魔法少女リリカルヴィヴィオ

ヨシュア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルヴィヴィオ

【Ｎコード】
Ｎ１２６４Ｇ

【作者名】
ヨシュア

【あらすじ】
私は、ママに憧れ、魔法少女になった。
ＪＳ事件の後、世界は平和な日々を過ごしていた。
再び災いが近づいているとも知らずに…
魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります。

プロローグ平和な日々近づく終わり（前書き）

はじめまして。なんとなく書きたくなったので書いて見ました。初めて書いた作品なので誤字脱字も多いとは思いますがよろしくお願いします。

プロローグ平和な日々近づく終わり

世界が平和になり、月日はながれ私は中学生になった。…

こんにちは。私、高町ヴィヴィオです。
現在ママに憧れて魔法少女をやっています。…ていってもまだまだ駆け出しなんですけどね。

さて私のママはと言いますと、もう〇〇歳近いのにまだ現役で頑張ってます。（年齢の話をするとママが悪魔になるので言えません…）
ママはあれからユーノ・スクライアさんと結婚したのですが、ユーノさんの現役引退の勧めを断りました…
ユーノさんは返事がだいたいわかっていたようで笑顔で
「わかったよ。」といっただけでした。
二人には私には分からない絆があるのかもしれません。
さてもう一人の私のママ、フェイト・T・ハラオウンはと言うとこちらも現役バリバリです。
でも、最近は平和が続いているので、忙しいとは言ってもなのはママよりはマシらしいです。

なのはママとは違い出会いには恵まれないみたいです。…とはいってもモテないわけではなくその逆でモテモテです。
なのはママ曰く
「ニャハハ。フェイトちゃんは綺麗すぎてちかづけないんだよ～。」らしいです。

まぁフェイトママにはなのはママが世界で一番可愛く見えるらしい

です。

はやてさんは何故かもう一度機動六課を再編しようと奔走中です。
綺麗なのに三人のなかで一番仕事一筋なかたで、私的にはもったいなく思っています。

こんな感じで平和な日々が続いています。

もうすぐ終わる束の間の平和ともしらずに…

プロローグ平和な日々近づく終わり（後書き）

どうでしたでしょうか？小説ってむすがしいですね。最初は人物紹介的な感じにしてみました。何かアドバイスがありましたらよろしくお願いします。

第一話　始まり（前書き）

私は辿る…ママの歩んだ道を…
いつか追い付くその日まで…
肩を並べて戦えるように…
私の一歩はここから始まる。

第一話　始まり

さて、私は今試験場にたっています。
正直ガチガチです。

あ、誰かモニターに出てきた…

モニターには赤い髪の女の子が映っていた。

「お～す！ちゃんといるなあたしが今回試験官をするアギトだ。まず名前と試験内容の確認な。　名前高町ヴィヴィオ二等空尉、試験内容は空戦Ｂランク間違いねぇな？」
「はい！」
「よし！内容は進路上空に浮かぶターゲットの全撃破及び全弾回避もしくは防御な。わかったか？」
「わかりました！」

「んじゃあ始めるぞ。あたしが言ったらスタートな。頑張れよ！」

「はい！ありがとうございます！」

「空戦Ｂランク試験。レディー…ゴー！」

その声と同時にヴィヴィオはスタートした。

「よし！行こうフェアリー！」

「行きましょうマスター」
少し飛ぶと前に三機のターゲットが現れた。

砲撃をしてくるがヴィヴィオは急上昇してかわす、そしてそのままはるか上空から攻撃した。
「アクセルランサー！」
これは母二人から教わった技をアレンジした技で、プラズマ・ランサーの威力とアクセルシューターのスピードと追尾性能をあわせた技。

上空からの流星のような攻撃に回避行動がとれなかった三機はあっさり撃破された。

「次！」

ヴィヴィオはさらにスピードを上げて次のターゲットをさがす。
「マスター！！」フェアリーからの警告

いつの間にかに１０機以上に囲まれていた。

「いつのまに！」
包囲されていたことにヴィヴィオは驚く
３６０度からの集中放火がきた！

しかし、ヴィヴィオは落ち着いて対処する

「聖王の鎧発動…」

大爆発が起きた…ヴィヴィオは一発も被弾せずにたっていた。

聖王の鎧はもともとヴィヴィオが使えた技だが、あまりに強力過ぎて本人にも負担がかかるため、普通は使えないのだが、機動六課の

デバイスマイスターであるシャリオが
「せっかくの能力なのに勿体無いですよ～」といい、変身中に出力リミットをかけてくれるヴィヴィオ専用のテバイス、フェアリーを作ってくれたのである。

「ふぅ～シャーリーさんには感謝しなきゃね。」

「まったくですね。」
ちなみにフェアリーはかなり高性能らしく普通の人のように喋れる。
まぁたまには喧嘩したりもするのだがそれはまた別の話。

「さて、反撃開始だね！いっくよ～！」

「なのはママ直伝！ディバインバスター！」

ヴィヴィオの砲撃は5、6機を巻き込み撃破した。

後ろを向き、

「フェイトママ直伝！サンダースマッシャー！」

さらに6機を撃破し、ターゲットを殲滅した。
「お見事です、マスター」とフェアリーが誉めた。

「ありがとう。さてちょっと時間かかっちゃったし急ごう。」

ところ変わってゴール近くでヴィヴィオが映っているモニターを見ている三人がいた。

なのは、フェイト、はやてである。

「いや～かなりええ動きやんか。さすがなのはちゃんとフェイトちゃんの娘やね」とはやて

「私達の技をアレンジするなんて凄いね」とフェイト

「うん。そこまでは良かったけど囲まれちゃったのがダメだね。聖王の鎧がなければ撃墜だよ」と少し厳しいなのは。

「まぁまぁ、結果的には撃破したわけやしそういうのはこれから育てればええやんか」

「てことは…ヴィヴィオは新六課配属決定？」

「それは、これからやる二機を倒せるかどうかで決定やね～」

「ヴィヴィオ頑張ってほしいな…」

さてヴィヴィオはというと二機の巨大ターゲットと戦って苦戦していた。

なんとその二機はアクセルランサーの直撃を受けてもほとんど損傷がなかったのだ。

「なにこれ！？硬い！」

「くっ！」

ギリギリでターゲットのアームを避けたヴィヴィオ。

聖王の鎧は多少の攻撃は防げるが出力を下げているため近接攻撃や強力な砲撃は無効化しきれないのである。

しかも相手は二機、ディバインバスターやサンダースマッシャーを溜める時間をくれない。
「仕方ないね。カードリッジロード！」
フェアリーから空薬莢が一つ排出される。
魔力を上げ、大量のアクセルランサーがヴィヴィオのまわりに出現した。
「シュート！」
爆発…そして相手の動きが一瞬止まる。

「よし！フェアリー、モードセカンド！」

「了解。セカンドモードに変更。」
空薬莢をまた一つ弾き出し今まで、宝石が緑になり分裂し短くなった杖の両端に移動。その両端からフェイトのザンバーフォームと同じ形状の緑の刃がでてきた。

「セカンドモード機動終了。」
「これで終わらせる！」
急上昇
「疾風一閃！ウインドスラッシュ！」
そして急降下並んでいた二機の内、左のターゲットを撃破し、そのまま回転横にいたターゲットを真っ二つにした。

「あとはゴールに向かうだけ！フルスピードでいくよ～！」
「はい。マスター！」

一気に加速ゴールに向かって一直線に進んで行った。

ゴール付近

「わぁ、あれ二機を一瞬で真っ二つかぁ～」驚くはやて
「時間を稼ぐまでは予測してたけど、まさかそのあと慣れないクロスレンジに行くなんて…度胸あるね。」
とフェイト。
「にゃはは～私とフェイトちゃんの子供だからね～」と笑ってなのは。

「さて、そろそろ来るころやな。」
「お、あれじゃねぇか？やっぱりだ！きたきた」とアギト

「ゴールは…あれだ！時間はちょっと危ないね。仕方ない…減速しないで突っ込むよ！」
「行きますよマスター！」
「間に合えー！」

「あれなんか減速する雰囲気がないで？…ていうかスピードあげてるやん！」

「大丈夫かな…」ママ二人
「元気でいいじゃねえか！あたしは好きだぜ！」とアギト
そして…
「ゴール！」
「ディバイーンバスター！」
止まれなかったヴィヴィオはバスターで無理やり止まった。

「ギリギリセーフだね」
「やね」
「…無茶苦茶な止まり方だね…少し頭冷やさせないと…」
なのはのみダークオーラをまとってヴィヴィオのもとえ三人は向かった。

「きゃ～！なのはママごめんなさ～い！」

私は一生懸命謝っていた。

「私…あんなめちゃくちゃな止まりかた教えたかな?…フルスピードを止めるにしても、もう少しやり方があったよね…少し頭冷やそうか…」
悪魔になったなのはがレイジングハートを構える…

「ディバイン…バスター…」

「きゃ～！」と悲鳴をあげるヴィヴィオ

バスターが直撃する瞬間ヴィヴィオの体が消えた。

「なのはやりすぎだよ。」
「ヴィヴィオごめんね。」

「フェイトママ…うぅ…怖かったよぉー！」

怖くて泣いてしまった私。

「よしよし。もう大丈夫だからね。」

フェイトママが抱き締めてくれた。とっても安心した。

「フェイトちゃんは甘すぎだよー。たまには厳しくしないと。」
もう充分だと思ったのかダークオーラを消したなのはママがそう言った。

「だから、なのはが厳し過ぎるんだよ。まだ子供だよ？」
「もうヴィヴィオは中学生なんだから我慢できるよ。」
と口喧嘩が続き…
「あの～そろそろ結果のほうを言いたいんやけど、もうええやろか？」

「「ごめんなさい…」」
と謝ったママ達。

私はというとはやてさんの発言に再び緊張でガチガチになっていた。

そして結果発表…

「まず、回避と防御能力これはまぁ問題ないな。スピード、魔力これも合格点や」
「やった！」
思わずガッツポーズをしてしまった私。
「けどな、」
と言って試験官の赤い髪の少女があらわれた。

「ちっちゃーい！」
こんなに小さいと知らなかったので驚いた私

「うるせぇ！減点するぞ！」

「すいません…」

「まったく…でだな周囲の注意力が低い。フルスピード時の制御が下手などが減点対象だな。」

「はぁ…」

「で、試験結果なんやけど内容的にはかなりいいし合格や！」

「合…格？……やったー！」

「やりましたねマスター！」

「「おめでとうヴィヴィオ！」」

「なんやけど！さすがに注意力と制御力がないのはあかんから、これから配属される隊に入隊するまえに、なのはちゃんとフェイトちゃんにみっちり訓練してもらって、二人に合格をもらったら、私が設立した新機動六課に配属決定や！」

「え…機動…六課？ママ達も？」

「そうだよ。一緒に頑張ろうね。ヴィヴィオ。」

「わーい！」

「私達だけじゃなくて、先代の六課の先輩達も一緒だよ。」

「ほんとに!?スバルさんやティアナさん達も一緒なの!?」

「「うん!」」

「やったーーー!」

私はその時心臓が飛び出しそうなくらい嬉しかった。

それから私はママ達との訓練に明け暮れた。

注意力の方はなのはママと林に行き、草から飛び出してくるシューターを避けたり撃ち落としたりする訓練で強化し、フルスピード制御の方は何もない星に転移してフェイトママと一緒に飛んで、急旋回や急ブレーキなどをして少しずつ上達していっていった。

そして二人の試験を完璧にクリアしたヴィヴィオは晴れて新生機動六課に配属された。

「みんなまた集まってくれて嬉しく思う。今回は新メンバーに高町ヴィヴィオ二等空尉とギンガ・ナカジマ陸曹が入ってくれてる。仲ようしてな。」

「私らの主な担当は前回と同じでロストロギアの回収や。詳しい説明は渡した資料に目を通しといてな。ほんならみんな頑張って行こか!

ヴィヴィオは六課内のデータを渡すから私のとこにきてな?」

「「「「はい!」」」」

こうして新生機動六課は動きだした。

ほぼ同時刻…

「ふぅ…やっと出られたよ…ウーノ、クアットロご苦労だったね。」
「Ｄｒ疲れました～あとでメンテナンスお願いしますね～」
「あぁ、わかっているよ。」
「さぁ…新たな研究と実験の始まりだ！」
「ハハハハハハ！」
闇もまた動きだした…
八神部隊長の挨拶が終わり私に簡単に六課内ついて説明されたあと、ママに部屋に案内された。
「ここがヴィヴィオの部屋。同じ部屋なのはスバルとティアナだよ。」
「やった～♪スバルさんとティアナさんなら気楽でいいや。」
「ダメ。ヴィヴィオは二人の後輩なんだからちゃんとした口調で話すんだよ？」
「は～い…」
厳しいなぁ…
「じゃあ私は仕事もあるし行くから、さっき言った通りにね？」
「は～い。」
小走りでなのはママは去ってしまった…

「リラックスリラックス…すぅ…はぁ…よし！」
ここから始まるんだ…頑張るぞ！
そしてヴィヴィオは踏み出す…始まりの一歩を…
シュン…

「高町ヴィヴィオ二等空尉であります。これからよろしくお願いします。」

私は部屋に入ると同時にこう言った。

「「え！？」」
部屋の中には6年の間に昇進したスバル・ナカジマ陸曹とティアナ・ランスター執務官がいて、驚いてこっちをみていた。

「わぁ！ベッドが一つ多いからギン姉かと思ってたのにヴィヴィオじゃん！お久ー！」

「久しぶりね。」
「お二方ともお久しぶりであります。」
「…え～とヴィヴィオ？知らない仲じゃないんだからそんな口調じゃなくてもいいよ？」
スバルさんがそう言ってくれた。

「いいんですか？じゃあいつも通り話しますね。」

「良かったよ。もしかしたら素であれなのかと思った。」

「まったくね。あれじゃ話にくいわ。」

「すいません。ママに最初はきちんと挨拶しなさいといわれたもので。」

「なのはさんも変なとこ律儀だよね～」

「そうですね～」

「じゃ、同じ部屋になったことだしこれからよろしくね。」

「スバルはいびきをかくときがあるから熟睡したいなら耳栓を買っといた方がいいわよ。」

「ティア、ひどい！」

「あははは！大丈夫ですよ。…ちゃんとありますから。」

「さすがね。」

「ちょっと～ヴィヴィオまでひどいよ～」

「まぁ冗談はおいといてよろしくね。」

「冗談なの！？」

「うるさい！」

「ほんとに変わってないですね。安心しました。改めてよろしくお願いします。」

そこでママから念話が入った。

「挨拶は終わったかな？終わってたら特設訓練所にきて欲しいんだけど？」

「うん。わかったよ。」

「多分、今日は模擬戦ね。」
ティアナさんがそう言った。

「特にヴィヴィオは覚悟しといた方がいいよ。」

「なんでですか？」

「力を見るために最初はなのはさんが相手で一対一の模擬戦をするからね。私達はある程度知られてるから確認程度だと思うけど、ヴィヴィオは全力でなのはさんとやったことないでしょ？」

「それは…そうですね。」

「だから、なのはさんもヴィヴィオの全力がわからないから結構力入れてくると思うよ？」

「ママとの勝負か…なんだか楽しみです。」

「その気持ちがあるなら多分大丈夫ね。頑張って。」

「ヴィヴィオ頑張れ！」
「はい！ありがとうございます。」

「じゃあ、行こうか！」「はい！」

「チーム戦ギン姉とヴィヴィオも入るから新しいフォーメーション考えないとね。」

「どんなのがいいかなぁ」

「チーム戦あこがれだったんですよ。早くやりたいです！」

こうして話ながら歩いていると訓練所にすぐについた。

「全員そろったね。じゃ訓練を始める前に…ヴィヴィオ自己紹介して。」

「はーい。えと、高町ヴィヴィオです。得意なポジションはセンターガードとフロントアタッカーです。」

「あれヴィヴィオクロスレンジ苦手じゃなかった？」とスバルさん

「あれから、フェイトママにコツを教えてもらったので練習したのでそれなりにはできるようになりました。」

「「「へぇ～」」」

驚いてるスバルさん達。

「じゃ、ヴィヴィオの実力を見ることもかねて、私と模擬戦をするから、フロントアタッカーのスバルから順にやろうか。」

「「「やっぱりね」」」

と全員が呟いた。

「うん。皆強くなってるね。

次ヴィヴィオ～」

全員の実力をだいたい確認したママは私を呼んだ。

「ヴィヴィオ実力がまだあまりわからないからちょっと本気で行くからね？」

「よーし頑張るぞ！」

二人は空に上がる。

「ヴィヴィオどうなるかな」とスバル

「私達もあの子の力よくわかってないからね。なのはさんにどう対抗するか見物ね。」

「キャロはどう？僕は何かしてくれそうな気がするんだ…」

エリオが言った

「とりあえず怪我はしないで欲しいな。」

とキャロ

親対子の戦いが今始まった　私はママと十メートルほど距離をあけて対峙している。

バリアジャケットのデザインはほぼ同じ、デバイスの形も同じ、違うのは宝石の色が赤か青なだけ、そっくりな格好の二人…

さきに動いたのはヴィヴィオだった。

「先手必勝！アクセル・ランサー！」

前方にランサーが出現。

「じゃあこっちも！アクセル・シューター！」

ママもシューターを出現させる。

「「シュート！」」

シューターとランサーがぶつかり爆発が起きる。

爆煙の中から出てきたのは私のランサーだった。

「やっぱり威力じゃ負けるね」

ママがそう言った。

「でも！私に当てられるかな？」

ママは急上昇する。

「速い！」

私はランサーを制御しママを追いかける。

ママは突然動きを止める…

「動きが止まった？今だ！」

ママの動きが止まった隙を狙って私はランサーを殺到させる。

「甘いよヴィヴィオ。」

「Ｆｌａｓｈ　Ｍｏｖｅ」

ママが消えた…目標を見失ったランサーはお互いにぶつかって爆発する。

「…」
意識を集中…ママの気配を探る。
「っ！」
突如背後に気配振り向きもせず、急降下した。
次の瞬間、私がさっきいたところにママのディバインバスターが炸裂していた。
「今のを避けるか～結構やるねヴィヴィオ。」
まだまだ余裕のママ。
「さすが私のママだね。やっぱり強いや。」
そう言って私は笑っていた。
「まだまだ娘に負けられないからね。」
そう言ってママも笑った。
一方スバル達は…
「ヴィヴィオの魔法って、なのはさんとフェイトさんのアレンジした魔法なんだね。」
「あんたはまんまパクりだけどね。」
「いいじゃん！かっこいいんだから！」
「あのバスターよくよけられるなぁ…私なら防ぐだけでギリギリだよ…」
と驚くキャロ

「僕は避けられるとは思うけど、笑ってる余裕はないだろうなぁ…」
とエリオ

舞台は空に戻り…

「行くよママ！ディバイーン！バスター！」
「受けて立つよ！ディバイーン！バスター！」
ブルーの光線とピンクの光線がぶつかる
「「カードリッジロード！」」
双方から空薬莢が一つ弾き出されるお互いにバスターの出力が上昇

「「行けー！」」
大爆発！

「モードセカンド！！」

「セカンドモード了解…起動します。」
接近すればママにだって負けない！

ヴィヴィオはなのはに突っ込む。

「させない！」
カートリッジを一発排出…即座に収束が終わる。

「っ！！」
間に合うかな…

「エクセリオン！バスター！！」
極太の光線が放たれる。
狙い違わずヴィヴィオのもとへ…

「く…危なかった…」
なんとか上昇し、かする程度で回避に成功。

「気を緩めちゃダメだよ。」
さらにカートリッジが排出され、スフィアが大量生産される…軽く５０を越えている。
なのはは勝負を決めるために追撃をかけた。
「アクセル・シューター！」
５０発全てをヴィヴィオに向かって打ち込んだ。

「プロテクション！」

ヴィヴィオはプロテクションを張る…しかし、ヴィヴィオに全て防ぎきれる数ではない…
次第に爆煙に消えていくヴィヴィオ…

「ふぅ…やったかな？」
いくら威力が低いスフィアでもあれだけ撃ち込めば…
煙が晴れる…しかしそこにはヴィヴィオの姿はなかった…

「フェアリーありがとう。」

ヴィヴィオはフェアリーが自己判断で展開した聖王の鎧に守られなんとかしのいでいた。

「いえ。では決めましょう。」

「そうだね。」

爆煙の中でヴィヴィオは最後の勝負にでる

「行くよフェアリー！」

「了解です！」

「ソニックフォーム起動！！」

カートリッジを一つ弾き出しバリアジャケットから重量を減らし最低限の防御のみ残し変身する。そして…初代ソニックフォームになったヴィヴィオがいた…

「突っ込むよ！！」

「了解！！…Ｓｎｉｃ　ｍｏｖｅ！」

そして私は急上昇！音速の速さでママの遥か上空へ、

「決める！！」

また一つ空薬莢を弾き出す

「疾風一閃！ウィンドスラッシャー！」

大上段に振り上げる。頭上回転させながらさらに勢いを上げ急降下。

「はぁぁぁぁ！」

私は全力でママに降り下ろした。

「ヴィヴィオ！？」

驚愕に変わるママの顔…勝った！

…あれ？ここは…医務室？なんで？私は混乱していた。

「あら、やっと気が付いたのね。」

あの人は確かシャマルさんだっけ？

「あの、何で私はここに？」

「なんでってなのはちゃんに撃墜されたからに決まってるじゃない。」

「え！？」

私は驚いた。あれは私の勝ちだったはずなのに…

「あ、ヴィヴィオ。良かった気が付いたの？」

スバルさん達がやってきた。

「私、どうして負けてるんですか？」

「あはは、そりゃわかんないよね。

えっとね上空から降り下ろしてくるヴィヴィオにギリギリで気付いたなのはさんは、ヴィヴィオの一撃をレイジングハートで受け流して、カードリッジロードして、零距離抜き打ちエクセリオンバスターを叩きこんでヴィヴィオを撃墜したのでしたー。」

とスバルさんが説明してくれた。

私はというとあまりの出来事に、

「ふぇぇ～」

と感心するしか出来なかった。

とそこへ、

「ヴィヴィオ～大丈夫～？」とママが登場した。

「うん。」

そう返事をすると安心した顔をしたママ。

「良かった～。ヴィヴィオの動きが予想外で最後の一瞬ビックリしてつい本気をだしちゃたんだ。ごめんね。」

とママが謝った。

「あはは、やっぱりママは強いね。ママとの模擬戦とっても楽しかったよ。またやろうね。」

「ヴィヴィオ…うん！まだまだ私も負けないよ！」

「私だってもっと強くなる！」

「私ももっともっと強くなるから負けないよ！」

「「むぅ～」」

「あはははは！」

スバルさん達に笑われた。

「ほんとに仲良しですね。そこまで仲良い親子もなかなかいないと思いますよ？」

「そうかなぁ？普通だと思うけど…あ、そうだ！ヴィヴィオ明日はチーム戦をするから、チームのスキルやポジションを把握しといてね。」

「わかったよ。ママ。」

模擬戦を通じて親子の絆が深まった気がする私なのでした。

スカリエッティ拠点、

「さて、やはりクアットロとウーノだけではきついよねぇ…よし！新しい姉妹を作ろうか」

「良いですねぇ私も欲しいですぅ♪」

とクアットロ

「作業効率からいっても人数は多いにこしたことはないですからね。」

とウーノも賛成

「じゃあ、早速取りかかろうじゃないか！」闇側も準備を進めていた…

「…ター！マスター！」う…ん？誰か叫んでる？…フェアリー？

「むにゃ…おはようフェアリー。どうしたの？」

「おはようございます。マスター。早速ですが、早く訓練用ジャケットに着替えてください。あと１５分で訓練が始まります。」

「え…わぁー！なんで起こしてくれなかったの？！」

「マスター。私は１０分前からずっと声をかけていましたよ」

「ほんとに！？」

「スバルさん達も起こしてくれようとしたのに、もう少しと返事をしたのはマスターですよ？」

「う……あ、時間がない急がなきゃ～。」

私はこれ以上言われたくないので話題をそらして着替えることにした。

「マスター逃げましたね？」

「なんのことかわかんないや～さて訓練所にいそごー！」

「棒読みですよ。」

「気のせい、気のせい」
そう言って私はフェアリーを首にかけ走り出した。
り出した。

訓練所…

「ヴィヴィオ遅いね。」

「あと、5分で訓練始まりますよ？」

「やっぱり連れてきた方がよかったんじゃない？遅刻したらスバルの責任ね。」

「ティア酷いよ！ティアは後ろにいたから見えなかったけど、ヴィヴィオの寝顔とっても可愛くて、あんな顔で、もうちょっと…って頼まれたら誰も断れないよ～」

「あっそじゃ次からは私が起こすわ。」
「じゃ起こせなかったら今度の休みに出掛けた時にティアの奢りね。」

「起こせたらアンタに奢ってもらうからね！」

「二人とも朝から元気たね～」
なのはが登場

「おはようございます。」メンバーが挨拶する。

「はい。みんなおはよー。ってまだヴィヴィオは来てないの？」

「すいませ～ん遅れました～！」

私は叫びながらみんなのもとへ走り込んだ。

「ヴィヴィオ謝らなくても良いわよ。ギリギリセーフだし、もし遅れてても、スバルのせいだから。」

「う～きっとティアだって無理だよ」

「「おはよう、ヴィヴィオ。」」

エリオとキャロが挨拶してくれる。

「おはよう、エリオ、キャロ」

二人は年も近いので敬語は使わなくてもじゃなくていいと言ってくれたので、この二人には使っていない。

「ヴィヴィオみんなに迷惑かけちゃダメだよ。」

「ごめんなさい…」

ママに怒られちゃった…

「とりあえずメンバーもそろったし、訓練始めよっか。」

「「「「はい！」」」」

なのはが何か入力すると、たちまち周囲が街になった。

「それじゃ、部隊分けだけど、フェイトちゃんとシグナムさんが不在の時はギンガがライトニングをまとめてね。
ヴィヴィオは、スターズ分隊。
コールサインはスターズ５とライトニング３ね。」

「「はい！」」

「相手は…どうしようかな～、ガジェット一型二十機、二型二十機、三型十機、四型十機くらいでいっか。」

「ええ～！？それはちょっときついんじゃ…」

「大丈夫。私みんなを信じてるから。」

「ママはやると決めたらやる人だから何を言っても無駄ですよ。」

「そうだね…仕方ない頑張ろう！」

「なんか嫌な納得のされかただな…まぁいいや、じゃスタート！」
私達に向かってガジェット達が一斉動き出した。

「バックス！退避～！」

ティアナさんの声と同時にキャロ、ティアナさん、そして私が後ろに走る。

念話で前衛三人に少しの時間稼ぎを伝える。

「まかせて！」

「わかったわ。」

「頑張ります。」

と前衛三人から返事が返ってきた。

そしてスバルさん達前衛メンバーは、ガジェット軍団に突っ込む。

私は私の役割を果たすべく後ろで詠唱を開始する。

「氷の精霊、フェンリルよ我が願いに答え、我が下へ舞い降りよ、我に仇なす敵の命の息吹きを閉じよ。」

「嘘！？ヴィヴィオって広域魔法もつかえるの！？

これは私も負けられないわね…

クロスミラージュ！カードリッジロード！」

クロスミラージュからカードリッジ四発がすべて弾きだされる。

「ケリュケイオン！ヴィヴィオとティアナさんに力を！」

二人にブースト魔法がかかりさらに魔力があがる。

念話を使い。

「前衛急いで私達の後ろへ！」

「了解！」

前衛三人が自分達がより後ろに下がると同時に二人は魔力を解放した。

「フロストオーバーストライク！」

「ファントムブレイズ！」

ヴィヴィオの魔法が発動した瞬間、ガジェット周囲の気温が急激に下がりＡＭＦがあるにも関わらずまとめて凍結されてしまった。

ＡＭＦの機能が停止したガジェットなどただの鉄屑、一型のほとんどと、空に逃げれなかった二型数機、三型四型は五機ずつ破壊され、一気に数が減ったガジェット達、

「あとは、私達に任せて！」

前衛三人が残った敵に突っ込む。

「「リボルバーシュート！」」

「サンダーレイジ！」

放たれた弾丸と雷撃が動けない敵を襲う。

残ったのは、三型一機、四型二機だけだった。

三型にスバルが突撃し、残る二機にギンガ、エリオが突っ込む。

かろうじで動けるようになった三型はアームを伸ばしてスバルを攻撃する。

が、スバルはシールドを張りそのまま突っ込んだ。

激しい光が弾ける。

スバルは、無理やり前に進む。

「リボルバーナックル！」
そのまま三型に拳を打ち込み、あっさり撃破。

ギンガは、シールドも使わず、すべて攻撃をかわして、同じくナックルを打ち込み勝利。
エリオはストラーダのブースターを使い一瞬で撃破した。
「あとは、空ですね。私が行きます。」

「援護はするからよろしくね。」

「はい。」

空には最初に逃げたガジェット二型が十五機ほどとんでいた。

「まだ気付かれてないや。ここから打っちゃえ。ディバイ～ンバスター！」

不意討ちで十機ほど落とすとこっちに特攻に近い形で突っ込んできた。

「わ！」
ギリギリでかわす。
そこへ

「クロスファイヤー！シュート！」
オレンジ色のスフィアが飛んできた。
スフィアは狙い違わず残りのガジェットを撃墜。

「ティアナさんありがとうございます。」

ティアナさんに念話でお礼を言ったら、

「いいわよ、このくらい」

と返事がきたところで訓練終了の合図が響いた

「みんな強くなったね～。私びっくりしちゃた。」

ママがそう言いながらビルの上から降りてきた。

「じゃ朝練はここまで！お疲れさま。」

「お疲れ様でしたー。」

「さて朝御飯食べに行こ！」

「あんたの頭にはご飯と戦闘の知識以外入ってないの？」

あきれたティアナさんが言った。

「だってお腹がすいたんだもん…」

「わかった！わかったからそのくらいで拗ねないでよね！」

にぎやかに食堂に向かう私達。

食堂につくまで私達は衝撃の事実をしらなかった…

はやての部屋…

「やっぱりな。カリムに聞いて警戒しといて正解やったわ。スカリエッティが脱獄しよった…」

ミッドチルダには世界を恐怖に落としたスカリエッティの脱獄のニュースがながれていた。

第一話　始まり（後書き）

まずいろいろすいません。ほんとにわかりにくい書きかたですね。
こんな作品でも気に入ってくれたなら感想まってます。

第二話　少年と少女（前書き）

俺は力が欲しい…スカリエッティ一味を殺せるほどの力が。
俺は無力な自分が嫌で力を欲した…　魔法少女リリカルヴィヴィオはじまります。

第二話　少年と少女

俺は奴を許さない…
ＪＳ事件の時、俺と父さんと母さんは、病弱な母さんを支えながら歩いていたために避難に遅れていた。
もう少しで避難シェルターという時に、俺達家族はガジェットに発見され、父さんと母さんは俺を庇い、そして殺された…
あの時は悲しみでいっぱいになった…そして結局は攻撃にさらされて俺も死ぬと思った。
だが俺だけは重症を負ったが管理局の局員に発見され病院に運びこまれた。それから一月後の知らない病院で俺は目が覚めた。
運が良かったのか悪かったのか、奇跡的に俺は助かったらしい。
でも…目覚めた世界に父さん母さんはいなくて…
俺に残されたのは両親をしょうもない野望の巻き添えにしてくれたスカリエッティ一味に対する憎しみと両親を失った悲しみしか残らなかった。
しかし、俺には何も出来なかった。
力がなかったからだ。自分の不甲斐なさを呪った…

それから俺は親戚だというおじさんの家へと引き取られた。
おじさんはとても好い人で、俺を我が子のように育ててくれた。
学校へ通えるようにもしてくれた。だが、最初は学校なんて嫌だった。
でも、ある出会いが俺を変えた…。
その日を境に学校が楽しくなり始め、友達もたくさん出来て、小学校を卒業した。
そして俺は私立聖祥大付属中学校に入学し、しばらくたったころ。
俺の運命を変える一つ出来事が起きた…
親子三人が、何者かの手によって間接的に殺されたというニュース

をたまたま見てしまった…
そのニュースを見た途端今まで忘れていたスカリエッティへの憎しみが一気に溢れ出した。

「俺は復讐も忘れて何をしているんだ…
俺は奴を殺さなくてはならないのに！
父さんと母さんの敵をとらなくてはいけないのに！！」
バタン…
家から飛び出した。
背後で伯父さんの声がしたような気がするが無視をする。

（何でもいい。奴を殺せるだけの力をよこせ！）
俺は心から力を欲した。
その時俺の前に一本の剣が現れた。

「な、何だ？いきなり剣が…」

「そんなに力が欲しいならお前に力をやろう。」

（剣が喋った！）

「奴を殺したいのであろう？私が力を貸してやる。さぁ願え！破壊の力が欲しいと！」

俺は一瞬躊躇ったが、

「欲しい！スカリエッティを殺せる破壊の力が！」

「ふふ…さぁ受けとれ…お前の力だ…」

俺の前に黒い剣が降りてきた。
俺はそれを手に取り、

「スカリエッティ！俺がお前を殺してやるからな！」

今までにないくらい憎しみが膨れ上がって、叫んでいた……

「ジャケット精製…」

何故かこうすることを俺は知っていた。まぁ復讐がはたせるならなんでもいい…目を閉じる
次の瞬間、俺は黒いジャケットを身に纏っていた。
閉じた目を開く。開かれる瞳の色は…赤。

「さよならおじさん…アイツのところにも行かないとな…」
最後におじさんにお礼を言って飛んだ。
そして、俺を変えてくれた存在のもとへ向かい…つらい別れをつげ…
スカリエッティを追ってどうやってかはわからないがミッドチルダへと転移した…
綺麗な空…しかし、今の俺には好きだった空などどうでもよくなっていた。

「さて…まずは前の奴のねぐらにでも行くか…おい、座標を合わせろ。」
「仕方がない奴だな…少し待て…」
さらに通常転移を行い隠れ家へと向かった…
少年はそこで二人目となる自分運命を変える少女と出会うことになる…
少年がスカリエッティを探しているころ…スカリエッティも少年を探し捕獲するための戦力を揃えていた…

「ほらね、やっぱり余計な知識があるから、機能に障害をきたすんだよ。」

「これが私達の新しい姉妹ですかぁ～？」

「そうだよ。彼女らにあるのは、僕に対する忠誠心と最低限の知識だけだよ。」

「前の子達みたいに裏切ることはないですよねぇ～？」

「それは大丈夫だよ。もしそんな知識が入ったら自爆プログラムが作動するようにしてあるからね。」

「それなら安心ですが彼女らの動力はどうするおつもりで？」

「それも大丈夫。脱獄のさい倒した魔法使いのリンカーコアを抜きとったし、それなりに強い魔法使い達だったから動力源には問題ないよ。」

「Ｄｒ～新たな研究って何を研究するんですか～？」

「それはね…ロストロギアエクスカリバーだよ。」

「エクスカリバー？」

「絶対勝利の聖剣とされていてね。それが最近発掘されたそうなんだ。発掘と同時に何処かへ転移してしまったらしいが、気になるじゃないか。絶対勝利なんて言うくらいだ。どういう構造をしていて、どんな機能を搭載しているか。それが知りたくて脱獄したんだよ。」

ウーノは思った。たったそれだけのことにこの人は行動を起こせるのだからかなり凄いと思う。

「では、今回の私達の任務は、ロストロギアエクスカリバーの回収…ということでよろしいでしょうか？」

「ああ、頑張ってくれたまえ。もうすぐ姉妹も目を覚ますからね。そう伝えてくれ。私はまたガジェットを生産してエクスカリバーを捜索ことにするよ。どういうわけか、転移を行ってこちらだけでは捕捉が時間がかかるからね。」

といってＤｒは部屋に入って言った。

「新しい姉妹か…下僕のほうが近いわ…」

そう言ってウーノはまだ眠る十人の顔を眺めていた…

六課…

「あれ？なんか騒がしいね。」

食堂につくとみんながなんだかざわついている。

「あ、ヴァイス陸曹この騒ぎなんなんですか？」

ティアナさんが近くにいたヴァイスさんに訪ねた。

「…スカリエッティが脱獄したんだとよ。」

「スカリエッティが！？」

なのはさん以外、六人が全員が驚く。

「もう脱獄するなんてちょっと予想より早かったかな…」

「ママ知ってたの？」

「カリムさんから聞いたの。六課設立もそれを警戒してのことなんだ…」

ママがそう言った時にはやてさんがやって来た。

「そのスカリエッティがもう行動を開始したんや…」

はやてさんの一言にみんなが固まる。

「つい最近発掘されたロストロギアエクスカリバー…でも発掘と同時に転移した。どうやらスカリエッティはそれを狙ってるみたいなんや…」

「それでですね、スカリエッティもまだ場所は特定できていないみたいなんです。」

はやてさんの肩にいたリィン曹長が言った。

「でだな、ガジェットを大量に使って捜索してるみてぇだ。」

席に座っていたヴィータ副隊長も会話に参加。

「そのガジェットが一点に集まりつつある。その地点とは…元スカリエッティの隠れ家だ…」

とシグナム副隊長

「みんなには午後からそこへ向かってもらう。ただガジェットの数がかなり多いと思うから危なくなったら撤退してな？」

「「「はい！」」」

頷くフォワード六名。

「今回は、私はついていけないんだ。」
ママがそう言った。

「どうして？」

「ガジェット達が民家の方にもかなり散らばってるからね。私が行くことになったんだ。その代わり副隊長達がいてくれるし大丈夫だよね？」

「わかった…頑張る…」
初めての出撃でママがいない不安からか少し涙目になってしまった。

「大丈夫…ヴィヴィオは強い子だから…」
ママが抱き締めてくれた。

「大丈夫…大丈夫…」
何故だか心が落ち着いた。頑張れる気がした。

「もう平気だよ…ママ。」

「うん！ヴィヴィオは強いもんね！頑張って！」

「ヴィータちゃんヴィヴィオのことよろしくね？」

「任せろ！ぜってぇ守ってやっからよ。」

「うん！お願いね。」

「それじゃみんなでご飯食べよか～。」

「食べるです。」

「お腹ペコペコだよ～。」

「しっかり食べてエネルギーためとけよ?」

「はーい!」

「ふ…緊張感のない連中だ。」

二人が出会うまであと少し…

「ちっ!やっぱり同じとこにはいなかったか…手がかりもゼロ…仕方ない出るか…」

洞窟の外に出てみると俺は少し驚いた。

空が暗く見えるほどのガジェットに取り囲まれていたからだ…

「こいつらは…」

今まで俺の前に現れなかったことから、ガジェット達は俺の左手にあるこの剣が目当てらしい。

「ふん…ザコ共じゃ、肩慣らしにもならないが父さんと母さんを殺した恨み、てめぇらにもあるからな、一機残らず破壊してやる。」

俺は、ガジェット達に突っ込んだ。

「それじゃみんな気を付けてな!」

「「「はい!」」」

ヘリに乗り込む私達。

「全員乗ったなそれじゃ飛ばして行くぜ！ストームレイダー！」

「ＯＫ！　ｔｅｋｅ　ｏｆｆ！」

こうして私達を乗せたヘリは出発した。

ヴァイスさんが飛ばしてくれたおかげでかなり早く現場に到着。

現在は副隊長達とミーティング中。

「まず私達が降りて道を開く。お前達はその後から降下しろ。」

「「はい！」」

「副隊長さん方そろそろ効果ポイントに着きますぜ！」

「わかった。ハッチを開いてくれ。」

「スバル達は大丈夫だと思うけどな、ヴィヴィオお前は初めてなんだから危なくなったら私を呼べよ。すぐ行ってやっから。」

「ありがとうございます。でも大丈夫です。これでもＡＣＥｏｆＡＣＥ、高町なのはと雷帝、フェイト・Ｔ・ハラオウンの娘ですから。」

その言葉にヴィータは笑い。

「そうだったな。頑張れよ！」

「はい。副隊長達も！」

「おう！」

そしてハッチが開く。

「ライトニング2！」

「スターズ2！」

「「出るぞ！」」

副隊長達が飛び降りた。

「アイゼン！」

「レヴァンティン！」

「「セットアップ！」」

「Ｓｅｔ　ｕｐ」

二人が光に包まれガジェット達のもとへ向かった。

そこでは既に爆煙があがっていた…

「なんだ?誰か戦っているのか?」

「みたいだな…念話は…ダメだ切ってやがる。」

「ガジェットと戦っているのだから当面は敵ではないだろう。とりあえず私達は空の敵を叩くぞ！」

「おう！」

私達はガジェットの集団に突っ込んだ。

「レヴァンティン！」
「Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！」

「伸びろ連結刃！飛竜！一閃！」
刃が分裂し延長、大量のガジェットを薙ぎ払う。

「アイゼン！」
「Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！　Ｒａｋｅｔｅｎ　Ｆｏｒｍ！」

「ラケーテン！ハンマー！」
遠心力を使い加速、回転したままガジェット達に突っ込み手当たり次第殴り飛ばす。

「はぁぁぁ！」

「おらぁぁぁ！」「わぁ…ヴィータ副隊長達つよーい…さすがママの親友だ…空のガジェットが次々に撃墜されて行く。」

「ガキ共、降下ポイントに到着した。準備しろ。」
「ヴァイス陸曹…私とスバルはもう２０代なんですけど…」

「俺からすればまだまだお前らもはガキなんだよ。さっさと準備しろ。」

「う～」
スバルさんが唸った。

「はぁ…じゃ、まずはスターズから降りるわ。行くわよ。スバル、ヴィヴィオ。」
「うん！」

「はい！」
ハッチが開く。

「スターズ３！」
「スターズ４！」
「スターズ５！」

「「「行きます！」」」
そして私達は飛び降りた。
「マッハキャリバー！」
「クロスミラージュ！」
「フェアリー！」

「「「セートアップ！」」」

「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ　ｓｅｔ　ｕｐ」

三人は光に包まれ次の瞬間には変身していた。
安全に着陸、

「じゃ僕たちも行こうか、」
「うん！エリオ君！」
二人は初めての出撃の時を思いだし手を繋ぐ。

「ふふふ…、二人共お熱いわね♪」

「「もう、ギンガさん！」」

「はいはい、ごめんなさい。」

「ライトニング３」
「ライトニング４」
「ライトニング５」

「行きます！」

「ブリッツキャリバー！」
「ストラーダ！」
「ケリュケイオン！」

「「「セットアップ！」」」

「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ　Ｓｅｔ　ｕｐ」

三人も変身し、スターズのすぐそばに降りる。

（おい。お前ら。）

（なんですか？）

（誰かはわかんねえけど先に来て戦ってるやつがいる。注意しとけ。）

（はい！）

「ほんとだ…爆発がみえたよ。」

「私先行して見てきますね。」
私は飛び出した。

「ちょっとヴィヴィオ！ダメだよ！」

「道は開けておきますから～。」
そう言って、ガジェット達に突撃した。

「アクセル・ランサー！」
数が多いためカードリッジを使い大量のランサーをガジェットに打ち込む。

「よし！行っくぞ～。全速前進！」
私は空いた穴に向かってフルスピードで進んだ。

「ヴィヴィオ！待ちなさいって！！」
慌てて追いかけようとするが目の前にガジェットの集団があらわれる…

「あ～もう！スバル、エリオ、キャロ、ギンガさん！私達は私達でやるわよ！」

「ティア！ヴィヴィオはどうするの？」

「あの子の実力ならそう簡単には負けないわ。副隊長達も近くにいるし、ヴィヴィオはいい子だし、負けるようなことがあれば私達か副隊長に助けを呼ぶはず。」

「そうですね。でも、用心して早めに片付けてヴィヴィオの所に向かいましょう。」

「そうね。スバル行くわよ！」

「オッケー。」

「エリオ、キャロ、よろしくね。」

「「はい！」」

スターズ、ライトニングのチームワークの前にはいくらガジェットがいようとも、壊滅までは時間の問題だった。
先にガジェットと戦っていた俺は、魔力の節約のため百機以上を剣撃のみで倒していた。
突然ガジェット達の向こうで爆発が起き、集団に穴が空く。

「なんだ？新手か？ちょうどいい。そろそろ雑魚の相手は飽きてきたころだったんだ。」
俺は新たな来襲に喜んだ。

ところが…現れたのは俺と同じくらいの青い宝石のついたデバイスを持った女の子だった。私はＡＭＦを魔力を体に流しながらキャンセルし、フルスピードで進んで行った…邪魔なガジェットはアクセル・ランサーで撃墜しながら戦いの中心部へとたどり着く。

そこにいたのは、私と同じくらいに見える、左手に黒い剣を持った男の子だった。

私達は固まった。そして、同じ言葉を口にした。

「あなた（お前）…誰？」

それが二人の出会いだった。

「え？えと、私は高町ヴィヴィオっていうんだ。あなたは？」

「俺？俺は風間カナン。変な名字だろ？」

「そ、そんなことないよ。」

サァ…

二人の間に柔らかな風が抜ける…

「いい風だな…」

「うん…」

ここでお互いの顔をしっかりと見る…

カナン君は、ルビーのような綺麗な赤色の瞳

少し長い髪をした格好いい男の子…

ヴィヴィオは、長い金髪をポニーテールにまとめ、左目は赤、右目は緑のオッドアイ…少しおっとりした感じの可愛い女の子だった。

「カナン君って呼んでもいいかな？」

「じゃあ俺はヴィヴィオって呼ぶからな。」

「うん。よろしくね、カナン君。」

差し出される手…

「ああ。よろしく、ヴィヴィオ。」

そっと握り握手をかわす。

「あはは！」

「な、何で笑ってんだよ。」

「カ、カナン君だって。」

「そ、そうだな。ははは。何だこれ。」

何故だか急に笑いが込み上げて来て止まらない。

俺達は状況を忘れてしまったかのように武器も構えずただ笑いあっていた。

絶対にいい友達になれる…そう思っていたのに…

心に声が響く…

（何をしている。あれはお前の敵だぞ…殺せ。）

その声が響いた途端目の前の少女が敵として認識される…少女を殺さなくてはならないと思った。

嫌だ…ヴィヴィオは関係ない…嫌…だ…

「ヴィ…ヴィオ…に…げ…」

「え！？」

突然雰囲気が変わったと思いきや、カナン君がいきなり切りかかってきた。

私は反射的にプロテクションで防いだ。

「カナン君！いきなりなにするの！」

「…」

「カナン君！」

カナン君の目はもう私を敵としてしか認識していなかった。

とにかく魔力をプロテクションにこめ弾き飛ばした。

「どうしたの？カナン君もとに戻ってよ！」

「…」

無言でカナン君は剣を構えた。

「よく見たらあの剣は…まさかエクスカリバー？」

彼の持っている剣は消失したロストロギアエクスカリバーにそっくりだった。ただ黒いことを除いては…

「あの剣にあやつられてるんだ…」

再びカナン君が切りかかってきた。

ギリギリでよける。

「くっ！そんな力を使っちゃだめだよ。取り込まれちゃう！」

「…」

返事は来ない。

「仕方ない、無理やりにでも止めるからね！フェアリーモードセカンド！」

「了解！」

「行くよ！」

「…」　緑と黒の斬撃がぶつかりあい火花が散る。

「はぁぁ！」

飛び上がり頭上で回転させ全体重をのせた一撃を放つ。

「…」

無言で受け止めびくともしない。

ギァン！

「っ！わぁぁ！」

弾き飛ばされ周りにいたガジェットを吹き飛ばしながら私は木にぶつかって止まった。

「うぅ…強い。」

痛みを耐えて立ち上がると一直線に突っ込んでくるカナン君がいた。

鋭い突きが繰り出される加減はない…当たれば死ぬ！

間一髪で横に飛びかわす。

突きが放たれた場所は、さっきまで私の頭があった場所…木に大穴が空いていた。

「危なかった…」

戦闘に集中しているから気付かなかったが、ガジェット達は私達が戦闘を始めてから一度も攻撃を仕掛けてこない。

（どういうことだろう…）

と思案を巡らせていると、カナン君がまた突っ込んでくる。

「まぁいいや、後で考えよ。」

切り替えた私は迎え撃つ。

再び斬撃が混じりあい、斬り結ぶ。

「疾風一閃！」

腰だめに構えられた巨剣…

カートリッジを一発使い、風を纏わせる…

「ウインドスラッシャー！！」
思い切り振り抜く！

「…」
ギィン…

「っ！」
もう何度目になるだろう…高速で背後に周りこんで斬りつけても私の全体重をのせて叩きつけても全て防がれる…

「…」
ギァン！

「きゃ！」

あっさり弾き飛ばされ、さらに一瞬で間合いを詰められ、猛攻が始まる…

「く…！そろそろ決めないとまずいかな…」
元々ヴィヴィオはセンターガードのポジションのためにスバルやエリオのような筋力はなく、技術もまだ拙い…
その結果が徐々に表れ、次第に押され始めた。
実際、ヴィヴィオはもう腕の感覚がほとんどなく受け止めるだけで精一杯だった。
カナンはそんな様子は全く見られず、剣速をさらに上げてきた。

「痛っ！」
カナン君の剣先がかすった。微量だか血が吹き出す。
「まだ…終われない…はあああ！」

最後の力を使いカナン君を弾き飛ばし距離をとる。カードリッジを2つロード

「貫け！風神！」

「ｇａｌｅ　ｓｒａｓｈ　ｂｒａｓｔ！」

風が刀身に集まる。

私は渾身の力で振り抜いた…

巨大なカマイタチがカナン君に襲いかかった。

しかし、カナン君はその一撃を一振りで軽く吹き飛ばす。

「嘘…」カートリッジを使った攻撃を…あっさり…

「…」

カナン君が剣を上段に構えた彼の持つ黒剣に凄まじい闇の力が集まっていく。

「エクス…カリバー…」

真っ黒な波動が黒剣から放たれた。

私は避けられる筈もなく、悲鳴もあげられず闇に飲み込まれた。「ヴィヴィオ？…何で…嘘だ…」

殺戮衝動から解放されやっと自我を取り戻した俺。

そこにはヴィヴィオが血だらけで倒れていた。

「こいつはスカリエッティの仲間だったのだ。倒したお前が正義だ。」

「本当にそう…なのか？あんなに綺麗な目をして、明るかったこの子が？」

「本当だ、油断させたところを殺すつもりだったのだ。私が気付か

なければ危なかったぞ。」

「…」

「ヴィヴィオ～どこ～」

「まずいな…また新手が来た、いったん逃げるぞ。」

「あぁ…」

俺は無気力になっていて剣の言葉に従い飛び去った。

ガサッ…

「ヴィヴィオ!?みんなヴィヴィオが!ヴィヴィオが!」

混乱した。何故かヴィヴィオが血まみれになって倒れているからだ。

「スバル落ち着いて、何があったの?」

念話でギン姉が言った。

「ヴィヴィオが血まみれで倒れてるの!」

「なんですって!?」

ティアの声…

「とりあえず、副隊長達に連絡をするわ。そこでまってて!」

ギン姉からの念話がきれる

「スバルさん私達も向かいます。もう少しだけまっててください。」

キャロからも切れた。

「ヴィヴィオなら大丈夫ですから落ち着いてくださいね。」

自身もクローンだからか、メンバーで一番冷静なエリオ。

「僕たち人造魔導師は普通の人間よりはるかに頑丈です。さらにヴィヴィオには聖王の鎧もあるので、並大抵なことでは死にませんよ。」

エリオはそう言って念話を切った。　しばらくするとヴィータ副隊長が飛んできた。

「ヴィヴィオ！なんで私を呼ばなかったんだ…バカ野郎…」

遅れてシグナム副隊長も到着し、

「ヴァイス！早く来い！」　と念話なのに口に出して怒鳴っていた。

ヘリが到着しヴィヴィオを急いで乗せる。

フルスピードでヘリを飛ばし、六課に急いだ。

ようやく六課についてヴィヴィオは集中治療室へと運びこまれていった…

「ヴィヴィオ！なんでなんでヴィヴィオが…」

なのはさん、フェイトさんは泣き崩れた。

「なのは、フェイト、ヴィヴィオを信じよう…あの子なら大丈夫だよ。」

遅れて到着したユーノさんが二人を励ましていた…

「ヴィヴィオに一体何があったんや…」

はやてさんも悲しんでいた…

六課に悲しい時間が流れていた。

「ククク…エクスカリバー…素晴らしい力じゃないか。」

「嬉しそうですね。Ｄｒ？」

「嬉しいに決まってるじゃないか、みたまえこの数値を！標準状態でＡＡ＋、今回計測できた最高値はＳ＋だよ？さらに使った本人はまだ余裕がありそうだね…おそらくまだまだ上がるよ！」

「確かに凄い魔力ですね。これを相手にしていた方もかなりのランクなのでは？」「それがね、面白いことにあの聖王之器だったんだよ！こんなところでまた会えるとはねぇ…ククク」

「でも、あれを食らったんですよね？大丈夫なのですか？」

「僕の最高作品があんなもので死ぬはずはないよ。ところで姉妹達は起きたのかい？」

「五人は目を覚ましました。」

「じゃあ全員起きたら呼んでくれ、名前をつけてあげないとねぇ…」

「分かりました。」六課…スバル視点

「とりあえず、一命はとりとめました。今は落ち着いて眠っています。」

「良かったぁ～」
なのはさん、フェイトさん、ユーノさんが崩れ落ちた。

「とは言うものの、死ななくて済んだのは、ヴィヴィオちゃんだからですよ。聖王の鎧、バリアジャケット、さらに肉体を強化しているヴィヴィオちゃんであの傷なら他の人なら即死です。」
「…そんな凄いやつとヴィヴィオは一人で…どうして私達の助けを

呼ばなかったんだろう…信頼されてないのかな…」
私は落ち込んだ。
突然病室のドアが開いた。
「それは…違いますよ…」
ヴィヴィオがフラフラと松葉杖をつきながら歩いてきた。
「ヴィヴィオ！寝てなくちゃダメだよ！」
なのはさんとフェイトさんが叫ぶ。
「大丈夫だよ。ママ。スバルさん私は、信用していなかったわけではありません。絶対違います。」
「じゃあどうして呼んでくれなかったの？」
「カナン君はなんだか私が一人で助けなきゃいけない気がしたんです。…」
「カナン君？」
「はい…一人でガジェットと戦っていた男の子の名前です。おそらく持っていたのはロストロギアエクスカリバー…ただ何故かは分かりませんが黒く変色していました。」
「多分、私の時と同じやね。プログラムがおかしくなって暴走してるんや…」

「直す方法はないんですか？」

「現在のマスターつまりはカナン君やけど、その子がプログラムを修正できれば直ると思う…」

「それが出来れば、カナン君も元に戻るんですね？」

「ただ、暴走してる相手を一回ぶっ飛ばして、気絶ささなあかんけどな。
」

「大変ですね…でも方法がそれしかないんだったらやりますよ！」

「まぁとりあえず今は傷を癒すことが先決や、ゆっくりやすみぃ。」

「そうですね。そうさせてもらいます。
あの…心配かけてすいませんでした。」

最後に深々と頭を下げてヴィヴィオは病室へと戻っていった。

「なんかますますなのはちゃんに似てきたんちゃうか？」

「うん、そうだね。」

「そうかなぁ？例えばどこが？」

「一生懸命になるとその事しか考えられなくなるところとか…」

「自分が傷ついても、相手を助けようとするところとか…」

「一度決めたら、やり通すまで諦めないところとか…」

「私ってそんなふうに見られてたんだ…」

「なのはさん？自覚なかったんですか？」

「全然…ちょっとお節介かなとは思ってたけど…」

「ちょっとじゃなくてかなりだよ。なのは」

「そ、そう？」

「「「うんうん！」」」

一同頷く。

「ふぇぇ～ごめんなさ～い！」　カナン視点

もうヴィヴィオのことは忘れよう。俺はスカリエッティを殺すことだけを考えて生きて行こう。

「やっと立ち直ったのか…。うじうじして女みたいな奴だな…」

「うるさい…折るぞ…」

うじうじ…か…アイツにも言われたっけ…

「お～怖い怖い…」

「それで…何か情報はないのか？」

「ないな…適当に飛んで探すしかない…」

「仕方ない。行くぞ…」

今まで隠れ家しにしていた岩場を飛び去る。
スカリエッティ視点、

「Ｄｒ姉妹が全員目を覚ましました…」

「おお、そうかいじゃ行こうかな。」

「やぁみんな調子はどうだい？」

「「「快調です。」」」
「それは良かった。じゃ名前をあげよう。」

「Ｎｏ．１はウーノ、Ｎｏ．２はクアットロ、君たちのお姉さんだから逆らっちゃいけないよ？
Ｎｏ．３ディルナ、Ｎｏ．４セレスタ、Ｎｏ．５ウーズ、Ｎｏ．６レクタ、Ｎｏ．７テュロ、Ｎｏ．８リティス、Ｎｏ．９レスベル、Ｎｏ．１０スレイ、Ｎｏ．１１クルス、Ｎｏ．１２イセリア。
以上が新ナンバーズだ。記憶できたかな？」

「「「了解ですＤｒ」」」

「さて、しばらくは監視だから、暇だとは思うけど、何かあった時にいつでも出られるようにしておいておくれよ。」
スカリエッティ一味は準備を終えた…。六課…
「はぁぁぁ！」

「てぁぁぁぁ！」
私は、シグナムさんを相手にクロスレンジで戦っていた。
前回カナン君と戦ってわかったこと、それは、筋力の差…同じように剣をまともに合わせていれば、いずれ弱い方が押し負ける。

そう理解した私は、技術面を強化することにした。
まともに受けるのではなく受け流す。かわせるものは受け止めずかわす。
その訓練を私はシグナム副隊長に頼んだ。シグナム副隊長は忙しいにも関わらず、少しの暇が出来た時に相手をしてくれた。
始めは吹き飛ばされたり、避けきれなかったりで身体中傷だらけになったが、私はカナン君を助けるために毎日続けた。
そうして訓練を始めて１０日目になった。
私は、受け流してさらにその後反撃まで加えられるようになり、体につける傷も減っていった。
模擬戦や出撃の時にも、ほとんどセカンドモードを使っていた。
もちろん遠距離魔法も訓練し、なのはママとフェイトママの集束魔法、スターライトブレイカー、プラズマザンバー（私の場合はウインドだが）ブレイカーを習得し、一発限りではあるが打てるようになった。ある日フォワードメンバーは八神部隊長の部屋に呼び出された。

「私はみんなに休みをあげようと思うんよ…」

「えぇ～！こんなときにですか？」
私は驚いて言ってしまった。

「こんなときやからこそや。みんなはここのところ頑張り過ぎや、特にヴィヴィオ…あんたはな。」

「私なら大丈夫ですよ！まだまだやれます。お休みなんていりません。」

「ヴィヴィオ～？わかってへんなぁ？これは強制やねん。たまには、子供らしく遊びに行ってきなさい！」

「でも…」

「ま、仕方ないよ。折角のお休みなんだから楽しも？」

「さすがスバルね切り替え早いわ…。」

「だってなかなかお休みもらえないんだし、楽しまなきゃ損でしょ？」

「そう…ですね。たまには遊びましょう！」

「そうそう。そうこなくっちゃ！」

こうして少しだけ休むことにした私達。たたんでいた羽を思い切り伸ばしてこようと思います。

第三話　戦士達の休息（前書き）

部隊長に休暇をとるように命令された私達。　あいにくママ達はお仕事で一緒にこれないけれど、笑って見送ってくれた。
たまには事件の事も忘れて羽を伸ばさなきゃね！　魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります。

第三話　戦士達の休息

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

息抜きに八神部隊長から休みをもらった私達フォワードメンバーは、久々に普通の若者らしく過ごすことにした。

「うん、こんなもんね。ヴァイス陸曹、また貸してもらってすいません。」

「なーに、構わないさ。最近走れなかったから、こいつも嬉しがってるよ。」

「バイクで街まで行くんですか？」

「そうよ、ヴィヴィオは私の後に乗ってね。」

「ティア、ティアねぇ私は？」　スバルさんが聞いてくる。

「あんたにはマッハキャリバーがいるじゃない。それでついてきて。」

「私も乗りたかったのに…」
すねちゃったスバルさん

「仕方ないじゃない。ヴィヴィオは飛ぶわけにもいかないし。」

「わかったよ…」

「スバルさんごめんなさい…」

「いいよ。いいよ。それより振り落とされないように、ティアにしっかり捕まってなよ。」

「どういう意味よ！」

「別にティアの運転が下手な訳じゃなくて、ヴィヴィオはこういうの初めてでしょ？」

「そうですね…車は乗りましたがバイクは初めてです。」

「ほらね。言っとかないと、危ないから言っただけだよ。」

「そういうことなら許してあげる。慣れるまではゆっくり行くし大丈夫だからね。」

「ありがとうございます。」

「なんか、初めて私がのる時より、かなり優しいよね…私の時なんか、最初からアクセル全開だったのに…」

「あれは、あんたがギャアギャアうるさいから、落とそうとしたからよ。」

「ひどいよティア！」

「うるさい！そろそろ行くわよ！」

「は～い…」

スバルさんはマッハキャリバーを装着し、一緒に走り出した。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「わぁ～！」
私はしばらくは、慣れない座席が怖かったが慣れて来ると、風が気持ち良かった。

「ティアさん。もう大丈夫です。スピード上げていいですよ。」

「そう？じゃ、行くわよ～。」

エンジンが唸りをあげスピードがグンと上がる。

「わ、ティア待ってよ。」
あわててスバルさんもスピードをあげる。

「楽し～い！」

「それは良かったわ。あ、ヴィヴィオカーブだから体の体重を右に傾けて！」「こうですか？」
手は話さないようにしっかり持って、道路すれすれまで体をずらす。
するとバイクは、傾き、倒れそうになるが、横転せず魔法のようにタイヤが地面にくっついたまま、カーブを曲がった。

「そうそう、ヴィヴィオ上手いじゃない！スバルの初めての時より、断然走りやすいわ。」

「だって怖かったんだもん！」

後ろからスバルさんの非難の声がとんだ。

「ほんとにうるさい！」　ティアナさんが怒鳴り返した。

「うぅ…」

スバルさんは涙目になってしまった。しかし、それも一瞬で明るい顔に戻り、

「そうだ！ねぇティア街まで競走しようよ！」

「いいわね。負けたら昼代全額奢りね。」

「いいよ。負けないからね！」

「二人とも頑張って下さい♪」

そうして二人共アクセルを全開にし、街まで減速せずに競走した。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一方ライトニングはというと、ギンガの運転で安全に目的地へと向かっていた。

途中まではスバルとティアナは前にいたのだが、競走を始めたのか、あっというまに見えなくなってしまった。

「スバルさんたち速〜い！」

キャロが感心していた。

「いや、キャロ？あれは明らかにスピード違犯だよ？…」

エリオが教える。

「そうなの？じゃあダメなことだよね。あとで注意しなくちゃ。」

本当なら注意ではすまないが、そこはキャロの言うことなので、苦笑いで返すエリオ。

「全く…あの二人は変わらないわね…ヴィヴィオ大丈夫かな…」
ギンガはスバルとティアナに呆れて、ヴィヴィオの心配をしていた。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼
そんなギンガの心配をよそにヴィヴィオ本人はというと…
「あはははは！とっても楽しーい！」
と笑っていた。
「「ラストスパート！」」
全速力で走る。街のゲートが見えるがブレーキもかけず、突っ込んだ。
次の瞬間凄まじい音が鳴り響き、ドリフトをして街のゲートの前に止まった私達。
「ふぅ…引き分けってとこね。」
「そうだね。お昼どうしよっか？」
「ワリカンでいいんじゃないですか？」
「そうね。それでいい？」
「もちろん。」
バイクを止めてパーキングに置いて、三人は街の中へ入って言った。
それからしばらく後にギンガたちの車がやって来た。

「このゲートの手前にある黒い線は何？」
キャロがたずねた。

「多分ドリフトをして止まったんじゃないかな？」

「ドリフトって？」「ブレーキをかけずに横に滑って曲がったり止まったりする技だよ。」
超世間知らず少女に根気よく答えるエリオ。

「そんな凄い技を使えるんだ。スバルさんたち凄いなぁ～」
また感心しているキャロ

「…まぁ普通はレーサーとかがやる事だしね。でも普通はこんな街の近くではやらないよ。」
また苦笑いしているエリオ。

「エリオも大変ねぇ…じゃ私は邪魔しちゃ悪いし、一人で行くわ。」
「え、ちょっとギンガさん？」
慌てるエリオ

「頑張ってねエリオ君♪」
ウィンクをして去るギンガ。

「何を頑張るんですか…ギンガさん…」
崩れるエリオ。

「エリオ君、エリオ君、せっかく二人っきりになったんだし、デートしよ？」

少し赤く頬を染めたキャロが言ってくる。

（可愛い…）

返事を忘れ見とれてしまったエリオ。

「エリオ君？」

キャロが首を傾げる。

「あ、う、うんそうだね。行こう。」

「うん！」

二人は歩き出した。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「さて、何しよっか。」

「そうですね～。まだお昼までは時間がありますし…」

「あ、あそこにアイス売ってる。あれ食べながら考えましょ。」

「わ～いアイス～」

スバルさんはとても嬉しそうだ。

「何にする？」

「私は、チョコとストロベリーとオレンジの三段重ね！」

さ、三段…うわぁ積むのが大変そう…

「じゃあ、私は…バニラとチョコでお願いします。」

「ん～じゃあ私はミントとオレンジにしよっと。

じゃあ買ってくるね。

一人じゃ持てないからスバル、アンタも来なさい。」

「は～い。」

しばらくするとティアナさん達がアイスを持ってきてくれた。

「はい。これがヴィヴィオのね。」

「ありがとうございます。あのお金はいくらですか？」

「ん？いらないわよ。これくらい先輩だし奢るわ」

「そんな！悪いですよ！」

「とけちゃうわよ？さっさと食べる！」

「ティアは言ったら聞かないから言うだけ無駄だよ。」

「じゃあティアナさん、少し食べて下さい！」

「はいはい。わかったわよ。」

ティアナさんが持っていたスプーンで私のアイスをすくいとる。

「おいし♪じゃヴィヴィオあ～ん。」

「？あ～ん」

素直に口を開けた私、そこへアイスが入って来た。

「…美味しい。」

「そう？良かった。」「ってこれじゃ意味ないです！」

「いいじゃないこれくらい。」

「うう～」

「ほらね、言うだけ無駄でしょ？ところで私も二人にあ～んってしてほしいなぁ。」

キュピーン！

「いいわよ、はいスバルあ～ん♪」

ティアナさんが私に目配せする。私は頷く。

ティアナさんが入れると同時に私も自分のアイスをスバルさんの口に放り込んだ。

「う～ん！美味し…い？」スバルさんが首を傾げる

「どうしたんですか？」

「なんかチョコとオレンジが混ざった味がする…」

「気のせいよ。」

「そうかな？」

「そうですよ。ほら次は私の番です。スバルさん。あ～んしてください。」

「あ～ん♪」

次は、自分のアイス二種類を混ぜ、ティアナさんに目配せした。

ティアナさんも二種類混ぜた。
それをまた同時にスバルさん口に放り込む。

「…美味しくない」
「おかしいですね。どうしたんですか？」

「なんか、味がめちゃくちゃで分かんない…絶対二人で何かしたでしょ…」

「気のせいですよ♪」
そうして食べさせながら遊んでいる内にアイスはなくなってしまった。

「ふぅ、アイスも食べ終わったし、洋服屋さんにでもいこうよ。」

「いいですね。ティアナさんはどうですか？」

「いいわよ。行きましょう。」私達の次の行動が決定し洋服屋さんに向かった。
この後私は後悔することになる…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
一方エリオとキャロは…

昔はシャーリーさんに予定を組み立ててもらってそれの通りに行かなきゃ行けないと思ってたけど…
あの時の僕は何を考えていたんだか…
今、考えるとあの頃はデートという考えが頭から抜けていたんだな～

「はぁ…」

自分の鈍さにため息が出る…

「エリオ君どうしたの？」

「何でもないよ。さて…どこに行こうか？」

「う～ん。あ、展望台があるよ。あそこに行ってみようよ。」
キャロが指さしな先には、ビルなんかより遥かに高い展望台が立っていた。

「いいね。行こう。」

「うん。」
僕達二人は自然に手を繋いで、展望台へと向かった。
キャロとの関係は少しだが進展していると思いたい。
「うわぁ。高～い！」

「ほんとだ。人があんなに小さく見える。」

「あ、キャロ、クリアゾーンだってさ。面白そうだしいこうよ。」

「うん！」
とは言ったものの、あまりの高さに少し足がすくんだ。

「なんだか落ちそうだね。」

「怖いよエリオ君…」
キャロが腕に抱きつく。

「いつも、ヘリから飛び降りてるじゃない。」

「あれは、バリアジャケットを来てるし、エリオ君やフリードがいてくれるから大丈夫なの。」

「僕は今もいるよ。大丈夫。」

「うん…絶対離れないでね。」

「離れないから安心して、さぁ行こ。」
ゆっくり、ゆっくりと確実に進み、そうしてアクリルの床を渡り終える。

「はぁ～怖かった。」
安堵と共にキャロが言った。
そこへ

「お二人ともあついね～！」
とはやしたてられる。
僕達は周囲の観光客の注目を集めていた。
なぜならキャロはまだ腕に抱きついたままだったからだ。
あわてて離れようとするキャロ。

「そのままでいいよ。せっかくのデートなんだしね。」
昔とは違うんだ…ちょっとだけ…
僕が一歩踏み出さなきゃ。
「うん！」
と赤くなりながらも、また腕をくんだ。

（なんだかエリオ君またかっこよくなったな。）

と思ったキャロだった。
少しは恋人らしくなったと言えるだろう。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一方ヴィヴィオ達はというと…

私達は洋服屋さんにいた。
最初は三人でこの服が可愛いとか、こっちの方がいいなどとショッピングを楽しんでいたんだけど…
二人の興味は私へと向けられ自分の服もそっちのけで私に似合う服ばかりを探し始めた…

「ヴィヴィオこれなんてどうかな！似合うと思うんだけど。」
スバルさんがジーンズパンツと白い半袖Tシャツ、黒い上着を持ってきた。

「スバルはバカねぇ、そんな男の子みたいな格好ヴィヴィオに似合うわけないじゃない。
ヴィヴィオにはやっぱりこっちの方が似合うわよ。」
ティアナさんが持ってきたのは、肩と背中が大きく露出しているちょっと大人っぽい緑のワンピースだった。

「私の服のが似合うよ！」

「あんたは、女の子としてのセンスがかけてんのよ！」

「そんなことないもん！最近はこういうのもはやってるんだよ！」

「じゃヴィヴィオに着てもらってどっちが似合うか審査しましょう。」

「なっ！困ります！」

「わかった！絶対私の方が似合うんだから！」
あの～お二人とも私の意思は無視ですか？

「「ヴィヴィオ試着してきて！」」

やっぱり無視なんですね…

「はぁ～なんでこうなるのかな～…」
そうぼやきつつ私はまずスバルさんの服を着る。
着替え終わり外に出る。

「わぁ～似合う似合う！」
「う…悔しいけど似合ってるわ。」

「そうですか？変じゃないですか？」

「ヴィヴィオはボーイッシュな格好も出来るんだね。とっても似合ってる。
そうだ！ポケットに手を入れてよ。」
言われてポケットに手を突っ込む。

「「「おお～」」」
周囲から声があがる。
…私モデルさんじゃないんだけど…

「ヴィヴィオかっこいい～！」

「そ、そうですか？ありがとうございます。」

「つ、次は私の番よ。ヴィヴィオ着替えて！」

悔しそうなティアナさん。拗ねた顔がかわいい。思わず笑ってしまう。

「何笑ってるの！早く着替えて！」

雷が落ちた…怖いよぅ

「わ、分かりました！」

怒声を浴び慌てて試着室に戻る。

「これか…ちょっと恥ずかしいな。」

確かに可愛い服ではあるが、普段着なれない服だけにかなり違和感があった…

着替えて外にでる。

「うわぁ…」

「これは…ヤバいわね…」

「どうしたんですか？そんなに変なんですか？」

周囲の人までがこっちを見たまま固まっている。

「逆だよヴィヴィオ。似合い過ぎてびっくりしてるの。」

スバルさんが言ってくれた。

「あ、ありがとうございます！…ティアナさん？顔が赤いですよ？」
ティアさんは顔を赤くして視線をそらしていた。

「うるさい！先に外に出てる！」
そういってティアナさんは店の外に出ていってしまった。
私何か怒らせることでもしたのかな？

「あらら、ティア行っちゃった…
勝負は私の負けだね。ヴィヴィオこの服プレゼントするよ。」

「え！？いいですよ！」
慌てて断る私

「ダ～メ。これは強制！こんな可愛いヴィヴィオなのはさん達にも見せなきゃ！」

「こ、この服をですか？」
ママ達に見せるのは恥ずかしいかな…

「うん♪きっとびっくりするよ～。
じゃ、買ってくるね～。」
「ま、待って下さい、せめて半分出させて欲しいです。」
先輩に全額負担は気が引ける。

「それならよろしい。」
服を買いにいっただけなはずなのにまるでファションショーをしているみたいになってしまった。
でも、それを見ていた店長さんが、いい宣伝になったからと服の値段を下げてくれて普通よりかなり安く買えたので、結果的には良かったのかな？

「ティア～お待たせ～。」
「遅いわよ！何してたの。？ってその包み…まさか…」
「えへへ…買っちゃいました…。」
「ス～バ～ル～！」
ジト目でスバルさんを睨み付けるティアナさん。
「もう買っちゃったもーん。」
そんな視線をもろともせず、言い放つ。
「はぁ、まったく…今夜は睡眠不足ね…」
ティアさんはこのファションショーもどきでかなり体力を消費したらしかった。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
そのころギンガは町外れにいた。そこには機械の破片が散らばっており、管理局の人間が集まっていた。
「あれ？」
そしてギンガは知った顔を見つける。
「ノーヴェ！チンクも！」
「ん？あ、ギン姉！」
「姉上！」
元ナンバーズの二人現在はＮ２Ｒのメンバー

「久しぶりね。これはどうなってるの？」
このことを訊ねる。

「それが、これはガジェットの残骸なんだけどな。
戦闘があったってことなんだけど、ガジェットの残骸以外は何も見つからねぇんだ。」

周囲を見渡すとガジェットの残骸を除けば、確かに戦闘をしたとは思えないほど綺麗だった。

「形状と残骸の量からして、三型が三、四機と一型が十機以上はいたはずなんだ。」

「そんなに！？それだけの数がいればなのはさんやフェイトさんでも、多少は損害は出すのに…」
「そうなんですよ。ところが地面は爆発の跡以外は綺麗なままなんです。」

「まるで、ほとんどガジェットに認識されずに破壊したかのように…」

「ＡＭＦを無効化し、かつ、一瞬で相手を倒す。そんなことが出来るのは…」　ギンガは考える。

「まさか…ヴィヴィオが言っていたカナン君…」

「カナン？誰ですか？」

「簡単に言うと、暴走したロストロギア、エクスカリバーに操られ

てる男の子よ…」
「はぁ？…なんでそいつがガジェットと戦ってんだ？」
「スカリエッティ脱獄はもう聞いたわよね。」
「うん…」
「はい…」
「そのスカリエッティがエクスカリバーを狙ってるのよ…
世界中にガジェットをばらまいて捜査してるみたい。このガジェットはカナン君を見つけたけど、増援を呼ぶ前に撃墜されたみたいね…」
「なるほど。」
「ところでギン姉なんでこんなとこにいるんだ？」
「私？私はちょっと休暇をもらってね。偶然ここにたどり着いたの。ところで他の子たちは？」
「私とチンク姉以外は他の仕事をしてるよ。それがどうしたんだ？」
「ちょっとこれからの戦闘に備えて、あなた達の力を貸して欲しくてね。」
「そういうことなら任しといけ！六課に力を貸せるように父さんに話してみる。」
「えぇ、お願いね。」
こうしてギンガ達は別れた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
カナン視点…

「ちっまさかガジェットに見つかるとはな。」

「貴様が食料など買いに街に行くからだろう。」

「それは仕方ない。復讐を果たす前に空腹で倒れるなんて嫌だからな。」

「つくづく人間とはめんどうな生き物だな。」

「ところで、最近情報はないのか?」

「どういうわけか、ガジェットを動かす以外はまったく動きがないな…」

「ちっ!めんどくさい野郎だ…」「まぁ奴が来ないならこちらから動くまでだ。もう少し力を蓄えるまでまて…」

「…それまであとどれ位だ?」

「一月といった所だな…」

「長いな…もっと急げないのか?…」

「無理を言うなこれで限界だ。」

「仕方ない…待ってやるよ…」

「少しの間の休暇とでも思っておけ。」

「休暇なんざいらないんだがな…」

「そういうな…六課の方も休みみたいだぞ？」

「六課の話はするな…こんどしたら折るぞ…」

「それは怖い…黙っておいてやるか。」

「そうしろ。お前自身のためにもな…俺は寝る。もう話しかけんなよ…」

「そうか…どうせもう話すこともない。寝ていろ。」

「言われなくても寝るさ…」俺と出会いさえしなければヴィヴィオは生きていられたのに…

謝ってすむ話じゃないけど…ごめんな…

（つくづく人間というのは弱いものだな…

何故殺すことにこうも心を傷める…

だが…もうすぐその心も消える…ククク…良かったな）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

そのころ六課では、

「みんな休みは満喫できたか？」

「「「はい！」」」

休暇をもらったおかげか全員普段よりさらに元気になっていた。

「それは良かったわ。」

「ところで八神部隊長、あとでみんなを食堂に集めて貰えませんか？」

いきなりスバルさんが八神部隊長に提案をする…

「？なんでや。」

「ちょっと見せたいものがあるんですよ。驚きますよ。」

「なんか知らんけど面白そうやね。わかった。ほんならみんなに食事の時間は仕事はオフにしてもらうわ♪」

「さすが八神部隊長♪話がわかる～♪」

「そのかわり絶対驚かしてや。しょうもないもんやったら…もれなく仕事二倍や。」

「じゃ、驚かせたら仕事半分減らしてもらえます？」

「賭けか…ええやろ。受けてたつよ…」

「絶対驚かせますよ…」

「絶対驚かへん…」

ゴゴゴゴ…二人の背後に火炎が見える…

「スバルあんたまさかアレをみせる気？」

「うん！もちろん！絶対勝ぁつ！」

「はぁ…まぁ可愛いからいいけど…」

あの～お三方？私の意思はまた無視されるんですか？されるんでしょうね。

「ヴィヴィオ行こ！完璧にしなきゃね♪」

「はぁ…」

私は部屋へと引きずられていった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

そして食事の時間。

「みなさん。お集まり頂きありがとうございます。

では、ヴィヴィオさんどうぞ～！」

スバルさんが高らかに宣言すると同時にどこにそんな設備があったのか、入り口のみがライトアップされ部屋が暗くなる。

「…これ絶対費用の無駄遣いだよね…

はぁ～仕方ない行こ…」

私は歩き出した。

「「「おおお～」」」

本日二回目の驚きの声。

食堂の中心に立つとマイクが渡された。

つまり喋れと？　もう何でもいいや。

「え～皆さんこんな私のためにお集まり頂き本当にありがとうございます。
私が六課に配属されてもう一月も経ちました。
皆さんのおかげでとても充実した毎日を送らせて頂いてます。
それでは！今、この時だけは仕事を忘れて楽しみましょう！では乾杯！」

「「「「乾杯！」」」」
こうして賑やかな食事会が始まった。
「ヴィヴィオ～似合ってるよ～」
なのはママが誉めてくれた。

「ヴィヴィオ可愛い！」
フェイトママにいたっては抱きついてきた。

「フェイトママ、恥ずかしいよ…」

「ごめん…」
フェイトママが離れる。

「でも本当に可愛いよヴィヴィオ！」

「ありがとう。なのはママ、フェイトママ。」

「いや～ほんまに似合ってるわ。悔しいけど私の負けやな…
こんな綺麗なヴィヴィオを見れるなんてな～。」

「じゃあ明日の仕事は？」
期待に胸を膨らませスバルさんが八神部隊長に詰めよる。

「私も一度言ったことは守るよ。スバルは明日仕事半分。」

「やったー！ありがとうございます！」

しかし、喜んだのもつかの間…

「やけど、協力してくれたヴィヴィオの仕事の手伝いをやらんとな♪」

「…それじゃ変わらないよぉ…」

「私が半分になるんですね。協力して良かったかな。」

「…しくしく」

「八神部隊長ありがとうございます♪」

このあとフォワードメンバーに囲まれ、たくさん誉めてもらった。

「ヴィヴィオとっても綺麗…」

「ありがとうキャロ」

「…ちょっと目のやりどころに困る服だね。」

エリオに指摘される…自分の格好を思い出す…

「…それは言わないで恥ずかしくなるから。」

このあとも、ヴォルケンリッター一同やロングアーチの人達に可愛

いといってもらえた。
恥ずかしかったけどやって良かったなと思った。
ちなみにこのあとほとんどの男性局員＋至近距離でヴィヴィオを見た。スバル以外のフォワードメンバー＋親バカ二人が寝不足になったのは言うまでもない。

第四話　先輩対後輩（前書き）

最近日課になっている早朝練習をやるために草原に向かう私、しかしそこには先客がいた…

「ヴィヴィオ待ってたよ。」

スバルさんだった。

「この前のなのはさんとの模擬戦を見てからずっと勝負したかったんだ！受けてくれるよね？」

返事は決まっていた。　「もちろんです！」

ママに憧れて魔法少女になった、先輩と後輩の戦いが始まる。

魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります。

第四話　先輩対後輩

「ヴィヴィオ行くよ！」

「うん！手加減抜きだよ！」

私はスバルさんと対峙していた。

「もちろん！ギア・エクセリオン！」

「Ｄｒｉｖｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ！」

空薬莢が一つ弾き出され、スバルさんから凄まじい魔力が溢れる出る。

さらにマッハキャリバーに青い羽がはえる。

「これが、スバルさんのフルドライブ…ギア・エクセリオン…凄いや！」

私は驚きながらも笑う。　ママが育てたスバルさんとこれから全力で戦うのだ。恐怖はない、むしろとても楽しい！

「でも…負けない！モードセカンド起動！」

「起動開始！」

フェアリーを両刃剣のセカンドモードにして対峙する。

静寂…そして同時に踏み込む！

「リボルバーナックル！」

カードリッジを一発ロードし、スバルさんが殴りかかってくる。

私は、シグナム副隊長との特訓の成果を発揮する。

最低限の力で拳を受けそして流す。

「え？…」
スバルさんの体勢が崩れる。
「はぁぁぁ！」
私はがら空きの左の脇を狙い全力でデバイスを振った。
完全に隙をついたにも関わらず、スバルさんは使っていない右腕を脇に回しプロテクションを張った。
まるでコンクリートを殴ったかのような衝撃が両腕に伝わる。
「つっ！硬い！」
さすがママ達が鍛えたフロントアタッカーだ。
反応速度、プロテクションの硬さ共に段違いだ。
そうして防がれている内に、スバルさんは体勢を立て直し、再び殴りかかってきた。
「フェアリー！お願い！」
「お任せを。」
フェアリーのおかげで何とかプロテクションを張れた私。
安心するのもつかの間、
「ＩＳ発動振動破砕！」
スバルさんの目が一瞬金色になった。
その瞬間私のプロテクションは何も無かったかのように破壊される。
「くっ！」　刃を退き、バックステップでかわす。
距離が開く。
しかし、あっという間に距離を詰められ四肢を使ったシューティングアーツが襲いかかる。

私は、受け流すので精一杯になり防戦一方になる。
でも、負けてられない！

「アクセル・ランサー！」
受け流しつつ、練り上げた魔力でランサーを作り出し、放つ。
スバルさんはすぐに反応しプロテクションで防いだ…が、動きが一瞬止まる　私にはその一瞬で充分！
「ソニックフォームで行くよ！」

「Ｓｏｎｉｃ　ｆｏｒｍ！」

「行きます！」
バリアジャケットの防御を下げ軽くなった私は今までの速さとは別次元の速度で斬りかかる。

「くっ！速い！」
私はスバルさんのプロテクションを貫ける力はない。
なら張られる前に攻撃を加えればいい！という結論に達した。
私はスバルさんの周囲を駆け回り、斬りまくった。
残像を残しながら斬りかかる私にスバルさんは防御で精一杯になる。
さっきとは完全に立場が逆転していた。

「マッハキャリバー！」
「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ！」
突然スバルさんの全身を薄いシールドが取り囲む。　これなら、壊せる！
そう思った私は全力で降り下ろした。刃がシールドに触れひびが入る。
いける！
さらに力を込める私。

音速の動きが完全に止まった。
そこへ、
「リボルバーシュート！」　バリアの中から砲撃が飛んできた！
「かはぁ！」
腹部に直撃…肺の中の空気を全て吐き出した。
さらに防御の低いソニックフォームでくらったためダメージが大きい。
それでも、なんとか立った私は、笑う。
「ゲホ！ゲホ！…やっぱりスバルさんは強いや！こんな方法で来るなんてビックリしました。」
「はぁ…はぁ…ヴィヴィオもね！こんなに強くなってるなんて思ってなかったよ！」
満面の笑みでかえってきた答え。
「降参する？」
「冗談言わないでくださいよ。まだまだこれからです！」
そう言って再び斬りかかる。
先程のダメージがあるためかスピードはやや落ちていた。
「もう、さっきみたいな手段は使えないよ！」
スバルさんが動きをとらえ蹴りを放つ。
「防戦一方にさえならなければまだ勝ち目はあります！」
しゃがんでかわす。

「リボルバーナックル！」「ウインドスラッシュ！」
お互いに一発ロードし、刃と拳がぶつかる。
しかし私は押し負けて吹き飛ばされる。
（やっぱり力では負けるか…）

「なら！シューティングモード！ソニックフォームは維持！」
私は吹き飛ばされながらシューティングモードを起動する。

「サンダースマッシャー！」

「っ！」
ギリギリでプロテクションで防いだスバルさん。
しかし、先のはオトリ。スピードを生かして一瞬で上空へ…
本命をぶつける！
空薬莢を一つ弾き出す。
「Ｄｉｖｉｎ　Ｖａｓｔｅｒ　ＥＸ！」
「ディバイ～ンバスター！」
大爆発！
デバイスがたまった蒸気を吹き出す。
カードリッジを新たに装填し、様子を見る。ようやく煙が晴れる…
未だスバルさんが立っていた。

「いったたた…まさか砲撃魔法二発も撃つなんて思わなかったよ。
危ない、危ない。」
見たところスバルさんは多少はダメージを受けたらしいが直撃は
回避している…

「よくあれを避けられましたね…結構自身あったんですよ？」
私は驚いて聞いてしまった。

「ん?避けてないよ?殴り飛ばしただけ。」
さも普通のことのように返事を返すスバルさん。
「な…殴り飛ばした?」

「めちゃくちゃな馬鹿力ですね」
驚く私とけなすフェアリー。

「どしたの?」

「いえ…とことん常識はずれな人だなと思いまして…」

「そっかな?多分ヴィータ副隊長なら無傷だよ?」

「あは…はは…は。…ほんとにめちゃくちゃだ…」
渇いた笑い声しか出ない私。

「さて、続きと行きますか!」

「常識が通じない方には、こちらも常識外れな技で対抗させていただきます!」
再びセカンドモードを起動し構える。

「せいやぁぁ!」
スバルさんの右腕が襲いかかってくる。
私は冷静に受け流し一撃を加える。
が、当然のようにプロテクションで防がれた。
止まった私に蹴りが来る。

「もう、同じ手はくいません。」

すぐに刃を退き上空に飛び上がる。
「逃がさない！」

「Ｗｉｎｇ　Ｒｏａｄ！」
空中に滑走路が出来スバルさんが追跡してくる。
転身…急降下。

「はぁぁ！」

「おおお！」
空中でぶつかり合う。
何度も交差する金の光と青の光…
そして距離が開くと同時にお互い最後の奥義をぶつける…

「一撃！必倒！ディバイ～ン！」
スバルさんは右手に巨大な魔力スフィアを展開、維持しながら突っ込んできた。
「神速！一刀！ウインドザンバー」
前方に魔力を集束させ迎え撃つ。

「バスター！！」

「ブレイカー！！」
至近距離でお互いの奥義がぶつかる！
吹き荒れる暴風。そして今までで最大の大爆発！
勝負の結果は…「は～…ヴィヴィオは強いねぇ…」

「スバルさんも相当強いですよ…」
二人して訓練所の草原に倒れていた。

「引き分けってとこですか？」

「そうだね～。あ～楽しかった♪」

「私もです♪」

全力でやったからか凄まじい眠気に襲われる私達、「ふぁぁ～少し眠っていいですか？」

「私も～疲れた。」

二人は夢の中へ落ちていった。

訓練を始める前に爆睡してしまった二人は、このあとでなのはから、それはもうきっつ～～い雷を落とされることになるのだが、そのこと今の二人は考えもせず、熟睡していた。

第四話　先輩対後輩（後書き）

お休み終了！ここからしばらく模擬戦を中心に書いていくつもりです。

第五話　隊長対隊員（前書き）

スバルさんとの激戦を終え、なのはママの雷をうけた私達…怖かった。
でも、カナン君を助けるため模擬戦を中心にメニューを組んでくれるママ。
やっぱり優しいのです。
魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります。

第五話　隊長対隊員

「じゃ今日はチーム戦をするよ。こっちはのチームは私とヴィータちゃん、さらに今日たまたま暇だったはやてちゃんのチームね。」

「よろしゅうな！」

「部隊長まで！？」

「たまには私も鍛えんとな！」

「じゃ、始めるよ。レディ…ゴー！」

開始と同時にティアナさんから指令が飛ぶ。

「ヴィヴィオとスバルはなのはさんを、エリオとギンガさんはヴィータ副隊長をお願いします。私とキャロははやてさんを相手します。」

「「「了解！！」」」

「ママ私達が相手だよ！」

「よろしくね。」

「副隊長は僕たちです。」

「お前らで私の相手をできるのか？」

「はやてさんいきますよ！」

「よっしゃ相手したる！」ヴィヴィオ&ａｍｐ;スバルチーム

「ヴィヴィオ行くよ！」

「はい！モードセカンド！」
そして同時に駆け出す。

「さてまずは小手調べ…アクセル・シューター！」

「スバルさん、私が迎撃します。そのまま突っ込んでください！」

「わかった！任せるよ！」

「はい！アクセル・ランサー！」
ランサーがなのはのシューターを撃ち落とす。
そのままなのはに襲いかかる。「威力はやっぱり負けちゃうね。」
ママはそう言ってプロテクションを張った。
ランサーが殺到するがすべて爆散した。
傷一つないママが立っていた。

「うおぉぉ！」
しかし、次の瞬間にはスバルさんが肉薄していた。
「っ！」
再びプロテクションで防いだママ。
スバルさんは止まらない。

「ＩＳ発動！振動破砕！」
一瞬でママのバリアが破壊される。

「Ｆｌａｓｈ　Ｍｏｖｅ！」　攻撃は当たる瞬間高速でママが上空に離脱する。
だが、スバルさんは囮、本命は…
「いっけーヴィヴィオー！」
「疾風一閃！ウインドスラッシャー！」
私はカードリッジを一発ロードし、ママの頭上から刃を叩きつける！しかし、
「ディバインバスター！」　カードリッジをロードし溜めの時間を省略したママは、私に向けて砲撃を放つ。
しかし私は構わず砲撃ごと切りつけた。
「はぁぁぁー！」　刃と光線が交わり、周囲の作り出されたビルに光が弾き飛び小爆発がおきる。
「切り裂けー！」
さらにカードリッジを一発弾き出す。
ついに砲撃を切り裂き降り下ろされた刃。しかし切っ先がずれかするだけに終わった。
再び地上で構える私達。
「すいません。外しました。」
「ドンマイ！あれは仕方ないよ。次に集中しよ！」
「二人ともなかなかいいコンビネーションだよ。少し驚いた。」
まだ余裕がありそうなママ。

「すぐに余裕なんてなくしてあげるよ。ママ。」

「それは楽しみだね。でもまだまだ負けてられないよ。」

「なのはさん。成長した私達を甘く見ないでくださいね。」

「「いきます！」」

再び突っ込む私達。目の前の強敵を相手にその瞳は喜びを表していた。　一方エリオ＆ａｍｐ；ギンガチームは、苦戦していた。

「強い！…」

僕達の攻撃は一発も当たっていないのに対し、ヴィータ副隊長は二人を相手に余裕の表情。

「お前らじゃ私はたおせねぇよ。」

副隊長が宣言する。

「まだ勝負はわかりませんよ！」

そう言って僕とギンガさんは、走り出す。

「Ｗｉｎｇ　Ｒｏａｄ！」

何本も道を作り出し、撹乱しながら突っ込むギンガさん。

「せいやぁぁぁ！」　カードリッジを一発ロードし殴りかかる。

しかし、

「まだまだあめえな。」

またあっさり防がれた。

「カードリッジロード！」　さらにロードしギンガさんは勢いをあ

げ、プロテクションを破壊する。

「プロテクションを破壊するまでが遅せえよ。」

かわされアイゼンがギンガさんを狙う。

「ギンガさん！危ない！」　なんとか防御したギンガさんだが、

「バリアブレイクってのはこうやんだよ！」　空薬莢が弾きだされる。

「Ｒａｋｅｔｅｎ　ｆｏｒｍ」

「ラケーテンハンマー！！ぶち抜けぇぇーー！！」

プロテクションは簡単に破壊され、ハンマーが迫る！

ギリギリで右腕で防ぐが、まだ止まらない。

「うりゃぁぁぁ！」

吹き飛ばされビルを２つ貫通し三つ目のビルに激突し、ようやく止まった。

「つぅぅ…」

「ギンガさんが作ってくれたこのチャンス。逃しはしない！」

カードリッジをロードする。　槍の切っ先に雷が光る。

「サンダー！レイジ！」

副隊長に向かって突撃する。

「お前は突っ込んでくんのがのがおせぇんだよ。」

アイゼンが降り下ろされる。

「ぐあっ！」
空中から地面に叩きつけられる。
「エリオ…大丈夫？」
「っー…ギンガさんは？」
「大丈夫、まだやれるわ。」
「ほらな？お前らじゃ無理だって言ったろ。諦めろ。」
「お断りします！」
「まだこれからですよ。！」
「根性と気合いだけはみとめてやるよ…」
そう言って笑う
「いくぜ！」
「「負けません！」」　ティアナ＆amp;キャロチーム
「クロスファイヤーシュート！」
「わわ！危ないやんか！」
そういいつつ完璧に防御するはやてさん。
「やっぱり地上戦はふりやな。逃げさしてもらうわ。」
上空に逃げられた。
「キャロ私がはやてさんの注意をそらすから、一発大きいのお願い。

」

「分かりました！」

「さて、二人はどこかな～？あ、おったおった。」
ティアナがビルの屋上に立っていた。

「ファントムブレイズ！」
私は注意をそらすため砲撃を放つ。

「こんだけ距離が空いてたらいくら私でも余裕やわ。」
やはりあっさりかわされる。

「あれはええ的やな。」

はやてさんの足下に魔方陣が発生する。

「まずい！」
あわてて私は隣のビルへアンカーを使い移動する。

「石化の槍…ミストルティン！」
直後さっきいたビルに光の槍が降り注ぐ。光が当たった場所から石になり始める。
「冗談じゃないわよ！あんなのくらったら一発リタイアじゃない！」
ビルの影に隠れ幻影を作り出す。

「あ、なんかいっぱいティアナが出てきた。まぁ片っ端から潰せばええか。…ブレスベルグ！」

今度は、はやてさんの前方に四つの魔方陣が発生し、一斉に砲撃を開始する。

「なんて無茶苦茶な！」
幻影は維持しながら逃げ回る。

「キャロ～急いで～！」
悲鳴をあげてしまう。

「なかなか粘るな～ほんなら次は～これやな。デアボリックエミッション！」

「ほんならでそんな大技撃たないで～！」
はやてさんの適当さに泣き叫ぶ私。

「さて、あそこで終わりやな。響け終焉の笛！」

「あ～もう無理だわ。ごめんねキャロ…」
頭の中が真っ白になった。

「ラグナロク！…ってうわ！」
はやてさんがバインドで拘束され止まった。

「フリード！ブラストレイ！」
「ギャオオオ！」

「わぁぁぁ！」
バインドで捕まっていたために防御もできず、直撃を受け大爆発！

「ティアナさん大丈夫ですか？」

「…」

「ティアナさん？」

「怖かったんだから～！もっと早くに来てよ～！」
私は泣いてしまった、キャロが必死に謝っていたが、私は訓練が終わる直前まで泣きやまなかった。
はやてはというと地面に倒れのびていた。

エリオ&ｍｐ；ギンガチーム

「はぁはぁ…ここまで粘るとはな…驚いたぜ。」
無傷ではあるが息が切れ始めたヴィータ副隊長。

「副隊長も…しぶといですね。」

「全くです…」
ぼろぼろではあるが、根性で粘る二人。

「疲れてきたな…次で終わらせてやる。」

「奇遇ですね。僕も同じことを考えてました。」
「私もです。」

少し間が空く…激闘で崩れたビルの破片が落ちる。「アイゼン！」
「Ｇｉｇａｎｔ　ｆｏｒｍ！」

「うらぁぁぁ！ギガント！シュラーク！！」
カードリッジを四発すべてを使い巨大なハンマーになったアイゼンが降ってくる。
ギンガさんもカードリッジを四発すべてロードする。

「リボルバー！ナックル！」
巨大なアイゼンを全力で殴る。

「エリオ行きなさい！」

「はい！ストラーダフォルムツヴァイ！」
「ＯＫ！」
「ブースト！」
ギンガさんを攻撃している副隊長は回避不可能。そこへ突っこむ！
カードリッジをすべてロードする。

「エリオ頑張ってね…」

「え？」
重い音がしてギンガさんがアイゼンに潰された。

「ギンガさん！くっそー！」

「アイゼン！」
その声に反応し小さくなるアイゼン。

「いっけー！！」

「ぶっ飛べー！！」
火花が散る。しばらく均衡を保ったが、カードリッジを使ってい

るストラーダを止められる筈もなく副隊長は直撃を受け倒れた。
「はぁはぁはぁ…なんて人だ。カードリッジなしで四発ロードしたストラーダを一瞬止めるなんて。」
勝つには勝ったが、ギンガが時間をかせいでくれたからだ。
「もっと強くならなくちゃ！」
エリオはそう決意した。「向こうは勝負がついたみたいですね。」
「あとは私達だけみたいだね。」
「こっちもそろそろ決着つけようか。」
三人ともビルに激突したりして汚れている。
しかし未だその顔は笑顔。
「楽しかったですね。」
「そうだね。」
「あ～あ終わりかぁ。」
「さて、やろうか。」
「「うん！（はい！）」」
「「「絶対勝つ！」」」
「「「はぁぁぁぁ！」」」　剣と拳を構え突っ込む！　シューターが

飛んでくるが、防御も行わず、無視

「ギア・エクセリオン！」
「Ｄｒｉｖｅ　Ｉｇｎｉｓｈｉｈｏｎ！」
フルドライブ。

「一撃！必倒！ディバイーン！」
ママは避けようともせず正面から迎え打つ。

「エクセリオン！」
お互い空薬莢を三発弾き出す。

「「バスター！！！」」
砲撃同士がぶつかり合い、激しく地面が揺れる。　そのなかで私は構える。

「貫け！風神！行けー！」
カードリッジ二発ロード。側面から風の一撃を加える。
ママは突然砲撃をやめ飛び上がる。

「「うそ！」」
あまりの反応の速さについていけなかった。

「アクセル・シューターフルシュート！」
スバルさんに大量シューターが殺到。

「スバルさん！」
私はスバルさんに突っ込む。
スバルさんの前に立つ。
「フェアリー！聖王の鎧！一時的だけでいい！フル稼働！」

「了解しました。」
私の体に一瞬だけ痛みが走ると虹色の光が立ち上る。
シューターは私達にぶつかる前に全て破壊された。
「はぁはぁ…大丈夫ですか?」

「うん。でも、ごめんね魔力使いすぎて動けそうにないや…」

「謝らなくてもいいですよ。私も反動で動けませんから。」
そう言ってわらいかける。
そこへママから宣言される。

「これで、私のほうが圧倒的に有利だね。降参する?」　私は答えた

「まだ諦めない!」
ママは笑って、

「さすが私の子供だね。じゃ、これで終わらせてあげる!」

「シューティングモード!」
お互いにカードリッジを装填…そして、フルリロード!

「「全力!!」」
膨大な桃色の光と青色の光が二人の前方に集まる。

「「全開!!」」
自分の中に眠る魔力を全て絞り出す。

「「スターライト!!」」　デバイスをゆっくり振り上げる…

「「ブレイカー！！！」」
そして全力で降り下ろす！
二人の間で強大な魔力同士が激突する！

地面が揺れるだけに止まらず、周囲に存在するビルが衝撃に耐えきれず倒壊する。
そして光に包まれる…「ヴィヴィオ…本当に強くなったね…前にやった時とは比べ物にならないよ…」
笑うなのは。

「すぅーすぅー」
そこには力を使いはたして眠っているヴィヴィオがいた。

「まったくとんでもねぇ奴だな。リミットがあるとはいえ、なのはのスターライトブレイカーと威力が同等なんてな。」
苦笑いのヴィータ

「あ～あ、私ヴィヴィオに守られちゃった。情けないなぁ…」
落ち込むスバル。

「ヴィヴィオの寝顔可愛い…」
考えが全く違う方向に言ってるティアナ。

「凄かったですね～」
感心しているキャロ

「もっと強くならないと…」
さらに決意を固くするエリオ。

「「う～ん…」」
まだのびているギンガとはやて
「気持ち良さそうだね。訓練もきりがいいし私達もお昼寝しよっか。」
「さんせーい！」
みんな一斉に芝生に倒れ込み。お昼寝。
平和な一時がながれていた。

第五話　隊長対隊員（後書き）

チーム戦と言いつつもコンビ戦になってしまったことにまずお詫びします。　昨日のうちになんと４０００から６０００までアクセスが増えました。皆さんありがとうございます。次にもう一度模擬戦を入れて、新たな仲間の登場です。頑張ります。

第六話　風神ＶＳ雷神（前書き）

疲れた私達は芝生でお昼寝をしていた。なのはママが起き上がりどこかへ歩いていく。「どこいくの？」訊ねる私、「フェイトちゃんが帰って来たからお迎えに行くだけだよ。もう少し寝ていてもいいよ。」「はぁ～い。」眠気には勝てず再び眠りにつく私。　太陽が気持ちい～い。　ふぇ？そろそろ言わなきゃダメ？　え～と、まほーしょーじょリリカルな私。始…まり…ま……すぅ～。

第六話　風神ＶＳ雷神

「これがこの間のヴィヴィオの戦闘結果だよ。」

「本当に？確かヴィヴィオって魔導ランクＢなんだよね？」

「その筈なんだけどね…六課に入ってからのヴィヴィオの成長速度が異常にはやいんだよ。」

画面に表示されている数値はＳ＋…技術はまだまだだが、魔力値だけなら私達と同じ数値だ…

「ね、なのは？」

「何？」

「今日の訓練でヴィヴィオと模擬戦したいんだけどいいかな？」

「それはいいけど…どうしたの？」

「ヴィヴィオの力を直接みたくなったんだ。」

「ニャハハ、きっとヴィヴィオ喜ぶよ。」

「そうかな？」

「そうだよ！さてそろそろ時間だし、行こ！」

「うん。」「え？今日はフェイトママが相手してくれるの？やったー！」

「ね？」

「ほんとだね。」

あんまりにも無邪気な反応なので笑顔になる。

「何笑ってるの？」

「何でもないよ。大人の話。」

「う～ちょっとくらい教えてよ～。」

「じゃ私に勝てたらね。」

「よ～し！勝って聞き出してあげるからね～！」

「私達は今日は見学にしよっか。」

「ヴィヴィオとフェイトさんかぁ～。楽しみだなぁ。」

「ヴィヴィオきついんじゃない？」

「ヴィヴィオ強いよ？私直接やったから分かるもん。」

「フェイトさんとあんたみたいなのを一緒にしないの。」

「はいはい、口喧嘩はそこまで！それじゃ二人とも準備はいーい？」

「いつでもいいよ～！」

既にセカンドモードのヴィヴィオが答えた。

「私もいつでも。」

まだ通常モードのフェイトも答える。

「それじゃレディーゴー。」

開始と同時に突撃したのはなんとフェイト。

少し意表を突かれたが、冷静に構えるヴィヴィオ。

「はぁぁ！」

バルディッシュが側面から迫る。

「ふ…」

フェアリーで受け止める。そして必用最低限の力を残し受け流す。

フェイトママの体が正面にある。

反らした刃の向きを変え突きを放つ。

しかし、次の瞬間にはフェイトママの体は消えていた。

「うぐっ！！」突如背後からの一撃を受け吹き飛ぶ。

速い！通常のスピードさえ目で終えなかった。

「なら！ソニックフォーム！」

「へぇ…それを使えるんだ。懐かしいな。」

「いくよ！」

私は音速で接近し斬りかかる。

「なかなか速いね。」

しかしフェイトママは余裕の笑みで受け止める。「うわぁフェ

イトさん余裕だ…」

「私達は目で追うのがやっとな動きなのに…」

「フェイトちゃんは管理局でもトップクラスのスピードの持ち主だからね。ヴィヴィオのあの斬撃じゃ1日振っててもフェイトちゃんには届かないよ。」

なのはさんがこう言った矢先、ヴィヴィオの斬撃がフェイトさんの腕を掠める。

「あのなのはさん、届きましたよ?」

「スバルあんた何見てんのちゃんと見なさい。」

模擬戦に目を戻す。

「え?あんなヴィヴィオの戦い方初めて見た…」剣だけ振っても当たらない… なら…体全身を使うまで!

膝を落とし回転切りを放つ。

「うわっ!」

予想外の斬撃にフェイトは驚く。

しかし、軽く跳びかわす。

「まだまだ!」

回転切りから振り上げ、袈裟斬り、突き、回し蹴り、正拳突きと連続して体術と斬撃を組み合わせて攻撃する。

「っ!」

捌ききれず、斬撃が腕にかする。 「あはは!ヴィヴィオ凄いよ!」

フェイトママがさっきよりも、嬉しそうな表情になる。

「じゃ私も、もうちょっと本気になるね。」

「Ｈｅｒｋｅｎ　Ｆｏｒｍ」

カートリッジが一つ弾きだされる。

バルディッシュの形が変形し、黄色い雷を纏った鎌が発生する。

「いくよヴィヴィオ！」

「ここからが本番だよね。」

恐ろしい音が鳴り響くがお互いに楽しんでいる。「わぁ、フェイトさん本気だぁ…」

「ヴィヴィオ大丈夫かな。」

驚くスバルと心配するティアナ。

「何言ってるんですか？フェイトさんまだ真・ソニックフォームになってないじゃないですか。」

エリオが驚愕の事実をのべる。

「そうだった…まだ本気じゃないんだ。」

「エリオ君でも二撃防げればいいほうだよね。」

「あれは速すぎるよ…ほとんど見えない…」

「フェイトママ！とっても楽しいよ！」

と言いつつ私は飛び上がり体重をかけて降り下ろす。

「ヴィヴィオ、私もだよ。こんなに斬り合いが続いたのはシグナム以来かなぁ♪」
余裕の笑みで受け止める

「フェイトママまだ加減してるよね…」
一転、真剣な表情で私は言う。

「バレちゃったか…」

「わかるよ…娘だもん…」

「私は、全力のフェイトママとやりたい…」

「本気みたいだね。わかった。いくよ。」

「Ｓｏｎｉｃ　Ｆｏｒｍ！」
フェイトママのバリアジャケットが薄くなりマントが外れ、ジャケットだったものはレオタードになる。　防御は手甲のみ。

「ライオットザンバー・スティンガーモード。」

バルディッシュは二つにわかれ二刀流になった。

「これが、フェイトママのソニックフォーム…」

圧倒的なまでの威圧感。でも私は喜んでいた。

「ありがとう！フェイトママ！大好き！」
私は満面の笑顔でこう言った。

「ヴィ…ヴィヴィオその笑顔は反則だよ…」
あまりの可愛さに赤くなって目をそらすフェイト。

「はぅ～大好きだって～いいな～いいな～私もエクシード使えば良かったな～。」
ここにもう一人の親バカが一命悶絶していた。

「ヴィヴィオ怪我したら降参してね？」
私の心配をしているフェイトママ。

「大丈夫だよ。私だって速さならまけないよ！」
この時はそう思っていた。

「じゃ、行くからね。ちゃんと受けてね？」
まだ心配しているフェイトママ。

「大丈夫！来て！」
フェアリーを構える。
次の瞬間…

「かはっ！」
私は受け止められずに吹き飛んでいた。

「ヴィヴィオ！大丈夫？ごめんね。痛かったよね？」　また心配をしているフェイトママ。
「大丈…夫まだまだやれ…るよ。」　私は気合いを込め立ち上がる。

速い…殆ど見えなかった…油断したからだ…集中しろ！
心の中で自分に叱咤し構える。

「はぁぁ！」
音速で斬り込む。
しかしフェイトママは音速を遥かに超える神速の世界にいた。
私の一撃はあっさりかわされ、背後から斬撃が襲う。
一撃は何とか受けたものの、側面からの第二撃で再び吹き飛ばされた。「何が…起きてるの？」

「ヴィヴィオが斬りかかった瞬間にはフェイトさんが消えて、ヴィヴィオが吹き飛ばされてる…」

「あれを見切れるのは、六課ではシグナムさんだけだよ…残念だけど、ヴィヴィオは多分もう終わりだね。」
なのはさんが宣告する。

「まだ、ヴィヴィオは諦めてないです！まだ何か考えがあるはずです。」
スバルが必死に言う。

「攻撃が当たらないんじゃ、どうしようもないじゃない。」
また口喧嘩が始まる。

「ちょっと待って…あれはまさか！？…あはは…全くほんとにあの子はどこまで成長することやら…」
呆れているのか喜んでいるのかよくわからないなのはさん。

「どうしたんですか？」
模擬戦に目を戻す。

「「あれは！」」　私は、バリアジャケットとデバイスのフォームを再構築していた。

「あれじゃ重すぎる。もっと薄く…もう防御はいらないや完全捨てる。
フェアリーセカンドモードをデュアルセイバーに変更！
…真・ソニックフォーム！！
…起動…開始！」

「設定変更読み取り終了。起動を開始します。」

フェイト視点
ヴィヴィオの周囲に竜巻が出現。竜巻に包まれるヴィヴィオ。

「まさか…ここまで成長が速いとはね…」　私は驚くと同時に喜びを感じていた。

「さぁ、ヴィヴィオ！遊ぼうか！」
こう言った。
竜巻が弾ける。そこには、手甲すらつけていない薄いレオタードを纏い。
二刀流になったヴィヴィオが立っていた。

「うん！フェイトママ遊ぼ！」
その表情は笑顔

「いっくよ～。」

「よし。来〜い。」
私達の遊びが始まった。

私は膝を落とし、力を溜める。　そして、走った。そのスピードは最早フェイトと同等かそれ以上！

「はあ！」
今までを遥かに上回る速度で斬撃を放つ。

「ヴィヴィオいいよ！ママとっても楽しい！」
フェイトは全て受け止める。

「私も！風になったみたい！」
疾風のような速さで十回以上も斬りつける。

「じゃあ、ママは雷にでもなろうかな。」
雷光が煌めき、その全てを弾きあるいはかわす。

「ふふ！」

「あはは！」

「なんかあの二人笑ってるよ。」

「こっちには何がおきてるか全くわからないけど幸せそうね。」

「フェイトちゃんいいな〜。私もヴィヴィオにエクシードのやり方を教えようかな〜。」

「ヴィヴィオはやーい…」

「スピードで抜かれたら僕って…」

エリオを激しく落ち込ませたことにまだヴィヴィオは気付いていない。

私は、空に向かって右手のフェアリーを投げる。

「トライデント！」

空いた右手に魔力を溜める。さらにカートリッジを二発ロード

「ライオットザンバー！」　それをみたフェイトママは双剣を一つに纏め巨大な剣にする。

「スマッシャー！」

「はぁぁぁぁ！」

ほぼゼロ距離で放たれた光線をママは叩ききった。

「凄い、凄いカッコイイよフェイトママ！」

「ありがとう。ヴィヴィオ。」

落ちてきた。剣を手に取り、再び斬撃を加える。　右手で突き、時間差で左手で足下を払い、さらに回転切りを連続して放つ。

フェイトママは右手の突きを払い、足下の剣は飛び上がり回避、回転切りは急上昇してかわす。

フェイトママが上空でカートリッジを二発ロードする。

私も二発ロードし、デュアルセイバーを連結。
「撃ち抜け！雷神！」
「Ｊｅｔ　Ｚａｎｂｅｒ」

「貫け！風神！」
「Ｇｅｌｅ　ｓｒａｓｈ　ｂｒａｓｔ」　ふりおろされた長大な剣と巨大なカマイタチが衝突！
爆風が二人を襲うが構わず相手に突進！

「やぁぁぁ！」

「せやぁぁ！」
巨大な刃同士が交わる。
均衡…そして同時に弾く！
これで幕にするべく最後のカートリッジを装填、

「はぁぁぁぁ！」
私は突っ込む！
きりつけながらカートリッジ六発フルリロード！
フェイトママも六発全てロードする！

「雷光！」

「神速！」
さらにスピードをあげ斬り合う。

「一閃！」

「一刀！」
残像をいくつも残しながから、さらにはやくなる斬撃。

二人とも全て受け止め弾いている。
ここまで一切かすりもしない。

「プラズマザンバー！」

「ウインドザンバー！」
お互いの距離が一メートルほど開く。

「「ブレイカー！！」」
同時に踏み込み、刃を触れさせると光に包まれる。「勝〜利！！」
Vサインを掲げるわたし。

「ヴィヴィオはつよいね〜」
敗北したが笑顔のフェイト。
そこへ念話、

「フェイトちゃん最後力抜いたでしょ…」

「ばれた？」

「なんで手加減したの？」
「子供に喜ばせるのは当たり前だよ。」

「もう！甘いんだから…」　念話が切れる。

「じゃフェイトママ、何で最初に笑ってたの？」

「へ？」

「勝ったら教えてくれるって言ったよね？」　すっかり忘れていた。

「あ、え～とね、前にヴィヴィオが着たワンピースあるでしょ？とっても可愛かったから、あれをまたみんなの前で、ヴィヴィオに着てもらおうかなって話してたの。ダメかな？」

ボン！と音を立てて、真っ赤になるヴィヴィオ。

「もう、あんなのやらないもん！」

「そう…それは残念。」　もともと適当に考えたものなのでダメもとで頼んでみたがやっぱり却下された。　しかし、

「あのね…ママ達だけなら見せてあげても…いいょ…」

最後の方は消え入りそうな声でヴィヴィオが言った。今度は私が赤くなる番だった。

「っ！！～～ヴィヴィオ！」

私は、あまりの可愛さに抱きついていた。

「く、苦しいよ…ママ。」

「ごめん…でも今回は離してあげない。ヴィヴィオが悪いんだから。」　こんな可愛いヴィヴィオは私が独占したい。

「私が悪いの？だったら我慢する…」

そんなわけはないのだが、ちょっぴり天然のヴィヴィオ。

「うん…ありがとう。」

でも、私はもっと抱き締めたかったためそういうことにしておい

た。

「ごめんなさい…」

謝るヴィヴィオ。

「いいよ。もうなんでも許してあげる。」

しばらく私達は抱きついたまま止まっていた。

「で、どうしてヴィヴィオがワンピースをきて私達の部屋にいるの？」

「なのはママ何言ってるの？ママ達がきてほしいって話をしてたんでしょ？」

「そうだよ、なのは…私達が言ったんだよ。」

フェイトちゃんの目がとろんとしている。

「はぁ…（またフェイトちゃんの仕業か…）そうだったね。ごめん。ヴィヴィオ。」

「謝らなくてもいいよ。」

「可愛いよ。ヴィヴィオ！」

またヴィヴィオに抱きつくフェイトちゃん

「なのはママ助けて！」

「ごめん、そのテンションのフェイトちゃんは無理。」

「そんなぁ～！」

「ヴィヴィオ今日は私達と寝よ？」

「え、遠慮するよ～！私もう中学生だよ？」

「寝よ？」

「だからいいっていい…」

「寝よ？」

「…はい。」

「だから無理って言ったでしょ？」

「うん。そうだね…」
フェイトちゃんに敗北したヴィヴィオが部屋でパジャマに着替えてきた。

「ヴィヴィオおいで。」　二人の間を開けその間を手で叩くフェイトちゃん。

「うん。」
ヴィヴィオが二人の間に入ってくる。

「ニャハハ、こうやって寝るの久しぶりだね。」

「そうだね。」

「私は毎日でも構わないよ？ヴィヴィオ私達の部屋にこない？」

「それはさすがに遠慮するよ。」

苦笑いのヴィヴィオ。

「わかった。それはやめてあげるよ。」

「じゃママ達お休みなさい。」

「「お休み。」」

ヴィヴィオは眠りについた。

「じゃ私も寝ようかな。お休みなのは。」

そう言ってヴィヴィオに抱きついて眠りにつく。

「お休み。フェイトちゃん。」

「私もそうしよーと。」

私もヴィヴィオに抱きつく。

「お休み二人とも…」

私の意識は遠退いていった。

第六話　風神ＶＳ雷神（後書き）

次は新キャラをだす予定ですが、まだ戦いはなく日々を過ごす予定です。

第七話　過去（前書き）

私がアイツに話かけた理由それは、何処か私に似ていたから。ただそれだけだった。魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります。

第七話　過去

私がアイツと初めて出会ったのは小学校三年生のことだった。

「今日から転校してきた風間カナン君です。みんな、仲良くしてね。
カナン君自己紹介をして。」

「カナンです。よろしく…」
とても短い自己紹介だった。

「…え～と好きなものとかはないのかな?」
焦る先生。

「ない。」
間が持たない。

「…じゃ将来の夢は?」
なんとか会話を繋げようとする先生。

「ない。」　即答…

「…じゃカナン君は一番後ろの窓際の席に座ってね。」
ひきつった笑みを浮かべ私の隣の席を指差した。

「わかった…」
無表情で歩いてくる。

「私、一之瀬祐希奈。よろしくね。」

「よろしく…」
声をかけられたことに少し驚くがすぐもとに戻り返事が返ってきた。そして窓の外に視線を向けた。
カナンの第一印象は不思議な奴だった。
一時間目が終わり休み時間になる。教室では恒例の質問責め大会が開催。…された筈だった…

「なんで好きなものがないの？」

「あったかも知れないけど、もうどうでもいい。」

「ほんとはなりたい夢あるでしょ？」

「今は、わからない。」

「欲しいものは？」

「力…」
まともに返事を返したのはその質問だけだった。
ただ小学生とは思えない内容だったが…

「…次体育だし体育館にいこうぜ。」　この言葉をきっかけにみんなが離れて言った。
それを気にかける事もなく、窓の外に視線を戻す。
私は何故だか悲しくなった。好きなものもなく、なりたいものもなく、求める物は力だけ…
そんな彼を助けたかった。
私は思いきって行動にうつした。

「ほらカナン、次は体育だっていってるでしょ！さっさと着替え

る！」
私のとった行動にカナンの無表情だった顔が驚愕に変わる。
「！？…俺はまだ体操服はないんだ。」
「そんなの保健室に大量にあるわよ！さっさと行くわよ！」
「ちょっ！ちょっとっ！」
カナンを引きずり保健室にむかった。
その行動を見ていたクラスメイトは苦笑い。そして言った。
「「「さすが祐希奈だ。」」」「着替え、終わった？」
保健室の扉の前で訊ねる。
「ああ…」
返事が中から返ってきた。
扉を開くと少し怒ったカナン顔が見えた。
「なら行くわよ。」
「はぁ…わかった…」
体育館に向かう。
今日の授業は一対一のタイマンドッジボールだった。
私とカナンは対峙する。
「おい」
私だとわかっているが無視する。
「一之瀬！」
まだ無視。

「祐希奈！」
やっと振り返る。
「何よ。」
「なんで俺なんかを相手にするんだ？」
プレーボール　「それはね…」
私はボールを先生から受け取りオーバースローフォームでふりかぶる。
「あんたがウジウジウジウジしてるからよ！」
全力投球！
「っ！」
カナンが受け止める。
カナンがボールを握る。そして…
「にゃろう…ウジウジしてて悪かったな！」
キレた！ボールが凄いスピードで私に飛んできた。　私も正面から受け止める。
「アンタ今日からウシウジするの禁止！鬱陶しいから！」　全力で投げ返す。
「放っとけばいいだろ！」
怒号と共に返ってくる。
「私にもウジウジがうつるじゃない！」

「そんなのがうつってたまるか！」
お互い避けようともせず、受け止めては投げ返す。
「大体ねぇ、欲しい物が力って何よ！調子乗ってんじゃない！？」
「本当に欲しいんだから仕方ないだろ！！　お前だって教室ならまだしも体育の時にまで、そんなペンダントをつけてきやがってそんなに目立ちたいのか！？　お前の方がよっぽど調子に乗ってるじゃないか！！」
（あ…あいつ死んだな…）
クラスメイト全員がそう思った。
私は本当にぶちキレた。
「これは…母さんの形見なの…私のことはいくら言っても構わない…でも、これを悪く言うのは許さない！」
「母…さん…？」
私はカナンにダッシュ。
「カナンの…」
中央の白線を飛び越えカナンの目の前まで飛ぶ。
「バぁカぁぁぁーー！！」
「うわー！」
強烈なジャンピングシュートが放たれ、顔面にヒット。カナンは鼻血を吹き出し倒れた。

「ふん！！」
私は肩を怒らせながら走り去った。「う…ん？ここはどこだ？」
周囲を見渡すと見覚えのある景色。どうやら保健室にいるらしい。

「あ、カナンくん良かった痛いところはない？」
先生が出てきて訊ねてきた。

「いえ、大丈夫です。」

「そう…。ところで先生が職員室に行ってたから理由がわかんないんだけど、祐希奈ちゃんと何があったの？」
そうだ。俺は祐希奈のペンダントを母親の形見とは知らなかったとはいえ、けなして怒らせてしまったんだ…謝らなければ。

「俺が祐希奈をバカにして怒らせたんですよ。謝りたいのですが祐希奈はどこにいるか分かりますか。？」
先生はニッコリ笑って、

「祐希奈ちゃんはケンカした時はいつも屋上にいるから、行ってきなさい。」

「ありがとうございます。」
俺は屋上に向かって走りだした。

「祐希奈ちゃんの影響は凄いわねぇ…もう明るくしちゃってる。」
祐希奈は屋上のベンチに座っていた。

「はぁ…はぁ、」
深呼吸…

「よし！」
祐希奈に向かって歩きだす。
顔をあげた祐希奈。
「その…ごめん…そんなに大切な物だとは思ってなかったんだ…」
祐希奈はため息をつき条件をだした。
「なんで力なんてほしいの？これを教えてくれたら許してあげる。」
「面白い話じゃないぞ…」
「それくらいわかってるわよ。」
「仕方ない。話すよ。」
「俺が力が欲しい理由…それは、復讐のためだ…」　小学生らしからぬ言葉が飛び出す。
「復讐…誰に？」
「ジェイル・スカリエッティ」
「誰…かは置いといて？何で？」
「それは奴が…俺の父さんと母さんを殺したからだ！」
「っ！」
カナンは、昔の私と同じだった。私の母さんはなんの仕事かは聞

けなかったがその仕事の任務中に誰かに殺されたらしい。
私は、今のカナンと同じく力を求めた。
でも、私にはまだ父さんがいた。
父さんが私の心を支えてくれた。
だから私はこうして明るく元気に暮らせているのだ。
しかしカナンは支えもなく、今まで一人で耐えてきたのだ。
その結果があの態度だったのだ。

「カナン、復讐なんてやめようよ?」

「それは出来ない…奴への復讐は俺のすべてだ。」

「だって私達まだ小学生だよ?そんなの忘れて遊ぼう?」「…無理だ。俺は復讐を支えに生きてきたんだから。」

「じゃあ、私が支えるから!」
必死に訴えてくる祐希奈。

「何故そんなに俺をきにする?さっきも言ったがこんな奴放っとけばいいだろう。」

「だって、そんなのカナンが可哀想だよ。悲しすぎるよ…」
祐希奈が泣き出す。

「祐希奈…泣かないでくれよ…」

「誰が泣かしてるのよ!」
「まぁ…俺…だな。」
しばらくして祐希奈が突然立つ。
「もう決めた。決定事項だからカナンには拒否権なしね!」

それまでの弱々しい祐希奈が嘘のように消えていた。

「ちっ、なんだよ…」

「これからは、私があなたを助けてあげる。私があなたに外の世界を見せてあげるんだから！」

高らかに宣言する祐希奈。

「やめてくれ！別にいい」

「言ったでしょ？拒否権はなし！」

「無茶苦茶だ！横暴だ！」

「うるさいわよ。さ、教室に行くわよ。」　また引きずられる俺、

「わかった！わかったから階段て引きずらないで！わぁーー！」

それからカナンは、私には大しては明るく話すようになった。

しばらくすると、私以外にも話せる子も出てきて最終的には、クラスメイトとはみんな友達になってしまった。

そんな幸せな毎日を送り小学校を卒業し、同じ私立聖祥大付属中学校に進学した。

また楽しい学校生活が始まると思っていたのに…　「祐希奈、カナン君がきたよ？」

「カナン？どうかしたのかな？」

ある日突然カナンが私の家に訊ねてきた。

玄関に出るとそこには小学校に転校したばかりの頃のカナンがいた。

「何?どうしたの?怖い顔してるよ?」

「祐希奈少し外に出れないか…」

「うん…いいけど…」

私達は無言のまま近くの公園まで歩く。

「カナン?そろそろいいでしょ?何があったの?」

「スカリエッティが脱獄した…」

「スカリエッティって…確か、昔カナンの両親を殺したっていう人だよね…」

「そう…俺は奴を殺しに行かなくてはならない。」

「カナン?何を言ってるの?…」

頭がついていかなかった。いや、理解することを拒んでいた。

「その為の力もてにいれた…」

カナンが光に包まれ次の瞬間には真っ黒な服と黒い剣を持っていた。

私のような素人が見てもわかるほど、カナンがもつ剣からは凄まじい憎しみが溢れてだしている。

「カ…ナ…ン?」

「もうここには帰れないと思う…だから最後に祐希奈にお別れの言葉とお礼を言いにきたんだ…」

「嫌だよ…聞きたくない！」
私は首を振る。

「君のおかげで今までの三年間とても充実した毎日だったよ。祐希奈ありがとう…」

「聞きたくないって言ってるじゃない！」

「祐希奈…さよなら…」
悲しい笑顔のカナンをみた。　カナンの下に黒く光る魔方陣らしきものが出てきた。
私はカナンが私の前から消えようとしていることを悟る。

「なんでよ！カナン！行かないで！」

「…ごめん」
そう言ってカナンは消えた。

「カナン！カナン！
…うぁぁぁぁん！なんで！これからもっと楽しいことがあるのに！なんで行っちゃうのよ！カナンのバカー！！」
泣き叫んだ。

しばらくすると私はある考えにたどり着く。
彼をおかしくしているのはあの黒い剣だ…それを壊せばカナンは帰ってきてくれるはず！
しかし自分にはその力はない。再び泣きそうになる。
その時

「あなたは彼を助けたいですか？」

声が響く…周囲を見渡すがだれもいない…

「ここです。」

母さんの形見の銀のペンダントから声が聞こえた。

「嘘!?」

わたしは驚愕する。まさかペンダントがしゃべるなんて…

「ではもう一度問います。あなたは彼を助けたいですか?」

答えは決まっていた。

「うん!私は彼を助けたい!!」

「わかりました。私の力を授けます。唱えてください起動の言葉を。」

不思議と言う言葉は理解していた。

「我、汝と契約をかわすものなり、契約のもと汝が力を我にしめせ。大地に水を、空に光を、そして魔法の力を我に授けよ! アシェル!セットアップ!」

「起動開始」

私は光に包まれる。

「イメージはこれね。」

自分を守るジャケットをイメージする。

「了解」

光が消える。

「ちょっと、派手かな?」

「大丈夫でしょう。」
私の格好はというと、胸の周囲は青で包まれ、肩は露出している。ミニスカートをはいており、膝から爪先まであるロングブーツ。腕だけは私のイメージとは違い、肘まである手袋？のようなものをつけるまではイメージ通りだが、両腕にスライドする手甲が追加されている。

「なんか若干イメージと違うところが違うけど？」

「防御力の関係でカートリッジシステムを内蔵した手甲を追加しました。」

「ふーん、まぁ邪魔にならないし、いいけどね。」

「それでは、彼の向かった世界、ミッドチルダへと転移します。よろしいですか？」「もちろん！」

「わかりました。転移を開始します。」
足元に魔方陣が展開され地球から私の存在が消えた。公園だったはずだが目の前の景色がかわる。

「ここがミッドチルダ…カナンがいた世界…」
周囲を見渡すと地球と同じような景色が見えた。

「マスター、この近くに機動六課という部隊の本部があります。そこへ向かい部隊長へ事情を話してください。」

「日本語か英語どっちが通じるの？」

「ミッドチルダは文字以外は日本語で通じます。また、六課の八神はやて部隊長は地球の日本出身の方ですので、話しやすいでしょう。」

「なら安心だね。」

「ここが機動六課かぁ～。おっきいなぁー。」

「早く入ってください。」

「わかったわよ。ちょっとくらいいいじゃない。」　文句を言いつつ中にはいる。

なかでは、皆が忙しそうに走り回っていた。

「あの～すみませ～ん」

声を出して言ってみるが、聞こえていないらしい。

「すみませーん！」　もう少し大きな声を出す。

やっぱり誰も止まってくれない。

「忙しいみたいだね。もう少し後にしよ。」

立ち去ろうとする私、

「どうしたんですか？」

声をかけられて振り返る。

そこには、赤と緑のオッドアイ、綺麗な金髪をした同じくらいの女の子がたっていた。　私は訓練が終わりオフィスを歩いている時に、多分年は私と同じくらい、綺麗な銀髪の長髪をした女の子を見つけた。

必死に呼び掛けているけれど誰も聞こえていないらしい。
諦めて帰ろうとしている女の子。
仕方ないので私が対応をとることにした、

「どうしたんですか？」
そう声をかけた。

「良かった気付いてくれんだ。
え～と、八神はやて部隊長と話がしたいんだけど…」
年が近いことから安心したのか崩れた口調で話す女の子。
「それなら、私が八神部隊長の部屋まで案内させてもらいます。
今は休憩中でしょうから、多分聞いてもらえると思いますよ。」
私も崩したかったが、局員という立場上丁寧な言葉で答えた。

「ありがとう。」

「いえいえ。」
二人とも最初にもった相手への第一印象は、可愛い子だった。

第七話　過去（後書き）

すいません。今日はだいぶ更新が遅れました。　オリキャラを追加する作業がなかなか進まなくて遅くなってしまいました。

学校の授業中とかも使って考えたのですが、ここまでかかりました。本当にすいません。

第八話　意地（前書き）

私は、女の子を部隊長の部屋に案内をしている。女の子は六課の中が興味深いようでさっきからキョロキョロしていた。　そんな彼女の興味が私と向いた。　　魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります。

第八話　意地

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「あなたもここの局員なの？」
女の子が突然訊ねてきた。
いきなり話かけられたことに少し驚くが、私は答えた。

「はい。まだまだ新米ですが局員です。」

「へぇ～。いくつ？」

「えっと、今年の誕生日を迎えたらで１３になりますね。」

「私も１３歳になったばかりよ。やっぱり同い年だったわね。」

「そうなんですか。よろしくお願いしますね。」同い年の知り合いが少なかった私は少し嬉しくなった。

「六課ってあなたみたいに若い人ばかりなの？」

「十代は、私を入れて三人ですが、三人を抜いたとしても六課は部隊の中ではかなり年齢層が低いですね。」

「でさ、八神部隊長だっけ？何歳なの？」

「耳をかしてくださいますか？」

「？わかった。」

「…27歳です。」

「なんだ若いじゃない。何で声を小さくする必要があるの？」

「六課局員には、私の母親のなのはママ、保証人フェイトママ、部隊長はやて部隊長の年齢を言うことは禁則事項なのです…」

「言ったのがばれたらどうなるの？」

「…三人の悪魔が降臨します。」

ヴィヴィオは遠くを見る…一瞬にして何かを悟ったような表情に変化した…

「あれは凄かったなぁ……」

ヴィヴィオの頭の中には、にこやかに笑いながら、しかし絶対に怒っている三人の顔が浮かぶ…

「ごめん！言わないからこっちの世界に戻ってきて！」

「絶対に言わないでくださいね…」

「わかった。約束する。」

「ありがとうございます。」

今ここに二人に固い約束が交わされた。

この子ならいいお友達になれると確信した。

「お名前を教えてもらっていいですか？」

「私？私は一之瀬祐希奈。あなたは？」

「高町ヴィヴィオです。

一之瀬さんは名前からして日本人ですよね？何で銀髪なんですか？」

「あ～やっぱり気になった？

私の母さんがハーフなの。

正確には私のお祖母ちゃんの血なんだけどね…

私はそれが濃く出たみたい。

あなたもハーフなんでしょ？」

「私は、なのはママの子供じゃないんです。

養子縁組をしてそれから高町の名字をもらいました。」

「ご、ごめん！」

「いいですよ。気にしてません。

それに、血なんか繋がってなくても私とママ達は親子です。」

「いいお母さん達なのね。」

「はい！ママ達は最高です！」

笑顔で答える。

ママ達？あ～さっきの保証人の人かな？

「そろそろ八神部隊長の部屋につきますよ。

先に入って大丈夫か聞いてきますね。」

「ありがとう。高町さん。」

可愛いし、優しいし、明るいし…友達にしたら楽しくなりそうね。

「いえいえ。」

高町さんは背中まで届く金髪を靡かせながら部屋へと向かった。

「休憩中失礼します。」

「ん～？なんやヴィヴィオかいな。どないたん？」

「個人的に部隊長にお話がある方が要らしているのですが、御通ししてもよろしいでしょうか？」

「私にお話？どこの所属の人や？」

「一般の市民の方のようです。」

「私何かやらかしたんやろか…まぁええよ。お通しして？」

「それでは、お連れします。」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「一之瀬さん大丈夫ですよ。入ってください。」

しばらく待つと高町さんが出てきて許可が降りたことを伝えてくれた。

「わかった。ありがと。」

少し緊張しつつ高町さんの横を通り中に入る。
高町さんが中に入り、扉が閉まる。

「初めまして。
私が機動六課部隊長の八神はやてや。
私に何かお話があるそうやけど？」

「一之瀬祐希奈です。」
どうやら正面に座っている人関西弁の人が部隊長、八神はやてさんらしい。
とても若い顔立ちをした人だった。
高町さんの話によると２７歳らしいが、正直なところ１８歳～２０代前半にしかみえない。

「なんや？そない私の顔を見て。
私の顔がどうかしたんか？」

しまった！マジマジと見すぎた！

「すいません！あまりに若くて綺麗な方だったもので。」

「お、おおきに。」

八神はやてさんが頭を下げた。

「どういたしまして？」

つられて私も頭を下げる。

「一之瀬さん、八神部隊長にお話があるのでは？」

「そうだった！六課の力を貸してください！」

私は焦って、いきなり用件を言ってしまった
これでは伝わる筈もない。

「ごめんな。なんの話かまったくわからんのやけど…。」

案の定困っている八神さん。
この説明でわかった方がびっくりだけど。

「わ、間違えた。
え～とえ～と、私はカナンという男の子を助けるために、地球からこの世界へと来ました。
でも、私の力だけでは彼を助けられない確率の方が遥かに高いのです。
そこで皆さんの力をお貸し頂きたいのです！お願いします！」

最後に深々と頭を下げ、必死に頼む。

「はぁ～地球から…
その年でよう次元転移出来たなぁ…
とりあえず頭をあげてぇな。」

頭をあげると笑顔の八神はやてさんがいた。

「もともと私達機動六課は、彼を助けるつもりや。
せやから、もうちょっとだけまってぇな。
それまでの間は六課の部屋を使ってもええように手配しとくし。」

はやてさんはそう言ってくれた。
だが、それでは意味がない…
カナンは私が助けなければ意味がないんだ。
私がカナンの支えとなると決めたのだから…

「いえ、カナンは私が助けます。
失礼ですが六課の皆さんにはそのサポートをお願いしたいのです。」

私は強い意思をこめていった。

「そのこと以外は六課の皆さんに従います。
何でもします。お願いします。」

無理なお願いとはわかっている…故に再び頭を下げる。

「そんなのダメだよ！カナン君は私が助ける！」

「え…高町さん？」

予想外の方向から反対の声。
高町さんだった。

「…高町さん。悪いけどこれだけは譲れない。カナンは私が助ける！
私がアイツの支えになると決めたから！」睨み付ける。
アイツは私が助けるという意思を伝えるために…

「ダメ、カナン君は私が助ける…
カナン君を救えるのは多分、私しかいないから…
いくら一之瀬さんがカナン君の友達でも関係ない。

私も譲りたくないの…」

高町さんはさっきまでの優しい雰囲気が消え、色が違う瞳には怒りが宿っている。
折角友達になれそうだったけど…
私の邪魔をするなら押し退ける！

「なら、勝負しましょうよ。
どっちがカナンを助けるかを賭けて…」

「受けてたつよ…
訓練所に行こう案内するよ…
ほかの人に邪魔されたくないしね。」

「上等…ぶっ飛ばす…」

二人は既に戦闘モード。

「まぁまちぃな。二人とも落ち着いて。」

見かねたはやてさんが間に入り止める。

「二人がカナン君を助けたいのはようわかった。
せやけど、ヴィヴィオは仕事と訓練で疲れてるし、
一之瀬さんも地球からミッドチルダまで、超長距離転移をしたんやから魔力を相当消費してるはずや。
勝負は止めへん。
六課も出来る限り協力もする。
けど1日はゆっくり休んで、勝負はそれからや。」

「「はい…」」はやてさんにさとされ落ち込んだ私と高町さん。
少し熱くなりすぎたかもしれない。

「八神部隊長申し訳ありませんでした。」

「ごめんなさい。」
二人ではやてさんに謝る。

「もうええよ。ほんなら今日はもうヴィヴィオは明日にそなえてお休みや。
仕事はまた今度お願いな。」

「はい…」

「一之瀬さんは、私ちょうど暇やし、部屋に案内するわ。」
気を使ってくれたのか自ら案内してくれようとするはやてさん。

「八神部隊長。一之瀬さんは私が案内します。」
何故か高町さんが案内をかってでる。

「ヴィヴィオ?ええんか?」

「はい…大丈夫です。部隊長にこんなことをさせるわけにはいけませんから。」
なんとか笑う高町さん。
かなりひきつってはいるが…

「なら、お願いするけど、明日までケンカはなしやで?」

はやてさんが釘をさす。

「はい。わかってますよ。
一之瀬さん行きましょうか。」

「…うん。」

「失礼しました。」

ヴィヴィオと祐希奈が出ていった後、はやては苦笑いをしていた。

「まさかヴィヴィオがなぁ…
なのはちゃんにも言った方がよさそうやね。」

はやての部屋を出てから二人の間の空気は果てしなく重い…

「…」

「…」

黙って二人は歩く。
高町さんが一つの部屋の前で止まる。

「こちらが一之瀬さんのお部屋になります。」

平静を装い話す高町さん。目線を合わせない所を見るとやはり怒ってるらしいけど…

「そう。案内ありがとう。」

こちらも出来るだけ普通に返す。

「では…失礼します。」

すれ違う瞬間…

「…あなたにカナン君は渡さない…」

小さな声で宣言される。

声は小さいが、意思は強い。

「私だって…」

気押されないないように返事を返す。

「明日、朝の七時に迎えに来るよ。

訓練があるけど内容を一之瀬さんとの模擬戦に変更してもらうからそのつもりでいてね…」

そう言って高町さんは振り向かずそのまま行ってしまった。

私も振り向かずに部屋に入る。

なかなか広い部屋だったが最低限の物しか置いていなかったので余計に広く感じた。

無性に疲れていた私はすぐにお風呂に入り、ベットに倒れこむと気絶するように眠りについた。最後の思考は、明日の模擬戦のことではなく、パジャマ忘れたなぁーと考えていた。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

さて、変更のお願いを今日しないと…私は作戦を考えていた。

「ママ～はいっていい？」

「ヴィヴィオ？いいよ。」

「わ～い。」

私はなのはママとフェイトママがそろう時間を見計らい部屋に入った。

「ヴィヴィオ！？その格好どうしたの？」

なのはママとフェイトママとが驚く。

「今日はなのはママとフェイトママと一緒に寝たいの」私はパジャマ姿だった。

「突然どうしたの？この前一緒に寝たところだよ？」

フェイトママが近づき聞いてくる。

「ダメ？…」

必殺、上目遣いウルウル光線が炸裂！（目薬使用）

「はうあ！もちろんいいよ。

一緒に寝ようね。」

よし。これでフェイトママは私の味方だ。

ここまでは順調。

「はぁ…フェイトちゃん甘過ぎだよ。」

「いいじゃない。可愛い娘のお願いだよ？
ヴィヴィオおいで。」

「はーい♪」二人の間に入る。
なのはママがこっちを見た。
今だ！

「なのはママお願いがあるんだけど…」

「ん、何かな？ヴィヴィオ。」

「今日一之瀬さんが来たことは知ってるよね？」

「うん。地球から来た女の子だってね。」

「その一之瀬さんと明日の朝練で模擬戦がしたいんだ。
いいでしょ？」

ウルウル光線（目薬大量仕様）発射！

「う…なんでかな？」

さすがになのはママは一筋縄ではいかない。
「ちょっと一之瀬さんの力を見たいの。」

光線を発射し続ける。

「く…そのために私の考えた訓練を無駄にするの？」
なかなか落ちないママ。
フェイトママに比べるとなのはママはかなり厳しい。（フェイトが

甘すぎるだけ…）

「それは悪いと思ってるけど、どうしてもやりたいの。」

「…力を見るだけなら明日じゃなくてもいいでしょ？
どうしてそんなに一之瀬さんとやりたいのかな。」

なのはママは力を振り絞り反撃する。

「えっと…」

必死に考えるがもうこれ以上でて来ない。
手詰まりかと思えたが援軍が登場。

「可愛い娘がこんなに頼んでるんだよ。少しくらいいいんじゃないかな？」

「フェイトちゃん…
わかった。明日の訓練はヴィヴィオと一之瀬さんの模擬戦ね…」

フェイトママの参戦に、ついになのはママがおれた。しかし、なんだか悲しそうだった。

「ふあ…じゃ、そろそろ寝ようよ」眠いのか欠伸をしながらフェイトママが言った。

「そうだね。お休みヴィヴィオ。」

「お休みなさい。」

「お休み。明日は頑張ってね。」

「うん。ありがとうフェイトママ。お休みなさい。」

明かりが消える。

フェイトママは疲れていたのかすぐに寝息が聞こえてきた。

それを確認しなのはママに話かける。

やっぱり嘘をつくのはよくないよね。

「なのはママ？」

「どうしたの？ヴィヴィオ。」

私は、真実を告げることにする。

怒られるかな…

「ごめんなさい。

なのはママ。ほんとは一之瀬さんとケンカしちゃってその決着をつけたかったからお願いにきたんだ…」

「どうして、ケンカしちゃたの？」

「私カナン君を一人で助けたかったんだ。

でも、一之瀬さんもそうしたいらしくて、お互い譲れなくてケンカになっちゃたんだ…」

でも、何で私はあんなに譲りたくないのかな…

自分のことなのにわからない。

「どうしても譲れないケンカなんだね？」

「うん…」

「なら私は止めないよ。」

「え！？」

私は驚いた。怒られなかったのもそうだが、てっきり模擬戦をやめさせられると思っていたからだ。

「なんでさっき私が悲しかったかわかる？」

「…私が嘘ついてたの気づいてたから？」

「うん。実は、もうはやてちゃんから聞いてたんだ。最初からこうやって正直に話してくれたんなら、あんなことしなくても変更してあげたよ。」

「ごめんなさい…」

「もういいよ。もしあのままなら私はヴィヴィオを嫌いになってたかもしれない。
けど、ヴィヴィオは私に話してくれたからね。
ヴィヴィオがそんな卑怯な子にならなくて良かった。」

そう言って抱き締められた。
怒られるよりも辛かった…こんなに優しいママを騙そうとしていた自分が恥ずかしくなった。

「もう、ママ達に嘘なんてつかないよね？
ヴィヴィオはそんな子じゃないよね？」

「うん…ほんとにごめんなさい。」

「話してくれてありがとう。ヴィヴィオ。」

私はなのはママの温もりを感じながら眠りについた。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「じゃ…一之瀬さんを呼びに行ってくるね…」

私達の前には今までかつてない程に怖い顔をしたヴィヴィオがいた。
それだけ譲れないということかな…

「行ってらっしゃい。
時間に遅れないようにね。」

「うん。」

ヴィヴィオが部屋から出ていった。

「フェイトちゃん、恋は盲目って言葉の意味が初めてわかったよ。」

「うん。あんなに怖い顔したヴィヴィオなかなか見れないもんね。」
「それだけ、カナン君を渡したくない想いが強いんだよ。
ヴィヴィオはその気持ちに気付いてるかは分からないけどね。」

「気付いてないんじゃないかな?
だって私達の子供だもん。」

「フェイトちゃんはともかく私はユーノ君と結婚してるよ?」

「なのはに気付かせるために私やはやてがどれだけ苦労したと思っ

てるの？
ユーノにデートに誘わせ、プレゼントを考え、ディナーの場所を考え、それでもダメだったからユーノと偽デートをしてようやく気付いたんだよ？」

「えー！あれ全部計画だったの！？」

「そうだよ。これでも鈍くないって言える？」

「ごめんなさい。」

「もういいけどね。気付いてくれたし。
まぁ付き合ってた期間がほぼゼロだけど…」

「いきなり結婚したからね～。」

「なんであんなに急いだの？」

「フェイトちゃんにユーノ君を取られたくなくて…」
「で、告白して3日目で自分から結婚したいなんていったの？
女性からプロポーズなんて聞いたことないよ…」

「あはは…とにかく、私達でこれならヴィヴィオは確実だね。ちょっと天然だし。」

「いつ気付くことやら。」

「「はぁ…」」▼▼▼▼▼▼▼▼

「へっくち！なんだろ風邪かな？」

こんなことを言われているとは知らないヴィヴィオは祐希奈の部屋の前でくしゃみをする。

「風邪なら明日にする？全力でやりたいし…」

くしゃみで気付いたのか中から一之瀬さんが出てきた。

「大丈夫だよ…」

一之瀬さんの登場に私は戦闘モードに切り替える。

「そう…良かったわ…」

一之瀬さんもスイッチが入ったようだ。
声は鋭く、瞳もまた鋭くなる…

「さて、行こうか…」

「ええ…」

二人の周囲は凍てつくような寒さだったという…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
なのは視点

「あ、きたきた。」

「ほんとだ。わぁ、綺麗な子」

「また女の子…」

エリオを除きはしゃぐフォワードメンバー。
しかし、

「なんか寒くない？」

二人が近づいてくるにつれ寒気を感じる。

「なんかあの二人怖い…。」

そして、冷気を放つ本人達が到着する。

「少し遅れましたか？…」
口調こそ丁寧だがいつもと違うヴィヴィオにメンバーは怯える。

「だ、大丈夫。遅れてないよ。」

スバルが勇気を出して答えた。
しかし、いつも元気なスバルでさえそれ以上は何も言えない…

「それじゃ、自己紹介といこうか。」

私は普通に話す。このくらいの殺気慣れている。

「一之瀬祐希奈。
これからしばらくの間よろしくね。」

「一之瀬さん敬語をつかいなよ…」

ヴィヴィオからさらに殺気が放たれる。
やれやれ…大丈夫かな…

「別に私、局員じゃないし。」

一之瀬さんからも殺気。
この場にいるなのは以外のメンバーは思った。

「「「帰りたい…」」」　と

「まぁ、確かにヴィヴィオみたいに局員なわけじゃないし、まだ中学生だからいいよ。」

凄まじい殺気の中で平然と答える。

「ありがとう。え～と?誰?」

「なのはだよ。ヴィヴィオの母です。」

「へぇ～、ありがとう。なのはさん。」

どうやら私には敵対心はないらしい。
「今日は個別スキルをやるつもりだったんだけど、祐希奈が入って来たから実力をはかるために模擬戦に変更するよ。
最近見学が多いんだけど、みんないいかな?」

「「「はい!」」」

メンバーはこの殺気の中で訓練はやりたくなかったため一斉に返

事をした。

「良かった。二人共準備して。」

「「はい！」」

「アシェル！」

「フェアリー！」

二人から銀色のペンダント…

青色の宝石が浮かび上がるそして、二人は言い放つ。強い決意のもとに…

「「セットアップ！」」

「「起動します。」」

お互いバリアジャケットに変身。

「始めるよ。設定はいつも通り、街中。レディ…」

「勝った方がカナンを助ける。文句なし！いいわね！」

「いいよ。」

何か最近私変だ。いつからかな…カナン君と出会ってから？　胸の中のモヤモヤが晴れない。この気持ちは何？

分からないけど一之瀬さんにカナン君を任せたくない…私が助ける！

「私…負けないよ。」

「こっちのセリフよ！」

「ゴー！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

開始と同時に二人は走り込み距離がつまる。

一之瀬さんが右腕を引き拳を作る。

格闘型？様子見をするためプロテクションを張ろうとするが、

「ブレード展開！」

『展開。』

つきだされた右腕から剣が出てくる。

「はぁぁ！」

「っ！」

ブレードの距離が追加され、プロテクションは間に合わない…

しかし、なんとかかわすことに成功。

「たぁぁ！」

デバイスで殴りかかる。

プロテクションを張られたが構わず殴った。

「うっ！」

しかし吹っ飛んだのは私の方がだった。あまりの固さに弾きかえされたのだ。

「その程度なの？随分軽い攻撃ね。」

一之瀬さんは余裕の表情。仁王立ち…挑発か…
後悔させる！！

「そんなわけないでしょ！ディバイ～ンバスター！」

「アシェル…稀少技能を発動して。」
『Ｒｅｆｌｅｃｔ　ｆｅａｔｈｅｒ』。

「直撃？プロテクションは張れたはず…何かある。」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「一之瀬さん大丈夫かな？」

祐希奈の心配をしているフォワードメンバー
先程のディバインバスター…
祐希奈は避けようとすらしなかった…

「祐希奈は大丈夫だよ。
それよりヴィヴィオの心配の方がいいと思うよ。」

「え？どういうことですか？」

「見ればわかるよ。
ほらね…」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ふ～ん。やっぱり大したことないね。」

煙の中から声が響く。

「これ、返すわよ。」

私の撃ったはずの砲撃がそのまま返ってくる。

「きゃああ！」

ドーン…

予想外の攻撃に直撃を受ける。

「う…く…まさか返すなんて。」

そこには六枚の白い羽が生えた天使がいた。

「え？…」

「何ボーとしてるの！行くわよ！」

そうだ。集中しなきゃ！

一之瀬さんがカートリッジを一発ロードしている。　何が来るかわからない。

「ストームワルツ！」　天使のような羽が羽ばたかれ、いくつもの巨大な破壊の竜巻が生まれる。

「大きい！防御は無理だね…。

フェアリー！シューティングモードは維持したままソニックフォーム！出来るよね？」

『当然です。』

「真・ソニックフォーム！！」

『起動開始』

防ぐことは不可能と判断しソニックフォームに変更。
神速で離脱。
ビルの屋上へ降りる。

「長距離砲撃！！カートリッジロード！」

空薬莢が一発排出される。杖の宝石の部分から青い羽が広がり、魔力が集まっていく…

『ＤｉｖｉｎｅＢａｓｔｅｒＥＸ』

フェアリーが電子音と共にその術名を表示する…
最初に放った数倍の威力の砲撃が放たれようとしていた…

一方祐希奈は…

「マスター相手は離脱、その後ビル屋上に降りました。
砲撃を撃とうとしています。」

「ふ～ん。逃げるのは癪ね、正面から受ける！」

「了解。」

「逃げないんだ…そういう性格、嫌いじゃないよ！

撃ち抜くよ。フェアリー！」
「任せて下さい！」

「ディバイ～ン！バスター！！」

大威力の砲撃が、一切の手加減もせず、祐希奈へと撃ち込まれた。

「また返してあげる！アシェル！」
「ウイング展開！」

白銀の天使の羽に包み込まれる…
衝突…そして、

「わっ！これも返した！」

カートリッジを消費したにも関わらず、返された事実に驚愕を浮かべる。
砲撃が返ってくるが今回は長距離のため余裕をもって避ける。

「遠距離砲撃なのに凄い衝撃…やるわね。」

一方祐希奈も砲撃の威力に驚いていた。
祐希奈は最低限の魔法の知識しかもっていないが、防御に関しては自信を持っていた。
正直ここまで衝撃が通るとは思ってさえいなかった。
砲撃を返された回避したヴィヴィオは空。

「どうすれば攻撃が通るのかな。」

私はあの鉄壁の防御を抜ける方法を考えていた。

生半可な砲撃は危険だし…

「ちょっと試してみるからフェアリーはいつ防御がとけるか特定をお願い。」

『わかりました。お任せください。』

「よし。行くよ。アクセル・ランサー！」

射撃魔法を放ち一之瀬さんの周囲を包囲する。

「そんな小さなもの効くわけないでしょ！」

再び羽に包まれる。

一之瀬さんは回避をしない…

もしかしたら回避が苦手なのかな？

「シュート！」

放たれる光の槍は案の定すべて弾かれ返ってくるがコントロールし直し再び攻撃させる。

「あぁ！鬱陶しい！アシェル。撃ち落とすわよ！」

『了解しました。』

一之瀬さんが左手をかざす。

「出てこいブルーゲイル！」

弓が左手に召喚される…
遠距離もあるんだ…何するのかな?
右腕で弦を引く。
するとその周囲にはランサーと同じ数の矢…

「撃ち落とす!」

全ての矢がランサーに発車され狙い違わず撃ち落とされた。

「わぁ、凄いなあ…」

「マスター、バリアの消滅のタイミングがわかりました。
これまでブレードを除く、相手の攻撃の瞬間はバリアは消えるようです。
また、バリアの形状からして近接の反射は不可能と思われます。」

フェアリーからの分析結果が伝えられ、反撃の準備は整った。

「そう、ありがとうフェアリー。
さてと遠距離攻撃のタイミングもわかったことだし、行こっか!
フェアリー、セカンドモード起動してくれる?」
「了解。セカンドモード起動。」

セカンドモードが起動されデバイスの両端から巨大な魔力刃が発生する…
クルクルと頭上で回し…腰だめに巨剣を構える。

「突撃!」
ソニックムーブを発動し、神速で突っ込んだ。　▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「マスター相手が接近してきます。」
「わかってる！ブレード出して。」
「了解。」
弓が消え、右腕からブレードが突き出る。
「近接戦闘だって負けないんだから！」
自身へと向かう金色の光を睨みブレードを構えた。
「また、正面から挑んでくれる。私あの子好きかも。」
カナン君を任すの最初は嫌だったけどなんか一之瀬さんなら許せる気がする。
そんなことを考えつつも全力で斬撃を放つ。
「はぁぁ！」
「せや！」
横殴りにぶつかる刃、しかし、ヴィヴィオは刃がぶつかる瞬間刀身をそらせ受け流す。
シグナムさんとの訓練を積んだんだ…
近接では負けない！
「ちっ！」
「そこだ！」

突きを繰り出すとプロテクションに阻まれる。
回避は苦手みたいだけど…反応自体は早い…

「くっ…やっぱり固い…でも、攻撃は届くんならなんとかなるね！」

「調子に乗るんじゃないわよ！」

怒声と共に斬撃が来た。が、

「遅いよ！」

受け流す必要すらなく楽々避けて反撃を打ち込む。

「なっ！」

「フェイトママに比べたら、止まって見えるよ！」
言いながら数回打ち込む。高機動近接戦闘ならこの子には勝てる！

「うっさいのよ。マザコン！」

あまりのスピードに防戦一方の一之瀬さん。
しかし、口では言い返してきた。

「マザコン？なにそれ？食べ物かな？」

知らない言葉に動きが止まる。
戦闘中に足を止めるなんて私はバカだった。

「あんたみたいな、母親から離れられないバカのことを言うのよ！」

セリフと共に突きがきた。

「わっ！」

なんとかプロテクションで防ぐが、突き刺さった状態から一之瀬さんは笑う…

「カートリッジロード！」

手甲が上下に動き空薬莢を弾き出す。

「撃ち抜けー！！」

「なっ！」

ブレードが赤く光を放つ…瞬間、プロテクションで防いだブレードの先端が爆発。

バリアブレイク…ソニックフォームのいう薄い防御では最悪の技だった…

「きゃあああ！！」

ヴィヴィオは黒煙を纏いながらビルに激突した。▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ふん！装甲を薄くしてスピードを上げたのに止まるなんてバカじゃないの？」

「それは私も思ったよ…」

高町さんはふらふらになりながら、立ち上がり、再び私の前に飛び上がる。

「ちょっと待ってね。ママに聞きたいことが出来たから…」

真剣な表情で話す。高町さん…

「少しだけならいいわよ。」

構えを解く。

「ありがとう。」

返事の後、大きく息を吸い込む。

「ママー!!私ってマザコンなのかなぁ!?」

ずるぅ!!

あまりの天然ぶりに私は空中から落下、フォワードメンバーは全員ずっこけた。

なんとか地面にぶつかるまえに姿勢を制御する。しかし、

「ちょっと甘えん坊さんかな~!でも元々の原因はフェイトちゃんは親バカだし、そうなっちゃっても仕方ないよー!」

ズドーン!!

天然砲二連発に耐えきれず私は墜落した。ていうか素で返さないでよ!

「一之瀬さん?何で墜落してるの?」

自分のせいだとは気付いていない、スーパー天然魔法少女高町さん。

「あぁ！可愛いわね！畜生！」
「な、なんで誉められてるのかわからないけど、とりあえずありがとう。」

顔を赤くしながらお礼を言ってくる。
私達ケンカしてるんじゃなかったっけ？
この、のほほんとした空気…
もういいや…やる気なくした…

「ねぇ高町さん、なんか私、急にやる気がなくなっちゃったんだけど、カナンは二人で助けるってことで勘弁してくれない？」

私の提案に意外なことに高町さんは表情を輝かせた。

「実は私もなんだよね～。最初はカナン君を一之瀬さんに渡したくなかったんだけど、戦ってるうちに一之瀬さんならいいかなって思えるようになっちゃった。」

「じゃ、決まりね。」

「うん。よろしくね。」

「「ただ…」」

二人は思う。
このままでは中途半端だと…
次に言う言葉は見事にハモることとなる。

「「決着はつけないとね！！」」

再び構える。

「ほんとの全力勝負はまた今度にしよう？」

「そうね。今日はこれで終わりにしよっか。」

「フェアリー、シューティングモードお願い。」

「アシェル、レイザーフォーテルを出して。」

「「了解。」」

私はシューティングモードになり、一之瀬さんは先程より巨大な弓を召喚する。

「全力全開！スターライト！」

魔力を前方に集中する。

放つは母親から受け継いだ最強の魔法…

「一撃必中！ジャッジメント！」

一之瀬さんの左右の手甲が三発ずつカートリッジを排出…六発の空薬莢が地面に落ちて行く。

羽がさらに白銀に輝き、弦を限界まで引き絞る。

綺麗だなぁ…場違いなことを思いつつ全力の一撃を放つ。

「ブレイカー！！」

「アロー！！」

巨大な集束砲と流星のような矢がぶつかる。
しばらく均衡を保っていたが矢が魔力砲を貫いた。▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「勝った！」
私はそう思った。が、

『Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ！』

聞こえたのはデバイスの声…
目に見えない程の速さで高町さんは動き矢をかわす。そのままのスピードで突っ込んできた。

「あれが囮！？」

「２ｎｄモード！」
「もうやってます。」

「さすがフェアリーわかってる！」

ヴィヴィオの支持より前に変形を開始していたフェアリー。

「これで終わらせるよ！」
『了解です。』

「疾風一閃！ウインドスラッシャー！！」

「アシェル！プロテクション！」
『了解しました。』

ガン！！

「ぐっ！！防ぎきる！」

「っ！！切り裂く！」

二人は残りの魔力全てを注ぎ込む…一方は防ぎきるために、一方は決めるために…

「「おおぉぉ！！」」

風が吹き荒れ、プロテクションとの衝突で火花が踊る…

「フェアリー！！フルドライブ！！行くよ！！」

最後の二発を使う。
スターライトブレイカーにはカートリッジは四発しか使っていなかった…

「Ｗｉｎｄ　Ｓｌａｓｈ　Ｆｕｌｌｄｒｉｖｅ！！」

刃にさらに風を纏いバリアをプロテクションを侵食する。

「切り裂けー！！」

「く…そ…」

プロテクションは破壊され、風の刃は祐希奈へと叩き込まれた…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「勝者ヴィヴィオ！」
勝利者をなのはママが宣言する。
「わ～い！」
「あんなデカイの囮だなんて気付かないわよ。」
祐希奈としてはあれで終わる予定が、計算外だった。
「私の作戦勝ちだね。」
「せこい真似が好きなのね。」
「違うもん！」
模擬戦を通じて、仲良くなった二人は自然と喋るようになっていた。
そんな光景に、フォワードメンバーは首をかしげる。
「なんか二人とも仲良くなってない？」
「うん。」
「何があったんだろう？」
「何かしゃべってたけどあの時仲良くなったんじゃない？」
「ま、仲が良いのは構わないわ。」
もう怯えずにすみそうなので喜ぶフォワードメンバー。

「集合！」
ママから号令がかかる。

「二人の反省点を言うと、まずヴィヴィオは集中力だね。
祐希奈が稀少技能を発動した時、見とれてたでしょ。あれは減点。
いちいち気にしない。」

「ごめんなさい。」

「祐希奈は稀少技能やプロテクションの力に頼り過ぎ、もっと自分で回避をしないとね。」

「は～い。」

防御だけでここまで戦える祐希奈も相当な気がするけどね。

「じゃあ、今日の朝練はここまで！」

「「「ありがとうございました。」」」

「あ、ヴィヴィオカナン君の件はどうなったの？」

訓練が終わった後なのはママが訊ねてきた。

「一緒に助けることにしたよ。」

「そう…それが一番いいよ。これからは仲良くしてね？」

「大丈夫。一之瀬さんのこと、好きになれそうだしね。」

そこへ一之瀬さんがやってきた。

「高町さん、一緒に朝食食べない？っていうか食堂わかんないから連れてって。」

「うん。わかった。すぐいくよ。じゃあ、またねママ。」

「うん。私もデータ整理したらすぐいくから。」

「うん。」

こうして私には新しいお友達が出来た。
結局モヤモヤは分からないけどそのうちわかるよね。

第八話　意地（後書き）

なんともうすぐＰＶが９０００アクセスを突破します。ユニークは毎日３００から４００とここまで結構順調です。最近学校が忙しくて更新の時間が遅いですが、多分最低３日の間には更新するのでよろしければお読みください。ではまた次の後書きで

第九話　友達（前書き）

模擬戦が終わり仲直りした私達、カナン君を一緒に助けると言う報告と昨日の迷惑をかけた謝罪に向かう私と一之瀬さん。ちょっと怖いけれど勇気を出して部屋に入る私達。
魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります。

第九話　友達

「「昨日は本当に申し訳ありませんでした！！」」

私達はそろって頭を下げた。

理由は昨日八神部隊長の前でケンカをし、迷惑をかけたからだ。

「？何を謝っとるの？」

「昨日はご迷惑を…」

「あぁ、そのことか！気にしてへんよ。仲直りしたみたいやね。カナン君争奪戦の結果はどうなったん？」

「二人で助けることにしました。」

そう私が答えると八神部隊長はとても嬉しそうにした。「うん！それがええ。仲良くするのが一番や！

それに二人の方がカナン君を助けられる可能性はぐんとあがるしな。

話が変わるけどなのはちゃんに聞いたんやけど、ヴィヴィオは今の部屋が嫌らしいな。」

「いえ、ティアナさんもスバルさんもとてもいい方です！…ただ夜寝る時に下着で寝られることがあるので、その…女の私からみても、お二人ともあまりに無防備なので緊張するといいますか…」

「なるほどな。それで寝つきが悪くなると。

「祐希奈は寝る時の格好はどうしてる？」

「私？私はいつもはパジャマで寝るんだけど、急に転移してきた

おかげで何もなくて困ってるのよね。」

「一之瀬さん、八神部隊長くらいには敬語を使おうよ。」

「だってはやてさんとかなのはさん、フェイトさんは、とても若くみえるから敬語使うきがおきないのよね。」

「若くみえるんなら仕方ないな、敬語はなしでええよ。」　若くみえる発言に上機嫌になり、許す八神部隊長。

「まぁ、部隊長がいいと言われるならいいですけどね…」

私はちょっと不満。

「なんやったらヴィヴィオも敬語なしでええよ。」

「とんでもないです！ママから雷が落ちますよ！」

あわてて断る。悪魔のママはもう嫌だ…

「あはは、そない必死にならんでもええのに。

でやな話を戻すけど、ヴィヴィオはスバル達に困ってるし、祐希奈は日用品がなくて困ってる。

そこでやな、私は二人が一緒の部屋になればええと思うんや。

ヴィヴィオは落ち着いて眠れるし、祐希奈はヴィヴィオに日用品を借りればええ。どうや？」

「いいですね！私は賛成です！」

「マザコンがうつらないか心配だわ。」

「マザコンじゃないもん！」

「あんたがマザコンじゃなかったら世界中みんなマザコンじゃないわよ！」
「じゃあティアナさん達に聞いてマザコンって認められたら、私も認めるよ！」
「事実を言われて泣かないようにね！」
「私をいくつだと思ってるの？もう泣かないよ！」
「どうだか…」
「あはははは！」
突然の笑い声に振り向く。そこには腹を抱えて机を叩いている八神部隊長がいた。
「自分らおもろ過ぎるわ！あはははは！誰か助けて！あはははは！！」　大爆笑している八神部隊長をボーゼンと見つめる私達。
「あーおもろかった。部屋の話やけど、そんだけ仲ええなら部屋は一緒でええな。
しっかし祐希奈はともかく、こんなヴィヴィオを見れるとはなぁ。なのはちゃん達に自慢しよ。」
そう言われて顔が熱くなってきた。
「失礼します！」
恥ずかしくなり全力で走りだし逃げた！
「待ってよ高町さん！」
一之瀬さんもあわててついてくる。

「友達が出来るとあんだけかわるんやなぁ。」
はやてはヴィヴィオの変化に感心していた。「そんなに息を切らしてどうしたの？ヴィヴィオ。」
スバルさんが訊ねてきた。
「はぁ…はぁ…部屋が変更になったので荷物をまとめに来たんです。」
「それ息を切らしてる理由関係なくない？」
ティアナさんまで聞いてきた。
「何でもないです！」
「高町さん何で急に行っちゃうのよ！」
「あ、祐希奈だ。やっほー。」
「あ、スバルさん。やっほー」　軽く挨拶する二人。
「そうだ！高町さんちょうど二人共いることだし聞いて見ようよ。」
「今！？ちょっと待って心の準備が…」
深呼吸…よし！
「ティアナさんスバルさん！」
「「はい！何でしょうかヴィヴィオさん！」」
私の真剣な様子に何を聞かれるのかと不安になるあまり、敬語になる二人。

「私ってマザコンじゃないですよね？」
バターン！！
本日二回目のズッコケ。
「真剣な顔してるから何かと思えば…」
「どうなんですか！？」
顔を見合わせる二人…苦笑い。
「ちょっとだけね？」
ズーン…
「一之瀬さんの言う通り私ってマザコンなんだ…」　私はあまりのショックに崩れ落ちた。
「私の勝ちね。認めなさい。
私はマザコンヴィヴィオです。って言いなさい♪」
実に嬉しそうな声で言う一之瀬さん。
「私はマザコンヴィヴィオです…」　ドゴーン！
さらに口に出してマザコンと認めると頭に鉄骨が落ちて来たようなショックを受ける。
「…うぅ…私はマザコンなんだ…」
半泣きになる。
「あ～あ、泣かないように言っといてあげたのに結局泣いてるじゃない。」
止めをさす一之瀬さん。

「うわぁぁぁん!!」
ついに我慢出来なくなり涙が大量に流れ出す。
「ヴィヴィオ!だ、大丈夫だよ。ティアナだってブラコンだったし!」
「何ですって!?誰がブラコンよ!」
「だってお兄ちゃんを目指して執務官になったんでしょ?ブラコンじゃん。」
「私がブラコンならあんたはシスコンでしょうが!!」
「違うよ、私とギン姉はとっても仲良しなだけだよ!」
「それを世間一般ではシスコンって言うのよ!」
「私は、ちゃんと一人で生活出来てたもん!!」
「どこがよ!!私かギンガさんが片付けに行かなかったらスバルの部屋はゴミ屋敷になってるわよ!!」
こちらでも口喧嘩が始まる。
「あんたは、スバルさんティアナさん公認のマザコンよ♪」
「うわぁぁぁぁん!!フェアリーシューティングモードぉぉ!!」
泣き叫びながらデバイスを起動する。
「「げ!」」
「うぁぁぁぁん!!ディバインバスター!!」

「「ぎゃあああああ！」」　もう部屋のなかは大混乱。
ちなみにこの混乱は騒ぎに気付いた他の局員がなのはを呼び、なのはが止めにに来るまで続いたそうな。「それじゃ、行きますね。」

「うん。二人仲良くね。」

「はい！」
混乱が収まりようやく荷造りが終了した私。

「まったくなんでこんなに時間かかるのよ…」

「かけさせる原因を作った人がいわないでよ…」

「うるさいわよ。マザコン」

「なんか祐希奈ってティアみたいだね。」
スバルさんが言った。
「どこがよ！」
怒るティアナさん。

「そうやってすぐ怒ったりするところとかだよ。若干Ｓっ気あるし…」

「…スバルあとでゆっくり話しましょうか？」

「ひっ！でもでも、たまに優しいところとかもあるよね。」

「もう遅いわよ♪
ヴィヴィオ、祐希奈でてってくれる？これは教育上子供には見せら

れないわ。」
絶対零度の微笑みを向けるティアナさん。

「「はい！」」
回れ右をしてダッシュで逃げる。

スバル視点
「ヴィヴィオ！祐希奈、待ってよ！置いてかないで！」
私は追いかけようとするが…

「どこに行くの♪？」
肩を捕まれ振り向かされる。正面には絶対零度の微笑み…

「ちょっとトイレに行きたいなぁ…？」

「却下♪」

「あはははは…」

「あはははは♪」
私は生き残れるかなぁ…

ヴィヴィオ視点

「たまにしか優しくなくて悪かったわねぇぇ！！」

「ぎゃあああああ！！！！」
背後から断末魔の叫びが聞こえる。

「ごめんなさいスバルさん…私達はまだ生きていたいんです…」
涙を流しながら走り去った…

「はぁ、怖かった～」

「ほんとだね。」
あぁ、生きているって素晴らしい…

「なんか疲れちゃった。さきにお風呂入っていい？」

「いいよ～。パジャマはどれがいい？」

「ん～これかな。」　一之瀬さんが選んだのは、青色のパジャマだった。

「んじゃお先～♪」

「ごゆっくり～。」
一之瀬さんがバスルームに消える。

「はぁ…なんか妙に疲れる1日だったな。」
ネクタイと上着を脱ぎ、カッターシャツになりダブルベットに倒れ込む…

「ちょっとだけ寝ようかな。」
目をつむるとすぐに眠りにつけた。

祐希奈視点

「ふぅ～気持ちいい～♪1日の疲れが癒されるわ。」　私は体を洗ったあと湯船に浸かる。

「高町さんホントに可愛いなぁ～。私もあんな性格なら良かったのに。」

まぁ、私が急にあんな性格になったらそれこそみんなどん引きだろうが…

そんなことを考えながら浸かっていると、既に５０分が経過していた。

「そろそろあがろうかな。」

湯船から出て、貸してもらったパジャマに着替え部屋に戻ると高町さんはベットの上で眠っていた。「まったくお風呂に入る前に寝るなんて…起こしてあげないと。高町さ…」

あまりに可愛い寝顔に声が止まる。

なんなのこの人も殺せそうなくらい可愛い寝顔は！

「女の子同士だし、ちょっとくらい良いわよね…」

私は好奇心にまけ眠る高町さんのほっぺをつつく。

「わぁ…プニプニだ…」

楽しくなりまたつつく。

「…ん…」

ヤバっ起きたかな…

「すぅーすぅー」　ふぅ助かった～
眠る高町さんを見下ろすとあることに気付く、
「あれ？この子私より胸が大きいような…」
上着を着ていたので、わからなかったが、カッターシャツになると違いがわかる。

「女の子同士だし、ちょっとくらい良いわよね…」
また好奇心にに負ける。
既にちょっとを通り越している気がするがこの際無視だ。　プニプニ…
やっぱり私より少し大きい…同じ中学生なのに…神様って意地悪だ…
と思いつつも触り続ける。
こうして今日ここに、はやて、スバル、祐希奈という変態トリオが結成…

「するか！！」
私は思わず大声でツッコミをいれてしまった。

「ん…あ、一之瀬さんあがったの？」
その声に高町さんが起きてしまった！
視線が自分の胸に向く。そこには胸を触っている私の手…

「…」

「…」　気まずい沈黙がながれる。

「あ、もしかして私を起こそうとしてくれたの？」
ここにきて天然炸裂！

「そう！揺すってもなかなか起きないから胸の上に手が乗ってしまったの！」
助け船とばかりに言い訳を言う。

「なーんだ。やっぱりそうなんだ。最初は私の胸を触ってるのかと思っちゃった。」
すいません高町さんまったくその通りです…

「あはは…そんなことなんでする必要があるのよ。バカなこと言ってないで、さっさとお風呂に入って来なさいよ。」

「うん。そうするね。」
高町さんがバスルームに消える…

「危なかったわ…」
安堵する私…

「あはは、パジャマ忘れちゃったよ。」
再び高町さん登場！

「わっ！な、何よそそっかしいわね。」
油断ならないわね、高町さん。

「それじゃ、今度こそ入ってくるね。」

「心臓に悪いわ…」
私はそう言ってベットに倒れ込んだ。
ヴィヴィオ視点

「なな～なな♪」
私は鼻歌を歌いながら上機嫌で湯船に浸かる。
「今日から一之瀬さんと一緒に寝れるんだ～♪」
私は友達と一緒に寝るなんてことをしたことが無かったため、とても嬉しい。

「ん～今日は興奮してねむれないかも～♪」
一時間お風呂に入りパジャマに着替え（ちなみに私はピンクのパジャマ）部屋に戻った。

「ふ～気持ち良かった。」
一之瀬さんの横に倒れる
「それは良かったわね。」

「一之瀬さん自分が入ったあとお湯足しといてくれたの？」
「まぁね。ぬるいお風呂なんて嫌でしょ？」
「ありがとう。一之瀬さんは優しいね。」
「このくらい別にいいわよ！」
なぜか一之瀬さんが赤くなっている。
「一之瀬さん、何怒ってるの？」
「別に怒ってないわよ！」　やっぱり怒ってる気がするんだけど…

「ねぇ…」
しばらく黙っていると、一之瀬さんから呼び掛けられる。
「その一之瀬さんっていい加減やめてよ…その…友達なんだしさ…」
私はその一言に嬉しくなった。
「じゃあなんて呼べばいいの？」
「別に呼び捨てでいいわよ。」
「あだ名つけていい？」
「勝手にすれば？」
了承がきた。
「じゃあ…ユッティ？」　こう呼んでみた。
「…売れない芸人みたいな名前だから却下。もうちょっと普通なのにして。」
ダメ出しがきた。了承したのに～
「じゃあ、普通に祐希ちゃん？」
「ん。それなら許す。」
「じゃ、私も名前で読んでよ。」
「マザコンヴィヴィオさん♪」

「…いつまでそのネタ引っ張るの？」

「私が飽きるまで♪」

「お願いだから普通に呼んでよ…」

「仕方ないわね。ヴィヴィオ。」

「うん♪」

「祐希ちゃん♪」

「何よヴィヴィオ？」

「呼んだだけ～。」

「用もないのに呼ぶな！」

「じゃ、そろそろ寝よっか？」

「そうね。」

しばらくお喋りをして、時間が遅くなってきたので寝ることにした私達。

「おやすみ祐希ちゃん…」

「おやすみヴィヴィオ…」

電気が消され二人は眠りに落ちた。

こうして、二人の呼び方が変わり、喧嘩をへて、友達になった二人の１日が終わった。

第九話　友達（後書き）

今回の話はどうでしたか？　僕的にはわりと上手くかけたつもりなのですが、ほかの方から見ると、やっぱりもう少しと思う方も多いと思います。　まだまだ未熟な作者なので、何か問題点があればアドバイスをよろしくお願いしますね。

第十話　助けたい想い（前書き）

祐希ちゃんと部屋が共同になった次の日。朝の訓練では、なのはママとシグナム副隊長がいた。シグナム副隊長はなのはママに頼まれ祐希ちゃんの指導にきたそうだ。　祐希ちゃん大丈夫かな～　魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります。

第十話　助けたい想い

「じゃあ本日の午前の訓練はこれまで！」

「「「ありがとうございました。」」」

今日は私と祐希ちゃんの模擬戦のせいで出来なかった、個人スキルの強化練習を行った。

「…ヴィヴィオ、なのはさんっていつもこんなにきついの？」

ぐったりしている祐希ちゃん…

それも納得がいく。何故ならメンバーの中で回避率が極端に低いということで、二時間の間、ママとマンツーマンで回避訓練をしたあと、

さらに接近戦、及び弓の命中力強化ということでシグナム副隊長との訓練を二時間をこなしていたのだから。

「私達はデバイスが特殊なぶん、スバルさんやティアナさん達より、クロスレンジやロングレンジをたくさん練習しなくちゃいけないから、ちょっときついだけだよ。

最初はきつく感じたけど慣れてくれれば、体がついてくるようになるし大丈夫。」

「慣れる日が早く来ることを願うわ…」

力なく答える祐希ちゃん。

そこへ、

「起動六課前線メンバー至急ブリーフィングルームに集合ください。　繰り返します起動六課前線メンバー至急ブリーフィングルームに集合ください。」

「集合？なんだろ…出撃かな？」

「え～…めんどくさ～」

「そんなこと言ってちゃダメだよ。さ、行こ。」

「う～。」

私に引きずられるようについてくる祐希ちゃん。「みんな集まったか？」

「「「はい！」」」

「ふぁ～い…」

一名を除き元気よく返事をする。

「祐希奈…今回は気合いを入れなあかんで。おそらくカナン君がらみや。」

「カナンが出てきたの！？」

目を覚ましたように元気になる祐希ちゃん。

「多分…な。」

「多分？どういうこと？」　「前にカナン君が出てきた時より魔力反応が大きいんよ…

やけど前と同じく大量のガジェット…さらに今回は三人の魔導師の反応がある…スカリエッティに丸め込まれた魔法使いか、戦闘機人の可能性が高い…今回は敵さんも本気なんかもな。」

「戦闘機人？なにそれ？」

この中で一人だけ戦闘機人の存在をしらない祐希ちゃんが訊ねる。

「え～と、簡単に言うと人造魔導師っていう人工的に作られた魔導師に強力な機械を埋め込んで強化された機械人間のことを戦闘機人って言うんだよ。

祐希奈だけに隠したくないから言うけど、私やギン姉も戦闘機人なんだよ。」

「スバルさんやギンガさんも戦闘機人…普通の人間にしかみえないよ？」

「そうだよ。素体は人間だからね。だから今回の相手も見た目は人間と変わらない…」

「凄く戦いにくい…」

「まぁ、戦闘機人の話はおいといて、

カナン君と思われる人物は既にガジェットと交戦して足が止まっとる…

いやスカリエッティを待ってるんかな。

とにかくカナン君を取り戻すチャンスや。みんな行ってくれるか？」

「「「了解！」」」

「よっしゃ。ええ返事や。

それなら部隊をわけるよ。
カナン君の救出は、予定通りヴィヴィオと祐希奈に任せる。」

「「はい！」」

「スターズ、ライトニングはガジェットの排除及び魔導師三人の迎撃。
それと今回は六課に、ノーヴェとチンクが参戦してくれる。」

「ノーヴェとチンクが？何故ですか？」
スバルさんが混乱している。

「前に私が二人に頼んでおいたのよ。約束守ってくれたみたいね。」

「ギン姉が？いつ？」

「こないだ街に行った時によ。」

「なんで？」
スバルさんから質問攻めにあって困っているギンガさん。

「はいはい。質問はそこまで、ヘリに急ぐよ～」
なのはママが質問を強引に打ち切った。

「すいません…」
トボトボとヘリに向かうスバルさん。
ちょっと可哀想に思ったが私は黙ってヘリに向かった。

「それじゃ頑張ってな。なるべくケガせんようにな。」

「「「はい！」」」

「出発しますぜ。部隊長離れてください。」　ヘリの扉が閉まる。

「カナン君待っててね。私達が絶対助けるから。」　カナン視点。

「ちっ！数だけは多いな。」

あまりの数の多さに悪態をつく。

「本当にこんなんでスカリエッティを呼び出せるんだろうな！？」

「これだけ暴れれば出てくるだろう。事実三人の手下がこちらへ向かってくるようだ。」

「まだザコが来るのかよ！めんどくせーな！」

「我慢しろ…何のためにこの一月力を溜めたと思っている？」

「わかってるけど、めんどくせーことにはかわりねぇだろうが！薙ぎ払う！力をかせ！」

「まったくえらそうなやつだ…」

「エクス…カリバー！！」

黒い波動が放たれ、前方のガジェットを消し飛ばした。　しかし、後から後からわいてくる。

「だぁー！もう！スカリエッティ！さっさとかかってこいやぁ！」

苛立ち叫ぶ。

俺はこの時まではまだ自我はあった…

「さぁ、そろそろ目的地につくぜ！」　ヴァイスさんから声がかかる。

「カナン君の位置は？」

「ガジェット達のど真ん中！」

「そう…少し予定がちがうけど、ヴィヴィオ、祐希奈一緒に降りよう。私達が穴をあける。」

「「わかった。」」

「ヴィヴィオ、祐希奈もまだ子供なんだから危ないと思ったら逃げるんだよ？」

心配しているフェイトママ。

「今度は大丈夫。祐希ちゃんもいるしね。」

「そうだね。」　今回は一人じゃないということで少し安心したらしい。

祐希ちゃんは副隊長達と話していた。

「一之瀬…私との訓練乗りきったお前ならば大丈夫だ。」

「はい。」

「お前は、初陣なんだから気をつけろよ？」

「ヴィヴィオとは違いますよ。危なくなったら助けを呼びます。」

「そうしてくれると助かる。でも今日はいつもと口調が違うぞ？大丈夫か？」

「あ、大丈夫やれるわ。」
知らず知らずのうちに緊張していたらしい…

「落ち着いて行け。」

「うん。」
話が終わり隊長陣が一列に並ぶ。
ハッチが開く…

「スターズ１」

「スターズ２」

「ライトニング１」

「ライトニング２」

「「「「行きます！」」」」
隊長陣達が飛び降り変身してガジェットに向かって飛んで言った。
「私達も行こうか。」
「ええ。」
「「カナン（君）を助けに！！」」
「高町ヴィヴィオ！スターズ５！」

「一之瀬祐希奈！」

「「行きます！」」
同時に飛び降りる。
「フェアリー！」
「アシェル！」
「「セットアップ！！」」
変身…ママ達に続きガジェットに突っ込む。
既にママ達が戦闘をしている。
「エクセリオン！バスター！」
ガジェットはその一撃でかなり撃墜。
（穴は開けた。二人共突っ込んで！）
なのはママが念話で言ってきた。
（ありがとうなのはママ！フェイトママと副隊長達も！それじゃ、行ってきます！）
（頑張ってね）
（必ず帰ってこい）
（行ってこい！）
（ファイトだよ～）

「行くよ～祐希ちゃん！」

「ええ！」

私達は穴に突撃した。

気付いたガジェット達が砲撃を撃ってきた。

「フェアリー！聖王の鎧！」

「アシェル！羽出して！」

「「了解しました。」」　雨のような砲撃が３６０。から降り注ぐが私達の防御能力の前では無意味だった。

私達の前方にガジェット達の壁ができる。

「「邪魔！！」」

「ティバイーン！」

「グラビティ！」

「バスター！」

「アロー！」

私達の攻撃に壁が消し飛ぶ。

急に開ける景色…そこには、カナン君が大量のガジェットに囲まれていた。

「カナン君！」

「カナン！」

声に気付きカナン君が視線を向ける。　俺は名前を呼ばれた方に顔を向ける…そこにはいるはずのない人物達がいた。

「ヴィヴィ…オ？なんで生きてるんだ？」

「なんでって…この前の時、私死んでないよ？」

首を傾げているヴィヴィオ。

「カナン！私は無視！？」

なつかしいこえ…

「祐希奈？…なんでお前がここにいる？」

「あんたを追いかけて来たからよ！」

会話をしているとガジェット達が攻撃を始める。

「人が！」　ヴィヴィオが力を溜める。

「話をしてる最中に！」

祐希奈が弓を引き絞る。

「「邪魔をするなー！！」」

一斉攻撃！

「わー！」

あわてて構えたが衝撃はこない。

見ると俺の周りのガジェットだけ綺麗に消し飛んでいた。

「危ないだろうが！！」

怒鳴る。

「カナン君がこんな無茶してるからだよ！」

「当てれば良かったかしら？」　まったくこいつらは…苦笑いしていると頭に声が響く…

（何をしている…こいつらはお前の邪魔をしにきたのだぞ…はやく殺せ…）

「く…あ…やめ…ろ…こいつらは…違う…」

抵抗をするが理性が消え破壊の衝動が抑えつけられなくなる…

「カナン君！どうしたの？」

「カナン！？」

二人が心配して近づいてくる。

「来るな！逃げろ！」

最後の理性を振り絞り叫ぶ…

「うあああああ！！」破壊の衝動に塗りつぶされおれの心は…消えた。「カナン君？」

「カナン？」

「…」

呼び掛けるが返事はこない…

「ねぇ返事をしてよ…カナン君。」

「…」

「何黙ってるのよ！返事をしなさいってば！」

「…俺は…スカリエッティを殺さなければならない…邪魔だ…どけ…」

まただ…この前と同じ…でも退くわけには行かない！

「嫌だよ…私はあなたを助ける！」

「抜け駆けしないでよね！私もよ！」

「うん！いくよ祐希ちゃん！」

「遅れないでね！」

「そっちがね！」

「モードセカンド！」

「ブレード展開！」

突撃！

「…邪魔をするなら排除する。」

カナン君も構えた。

「「はぁぁぁ」」

「…」

私達のカナン君を助けるための戦いが始まった…

一方スバル達はようやく降下ポイントに到着した。

「さて、私達は私達で頑張ろっか！」

「「はい！」」

素直に返事する二人。

「あんたは頑張りすぎで空回りしないようにね。」　ティアは注意してくる。

「戦闘中にノーヴェとケンカしないでよ？」

ギン姉にも注意された。

「はい…」

なんで私ってこんな立場になってるんだろう…

「スバルさっさと行くわよ！」

「う、うん。」

再びハッチが開く。

「スターズ３スバル・ナカジマ！」

「スターズ４ティアナ・ランスター！」　「ライトニング３ギンガ・ナカジマ！」

「ライトニング４エリオ・モンディアル！」

「ライトニング５キャロ・ル・ルシエ！」

「「「行きます！」」」

「「「セットアップ！！」」」

変身…そして安全に着地！

正面には大量ガジェット、

「行くよー！」

私は先陣をきって突入。

「リボルバーシュート！」　ガジェットを貫通し二、三機を撃墜する。

「スバル！下がって！」　バックステップ。

「クロスファイアーシュート！」

オレンジ色のスフィアが飛んでいき、さらに撃墜。

「サンダーレイジ！」

エリオの雷撃が地面を走る。

「リボルバーナックル！」　大型の三型をギン姉が破壊する。

「ふぅ…とりあえず殲滅かな？」

息をつくと横からいきなり三型が出現！

「くっ！」

プロテクションを張ろうとするが、

「しゃがめ！スバル！」　とっさに身を低くする。

頭の上を蹴りが掠めていった。

正面をみると三型が破壊され、元ナンバーズのノーヴェがたって

いた。

「あぶねぇだろ！敵の気配で気付けよ！」

「危ないのはノーヴェでしょ！もう少し遅かったら蹴られてたよ！」

「知るか！」

「はいはい、ケンカしないの。」

ギン姉がなだめる。

「ノーヴェ、チンクは？」

「ここにいます。」

ゆっくりと歩いてチンクが登場。「ノーヴェ、チンク。力を貸してくれてありがとね。」

ギン姉がお礼をいった。

「ごめん。ギン姉ほかの妹や姉さん達は、仕事が忙しくって、ダメだったよ…」

「あなた達が来てくれただけでも嬉しいわ。」

そう言ってノーヴェを撫でるギン姉。

「ところでギンガ姉さん。ここに敵の魔導師の反応が近づいているのですが。」

冷静にチンクが話す。

「そういうことはもっとはやくに言ってねチンク。」

「すいません。」

全員構える。

しばらくすると、敵と思わしき人間が出てきた。

「戦闘機人…ですね。」

チンクが話した。

「お前ら！ドクターに従ってもいいことなんかねぇぞ！」

口調は荒いがノーヴェが説得をする。

「そうだよ。スカリエッティに協力するのなんてやめよう？」

私も説得する。が、

「…確認…敵と判断…排除開始…」

感情のこもらない声でこう言った。「ダメだ…こいつら私達と違って感情をもってやがらねぇ。説得は無駄だ。破壊するぞ。」

ノーヴェが話すのだから間違いないのだろう。

「ごめんね…」

私は謝り構える。

「敵に同情なんかするんじゃねぇぞ…」

「わかってるよ…」

「戦いたくなんてないのにね…」

「はい…」

悲しい戦いが幕を開けた。

第十話　助けたい想い（後書き）

戦闘になるのは次回からということになってしまいました。
次回の更新は今日の夜…もしくは明日の午前中には更新したいと思います。

第十一話　悲しき戦い（前書き）

ついに私達はカナン君にあうことが出来た。でもカナン君はエクスカリバーに意識を侵食されていっているみたいでまた戦うことになってしまった…　魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります…

第十一話　悲しき戦い

「ドクター、あんな混戦の場所に妹達を送りこんで大丈夫なんですかぁ～？」
「大丈夫じゃないだろうね。何せ六課のメンバーとエクスカリバーがあるのだからね。」
「じゃあどうして送りこんだんですかぁ～？」
「実はね、今回送りこんだ三人…Ｎｏ．１２、１１、１０、スレイ、クルス、イセリアはちょっと失敗してしまってねぇ…廃棄するのも面倒だったから行ってもらったまでさ。」
「どこが失敗何ですか？」
「それがねぇ、極僅かにだけど感情が存在しているんだ。これじゃあ任務に支障がでる可能性がある。だから失敗作なのさ。」
「じゃあ今回はエクスカリバーを回収するきはないんですかぁ？」
「そうなるね。
そうそう、そのエクスカリバーだけどね…どうやら古代ベルカの遺産みたいなんだよ。」
「本当ですかぁ？珍しいこともありますねぇ？」
「それでね…興味深いことがわかったんだよ。
古代ベルカの武器のことを調べると、エクスカリバーの他に、グングニル、バルムンクなんかが存在していたんだけどね…
それに酷似したものが地球という惑星で何度も目撃されてるんだ。
実に興味深いじゃないか！
この事が確実だとしたら地球という惑星は宝の山なんだよ。
僕はそこに行こうと思うんだが、エクスカリバーも気がかりでね。
悩んでいたんだけど、エクスカリバーの持ち主は僕を追ってるらしいからね。だからあの三人には伝言係になってもらったと言うわけさ。撃墜もしくは感情が覚醒した場合、僕が今から地球に向かうっていうことモニターに流すように細工をして自爆するようにね。

まぁ実際はまだ座標が特定できていないから、もう少し時間がかかりそうだけどね。」
「ドクター楽しそうですね。」
「あぁ最高の気分だよ！ははははは！」

「お前ら！こいつらには私達と違って感情がねぇんだ。もう説得なんて考えんなよ！」
「でも…」
「でもはなしだ！破壊することだけを考えろ！」
「…わかったよ…」
「仕方ないのよね…」
「スバル、いくぞ！」
「うん…」
向かう相手は私達二人を合わせたような武器をもつ女の子…
「くらぇぇ！」
「っ！」
仕方ないことなんだと頭に言い聞かせ攻撃する。
「プロテクション…」
拳と蹴りが阻まれ止まった。
「飛べ…」
短い一言…私とノーヴェは回避も防御も出来ず、宙をまった。

ギンガ&ｐ；エリオ
「スバル！ノーヴェ！」
スバルとノーヴェを蹴りとばした相手は追撃をするため二人を追いかけて行った。
「よくもスバルを！」

私は一番近くにいたシールド型ＩＳエリアルレイヴに酷似したものを持つ相手になぐりかかった。
「リボルバーナックル！」　カートリッジを一発ロードし全力の一撃を放つ！
「攻撃…直線…回避不要」
シールドに防がれる。
「はぁぁぁ！」
残るカートリッジを消費しさらに勢いをあげる。
しかし相手は不動…
「ブースト！」
いつの間にか側面に周りこんでいたエリオが突っ込んでくる。
「援護要請…」
「了解…スパイラルスティンガー…」
無数のスティンガーらしきものがエリオに投げ込まれる。
「うわっ！」
ブーストで突っ込んでいるため回避が間に合わない…
「クロスファイアー…」
「スティンガー…」
「シュート」
「ＩＳランブルデトネイター…」
背後からオレンジ色のスフィアと本物のスティンガーが飛んでいき相手の迎撃エリオがフリーになる。
「行けー！」
私を防いでいる相手は迎撃不可能…勝負ありね…
「迎撃失敗…前方の相手を吹き飛ばす…」
「こっちはカートリッジを三発も使ってるのに！」
拳が押し返され始めた…
「う…あ…」
ついに弾かれる。
「ふ…」

そのままシールドで殴り飛ばされた。飛んだ先にはエリオの刃

「くっ！」

私に刺さる瞬間エリオは何とか方向を変え地面にストラーダを突き刺した。

「きゃあああ！」

「うわぁぁぁ！」

私はエリオを巻き込みながら飛んだ…

ティアナ&チンク&キャロ

「ギンガさんとエリオまで…」

「エリオ君…」

「心配は後だ来るぞ…」

二人を突き飛ばした相手も追撃していったので、残るは一人…

「三対一だ。いくら相手が強化されていようが勝てる。」

「…そうね。」

「…」

三対一だが二人には最早士気がない…下手をすれば足手まといになる…

「お前ら、いつまで相手のことを考えているつもりだ…」

「…」

「…」

「この相手に説得は不可能だとさっきわかっただろ…」

「でも…」

「破壊するぞ…」

「…キャロ、チンクの言う通りよ…やりましょう…」

「はい…」

「それでいい…いくぞ！」　「うん…」

「わかりました…」

「スティンガー」
「ファントム…ブレイズ」
「二人に力を…」
キャロのブースト魔法がかかり威力があがる。
スパイラルスティンガー十本が投げ込まれるが。
「攻撃力大…最大威力で迎撃する…」
数は勝っている…攻撃は通るはず…
「ランブルデトネイター！」
ブースト魔法で威力がました爆発しかし、
「ランブルデトネイターオーバー…」
私の爆発を遥かに越える大爆発…
「ばかな…ブースト魔法を使って威力をあげた爆発をさらに越えるだと…」
しかもそれだけではなかった…煙の中からさらに投げ込まれてくる。
次を投げるまでの間が短い！！
三人とも何とか回避。しかし地面に刺さる。
「吹き飛ばせ…」
再び大爆発！
「うっ！」
「きゃぁ！」
「あああ！」
三人ともあっさり吹き飛ばされた。

ヴィヴィオ&祐希奈

「はぁぁぁ！」
「せやぁぁ！」
私は上段から斬りかかり、祐希ちゃん正面から突く
「…」
突きは避けられ私の刃は受け止められた。
「嘘…」
同時に攻撃したのにあっさりさばかれた！

「くあっ」
弾き飛ばされる…
「ヴィヴィオ！カナンあんた目ェ覚ましなさいよね！」
「目ならとっくに覚めている…むしろ昔の方が眠っていた…復讐を忘れていたのだから…」
「じゃあ…」
十字に斬るがかわされる。
「ずっと寝てろ！」
渾身の突き！
「…」
プロテクションを張られた。でも関係無い！
「撃ち抜けー！」
カートリッジをロードする。
剣の先端が爆発しカナンを吹き飛ばす。
「祐希ちゃん飛んで！」
背後からの声に反応し上空に離脱。
「ディバインバスター！」
直後ヴィヴィオの砲撃がカナンを追撃。かわせるはずもなく直撃。
「あんた…容赦ないわね。」
「そんなのしてたら負けちゃうよ…ほらやっぱり無傷だ。」
「…」

ヴィヴィオの言う通り煙の中にはカナンが平然と立っていた。
「はぁ…頑丈なやつ…」
「来るよ…」

ヴィヴィオは再びセカンドモードに戻し構えた。
「私が時間を稼ぐから、祐希ちゃんは、大威力の魔法を撃ち込んで。」
「わかった…」

「カナン君しばらく私と勝負だよ…真・ソニックフォーム！」
「…」
「行きます！」

「たぁぁぁ！」
四方八方からきりつける。カナン君は特に表情も変えずすべて受け止める。
「っ！」
それどころか、反撃まで加えてきた。このスピードについてこられたのは、フェイトママ以来だ。
「ほんとカナン君は油断できないね。」
反撃は全て受け流し流れた体に打ち込むが、こちらも全て防がれている。
凄い反射神経だな。
そう考えていると祐希ちゃんの準備が完了したようだ。
「ヴィヴィオ。どいて！」「そのまま撃っていいよ。全部避けるから！」
「当たっても知らないからね！」
カートリッジ三発ロード。
「燃やしつくせ！スパイラルフレア！」
背後から超高温の矢が迫る。

「はぁぁぁ！」
私はギリギリまできりつけ動きを止める。
「Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ」
高速で動き後方へ離脱。
「さすがにヤバかったかな…」
心配している祐希ちゃん。
「カナン君なら大丈夫だよ…」
黒煙が晴れる。カナン君はまだ、立っている。
どうやら、当たる瞬間にエクスカリバーで防いだらしい。
「どんな反射神経してんのよあんたは！」
「まぁ私の攻撃も全部防がれたし、なんかするような気はしてたけど…」
再び構える私達。
「何故邪魔をする…俺はスカリエッティ一味に復讐をしたいだけだ。」
カナン君が話してきた。
「あなたの手をそんな奴のために汚したくない…」
「ねぇ…カナン。学校に戻ろう？スカリエッティは六課が捕まえてくれるよ。」
「捕まえるだけでは復讐は果たされない…俺は父さんと母さんは奴らに殺されたんだ！
父さんと母さんのために奴らを殺す…」
「祐希ちゃん…カナン君のお父さんとお母さん…亡くなってるの？」
「…ええ。避難の最中にガジェットに出くわしてね…」
「だから、復讐か…だったら尚更通すわけにはいかないよ！
天国にいるカナン君のお父さんとお母さんを悲しませるわけには

いかないもん！」
ヴィ…ヴィオ
「カナン…復讐が果たされたとしても、父さんと母さんは喜ばないよ。ほんとはわかってるんでしょ？」
祐希…奈
心が戻ってくる。
「カナン君、復讐なんてやめよ？」
「カナン。」
「いい…のか？俺は復讐なんてしなくても…」
「うん。」
（何を言っている…復讐するためにここまで来たのだろう…目の前の二人はスカリエッティの手先だ。邪魔ものは消さなければならない…
お前は弱い…私の力を分けてやる…）
左腕から憎しみが溢れてくる。消えかけていた。復讐の気持ちが再び増大。
（止めろ！やめてくれ！復讐なんてもうやらなくてもいい！）
（それは一時期の迷いだ。復讐をしなければ父と母は報われん…さぁ我が力を受け入れろ。）
「いやだぁぁぁ！！止めろーー！」

「カナン君！」
「カナン！」
再びカナン君が苦しんでいる。
「うぁぁぁぁぁ！！」
カナン君の両腕と両足に黒い鎧が装着されていく…
胴体に差し掛かるというところで悲鳴が止まった。
「…カナン君？」

「…」
呼び掛けてみるが返事はない。
「返事をしなさい！」
「…」
カナン君が顔をあげた。その顔は無表情。何も感じられない…いや、憎しみだけははっきりと認識できた。
「また振り出しか…」
「何度でもやるまでよ！」
デバイスを構えるカナン君を取り戻すために…

スバル視点
相手の圧倒的な力に私達はおされていた。正確には私が力を出し惜しみしていた。
「ちゃんと戦えスバル！」
ノーヴェが怒鳴る。
「やっぱりこんなのっておかしいよ！」
「何がだ！」
「言うことを聞かないから感情を消されてただの兵器としてしか使わないなんて、あの子達だって生きてるんだよ！」
「じゃあどうすんだよ！このまま黙ってやられるのかよ！」
「私があの子達を説得する。」
「無駄だってのはさっきわかったろ！」
「ちゃんと言えばわかってくれるよ！」
「勝手にしろ！ただし説得に失敗したら、予定通りあいつらは破壊する。」
「わかった。」

（ティア、ギン姉、戦闘をやめてこっちにきて。ちゃんと説得し

たいから。）
（スバル…でも）
（大丈夫。ギン姉私を信じて。）
（まったく、あんたは…いいわ。ノってあげる。）
（ありがとう。ティア）

しばらくするとティア達とギン姉達を追ってきた。新ナンバーズのメンバーが集合した。

「みんな、話を聞いてほしいの。」
変身を解き話しかけた。
「スバル！お前はバカか！」
「大丈夫。見てて」

「行動理解不能…」
ナンバーズが混乱している。
「あなた達は本当はこんなことやりたくないんだよね？」
「ドクターの命令は絶対…」
ナンバーズの一人が答える。
「命令に従えばそれでいいの？心が痛くないの？」
「私達は兵器それ以上の考えは不要。」
「あなた達は兵器じゃない。私達と同じでちゃんと息をして、生きてるんだよ。」
「何が…いいたい？」
ナンバーズの一人に迷いが出る。
「こんなの嫌なんでしょ？ならやめよう？自分の心をねじ曲げてまでやらなくてもいいんだよ。」
「私達に感情など…ない！」　私とノーヴェと戦っていたナンバーズが殴りかかってくる。

「スバル！」
ノーヴェがでようとするが手で制す。
拳が顔面に向かってくるが私は動かない…
目の前で拳が止まる。
「手が動かない…私に何をした！」
「何もしてないよ。あなたが自分で拳を止めてるの。」
「バカな…それに…なんだ目から水が…」
「それは涙だよ。心が痛くなった時に出るんだ。」
「私に心などあるわけがない！」
「じゃあ何で怒ってるの？何で泣いてるの？何で拳が動かないの？」
「うるさい！！」
「もう、いいんだよ。」
そう言って抱き締めた。
「う…うわぁぁぁ！！」
泣き叫ぶナンバーズの女の子。
「よしよし。大丈夫だからね。」
女の子が泣き叫ぶと後ろにいた二人も泣き出した。
「私達にも涙が…」
「これが悲しいということ。」
三人で泣いた。
「まったく、スバルにはかなわないわね。」
「頭がいかれてんだよ。あのハチマキ女は。」
「スバルさんスゴーイ。」
「ほんとに説得するとはな。」
口々に言うメンバー。

「さて、もう大丈夫だね。」
「うん。」
「お名前教えてくれる？」
「私はイセ…リ…ア…」
「どうしたの？」
「あ、あああ…あああ！」
突如女の子が光に溢れ、他の二人も同じように光る。
「ねぇ！しっかりして！」
上空にモニターが現れた。

隊長陣
「ついに出てきたか…」
上空に映る巨大なモニターに隊長陣は目が釘付けになる。
「映像なんか使って何を言うつもりだろう。」
「どうせろくなことじゃない…」
カナンほどではないが憎しみを抱いているフェイト
とにかく一同はスカリエッティの映像に意識を集中した。
ヴィヴィオ&p;祐希奈
「あれは…」
「誰あいつ…」
カナン君に変化が起きた。
「スカリエッティー!!!!」
激しい憎しみがカナン君から溢れだし、紅蓮の瞳が大きく開かれる。
「カナン君!?」
「あれが…カナンが復讐をしようとしている相手…」
「やぁ諸君。この映像を見ているということは、ナンバーズを倒

したか説得に成功したらしいね。おめでとう。
でも今回の三人は失敗作なんだ。だから実は捨てゴマなんだよ。
　話が変わるけど諸君に一つお知らせがあるんだ。
君たちなら、地球…という惑星をご存じだろうけど、そこにたくさんの古代ベルカのロストロギアがあるかも知れないんだ。
僕はこれからその地球に行って研究をしようと思う。
それじゃ言いたいことはそれだけさ。まぁ追うか追わないかは君たちの自由だけどね。ハハハハハ。」
　映像が途切れた。

スバル視点
「大変なことになったね。…」
「ええ…」
「失敗作なんて酷いよね。こんなに可愛いのに。大丈夫？」
そう言って目の前の女の子に手をのばすが相手は逃げた。
「どうしたの？」
「あなた達と出会えて良かった…少しの間でも心が持てたのだから…」
「ちょっと待ってよ…まさか…」
「ええ、私達の自爆プログラムが作動しました…離れてください。」
「そんなのってないよ…折角友達になったなのに…」
「すいません…そしてありがとうございました…」
お礼をすると女の子の体が光出す。
「いやだよ！お別れなんてしたくない！」
女の子がにっこり笑い…そして爆発した…
「う、あああ！！」
「しっかりしなさい…アンタがないてたらあの子達が可哀想でしょ…」
ティアも涙を流しながらこう言った。
「ひっく…うん…」

あの子達の分まで私は生きなくてはならない。この戦いは勝って終わらせる！

ヴィヴィオ＆amp;祐希奈視点

「地球…ママの生まれた星」

「まさかこんなことになるとはね…お早い帰宅になりそうね。」

「ふざけるなぁぁぁ！！」

カナン君が叫んだ。

「貴様だけは許さん！！すぐに追ってやる！！」

カナン君が転移魔法を使おうとしている。

「行かせない！」

「今度は逃がさないわよ。」

「エクセリオン！バスター！！」

カートリッジを六発ロードし放つ。

「グラビティアロー！！」こちらも六発ロードし同時に放った。

「邪魔を…するなぁぁーー！！エクスカリバー！！」

殺意を私達に向けたカナン君は最大の力で黒い波動を放つ。その大きさは今までのそれが遊びだったかのような大きさだった。

私達の攻撃は闇に飲み込まれ、消え去った…

さすがに今回は耐えきれない。死を覚悟した。

祐希ちゃんも同じのようだった。ただ茫然と迫る闇を見ているだけ、

「何、ボーとしてやがる！死にてぇのか！」

「簡単に希望を捨てるな。最後まで抗え。」

突然体が何かに引っ張られた。

私達を引っ張っているのはヴィータ副隊長とシグナム副隊長だっ

た。

黒い波動の先にはなのはママとフェイトママ…

「「リミットブレイク」」魔力があふれだす。

「イクシードモード！」

「真・ソニックフォーム！」

さらに魔力は巨大化。

「ブラスター３！」

なのはママの魔力はさらに上がる。

「全力全開！スターライト！」

「雷光一閃！プラズマザンバー！」

「「ブレイカー！！」」

二つの集束砲が黒い波動にぶつかり激しい光がおこる。

やがて光が消え世界に再び静寂が訪れた。

地面に倒れている私達

「私達、負けちゃったのかな？」

「勝ちではないけど負けてはいないんじゃない？一回は成功しかけたわけだし。」

「結局カナン君は言っちゃったけどね。」

「もっともっと強くならなくちゃ…」

「私達も協力するし、大丈夫だよ。」

なのはママが覗きこんできた。

「まずは火力を底上げしなきゃね。」

フェイトママも来た。

「根性も全然足りねぇな。最後まで諦めんじゃねぇ」

ヴィータ副隊長。

「私達も地球へ行くことになりそうだしな。みっちりしごいてや

る。」

シグナム副隊長。

「「頑張りま～す」」

そう返事した後二人は意識を手放した。

第十一話　悲しき戦い（後書き）

結局昨日は更新できませんでした。ひっじょ～にナンバーズが書きにくいです。今回は書いててちょっと悲しかったですね。スバル達をどう明るくしよーかなーとか悩んでます。次回から部隊は地球にうつる予定です。そして再びスカリエッティはしばらくお休みということに…のんきな敵になったものです。ついに皆さんのおかげで総アクセス数が一万を越えました。感謝感謝です。

キャラクター紹介（前書き）

地球編のネタが膨大になりすぎてちょっと困ってしまった作者、息抜きにキャラクター紹介に逃げた。なんてセコいやつなんだろう。

魔法少女リリカルヴィヴィオよりキャラクター紹介始まります。

キャラクター紹介

キャラクター詳細

どうもヨシュアです。今回は2人のオリキャラ。＋ヴィヴィオの紹介を行いたいと思います。

ヴ　「大して人気もでてないのにね。」

ヨ

「それは気にしたら負け。
それではメインのヴィヴィオさんの詳細をどうぞ！」

名前、高町ヴィヴィオ。
年齢１２歳、身長１５３ｃｍ、３サイズ、７５／５１／７７
好きな物、なのはママ、フェイトママ、模擬戦
嫌いな物、目覚まし時計、ユーノさん、悪魔のママ
趣味、新しい魔法の習得、ママに教えてもらう料理

魔導師ランク空戦Ｂランク（最大出力はＳランク相当）
稀少技能あり、聖王の鎧
デバイス、インテリジェントデバイス
「フェアリー」
デザインはレイジングハートを青くしたもの。
シューティングモード、両刃剣型に変形するセカンドモードが現在使用可能。

ヴ
「わぁー！３サイズまで書かないでよ！」

祐
「やっぱり私より大きい…」
ス
「まぁ、ヴィヴィオの未来の姿はアニメのなのはをみてるかたならわかるよね。」
テ
「あれにならなきゃいけないんだから、まだまだ成長するわね。」
祐
「神様って意地悪…ていうか嫌いな物にユーノさんって…お父さんでしょ？」
ヴ
「それについてはまた後日…」
カ
「プロフィールの大半に母さんが入っているのも問題だろ…親離れできるか心配だな…」
ヴ
「できるもん！してるもん！第一なんでカナン君がいるの！？」
カ
「これは本編とは関係ないからだ。で、さっきの親離れの話だが…」
カ＆ａｍｐ；祐
「「どこが？」」
ヴ
「うぅ…カナン君と祐希ちゃんがいぢめるよ～」
フェ

「ヴィヴィオをいじめたら殺すよ？」

カ＆ａｍｐ；祐

「「すいませんっした！！」」

な

「さて次は祐希奈の紹介行ってみよ～」

一之瀬祐希奈

年齢１３歳　身長１５５ｃｍ　３サイズ７０／５２／７５

好きな物、寝顔のヴィヴィオ、スポーツ

嫌いな物、ウジウジしてるやつ、無駄に絡んでくるやつ

趣味、ヴィヴィオいじり、整理整頓

魔導師ランクなし（恐らくヴィヴィオと同等。）

稀少技能あり、リフレクションフェザー、（名前の通り相手の攻撃を跳ね返すもの、羽で自身を包みこむため、攻撃の最中や接近戦の時は使えない）　デバイス、インテリジェントデバイス、

「アシェル」

デザインは銀色のペンダントで左右に羽がついている。

ヴ

「寝顔の私が好きな物って、どういう意味？」

祐

「きっと書き間違いよ！」

はや＆ａｍｐ；スバ

「祐希奈を三人目に任命する。」

祐

「せんでいい！！」

テ
「スポーツが好きなんてスバルみたいね。」

ス
「スポーツは楽しいよ！ティアは嫌いなの？」

テ
「嫌いじゃないけど、好きか？って聞かれると微妙なところね。」

ヴ
「ルールが複雑なものは、苦手ですね。」

祐
「そんなに難しいスポーツはやらないわよ。私はサッカーとか野球ぐらいしかやらないわね。」

カ
「ほんとにお前女の子か？　整理整頓以外は男みたいだぞ？　胸もヴィヴィオより…」

祐
「ぶっ飛ばすわよ♪」

カ
「すいません…祐希奈様はとても可愛い女の子です…」

祐
「よろしい。」

ヴ

「私いじりが趣味って…私は祐希ちゃんの遊び道具？」

祐
「うん♪」

ヴ
「…そう。フェイトママ～祐希ちゃんが～」

祐
「すいません。違います！大切な友達です！勘弁してください！」

ヴ
「仕方ないから許してあげるよ。」

な
「カナン君の行ってみようか～」

風間カナン
年齢１３歳　身長１５９ｃｍ
好きな物、青空、スポーツ
嫌いな物、キレた祐希奈、ドッジボール、スカリエッティ
趣味、空を眺めること
魔導師ランクなし（なのは、フェイトの合体集束魔法と同等の威力のことから最大魔力はＳＳ以上）
稀少技能あり、未完成のため名前は不明
デバイス、ロストロギア
「エクスカリバー」
デザイン、ほとんど黒色。待機形態は現在不明

祐

「これってほとんどは復讐に向かう前のデータよね…今のあんたの趣味とかはどうしたの？」

カ
「お前バカだろ。今の俺のデータ書いたら、復讐か憎しみとか力とかしかないだろうが。」

ヴ
「あ～確かに。じゃあ仕方ないね。これで行こう。」

ヴ
「えと、好きな物が青空ってなんで？」

カ
「なんでって聞かれてもなぁ…昔に父さんと母さんに遊びに連れて行ってもらった時の青空がとても綺麗だったからかな。」

祐
「うわっ！そんな寒いセリフ普通に言わないでよ！」

カ
「やかましい！好きになった理由はこれなんだから！仕方ないだろ！」

ヴ
「まぁまぁ、カナン君落ち着いて。」

カ
「ふ～ふ～…もう大丈夫だ…」

ス

「私からも質問。スポーツが好きなのになんで、ドッジボールは嫌いなの？」

カ

「ふっ…それは祐希奈に聞いてくれ…」

テ

「カナン？お～い。」

ヴ

「遠くを見てるね…」

祐

「あ～、それでそいつがドッジボールが嫌いな理由だけど、またいつか本編で話すわ。」

ス&テ&ヴ

「え～！なんで～？」

祐

「ネタがなくなるからよ。」

ス&テ&ヴ

「リアルな話だ…」

祐

「じゃあ次！キレた時の私が嫌いってどういうこと？　よく考えて返答しなさい？　答え次第では冥界に送るわよ♪」

カ

「…祐希奈様は普段はお綺麗な方なのに、キレたらその顔が台無し

になるではありませんか。だから嫌いなのです。」

祐
「よろしい。許そう。」

ヴ（ねぇカナン君実際は？）

カ（祐希奈がキレるととてもじゃないが手に負えん、男の先生三人がかりでも抑え込めなかったほどだ。）

ス&テ&ヴ（こえ～！！）

祐
「そこの四人何をさっきから黙ってるの？次に行くわよ。」

ス&テ&ヴ&カ
「「「「はい！！！！」」」」

祐
「？変なの。」

テ
「趣味が空を眺めることって見てて楽しいの？」

カ
「ああ、楽しいぞ。雲の形を何かに連想したり、太陽が沈むにつれ空の色がゆっくりと変わっていくところなんかは幻想的で最高だな。」

ス
「なんか友達いないみたいな雰囲気でてそうだよ…」

祐
「実際最初は暗くて転校初日の質問会のあとは、誰も近づかなかったしね。ていうかあんたそれ趣味だったんだ…悲しい人間ね。」

カ
「うるせぇ！男みたいな女よりかマシだ！」

ス＆ａｍｐ；祐
「ん？なんて♪もう一度大きな声で言ってみようか♪」

カ
「男みたいな女よりマシ！…なわけないですよねぇ～？」

ス＆ａｍｐ；祐
「遺書の準備は終わったかな♪」

カ
「…申し訳ございませんでした！」

ス＆ａｍｐ；祐
「次に言ったら…わかってるよね？」

カ
「肝に命じておきます！」

ヴ＆ａｍｐ；テ
「哀れなり…カナン（君）」

ヴ
「さて次の質問。最大魔力がＳＳ以上って高すぎない？」

カ
「俺は一人に対してお前らは二人がかりだろ。さらにお前らはまだまだ成長する。これくらいは差をつけんと話にならん。」

祐
「さっさと観念すればいい話じゃない。」

カ
「祐希奈さん?そんなに弱かったら、俺の存在いらなくないっすか?」

祐
「下僕として私達に服従を誓いなさい。」

ヴ
「さすがにそれはやめようね。」

な
「以上三人のプロフィールでした〜。次は聞かれてもないのに勝手に言うよ〜。」

ヴ
「なのはママの出番ってここだけ?それ以前にエリオとキャロとギンガさんは?」

な
「絡ませにくいためと言う都合で出てくるかはわかりませ〜ん。」

ヴ
「…」

現在フォワードメンバーで強い順番は誰か？

なのは＝フェイト＜若干シグナム（魔力値のみ）＜ヴィータ（魔力値のみ）＜キャロ＜スバル＝ティアナ＝ヴィヴィオ（ティアナには勝てる確率が高い。エリオにはほぼ勝てる。）＝祐希奈（ティアナにはほぼ勝てる）＝エリオ＜ギンガ

テ
「なんで私は祐希奈とヴィヴィオに勝てないの？」

ヴ
「私達の稀少技能がティアナさんは相性が悪いからです。私の場合は負担がかかるため出力が低いのでティアナさんが勝てる確率も結構ありますが、」

祐
「私のはリミッターがかかってないからね。撃ち抜くにはスターライトブレイカー並の威力で攻撃しないと通らない。」

テ
「そんな大威力の魔法連続でなんて無理よ…魔力刃なら通るのよね。」

ヴ
「確かに祐希ちゃんの能力の性質上接近戦では使えませんが、祐希ちゃんはブレードを使うため、かなりクロスレンジの訓練も積んでます。対してティアナさんはセンターガードなので最低限のものしか受けていません。はっきり言って遠距離の方がマシです。」

テ
「なんか後輩に勝てないのは悔しいわ。」

祐
「これは能力があっての話だし、もし私になかったら私の実力は相当下がるわよ。つまりティアナさんには勝てない。だいたい、データ上の話だし実際はやってみないとわかんないわ。」

テ
「ありがとうちょっと楽になったわ。」

エ
「なんで僕はヴィヴィオに負けるの？」

ヴ
「え～と、言いづらいな…こういう時はヴィータ副隊長お願いします。」

ヴィー
「理由は簡単。お前が真・ソニックフォームのヴィヴィオよりトロいからだ。
加えて陸戦型。飛ぶにしても、ストラーダのブーストを使わねぇと飛べねぇ。攻撃は直線になるが、ヴィヴィオは空戦型。自由に動ける。
最大破壊力もお前は負けてるし、勝ち目はほぼねぇって計算になる。」

エ
「僕って本当にスピードだけなんだ…」

ヴ

「私が陸戦だったらまだ分かんないよ。」

ヴィー
「スピードとパワーで負けてる以上、どのみち勝率薄いけどな。」

エ
「僕なんて…こんなもんだよね…」

ヴ
「エリオ、ちょっと私が変だから相性が悪いだけ。エリオは強いよ。」

エ
「ヴィヴィオ。ありがとう…」

キ
「なんで隊長陣以外みんな私に勝てないの?」

一同
「そりゃあ、ヴォルテール出されて防御に徹されたら、きついでしょうよ…」

キ
「あ、なるほど」

な
「まぁこんな感じです。ではまた次回。」

一同
「ではでは〜」

キャラクター紹介（後書き）

いや、ほんとに膨大になって困ってしまったので整理のためにちょっと息抜きをさしてもらいました。次こそは地球編を書きたいと思っていますので、ではまた次回。

第十二話　地獄！お勉強会（前書き）

ども、祐希奈だよ。さて今回はというと、カナンに引き分け?的な感じで逃げられた私達は朝の訓練にもさらに気合いを入れ頑張ってる所なんだ。舞台は厳しい訓練を終え部隊長の部屋に呼び出された所から始まるわ。魔法少女リリカル祐希奈始まりよ。…祐希ちゃん題名変えないでよ…

第十二話　地獄！お勉強会

「はやてさん話って何？」

「そろそろ嘱託魔導師になる試験を受けた方がええと思ってな。」

「嘱託魔導師？なんで？」

「祐希奈はまだ民間人からの協力者って扱いでなんとか今まで通してたんやけど、ここまで事が大きくなると、これ以上民間人を巻き込むことに反対の声が出てくるんや。
やけど、嘱託魔導師になればれっきとした魔法使いやしそんな声はなくなる。
どうやろか？」

「ふ～ん。はやてさんにはお世話になってるし、迷惑にはなりたくないから受けるわ。」

「ありがとう。助かるわ。」

「で、試験って何をすればいいの？」

「内容は魔法の発動原理とか法律などの筆記試験とプロテクションの強度や攻撃魔法の命中精度、一般隊士との模擬戦などの実技試験やね。」

「筆記試験…」
その言葉が重いわ…
実技試験は問題はないわね。毎日厳しい訓練を受けているしのに、
負けたらシグナムさんやなのはさんに申し訳ないしね。

私は筆記試験だけは昔からダメなのよね～…

「どうしたん？暗い顔してもて。」

「大丈夫。なんでもないわ。」

「そうか？ならいいけど、ちなみに試験は3日後な。祐希奈なら大丈夫やな？」

「…もちろんよ。任せなさい。」

「ほんなら話は終わりや。ご苦労様。」

「それじゃね。」

部屋の扉が閉まるのを確認。

（3日後って早すぎだっつーの！）そう心の中で叫び自分の部屋へ全力疾走をした。

「ヴィヴィオー！」

「祐希ちゃん！？どうしたの！？」

「助けて！筆記試験が！出来ない！3日後なの！」

自分でも滅茶苦茶だとわかる説明

「わぁ～それは大変だねぇ。私が勉強教えてあげるから一緒に頑張ろ。」

「…今の説明で理解できたの？」

「嘱託魔導師の試験が近くて実技試験は出来るけど、筆記試験は苦

手だから私に助けて欲しいんじゃないの？」

「そうだけど…嘱託魔導師試験のことまでなんでわかるのよ…」

「ん～乙女の直感？」

「首を傾げながら、私に聞かないでよ…」

「じゃあ、インスピ？」

「略すな！！…だいたいね、それ同じ意味よ。」

「とりあえず、なんとなくでわかったんだよ。」

「アンタに思考を読まれたなんて人生最大の汚点だわ…」

「祐希ちゃん…絶対私をバカにしてるよね…」

「気のせいよ♪」

この子をからかうのって面白いのよね～

「勉強教える気がなくなってきたなぁ…」

それはまずい！

「ごめん！もう言わないから許して！ヴィヴィオ様ー！」

「…まぁいいよ。許してあげる。」

「ヴィヴィオー！ありがとう！」

「さて、じゃあ早速はじめよっか。」

「え？まさか今から？」

「うん。今日はデスクワークだけだし資料も調べてあるから大丈夫。みっちり勉強を教えてあげるね♪」

「お仕事の後でも私は構わないかな～みたいな…」

流石に今からは嫌ね…

「3日しかないんだから頑張らなきゃね♪」

ヴィヴィオはやる気満々…

「ちなみにどれくらいの時間のお予定で？」

「今が11時30分だから…お昼を食べて、12時からお勉強、私がお仕事に行く4時までは私が教えて、私がお仕事の間はティアナさんに今頼んだから、安心して。晩御飯を食べてからまたお勉強ね。もちろん寝る時間まで。」

頭がクラクラする…

「ちょっとハード過ぎません？」

「あはは～。時間がないからね～。」

あはは～って…笑い事じゃない…

「…私死ぬかも。」

「このくらいのお勉強ぐらいじゃ死なないよ。

さ、お昼食べに行こ？」

（ヴィヴィオに頼んだのが間違いの始まりだったか…）
私はブルーな気分で食堂に向かった。
お昼の味はあまり分からなかった…
再び部屋に戻る。

「さて、お昼も済んだし張り切って行こ～！」

「なんでそんなに元気なのよ…」

「友達と一緒にお勉強なんて初めてだから嬉しいの。」

「そんなんで私は嬉しくならなかったわね…」
逆に萎えるわ…

「理解出来ればお勉強は楽しいよ？」

「理解出来ないから楽しくならないわよ…」

「そんなことないよ。大丈夫だよ。ゆっくりやるし、ね？基礎からやるよ？」

「はぁ～」
こうして私の地獄の3日間がスタートした。勉強開始から…三時間後

「お疲れ様～。じゃ私はお仕事行ってくるね。」

「行ってらっしゃい…」
ヴィヴィオを見送った後で愚痴る。

「はぁ…こんなのどこが楽しいのよ…頭んなかぐちゃぐちゃ…」

ヴィヴィオはとても優しく丁寧に教えてくれた。
それでも理解出来ないのは、やはり私の頭は勉強用ではないのだろう…

「祐希奈～頑張ってる？ってうわっ！大丈夫！？生きてる？」
ティアナさん来るの早いなぁ…もうちょっと遅れてくれてもいいのに…

「もしも～し？祐希奈～？」
机に伏している私を揺さぶるティアナさん…仕方ない起きるか…

「生きてる…辛うじて…」

「良かった。ヴィヴィオそんなに厳しかったの？」

「違うわ、むしろ優しかったし、分かりやすい教え方だった。」

「じゃあなんでそんなにくたびれてるのよ？」

「教えてもらった直後は覚えてるんだけど、次に入るとわかんなくなって、頭んなかぐっちゃぐちゃになっちゃったの。」
勉強が出来ない人はだいたいこうなるわ…

「最初は仕方ないわね。何回もやって覚えていくしかないわ。」

「めんどー…地道な作業は嫌いなんだけどな。」

「勉強は地道な作業をするものだから頑張らないと。」

「はぁ～い…」

「私はプリントにまとめて来たから、わからなくなりそうになったら、遠慮なく聞いてね。」
あれ？ティアナさん優しい？

「多分、聞きまくるわよ？いいの？」

「スバルで慣れてるわよ。大丈夫。」

「へえ…じゃあ頑張ろうかな。」
少しやる気が起きた私は勉強を再開した。

さらに…二時間後
「うん。だいぶ出来るようになったわね。」
私ってプリントの方が良いみたいね。すぐ理解出来た…

「ティアナさん。ありがとう」

「どういたしまして。それにしても祐希奈がお礼なんて珍しいわね。」

「何回も同じこと聞いたのに嫌な顔せずに答えてくれたから。私ならキレてるわ…」

「なんだ、そんなこと。祐希奈は確かにちょっと勉強は苦手みたいだけど、スバルに教えるのに比べれば楽なもんだったわよ。」

「スバルさんって、どんな感じだったの？私よりひどいって…」

「スバルは同じとこを十回以上聞いてくるからね…さすがにあれは

キレたわ…」十回…私なら三回でアウトね…

「うわ～大変だったわね。」

「だからそれに比べれば祐希奈のは軽いもんよ。」

「へぇ～」

とティアナさんは言っているけど、キレつつもスバルさんにも全て答えていたらしいし、やはり面倒を見るのが好きなんだろうな。

ティアナさんと話していると扉が開いた。

「ただいま～。ティアナさんありがとうございます。」

仕事を終えたヴィヴィオだった。

「ん、これくらい安いもんよ。じゃ、明日からもよろしくね。」

「え？明日からも…？」

「そうなんでしょ？ヴィヴィオから聞いたんだけど？」

「あれ？言ってなかったっけ？

明日と明後日は私が忙しくて教えられないかもしれないからティアナさんに頼んだんだよ。」

「そんなの聞いてな～い！そんなに勉強したら倒れる！！」

「倒れないよ…どのみちお勉強はするんだし、知っても知らなくても変わらないよ。」

「実技試験の練習はどうすんのよ！」

「祐希ちゃんの実力なら実技試験は何もしなくても大丈夫だよ。」

「息抜きができないなんて…」

「息抜いてたら間に合わないよ。さ、休憩終わり！やるよ。」

「祐希奈頑張ってね…」

「ティアナさん…見捨てないで…」

「？見捨てられてないよ？明日からティアナさんが先生だよ？」

「そういう意味ちゃうわ！この天然魔法少女が！」

「？？口調が八神部隊長みたいだよ？」

「もういい…勉強しよ…」

「？？？なんで元気ないの？」

「ほっといて…さっさとやるわよ…」

「う、うん。」

さらに二時間後

「祐希ちゃん凄ーい！もう基礎は完璧だね。予定より早いけど、ここまで出来るんならもう今日は休みにしよっか？」

「ほんとに?助かった〜。」

「じゃあ一緒に晩御飯食べに行こ?」

「うん。慣れないことしたからお腹空いたわ」
食べれるだけ食べないと…明日が持たない…「うわっ祐希奈そんなに食べて大丈夫?いつもそんなに食べないじゃん。」
スバルさん達が心配そうに見ている。
まぁいつもは、皿一枚ほどで終わる私がスバルさん、エリオ、ギンガさん並に大量に食べているんだからね。

「ふぁいひょうふ。」

「祐希ちゃん飲み込んでから話そうよ。お行儀が悪いよ?」

「ふぅ…大丈夫。普段やらない勉強を大量にしたら、お腹が空いちゃって。」

「あぁ〜!そういえばティアが教えに行ってたよね。あれって祐希奈だったんだ。」
なにやら納得しているスバルさん。

「どうして、勉強なんかしてるの?」

「民間人だと、はやてさんに迷惑がかかるから嘱託魔導師になることにしたのよ。」

「なるほど、でもそんなに必死に勉強しなくても大丈夫でしょ?

祐希奈は単独で転移魔法まで使えるんだからだいたいの魔法の原理はわかるんだよね？」

「え？あれってそんなに難しい魔法なの？」

「祐希奈知らなかったの！？」

この発言にヴィヴィオ意外は驚いている。

「あのね祐希ちゃん。転移魔法って座標指定とかだけじゃなくて、距離を魔力で調節しなきゃいけないからとっても難しいんだよ？」

「へえ～でも、アンタは驚いてないじゃない…」

「驚いてるけど、祐希ちゃんなら気合いだけでやりそうだなって納得しただけだよ。」

「なんでそんなんで納得出来るのよ…」

心外ね…

「それはやっぱり…乙女の直感？」

「だから聞かないでよ…」

「じゃあイン」

「そのネタはもういい！」

「うぅ～！」

「なんでに涙目になるのよ！？」

「ホントに仲良くなったもんねぇ～」
「最初はお互い殺気放ってたのにね」
一同は感心して見ていた。
私達は食事を終え部屋に戻る。
「ふぅ～。いいお湯だったわ。」
「ごめんね～先に入らせてもらっちゃって。」
「別にいいわよ。勉強教えてもらったお礼。」
「ありがとう。祐希ちゃん♪」
「どういたしまして。」
「じゃ寝よっか？」
「そうね。」
電気が消える。
「…ヴィヴィオ？」
「何？」
「いきなりだけど…アンタってお父さんもいるんでしょ？」
「…うん。ユーノさんって人がいるよ。」

「どんな人？」

「ユーノさんはとっても優しい人だよ…」

「…なんでなのはさんはママなのに、ユーノさんはパパって呼ばないの？」

「…私、あの人をパパって言いたくないの。」

「なんで？好い人なんでしょ？」

「うん…とっても好い人。でもね、私が小さい時あの人は、私に何も言わずにママと結婚した。

結婚する前にユーノです。なのはママとお付き合いしてます。って一言だけ言ってくれれば、私はあの人を好きのままでいられた…

でも、あの人はそれまで付き合っていたことを隠していた。いきなりママと結婚しましたなんて言われても、私は納得出来なかった…

これはマザコンって言われても仕方ないと思う…けどどうしてもこれだけは納得出来ない…だから最低限しか口も聞かない。」

「…私はあなた達家族の深い事情は知らない…でも、何か言えない理由があったのかもしれない…一度だけでもいいから、話をしてみることを進めるわ。家族なのに…せっかく一緒にいられるのに…悲しいじゃない…」

私は…もう母さんはいない…家族三人がそろうことは永遠にない…

こんな悲しい思いをして欲しくないから…一緒にいられるのなら…

仲直りして欲しい…

「祐希ちゃん？大丈夫？」

なんでこういう時は鋭いかなぁ…

「じゃ、お休み。」
逃げよう…泣きそうだ…

「う、うん。お休み」
話かぁ…いつかあの人と話せる日がくるのだろうか…

第十二話　地獄！お勉強会（後書き）

またまた地球編に行けませんですいません！祐希奈のお話を入れたらちょっと話を続けすぎちゃいました！　次はちょっとは入る予定です。でも、また祐希奈で手間取るかも、地球で受けさせた方が良かったかもですね…

第十三話　地球へ（前書き）

昨日祐希ちゃんから突然質問されたことが頭に残り、気になって早く起きてしまった。隣にはまだ眠っている祐希ちゃんがいる。仕方ない起きてよう。　魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります。

第十三話　地球へ

「ん…朝か…」

「おはよう。祐希ちゃん」

「お、おはようヴィヴィオ…どうしたの？早いじゃない？」

ヴィヴィオが私より早いなんて…ヴィヴィオは訓練ギリギリじゃないと起きないのに。

「ちょっと早く目が覚めちゃってね。」

「ふ～ん…明日は吹雪かな…」

「祐希ちゃん…いくらなんでもひどすぎだよ…」

「だって私は今奇跡を目にしてるのよ？」

「祐希ちゃんの奇跡ってやすいね…」

「ヴィヴィオが私より早く起きるなんて天変地異に匹敵する驚きよ。」

「私の早起きって一体何…」

「まぁヴィヴィオいじりは置いといて、なんでそんなに早いの？」

「寝ぼけた頭じゃ祐希ちゃんに聞けないかもしれないからね。」

「何を？」

「昨日なんであんなこと聞いてきたの？」

「お父さんはいるの？ってやつ？」

「うん。いきなりだったから。」

「う～ん…私もよくわかんないんだけどね。多分カナンの両親の話をしたからかな。突然、アンタの家族も知りたくなったのよ。」

「ふ～ん…じゃ、私も祐希ちゃんの両親の話聞いていい？」

「朝からしたい話じゃないし。また…ね。」

「わかった。いつか話してね。」

「気が向いたら話すわ…」

「うん。じゃ朝練行こっか。」

「またシグナムさんとの訓練かぁ～」

「大変？」

「まぁね、でも他に剣と弓両方使える人いないし。確実に力はついてるから感謝はしてるけど。」

「もっと強くならなくちゃいけないし、頑張らなきゃね。」

「ま、やれるだけやるわよ。」

「あはは。ファイトだよ。」

訓練所にて…

「反応が遅れているぞ！」

「はぁはぁ…わかってる…」

今日の私の訓練は近接戦闘。
シグナムさんの激しい剣撃を防いではいるけど、攻撃にいけない。
ダメだ！これじゃカナンを助けられない！
逃げてちゃダメだ…攻撃しなきゃ！

「はぁぁ！」

「祐希奈！甘いぞ！」

ギン！！

「うわ！」

「は！」

回し蹴り！？防げない！

「ぐっ」

プロテクションも張れずに蹴りとばされた。

「くそ！くそ！こんなんじゃダメなのに！」

「祐希奈相手を恐れず向かって来られるのは良いことだ…だが、焦るな。焦ればチャンスを逃す。攻撃をするタイミングを間違えるな。
実戦では一つの間違いで最悪死に至る可能性もある…つらくとも耐えろ。耐えてさえいれば必ずチャンスは来る。」

「はい…ありがとうございました。」

「敬語などお前らしくないぞ。やめておけ。お前はお前のままでいい。」

「…うん！」

「それでいい。今日の訓練は終わりだ。試験頑張れよ。」

「シグナムさん！本当にありがとう。」

「祐希ちゃんもだいぶ訓練に慣れてきたんじゃない？」

「そういえば、最近疲れの回復が早いわね。知らないうちに慣れてたみたい。」

「最初はどうなるかと思ったよ。倒れてたもん。」

「あの時の祐希奈は見てて痛々しくて心配だったからもう見なくていいと思うと私も嬉しいよ。」

「スバルさん心配してくれてたの？」

「元気な祐希奈があそこまでくたくたになってれば心配もするよ。」

「ごめんね。」

「謝らなくてもいいって訓練きついんだから仕方ないよ。それより嘱託魔導師になる試験うけるんでしょ？今日私オフシフトだしティアと一緒に勉強教えてあげるよ。」

「それは嬉しいけど…いいの？」

「もちろん。任しといてよ。」

「良かったね。祐希ちゃん。」

「うん。」

「はぁ～…プリントもう一枚つくるか…」

「？」

何故ティアナさんがもう一枚作るのかは後で知ることとなった。

「じゃ、お仕事に行ってくるね。祐希ちゃん頑張ってね」

「うん。なんの仕事なの？」

「それがなのはママと一緒の仕事なんだけど、教えてくれないの。」

「きっと驚くわよ。」

「いいな～ヴィヴィオ。」

「スバルさんとティアナさんは私がなんのお仕事か知ってるんですか？」

「まぁね。」

「内容は秘密だよ。」

「ちょっとだけ教えてくださいよ～。」

「じゃ、ちょっとだけね祐希奈が関係してるよ。」

「私が？何で？」

「ふふふ～」

「これ以上は言えないわ。さ、行った行った。」

「う〜ん…分かりました。行ってきます。」

「「行ってらっしゃーい。」」

「さて、勉強を始めましょうか。これが今日のプリントね。」

「あれ？一枚多いよ？」

「ほんとだ。同じのが二枚ある。」

「多くないわよ。スバルの分よ。」

「え！？何で！？私には必要ないよ。出来るもん。」

「じゃ、やって見なさいよ。」

「こんなの簡単だよ。」

「……」

「スバルさん？」

「何これ〜！？絶対できないよ〜！問題間違ってるよ！」

「そんなわけないでしょ。祐希奈ここなら出来るわよね？」

「ん〜と…うん。昨日やったし。こうでしょ？」

私が答えを書くとスバルさんは信じられないものをような顔をしている。

「ほらね？祐希奈で出来るのにアンタが出来ないわけないわよ。」

「祐希奈…実は天才なんでしょ？」

「…私が勉強好きそうに見えたなら病院に行った方がいいわ。」

「ごめん。見えない…」

「…でしょ？」

「つまりスバルがバカ過ぎるだけよ。だいたい前に散々教えた場所よ？」

「復習もいいことだよね！」

「さ、やるわよ。」

しばらくして…

「ティア～ここどうやってやるの～？」

「さっき教えたばっかじゃない！！」

「スバルさん…こうよ。」

「わぁ～祐希奈凄いね～。」

「全然凄くないって、私三回も聞いたし、スバルさんのも合わせて八回も聞いたら嫌でも覚えるわよ…」

「え～？ねえティア、私そんなに聞いてないよね～？」

「…祐希奈は気を使ってくれただけで、実際はアンタだけで十一回ほぼ同じことをきいてるわよ…」

「嘘！？」

「ごめん。スバルさん本当のことよ…」

「…次の問題に行こーよ。」

さらに時間がたちお昼の時間…

「あの…ティア？ここわかんないんだけど…？」

「…」

「ティア～？」

「…祐希奈ちょっと休憩にするわ。部屋の外に出てくれる？」

「ひっ！！」

絶対零度の微笑み再来…

「はい！！ごゆっくりどうぞ！！」

「祐希奈…待って…行かないで…一生のお願い…！」

「ごめん。スバルさん私やっぱりまだ生きていたい…」

背中を向けダッシュ！！

「祐希奈！…祐希奈ぁぁ！！」

「さて、スバル？お勉強会の続きと行きましょうか？」

「えと…私もちょっと休憩したいな～なんて…ダメ？」

「ダ・メ♪」

「ごめん！！お願いだから！怒らないで！」

「じゃあ…アンタが何回も同じとこ間違えなけりゃいいだろうがぁぁぁ！！！」

「ぎゃぁぁぁぁぁ！！！！」

「スバルさん…ごめんね。生きてたら今度何か奢るからね…。」

そんな騒動が起きているときヴィヴィオはというと…

「ほんとに…ほんとに地球に行けるの！？しかも、なのはママや

祐希ちゃんの住んでた鳴海市に!?」

「うん。ほんとに行けるんだよ。さらに、まだお楽しみがあるんだよ?」

「何!?」

「それは地球についてからのお楽しみ~。」

「え~!?ちょっとくらいダメ?」

「ダ・メ♪」

同じダメでも感情だけでこんなにも違う。スバルは泣いていたが、ヴィヴィオは楽しみで仕方ないという感じである…

「あぁ~早く行きたいよ~。」

「転送ポートに着くまでの我慢だよ。」

「ママ、スピード上げない?」

「急がなくても地球は逃げないよ。それに一応お仕事で行くんだからね?わかってる?」

「はぁ~い…」

「到着~。」

「ママ！早く早く！」

「もう。ヴィヴィオさっき言ったところでしょ？」

「わかってるけど、もう無理だよ！抑えきれない！」

「まったく。」

ヴィヴィオがあんなにはしゃいでる…
よっぽど嬉しいのかな。私も初めてミッドに来たときはあんなだったのか。

「マーマー！」

「はいはい。わかったよ。」

「わぁ～～ここが地球かぁ～！」

「ヴィヴィオ、行くよ。」

「どこに？」

「お楽しみの場所にだよ。」

「…うん！！」

しばらく歩く…

「ほら目的の場所が見えて来たよ？」

「え？…もしかして目的の場所ってあそこ？…」

「そう。鳴海中学校だよ。」

「まさか通えるの？」

「うん。もちろん祐希奈も一緒だよ。」

「祐希ちゃんも？一緒に学校行けるの？」

「うん。今日は編入手続きをしに来たんだよ。祐希奈の試験が終わった次の日から通えるよ。
フォワードメンバーとはやてちゃんも一緒に鳴海市に来る予定。」

「やったぁぁ！！ママ大好き！！」

「こ、こらヴィヴィオ人が見てるでしょ！？抱きつかないで？」

「無理だよ！地球に来るだけでも嬉しかったのに、祐希ちゃんと学校に通えて、フォワードメンバーの皆もこの鳴海市に来てくれるなんて嬉しくてどうにかなりそうだよ！」

「わかったから！ヴィヴィオ静かにしよう？」

「せめて抱きついたままでいい？」

「わかった…でも学校までね？」

「うん！」

「ここが学校かぁ～。祐希ちゃんここに通ってたんだぁ…」

「ヴィヴィオ校長に挨拶に行かないと行けないからついてきてね？」

「はぁーい！」

「失礼します。ここに編入させて頂くことになりました。高町というものですが。」

「あぁ、待っていました。入って下さい」

「はい。」

「保護者の高町なのはです。よろしくお願いします。」

「鳴海中学校の校長をしている。一之瀬雅樹です。高町さんはこの卒業生だそうですね。」

「はい。とてもお世話になりました。」

「そうですか。先々代の校長は優秀な生徒を指導したようですね。」

「恐縮です。」

「すいません。一之瀬校長ってもしかして祐希ちゃんのお父さんですか？」

「そうだけど、君、祐希奈を知っているのかい？どこに行ったのかわからないんだ。知らないかい？」

「一之瀬さん、それは私からお話します。」

「高町さん？」

「現在、一之瀬祐希奈さんは、私達が預かっています。」

「どういうことです？」

「これから言う話を信じて貰えますか？」

「分かりました。」

「他の方に言わないと約束して貰えますか？」

「はい。」

「では…」

「カナン君をご存知ですか？」

「よく祐希奈と遊んでいましたよ。彼もどこかへ行ってしまったらしいですが…」

「カナン君は、ある目的のために、魔法の力を手に入れることは違う世界に消えたのです。」

「魔法ですと？ふざけているのかと聞きたいところですが、あなたや娘さんのその表情から見ると本当なのでしょうね…」

「冗談みたいな話に聞こえますが全て事実です…」

「そのカナン君の目的はとても悲しいことなんです。祐希奈さんはそれを止めるために、自らも魔法の力を手に入れ、私達の住んでいる世界…ミッドチルダにやって来ました。そしてカナン君を助けるため私達に協力を仰ぎ、今に至ります。」

「…祐希奈は元気なのですか？」

「祐希ちゃんはとっても元気です！私と一緒にこの学校にまた通うんです！」

「本当か！？」

「はい！」

「そうか…教えてくれてありがとう…」

「一之瀬さん。今の話は私達の秘密の中でもとても重要なことです…くれぐれも他の方には言わないようにお願いします。」

「わかりました。絶対に言いません。恩を仇で返したくはないですから。」

「ありがとうございます。」

「あなた方を見た所、まったく必要ないかも知れませんが、これから編入試験を行いますので高町さんは少し外に出て貰えますか？」

「はい。」

「編入試験って…私地球の問題まだできません…」

「大丈夫。簡単な面接をするだけだからね。緊張しなくていいよ。」

「はい…」

「編入試験を行う。」

「…」

「高町ヴィヴィオさん。」

「はい。」

「あなたは今、幸せに暮らせていますか？」

一之瀬校長が笑っていた。

「…はい！とっても幸せです！！」

私は満面の笑みで返した。

「よろしい。合格！高町ヴィヴィオの編入を私、一之瀬雅樹が認める。」

「ありがとうございます。」

「これからも、祐希奈と仲良くしてやってくれ。」

「はい！任せて下さい！失礼します。」

「ヴィヴィオどうだった？」

「合格だったよ。」

「そう。良かったね。」

「うん！」

「じゃ、合格祝いに翠屋に行こっか？」

「翠屋？何屋さんなの？」

「とっても美味しい軽食喫茶だよ。」

「わ～い！」

「いらっしゃいませ～…ってなのは！？帰って来てたのか？」

「久しぶりだね。」

「ひょっとして隣にいるのは、娘のヴィヴィオちゃんかい？」

「うん。ヴィヴィオ挨拶して。私の家族だよ。」

「ええ！？聞いてないよ！！」

「わざと教えなかったんだ。その反応が見たかったからね。」

「ママの意地悪。えと娘の高町ヴィヴィオです。よろしくお願いします。ママのお兄さん。」

「はっはっは。俺もまだまだ若いなぁ。お兄さんだってさ。いいだろ桃子。」

「？何かおかしいことを言いましたか？」

「何を言ってるのよ。ごめんね。ヴィヴィオちゃん。」

わ、また綺麗な人が出てきた。

「いえ、私が変なことを言ったみたいで、すいません。ママのお姉さん。」

「あらあら、お姉さんなんてありがとうヴィヴィオちゃん。」

「？また何か変でした？」

「あはは！…ヴィヴィオ。この二人はね私のお父さんとお母さんだよ。」

「……」

「あら固まっちゃったわね。」

「ヴィヴィオちゃんは面白い子だな。」

「なのはママのママ？」

「はーい♪」

「なのはママのパパ？」

「…ドッキリカメラは？」

「あははは！ヴィヴィオ何言ってるの？二人とも本当に私のお父さんとお母さんだよ～？」

「うっそぉぉぉぉ～～～～～！！！！！」

（だって、なのはママが２７歳でしょ！？いくら若く結婚しても、４０歳以上のはず！）

「ヴィヴィオちゃん？何をそんなに必死に考えてるの？」

「…やっぱり見えない。」

「どうしたの？」

「失礼ですけど、なのはママのママってことは私のお祖母ちゃんってことになるんですよね？」

「そうなるかしらね～」

「すいません。桃子さんって呼んでいいですか？」

「私はお祖母ちゃんでもいいわよ？」

「ごめんなさい。それだけはやめさせてほしいです。」

「なんで謝ってるか分かんないんだけど、好きに呼んでくれていいわよ。」

「ありがとうございます。」

「なのはママのパパさんの方呼び方も下の名前にしたいのですけど…」

「さすがに桃子ならともかくこの年で下の名前で呼ぶのはやめてくれると助かるな。」

「じゃあどうやって呼べばいいんでしょう？」

「普通にパパって呼んでみてくれ。」

「パパ？」

「くぅ～！なんか嬉しくなるよ。なのはに呼ばせたかったんだがすぐにお父さんに直してしまったからな。」

「お父さんそんなこと考えてたんだ…」

「ただ敬語はやめてね?ヴィヴィオちゃんは家族なんだから。」

「はい!」

「よろしい。それで?なのははなんで鳴海市にいるの?」

「ちょっと事件があってね。また、鳴海市に本部を置くことになったんだ。」

「まぁ、もしかしてフェイトちゃんと同じように、ヴィヴィオちゃんが学校に通うの?」

「うん。今日、編入試験に合格したからそのお祝いに翠屋によったの。」

「それは、良かったわね。そうとわかればケーキを持って来なきゃね。なんでも好きなものを頼みなさい。」

「ほんと!?わーい!」

「良かっね。ヴィヴィオ」

地球での時間はあっという間に過ぎていった。

「ヴィヴィオちゃんまたすぐに来てね?」

「うん!桃子さん、今度は私の友達も連れてくるね!」

「たくさんケーキを用意して待ってるわね。」

「今日はいなかったけど、今度は恭也と忍にも言っておくよ。」

「うん！よろしくねパパ！」

「パパ…いい響きだ…」

「じゃ、ヴィヴィオ行くよ。お父さん、お母さんありがとね。」

「じゃあね。なのは」

「おう。じゃあな。元気にしてろよ？」

「バイバイ。」

地球での1日は終了し、六課に戻り、報告書を書き終え自分の部屋にもどると、

「祐希ちゃん。ただいま～」

「おかえり…ヴィヴィオ…」

「祐希ちゃん！？どうしたの！？疲れた顔してるよ？」

「ちょっとね…スバルさんがね…」

「疲れてるみたいだし、お風呂入って来たら？」

「そうね…そうする。」

「祐希ちゃん。どうしたのかな？」

「あ、祐希ちゃん。もういいの？」

「ええ。ありがと。」

「うん。じゃ私入ってくるね。」

「ふぅ、スバルさん明日訓練来れるかな…」

「はぁ～気持ち良かった～。」

「そうだ。ヴィヴィオ。今日あんた何の仕事だったの？」

「えへへ～地球に行ってきたよ。」

「？何で。」

「実はね…私祐希ちゃんと学校に通えることになったよ！」

「え！？ほんとなの？」

「うん。一之瀬校長にも会ってきたよ。」

「そう…父さん怒ってた？」

「ううん。心配はしてたみたいだけど、理由話して、祐希ちゃんは元気だよって伝えたらとっても喜んでたよ。」

「魔法のこと話したの？」

「うん。信じてくれたよ。絶対言わないって約束もしてくれた。いいお父さんだね。」

「私の自慢の父さんだからね。」

「勉強会はどうだったの？」

「ごめん…聞かないで。スバルさんを思い出すから…」

「わ、わかったよ。」

「今日は疲れたわ。寝てもいい？」

「うん。お休み。」

「また明日ね。」

いろんな意味で大変な1日が終了した。

第十三話　地球へ（後書き）

ちょっとだけ地球編をいれて見ました。まぁかすったぐらいですが。地球編書くのが楽しそうです。書き方を少し変えてみましたがどうでしょう?前の方がいいですかね?

第十四話　嘱託魔導師試験開始！（前書き）

祐希奈よ。　今回のお話は私が大活躍するお話よ。祐希奈最強伝説の始まりね。　じゃ、魔法少女リリカルヴィヴィオ始まりよ。

第十四話　嘱託魔導師試験開始！

「やっぱり昨日のは奇跡だったわね。」

外をみると、大雨が降っていた。

「ヴィヴィオ。起きなさい！」

「ん…おはよう祐希ちゃん…」

「雨が降ってるんだけど、訓練どうするの？」

「ＺＺ…」

「こら！寝るな！」

「にゅ…えっとね…なのはママに念話で聞いて…」

「念話ってどうすればいいの？」

「……繋げたい相手のことをね…思い浮かべてね…頭の中で話せば繋がる…よ…」

「わかった。もういいわよ。」

「うん…お休み…」

「え～と、相手を思い浮かべるだったわね。」

（なのはさん？聞こえる？）

（ん…祐希奈？どうしたの？）

（雨の時は訓練はどうするの？）

（雨？わっほんとだね。凄い雨…。じゃあ、今日は自主練にするよ。
祐希奈みんなに伝えてくれる？）

（わかった。それじゃ。）

（ありがとね。じゃあね。）

「魔法使いって便利だな。
あ、ヴィヴィオ…はいいか。寝てるし…」

（え～とフォワードメンバーの皆聞こえる？）

（聞こえるわよ。）

（祐希奈さん？なんでしょう。）

（祐希奈どうしたの？）

（今日の朝練は自主練にするって。）

（りょーかい。）

（わかりました。）

（わざわざありがとね。）

（じゃ。）

（祐希奈ちょっと待って、）

（何？ティアナさん）

（明日が試験なのよね？）

（そうだけど？）

（今から、朝練ないなら今から教えに行くわ。）

（ティアナさんこんなに早からじゃなくてもよくない？）

（時間は長い方がいいからね。私昨日のうちに仕事終わらせたし、今日は1日やれるわ。ね？）

（わかった。待ってる。）

（プリント作ったらすぐいくから。）

「はぁ…今日は長くなりそうね…」

「お待たせ…ってまだヴィヴィオ寝てるの？もう8時よ？」

「この子、朝には極端に弱いみたいでね。ほっとけば昼まで寝そうよ。」

「まぁ、仕事までには起きるでしょ。私達は勉強しましょう。」

「は～い。」

「ん…おはよ～…あれ？ティアナさん何でいるんですか？」

「何でって勉強教えてるからよ。ちなみにもうすぐお昼よ。」

「ほんとによく寝れるわね。」

「お昼！？わぁ！祐希ちゃんなんで起こしてくれなかったの！？私午後から見回りなのに！」

「アンタが悪い…」

「そうね。今回はヴィヴィオが悪いわ。」

「なんでですか！？」

「寝顔が…ね」

「寝顔が可愛くて起こせなかったの。」

「…恥ずかしいです。」

「ヴィヴィオ、仕事なら早く着替えれば？」

「そうだ！急がなきゃ！」　着替えながらヴィヴィオが走って洗面所に向かった。

「ゆっくり着替えたほうがー」

「わぁー！！」

ガッシャーン！！

「いいわよ～って言おうと思ったんだけど…」

「ちょっと遅かったみたいね。」

「いたた…行ってきます！」
再び走って行くヴィヴィオ。

「こけないー」

「きゃあああああ！」

ズシャー！

「…また遅かったわ。」

「ま、大丈夫でしょ。ヴィヴィオは頑丈な子だし。」

「そうね。勉強再開しましょうか。」

「うん。」

それから夜になり、

「終わった～！」

「どれどれ？……うん。完璧ね。」

「私もやればできるもんね。」

「明日は大丈夫そうね。」

「ティアナさん。私なんかに付き合ってくれてありがとう。」

「どう致しまして。明日は絶対受かってよ？」

「うん。」

「ただいま～」

「お帰り。」

「遅刻しなかった？」

「高速移動魔法を使ってギリギリセーフだったよ。」

「アンタ魔法まで使ったの！？」

「うん。間に合いそうになかったからね。」

「ヴィヴィオ、今度からはちゃんと起きるのよ？」

「すいません。」

「じゃあね。ヴィヴィオ、祐希奈、お休み。」

「「お休みなさい。」」

「私も疲れたから寝るわ。」

「祐希ちゃんお風呂は？」

「明日の朝に入るわ。」

「わかったよ。明日は朝９時に八神部隊長の部屋にきてって。」

「りょ～かい。お休み。」

「お休み～。」

「ふぅ…朝のお風呂も結構良いもんね。」

「今日は試験頑張るぞ！」

私は気合いを入れてお風呂から上がった。

「ヴィヴィオ、行ってくるね。」

「うん。頑張って！」

「ありがと。じゃ、また夜にね。」

「お、来たな。祐希奈調子はどうや？」

「バッチリ！」

「そら良かったわ。ほないこか。」

「はやてさんが来てくれるの？」

「祐希奈の晴れ舞台やからね。予定を開けといたんよ。」

「ありがとう。嬉しいよ！」

「私が見たかっただけなんやから、お礼はいらんよ。入り口にフェイトちゃんが待ってるからいこか。」

「フェイトさんが？なんで？」

「見に行くついでに車で試験会場まで送ってくれるんやて。」

「フェイトさんも！？」

「なのはちゃんもやで？」

「なんで皆そんなに予定が合ってるの!?」

「そら、祐希奈を見たいから合わせたに決まっとるやろ。」

「ちょっと緊張してきたかも…」

「いつもどおりやればええよ。リラックス。リラックス。」

「はぁ…頑張るわ。」

「ファイトやて。」

「祐希奈今日は頑張ってね。」

「私達も近くで見てるからね。」

「恥をかかないように精一杯やるわよ。」

「うん。じゃ出すよ。」

「レッツゴー!」

「まったくもう…」

「祐希奈何か言った?」

「なんでもないわよ…」

「そう。なら良いけどね。」

「わぁ…結構大きかったのね…」

「そら、嘱託魔導師だけが試験受けてるんと違うからね。」

「そうなの？」

「うん。ここは、嘱託魔導師～オーバーSまで受ける所だからね。私達やヴィヴィオもここで受けたんだよ。」

「へぇ～…」

「じゃ、受付に行こうか？」

「ちょっと待って…スゥ～ハァ～…よし！行こ！」

嘱託魔導師になるための試験が始まろうとしていた。

受付を済ませた私は今、筆記試験会場にいた。

「まだかな。」

そう思って待っていると突然正面のモニターに緑色の髪をした綺麗な女の人がうつっていた。

「ごめんなさいね～ちょっとおくれちゃったかしら。」

「いえ、大丈夫です。」
試験なので口調を敬語に直しているけど、めちゃくちゃ違和感があるな。

「私はリンディ・ハラオウン。本当ならクロノ・ハラオウンって私の息子がやるはずだったんだけどね？急な仕事が入ったみたいで、私が試験官になりました～。よろしくね？」

「はぁ。よろしくお願いします。」
なんかテンション高い人だな…

「では、問題を配りますので、合図を言ったら始めてください。」

「始め。」

（ティアナさんとヴィヴィオに教えてもらった所だ。これならいける。）
スラスラと解答用紙の空欄をうめていき、すべてがうまった時、ちょうど試験が終わった。

「では、回収します。一之瀬さんは、実技試験会場の方へ向かってくださ～い。私は答え合わせをしてるからまたあとでね～。」

「…はい。」
なんか疲れる…

実技試験会場、

実技試験の試験官は普通の一般隊士官らしい。

「では、まずプロテクションの強度テストを開始します。準備を、」

「アシェル！セットアップ！」

バリアジャケットに変身。

「では、良いですか？」

「はい…」

「始め！」

「アシェル…プロテクションお願いね。」

「お任せを。」

「レベル１発射。」

魔力砲撃が機械から放たれる。

微動だにせず受け止める。

「どうですか？」

「もっと強くても大丈夫です。」

「分かりました。レベル５」

先程よりは強かったがまだまだ余裕。

「多分、最大でも大丈夫です。」

「では…レベル１０発射。」

ん～なのはさんの砲撃荷比べたら、余裕すぎるや。

「まだやれますよ？」

「え？出力最大ですよ？これ以上は無理です。」

「そうですか…」

なんか面白くないな…もっと強い方がやりごたえあったのに…

「祐希奈。私がやってあげるよ。」

「高町一等空尉！？しかし！」

「この子の能力をちゃんと測定してあげて？」

「…わかりました。高町一等空尉がそうおっしゃるなら…」

「じゃ、祐希奈いくよ？強度検査だから稀少技能は抜きね？」

「うん！」

やった！これで楽しくなる！

「アクセル・シューター！」

「アシェル！このくらい防げるわよね。」

「余裕ですね。」

「シュート！」

爆発…

「なのはさ～ん。全然足りないよ。」

「わかったよ。次ね。ディバイ～ンバスター！」

先程より大きな爆発が起きる。

「高町一等空尉さすがにこれは不味いのでは？」

「多分まだ大丈夫だよ。…ほらね？」

「…なんなんですかあの子は…あんなのを受けて無傷なんて…防御の強度はもう軽くBランクを越えてますよ…」

「もっと強くしてもいいよ～余裕あるし～」

「じゃ、一気にレベルあげるよ？」

「うん。大丈夫だから遠慮なくやって。」

う～んこれくらいはなきゃ面白くない！たのしーい！

「レイジングハート！」

「Ａｌｌ　Ｌｉｇｈｔ　Ｄｉｖｉｎ　Ｂａｓｔｅｒ　ＥＸ」

「ディバイ～ン」
カートリッジを二発ロード。

「高町一等空尉！それはさすがに待ってください！民間人なんですよ！？」

「祐希奈なら大丈夫だよ。…バスター！！」

大爆発…

「高町一等空尉…今の砲撃…ＡＡランクレベルですよ？そんなのを魔法使いに成り立ての子供に撃つなんて…見損ないました…」

「だから、祐希奈なら大丈夫だよ…」

「そんなわけないでしょう！医療班を呼びます。」

「試験官さん。何興奮してるの？」

「…嘘だ、あり得ない…」

「ね？大丈夫って言ったでしょ？」

「あ～あ、ちょっと防ぎきれなかったや。汚れちゃったよ。
ま、いいや次行こ～♪」

「祐希奈。これ以上はさすがに無理だよ。問題にされちゃう。」

「え～せっかく楽しんでたのに…」

「君…ホントに魔法使いに成り立てなのかい？」

「うん。まだ一月くらいだよ？あ、ヤバ、一月ほどです。」

「凄いな…とにかく強度試験は終了だ。次の試験にうつるよ。」

「はい。」

「この試験では、魔力の最大破壊力及びコントロールの試験を行う。準備はいいかい？」

「はい。」

「まずはコントロール。動くターゲットを狙って当ててくれ。」

「はい。あ、私コントロールには自信があるのでレベル５くらいからで大丈夫です。」

「そうか…わかったよ。レベル５スタート！」

「アシェル。ブルーゲイル出して。」

「了解です。」

「はっ！」

十連射された魔力の矢はターゲットのど真ん中にすべて命中。

「もうコツはわかりました。最大で大丈夫です。」

「え?…あ、ああわかった。レベル１０」

「なんだ、速くなるだけか…よっと。」

再び十連射…そしてまたすべてど真ん中…

「終わり…ですか?」

「ああ…君、本当に凄いね…」

「そうですか?普通な気がしますけど…」

「普通じゃないさ…次の試験は最大威力の測定だ。得意なレンジは?」

「一応ロングレンジです。」

「わかった。ターゲットロングレンジに設定。強度最大。よし。もういいよ。」

「破壊してもいいんですか?」

「いいけど、多分君でも無理だよ。ＡＡＡはないと破壊出来ないものだからね。」

「じゃ、思い切り撃ちますよ?知らないですからね?」

「だから無理だよ…」

「アシェル…カートリッジフルリロード。レイザーフォーテルで撃ち抜く。」

「了解。レイザーフォーテル転送。」

カートリッジ六発を全て使い全力の一撃を放つ。

「これは…一体…」

目の前にいた少女には白銀に輝く六枚の羽がはえていた…

「一撃！必中！ジャッジメント！アロー！」

流星のような一撃は、一直線にターゲットへ向かい、あっさり貫通し、なおも矢の勢いは止まらない。

「ヤバ！！アシェル！止めて！」

「了解！」

無理やり魔力の放出を抑えつける。試験会場の壁に少し当たってしまったがなんとか貫通せずにすんだ…

「すいません。全力でやりすぎました。」

「まさか本当に破壊するなんて…高町一等空尉以来の天才か？」

「私が天才なら、同い年のヴィヴィオも天才ですよ。私が負けましたから。」

「君の上を行く子がいるのかい！？」

「高町ヴィヴィオ…なのはさんの娘です。」

「そうか…高町一等空尉の…なら納得かな…
私はここまでだよ。次は模擬戦だ。頑張ってくれ。」

「一之瀬さーん。」
モニターが再び出てきて、リンディさん？がうつった。

「あなた凄いわね。筆記試験は余裕で合格だったわよ。」

「え？それって言ってもいいんですか？」

「あ…いっけない！言っちゃいけなかったわ。」

どうして私の周りには天然の人が集まるのだろう…

「まぁいいわ。」

いいのか…

「模擬戦の相手はね。本当なら一般隊士が相手なんだけど、一之瀬さんはちょっと凄いらしいから…
はやてちゃんの協力でヴィータちゃんに来てもらいました～♪」

「ヴィータさん！？一般隊士とレベルが全然違いますよ！？」

「大丈夫。一之瀬さんならなんとかなるわ。じゃあ、頑張って！」

「ちょっと！…切れた。待ってよ。ヴィータさんなんて冗談きついって…」

「待たせたな。」

「ひっ」

「何おびえてんだ？まぁいいや。私がお前の模擬戦の相手になった。よろしくな。」

「よろしくお願いします。ところでヴィータさん。」

「何だよ。」

「負けたらどうなるんでしょうか？」

「落ちるんじゃねえのか？」

「…負けてもらえません？」

「無理だな。負けるのは好きじゃねぇからな。」

「ですよねぇ…わかりました！行きますよ！」

「あとなこれは試験だけどいつもの口調で話してくれよ。調子狂うし。」

「わかった。私はヴィータさんを倒します！」

「それでこそ祐希奈だ。行くぜ！」

負けられない模擬戦が始まった。

第十四話　嘱託魔導師試験開始！（後書き）

どうもヨシュアです。地球編に行きたいんですけど祐希奈を書くのが結構楽しくて結局書けませんでした。予定通りに進めなくてちょっと悲しいです。こんな感じで予定は外れることは多いですが、頑張って書くので見てくだされば嬉しいです。

第十五話　負けず嫌い対決（前書き）

私はヴィータさんと対峙している最中なんだけど、これに負けたら試験に落ちるらしいのよ。こんなとこでつまずいていられない。私の応援お願いね♪　魔法少女リリカルヴィヴィオ始まり始まり～「題名のわりには今回、私出番少ないよね？」「ドンマイよ。」

第十五話　負けず嫌い対決

「行くよ…」

「全力で来い！」

「アシェル、ブレード展開！」

「了解。」

「うおおおー！」

「迎え撃つぞ！アイゼン！」

「Ｓｃｈｗｅｌｂｅ　ｆｒｉｅｇａｎ」

「おらよ！」

鉄球が四発はなたれる

「アシェル面倒だからプロテクション張って突っ込むわよ！」

「わかりました。プロテクション展開。」

ギン！

「弾いたか…なかなか硬てぇな…」

「はぁぁ！」

ガキン！

「斬撃もなかなか鋭いな。」

「いつまで余裕かましてるのよ！」

「お前が私を焦らせるまでだ。」

「じゃあ今からね！」

距離をとり、突きを放つ。

「その程度じゃ無理だな。」

プロテクションに邪魔されたけど関係ない！

「ぶっ飛べ！！」

「ロードカートリッジ。Ｂｌａｄｅ　Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！」

カートリッジロードと同時にブレードの先端が爆発する。

「ぐあっ！」

予想外の攻撃にヴィータが数メートル吹き飛んだ。

「どうよ！ちょっとは本気になった？」

「…私にバリアブレイク攻撃するたぁ、いい度胸だ…アイゼン！やるぞ！」

「プロテクション！」

「おおおらぁぁぁ！！」

「アシェル！このくらい弾けるでしょ！」

「もちろんです。」

「何！？私とアイゼンが弾かれた！？」

「副隊長の実力ってこんなもんなの？がっかりね。」

ブチ！

「なんだと…？まさかこんなもんが私とアイゼンの本気だと思ってんのか？」

「だって私のプロテクション抜けなかったじゃない。」

（これだけいえば十分ね。全力の副隊長とやりたいし。）

ブチブチ。

「上等だ…てめえ逃げんじゃねえぞ…」

「誰がこの程度の相手に逃げるのよ。」

ブチブチブチ！

「鉄槌の騎士ヴィータと黒金の伯爵グラーフアイゼンをなめんじゃねえぞ！！
アイゼン！」

「Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！Ｒａｋｅｔｅｎｆｏｒｍ！」
カートリッジをロードハンマーが変形した。

（なんだろ…尖ったハンマーに噴射口みたいなのがある）

「ラケーテン！ハンマー！」

噴射口から魔力の火が吹き出し、ヴィータ自身も回転。

「うらぁぁぁ！！」

「アシェル！」

「プロテクション！」

激突！

「ぐ…う…アシェル！プロテクションフルパワー！」

「了解！」

「バリアの出力を上げたぐらいでなぁ…私らの攻撃を防げると思ってんのかぁ！！」

最大出力のプロテクションにヒビが入る。

「嘘…」

「ぶち抜けぇぇぇぇ！！！」

ついにプロテクションを突破。

「きゃあああ！！」

祐希奈は直撃を受け十メートル以上吹っ飛ぶ。

「はぁはぁ…どうだ、私をバカにすると、こうなんだよ。私の勝ちだな。」

後ろを向いて去ろうとする。

頭の横を弓矢が飛んで言った。

「ちょっと…待ちなさいよ…こんなもんで…終わりなわけないでしょ…」

倒れていた祐希奈が起き上がっている。

「めちゃくちゃ痛かったから倍返しね…」

弓を引き絞り狙いを定める。祐希奈

「おもしれぇ、やってやるよ…」

アイゼンを構えるヴィータ。

先に動いたのはヴィータ。

「おらぁ！」

「プロテクション！」

バチ！

「やっぱりかてえな…けどな！おらおらおら！」

「…」

ヴィータの連続攻撃に再びヒビが入ってくる。ヴィータは力を込め横から降りかぶる。

「おらぁぁぁ！」

「っ！」

プロテクションが破壊された瞬間祐希奈は身を屈めアイゼンをかわす。ヴィータの体が泳ぐ…

「はぁぁぁ！」

目にも止まらぬ速打ち。

「ぐは！」

至近距離で矢を受け吹き飛ヴィータ。

「まだまだぁ！」

未だ空中に浮くヴィータに連射する。

「ぐあああ！」

回避もできず全弾命中。しかし祐希奈の攻撃はまだ終わらない。

「ラスト！グラビティアロー！！」

容赦ない止めの一撃。直撃…爆発

「あああああ！」

「うわ～ヴィータ大丈夫やろか？」

「ホントに倍返しだね…追い討ちまでかけたし、相当痛かったみたいだね。」

「なのはみたいだね。」

「私みたい！？」

「昔、逃げたヴィータに追い討ちバスター撃ち込んだじゃない。」

「あ～そんなこともあったねぇ…」

「ちょっとヴィータが可哀想になってきたわ…」

「あはははは…」

「どう？ちょっとは効いたでしょ？」

「…たく、いてえな…普通ここまでやるか？」

「言ったでしょ。倍返しだって…」

「そうだったな…じゃあ私も倍返しにするぜ！」

「やってみなさい！…ブレード展開！」

「行くぞアイゼン！」

「返り討ちにしてあげる！」

「うらぁ！」

「だぁ！」

ハンマーとブレードが交差する。

「ラケーテンハンマー！」

「ブレードエクスプロージョン！」

お互いにプロテクションを張りながら攻撃をする。

「「ぶち抜けー！！」」

「うっ」
「ぐはっ」
「「まだまだ！」」
「はっ」
かわされる。
「ふん！」
こちらもかわす。
「「てあ！！」」
ギン！再び交差。
「こけてなさい！」
ヴィータに足払いを食らわせる。
「うぜえ！」
体制を崩しながらもハンマーを振るう。
「ちっ！」
「プロテクション！」
なんとか防いだが急だったため、勢いに押される…

その間に体制を立て直したヴィータが鉄球を撃ち込んでくる。

「アシェル！」

「ｒｅｆｌｅｃｔｉｏｎ　ｗｉｎｇ」

羽がはえ祐希奈を包み込む。四発の鉄球を全てヴィータに跳ね返す。

「何！？」

ギリギリで回避するヴィータ。

「稀少技能か！」

驚いているといつの間にか祐希奈が弓を構えていた…

「ロードカートリッジ。」　空薬莢を三発弾き出す。

「不味い！アイゼン！」

「Ｇｉｇａｎｔ　Ｆｏｒｍ」

ヴィータもカートリッジを三発ロードしギガントハンマーを構える。

「燃やし尽くせ！！スパイラルフレア！！！」

「豪天！爆砕！ギガントシュラーク！！」

巨大化したハンマーで祐希奈の放った矢を殴る。

「うぉぉうらぁぁ！！」

ドゴーン！！

「うわぁ、殴り飛ばした…凄いや。」

「お前も結構な威力じゃねえか…ちょっと手が痺れたぜ…」

「まだいけるよね？」

「お前の方こそへバってねえだろうな？」

「冗談！」

「「はぁぁぁ！！」」

お互いのデバイスがぶつかる度激しい火花が散った。

「ストームワルツ！」

「うお！」

巨大な竜巻が作りだされヴィータは後方へ下がる。

「一撃！必中！」

カートリッジフルリロード。

羽が白銀に輝く。

「ジャッジメント！アロー！」

「のわっ！」

回避はしたが風圧で吹き飛ばされる。

「止め！」

祐希奈が突っ込む！

「ちっプロテクション！」

回避は無理…プロテクションを張る。

「はぁぁぁ！！」

渾身の突き。

「ぐぅぅ！アイゼン！耐えきるぞ！」

「撃ち抜く！カートリッジロード！」

手甲から最後のカートリッジが一発排出。

「だぁぁぁぁ！」

「アイゼン！プロテクション解除！」

「え…？」

まさか解除するとは思わず体のバランスが崩れる…

「くぅらぁえーー！！」

ヴィータの全力の一撃が横腹に直撃！

「うっ！」

祐希奈は吹き飛び動かない…

「気絶したか…ったく…ヴィヴィオといい祐希奈といい、めちゃくちゃな二人がいたもんだ。いや、カナンも入れれば三人か…」

「ヴィータちゃんお疲れ様。」

「なのは。こいつ強いぜ。」

「うん。カナン君を助けるために必至で頑張ってるからね。」

「祐希奈だけじゃないよ…ヴィヴィオも強くなってる。配属された時よりずっとね。」

「フェイトか…こいつらの相手してると、魔力リミッターがきつく感じるな。」

「ごめんな。ヴィータ堪忍してな。」

「はやて…仕方ないことだしな。我慢はする。」

「じゃ、祐希奈を医務室に運ぼ？」

「またずいぶんぼろぼろになっちゃって…」

「負けたくなかったんだろうね。」

「祐希奈は負けず嫌いやからな。」

模擬戦は祐希奈の敗北という結果だったが、あのヴィータを相手にし、互角の戦いをした祐希奈はこの日少し有名になったという。

それはさておき医務室にて、

「…あーあ試験落ちちゃった…」

いまだに負けたら試験に落ちると思っている祐希奈がいた。

「せっかく勉強したのにな…残念。」

「祐希奈?起きたの?」

なのはさんが入ってきた。

「落ちちゃった。ごめんなさい。」

「へ?何行ってるの?合格だよ?」

「…マジッスか?」

「マジッす♪」

「なんで？模擬戦負けたよ？」

「ヴィータちゃんとあそこまで戦えて落ちるわけないよ。」

「でも、ヴィータさんは落ちるって言ってたよ？」

「それは、誰にでも言うんだよ。本気でこさせるためにね。実際はヴィータちゃんのアイゼンを最初に防いだ時点で合格決定だよ。」

「……良かったよぉー！」

「うんうん。良かったねぇ。さ、帰ろうか？」

「そういえば、はやてさん達は？」

「ちょっと用事が出来たから帰るって。」

「そうなんだ。じゃあ帰りはどうするの？」

「タクシーを呼ぶよ。」

「私お金ないよ？」

「もちろん私が払うよ。」

「…貸しは作りたくないんだけど。」

「じゃあ、地球に行ってから、何か奢ってくれればいいよ。」

「それならいいよ。」

「うん。行こうか。」

六課にて、

（はやてちゃんもうすぐつくよ？準備出来てる？）

（バッチリや！みんなも揃ってるよ。）

（じゃあ祐希奈を連れてくね。）

（は～い。待っとるよ。）

「あれ？なんで事務員さん以外誰もいないの？」

「ほんとだ。おかしいな…」

「みんなどこ言ったんだろ…」

「あ、今ヴィヴィオ達は食堂にいるみたいだよ？行こう？」

「食堂？なんで？」

「さぁ？気になるしレッツゴー！」

「ちょっとなのはさん押さないでよ！」

「食堂明かりがついてないよ?ほんとにいるの?」

「とにかく入ろうよ。」

「う、うん…」

祐希奈が入った瞬間明かりが一斉に灯りクラッカーが鳴り響いた。

「「「「祐希奈嘱託魔導師試験合格おめでとう!!!」」」」

そこには、六課のみんなが集合しており、笑顔でこっちを見ていた。

「と、いうことでした。」

舌をぺろりと出しウインクするなのはさん。

「…」

「祐希奈?」

「…う…」

「祐希ちゃんなんで泣くの!?」

「私…今までこんなにたくさんの人に祝ってもらったことなかったから…嬉しくって…」

「なんだ良かった。」

「みんな…ありがとう…」

「ほらほらパーティーの主役が泣いてたらダメだよ?泣き止んで、楽しくいこ!」

「ヴィヴィオ…うん!」

「ほな、みんな祐希奈の合格祝って乾杯や!!」

「「「「乾杯!!!」」」」

部隊長の部屋。

「いや~楽しかったなぁ」

「うん。またやりたいよ。」

「祐希ちゃんお酒飲んでなかった?途中ハイテンションだったし…」

「き、気のせいよ!」

「ほんまなら怒るとこやけど…ま、今日ぐらいは多めにみよか。」

「さすがはやてさん!」

「やっぱり飲んだんだ。」

「う…」

「もうお喋りは終わり。」

「「は～い…」」

「さて、フォワードメンバーの皆と私は、明日から地球に行く。
それで仮本部なんやけどな、私の家となのはちゃんの家、翠屋。
それとフェイトちゃんが暮らしてたマンションをとれたんや。
割り当てを言うよ。私の家、ヴォルケンリッター全員とギンガ。
翠屋、なのはちゃん、スバル、ティアナ。マンションは、フェイトちゃん、エリオ、キャロまではいいんやけどな。
ヴィヴィオと祐希奈はどこがええ?」

「私は自分の家でいいわ。」

「私は…なのはママの翠屋にも行きたいし、フェイトママのマンションにも行きたい…八神部隊長のお家も見たいなぁ…」

「結局どれにするのよ…」

「う～ん。」

「そんなに迷うなら私の家に来る?」

「祐希ちゃんの家?いいの?」

「別にいいと思うわよ。女同士だし、部屋は空いてないから私の部屋になるから狭くなるけどね。」

「ヴィヴィオそうしたら？なんなら、翠屋とマンションとはやてちゃんの家には祐希奈と一緒に泊まりにおいで。」

「私も？いいの？」

「もちろん。当たり前だよ。」

「でも、親にはちゃんと言うてからな。」

「わぁーい。良かったね祐希ちゃん。いろんな所にお泊まりできるよ。」

「ええ。楽しみね。」

「ほんなら、明日はちょっと早いけど６時に正面入り口に集合な。」

「なんで６時なんですか？」

スバルさんが質問した。

「ヴィヴィオと祐希奈は学校があるから、これ以上遅くは出来んのや。堪忍な。」

「そうだよ！明日から学校なんだった！やったぁ～！」

「また勉強の日々か…嫌だな…」

「また私が教えてあげるね。」

「あんたはまだ、平仮名も書けないくせにどう教えるのよ！」

「ひらがな？ひらがなって何？」

「あぁ～もう！私達の住んでる日本で一番簡単な字よ！」

「ふ～ん。祐希ちゃん教えてね？」

「仕方ないわね…平仮名だけよ？漢字とかはあんまり知らないから無理よ？」

「うん。ありがとう。そのかんじって言うのは自分で頑張るよ。」

「まぁちょっとくらいなら教えてあげてもいいけどね？」

「ほんと！？ありがとう。嬉しいよ。」

「ほんまに仲良くなったもんやねぇ。」

「「はっ！」」

「私達が会話に入れないもんね。」

「ごめんなさい…」

「ごめん…」

「ええよ。ええよ。仲がええのは、何も言わへん。そういうこと

やから明日は6時に集合やから荷造りしときな。」

「「「了解！」」」

ヴィヴィオ、祐希奈の部屋

「あ～学校楽しみだなぁ♪」

「あの勉強地獄を楽しみと言えるアンタが凄いわ…」

「お勉強だけじゃないよ。お友達作りや、行事だってたくさんあるしね。」

「そりゃそうだけど、ヴィヴィオクラスで浮いたりしないようにね。」

「浮く？クラスの中って無重力なの！？」

「…はぁもういいわ。そんだけ可愛いキャラなら大丈夫よ…」

「？意味がわからないよ？」

「何でもないわよ…明日は早いんだからさっさと寝るわよ。」

「う、うん。お休み。」

「お休み～」

祐希奈の学校での苦労が始まろうとしていた。

ちなみに勝手に祐希奈が苦労するだけなのはここだけの話。

第十五話　負けず嫌い対決（後書き）

エ「なんだか最近僕たちの出番すくないよね。」　キ「私なんて今までブースト魔法くらいしか使ってないよ。」

ギ「私は囮役や、吹っ飛び専門ね…」

ヨ「君たちは書きづらいからね。まぁ、出番ゼロにはならないから安心してくれ。」

エ・キ・ギ「このアホ作者が！」

ヨ「なんか危険な気がしてきたので、それではまた次回～」

第十六話　初めての学校（前書き）

嘱託魔導師試験に無事に合格した祐希ちゃん。　さあ明日からは地球へレッツゴー。楽しみー♪　私の苦労の始まり…応援してね…　それでは「「魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります。」」

第十六話　初めての学校

ジリリリリリ！

けたたましい音が部屋に鳴り響いた。

「ん…う～ん…うるさいなぁ…よいしょ。」

ジリ…

「ふぅこれで寝られる～…」

「バカ！寝るんじゃないわよ！」

「んん～祐希ちゃん？…まだ5時だよ～？だいたいなんでこんな時間に目覚まし時計が…？」

「はぁ～…アンタ今日どこに行くか覚えてないの？」

「…ん～と～」

（なんだっけ～とっても楽しみにしてたような～）

「まったく、顔洗って目を覚ましてきなさい…」

「ふぁ～い…あ～」

ゴン！

「…大丈夫？」

「う～痛いよ～。」

「…今ので目が覚めた？」

「あ、そうだよ！今日は地球に行く日だったね。学校だぁ～♪」

「目が覚めると急に元気になるわね…」

「だって地球だよ？学校だよ？お泊まりだよ？楽しみで仕方ないよ。」

「はいはい。それは昨日も聞いたからさっさと準備しなさい。」

「うん！地球♪学校♪お泊まり♪えへへ～♪」

「朝からテンション高いわねえ…」

苦笑いをしながら自分も準備をして六課の入り口へと向かった。

「みんな集まったか？」

「「「はい！」」」

「は～い♪」

「…疲れる。」

「ヴィヴィオはご機嫌さんやね。祐希奈は元気ないけど大丈夫か？」

「…多分。」

「そりゃ朝からあれだけヴィヴィオにツッコミ入れてれば疲れるよね。」

とスバルさん

そう。私はヴィヴィオがあまりにもハイテンションだったから、何かヴィヴィオが言う度に叫んでいた。ヴィヴィオも言ってしばらくは静かだったんだけど、また騒ぎだしたためにはやてさんが来るまで、ツッコミを入れていた。

結果、疲れはてた。ということである。

「あはは。まだ1日は長いで？頑張らなあかんよ。」

「はぁ～…」

「祐希ちゃんファイトだよ！」

「疲れさせてる原因が言うな！」

「まだまだ元気みたいやね。車も来たみたいやし転移ポートまで行こか。」

「「「はい！」」」

「ふう…」

転移ポート、

「へぇ～ほんとはこんなとこから行くんだ…」

「祐希奈は単独転移で来たからね。驚いた？」

「うん。こんな大きいとは思わなかった…」

「あんまお喋りしてると学校に遅刻してまうし、歩きながら行こうな。」

「ごめん。はやてさん。」

「地球に行くのも久しぶりだね。」

「そうね。」

「スバルさん達は行ったことがあるんですか？」

「うん。前に地球でロスト・ロギアが発見されてね。」

「なのはさんのママさん若かったなぁ。」

「ティア一番叫んでたもんね。」

「えへへ。実は私もです。」

「やっぱりあれは驚くわよね。」

「はい。桃子さんをお姉さんって呼んじゃいました。パパもお兄さんって言っちゃって…」

「パパ？」

「あ、士郎さんって呼ぼうとしたら、パパって呼んでくれって言われまして。パパって呼ばれたかったそうです。」

「変わった人ね…」

「祐希ちゃんそんなこと言っちゃダメだよ。優しい人だよ？」

「中1の子供にパパって呼ばれてる人見たことないわよ…」

「きっと、心の中では呼んで欲しいってみんな思ってるよ。」

「そんな父さんやだな…」

「なんで？」

「普段とっても厳しいお父さんがいるとするわよ？そんな人が「パパって呼んでくれないかな？」なんて言ってきたら…私は逃げるわ…もしくは殴るわ。」

「私普通にパパって呼ぶと思うよ？」

「私も呼ぶと思う。」

とキャロ

「「ね～♪」」

「ごめんヴィヴィオ私呼べない…」
スバルさんから始まり
「私も無理かな…」
ティアナさんも
「僕も遠慮したいかな。」
エリオも
「私もパスしたいわ。」　とギンガさんまで

「ほらね？私の勝ちよ。」

「呼んで欲しいって言ってるんだから呼んであげればいいのに。」

「嫌よ。寒気がするわ。」

「みんな、そろそろ転移がはじまるよ。」

魔方陣が輝きはじめた次の瞬間景色が変わり山の中になる。

「地球～！ただいま～！！」

「やかましい！まだ朝早いのに叫ぶな！」

ポカ！

「祐希ちゃん痛いよ…」

「ヴィヴィオはホントに元気だね。」

「よっぽど嬉しいんじゃない？」

ママ達二人が微笑んでいた。

「何笑ってるの？娘が叩かれたんだよ？」

「アンタが悪いんでしょうが！」

「そうだよ。もし聞こえちゃったら迷惑がかかるでしょ？」

「うん。そうだね。ごめんなさい…祐希ちゃんもごめんね？」

「とは言っても、あんまり強く叩いちゃいけないよ？」

「はぁ～い♪」

「…絶対祐希奈叩くよね…」

「加減はしてるだろうし、大丈夫でしょ。」

「ティアは加減しないけどね…」

ドゴッ！

スバルのみぞおちにティアナの鉄拳が入る。

「何か言った？」

「いえ…何でもないです…」

「…祐希ちゃんあそこまではやめてね？」

「…心配しないで。あのレベルはカナンにしかやからいいから。」

「カナン君可哀想だよ…」

「大丈夫よ。体は頑丈な奴だしね。」

「漫才やってんと行くで～。」

「待ってくださ～い！」

「はやてさん待ってよ！」

「スバル行くわよ！」

「…はい。」

「ここからはお別れやな。なのはちゃんとヴィヴィオ、祐希奈は学校や。荷物は翠屋に置いたるからあとで取りに行きな？」

「「行ってきます。」」

「あとのメンバーは、各自の本部に荷物を置いたあと、サーチをするための機械をばらまいてくれるか？あとは勝手に世界中に散らばるし。」

「「「「了解！」」」」

「ほんなら解散。また今度や。」

「「「お疲れ様でした。」」」

「さて、エリオ、キャロ私のマンションに行こうか。」

「「はい！」」

「スバルとティアナは翠屋の場所わかるよね？私は学校に行かなきゃダメだから、二人とも行ってきて。」

「「はい！」」

各自の本部へとメンバーは向かった。

さて学校では

「祐希奈…心配したんだぞ。」

「ごめん。父さん。」

「ケガとかはしてないか？」

「大丈夫よ。だから今日から学校に来たんじゃない。」

「そうか。高町さん娘を助けていただきありがとうございました。

」

「いえ、こちらも無事にお返し出来て良かったです。」

「父さん。ヴィヴィオがしばらく私の家に泊まってもいい？」

「もちろんだよ。私は何日でも構わないよ。」

「ありがとうございます。」

「父さん。私、そろそろ教室に行くわね。」

「そうか。頑張って来なさい。」

「じゃあね。ヴィヴィオ。」

「うん。また後でね。」

「さて、高町さん。ヴィヴィオさんは祐希奈と同じクラスにしましたが、宜しいですか？」

「はい。ありがとうございます。」

「わぁ～い！」

「これからよろしくお願いします。」

「こちらこそ、ヴィヴィオをよろしくお願いします」

「今日からよろしくお願いします。」

「では…北里先生ヴィヴィオさんを頼みますよ。」

「はい。担任の北里舞です。
よろしくね。ヴィヴィオちゃん。」

「舞先生ですね。よろしくお願いします。」

「では、行きましょうか。」

「は～い♪」

「良いお子さんをお持ちですね。」

「はい。祐希奈さんもとっても良い子ですよ。」

「ありがとうございます。少々短気なのが難点ですがね。ははは」

「そうですね。ふふふ」

教室、

「祐希奈!?久しぶりだね病気は治ったの?」

「美鈴。久しぶりね。ところで病気ってなんのこと?」

「え？原因不明の病気にかかったから学校にこられないんじゃないの？校長が言ってたよ？」

（あの親父め！）

「そうだったわね…大丈夫よ。ちょっとアメリカまで行って治してきたから。」

「アメリカ！？い～な～私も行きたいよ。」

「こっちは病気なのによくもなんともないわよ。」

「祐希奈今日ね転校生が来るみたいよ？祐希奈の横に席が増えてるでしょ？」

「知ってるわよ。友達だもん。席が隣までは予想してなかったけどね。」

クラスがざわめく。

「マジかよ！？男子？女子？」

知らない男子生徒が聞いてくる。

「女の子よ。ていうかアンタ誰よ。」

「どんな子なの？」

今度は知らない女子…

「金髪の可愛い子よ。アンタも知らないんだけど。」

「性格は良い子なの？」

今度はおとなしそうな子が聞いてくる。
よし友達候補にいれとくか。

「ドがつくほどお人好しね。あとは超天然少女ね。見てれば分かるわ。」

「外国人かよ！！しかも性格俺好み！！彼女にして自慢してやるぜ。」

「俺がもらうぜ。」

「いや、俺が！」
知らない男子達が騒ぐ。

「あの子になんかしたら殺すわよ…」

「祐希奈怖いよ…」

チャイムがなって先生が入ってきた。

「起立、気を付け、礼、着席」

「皆さんおはようございます。」

「「「おはようございます。」」」

「今日は転校生が来てくれました。ヴィヴィオちゃん入って。」

「はい。」

「「「「…わぁ～」」」」

クラスから感嘆の声が上がった。

ヴィヴィオは教壇にあがろうと足をあげ…

ベチャ！

足を引っかけ転んだ…

（早速発動したか…）

クラスが呆気にとられていた。

「いたた…わわ！すいません。」

（ああ！可愛いわね畜生！）

「大丈夫？」

「はい！慣れてますから！」

（その発言もどうかと…）

「そ、そう。じゃ自己紹介お願いね。」

「はい！えと、高町ヴィヴィオ二等空…」

「ちょとまてぇい！アンタバカ！？」

クラスの視線がこっちに集まった。

「すいません。寝ぼけてました…」

（ごめん！祐希ちゃん！）

（あとでなんか奢りね…）

「すいません。やり直します。
高町ヴィヴィオです。好きな物はマ…

（ママ達とか言わないでね！）

「マ、マ〇オです。」

（ええー！！ていうかアンタがそのキャラを知ってることに、ええー！！）

「嫌いな物は目覚まし時計です。趣味はマ…料理です。これくらいでしょうか？」

「あ、ありがとうね。席は一番後ろの窓側ね。さっき祐希奈さんの隣。」

「はい。」

（やっと終わった…）

「皆さんよろしくお願いします。」

ヴィヴィオは頭を下げ…
ゴン！
教卓に頭をぶつけた…
（ああもうほんとに可愛い！）
「いたた…またやっちゃったよ…」
ヴィヴィオが近づいてきた。
「…疲れた」
「ごめんね。」
「それではＨＲ終わり。」
「起立、気を付け、礼、着席。」
授業が始まるまでの恒例の質問合戦。
（カナンの時とは大違いね。）
「ヴィヴィオちゃんどこからきたの？」
「えと、」
（アメリカ）

「アメリカです。」

「うわぁ、なんでそんなに日本語上手いの？」

「ママがハーフなんです。」

「へぇ」

「なんで、祐希奈を知ってるの？」

（私が病院に行ってる最中に知り合ったって言いなさい。）

「えと、祐希ちゃんが病院に来てる時に私たまたま病院にいまして、それでお友達になりました。」

「祐希ちゃん？祐希奈そうやって呼ばれてるの？」

「まぁね…」

「俺と付き合ってくれ！」

「付き合う？どこにです？」

（天然何回やる気よ…）

「いや、俺と付き合って！」

「俺と！」

ワラワラと集まってくる男子共

「そう…よっぽど死にたいのね…誰からがいい？」

「お前女子の癖に男子に勝てると思ってんのか？」

「もちろん…屋上に来なさい…全員叩きのめしてあげる…もし私に勝てたらヴィヴィオと付き合ってもいいわよ…」

「楽勝だぜ！」

「よっしゃあ！手加減抜きだぜ！」

ぞろぞろと教室から出ていく男子共

「美鈴…次の時間私欠席だから先生に言っといて…」

「わかった。手加減しなよ？」

「いいえ…全力でやるわ…今日は死人がでるかもね…」

祐希ちゃんが教室から出ていった。

「なんであんなに怒ってるんだろ？」

「さぁね。それよりヴィヴィオちゃん私と友達になってよ。私、橘美鈴って言うんだ。」

「わぁ。うん！よろこんで！」

「私も…いいかな？」

「もちろん。お名前教えて欲しいな。」

「あ、ありがとう。私、白河神楽」

「美鈴ちゃんに神楽ちゃんだね。よろしくね。」

「「よろしく。」」

ここでチャイムがなった。

「ほら座れよ～ってなんでこんなに少ないんだ？」

「祐希奈は頭痛で保健室に行きました～。男子は知りません。」

「男子は神田以外は欠席か…こりゃ進めるわけにはいかんな…仕方ない自習にするから高町にいろいろ教えてやれ。」

「やったね！」

このころ屋上では既に勝負がついており、無傷の祐希奈は男子の山の上で座っていた。

「めんどいからサボろっと。」

「ヴィヴィオちゃん何を教えようか？」

「う〜ん。日本語は喋れるだけだから、ひらがなってやつから教えて欲しいな。」

「うわぁほんとに外国人なんだぁ。いいよ。三人でやればすぐだよ。」

「ありがとう。美鈴ちゃん、神楽ちゃん。」

しばらくすると授業が終わった。

「起立、気を付け、礼。」

休み時間。

「神楽ちゃんって号令かけてるんだね。」

「その人のことを学級委員って言うんだよ。リーダーみたいなものかな。」

「へぇ〜。あ、祐希ちゃん。」

「あら、もう友達出来たの?」

「うん!美鈴ちゃんに神楽ちゃんだよ。」

「美鈴は知ってるけど、神楽さん?私とも友達になってくれる?知ってるかもだけど一之瀬祐希奈よ。」

「私もなりたかったんです。白河神楽です。よろしくね。」

「私のことは呼び捨てでいいわよ。敬語もしなくていいし。」

「じゃあ私のことも神楽でいいです。敬語は癖だからやめるのは無理なんですよ。」

「そうなんだ。ところで次の授業は？」

「数学だけど、男子が復活するまでは自習だってさ。」

「やったわね。頑張った甲斐があったわ！」

「何を頑張ったの？」

「ちょっとボコっただけよ。」

「祐希奈。暴力は行けませんよぅ。」

「あいつらが悪いんだからほっときなさい。」

「そうそう。」

結局男子が復活したのは六時間目の体育だけだった。

「バスケかぁ～燃えるわね！」

「私は応援してるね。」

「何言ってるの？アンタもやるわよ？」

「体操着ないよ。」
「保健室にありますよ。」
「レッツゴー！」
「ちょっと神楽ちゃん、美鈴ちゃん！？」
（カナンを思い出すわね…アイツも体操着なくって私が無理やり参加させたのよね。）
「さ、ヴィヴィオ諦めなさい！」
「ふぇぇぇ！」
「もう…三人とも強引だよ…」
「体操着も似合うわね。」
「そうですね。可愛いです。」
「似合う。似合う。さ、行こ！」
「シューズはどうするんですか？」
（フェアリーに頼みなさいよ。）
（あ、そうか。フェアリーお願いね。）

「大丈夫。祐希ちゃんが持ってるらしいから。」

「そういうこと。」

「今日は四人一組のチームを作って試合をするぞ。誰でもいいから組め」

「ぴったりだね。」

「私と美鈴がいれば楽勝よ。」

「私もがんばります。」

「よぉ一之瀬。俺達と勝負しねえか？もちろんヴィヴィオちゃんをかけて。」

運動神経の良さそうな男の子が話しかけてきた。

「またやられて恥さらしたいの？」

「あの、祐希ちゃんこの展開だと私の意思は…」

「運動で俺達に勝てると思うなよ！」

「なんでも一緒よ。かかって来なさい！」

「無視なんだね…」

「祐希奈は燃えると言うこと聞かないからね。」

「ヴィヴィオちゃん可哀想です…」

「さ、アンタ達やるわよ！」

「「「はぁ…」」」

「行くぞ！3、2、1」

ボールが高く投げられた

「うおお！」

「その程度？」

祐希ちゃんはあっさりボールをとった。

「美鈴！」

「はいな。」

「わぁ、凄いです。」

美鈴ちゃんはドリブルで男子を次々に抜いていく。そして構えた

「打たせるか！」

数人がたかるが、

「美鈴パス！」

「ほいっと。」

いつの間にかフリースペースにいる祐希ちゃん。パスをもらい…

「3点もらい。」

パスッ

ボールが吸い込まれるようにネットに入った。

「どうよ！」

「さすが祐希奈！」

「凄いね。」

「お見事です。」

このシュートに男子が本気になる。

ボールがパスされ、試合が始まる。

「相手の主力はあの二人だ。固めろ！」

「「任せろ！」」

ガチガチに二人はマークされ、動けない。

いくら祐希ちゃんでも男子に力では勝てないらしい。

「もらった。」

「ヴィヴィオ！神楽！止めなさい！」

男子が突っ込んできた。

「きゃ！」

あまりの勢いに神楽ちゃんは止められなかった。

祐希ちゃんは二人、美鈴ちゃんは一人にマークされ動けない。私と一対一…

「ヴィヴィオちゃんどかないとケガするぜ！」

「…」

集中、足運びたいしたことない…スピード遅い…バウンドちょっと低いけど…行ける！

バチン！

空中に浮いたボールを弾き跳ばす。

「何！？くそ！」

男子が取りに走る。しかしそれより遥かに早くボールを取る。

（ゴールまでは直線…）

覚えたばかりのドリブルをして走り出す。

「お前らマークやめろ止めろ！」

男子三人が私に向かってきた。

「ヴィヴィオ逃げなさい！」

「大丈夫！」

一人目、地面にボールを叩きつけ頭の上を越えたボールを捕球、抜き去る。

二人目、右に行くと見せかけ、回転がら空きの左を走り抜ける。

三人目、バウンドを高くし隙を作りとりにきたところでボールを少し投げ走り抜ける。

フリー。行ける！ボールを片手に持ち高く飛ぶ。訓練で鍛えられたジャンプ力ゴールの高さ程度楽々届く。

「は！」

ガコン！

「…ダンクシュート？だと…」

「ヴィヴィオ～いいわよ～！」

「ヴィヴィオちゃん格好いいです！」

「私も惚れちゃいそう！」

「えへへ…あれでいいのかな？」

「もちろん！バッチリよ！」

「じゃあ決めますか！」

「私パスだけは頑張って回すね！」

それからの男子は悲惨としか言いようがなかった。ヴィヴィオが抜き去りダンクを決め、祐希奈がフリーから3ポイントを決め、美鈴もレイアップを決め、神楽でさえも、下投げながらも点数を入れた。

男子の点数は0…ヴィヴィオチームの点数は驚異の65点。

「つ、つえぇ…」

「これが実力の差よ。諦めなさい。」

「楽しかったよ。またやろうね？」

「ヴィヴィオちゃん！改めて惚れなおしたぜ！君を手に入れるまで諦めない！」

「？よくわかんないけど頑張ってね。」

「ヴィヴィオちゃん意味わかってないよね…」

「ですね。」

「今日は楽しかったね～。」

「まさかヴィヴィオがあんなにバスケが出来るなんてね。」

「私もびっくりだよ。運動は出来ないと思ってたのに。」

「ヴィヴィオちゃん格好良かったよ。」

「えへへ。そう？」

「あ、私こっちだから。」

「私もです。」

「じゃあみんなお別れだね。」

「また明日ね。」

「うん。また明日～」

「バイバ～イ」

「さようなら。」

こうして私の学校１日目は終了した。

「さて、帰るわよ！」

「うん！」

私はしばらくはこんな日々が続いてくれることを祈った…

第十六話　初めての学校（後書き）

学校編書くの楽しいです！　さぁ次は祐希奈の家にお泊まり。ちょっとシリアス？になるかもですね。

第十七話　明かされる過去（前書き）

学校が終わり美鈴ちゃんと神楽ちゃんと別れた私達これから祐希ちゃんの家でのお泊まり会楽しみでしかたないよね～。　魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります♪

第十七話　明かされる過去

「♪♪♪～」

「アンタ今日は1日ご機嫌ね～。」

「だって楽しいんだも～ん♪
これから祐希ちゃんちにお泊まりだし～。」

「そんな良いとこじゃないわよ。」

「祐希ちゃんと一緒だから嬉しいんだよ～。」

「…そういうセリフは…面と向かって言わないでくれる?…」

「祐希ちゃん照れてる?」

「うるさい!何でもないわよ!」

「なんでいきなり怒るの?」

「知らないわよ!」

「知らないって祐希ちゃんのことでしょ?」

「知らないったら知らないのよ!」

ダッ!

「あ、待ってよ!私祐希ちゃんのお家分かんないんだからー」

「わからないならさっさと来なさい！」

「なら走らないでよ！」

「アンタが悪い！」

「なんで？」

「自分で考えなさい！行くわよ！」

「だから、走らないでってば！」

夕日が明るく照らす町を二人はにぎやかに駆けていく。

「はぁはぁ…こ、ここが私の…ゲホ…家よ…」

「へぇ～。綺麗だし結構大きいね。」

「そ、そう？でも、部屋の数が…少ない…のが難点ね。ていうか…ヴィヴィオはなんでそんなにピンピンしてんのよ…」

「乙女は疲れないのです♪」

「そんな乙女いるか！だいたい私も乙女よ！」

「祐希ちゃん乙女ってキャラじゃないよね？」

「うるさい！私も自分で言ってて悲しくなってきたわよ！」

「でも、祐希ちゃんは可愛いし大丈夫だよ。」

「…何が大丈夫なのよ…何が…」

「え?乙女キャラじゃなくても、可愛いから結婚できるよって話だよ。」

「結婚のことなんて今から心配してないわよ!」

「でも祐希ちゃんきっとモテるよね。」

「その言葉アンタにそのまま返すわ…
今日の学校であんだけ告白されといてよくそんなこと言えるわね。」

「告白なんてされてないよ?付き合ってって言われただけ。
結局どこに付き合うのかわかんなかったけど。」

「付き合ってって言うのはね…好きですって告白してるのと同じ意味よ…」

「え~そうなの?なんで私なんかに言うのかな。祐希ちゃんや神楽ちゃん、美鈴ちゃんのほうが可愛いのにね。」

「…私達のが可愛いは置いといて…ヴィヴィオは性格とかいいからね。」

「そうかな~?祐希ちゃんや美鈴ちゃんの方が私より明るくて可愛いし、神楽ちゃんは控えめなところが可愛いし、私なんかよりずっといいと思うよ?」

「その自分よりちょっと人を上にたてられるからヴィヴィオはモテるのよ。美鈴はマシだけど、私は自分より上に人がいるのが嫌だし、神楽は自分が下すぎるからね。」

「そういうものなの？」

「多分ね。…何で私達はこんな話を玄関前で話してるのよ…」

「乙女の話から祐希ちゃんが繋げたからだよ。」

「つまりヴィヴィオが原因ってことね。」

「え～話を続けたのは祐希ちゃんだよ。」

「なんでよ！だいたい…ってまた終わりそうにないから中に入ろ…」

「うん。話は何処でも出来るしね。」

「お邪魔しまーす。うわぁ…不思議な匂いがするね。何なの？」

「？あぁ畳の匂いかもね。父さんが和風がいいらしくてね。家はこの辺では珍しく畳を使ってるのよ。」

「私この匂い好きだよ。とっても落ち着く。」

「ま、確かにね。居間に案内するわ。」

「居間？」

「客室みたいな広いところよ。あ、そこで靴は脱いでね」

「靴を脱いで部屋に入るの？変わってるね。」

「日本では普通のことよ。居間はこっちね。」

「わぁ。タタミの匂いがたくさんする。」

「適当にテーブルのとこで座ってて。お茶とお菓子持ってくるから。」

「お茶入れるの私が入れようか？」

「ヴィヴィオは緑茶の入れかた知らないでしょ？」

「ううん。緑茶は分かるよ。」

「え？なんで？」

「フェイトママのママのリンディさんって人に教えてもらったの。」

「リンディさん…あ、その人私の試験官だったわよ。フェイトさんのお母さんだったんだ…」

「リンディさん綺麗な人でしょ？」

「確かにね。…フェイトさんのお母さんってことはあの人って何歳なんだろ…えらく若い顔してたけど…」

「どうして私のママのママは以上に若い顔の人達ばかりなんだろう…」

「なのはさんのママさんも若い顔立ちなのよね？」

「どうみても、二十代にしか見えなかったよ…」

「カオスね…ま、その話は終わりにして、お茶入れかたわかるんなら手伝ってよ。」

「うん。飲んだことはないんだけど、リンディさんは美味しそうに飲んでたし大丈夫だよね。」

「緑茶は体にいいし間違っても倒れたりはしないわよ。」

数分後…

「準備できたよ～。」

「お菓子もあったし、のんびりテレビでも見ながら時間潰しましょうよ。」

「そうだね。よいしょっと」

「…なんでスプーンが湯呑みに入ってるの？」

「え？ちゃんとリンディさんに教えられた通りに作ったよ？スプーンもついてたし。」

「そ、そう。きっとリンディさんは紅茶と混ざっちゃったのね。」

「緑茶はいらないの？」

「緑茶は湯呑み両手で持って飲むものよ。スプーンはいらないわね。」

「へぇ…リンディさんに伝えとくよ。」

「じゃ、飲みましょうか。」

「うん。」

ずずず…

「「うっ！」」

「…ヴィ、ヴィヴィオこれ…何入れ…たの？」

「えとね…角砂糖二個と…ミルク…」

「リンディさん…これ作って…飲ん…で…たの？」

「多…分ね…」

「「無理…」」

バタ…

「…私、夢でお花畑が見えたわ。そうそう、ヴィヴィオも隣にい

たわよ。」

「…奇遇だね。私も祐希ちゃんとお花畑を見てたよ…もしかして私達臨死体験してきた？…」

「そうみたいね…」

「「リンディ茶恐るべし…」」

「ねぇ、祐希ちゃんの両親はいつごろ帰ってくるの？」

「あ…いけない！今何時！？」

「6時だけど？」

「ご飯の準備忘れてた！」

「ていうか、死にかけてたからそれどころじゃなかったよね…」

「私緑茶がトラウマになりそうよ…」

「私もだよ…」

「ねぇ、ヴィヴィオ、アンタって包丁とか使える？」

「お料理もママに教えてもらってるからそれなりには作れるよ？」

「料理は今日は私が作るわ。ヴィヴィオは野菜を切ってくれる？」

「それくらいお安いご用だよ。」

「じゃ、簡単に作れるしカツ丼でいいわね？」

「なんか体中の力が抜けてるからカツ丼でも食べれそうだよ。」

「エネルギーまで吸いとられるなんて…ホントにヤバい代物ね…」

「あれを何回も飲んでるリンディさんって…」

「私は考えないことにするわ…」

「うん。私も忘却しとくよ。さ、作ろっか。」

「オッケー。」

「ヴィヴィオ！玉ねぎと青ネギ切って！」

「わかった。」

野菜を空中に放る。

「はぁぁぁ！」

閃光…

「切れたよ～。」

「…その技って漫画の世界でしか見たことなかったわ…」

「小説だし似たようなものだよ。」

「うわぁ…ま、いいわ。次は揚げ終わったお肉から切っといて。」

「はいはーい。」

再び閃光…

「切れたよ〜。」

「もう気にしないことにするわ…」

「ただいまー。」

「お帰りなさい。」

「あ、お邪魔してます。」

「ごめん。父さんもう少し待ってね。」

「構わないよ。…祐希奈が友達と料理か…初めてだな。」

「父さん！いいから座っててよ！」

「わかった。わかった。」

「祐希ちゃんって、一緒に料理作るの私が初めてなの？」

「たまたまよ！仕上げにかかるわよ！」

「は〜い。」

「「出来た～！」」

「カツ丼か、美味しそうだね。」

「じゃ、食べましょうか。」

「あれ？祐希ちゃんお母さんの分は作らないの？」

「…」

「…」

「祐希奈…同じ仲間なんだろう？」

「わかってるけど…」

「あ、ごめんね？私が聞いちゃいけないこと聞いたんだよね。話たくないことならもう聞かないよ。」

「…後で話すわ。いつかは話すつもりだったしね。」

「うん。ありがとう。」

「さ、問題も解決したことだし、食べようか。せっかくのカツ丼が冷めてしまう。」

「「「いただきます。」」」

「うん。祐希奈、ヴィヴィオさん、とても美味しいよ。」

「良かったです。」

「急いで作ったからまずかったらどうしようかと思ったわ。」

「祐希ちゃんお料理上手だね。」

「上手って卵焼いて、お肉揚げるだけじゃない。」

「ううん。焼き加減も丁度いいし、揚げる時間も完璧だよ。ちょっと意外…」

「確かにね。祐希奈は料理は出来そうには見えないなぁ。」

「悪かったわね！」

「こんなに上手なんだから私にお料理教えてね？」

「気、気が向いたらね。」

「祐希奈顔が赤くなってるよ？」

「あ～もう！父さんは喋るの禁止！」

「ははは！こんなに楽しい食事は久しぶりだよ。ヴィヴィオさん、私の子にならないかい？」

「あはは、なりたいですけど遠慮しておきます。

私にはママがいますので。」

「…マザコン」

「もう！祐希ちゃん！」

暗い雰囲気もどこへやら明るい空気が居間に流れていた。

「祐希ちゃんちのお風呂って大きいんだね。」

「そりゃ隊舎についてる簡易のバスルームよりは広いでしょうよ…」

私達は今、一緒にお風呂に入っている。

何故かと言われると、

「寝る直前に暗くなるよりは、いい」ということらしい。

部屋で話しても良かった気がするけど、

「暗い気分でお風呂は入りたくない」らしいのでお風呂で話すことになったわけ。

「背中流してあげよっか？」

「…そうねお願いするわ。」

「うん。任せて。」

しばらく無言で背中を石鹸で洗っていると祐希ちゃんが話し出した。

「私のつけてるペンダント…アシェルは、もともとは母さんの形

見だったものなんだ…」

「…そう…なんだ…」

祐希ちゃんのお母さんはやはり亡くなっていたらしい。

「母さんは昔、何か大変な事件に巻き込まれて死んじゃったんだって…調べてみたけど、何者かに殺されたってとこまでしか分かんなかった。
そのことがわかったのは母さんが死んでからしばらくたって冬になってからだった…」

「うん…」

「その時の私はね。今のカナンみたいに母さんを殺した奴に復讐することで頭がいっぱいになってたんだ…復讐するための力を求めた。」

「祐希ちゃんが？信じられないよ…」

「でも事実なの。小学生がいくら頑張っても無理なのにね…
それから私は学校に通わなくなって、ついには家にも帰らなくなった…頭には復讐のこと以外何もなかった…闇のなかにいた…」

「…」

「でもね…そんな闇のなかにいた私を父さんは助け出してくれたんだ…
その日は吹雪だった。でも寒さすら感じなかった…死んでもいいと思ってた。母さんのところに行けるから…

私は地面に倒れてついに死ぬんだと思った。
でもね、父さんが来てくれた。
…自分が必死に犯人の手掛かりを探して、なんとか手に入った母さんのペンダントを私にくれた…
家にも帰らない頭のおかしい娘にだよ?
たった一つの母さんが身につけていた大切なペンダントを私につけてくれた。
そして抱き締めてくれたんだ…言葉はお前は生きろ!って一言だけだったけどその一言を聞いた途端に涙が止まらなかった。
その後は元気を取り戻してこんな感じ…」

「悲しかったね…私と友達になってくれてありがとう…話してくれてありがとう…」

「もう…あがるわ…」

「うん。私も体洗ったら行くよ。」

祐希奈の部屋、

「さて、カナンの話はまた今度でいいわよね。あぁ明日も学校かぁ。サボろっかな。」

明るく振る舞っている祐希ちゃん。

「…祐希ちゃん、悲しい時は我慢しなくていいんだよ…」

「っ!私が落ち込んでるように見える?」

「いくら私でもわかるよ…なんで顔そらしてるの？泣きそうだからでしょ？」

「なんで…なんでいつもは鈍い癖に！」

「乙女の直感だよ…」

「バ…カ…」

「祐希奈…おいで。」

「う…あああああん！なんで！なんで！死んじゃうのよ！もっと母さんと！遊んだり、喧嘩でもいい！なんでもいいからやりたかったよぉぉぉ！！」

「うん…本当に悲しかったね…よくここまで頑張ったね…祐希奈はえらいよ。」

「母さぁぁぁん！！うあぁぁぁん！うあぁぁぁ！母さん！母さぁぁん」

「よしよし…えらい。えらい。」

私は祐希ちゃんが泣き止むまでずっと頭を撫でていた。少しでも母親のかわりになれるようにと…

「もう、平気？」

「うん…ごめん。」

「いいよ…辛いこと聞いちゃったの私だしね。」

「うん。ありがとう。」

「じゃ…寝よっか?」

「ヴィヴィオ…」

「何?」

「今日だけ…今日だけでいいから一緒に寝て欲しい…」

「うん。いいよ。」

「ありがとう…」

「お休み。祐希奈。」

「お休みなさい。母さん…」

二人は眠りについた…まるで親子のように相手を抱きながら…

第十七話　明かされる過去（後書き）

今日は編集などをしていたらすっかり遅くなりました。まだ一日目とかおっそ～！とか思われるかもですがどうか勘弁してください。

第十八話　暴走（前書き）

昨日は祐希ちゃんと同じベッドで寝たんだけど、甘える祐希ちゃん可愛いなぁ。でもこの後ちょっと後悔することになるんだよね～

魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります。

第十八話　暴走

「そろそろ、行こうかな。」

布団からでると祐希ちゃんに手を捕まれた。

「母…さん」

寝ぼけて私をまだお母さんだと思っているらしい。

「祐希奈、どうしたの？」　私はママの真似をして優しく聞いてみた。

「行か…ないで。」

「…大丈夫。朝ご飯作ってくるだけだからね。帰ってくるよ…」

そう伝えると安心したのか眠りについた。

「さてと、お料理頑張りますか。」

私は制服に着替えて居間へと向かった。

「ねぇ、フェアリー。勝手に作っちゃっていいかな？」

「後で謝れば許してもらえますよ。」

「そうだね。もしダメだったら謝ろう。」

トントントン…

静かな台所に包丁の音が響きわたる。

「味って私の好み大丈夫かな？」

「マスターの味覚は正常の範囲内ですので大丈夫でしょう。」

「じゃ、お味噌汁はこれでいいよね。」

「おはよう。祐希奈今日は随分早いね。」

「あ、一之瀬校長。おはようございます。勝手に使わせてもらってますけどいいですか？」

「おや、ヴィヴィオさんだったのか。使うのはもちろん構わないけど祐希奈はどうしたんだい？」

「祐希ちゃんならまだ寝ています。
昨日私が辛い思いをさせてしまったので、そのお詫びもかねて、かわりに朝ご飯を作らせてもらってます。」

「そうか、祐希奈から話を聞いたのか…あの子は今日は学校に行けそうかい？」

「絶対…とは言い切れませんが、行ってくれると思います。」

「それは良かった…ところで朝のメニューは何かな？」

「とりあえず失敗しないように焼き魚とお味噌汁と卵焼きにしました。
校長や祐希ちゃんのお口に合うかはわかりませんが。」

「久しぶりに美味しい朝食が食べれそうだよ。ここ最近はインスタントも多かったからね。
あと私のことは雅樹でいいよ。
家でまで校長になりたくないしね。」

「あはは。
はい。分かりました。
これからは雅樹さんって呼びます。」

「いい匂いだ。そろそろ完成みたいだね。
あとは、私が容易しておくから祐希奈を起こして来てくれないかい？」

「分かりました。ではお願いします。」
「祐希ちゃん起きてる？」

「す～す～」

「あらら、まだ寝てるや。祐希ちゃん起きて～。」

「母さん？戻って来たの？」

「お母さんじゃないよ。ヴィヴィオだよ。いい加減着替えないと遅刻するよ？」

「母さん。朝御飯できたの？」

「はぁ…今朝だけは母さんでいっか。
そうだよ。出来たから呼びに来たの。早く着替えないと遅刻しちゃうよ？」

「うん。私着替える。」
着替え始めたが、やはり寝ぼけているせいか動きが遅い。
「あ～もう！祐希奈、手をあげてて。」
「ん。」
「着替えさせてあげるのなんか今日だけだからね。」
さっさと祐希ちゃんの服を脱がして着替えさせた。
「ほら、祐希奈、急ぐよ？」
「は～い。」「すいません。ちょっと手間取りました。」
「父さんおはよー。」
「おはよう祐希奈。ヴィヴィオさんどうしたんだい？」
「ちょっと問題が発生しまして」
「問題？」
「父さん、母さん何してるの？朝御飯食べようよ。」
「…これです。」
「なるほど。祐希奈は普段は寝起きはいいんだけど、一度寝ぼけると長いからね。学校につくまではこのままかも知れないよ？」

「そうですか…」

「すまないね。」

「いつまで話てるの～?遅刻しちゃうよ。」

「ごめんね。祐希奈。とりあえず朝御飯を食べましょう。」

「そうだね。母さん♪」

「もう!雅樹さんまでからかわないで下さい!」

「「「いただきます。」」」

「母さんの料理、美味しいよ」

「そ、そう。ありがとう祐希奈。」

「本当においしいよ。味噌の濃さも丁度いい。朝食作ってくれてありがとう。」

「しかし、マスターは習得するまでの間は、見た目は完璧ですが味は違う食べ物の味になります。美味しいことには変わりありませんが…」

「!?宝石が喋った!?」

「もうフェアリー!ひどいよ!」

「それが魔法の力なのかい？」

「まぁ、このフェアリーは特別会話機能が発達してますが、そうなりますね。」

「ほぉ～。で、フェアリー君と言ったっけ？」

「なんでしょう？」

「先程の話は本当なのかい？」

「はい。なのはさんはきちんと教えたのですが、マスターの料理を味見した時のあの表情…忘れられません。」

「そんなことまで言わなくていいの！」

「ははははは！それは是非食べてみたいね。」

「私も食べたいよ。」

「不思議体験が出来ますよ♪」

「…フェアリー沼に沈めてあげようか…？」

「すいません。マスター冗談が過ぎました…」

「…」

「母さん怖い…」

「分かればいいよ。さ、祐希奈そろそろ学校に行こっか。」

「もう？いつもよりだいぶ早いよ？」

「たまには父さんと三人一緒に登校しようよ。」

「それは嬉しいね。じゃ行こうか。」

「母さんと父さんと私の三人で登校かぁ。なんか楽しみだよ。」

「ねぇねぇ。母さん何処までついてくるの？」

「今日は学校にも通うよ。」

「どうして？通っていいの？」

「私が許したからいいんだよ。」

「そっか～なら大丈夫だね。」

「あれ？ヴィヴィオちゃんに祐希奈じゃない。校長もおはようございます。」

「あ、美鈴ちゃんに神楽ちゃん。おはよー。」

「美鈴、神楽おはよう。ていうか何で美鈴はともかくなんで新しく友達になった神楽まで母さんが知ってるの？
だいたい、ヴィヴィオって誰だっけ。聞いたことあるんだけどなぁ…」

「…母さん？」

「ヴィヴィオちゃん祐希奈の母さんだったの？」

「もちろん違うよ。どうやら祐希奈は寝ぼけてるらしくてね。いつもは学校につくと治ってるみたいなんだが…」

「校長。正解には学校に行くとじゃなくて、私と出会うとですよ。」

「美鈴ちゃんに？どういうこと？」

「校長少し耳を塞いでください。女の子同士しかダメな会話なんです。」

「？わかったよ。」

美鈴ちゃんが祐希ちゃんの耳に近づく。

「祐希奈が好きな人は～カ」

バキッ！

「アンタは何を朝からバカなこと言ってるのよ！」

「さすが祐希奈…ナイスツッコミ…」

「あれ？なんでいきなり学校なの？」

「祐希ちゃんが寝ぼけてたからだよ…」

「へ？」

「祐希ちゃんって人のことマザコンマザコン言うわりに自分も結構甘えん坊なんだね。
口調までなんか小さい子みたいだったよ。」

「ヴィヴィオ…私もしかして昨日の夜からアンタのこと母さんって呼んでた？」

「うん。可愛かったよ♪」

「ヴィヴィオを母さんと間違えるなんて私もう生きていけないわ…」

「祐希奈元に戻ったみたいだね。」

「父さん？なんで父さんまで一緒にいるのよ？」

「三人で登校してきたからだよ。」

「二人の間に祐希奈が入って手を繋いで笑ってたよ。」

「人に…見られたの？」

「バッチリ♪通行人が微笑んでたよ」

「うわぁぁぁぁ！」

「ちょっと祐希ちゃんまた走るの！？」

「待ってよ祐希奈！」

「三人とも速いですぅ！」

「…こんなにもいい友達がいるなら私も心配しなくていいな。」

雅樹さんだけはゆっくりと歩いて登校した。

「はぁ…はぁ…」

「もう登校する時間速いのに走る必要ないよ。」

「はぁ…はぁ…アンタ達…速いわよ…」

少し遅れて美鈴ちゃん、

「なん…で…朝…から走…って…る…んです…か？」

さらに遅れて息も絶え絶えな神楽ちゃんが追い付く。

「ほら祐希ちゃんが走るから二人ともへとへとになっちゃったよ。」

「誰の…せいだと思ってんのよ…」

「祐希ちゃんが寝ぼけるからでしょ？」

「アンタが昨日の夜母さんみたいなの真似をしたからでしょうが！」

「え?ヴィヴィオちゃん昨日は祐希奈の家に止まってたの?」

「うん。お泊まり会だよ。」

「いいなぁ。私も誘ってくれたら良かったのに。」

「休日ならともかくなんで平日に誘うのよ…」

「でも、ヴィヴィオちゃんは誘ったんでしょ?」

「ヴィヴィオが無理矢理押しかけたのよ…」

(その言い訳私が悪い人みたいだよ…)

(うるさい…)

「ヴィヴィオちゃん意外と積極的なんですね。」

「あははは…」

「ほら、いつまでも話してると遅刻するぞ?」

いつの間にか雅樹さんが追い付いてきていた。

「父さんいつの間に…ってこんだけ長話してたら追い付くわよね…とりあえず中に入りましょうか。」

「「「は〜い。」」」

今日は特に何もなく(告白騒動はあったが、)普通の授業が行わ

れていた。

「あと一時間で終わりね…最後の力を振り絞るわ。」

「日本の勉強って楽しいね。数学とか答えがわかるとスッキリするし。」

これが勉強が理解できるものと出来ないものの考え方の違いである。

「それにしてもヴィヴィオちゃん飲み込みはやいねぇ～。漢字までもう完璧だよ。」

「昨日の午前中に二人にたくさん教えてもらったからね。」

「どうせ私はたいして教えられませんでしたよ。」

「そんなことないよ。確かに勉強はちょっと教えにくそうだったけど、体育の時間に分かりやすくルールを教えてくれたのは祐希ちゃんだよ。三人共感謝してるよ。」

「「「…」」」

「ん?どしたの黙っちゃって。」

「素でその性格ってのがうらやましいわ。」

「いいこ過ぎるよね。」

「それだけ純粋なんですよ。」

「なんの話？」

「何でもないわよ。」

突然頭に念話がつながる。

（二人とも聞こえるか？はやてや）

（はやてさん？どうしたんですか？）

（ガジェット発生したんや。ごめんな。私らだけで処理したかったんやけど、数が対処しきれんのや…行ってくれるか？）

（わかりました。祐希ちゃん聞こえた？）

（うん。行くわよ。）

（堪忍な…）

（いいですよ。仕方ないです。きりますね。）

「ごめん。美鈴ちゃん神楽ちゃん私達これから用事があるから帰るよ。先生に言っといてくれる？」

「私達って祐希奈も？」

「たまたまよ。」

「…まぁ今回は信じるよ。今度は聞くよ？」

「聞かれても言えないかもしれないわ…」

「私達にも言えないことなの？」

「ごめん…」

「そう…」

「ほんとにごめんね？」

「いいですよ。早く行ってください。大切な用事なんでしょう？」

「うん。じゃあね。」

「また明日」

「うん…」

「バイバイ…」

美鈴ちゃんと神楽ちゃんは自分の席に行ってしまった。

「あの二人ならわかってくれるわよ。」

「そう…だね。」

この迷いさえなければ何事もなく任務を終えられたのに、

「ヴィヴィオ！いたわよ」ガジェット達は鳴海市の外れの方にいた。

「うん…」

「ほら！いつまで気にしてるの！今は忘れなさい！」

「そうだね…やろう。」

「アクセル・ランサー」

「グラビティアロー！」

ガジェット達に向かって放つが、消された。

「いつもよりバリアが強い？」

「みたいだね…」

「めんどくさいわね…接近戦で倒すわよ！」

「うん…」

「はぁぁぁ！」

「…」

接近戦にはさすがにＡＭＦもやくにたたなかった。

あと三型と一型が合わせて十機ほどだった

「…」

私は周囲の警戒もせず正面のみを見ていた。

「ヴィヴィオ増援よ！上！」

ゴス！

「ぐあっ！」

増援の一型が上から降ってきて私は地面に押さえつけられた。

「アンタは何してるのよ！」

祐希ちゃんがガジェットに突きを叩き込み助けてくれた。

しかしガジェット達は驚くべき行動にでた。

近くにいた数機が光を放ち始めた。

「自爆！？くそ！」

「っ！」

祐希ちゃんに蹴りとばされた。

その瞬間爆発が起きる

顔をあげると…黒い煙のなかに祐希ちゃんが倒れていた…

「祐希ちゃん？」

「…」

「祐希ちゃん返事をしてよ?」

「…」

「祐希ちゃん!」

「…」

いくら呼んでも返事はない…

「う、あ、祐希ちゃんが…!うあああああ!」

私の中で何かが弾けた。

「モードサード…」

「サードモードは不完全です。マスターやめましょう。」

「はやくしろ!」

「…サードモード了解。」

手から虹色の光が登り集束

「サードモード。クローフォーム…」

サードモードは今まで出力を下げていた聖王の鎧の出力を上げ腕に集束し、超高出力の武器を作りだすもの…しかし未完成のため禁じられていた機能である。

「破壊する！！」

自分のせいで祐希奈が倒れたことで理性がおかしくなり破壊衝動に支配されるヴィヴィオ。

「うあああああ！！」

ひたすら切り裂く…未完成のサードモードを制御もせず使っているため、ヴィヴィオの腕からも大量の血が吹き出す。

魔力の暴走を感知したロングアーチがなのはに伝え、なのはが到着したころには大量のガジェットの残骸と祐希奈、腕から血を流すヴィヴィオが倒れていた…

第十八話　暴走（後書き）

一話からちまちまと編集をして少しでも読み安いようにしています。　そのかいあってか少しずつアクセス数が増えてきました。読んで下さってるみなさんありがとうございます。　　ＰＳついにＰＶ２００００アクセス突破しました。これを励みに頑張ります！

第十九話　亀裂…&修復作戦（前書き）

部隊長に禁じられていたサードモードを起動してしまった私は暴走しそして倒れた。だんだん凄いキャラになってるような…とりあえず魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります。

第十九話　亀裂…&修復作戦

「ん…ここは…どこだろう」

「海鳴市の病院よ。」

「え？」

「おはよう。」

「祐希ちゃん！大丈夫なの？」

「とっさに防いだから軽い打撲と火傷だけよ…」

「良かったよ～！」

「良くない！アンタ丸一日寝たきりだったのよ！」

「嘘…」

「腕から大量に血を失ってもう少し発見が遅かったら死んでた…」

「……」

「アンタ私が倒れてから、制御できないほどの力を使ったらしいわね…」

「……」

「私のことはどうでもいい…
私が怒ってるのはそのことよ。」

「…ごめん。」

「謝らないで…許したくないから。」

「でも…ごめん。」

「美鈴や神楽のことを気にしてたの？」

「…うん。」

「で、さらに私がケガをして倒れたからキレた…」

「みたいなもんだね…」

「バカ…もう少し二人を信頼しなさいよ…あの二人ならわかってくれる…
精神的に辛かったんなら私に頼りなさいよ…」

「祐希ちゃんの負担になりなくなくて…」

「言ってくれない方が辛いわ…
私そんなに頼りない？」

「そんなことないよ！」

「私のことも信頼できないの？」

「違う！！」

「違わないから言えなかったんでしょ？」

「祐希ちゃん違うよ！！」

「その名前で呼ばないで…」

「っ！！」

「このあと二人が病院に来てくれるから聞いてみなさい…わかってくれてると思うから…じゃあね。」

「どこ…行くの？」

「帰るに決まってるじゃない…」

「一緒に…いてくれないの？」

「しばらくはアンタと話たくない…」

「そう…」

「二人によろしく。」

「うん…」

祐希ちゃんは病室から出ていってしまった…「ヴィヴィオ？起きてる？」

「なのはママ？起きてるよ。」

「入ってもいい？」

「うん。」

「腕…大丈夫？」

「腕？…痛っ！」

腕をあげようとすると激痛がはしる。

祐希ちゃんのことで頭がいっぱいで腕の痛みなんて吹き飛んでいた…

「何してるの！？折れてるんだよ？動かしちゃダメだよ！」

「折れてる？どうして？」

「サードモードの負担に耐えきれなかったんだよ…左腕はヒビですんでるけど右腕は完全に折れてる。」

「これじゃ祐希ちゃんに怒られるのも仕方ないや…」

「やっぱり喧嘩したんだね…」

「喧嘩って言うか、一方的に私が悪いんだけどね…」

「どうして喧嘩になっちゃたの？」

「私達のことってお友達には言えないでしょ？

そのことで学校のお友達と気まずくなっちゃって…そのことを引きずって任務で祐希ちゃんにケガさせて…最終的には暴走して…

あはは…全然ダメだね。」

「多分祐希奈は私達はほとんどどうでもよかったと思うよ。」
病室のドアが突然開く。「美鈴ちゃん！神楽ちゃん！」
「やっほー。そしてママさん今晩は。」
「すいませんけど、お邪魔しますね。」
「今晩は。私も聞かせてもらってもいいかな？」
「もちろんですよ。」
「美鈴ちゃん。さっきの話だけどどういうこと？」
「祐希奈はね悔しかったんだと思うよ。
私達のビミョーな反応で悩んでるヴィヴィオちゃんの力になりたいのに、なれなかった。
自分では元気にしてあげられなかった。
そして、ヴィヴィオちゃんが事故にあった…
私があの時力になれてれば事故にならなかったのにって１００％思ってるね。」「確かにヴィヴィオが眠っている間の祐希奈は悔しそうだったね。」
「そうなの？」
「うん。壁を殴り付けてたし分かりやすかったよ。」
「手が痛そう…」
「それで、今日ヴィヴィオちゃんが起きて嬉しかったんですけど、

一言だけ言おうと思ったんでしょうね。でも、悔しくてイライラがたまってて歯止めが効かなくなったんでしょう。」

「祐希奈は猪突猛進だからね～。で、八つ当たりをしてキレて帰ったと。多分今ごろ家で激しく後悔してるね。私バカだ…ってね。」

「じゃあすぐに仲直りできるかな？」

「それはヴィヴィオちゃん次第だね。
祐希奈は言い出すと頑固だからね～。言っちゃったからには貫き通すと思うよ？」

「あはは。わかるよ。じゃ頑張って仲直りしないとね。」

「私達も協力するし大丈～夫！」

「明日学校これそう？」

（シャマルさんに頼んで治してもらうからいいよ。）

（なんで昨日はダメだったの？）

（シャマルさんも出てたからね。昨日のうちに間に合わなかったんだ。）

（ふーん。とにかくありがとうママ。）

「大丈夫だよ。行けると思う。」

「じゃ、明日の放課後に決行ね。」

「朝じゃないの？」

「朝だと逃げられますからね。」

「あ、そっか。じゃあ明日の放課後。」

「うん。そろそろ帰るね。」

「ちょっと待って。」

「「何？」」

「何も教えなくてもいいの？」

「聞いたら答えてくれる？」

「それは…」

「任務とか暴走とか人に言えることなんですか？」

「無理…かな。」

「ならいいよ。人には言えないことの、一つや、二つや、三つや、四つや、五つや、六つ。誰にでもあるよ。」

「それは多いよ…許して三つだよ…」

「私はまだまだたくさんあるよ～？」

「私もです。」

「私は数えられないなぁ…」

「三人とも隠しすぎだよ…」

「あははは。まぁ隠し事ぐらいで嫌いになったりはしないから安心してよ。」

「そうです。今度の早退の時には遠慮なく言ってください。」

「二人とも…ありがとう。」

「どういたしまして。じゃあ～ね♪」

「さようならです。」

「美鈴ちゃん神楽ちゃんバイバイ。」

ガチャン

「いい友達だね。」

「うん。最高の友達だよ！」「祐希奈ヴィヴィオさんは大丈夫だったのかい？」

「私…バカだ…」

そのころ祐希奈は本当に美鈴の思った通りのセリフを言っていた。

「どうしたんだ?喧嘩でもしたのか?」

「私が一方的にキレただけよ…二人を信じろとか何をいってるんだろう…あの子が信じてないはずないのに…
落ち込んでたヴィヴィオの力になれなかった…
そのことで八つ当たりして最低だ…
力になりたいってそれだけで良かったのに…
名前呼ばないでとか話たくないとかまで言っちゃって…きっと怒ってる…仲直り出来なかったらどうしよう…」

「ヴィヴィオさんなら一言謝れば許してくれると思うよ。」

「もし、許してくれなかったら?そんなことになったら私立ち直れないかも…」

「何度でも謝ればいい。」

「父さんは私に何回も奈落に落ちろと?」

「おそらく一度も落ちないよ。」

「なんでわかるの?」

「祐希奈とヴィヴィオさんだからね。」

「理由になってない!」

「明日になればわかるさ。もう遅いから寝なさい」

「わかった…お休み。」

「祐希奈…」

「何？」

「お前のペンダントを今日だけかしてくれないか？」

「アシェルを？どうするの？」

「ちょっと、話してみたくてね。」

「まぁ…いいけど。はい。」

「ありがとう。引き留めて悪かったね。」

「今日だけだよ？」

「ああ。」

私は自分の部屋へと向かった。「どういうつもりでしょうか？」

「本当に話をしたいだけなんだ。」

「内容によります。魔法世界のことに関してはお答えできません。」

「大丈夫。それは聞くつもりはないよ。」

「では何でしょうか？」

「一之瀬奈央という人物を知っているかい？」

「…知っています。」

「そうか…ありがとうそれだけだよ。」

「祐…マスターはやはり奈央様と遊びたかったんでしょうか？」

「そうみたいだね。君は一緒に昔の話を聞いたのだろう？
その気持ちは君の方がわかるはずだよ。」

「そうですね。おかしなことを聞きました。申し訳ございません。」

「いいさ。何でも聞いてくれ。」

「では、奈央様がお仕事で出られていたころのマスターはどうでしたか？」

「あの頃は大変だったよ。奈央がいないとわかると泣き出してね…なかなか泣き止んでくれないんだ…泣き止むころにはもう遅刻ギリギリの時間でね自転車に祐希奈をのせて学校まで全速力さ。」

「それはご苦労様でした。」

「ありがとう。」

「最後に一つ聞いてもいいですか？」

「なんだい？」

「なぜ私をご自分ではなくマスターに渡されたのですか？」

「なんとなく君には奈央が感じられてね…君を渡せば祐希奈を復讐闇の中から助けられる気がしたんだよ…

奈央と一緒の時の祐希奈はいつも笑顔だったからね…まぁ、君が魔法の力を持ってるなんてことはまったくの予想外だったけどね。」

「そうですか…やはりあなたはいい父親のようですね。これからも、祐希奈をよろしくお願いします。」

「…ああ、安心してくれ。

それと今回の喧嘩なんだが出来れば力を貸してやって欲しいんだが君も知ってると思うが祐希奈は頑固だからね。

背中を押してあげてほしい。」

「まぁ、今回は援助をさせてもらいます。心配ですから。」

「助かるよ。じゃあ寝ようか。私の隣なんかで申し訳ないが。」

「いえ。」

「お休み。」

「はい。お休みなさい。」

そうして私は眠りについた。

「まったく、この人はきづいてるのかしらね。お休みなさい…雅樹さん。」

名前を呼ばれた気がしたが気のせいだろう…

次回に続く。

第十九話　亀裂…&修復作戦（後書き）

皆さん今まで鳴海して勘違いしていてすいません！　なるべく急いで修正したいと思います。間違いを言って下さったミカンさんありがとうございます。

第二十話　芽生える友情（前書き）

私は祐希ちゃんと喧嘩をしてしまった。でも、美鈴ちゃん、神楽ちゃんの協力もあり、なんとかなりそうです。　では魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります。

第二十話　芽生える友情

「ん、よし、もう大丈夫よ。」

「ありがとうシャマル先生。」

「どういたしまして。でも、これからは、無茶はしないでね？」

「ごめんなさい…それは無理です。
無茶をしないとカナン君は助けられませんから。」

「…じゃあせめてサードモードは完成までは絶対使用禁止ね？」

「はい。そのことは守ります。」

「じゃあいいわ。自宅療養ってことにして、退院手続きもしてあるから学校に行ってらっしゃい。」

「あの、八神部隊長はなんて言われてましたか？」

「はやてちゃん怒ってたわよ。」

「やっぱり…」

「でも、反省してるみたいだし、私からも怒らないように言っておきますから」

「ありがとうございます！行ってきます。」

「祐希奈ちゃんと仲直りできるといいわね。」

「できるよう頑張ります！」

病院から学校へと走り出した。

「はぁ…なんで朝日は昇るんだろう…」

「中学一年生がいうセリフじゃないよ。」

「まったくです。」

「だって、ヴィヴィオに会うの気まずいのよ…」

「マスターが自身で巻いた種でしょう？」

「まぁ、そうだけど…」

「きっと仲直りできるさ。祐希奈が意地を張らなければね。」

「残念ながらそれは無理かと思われます。」

「確かにね。祐希奈だからね。」

「マスターですからね。」

「なんか？仲良くなってない？」

「まぁね。保護者としての交友というところかな？」

「まぁ…そうですね。マスターはほっとくと何をするかわかりませんから。」

「父さんはわかるけどアシェルまで…デバイスに子供扱いされる私って…」

「なら、もう少し落ち着きを持つことだね。」

「私よりヴィヴィオの方が落ち着きないわよ…」

「どうでしょう？
その落ち着きのない子に泣きついてたのは誰ですか？」

「う…あれは…その…」

「ははは！祐希奈の負けだね。」

「うるさい！もう学校に行くわ！」

「行ってらっしゃい。意地を張るんじゃないよ？」

「ふん！」
私は恥ずかしくなりアシェルを急いで首にかけ、家から逃げ出すように走り出した。

「おはよう。美鈴ちゃん。神楽ちゃん。」

「あ、ヴィヴィオちゃんおはよー。」

「おはようございます。」

「さて、今日の放課後よ…」

「どうするの？」

「「待ち伏せ。」」

「なんで？そこまでしなくても。」

「ヴィヴィオちゃん、甘いわ。おそらく祐希奈は授業が終わると同時に帰り支度を始めるはず…」

「美鈴ちゃんと私は、校門で待ち伏せをして逃げ道を潰します。」

「ヴィヴィオちゃんはとりあえず祐希奈に話しかけてみて。多分逃げるけど…そのあとヴィヴィオちゃんが祐希奈を追跡して校門まで来たら…」

「「捕獲…」」

「…捕獲って祐希ちゃん人間だよ…」

「ヴィヴィオちゃんアイツは野獣よ…
このクラスの男子が束になってかかっても勝てなかったでしょ？」

「なんであんなことになったのかは分かんないけどね。」

（（それはあなたが可愛いせいよ…））
とは言いたくなるが我慢する…

「とりあえず祐希奈相手に手を抜こうものなら…」

「「…殺られる」」

「いや、さすがにそれはないと思うよ？…」

「捕獲する瞬間を見れば分かるわよ…」

「命懸けです…」

「…ま、まぁ頑張ってね？」

ガラガラ

「…」

「うっわー祐希奈、暗ーい…」

「相当悔やんでますね…」

「今でも大丈夫そうじゃない？」

「多分無理だとは思うけど言ってみれば？」

「うん。」

「あの…祐希ちゃんおはよう。」

「…その名前で呼ぶなって言ったでしょ？」

「…うん。」

「アンタと話す気ないわよ…」

「…わかった。」

「ダメだった…」

「ほらね？
言っちゃったからには意地を張り通すわね…」

「頑固ですね～」

「でも、多分また落ち込んでるわね。」

「よくそれだけわかるね。」

「小学校からの付き合いだからね。」

「へぇ～いいな～。」

「これはこれで大変なこともたくさんあるわよ…」

そこでチャイムがなり先生が登場した。

「ほら席について。ホームルーム始めるわよ。」一時間目が始まる少し前…

「せっかく話しかけてきてくれたのにマスターは自分で一つチャンス潰しましたね。」

「…なんで私ってこうなんだろう…
いきなり意地張ってるし…」

「リラックスですよ。」

「そんなもんでなんとかなる性格なら苦労しないわよ…」

「ですね。」

「あっさり納得されるとムカつくんだけど」

「仕方ないです。事実ですから。」

「はぁ…」

「ほら、一時間目が始まりますよ。」

「帰りたい…」四時間目の終わり、

「ヴィヴィオさんも勉強についてこれてるし、次の五時間目は抜き打ちテストを行います。」

「「「ぎゃ～！」」」

男子生徒と祐希ちゃんが叫んでいた。

昼休みになった。

「祐希奈死にそうな顔してるわよ。」

「私達がヴィヴィオちゃんと話してるから近づけないみたいです。」

「なんで、あんな顔してるのかな…」

「祐希奈は英語以外の勉強が出来ないからね。こういう時は私が教えてたのよ。」

「へぇ～何で英語は出来るの？」

「ヴィヴィオちゃん。アイツハーフだってこと忘れてる？」

「あ…」

「小さい時は普段から英語で生活してたらしいからね。英語だけは私より出来るのよ。」

「でも、今回のテストは数学…専門外ですね。」

「そ、だからあの顔なの。」

「祐希ちゃんに教えてあげないの？」

「いい薬よ。」

「美鈴ちゃんそれは可哀想なのでは？」

「この間殴られた仕返しもあるし♪」

「「うわぁ…」」

「よし。テストを始めるわよ…始め！」

空欄をすべて埋めたあと祐希ちゃんのほうをみると机から大量の水？違った。涙が流れ落ちていた…

「いい気味だったわね♪いや～気分爽快♪」

「美鈴ちゃんってもしかして…」

「祐希奈をいじめるのはたのしいわ～♪」

「「やっぱり…」」　そしてついに六時間目が終了した。

「マスター結局謝らないのですか？」

「今日はやめるわ…明日にする…」

「後にすればするほど厄介ですよ？」

「明日よ！明日。」

素早く片付けを始める。

「じゃ、作戦通りよろしく。」

「では行きます。」

「幸運を祈るよ。」

「任せなさい。祐希奈ハンターの私にかかれば楽勝よ。」

「そうです！」

「私ツッコミキャラじゃないしスルーするね～」

「しくしく…」

「残念です…」

そう言って二人は教室からさった…

「さて、私も頑張ろ！」

「あの祐希ちゃんお話があるんだけど…」

「私はないわ…じゃあね。」

予定通り祐希ちゃんは走り出した。

「待ってよ祐希ちゃん！」

追跡開始。

「ついて来る！」

「素直に謝れば良いのでは？」

「なんか負けたみたいで嫌…」

「では、相手の話を聞いてあげれば良いのでは？」

「それをあっさり聞き入れたら、昨日あんだけ言っといて情けないわ…1日は我慢する。」

「意地を張らないように言われましたよね？」

「無理！」

「やはり子供ですね。」

「…うるさいわよ！」

「まったく困った子ね」

「なんか言った？」

「いえ…」

「よし。このまま逃げ切るわよ！」

「どうぞご勝手に。」

校門を通り抜けようとした瞬間…

「ふはははは！祐希奈かかったわね！」

「祐希奈ゲッ〇です。」

「ん？わー！」
頭の上からネットが降ってきた！
「うわぁ、どこからもってきたんだろ…」
校門のところでは祐希ちゃんが捕まっていた。
いや、まだ暴れている…
「キシャーーー！！」
「この！暴れるな！」
「諦めるです！」
「シャーーー！！」
「本当に野獣だね…」
「だから言ったでしょ！？」
「キシャーーー！！」
「祐希ちゃん！！」
「……何よ。」
「私はね。祐希ちゃんを信頼してなかったわけじゃないよ。」
「じゃあもう一回聞くけどなんで言わなかったのよ…」

「それは…祐希ちゃんに迷惑をかけたくなかったんだよ…」

「やっぱり私は、そんなことも言えないほど頼りにならないのね…」

「違うよ！！

私は、まだ友達とかママにも頼ったことなくて…

頼っていいのかも分からなくて…

こんな私を見せたら祐希ちゃんに嫌われるんじゃないかって不安で…」

「…」

そうだ…この子はこういう子だ…

いつも笑っているけれどたくさんの不安を溜め込んで…

誰にも悲しい顔をしてほしくなくて母親にさえ吐き出すこともせず…

辛いのにそれでも笑って…

カナンとはまた違う悲しい子…

私が支えになりたい…いや…なる！

「こんなことぐらいで…嫌いになるわけないじゃない…」

「え？」

「アンタがどれだけ暗い部分をさらけ出しても、私は…

私だけは嫌いにはならない…」

「祐希ちゃん…」

「むしろ頼ってくれたほうが好きになるわ。だから辛くなったら私にいいなさい…いくらでもいいわ。何でもいい。嫌いにはならない。」

「うん！うん！ごめんなさい！ありがとう…」

「ちょーと間違いがあるよ～？」

「え？」

「私だけじゃなくて～」

「私達の間違いです♪」

「美鈴ちゃん！神楽ちゃん！ありがとう…」

「お取り込み中悪いんだけど…」

「「「へ？」」」

「そろそろいいですか？」

校門前に立っていた二人の人物…

「アリサさん！すずかさん！」

「「「誰？」」」

「ママの親友だよ。」

「そ、あたしがアリサ・バニングスで、」

「私は月村すずかです。」

「どうしてここに？」

「アンタ達の仲直りパーティーを開くことになってたんだけどね。」

「残念ながらジュースとかがなくてね。」

「買い出しついでにお二人を連れてくることにしたんですよ。」

「わぁ！私達のためにですか！？」

「もともとは再会を祝してのパーティーだったんだけど、アンタ達が喧嘩してるって聞いたからね。変更したってわけ。」

「お友達も来ますか？」

「「いいんですか！？」」

「もちろんですよ。」

「「わーい！」」

「んで、お友達二人は先にパーティー会場ってもあたしの家だけど、向かってちょうだい。」

「準備が遅れてるので手伝って欲しいんです。」

「でも、私達アリサさん達のお家知らないです。」
「心配ないわ。アンタ達」
「「はっ！」」
どこからともなく黒いスーツ姿の人が登場…
「この子達をあたしの家に連れて行って。」
「「了解しました。」」
キッ
さらにリムジン登場…
「さ、お二人はこちらへ…」
「凄ーい！じゃ先に行ってるね。」
「さようなら。」
二人をのせたリムジンは行ってしまった。
「それで私達は何をすればいいわけ？」
祐希ちゃんがようやく口を聞いた。
「だから、コンビニまで買い出しよ。」
「金持ちのくせに歩いて？…」
「金持ちでも歩いていきたいときはあるのよ。」

バチバチバチ

「なんか睨みあってますね～。」

「雰囲気が似てますからね～。」

ほんわかしている天然二人。

「ま、とりあえずコンビニに行くわよ。」

「分かりました。」

「仕方ないわね。」

こうして珍しい組み合わせでいざコンビニへ！

「で、ヴィヴィオはわかるけど、アンタの名前は？」

「アンタに教える必要はない。」

「生意気な子ね。ヴィヴィオ友達を選びなさい。」

「なのはさんもこんな女と友達なんて見る目ないわね～。」

「なんですって？アンタ私とやる気？」

喧嘩腰のアリサさん

「上等…」

買うつもりの祐希ちゃん。

「長くなりそうですね。止めましょうか？」

「危ないし、やめておこうよ。アリサちゃんも大人だし大丈夫。」

「いい気にならないことね。クソガキ…」

大人なアリサさんキレてる気がしますが…

「こんなクソガキにキレてるアンタは大人としてダメな大人ね…」

お～い祐希ちゃ～ん火に油注がないで～

「ガキだからって容赦しないわよ…」

「容赦してたら絶対勝てないわよ?」

「「ぶっ飛ばす!!」」

「「きゃあああ!」」

しかし悲鳴が響きそちらを向いた。ヴィヴィオとすずかさんが時代遅れのチンピラ共五人に腕を捕まれていた。

「そんなに怖がんなくてもいいじゃんか。俺達と遊ぼうぜ?」

「放してください!警察に訴えますよ!」

「怖い怖い。でもどうやって?君いまの状況わかって言ってる?」

チンピラ共が連れ去ろうとする。

「…アリサさんだっけ?勝負、後回しでいい?…」

「奇遇ね。私も同じこと言おうとしたのよ…」

「ありがとね…」

「どう致しまして…」

二人から殺気が発せられる。

「私のヴィヴィオを」

「あたしのすずかを」

「「汚い手で触ってんじゃねーよ!!」」

鬼神降臨…

「「おらぁぁぁ!」」

背後から飛び蹴り。

外側にいた二人轟沈…

「なんだこいつら!?やっちまえ!」

男の一人がアリサに殴りかかる。

パシッ

「うっ!」

「…歯ぁ食い縛れや…」

ドゴッ

顔面を殴られ吹き飛ぶ。悲鳴もあげられず十メートルほどとんだのち動かなくなった。

一方祐希奈の方にも蹴りが向かう。

ガスッ

まともに祐希奈の頭に入った。

「ふん！調子に乗るからだ！」

勝利を確信したチンピラ。

ガシッ

「大当たり～…」

「へ？」

ブンブンブン！

片手で足をもたれ大回転。

「…一名様、空の旅にごあんな～い…」

「ぎゃあああああ！！」

放り投げられ吹っ飛ぶ…

近くにあった自販機に突っ込み沈黙…

「あとは…」

「あんただけね…」

ユラリ…

「ひっひぃ！こいつら返すから見逃してくれ。」

ヴィヴィオ、すずかを放し土下座。

「顔をあげなさい…」

「は、はい！…がほぉ！」

バキャ！

二人に頭を蹴りあげられ宙に浮く

「「ぶっ飛べ！」」

ドゴッ！！

みぞおちに二人の鉄拳が入り吹き飛ぶチンピラ。ゆうに五十メートルは吹き飛んだ…

「「ふう…」」

「アンタやるわね。」

「そっちこそ。」

二人して笑い合う。

「一之瀬祐希奈よ。祐希奈でいいわ。」

「じゃあ私はアリサでいいわよ。」

年齢差を越えた友情が芽生えた瞬間だった。

ちなみにヴィヴィオとすずかは二人のあまりの恐怖に気絶していた…

第二十話　芽生える友情（後書き）

アリサ&すずか登場。アリサにいたっては超短気キャラになってしまいましたが楽しんでいただけましたか？現在１５話を編集しなおしているのでちょっと更新が遅れるかもですがなるべく頑張ります。ではまた次回

第二十一話　仲直りパーティー（前書き）

アリサと私の間に鉄より固いの友情が結ばれたあとの話よ。楽しんで読みなさい。

ぁ祐希ちゃん可哀想…気になる方はさっそく読んでください。では

魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります

第二十一話　仲直りパーティー

「さて、ジュースも買ったし帰りますか。」
アリサさんの手には大量のジュースとお菓子がもたれていた。
「あの～アリサさん。私達そんなに飲めないし、食べられませんよ？」
「ん？あぁ、これは私が食べるために買ったのよ。」
「アリサさんが？」
「うん。私以外とジュースって好きなのよね～。いくら飲んでも、気分わるくならないし、美味しいし。」
「アリサって以外と味覚が子供っぽいのね♪」
「祐希ちゃん…ちょっとは遠慮して言おうよ…」
「いいわよ。こんだけスッパリ言われると逆にすっきりするわ。」
「でしょ？」
「調子に乗らないの。」
「昔のアリサちゃんもこんな感じだったんだよ？」
「そうなの？」

「歯に衣きせぬ言い方で一体何人の精神を潰してきたことか…」

「祐希ちゃんの場合は言い方もそうだけど、男子限定で殴り飛ばしたりしたよね。」

「あれは、先に言っといたのに聞かなかった男子が悪いのよ。」

「言うこと聞かない奴には鉄拳制裁それで正解よ。」

「さすが私の友アリサね。」

「「よし!!」」

お互いに親指を立てて笑い合う二人…

「意味わかんないんだけど…」

「アリサちゃんが、バカキャラになってるよ。」

「とまぁ、祐希奈と遊んでるうちについた見たいね。」

「早!!明らかに時間に無理があるわよ!!」

「小説って便利ねぇ♪」

「……」

「えと、とりあえず読者の方々すいません。気にしないでください。アリサさんの妄言です。」

「そのセリフ言ってる時点でおかしいわよ…」

「とにかく本編に戻ります！」

「あはは～楽しんで読んでね～。」

「祐希ちゃん！！」

「はいはい。」

「…えっと、ねぇアリサ。ここはどこのリゾートホテルなの？」

「は？何言ってんの？私の家に決まってるじゃない。」

「まぁ、祐希ちゃんの反応もわかるよ。
私も最初家だとは思わなかったし。」

「家なわけないでしょ！プールがあるのよ！？」

「だけど家なんだよ…」

「はぁ！？そんな家テレビでしか見たことないわよ！」

「何してるの？おいてくわよ？」

「ほら、祐希ちゃん行こ！」

「…絶対信じないー！」

「ほら、こっちよ。」

「あれ？入り口は向こうですよね？」

「みんなはもう準備できてるけど、あたし達はまだ準備できてないからね。」

「準備？何かいるの？」

「私達がパーティードレスに着替えるのよ。」

「はい？どういうことですか？」

「どういうことも何もパーティードレスに着替えるだけよ。ちなみにヴィヴィオのドレスはミッドチルダで着たあのワンピースをドレスに再現したからそれに着替えなさい。」

「…アリサさんがなんでそのことを？」

「はやてにビデオをもらったのよ♪」

「部隊長…今だけ恨んでもいいですか…」

「ま、私はそんなものは無縁だったし関係ないわよね。」

「ちゃんと祐希奈のもあるわよ。」

「…何で？」

「大急ぎで作らせたからよ。」

「…ドレスなんか絶対！着ないからね！」
そう言って祐希ちゃんは逃げた。

「アンタ達」

「「はっ！」」
黒スーツの男性再び…ていうか何処にいるんだろう…

「今逃げた奴を捕まえて。」

「「承知しました！」」

しばらく後…

「離しなさいよ！私は絶対嫌よ！」

「祐希奈、観念しなさい？アンタがこの敷地に入った時点で逃げられはしないのよ…」

「ひっ！嫌だー！」

「メイドさん！やっちゃいなさい！」

「「はい！」」

「わっ！」

「嫌だー！」

担ぎ上げられ部屋に連れていかれた。

「ヴィヴィオ様のお召し物はこちらになります。」

「見事に再現されてるよ…」

メイドさんの手には本当にあのワンピースをドレスにした物が納まっていた…

「特注品ですからね。頑張りました。」

「ってメイドさんの手作りなんですか?」

「はい♪うまく出来てますでしょうか?」

「悲しいくらい完璧ですよ…」

「それは良かったです。ではお着替えをさせて頂きます。」

「いいです!自分で着替えます!」

「そうはいきません。アリサ様のご命令ですから。」

「…どうしても?」

「はい♪」

「わかりました…お願いします。」

「お任せください。」

人に着替えさせてもらうのはかなり恥ずかしかった…

一方祐希奈は…

「嫌…嫌よ…来ないで！」

「さぁ、祐希奈様観念してください。祐希奈様のお召し物はこちらになります。」

メイドさんの手には白を基調としたドレス…露出が高過ぎる…肩から背中にかけて大きく開いている…

「無理…私には似合わないって…助けて！」

「さぁ…お着替えの時間ですよー。」

ゆっくりとメイドさんが近づいてくる…

「きゃあああああ！」

「…」

「…」

「二人ともめちゃくちゃ可愛いわよ♪」

慣れているのか自分もドレスなのに平然としているアリサさんとすずかさん。

「ほんとだ。連れて帰りたいね。」

お願いだからそれだけは勘弁して欲しい…

「祐希奈も黙ってれば美少女よ。」

「余計なお世話よ！」

「はぁ…」

「さ、準備万端行くわよ。」

「みんなの反応が楽しみ。」

「ヴィヴィオ…私逃げていいかな…」

「敷地内じゃ逃げ切れないよ…諦めよう？」

「「はぁ…」」

「おまたせ！二人の準備できたわよ。」

「二人共可愛いよぉ～？」

「楽しみだね。ね、フェイトちゃん。」

「うん。」

「アリサちゃんヴィヴィオのビデオ役にたったやろか？」

「バッチリよ。完璧に再現してみせたわ。」

「さすがアリサちゃんや！信じとったよ！」

「「アリサさん！」」

「ん？ああ、ヴィヴィオと祐希奈の友達の子よね。」

「美鈴です！」

「神楽です！」

「で、その二人がどうしたの？」

「あの、このドレス本当にもらってもいいんですか！？」

「あぁ、うん。もちろんよ。安物だし。」

「良かった～ちなみにどれくらいのお値段なんですか？」

「二人共、五百万ずつってとこかしらね…」

「「ご、五百！？」」

「ね？安物でしょ？」

「「一生大事にさせて頂きます！！」」

「もっと良いものもあるわよ？後であげましょうか？」

「け、結構です！」

「あ、そろそろ始まりそうね。」

「あの、ヴィヴィオちゃんと祐希奈ちゃんのドレスのお値段は？」

「確か二千万ぐらいだった気がするけど…」

「お金持ちって凄いやぁ…」

二人はお金の桁の違いに開いた口が塞がらなかった…

「「はぁ…」」

その頃ヴィヴィオと祐希奈はため息をついていた。

「まさか12年の人生でこんなことをもう二回も体験するなんて思わなかったよ。」

「私はこれからも体験するとは思ってなかったわよ…」

上から声響いてくる。ここは、パーティー会場のど真ん中の真下…もうすぐ床が上に上がってお披露目タイム…なわけである。

「なんでお金持ちってこんな設備を作りたがるんだろう…」

「暇だからじゃない？一般市民には理解できないわ…」

「レディース&エリオくーん。メインイベントの時間が近づいてまいりました！」

アリサさんノリノリだなぁ…ってエリオ以外はあと全部レディ…エリオ可哀想～

「それでは二人の妖精と天使に出てきてもらいましょう！」

確かに私のデバイスはフェアリーだし、祐希ちゃんは稀少技能が天使みたいだけど…なんでそこまでバレてるんだろう…

「ヴィヴィオ&祐希奈のお二人です！どうぞ！」

床が上昇を始める。あぁ…もうどうでもいいや。

「「「わぁ～～！！！」」」

会場に響く歓声…

「祐希奈可愛いよー！」

「ヴィヴィオちゃんも可愛いー！」

美鈴ちゃんと神楽ちゃんの声がする。

「「ヴィヴィオ、祐希奈似合ってるよー！」」

ママ達二人の声もする。

「はい。マイク♪」

アリサさんからマイクが渡される。

「またスピーチするんですか？」

「ふ…ふふふ…もういいわ！ここまで来たらやってやるわ！ヴィヴィオ貸しなさい！」

「う、うん…」

「やぁ！みんなノってるかーい！？」

あぁ、祐希ちゃんが壊れた…

「「「いえーーい！」」」

「いい返事ね！今日は仲直りパーティーに集まってくれてありがとー！」

「「「わぁーーー！！！」」」

「喧嘩しちゃった私とヴィヴィオだけど、これは試練だったのよ…そして試練を乗り越えた私とヴィヴィオを仲を邪魔できる存在などいないわ！！」

「「「ひゅーひゅー」」」

「だからみんな安心して今日は弾けちゃってー！！」

「りょーかい！！」

「それじゃあみんな一緒に言ってくれるかな！？」

「「「いい○もーー！！」」」

そのネタはいろいろ危ないよ祐希ちゃん…

「せーの！！」

「「「かんぱーい！！」」」

「よっしゃ～！！みんな食べなさい！飲みなさい！騒ぎなさい！今日はオールで行くわよー！！」

「「「お～！！」」」

あぁ祐希ちゃんが痛い…ていうか八神部隊長ノリノリですが仕事しなくていいんでしょうか…

「ほらほらヴィヴィオ飲みなさい！」

「祐希ちゃん…強く生きてね…」

「は？何言ってんの？私はいつでも元気いっぱいよ！さ、飲みなさい！」

可哀想な祐希ちゃん…

「うん。」

グビッ

「あ、ヴィヴィオそれお酒だよ…」

フェイトママ言うのが遅いよ…

「にゃはははは～。ヴィヴィオ～今日だけは許してあげるよ～。」

既に酔っているなのはママ。

「はぁ…でもなんか気持ちいいや。」

「でしょ？もっと飲みなさいよ。」

「うん！今日だけね。」

オマケストーリー

ヴィヴィオ以外のフォワードメンバーは二日酔いでダウン…

ヴィヴィオが酒豪と言うことが判明した次の日の話

「みんな大丈夫？」

「うぅ～なんでアンタだけ…不公平よ…」

「エリオ君。頭がぐるぐるするよ～」

「キャロ…助けてあげたいけど僕も無理だ…」

「ティアー昨日私なにしてたかわかる～？」

「暑いとか言ってドレスぬぎかけてたとこまでは覚えてるわ…」

「私、脱いだのかな～？」

「大丈夫ですよ。私が止めましたから。」

「ありがとう～…」

「にゃはは…ヴィヴィオにお世話してもらうことになるなんてね。」

「ママ達は飲み過ぎだよ…体に悪いよ？」

「ごめん。でも私はヴィヴィオにお世話してもらって幸せだよ…」

「こんなことで、幸せになられても困るよ…」

「あ～う～」

「ギンガさーん？大丈夫ですか？」
「私はそんなにだけど、はやてさんが…」
「頭がガンガンする～死ぬわ～」
「はやて…大丈夫かぁ～？」
「私の治癒魔法でもこれは無理ね…」
「主はやて…お気を確かに」
「お粥作ってくるから皆さん大人しく待っててくださいね？」
「「「はーい…」」」
「皆様は大丈夫ですか？」
メイドさんの一人が話しかけてくる。
「残念ながら大丈夫じゃないっぽいです。アリサさんは？」
「聞かない方がいいです…」
「そうですか…お粥を作りたいんですけど、キッチンを借りてもいいですか？」
「私もお手伝いします。」
「すいません。ありがとうございます。」
メイドさんに手伝ってもらいいろいろな種類のお粥を作り持っていった…実は初めて作ったんだけど大丈夫だよね。お粥だし。

「皆さんもって来ましたよ～。どうぞ！」

「おいしそう…」

「では、召し上がってください。」

「「「いただきまーす。」」」

パクっ…

「「「？？？」」」

「どうしたんですか？」

「いや、おいしんだけどピザみたいな味が…」

「私味噌ラーメン…」

「僕はこれは…エビチリ？」

「ねぇ、フェアリー…」祐希ちゃんが話しかける

「何でしょう？」

「これってもしかして…」

「不思議体験ができたでしょう？まさかお粥で発動するとは予想外でしたが…」

「ヴィヴィオ…アンタ一種の天才だわ…」

「あはははは…ごめんなさい」

「まぁ、美味しいから楽しんで食べられるわ。」

「それは良かったよ。」

「普通の状態ならね…」

「「「うん…」」」

「へ？」

「今の私達には無理だわ…」

「「「うん…」」」

バタッ

「わぁーーみんな大丈夫!?メイドさーん!」

結局世話にドタバタして仕事どころではなかった…また次回

第二十一話　仲直りパーティー（後書き）

あはは…スカリエッティとカナンはどこにいったんでしょうまったくストーリーが進んでおりません。　友達からもお前って進める時早いくせに、進まないと全然だな…と言われてきました…ほんとに極端ですね～すいません。　あ、この作品を読んでる方でまだＳｉｌｖｅｒ　ｆｒｉｅｎｄやＳＴＳ　ＥＸを読んでないかたがいたら是非オススメします。面白いと同時に多分、僕の作品が悲しく見えますよ（笑）…（悲）

第二十二話　祐希奈の成長（前書き）

今回はタイトル通り私が中心。二日酔いから回復したあとの話よ。
楽しんで読んでね。
じゃあ、魔法少女リリカルヴィヴィオ始まるわよ。

第二十二話　祐希奈の成長

「ん…はぁぁあ…あれ？みんなまだ寝てる…アシェル今何時かわかる？」

「現在時刻は5時丁度です。」

「うわっめちゃくちゃ早起きしちゃった…」

隣ではヴィヴィオを含むフォワードメンバーがぐっすり眠っている。

なぜみんなと一緒なのかと言うと、結局昨日は二日酔いが回復せず、かつヴィヴィオの珍味お粥を食べたせいで、全員ダウンし、アリサの家にもう一泊とめてもらった。ちなみに今日は日曜日…再び明日から学校…正直めんどい。

「あれ？シグナムさんは？」

「シグナム副隊長ならマスターより早くに起きて出ていかれました。」

「ふ～を。目が覚めちゃったし散歩ついでに探しに行こうかな…」

「それがいいでしょう。」

「着替えは…と」

「昨日、貸してもらったパジャマとパーティードレスしかありませんが？」

「そ、ならこのままでいっか。」

「あえてドレスを着られてみたらどうですか？」

「もう二度と着たくないわよ…」

「残念です。」

「バカなこと言ってないで行くわよ。」

「失礼しました。」

こうして、私はシグナムさんを探しに散歩に出かけた。

「ふん！ふん！」

剣が風を切る音が誰もいない庭に響く。

「レヴァンティン…今何度目の振りかわかるか？」

「ｔｗｏｔｈｏｕｓａｎｄ」

「そうか…やはり昨日しなかった分、鈍っているな…この程度で腕が少し重い…」

「いやいや、二千回も振れば少しは疲れますって。」

「祐希奈か…どうした？こんな朝早い時間に…」

「たまたま目が覚めちゃって。で、シグナムさんがいないから散歩がてら探してたのよ。」

「そうか。」

「で、何で素振りなんてしてるの？」

「昨日は1日だらけてしまったからな…。感覚を取り戻すために素振りをしていただけだ。」

「ふ～ん…ねぇ、さっさと感覚戻したくない？」

「それはもちろんそうだが…」

「じゃあさ、私と模擬戦やらない？もし、迷惑がかかったらアリサに私から謝っとくしさ。」

「お前と模擬戦か…そういえばまだ本気でやったことはなかったな。」

「私がどれくらい成長してるかわかるし、感覚も取り戻せる…悪くない話でしょ？」

「ふ…確かにな。いいだろう。この勝負受けて立つ。」

「私が勝ったらシグナムさんに正式に弟子入りってことでいいわよね？」

「ほぅ…お前が私に勝つつもりか？」

「私は、カナンを助けないといけないからね。

もっと強くならないと行けないのよ…
シグナムさんに弟子入りして鍛えれば、確実に強くなれる…
だから勝つ！」

「なるほどな…だが簡単には行かないぞ。…我はヴォルケンリッターが一人。剣の騎士シグナム！推して参る！」
シグナムさんはレヴァンティンを構える…さすがに凄い気迫だ…でも負けられない！

「さぁ…行くわよ。アシェル！ブレード展開！」

「了解！Ｂｌａｄｅ　ｍｏｄｅ！」
「うぉぉ！」

「はぁぁ！」
ギン！

刃同士がぶつかり合い火花が散る。

「がら空きだぞ！」
シグナムの剣が祐希奈を左側面から襲う。

「うぉぉぉ！！」
祐希奈は左腕を上げプロテクションを張り突っ込む。

シグナムの刃は阻まれ通らない！
「何！？」

「くらぇぇぇ！！」

シグナムの頭を狙い全力の突きを放つ。

「ちっ！」

シグナムは首を反らしかわす。

一端二人に距離が開く…

「なかなかやるものだな。最初とは見違えたぞ。」

最初のころは斬撃にすら反応がギリギリだったものが防ぎ攻撃を加えられるまでに成長している。

「余裕かましてるとすぐに負けるわよ？

まぁ時間が長いか短いかが変わるだけでどのみち私が勝つんだけどね。」

「今のは小手調べだ…次に行くぞ。」

「あれで全力だったら弟子入りなんてしないわよ。」

「確かにな…」

同時に走り込む！

「は！」

「そんなの効かない！」

ガン！

祐希奈は再びプロテクションで防御する。

「防御に頼っていては絶対に勝てない…」

「破ってからいいなさいよ。」

「そのつもりだ！」

シグナムの体重の乗った一撃がプロテクションに激突する。

「おおおお！」

「ぐっ…アシェル！」

バチバチ！

なんとか防いだ祐希奈…だが、

「まだだぞ…」

「っ！」

再び斬撃がくる。

「は！は！…」

「う…ぐ…」

重い斬撃の連続攻撃に次第に祐希奈が押されて行く…

「これで終わりだ！」

「きゃあ！」

ついにプロテクションが破られ腹部に直撃…祐希奈は木の葉のよ

うに吹き飛ばされる。

「お前の防御は確かに固い…だが、防御はいずれ破られる…最初のように一撃だけならいいが、動きを止めれば終わりだ。」

「けほっ！けほっ！わざわざご指導どうも。」

カートリッジも使わずに私の防御破った人はシグナムさんが初めて…やっぱりこの人は…強い。

「楽しくなってきたわ。やっぱり目標は高くないとね…」

「まだ、やるか？」

答えは決まっている…

「当たり前よ！勝つまでやるわ！」

「ふふ…いい返事だ！」

「はぁぁぁ！」

「つあああ！」

再び交じり合う刃と刃。

「近接での防御は一回ならいいのよね？」

祐希奈は斬り結びながら問う。

「しないに越したことはないがな…」

袈裟斬りを行いながら、シグナムも答える。

「ふ～ん。わかった。なるべくしないようにするよ。」

祐希奈は軽く言い放つ。

「簡単にできると思うな！」

一瞬のスキに上段に振り上げ全力で降ろす。

「…できるよ。」

あっさり回避…

「何！？」

「相手の攻撃を誘いさえすればね！」

突きがくる！

プロテクションで防ぐが…

「お前の突きは防御不可能だったな。」

祐希奈の手甲が上下カートリッジがロードされる…

「大正解！！」

「Ｂｌａｄｅ　Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！」

ズドン！！

剣先が爆発。先ほどの祐希奈と同じようにシグナムが吹き飛ばされる。

「くっ！なかなかの威力だ…」

「お誉めに預かり光栄です。」

「さて、一気にケリをつけるわよ！」

「調子に乗るな！」

ついに全力になったシグナム。雨あられのような斬撃が降り注ぐ。そのすべてを防ぎ…あるいはかわし…祐希奈は笑う。

「いいわねぇ。そうこなくちゃ！」

何度も切り結ぶ…刃同士が激しい音を奏で、火花を散らし、一撃一撃が相手のスキを逃さず狙い…それを防ぎ…斬撃は終わりを迎えた…

「レヴァンティン！」

「Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！」

カートリッジを一発使い。レヴァンティンが紅蓮の炎を纏う。

「紫電！一閃！」

「炎を纏ったくらいで！」

構わずブレードで迎え撃つが

「うぉぉぉ！！」

バキッ！

「嘘…」

レヴァンティンは祐希奈のブレードを容易く破壊し祐希奈に向かう。

「プロテクション！」

ギリギリでプロテクションを張るが結果はわかっていた。

「はあああああ！」

プロテクションはほとんど意味をなさず破壊された…

「ぁぁ！」

そして斬られる…非殺傷設定とはいえ斬撃の衝撃、炎の熱さはキツい…

シグナムが構えを解いた…

「なかなか良かったがここまでだな…お前は良くやった方だ。」

勝利を確信しているシグナム。

しかし祐希奈は超負けず嫌いだった。

「は？こんなもんで私がダウンするとでも？」
再びブレードを再生させ構える祐希奈。

「バカな…直撃の筈だぞ…」
祐希奈のあまりのタフさに表情が驚愕に変わる。

「ねぇ…一つ教えてよ。」

「…何だ？」

「剣って誰でも燃やせるの？」

「いや、魔力の変換資質がないと不可能だ…」

「ふ～ん。魔力ってどうやって変換するの？」

「？そうだな…私の場合は魔力を燃やす。というイメージでやっているが…それがどうした？」

「魔力を…燃やす…」

「まぁ…資質がなければ無駄なこ…と…」

シグナムは目を見開いた。なぜなら…

「こんな感じ？」

目の前にはレヴァンティンと同じく紅蓮の刃を持つ祐希奈が立っていた…　「お前…私と同じ炎の変換資質を…」

「持ってたみたいね…
」
そう言って祐希奈はシグナムに走り込む！
いきなりだったのでシグナムの反応が遅れる。
祐希奈は飛び上がり大上段から降り降ろす！
「はぁぁぁ！紫電！一閃！…なんつって！」
言葉は遊んでいるが打ち込みは激烈！
「っ！」
なんとかレヴァンティンを持ち上げ防ぐが先程より遥かに重い斬撃に足が地面に沈み込む…
「アシェル！カートリッジロード！」
「了解。」
祐希奈の空いていた左手が引かれ手甲が上下に動いた…
「レヴァンティン！防ぐぞ！」
「Ｐｒｏｔｅｃｓｉｏｎ！」
「新技行くわよ！一撃粉砕！」
祐希奈の左手の拳から紅蓮の炎が立ち上る…
「炎王！烈波！爆砕拳！！」　プロテクションと祐希奈の拳が衝突。

凄まじい衝撃がシグナムを襲う。

「うおぉぉぉ！」

「ぐぅ…あぁ…」

地面が抉れ後ろに押される…

「ぶっ！！飛べー！！」

ドゴン！

「ぐあああああ！！」

プロテクションを拳が破りシグナムの額に拳が炸裂！凄いスピードで飛んでいくシグナム…だがただでは終わらない…吹き飛ばされながらカートリッジロード

「飛竜！一閃！」

レヴァンティンが連結刃になり祐希奈に向かい伸びる。

「そんなもの！弾き飛ばす！」

ブレードで斬りつけ軌道をそらすが

「おおおお！」

シグナムは空中で無茶苦茶な体勢から腕を振るう。

再びレヴァンティンが刀身の向きをかえ生き物のように祐希奈を包囲巻き付く…

「っ！」

「せいやぁぁ！」

さらにシグナムが回転…レヴァンティンが祐希奈を振り回し投げ飛ばした。

「きゃあああ！」

「ぐっ…」

ザザザー

二人共反対の方向へ飛び地面を抉りながら滑る…だが二人は受け身をとり反動で起き上がり行動する…

「レヴァンティン！」

「アシェル！」

「Ｂｏｇｅｎ　ｆｏｒｍ」

「レイザーフォーテル召喚！」

お互いに弓の形態をとりさらに同時にカートリッジを排出…

「疾れ！隼！」

「燃やし尽くせ！スパイラルフレア！」

お互いの弓に炎の矢が引き絞られはなたれた。
矢は、狙い違わず相手の頭を狙っていた。

「っ！」

「ちっ！」

体を沈めかわすが炎が体を燃やす…だが痛覚は無視…カートリッジを装填し、斬り込む！

「「はぁぁぁ！！」」

一発排出…二人の剣に炎が纏われる。

「「紫電！一閃！」」

祐希奈は右下から切り上げ、シグナムは左上から切り下ろす。

屋敷に響く爆音！
おそらくこれで屋敷に住む全員が目を覚ましただろう…
それほどの音が響いた。

「うぉぉぉ！」

「はぁぁぁ！」

炎が消えそうになる度カートリッジを一発排出し切り結ぶ！

凄まじい熱の中、二人は気にもせずひたすら斬り合う。

一撃一撃が最高の斬撃。祐希奈の上段からの一撃を受け止め、シグナムが受け流し、切り上げを放ち、祐希奈がかわし、突きを放ち、シグナムが刀身を払い…そんな激しい戦いが行われているなか、二人は心から楽しむ…

「楽しいね。」
極上の笑みを浮かべる。痛烈な逆袈裟斬りを放つ。

「あぁ…こんなに楽しいのは久しぶりだ…」
シグナムも優しげな笑みを浮かべながら切り流し、下段切りを放つ。

「ずっとやってたいよ。」
飛び上がりそれをかわしながら全力で降り降ろす。

「そうだな。」
その一撃を真っ向から受け止める。

「でも、もうそろそろ終わりかな…」
祐希奈は腕が痺れもうほとんど感覚はなかった。

「また、いつでも相手になろう…」
それはシグナムも同じであり、おそらく、次が最後の一撃となる。

一端二人の距離が開く…世界の熱がもとに戻った。

「ほんとに!?」

「あぁ。私もまたやりたいからな。」

「ありがとうシグナムさん。」

再び天使のような笑みを向ける。学校でこの笑みを使えたなら男子昏倒ものである。

「礼には及ばん。私がやりたいだけなのだから。さぁ…幕にするぞ。」

「うん！！」

構えをとる。

「アシェル！！」

「レヴァンティン！！」

「「Ｒｏａｄ　ｃｅｒｔｌｉｇｅ」」

アシェルは六発、レヴァンティンは三発の薬莢を弾き出す…今までで最大の炎が吹き荒れる。二人の立っている空間が世界から切り離される。

「「うおぉぉぉ！！！」」

同時に駆け出す！！

「「紫電！！！」」

祐希奈は急停止し体重を移動…右のブレードを左腰に下げ…居合い抜きのように抜刀！！、シグナムはレヴァンティンを上段に振り

上げ飛び上がり…降り降ろす！！

「「一閃！！！！」」

剣がふれ合う…巨大な炎同士がぶつかり火柱が発生。

「「おおおおお！！！」」

最後の力を振り絞り相手を押し返す。

もう二人には相手を倒す以外のことはない…

爆発！爆音！…そして、火柱が消えた。

そこには振り抜いた形で立っている二人がいた…

「引き分け…か」

シグナムが言った…

「ううん。私の敗けだよ。」

そう言うのを待っていたかのようにブレードにヒビが入る…

「いい勝負だったな。」

「ええ。楽しかった…」

シグナムが突然剣を掲げ目の前に上げ目をつむる。

「我、ヴォルケンリッター、剣の騎士シグナムは一之瀬祐希奈を弟子と認めることを我が魂の剣レヴァンティンに誓う。」

「へ？」
祐希奈はあまりのことに放心状態になる。
「師弟になる儀式だ。何でもいい誓いの言葉を言え。」
「…うん！えと、私一之瀬祐希奈は剣の騎士シグナムを師とし、私以外の存在を守るため強くなることを誓います！」
シグナムと同じように剣を目の前に掲げ誓いの言葉を言う。
剣を合わせる。
「「我らここに師弟の契りを結ぶものなり！！」」
「ふふ。」
「あはは！」
二人で笑い合う。
パチパチパチ！
拍手が響きわたった。「え？」
「ん？」
「いや～ホンマにええ勝負やったな～。」
「はやてさん。何で？」
「何ではないやろ。あんだけ音が響けばみんな起きるわ。」
「祐希ちゃん強～い。」

「ヴィヴィオ。」
「拳仲間が出来たね。」
「ええ。」

「スバルさんにギンガさん。」

「祐希奈といい、ヴィヴィオといい成長早すぎだよ。」

「凄かったね。」

「エリオとキャロか…」

「にゃはは。痺れる勝負だったよ。」

「うん。私もやりたくなった。」

「なのはとテスタロッサ…」

「祐希奈よくここまでやれたな。私の時より強くなってるじゃねぇか。」

「ヴィータさん。ありがとう。」

「魔法使いって凄いんだね～。」

「すずかさん!?」

「あ、魔法のことならすずかさんとアリサさんは知ってるよ。だから拠点としてここを使わしてもらえるんだよ。」

ヴィヴィオが説明をしてくれた。

「へぇ～。」

「それにしてもアンタ達また派手にやったわねぇ。」

アリサがそう言った。

周りを見渡すと綺麗な芝生だった庭が二人が戦った部分のみ土がむき出しになっていた。

「あ…えっと、アリサ、ごめんなさい…」

さすがにやりすぎた…アリサ、怒ってるかな…

「？何祐希奈は謝ってンのよ？」

「芝生こんなにしちゃったのに怒ってないの？」

「怒るわけないじゃない。あんな凄い物見せてくれたアンタ達には感謝してるくらいよ？ありがとね。」

「アリサちゃんは太っ腹だね。」

「まぁね。もうすぐ家を継ぐことになるんだしこれくらいは、心が広くないとね。」

「アリサ！ありがとう…」

「祐希奈…私達の友情の前にはこの程度のことはお礼なんて不要

よ…」

「「よし！」」

「祐希ちゃん…それって何か意味があるの？」

ヴィヴィオが呆れながら訊ねてくる。

「ううん。意味なんて全然ないわ。」

「強いて言うならただのノリよ。」

アリサが答えた。

「そうね。それが一番近いわね。」

「ノリ？ってあの食べ物の？」

「「「「違うわい！！！」」」」

スパーン！！

はやて、ティアナ、祐希奈、アリサがヴィヴィオの頭を叩いた。

「痛いよ～！っていうか八神部隊長とティアナさんまで入らないでくださいよ…」

「あ、つい大阪の血がツッコミをいれてもたわ。」

「ごめん。ヴィヴィオなんか今勝手に手がうごいた…」

「「ヴィヴィオアンタが悪い。」」

「私が悪いの！？」

「そんなわけないよ…悪いのは四人だよね…」

「私達のヴィヴィオを何で叩いてるかなぁ…」

「「「「ひっ！！」」」」

なのはさん、フェイトさんからダークオーラが立ち上っている…

「いや～これはついなんや。許して～な。」

はやてさんならなんとかなるかも。そう思った私が甘かった…

「はやてちゃんでも許せないよ…」

「そうだね。無理だよ。」

あっさり有罪確定…

「「四人とも…少し頭…冷やそうか…」」

「「「「ぎぁぁぁぁ～～～！！！！」」」」

アリサ邸に四人の叫びがこだました…

第二十二話　祐希奈の成長（後書き）

今回は久しぶりに模擬戦をやってみました。楽しんで頂けたでしょうか？楽しんで頂けたなら嬉しいです。　次回ようやくカナン登場予定…

外伝、楽屋裏にて（前書き）

ＥＸへの一回目の出演が終わったあとのものがたり…　魔法少女リリカルヴィヴィオ外伝始まります。

外伝、楽屋裏にて

アリサ道場出演後楽屋にて…

ヴ
「あ～楽しかったね～♪」

祐
「そうね。最後以外はね。」

カ
「ああ。最後以外はな。」

ヴ
「最後は祐希ちゃんとカナン君が暴れて迷惑かけるからだよ。」

祐
「だからって全力で集束砲打つバカがどこにいるのよ…」

カ
「まったくだ…」

ヴ
「あれは～…ほら、道場因子とかいうやつだよ。」

祐
「私は変わんなかったわよ?」

カ

「それはお前が普段から因子に感染してるからだ。」

祐

「カナンくーん？そんなに冥界に送られたいのかな～？」

カ

「もちろん冗談です！祐希奈様！」

ヴ

「あんまりカナン君をいじめちゃダメだよ？」

祐

「だってこいつ出番少なくてなかなかいじれないんだもん。」

カ

「俺の存在って…何なんだよ…」

祐

「ん？教えて欲しい？」

カ

「いえ…結構です…」

祐

「懸命な判断よ♪」

カ

「あぁ…シオンこの悪魔を精霊召喚の力で何とかしてくれ…」

ヴ

「シオン君も格好良かったね～」

祐
「どこぞのヘタレよりは骨がありそうね。今度組み手でもやりたいわね。」

カ
「やめろ。シオン悲痛なの叫びが聞こえてくる…」

ヴ
「あはは…私も～」

祐
「私は人間よ！」

カ
「お前ヴィヴィオと喧嘩したとき、キシャー！とか言ってたじゃないか。」

祐
「何でアンタがそれを知ってるのよ！」

カ
「それはもちろん…なぁ？」

ヴ
「うん。」

祐
「何よ！そのアイコンタクトは！」

カ
「まぁその話は置いといて。」

祐
「私のツッコミをカナンごときが流すとはね…後でコロス…」

カ
「すいません。勘弁してください…」

ヴ
「カナン君もここでは弱いね～。」

祐
「本編では負けなしなのにね。」

カ
「生身では獣には勝てんよ…」

祐
「何か言ったかな？」

カ
「何でもないっす！」

ヴ
「で、なんで前の予告を無視してこの話があるかって言うとね。」

祐・カ
「作者があまりにも嬉しくて衝動で書いてしまったから。」

ヴ
「そういうのだけは息ピッタリだね…
まぁ、それもあるんだけどね。」

祐・カ
「やっぱり…」

ヴ
「今日たまたま学校の友達から五件も疑問のメールが来たからだよ。
これはどうなってるんだ？みたいなのがね。」

祐
「じゃあ私が作者の変わりに疑問に答えてあげるわよ。」

ヴ（…絶対ろくなこと言わないよね…）

カ（あぁ。間違いない…）

祐
「ぶっちゃけた話…」

ヴ・カ
「ゴクッ」

祐
「作者の執筆力がヘボすぎて抜けてるだけよ。」

ヴ・カ
「・・・」

祐
「ん？何固まってんのよ？」

ヴ
「一生懸命書いてる作者にも容赦ない攻撃…」

カ
「頼むから…頼むから」

ヴ・カ
「まだ出演予定のＥＸの方ではそういうことは言わないでください。」

祐
「善処するわ♪」

ヴ
「そのテンションはやめてよ…シオン君が泣いちゃうよ…」

カ
「シオン！俺はお前の味方だからな！…命の危険がなければ…」

祐
「心配しなくてもシオンも男よ。覚悟は出来てるって♪ていうかヴィヴィオ。シオンは呼び捨てでいいって言ったじゃない。なんでまだ君づけなのよ。」

ヴ
「私、あんまり呼び捨てって得意じゃないんだよね～。」

カ

「エリオとキャロは読んでるじゃないか。」

ヴ
「あの二人は…まぁ、あの二人だからだよ。」

祐
「まぁ…そうね…」

ヴ
「とにかく私はシオン君って呼ぶから。」

カ
「わかった。さっき祐希奈がぶち壊した疑問に答えないとな。」

祐
「なんで?別にいいじゃない。」

ヴ
「補足した方が分かりやすくなるでしょ。」

カ
「うんうん。」

祐
「え~めんどい…」

カ
「それが大部分だろ…」

祐

「バレた？」

カ

「当たり前だ。ほらやるぞ。まずはヴィヴィオの補足から。」

ヴ

「どうぞ～。」

高町ヴィヴィオ。

利き腕、左利き。

魔力変換資質、風。

スポーツの才能は祐希奈と並ぶがスポーツなどのルールをまったく理解していないため最初は動きが鈍い。

サードモード追加…現在爪のタイプが判明、他にもあるが使用禁止。

フェアリー、

カートリッジ装填数６

色、待機時、青。シューティングモード時、青。セカンドモード時、緑。サードモード時、紫。

フルドライブ時、現在使用不可能のためヴィヴィオ本人もわからない。

ヴ

「こんなところかなぁ…」

祐

「めちゃくちゃ追加されてるし！」

カ

「これはひどいな…」

祐

「利き腕ぐらい書いときなさいよね…」

カ

「読み直すとわかるが利き腕は祐希奈、俺以外ははっきりしていないな…」

祐

「魔力変換資質なんてアンタあったんだ…」

カ

「カマイタチを放ったりはしてたから分かってた人はいるとは思うけど…」

祐

「ていうか風ってアニメの方で存在してたっけ?」

カ

「おそらくなかったとは思うが…」

祐

「数少ないオリジナル要素ね…」

ヴ

「まぁまぁ。次は祐希ちゃんだよ〜」

祐

「どうなることやら…」

一之瀬祐希奈
利き腕、右利き
魔力変換資質、火
生身でも常人を遥かに越える身体能力を持つ。
魔法の最大破壊力はヴィヴィオを凌ぐ。（膨大な魔力を矢に凝縮しているため貫通力が高い。）
弓の種類は現在二種類、連射など細かい攻撃はブルーゲイル、一点に魔力を集める場合はレイザーフォーテルに変更して戦う。
中距離砲撃戦闘は苦手。だいたいはストームワルツを使い離脱している。

アシェル
カートリッジ装填数６
カートリッジは武器にはついておらず、腕についている手甲で行う。左右三発ずつ装填されている。
色、待機状態、銀色。
変身しているときは、邪魔にならないようピアスになっている。

祐
「…作者殴ってきていいかしら…」

ヴ
「祐希ちゃん落ち着いて！」

カ
「凄まじい量の補足だなというかやはり人ではないのでは？」

祐
「アリサと一緒にカナンとシオンをいじめて憂さ晴らしね…」

カ
「何故にシオンを巻き込む!?」

祐
「因子に身を任せるわ…」

ヴ
「祐希ちゃんがキレるまえにカナン君をどうぞ～♪」

祐
「キシャァァ！！」

風間カナン
利き腕、左利き
魔力変換資質、不明
エクスカリバーに意識を蝕まれていく少年。
実は…弄られキャラ。
なかなか現れず、補足出来たとしても長距離転移で逃げるため、戦闘中ぐらいにしかコンタクトは不可能。ゆえに情報は膨大な魔力を有することくらいしか判明していない。

エクスカリバー
発掘されてすぐ転移しカナンの憎しみの心に反応し、カナンの前にあらわれた魔剣。本来の色は金色に輝く剣のはずだが、過去に暴走を起こし変色。黒色となっている。カナンの魔力に加えこの剣自身も強い魔力を秘めているため、所有者の実力以上の破壊の力を放つことができる。

技、所有者の憎しみを最大まで引き出し、暗黒の波動を放てる。

ヴ
「…」

祐
「…」

カ
「頼むから何か喋ってくれ…」

祐
「よくわかんないプロフィールね。弄られキャラって以外は。」

カ
「どうせなら全部分からなくて良かった…」

ヴ
「祐希ちゃんがいる関係上仕方ないね。」

カ
「はぁ…」

ヴ
「続いては…」

祐
「まだあるの!?」

カ
「魔法の疑問が四件と学校の疑問が一件だからこれで最後だ。」

ヴ
「ではどうぞ～」

結局ヴィヴィオと祐希奈どっちが主人公？

カ
「この疑問の時点で俺は主人公じゃないことは確定だな…」

ヴ
「大丈夫。もうすぐ出番も増えて来るって。」

祐
「実は死んだりしてね。」

カ
「シオンこいつをどうにかしてくれ！！俺がもたん！」

祐
「さっきからシオン、シオン、シオン、シオンってうるさいわよ！アンタはホモか！！」

カ
「何でそうなるんだよ！！お前があんまりにも容赦がないから、数少ない男友達としてついシオンに助けを求めちまうんだよ！！」

祐

「自分の力で頑張りなさいよ！」

カ
「それが出来たらやってるっつーの！！」

ヴ
「ねぇねぇ。」

祐・カ
「どうした（の）？」

ヴ
「ホモって何？」

カ
「…」

祐
「アンタそんなこともしらないの？ホモって言うのはそうね～。カナンとシオンが」

カ
「バカか～！！なんつうことを教えようとしてんだよ！！この変態が！！」

祐
「変態…カナン…今変態って言ったわよね？」

カ
「言っておりません！」

祐
「今回は許さないわ♪」
カ
「！！」
ヴ
「カナン君私逃げるね。」
カ
「ヴィヴィオ！」
祐
「アリサ～カナンがねぇ三十路近いオバサンが！ですって～」
ア
「なんですってぇぇ…」
カ
「お前はどこから出てくんだよ！！」
祐・ア
「とりあえず…」
カ
「ごめん…シオン。次俺出れないかも…」
祐・ア
「シネ！！」

カ
「ぎあああああ！！」

ヴ
「で、疑問の答えですが今のところ決まっておりません♪」
終わり

外伝、楽屋裏にて（後書き）

今回は本当に本編とは関係ありませんでした。カナン編は明日にでも投稿させてもらいますね。

ＰＳテスタメントさん本当にありがとうございます。

第二十三話　失う心、取り戻す絆（前書き）

シグナムさんとの模擬戦を終えた祐希ちゃんを誘い無限書庫へと向かう私達、カナン君を助けるためには嫌いな人とでも協力しなくちゃね。

魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります。

第二十三話　失う心、取り戻す絆

北極…
「うおおおお！！」

ザシュ！

今、俺は１０００機目のガジェットを撃墜…あたり吹雪の音しか聞こえない…なら進むだけ

（俺は…何をやってるんだろう…ヴィヴィオ、祐希奈を殺し…もう復讐なんかどうでもいいのに…体が勝手に動く…この意識もいつか消えるのだろうか…）

突如背後に殺気！

「…」
ギン！
意思とは無関係に体が動き何かを弾く。弾いたものは…赤い…槍か？

「へぇ～。今のを凌ぐかぁ結構やるやないか。」

「…」

振り向くとそこには、赤い槍に赤いジャケット白い髪をした男…
年齢は俺より少し上くらいか？何故か笑っている

「なんか反応返してーな。悲しゅうなるわ。」

「…誰だ。」

「それは答えられへんわ。とりあえず力を見にきた…とだけ教えとくわ。」

「そうか…」

「あんま喋らん子やな。そんなんやとモテへんで?」

(なんだコイツ変な奴だな…)

「邪魔をするなら殺す…」

体が動き俺が斬りかかる。

「あらら…血の気が多いクソガキやな。」

そう言って槍を構える男。

俺は目にも止まらぬ横一閃を繰り出す。

ギン!

男は余裕の笑みで受け止めた。

「スピード、力共になかなかやね。」

「…」

男の言葉は無視され、下段から振り上げ、回転切り、袈裟斬りが放たれた。

「おっとっと…そないカリカリせんといてーな。会話のキャッチボールは大事やで？」

（この男は何言ってんだ？今の俺を見れば会話なんて無理だとわかるだろ…バカか？）

「…」

（ほらな無視だ…）

「せっかくええこと教えてあげよとおもたのに…」

「…」

再び斬りかかる。

「話には興味もないか。なら殺りながら話すわ。」

ギン！ギン！

突きから足払いへと変則的に軌道を変える剣を裁きながら男が言った。

「ヴィヴィオちゃんと祐希奈ちゃんのことなんやけどな～…」

（何！？クソ止まれ！！）

「…」

首筋を狙う剣首に触れる瞬間止まった…

俺が全意思を使い果たし止めた。

「話聞く気になったんか？」

「…早く…話せ…もうもたない…」

「なら言うけどな、あの二人なら生きとるよ。」

「な…に？」

俺の手加減抜きの一撃を耐えきってくれたらしい。

「ほんで、現在は、私立聖祥大付属中学校に二人揃って在学してるわ。」

「そ…うか。情報…あ…りが…とう。」

最後の力を振り絞りお礼を言った。

「お礼なんかええよ。…冥土の土産にしいや…」

「え…？」

初めて男の目が開かれる…目の色は俺と同じ…紅蓮ドス！！

「ぐはっ！」

槍が俺の腹を貫通していた…

「バイバイ。カナン君。」

男が背を向けさろうとする…

俺の血が雪を赤く染めていく…

（俺…死ぬのかな…せめてヴィヴィオと祐希奈に…会いたかった）

（お前は死ねぬ…私が死なせぬよ…）

（お前は…また…）

俺の意識は更に深い闇のなかへ…

ゴゴゴゴ…

地面が揺れる…倒れているカナンから魔力が吹き出す。痙攣を始める。

「うわあああああ!!!」カナンは腹から血を流しながら立ち上がる…

「やっと、出てきたんか？エクスカリバーはん。」

「貴様にこの男は殺せん…私がいるかぎりな…」

カナンの口からしかし絶対違う声が聞こえる…

「ベースは人間や…心臓を突けば死ぬやろ？」

「やれるものならやってみろ…」

カナンの胴体に黒い鎧が装着される…

「その程度、貫通出来んと思っとんのか？」

「貴様では無理だ。」

「後悔させたる！！」

「無理だと言っている！」

「せい！！」

神速の突きが繰り出される。

「遅いな…」

無造作に腕を動かし槍を弾く。

「これならどうや？」

こんどは、槍が分裂してみえる程の連続突き。

「私に当てるには程遠い…」

その突きをことごとく払いのける。

「次はこちらの番だ…」

カナンが走り込む。今までよりもさらに速い速度…一瞬のうちに間合いを詰め横一閃。

「のわっ！」

ギリギリで槍を立て防いだが、

「この程度か？軽いな…」
特に力を入れたようには見えないが相手は吹き飛んだ…
「つ～！きっついなぁ…」
「言っただろ…貴様では無理だ…」
「まだこっちは本気を出してへんよ…」
槍が光を放つ…
「ふん…貴様の全力がどの程度か受けてやろう…」
剣を下げ目をつむる…
「後悔するで？
ゲイボルグ！！」
全力で突きを放つ…槍は吸い込まれるようにカナンの心臓へ…
刺さらなかった…胸の前で停止…
「嘘…やろ？」
「やはり貴様程度では無理だったと言うことだ…死ね！」
降り下ろされる刃…血飛沫が舞い…男が倒れた…
「ふん！ザコが…ゲイボルグを使ってこの程度とはな…」

「ははは…やっぱり俺では使いこなせんかったなぁ…」

男が喋ると同時にゲイボルグは男の手から消えた…

「やはりお前は真の持ち主ではなかったか…弱いはずだ…」

「俺は…捨てゴマやからね…上は別次元やで？」

「私の邪魔をするなら殺すまでだ…」

カナンは立ち去る…

「あ～あ…もうちょい生きたかったなぁ…」

そして名前も名乗らなかった男は…意識を手放した…

そのころ、ヴィヴィオ達は無限書庫にいた。

「あ～頭痛い…」

祐希ちゃんはこめかみを抑え唸りだした。

「我慢だよ…カナン君を助けるためだもん。待ってるだけじゃなくて、私達も情報を集めなきゃね。」

「僕も手伝うしきっと見つかるよ。」

今回は、ヴィヴィオの父さんであるユーノ・スクライアさんが協力してくれるらしいが…

「ありがとうございます。ユーノさん…」

周りの人から見ればごく普通のお礼だが

「…」

祐希奈にはヴィヴィオとユーノさんの間に壁が見えた…ヴィヴィオはユーノさんのことをはっきりと拒絶している。それを知っているから…

「お礼なんていいよ。家族でしょ？当たり前だよ。」

「さて、祐希ちゃん探そっか？」

家族という言葉は無視…

「はいはい。わかったわよ。で、私は何をすればいいの？」

「祐希ちゃんは検索魔法は…知らないよね？」

「もちろん。」

「やっぱり…じゃあ私のところに歴史に関係ある本を片っ端から持ってきて。」

「わかったわよ…手伝うのはアンタだけでいいの？ユーノさんは？」

「僕は大丈夫。得意だしね。」

「じゃ、祐希ちゃんお願い。」

「はいはい。まったく私が休みの半日を図書館で潰すなんて将来

ないわね。」

愚痴りながら歴史関係の本棚から本を取りヴィヴィオに渡していく。

「検索開始。」

ヴィヴィオの前で数冊の本が開かれ凄い早さでめくれていく。

「じゃ僕も頑張ろうかな。」

ユーノさんの検索魔法はヴィヴィオの比ではない…ユーノさんの周囲の本が一斉にめくられていく…館長の名は伊達ではないようだ。

「祐希ちゃん。次お願い！」

「早いわね～。」

「頑張らないといけないからね。」

「そうね。私も頑張りますか！」

気合いを入れ直し本を運ぶそうして時間が流れ、五時間が経過した…

「ふぅ。この辺で終わろうか。」

「そうですね。そろそろ地球に帰らないと行けませんし。」

「はぁ～終わった～！」

ぐにゃりとしている祐希ちゃん。

「ははは。良く頑張ったね。店で何か奢るよ。」

「いえ、結」

ヴィヴィオが断ろうとしたがさせない！

「わ～い。ユーノさんありがとう！」

「祐希ちゃん！！」

「いいじゃない。お腹空いたし、たまには親子の話もあるでしょ？」

「わざとやってない？」

ギクッ

ヴィヴィオの癖にいつもより鋭い…

「あ…はは…ははは…」

笑ってごまかす。

「まぁ、いいじゃないか。何を注文してもいいよ？」

ユーノさんから助け船。

「はぁ…わかりました。行きますよ。」

かなり不満そうだが承諾。

「さぁ。レッツゴー！」
こうして私達はレストランへと向かった。
「へぇ～。魔法界の食べ物って地球に近いのね。」
「祐希ちゃん今さらだね…六課で変なものなんて出なかったでしょ？」
「そういえばそうね。忘れてたわ。ところで何で個室？」
「ちょっとヴィヴィオに話もあったからね。とりあえず何でもいいから注文しようか。」
「私は～…これ面白そうね。悪魔チョコレートパフェＥＸ」
「…それは、ママが頼んでから名前が変わったんだよ…前はただのチョコレートパフェだったんだ…」
「へ？何で名前変更？」
「この店でなのはママが悪魔になったからだよ…」
「な、何故に！？」
「それは僕が関係してるんだよ。まぁ…食べながら話すよ。実は今回の話に関係あるしね。」
「そ、そうなんだ…」
予想外の出来事にどもる。

「ユーノさん私は、イチゴパフェ頼んでもいいですか？」

「もちろんだよ。」

しばらくしてパフェが２つ運ばれてきた。

「デカッ！！ていうかこの頂上にあるサイドポニーテールの人ってまさか…」

「ママだよ…」

「顔！怖！！」

ていうかこれは人の顔には見えない…

「忠実に再現されてるね。」

とユーノさん…マジですか！？あのなのはさんには全然見えませんけど！？

「ユーノさん全然違うよ。オーラがないよ。」

「んなもん再現出来るか！！」

「へぇ…ヴィヴィオと仲良いんだね。」

「というかお世話係ね。」

「祐希ちゃん、ひどいよ！！」

「ははは！！賑やかだなぁ。とにかく食べよう。この店の味は保証するよ」

「は～い♪」

「うん。」

「「おいしい。」」

「でしょ？悪魔になりつつもなのはが完食したほどだからね。」

「こええ～…」

「それで、ユーノさんのお話というのは？」

「ああ、うん。ヴィヴィオの誤解を説こうと思ってね。」

「誤解？何のですか？」

「ヴィヴィオが僕を嫌っている理由についてだよ。」

「…だれから聞いたんですか？」

「だれからでもないよ。見てればわかる。一応父親だからね。」

「私はあなたを父親だとは思っていない…」

「ヴィヴィオ！何てこといってんのよ！」

「構わないさ。ヴィヴィオは僕が君に何も言わずにいきなり結婚したからずっと怒ってるんだよね。」

「よくわかりましたね…」

「小さいころと結婚後の態度の変化の違いを見れば誰でもわかるよ。僕にたいしての急に口調が変わったからね。」

「…」

「言わなかった理由だけど、実は大した理由じゃないんだ…」

「は？何か深い理由があるんじゃないの？」

「ないんだ。実はこの店でフェイトと偽デートをしたんだ。」

「「偽デート？」」

「僕はなのはのことが好きだった

…でも、なのはの気持ちがわからなくて不安でね。

フェイトやはやて達は大丈夫だって言ってたんだけど、どうしても言い出す勇気がでなくてね。

痺れを切らしたはやて、フェイトがなのはが僕を好きかどうか試そうって言ったんだ。それで計画されたのが偽デートなんだ。」

「「はぁ…」」

「予定を合わせて、なのは、フェイト、はやて、ヴィヴィオの四人と僕とクロノの街をめぐってね。

フェイトと僕は腕を組んだり急に二人でどこかへ行ったりしてね。

それでここにたどり着いて、なのはが頼んだのが君が頼んだそのパフェ。

フェイトと僕にたいしてのイライラが溜まってたのかそれはもう怖

かったよ。」

「はぇ～」

「それでお店の人が後でなのはママの招待に気付いて名前を変更した…ってとこまでなら知ってますよ。偽デートは知らなかったですけど…」

「告白されたのはその後の話だからね。ヴィヴィオを寝かしたあとなのはに呼び出されてね。付き合うことになったんだけど、」

「だけど何ですか？」

「本当に偶然なんだけどね。大きな仕事が入ってね。たまたま、なのは、フェイトと同じ現場に行くことになったんだ…」

「すっごい偶然ね…ありえないわ…」

「続きはどうなんですか？」

「えっとね。三日間の捜査があったんだけど、そのうち2日はフェイトと行動をしたんだ。なのははそれを見ていた…それでまた焦りが出たらしい。それで…」

「「それで？」」

「捜査が終わった夜プロポーズされた…」

「「へ？」」

「プロポーズって普通男の人からよね？」

「女の人からなんて初めて聞いたよ…」

「その時のなのはが可愛くってね…ノックアウトされた僕は、婚約指輪を購入して、付き合って3日で婚約したってわけさ。それでヴィヴィオには結婚することになりましたって言ったら見事に嫌われてね。まいったよ。」

「…ヴィヴィオこの人殴っていいかしら？」

「私も同じこと考えてたよ…」

「ちょっ！ちょっと？二人ともなんで拳を構えてるのさ？」

「理由を話してくれたからユーノさんの事は許してあげる…」

「でもね…たかが3日の付き合いでプロポーズを承諾するなんて…浅はかにもほどがあるわ…しかもノックアウトされたからだぁ！？」

「ちょっと二人ともストップ！！」

「「ユーノ・スクライア…少し…頭…冷やそうか？」」

ドゴン！！

「ぐ…ふ」

「それくらいで勘弁してあげるわ。」

「ありがとう…ございます…」

「ほらユーノ、パパ、いつまでうずくまってるの？」

「ヴィヴィオもういいの？」

「うん。理由さえ聞ければもういいよ。ちょっと納得いかない理由だったけど…」

「パパになる試練って厳しいのね…」

「修羅の道だよ…」

私はようやく親子の絆を取り戻した。
ちなみにユーノパパはこの後気を失ったという…
ではまた次回に会いましょう。

第二十三話　失う心、取り戻す絆（後書き）

前半が暗かったので後半はちょっと明るめです。　　え？あの関西弁男はなんだって？気にしちゃダメですではまた次回。

第二十四話　悲しきエリオ（前書き）

今回はシリアスはなーし！ていうか私が発表してる時はだいたいコメディー次に戦うのはいつになるのか？作者にすら不明よ。

こ

魔法少女リリカルヴィヴィオ始まるわよ。

んなめちゃくちゃな前書きみたことないよ…

第二十四話　悲しきエリオ

「じゃあ、ユーノパパバイバイ。」

「パフェありがとね。じゃあ、またね。」

「エクスカリバーについての情報は、後日まとめて送るから安心して。気をつけてかえるんだよ？」

「うん。」

パパと別れ地球に戻ってきた私達。夜だった…

「はぁ…今までユーノパパに怒ってたのがバカみたいだよ。」

「言えなかった理由がショボすぎるわね。」

「祐希ちゃん。」

「ん？」

「今日は手伝ってくれてありがとう。」

ヴィヴィオは可愛らしい笑顔を浮かべお礼をいってきた。

「べ、別にお礼言われることしてないわよ。私にも必要だったから手伝っただけよ。」

「それでも、ありがとう。」

「わかったから、帰るわよ？」

「うん。雅樹さんが心配しちゃうしね。」

「そうね。」

二人は並んで帰路についた。

「「ただいま～」」

「おかえり。祐希奈、ヴィヴィオさん。」

「あ～やっぱり自分の家はいいわね～！」

「確かにアリサさんの家は緊張したね。」

「そうそう。そのアリサさんから、二人に届け物があったよ？」

「「え？」」

「部屋に置いて置いたから見に行ってきたらどうだい？」

「わかりました。」

「なんか嫌な予感がひしひしとするんだけど…」

祐希奈の部屋の真ん中に結構大きな包みが2つ置いてあった。

「何だろうね？」

「この大きさってもしかして…」

祐希ちゃんが包みを乱暴に破いていった。

「もっと丁寧に開けなきゃダメだよ！」

「私の予想が正しければ…やっぱりね…」

「何なの？ってそれは…」

「「パーティードレス…」」

「「…」」

私も無言で包みを開ける…案の定パーティードレスが出てきた…

「なんか落ちたわよ？」

「あ、文字が書いてあるメッセージみたい…」

「何々…？

「学校に着ていけば男子を悩殺できるわよ♪ファイト♪」…だって。

」

「…祐希ちゃん封印しよう。」

「当たり前よ。二度と着ないわ…」

クローゼットの奥底にドレスは押し込まれた…

「荷物はなんだったんだい？」

「お仕事で使った道具でした。」

「へぇ～。ところで晩御飯は食べたのかい？」

「パパに奢ってもらいました。」

「私たちだけで食べてきてごめんね？」

「いいよ。あ、ヴィヴィオさん。フェイトさんって言う保護責任者の方が明日はお休みだから泊まりに来て欲しいって電話があったよ？」

「フェイトママから？う～んどうしよっかな～。パーティーでアリサさんの家に泊まったばかりだし…」

「行ってきなさい。なんなら祐希奈も連れて一緒にね。フェイトさんも祐希奈が気に入っていたようだし大丈夫だろう。」

「私も？ヴィヴィオどうする？」

「じゃあ、行ってきてもよろしいですか？」

「ああ。楽しんできなさい。私の事は気にしなくてもいい。」

「ありがとうございます。」

「フェイトさんってマンションだったわよね？エリオとキャロもいるのに入れるの？」

「さぁ？誘ってるんだから大丈夫なんじゃない？」

「とにかく、明日に行くのなら荷造りをした方がいい。」

「あ、そっか。じゃあ部屋にもどるね。」

「ああ。忘れ物のないようにな。」

「しないわよ。もう13よ?ヴィヴィオは12だけど。」

「祐希ちゃんよりちょっと誕生日が遅いだけだもん!」

「私にしたらどちらもたいして変わりはないよ。まだ中学生だからね。」

「子供扱いしないでよ。」

「そうやって言ってるうちはまだまだ子供だよ。」

「むぅ…まぁいいわ。終わらないしね。」

「祐希ちゃんあっさりが譲った!?」

「…何よ?」

「ははは!それだけ頑固にみえるのさ。」

「もういい!ヴィヴィオ行くわよ!」

「うん。では失礼します。」

「祐希奈が面倒をかけるね。」

「いえ、とんでもないです。私の方がかけてますし。」
「へぇ…あ、呼び止めてすまなかったね。」
「では。」
「あの祐希奈がねぇ…いい友達を持ったもんだ。」
「持ち物って言っても着替えと歯ブラシとかだけよね。」
「そうだね。宿題をするためのペンはフェイトママに貸してもらえばいいし。これだけだね。」
「ていうかヴィヴィオのパジャマ借りっぱなしだったわね。返すわ。」
「祐希ちゃん気に入ってくれてた?」
「動き安かったしサイズもピッタリだったからね。」
「じゃあ、それあげるよ私には、ちょっと小さいから。」
「は?あんた私より身長低いし小さいわけないわよね?」
私が聞いた途端ヴィヴィオがもじもじしはじめた
「えっと…その…胸が…ね?」
「…そう。ヴィヴィオはいいわねぇ…」
私は悲しくなり天井を見上げる。
「祐希ちゃんだってもうすぐ成長してくるよ!」

「つまり、今の私はまな板に見えると…」

「そ、そんなつもりで言ったんじゃないよ…？」

「いいわよいいわよ。どうせ私なんて…」

「祐希ちゃ～ん！帰ってきてよ～！」

「もういいわ。お風呂入って寝るわよ。どうする？先に行く？」

「え？えっと、えっと。」

ヴィヴィオは急に訊ねたせいか考えが纏まらず混乱している。からかいたくなるわね。

「それともまた一緒に入る～？」

冗談めかして聞いてみた。これが間違いだった…

「う、うん！」

うわ～冗談だったのに満面の笑みで頷かれちゃったよ…

「はは…じゃあ一緒に入ろっか。」

ここまで喜ばれると断れないな。

「うん。祐希ちゃんとお風呂～♪」

ヴィヴィオは上機嫌でお風呂の支度を始めた

「ヴィヴィオに冗談は通じないわね…」

ため息をつきながら私も準備をしお風呂場へ向かった。

カポーン…

「ふぅ～。気持ちいい～」

「はへ～そうだね～。」

二人して湯船につかりのほほ～んとしていると、

「祐希ちゃんのお肌綺麗だね。」

「は？」

ヴィヴィオが突然話しかけてきた。

「いや、だから綺麗なお肌でいいな～って。」

「な、何言ってんのよ…ヴィヴィオのだって充分綺麗じゃない…」

「え～私のより祐希ちゃんのが綺麗に見えるよ？」

「自分のより相手の方が綺麗に見えるものなの。」

「そうかなぁ？比べてみよっか？」

「どうやってよ…」

「こうするの～♪」

私の腕をヴィヴィオの指が滑った。

「ひあ！くすぐったいじゃない！」

「あはは！祐希ちゃん面白～い。」
私の反応をみてヴィヴィオは笑っている。負けっぱなしは嫌ね…
ツツツー
「ひい！祐、祐希ちゃんそれとってもくすぐったいよ！」
「お返しよ♪」
「むぅ～ならえい！」
今度は背中をなぞられた。鳥肌が立つ。
「やったわね～！」
「きゃ～♪」
バシャッバシャッ
くすぐり合戦が始まり賑やかな風呂場
「マスター達は元気ですね～。」
と脱衣所にいるフェアリーとアシェルが会話していた。
「そうですね～。年頃の女の子が一緒にお風呂に入れば一度はやることですね～。」
とアシェル。
「そうなのですか？私はまだ稼働年数が少ないためそういうことはよくわかりません。」
「あと二十年も稼働すればわかるようになりますよ。」

「そういうものですか。」

「はい。」

「マスターヴィヴィオと共にこれからもよろしくお願いします。」

「こちらこそ祐希奈とよろしくお願いしますね。」

その夜2つのデバイスの間には奇妙な意志疎通がはかられていたことはもちろん二人は知らない。

「先に行ってくるよ。」

「「行ってらっしゃい。」」

雅樹さんを見送り、私達もしばらく後から準備を始める。

「祐希ちゃん。」

「何よ?」

「学校行くまでにエリオとキャロが荷物持っていってくれるらしいよ。」

「なんていうか…あの二人ってさ…」

「うん。」

「「年上って感じしない…」」

「弟と妹って感じなんだよね~。だから呼び捨てに出来るんだけど…」

「確かにそんなかんじね。年下に対して気を使いすぎっていうか…」

「まぁいいところでもあるんだけどね～。」

「そうね。さて準備も出来たし、行くわよ。」

「わ、わ、ちょっと待ってよ～。」

賑やかな1日がまた始まる。

「今日は何か行事あったっけ？」

「えっと…確か体育館で集会があったような…」

「うわ～…父さんの話長いのよね～。」

「集会って何するの？」

「座って先生の話を聞くだけよ。一番無駄な行事ね。」

「先生がいいこと言ってるかもしれないよ？」

「集会なんか真面目に聞いてる生徒いないわよ…」

「私は聞くよ？」

「アンタは特殊体質だったわね…」

「私普通だよ…」
まぁ確かに特殊体質だけど…

「ヴィヴィオ！祐希奈！」

「あ、エリオだ…」

「お疲れ様～。」

「フェイトさんのお願いだからね。それに、これくらいどうってことないよ。」

「じゃあお願いね♪」

「ありがとうエリオ。」
カバンが渡された瞬間エリオの膝が一瞬揺れた。

「うっ！これなんか重くない？」

「私は日用品しか入れてないよ？」

「私も～♪」
あ、祐希ちゃん絶対なんか入れた…

「エリオ君私も手伝うよ。」

「い、いいよ。これくらい平気さ…。こんなの女の子に持たせてたら、男がすたるってね。」

「エリオ君…ありがとう。」

「きゃ～エリオ格好いい♪」

「…祐希ちゃん後で謝るんだよ？」

「仕方ないわね。」

「じゃ、じゃあ学校頑張ってね。」

あぁエリオ痛々しいよ…膝が笑ってる。

「また後で合おうね。」

「キュクルウ♪」

「バイバイ、エリオ、キャロ、フリード。」

「エリオファイトよ～♪」

エリオ達を見送ったあと祐希ちゃんは笑い出した。

「あははは！あー面白かった。」

「で、祐希ちゃんは何を入れたの？」

「五十キロの重し。」

「…今まで平然と持ってなかった？」

「アシェルに頑張ってもらってたからね。」

「…マスターはデバイス扱いが荒いです…」
待機状態のアシェルが点滅していた。

「アシェルが可哀想だよ。」
ちょっと怒る。

「ごめん、ごめんもうこんなことはしないって。」

「そうして戴けると助かります…」

「はぁ…じゃ学校に行こっか？」

「はいは～い。」

祐希ちゃんの言う通り学校で集会を真面目に聞いていたのは、私と先生くらいしかいないみたいだった…
集会の後

「ほらね？集会なんて聞く意味ないのよ。」

「でも、とってもいいこと言ってたよ？」

「いいこと言ってても暇だし眠くなるだけよ。」
一刀両断…

「ほんとに祐希ちゃんって言い方きついね。」

「まぁ、それが祐希奈だからね。」

「美鈴ちゃん。祐希ちゃんって小学生からこうなの？」

「うん。まだマシになった方だよ。
マシになったのはやっぱりカナン君のおかげかなぁ～」
「なんで？」
「それはね。祐希奈が」
「美鈴？それ以上言ったらアンタの恥ずかしい過去話インターネットに広めるわよ？」
「祐希ちゃん？目が怖いよ？」
「ヴィヴィオちゃん。ごめん…言えない…」
「三人は賑やかですね～。」
と神楽ちゃん。
「三人って私も入ってるの？」
「もちろんですよ～。」
「そ、そうなんだ…ちょっとショック…」
「アンタが変なこと言わなかったら何も起きないからね。」
「うぅ…」
「祐希奈がいるかぎり何もってことはないわよ。」
「うるさい！」

学校終了…

「バイバ～イ」

「またね。」

「「また明日～」」

美鈴ちゃん神楽ちゃんと別れたあとフェイトママのマンションへと向かう。

「今さらだけど、ケーキとか持っていかなくても良いの？」

「フェイトママなら大丈夫だよ。大量に何か買ってあると思うし。」

「よく知ってるわね。」

「なのはママとユーノパパと暮らしてた時はお菓子とかなくなったことがなかったんだよ。理由はフェイトママが買ってくるから。」

「親バカねぇ～。アンタがマザコンになるのもわかる気がするわ。」

「またマザコンって言う！違うよ！」

「どこがよ…アンタでマザコンじゃなかったら世界中違うわよ。」

「祐希ちゃんひどいよ～！」

「で、まだ着かないの？」

「う～ん。エリオとキャロが待っててくれるはずだけど…」

「ねぇ…マンションってまさかアレ？」

「あ、エリオとキャロもいるよ。そうみたいだね。」

「なんでこの辺の建物は無駄に豪華なのよ…」

「さぁ？」

「ヴィヴィオ。祐希奈。ここが僕達のマンションだよ。部屋に案内するね。」

「結構広いからちゃんとついてきてね？」

「うん。よろしくね。」

「よろしく。」

エレベーターに乗り込みしばらく歩き扉の前で止まる…

「到着。フェイトさーん連れてきました～。」

部屋にに声が響いた瞬間、

シュン！

「二人ともよくきたね。さ、上がって。」

「フェイトママ…今ソニックムーブで来たよね？」

「嬉しくてついね。」

「親バカだ…」

祐希ちゃんはいきなり呆れていた。

「ひっろ～い。」

「マンションとしての広さを通り越してるわ…」

「僕達も最初は驚いたんだ。」

「四人ともケーキ持ってくるから座ってて。」

フェイトママが冷蔵庫へと向かって言った。

「ね？大丈夫だったでしょ？」

「ほんとね。」

「何が？」

とエリオ

「何も持っていかなくても大丈夫っていう話をしてたのよ。」

「フェイトさん優しいから。」

キャロが微笑んで言った。

「お待たせ～。好きなの食べてね？」

テーブルにはいろいろな種類のケーキが並ぶ。

「おいしそ～。」

「これだけあると悩むわね…」

「僕達は後で選ぼうよ。」

「うん。」

各々、ケーキを選び食べた。

「ねぇ祐希奈？あのカバンの中って何が入ってたの？」

「五十キロの重しよ。」

「は？なんで？」

「エリオを鍛えさせてあげようと思ってプレゼントよ♪」

凄いうそだなぁ…

「そうなんだ。ありがとう。一瞬いじめかと思ったよ。」

「…」

「祐希奈どうしたの？」

「ごめん。エリオ。」

「な、なんで謝ってるのさ！」

「エリオ君、祐希奈をいじめちゃダメだよ！」

「エリオ反省しなさい。」

「え？フェイトさんまで…」

（ドンマイ。エリオ…）

心の中でそう言った。

あっというまに時間は過ぎ…夜

「お風呂の順番どうする？」

フェイトママが訊ねると…

「「「「最後」」」」

「あはは。みんなそろったね…」

苦笑いのフェイトママ。

「これは勝負で決めるしかないわね…

第一回お風呂の順番はどうするの？斬って撃って防いでじゃんけんポン大会～♪」

「あの、祐希ちゃんタイトルがおかしいよ？」

「こんなこともあろうかと企画しておいたのよ。」

「カリムさんもびっくりの未来予知だね…」

「ルールは簡単じゃんけんに勝ったらデバイスで攻撃、防げばセ

ーフ防げなかったらお風呂にご案内～」

「お風呂いくまえにけがするよ…」
とエリオ

「そんなもんは本人の腕次第よ。知ったこっちゃないわ。」

「うわぁ…祐希ちゃんのことながらめちゃくちゃだ…」

「じゃ変身してね。
問答無用で一回戦はキャロとエリオ！」

「げっ」
この時点でエリオは圧倒的不利…

「よくわかんないけど頑張るね。」
やる気満々のキャロ

「では開始！じゃんけん…ポン」

エリオの勝ち

「ストラーダ！」
ヒュン！

「きゃ！」

コツ…

「え？」

エリオは先端でキャロの帽子の部分を突いて終わった…

「これで僕の勝ち…」

「炎王！烈波！爆砕拳！」

ドゴォ！

「貴様はなめているのか？誰がそんなへなちょこ技を認めるか…お風呂一番はエリオに決定！」

さすが祐希ちゃんめちゃくちゃだ…

「エリオ君気絶してるよ？」

「湯船にぶちこめばいいのよ。」

ズルズルズル……バッシャーン…

「フェイトママ…エリオ死んでないかな？」

「多分大丈夫だよ…」

「さて、二回戦はぁ…あーと時間がなくなってしまいましたー。これにて終了です。ではまた次回。」

「祐希ちゃん…」

「何よ？」

「ひょっとして…エリオを弄りたかっただけ？」

「うん♪最初が失敗したからね。
いやぁすっきりしたわ。」

（（ドンマイエリオ…））
ヴィヴィオとフェイトは同じことを心の中で呟いた…
ちなみにこのあと女子四人は、沈んでいるエリオを引きずり出し、仲良く四人で入浴した。

「「フェイトさんお休みなさい。」」
なんとか復活したエリオ。とキャロが自分の部屋に向かって言った。

「私達って何処で寝ればいいの？」

「もう部屋ってないよね。ってことはここ？」

「違うよ。二人共私の部屋だよ。」

「「…今なんと？」」

「だから私の部屋でねるの。」

「フェイトママ私ここで…」

「寝るの。」

「私は親子じゃ」

「寝るの。」

「中学生だしやっぱり」

「寝るの。」

「私」

「寝るの。」

「「ここがいいです！！」」

「ダーメ♪寝るの。」

「「…」」

「ほら行くよ。」

「「はい…」」

二人の力を持ってしてもフェイトママには勝てなかった…

「ヴィヴィオ…よく今まで頑張ったわね…」

「ありがとう…わかってくれて嬉しいよ…」

よりヴィヴィオのことを理解した祐希奈なのでした…

「おっきいベッドだね～…」

「父さんのやつよりでかいわね…」

「さ、寝よ。」

フェイトママが真ん中に転がった。

「おいで。」

「フェイトママ？できれば普通に寝たいなぁ～なんて…」

「ダメ。」

「やっぱり…」

「私も？」

「もちろん。」

「はぁ…もうどうでもいい…」

フェイトママの腕枕

「痛くない？」

「大丈夫だよ。軽い軽い。」

ぎゅっ！

私達は抱き締められた…

「わわっ」

「え？ええ？」

「お休み。」

「…お休みなさいフェイトママ。」

「お休み。フェイトさん。」

フェイトに抱き締められながら二人は眠りについた…

第二十四話　悲しきエリオ（後書き）

前回はわかりにくかったですね～すいません！　お詫びもかねて連続更新です。まぁコメディでしたが…間違いを見つけたら遠慮なく言ってくださいね。

第二十五話　高町家での訓練（前書き）

なんか最近お色気が多いよ～。前回はフェイトママのマンション、今回は翠屋でのお話です。　最近お色気が多いのはたまたまだそうだけどどうだかね…よくわかんない作者だし。　祐希ちゃん出番減らされるよ？　仕方ないわね。

では魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります。

第二十五話　高町家での訓練

「ふぅ…やっと転移作業が終わったよ。」

「Ｄｒお疲れさまです。」

「ありがとう。ウーノガジェットは気付かれても問題ないから楽なんだかね。私達の場合は、邪魔をされると面倒になるからね。その準備に苦労したよ…」

「で、Ｄｒ～ほかのロストロギアは何処にあるのかわかったんですかぁ～？」

「それがね。文献に記されている場所と大分違っていてね。地殻変動か何かで変わってしまっているんだ。」

「え～大丈夫なんですかぁ～？」

「無論大丈夫さ。そのためにガジェット達を先に送ったんじゃないか。だいたいの見当はついてるよ。」

「さすがです。それでどのあたりなのですか？」

「ここの大陸のどこかだよ。」

スカリエッティが指した場所は…アメリカ…

そのころヴィヴィオ達は学校を終え翠屋にきていた。

「なのはパパ～。桃子さん。お友達を連れて来たよ～」

「「なのはパパ！？」」

美鈴ちゃんと神楽ちゃんが驚いていた。

「あ、本当のお父さんじゃないよ？一応お祖父さんになるんだけど、顔立ちが若いからお祖父さんって呼べないだけ。」

「じゃあ叔父さんじゃダメなの？」

「叔父さんって呼ぶのも変に思えるくらい若いんだよ。」

「名前にさん付けはダメなんですか？」

「本人が恥ずかしいからパパって呼んでくれって。」

「「「そっちの方が恥ずかしい…」」」

「ヴィヴィオちゃんいらっしゃい。えーとお名前教えてくれる？」

桃子さんが出てきた。相変わらず若すぎる…

「あ、美鈴です。」

「神楽です。」

「祐」

「こいつは怪獣です。」

「よろしくね。美鈴ちゃん、神楽ちゃん、怪獣ちゃん。」

（（（（わー！！普通に信じたー！！！！）））））

「桃子さん？私は怪獣じゃなくて、祐希奈っていうのよ。」

「あら、そうなの？冗談とは気付かなかったわ。」

「やぁ、ヴィヴィオちゃんと？」

「こちらは、祐希奈ちゃん、美鈴ちゃん、神楽ちゃんよ。ヴィヴィオちゃんのお友達ですって。」

「「「こんにちは」」」

「こんにちは。いい子達じゃないか。今なのは達を呼ぶからね。皆で何か食べよう。お金はいらないよ。」

「「「「ありがとうございます！」」」」

（ねぇ、ヴィヴィオ？）

（ん？どうしたの？）

（高町家って皆こんなに若い顔なの？桃子さんとか、なのはさんと変わらなく見えるわよ…）

（お兄さんとお姉さんは見たことないけど、多分みんな、なのはママと大してかわりないと思う…）

（…ここって何処？）

（異世界じゃない？この中では年を取らないとか…）

（なるほどあり得るわね…）

などと意味不明な念話で話していると、

「ヴィヴィオ～元気～？」

「元気じゃなかったらこないでしょうが！」

「スバルさん、ティアナさん。ちょっとだけお久しぶりです。」

「あ、ヴィヴィオのお友達？」

スバルさんが聞いてきた。

「はい！美鈴ちゃんと神楽ちゃんです。」

「私、スバル・ナカジマって言うんだけど、スバルでいいよ。」

「私はティアナ・ランスター。ティアナでいいわ。」

「「よろしくお願いします。」」

二人が頭を下げた。

「そんなにかしこまらなくてもいいよ。」

「なんならスバルのことは貴様とかでもいいわよ♪」

「おい貴様！水を持ってこい♪」

…祐希ちゃんほんとに言わないでよ…

「はい！ただいま！！」
スバルさんが慌てて走り出しちゃったよ…
「スバルさん冗談よ♪」
「祐希奈…私で遊んでない？」
「気のせいよ♪」
「う～ティア～祐希奈がいじめるよ～」
「貴様にはそれがお似合いだ！」
「はい！すいません！ってティ～ア～！」
「あはは！スバルさんって面白いですね！」
「くすくす…美鈴ちゃんそんなに笑ったら失礼ですよ？」
「まったくいつも賑やかだね～。」
「まぁ静か過ぎるよりはいいじゃないか。」
「私は賑やかな方が好きだよ。」
「ママと…ママの兄弟さんですか？」
「…みんな同い年に見えるわ…」

「あはは。ありがと。私高町美由希って言うんだ。」
「俺は月村恭也だ。で、どれがなのはの娘なんだ?」
「さて、どっちだろうね。自己紹介してもらうからから当てて見てよ。」
「私、ヴィヴィオっていいます。」
「私は美鈴です。」
「私は神楽です。」
「私は祐希奈です。」
「さて、お兄ちゃんわかる?」
「う〜ん」
お兄さんが近づいてきて私達をじっと見つめる。
「神楽ちゃんは違うな。」
「なんで?」
「元気な子って聞いてるけど、神楽ちゃんは大人しそうだしな。」
「正解〜神楽ちゃんは違うよ。」
「お兄ちゃんファイト!」

「美由希は知ってるのか？」

「お兄ちゃんが外国に行ってる間に名前聞いたからね。」

「そうか…そうだったな。じゃ、頑張るか。」

「ちょっと試してもいいか？」

「うん。どうぞ？」

「ふっ！」

恭也さんがいきなり三人を殴ってきた！

「わっ！」

私は屈む。

「きゃ！」

美鈴ちゃんは尻餅をついた。

「…」

祐希ちゃんは無言でガードの構え。

「ちょっとお兄ちゃん！」美由希さんが怒っていた。

「寸止めできるように加減したよ。とりあえず今ので美鈴ちゃんはなしだな。」

「正解～。さぁ、あと二人だよ。」

「う～ん…もう一回試すぞ？二人なら大丈夫だよな？」

「はい。大丈夫ですよ。」

「はい。」

わからないように祐希ちゃんも敬語を使っている。

「ふ！ふ！」

左右のパンチがきた。

「…」

私はかわしだけだった…

「…ほっ！」

祐希ちゃんもかわしたが…

「ごへ！」

みぞおちに拳を入れていた…

「あ…やっちゃった…」

「これで…祐希奈ちゃんは…消えた…な」

「恭也さ～ん？大丈夫ですか？」

「おめでとうお兄ちゃん。ヴィヴィオが私の娘だよ。」

「やったぜ…」

「祐希奈…反撃はしちゃいけないよ…」

「あはは…つい手がでちゃったのよ。恭也さんごめんね？」

「き、鍛えてるから大丈夫。」

「あ、やっぱり？腹筋結構あったからね。最近の男にしては感心感心。」

「あ、ありがとう…祐希奈ちゃんのパンチもキレがあるね…」

「鍛えてましたから。友達で。」

「「「…」」」

「ほら恭也いつまで倒れてるんだケーキ運ぶの手伝え。」

なのパパ、恭也さんには容赦がないね…

「わ、わかったよ…」

「あ、あの私も手伝いますよ？」

「い、いいよ。お客さんに手伝わせるわけにはいかないからね。」

恭也さんはフラフラになりながらケーキ運びの手伝いをしにいった。

「おまたせ。ごめんね待たせちゃって。」

桃子さんさんが謝った。

「いえ、全然ですよ。」

「わ～美味しそう…」

「うちは喫茶店だからね。このくらい出来ないと。さ、遠慮なく食べてくれ。」

「「「「は～い」」」」

「なのパパ。美味しいよ。」

「そりゃ良かった。」

「ムシャムシャ！」

「うわ～スバルさんはやーい！」

美鈴ちゃんと神楽ちゃんはスバルさんの食べっぷりに見とれている…

「スバル…教育に悪いわよ…」

「んく！何でも美味しく食べるのが一番だよ。」

「ははは！まぁ確かにね。だけど、ゆっくり食べなよ。まだまだあるしね。」

「「「はーい」」」

大量のデザートを食べた私達は（ほとんどはスバルさんだが…）塾があるらしい美鈴ちゃんと神楽ちゃんにお別れした。

「また遊ぼうね。」

「また明日ね。」

「「バイバイ！」」

「また来てね～サービスすよ～。」

「なんでスバルが言ってんのよ！」

「「「あはははは！」」」

「二人とも魔法使いなんだよね？」

なのパパが聞いてくる。

「うん。そうだけどそれがどうかしたの？」

「なのはの話によると近接戦闘を行うらしいね。」

「うん。まだまだ未熟だけどね。」

「私で良ければ教えてあげるけど、どうだい？」

「なのパパ魔法使いなの！？」

「びっくりだわ…」

「二人とも違うよ。士郎さんは、小太刀二刀流の継承者なんだよ。」

「小太刀二刀流？それなんですか？」

「まぁ、簡単に言うと二刀流での戦いの達人ってことね。」

「「へぇ～。」」

「それで、教えて欲しいかい？」

「「もちろん！」」

「じゃ道場に行こう。」

「「はーい。」」

「まず君たちは一刀流か二刀流かを教えてくれるかな？」

「私はどちらも使います。両端に刃がついている剣と二刀流です。」

「私は一刀流ね。」

「そうか。一刀流の場合は一太刀の入れられるチャンスを逃してはいけないよ。相手の癖なんかを見抜ければとても有利に勝負をできる。

二刀流の場合は、手数だ。攻撃の手を休めてはいけない。あと、左右の手どちらからでも攻撃できることが前提だ。少しやって見ようか？恭也！美由希！」

「「はい！」」

「恭也はヴィヴィオちゃんと、美由希は祐希奈ちゃんとやってくれ。」

「「はい！」」

「恭也さんよろしくお願いしますね。」

「手加減はいらないよ。」

「ゆきＮｏ．１は私よ。」

「え？あ、負けないよ？」

「始め！」

「フェアリー！」

「Ｓｅｃｏｎｄ　ｍｏｄｅ　ｓｔａｎｄ　ｂｙ」

「アシェル！」

「Ｂｌａｄｅ　ｍｏｄｅ」

「「はぁぁぁ！」」

「へぇ…なかなかの威力だな…」

「まだまだ上げていきますよ？」

「楽しみだ！」

押し上げられ体が浮いてしまった…

「せい！」

突き…
「くっ！」
空中で受け止めるが後ろに飛ばされる…
「はぁぁぁ！」
恭也さんの左の一撃！
「っ！」
受け流すが…
「甘い！」
今度は右手。
「う…」
腹部を叩かれた…木刀って結構いたい…
「どうした？魔法使いってその程度か？」
「あはは…ちょっと怒りましたよ？フェアリー！」
「Ｒｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！」
「ヴィヴィオちゃん？それはちょっと…」
「問答無用！ウインドスラッシャー！」
「ぐあ！っ」
恭也さんは両手で防いでいるが風に押されている…
「すっごく痛かったんですからねー！」

手加減なしでいいって言われたし…いいよね！

「ソニックフォーム！」

「了解！」

「ヴィヴィオ…」

「何ですか？」

「その格好恥ずかしくないのか？」

「…禁句を言いましたね？フェアリー…デュアルソード！」

「…処刑確定。」

フェアリーの判決がくだった。

ヴィヴィオの背後にダークオーラが纏われる…

「え？」

「恭也さんの～」

膝を落とす…

「ばかー！！」

神速で接近！いくつも残像を残しながら恭也さんをきりつけまくる。

「うわぁぁぁ！！」

当然裁ききれるはずもなく、恭也は意識を手放した…

「はぁはぁ…」

「アンタやっと終わったの？」

「祐希ちゃん…はやいね…」

「十秒で終わったわ。」

「どんな戦いかたしたの…？」

「それはね～。」

「はぁぁぁ！」
美由希が斬りかかるが、
片方の木刀を弾き、

「プロテクション！」

「へ？」
あっさり阻まれ…

「紫電！一閃！」

「ぐっ！」
なんとか防ぐが恭也と同じく壁に叩きつけられる…
祐希奈は接近。

「カートリッジロード！」
「Ｂｌａｄｅ　Ｅｘｐｒｏｓｉｏｎ」
「きゃあああ！」
零距離爆発をくらい沈黙…
「てな感じよ。」
「私が言うのもなんだけど、もう少し加減しようよ…」
「いや～二人とも強いね～。でも、この相手だから力押しが通じたんだよ?試しに俺にやってみて。」
「紫電！一閃！」
祐希ちゃんいきなりなの！?
ところがなのパパは完璧に受け流し殆んど動きを止めずに反撃…
祐希ちゃんに当たる寸前で止めた…
「今のどうなったの?」
祐希ちゃんはきょとんとしている。
「完璧に流されて攻撃されたんだよ。」
「は?でも触れた感覚なかったんだけど。」
「だから完璧にだよ。私みたいに動きが止まらなかったもん。」

「へぇ～士郎さん凄いわね…」

「いやいや、それほどでも。」

「お父さん！そろそろヴィヴィオ達を家に帰さないと！」

「ああもうそんな時間かい？じゃあ最後にしようか。」

「何するの？」

「この間、制御出来ない力ほどの力を使って怪我しただろう？
あ、ヴィヴィオが眠ってる間に俺達はお見舞いに言ったんだけどね？
それの制御を教えて今日はお別れだ。」

「お父さんダメだよ！使用禁止だし、ヴィヴィオが怪我するかもしれないんだよ！？」

「少しだけだよ。」

「私制御できるようになるかな？」

「もちろん。大丈夫。俺を信じてくれ。」

「なのはママ。いいかな？」

「…わかった。けど危なくなったら止めるからね？」

「うん。ありがとう。」

「ヴィヴィオ…どうしてそんなに危ない力使ってまで頑張るのよ…」

「カナン君を助けるためには少しでも使えるようになった方がいいからね。」

「そう…でも無理はしないでよね…もうあんなに傷ついたアンタ見るの嫌だから…」

「うん。大丈夫。今回はなのパパも協力してくれるから。ね？」

「ああ。必ず制御できるようになるさ。
じゃあ始めようか。」

「うん。フェアリー。モードサード起動…」

「了解。」

フェアリーの色が紫になるとヴィヴィオの腕から虹色の光が立ち上りはじめた…

「くっ…」

「ヴィヴィオ大丈夫？」

「うん。心配しないで大丈夫だから…クローモード…」

虹色の光がヴィヴィオの手に集まり歪んだ爪の形になった

「くっああ…」

ヴィヴィオの腕から血が少し出始める…それほど負担が大きいらしい。

「お父さん！」

なのはさんが声をあげる。

「まだだ…ヴィヴィオ…力が漏れているから全て爪に集めるんだ…そうすれば負担も減る。少しなら使えるようになるから。」

「うん…」

少しずつではあるが爪に光が集まり始め、ちゃんとした形になっていく。しかし…

「あああ！」

血の量が増え始めた…

「ヴィヴィオ！」

「お父さん！もうやめよう！無理だよ！」

「ヴィヴィオは強い意思を持って制御しようと頑張ってるんだ…無理じゃないよ。

ヴィヴィオもう少しだ。集中しろ。」

「く…う…」

虹色の光がついに綺麗な爪の形になった。それと同時にヴィヴィ

オは倒れた。

「ヴィヴィオ！大丈夫？」

「祐希ちゃん？うん。ちょっと疲れただけだから…」

「そう。もういいから少し眠りなさいよ。」

「あはは。うん。そうするね。お休み…」

「お休み。」

「お父さんは無茶させすぎだよ…もう、私の娘に何かあったら許さないからね。」

「それは怖いなぁ。お前の相手は勘弁してもらいたい。」

「じゃあ、ヴィヴィオをおんぶして祐希奈の家まで送ってきて。私が行きたいけど晩御飯の手伝いがあるから。」

「わかったよ。じゃあ祐希奈ちゃん行こうか？」

「出来ればちゃん付けはやめて。祐希奈でいいわ。」

「そうかい？可愛いのに。」

「そういうこと言わないでよ！
それ以上言うとなのはさんの父さんでも容赦しないわよ！」

「お父さん。二対一だよ？」

「ははは。まいったなぁ…こりゃ大変だ。」

「六課全員の女性を敵にしてあげようか？」

「それは嫌だね。退散することにするよ。」

「じゃあね。なのはさん。」

「また遊びに来てよ。」

「うん。」

「ん…？あれ？なんで私祐希ちゃんの部屋に…」

「士郎さんが運んでくれたのよ。」

「迷惑かけちゃったな…」

「向こうが無理させたんだから、ほっときなさいよ。」

キュルルル～

「あ…」

「お腹空いた？」

「う、うん。あれ？もう寝る時間だよ。」

「よく寝てたからね～。今日の晩御飯ハンバーグとポテトサラダ

だけど食べれる？」

「うん。じゃあ食べて来るよ。」

「待ちなさい…持ってきてあげるからアンタはベッドで寝てなさいよ。」

「でも…もし汚しちゃったら…匂いもついちゃうし…」

「そのくらい別に気にしないわよ。洗えばいいし。」

「でも…」

「でもはなし。もう持ってくるわよ？」

「う、うん。」

「はい。」

「ありがとう。いただきます。…あ」

カチャン…

「あはは…失敗、失敗。」

カチャン…

「はぁ…もてないんならいいなさいよ。ほら、貸しなさい。食べ

させてあげるから。」

「い、いいよ。」

「じゃあ、どうすんのよ?」

「が、我慢?」

キュルルル〜

「…」

「…我慢出来そうにないわよ?」

「お、お願いします。」

「はいはい。口開けて〜。」

「あ〜ん。んぐんぐ。」

「美味しい?」

「うん。とっても美味しいよ!」

「じゃ、次はポテトサラダ。はい。あ〜ん。」

「あ〜ん。んぐ。こっちも美味しい。」

「良かった。それじゃ次ね。」

「うん！」

こうしてハンバーグを食べ終えた。

「で、お風呂入れる？」

「ん～ちょっと染みるかも…」

「じゃ、体だけ拭いてあげるわ。行くわよ。」

「そ、それはいいよ！」

「アンタ腕使えないでしょーが。じゃあもう寝る？」

「それは…汗もかいたし…不潔だし…」

「じゃ、行くわよ。」

「食べさせてもらうより恥ずかしいよ！」

「怪我人に主張する権力はないの。」

「そんな法律…社会じゃならってないよ？」

「この家では私が法律。さっさと歩く！」

「無茶苦茶だよー。」

「まずは背中からよね…」

「そ、そうだね…」

「…」

「…」

「お、終わったけど…？」

「ま、前もやるの？」

「なるべく見ないようにするわ…」

「う、うん。そうしてくれると嬉しい…」

一応ブラはついてはいるが恥ずかしいことにはかわりない…顔を真っ赤にしながらついに終わった。

「終わった～…」

「あ、ありがとう。」

「さ、さてもう寝ましょうか？」

「う、うん！寝よ寝よ！」

恥ずかしさからか二人は急いで部屋に戻り会話もかわさず速攻で眠りについた。

第二十五話　高町家での訓練（後書き）

最近アクセスが多くてめちゃくちゃ嬉しいです。今回もお色気が入ってしまいましたが、今回は本当にたまたまなんです。腕をやってしまったので書いてるときにやっちまった～って思ってました。この作品を読んで下さってるかたありがとうございます。では。

第二十六話　救出に向けて（前書き）

恥ずかしい1日が終わった次の日デバイスの強化のためにフェアリーとアシェルをママに預けた…不安になったがこの日は何も起きずに無事終了…　平和な日々が続けばいいと思った矢先…テレビにニュースがながれた。　魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります。

第二十六話　救出に向けて

「…何よこれ…」
私達は朝ご飯を食べながらニュースを見ていた…そこには衝撃の映像…

「ガジェット…だよね…」
テレビには逃げ惑う人々そして街を破壊するガジェット達が映っていた…

「場所は…ワシントン…アメリカの首都じゃない！」

「お仕事の話なら私は外に出ようか？」
雅樹さんが気を使い聞いてきた。

「すいません…少しだけお願いできますか？」

「わかったよ。自分の部屋にいるから終わったら呼んでくれ。」
そう言って雅樹さんは出ていった

「今までは偵察だけだったガジェット達がこんな大規模な破壊活動を行ってるってことは…やっぱり…」

「…スカリエッティが言ってた古代ベルカのロストロギアがこの近くにあるってことよね…」

「カナン君も動くかもしれない…」

「それは、正直もう少し待って欲しいわね…まだアイツに勝てる

か自信がないわ…」

「もう少し強くならないとよくて前と同じか…」

「負ける…下手をすれば死ぬわね…」

「うん。」

それほどまでにカナン君との差はある…今のままでは助けることなど絶望的。

（二人ともニュース見たか？）

はやてさんから念話が入る。

（はい。たった今見たところです…）

（そうか…今日は学校はお休みになりそうや…）

（やっぱりね。出撃するの？）

（その話もまとめて言うから、とりあえず私の家に集まってくれるか？）

（わかりました。）

（じゃ、また後でな。）

「雅樹さんに言わないとね…」

「ええ…呼んでくるわ。」

「うん。」

「お仕事の関係で、今日…ひょっとしたらしばらくの間かもしれません…私達は学校を休みます。」

「ごめん。」

「仕方ないさ。
わかったよ。
学校の方は私から言っておくから行ってきなさい。」

「すいません…」

「だから、謝らなくてもいいよ。そのかわり…」

「「?そのかわり?」」

「必ずここに帰って来なさい。多少の怪我はしてもいい。でも、必ず帰ってきてくれ。」
雅樹さん…

「必ず帰ってきます。」

「私達は大丈夫だから。帰ってくる。」

「約束だよ?」

「はい。」
「うん。」

「じゃ、気をつけてね。」

「「行ってきます！！」」

私達は家から飛び出した。必ず帰ると誓って…

「で、あんたは、はやてさんの家知ってんの？」

「あ…知らないや…」

「…どうすんのよ。」

祐希ちゃんは呆れているのか流し目でこっちを見ている…痛い…

痛いよ…

「ど、どうしよう…」

はやてさんに念話で聞こうかな…

そう思い繋げようとすると…

「そんなこったろーと思って迎えに来たぜ。」

振り向くと…

「ヴィータ副隊長！わざわざ来て下さったんですか！？」

「なのはから頼まれてな…仕方ねえからあたしが来たってわけだ。

」

「す、すいません。」

「ヴィータさん。ありがとね。」

「これくらい別に構わねえよ。ほら行くぞ？」

「は、はい！」

「は～い。」

ヴィータさんについて行くと祐希ちゃんの家よりさらに大きい家の前で止まった。

「ここだ。」

「へぇ～。なかなか綺麗な外見してるわね。」

「うん。」

「中も綺麗だぞ。はやてが掃除したからな。ピカピカだ。」

「部隊長が？」

「ああ。はやては家事全般はなんでも出来るからな。」

「意外だわ…関西弁の人ってそういうの苦手なイメージがあったから。」

「ま、とにかく入るぞ。なのは達も、もうついてるからな。」

「はい。」

「お、ヴィータお帰り。お疲れ様や。ヴィヴィオと祐希奈もいらっしゃいや。」

「「お邪魔します。」」

「早速始めたいからリビングに来てくれるか？」

「はい。」

「うん。」

リビングは綺麗に掃除されていた。どうやらさっきのヴィータ副隊長の話は本当らしい。

「さて、まず、ヴィヴィオと祐希奈にはこれをみてほしい。」

私と祐希ちゃんの前に何かのデータが表示される。

「これは…エクスカリバーのデータ…ユーノパパからですか？」

「凄い量ね…」

「そうや。ユーノ君がこないだのデータをまとめて送ってくれたんや…そこにカナン君を助けられるかもしれんことが書いてある…」

「もしかしてこの鞘のことですか？」

「うん。ヴィヴィオと祐希奈の話やとエクスカリバーは抜き身なんやろ？」

「ええ。鞘なんて多分なかったわよ。」

「その鞘はな。力を制御するための物らしい…

私の予想では、闇の書と同じように、さらに力を上げるため、

何物かが鞘を排除した…その結果暴走…誰かが暴走を止めたか、自然と収まったかはわからんけど、
その後、エクスカリバーの力を恐れた人はエクスカリバーを埋めた…
でも、それを私達は発掘してもて…」

「強い憎しみと力を求めたカナンの元へ転移した…ってこと？」

「予想やけどな…」

「鞘を排除してしまったんなら、制御は不可能なんじゃないですか？」

「多分、カナン君なら再構築出来る…私の時と同じ要領や。主なら異常を直せる…逆に言えば主にしか出来ん…問題はカナン君の今の状態や…」

「カナン君は、暴走したエクスカリバーに自我を奪われています…」

「やっぱりな…私はまだ初期やったから、完全に消える前になんとかなったけど…カナン君は正直難しいかもしれん…」

「カナンなら大丈夫よ。」
祐希ちゃんが自信を持って話した。

「アイツは昔から自分の意思は曲げないやつだったからね。きっとまだ頑張ってるわ…まぁ今回の復讐の意思は私達が曲げるけどね。」

「もし…アカンかったら？」

「そんなことは考えないわ。ね、ヴィヴィオ？」

「うん。助け出すまで何度でも挑む。私達の声はいつかは届くと思うから。」

「と、いうことだから、無理だとか、そんなことは知ったこっちゃないわね。」

「私が命令で止めたとしたら？」

私達は強い意思をこめ言った。

「例え八神部隊長の命令だとしても…」

「そんな命令は…」

「「無視。」」

「もし六課の皆が実力で私達を止めようとするなら」

「私達は六課の人達を倒してでも助けに行くわ。」

「…本気なんやね。」

「「もちろん。」」

「はやてちゃん。もうこの二人は止められないよ。」

なのはママがそう言った。なんだか嬉しそうな顔をしている。

「返事はわかってはいたんやけどな。一応の確認や。」

「じゃあ、いいんですか？」

「私は二人を止めへん…もちろん協力はするよ。」

「はやてさん。こんなわがまま聞いてくれてありがとね。」

「たまにはわがままも聞いたらなあかんからな。
ほな、皆、出撃準備や…」

「はい！」

「今回こそ助けるわよ。」

「ヴィヴィオと祐希奈はちょいまちや。」

「え？…」

「止める気？さっきも言ったけど…」
祐希ちゃんが部隊長を睨む…

「私も言ったやろ？もう止めへん。」

「じゃあ、何ですか？」

「ちょっと待ってな？リィングレアム叔父さんと通信を繋いでくれるか？」

「はいです。」

モニターに優しそうな叔父さんが映る。

「グレアム叔父さん。お久しぶりです。」

「ああ、久しぶりだね。君が私に連絡をよこすということは…ワシントンのことかい？」

「はい。申し訳ありませんが、グレアム叔父さんの使い魔…リーゼ達の力を貸して欲しいのです。」

「それはもちろんいいが何をする気だい？」

「ワシントンまでの転移をするためにリーゼ達に協力して欲しいのです。もちろん、ほとんどの隊員は自力で向かわせます。でも、五人だけお願いできませんか？」

「…私は君に力を貸すことは惜しまないよ。今からリーゼをそちらに向かわせる。ロッテはワシントンで待機して、転移の準備をさせるからね。」

「グレアム叔父さん。ありがとうございます。」

「ああ。またね。はやてちゃん。」

「はい。」

通信が切れた…

「さて、話も終わったし始めよか！」

「…何を？」

「カナン君が動き出すギリギリまで、二人には、なのはちゃんとフェイトちゃんの二人に模擬戦を行ってもらう。」

「え？…そんなことしたら戦うための魔力を消費しちゃうんじゃないですか？」

「大丈夫や。そのためにシャマルがいてくれる。シャマルの薬で魔力問題は解決や」

「薬で魔力って回復するんだ…」

祐希ちゃんは意外な事実に驚いている。

「…ただし、シャマルの魔力を入れた薬やから…自分の魔力と違うし、最初は魔力の拒絶反応があるかもしれん…」

「痛いんですか？…」

「う～ん…痛いっていうか～…めちゃくちゃ不味く感じると思う…」

なのはママがそう言った。

「ま、それくらいなら問題ないわね。」

「お薬苦手だけど頑張るよ…」

「ヴィヴィオ…最近は小学生でも薬くらいさっさと飲むわよ？」

「だって苦手な物は仕方ないよ～」

「ははは。緊張もないみたいやね。ほんなら先に皆の見送りに行こか？」

「「は～い。」」「私達は先に行くが、お前達も頑張るんだぞ？」

シグナムさんが私達の頭に手をのせた。シグナムさんが優しいなんて珍しいなぁ

「はい。シグナムさん達も頑張って下さい。」

「ところで今回の敵ってガジェットだけなの？」

祐希ちゃんがシグナムさんに聞く。

「…戦闘機人も参加するだろう…」

「大丈夫。また説得してみせるから。」

スバルさんが言った。

「スバル…残念だが今回はおそらく無理だ…」　シグナムさんから残酷な事実が述べられた…

「え？…だ、だって、あの子達…感情もありましたよ？今回だってきっと…」

「スカリエッティは前回の三人は失敗作だと言っていた…今回の相手は完璧な兵器だ。…何より混戦になる可能性が高い…カナンも参加すれば、説得してる暇などは限りなくゼロに近づく…もし説得して成功したとしても…おそらく…また自爆プログラムが作動する…」

「…スバル今回は仕方ないわ…破壊しましょう…」
ティアナさんが静かに言った…
「でも！捕縛して自爆プログラムを解除出来れば！」
「いい加減にしなさい！」
「！！」
「スバル…アンタはあの子達の分まで生きるって決めたんでしょ？説得に失敗したら死ぬかもしれないのよ？そんな危険な賭けをして無駄にする気？」
「…そうだね。説得は諦める…けど、他の方法で助けてみせる。一人でも多く生きて欲しいから。」
「まったくアンタは…本当に…まぁ、いいわ。でも絶対に死ぬんじゃないわよ…？」
「うん。大丈夫。」
「話も終わったみたいやし、出発やね。」
「移動手段はどうするんですか？僕達は陸戦魔導師ですからフリードに乗らないと長距離は無理ですよ？」
とエリオ。
「でも、キャロが結構魔力使っちゃうよね。」
とギンガさん。

「その点は私に任せなさい！」

「その声は…アリサ？」

祐希ちゃんよくわかるね…

「さすが祐希奈ね。」

「当然よ。」

「「よし！」」

「…まだそのネタ引っ張るの？」

「まぁ、友情の確認みたいなもんよ。」

「変な確認だね…。」

「で、何でアリサがここに？」

「よく聞いてくれたわね！ワシントンまでの道のりは私の自家用ジェットで送るわ！」

「…ジェットって滑走路はどうすんのよ…」

「私をなめてもらっちゃ困るわ。」

パチン！

アリサさんが指を弾くと例の男の人達がボタンを持って現れる…

「ポチッとな。」

ゴゴゴゴ…

アリサさんがボタンを押すとどこからか音が響き出す…

「あれを見なさい！」

「「「「へ？」」」」

フォワードメンバー一同はアリサさんの指を指した方向を向いた。

そこには…

「金持ちってめちゃくちゃね…」

「うん…あれは凄いね…」

アリサさんの家から空に向かって滑走路が伸びていた…

「さ、滑走路も出来たし私の家まで行くわよ。」

「「「「はい。」」」」

なのはママ、フェイトママ、八神部隊長以外のフォワードメンバーは、アリサさんのめちゃくちゃさについて行けず…従うしかなかった…

「じゃ、みんな頑張ってね～。」

「あとから私達も合流しますから。」

「「「「…頑張るよ。」」」」

ちょっと元気がないけど大丈夫だよね…

「ほな、ヴィヴィオ、祐希奈、なのはちゃん、フェイトちゃん、シャマル、後でな。」

「はい。」

「はやてさんもがんばれ～。」

八神部隊長は微笑んで手を振り、みんなの後を追った。「じゃ、こっちも頑張ろっか！」

「二人の力を見せて？」

「「はい！」」

「はやてちゃんからリミット外されてるから全力でやるからね。」

「手加減はしないからね…」

とフェイトママ

「リミットなしのママ達か…」

「面白くなりそうね。」

「はい。二人のデバイスだよ。」

なのはママからフェアリーとアシェルが返ってきた。

「ヴィヴィオのファースト、セカンドと、祐希奈のフルドライブの方はなんとかなったけど、ヴィヴィオのサードモードは、手付かずだから未完成のままなんだ…
私とシャーリーとで頑張ったんだけど…」

「フルドライブが使えれば充分だよ。サードモードは少しなら使えるし、ありがとう。これならカナン君とでも力負けはしない。」

「サードモードはあんまり進められないよ…？
フルドライブだって、扱いは難しくなるし、魔力の消費や負担も大きくなる…模擬戦ではフルドライブは使わないでね？魔力が回復しきれないから…」

「フルドライブは模擬戦では禁止はわかった…でも、サードモードは使うよ？長時間はなるべく控えるから。」

「うん。約束ね。」

「なのはさん。ありがとう。シャーリーっていう人にもお礼を言ってもらっていい？」

「いいよ。今度、祐希奈にも紹介するからね。」

「楽しみにしてるわ。」

「あ、祐希奈もフルドライブは禁止だからね？」

「え～使いたかったのに…」

「ダメだよ？」

「は～い…」

「話は終わった？…なら始めようか？」

「うん。ごめんね、フェイトちゃん。」

「別にいいよ。」

「よし！祐希ちゃん。頑張ろ！」

「このさい勝つわよ！」

「シャマルさん！結界を！」

「はいはい。クラールヴィントお願いね？」

「ｙｅｒ」

家の周囲の世界が結界によって封鎖される…これで思い切りやっても問題ない…

「では、お互い準備を！」

シャマルさんの声。

「フェアリー！」

「アシェル！」

「レイジング・ハート！」

「バルディシュ！」

「「「セットアップ！」」」

「「「「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ　Ｓｅｔ　ｕｐ！」」」」

四人が光に包まれ変身！
デバイスを構える…

「始め！！」
「いくよ！祐希ちゃん！」

「オッケー！」

「なのは、援護を頼める？」

「任せて！」

全力全開での模擬戦が始まった…

第二十六話　救出に向けて（後書き）

どうもヨシュアです。　更新がちょっと遅れましたが脱字などは少ないと思います。次回はママ達二人との模擬戦を中心に頑張ります。

第二十七話　全開対決（前書き）

カナン君が出てくるまではにママ達と模擬戦をすることになった私達。どこまでやれるかわからないけど時間が許す限り頑張ります。

魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります。

第二十七話　全開対決

「ねぇ、ヴィヴィオ…」

「何？」

「私に考えがあるんだけど、協力してくれる？」

「もちろん！何でも言ってよ。」

「ありがとう。指示はタイミングが揃ったら出すから、なのはさんの迎撃を頼むわ…私はフェイトさんの相手をする…」

「わかった。任せて！」

「頼りにしてるわよ！」

祐希ちゃんはフェイトママに向かって走り出した。

「さて、私達は上空で迎撃するよ！」

「了解！」

「さて、時間もないし、全開で相手をしないとね…」

「そうだね…」

二人が光に包まれる…

「エクシードモード！」

「真・ソニックフォーム！」

なのは、フェイトの二人から魔力があふれだす。

「祐希奈は私が相手をするよ！隙があったら攻撃して！私ならかわせるから遠慮しないでいいよ！」

「わかった。頑張ってね。」

「うん。」

そう言ってフェイトは疾風のように祐希奈に走り込んだ。

「さて、フェイトさんはかかった…」

「何をぶつぶつ言ってるの！」

側面から斬り込まれる。

「ちょっとね！」

プロテクションを張り防ぐ。

「何を考えていても無駄だよ！祐希奈に私は倒せない！」

四方八方から斬りつけられる。

「…」

さすがに速いわ…でも、防ぐだけならなんとかなるわね。

「ディバイン！バスター！」

上空のなのはさんから砲撃がくる…しかし無視する。なぜならあの子が防いでくれるから。

「ディバインバスター！」

青色の砲撃が桃色の砲撃を相殺する。

「なるほど、なのははヴィヴィオが止めるってことか…」

「どうかしらね…」

「やっぱりヴィヴィオは邪魔するんだね。」

「約束だからね。通させないよ…」

「やってみなよ…」

「やってみせるよ。」

「アクセル・シューター！」

リミットが解除されているおかげかいつもより遥かに数が多い…

「アクセル・ランサー！」

対抗するためにこちらも作り出す…

「「シュート！」」

祐希奈とフェイトえと殺到する。

ヴィヴィオのランサーは祐希奈を狙う全てのスフィアを撃ち落としヴィヴィオの周りえと戻る。

「コントロールもうまくなったね。」

「えへへ、ありがとう。」祐希奈
「はぁぁぁ！」
払いと切り上げが同時にきた。足払いはジャンプして回避、切り上げはブレードを使い弾いた。
しかし、次の瞬間にはフェイトさんは背後に回り込んでいた。
「っ！」
ブレードを頭上に掲げて受ける。感覚が消えフェイトさんの片手に魔力が溜められる…
「トライデント！」
「くっ！烈破！爆砕拳！」
振り向きざまに炎の拳をフェイトさんに叩きつける。
「スマッシャー！」
至近距離で砲撃が放たれ拳と激突。爆風で二人が飛ばされる。
「はぁはぁ…フェイトさん速いわね～…ヴィヴィオより速いんじゃない？」
「リミット外したからね…速くなってるかもね…それについてきてる祐希奈もなかなか凄いよ…」
「どうも。」
短くお礼をいい再び構える…
「次から威力もあげていくよ…ライオットザンバー・カラミティ…」

フェイトさんの剣が一つに纏められ、一本の巨大な剣になる…

「はは…凄いのがきたわね…」

「いくよ…」

「いつでも…」

同時に踏み込む。

「「はぁぁぁ！！」」

ヴィヴィオ

「フェイトちゃんも本気だね…私も手伝わなきゃね…」

「抜かせないよ…」

「レイジング・ハート！」

「Ｒｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！」

「アクセル・シューター！」

さらに数が増える軽く７０くらいはありそうだ…

全て撃ち落とすため射線上に立つ…

「フェアリー！カートリッジロード！バレル展開！」

「Ｅｘｃｅｒｉｏｎ　Ｂｕｓｔｅｒ　ｃｈａｒｇｅ！」

「「シュート！！」」

シューターが一斉に発射されたが私の砲撃は四つに拡散し全てを撃ち落とした…が、

「エクセリオン！」

止めの砲撃が溜められる…こちらは溜める時間がない…なら！

「祐希ちゃんが私を信頼してくれている…

だから！通すわけにはいかないの！

フェアリーモードサード！クローモードで展開！」

「了解！」

「バスター！！」

目の前に迫る膨大な魔力に退くことなく立ち向かう。

「うぉぉぉ！！」

両手を振り上げ力いっぱい降り下ろす。

砲撃が切り裂かれ周囲に降り注いだ…

「まさかあれを切り裂くなんて…さすが聖王の力ね…」

「はぁ…はぁ…」

「マスター大丈夫ですか？」

「大丈夫。ちょっと制御に疲れただけだから…」

「さて、もう少し…」

（ヴィヴィオ！もういいわ！なのはさんの砲撃は通しなさい！コンビネーション行くわよ！）

「頑張らなくてよくなりましたね。」

「そうだね。もうすぐ仕上げだし気合い入れないとね。」

「ちっ！」

カラミティとか言うのになった途端、威力がめちゃくちゃあがってるわね…

「はぁぁぁ！」

大上段から降り下ろされる。

（いまだ！）

バックステップ…予想通りなのはさんが砲撃を溜める…

（かかった！ヴィヴィオアンタも私に砲撃撃ち込みなさい！）

（いいの？）

（私を信じなさい！）

（わかった。いくよ！）

「エクセリオンバスター
「エクセリオン！バスター！」」
なのはより少し遅れての砲撃を祐希奈に放つ…

「逃がさない！」
フェイトさんが斬りかかってきた…

「こっちのセリフよ！」
地面にブレードを突き刺す！

「砕けろ！」
カートリッジをロード…
「Ｂｌａｄｅ　Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！」
地面の中が爆発し破片が飛び散る。

「っ！」
至近距離にいたフェイトは回避不能…そこへ…2つの砲撃！

「このくらいは避けられるよ！」
フェイトさんはバックステップをして射程外に出る。

「私の能力忘れてるでしょ？…」

「Ｒｅｆｌｅｃｔｉｏｎ　ｆｅａｔｈｅｒ！」
祐希奈が白銀の羽を纏う…砲撃が吸収される…そして、

「反射！！」
なのはの砲撃はなのはヘヴィヴィオの砲撃はフェイトへ放たれる。

「「うわっ！」」

二人のバランスが崩れる…

「ディバイン！バスター！」

バランスが崩れたなのはにヴィヴィオは砲撃を撃ち込む。

「プロテクション！」

ギリギリで砲撃を防ぐなのは…

「くらえぇぇ！」

祐希奈は空中で体勢の崩れているフェイトに斬りかかる。

「くっ！」

一撃目の袈裟斬りは剣で受けた、

「これで…」

思い切り剣を振り上げる…カートリッジがロードされ炎が纏われた。

「どうだぁぁぁ！」

プロテクションで防いだが地面に叩きつけられた。

「ストームワルツ！」

さらに羽を羽ばたかせ竜巻を起こしフェイトを吹き飛ばした。

（フェイトちゃん大丈夫！？）

（私は大丈夫だから自分の心配をして！）

「はぁぁぁ！！」

祐希奈がなのはに向かって飛び上がる。

「アクセル・シューター！」

祐希奈を迎撃するべく、スフィアを作り出し、放つ

「当たらないわよ！」

翼を羽ばたかせ舞い上がる…そして鮮やかに回転などでスフィアをかわし突っ込む。

「エクセリオン！バスター！」

なのははカートリッジをロードし溜めを短縮、抜き打ちを使う。

「アシェル返せるわよね！」

「お任せを！」

翼を広げ砲撃を正面から受け止める。

「レイジング・ハート！お願い！」

「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ！」

砲撃の出力が最大になった…

「く…ぅぅ。」

少しずつ祐希奈が押され始める。

「トライデント！スマッシャー！」

なのはの側面からヴィヴィオが砲撃を放つ。

「っ！」

片手を放し防御する。なのはの砲撃の出力が低下し祐希奈に反射される。

「レイジング・ハート！」

デバイス本体を使い反射された砲撃を防ぐ。

「まだまだ！レイザーフォーテル！」

「転送。」

「ジャッジメント！アロー！！」

「Ｆｌａｓｈ　ｍｏｖｅ！」

なのははヴィヴィオの砲撃が弱まったのに気づき高速で上空に離脱…

しかし高速をこえた神速の速度で上空に上がっている影があった…

真・ソニックフォームに変身したヴィヴィオだ。

「プロテクション！」

なのはは瞬時に反応しシールドを張った。

「ウインド！スラッシャー！」

残りのカートリッジを全て排出風を纏った刃を叩きつける！

「たぁぁぁ！」

刃はプロテクションを抜け叩き込まれた…

なのはは地面に向かって一直線に落ちていった。

「はぁ…はぁ…ちょっとは効いた？」

「これが…私達のコンビネーション攻撃よ…」

下を見下ろしているとなのはママが立ち上がった…あれでも無理か…

竜巻も消えフェイトママも出てきた…なのはママの元へ向かい何かを話している。

「なのは…あの二人何をしたの？」

「あの子達…クロスシフトを使ったの…」

「クロスシフト？スバルやティアナのコンビネーション攻撃のことだよね…それを急造コンビの二人が使ったの？」

「うん。しかもあれはクロスシフトC…」

「Cって…あんなの成功以前にコンビネーションとしてダメなんじゃないの？」

「あの二人は、自分達の能力を最大限に使って、ほぼ完璧に決めた…あのクロスシフトCは二人だけにしか使えない…祐希奈の防御能力、2つのモードを使えて、さらに追撃を出来るスピードをもつヴィヴィオ…この条件が揃わないと完璧には完成しないよ…」

「あの子達はそんなに、成長してたんだね…」

「コンビネーションなんて数えるくらいしか教えてないのに…ほんとにあの二人は凄いよ。」

「ママ～どうするの～？まだやるの？」

「やるんならさっさと始めましょうよ！」

「残念ながら時間切れですよ。」

「リーゼさん！お久しぶりです。」

「挨拶は後です…早速転移をしますので、私の近くに来てください…」

「ヴィヴィオ～！祐希奈～！転移するから集まって！」

「…うわ、猫耳…！」

「使い魔さんですね。ワシントンで動きがあったんですか？」

「はい。ロッテの話によると黒い髪の男の子が現れたらしいです。」

「カナンね…」

「うん…」

「戦闘が始まるのは時間の問題らしいです…ですのでいきなりで

申し訳ありませんが…準備の方をお願いします。」

「はい。四人ともこの薬を飲んで。」

ゴクッ

「「「まっずー！！」」」

ヴィヴィオはもちろん、祐希奈、なのは、フェイトまでもがしばらく薬は見たくなくなる味だった…

「では、転移を始めます。離れないで下さいね…」

「「「はい！」」」

「祐希ちゃん…」

「何よ…」

「この戦いで最後にしたいね。」

「してやるわよ…終わらせるわよ…」

「うん…」

六人はカナンがいるワシントンへと向かった…

第二十七話　全開対決（後書き）

全開対決…とか書いてるわりには魔力節約のためにブラスター、集束砲、ヴィヴィオ達のフルドライブ禁止など全く全開じゃないですね…クロスシフト決めたところで時間切れとか我ながらＫＹだな～と思いましたが、真の全開対決はまたにしたいと思います。クロスシフトまともに食らってもケロッとしてるくらいヴィヴィオ達となのは達の差はありますのでまだまだ書くつもりです。　ではまた次回

第二十八話　総力戦（前書き）

カナン君がついに動き出した…予定よりかなり早い出撃になってしまったけれど、とにかく全力で頑張るだけだよ。　魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります。

第二十八話　総力戦

「スカリエッティ！どこにいる！さっさと出てこい！」

カジェット達を斬り飛ばしながら俺は叫んでいた。

心は生きている…このあ　いだのやつは一時的だったらしい…

（とは言ってもコントロールを戻せるのは一瞬か…俺にはどうすることも出来ない…）

カナンは自身が行う破壊の光景を心の中から見ているだけだった…

スカリエッティ…

「どうやらエクスカリバーの持ち主が動き出したみたいだね…新ナンバーズの諸君行ってくれるかな？」

「了解です。」

ナンバーズ一同が返事をし、八人が現場に向かった。

「ウーノは彼女らに指示を、クアットロはＩＳでガジェットの幻影を作ってくれ…これから六課の部隊が来るだろうからね。」

「了解です。」

とウーノ。

「は～い。サービスしてあげますよ♪」

「では、私はロストロギアの発掘に向かってくるよ…」

「お気をつけて…」

「いってらっしゃいませ～。」

「ああ、またあとでね…ククク…」

ヴィヴィオ達…

「うわぁ…凄い量のガジェット…」

大量のガジェットが空や陸にいた…建物や道路が破壊され、炎上している…

「ひどい損害ね…ワシントンに住んでた人達は大丈夫なの？えっとロッテさんだっけ？」

祐希奈は転移を手伝ってくれたもう一匹？の使い魔ロッテに訊ねた。

「しばらく見てるけど、もう、逃げ出してる人は見かけてないから、避難してるか…まだ建物の中に残されているか…どちらかしかないよ。」

「建物の中！？まずいじゃない！！探す方法はないの！？」

「あるわよ。私だけじゃ広範囲は無理だからリーゼを待ってたの。私こういう魔法苦手だからね…補助がいないとうまく出来ないんだ」

「じゃ、ロッテやるわよ！」

「うん。」

リーゼさんとロッテさんの下に魔方陣が発生。

「「戦闘区域には…いた！二人…あのビルの中五階よ！」」
リーゼさんとロッテさんが指差したのは…既に大部分が炎上しているビル…

「なのはママとフェイトママはビルの周囲のガジェットを倒して…ビルには私と祐希ちゃんで行くよ。シャマルさんは私達が帰って来たら治療してあげて。」

「ヴィヴィオ、祐希奈危ないよ。私が行くから待ってて。」
とフェイトママ。

「あのビルはもうすぐ崩れるわ…小柄な私達の方が動き易いわ。でも、ガジェット達に攻撃されたら終わりなのよ…だから迎撃をお願いしたいの。」

「カナン君のために魔力は温存しなくていいの？」
なのはママが聞いてくる。

「人を見捨ててまで温存したいとは思わないよ。」

「私も同じ。カナンだってそんなことした私達を良くは思わないだろうしね。もう少し待ってもらうわ。」

「だって。フェイトちゃんどうする？」

「こんなこと言われたら何も言えないよ…わかった。私達は迎撃にまわる。怪我しないでね？」

「うん。フェイトママ、ありがとう。行ってくるね。」

「怪我なんてしないし、ヴィヴィオにもさせないから安心して。」

そう言って私達はビルへと向かった。「助けに来ました！返事をして下さい！」

「なんでもいいから返事をしなさい！」

二人で叫びながら呼ぶ。

「ヴィヴィオ！上！」

「大丈夫！」

「Ｓｎｉｃ　ｍｏｖｅ！」

ズシン…

高速で横に避けると、直後に天井が崩れて瓦礫の塊が降ってきた。

「そろそろまずいね…倒壊するかもしれない…急ごう！」

「ええ！」

スピードをあげ時々降ってくる瓦礫を避けながら進むと二人の泣き声が聞こえた…。

「祐希ちゃん。今聞こえたよね！？」

「ええ！この先からね…フルスピードで行くわよ！」

「うん。」

さらに速度をあげ進むと小さな男の子と女の子の二人組いた。が、炎の壁と瓦礫に逃げ道をふさがれている。

「いた！私が少しだけ炎をあけるから突っ込んで！」

「わかった！」

「フェアリー！セカンドモード！」

「了解！」

カートリッジを一発排出。

「ウインド！スラッシャー！」

刃に纏われた風によって一瞬だけ炎の壁が吹き飛び道ができる。その間に二人は突っ込み、男の子と女の子の元へ到達。

「「わぁぁん！ママ！パパ！」」

まだ二人は泣いている…英語だ…

「大丈夫？もう安心していいよ。助けに来たからね。」

とりあえず女の子の頭を撫でる。

「ほら、男の子でしょ？いつまでも泣かないの。怪我はない？」

私より英語が話せる祐希ちゃんが男の子に怪我の確認をしている…

「お姉ちゃんが足捻ったみたい…」

「その子が足捻ったってさ。」

祐希ちゃんが通訳してくれた。

「背中に乗れるって聞いて？」

「う、うん…」

「わかったって。」

「ほらアンタもよ。早くしなさい。」

「わかったよ…」

私達は二人を背中に背負いデバイスを天井に向ける。

「穴は私があけるから、祐希ちゃんは先頭で瓦礫を防御してくれる？」

「オッケー！アンタ達目を閉じてなさい。」

「「わかった。」」

「行くよ！ディバイン！」

砲撃を溜める。祐希ちゃんは膝を落とし飛び立つ準備をする。

「バスター！！」

砲撃が放たれ一瞬空が見えたがすぐに瓦礫が降ってくる…

「プロテクション！」

祐希ちゃんがシールドを張りながら飛び上がった。私もそれに続く。

炎の壁が行く手を阻んだ…。

「ちっ！ちょっと我慢しなさいよ？」

祐希ちゃんが男の子に話しかける。

「うん。」

「いい返事よ！」

肩の手を外し一瞬だけ男の子が空中に浮く…祐希ちゃんは回転そして抱き抱えた。

「アシェル！」

「了解！」

翼が出現。大きく広げ炎に突っ込み道を作った。

上空に到達…

「ふぅ…」

「お疲れ様。シャマル先生の所に戻ろうよ。」

「ええ。」

二人は地上へと向かった

「二人ともお疲れ様。」

となのはママ。

「ヴィヴィオ、祐希奈。怪我はない？」
心配そうなフェイトママ。

「私も祐希ちゃんも大丈夫だよ。シャマル先生この子の足を治してあげてください…って」

「「すぅ～。すぅ～」」

「二人とも寝ちゃってるわね…」
シャマル先生が笑った。

「安心して寝てしまったみたいですね。とにかくこの子達をお願いします。」

「はいはい。任せて。」

「ちょうどいいぐらいにはやてちゃんも来たみたいだよ？ほら。」

「え？もう？」
なのはママが見ている方向に目を向けると確かにフォワードメンバーがこちらに向かっている…

「お待たせや。」

「いえ、全く待ってないです。どうしてこんなに早いんですか？」

「ちょっとな…」
八神部隊長が目をそらせた。

「スバルさん。何があったの？」
祐希ちゃんはスバルさんに聞いていた。
「それがね。めちゃくちゃ楽しかったよ♪」

回想、

「なんやて！？もうカナン君が動き出した？」
「はい。今までのデータと似ていることから彼だと思います。」
モニターに写っているのは、はやてに変わりロングアーチに指令をだしているグリフィスである。
「まずいな…さすがに早すぎるわ…なのはちゃん達だけでは、数も違いすぎるし…」
転移を使うか迷っているとアリサが登場。
「はやては何考えてんのよ？」
「暇だったからね。」
「アリサちゃん！？一緒に乗ってたんか？」
（次期社長が暇なわけないやんかー！）
と心の中でツッコミを入れておく。
「そうか。あのな、予想より早く相手が動いてもてな…転移を使

うか迷ってるんや…この航空機、無駄になってまうかもしれん…このままやと間に合わんようになってまうしな。」

「早く目的地につけばいいの？」

「あと二時間ぐらいや…無理やろ？」

「行けるわ…全員、体を固定しなさい！」

「？わかりました。」
一同ベルトを装着した。

「じゃ、行くわよ。」

アリサちゃんがいつの間にか赤いスイッチを手に持っている…

「ポチっとな…」

ガコン！

ん？なんやこの音は…

シュゴォォォ！！

「っ！」

体が座席に押し付けられた！

「アリサ…ちゃん…これは？」

「ふふ…こんなこともあろうかと…ロケット噴射機を取り付けておいたのよ…。」

「どんなことを想定しとるんやぁぁ！！」

あまりのことに今度は声に出てしまった…

「「「「きゃあああああ！！！」」」」

「あはははは！！」

機内には叫び声とスバルの笑い声がこだましていた…

回想終了。

「ってことだよ。帰りも乗りたいなぁ…」

「い～な～。私も乗りたかったわ。」

祐希ちゃん…私は遠慮するよ…

「とにかくこれでメンバーは揃ったことやし、反撃といこか！」

「「「「はい！！」」」」

「機動六課！突撃や！」

機動六課のメンバーはその声を合図にガジェット達に突撃した。

「クロスファイアー」

「アクセル・シューター！」

「「シュート！」」

ティアナさんとなのはママがスフィアを放つ。

それだけで小型の一型、二型は撃墜されていく。

こちらに気付いた大量の三型が向かってくる。

「「リボルバーナックル！」」

カートリッジをロードした、スバルさんギンガさんが二機を殴り飛ばし撃墜。

「ストラーダ！」

「Ｂｏｏｓｔ！」

エリオがストラーダのブーストで突っ込み貫く。

「フリード！ブラストレイ！！」

「ギャオオオ！！」

キャロの力で真の姿に戻ったフリードが薙ぎ払う。

四型まで大量にいる…

「アイゼン！」

ヴィータ副隊長がカートリッジを排出

「Ｇｉｇａｎｔ　ｆｏｒｍ！」

「豪天！爆砕！ギガントシュラーク！」

巨大化したグラーフアイゼンが纏めて殴り飛ばす。

「アギト！」

「おう！」

「「ユニゾン・イン！」」

これが…ユニゾン…シグナム副隊長の髪の色が薄いピンクになり、ジャケットの色が青になった。背中からは炎の羽がはえた。

「火竜！一閃！」

炎のムチのようなもので四型を薙ぎ払う。

副隊長達がガジェットを大量に破壊すると視界が開け遥か先にカナン君の姿が見えた。ガジェットに囲まれている…

しかし、見えたのは一瞬、再び大量のガジェットに阻まれ見えなくなった。

「私達がガジェットに穴をあける。みんなは先に行って！」

「なのは！行くよ！」

「うん！」

「エクセリオン！」

「トライデント！」

「バスター！」

「スマッシャー！」

なのはママとフェイトママから砲撃が放たれ、前方のガジェットが消し飛んだ…

同時に六課全員が突っ込む。

「ヴィヴィオ！祐希奈！ガジェットは私らが相手をする！行くんや！」

「はい！」

「ありがと！」

私達はカナン君に向かって飛び上がる。

「カナン君！」

「カナン！」

呼び掛けるとゆっくりとカナン君がこちらを向いた…

前に戦った時より黒い鎧が装着されている…

「邪魔者は排除する。」

カナン君が剣を構えた…

「カナン君…」

「やっぱり自我はないか…ヴィヴィオ、目を覚まさせるわよ…」

「うん。絶対助けるからね…」

「助けたら一発ずつ殴りましょうか…」
祐希ちゃんから凄い提案が来た。
「私は言うだけにしとくよ。」
「甘いんだから…私はやるわよ。」
「あはは…カナン君、とにかく覚悟してね…フェアリー…モードセカンド…」
「アシェル…ブレード展開…」
二人は剣を構え対峙する。
「「はぁぁぁ！」」
「…」
カナン救出のための激闘が幕をあけた…
「六課全員でヴィヴィオ達の手伝いや！ガジェットを排除するよ！」
「「「「はい！！」」」」
（ロングアーチから報告します。）
グリフィス君から念話が来た。
（なんや？）
（ガジェットの数がその場で増え始めています！おそらく敵のⅠ

Sの力かと思われます！）

（ってことは戦闘機人が動き始めたか…力の発生源を特定急いでくれるか？わかったら連絡して！）

（了解！）

「みんな！シルバーカーテンや！私が広域魔法で幻影ごと破壊するから下がって！」

「「「「了解！」」」」

全員が一度下がる。

「行くよ！リィン」

「はいです！」

「「ユニゾン・イン！！」」

はやてとリィンフォースがユニゾンし魔力が増加する。

「細かな制御は私がやるです！はやてちゃんはだいたいの位置を狙ってほしいです！」

「わかった。ありがとうな。ブレスベルグ行くよ！」

「はいです！」

はやての前方に魔方陣が出現…一斉砲撃を開始しガジェットの集団に撃ち込まれ、リィンの補助のおかげで外すこともなく、殲滅…

「さっすがはやてちゃん！」
となのは
「部隊長…凄いや」
スバルは目を見開いて驚いている。
「こんでしばらくはガジェットは出てこんはずや…」
「はやて…ガジェットの次のお客様の登場だぜ…」
はやてが正面を向くと八人の戦闘機人が立っていた…
「…こっからが頑張りどころってわけやね…」
「はやてとキャロ、ティアナはヴィヴィオ達に近付く戦闘機人を狙って欲しい…残りは前衛六人で倒すよ…」
フェイトは完全に戦闘体制…
「わかった。キャロ、ティアナ私らは遊撃にまわるよ…」
「「はい。」」
六課全員がデバイスを構える。
「排除開始…」
まったく感情のこもらない声でナンバーズの面々も固有武装を構えた。
総力戦が始まろうとしていた…

第二十八話　総力戦（後書き）

我ながら書いてて次回は大変そうだなぁ…と思って書いていました。精一杯頑張ります。今回の話ですがほとんど学校で仕上げたのでおかしい部分が多いかもです…すいません。見つけ次第修正はしていきますのでご容赦ください。

第二十九話　つながる心（前書き）

エクスカリバーに侵食され、結局ほとんど会話のないまま戦闘に入ってしまった私達、でも、カナン君に想いは届いていると信じて戦います！　魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります。

第二十九話　つながる心

「「はぁぁぁ！」」

「…」

戦闘を開始して何分たっただろう…私達の攻撃はすべてカナン君にさばかれている。しかし私達には傷が増えていく…

ギン！

「ちっ！」

祐希ちゃんが舌打ちをした。ここまでで何回聞いただろうか…

「反応速度が高すぎるよ…前より上がってる…」

「今更だけど面倒なやつね…」

突如今まで自分から動かなかったカナン君が突っ込んできた。

「祐希ちゃん！そっちだよ！」

「わかってる！」

身構えるが、一瞬で近づかれただの一振り…

ギィン！

「っ！」

祐希ちゃんなんとか受けた。が、すぐに押されはじめていた…

「祐希ちゃんもう少し耐えててね！！ウィンドスラッシャー！！」

隙ができたカナン君に大上段から全力で振り降ろした。

「…」

カナン君は私をは無視して剣を振り抜いた。

「きゃあぁぁぁ…」

ズシン…

祐希ちゃんはビルに直撃した…

「このぉぉ！」

がら空きの背中に振り下ろされた刃は…止まっていた…

「堅…い！」

鎧は異常に堅かった。カートリッジを使っているにも関わらず傷一つつかない…

「…邪魔だ！」

振り向きざまに剣が振られた。

「っ！プロテクション！」

バチバチバチ！

プロテクションと剣がぶつかるが破壊された。剣で受けるも祐希奈と同じく飛ばされる…

「あぁぁぁ！」

ズシン！

二人はビルにめり込んでいた…攻撃力の桁が違う…

（祐希ちゃん…起きてる？）

（なんとかね…でも、ビルの瓦礫に挟まれて動けないわ…）

（わかった…動けるようになったら参加して。）

（は！？一人でやる気二…）

（じゃあね！）

ブツッ

「真・ソニックフォーム起動！サードモードもお願い！」

使わなくては勝てない…

「どうしても…ですか？」

「攻撃力が違いすぎる…今並んでるのはスピードだけだからね…

スピードと攻撃力を上げて、一気にけりをつける…」

「了解…しました。」

ヴィヴィオの手に虹色の爪が装着される。

「行くよ！カナン君！」

再び彼の元へ…

「…」

カナンは剣を構えた…

（ヴィヴィオ！やめろ！死ぬぞ！）
カナンはヴィヴィオに心の中で叫んでいるが届かない…

「せあああ！」

ヴィヴィオの右腕が振り下ろされた。

「…」
カナンは無言で受け止める…今までとは違い、押し返せない。

「これなら！」
右腕を引き左腕を振り上げる。

「…」
カナンは無言で防ぐ。

「はぁぁぁ！」

ソニックフォームのスピードを生かし、側面や背後に回り、狙うが、カナンはすべて受け止めあるいはかわす…そして反撃！いきなり振るわれる剣はヴィヴィオの腕を掠めた…

「！」
スピードでは勝てると思ったのに！

「…」
ソニックフォームのヴィヴィオ以上の速度でカナンが動き始めた…
ヴィヴィオが一度振る度かすり傷が増えていく…

「痛！くそぉ！」

ついには防戦一方になりはじめる。カナンの速度はまだ上がる…
さらに…

「あああ！」

制御しているとはいえ未完成のサードモードがヴィヴィオの体に
負担を溜めていく…腕が耐えきれなくなり…血が流れ始めた。

「…」

（ヴィヴィオ！止まれよ！俺の体だろう！）

止めようとするが止まらない…自分の体すら少しも動かせない…

「あああああ！」

まずい…骨が…動かなきゃ…

あまりの痛みに一瞬動きが止まった…頭ではわかっているが動か
ない…その一瞬の間にカナン背後に回り…振り抜いた…

「あ…」

振り向いた時にはすでに降ろされている刃…

（終わったかな…）

「マスター！」

フェアリーが自動でプロテクションを張り防いだが再びビルに向
かい一つを貫通し二つ目のビルに激突し止まった…

「…」

（おい…まさか…やめろ！）

追撃をかけるためヴィヴィオに向かう…ほとんど一瞬で横たわるヴィヴィオに追い付き剣を構えた…

（やめろーーーー　！）

振り下ろされる瞬間…

「アンタは何やってんのよ！！」

ドゴォォン！

カナンは殴り飛ばされ吹き飛んだ。
ようやく瓦礫を抜け出した祐希奈である。

（祐希奈…）

祐希奈はブレードをしまい両方の拳に炎を纏って突っ込んでくる。

「アンタは！」
言葉と共に左の拳
ドゴォ！

「ヴィヴィオに何をしようとしてるのよ！！」
今度は右。
ドゴォォ

「いい加減に！」
ブレードが展開され炎を纏い振り下ろされる。

スドーン…

カナンは地面に叩き落とされた。
祐希奈は急降下しながら右腕を思い切り引く…

「目を覚ませー！！！」
「Ｂｌａｄｅ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！！」
ドーーーン……

怒号と共に突きが繰り出され大爆発が起きた…

「はぁ…はぁ…ちょっとは…効いた…？」

黒煙の中からカナンが姿を現した…黒い鎧は大半は破壊されていた…

「祐…希奈…」

「カナン！？もとに戻ったの！？」

「ヴィ…ヴィオと…一緒に…俺…を殺…せ…」

「っ！？何いってんのよ！？出来るわけないでしょ！！」

「早…くし…ろ…また…抑え…られな…くな…る。」

「アンタが鞘をつくりなおせば助かるわ！！
それまでは私達で頑張るから！
そんなこと言わないで！！」

「そん…な時間…は…ない…んだ…早…く…しろ！」

「嫌だよ…」
いつの間にかヴィヴィオが来ていた。カナンに負けず劣らずぼろぼろだが強い意思をもって言った…
「ヴィヴィ…オ…頼む…か…ら」
「そんなこと何度頼まれても聞いてあげない。」
珍しくヴィヴィオが怒っている。
「俺は…もう…お前ら…を傷つ…けた…くないんだ！」
「傷は時間が経てば治るけど…失った命は二度と戻らない…私はあなたにどれだけ傷つけられてもあなたを殺しはしない…」
「ヴィヴィオ…」
「絶対助けるから…カナン君も諦めないで…戦ってよ。カナン君なら出来るから…」
そして笑顔。
「ありが…とう！ありがとう！」
カナンは涙を流した…
「まったく…本当にヴィヴィオにはかなわないわ…」
「えへへ。」
「そろそろ…限界…みたい…だ。俺も…頑張…る…か…ら…な…」
鎧が修復され…さらに黒い胄まで…カナン君の顔の半分が隠れる…

「…貴様らがいくら努力をしようが無駄なこと…」
カナン君の口から違う声が聞こえてきた…
「カナン？違うわね…エクスカリバーのほうか…」
「そうだ…この男がいくら抵抗しようが私の力には勝てはしない…」
「確かに、カナン君一人では勝てないかも知れない…でも、私達がいる…」
「ええ。お前にカナンは渡さない…消えて…」
「貴様らの力では不可能だ…」
「「黙れ！！」」
「！」
「カナン君をここまで苦しめたお前は…許さない…」
ヴィヴィオから殺気が放たれる…
「ヴィヴィオ…行くわよ…」
「うん…」
「フェアリー！セカンドモード！」
「アシェル！」

「「フルドライブ！」」
「「Ｆｕｌｌ　Ｄｒｉｖｅ！Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ？」」
「「いつでも行ける！！」」
「「Ｓｅｔ　ｕｐ！」」

ヴィヴィオはセカンドモードで、祐希奈もフルドライブを発動…
二人は虹色と銀色の光に包まれる。吹き荒れる暴風…

「…」
風に構わず見続ける。

虹色と銀色の光が消える

ヴィヴィオは剣が消え手に虹色のグローブ…風が唸りをあげている…
祐希奈は翼が銀に輝き剣は燃え盛る…

「それが貴様らの全力だな？」

「「…」」
問いかけにも答えず無言で構える…

「ふん！まぁいい…来い…」

「カナン君…頑張ろうね…」

「帰ったらお祝いするわよ。」

二人は静かに呟いた…

（ああ…）　二人の声はカナンに届いていた…

スバル視点…

「リボルバー！シュート！」

私は、ナンバーズの一人と戦っていた…

「ＩＳツインブレイズジェノサイド…」

「リボルバーナックル！！」

拳と剣がぶつかるがすぐに均衡を崩した。スバルが吹き飛ばされたからだ…

「つ～！」

凄い力だな…あんなに簡単に押し負けたの久しぶりだ…

前を見るとナンバーズの一人が砲撃を放った。

「クロスファイアーシュート！！」

その全てをティアのスフィアが撃ち落とした。

「ティアありがとう！」

「お礼なんていいから止めるわよ！

方法は考えてあるの？」

「うん。あの子達は本当に感情がないみたい…ってことは完全に

破壊されない限りいつまでも動き続ける…それを逆手に取って機能停止にしないように、腕、足だけを行動不能にすれば…助けられる…」

「かなり痛そうね…だいたいそれって可能なの？」

「私の振動破砕をコントロール出来れば、内部のフレームだけ破壊出来るよ。」

「コントロールに失敗したら？」

「機能停止…だね…」

「アンタなら出来るわよ。
ヴィヴィオ達もどっか行っちゃったから遊撃の必要ないし、私も手伝うから。」

「ティア…うん！ありがとう！」

「じゃ、まずはあの二刀流と砲撃撃ってきたやつからね…」

「わかった…」

「行くわよ！ファントムブレイズ！」

「マッハキャリバー！」

「Ｗｉｎｇ　ｒｏａｄ！」

ティアナの砲撃が放たれると同時に空へ駆ける。

「回避行動…」

二人が左右に動きティアナの砲撃を避ける。
「リボルバーシュート！」
放つと同時に飛び降りる。
「迎撃…」
ブレイドの片方で砲撃を弾きもう片方でスバルを狙う。
「うぉぉ！」
リボルバーナックル。
自分の全体重さらに重力の力も加わり相手のブレードを押し返し、殴り飛ばした。
「ダメージ小…戦闘に支障なし…」
再び斬りかかってくる。
（スバル伏せなさい！）
ティアナの念話に従いしゃがむ。
頭の上をスフィアが十発ほど過ぎ、直撃。
（砲撃！避けて！）
「Ｗｉｎｇ　ｒｏａｄ！」
道を作り一気に離脱、砲撃が通過していた。
（そっちにブレードもったやつ！砲撃はこっちで止めるから決めなさい！）

（うん！）

振り返り迎撃の準備をする…

「ギア！エクセリオン！」

「Ｄｒｉｖｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ！」

マッハキャリバーから翼がはえる

「いっくぞぉ！！」

「最大出力で迎撃する…」

「リボルバーナックル！」

振るわれるスバルの右腕と相手の左のブレード。　激突…激しい衝撃が両者を襲うがさらに攻撃を加えるため、動く。

「もう一撃！」

左腕と右のブレードが激突するが、スバルは、すぐに身を屈め回転し、足払いを放つ。予想外の攻撃に防御を使ったナンバーズ。

「おおおお！」

一度攻撃に転ずればスバルの独壇場。

すぐに体勢を立て直し拳を叩き込む。

プロテクションで防がれているが、構わず蹴りを入れる。凄まじい連続攻撃に相手は押されていく…

「リボルバーシュート！」

零距離で撃ち込まれついにプロテクションは破壊された…

「援護要請…」

呟くと同時に砲撃が発車されるがティアナが全て落とした。

「終わりだよ…ＩＳ発動！振動破砕！」

「…」

最後の抵抗にブレードを斬りつけてくるがスバルはそれごと殴る。

超振動によってブレードは破壊され拳は腕へ、

「うおおお！」

ＩＳの出力をコントロールし間接部だけを破壊…

蹴りを放ち膝から下を動けなくした…

「腕部、脚部破損、救援を要請する。」

感情のない声で救援を呼ぶがくるはずがない…なぜなら…もう既に勝負は決まりかけているのだから…

（こっちも終わったわ。バインドかけて縛っておいたからさっさとやっちゃいなさい。）

（うん！ありがとう！）　六課メンバー、

「はぁぁぁ！」

フェイトは相手が放つブーメランを破壊…威力等前より上がっているが、ＡＭＦが発動していないこと、リミットが解除されている

こと、ヴィヴィオ達がどこかへ行ったので、遊撃組も含めたフルメンバーで戦えること、この三つの条件が重なった今、隊長陣に敵はいなかった…

「ライオットザンバー！カラミティ！」
巨大な剣がスピードと共に横に振り抜かれる。
「プロテクション」
防御をするが耐えきれず、吹き飛ばされる。一対一で勝てる相手ではない…フェイトはなのはに並ぶ実力者なのだから…

ヴィータ、シグナムの二人は三人を相手に互角の戦いをしていた。

「ラケーテン！ハンマー！」

「紫電！一閃！」

「回避行動…」
ナンバーズの三人は二人の攻撃力の高さから防御は危険と判断し、防御はせず、回避をし続けていた…

キャロ、はやてもまた、押している。

「ヴォルテール！フリード！頑張って！」

「グルゥゥゥ…」

「ギャオオオオ！」

「石化の槍！ミストルティン！」

強大な力をもつヴォルテール、フリードさらにブースト魔法で強化されたはやての広域魔法…ナンバーズ二人は近づくこともできない…

ナンバーズ達は今、気付くコミュニケーションがないために気付かなかった罠に…敵の攻撃は全て囮…自分達は一ヶ所に集められていることに…

「ブラスター3!!」

上空にいるなのはがファイナルリミット解除…ブラスタービットが展開され、ナンバーズの逃げ道を塞ぐ…

「プロテクション…」

ナンバーズ全員はプロテクションを張るが…無意味…

「全力!全開!スターライト!ブレイカー!!」

三方向から放たれる集束砲…プロテクションなどあっさり破壊し、ナンバーズ一同はその場に倒れた…

「やっぱり六課の戦力って以上だわ…」

ティアナはあきれ始めていた…前に戦った手強い新ナンバーズをこうもあっさり倒すのだから…

「だけど、なのはさんってやっぱり優しいね。自爆の危険があるのにノックアウトだけにしてくれるなんて…」

スバルは本局で暴れられては困るので間接の部分を全て破壊していた。

「さて、こいつらのことも更正させないとね。」

「うん！」

「そんなことはさせないわよ～ん。」

ナンバーズの一人から声が響いた…

「え！？」

「今回の子達なら心配ないかと思ってたのにぃ～残念ねぇ～。調べられたりするまえに私が自爆装置を作動させてあげるわね♪」

「や、やめて！！」

私は二度も悲しい思いをしたくない！

「あははは！この声が聞きたくてわざわざ連絡してあけたのよ～？じゃあ…」

「大人しく捕まってもらうよ？」

（座標特定完全に終了。位置は間違いないです！ただかなりの強度を持っています！）

「了解や…リィン！超ロングレンジで、ラグナロク当てられるか？」

「任せるです！」

「よっしゃ！」

「ちょ！！ちょっとこっちにはスイッチがあるのよ！！」

「関係あらへん…この子らが犠牲になるか、そっちが犠牲になるかの違いや…響け！終演の笛！ラグナロク！」

「もう！！いいわよ！」

通信が切れた…

「ブレイカー！！」

集束砲が放たれ遥か遠くに着弾し爆発した…

（グリフィス君どうや？）

（逃げられました…）

（そうか…ありがとうな。）

「多分こんで自爆の心配はないよ。」

「はやてさん…ありがとうございます。」

「ええよ。私も悲しい思いしたなかったしな。さて…あとはヴィヴィオ達やな…」

「私達は手を出しちゃ行けないんですよね…」

なのはさんに聞く

「うん…これはあの子達の意思だからね…大丈夫きっと三人で帰って来るよ…」

「ヴィヴィオ…祐希奈…頑張って…」

第二十九話　つながる心（後書き）

六課メンバーがやたら強くなってしまいました…アニメでもこんなに強くなかった気がします…ナンバーズ相手に楽勝って…とにかく次回はカナンとの戦いともう一つが中心になりますので、ではまた次回。

第三十話決戦（前書き）

エクスカリバーに対して怒りが込み上げた私達はついにフルドライブを発動する…助けるための決戦が始まった。

え～私、祐希奈からの忠告。この作者の中の作品ではダントツに長いからそこそこ時間がある時に読みなさい。

では、魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります。

第三十話決戦

「祐希ちゃん…」

「何よ…？」

「私、先に行っていいかな…ちょっとイライラしちゃって…」

「わかったわ…思い切りやってきなさい。」

「ありがとう…」

私は祐希ちゃんより一歩前に出た。

「私を貴様一人で相手にする気か？…」

相手は嘲り笑う…

「ちゃんと構えないと…知らないよ…？」

「貴様程度の攻撃、通らぬよ…」

「そう…」

ヴィヴィオが腕を引く…腕に風が集束される。

「風ごときで何をする気だ？」

相手はまだ余裕。で、構えてすらいない…

「あんまり調子に乗らないでよ…」

腕を突き出す。風の塊が放たれる。

「がっ！」

反応も出来ず腹部に直撃！

「バカな…私の鎧を…」

「喋ってる暇なんてないよ…」

背後にはヴィヴィオ…既に風は集束されている…

「なっ！」

「…ハイウインド…インパクト。」

「ぐあっ！！」

背中から巨大な風の塊を零距離で放たれ盛大に打ち上げられる。
打ち上げられた先にはまたヴィヴィオ…

「ラスト…」

「がはぁ！！」

頭を殴られ地面に一直線に叩きつけられた。

「だから、忠告しといてあげたのに…」

「貴様ぁ！！」
叩きつけられた地面から怒声が上がり膨大な魔力が集まる…

「これでも！くらえぇぇ！！」
放たれるは暗黒の光。

「アンタがね。」
祐希奈がヴィヴィオの前に立つ。

翼が輝くと同時に祐希奈の前の空間が歪む…

そこへ暗黒の光が着弾…方向を変え、放った本人のもとへ向かう。

「何！！！」
ドーーン！

直撃…

「結構な威力返せるようになってるわね…」

「…やったかな…」

下を見ていると立ち上がる姿がみえた…

「もう！許さん！殺す！」
飛び上がり近づいてくる。
「別に許してもらわなくて結構よ。」

「私も～。」

「死ねぇぇ！！」
ついに全力を出して向かってきた。
さすがに本気になると速い…

「「誰が！！」」
こちらからも向かう。

「「はぁぁ！！」」

「でああああ！」

三人が入り乱れて戦う…最初とは違いヴィヴィオ達が押している。

「紫電！一閃！」
ギン！

「ぐお…」

祐希ちゃんの一撃を防いだが動きは止まる…

再び風を集束しながら飛び上がる。

「祐希ちゃん退いて！」

「オッケー！」

祐希ちゃんが下がると同時に放つ…

「Ｗｉｎｄ　ｉｍｐａｃｔ　Ｅｘ！」

グローブについている金属からカートリッジ二発排出…

「調子にのるなぁぁ！！」

暗黒の光が集束…

「「はぁぁぁ！！」」

巨大な風弾と暗黒が衝突…威力は互角…相手はほとんど抜き打ちにも関わらず…だ。

「残念ながら私もいるのよね！炎弓クリムゾンアロー、転送…」

「了解。」

祐希奈の手には燃え盛る火の弓…

「灰塵とかせ！インフェルノバスター！」

名前の通り地獄の火炎を纏う矢放たれる…

「ちっ！」

黒いプロテクション…

着弾…黒煙があがる…

「どうかな？」

「多少は効いたんじゃない？」

祐希ちゃんの言う通り黒煙の中からカナン君が立ち上がる…胄がさらに顔を覆い見えているのは右目から上のみ…

「ふふふ…ははははは！」

「うわっ！ついに壊れた？」

「ククク…ここまで私を押した人間は久しぶりだ…」

「このまま倒してあげるわよ…」

「そうだな…そろそろ本気を出してもいいだろう…」

「負け惜しみ言ってんじゃないわよ。」

「口の減らない小娘だ…まずは貴様から殺してやろう…」

剣を構える…

「やれるもんならやってみなさいよ…」

祐希ちゃんもブレードを構え迎撃の準備を整えた…

「ふっ！」

相手が消えた！

「祐希ちゃん！後ろ！」

「っ！」

ギン！！

「ほう…今のを防いだか…次はどうかな…」

「やらせない！」

拳を構え突っ込んだ。

ガキ！

「なっ！最初より硬い…」

「ふん。最早ほとんど完成している私の防具にそんな拳や風など無意味…さぁ小娘…楽しもうか…」

「！！」

また姿が消える…

「ここだぞ…」

そいつは頭の上にいた…

「ちっ！」

舌打ちと共にブレードを振るうが相手はまた消える…

「ほら…ここだ…」

次は遥か上空…既に暗黒の力が集束されている…

「ではな小娘…死ね…」

（やらせるか！！）

暗黒が放たれた…回避不能…

「アシェル！！」

「了解！」

白銀の翼が輝き空間をねじ曲げる。着弾…

「ぅぅああ！！」

返せない…ゆっくりと歪んだ空間を進む暗黒の光…

「祐希ちゃん！！」

「大丈夫よ…」

「え？」

「アンタだけは、守るから…シグナムさんに誓ったから…自分以外の誰かを守るって…」

「待ってよ…祐希ちゃん！」

「あああああ！！」

祐希ちゃんが叫ぶと白銀の光が激しくなる…暗黒の砲撃はそれた…祐希ちゃんを巻き込みながら…

「祐希ちゃーーん！！」

「ちっ！こやつめ…最後に抵抗しおって…」
（お前に…俺の友達は…殺させねぇ…）

「まぁいい…もう一度放てば終わりだ…」
再び力を集束させようとすると、凄まじい殺気が放たれ始める…

「な…何だ？」

「フェアリー…シューティングモード…フルドライブ…」

「了解。」

黒かったジャケットは白く染まり、左手にはなのはのエクセリオンモードによく似たデバイス…宝石の色は虹色。

「お前は…カナン君だけに止まらず…祐希ちゃんまで大怪我を負わせた…私、本気で怒ったよ…」

「ふん！いくら怒ろうが、お前の攻撃は私には届かん…」

「どうかな…カートリッジシステム全解放…」

「了解。…カートリッジシステム、リボルバー、マガジン共に解放終了。リロード完了。」

「さぁ…行くよ。カートリッジロード！」
三発排出…
「エクセリオン！」
デバイスに金色の羽が出現。

「その程度で！」

暗黒の光を集束…

「バスター！！」

「止められると思うな！」

放たれる虹色の砲撃と暗黒…やはり暗黒の力が勝る。

「終わりだな…貴様を殺したあと小娘にも止めを指してやる。一緒に死なせてやろう。」

「…フェアリー。」

「Ｒｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！」

さらに三発排出。

「ほう、同等まで持っていったか。」

「まだだよ…」

四発、五発…砲撃がゆっくりと暗黒を押し返し始める…

「なに！？」

「いっけえぇぇーー！！」

カートリッジ七発目を排出し、砲撃が暗黒の光を消し飛ばし、相手のもとへ向かう。

「ちっ！！」

黒いプロテクションを張り受け止める…しかし止まらない。プロテクションを破壊し本人へ着弾。

そして…爆発…

しかし未だ、相手は立ち上がる…

「今のは…少し驚いたぞ…」

鎧にはヒビが入っている…

「油断してるからだよ…」

「そうだな…貴様の力を侮っていた…ここからは油断はない！」

凄まじいスピードで迫る…

「アクセル・ランサー！！」

三発排出、１００発以上のスフィアのナイフが出現。

「フルシュート！！」

一斉発射！

「無駄だ！！」

目に見えないほどの速度で剣を動かしランサーをすべて叩き落とす。しかしヴィヴィオはその間にカートリッジを装填。

ヴィヴィオとの距離を一瞬で詰め横一閃…

「ふ…」

デバイスを立て受け流す…士郎がやった完璧な受け流し…動きを止めず腹部にデバイスの先端を突きつける…

「くらえぇぇぇ！！」

六発リロード、零距離エクセリオンバスター…

「ぐあああああ！！」

プロテクションも張れず盛大に吹き飛んだ…

「はぁ…はぁ…」

吹き飛んだ先でゆっくりと起き上がる…

「殺す！！！もう小僧の体がどうなろうと構わん！！」

今までで最大の力を集め始める…大きい…回避出来ない…祐希ちゃんが！

「くそ！！」

急降下し祐希奈の元へそして横たわる祐希奈の前へ立つ。

「フェアリー…押し返せるかな…」

「正直難しいです…」

「そう…でも、頑張らなきゃね！！」

「はい！！」

「何…一人で…やろうと…してる…のよ。」

「祐希ちゃん!?」

「アイツは…二人…で助けるって…言ったでしょう?、私も協力するわ。」

「怪我は?」

「ちょっと頭がくらくらするだけよ…カナンが助けて…くれたみたいね。」

祐希ちゃんは顔をしかめて立ち上がる。

「じゃあ、一緒に助けようか!」

「ええ!!アシェル…クリムゾンアロー出して。」

「了解。」

「行くよ…」

「任せなさい。」

(二人も頑張ってるんだ…俺が頑張らないでどうする!!)

「く!小僧!また邪魔をするか!」

集束が遅くなる。

(あいつらと約束があるんでな!!)

「黙れ!!」

今、完全にカナンの顔が隠れた。

(うあああ!!)

「ふん！抵抗をするからだ…」

（俺は…まだ…終われないんだ…）

目の前に光が生まれ、金髪ショートの女性が現れた…

（私のマスターよ…）

（誰だ…？）

（すまない…大変なことに巻き込んでしまった…）

（お前…もしかしてエクスカリバーの…）

（ああ。破壊された鞘の人格だ…）

（なら話は早い！鞘をもう一度再生したいんだ！暴走を止めよう！）

（それは出来ない…）

（なんでだよ！マスターの俺なら出来るんだろ！）

（ああ。鞘自体の再生は可能だ…だがそのあとが問題なのだ…）

（どうなるんだ？）

（今までの憎しみをすべて外に出してしまう…早い話は化け物が出てくると言うことだ…下手をすれば地球が侵食される…）

（っ！？）

（だから…すまない…マスターを助けることは…）

（…大丈夫だ。鞘を作り直そう。）

（何を言っている!?止められなければ地球が滅ぶかもしれないのだぞ!?）

（だから大丈夫だって、俺とお前、ヴィヴィオと祐希奈、その仲間達…めちゃくちゃ強いんだぜ?きっと止められる。）

（…何故そんなに前向きに考えられるのだ?）

（それがなぁ…祐希奈って奴がいるだろ?アイツがまたひどい奴でさ。前向きに考えなきゃ、毎日が過ごせないほどの野獣でな。前向きに考えるようになったのはその影響かなぁ。その後で、ヴィヴィオの優しさ、あれが嬉しくてな。可愛いし強いし、そんな奴等と学校生活が送れるかもしれない。目の前にその可能性が出てきた。なら、多少のリスクはあっても、やりたくなるよな?）

（多少のリスク…か。ふふ…マスターのお前がそう言うと大したことではなく感じてしまうな。）

（な?どうせこのままほっといても、結構な損害が出るんなら、纏めてかたずけてハッピーな感じで終わろうぜ?）

（いいだろう。やってみよう!!）

（おっしゃ!!ならあいつらにも伝えられるか?）

（ああ。今ならば出来る筈だ…繋げたい相手を念じろ。）

（わかった！）　（ヴィヴィオ！祐希奈！あとその仲間！聞こえるか？カナンだ！）

「カナン君！？」
「カナン！？」

（その仲間達の隊長のはやてや。話はだいたいわかってる…暴走のことやな？）
経験からかはやては理解していた。

（ああ。ちょっと化け物退治に付き合ってくれ。）

（気軽に言うなぁ…まぁ、ほんなら今から向かうわ。ちょっと待っててな。）
念話が切れた。
（カナン君？私達はどうすればいいの？）

（まず、俺をぶっ飛ばせ遠慮はしなくていい。）

（任せなさい！今までの分全部纏めてぶっ飛ばしてあげるわ♪）

（お前は多少手加減してくれ…）

（無理よ♪）

（言うと思ったよ…じゃカナン君も頑張ってね。）

（ああ。頼むぞ。）

「さて、やりますか！」

「全力全開でね！」

「ヴィヴィオ…圧縮は私がやるから、私の前にあるだけ魔力をつぎ込んで！」

「オッケー！！」

「カートリッジロード！！」

驚異のカートリッジ１２発ロード…

「うぉぉ！！」

ヴィヴィオが膨大な魔力を集束する。

巨大な魔力球が発生…

「カートリッジロード！」

カートリッジ六発排出…地面に計１８発の薬莢が落ちる…

「はあああ！！」

魔力球をさらに魔力で押し固め…巨大な火矢を作り出す…

「これが！」

「私達の！」

「最後の切り札！」

「「狙うは一点！！全力！！全開！！シューティングスター！！ブレイカー！！」」

最大の攻撃力を誇る矢が放たれた…

カナンの妨害により遅れていた相手も集束が完了…

「二人そろって!!消し飛べぇぇ!!」

ヴィヴィオ達が放った矢の何倍も大きい暗黒の塊を放つ。

火矢と巨大な暗黒が激突!!周囲の建物が崩壊…何もない空間ができた…

「そんな小さな矢で!押し返せるわけがなかろう!!」

「押し返す?」

「何言ってるんだろうね…私達は…」

「「貫くだけ!!!」」

言葉と同時に矢が暗黒のど真ん中を貫通…暗黒の力は霧散した…

「ばかなぁぁぁ!!!」

直撃と同時に空へも届く火柱が発生…

(カナン君!あとは任せるよ。)

(しくじらないでよ?)

(ああ!!)

（さて、やるぞメイデン！）

（メイデン？何だそれは…）

（エクスカリバーは剣の名前…でもお前は名前ないだろ？だからメイデンって名前でいいだろ？）

（何か由来があるのか？）

（閃いただけだ。意味は知らん！男がそんな意味まで考えてると思うか？）

（思わないな…）

（だろ？でも女神てきな印象があった気がするしお前綺麗だし、いいだろ？）

（っ！？何を言っている？）

（なぁーなぁーいいだろ？）

（わかった！わかったからさっさとやるぞ！）

（おう。いくぞメイデン！）

（ああ。）

（我…今ここにマスターの名において鞘の再生を宣言する。）

（我、メイデンは、カナンをマスターと認め鞘の再生を開始する。
）

（（再生開始！！））

「なんだ？…っ！何故鞘が！？」
腰に鞘が装着される。

「小僧貴様！！」
ガシャッ
左手が動きだし鞘の入り口に切っ先を近づける…

「させん！」
右腕で左腕を押さえつける。
（いい加減に言うこと聞きやがれ！！）
右腕が止まり剣が鞘に収まった…

「ぐあああああ！！」
カナンから邪気が立ち上る…

「貴様らは…貴様らだけは殺し…てやる…からな…」
邪気は完全に抜けた…

「ふぅ…なんか久しぶりに空気を吸った気がする…」
仰向けになり寝転がっていると懐かしい声が聞こえた…

「カナン君？」
「カナン？」

「お～う…ヴィヴィオ、祐希奈久しぶりだな。」

「っ！！良かった…良かったよぉ～～」
ヴィヴィオは泣き出してしまった。
「ごめん…もう大丈夫だから…ごめんな…」
優しく頭を撫でる…
「カナン…」
「ん？」
パシン！！
「って～何すんだよ！！」
「本当に…本当に心配したんだからね！！」
お、おいおいまさか…
「「うあああん！！」」
「だからごめんって！！頼むから泣き止んでくれよ！！」
「あ～あ、女の子二人を泣かすなんて、カナン君いけないんだ～」
「え？お前らは？ヴィヴィオと祐希奈の仲間か？」
「私はヴィヴィオの母親の高町なのはです。」
「あ、すいません！娘さんを泣かせてしまって…」
「にゃはは、仕方ないよ。」

「…でも、地球についたら覚悟してね？」
金髪の女性が凄まじく怒っている…
「あの、あなた様は？」
「ヴィヴィオのもう一人の母親…フェイト・T・ハラオウン…」
「もう一人って…」
「とりあえず黙って…」
「はい…」
「まぁまぁフェイトちゃん今は落ち着いてえな。」　先程の声
「はやてさん…ですか？」
「そうや。よろしゅうな。」
「はい。」
「私、スバル・ナカジマ！」
「ティアナ・ランスターよ。」
「エリオ・モンディアルです。」
「キャロ・ル・ルシエです。」

「ギンガ・ナカジマです。」

「シグナム…」

「ヴィータだ。」

「シャマルです♪」

大量の自己紹介…ヤバい覚えきれん…

「風間カナンだ。よろしくな。」

とりあえず名乗る。

「さて、自己紹介もすんだし、これからの敵やけど…多分私の時と同じで複数のシールドを張ってると思う…みんなの力をあわせてシールドを破壊するんや。頼むよ。」

「「「「了解!!」」」」

突如、世界が暗黒に包まれる…地上から禍々しい、邪気が立ち上る…

「うわ…気持ちわる…」

それは、色々な触手をはやし、ぐちゃぐちゃしたものの塊だった…吐きそう…

「出てきたな…ほな皆化け物退治といこか。」

「「「「はい!!」」」」

「全員まとめて殺してやる!!!」

叫ぶ異形…あれは…俺?

「俺をそんな気持ち悪いもんにつけるな！！」

「あ、向こうの方がカッコいいわね。」

「…」

「そ、そんなことないよ！カナン君の方がカッコいいよ！！」

「ヴィヴィオ、ありがとな…」

「えへへ。」

二人の間には桃色の空気が…

「ラブるな！！」

ドゴォ！

消し飛ばされた…

「げふぅ…」

「カナン君！！」

「…漫才やっとらんとやるよ？」

「あ、俺先頭言っていいっすか？」

「「「復活はや！！」」」

「なれてるんで…」

なんて悲しい男の子だろうか…

「ほ、ほんなら頼めるか？」

「あ、了解っす。」

「行くぞ。メイデン。」

「はい。」

「貴様は許さん！八つ裂きにしてくれる！」
鋭い触手が伸びて来るが無視…

「壱式抜刀剣術…」

エクスカリバーの柄に手をかけ膝を落とす…

「暗夜一閃…」

一瞬で異形の背後へ通り抜ける…
ガシャン…

結界二枚が破壊された…

「何！？」
異形は何が起きたか分からず驚く。

「次、私となのはママ！」

「わかった。一緒に行こう。」

「高町ヴィヴィオと！」

「その母高町なのは！」

「「行きます！！」」

「「エクセリオンバスター！ストライクフレーム！」」

全く同名の技を異形の左右から構える…

「「ドライブ！！」」

二人で突撃…結界一枚を破壊…まだ止まらない…

「「ブレイク！！」」

ヴィヴィオは六発、なのはは三発のカートリッジを排出…

「「シュート！！」」

零距離砲撃…結界三枚を一気に破壊…しかし…

「死ね！小娘！」

複数の触手から光がほとばしる…

「っ！」

放たれた砲撃はヴィヴィオに向かう…

「だあああああ！！」
カナンが目の前に現れ砲撃を切り裂いた。
抱えられ離脱…
「あ、ありがとう…」
「たくっ大丈夫か？」
「うん！！」
満面笑顔。やべえ…可愛い…
「カナン君？顔が赤いよ？」
「気のせいだ…」
「祐希奈…師弟の力見せてやろう。」
「うん。」
「剣の騎士シグナム…」
「その弟子一之瀬祐希奈！」
「烈火の剣聖アギトもいるぜ！」
「「「推して参る！！！」」」
「アシェル！ブレード最大出力！」
「了解。」

「行くぞ…アギト」

「おうよ！！」

二本の巨大な火柱が立つ…

「「「火竜！一閃！」」」

叩きつけられた二本の炎　シールドを貫通し本体へ届く…

「くそぉぉ！貴様ら！」

六課全員に触手を向け砲撃を放とうとするが…

「セカンドドライブ！」

「真・ソニックフォーム！」

「「はぁぁぁ！！」」

神速の速さでヴィヴィオとフェイトが動き触手を全て斬り飛ばす…

「ギン姉！行くよ！」

「ええ！」

「「Ｗｉｎｇ　ｒｏａｄ！！」」

「スバル・ナカジマと」

「ギンガ・ナカジマ！」

「「行きます！！」」

「「うおおおお！！」」

光の道を突き進み異形の頭へと向かう…

「来るな！！」

再び触手を再生させ凪ぎ払おうとする…

「やらせんよ！」

「です。」

「八神はやてと、」

「祝福の風リインフォース。」

「「行きます！！」」

「「ミストルティン！！」」

触手に光のやが刺さり石化する…その間にナカジマ姉妹は突撃。

「「リボルバー！！シュート！！」」

カナンの形をした異形が撃ち抜かれ破壊された…

「あと一息です！！」
とシャマル。

「キャロ・ル・ルシエ行きます！」

「来て！！ヴォルテーール！！」

「グルゥゥゥ…」

異形に負けないくらいの大きな竜人…

「やっちゃえ！！」

「ガアアア！！」

ヴォルテールの口が開き破壊の光が放たれる…

「うがあああ！！」

異形の残骸は叫びなお再生する…

「行くよ！フリード！」

「ギャオオオ！！」

「エリオ・モンディアル！」

「鉄槌の騎士ヴィータ！」

「「突撃！！」」

「フリード！ブラストレイ！」

「ギャオオオ！」

フリードの口から放たれる魔力…異形を燃やす。

「ガキ共め！！」

カチン！

「あたしは…」

「Ｇｉｇａｎｔ　ｆｏｒｍ！」

「大人だぁぁぁ！！」

降り下ろされる巨大なハンマーは異形を砕く…

「サンダー！レイジ！」

フリードから飛び降り雷撃を纏った一撃を放つ。雷の効果で相手が痺れ動きが止まる…

「本体コア…露出…」

「今回はアルカンシェルはない！私らだけで破壊するんや！！」

「「「「了解！！！」」」」

「目覚めよ…破壊の妖精！！」

ヴィヴィオ…

「撃ち貫け…炎の天使！」祐希奈…

「消し飛ばせ…断罪の女神…」
カナン…
「「全力！全開！」」
なのは、ティアナ…
「一撃！必倒！」
スバル…
「雷光！一閃！」
フェイト…
「響け！終演の笛！」
はやて…
「ディバイン！バスター！！」
スバルの砲撃が炸裂…

「「スターライト！！」」
「プラズマザンバー！！」
「ラグナロク！！」
なのは、ティアナ、フェイト、はやてが魔力を最大まで溜める…

「「「「ブレイカー！！！！」」」」

さらに四発の集束砲が重なる…

「ディストラクション！！」
掲げられるは破滅の光…

「ヴォルカニック！！」
引き絞られるは地獄の火炎…

「エクス！！」
振り上げられるは、聖なる光…

「ブレイカー！！！」

「アロー！！！」

「カリバー！！！」

巨大な集束砲…溶岩にも匹敵する超高温…本来の色を取り戻した聖なる光…その3つが加わり、コアは耐えきれず…破壊された…

光が徐々に収まり…静けさが支配する…

「やったの…かな…」

「だといいけど…」

「メイデン…どうだ？」

「破壊されました…」

しばらくの沈黙…そして爆発。

「「「「「「「やったーーーー！！！！！」」」」」」」

あまりの嬉しさに全員が跳び跳ねた。…いや、シグナムは我慢していた…

「これで、大丈夫なんだよね？カナン君もどこにも行かないよね？」

「ああ。お前らと一緒に学校に行けるよ。」

「良かったわね。ヴィヴィオ。」

「うん！」

（ほんまはもうちょいまたなあかんのやけどな…）

（水差しちゃいけないよね。）

（うん。）

保護者一同はとりあえず見守った。

第三十話決戦（後書き）

もの凄く疲れました…夜の7時から書いて終わったのが11時…まぁ僕の執筆速度が遅いせいもありますが…とにかく後書きまで呼んで下さった方々ありがとうございます。ではまた次回。

リリカルヴィヴィオ舞台裏　救出編を終えて。（前書き）

ちょうど質問も少し来たから舞台裏でのお話です♪　ちなみに次回の話はコメディー中心の予定よ。　また俺が悲惨な目にあうのか…　もちよ。　では魔法少女リリカルヴィヴィオ外伝始まります。

リリカルヴィヴィオ舞台裏　救出編を終えて。

カ
「このリリカルヴィヴィオも、もうすぐ終わりかぁ…俺の出番少なかったなぁ…」

祐
「ふっふっふ…カナン…何を言っているの？終わるはずないでしょ？むしろこっからが始まりよ！」

ヴ
「いや、あのね、確かに終わらないけど始まりではないと思うよ？」

カ
「こんな長いプロローグがあってたまるか！！」

祐
「この作者はね…カナンを出したはいいけど思いのほか救出に手間取ってるだけなのよ！！」

ヴ
「無駄に強くなっちゃってるしね～本当は二十話くらいで復帰させる予定だったらしいよ？」

カ
「そ、そんな設定が…」

祐
「だいたいね、学生生活もまだろくに書いてないのに終わるわけな

いでしょ？ホントにバカね。」

ヴ
「確かにね～バスケくらいしか書かれてないよ。」

カ
「ってことは俺の出番は！？」

祐
「あるわよ。」

カ
「やった！」

ヴ
「主にいじられやくで…」

カ
「え！？ちょっとヴィヴィオさん！？本当ですか！？」

祐
「そのために紙芝居ネタを使わせてもらうんでしょうが…ククク！！」

ヴ
「祐希ちゃん怖いよ…」

カ
「アリサ道場に出したの間違いだったな…より凶暴になってやがる…」

祐
「楽しみにしてなさい…カナンの恥ずかしい話ベスト１００００…」

カ
「ちょっと待て！おかしいだろ！アリサ道場の時点でかなり多かったのに、１００００って！！俺の人生どんなだよ！！」

祐
「そりゃあ…恥ずかしい思いの塊でしょうよ。」

ヴ
「カナン君…」

カ
「ヴ、ヴィヴィオ？そ、そんな哀れみの目で見ないでくれ…祐希奈の冗談だから…な？」

祐
「私はいつでも本気よ♪」

ヴ
「らしいよ？」

カ
「祐希奈！お前と違ってヴィヴィオは純粋なんだぞ！？信じちまっただろ！！」

祐
「私と違って…ねえ？アンタも言うようになったじゃない…」

カ
「すいません！！許して下さい！！」

祐
「カナン？」

カ
「はいぃぃ！！」

祐
「バイバイ♪」

カ
「ぎゃあああああ！！」

ヴ
「あ～私、逃げるね。」

カ
「ヴィヴィオ！ちょ！！」

祐
「一撃粉砕！！」

カ
「待てーーー！！」

祐
「炎王烈破爆砕拳！！」

カ
「ぐぼへ！！！」

ヴ
「わー…たかーい…」

ア
「止めは任せなさい！！一撃轟沈！炎王烈破旋風脚！！」

ヴ
「あ、アリサさん…」

カ
「ごふ！！」

ヒュルルル…ズドーン…

祐
「さすがね。アリサ！！」

ア
「アンタもね。祐希奈！！」

祐・ア
「「よし！！」」

カ
「なんでお前が魔法使ってんだよ！！」

ヴ・祐・ア

「復活早！！！」

カ
「慣れてますから…」
遠い目…
ヴ
「カナン君？カナンくーん！おーい！！」

カ
「はっ！！」

ヴ
「良かった帰ってきたよ。」

祐・ア
「ちっ！！」

カ
「ひどくないっすか！？」

祐
「だから道場で言ったでしょ？」

ア
「アンタの人権は…」

祐・ア
「私達のものよ♪」

カ

「もういいっす…で？なんで魔法を使ってるんすか？」

ア
「私は道場に住む最強のアリサだからよ！」

カ
「いや、勝手にキャラ借りたらいけなくないっすか？」

ア
「その変は作者が土下座すればいいのよ。」

ヴ
「めちゃくちゃだ…」

カ
「ああ…」

祐
「一応クロスになるの？」

ア
「さぁ？シオンを借りてるわけじゃないしね…きっと許してもらえるわよ。」

ヴ
「許してもらえなかったら？」

祐・ア
「作品打ち切り？」

カ
「俺の出番が！！」

祐・ア
「知らん。」

カ
「もういい！俺から謝る！！勝手にキャラをお借りして申し訳ない！！いくらでも謝りますからどうかお許しを！！！」

ヴ
「えと、私からもごめんなさい…」

祐・ア
「作者にやらしとけばいいのに…」

ヴ・カ
「…」

す
「じゃ、次のつけたしに行ってみましょー。」

ヴ・祐・カ・ア
「お前もかい！！！！」

す
「気にしない。気にしない。で、質問の内容ですが、ヴィヴィオの髪型はどうなってんの？」

ヴ

「わ、私ですか…私は普段はおろしていますが、変身時はポニーテールです。」

祐

「サイドじゃないの？」

ヴ

「ママと被るからね。」

カ

「原作のラストはサイドじゃなかったか？」

ヴ

「聖王ではなく、魔法少女だから、多少いじったんだよ。」

す

「続いての質問、フルドライブ時の能力の違いは？」

ヴ

「私はシューティングはカートリッジが１２発装填になって、セカンドは、風の力で凄まじい加速を得る…ということになってます。」

祐

「私は、反射能力強化とブレードに炎が付加されたこと、クリムゾンアローが使用可能になるくらいね。」

す

「カナンの戦闘スタイルは？」

祐

「体をはったボケと私へツッコミ。そのあとの反撃をくらうのがお約束。」

カ
「それ違いますよねぇ!?改めて、鞘からの抜刀剣術が基本になるな。」

ア
「これで許してもらえなかったら壱式で終わりだけどね。」

カ
「誰のせいだよ!!」

祐・ア
「うるさいわよ下僕。」

カ
「下僕……」

ヴ
「ああ!カナン君!しっかりして!!」

す
「メイデンの本当の名前の由来は?あるんだろ?教えろよ?」

カ
「えらく挑戦的な奴だな…答えは作品で述べたようにない!!」

祐
「こいついいきったわよ…」

ア
「最低ね…」

す
「うん。」

ヴ
「カナン君…最低だよ…」

カ
「ヴィヴィオまで!?だって、俺は男だぞ?はやてさんみたいに祝福の風…とか考えつかねえよ!」

ヴ・祐・ア・す・メ
「はぁ…」

カ
「ため息やめて下さい!ていうかメイデンまで参加するな!!」

メ
「こんな人が私のマスターですか…先が思いやられますね…」

祐
「同情するわ…」

ア
「可愛そうに…」

す

「ドンマイですよ。」

ヴ
「諦めよう?仕方ないよ。」

カ
「俺…の立場って…」

祐・ア
「だーかーらー」

ヴ・す・メ
「下僕♪」

カ
「もうお前らなんてぇぇ!!」

祐・ア
「叩きのめしてあげるわ!!」

ヴ・す
「頑張れ～。」

フ
「マスター…もしかしてこれを見たかっただけですか?」

ヴ
「うん♪道場の時のが面白かったからね♪」

す

「あ～カナン君両腕に間接技かけられてますね～。」

祐・ア
「ジェノサイド！クロス！！」

カ
「ぎあああああ！腕が折れるーー！！」

ヴ
「お茶が美味しいです～」
ずずず～

す
「お菓子もありますよ～？」

ヴ
「わーい♪」

祐・ア
「滅殺紅蓮撃！！」

カ
「メイデン！プロテクション！」

メ
「嫌です♪」

カ
「ちょ！ごふぅ！！！」

す
「さてそろそろ終わらしましょうか。」

ヴ
「は～い♪フェアリー。シューティングモードフルドライブ♪」

フ
「了解♪」

祐・ア・カ
「またこのオチか！！？？」

ヴ
「目覚めよ♪破壊の妖精♪」

祐・ア・カ
「１２発もつかうなーー！！！」

ヴ
「ディストラクション♪」

ヴ・す
「ブレイカー♪」

祐・ア・カ
「のわあああああああああ！！！！！」

ヴ
「ふぅ…楽しかった。」

す
「ではまた次回♪」

ヴ・す
「ではでは～」

祐・ア・カ
「もう…この…コーナー…やだ…」

リリカルヴィヴィオ舞台裏　救出編を終えて。（後書き）

まず…テスタメントさんすいません！！アリサ道場のアリサを再び勝手に借りてしまいました！！さらに道場のパクりみたいな感じになってしまい申し訳ないです！！　読者の皆さんカナンも加わりより賑やかになりそうな予感です…戦闘がまたしばらく停滞しそうです…こちらもすいません…

第二部一話賑やかな家（前書き）

ようやくカナン君を助けられた私達は喜びあった。でも周りは瓦礫でいっぱい…これ…どうしよう…魔法少女リリカルヴィヴィオ始まります。

第二部一話賑やかな家

「で…この有り様どうすんのよ…」
周囲に広がっているのはビルなどが消し飛ばされ瓦礫のみがある景色…

「う～ん…ほんまにどうしょう…」
八神部隊長何にも考えてなかったー！！

「その点は大丈夫よ。」
声が響き振り返ると使い魔リーゼさんとロッテさんが立っていた。

「ね、猫人間！？」
使い魔のことを知らないカナン君は混乱している…

「あのね、二人とも使い魔って言ってね。人間じゃないんだよ？」

「へぇー…使い魔なんて漫画の世界だけかと思ってた。」

「それを言ったら魔法もそうでしょうが…バカたれ。」
祐希ちゃんから始まり…
「バカたれ」
ティアナさん…
「バカたれ…」
フェイトママ…

「皆さんきつくないっすか！？」

「で、何で大丈夫なの？」　となのはママ。

「あなた達が戦闘を開始した時点で私達で結界を張ってあげたのよ。」

「わぁ…ありがとうな。助かったわあ。」

「これからどうするの？地球に戻るんなら準備するけど？」

「そやね～ほんなら私の家の前にお願いできるか？」

「じゃ、全員集まって下さい。」

「なぁ…今更思ったんだが…この部隊メンバーって女ばかりなのか？」

「えっとね。前線メンバーはエリオだけかな。だけど、情報局員は男の人も結構いるよ。」

「ってことは…もしまた出撃があったらこのメンバーなのか？…」

「今回は特別だけどね。まぁ、この中のメンバーの誰かは一緒かも。」

「…エリオさん。」

「エリオでいいよ。ヴィヴィオ達もそう言ってるし。」

「じゃあ、エリオ。」

「何？」

「数少ない男メンバーとしてよろしくな！！」

「あ、うん！ようやく同じ立場の人が出てきてくれて嬉しいよ。」

ここに男の友情が芽生えた。

「じゃ、転移しますよ。」

「ここは…海鳴市！？」

「そうや。私の実家はここなんよ。」

「へぇー…」

「ま、とにかく中に入ろか？」

「「「はーい。」」」

「で、カナン君？」

部屋のソファーに六課メンバーが座るのを確認し、八神部隊長が話を始めた…

「あ、はい。なんすか？」

「実はな…カナン君は罪を犯してるんよ…」

「まぁ…覚悟はしてましたよ…」

「八神部隊長！カナン君は…」

私は罪をなくそうと言おうとしたが…

「ヴィヴィオ…ちょっと黙っとって。」

「八神部隊長!!」

「まだ話の途中や…」

これ以上発言は認めてくれないらしい…

「…」

「罪の内容やけど、最初は公務執行妨害、ヴィヴィオ、祐希奈の二人に殺人未遂…この2つが主な罪の内容や。」

「はい…」

「ほんまなら捕まえるとこやけど…」

「え?」

「ヴィヴィオ、祐希奈。」

「「はい。」」

「カナン君を許せるか?」

「「はい!!」」

「らしいから、この罪はなしや。」

「ありがとうございます…」

「あとの罪は、カナン君も嘱託魔導師になれば、私がもみ消してあげるわ。」

「嘱託魔導師？それなんすか？」

「稀に民間から魔導師が生まれる時がある…なのはちゃんや私、祐希奈がそうやな。その人達が協力してくれる場合…試験を受けて嘱託魔導師になるんや。」

「はぁ…俺が嘱託魔導師になるとどうなるんですか？」

「正式な魔導師なら、私からクロノ君に頼んで罪を減刑できる…多分、学校生活はそれで大丈夫や。上手く行けば罪をほとんど無くせるんや。」

「試験って難しいんすか？」

「大丈夫よ。私でも受かったからね。」

「そうか。祐希奈で大丈夫なら俺は余裕だな。」

「カナン…？殴るわよ？」

「いえ、冗談に決まってるじゃないですか！はっはっは。」

「はっはっは…で済むかーー！！」

「ぎゃあああ！！！」

「お～見事なコブラツイストや。」

バタリ…

「ふぅ…こんなもんで終わってあげるわ。」

「カナン君?大丈夫?」

「しばらくは無理そうだ…」

「で、嘱託魔導師試験受けてみんか?」

「あ、はい。受けます。」

「うわぁ…復活早いね…」

スバルさんが感嘆の声をあげる…

「ははは…小学校は毎日受けてましたから…」

なんて悲しい男の子なんだろう…

「嘱託魔導師試験はいつでも受けられるけど、いつがいい?」

「う〜ん…じゃあ、あさってでいいっす。」

「わかった。手配しとくわ。」

「はやて…話は終わった?」

フェイトママが立ち上がる…

「あ、うん。終わりや。もうええよ。」

「じゃ、カナン…行こうか…」

ダークオーラ全開…
「あの、どこに行くか聞いていいっすか…？」

「人目のつかないところ…だよ…」
振り返る…顔は笑顔…しかし…背中に冷たいものが流れた…行ったら帰れない気がする…

「あ～…俺ちょっとトイレに…」

「行くよ…」
ガシッ！

「い、嫌だ…死にたくない！！」
華奢な腕からは想像も出来ない力で引きずられていく…

「大丈夫…」

「へ？」

「半殺しで許してあげるよ…」

「嫌だーーーー！！！」
ズルズルズル…バタン…

「アイツ帰ってこれるかしら…」

「カナン君…」

「ま、これくらいは仕方ない…」

「ぎゃあああああああああ！！！」

「…な？」

「にゃはは…しばらくしたら様子を見に行こうか…」

「ぼ、僕は遠慮しておきます！」

「私もいいです！」
エリオとキャロが全力で断った。

「ごめんなさい！！！もう許して下さいーーー！！！！」
再びカナン君の叫び声…

「なのはママ…そろそろ止めに行こうよ！！」

「うん…さすがに可哀想になってきたよ…」

「私も行くわ…」
三人でカナン君とフェイトママの元へ向かう…

カナン君はバインドで縛られ…フェイトママは鞭を持っていた…

「最初にヴィヴィオと戦った君がしたことは何かな…」

「波動で大怪我を負わせました！！申し訳ないです！！」
ピシッ

「ぐぅ…」

「あれでヴィヴィオは死にかけたんだよ？…反省してるのかな…」

「フェイトママ…もういいよ。」

「ヴィヴィオ。でも…」

「ていうかその鞭…」

なのはママが指をさした

「あ、これは母さんのを真似たんだ。」

「フェイトさん…もういいでしょ？許してあげてよ」

「二人がそう言うんなら…カナン…もうしないよね？」

「はい！！神に誓います！！」

「じゃあ、許してあげる…次はないよ？」

冷たい笑顔…

「はいぃぃ！！」

「親バカもここまで行くとヤバいわね…」

「私も同じこと思ったよ…」

「じゃ、今日は解散や。みんなお疲れ様や。」

「「「「お疲れ様です！！」」」」

「なぁ…祐希奈…」

「何よ？」

「今日だけお前んちに泊めてくれないか？」

「はぁ？アンタ自分の家があるでしょ？」

「確かにあるが…頼む！1日だけだから！変な気持ちは一切ない！」

「まぁ、私はいいけど…ヴィヴィオいい？」

「いいよ。カナン君なら信じられるし。」

「ヴィヴィオも祐希奈の家に泊まってるのか？」

「うん。祐希ちゃんの部屋で寝てるよ。」

「アンタは居間でいいでしょ？」

「ああ。ありがとな。」

「別にいいわよ。」

「じゃ、祐希ちゃんの家へレッツゴー！」

「「ただいまー！！」」

「お帰り。ヴィヴィオさん、祐希奈…」

「お邪魔します…」

「カナン君…帰って来たんだね…」

「はい…雅樹さん…すいません。」

「父さん。今日だけカナンを泊めてあげてもいいでしょ？わけありなのよ。」

「ああ…ゆっくりと心の整理をしなさい…」

「ありがとう…ございます。お世話になります。」

「なんなら明日から休みだし、もっといてもいいよ？」

「「「休み！？」」」

「ああ。君達は木曜日から丸1日帰ってなかったんだよ？気付いてなかったのかい？」

「全然知らなかったわ…」

「私も…」

「俺なんて今が何月かもわからん…」

「おやおや…今から晩御飯を作るけど…お腹は空いてるかい？」

キュルルルー

「「「あ…」」」

「ははは！空いてるらしいね。私が作るからゆっくりしてなさい。」

「いいわよ…私が作るわ。」

「私も手伝うよ。」

「俺も…」

「アンタはいいわよ。」

「うん。ゆっくりしてて。」

「それは悪いって。」

「じゃあ、出来た料理を並べといて欲しいな。」

「よし。任せろ。」

「父さん。晩御飯なにがいい？」

「そうだなぁ…豚肉があったからしょうが焼きでもしてもらおうかな？」

「オッケー。念のため聞くけどヴィヴィオ作ったことある？」

「大丈夫だよ。」

「私も保証します。」

「フェアリーが言うんなら大丈夫みたいね。」

「なんでそんなこと聞くんだ？」

「今度ヴィヴィオに何か挑戦してもらいなさい。楽しめるわよ。」

「は？」

「もう！祐希ちゃんひどいよ！」

「はいはい。ごめんごめん。じゃ、話でもしながら待ってて。」

二人は台所へと行ってしまった…

「雅樹さん…ヴィヴィオの料理って食べられるんすか？」

「多分ね。フェアリー君が言うには、見た目は完璧な料理だけど、味はまったく違うらしいよ？
美味しいことには変わりないらしいけどね。」

「気になる…むちゃくちゃ気になる。」

「私もだよ。今度頼んでみようか…？」

「いいっすね。」

「ところでカナン君。学校にはいつから通えるんだい？」

「明後日に魔導師試験を受けて合格出来れば、来週にでも行けそう

っす。」

「そうか。二人とも喜ぶね。」

「だといいんですが…」

「苦労してようやく連れ戻すことが出来たんだ。喜ばないはずないよ。」

「雅樹さん…」

「何だい？」

「俺は…あなたの娘さんを傷つけました…どうしてそんなに普通に喋れるんですか…？」

「ははは。あの子が進んで選んだ道だし、傷つけたとしても、祐希奈が許しているのなら、私からは何も言わないよ。君にも傷つけた理由があったんだろうしね。」

「すいません…これからは俺が守ります。ヴィヴィオも祐希奈も…」

「君だけが頑張る必要はないさ。三人で支えながら進んでいきなさい。」

「はい…」

話が終わると、タイミング良く声が響いた。

「カーナーン！出来たから運んで！」

「じゃあ、私からの罰はこれだ。食器を割らずにここまで運んでくれたら許してあげるよ。」

「ははは！任せて下さい！」

「うまそうだな。」

「美味しいよ。私達の自信作だよ。」

「落としたら殴るわよ？」

「へいへい。」

…コト…コト…コト
料理が机に並べられる。

「雅樹さん出来ましたよ。」

「じゃあ許そうかな。」

「ありがとうございます。」

「何の話？雅樹さん何か怒ってたの？」

「男同士の約束さ。」

「ああ。」

「気持ち悪いわね…父さんとカナンはご飯抜きにしようか？」

「ははは。それは困るなぁ。」

「確かに。腹ペコで死んじまうよ。」

「アンタは死ねば?」

「…祐希奈さん…きつくないっすか?」

「祐希ちゃん。私お腹空いたよ~。早く食べよう?」

「仕方ないわね…食べてもいいわよ。」

「ありがとう。」

「助かる。」

「「「「いただきます。」」」」

「あれ?カナン君左利きなの?」

「ああ。ヴィヴィオもか?」

「うん。左の方が上手く使えるんだ。」

「世の中右利きの方が楽よ?」

「作業によっては右でやるよ。」

「俺もだな。」

「ずいぶん器用なことをするね。」

「そうでもないですよ。だよね？」

「ああ。ほとんど無意識のうちに持ち替えてるな。
それにしてもこのしょうが焼き上手いな…」

「へぇ…ってカナン。しょうが焼きだけじゃなくて、サラダも食べなさい。」

「げっ…バレたか…」

「カナン君はお野菜嫌いなの？」

「カナンは、汁物とかの野菜は食べるけど、温野菜は食べないのよ。」

「よくわかったな…」

「小学生の時に給食のサラダだけあんだけ残せば嫌でもわかるわよ…」

「カナン君お野菜も食べないとダメだよ？」

「そういうヴィヴィオもピーマン食べないわよね～？」

「う…」

「なんだヴィヴィオも人のこと言えないじゃないか。」

「ニンジンは食べれるようになったもん…」

「それは偉いね。カナン君も一つ克服しようか？」

「いや…マジで温野菜はダメなんで…」

突然カナンをバインドが締め上げる。

「なんだ！？」

「マスター。好き嫌いは行けませんよ？」

「メイデン！お前の仕業か！」

ちなみにメイデンの待機状態は剣の形のキーホルダー。腰につけてるんだ。

「メイデンよくやったわ！」

「待て！サラダの皿を手に持って近づくな！！」

「はい。カナンく～ん。口を開けなさい？」

「嫌だ！！」

「開けないと撃ち抜くわよ♪」

「物騒なこ…もが～！！」

カナン君の口にサラダが突っ込まれた…

「さぁ噛みなさい！飲み込むのよ！」

「祐希ちゃん？カナン君の顔が青いよ？」

「このくらいしなきゃ食べないわよ。」
しゃき…しゃき…ゴクッ

「し…死ぬ…なんか飲み物くれ…」

「ここにあるわよ♪」

「サンキュー…」
ゴクッゴクッ…

「ごは！！祐希奈お前！！」

「野菜ジュースだけどね♪」

「言うのが遅いわぁ！！うえ～…口の中が野菜の味でいっぱいだ…」

「自業自得よ♪」

「おかしいですよねぇ！？どう考えてもお前のせいだろ！？」

「ははは！賑やかだねぇ…」

「楽しいです。」

「俺は楽しくない…」

「気のせいよ♪」

「だからお前のせいだって言ってるだろ！！」

「うるさいわよ…カナンの分際で…」

「なんでお前がキレてんだよ！！」

「黙れって言ってんのよー！！」

バキャッ！

「げふぅ…」

バタリ…

「はっはっは！大変だなあー」

「カナン君！？大丈夫！？」

「これで静かに食べれるわ。」

「何しやがる！この暴力女！！」

「相変わらず復活早いねー。」

「自分でもびっくりさー…」

「ごちそうさま。何してんの？冷めちゃうわよ？」

「…もういいっす…」

「あはは！カナン君って面白いね。最初はもっとクールキャラだと思ってたよ。」

「まったく誰の影響かしら…迷惑だわ。」
「お前だよ！！」
賑やかな晩御飯も終わる…
「じゃ、私、お風呂入って来るから。」
「ごゆっくりー。」
「覗いたら殺すわよ？」
「誰がお前の裸なんか覗くか…見たくもねえよ。」
「カナン？永眠したい？」
「いえ！祐希奈様は大変魅力的で覗きたくなります！ってあれ？」
「変態…」
「カナン君…エッチだね…」
「ははは。それはいけないなぁ。」
「誤解だぁ！！」
「ヴィヴィオも気を付けなさい？」
「うん。」

「いや…ほんとに覗かないから…」

「わかってるわよ。じゃあね。」

祐希奈が部屋から出ていった。

「なんか…物凄い疲れた…」

「大変だったね。」

「ヴィヴィオ…覗かないからな?」

「うん。わかってるよ。信じてるからね。」

「なんでだよ?祐希奈はともかく、ヴィヴィオとは大して話もしてないのになんで信じられるんだ?」

「さぁ?なんでだろ…なんかね。カナン君と話してると温かい気持ちになるんだ…」

「なんだそりゃ?よくわからないぞ?」

「私も分かんないんだよね~。」

「そのうちわかるようになるさ。」

「雅樹さんはわかるんですか?」

「まぁね。」

「教えて下さいよー。」

「自分で気付いて意味がある気持ちだよ。」

「え～」

「残念だったな。」

しばらくして祐希奈が風呂から上がりヴィヴィオが次に入ることになった。

「ふぅ～気持ち良かった。」

「じゃ、次、私が入って来るね。」

「出るときに水を入れときなさい。次はカナンね？」

「もう…何でもいい…」

「あらら…大丈夫だよ。入れないから。」

「そうしてくれ…」

「じゃあね。」

ヴィヴィオが部屋から出ていく。

「お前のパジャマは初めてみたな…」

「正確には私のパジャマじゃないけどね。」

「じゃあ、誰のだよ？」

「ヴィヴィオのを貰ったのよ。」

「なんで？お前も持ってんだろ？」

「気に入ったって言ったらくれたのよ…」

本当の理由なんて言えるわけないじゃない…ムカつくし…

「へぇ…あ、俺、着替えねえや。」

「父さんのは大きすぎるし…仕方ないわね…私のジャージを貸してあげるわ。」

「いいのか？」

「ていうか…アンタお風呂入ってたの？」

「体の自由が効く時は、洗濯と水を被って洗ってたけど…最近は洗ってないかもな…」

「汚な！！」

「大丈夫だって。ほとんどは変身してたから服は着てないし…髪は…まぁ、戦闘以外は汗かいてねえし大丈夫だろ…」

「ちょっと頭貸しなさい…」

「いやだよ…」

「貸しなさい！」

ギリギリギリ…

「いでー！痛い痛いって」

「臭いは…まぁ大丈夫ね…でも、しっかり洗ってよね？」

「わかってるよ…」

「じゃ…取ってくるわ。」

「はい。多分着れるでしょ…」

「ありがとな。」

「あがったよ～。カナン君どうぞ～。」

「お～う。じゃあな。」

「ちゃんと入って来るのよ？」

「へいへい。」

風呂場…

「ってよく考えたら…女の子二人が入ったあとの風呂って何気にヤバくないか？」

「マスターはにぶいですね…」

「仕方ないだろ…疲れてそこまで頭が回らなかったんだよ…」

「ではゆっくり浸かって疲れをとってきて下さい。」

「落ち着けるといいがな…」

カラカラ…

「やっぱりか…雅樹さんもよく我慢出来るな…」

風呂場には女の子特有の甘い匂い…

「しゃあない…体と頭だけ洗ってでよう…」

換気扇くらいつけようぜ…

１０分少々で洗い終わり…風呂場を後にした。

「わ！カナン君早いね？」

「カナン…私言ったわよね？ゆっくりって。」

「そう思うなら次から換気扇をつけてくれ…あれは男にはきつい…」

「「！！」」

「確かにね。私は換気扇をつけて少しあとから入っているよ。」

「「！！！！」」

「なんで…言って…くれなかったんですか…？」

ヴィヴィオが顔を真っ赤にしてそう言った。

「うわっ！なんかカナンがにやけてる…気持ち悪…」

「誤解を招くことを言うな！！」

「カナン君…ごめんね？」上目遣いでこっちを見ないでくれ！

「い、いいよ。次からは頼む。」

「うん…」

「怒ってないから。そんなに落ち込ないでくれよ。な？」

「あ～あ、カナンがヴィヴィオをいじめた～。」

「罪悪感が増すから言わないでくれ…」

「ま、今日は疲れただろうしやめてあげるわ。」

「もっと早くやめてくれ…」

心からそう思う…

「続けてあげようか？」

「結構です！」

「なら行くわよ。」

「どこへ？」

「私の部屋によ。」

「何で？」

「アンタねえ…明後日試験でしょ…？」

「ああ。」

「勉強教えてあげるから今日だけは、私の部屋で寝ていいわよ。」

「お前が俺に勉強？マジか？」

「私も手伝うよ～。」

「お、そうか。ありがとな。」

「えらくヴィヴィオの時は素直にお礼を言うのね…」

「いや、だってお前勉強苦手だろ？」

「一応、私は最近受かったから魔法試験のことは教えてあげられるわ。」

「そうだったな。じゃあ頼むな。」

「はいはい。父さん、おやすみ。」

「「おやすみなさい。」」

「ああ、おやすみ。」

「試験は実技と筆記と模擬戦よ。まぁ、あれだけ実力あれば実技は大丈夫でしょ…」

「問題は筆記だな…」

「カナン君はまだ、知識がないからね～。」

「ああ。知識なんて戦闘のものだけしかわからないな…」

「じゃ、やるわよ？はい、プリント。」

「お前…いつ書いたんだ？」

「アンタがフェイトさんにしばかれてる間よ。」

「…」

カタカタカタカタカタ…

「カ、カナン君？大丈夫？震えてるよ？」

「あ、ああ…だ、大丈夫…だ…だだ…だぞ？」

「相当なトラウマになってるわね…まぁその内納まるでしょ…やるわよ？」

「お、おう…」

二時間後…零時を回る…

「ふあ…どうだ？」

「アンタ凄いわね…全問正解よ…」

「そうか…今日は終わりにしようぜ…」

「ええ。この子もこれだし…」

「くー…くー…」

「はは。疲れたみたいだな…」

「カナン…この子ベッドに運んでくれる？ふああ…私も眠くて…」

「はいよ。」

いわゆるお姫さま抱っこの形でヴィヴィオを運ぶ。驚くほど軽い…

「こんな軽い体で戦ってたんだな…」

「感謝しなさいよ？」

「ああ。お前にも感謝してるよ。」

「な、何言ってんのよバカ！私は好きでやったんだからいいわよ…」

「でも、ありがとな。」

「はいはい。おやすみ。」

祐希奈は何故かこちらを向かないまま布団に潜りこんだ。

「？おやすみ。」

ヴィヴィオをベッドにおろし布団を被せる。

「おやすみ。ヴィヴィオ。」

部屋の明かりを消し、出してもらった布団に入り目を閉じるとすぐに意識がなくなった…

第二部一話賑やかな家（後書き）

またまた長くなってしまいました。再び嘱託魔導師編がありそうですが、主に模擬戦で終了します。相手は…どうしよう…ではまた次回。

第二話　嘱託魔導師試験（カナン編）

カ
「まず、俺から…Ｓｉｌｖｅｒｆｒｉｅｎｄに特別出演してた奴等に一言言っとく…勝手に死んだことにすんなよ！特に晶！即、死んだな…とか言いやがって！この際年上だからとか関係ねぇ！待ってやがれ！今クロイツの世界に…」
バキャッ！

カ
「げぼは！！」

祐
「うっさいわよ。私が殺してあげましょうか？」

カ
「…」

ヴ
「祐希ちゃん…カナン君動かないよ？」

祐
「マジで死んだのかしら…」

カ
「何すんだよ！」

祐
「ちっ…生きてたか…ごめん。晶さん殺し損ねたわ…」

カ

「なんでお前が加勢すんだよ！！向こうが悪いんだからこっちの味方しろよ！」

祐
「カナンの敵は私の味方。よって晶さんを加勢するわ。」

ヴ
「じゃあ、零ちゃんはカナン君の味方で祐希ちゃんの敵だね。ＫＦＣの会員だし。」

カ・祐
「ＫＦＣ？」

ヴ
「うん。カナン君ファンクラブだって。」

カ
「よくわからんが、零さんが味方なら祐希奈にも勝てるな。」

祐
「零さん。悪いことは言わないからＫＤＣに乗り換えなさい。」

ヴ・カ
「何それ…」

祐
「カナン、デストロイ、クラブ♪」

カ
「やめーい！！」

祐
「ちなみに会長は私、副会長はアリサ、会員は現在フェイトさんよ♪どう？零さん。」

カ
「勧誘すな！！その三人に零さんが加わったら確実に死ぬ！！」

ヴ
「ＫＤＣには晶さんも入ってくれそうだね。」

カ
「ならこっちはシオンと銀杏さんと同盟を組む！」

ヴ
「私は中立だね。」

祐
「フェニックスは…」

ヴ・祐・カ
「いらない…」

ヴ
「マイナス要素が多すぎるよ…」

祐
「きっと…」

フェニックスはテ○ポートを使った。

祐
「ってことになるわね…」

カ
「マジでやりそうだ…」

祐
「とにかく零さんはＫＤＣに入ってね～。」

カ
「まだ勧誘するか！！」

ヴ
「あはは。祐希ちゃんだからね。」

カ
「はぁ…そろそろ本編始めようぜ…このままじゃ始まる前に力尽きそうだ…」

ヴ
「そうだね。じゃあ、」

祐
「魔法少女」

カ
「リリカル」

ヴ

「ヴィヴィオ。」

ヴ・祐・カ

「始まります。」

「もういいだろ？理解できたし勉強終わりにしようぜ？」

三枚目のプリントを満点にしたカナン君が言った。

「カナン君覚えるの早いねー…」

「カナンごときの分際で私より出来るなんて…」

「ごときって…」

カナン君が落ち込んでいる…

「わわっカナン君しっかりしてよ！」

「ふ…どうせ俺なんて…」

「人類のゴミね♪」

「ちきしょーーー　！！！」

カナン君が今にも襲いかかりそうだ…

「カナン君落ち着いて！！」

「かかってきなさい！」

「ふえ～ん。祐希ちゃんも挑発しないでよ～」

「はあああ！」

「でああああ！」

こんな感じで賑やかな1日が終わり…試験当日…

「じゃあな。」

カナン君はこちらに手を振り試験会場へ向かう

「私達も見てるから頑張ってね。」

「落ちるように祈ってあげるわ♪」

「やめろ！！お前が祈ると本気で落ちそうだ！！」

「数珠も持ってきたわ♪」

「わ～綺麗…」

「いや…本気でやめてくれ…ていうか数珠で祈るっておかしくないか？」

「気にしない気にしない♪行ってきなさい。」

「はぁ…また後でな…」

とぼとぼと背中が遠ざかって行く…

「大丈夫かな？」

「多分ね。やる時はやる奴だし。」

「うん！先にお祝いの準備して来ようよ。」

「気が早いわね～まだ分かんないでしょ？」

「大丈夫って言ったのは祐希ちゃんだよ？」

「はいはい。わかったわよ。」

先にお祝いの買い物をするため…一旦、試験会場を後にした

「あ～畜生…ほんとに受からない気がしてきたぞ…」

「いつもの通りやれば大丈夫だ…」

メイデンがそう言った。

ん？なんか違和感…

「お前…敬語はやめたのか？」

「ダメか？」

「いや、いいよ。こっちの方が話しやすい。」

「感謝する。試験はいつからなんだ？」

「そろそろだと思うけど…」「すまない。待たせたな。」

正面モニターに男性がうつった。

「いえ全然大丈夫っす。」

「はやてから一昨日、急に頼まれてな…これでも急いで仕事を終わらせたんだが…」

はやて？知り合いか？

「はやてさんの知り合いの方っすか？」

「ああ。よく知っている。俺はクロノ・ハラオウンだ。はやてから聞いていないか？」

クロノ…はやてさんの上司か！

「聞いてます！すいません！お世話になります！」

「おいおい…一応、受かったらの話だぞ？まぁ、ヴィヴィオと祐希奈、二人を相手に出来るなら実技は大丈夫だろうがな。」

「はい。多分、実技は大丈夫っす。模擬戦の相手ってだれなんすか？」

「君もあったことがある相手だよ。」

「てことは六課の誰かっすね。」

「ああ。お喋りはここまでだ。始めるぞ。」

「了解っす。」

目の前に鉛筆と紙が出現…どこの世界もこれは変わらないらしい…

「始め！」

問題は…これか…大丈夫だな…

しばらく鉛筆が書く音が響く

「やめ！」

「ふぅ…」

「じゃあ次は実技試験会場の方に行ってくれ。」

「あ、はい。ありがとうございました。」

実技試験会場。

「じゃあこれから防御力の測定を行うからね。」

「あ、話は聞いてるんで大丈夫っす。」

「そうか。じゃあレベルは…」

「１０でいいですよ。自信ありますから。」

「知らないよ？」

レベルが１０に合わされ砲撃が放たれる。

「メイデン。よろしく。」

「わかった。」

金色のプロテクションが発生。あっさり砲撃を防ぎきった。

「次の試験お願いします。」

「あ、ああ。君は近接だったね。あそこにあるターゲットを制限時間内に倒してくれ。」

「了解っす。」

「レベルはやっぱり」
「１０でお願いします。」
「わかったよ。」
ターゲットが動き出した。
「壱式抜刀剣術…」
カナンが構え目標を全て認識…
「暗夜…一閃…」
試験官が気付いた時には動いていたターゲットの向こう側へカナンはいた。
キン…
カナンが剣を鞘に納刀すると同時に全てのターゲットは真ん中から綺麗に切れていた…
「次はなんすか?」
カナンが戻ってきて次を促した。
「最大威力測定だ…あのターゲットを攻撃して測定するんだ。」
「ぶった切っていいっすか?」
「ああ。君ならやりそうだね…」
ちなみにこの試験官。祐希奈の試験官をした人である。
「わかりました。」
ターゲットに狙いを定める…

「弐式抜刀剣術…」
柄を握る力を強める…

「虚空閃…」
その場で抜刀…目に見えないほどの居合い抜き。
ターゲットがずれ…斬れていた…

「次は模擬戦だ…頑張れよ?」

「ありがとうございました。」
少年はお礼を言い次の会場へ向かった。

「最近の子供は凄いなぁ…」
試験官はただただ感嘆していた。
「カナン君待ってたよ。」試験会場につくと待っていたのはヴィヴィオの母親…

「なのはさん…良かった。フェイトさんじゃなくて。」

「にゃはは。ほんとはフェイトちゃんだったんだよ?」
カタカタカタカタカタ…

「カナン君?大丈夫?」

「は…はは…はい!大丈夫っす…すよ?…どどど…どんとこいっす…す…よ。」

「よっぽどフェイトちゃんが苦手なんだね…」

「挨拶はすんだか?…てなんでカナンはそんなに震えてるんだ?」

「フェイトちゃんの話をしたら怖がっちゃって…」

「そうか…すまない…俺の妹がひどいことをしたらしいな…俺が謝るから許してやって欲しい。」

「い…妹!?全然似てないし。髪の色も…」

「フェイトはハラオウン家の養女なんだ。」

「へ?養女?」

「ああ。納得してくれたか?」

「あ、はい!」

「じゃあ始めたいんだがいいか?」

「いつでもいいよ~。」

「俺もっす。」

「わかった。では…始め!」

「カナン君ならこれくらい大丈夫だよね!アクセル・シューター!」
カートリッジ一発を排出し４０発ほどスフィアを作り出す…

「行くぞ!メイデン!」

「わかった。」

「うおおおお！！」
構わず走り込む。

「シュート！！」
大量のスフィアがカナンを取り囲む。
カナンは急ブレーキをかけ柄を握る…

「止まったらただの的だよ！！」
スフィアが殺到！３６０度から撃ち込まれる。

「…」
抜刀…カナンの回りに閃光が走る…
スフィアは一メートル手前で全て斬られ消滅…

「ディバイーン！バスター！」
続けてなのはから砲撃が放たれる。

「はっ！」
縦一閃…砲撃さえも斬られカナンの左右に着弾…爆発する…

「やるね。」
再びスフィアを展開…しかし…

「壱式抜刀剣術…」
カナンは既に納刀し…構えをとっている。

「あれは！レイジング・ハート！」
「Ｆｌａｓｈ　ｍｏｖｅ！」
なのはは高速で動き離脱をはかる。

「暗夜…一閃…」
カナンの姿が消える…

「どこ見てるんすか?」
背後からカナンの声…

「っ!」
既に斬られたあと…ジャケットの肩が裂けていた…

「エクセリオン!」
カートリッジを二発排出抜き打ち砲撃!

「参式抜刀剣術…」
カナンは振り向かず柄に手をかける…

「バスター!!」
至近距離での砲撃。

「絶空斬…」
横一閃…

「なっ!」
なのはの砲撃はカナンに斬られ霧散…

「はぁぁぁ!」
振り向き一瞬で抜刀…

「きゃああ!!」
なのはは試験会場の壁に叩きつけられた…

「たたた…あれを防ぐなんて凄いね～。」

「いえいえ。まぐれっすよ…」

違うけどな…

「嘘でしょ？」

即刻バレました…

「やっぱりバレました？」

「わかるよ…まぐれで私の抜き打ち斬れるわけないからね…」

「ははは…自分でもびっくりっす。」

「じゃあ私も接近戦で頑張ろうかな…」

「はい？」

「エクシードモード！」

「Ｓｅｔ　ｕｐ！」

まてーい！模擬戦で使う技じゃねー！！

「あの～なのはさん？これ試験っすよ？」

一応注意してみた。

「にゃはは…全力全開が私のモットーだからね…」

あ～…最近俺悪いことばっかだなぁ…誰か俺を呪ってるのか？…あ

ぁ…祐希奈のお祈りかぁ…
と自問自答をしていると…

「行くよ?カナン君…アクセル・シューター…」

「やべ!」
慌てて構えるが…あのなのはさん…数多くないっすか?
ざっとみて１００はある…

「バリアブル・シュート!!」

「ちょっと待てーー!!」
スフィアの全てに魔力がコーティングされ襲いかかってきた!

「ぬあああああ!!祐希奈のバッキャローー!!」
と叫びつつもスフィアを斬り飛ばす…先程より一発一発が遥かに重い…

「エクセリオンバスター!Ａ・Ｃ・Ｓ!」
カートリッジ三発排出…巨大な羽が広げられる…
「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ!」「ドライブ!」
「Ｉｇｎｉｔｉｏｎ!」
突撃してきた…

プチッ

「もういい!ヴィヴィオの母親とか関係あるかぁ!!
参式抜刀剣術!!」

「たあああああ!!」

「絶空斬！！！」
突撃してくるなのはに対し全力で斬りつける！
「おおおらあああ！！」
ガキン！！
なのはさんは弾かれ距離が開く…
「弐式抜刀剣術！！虚空閃！！」
空間攻撃を放つ！
「プロテクション！！」
バキバキ！！
「何！？」
空間斬撃って気付いたぁ！？
「エクセリオンバスター！バレル展開！！」
「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ！」
いつの間にかカートリッジが装填され、四発排出される。
「ブレイク！！」
四つの砲撃が放たれる…
「っ！プロテクション！」
納刀出来ていないため…全ては斬り飛ばせない…仕方なく防ぐ…
「わかった。任せろ！」

ここにきて始めての防御を使う。
四つね砲撃が着弾し凄まじい衝撃が襲う…

「シュート！！」
五発目の砲撃が放たれた。

「ここまで来て負けられるか！！」
光を集束…

「エクス！カリバー！」
下段から振り上げ光を放つ。
砲撃と光が激突…爆発が起きると同時に上段に構え踏み込む！

「だあああ！！」
袈裟斬りに全力で降り下ろす！
「はあああ！！」
なのはさんもデバイスで降り下ろしてきていた…
ギン！！

「俺に接近戦か！！いい度胸だ！！」
敬語も忘れ言い放つ…

「場数が違うよ！！」

ギリギリ…ギリギリ。

「であああああ！！」
横一閃！

「プロテクション！」

片手を上げ剣を防ぐ。

「アクセル・シューター！！」
二人の周囲にスフィアが出現…

「これなら防げないよね！！シュート！！」

「メイデン！！鎧だせ！！」

「もうやっている！！」
銀の鎧を纏う…

「残念だったな！！」

「まだまだ！！エクセリオン！！」
抜き打ち！！

「やらせるかぁ！！」
剣をデバイスに振り上げる。
「バスター！！」
ギン！！

砲撃が放たれる直前…デバイスの向きを変え砲撃を反らした。しかし蹴り飛ばされる…

「全力全開！！」
残るカートリッジ全て排出五発…まずい！！間に合わない！！
「プロテクション！！」
防ぎきれるかわからない…

「スターライト！！！」

来るべき衝撃に備え構える。

「ふにゃあああ…」

バタリ…

「へ？」

なのはさんが倒れている…え！？

「なのはさん！！」

慌てて駆け寄るがピクリともしない…

「クロノさん！！なのはさんが！！」

「大丈夫だ…魔力の使い過ぎで倒れただけだから…まったく…リミットかけたままのエクシード…さらには大魔法連発…よくここまでもったよ…」

「リミットって…あれで！？」

「ああ。リミットが外れればもっと凄いぞ？」

「え？いや…だって…あの強さでリミットって…えええええええええ！！！」

カナンの叫びが試験会場に響き渡った…

「まぁ…聞かなくてもわかるとは思うが君は余裕で合格だよ。筆記は満点。実技も満点。さらに模擬戦にも勝った…言うことなしだ。」

「良かったね。カナン君。」

「ああ。でも…ヴィヴィオの母親は何であんな化け物みたいな強さばっかりなんだ…」
あの強さでリミットありはいかんだろー…

「あはは…さぁ？」

「さて、カナン…お祝いの前にやることがあるわ…」
ゴゴゴゴ…
最近見たダークオーラが祐希奈に漂っている…俺…死ぬかもな…

「なんでそんなに怒っていらっしゃるんでしょうか～…？」

「クロノさん…お願い…」

「ああ。わかった。」
ピピピ…
クロノさんが手元のコンソールを操作すると…

「祐希奈のバッキャローー！！！」

「…」
俺…死んだな…

「どうして、私にいきなりバッキャローーって言ったのか説明出来る…？」

「いや…あの時は…」
必死に言い訳を考える…が…

「ピー…時間切れ…」

「時間とかあんのかよ!!」

「抹殺開始…」

祐希奈が変身…

「いや…祐希奈様…?それは…さすがに…しない…ですよね?」

「どうだと思う♪?」

「…」

俺は逃げた!ひたすら逃げた!ただ生きるために!

「フルドライブ…」

まてーーー!!!フルドライブはやめろーーー!!心の中で叫びつつ逃げる!

「ヴォルカニック!!!」

「さようなら…マイライフ…」

「アロー!!!!!」

ちゅどーーーん……

「ヴィヴィオ…カナンは大丈夫なのか?」

クロノさんが聞いてきた…

「…多分。」

「…」

二人して黙る…

「さ、ヴィヴィオお祝いの料理作りに戻るわよ。」

「え？…え？カナン君は？」

「お祝い＆ａｍｐ；お供え物でもいいでしょ。」

「そんなお祝いいらん！！！ていうか殺すな！！！」

「おお！生き返った！」

初めて見たクロノさんが驚いていた。

「本当にしぶといやつね…いい加減逝きなさいよ？」

「今回はマジで逝きかけたっつーの！！」

「そのわりには復活が早いね。」

「毎回マジで逝きかけてるからな…」

「慣れるの？」

「慣れるさ。やってみるか？」

「痛くない？」

「痛くないよ。痛みすらも感じないな…」

「じゃ、じゃあ頑張る！！」久しぶりの天念砲炸裂…

バタン！！

「あれ？祐希ちゃん？何倒れてるの？」

ギュ！

「本当にアンタは！！」

「わっわっ！何？何なの！？」突然抱き締められヴィヴィオが戸惑っていた。

「ははははは！こんな祐希奈は初めて見たな…」

「笑ってないで助けてよ～！！」

「このまま帰るか。」

「ふえ～ん！恥ずかしいよ～！」

カナンの模擬戦は余裕の合格という結果で幕を閉じた…

ちなみにこの後カナンはもう一度逝きかけた。理由は復活した祐希奈の八つ当たりである…

第二話　嘱託魔導師試験（カナン編）（後書き）

今回はカナン中心のお話でしたがどうでしたでしょうか？カナンが悲惨な目にあってます…前書きであんな感じにやりたいなぁ…と思ってます。ではまた次回

第三話　お祝いパーティー

祐
「はっはっは～！カナンに死刑宣告が来たわよ！」

カ
「…」

ヴ
「カナン君？大丈夫？ねえ？」

祐
「晴れて零さんはＫＤＣに入ってくれたわよ！」

カ
「零さん…俺の命の炎が消えたよ…」

ヴ
「あはは…大丈夫だよ。多分…」

祐
「この際、銀杏さんやシオンも引きずり込んで、カナンデストロイ軍団にしようかしら？略称ＫＤＧでいい？入団メッセージ待ってるわ♪」

カ
「変な募集すな！！ホントに送られて来たらどうすんだよ！！」

祐

「私は本気よ♪」

ヴ
「だろうね…」

カ
「ダメだこいつ…人の話を聞きゃしねえ…」

ヴ
「私は、祐希ちゃんが簡単に話を聞き入れたら逆に心配したくなるよ。」

カ
「まぁ…確かにな…何せ土台となったキャラがティアナさんとアリサさんだからな…」

祐
「そんな裏設定言わなくていいわよ！」

ヴ
「最初はもうちょっと大人しい感じだったんだけどね～。」

カ
「ヴィヴィオと対照的にしてくれってことで…」

ヴ
「二人を混ぜたら…」

ヴ・カ
「こんなに凄まじいツッコミ力の持ち主に…」

祐
「うるさい！！」

ヴ
「でも、作者の学校の友達ランキングでは祐希ちゃんは八票で二位です♪」

カ
「ヴィヴィオは十票で、一位だよな…」

祐
「カナンは五票で四位ね。やっぱり逝けってことよ♪」

カ
「読者さん！あなたの一票がカナンを救います！助けてください！」

ヴ
「何気に美鈴ちゃんは六票で三位なんだよね～。」

カ
「なぜ…何故サブキャラに俺は負けた！！」

ヴ
「祐希奈ハンターが面白かったらしいよ？」

祐
「あぁ…あれね…」

カ

「じゃあ、俺もハントすれば！」

祐

「アンタは私にされる側よ♪」

ヴ

「だね。」

カ

「ぬあああああ！！！」

ヴ

「じゃ、そろそろ前書き終わりにしようよ。」

カ

「ところで、ぶっちゃけ、これってパクりじゃねえ？」

祐

「質問に対する答えをコメディーを交えながら前書きで言う…シルフレと道場のいいとこ合わせよ。」

カ

「いや…許可は？」

祐

「ここでは私が法律よ♪」

カ

「またか！！またなのか！？」

祐
「まぁまぁ…勝手に良いとこ取りした代価として、ＫＤＧに入れてあげるから。ね？許してよ。」

カ
「いや…それ俺にメリットないし…作者さん嬉しくないし…」

ヴ
「とにかく魔法少女リリカルヴィヴィオ始まるよ～。」

祐
「入団メッセージ待ってるわ♪」

カ
「お前はまだ言うかー！！！」

祐
「だってこういうのって最初のインパクトが大事…」

ヴ
「もう！終わったんだから切るよ！」
ブツッ
「で、お供え物についてなんだけど～」

「いきなりそれかい！！」

「祐希ちゃんは話が急だね…」

「しかも俺死んでるし…」

「何か食べたいものある？鳥の照り焼きは決定事項ね。」
「まさかのスルー！？せめてお祝いに言い直してくれ…」
「私はコーンスープ飲みたいよ。あれ好きなんだ～。」
「ヴィヴィオまでか…」
「言うでしょ？死人に口なしってね♪」
「だから死んでねえよ！！」
「あはは。わかってるよ。冗談だよ～。」
「アンタは冗談か本気か一番分かりにくいわ…」
「それは俺も同感だ…」
二人して頷き合う二人…
「二人ともひどいよ～。」
「アンタがたまに天然砲を打つのが悪い…」
「前にもあったのか？」
「ええ…最近は少なくなってきたから助かってるわ…」
ちょっと残念でもあるけど…
「私…自覚ないよ？」
「「あったら天然言わんわぁ！！」」

ダブルツッコミ発動…

「二人とも…顔が…怖い…よ?」

「すまん…ついやっちまった…」

「もう…カナン最低。」

「お前もだろ!?」

「で、話を戻すわよ。食べたいものはあるの?」

「う〜ん…」

「え?…雑草が食べたいって?仕方ないわねえ…今日は庭の雑草食べ放題にしてあげるわ♪」

「いや…何も言ってねえし…そんなもん食わねえよ…」

「もう…特別サービスで除草剤ドリンクもつけてあげるわよ♪」

「良かったね。カナン君♪」

「ヴィヴィオまで祐希奈に加勢しないでくれ!!お前のテンションに巻き込むな!ヴィヴィオが穢れる!!」

「ふーん…今日は人肉が食べたいって?仕方ないわね…アンタの腕一本…よこしなさい…」

「嫌だーーー!!!」

カナン君、本日二回目の全力ダッシュ！
「まてコラーー！！！」
祐希ちゃんも追跡。

「あははは！待ってよーー。」
結局私達は祐希ちゃんの家まで全力疾走をした。
「「はぁ…はぁ…はぁ…」」

「あはは！二人とも速いね～。」

「何で…ヴィヴィオは…こんなに…元気…なん…だ？」

「というか…前にも…同じ…こと…やった…わよね…」

「うん。前も楽しかったね♪」

「ふー…全然楽しくないわよ…」

「右に同じ…」
突然玄関の戸が開けられた。

「おや？二人とも何をしてるんだい？」

「父さんただいま。…ちょっとへばっただけよ…」

「俺もっす…」

「じゃ、カナン君のお祝いのお料理を作らなきゃね。」

「私は、あとから行くから先にやっててて…」

「俺も休んでるな…」

「は～い。」

ヴィヴィオの姿が台所へと消えた…

「ヴィヴィオってどんな体してんだよ…」

「さぁ…？聞いてみれば？」

「んなこと聞けるかよ…お前が聞け…」

「別に私はどうでもいいから聞かないわ。」

「そうかよ…」

「出来たらまた呼ぶから運んでよね？」

「へいへい…」

そう言って祐希奈はヴィヴィオの待つ台所へと消えた。

「あ～腹減ったなぁ～」

それは当たり前である。なのはの攻撃のほとんどを斬り飛ばし、一発とはいえエクスカリバーの大技を放ったのだ…全力疾走出来るだけでも常識から外れている…というか人間ではない…

「うるせー！！祐希奈よりマシだ！！」

「カーナーンくーん？また逝きたいの…？」

台所から祐希奈が顔をだし目を光らせている…

「いえ！すいません！お許しを！！」

祐希奈に凄まれればこの通りヘタレである…

「…まぁ、いいわ。もうすぐ出来るし来てよ。」

「わかった。」

台所へと向かうとコーンスープは既に完成していた。

「熱いからこぼさないように気を付けてね？」

ヴィヴィオが鍋を持ち注意をしてくる。

「ああ。折角作ってくれたのにこぼしたらもったいないからな。」

慎重に運び、テーブルへと到着…

「どんだけ時間かかってんのよ…。」

「カナン君ありがとう。」

ヴィヴィオと祐希奈は両手に鶏肉の照り焼きをのせて運んできた。

「お前ら…何気に凄いな…」

「ウェイトレスのアルバイトでもやって見ようかしら♪」

「ヴィヴィオはともかく…お前はやめろ…店が潰れる。」

「店が潰れるかは置いといて…やらないわよ。私は接客とか出来そ

うにないし。」

「なんで私はいいの～？」

「ヴィヴィオは人当たりがいいからな。」

「学校では良すぎて困るんだけど…」

「モテるのか…？」

「モテモテよ…。」

「ヴィヴィオに近付く奴は俺が潰してやる…。」

「その時は私も呼びなさい…協力するわ…」

「ああ。頼りにしてるぜ？」

「任せなさい。」

カナンと祐希奈のヴィヴィオを守る連合が生まれた瞬間だった…

「なんか二人とも仲良いね～♪

いつもこれくらいだといいのに。」

「それは遠慮するわ。私、カナンの敵だし…」

「俺達が毎日仲良かったら小学生からの知り合いは皆学校休むな。」

「休むって…二人ともどんな小学生だったの…？」

「どんなって…」
二人して腕組み思い出す。
「毎日が生と死の境目だったな…」
「私は、楽しい日々だったわよ♪」
「無茶苦茶な女だろ…？」カナン君はうなだれていた…
「とりあえず、毎日殴ったりしたことは確かね…」
「そんな二人が仲良くしてたら…な？」
「怖いね…」
「でしょ？」
「だろ？」
「三人とも早く食べないと冷めてしまうよ？」
「「「あ…」」」
料理のことをすっかりわすれていた三人…
「ははは。忘れていたのかい？」
「すっかり忘れてたわ…早く食べましょ？」
「カナン君！絶対全部美味しいから食べてみて！」
「ああ。今回は残さず食べるよ。」
サラダもないしな…

「あ、サラダ持ってくるの忘れてたわ…」

「ヴィヴィオ…やっぱり食えねえ…サラダは無理だ…」

「う、うん…嫌いなものは仕方ないよね…」
目に見えて落ち込んでいるのがわかる…すっげえ罪悪感…

「カナン？ヴィヴィオが心を込めて作ったお祝いの料理よ？
サラダも全部食べなさい？♪」
こいつ…

「わかったよ…でもな全部は無理だけどいいか？」

「うん！ありがとう！」
く…そんな笑顔を向けられたら…美味しいと言わないわけにはいかないじゃないか！

「私がとってあげるね♪これぐらいなら食べれるかな？」
小皿に綺麗にポテトサラダが盛られる…

「あ、ああ。ありがとな。」
実はキュウリは一番苦手なのだが…きっちり入っていた…

「ささ。カナン。味わって食べなさい♪キュウリなんて美味しそうよ♪」
くそ！知ってやがる！仕方ない…
パクっ…ポリポリ…ヤバい不味い！涙が出てきた…

「うまいよ。ヴィヴィオは料理上手だな。」

「カナン君泣いてるよ？大丈夫？」

「泣くほど美味しいのよ♪え？もっと食べたいって仕方ないわね。はい♪」

追加されるサラダ…キュウリたっぷりだ…

（てめえ！わざとだろ！）

（じゃあ、食べなきゃいいじゃない♪）

（んなこと出来るか！！真横にヴィヴィオがいるんだぞ！？）

（じゃあ頑張って食べなさい♪）

（くそーー！！）

「カナン君？無理しなくてもいいよ？」

「い、いや、大丈夫だ。うまいからいくらでも食べれるよ。」

「ほんと！？嬉しいなぁ♪」

ま、眩しい…この笑顔が見れたからまぁいいか。

「良かったわね。サラダが好きになりそうね♪」

「ああ！そうだな！！（涙）」

「じゃあ、これからサラダは私が作るよ！」

ヴィヴィオが俺の為に…嬉しいが、同時に悲しい…

「カナン君も大変だねえ…」
全て理解しているのか雅樹さんは微笑みながらこちらを見ていた…
「「「「ごちそうさま。」」」」
「うまかったよ。ありがとな。」
「えへへ。良かったよ。」
「お礼はこの家の完全リフォーム代の代金でいいからね。」
「たけえよ!!」
「あはは。でもまだお祝いは続くんだよね。」
「は?そうなのか?」
まだ何かあるのか?
「ちょっと待っててね?」ヴィヴィオが台所へと向かった…
「来たら殺すわよ?」
「お祝いの主役殺すなよ!!」
「来なければいい話よ…」
そう言って祐希奈もついていく…
「何かわかります?」

「いや…台所に近づいたら追い出されたからねぇ…」

「一体何なんだ…」

しばらく考えているとヴィヴィオと祐希奈が帰ってきた…手を後ろに回してるぞ？

「せーの！」

「「カナン（君）！！嘱託魔導師試験合格おめでとう！！」」

手を前にだし持っていたのはチョコレートケーキ…しかもホール…

「え？」

「私達の手作りなんだよ？」

「マジか！？いつ作ったんだ？」

「下準備はやってたから帰ってすぐにオーブンにいれて、ご飯を食べてる間に焼いてたのよ。」

「わざわざ手作りで作ってくれたのか…？」

「うん。桃子さんに教えてもらったから絶対美味しいよ。」

笑顔で話すヴィヴィオ…

「感謝しなさい？」

片目をつむりこちらを見てくる祐希奈…

「ありがとう…な…すっげー嬉しいよ！」

「えへへ。祐希ちゃんからカナン君は甘いのが苦手って聞いてるからちゃんとビターだよ？」

「余計なことまで言わなくていいの！」

「そこまでしてくれたのか…二人共…本当にありがとう。」

「早速食べよ？」

「残すんじゃないわよ？」

「ああ！こんなうまいもん頼まれても残さねえって！」

「あはは！まだ食べてないよ～？」

「食わなくてもわかるって！絶対うまいよ！」

「実は激甘チョコレートだったらどうすんの？」

「それでも食うよ。今なら何でも食えそうだ。」

「ははは。カナン君。良かったね。」

「はい！」

ケーキを切り…均等に分けてフォークで食べた…

「うめえ！！」

世界で一番うまいケーキに違いない。

「うん。美味しい！」

「上出来ね。」

「ほんとに、美味しいよ。お店でも出すかい？」

「そ、そこまではいいですよ～…」

「文化祭の模擬店でなら大丈夫じゃない？」

「そういやそんなんあったな…今年からやってみるか！！三年間売上一位間違いないな！」

「文化祭？それなんなの？」

「秋に学校でやるお祭りみたいなもんよ。」

「劇を見たりや合奏を聞いたりするんだ。模擬店は生徒が出す店のことだ。」

「お店が出せるの？」

「残念ながら稼いだお金は寄付だけどね…」

心底残念そうに祐希ちゃんが言った…

「でもきっと楽しいぞ？思い出にもなる。」

「面白そう…私やってみたい！」

「最近流行りのメイド喫茶にでもしましょうか…」

「いや…それはやめてくれ…俺の居場所がない…」

「客としてずっといれば？」

「変な目で見られるだろうが！！」

「メイドさんって変なの？アリサさんの家のメイドさんは可愛かったよ？」

「そうよね～？やってみたい？」

「頼むからやめてくれ…」

「私もお店に行かなくてはね。二人のウェイトレス姿とカナン君のホールスタッフとしての働きを見たいからね。」

「う…父さんがお店にくるんならメイドはやめようかな…」

「雅樹さん！是非来てください！！」

「祐希ちゃん。美鈴ちゃんと神楽ちゃんも誘おうよ！」

「美鈴は知ってるが…神楽ちゃん？知らないな…」

「新しく出来た友達だからアンタは知らないわよ。」

「おとなしくて可愛いんだよ？」

「祐希奈…おとなしいからってあんまりいじめるなよ？」

「アンタねえ…私だって大丈夫な人とそうじゃない人くらい見分けてるわよ…」

「というか…俺の周りって女の割合高いな…下手すると模擬店で男って俺だけになりそうだ…」

「それならエリオを誘おうよ。」

「それは…いいのか…？」

「父さんいいでしょ？」

「私は何も聞いていないよ。だから好きにしなさい。」

「雅樹さんありがとうございます。」

とヴィヴィオ。

「いっそ六課前線メンバー全員を店員にするわよ♪」

「確実に歴代売上一位だな…」

「ママに頼んでみるよ。」

「高町さん達に迷惑にならない程度にするんだよ？」

「わかりました。」

「ヴィヴィオ。文化祭ってまだまだ先の話よ？わかってる？」

「あ…」

「興奮して忘れてたな…」

「あはは…ついうっかりしてたよ…。」

「気が早い子ね～」

「でも、楽しみだな。」

「うん！！」

そして楽しいお祝いパーティーも終わる。

「ちゃんと換気扇つけたからゆっくり入って大丈夫だからね？」

「ああ。ありがとな。」

「５０分くらいは入りなさい。」

「男にそんなに入れって言うのはきついな…」

「メイデンと話ながら一緒に入れば？」

と祐希奈からびっくり発言…

「いや…デバイスとはいえ女だぞ？無理がある…」

「私は構わんぞ？なんなら人の姿に戻ろうか？」

「メイデンは人の姿になれるの！？」

「俺も知らないぞ！」

「言ってなかったか？私はユニゾンデバイスだぞ？」

「は！？じゃあ、何でキーホルダーになってんだよ？」

「移動が面倒だからだ…」そんな理由かよ…

「私メイデンがどんななのかみたいなぁ…」

「私も見たいわね。お願い！見せて？」

「まぁ、別に構わんが…マスター、いいか？」

「何で俺に聞くんだよ？」

「人型になると少しだがマスターの魔力を使うからだ。」

「へえ。まぁ、いいぞ。」

「わかった。」

剣のキーホルダーが光に包まれた…光の中から現れたのは…金髪、金色の目をもつ銀色の鎧を着た１８～２０の女性…ただし…

「ちっちゃ！！」

めちゃくちゃ小さい。俺の肩に乗れる！

「メイデン…お前、前はもっと大きかったよな？」

「別に大きくはなれるがその分マスターの魔力を使う。さらに大きくなると不便なことも結構あるのでな。」

「わぁ…メイデン可愛いね～。」
「ほんとね。」
「な、何を言っているのだ!!」
あれ?こいつ赤くないか?
「大丈夫か?」とりあえず聞いてみた。
「すまない。取り乱した…」
「ねえ、カナン君。」
「何だよ?」
「メイデンはこのままがいいなぁ。」
「私もそう思うわ。話もしやすいし、ご飯も一緒に食べれるんでしょ?」
「ああ。だが、マスターが…」
「俺は別にお前がそうしたいんなら構わないよ。」
「マスター…いいのか?少しだが維持にも魔力を使うのだぞ?」
「魔力はいいけど、お前はどうしたいんだ?」
「私は…ヴィヴィオさんや祐希奈さんと話がしてみたい…」
「そうか。それなら、そのままでいいよ。」

「マスター。礼を言う…ありがとう。」

「メイデン。良かったね。」

「私達と一緒に寝ましょうよ？」

「いいのか？」

「もちろん！」

「あ、そうだ…昔に買った人形の家があるから持ってきてあげるわ。」

「お前そんなの持ってたのか…びっくりだよ…」

「私にだって、そういうころはあったわよ…」

少し悲しそうな顔をされた…何か今日は暴力が少ない…まぁ一発は強力だったが…

「そ、そうか。悪かったな。」

一応謝る。

「別にいいわよ。それよりお風呂、早く行きなさいよ。」

あれ？さっきのは気のせいか？

「あ、ああ。」

部屋を出るとメイデンもついてきた…

「何でお前もついてくるんだ？」

「?さっき一緒に湯に入ると言ったではないか。」

「冗談じゃなかったのか…」

「私はただのデバイスだ。気にするな。」

「はぁ…わかったよ…人型でいる以上は体を洗わなきゃな。」

「ああ。」

風呂場…

「服を脱ぐから向こうを向いてくれ…」

「何故だ?さっきも言ったが…」

「頼むよ…」

いくらデバイスだと思っても服を脱ぐところを見られるのは抵抗がある…

「わかった。着替え終わったら言ってくれ。」

「悪いな。」

急いで服を脱ぐ。

「いいぞ。先に入ってるからな。」

「?私も入るぞ。」

メイデンが光に包まれる…まさか…

「さて…準備も出来たし入るか。」
バッ！
「？何故後ろを向くんだ？」
「メイデン…タオルくらい巻いてくれ…」
無防備すぎる…
「ああ…そういうことか…仕方ない。」
背後で再び光…
「終わったぞ。」
振り向くと確かにタオルを巻いたメイデンがいた。
「じゃ、入るか。」
「ああ。」
カラカラカラ。
「お前の風呂はこれな。」洗面器に湯を入れ隣に浮かべる。
「わかった。手間をかける。」
洗面器にメイデンが入浴している…人が洗面器にぴったり入浴…ヤバい…面白い。
「ぷ！ははははは！」
堪えきれず笑い出してしまった。
「いきなり何だ？何を笑っている？」

「いや…洗面器に人が入ってるのなんて初めて見たからな…くく…またぴったりだし…ダメだ…ははははは！！」

「よくわからん男だな…」メイデンは首を傾げこちらを見ていた。

「あ～面白かった。そろそろ体を洗うか。」

「ああ。」

メイデンが洗面器から出ようとするが…

「お前は出なくていいよ。泡風呂にしてやる。」

そう言って泡立てた別のタオルをメイデンの洗面器の中に入れしばらくすると泡だらけになった。

「な、何だこれは！」

「その中に入れば勝手に体は洗えるさ。」

そう言って体と髪を洗っているとメイデンが笑い声をあげる。

「あははは！マスター！これは楽しいぞ！」

「気に入ったか？」

「ああ！とても、な！！」

無邪気な笑顔…こいつこんな顔も出来るんだな…

「そっか。良かったよ。」

なんだかこっちまで嬉しい…父親の気分ってこんな感じなのかな…

「そろそろあがるけどお前はどうする？まだ浸かってるか？」

「ま、待ってくれ！私もあがる！」

泡だらけのままこっちに飛んできた…

「まったく…」

苦笑しながらシャワーの蛇口をひねりメイデンにかけた。

「わわっ！」

驚いた顔…ひょっとしたらこれがこいつの本来の性格なのかもしれない…

「ほら。行くぞ？」

「だから待ってくれ！」

風呂からあがると一時間が経過していた。

「ずいぶん長い間入ってたわね…メイデン変なことされてない？」

「大丈夫だ。されてない。」

「今日はもう遅いし、寝ようよ。」

お祝い会があったために風呂の時間が遅くなり、さらに入浴時間が長かったためである。

「ああ。明日から学校だし、早めに寝ないとな。」

そうだ…明日から学校だ。ヴィヴィオと祐希奈も一緒にまた通えるんだ！

「そうね。おやすみ。カナン。父さん。」

「二人ともおやすみなさい。」

「「おやすみ。」」

「メイデン行こ？」

ヴィヴィオがメイデンを肩にのせる

「ちゃんと掃除したし、ベッドはスポンジベッドを作ったから痛くないわよ。」

「祐希奈さん。ありがとう。」

「あと私は祐希奈でいいわ。」

「じゃあ私もヴィヴィオでいいよ～。」

「わかった。ヴィヴィオ、祐希奈。よろしく。」

「うん！よろしく。」

「よろしくね。」

「では、マスター。おやすみ。」

「ああ。おやすみ。仲良くな。」

「わかっている。」

ヴィヴィオ、祐希奈、メイデンが出ていった…

「ふあ…雅樹さん。おやすみなさい。」

「ああ。おやすみカナン君。」

いやぁ…楽しい1日だったなぁ…

祐

「仮名ＫＤＧの入団メッセージ＆ａｍｐ；名前を募集してるわよ♪」

カ

「最後まで引っ張るんじゃねえ！！」

ヴ

「では、また明日か明後日まで。」

一同

「さようなら～。」

第四話カナン波乱の学校生活

祐
「カナン。アンタが言った人気投票なんだけど…」

カ
「お、ついに俺に一票が入ったのか？」

メ
「すまない。私に入った…。」

カ
「マジか！？募集したの俺なのに！？」

ヴ
「作者の学校の友達からメイデンに二票入ったんだよ。ちゃんと違う人だよ？」

祐
「さらに…」

カ
「さらに？」

メ
「実は作者さんからも一票来たんだ。」

カ
「嘘だ！学校の友達はともかく…作者さんから…？誰からだよ…」

メ
「マスターを傷つけるからいわないでおく…」

カ
「充分傷ついてるよ…」

祐
「メイデンが可愛いですって。メイデン。良かったわね。」

メ
「な！私は…別に…可愛くなどない…ぞ？」

ヴ
「あはは。メイデンまた顔が赤いよ～。」

カ
「これか！！これなのか！！」

祐
「うるさいわよ…作者さんにでも聞いてみなさいよ…」

メ
「あの…その…私のどこが可愛いんだ？私は無愛想だし、可愛くなどないと思うが…？」

カ
「メ…メイデンがもじもじしている…！」

祐

「うわっ…こいつ気持ち悪…なんか変人オーラがでてるわ…」

カ
「だって、あのメイデンがだぞ!?あの…」

ヴ
「まぁ、その問題は置いといて。」

カ
「…」

祐
「ヴィヴィオ。ナイスぶったぎりよ♪」

ヴ
「時間が押してるから仕方なくだよ…カナン君ごめんね?」

カ
「ああ。気にしてないよ。」

祐
「カナンの話は全部流して、進めるわよ♪」

カ
「俺…」

祐
「質問コーナー♪」

ヴ・メ

「パチパチパチ～」

カ
「ふふふ…もう…いいよ…」

ヴ
「ごめんね？じゃあ質問…カナンの実力は何番目？」

祐
「実はね…癪なことにコイツが一番強いのよ…」

ヴ
「一対一ならほぼ勝てないよ。」

メ
「？ならなぜこんなにもマスターは弄られているんだ？」

カ
「女相手に本気で怒れるわけないだろ…」

ヴ
「カナン君は優しいんだよね。」

メ
「それは私も思うな。前回の風呂でも世話を妬いてくれたしな。」

祐
「ま、そこは認めてあげるわ。」

ヴ

「じゃあ、次の質問。メイデンの胸のサイズは？」

ヴ・祐・カ
「…」

メ
「おかしなやつだな？私はデバイスだぞ？そんなことを聞いてどうする。別にいいが…私の胸囲は…」

カ
「言わんでいい！！」

祐
「無防備すぎる…」

ヴ
「あはは…」

メ
「？別に知られた所で困ることではないだろう？」

カ
「お前は言って恥ずかしい事はないのか…？」

メ
「身体のことなど恥ずかしいことなのか？」

祐
「もうダメよ！メイデンが質問に答える前にやめるのよ！」

ヴ
「わかった！今回は学校の話だから！リリカルヴィヴィオ始まります！」

メ
「それで先程言いそびれた胸囲のことだが私のサイズは…」

カ
「じゃあな！！」
ブツッ！
「ん…」

「あ、メイデン目が覚めたの？」

「…ああ。」

「メイデン？大丈夫なの？なんか眠そうよ？」

「…ああ。」

「私のデバイスになる？」

「…ああ。」

「メイデンって可愛いいね～。」

「…ああ。」

「寝ぼけてるわね…」

「うん。普段と全然違うね。」

「メイデン。顔を洗ってきなさい。洗面する所は分かるわよね。」

「…ああ。」

フヨフヨ…

「なんか飛び方がフラフラしてるよ?」

「メイデン!襖開けないと!」

祐希ちゃんが叫ぶが…

ゴン…

「…く〜」

「「寝た!?」」

メイデンは飛びながら寝ている…

祐希ちゃんが仕方なく襖を開けると再びフラフラと洗面所の方へ飛んで言った…

「大丈夫かな?」

「ま、まぁ家の中だし何もないとは思うけど…」

洗面所…

フヨフヨ…ゴン…あれ?何で私はここに…あ〜…えっと顔を洗うのだったな…どうやって水を出すのだろうか…あ…あそこの入れ物に水が…

パシャパシャ…

「ふぅ…すっきりしたぞ。」

「そりゃ良かったな。」

上から声…徐々に意識が目覚め始める…この声は…

「それ、俺が歯磨きをするために入れた水なんだけど…」

「マ…マスター?いたのか?…いつから?」

「最初からだ。」

「み…見たか?」

「何をだよ?」

「私の朝の様子を…だ。」

「ああ。鏡に顔をぶつけたところからバッチリ見たぞ?」

「っ!いや…これは…私は朝が苦手なんだ…いや…いくら苦手だとしても…こんななさけない姿をマスターにさらすなど…ダメだな…やっぱりキーホルダーに戻る…」

「別にいいんじゃないか?」

「え?…いいのか?こんな間抜けな姿をさらしても?」

「ああ。というか俺はお前の新しいとこ見つけられて面白いぞ?」

「そ、そうか…」

「ほら…そろそろ朝飯が出来るぞ?髪型治せ。跳ねてるぞ?」

「え?どこがだ?」

鏡を見るがわからない…

「ここだよ。」

後ろ髪の真ん中当たりを指でなぞられた…

「マ、マスター。くすぐったいぞ。」

「お前がわからないんだから仕方ないだろ?ほれ。終わったぞ?」

「あ、ありがとう。」

「歯を磨いたら俺も行くから先行っとけ。」

「わかった。ではな。」

「もうぶつかるなよ~。」

「も、もう大丈夫だ!!マスターのバカ!!」

振り向いて怒った顔を見せてから行ってしまった…

「へえ。マスターのバカ…ねえ。」

可愛い怒り方をするもんだな…昨日に引き続き珍しい発見だ…

「カナン!早くしなさい!全部食べるわよ!?」

居間から祐希奈の声が聞こえてきた…

「悪い！もうすぐ終わるから待ってくれ！」
急いで歯を磨き上げ居間へと向かった。
「遅い！！」
ぺしっ！
「いて！朝から叩くなよ…」
「カナン君が遅いからだよ～。」
「マスターが悪いぞ。」
「そ、そうか。悪い。」
「それじゃあ食べるとしようか。」
「「「いただきます。」」」
「い、いただきます…」
朝飯は目玉焼きとベーコン焼き鮭だった。
「カナンはメイデンに分けてあげなさいよ？」
「わかってるよ。」
「すまない。」
「別にいいって。祐希奈小皿くれるか？」
「自分で取ってきなさいよ…」
祐希奈にしては最もな言い分だ…仕方ないな取ってきくるか…

「といいたい所だけど、メイデンのためだから取ってきてあげるわ。」

「祐希奈、ありがとう。」とメイデンが頭を下げた。

「いちいちこれくらいでお礼なんて言わなくてもいいわよ。ちょっと待ってて。」

「なんかアイツ昔より優しくなったというか…他人に心を開くようになった感じだな…」

「昔は違ったの？」

「表面では仲良くしてるんだけどな。完全には心は開かなかったな。一番の友達の美鈴にさえ…だ。」

「へえ～…意外だよ…」

「ヴィヴィオ。お前祐希奈に何か聞いたのか？」

「祐希ちゃんの昔の話は教えてもらったよ？」

「そりゃ凄いな。俺にしか話さないと思ってたよ。となるとヴィヴィオのおかげかな？」

「何が？」

「祐希奈が心から笑えるようになったのがだ。」

「私、無理矢理聞いちゃったのに？」

「無理矢理だとしても祐希奈が話したのならヴィヴィオのおかげだ。」

「それは違うと思うよ？」

今まで静かに聞いていた雅樹さんが始めて口を挟んだ…

「何が違うんすか？」

「祐希奈が他人に心を開けるようになったのは二人のおかげなんだよ。自分と似た境遇のカナン君と出会って、ヴィヴィオさんに受け止めてもらえたから今の祐希奈がいる。二人には感謝してるよ。」

「アンタ達ねえ…そういう話は私がいないときにやってよ…」

「「「あ…」」」

祐希奈が帰って来ていた…

「ていうか…カナンごときにバレてたのがムカつくわ…」

「雅樹さんや俺と話す時と友達と話す時の態度が微妙に違ってたからな。少し見てればわかる。多分美鈴も気付いてるぞ？」

「美鈴ちゃんは、洞察力が凄いからねえ～。」

「確かにそうね…あ、メイデン遅くなってごめんね？」

「いや…マスター達にもいろいろあるのだな…聞けて良かった。」

「さて、私はそろそろ行くよ？」
雅樹さんが席をたつ。
「父さん。いってらっしゃい。」
「「いってらっしゃい。」」
「気をつけてな。」
「ああ。じゃあね。」
雅樹さんは出ていった…校長って大変だなあ…
「遅くなっちゃったけど食べようよ。」
「そうね。」
「だな。メイデン。ちょっと待ってくれよ？」
小皿に四分の一ほどの料理をいれていく。
「ほら。もっと食べたかったら言ってくれ。」
「ああ。感謝する。」
メイデンは専用の割り箸…ただのつまようじだが…それで食べている。
「美味しい？」
食べ方可愛いなぁ…
「ああ。とても美味しい。何百…いや、何千かな…こんなに美味しいご飯は…」

「これからは毎日食べれるわよ？」

「おいおい…今日で俺達は帰るぞ…」

「あ…そうだった…ね。」

「アンタは自分の家があったのよね…。」

「ああ…今日で帰るつもりだ…世話になったな…ありがとう。」

「何だ？今日でお別れなのか？寂しくなるな…」

「また泊まりに来なさいよ。」

「いいのか？男だぞ？」

「カナン君なら大丈夫だよ。」

「それとも…アンタ私達になんかする気？」

「いや…命の危険があるからそんなことする気はないな。」

「なら大丈夫じゃない。気が向いたらいつでもきなさい。」

「待ってるよ～。」

「ああ。ありがとな。」

「どうでもいいがマスター…」

「何だ？」

「学校とやらは大丈夫なのか？」

「「「…」」」

学校が始まるのは八時半…現在時刻は、八時十五分…登校にかかる時間は二十分ほど…

「「「わぁあああ！！」」」

私達は急いで朝食を食べて鞄を持って家を出た。

「２日連続で全力疾走するなんて思わなかったぞ！」

「全部アンタのせいだからね！！変な話するからよ！！」

「言っとかなきゃ行けない話だろ！！」

「帰りにすれば良かったじゃない！！」

「二人とも、もうちょっとだよ。頑張ろ！」

「今何時よ！！」

「知らん！！」

「あははは！三人とも速いな。楽しいぞ！」

「「「えええええ！！！」」」

「な、何をそんなに驚いている？」

「お前、その姿でここまできたのか？外だぞ？」

「わかっているが…それがどうかしたか？」

「魔法は極力人に知られちゃ行けないんだよ？」

「大丈夫だ。今までマスターの肩でじっとしていたから人形に見えたはずだ。」

「なら大丈夫ね。」

「さっきから視線が痛かったがお前のせいか！！」

「す…すまない…」

…やっちまった…こいつは祐希奈とは違うんだ…

「まぁ、いいよ。」

「でも…私のせいでマスターに迷惑が…」

「いいって。それより突然怒鳴ってごめんな…」

「い、いや…私が悪いのだからマスターが謝る必要は…」

「メイデン。こいつにはいくら迷惑かけても私が許すから大丈夫よ♪」

「待て…それは人権無視だ…」

「だから…」

ブロロロ…
「「アンタに人権はない！！」」
ブロロロ…

「アリサさんだね…」

「さすがねアリサ…」

「いきなり出てきて人権無視宣言してんじゃねーーーー！！！俺はお前のことなんては知らねえぞーーー！！！」

「向こうは知ってるのよ…アンタは記憶が消えてるだけよ…」

「何！？何でだよ？」

「さぁね～？」

「あ、学校見えて来たよ。」

「急げ。一分前だ。」

「ヴィヴィオ。行くわよ。」

「うん！」
スピードをあげ二人は先に行った…

「教えやがれーーー！！！」
怒りを力に変えラストスパート！

「ヴィヴィオちゃん。祐希奈！こっち！」

美鈴ちゃんが教室の窓を開け待っていてくれた。

「美鈴。でかした！」

「美鈴ちゃん。ありがとう！」

シュダッ！

跳躍…教室に滑り込み席についた…同時にチャイム…

「ＨＲをはじ…」

「わあああ！！」

ザザザーーガッシャーン！！

カナン君が滑りこんできて、机を巻き込み転倒…

「あのバカ…」

祐希ちゃんは顔に手を当てて呆れていた…

「あはは。カナン君面白いよ。」

「てー…」

頭打ったぞ…

「久しぶりだけど…ずいぶん派手なご登場ね…カナン君？」

「あ～…これには海より深いわけが…」

「ちょっと来なさい！！」

ズルズル…

「いだだだ！！教師が生徒の耳を引っ張るなって！」

「君にはこれくらいが丁度いいわ…」

「痛い！痛いって！」
カナン君はいきなり問題をおこし引きずられながら退場した…

「・・・」
教室が静まりかえる…

「ねね。今のってカナン君だよね？」
美鈴ちゃんが聞いてきた…

「うん。今日から通うんだって。」

「あれ？ヴィヴィオちゃんはカナン君のことを知ってるの？」

「あ…う、うん。祐希ちゃんの家に遊びに行った時にたまたま会ったんだ。」

「ふ～ん。カナン君今まで何してたんだろうね…祐希奈、知ってる？」

「さぁね…」

「さっき入って来たのって祐希奈の友達なの？」
今度は神楽ちゃん。

「下僕の間違いよ。」
その言葉を聞き神楽ちゃんがおろおろした…

「神楽ちゃん違うよ？カナン君は友達だからね？」

「そ、そうだよね…」

「で…ヴィヴィオちゃんその肩の人形何？」

「え…？わっ！めめっ！メイデン！！いつの間に！？」

「メイデン？」

（バカ…）

（うぅ…）

「人形とは失礼だな。私は超高性能ロボットだ。」

（（えええええええ！！））

「おわ！しゃべった！！」

「凄いね～。何処で作られたの？」

「極秘だ…私は世界で一人だけに配布されるんだ。」

「そうなのよ。それでカナンがなっちゃったみたいでね。」

「あはは…」

「「い～な～。」」

ガラガラ…

「てて…教師が生徒に暴力振るっちゃだめだろ…」

「あ、マスターお帰り。」

「…」

なんでこいつは楽しく談笑している？

（カナン君。世界で一人に配布される高性能ロボットってことになってるから合わせて！）

（いや…無理があるだろ…）

「カナン君久しぶり。」

「あ、ああ。美鈴久しぶりだな。」

「あ、あの私…」

「そっちは神楽ちゃんって子か？」

「え？あ、はい。何で知ってるんですか？」

「昨日、二人から聞いたからな。」

「そうなんですか…そ、それで、その…」

「俺で良ければ友達になってくれ。いいか？」

「は、はい！」

「知ってるかも知れないけど、風間カナンだ。」

「私、白河神楽です。」

「同級生だし呼び捨てでいいか？俺もカナンで構わないから。」

「じゃあ、ヴィヴィオちゃんみたいに私もカナン君って呼びます。」

「ああ。」

「それでね。物は相談なんだけど…」

「何だ？」

「メイデン頂戴。」

「無理だ。」

「けち。カナン君にこんな可愛いロボットは似合わないって。」

「なぜ…マスター達といい…お前達といい…私を可愛いと言うんだ…私は可愛くなど…ないぞ？」

「そんな顔を真っ赤にして言ってもな…」

「可愛いね。」

とヴィヴィオ。

「「「うん…」」」

「っ！」
ボンっと音がなるほどさらに赤くなった…誉められると弱いんだな…
「ところでカナンさっきから教室の男子共が睨んでるわよ？」
「は？なんでだ？」
「アンタが男子で唯一ヴィヴィオと話してるからでしょ。」
「あ～…」
「？私誰とでもお話するよ？」
「カナン以外の男子は私が許さないわ…」
「なんで？」
「学校には獣だらけだからね…」
「みんな人間だよ？」
獣の意味がわかっていない…
「俺達が守ってやるからな…」
「？？？」
男子の一人が向かって来た…
「風間よ…ちょっと顔貸せや…」

「お前いつの時代の不良だ?今時いないぜ?バカだろ。」

「んだと!?屋上に来いや!!」

「だからダセーっての。まぁいい。相手してやる。」

「私も協力しましょうか?」

「いい。すぐ終わるし。」

「そう。」

カナンは軽く言って教室から出ていった…

「カナン君…大丈夫かな?」

ヴィヴィオが心配そうにしていた。

「大丈夫よ。アイツ本気出したら私より強いしね。」

「そうなのか?意外だぞ…」

「この話…前に言った気がするんだけど…」

「あれ?私も聞いた気がするよ…」

二人が悩んでいるころ…

「てめえ、何ヴィヴィオちゃんと一之瀬と話してやがる!!」

「ヴィヴィオはともかく…祐希奈もか!?」

「顔は可愛いからな。」

「確かに可愛いが命無くすぞ？」

「女一人にびびりすぎなんだよ。お前ら出てこい！」ぞろぞろと似たような不良が登場…

「これ…どれが祐希奈を好きなやつらだ？」

「ヴィヴィオちゃんと一之瀬で半々ぐらいだな。」

「祐希奈を好きな奴らに言っとくぞ！
半分は死ぬ覚悟をしろ！」

「死ぬのはてめえだ！」

「結局こうなるのか…」
全員が殴りかかってくるが、手刀を叩き込み黙らせていく。数分で最初の不良以外は壊滅…

「なっ！」
ゆっくりと不良の方を振り向く…

「お前はムカついたから加減抜きな。」

「ま！」
ドゴッ！
みぞおちに拳を叩き込むと悲鳴もあげず倒れた。

「マスターは体術も出来るのだな。」

「メイデン…またついて来たのか。」

「気になったのでな。面白かったぞ。」

「はいはい…ほら帰るぞ？」

「ああ。」

教室

「もう終わったの？早いわね。」

「祐希奈。お前もモテモテだったぞ？」

「は？」

「１０人くらいはいたな。」

「ちょっと息の根止めてくるわね♪」

「わ！祐希ちゃん！ダメだよ！」

「また今度にしとけ。」

「カナン君！今度でもダメだよ！！」

「仕方ないわね…我慢しとくわ。」

「授業を始めるわよ～席につきなさい。…て男子は風間君と神田君

だけ？」

「全員、腹痛いってトイレにこもってます。」

最前列からカナン君が理由を言った…無理があると思うけど…

「それは凄いわね…まぁいいわ。」

先生大雑把すぎるよ…

「この人数じゃ授業出来ないわね…席替えでもしましょうか！」

先生の提案に教室から喜びの声があがった。祐希ちゃんと離れちゃうかな…

「はい。アミダくじ完成～♪いる人は書いて～。」

どんどん名前が書き込まれて行く。そして完成。番号の通りに席替えすると…

「なぁ…これは仕組んでないか？」

教室の真ん中一番後ろの席…左右にヴィヴィオ、祐希奈。斜めには美鈴、神楽がいた…

「私は皆近くて嬉しいよ。」

「いちいち席動かなくてもいいから楽ね。」

「みんな、よろしくお願いします。」

「よろしくね～。」

「とりあえず、よろしくな。」

こうして席替えが終わり、自習なので話していると授業が終わった。
ちなみに不良以外の男子が復活したのは一時間目の終わり。
不良が復活することはなかった…
5時間目の授業の最中…
（三人とも聞こえるか？）
（はやてさん？まさか出撃ですか？）
（そうなんや…スバル達も出てくれたけど、ガジェットが散らばっとってな…もうすぐ市街地に入りそうなんや…出られるか？）
（仕方ないわね…私が行くわ二人は待ってて。）
（いや…私が行こう。）
（メイデン？大丈夫なのか？）
（ああ。雑魚の相手くらいは私がやろう。この姿を許してくれた礼だ。）
（ほんなら頼めるか？）
（ああ。任せてくれ。）
（メイデン怪我しちゃやだよ？）
（大丈夫だ。しない。すぐに戻る。）
魔法陣を展開し…メイデンは転移した…

「…ここか。」
水がある…海かな…晴れていたのならさぞ綺麗だったろうに…
そらはどんよりした曇り空…今にも雨が降りそうだ…
正面に視点を戻すと空戦ガジェットが向かってきている…

「本当に雑魚だな…さっさと帰るか…」
ガジェットが砲撃を打つが…

「無意味だな…」
避けもせず受ける。もともと鎧はメイデンの能力のためこの程度は効かない…ゆっくりの手をあげる。途端に雷がなりはじめた…

「消えろ…」
手をおろすとガジェットに豪雷が落ち壊滅した…

「次だな…」
再び転移する…今度は荒野にでた…ガジェットは陸戦一型１０、陸戦三型が３…

「やるか…」
ガジェットの攻撃は無視して、荒野に手をあてる…

「グランドスパイク…」
ガジェットの真下から土の針が飛び出し撃墜…

「しぶといな。」
三型一機は大破しながらもアームで攻撃をしてきた…

「その意気は良し…」
三型に手のひらを向ける…ゆっくりと手を閉じていく…みるみる三

型が小さくなり、

「ではな。」

手のひらが閉じられると同時に三型は跡形もなく潰れた…

（はやてとやらまだか？）

（あと一小隊だけお願い出来るか？）

（わかった。）

さらに転移…湖か？

陸地には先程と同じ種類のガジェット達…

「さて…」

水に手を触れる…波紋が広がり巨大な津波がおきた。ガジェットは飲み込まれ消え去った…

そよ風が吹きメイデンの髪を揺らす…

「いい風だな…」

風を感じつつ、手をひとふりすると風が向きを変えつむじ風となり隠れていた４型を切り裂いた…

「帰るか。」

戦闘をしたとは思えないほどの口振りで転移し学校へ向かった。

「ただいま。」

「おわ！！」

「風間君！静かに！！」

「すいません。」

（お前はやいな。）

（雑魚だっだからな。）

（メイデンお帰り。怪我はないよね？）

（ない。観光してきただけだ。）

（観光って…まぁ、いいわ。）

祐希奈は呆れていた…

そうしているうちに授業が終わった…

「ふぅ…ラスト一時間ね。」

「ああ。寝るなよ？」

「寝るわ。」

「寝ちゃダメだよ！」

「無理…」

祐希ちゃんが寝息をたてはじめた…

「もう寝てるし…」

「ま、ほっときなって後でなくのは祐希奈だし。」

「そうですね。」

話していると授業が始まった…
そしてついに学校が終わる…

「終わった～。いや～疲れたわ。」

「お前寝てただけだろ…」

「ちゃんと起きてたわよ♪ねえ?」
祐希奈はカッターをこちらに向けて問いかける

「そんなもん向けて聞くな!!」

「祐希ちゃん危ないよ!」

「カナンなら死なないって♪」

「いや…そこ頸動脈なんですけど…」

「死ぬかどうか理科の実験よ♪」

「やめろ!!」

「一之瀬さん。危ないからやめましょうね?」
先生から注意が来た

「仕方ないわね。許してあげるわ。」

「俺何も悪くないよなぁ!?」

帰りのＨＲも終わり…分かれ道…

「三人共仲良くね～」

「さようなら。」

「バイバイ。」

「「また明日。」」

「さて…俺達もさよならだな。」

「そのことなんだけどね？」

「何だ？」

「今日私カナン君の家に泊まってもいいかな？」

「「は？」」

「ヴィヴィオ？何言ってるの？そりゃカナンはヘタレで何も出来ないわよ？でも一応男なのよ？」

「ヘタレ言うな！！一応でもなくれっきとした男だ！！」

「そうだったの？初めて知ったわ…」

「素で驚くのやめてくれ！！」

「カナン君は嫌かな？」

「別に嫌とかじゃないけど…俺んち祐希奈の家より狭いぞ？男二人だしな…」

「私カナン君の家を見てみたいんだ。」

「見てみたいって多分面白くないぞ？」

「ダメ？」

いや…だからな…そんな上目遣いで見られたら断れないだろ…

「祐希奈の心配もわかるが、そこは私に任せてくれ。マスターが変な行動をしたら即座に攻撃する。」

「はぁ…わかったわよ。」

「祐希ちゃん、ありがとう。」

「1日だけだからね？」

「うん。」

「じゃあ、行くか。」

「カナン。変なことしないでよ？」

「ああ。しない。心配ならお前も来るか？」

「い、いいわよ！恥ずかしいし…」

「そうか。じゃあな。」

「バイバイ祐希ちゃん。」

「ではな。」

「ええ。」

こうして1日だけカナン君の家に泊まることになった。

祐

「今回はなんか静かね…」

カ

「かなり平和に終わった話だな…」

ヴ

「戦闘があったのに日頃より静かっておかしいね。」

メ

「マスターがあまり蹴られてないからな。」

カ

「ていうか…いつまでコメディー続ける気だ?」

祐

「さぁ…この作者は更新は早いけど、コメディーが多いからね…」

ヴ

「次回も似たようなのになりそうだし…」

ヴ・祐・カ・メ

「この作者…ダメだ。」

ヴ
「もし好きなキャラがいたら送ってくださいね～」

カ
「出来れば俺に！！」

祐
「ＫＤＧも絶賛募集中よ♪」

カ
「するな！！」

メ
「またな。」

第五話突入カナンの家

ヴ
「カナン君に悲しいお知らせがあります…」

カ
「…まさか?メイデン関係か?」

祐
「実はね…」

メ
「私の投票数が7票になった…」

カ
「ぬぁぁにぃぃ!!」

祐
「メイデンは現在カナン美鈴を抜いて三位になったわよ♪」

カ
「デバイスに負けた…しかも五位になってるし…」

ヴ
「あはは。メイデン人気急上昇だね~。」

メ
「何故こんなに票が入るのかわからんな…」

ヴ
「情報によりますと…普段とのギャップが可愛いすぎる！との話が四件。とにかく可愛い！というのが三件です。」

祐
「作者さんはメイデンファンクラブが出来たら即入ってくれるらしいわよ♪」

メ
「ファンクラブとは何だ？」

カ
「ようするにお前が大好きな人が集まるってことだよ。」

メ
「わわ、私のことを、すすす、好いている！？な、なな！」
バタリ…

ヴ
「あ…倒れちゃった…」

祐
「恥ずかしさの限界を越えたのね…」

カ
「ほんと…言葉には弱いのな…」

ヴ
「さて質問コーナー♪」

カ
「よく質問がなくならないな…」

祐
「それだけこの作者が抜けてるってことよ。」

ヴ
「あはは。メイデンに質問です。メイデンってどんだけ魔力変換資質持ってんの？」

メ
「好いている…私のことを…」

カ
「まだ伸びてるな…変わりに俺が答えてやるよ。」

祐
「少しでも人気をあげるためにね♪」

カ
「うるせえ！！俺だってなぁ…女の子のファンがいたらもっと…」

祐
「ボコボコにされるわね♪」

カ
「なんでやっちゅうねん！！」

ヴ
「もう…私が答えるよ。メイデンは、魔力変換資質はないよ。自然

の力を借りただけ。」

カ
「俺の出番が！！」

バキャッ！！

祐
「うっさい！！」

カ
「いってー……」

ヴ
「わぁ…飛んだねー。」

祐
「ふう…魔力変換資質がないのはわかったわ。ガジェットを握り潰したわよね？あれ何？」

メ
「あれはだな…」

ヴ
「あ、目が覚めたの？」

メ
「ついさっきな。祐希奈の質問の答えだがあれは、空間攻撃だ。マスターも使っていただろう？あれは私の能力だ。マスターは遠距離斬撃に使っていたが、私は空間をねじ曲げて潰すのに使ったんだ。」

祐
「空間操作って…それって稀少能力じゃないの？」

メ
「稀少能力？そのような言葉は知らんな。だいたい魔力変換資質といったか…そんなものなくても、自然な力を借りれば似たようなことは出来るぞ？」

ヴ
「じゃあカナン君は全部の属性を使えるってことになるのかな？」

祐
「カナンには勿体無い能力ね…メイデン。私と契約しない？」

メ
「残念だが、私の力を完全に引き出せるのはマスターだけなのだ…。」

ヴ
「あはは。仕方ないね。」

カ
「ふう…やっと帰って来れた。」

祐
「じゃあそろそろ前書き終わるわね♪」

ヴ
「本編をお楽しみください。」

カ
「今回、俺の出番ほとんどねえ！！」

ヴ・祐
「では！」

カ
「もうちょっと出番を…」
ブツッ…「ここが俺の家だ。」
目の前には祐希ちゃんの家とは対照的な洋式の白い家。

「真っ白で綺麗だね。」

「そうか？慣れるとあんまり綺麗とか思わないけどな。」

「そういうものなの？」

「ああ。じゃ…入るか。」
若干緊張した様子のカナン君。

「大丈夫？」

「大丈夫だ。ふぅ…よし！」
カナン君が取っ手に手をかけて扉を開いた。

「ただいまー！」
声が家に響いたが誰も出てこない…

「留守かな？」

部屋も真っ暗だ…

「無用心だな～…まぁいいや。ちょっと待ってくれ…確か明かりがこのへんに…」

「マスター。もしかしてこれか？」

暗闇の中からメイデンの声。

「ああ。それだ。押してくれ。」

「わかった。」

パチッ

「わぁ…床がピカピカだよ…。」

「ワックスがけをしてるからな。あがってくれ。」

「勝手に入ってもいいのかな？」

「大丈夫だろ。伯父さん優しいしな。」

「う、うん。」

「ヴィヴィオが怒られたら祐希奈に報告するからな。」

「いや…それは…やめてくれよ？」

「祐希奈との約束だからな。私は約束は守る。ヴィヴィオが嫌な思いをしたら即座に報告する。」

「可愛いメイデンはそんなことしないよな～？」

「な！何を！」

「メイデンは女神みたいに綺麗だしきっと優しいんだろうな～？」

「わわ…私は…綺麗なんかでは…ない…めめ…女神なんて…そんな…」

「メイデンは…」

「わかった！報告はしない！もう言わないでくれ！」

顔を真っ赤にしてメイデンが降参した。

「勝った…」

カナン君がガッツポーズをしている。

「カナン君。あんまりメイデンいじめちゃダメだよ～。」

「俺の命がかかってたからな。」

「そこまで祐希ちゃん怖くないよ？」

「ヴィヴィオにはな…俺には加減抜きだからな…」

「カナン君は何しても死なないって信じてるからだよ。」

「そんなこと信じられても嬉しくねえよ！！」

「マスター…いつまで話している気だ?夕食の準備はいいのか?」

「あ、やべ。忘れてた。ヴィヴィオ右の扉に入ってくれ。リビングだから適当にくつろいでて。」

「私も手伝うよ。」

「今日は俺が作るよ。いつも世話になってるしな。」

「マスターが料理を?作れるのか?食べたら死んだりしないか?」

いや…本気で泣きそうな顔して聞かないでくれ…

「メイデン…食べて死ぬような料理を作る方が難しい…」

「でも…でもな。この前、祐希奈と見たテレビとやらには、料理を食べた人間が死んでたぞ?

とても苦しんでいた…

祐希奈は料理が下手だからって言ってたぞ?」

「え!?料理が下手だとそんなに危険なの!?わ、私、今まで知らなかったよ…どうしようみんなを危険な目にあわせてたよ…」

ヴィヴィオまで泣き顔になる…

お前まで信じないでくれ…

「断言しよう。祐希奈の言葉は八割…いや、九割は疑え…」

「「え?」」

「そんな人が死ぬような料理はめったにない。大方サスペンスドラマでも見たんだろう…祐希奈はからかっただけだ。」

「そ、そうなのか？死なないか？」
零距離うるうる光線…

「大丈夫。死なないから。安心しろ。」
メイデンの髪を撫でた…

「うん…マスターを信じる…」
見た目は大人なのに中身は完璧子供みたいだな…

「見た目は大人！中身は子供！迷いまくりのユニゾンデバイス！迷探偵メイデン！」
ビシッと指を指す。
決まった…

「…は！」

「カ、カナン君？何やってるの？」

「ヴィヴィオ！どうしようマスターが壊れてしまったぞ！！」
あ～メイデンが壮大な勘違いをしてしまったぞ？

「お、落ち着いて…こういう時は１１０番だよ！」
いや…まずお前が落ち着こうな？番号が違うぞ？

「あ、ああ。わかった。こ、これを押せばいいのだな？」
そろそろまずい！！

「まてー！大丈夫だから！壊れてないし！そもそも１１０番は警察だ！！俺が捕まる！！」

「カナン君…うわあああん！！良かったよ～！！もとに戻ってくれたよ～！！」

「マスター！！無事で良かった～！！」

「だあああ！何で泣くんだ！？とりあえずごめん！！ごめんな？」

「ひっく…」
しゃくりあげるヴィヴィオ…

「ぐす…」
まだ少し涙を流しているメイデン…

「落ち着いたか？」

「うん…もう平気。」

「すまない。私も、もう平気だ。」

「そうか。じゃあリビングに行こうな？」

「うん。」

「わかった。」
二人？をリビングに連れていき、その後で自分はキッチンへと向かった。

「ふぅ…ていうか料理を作るだけなのにえらいことになってしまった…何でだ？…あ～祐希奈がメイデンにサスペンスを見せたのが原因だな…。ほんとにあいつは、俺の苦労の源だな…」

などと壮大な一人ごとを言ってしまうほどカナンの精神は病んでいた…

「なんか今すげえムカつくこと言われた気がする…さて…何作るかな」

ふと前を見るとチャーハンの元…よし！料理を開始した。

「カナン君何作ってくれるのかな？」

「さぁな？マスターの料理を作ってる所は想像しづらいが…」

「あはは。確かにね。」

「テレビとやらに出てきた料理と同じだったら…」

「だ、大丈夫だよ？…多分…」

ちょっと怖いな…

「わ、私はやめておこうか…」

「メイデン！？ずるいよ！！私も食べないよ！」

「ヴィ、ヴィヴィオはマスターの友達だろう？食べないとダメだ。私の分もやるから。」

「そ、そんなこと言ったらメイデンだってカナン君のたった一つのデバイスだよ？私の分をあげるよ。」

「いや、やはり私が。」

「いいよ。私のを」

口論が続く。

「お前らずいぶんひどいこと言うのな。」

「「ひゃう！！」」

「カ、カカ、カナン君早いね。」

「マ、マママ、マスター驚いたぞ…」

「あんかけチャーハンだからな。」

「「え？」」

「でも、お前らは食いたくないんだな？じゃあ、全部俺が食うよ。」

「えっとごめんなさい…食べたい。」

「すまない…私も食べたい…」

「ははは！謝らなくてもいいって。冗談だ。だいたいこんなたくさん食えねえよ。ほら。」

食器が置かれる。

「ありがとう。ごめんね？」

「だから謝らなくてもいいって。簡単だけど、結構うまいと思うぜ

？」

「うん！いただきます。」

「いただきます。」

「おう！」

「…」

とりあえず一口食べてみた…

「美味しいよ！すっごく美味しい！」

食べたことない味だけど、本当に美味しいや！

「ああ。マスター大したものだ…なかなかここまで美味しい物もないぞ！」

「お前ら言い過ぎだって。チャーハンの元とあんかけ作ってかけるだけだし誰でも作れる簡単な料理だよ。ヴィヴィオと祐希奈が作る料理とは比べものにもならないな。」

「後で教えてくれる？」

「教えるほどの料理でもないと思うけど…まぁ、いいよ。」

「ありがとう！」

出た…１００％全開スマイル…あんかけチャーハンなんかで見れるんならいくらでも教えてやる…。

「マスター？大丈夫か？ぼーとしているぞ？」

メイデンが目の前に現れた…ドアップ…5センチない…細部まで見える…

「メイデン…近い…離れてくれ。」
メイデンの容姿はかなりいい…正直かなり恥ずかしい…

「変なマスターだな?ここならいいか?」
メイデンが肩に移る。

「ああ。メイデン…もうちょっと気をつけてくれ…」

「何にだ?わけがわからんぞ?」

「お前は無防備すぎる…」

「?ちゃんと周囲の警戒は怠っていないぞ?」

「もういい…お前はそういう奴だったな…」

「カナン君。誰か来たみたいだよ?伯父さんかも…」

「帰ってきたか…」
玄関へと全員で向かう。
ガチャリ…と玄関が開く。

「伯父さん。おかえり。」

「カナン君…はは。立場が逆になってしまった。」

「お邪魔してます。」

私はカナン君の伯父さんに頭を下げた。伯父さんは少し丸い体型で、人の良さそうな顔をしていた。

「カナン君…もう彼女を作ったのかい？」

「なっ！」

「ええ！！わ、わわ私はカナン君の彼女とかではなく…カナン君には祐希ちゃんという可愛い子が…」

「待て！何で祐希奈になる！？違うからな！？祐希奈を彼女なんて嫌だぞ！！俺はヴィヴィオが好きなんだ…て、わあああ！！」

「カナン君！？わわ、私なんかでいいの！？」

「じょ！！冗談だ！！」

「だだ、だ、だよね～！！びっくりしちゃったよ。」

「ははははは！賑やかだね。すまないちょっとからかっただけなんだ。」

「もうちょっと普通の冗談にしてください…」
カナン君がふにゃふにゃとへたれこんだ

「わ、私もお願いしたいです…」
自分でも顔が火照って赤いのがわかる…カナン君に好きって言われた時どうにかなりそうだった…祐希ちゃんに好きって言われた時とは違う…
この気持ちは…何？カナン君が男の子だからびっくりしただけかな…

「まったく、マスターもそうだが伯父までも冗談のたちが悪いとはな。」

「え？人形が…しゃべった？」

「あ、伯父さん。これ抽選で当たった世界に一つだけの超高性能ロボットなんだ。」

「それは、すごいね。二人の名前を聞かせてもらえるかな？」

「私、高町ヴィヴィオです。アメリカから転校してきました。パパがアメリカ人でママが日本人のハーフです。よろしくお願いします。」

前と同じように言っておく。

「メイデンだ。よろしくな。」

「よろしく。カナン君の義理の父、風間英治だ。」

「英治さん…ですね。」

「英治さん。改めてよろしくな。」

「伯父さん…心配かけてすいません！」

「君は昔からしっかりしていたしいつかは帰って来ると思っていたからあんまり心配はしてないよ。

ただ、いつ帰って来るかわからないから鍵を開けておいたんだ。」

「だから開いていたのか…でも危ないって。」
「大丈夫さ。家に盗られて困るものはないからね。はっはっは。」
「…それはそれで悲しいぞ。あ、今晩ヴィヴィオを止めてあげてもいいか？」
「ヴィヴィオさんの親御さんは何て言ってるのかな？」
「すいません。連絡してきます。」
物陰に隠れ念話を使う…
（なのはママ。今夜はカナン君の家にいるから何かようがあったらこっちに来てね？）
（わかったけど…ちゃんと警戒はしとくんだよ？）
（うん。でも、カナン君なら心配ないよ。）
（もし何かされたら言うんだよ？）
（わかった。じゃあね。）
カナン君達のもとへと帰る。
「許可もらえました。」
「なら僕からは言うことはないよ。」
「伯父さん。ありがとう。」
「英治さん。ありがとうございます。」

「伯父さん腹減ってないか？」

「そういえば少し空いているね。」

「マスターが作ったあんかけチャーハンが残っているぞ？食べてみろ。なかなかの味だ。」

「本当かい？是非いただくよ。」

英治さんも交えてご飯を再開する。

「これ美味しいよ。これからはカナン君にご飯係を任せようかな？」

「いや…俺そんなにレパートリーないし…」

「明日の朝御飯は私がお作りしますよ。」

「ヴィヴィオの料理はマジでうまいんだぜ？」

「ああ。私も保証する。」

「そ、そんなに上手じゃないよ～。」

「それは楽しみだね。」

「これからはヴィヴィオ以外の料理は食えなくなるよ。」

「ああ。間違いない。」

「もう！二人とも明日ご飯抜き！」

「それは勘弁してくれ、悪かった。な?頼むよ?」
「私も食べたい。私からもお願いする。」
二人が頭を下げた…そこまでしなくても…
「しょうがないなぁ…許してあげるよ。」
「ごちそうさま。美味しかったよ。」
「さて、片付けて来るな。」
「私も…」
「ヴィヴィオは今日はお客様だ。手伝いはなし。」
「いいの?」
「ああ。たまには休め。」カナン君優しいなぁ…
「ありがとう。じゃあ、任せるね。」
「話でもしててくれ。」
カナン君がキッチンへと向かった。
「それにしても驚いたよ。」
「何がですか?」
「あのカナン君が祐希奈さん以外女の子を家に連れてくるなんてね

ぇ。」

「え？今までは祐希ちゃんだけだったんですか？」

「あれはカナン君が連れて来たというか祐希奈さんが押し掛けてきた感じだったね…」

「なるほど祐希奈ならやりそうだな…」

「凄かったよ～。小学三年生のころかな…カナン君の首根っこを捕まえて引きずってきたんだ。しかも引きずってきた本人は涼しい顔だったなぁ…」

「…さすが祐希ちゃんだね…」

「ああ。」

「それから後は頻繁に来てくれてね。カナン君もどんどん明るくなって、よく話すようになったんだよ。」

「へえ…」

「確かに話でもしててくれとは言ったけどな…そんな情けない過去の話を持ち出さなくてもいいだろ…」

後ろからカナン君の声がして振り向くとすぐ後ろにカナン君が立っていた。

「祐希ちゃん相手じゃ仕方ないよ。」

「私もそう思うぞ。」

「まぁ…あいつは野獣だからな…」

「こらこら。そんな言い方しちゃ失礼だろう？」

「事実だ…さて、風呂入れといたからもうすぐで入れるけど、ヴィヴィオからでいいよな？」

「ありがとう。あ…」

「どうした？」

「着替え…忘れちゃった…」

「たくっ歯ブラシとかは覚えてるのに普通、服忘れるか？」

「あはは…ごめんなさい…」

「俺の小さくなって着れなくなったジャージがあるからやるよ。」

「え？くれるの？」

「着れないからな。持ってても意味ないしな。」

「わ～い。大切にするね。」

「大切にするようなもんでもないぞ。」

「だって友達からの初めてのプレゼントだもん。嬉しいよ！」

初めて…だと？

「やっぱりやるのやめようかな…」

「え～！何で？」

「初めてのプレゼントがジャージって…情けなさすぎる…しかもお下がり…」

「私は嬉しいから欲しいな？」

「まぁ…いいけど…
ごめんな？いつかちゃんとしたプレゼント買ってやるから。」

「そんなのいいよ～。これで嬉しいから。」

「俺の気が済まん…」

「じゃあ楽しみにしてるね？」

「ああ。」
とびきり高いのをプレゼントだな…

「じゃあ行ってくるね～。メイデンも一緒に入ろうよ。」

「わかった。ではな。」
ヴィヴィオが出ていった。

「優しい、いい子じゃないか。友達になれて良かったね。」

「うん。気付いたら隣にいてくれたんだよ…友達になったのは最近

だよ。」

「へえ…ところでジャージは渡したのかい？」

「……」

ジャージは…まだクローゼットの中のはず…

「ヴィヴィオの奴…忘れたな…しゃあない。」

クローゼットの中からジャージを取りだし、届けに部屋を立つ。

「ヴィヴィオ～。ジャージ忘れてるぞ～。」

「え？あ、ごめんね？」

扉が開く…そこにはバスタオルを巻いたヴィヴィオとメイデン…お前ら…待て…

「ありがとう。」

ヴィヴィオがジャージを受けとる。

「マスターも気が利くな。」

「じゃ、じゃあな…」

「うん。またあとでね。」バタン…

「いや…お前ら…普通に会話すんなよ…」

壁にもたれ掛かりずるずると滑り落ちた…

しばらくたちカナンも入浴し終わり、寝ることになった。

「私カナン君の部屋で寝たいんだけど、いいかな？」

「もう勝手にしてくれ…ヴィヴィオとメイデンには勝てん…」

「マスター？何を嘆いているんだ？早く案内してくれ。」

「まさか…俺と一緒に寝る気か？」

「ダメかな？私一人で寝るのって苦手なんだよね…」

「いくら苦手でも男と寝ちゃ行かんだろ…」

「カナン君なら大丈夫だよ。」

「どっからその自信は出てくるんだ…」

「乙女の直感…かな？」

首を傾げて聞いてくる？ぶりっ子とかではなくヴィヴィオは素でやっている…

「もう…いい…こっちだ…」

結局可愛さに負け…案内した…

「男の子の部屋って意外と綺麗なんだね。」

「俺の場合。綺麗というか何もないだけだ。」

「何か書物があるぞ？」

メイデンが本棚へと向かう。

「ただの漫画だ。」

「「漫画？」」

二人して首を傾げる。

「漫画もしらないのか？え～とだな…俺達の戦いを絵にするみたいな感じだな。」

「絵って私達動いてるよ？」

「不可能だ。」

「それをいかにリアルに伝えられるかは腕次第だ。」

「読んでみていい？」

「私も読みたいぞ。」

「別にいいけど…」

「わ～い。」

漫画の一冊を手に取り勉強机に座って読み出した。メイデンはヴィヴィオの腕の間から一緒に読んでいる。

「わぁ…凄いね…」

「ああ…大したものだ…」

二人が感嘆の声をあげている。

「何が？」

「だって、絵なのに凄い迫力だよ…」
これを書いてる人って大変だなぁ…

「…」
凄い…絵が動いて見えるぞ…

もう、一冊を読み終えた。

「漫画って面白いね。」

「そうか？そのうち飽きると思うぞ？」

「そうかな？」

「ああ。さて明日も学校だし寝るぞ？」

「うん。」

「ヴィヴィオとメイデンでベッドを使ってくれ。」

「え？一緒に寝ようよ？祐希ちゃんとも一緒だよ？」

「あのな～祐希奈は女で俺は男なんだぞ？もし一緒に寝て俺が変な気を起こしたらどうするんだよ？」

「カナン君は変な気を起こしそうなの？」

「いや、起こさないが…」

「じゃあいいよね？」

「そういう問題じゃないだろ！？だいたい同じ部屋で寝ること自体ギリギリだぞ…」

「心配するな。マスターがヴィヴィオに変なことをしたら私が止めてやる。」

「…一応聞くが…どうやって？」

「それは魔法を使って…」

「生身で受けたら死ぬっつうに！！」

「マスターが変なことをしなければいい話だ。」

「それ以前にお前達と違うところで寝ればいい話なんだが…」

「カナン君は私と一緒に寝るのが嫌なの？」

ヴィヴィオが聞いてくる…

「ヴィヴィオが嫌とかではなく…」

「では私か…」

メイデンが落ち込む…

「それも違うから！」

「じゃあ一緒に寝て欲しいな？」

「なんでそれにこだわる！」

「やはり私達が嫌なのだな…」

「だあああ！！もういい！わかった！ただしこれから祐希奈の家に泊まりに行ったとしても一緒はなしだからな！」

「うん。私からは強制しないよ。」

「祐希奈からはどうだか知らんがな…」

「大丈夫だ…あいつは常識をわきまえていると信じたい…」

「その常識をわきまえている人がほぼ毎日マスターを殴っているのだが？」

「うっ…」

「あはは。」

「おやすみ！」

「逃げたな…」

「逃げたね。」

「まぁ、いいだろうマスター、ヴィヴィオ、おやすみ。」

「おやすみ。カナン君、メイデン。」

この眠りについた時点でカナンは地獄の道をたどることとなる…

カ
「祐希奈！晶さんは俺の味方になってくれたぞ！」

ヴ
「あれ？前は呼び捨てにしてなかった？」

カ
「何の話だ？尊敬する晶さんをそんな呼び捨てになんてするわけないだろ？」

祐
「私の招待を断るとは…いい度胸ね…今すぐクロイツの世界に行くから待ってなさいよ！！」

ヴ
「晶さんＫＤＧ入団拒否理由…なんでわざわざ他の作品のキャラをデストロイしにいくんだ…面倒だし、パスな。」

祐
「神だかなんだか知らないけどねえ…私に逆らう奴はぶちのめす…」

カ
「さすがナンバーワンジャイアニズマー…」

祐
「あんたはいちいちうるさいのよ！！ブレードエクスプロージョン！！」
ズドン！！

カ
「わあああぁぁぁー…」

メ
「こんなので出演して大丈夫なのか?」

ヴ
「ちょっと心配だね…」

祐
「晶なんかより私の方が神の名にふさわしいと言うことを思い知らせてあげるわ!!覚悟しなさい!!」

ヴ
「以上あとがき?でした~。」

メ
「実は私も近々クロス出来るのだ。楽しみにしててくれ。」

第六話　魔王再臨

カ
「なぁ…前回の最後に地獄がどうとか書いてたが…なんなんだ?」

ヴ
「あ～あれはね…やっぱりやめておくよ…」

祐
「ヒントは悪魔降臨ね♪」

カ
「その時点で既に答え言ってるようなもんだ…」

ヴ
「大丈夫だよ。…多分　…」

カ
「多分ってなんだよ!?」

メ
「骨は私が拾ってやる。」

カ
「物騒なこと言うな!!」

祐
「そして私が犬にあげてくるわ♪」

カ
「せめて火葬してくれ…」

祐
「あんたごときが犬の食物になれるんだからいいじゃない♪」

カ
「俺の命は犬以下なのか!?」

祐
「え…今更わかったの?」

カ
「お前はそんなに俺をいじって楽しいか!?」

祐
「うん♪」

カ
「ぢぐじょぉぉぉ!!」

ヴ
「毎回のことだけど…ちょっと可哀想だね。」

メ
「ああ。しかも、マスターは舞台裏だけではなく現実世界でもこれだからな…難儀なことだ…」

ヴ
「そうだね…

では、本日の質問コーナー♪」

メ
「今回は誰になんだ？」

ヴ
「カナン君です。カナンに希少技能はあるのか？だって。」

カ
「答えはある。だな」

祐
「そんなの発動したことあった？」

カ
「一応な。周囲の空間認識と空間突破だ。」

祐
「空間突破は凄いけど…空間認識って誰でもできると思うけど？」

カ
「俺の場合は一～三メートルの範囲内なら何処でも認識できる。」

メ
「私とユニゾンすれば四十～五十メートルほどなら認識できるぞ？」

ヴ
「それってミドルレンジ相当だよ？」

カ

「空間突破は俺の視界に入る範囲＋空間認識範囲なら何処でも狙える。」

祐
「メイデンとユニゾンしたら五十メートルはカナンの斬撃の攻撃範囲ってことね…」

ヴ
「凄いね…」

カ
「メイデンの力で空間攻撃も出来るから複数戦闘も出来る。」

祐
「メイデンがサポートすれば自然の力も操れる…」

ヴ
「カナン君…強すぎない？」

カ
「晶さんや６６６にはかなわねえよ…」

祐
「…さすが作者が生けるバグキャラと言うだけはあるわね…」

ヴ
「そろそろ終わるよ～。」

祐
「カナンさよなら♪」

カ
「死なねえよ！！」

メ
「私も頑張るからな。」

ヴ
「魔法少女リリカルヴィヴィオ。」

一同
「始まります。」

「ふあ…って何だこりゃ！？」
目が覚めると…俺とメイデンは林の中にいた…何故に？

「カナン…やっと起きたの？随分お寝坊さんだね？」
え…？何で目の前にフェイトさん？ていうか再びダークオーラモード？

「フェフェ…フェイトさん？あ、あの…何で俺はこんなところに？
家で寝てたはずなんですけど…？」

「カナンの家に泊まるだけでも反対なのに…私に許可なしでヴィヴィオと一緒に寝るなんて…許されるわけないよね？」
あ～なるほど…で、お仕置きのために連れ去ったと…

「な、なんで一緒に寝たことを知っていらっしゃるのでしょうか？」

「そんなの答える義理はない…さっさと変身しろ…」

口調まで変わってきたな…既に戦闘モードか…

「わかりました…メイデン起きろ。」
メイデンを揺さぶり起こす。
「ん…マ、マスター？何だ……！！」
寝ぼけたメイデンもすぐに飛び起きた…恐ろしい殺気だな…

「ママ、マスター？な、何をしたんだ？」
俺の背中に隠れ怯えた声で聞かれた…

「ヴィヴィオと一緒に寝たのがバレた…」

「フェ、フェイトさんとやらはそ、それだけでこんな殺気を放っているのか！？」

「それだけ…？」
ダークオーラ全開…

「「！！」」

「お前ごときがヴィヴィオと寝ることは罪だ…万死に値する…」
これは…親バカの域を越えている…

「メイデン…生きたいか？」
静かに訪ねる…

「ああ…自由を手に入れてまだ短い…死にたくはない…」

「生き残るぞ！」

「ああ！」

「メイデン！セットアップ！！」

「了解だ！」

騎士甲冑を装着…左手には黄金に輝く剣…

「準備はいい？全力で来ないと…すぐに死ぬよ？」

「最初から全力で行くつもりっす…」

親バカが生んだ驚異の戦いが今、始まる…「バルディッシュ！」

「Ｈａｋｅｎｆｏｒｍ…」

鎌形の魔力刃を展開…来るか…膝を落とし柄に手をかけ構える。

「行くぞ！」

「Ｓｎｉｃ　ｍｏｖｅ…」

高速移動魔法…

後ろだな…

「はぁぁぁ！」

案の定後ろから斬撃。

抜刀！

「そんな速度で！」

ギァン！

「まだ！」

高速移動魔法を連続行使しながらさらに背後へ…

「遅い！」
ギァン！
再びふれあう刃…つばぜり合い…

「へえ…よく反応したね…」

「接近戦には自信があるんで…」

「そう…」
フェイトさんはいきなり腕の力を抜く…
一瞬体の前に重心がずれた…
「ちっ！」
その間にフェイトさんは側面に移動。カートリッジ二発排出…

「ハーケン！セイバー！」
デバイスが振り降ろされ、魔力刃が飛んでくる…
前にずれた重心に任せ前転…ギリギリ避ける。その間に納刀…

「くらえ！」
下段から振り上げられもう一発。

「絶空！！」
抜刀し、切り払う。
激突。

「だあああああ！！」
野球の要領で魔力刃をフェイトさんに打ち返す。

「っ！」

間一髪で避けられたがその間に接近。剣を引く…

「はっ！」
手加減抜きの突き。

「甘い！」
フェイトさんはデバイスで横薙ぎに払い軌道をそらす。さらに遠心力を利用し…回し蹴り…

「プロテクション！」
防ぐが…体勢が整っていなかったため若干距離が開く。

「ザンバーフォーム！」
「Ｇｅｔ　ｓｅｔ…」
大剣となりカートリッジ三発排出…

「はぁ！」
フェイトさんが大剣を振ると衝撃波が発生。動きを止められる。

「メイデン鎧頼む！プロテクション全開！」

「わかった！」
銀の鎧を装着し、プロテクションの出力を最大まであげる。

「撃ち抜け！雷神！」
「Ｊｅｔ　ｚａｎｂｅｒ…」
魔力刃が伸び水平に薙ぎ払われる…。

「ぐぅ…」
凄まじい衝撃が体を襲う…地面が抉れる…そしてプロテクションが

破壊された…
「わああ！」
剣を縦に構え防ぐがなすすべもなく吹き飛ばされた…

「まだまだ！」
「Ｓｎｉｃ　ｍｏｖｅ」
高速移動し接近…カートリッジ最後の一発を排出

「でああああ！！」
吹き飛んでいる最中に真上から振り降ろされた…

「ごはっ！！」
地面に叩きつけられ…骨が軋む…

「マスター！大丈夫か！？」

「ああ…」
なんとか立ち上がり構えるとフェイトさんは切り札を切っていた…

「バルディッシュ！真・ソニックフォーム！」
「Ｇｅｔ　ｓｅｔ　ｓｔｉｎｇｅｒｆｏｒｍ…」
フェイトさんの切り札…超高速戦闘モード…

「行くぞ！」
今までの倍以上のスピードで走る…
閃光が煌めきカナンを襲う…

「絶空！」
周囲全てを切り払う。

「随分遅いね！」
あっさり避けられ…再び斬撃の嵐…右を防いでも左が左を防いだら
今度は背後から…避けて距離をとってもめの前には既にいる…
完璧に防戦一方になっていた…

「ちくしょう！」
下手に攻撃をしようものなら全ての斬撃をもらってしまう…どうすればいい…

「このまま終わらせてあげる！」
さらに速度があがる…こっちは雷の付加で動きが鈍くなってきている

「はぁ！」
側面からの左の一撃。剣を縦受ける。時間差で右が来る。慌てて飛び退き避ける…これが間違いだった…

「フォトン・ランサー！」
カートリッジを使い一瞬で精製…
「ファイア！！」
雷を纏うランサーが一斉に放たれる。

「っ！」
直感的に止まって捌くのは危険と判断回避行動を取る。なんとか避けた。

「ターン！」
フェイトの言葉と同時にランサーが向きを変え再び襲いかかる。

「面倒だな！」
回避行動を取りつつすれ違いざまにランサーを斬り飛ばす。

「トライデント！」
真上からフェイトさんの声が響いた…即座に回避をやめ納刀…ランサーをいくつかもらうが鎧のお陰でまだ耐えられた…

「スマッシャー！」
やはり砲撃魔法だった。

「絶空！」
縦に斬りつけ砲撃を無効化…フェイトが待っていたのはこの一瞬…カナンの技の中では一番の隙を作る技

「もらった！！」
背後からの声…

「しまっ！ぐあああ！！」
背中をクロスに斬られた…物理ダメージならなんとかなる…しかし、雷で体が麻痺った…背後ではさらに畳み掛けようとフェイトさんが動いているのがわかる…
…このままでは…負ける…
そう思った時…頭に声が響く…

（マスター…このままで終わるつもりか？）
メイデンが問う…

「…んなわけねえだろ。」
答える…

（なら、フェイトさんに見せてやろう…私達の力を！）
なんと力強い声だろう…こいつと一緒なら…何処までも強くなれる

…そんな気さえする声…

「よっしゃ！メイデン！行くぞ！」

戦意回復…気合いは十二分麻痺ぐらいなんだ！

（ああ！やろう！）

「でああああ！！」

ギィン！…

振り向くと同時に剣を振り上げ弾く。

「っ！」

麻痺していたはず！

予想外の攻撃に崩れたフェイトとの距離が一瞬離れる…

「「ユニゾン！イン！」」

カナンの体から光が溢れる…

「くっ！ユニゾンなんて…」

あまりの光に目を伏せる。

やがて光が収まった…目の前の少年の姿が変わっている…

黒髪だったが金髪…騎士甲冑と呼ぶに相応しい銀の鎧…対峙しただけでわかるほどの膨大な魔力…間違いなく強い…

「…」

閉じられた目が開く…瞳の色は…紅蓮から金色へ…

「これなら…勝てる…」

自信に溢れた言葉…

「それはどうかな…」
一瞬も気を抜かず…いい放つ…

「行くぞ…メイデン…」
カナンが柄に手をかける…
「ああ。今までの分を纏めて返してやれ。」

「来い…」
二振りの刃を構える…

「「壱式抜刀剣術…」」

「空間突破斬撃か…」
事前にフェイトはカナンのデータを見ていた…空間のをねじ曲げ対象との距離をなくし、突破…一瞬で相手の背後へと切り抜ける技…

「暗夜！一閃！」
ギァン！

「くっ！」
フェイトのスピードを持ってしても防ぐのがギリギリ…それほどの速度…

「参式抜刀剣術…」
速い！
切り抜けたカナンは既に構えていた…

「絶空…」

ギャリィィ…
おかしな角度で受け止める、嫌な音がなった…

「うっ！」
間一髪で防いだが…無茶な体勢だったため吹きとばされた…しかし
カナンの猛攻は止まらない…

「弐式抜刀剣術…」
空間斬撃…

「やらせるか！」
「Ｓｎｉｃ　ｍｏｖｅ…」
超加速！

「虚空閃…」
ドン…
後方で土煙が上がる…一気に接近。カナンに肉薄する瞬間…

「六式抜刀剣術…」
カナンの体に風が渦巻く…
「何！？」
データにない！！

「絶空…旋竜破…」
カナンが剣を抜き払うと衝撃波が発生…フェイトはもろに受け再び
吹き飛ぶ。

「似た技だけど、さっきと全然違う…まだあるはず…」
吹き飛びながらも次に備える…

「四式抜刀剣術…光刃…」
カナンの前方の空間が歪む…

「っ！」
空間突破か！
ギァン！
なんとか反応し受ける。
しかし背後のカナンが何かを言った…
「二閃…」
もう一撃！
カナンはねじ曲げた空間を二連続で突破。
「くあ！」
さすがにさばききれずに打ち上げられる…

「伍式抜刀剣術…」

「まだある！？」

「さっきの一撃…返しますよ！」
その言葉と同時にフェイトの目の前の空間が歪む…

「虚空破砕断！」
さらに大きく…強力になった空間斬撃…

「あぁぁぁあ！！」
フェイトは地面に叩き落とされた…

「マスター…やりすぎではないか？」
さすがに心配したメイデンが聞いてきた。

「さっき俺も思いきり叩き落とされたしいいだろ。」
あの薄いジャケットだ。多分ノックアウトのはず。
しかし、カナンの予想は外れた…

「…本格的なお仕置きが必要みたいだね…」

フェイトさんの声…

「「っ!!」」

フェイトは未だダークオーラを纏いつつ、立ち上がる…

「ライオットザンバー…カラミティ…」
二刀流を連結し大剣を作り出す…さっきの大剣と違うところは…魔力の密度…雷撃の凄まじさ…威力はおりがみつきだろう…

「すげえな…でも負けねえ!」
「行くよ…」
フェイトが走り出す…空間斬撃をまともと食らったと言うのに凄まじい速さだ。

「絶空旋竜破!」
先程と同じく再び衝撃波を発生させるが…

「同じ手は二回も通じない!!」
大剣を振り衝撃波を斬り飛ばす!

「だあああ!!」
接近…横殴りの一撃!
ガキィィン

「く…」
剣越しに雷が体に流れ込む…めちゃくちゃな威力だ…

「吹き飛べーー！！」
大剣は振り抜かれる…しかし、飛ばされたのではない、カナンが自分から飛んだのだ。

「メイデン！」
「任せろ！」
受け身を取り跳ね起きる。地面に剣を突き立てる！

「「グランドスパイク！！」」

「っ！」
フェイトの足下から岩の針が突き出てくる！
しかし、フェイトは直感で避け…針を蹴り…加速！

「はぁぁぁ！」

「でああああ！」
剣と大剣が激突！

「ぬおぁありゃあ！！」
気合い全開！

「ちっ！」
ブン！
今度はカナンが振り抜きフェイトを吹き飛ばす。
しかし、ユニゾンしていなければカナンが押し負けている…

「マスター！突っ込め！サポートしてやる！」
珍しくメイデンが熱くなっている。

「おう！行くぞ！」

「風よ！汝が力を我らに！」
メイデンが突風を起こしカナンの背中を押し加速。みるみるフェイトに近づく！
フェイトはようやく体勢を立て直したところ…

「これで！終わりだあ！！」
全力の一撃を叩きつける！

「まだ負けない！」
「Ｓｎｉｃ　ｍｏｖｅ！」
高速移動魔法を使い加速！避けるのではなく突っ込む！

「「はぁぁぁ！！」」

「でああああ！！」もともと高い威力の斬撃に加速が加わり…お互いの最高威力の斬撃をぶつける…
バチバチバチ！！
雷が弾けスパークが起きた。二人の斬撃は均衡が保たれている威力は同等…残りは気力！

「「うぉぉぉ！！！」」
お互い最後の一滴まで振り絞る…
カナンはフェイトのお仕置きを回避するために…
フェイトは自分に許可もとらずヴィヴィオと一緒に寝たカナンをお

仕置きするために…
なんとも情けない理由だが両者は全力である。
そして…
「ちきしょー！！引き分けかよ～！」
勝負はお互いが同時に力尽き倒れた…
「悔しいぞ…」
とメイデン

「カナン達強いね。私これでも二段階外してシングルSの魔力になってるんだよ？」

「へ？許可もらえたんですか？」

「カナンとヴィヴィオのことを知ってからはやてに頼んだらオッケーしてくれたんだ。」

「はぁ…」

（きっと、はやてさんも怖くてオッケーしたんだろうな…）

（ああ…災難だな…）
「さて…お仕置きタイムと行こうか…」
カナンの体がバインドで縛られる…

「え？ちょっと…フェイトさん？引き分けだったしお仕置きはなしじゃ…？」

「それは別の話…引き分けくらいでなしなわけないよ…まぁ、カナンが勝ってもやるけど…」
ダダダ！ダークオーラ！！

「ま、待ってください…ていうかもうすぐヴィヴィオの朝御飯が！！」

いい忘れていたが二人が戦っていた時刻は午前４時から６時の二時間である。

「問答無用…」

鞭出現…

「さて…やろうか…」

「ゆゆゆ、許してください！！」

「わわ、私からもお願いする！！マスターを許してやってくれ！！」

涙目になりながら二人は必死に訴えた。普通の人なら許すだろう…

そう…普通の人なら…

「ダ、メ♪」

死刑宣告…フェイトは普通ではなかった…

「ぎゃあああああああああああ！！！！！！」

今日の海鳴市の市民の朝の起床は鶏の声や犬の鳴き声ではなく…ある男の子の叫び声だったという…

ちなみにカナンはこのあとヴィヴィオの作る朝食は食べたのだが…

何故かフェイトが一緒だったため…恐怖で味を感じなかったという…

カナンは今日１日何も喋らずひたすらフェイトに怯えて過ごした…

祐

「あはははは！！無様ねカナン♪」

カ
「なんとでも言え…あの恐怖を知らないお前に何がわかる…」

ヴ
「ママ達怒ると怖いよね…私はわかるよ…」

カ
「ヴィヴィオ…お前はわかってくれるか…」

ヴ
「うん…カナン君頑張ったね…」

祐
「なんかこの空気ムカつくわね…ねえメイデン？」

メ
「なんだ？」

祐
「今度ユニゾンした時にカナンの体を乗っ取っちゃいなさい。」

メ
「さすがにそれは無理だ…」

ヴ
「それって融合事故だよ…」

祐
「そうなの！？カナンなんてどうなろうと知ったこっちゃないけど

それじゃメイデンが可哀想ね…」

カ
「ひどくないか！？」

祐
「普通よ♪」

メ
「マスター…諦めろ…祐希奈には口喧嘩では勝てん…」

ヴ
「無理だね…」

カ
「無理だな…」

祐
「あんた達ねえ…コロス…（カナンのみ）…」

カ
「何故に！？」

祐
「理由はカナンだからよ♪」

カ
「何…」
バキャッ！！

カ

「ぐは！！」

ヴ
「さて後書きも終わりますが、昨日は更新できずにすいませんでした。」

祐
「なんでヴィヴィオが謝ってんのよ？」

ヴ
「作者に頼まれたからです。」

カ
「ヴィヴィオに汚れ役をやらせるとは…許さん！」

祐
「私も同じ気持ちよ…ちょっと出掛けましょうか？」

カ
「ああ。」

メ
「どこにだ？」

祐・カ
「作者の家にだ。」

ヴ
「なんで？」

祐・カ
「もちろんこの世から消しに…」

ヴ
「わわ、連載終わっちゃうよ！」

祐・カ
「じゃあ三分の二殺し…」

メ
「確実に重体だな…」

祐・カ
「じゃ…そういうことで…」

ヴ
「二人とも待ってよ～！！」

メ
「作者よ…逃げろ…」

ヨ
「また明日～明後日に～」

祐・カ
「そこかぁ！！」

ブツッ

第七話　近づく闇

祐
「祐希奈の♪」

美
「美鈴の♪」

祐・美
「祐希奈道場～♪」

カ
「貴様らまてーい！！何完全にパクってんだよ！！」

祐
「え～？じゃあ…」

祐
「祐希奈と」

美
「美鈴の♪」

祐・美
「ＫＤＧ作戦会議室～♪」

カ
「結局ノリはパクりだし！！だいたいやめろ！！」

祐
「会長は私、副会長はアリサ、会計は零さん、参謀はフェイトさん、会員は美鈴でお送りします♪」

カ
「死ぬ！！確実に死ぬから！！」

ヴ
「零ちゃんが来たら魔法使えないからね～。」

カ
「大丈夫…落ち着け俺…銀杏さんとシオン、晶さんは味方だ…」

ヴ
「銀杏さんは零ちゃんには手を出せないし、シオン君は道場で機嫌悪くなったから助けてくれないかもしれない、晶さんは基本的に面倒事は嫌いだから味方はしてくれないと思うよ？」

祐
「だいたい、銀杏さんやシオンは味方かどうかさえわからないわよ♪」

カ
「一瞬にしてすべてのカードを潰された…」

メ
「マスター…」

カ
「そうかメイデンは味方してくれるか…」

メ
「クラウンと話してみたいからクラウンが加勢する方の味方をする。」

ヴ
「クラウンちゃんは現在零ちゃんがロードだから…」

カ
「メイデンも敵か！？」

メ
「ファイトだ。マスター！」

祐
「さらに道場のアリサを呼べば…」

美
「カナン君の周りは敵だらけ♪」

カ
「…燃え尽きたよ。真っ〇にな…」

ヴ
「それ著作権的に危ないよ…」

祐
「あ、ちなみに始まりかたについては今回だけだから。」

美

「もう遅いかもだけどね～」

カ
「どんだけギリギリの綱渡りが好きなんだ…いや、ほんと申し訳ない…」

ヴ
「あはは。ごめんなさい…」

祐
「あんたら謝ってばっかり情けないわよ？」

カ
「お前がギリギリの企画ばっかりするからだろ！？」

美
「大丈夫。苦情が殺到しようと作者は書いてくれるから♪」

メ
「あの作者にそんな根性があるかは知らんぞ…」

祐
「打ちきりになったら私達は他の作者に出してもらえばいいのよ♪」

カ
「どんだけ無茶苦茶な理論を言ってるか分かってるのか！？」

祐・美・フ
「うるさい…」

ヴ
「あ、フェイトママ…」

カ
「何故に!?」

フ
「今回だけ特別出演なんだ。」

祐・ア・美・フ
「覚悟はいい?」

カ
「まてまて増えてる増えてるって!!」

ヴ
「あ~あ。アリサ道場では平和だったのに…」

メ
「まぁ…マスターの運命だ。」

祐・ア・道ア・フ・美
「バイバイ♪」

カ
「また増えたぁ~!?ちょっとまて増えた人危ないって同一人物が!ぎゃあああああ!!!!!」

バキッ!ドゴッ!ベキャッ!ゴキッ!メキメキメキ!!

ヴ

「効果音…この音なら死んでるよ…」

メ
「だな…ヴィヴィオ。私の新しいマスターになるか？」

ヴ
「いいの？わ～い。」

カ
「死んでないからな？」

一同
「！！！！！！！！」

カ
「あ～今回の質問コーナーはまた次回な…は～疲れた疲れた。」

ヴ
「慣れって凄いね…とにかく魔法少女リリカルヴィヴィオは」

メ
「始まるからな…」

一同
「カナンって…一体…」スカリエッティサイド

「ふぅ…ただいま。」

「ドクタ～お帰りなさ～い。」

「お帰りなさいませ。」

「思いの外発掘に手間取ってしまったよ。」

「お疲れ様ですぅ～…で目的の物は手に入ったんですかぁ？」

「ああ。見たまえ。これが神槍グングニルだよ…」

両端に刃がついている…槍というよりは剣の方が近い。

「大きいですね。」

ウーノが驚く、何故ならグングニルはスカリエッティの背丈と大差ないのだ。

「これを使うには相当の力が必要になるね。」

「これじゃ私達では使えませんよぉ？役たたずの妹達も捕獲されましたし。」

「元々、あの子達にはたいして期待はしていなかったから捕まった所で気にはしないさ。」

「グングニルを手に入れるための囮…ということですか？」

「まさか全員敗北するとは思ってなかったけどね。まぁ、いいさ。グングニルがあれば事足りる。」

「でも使えませんよぉ？」

「自分を改造して使うさ…グングニルを一度使ってみたいしね。」

「自分を…ですか?大丈夫なのですか?」

「さぁねぇ?やってみないことにはわからないさ。じゃあね。」
スカリエッティは部屋へと消えた…

「さすがは、無限の欲望ってとこですねぇ。」

「あの方は、自分の体さえ実験の対象なのです。死ぬことすら恐れてはいない…」

「いずれにせよ…もう少しで襲撃ってことになりますよねぇ?」

「そうなりますね。おそらく今度は私達が囮…」

「ドクターは…エクスカリバーの持ち主を狙う…」

「ええ。お互い最後にならないよう。頑張りましょう。」

「は〜い。」
冗談じゃない…
こうして二人は別れた。

スカリエッティの狙いはカナン…これが意味するのは…海鳴市が戦場になるということである。
スカリエッティ襲撃まで一週間。
フェイトの一件があった3日後
私達は八神部隊長の家にいた。六課全員が集合している。

「カナン君。話って何かな?」

「しょうもないことだったら殴るわよ？」
既に拳を固め殴る準備万端の祐希ちゃん…

「そ、それは俺に言っても仕方ないな…話すのはメイデンなんだから。」
腰が引けてるカナン君…

「祐希奈殴るのは私も後で手伝うし、メイデンの話を聞こう？」

「フェイトさんまで加勢しないで欲しいっす！！」

「ついでだから。」

「なんの！？」

「カナンがヴィヴィオと…」

「もうその理由でやるのやめてください！！」

「まぁまぁ…落ち着きいな。」
部隊長が止めに入った。

「フェイトちゃん、そんなことしたらあかんで？」

「だってカナンが…」

「ヴィヴィオは暴力ふるうママ好きか？」

「好きにはなれないです…」

「ほらな?そんなことしてると…ヴィヴィオに嫌われるよ?」
ピシャーン!!
フェイトママの背後に雷が落ちた…
「嫌われ…る?ヴィヴィオに…私が?」
「フェイトちゃーん?大丈夫かー?」
部隊長が目の前で手を振るが無反応…
「フェイトさん…よっぽどショックだったみたいだね。」
とスバルさん。
「フェイトさんは世界一の親バカだからね。」
ティアナさんまで…
「はやてちゃん。一人お話聞けなくしちゃったよ?」
「しまった…言い過ぎやったな…」
「はやてさん。そろそろ話してもいいだろうか?」
メイデンがおずおずと尋ねた。
「あ、ごめんな?フェイトちゃんには後で話しとくし、ええよ。」
「わかった。かなり悪い知らせだ…古代ベルカのロストロギア…グングニルがスカリエッティの手に渡った…」
「ほんまか!?」

「ああ。グングニルの管制人格が消される直前に連絡をよこした…白衣をきた男だそうだ…」

「十中八九…スカリエッティで間違いないやろな…」

「もう一つ知らせがある…近々スカリエッティは動く…」

「マジでか！？」

「ああ…おそらく間違いないだろう。管制人格はその連絡をした後、消されたようだ。」

「貴重な情報ありがとう。
みんな聞いての通りや…近々襲撃があるかもしれん…警戒体制で待機しといてな。」

「「「了解！！」」」

公園にて

「カナン君…」

「何だ？」

「スカリエッティと戦うことになっても、もう…復讐なんてしないよね？」

「ああ。もうしない。お前らともっと一緒にいたいからな。」

「うん！」

「今度しようとしたら手加減なしでぶん殴るわよ？」

「いや…お前はいつも手加減してないだろ？」

ドゴッ！

みぞおちに祐希ちゃんの拳が炸裂…

「ごはっ！」

「カナン君！だ、大丈夫？」

「カナン？何か言った？」

「い、いえ…何もおっしゃっていません…」

「よろしい。」

「祐希ちゃん。暴力はダメだよ。」

「これは、飴と鞭ってやつよ♪」

「飴…もらってないがな…」

バキャッ！

今度は回し蹴りが炸裂…

「いてえよ！！」

シュゴン！！

「あ、アリサさん…」

「あんたに発言権はないわ！！」

「あれ？アリサ若くない？」

「じゃ！！」

ブロロロ…

「行っちゃった…」

「だから！てめえは誰だっちゅうに！！！アホーー！！」

ブロロロ

「帰って来たよ？」

「アリサ・バニングスよ！！」

ガン！！

「あ～…」

キラーン…

「飛んだね…大丈夫かな？」

「跳ねられたわね…死んだんじゃない？」

「まったくもう少しで私まで跳ねられかけたぞ。」

「メイデン…いつの間にこっちにいるのよ。」

「気にするな。」

ヒュルルル…

「落ちてきたよ？」
…スタッ

「ふ～危なかった…」
何も無かったかのように着地しこちらに歩いてくるカナン君…怖いよ…

「ヴィヴィオ？何をそんなに怯えているんだ？」

「だってカナン君車に跳ねられたんだよ？」

「ああ。そうだな。それが？」

「それが？ってカナン君大丈夫なの？」

「不思議と何でもないな…」

「あんた…人間じゃないわ…つまりこいつは…カナンじゃないわ！♪」

「ああ。お前は誰だ！マスターを返せ！！」

「カ、カナン君を返して下さい！」

「カナンを返して！♪」
一名を除き信じている純粋な二人…

「お前ら前に言ったろ？祐希奈の言葉は…九割は疑え。」

「あ、そうだったよ。カナン君お帰り。」

「マスターお帰り。」

いや…その反応もどうかとは思うが…

「甘いわね…実はそれを言ったのもカナンじゃないのよ！♪」

「「はっ！！」」

「「返して！！」」

「信じるなっつうに！！祐希奈！！いい加減にしろ！！」

「面白かったのに。」

「「え？」」

「二人とも…素で驚かないでくれ…」

「だいたい、あんたが無駄に頑丈なのが悪いのよ。さっさと死になさい♪」

「俺か！？俺が悪いのか！？どう考えても跳ねた向こうが悪いだろ！！」

「うるさい…」

「なんでお前がキレてんだよ！！」

「まぁマスター落ち着け。祐希奈も悪気があったわけじゃないんだ。

」
「そうそう♪遊びたかったのよ♪」
「遊び方が悪いわ！！」
「祐希ちゃんはね。カナン君が出ていっちゃったから寂しいんだよ。」
「っ！」
「お前…まさか図星か？」
「知らない！！」
ダッ！
「行っちゃった…」
「あんなことをしたらまるわかりだぞ…寂しかったんだな…」
「…それだけではないと思うがな…」
「他に何かあるのかな？メイデン教えて？」
「ヴィヴィオも持っている気持ちだろう。」
「？わからないよ。」
「ほかに何がある？」

「マスター…ヴィヴィオ…鈍すぎるぞ…」

「「え？」」

「やれやれ…いつになったら終わることやら。」

「ヴィヴィオ、わかるか？」

「わからないよ…」

「ま、私はどちらも応援しているからとだけ伝えておく。」

「わけがわからーん！！」

「じゃあ、祐希ちゃんも帰っちゃったし、私も帰るよ。」

「そうか。ところでヴィヴィオと祐希奈は明日は暇か？」

「多分、何も用事はないよ？」

「三人で一緒に出かけるか？」

「でも警戒体制だよ？」

「近くの遊園地とか映画館に行くだけだ。」

「遊園地？映画館？って何？」

「そうだな…でっかい遊び場とでっかいテレビってとこだな。」

「行きたいよ…大丈夫かな？」

「大丈夫だろ。ただ…フェイトさんには内緒な？」

「うん…死守するよ…楽しみだなぁ。」

「祐希奈は嫌がるとは思うけど無理やり連れてきてくれ。」

「了～解。」

「では、解散！」

「アイアイサ～。」
ヴィヴィオが走り去った。
俺達も家へと向かう。
「アイアイサ～って何でそういう言葉は知ってるかな…」

「さぁな…」

「よく考えたらデートに誘っちまったんだな…」

「でーと？とは何だ？」

「基本的には二人で遊ぶことだ。今回は三人だけどな。」

「マスター、両手に花。だな。」

「お前も変な言葉は知ってるんだな…」

「テレビで聞いたのだ。」

「まぁ、祐希奈は花かはわからんが…棘の塊にもなりえるな…」

「そんなこと言ってると明日どうなっても知らんぞ…」

「メイデンは来ないのか？」

「いいのか？私などいても変わらんだろう。」

「何なら魔力やるから等身大で行くか？」

「それは遠慮しておく。不便だからな。」

「そうか。とにかく来てもいいからな。人数は多い方が楽しい。」

「では、ついていくとしよう。」

「決まりな。」

話が終わる頃丁度家に着いた。

「「ただいま～。」」

「絶対嫌よ！！カナンと一緒に歩いてるのなんて誰か知り合いに見られたら…却下！却下よ！」

「え～きっと楽しいよ？」

「楽しい楽しくないの話をしてるんじゃないわよ！カナンと一緒なのが問題なの！」

「もう…祐希ちゃんもカナン君がいなくて寂しいんでしょ？なら意地を張らなくても…」

「誰がカナンがいなくて寂しいって？」

グリグリ。

「痛い！痛いよ～」

「ほらほら言ってみなさい？」

グリグリグリグリ

「祐希ちゃん…」

涙目になりながらも譲らない。

「まだ言うか！！」

飛びかかる。

「きゃ～～！」

「こらこら。祐希奈そんなことをしたらヴィヴィオさんが可哀想だろう？」

「だってヴィヴィオが…」

「カナン君がいなくなって祐希奈が落ち込んでいたのは本当のことだろう？」

「はぁ～い。ヴィヴィオごめん。」

「ううん。怒ってないよ。」

「仲直り終了。二人とも明日の服でも選んでいなさい。晩御飯は私が作るから。」

「でも、父さんは疲てるし…それにまだ行くとは…」

「疲れてないよ。むしろ今日は暇でね。書類整理くらいしかしてないんだ。それに、たまには遊んで来なさい。」

「わかったわよ…行けばいいんでしょ？もう…」

「わ～い。」

「でも、そんな服あったかなぁ…」

「私もないかも…」

そう言って二人で部屋に戻る。

「「…」」

部屋に戻ると包みが2つ…

「「まさか…」」

「明日はカナンとのデートらしいわね♪これあげるから来てね♪差出人アリサ♪」

「どこから見てるんだろう…」

「私達ってもしかして監視されてる？」

「と、とりあえず開けてみようよ。」

「そうね。」

ヴィヴィオの包みは…赤の上着、白の服、水色のミニスカート。

祐希奈の包みは白の上着、緑のインナー、うす緑のミニスカート

「「なんでミニスカート!?」」

二人の気持ちは同じだった…

「わ、私違うの着てもいいかな?」

「私もそうしたいわ。」

広げた服に手紙が一枚…

「違う服を着たら爆撃するわよ♪」

「「っ!」」

見透かされている…さらに爆撃…アリサさんならやりかねない…

「あきらめよっか?」

「そうね…」

「「はぁ…」」

こうしてデート用の服が無理やり決定した…

「おや、服は決まったのかい?」

「はい…決まりました。」

「強制的にね…」

「よくわからないけどとりあえずご飯にしようか？」

「はい…」

「ええ…」

どこまでも二人は暗い…ヴィヴィオは前にフェイトに二、三回以来ミニスカートは着ていない。祐希奈に至っては、幼稚園に一回きりである。そんな二人が明日は二人揃ってミニスカート…

「「はぁ…」」

ヴィヴィオが来てからこの家でかつてこれほど静かな空間ができたことはなかった…

「マスター。これなんかどうだ？」

「…いいんじゃないか？」

「さっきからそればかりではないか。もっと違う評価もほしいぞ？」

「そうだな…じゃあ今までそれが一番だよ。」

俺はというとメイデンの着替えに付き合わされていた。こういう時だけは女の子らしさ全開だな。

「そうか？マスターがそういうならこれにしようかな。うん。これ

にする。いいか？」
二時間かかって選んだのは黒のワンピース。
似合ってはいるが、何で女の子ってのはこんなに時間がかかるかなぁ…

「ああ可愛い可愛い。惚れそうだよ…」
早く解放されたいがゆえにかなり投げやりに言った言葉だったのだが…

「ま、またそういうことを…あ…あとな？私に惚れてはいけないぞ？…ヴィヴィオと祐希奈が…あ…いや…やっぱりなんでも…」

「よく棒読みのセリフでそこまで赤くなれるな…」
そうだ！
「メイデン…結婚してくれ！！」

「わ！私とか！？…嬉しい嬉しくないで言ったらもちろん嬉しいが…二人に悪いし…でも…マスターがどうしてもって…言うなら…してもいいかも…あ…私デバイス…なのに…マスター？…どうしよう？」
うわあ…やってしまった…冗談なのに…

「メイデン…すまん…」

「え？」

「あ！メイデンファンクラブがメイデンと結婚したいと言ってきたぞ！？」

「っ！？ぜ、全員か！？わ、私の体は一つ…しかない…でも、ふあ

あ…」
バタリ…
「ふぅ…冗談も加減しないとな…メイデン。起きろ。」
「ん…マスター？」
「どうしたんだ？いきなり倒れたりして大丈夫か？」
「ファンクラブの人達は？」
「ファンクラブ？何の話だ？ははは、寝ぼけてるんじゃないのか？」
「そうなんだろうか？マスター？私と結婚したいか？」
「メイデンは確かに綺麗だけど出来ないな。」
「やはりバグか…変なことを聞いてすまなかった。」
「お前も疲れてるんだよ。はっはっは～。」
よし！なんとかごまかした…
「では着替えていたのもバグだな。マスター服装を変えるから変じゃないか見てくれ。」
「げ…」
しまった…そこまでは計算してなかった…
「何だ？変な声を出して？」

「いや…気にするな。」

「そうか？では始めるぞ。」

メイデンが光に包まれまた二時間の悪夢が始まった…

「結局これか…」

黒のワンピース…というか先に言えば終わったのでは？

「結構遅くなってしまったな。風呂に入って寝よう。」

「ああ…先に入れ。」

「何か疲れているな？大丈夫か？」

「大丈夫だから。」

「わかった。ではな。」

「はぁ…四時間もかかってしまった…自業自得だけどな…」

「マスター。」

「おわ！！メメ！メイデン。風呂に言ったんじゃないか？」

「うむ。そうしようかと思ったのだが、マスターも一緒に入ろう。疲れているようだから私が背中を流してやろうと思ってな。」

「お前の体じゃ大変だぞ？」

「気にするな。それにマスターを洗っているうちに私も勝手に洗えるから一石二鳥だ。」

「わかった。行くよ。」

「ああ。なるべく早くな。」

「なんで？」

「泡風呂に入りたいんだ。」

「俺を洗ったら自分も洗えるって言ってなかったか？」

「入りたいんだ…」
出た…お子さまモード…

「しょうがないな。してやるよ。」

「ありがとう！マスターは優しいな！」
パパはお前が可愛くてしかたないぞ♪もうどこの男にもやらん。

「ははは。ほら、行くんだろ？肩に乗れ。」

「うん！」
うん…あのメイデンが、うん…ああ、可愛い…

子供が出来たら間違いなく親バカの道を歩むだろう…
風呂に入ったあと俺たちはすぐに眠りについた。

「あ、明日はカナンにあれを見られるのよね？」

「そ、そうだね。ちょっと恥ずかしいかも…」

「私はちょっとじゃなくてかなりね…よりにもよってミニスカート…はぁ…」

「アリサさんも人が悪いよね…」

「ええ…」

「とりあえず…寝ようか？」

「そうしましょう…」

「祐希ちゃん…おやすみ。」

「ヴィヴィオ…おやすみ。」

「「ミニスカート…嫌だなぁ…」」

こうして二人も眠りについた。

スカリエッティ襲撃まで…あと３日…

第七話　近づく闇（後書き）

更新していないにも関わらず、ＰＶ１０００を越えててびっくりしました。ありがとうございます。感想やメッセージ等もお待ちしています。

舞台裏、疑問、質問答えます。（前書き）

えと前回カナン君が大変なことになって質問がまた少したまりましたのでお答えします。では舞台裏始まります。

舞台裏、疑問、質問答えます。

カ
「ただいま～。」
メ
「帰ったぞ。」
ヴ
「おか…」
祐
「とりあえず…デストローイ！」
バキャッ

カ
「なんでー…」
メ
「また派手に飛んだな。」ヴ
「シルフレ出演、どうだった？」
メ
「うむ。クラウンと仲良くなれたぞ。あともう一つ敬語はやはり疲れるな…肩が凝ってしまった。」
ヴ
「そうかな？私は別になんともないよ？」
祐
「私は疲れる派ね。」
カ
「俺は別に頑張れば使える。」

メ
「マスター…いつの間に復活したんだ？」

カ
「今さっきだ。」
祐
「そうだ…何であんた達だけ出演してんのよ！私達も出しなさい！」
カ
「お前が出たらシルフレの世界が崩壊するからだろうが！！」
ヴ
「祐希ちゃんだけじゃないよね？…カナン君もＳＴＳ　ＥＸの世界で暴れてたよ？」
カ
「あ、あれは道場因子というやつだ。」
メ
「それはこの空間にも感染するのか？」
カ
「いや、多分あの空…」
祐
「するわ♪」
カ
「おい！」
ヴ
「祐希ちゃん…またなの？」
メ
「するのか！？わ、わわ私も破壊衝動が抑えられなくなるのか！？」
カナンの肩の後ろに隠れるメイデン。
祐
「そうね…海鳴市を破壊しても止まらず…メイデンはここ日本を破壊していくのよ…♪」
メ
「マスター？私は…私はどうなってしまうんだ？」

カ
「いや…どうにもならないから安心しろ。」
ヴ
「全部祐希ちゃんの冗談だよ。」
メ
「そう…なのか？良かった…グランドスパイク！」
祐
「ひゃ！！メイデン！？何するのよ！？」
メ
「いや、クラウンからこうすれば言うことを聞いてもらえると教えてもらったのでな。」
カ
「お前あのあとの銀杏の言葉を忘れてるだろ…聞いてもらえるんじゃない…聞かせてるんだ。」
メ
「あ…命令はよくないな…祐希奈すまなかった。」
石の針が消える。
祐
「さすが、キ、Ｋｉｓｓのメンバーね…メイデンにそんなことを教えるなんて…」
ヴ
「祐希ちゃん？顔が真っ赤だよ？」
祐
「うるさい！！」
カ
「大方グループ名が恥ずかしかったんだろ？」
メ
「Ｋｉｓｓがか？何の意味何だ？」
ヴ・祐・カ

「・・・」
赤くなって目線を反らす…
メ
「何で教えてくれないんだ?何故三人とも赤くなっている…マスター教えてくれ。」
カ
「俺か!?」
メ
「マスター意外にはもういないんだ…」
カ
「あいつら逃げやがったな!!」
メ
「ダメか?」
いや、だからな娘よ…上目遣いの半泣きの顔で見られたら父さんは…父さんは!
カ
「Ｋｉｓｓとは…」
答えるしかなかった…恥ずかしいので耳打ちをする。
メ
「っ!!そ、それは確かに恥ずかしい…な。」
(祝)四人真っ赤になりましたデー
カ
「何が(祝)じゃあああ!!」
メ
「わっ!いきなり大声をだすから驚いたぞ…ところでマスター質問はどうするんだ?」
カ
「あいつら帰って来ねえな…しゃあない。俺らでやるぞ。」
メ
「仕方ないか…」

カ
「質問1…メイデンを嫁にください！！」
メ
「し、質問なのか？これは…」
再び真っ赤になるメイデン。
カ
「答えは…お前ごときに娘はやらん！！」
見事に読者のネタ質問に引っ掛かったカナン…
メ
「マスター？私はマスターの娘なのか？」
カ
「あ…いや、そんな感じがするだけだ。」
メ
「どちらかと言うとマスターが私の息子だが？」
カ
「こんな世間知らずの母親はさすがにいらん…」
メ
「ちょっと傷つくぞ…」
カ
「質問2…シオンと戦ったらどちらが強い？」
メ
「答えはわからんな。ＥＸの作者さんに聞いてくれ。」カ
「聞かんでもわかるだろ…精霊召喚使われたら俺の勝率は薄い、ましてや戦闘経験の差がありすぎる…」
メ
「まだ、マスターは奥義を使ってないぞ？」
カ
「あんなもん模擬戦で使ってたら死ぬわ！！」
メ
「そうか…アレを使えば結構いけるとは思うのだが…」

カ
「ネタバレする前に次の質問な。
質問3…メイド喫茶は開店するのか？あ～あれか…」
メ
「メイドとは」
カ
「世話をする人のことだ」
メ
「は、はやいな。」
カ
「予想済みだ。で、メイド喫茶だが…知らん。」
メ
「無責任だな。」
カ
「んなこと言っても企画した本人が消えてんだから仕方ないだろ？」
メ
「まぁ、確かにそうだが。」
カ
「あの恥ずかしがりようだとないんじゃないか？多分…としか言えないけどな。」

カ
「ついさっき新しい質問が来た。」

メ
「なんだ？」

カ
「ｎａｏｎａｏさんがメイデンに飛び付いていたが、なんで？」

メ「ｎａｏｎａｏさんが？いつ？」

カ「メイデンに飛び付こうとして流された人だ。」

メ「あ、あれか！？あんなのくらって大丈夫なのか！？」

カ「大丈夫だろ？多分…」

メ「不安だな…ｎａｏｎａｏさん大丈夫か？心配だ。」

カ「で、何で飛び付いたかと言うと…」

メ「理由があるのか？」

カ「初代会員だからだ。」

メ「何のだ？」

カ「気にするな。」

メ「かなり気になるんだが…」

カ「気絶したいんなら別だが？」

メ「…やめておこう。」

祐

「懸命ね。」
メ
「やっと帰ってきたのか。マスターと二人で大変だったんだぞ。」
ヴ
「あはは。ごめん。でも、あんなこと聞かれちゃかなわないから…」
カ
「まったく俺に押し付けやがって。」
祐
「で、残りの質問は何件?」
メ
「今日きたのも合わせて三件だな。」
祐
「どんだけこの作品は疑問の塊なのよ…」
ヴ
「気にしないことにしようよ…さて、気を取り直して質問です。カナン恥ずかしい話ベスト１００００はいつやるんですか?」
カ
「やらん!!」
祐
「楽しみにしてくれてありがとう♪もちろんやるわよ♪」
カ
「やらんと言ってだろうが!!」祐
「やっかましい!!美鈴来なさい!」
美
「はいな。」
カ
「っ!…今美鈴…どっから出てきた?」
美
「そんな細かいこと気にしてると…ハゲルヨ」
カ

「何故に！？」
メ
「マスター…髪がなくなるのか…」
ヴ
「カナン君…可哀想。」
カ
「そこ二人！信じるな！」
祐
「で、ベスト１００００はやるからね？」
カ
「どうせ公表は…」
美
「するよ。」
カ
「…マジで？」
祐
「もちよ。」
カ
「出でよ！銀杏！」
・・・
カ
「あれ？」
祐
「残念だったわね。この場所での召喚は私しか出来ないのよ♪しかもカナンに味方するキャラなんて絶対に召喚不可能よ♪」
メ
「マスター…諦めろ。祐希奈は神だ…」
カ
「神だとしても、邪神な。」
祐・美

「はい♪調子にのらなーい♪」
カ
「待て待て！そんなもんでしても音はならん！」
ゴーン…
カ
「あ～れ～…」
ヴ
「なったね…」
メ
「ああ。落ち着く音だな。」
祐
「さて、続いての質問は。」
美
「最近祐希奈カナンに甘くないか？」
祐
「あ、やっぱりそう思う？」
カ
「待てこらぁ！どこがだ！？十分だろ！！」
ヴ
「でも、確かに減ったよ？」
メ
「ああ。最近は突然出てきたアリサさんやフェイトさんだけだな。」
祐
「ＫＤＧ会長としてカナンには厳しくいかないとね♪」
カ
「お前まできつくなったら俺の命がなくなるわ！！」
ヴ
「多分大丈夫だよ。カナン君なら耐えられるよ。」
メ
「私もマスターなら耐えられると思う。」

カ「そんなの信じられても困るっつうに！！」
祐「あ～うるさいから黙って。」
ドゴッ
カ「がは！！」
メ「人体の急所に見事な正拳だ。祐希奈、凄いぞ…」
祐「ありがと♪」
カ「なんでメイデンは感心してるかわからん…」
メ「あそこまで見事なのはなかなか見れんぞ。やはり凄い。」
ヴ「メイデンってやっぱりどっかずれてるよね…」
祐「あんたに言われたら末期ね…」
ヴ「え！？大丈夫だよ！きっと治るから！」
祐「いった側からずれてるわよ…」
美「はいはい。次の質問行くよ～。結局メイデンの胸のサイズは？」
カ「どうでもいいことを二回も聞くな！！」
祐「これが最後の質問って言うのがムカつくわ！！」
メ

「どうでもいいことだし答えるぞ。私…」
ヴ
「はいはい。答えなくていいからね～。」
メイデンの口にガムテープ。
メ
「!?ん～」
カ
「ヴィヴィオナイスだ!」
ヴ
「えへへ～」
メ
「ん～!!」
祐
「ねえ…なんかこの空間歪んでない?」
美
「ていうか狭くなってるよね…」
カ
「メイデン!?まさか!!」
メ
「…」
ヴ・祐・カ・美
「メイデンが怒った～!!!!」
メ
「ん～!!!!」
祐
「脱出!!!」
四人の姿が消える…
グシャ…
ヴ
「あ、危なかったね～…」

カ　「お前に助けられるとはな…」
祐　「ついでよ。」
美　「メイデン怖いね…」
メ（ベタつくものが嫌いだからな…）
ヴ　「ご、ごめんなさい…知らなくて…」
メ（もういいからこのくっついている物をはがしてくれ。）
カ　「ああ。ちょっと待てよ？」
ペリペリ
メ　「なかなか痛いぞ…」
祐　「ガムテープは…」
ペタリ…
カ　「待て！顔に！」
祐　「こうやってはがすのよ！！」
ベリ！！
カ　「いってえええ！！」
ヴ　「わぁ…新技だ…」
メ　「痛そうだな…」
美

「今更だけど…なんでガムテープをメイデンに貼ったんだっけ？」
メ「そうだった私の胸囲の話だったな。」
カ「まっ！」
メ「私の胸囲は別に変えることも出来るが基本的にはお前達の世界でいうCだな。」
祐「あーあ…言っちゃった…」
カ「この男にメイデンの秘密を知られてしまった…」
美「仕方ないね…でも、メイデンってCにしては大きくない？」
メ「Dに近いCみたいだからな。」
祐「…」
ヴ「あれ？祐希ちゃん？元気ないね。大丈夫？」
祐「ヴィヴィオといい…メイデンといい…胸が何よ！！胸なんて邪魔なだけなのよー！！」
バキャッ！！
カ「なんで俺ー…」
祐「ふん！！」
メ「気にするな。私はただのデバイスだ。それに、シルフレの女性メ

ンバーも祐希奈と似たようなものだったし。」
祐　「へえ…同じ悩みをもつもの同士だし、カナンの味方なんてやめて是非ＫＤＧにどうぞ♪」
メ　「本当に飽きないな…」
祐　「もちろんよ♪」
美　「カナン君を…」
祐・美　「殺るまではね♪」
メ　「銀杏さんとやら…見事な予想だ。完璧に見抜いていたな。」
カ　「嬉しくない予想が当たってしまった…」
ヴ　「カナン君。頑張ってね♪」
カ　「…ヴィヴィオは味方してくれないのか？」
ヴ　「だって私…爆弾だもん…危ないよ？」
ゴゴゴゴ…
カ・祐　「まだ根に持ってたのか…」
メ　「マスター。質問も終わったしそろそろ幕をひかなくていいのか？」
カ　「つっても今のヴィヴィオにさせたらシャレにならん…」
祐

「殺傷設定にしそうね…」

カ「メイデン。めんどくさいからあとよろしく。」

メ「私がか!?え、えーとｎａｏｎａｏさん次があるのなら出来れば飛び付くのはやめてくれ。普通にお話しような?以上だ。」

カ「つまりメイデンはｎａｏｎａｏさんが嫌いなのか?」

メ「ええ!?なんでそうなるんだ!?違うぞ?嫌いじゃないからな?」

祐「飛び付くのは作者達の間では挨拶なのよ。拒絶される＝嫌いってことね♪」

メ「そうなのか!?じゃ、じゃあ恥ずかしいが飛び付いていいぞ?」

ヴ「メイデンは大胆だね～♪」

メ「ええ!?大胆って挨拶なんだろう?」

美「シルフレに戻って聞いてくるといいわ♪」

メ「わ、わかった。聞いてくる!」

カ「まさに白…だな…」

メ「マスター行くぞ!」

カ「待てって!絶対いけないから…」

メ

「やってみなければわからんだろ！？行くぞ！」
祐
「見事にテンパってるわね…行けるわけないのに。」
ヴ
「あはは。どこまで行く気かな。」
美
「地平線までじゃない♪」
ヴ
「カナン君旅行なんていーなー。」
カ
「お前ら見てないで助けろーー！！」
祐
「バイバイ。カナンシルフレの世界に行けるといいわね♪」
カ
「行けるかーー！！」
シュン…
ヴ
「転移しちゃったよ…どこまでいったのかな？」
祐
「さぁ？あ、ここまで読んでくれた人。感謝するわ。ありがと。」
ヴ
「質問はいつでも受付ているのでどんどん送ってください。」
美
「じゃあ皆さんまた次回ね。」
ヴ
「次回はデート編です。」
祐
「ミニスカート…か…」
ヴ
「では皆さんまた次回に会いましょう。」

ヴ・祐・美
「バイバーイ♪」

ヨシュアです
ｎａｏｎａｏさんテスタメントさん、クロスしていただきありがとうございました。
楽しく読ませていただいています。
さらに大和さんともクロス中なので嬉しい限りです。読者の皆さん。
毎日たくさん来てくださってありがとうございます。アクセス数を見るたびやる気になれます。
こんな僕ですがこれからもよろしくお願いします。

第八話　初めてのデート

ヴ「ああ…始まっちゃう…」
祐「そうね…もうすぐね…」
カ「楽しみだ♪」
メ「ああ。早く始まらないかな？」
祐「何が楽しみなのよ！！言ってみなさい！！」
ギリギリギリ
カ「ぐ、ぐるじいじぬ…」首を絞められる…
祐「逝ってしまえー！！」
ヴ「そろそろやめてあげようよ？」
メ「マスターの顔が青くなってきたぞ…」
カ「…」
祐「ふん！」
パッ
カ「げほ！！はぁ…はぁ…死ぬわ！！」
祐

「やかましい！！」
バキャ！！
カ
「ごへ！！…いてえよ！！俺悪くないだろ！？」
祐
「存在自体が罪よ！！」
カ
「ひでえ！！」
ヴ
「あはは。カナン君も発言には気を付けないとね。」
カ
「ヴィヴィオもか！？」
ヴ
「私達は恥ずかしくて、大問題なのに楽しみとか嫌がらせにしか聞こえないよ。」
カ
「いや、俺は二人と出かけるのが楽しみなんであって、格好はどうでもいいというか…」
祐
「どうでもいいですって？」
ヴ
「カナン君…ひどいよ…私達恥ずかしいけど頑張って着ることにしたのに…」
カ
「も、もちろん二人の服も楽しみだぞ？」
祐
「楽しみとか言うな！！」
カ
「もうわけがわからん！！」
メ

「ようするに、マスターが喋ったのが間違いだ。」
祐
「そうよ。喋るな！いっそ消えてしまいなさい！！」
カ
「また存在否定しやがったな！！お前こそ黙ってやがれ！！」
祐
「カナンの分際で私に逆らう気！？潰してやるわ！！」
カ
「やって見やがれ！フェイトさんに比べればお前なんて怖くもなんともねえ！！」
祐
「燃やし尽くせ！！スパイラルフレア！！」
カ
「参式抜刀剣術！絶空！！」
ドオオオン！！
ドカーーン！！
チュドーン！！
ヴ
「あ～…メイデン？私達で質問に答えよっか？」
メ
「そうした方が良さそうだな。」
祐・カ
「だあああああ！！」
ガキィィン！！
ヴ
「最初の質問はこちら。」
メ
「カナンは技は全て抜刀剣術なのか？についてだが…」
ヴ
「カナン君～！！質問が～！！」

祐
「ヴォルカニック！！アロー！！」
カ
「エクス！！カリバー！！」
ドゴォォォン！！！
メ
「仕方ないな。私が答えよう。答えは、他にもあるな。というか抜刀剣術はもうほとんどない。」
ヴ
「え？そうなの？」
メ
「もともと抜刀剣術は防御重視の技なんだ。絶空とかはほぼ防御のための技だしな。」
ヴ
「てことは、六式から先は攻撃重視なの？」
メ
「まだ抜刀剣術は残っているが七式よりあとは抜き身だな。」
ヴ
「へえ…」
メ
「さて次の質問だ。各キャラの好きな食べ物を教えてください。か。」
ヴ
「聞いてどうするんだろうね…」
メ
「まったくだな…」
ヴ
「とりあえず私は甘い物ならなんでも好きだよ。」
メ
「私は、卵料理が美味しいと思う。二人は…」

祐
「烈破！爆砕拳！！」
カ
「暗夜！一閃！」
ザシュ！
祐
「うっとうしい！！食らえ！！爆砕！二連突！！」
ドゴッ！！
カ
「がは！！」
ヴ
「それどころじゃないみたいだね…えと、祐希ちゃんは焼き魚が好きなんだって。珍しいよね。」
メ
「確かにあまりいないな…マスターはカツ丼や親子丼といったものが好きらしい。」
ヴ
「男の子らしいね。じゃだいぶ長くなっちゃったけど終わりにするね。」
メ
「ああ。本編を楽しんでくれ。」
祐・カ
「はあああああ！！」
ギィン！！ガキィィン！！
ヴ
「まだやってたの…？」
メ
「まったく…最後まで私達か…」
ヴ
「はぁ…魔法少女リリカルヴィヴィオ」

メ
「デート編。始まるぞ。」
祐・カ
「消え去れーーーー！！！！！」
ドギャアアアン！！！！！
「うぅ…足がスースーするよ…」

「こんなのよく皆平然と着てるわね…」
とりあえずデートに向かう一時間前に着替えてみたのはいいものの
…やはり慣れない格好…というかミニスカートが馴染まず、嘆いていた…

「祐希ちゃんはいいよね…似合ってるもん…」
黙って入れば綺麗な顔立ちをしているので落ち着いた色も似合っていた。

「うるさいわよ！！」

「祐希ちゃん？何怒ってるの？」

「…何でもないわ。ヴィヴィオだって似合ってるじゃない。」
要するに顔立ちが良ければ大抵のものは似合って見える。

「ぶっちゃけたね…」

「あんたも聞こえた？」

「うん…」
気にしない気にしない。あんまり気にすると…いじるよ？

「な、何も聞こえないよ？」

「わ、私も聞こえなくなったわ。」

「おや、二人とも可愛いじゃないか。カナン君も喜ぶだろうね。」
いつの間にか雅樹さんが入ってきていた。

「「っ！！」」

「父さん！！入って来ないでって言ったじゃない！！」

「どうしても見たくなってね。祐希奈は私に見せてくれずに行きそうな雰囲気だったからね。」

「うぅ…恥ずかしいです…」
雅樹さんでこれならカナン君に見せたら…

「窓から逃げる作戦だったのに…」

「やっぱりね。祐希奈の考えることくらいわかるよ。」

「もう…」

「ところで待ち合わせは何時だい？」

「公園に１０時の予定ですけど？あと一時間ほどですね。」
時計を見る…
「あれ？この時計止まってない？」

「ああ…本当だね。」

「てことは…ひょっとして待ち合わせまで時間は…」

「「危ないかも！！」」

「ヴィヴィオ行くわよ！！」

「うん！！」

二人で部屋から飛び出し靴を履く。

「「行ってきます！！」」

「あ、二人とも時間はまだ…行ってしまったか…まだ8時半なのだが…」

そう、腕時計の針が示していた…

「マスター？何でこんなに早くから待つんだ？」

「女の子より後に男が行くのは、ちょっと情けない気がしてな。」

「そういうものなのか？まだ一時間もあるぞ。」

「だいたい女の子っていうのは早くから来るもんだし、多分あと40分もすれば来ると思う。」

「いや…もう来たみたいだぞ？」

「は？いくら何でも早すぎ…」

こちらに向かって二人が走って来ていた…

「来てるだろ？」

「ああ。来てるな…」

「はぁ…はぁ…」

祐希奈は息が乱れていた。

「カナン君遅れてごめんなさい。」

「は？」

「家の…時計が…止まってて…あんたが先ってことは…やっぱり遅れたみたいね。ごめんなさい。」

「いや、遅れてないが？まだ一時間もあるぞ？」

「ああ。マスターは早く来ただけだ。」

「「へ？」」

「ははははは！！凄い偶然だな！！」

「あはは！ほんとだね。」

「早く言ってよね…謝る必要なかったじゃない。」

「それにしても二人ともいつもとはだいぶ違う格好だな。足がむき出しではないか。」

メイデンにそう言われ気付く…私達はミニスカートだったことに…

「わっ！カナン君！見ないで！！」

「へ？何で？」

「見るなぁぁ！！」
足を引く…

「祐希ちゃん蹴りはダメ！！」

「っ！」
ドゴッ！
「ぐは！！」

「祐希奈よく我慢したな。」

「危なかったわ…」

「蹴りが…ダメだからって…殴るなよ…」

「じゃあどうしろって言うのよ！！」

「何もしないという選択肢はないのか？」

「ないわ。」

「…ないのか。」

「じゃあどうするんだ？マスターがそっちを見るたび殴られてたら遊びに行けないぞ？」

「で、でも恥ずかしいよ…」

「ええ…」

「じゃあ、条件付きで我慢してくれないか？」

「「条件？」」

「今日1日の費用は全部俺が持つ。どうだ？」

「マスター…お金…とやらは大丈夫なのか？」

「ああ。五万ほどあるしな。」

「五万！？あんたそんなお金どこで貰ったのよ！？」

「俺はお金はあまり使わないんだが伯父さんがくれるんだよ…
で、使い道がないから貯金してるんだ。
でも、いざ使うとなるとどれくらい持っていけばいいかわからなくてな…絶対大丈夫なように多めに持ってきたんだ。」

「へえ…」

「多めって…いくら何でも持ちすぎでしょ…」

「まぁ、その話は置いといてどうだ？我慢してくれるか？」

「ま、いいわよ。」

「わ、私も。」

「決まりな。ちょっと早いけど、行くか！」

「うん！」

「ええ。」

「あとな…」

「「？」」

「二人とも似合ってるぜ♪」

「「っ！！」」

二人揃って赤面した。

「うむ。私もそう思う。二人とも可愛いぞ。」

「メ、メイデンまで言わないでよ～。」

「カナンのお金…空にしてやる…よこしなさい！」

「待て！それはきつい！」

「問答無用！」

ダッ！

「来るな～！！」

「わっ！待ってよ！」

「あはは！マスター達は走るのが好きだな。」

デートの始まりは全力疾走から始まった…

午前１０時…街中。

「はぁ…全力疾走したせいか喉が渇いたわよ…」

「自業自得だ。」

「でも、走ったおかげで予定より早く着いたね。」

「なんだか建物がたくさんあるぞ！あれは何だ？」

メイデンが目をキラキラさせている。

「お、メイデンいいとこ見つけたな。」

メイデンが偶然指差したのは喫茶店。

「あそこで休憩しようぜ。」

「メイデン。ナイスよ。」

「カナン君。」

「何だ？」

「パフェ頼んでいいかな？」

「あ、私も～。」

「私も食べてみたい。」

「お前らな…昼飯食えなくなるぞ？」

「大丈夫だよ。甘いものは別腹だしね。」

「そうなのか!?甘いものは違うところにわけられて入るのか。知らなかったぞ。」

「違うって…全部一緒だ。」

「でも私パフェならいくらでも食べられると思うけどな?」

「ヴィヴィオ…太るぞ。」

「太らないもん…」

「カ～ナ～ン?」

背後から殺気!謝らなければ命が危ない!

「じょ、冗談だって。ヴィヴィオは太らないし、可愛いままだから。」

「ま、またそういうこと言わないでよ～。」

手で顔をおおうヴィヴィオ。おそらくまた赤面しているのだろう。

ほんとに可愛いぞ♪

「とにかくパフェくらいなら、いくら頼んでも構わないし遠慮するな。」

「は～い♪」

祐希奈が元気よく返事をした…

「やっぱりお前は遠慮してくれ…」
マジで五万がなくなりかねん…

「却下よ♪」
ああ…さようなら俺の五万円…

「マスター。早く早く！」
メイデンが肩から離れて喫茶店の前で浮かんでいる。

「わかったから！目立つ行動はやめろって！肩に戻れ。」

「仕方ないな…」
渋々肩の上に戻った。

「カナン君。行こ？」

「ほら。行くわよ！」
二人に両手を捕まれ引っ張られた。

「おわ、ちょ、ちょっと待てって！」
引きずられるようにして喫茶店の中へ入った。

「いらっしゃいませ～。」

「いらっしゃいました～♪」
祐希奈が答えた…

「恥ずかしいからやめろ！」

「あはは。あ、あそこが空いてるよ？」

「窓際か…ま、いっか。」
窓際といえばデートでの定番の席だが一応デートみたいなものだし…いいよな？

「ん～と私は～やっぱりキャラメルパフェかな。」
うわ…甘！！

「私はイチゴね。」

「私はチョコレートパフェとやらがいいぞ。」

「メ、メイデン？丸々一個食えるのか？」

「チョコレートパフェが食べたいんだ…」
だ～！！もう！だからその上目遣いしたら断れないって！！

「わかった…無理して食うなよ？」

「ああ！マスター！ありがとう！」
まったく…この笑顔には勝てん…
ん？何か俺勝てないもの増えてないか？

「すいません。」
店員を呼び止めた

「はい。ご注文はお決まりでしょうか？」

「え～と、キャラメルパフェとイチゴパフェとチョコレートパフェ、あとコーラとオレンジジュース二つで。」

「承りました。」

「お前らなぁ…飲み物忘れてどうすんだよ…」

「あはは。パフェで頭がいっぱいだったんだ。」

「カナンにしては気が利くわね。」

「マスター。私のは？」

「メイデンは、俺のコーラか二人にオレンジジュースをわけてもらえ。」

「こーら？それは、美味しいのか？」

「男は大抵好きだけどな…メイデンは女の子だし…どうだろな？」

「炭酸に驚くんじゃない？」

「たんさん？たんさんって何なの？」

ヴィヴィオが首を傾げていた。

「あ～ヴィヴィオもか…炭酸はだな…簡単に言うと飲むと舌に電気が流れるような感じだ。」

「それは痛いのではないか？」

「だから刺激を求める人には好評なのよ。ちなみに私は結構好きよ♪」

「お前は好みが男に近いからな…」

「何か言ったかな～♪」

顔は笑顔…しかし殺意がみなぎっている…

「いえ！！何でもございません！！」

「お待たせしました～。キャラメルパフェ、イチゴパフェ、チョコレートパフェ、コーラ、オレンジジュースです♪」

カートに乗せられ運ばれて来る。

中学生ではまず頼まない量。

「見てるだけで甘いのがわかるな…」

「美味しそうだね♪」

「ええ。ヴィヴィオ、メイデン。ちょっと頂戴？」

「いいぞ。私ももらっていいか？」

「いいよ～。どうぞ♪」

女の子恒例の頂戴合戦。

「「「美味しい♪」」」

「それは良かったな。」

「カナン君も食べる？」

「いや…いいよ。」

「ヴィヴィオ忘れたの？こいつは甘いものは苦手なのよ。」

「マスターはこれが嫌いなのか？こんなに美味しいのに…」

「「「ね～♪」」」

「わかったから、早く食え…」

「カナン君はわかってないなぁ…パフェはね、ちゃんと食べ方があるんだよ？」

「カナンだから仕方ないわよ。」

「そうだな。マスターだからな。」

「「「ね～♪」」」

「待てこら！メイデンは知らんだろうが！！」

「バレたか…」

「えっとねパフェは上からだけ食べてると…美味しくなくなっちゃうから、下のフレークもちょっとずつ食べてね？バランスが崩れないようにゆっくりね？」

「こうか？」

メイデンの空中に浮いたスプーンが綺麗にフレークとクリームを一緒にすくいあげる。ちなみに空中に浮いているのはメイデンがやっているためだ。

「そうそう。メイデン上手よ。」

「メイデンはパフェを上手に食べる才能があるんだよ。」

「そうか？嬉しいぞ♪」

「そんな才能いらん…」

「これだから男って生き物は…」

「パフェ道から外れてるよ…」

「ああ。人間失格だな。」

「パフェ上手に食えないだけで人間失格っすか！？」

「当然よ♪」

「当然だよ。」

「当然だな。」

「そうか…知らなかった…ておかしいだろうが！！」

「ところで、マスター。その飲み物がこーらという物か？」

「そうだけど？飲んでみるか？」

「ああ…」

ストローはくわえられないためスプーンにすくうメイデン。

「んく…！！！」

ビクッ！

メイデンの体が痙攣した…

「マスタ～…舌が痛い…」

半泣きになりながら訴えてきた。

「ははは！やっぱりメイデンには無理みたいだな。」

「私も飲んでもいいかな？」

「ああ。泣くなよ？」

「泣かないよ…」

ヴィヴィオがストローから吸い込む…

「んく…んく…ぷは！結構ビリビリするね…私はあんまり好きにはなれないかな…」

「そうか。ま、女の子は嫌な人が多いからな。」

「どうせ、私は女の子らしくないわよ。」

「どこがだ？そんだけ可愛かったら女の子にしか見えないけどな？いつもはきついけど、お前はたま～に弱い時があるからな…それは可愛いと思うぞ？」

「バッバカ！！そういうこと本人の前で言わないでよ！！」

「あはは。祐希ちゃん赤くなった～。」
「お前達は見てて飽きないから楽しいぞ。」
「そうか？…んく。」
コーラを飲んだ瞬間…ヴィヴィオの顔も赤くなった…
「カナン…君…それ…ストローがね？」
「…わあああ！！！しまった！！！」
間接キスをしてしまった…
「カナン…わざとでしょ？」
「お前な！！俺がそんな…」
「見えないわね。ヘタレだし。」
「判断早すぎて悲しい…」
「ご、ごめんね？私がストロー使ったからだよね？」
「いや、注意が足らなかっただけだ…ヴィヴィオが謝ることじゃないし、悪いのは俺だ。」
「カナンが全て悪いわ♪よってパフェもう一つね♪」
「わっ！いいの？」
「まだ食えるのか！？」

「「「もちろん！」」」
三人笑顔で答えてくださいました…

「ありがとうございました～。」
会計３４５０円…高！！

「美味しかったね～。」

「ああ。パフェか…また食べたいな。」

「食べられるわよ。ね？カナン？」

「何故俺に振る…」

「何故ってカナンのおごりだからよ♪」

「今日はお前らが恥ずかしいとか言うからお詫びとしておごってるだけだぞ！？」

「じゃあ、今度もこの服でくるわ♪」

「おい…恥ずかしいんじゃないのか？」

「恥ずかしいけど、慣れたら意外と大丈夫になったよ。」

「ならおごる必要ないだろ…」

「マスター？私はまたこのメンバーとパフェを食べたい…」

「カナン君…私も食べたい。」
「カナン君私も食べたいな♪」
「祐希奈以外はおごってやるよ。」
「「わ～い。」」
「おごらないとコロスわよ?」
アシェルをいじりながら言うな!!
「いや～もちろん冗談に決まってるじゃないっすか～はっはっは～…」
「そうよね～♪はっはっは～」
ちくしょう…
「で、現在時刻が11時なんだが、時間的に厳しいから絞るけど、遊園地か、映画館、どっちがいい?」
「遊園地なら電車に乗らないと行けないわね…」
「「でんしゃ?」」
ヴィヴィオとメイデンが?マークを浮かべている。
「車より速い乗り物だ。遊園地は少し遠いからな。電車に乗らないとかなり時間がかかるんだ。」
「へえ…でも、もうすぐお昼だよ?でんしゃっていうのに乗ったらお昼抜かないとダメじゃないかな?」

「一応駅弁という弁当があるが…」

「こんなよく知ってる所の駅弁嫌よ。」

「じゃあ映画にするか？
一時間は買い物でもして潰せるし。」

「私はオッケーだよ。」

「別にどちらでも楽しいなら構わん。」

「決まりね。遊園地はまたにしましょう。」

「わかった。」
これからの予定は映画になった。

「私ちょっと行きたい所が出来たから別行動するわ。」

「行きたいとこ？どこだ？」

「秘密よ♪」

「お前がそのテンションの時は大抵ろくなことが起きないんだが…」

「まぁいいではないか。となると集まる場所を決めなくてはな。」

「お昼ご飯のお店でいいんじゃないかな？」

「そうだな。なに食いたい？」

「私はあれがいいわ♪」
祐希奈が指差した先の店は…
「ＫＦＣ…お前…」
「あ、これ間違いよ。」
新たな看板を持ち出した…
「待て！どこから看板なんて出した！？」
「気にしない気にしない♪よしこれでオッケーね♪」
「ＫＤＧ…店の名前変えてんじゃねえよ！！Ｋしかあってねえじゃねえか！！」
「でも、分かりやすいよ～。」
「うむ。確かに間違いようがないな。」
「そういう問題じゃないだろうが！！金髪天然ズ！！」
「「金髪天然ズ？」」
「細かいことを気にしないの。じゃあね！」
「細かくねえだろーー！！」
「ね、カナン君。私達はどうしよっか？」
「うーん…」

「マスターマスター！あそこに何か生き物がたくさんいるぞ！！」
メイデンがまた何か見つけたみたいだな。
「ペットショップか。入ってみるか？」
「うん！」
「入ろう入ろう！」
「わぁ～！可愛いよ～！」
わんわん！きゅうん、きゅうん。きゃんきゃん！
「可愛いけどやかましいな…」
「はぅ～～犬さ～ん！！」
ヴィヴィオは子犬を触れる所に入りさわりまくっていた…
「ははは！ヴィヴィオ毛だらけだ！」
「にゃ～～♪幸せ～♪」
「あれ？メイデンは？」
「ここだ。」
メイデンがイグアナに乗っていた…
「お前なぁ…危ないぞ？」

「大丈夫だ。こいつは何もしない。」

「普通の女の子ならまず触らないぞ…まぁ、祐希奈なら触る気がするが…」

「結構気持ちいいぞ?ざらざらだけど、ぷにぷにしてる所があってな。病み付きになる。」

「言っておくがそれは買えないからな?」

「わかっている。買いたいとまでは思っていない。」

「それなら良いけどな…」

「犬さん可愛いよ~♪」

「イグアナも可愛いぞ~♪」

「なんなんだろうな…この差は…」

結局二人はペットショップから動こうとせず、時間になったので無理やり引きずってきた。

「うぅ…犬さん…」

「うぅ…イグアナ…」

「ほら、これやるから元気だせって。」

二人に犬とハムスターのガラスのネックレスをあげた。

「わぁ!犬さんのネックレスだ!もらっていいの?」

「ああ。たいした値段じゃないけどな。」

「わ～い♪」

「マスター…イグアナではないのか？」

「メイデンは知らないみたいだが…これは珍しいイグアナなんだ…」

「本当か！？」

「もちろん。手に入れるのに苦労したがメイデンにプレゼントしたくてな…」

まるっきり嘘…

「マスター…ありがとう！！」

しかしメイデンには通じる。

「「♪～」」

二人とも期限が治ったらしい。良かった良かった。

店に到着。

「遅かったわね…」

「ちょっと問題が起きてな。すまん。」

「祐希ちゃんごめんね？」

「すまない…」

「まぁいいわ。入りましょ？」

「お前は何してたんだ？」

「ちょっと画用紙を買いに行ってたのよ。」

「画用紙？なんで？」

「企業秘密よ♪」

「二人とも入らないの～？」

「今行くわ。」

「おい！」

「そのうちわかるわよ♪」

行ってしまった…

「…もの凄く嫌な予感がする…」

「マスター諦めろ。」

「だな。入るか。」

「ああ。」

店に入り適当に注文して食べる。

「さすが世界に有名なＫＤＧね♪美味しいわ♪」

「ここだけだから…」

「あはは。でも美味しいよ。」

「ああ。少し油がベタベタするのが気になるがな…」

「そうね。そこが難点よね～。」

「それはメイデンは小さいせいなのと、祐希奈の食い方が雑だからだ。ヴィヴィオを見てみろ。」

二人の顔がヴィヴィオの方へ向く。

「？な、何かな？」

ヴィヴィオは油なんかで汚れてはおらず綺麗に食べていた。

「どういう食べ方したらそんなに綺麗に食べられるのよ…」

「どういうって…普通に食べてるだけだよ？」

「性格の違いが出たな…」

「うるさい！！」

「店の中でまで喧嘩をしない方がいいと思うぞ？」

「「あ…」」

注目の的だった…特にカナンは恨みのこもった目で見られていた…

「な？しない方がいいだろ？」

「ああ。黙って食おう…」

「そうね…」

それっきり四人は黙って食事を終え、店を後にした。

「やっと解放された…」

「恥ずかしかったわ…」

「あはは。二人が喧嘩するからだよ？」

「まったく…状況をみなくてはな。」

「「すいません。」」

「別に怒ってないから安心して。次は映画だよね？」

「ああ。今は…一時過ぎだな。行くか。」

「それはいいけど、カナンは今何の映画してるかわかってるの？」

「いや、調べてないが…」

「ホラーよ…」

「ホラー！？早くないか！？まだ5月だぞ！？」

「ホラーとはなんだ？」

「ホラーはね…お化けよ。」
「お化け？なんだそれは。」
「ゆ、幽霊…わ、私やっぱりやめようかな…」
「あ～やっぱりヴィヴィオはダメか…」
「見るからに怖いのダメそうだもんね。」
「偽物ってわかってても怖いんだもん…」
「なんだ。偽物なのか。なら私は大丈夫だな。」
「そんなこと言って大丈夫か？知らないぞ？」
「私が何年生きていると思っている。その程度ではどうにもならん。」
「わ、私遠慮するね！！」
ダッ！
「逃がさないわ♪」
ガシッ！
「ゆ、祐希ちゃん！離して！私お化けはどうしてもダメなの！」
「ふふふ…さぁ…行くわよ…」
祐希奈ドSモード発動…

ズルズル…

「カ、カナン君！助けて！」

「すまん…あの祐希奈は無理だ…」

「そ、そんな！嫌！嫌だよ～！」

「ふふふ…」

「いやーーー！！！」

ヴィヴィオが引きずられること１０分…映画観に到着…

「三名よろしく。ポップコーンもね。」

軽い口調で祐希奈が頼む。

「うぅ…カナン君…離さないでね？お願い…」

俺はと言うとヴィヴィオと手を繋いでいた。

「わかってる。大丈夫だから怖かったら目をつむってもいいからな？」

「うん…」

落ち着いて話しているように聞こえるが…実は心拍数が凄いことになっている…なんせ半泣きのヴィヴィオと手を繋いでいるんだ…可愛すぎて抱き締めたくなる…

「ほら入るわよ？」

祐希奈はもう片方の俺の手を取った。

「へ？」

「ほ！ら！」
祐希奈が手を引っ張り進む。
「おわっ！」

「きゃっ！」
また祐希奈に引きずられる形で席についた…

「祐希奈？いつまで手を握ってるんだ？」

「…ダメ？」

「いや、ダメじゃないけど…お前どうした？大丈夫か？」

「大丈夫…」
祐希奈がおかしい…離さない方が良さそうだな。

「ヴィヴィオ…は聞くまでもないか…」
ガチガチだ…

「マスター。楽しみだな♪」
ただ一人元気なメイデン。まぁ…今だけだろうが…

「どちらかというと不安が大きいんだが…」
ビー！！

「さて…どうなるかな…」
ＣＭが流れ、いよいよ…始まる…

「うがあああああ！！」
気持ち悪いゾンビが出てきた…

「きゃあああああ！！！」
叫びをあげてるくらいなら逃げろよ…

「っ！」
ぎゅ！
ヴィヴィオの手に力がこもった…やはり怖いらしい…

「大丈夫か？」

「う…ん…」
いや…うんって涙ぼろぼろ流れてますが…

「…」
ビクッ！
もう片方の手から振動が伝わる…祐希奈だ…

「お前…まさか苦手なのか？」

「別に…」
と答えはしたもののポップコーンが食べられていないところを見ると苦手なのだろう…

「メイデン…お前怖くないんじゃないのかよ…」

「だ、だってな、あんなに気持ち悪いものが…」

「きゃあああ！！！」

「！！」
シュバ！
再び俺の上着の中に隠れた…
「結局大丈夫なのは、俺だけか…」
「うがあああああ！！！」
またでた…
「「「きゃあああああ！！！」」」
三人の悲鳴が映画館に響き渡った…
ようやく上映が終わった。
「ぐす…」
「…」
「ひっく…」
三人見事に泣きました…非常に居心地が悪い…
「あ～お前ら大丈夫か？」
「だ、大丈夫…だよ…」
「どっからどう見ても一番大丈夫じゃないな。」
「うぅ…」

「祐希奈も苦手なら言えよな～。」

「こ、これは笑い過ぎただけよ！！あ～面白かったわね。」

「笑い声なんて聞こえなかったが？」

「きゃあああって言うのは私の笑い声なのよ！」

怖！！

「そうか…メイデン？お前これからはやめとけよ？」

「ああ…お化けはもう嫌いだ…」

たく…こいつらよくこんなんで犯罪を取り締まれてたな…

「あ～俺喉渇いたから飲み物買ってくるな。」

「う、うん。」

そう言ってカナン君はどこかへ言ってしまった。

「飲み物ならそこにあるわよ…」

そう…私達のすぐ後ろの売店にある…

「バレバレだな…」

「カナン君、優しいね。」

「それがカナンだから。」

「そうだな。特に女性には甘い。」

「あはは。涙も止まったしカナン君の所に行こっか？」

「ええ。あのバカの所にね。」

「ああ。バカは否定できないな。本当にバカだから。」

その頃カナンは、

「へっくし！風邪か？」

くしゃみをしていた…

「いたいた。カナン君！」

「ヴィヴィオ？何で？」

「バレバレなのよ。バカ…」

「もう少し頭を使わないとな。」

「どうせ俺は思慮が浅い奴ですよ。」

「気を使ってくれたんだよね？ありがとう。」

「泣いた顔見られて好きな女の子はいないだろうからな。」

「あれで、もうちょっとマシな言い訳を言えれば満点なのに。やっぱりカナンとしか言いようがないわね。」

「ああ。さすがはマスターだ。肝心な所で外せるのは凄いぞ。」

「そんなもん誉められても嬉しくねえよ…」

「これからどうする？」

「３時５０分か…行きが走って３０分だから…歩きは一時間か…タクシー使うか？ていうか行きもタクシーの予定だったんだけどな…祐希奈が追いかけるから…」

「仕方ないでしょ！？」

「あの理由は仕方ないのか！？」

「タクシーとは何だ？」

「お金を払って目的地まで乗せてくれる車よ。」

「そういう物もあるんだな…」

「でも、私はお話しながらゆっくり帰りたいよ。」

「そうか？なら歩くか。」

「オッケー。」

「わかった。」

三人は歩きだした。

途中３０分ほどは賑やかだったのだが、

「…」

「ヴィヴィオ？」

「あんた大丈夫？」

「…」

「ヴィヴィオ～。」

「え？あ、何かな？」

「眠いのか？」

「あはは…ちょっとだけ…」

「タクシー呼ぶ？」

「もうすぐだしいいよ…」

「まだ半分ほどあるぞ？」

「が、頑張るよ。」

「そうか？」

しばらく歩くとヴィヴィオの足取りがふらついてきた…

「そんなに眠いなら…ほら。おぶってやるよ。」

「い、いいよ。」

「私からもそうしてほしいわ。ふらふらして危ないから。」
「私もそうした方がいいと思うぞ？」
「ほらな？」
「うぅ…わかったよ…」
ヴィヴィオが背中に乗っかる…相変わらず、軽い。
「重くない？」
「いや、まったく。というか…軽すぎるな…ちゃんと食べてるか？」
「食べてるよ…」
「じゃあまだ足りないな。もっとパフェ食って太れ。」
「それは嫌だよ…」
「じゃあピーマン食べなさい♪」
「ピーマンは…人類の敵だよ…」
「また一緒に遊ぼうな？」
「う…ん…」
「ヴィヴィオ？」
「…」

「寝たか。よっぽど疲れてたみたいだな…」

「あんだけ騒げばね。」

「騒ぎの原因は大抵はマスターと祐希奈だぞ…」

「「すいません…」」

「ふああ…私も眠いわ…」

「お前はいろいろし過ぎだ…店の名前まで変えやがって…」

「きっとバカ売れ間違いなしよ♪」

「絶対にない…」

「カナン…今日は私の家に泊まってくれない？」

「別にいいけど…何でだ？」

「理由は聞かないで…」

「お前まさか映画が…」

「言うな！！」

コンッ！

「あれ？随分緩いな。」

「疲れたからね…」

「良かったなマスター。」

「さすがに俺もヴィヴィオを背負って逃げる元気はないな…」

「感謝しなさい。」

「ああ。感謝するさ。」

それから無言で歩きカナンの家の前。

「ちょっと待っててくれ。伯父さんに言ってくるから。」

「わかったわ。ヴィヴィオ背負うの変わりましょうか?」

「いや、いくらお前でも、そんな元気はなさそうだからな。」

「なんかムカつくいいかたね…事実だけど…」

「じゃあな。」

バタン…

「はぁ…」

今日改めてわかった…やっぱり私カナンのこと…でもカナンはヴィヴィオが好きなのよね…ヴィヴィオも多分カナンが…なら、私は今のままでいよう…そうすれば関係は壊れない…少なくともこの場所にはいられる…

「仕方ない…よね…」

「やってみなければわからない…があなたでしょう？」

「アシェル…バレてたか…」

「わかっていないのはあなた達ぐらいですよ？」

「げ…てことは美鈴達も…」

「わかってるでしょうね…」

「隠せてると思ってたのに…」

「カナン君は鈍感ですからね～。まぁヴィヴィオちゃんもですが。」

「アシェル？なんかあんた変よ？」

「気にしちゃダメですよ♪」

「おかしい…どっか壊れた？」

「失礼ですね。どこも以上はありませんよ。それでさっきの話ですが、確かにカナン君はヴィヴィオちゃんのことが好きかもしれません。」

「…やっぱり？」

「ですが、おそらくヴィヴィオちゃんはまだ好きという気持ちを理解出来ていません。」

「何でそこまで分かるのよ…」

「長年の勘…というやつです。」

「デ、デバイスが勘…」

「ですから、まだ祐…マスターにも逆転のチャンスはありますよ。」

「わ、私は…今の関係が続けばそれで…」

「カナン君はどちらを選ぶにしても今の関係は崩れないと思います。いい子ですから。なら勝負、しましょう?」

「で、でも!」

「私からのアドバイスはここまでです。では。」

「ちょっと!」

「待たせたか?」

「っ!!」

「どうした?顔赤くして…」

「な、何でもないわよ!!」

「そうか?ならいいけど。」

「許可は貰えたぞ。」

「そ、そう。じゃあ行きましょうか。」

「ああ。本当に大丈夫か？」

「しつこい！！」

（やってみなければわからない…か。確かにそうね。諦めるのは早いわよね！）

「ほら！さっさと歩く！遅いわよ！」

「急に元気になった…女の子はよくわからないな…」

どこまでもカナンは鈍感だった…

第八話　初めてのデート（後書き）

おそらく次の投稿は明後日…あたりです。

第九話　襲撃前夜

祐
「みなさんお待たせ致しました！ＫＤＧ（カナンデストロイ軍団）隊長の祐希奈です♪」

カ
「待ってねえし！いつまで引っ張る気だ！？」

祐
「さて、いちいちツッコンでくる阿呆は放っておいて。」

カ
「…」

ヴ
「カナン君。元気出して！」

祐
「後書きには本日の豪華ゲストを召喚するわ♪」

ヴ・カ・メ
「ゲスト？」

カ
「待て…ただでさえパクりなこの企画をさらにパクる気か？」

ヴ
「これはさすがに作者さん達怒るんじゃないかな？」

メ
「私もそんな気がしてならないぞ…」

祐
「大丈夫よ♪ね？作者さん達？」

カ
「こいつはこういう奴です…すいません…」

ヴ
「あはは…」

メ
「では、ここであまり文字数を使うわけにはいかないな。」
祐
「そうね。ちゃっちゃと行くわよ。質問です。現在のキャラ投票の結果は？」
ヴ
「現在は、一位は私で、１２票。二位は祐希ちゃんで、１０票、三位はメイデンとカナン君で八票です。票が入ったのはこの四人だけです。」
カ
「おお！俺が三位になってるじゃないか！」
祐
「誰よ…こいつなんかに入れた暇人は。」
ヴ
「読者さんから四票とあとは学校友達のメールだよ。」
祐
「全部違う人なの？」
メ
「ああ。どうやら作者の学校はなのはを見てる人が多いらしい。」
カ
「とにかく、票を入れてくれてありがとな。」
祐
「これからカナンに入れた奴は私が直々に成敗してやるから覚悟しときなさい♪」
カ
「やめろ！」
ヴ
「まだまだ続くのでお待ちしてますね～。」
祐

「ラストの質問よ。あ～またＥＸ関係ね…道場出演してから質問が多いわ。」
カ
「ま、あんだけ騒げばな…」
ヴ
「では、質問です。カナンでシオンに勝てないのならヴィヴィオや祐希奈はどうですか？」
ヴ
「またシオン君と私達に対してか～…う～ん。」
祐
「相性的に見ても私は不利ね。高機動戦闘苦手だし。ブレイズ使われたらきついわね…」
ヴ
「私は出来るけど力は弱いし、カナン君で勝てないなら私もちょっと難しいかな…」
カ
「ＥＸ作者さんの話だと俺は勝てる…かもしれないらしいぞ？」
メ
「まぁ、精霊融合なしでの話だがな。」
ヴ
「じゃあ、私でもやり方次第では互角ぐらいにはやれるかな？」
カ
「正確な所はＥＸの作者さんに聞かんとわからないけど、精霊融合さえ防げれば、結構やれるんじゃないか？」
ヴ
「そうかな？」
祐
「ま、仮定の話だから結局はやらないとわからないんだけどね。」
メ
「そうだな。戦局は常に変わるからよく相手を観察し、弱点やクセ

を見つけられればどう転ぶかわからない。」
祐
「ちゃっちゃとやるとか言いつつ長くなっちゃったわね…」
カ
「そうだな。さっさと始めるか。」
ヴ
「うん。魔法少女リリカルヴィヴィオ。」
全
「始まります。」

現在時刻、午後5時30分、祐希奈家

「ただいま～。」

「お邪魔します。」

「邪魔するぞ。」
三人が玄関で、声を出すが誰も出てこない…

「あれ？父さん？いないのー？」

「・・・」
誰も答えない…

「おかしいな…とりあえず、あがってて。探してくるわ。」

「あ、ああ。」
居間にあがり、ヴィヴィオを寝かした後、しばらく待つ…

「あああああ！！！！」

祐希奈の声が隣の部屋から聞こえる。

「ど、どうした!?」

部屋の真ん中に祐希奈が呆然と座っていた。

「きょ、今日…父さん先生達と飲み会とか言ってた気がする…」

「…つまり?」

「今日は父さんは帰りが遅い…」

「何時ぐらいになるんだ?」

「いつも深夜過ぎまでは飲んでる…」

「それまでは、俺達だけしかいない…ということだよな?」

「…ええ。」

「「・・・」」

二人して沈黙する。

「二人共…それは何か問題があるのか?」

「な、ないわよ…ね?」

「俺に振るな…」

「別に気にすることではない気がするがな。」

まあメイデンにはそうだろうな…

「そ、そうよね。大丈夫、大丈夫…」

「心配しなくても、そんな危ない男じゃないから安心しろ。」

「うん。」

「祐希奈？」

「はい！！」

あ～ガチガチだな…

「いや、腹が減ったんだがお前は減ってないか？」

「え？あ、減ってる…かな。」

「結構あるいたし、お前も疲れただろ。休んどけ。」

「カ、カナンは？」

「適当に何か作ってやるよ。台所、借りるな。」

そう言ってカナンは部屋から出ていった。

「祐希奈。マスターなら何もしない。保証する。」

「わ、わかってるわよ。メイデンより私の方が付き合い長いのよ？」

「そうだったな。すまない。私から言うことはそれだけだ。私はマスターを手伝ってくるからな。」

「わかった。」
メイデンも出ていく。
そうよね。あのカナンが変な事考えるわけない。
いつも通りに…よし。
部屋に戻る。

「ん…あ、祐希ちゃん、おはよ～。」

「あんたね…まだ、日付変わってないわよ…」

「え？あ、あれ？私寝ちゃったの？」

「おぶってもらってすぐに寝たわよ。」

「ほええ～…」

「で、もう眠くないの？」

「少し寝たら大丈夫になったみたい。」

「そう。お腹空いてる？」

「ちょっと…」

「大将！！オムライス一つ追加よ！！」

「あいよ！…って寿司屋じゃねえ！！」

「調子は戻ったようだな。」

「戻るも何もおかしくないわよ。」

「そういうことにしといてやるか。」

「しといてよ。あ、大将!!デミグラスソースもね!!」

「あいよ!!…違うつってんだろ!!」

「あ、大将。私は飲み物もほしいな。」

「…もういい。わかった。」

「あはは。冗談だよ～。大将じゃなくてカナン君だよね。」

「まったく、本気にしないでよ。」

「お前らが大将大将ってしつこいからだろ!?」

「「「あはははは!!」」」

「笑われた…三人に笑われた…」

結構本気でショックを受けたカナンだった。

「オムライスとラーメンお待ち!ちゃんと手作りだぞ。」

「あんたラーメンなんかよく作れたわね…」

「一時期めちゃくちゃはまってた時があってな。自分で作りたくなって、１０歳くらいだったかなあ…ラーメン屋のおっちゃんに頼んで教えてもらったんだ。」

「ラーメンごときにどんな感動を覚えたのよ…しかも１０歳で…」

「ラーメンごときとは言ってくれるな…めちゃくちゃ奥が深いんだぞ！？
師匠に合格をもらったのは１１歳になってからだったんだぞ！？」

「なんかカナン君が燃えてるよ…」

「こんなマスター初めて見たぞ…」

「とにかくさっさと食え！麺がのびる！」

「わ、わかったわよ…」
祐希奈は職人魂に敗北した…

「一気にすすれ！音をたてて切るなよ？」

「そ、そこまでやるの？」

「一番うまい食い方だ。」

「わかった。」
ズルズルズル。

「んぐ…んぐ…」

「どうだ…？」

「お、美味しい…」
本当に美味しい。インスタントなんかとは比べ物にならない…

「そうか！良かった！」
明るい笑顔…とても嬉しそう…

「私も食べたいよ。」

「わ、私も食べる。」

「どんどん食え！何ならもう一回作ってくるし。」

「わーい。」
私達はカナンのラーメンを一人一杯ずつ食べた。
…インスタントはもう食べれそうにない…
注文したオムライスはカナンが食べた。しかしデミグラスソースが失敗したらしく顔をしかめていた…

「もうお腹一杯～。」

「ラーメンがこんなに美味しいなんて初めて知ったわ…」

「初めて食べたがとても美味しかった。」
三人共大満足。

「そりゃ良かった。あ～疲れた…」
カナン君はそう言って腕を揉んでいる。

「そんなに疲れたんならお風呂入れば？」

「風呂ってまだ早いだろ…」

「カナン君も疲れてるでしょ？今日は早めに入って寝ようよ。」

「ん～…そうだな。そうするか。」

「じゃあ私お風呂洗ってくるわね。」

「私がやろうか？」

「あんたが一番ヘロヘロだったんでしょうが…おとなしくしてなさい。」

「あはは…ごめんなさい。」

「はいはい。」

祐希ちゃんもカナン君も優しいなぁ。

「カナン君。」

「ん？」

「お話したかったのに寝ちゃってごめんなさい。」

「そんなことか。別にいいよ。こっちも映画で怖がらせてごめんな。ちゃんと調べてれば、楽しかったのにな…」

「う、ううん。ちょっとは怖かったけど、嬉しかったから。」

「嬉しかった？何が？」

「ずっと…手を繋いでてくれたから…」

「あ～…え～…うん。」

「マスター…意味がわからんぞ…」

「さ、さて！ちょっと走ってくるな！」

「え？」

「ますます意味がわからんぞ…」

「そろそろランニングをする時間なんだ。」

「そ、そうなんだ。じゃあ私も一緒に行くよ。」

「へ？」

「鍛えるために走るんだよね？私も走るよ。」

「そ、そうか？」

「うん。行こ！」

「あ、ああ。」
変な事になってしまった…
その後学校までを全力で走り往復した。

「はぁ…はぁ…」

「ただいま～。」

「あんた達…何してたのよ…」
祐希ちゃんが呆れて立っていた。

「じ、時間潰し…の訓練？」

「…バカ？」

「言うな…悲しくなる…」

「とにかく、あんた達がバカをしてる間にお風呂も入れるし行ってきなさい。」

「わかった…」

「私も行くぞ。」
カナン君とメイデンがお風呂に向かった。

「で？何でヴィヴィオまであのバカのやることに付き合ってるの？」

「あはは～。何でだろうね。よくわかんないや。」

「ヴィヴィオの頭の中はどうなってんのよ…」

「普通だよ？」

「絶対にそれはないわね。」

「祐希ちゃん…ひどい…」
うぅ…祐希ちゃんの言葉は痛いよ…泣けてきた。

「ああ～もう、すぐ泣くし…泣き虫さんね。」

「そ、そんなことないもん！…多分…」

「本当に？」

「きっと…」

「ん～？ちゃんと言ってみ？」

「泣き虫じゃなかったらいいな～。」

「泣き虫決定！」

「ふえええん！」

「また泣いた～。」

「祐希ちゃんがいじめるからだもん…」

「ごめんごめん。ほらいつまでそこにいる気よ？入りなさい。」

「うん…」

「いつまでも泣かないの。中学生でしょ？」

「うん。私、中学生…」

「中学生ならそのくらいで泣かない。」

「わかった。我慢する。」

「ふぅ～いい湯だったぞ～って何でヴィヴィオが泣いてんだ？祐希奈、お前何かしたのか？」

「ちょっといじり過ぎたかな？」

「おいおい…加減しろよ…」

「ち、違うよ。私が泣き虫だっただけ。祐希ちゃんは何もしてない。」

「そうなのか？」

「何もしてない事はないけど、まぁ、泣くほどではないかもね。」

「そうか。祐希奈に何かされたら俺に言え。」

「言ったらどうなるの？」

「身代わりくらいにはなれる。」

ポン。カナン君の手が私の頭に乗せられた。

「カナン君。ありがとう。でも、祐希ちゃんも優しいし多分大丈夫。」

「それにしても…身代わりってカナン、ダッサー。」

「マスター…情けないぞ。」

「相手が祐希奈だから仕方ない…」

「どういう意味よ!!」

「気にするな。はっはっは。」

「祐希ちゃん。次、私が入っていいかな?走ったから汗かいちゃって。」

「ヴィヴィオでも汗をかくのか?…全然わからないぞ?」

「メイデン…私だって汗くらいかくよ?」

「すまん…俺もヴィヴィオは走ったくらいでかかないと思ってた…」

「私も…いつも、しれっとしてるから。」

「私…機械じゃないよ?」

「「「え!?」」」

「わあああん!!もういいもん!!!」

走ってヴィヴィオは風呂に行ってしまった。

「ホントにいじりやすいわね…」

「さらにやっぱり泣き虫だな。」

「ああ。あそこまで泣けるのは才能だな。」

しばらくして拗ねた顔のヴィヴィオが上がってきて祐希奈が入った。

「ヴィヴィオ。いつまで怒ってんだよ。」

「私…機械じゃないもん…」

「んなことわかってるって。軽い冗談だ。」

「軽くないよ…もう…本気で怒ってるんだからね。」

「許してくれないのか?」

「当分はね。」

「そうか。」

ちょっと逆鱗に触れたみたいだな…

「私、機械じゃないもん…人間だもん…ちゃんとした…人間…だもん」

あれ?

「ヴィ…ヴィヴィオ?」

「私は!ちゃんと生きてるもん!機械なんかじゃ…ない…うあああん!!」

ちょっとどころじゃなかった…まともか?

「ご、ごめん!ごめんな?」

「わあああん！！」

「私からも謝る！すまなかった！」

「ど、どうしたのよ！」

慌てて服をきた祐希奈も驚いてやって来る。

「いや、それが…」

「人間だもん！！ママの娘の高町ヴィヴィオだもん！！」

「わ、わかってるわよ。ヴィヴィオは人間なんて当たり前じゃない！！」

「どうやら、先程の発言が問題のようだ。」

「そうなの！？ごめん！！ヴィヴィオごめんね？」

ぎゅ！！

「わあああん！！」

「大丈夫。あなたは人間だから。わかってるから。機械なんて言ってごめんね？」

「ぐす…ぐす…」

「ヴィヴィオ…お前は人間だ。誰がなんと言おうと人間だから。」

「うん…」

「すまないな…注意が足らなかった…」

「うん…」

「ごめんね？もう絶対言わないから。」

「もう…いいよ…なんだか眠いから寝るね？泣き叫んじゃってごめんなさい。」

「ヴィヴィオは謝らなくていい。悪いのは俺達だから。ゆっくり寝てくれ。」

「おやすみヴィヴィオ。」

「また明日一緒に学校に行こうな？」

「いつものヴィヴィオに戻って欲しい…」

「うん。おやすみ…皆。」

目を閉じてすぐに寝息が聞こえてきた。

「悪いことしたな…」

「ええ。人にはいろいろあるのにね…」

「警戒体制になって、不安がたまっていたのかもしれない…それが俺達の言葉でトラウマ思い出させてしまった…で、不安がプラスされてこうなった…てとこか…

トラウマは知らなかったにしろ…不安に気付いてやれなかった…情けない…」

「この子は溜め込んじゃうからね…前にも似たようなことがあったのよ。
で、私がイライラして当たっちゃって喧嘩したのよ。私が一方的にぶつけただけなんだけどね。」

「お前らでもそういうのあったんだな…」

「信じられん…今からは想像も出来んな。」

「あの時…この子の支えになるって決めたのに…私はまた気付いてあげられなかった…」

「お前は一人で頑張り過ぎだ…これからは俺も注意を払う。」

「私もだ。」

「うん。お願いするわ。」

「よし。寝るか。」

「私ここから動けないし、カナン、私の部屋使っていいわよ?」
抱き締めた後にヴィヴィオが寝たため祐希奈の膝枕でヴィヴィオは寝ていた。

「さすがに無理だ…俺もここで寝ていいか?」

「好きにしなさい…布団は取って来ないとないわよ?」

「面倒だしこのまま寝る。」

壁にもたれかかり目をつむる。

「そう…おやすみ。」

「おやすみ。」

「祐希奈…私の魔法を使えば移動できるぞ？」

「ありがとう。でも、いいわ。」

「そうか？ではな。おやすみ。」

話ている間、祐希奈はヴィヴィオの髪をずっと撫でていた。

「おやすみ。」

この子があそこまで取り乱したのは久しぶりだな…過去に何があったのかは知らないけど、私達はヴィヴィオの味方だから。元気になってね。

こうしてデートの1日は幕を閉じた。

スカリエッティ襲来は…明日…

祐

「さて、微妙にシリアスな場面も終わった所で！召喚しちゃいましょう！」

ヴ

「無理やりなテンションのあげ方だね…」

祐

「しんみりで終わるなんて神様、読者様が許してもこの私が許さないわ♪」

カ
「パクらないパクらない…」
メ
「ところで、誰を呼ぶ気だ？」
祐
「よくぞ聞いてくれたわ！！カナンを生け贄に！」
バキャッ！
カ
「ぐは！！」
祐
「召喚！！降臨せよ！！神代零さん！＆ａｍｐ；クラウン！」
零
「こんにちは♪」
ク
「来てあげたです♪」
ヴ
「あれ？どちらか一人じゃなかったの？」
カ
「またか！！恒例の約束破りか！！」
祐
「好きなだけって言われたし～大丈夫じゃない？」
零
「大丈夫だと信じましょう♪」
ク
「信じるです♪」
カ
「いや、でも！」
ジャキ！
零
「信じましょう？」

ク
「とにもかくにも信じるです♪」
カ
「…はい。」
メ
「クラウン！来てくれたのか！？」
ク
「はいです。私とメイデンの友情の前には不可能な壁などないのです。」
メ
「ありがとう。クラウン大好きだ。」
ク
「私もメイデンのこと大好きですぅ～！」
零
「仲良いわね～♪ヴィヴィオ。久しぶり。」ヴ
「零ちゃん。久しぶりだね。」
零
「で、あなたが祐希奈ね？」
祐
「ＫＤＧ隊長の祐希奈よ。よろしくね。」
零
「神代　零よ。一緒に頑張りましょうね。」
カ
「何を頑張る気だ！何を！」
祐
「何って…」
零
「それはもちろん…」
祐・零
「カナン殺戮運動よね♪」

カ
「やめろ！今すぐやめろさもないと！」
祐・零・メ・ク
「さもないと？」
ジャキ！
カ
「待てこら！メイデンとクラウンは味方だろ！？」
メ
「前回クラウンは私の味方をしてくれたからな。今回は私がクラウンの味方だ。マスター。悪く思うな」
カ
「クラウン！今回も俺の味方だよな！？」
ク
「前回の時に一応って言ったです♪今回はこちらに分があるのでこちら側につくです♪」
ヴ
「私は中立だから、どっちの味方でもないよ。」
カ
「のう！！！」
ク
「にししし。大人しく命を渡すです♪」
零
「渡しなさい♪」
カ
「誰が大人しく渡すかぁ！！エクス！！」
零
「キャンセル♪」
カ
「しまった！！」
ヴ

「どっちも頑張れ～。」
カ
「俺のが明らかに不利だ！！」
祐
「ＫＤＧ…突撃♪」
零・ク・メ
「了解♪」
カ
「やってやらあ！！」
祐・零
「チェストー！！！」
ドギャ！！
カ
「ぐへ！！」
ヴ
「飛び蹴り二連撃が綺麗に入った～。」
メ
「受けよ！イカズチ！！」
ピッシャーン！！
カ
「ぎゃあああ！！」
ヴ
「雷がカナン君を直撃～。」
ク
「シルバーダガー！！」
ジャキ！！
カ
「待て！それは！」
ク
「バイバイです♪」

ザクザクザク！
カ
「はぁ…はぁ…」
ヴ
「ギリギリで全てかわした～！」
ク
「ちっ！です。」
カ
「舌打ちすな！！というかヴィヴィオは解説せんでいい！！」
メ
「流石マスターだな。まだツッコミを入れる元気があるとは…」
ク
「マイロードみたいです。」
零
「確かにお兄ちゃんもツッコミのプロね。」
ヴ
「ツッコミ王だもんね。」
祐
「その称号は私がもらうわ！！」
カ
「どうでもいいから活動を停止しろ！！銀杏に言いつけるぞ！！」
ク
「うわ…チクるとかヘタレです。」
メ
「ああ。私のマスターはヘタレなんだ。」
カ
「うるせえよ！（泣）」
祐
「うわ～…男の癖にないたわよ…どう思う零？」
零

「人間としてダメね…」
カ
「黙れ！黙れ！（泣）どうなんだよ！！」
ヴ
「カナン君が可哀想に見えてきたよ。」
祐・零
「ヴィヴィオ。それは気の迷いよ♪」
ク
「こんな男に同情の価値なしです♪」
メ
「マスターそうらしいぞ。」
カ
「チキショー！言いつけてやるからな！？」
零
「まぁ、お兄ちゃんが来たところで私には勝てないんだけど。」
祐
「一緒にボコるだけね♪」
ク
「マイロードもこのメンバー相手じゃ勝てないです♪」
メ
「零さんがいるからな。」
カ
「くそ！くそ！」
ヴ
「あはは…カナン君…元気だして。」
カ
「なら手伝ってくれ！！」
ヴ
「う～ん。痛いの嫌だしやめとくよ。ごめんね？」カ
「…」

零
「ヴィヴィオ、ナイス♪」
祐
「さて…ラストにしましょうか？」
ク
「止めにしてやるです♪」
メ
「マスター短い間だったがあの世でも達者でな。」
カ
「まだ！まだ死なん！」
祐・零
「バイバイ♪」
メ・ク
「さよなら。（です♪）」
カ
「ぬあああああ！！！」
ちゅどーーん…
カ
「…」
ヴ
「カナン君…生きてる？」
祐
「大丈夫でしょ。」
零
「はぁ…すっきりした。」
ク
「気分爽快です♪」
メ
「結構楽しかったな。」
ヴ

「ところで、何で零ちゃんとクラウンちゃんなの？」
祐
「ん？ああ。え～とね。それ以外の人を呼ぶとカナンに味方が増えるからよ♪」
零
「私達の方ではみんな協力してくれなかったからね。」
ク
「私は、メイデンと一緒にいたかっただけです。カナンはどうでも良かったです。」
メ
「クラウン…嬉しいぞ。私なんかとそこまで仲良くしてくれるなんて。」
ク
「友達と一緒にいるのに理由はいらないです♪」
メ
「ずっと友達だからな。」
ク
「もちろんです。」
零
「祐希奈。あなたは素晴らしい隊長になれる。これからも頑張って。」
祐
「任せて！もっと隊長の名に相応しくなれるように頑張るわ。」
ヴ
「あはは…実際はカナン君いじめなんだけど…」
零
「ＫＤＧは不滅よ！」
祐
「ええ！」
ヴ

「カナン君…これからも大変だなあ…」
零
「じゃ、元の世界に戻るね。」
ク
「メイデン。またね。です。」
ヴ
「元気でね～。」
祐
「集会には必ずくるのよ～。」
カ
「もう…来ないでくれ…」
零
「何か言った？」
ジャキ！
カ
「いえ！！滅相もない！！お気をつけてお帰りください！！」
零
「よろしい。じゃあね。」
ク
「バイバイです～♪」
シュン…

ヴ
「言っちゃった。また来て欲しいな。」
祐
「今度はもっと歓迎しないとね。」
メ
「いい友達が出来た。本当に嬉しい。」
カ
「俺は悲惨だ…」

祐
「だいぶ長くなったわね。」
ヴ
「うん。読者の皆さんもさようなら。」
カ
「また次回に会おうな。」
メ
「絶対だぞ?」
全
「バイバイ。」

え～とまずｎａｏｎａｏさん両方使ってしまいすいませんでした。
喋り方なども変だったかも知れません。
クロスって難しいですね…
読者の皆様、ちょっと更新遅れてすいませんでした。部活が長引きまして…
これからも2日～3日更新になるかもしれませんがご了承ください。

第十話　襲来（前編）

祐
「カナン。四位降格おめでとう♪」
ドンドンぱふぱふ。
カ
「黙っとけ…」
ヴ
「メイデンに一票入っちゃったね。」
メ
「すまないな。」
カ
「別に一票入るのはいいんだが…理由が気に入らない…」
祐
「カナンに止め（笑）を指す意味合いを込めてだっけ？ナイスよ♪
是非ＫＤＧに招待するわ♪」
カ
「やめろ！！これ以上増強されたら！！」
ヴ
「もともとタカトや零ちゃんが入った時点でかなりきついと思うよ
？」
カ
「ちょっとまてよ…あのスーパー体術バカと魔力を消滅させる能力
をもつ零さんが組んだら…」
祐
「無敵ね♪」
ヴ
「あはは…カナン君…ファイト。」
カ

「無理！絶対無理！」
祐
「カナン？さっきスーパー体術バカとか言ったわね…」
カ
「は！！」
祐
「決定ね。次回タカトとシオンを召喚するわ♪」
ヴ
「タカトはわかるけど何でシオン君もなの？」
祐
「いじめたいから♪」
カ
「シオン…大丈夫だ…慣れたら痛みを感じなくなるからな…」
メ
「それは、死にかけなのではないか？」
カ
「それも、大丈夫だ。慣れると意識的に花畑に行かないように出来る。」
祐
「つまりあんたは死なないわけ？」
カ
「いや…どうだろな…目の前に花畑あったりもするから危ない時もあるぞ？」
ヴ
「カナン君って凄い体験してるんだね…」カ
「だろ？」
ヴ
「祐希ちゃん、この作者はいつか召喚って言ってたのにもう召喚するの？」
祐

「バリバリ使って下さいって言われたし、バリバリ使うわ♪三回に一回くらいの割合でね♪」

カ「それは使い過ぎだろ…」

祐「じゃあ、ネタが浮かんだら即ね。」

カ「ネタが浮かんだら即、俺が吹っ飛ぶな。」

メ「マスター。６６６とやらは怖いのか？」

ヴ「タカトは優しいから怖くないよ。御菓子作ってくれてねとっても美味しいんだ。」

祐「確かにアレは美味しかったわね。」

カ「もっとも優しいのはお前らにであって、俺には鉄拳の嵐が降るだろうがな…」

メ「マスターなら大丈夫だと信じている。」

カ「いや～…今回の相手は格が違う…ボスだからな…ロリコンだけど…」

祐「スーパー体術バカに…ロリコン…っと。よし。」

ヴ「祐希ちゃん？何してるの？」

祐「ん？タカトが来たときに言い忘れないようにメモをとってるのよ。」

カ「何!?」
祐「フフフ♪」
カ「…俺次回の前書きもしくは後書き休む…」
ヴ「え～シオン君はどうするの?」
カ「あいつなら生き残れるさ…きっと…いや多分…生き残れるといいな。」
メ「どんどん希望的な考えになっているな…」
祐「逃げたいんなら好きにすれば?」
カ「言ったな!?逃げるからな!?」
祐「はいはい。頑張ってね♪」
ヴ・メ（多分無理なんだろうなぁ…）
ヴ「とにかく今日もあります。質問コーナー。」
祐「相変わらず凄まじい速度で質問がくるわね…」
カ「メッセージが大変なことになってるからな…」
メ「というかこの質問コーナーを開いてからじゃないか?」
ヴ

「読者さんの聞きたい疑問がたくさんあるんだと思う。」
祐
「さて、最初の質問は…召喚はいつやるとか決まってるんですか？…について」
カ
「答えは道場みたいに決まってはいない。」
祐
「そんなの適当。適当が命のＫＤＧ活動よ♪」
カ
「これ活動だったのか！？」
祐
「今更知ったの？」
カ
「いつからだ！？」
祐
「今からよ♪」
カ
「適当過ぎるだろ！？」
バキャッ
カ
「なんでー…」
祐
「うるさいわね…進まないでしょ。」
ヴ
「さすが第二の６６６と言われたことはあるね…」
メ
「綺麗に入ったな。」
祐
「ありがと♪じゃあ次の質問は…メイデンダイブ許可して下さい！…実はこれ三件もあるのよね…」

ヴ
「シルフレ出演してから増えたね。」
カ
「メイデンファンクラブ…マジで結成かな…」
メ
「ファンクラブの人達全てがダイブしてくるのか!?」
祐
「ええ。それはもう皆メイデンちゅわああ～んってあのダイブをね♪」
メ
「お、お話だけではダメか?」
カ
「メイデン…ファイト。」
メ
「ええ!?さ、作者殿止めてくれ!」
ヴ
「あ、この作者もダイブ付き合いますとか言ってたからダメじゃないかな?」
メ
「う…私にファンクラブなんか作っても、いいことないぞ?」
祐
「ファンクラブの人達はその男口調も好きみたいね…口調変えてみれば?」
メ
「え!?えっと…み、皆でダ、ダイブはやめてほしいな?」
ヴ
「一人ならいいの?」
メ
「ど、どうしてもって言うんなら一人くらいは許してあげてもいいよ?」

カ
「じゃあ俺がダイブするな。」
メ
「マ、マスターはダメだよ…恥ずかしいもん…」
カ
「そうか…メイデンは俺のこと嫌いか…」
メ
「え!?そんなことないよ?マスターのことは私は好き…わあああ!もう無理だー!!!」
祐
「以上ヴィヴィオ口調のメイデンでした～。希望があればメイデンに口調を真似して欲しいキャラを送ってね♪」
メ
「頼むから募集しないで欲しい!!」
ヴ
「あはは。それじゃ皆さんこの辺で前書きを終わります。」
カ
「じゃあ、本編の始まりだ。」
祐
「世紀末救世主伝説、魔法少女李里化流ヴィヴィオ。始まるわよ♪」
ヴ・カ・メ
「何それ!?」
「ん…」
朝日が窓から差し込みその光で目がさめた。
「え!?…祐希ちゃん!?」
何で!?あ、そうか…昨日抱き締められたまま寝たから…
「ヴィヴィオ?起きたの?」閉じられていた目が開く。

「…祐希ちゃん起きるの早いね。」

「目を閉じてただけだからね。」

「寝てないの？」

「仮眠くらいならとったわ。」

「ごめんなさい…」

「あんたは悪くない…だから怒ったりしてないわ。」

「ふあ～。あ、二人とも起きてたのか。おはよう。」

「カナン君？どうしてこんなところで寝てるの？」

「動くのが面倒だったからだ。」

「風邪ひくよ？」

「それは全員同じだろ…」

「そう…だね。雅樹さんは？」

「帰ってないみたいね。まぁ、たまにあるんだけど…どこかに泊まったんじゃない？」

「心配じゃないの？」

「父さんが飲み会に行く時は学校の仕事がいそがしいと飲み会と言

う名前の職員会議なのよ。今回は長引いたか何かでしょ。」

「そうか…って今何時だ?」

「7時丁度よ。ご飯…食べる?」

「そうだな。食うか。」

「わかった。作ってくるから待ってて。」

「ああ。」

「…」

祐希ちゃんは行ってしまった…

「ヴィヴィオ。」

「な、何?」

「まだ、気にしてるのか?」

「あはは…もう気にしてないよ…」

「…そりゃ良かった。楽しい学校に通えるな。」

「うん…」

「…」

やっぱりまだ気にしてるな…いつものヴィヴィオじゃない。

「…」
ヴィヴィオは何も喋らない
無言の時間が過ぎる…何か話したいが、話す事が浮かばない…とりあえず洗顔をすませた。

7時半…
「ふああ。ごめん。ご飯と、焼き魚と味噌汁しか無理だったわ。」

「十分だ。ありがとな。」

「…」
ヴィヴィオは祐希奈が料理を持って来ても何も喋らない…

「ヴィヴィオ?ご飯食べないの?」

「え?あ!美味しそうだね。食べるよ。いただきます。」
今気付いたのか…

「「いただきます。」」

「今日からまた学校か〜
勉強やだ。」

「あはは。大丈夫。私が手伝うよ。」

「それなら俺は何もしなくていいな。安心だ。」

「んあ…マスター、ヴィヴィオ、祐希奈、おはよう。」
寝ぼけたメイデンが飛んできた。

「やっと起きたか。さきに顔洗ってこい。」

「わかった…」

朝食の間は少し元気になり、喋ってくれるようになった。良かった…

その後、徐々に元気を取り戻し始め、学校につくころにはいつも通りに戻っていた。

一時間目の授業…祐希奈は寝て過ごしていた。あまり寝ていないらしいので無理もない。

「祐希ちゃん。大丈夫?」

「ん〜。」

ヴィヴィオが祐希奈を心配し、祐希奈がそれに答える。いつも通りに戻っている、そう思っていた。

二時間目の最中…事件が起きた…

(三人とも!!よう聞いて!!)

(はやてさん?何?慌ててどうしたの?)

(スカリエッティ一味が動いたんや!!日本を挟むようにして両端に、最後のナンバーズ二人と大量のガジェットがな。)

(スカリエッティは!?)

(出てない…おそらく先の二人は陽動や…でも私を含む隊長陣は出撃する。)

(陽動ってわかってても、都市は守らなきゃ行けないですからね。)

（そうや！日本にも北海道側からと九州側の２つから攻めてきてる。スバル達はそこに向かわせてる。）

（私達はどうすれば？）

（待機して、スカリエッティが出てきたら足止めをしてほしいんや。ナンバーズ捕獲次第私らも向かうから頼むよ？）

（了解。）

（ほな！）

念話が切れた…

「大変なことになったね…」

「さて…スカリエッティはどこに来るかな…」

「街がないところがいいわね…」

（ロングアーチより報告！スターズ５聞こえますか！）

（はい！！）

（今…そ…）

（よく聞こえません！）

（転移…応…した！）

「転移…まさか！！」

嫌な予感は的中してしまった…
学校の周囲に魔方陣…ガジェットが転送されてきた!!

「おい!ガジェットが!」

「ヴィヴィオ!カナン!行くわよ!!」

「うん!!」
三人は走り出す!

「ちょっと三人とも授業は!」

「先生!急いで避難放送をお願いします!!私達は大丈夫ですから!!」

「避難?放送?」

「道は開けるからタイミングを間違えないでね!!」

「ちょ!!ちょっと!!」
校庭には既にガジェットが見えている。そして砲撃が放たれた…
ドーン…

「くそ!あいつら!」

「ここなら大丈夫だよ!」

「フェアリー!」
「アシェル!」
「メイデン!」

「「「セットアップ！！！」」」

変身…窓から飛び降り突っ込む！

「アクセル・ランサー！撃ち抜け！」

前方のガジェット達に狙いをつけ放つ！
まだ砲撃を放つものがいる…

「やめろーー！！！」

ザシュ！！ザシュ！！

カナン君が、空間突破斬撃を使い蹴散らす。
三型二機が校舎へと向かう。

「爆ぜろ！！烈破爆砕！」

両拳に炎をまとい祐希ちゃんが降ってくる。

「二連突！！」

ドカアアア！！

「ヴィヴィオ！校舎の裏からも来てるわ！」

「わかった！フェアリー！セカンド起動！フォームも変えて！」

「了解です。Ｓｎｉｃ　ｆｏｒｍ！」

「祐希ちゃんは校舎の上から側面を守って！」

「わかった！ブルーゲイル！」

「了解！」

「正面は任せろ！」

「うん！」

「Ｓｎｉｃ　ｍｏｖｅ！」

校舎裏へと向かう…そこにはやはり大量のガジェット…

ヴィヴィオ

「どけーー！！！」

神速で接近！すれ違うと同時に斬り飛ばしていく。

残るは前方のみ！

「風よ！！」

カートリッジ五発排出！

「薙ぎ払え！！！」

巨大なカマイタチが前方全てを消し飛ばす。

「はぁ…はぁ…これで…」

安心したのもつかの間また魔方陣が展開され、再びガジェットの壁ができる…

「くっ！！」

ミサイル一斉発射…

「はあああああ！！！」

ミサイルの群れに突っ込み片っ端から斬る！

爆風が襲うが気にしてはいられない！

「私は皆を！守るんだぁあああ！！！！」
私はガジェットの壁に突っ込み手当たり次第に斬りつけまくった。
こんなに頑張っているのに…間に合わない砲撃が校舎を破壊していく。
「！！！」
攻撃の数が違いすぎる…どんなに頑張っても…守りきれない…
「やめて！！！やめてよ！！！」
私は戦った無我夢中で…涙を流しながら…ひたすら斬った…
「ヴィヴィオ！よくもたせた！」
声が響く…
「メイデン…？」
「大地よ！汝が力！我に与えよ！グランドウォール！」
地震がおき大地が学校の周りを囲う。学校は大地の壁に守られた…
「さて…ヴィヴィオを泣かせた罪は重いぞ…」
メイデンが本当に怒っている…初めて見る…メイデンの怒り…
「雷帝よ…汝が力我が顕現せん…」
メイデンが喋ると同時に空に雲が集まり光を放つ…
「消し飛ばせ！ギルティーレイン！！」
一瞬、光で何も見えなくなった…鼓膜が破れるかと思うほどの雷…
目の前には何も残ってはいなかった。

「転移妨害の結界も張ったからここは大丈夫だ。」

「私…役に立たなかった…メイデンに迷惑かけた…ごめん。」

「いや、ヴィヴィオが頑張らなければ、壁を作る詠唱が出来なかった。十分過ぎるぞ。」

「そうかな…」

「祐希奈も苦戦している…助けに行かないと。」

「うん。」

祐希奈

「メイデンが学校の周囲をを守ってくれたのはいいんだけど…上は私が守らないとね…」

大地の壁は上は囲えていない…ということはガジェットの大半がこちらに来る…

「やっぱりか！！」

大量の空戦ガジェットが向かってきた！

「アシェル！撃ち落とすわよ！」

「了解！」

「ブルーゲイル出力全開！」

「Ｒｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！」

「…」

無言で弦を引く…祐希奈の周囲に無数の矢が形成される…

「行けー！！！」
弦を放すと一斉に放たれガジェットに殺到する。
ブルーゲイルの能力は絶対必中…全て直撃。撃墜する
「まだ…ね。」
次々と魔方陣が展開され転移されて来るガジェット

「キリがないわね…」
カートリッジは残り五発…

「ギリギリまで粘るか…」
一発ずつ排出し、ガジェットの波を防ぐ…

「ラスト！」
最後のカートリッジを排出すると同時にブレードを構える。

「はあああ！！」
転移されてきた瞬間に斬り飛ばす。

「いつまで…もつかな…」
体力がなくなったら…そう考えていると近くに巨大な雷が落ちた…

「メイデンか…もう少しね…」
助けが来るまでは持たせる！！
しばらくは、均衡が保たれていた…

「はぁ…はぁ…」
祐希奈の息が乱れ始めるとそれも崩れる。
徐々にスピードが落ちてくる…
その横を一機が通り過ぎた…

「くそ！！」
一機を追いかけて斬る。追いかけたタイムラグで次々にガジェットが迫る。

「あ…」
斬れなかったガジェットが数機校舎へ…

「祐希ちゃん！ありがとう！」
ヴィヴィオの声が響くとほぼ同時にガジェットは撃墜。
続いて自分の周りのガジェットも撃墜されていく…

「メイデン！封鎖して！」

「了解した！」
結界を張り転移を止めた…

「ふぅ…ギリギリね…」

「次はカナン君だね…」

「いや…マスターなら大丈夫だ。それより生徒や職員に避難の準備をさせよう…」

「校内放送を使えば…出来るわね…」

「うん！急ご！」

「私はマスターと合流してガジェットを蹴散らす！そっちは頼んだ！」

「任せなさい！」
校内に突入し放送室へ…変身をとく…

「皆さん落ち着いて体育館に！」
運良く放送をしていたのは雅樹さんだった。

「待ってください！皆を学校の正面に集めてください。」

「ヴィヴィオさん…どうして？」

「今、裏口は封鎖したので敵で溢れています…その裏口の敵が正面に回り込む前に、抜けましょう…」

「しかし…」

「父さん。大丈夫よ。私達が守る…」

「…わかった。皆さん！話は聞きましたね？護衛がいます！正面玄関に集合してください！」

「じゃあ、私達も行きますね。」

「父さん。またね。」

「気を付けるんだよ？」

「はい！」

「了～解！」

再び屋上へ向かう。

カナン

（カナン！これから皆を避難させるわ！とりあえず前のガジェット全部斬り飛ばして！）

（おっしゃ！）

（私達もすぐにそっちにいくから！）

（おう！）

「マスター！ユニゾン行くぞ！」
メイデンがこちらに飛んでくる。

「わかった！」

「「ユニゾン・イン！」」

「この天候なら雷を使える！やれ！マスター！」

「任せろ…六式抜刀剣術！」

「雷帝降臨！」
雷が剣に落ち纏われる…

「絶空！青龍破！！」
カナンから周囲五十メートルに雷が降り注ぎガジェットを消し飛ばした…

「開け！大地の門！」
学校の正面から大地２つに割れ道が出来る。
「全員！！走れーーー！！！！！」
教師が叫ぶ。慌てず騒がずなど実際には不可能である…一斉に走り出す。
「祐希ちゃん！」
「行くわよ！」
突撃！転移されてくるガジェットを斬る。念話が妨害されたことから学校の中では転移不可能…ガジェット達も外から来ているため間違いない…
「「「はあああああ！！」」」
斬る…皆を逃がすために自らの危険は考えず…斬る。
「もうすぐ！終わりだ！」
「「了解！」」
「きゃ！」
誰かがこけた！
「立って！急がないと！」
友人だろうか…助けようとしている。
「ピーガガ…」
ガジェットの一機がそちらに気付き砲撃を放った。

「っ！」
「Ｓｎｉｃ　ｍｏｖｅ！」
声がした方に動く…
ドン…
「ぐあ！」
薄いバリアジャケットから衝撃が襲う…
「は、早く…逃げ…て。」
「「ヴィヴィオちゃん？」」
目の前にいた二人は美鈴ちゃんと神楽ちゃんだった…
「な、何でヴィヴィオちゃんが…」
「ヴィヴィオ！急…げ。」
「何してる…美鈴…神楽」
「カナン君に祐希奈？」
「っ！マスター！早く！」
「美鈴ちゃん！神楽ちゃん後で話すから逃げるよ！」
「「う、うん！」」
最後の二人を護衛し、送る…ロングアーチが転移をしてくれ死傷者

はなし…

「バレたか…」

「ま、仕方ないわね。」

「とりあえず後回しだね。」

「うむ。」

パチパチパチ…

拍手が響く…そこには…

「いや～よく頑張ったねえ…ゴミを助けるために…ね。」

「ジェイル…スカリエッティ…」

「まさかここに襲撃してくるなんてね…覚悟は出来てる?」

「ちょっとお仕置きが必要みたいだね…」

「どうだい?楽しんでくれたかな?」

「「「ぶっ飛ばす…」」」

「おやおや…出来るかな…」

「グングニル…か。貴様…管制人格を消しただろう…」

「そうだけど?ユニゾンデバイスごときが僕に何のようかな…?」

「貴様だけは…許しはしない…」

「ははははは！これは傑作だ。そんなちっぽけな存在に許しをこうとでも？」

「「「「黙れ！！！！」」」」

「ほう…」

「生きてるのを後悔するぐらい…痛め付けてやるからな。」

「私…そういうのは得意よ。」

「今回は私も協力するよ…」

「そうか…じゃあかかって来てくれ。」

「「言われなくても！」」

「「行ってやる！！」」

激闘の火蓋が切って落とされた。

「はあああ！」

ギァン！

「この程度かい？」

「くっ！まだまだ！」

スピードを生かし、背後に回り込み斬りつける。が、

ギァン！

「データではかなり速かったのに、実際に戦うとそうでもないね…」
ありえない…ただの科学者がこの速度についてくる…

「さて、次だ。」
ブン！

「きゃあああ！！」
軽く吹き飛ばされ校舎に激突…

「スパイラルフレア！！」高熱の矢が迫る。
パシッ…

「なんだいこれは？」

「嘘…」
燃え盛る矢を素手で受け止めた…

「壱式抜刀剣術！」

「Ｓｎｉｃ　ｍｏｖｅ！」

「暗夜！一閃！」

「ウインドスラッシャー！！」
側面から超速で二人がせまる。
ガキッ！

「う～ん。まだこんなものかい？」

「「っ！」」
反応をされただけでなく、両腕を盾にして防がれた…

「つまらない。」
ブンッ
再び腕が振られ飛ばされた…

「わあああ！」

「きゃああ！」
ドーン…
ヴィヴィオはともかく、ユニゾンしたカナンまで…

「あんた…どういう体してんの…」

「ちょっと、自分の体を強化しただけさ。」

「体を…強化？自分で？」

「ああ。内蔵なんかは綺麗だったねえ。」

頭がイカれている…これがスカリエッティ…確かに何をしていてもおかしくないわ…

「祐希ちゃん。こんなおかしな奴と話しちゃダメだよ…」

「お前までイカれる…やめとけ…」
吹き飛ばされた二人が戻ってきた。

「おかしな奴とは失礼だな。君だっておかしな存在だろう？」

「っ！！」
こいつ！ヴィヴィオのトラウマを知っている！？
「ヴィヴィオが？んなわけないでしょ…優しい、いい子よ！」
弓が放たれる。
「お前と…同類にするな！」
矢と同時に斬りかかる。
「まぁ聞きたまえ…そこのヴィヴィオだったかな？どうでもいいがね…人間ではないのだよ…」
その全てを捌き、スカリエッティは話す…
「黙れ！違う！！私は…人間…人間だもん…」
昨日の今日で傷口を抉られる…
「作られた存在で人間を名乗るなんてね。」
「作られた？バカなこといってんじゃないわよ！！」
祐希奈は怒涛の超連射を放つ。
「それが本当なんだよ。」余裕の笑みでグングニルを振り矢を吹き飛ばす。
「黙れ…」
ヴィヴィオが砲撃を溜める…
「そこにいる奴はね…人間の皮を被った化け物なんだ…」

「違う！違う！違うよ！私は人間！」
砲撃が放たれるが片手で防ぐ。
「何が違う？証明してあげようか？」
「うるさい！私は…私…は」
「ほら！行くよ？」
砲撃の中を突き進む。
「なっ！ヴィヴィォ砲撃をやめろ！」
叫ぶがヴィヴィォには聞こえない…ヴィヴィォは精神がこわれかけていた…目に光がない…
「残念だったね…遅いよ…」
「あ…」
グングニルが大上段から振り下ろされ…ヴィヴィォに直撃した…ほとんど持ち上げただけに等しい剣で受け止めはしたが、凄まじい速さで地面に叩きつけられ…クレーターが出来た…
「がは！」
ヴィヴィォの口から血が吹き出した。
「「ヴィヴィォ！」」
急降下しヴィヴィォのもとへ…
「…カナン君…祐希ちゃん…ごめんなさい。」
「ヴィヴィォ！何、謝ってんだよ…謝ることなんてないだろ？」

「ううん…私…二人に…黙ってた…私は…古代ベルカの王のクローン…聖王之器として…生まれた存在…」

「なっ！」

「わかったかい？人間じゃないってことが。普通の人間なら今ので死んでいるよ…ククク。」

「ごめん…なさい。私…人間…じゃないんだ…あいつの…言ってたことは…全部…本当…」
ヴィヴィオが泣いている…

「バ～カ。何言ってんのよ。」

「え…？」

「ああ。今回はおれも言わせてもらう。ヴィヴィオ。お前はバカだ。」

「え？…え？」

「確かに。ヴィヴィオはバカだな。」

「…」

「あんなイカれた頭してる奴の言うことなんか信じないわよ。ヴィヴィオは人間…私達と同じ。」

「でも、本当に…」

「ここでは私が法律。私が人間って言ったら人間なのよ。反論は誰にも許さない…例え、世界一偉い人でもね。次、反論したら殴るわよ♪」

「だとさ。だいたい俺だって地面に叩きつけられたくらいじゃ死なないぞ。日頃の俺見たらわかるだろ？
祐希奈にあんだけ、どつかれても生きてるんだぜ？ヴィヴィオも体が丈夫なんだよ。」

「むしろ、マスターが人間ではないのかもな。」

「ひでえ！！」

「うん。確かにそうね。」

「納得するなよ！！」戦闘中とは思えない会話。

「あは…あははは！二人共…喧嘩はダメだよ？」
笑った…ようやく、心から笑ってくれた。この笑顔を…守る。

「そうだな。ダメだな。」
「その喧嘩の種を作ってヴィヴィオを泣かせたんだから…」

「「手加減抜きで…ぶっ飛ばす…」」

「わかってるじゃない。」

「当たり前だ。ヴィヴィオ。お前は休んでろ。俺達がやるから。」

「うん。頑張って。」

「僕をぶっ飛ばすだって？親切に教えてあげたのにひどいな…」

「ああ。だから親切なてめえに礼だ…しょうもないこと教えてくれてありがとな…」

「お礼はきっちり払わせてもらうわ…」

「「オーバーキルで…」」

瞬間二人から殺気全開…今まさに本気で二人はブチキレた。

次回に続く。カ

「いや…スカリエッティどんだけ強いんすか…」

ヴ

「化け物になってるね。」祐

「本当なら一話で終わる話が終わらない…予定を変更しちゃった作者…あ～あ私の活躍が…」

ヴ

「大丈夫だよ。この作者の取り柄の高速更新があるからすぐに見れると思う。」カ

「それしかないがな…」

祐

「ザコのガジェットぐだぐだ書いてるからよ！！」

メ

「まあまあ…祐希奈落ち着け。」ヴ

「それにしても、メイデン強くない？」

メ

「まあ、気にするな。」

カ

「俺、今回出番があんまりないな。」

祐
「次回はあるわよ♪前書きか後書きでね♪」
ヴ
「多分後書きになりそうだけど。」
カ
「つまり…俺に消し飛べと？」
祐
「うん♪」
カ
「逃げるからな！！」
祐
「まぁ…頑張って。」
カ
「何その投げやりな応援！？」
ヴ
「カナン君…死んじゃやだよ？」
カ
「タカトさんに手加減してくれるように頼むよ…」
祐
「男なら！真っ向から立ち向かいなさい！あんたまだ隠してる技があるんでしょ？この前言ってたらしいし。」
カ
「だから、模擬戦で使える技じゃねえよ！」
祐
「じゃあ散りなさい♪言っとくけど、手加減はさせないわよ♪」
カ
「何でだよ！」
祐
「面白いからよ♪」
カ

「ドS女め…」
祐
「トュース！！」
バキャッ！
カ
「わけわからんー…」
ヴ
「あはは～そろそろ終わるね～。」
メ
「ではな。また次回に。」
祐
「バーイ♪」

第十一話　襲来（後編）

ヴ
「まずは謝罪です。前回作者のミスで同じところがありました。」
ヴ・祐・メ・ヨ
「すいませんでした。」
祐
「さて、私に頭をさげさすなんて…あの作者…しばかなきゃね♪」
ヨ
「かかってこいや！出番減らすぞ！？」
祐
「へえ…いいの？私がいなくなったら困るのはあなたでしょ～？」
ヨ
「う…」
ヴ
「祐希ちゃんはよく喋るからね～。いなくなると間がもたないよ？」
メ
「確かに。ヴィヴィオにもマスターにもゲスト召喚されようがゲストを召喚しようがツッコミを入れられる逸材だからな。」
祐
「さあ…今なら許してあげるわよ？」
ヨ
「すいませんでした！！」
バキャッ！！
ヨ
「何故ー…」
祐
「蹴り十発でね♪」
ヨ

「自分が作ったキャラながら…手に負えない…」
祐
「二発目ー♪」
ヨ
「ふん！」
ドロン…
ヴ
「あ、逃げた…」
メ
「見事に逃げたな…」
祐
「ちっ！」
ヴ
「作者はほっといて、カナン君は？」
祐
「カナンならもう既に逃げてるわよ？」
メ
「もう！？いくら何でも早すぎるぞ…」
ヴ
「それだけ死にたくないんだね…」
祐
「まあ無駄だけどね。」
ヴ
「だろうね…タカトを使うの？」
祐
「タカトを使うまでもないわ。まぁ後でわかるわよ♪
もちろんタカトには最初に一発殴ってもらう大役をやってもらうわ♪」
メ
「シオンとやらは邪魔するのではないか？マスターの友達だろう？」

祐
「シオンは先に仕留めるわ♪」
ヴ
「召喚させてもらうのに仕留めるの？」
祐
「もちろん♪カナンに味方するものは潰すわ♪」
メ
「祐希奈だけは敵に回したくないな…」
ヴ
「何されるかわかんないもんね…」
祐
「さて、雑談はやめて本日の質問コーナー♪」
ヴ
「今回は一件だけなんだね。」
メ
「いや、答えられないような質問は省いただけだ。」
ヴ
「答えられない質問なんてあるの？」
祐
「知らない方がいいわ…」
ヴ
「う、うん。わかった。」
ヴ
「では質問。この間クラウンとクロスしていましたよねふと思ったのですが、クラウンとメイデンどっちが強いんですか？」
祐
「ついにシルフレのクロスに対しての質問がきたわね…」
メ
「聞かれても答えづらいのだが…おそらくとしか言えないが単体戦

闘に関しては私に分があるかもしれないが、ロードに対してのサポート速度は勝てないだろうな。」

ヴ

「クラウンちゃんは相性が悪くても合わせられるからね。」

祐

「まぁ、あくまでも予測だし、クラウンもまだまだ実力隠してそうだから、わかんないんだけど。」

メ

「そういうことだな。」

ヴ

「じゃあ質問も終わったし本編に移ります。」

祐

「ヴィヴィオのごとく！始まるわよ♪」

ヴ・メ

「いつまでやる気だろう…」

「ははははは！！傑作だ！！さっきは僕に傷一つつけられなかったのに、まだ向かってくるなんてね！」

「うるせえよ…黙れ…」

「ほう…」

上空にいたスカリエッティの背後には既にカナンがいた。上段の構えギァン！

スカリエッティは腕を持ち上げ防ぐ。

「残念。届かなかったね。スピードはたいしたものだ、一瞬とはいえ僕が反応が遅れた…」

「黙れっつってんだよ！！」
ギリギリギリ…
「なっ！」
カナンの剣が徐々にスカリエッティを押し始める。
「落ちろーー！！！」
腕が振り抜かれ、スカリエッティは地面に叩きつけられ大の字になった。
「強化された僕を…」
「だから黙れって言ってんのよ！！」
流星のように祐希奈がスカリエッティ目掛けて降ってくる。最速の勢いで突きを放つ。
「この程度、効くと思ってるのかい？」
ギァン！
グングニルの腹で受け止める。
「アシェル！カートリッジロード！」
薬莢が三発排出される。
「Ｂｌａｄｅ　ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！」
「へえ…」
スカリエッティは感心したように自らに放たれる爆発を見ていた…
グラウンドが揺れた。祐希奈の大爆発によってだ。

「カナン！やりなさい！」
祐希奈は離脱。
「エクス！」
黄金の光が掲げられ蓄積…
「カリバー！！」
まだ黒煙が残る中へと放たれる。もう一度大爆発が起きた。
予告通りのオーバーキル…しかし

「いや～凄いね。少し驚いてしまったよ。」
煙が晴れるとそこには未だ無傷のスカリエッティが立っていた。

「化け物め…」
カナンが毒づく。

「意外だな…君達は１２か１３才…その年齢でこの大威力を放てるのだから君達の方が化け物と言う言葉がふさわしいだろう？。」

「黙れ。変人。」
いつにも増して祐希奈の口調が悪い…

「おやおや…ではこちらからも行くよ…」
先程のカナンのように祐希奈の背後にスカリエッティが出現。

「！！」

「バイバイ。」
降り下ろされるグングニル…

「女を先に狙うなんて…カスだな…」
ギァン！

カナンが刃を受け止めていた。

「よく反応したね。そう言えば君には、便利な希少技能があったね。空間突破と空間把握だったかな？」

刃を交えながら問う。

「俺から周囲５０メートルは…お前が何をしようとわかる…」

「それは凄いね…じゃあ、彼女を守りきってごらん…」

スカリエッティの姿が消え祐希奈の正面へ。

「やらせるか！！」

再びカナンが受け止め、スカリエッティの姿が消え祐希奈の側面へ、さらにカナンは受け止める。

祐希奈の周囲には閃光が走り凄まじい斬り合いが続いていた。

「アシェル！フルドライブ！」

「Ｆｕｌｌ　Ｄｒｉｖｅ　ｓｅｔ　ｕｐ！」

広がる白銀の翼。右腕のブレードが燃え上がる。

「メイデン！行くわよ！！」

「任せろ！」

「烈閃！烈火！」

「水竜！降臨！」

立ち上る火柱。その周囲にとぐろをまく水竜。

「火竜！一閃！」

長大な炎剣をスカリエッティに降り下ろす。
「あたると思ったのかい？」
余裕の笑みで灼熱の剣を避ける。

「カナン！」

「おう！」
カナンと祐希奈が合流。翼に包まれる。次の瞬間！
響きわたる爆発音…水竜に直撃した灼熱の剣は、水蒸気爆発を起こし、三人を炎の海に飲み込んだ。

「きゃあああ！」

「うわあああ！」
防御しているとはいえ、衝撃で吹き飛ばされた祐希奈とカナン。

「いたた…あんなに凄いなんて…」

「お前ら無茶苦茶だな…」

「マスター。ありがとう。」

「誉めてねえよ！！」

「さて、どうかしら…」

「魔法で攻撃したのと違って、魔法で起こした爆発のダメージだからな…死んだかもしれん。」
メイデンが言った。

「あいつが、死んだら罪になるんだよな…」

「多分ね。」

「その心配はなさそうだぞ…」

「ははははは!!素晴らしい今のはなかなかいい攻撃だよ!」
血を流してはいるが…傷が浅い…

「今のであれだけか…相当体をいじってやがる…」

「まだまだかかりそうね…」

「もう少し本気を出してあげよう。やはり…レディーファーストだね。」

「いいわよ…ちゃんとエスコートしなさい…」
ブレードを構え気を張る…
消えた…来る!
正面にスカリエッティが見えた。

「ほら!」
ギァン!

「くっ!」
重い…今まで受けたどの攻撃より…

「ほら!ほら!ほら!」
ギァン!ガキ!パキン…

「あ…」
ブレードが耐えきれず折れた…

「俺もいるんだよ！」
カナンが背後から斬りつける。
ギン！
「まったく、今はこの女の相手をしているのに。」
スカリエッティは腕を使ってすらいない…背中でカナンの剣が止まっていた…

「なっ！」

「邪魔だよ！」
蹴り上げられる右足はカナンの腹へと入った…

「ごはぁ！！」
カナンは背後に存在していた校舎に突っ込み、正面玄関を破壊し、飛んで行った。

「くそ！よくもカナンを！」
ブレードを再生し斬りかかる。

「おや？怒らせたかい？」
まだふざけている。

「なめるなぁ！！」
「Ｒｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！」
六発全て排出。
吹き上がる炎の剣を下段から切り上げた。
「火竜！！！一閃！！！」

スカリエッティはグングニルに受け止める。

「なかなか熱いね。」

「ぐっ！」

ブレードが進まない…スカリエッティ手前で動かない…

ピキ…

「でも…力不足だね…」

ブレードにヒビがはいりだし…広がっていく…

「嘘…」

パキン…

再びブレードは折れた…

「仲良く吹き飛べ。」

ドゴッ！

みぞおちに衝撃…痛みはわからない…

「がはっ！！」

口から血が吹き出した。カナンと違う所は校舎に叩きつけられ止まった所。

「止めと行こうか。」

眼前に迫るグングニル…

「く…そ…」

私は諦めた…勝てなかった…父さん…ヴィヴィオ…カナン…ごめん…

死を覚悟し、目をつむった
その時…声が聞こえた…
「七式抜刀剣術…」
カナンの声だ…

「双竜…青雷陣!!」

「がっ!」
スカリエッティが私から引き離されると同時に地面がスカリエッティを中心にクロスに割れる。

「…」
キン…ピシャーン!!
カナンが納刀すると雷が落ち、スカリエッティを直撃した。

「うあああああ!!」
油断していたせいか、斬撃をまともに受け、雷も直撃したスカリエッティは膝をつく…血が出ている?非殺傷じゃない!!

「俺の仲間を…お前は傷つけた…てめえは許さん…お前も身を持って償え…」
カナンが怖い…こう感じたのは初めてだった…先程まではカナンは本気で怒っていなかったのだろうか?
比べ物にならないくらい怖い…カナンが剣を振り上げる…

「カナン君…ダメだよ…」
「…」
その声にカナンが止まる。
今まで戦闘空域から離れていたヴィヴィオがだった…

「ヴィ…ヴィオ?ダメ…今のカナンは…」
「大丈夫…カナン君なら。」

「怖く…ないの?」

「怖いよ。でも、迷った友達を助けるのも、カナン君の友達の私達がやらなきゃ。祐希ちゃんは怪我してるし今回は私がやるね。」
そう言って進んでいく…ヴィヴィオの体は震えていた…

「カナン君、そんなことしちゃだめ。」
「こいつはお前らを傷つけたんだぞ…こいつだけは許せない。」

「私だって、そんなやつ殺したいくらい嫌いだよ…」

「なら。」
「でもね、もし殺しちゃったら、罪になるってこと、忘れてない?」

「…」

「殺人は罪なんだよ?相手がどんなに悪人でも殺しちゃったら、自分も悪人になるんだよ?
カナン君まで捕まっちゃうのはやだよ…私、まだ一緒にカナン君や祐希ちゃんと学校に通ったり遊んだりしたい。こんな私でも、受け入れてくれた二人と一緒にもっともっと一緒にいたいよ…いつもの優しいカナン君に戻って…お願い…」
涙目になりながらヴィヴィオは訴える。

「俺はお前を泣かせてばかりだな…」
ギュ…

「え…？」

「ごめんな…」

「うん。」

「ありがとう。」

「うん！」

「ふふふ…ははははは…ははははは！！！」
今まで黙っていたスカリエッティが突如笑い出す…

「何かと思って聞いていたら…面白いことになってるじゃないか…楽しませてくれたお礼に教えてあげるよ…君が抱いているそれのせいで私は君の母親と父親を殺したのさ…子供は生き残ってしまったがね…」

「何だと？」

「君の親は僕の下で働く科学者だった…」

「…」

「その時僕は聖王之器のクローンを開発していてね…その研究に君の両親も関わっていたんだ…」

「な…に…？」

「ところが君の両親達は善良な人間だったみたいでね…研究に耐え

られず逃げたんだ。これは大事だろう?何せ情報が漏れる可能性が出てきたのだから…早速始末するために四型を大量に送ったんだがね…失敗したよ。何故か…それはね…君の親のせいだよ。」
祐希奈を指さす…

「私の親?」

「一人の女が邪魔してくれてね…逃がしてしまった…もちろんその女は始末したよ。」

「お前か…母さんを殺したのは…」

「そうなるかな。まぁそのせいで一度は逃がしたんだが、その後、六課襲撃の時に偶然見つけたんだ…君の両親をね…後は知っての通りさ。
ミッドの病院に運ばれたあと…君の親は地球出身と言うことが判明…地球の病院に移されたあと、親戚を頼って今に至るというわけさ。とにかくわかったかい?君達の親が死んだのはそれが生まれたからなんだよ。」

「私が生まれたから…カナン君の両親や祐希ちゃんの母親が死んだ…私のせいで…」

「ヴィヴィオのせいじゃない…悪いのはあいつだ」

「カナン君…」

「スカリエッティが母さん達を殺したんだから…ヴィヴィオにはなんの罪もないわ。堂々としてなさい。」

「祐希ちゃん…」

「第一あいつが全て真実を言っているかさえわからん。」

「メイデン…」

「まぁ信じる信じないは君達の勝手だがね…それじゃ私は逃げるとするよ。」

「何!?」

「いくら私でもこの人数を相手にするのは面倒だからね。」

「え?」

周囲を見渡すと六課メンバーが集結していた。

「三人共!大丈夫か?」

「大丈夫じゃないみたいだね…ぼろぼろだもん。」

「カナンはどうでもいいけど、ヴィヴィオと祐希奈を傷つけた貴様は…許さない…」

「フェイトさん!?ひどくないっすか!?」

「カナンも後でお仕置きだからね…」

「何故に!?」

「女の子二人に怪我をさせるなんて…男失格だよ…」

「情けは…？」

「なし…」

「…」

「次は僕も本気で行くからね…覚悟しといた方がいいよ…」
魔方陣が展開される

「待てこら！！」
斬りかかる。

「じゃあね。ククク。」
ブン…

「逃がしたか…」

「撃ち抜け…雷神…」
「Ｊｅｔ　Ｚａｎｂｅｒ」ギァン！！

「はーはーは…フェイトさん！何するんすか！！」

「何って…お仕置き。」

「さも当然のような顔をして言わないで下さい！！」

「うるさいな…トライデント…スマッシャー…」

「絶空！」

キィン！

「防いじゃダメだよ…お仕置きなのに。」

「カートリッジ使ってまでしないで下さい！！」

ピシッ

「へ？」

「へえ～バインドって簡単なのね♪」

「待て！何でいきなりこんな展開になってんだ！？普通スカリエッティの話題になるんじゃないのか！？」

「おもしろそ～。私も混ぜて～♪」

「じゃあこのＫＤＧ入団手続きをしてね♪」

「スバルさん！？ダメだって！！祐希奈も話聞けよ！！」

「はいは～い。スカリエッティ逃がした鬱憤を晴らしたい人はこれにサインをお願いね～♪」

「最近ストレス溜まってるしサインするわ。」

「ティアナさん！！俺で発散する気っすか！？」

「あ、私もやるわ♪」

「はやてさんまで！？」

「フェイトちゃんもはやてちゃんも入るんなら私も入ろうかな。」

「なのはさん!!あなたは一番いけませんって!!」

「フフフ…一気に会員が増えたわ…」

「のおおおお!!!」

「じゃ…お仕置きの続きと行こうか…」

「「「「さんせーい♪」」」」

「賛成すな!!!!」

「一斉砲撃構え♪」

砲撃が溜められる…

「メイデン…ユニゾンといて逃げろ…」

「いいのか?」

「お前まで付き合うことはないからな…」

「わ、わかった。」

「また…会えたらいいな。」

「縁起でもない…やめてくれ。」

「はっはっはーいい人生だった…」

「発射♪」
ドーーーーン…
「カナン君…大丈夫かな…」
「まぁ、マスターなら大丈夫だとは思うが…」
「なんて死ぬと思うかーー!!!」
「ほらな?」
「相変わらず凄いね。」
「逆襲してやる!!!」
「きゃあああああああ!!」
六課メンバーに斬りかかるカナン君。
「多分ママが怒るよ?」
「逃げるか…」
「うん。」
「カナン…」
「…」
カタカタカタカタ…

「男の子なんだからそんなことしちゃいけないよね…」
そこに…悪魔がいた…白い悪魔が…元祖ダークオーラ全開…

「で、でもですね。今回は祐希奈が、」

「問答無用…」

「…マジで？」

「マジで…」
いつの間にか六課メンバーが消えて俺となのはさんだけの空間が出来ていた…

「全力全壊…」

「待って！全開っすよね！？」

「スターライト…」
どす黒い魔力が溜められる…
「いやもう、スターでも、ライトでもないんですが…」

「ブレイカー！！！」

「やっぱり…こうなるのね～…」
キラーン…
一同
「出張道場インジャパンの提供でお送りします♪」

祐希奈
「どうも皆さんこんにちは。ＫＤＧ隊長の祐希奈です♪」

ヴィヴィオ
「アナウンサーのヴィヴィオです♪」
メイデン
「み、皆のアイドルメイデンだ…とてつもなく恥ずかしいんだが…」
祐希奈
「こういうのは恥ずかしがったら負けなのよ♪」
ヴィヴィオ
「本編はよくわかんない終わり方したね～。最終的にはスカリエッティ無視だもんね。」メイデン
「それがこの作者の凄い所だ。ボスキャラを無視。普通ならあり得んぞ…」
祐希奈
「次回は無茶苦茶になった話の整理をするらしいから大丈夫よ。」
ヴィヴィオ
「そうなの？」
祐希奈
「ええ。ま、その話はおいといて…出でよ！シオン！」
パアアアア…
シオン
「あれ？道場？なんでだ？」
祐希奈
「違うわよ。出張道場って書いてあるわ。つまりこの道場は、アリサに借りたのよ♪」
ヴィヴィオ
「ちゃんと返すから安心してね？」
シオン
「そ、そうか。ところでカナンは？」
祐希奈
「デストローイ！」
バキャッ！

シオン
「げふぅ…」
ヴィヴィオ
「いきなり行ったね…」
祐希奈
「さて、邪魔者はいなくなったわ♪出でよタカト！」
タカト
「お、ようやく出番か。祐希奈殿、ヴィヴィオ暫くぶりだな。」
ヴィヴィオ
「あれ？タカト今日は喋れるの？」
タカト
「まぁ、大丈夫だろう。」
メイデン
「タカト…さん？」
タカト
「ん？誰だ？」
メイデン
「マスターカナンのユニゾンデバイスのメイデンだ。」
タカト
「そうか。よろしく。」
メイデン
「よろしく。」
祐希奈
「で、タカト早速で悪いんだけど、ここに構えをとって、私がいいって言ったら天破なんとかってのを出して。」
タカト
「祐希奈殿の願いなら仕方ないな。わかった。」
すう…
祐希奈
「出でよ！カナン！」パアアアア

カナン
「え？」
タカト
「天破紅蓮！」
＞爆＜
カナン
「こぼへ！！」
ズシャアアア…
ヴィヴィオ
「うわ～…」
祐希奈
「タカトナイス♪」
タカト
「ありがとう。」
パチン！
タッチがかわされる。
カナン・シオン
「いきなり何すんだ！！」
ヴィヴィオ
「わ！二人とも息ピッタリ。」
メイデン
「さすが武器の元ネタが同じだけはあるな。」
祐希奈・タカト
「ちっ！生きてたか…」
ヴィヴィオ
「こっちもピッタリだよ？」
メイデン
「元祖６６６と二代目６６６だからな。」
シオン
「タカ兄！？なんでここにいるんだよ？」

タカト
「お前の知ったことではない。」
祐希奈
「細かいこと気にすると禿げるわよ♪」
カナン
「そのネタはもういい！！」
シオン
「因子がないのにこのカオス空間…カナン…なんとかならないのか？」
カナン
「すまん…祐希奈がいる以上無理だ…」
タカト
「天破水迅！」
カナン・シオン
「ぎあああああ！！！」
祐希奈
「フフフ…私に失礼なことを言ったらこうなるわよ…」
ヴィヴィオ
「あはは…二人とも頑張って。」
メイデン
「応援しているぞ。」
シオン
「ところで、そこの金髪のちっこいの誰だ？」
メイデン
「ちっこい…ちっこいって言われたぁ…」
タカト
「俺の仲間を侮辱するとは！」
シオン
「タカ兄！？何故キレる！？」
タカト

「祐希奈殿の仲間は俺の仲間も同然だからな。」
シオン
「仲間意識早！！」
ヴィヴィオ
「タカト～喧嘩はしないでよ～。」
タカト
「…ヴィヴィオがそう言うなら仕方ないな。」
シオン
「で？金髪美少女お前は誰だ？」
メイデン
「び、美少女！？わ…私は美少女などでは、ない…と…思う…」
カナン
「シオン、こいつはメイデンって言うんだ。ただ極度の恥ずかしがりやでな…」
シオン
「それはやっちまったな…」
祐希奈
「さすがシオン♪地雷を踏むのがうまいわね♪」
シオン
「言うなよ…自分でも悲しくなるから…」
ヴィヴィオ
「シオン君、祐希ちゃんの言葉をいちいち気にしてたら心が壊れるよ？」
シオン
「怖！！」
カナン
「事実だ…」
タカト
「ところで、今回もお菓子を持って来たんだが…食べてくれるか？」
ヴィヴィオ

「タカトのお菓子大好き～♪」
メイデン
「私も以前から食べて見たかったんだ。」
祐希奈
「タカトを呼べばこれがつくからさらにお得よね♪」
タカト
「ちなみに今回はシオンとカナンの分もある。」
カナン
「俺甘いものは…」
タカト
「心配するな。甘くないから。」
カナン
「なら食べます。」
シオン
「タカ兄のお菓子久しぶりだな。」
ヴィヴィオ
「タカト～今回のお菓子何なの？」
タカト
「イチゴショートだ。」
祐希奈
「随分シンプルね。」
タカト
「シンプルだからこそ、奥が深い…最高の味を出したくなるってもんなんだ。」
カナン
「わかるっすよ…ジャンルは違えど俺もラーメンは醤油を極めた男っすから。」
タカト
「そうか…お前とは仲良くなれそうだな。」
カナン

「じゃあＫＤＧの脱退をお願いしたいっす。」
タカト
「それとこれとは話が別だ。」
カナン
「…くそぅ。」
タカト
「話が長くなったな。さぁ食べて見てくれ。カナンにはこれな。」
カナン
「抹茶ケーキ？」
ヴィヴィオ
「わぁ…美味しい～。」
祐希奈
「へえ…イチゴショートってこんなに美味しくなるんだ…」
メイデン
「苺も甘いぞ。」
タカト
「今が一番ベストな旬の苺を取り寄せたからな。」
カナン・シオン
「のわあああああ！！！！」
ヴィヴィオ
「わ！？どうしたの！？」
カナン
「か！！辛い！！！めちゃくちゃ鼻がいたい！！」
タカト
「ワサビケーキだからな。」
カナン
「ひいいいいい！！！」
シオン
「タカ兄なんで俺のまで辛いんだ！？色は白いぞ！？」
タカト

「巧妙に唐辛子を混ぜるのには苦労した…ちなみに苺は全て唐辛子コーティングだ。」

シオン

「があああああああ！！！」

ヴィヴィオ

「あ～そろそろ時間だね～。」

祐希奈

「え～せっかく楽しくなってきたのに～まぁ3話に一度借りるけど…」

メイデン

「あれは本気だったのか！？」

祐希奈

「いや、まぁ、ネタが浮かばなかったらかもうやめてコメントが来ればやめるわよ♪」

ヴィヴィオ

「そんなギリギリのことしないでよ…」

カナン

「のわあああああ！！！」

祐希奈

「うっさい！！」

バキャッ！

カナン

「ごは！！」

シオン

「ひいいいいいい！！」

祐希奈

「ヘタレオンは黙ってなさい！！」

ドゴッ！！

シオン

「ぬあ！！」

タカト
「…」
ドゴッ！！
シオン
「がは！！」
ヴィヴィオ
「タカト…今のは…ちょっと危なくない？」
タカト
「心配ない。」
カナン・シオン
「お前らいい加減にしやがれ！！」
祐希奈・タカト
「死ねぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」
ドカッ！！バキャッ！！ズドン！！
カナン・シオン
「…」
ピクッ…ピクッ
メイデン
「…タカトさんをＫＤＧに入れたのは間違いだったのではないか？
マスター達、死にそうだぞ？」
祐希奈
「もちろん正解よ♪楽しいじゃない♪」
タカト
「確かに楽しいな。」
ヴィヴィオ
「あはは…じゃあ終わるね～」
カナン・シオン
「ではまた次回～♪」
ヴィヴィオ
「ディストラクション！！ブレイカー！！」

カナン・シオン
「ぎゃあああああああ！！！」
ヴィヴィオ
「ふぅ…セリフとっちゃやだよ？」
祐希奈
「あんたが一番怖いわ…」
タカト
「見事な一撃だ。」

第十二話　強くなる為に…

ヴィヴィオ
「読者の皆さんお待たせしました。作者が部活で遠征に行っていたため更新が遅れたそうです。」
ヨシュア
「申し訳ないです。宿舎で執筆予定だったのですが…眠気に負けました…」
祐希奈
「情けないわね…」
カナン
「まったくだ…おかげでまた質問がたまったじゃないか…八件もどうする気だ…」
ヨシュア
「また舞台裏で一気に答えようかなと…」
ヴィヴィオ
「舞台裏…何気に人気高いんだよね～。」
メイデン
「どの作品でもカオス空間は人気みたいだな。」
祐希奈
「まぁ、お喋りはこれくらいにして、質問行くわよ。」
ヴィヴィオ
「は～い。えと…Ｅｘやクロイツのようにカナンの能力と技の詳細を教えて下さい。だって。」
カナン
「長いから毎回ちょっとずつ答えるな。」

希少技能…空間把握
通常は周囲約三メートルは自分の認識出来る範囲、つまり周囲三メ

ートルはカナンの視界と言うこと、メイデンとユニゾンすると範囲が飛躍的に上昇。周囲五十メートル以内なら感知できるようになる

希少技能…空間突破
自分が見えている範囲までは空間をねじ曲げ一瞬で相手に接近できたり、回避が出来たりする。追撃から緊急回避、変則攻撃を行う時など、幅広く活用可能。ただし直線にしか動けないため、うねった道は使いづらい。

壱式抜刀剣術『暗夜一閃』
威力Ａ＋、速度ＳＳＳ

攻撃対象との距離をほぼ零にし、一瞬で斬り込む技。反応出来るのは、強化した魔導師、または、自身も高速化し一瞬で判断し捌くくらいしか方法はない。

弐式抜刀剣術『虚空閃』
威力Ｂ、速度ＳＳ
遠距離斬撃、対象のいる空間を斬り攻撃する、空間攻撃はカナンの技能ではなく、メイデンの力を借りて使っている技、威力はただの斬撃なので低め、速度は速いが、目測で放つため、止まっている相手くらいにしか当たらないと意外と使い勝手はわるい。

参式抜刀剣術『絶空』
威力Ｓ＋、速度ＳＳ
自分の周囲を一気に切り払う技。威力は高いが、止まらないと使えないためほぼ防御用。しかし、技の後のスキは一番大きいため連続使用は不可能。
ちなみに速度ＳＳはカナンの抜刀の速度。
つまり、カナンの抜刀剣術には速度ＳＳ以下は存在しない。

メイデンとユニゾンせずに使えるのはここまでである。

カナン
「今日はこんなもんだな。」
祐希奈
「ユニゾンしてなくても、スピードだけは天下一品ね…」
ヴィヴィオ
「ちょっとクセのある攻撃が多いけどね。」
メイデン
「まぁ、抜刀剣術というスタイルの関係上多少はな。」
カナン
「時間がないから次の質問な～。」
ヴィヴィオ
「デート編の時に買ってた画用紙ってもしかして…アレですか?だって。」
祐希奈
「アレよ♪」
カナン
「アレって何!?」
祐希奈
「また今度わかるわよ♪」
ヴィヴィオ
「カナン君…頑張って。」
メイデン
「泣かないようにな…」
カナン
「嬉しくない応援ありがとな!!」
祐希奈
「さて、次でラストにするわ。まだあるけど、時間ないからまた今度ね。」

メイデン
「カナンはヴィヴィオ、祐希奈、メイデンの三人のどの水着が見たいですか？また、どのような水着がいいですか？」
カナン
「俺、個人に対しての質問か…」
ヴィヴィオ
「こ、こんな質問…してくる人いるんだね…」
祐希奈
「…私なんて答えたら殺すわよ？」
メイデン
「水着？水に入るのに服などいらんだろ？」
ヴィヴィオ
「う～ん。お風呂に入るのにタオルを巻くのと同じことかな？」
メイデン
「ふ～ん…それで、マスターは誰のを見たいんだ？」
カナン
「俺は、三人とも見たいかな。」
ヴィヴィオ・祐希奈
「！！！！」
メイデン
「マスターは欲張りだな…まぁ良いだろう。水着とやらの種類は？」
カナン
「お前らなら可愛いし、何でも似合うだろ、任せる。」
ヴィヴィオ・祐希奈・メイデン
「！！！！！！」
カナン
「ん？どうした？」
ヴィヴィオ
「真顔で言わないで欲しいな…」
祐希奈

「バカ…」
メイデン
「バカ…」
カナン
「今、バカが二回あったぞ！？」
祐希奈・メイデン
「気のせい（だ）♪」
カナン
「ぜってえお前らだよな…」
ヴィヴィオ
「あはは。あと五件で止まれば良いけど…」
祐希奈
「間に合わなかったら作者がなんとかするでしょ。」
メイデン
「そうだな。そろそろ時間だぞ？」
カナン
「じゃあ魔法少女リリカルヴィヴィオ。」
祐希奈
「終わります♪」
ヴィヴィオ
「ええ！？」
メイデン
「終わるのか！？」
カナン
「いちいち祐希奈の言うことを真に受けるな…」
「…」

「ママ…カナン君動かないよ？」
なのはのダークモードスターライトブレイカーを受けたカナンは、
しばらく、時間たってもピクリとも動かない…

「うん…どうしよう…ちょっとやりすぎちゃったかな？」

「これがちょっとって言えるんすか！？」

「「あ、生き返った…」」

「くぉら！人を勝手に殺すな！」

「だって、１０分以上起きなかったんだよ？」

「いかに花畑に慣れている俺でも、今回ばかりは、行くかどうか迷ったからな…」

「何だ…生き返ったんだ…面白くないわね…」
なのはの攻撃から逃げていた祐希奈達が帰ってきた。

「死ねば良かったのに…」
ぼそりとフェイトが言った。

「お二方共冗談がきついっす！！」

「「本気だから♪」」

「…」
ダメだ…こいつらが手を組むとろくなことにならない…

「マスター？大丈夫か？」

「メイデン…お前だけだよ…一番最初に心配のセリフを言ってくれ

たのは…」

「便利な道具がいなくなるのは嫌だからな。」

「何ですとー!?」

「冗談というやつだ。祐希奈、今のはどうだ?」

「カナンを叫ばしたんだから合格ね♪」

「お前か!!メイデンに変なことを教えるなよ!!」

「冗談は人類の生んだ英知の一つよ♪」

「お前の冗談は笑えん!!」

「二人ともそのへんにしてもらえんかな?」

「「すいません…」」

「ほんなら今後の話なんやけど…ちょっとまずい状況や…クアットロとウーノは健在のままや…」

「逃がすなんて、隊長達にしては珍しいっすね。」

「カナン君…失礼だよ。」

「ええよ。ほんまのことやし。」

「でも、はやてさん達が逃がすなんて本当にどうしたの?」

「邪魔が入ってもてな…急襲やった上に相当な実力者やったらしいんや…何があったんかわからんまま気付いたら、クアットロもウーノも逃げてたってわけや…。」
「不意討ちにしても隊長陣がやられるなんて…」
「まぁ、スカリエッティやナンバーズの二人にも、ガジェット達も、結構な損害あたえたし、しばらくは動きはないとは思うんやけど…気になるのは…」
「不意討ちを仕掛けてきた相手…ですね。」
「そうや…まだ無傷やし何をしてくるかもわからん…十分に警戒しといてな。」
「了解!!」
一同が敬礼し解散となった…
「今日はいろいろなことがあった日だね…」
「ああ。嘘か本当かはわからないけど、スカリエッティからもいろいろ聞いたしな…」
「…」
祐希ちゃんが先程から喋らない…
「祐希ちゃん?」
「母さんの話は本当かもね…母さんの形見のペンダントがデバイスなら魔導師だったってことにも納得できるし。」

「祐希ちゃん…皆の前では無理してたの？」

「私に暗い話は似合わないしね。」

「俺らの前ではいいのか？」

「あんた達になら別にいいかなって。」

「泣きたいなら泣いてもいいよ？」

「泣きたいって言うか、微妙な所なのよね…知ってすっきりした所もあるし、やっぱり知りたくなかった気もするし…よくわかんないや…」

「そうなんだ…」

こう言うことしか出来なかった。今の祐希ちゃんには、触れてはいけない気がした。触れたら壊れてしまう…そんな気がした。

「ヴィヴィオ…私、今日はもう私帰るわね。」

時間で言えばまだ四時間目の途中の時間…いつもの祐希ちゃんなら遊ぼうとか言うはず…やっぱり相当つらいらしい。

「うん。私はもうちょっとしたら帰るよ。あんまり抱え込まないでね？」

「わかった。じゃあね。」

「バイバイ。」

「じゃあな。」

「また…明日だ。」

ゆっくりとした足並みで祐希ちゃんは帰っていった。

「祐希ちゃん…大丈夫かな？」

「あいつなら1日あれば整理をつけて元気になるさ。」

「だといいが…」

「それで、ヴィヴィオが残った理由はなんだ？どうせ俺に何かあるんだろ？」

「カナン君凄い…よくわかったね。」

「なんとなくだから凄くもなんともない。それで？」

「あのね…私と本気で模擬戦をして欲しいんだ…」

「本気って…何でまた…」

「今回の戦闘で私の力ではスカリエッティに対抗出来なかったでしょ？これじゃあ祐希ちゃんやカナン君に迷惑がかかっちゃうし、もっと強くなりたいんだ…」

「なら俺よりなのはさんやフェイトさんがいるだろ？」

「カナン君はリミットのかかったなのはママに勝ったし、Sランク

までリミットを解除したフェイトママと引き分けたんでしょ？」

「フェイトさんのことまでよく知ってるな…」

「メイデンから聞いたんだ。大変だったね。」

「メ～イ～デ～ン？」

カナン君はにこやかにメイデンの方を振り向いた…心は怒っていたが…

「だ、だってな？マスターがあんまりにも可哀想だったからヴィヴィオにフェイトさんに注意してもらおうかと…」

「注意したくらいであの人が止めるわけないだろ…今回なんていきなり攻撃されたんだぞ？」

「あはは…フェイトママが迷惑かけちゃったみたいだね…私から謝るよ。」

「まぁ、自分の子供の為に怒ってるんだからいい親ではあるんだが…もうちょっと加減はして欲しいかな…」

「重ね重ねごめんなさい…それで模擬戦の話なんだけど…ダメかな？」

「…多少の怪我は覚悟してくれよ？」

「うん。」

「わかった。やるか！」

「カナン君。ありがとう！」
そんな笑顔を向けられるとやりづらいんだけどな…

「場所はあそこでいいだろ？」
あそことは、昔、なのはが訓練をしていた林である。
この前、フェイトとカナンが模擬戦をした場所でもある

「うん。じゃあ行こ！」

「ああ。」

林に到着し、向かい合う…
「フェアリー！」
「メイデン！」
「セットアップ！」」

「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ　Ｓｅｔ　ｕｐ!」
「わかった。」
二人が光に包まれ変身…ヴィヴィオは両手で巨剣を持ち、カナンは左手に剣を構える…

「ソニックフォーム…」
「了解。Ｓｏｎｉｃ　ｆｏｒｍ　ｓｅｔ　ｕｐ」
ヴィヴィオはレオタード姿になり膝を落とす。

「行くぞ…メイデン…」
「ああ。」
「「ユニゾン・イン」」
カナンもメイデンとユニゾンし、柄に手をかけ、いつでも抜刀出来るようにする。

「行くよ！」
「ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ！」
神速で動き側面に回り込む。

「…」
希少技能の空間把握により瞬時に反応。

「だあああ！！」
抜刀…一筋の光が横凪ぎに払われる。そこにヴィヴィオはいなかった。高速移動魔法の連続行使。

「マスター！後だ！」

「わかってる！」

「はぁぁあ！！」
カナンの背後で振り下ろされる刃。

「遅い！」
ギァン！
回転の力を使い、振り向き下段から切り上げ防ぐ。

「うおおお！」
カートリッジが一発排出され、ヴィヴィオの刃に風が纏われる。

「く…」
カナンは風圧に押され、地面をえぐりながら押し込まれる。
もちろん、単純な力ならヴィヴィオよりカナンの方が強いが、風で

重心をずらされたうえ、押し込まれているので、体勢が悪ければ、力が強くても押される。実質、腕力の差はあまり関係がなくなった。

「へぇ…考えたな…」

体が浮いたのを感じつつ言った。口元には笑み。

「行けぇぇえ！！」

ヴィヴィオが叫ぶと同時にカナンが吹きとばされる。

「フェアリー！」

「Ｓｎｉｃ　ｍｏｖｅ！」

再び高速で動き追撃

「ウインド！」

振り被る…

「「グランド！スパイク！」」

ギャリ！

吹き飛びながら剣を地面に突き立て急停止…同時に魔法を発動する。

ヴィヴィオの真下から石の針が襲う。

「っ！スラッシャー！」

刃の向きを下にかえ、石針を迎撃…破壊する。

「壱式抜刀剣術…」

「烈風よ…」

カートリッジをまた一発排出し、風を起こす。

「暗夜…一閃！」
カナンの目の前の空間がねじ曲がりヴィヴィオとの距離がほぼゼロになる。
突破する瞬間…ヴィヴィオが動く。

「吹き飛ばせ！」
ヴィヴィオの前方に暴風が吹き抜ける。
カナンの剣はヴィヴィオには届かなかった。
空間突破は消えるわけではない、そのため風の力を受け、届かなかったわけである。

「これも防ぐか…凄いな。」
微笑みながらカナン君が言った。

「何で本気出さないの？メイデンとユニゾンしてるんだから、四式以降使えるよね？」
そんなに私じゃ相手不足なのだろうか…

「ヴィヴィオとの模擬戦が楽しくてな。ちょっとずつ試してたんだ。嫌な思いをさせたんなら謝るよ。ごめん。」
カナン君が頭を下げた。

「い、いいよ。私じゃカナン君の相手にならないのかと思ってちょっと心配してたんだ…」

「それはない。正直ヴィヴィオがここまで無傷で戦えるとは思ってなかったからな。」

「ありがとう。カナン君もやっぱり強いね。私ももうちょっと本気でいこうかな…カナン君怪我しないようにね？」

「言ってくれるな…ヴィヴィオこそ…。」
「では、私も攻撃をサポートし始めるぞ。」

「そうこなくちゃ…シューティングモード起動。」
「了解。」
テバイスが剣から杖に変化する…

「さて…どうくるかな…」
柄に軽く手をかけ…改めて構える。

「アクセル・ランサー！」
カートリッジを使いおよそ、５０のランサーが出現…カナンを取り囲む…

「このやり方はなのはさんの…」
ヴィヴィオの初手は嘱託魔導師試験のなのはと似ていた。

「ということは…」
この後は砲撃か…

「フル・シュート！」
一斉射撃…

「よし！」
あえて、なのはの時と同じように、ランサーを斬り飛ばすことにした。

「はあああ！」
カナンの周囲に閃光が煌めく、ランサーが次々に斬られていく。

「ディバイーン！」
案の定砲撃が溜められカナンに向けられていた。

「同じか？」
ランサーはまだ残っていたが、砲撃に備え納刀する。

「バスター！」

「参式抜刀剣術…絶空！」
しかし、ヴィヴィオはここからがなのはと違った…

「Ｓｎｉｃ　ｍｏｖｅ。」

「バスター！」
高速で右、背後、左へと移動、四方からショートバスターが放たれる。

「面白い！」

しかし、まだヴィヴィオは動いている。
カナンは砲撃が迫るなか納刀したまま構える…

ヴィヴィオは上空へ移動…カートリッジの残り三発を排出…

「バレル展開！」
ヴィヴィオの中距離砲撃では最大の威力を誇る砲撃が溜められる…

「六式抜刀剣術…」
「風よ…刃に力を！」

エクスカリバーに風が纏われる…

「エクセリオン！」
さらに四つの砲撃が追加され、合計八つの砲撃がカナンに向かう…
「グランドウォール！」
メイデンが魔法を唱えカナンの周囲に大地の壁が出来、砲撃を止めるが、すぐにヒビが広がる…

「絶空…」
もうすぐ来るであろう砲撃に備え、柄を握る手に力を込め引き抜く準備をする。

「バスター！！」
五つ目の砲撃が先に放たれた四つの砲撃と合わさり巨大な一つの砲撃となる…瞬く間に、大地の壁は破壊され、カナンに大威力砲撃が向かう…

「旋竜破！！」
周囲５０メートルを吹き飛ばす衝撃波が砲撃と衝突。風の勢いは止まらず、ヴィヴィオの砲撃を吹き飛ばしヴィヴィオ本人にも襲いかかる。

「…」
ヴィヴィオは風に逆らわず吹き飛ばされる…飛ばされながらも、マガジンを装填。

「四式抜刀剣術…」
その間にカナンも納刀…追撃をかけるべく、空間突破を発動…
ヴィヴィオは着地し、体勢を整える。

「エクセリオン！」
デバイスを正眼に構え砲撃を溜める…

「光刃！」
一度目の空間突破…

「Ｓｎｉｃ　ｍｏｖｅ！」
高性能デバイスのフェアリーだからこそ出来る魔法の同時処理…

「…ふ！」
高速化するとなんとか目でついていけるようになった斬撃をほぼ直感のみで斬り流す…
そのまま左回転…先端を横に向ける。

「二閃！」
二連続空間突破！

「バスター！！」
回転しながら横に払われた砲撃は１８０度を薙ぎ払う。

「うらああ！！」
砲撃と剣が激突する…光が弾ける。

「カートリッジロード！！」
二発排出し、さらに威力をあげる…砲撃が徐々にカナンの剣を押し始め…

「く…！」
押し切りカナンに直撃…爆発した。

「はぁ…はぁ…」
激闘の結果、最初に相手に攻撃を食らわせたのはヴィヴィオだった。
「くはあ…負けた～！」
黒煙のなかから姿を表したカナンは、多少のダメージは受けたらしいが、まだまだ元気そうだった。
「マスター…強引過ぎだ…ちょっとは避けることも考えろ。」
「いや、ヴィヴィオが正面から向かって来るんだから避けるわけには行かないだろ。」
「さも、当たり前のように言うな。攻撃よりも回避の方が重要なんだぞ？」
「でも、私は正面対決は好きだな。」
「ほらな？」
「ほらな？…ではない！どこに相手の好みに合わせて戦う奴がいる！？」
「ここ。」
「…マスター頼むからもうちょっと考えて戦ってくれ…」
「へいへい。」
「お話はもういいかな？」

「おう。次…やるか！」

「うん！フェアリー！セカンドフルドライブ！」

「Ｆｕｌｌ　ｄｒｉｖｅ　ｓｅｔ　ｕｐ！」

ヴィヴィオのセカンドフルドライブは、体に風を纏わせ、体術から風弾を叩き込むというもの。加速に至っては、フェイトを凌ぐ。

「風神降臨ってとこか。ヴィヴィオのフルドライブとやるのは仲間になってからは初めてだな。楽しみだ。」

「私も楽しみだよ。」

渦巻く風を背中に集め拳を構える。

「…」

再び気を張り戦闘へと備える。

「Ｓｏｎｉｃ　ｗｉｎｄ！」

一瞬風が止み…静寂で満たされる…

「Ｂａｒｓｔ　ｍｏｖｅ！」

膨大な風がヴィヴィオの背中で炸裂。爆発的な加速でヴィヴィオが迫る！

「「はぁぁあ！！」」

右の拳と刃がぶつかり火花を散らす。

ヴィヴィオは左の拳に風を集める。

「ウインド！インパクト！」

超高圧で固められた風弾が構えられる。

「メイデン！」
「わかっている！」
上空への空間が歪み突入。回避する。
先程カナンがいたところを地面をえぐりながら風弾が飛んでいった。

「マジで手加減なし…だな！！」
ギァン！
背後に気配を感じ、振り抜いた。そこには既にウインドがいた。

「まだまだこれからだよ！」
言葉と同時に左のアッパーカット。

「当たり前だ！」
バク転し回避しながら斬撃を放つ。

「だよね！」
片腕で防ぎ横へ弾き飛ばす。

「っ！」
カナン君が目の前にいた。ほぼ密着状態…何も出来ない！

「おおお！」
カナンは体を反転、ヴィヴィオの腕を掴み背負う。

「わっ！」
予想外の技に戸惑う。

「らあああああ！！！！」
背負い投げ。地面に向かって頭から一直線に投げられた。

「面白いことするね！」
落ちる直前、拳から風を放ち速度を減速…逆立ちになり腕を曲げる。
「五式抜刀剣術…」
「Ｂａｒｓｔ　ｍｏｖｅ！」
「虚空破砕断！」
腕の力と風の力で動き横に飛ぶ。縦に一回転…両足と左腕には風。
「くらえええ！」
回転の勢いで足からカナンに向け、風弾二発を放ちその後、着地。
「エクス！」
魔力を溜めながら、空中で反転。二発を回避し、上段に構える。
「Ｗｉｎｄ　ｉｎｐａｃｔ　Ｅｘ」
ヴィヴィオの左腕から今までよりさらに巨大な風弾が放たれる。
「カリバー！！」
魔力を開放。一気に振り降ろし、迫る風弾に叩きつけた。
吹き荒れる爆風。徐々に風弾が押され始め、形がくずれはじめる。
回避も出来たがしない。カナンを先に落とすことにした。
「シューティングモード起動！」
「了解。リボルバー、マガジンスタンバイ…全カートリッジシステム開放。」
六枚の虹色の羽が広がる。

「クロスファイアー…」
カートリッジ六発排出、六つのスフィアが展開され、カナンに向かう。

「メイデン頼む！防いでくれ！」
カナン自身は攻撃中なため回避が出来ない…

「了解だ。覇王の鎧、プロテクション出力全開！」
銀の鎧の輝きが増し、さらに金に輝くプロテクションも展開される。
スフィアなら余裕で防げる強固さ。

しかし、ヴィヴィオの放ったスフィアはただのスフィアではなかった。
ティアナの技の発展。

「バースト！！」
六つのスフィアから砲撃が放たれ、カナンに向かう。
それぞれの砲撃がディバインバスターの威力と同等それが六つ。
いくらメイデンでも防ぎきれる威力ではなかった。

「マスター…防ぎきれそうにない…」

「もう少し頑張ってくれ！」

「わかった…急いでくれ。」

「うおぉおお！！！」
エクスカリバーの輝きが増し、風弾を歪めていく。

「フルリロード！！」
ヴィヴィオは残り六発を排出し、勝負を決めるべく、プロテクションを破ろうとする。
風弾が消し飛ばされるのとプロテクションを破るのはほぼ同時だった…どちらも着弾…黒煙があがった。

「私の負け…だね。」
ヴィヴィオの首にはカナンの剣がギリギリで止められていた…

「ふぅ…ヴィヴィオ、前に俺と戦った時より強くなってないか？」

「そう…かな？いっぱいいっぱいだったからよくわかんないや。」

「そうなのか？とてもそうは見えなかったぞ？」
ユニゾンを解いたメイデンが肩の上から話かけた。

「その場で考えついたことをやって見てただけだから。」

「その場で？」
マジか…恐ろしいくらいの応用力と決断力だな…
しかも、一人で俺とほぼ互角の戦えるまで追い付いてきてる…
戦えば戦うほど強くなるこの成長速度…
俺も強くならないとな。女の子に守られるわけにはいかない。

「カナン君？何考えてるの？」

「いや、別に大したことじゃない。気にするな。」

「気になるな？」

「はっはっは。」

「ん？」

「はっはっは～。」

「んん？？」

二人がのほほんとした時間を過ごしているとき、祐希奈は部屋に仰向けになり転がっていた。

「…」

目を閉じる…浮かんでくるのは小さい頃に見た母さんの顔…そしてスカリエッティの顔…

「くそ！」

ムカつくわね…カナンの両親や母さんを殺しておいてあのヘラヘラした態度…

「女の子がそのような口調をするのはどうかと思いますが？」

「ほっといて…」

「今回は言わせて頂きます。マスターがそのような態度を取っていると、ヴィヴィオちゃんやカナン君が心配します。」

「うるさい…」

「お友達を困らせることをあなたはしているのですよ！？悪いとは思わないのですか！？」

「だって母さんが！」

「今更それですか？前から殺されたことはわかっていたでしょう！！たまたま、それがスカリエッティだっただけです。気にすることではないでしょう？」

「気にすることじゃない？カナンの両親や私の母さんが殺されたことを気にすることじゃないって言うの！？」

「カナン君はあなた達の協力によって乗り越えました。あなたは過去に乗り越えた壁にもう一度ぶつかっているだけです。」

「…」

「あなたは過去に乗り越えたことをまた引っ張り出して落ち込むような情けない人間ではないでしょう？
あなたは強い子です。あなたのお母さんもそう思っているはずです。」

「そっか…そうね…確かに今更ね。スカリエッティが母さんを殺していた…ただそれだけ…復讐の気持ちは過去に捨てた。なら、別に落ち込むことでもなかったのよね。」

「そうです！」

「アシェル…ありがとね。吹っ切れたわ。」

「マスターのお役に立てて光栄です。」

「マスターじゃなくてもいいわ。さっきみたいにあなたでも、何なら祐希奈でも何でもいいわ。」

「はい。分かりました。これからもよろしくお願いします。『祐希奈』。」

「ん。それにしてもアシェルって母さんに怒られてるみたいだったわ。」

「…気のせいですよ。」

「今の間は何？」

「気にしちゃダメです。」

「気になるわね…」

同じ問答を繰り広げる人物とデバイスがここにもいた。

「ただいま～」

ヴィヴィオの声だ…

「おかえり！」

笑顔で出迎えるとヴィヴィオが驚いた顔をしていた。

「祐希ちゃん？もう平気なの？」

「ええ。アシェルに一喝されたわ。」

「祐希奈！！」

「あれ？アシェル、祐希ちゃんの呼び方変えたの？」

「あ、はい。許可が出たので。」

「うん。私もそっちの方が良いと思う。フェアリーも私の呼び方変えてもいいよ？」

「いえ、もう少し経験を積んでマスターのことを完璧に理解出来たらそうします。」

「あらら。」

「さて、心配かけたお礼に晩御飯は私が作るわ。」

「うん。楽しみにしてるね。」

「任せなさい♪」

それからはいつも通りの二人に戻り、１日を終えた。

第十二話　強くなる為に…（後書き）

たくさんのメッセージありがとうございます。少しお待たせしてしまいましたがようやく投稿することができました。これからもよろしくお願いします。

ＰＳあと少しで９００００万に到達です♪感激です！

出張道場、質問答えます。

一同
「ご覧の番組は出張道場インアメリカの提供でお送りします♪」

シオン
「アメリカになってるし！！」

ヴィヴィオ
「それ以前にシオン君がいること自体、おかしいよ。」

祐希奈
「二人とも細かいこと気にしすぎよ♪」

シオン
「アリサさんと言い祐希奈と言い、大雑把すぎる…」

カナン
「シオン…耐えろ。そして、出来るだけツッコミは入れるな…」

シオン
「入れるとどうなるんだ？」

タカト
「待たせたな。ダージリン入ったぞ。」

カナン
「何で普通に茶いれてんだよ！！」

祐希奈
「やかましい！！」

バキャッ！

タカト
「道場の執事だからだ。」

ドゴッ！

カナン
「ふごっ！！」

シオン
「こうなるのか…注意しよう…」
ヴィヴィオ
「カナン君の心配はしないんだね。」
シオン
「並大抵のことではカナンは死なないだろ?」
メイデン
「まぁ、確かに事実ではあるが…」
カナン
「それで?何でシオンと６６６ことタカトさんがいるんだ?」
シオン
「お前の体はサイボーグなのか?」
カナン
「慣れればあれくらい何てことない。」
シオン
「慣れたくない…」
祐希奈
「理由だけど、シオンはいじれるから面白いし、タカトは制裁、執事と何でもオッケーで便利だから。」
シオン
「…俺の存在理由それだけか?」
祐希奈
「もち♪」
シオン
「斬っていいか?」
祐希奈
「アリサから力を借りてる私を倒せるとでも?」
不気味な笑みを浮かべる祐希奈…
シオン
「すんません!許して下さい!!」

祐希奈
「しょうがないわね…爆破されるか、燃やされるかどっちがいい？」
シオン
「…どっちにしろ死ぬだろ。」
ヴィヴィオ
「シオン君も相当頑丈だし大丈夫だよ。」
シオン
「ずれてる…大丈夫かもしれないが…おかしい…」
ヴィヴィオ
「？」

祐希奈
「烈破爆砕拳！」
タカト
「天破紅蓮！」
ー煌ー
シオン
「あぁぁぁぁ…」
カナン
「いや、ちょっとは加減しような？」
メイデン
「空まで飛んだぞ…」
祐希奈
「さすがはパーフェクト執事タカト♪素晴らしい活躍ね♪」
タカト
「そう言ってもらえると有難い。」
ヒュルルル…ズドーン…
シオン
「…」
カナン

「シオン…川の向こうに花畑が見えるだろ？絶対行くな？多分死ぬから。」
ヴィヴィオ
「凄いアドバイスだね…」
シオン
「はっ！！」
カナン
「大丈夫か？これからアリサ道場やこの作品に出る時には覚えておいて損はしない技術だ。忘れるなよ？」
シオン
「あ、ああ。助かった…」
祐希奈
「シオンの安否なんてどうでもいいから質問行くわよ～。」
シオン
「きっつ～…」
メイデン
「祐希奈にとってこれくらいは当たり前だ。気を引き締めてくれ。」
シオン
「怖…」
タカト
「この程度のことで恐怖を感じていてはお前に俺は越えられん。」
シオン
「ぬかせ…今ここで決着つけてやろうか？」
祐希奈
「ちなみに私はタカトに加勢するわ♪」
カナン
「じゃあ俺はシオンだな。」
ヴィヴィオ
「三人とも暴れるんなら…頭冷やすよ？…ディストラクション…」
祐希奈・カナン・シオン

「わあああああ！！」
タカト
「ヴィヴィオ。とりあえず待て。後で好きなだけケーキでも料理でも作ってやるから。」
ヴィヴィオ
「本当！？」
タカト
「ああ。何でもいいぞ？」
ヴィヴィオ
「わ～い♪」
祐希奈
「助かった…タカトありがとね。」
タカト
「怒ったヴィヴィオの扱い方は、昔と変わらないな。」
シオン
「タカ兄ぃがいて良かった…」
カナン
「今回ばかりはそう思う…」
ヴィヴィオ
「♪一つ目の質問は♪ヴィヴィオのポジションはフロントアタッカーとセンターガードですが、カナンと祐希奈はどこですか？」
祐希奈
「私は一応フロントアタッカーになるわね。」
カナン
「俺はガードウイングだな」
シオン
「祐希奈は弓も使えるんならセンターも行けるんじゃないか？」
祐希奈
「私はロングレンジは大丈夫だけど、ミドルレンジに技が少ないからヴィヴィオの方がいいわね。」

カナン
「三人の中では防御が一番だしフロントが一番向いてるな。」
祐希奈
「相手をぶっとばせばいいだけだから簡単だしね。」
シオン
「随分軽く言うな。」
ヴィヴィオ
「吹き飛ばしたりするのは祐希ちゃんの十八番だからね。」
カナン
「ちなみに俺がガードウイングなのは、空間突破のおかげで、早く動けるからだ。」
タカト
「お前のことなど聞いていない。黙ってろ。」
カナン
「扱いがひでぇ…」
メイデン
「そうか？いつもと変わらないと思う。」
カナン
「祐希奈ならともかくゲストからもけなされる俺って…何？」
シオン
「ゲストなのにいじられまくってぶっ飛ばされてる俺って…何？」
祐希奈・タカト
「人間サンドバック。」
カナン・シオン
「チキショーーー！！！！」
メイデン
「さて、次の質問に移るぞ。前にメイデンがこの天候なら雷が使えるって言っていましたが天候が一致しないと、属性攻撃はできないんですか？の答えだが、別に使える。」
祐希奈

「じゃあ、何であんなこと言ったの？」
メイデン
「使えると言ったのは、一番、雷が強力に使えるということだ。わかりにくくてすまないな。」
ヴィヴィオ
「んぐ…戦闘中にわかりやすく言えたら凄いよ…」
シオン
「じゃあ、別に火とか水も使えるんだな？」
メイデン
「ああ。ただし、威力は魔力変換資質を持つ人間と同等かそれ以下になるがな。」
祐希奈
「ほんといい能力よね。」
シオン
「俺なんて精霊融合して、初めて雷とか使えるようになるのに。」
カナン
「いや、シオンの強さに魔力変換資質ついたらセコいだろ…」
シオン
「十分カナンの強さでもセコいと思うぜ？」
タカト
「お前らごときについたところで何も変わらん。すぐに叩き潰せる。」
カナン
「それは、アンタがバグキャラだからだろ…」
シオン
「チート兄貴め…」
タカト
「飛ぶか？」
カナン・シオン
「遠慮する。」

ヴィヴィオ
「もぐもぐ…」
カナン
「ヴィヴィオ?さっきから何食べてるんだ?」
ヴィヴィオ
「んぐ。タカトのスペシャルケーキセット♪」
メイデン
「ヴィヴィオ。私も食べさせてくれ。」
ヴィヴィオ
「うん♪一緒に食べよ♪」
ヴィヴィオ・メイデン
「美味しい~♪」
シオン
「いつの間に作ってたんだ…」
タカト
「お前の知るところではない。」
シオン
「さいですか…」
祐希奈
「さっさと次の質問行くわよ~。祐希奈とカナンが男子を叩き潰す時に一人だけ神田とか言う男子がいましたが、何故あの男子だけいたんでしょうか?」
シオン
「その…何だ…こんな質問の意味はあるのか?」
カナン
「さぁ?とりあえず、読者が知りたいんだったら答えるだけだ。」
祐希奈
「面倒くさいから本人に答えてもらうわ。出でよ!神田!」
タカト
「いいのか?」

ヴィヴィオ
「多分…祐希ちゃんだし。」
メイデン
「祐希奈だからな。」
祐希奈
「何かムカつくわね…まぁ、いいわ。神田。さっさと答えなさい。何であんただけいたの？」
神田
「んだよ…人が寝てるのにこんなわけのわからん場所に呼び出しやがって…うぜぇ…」
ピシッ…
祐希奈
「…さっさと答えなさい…すぐに帰してあげるから。」
神田
「高町や一之瀬のことなんてどうでもいいし、好きだったとしても、群れるのは嫌いだからだ。」
祐希奈
「ありがと…じゃあね…」
ゴワアアアア…
ヴィヴィオ・カナン・シオン・タカト
「あ～あ…」
祐希奈
「紫電！一閃！」
ヒュ…
神田
「ふあ～あ。ねみぃ…じゃあな。」
祐希奈
「…避けた？」
ヴィヴィオ
「避けたね。」

カナン
「避けたな。」
メイデン
「避けたぞ。」
シオン
「何だアイツ…」
タカト
「知らん。」
カナン
「アンタが知ってたらびっくりだよ！！」
ヨシュア
「ただのネタじゃ！！たまには避けてもいいかなてきな！！」
祐希奈・タカト
「消えろ…」
ドガアアア！！！
ヨシュア
「ぐへえー…」
ヴィヴィオ
「作者はほっといて次の質問行ってみよー。ヴィヴィオ、祐希奈、カナンの三人を型でいうと何？」
ヴィヴィオ
「私はスピード…かな？」
祐希奈
「私はパワー？」
カナン
「俺は、スピードよりのバランス型…か？」
シオン
「全員、疑問になってる。ちゃんと答えてやれよ。」
タカト
「何か迷うことでもあるのか？」

ヴィヴィオ
「私はモードを変えると攻撃方法も攻撃力もかなり変わるし…」
祐希奈
「ブレードを使うか、弓を使うかでスタイル変わるし…」
カナン
「バランス型って言ってるわりにかなりスピードに偏りあるし…」
シオン
「何とも微妙なところだな…まぁこの三人にぴったりの型があったら教えてやってくれ。」
タカト
「そういうお前はどうなんだ?」
シオン
「…ノーマルがパワーだろ?ブレイズがスピードでウィズダムは…一撃必殺?」
メイデン
「どのみち大して変わりはないな。タカトさんは?」
タカト
「うん?俺か…」
シオン・カナン
「チート型」
タカト
「お前ら…」
ヴィヴィオ
「そう言われても仕方ないよ。まだクロノさん以外タカトとまともに戦えてないもん。」
タカト
「まぁ、そうだが…」
シオン
「俺達の型については、俺達の作者に聞いてくれ。」
祐希奈

「考えてあるのか不安ね。」
カナン
「大丈夫だろ。うちの作者みたいにノープランじゃなさそうだし。」
シオン
「いや…ノープランがうちのウリだから。」
祐希奈・カナン
「設定あるかな？」
シオン・タカト
「さぁ…」
カナン
「最後の質問にいくまえに俺の能力解説の続きだ。」
祐希奈
「最後のは特殊だからね。」
シオン
「カナンの能力をみせてもらうか。」

参式以降の説明。範囲の追加（メイデンとユニゾンすると攻撃範囲が飛躍的に上昇するため追加する。）
メイデンとユニゾンしている場合のみ使用可能。

四式抜刀剣術『光刃二閃』
威力…ＡＡ＋
速度…測定不能
範囲…切り抜けた直線すべて。
『暗夜一閃』の強化型。
一度切り抜けたあと、折り返し、もう一度切り抜ける。威力、速度ともに強化され、速度に至っては、フェイト、ヴィヴィオの二人でも、二撃目は捌けない。（ヴィヴィオは二撃目を砲撃で防いだだけなので、捌いたとは言えない。）
単純な技に見えるが、メイデンの力なしで連続使用をすると、空間

の形成に失敗し、良くて空間に閉じ込められ、最悪、捻れた空間ごと消滅する。

五式抜刀剣術『虚空破砕断』
威力…Ａ＋
速度…ＳＳ＋
範囲…周囲５０メートル＋視界に入る相手一～十。

『虚空閃』の強化型。
メイデンの力により、相手が後ろにいても５０メートル以内なら攻撃可能になった。
威力、速度、範囲、共に上昇。
空間がより大きく広げられるようになったため、一対多の戦闘にもより使いやすくなっている。

六式抜刀剣術『絶空旋龍破』
威力…ＡＡＡ＋
速度…ＳＳ＋
範囲…周囲５０メートルすべて
六式抜刀剣術『絶空青龍破』
威力…Ｃ～Ｓ＋
速度…ＳＳ
範囲…上に同じ

旋龍破は完璧な防御用。風の力を利用し、衝撃波でＡＡＡ＋ランク以下の相手の魔法を無効化、以上の攻撃を弱体化させる。衝撃波が当たれば相手を吹き飛ばしたりも出来る。ただし斬撃には弱いため、斬り飛ばされた場合カナンはスキだらけになる。
青龍破は５０メートルに雷を落とす技。
天候によって威力が左右する技であり、晴天の場合、スフィアと大

してかわらないほどまで威力は落ち、大雨なら、５０メートル全てに大威力砲撃が降り注ぐに匹敵する威力となる。
メイデンが力を使えば雨雲を発生させることも可能だが、燃費も悪いため、あまりいい方法とは言えない。
七式抜刀剣術
「双龍青雷陣」
威力…ＡＡ～ＳＳ＋
速度…ＳＳＳ
範囲…５０メートル＋視界

六式以降の技は、カナンが何かを決意した時、またはキレた場合なため、模擬戦などでは、余程のことがない限り使用しない。
対象は一人のみ。×の字に斬りつけたあと納刀すると同時に雷が落ちる。
対象は一人だが、威力は絶大。
この技には、『炎』『氷』の付加もつけられるため、場合に応じてもっとも最強の威力を放つ斬撃を選ぶ。
『エクスカリバー』
威力…Ｂ＋～ＳＳＳ＋
速度…ＡＡ＋
範囲…直線全て

一応の必殺技になるが、溜めの長さで通常砲撃並の威力からスターライトブレイカーを越える威力までかなりの差がある。
また、カナンの気持ちや身体状態などで溜めの早さや威力も変わるため、本人以外はどうなるかはわからない。

カナン
「なげ～こんなもんか？」
シオン

「思ったんだが、お前…よくこんな使いづらい技で戦ってるな。四式とかミスったら死ぬとかヤバいだろ…」
タカト
「メイデンも大変だな。」
メイデン
「まぁ、相性が抜群というかマスターに合わせるように作られているからあまりそうは思わないが、他のユニゾンデバイスでは苦労するだろうな。」
ヴィヴィオ
「シオン君めちゃくちゃする時あるし、イクスも大変だね。」
イクス
「まったくだ。とんだバカ弟子を持ってしまった。」
シオン
「こいつの弟子も楽じゃないぜ？」
祐希奈
「ウォーミングアップにスルメ踊りよね♪」
タカト
「あれは腹筋を鍛えるのに大変効果的だ。オススメだな。」
カナン
「そんなバカな鍛え方するのシオンとタカトさんだけだから。」
シオン
「俺は、好きであんなスルメ躍りをしてるわけじゃない…」
イクス
「そうなのか？てっきり趣味なのかと…」
シオン
「やらせてたのはお前だろうが！！」
祐希奈
「もう…うるさいわね…」
シュド！！
シオン

「ふ…」
イクス
「うむ。見事な裏拳だ。」
ヴィヴィオ
「あはは…」
タカト
「このバカは放っておいて最後の質問だ。朝起きた時知らない所に一人なら四人はどうする？」
カナン
「絶対作者の友達だよな…」
祐希奈
「本編にまったく関係ないわね…」
ヴィヴィオ
「とりあえずこうなりました。」
ヴィヴィオの場合…
場所…牢屋。
「ん…」
見渡せば知らない場所…

「ん？」
鉄格子…何で？

「ここ…どこ？祐希ちゃん？雅樹さん？」
シーン…

「返事してよ～…カナン君！メイデン！」
シーン…

「ふぇ…なのはママ～！フェイトママ！ユーノパパ～！」
シーン…

「何で誰もいないの？ここどこなの？誰かいませんか！！」
「うぅ…私何かしたの？な、何で私こんな所にいるの？」
「うわあああああん！！出して～～！！！」
ヴィヴィオは泣きました。
「うわあああああん！！」

祐希奈の場合…

「ふあ…あれ？何で牢屋？お～い！誰かいる？」
一応の確認…
「いないか。とりあえず外に出よっと。アシェル。」とにかく破壊最優先…
「了解。ｓｅｔ　ｕｐ。」
「燃やし尽くせ！！スパイラル！！フレア！！」
ドゴオオオン…
「よしっと。」
ビービー
「ん？警報？」
「脱獄者がいます。至急捕えてください。」
ダダダダ…警備員が集まり始める。

「大人しくしろ！！さもないと…」

「一撃必中…ジャッジメント！！」

問答無用で制裁準備…

「大人しくしてください！！」

警備員土下座…

「バイバイ♪アロー！！！」

笑顔で放たれる矢…

「ぎあああああああ！！！！」

響き渡る断末魔…

祐希奈は脱獄し…さらに警備員を全滅させた…

カナンの場合…

「ん…何処だここ？」

「あ～…また祐希奈なフェイトさんの仕業か…俺なんかしたっけ？」

とりあえず、祐希奈とフェイトを疑う。

「そんで…剣だけここにあるってことは脱獄しろと…まぁ、やるか。」

ズバッ！！

カナン脱獄…

ビービー

「やっぱりな…」
予測済み…

「大人しくしろ。さもないと…」

「わかってるって。あんたらも祐希奈とフェイトさんに脅されて仕方なくやってんだろ？」

「は？」
警備員一同疑問を浮かべる。

「まぁ聞けって。あの二人が怖いのはわかる。けどな、立ち向かわなきゃいけない時があると思うんだ。」
説得開始…
「ま、まぁそういう時もあるな。」

「だろ？あんたらはまだ未来がある。俺なんてな…とか…や…なんてこともあってな…」
自分の身の上話を始めるカナン。

「ひでえ！！普通そこまでするか！？」

「わかってくれるか？」

「ああ！！皆はお前の味方だ悪に立ち向かおう！」
共感…

「いや…お前らはお前らの道を生きてくれ。犠牲は俺一人で十分さ…」
ゆっくりと歩いていくカナン。

「兄貴ぃぃ！！！」

カナンは脱獄したのち警備員を説得…兄貴と呼ばれた…

メイデンの場合…

「ん…」
ぼー…

「んー…」
ぼー…

「おやすみ…」
スースー…

メイデンは何もせずもう一度寝た…

ヴィヴィオ
「こうなりました～。」
シオン
「なんつうか…お前らむちゃくちゃだな…」
タカト
「確かに。」
祐希奈
「普通はぶっ飛ばすでしょ？」
カナン
「どこが普通だよ！？」
祐希奈

「あんたの説得よりマシよ。」
シオン
「どっちもどっちだと思うが…」
タカト
「ヴィヴィオは泣いてただけだったな。」
ヴィヴィオ
「だって…起きたら一人で牢屋だよ?怖いよ…」
カナン
「まぁ…女の子としては合格だな。」
メイデン
「マスター。私は?」
シオン
「いや、メイデンは論外だろ…」
カナン
「判定のやりようがないな…」
タカト
「もう一度寝たからな。」
メイデン
「そうか…少し残念だ…」
ヴィヴィオ
「これで質問は全部だね。」
祐希奈
「てことは終わりね。」
カナン
「いくつか意味不明な質問があったけどな…」
シオン
「この作品…大丈夫なのか?」
祐希奈
「私がいる限りは大丈夫よ♪」
タカト

「そうだな。祐希奈殿ならば安心だ。」
カナン
「いや…祐希奈がいるから心配なんだけど…」
祐希奈
「ぶっ飛べ～♪」
ドカッ！バキッ！
カナン
「ぐは！！」
シオン
「何で俺まで…」
タカト
「天破疾風…」
ドオオオン…
カナン・シオン
「…」
メイデン
「この二人は本当に災難だな…とくにシオンさんはまだアリサ道場もあるのに…」
ヴィヴィオ
「シオン君ファイト。」
シオン
「お…う。」
祐希奈
「お、返事したわね。なかなかの根性よ♪ヘタレオン♪」
シオン
「まだ！！」
タカト
「天破紅蓮…」
ドゴッ！！
祐希奈

「ヘタレオンももう少し学習しましょうね？私の執事は最強なのよ♪」
カナン
「さて、終わるか。」
ヴィヴィオ
「わっ！」
祐希奈
「あんた…そのいきなり復活やめなさいよね。心臓に悪いわ…」
カナン
「ほら、シオン教えただろ？秘伝の技を…」
シオン
「…ふっかーつ！！」
タカト
「ちっ！」
シオン
「てめえ…本編で覚えてろよ…」
タカト
「返り討ちにしてやる。」
メイデン
「喧嘩が始まるまえに終わりにするぞ。」
ヴィヴィオ
「ではまた次回お会いしましょう。」
祐希奈
「またね♪」
カナン
「じゃあな。」
メイデン
「ではな。」
シオン
「ＥＸもよろしく。」

タカト
「ＫＤＧもよろしく頼む。」
カナン・シオン
「頼むな！！！」

第十四話　告げる秘密

祐希奈
「出張道場は凄いわね～。ＰＶアクセス３９５４件って新記録よ。」
ヴィヴィオ
「今までは２０００前後だもんね～。」
カナン
「クロスの効果が凄すぎるな…」
メイデン
「というか昨日の道場で答えたのに、また質問が三件もきたぞ…」
祐希奈
「大抵の質問には答えるから質問しやすいんじゃない？」
ヴィヴィオ
「キャラ個人に対しての質問もあるからね～。」
カナン
「メイデンに至っては質問だけじゃなくて、メイデン万歳とかのメッセージも来てるしな。」
祐希奈
「空前のメイデンブームに乗り遅れないようにね♪」
メイデン
「私は乗り物なのか？」
ヴィヴィオ
「メイデンはメイデンだよね？」
カナン
「お前ら、どんだけ世間知らずなんだ…」
祐希奈
「最近はヴィヴィオとメイデンのダブル天然も好評よ♪」
ヴィヴィオ・メイデン
「意味がよくわからない（よ）。」

カナン
「ちなみにメイデンファンクラブ会員は、メッセージをくれた人だけでも五人はいる。」
メイデン
「っ！！」
祐希奈
「簡単に赤くなれるんだからある意味才能よね♪可愛いんだから♪」

メイデン
「ゆ、祐希奈！！」
祐希奈
「うりうり～。認めなさい？メイデンは可愛いのよ♪」
メイデン
「ち、違う！！…マスター！違うと言ってくれ！！」
カナン
「だから半泣きの上目遣いで言われても、可愛いとしか言えないんだが…」
メイデン
「マスターまで…ヴィヴィオ…違うだろ？」
ヴィヴィオ
「ごめん…」
メイデン
「…」
祐希奈
「認めなさい♪楽になるから♪」
メイデン
「やだ…」
ズキューン…
カナン・祐希奈
「メイデ～ン！！！」

ギュウウウ！！
メイデン
「うぅ…苦しい…」
ヴィヴィオ
「ファンクラブの人達に怒られるよ？」
カナン
「ダメだ…こいつ可愛すぎる…」
祐希奈
「我慢できないわ…」
メイデン
「ふにゃあああ…」
ヴィヴィオ
「あ～あ…とりあえずメイデンいじりは終わりにして質問コーナー行ってみよ～♪」

祐希奈
「そうね。ほらそこの変態。早くメイデンから離れなさい」
カナン
「お前もだろ！？」
祐希奈
「私は女同士だからセーフよ♪」
カナン
「ある意味アウトだ…」
祐希奈
「何か言った？」
ジャキ…
カナン
「ブレードを俺に向けるな！！」
ヴィヴィオ
「零ちゃんみたい…」

祐希奈
「真似だからね♪」
カナン
「心臓に悪いわ！！」
ヴィヴィオ
「さて、一つ目の質問はこちら。この作品もＥＸもノープランが売りらしいですが、この作品のノープランとはどの程度ですか？」
カナン
「本編にまったく関係ない質問が多いな。」
祐希奈
「ここまで来たらすべての疑問に答えるまでよ。」
ヴィヴィオ
「ちなみに答えは…タイトル、話の内容、技名など、ほとんどその場の思い付きです♪もちろんストックなんて一つもありません。」
カナン
「お先真っ暗だな…」
祐希奈
「よくここまで続いたわね…」
ヴィヴィオ
「メッセージとかを参考にしながら頑張ってるらしいよ？」
カナン
「つまり…メッセージがなくなったら…」
祐希奈
「ネタ切れってことになるわね。」
ヴィヴィオ
「あはは～ピンチだね～。」
カナン
「笑い事じゃない！！」
祐希奈
「その時はその時よ。焦っても仕方ないわ。」

カナン
「落ち着き過ぎだろ…」
ヴィヴィオ
「その時が来たとしても、まだかなり先だし、なんとかなるよ。」
カナン
「だといいがな…」
ヴィヴィオ
「続いての質問は～カナンはヴィヴィオ、祐希奈、どちらのルートに進むのですか？」
カナン・祐希奈
「っ！！」
ヴィヴィオ
「ん？何これ？私と祐希ちゃんのルート？意味がわからないよ？」
カナン
「わからなくていい！！」
祐希奈
「こんな質問した奴誰よ！？」
ヴィヴィオ
「二人はわかるの？教えて欲しいな。」
カナン・祐希奈
「言えるか！！」
メイデン
「ん…あれ？何で私は寝ていたんだ？」
ヴィヴィオ
「あ、メイデン起きたの？私ルートと祐希ちゃんルート、カナン君はどっちに進むって質問なんだけど…質問の意味がわからないんだ。メイデンわかる？」
メイデン
「ルート…なるほど。今のマスターはヴィヴィオよりのルートだな。」

カナン
「何でそういうのだけは理解が早いんだよ！？」
メイデン
「マスターや、ヴィヴィオほど鈍くはないのでな。」
カナン
「ヴィヴィオはともかく俺もか！？」
メイデン
「ああ。十分鈍い。」
祐希奈
「まぁ、否定はしないわ。」
ヴィヴィオ・カナン
「わかんないよ～／何でだ！！」
メイデン
「こればっかりは個人差だ。そのうちわかるさ。」
カナン
「なんかメイデンより下なのは癪だ…」
メイデン
「はは。たまにはいいものだな。」
祐希奈
「質問も終わったし本編に移るわよ？」
ヴィヴィオ
「う～ん…」
カナン
「…何なんだ？」
メイデン
「この二人はダメだな。」
祐希奈
「じゃあ私とメイデンね♪」
メイデン
「そうなるな。」

祐希奈・メイデン
「魔法少女リリカルヴィヴィオ、始まるわよ♪／始まるぞ。」
「うわ～…やっぱりニュースになってるね。」
テレビに映っているのは私達の学校…私立聖祥大付属中学校の変わり果てた姿だった。
「父さん…私達、学校守りきれなかった…ごめんなさい。」
「学校はまた建て直せるけれど生徒はそうはいかない…祐希奈達はその生徒達を守ってくれたんだ。お礼を言いたいくらいだよ。」
「でも、しばらくは休校になりそうですね…」
「そうだねぇ…今は、街の人達の協力もあって建て直しの最中だからね。ただ、不幸中の幸いで、大きな破損は二ヶ所とグランドだけだから、そんなに時間はかからないとは思うよ？」
「良かった。話が変わるんだけど私達、カナンの家に行くわ。」
「そうだね。これからの相談なんかもあるだろうし行ってきなさい。」
「うん。行ってきます。」
「行ってきます。」家を後にする。
しばらく歩くとカナン君の家が見えてくる。
「「おはようございます。」」

玄関をあけるとそこにはカナン君とメイデンがいた。

「びっくりした…何でもういるのよ。」

「美鈴の家に行くんだろ?」

「よくわかったわね。」

「昨日に行けなかったからな。今日には行くと思って準備はしてた。」

「マスターはわざわざ、粗品まで準備していたぞ。」

「私達も何か持って言った方がいいかな?」

「あんまり持っていくのも、ダメだと思う。カナンのだけでいいでしょ。」

「それはいいとして…やっぱり話すのか?」「うん。ちゃんと部隊長やママ達の許可も取ってあるよ。」

「なら、行くか。」

「ええ。」

「うん!」

三人は歩き出す。友達に真実を告げに。

「今思ったんだが、神楽はどうする?」

「ちゃんと文明の力に頼って呼んだわよ。」

「なるほど。携帯を使ったのか…」

「「携帯？」」

いつもと同じく世間知らず二人が首を傾げている。

「携帯はね。まぁ、これを持ってる人同士が念話を使えるみたいなもんよ。」

「本当？」

「本当よ。試しに誰かかけてみるわ。…この人でいいや。はい。」

四角い物を渡される…

「え！？ええ！？」

トュルルル…

「もしもし？」

聞き覚えのある声…

「もしかして…ママ？」

「あれ？ヴィヴィオ？携帯なんか使ってどうかしたの？」

「え？あ、祐希ちゃんに貸してもらって…」

「わかった！ヴィヴィオも携帯欲しくなったんだね？」

「え！？私…」

「言わなくてもわかるよ。大丈夫。珍しくヴィヴィオからのお願いだもん買ってあげるよ。」

「え、えと…」

「機種はわかんないだろうから、私とフェイトちゃんとで選んで持って行ってあげるよ。いつ頃帰るの？」

「ご、5時くらいかな。」

「やけに規則正しい時間だな…」

「ヴィヴィオだからね。」

「じゃあ、今日の5時ごろに持っていくからね？ちゃんといてね？」

「な、なのはママ！」

「じゃあね…フェイトちゃーん！！」

ブツッ…

「なのはさん、何て言ってたの？」

「携帯買ってあげるって…」

「良かったじゃない。魔力の節約になるわね。」

「念話なんて、スフィア一発の魔力で何回も出来るよ…」

「まぁ、いいんじゃないか？少なくともあって困るものじゃない。」

「そういうマスターは持っているのか？」

「俺はあることはあるが、ＰＨＳしかないな。電話とメールの最低限の機能しかないやつだ。」

「携帯はいいわよ～♪便利な機能がいっぱいね♪」

「ただし、ちゃんと自分で管理しとけよ？危ないから。」

「わかったけど…私欲しいなんて一言も言ってないのに勝手に買われちゃうよ…」

「気にしない気にしない♪さて…そろそろつくわよ。」

「美鈴の家か…久しぶりだな…」

「ここよ。」

立ち止まった家は、洋風の白い家…カナン君の家に近い。

「誰が押す？」

私達はは扉の前のインターホンの前で止まっていた…やはり後ろめたさがある…押しづらい…三人が躊躇していると…

「これだろう？何故押さないんだ？」

メイデンがインターホンの前へ…

「「「待っ！！！」」」

「よっと…」

ピンポ～ン♪

「どちら様ですか？」
美鈴ちゃんの声…

「私だ。メイデンだ。」

「メイデン？あ～ヴィヴィオちゃん達かな？」

「うむ。マスター達が話すことがあるそうだ。」
洗いざらい一気に言いましたよこの子は…

「わかった。ちょっと待ってね。」
ガチャリ…

「どうぞ～。」

「「「お邪魔します…」」」

「邪魔するぞ。」

「邪魔をするなら帰って。」

「「はいよ～。」」

「「え！？」」

「って何やらすのよ！！」

「ノってしまった自分が恥ずかしい…」
怒鳴る祐希ちゃんと少し顔が赤いカナン君。

「え？私達帰った方がいいの？」

「どうなんだ？」

「あはははは！！違う違う！！今のはギャグだから！！あはははは！！ここまで反応が違うとはね！！あはははは！！サイコー！！」

「「笑うな！！」」

「「？？」」

「あはははは！と、とにかく上がって…ダメだ…あはははは！！」

「笑うなって言ってんでしょ！！」

バキャッ！

「ふぅ…やっと収まった。祐希奈ありがと。」

「はいはい…」

「相変わらずお前の体はどうなってるかわからん…」

「い、今までともに蹴られたよね？痛くないの？」

「多分、祐希奈も加減してるんでしょ。そんなに痛くないわ。」

「そ、そんな風には見えなかったが…」

「ま、何ともないし、神楽ちゃんを待たせてるから来てよ。」

何事もなかったかのように奥の階段を上がっていく美鈴ちゃん。

「美鈴は昔から体が頑丈なのか何をしても、あんまり痛そうにしないのよね。」

「へ、へえ…凄いね…」

祐希ちゃんの蹴りは不良でも一撃必殺なのに…それをまともに受けてケロリとしてる美鈴ちゃん…どうなってるんだろう…

「早く～！！！」

上から美鈴ちゃんの声がする。

「さっさと行くわよ？」

「ああ。」

「う、うん。」

どうして私の周りは不思議な能力の人間が集まるんだろう…

考えながら階段を上ると一つの部屋の前で美鈴ちゃんと神楽ちゃんがいた。

「来たわね。入って。」

部屋に入れられる。

ベッドや机にところ狭しとぬいぐるみが並べられた部屋だった。

「前より増えてない？」

「頑張ったのよ。」

「何を頑張ったの？」

「ＵＦＯキャッチャー♪」

「ちなみにＵＦＯは未確認飛行物体のことだからな。」

「それを捕まえるのか！？」

「メイデン…ただの名前ですから気にしなくていいですよ？」

「そ、そうか。」

「神楽～教えちゃダメじゃない…メイデンはいじるのが楽しいのに…」

「祐希奈？私だって怒るぞ？」

「ごめん♪ごめん♪」

「お前、確実に反省ゼロだな…」

「そんなことないわよ♪空よりも高く海よりも深く反省してるわ♪」

「そんなことよりさ…話しがあるんだよね…一昨日のことでしょ？」

「「「…」」」

「…三人とメイデンは何者ですか？」

静かに…しかし、強い決意を持った声が響く…

「私達はね…魔法使いなんだ。私に至ってはこの世界…地球の住人

ですらないんだ。」

三人はそこから自分達についての話をした。
ヴィヴィオは別世界の住人ということ。カナンを助けるため、祐希奈が魔法使いになったこと、カナンは助けられた後しばらくは協力することにしたこと、この前は対処が遅れ、皆を危険にさらしてしまったことを言った。

「だいたいこれで全部だよ。」

「ふ～ん。大変だね。ま、私達で良ければ今まで通りサポートするし、頼ってよ。神楽ちゃん。いいよね？」

「はい。任せてください。」

「あ、あんた達の言うことはそれだけ？隠してたこと怒らないの？」
あまりに平然とした態度に拍子抜けする。

「怒る？何で？話してくれたんだし怒る理由なんてないって。」

「あのまま黙ったままなら少しは怒ったかもしれませんけどね。」

「信じてくれるのか？魔法使いだぞ？」

「随分壮大な嘘つくのね。」

「いや…本当だけど…あんまりあっさり信じたもんだからついな。」

「あれだけ必死に話されたら本当ってことくらいわかるよ。」

「三人共凄い顔してたよ？」

「「「…」」」

何も言えない…恥ずかしい…

「でも、三人の仕事って危ないのよね…」

「うん…」

「無茶はしないでください。絶対に帰ってくることを約束してください。」

「善処するわ。」

「絶対だって言ってるでしょ？帰って来なかったら許さないから。」

「大丈夫だ。任せろ。」

「うん。なら後は遊びましょう！！」

「何して遊ぶの？」

「カナン君いじり。」

「オッケー♪」

「オッケーじゃない！やめい！！」

「私とヴィヴィオちゃんとメイデンは応援してますね。」

「待て待て！！やらないから！！」

「カナン君覚悟！！」

「撲殺開始♪」

「ちょま！！ぎいあああああああ！！！」

その後からはいつも通り仲良く遊んだ。カナン君をいじったり、お菓子を食べながら話したり、カナン君をいじったり、ぬいぐるみの名前を聞いたりカナン君をいじったりしている内にあっという間に時間は過ぎた。

「なんで、俺はこんなめにあってるんだ…」

「「カナン（君）だから♪」」

「答えになってねえよ！！」

「あはは。楽しかったね～。」

「カナン君、面白いです。」

「マスターだからな。」

「嬉しくねえ…」

「じゃあ、私達そろそろ帰るね。」

「そう？」

「ヴィヴィオは今日携帯を買ってもらうのよ。」
「本当!?買ったらメアドと電話番号送ってね。祐希奈から聞けばすぐにわかるから。」
「私も、教えてくださいね?」
「うん!」
「じゃ、バイバイ。」
「さよならです。」
「「バイバイ。」」
「またな。」
「ではな。」
振り返ると二人はいつまでも手を振ってくれていた。友達に慣れて良かった。
心からそう思った。
「「ただいま~」」
「じゃあな。」
敷地の外からカナン君が別れを告げた。
「あれ?カナン君帰るの?」

「もう少しいれば？晩御飯ぐらい食べてきなさいよ。」
「そうしたいとは思ったんだけどな。メイデン…セットアップ。」
「？了解。」
メイデンは困惑しながらも了承する。
「カ、カナン君何してるの？」
「まぁ、見てろ。あ、離れとけよ？」
「う、うん。」
「…」
カナン君が一歩敷地に踏み込む…と同時にランサーが飛んできた！
「やっぱりな！」
抜刀し、斬り飛ばす。
「ハーケンセイバー！！」上空から魔力刃が降ってくる。
「絶空！！」
キィン！
周囲に被害がでないように真上へと弾き飛ばす。
「わかっただろ？じゃあな。」
消えた…空間突破を使って離脱したらしい
「逃がした…」
「フェイトママ？何してるの？」

「あ、ヴィヴィオおかえり。」

「何してるの！」
少し強く言う。

「う…えっとカナンに模擬戦を申し込もうと…」

「本当？」

「ごめん…」

「もう！」

「まぁまぁ、そのくらいで許してあげてよ。フェイトちゃんもお金出してくれたんだよ？」

「はぁ…仕方ないなぁ…カナン君も怒ってなかったみたいだし、許してあげる。」

「うん。これからはもう少し加減するね。」

「そうしてあげて欲しいな。」
どこか会話がずれている…

「それじゃあ…お待たせしました。ヴィヴィオの携帯お披露目タイム♪」
何故かハイテンションなのはママ…

「待ってました！！」

そして合わせる祐希ちゃん…

「じゃじゃ～ん♪これだよ♪」
なのはママの手のひらにあるオレンジ色の四角い携帯…

「うわっ！！また奮発したわね～。最新の携帯じゃない！」
どうやら相当に高いらしい…

「何でそんな高いの買ってくれたの？」

「ヴィヴィオからの何か欲しいなんてお願いめったにないからね。
サービスだよ♪」
とフェイトママ…フェイトママならしょっちゅうお願いしていても
買ってくれる気がする…

「あ、ありがとう…」

「大切に使ってね？」

「うん。」

「じゃあこれ。私とフェイトちゃん、アリサちゃんとすずかちゃん
のアドレスね。」

「ママ達のはいらないんじゃないかな？」

「確かにそうなんだけど、念話よりメールや電話の方が楽しいから
ね～」

「祐希奈。カナンがヴィヴィオに何かしたら…」

「任せて…光速の速さでメールを送るわ♪」

「こ～ら。祐希奈もフェイトちゃんも変な相談しないの。」

「フェイトママ、カナン君はいい人だよ?戦った相手を警戒するのもわかるけど、もうちょっと仲間だって認めてあげてもいいんじゃないかな?」

フェイトがカナンを攻撃するのは、父親が彼氏に厳しいのと同じ理由であって、フェイトにとって前歴などは関係ない。ヴィヴィオに近づく男は皆敵なのだ。
ヴィヴィオはそれに気付いていない。

「う、うん…」
鈍いのは、まぁ、可愛い所の一つではあるんだけど…ん?
不意にフェイトの携帯が震えた。メール…開くとそこには…

『そろそろ子離れしないとね（笑）』
祐希奈だった…いつのまに打ったのだろうか…

「フェイトちゃん、そろそろ帰ろう。」
なのはが言った。

「あ、うん。ヴィヴィオ、祐希奈またね。」

「「バイバイ。」」

帰りに祐希奈にメールを返しておく。

『私の目が黒いうちはヴィヴィオは誰にも渡さないよ。』

「あらら…ヴィヴィオも前途多難ね～♪」

「何が？」

「何でもな～い♪」

後ろを向き家に入る祐希ちゃん。

「え～！教えて～。」

「さぁね～♪」

「祐希ちゃんの意地悪…」

「あ、教えることあったわね。」

突然振り向く。

「わっ！な、何？」

「これ、私のアドレスと電話番号ね。こっちはカナンと美鈴、神楽よ。」

「そんなに一気に出来ないよ～。」

「チャレンジチャレンジ♪」

「う～んと…これかな？」

電話番号を入れ、電話帳に登録する。

「そうそう。それで、アドレスは適当に登録して…」
四苦八苦しながらなんとか全て登録を終了した。

「あとは、自分の名前と電話番号をメールに張り付けて、一斉送信よ。」

「うん…」
カチカチとボタンを押す音が響く…

『高町ヴィヴィオです。現在、7時47分携帯の電話番号、アドレスを添付しました。登録よろしくお願い致します。』

「これでいいかな?」

「固いわね…このくらいにしなさい♪」

『高町ヴィヴィオで~す♪携帯買いました♪
いつでも好きな時にメールでも電話でもしてね♪
あ、ちゃんと登録してね~?
してくれないと泣いちゃうよ?
それじゃね~♪』

「私こんなんじゃ…」

「送信♪」
ピッ♪送信完了しました。

「わー!!祐希ちゃん何するの!!」

「済んだことは気にしないの♪」

「八神部隊長とかもいるんだよ！？」

「はやてさんなら大丈夫だって。ほら、来たわよ？」

『あはは（笑）
なんやヴィヴィオご機嫌さんやね。
ちゃんと登録したから泣かんといてな？（笑）
』

「はぅ…」

「ほらまた来た♪」

『さっそく使ってるみたいだね♪嬉しいよ。
最初は慣れないかもしれないけど慣れたらとっても便利だから頑張ってね♪
以上、なのはママとフェイトママでした～。』

「ママ達だ…」

『ヴィヴィオちゃんってメールだと性格変わるタイプなんだね（笑）
こんなヴィヴィオちゃん知れるなんて嬉しいよ♪
これからも仲良くしてね？（＾＾）／
美鈴』

『あの…登録しましたから泣かないでくださいね？
気をしっかりもってください。
神楽』

「もう…祐希ちゃんのせいで、二人とも勘違いしちゃったよ…」

「あ、また来た…カナンね。」

『ヴィヴィオ。どうせ祐希奈にされたんだろ？
ごめんな。
あいつ、いつまでたっても考えること小学生並でな…まぁ、我慢してやってくれ。』

「さすがにカナン君はすぐにわかったみたいだね…って祐希ちゃん？何してるの？」

「ん？電話よ？」

「誰に？」

「カナン。」

「何で？」

「それは…あ、ちょっと待って。」

『もしもし？なんだよ？』

「誰が小学生並ですって？」

『…見たのか？』

「バッチリ♪」

『すいません…』

「誰が許すかぁ！！首洗って待ってなさいよ！！」

『ひいっ！！すまん！！』

ブツッ…

「ふう…」

「祐希ちゃん…何がしたいの？」

「ん？脅迫電話♪これからしばらく後にもう一度電話をかけるのよ♪」

「そんなことしてどうするの？」

「カナンの睡眠妨害♪」

「…楽しい？」

「めちゃくちゃ楽しいわ♪」

「…」

この時、ヴィヴィオは携帯電話の怖さを知った…そして誓った…寝るときにはロックをかけて寝ようと…

「脅迫電話楽しいから、良い子は真似しましょうね♪」

「真似しちゃダメだよ…」

学校のことで雅樹さんは帰れないらしく、祐希ちゃんと二人ということになったのだが…

「だから違うって、そんな固い文章打つ奴いないわよ。」
報告書のようなメールを打ってしまう私を祐希ちゃんが普通の文章にしようと訓練していた。

「ん～…メールって難しいね…」

「普段喋るときと同じように打つだけよ?」

「う～…」
仕事の癖で口調が報告口調になってしまう…

「だ～か～ら～!!」

「ふぇぇん」

結局、報告口調が直ったのは真夜中だった。
相変わらず絵文字や、顔文字は使えないが、とりあえず、最低限のことを出来るようになったヴィヴィオ、必死に教え疲れきった祐希奈は、気を失うようにして眠りについた…
ちなみにカナンは計三回あった祐希奈からの電話に悩まされ、眠りについたのは午前3時を回っていた。電話の内容は…
『これから行くからね♪』
『殺すわよ♪』

『ふふふふふ…』
という会話にもならない短い電話だった。

特に最後の電話が来たときは、バリアジャケットを装着していたのは内緒だ。

カナン
「今さっき来た質問なんだが俺の能力が高すぎないか？シオンのライバルならもう少し下げろって来たんだが…
一応言うが俺はシオンのライバルじゃないぞ～。別作品のキャラだからな？
ついでにライバルだとしても、能力の差は対してないぞ？
俺にはアビリティスキルなんてものはないし、俺の技の威力は天候なんかでかなり変わる技が多いからな。
データだけ見るとめちゃくちゃ強く見えたかもしれないけど、実際は、条件が完璧にそろうことは少ないし、ユニゾンしてもいいとこＡＡＡ＋だ。」

祐希奈
「つまりこいつの持ち味は圧倒的なスピードを生かして手数で勝負ってことよ。」

ヴィヴィオ
「パワーなら基本的にはシオン君の方がカナン君より強いから結局は互角くらいになるんだ。」

カナン
「まさかこんな質問が来るとは思わなかったからびっくりしたぞ。」

祐希奈
「それじゃあまた次回。」

ヴィヴィオ
「次回は、久しぶりの学校編の予定だよ～。」

カナン
「何か企画があるらしいから予定通りに行けるかはわからないけどな。」

祐希奈

「とにかくよろしくね♪」
ヴィヴィオ
「またね～♪」
カナン
「人気投票もまだやってるから俺に入れてくれよ？」
祐希奈
「入れなくていいわよ～。」
カナン
「おい…」
ヴィヴィオ
「終わり！！」

第十五話　原石

ヴィヴィオ
「今回の道場は凄かったね～。」
祐希奈
「確かに凄かったわね…」
カナン
「いつもより数倍の疲労があるからな…」
メイデン
「？何故二人はそんなに疲れているんだ？」
祐希奈・カナン
「お前らの／あんた達せいよ／だ！！！」
ヴィヴィオ・メイデン
「？」
カナン
「ポロりは何とか聞かないでくれ…」
祐希奈
「全員でフェニックスとトウヤさん止めるのにどれだけ苦労したことか…私達だけなら倒れてるわよ…」
ヴィヴィオ
「あ、そうだ。ポロりって結局なんなのかな？」
祐希奈・カナン
「知らん！！」
メイデン
「タカトさんの真似か？」
祐希奈・カナン
「違う！！」
美鈴
「ポロりって言うのはね～♪」

祐希奈
「ブレードエクスプロージョン！！」
ドン！
美鈴
「あ～れ～♪」
カナン
「やり過ぎだろ…一般市民だぞ？」
祐希奈
「大丈夫よ。マジ○ガーZもびっくりの鋼鉄の体をしてるんだから。」
ヴィヴィオ
「マ○ンガー？」
カナン
「伏せられてないから！！」
メイデン
「マジン○ーとは何だ？」
祐希奈
「意味ない！！それ限りなく伏せる意味がないわよ！！」
ヴィヴィオ・メイデン
「だから、マジンガ○って何／だ？」
カナン・祐希奈
「ぬあああああ！！」
美鈴
「マジンガー○って言うのはね～♪」
カナン
「意味ないって言ってんだろが～！！！！」
カキーーン…
美鈴
「あ～れ～♪」
祐希奈

「あんたもやってるじゃない…」
カナン
「俺のは鞘だから大丈夫だ。」
ヴィヴィオ
「あれだけ飛んだら似たようなものだと思うよ?」
メイデン
「ところで今回の質問コーナーはやらないのか?」
祐希奈
「今回はお休みよ。」
カナン
「じゃあこの前書きいらないだろ…」
ヴィヴィオ
「今回はクロスリレー出演おめでとう前書きなんだ。」
祐希奈
「質問は後回しよ♪」
カナン
「ということは質問自体は来てるんだな?」
メイデン
「またあれをやる気か?」
祐希奈
「消化しきれなかったらやるかもね?」
カナン
「そうなれば、また悲惨な運命が…」
ヴィヴィオ
「あはは…頑張って。とにかく、私達四人は確定です。ありがとうございます。」
祐希奈
「フフフ…この機会にＫＤＧをさらに大きく…」
カナン
「やめい!!!」

メイデン
「無理だと思うぞ?作者達の間でもかなり有名だ。」
カナン
「…」
祐希奈
「毎回、誠心誠意宣伝してるからね♪」
ヴィヴィオ
「と、とにかく、よろしくお願いします。では本編をお楽しみください。」
「…」
私は起きたは良いが、考えごとをしていた…
スカリエッティのことだ…最近はバタバタしていて、考えることすら出来なかったけど、今、冷静に考えると、あいつにまともに通った攻撃は、水蒸気爆発とカナンの斬撃のみ…私やヴィヴィオは、傷一つつけられなかった…
まだヴィヴィオはいい、スピードでスカリエッティに並んでいるのだから…しかし、私は…

「ん~こう言う時の師匠よね…」
決断をし強くなる第一のステップとしてシグナムさんのもとへ行く準備をする。朝早いが、あの人ならおそらく…

「く~す~」

「ちょっと行ってくるわね。」
未だ眠るヴィヴィオにそう言って家を出た。
しばらく歩き、はやてさんの家につく。入ろうかと思ったが必要がなくなった。

「こっちだ。」

庭の方からシグナムさんの声が聞こえたからだ。
庭に行くとシグナムさんは目を閉じ、多分、瞑想と思われることをしていた。

「こんな朝早くに何のようだ?」
目が開かれ、まっすぐにこちらを見据える。

「どんな敵でも通るような斬撃を教えて欲しい。」
強い想いをこめ、見つめ返す…

「…ようやく最初の壁に当たったようだな…いいだろう…剣を構えろ。」

「ありがとう…アシェル。」
「ｓｅｔ　ｕｐ　ｂｌａｄｅ」
右腕にブレードが展開され、祐希奈は構える。

「今回、お前に教えるのは足腰の使い方と重心の移動だ。今までのお前はほとんど腕の力だけで剣を使っていただろう?」

「うん。力まかせに振ってただけだった。」

「それでは、いずれ限界が来る。つまり今の祐希奈がそれだ。」

「話はいいわ。何をすればいいの?」

「やることは簡単だ。魔法を使わず私のレヴァンティンを弾き飛ばしてみろ。」
そう言って正眼にレヴァンティンを構える。

「わかった…はあああ！！」
ギィン…
全力で斬ったはずなのにレヴァンティンは微動だにしない…

「単純な腕力勝負ではお前に弾き飛ばすことは不可能だ。」

「じゃあ、最初にシグナムさんがお手本見せて欲しい。」

「仕方ないな…構えろ…」

「ありがとう。」
カシャッ…
お互いに向かい合う…

「はあああ！！」
シグナムさんが一歩踏み込む…重心は左足から…今二歩目…重心は右足か…後は腰の回転…
ガキィン！！
刃が触れ合う…ここでもう一度腰の回転…
パキン…
たった一度の接触で刃は叩き折られた…
どうやら以前は私の実力に合わせてくれたらしい。
ま、とにかくやり方はわかったしやりますか！

「オッケー。もう行けるわ。」

「おいおい…この技術を習得するのに私でもかなりの時間を使ったんだぞ？
そう簡単には行かない。」
苦笑まじりにシグナムさんが言った。

「まぁ、見ててよ。」
ブレードを再生し、構える。

「ああ。」
シグナムさんが再び正眼に構える。

「…」
踏み込む…左…それから右へ…腰の回転…
ガキィン！

「む…」
先程より遥かに重くなった斬撃…

「ここ！」
グッ！！
さらに腰の力と右足へと重心を移動し、切り上げる。
キン…
高い音をたてて、シグナムの手からレヴァンティンが弾き飛ばしされた…

「なっ！」
この事実に驚く…たった一度…本当にたった一度の手本でこの技術を習得した祐希奈…受け流しを教えたヴィヴィオでさえここまでの才能はなかった…

「よし！」
祐希奈本人は、ガッツポーズをして、喜んでいた。
祐希奈は戦い方も自分に近い…祐希奈なら今まで自分が修得した技術を全て伝えられるかもしれない…

私と並ぶ…いや、私以上の騎士へと成長してくれるかもしれない。
師匠の最高の喜びは弟子が自分を越えること…まだ見ぬその姿を想像すると自然と笑みがこぼれた。

「これだけでいいの？って何か笑ってるし…」
いきなり振り向かれたので笑った顔のままだった私は直に見られてしまった…

「…お前は何も見てはいないな？」

「へ？」

「お前は何も見てはいないな！！」
鬼の形相で訊ねられた…

「み、見てない見てない。」

「よし…先程の問いかけだが、まだだ。いつでも、どんな状況でもこれが出来るようになるまで日々精進しろ。」

「は～い♪じゃ、私行くわ。ありがとね♪」

「ああ。」

「あ、そうだ♪」
帰り際祐希奈が振り向く…

「ん？」

「笑った顔…綺麗だったわよ♪」

「斬る！！！レヴァンティン！！！」
ダッ！！
走り込むが…
「あはははは！！じゃあね～♪」
ダッ！！
祐希奈も走りだした。ある程度距離が離れていたため、追い付けない。しばらく追いかけたところで諦めた。

「まったく！！…ふ。とんでもない弟子を持ってしまったな。」
前半は怒りながら後半からは少し笑いながら言って見送った。
計画その二…
（なのはさ～ん！！）
朝も早いため、念話で呼びかける…

（祐希奈？こんな朝早くから何？）

（ちょっと訓練して欲しいんだ。お願い♪）

（訓練？何の？）

（反応&動体視力強化特訓♪）

（仕方ないなぁ…ちょっと待ってて。）

（さっすが～♪）
しばらく待つ…玄関が開きなのはさんの登場。まだ髪をおろしているところを見るとまだ起きて間がないらしい。

「こんな朝早くでごめんなさい。でも、少しでも多くメニューをこ

なしたいから。協力して欲しい。」

「ヴィヴィオがお世話になってるし、協力はするけど、何かやりたい訓練があるの？」

「なのはさんがすることは簡単よ。十発ほど、スフィアを私に向けて放って欲しいだけ。ただし、最大速度で操作してね？」

「祐希奈は避けつづけるってわけか…当たるとちょっと痛いかもしれないよ？」

「実戦なら痛いどころか下手をすれば死ぬわ…痛いくらい我慢するわよ。」

「わかった。じゃあ行こうか？」

「お願いします…」

林に到着…なのははスフィアを展開。祐希奈はバリアジャケットのみ纏い、構える。

「ブレードはいらないの？」

「防ぐのにブレード使ってたら攻撃のチャンスが減っちゃうからね…」

「わかった…アクセル・シューター…」

十発のスフィアが展開され、なのはの周りに浮く。

「シュート！！」

一斉にスフィアが放たれる。
まずは三発…高めの直線なため、屈んでかわす。
続いて左右から二発、少し後ろに飛ぶ…

「甘いよ。」
ドドドド！！
私の動きを予想して上空に待機していたスフィアが降り注いだ。

「つ～…動きの隙が大きかったか…」

「う～ん。それもあるけど、動き始めが速かったかな？
今の速さで動くと左右のスフィアでも追撃できるよ？」

「ギリギリで、最小限の動きでってことね…わかった。」

「回避できても常に追撃の警戒もしておいて。」

「オッケー。」
訓練再開…しかし、数秒後にはまた被弾…
何度も繰り返すが、結果は同じ。

「た～！」
非殺傷でも衝撃はある…衝撃によって内出血が出来た。

「祐希奈、大丈夫？」

「ちょっと試したいんだけど、なのはさんに接近戦しかけてもいい？」

「それは構わないけど…余計に怪我するよ？」

「ま、その時はその時よ。ブレード展開！」

「了解。」

「知らないからね。」

スフィアを展開し、放つ…

「レッツゴー！！」

確かに仕掛けてもいいとは言ったが、正面からの突撃…これでは的だ。

内心ため息をつきながらスフィアを向かわせる…

正面二発…

「よっ！」

ザザザー

「スライディング！？でも！！」

残っているスフィアの内五発を下方に放つ。

土煙が上がる…直撃のはず…しかし、土煙の中から祐希奈が飛び出してきた。

前宙返り…逆さまの状態のままなのはに接近。

「はあああ！！」

体を捻り重力落下と回転の力を使い斬りつける。

「っ！！」

「プロテクション！」

レイジングハートが自動でプロテクションを展開。刃を止める…

「終わりだね！！」
残り三発のスフィアで祐希奈を狙う。

「今！！」
プロテクション激突し、ブレードの勢いが止まったところで再び力を入れる、シグナムの訓練の応用…力を入れるタイミングを変えることで、プロテクションが壁の役割を果たし、なのはから離れた。
結果、三発のスフィアは先程祐希奈がいたところを通過した。

「よし！！全部避けた！！」

「めちゃくちゃな身体能力だね…」
攻撃をすると決めてから、反応が異様に速くなった…変わった子だな～。

「私って動いてる時の方が冷静に周りを見れるらしいわね。」

「祐希奈はちょっと変わったタイプみたいだね…」

「自分でもそう思ったわ…」
どうやら祐希奈は、動くことで、視界に捉えたものの動きを把握して、避けているみたい…ということは動体視力はもともと飛び抜けていた、ということになるよね…

「一対一の接近戦なら祐希奈は…」
恐ろしく強くなるかも…
まだまだ荒削りではあるが、これからが楽しみになる。ヴィヴィオ、祐希奈、カナン…この三人は化けるかもしれない…

「よ～し。あとは…なのはさん。スバルさんの技のやり方見せて。」

「スバルの？」

「使える技があれば真似しようと思って♪」

「あはは。わかった。レイジングハート？」

「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ。」

スバルさんの戦闘が映される…

「あ、今の良い。もう一回見せて？」

祐希奈が注目したのは…スバルのディバインバスター…同じ映像を見る。

「祐希ちゃーん！！なのはママー！！」

この声は…ヴィヴィオ？

目線を向けるとヴィヴィオがこちらに向かって来ていた。

「ヴィヴィオ？あんたにしては早いじゃない。どうしたの？」

「布団みたら祐希ちゃんいないんだもん…携帯みたら林で訓練してるわね♪って書いてあったから…」

「ふーん…で、あそこから歩いてくるバカは何？」

ヴィヴィオの後から見慣れた黒髪の少年が歩いてきていた。カナンだ。

「カナン君に誘ってみたら、暇だし見に行くって来てくれたんだ。」

「おう。頑張ってるか？」

ダッ！！
「帰れ！！！」
バキャア！！！
「ぐはあ！！！」
顔面に飛び蹴りが炸裂し、盛大にカナン君が吹き飛んだ。
「ところでヴィヴィオ？そのバスケット何かな？」
カナンが吹き飛ぶのは慣れたことなので、大して気にもせずなのははヴィヴィオが持っていたバスケットについて訪ねる
「あ、これはねサンドイッチだよ。訓練してるんなら少しお腹空くんじゃないかなって思って作ったんだ。」
「ヴィヴィオ、ありがとう。祐希奈～！ヴィヴィオがサンドイッチ作ってくれたから食べよ～？」
「ヴィヴィオ、ナイス♪メイデン一緒に食べましょ。」
「ああ。マスター食べてくるな？」
倒れるカナンを無視して、サンドイッチを四人で食べる…
「お前らちょっとは心配しろよ！！」
復活したカナン君がこちらに来た。
「そんなに心配しなくてもカナン君の分もあるよ～。はい。」
「違う…ヴィヴィオ…違うんだ…そっちの心配じゃない…」
「え？味かな？多分今回は大丈夫だと思うんだけどな…」

「いや、俺が悪かった。ありがとな。」

「う、うん。」

「ヴィヴィオ。ちゃんと美味しいぞ。」

「ええ。カナンがおかしいだけよ♪」

「そうだね♪カナンったらダメだよ？」

「魔王二人組め…」

「「消されたい…？」」

管理局の白い悪魔と銀髪の破壊神が降臨した…

「すいません…生きたいです…」

「仕方ないなぁ…今回だけは許してあげるよ。」

「仕方ないなぁ…」

ドゴオ！！

「がはっ！！」

「これで許してあげるわ♪」

「あ、ありがとう…ございます…」

蹴りじゃなかっただけましか…

「それで、いきなりなんだけどさ。ヴィヴィオ、ちょっと模擬戦の相手してくれない？」

「え？それはいいけど…本当にいきなりだね。どうしたの？」

「今日でどれだけ強くなったか試したくなったのよ。」

「あはは。わかった。私も試したいことあるし、やろっか。」

「そういえばまだ前の勝負ちゃんとやってなかったわね。あれの再試合ってことでどう？」

「勝ったら何かあるの？」

「カナンに告白する♪」

「「ええ！！？？」」

見事にハモる…

「お、おおお、お前なぁ！！」

「はぅ～…」

「にゃはは。大変だね～。」

「さてと、やりますか！」

「ま、負けられない…」

「どっちが勝っても俺は告白される…なんだこれ…」

「二人とも頑張れ～。」

「マスターも早く決心しなくてはな♪」

「ぬあああああ！！」

「フェアリー！！」

「アシェル！！」

「「セットアップ！！」」

「「ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ…ｓｅｔ　ｕｐ。」」

「サードモード…クローフォーム！」

「了解。」

ヴィヴィオの手の甲に虹色の爪が出現。

「ちょっと！そんなの使ったら！！」

「大丈夫。少し前から調整は終わってたんだ。もう、完成してるよ。」

「ヒヤヒヤさせないでよ…罰として…」

「展開…」

「吹き飛びなさい！」

加速…
「出来たらね！」

ヴィヴィオも加速し、あっという間に距離が縮まる。

「紫電！」
ゴア！
炎が剣に纏われる。

「牙を剥け！」
ジャキ！
左右の爪が伸びる

「一閃！」
「翔舞！」
ギァン！

「ちっ！」
振り降ろされた刃と振り上げられた右の爪。力負けしたのは祐希奈…体が浮いた。
浮いた祐希奈に…ヴィヴィオは回転の力を加え、構えるは左の爪…
「天砕牙！」
横殴りの一撃が放たれる。ブレードは上向き…なら！

「ブレードエクスプロージョン！！」
「Ｒｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！」
ドン！
上向きのブレードの先端が爆発し、急降下。ギリギリで避けられた。

「燃やし尽くせ！」

落下しながら弓を構える。ヴィヴィオは体制を立て直していない！

「スパイラル！フレアー！！」

直撃コース。

「モードチェンジ！」

「Ｗｉｎｇ　ｍｏｄｅ！」

ヴィヴィオの背中に一対の虹色の翼…

「なっ！」

羽ばたかれ、急上昇…矢をかわす…

旋回…突撃！

「セカンドモード！」

爪の変わりに巨大な刃がヴィヴィオの手に出現…

「アシェル！」

「了解！」

祐希奈には三対の白銀の翼が出現する。

上昇！

「「はあああああ！！」」

刃同士が交差する。すれ違う二つの光…しかし、ヴィヴィオの翼は桁が違う…

慣性の法則を完全に無視…ほとんど直角の動きで急上昇。

もともと祐希奈の翼は防御用…そこまでの能力はない。

遥か上空でヴィヴィオが停止…翼をたたんで身を包み刃を前に急降下。回転し、風を切り裂きながら降ってくる…

「まずい！」

斜線上から退避紙一重で直撃は避けられたが…

「くあ！」
あまりの風に抵抗も出来ず地面に叩きつけられた…

「いった～…あり得ないって…また準備してるし…」
そう…上空では再びヴィヴィオがあの技を出そうとしていた。

「なんか癪ね…こっちだってやってやる…」
ゴアアア！！
怒りの力のみで新たな技を習得…白銀の翼が炎の翼へと変わる…

「受けよ、聖なる鉄槌！」
「炎よ集え！破滅の業火！」

「ホーリーレイザー！」
「鳳凰裂光翔！」

七色の光と紅蓮の赤がぶつかり、互いをうち消しあい、消滅させんとし拮抗を結ぶ…光に包まれ…一瞬の静寂のあと、大爆発を起こした…

「「はぁ…はぁ…」」
それだけの衝突があったにも関わらず二人は立っていた…

「はぁ…はぁ…よく立ってるね…結構痛かったんじゃないかな？」
ただでさえ魔力消費が激しいサードモードで大技を二回も使ったため、かなり息が上がっている…

「はぁ…はぁ…このくらいで、倒れてなんていられない…」
まだ試していないこともあるのだから…

「「フルドライブ！！」」

「おいおい…あの二人無茶しすぎだぞ…。」

「ヴィヴィオも以外と負けず嫌いなんだよね～。祐希奈は筋金入りでしょ？」

「確かに祐希奈は負けず嫌いっすから簡単には倒れないっすね…ヴィヴィオもとなると…終わるのはいつになることやら…」

「マスター…同時に倒れたりしたらどうする？」

「おんぶに抱っこで家まで送るか…」

「カナンも大変だね～。」

「ははは。まぁ慣れましたよ。」

「あ、始まるみたいだよ？」

視線をもどす…

「もう、あの羽は使える魔力がないみたいね…」

「通常でもフルドライブより魔力を使うから…フルドライブと同時に使うなんて無理だよ。」

「さて…そろそろ一撃入れさせてもらうわよ…」

「遠慮したいな…」

ザリ…

「そう遠慮しないで受け取りなさい！」

「お断りだよ！」

「Ｂａｒｓｔ　ｍｏｖｅ！」

ギュオ！

一瞬で接近…右の拳を引く。

「相変わらず速いわね！」

ギァン！

一瞬の手応え…それも消える…背後で風の音…

「そうかな！」

「Ｈｉ　ｗｉｎｄ　ｉｎｐａｃｔ！」

ゴウ！

空弾は何もない空間を通っていた…

バク宙…ヴィヴィオの頭の上に両拳に炎を纏う祐希奈。

「烈破爆砕！」

一発目…バックステップで回避…

「ウインド！」

左拳に風を纏う…

「インパクト！」

「二連突！！」

拳がぶつかり合いお互いに衝撃が抜ける…互角…

「はあああ！！」

両拳、両足に風を纏うヴィヴィオと、同じく炎を纏う祐希奈。
炎の拳が頭を狙う、屈んでかわして、足払いと同時に空弾を放つ。
飛んでかわした祐希奈は蹴りを放ち空弾を横に蹴り飛ばした。
ヴィヴィオはサマーソルトを繰り出しながら、起き上がる。蹴りはかわすが…
「吹き飛べ！」
風が唸りをあげる…

「プロテクション！」
シールドを張るが凄まじい風に吹き飛ばされる。

「Ｂａｒｓｔ　ｍｏｖｅ！」
再びヴィヴィオが接近…

「カートリッジロード！」
「Ｈｉ　Ｗｉｎｄ　ｉｎｐａｃｔ　Ｅｘ」
左腕に風が集束…引かれ…放たれる直前…祐希奈は笑う…
この時を待っていた…ヴィヴィオの動きが直線になる時を…

「一撃粉砕！！」
左手をかざす…前方には赤く燃える魔方陣…

「烈破紅蓮爆砕撃！！」

それを炎の拳で殴る。
魔方陣から巨大な火柱が放たれる…これが、スバルのディバインバスターの祐希奈流アレンジ…
ヴィヴィオからも最大威力の風が放たれるが、攻撃力なら祐希奈の方が上…ゆえにヴィヴィオは拳と刃まともに合わせなかったのだ。
炎の本流は一瞬の拮抗の後、風を飲み込み、ヴィヴィオのもとへ…

「っ！」
プロテクションなどほとんど意味をなさずヴィヴィオは丸ごと飲み込まれた…

ふらふらになりながらも、低い防御力で耐えきったヴィヴィオがいた…

「決めてあげるわ！」
もう一度魔方陣を発生させた…
ここで、弓を使えば、終わりだったかもしれない…しかし、強敵との決着を急ぐがゆえにしてしまったミス。

「私もスバルさんの技にアレンジしようとしてたんだ…成功するかわからないからまだ使いたくなかったんだけど…たまには一か八かもいいかもね！」
ゴウ…
今までの風の集まり方ではない…ヴィヴィオの腕に巻き付くように風が集まっている…
早く決めろと頭で警鐘がなり響いた…

「行けぇぇぇー！！！」
全力で魔方陣を殴った。炎の奔流が迫るなかヴィヴィオはゆっくりと腕を引いた…

「リボルバー！！」
ギュオオ！！！
激しく風がヴィヴィオの腕を渦巻く…
目の前まで炎が迫る。

「ストーム！！」

ゴオオ！！
回転しながら放たれた風は炎を巻き込みながら進む。
炎を放った本人…祐希奈の元へと…

「返したぐらいでなんだって言うのよ！！」
「ｒｅｆｌｅｃｔｉｏｎ　ｆｅａｔｈｅｒ。」

翼を纏い、受け止める…

「もう一度くらえ！！」
「ｒｅｆｌｅｃｔｉｏｎ！」
さらに反射し返す。
しかし、ヴィヴィオはもうそこにはいなかった…

「セカンドフルドライブの私の真髄はね…」
背後からの声…そして風の音…

「なっ！」
振り向いた時には遅かった…

「加速なの忘れてた！？」
ドゴオ！！
腹部への一撃…

「ぐっ…は…」
地面から足が離れた…

「おおおお！！！」
ゴウ！！

「が…」
腹部へさらに衝撃が走る…意識を手放し…かけた…
「ふぅ…」

「最後まで気を抜いちゃダメなのよ…」
ゴア!!
ブレードに炎が纏われる。

「っ!!」
慌てて離脱しようとするが…出来ない…腕をがっちりと捕まれていた。

「烈閃!!烈火!!」
目の前で火柱が上がる…あ～痛そうだな～…とりあえずプロテクションを張り、モードをシューティングへと移項する。

「火龍!!一閃!!」
ドカアアア!!!

「きゃあああああ!!!」

木の葉のように吹き飛ばされ、木々をなぎ倒しながらようやく止まった…

「はぁ…はぁ…やったかな…」
零距離直撃…並のダメージではないはず…

「祐希奈!まだです!!」
アシェルが警戒の声をだす。
「フェアリー!カートリッジフルリロード!!」

姿は見えないがわかる…最大の一撃を放とうとしている！

「アシェル！クリムゾンアロー！！」

「「了解！！！」」

なら…こちらも最大威力を放つだけ！！

「撃ち貫け！！！炎の天使！！！」

祐希奈は引き絞る…ヴィヴィオを倒すために…

「目覚めよ！！！破壊の妖精！！！」ヴィヴィオは掲げる…祐希奈を倒すために…

「ヴォルカニック！！！アロー！！！！！」

放たれる地獄の業火

「ディストラクション！！！ブレイカー！！！！！」

振り降ろされた、破滅の光…

均衡を保つ、力と力…

「「おおおお！！！！！」」

一度目の爆発など比べ物にならないほどの大爆発が起きた…

ボロボロになった二人はまだ立っていた…

「「まだまだ！！！」」

「エクセリオン！！」

「インフェルノ！！」

お互い残ったカートリッジを使い無理やり魔力を底上げする。

「「バスター！！！」」
砲撃と矢が衝突する瞬間異変が起きた…
二人の技が切り裂かれ…真っ二つに割れた…

「たく…お前ら無茶苦茶しすぎだ…」
カナン君だった…

「カナン…どきなさい…まだ決着がついてないわ…」

「うん。あと少しだけ…お願い…」

「はぁ…」
カナン君が消えた…？

「いくらお前らのお願いでも却下だ。」
シュド！
背後からの声と後頭部に衝撃…

「うっ！カ…ナ…ン…く…」
バタリ…

「お前もだバカ！」

「え？」
シュド！

「あ…」
バタリ…

二人に手刀を叩き込み眠らせた。

「またヴィヴィオが迷惑かけちゃったかな？ごめんね。」

「いえ、もともとはこのバカが悪いんですから。」

「ところでマスター…その二人どうする気だ？」

「こんなボロボロな状態じゃな…メイデン俺の魔力わけてやるから、この二人の世話、手伝ってくれないか？着替えとかは俺がやるわけにはいかないからな。」

「そうだな。手伝おう。今からか？」

「いや、俺の家についてからでいいよ。なのはさん。そういうわけなんで、許してもらえますか？」

「うん。二人をよろしくね。」

「了解っす。じゃあまた。」

「またね～。」

なのはさんに背を向け帰る。

「…」

二人を背負いながら帰る。ヴィヴィオはわかっていたが祐希奈も相当軽い…この体重であのパワーを出せるのだから凄いと思う。

「マスター？」

「ん？」

「結局勝負の結果はどうなるのだろう？」

「引き分け…だろ。」

「なら告白はどうなるんだ？」

「なしだな。」

「そうか…まぁ一番それが良かったのかもな。」

「ああ。告白なんて本当に好きな奴にするもんだ。遊びでやることじゃない。」

「遊び？二人は本気かもしれないぞ？」

「んなことあるかよ…ヴィヴィオも態度は変わってないし、祐希奈なんて毎日蹴りを入れて来るんだぞ？」

「…」

相変わらず鈍いことだ…

「さて、そろそろか…メイデン頼む。」

「わかった。」

パアアア…

光につつまれ本来の大きさに戻る。

「うお…」

「何だ？」

「メイデンと目線が同じっていうのがとてつもなく不思議でな…」

「はは。まぁ、気にするな。中身は同じだ。」

「そ、そうだな…」

「ただいま～。」

「おかえり…って隣の方は？」

「私だ。」

「まさかメイデンさんかい？」

「ああ。こっちの身体も試さないといけないからな。」

「最近のロボットは凄いねえ…」

いや、ありえないからな？

「今日はこいつら二人も止まるから。」

「何でそんなにボロボロなのかは尋ねない方がいいかな？」

「そうしてもらえると助かる。」

「ちょっと話せない…」

「わかったよ。とにかく入りなさい。」

「感謝する。」

「ありがとう。」
未だ二人は起きない…まぁあれだけの魔力を一気になくしたのだから当たり前だが…夕食を終え、風呂と着替えはメイデンに任せた。
かなり苦戦したようだが、なんとか終わったらしい。

「着替え終わったから入っていい。」

「はいよ~。」
ガチャリ…
ジャージ姿の二人がいた。

「よし。部屋まで運ぶか。」

「二人を背負って階段はさすがにきついだろう。私も背負う。」

「そうか?じゃあ頼むな。」

「ああ。」
二人を俺の部屋のベッドに寝かし、自分も風呂に入る。
部屋に戻ると、三人は川の字で寝ていた…

「こんな光景、世の中の男に見られたら…殺されるかもな…」
美少女二人と美女が自分のベッドで寝ている…普通の男なら変な気の一つや二つおきそうだが

「可愛いな。」
カナンはおきない…中学生とは思えないような強靭な精神力を持っ

ていたからだ。祐希奈はカナンを知らず知らずのうちに鍛えていたのだった…

「ふあ…俺も少し寝るか…」

壁にもたれかかり、目を閉じる…

少年は浅い眠りに落ちていった…

第十五話　原石（後書き）

クロスリレーの関係で執筆速度が落ちると思いますが出来る限り頑張りますのでよろしくお願いします。

第十六話　急襲（前書き）

すいません。ちょっと急いでかいたので誤字脱字が多いかもです。
ざっと修正はしましたが、明らかにおかしい文字などがあれば言ってくださると嬉しいです。

第十六話　急襲

きゅるるる…
お腹が空いて目が覚める…
「ん…っ！」
目の前に誰か知らない人がいる！
跳ね起き距離をとる…

「…あ…れ？メ、メイデン？」
何で大きくなってるのかな…
それ以前にここは…カナン君の家？

「う～ん…何でだろ…」

ヴィヴィオは寝起きのせいか考えが纏まらず？を浮かべて唸っていた。

「誰か起きたのか？」

「ひゃうううう！！」

ヴィヴィオは、暗闇、さらに背後からいきなり声をかけられたことでびっくりしてしまった。
…まだ、これが普通の女の子なら良かったのだが…
ヴィヴィオは普通の女の子ではない…デバイスを起動した…
「ディ、ディディ、ディバイン！！」
混乱のなか青い光が集まる…

「うわっ！バカ！」

ガキ！

「きゃ！」

砲撃が放たれる直前、デバイスが弾き飛ばされた。

「まったく…ヴィヴィオ、俺だ。カナンだよ。」

若干苦笑気味のカナン君がいた…

思考停止…

「え…？」

「人ん家でいきなり砲撃を放とうとするなんてどういう教育を受けたんだ？」

「う…ごめんなさい…」

「ははは！冗談だ。俺の注意が足らなかったな。こっちこそごめん。」

「そんな…私が悪いのに…」

「じゃあ、おあいこってことにするか。」

下手をすれば家に大穴が開いたかもしれないのに、おあいこなはずがないのだが…

「でも…」

「でもはなし。この話は終わり。」

「う、うん…」
強制的に話を中断…こうでもしないとヴィヴィオは謝り続けることだろう。
カナンはヴィヴィオの性格をよくわかっているため中断した。

「で？何で起きたんだ？」

「そ、それは…」
きゅるるる…

「っ！！！」
何でこういう時に鳴るの～！！
恥ずかしいよ～…

暗いのでわかりにくいが、今、ヴィヴィオの顔は真っ赤に染まっている。

「…ぶは！！ちょっ！！ちょっと…くくく…ちょっと待ってくれ…くくくく…し、死ぬ…」
まだ寝ている二人を起こさないように、必死で笑いを抑えているカナン君…
おそらく涙を目に浮かべながら腹を抱えていることだろう…
ドゴッ！！
「ぐほ…も、もう大丈夫だ…笑ったりしてごめんな。」
圧し殺した声でカナン君が言った…

「い、今何したの？」
凄い音が鳴った気がしたけど…

「き、気にするな…
女の子を笑うなんて最低だからな…
自分で制裁を下しただけだ…」
どうやら笑いを抑えこむために自分でみぞおちを殴ったらしい…

「そんなことしなくても…」

「だから気にするなって…
話を戻すけど、腹が減ってるんだな？」

「うん…ちょっとだけ…」
本当はかなりだけど…

「ふ～ん…何か作って来てやるから、ちょっと待っててくれ。」

「い、いいよ。」

「却下。じゃあな。」
バタン…

「行っちゃった…」
行っちゃったものは仕方ない。
大人しく待とうかな。
そうだ。机でも出しておこう。
これかな？
折り畳み式の机を引っ張り出し、四苦八苦しながら組み立てていく。
「さて…作ってやるとは言ったものの…どうしたものかな…」
俺に作れるような簡単で手早く出来る料理…
チャーハン…こないだ作ったからなし。

ラーメン…何度でも食べてもらえる自信はあるが、麺をうつ際音が鳴るため却下。
ん～…ロールキャベツでいいや。さっぱりしてるし、多分簡単だし。

多分と言っているのは初めて作る料理だからである。
とにかく料理が決定する。
チャーハン、ラーメンときて、何故ロールキャベツになるのかが不明だが…

冷蔵庫から材料を取り出し作り始める。
カナン自身は料理のレパートリーが少ないとは言っているが、実は作らないだけで挑戦すれば大抵のものは作れたりするのはここだけの話…

「あ～…調味料は～コンソメでいいか…とりあえずまずくはならないだろ。」

ちなみにカナンが初めての料理を作る時はいつもこんな感じでかなり適当である…
失敗しないのは奇跡に近い…

しばらくして…
「こんなもんでいいだろ。」

つまようじを刺してなんとなくいいかな～と思ったのでロールキャベツは完成…なんとも適当な料理作りである…
さすがに炊き直すわけにはいかないので、晩御飯のあまりを温め部屋に戻る

「あ、おかえりなさい。」

「おかえりってのもおかしい気がするけどな…とりあえずただいま。
机出してくれたんだな。ありがとな。」

「美味しそうだね。」

「本日の料理はライスとロールキャベツ、晩御飯の余りの肉と野菜
のこしょう炒めになります。
なんてな。」

「あはは。食べてもいいかな?」

「ヴィヴィオのために作ったんだから遠慮するな。」

「その割には量が多いよ?」

「そうか?俺の目分量だからな…
ヴィヴィオには多かったか…」

「じゃあ一緒に食べよ?」

「そうだな…そうするか。」

「うん。いただきます。」
ヴィヴィオはきちんと両手を合わせ合掌しながら言った。
律儀だなあ…

「もぐもぐ…」
ヴィヴィオは俺の作ったロールキャベツから食べた…反応は…

「美味しい…やっぱりカナン君って料理上手だね。」

「そんなことないって。ロールキャベツなんて誰でも作れる。」

「そうかな～？」

「そうそう…もぐもぐ…」

ロールキャベツからつまようじを抜き取り自分も食べる。

初めてにしてはわりかし旨く出来た方か。

「まぁまぁだな。でも、ヴィヴィオや祐希奈には程遠い。」

「祐希ちゃんはともかく、私はそんなにお料理は上手くないよ？」

「あれで上手くないんなら世の中大抵上手くないって…」

ヴィヴィオや祐希奈の料理は店に出されていても問題ないと思う…

なんせ材料から何からほとんど手作りなのだから…

ゴソ…

「ん？」

音がした方に頭を向けると祐希奈が起き上がっていた…

「あ、祐希ちゃん。祐希ちゃんも食べる？」

「味は保証しないぞ。」

「…うん。食べる。」

トコトコとこちらに向かって来た。

何かおかしい…

「お～い祐希奈？大丈夫か？」
目の前で手を振ってみる…
「大丈夫。」
ストン…
「え？ゆ、祐希ちゃん？」
「お、お前…」
祐希奈が座ったところは俺のあぐらの上…
「なぁに？」
きょとんとした顔でこちらを向く…
もしかしてこいつ寝ぼけてるのか？
「あはは。祐希ちゃん寝ぼけてるみたいだね。」
「笑い事じゃないぞ…目が覚めたらもれなく死刑だ…」
「大丈夫だよ。前にもあったけど祐希ちゃん寝ぼけると長いから。」
「それはそれで拷問に近いぞ…」
いつ起きるかわからない状況が延々と続く…
かなり怖い…
「食べたい。」
「は？ああ。食べろよ。」

「食べさせて？」
祐希奈は首を傾げながらこちらを向く…

「…」
待て…落ち着け俺…相手は祐希奈だ…
今抱き締めたくなったただなんてあり得ない…あり得ないんだ…

「ねえ…食べたいよ？」
若干涙目で見られた…
元々はかなり可愛いため威力は殺人級…

「くあああああ！！」
ダメだ！！やめろ俺！！耐えるんだ！！

「確かに拷問かも…」
今のカナン君を見るとよくわかる…

「ん…マスター？何をそんなに騒いでいるんだ？」
大きなメイデンが歩いてきた。
珍しくこちらは寝ぼけてはいないらしい。

「メイデン…頼む…助けてくれ…」
心から思った…日頃の祐希奈と今の祐希奈…
いつもはきついが今は甘えん坊…
抱き締めたくなる衝動を必死に抑えるがそろそろ限界が近かった…

「随分と困っているな。仕方ない。
ほら、祐希奈こっちに来い。」

「？」

再び首を傾げる。

「食べたいのだろう?私が食べさせてやるから、おいで。」
メイデンは優しげな表情で言った。

「母さん?」

「わ、私がか?」

「祐希ちゃんは寝ぼけると誰でもお母さんになるんだね。」
ヴィヴィオがそう言うと祐希奈はふるふると首を振る。
「私のお姉ちゃん。」
ヴィヴィオを指さし、次に俺を指さし、

「私のお兄ちゃん。」
お姉ちゃん…お兄ちゃん…そういえば昔、祐希奈に聞かれたことがあった…
兄弟はいるのか?…と、そして私はお兄ちゃんやお姉ちゃんが欲しかったなぁ…と少し悲しげに言っていたことを思い出した…
寝ぼけた祐希奈は、それらを俺達に重ねた…

「まぁ、いいか。今日だけは俺はお前の兄ちゃんだ。」

「じゃあ、私もお姉ちゃんでいいよ。」

「そうだな。今日1日くらいは面白いかもしれない。」

「うん!」
嬉しそうにメイデンの元に行って座る。

「ほら、祐希奈口を開けろ。」
ロールキャベツを祐希奈に近づける。
「あ～。もぐもぐ…美味しいね。」
こんな妹なら俺は、確実にシスコンだな…
「そうか？それは良かったな。」
「それはね～。カナンお兄ちゃんが作ったんだよ？」
カ、カナンお兄ちゃん…
俺は今、二人の妹を持ちました！！
「お兄ちゃん凄いね♪
私にも教えて？」
「ああ。もちろんだ。」
もちろんだとも我が妹よ。お前のためなら兄ちゃんは、何でも教えてやるぞ。
「えへへ…母さん暖かい。」
メイデンにもたれ掛かりながら祐希奈が言った。
「祐希奈も暖かいぞ？
」
祐希奈の頭を撫でる。
「そうかな？」
「ああ。」

「祐希ちゃん。お姉ちゃんの所にも来て欲しいな？」

「行くよ～♪」

トテトテと…このトテトテが可愛すぎる…

「到着～♪」

ガバッ！

ヴィヴィオに飛び付く。

「わっ！あはは。やったなぁ～。こちょこちょ～♪」

「あはははは！！お姉！！ははは！ごめん！はは！なさ～い！！

あはははははは！！」

「ダメ～♪許してあげないよ～♪」

「あはははは！！！やめ！！あはははははは！！」

じゃれあう二人…こうして見ると祐希奈が異常に幼く見える…

多分、精神年齢は小学生並…

昔に甘えられなかった分を今、甘えているのかもしれない…

「あ…今更だけど…こんなに騒いで大丈夫かな？」

ヴィヴィオが心配そうに聞いてくる…

確かに、今はまだ深夜一時過ぎ…

少しまずいかもしれない…

「大丈夫だ。騒ぎになりそうだったから、結界を張っておいた。」

「そうなの？」

「おい…聞いてなかったぞ…」
知らない間に俺の魔力を使われていた…

「言おうとしたが、ヴィヴィオと祐希奈を見ながらマスターがあまりに幸せそうな顔をしていたから、邪魔をしたくなくてな。」

「…俺、そんなに分かりやすかったか?」

「ああ。優しげに二人を見ていたぞ?」

「俺…ポーカーフェイス苦手なのかな…」

「何を今更言っているんだ?」

「今更なのか!?」

「も~二人とも何のお話してるの~?
遊ぼうよ~。」

「ああ。そうだな。すまない。」

「悪い悪い。」
その後は、祐希奈と遊びまくった。
ヴィヴィオやメイデンと体術勝負までした気がする…そして、午前2時半。

「す~す~」
遊び疲れた祐希奈は現在、俺の背中で寝息をたてている。

「寝ちゃったね。」

「あれだけ騒げば疲れもするさ。」

「母さん体験も終わりだな。なかなか楽しかったぞ。」

「うん。お姉ちゃんも楽しかったよ～。
たまには寝ぼけてもらってもいいや。」

「さすがに毎日これだと困るからな。
ふあ…俺も疲れた…
寝ていいか？」

「私もちょっと眠いかな…」

「では、私も元に戻って一緒に寝るとするか…」

「ヴィヴィオ、メイデンおやすみ…」

「うん…おやすみ。」

「おやすみ。」
真ん中に祐希奈を寝かせ、左にカナン、右にヴィヴィオ、メイデンは祐希奈の頭上で眠る…
カナンは忘れていた…
普段の祐希奈を…
朝８時…
「ん…」
目を開ける…隣では二人の寝息が聞こえる…
…二人？
右を見る…ヴィヴィオだ…いつも通り可愛い寝顔。

これはいい…
問題はもう一つの寝息。
左を向く…そこには、至近距離にカナンの顔があった。

「何であんたがいるのよー!!!」
ズドン!!

「へぶっ!!」
顔面に拳を叩き込まれたカナンは変な声をあげた。

「つ～…祐希奈か。おはよう。」

「おはようじゃないわよ!!」
ズドン!

「ぐあ!」
再び顔面に入りカナンがのけぞる。
私はベッドから抜け出す。
「何であんたが同じベッドで寝てるのよ!!」

「…しまっ!」

「死んで償えボケぇぇぇ!!」
滞空…膝を下に降下…狙うはカナンの腹。

「話を!!くばはああ!!」
見事みぞおちに直撃…

「ふん…って何で私とヴィヴィオはあんたの家にいるのよ?」

「話す…から…ちょっと…待て…」
息も絶え絶えにカナンが起き上がる。
ちょっとやりすぎたかな…
「大丈夫？」

「心配するんなら最初からやるなよ…」

「それは…アレよ。ノリ？」

「もうお前にまともな答えは期待しない…」

「で？私達は何でここにいるの？」

「模擬戦…最早模擬戦と言ってもいいのかもわからないけどな…
とにかく、それで魔力を使い果たしたお前らは倒れてな。
まだ雅樹さんも忙しいだろうから俺んちで世話をするために連れて来たんだ。
ちなみに一緒に寝てたのは不可抗力だ。」
多少ぼかして話す。手刀を叩き込んだなんて知れたらこいつはもちろん…フェイトさんなら…
考えるのよそう。寝られなくなりそうだ…

「ふ～ん…何が不可抗力なのかは聞かないでおいてあげるわ。
まぁ、世話になったわね。何気に着替えてるけど、もしかして…あんたが？」

「んなわけあるか！！俺はどこまで変態なんだよ！！」

「え…どこまでって…」
祐希奈は眉間に手をあて考え始める。

「頼むから本気で悩まないでくれ！！」

「はいはい。あんたが違うんなら誰よ？」

「メイデンだ。普通サイズに戻ってもらって手伝ってもらったんだよ。」

「へえ～便利なもんね～。」

「とりあえずはこんな感じだ。
納得したか？」

「だいたいはね。」

「なら、ヴィヴィオとメイデンを起こしといてくれるか？
朝飯作ってくる。」

「りょーかい。」

「じゃあな。」
カナンが出ていった。

「さて…と、起こしますか！
ヴィヴィオ！メイデン！起きなさい！」

「ん…もうちょっと…寝たい…」
「私もだ…」

「却下さっさと起きる！」

「「……す～」」

「寝るな！！」

バサッ！

布団を取り上げた。

「「あ～…私の布団…」」

「私の、じゃなくてカナンのだからね？」

「「う～…」」

朝に弱い二人が一緒にこちらを睨む…

ふうん…いい度胸ね…いじろっかな♪

「実はね…朝早く起きないと…夜にお化けが出やすくなるのよ？」

「「！！」」

効果抜群…ほんといじりやすいわね♪

「で、でも、今までは出てきてないよ？」

「そ、そうだ。ゆ、祐希奈は嘘をついているな？」

「それはあんた達が知らないだけで…夜に来てたのよ…

あんた達の枕元に目の赤い黒髪の少年の幽霊が…」

「「ほ、ホントに／か！？」」

「本当よ…」

「こ、怖いよ…」

「も、もう起きるから出ないでくれ…」

「さぁ…？どうかしらね…」

ポカッ！

「った！」

「人を勝手にお化けにするなよ。」

「「あ…」」

赤い目の黒髪の少年…さらに昨日は一緒に寝ていた…じゃあお化けって…

「か、カナン君ってお化けだったの！？」

「マスター！？そうなのか！？」

天然ズの二人は祐希奈を信じたため、カナンはお化けというかなりずれた答えにたどり着いた…

「なんでそうなる！！どう見ても生身の体だろうが！！」

「あ、そうだね。」

「マスターすまなかった。」

「ヴィヴィオ、メイデン騙されちゃダメよ…ゾンビかもしれないわ

…♪」

「「そうか！！」」

「お前らには俺が腐ってるように見えるか！？」

「見えないよ？」

「臭いもしない…」

「甘い…甘いわ…頭の中が腐ってるのよ！！…♪」

「「！！」」

「だから信じるなっつーに！！！
だいたい頭の中が腐ってたら会話なんか出来んわ！！！」

「「あ～…」」

「きっと会話機能だけ残して腐らしたのよ♪」

「「ええ！？」」

「そんな無茶苦茶な腐り方するか！！
じゃあ全部のゾンビそうやって腐らせてみやがれ！！」

「…は？何言ってるの？
会話機能だけ残して腐るなんて現実的にあるわけないじゃないバッカじゃないの？」

「お前が言ったんだろうがー！！！」
朝からツッコミ全開である…

「結局…カナン君はゾンビなのかな？」

「ゾンビのマスターは少し嫌だな…」

「「お前らはどんだけ天然なんじゃー！！！！！」」

「じゃあカナン君は…人間？」

「当たり前だろ…」

「なら先に言って欲しいぞ。」

「まず祐希奈の冗談を信じるな！！」

「もぐもぐ…あんた達いつまでやってる気？
ご飯冷めちゃうわよ？」

「お前が原因なんですけど…」

「ごちそうさまー。私散歩に行ってくるわね～。」
バタン…

「無視か！！無視なのか！？今完全に無視しやがったな！？」
ガチャリ…

「いい加減うっさいわよ！！」
バキャッ！！

「超理不尽〜…」
ドサ…ガン…
「ごは！！」
「わぁ！！カナン君！！頭から血が〜！！」
「マスター！！気をしっかりもて！！」
「ほっといてもカナンなら死なないわよ。
じゃあね。」
「…容赦ねえ〜。寝ぼけた時とは別人だな…」
「カナン君…痛くないの？」
「あ〜…痛いっていうか〜何か寒いな…」
「それはまずいのではないのか？」
「さぁ…」
「回復魔法はあんまり得意じゃないんだけど…応急措置くらいにはなるから…」
「いや、いい。その内治まるだろ。それともヴィヴィオが抱き締めて暖めてくれるか？…なんて冗談…」
ギュッ！

「これで治るんならいくらでもいいよ…」
冗談のつもりだったのだが…どうしよう…

「もう…大丈夫？」

「あ、ああ。ありがとう。」
体が火照る…先程の寒さがなくなり逆に暑い…
「うん。」
そう言うヴィヴィオの顔が少し赤い…

「私もちょっと出るとするか。」

「「メイデン！？」」

「あとは若者同士でやってくれ。ではな。」

「あ、おい！！」
メイデンは後ろ向きのままひらひらと手をふるだけで、行ってしまった…

「「……」」
話題がない…というより恥ずかしさで喋れない…

「…」
何で私あんなことしたんだろう…もう…バカ…

「…」
な、何か喋ることは…何か…
少し前…
「あ～あ…なかなか素直にはなれないものね～…何で意地を張っち

やうかな～…」
自分のこの性格がこれほど厄介なものだとは思わなかった…

祐希奈は現在、朝のの反省をしながら適当にぶらつき歩いていた。

「まぁ、仕方ないですよ。その性格は祐希奈の長所であり短所でもあるのですから。いきなり、短所だけを消せと言われても出来る人はいないです。」

「まぁね～。そうなんだけどさ。」
ガチャ…

「ん？」
音がした気がして振り替えるが誰もいない…

「気のせいか…」
改めて前を向き歩き出そうとした…

「祐希奈！！横に飛んでください！！」

「っ！！」
アシェルの警告に従い横に飛び込む…
直後、右足に激痛…
どこから表れたのかガジェット四型が私の足の太股を貫いていた…

「アシェル…セットアップ…」
痛みをこらえ変身する…

「痛いでしょうが！！」
ザシュ！！

ブレードで切り裂き破壊する…
しかし…

「ちっ！転移…か。私を潰そうってわけね…」
次々と転移されてくるガジェットの四型達…
しかも…

「何これ…体が…重い…」
今までのガジェット達より遥かにＡＭＦが強化されている…
足の怪我…このＡＭＦ…数的問題…
「救援を呼ぶか…」
（はやてさん！！祐希奈だけど、救援頼める！？）

（…）

返事はこない…
用意周到なことに念話妨害までしてくれているらしい…
生存は絶望的…

「くそ…一機でも多く破壊してやる…」
弓を引き絞る…
構える弓はレイザーフォーテル…

「一撃！！必中！！ジャッジメント！！アロー！！」
前方の集団は消え去るが…たったの一発放つだけで、いつもの三倍以上の魔力を使う…
大技は使えて三回…きついな…
思考の間にも次々に転移されてくる…

「かと言って今、クロスレンジなんて使えば…」

足が動かない状態でのクロスレンジなど、意味がない…
わかっていても弓を使わざるを得なかった…
フルドライブも使えない…飛べばミサイルのいい的…防御もいつかは破られる…完全に手詰まりだった…

「私の人生ここで終わりか…」
弓の最後の一撃を放つ…
やはりあまり意味はない…敵の数が多すぎた…

「くっ！」
ブレードを展開し、斬り飛ばしていく…
しかし…大して持たなかった…
ズブッ！
「ぐあああああ！！」
右腕にアームが刺さる…
もう…何も出来ない…
殺されるならまだ良かった…だが…

「やぁ…残念ながら君はまだ殺さないよ。君を人質にあの二人の苦しむところをじっくりと見せてから殺してあげよう…」
スカリエッティからの通信だった…

「な…何ですって？」

「だから君を人質にあの二人を痛めつけるのさ…今から楽しみだねえ…ククク…」

「嫌っ！！やめてよ！！私のことであの二人が苦しむなんて…見たくない！！今、殺してよ！！」

「…ククク。いいねえ。もっとその顔がみたいね…さぁ、ガジェット達連れてきてくれ…」

「嫌だ!!嫌だーーーー!!」変身が解かれ…私服に戻る…運ばれる時左手に何かが当たった…

携帯…念話は使えなくてもこれなら!!

ここであの二人に頼れば結局二人を危険にさらす…

でも…このまま捕まったら二人は結果がわかっていてもくるだろう…

確実に負ける勝負をさせるよりは…マシなはず!!

手探りで電話帳を開き、ア行の一番上…ヴィヴィオに電話をかける…

お願い…出て!!

話題が浮かばないことが良かったのか着信音がよく聞こえた…

「あれ?祐希ちゃんだ…」

電話…出てみるが電波が悪いのか雑音がひどい…

『…て!』

「祐希ちゃん?よく聞こえないよ。」

『けて…ン!!』

「祐希奈はなんだって?」

「よく聞こえないんだ…ちょっと待ってね…」

耳をすます…

(助け……ィヴ…オー!!カ…ン!!)

断片的にだが泣き叫ぶ祐希ちゃんの声が聞こえた…

「カナン君！よくわからないけど祐希ちゃんが危ない！！」
あの祐希ちゃんが泣いている時点で大事だ…
まさか…まさか…スカリエッティが…

「カナン君！！」

「ああ！！メイデン！！」
手をかざすと魔方陣が発生…

「うわっ！！ど、どうしたんだ？
召喚まで使って呼び出すほどのことなのか？」

「祐希奈が危ない！！」

「何？わかった。三秒待て…」広域探査魔法で祐希奈を探す…

「まずい！！方角南東！！スカリエッティはいないみたいだが、祐希奈が負傷…このままだと！！急ぐぞ！！」

「フェアリー！！」

「メイデン！！」

「「セットアップ！！」」
変身を終えると同時に魔法陣を展開…通常転移の準備をする。
申請などしていては間に合わない。無視を決め込む。
「ヴィヴィオ来い！！」

「うん！！」
ヴィヴィオの手をとると同時に転移をした…。

第十六話　急襲（後書き）

なんとも急展開な話になりました…今回は本当に急いで書いたので、いつもの前書きと後書きは飛ばしました。次回からはまた書くのでご安心を。

第十七話　思いやり

一同
「ご覧の番組は出張道場インロシアの提供でお送りします♪」

シオン
「このタイトル毎回変える意味あるのか！？」
カナン
「さぁな…祐希奈の考えることはわからん。」
シオン
「あれ？カナンだけか？」
カナン
「いや、さっきまでヴィヴィオと一緒に…いないな…」
シオン
「まさか…」
カナン
「あ、ここに紙が…」
シオン
「何て書いてあるんだ？」
カナン
「後ろに十歩…？」
シオン
「とにかく行くか…」
十歩下がる…
ヒュルルルル…
ズドン！！

カナン・シオン
「がは！！」

祐希奈
「はい♪よい子の味方、一之瀬祐希奈です♪」
ヴィヴィオ
「高町ヴィヴィオだよ～。」
メイデン
「メイデンだ。」
タカト
「現在バカ兄と死闘中の伊織タカトだ。」
カナン・シオン
「ぬあああああ！！！」
ガバア！！
祐希奈
「っと。」
ヴィヴィオ
「わっ！」
タカト
「…」
メイデン
「毎回大変なことだな。」
カナン
「何で上から降ってくんだよ！！」
シオン
「普通に出てこい！！」
祐希奈
「面白くないじゃない？」
タカト
「コクコク。」
カナン・シオン
「前書きに面白さはいらん！！」
ヴィヴィオ

「え～でも、この前書きがあるかないかでかなりアクセスが変わったんだよ？」
メイデン
「もう少し正確に言うと５００近く違うな。」祐希奈
「よっ！」
バキャッ！！
カナン
「がふ！！」
シオン
「…何で今蹴ったんだ？」
祐希奈
「え？ノリ？」
タカト
「ふっ！」
ドゴッ！！
シオン
「がは！！」
タカト
「ノリだ。」
カナン・シオン
「聞いてねえよ！！」
祐希奈
「じゃあ理由は～…祐希奈さん最高コールがきてテンション上がったからよ♪
ありがとね～♪」
カナン
「誰だ！！そんな危険なコールを送った奴は！！」
シオン
「俺なんてまるっきりとばっちりじゃねえか！！」
ヴィヴィオ

「まぁまぁ、シオン君もいきなりルミオ君の首を絞めたりしてるんだし。」
メイデン
「いくらなんでも危険だぞ。」
シオン
「収束砲ぶっぱなして道場崩壊させる爆弾よりかはマシだと思うが…」
ヴィヴィオ
「…シオン君…体…冷やそうか…」
シオン
「死ぬ…体冷やしたら死ぬからな?」
祐希奈
「わからないわよ?何事も体験してみないとね♪」
タカト
「俺も手伝おう。」
カナン
「お前の相手は俺だああ!!」
タカト・祐希奈
「天破紅蓮!!」
ドゴオッ!!
カナン
「お前のは列破爆砕拳だろー……」
タカト
「祐希奈殿、さすがだな。」
祐希奈
「まだまだタカトには勝てないわ。」
シオン
「とりあえずヴィヴィオ…すまなかった…」
ヴィヴィオ
「次言ったら本気でやるからね?」

メイデン
「ヴィヴィオは優しいんだな。」
シオン（優しいのか？）
ヴィヴィオ
「えへへ…あ、そろそろ質問コーナーいくね。カナンの部屋は何もないと書かれていましたが、どのくらい何もないのか教えてください。」
カナン
「聞いてどうする…」
シオン
「自分の部屋と比べるんじゃないのか？」
祐希奈
「どっちの方が何もないのか勝負だ！！みたいな？」
タカト
「凄まじくどうでもいい勝負だな…」
ヴィヴィオ
「それで？答えは～？」
カナン
「あ～。マンガ数冊と勉強机一つ、セミダブルベッド一つ、来客用折り畳みテーブル一つ…くらいか？」
メイデン
「少ないな…」
シオン
「本当にな…」
祐希奈
「男ならあるでしょ？〇〇〇の十冊や二十冊。」
ヴィヴィオ・メイデン
「〇〇〇？」
カナン・シオン
「聞くな！！」

タカト
「ヴィヴィオ、メイデン、聞いてはいけないこともある。」
祐希奈
「その内わかるようになるわよ♪」
カナン・シオン
「わからんでいい！！」
タカト
「清く育ってくれ。」
ヴィヴィオ
「う、うん。」
メイデン
「わかった。」
祐希奈
「次の質問は…ヴィヴィオ、祐希奈、カナンの魔導ランクは？」
ヴィヴィオ
「私は、Ｓ－くらいかな。」
祐希奈
「同じくＳ－」
カナン
「Ｓ＋ぐらいだろ。」
シオン
「お前ら高過ぎ！！」
タカト
「そうか？」
シオン
「タカ兄ぃはチートキャラだからだ！！」
ヴィヴィオ
「う～ん…私はモードチェンジや聖王の鎧のおかげだし、鎧抜くだけでＡＡＡ－まで下がるよ？」
祐希奈

「私も似たようなもんだし。稀少技能抜いたら結局同じかな。」
カナン
「基本は稀少技能で点数稼いでるようなもんだし。」
シオン
「お前ＳＳＳランクの攻撃出来るだろ…」
カナン
「あんなもん実際に溜めてる時間なんてないって…だいたい一発打ったら動けなくなるしな。」
タカト
「情けない…」
メイデン
「タカトさんは強すぎるんだ。」
祐希奈
「いいわよね～ほぼ魔力無限じゃない。」
タカト
「練習すれば誰でも出来る。」
シオン
「無理だろ…」
ヴィヴィオ
「とにかく最後の質問いっくよ～。」
カナン
「少なくないか？」
ヴィヴィオ
「時間の都合上紹介出来ない質問もあるの。」

メイデン
「小説やキャラでイメージしてる歌はあります？との質問だ。」
祐希奈
「うちの作者は気分屋だから、その場面、場面で変わるのよ…」
ヴィヴィオ

「一つだけ変わらない歌もあるよ～。」
カナン
「そうなのか？」
ヴィヴィオ
「うん♪それではカナン君とシオン君に歌っていただきま～す。」
♪♪♪
カナン・シオン
「ドンマイドンマイドンマイドンマイ泣かない～で～♪」
祐希奈（あんたらがね…）
カナン・シオン
「パワーはいつもどんな時も負けはしないさ～♪」
タカト（それしかないがな…）
カナン
「人生～♪」
シオン
「人生～♪」
？
「人生～♪」
カナン・シオン・？
「夢で生きてる～♪」
祐希奈・タカト（夢でしかいきられない悲しい人間達…）
カナン・シオン・？
「うるせえよ！！！」
祐希奈
「うん♪弄られキャラにぴったりな歌ね♪」
タカト
「それよりその？はだれだ。」
？
「あ、そろそろまずいから帰るな。食い荒らすもの（イーター）発動！！」

ヴィヴィオ
「許可をもらってないので名前は伏せました～。」
カナン
「伏せる意味ねえよ！！」
メイデン
「答えだな…」
祐希奈
「そういえば？さんも苦労してるわね。」
シオン
「変態キャラ扱いだからな…」
カナン
「そんな時こそ歌って元気を出してくれ。」
ヴィヴィオ
「祐希ちゃん＆ａｍｐ；タカトのナレーション入りで？」
カナン・シオン
「いらん！！」
祐希奈
「遠慮しなくてもいいわよ♪」
カナン
「してねえよ！！お前が入ると逆に鬱になるだろ！！」
タカト
「さきに相手の戦力を削るのは立派な戦略だ。」
シオン
「随分卑怯な削り方するのな！！」
メイデン
「精神力のみせどころだぞ？」
カナン・シオン
「俺らは圧倒的に不利だ！！」
ヴィヴィオ
「あ～なんかまた話がずれてきたね～。ぐだぐだになる前に終わろ

っか。」
祐希奈
「そうね。」
カナン
「もう遅いだろ…」
シオン
「この作品にでると疲れる…まだこのあとルミオとの絡みが…」
メイデン
「八つ当たりはダメだぞ？」
シオン
「するかもな…」
タカト
「器の小さいことだな。」
シオン
「やかましい！！」
ヴィヴィオ
「終わりだってば！！」
祐希奈
「毎回無理矢理終わるわね～…」
メイデン
「まぁ、仕方ないだろう…」
祐希奈
「ヘタレオンだからね♪」
シオン
「もうそのネタはいい！！魔法少女リリカルヴィヴィオ！！」
タカト
「始まるぞ…読まなければ…」
ゴア…
カナン
「いや、脅すなよ…」転移した場所は…海鳴公園。

「メイデン！一般市民は！？」

「大丈夫だ。自力で逃げ出したらしい…
というより…全てのガジェットが祐希奈に狙いを絞っていただけかも知れないが…」

「話は後！！祐希ちゃんは！？」

「このまま真っ直ぐだ。急げ。」

「わかった！！フェアリー！！」
「Ｓｏｎｉｃ　ｆｏｒｍ」

「ゴー！！」
「Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ！」
ギュオ！！

疾風のごとき速さでヴィヴィオが走る。

「俺達も行くぞ！！」
「ああ！！」

こちらは空間突破を使いヴィヴィオよりさらに速い速度で向かう…

「祐希奈…お前にはまだ借りあるからな…
勝手にどっかに行くんじゃねえぞ…」

「私は祐希ちゃんに何度も助けてもらった…支えてもらった…
だから…」

「「今度は私（俺）達が助ける！！」」

すぐに前方にガジェットの集団が見えてくる…
例のごとく転移防止結界が張られている…
あの中に祐希奈が…突っ込もうとしたところで…

「マスター！空間突破をやめろ！！」
突然メイデンが叫ぶ。
急ぎたいところだがメイデンが言うのだからやめたほうがいいだろう。

「わ、わかった。」
通常空間に戻ってすぐにヴィヴィオが追い付いた。

「カナン君！？何してるの！？」

「止めたのは私だ。二人とも走りながら聞け。
この先のＡＭＦは、今までのように軽い物ではない。
一体一体のＡＭＦ出力が上がっている。
そんな中に突っ込めば、ヴィヴィオの魔力も長くはもたず、マスターは…自分で作り出した空間に閉じ込められるだろう…」

「でも、もうすぐガジェットが転移防止結界の外に！！
この速度じゃ間に合わないよ！！」
ヴィヴィオは泣きそうだ…

「なんとかならないのか？」
祐希奈を助けられないかもしれないという不安に俺も押し潰されそ

うだ。

「大丈夫だ…私が絶対に二人を届ける…」

「お前無理する気だろ…」

正面から見る…

「多少は…な。」

メイデンが目線をそらした…

おそらくメイデンの多少は自分の限界まで頑張るつもりだろう…

「はぁ…今回は俺は自分の魔力は使わない。

だから、目一杯使え。

魔力結合をするだけでかなりの負担だ。

多少は雑でもいいから…わかったか？」

「マスター…でも…」

「お前も俺達の仲間だ。道具じゃない、俺は仲間は守る。だから…な？」

「…わかった。覚悟してくれ。」

「ああ…ヴィヴィオ…準備はいいか？」

「うん…フェアリー、モードリリース…ただ、起動準備はしといてね？」

「了解。」

魔力消費を最小限にするため、一旦待機状態に戻す。

「いくぞ…グランド！！」
メイデンが手をつくと、大地が揺れる…
膨大な魔力がメイデンから溢れ、巨大な金のベルカの魔方陣が展開される。

「ぐ…はぁ…はぁ…」

「カナン君！！」
カナン君が膝をつく…かなりきついのだろう…
普通の魔導師なら気を失うほどの魔力が一気に失われていくのだから無理もないよね…

「大丈夫だ…このぐらいで…へばってられない…
祐希奈は…今も怖い思いをしているんだ…
俺がへばってる場合じゃないんだ。」
カナン君が立ち上がる…真っ直ぐに正面を見つめて…

「しっかり足に力を込めろ！！」
なおも魔力を込めながらメイデンが叫ぶ。

「「ああ！！／うん！！」」

「スパイク！！！！」

メイデンが唱えると同時に凄まじい速さで景色が動いた。
石針が私達を乗せ進んでいた。
ガジェットの集団に突っ込む。
前方には、既に飛び掛かってくる十数機の四型…
「ヴィヴィオ！伏せろ！！」

「わかった！」
すれすれまで頭を下げる。

「……」
三メートル…二メートル…一メートル！！

「はぁああ！！」
ガジェットとの距離が一メートル以内になった時、閃光が疾る…
ただの斬撃も、この速度なら必殺の威力…
キン…
納刀する高い音が鳴ったあと、背後では、爆発音が響いた…
飛び掛かるのが間に合わなかったガジェットは、石針によって貫かれる。

「ちっ…」カナン君が舌打ちする…顔をあげると飛べない筈の四型が飛び上がっていた…
集団の中には…人間の腕が見えた…

「祐希ちゃん！！／祐希奈！！」
「ヴィヴィオ…カナン…来てくれたんだ…でも…もう…」
このＡＭＦの濃度では、飛行魔法も使えない…石針も止まり始めた…メイデンが限界なのだろう…

「二人とも…私を助けに来てくれたのに…」
ならば…最後に出来ることはただ一つ…伝えること…

「二人とも！！よく聞いて！！私は…これからスカリエッティに人質にとられる…」

「何諦めてんだ！！いつものお前らしく早く助けろぐらいいいやが

れ！！」

「待ってて！！今行くから！！」

「飛行魔法も使えないのにどうやって来るよ！！
話の続き聞きなさい！！
人質にとられたらあんた達は私のことはどうなろうと気にせずにスカリエッティと思いっきりやりなさい…
その結果、私は…私のことはどうでもいいわ！
あんた達二人が死ぬよりはマシだから…
あとは頼んだわよ…」
これで…二人が死ぬことはないだろう。
私のことで二人の苦しむなんて嫌だから…
なら…私だけ消えれば…

「「バカ！！！！」」

バカって…最後にきついわね～…

「いいか！？よく聞きやがれ！！
お前の意見なんて無視だ！！却下だ！！そんな頼みどんだけ土下座されようが泣かれようが聞かん！！」

「なっ！あんたねえ！！助けるなんてもう無理でしょ！！」

「無理じゃない！！絶対に助ける！！今！！ここで！！
スカリエッティなんかに…祐希ちゃんは渡さない！！
ただ…」

「何よ！」

「助けたらお仕置きするからね！！」

「……」

何だろう…この二人は、本当に助けてくれそうな気がする…

まだ希望がある…一緒にいられるかもしれない…

「うん…うん！！わかったから！！助けて！！…助けなさい！！

助けなかったらしばくわよ！！」

「それでこそ祐希奈だ！！

おし！そんじゃあ、しばかれたくないし…ヴィヴィオ！！行くぞ！

！」

「了～解！！」

飛行魔法は使えない…だから、二人は' 跳んで' きた…

「もうちょい！！」

「うん！！」

ガジェットの上を跳ぶ…落ちたら終わりの高度に達するなか…二人

は迷いなくこちらに向かって来る…

さすがにガジェットも学習したのか、

ガジェットの間の距離が開く…

その距離二十メートル…

いくら二人でもあの距離は届かない…

また諦めかけた…

しかし、

「このくらいの距離がどうした！！」

「カナン君！行くよ！！」
それでも二人は最後のガジェットを踏みきった…
二十メートルも跳べるはずはない…
そう…一人では…

「うおおお！！」
横に構えられたエクスカリバーの鞘の上にヴィヴィオがいた。

「おおおぉぅうりゃあああああ！！！！」
ブン！！
全く踏ん張りがきかないにも関わらず、カナンは腕の力だけでヴィヴィオを放った。

「祐希ちゃん！！手を！！」

「ヴィヴィオ！！」
必死に手を伸ばす…指先がかかる…
ガシッ！

しっかりと捕まれ…

「きゃあああああああ！！！！！」
落ちた…
みるみる地面が近づく…
「フェアリー！！サードモード！！ウィングでお願い！！」
「了解！！」

虹色の翼が出現…一度羽ばたき速度を減速したあとすぐに消えた…

ドサッ！

「「っ～！！」」

減速したとはいえ、受け身も取れなかった。
祐希奈に至っては怪我人だ。相当な痛みだろう。

「ぐっ…」

「祐希ちゃん？腕と足が…」

「ちょっとね…ま、とりあえず助けてくれてありがとね。」
ヒュルルルル…

「あ、うん…」
ズダン！！

「「うわっ！！」」
すぐ近くに何かが落ちたらしい…
蜘蛛の巣のように地面がひび割れている…

「ふ～…無傷じゃないけど、無事に助けられたな。」
降ってきたのはカナン君だった…

「あんたねえ…ほんとどういう体してんのよ…」

「あ、足とか大丈夫？」

「ん？ああ。ちょっと痺れるくらいか。」

「ちょっとって…はぁ…今更かもね。」
カナンの体の丈夫さには呆れる…

「あとは…こいつらか。」
獲物が弱っている隙に一気に勝負をかけてきたのか…ガジェットの集団に囲まれていた…

「いつのまに!!」
ヴィヴィオが立ち上がり戦闘準備をするがカナンが制止をかける。

「この状況で魔法使ったんだから疲れたろ?今回は俺に任せろ。」

「でも、カナン君だって…」

「俺と戦ったお前らならわかってるだろ?
近距離戦闘なら負けないって。」

「ただの剣じゃいくらなんでもきついんじゃないの?」

「いざとなったら奥の手でも使うさ。」

「「奥の手?」」

「ああ。だから、俺が道を開くからヴィヴィオは祐希奈を連れて先に行ってくれ。」

「信じていいのね?」

「ああ。必ず帰る。」

「…ヴィヴィオ行くわよ。私達がいたらカナンの邪魔になる。」

「わかった…カナン君…絶対にだよ？」

「約束破ったら祐希奈と一緒にお仕置きくらってやる。」

「フェイトママも呼んじゃうからね。」

「そりゃあ怖いな…ま、多分心配いらないって。
そろそろか…」
ジリジリとガジェット達が間合いを詰めつつあった…

「祐希ちゃん。私の背中に乗って。」

「…重いわよ？」

「鍛えてるから大丈夫。」

「そこは重くないって否定するところよ…」
ヴィヴィオが男ならアウトね…

「え！？あ、別に祐希ちゃんが重いとかいう意味じゃなくって！！」

「はいはい…まぁ頼むわね。」
ゆっくりとヴィヴィオの背中におぶさる。

「うん！あ、重くないよ？ほんとだよ？」

「わかったから、もうちょっと緊張感持ちなさい。」

「あはは…ごめん…」

「じゃ…カウントが終わったら走れよ…」

「うん…」

「3…」

近づいてきたガジェットの動きが止まる…

「2…」

蜘蛛のような足に力をため跳躍準備…

「1…」

一斉に跳躍…

カナン君も走り出す…

「走れ!!」

「うん!!」

ダッ!!

カナンを信じて正面に走る。

「どけえええええ!!」

縦横無尽に光が疾る…

ガガガガ!!

さすがにただの剣撃では弾き飛ばすだけだが今はそれで十分だった。

その間にヴィヴィオが走り抜ける。

二人の進路を塞ぐようにカナンがガジェット達の前へ…

「さてと…いちいち何回も攻撃してたら体力がつきたら終わりだからな…」
この間にもガジェット達はカナンに攻撃を加える。
カナンは、わざと体にかするように攻撃を避ける…
少しずつカナンの体から血が吹き出し、どんどん傷が増えていく…

「こんなもんだろ…じゃあな…」
次の瞬間にはガジェット達は壊滅していた…
ガジェットの記録に残った映像は…一瞬の黒い光だけ…
あとには、残骸だけが散らばっていた…

「はぁ…はぁ…」
ヴィヴィオの息が荒い…

「走ってあんたがへばってるの初めて見たわ。」

「ひどいよ…私だって…疲れる時もあるよ…」

「ごめんごめん。ところで何でここで止まったのよ?」

「ここにメイデンがいる筈なんだけど…」

「いないわね…」

「あ~あ。やっぱり無理しやがったな…」
この声は…

「「え!?」」

「何、驚いてるんだ?」

カナン君がいた…

「は、早いね。もう少しかかると思ってた。」

魔力ゼロの状態で戦ったにしてはあまりにも早すぎる…

「面倒だったから奥の手使ってさっさと終わらせたんだよ。」

「そんなに早く終わるんなら最初から使いなさいよ…」

「ちょっと条件が特殊でな。お前らに見せたら反対するだろうから。」

体の傷が増えていることに関係があるのかな…

「危ない能力なの？」

「いや、別に大して危なくないって。」

多分…

「とっても不安だよ…」

「大丈夫大丈夫。さ～てと、メイデンは～…あった。」

「「あった？」」

少し表現がおかしい気がする…

「たく…無茶すんなっていっただろ…」

「すまない…少しでもマスターに負担を減らしたくて…」

カナン君が喋りかけていたのは剣のキーホルダー…メイデンの待機状態…

「わ～久しぶりに見た気がする。」

「そうね。もう人型が定着しちゃったから忘れてたわ。」

「メイデンは、自分の限界まで魔力の制御をした結果、ちょっとオーバーヒートみたいな感じになってるんだ…
魔力が少し残ってたからそうじゃないかとは思ってたけどな…」

「だから…謝っているではないか…」

「ま、おかげで楽が出来たよ。ありがとな。」

「自分のマスターを助けるのは当たり前だ。
礼など…」

「違うだろ…ありがとうと言われたら？」

「…ど、どういたしまして。」

「おし。」

「メイデン、いつくらいに戻れるのよ？」

「おそらく、今夜までには修復出来ると思う。」

「念のためにシャーリーさんにフルメンテナンスしてもらう？」

「いや、遠慮しておく。
だが、問題が解決したら頼んでくれるか？」

「うん、わかった。任せて。」

「とりあえず…祐希奈の手当てをしないとな…」

「魔法はまだ使えないし…」

「別に出血も止まってるし、応急措置だけでいいでしょ。」

「でも…痛いんだよね？」

「当たり前よ。まぁ我慢出来ない痛みでもないし、あんた達と喋って時間潰してたらその内魔力も回復するわよね。
その時に治療はお願い。」
命令無視をしたことを気付いているのかな…

「いや、やっぱりシャマルさんの所へ行こう…
わざわざ我慢することないって。俺が怒られれば済む話だ。」

「悪いのはカナン君だけじゃないよ。
私も一緒に…」

「怒られる人数増やさなくてもいいだろ。
俺だけでいいさ。」

「でも…」

「女の子はこういうことは男に任せとけばいいんだよ。」

「ごーかーく♪」

「「「！！！」」」
後ろを振り向くと…

「カナン君もヴィヴィオちゃんもいい子ですね～。
今回は特別にはやてちゃんへの報告もなしにしてあげましょう。」

「「「シャマル先生！／さん！」」」

「結界の反応を辿ってきて見れば…大変なことになってますね。」
祐希ちゃんの腕と足をじっくりと眺めるシャマル先生

「あなた達は偶然近くにガジェットを発見、迎撃をした。いいですね？」

「ありがとうございます！」
ヴィヴィオが深々と頭を下げた。

「はやてちゃんには私からそう話しておきますから、もしはやてちゃんやほかの隊長さん達に聞かれたらそう答えてね？」

「何から何まですいません…」

「いいですよ。友達を助けるのは罪ではないです。
…クラールヴィントお願いね？」
「Ｊａ」
パアアア…

「凄い…痛みがどんどん退いていく…」

「シャマル先生の回復魔法に治せない傷の方が少ないよ。」

「はい。終わりましたよ～。」

「…」

祐希ちゃんは肘や足を動かして確認している。

「「「本当にありがとうございます。」」」

カナン君と祐希ちゃんの三人で頭を下げる。

「いえいえ。では。」

シャマル先生が見えなくなるまで頭を下げた

「助かったな…」

「うん。シャマル先生がいい人で良かった。」

「それにしても凄いわね…まったく痛みがないわ…

傷も綺麗にふさがってるし…」

「シャマル先生だからね～。私の付け焼き刃の回復魔法とは桁が違うよ～。」

「ふ～ん…」

「ま、怪我も治って、問題はなくなったことだし帰るか。じゃあな。」

「カナンちょっと待って！」

「な、何だよ?俺なんか変なことしたか?
制裁ならまた明日にして欲しい…」

「違う!!そ、その…カナンとヴィヴィオには迷惑かけたし、お礼もかねて夕飯ごちそうしたいんだけど…」
何だか祐希奈のキレが悪い…
それに若干赤い気が…

「お前、顔赤いぞ?熱でもあるのか?」
「はぁ…」
メイデンのため息が聞こえた…

「いきなりため息つかれると何気に傷つくんだが…言いたいことでもあるのか?」

「いや、何でもない…マスターだからな仕方ない。」

「スンゲー腹立つんだが…」

「とにかく!夕飯食べてくれる?」

「あ、ああ…ご馳走してくれるんならもちろん食べるけど…どうした?」

「ど、どうもしないわ!!じゃあ行くわよ!!」
ガシッ!

「へ?」
ズルズルズルズル…

「わぁ…祐希ちゃんすごーい…」
首根っこを掴んで引きずって歩いている…

「…見事に空回りしているな…」

「おい！祐希奈！自分であるくから！この先は階段があるって！！」
ズルズル…

「…夕飯のメニューは…やっぱり…いや…これなら…」
祐希ちゃんはなにやらぶつぶつ一人ごとを喋っていた…

「あ～聞こえてないみたいだね…」

「マスター、我慢だ。」

「ちょっちょっと待て！！このまま行くと小学校以来の…ってごほ！！痛い！痛いって！」
ガン！ガン！

「…ん～やっぱり…」

「痛いです！！祐希奈さん！！祐希奈さ～ん！ごあ！！やめてーー！！」

「家につくまでにカナン君傷だらけになりそうだね…」

「ああ…」
その後もカナンは引きずられ続け、周囲の奇異の目を集めながら祐希奈の家へと入って行った…
次回に続く～。

第十七話　思いやり（後書き）

少し遅れてしまいました。最近国体予選が近くて…とにかくすいません。さて、人気投票ですが、今月いっぱいできりたいと思います。それではまた次回。

第十八話　約束

祐希奈
「皆さんこんばんは。今日も私は私の道を行くわ。前書き終わり♪」
チャンチャン♪

カナン
「終わるかあ！！」
ヴィヴィオ
「もう…まだ質問も残ってるんだよ？」
祐希奈
「だって作者がアレだし…」
ヴィヴィオ
「確かに国体選抜で疲れてはいるけど…」
カナン
「そのせいで執筆速度がかなり落ちてるからな…」
祐希奈
「執筆速度が速いだけが取り柄なのにこれじゃあね…」
ヴィヴィオ
「あはは…」
メイデン
「とりあえず読者の皆さん遅れてすまなかったな。」
ヴィヴィオ
「作者は幸か不幸かメンバーに選ばれてしまいました。」
祐希奈
「これから少しの間は執筆速度が落ちるかもしれないから、我慢してね。」
カナン
「なるべく3日間ぐらいで頑張るらしいから勘弁してやってくれ。」

ヴィヴィオ
「さて、謝罪も済んだ所で質問コーナー言ってみよ～♪」
祐希奈
「ちなみにメッセージのページ数がほぼ質問だけで３０を越えたわ…」
カナン
「い、いいことなんじゃないか？」
メイデン
「これだけ答えても減らないというのは異常な気もするが…」
ヴィヴィオ
「気にしない気にしない。え～と、個人的にカナンとシオンの戦いの様子を書いてみたのですが、うまく書けませんでした。特にカナンは書きにくかったのですが、何かコツとかあります？」
カナン
「…いるんだな～こういう人…びっくりだ…」
祐希奈
「大抵は想像で終わると思ってたわ…」
ヴィヴィオ
「あえて書きにくいクロス対戦を書いて、力をつけようとしてるのかな？」
メイデン
「何かコツはあるのか？」
カナン
「ん～…まず、戦ってる天候を決めておくと少し楽に書ける。俺の技の威力が変わる以外にも、それを利用した攻撃なんかも書けるかもしれないからな。
あと、抜刀剣術を使う場合は多少距離を開けないと使えないというのを頭に入れてくれ。
あとは、相手の動き対してにどの技を使うか…
相手がシオンならアビリティスキルの効力や、フォームの戦い方等

を確認すると案外次に書くとうまくまとまるかもしれない。」
メイデン
「マスターは私とユニゾンしていれば自然の力も操れるからそれも混ぜると良くなると思う。」
ヴィヴィオ
「戦闘については作者も手探り状態ですから難しいかもしれないけど頑張ってください。」
祐希奈
「簡単にかつ、わかりやすく書く方法があるわよ♪」
メイデン
「どうするんだ？」
祐希奈
「カナンをシオンにフルボッコにさせればいいのよ♪」
カナン
「俺…そこまで弱いか？」
祐希奈
「弱くするのよ♪」
ヴィヴィオ
「それって書く楽しみないよね？」
祐希奈
「じゃあ頑張るしかないわね。」
カナン
「結局そうなるのな…」
メイデン
「とにかく頑張ってくれ。」
ヴィヴィオ
「じゃあ2つ目の質問。
前話でメイデンがＡＭＦ内で魔法を使っていましたが、カナン達が使えないのにメイデンだけ使えるのはおかしいのでは？」
メイデン

「正確には私の攻撃は魔法ではない。
魔力を使うのは自然の力を借りる時に使うのであって、攻撃自体は本物の雷や、石針だ。
つまりＡＭＦは意味がない。」
カナン
「とは言ってもその借りる時には魔力を使うから影響はあるんだけどな。」
祐希奈
「よくわかんない説明ね…」
ヴィヴィオ
「まとめると…ＡＭＦ内でも、魔力で借りる段階までいければ攻撃可能ってことだよね。」
メイデン
「ああ。だからマスターの魔力をかなり使って無理矢理その段階まで持って言ったんだ。」
カナン
「とりあえずこんなもんか？」
祐希奈
「ネタバレになる質問には答えられないからその辺は注意してね？」
ヴィヴィオ
「それでは本編始まります。」
カナン
「待たせておいてまた戦闘はナシだ…」
祐希奈
「次で予告でその次に戦闘ってとこかしらね…」
メイデン
「まぁ予定などあってないようなものだからあまり気にしないでくれ。」
一同
「では、お楽しみください。」引きずられて連れて来られた祐希奈

の家

「あんた達は座って話でもしてて。」
そう言い残し祐希ちゃんは台所へと消えた。

「話って言われても…何かある？」

「う～ん…あ、学校の修理状況はどうなってるんだ？」

「えと…2つの大きな損傷の片方は終わったらしいけど、大穴が空いてる方が難航してるみたい。」

「あー…俺が吹き飛ばされてぶち抜いたやつか…」

「うん…貫通してる分、閉じるのが難しいんだって。」

「そっか。」
会話終了…
話題がねえ！！暗い話は続けたくないし、明るい話題、明るい話題…何か…あ、学校といえば！！

「ヴィヴィオは学校で好きな奴出来たか？」

「ふぇ！？」

って俺は何聞いとんじゃあああああ！！！！
とりあえず落ち着こう…焦らず話題を変えて…

「あ、いや、」

「好きかどうかはわからないけど、気になる男の子ならいるよ。」
ぎゃあああああ！！！答えられてしまった…
しかもいるううぅぅ！！！

「そ、そうか…ど、どんな奴なんだ？」

「えっと…格好良くて、優しくて、運動神経も良くて、勉強も出来るんだ。あ、ちょっとお金持ちかもしれない。」

「…」
なんだその完璧超人間はあああ！！！
そんなやつあの学校にいるのか！？
まったく知らなかった…探し出して見極めてやる！！

「なるほど、その人間なら私もよく知っているぞ。」
はあ！？メイデンもよく知っているだって？
ますます気になる…お前は誰なんだあああ！！！

「誰なのか教えてくれないか？」

「ダメだよ。恥ずかしいもん。」
ちょっと赤くなり答えるヴィヴィオ…
ちくしょう…ヴィヴィオにこんな可愛い顔をさせるなんて…一体どんな男なんだ…

「マスターもよく知っている人間だぞ。」

「あの学校でメイデンが知っているかつ、俺がよく知っている男子…神田？」
剣道部主将で間違いなく強い…

優しくて勉強が出来て金持ちかどうかは知らんが…

「ち、違うよ～。確かに神田君は強そうだけど、ちょっと怖いし…」

「くすくす…」

メイデンが声を押し殺して笑っている…

「た、確かに神田とやらは強いだろうが、マ、マスターにはあれが優しそうに見えるか？あはははは！！
す、少なくとも最初に見た印象では優しそうには見えないぞ…あはははは！！」
まったく検討違いの答えだったらしく、メイデンが大笑いしている。
人の形態をとっていたら、きっと腹を抱えて笑っていただろう…

「お前は誰なんだーーーー！！！！！」

「やかましい！！」
バキャッ！！

「のわっ！！！」
ゴーン…
カナン君が顔面から壁に突っ込んだ…
痛そう…

「祐希ちゃん今の蹴りで良く落とさなかったね…」
両手にどんぶり鉢を持ったまま飛び蹴りを放ったのに中身が飛び出たりしていない…
凄いバランス感覚だなあ…

「ま、蹴り慣れた頭だしね。」

蹴り慣れればこぼさなくなるんだ…

と祐希奈のまったく関係のない発言に感心をするヴィヴィオ。

「つ～…お前は1日くらい暴力を振るわない日はないのか…」

「ないわね♪」

「即答かい！！お前は' 一応' 女の子なんだからいつまでも暴力ふるってんじゃねえ！！」

わざわざ地雷を踏むのが得意なカナン…

「一応…ね…」

ゴゴゴゴ…

「ごめんなさい…あなた様は立派な女の子です…」

バッ！！

あまりの迫力に土下座するカナン…

「許さないわ！！はあああ！！」

「うわあああ…ってあれ？」

また蹴られると思ったんだけどな…

「と、言いたいところだけど今日はお礼をするために呼んだんだから我慢してあげる。」

「だったら最初の一発目からやめてくれ…」

「やっぱり気が変わりそうね～…」

「すいません！！ありがとうございます！！」

「マスターも大変だな…」

- 色々 - と…

「ねえ祐希ちゃん。さっきから気になってるんだけど、その料理何なの？」

「ん？ああ。うな丼よ。」

「うな丼って…うなぎさんの？」

「ほかにどんなうな丼があるのよ…」

「だって学校の生物室で見たうなぎさんはヘビさんみたいで美味しいとは思えないよ…」

「ヴィヴィオ。うなぎは一応高級なんだぞ？うまいぞ～♪」

「そうなの？」

「ああ。それより…そんなもん使ってもいいのか？雅樹さんに悪いだろ…」

「大丈夫よ。父さん隠してるつもりかも知れないけど、魚料理は全般苦手だし。」

「そうなのか？」

「うん。お魚さんの料理の時は決まって雅樹さんが食べるのが遅いんだ。」

「へぇ…」

何で女の子はそんなによく見ているのだろう…
俺なら気にもしないな…

「あんたはうなぎは好きよね？」

「よく分かったな…」

「中学上がる時に一緒に外食に行ったでしょ？」

「行ったかな…」

「行ったのよ。その時にあんたはラーメンにするかうな丼にするかで迷ってたから…」

「…」

いくら女の子でもここまで気にするだろうか…
きゅうりが嫌いなのはバレても仕方ないけど…よく見すぎな気がするぞ…

「マスター達はいつまで喋っている気だ？
早く食べないとうな丼とやらが冷めるぞ。」

「そ、そうだな。食べるか。」

「うなぎさん…食べれるかな?」

「食べないと夢でうなぎが襲ってくるわよ♪」

「ええ!?た、食べないと!!」

「ヴィヴィオ…祐希奈の冗談だからな?」
まったく…どんだけ純粋なんだ…

「私、うなぎさんに食べられない?」

いや、泣くなよ…確かに自分を飲み込むほどのうなぎには怖いが…

「ああ。大丈夫だ。ヴィヴィオがピンチになったら俺がそのうなぎを食ってやるよ。」

「ほ、本当?この部屋くらいあるよ?」

「…でかいな。」

怖…ヴィヴィオの想像力怖…

「私が蒲焼きにしてあげるわ♪」

事の始まりはお前の冗談のせいなんだが…

「うん…助けてね?」

ま、ヴィヴィオが可愛いからいいとしよう。

「それ以前にうなぎを食べられれば済む話ではないのか？」

「「「・・・」」」

確かに…

「じゃ、じゃあいただきます。」

「食わせてもらうか。」

「はいはい。どうぞ。」

どんぶり鉢の蓋をあけるとご飯が見えないほどの分厚いうなぎの蒲焼きがたっぷりとのせてあった…

どう見ても高い…

「祐希奈…これかなり高いうなぎじゃないのか？」

「安いの買うと父さんが食べてくれないかもしれからね。」

「奮発しすぎだ…遠慮しちまうだろ…」

「うなぎさん美味しいね♪」

おい…さっきの怖がりようはどこにいったんだ？

「してないけど？」

「…」

「作っちゃったんだし、遠慮せずに食べなさいよ。」

「いただきます…」

改めて言い直したのはこれからなかなか食べられるようなうなぎではなさそうだからだ。

「うまっ！！」

ヤバい！！マジでうまい…

「美味しいね～♪」

「私も食べたいぞ…」

メイデンが少し拗ねたような声で言った…

「まだ無理なのか？」

「戻れることは戻れるが、まだほとんど動けん…」

どうやらまだ修復が完璧には終わっていないらしい。

「あ、そうだ。メイデン戻ってもいいよ～。」

「だが、見てるくらいしか…」

この光景を見てるだけなのはかなりつらい…

「大丈夫。私が食べさせてあげるから。メイデンは口を開けるだけでいいよ。」

「しかしそれではヴィヴィオに迷惑が…私は…食べるのが遅いんだ…」

「口が小さいから仕方ないか…アウトフレームは無理なのか？」

「無理だ…それだと座ってもいられない…」

「じゃあ、私がメイデンの分を残して食べるからゆっくりたべよ？」

「ヴィヴィオは本当に優しいな…すまない世話になる。」

「優しいとかそんなんじゃないよ～。私がメイデンと食べたいだけだもん。」

「ヴィヴィオは謙遜しすぎ。あんたほど優しい子…ていうかお人好しも少ないわよ。」

「カナン君も優しいよ？」

「こいつもその珍しい部類に入るのよ。ここには稀少人類が二人も揃ってるってこと。」

俺は三人の間違いだと思うぞ…
祐希奈も相当お人好しな部類に入る…
普段はああだが、ぶつぶついいつつも結局助けたりする。

「何よ？」
しばらくじっと見ていたのが気付いたのか祐希奈が聞いてきた。

「いや、俺達って意外とと似た者同士だな～と。」

「は？どのあたりがよ？」

「お前は認めないだろうから言わない。」

「まぁいいけど…」

「メイデン口開けて～。」

隣ではまだ歩くくらいしか出来ないメイデンにヴィヴィオが食べさせていた。

「あ～ん…もぐもぐ。確かに美味しいな。」

「うなぎさん美味しいよね～♪」

「ああ。ヴィヴィオ…」

上目遣いで見上げるメイデン…

そうか…そんなにヴィヴィオに食わせてもらうのはうまいのか…

「あはは。うん。はい。あーん♪」

「あ～ん…もぐもぐ…♪♪♪」

えらい上機嫌だな…

「あの二人は仲いいわね～。」

「似たような特徴の持ち主だからな。」

「それって天然のこと？」

「性格が似てる奴って大抵はめちゃくちゃ仲良くなるか、極端に悪くなるかのどちらかだからな。」

「ヴィヴィオの性格で仲悪くなる方が難しいと思うわよ？」

「だな。」

「はい。ごちそうさまでした～。」

「美味しかったぞ。」

「お口に合って何よりよ。じゃあ片付けるから食器まとめといて。私はお風呂入れてくるし。」

「は～い。」

「わかった。」

「へいへい。」

まとめるだけでいいとは言われたが大して手間もかからないため、洗ってしまった。

「ねえねえ、カナン君は今日はお泊まり？」

「いや、着替え持ってきてないし、帰ろうと思ってたけど…」

「私からのお願い。今日は泊まっていって欲しいんだ…」

「何で？」

「こんなこと言ったら笑われるかもしれないけど…不安なんだ。

今日の祐希ちゃんみたいに一人の時に狙われたら…
カナン君が強いのは知ってる。
でも、もしものことがあったらって思うと怖くて…
考えると震えが止まらなくて…
だから…魔力が回復する今日1日だけでいいから…お礼もするから
…今日は…お願い…」

ヴィヴィオの目から涙がこぼれた…
それほど、今日は怖かったのだろう…

「わかった。泊まっていく。」
「ほんと？」

「ああ。あとな、誰もこんなヴィヴィオを笑ったりなんかしない。
肝心なこと忘れてないか？
ヴィヴィオは、管理局員や魔導士であるまえにただの女の子だ。
男は我慢しないといけない時もあるけど、女の子はいいんだよ。
これからも俺や、祐希奈はずっとヴィヴィオの味方だ。遠慮なく頼
れ。むしろ頼ってくれないと困る。」

「うん！！」

心からの笑顔…

「おし。ヴィヴィオは泣き顔も可愛いけど笑ってる方がもっと可愛
い。」

「か、カナン君…それはちょっと…言い過ぎかも…」

「この言葉を素で言えるマスターは凄いな。」

「そうか？思ったまま言ってるだけだぞ？」

「…」

ヴィヴィオや私はよく天然と言われているが、マスターも天然とやらではないのだろうか…

「お風呂もうすぐ入るわよ…ってヴィヴィオに何したのよ！！」

バキャッ！！

「ごはっ！！」

「カナン君！？」

「あんたヴィヴィオになんかひどいこと言ったんでしょ！！

何泣かしてるのよ！！」

ドゴッ！！

仰向けになって無防備な腹部に止めの一撃…

「かは…」

「カナンく～ん！！」

「まだまだあああ！！」

なおも攻撃を加えようとする祐希奈。

「祐希ちゃん待って！！違うよ！！」

「は？」

「カナン君は相談にのってくれただけ。」

「じゃあ何で泣いてるのよ…」

「これは、えと…洗い物をした時の水かな。」

「洗い物…まとめとくだけでいいのに。」

「とにかくカナン君は何もしてないよ。」

「ちょっと悪いことしたわね…」

「問答無用で蹴り飛ばしてさらに止めまでさしておいてちょっとか！？」

「さすがマスター。復活が早いな。」

「こんなに早く復活するんだし大丈夫よね。」

「大丈夫とか言う以前に謝れよ！！」

「ごめんなさい。」

「いや、ヴィヴィオは悪くないって…」

「じゃあ私が悪いって言うの！？」

「何で逆ギレしてんだよ！？お前しかいないだろーが！！」

「あんたが当たるから悪いのよ！！」

「それ言ってることおかしいですよねえ！？」

「そもそもあんたは私の下僕なんだから私が謝る必要ないわよ！！」

「いつお前の下僕になったんだよ！！」

「今よ！！」

「お前は無茶苦茶なんだっつーの！！」

「あ、あの、あのね、二人とも仲良く…」

「「出来るか！！！」」

「うぅ…」

「息はぴったりだな。」

「「誰と誰が！！」」

「どう見てもマスターと祐希奈だろう。」

「「それはない！！」」

「あはは…」

「これ以上言うと終わらなくなりそうだな。どちらでもいいから風呂にいけ。」

「俺が行く。今日はさっさと寝たいからな。」

「永眠しちゃいなさい！！」

「んだとこらあああ！！」

「ほらマスター相手にするな。」

「ちっ！」

バタン…

「きしゃあああああ！！」

「祐希ちゃん…怖いよ…。」

シャアアア…

「たく…祐希奈の奴…おもいっきりやりやがって…」

パキッ…

首を捻ると骨の音が響きわたった。

「カナン君。着替えここに置いとくね～。」

「ん？ああ。ありがとう。」

怒りで着替えの存在忘れてた…

「どういたしまして～。」

ガチャ…

何故か扉が開いた…

「へ？」

「今日泊まってくれるお礼に私が洗ってあげるね～。」

「はいいぃ！？」

「あ、カナン君って結構筋肉質なんだね…凄いや…」

「ヴィヴィオ…ちょっと待て…いくら何でもこれはダメだって…」

「何で?私、服は着てるよ?」

「そういう問題じゃなくて…」

「丁寧にやるよ?」

「いや、そっちでもなくて…」

「わかんないよ~…」

「もういい…勝手にしてくれ…」

断言しよう…俺はヴィヴィオには一生かかっても勝てはしないだろう…

「は~い。じゃあ髪から洗うね。」

「ああ…」

シャカシャカシャカ…

あ、結構気持ちいいかも…

「どうかな?」

「いいと思う。まぁ普段から髪なんてどうでもいいから多分としか言えないけどな。」

「どうでもいいとか言ってる割にはカナン君の髪ってサラサラしてるよね～。結構長いしこうして見ると女の子みたい。私もこんな髪ほしいな～。」

「それは誉めてるのか？」

「うん。カナン君髪伸ばしてみない？」

「嫌だ…」

「カナン君なら可愛くなると思うんだけどな～…」

「男に可愛いさはいらん…」

「そうかな？」

「ああ…」

「う～ん…あ、流すから目を閉じてね？」

「わかった。」

シャアアア…

「じゃあ次に背中流すね～。」

「へいへい。」

「んしょ…」

コシコシコシ…

「…」
ツツツ…
「うわっ！ヴィヴィオ！？」
背中をヴィヴィオの指がなぞった…
「男の人の背中ってみんなこんな感じなのかな？」
「さあな…くすぐったいからやめてくれ…」
「あはは…じゃあ…」
モミモミ…
細い指が肩を揉む…
「別に今肩を揉まなくてもいいだろ…」
「うわ～…ゴツゴツしてる～…」
「聞いてないな…」
「あ、ごめんなさい。終わらせるね。」
シャアアア…
「お疲れさま。濡れたりしてないか？」
「大丈夫。」
「とりあえずありがとな。」

「うん。ゆっくり入ってね。」

「ああ。」

ガチャン…

「…俺って女顔なのか？」

ヴィヴィオが出ていってから激しく落ち込むカナンだった…

その後ヴィヴィオ＋メイデン、祐希奈の順に風呂に入った。

祐希奈とのケンカはよくあること、風呂からあがった時にはすっかりいつも通り話せた。

「今日も父さん帰って来なかったわね…」

「校長って意外と忙しいんだな。いつも椅子に座ってるだけかと思ってた。」

「それは存在の価値はないのではないか？」

「ああ。だから校長って暇だろうな～って思ってた。」

「偉い人は偉い人でつらいことがあるんや。って八神部隊長は言ってたよ。」

「そういえば上の人間は肉体疲労より精神疲労の方が大きいってどっかで聞いたな…」

「私だったらキレるわね…」

「心配するな。お前が上になることはないから。」

「…しばくわよ?」

何故か笑顔…とてつもなく怖いんだが…

「しばかれる前に退散するさ。じゃあな。」

「カナン君?どこ行くの?」

「俺の好きなことをしに行くんだ。」

「「好きなこと?」」

「マスター私も行きたいぞ。」

「ほら、髪でも持っとけよ?」

「ああ。」

カナン君は肩にメイデンをのせると窓を開けそこから屋根の上に出る。

「よっ!」

さらに上の屋根縁をつかみ飛び上がりカナン君の姿は消えた…

「猿みたいな奴ね…」

「身軽だね〜。私達も行ってみようよ。」

「言うと思った…」

二人も屋根に出る…

「行けるかな…よっと…」

「訂正…あんたが猿ね…」

ヴィヴィオは縁も掴まず跳躍だけで二階の屋根上へ…
祐希奈はカナンと同じように縁を掴み登った。
普通なら梯子を使う高さなのだが…

「カナン君。」
屋根の一番高い所にカナン君が転がっていた。

「ん？お前らも来たのか？」

「あはは。ちょっと気になちゃって。」

「私はついでよ。なにしてんの？」

「見てわかんないか？星を見てるんだよ。」

「天体観測じゃないの？」

「いや、別に観測してるわけじゃない。第一、星座とか名前知らないしな。」

「それって楽しいの？」

「ああ。知ってるか？星の光ってのは大昔…細かい話は忘れたけど…とりあえず大昔に光った光が今になってようやく見えてるんだ。

これって凄くないか？
俺達が生まれるより遥か昔にに生まれた光が今届く…それだけ宇宙ってのは広いってことだ。
その中にある太陽系に地球があって、その地球の中に俺達が生きていて…
人間一人がどれだけ小さな存在か…」

「そうやって考えると生きているのって凄いね～。」

「そこまで深く考えてなかったわね…」

「たまにこうやって考えると悩みが馬鹿馬鹿しくなってな。自然と解決するんだ。
だから、俺はこうやって星を見るのが好きなんだ。
悩み云々を別にしても、綺麗だし、メイデンにも見せたら気に入ったらしくてな。今では星好きコンビだ。」

「私はただ綺麗だと思っているだけだ。マスターほど深くは考えてはいない。」

「おいおい…俺がしょっちゅう悩んでるみたいな言い方だな…」

「違うのか？」

「自分で言うのもなんだが、俺が悩むなんてよっぽどのことがない限りはないな。」

「バカだからね♪」

「…かもな。」

「え?ちょっちょっと今のは否定する所よ?」

「バカしか出来ないこともある。
バカも悪いことばかりじゃないさ。」

「じゃあ私もバカになろうかな~。」

「「ヴィヴィオはボケ。」」

「ええ!?」

「マスター私は?」

「お前もボケ。」

「「ええ!!??」」

「ははははは!!お前らと喋ってると飽きないな。」

「もう…笑わないでよ~。」
ヴィヴィオが少しむくれている。
怒ってても可愛いな。

「悪い悪い。でも飽きないから毎日が楽しいんだ。
お前らと会えて良かったよ。」

「はぁ…あんたこれからいなくなるみたいなセリフ言ってんじゃないわよ…」

「いなくなんてならないさ。
まだまだお前らと一緒にいたいからな。」

「約束…してくれる？」

「ああ。いなくならない。ずっといる。」

「カナン君…ありがとう。」

「どういたしまして。」
二人の間には桃色の空気が…

「ふん！！」
バキャッ！！

「ぐは！！ちょっと…あぶ！！」

「カナン君！？」
流れる前に祐希奈に消された…
蹴り飛ばされたカナンは屋根の縁に掴まり辛うじてぶらさがった…
そこに祐希奈が近づいていく…

「お、おい…まさか…いくらなんでも…」

「ふふふ…」

「ははは…」

「落ちろ！！」
バキャッ！！

「がっ…あああぁぁぁ…」
ドスン…
鈍い音が下から響いた…
「カナンく～ん!!大丈夫～?」
覗き込むと大の字で下に倒れていた…
「あ、あんまり大丈夫じゃない…」
「私を助けた時にもっと高いとこから落ちても平気だったじゃない!!」
「あれは…足から落ちたし…」
「気合いでなんとかしなさい!!」
「それ以前に最初から落とすな!!」
「大丈夫じゃない。心配して損したわ。」
「今の会話のどこにそんなもんがあるんだよ!!」
「あんまり騒ぐとご近所さんに迷惑だよ?」
「時間帯を考えて叫べ。」
「「そんなもんいちいち考えてられるか!!」」

「あはは…」

この事件が終わってもこんな感じで毎日を過ごせたらいいな。

大きくなっても、仲良く…ずっと…ずっと…

第十八話　約束（後書き）

前書きにもありましたように国体メンバーに選ばれました！！個人としてはかなり嬉しいのですが、練習がきつくなり、執筆する体力もないまま寝てしまうかもしれません…ご了承下さい…

第十九話　訓練と…地獄？

ヴィヴィオ
「皆さんこんばんは～。」
祐希奈
「毎度お馴染み、前書き＆ａｍｐ；質問コーナーの時間よ♪」
メイデン
「というか雑談に近い気もするが…」
カナン
「大半は雑談だな…」
祐希奈
「そこんとこは気にしない気にしない。」
ヴィヴィオ
「前回のイメージソングについてのメッセージが何件かあったから紹介するね～♪」
カナン
「まず最初のイメージソングはｉｎｎｏｃｅｎｔ　ｓｔａｒｔｅｒある作者さんからメールできた歌だな。」
祐希奈
「第一期リリカルなのはのＯＰでこの作品にはもったいないくらいね～。」
メイデン
「王道の曲を私達のイメージソングにしてもいいものか…非常に悩むな。」
カナン
「まぁ、大丈夫だろ…多分…」
ヴィヴィオ
「続いては…ｓｐｒｉｔ　ｔｅａｒｓ　作ｆｒｉｐ　ｓｉｄｅ」
祐希奈

「これはカナンと私が別れる時の挿入歌ですって。多分ここまで仲良くないわよ…」
カナン
「多分じゃなくて絶対な…」
ヴィヴィオ
「君を抱いてたーこの胸にー♪」
祐希奈・カナン
「歌うな！！」
ヴィヴィオ
「作者も早速ダウンロードして聞いてます。」
メイデン
「ラストの歌は…倦怠ライフリターンズ　作キョ〇」
カナン
「別作品のキャラソンを送るなんてな…」
祐希奈
「男ね♪」
ヴィヴィオ
「ちなみにこのキョ〇さんのところがカナン君、ハル〇さんのところが祐希ちゃんだって。」
メイデン
「聞いて思ったが…この人もマスターと同じく苦労人だな…」
カナン
「キョ〇さん頑張ってくれ…」
祐希奈
「私あそこまでひどくないわよ？」
カナン
「いや、大差ないと思うが…」
ヴィヴィオ
「私も十分張り合えると思う…」
祐希奈

「さて続いての質問は…」
カナン
「人の話を聞けー！！」
祐希奈
「うるさい！！」
バキャッ！
カナン
「ぐはっ！！」
メイデン
「やはり勝るとも劣らないな。」
祐希奈
「はいはい。んで次は…国体ってなんの国体ですか？って…まだ言ってなかったのね…」
ヴィヴィオ
「現在作者の部活を知ってる人は一人しかいないからね～…」
メイデン
「作者の部活は…」
祐希奈
「ちょっと待った！！どうせだし問題にして見ましょう。」
カナン
「質問なのに疑問で返すのか…無茶苦茶だな…」
ヴィヴィオ
「あはは…祐希ちゃんだから…」
祐希奈
「外野はうるさいから黙ってなさい。」
カナン
「外野って…」
ヴィヴィオ
「あはは…」
メイデン

「読者の皆さん頑張ってくれ。」
祐希奈
「さて、ヒントを出すわよ。ヒントは球技…そして、ラケットこれだけあれば正解者も出るわよね。」
カナン
「暇な人は答えをメッセージにどうぞ。」
ヴィヴィオ
「来るのかな…」
メイデン
「正解すると何かあるのか？」
祐希奈
「ん～…して欲しいって来た萌えシーンをやる…」
ヴィヴィオ・メイデン
「ええ！？」↑主な被害者
カナン
「おいおい…」↑ラッキーな人間
祐希奈
「かも。」
ヴィヴィオ
「…怖いなぁ。」
メイデン
「ああ…やりたくはない…」
カナン
「あ、そろそろ時間だな。」
祐希奈
「今回の話は私達はあんまり出ないのよね～。」
ヴィヴィオ
「今回は主にカナン君が主人公のお話だよ。」
カナン
「読者さん…笑うなよ？」

メイデン
「何かあるのか？」
カナン
「…気にするな。」
祐希奈
「変な奴…ま、とにかく…」
ヴィヴィオ
「魔法少女リリカルヴィヴィオ」
祐希奈
「Ｇａｍｅ　ｏｖｅｒ♪」
一同
「何で！？」
朝の日差しの眩しさ…
そして寝心地の悪さに目が覚めた…

「あ～…俺なんで庭で寝てんだっけ…
思い出した…祐希奈に蹴り落とされて…鍵を閉められて…毛布だけ渡されて…」
で、今に至ると…

「今、何時かもわからないしな…
訓練でもして時間潰すか。」
とりあえず林に向かうか。いつもの訓練場所へと向かう。無論走って。

しばらく走るとすぐに目的の場所に着いた。

「さて…」

目を閉じ、剣を意識する…次に開くと左手には黄金の剣が収まって

いた。
メイデンがいなくても剣を呼ぶくらいは出来る。
もちろんメイデンは気付くが…
「何したもんかな～…
」
収束と圧縮の練習でもするか。
「…光よ。」
カナンの元へと光が集まる…
剣に密着し、輝きだす…
ゆっくりと刺突の構えをとる。
「こんなもんか…な!!」
剣を突き出すと同時に魔力を解放…
細い…しかし、一点に圧倒的な威力を誇る高密度な光が放たれる。
「あ、ヤバい…強すぎた…」
進行方向にあった木々をなぎ倒し、なおも止まらず町の上空を通り抜けていった…
「ちょっとまずいか?」
いくら早朝とはいえ、見た人がいるかもしれない…
「動かないで!!」

背後から聞き覚えのある声が響く…
「へ？」

「あなたを拘束します…」
どうやら相手は二人組らしい…もしかして…

「あの～カナンっす。」

「「え？」」

ゆっくりと振り返るとスバルさんとギンガさんがいた…

「な～んだ。カナンか。スカリエッティの部下かなんかかと思っちゃった。」

「なんでこんなところにいるの？
まだ寝てると思ったけど。」

「時間潰しに訓練をしようかと思いまして。」

「訓練にしては派手にやったね。」

「ちょっと加減を間違えたといいますか…
」

「これがちょっと？」

ギンガさんが光が突き抜けた先を指指して聞いてくる…

「一点貫通の技だったんで…

普段使い慣れていないぶん失敗しました…」

「はぁ…今度から注意してね？」

ギンガさんが額に手を当てながら釘を指した。
そこまで呆れられるとちょっと傷つく…

「俺はいいとして、なんでスバルさんとギンガさんがいるんすか？」

「この近くで私達も朝練してたんだけど…」

「どこかの誰かさんが…ね。」

「すいません…」

「ギン姉ギン姉！」

「ん？」

「監視ついでにカナンも混ぜて訓練しようよ！！」

なんかちょっと嫌な予感が…

「そうね…無茶苦茶やられるよりはいいかもしれないね。」

まずい…絶対にまずい…

「大丈夫っす。もう…」

帰るんで…と繋げようとしたが遅かった…

「模擬戦♪模擬戦♪」

「それでいいかな？」

「でも人数が…」

「私達ＶＳカナンでいいよね♪」

「スバルさん！？それおかしくないっすか！？」

「私達…カナン君に訓練を邪魔されたんだけど…」

黒い！！ギンガさんが黒い！！カムバック優しいギンガさん！！

「俺…そんなに強くないっすよ？
二人の相手はつとまらないと…」

「なのはさんに見せてもらったんだけど、この間のヴィヴィオとの戦闘を見る限りではそんなことないよね～？」キラリと光るスバルさんの目…
なのはさ～ん！！個人情報を守ってくれー！！

「早くメイデン呼んで。それともそのままやる？」

既にリボルバーナックルを装着し、腕の調子を確かめているギンガさん…
結局…逃れられない運命なのか…

「わかりました…メイデン！！」

地面に手を当て召喚する…

「まったく…いきなり剣を使ったかと思えば次は模擬戦か？朝から随分ハードなことだな。」

寝起きのせいか少し機嫌が悪いらしい…

「この後パフェ食わせてやるから機嫌直せ。」

「本当か！？」

不機嫌だった顔が、急に明るくなった。

「あ、ああ。」

何だこの変わりようは…

「なら許す♪マスターやるぞ♪」

現金な奴…

「セットアップ！！」

「了解だ♪」

銀の鎧と黄金の鞘も追加され、戦闘準備を整えた…

「カナンと模擬戦…楽しみだな♪」

「そうね。行きましょうか。」

「うん！」

かなり微笑ましい姉妹なのだが…リボルバーナックルが回転している時点でやる気満々である…

「なんだかなあ…」

「パフェ♪パフェ♪」

「こんなんで…勝てるのか？」

かなり不安なカナンであった…

ギュイイイン…

マッハキャリバー、ブリッツキャリバー…通称キャリバーズのローラーが唸りをあげる…

「二対一か…とりあえず…」

スバル、ギンガの二人は左右に別れ挟み込むように突っ込んでくる。

「「リボルバー！！」」

お互いにカートリッジを一発排出。

「「シュート！！」」

挟撃…同時に放たれた衝撃波を伴う弾丸がカナンに向かう。

「やれるだけやるかな！！」

抜刀…切り払うと同時にスバルに突っ込む。

「くらっとけ！」

横殴りの一撃を繰り出す。

「プロテクション！」

ガン！

「硬！！」

さすが六課のＦＡ…

「リボルバー！」

ギュアアア！！

カナンの背後でギンガが飛び上がる。

「ナックル！！」

狙いは頭…

「よっ！」

屈んでかわす。拳は正面のスバルに向かう…

「キャリバー！」

スバルもかがみギンガが通り抜ける…

マッハキャリバーが光る…

「シュート！」

振り上げられる右足

「危！」

当たる直前にバク転を行い避ける。
距離が離れるが片足のローラーの推進力を使い接近。
「はあああ！！」
踵落とし！！

「ちっ！」
ギァン…
剣を頭に掲げ防ぐ…姉妹の攻撃は止まらない。
スバルの頭の上に紫の光の道が発生…

「はあああ！！」
ジャンプ台のようにしてギンガが飛び、落下しながら蹴りを放ってくる。

「面倒だな！！」
ギン！
スバルの足を弾き横に飛ぶ。

「マッハキャリバー！」
「ブリッツキャリバー！」
ギュアアア！！

「スキがないな…」
四肢を使ったシューティングアーツ…術後硬直がほぼゼロ…相性が悪いか…

「「はあああ！！」」

「く…」

さすがは姉妹…やたらコンビネーションがいい…
スバルの左拳を横にずれてかわす、スバルが通り抜けた途端、ギンガの拳が目の前に…

「プロテクション！」
めったに使わない防御魔法を使う。
ギンガは構わず殴る…
ガン！

「おおお！！」
ギンガの腕からカートリッジが排出される。
ギュアアアア！
車輪が回り激しい火花が散り始める…

「く…そ…」

歯を食い縛り耐えるがこのあとどうなるかはわかっていた…
背後にスバルさんが回り込んでいたのだから…

「リボルバー！！」
回避不能の一撃…加速し、迫る。

「ナックル！！」
ドゴオ！！

「ぐあ！！」

背中から盛大に打ち上げられ、空中を漂う…

「「Ｗｉｎｇ　ｒｏａｄ！」」

俺へと続く青と紫の道…

「「はあああ！！」」

二人共に車輪を回し、突っ込んでくる…

片方はなんとかなる…しかし…

「やっぱ二人相手はきつかったか…」

若干苦笑いぎみに愚痴る…

「ユニゾンを使うか？」

「…たまには違うやり方で戦うか。」

「違うやり方？」ギュアアア！！

二人が登ってくる…

体勢を整え、しっかりと足をつける…

「リボルバー！！」

「…頼んだぞ？」

「ふふ…なるほどな。任された。」

「ナックル！！」

「参式抜刀剣術…絶空！！」

ギァン！！

「わああ！」

スバルを弾き飛ばす。

「まだ私がいるわ！！」

迫る拳…

ガシッ…

「え…？」

「残念だったな。私もいるんだ。」

拳を受け止めたのはアウトフレーム（１６０センチほど）のメイデンだった…

「ではな。」

「うわっ！」

ブン！！

「きゃあああ！！」

華奢な片腕で軽々とギンガを持ち上げ投げ飛ばした。

スバルもギンガも地面に落ちる前に再度ウイングロードを展開し、免れている。

「お前意外と力あるんだな…」

「そんなわけないだろう…大地の力を借りて筋力の強化をしただけだ。」

「便利なもんだ。」

「早くうまく使えるようになってくれないと困る。」

「まぁ、適度に頑張るさ。」

「さて…これで条件は同じだが…どうする?」

「やっぱり一対一にかぎる。」

「ほう…理由は?」

「楽だから。」「だと思ったぞ…」

「おっと…来たな…やるぞ。」

「ああ。」

二手に別れる。

カナンにはスバルがメイデンにはギンガがついた…

「ちょっとびっくりしたよ。まさかメイデンを使うなんてね。」

「一人じゃきついんで。」

「またまた…まだ余裕があるくせに~。」

ギュアアアア!!

「いえいえ全然。」

まぁ、あるけどな。

腰を落とし構える…

「本当かな!?」

接近…引かれる拳…

「ご想像にお任せしますよ！！」

引き抜かれる刃…

ギリ！！

「「うおおお！！」」

重なるは刃、拳、声…引き合うようにぶつかり、拒絶するかのように相手を押し返そうとする。

「力勝負なら男は負けられない！！」

踏み込む…少しずつ…確実に…

押されているなか閉じられるスバルの瞳…

「ＩＳ発動…」

次に開かれる瞳は金色…

「振動破砕！！」

ギャリリリ！！

「っ！何だ！？」

激しく刃がぶれる…押さえ込めない…

「リボルバー！！」

渦巻く螺旋…来る！！

キィン…

自分から剣を手放し首をひねる。

「シュート！！」

すぐ横を弾丸が通り抜ける…

「くあ…」

後から来る衝撃波…体が開く…

「キャリバー！！」

ギュアアアア！

加速し一回転…回し蹴りか！！

「剣よ！！」

左手に剣が戻り、剣腹に腕をあて構える。

「シュート！！」

全力の蹴りが放たれる…

「ふ…」

足の力を抜き自分から吹き飛ばされ威力を軽減する。

「まだまだ！！」

「Ｗｉｎｇ　ｒｏａｄ！」

追撃するために道を伸ばしカナンに突っ込んだ。

「リボルバー！！」

カートリッジが排出され、リボルバーナックルの車輪が回る…

ローラーが唸りをあげ、吹き飛ばされたカナンに追い付く。

「ナックル！！」

ギャリリリ…

止めた!?

「向こうは終わったみたいっすよ…魔力…もう全開で使っても問題ないみたいなんで、ちょっと強めに行きますよ!!」

ガキン!!

「なっ!」

カートリッジを使った拳撃を弾いた!?

それより…

(ギン姉?勝ったんだよね?)

念話を試みるが繋がらない…

「念話ならメイデンも繋がらないんで引き分けかもしれないっすよ?」

「どうなったのかな?」

「さぁ?」

時は少し前にさかのぼる。

「やはり体術は苦手だな…」

メイデンは慣れない接近戦に防戦一方になっていた。

「はあああ!!」

何度目かのギンガの猛攻が始まる…

「頑張ることだな。大地の力よ…」

筋力強化を施し迎え撃つ。胴体に迫るギンガの右拳を蹴り飛ばし弾

くが…

「キャリバー！！」

蹴り飛ばされた回転を使い体重をのせる…

「もうその技は何度も見たぞ。グランドウォール！！」メイデンの目の前に大地の壁が出現…

「シュート！！」

左足で大地の壁を蹴るが破壊出来ない…

「リボルバー…」

「無駄だ…」

「バンカー…」

ギンガの手がドリルのように回転…

大地の壁を貫通する。

「ほう…貫通したか…やるものだな。」

ギンガはさらにカートリッジを使う…

「シュート！！」

ドリルの回転力を利用し、いつもの数倍の威力を誇る弾丸を発車する。

「まだ届かないぞ。」プロテクションに阻まれ届かない…

「キャリバー…」
飛びあがりメイデンに蹴りを放つ。

「無理だ。」
ギャリリリ！！
火花が散る…まだ終わらない。
ブリッツキャリバーに渦巻く螺旋…

「っ！」

「ショット！！」
ブリッツキャリバーから弾丸が放たれた…
至近距離からの弾丸はプロテクションを破壊し、届く…

「く！！」

ここにきて初めてメイデンが被弾した…

「やっと一撃か…固いなぁ…」

「止まったな…」

「え？」

メイデンの前に空気中の水分が集まりだし…龍を形どる…

「っ！！ブリッツキャリバー！！」
「Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！！」

とっさの判断でプロテクションを張る…

「水龍降臨…行け！！」

巨大な水龍が、ギンガを飲み込まんと口を開け、襲いかかる。

「ブリッツキャリバー…頑張って…」

「Ａｌｌ…ｒｉｇｈｔ…」

出力を最大にし、なんとか耐えきったギンガ…

「耐えたか…だが私の勝ちだな。」

「まだ…わからない…え？」

動こうとするが手足が動かない…

凍りついていた…

「おしかったが、水を浴びた時点でギンガさんと言ったか…あなたの負けだ。」

「こんなもの…」

パキパキ…

力を込めて少しずつ氷を砕く…

「上を見てみろ。これが今まで私が攻撃に転じなかった理由だ。」

メイデンが上を指差す…そこには雨雲…

「あ～あ…」

自分はずぶ濡れ…プロテクションを張ったとしても無駄だろう…

「しばらく眠れ…雷帝降臨…」

ピシャアアン！！

「きゃあああ！！」

ドサッ…

出力最低限で雷を落とし、ギンガを気絶させた…

「疲れたな…私もしばらく眠るとしよう…」

アウトフレームを解除し、メイデンも眠りについた…「二人がどうなったのか気にならない？」

「多少は。」

「早く見に行きたいしこっちも決着…つけようか…」

「いいっすよ…終わらせましょう…」

「「私の勝ちでね！／俺の勝ちでな！」」

「ギア！エクセリオン！！」

「Ｄｒｉｖｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ！」

「フルドライブか…楽しめそうだ…」

「余裕だね…」

「余裕なんてない…ギリギリの戦いだからこそ楽しいんだ。」

普段は平和主義なカナンだが実は何気にヴィヴィオや祐希奈より戦闘バカの傾向にあったりする…

「楽しむ気もなくしてあげるからね…」

ギュアアア！！
リボルバーナックルの車輪が、ローラーブーツのギアが火花を散らし、今か今かと突撃の時を待つ…

「やってみてくれ…」

すでにカナンの頭の中には戦闘のことでいっぱいで敬語などは抜け落ちている。

「うおおお！リボルバー！！」
爆発的な推進力をもって進む。

「参式抜刀剣術…」

「ナックル！！」

「絶空！！」

再びぶつかる刃と拳…技術ゼロの力任せな一撃が激突する。

「あああああ！！！！」
ガキン！！

「面白い！！」
押し負けたのはカナン、力勝負ではフルドライブの状態のスバルの方に軍配が上がる…しかし、カナンの顔は笑顔のまま…

「くらえええええ！！」
拳がカナンへと迫る…

「遅い！！」

「これは！」
眼前のカナンの姿が残像も残さず消える…スバルの目をもってしても視認も出来なかった速度…

「どこみてんだよ！！」

上空からのカナンの声…見上げると光の粒子を集めるカナンがいた…

「エクス！！」

「マッハキャリバー！！」
「Ｗｉｎｇ　ｒｏａｄ！」

回避ではない…ただの一本カナンへと続く道…
フルスピードで突き進む…

「カリバー！！」

振り降ろされた剣から放たれるはＡＡ以上はある光の波動…

「リボルバー！！」
ギュアアア！！
この程度なら…
迫る波動を見ながらも臆せず進む…

「ナックル！！」
いける！！

「無茶苦茶だな…」
あり得ないことが起きた…スバルはＡＡ以上の攻撃を殴って軌道をそらした…
そのまま突撃してくる…
術後硬直…体が動かない…

「ヴィヴィオの砲撃の方が…」

カナンの手前で前宙…

「鋭かったよ！！」
バキャッ！！

「が！！」
全体重、勢いがのった踵落としが綺麗に頭に決まり、カナンが地面へと叩きつけられる…

「これで！！」
リボルバーナックル、ローラーブーツが唸りをあげ、風を巻き込み、渦巻く…

「終わり！！」
土煙に向かってリボルバーシュート、キャリバーショットの三発の弾丸を叩き込む。
そして右手にスフィアを形成

「一撃！必倒！」ラストカートリッジ三発を使いスフィアを巨大化させる…
カナンが動いた形跡はない…

「ディバイン！！」
拳を引く…

「バスタァァァァー！！！！」

ディバインバスターとは名前だけのスターライトブレイカーに相当する砲撃が叩き込まれる

しかし、カナンに着弾したはず砲撃は…止まって…いた

「うっそ～…」

驚愕…スバルの最大威力を誇る砲撃が止まっているのだから…
戦っていた相手は一人、必然的にこれを成し得た人物は一人しかいない…

「さっきの俺の攻撃弾かれたの結構ムカついたから真似だ…」

ムカついた…カナンはそれだけの理由で回避を考えず相手が最大の攻撃を出してくるのを待っていた。

「おら…よ！！」

カナンが剣を振り抜き砲撃の軌道をそらした…
姿が消失…スバルの目の前へ…
刺突の構え…光が集まる…

「っ！」

今朝の技だ！
反射的にプロテクションを張る…

「貫け！！」
スバルの強固なプロテクションを何も無かったかのようにあっさり貫通する光…

「！！…あれ？」

来ると思っていた衝撃は来ない…
スバルの頭のすぐ横を光は通り抜けてしていた…

「あ～あ、制御失敗か。敵前で攻撃を外すなんてこの時点で俺の負けっすね。」

「…」

下手な嘘だな～。
今、考えてみれば私自身に高威力の技を叩き込まれたことは無かったな…
私はあれだけやったのに…カナンは必要最低限の防御の技と私に怪我をさせないようにＡＡで止めた収束攻撃、最後は私のプライドを傷つけないように自分が外したことにした…

「カナンは…優しいね。」

「はい？何のことだかわからないっすよ？」

ほんとは手加減はいけないことなんだけど…まぁいいや。

「ギン姉達を見に行こうよ。」

「了解っす。」

ヴィヴィオと祐希奈もいい子を見つけたなぁ～♪

不器用さが可愛い♪

「スバルさん？何笑ってるんすか？」

「ん～？カナンが可愛いなぁ～と思って♪」

「…やっぱり俺って女顔なんすか？」

ヴィヴィオにも言われたばかりだしな…

「え？…あ～女装したら似合いそうだね♪」

「勘弁して下さいよ…」

「うん♪似合う似合う♪カナン可愛い～♪」

「想像で笑うのやめてください！！」

「え？じゃあ…」

「じゃあって何…？」

「実際にレッツゴー♪」

ガシッ…

両腕を拘束され…持ち上げられる…

「ぎゃあああああ！！！やめて！！俺の人生が！！」

「気にしないの♪」

「気にする！！普通は気にする！！嫌だあああああ！！！！」

二人はギンガ、メイデンを置いて服屋へ…

「ん…ふああ…かなり眠ってしまったようだな…」

既に日は高いしお昼前かもしれないな…

「あ、メイデン起きた？」

頭の上からギンガさんの声…

「…何故私はギンガさんの膝で寝ているんだ？」

「え～と寝てるメイデンが可愛くって…つい…」

「な！！ギ、ギンガさんまで可愛いなどと…か、からかうのは…やめてくれ…」

「…」わぁ～…真っ赤になっちゃって…クールかと思ってたけど意外ね…

「あの…えと…ギンガ…さん？」

うるうる涙目可愛いい！！

マスコットのような可愛さに思わず抱き締めてしまった…

「なぁに？」

「む、胸が…」

メイデンがギンガの胸に埋もれていた…

「あ、ごめん。」

前向きに持ち直し、しかしやっぱり抱いたまま…

「あの…マスター達は？」

「さぁ…？」

「ギン姉ぇぇ～～！！」

「噂をすればなんとやら…ね。」

声のする方を向くとスバルと…誰？

「お待たせ。」

「別にいいけど…その子誰なの？」

スバルの背後に隠れるように立っている女の子を訊ねる。

「ほら、あいさつあいさつ♪」

「い、いや…無理…です。」

か細いこえが聞こえる…恥ずかしがりやなのかな？

「じゃあ私から…ギンガ・ナカジマです。よろしくね。」手を差し出す…スバルの後ろからおずおずと女の子が出てくる…

綺麗な子だな～…

長い黒髪、白の上着に、黒の服、また白のミニスカートか…質素だけど似合ってる。

「カナメです…」

握手をする、本当に小さな声で話す女の子…

「よろしくね。カナメちゃん。
どこで知り合ったの？」

「たまたま道端で。」

「ふ～ん…スバルに何かされなかった？」

「い、いえ…」

「ギンガさん、こういう子を可愛いと言うのではないのか？」

「ち、ちがっ！！」

「そうね～。守ってあげたくなちゃうわね♪」

「っ！！」

真っ赤になっちゃって…メイデンとはまた違う可愛さがあるわね♪

「そういえばカナン君は？」

「カナンなら先に帰るってさ。」

「こんな可愛い子見れないなんて残念ね。」

「…」

誰か助けてくれ…
カツラに変声機までつけられて…その上服まで買って…何の恨みがあってこんな仕打ちを…

「ねえ、カナメちゃん？」

「は、はい！」
あ…まずい…正面から見てしまった…

「あれ？カナメちゃんってなんかカナンに似てるような…」

「い、従妹なんです！！」

「へえ…もしかしてスバルが連れてきた理由ってこれ？」

「そうなんだ～。私も似てるな～と思って聞いてみたら従妹だって知って、びっくりだよね～♪」

「ほんとね。」

「あはは…はは…で、ではそろそろ用事もありますので…」

一刻も早く逃げなくては！！バレれば人生の終末が訪れること必死！！

「あ、そうなんだ。スバル、ダメじゃない。忙しいのに連れてきちゃ。
ごめんね～？」

「あはは。ごめーん。じゃあねカナメちゃん…！　またね！♪」

嫌じゃあああああ！！！
（その服はプレゼント♪）

（いりません！！）

（似合ってるよ～♪）

（そういう問題じゃないっすよ！！）

「カナンによろしく。」

「はい…失礼しますね。」お辞儀をして背を向ける…とりあえず危機は去った…と思っていた。

「カナメさんとやら途中まで一緒に行こう。」

まだあった…

「え？あ、はい。ところで先程から気になっていたのですが、あなたは何なんですか？」

演技も疲れる…

「私はあなたの従妹だったか…カナンという人物のロボットだ。」

「ロボット…ですか？」

そういやそんな話だったっけ…

「ああ。細かい話はまたマスターから聞いてくれ。
家に行くまでの間、肩を貸してもらってもいいか？
飛んでいると目立つのでな。カナメさんなら私を持っていても不思議がられないはずだから。」

「はい。どうぞ。」

「有難い。」
ストン…
とりあえず…残りの爆弾はメイデンだけか…
なんとかしないと…

林を下り街中へと出る…さすがにこの時間だと人手も多い…
知り合いに会わないといいが…

「お…そこの君可愛いね。俺達と遊ばない？」

周囲を囲まれ動きを封じられる…貴様らいつの不良だ…

ちなみに以前ヴィヴィオ、すずかをナンパした不良集団であった…

「申し訳ありませんが…用事があるので…失礼します…」
ガシッ…

「そんなに冷たくしないでよ…ちょっとだけだって…」

「っ！」

いつもなら殴り飛ばすが…模擬戦のせいか力が出ない…スバルさんの砲撃受けるんじゃなかった…

「嫌がっているだろう放してやれ。」

「なんだ?このちっこいの?」

「何でもいいだろう放してやれと言っている…
飛ばすぞ…」

メイデンが凄むが大きさの違いがあり過ぎてあまり効いていない…
むしろ逆効果だ…

「なんだと?ちっこいの…お前の服から剥いでやろうか?」

「やってみろ…ただし、消すぞ…」

「メイデンさんは関係ありません!!私ならついていきますからやめてください!!」
メイデンがキレたらシャレにならん!!街が吹っ飛ぶ!!

「カナメさん!?」

「お…物分かりがいいね…じゃ…行こうか…」

「…」
どうする…力は出ないこの人数差じゃ逃げ切れないし…

「あの…嫌がってらっしゃいますし、やめてあげませんか?」
聞き覚えのある声…まさか…

「あ、お前は!!」

「あれ？あなた達はあの時の…
はぁ…まだ懲りてなかったんですか？」

「お前一人か…ならお前も！！」
「残念だったわね…私もいるわよ…」

「「「ひぃ！！」」」
最悪だ…ヴィヴィオと祐希奈か…

「私がちょっと余所見してるうちにま～たヴィヴィオに手を出す気だったみたいね…」

「祐希奈。こっちの人も被害者なんだ助けてやってくれ。」

「あれ？メイデン？なんでここに…」

「ちょっと散歩をしていてな。」

「さて…あんた達？ヴィヴィオに加えてさらに悪事を働こうとしたらしいわね…」
ゴア…銀髪の破壊神降臨…
あ～…不良集団…ドンマイ…

「「「ご慈悲を！！！」」」
土下座…以前に何があったかは知らんが…無駄だ…そんなもんで祐希奈は止まらん。

「いっぺん死んでこいやあああ！！！」
ドカ！！バキッ！！バキャッ！！シュド！！

「「「・・・」」」
ものの数秒で屍の山完成…安らかに眠れ…

「ふぅ…ヴィヴィオ何もされてない？」

「うん。ありがとう。」

「あなたは？ていうか何でメイデンと一緒なの？」

「あ、私も大丈夫です。メイデンさんと一緒なのはたまたま会ったスバルさんに連れられて向かった林で仲良くなりました。」

バレるわけにはいかない…祐希奈にバレたら…何を言いふらすか…

「ああ。この人はマスターの従妹とやらららしいぞ。」

「へえ…あいつの従妹ねえ…そういえば少し似てるかもね。」

同一人物です…

「カナン君の血縁の人か～。私、高町ヴィヴィオっていいます。カナン君のお友達をさせてもらってます。」

「あ、私は一之瀬祐希奈よ。
ちなみにあいつとは腐れ縁ね。」

「えっと…鷹月カナメです。
よろしくお願いします。高町さん、一之瀬さん。」

鷹月って誰だよ…とにかく見知らぬ鷹月さん…ありがとう…助かった。

「名字呼びあんまり好きじゃないから祐希奈でいいわ。
私もカナメって呼ぶし。」

「じゃあ、私もヴィヴィオでいいよ～。」

「わかりました。祐希奈さんにヴィヴィオさんですね。」

「呼び捨てでいいのに。」

「いえ、この呼び方が私にはしっくりくるので。」
ただ単にいつもの調子で喋りそうになるからだけどな…

「まぁ、それがいいんなら好きに呼んで。」

「はい。」

「ところでカナメちゃんは何か予定あるの？」

「あ、ちょっと家にお友達が来るのでお買い物をしようと思いまして。」
敬語って疲れる…

「丁度いいじゃない。私達も買い物に行く所だし、一緒に行きましょうよ？」

ぬぁにーーーー！！

「で、でも私がご一緒してはご迷惑では…」

「そんなことないよ。
もっとお話もしたいし、ダメかな？」

「わかりました…ありがとうございます。」

離脱失敗…

「じゃあ、行きましょっか！！」

「うん！」

「楽しそうだな。」

「…そうですね。」

カナメことカナンの人生をかけた戦いが始まりを迎えた…

カナン
「なんじゃこらあああ！！
終われよ！！模擬戦で終われよ！！激しく終われよ！！」

祐希奈
「意味がわからんことを言うな！！」

バキャッ！！

カナン
「ぐはっ！！」

ヴィヴィオ
「だ、大丈夫？」

メイデン
「カナメさんは何で見知らぬスバルさんに着いていったんだろうな

…」
ヴィヴィオ
「う～ん…着いていったって言うより連れてこられたんじゃないかな？」
祐希奈
「どうも説明が不十分ね…いきなり考えたみたいに不自然だわ…」
カナン
「気にするな！！そしてこれ以上カナメについて考えるな！！」
ヴィヴィオ
「どうして？」
祐希奈
「あんたまさかカナメのことが…」
カナン
「絶対にない！！あり得ない！！つーか無理！！」
メイデン
「カナメさんが悲しむぞ。」
カナン
「知らん！！」
ヴィヴィオ
「あはは…とりあえずこの後書きの理由は…」
祐希奈
「やっぱり予定通りは無理だったからその謝罪よ。」
一同
「すいませんでした～。」
ヴィヴィオ
「今回の話は比較的楽に書けたらしく予想より遥かに多くなってしまって、結局文字数オーバー…ということになり急遽変更になりました。」
メイデン
「こんな感じで予定が狂いっぱなしの作品だが、これからもよろし

く頼む。」
祐希奈
「メッセージ、評価、感想を書いてくれた人…主にメッセージだけど…ありがとね。」
カナン
「次回の話は…」
カナメ
「私とヴィヴィオさん、祐希奈さんとのまたまた日常生活編になりますね～。」
ヴィヴィオ・祐希奈・カナン・メイデン
「！！！！！！！！！！！！！！」
カナメ
「ではまた次回に会いましょう♪」
カナン
「何故にーーーー！？！？」

第二十話　人生をかけて

祐希奈
「魔法少女リリカルヴィヴィオ、始まるよ～♪」
ヴィヴィオ・メイデン・カナメ
「わ～い♪」
カナン
「ちょっと待てコラあああああ！！！！
特に三番目の奴！！」
カナメ
「え？私ですか？」
カナン
「お前以外に誰がいるんだよ！！」
カナメ
「祐希奈さんとヴィヴィオさんとメイデンさんですけど？」
カナン
「素で返すなボケえええええ！！！！」
祐希奈
「やかましい！！」
バキャッ！！ザザザー…
カナン
「今回の俺は引き下がらねえ！！」
タカト
「はあ！！」
ドゴオ！！
カナン
「がはっ！！ま、まだ…」
アリサ
「チェイサー！！」

ズドン！！
カナン
「うげっ！！く…そ…」
祐希奈・タカト・アリサ
「落ちろーーーー！！！」
ドゴーーン！！！
カナン
「…」
タカト
「失礼した。続けてくれ。」
アリサ
「じゃあね。バイバイ♪」
祐希奈
「お疲れ～♪」
ヴィヴィオ
「カナン君白目むいてピクピクしてるよ？」
カナメ
「いつものことですから大丈夫ですよ♪」
メイデン
「まぁ…確かにな…」
カナメ
「では、質問コーナーにいきましょうか。」
ヴィヴィオ
「うん。えーと、最初の質問は～…カナメちゃんの趣味はなんですか（笑）」
カナン
「絶対わざとだろ！！ていうか作者の友達だろ！！！」
祐希奈
「はいはい。何でキレてんだか知らないけど黙ってなさい。下僕…」
カナン

「最後の方ひどいこといいませんでしたか！？」
祐希奈
「気のせいよ♪」
メイデン
「それでカナメさんの趣味はなんなんだ？」
カナン（んなもん俺と同じ空を見るとか…）
カナメ
「そうですね…お散歩とお花さんのお世話でしょうか。」
カナン（超メルヘン！！！！）
ヴィヴィオ
「お花さんは私も好きだよ。
でも、お世話って大変じゃないの？」
カナメ
「いえ、大変なんかじゃないですよ。
毎日水をあげるとお花さんが喜んでるのがわかって、こっちまで嬉しくなります♪」
カナン（なんだこいつ！？絶対俺じゃねえよ！！）
カナメ
「風間君どうしたんですか？」
カナン
「ひいいいいいい！！！」
祐希奈
「さっきから気持ち悪いのよ！！」
シュドン！！
カナン
「がっ！！」
カナメ
「あらら。」
カナン
「お前がいることは認めよう…許す…だが…頼むから…下の名前で

呼んでくれ…（話しかけられるだけでも鳥肌ものなのに名字よび…さらに君づけなんてされたら…狂う。）」
カナメ
「わかりました。カナン君でいいですか？」
カナン
「…君は消せないか？」
カナメ
「何かいいましたか風間君。」
カナン
「いい！君づけでもいいから名字よびはやめてくれ！！」
カナメ
「はい♪」
ヴィヴィオ
「カナン君が怯えてる…」
メイデン
「祐希奈の時より凄いんじゃないか？」
祐希奈
「カナメって何者？」
カナン
「もう質問はないんだよな！？なら終わりにしよう！！」
ヴィヴィオ
「まだお知らせがあるよ。」
カナメ
「残念でしたね～。」
カナン
「く…」
メイデン
「お知らせの内容だが、今週末で人気キャラ投票が終わるぞ。」
祐希奈
「主要キャラ少ないのにやる意味あったの？」

カナメ
「少ないからこそ読者さん方がどのキャラがタイプか分かりやすいというメリットもありますよ～。」
カナン
「で？今の票数は？」
ヴィヴィオ
「メッセージの中に同じ人もいるかも知れないので現在確認中だけど、十票越えは三人以上はいそうだね。」
メイデン
「まぁ二人は確定なんだが…」
ヴィヴィオ
「えへへ。ありがとうございます。」
祐希奈
「ありがとね♪」
カナン
「後一人はもちろん俺だよな？」
カナメ
「でも、中間発表ではメイデンさんに負けてましたよね？」
メイデン
「あ～…確かに…僅差ではあったが私が勝っているな。」
カナン
「メイデン…お前の票を俺に寄越せ…」
メイデン
「無茶を言わないでくれ。」
祐希奈
「ほら、次の知らせ行くわよ。」
カナメ
「あらすじに書いてありましたように、大量修正中のため話数がおかしくなっていますが、気にしないで下さいね。」
カナン

「お、俺のセリフを…」
メイデン
「あとは前回の問題の答えだが…ソフトテニス部だ。」
祐希奈
「テニスって答えた人も正解にするから、正解者はやって欲しいことをメッセージに書いて送ってね。」
カナン
「何か俺の存在が薄い気がする…」
カナメ
「ふふ♪なんででしょうね？」
カナン
「貴様のせいだー！！！」
カナメ
「名字で呼びますよ？」
カナン
「勘弁してください！！」
メイデン
「女性問題が多いマスターだな…」ヴィヴィオ
「お知らせも終わったし、本編に移るね。」
カナメ
「今回で私の出番は一旦終わります。」
カナン
「もう出てくんな！！」
カナメ
「それは作者さん次第ですね。ちなみにこちらには出ますので。」
カナン
「なっ！」
祐希奈
「レギュラー確定だからよろしくね。」
カナン

「いやだーーー！！！」
ヴィヴィオ
「それじゃ今回はカナメちゃんに言ってもらうね。」
カナメ
「はい♪魔法少女リリカルヴィヴィオ。始まりますよ～。」
カナン
「出張道場とか…どうすんだよ…」
カナメ
「終わりですよ風間君♪」
カナン
「ひいいいいい！！」
前回離脱に失敗した俺は、ヴィヴィオ、祐希奈の二人と一緒にスーパーに行くことになり歩いていた。
しっかし…女ってのはよくここまで話題がポンポン出てくるな…
ここまで喋りっぱなしじゃないか。

「ねえねえ、カナメちゃん。」
いきなりヴィヴィオがこちらに話しかけてくる。

「な…はい？何でしょうか？」
あっぶね～…口調が戻りかけた…

「カナメちゃんから見てカナン君ってどんな男の子？」

「そ、そうですね…」
カナメちゃんから見てって俺だし…

「「「…」」」
ヴィヴィオ、祐希奈、メイデンからの熱い視線が突き刺さる…

「自分でも言っていたと思いますが、カナン君はおバカさんですね。
小さな時から不器用な男の子でしたから、たいてい最初は話した子とぶつかって喧嘩して、落ち込んで、謝って…そんなことの繰り返しでした。
ただ、おバカさんなだけあって一度約束したことは絶対に守り通してくれましたね。」
俺は自分で何言ってんだーー！！

「「「あ～…」」」
いや…あっさり納得されるのもなんかな…

「隠し事が下手でしたから、私から見てもあなた方から見てもあまり変わらないとは思いますが。」
言ってて悲しくなってくるな…

「そういえば私も最初アイツと喧嘩したわね…」

「そうなの？」

「ええ。ま、私が一方的にキレただけなんだけどね。で、ドッジボールで顔面に思い切り叩き込んだと言うわけよ。」
そのせいでドッジボールがトラウマになっちまったよ…

「痛そう…」

「ああ…マスターは昔からマスターだったんだな…」

「はは…悲惨だったよ…」

「「「え？」」」

しまった！！

「あ、いえ。そうやってカナン君が話してました。」

「良かった～。今カナメちゃんがカナン君に見えたよ。」

正解です…

「従妹にまで愚痴るなんてほんとにヘタレね…」

いや、お前がきつすぎるんだって…

「お、スーパーとはあれではないのか？」

「あ、そうですね。じゃあ私はこれで…」

「カナメちゃん。もうちょっと協力して？お願い。」

ヴィヴィオに頼まれたら断るわけにはいかないな…

「私でよろしければ…何を協力すればいいんですか？」

「今日学校の修復が終わったから、お祝いをしようと思ってるんだけど、折角のお祝いだし、嫌いなものとか出したくないのよ。

カナメなら私達よりカナンのこと知ってるかもしれないし、買い物に付き合って。」

「はぁ、なるほど、わかりました。お手伝いしますね。」

「「ありがとう。」」

「いえいえ。これくらいはお安いご用ですよ。」

ま、仕方ないか…

「荷物は私が持とう。」

「いいの？」

「ああ。アウトフレームになるからな。ちょっと待ってくれ。」

（マスター。何処にいるのかは知らないが魔力を借りるぞ。）

隣にいます…

（なんで？）

（荷物持ちをするためだ。）

（お前が持たなくてもカナメがいるんだろ？

持たせとけってああ見えて空手もやってるし）

小６までだが…

（よく私達と一緒と知っているな…）

（現代技術の進歩ってやつだ。とにかくカナメに持たせろいいな？）

（しかし、知り合ったばかりの人だぞ？悪いと思うが…）

（多分その心配はいらないと思う…）

（何故だ？）

（いや、あいつは…）

ここで念話をきる。

「メイデンさん。荷物なら私がお持ちしますよ。」
「え？いや、それは…」
「大丈夫です。私こうみえて空手やってますから。」
「だが…」
「皆さんには助けて下さったお礼もありますし。」
「別にカナメやメイデン一人で持たなくても、私達も持つわよ。」
ゆ、祐希奈が荷物を持つだとぉぉぉ！？
これが扱いの差か！？
えらい違うな！！
「そ、そうですか？ありがとうございます。」
「話も纏まったところでレッツゴー！！」
こうして四人はスーパーの中へと入って行った。
「まず、カナン君の好きな物ですが、お刺身が大好きです…というかお魚料理ははたいてい好きですね～。」
「魚か…父さんが嫌いだし…カナメほかに好きなものは？」
「ほかには…豚の角煮なんかも好きですね～。」
「なるほど～。角煮なら雅樹さんも食べられるよね？」

「そうね。父さんが嫌いなのは魚類だけだし、あとは大丈夫なはずよ。」

「では、角煮とやらは決定だな。」

「カナメちゃん。嫌いなものは?野菜類は嫌いなんだよね?」

「いえ、温野菜はダメですが、炒め物などは普通に食べていましたよ。」

なんでか生は食べられないんだよな~…

キュウリは何をしようが食いたくないが…あれは人類の敵だ…

「盲点ね…野菜類全般ダメかと思ってたわ…」

「カナメちゃんってよく見てるね~。」

本人ですから。とは間違っても言えない…

「従妹という関係のせいか、聞いたらすぐに答えてくれました。」

「随分カナメには素直なのね…」

「カナメちゃんいいなぁ…」

「何がですか?」

「だってすぐにカナンの好きな物や嫌いな物調べられるしさ…」

「カナン君って聞いてもうまいよとしか言ってくれないからわかんないんだもん…」

いや、ほんとにうまいからうまいとしか答えてないんだが…俺のた

めにフォローを入れるか。いや～便利便利♪

「カナン君は美味しい時しか美味しいとは言いませんよ。我慢して食べてる時は表情がなくなるはずです。」

「じゃあ、私達の料理は…」

「本当に美味しいということです。」

「良かった～。」

「それにしてもこんなにカナンのことを知ってるのによく今まで私達と会わなかったわね…」

「それは…メールで確認してから家に行っていましたから。私、人見知りするので…」

「そうか。だから最初にスバルさんに連れられて来た時は怯えていたんだな？」

おお！メイデンナイスだ！

「じ、実は…そうなんです。」

「でも、これからは大丈夫よね。」

「一緒に遊ぼうよ。」

「え？でも…」

無理だな…少なくとも俺がいる間は。

「なんなら私の家に泊まりに来る？」

「あ、いいかも。カナメちゃんまた今度来てよ。」

「カナン君がいないならいいですよ。」

「何故マスターがいるとダメなんだ？」

同じ人だからだ…

「その…夜とか怖いので…」自分で変態って言ってるみたいで嫌だな…

「カナメが嫌なら別に呼ばないけど、カナンの家に泊まったこととかはないの？」

「はい…」

「ま、女三人でのお喋りも楽しいだろうし、待ってるわね。」

「その時は私も行くぞ。」

「あはは。カナン君は英治さんと二人だけになっちゃうね。」

「大丈夫でしょ。メイデンが来る前まではずっと二人だけだったわけだし。」

「そうですね。」

今から考えると静か過ぎて不気味だ…

「カナメちゃんのパジャマ楽しみだなぁ♪」

「えっと、私、あんまり可愛いパジャマが無くて…」
男だからな。

「じゃあ、私のパジャマあげるよ。」

「私のもいいわよ。」

「いいんですか？」

「うん。フェイトママにたくさん買ってもらったから気に入るのもあると思うよ？」
スーパー親バカだからな…

「私もヴィヴィオほどは無いけど、結構あるしね。」

「ありがとうございます。」
この服といいパジャマといい保管場所に迷うのだが…

「さて…夕食のメニューも決まったし、帰ろっか。」
買い物袋一杯の材料…一人一袋ずつ持っている。

「はい。」
これで地獄も終わりだな…

「私の家の道ちゃんと覚えといてね？
あ、泊まりに来るのはいつでもいいから。」

「わかりました。」
まぁ、たまにならいいか…我慢しよう…

「私も誘ってくれるか？」
「大丈夫ですよ。行く時に私が誘って行きますから。」
「助かる。」
「いえいえ。」
そうしてしばらく歩く
「ねね。カナちゃん。」
「カナちゃん…私ですか？」
「ダメかな？」
「ふふ…いえ、大丈夫ですよ。ありがとうございます。」
カナちゃんねえ…
「カナメ、二文字あだ名二人目おめでとう。」
「はい？」
「ヴィヴィオがあだ名…って言っていいのかはわからないけど、それで呼ばれたのはまだ二人目よ？」
光栄…なのか？
「何か理由でもあるのですか？」
「う～ん…なんとなくこの子ならいいかなって思ったからかな？」

いや、聞かれても…
ヴィヴィオはよくわからん…

「仲良くなれたってことよ。
そろそろね…あれが私の家にだから。」
わかってるけどな…

「あ、はい。わかりました。
では、私はそろそろ…」
荷物を渡し、いよいよお別れ…

「お別れだね。」

「また今度ね。」

「また…な。」

「はい。また今度…です。」
すぐに会うんだが…まぁいいか…
背を向け、歩こうとした瞬間、四人の足元に魔方陣が発生する。

「え!?強制転送!?」

(やぁ諸君…これから君達を逃げ場なしのへと案内しよう…相手は私の作品だけどね…なかなか強いと思うよ?勝てるかな?)
スカリエッティ!?

「ちょっと待ちなさい!!民間人も巻き込んでるじゃない!!」

(おや…いつも一緒にいるから間違えてしまったのかな…

まぁいい…頑張ってくれたまえ。）
うぉい！！俺にこのままで戦えってか！？ふざけんなカス野郎！！
シュン…
ついたのは周囲を囲まれた暗い洞窟のようなところ…目の前には大きな何かがいた…

「カナメさん、あなたは私達が守る…だから、戦闘に巻き込まれないように離れていてくれ…」
こうなりゃやけくそだ…
最悪、俺の人生が終わるだけだ…何もしないよりはいい…

「皆さん…隠していましたが、私は嘱託魔導師です。
「「「ええ！！？？」」」

「ただ…デバイスは簡易デバイス…しかも、ついこの前壊れました…」
かなり無理やりな設定だなと自分でも思う…

「援護だけでも充分役立つわ。
お願い出来る？」
なんと、祐希奈は信じてくれている。

「でも、もし狙われたりしたら逃げてね？」
当然のごとくヴィヴィオも信じている…

「いえ…私も前線に出ます…メイデンさんはユニゾンデバイスですよね？」

「よくわかったな…」
そりゃ俺の融合機だからな。

「アウトフレームと聞いてわかりました。
六課のリィンフォースさんが有名ですから。」

「な、なるほど…」
よし…あとは…

「メイデンさん…私に力を貸して下さい…お願いします。」

「…接近戦は出来るのか？」

「はい！自信も実績もあります！」

「わかった…信じよう…」

「ありがとうございます。」

「行くぞ！」

「はい。メイデン！！セットアップ！！」

「了解だ。」
デバイスイメージを再構築…
銀の鎧に、白のロングスカート、頭を守る為…というよりカツラが取れないように額から後頭部にかけての兜を装着…

「わぁ…カナちゃん綺麗…」

「話は後よ…カナメ…遅れないでね…」

「はい…頑張ります。」

洞窟に響くのは水滴の音…そして、機械音…

「く…」

「体が重い…」

「ＡＭＦ…ですね。」

となると相手はガジェットか？

ガシャン…ガシャン…

洞窟に機械音がこだまする…

「な…何あれ…」

出てきたのは巨大な機械…一型と三型と四型を合わせたような…蜘蛛のようなアーム…触手のような細いアームと太いアーム…

「戦闘機人…ですよね…」

アームの装着されているところは、上半身だけの戦闘機人…ウーノ…

「ひどい…可哀想だよ…」

（どうだい？' スポンサー' がいなくなってしまってね…修理も出来なくなってしまったから、ガジェット達と合体してみたんだが…）

「最低…ですね…」

（まぁ、精々足掻いてくれたまえ。

逃げ道なんてものはないから、どの道君達は死ぬんだけどね。）

ブツ…

「まだ外にはカナン君もいるし、大丈夫だよね？」
残念ながら隣にいるんだ…

「とにかく…アレをなんとかしないとね…」

「三人とも聞け、今、奴の体を調べてみたが…今回のＡＭＦは発生源となる装置がある…」

「それを壊せればＡＭＦをなくせるのね？」

「ただし、場所が分からない…探すためにはあの大量の触手を回避しながら探さなければならない…」

「回避なら私だね。じゃあ…」

「表面にあるかもわからない…内部かもしれないんだ…魔力を結合しづらいヴィヴィオでは破壊に時間がかかる…
カナメさん…回避は得意か？」

「はい。得意分野です。」
本当はぶっ飛ばす方が得意分野だけどな…

「ちょっと何でカナメなの！？私が行くわよ！」

「祐希奈は回避は苦手だろう？
それに二人には役目もあるんだ。」

「「役目？」」

「ああ…散れ！！」

「「「っ！！」」」

シュドドド！！

ミサイルの雨が先程いたところに降り注ぐ…

作戦会議ぐらいさせろよな…

「メ…デ…！！…戦…？」

念話妨害があるため、ヴィヴィオが叫ぶが聞こえにくい…

「…」

ジェスチャーで構えて待ってろと伝えてみた。

「…」

○…よし。伝わった。

「メイデンさん。私はどうすれば！？」

戦闘中敬語ってさらに疲れるな…

「相手を適当に斬り飛ばしてくれ！

発生源をサーチで調べる！！」

「わかりました！参ります！！」

ダッ！！

突っ込むとあっという間に細いアームが迫る。

「剣舞…初の舞…」

適当あるのみ！！

「閃花！」

前宙…逆さまになりながら足元にきたアームを切り払う…
そのまま横に体をひねり側面を切り払う…
二本の太いアームが正面から来る…

「終演…」
ギィン…
アームのうちの一本を剣で受け止め斬り揉み回転。
上空へ…

「はあああ！！」
二筋の閃光が疾り、切り落とされる…
適当でもやれば出来るもんだな～…

「わぁ…カナちゃん強～い…」

「踊るみたいに戦うわね…」
ジェスチャーの意味を理解した二人は、デバイスを構え、遠距離攻撃の準備をしていた。

「がああああ！！」
斬り飛ばしたはずのアームは、一瞬で復活…

「感情が消されてますね…」

「むごいな…元部下でも遠慮なしか…」

「助けて見せます…」
あんな奴の為に命を捧げさせるわけにはいかない…

「そうか…来るぞ！！」

「大丈夫です…剣舞…次の舞…」
さて…どんなんにするかな…

「烈花…」
一度納刀し腰を落とす…

「あああああ！！」
踏み潰すため、凄まじいスピードで突撃してくる…
蜘蛛のようなアームがあげられ、重心が移動した瞬間を狙い抜刀…
全力で投げつける！
アームを突き抜け、戦闘機人の少し下の部分に突き刺さる。

「があ！？」
バランスを崩し倒れ込む…

「終わりです！！」
剣の柄を踏み台に跳躍…上空で剣を呼び寄せ落下の勢いを利用して刺突を叩き込んだ！
刺突は、アームを突き抜け、地面まで貫通…大量の機械の部品を巻き上げながら、崩れ落ちた…

「がああああ！！」

「あった！！腹の下…あの宝石だ！！」
よし…あとはぶち抜くのみ！！

「ヴィヴィオさん！！祐希奈さん！！」
だーもう敬語って叫びづらいな！！

「「了解！！」」
返事を確認したのち、離脱…

「「うあああああ！！！」」
二人はカートリッジを六発全て使い、一時的に大魔力を放出…ＡＭＦをはねのける。

「「フルドライブ！！」」
おいおい…容赦ねえな…

「メイデンさんユニゾンお願い出来ますか？」
「しかし…」

「大丈夫です。私を信じて下さい。」

「わかった…無理だと思ったら強制解除をするぞ？」

「わかりました！」

「「ユニゾン！！イン！！」」
金髪金眼の最初で最後の女装ユニゾンになると信じたい…（カツラも）

「バレル展開！！」
「灰塵とかせ！！」

「エクセリオン！！」
「インフェルノ！！」

「「バスター！！！！」」

超高熱を纏う矢を囲むように四つの砲撃が包み込む…

「ぐうあああ！！」

合体ウーノは、前面にＡＭＦを集中させ防いでいる…動きが止まった今がチャンス！！

ラストの適当思い付き技奥義！！

「剣舞…参の舞！水仙花！！」

洞窟の水を集め、下方から合体ウーノを吹き上げる。

「うごっ！！」

巨体が浮いた…

「終演剣舞…雪月花！！」

浮いたまま合体ウーノは凍り漬けになり、巨大な氷柱が出来た…

「砕！！」

ガシャーン…

合体ウーノの下半身を潰し、ＡＭＦを解除…

いや～適当って素晴らしい。

何でもやれば出来るって本当だな。

「カナちゃんすごーい！！強いんだねー！！」

すぐさまヴィヴィオが近づいてくる…

「あ、まだ凍ってますから危な…」

ズベ…ベチン！！

「あう！！」

あ～あ…さすがヴィヴィオ…期待は裏切らないな。
「ヴィヴィオさん…大丈夫ですか？」

「いたた…」

「ほら、早く起きなさい。」
祐希奈が手を差し出し、ヴィヴィオを起こす。

「ありがとう。」

「ん。それにしてもホントにカナメ強いわね…カナンに勝てるかもしれないわよ？」
いや、同一人物だから無理だと思う…

「はは。残念ながらメイデンさんの持ち主のカナン君には勝てませんよ。」
こっちは戦いづらいしな…技とか思い付きだし…

「でも、その実力で簡易デバイスなんて勿体無いよ。私がシャーリーさんに頼んでちゃんとしたデバイス作ってもらおうか？」

「いえ、さすがにご迷惑になりますし、遠慮しておきますよ。
あまり出撃もしないので、デバイスさんも可哀想です。」
使えないだろうだしな…

「アームドデバイスならそんなこと考えないわよ？」

「あ…そうだね。頼んでみよっか。」

「け、結構ですよ！」

作ってもらってどうしろと!?

「ま、その話は置いといて…座標を調べなきゃね…」

「あの方に聞きましょう。」

「でも…教えてくれるかな?」

「それは私達の頑張り次第です。」

「そうね…ねえ。起きてる?」

上半身だけとなったウーノは目を開けた…

「やはり寄せ集めの体では勝てませんでしたか…」

感情は戻ってるみたいだな…好都合だ。

「あなたは実験材料として使われたのですか?」

「…そうなります。体の損傷が激しく、修理も不可能なために…」

「管理局に協力してくれれば、修理もします。協力してくれませんか?」

「…」

「今、拘置所にあなたの妹の新しいナンバーズ達もいるんだけど、どうにも教育が難しくてね~。

あなたがそっちにも協力してくれれば助かるんだけど…」

「妹達…あの子達には悪いことをしました…」

こいつ…根っからの悪人ってわけじゃなさそうだな…

「私達はあなた達を助けたいんだ…」

「スカリエッティなんかにもう従わなくていいんだよ?」

「ほかの妹さん達もきっと迎えてくれますよ…
どうでしょうか?」

「…いいのですか?私はまたあなた方の敵として裏切るかもしれませんよ?
情報をドクターに渡すことも出来ます…」

「あなたを失うよりはマシですよ。
消えていい命なんてないんです…」
これは本心から言った。

「…負けました。協力しましょう。」

「ありがとうございます。」

「話せば伝わるものね~。」

「じゃあ、ウーノさん?座標を教えてもらえるかな?」

「わかりました。」

「座標入力終了…海鳴市へ…」
シュン…
「八神部隊長、お願いしますね。」

ウーノの身柄を八神部隊長に渡す。

「わかったけど…大変やったね。」

「まぁ、カナメがいなかったらちょっとまずかったかもね。」

「はは…そんな…」

「ん～…この近辺の魔導師は全て把握してるつもりやったんやけどなぁ～…」

「私は最近来たばかりなので仕方ないですよ。」

我ながら凄まじい処理速度になったな…

「まぁ、これからもヴィヴィオや祐希奈達と仲良くしたってえな。」

「はい。」

「では、八神部隊長失礼します。」

「はやてさんバイバイ。」

「失礼します。」

「またきいやー。」

その後またまたお別れの時…

「今度こそ、さよならです。」

「巻き込んじゃってごめんね。」

「協力してくれてありがとう。」

「いえ、また会いましょう。」

「またねー。」

「バイバイ。」

「…」

ユニゾンした時のあの感じ…マスターと似ていたのだが…まさかな…

「さて…夕飯準備できなかったわね…」

「雅樹さんが何か作っちゃったかな…」

「とりあえず私は、マスターと英治さんを呼んでくる。」

「よろしくね。」

「ああ。」

「帰ろっか。」

「そうね。最悪またやればいいだけの話だし。」

「うん。」

こうして二人は帰路についた…

一方カナンは…

「疲れた果てしなく疲れた…でも、人生は守りきったぞ。」
家で着替えながら妙な達成感に浸っていましたとさ。
カナン
「俺の出番がああああ！！！」
カナメ
「うるさいですよ。風間君♪」
カナン
「その呼び方やめてーーー！！」
祐希奈
「じゃあ黙って～♪」
バキッ！！
カナン
「がはっ！」
ヴィヴィオ
「今回の戦闘はカナン君で書くつもりだったものを、急遽カナメちゃんに変更したんだって」
カナメ
「光栄ですね。」
カナン
「え…つまり俺の見せ場は…」
メイデン
「しばらくないということになるな。」
カナン
「…」
祐希奈
「いい気味ね♪」
ヴィヴィオ
「カナン君次からはまた出番もあるし頑張って。」
カナン
「ああ…」

カナメ
「さて次回は、パーティーそして現在は7月…」
祐希奈
「初めてしったんだけど…」
カナメ
「初めていいましたからね。7月といえば夏、夏休み前に体育祭を開きます。」
ヴィヴィオ
「作者の学校と同じ設定だね…」
メイデン
「原作では学校編なんて見ていないから勝手に作者の学校に合わせたそうだ。」
カナン
「いいのか?」
カナメ
「気にしないでおきましょう。ではまた次回に。」
一同
「さようなら♪」

第二十一話　苦労人

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

祐希奈
「はい。ようやく更新することが出来ました。コメディィが大好きなダメ作者ヨシュアが書くリリカルヴィヴィオ、主役の祐希奈です♪」

ヴィヴィオ
「わぁ～祐希ちゃん主役になったんだね。おめでとう。」

メイデン
「祐希奈、おめでとう。」

カナメ
「おめでとうございます～。」

祐希奈
「ありがとうありがとう～♪」

カナン
「ちっがーーーう！！！」

祐希奈
「うるさいのが来たわね…消えればいいのに…」

カナン
「いきなりきつい一言どうも…」

メイデン
「それで何が違うんだ？」

カナン
「この話の主人公は三人の中の誰かであって、断じて祐希奈に決定したわけではない…」

祐希奈
「ちっ…余計なことを…」

カナン
「お前口悪すぎ…」

祐希奈
「余計なお世話よ！！」
バキャ！！
カナン
「ふ…」
カナメ
「毎回お馴染みの見事な蹴りですね～♪」祐希奈
「ありがと♪」
ヴィヴィオ
「カナン君の立場は変わらないね…」
メイデン
「たまに格好いいこともあるんだがな…」
ヴィヴィオ
「本質はやっぱりこっちなのかな？」
カナメ
「ですね。」
カナン
「お前…仮にも自分だろ…助けろよ…」
カナメ
「何のことだかさっぱりです♪」
カナン
「こいつ…」
祐希奈
「カナメに八つ当たりするなんて最低ね…」
カナメ
「最低ですね♪」
カナン
（てめえ…次に女装した時に覚えとけよ…）
カナメ
（それは怖いですね…ただ…あなたも道連れですよ…）

カナン
「ははははは…」
カナメ
「ふふふふ…」
ゴオオオオオ…
ヴィヴィオ
「ふ、二人の間にダイヤモンドダストが！！」
メイデン
「な、何があったんだ！？」
祐希奈
「さぁ？あ、そろそろ次に行かないと…集計の結果が出たわ。」
カナン
「どうなったんだ？」
カナメ
「楽しみですね♪」メイデン
「わくわく。」
ヴィヴィオ
「では、発表て～す♪」

一位…高町ヴィヴィオ…１４票
ヴィヴィオ
「わ～い♪皆さんありがとうございます♪」
祐希奈
「まぁ妥当ね。最初からぶっちぎりトップだったし。」
カナン
「人気の理由は、優しい性格、ナイーブな一面、そして…魔王モード…」
ヴィヴィオ
「う…最後はいらないかも…」
祐希奈

「まぁ仕方ないわよ♪じゃ、続きよ♪」

二位…一之瀬祐希奈…１３票

祐希奈
「ありがとね♪」

カナメ
「結構な接戦だったんですね。」

カナン
「後半から伸び始めたからな。一時はヴィヴィオを抜いていたんだ…」

メイデン
「祐希奈の人気の理由は、やはりマスターいじりだそうだ。あとは戦闘方法が格好いいなどだ。」

祐希奈
「やっぱり戦闘は突撃に限るわよね♪
細かい頭脳戦なんてやってらんないわよ。」カナン
「凄まじい考えだな…続いては…」

三位…メイデン…１１票

メイデン
「わ、私か！？とにかく…ありがとう。嬉しいぞ。」

カナン
「あ～やっぱりな…ユニゾンデバイスとして出てきてから無茶苦茶伸びたからな…」

カナメ
「ご自分のデバイスに負けた気分はどうですか♪」

カナン
「まぁメイデンならまだいい…」

娘だからな。
ヴィヴィオ
「人気の理由は、やっぱりあの恥ずかしがり方と…キレたメイデンだそうです。」メイデン
「今更だが人気の理由などいつ聞いた？」
祐希奈
「主に学校の友達よ♪
だから、読者によっては全然違う人もいるかもね。」
メイデン
「そうか…理由については聞かなかったことにしよう…」
カナメ
「いいじゃないですか♪可愛いって言ってもらえてるんですから。」
メイデン
「わ、私は！！」
カナン
「可愛くないとかいう言い分なら却下な。」
ヴィヴィオ
「だって可愛いもん。」メイデン
「うぅ…マスターとヴィヴィオがいじめる…」
祐希奈
「はいはい。次よ次！」

四位…風間カナン…９票

カナン
「まぁそんな気はしてたが…」
カナメ
「あと一票で二桁でしたね。
やはり最後の踏ん張りが足りない情けない男ということでしょうか？」

カナン
「…そうだな～♪」
カナメ
「ですよね～♪」
ゴオオオオオ！
ヴィヴィオ
「またダイヤモンドダストが！！」
メイデン
「一体あの二人の間には何があるんだ！？」
祐希奈
「気にしてても仕方ないわね…理由は何なの？」
ヴィヴィオ
「カナンは吹き飛んでこそ意義がある！！…だって～。」
カナン
「…それ以外は？」
ヴィヴィオ
「…」
メイデン
「ないな…」
祐希奈
「なんせ作者の友達だからね～。」
カナン
「ふ…いいさ…俺なんて…俺なんて…」
カナメ
「おバカさんは放っておいて次に行きましょう。」カナン
「何だこいつ…スッゲームカつく…」

五位…鷹月カナメ…7票

カナメ

「ありがとうございます♪」
カナン
「マジで！？」
祐希奈
「凄いわね…たった二話の出演で五位なんて…」
ヴィヴィオ
「カナちゃんは純粋に読者だけから票を集めました～。」
メイデン
「理由は書いてなかったからわからないんだが…とにかく可愛いやマスターよりカナメさんを本編キャラにすれば良かったのでは？などなど…」カナン
「ひどっ！！俺の存在って…」
カナメ
「カナン君、人生山あり谷ありですよ。」
カナン
「お前のせいでさらに増えたんじゃねえか！！」
祐希奈
「あんたカナメにあたり過ぎよ。」
カナン
「…理不尽だ。」
カナメ
「これからもよろしくお願いしますね♪」
ヴィヴィオ
「あとは一気に発表するね。」

六位…橘美鈴…６票、七位…白河神楽…３票、八位アシェル…１票、八位、フェアリー…１票。

ヴィヴィオ
「となりました。デバイスにまで入れて下さりありがとうございま

す。」
祐希奈
「ただ単にキャラが少なかったから入っただけよ…」
カナン
「ぶったぎるなよ…」
カナメ
「同じ人でもアリにすると、いくらか変わりますが、時間もないので、リクエストがあれば書くとのことです。」
ヴィヴィオ
「計６５票のたくさんの応募…でいいのかな…とにかくありがとうございます。」
祐希奈
「じゃ本編にうつるわね。」
カナメ
「お楽しみください。」
メイデン
「ちなみに最初は面白く書けた自信はないそうだ…」
カナン
「今回の話は、パーティー…だけで文字数オーバー…一話あたり一万文字って少ないよな…」
ヴィヴィオ
「ちなみに今回更新が遅れたのは、昨日に投稿しようとしたんだけどきつい練習に作者が力尽きたせいです。
申し訳ありません。」
カナン
「じゃあ、魔法少女リリカルヴィヴィオ始まるぜ。」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

カナメさんと別れたあと私はマスターと英治さんを呼びに一旦ヴィヴィオ達と別れていた。

「マスター、英治さん。いるのか～？」
何故か暗闇に包まれている家に私の声が響く。

「・・・」
返事は来ない…

「おかしいな…寝ているのか？」
とりあえず部屋に向かうか…
二階へと上り、マスターの部屋に入ると…

「…」天井に向かって拳を突き上げるマスターがいた。
やりとげたぜ…という顔をしている…何故だ？

「ま、マスター？」

「おう…メイデンか…」

「何をしているんだ？」

「人生を…人生を守りきったんだ…」

「そ、そうか…何があったのか聞いても良いか？」

「すまん…ちょっと言えない…」

「まぁ、言いたくないのなら良いが…英治さんを探しているんだが、何処にいるのか知らないか？」
「さぁ？家に帰った時にはいなかったと思うぞ？」

というかこの状態のマスターがちゃんと周りを確認していたのかかなり信用に欠けるが…

「なら仕方ないな…マスター、祐希奈の家に行くぞ。」

「お祝い会があるんだったな。
ちょっと待っててくれ、すぐに行くから。」

「…何故お祝い会だと知っているんだ?
まだマスターには言っていなかったと思うが…」
しまった!俺は一緒にいなかったんだ!

「あ~カナメに連絡をもらってな。」

「今の間が気になるんだが…」

「ね、寝ぼけてたんだ。ほら、さっき変なことしてただろ?」

「ああ、そうだな…疑ってすまなかった。
てっきりカナメさんがマスターなのかと思ったぞ。」
大当たり~。景品はありませ~ん…

「…俺にそんな趣味があるわけないだろ…ははは…」

「まったく…カナメさんも先に言ってしまっては意味がないではないか…」

「俺には内緒だったのか?」
「内緒…というほどではないがな。」

「なら許してやれ。知らなかったんだろ。」

「許すもなにも、別に怒ってなどいない。」

「ならもうこの話はいいだろ。行くぞ?」

「ああ。」

ふう…何とかやり過ごしたか…
普段はヴィヴィオにも負けないくらい天然のクセに…
何でこういうのは鋭いんだよ…
これからもメイデンには気をつけないとな…
家の戸締りをして、祐希奈の家へと向かう。

「ところでマスター。模擬戦の後どこに行っていたんだ?」

「家に帰った後、テレビとか見て時間潰してただけだぞ?」

「はぁ…私達が危険な目にあってる時にマスターはテレビを見ていたのか…」

「あ~悪かったって…怪我とかしてないか?」

「ああ。カナメさんが頑張ってくれたからな。
なかなかの剣技だったぞ。」
あんな適当技でなかなかなのか…

「しっかし、カナメが嘱託魔導師とはな~。」我ながら無理やりな設定だったな…

「私達も驚いたぞ。
あれだけの腕だ、足手まといにはならないだろうし、嘱託魔導士だというのなら、協力をしてもらえばどうだ？」
無理…どっかのアニメみたいに分身の術とか使えないし…

「多分難しいんじゃないか？
デバイス壊れたらしいし、担当が違うだろ。」

「そうか…かなりの戦力になると思ったのだが…」
片方消えるから変わらないって…
空間突破が使えない分、むしろ弱くなるな。

「あんまり戦闘に巻き込むのもダメだろ？」

「確かに…ん？何かいい香りがしないか？」

「ああ。」

「あ、カナン君、メイデン。こっちだよ～。」

「ヴィヴィオ？何で外に…」

「やっときたわね。遅いわよ。」

「悪い。で、何でお前らが外にいるんだ？」

「えと…戦闘の話は聞いたかな？」

「カナメから聞いたけど？」

「強制転移されたんだけど、びっくりして念話も使わずに叫んだのよ。」

「それでね？騒ぎに気づいた雅樹さんが出てきたんだけど…私達は転移した後で、食材だけ玄関の前に落ちてたんだ。」

「食材を見ると野菜とお肉がたくさん入ってたから、学校再建のお祝いと確信した父さんは、英治さんを呼んで、勝手に食材を調理して外でバーベキューにしちゃったわけ。
これが私達が外にいる理由よ。」

「はぁ…長々と説明ありがとな。」あの後そんな動きがあったのか…

「バーベキューとは何だ？」
いつものようにメイデンが聞いてくる。

「串に野菜や肉を刺して焼いて食べるんだ。
うまいぞ～？」

「そうなのか？」

「まぁ大抵の人は好きね。」

「うん。私もお肉はそんなに食べないんだけど、美味しいと思うよ。」

「三人共～そろそろ来ないと焦げてしまうよ？」
雅樹さんが呼んでいる。

「焦げたお肉は全部カナンにあげるからね♪」

「いらん！！」

「ほら、二人とも早く行こうよ～。」

「そうだな。」

「はいはい。」

三人で向かう。

「もぐもぐ…バーベキューとやらは私は好きになれそうだ♪」

庭に行くと既にメイデンがつまようじに肉と野菜を刺して食べていた…

「「速！！」」

「あ、ふぁふぁん、ふぁっとふぃふぁんふぁふぇ。（カナン、やっと来たんだね。）」

「ふぃふぁふぃ（久し）…んぐ。ぶりだね。」ちなみに今のは前者はスバルさん、後者はエリオ…

何故だ…何故この二人が…

というかスバルさん…あなた女性なんだから、もうちょっと行儀よく食おうぜ…

「カナン…私が見てない間にヴィヴィオに変なことしてないよね？」

その声は…

「ご、ご機嫌様です…フェイトさん…」

「あんまりご機嫌じゃなかったりしてね♪」

「いや～冗談きついっすよ～。はっはっは。」

「ふふ。冗談じゃないよ♪」

「すんません！！！！」

「にゃはは。大丈夫だよ。フェイトちゃん今日は怒ってないし。」

なのはさん…先に言って欲しかった…

「仮にも男でしょ？

ちょっとは抵抗しなさいよね。」

「ティアナさん…男でもわざわざ命の危険を犯してまで抵抗する勇気はありません…

回避出来る時は全力で回避します…」

「なっさけねえなあ～。当たって砕けろって言うじゃねえか。」

「ヴィータさん…今は砕ける時期ではないっす…」

「それでも剣を持つ物か！？剣に誓った誇りはどうした！！」

「シグナムさん…いきなり出てきてキレないでください…

ていうか、そんな誓いした覚えは全くないっす。」

「カナン君…なんかボロボロに言われてるね。」

「キャロさん…これが俺のポジションっすから…」

「これだけ言われてよく我慢できるね。」

次はギンガさんか…

「何回も言いますけど、慣れてますから…」

「リンチにされて怪我したら私に言ってね？」

「シャマルさん…リンチは確定なんすね…」

「おお～よう六課全員覚えてたなぁ。」

「個性的っすからね。」

「まぁ確かにこれだけの目立つ部隊も少ないだろうがな。」
青い犬が喋ってる…

「すげえ…犬が喋ってる…」

「何！？俺の名前を知らないのか！？」

「…ポチ？」

「ワン♪…ちっがーう！！守護獣ザフィーラだ！！」

「変な名前だな…ポチでいいだろ？」

「良くない！！」

「まぁ、ポチはほっといてだ…」

「貴様ぁぁぁ！！！」

ガリガリ…

「何で六課のメンバーが全員いるんすか？」

「カナン？痛ないんか？血が…」

ポチことザフィーラに噛まれて頭から血が流れているにもかかわらず、カナンは平然と会話を続ける。

「痛い痛くないで言ったらそりゃ痛いっすけど、死にはしないんでどうでもいいっす。」死にさえしなければ血が流れていようが無視するというカナンに、六課一同は多少距離をとる…つまり、ひいている。

「そ、そうかぁ…集まったのは皆に伝えることがあることと、雅樹さん達にも関係のあることやからや。

バーベキューに参加してるのはたまたまや。」

本当にたまたまなんだろうか…買った覚えのない肉まである気がするが…

「私達にもですか？それは一体どういう…」

「それは今からお話します。その前に…スバル…いい加減に食べるのやめや…」

「ふぇ？」

今までずっと食べていたのだろうか…スバルさんの横の皿には山程の串、串、串…よくあれだけ食えるな…

「んぐ…はい。すいませんでした…」

恥ずかしさからか、少し赤くなるスバルさん。

「「バカスバル…」」

「今ティアともう一人いたよね！？」

「気のせいよ♪」

祐希奈…お前か…

「ほら、お話が進まないでしょ。静かにしようね？」

「「は～い。」」

「ほんなら…前回、そして今回の事件で私ら海鳴にいることは危険と判断した…六課は、なるべく早くこの海鳴市を出ようと思う。」

「ヴィヴィオと祐希奈と俺もっすか？」

「そうや…むしろ、この三人は絶対出てかなあかん…スカリエッティの狙いはあんたら三人なんやから…」

「でも、学校が…」

「ヴィヴィオは学校の人達を危険にさらしたくはないよね？」

「うん…」

「そういうことなので、事件が解決するまで、私達にお子さんを預けて欲しいのです…もちろん、全力で守ります。」

「私は祐希奈の意思に任せますよ。」

「僕も同じ気持ちです。」

「すぐに帰ってくるから。」

「ちょっとした旅行くらいのつもりで待っててくれ。」

二人とも笑顔で頷いてくれた。

「ただ…」

「なんでしょうか？」

「もうすぐで体育祭なんです…それまでは待っていただけませんか？思い出作りくらいはさせてあげたいのです。」

「雅樹さん…」

「…条件付きですが構いませんか？」

「はい。無理を言ってすいません。」

「いえ、先に無理を言っているのはこちらですから。条件というのは、校舎に六課のメンバー全員を監視につけたいのです。いいでしょうか？」

「それだけでいいのですか？」

「はい。充分です。」

「分かりました。ありがとうございます。」

「ふぅ…よっしゃ！話は終わりや！ここからは騒ぐで～！！」

「八神部隊長、あんまり騒ぐとご近所に迷惑が…」

「ヴィヴィオは心配性やなぁ。大丈夫や。了承済みやから♪」

「いつの間に…」

さすがは六課の部隊長…ぬかりないな…

「では、最初のイベントはぁ～…じゃ～ん♪」

祐希奈が何やら紙芝居を取り出した…

「なんだ？カナンの恥ずかしい話ベスト１００００選…ちょっと待てやコラアアアア！！！」

「大丈夫♪最初は優しいのから言ってあげるから♪」

「優しい優しくないの問題じゃねえ！！人権無視だっつーの！！」

「「「リングバインド！！」」」

なのはさん、フェイトさん、はやてさんの三人からバインドがかけられる。

「へ？ちょっと？お三方？」

「にゃはは。面白そうだね♪派手に言っちゃお～♪」

「カナンの過去がどんなもんか見せてもらおか～♪」

「クスクス…楽しみだね♪」

「黒い！！あんた達黒すぎ！！」

「「「ふふふふ…」」」

「いや、ほんとに…これ、警察問題っすよ？」

「バレなきゃ大丈夫だよ♪」

「そうや♪」

「バラしたりしたら…どうなるか分かるよね？」

「三番目の方は完全に脅しになってますけど！！！」

「それじゃあ一枚目はぁ～♪」

「マジでやるの！？ヴィヴィオ！！」

「ごめん…止められないよ…」

「のおおおおう！！」

「実は…カナンは今でも自転車に乗れません…」

「「「「ええええええ！！！！」」」」

「何バラしてんだてめえはあああああ！！！」

「カナン…自転車に乗れないなんて人生の汚点だよ？」

「なのはさん…何気にきついこと言いますね…」

「私でも、四歳のころにはのれたで？」

「さらに追い討ちをかけますか…」

「ふ…」

「一番その反応が傷つきます！！」

「カナン君、私も乗れないから大丈夫だよ。」

「いや、フォローになってねえし…ヴィヴィオは自転車すら知らないんじゃないか？」

「・・・カナン君、ファイト！！」

「やっぱりかい！！！」

「何で自転車くらい乗れないのか不思議でしょうがないわね♪」

「別にあんなもんに頼らなくても足があるんだから走ればいいだろ…」

「でた。自転車に乗れない人間の典型的な言い訳。情けないわね～♪」

「うるせえよ！！！！」

「二枚目～♪」

「まだやるのか！？」

「もちよ♪その為に前に画用紙を買い込んだんだからね♪」

「あれか…この為の画用紙だったのか…」
デートの時に気付いてさえいれば…くそ！！

「二枚目は～…実はカナンはジェットコースターが苦手で乗ると泣きます♪」

「「「えええええええ！！！」」」

「どこら辺が優しいんだコラアアアア！！！！」

「カナン…それはダメだよ…デートには欠かせないスポットなのに…」

「スバルさん…わかっていてもダメな物はあるんです…」

「ていうか…それでよく空戦出来るわね…」

「いや、あれは飛べるってことがわかってますし、コースも自分で決められますから…」

「男として問題だね。」

「ギンガさん…最近黒くないっすか？」

「大丈夫。ジェットコースターが何かは分かんないけど私も泣いち

やうと思うし。」

「だからな?ヴィヴィオのはフォローになってないんだって…何処にジェットコースター乗って二人で泣いてる男女がいるんだよ…」

「私とカナン君?」

「わかった…ヴィヴィオが天然なのはよ~くわかっているつもりだ…だがあえて言おう…
普通に奇異の目で見られるっつーの!!」

「うるさい!!」
バキャ!!

「ごっ!!」いって~…動けない相手を蹴るか…
さすがは祐希奈だ…容赦ねえ…

「カナン…今の立場わかってるのかな?」
訂正こちらの方が容赦ありませんでした…
瞬時に起動したバルディッシュのハーケンフォームの魔力刃が喉元にありまーす…

「一応聞きますが…設定は?」

「殺傷設定だけど?」

「は、ははは…すいません調子にのってました…」

「次は刺すよ?」

「サー！！イェッサー！！」
「どんどん行きましょ～♪続いては～…」
「ぎあああああ！！それは言っちゃダメだってえええええええ！！！」
「ふはははははは！！！あんたに人権なんてないわ！！！」
「いやあああああ！！！」
「カナンく～ん！！！」
まさに地獄絵図…
強靭な精神をカナンでさえ、１００枚目辺りで白くなった代物であった…
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
数時間後…
「ふ…はは…は…はははは…は…」
精神が崩壊したカナンが血の涙を流していた…
「カナン君…強く生きてね？」
「マスター…死ぬなよ…」
「ふぅ…楽しかった♪」
「祐希奈、おかげで盛り上がったよ。ありがとう♪」
「まだまだ行くよ～♪どうせカナンはその内復活するやろし。」

「復活しなくてもいいけどね。」
フォワードメンバーは改めて認識した…
（（（この四人は悪魔だ））） と…祐希奈に情報を渡さないことを固く誓ったという…

「ぬうあああああああ!!!出でよ!!!エクスカリバー!!!!」
カナンの精神崩壊…ベルセルクと化した…

「カナン君!?落ち着いて!!!」

「マスター!?やめろ家が!!!」

「んなもん知らんわあああああああ!!!!」

「受けて立つよ!!!レイジングハート!!!」
ここで引き下がらないのが初代魔王…なのはさん…

「バルディッシュ!!!」
カナンを罰することが出来るのならフェイトさんも参加します…

「アシェル♪」
そして…ノリだけで人生を生きる祐希奈ももちろん参加する…

「ほな私は審判やね♪レディ…ゴー!!!!」
面白そうなことならいかなる危険なことでも承認しちゃう困った関西人…

「「「「「はあああああああ!!!!!」」」」」
斬撃、砲撃の嵐が吹き荒れる…

「ははははは。賑やかだなあ。」

「雅樹さん…笑ってる状況じゃないですよ！？」

「大丈夫さ。ご近所さんにも言ってあるんだろう？」

「家が吹き飛びますよ！！」

「それは大変だなあ。」

自身の家が吹き飛ぶ恐れがあるなか、他人事のように笑っている雅樹さん。
この人の中ではこれすらも思い出となる。

「前線メンバーの皆さん！結界張るの手伝ってください！！」

「「了解！！！」」

「うおおあああああ！！エクス！！！」

「全力全壊！！スターライト！！」

「雷光一閃！！プラズマザンバー！！」

「撃ち貫け♪炎の天使♪ヴォルカニック♪」

「カリバあああああー！！！！」
「「ブレイカーーー！！！！！」」
「アロー♪」
約一名を除き本気の一撃がぶつかりあい凄まじい爆風が発生する。

六課メンバー全員がいなければ、軽くここら一帯は吹き飛ばしたことは間違いない…

「はぁ…はぁ…皆さんありがとうございました…」

「「「お疲れ様です…」」」

ドサッ…

結界の維持に膨大な魔力を注ぎ込んだ前線メンバー＋カナンは力尽き気を失った。

その惨状を目にした三人はようやく正常に戻り（祐希奈はもともと正常だったが…）パーティーはお開き…ということになった。

各々気がついた人から順に帰っていき、最後にカナンが気がついた。

「何であんたが最後なのよ。いつもは無駄に早く復活する癖に…」

「仕方ないだろ…メイデンが使う魔力は俺の魔力だからな…結界維持に魔力をめちゃくちゃ持ってかれたんだ…」

「今回は自業自得だ。私はやめろと最初にいったぞ？」

「まぁそうだけど…」

「カナンはダメね～♪」

「お前のせいだろうが！！」

「ところでカナン君。」

最初に気がついたせいかもうかなり元気なヴィヴィオ…

結界にかなり注ぎ込んだはずなのに最初に目を覚ます辺り、やはりヴィヴィオの魔力は底が知れない…

「ん？何だ？」

「カナちゃんって私達と同い年くらいだよね？」

「ああ。それがどうした？」

「何処の学校に通ってるのかな？」

う！痛いとこついてくるな…

「…何でそんなこと聞くんだ？」

「今日学校の話があったから気になって…」

どうする…これだ！！

「カナメは俺達と同じ学校だ。」

「聖中？そんな子見たことなかったわよ？」

「カナメは極端な人見知りでな？

通信講座の生徒なんだ。」

「へえ…あんなの使う生徒いたんだ…」

「珍しいね。」

「ということだ。納得したか？」

「うん。ありがとう。」

「じゃあ俺は…」

「ちょっと待ちなさい。通信講座を受けてるってことはＰＣがあるのよね？」…何か激しく嫌な予感がする…

「だから…何だ？」

「カナメとメールしたいからアドレス教えなさい。」

「念話でよくないか？」

「カナメがどんなメール打つか気になるじゃない♪」

「普通に文章だけのメールだ…」

「あんたにはそうかも知れないけど女同士なら違うかもしれないわよ？」

「…わかった。ただ急いでて来たから携帯持ってないから、後でアドレス送るな。」

「話は終わったかい？ならそろそろ帰ろうか。」

「じゃあね。ちゃんと送ってよ？」

「私にもお願い。」

「へいへい。」

さて…家に帰ったらＰＣのアドレス作らないとな…

まさかこんなことになるとは…俺のバカ…

「アイツなんかあったのかしら？」

「さぁ？やっぱり最後の暴走で疲れたんじゃないかな？」

カナンを疲れさせている原因が自分達だとは全く気付いてはいなかった…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ふぅ…まさか俺がこんなものを使う時が来るとはな…」

カナンの家にも一応ＰＣはあった。

ただ、ほとんど使われておらず、これからもないと思われていた…

「え～と…アドレスの作り方は…」

取扱説明書を見ながら操作を進めていく…

自慢ではないが、俺はこういう機械を使う作業は大の苦手だ…

「だあああ！！めんどくせーー！！！」

カナンの部屋からは三時間の間叫び声が響いていた…

「カナン君は何をあんなに怒っているだい？」

もちろんカナンの叫び声は一階まで響き、英治、メイデンにも聞こえていた。

「さぁな…部屋に入ろうとしたのだが追い出されてしまった。」

「があああ！！！」

「「…」」

「何だか知らないけど大変そうだねえ。」

「ああ。しばらくは放っておいた方が良さそうだ。」
「で、出来た…後は祐希奈とヴィヴィオに送れば…」
地獄のメール漬けが待っていると…

「ま、普段知らないあいつらも知れるかもしれないし…頑張れ俺…」

自分で自分を励まさなければならないほどカナンの精神はボロボロだった…

『遅くなった。これがカナメのメアドだ。
アイツも今日は疲れてるだろうし、あんまり長話するなよ?』
ピッ…

「ふぅ…疲れた…」
ヴーヴー…

「速!!」

『何疲れてんのか知らないけど、体調管理はしっかりしなさいよ?』
主にお前のせいなんだが…

『えと、体に気をつけてね?
カナちゃんのアドレスありがとう。』
ヴィヴィオはメールですらどもるのか…

『ああ。じゃあ俺は寝るから、じゃあな。』

メールを送り終えると同時にＰＣの液晶画面にメール受信の文字…
本当に速いな…

『やっほー♪カナメ～元気？
祐希奈よ。
カナンからメアド勝手に聞いたけどいいわよね？
これからもよろしく。
暇だったらいつでもメールしてよ。じゃあね。』

『カナちゃん今日はありがとう。ヴィヴィオだよ。
本当に巻き込んじゃってごめんなさい。
今日は疲れてるだろうから終わるよ。
ＰＳ…お泊まり楽しみにしてるね♪』

「二人とも遠慮してくれたのか…助かった…」

『お二人ともよろしくお願いしますね。こんなお友達が出来るなら私も通えば良かったです…
お泊まりは私も楽しみにしています。
では、お言葉に甘えましておやすみなさい。』

「こんなもんでいいだろ…さて、風呂入って寝よう…」

風呂に入り、ベッドに倒れ込むと布団も被らぬままカナンは眠りに落ちた…
その頃ヴィヴィオと祐希奈は…

「私達もうすぐ行かないといけないし、いるうちにカナちゃんを呼ばないとね。」
「あの性格だし、誘ったらすぐに来てくれそうよね…パジャマ選ん

どかないとね♪」

「どれがいいかな～♪カナちゃん静かだから薄緑色とか水色が似合いそうだよね～。」

「ここはあえて赤色とかオレンジとかにも挑戦してみない？」

「う～ん…カナちゃんも可愛いから悩むなあ～♪」

「これなんか良くない？」

「フリフリだね♪似合うかも♪」

既にパジャマを床一面に広げ、どれがカナメに一番似合うか比べていた…

近々カナンはまた女装をすることになりそうだった…

次回に続く。

第二十一話　苦労人（後書き）

どもヨシュアです。

皆さんにまたまた謝らなければなりません…

国体の遠征でゴールデン・ウィークがなくなりました…

恐らく執筆も出来ないと思います…

帰って来れたらなるべく早く執筆をしますので…

ご了承ください。

第二十二話　恐怖の学校

一同
「ご覧の番組は出張道場インアフリカの提供でお送りします♪」

シオン
「はい。ゴールデン・ウィークがあけていきなり召喚されました神庭シオンです。」
タカト
「同じく伊織タカトだ。」
祐希奈
「何でいきなり召喚かというと、一人でも多くの人数に謝罪させるためよ♪」
カナン
「違うからな…」
ヴィヴィオ
「謝罪は私達四人だけだよ。」
メイデン
「二人はゲストなのだからしなくていいからな。」
四人
「やっぱり更新遅れて申し訳ありませんでした！」
シオン
「なんかいろいろと大変だったみたいだな。」
ヴィヴィオ
「あはは…毎日睡眠時間が三時間しかなかったらしいからね…」
祐希奈
「5日で十五時間なんて…私なら耐えられないわ…」
カナン
「ゴールデン・ウィークならぬ、ヘル・ウィークを満喫した作者は、

毎日倒れ込むように爆睡したんだが、朝練が午前四時でな…」
メイデン
「目覚ましの音に怯えながら過ごしたそうだ…」
タカト
「…三時間睡眠など普通だろう？」
シオン
「普通じゃないし…タカ兄ぃがおかしいだけだ…」
ヴィヴィオ
「で、急いで執筆したはいいんだけど…」
祐希奈
「また日常編が続くことに罪悪感を覚えた作者はダウナー状態に陥ったのよ。」
メイデン
「ほかの所みたいにバトルを入れたいらしいんだが…再び日常だけでオーバー…」
ヴィヴィオ
「まだ少なくとも三話以上はかかるとのことです。」
カナメ
「ふふ♪大変ですね♪」
シオン・タカト
「誰だ？」
カナン
「チェストーーー！！！！！」
祐希奈
「デストロ～イ♪」
ドゴオ！！
カナン
「がは…」
シオン
「相変わらずだな…」

タカト
「して、誰なんだ?」
カナメ
「鷹月カナメと申します。
よろしくお願いしますね。」
シオン
「あ、ああ。なんだ?いつの間に新キャラが…」
タカト
「…どこかで見たような面影が…」
カナメ
「気にしちゃダメですよ♪」
カナン
「く…人生の汚点め…」
カナメ
「存在が汚点の方に言われたくはないですね。」
カナン
「…殺ってやる。」
カナメ
「あなたに出来ますか?」
カナン
「だあああ!!」
カナメ
「甘いですよ!!」
シオン
「おお…あの子カナンと互角に切り結んでるな…」
タカト
「なかなかの使い手だな。」
メイデン
「まああの二人は仲が悪いみたいなのでほうっておこう。質問コーナーだ。」

祐希奈
「今日はあんた達で読んどいて。」
シオン
「他の作品のキャラに自分の作品宛の質問を読ませるとは…」
タカト
「さすが祐希奈殿、考えることがどこぞのバカとは違う。」
シオン
「バカ比べならタカ兄ぃも負けてないからな?」
タカト
「ほう…言うようになったな…」
シオン
「俺も強くなったからな…」
タカト
「こちらも殺るか?」
シオン
「どこまで追い付いたか試してやる…」
ヴィヴィオ
「ここで暴れるんなら…わかってる?」

シオン・タカト
(まずい…人間爆弾が…)
メイデン
「ちなみにこの出張道場はアリサ道場をそのまま借りて来ているから、次の拡大版道場がボロボロになるぞ?」
シオン
「マジか!?」
祐希奈
「ボロボロの道場を見てアリサがどうするかしらね~♪」
タカト
「ここではやめるぞ…」シオン

「そうだな…大人しくお便りを読むか…
ほかの所みたいにキャラ募集はないんですか?とのことだ。」
ヴィヴィオ
「もうすぐ三期が始まるからそうしようかな～と思ったらしいけど、
募集時期が被っちゃったからね～
後輩作者として先輩に譲るらしいよ?」
祐希奈
「いっそのこと他作者本人にキャラ募集すれば?」
メイデン
「仕事を増やすわけにはいかないだろう…」
タカト
「新キャラの追加はするのか?」ヴィヴィオ
「らしいね～。
ただデバイス設定や性格で迷ってるらしいよ?」
祐希奈
「まあ、まだ少し先の話だし、大丈夫じゃない?」
タカト
「なるほど、では次だな。カナメとヴィヴィオか祐希奈の模擬戦が
読みたいです。…質問というよりリクエストだな。」
ヴィヴィオ
「作者も何かと忙しいから書けるかわからないけど前向きに検討す
るらしいよ。」
メイデン
「しかしまた話数が増えそうだな…」祐希奈
「そん時はそん時よ♪」
シオン
「続いては…シオンとカナンの模擬戦がやっぱりうまく書けません…
なのでヨシュアさんからテスタメントさんにお願いして書いてもら
ってください。」
祐希奈

「ぶっちゃけ無理よ。」
ヴィヴィオ
「相当書きにくいだろうし、迷惑もかかるし、残念だけど不可能に近いかな…」
シオン
「だいたい何でうちの作者なんだ？」メイデン
「それは…まぁそっちの方がうまく書けるからだろう…」
タカト
「普段戦わない地味なキャラまで書けるほどだからな。」
祐希奈
「作者同士の間ではこんな感じでのクロスコメディが限界なのかもね。」
シオン
「それにしてもなんでこんなにＥＸとのクロスの質問が多いんだ？」
ヴィヴィオ
「やっぱりこの質問コーナーが原因かも…さすがに召喚し過ぎたかな？」
祐希奈
「これ以上増えるようなら回数を減らすしかないわね。」
タカト
「なくならないのか？」
祐希奈
「作者が無茶苦茶楽しんでるから多分無理ね。」
ヴィヴィオ
「ところであの二人は？」
シオン
「まだ激闘中だ。」
カナン
「六式抜刀剣術…絶空青龍破！！」
カナメ

「終演剣舞…雪月花！！」
ドゴオオン！！
シオン
「あああああ！！天井に大穴が…」
タカト
「次回の道場に傷が…」
ヴィヴィオ
「頑張って修理しなきゃ！！」
祐希奈
「ファイト♪」
シオン
「いや、手伝えよ…」
祐希奈
「え～アリサなら許してくれるわよ♪
庭の芝生焼け野原にしてもケロっとしてたし。」
シオン
「それはお前だからだ！！
俺には容赦しないんだよ…」
メイデン
「祐希奈とマスターみたいだな。」
ヴィヴィオ
「ほら喋ってないで修理するよ！」
タカト
「あの中でか？」
カナン
「虚空破砕断！！」カナメ
「烈花！！」
バコオオン！
シオン
「やめてくれえええ！！！」

メイデン
「シオンさんマスターに教えられた不死身講習を生かせ…」
シオン
「三途の川行きは確定なのか！？」
祐希奈
「ま、それはアリサ次第ってことで本編始めるわよ。」
ヴィヴィオ
「やっぱりというかなんというか日常編が続きます。」
タカト
「今回は学校編だな。」
シオン
「暴れないでくれえええ！！俺の命があ！」
ヴィヴィオ
「…魔法少女リリカルヴィヴィオ」
タカト
「始まりだ。」
カナン・カナメ
「はあああ！！」
ドゴオオン！！
シオン
「のう！！」
ブツ…▼▼▼▼▼▼▼▼
外から小鳥のさえずりが響く…
その鳴き声で祐希奈は目を覚ます。

「ん…ん～朝か。そういえば今日から学校なのよね。」

また勉強が始まることになるのか…
ちょっと面倒だけど、やっぱり楽しみの方が大きいわね。

「す～…す～…」

「気持ち良さそうに眠ちゃって…
ほらヴィヴィオ朝よ。」

「う…もうちょっと…」

可愛らしい声でヴィヴィオが呟く…
ヴィヴィオの寝起きは前よりはマシになってきているとはいえ、やはり弱い。

「ダメだって、今日から学校なのよ?
着替えなきゃいけないし起きなさい。ほら起きないと…こうよ!」

グリグリとヴィヴィオのほっぺたをつねる。
あ～…柔らかいわね～。

「ふぃふぁい、ふぃふぁいふぉ～!」

「ならさっさと起きる!」

少し惜しいがヴィヴィオのほっぺたを離す。
「何でもうちょっと優しく起こしてくれないかな…」

ほっぺたを抑えながらヴィヴィオがすねている。
すねている顔もまた可愛いわね♪

「ん～?なら次からは起こさないけど学校遅刻してもいいの?」

「う…それは嫌だけど…ほっぺたをつねるのはやめてほしいな?」

「どうしよっかな～♪」

「祐希ちゃん楽しんでない？」

「さぁ？あ、そろそろ時間ね、朝御飯作りに行くわよ。」

「話そらさないでよ～！」

「細かいことは気にしないの…よっと先に行くからね～。」

祐希ちゃんはベッドから飛び降り部屋から駆け足で去った。

「もう！待ってよ～！」

朝御飯を食べて先に出発する雅樹さんを見送り、私達も着替えて出発する。

途中で美鈴ちゃんと神楽ちゃんに合流し、教室に入ると既にカナン君とメイデンがいた。

ちなみに時刻はまだ８：００…始まる時間は９：００のため当然教室にはまだ誰もいなかった。

「お、おはようカナン君、メイデン。」

「ヴィヴィオ達か、おはよう。」

「ん？よう。お前ら早いな。」

「アンタ達こそ何でそんなに早いのよ？」

「何でって言われてもな…なんとなくとしか言えない。」

「そうだな。私も珍しく自分から起きられたし…
学校が楽しみだったのかも知れないな。」

「うん。私も楽しみなんだ。」

「私は勉強さえなければね～…」

「祐希奈はバカだからね♪」

「わわ…美鈴ちゃんダメですよ…」

「ふふ…美鈴…朝からいい度胸じゃない…」

「私は誰かさんと違って勉強も出来るから、学校始まってテンションあがりまくりだからね♪」

「まだいうかあああ！！」

「こいや猪♪」

「でああああ！！」

二人の間で拳が交わされる中、ヴィヴィオ、カナン、メイデンは慣れているので席につきお喋り、神楽はアワアワと二人のハードスキンシップを眺めていた。
そんな二人の決着がつくころ（美鈴が笑顔のまま殴り飛ばされた…）次々と生徒が到着、いつも通り賑やかなクラスになった。

「はい！全員席に着いて～。」

舞先生の声を合図に全員席に着く。

「皆さんおはようございます。
よくわからない事件に巻き込まれて大変でしたね。
でも、皆元気そうで安心しました。
突然ですが、これから体育祭までの間、教習の先生が入って来ます。
」

この先生の発言に、ヴィヴィオ、祐希奈、カナンは非常に嫌な予感を感じた…

「ねえ祐希ちゃん…まさか…」

「いくらはやてさんでもそれはないわよ…多分…」

「…来る！あの方達が！！」
カタカタカタカタカタカタ

「マスター？何を怯えているんだ？」

「入って下さい。」

「「失礼します。」」

引き戸を開けて入って来たのは…

「高町先生とフェイト先生です。
二人共この学校の卒業生なので、話も合うと思いますよ。」

「高町なのはです。」
「フェイト・T・ハラオウンです。」

クラス中（主に男子）から
「おお～可愛い！！」という声が聞こえる…
その中で約一名叫びをあげた男子がいた…

「ぎゃあああ！！何でええええ！！！！」

言わずもがなカナンである。
ヒュン…ザクッ！

「ぎゃあああああ！！」

カナンの額にチョークが刺さる。

「カナン…うるさい♪」

投げたのはもちろんフェイト…

「あはは…」

「予感的中…」

ヴィヴィオ、祐希奈は苦笑いをするしかなかった。

「フェイト先生…今回は相手がカナン君なので見逃しますが、他の生徒にはやめて下さいね？」

「了解です。」

「おかしいよな!?何故に俺だから免除!?」

「カナン?もっと欲しいのかな?」

五本の指の間からチョークが出現。
クラスの視線が二人に注がれる。

「…俺だって男だ。やってやる!!」

「おお!いいぞ風間!」

騒ぎが好きそうな男子が囃し立てる。
女子はハラハラと落ち着きなく二人を見ていた…
大きく息を吸い…

「すいませんでした!!」

と叫んで机の上で土下座した…
ガッシャーン!!!
これにはクラス中一人のこらずずっこけた。

「今回は許してあげる。」

「ありがとうございます!!…あれ?」

辛くも命を助けてもらったカナン。
しかし、大切な何かを失った気がした。

「さ、最後にほかにも臨時の教習生がいらっしゃるいますから、きちんと挨拶して下さい。以上です。」

「他の先生って…スバルさん達だよね…」

「エリオとキャロは年齢的に無理だろうからさすがに無いだろうけど…」

「一週間…俺は生き残れるのか？」

「マスター…気を確かにもて。」

カナンの苦悩はさらに増えるばかりだった…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一時間目…科学

「科学と数学の授業は私が担当することになりましたよろしくね。」

「なのはさんか…まだ助かったな…」

「カナン君…なのはママは教導が本業なの忘れてない？」

ほっとするのもつかの間、ヴィヴィオから指摘がとんだ。

「…厳しいか？」

「あの顔からは想像も出来ないようなハードな教導だったわね…手を抜こうものなら叩き落とされたし…」

祐希奈が遠い目をしている…

祐希奈がこうなるということは…ヤバいこれはマジで厳しいかもし

れない…

「マジメに授業受けないとフェイトママより危険かもしれないよ?」

「何!?…わかった。」

とにかく最初は様子を見ることにした。
最初の犠牲者を待つ…
少しすると勉強が苦手な神田が眠った…

「神田君だっけ?起きよーか?」

気付いたなのはさんが近づき神田を揺する…

「…」無視…
大抵の教師ならここで引き下がることが多い。が…

「そう…じゃあ仕方ないね…」

神田の肩に手が置かれる…なんか光ってるような…
ドン…

「ぐあ!!」

「起きた?授業中に寝ちゃダメだよ?次に寝たら…ね?」
再び肩に手を置かれる。
笑顔のまま、しかし教室の空気わ凍りついた。

「は、はい!」

おお…神田が敬語を…さすが悪魔だな…

「うん。じゃあ授業を続けるね。」

教壇に戻り、授業が再開される。

「今、絶対魔法使ったよな…」

「バレないように零距離でね…」

「これは寝るわけにはいかないわね…」

なのはの授業はそれ以降、誰一人寝ることもなく終了した…
正確には恐怖で寝られなかったの間違いだが…

「皆静かに聞けていい子ばっかりで良かったよ。
次もこの調子でね?」

最後にそう言ってなのはさんは教室から去った。なのはさんが出ていった瞬間プレッシャーから解放されたクラスメイトは机に倒れこんだ。

「祐希ちゃん、雅樹さんから何か聞いてた?」

「ううん…全く…」

「雅樹さん…今回は恨みます…」

地獄の時間が終わったクラスは思い思いに休み時間を満喫する。

そして、本日二回目の地獄が始まる…（一名限定）
引き戸が開く入って来たのはカナンの天敵。

「フェイトです。私は現代社会を担当することになったんだ。
短い間だけどよろしくね。」

「はは…死亡フラグ成立…♪」

「カナン君…まだ諦めちゃダメだよ！」

「今回ばかりは同情するわ…」

「では、授業を始めます。わからないことがあったら遠慮なく聞いてね？」

チョークが黒板にどんどん文字を刻みこんでいく。
しかし、フェイトの授業は要所を分かりやすく解説しているため、全員ついて行くことが出来た。
しばらく、進めると今までのことをまとめたプリントが配られる。

「じゃあ、カナン。ここ答えて？」

「はい。」

すらすらと答える。
しかし…これで終わりではなかった…

「じゃあカナンここもね。」

「は、はい。」

また当てられる…

「じゃあカナン。」
「じゃあカナン。」
「じゃあカナン。」

ｅｔｃ…
最早何度聞かれたかもわからない程に立て続けに当てられる…
明らかな集中放火。
そしてついにわからない問題…

「わかりません…」

「そう…じゃあ、グラウンド授業が終わるまで全力疾走ね？
歩いたら学校が終わるまでにするから。」

「…はい。」

鬼だ…少しでもマシになったかと思った俺がバカだった…
教室から諦めたように出ていった。

「うわ～…ホントに全力疾走だ…」

「次、体育なんだけど…大丈夫かしら？」
そんな心配をよそに授業は進み終了した…
カナンが走った周回は１５分で１００周…

「あはは。さすがカナン君だ。
伊達に祐希奈に毎日殴られてるわけじゃないね。」

「グラウンドに倒れてますけど大丈夫でしょうか？」

「体操服持って行ってあげた方がいいよね？」

「それ以前に体育をサボらしてあげれば？」

「授業をサボるなんてダメだよ！」

「ヴィヴィオも意外と鬼になれるかもしれないな…」

「ええ！？でも授業を休むのはやっぱり…」

「ま、カナンなら大丈夫でしょ。行くわよ。」

カナンの体力がまだ残っているものと信じ、四人はグラウンドへ向かう。

「ぜはーぜはー…」

汗を滝のように流したカナン君がグラウンドのど真ん中で倒れていた…

「どう見ても大丈夫じゃないわね…」

「カナン君、次体育なんだけど…」

「…マジで？」

「マジで♪」

「…」

若干Ｓっ気のある美鈴が止めをさした…

「しゃあない…頑張るか…」

ガクガクと震える足に力を入れてなんとか立ち上がる…

あ～やっぱり無理かもな。そう思っていると休み時間終了のチャイムが鳴り響く…

急いで着替え（ヴィヴィオ達が顔を赤くしたが無視した。）並ぶ。

「さぁて。皆大好き体育の時間だよ～♪」

「予想通りというかなんというか…」

「まぁ、わかってはいたけどね…」

「うん。どんな授業になるのかな？」

体育の教師はやはりスバルだった。

祐希奈と並ぶスポーツ大好きな女性だ。

「じゃあ今日は野球をするから準備してね～。」

「いきなりかよ…普通自己紹介からじゃないのか…」

自ら走り準備をするスバルさん…

その心意気は良いのだが、自己紹介はついにない…と思っていた。

「準備オッケー♪
皆、チームを作ってね～。ちなみに私の名前はスバルだよ～！！」

「「「今更かい！！！」」」

カナン、祐希奈、美鈴の突っ込みが炸裂し、グラウンドに響き渡った。

「ふふふ…風間よ…我らのチームと対戦しろ…」

といつぞやの不良が言ってきた…

「…何で俺に言う？」

「貴様はどうせヴィヴィオちゃんと一之瀬とチームだろうがあ！！！！」

「…まだ決まってないけどな…」

「カナン君一緒にやろうよ～！」

「ていうか早く来なさい！！しばくわよ！！」

「「…」」

「決まったな…てめえは死刑だああ！！！
俺達のチームに負けたらあの二人を寄越しやがれ！！」

「俺が二人と付き合ってるみたいなこと言うなよ

第一、俺に言っても意味ねえし、自分で告れ。」

「んなこと出来るかあああ！！」

「ヘタレだな…なら大人しく散れ。」

ヘタレにヘタレと言われればもう救いようがない。

「チクショー！！俺達のチームＶＩＴがお前をたたきつぶす！！」

「ビット？なんだそれ…」

「ＶＩＴ（ヴィヴィオちゃん、一之瀬を、取り戻す）チームだ！！」

まぁ、何だ…この学校はこんな脳ミソが悲しい人間ばっかなのか？

仕方ない…全力で応援してやるとするか。

「…ガンバ。」

究極にやる気のない声で声援が送られた。

一応今のカナンの全力の応援である。

「てめえ…やっぱ殺す…」

相手からしてみればバカにしているとしかとれないわけだが…

「へいへい。」

だいたい取り戻すも何もお前らの物じゃねえっつーの。

カナンチーム
一番、ヴィヴィオ
二番、スバル
三番、カナン
四番、祐希奈
五番、メイデン
六番、アリサ
七番、美鈴
八番、神楽
九番、神田

「なんだこのチーム!?教師＋関係ない人間までいるぞ!?」

「うるさいわね…出番少ないんだからたまには出してもらってもいいでしょ!?」

「アリサさんだっけ?…俺あんたにろくなことされてないんだけど…」

「細かいこと気にするとハゲるわよ♪」

またそのネタか…どんだけ俺にハゲろと言うんだ…だいたい…

「あんたの中では人を轢くのは細かいことなんだな?」

「それはあんただからよ♪」

「…」

ダメだな…祐希奈と同じ属性だ…

口喧嘩では絶対に勝てん…相手にするだけ無駄だな。

「で?メイデン、何でお前も参加してるんだよ。」

「今度は私か?私は祐希奈に人数が足らないからと言われたからだ。」

「普段小さなお前が急にでかくなったら騒ぎになるだろ…」

「恐らく大丈夫だとは思うがな。」

「さぁ作戦会議と行くわよ〜!!」

「「「お〜!!!」」」

すっかり溶け込んでいるアリサさん…

「まぁ部外者も参加してるし大丈夫か…」

「おい貴様…何で俺がこんなチームに入らなくてはいけないんだ…」

背後から凄まじい殺気が放たれている…神田か…

「まぁ落ち着けって。不本意なのはわかるが、いくら何でも男が俺一人はきついから仕方なくというやつだ。」

「何が仕方なくだ!!勝手にこんなチームに入れやがって!!」

「あいつらをたたきつぶせばもう頼まないから、な?」

「…わかった。今回だけだぞ…」

ふう…短気な奴だ…
とにかく問題は解決したな。
そして整列

「風間…お前は女ばっかし集めやがって…勝つ気あんのか!?」

「勝つ気はないが、このメンバーに勝てたら何でもしてやるよ。」

そんじょそこらの草野球チームなど相手にもならないだろう…
ましてや学生では…

「なめんなよ…こちとら精鋭部隊だぜ?
全員野球部のメンバーで揃えてやった。
勝てると思うか?」

「そりゃあ凄いなあ…勝てるかわからないなあ。」

「そうだろ!?今のうちに後悔しときな!!」
棒読みだったが、相手がバカだったらしい…
何も起きずにプレイボール。

「ヴィヴィオぶちかましなさい!!」

「あはは。出来るだけ頑張るよ。」

ヴィヴィオは左バッターボックスに立つ。
ヴィヴィオにパワーはない、野球は初めて…打てなくても仕方ないと思っていた。

「ヴィヴィオちゃん…手加減はしないぜ！！」
ビュッ！ズバン！

「ストライク！」

「うわ～女の子相手にマジで投げてるし…情けな。」

「はやーい。」

「ふふ…そら！」
ビュッ

「わっ！」

ブン！
空振り…まぁそりゃそうだろうな。
初心者に打てる球ではない。

「これで終わりだ！」
ビュッ

「えい！」
コキン…

当たるには当たったがボテボテのショートゴロ…
余裕をもってファーストに投げられ…

「セーフ！」

「え？」

ファーストの男子の顔が驚愕にかわる。

「わーい！」

内野安打…驚異の足の速さだ…

ヴィヴィオ…お前はイ○ローになれるよ。

「二番は私だね。続くぞ～！」

気合い十分、スバルさんなら間違いなく打つだろう。

「いくら教師でも女だろ！！」

ビュッ！

「それ～♪」

キイーン…

快音…綺麗なセンター前ヒット。

俊足のヴィヴィオは一気にホームに走り込む。

「バックホーム！！」

慌てて指示を飛ばすキャッチャー。しかし…

「ねえねえ。これで一点なのかな？」

「へ？」

センターが投げる構えをとる間に既にホームインしていた…

デタラメな速さだな…

「カナン三振したら殺すわよ！」

「私も参加決定ね♪」

「やめい！！」

三振したらダブルデストロイかよ…

「風間よ…貴様には負けん！！」

「本当は別にどうでもいいんだが、負けると殺されるかもしれないから打つ。」

「ほざけ！！」

ビュッ！

「よっ！」キイーン！

いや～遅い遅い。止まって見えるな。

「く…一之瀬だけでも！！」ビュッ！

俺から言わせればそいつが一番パワーがあるんだが…

「た～まや～♪」

カキイイイーン…

「なにぃー！？」

余裕のフェンス越え…ため息がでるな。

「バカ力め…普通は女の子がホームランなんて打てないんだけどな…」

あっと言う間に四点差…ピッチャーは既に泣きそうな顔…

「次は私だな。」

さて…こいつは打てるのか?そもそもルールを理解しているのか?

「メイデン頑張れ~。」

「私みたいにスタンドにぶちこめば走らなくてもいいわよ♪」

「そうなのか?わかった。」

やっぱり理解してねえし…知らんからな。

「誰だか知らねえけどなあ…何で風間のところには美人ばっかしくるんだよお!!」

ビュッ!

恨みのこもった球が投げられた…

俺に言われてもな…

「わ、私は美人などではないぞ!!」

カキイイイーン…

黙って投げとけば打てなかっただろうに…

「でえええ!!??」

「メイデンの奴…大地の力使ったな…」

「いいわよ～♪あと五点で終わりね♪」

一回コールド…まぁ楽できるからいいが…

「可哀想すぎるな…」

誰か一人くらいアウトにならないと相手の精神がダメになる。

「…」

ビュッ！

もう喋る元気もないのか覇気もなく投げる…

「もらったあああああ！！！」

グワアキイイイイン！！

無駄に張り切ったアリサさんは遥かそらのかなたへと白球を飛ばした…

お～い…相手のことも考えような？

「アリサ最高よ♪」

「ありがとう♪」

「「よし。」」

「久しぶりに見たよ…」

「何だあれ…意味わからん…」

「二人の友情の確認らしいよ？」

「へえ…変わった確認だな。」

「次は私だね。打ちま～す。」

「美鈴…多少は加減してやれ…」

「ふふ♪やだ♪」

間違いない…こいつはSだ…

「…」

ビュッ！

「とりゃ♪」

キイーン！ゴス！

「ぐは！！」

「ごめんごめん♪大丈夫～♪」

ピッチャー強襲…あいつ狙いやがった…

「神楽は大丈夫だな？三振でもいいから適当にやれ。」

「は、はい。」

神楽なら相手の精神を潰すようなことにはならないだろう。

「く…」

涙を流しながらまだ投げる…根性は素晴らしい。

「えい！」
コキン…

「ゲッツー！！」

さすが野球部…動きが速い。
もう遅い気もするが…

「すいません…」

「ドンマイ。次は打てるわよ。」

「ほら、応援しましょ？」

何故だ…俺の時はデストロイなのにこの扱いの差は…

「次は俺か…」

剣道部主将こと神田が立ち上がる。
こいつの力は未知数なため、何をするかわからん。

「男子には負けねえ！！ましてや女に誘われて入ったてめえなんかにはなあ！！」
ビュッ！

「女に誘われたわけではない！！」
キイーン…

「お～怒りの力で打ったか～。」

続くヴィヴィオ、スバルも再びヒットを打ち満塁。

「ツーアウト満塁…燃えるねえ…」

「これが九回裏で接戦だったらな。」

残念ながらまだ一回表の６対０…燃える要素が全くない…

「しかし…勝つのはおれだあああ！！」

聞いちゃいねえな…

「参式抜刀剣術…」

止めをさすべく、腰だめに剣…ではなくバットを構える。空間認識発動…

「うらあああ！！」

ゴオ！！
今まででは一番速いだが、空間認識の前では意味がない。

「絶空！！」
カキイイイーン…

「お～満塁ホームランだな。
劇的な逆転サヨナラ弾だ～やったぜ～。」
もう続けるのも面倒なので勝手にサヨナラにした…
「く…サヨナラ負けか…しかし、悔いはない…」
実際は裏の攻撃の後コールドゲームだが…
「じゃ、勝負は俺の勝ちってことで、これからはヴィヴィオ達に構うなよ？」
「それとこれとは話が別じゃあああ！！」
「あっそ…」
どこまでもアホな不良だった。
その後はキャッチボールをしたりして時間を潰し、授業を終えた。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
「ふう…学校って疲れるな…」
四時間目以降はいつも通りの時間割だったため、特に何事もなく終了した。
帰りのＨＲも終了し、帰路についた。
「これから一週間はこんな感じなのね…」
「あはは…ちょっと疲れるかも…」

「三人は特に大変だね～。」
「頑張ってくださいね。」
「「バイバイ。」」
いつもの十字路で美鈴、神楽と別れ、カナンもまた別れる。
「また明日な。」
「気をつけて帰ってくれ。」
カナン、メイデンが手を振る。
「うん。あ、メイデンは今日祐希ちゃんの家に来る？」
「？意味がわからないぞ。」
「時間もないし、今日カナメを呼ぼうと思うのよ。」
「マジで！？」
昨日はいつでもいいって…
「明日からは体育祭の準備で忙しくなるし、今日しかないのよ。」
「なるほど…」
「マスター？私も行っていいか？」
「ああ。楽しんでこい。」
「マスターありがとう。」

にっこりと笑うメイデン…最近表情が豊かになってきたみたいだな。
いいことだ。

「急に誘っても大丈夫かな？」

まあ俺だし、大丈夫だが…

「多分大丈夫だろ。後で聞いてみ。」

「わかってるわよ。じゃあね。」

「カナン君バイバイ。」

「ではな。」

「ああ。じゃあな。」

はあ…早々にあの封印を解くことになるとは…

とぼとぼと家に向かう。

「カナちゃん来てくれるといいね。」

「そうね。あ、メール来た。」

『了解です。今からそちらに向かわせてもらいますね。何かいりますか？』

「来てくれるらしいな。良かった。」

「ヴィヴィオ、別に何もいらないわよね？」

「うん。来てくれるんならそれだけでいいよ。」

「んじゃ送信と…」

「カナちゃんとのお泊まり楽しみだなあ♪」

しばらくして…

「こんばんわ～。カナメです。」

「あ、カナちゃん。いらっしゃい。」

「ていうか前と同じ服なのね。」

「えっと…これしか可愛いのがないので…」

これしか女装の服がないんで…

「カナメさんなら大抵は似合いそうだが?」

「ふふ。ありがとうございます。」

あんまり嬉しくねえ…そんだけ女顔ってことだからな…

「ま、とにかくあがってよ。」

「はい。お邪魔しますね。」

人生をかけた戦い（パート2）が始まった…

第二十二話　恐怖の学校（後書き）

これは一応リリカルシリーズなのですが、もう訳がわかりませんね…

まあ日常編が多いのがこの作品の特徴ということでご容赦願います。

本当に更新が遅くなりすいませんでした。

しばらくはまた3～4日に一度の更新で行けると思います。

僕もＰＶアクセスが１５００００を越えました♪

皆さんありがとうございます♪

第二十三話　プライド（前書き）

少し遅れましてすいません。
　修正にちょっと時間がかかりまして…日常編一体いつになったら終わるのか…　僕にもわかりません…気長に待って下さると嬉しいです。

第二十三話　プライド

「え～とですね。相手の手首辺りを受け止めて、手首を返し巻き付け、こちらは前に踏み込み相手の腕は引きこんでください。相手は重心が、ずれているためこうなります。」
ヴィヴィオの手首を引くと体勢を崩しこちらに倒れ込んでくる。

「わっ！」

「そして倒れ込んで来た相手の頭を…」
ビュッ！
唸りをあげる拳はヴィヴィオの目の前で停止。

「思い切り殴り付ければ大抵勝負は決まりますね。」

「凄いわね…ヴィヴィオも私も結構体術出来るんだけどカナメには敵わないわ…」

「うん。カナちゃんわざわざ教えてくれてありがとう。」

「いえいえ。これくらいお安いご用ですよ。」

俺はヴィヴィオ、祐希奈の二人に空手を教えていた。
時は少し前にさかのぼる。

「ふう…お腹いっぱいです。美味しかったですよ。ありがとうございます。」

再びカナメとなった俺は祐希奈の家に泊まることになった。

ただ、学校帰り＋着替えなどの都合から既に夕食の時間となっていた。

「本当？」

「はい。とても。大満足です♪」

う～ん…やっぱりこの二人の料理はうまい♪

「お世辞とかなら言わなくてもいいわよ？」

「いや、私も美味しいと思うぞ？」

「そうですよ。お世辞なんかじゃないです。」

「そう。なら良かったわ。」

「では私は少し外に出させてもらいますね。」

「カナちゃんどこ行くの？」

「どこにも行きません。

ただ、少し運動でもしようかと思いまして。」

「ふ～ん…あ、そうだ！カナメ空手やってたんでしょ？」

「え？あ、はい。小学校までですが…それが何か？」

「ちょっと私達に教えて。私達の戦い方って体術も結構使うんだけど、それに使えないかな～って。」

「それに空手とやらは日本の拳法の一つなのだろう？私にも見せて欲しいのだが？」
「成る程。そういうことでしたらお見せします。ただ、道場をやめてからかなりの間があるので、保証は出来ませんよ？」

道場をやめただけで空手事態はたまにやってるから大丈夫だとは思うが…

「カナちゃん。私と組んで～。空手ってどんいうものなのか直に受けてみたいから。」
「わかりました。では、始めますね？」
「「「了解。」」」

こうして空手講座が始まり現在に至るというわけだ。

「こうかな？」

先程の俺と同じようにヴィヴィオが動く。

「はい。そうです。飲み込み早いですね～。」

本当にびっくりだな。
見た感じ簡単だが、実は結構難しい技なんだが…

「簡単じゃない。こうすればいいんでしょ？」

祐希奈もあっさりと習得…この二人は成長が早すぎる…

祐希奈はこれをもう少し勉強にまわせないのだろうか？

「とりあえずはこれくらいでよろしいでしょうか？」

「うん。十分だよ。ありがとう。」

「あとは私達でなんとかするから。」

「なかなか興味深い内容だった。見れて良かったぞ。」

「いえいえ。泊めてもらうお礼みたいなものですよ。」

ちなみにヴィヴィオ、祐希奈の二人に教えたのは、殴る際の腰の使い方、呼吸の仕方、あとは少しだけ技を教えた。
どうアレンジするのか楽しみではあるな。

「さてと…まだお風呂には早いですし…テレビでも見ますか？」

時刻は7時最近はまだまだ明るい時間帯だ。
祐希奈達は基本的には8時過ぎから風呂に入るため少し早い。

「ね、カナメ…時間潰しに私と軽く模擬戦やってみない？」

げ…またこの格好でかよ…しかも、相手は祐希奈…絶対軽くにはならない。
下手したら余裕で就寝時間まで突入する…

「え～。祐希ちゃんずるいよ～。
私がやりたいのに。」

…ヴィヴィオもかよ。
ていうか模擬戦は決定事項なわけな…

「私はどちらの模擬戦も見てみたいな。
カナメさんもかなりの使い手だし、面白くなりそうだ。」

メイデン…火に油をそそいでくれたな…
そんなこと言われたら断るのなんて不可能じゃねえかよ…

「今度また何かおごってあげるから、ね？」

「…イチゴパフェＳＰ。」

「ぐ…わかったわよ…」

お～あれ結構高いのに祐希奈もやるな～。
相手は適当技を使う俺だぞ？
もったいない。

「では、相手は祐希奈さんでよろしいですか？」

「うん。祐希ちゃんでいいよ～♪
私は応援してるから。」

イチゴパフェＳＰ（１５００円）を食べられるおかげかかなり上機嫌なヴィヴィオ。

「カナメ手加減抜きよ？」

「ふふ。祐希奈さんに手加減なんて出来ませんよ。

では、メイデンさんお願い出来ますか？」

「わかった。よろしくな。」

「じゃ、行きましょうか。いつもの場所に。」

「あの林ですか？」

「うん。そうだよ～。思い切りやっても大丈夫だから。」

「は、はい。」

やっぱり全開でやるらしい…はぁ…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「じゃあカナメ…始めるわよ？」

「いつでもどうぞ。」

バリアジャケットと騎士甲冑を装着し、互いに剣を構える。

「始め！！」

ヴィヴィオの合図と同時駆け出す。

「カナメの力見せてよね！」

「言われなくてもお見せしますよ！」

ギィン！

言葉と同じくして交わる剣。

一合目にしてつばぜり合いになる。
ギリギリという音が響く。

「力は私と同等か…結構あるのね…」
「鍛えてますから…」

「でもね…私にはこれがあるのよ！」
『ロードカートリッジ！』

祐希奈の手甲が上下にスライドし、空薬莢が排出される。
魔力変換…祐希奈のブレードに纏われるは紅蓮の炎。

「はあああ！」

「く…」

じわじわと威力の差が出始め押し込まれ始める。

「…剣舞初の舞。」

「うわっ！」
ドゴッ！
ブレードを受けていた力を抜き横に避ける。
祐希奈は勢い余りブレードを地面に叩き込んだ。
がら空きの体にとる構えは刺突の構え。

「甘いのよ！」

体を無理にひねり横凪ぎの斬撃を放つ。
しかし予測済み。

「ちっ！」

飛び上がり回避狙うはがら背中！

「閃花！」

「ブレードエクスプロージョン！」

ザクッ…

俺の剣は狙いを外し、地面に刺さる。

爆発の威力で背後に離脱した祐希奈がいた。

「烈破爆砕！」

いい動きだ…

空中に逆立ち状態でいる俺に向かい、飛び上がりながら拳に炎を纏う。

それを確認し、腕の力で体を投げ出す。

受け身をとりすぐさま起き上がる。

「ああ！もう！」

また攻撃を外した祐希奈は苛立ちながらこちらに来た。

「剣舞…次の舞…」

即座に剣を呼び戻し鞘に納める…

「あれは！」

何が来るかわかっている祐希奈は即座にプロテクションを展開。
…思う壺だ。

「烈花！」

抜刀と同時に投げられた剣は祐希奈のプロテクションへ突き刺さる。

「しまっ！」

「これは避けないとダメなんですよ！」

柄を踏み台に跳躍…全体重をかけ、祐希奈に迫る。

「考えるのは面倒なのよ！！」

再びカートリッジを使い、炎が纏われる拳…
このまま、まともにぶつかればさすがに威力負けするが、このまま
ぶつからなければいい話
拳と刃が触れ合う瞬間魔力を結合…
メイデンの力を借りる。

「咲け！」

纏われるは炎…祐希奈に比べれば威力は下がるが、押し負けなければそれでいい。
ギァン！
少し吹き飛ばされ着地。

「随分身軽なのね。」

「それだけが取り柄ですから。」

「でも…」

弓を召喚…ブルーゲイルか…ダル～。

「もう逃がさない！！」

ブルーゲイルの十八番の超連射。
祐希奈が一度弦を引く度数十の矢が形成…
これが、全部絶対必中なんだから面倒なんだよな～…しかも連射可能って…面倒極まりない。

「剣舞…四の舞…桜」
そろそろネタ切れだな…
地面に剣を突き立てる…

「何だろ？」

何も起きない…矢はすぐ目の前まで迫っているのにカナメは構えようともしない…
不発かとも思った。でも違った。

「はっ！」

ドン…という爆発音と共に細かい土の塊がカナメの目の前に弾ける。
そこで剣を抜きカナメは剣を横に振り抜いた…

「乱れ咲け…」

その口上が言われると同時、カナメの目の前が小爆発でおおわれる…
確かに花に見えた…

「何をボーっとしてるんですか！」

爆発の中からカナメが飛び出して来ていた。

「別に！」

再びブレードを構え迎撃、交わる…確かに手応えはあるのに、カナメは体重を移動したり、飛び上がったりして変則的な動きで撹乱してくる…
正直受けるだけでギリギリだった…

「はあああ！」
ギィン！
また防がれた…祐希奈の奴むちゃくちゃな反応速度してるな…
さっきから体勢崩したり、撹乱したりしてるのに防がれる…
見切られつつあるのかもしれないな…

実はお互い内心追い詰められつつある二人。
そんなことは表情には出さずひたすら斬り結ぶ…
祐希奈の刺突が頭を狙い、紙一重で首をひねり避けたカナメが流れた体に横殴りに剣を叩きつければ、左手に最小の大きさで張られたプロテクションが剣を防ぎ、祐希奈の膝がカナメの腹部を襲い、カナメは回避をするためにバックステップ少し距離が離れるが祐希奈が追撃さらに斬り結ぶ…

「…」

相手が強いとき逃げ腰になってはいけない…立ち向かう…
これはなのはさんの教え…
そして、苦しい時に無理な攻撃にでてはいけない…防いでいれば…
チャンスは必ず来る。

「はあああ！」

カナメが少し大振りに振りかぶる。
力で押しきろうとした結果だった。

「来た！」
ヴィヴィオほどうまくは出来ないけど！
ギャリ…
袈裟の一撃を受け流し、自身はそのまま回転する。

「なっ！」
受け流されたカナメの体が泳ぐ…
最後の教え…一刀流はチャンスが来た時には逃さず決める！！
なのは、シグナム、そして高町士郎の教えが一つになった瞬間だった…

「一撃！粉砕！！」

祐希奈の突き出された左手の前に出現する紅蓮の炎を纏う魔方陣…
カートリッジを全て使いさらに威力をあげる…

「プロテクション！」
回避は不可能と考え最大強度でプロテクションを張る。

「烈破紅蓮爆砕撃！！」

叩きつけられた右拳…零距離から放たれた紅蓮の奔流はプロテクションを張ったカナメをあっさり飲み込み直線上を荒野と化した…

「はぁはぁ…」

視線の先には倒れるカナメがいた…

終わったかな…

「やり…ますね…少々痛かったですよ。」

しかし、片腕をつきなおも起き上がるカナメ…

「っ！」

あれを耐えきった！？

自身の中でもかなりの高威力をもつ攻撃を零距離で受けてなお起き上がるその事実に驚愕する。

「メイデンさん…行きますよ…」

『了解だ。』

「『ユニゾン・イン！』」

起き上がる少女の髪は金髪に、紅蓮の瞳は黄金に輝く…

「まだ…終わらない…」

圧倒的な戦力差…でも…祐希奈はカートリッジを全て装填…構える。

「やってみないとわからないってね！！」

「剣舞…参の舞…」

大量に魔力を失った反動か足がほとんど動かない中まだ諦めない。
その心意気に答える…全力で終わらせる！
あ～あ…こういう燃える戦いなら男の時にやりたかったな～…残念無念…

「水仙花！！」

祐希奈に接近。切り上げを放つと同時大量の水が吹き出す。
くそ…あんまり水分がないからか、魔力消費が激しいな…

「くあ！！」

避けられるはずもなく直撃…打ち上げられる。

「私の勝ちです！！終演剣舞…」

一気に周囲の温度が下がる…
水が氷へと変わり始め祐希奈に到達する…

「雪月花…」

納刀すると完全に凍りつき勝負は俺の勝ちで決着がついた。
と思っていた…
ポタポタと水滴が頭に落ちる…

「？」
見上げると…祐希奈の周りの氷が溶け始めていた…
「っ！まさか！？」
「あああああああ！！！」
答えは祐希奈がカートリッジを全て使い魔力を無理やりに上げ、炎の翼を展開していたからだった…
「…さすが、ですね。」
そのむちゃくちゃさ…やっぱりお前は考えるより先に行動なんだな。
「鳳凰！！」
突撃…空間突破を使えば避けれるが、使えば人生が終わるため使えない…つまりは受けるしかなかった。
「がっ！！」
火の鳥は俺を容易く打ち上げた…
ホントパワーだけならお前には勝てないよ…
「裂光翔！！」
自身へと舞い上がる火の鳥を見つめ、綺麗だ、などと場違いなことを思い浮かべる…
直撃…カナメを中心に大爆発が起き決着がついた。

本来の力を使っていないとはいえカナン最初の敗北だった…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「……ちゃん……う……んが……！！」

誰かが怒っている声が聞こえる…誰だ?

「…ったく……メさん…客人…ぞ?」

さらにあきれたような声がする…

「…から、…めんって……と燃えすぎ…ゃったのよ。」

だんだんと意識がはっきりしてくる…

視界に広がるのは満天の星空…そして二人の顔…

「あ…カナメさん起きたか。」

肩にいたのかメイデンが顔の横に舞い降りてくる。

「カナちゃん大丈夫?ごめんね。祐希ちゃんがやりすぎちゃって。」

「はは…その…楽しくってつい…ごめん!」

お～…祐希奈が謝ってる…明日は吹雪だな…

「いえ…それは私もですよ…謝る必要は…ないです。」

「あ、やっぱり?そうよね♪おあいこってことで…」

「調子にのらないの!」

ペチッ。

「った！」

おお！？ヴィヴィオが祐希奈にツッコンだ！？
ヤバい…明日は地球が滅ぶかもしれない…

「すいません、今何時なんでしょう？」

「え～と…じゅ…１０時よ？」

「祐希ちゃん…軽くって言ったよね？」

「し、仕方ないじゃない。カナメが気絶しちゃったんだし…ね？」

「気絶するような攻撃を叩き込んだのは祐希奈だが？」

「う…」

祐希奈がヴィヴィオとメイデンに押されている…今日は珍しいことの連発だな。祐希奈が半泣きに見えるのは気のせいか？

「ま、まぁ避けられなかった私も悪いんですから、そんなに祐希奈さんを責めなくてもいいじゃないですか。」

「カナメ…」

「もう…カナちゃんは優しすぎるよ～。」

「そうだな。たまには誰かが言わないといけない。

今回はやりすぎだ。」

「そうだよ。相手がカナン君ならともかく、女の子同士で使う技じゃないよ。」

「…」

俺ならともかくって…俺でも死ぬ時は死ぬぞ?…多分。

だいたいお前らもっと凄いのぶちかましてたが、それはいいのか?

心の中のツッコミが止まらない…

「まぁ、もういいじゃないですか。

とりあえず帰りませんか?」

「カナメ~ごめんね?」

「怒ってないですから安心してください。私も楽しかったですよ?」

「カナメ!!あんたは最高の友達よ!!」

ギュッ!

「ちょっちょっと祐希奈さん!?」

ヤバい!!これはヤバい!!祐希奈さん中身は男なんでやめてください!!

「あはは。祐希ちゃん面白~い♪」

面白くない!!ヴィヴィオさん俺は果てしなく面白くないっすよ!?

「カナメさん大変だろうが頑張ってくれ。」

「はいぃ！？」

「いい返事だ。」

「カナちゃん頑張って。」

返事じゃねえ！！久しぶりに揃いましたよ金髪天然ズ！！

「カナメ～♪」

「わかりました…」

もうどうでもよくなり、抱きつく祐希奈をそのままに引きずるように家まで連れ帰った。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「カナメ先に入って来なさいよ。」

「それは嬉しいですけど…いいんですか？」

「いいわよね？」

「うん。構わないよ～。ね～メイデン。」

「ああ。カナメさんなら異存はない。」

俺ならあるのか？

「わかりました。」

「じゃあカナメ、どれがいい？」

「この中のどれかが似合うと思うんだよね～。」

「はい？何の話ですか？」

「何のってカナちゃんのパジャマの話だよ？」

「あげるって言ってたじゃない。忘れたの？」

…そういえばそんな話をしていた気がする…

こんなに早くに封印を解くとは思わなかったから忘れてた…

「そうでしたね。ってこれは何ですか？」

笑顔が一瞬にして凍りつく…目の前に広げられていたのは水色、薄緑、オレンジの三色ここまではいい…問題は次だ…

「えへへ。カナちゃんなら似合うよ♪」

「うんうん。着てみてよ。」

「確かにカナメさんなら大抵は似合うだろうな。」

何故に全部フリフリがついてるんでしょうか…

これはあれか…俺にプライドを捨てろと？

今女装してる時点でもう捨ててるだろとか思った奴、それは間違いだ。

これは無理やりスバルさんに着せられたんであって断じて俺の意思ではないって俺は誰に説明してるんだ？

「どれがいいかな？」

既に着ること確定っすか…

「…」

「カナちゃん？」

「カナメ？やっぱりこういうのは嫌だった？」

「似合うと思うのだが…」

「あ、えっと…」

「い、嫌なものは仕方ないよ。
着たくないんだよね？」

目に見えて落ち込むヴィヴィオ…
もう、プライドなんてあって無いようなもんだし…いいや。

「いえ。あまりにも可愛らしかったので迷ってしまっただけですよ。
」

「え？」

「そうですね～。この水色のにします。
ありがとうございます♪」

「うん！！カナちゃんならきっと似合うと思うから。」

「楽しみに待ってるわね♪」

「ゆっくり浸かるのだぞ？」

「はい。では。」

はぁ…いざゆかん！我がプライドを粉砕するために！！

お湯に浸かりしばらくしたあと、パジャマを着る…

う～わ～自分で言うのも何だが似合ってるし…

男として悲しく思うな。

「あがりました～。気持ちよかったですよ。」

「わぁ～カナちゃん可愛いね。」

「似合う似合う♪」

「ヴィヴィオと祐希奈の判断は正しかったな。」

口々に誉められる…ただ誉められる度悲しくなるのは何故だろう…

一度着てしまえば慣れるのかその後からは違和感なく着られた。

ヴィヴィオ＋メイデンと祐希奈が風呂からあがったところでまた問題が起きた…

「もう面白いテレビもないし、そろそろ寝ましょっか。」

「そうだね。カナちゃん行こ？」

「はい？私はここでいいですよ？」

「マスターみたいに男ではないのだから一緒に寝るんだ。」

…またかよ…またなのかよ本日三回目の危ないイベント…しかも最大級だよ…

「い、いえ、私は…」

「ほら行くわよ?」

ガシッ…

ガシッ…

「レッツゴー♪」

「ちょっとお二人共!?」

ズルズル…

誰か助けてーーーー!!!!

「今日は遅いしもう寝るわよ?」

「祐希ちゃんがカナちゃんを気絶させなきゃもうちょっとお喋り出来たのに…」

「もうその話はなし!!」

「何でもいいが、寝なくてもいいのか?」

メイデン用人形の家のベッドからメイデンが声をかける。

「私やっぱり床で…」

「却下だよ。今日は女の子三人で川の字で寝るんだ。」

「ならメイデンさんでもいい気もしますが…」

「メイデンは前に一緒に寝たし、カナメと寝てみたいのよ。」

「ならせめてはしっこが良かったのですが…」

「だってそれだとカナちゃんの手をどっちか握れないもん。」

「必然的にカナメが真ん中ね。」

何が必然的なのか全くわからん…
しかも俺が寝ている布団はもちろん毎日ヴィヴィオと祐希奈が寝ている物、さらに横には手を握るヴィヴィオと祐希奈…
確実に寝られない…
しかし、この二人相手に口で言っても勝てないだろう…特に祐希奈が…

「もういいです…」

「うん。じゃあカナちゃん、祐希ちゃん、メイデンもおやすみ。」

「おやすみなさい。」

「おやすみ～。」

「また明日の朝にな。」

しばらくすると三人からは寝息が聞こえてくる…
そしてさらに問題が発生…寝返りをうったヴィヴィオ、祐希奈がこちらに来た。顔の距離十センチ以下…
いや、もうホント…誰か助けて…▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
カナン
「うぅ…」
祐希奈
「ほら～カナン舞台はこっちよ～♪」
ヴィヴィオ
「カナン君まだメイド服着てたんだ…」
カナメ
「あの後の学校での皆の反応面白かったですね～♪」
祐希奈
「好きだ！！とか言う人もいたからね♪」
カナン
「お前らどんだけ人の人生潰せば気が済むんだよ…」
メイデン
「似合っているぞ？」
カナン
「嬉しくねえよ！！」
祐希奈
「まぁ、このバカは放って置いて…何で今回このコーナーが後ろにあるかといいますと…」
メイデン
「質問が大変だからだ。」
ヴィヴィオ
「内容は～ＥＸのラスボスつっちーとカナン、ヴィヴィオ、祐希奈、メイデンが戦うとすればどう戦いますか？との質問です。」
カナン

「ＥＸを真似てミニバトルを書いてみたから暇だったら読んでくれ。」
祐希奈
「スタート♪」
▼▼▼▼▼▼▼▼▼
出会うは異形…何故出会ったかは置いておこう、そして始まる激闘。
「んじゃ、触手は俺が退けてやるから砲撃頼むな。」
大量の触手を前に軽くいい放つカナン。
「了解。」
「任せろ。」
「ま、あんたなら大丈夫でしょ。
やられたら後ろから止めさすわよ？」
「何でだよ！？」
やはりこの四人には緊張感というものが皆無だった…
「さてと…壱式抜刀剣術…」
後ろはあいつらに任せた…俺は道を開くのみ！！
「暗夜一閃！！」
駆ける…進路上の触手を全て切り刻みながら…一瞬で異形の頭の上

へ…

「くらっとけ！！」

降り下ろされる刃…
しかし、頭の上で停止していた…

「障壁かよ…面倒だな…」

ユニゾン状態ならともかく今は破れないな…
思考しつつも触手を斬り飛ばす。
そして今までは触手に任せきりだった異形が動く…

速いそれでいて巨大な斬撃が立て続けに振るわれる…

「わっと…」

一端離脱を…そう考えたが無理だった…触手に背後を塞がれていたからだ…
メイデンとユニゾンしていれば後ろ向きでも空間突破で５０メートル下がることは出来る…
しかし、今のカナンの空間突破の距離は視界＋認識出来る周囲三メートルほど…囲まれてる今では意味がない…

「なさけない…しゃあない」

（メイデン頼む。）

（まったく…突っ込んでおいて離脱不可能になるまで戦うからだ…動くなよ？）

「へいへい。」

異形の前で棒立ちとなるカナン…
迫る異形…斬撃がカナンに降り下ろされる瞬間変化が起きた。

「風よ！切り刻め！！」

カナンの位置を正確に把握したメイデンが風の力で触手を斬り飛ばした。

「ナイスだメイデン。」

三メートルの背後への空間突破を使い離脱。
しかし、この程度の距離ではすぐに詰められる。
再び異形が迫る。

「残念でした。まだあるんだよ。」

「ディバイン！バスター！」
「スパイラルフレア！」

左右から砲撃、矢が放たれ矢は異形の頭を砲撃は足を吹き飛ばす。

「エクス！カリバー！」

ＡＡほどの魔力が異形の胴体ど真ん中に穴を開ける…
どうやら意識がそれると障壁は発生しないらしい。

「祐希奈！メイデン！こいつの上に行け！」

「わかった。」

「しょうがないわね！」

「ヴィヴィオいくぞ！！高機動砲撃頼む。
威力は低くてもいい！」

「うん！ソニックフォーム！！」

ヴィヴィオは防御が低い…当たれば終わり…俺が守る！
異形は恐ろしい再生能力で既に損失した部分を全て再生していた。

「だるい奴だな…」

再び触手を斬り飛ばしながら祐希奈とメイデンを待つ…

「援護いっきまーす！」

ヴィヴィオの姿がぶれる…周囲３６０度全てからのショートバスター。
おいおい…俺巻き添えかよ…
最低限の部分を斬り飛ばし離脱…
ヴィヴィオは祐希奈、メイデンと合流、砲撃を溜める。

「Ｇａａａａａａａ！！」

吠える異形ヴィヴィオ達に向かって砲撃を溜める…

「させるか！！参式抜刀剣術…」

空間突破で異形の砲撃の目の前へ…

「ＧＡａａａａａ！」

「絶空！！」

零距離で衝突する砲撃と斬撃…

数秒の拮抗の後、カナンは砲撃に撃ち落とされた…

「じゃ、よろしく…」

三人にそう言い残し、吹き飛ぶ。

「カナン君！！」

「あいつなら大丈夫よ。その怒りはあの気色悪いのにぶつけなさい。」

「ああ。私もああいうのは好きではないのでな。」

「よくもカナン君をー！！エクセリオン！！バスター！！」

「ま、一応仲間だし…ジャッジメント！アロー！」

「雷帝…降臨！」

砲撃、矢、雷の三つの大威力魔法が異形へと降り注ぐ…

障壁の二枚までは破壊した…

しかし、そこで攻撃は終わる…

「届かない！？」

「くそ！」

「厄介な相手だ…」

三人の攻撃は軽くSランクを凌ぐ物…しかし、届かない…
そして異形が消える…瞬動を使いヴィヴィオ達の真上へ。
降り下ろされる巨大な斬撃…

「祐希ちゃん、メイデン！！」
ドン！
「うわっ！」

「わっ！」
この中で一番早くに反応したのはヴィヴィオ…祐希奈とメイデンを押し、斬撃の範囲外へと出るが、触手がヴィヴィオの足に絡みついた。

「っ！」

ズウウウン…

「がはっ！」

高さ数十メートルから地面に叩きつけられ、痛みのあまり身動きがとれない…
ゆっくりと近づく異形…勝利を味わうかのように…
離脱に成功した祐希奈がヴィヴィオを助けるべく、重力落下を利用し、空から異形目掛けてふりおろす。
「紫電！！一閃！！」

ガッ…

「嘘…」

カートリッジを使い全力でふりおろした一撃さえ届かない…

「がっ！」

動きが止まった祐希奈を無造作に触手が殴り飛ばした…

「やらせるか！！」

異形の周りの空間が歪む…空間圧砕…メイデンの得意とする高威力の空間攻撃。

「潰れろ！！」

メイデンが掌を閉じると同時、確かに一度潰れたように見えた。
その証拠に異形の所々が損傷している。
しかし、気にも止めず異形はヴィヴィオへと向かう…

「ヴィヴィオに近づくな！！」

アウトフレームとなり異形の背後から殴りつける…
大地の力を借りたその力は一瞬異形の足を止めた…だがそこまで…
触手がメイデンに向かう。

「く…そ…」

あっさりと打ち上げられた…
さらに異形は止めの一撃の砲撃を溜める…

「アクセル・ランサー…」

ドドドド…

異形に当たるが…まったく聞いていない…ヴィヴィオは気をこちらに向けるためだけに放ったに過ぎない…

「あなたの…相手は…私…でしょ…」

息も絶え絶えに…身動きもとれないなか挑発をする。

「Ｇａａａａａａａ！！」

邪魔をされた怒りの咆哮か獲物を殺せることの嬉しさの咆哮か…どちらにせよ狙いはヴィヴィオに戻った。

目の前であげられる巨大な足…

「みんなバイバイ…」

ズブッ…

来るべき痛みが来ない…何故か…

「勝手に…バイバイな…んかさせる…か…よ！」

自身を身代わりにヴィヴィオをカナンが庇っていた…空間突破で離脱、一度離れる。

「カナン君！？ち、血が！？」

異形の足はカナンの腹部を貫いていた…

カナンの腹部からはおびただしい量の出血…すぐに治療しなければ命の危険すらある。

「ん…あ～まぁ…気にするな…これ…終わら…せたら…メイデンにやって…もらうから…」

「で、でも！！そんな状態であんなのに勝てないよ！！」

「勝てるさ…むしろ今しか勝てない…ちょっと待ってろ…すぐに…終わらせるから…」

ヴィヴィオに背を向け、異形と向かい会う…律儀にも待っていてくれたのかいつでも倒せるという余裕か…

「カナン君！！待って！！死んじゃやだよ！！」

その言葉にカナンは振り返る…その顔には笑顔…とても優しい笑顔…

「大丈夫だ…俺は死なないから。」

そう言い残し異形へと歩いていく…

「カナン君…」

彼は行ってしまった…後は願うことしか私には出来ない…死なないで欲しいと…

「よう…待たせたな。続きといくか。」

「Ｇａａ…」

あまりにも気楽に言うせいか戸惑うような咆哮をあげる…

「不思議か?俺がこんなに明るいのか…
じゃ、何でか教えてやるよ…
最後の瞬間くらいは笑顔で送られたいだろ!?」

同時カナンから黒い魔力があふれだす…

「Ｇａａａａ…」

圧倒的な魔力に数歩確かに後退りした…

「妖刀…ムラマサって知ってるか?
知らないか…なら説明は不要だな…斬る!!」

向けられる莫大な殺意…異形は本能的に理解した…勝てないと…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

カナン
「以上だ。ここまで読んでくれた人ありがとな。」

ヴィヴィオ
「無茶苦茶な所できるんだね…」

祐希奈
「まぁそれは置いといて…私達の活躍少なくない?」

メイデン
「ぶっちゃけるとマスターの影が薄いからちょっと活躍させたかったらしいが…」

カナメ
「誰のせいでしょうね～♪」

カナン
「な～♪」

ヴィヴィオ

「寒い…寒いよ…」
祐希奈
「こんなとこにいられない…もう終わるわ！」
メイデン
「で、ではな。」
カナン
「ははははは…」
カナメ
「ふふふふ…」
ヴィヴィオ
「二人共…次の道場までには仲直りしてね？」
終わり

第二十四話　ＰＢＭ

おう…何処の誰だか知らないけどおはよう…
現在、鷹月カナメに女装中の風間カナンだ…
とりあえず俺の愚痴でも聞きながら、もう少し待ってくれ…
俺は今非常に困った状況にいる。
もちろんこいつらのせいだ。

「「す～す～。」」

「幸せそうに寝やがって…ふあ…こっちは徹夜だってのに…」

何で徹夜なのか教えてやるよ。
そんなの聞きたくないってか？
そんなこと言わずに話相手になってくれよ。
で、何で徹夜なのかってことだが、ヴィヴィオと祐希奈が寝返りをうった後、顔が近いわけだ。
首を横に向ければすぐ目の前にドアップの可愛い顔が見える程にな。
で、大抵の人間は寝れば寝返りをうつわけだが、ここで俺が寝て寝返りをうてばどうなる？
まぁ、この二人の少女の恐らく初と思われるものを奪ってしまうわけだ。
な？寝るわけにはいかないだろ？
なら起き上がれよって思ったかもしれないけどな…
この二人は、昨日から手を握ったまま解放してくれなかったわけだ…
これで徹夜フラグ完成～というわけ。
愚痴終了。聞いてくれてありがとな。

「って俺は誰と喋ってんだよ…幻覚でも見てたのか？

本格的にヤバイな…どっちでもいいから起きてくれ。」

「ん…カナメ？早いわね…ふあ…」

そんな願いが通じたのか祐希奈が起きた。

まだ少し眠そうだ。

「あ、祐希奈さんおはようございます。」

「おはよう…今何時よ…」

ベッドの横の机に手を伸ばし携帯を手に取り時間を確認。

「まだ四時過ぎじゃない…悪いけどもうちょい寝るわ…」

「祐希奈さん？祐～希～奈～さ～ん？」

「す～」

は、早い…仕方ないな…もう少し幻覚遊びを楽しむとするか。

そうだな…前回の後書きの補足をしておく…

ツッチーとか言ったか…あいつに対しての戦い方だが、どこぞのバカが無茶苦茶にしたから正しくして言っておくな。

まず、触手、クラゲの担当はメイデンと俺、ちなみに一緒にはいるがまだユニゾンはしてないぞ？

数の排除は二人でやった方が効率がいいからな。

触手を排除しながら、出来れば障壁の外の足を狙う。

そうして時間を稼いで、フルドライブのヴィヴィオ、祐希奈の大威力の収束砲と一点貫通に優れた矢で障壁を打つ。

多分まだ一、二枚残るだろうから、ユニゾンした俺が七式叩き込ん

で終わりだな。
まぁ、こうして書けば簡単だが、これを全て叩き込むまでが大変なんだ…
で、次だが、何で俺が自転車に乗れないのかって言うとだな…
まず、父さん、母さん共に働いていたために教えてもらう時間がなかったこと。
二人が休みの日は大抵車でどこか遊びに行ってたからな…
で、伯父さんの家に引き取られてからはしばらくは復讐しか頭になかったからな…仕方ないと言えば仕方ないんだが…
祐希奈と知り合ってからはそんな練習する暇なんて全くなくてな。
毎日遊んだり暴力振るわれたりしてたんだ…
で、小6までほったらかしにしてたんだが流石にヤバいと思ってこっそりやってる所を祐希奈に目撃されて…
絶対乗れるようになってやると猛練習しはじめたのが中1の始め…
あとは親子虐殺の事件を見て復讐心復活…
で、乗れないまま今にいたると…
なげー…ま、こんな感じだ。自業自得と言えばそれで終わりの内容だが、事実なんだ。

「ん…」

お?ヴィヴィオが起きそうだな。じゃ、本編楽しんでくれよな。
魔法少女リリカルヴィヴィオ始まり始まり~。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
「ふあ…あれ~?カナちゃんおはよ~。」

「はい。おはようございます。
眠そうですが大丈夫ですか?」

「大丈夫…大丈夫…顔洗ってくるね~。」

フラフラと歩き、扉から逸れていく…
ん?この展開はメイデンの時にあったような…
ゴン…
やっぱりな…ヴィヴィオも朝に弱かったんだな…
今まではなかったからちょっと意外だ。

「ん…今何か音がしたような…」

「あ、メイデンさんおはようございます。」

「ああ…おはよう…
先程頭を…ぶつけたのは…ヴィヴィオか…まったく…少しみてくる…」

蛇行しながら飛んでいくメイデン…
まさか…まさか!?
ゴン…
出た!!ダブル寝ぼけクラッシャー!!

「「す〜す〜」」

しかも柱に頭ぶつけたまま二人とも寝てるし…
すげえ…流石金髪天然ズの名は伊達じゃないな。
「朝から騒々しいわね…
で、カナメ…あの二人は何をやってんのよ…」

二度寝をしたせいか目が覚めている祐希奈。
至って普通に話しかけてくる。

「何でしょうか?新しいリラックス方法かもしれませんよ?」

「たく…からかわないでよ。
あんなのでリラックス出来るわけないでしょ。」

ぺち。
おお…祐希奈のツッコミが軽い…

「ふふ…わかりませんよ?やってみます?」
「はいはい。バカ言ってないであの二人起こすわよ?」

「わかりました。
では、起こしますか?」

「ちょっと待って…ふ~む…」

顎に手をあて、起こす方法…
否…朝いじりの方法を思案する祐希奈。

「ヴィヴィオの口にピーマン突っ込んで起こしてみる?」

「そ、それは余りにも可哀想過ぎる気がします。」

ヴィヴィオなら本気で泣き出しそうだな…

「じゃあメイデンをガムテープでぐるぐる巻きにしてみるとか。」

「潰されますよ?」
メイデンは只でさえ珍しいユニゾンデバイスなのだが、古代ベルカに存在した伝説の剣の管制人格ということもあってか自分の力を扱

いきれないマスターには服従しない…
つまり強制的に従わせることが不可能…
何故こんな機能がついているのかと言うと…ぶっちゃけ自分に相応しくないマスターをデバイス自身が裁けるようについているらしい。
俺はまだ完全には使いきれないため…
まぁ、簡単な話メイデンを従わせることは出来ないと言うことだ。
怒らせれば俺ごと潰される可能性大なわけだ。

「う～ん…ならどうやって起こせばいいのよ…」

「普通に起こせばいいのではないのでしょうか？」

「面白くないから却下♪」

そうか…こいつの中では面白ければ何をしてもいいわけだ。

「残念ながら面白いことは出来そうにないな。」

「あ、メイデンさん。目は覚めましたか？」

「ああ。」

「あ～あ、カナメがごちゃごちゃ言うからイタズラ出来なかったじゃない。」

「私達は祐希奈の遊び道具ではないぞ。
それにいくらなんでもあんなに時間が経っていたら起きる。」

「起きてませんよ？」

「す～す～」

未だ額を柱にぶつけ立ったまま寝るヴィヴィオがいた…

「ヴィヴィオもかなり朝に弱いらしいな…
しかし、私の方が早いとは…」

「ドングリの背比べってやつよ。
メイデンが早いのはたまたま。」
まぁ、お前が寝ぼけた時に比べれば二人の目が覚める時間はかなり早いがな…
祐希奈（二時間以上）＜メイデン（十分弱）＝ヴィヴィオてな感じだな。

「それは認めるが、すっかり熟睡しているな…
なかなか起きそうにない。」

「あ、いいこと思い付いた♪」

絶対ろくなことじゃない…ヴィヴィオの耳に近づき通常の声で話す…

「ヴィヴィオ…起きないと悪魔がくるわよ♪」
瞬間…ビクッっとヴィヴィオの体が反応…
目を覚ますヴィヴィオの瞳は既に涙を溜め込んでいた…
自分の母親でも、怖いものは怖いらしい。

「わ、私起きたよ？ママ来ないよね？」

「今から来るって♪」

「い、嫌だよ…わ、私逃げるね！！」

凄まじい加速で逃げようとするヴィヴィオのパジャマの襟を俺が掴む。

「心配しなくても来ませんよ。
全部、祐希奈さんの…う…そ…」

そこで四人の表情が固まる…

視線は祐希奈の携帯へ…

着信…恐る恐る開ける祐希奈…発信者は…高町なのは…

「も、もしもし?なのはさん?」

『今…悪魔って声が聞こえたんだけど…誰か言った?』

怖!!なのはさん怖!!

どんだけ地獄耳なんすか!?俺でさえ寒気を感じる。

ヴィヴィオに至っては部屋の隅にうずくまって震えはじめた…

「え~と…多分カナンじゃないかな~?」

うぉい!俺に死ねってか!?

『ふ~ん…ちょっとお話してくるね…』

ツー…ツー…

「はぁ…はぁ…あれがなのはさんの裏人格…喋ってるだけで寿命が縮むわね…」

「カナン君は寿命が終わりそうですが…」

言いたくないけど女装中で良かった…

「マスターは学校にこれるのだろうか…」

行くさ…

ただ、無茶苦茶眠いから三時間目からな…

「ヴィヴィオさん？もう大丈夫ですよ。」

隅で震えているヴィヴィオに声をかけるとゆっくりとヴィヴィオが振り向く…

「ほ、ほんとに？ママ…来ない？」

ぐはっ！至近距離うるうる光線…

頑張れ俺…耐えろ！

「はい。安心してください。」

「怖かったよぉ～！！」

ギュウウウ！

待て…これは…ダメだって…

2日連続の女の子からの抱擁に、理性の崩壊を感じとった俺はヴィヴィオを襲う前に自身の意識をシャットダウンした…

「あれ？カナちゃん？」

「締めてカナメを気絶させるなんて…

ヴィヴィオ…あんたって結構力あるのね。」

「ええ！？ち、違うよ！私そんなに力入れてないもん！」

「なるほど…力が強すぎて加減してもこうなるわけか…」

「本気で締められたら骨が砕けるわね…」

「もう！違うったらー！！」

「ヴィヴィオが怒った～♪逃げろ～♪」

ドタドタと階段を降りていく二人…
まったく朝から元気なことだな。
カナメさんをベッドに戻さなくては。

「アウトフレーム…起動。」

ひょいと持ち上がる華奢な体。
ヴィヴィオ、祐希奈もそうだがよくこんな体で戦っているな…
その華奢な体の少女こそ普段バカ力を存分に発揮しているカナンなのだが…

「カナメさん、楽しかったぞ。
また、遊ぼう。」

そう言い残しメイデンは部屋から去った…
それからヴィヴィオ、祐希奈は寝ているカナメに行ってきますを言った後、学校へ向かった。
カナメことカナンが目を覚ましたのは、しばらくたった後だった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ん…あれ？何でまたベッドに…ていうか今何時だ？」

一階に降り、時計を確認するととっくに昼を過ぎていた…

「今から行くと五限目だな…
面倒だし、サボるか。
にしても腹減ったな…なんかあるのか？」

居間に入るとテーブルの上には、きちんとご飯、味噌汁、焼き魚、たくあんが置いてあった。
この家の朝御飯はこういったバランスの取れたものが多い。
2日に一度くらいの割合である。ご飯、味噌汁、焼き魚を温めなおし、合掌…

「有り難くいただきます。」

カチャカチャという音だけが響く…
一人で食っててもうまいことはうまいが、やはり人数がいた方がうまく感じる…人間ってのは不思議なもんだな。
食べ終わり、食器を洗ってから出かけることにした。鍵の場所がわからなかったため、結界を張っておいたから大丈夫だろう。

「しっかし…女子ってよくこんなのはいてるな…
気になって仕方ない…」
スースーして非常に心許ない…

「着替えてくるか…」

そう思い、自身の家へと向かった。
そして、その道中…出会ってしまった…悪魔に…

「な、何でなのはさんがいるんだよ…

学校は…って今日から体育祭準備だから用無しなのか…」

落ち着け…今の格好ならバレない…
普通に通り過ぎればいいんだ…普通に普通に…
何事もなく通り過ぎ…内心ガッツポーズをした時、肩をトントンと叩かれた…

「間違えてたらごめんね？もしかして…カナメちゃんかな？」

違います！っていいたいけど言えないよな。
何故にこの格好の名前の俺を知ってるんだ？
どうせ祐希奈かヴィヴィオが言ったんだろうけどな…

「そうですが…どちら様ですか？」

「あ、私は高町なのは。ヴィヴィオの母親なんだ。」

存じておりますとも…
逆にあなた様のことを知らない人がびっくりっす。

「あ、鷹月カナメです。ヴィヴィオさんには良くしてもらってます。」

「こちらこそヴィヴィオがお世話になってます。カナンに会いに来たら思わぬ人物に会えて良かったよ。」

「ちなみにカナン君には何の用事だったんですか？」

「ん？ちょっとお話をね？」

待機状態のレイジングハートをいじりながら笑顔で答えてくれました…
良かった…マジで良かった～！！

「は、はぁ…それで、私に何かご用ですか？」

「用はないんだけどね、折角会えたんだし、お茶でもしようよ。」

「お茶…ですか？
この辺りの店というと…翠屋ですか？」

「うん♪そして私の家でもあるんだよ？」

やっぱり翠屋か…スバルさんがいないことを祈ろう…翠屋に向け歩き出す。

「そうなんですかぁ～。喫茶店がお家なんて羨ましいです。」

「そうかな？カナメちゃんは喫茶店で働いてみたいの？」

まぁ普通の女の子なら一度は働きたいんじゃないか？生憎俺は男だが…

「そうですね。少し興味はあります。」

「ふ～ん…あ、良いこと思いついた♪」

「何ですか？」

「翠屋についてからのお楽しみ～♪
あ、あれだよ。」

…何かもの凄い嫌な予感がするんだが…
気のせいか？
そうして二人は翠屋に入っていく…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
「ただいま～。」

「こんにちわ。」

「お帰り。お？可愛い子が一緒じゃないか。
名前を聞いてもいいかな？」

この人がヴィヴィオのお祖父さんだったのか…
翠屋には伯父さんと何回か来たけど直接話すのは初めてだな。
かなり若いけど、なんとか納得出来るかな…

「鷹月カナメです。よろしくお願いします。」

「礼儀正しい子だね。
俺は高町士郎よろしく。
ヴィヴィオちゃんの友達かな？」

「あ、はい。良くしてもらってます。」

「なら、サービスしないとね。
なのは、手伝ってくれ。」

「わかった。それでね？お父さん…」

士郎さんにヒソヒソと何かを伝えるなのはさん…
非常に気になる。

「そういうことなら任せなさい。」

「ありがとう♪じゃ、すぐにケーキ持ってくるからまっててね～♪」

やけに機嫌がいいな…
しばらく待つと、なのはさんとそのお姉さんと思われる人がやって来た。

「初めまして。」

「初めまして。高町桃子です。」

さすが姉妹。顔がよく似てるな。

「お母さんどうかな？」

はぁぁあ！？

「お母さん…？え…今…お母さんっていいました？」

「うん。この人は私のお母さんだよ？」

「…世の中不思議がたくさんありますね。」

内心驚愕ものだが、ヴィヴィオや祐希奈とは違い、叫んだりあから

さまに口に出したりはせず、ポーカーフェイスを貫いた。

「それで、お母さんどうかな？」

「うん。礼儀正しいし、可愛いし、合格ね♪」

「合格？何にですか？」

「ん？ウエイトレス♪喫茶店で働いてみたいんでしょ？
やらせてあげようかなって。」

ふふふ…何だろな…女装してから俺の不幸が前にも増して加速してる気がする…もうやけだ…何だってやってやるさ！！

「いいんですか！？ありがとうございます♪」

カナンの精神崩壊…
完璧に女の子を演じきる…

「もちろんよ。ケーキ食べたら早速やりましょうか。」

「はい♪わぁ…このケーキ美味しいですね～♪」

「お母さんの手作りケーキだからね。」

カナンはカナメになった時のみケーキを克服した。
これからこの精神崩壊のことの略称はＰＢＭ（パーソナリティー、ブレイク、モード）と呼ぶことにする。

「こんなに食べたら太っちゃいますね。

運動しないと…」

ＰＢＭ状態のカナンは女性の知識が豊富になるという凄まじい能力を得る。

「一生懸命働けば大丈夫だよ。」

「はい♪頑張りますね♪」

ケーキを食べ終え…制服に着替える…

翠屋の制服は、緑のバンダナ、白いエプロンドレスから伸びる緑のスカートだった。

「似合うね。じゃ、仕事の内容は桃子となのはから聞いてくれ。」

「はい。」

「可愛いよ。これなら売上もっと伸びるね。」

「ありがとうございます♪」

「仕事の内容はね、今はお昼時で中は大変だし、なかなか教えてあげられないかもしれないから、外で接客のお願いできる？」

「わかりました。」

最早、こうなったカナンには羞恥心など存在はしない…

堂々と外に出て宣伝を行う。

「喫茶翠屋によっていってください。

美味しいケーキや料理をお出ししますよ♪」
全力前開スーパー営業スマイルが振り撒かれた…
その一回で群衆の足（主に男）が翠屋へと方向を変えた…

「押さないで二列に並んで下さいね～♪」

営業スマイルは振り撒かれ続ける…
ここまで来るとベテランの領域である。
中はと言うと…

「お父さん！三番テーブル行って！」

「はいよ！」

「スペシャルセット出来たわよ～。」

「は～い！スバル！ティアナ！注文とっておいて！」

「「了解です！」」

「お兄ちゃんテーブルの掃除お願い！」

「おう！」

「お姉ちゃんは会計の方に！」

「うん！」

カナメの客寄せにより、中は戦場と化していた…
いつもなら、三人で間に合う店内が休んでいた四人も手伝うことに

なってしまう程に…
本当は外は外でかなり大変ではあるのだが…

「店員さん可愛いね。俺達と遊ぼうよ。」

「ありがとうございます。…でも、残念ながら忙しいのでごめんなさい。」

「ちょっとだけ…」

ドゴン…

「へ？」

近くにある電柱をカナメが殴りヒビを入れる…

「何かご用ですか？」

顔は笑顔…
しかし、底冷えするような寒さを感じさせる…
そんな絶対零度の微笑みが向けられた。

「い、いや…頑張って。」

「はい♪ごゆっくり。」

こんな感じであしらいながら順調に接客を続けていた…
ちなみに翠屋が混み出すのは今この時間と、学生がやってくる時間帯がある。しかし、なのは達の体力は前半戦だけでほとんど尽きてしまった…

「大丈夫ですか？
後半は私も中で頑張りますから。」

接客を終えても未だ元気なカナメ…
当たり前である。中身は底なし体力のカナンなのだから。

「カナメちゃんを外に出したのは間違いだったかもね…」

「あらあら、なのはったらカナメちゃんも頑張ってくれたのに失礼よ？」

「いえ、お客様が礼儀正しい人ばかりでしたから楽をさせてもらいました。」

真実は恐怖で丸め込んだだけだが…

「う～すっかりなりきっちゃってるよ…」

「何の話よ…」

今はいないテーブルに伏してスバルのティアナが会話をかわす…
スバルの予測では、もっと恥ずかしがるカナンを見れる予定だった。

「はは。カナメちゃんに接客をしてもらうと大儲けできるな。
また暇な時にでも頼めるかい？」

「それが暇がしばらくはないですから、かなり後になるかもしれません…」

「いつでもいいよ。待ってるからね。」

そうして話をしていると、後半戦学生の第一のお客が登場…

「あれ？カナちゃん？」

「は？ホントだ…カナメがいる…」

「ケーキを買う必要がなくなったな。」

知った声…視線を向けると
ヴィヴィオ、祐希奈、メイデンの三人だった。

「「「閃いた！！！この三人を店員にすればいいんだ！！！」」」

兄弟＋スバルが見事にハモる…
なのは、ティアナはうわ～みたいな目で三人を見ていた…

「「「さぁ、着替えよっか？とにかく着替えよっか？さっさと着替えよっか？」」」

「「「え？え？えええええ！？」」」

ずいずいと背中を押され、しばらく後には未だはてなを浮かべているヴィヴィオとアウトフレームメイデン、ふて腐れた祐希奈がいた。

「はは。いいね。三人共似合うよ。」

メイデンの事は新しい友達としか見ていない士郎。

「ふふ…じゃあ後半戦開始ね♪」

「カナメとヴィヴィオと祐希奈とメイデンは外で一度だけ宣伝してくれる？」

何で一度？と四人は首を傾げる。

「カナメ一人であり得ないくらいお客が来るのにあんた達が加わったら対処しきれないからよ。」

「必ず一回だよ？一回宣伝したら走って中に入ってね？」

ティアナ、スバルに念を押される。

「では、行きましょうか。」

「う、うん。出来るかな？」

「まぁ、あんたなら大丈夫よ。
何で私がこんな目に…」

「さぁな…成り行きというやつだ。」

四人が店の外に出るだけで群衆の顔がこちらに向いた…

「せ～の♪」

やたらノリノリのカナメ…

「「「「ようこそ！喫茶翠屋へ♪」」」」

カナメ、ヴィヴィオは完璧な営業スマイル、祐希奈はやや固め、メイデンはほぼ無表情…いや赤くなりながら言った。
「二列に並んでお入りください♪
では、中でお待ちしておりますね♪」

ダッ！
これが止めとなり、全ての群衆が翠屋に向かい始めた。

「お客様測定不能の人数ご案内です♪」

「あはは。とにかくたくさんだから頑張らなきゃ！」

「たく…仕方ないから私も手伝うわよ。」

「出来る限り努力はしてみる。」

それから後は滝のように来た客足は収まらず、常にフル稼働状態だった…
厨房には、士郎、桃子、祐希奈、なのは、美由紀の五人。
会計はメイデン、フェアリー、アシェルのデバイス陣が処理。
ホールは底なし体力のカナメ、ヴィヴィオが入ったことにより、なんとか持ちこたえていた。

「カナメ！ケーキとパフェ出来たから持っていきなさい！」

「了解です♪」

「こっちも出来たよ！ヴィヴィオ！」

「は～い♪」

「スバルさん。お願いしますね！」

「任せて！行くよマッハキャリバー！」

スバルはしまいにはデバイスも使い始めていた。

「体力派じゃないのにきっついわね～。」

「ティアナちゃん。ファイトですよ♪」

「お前は男なんだ。負けるな。」

「はぁ…頑張るよ。」

「こっちが３６２０円だな…こっちは…」

『１９４０円になりますね。』

『こちらの方は２６７０円になります』

「フェアリー、アシェルありがとう。助かるぞ。」

デバイス陣の活躍により、高速で値段が処理されていき流れるように客が出ていく…

そうして時間がたち、戦場から解放される。

「いや～凄かったねえ～１日で半年分の売上だよ。」

「はい。これが四人のバイト料よ。」

四人に渡される封筒の中にはカナメには福沢〇吉が三枚、三人は二枚もあった…

「こんなに…悪いですよ。」

「今日は本当に頑張ってくれたからね。
かなり余裕が出来たから大奮発だ。」

「なのはパパ…でも…」

「じゃあ、また来てくれるっていう契約金ってことでどうかな?」

「なるほど…なら私はもらっておくわね。
何だかんだで結構楽しかったし。」

「そうだな。なら私もそうする。」

「ありがとうございます。」

「今度はもっと頑張るよ!」

今日の頑張りで半年ならもっと頑張れば一年に到達するだろう…

「じゃ、カナメちゃんもこれからもヴィヴィオ達と仲良くね?」

「はい。それは心配いりませんので…ん?」

あれ…もう夕方か?
というか翠屋に行ったあとから記憶がないんだが…

マジかよ…この年で記憶障害か？

「カナちゃんどうしたの？」

「い、いえ、何でもないです。
それではそろそろ帰らせていただきます。」

「また、バイトに来てくれよ。」

「待ってるわね～。」

「カナちゃんバイバイ。またね。」

「私達はしばらく出掛けるからいなくなるけど帰って来たらまた遊ぶわよ？」

「元気でな。」

「は、はい。」

う～む…どうなってんだ？

「じゃ、私達も帰ろっか。」

「バイバイ高町一家♪」

「私達は高町一家じゃないんだけどな～。」

「あんたは誰とでも家族みたいなもんでしょうが…」

「ヴィヴィオと祐希奈も喧嘩しちゃダメだよ～？」

「大丈夫～！祐希ちゃん優しいから～。」

「はいはい…そういうことを本人の隣で言わないでよ。」

「ところで今日はマスターを見なかったが…」

「カナン君もしかしてママに…」

「有り得るわね…大丈夫かしら？」

「ま、マスターだからきっと生きてはいると思うぞ？…多分。」

内心不安になりつつもそれぞれの家へと向かう。

この後カナンはＰＢＭを使った反動で、意識が朦朧とする中でを何とか繋ぎ、伯父さんに見つからないように家に入り、着替え、服を隠したまでは良かったが、そこで体力が尽き、貧血のように倒れ、伯父さんに心配をかけたという…

第二十四話　ＰＢＭ（後書き）

珍しく休みをもらえたので一気に書き上げました。　なるべく早くに日常編を終わらせるために執筆速度を上げなければ！

次回からはカナメではなくカナンが復活する予定です。ではまた次回まで。

疑問、質問答えます（通常版）（前書き）

先に二件こたえましたが、また、新たに三件届いたため、急遽執筆しました。

本編はまた近日中には更新したいと思います。

疑問、質問答えます（通常版）

ヴィヴィオ
「連日投稿となりました～♪」
祐希奈
「しっかし、この作者大丈夫なのかしら。」
メイデン
「確かにな…今年は受験だと言うのに勉強より執筆を優先しているからな…」
カナン
「休みを利用して遅れがちな海鳴温泉とＬＶ（リリカルヴィヴィオ）の質問を解答しないといけないらしいからな。」
カナメ
「海鳴温泉ですか～私も行きたかったです。」
カナン
「いや、お前が来たら俺出れないから無理だろ…」
カナメ
「じゃあ出ないでください♪」
カナン
「く…何でこんなキャラに…」
ヴィヴィオ
「何でカナちゃんが来るとカナン君が出られないの？」
カナン・カナメ
「その辺はスルーでお願いします。」
祐希奈
「さすが従妹…息ピッタリね。」
メイデン
「従妹と言うよりは家族に近いかもしれないな。」

カナン（双子よりそっくりな家族になれるな…）
カナメ
「カナン君と家族ですか～。
楽しそうですね♪
いろいろと遊べて。」
カナン
「ひどっ！！」
祐希奈
「どうせならシオン達も家族にしちゃえば？
家族構成はこれね（笑）」

母…ユウオ、父…トウヤ、長女…アリサ、次女…すずか、三女…カナメ、四女…ヴィヴィオ、五女…メイデン
長男…タカト
犬…カナン、シオン

カナン
「待てやこらあ！！誰が犬じゃあ！！」
ヴィヴィオ
「二人がペットなら私喜んでお世話するね～♪」
メイデン
「私も手伝うぞ。」
カナメ
「では、私はしつけ役ということで。」
カナン
「頼むからまず人間にしてくれ…」
祐希奈
「あんた達はご主人の言うことを聞いてればいいのよ♪」
カナン
「お前には噛みついてやる…」

祐希奈
「そんなことしたらカナメに変わって最終兵器のタカトにしつけてもらうわよ？」
カナン
「あの人は何でも出来そうだからな…」
メイデン
「パーフェクトブラウニーらしいからな。」
ヴィヴィオ
「あ、そろそろ質問に答えないと…」
祐希奈
「え～。家族構成Ｓｉｌｖｅｒ　ｆｒｉｅｎｄバージョンも考えたのよ？」
カナン
「その知識を勉強に回せ…」
祐希奈
「勉強なんて適当で何とかなるわよ。現に作者も勉強してなくても平均下回ってないし。」
カナメ
「それは、作者の学校のレベルが低いだけなのでは？」
祐希奈
「まぁ、それもあるかもだけど…」
ヴィヴィオ
「というかそれしかないね～。」
メイデン
「また脱線しているぞ…話を戻すが、質問コーナーの時期がＥＸと被っているのは何故だ？」
ヴィヴィオ
「それの理由は後からわかるよ。では、質問コーナー♪」
カナン

「で、今回の質問は三件な訳だが…一件は長くなりそうだから最後な。」
祐希奈
「じゃ、最初の質問は…『本当に今更の質問なのですが、ヴィヴィオのセカンドモードの形態が僕には未だに分かりにくいです。分かりやすく教えてもらえませんか？』
あ～あれね。確かに書きづらいフォームではあるわね。」
ヴィヴィオ
「う～ん…形状としては両端からザンバーフォームの緑の魔力刃が出ているっていう設定なんだけど…分かりにくいかな？」
カナン
「何か方法は…」
カナメ
「こういう時のネタじゃないですか♪」
メイデン
「一部の人…というかガン○ムを見ていない人には分かりにくいかもしれないが…」
祐希奈
「とりあえずツッチー召喚♪」
ツッチー
「Ｇａａａ！！」
カナメ
「また随分と小さくなりましたね…」
カナン
「細切れにしてやったからな。」
メイデン
「ちなみにあるのは上半身のみ再生した。暴れられると厄介なのでな。」
祐希奈
「じゃ、ヴィヴィオどうぞ～♪」

ヴィヴィオ
「恥ずかしいけど…えと…」
台本を読むヴィヴィオ…
ヴィヴィオ
「それでも！守りたい世界があるんだー！！！」
ツッチー
「Ｇａａａａａ！！！」
ちゅどーん…
ヴィヴィオ
「終わり。恥ずかしかった～…」
祐希奈
「お疲れ。あんな感じのビー○サーベルを思い浮かべてね♪」
カナン
「このネタ分かる人いるのか？」
カナメ
「でも他に分かりやすいネタがないですよ？」
メイデン
「作者が剣の形状の名前を調べればいい話だと思うのだが…」
祐希奈
「ま、そこまで分かりやすさを気にしてる人はまた言ってきてね。
また何かネタを考えるわ。」
カナン
「いやいや…何もネタで答えなくてもいいだろ…」
祐希奈
「ネタはお寿司の命なのよ！？」
カナン
「意味わからんちゅーに！！」
祐希奈
「お寿司にネタがなかったらただのシャリしかないじゃない！！」
カナン

「もうええわい！！」
カナメ
「それは美味しくないですね～。
そんなお寿司はいりません。」
カナン
「お前に食べたいかとか聞いとらん！！」
メイデン
「では私か？」
カナン
「何でそうなるんだよ！」
ヴィヴィオ
「え？まさか私なのかな？」
カナン
「誰にも聞いてないっつーの！！！」
祐希奈
「さて次は～」
カナン
「あっさり流すな！！」
祐希奈
「黙れ犬が！！」
バキャッ！
カナン
「がはっ！」
カナメ
「久しぶりに見た気がします。」
祐希奈
「最近は遠慮してるからね。」
カナン
「どこが…」
シュドン！

カナン
「が…」
祐希奈
「黙ってなさいっていったでしょ？」
ヴィヴィオ
「えっと…このままだとカナン君が死んじゃいそうなので、次に移りたいと思います。」
メイデン
「質問2だな。『シオンVSカナン見ました♪どっちも強いですね。カナンとしては何処で決めたかったですか？』
マスター個人に対しての質問だ任せるぞ。」
カナン
「やっぱあのシールドぶち破った時かな。
多少無理してでも雨雲呼んどけば、雷落として勝てたかもしれないからな。」
祐希奈
「シオンも底なしだから雷落としてもあんまり変わんなかったかもしれないわよ？」
カナメ
「決められなかった場合魔力をさらに消費してあの後の砲撃勝負に負けてますね。」
カナン
「迷い所だったのは確かなんだが…」
ヴィヴィオ
「同じ質問をEXに持っていこうか。」
メイデン
「いいかもしれない。
アリサさん達も質問待ちをしていたし…」
カナメ
「こっちの質問を向こうにですか？とことん無茶苦茶ですね。」

祐希奈
「じゃ、リリカルヴィヴィオからの質問で、シオンは何処で決めたかったのかってことで、シオン考えときなさいよ～？」
カナン
「何処に向かって言ってんだよ…」
祐希奈
「気にしない気にしない♪」
ヴィヴィオ
「さてと…最後の質問は私達のオリジナル魔法ついてです。」
カナメ
「ＥＸで燃える戦いをしてもらいたいから概要説明をというメッセージが多数届きました。」
祐希奈
「長いから覚悟しなさいよ？」
メイデン
「では、概要説明の始まりだ。」

高町ヴィヴィオ
シューティングモード詳細
アクセル・ランサー
威力…Ｂ－
速度…ＡＡ

アクセルシューターの機動力とフォトンランサーの威力のいいとこ合わせな技。それを可能にしているのは分かりにくいがアクセルランサーの周りには風の力が加わっており、フォトンランサーの直角軌道ではなくアクセルシューターの素早い方向転換を可能にしている。

通常シューティングモードはなのはと同じ技が使える。

サンダースマッシャー、トライデントスマッシャーに関しては、変換資質がないだけでほぼ同じ。

フルドライブ時
隠されたリボルバー式カートリッジシステムの起動、聖王の鎧の力で自動的にヴァリアブル状態に変化。

クロスファイアーバースト
威力…ＡＡ＋
速度…Ａ＋

ティアナのクロスファイアーシュートの発展技。
スフィアからディバインバスターを放てる。
もちろんスフィアは操作可能。
ただし、スフィア一発につきカートリッジ一発のため、最大１２個までしか生成不能。

ディストラクションブレイカー

威力…ＳＳＳ
速度…ＡＡ＋

ヴィヴィオ最強の収束砲撃。カートリッジ全てを使用し、発動させる。
なのはと違うところは、魔力コーティングがされていること、砲撃の巨大さ、着弾後の爆発の大きさなど威力だけならば、なのはのスターライトブレイカーを越える。
まさに破滅の光
ブラスタースターライトブレイカーに相当する威力となる。

セカンドモード詳細
ヴィヴィオは主に真ソニックフォームでこれを起動する。

ウインドスラッシャー

威力…ＡＡ
速度…Ａ

その名の通り、風を纏い対象を斬る技。
威力はカナンの暗夜一閃を越える。
斬撃速度は通常はＡだが、真ソニックフォームの場合オーバーＳまではねあがる。
この技には特徴があり、つばぜり合いには持っていきにくい。
なったとしても風で押されるため力が弱いヴィヴィオでも勝てる場合も多々ある。

ソニックエアブラスト

威力…ＡＡＡ
速度…ＡＡＡ

フェイトのジェットザンバーを参考にヴィヴィオが考えた遠距離斬撃。
風を収束し、巨大なカマイタチとして放つ技。
実は何気にヴィヴィオのお気に入りの技。

ウインドザンバーブレイカー

威力…Ｓ
速度…ＡＡ

プラズマザンバーブレイカーとほぼ同じ技。
利点としては刀身に集めるため動きながらでも魔力の収束がやりやすいことだが、手数を増やした今では、あまり使われることがない。

セカンドフルドライブ時

ウインドインパクト

威力…Ａ
速度…Ｓ

風を圧縮し、腕から風弾として放つ技。
威力はディバインバスターより低いが、中～ほぼ零距離まで少ない時間で放てるため手数は砲撃より遥かに多い。

ハイウインドインパクト

威力…ＡＡ＋
速度…Ｓ＋

ウインドインパクトの強化バージョン。
カートリッジを使いさらに圧縮した風弾をぶつける。
ヴィヴィオはこの技をほとんど零距離で拳撃と共に叩き込むため、数値以上の破壊力がある。

ハイウインドインパクトＥＸ

威力…ＡＡＡ＋
速度…ＳＳ

さらに強化したもの。
威力、速度共にかなりのものだが、収束砲撃より圧倒的に早く放てるため攻撃に組み合わせることが可能。

リボルバーストーム

威力…Ｓ＋
速度…ＡＡ

スバルのリボルバーナックルをヒントに発展させた技圧縮ではなく腕に螺旋に纏うことにより、竜巻を放てるようになった。
相手の遠距離攻撃を巻き込んでカウンターで返すことが可能となった。

サードモード詳細

聖王の力の一部を使った応用。

翔舞天砕牙

威力…Ｓ－
速度…Ａ＋

クローモードで使った唯一の技、通常モードながら圧倒的な破壊力を誇る反面、サードモードの魔力消費はフルドライブより悪いとなかなか使い所が難しい。

ホーリーレイザー

威力…ＳＳ

速度…Ｓ＋

ウイングモードで使った技、同時に起動したセカンドモードの刃を急降下と共に叩きつける。
こちらは同時起動ということもあり、さらに燃費が悪くなっている。
なお、ウイングモードは慣性の法則を完全に無視した直角軌道で動くことが出来る。

広域魔法
フロストオーバーストライク
威力…ＡＡＡ
速度…計測不能

威力も高く範囲も申し分ないが、魔力消費が激しい。ヴィヴィオは詠唱をするより手数を増やして攻めるほうが効率的と考え、使うことはほとんどない。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
一之瀬祐希奈

ブレードエクスプロージョン

威力…ＡＡ＋
速度…Ｂ

祐希奈のかなりお気に入りの技。
突きと共にカートリッジをロード。
ガードされたとしても先端が爆発するため、ガード不能。
攻撃の他にも爆発の衝撃で離脱に使ったりも出来る。

炎王烈破爆砕拳
威力…ＡＡＡ
速度…Ｃ

拳に炎を纏い相手を殴り付ける技。
祐希奈の力を存分に生かすことが出来る。
また、個人的にも殴り飛ばすとすっきりするため、使用頻度が高い。
四肢に纏うことも出来、体術と共に用いることも出来る。
なお、最初は炎王をつけていたが、既に炎王とかどうでもいいかなと思い始め、烈破爆砕拳になっている。
ストームワルツ
威力…Ａ
速度…Ｂ＋

ミドルレンジが苦手だった祐希奈はこれを使い離脱が多かったが、強くなり始めてからは、とにかく突撃という荒業に出たため、もう使用することはないかもしれない。

烈破紅蓮爆砕撃
威力…Ｓ＋
速度…Ａ

スバルのディバインバスターを参考に考えた。前方に魔法陣を展開し、それを殴ると同時に紅蓮の奔流が放たれるという技。
祐希奈の性格も相まって、至近距離で放たれることが多いため、かなりの威力を誇る。

祐希奈の弓、詳細
絶対必中のブルーゲイル、大威力のレイザーフォーテル
フルドライブ時のクリムゾンアローが存在する。

スパイラルフレア

威力…ＡＡ＋
速度…Ｓ

超高熱の矢が放たれ、着弾と同時に爆発する。
カートリッジ二発で使用することが多い。
クリムゾンアローになるとインフェルノバスターとなり、威力、速度共に一段階上がる。

ジャッジメントアロー

威力…Ｓ＋
速度…Ｓ＋

レイザーフォーテルで放てる矢。
貫通力はスターライトブレイカーを抜いており、ＳＳ＋はないと止めることは出来ない。

ヴォルカニックアロー

威力…ＳＳ＋
速度…ＳＳ＋

祐希奈最強の炎の矢。
纏う火炎は触れるもの全てを燃やし尽くす。
ヴィヴィオのディストラクションブレイカー、カナンのエクスカリバーに並ぶ超高威力の矢である。

その他…

シューティングスターブレイカー

威力…ＳＳＳ＋
速度…ＳＳＳ

ヴィヴィオ、祐希奈の最強合体魔法。
魔力の収束をヴィヴィオが行い、圧縮を祐希奈が担当。
巨大な火矢と化し対象に撃ち込む。
威力はカナンのエクスカリバーの最大出力と同じだが、貫通力が極限まで引き上げられており、進路を阻めるものは存在しない。
現在この作品中では最強の技である。

ヴィヴィオ
「ながーい…」
祐希奈
「まったくね…」
カナン
「作者がために貯めたツケが今来たな…」
メイデン
「まったく…困ったものだ…」
カナメ
「ここまで呼んでくださった読者の皆さんありがとうございました。」
ヴィヴィオ
「かなり暇だったとは思いますが、現在の私達の全てです。」
祐希奈
「ちなみにまだまだ増える予定よ。」
メイデン
「毎回たくさんの質問ありがとう。」
カナン

「何だかんだで結構楽しんでるからこれからも遠慮なく送ってくれ。」
ヴィヴィオ
「あ、でもネタバレ質問は答えられないかもしれないから、そこだけは注意してね？」
カナメ
「作者はメッセージが来るだけでテンションがかなり上がります。」
祐希奈
「まぁ分かりやすく言うと、ＭＡＸ１０でいつもは2感想やメッセージが来ると8~9で評価が来ると１０って感じね♪」
カナン
「えらい急だな…」
メイデン
「授業中は－２０くらいだな。」
ヴィヴィオ
「それは…大丈夫なのかな？」
祐希奈
「ま、作者がどうなろうと私達には関係ないけどね。」
カナン
「いや、あるだろ…」
カナメ
「大丈夫ですよ♪きっと誰かがこの性格のキャラを書いてくれます♪」
カナン
「それ俺らじゃないって…」
祐希奈
「んじゃ、次は海鳴かＥＸかになるわね。」
ヴィヴィオ
「多分…としか言えないけどね。」
メイデン

「とにかくこれで一旦さよならだ。」

カナメ

「次は体育祭編…かも…」

一同

「適当だな～…」

第二十五話　体育祭（前書き）

うむう…いつものやりとげた感がありません…
ことはあんまり面白くないかもです。
ば幸いです。
読んで下されという

第二十五話　体育祭

アリサ道場出演前…

祐希奈
「やっぱりここは高機動で…」

ヴィヴィオ
「でも、それだと失敗した時のリスクが…」

祐希奈
「天破紅蓮は私が止めるからヴィヴィオは回り込んで…」

ヴィヴィオ
「う～ん…タカト相手に決められる技あるかな…」

ヴィヴィオ・祐希奈
「う～～～～～！」

カナン
「必死だな。」

カナメ
「女の子にとってあの体重増加は深刻な問題ですからね。」メイデン
「というか…味自体に問題が出来ると思うのだが…」

カナメ
「タカトさんだし味は考慮してあるだろ。
あの二人はちょっと軽すぎるし、むしろ、少し体重を増やした方が…」

カナメ
「カナン君。もう少しデリカシーと言うものを学びましょうか…」

メイデン
「ああ。あの二人は太って誰かさんに嫌われたくないから必死になっているのだぞ？」

カナン

「何!?あいつら好きな奴が出来たのか!?
…ちょっと連れてこい。どんな奴か見てやる…」
カナメ・メイデン
「・・・」
カナン
「何で肩をすくめてるんだ?」
カナメ
「いえ、シオン君もそうでしたが、困ったものだなと思いまして。」
メイデン
「やれやれだな。」
カナン
「さっぱりわからん…」
カナメ
(ヴィヴィオさんは好きという気持ちがよくわかってないみたいですが、カナン君は自分の気持ちに気づいているのですか?)
メイデン
(恐らくは…ただ…な?)
カナメ
(ヘタレですからね~。)
カナメ・メイデン
(はぁ~~~~~…)
カナン
「な、何で二人して落ち込んでるのかわからないんだが?」
カナメ
「とりあえず、今後に期待していますよ。」
メイデン
「遅れをとって、あうあうなどと言わないようにな。
とにかく先手必勝だ。」
カナン
「あ、ああ。」

カナメ
「では、本日の質問コーナー♪」

カナン
「おい…お前が言うのか？」
カナメ
「だってあの二人はあれですよ？」
ヴィヴィオ
「合体収束魔法使えないかな？」
祐希奈
「難しいわね…合流出来るかわかんないわよ？」
ヴィヴィオ
「う～ん…やっぱり時間稼ぎに何かしないとね。」
祐希奈
「タカトを止めるのは当てるより難しいんじゃない？」
ヴィヴィオ・祐希奈
「む～～～。」
カナン
「今回あいつらこのコーナーほったらかしか？」
メイデン
「まぁ、仕方ないと言えば仕方ないな。」
カナメ
「私でもなりますよ。
あのケーキはちょっと…ね？」
カナン
（本当にこいつは俺なのか？俺が可愛らしく首を傾げてこちらに聞いているのか？
違うと信じたい…）
メイデン
「マスター？目が遠いぞ？」

カナン
「何でもない…
で？今回の質問は？」
カナメ
「え～とですね。ＰＢＭにはどういう時になるんですか？」
カナン
「は？意味がわからないんだが…ＰＢＭ？新しい魔法か？」
メイデン
「さぁな？質問する所を間違えたのではないか？」
カナメ
「いえ、合ってますよ～。
ＰＢＭはカナン君が精神的に、または生命の危機を感じ取った時、
脳裏に種の弾けるイメージが浮かび、発動します♪」
カナン
「読者の皆さん…このバカの言ってることは無視してください。」
カナメ
「あなた程のおバカさんじゃありませんよ♪」
カナン
「認めよう…俺はバカだ…
だがなあ！！お前もバカということを認めろ！！！」
カナメ
「いいですよ？」
カナン
「よし。お前も公認のバカだからな？」
カナメ
（自分で自分をバカにして楽しいですか？）
カナン
「がはっ！」
メイデン
「脱線し過ぎだ…次に移るぞ？」

カナメ
「はい♪」
カナン
「バカ…」
メイデン
「あまりプロテクションを使わないカナンですが、何か理由でもあるのですか？」
カナン
「バカ…」
カナメ
「いつまで落ち込んでるんですか？
カナン君に質問ですよ？」
カナン
「へ？お、俺か？」
メイデン
「プロテクションの使用頻度が低いのはなぜかと訪ねられている。」
カナン
「あ～何でって…面倒だからとしか言えない。」
カナメ
「まぁ、カナンには絶空がありますし、仮に攻撃を受けてもメイデンさんの鎧もありますから。」
メイデン
「そもそもマスターには空間突破があるからな。
当てること自体が難しい…」
カナン
「第一、俺は祐希奈やヴィヴィオみたいにプロテクションの訓練は受けてないから最小の大きさで展開とかは苦手だからな。
ぶっちゃけプロテクション張るのが苦手だから。」
メイデン
「つまり、マスターはプロテクションを使わないのではなく、使え

ないんだ。」
カナメ
「プロテクションを使うと弱くなるという変な人です。」
カナン
「うるせーよ…」
メイデン
「では、そろそろ時間だな。」
カナン
「お前ら～締めもいいのか～？」
ヴィヴィオ
「タカトのアビリティスキルや技も再確認した方がいいよね。」
祐希奈
「そうね。何処かに穴があるかもしれないし…」
カナメ
「聞こえてませんね…」
メイデン
「仕方ない。私達で言おう。」
カナン
「だな。魔法少女リリカルヴィヴィオ」
カナン・カナメ・メイデン
「始まります。」
アリサ
「二人共～そろそろやるわよ～？」
ヴィヴィオ・祐希奈
「…よし！！」
カナン
「は！？」
アリサ
「ほら、あんた達もさっさと動く！」
メイデン

「ア、アリサさん？」
シオン
「ほら、行くぞ。」
カナメ
「え？ええ！？ま、まだ本編が…」
シュン…
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「カナン君？本当に大丈夫なのかい？」

「大丈夫大丈夫。昨日は何か疲れてただけだし、行けるよ。」

伯父さんが心配するのも無理はない。
何せ昨日は着替えてからついさっきまでずっと寝てたからな。
とりあえず風呂と飯を済ませ、学校に行くことにした。

「今日は前日準備の仕上げだから大変だろうし、無理はしちゃいけないよ？」

「善処はするさ。」

…多分。

「行ってくる。」

「頑張ってきなさい。」

扉の外に出ると別世界だった…
今年は、あまり暑くならないかと思ったが、そんなに甘くはなかっか。

「暑…何時もよりかなり気温高い気がする…」

ここ最近は、朝から暑いことは少なかったが、今日は朝から太陽も絶好調らしい。

「で、人が暑い思いをしてるなか、お前は楽をするのな。」

視線の先…待機フォルムのメイデンが腰についていた。

「ふああ…仕方ないだろう…眠いんだ…」

「たく。」

どうやら、俺は意識が無い間翠屋でヴィヴィオ達と働いていたらしい。

で、メイデンは慣れないことをしたせいか疲労が凄いのか、人形にもなれないほど疲れはてていると言うわけだ。

「回復したらちゃんとヴィヴィオ達にも挨拶しろよ?」

「ああ…わかっている…ではな…」

「へいへい。」

太陽が照りつけるコンクリート燃えるような暑さのなか、カナンは学校へと向かった。

さて、ヴィヴィオ達は…

「いいわね～♪
夏サイコー♪
一年中夏でも構わないわ♪」

夏大好き少女である、やたらハイテンションな祐希奈と

「暑いね～
私は一年中、夏は遠慮したいかな。」

特に好きでもない普通のテンションのヴィヴィオ。

「何で？夏はいいわよ～♪お祭りあるし、花火もあるし、海で泳げるし♪
夏休みなんてパラダイスね♪」

「花火綺麗だよね～。
前になのはママとフェイトママが買ってきてくれて一緒にやったんだ。」

「小さな花火じゃなくて、もっと大きいのもあるのよ？」

「ほんと！？見たいなぁ。」

「見れるって。今から楽しみね～♪
ヴィヴィオも夏大好きにしてあげるわ♪」

「うん！！…あ、でも事件が…」

「私に任せなさいって。もう既に計画済みなのよ♪」

「わぁ～！楽しみにしてるね♪」

「オッケー♪最高の夏にしてあげるからね。」

夏の楽しさについて語っている内に学校についてしまった。

「さて、今日で前日準備ラストね。
頑張りますか！」

「お～！って…あれ？テントが全部組み立てられてるよ？」

運動場には昨日運んだ部品があったのだが、それらがすべて組み立てられている。
それどころか、垂れ幕の追加、草も綺麗にむしられている。

「ねえ…あの真ん中の二人ってさ…カナンとフェイトさん？」

「…だね。」

カナン君がグラウンドの真ん中で汗だくになりながら倒れている…
何で？

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
時は遡り、ヴィヴィオ達が到着する一時間ほど前…
何故カナンはこんなに早く来たのかと言うと、昨日の埋め合わせをするためである。

「お～。昨日俺がいない間に結構進んでたんだな。」

見渡すグラウンドにはテントの部品がたくさんあった。
本部だけではなく、保護者席の方にまであるため、ざっとみて５０以上はあるだろう。
その時、背後から声がした…

「そうだよ…君が昨日来ない間に、ヴィヴィオや祐希奈、他の生徒達も頑張ってくれたんだ。」

何故…何故…何故…フェイトさんがいるんだあああああああああああ！！！！！

「お、おはようご…」

「働こっか？」

挨拶すら打ちきられ、笑顔で一言…
やっぱりな…

「俺はな…」

「とりあえずテント全部を３０分以内に組み立てようか？もちろん休んだらお仕置きね？」

「全部！？いくら何でも…」

「フォトンランサー…」

問答無用で展開される光の槍…
その全てが俺に向く…

「ファイア！！」

「でえええええ！！！」

走った…ひたすら走った…空間突破すら使い、己が持つ最速の速さでテントを組み立てた。
一瞬でも無駄な動きがあれば、即座にフォトンランサーの槍が向かって来る…
あの笑顔からして…殺傷設定。
全てが組み立て終わるとフェイトさんがやって来た。

「３０分で組み立てましたよ…これでいいっすか？」

「お疲れ様。さて、次に行こうか？」

「つ、次！？
もう終わりじゃないんすか！？」

「思い出作りの体育祭だよ？
どうせならもっと豪華にしなきゃ。
あそこに垂れ幕準備したから屋上からお願いするね？」

指の先には大量の垂れ幕…
相当な重量になりそうなんだが…

「７０キロくらいだし、大丈夫だよね。
１５分で終わらせようか。」

「１５ぉぉ！？無理！？いくら何でも…」

「さっさとやろうか？」

またか…またなのか…？

「フォトンランサー！！」

「のわあああああ！腕がああああぁぁぁ！」

「ファイア！！」

「ぎゃあああああああ！！！」

７０キロの垂れ幕を担ぎ、屋上から降ろす…

１日に二回も限界を越えるとはな…

だが…やったぜ…

「お疲れ様。次、行こうか？」

今…何か死刑宣告がくだされたような気がするんだが。気のせいだよな！？

「…マジッスか？」

「もちろん♪」

天使みたいな笑顔で言われました…

世の中の男性が見たらそれはもう美しい笑顔ですよ…ただ、ただな…俺には悪魔…いや、まだぬるい…

フェイトさんはフェイトさんはあ！！閻魔だあああああああああああ

あ！！！

「次は草むしり、１５分で出来るよね？」

「無理っす！！」

「出来るよね？」

無理…そう言った瞬間バルディッシュザンバーモード起動…
選択肢ねえじゃねえか！！

「ぢぐじぉぉぉぉーーーーー！！！！！」

度重なる地獄に体が悲鳴をあげるなか、空間突破を使いまくり、グラウンドの草という草をむしりまくった…
それが終わったころ…俺は遂に意識を失った。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
そして、ようやく今に至る。

「フェイトママ～。何してるの？」

「あ、ヴィヴィオ。カナンがね。
体育祭盛り上げたいからって頑張ってくれたんだ。」

「カナンが？倒れるまでやらなくてもいいと思うんだけど。」

「カナン君こんなに頑張ってくれたんだ。
カナン君、ありがとう。」

ヴィヴィオは持っていた鞄からタオルを取りだし、カナンの顔を丁寧に拭いていく。

「ヴィヴィオ…カナンなんかに勿体無いよ！」

フェイトにしてみれば、宝石をドブ川に捨てるのと同じであった。

「勿体無い？ただのタオルだよ？」

「フェイトさんにはフェイトさんの理由があるのよ♪」

「あ…ああ…」

フェイトはカナンの汗を拭き終わるまで終始、手を宙で泳がせていた。

その後、カナンの活躍により、準備がなくなった生徒達は、明日の体育祭に向け、練習を始める。

カナンが目を冷まさないため、練習の邪魔にならないようヴィヴィオと祐希奈は木陰に移動しようとした。

「祐希奈～！ヴィヴィオちゃ～ん！リレーの練習したいからどっちか来てくれないかな～？」

美鈴から呼び出しがかかる。

足の速いヴィヴィオ、祐希奈、カナンの三人に合わせてリードをしないといけないため、練習が必要とのことだった。

「じゃあ、私が行ってくるね。

祐希ちゃんはカナン君のことよろしくね～。」

「あ、ちょっと…行っちゃった…もう。」

カナンを引きずり、木陰に移動

「今日だけ…特別なんだからね？」

カナンの頭を太股にのせ、自身は木にもたれ掛かる。

「ふぅ…カナン…お疲れ様。
やっぱりカナンは優しいね。」

話かけるが、当然返答はない。
穏やかに眠るカナン。
カナンは不思議だ。
情けなく見える時もあり、カッコ良く見える時もある。
そして今は可愛く見える。
そうして祐希奈はいつの間にか、カナンの頭を優しく撫でていた。

「ん…」

ゆっくりとカナンの目蓋が開き祐希奈の顔を捉える。

「起きた？よく寝てたね。疲れは取れた？」

「へ？へ？ゆ、祐希奈？」

柔らかい…何で祐希奈の膝の上！？
それに口調が…ていうか目線が優しい！？
何故に！？俺なんかしたのか！？

「カナンが頑張ってくれたんでしょ？
本当にお疲れ様。
おかげで皆助かったって。まだ疲れてる？
ならもうちょっと寝てても構わないから。
私のことなら気にしなくていいし。」

ヤバい…確実にヤバい…この口調は小学校の時以来か？
間違いない…俺が何かやらかしたんだ！！

「ごめん！！」

膝からおり、謝る。

「は？」

「何したかは覚えてないけど、とにかくごめん！！」

いきなり謝るなんて私をどういう目で見てるのよ…ぶっとばす…
この行動に祐希奈はキレた。
カナンは自ら地雷を踏んでしまったのである。

「このど阿呆ぉぉぉう！！」

ズガーン！

「がはっ！！」

祐希奈のアッパーカットが直撃…
倒れるカナンをそのままに祐希奈はリレーの練習へと参加した。

『やれやれ…折角いい調子だったのに…さすがは祐希奈と言いますか…』

アシェルのこの呟きが聞こえるものはいなかった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

そしてついに体育祭当日…

「我らがチームに恐れるものは何もない!!
叩き潰すのみ!!
行くぞ～!!」

「「「「お～!!!!」」」」

真夏並の太陽が照りつけるなか、元気なチームはもちろん祐希奈。
掲げられる旗にはＫＤＧの三文字が…

「またかよ!!いい加減飽きろよ!!!」

「ＫＤＧは不滅よ!!!」

「「「「お～!!!!!」」」」

「お前ら意味わかって団結してんのか!?」

「マスター達は朝から元気だな。
今からそれで最後まで持つのか?」

「あいつ次第だ…」

「あはは…とにかく頑張って盛り上げようね。」

「ああ。」

これが終われば私達は何処かへ行かなくてはならない…
何時帰ってこられるかもわからない…
なら、記憶に焼き付けよう。
何時でも思い出せるように…
全力前開で優勝して！！

「１００M走を始めます。選手は…」

「これは最も勝ったチームに一番点数が入るわ。
最低二位以上わかった！？」

「「「「お～！！！！」」」」
始まるアナウンス…高まる鼓動…
ついに私の名前が呼ばれる。

「高町ヴィヴィオさん。」

「はい！」

勢いよく手をあげ、返事をすると同時に応援がきた。視線を向けるとやはり祐希ちゃんを先頭に、応援が叫んでいた。

「ヴィヴィオ！！負けんじゃないわよ！！」

「ヴィヴィオちゃんなら勝てるよ！！」

「余裕です。ファイトですよ～！！」

「まぁ心配はいらないとは思うが、頑張れ。」

順に視線を巡らし、最後に少年、カナンと目があった。

「ま、今日くらいはぶっちぎってもいいだろ。」

カナン君らしい、少し苦笑いを浮かべながらそう言われた。

「うん！！」

自分で顔が、心が笑っているのがわかった。

「位置について…よーい！！」

パン！

銃声が鳴り響くと同時に単身ぶっちぎるヴィヴィオ。その光景に、チームは歓声をあげた。

「おいおい…本当に速え～な…」

ヴィヴィオがゴール。タイムは、１０秒８６…余裕で校内新記録達成。

というか、日本でも結構程度上にいけるのでは？

「カナン！！負けたら…逝かす…」

「へいへい。」

やる気のない声とは裏腹にカナンのタイムは１０秒３２…またもや校内新記録…

「祐希奈～！負けないでよね！」

「私が負けるわけないでしょ！」

自身満々に言った祐希奈の記録も１１秒０２…この三人は伝説と化した。

「私だけ１１秒きれなかったー！！」

驚愕のタイムにもかかわらず、祐希奈は満足していなかったが…

ちなみにこの三人…１００、２００、４００、１５００、３０００距離が伸びてもほとんど変わらないペースで走り抜き、カナンは１００、２００、４００で校内新記録…

ヴィヴィオが１５００、３０００で校内新記録と全ての校内新記録を塗り替えた…

祐希奈も高記録を残してはいたが、やはりスピードに関しては二人に分があった。

そして昼食は、なのは、フェイトの二人からお弁当をもらい食べた。

カナンのお弁当だけ日の丸弁当と（渡したのはフェイト）かなり質素だったが…食えるだけいいとのこと。

「さて…問題は午後なのよね～。」

「ああ。午後からは団体競技が多いからな。」

「ちょっとつらいね。」

「練習を見ていて思ったが、ヴィヴィオ達がやりにくそうだったな？」

三人は苦笑いで肯定する
メイデンの言う通りこの三人の能力が高過ぎるが故に、団体は苦労していた。
もちろん三人はかなり努力をしているのだが、なかなか力を合わせられない。

「ま、あんだけぶっちぎってるわけだし、勝てるわよね？」

「オール最下位とかにならなきゃな。」

「大丈夫…だよね？」

「とにかく頑張るしかないな。」

そうして昼も終わり午後の部が始まる…

そしてカナンの言ったことが本当になりはじめた…
団体競技は配点が大きい…負ければあっというまに追い付かれる。
二人三脚、ムカデ、大縄と立て続けに落とし、現在辛くも1位の状況…
残すはリレーと綱引きのみ。
ただし、綱引きで最下位になればリレーで優勝しても追い付けない…
ここまでボロ負けということもあり、士気は最低…これでは勝てるはずもなかった…
あっというまに最下位決定戦…

「よーい…」

パン！

引かれる綱、しかし、みるみるうちにヴィヴィオ達のチームは引きずられていく。
誰もが終わりかと思ったそこで怒号が飛ぶ…

「あんた達ねえ！！いい加減にしなさい！！
これに負けたら力抜いてたやつからぶっとばすわよ！！」

嘘だ…全員がそう思った…
バキャッ！

「がはっ！！」

クラスでの不良…たまたま祐希奈の近くにいたため、最初の犠牲者に…

「ほら…次は誰よ？」

本気だ！！奴は本気だ！！ヤバい！！
祐希奈の恐怖の力でクラスが纏まった瞬間であった…
完全なシンクロ…祐希奈が引くのに合わせ綱が引かれていく…

「ほんと…アイツは無茶苦茶だな…」

「あはは…流石は祐希ちゃん…指揮官になれるね。」

「そんな部隊は入りたくねえ…」

綱を引きながらヴィヴィオとカナンは終始苦笑いをしていた。
祐希奈の恐怖統一の結果勝利。
最初からやってればもっと楽に勝てたような気がするのは俺だけか？

「勝った～！！優勝よ～！！」

「「「「わ～！！！！」」」」

「お～い…一応まだリレーが残ってるぞ～。」

「凄い騒ぎだね～。」

「ここまでまとめられるのは祐希奈の才能は凄いな。」

「まぁ、祐希奈だからな…夏のために生きてるような奴だし…」

「冬の祐希ちゃんも見たいな～。」

「簡単に言うと今の真逆の状態だ。」

「やっぱり冬は苦手なんだね。」

「ああ。」

そして、最後の種目、２００Ｍリレーが始まるわけだが…
勝負になるはずもなかった…
代表者五名が走るこのリレー
ヴィヴィオ、祐希奈、カナン、美鈴の四人に加え、勝利を確実にするために、神楽を抜いて、神田を入れ、最強の布陣。

美鈴も神田も13秒台…ほかのクラスならトップクラスの速さだ。
開始早々にヴィヴィオがぶっちぎり、半周以上も差が開いた。
美鈴に代わっても差は縮まらず、祐希奈でさらに開いて、神田に繋ぎ、やっぱり縮まらず、俺に来て…再びぶっちぎった。
俺がゴールする頃、他のチームはようやくアンカーが走り出した所だった。

「勝った～！！優勝よ～！！」

「「「「わ～！！！！」」」」

「またやるのかよ！！」

「では、最後に、優勝したチームにソー○ン節を踊ってもらいフィナーレです！閉会式はありません。」

「踊れねえよ！！
しかも閉会式ないのかよ！！とことん無茶苦茶なプログラムだな！！」

「そこのツッコミ、ヘタレにツッコミを入れる権力はありません。」

「謝れ！！今すぐ全世界のヘタレのツッコミに謝れ！！」

「ヘタレは無視して、ソー○ン節やっちゃってください。」

「だから！踊…」

♪♪♪♪♪～♪♪、♪♪♪～

「「「「チョイヤ！！」」」」

「でえええええ！？何故に踊ってるううう！？」

そして曲の最後…おみこしで担ぎ上げられたのはヴィヴィオ…

何でお前が踊ってるんだよ…

「よっ！」

バク宙…そうか…金○先生のパクりか…

「ってアホかあああああああ！！！！！！！！」

「やかましいわど阿呆があああああ！！！！！！！！」

バキャアッ…

「ふ…」

祐希奈渾身の飛び蹴りが直撃し、体育祭はお開きとなった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

体育祭終了後、アリサの家に集まった六課面々、保護者、美鈴、神楽

「いや～楽しかったわね～♪」

「うん♪忘れられない思い出になったよ。」

「俺は忘れられない痛みになったよ…」

「よく骨が折れなかったな…」

「折れちゃえば良かったのに…」

ぼそりと呟いた女性はもちろん…

「フェイトさん!?最近あなたそんなキャラばっかしっすよ!?」

「君の前だからだよ。」

「ひどくないっすか!?」

「にゃはは…」

いくら親バカでもここまでする人間は世界中探してもこの人だけだろう。

「で?何でまたアリサの家に集まったの?」

首を傾げる祐希奈に、アリサが答える。

「何でも何も、これから行くところは私の別荘だからよ。」

「…別荘?何しによ?」

「はやてから空いている入らない土地はないかって言われて、もう使ってないからってことで別荘を提供したのよ。」

「べっそう?べっそうとはなんだ?」

「簡単に言うと、もう一つの家見たいなものよ。」

「もう一つ家があるのか!?それは、誰でもなのか?」

メイデンとアリサさんが問答を繰り返すなか、俺もヴィヴィオに尋ねる。

「ヴィヴィオ…この人は一体…」

「アリサさんは、有名な会社の次期社長なんだって～。」

会社が何処なのか気になるが、このバカでかい家に別荘まで持ってるんだ…

とにかく相当な金持ちに間違いはない…

「アリサさん?別荘とやらはどこにあるんだ?」

「太平洋のど真ん中よ♪

」

「太平洋?」

「海っていう場所の中の地名見たいなもんだ。」

「私にはさっぱりだな。」

「あの、アリサちゃん…それは大丈夫なのかな?

領土問題とか…」

「大丈夫大丈夫。そこ一帯だけバニングス家が買い取ってるから♪」

無茶苦茶だ…国を相手に土地を買い取るって…

「良く分かんないんだけどさ…ヴィヴィオちゃん達はそこに行くの？」

「まぁ、当分の間はそうなるわね。」

「帰って来てくれるんですよね？」

「うん。必ず帰って来るから。」

「心配するな。この二人は絶対に俺が守るから。」

「二人だけじゃないよ、カナン君もだ。」

「君は結構無茶をする時があるからね～。」

保護者二人に釘を刺された…

「大丈夫。死ぬような真似はしないと思うから。」

「思うじゃなくてしないでくれ。」

「もちろんヴィヴィオさん達もだよ？
約束してくれるかい？」

「「「はい！」」」

「「よし。」」

「それにカナン君は私とも約束があるから二重だよ？」

「わかってるって。俺は何処にも行かないし、死にもしない。」

「うん！」

「ほな…話も済んだみたいやし…」

会話を黙って聞いていたはやてさんが立ち上がる。

六課メンバーも立ち上がり、整列する。

「「二人をよろしくお願いします。」」

「はい。必ずお返ししますから。

安心してください。」

「父さん…／伯父さん…」

「「行ってきます。」」

「「行ってらっしゃい。」」

笑みを交わしあい、背を向け、アリサが待つ自家用航空機に向かう…

六課を乗せた航空機は別荘に向け、飛び立った…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

アリサ道場出演後…

アリサ
「いいわよ～♪もっと泣いてみようか～♪」
祐希奈
「ぱしゃりぱしゃり」
風ハ
「むが～～～～～～！！！！」
ヴィヴィオ
「あはは。カナン君可愛いよ～♪」
カナメ
「似合ってますよ風間ハーマイオニー♪」
メイデン
「似合いすぎて怖いな…」
タカト
「ヴィヴィオお嬢様、祐希奈お嬢様、ダージリンがはいりました。」
ヴィヴィオ
「は～い♪」
祐希奈
「タカトが言うと様になるわね～♪」
タカト
「恐悦至極に存じます。」
アリサ
「ねえ、すずか。お嬢様って言われるのってそんなに嬉しい？」
すずか
「う～ん…慣れって怖いね。」
祐希奈
「慣れるほど呼ばれてみたいわね。」
ヴィヴィオ
「私はいつ言われても嬉しいと思うな～。」
風ハ
「ぶは！いい加減怒りますよ！！」

一同
「・・・は？」
カナメ
「自爆ですね…」
風ハ
「あ…」
タカト
「何故今口調が変わった？」
ヴィヴィオ
「まさか…カナン君って…」
祐希奈
「完璧にそのキャラになりきるタイプ？」
風ハ
「違う！！ちょっとサプライズにカナメの真似をしただけだ！」
メイデン
「私はてっきりカナメさんがマスターなのかと思ったぞ。」
風ハ
「むがっ！！」
カナメ
「変なこと喋る口にはこれで蓋をしますね～♪」
タカト
「む…それはファトンケーキか。」
ヴィヴィオ
「うわ～…顔が油まみれだよ～。」
祐希奈
「勝って良かった…」
風ハ
「むぎゃあああああああああああ！！！！！」
アリサ
「し、死んだ？」

タカト
「いえ、生命活動は確認出来ています。」
カナメ
「ふふ♪」
ヴィヴィオ
「え、えとじゃあこの辺で終わります。」
祐希奈
「拡大番ＥＸ舞台裏、終局♪」
メイデン
「あ…まずい…全員逃げろ…」
風ハ
「Ｌｕｇａａａａａａａａａ！！！！！」
タカト
「か、感染者だと！？」
一同
「きゃあああああ！！！」
ズガーーーン…
終わり♪

第二十六話　海から川へ…（前書き）

あ～日常編が終わらな～い。　　前回よりは書き終えた感があるので、良かったです。　　とにかく進行が遅いこの作品を読んで下さってる読者の皆さんありがとうございます。　　疑問質問今まで通りバシバシお送り下さい。

第二十六話　海から川へ…

ヴィヴィオ
「皆さんおはようございます。」
祐希奈
「それともこんにちは？」
カナメ
「人によっては今晩は♪」
メイデン
「リリカルヴィヴィオの時間だ。」
一同
「楽しんでみてね～♪」
カナン
「…あえてこのテンションは無視するとしよう…」
祐希奈
「無視すな！！」
バキャッ！
カナン
「がへっ！何でいきなり蹴られなきゃならん！！」
祐希奈
「あんたがツッコミ入れなかったら私達がバカに見えるでしょ！？」
カナン
「勝手にやったのはお前等だろ！？」
ヴィヴィオ
「うぅ…カナン君を信じてたのに…」
カナメ
「カナン君最低ですね♪」
メイデン
「最低だな。」

カナン
「俺か！？俺が悪いのか！？」
ヴィヴィオ
「タカト～カナン君が…」
カナン
「すんませんでした！！！」
祐希奈
「早いわね…」
メイデン
「ｂｙ若森が効いているな。」
カナメ
「私としてはまた聞いてみたいですね♪」
カナン
「やめてくれ…あの変な口調を思い出すだけで…ひいいいいいい！！！」
ヴィヴィオ
「完璧にトラウマになってるね…」
メイデン
「風間ハーマイオニー可愛かったぞ？」
カナン
「女装して可愛いなんて言われても嬉しくないわ！！」
カナメ
「そうなんですか？私はてっきりそっち系かと…」
カナン
「違うってのはお前が一番わかってるよなぁ！？」
カナメ
「どうでしょう？（笑）」
カナン
「てめえ…」
祐希奈

「あんた達いい加減仲良くしなさいよね～。本編でそんなに仲悪かった感じしなかったわよ？」
カナメ
「これは私達の間でのスキンシップのようなもので、この後から普通になるんですよ♪」
カナン
「誰がなるかああ！！」
ヴィヴィオ
「質問コーナーに移っていいかな？」
カナメ
「あ、はい。今黙らせますので…ここにあるのはぁ、取れ立て野菜ぃ。そのぉ名もぉ…キュウリぃ♪これをこ奴の口にぶちこめばぁ…」
カナン
「ま、待て…待てえええ！！！」
ガボッ…
カナン
「！？＃＄％・・＊・＜∬＃！！！！！」
メイデン
「これは…死ぬのではないか？」
祐希奈
「こいつのキュウリ嫌いは筋金入りだからね。生で何か食べたらこうなるのも無理ないわ。」
カナメ
「男のぉ出来立てほやほやぁ…死体のぉ完成だぁ（ｂｙ若本）見様見真似バージョンでした♪」
カナン
「ぴく…ぴく…」
ヴィヴィオ
「…質問コーナー！！」

メイデン
「可哀想で見ていられなかったか…」
祐希奈
「まぁ…無理もないわね。」
ヴィヴィオ
「一件目の質問は！！！
この間の技詳細でディストラクションブレイカーの範囲はスターライトブレイカー以上と書かれていましたが、広域型のはやてさんのラグナロクと比べるとどちらが強いですか！！！」
カナメ
「何だかヴィヴィオさん元気ですね～♪」
祐希奈
「現実逃避してるだけよ…」
ヴィヴィオ
「答えは！威力は並べるかも知れないけど勝てないよ！
範囲はそもそも比べること自体が間違いだよ！！」
メイデン
「いっぱいいっぱいだな…」
祐希奈
「あ～別にヴィヴィオは怒ってるわけじゃないからね？」
カナメ
「ヴィヴィオさんがいっぱいいっぱいなので、後は私が…はやてさんは広域型、着弾後の範囲はもちろん、射程もヴィヴィオさんには勝っています。
はやてさんと遠距離砲撃の撃ち合いで勝てる人は、ぶっちゃけいません。」
祐希奈
「なのはさんでも？」
カナメ
「はやてさんはなのはさんより、更に射程が長いため、超ロングレ

ンジなら負けないと以前言っていましたから負けないんじゃないですか？」
カナン
「う…」
ヴィヴィオ
「カ、カナン君！！大丈夫！？」
カナン
「ああ…なのはさんのBスターライトブレイカー以来の長さだ…」
メイデン
「キュウリとは恐ろしい食べ物だな。」
カナン
「あれは兵器だ…」
祐希奈
「バカな会話交わしてないでさっさと質問終わらすわよ。」
カナメ
「では二つ目の質問です。
風間ハーマイオニーが出ていましたが、あれはヨシュアさんがテスタメントさんに希望したものですか？
以前ハヤ○のごとくネタを少し使われていたので相談されたのかと思ったのですが…」
ヴィヴィオ
「そういえば前に祐希ちゃんが色々とやった時に使ったね。」
祐希奈
「よく覚えてたわね。ヴィヴィオのごとくでしょ？」
カナン
「ちなみに答えは？」
メイデン
「何も相談等はしていなかった。
作者自信もテスタメントさんが知っていてびっくりだったそうだ。」
カナメ

「結構メジャーになりつつありますからね～。」
ヴィヴィオ
「知らない人の方が少ないのかな？」
カナン
「俺はそのとばっちりを受けたわけか…
なんと言うかまぁ…」
祐希奈
「大丈夫面白かったし♪」
カナン
「…写真まで撮ってたからな。」
祐希奈
「ネットで好評発売中よ♪」
カナン
「消せ！今すぐ！」
祐希奈
「無理♪」
ヴィヴィオ
「二人のケンカが始まる前に本編に移るね。」
メイデン
「今回は、リクエスト企画第一弾だ。」
カナメ
「さてさて…面白く書けますかね～？」
ヴィヴィオ
「魔法少女リリカルヴィヴィオ。」
カナン
「消せ！！」
メイデン
「この作品を消すのか！？」
カナメ
「消しませんからご安心を～♪」

祐希奈
「きっと皆舌打ちしたわよ♪」
一同
「えええ!?」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼
「わぁ～!凄～い!!」

「綺麗ね～♪」

「マジでど真ん中だな…」

「これが…海か…」

航空機から出てきた六課メンバーが最初に抱いた感情は驚愕であった。
島の周囲を海が囲い、浜辺の近くに木造の綺麗かつ、大きな別荘が建っていた。使ってない土地…と言ったアリサ。
しかし、普通にその別荘の大きさははやての家より更に大きい。

「ア、アリサちゃん?ここ本当に使ってない土地なの?」

「そうよ?狭くてごめんね～。」

「アリサ違うよ…こんな凄い所荒らしちゃうかもしれないんだよ?もったいないんじゃないかな?」

「私らはもうちょい粗末なとこやと思ってたんやけど…」

「そんなに良いとこじゃないわよ？
魚もあんまりいないし、良いとこなんてこの周りの海くらいしかないわね。」

アリサのこの発言に三人は苦笑いを浮かべる。
さすがはバニングス家だと改めて凄さを痛感した。

「それでさ、こんな所になっちゃった御詫びに…
これ、あげるから楽しんできてよ♪」

「「「わぁ…」」」

アリサから渡されたもの…それは…アクリルのケースに入った全員分の新品の水着と…祐希奈用と書かれた巨大なケース一つ…
やたら重い祐希奈用が激しく気になった三人だが、あえて無視した。

「こんなの貰っちゃっていいの？」

「いいのいいの。全部安物だしね。」

なのはの問いに、あっさりと答えるアリサ。
なのはは値段は？と聞きかけたが、やめておいた…
聞いたら楽しめなくなりそうだったからだ。

「アリサちゃんほんまにありがとう。
ほんなら楽しませてもらうよ。」

「はいは～い♪じゃ、帰る時には連絡いれてね？
すぐに来るし。」

「「「バイバイ。」」」

「そんじゃ～ね～♪」

アリサを乗せた航空機は飛んでいく…
それが見えなくなるまでメンバーは見送っていた。

「さてと、集合や～！！」

はやての集合発言に首を傾げながらも全員綺麗に整列する。
ちなみに先程のアリサとの会話は聞こえていない。

「カナン、前に来て。」

「へ？フェ、フェイトさん俺また何かしましたか？」

「返事は…？」

「はいぃぃ！！」

フェイトのドスの効いた声に、カナンは全力で走って前に出てくる。

「それじゃ、カナンはこれを別荘の中に置いてきて。」

カナンに渡されたのはやたら重い祐希奈用と書かれた黒いケース…

「何だこれ？祐希奈用？」

「あ、カナン。それの中、見ないでよ？」

「…ヒントは？」

「ん～…危険物？」

「ええ！？危ないものなの！？」

「大丈夫だって。私が何もしない限りわね♪」

「果てしなく不安なんだけどな…」

「私を信じなさい♪」

信じられない…そう言いたいが、言ったら確実に蹴り飛ばされるため、渋々了承した。

「うお…重！！」

ヨロヨロと危なっかしい歩き方でカナン君は別荘へと向かった。

「ほんなら、私らは着替えよか。」

「何に着替えるですか～？」

「スバル、ナイスな質問や。
私らが着替えるのは水着や！！」

はやてさんの背後から出てきたのは透明なアクリルケースに入った大量の水着…ただ…全てビキニ…

「水着とは何だ？」

「字のまんまよ。泳いだりする時には着る服。」

カナンに変わり、ティアナがメイデンに説明をする。

「いちいち着替える意味はあるのか？」

「ん～とね～。意味はわかんないけど男の子は喜ぶよ～♪」

スバルの説明にメイデンは首を傾げる。

「こんな物でか？よくわからんな。」

「とにかく皆着替えよか～。」

「わ、私は結構です！！」

「私もいいわ！！」

反発するのはもちろんヴィヴィオと祐希奈。

しかし、そんな二人の反応にシグナム、キャロ、メイデン以外は全員微笑んだ…二人はこのタイプの笑みにいい思い出はない。

「祐希ちゃん…」

「ええ…」

二人の考えることは一致していた…

足に力を込める…

「「逃げるしかない！！」」

「逃がさへんよ～！六課メンバー突撃や！！」

「「「「了解！！」」」」

「「いやあああああああああああああ！！！！！」」

全員に周りを囲まれ、リングバインドで身動きを封じられた後、強制的に着替えさせられていく二人…
衣服が次々と宙を舞う。

「全く…皆僕がいるってこと忘れてないかな…」

一人顔を赤面させ、視線を反らす少年エリオがいた…ラッキーボーイの称号を欲しいがままにするだけはある。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ん？何か今悲鳴が聞こえたような？」

祐希奈用のケースを別荘に運び終わり一息をついていたのだが、ヴィヴィオと祐希奈の悲鳴はカナンにまで届いていた。

（お～い。今悲鳴が聞こえたような気がしたけど、皆大丈夫か～？）

（悲鳴？うちは知らんな～
それより荷物置いたんなら戻って来てくれるか？）

（あ、了解っす。）

「何だ気のせいか。確かに聞こえたような気がするんだけどな～。」

とりあえず指示通り先程の場所へと向かうが…そこにはエリオがいただけだった。

何故か水着だが…

「何で水着なのかは置いといて…皆は？」

「それが…カナンにこれを渡してって言われた後どこかに行っちゃって…」

エリオの手には綺麗に畳まれた黒い半ズボンタイプの水着…

ちなみにエリオは赤だ。

「これを着てエリオと時間潰して遊んどけってことか？」

「さぁ？」

なら呼び出す必要ないだろ…

まぁ、折角だし、遊ぶか。

「おし！なら久しぶりに砂の城でも作るか！！」

「何もしないのも暇だしね。

やろうか！」

さっさと岩影で着替え浜辺へと向かう。

「ところでカナン。砂のお城なんて作れるの？」

「任せろ！！」

親指を立て、笑顔でかつ、自信満々に言い放つ。

「頼もしいね。足手まといにならないように…」

「全く知らん！！」

ボフッ…

「ん？何だ？土に埋もれたい気分だったのか？」

「違うよ！カナンがあんまりにもスカッと言うもんだから。」

「ははは！とにかく手探りってことだ。
こういうのは一からやるから面白いんだ。」

「それもそうだね。
とりあえず、適当に砂を湿らせて山を作って…」

「この横を少しずつ湿らせていけば平な土台になるんじゃないか？」

「あ、うん！出来る出来る！」

小さな子供のようにはしゃぎながら二人は熱中していく…
そんな二人を囲うように影が広がった…

「カナン、エリオお待たせや～。」

「ん？あ、はやて…さ…でえええええ！！！？？？」

二人の男を囲うビキニ姿の女性陣…
エリオは苦笑いしつつ、カナンに謝った。
全てはカナンを驚かせるために仕組まれたものだった。
ここまで気付かない奴も珍しいが…

「えと…ななな何故にビビビビキニ!?」

普通ならここまで焦ることもなかった。
しかし、自分達を囲うのは一人一人が美人であり、世の中の男性にしてみれば、これ程羨ましい状況も少ないわけで…

「あれれ~?カナンったら赤くなっちゃって~可愛いね~♪」

「少しはエリオを見習いなさいよ。
全く動じてないじゃない。」

スバル、ティアナの二人がカナンに近づいて来る…

「エリオ!!何でお前は平気なんだよ!!」

「それは…まぁ…いろいろとね?」

このメンバーと一緒に混浴すらしたエリオにとっては、この程度…とは言っても多少は赤いが、カナンに比べればかなり免疫は強い。

「エリオと俺は別人種なんで!!」

「何それ!?ひどくない!?」

「あら～？そんなことは無いはずですけど？
シグナム二人を押さえてくれますか？」

「ああ。わかった。」
ガシッ！

「「うわあああ！！」」

二人は悲鳴をあげる。
後ろから首に手を回されたことにではなく…
背中に当たる感覚に…感覚についてはご想像にお任せする。

「では調べますね～♪」

「「ひいいい！！」」

シグナムと違い確実にわざとやっているシャマル…
二人の至近距離から、体に手を滑らせ遊ぶ。
ちなみにここでカナンが認識した水着は…
なのは、シグナム、キャロ…白、フェイト、リイン、スバル…青、
はやて、ギンガ…黒、シャマル…緑、ティアナ…オレンジである。
ここでカナンの止まっていた脳は動き出す…
三人が居ないことに…
カナンの視線が三人を探していたことに気付いたはやて…

「気付いたみたいやね？」

悪戯っぽい笑みを浮かべ、カナンと視線を合わせる。

「な、何にっすか？」

「またまた～ほんなら…カナンもお待ちかねやし、出てきてもらおか♪」

「変な言い方しないでください…よ……」

そのツッコミを最後にカナンの思考は再びストップ…釘付けの視線の先…ヴィヴィオ、祐希奈、メイデンがいた。

「カナンが止まってるです。」

「ヴィヴィオ…可愛い…」

「にゃはは…フェイトちゃんもだ…」

ゆっくりと三人がカナンの前に歩き、止まる。

「ど、どう…かな？」

ヴィヴィオが着ているのは胸にリボンがついたヴィヴィオがチョイスしそうにない桃色のやっぱりビキニ…

「……」

「な、何か言いなさいよ！！」

祐希奈が着ているのは、本人の性格とは逆に静かなイメージを受ける緑の…そしてやっぱりビキニ…

「……」

「完全に固まっているな…これは本当に喜んでいるのか？」

メイデンが着ているのは、目立つ金髪とは対照に控えめな黒…というよりは藍色のなんといってもビキニ…

「カ、カナン君？あれ？」

「反応なしだな…」

「もしかして…」

祐希奈がカナンの目の前まで近づき…

ツンと額を押す。

「……」

ドサッ…

「わ～！！カナン君が気絶してるよ～！！」

「にゃはは…破壊力抜群だったみたいだね～。」

「……」

「あれ？フェイトちゃん？」

ツン…ドサッ…

「フェイトちゃんも気絶してるよ～！！！」

「あ、あかん！二人を日の当たらんとこに移動や！」

「「「「了解！！」」」」

結局二人が目が覚めたのはそれから３０分以上あとだった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「カナン君ごめんね～。」

「いや、ヴィヴィオが謝ることじゃないし…俺が免疫が足りないだけだ。」

「まぁ、わからないでもないけどね。」

「六課の人達は綺麗な人ばかりだからな。もちろん、ヴィヴィオと祐希奈も入るが。」

「メ、メイデン…私はそんなに…」

「あんたは問答無用で可愛いわよ。」

「わっ！祐希ちゃん！」

「ちなみにお前もだ。」

「は！？ば、ばっかじゃないの！？」

言葉に関しては本当に無自覚なカナン…

思ったことをド直球で言うため、女性の場合、大概の相手は赤面する。

「私から見ても二人はかなり可愛い部類に入ると思うぞ？」

「「メイデンもね。」」

「はうう…また…そ、そんなことを…」

「お前いい加減に慣れろよ…」

「無理だ！！」

即断言するなよ…

ちょっとは努力する気にはならないのか？

まぁ、メイデンには永久に無理かもしれないけどな。そんなことを考えながら、寝そべっていると、スバルさん、ティアナさんの二人がやってくる。

そうそう。少しずつならまだ大丈夫なんだ。

「四人とも～！ビーチバレーしようよ～♪」

「ビーチバレーって…テレビでやってたあれかな？

二人一組のチームの…」

「そうよ。ていうかスバルさん。ボールあるの？」

「水着が入れてあったアクリルの中にたくさんあったよ～♪

アリサさんが準備してくれたみたい。」

「ふ～ん…あ、良いこと考えた♪

三対三でやりましょうよ。」

「待て…まだ俺はやるとは…」

「チームは、ヴィヴィオと私とスバルさん。カナンとメイデンとティアナさんで良いわよね♪」

「オッケー。」

「足引っ張らないでよ?」

「だから…」

「マスター頑張ろうな。」

「勝つわよヴィヴィオ!」

「頑張るよ!」

「選択権ねえじゃん…」

ため息をつきつつも相手をするあたり、大概いい奴である。
浜辺に歩くとやはりと言うかなんというか、ビーチバレーのネットまであった。その周囲には観客のように六課メンバーが囲んでいる。

「で?ルールは何だよ?」

「ルール?じゃあ、二度打ちなしのサーブ二回交代、１０ポイントマッチね。」

「メイデン、ルール分かるか?」

「いや…すまない。」

「ん～、じゃあメイデンはレシーブね。
ボールを私達の方にあげてくれればいいから。
やってるうちに理解してきたら三人で攻めましょ？」

「わかった。二人にあげればいいんだな。」

「始まるぞ…」

「くらえ！！ツイ◯トサーブ！！」

「ネタ的に危ないからな！？」

祐希奈がかけた猛烈な回転と共に、変化するボール…初めてのメイデンはあたふたとボールを目で追う。

「メイデン！どこでもいい！打ち上げろ！！」

「わ、わかった！」

適当に打ち上げられたボールは高々とバックラインに上がった。

「カナン！」

「了解っす！！」

瞬発力を生かして、後ろに走り込み、跳躍…
ボールに被せるように腕を振り抜いた。
普通に行けばホームラン…

「ヤバッ！ヴィヴィオ！」

「え？」

バックラインギリギリにボールは入った…
ドライブ…カナンは縦回転をかけることにより落とす技術を使った。

「やるね～。じゃ、次は私がサーブ打つね～♪」

高くトスがあげられ…横に擦るように放たれる。
メイデンの目の前まで来たところで…

「ふふ…そのボール…」

「また危ないっつ～に！！」

「うわっ！」

超急激なカットサーブ…メイデンにとれる筈もなく、空振り…

「すまない…」

「ドンマイよ。あのバカ…」

向こうのネタサーブは無視してこちらは普通にサーブを放つ。

「よいしょ！」

ヴィヴィオは安定したレシーブをあげる…

「任せなさい！うおおおお！！」

高く高～く飛ぶ祐希奈…

ズバン…

思い切り叩きつけられたボールはコーナーへ入った…

「ドー〇」

「お前等さっきからあぶねえんだっつーの！！」

なんか俺ツッコミっぱなしな気がする…

「はぁ…」

ため息と共に放たれた緩いサーブは再びヴィヴィオのレシーブであげられ、スバルさんがアタックを打ち込む。

良かった…今回はネタは無しか。

飛び付きレシーブを返し、ティアナさんが跳躍する。

「終わり！！」

「〇種返し…罷〇とし！」

祐希奈が放つその技で高く上がるボール…

違った…やっぱり懲りてなかった。

「ええかげんにぃ～！！」

常人では届かないその高さにカナンは跳ぶ…

「せいやーーーー！！！！！」
ドゴーン…
怒りのツッコミと共に放たれたアタックは、音速の速さで叩き込まれた。
「はぁ…はぁ…」
「おお。マスター凄いぞ。」
「とりあえず…お疲れ。」
感心するメイデンと、カナンの気持ちを理解するティアナ。
しかし、今の一撃はバカ共を燃えさせてしまった…
「う～わ～…マジモードだ…」
カナンの視線の先…円陣を組む三人がいた。
「絶対勝つぞ～！！」
「「お～！！」」
それから先は激闘だった…ネタ技を使いまくる相手に対しカナン、ティアナのツッコミとメイデンのボケで対抗し、ついに迎える９対９
「はぁ…はぁ…デュースはいらないよな？」
「はぁ…はぁ…あんなもん…勝負には必要ないわ…」
「はぁ…はぁ…サーブはスバルか…私が受けるわ…」

「はぁ…はぁ…任せるぞ。」

「うおおお!!マッハキャリバー!!」
「Ｄｒｉｖｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ！
Ｗｉｎｇ　ｒｏａｄ！」

空へと繋がる青い道…そこを一気にかけあがる！

「おかしいだろ!?なぁ!!これビーチバレーだよなぁ!?」

「一撃…必倒…ディバイン!!」

「やるわね…クロスミラージュ!!」

「え…ティアナさん受けてたつんすか?」

「スターライト!!」

「バスター!!」

巨大な砲撃と共にボールが撃ち込まれる…
ていうかよくボール割れないな…

「ブレイカー!!」

こちらからも巨大な収束砲撃が放たれ、拮抗…ネットの真ん中あたりでボールが浮く…

「何だ?魔法がオッケーなら私にも出来るな。」

飛び上がるメイデン…
いや、ルール無視かよ…

「やらせないわよ！！」

祐希奈も飛び上がる…
なんだこれ…絶対バレーじゃねえよ。

「大地の力よ…」

うお～い…お前もか…

「一撃粉砕…」

お前に至ってはボール溶けるからな？

「我に汝が力を！！」

「烈破爆砕拳！！」

ドゴッ！！
いや…もう本当にボールよ…お疲れさま。

「「おおおおお！！」」

力は互角…耐えきれないボールが再び浮き上がる。
そこに現れるのはやっぱりお前かよ…ヴィヴィオ。

「ハイウインド！！」

「もうこっちもやったらあ！！行くぞメイデン！！」

「ん？ああ。」

「「ユニゾン・イン！！」」

とことん付き合いのいい少年であった。

「『六式抜刀剣術…』」

二人が使うのは同じ属性の風…
ヴィヴィオは拳に、カナンは剣にそれぞれ纏う。

「インパクト！！」

「『絶空！旋龍破！！』」

拳撃と共に凄まじい勢いですっ飛んだボールは、衝撃波によって変型し、途中で止まる…

「「『いけーーーー！！！！！』」」

風対風…押し勝ったのは旋龍破…ギリギリ相手のコートに…入らなかった…

「入れよ～！！そこは空気よんで入ってくれよ～！！」

「わ～い♪勝った～！」

「あ～あ、負けた～って皆何をしてるんすか？」

カナン、ヴィヴィオ以外は全員ダウンしていた…

「あんたねえ…自分の技の能力考えて技使った？」

「俺の技の能力？あ～なるほど…」

俺の技、例でいうと先程の旋龍破は、自分の周囲５０メートルに衝撃波を放つ技。で、ほぼ相殺したヴィヴィオは平気な訳だが、他のメンバーはまともに受けたわけだな。

「「「「「「……」」」」」」

皆さんからダークオーラが立ち上っているのは気のせいと信じよう。

「ケリュケイオン…ブーストストライク…」

キャロが全員にブースト魔法をかけたのも気のせいと信じよう…

「「「「「「「頭…冷やそうか？」」」」」」」

きっと幻聴と…

「信じられるかあああああああ！！！！

ユニゾンアウト！！じゃあな！！」

悪いのは俺なので、メイデンとユニゾンを解き、即逃走！

「追撃開始…」

「「「「「「「「「「イエッサー…」」」」」」」」」」

「ぎゃあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

ほとんど島の3分の2を破壊する光が溢れたのは気にしないでおこう。

「やれやれ…マスターは苦労が耐えないな。」

カナンはまた一つ学んだことがあった。
この人達を怒らせた場合…逃げるよりも、その場で制裁を受けた方が、多少はマシだと…あの場で謝っていれば…約三時間もの間三途の川で体育座りをする必要はなかったと…

「ま、それでも一時間は確実だったけどな…」

ていうか…よく生身で受けて生きてたな…
ここまでいくと稀少技能に登録出来るんじゃないか？
などと、アホなことを考えつつ、海を漂流するカナンだった…

第二十七話　心に蓋を…

ヴィヴィオ
「たくさんの読者様、毎回読んで下さってありがとうございます。」
祐希奈
「海編になってからはアクセスも飛躍的に伸び、２０万に到達したから、作者も跳び跳ねてるわ♪」
カナン
「あと、お詫びだ。修正がなかなか進まなくてごめんな。地道に進めてはいるんだが、まだ半分にも到達できていない。」
メイデン
「話数が戻るのはまだかなりあとかもしれない。迷惑かける。」
カナメ
「さて、今回は質問コーナーはお休みです。何故かと言うと、もうすぐ舞台裏があるのでそこで答えるからです。」
カナン
「てことで、今回はこれで終わりだな。」
祐希奈
「なにこれ!?前書きなのにギャグがないじゃない!?」
ヴィヴィオ
「たまには静かなのもいいね～。」
メイデン
「ああ。ゆっくりと出来て落ち着けるな。」
祐希奈
「平穏に終わるなんて神様仏様が許してもこの私が許さないわ!!」
カナメ
「わぁ～、孫〇空さんですね～♪」

カナン
「そこ！！名前出すな！！」
祐希奈
「キエエエイ！！」
シュドーン…
カナン
「な、何で…」
カナメ
「討ち取ったり～♪」
ヴィヴィオ
「このままだとまた祐希ちゃん達が暴走を始めてしまいそうなので、本編に移ります！」
メイデン
「前回に引き続き海編だ。」
祐希奈・カナメ
「始まります♪」
カナン
「悲惨だ…」
▼▼▼▼▼▼▼▼「気持ちいい～～！！海サイコー！！」

「ほんとね。こんな所を用意してくれたアリサさんには感謝しないとね。」

「そうだ！ねえ、スバル競争しよっか。」

「いいね。でも、ギン姉が相手でも負けないよ～！」

「じゃ、私は審判でもやってるわね。」

「ギンガ、スバル、ティアナ～！

三人ともあんまり海に慣れてないんだから泳ぐんならちゃんと体操しなきゃダメだよ～？」

「「「分かりました～！」」」

なのはの号令のもと、しっかりと準備体操が行われ、海では改めて競争が始まる。

「あ、エリオ君！繋がったよ！」

「ほんとだ！これで入り口は完成だね。」

「いい感じだね。
はい、二人にプレゼント。ヤドカリさんだよ。」

「わぁ～可愛いです！」

「フェイトさんありがとうございます。」

「うん。さてと、もう少しだね。頑張ろ。」

「「はい！」」

浜辺では、エリオ、キャロ、フェイトの三人が途中で中断された城作りの続きをしていた。

影で休んでいるのははやてとヴォルケンリッター組

「皆元気やね～。生き生きしとるわ♪」

「そうですね…はやてちゃん？」

「ん？なんや？」

「はやて…何か手が卑猥な動きをしてる。」

「き、気のせいや！」

「主…先程は高町を、今はテスタロッサを凝視していませんでしたか？」

「なのはちゃんやフェイトちゃんだけやない…私は大好きなんや～！！」

『『『何が…？』』』

もちろんはやてのレアスキルの話である。

大量のビキニを前に理性が崩壊仕掛けている人物がここにも…

ただ一人別荘の中で動くものがいた…

「え～と…ふむふむ。とりあえず燃やせばいいのよね。」

『祐希奈…いくら何でも適当過ぎますよ。』

「え～だって機械の組み立て面倒だしさ…着火すればいいわけだし。」

『確かにそれはそうですが…危ないですよ？』

「こんなのにびびってたら魔導師なんて諦めるって。」

『はぁ…そうですね。
あなたはそういう子ですからね。』

「ありがと♪」

『誉めてないですよ…』

「こんなもんかな。
さて…あ、競争してるじゃない。
私を差し置いて勝負事なんて１００万年早いわよ！！」

『普通に死んでいますよ？』

「そういうツッコミは滑るからしないほうがいいわよ？」

『…わかりました。』

「じゃ、レッツゴー！」

『やれやれ…』

祐希奈はアリサから届いたボックスの中身を確認し、その後スバル達の競争に参加をして楽しんだ。
こんな感じでカナンが漂流している間、大半の六課メンバーは、各々で楽しんでいた。
無論、全員日焼け止めは塗ってある（遅れたのはそれが理由）ため陽射しなどまったく気にしていない。
そんな元気に遊ぶメンバーの中で二人だけ欠けていた。

「カナン君いないね～。」

「恐らくこの辺りに漂流しているはずなのだが…」

その二人とは…ぶっちゃけカナンを心配する人間は限られるわけだが、ヴィヴィオとメイデンである。

漂流をしているはずのカナンを探し、広域探索を使おうとしたのだが、はやてが何も手を打っていないはずはなく、ジャミングがかけられ、調べるにはかなりの魔力が必要となるため、大体の見当で探し回っていた。

「飛んでみよっか？」

「いや、ある程度の高度になると結界にひっかかる。この島全体に張られているみたいだな。」

「解除してもらえないかな？」

「わからないが、いちいち待つのが面倒だ。」

「面倒って…カナン君危ないかもしれないよ？」

「心配ない。私との契約は切れていない。契約が切れた時がマスターが死んだ時だ。」

「へえ～そんなこともわかるんだ～。」

喋りながら歩いていると島が大きく欠けた部分に出た。

ごっそり削りとられたようにいきなり砂浜がなくなっている。

「ここみたいだね。意図的に削られた見たいに綺麗になくなってるし…」

「マスターは…あれではないのか？」

メイデンが指を指したその先には、仰向けに水面に浮かび漂流しているカナン君がいた。

「うん！カナン君だ！って…気絶してる？」

「かもしれないな…今は仰向けだから良いが、強い波がきてうつ伏せになれば…」

気絶をしてるカナン君は溺れちゃう！！

「早く助けないと！！」

「待て……ぶって…るだ……！」

メイデンの声は走り出したヴィヴィオがたてた水の音によってかきけされた。

「今行くから！！」

深くなってきたため、泳ぎに切り替える。

少しなら泳いだこともあるため、カナンに近づいていく…

「ん？あれ？ヴィヴィオ？」

「ふぇ！？」

気絶していると思われたカナンが目を開けた。
実はカナンは帰るのが面倒で漂流していただけであり、気絶をしていたわけではなかった。
しかし、ヴィヴィオに異変が起きる…

「っ！！」
あ、足が！！

体操もしないでいきなり泳いだため、つったのである。
沈んでいくヴィヴィオの体…

「お、おい！！ヤバッ！！」

潜水してヴィヴィオを追いかける。
既に意識がないのか、ぐったりとして沈んでいくヴィヴィオを捕まえなんとか海面に出した。

「おい！ヴィヴィオ！！くそ！！」

「マスター！早く！！」

ヴィヴィオの異変を感じたメイデンが作り出した石針の上にのり、助けに来てくれた。
陸地には上がったものの、ヴィヴィオは起きない…

「メイデン！誰か呼んでこい！！」

「わかった！」

息がない…え～とこういう時は気道がどうとか…
で、それでも起きない場合は…あれか…人工呼吸…

「…ごめんな。」
意を決して顔を近づけていく…
心臓が爆発しそうだ…

「こぽ…あ、う…わっ！！」

「っ！！！」」

まさに触れ合うギリギリの距離でヴィヴィオが水を吐き出し目を開けた。
その距離まさに数ミリと言ったとこか…
飛び退くように離れ、何故か二人とも正座をする…

「「ごめんなさい！／ごめん！」」

そして二人一緒に土下座…双子もびっくりのパーフェクトにハモった二人だった…

「い、今のは…その…キ、キスをしようとしたわけじゃなくて…」

「う、うん…わ、私が溺れちゃったからだよね…」

「そ、そうなんだけど…」

「なら…人命救助をしようとしたんだし、ああなっても仕方ないよ。」

「でも人命救助とはいえ、ヴィヴィオって…その…初…だよな…」

「あの…えと…うん…」

「それを俺なんかがしようとしたんだし…」

「も、もしかして…カナン君も…かな？」

「っっっ～～～！！！」

わぁ…カナン君真っ赤…カナン君も初だったんだ。

「あのな…俺そういう耐性ないからやめてくれ…」

「ごめんなさい…」

「いいよ。じゃあ、おあいこってことにしてくれるか？」

「うん…」

「ありがとな。んじゃ俺は…」

皆を呼びに…

「あ、あのね！！」

「お、おう。」

「もし…もしだよ？

あのまま私が目を開けてなかったら…その…えと…」

「…してた…よ。」

「っ！！！！」

あれ？私、おかしいのかな？
カナン君は大切なお友達のはずなのに…
でも、してくれたってことに喜んでる？
もしかして…もしかして…私は…

「ふにゃあああああ…」
ドサッ…

「お、おい！？ヴィヴィオ！？」

その後、抱き抱えられ揺られていたことを最後に私の意識は暗闇に落ちた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ん…あれ？ここは…」

「気が付いたか？ちなみに別荘の中だ。」

「メイデン？カナン君は？」

「マスターか？ヴィヴィオを抱き抱えて運んで来た後、メンバー全ての目線にさらされているな。」

「暴力は…？」

「はやてさん曰く、暴力より無言で睨まれているほうが遥かに効き

目があるらしい。」

「あはは…」

苦笑いをしつつ、カナン君に対しての自分の気持ちに蓋をする…
私は友達としてカナン君が好きなんだ…
将来になっても三人笑って会えるように…
バラバラになんかなりたくないから…
この最高の友達を失いたくないから…
私は…好きにはならない…心の奥深くにきつく蓋をした…

「…ヴィヴィオ？どうしたんだ？」

「ううん。何でもないよ。それより、カナン君を開放してあげなくちゃ。」

ヴィヴィオはいつも通り、笑みで返す。
しかし、わかってしまった…溢れそうな想いを必死に押さえつけながら…
祐希奈の場合は諦めればいずれは未練を断ち切る…
しかしヴィヴィオは…いつまでも…いつまでも溜め込み続けていく…
自分の気持ちに背を向けて…

「たまには…自分に正直になってもいいと思うがな…」

「え？」

「いや…何でもない。行こう。」

「う、うん。」

これが爆弾にならなければいいが…
まぁ、ヴィヴィオは我慢強いから余程のことがない限りは、まだしばらくは大丈夫だろう…
とりあえずは、あのバカマスターを何とかしない限りは、どうしようもないな。

「うわ…」

「これは…」

私達が外に出ると…負の空間が出来上がっていた。
正座しているマスターの周りの空間が歪んで見えるのは気のせいか？

「…」

マスターは無言ではやてさん達を見上げている

「ん？なんや？言いたいことがあるんなら男らしくズバッっと言おか？」

「ただ、いくら男らしく言うにしてもよく考えてズバッっと言った方がいいよ。」

「言い訳っぽい気持ちが少しでも入ってたら、これをプラス二時間はやるから。」
マスターがバカな理由…というかヘタレな理由はこの尋問やフェイトさんの影響もかなりある気がしてきたぞ…
となると…マスターを何とかするためにはこの周りの環境から何とかしないといけないということか？

途方もない話だな…

「じゃあ、この際なんで言わせてもらいます…
ヴィヴィオを危険にさらしたのは弁明しません。俺です。
でも、皆さんの注意力が散漫し過ぎていたのも事実だと思うんです。」

ん？何だ？マスターは少し怒っているのか？

「私らにも責任はあるて言うんやな？」

「はい。確かに息抜きとして遊ぶのもいいと思います。
俺はメイデンに誰か呼びに行くように言いました。
でも、俺がヴィヴィオを抱えてくる間、誰とも会いませんでした…
メイデンの話が聞こえない程遊んでいたのか…
聞こえているけど他人任せで誰も行こうとしなかったのかは分かりませんが…
さすがに今回は気を緩めすぎだと思います。
こんな状態の部隊にスカリエッティが襲撃してきたら終わりです。」

「ヴィヴィオの件は私達も悪かったよ…ごめん。
でも、スカリエッティについてはロングアーチのスタッフが２４時間体制で見ていてくれるんだよ？」

なのはさんのその言葉にマスターから明らかな怒りの気配が発せられる。

「なら…聞き返すがな…ロングアーチが頑張ってくれるから現地は警戒しなくていいのか…
機動六課ってのはそんな腐った部隊なのかよ…外は優秀なのに、内が腐ってるような部隊に…
そんな部隊に…何かを守れるとは思わない！」

口調は悪いが、言っていることは間違ってはいないな。
私も同意見だ。

「カナン礼儀がなってないね…
君は所詮、嘱託魔導師…
私達より遥かにしたの権限しかないんだ。
私達に逆らう権限はないのわかってるよね？」

「フェ…」

（ヴィヴィオ、今は黙っていろ。
マスターが言い出したんだ…
私達が口を挟むべきではない。）

（で、でも！）

（大丈夫だ。見ていろ…）

（う、うん。）

「逆らったらどうなるんだ？
いつもみたいに暴力で黙らせるのか？
さすが腐った部隊の執務官殿だな…」

「黙れ！！」

フェイトさんがバルディッシュを起動し、斬りかかる。マスターは目をつむり静かに座るだけだった…▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
「うん。カナンも芯はしっかりしてるね。合格。」

「へ？」

フェイトさんがマスターの頭を撫でている。
まぁ、そんなことだとは思ったが…

「上官に対してでも意見を言える。カナン君がいたら良い部隊なるね。」

「へ？へ？いや、何の話？」

「ごめんな～。
ヴィヴィオの件は気付いてたんやけど、スバルが見に行った時にはなんか二人とも正座してたらしくて、安全やと思ってな。
丁度ええ機会やったから、わざとミスをして、上官に対してカナンがどこまで意見を言えるか試してたんや～。ほんま堪忍な。」

「…誰の提案っすか？」

「誰だろさっぱりわかんないわ♪」

「祐希奈あああ！！！貴様かあああああ！！！」

「でもカナンって全部ヘタレかと思ってたけど、やっぱり男の子だね～。」

スバルさん…違うぞ、今日はたまたまヴィヴィオが絡んでいて、怒りがあったから言えただけで、実は…というかやっぱりヘタレだ。

「び、びっくりしたよ～。メイデン気付いてたの？」

「ん?途中から妙に三人が悪役になりすぎていたからな…」

「にゃはは。やっぱり?
はやてちゃんこの台本無理があるよ。」

「ほうか~?我ながらなかなかの出来やと思ったんやけどなあ。」

「はやて…私、ここまで黒くないよね?」

「…」

「何で黙るの?な、なのは?」

「にゃはは…」

「何で笑うの!?」

理由は一つ…上官、下官の部分はないが、いつものフェイトはカナンの人権を否定しまくっているため、結構近いと思っていたから…ただ一名を除いて。

「大丈夫っすよ。いくらなんでもあそこまで酷くありませんから。」

『ええ~!カナンが言うの!?』

メンバー心の中でハモった瞬間だった…

「カナン…」

「フェイトさんって人間否定とかしながら殴ったりはしてますが…」

「う…」

「自分で気付いてます？
死ぬような急所は全部外してるんすよ？」

『マジで！？』

再びハモる。

「知らなかった…」

「フェイトさんの攻撃は、三途の川こそ逝きますが、時間としては、
祐希奈より短く、軽いんです。
結局は優しいってことっすね。」

「カナン…ありがとう！
今までひどいことしてきてごめんね？」

「いいっすよ。これからは…」

「今度からは少し軽めにするからね。」

「…はは。ありがとうございます。」

『なくならないんだ…』

若干フェイトとカナンの仲が修復された。
これからは暴力は少し加減するということだが、無くならないので、

喜んでいいのかはわからないが…

「さてと…一区切りついたわけだし、そろそろ時間的にもオッケーね。
皆、海の方見てなさいよ？特にヴィヴィオ。」

「わ、私？」

「じゃね～♪」

「何だアイツ…」

「さぁ？」

浜辺では…
「さてと…やるわよ。
アシェル！セットアップ！」
『了解です。』

「よいしょっと。」
祐希奈が抱えるのは例のブラックケースの中身を袋に詰めたもの。

「稀少技能…」
『ウイング展開！』

夜空に飛び上がる白銀の天使…

「祐希ちゃんが見せたいのってこれ？」

「確かに綺麗だが…」

「いや、注目って言ったからには…」

「いっくわよ～！！」

「な？」

あの程度で終わる奴では無いことはわかっていた。

「たあああああ！！」

祐希ちゃんがそらに向かって何かを投げまくっている…玉？

「鳳凰裂光翔！！」

白銀から紅蓮の翼へ…次の瞬間異変が起きた。

「た～まや～！！！」

ドーーーン！！

「「「わああ！！！」」」

六課メンバーから沸き上がる歓声。

夜空に咲いた色とりどりの花、花、花…もしかしてこれは…

「花火…」

「流石、祐希奈だ、やることが違う。」

「確かにアイツには危険物だな。」

ドドーーン！！

立て続けに華々しく咲いては消えていく幻想的な光景に、六課テンションはＭＡＸに。

「祐希奈～！！最高～！！」

「スバルさん…アイツテンション上がるからそういうのは…」

「やっぱり～？じゃあもっと凄いの行くわよ～♪」

「遅かったか…」

祐希奈は急上昇…そして斜め下に向かって花火の玉を落としながら降下…

「スパイラル！！フレア！！」

ドドドドド！！

上り坂のように、下から上へと爆発していく、花火。

「「「「お～！！！」」」」

「あ～あ…完全にノッちまってるよ…」

「あはは。綺麗だね。」

「こんなに綺麗なものを見れるとはな。」

「私も夏が好きになれそうだな～。」

「好きは良いけど夏バカはやめてくれよ？」

「あそこまでは無理かな…」

「今気になって調べてみたが、結界が解除されているな…大丈夫なのか？」

「こんな六課メンバー全員が纏まってるとこに堂々とはこれないだろ。
第一、さっき言っといたから皆、警戒心は持ってるだろ。」

「「「やっちゃえ祐希奈～！！！」」」

ちなみに叫んだのは、スバル、ギンガ、なのはである…
果てしなく不安になってきたのでこう付け加えた。
「多分…な」
と…

「フィーバー♪」
ズドドドド！

今度は適当に放り投げた花火をブルーゲイルに火を追加し、着火させ、あたかもスターマインのように、広がる。

「…先にあのバカを何とかしないとな。
緊張感なんて皆無だ…」

「バカはマスターだがな…」

「へ？」

「いや、そろそろ何かをしてやらないと時間がないかもとだけ伝えておく。」

この事件が終わったらデートなりなんなりして、蓋を緩めてやってくれ…

そうしないとヴィヴィオが…

可哀想すぎる…

「な、何の話だ？」

「う～ん。メイデンっていきなり内容から喋るから分からない時があるんだよね～。」

「はぁ…かなり分かりやすい情報だとは思うがな…」

「「さっぱり。」」

…分かってはいたんだ…

ヴィヴィオには伝わらないと思っていたからギリギリまで削って言ったのだが…マスター…やっぱりあなたも…天然と言われる者だ。

「まだまだ私の気苦労は続くかもしれないな…」

「「だから何の話？／だ？」」

「いずれ、分かる。

恥ずかしい思いをするだろうがな。」

「「？？？」」

「ラースートー！！！てりゃ！！」

高々と投げられた玉…
それを撃ち抜く。
今までで一番大きな花が、夜空に輝いていた…
全員その花火を今度は静かに見つめ本日最後のハモる言葉を呟く。
『綺麗…』
と…それ以外の言葉は出てこなかった。

「どうだった？」

浜辺から祐希奈が戻ってきた。
あれだけの爆発の中にいながら火傷をしたような形跡はない。
防御が得意なだけはある。

「お疲れ様や～。
こんなええもん見せてもらってありがとうな。」

「花火なんて久しぶりに見たよ。
ありがとう。祐希奈。」

「私からも、ありがとう。」

「喜んでもらえて良かった。
ヴィヴィオは？夏、好きになれそう？」

「うん！祐希ちゃん！ありがとう！」

「お前アリサさんにも礼しとけよ？
打ち上げ花火ってかなり高いもんだろ…」

「打ち上げてない分は費用は浮くわよ？」

「だとしても高いことに変わりはないだろ…」

「仕方ないわね…」

携帯を取りだし、アリサさんにかけているのか…

「もしもし祐希奈？」

「あ、アリサ？花火上手くいったわ。ありがと。」

「はいはい。喜んでくれた？」

「うん。バッチリ。」

「良かった。じゃ～ね。」

「バイバイ。」
ブツ…

「ず、随分短い電話だな。」

「お前…普通はもっと有り難みをもって言うんだ。」

「私とアリサの二人には、言葉を越えた友情があるから大丈夫よ♪」

「へいへい、そうですか～。」
これだからこいつの相手はしてられん…
「これで計画パート1は終わりね。」
「パート2もあるの？」
「もちろん♪パート2は夏祭りよ♪」
「お祭り？楽しそうだね。」
「ヴィヴィオも夏がないと生きられなくなるわよ～♪」
「わっ！それは大変かも…お仕事で四季が無い所にも行かなくちゃいけない時もあるのに…」
「真に受けるな…」
この天然さんときたら…
「死なない？」
「ああ。」
「私は死ぬわ！！」
「ええ！？」
「そ、それは大変だ！
祐希奈はやてさんに頼め！」
間違えた…この天然さん達ときたら…可愛いけどな。

「真に受けるなっつーの！！」

「「死なない？」」

「死なないから安心しろ。」

「私は死ぬわ♪」

「「ええ！？」」

「さっきと同じ反応をすなあああ！！！！」

この問答を後三回繰り返してようやく、天然ズの暴走は収まった…

「あの四人は元気やなあ。」

「元気が良すぎる時もあるけどね。」

「カナンはどっちに倒れるかな？」

「あれ～？フェイトちゃんカナンが倒れてもええんか？」

「うん。少しは認めてあげようかなって。」

「少しってどういうこと？」

「好きになるのは構わないけど、妨害はする。」

「あんま今と変わらんような気がするんやけど…」

「カナンを人間って認めた所が全然違うよ。」

「にゃはは…ちなみに今までのカナンは何だったの？」

「鬱陶しい野良犬。」

この解答には、なのはもはやても苦笑いをするしかなかった…

1日騒ぎ疲れたメンバーは、別荘の中に入る。

内装は、やはり素晴らしく、風通しもよく、使っていないと聞いていたが、チリひとつ見つからない…

掃除をしてくれたのだろうか？

「アリサちゃん本当にここ使ってないのかな～？」

「私らが止まっても十分過ぎるスペースもあるし…」

「お風呂も広かったよね…」

何故使わないのか…やはり大金持ちの気持ちはわからない三人であった。

わからないものは仕方ないという結論になり、夕食を作る。

久しぶりのメンバー全員集合ということもあり、はやてがその腕を奮い、中華のフルコースを作った（食材はあらかじめ買ってある。）

「美味しい…」

「負けた…」

「うま…」

「♪♪♪～」

「好評みたいで良かったわ～。」

八神部隊長の料理が美味しいのは知っていたけど、本気を出すとここまで凄いなんて…

はやてさん…こんなに料理上手かったんだ…

上には上がいるもんね…

そこで二人は、視線をカナンとメイデンに移す。

「…」

「美味しい♪♪♪」

無言のまま、ひたすら食べまくるカナン君と、超ご機嫌でちまちまと食べるメイデンがいた…

他のメンバーにしても、夢中になって食べている人、驚愕を浮かべながら味わいながら食べている人など…自分達の作る料理とは明らかに反応が違う…

『負けてられない…』

二人の少女に火がついた瞬間であった。

「「「ご馳走様でした～！！」」」

「お粗末様でした。綺麗に食べたな～。」

「美味しかったですからね。」

「まだまだ食べたりないくらいです。」

あの体の何処に入るのか聞きたくなるほど、スバルさん、エリオの二人は食べまくっていた。
あの二人は食べっぱなしなので目立つが、実は何気にギンガさんも、同じくらい食べているのを私は見逃してはいない。

「スバルとエリオは、もうちょい味わって食べてや。」

「「すいません…」」

「あはは！何も怒ってへんよ。
ほんなら今日は解散や。
部屋は十分あるし、部屋割りは各自で頼むわ。」

「「「了解！！」」」

この別荘の寝室は、たくさんあり、余裕を持って寝れる…筈だったのだが…

「ギン姉～、ティア～。一緒に寝ようよ～。」

「はいはい。そんなことだと思ってたわよ。」

「一緒に寝るのも久しぶりね～。」

「エリオ君、一緒に寝てくれる？」

「え？僕はカナンと寝た方が…」

「私とは嫌？」

「そ、そんなことないよ。わかった。一緒に寝ようか。」

「うん！」

「きゅくる～♪」

「ほな、やっぱり私らはこの三人やな。」

「はやてちゃんと寝るのも久しぶり。」

「久しぶりついでに三人で夜更かしもいいかもね。」

「では我々はこの四人で寝るか。」

「いつもとあんましかわんねーな。」

「ですね～。」

「うむ。」

仲良し組で固まっていくと結局こうなるわけだ…

「じゃあ、私達はこの四人だね。」

「そうなるわね。」

「ああ。よろしく頼む。」

「あのな？お前らフツーに言うけどな…

俺は男だぞ？その辺を頭にいれてもう一回考えろ。」

「そんなこと言ったら、エリオはどうなるのかな？」

「…あいつは男としての尊厳を捨てたんだ。」

「じゃあ、あんたも捨てたってことで、行くわよ。」

ガシッ

「おい！強制か！？強制なのか！？」

「一名様、男の尊厳を捨てましたのでご案内～♪」

ズルズル…

「無茶苦茶だ～！！」

「あはは…」

「こうなる気はしていたが…」

その夜、それまでの晴天が嘘のように大雨が降りだした…

簡単に尊厳を捨てたから神様が怒っているに違いない。

神様、いるのかはわからないけど、悪いのは祐希奈だからな？

間違っても俺に天罰落とすなよ？

「カナン君？何してるの？」

「ん？天罰が俺に来ないように神様に頼んでたんだ。」

「天罰？カナン君何か悪いことしたの？」

尊厳捨てたことが悪いことなら現在進行形でやってるな。

「今はしてないんじゃないか？」

少し前にならたくさんしてるけどな。
俺が罪に問われない理由は傷つけたのがこいつらだったからであり、
他の人間を傷つけていれば、間違いなく捕まっている。

「今は？昔はしたの？」

「さぁ？昔はしたかもしれないな…」

「あんたねえ…まさか暴走の時のこと引きずってんじゃないでしょうね？」

何でこんなに俺の心は見透かされるかな…
そんなにわかりやすいか？

「それなら大丈夫だね。
私達は許してるし、天罰なんて落ちないよ。」

「落とすかどうかなんてのは神様が決めることだ。
お前らがいくら許してもな。」

「天罰なんて雷とかそんなもんでしょ？
雷くらい打たれた所で、あんたは死なないって♪」

「私のマスターなのだから自然災害くらいで死んでもらっては困るぞ。」

だ～か～ら～何でこいつらは俺は不死身みたいな言い方するんだよ…
頑丈なだけだ！多分。

「何か疲れた…寝る。」

「あんたが変な話しだすからよ。」

「大丈夫？」

「ああ。おやすみ。」

「「おやすみ～。」」

「仕方ないわね。弄る奴もいないことだし、私達も寝よっか。」

「弄るって…他には理由はないの？」

「うん♪」

「はぁ…おやすみ。」

「おやすみ～。」

やがて三人の布団から規則正しい寝息が聞こえ始めた。
あれだけ騒げば疲れもするか。
それにしてもこの三人は、いろいろと問題が多いことだな。
マスターに至ってはまだ暴走のことを悔いているのか…
二人を守る気持ちが空回りしないといいがな…

「ふあ…三人共…おやすみ…」

こうして四人は眠りについた…
しかし、その平穏はすぐに崩されることとなる…

第二十八話　侵入

大雨が降る深夜…
六課のメンバーが眠りに落ちている時間…
誰も予想すらしていなかった…
こんなにも早く、奴が来るなんて…

「く、あ！！」

メイデンは突然の頭痛に強制的に目が覚める。
頭を刺すような激痛…
そして…

『やぁ、やはり君とは連絡がとれたみたいだね。
目覚めはどうだい？』

「く…何故貴様が私の中に干渉できる…
ジェイル・スカリエッティ…」

『グングニルから無理矢理繋げただけさ。
さて…問題を出そうか…
僕は今何処にいるかわかるかい？』

「な…に…？」

『繋がってる今なら君の力で逆探知を出来るだろう？』

「バカな…貴様…どうやって気付かれずに結界の中に入った？」

メイデンはスカリエッティに言われ、逆探知をした。スカリエッティの居場所は…別荘のすぐ近く…
結界をすり抜け、侵入をしてきていた。

『居場所は、前回君達と戦った際、マーキングをしておいただけだよ。
結界については、干渉して穴を開けただけさ。』

「く…」

「メイデン？誰と話してるんだ？」

物音に敏感なカナンが話声を聞き、起きた。
メイデンはカナンに、なのは達を起こすように何かに書こうとした。

『面倒なことをしたらすぐにそこを破壊するよ？
それと…やあ、エクスカリバーの持ち主。』

「貴様…」

「外にスカリエッティが侵入して来ている…」

『ククク…直接会って話さないかい？』

「…少し待て。」

六課メンバー全員が人質にとられている今…行くしかなかった。
窓から飛び降り騎士甲冑を装着、大雨の中に身をさらす。
少し先に進むと、本当にスカリエッティがいた…

「久しぶりだね。」

「「…」」

「おや、随分お怒りのようだ。
後二人はどうしたんだい？」

「貴様なんざ、俺達だけで十分だ…」

「彼女達はそう思っていないみたいだね。」

「何…？」

「あんただけ抜け駆けなんてさせないわよ。」

「私達、友達だよ？
もう少し頼ってくれてもいいんじゃないかな？」

驚いて振り向くと、雨の中に二人の少女がいた。

「ヴィヴィオ、祐希奈…何で…」

「あんたほどじゃないけど、私は敏感な方なのよ。」

「私も…」

「「ヴィヴィオは違う。」」

二人はいつでもどんな時でもツッコミは忘れなかった…

「うぅ…どうせ私は祐希ちゃんに起こしてもらわなきゃ起きなかったもん…」

「時間稼ぎのつもりかも知れないが、生憎バレバレだよ？」

「「っ！」」

「よく気付いたな…」

少しでも長く会話を続けヴィヴィオ達が呼んだであろうなのはさん達を待っていたのだが…

「ククク…もう僕は人の形をした化け物でしかないからね…建物の中まで丸見えなのさ。」

「成る程…」

そうだ…アイツはもう人間ではない…

頭にそれをもう一度叩き込み、剣の柄を握る。

「こんなところで戦闘をするつもりは毛頭ないよ…さぁ…会場に行こうか…」

「こいつらは関係ない…俺だけ…」

「大有りだよ！！」

「一発ぶん殴らなきゃ気が済まないわよ…」

折角お前等だけでも、助けようとしたのに…

「…バカ。」

「「「カナン（君）がね！！／マスターがな。」」」

「へいへい…そうですか…」

たく…三人揃ってバカ呼ばわりかよ…

まぁ、事実だから認めるが…

「ククク…全員招待ということだね。

楽しくなりそうだ…」

その言葉を最後に、スカリエッティを中心に次元結界が展開され、

海から、周りを岩壁に囲まれた場所に景色が変わる。

「ドクタ～待ちくたびれました～。」

「ごめんよ。少し話が弾んでしまってね。」

誰と誰がだ…

貴様なんぞと喋りたくもない…

「さて、客人も待ちくたびれているようだし…クアットロ…」

「わかりました～。」

「く…」

「面倒ね…」

「ダルい奴だ…」

「全くだな…」

クアットロから展開されるのは、高濃度のＡＭＦ…
やはり、ウーノと同じく、クアットロも改造をされているようだ。
この状況ではスカリエッティを相手に出来るはずもない…
まずはアイツから潰さなくてはならない。

「アイツから潰すぞ…」

「うん。」

「オッケー！」

「２ｎｄモード！」

「ブレード展開！」

「「了解！」」

クアットロを挟み込むようにヴィヴィオ、祐希奈が走り込む。

「「はあああ！」」

左右から振り下ろされた刃は、迷いなくクアットロへと向かう。

「私だって強化されたんですよ～？」

その刃を左右片腕ずつで掴むクアットロがいた…
しかし、ヴィヴィオ、祐希奈は笑う。

「終わりだよ。」

「残念、私達は囮なのよ。」

「大人しく寝とけー！！」

刺突の構えを取り突っ込んでくるカナンがいた。

「きゃあああ！…なんちゃって。
捕まえた～♪」

「なっ！」

クアットロの背中から、ガジェット三型のアームが飛び出し、カナンの腕ごと絡めとる…

三人はクアットロ一人により身動きを封じ込められてしまった。
これが何を意味するか…

「ドクタ～やっちゃってくださ～い♪」

「ククク…上手く凌いでくれたまえ。」

答えは、スカリエッティによる大威力魔法だった…
グングニルを使わないのは、すぐに仕留めてしまっては面白くないからだろう。グングニルの先端から膨大な魔力が溢れ出す。
この量からして、当たればどのみち瀕死だが…

「祐希ちゃん！」
「任せて！」

『『ロードカートリッジ！』』

左右の二人からカートリッジが排出され、ＡＭＦを無力化、同時にヴィヴィオの剣からは風が、祐希奈の剣からは炎が纏われる。

「可愛くないわね！」

「別にあなたに可愛いなんて言って欲しくないよ！」

「嬉しいどころか、最悪の気分になっちゃうわよ！」

「生意気な！」

「「ぉおおお！！！」」

「ちっ！」

二人の剣はクアットロの手から解放され、自由になった瞬間、軌道を変える。

「ウィンドスラッシャー！！」

「紫電一閃！！」

カナンの剣を捕らえていたアームを真っ二つに叩き斬った。

剣圧にバランスを崩したクアットロを無視し、二人は上を向く。

ヴィヴィオはシューティングモードへ、カナンは収束を開始。

「ディバイン！！」

「エクス！！」

溜められる砲撃は共にＡランクを越えている。
合わさるその力は、ＡＡＡに匹敵。
それを躊躇いもなく撃ち放つ。

「バスター！！」
「カリバー！！」

「その程度で勝てるかな？」

グングニルから放たれた赤い砲撃は、二人の砲撃と衝突。三秒程の拮抗の後に、飲み込んでしまった。

「祐希ちゃん頑張って！」

「任せなさい！」
『ウィング展開！』

三人が白銀の翼に包まれ、翼が砲撃を受け止める。

「威力が下がった砲撃なんてねえ…
私には聞かないのよ！」
『反射！』

「やるねえ…」

爆発…
反射された砲撃を避けようともせず、笑ったままともに受ける。

「まだだよ…」

「わかってるわよ…」

「お前等！伏せろ！」

カナンの叫びに素早く伏せる、同時カナンが抜刀し頭上に閃光が疾る。

アームの残骸が散らばった。

「惜しかったのに～。」

体勢を立て直したクアットロがアームを伸ばし、攻撃を加えていた。

そのことごとくをカナンが斬り飛ばし、二人を守る。しかし、これではじり貧だった。

防いでいるうちに再びスカリエッティが砲撃を溜め、撃ち込めば、いつかは負ける…

そこで、考えついたのは…

「ヴィヴィオ、祐希奈、俺がスカリエッティを止めるから、お前等でアイツを倒してくれ。」

自身を身代わりにした無謀な作戦だった…

「カナン君一人で！？

ダメ！！私は反対だよ！！」

賛成出来る筈がない。

スカリエッティは、三人で戦っても勝てないかもしれないのに。

「ヴィヴィオ…このままじゃ全滅を待つだけだ…

これが最善なんだよ。」

「ダメ…」

「カナン…やれるのね？」

「ああ。俺の頑丈さはよく知ってるだろ？」

祐希奈は少し目を閉じ、開く…
笑顔でこう言った。

「アンタが死んだらメイデンは私が貰うからね♪」

「「「ええええ！！！！！」」」

「だってメイデン単体でも強いし…ね？いいでしょ？」

「お、俺の心配は？」

「知らないわよ。」

「ひどっ！！」

「アンタが死ぬなんて思ってないから心配もしてないし、メイデンとられたくないなら帰って来なさい！」

「祐希奈…」
成る程、今のはコイツの照れ隠しみたいなもんか。
しっかし、怖いこと言うなよな…

「カナン君、約束…忘れちゃダメだよ？」

「大丈夫、覚えてる。」

「なら…頑張ってね！」

「ああ！メイデン！後頼むな！！」

「マ、マスター！？一人で行く気なのか！？」

「お前がいた方がヴィヴィオ達が早く勝てるだろうしな！
んじゃ、なるべく早く倒してくれよ！」

剣速を上げ、アームを全て斬り飛ばした隙に、鞘を腰から外し、空中にいるスカリエッティの元へと、魔力が結合しにくいなか飛び上がって行った。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「まったく…ユニゾンもせずに行くとは思わなかったぞ…」

「さっきからお喋りしすぎじゃない？」

どれだけあるのか、クアットロの背中からさらにアームが排出され、襲いかかる。

「処理は私がやるからヴィヴィオ、祐希奈、突っ込め。」

「わかった！」

「頼んだわよ！」

クアットロに向け、二人が走り込む。

当然のごとくアームが立ち塞がるが、二人はメイデンを信じ、そのまま突っ込んだ。

「バカじゃないの？」

「それはお前だな…
グランド！スパイク！」

「なっ！」

クアットロの背中から突如石針が飛び出し、アームを根本から破壊した。

「紫電！一閃！」

開いた道から祐希奈が剣に炎を纏いクアットロに突撃する。
しかし、空振り…

「ＩＳ…だっけ…」

「そ、私のＩＳシルバーカーテン…嘘と現実の世界を楽しみましょう？」

クアットロの姿が分裂し、祐希奈の前後左右に現れる。
本体は一人、わかってはいても下手な隙を見せれば、終わり…
そんな中、祐希奈は叫ぶ。

「ヴィヴィオ！やっちゃいなさい！」

「オッケー！」

そう…突撃したのは祐希奈のみ、ヴィヴィオは後方でセカンド、デュアルソードモードに風を纏う。

「フェアリー！行くよ！」
『ツインソニックブラスト！』

二刀の剣から放たれた鎌鼬は、祐希奈を囲っていた全てのクアットロを薙ぎ払った。
その中にいた本体に直撃…爆煙が上がる…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼
「本当にガキって生意気…」

爆煙の中から、四型の鋭利なアームが祐希奈に伸びる。

「アシェル！」
『プロテクション！』
ガキィ！

余りの威力に、鉄壁を誇る祐希奈が数メートル程、押し込まれる…
ヴィヴィオだったなら、破られていた威力。
受けたのが自分で良かったと内心安堵する。
「祐希ちゃん！」

「大丈夫よ…この程度…」

「生意気なガキには…お仕置きしなくちゃ…」

『祐希奈！離脱を！』

「うわっ！」

アシェルが叫ぶが、既に遅く、多数のアームに祐希奈の体は持ち上げられた。

「ほ～ら！！」

ドゴン！！

「がっ！！」

荒野に叩きつけられる祐希奈の体…

それだけに終わらず、また持ち上げられる…

「あはははは！！死んじゃいなさい！！」

ドゴン！…ドゴン！

「あああああ！！」

何度も何度も…叩きつけられては持ち上げられる…

「やーめーろー！！！」

ヴィヴィオはソニックムーブを使い、クアットロに斬りかかる。

が…

「焦りは禁物…直線軌道じゃ…私には当てられない…」

片腕一本で、刃を止められ、身動きを封じられる…

祐希奈と同じように、アームに捕まり、持ち上げられる…

「あははは！二人一緒に殺してあげる！！」

ドゴン！！

「「あああああ！！」」

「潰れちゃえ～♪」

今までで一番高くまで持ち上げられるアーム…

叩きつけられれば、確実に死ねる高さにまで…

そして、振り下ろされる一撃…

ズウン…

「よくも二人を…よくも私の仲間を…よくも私の友達を！！」

叩きつけられ、沈みこんだ地面の中、アームを受け止めるアウトフレーム状態のメイデンがいた…

「ふ～ん…友達ねえ…くだらない。」

「貴様にはくだらないかもしれない…

でも、孤独だった私には…かけがえのない存在なんだ。その友達を傷つけるのなら…

私が貴様の相手をしてやる…

ただし、多少の損傷は覚悟しておけ…」

「デバイスごときが私を？あはは！やってみせてよ！」

クアットロは伊達メガネを放り投げ、挑発的な態度でメイデンをけ

なす。
改造をされてから、言葉使いはさらに酷く、性格は残虐になっていた。

「完全に破壊するとヴィヴィオ達に怒られるのでな…八割破壊で許してやろう…」

「デバイスが調子に乗るなあ！」

二人を絡めたアームが再び持ち上げられ、メイデンに振り下ろされる。

「二人を帰してもらうぞ。」

ただの一振り…
横に振るわれた拳は、アームを破壊し、二人の体を解放する。

「怪力が…」

悪態をついた瞬間、メイデンが目の前に現れた。

「悪いが…手加減は抜きだ…」

「早い！」

風の力で加速し、一瞬で近づいたメイデンは、拳を振り被り、思い切りクアットロの顔面を殴り付けた！

「っ！顔を！！」

「喋るな…」
ドゴッ！！
「がっ！！」
背中から蹴り飛ばされ、地面に叩きつけられる。
「終わりだ！！」
ギシッ…
掌をクアットロに向け、閉じていく…
空間が軋む…今までの空間圧砕とは次元が違う。
相手を破壊するために放たれるその一撃は、小型のブラックホールを思わせる。
「ＡＭＦ下でこの威力…
あ～あ…少しなめてたかなあ…」
「消え去れ…」
クアットロの姿が歪み、潰される瞬間、閉じられようとした空間が広がっていく…
純粋に力だけによってこじ開けられていく。
「な…に…」
「でも残念ながら…まだ足りないわ。」
その言葉が響くと、完全に空間が開いた。
そこには…ウーノと同じ、姿になったクアットロがいた…
「あ～あ…楽しかったけど終わりね。」

ヒュン！
唸りをあげるアームがメイデンに向かう。
メイデンは即座に反応、大地の力を使い、受け止める。

「く…あ…」

「ほらほら…こんなもんなの？」

大地の力をもってしても、押し込まれ、徐々に下がっていく…

「バイバ～イ♪」
ドゴン！

「がはっ！」

支えきれず、腹部に直撃したアームは、メイデンを木の葉のように軽々と吹き飛ばした…

「止め～♪」

「…プロテクション」

振り下ろされた鋭利なアーム…
無駄だと分かりつつも、プロテクションを張り、耐える…
やがて、耐えきれなくなったプロテクションにヒビが入り、広がっていく…

「もう少し…一緒にいたかったな…」

ついにプロテクション破壊し、下りてくるアームを見つめながら呟

いた…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼そのアームが突如斬り飛ばされた。

「一緒だよ…ずっとね！」

「嫌だって言ってもね！」

メイデンの目の前にいる二人の少女…

叩きつけられ、ボロボロの体になりつつも、助けてくれた二人…

そんな二人にメイデンが言う言葉は単純…

「ありがとう…」

「あはは。じゃあ、こちらこそ助けてくれてありがとう。」

「ヴィ～ヴィオ～…メイデンのありがとうの意味は助けたのとは別の意味よ～…」

「え？他に何かあるの？」

「やれやれ…まぁ、こういう子だけど、これからもよろしくね！」

「え？え？」

「ああ。わかっている。」

「二人で納得しないでよ～！！」

「わざわざまた殺られに来てくれたの？手間が省けて助かるわ～。」

「どうかな…今度は、負けないよ。」

「メイデンは優しいから捕獲しようとしたかもしれないけど…」

「いや…八割は破壊するつもりだった。」

「八割？甘いのよ。こういう変態はミスって全壊させちゃった～。くらいで丁度いいわ！！」

「良くないよ…」

「祐希奈だからな。」

祐希奈の問題発言に、ヴィヴィオは呆れ、メイデンは納得していた。

「お喋りはそこまでにしない！？」

ヒュン！

「烈破爆砕拳！！」

ドゴッ！！

迫るアームを無造作に殴り付け、消し飛ばした。

アームは金属に酷似しているため、高熱を操る祐希奈とは相性が悪い。

故に、簡単に消される。

「ヴィヴィオ、メイデン…止め任すわよ？」

「うん！」

「わかった。」

「いい返事よ♪」

そう言い、祐希奈はクアットロへと突撃する。

「いい気になるな!!」

大量のアームが祐希奈へと殺到、それを見て祐希奈は不敵に笑う…

「私を囲んだ時点であんたの負けよ!!」

『ウィング展開!最大出力!祐希奈!行けます!!』

カートリッジ三発を排出し、魔力を炎に変換、威力強化、スピード強化も加える。

「鳳凰裂光翔!!」

「く…」

祐希奈が纏うは紅蓮の翼…触れるアームを全て燃やし尽くし、勢いをあげながらクアットロへと突っ込む。

「シルバーカーテン!!」

再びクアットロが分裂…

その数、十体…祐希奈を囲い、その全てが、アームを持ち上げる…

その先に灯る光…砲撃が放たれようとしていた。

「幻術なんて無視よ！アシェル！」
『ロードカートリッジ！』
天空に弓を構える…
選んだ弓はブルーゲイル。
カートリッジ三発が排出され、矢は、地面に突き刺さり、魔力を放出。
祐希奈を中心に光の三角形を描く。
その三角形はベルカ式の魔方陣…
祐希奈自身は、白銀の羽に包まれ、防御体勢。
「ヘヴンリィジャッジメント！！」
天神の裁きと名付けられたその光は、幻術を消し去り、砲撃を放とうとしていたクアットロの巨体をも打ち上げる。
「殺す！！」
「あっそ…ま、頑張って。あれに耐えられたらの話だけどね。」
祐希奈の視線の先にはもちろんヴィヴィオ…
ただ、ここまで容赦ないとは思わなかったけどね。
「『ユニゾン・イン！！』」
二人はユニゾンを行っていた…
ヴィヴィオは古代ベルカの王のクローン…
メイデンもまた古代ベルカの伝説の剣の鞘…
相性が悪い筈がない。
瞳は黄金…髪からは神々しい程の光が放たれる…

「『風の力、大地の力、今一つに合わさらん…』」
『Ｂｒｅａｋ　ｗｉｎｄ！』
セカンドモードの刃の片方が消え、風が噴き出す…
ヴィヴィオの腕に大地の力が流れ込み、通常ではあり得ないような筋力に変化。
「『行けー！！！』」
ゴウ！
踏み込む地面が抉れ、全体重を乗せ剣が投げられた…
最早それは一筋の光と化してクアットロに向かう。
クアットロのど真ん中に直撃するが、アームを使い、受け止める。
「ぐぅぅぅ…なめるなあああああ！！！」
火花を散らし耐えるクアットロの目の前にヴィヴィオが現れる…
「『ブレイク！インパルス！！！』」
ドゴッ！！
ジェット噴射に追い討ちをかけるように叩き込まれた強烈な蹴り…
「あああああ！！！」
流石に耐えきれず、上半身と下半身を分断するように、胴体に大穴を開け、地面に落ちて言った…
▼▼▼▼▼▼▼▼「はぁ…はぁ…勝った…よね。」
「そいつも機能停止だし、ＡＭＦも解除されたみたいだし、終わったんじゃない？」
「はぁ…はぁ…疲れたぞ…」

「そりゃあ、最後にあんな無茶苦茶すれば疲れるわよ。」

魔力結合がしにくいなかで、ユニゾンをして、さらに風、大地、両方の力を同時行使したんだし…
意識があるっていうだけ凄いわよ。

「カ、カナン君を助けに行かないと…」

「そうだ！アイツは！？」

キョロキョロと視線を巡らし、カナンを探す。
そして見つけた…

「マ、マスター！！」

「嘘…」

「あのバカ！！」

カナン君の全身がボロボロなのは、覚悟していた…
ただ…出血がひどい。
遠目からでも分かるほど頭から血が流れている…
対して、スカリエッティは無傷。
グングニルを構えてすらいない。
いくら空間突破が使えなかったにしても、カナン君には、まだ空間把握があり、近接に関しては飛び抜けた才能を持っていた。
そのカナン君が傷一つつけられない…
早く助けに行かないと…
嫌な予感がする…とても嫌な予感が…

▼▼▼▼▼▼▼▼時は少し前に遡る。

「くそ…ここまで力の差があるとはな…」

何故こんなにもカナンはボロボロなのか…
反応は出来る、受けることも出来る、ただ、止めることが出来ない…
単純に腕力の差が有りすぎた…
もう、何度岩壁に叩きつけられたかわからない。
抜刀剣術は、ＡＭＦが解除されない限り、有効に使えるのは絶空のみ…
絶空を使えば一撃は防ぐことは出来る、しかし…隙が大きいため、
結果は同じと完全に手詰まりだった。

「さて…そろそろ限界かな?」

「誰が…」

言った瞬間スカリエッティの姿が消える…
気配は背後、剣を持ち上げ、足に力を込める。

「君がだよ!!」
ギィン!!

「ぐ…う…」

一撃を受けるだけで、腕の筋肉が悲鳴をあげ、膝が笑う…

「だんだん遅くなっているよ!!」
ギィン!!

「ぐあああ！！」

僅か二合…横殴りの一撃にあっさり吹き飛ばされ、再び岩壁に激突…
ガラガラと岩が落ちていく…
ヴィヴィオを倒し、スバルを倒し、なのはを倒し、フェイト倒してきたカナンでさえ、この化け物相手には分が悪すぎた…
しかし、それでも立ち向かう…
何故なら…

「女の子が頑張ってるのに…男の俺が頑張らないわけには行かないからな…
もう少し付き合ってもらうぜ？」

「頑張るね…
その心掛けに答えようかな…」

さらに上がるスカリエッティの魔力…

「くそ…」

悪態をつきながらも剣を構える。
三人が解除してくれるのを信じて…
カナンは待ち続ける…
そして、その瞬間が今、来る！！

「おや…クアットロは負けたみたいだね…」

「おし！！後はお前だけだ！！」

「そんなにボロボロの体で勝てるつもりかい？」

「ボロボロだから勝てるんだよ…
エクスカリバーリヴァースモード！！解放！！」

「ほう…これは…ちょっと驚いたかな…」

「今までの威力と同じ思うなよ…」

カナンの手には、かつて暴走していた時に手にしていた黒い魔剣が握られていた…
普段のカナンの倍以上の黒い魔力が逆巻く…
人間の限界を越えた戦いが始まろうとしていた…

第二十八話　侵入（後書き）

長い…まさか僕がバトルで二話も続くなんてびっくりです…

次回はカナンとスカリエッティの戦いを書く予定です。

第二十九話　天罰（前書き）

大変遅くなりました！　大会が近いので練習が長くて…　誤字など多いかもしれませんから見つけた場合は教えてください。

第二十九話　天罰

「あれは…本当にカナン君なの？」

「私達の他にはカナンしかいないじゃない…」

私達の視線の先で繰り広げられているのは剣撃戦…
ただ、カナン君とスカリエッティがぶつかり合う度、衝撃波が発生し、地上を破壊し、近づくことすら出来なかった…
それは最早、人の限界を越えた一撃…
カナン君から放たれる魔力は、恐怖すら覚える程禍々しく、いつもの優しいカナン君とは、同一の物とは思えなかった。

「メイデン…あの力は何？あの力は…何処で手に入れたの？」

「あの力は…本来のエクスカリバーには無かったものだ。
恐らく、マスターが暴走していた時に手にした力…」

「暴走って…じゃあ今のカナンはあの時の！？」

「いや、殺気はこちらへは感じられない。
制御は出来ているようだな。」

「良かったよ…」

「あまり良くはない…
制御が出来るということは、長く戦えるということだ。
早く助けに行かないとまずいことになる。」

「制御が出来るのに何でまずいことになるの？」

「それは…」

▼▼▼▼▼▼▼▼「あああ！！」

「ククク…」

二人が斬り結ぶこと五十合を越える。
吹き飛ばされてばかりだったカナンが、リヴァースモードを発動してからは、互角の斬り合いとなっていた。

「はぁ…はぁ…」

「やるじゃないか。
その状態になってから、押し負けていない。
さらに力を増していく…
どういう能力なんだい？」

「知ってどうする…
お前はここで捕まるんだ。知る意味ないだろ。」

「残念だね…でも、そう簡単に捕まる気はないよ？」

「そうかよ…」

「ああ。まだまだ君と‐遊んで‐いたいからね。」

「…」
くそ…この力使って漸く互角かよ…
気を抜かず、剣を握り締める。

瞬間、スカリエッティの姿が消える…前！！

「ほら！」

「ちっ！」

カナンは刺突を振り上げて弾くが、スカリエッティの斬撃は、その怪力によって強引に軌道を変え、何度もカナンに襲いかかる。
それをことごとく弾くが、何故か傷がついていく…

「っ！！」

腕に新たな傷が増え、裂けた皮膚から激痛が走る。

「やはり改造もしていないその体にその力は耐えきれないみたいだね！」

「確かにそうみたいだ…でもな…」
ギャリ…ギリギリ…

「ほう…」

つばぜり合いの状態からカナンがスカリエッティを押していく…

「だからこそ…お前に勝てる！！」
ギィン！！

ついに剣を振り切り、スカリエッティを吹き飛ばし、岩壁に激突させる。

「くらえええええ!!」

岩の塊が降る中、カナンは構わず空間突破で追撃。
スカリエッティは、グングニルの腹で受けるが、スピード、パワーの揃った刺突は、容易く岩壁を破壊し、ついには、岩壁そのものを無くしてしまった…

「面白いねえ…」

「く…」

渾身の一撃を受けてもスカリエッティは笑みを絶やさない…
どういう改造をしたんだこのイカレ野郎…

「少し痛かったから、反撃をしようかな?」
ギリギリ…

「なっ!」

まだ手加減してたのか!?
早めに決着つけたかったんだがな…
その思考を最後に、音速を破る速さで吹き飛ばされていく…
そしてやはり追撃…
振り上げられるグングニル…

「さぁ…耐えられるかな!?」

「ちっ!」

受けても地面に一直線か…死なないといいけどな…

剣を持ち上げ、衝撃に備える。
が、スカリエッティの背後に何かが見えた…

「一撃粉砕！」
「大地の力よ！」

響くのは、信頼する仲間の声。
祐希奈、メイデン、ナイスタイミングだ。

「烈破爆砕拳！！」
「グランドナックル！！」
ドゴッ！！

「がっ！」

予想外の所から受けた攻撃に、スカリエッティの表情が苦痛に変わる。

「「おおおお！！」」

叫びと共に、スカリエッティは空高くに打ち上げられる。
その先に待ち受けている少女、ヴィヴィオがいた。
拳に集まるは暴風…
ゆっくりと引き絞られるように、拳が引かれる…

「残念！甘いよ！！」

ヴィヴィオの存在に気付いたスカリエッティは急停止、横殴りの一撃をヴィヴィオに加えようとした。

「カナちゃん…見ててね…」

右腕に風を纏い炸裂…
スカリエッティの振りの勢いを激減させる。
その右腕をスカリエッティの腕に絡ませ、引き込む。風によって体勢が崩れたスカリエッティが近づく。

「ハイウィンド！！」
バキッ！！

「ぐっ！」

スカリエッティの顔にヴィヴィオの拳がめり込む。
そこからヴィヴィオは縦に回転をすることによって全体重を乗せる。

「インパクトー！！！！！」
ゴウッ！！
さらに風弾が零距離で叩き込まれ、スカリエッティは、流星のように地面に落ちていった。
しかし、三人はまだ止まらない…
ヴィヴィオはシューティングモードへ、祐希奈、クリムゾンアローを構え、メイデンは掌をスカリエッティに向けた。

「エクセリオン！！」
「インフェルノ！！」

溜められる巨大な砲撃と地獄の業火…
その威力、ＳＳは軽く越えるだろう。

「「バスター！！！！」」

容赦無く、スカリエッティに降り注いだ。
ここまで熱気が届く程の爆発が起きるが、スカリエッティには、止めの一撃が待っていた。

「潰れていろ！！」

メイデンが掌を閉じると同時に、爆発ごと空間を握り潰した…
ごっそりと抉りとられた荒野がその威力を物語っている。

「…死んだんじゃないか？」

「さぁ？ま、それよりも…」
鬼だ…やっぱり祐希奈は鬼から生まれたんだ…

「メイデンから聞いたよ。その剣の能力を…」

「…メ～イ～デ～ン？」

「う…だ、だってな？
あのまま長期戦になるとマスターが危険だと…」

「やれやれ…困った奴だ。」

「困った奴はあんたよ。
持ち主が傷つけば傷つく程威力、魔力が上がる剣って何よ！！」

「そして、カナン君の体は衝撃に耐えきれず、剣を振るう度、自分の体を傷つける、また威力が上がる…その繰り返し…
こんな力使ってたら死んじゃうよ！！」

「あ～やっぱり反対？」

「「当たり前！！」」

「今ん所、自分が攻撃した時につく傷なんて、擦り傷程度なんだけど…」

「威力が上がってきたらどれくらいになるの？」

「さぁ？そこまで長期戦したことねえし…」

「スカリエッティ相手なら長期戦になるに決まってるじゃない！！バッカじゃないの！？」

「すんません…バカっす。」

「とにかくそのモードは解除して欲しいな？」

「それは…無理だ。メイデンとユニゾンしてもこのモード無しじゃアイツに押し負ける。」

「そこまで強いの？」

「ああ…だから…今回は解除出来ない。」

「でも、このまま威力が上がり続けたら！！」

「仕方ない…私がマスターの体を強化しておく…」

「助かる。」

「但し、これ以上威力が上がれば、強化しても無理が出てくる…
一撃も受けないつもりでやれ。」

「わかった。ていうか、スカリエッティは生きてんのか？」

「心配ないわよ。」

「ははははははは！！！いいねえ！！！
さぁ！続きといこうじゃないか！！」

抉られた地面からスカリエッティが飛び上がりながら高らかに笑う。
その姿は、ボロボロ…
しかし、溢れる魔力がまだまだ戦闘可能なことを示していた。

「ほらね？」

「心配して損したな…」

「カナン君…気をつけてね。」

「それは全員だな…行くぞメイデン！」

「ああ。」

「『ユニゾン・イン！』」

「フェアリー、頼りにしてるね。」

『お任せ下さい！』

「アシェル、ぶっ飛ばすわよ？」

『やっちゃいましょう！』

再び三人とスカリエッティの戦いが始まろうとしていた。

▼▼▼▼▼▼▼「行くぞ！ヴィヴィオ！」

「わかったよ！」

「五式抜刀剣術…虚空破砕断！！」

捻れた空間からスカリエッティに斬撃が放たれる。

それを易々と受け止める。

「効かないよ…」

もとより効くとは思っていない…

狙ったのは一瞬の時間稼ぎ。

それさえ出来れば常に先手を打てる。

『Ｂｅｒｓｔ　ｍｏｖｅ！』

「はあああ！！」

爆発的な加速をもって、ヴィヴィオが両拳に風を纏いスカリエッティに突撃する。

「おや…」

「ウィンドインパクト！！」

拳から放たれた風弾をまともに受けながら、グングニルを振り上げる。

「その程度かい？」

「く…」

恐ろしい勢いで振り下ろされるグングニルを持ち前のスピードで避けるが、余りの剣圧に少し体勢が崩れる。
そのスキを逃すスカリエッティではない。
止めの一撃を加えるためにヴィヴィオに迫る。

「君では無理だよ！」

「引っ掛かったね…」
『Ｂｅｒｓｔ　ｍｏｖｅ！』

ヴィヴィオの姿がスカリエッティの前から消える。
風を操るヴィヴィオには、突撃の際の爆発的加速に加え、さらに二つの利点がある。
まず、風の力で移動するため、術後硬直を無視出来ること。
そして、どんな体勢からでも、加速を行うことが出来ることである。
つまり、体勢を崩されようが、離脱することなど容易なこと。
しかし…

「君より僕の方が速ければ関係ないだろう？」

「…」

すぐさまヴィヴィオに追撃をかけようとするが、カナンがそれを許さない。

「お前より俺のが速いっつーの…光刃！！」

「そうだったね。」

スカリエッティがヴィヴィオに近づくよりもさらに速くカナンがスカリエッティを斬る。

通り抜けた空間をメイデンが維持、折り返す。

「二閃！！」

「少し痛いかな。」

二筋の閃光は、スカリエッティの胴に叩き込まれた。怯んだ相手に畳み掛けるように、ヴィヴィオと祐希奈が左右から迫る。

「リボルバー！！」

「烈破紅蓮！！」

放つは、己が持つ拳撃の最大威力の大技。

竜巻のように螺旋に渦巻く暴風…

今か今かと叩き込まれる瞬間を待つ紅蓮の魔方陣…

「ストーム！！」

「爆砕撃！！」

「これはさすがにまずいかな？」

そう言って飛び上がり、初めて避けたスカリエッティ。
竜巻は、紅蓮の奔流を飲み込み、祐希奈のもとへと襲い掛かる。

「アシェル！」
『ウィング展開！！』

白銀の翼に包まれた祐希奈は、それを受け止める。
オーバーSを越える威力を受けても、フルドライブ状態の祐希奈の翼は微動だにしない…

「位置修正…角度７５ってとこ？」
『修正完了…反射！！』

反射された砲撃は、狙い違わずスカリエッティへと軌道を変える。
それを見て、さらにスカリエッティの笑みは広がった…
瞬間スカリエッティの狙いは祐希奈の方へと完全に変わった…
グングニルが宙に浮く。

『まずい！マスター！！砲撃を溜めろ！！』

「ヴィヴィオ離れとけ！！」

「わ、わかった！」

腰だめに構えられる闇の剣から暗黒の力が収束していく…
その力は、通常状態のエクスカリバーの威力を遥かに凌ぐ。

「これが…グングニルの力さ！！」

宙に浮いたグングニルは、まるで意思を持つかのように祐希奈へと向かう。

反射された砲撃とぶつかるが、殆んど抵抗にもならず、あっさり貫通…

祐希奈は回避をするべく、少し後退するが…

「嘘…」

グングニルは祐希奈を追いかけるように方向を修正、迫り来る…

一瞬絶望を感じたが、カナンの声に希望を取り戻す。

「祐希奈！！羽広げとけ！！」

「わかったから助けなさいよ！？」

言われた通り翼を広げ、助けを待った。

「エクス！！」

グングニルの軌道を予測、その先に砲撃を叩き込む！！

「カリバー！！」

放たれた暗黒の波動は、見事にグングニルに直撃…

吹き飛ばすことに成功した。

「はぁ…はぁ…」

あれがグングニルの能力か…
オーバーSランクの絶対必中投擲…
メイデンがいなかったら反応が間に合わなかった。

『無理をさせてしまったな…
すまない。だが…』

「わかってる…グングニルを防げるのは俺だけなんだろ？」

『ああ…』

古代ベルカに作られたの伝説の武器には、多重に魔力防御コーティングがされており、生半可な魔法は通じない。
俺が砲撃の殆んどを斬れるのも俺自身の力に加えてこの恩恵も作用している。

「カナン！大丈夫？」

一旦攻撃が止んだスキにヴィヴィオ、祐希奈がこちらに集まってきた。
つうか…

「そのセリフは俺じゃなくてお前に対して言うもんだな…」

「私なら何ともないわよ。アンタは負荷限界越えてないでしょうね？」

「俺は何ともない。
それより、これからが大変だ…
あのオーバーSランクの絶対必中投擲を何とかしなきゃいけないん

だからな…」

「カナン君なら防げるんだよね？」

「ああ。」

「なら…次の投擲で決めようよ。
カナン君が防いで私達が突っ込むから。」

「地面に叩きつけたら、三人でぶち込むわよ？」

「わかった…多分、ミスれば終わりだ。頼む…」

「「任せて！！」」

本当なら俺が代わってやりたいが、ヴィヴィオでは収束が間に合わないし、祐希奈では貫通力で負けるかもしれない…
二人を信じるしかない…

「作戦会議は終わったかな？」

「別に待っててくれなんて頼んだ覚えはないがな？」

「確かに頼まれてはいないが、少しでも長く楽しみたいからね…」

「その余裕…後悔するぜ？」

「是非させてみてくれ！」

再びグングニルが宙に浮き、狙いを三人に向ける…
と同時に俺も収束を開始。ヴィヴィオはシューティングモードへ変更、祐希奈はブレードを展開する。

「アクセルチャージャー起動…
エクセリオンバスターＡＣＳ！！」

「フルリロード！！ブレード最大出力！！
一之瀬祐希奈…推して参る！！」

お互いに六発リロードを行い、フェアリーからは虹色の翼が広がり、アシェルからは紅蓮の炎が天へと登る。

『風の力よ…』

ヴィヴィオ、祐希奈の背後に風が集められていく…

「くらいたまえ！！」

上空から放たれるグングニルに向かい、カナンは収束していた力を解き放つ！

「エクス！！カリバー！！！」

放たれた暗黒の波動はグングニルと拮抗…
軌道をそらし消滅した。

「メイデン！」

『風よ…吹き飛ばせ！！』

二人の背後で収束されていた風が暴風となり、二人をスカリエッティの元へと一気に加速させる。

「ドライブ！！」

「烈閃烈火！！」

さらに加速しながら、己が技を叩き込むために進む。スカリエッティは避けられないのか、プロテクションを展開した。

「ブレイク！！」

「火竜！！一閃！！」

プロテクションに触れた瞬間に特大の衝撃波が二人を襲う。
それに耐えながら、プロテクションを破るためさらに力を込めていく。
フェアリーから最後の六発がリロードされ、ストライクフレームの先に光が灯った…
放つは零距離大威力砲撃魔法…

「シュート！！！」

手加減抜きで放たれた砲撃…それですら、プロテクションを破壊するだけに留まった…
しかし、破壊さえすれば祐希奈の斬撃がスカリエッティに叩き込まれる。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼
「お疲れ様…」

筈だった…
凄まじい速さでヴィヴィオ、祐希奈の首に手が伸びる…

「あ、が…」

「か…ひ…」

ギリギリと首にスカリエッティの指が食い込んでいく…
呼吸も出来ず、目の前が暗くなっていくのを感じた…

「何してんだてめえはあああ！！！！！」

二人を助けるため、カナンがスカリエッティに一瞬で詰め寄る。

「ククク…」

霞むほどの勢いで、ヴィヴィオ達がなげられ、地面に激突した…
空いた手にはグングニル…カナンの斬撃を受け止める。
力を押さえることも忘れた一撃は限界を越え、傷を作った…

「ヴィヴィオ！！祐希奈！！」
『二人なら大丈夫だ！
フェアリーとアシェルが何とかしてくれている！落ち着け！！』

「君が本気でやるためには必要なことだろう！！」

「それだけのために…
たかがそれだけのために二人を！！」
『マスター！話を聞け！！』

メイデンが止めようとするが、カナンは無視…
全力で剣を叩き込み続けた。

「僕にとっては楽しめさえすればアレは死んでも構わなかったんだがね？」

「お前は俺がぶち殺す！！！！！！」
『マスター！！』

く…もう私には非殺傷設定を維持しておくのが限界だ。
ヴィヴィオ、祐希奈…頼む…早く来てくれ。
マスターを止められるのは二人しかいない…

「あああああああ！！！！」
カナンの剣が叩き込まれる度、傷を増やしていく…
自身で負った傷がさらに威力を上げ、スカリエッティすらも凌駕する程になっていく…

「いいねえ！！最高だよ！！」

防ぎきれない斬撃をいくつも浴びながら、浮かべるのは笑み…
それがカナンを激昂させていく。
一瞬で納刀…莫大なる魔力がスカリエッティに向けられる。

「双龍！！氷牢陣！！」

水など殆んどないなか、氷の属性を使い、スカリエッティを氷牢の中に閉じ込める…
カナンから吹き出す魔力はさらに上がっていく…

「双龍！！獄炎陣！！」

氷牢の中にいる身動きが封じ込められたスカリエッティに今度は業火が叩き込まれ、その身を焦がす。

「ははははは！！」

「うあああああああ！！！」

カナンは暴走していると言ってもおかしくなかった…自身の体の負荷など気にもせず、全力で剣を叩きつけ、高威力の剣術を何度も使い…

スカリエッティ以上にカナンの体は血まみれで、鮮血を撒き散らしながら、ただひたすらにスカリエッティを追撃していた…

「そんな程度じゃまだまだ僕は死なないよ！？」

「殺してやるさ！！！」▼▼▼▼▼▼▼▼▼

斬りかかろうとした時、腕に抵抗を感じ、振り向いた。

「カナン…君、やめて…こんなカナン君…見たく…ないよ…」

「罰として…帰ったら…蹴り飛ばすからね…」

「ヴィヴィオ…祐希奈…」

腕にすがる二人の力は弱い…

こんなにボロボロになりながらも自分のことは考えず、他人の心配をしている…そんな優しい二人を見て、カナンの怒りは消えた。

しかし、限界を迎えていたカナンの体は、ガックリと膝をついた…

「やはり…君達は邪魔な存在だよ！！」
次に怒りを発したのはスカリエッティだった…
グングニルが投擲され、二人に向かう…

「お前に…二人は殺らせない…」
ギィン！！

再び立ち上がり、鮮血と共にカナンは剣撃のみでグングニルを弾き飛ばした…
衝撃でボタボタと血が落ちる…

「カナン君！！」

「バカ！！また無理して！！」

「いいんだ…今のはお礼の一つだ…」
『マスター…』

「そんなゴミをまだ守るとはね…興醒めだ！！一緒に死ぬといい！！」

己の快楽を邪魔された怒りか、グングニルの先端から砲撃を放ち、カナンごと消そうとした…

「おおおお！！」

カナンは縦に剣を振り、砲撃を切り裂く。
出血は止まらず、血の水溜まりが出来ていく…

「やだ!!やだよ!!大丈夫だから!!
そんなに無茶しないで!!
カナン君が死んじゃうよ!!」

「私ならそれくらい防げるから!!
カナン!!やめなさい!!」

「俺は…お前等に会えて良かった…
だから、お礼の言葉を言うから聞いてくれ…」

「そんな…」

「お礼なんて後でいいわよ!!」

「今…言いたいんだ…
祐希奈…小さい時からお前には迷惑かけたな…
やり方は無茶苦茶だったけど、アレは俺が一人にならないようしてくれたんだよな…
なのに、ひどいこと言ってごめんな。
んで…ありがとう…」

「そんなこと言わなくていい…
やめてよ…」

祐希奈の目から溢れる涙が止まらない…

「ヴィヴィオ…お前と過ごした時間は短かったけど…ずっと前から友達みたいな感じですっげえ信頼出来た…
俺って肝心な時に鈍くてな…
何回も泣かせてごめん。

んで…一緒にいてくれてありがとな。」

「聞きたくない！！聞きたくないよ！！」

「お前等と一緒に過ごした毎日が楽しかった…
お前等とずっとバカをやっていたかった…
これで礼は終わりだ…じゃ、行くとするか！」

「なっ！」

カナンは力をこめ赤い砲撃を切り裂く…
納刀…

「最後に…ヴィヴィオ…約束守れなくて…ごめん…」

「っ！！カナン君！！
どこにも行かないって！！
俺は死なないって言ったよね！！
約束は絶対に守ってくれるんじゃなかったの！？」

「守りたかったけどな…
もう…これしかお前等を助ける方法がないんだ…」

そう言って振り向いたカナン君の表情は笑顔…
ただ、世界で一番悲しい笑顔だった…

「もう一度くらえ！！」

「効かないさ…」

次に放たれた砲撃は、一振りで吹き飛ばされる…

「メイデン…」
『私も付き合ってやる。
その方が生存率もあがるだろうからな。』

「ありがとな…」
『礼など不要だ。』

カナンは目をつむり、魔力を剣に注ぎ込んでいく…

「『エクスカリバー…ファーストリミットブレイク…』」

その言葉が静かにひびくと世界の時間が一瞬止まった…
ただ一人の少年の力により一瞬とはいえ止まったのだ。
それは殺那の時間…一秒にも満たない…
しかし、その中にいて動く存在がいる…

「『時の神クロノスよ…汝が力の片鱗を我に貸し与えたまえ…
奥義…瞬迅破光斬』」

カナンがスカリエッティの後ろに空間突破で斬り抜ける…遅れて叩き込まれる斬撃、その数、億を越えていた…
本来ならBランク程の斬撃…
しかし、リヴァースモードで叩き込まれる斬撃は…一撃一撃がオーバーS…
いかにスカリエッティとはいえ、耐えきれるはずはなかった…
もちろん…使用したカナンもだ…
ヴィヴィオ達の目には何もしていないカナンとスカリエッティが立

っているだけにしか映っていない…

「…」

ドサッ…

「え…」

突如倒れるスカリエッティ…

そして…

「がはっ！！」

ドサッ…

大量の出血と共にカナンも倒れた…

ユニゾンアウトしたメイデンもすぐ横に現れる…

「カナン君！！メイデン！！」

「バカ…」

ヴィヴィオはフラフラの体に力を入れ二人に近寄る。

そして、この程度では無駄とわかりつつも回復魔法をかけつづけた…

スカリエッティが倒されたことにより、結界が解除され、外に待機していた六課メンバーにより、カナン君とメイデンは運ばれて行った…

外は大雨…雷が鳴り響くなかヴィヴィオは天を見上げ呟いた…

「神よ…何故あなたはカナン君達に罰を与えたのですか…

私達は…彼等を許していたのに…

何故あなたは…許してあげないのですか…」

「ヴィヴィオ…」

「わあああん！！！！ああああ！！！！！」

結果は勝利…だが、大きな代償を払っての勝利だった…

第三十話　絆

大雨が降り、雷鳴が轟くなか、私達二人は別荘に向かおうとはしなかった…
否…出来なかった…
今別荘の中ではカナン君の治療が行われていて、設備が少ない中、シャマル先生が必死に命を繋ぎ止めようとしてくれている。
しかし、誰が見ても危ない状態であり、生死の境目であることは間違いない。
もし、カナン君の死に直面してしまったら…
そう考えると足が全く動かなかった…

「ククク…その様子だと、彼は虫の息ってところかな？」

そうして佇んでいる内に、身体中をバインドで何十にも拘束されたスカリエッティが目を覚ましていた。
二人にとって、スカリエッティが目覚めたことなどはどうでも良い、問題は内容だった。

「…虫の息？何言ってんのよ…
アイツは…カナンは、すぐに目を覚ますに決まってる。
いつだってそうなんだからね。」

殴り飛ばしてやりたい衝動に駆られたが、コイツにそんな価値は無いと自分に言い聞かせ、平常心を保った。
しかし、それは祐希奈の精神状態だから出来た芸当だった…

「…」

「おや？聖王之器は肯定しないようだけど？
やっぱり死んでしまったのかな？」

「く…」

「ヴィヴィオ…無視しなさい…」

祐希奈はそう言うが、スカリエッティの言葉はヴィヴィオの心を確実に傷つけていく…

「ククク…図星か。」

「黙れ…」

きつく閉じた筈の蓋から押し込めた感情が漏れだしていくのがはっきりわかった…
その感情は、スカリエッティに対する憎しみ、恨み、怒り…
別荘に来てからの騒動で不安定になっていた心…
その心に追い討ちをかけるように、カナンの死の危険…

「折角これから楽しい毎日だったかもしれないのにねぇ…クククククク…」

「黙れ！！」

こんな状態の少女に次々と言葉の刃が突き刺さっていく…
そうしてついに、心が壊れる音がした…

「所詮、化け物…
人間ではない君は幸せを得ることなど出来はしないのさ！！」

「うあ…あ…あ…あああああああ！！！！！」

「ヴィヴィオ！前に言ったじゃない！
アンタは私達と同じ人間！化け物なんかじゃない！！」

祐希奈の叫びも今のヴィヴィオには届かない…
ヴィヴィオから魔力が溢れだし、セカンドモードに酷似した歪な形の虹色の巨剣がヴィヴィオの手に握られる。
歪な形なのはフェアリーが止めようとしているからである、しかし、フェアリーの性能を持ってしても、聖王の力は抑えきれない。

「お前さえ！！お前さえいなければあああああ！！！」

いつものヴィヴィオからは想像も出来ないような鋭い目付き…
戦闘中ですら感じたことのなかった恐怖を私は感じた。
ヴィヴィオは、スカリエッティを殺そうとしている！

「もう僕はこの世界は飽きた。
殺したいなら殺してくれ。あの世とやらでカナン君と楽しく話しているよ。」

この一言で辛うじて保たれていた糸が切れた…
ヴィヴィオが走り出す…
あの子にそんなことをさせるわけにはいかない！！

「うあああああああ！！！」

振り下ろされる凶刃は、スカリエッティの首筋を狙い、しかし阻まれる…

プロテクションを出力全開にして何とか耐える祐希奈がいた。

「ヴィヴィオ…やめなさい…」

「どいてよ…」

「ヴィヴィオ…あんたが前にカナンに言ったのよ？
どんな悪人でも殺してしまったら罪になるって…
ヴィヴィオは罪を背負いたいの？」

「うるさい…」

「だいたい、まだカナンは死んだわけじゃない…
またカナンや私と学校生活送りたくないの？」

「うるさい…うるさい！！」

ヴィヴィオからさらに魔力が吹き出す。
プロテクションが嫌な音をし始めた。
でも…退くわけには行かない。
この子を闇の道へ落とすわけにはいかないから…

「カナンは死んでない。
カナンだって頑張ってるんだから、私達も頑張ろうよ…カナンの所に行こう？」
必死の説得にヴィヴィオから魔力が収まり始める…
しかし…

「ククク…そして行ったら既に死んでいたなんて事実だったら傑作だねえ！！

あはははははは！！！」

「死ぬ…カナン君が…」

「そもそも、彼が死にかけているのは、僕が存在し、君が存在しているからだろう？
こちらも前に言ったじゃないか…
僕と君さえいなければ、彼等の両親は死ぬことはなく、彼が僕を恨んで力を手にするなんてことはなかった。」

「あ…」

「あんたは黙ってなさい！！」

もう少し、もう少しなのに！！
再びプロテクションが軋み始める…
魔力放出が始まった。

「今、一度はっきり言おう…
君の存在が彼を死に至らしめたのだよ！！」

「うあああああああああ！！！！」

「く…」

ガシャン…という破壊音と共に、刃が自分へと迫って来る。
今のヴィヴィオにはスカリエッティを殺すことしか映ってはいない…

「止められなかった…」

自身に迫る刃よりも、ヴィヴィオを止められなかったことの方が意識の大半を閉めていた…
友達ごとスカリエッティを斬りつけようとする瞬間…ヴィヴィオの体は吹き飛ばされた…
桃色の閃光によって…
▼▼▼▼▼▼▼▼「何を…してるのかな？」

デバイスを構え、ヴィヴィオ吹き飛ばした人間…
高町なのはが雨のなか立っていた…

「なのは…さん？」

「祐希奈…大丈夫？」

「う、うん。でもヴィヴィオが…」

「邪魔するなあああああ！！！」

直撃を受けたにも関わらず、こちらに向かって疾走してくるヴィヴィオ…
最早ヴィヴィオに敵も味方もない…
そんなヴィヴィオに容赦無くレイジングハートを向けるなのはさん。

「アクセルシューター…」

形成される５０以上のスフィア…
その全てがヴィヴィオに向かって最速で放たれる。

「おおおお！！！」

ヴィヴィオは回避行動もとらず、スフィアの中に突っ込む。
聖王の鎧の出力が上がっているせいか全く効いていない。
そのまま跳躍、なのはさんへと刃を振り下ろす。

「Ｆｌａｓｈ　ｍｏｖｅ！」

残像を残しながらあっさりとかわし、レイジングハートを下段からヴィヴィオの顎へと叩き込んだ。

「ぐ…」

「そんな雑な戦い方…教えた覚えはないんだけどな…」

レイジングハートをクルリと反転…
腹部へと突き。
何故、追撃に魔法を使わないのか…
その疑問はすぐに晴れる。
吹き飛ばされたヴィヴィオをさらに高速移動魔法で追撃、体勢を立て直していないヴィヴィオに次々と杖で横殴り、突き上げを繰り出し頭上に構えられるレイジングハート…

「悪い子には…お仕置きだよ…」
ドゴッ！！

「がはっ！」

「成る程…キツイ版おしりぺんぺんみたいなもんなのね…」

にしてもキツ過ぎる気がするんだけど…
見ているこちらが目をそらしたくなってきた。

「ヴィヴィオはそんなに弱い子だった？
スカリエッティに何を言われたのかは知らないけど…友達に大怪我負わせかけたの理解してる？」

「がっ！！」

一方的に殴られていくヴィヴィオ…
明日は打ち身やアザだらけだろう。

「反省した方がいいよ。」
バキッ！！

「あああ！！」

空中のヴィヴィオを横殴りに叩きつけた…
ヴィヴィオはきりもみをしながら砂浜を転がった。

「ふう…こんなものかな？さ、祐希奈。カナンの所に行こう？
とりあえず、最悪の事態は避けられたから。」

「そ、それは良かったけど…
なのはさん？ヴィ、ヴィヴィオは？」

「反省のために放っておいた方がいいよ。」

「でも…」

話を続けようとした時…地震が起きる…
悪寒…底知れない悪寒が私の中に走り抜けた…

「うあああああああああああ！！！！」
『マスター！！お止めください！！』

フェアリーが止めようとしているが、ヴィヴィオの魔力は止まらない…
上がり続けていく…
バリアジャケットが黒く変化し、ゆっくりと立ち上がるヴィヴィオの姿は大人びた顔…身長はなのはさんと変わりない程伸びている…

「あれ…ヴィヴィオなの？」

「うん。聖王モード…サードモードのフルドライブだよ…
使用禁止にしてたんだけどね…」

「サードモードって…」

あの通常モードでフルドライブ時に並ぶ超威力…
そんなもののフルドライブを使えばヴィヴィオの体は…

「おあああああああ！！！」

「ヴィヴィオ！！カナン生きてるって！！
スカリエッティなんか放っておいてカナンの所に行こ？」

「あああああ！！」

聞こえていない…
拳から虹色の衝撃波が放たれる…

「あ…」

「Ｆｌａｓｈ　ｍｏｖｅ！」

私はなのはさんに抱えられるようにして衝撃波の範囲外にいた。

「ヴィヴィオ…」

「これはやりすぎかな…
祐希奈ちょっと待っててね？」

なのはさんはヴィヴィオへとゆっくり歩いていく…
ヴィヴィオはなのはさんに向けて再び衝撃波を放つ。

「エクシードモード…」
『プロテクション！』

凄まじい魔力の衝撃波をプロテクション一枚で正面から易々と受け止める…

「うあああああああ！！」

次々と放たれる衝撃波をプロテクションを片手で張りながらゆっくりと進んでいく…

「そんな無茶苦茶な収束じゃ、私には届かないよ…」

その距離、三メートル、二メートル、一メートル
放たれ続ける衝撃波を全て防ぎ、遂に零距離…
繰り出される拳を避け足払いを放つ。

倒れるヴィヴィオにレイジングハートを向ける…

「ヴィヴィオ…ちょっと頭冷やそうか？」

「あ…」

二回目の地震…その正体は零距離で放たれたエクセリオンバスターだった…

「…」

こ、怖！！さすが、元祖悪魔は格が違う…

「祐希奈は先にカナンの所に行ってくれるかな？
私はヴィヴィオを部屋に寝かせてくるよ。」

「わ、わかった。」

なのはさんは、こちらを向くこともなく、ヴィヴィオを抱えて別荘の中に入って言った…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

別荘の広間に行くと、メンバーの中心に静かに眠るカナンがいた…

「シャマルさん…カナンの容態は？」

「なんとか一命はとりとめましたけど…」

「けど？」

「気をしっかりもってください…

カナン君は…このまま目を覚まさないかもしれません…」

「う…そ…」

告げられたのは絶望的な言葉…
シャマルさんの話によると確かにカナンは生きている。
しかし、傷は体の内部まで傷つけていて、植物人間状態は避けれないらしい…

「私がもっと警戒しとけばこんなことは防げたかもしれへんのに！！
カナンの言う通りや…ロングアーチに頼り過ぎやった…」

はやてはうつむき、膝の上で拳を固める…

「はやてさん…多分、こうなることは避けれなかったと思う…」

「え？」

「いくら警戒を厳重にした所で、スカリエッティは私達にマーキングをしてたみたいだし、結界のハッキングなんて、見回りだけで見つけるのはほとんど不可能…
被害が少なかっただけ良かったじゃない。」

「被害が少なかったて…私のミスでカナンを…」

「植物人間なんでしょ？
なら…まだ起きる可能性はある。
私は、それを信じるだけよ。」

そう…死んでさえいないのなら、待つことが出来る。いつになるのかはわからないけど…きっと起きてくれる。

「じゃ、私ヴィヴィオの所に行くから…」

信じてるから…必ず起きなさいよね…

その時まで、あんたには会わない。

強く決意し、ヴィヴィオの所に向かった。

部屋に戻ると、ベッドに眠るヴィヴィオの髪を撫でるなのはさんがいた。

「なのはさん。」

「ん？お見舞い終わったの？」

「とりあえずはね。ヴィヴィオ大丈夫そう？」

「多分ね。元々、精神的に疲労が溜まってたんだと思う。それで、カナンがあんなことになっちゃって…」

「精神疲労って…最近は何も無かったけど…」

ヴィヴィオのことは以前にも増して注意深く見ていたつもりだったんだけど…

それでも、気付けない所があったのかな？

「ヴィヴィオは自分で自分を縛っちゃう時が結構あってね…」

「うん…わかる。」

特に自分の生い立ちについてはそうだった。

「昔のヴィヴィオは、やりたいこと、やりたくないこと、そういう意見はもちろん持ってた筈なんだけど、一個人の意思で迷惑をかけたくないって理由で全部周りの決定に逆らわずにいた。」

「昔のヴィヴィオは？今は違うの？」

「祐希奈とカナンに会ってからなんだよ？
ヴィヴィオがワガママ言うように，なってくれた，のはね。」

「あはは…ごめんなさい。」

「ううん…祐希奈達には感謝してるんだ。
あのまま大きくなったら、きっと心に大きな傷を持ったに違いないから。」

「感謝の話は置いといて…最近、ワガママ言えるようになってたんなら…
何で今回みたいなことに…」

「祐希奈はヴィヴィオがカナンのことをどう思ってると思う？」

「ほえ!？い、いきなり話題変えないでよ。」

「変わってないよ。
今回に関係してる話。」

関係してる話って関連性が全くわかんないんだけど…まぁ、いっか。

「そりゃあ、好きなんじゃないの？
少なくとも私は嫌いな奴の所には泊まったりしないわね。」

「じゃあ、祐希奈もカナンのこと好きなんだよね？」

「すすす、好きとかそんなんじゃなくて…その、アイツとは、腐れ縁で…成り行きっていうか…えっと…」

「誰にも言わないから、ね？」

「…好き。」

言ってしまった…遂に知られてしまった自分の気持ち。
その言葉になのはさんは微笑んだ。

「うん。祐希奈はそうやって認められるよね。
今以上の関係になりたい？」

「え！？え～と…私だって一応、女だし…」

「そうだよね。じゃあ、ヴィヴィオがカナンと付き合ったら、祐希奈はどうするのかな？」

「どうするって…ちょっと悔しいけど、あの二人のことは友達として好きだし、おめでとうって言うと思うけど…」

「ヴィヴィオはね…祐希奈がそう言ってくれるとは思ってないと思うんだ。
多分、祐希奈が自分とカナンから離れて行ってこの関係が壊れると思ってるんじゃないかな？

だから、気付きそうな気持ちを無理矢理押し込んで、友達を続けようとしてるんじゃないかってそう思うんだけど…」

「はぁ…私ってそんなに薄情に見える？」

ヴィヴィオにそこまで信じて貰えなかったことにショックを受けた。

『それを言えばあなたもですよ？』

「うわっ！いきなりしゃべんないでよ！」

『失礼しました。
ですが、先程の話は事実でしょう？』

「な、何がよ？」

『以前あなたも関係を壊したくないという理由でカナン君を諦めかけてませんでしたか？』

「あ…」

『それを棚に上げて、ヴィヴィオちゃんだけを責めるのはおかしくはないですか？』

「そうね…なのはさん、私も少し前までヴィヴィオと同じだった…さすがに押し込むっていう方法は取らなかったけど…」

好きという気持ちを捨てるのではなく、押し込む…
どれだけつらいことなのか…

「まぁ、カナンが鈍すぎるのも悪いんだけどね…
鈍いで言ったら私もだったんだけど、私はこれがどんな気持ちか気づいてなかったから全然辛く無かったというか…」

苦笑いをしつつ、なのはさんは答えた。
ヴィヴィオも気づいたのは最近の話だということを二人は知らない。

「それでね?祐希奈から、ヴィヴィオに好きって気持ちを認めさせてあげて欲しいんだけど…いいかな?」

「これからはライバルよ!!って言えばいい?」

「えっと…出来ればもう少し優しく言ってあげてほしいな?」

「え〜しょうがないわね…じゃ、後は私から言っとくし、なのはさんは休んできてよ。」

あれだけの魔力を受け続けたんだし、なのはさんも結構疲労が溜まってる筈よね。

「ありがとう。そうするね。」

そう言ってなのはさんは部屋から出て行った…
さて、後はヴィヴィオが起きるのを待つだけね。

「カナンの奴…起きたら思いっきり蹴り飛ばす…」

起きたら起きたで、また三途の川に送られそうなカナンであった。
▼▼▼▼▼▼▼▼それから数時間後…

「ん…あれ？」

「起きた？」

「あ…祐希ちゃん…私、祐希ちゃんに…」

「気にしてないわ。
私よりも後でなのはさんに謝っときなさいよ？
ヴィヴィオを止めてくれたのはなのはさんなんだから。」

「うん…」

「あと、フェアリーにもね？」

「そうだね…」

「ヴィヴィオ最後の方は聞こえて無かったと思うから言っとくけど、
カナンは生きてるわよ？」

「え…？」

「ただ、ちょっとの間爆睡するけどね。」

「起きて…くれるかな？」

「当たり前よ。だから、カナンが寝てる間に、ヴィヴィオは自分の
気持ち整理しなさい。」

「私の？私はもう…」

「出来てないわよ。
奥底に溜め込んでるものあるんでしょ？
さっさと認めちゃいなさい。」

バレてる？な、何でかな？
でも私の思ってることとは違うかもしれないし…

「何のこと？」

「そう…そんなに私のこと信じられないのね…」

「え？信じてるよ。」

「なら何で私には言えないのよ～！」
ガバッ！！
祐希ちゃんがベッドに乗り私にのし掛かる。

「な、ななな！何を！？私祐希ちゃんのこと本当に信じてるよ～！！」

「まだ言うか～！！」

あ～柔らか…
本当に癖になるわね…
このぷにぷにの頬っぺた…

「ふぇぇぇん！！」

「ほら！さっさと薄情しなさい！！
さもないと頬っぺた千切れるわよ！！」

（何のことだかわからないし、頬っぺた千切れたら大変だよ～！！）

喋れないからか、念話で伝えてきた。
ぶっちゃけ内容を伝えないのは、頬っぺたを弄りたいだけなんだけどね。

「自分で考えなさい！
カナンはヴィヴィオの何よ！！」

ムニムニと形を変える頬っぺたをいじり続ける。
これ、本当に売ってないかしら？

（カナン君は私の大事な友達で…い～た～い～よ～！！）

「まだ認めないの！？
そんな子はこうよ！！」

今度は左右に引っ張り、拷問にかけた。

（痛い！！ち、千切れるよ！！
こぶが無いのに頬っぺた千切られても嬉しくない…痛い！痛いよ！！）

「今時そんなネタが笑えると思うな！！
純真天然記念物馬鹿！！」

（私、天然記念物に指定されてないよ？）

「そんなもんわかっとるわ～！！」

「ふぇぇぇえええん！！！」

この拷問は、それから３０分もの間続いたという…

「ひっく…ひっく…ぐす…」

「ふぅ…気持ち良かった～♪」

「うぅ～…祐希ちゃん私で遊びたかっただけ？」

「もち♪」

「わあああああん！！」

「ていうのは冗談で、本気の話よ。
カナンのことどう思ってるのか言ってみなさい。」

遊びの雰囲気が消え、真面目な顔になる祐希ちゃん。

「わ、私は…カナン君のお友達だよ？」

「ふ～ん…二十四時間耐久頬っぺたいじりやられたいんだ～♪」

「やだ！！」

「ま、それは次の返答によるわね？」

別に本気で耐久頬っぺたいじりやってもいいんだけどね。
飽きないし。

「じゃあ…頼れる仲間？」

「…そういうのじゃなくて。
この際もうヴィヴィオにも言っとくけど、私はカナンが好きよ？」

「っ！！えっと…おめでとうございます。」

「はいはい、ありがと。
で？ヴィヴィオはどうなの？私が言ったんだから正直な気持ちで言いなさいよ？」

直感でわかった…
次の質問に間違った答えを言えば、祐希ちゃんは私を嫌いになると…
でも、私がそれを認めてしまえば、祐希ちゃんとは今まで通りには話せなくなるかもしれない…
カナン君を奪い合うようなそんな関係にはなりたくなかった…
少し、顔をあげ、祐希ちゃんと正面から見つめ合う…
「あ～もう！早くいいなさいよ！」

言葉は荒いが、その瞳は『大丈夫』と優しげにこちらを見つめ返してきた。
そして、私は蓋を開ける決心をした…

「私は…」

「うん。」

蓋を開けた途端に高鳴る鼓動、赤くなる顔、今が何時なのか、どこなのかさえ、訳がわからなくなっていく…

そんな中で唯一確実なことがあった…

「カナン君が好きです…」

言った瞬間後悔した。
認めてしまった…
もう後戻りは出来ない…
壊れればそれで終わりだ。震えがはしる…

「うん。これからも宜しくね。」

そんな体を包みこんでくれる存在がいた…
嬉しかった。
ただ、純粋に嬉しかった…

「私…祐希ちゃんに嫌われてない?」

「人を好きになるかどうかくらいで嫌いになんてならないわよ。」

「良かった…これからも友達でいてくれる?」

「嫌よ。」

「え…」

まさかの拒絶…しかし、それは喜びへと変わった。

「私達は、真友よ♪」

「うん!!」

「それじゃ、カナンに会ってきなさい。」
祐希ちゃんは自分のベッドに倒れ込み、テレビをつけた。
「祐希ちゃんは来ないの？」
「私はさっきもうカナンには会わないって決めたのよ。」
「そっか。じゃあ、また後でね。」
「ついでになのはさんにも謝って来なさいよ～。」
祐希ちゃんが決めたんだ…その覚悟を私が揺るがすわけにはいかない。
そう思い、部屋を後にした。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
六課のメンバーは、気を使ってくれたのか、私が行くと同時に皆それぞれの部屋に帰って行った。
「私が弱いせいでカナン君にこんな傷を負わせちゃってごめんなさい…
今はゆっくり療養に専念してね。
あ、でも、いつかは起きてくれないと困るよ？
起きてくれるその日までには私も祐希ちゃんも少しでもカナン君に追い付けるように訓練しとくから、また三人で頑張ろうね。
最後に、カナン君に重要なお知らせがあるんだ。
私、高町ヴィヴィオと、祐希ちゃんこと一之瀬祐希奈は、貴方を好きになってしまいました。
私、こういう経験初めてだから、告白本番に上手く言えないかもし

れないけど、我慢してね？
以上、高町ヴィヴィオからでした…」

言い終わると後ろから拍手の音がした…

「カナンもモテモテだね～。」

「ママ…あの…」

「ん？どうしたの？」

「私、あんまり覚えてないけどママにひどいことしたんだよね？
だから、ごめんなさい。」

「にゃはは…実はひどいことしたの私かも…
体、どこも痛くない？」

「え？」

言われてみると、腹部や腕に微妙に痛みがある気がする…

「ちょっと痛いけど、何ともないよ。」

「アレだけやってちょっとかぁ～。
私もそういう能力欲しいな～。」

「アレだけって…そんなにひどいことされたの？」

「おやすみ～。」

話を急に切り上げ、寝室に向かったなのはママ。
追跡をかけたが、中から鍵を閉められた…

「もう…カナン君、おやすみなさい。」

ペコリと頭を下げ、自分の部屋へと戻り、適度に明日からの予定を話した所で長い1日は終わった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

それから一週間程は、カナンの様子見ということで、別荘に滞在し、容態が安定しているので、海鳴市へと帰還した。
最初に、メンバー全員でカナン君の伯父、英治さんの元へ謝罪に言ったが、カナン君なら起きてくれると英治さんも信じているようだった。
雅樹さんもまた、カナン君が起きることを信じていたが、約束を破った罰として、起きたら夏休みの宿題三回分をやってもらうと笑って話していた。
学校の方でも、三年間風間の席は彼処で決まり！や、宿題は全部帰ってきたようにとっておく！というイジメのような内容だったが、皆、カナン君が帰って来ると信じている。
機動六課のメンバーは、帰還することとなったが、祐希ちゃんの希望、私の強い意思によって、原因不明勢力に対する対抗勢力としてほぼ自由な期間地球にいる許可をもらえた。
この時程、ヴィヴィオ、祐希奈のワガママが凄まじかったことは無いだろう。
最終的には六課メンバー全て倒せば了承してもらえるかなどと無茶苦茶なことを言い出していた。
そんな忙しい時期が過ぎ、時は8月の終わり…カナンが意識不明になってから、既に一月が過ぎていた…

「じゃあ、行ってくるね～。」

「ヴィヴィオもよく毎日毎日あんな奴の所に通うわね…」

「お買い物のついでだよ。祐希ちゃんも早く夏休みの宿題終わらせないとダメだよ？」

「まだ後、一週間もあるわ！！」

「もう一週間しか無いんだからね？行ってきまーす。」

「行ってらっしゃい。」

祐希奈は、カナンと会わないという意思を貫いており、逆にヴィヴィオは毎日カナンに会うという意思を貫いていた。

「急がないとお店が混んじゃうな…あと何分くらいかわかる？」

『いつも通りですと、３０分程ですね。』

「叔母さん達凄いからな～。急ごっと！！」

胸元に揺れるのは、デバイス『フェアリー』と、カナンから貰った子犬を象ったネックレス…

ヴィヴィオ、祐希奈は、カナンが目覚めるのをずっと待っていた…

その目覚めは近い…

第三十話　絆（後書き）

第二部終了～　　お疲れ様、僕。

次回から第三部…といきたい所ですが、心機一転ということで久しぶりに番外編です。　　たまりに溜まった質問…ぶっちゃけ一話じゃ無理っぽくね！？　　と思いましたが、再び前書き解答も再開し、地道に答えていきたいと思います。　　この作品を読んで下さってる皆さん。　　まだまだ続くと思います。

なんせいつ完結するとか完璧には頭で決まってないので…

とりあえず皆さんありがとうございました！

外伝　侵略質問解答会

アリサ
「ふぅ～うちも鬱展開が続くわね～。」
すずか
「そうだね～。
そろそろこの道場だけでは持ちそうにないかな。」
アリサ
「む～ここは何かぶっ飛ばし企画でも考えないと…」
シオン
「あの～一つお尋ねしますが…」
アリサ
「もちろんシオンよ♪」
シオン
「早っ！ぶっ飛び確定早っ！！
もう少し悩みましょうよ！！」
アリサ
「ヘタレオンは…」
ドゴーン！！
祐希奈
「黙ってなさい！！」
バッキャアア！！
シオン
「がはぁ！！！」
祐希奈
「ふぅ…アリサ久しぶりね♪」
アリサ
「ひ、久しぶりね…まさか屋根ぶち破って登場するなんて…」
すずか

「この道場って結界が張ってあったんじゃなかったっけ？」
祐希奈
「私には発動しないようになってるのよ♪」
アリサ
「頻繁に祐希奈に道場貸し出しを頼まれるから主登録をしたのよ。」
すずか
「い、いつの間に…」ヴィヴィオ
「おかげで私は正面突破しなきゃいけなくて大変でした。」
アリサ・すずか
「うわ！！どっから出てきたの！？」
ヴィヴィオ
「だから正面入り口からですよ？」
すずか
「しょ、正面ってあのアリサちゃんが侵入防止のために張り巡らせたレーザー砲やミサイルの雨を突っ切ってきたの！？」

アリサ
「そして作ったは良いけどやっぱり通り抜けるのは不可能と判断して結局転送装置でこっちに通うようにしたという全く意味を成さなくなった正面玄関から来たの！？」
祐希奈
「長い驚愕ね…」
ヴィヴィオ
「私、アレで出演者の合否を決めるんだと思ってたよ…」
祐希奈
「そんな数のレーザーや質量兵器をくらったら合否以前に死ぬわよ…」
アリサ
「と、とにかく被害者が出なくて良かったわ。」
すずか

「たまたま…だけどね。」
ヴィヴィオ
「あれ？そういえばシオン君はどこに…」
アリサ・すずか
「それ。」
ヴィヴィオ
「それ？わぁ～！シオン君！？」
祐希奈
「あ、まだ踏みつけたままだったの忘れてた。」
シオン
「…」
ヴィヴィオ
「あの…シオン…君？」
シオン
「…よぉ。」
祐希奈
「何だ、生きてんじゃない。
さっさと起きなさいよ。」
シオン
「ヴィヴィオ…お前の真友…斬っていいか？」
ヴィヴィオ
「と、とりあえず落ち着いてね？
祐希ちゃんもきっとわざとじゃ…」
祐希奈
「もちろんわざとよ♪」
シオン
「斬る！！」
ヴィヴィオ
「わぁ～ん！祐希ちゃ～ん！！」
シオン

「はあああ！！」
アリサ
「とりあえず黙っときなさい！」
シュドーン！！
シオン
「ごは…」
すずか
「アーメン。」
アリサ
「で、今回は召喚した覚えはないけど何であんた達がいるのよ？」
祐希奈
「侵略よ♪この道場は私がもらったわ♪」
アリサ
「フェニックスみたいな真似しなくていいわよ…」
ヴィヴィオ
「あはは…まぁ祐希ちゃんなので…」
すずか
「それもそうだね。」
シオン
「う…何で今日は俺なんだ…
こういう役はカナンだろ？」
ヴィヴィオ
「カナン君は今意識不明で出演不可能なんだ。」
祐希奈
「メイデンはメンテ中だし、何でかカナメにも連絡つかないのよ。」
アリサ
「それで二人でメンバーが足りないからこっちに来たと。」
ヴィヴィオ
「そういうことになりますね。」
シオン

「待てよ?ということはこれだけのメンバーを俺一人で捌けってことか!?」
祐希奈
「ま、そうなるわね。」
パンパン…シュバ!

タカト
「祐希奈お嬢様お呼びで?」
シオン
「タカ兄ぃはまだ執事モードなわけね…」
祐希奈
「何か適当なジュース持ってきて。」
タカト
「そのような物で宜しいのですか?」
祐希奈
「いいのいいの。紅茶とかの気分じゃないからね。」
タカト
「かしこまりました。」
シュバ!
アリサ
「タカトほど執事服が似合う男いないんじゃない?」
すずか
「うちの人達より断然似合ってるよ。」
シオン
「そんなものまで準備しなくても…」
ヴィヴィオ
「もう一着あるけどシオン君も着てみる?似合うと思うよ?」
シオン
「やめとく…着たら次の道場でパシり決定フラグだからな。」
アリサ・祐希奈

「サンドバックかパシりかの違いしかないけどね…」
シオン
「また人権否定！？」

祐希奈
「さて、バカは無視して…」
シオン
「何でだろうな…前が滲んで何も見えねえよ…」
ヴィヴィオ
「な、泣いちゃダメだよ！！」
アリサ
「ヘタレオン…」
すずか
「ヘタレオン♪」

祐希奈
「へ！タ！レ！オ！ン～！！！」
シオン
「ふふ…言葉だけで花畑が見えてきた…」
ヴィヴィオ
「ダメだよ！？それは激しくダメだよ！？」
シオン
「あ、川にカナンがいる…お～い。」
ヴィヴィオ
「わぁ～！！シオン君！！今のカナン君に会っちゃダメ～！！」
祐希奈
「さてさて、質問コーナー♪」
アリサ
「ここでも質問コーナー開くのね。
毎度のことながら凄まじいカオス空間…」

すずか
「どうしてだろうね。
ヴィヴィオちゃん達が出ると無事で終わる確率が激しく低下してるんだけど。」
祐希奈
「それがＬＶのクオリティーよ♪
質問一、『三人の新技の能力詳細を教えて下さい。』まぁ、これは来るだろうとは思ってたけどね。」
アリサ
「質問が来るまで放置するってのもどうかと思うんだけど…」
すずか
「ま、まぁいいんじゃないかな？
よく斬新とか、雑とか、適当とか言われてるみたいだし。」
アリサ
「段々悪くなってるわよ？」
すずか
「あ、あれ？おかしいな？」
祐希奈
「ま、事実だけどね。
とりあえず詳細よ。」

『ブレイクウィンド』

威力…ＡＡ＋
速度…ＡＡＡ＋

双刃剣であるフェアリーセカンドモードの新技。
両端についている刃の内片方をカットしそこからジェット噴射のように風が吹き出し、対象に向かって投擲される。
貫通力と速度に優れるが、若干技の出が遅いため、この技単発では

当てづらい。なお、メイデンとユニゾンした場合、双方の力も合わさり三ランク上がる。

ヘヴンリィジャッジメント

威力…S＋
速度…C

ブルーゲイルで使用可能な唯一の大技。
高濃度の魔力の矢を対象を中心に三角形に撃ち込む。地面に魔力が流し込まれ、ベルカの魔方陣が発生、対象を下から打ち上げる。
ブルーゲイルなのは、正確に三角形を描かなくては発動する場所にズレが出るためである。矢から魔力を流し込まない限り発動しないためトラップのように仕掛けることも出来る。

奥義、瞬迅破光斬

威力…ＡＡ＋
速度…測定不能
範囲…エクスカリバー所持者が存在している世界。

カナンの八番目の剣技。
世界の時間をほんの一瞬止める。
しかし、カナンは行動可能。
カナンは、時の神クロノスの力を借りているため、時間という概念に全く縛られずに行動出来るため、光速をも越えた速度で移動を可能としている。
故に秒にも満たない一瞬で対象を億以上の数を斬りつけることが出来る。
ただし、一撃一撃は光刃二閃を速くしただけなので大して高くはな

い。
作中でオーバーSランクになっていたのは、リヴァースモードの為である。
リヴァースモードで使用した場合ほぼ確実に使用者は死に至る。
カナンが意識不明程度で済んでいるのは、メイデンが限界まで身体を強化し、負担を軽減した為。

ヴィヴィオ
「こんな感じになってるよ。」
アリサ
「カナンの説明長すぎよ。」
祐希奈
「まぁ、奥義だからね。」
すずか
「威力は大して高くはないって…カナン君の中ではの話だよね？」
ヴィヴィオ
「そうですね。一般魔導師にしてみれば、ディバインバスターが億以上撃ち込まれるのと同じですから。」
アリサ
「これ…回避出来るの？」
祐希奈
「カナンが術式展開を終えるまでに倒せれば止めれるわよ？」
ヴィヴィオ
「ただ、カナン君が意識を失う程の攻撃となると…」
アリサ
「シオンなら出来るんじゃない？」
シオン
「直感は予知みたいなものなんで、出来ないことはないと思いますけど…」
祐希奈

「並外れた先読みと威力を叩き込まないと回避は無理ってことね。」
シュバ！
タカト
「お嬢様方、ケーキとお飲み物の用意が出来ました。」
ヴィヴィオ
「ケーキ！？」
すずか
「ヴィヴィオちゃんそれ温泉と同じ反応だよ？」
アリサ
「それより、ケーキ何て頼んだっけ？」
タカト
「長くなりそうでしたので。」
祐希奈
「さっすが～♪」
シオン
「タカ兄ぃ、俺には？」
タカト
「ファトンケーキなら作るが？」
シオン
「…いじめ？」
タカト
「自分で考えろ。」シュバ！
ヴィヴィオ
「♪♪♪～」
祐希奈
「美味しいわね♪」
アリサ
「うんうん、最近また腕を上げたわね。」
すずか
「どんどん美味しくなってくね。」

シオン
「何で俺だけ…」
アリサ
「最近出番があんたばっかしだからじゃない？」
ヴィヴィオ
「そういえば、番外編以降出番が少ないね。」
シオン
「いや、タカ兄ぃを頻繁に使うと作品バランスが崩れかねないというか…」

アリサ
「いっそ崩壊するっていうのも新しいわね♪」
祐希奈
「じゃあ私が崩壊させてあげるわ♪」
シオン
「いや、もうタカ兄ぃ関係なくなってるよ！！」
すずか
「さて、収集がつかなくなるまえに次の質問いっちゃお～。」

ヴィヴィオ
「は～い♪
『漫画版出ちゃいましたね。ヴィヴィオが全然違いますがこれによって今後何か変更はありますか？』
変更はしません。というか出来ません。」
祐希奈
「性格も固まっちゃったし、今更変更なんて不可能ね。」アリサ
「これは、ドンマイってやつね。」
ヴィヴィオ
「そうですね。作者も友達に本を見せてもらって、あちゃ～って言ってました。」

すずか
「あそこまで違うとそうなるのも仕方ないよね。」
祐希奈
「こっちはこっちで漫画版とは違う道を進んで行くから、その辺は仕方ないって割りきって。
んじゃ、次の質問を全く喋れなかったヘタレオン、言っちゃって。」
シオン
「…ヘタレオンはデフォなのか？」
祐希奈
「今更シオンって呼ぶの面倒だしね♪」
シオン
「名前よりあだ名の方が長いってどうよ？」
祐希奈
「細かいこと気にしてると…」
シオン
「そのネタはもういい！！
たく…どうとでも呼べ！！
『前々から気になっていたのですが、ＥＸの空間把握とＬＶのそれはどう違うのですか？』
そういやそうだな。どう違うんだ？」
ヴィヴィオ
「う～んと…シオン君達は、気配を察知するか、事前に動きを予想するとかそんな感じだと思うんだけど、カナン君は、気配の察知とか予想とかじゃなくて、はっきり見えてるってことかな。」
祐希奈
「簡単な話、アイツは３６０。見える目を持ってるってことよ。
視覚情報から得た相手の動きで対応を考えてるってわけ。
あんた達の空間の把握とは微妙に違うのよ。」
アリサ
「日頃からそんな目使ってたら疲れるでしょうね。」

ヴィヴィオ
「さすがに日頃からはそんなに神経削って相手の動きは探ってないでしょうから大丈夫だと思います。」
シオン
「ウィルなら常に全開で使うな…」
祐希奈
「ウィルってあの新キャラよね？
疲れるだけだと思うけど、何か理由でもあるの？」
シオン
「範囲内なら見えるんだよな？
ってことは、更衣室なんかの近くで使えば…」
ヴィヴィオ・祐希奈
「…」
シオン
「ん？どうした？そんなにカタカタ震えて。」
ヴィヴィオ
「ま、まさか…カナン君って…そういうことに使ったことあるのかな…」
祐希奈
「まさかお風呂場の近くで…」
ヴィヴィオ
「そ、そういえば、カナン君の家に泊まった時、ジャージを渡しに近くに来てたよ…」
アリサ
「きっとそのまま近くに隠れて見てたに違いないわね♪」
ヴィヴィオ
「わあああああ！！！！！」
祐希奈
「ぶっころーす！！！」
シオン

「…カナン、スマン地雷踏んだみたいだ…」

（何をしてくれとんじゃ～！！！）

シオン

「いや、だから謝ってるだろ？」

（お前のせいで変態扱いじゃねえか！！）

シオン

「アレはウィルの場合を話しただけで、誰もカナンがなんて言ってない。」

（なら何でアリサさんの暴走を止めねえんだよ！！）

シオン

「死にたくないし…な？」

（な？じゃねえええ！！！）

シオン

「だから…」

アリサ

「シ、シオン？あ、ああ、あんた誰と喋ってるの？」

シオン

「誰って、カナンっすよ？ってあれ？カナンいないよな…あれ！？」

すずか

「シ、シオン君、カナン君は入院中だよ？」

シオン

「え？で、でも今確かにカナンの声が…あれえ！？」

祐希奈

「カナンの幽霊がシオンに憑いたのよ！！」

ヴィヴィオ

「幽霊！？シ、シオン君、ち、近寄らないでね？」

シオン
「ゆ、幽霊だとしてもカナンの幽霊だろ？
全員でそんなに下がらなくても…」
一同
「いやあああああ！！！！」
ダダダダダダタ…
シオンは幽霊との対話のアビリティを手に入れた♪

シオン
「入らんわ！！！…まだ質問あるんだろ…俺一人で何しろと？」
幽カナン
（仕方ない、俺も手伝ってやるよ。）
幽カナメ
（では、私も手伝いましょうか♪）
シオン
「な、何でカナメまで幽霊に？」
幽カナメ
（細かいこと気にしてると…）
シオン
「ハゲるってか？もうそのネタは…」
幽カナメ
（取り憑きますよ♪）
シオン
「ぎゃあああ！！寒いいいい！！」
幽カナン
（新ネタだな…）
幽カナメ
（では、シオン君弄りも終わりましたし、質問行きますね♪
『ふと思ったのですが、もしかして、ゼノサ○ガやってましたか？
祐希奈のブレードの構造が似てましたので、違ってたらすいません。

』
だそうです。）
幽カナン
（実は正解だ。
ただ、作者はエピソード1、3は完全クリアしたけど、2は途中でめんどくなって積みゲーと化した。）
シオン
「何で2はめんどくなったんだ？」
幽カナメ
（キャラデザインが激しく変わったのと、戦闘の手順が面倒になったとのことです。）
幽カナン
（脱線したが、祐希奈のブレードは確かにあのキャラが元ネタだな。後はオリジナルなのでご心配なく。）
シオン
「今思ったけど、これ公開するの危険じゃないのか？」
幽カナメ
（多分大丈夫ですよ、気付いてる方も何人かいらっしゃいましたし、ブレードだけですし。）
シオン
「微妙に危ない綱渡りだな…」
幽カナメ（ついでにもう一つぶっちゃけると、EXを読もうと思ったきっかけもあのゲームだったりします♪）
幽カナン
（あれ？なのは作品に見知った作品の作者名が…
みたいな感じだったな。）
シオン
「わかった…もういい、これ以上お前等に言わせてるとヤバいことになりそうだ…」
幽カナン

（そうか？いつもこんな感じだから耐性ついたのかもな。）
シオン
「普通の感性に戻ってくれ…」
幽カナメ
（ブルマのアリサさんやすずかさんとトークしているシオン君も相当普通ではないと思いますが？）
シオン
「あれは…うちの作者の趣味だから俺は関係ないって言うか…」
幽カナメ
（では、薬物を打ち込まれて平然としている所は？）
シオン
「あれは…道場の力だ。」
幽カナメ
（なら、本編で精霊融合して1日～2日で回復する体は？）
シオン
「…」
幽カナメ
（精霊装填連発しても、全然平気な体は？）
シオン
「普通じゃないな…」
幽カナメ
（ですよね～♪やっぱりシオンは異常なんですよ♪）
シオン
「次の質問行くぞこらあああ！！」
幽カナン
（やけになること、これを自暴自棄と言う、いつかテストに出るから、中～高校生の読者は覚えて損はないな。）
シオン
「まったく作品に関係ない知識教えてんじゃねえ！！」
幽カナメ

（これを八つ当たりと言います。
非常に見苦しいので皆さんはやめましょうね♪）
シオン
「ほっとけ！！
『最近の戦闘は白熱してて面白い。けど、最初は物足り感じるのは俺だけ？』
口調からして友達か？」
幽カナン
（ああ。結構久しぶりな奴だな。
で、答えだが、お前だけじゃないと思う。）
幽カナメ
（この作者が戦闘描写を真剣に参考にし始めたのは、祐希奈の模擬戦が終わってからですからね。）
シオン
「祐希奈の模擬戦って…後すぎるだろ。」
幽カナン
（作者は一回自分の小説を丁寧に読み直してみたんだが、あまりに迫力がなくて他作者さんの小説を読みまくって少しずつマシになっていったんだ。）
幽カナメ
（とは言っても、まだ付け焼き刃ですから、ＥＸやクロイツ、シルフレなどには全然敵いませんけどね。）
シオン
「まぁ、うちの作者はノって来ると止まらないからな…」
幽カナン
（クロス模擬戦とか凄かったしな。）
幽カナメ
（次は私でも書いてもらいましょうか♪
相手は…そうですね～ＥＸスバルさんで♪）
幽カナン

（またお前はバカなことを言う…無視してくれ。お、そろそろ終わりだな。）
シオン
「結局、帰って来なかったな…」
幽カナン
（いや、そうでもないな…シオン、死ぬなよ？）
シオン
「は？」
幽カナメ
（ふふ…頑張って下さいね♪）
シオン
「ちょっと待て、それどういう…」
幽霊ズ
（サラバ♪）
シオン
「おい！！一体何なんだ？」
一同
「…」
シオン
「あれ？全員いるじゃないですか。大変だった…って…まさか久しぶりにか？」
アリサ
「シオン、今、私達が助けてあげるから。」
すずか
「ちょっと痛いかも知れないけど、シオン君なら大丈夫だよね？」
ヴィヴィオ
「え、えと、悪霊退散！！」
祐希奈
「南無三！！」

ゴオオオオ…
一同
「除霊してあげる！！」
シオン
「待て、そんなのくらったら俺はしばらく道場レギュラーとして参加出来なくなるぞ？」
アリサ
「幽霊引き連れて来られるよりマシよ！！」
祐希奈
「ってことでいくわよ！！」
アリサ・祐希奈
「撃ち貫け…炎の天使！！」
すずか・ヴィヴィオ
「目覚めよ…破壊の妖精！！」
シオン
「ツッコミ所満載だけど…なんだろな…また目の前が滲んで何も見えねえよ…」
アリサ・祐希奈
「ヴォルカニックアロー！！」
すずか・ヴィヴィオ
「ディストラクションブレイカー！！」
ちゅどーん…
シオン
「あーーれーー！…」
キラーン…

カナン
「やっぱりこっちにきたか。」
カナメ
「あの様子では仕方ないですね。」

シオン
「まぁ、なんとなくオチはわかったけどな…」

カナン
「そんじゃ、第三期もよろしくな。」

カナメ
「私も大活躍の予定ですので♪」

シオン
「それじゃあ皆さんまた次回。」

アリサ・すずか・ヴィヴィオ・祐希奈
「まったねーー♪」

カナン・シオン
「全員揃って、川オチかよ!!!」

外伝　侵略質問解答会（後書き）

さてさて、どうやって書きましょうかね～。

次回から第三部です。

やっぱり僕らしく勢いで書きます。グアアア！！ってな感じで（笑）

そして…

シオン、屋根の修理ガンバ（笑）ちなみにタカトは使用禁止だから。

第三部一話　刺客

祐希奈
「さてさて帰って来ました前書き質問コーナーの時間です♪」
ヴィヴィオ
「わ～い♪
ってまだあるんだ…」
カナン
「二件だけな。
ちなみに片方は友達だから答えても答えなくてもいいんだが…」
メイデン
「あまり読者を退屈させてはいけないだろう。
会話を減らしてさっさと進めよう。」
カナメ
「メイデンさん、実はこの前書きが目的で読まれている方もいらっしゃるんですよ♪」
メイデン
「そうなのか？
それは何故だ？」
祐希奈・カナメ
「カナン（君）がぶっ飛ばされるのが面白いから～♪」
カナン
「んなことだと思ったよ！！」
ヴィヴィオ
「まぁまぁ…抑えて抑えて…」
カナン
「フー！！」
祐希奈
「キシャアアア！！」

カナン
「…」
祐希奈
「ガアアアア！！」
カナメ
「猫ＶＳモンスターどちらが勝つでしょう？」
メイデン
「は、白熱の戦いだな…」
ヴィヴィオ
「うん…手に汗握る戦いだね…」
カナン・祐希奈
「誰かツッコミしろ！！」
カナメ
「面倒なのでヴィヴィオさんどうぞ～♪」
メイデン
「ヴィヴィオ頑張れ！！」
ヴィヴィオ
「え！？えっと…勝負にならないよね？」
一同
「・・・」
ヴィヴィオ
「あれ？」
祐希奈・カナン
「ツッコミのキレが足らーん！！」
ヴィヴィオ
「え？え！？」
祐希奈・カナン
「ランニング五百周行ってこい！！」
ヴィヴィオ
「は、はい！」

ダッ！
祐希奈・カナン
「本当に行く奴があるかあああ！！！！」
ヴィヴィオ
「ふぇええ！？」
メイデン
「賑やかだな。」
カナメ
「賑やかですね～♪」
ズズズー…
カナン・祐希奈
「そして和むなあああ！！！！」
？
「さて、お待ちかねの質問コーナーですの。」
？
「では、僭越ながら僕が読ませて頂きます。
『読者からこんなにメッセージが来て迷惑ではないんですか？』らしいですが？」
？
「そんなことはまったくないですの。
ネタに困らないからバシバシ送って欲しいとのことですの。」
？
「そうだね。バシバシと飛び込んで来たまえ。
案ずることはない！女性限定で全て受け止めてみせよう！
野郎は知らないがね！」
祐希奈・カナン
「出番が欲しいからって先に出てくんなバカ共がああああ！！！
消えろ！！特に最後の破滅的バカ！！！」
ちゅどーん…
？ズ

「あ～れ～…」
ヴィヴィオ
「だ、誰だろう…」
カナメ
「新キャラの方々ですね。」
メイデン
「アレがか！？
三番目の輩など、言っている意味がわからなかったぞ？
会話になるのか！？」
ヴィヴィオ
「さぁ…ただ一つ確実に言えることがあるね。」
カナメ
「ですね♪」
祐希奈
「まぁ…そうね。」
カナン
「この作品は間違いなく…」
メイデン
「ああ。」
一同
「パーフェクトオブカオスへの道を加速する…」
ヴィヴィオ
「な、何か気が滅入ってきたよ…」
祐希奈
「こんな状態で質問コーナーなんて続けてられないわ。」
カナン
「すんげえだりぃ…」
メイデン
「負のオーラが満ち溢れているな。
仕方ない、カナメさん。」

カナメ
「はい♪
『ネタ質問になりますが、カナメちゃんは、銀花と会ってみてどうでしたか（笑）』
銀花さんは、とっても可愛らしい人でしたよ♪
銀杏さんを御兄様と言って慕われていましたね。
銀杏さんは、何故か拒絶なさっていましたが、私ならあんなに可愛い妹さんなら大歓迎です♪」
メイデン
「そうか。私もいずれ会いたいな。」
カナメ
「きっと仲良くなれますよ♪」
ヴィヴィオ
「終わったかな？」
カナメ
「はい。最後なんですから、気合いを入れて行きましょう。」
祐希奈
「よし…オッケー！！」
カナン
「しゃあない。やるか。」
メイデン
「その意気だ。
では、魔法少女リリカルヴィヴィオ」
？3
「始まるよ。
何？僕に惚れた？
おやおや、随分たくさんだねえ…
しかし、案ずることはない！
僕は、全ての女性に等しく愛を与えてみせるよ！！」
一同

「消え去れーーー！！！！」
ちゅどーん！！
▼▼▼▼▼▼▼▼「あはは…買いすぎちゃったかな？」
『マスター頑張りすぎですよ…』
「だ、だって、半額だよ？」
『確かに半額ですが、そんなに買ってどうするつもりですか…
祐希奈様達だけでは、とても食べられませんよ？』
「え、えと…頑張るよ。」
『やれやれ…』
ヴィヴィオの手にはパンパンのスーパー袋が２つ…
半額という誘惑に負け、その俊足を存分に生かして、オバサン達を抜き去り、買いまくったことが原因である。
そしてその袋を持ったまま海鳴病院へと入ったわけだが…
「うぅ…すれ違う人の視線が痛い。」
『院内でそんな袋を持っている女の子なんてマスターだけでしょうからね。』
「はぁ…とと、行きすぎる所だったよ。」
風間カナンとかかれた病室の扉のを開ける。
カナンは、意識不明ということもあり、個室になっていた。
中には、いつもと変わらない静かに眠るカナン。

その隣には、待機フォルムのメイデン。

「カナン君、メイデン、こんにちは。」

当然返事は返って来ない。メイデンは修理は完璧な筈なのだが、何故か起動すらしない。
カナンに至っては、呼吸をしている、という他には目覚める予兆すらまったくなかった。

「あのね、あと一週間で夏休みも終わりなんだ。
だけど、祐希ちゃんはね、まだ宿題一つも手をつけてないんだ。
カナン君と一緒だよ。」

「…」

「でも、祐希ちゃんはその気になれば宿題なんて1日で終わらせられるんだって～。凄いよね。」

返事は来ない…分かりつつも、話続ける。
毎日の出来事を少しでも教えてあげたかったから…

「あ、そうだ。もうすぐ夏祭りなんだ。
お店がたくさん出て、花火も打ち上げるんだって…
カナン君と祐希ちゃんとメイデンの四人で行きたいな…」

それは希望…
語りかける相手はいつ起きるかわからない…
夏祭りどころか、学校生活でさえ、もうおくれないかもしれない…
もう起きてくれないかもしれない…
そんな考えが頭をよぎる…でも、決めたから…

「私、カナン君達を信じてるから…起きて…また一緒に…遊ぼうね。」

夏祭りは来年もあるから…それくらいなら我慢するから…
学校に行けなくてもいいから…
いくらでも待つから、目を覚まして欲しい。
そんな願いを込め、ずっとカナン君の手を握っていた…
一月という時間は、とても長く感じた。
その時間は確実に二人を追い込んでいった…
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
「ああ…なんて可哀想な子なんだろう。
その姿は、儚げに散る夜桜のように美しい…
でもね、僕は君を消しちゃうかもしれない。
何故なら、君がその部屋からいなくならないから…
恨まないでおくれ…」

遥か彼方の高層ビルの屋上でフニャフニャと変な動作をしながらヴィヴィオを見下ろしていた男がいた…
男は、指をパチンとならす。
するとそこには三体の人型が落ちてくる…
男から遊びの気配が消えた。
そして一言…

「殺れ…」

三体の人型は、目的地、カナンの部屋へと向かった…▼▼▼▼▼▼▼▼▼
そんな頃、一人の少女が肩を怒らせながら病院から出てきた。
顔立ちはヴィヴィオ達と変わらぬ１３歳ぐらい。身長もさほど変わ

らない。
背中まで届く黒髪を三編みにして束ねている。
白の服に黒のミニスカートそして最大の特徴は、宝石が胸元にリボンで固定されているのだが、その胸は顔立ちに反して、大きい…
軽くDはこえている。
そんな少女が付き人であろう執事服の少年に愚痴りまくっていた。

「まったく！お父様ったら私がせっかく果物を持っていって差し上げたのにあの態度はなんですの！！
な～にが、『ふむ…リンゴか…ワシは今バナナが食べたい。買い直してこい。仕方ないから安物でも構わんぞ？』ですの！？
だいたい、お見舞いに来て下さった相手をさらにパシりに使うって人間としておかしいですの！！」

「まぁまぁ、旦那様もご病気でイライラしていらっしゃるのかもしれませんし。」

「私だってイライラしてるですの！！
あんな親父バナナ食ってゴリラにでもなってしまえばいいですの！！」

「クレア御嬢様？
その口調はいかがなものと思われますが？」

「ハルは一々細かいですの！！」

「やれやれ、これを細かいと言われますか…」

「十分細かいですの！！

あんなワガママ親父ゴリラで十分過ぎ…いえ、ゴリラが可哀想ですの…
アウストラロピテクスで十分ですの！！」

「アウストラロピテクスは最古の人類になりますが？」

「え！？えっと…ならサンヨウチュウで十分ですの！！」

「既にバナナは関係ありませんが？
サンヨウチュウがバナナを好きなんて情報は初耳ですね。」

「う…あ～もう！！これだからハルは細かいって言ってるんですの！！」

こうして白姫クレアと朱皇千晴（通称ハル）の漫才は続いていく。
余談だが、大抵の場合、この漫才はハルが勝つ。
今回もハルの勝利で漫才は終了した。

「はぁ…はぁ…きょ、今日はこれくらいにしといてあげるですの。」

「それは助かります。
ありがとうございます。御嬢様…ん？」

「ハル？どうしたんですの？何か感じたんですの？」

ハルは、風の知らせという稀少技能を持っており、風が吹いている所なら何処でも情報収集、探索が可能。加えて絶対記憶という能力も持っており、記憶したことは、絶対に忘れないという、まさに歩くデータボックス。
その能力から、クレアの執事兼ボディーガードとして任についてい

る。

「御嬢様…敵意のある何者かがこちらに向かって来ています…」

「敵？まさかハルが言っていた例の…」

「いえ、魔力値はそれほど高くありません…
恐らく雑魚でしょう。」

「数は何体ですの？」

「三体…ですね。
ボディーガードとしては御嬢様には逃げていただきたいのですが？」

「ふふ…答えはハルが一番わかっているはずですの。」

主の不適な笑みにハルは苦笑いをするしかなかった。

「お怪我はなされないようにお願いしますよ？
旦那様に怒鳴られるのは嫌なので。」

「了解ですの。シルフィス！！」
『起動承認…機竜召喚。』

ミッド式の魔法陣がクレアの足下に展開。
そこから五メートルはある機械で出来た竜が召喚される。
機竜にクレアが溶け込むように重なった。

「シルフィス、結界展開と同時に民間人の転送お願いするですの！」

『了解。結界展開、同時に転送開始。』

民間人に被害を出さないように結界の外へと転送していく…

「お見事ですよ御嬢様。
さて…敵様もお着きのようです。」

ハルがにこやかに視線を向けた先には銀色の三体の男性と思われる人型がいた。▼▼▼▼▼▼▼▼▼
クレアが転送したのは、民間人だけであり、魔導師は含まれていない。
つまり、ヴィヴィオ、カナンは放置されたままであった。

「結界!?何で…それより…フェアリー!!」
『了解しました。』

バリアジャケットに変身、即座に探知を開始する。

「魔力反応が五つ!?
とにかく行かなきゃ!
カナン君、またね!」

「…」

出ていくヴィヴィオはピクリと動いたその指をヴィヴィオは見逃していた。

「フェアリー、一気に行くよ!」
『プロテクション!』

外へとつながる窓にプロテクションを張りながら突撃し突き破り、原因の元…へと急降下した。
そこには、巨大な機械で出来た竜と一人の執事、そして剣を腰に持つ銀色の人型が三体いた。

「そこの人達待ってください！管理局の者です！」

「え？」

「おや、管理局の人がいらっしゃったみたいですね。」

機竜と執事さんの視線がこちらに向いた。
話が通じない相手ではないようだ。

「こちらは…」

「すいませんが、お話はまた後にしましょう…
お話が出来る状況ではないみたいので。」

その言葉にもう一度、執事さん達と人型達を見比べる。
敵意があるのは明らかに向こう。
予想はしていたが、やはり戦闘になりそうだった。

「わかりました。
理由は後でお話してもらいますから。」

「助かります。」

執事さんが丁寧にお辞儀をしてくれた。
それを待っていたかのように人型の一体が消える…

相手の狙いはスキだらけの執事さんに絞られていた。余りに唐突に相手が動いたため反応が遅れてしまう。

「執事さん！」

「おやおや…随分で姑息な真似をされるのですね…」

視線を横に向けると、人型の手首の所で受け止めている執事さんがいた。

受け止めたのは凄いが、執事さんの魔力値は低い…

避難をするように言おうとしたが…

「僕は大丈夫ですので、
頑張って下さいね。」

なんと、執事さんは左足を軸に一回転し、見事な回し蹴りを人型に叩き込み、吹き飛ばして追撃をかけにいった…

「執事さん！」

「ハルなら大丈夫ですの。私の最強のボディーガードですの。」

機竜が女の子口調で話している…

何なんだろう…デバイスだよね…

「あなたは、援護をお願いするですの。」

「え？」

機竜は翼を広げ、二、三度羽ばたくと一瞬で目の前から消え去った…

ドオン、という激突音がして、見ると既に人型に襲いかかる機竜がいた…

「あの人達は一体…」

途方にくれるヴィヴィオであった。

▼▼▼▼▼▼▼▼

「グラップラーアーム！」

クレアが叫ぶと機竜から四本の腕が出現…

一体は逃すが、右腕で片方を捕まえる。

人型は足掻くが凄まじい力で握られ、何も出来なかった。

握られた手が光を放つ…

「ラスターカノン！！」

零距離で放たれた光弾は放たれた後、相手をビルの中へと叩き込んだ。

仲間を犠牲にしながら人型は背後に回り込む。

「クラッシュテール！」

巨体が反転、機竜の尻尾が人型に叩き込まれ、容易く吹き飛ばした。

「弱すぎですの。」

『左です！マスター！』

シルフィスの警告に即座に反応、左腕を持ち上げる。

そこには、先程光弾で吹き飛ばした筈の人型がいた…

「この！」
『プロテクション！』

シルフィスがオートでプロテクションを張ると同時に凄まじい衝撃がクレアを襲う、機竜の頭に剣を突き立てようとする人型がいた…

「さっき吹き飛ばしたはずですの！」
『相手は高度な移動能力を持っているの推測されます。』

「データはないんですの？」
『検索…発見…能力、風間カナンの空間突破と認識されました。』

「なっ！」

その時、再び相手が消える…
機竜の体中に斬撃の後がつけられていく…

「くぅ…早いですの…」

二体の動きに撹乱され、狙いが定められない…

（飛んで下さい！援護します！！）

あの魔導師から念話が入る、指示に従い、飛び上がると青い砲撃が一直線に通り過ぎた…

「青い砲撃…まさか…高町ヴィヴィオ？」

クレアが想像した人物…
まさにその人物であった…

「フェアリー！真・ソニックフォーム！！」
『了解、真・ソニックフォーム、起動…終了！』
「はあああ！！」
ソニックムーブで人型に一気に接近…横殴りの一撃を叩き込む。
「…」
ギィン…
相手は無言で受ける…
その時ヴィヴィオは相手の顔を見た…
「カナン…君？」
銀色の人型の顔は確かにカナンそっくりだった…
しかし、絶対に違うもの…感情が感じ取れない…あるのは敵意のみ…
突如背後に気配を感じ、ソニックムーブで離脱、一瞬後に剣が地面に突き立った…
その人型もカナンと同じ顔…
一切の感情の起伏を見せることなくヴィヴィオに二体は斬りかかる。
「カナン君を…」
二体から繰り出される刺突や袈裟斬りの雨を、弾き、避わし、受け流す。
周囲から見れば完全に防戦一方の状況…しかし、クレアはわかっていた。
『助けなくてよろしいのですか？』

「あれが高町ヴィヴィオなのだとしたらあれくらいな筈がないですの。」

故に待つ、あれから念話が無いということは、援護は必要ないということ、今はただ、ヴィヴィオの戦い方を目に焼き付ける。

「「防御レベル高…危険と判断…」」

人型達は、剣を鞘の中へと納めた…

「「壱式抜刀剣術…」」

「カナン君をそんな物に…利用するな!!」
『ロードカートリッジ!』

双刃剣に風を纏い腰だめに構え両手で持つ…

「「暗夜一閃…」」

人型達の姿が消え、銀の残像を残しながらヴィヴィオへと迫る…
目の前へと迫る驚異をしっかりと捉えた…

「遅い!!」

ギィーンという金属特有の音と共に、銀の剣は弾き飛ばされた…
即座に剣を取ろうと人形達が動いた所に機竜が上からのし掛かる…
しっかりと腕で押さえられた。
機竜の口内が光を放つ…

「終わりですの。」
『シャイニングブラスター。』
白い光は、人型を飲み込み凄まじい爆発と共に葬り去った…
▼▼▼▼▼▼▼▼「そうだ！執事さんは！？」
「先程も言いましたがハルなら大丈夫ですの。」
機竜の中から綺麗な女の子が出てきた…
アレってどういうデバイスなのかな？
「あ、申し遅れました。
私、白姫クレアと言う者ですの。
先程の機竜は、私のデバイスのシルフィスですの。」
「あ、私は…」
「高町ヴィヴィオさん…ですの？」
「え？そうですけど、あれ？」
「ふふ…貴女…いえ貴女方は管理局内では結構有名ですの。」
「私達が有名…ですか？
何故です？」
「それは…」
「まず、ヴィヴィオ様は、高町一等空尉、テスタロッサ執務官の娘であり、その才能を発揮され、既に上からは目をつけられています。

あなたの事を知らない魔導師の方が少ないですね。
祐希奈様は、嘱託魔導師の身でありながら、有名なヴィータ二等空尉やシグナム一尉と互角の勝負をされたこと、カナン様は、ロストロギアエクスカリバーの持ち主であることや、高町一等空尉に勝利したことなどで有名です。
このお二方も是非局員にという声をよく耳にします。」

「ハル、説明ご苦労様ですの。」

「やれやれ、少しくらいは心配して欲しかったですよ。」

「ハルなら大丈夫だと信じてたんですの。」

「おや、御嬢様にしては上手い避けかたですね。」

「本当ですの!!」

「執事さん?あなたからはあまり魔力を感じられませんが、一体どうやって?」

「普通に体術で、ですが?」

さも当然のように答えられてしまった。
体術だけでアレを倒すなんて…
なんて無茶苦茶な執事さんなんだろう…

「と、とりあえず、ご協力ありがとうございます。
では、お話を…」

「いえ、まだ早いようですよ?」

執事さんは目を細めながら一点に視線を移した。

「はぁ…まだ雑魚がいるんですの？」

「どうやら、今度は雑魚ではないようです。」

執事さんの視線の先には、長いローブにフードで顔を隠した、恐らく人間が現れる。

「ほう…アレをあっさりと仕留めたか…
やはり、女性とは美しく、また強い方が輝きを増す…特にそっちの金髪の女の子はいいね…
まるでヴァルキリーだ…
どうだい？僕と付き合ってくれないかい？
案ずることはない。僕はこう見えて結構な富豪だからね、生活費には困らないよ？
式場も派手な所をとろう。
さぁ、カモンお嬢さん。」

バッと両腕が開かれる…
つまり、飛び込んでこいと？

「え！？えっと…」

「いきなり現れてナンパし、付き合う話から自慢話、あげくの果てには、結婚前提ってどういう頭の構造をしてるんですの！？」

「ナイスツッコミです。御嬢様。」

こちらはこちらで、変な空気になっていないでもないが、この際無

視しよう…

「ん？どうしたんだね？
ああそうか、子供は何人でもいいよ。
君が望むのら五人や十人、百人だろうとドンと来いさ！
むしろ回数が多い方が…」

「ハル！！」

「承知致しました。」

魔法を使ったわけでもないのに執事さんは、かなりの加速と共に相手にドロップキックをくらわせようとした。

「ふ～む…野郎に興味は無いのでね。
さっさと仕事を終わらせて立ち去るとするよ。」

「「え？」」

「これはなかなか…」

その声が上から聞こえた…執事さんは、相手を確かに蹴ったが、貫通、相手の後ろに着地した。
その相手は、ある一室の前にいた…

「出来ればもう少し話をしたかったが、そろそろタイムリミットが近づいているのでね。
主を殺し、エクスカリバーを回収して去るとするよ。」

カナン君の部屋の窓ガラスを叩き割り、侵入しようとした…

ドクン…
「やらせない！」

私は、ソニックムーブで相手の目の前に立ちはだかる。
しかし、今までのふざけた感じではなく、冷たい殺意を向けられた…

「邪魔をするんなら君も消すよ。」

相手の右拳が無造作に引かれる…
わかった…防がなければ死ぬと…
反射的にフェアリーの腹で受けるが激烈な衝撃が襲ってくる…
ドクン…

「ハル！！助けに行くですの！！」

「いえ…恐らく大丈夫でしょう。
こういうピンチは、王子様が助けるものですよ。」

共鳴…ということですか？それにしても凄い揺れ幅ですね…
いやはや、まさかここまでの少年とは…

「く…あ…」

「残念だけど…邪魔をした罰だ。」

フェアリーの刃にヒビが入っていく…
そしてついに砕けた…

ドクン…ドクン！ドクン！！

「終わりだお嬢さん！！」

引き絞られる左拳…
その光景の中、私の頭の中には、少年との思い出が過っていた…
最後の映像…
『お前達は俺が絶対に守るから…』

（カナン君…私…もう一度会いたかったよ…）

一筋の涙がヴィヴィオの頬を伝った…
頭に迫る拳、それを他人ごとのように見ていた…
バン…
私の顔と拳を遮るように新たな手が相手の拳を受け止める…
私の隣には、少年が立っていた…

「なっ！」

「え？」

「ヴィヴィオを泣かせてんじゃねえええ！！！」
ドゴッ！！

「がっ！」

少年から繰り出された拳が相手を盛大に殴り飛ばした。
その拳を開き、振り向いた少年は私の頭にその手を置いた…
銀色の騎士甲冑…腰にある黄金の剣と鞘…
ルビーのように赤い瞳がしっかりとこちらを見た。

「カナン…君…？」

「ああ…俺だよ。」

「おかえり…おかえりなさい！！」

「ただいま。」

ガバッ！

「わあああああん！！カナン君！！カナン君！！！」

「おいおい…」

抱きつく私を、困ったような表情で苦笑いを浮かべつつ頭で撫でてくれていた。

「あれが風間カナンですか…

噂以上の魔力値ですね。

これだけの魔力を放ちながらまだ発展途上…

まさに神童と呼ぶにふさわしい能力ですね。」

「ハルなら勝てるですの？」

「まさか。口が裂けてもそんなことは言えませんよ。」

「その反応をするということは、勝てるということですの。」

「おや、バレましたか。」

「ハルはいつも下手にでますから一緒にいれば嫌でもわかるですの。」

「やれやれ、御嬢様にはかないませんね。
お相手が動き出しますよ。」

「迎撃準備を…」

「その必要はないでしょう。
殺意が引っ込んでいますから。」

そう言って笑みを崩さぬまま、ハルは上空を見上げる…

「痛いじゃないか！
こんな予定外の事態が起きては興が削がれると言うものだね。
ふむ、撤退するとしよう。サラバだ諸君。」

「待てやコラアア！！
こんだけのことしといて帰らせると思うか！？」

「まったくうるさいなあ。
ギャアギャア騒ぐと恋愛運が逃げて女性関係で悩むことになるよ？」

『確かにマスターは悩んでいるな。
当たっているぞ。』

「うるせえよ！！」

「ふむ、デバイス君、君とは気が合いそうだな。
どうだい？そんな見るからに鈍感そうな男のデバイスなどやめて僕
のデバイスにならないかい？」

『確かに鈍感たがこのような人間でも私のマスターなのでな。遠慮しておこう。』

「お前は俺の敵か味方かどっちだよ！！」

『？味方に決まっているだろう？おかしなマスターだな。』

「まったくだ。おかしな少年だね。」

「帰れーー！！！」

怒号と共にエクスカリバーから砲撃が放たれた。

「アディオス、マイハニー♪」

「ヴィヴィオはお前の彼女じゃねーー！！」

砲撃が相手を飲み込む瞬間、転移をし、消えた。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「はぁ…はぁ…」

「あはは…変わった敵さんだったね。」

「これまでの相手とはまったく違うな。」

鞘だったメイデンが光に包まれ、久しぶりに見る人形サイズになる。

「メイデンも久しぶりだね。」

「ああ。随分待たせてしまってすまない。」

「帰って来てくれたから許してあげる。」

「助かる。ところで、マスター？何をそんなに震えているだ？」

「あんの女たらしがーー！！
次にあったら問答無用でぶっ飛してやるーー！！」

「わっ！カナン君落ち着いて！」

「仕方ないな…」

メイデンはだらんとしているカナンの左手に向かって飛び…

「落ち着け。」
ペシ…

「いでええーーーー！！！！！」

左手を抱え空中でカナンがもがく…

「ど、どうしたの？」

「あんな拳を受けたから骨が砕けているんだ。やはり無謀というか…」

「な、治してあげないの？」
「いい薬だ。しばらくは放置だな。」

そんな光景を下から眺める人間がいる。
もちろんクレアとハルである。

「あ、あれが風間カナン…幻滅ですの…」

同年代にして、超絶的な力をもつカナンに少なからず憧れがあったのだが、クレアがカナンに抱いていた憧れは脆くも崩れ去った…

「とりあえず、結界を解除しましょう。
今後のお話をしなければなりません。」

「わかりましたですの。」

パチンと指を鳴らすと空間がもとにもどり、街中へと変化した。

「「わっ！」」

空中の二人は慌てて着地し、バリアジャケットと騎士甲冑を解除した。

「さて…メンバーもそろいましたし…」

ハルが話を切り出そうとした時…

「カ…ナ…ン？」

「あ、祐希ちゃん…あのね！カナン君が目を覚ましたんだよ！」

「祐希奈…久しぶりだな。」

「どんだけ…」

「へ？」

祐希奈が何か呟き聞き取れなかったカナンが祐希奈に近づいていく。

「どんだけ待たすのよ！あんたはあああ！！」

祐希奈が滞空…魔法も使わずカナンより一メートル以上高く飛ぶ…

「え？ちょ祐希奈！？」

「天誅ぅぅーー！！！」
バッキァァァ！！！

「ぎゃあああああ！！！」

顔面に飛び膝蹴りをかました祐希奈は、華麗に着地、対してカナンは、十数メートル吹き飛び動かなくなった…

「カナンくーーん！！」

「あ、ちょっとやりすぎたかも…
ま、いっか。」

「「…」」

目の前の電光石火の出来事に、クレア、ハルの二人は石のように固まった…

「こ、これが噂に聞く…一之瀬祐希奈ですの？…
噂通りならその蹴りは、象をも倒す一撃らしいですの…」

「…少しばかり、説明は後回しにした方がよさそうですね。」

二人は苦笑いをするしかなかった…

第二話　ブランク

▼▼▼▼▼▼▼▼▼
ヴィヴィオ
「皆さんこんばんは。」
祐希奈
「今日も読んでくれてありがとね♪」
カナン
「さて、今回は新キャラも来てるぞ。」
カナメ
「だんだん増えてきましたね～♪」
メイデン
「では新キャラの白姫クレアさんと、朱皇千春さんだ。」
クレア
「初めまして、白姫クレアですの。」
ハル
「千春ことハルと申します。」
ヴィヴィオ
「二人共、いらっしゃい。
今日からよろしくお願いします。」
クレア
「よろしくですの。」
ハル
「よろしくお願いしますね。」
カナメ
「初めまして、鷹月カナメです♪」
カナン
「お前は出て…」
祐希奈

「デストローイ♪」
バキャア！！
カナン
「またかーい…」
クレア
「と、飛んだですの…」
ハル
「なかなかアグレッシブな前書きですね…」
カナメ
「いつものことですので気になさらないでください♪」
クレア
「カナメさん？あなたは本編ではみていないですの。」
ハル
「僕も見た覚えはないですね。」
カナメ
「とある事情によりまだ出られないだけですよ♪
そのうち出ます。」
カナン
「誰が！！」
祐希奈
「ヤッフィィィ♪」
バキャア！！
カナン
「二回目～…」
ヴィヴィオ
「あはは…カナン君まだほとんど喋ってないね…」
メイデン
「まぁ…マスターだからと言う理由で割りきろう…」
クレア
「それで、前回のように質問コーナーがあるんですの？」

祐希奈
「質問事態はあるにはあるけど、ネタバレになるから答えられないわね。」
ヴィヴィオ
「二件とも白姫さんと執事さんに対しての質問だから、ちょっとね。」
ハル
「御嬢様はともかく、僕にもですか？」
メイデン
「今までにないタイプのキャラだからかもしれないな。」
カナメ
「ですね～。
執事はタカトさんがいらっしゃいますが、パッと見た感じでは執事には見えませんからね。」
ハル
「僕の他にも執事ですか…
それは…燃えますね…
負けませんよ？」
クレア
「ハル？何をそんなに燃えてるんですの？」
ハル
「白姫家に仕える執事としての誇りがありますから。
本業としては負けるわけには参りません。」
祐希奈
「ま、戦闘は勝てないでしょうね。
全作品中でも、最強クラスのキャラだし…」
ヴィヴィオ
「私達でも二人がかりでギリギリだったからね～。」
ハル
「あははは。僕は戦闘では勝つ気はありませんよ。」

クレア
「ではって何気にライバル心むき出しですの…」
カナメ
「熱き戦い萌えますね♪」
カナン
「萌えんで！」
祐希奈
「イヤッハアアアア！！！」
バッキャアアア！！
カナン
「やっぱり～…」
ヴィヴィオ
「あ、そろそろ始めないと…」
メイデン
「今日は二人に言ってもらおうか。」
カナメ
「ですね♪」
クレア
「了解ですの！
魔法少女リリカルヴィヴィオ」
ハル
「始まります。」
カナン
「最後に！！」
祐希奈
「甘いのよ！！スパイラルフレアー！！」
ちゅどーん！！
カナン
「イヤッハアアアア…」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

目覚めて早々に意識を飛ばされたカナンが目を覚ましたので、一行は、喫茶店へと向かっていた。
無論、静かに話すためである。

「ったく、病み上がりなんだからちょっとは手加減しろよな～…」

「うっさいわね！魔力を感じて家から飛び出してみたら病院の近くに結界張ってあって入れないし、解けたら解けたであんたが起きてるし…混乱しちゃったのよ！！」

「お前は混乱したら人を昏倒させるんだな！？」

「あんたは私のサンドバックなんだから、いくら蹴ろうが許されるのよ！」

「たまには素直に自分の行動を反省しろ！！」

「なんで私があんた蹴ったくらいで反省しなきゃいけないのよ！！」

「ほんっとにお前は可愛くないな！！」

「あんたなんかに可愛いなんて言って欲しくないわよ！！」

「はいはいそうですか！！」

「そうよ！わかったら黙って歩きなさい！！」

「言われなくてもそうするっつーの！！」

「「バーカ！！」」

ぷいっとそれぞれ反対の方向に頭を向け、前を歩く三人に着いてくる。

端から見ればただの痴話喧嘩にしか見えていないということに二人は気付いていない。

前を行く四人は、本日何度目かの苦笑いを浮かべていた。

「ヴィヴィオ様…あの二人はいつもあのような感じなのですか？」

「あはは…今日は祐希ちゃんが口で終わっているだけマシなほうです。」

「いつもなら、マスターは宙を舞っていてもおかしくないからな。祐希奈なりに気を使っているのだろう。」

「あ、あれで気を使っていらっしゃるのですの！？私達は、喧嘩などしない…」

「それは間違いですね～。御嬢様は旦那様と会う度に喧嘩をしていらっしゃいますから。」

「ハル！！余計なことは言わなくていいですの！！」

「先程も旦那様のことをゴ…」

「ハ～ル～！！」

白姫さんの背後に何かが見えた気がしたけど、気のせいだよね…気のせい…気のせい…

「あはは！御嬢様に何をされるか分かりませんので逃げるとします。」

爽やかに笑顔を見せながら物凄い加速で執事さんが駆け出した…
カナン君より速いんじゃないかな？

「待つですのー！！！」

白姫さんもなかなか速いけど、執事さんには追い付けそうもない。

「あはは～。喫茶店はこの道を真っ直ぐ行った所にありますので、お先に行かせてもらいますね～。」

「待つですの！このコンニャク執事～！！！」

あっと言う間に二人の姿は見えなくなっていく…
それにしても、コンニャクって…

「ふむ…確かにフニャッとした執事だな。
案外的をいた意見かもしれないな。」

「メイデン、それって失礼だと思うよ？」

「では…テレビで見たクラゲなどどうだろう？」

「クラゲさんかぁ…気持ち良さそうに泳いでるよね～。」

「プカプカと波に任せて流れていたな。
確かに気持ち良さそうだな。」

「だよね～。」

既に話がずれていることにこの二人の天然は気付いていない…
とりあえず、ハルの評価は掴み所のない執事、と言うことにしておこう。
そして、ヴィヴィオ、メイデンは壮大にずれた話題を展開しながら、祐希奈、カナンは、話しては喧嘩をして、というサイクルを繰り返しながら喫茶店へと到着した。
人形と話す少女と、仲が良いんだか悪いんだか分からない二人組…
周囲には変わった集団だと思われていたことだろう。

「えと…白姫さん達は…」

「ヴィヴィオさん。こちらですの。」

白姫さん達は、窓際の一番端という目立たない席を選んで座っていた。
ということはここで全て話してしまうつもりらしい。白姫さんの正面に、祐希ちゃんその隣に私とメイデン私の隣にカナン君、カナン君の正面に執事さんという座席になった。

「それでは、長くなりますので、何か注目を致しましょうか。
ご心配なされなくとも、お代はこちらが持ちますので。」

「えと…私は、紅茶をお願いします。
メイデン、私一緒に飲む?」

「いいのか?なら、私はいらないな。」

「俺はコーヒーで。」

「え～と、私は…プリンパフェと…ソーダでお願いね♪」

「「「はぁ…」」」

ただ一人全く遠慮しない少女、祐希奈に三人は同時に溜め息をついた…

なんとなく予想はしていたのだが…

「やっぱり奢って貰えるんなら遠慮しちゃダメよね♪」

「ふふ…私、あなたの性格好きですの。」

「ありがと♪私もあなたは友達になれそうよ。」

早くも打ち解けつつある白姫さんと祐希ちゃん…

やっぱり祐希ちゃんってお友達作るのうまいなぁ…

「では、皆さんそのメニューでよろしいですか？」

コクりと頷くと注文され、しばらくすると紅茶2つに、コーヒー2つ、ソーダとパフェが一つずつ運ばれてくる。

「美味しそう…」

「そうだな…」

隣に座る祐希ちゃんのパフェは輝いて見えた…

そんな、私とメイデンに祐希ちゃんはスプーンを渡す。

「そんなに見られちゃ私だけ食べ辛いでしょ…
ほら、分けてあげるから。」

「「わ～い♪」」

やっぱり祐希ちゃんは優しいなぁ♪
ここでもう一つの視線に気付いた。

「じー…」

「ん？食べたいの？」

「い、いえ何でもないですの！」

白姫さんは顔を背けるが、視線はこちらに向いている…
祐希ちゃんの目が光った…ような気がした。

「ほ～れ。認めれば分けてあげるわよ～？」

祐希ちゃんはスプーンにすくいとり、白姫さんの近くに持っていく…
スプーンが揺れる度、視線が後を追う。

「わ、私も…」

「はい、時間切れ～♪」

後一押しというところでスプーンを下げる。
いじわるだなぁ…

「あ…」

「嘘よ♪はい、あ～ん♪」

「え？」

「ほら、あ～んってしたら食べられるわよ？」

「あ、あ～ん」

「良くできました～♪」

スプーンが白姫さんの口に入った。

白姫さんは、本当に美味しそうに頬を緩ませた。

「こんなに美味しい物…初めてですの…」

「そう？じゃ、サービスね♪あ～ん♪」

「あ～ん♪」

仲良く食べる二人を、微笑を浮かべながら見ているハルと、顔を赤らめながら視線をそらすカナンがいた。

「おやおや～？どうされましたか？」

「何でもない…」

「熱でもあるのですか～？」

く…こいつ…わかって言ってやがる…
この執事…意外と腹黒だな。

「え？カナン君熱があるの！？じっとしててね？」

「へ？」

顔がヴィヴィオの方へ向けられ、ヴィヴィオの顔が近づいてくる…
ち、近い！！近いって！！
コツンっと額と額が合わさる形となった。

「あ、ホントだ…ちょっと熱いね…」

「だ、大丈夫だから…ほっときゃ治る…」

ヴィヴィオが離れてくれれば即座に治るから！！
その光景を見て、笑っている執事…あの野郎…

「無理しちゃダメだよ？」

「ほらマスターこれでも当てておけ。」

メイデンから、お絞りにくるまれた氷の塊が渡された…
コップの中の水を丸々凍らせたらしい。

「辛いなら転がってもいいよ？
枕がないから私で我慢してもらわなきゃいけないけど…」

バカ言え…ヴィヴィオの膝枕なんてしてもらったら余計に熱くなる…

「いや、そこまでしてもらわなくてもいい…」

「そう？いつでも言ってね？」

「ああ。ありがとな。」

（青春ですね～。）

（黙っとけコンニャククラゲ執事が！！）

（これはまた随分な言われようですね。
僕は心配していただけですのに…）

（おかげで無駄な精神使わされたがな！！）

（ふふ…膝枕、してもらえばよろしかったのでは？）

（うっせえ！！）
ブチッ！！

断言しよう…俺はこの執事が苦手だ！

「さて、リラックスも出来たようですし、御嬢様？」

「わかったですの。
それでは改めて自己紹介をさせていただくですの。
私の名前は、白姫クレア、魔導ランクはＡＡ＋
階級は陸曹ですの。
デバイスは、我が白姫家が独自に開発した大型機竜式デバイスシルフィスですの。」

「僕は、朱皇千春といいます。
魔導ランクはC＋
階級はありません。本業は執事ですからね。
デバイスは、白姫家からいただきました、アスラです。」

「白姫家独自の技術って…自分家でテバイス作ったの！？」

「そうですの。特にシルフィスは管理局中を探しても同じタイプのものはないですの。
これ一つしかないですの。」

「僕のデバイス、アスラは、身体強化のみを集中的に強化されたデバイスです。僕の魔力では、砲撃なんてとてもじゃないですが、連発なんて出来ませんし、大した威力もありません。
ですから、無駄な部分を極限まで削ったのがアスラなんです。」

「ちなみに、ハルはアスラを使うことは滅多にないですの。
大抵の相手は、身体強化をするまでもなく倒せるんですの。」

「御嬢様…僕はそこまで強くはないですよ。」

誇らしげに胸をそらせる白姫さんと、あきれたように謙遜する執事さん。
しかし、先程の襲撃のさいは、体術だけでアレを倒していた…
白姫さんの言葉も嘘ではないかもしれない。

「今、思ったんだけどさ…クレア…胸大きくない？」

「っ！！そ、そんなことはないですの！！」

胸を隠すように前屈みになる白姫さん…

「僕の見立てでは、Dの後半といったところでしょうか？」

「ハ、ハル！？」

「どうせ私は、Aですよ…胸が何よ…胸なんて必要ないのよー！！！」

「ゆ、祐希ちゃん…恥ずかしいよ…」

「ヴィヴィオはいいわよねえ！？
今の時点でCに届いてるんだから！！
六課に入るころはまだBだったのに…何よこの成長の差はー！！！！」

「わぁー！！カナン君聞かないでー！！」

ハルの自慢話から、胸の話へと発展し、大混乱へと陥る一同…
喫茶店の一角のみ戦場と化していた…

（そうか…ヴィヴィオは今Cなのか…
対して祐希奈はA…まだ差が開きそうだな…）

赤面しつつもそんなことを考えている辺り、カナンもやはり思春期真っ盛りの少年であることが判明した。しばらくして、騒ぎが収まり、本題へと移る。

「まず、今日の襲撃して来た敵の目的から話しましょうか。
彼等’の目的は、カナン様が持っている、エクスカリバー、そし’

て、現在機動六課が管理している、グングニル…この2つのロストロギアです。」

ハルの発言にヴィヴィオ達に驚愕が浮かぶ。

「執事さん…今…彼等…と言われましたか？」

「はい。僕の稀少技能…風の知らせに引っ掛かった敵の数は、三人…今回の相手を含めれば四人です。
まだ未確認の敵もいるかもしれません。
そして、その四人に共通していること…それは、全員が古代ベルカ伝説のデバイス持ちだと言うことです…」

「「「なっ！！」」」

この言葉にの三人が驚くが、メイデンは、落ち着いた態度でいた。

「そうか…ならこの世界のざわつきにも納得がいった…」

「世界の…ざわつき？
どういうことだ？」

「…私達古代ベルカの伝説の武具、防具というのは、凄まじい威力を持っていることがわかるな？」

「う、うん。エクスカリバーとグングニルの戦い凄かったから…それはわかるけど…」

「私達が封印されていたのは、パワーバランスが崩れた為に封印されただけではない。

力の強い武器ならば世界の理を崩せる…マスターが時を止めたようにな…
弱いものでも、何かしらの世界の理を崩せるんだ…
例えば、グングニルで言えば、投擲されれば絶対必中だと言ったな。
アレは、対象までの大気の流れを固定する、つまり対象がいくら動こうとも、固定された大気の中を疾るグングニルは避けられんと言うわけだ。
ちなみにグングニルは低いレベルに入るが…グングニル程度の力でこれだ…
これだけの持った私達が、一ヶ所に集ったとしよう…
そして、全ての力が一斉放たれれば…世界は滅ぶ…いや…地球そのものが無くなると言った方がいいな。」
メイデンのこの発言に、三人はさらに驚愕を浮かべる…

「無茶苦茶だ…」

「な、何でそんなことを…」

「ハルさんだっけ?理由はわかってるの?」

「申し訳ありません…相手の武器さえわかっていません…」

「ハルは悪くないですの!ハルは一生懸命に調べてくれてるですの!」

項垂れるハルをクレアがかばう。
誰もハルを責めはしない。
とても感謝している。
これからに備えることが出来るのだから…

「あ！！」

「な、何！？」

「急に大きな声ださないでよね！」

「悪い…でも…一つ相手の武器がわかった…
ゲイボルグだ…」

自分が暴走している時に出会った男…
操られていたためにおぼろげだが、自分の口はゲイボルグと言っていたはずだ…

「ゲイボルグだと？
また厄介な武器を手にされたものだな…」

メイデンが、少しイラただしげにして目をつむる…

「そんなに凄い武器ですの？」

「いや…レベルとしては低めに入るが…奴の管制人格は、非常に好戦的でな…
恐らく説得は不可能だ。
能力は、空間攻撃に特化し、神速の突きを何処からでも放てるというものだが…正直、空間攻撃のレベルはトップクラスだ。
私では話にならん。」

「こりゃ、本気で訓練しないとヤバイな…」

「うん…反応速度をあげるのは必須だよね。」

「とにかく、情報ありがとね。
それじゃあ、私達これから特訓しにいくから…」

「待って欲しいですの。
私達も協力するですの。」
その言葉に、ヴィヴィオが答えを返した。

「…命懸けの戦いなんだよ?
気持ちは嬉しいけど、さっきの戦いを見る限り、相手が高機動戦法だった場合、確実に死んじゃう…
だから、白姫さんは、住民の保護に…」

「う…」

「まぁ、お待ちください。御嬢様もかなりの速度で成長されたお方です。
そこで、カナン様と模擬戦をされて、空間突破に反応し、戦うことが出来るようになれば参加、出来なければ不参加というように、スッキリ決めてはどうでしょう?」

「ハル…」

ハルは本当なら反対したいだろう…
でも、協力してくれている…
とても…とても嬉しかった。

「カナン君と?でも…」

病み上がりのカナン君に出来れば激しい戦闘はして欲しくなかった…

「いいんじゃないか？」

しかし、意外にもカナン君は乗り気だった。

「戦力は多いに越したことはないし、何より、守りたいって気持ちが伝わってくるからな。
俺で良ければ相手になるよ。」

「カナン様…」

「条件その一だ。
様はやめてくれ…寒気がするから…」

「了解ですの！
カナンでよろしいですの？」

「ああ。様じゃなければなんでもいい。
で、模擬戦だけどな、俺も病み上がりで鈍ってるからな、本気でいくからそのつもりでな。」

「は、はい！」

「良かったですね、御嬢様。」

「ハル！！大好きですのー！！！」
ガバッ！！

「あははは。御嬢様？目立ってますよ？」

「はっ！」

電光石火…素早く執事さんから離れる白姫さん。
それにしても…カナン君大丈夫かな？

「カナン君…」

「心配すんな。
どの道この体じゃあんまり無茶苦茶は出来ないからな。」

「無茶苦茶したら、私が二度と無茶苦茶出来ない体にしてあげるわ…」

「あ、あの祐希奈さん？
なんか目がマジに見えるのは気のせいっすか？」

祐希ちゃんの凄みに、冷や汗がだらだらと顔から流れ始める…

「マジだからね…よ～～～く…肝に命じときなさいよね？」

「さ、サー！！イェッサー！！」

危なくなったら私が止めようと心に決め、一同は、林へと向かった…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼林の中では、既に二人が身構えている…
緊迫した雰囲気の中、執事さんが私に話しかけてきた。

「すいません、お手数ですが、広域結界をお願いできますか？」

「結界をですか？
わかりました…フェアリー…」
『了解。広域次元結界展開します。』

「範囲は…そうですね…四方一キロってところですか…」

「一キロですか！？
が、頑張ります…」

「ヴィヴィオ一人頑張らなくても、私も手伝ってあげるわよ。アシエル。」
『了解。補助に入ります。』

祐希ちゃんが半分受け持ってくれたから、魔力消費は少なめですんだけど…
そこまで激闘になるのだろうか？
先程は、相手の劣化したスピードにさえ撹乱されて、撃墜の危険すらあった。
そんな少女が最大速度測定不能の値さえ出すカナン君に追い付けるのだろうか？

「不安そうですね。
しかし、御嬢様の対応の早さは凄まじいですよ？
貴女方のような急激な成長はありませんが、それでも、かなり長引くことにはなるでしょうね。」

「そんじゃま、お手並み拝見といきましょうか。」

「うん。」

「準備はよろしいですか？」

「いつでもいいですの。」

「こっちもだ。始めてくれ。」

両者の了解が出た所で、執事さんが右手を振り上げる…
機竜は翼を広げ、カナン君は柄に手を移す…

「レディ…ゴー！！」

「まずは小手調べだな…
弐式抜刀剣術…」

しっかりと柄を握る、これからやるのは、相手の小手調べだけではない…
自分がどれくらい鈍っているか調べるためでもある。
故に手加減抜きで振り抜いた！

「虚空閃！」

シルフィスの頭の辺りの空間が割れ、斬撃が直撃する。
キン…

「へ？」
『マスター！？』
サクッ…
頭を斬った筈の斬撃は、いとも簡単に弾かれ、それだけに終わらず、
カナンの手にあったエクスカリバーを後方へと弾き飛ばした…
綺麗に弧を描いた剣は地面へと突き刺さる…

「「「「「「・・・」」」」」」

全ての時が止まったような気がした…
リミットブレイクなんて使ってないぞ？

「舐めないでほしいですのー！！！」
『スタンバイ…』

四本ある腕の爪の中に光が生まれる…
同時に、翼にも光が集まっていく。

「ラスターカノン！！」
『デストロイ！！』

「デストロイって！！ちょっとタンマアアアーー！！！」

飛び上がり、旋回し、回転しながら急降下、地面を転がり、四つの光弾をやり過ごす。
が…

「それそれそれー！！！」
『消えてしまいなさい！！』
時間差で放たれる光弾は途切れることなくカナンを狙う。
その一つ一つが、地面をえぐり、木々を吹き飛ばし、着弾すれば、周囲二メートルを荒野と化していく…
これだけ連発しているにも関わらず、途切れる様子は全くない…

「っていうかシルフィス！！お前女性型デバイスだろ！？
もうちょい口を…」

『黙って消し飛びなさい！！』

機竜の口が開かれ、白光が集っていく…

「ヤバッ！！」

「『シャイニングブラスター！！！！』」

首を振りながら砲撃が放たれ、シルフィスの前面が、焼け野原となった…

「うわ～…結界張っといて良かった。」

「ゴ、ゴ〇ラだわ…
ミニゴ〇ラがいる…」

「あははは。言い得て妙ですね。」

カナンはというとギリギリで空間突破を使い、上空へと離脱していた。

「派手にやるなぁ…」
『しかしマスター…』

「ラスターカノン！！」

会話の最中にも光弾はカナンへと打ち出される。
それを、右に左にと避けながら、メイデンと会話する。

『そんな握力でどうするつもりだ？』
「あのバカタレを殴った時は力は大丈夫だと思ってたんだけどな…
まさかここまで落ちているとは…」

カナンが最初に剣を弾かれたのは、油断でも何でもなく、ブランク…
一月の間、意識不明だったというブランクが、カナンの身体能力を
著しく低下させていた。

『ユニゾンして大地の力を借りればそれなりには上がると思うが？』

「いや、それだと、鈍りが戻らないし、しゃあない…」

眼前へと迫る光弾を見て、動きを止める…
抜刀…光弾を殴り付けるようにして斬る！
威力に腕が押される…

「おおおおお！！！」

ギイーン…
一際高い音が鳴り響き光弾を弾き飛ばした…

「む、無茶苦茶ですの…」
『流石…データにすらバカとかかれるだけのことはありますね。』

「はぁ…はぁ…いっちょ筋トレと行きますか！！」
『はぁ…どうなっても私は知らないからな。』

カナンは、クレアの試験及び、自身のリハビリとして長期戦に持ち
込むことにした…

「わぁ…カナン君も凄いや…」

「あのバカ…」

次々と弾かれては周囲に着弾し、荒野を増やして行く光弾…その一つがヴィヴィオの方向へと飛んでくる。

「わっ！！」

「ヴィヴィオ！！」

着弾する寸前、光弾は、急に角度を変え、直角に飛んでいった…

驚いて転けてしまったヴィヴィオの目の前には、いつもと変わりない微笑をするハルがいた…

「し、執事…さん…」

「お怪我はありませんか？」

「は、はい…ど、どうやって？」

ハルから差し出された手をつかみ起き上がりながら、ヴィヴィオが問う。

「白姫家の執事やボディーガードの服は、頑丈な素材で作られていまして、生半可なバリアジャケットよりは高い防御力を持っていますから。

なので、こちらはお気になさらず。」

と、執事さんは服のおかげのように言ってるけど…

いくら高い防御力を持ってても、光弾が直角に飛んでいくなんてことは何かをしない限りは無いわけで…
魔法を使った気配もなかった…ということは、この執事さんは素手であの密度を誇る光弾を殴り飛ばしたことになる…
普通に考えればあり得ない…
しかし、他に可能性はない…
この人は…確かに最強の執事なんだろうな。

「おや…御嬢様が動きますよ？」

「え？」

「速ッ！！」

視線の先には、音速すらも突き破り、カナン君へと飛び上がる機竜がいた…

「シルフィス！突撃ですの！！」
『ウィングセイバー！！』

三メートルはある魔力刃が翼から伸びる…
只でさえ巨大なその体に魔力刃の大きさを合わせれば、十メートルはいくだろう…

「参式抜刀剣術…」
『いや、マスターあれは避けなければ！！』

「知らん！！絶空！！」
ガキィーン！！

カナンはその巨体を真っ向から斬りつけた…

「無茶苦茶にもほどがあるですの！！」

『くらいなさい！！』

キィーン…

「がっ！！」

加速、そして質量の違いからあっさりと剣は弾かれ、カナンへと魔力刃は叩き込まれた…

木の葉のように宙をまうカナンの体…

意識が飛びかけるが、気合いで踏ん張り、体勢を整える…

「こんなんじゃ私の試験になってないですの！

空間突破を使う前にあなたが倒れたら私不合格になっちゃうですの！！」

クレアの怒声にカナンは笑う…

「誰が倒れるって？

この程度の攻撃力じゃ…何べんやられても全然聞かねえよ…」

『嘘をつくな…先程の攻撃はギリギリだったぞ…』

「俺に空間突破を使って欲しかったらなぁ…

地面に落としてから言うんだな…

それも出来ないうちから試験なんてやる気もない。」

「く…すぐに落として見せるですの！！」

『いっそのこと勝負を決めて差し上げます…』

カナンの挑発に、クレアとシルフィスは本気になった…

「そうだ…後先なんて考えずに全力で来い！！」

『本当にマスターはバカだな…』

「はっはっは。何を今更言ってるんだいメイデン君。」

『バカマスター…』

「あはは…」

『バカカナン様』

「バカカナン…」

『バカカナン君』

「バカですね。」

「バカですの。」

『やはりバカです。』

さて問題です。誰が言っているかわかりますか～？

「お前らなぁ…後で覚えとけよ！？

特にコンニャククラゲ執事！！！」

「あはは。お気になさらずに。」

「てめえ…」

「余所見をしている暇はないですの！！」

『滅殺開始…』

「いやだからシルフィス！！言葉使いを…いってえええええ！！！」

機竜の突撃に吹き飛ばされまくるカナン…
ブランクを取り戻すために始まった長期模擬戦はまだ始まったばかり…

第三話　特訓

一同
「・・・」
祐希奈
「これ…血…よね？」
ヴィヴィオ
「う、うん…何でこんなに血が…」
カナン
「多分…作者の血だ…」
メイデン
「レイスさんから逃げ切れなかったのだな…」
クレア
「グ、グロテスクですの…」
ハル
「開始早々辺り一面血の海では萎えますね…」
？
「案ずることはない！
このウルトラスーパーダイナマイトスペシャリストドメスティックパーフェクトな僕がこの場を盛り上げてあげるからね！！」
祐希奈・カナン
「敵キャラが前書きに出てくんな！！」
？
「なんだいなんだい、ゆっきゅんにカナ吉君、そんなに僕のカリスマ性に惚れ込んだのかい？
全く仕方がないな…
特別にこの僕のカリスマの秘密を…」
祐希奈・カナン
「バイオレンスクロスデストロイ！！」

ちゅどーん！！
ヴィヴィオ
「うわぁ…」
メイデン
「死んだのではないか？」
クレア
「ま、まだ対応出来ないですの…」
？
「はっはっは！僕は無敵さ！君達の愛が僕に来る限りはね！！」
ハル
「この中の誰一人として貴方に愛を捧げてはいませんが？」
？
「案ずることはない！勝手に取っていくからね♪
そう…人は僕のことをこう呼ぶ…ラヴハンターとね！！」
カナメ
「そろそろ帰ってください♪水仙花！！」
ドシュ！！
？
「ははははは！また来るよ～アディオスマイハニーズ♪」
カナメ
「ふぅ…仕留めました♪」
祐希奈・カナン
「ナイス♪」
ヴィヴィオ
「祐希ちゃんはともかく、カナン君とカナちゃんが仲が良くなるなんて…」
ハル
「何気に暗い雰囲気も吹き飛びましたね。」
クレア
「あの人はこれを狙ってたんですの！？」

メイデン
「それは確実にないと思うぞ…
偶然の産物というやつだ…」カナン
「じゃあカナメ、質問の紹介頼むな♪」
カナメ
「はい♪任せてくださいカナン君♪」
ヴィヴィオ
「こ、怖いよ…」
メイデン
「普段が普段だからな…」
カナメ「では、『毎回聞いてすいませんが、これから楽しく読むためにクレアとハルの概要説明をお願いします。』らしいですよ♪
クレアさん、ハルさんお願いしますね♪」
カナン
「文句なしだ流石カナメだな♪
見事な仕事っぷりだ。」
カナメ
「いえいえ、これくらい出来て当然ですよ♪
前世が偉大な方なので♪」
カナン
「ありがとな♪」
祐希奈
「私まで寒気がしてきたわ…
話題変えたいからクレア、頼むわよ…」
クレア
「私の個人の情報はこれですの。」

白姫クレア
魔導ランクなどは省略。

年齢１３歳
身長…１５５センチ
体重…４６キロ
趣味…風景画を描くこと。
好きな物…ダージリン、ハルの作った食べ物。柑橘類
嫌いな物…御父様、変態、テンションの高い親父、ドリアン
概要
白姫家の跡取りであり、本当に御嬢様。
父親が苦手であり、レッスン中にビデオなどをとられたりして嫌気がさし、現在は全てやめている。
これでは、跡取りとしての問題が出来るため、執事のハルが勉強などを教えることとなった。
絵の才能は素晴らしく、プロ顔負けの風景画を描くが、あくまでも趣味にとどまっている。

クレア
「こんな感じですの。」
祐希奈
「父親が嫌いな物って…」
ハル
「あ～それは、本当に嫌いというわけではありませんので。」
ヴィヴィオ
「ライバルみたいな感じってことかな?」
クレア
「そういうことですの。」
カナン
「まぁ、本編でも見舞いに行ってたしな。
父親って感じではなさそうだったけど…」
クレア
「アレは女の子の敵ですの…」

カナメ
「ということは、変態、親父っていうのは…」
ハル
「旦那様のことですよ。」
メイデン
「どりあんとは何だ?」
ヴィヴィオ
「あ、それ私も気になったよ。」
祐希奈
「ドリアンって言うのは果物の王様なんだけど…果実が臭いのよ…」
ヴィヴィオ
「王様なのに臭いの!?」
カナン
「王様だから臭いんじゃないのか?」
メイデン
「臭いのは嫌だな…」
クレア
「日本では滅多に目にしませんから、多分大丈夫ですの。」
ヴィヴィオ・メイデン
「良かった~…」
カナメ
「レッスンを全てやめているとありますが…そんなに嫌だったんですか?」
クレア
「嫌なんてレベルじゃないですの…
毎回毎回毎回、３６０。から舐め回すように動くあのビデオカメラ…
思い出すだけで拒絶反応が起きるですの…」
ハル
「あははは。アレは聞かない方がいいですよ?

眠れなくなりますからね。」
祐希奈
「聞くだけで眠れなくなるって…」
ヴィヴィオ
「よ、よく耐えてたね…」
クレア
「半年も続いた自分を誉めてあげたいですの…」
カナン
「絵がうまいらしいな。
また今度見せてくれ。」
ヴィヴィオ
「私も見たいな～。」
祐希奈
「私も私も～。」
メイデン
「私は実際に書いている所を見たい。」
クレア
「機会がありましたら御見せするですの。」
ハル
「では、次は僕ですね～。」

朱皇千春
年齢…１９歳
身長…１８２センチ
体重…６７キロ
趣味…家事全般、トレーニング。
好きな物…家事全般、会話、ブレンド茶の開発。
嫌いな物…とばっちり、料理屋二流以下
概要
白姫クレアの専属執事。

いつも微笑を浮かべている。
何を考えているかわかる人間は極少数。
エリート執事教育機関を首席で卒業し、さらにカリキュラム六年の機関を二年で卒業したスーパー執事。
自身に対しての問いに答えることが少なくのらりくらりと避けていくので、クラゲやコンニャクなど柔らかい物に例えられることが多い。
尚、キレた場合、逃げるのが上策である。

ハル
「このぐらいですかね。」
メイデン
「執事兼ボディーガードなら趣味は妥当だな。」
カナン
「お前…好きな物会話って…イジメ大好きって言ってるようなもんだぞ？」
ハル
「心外ですね～。
僕は皆さんと楽しく会話をしてるつもりですよ？」
カナン・クレア
「嘘だろ。／嘘ですの。」
ヴィヴィオ
「まぁまぁ…そんなに責めなくても。」
祐希奈
「私達には普通よね？」
ハル
「弄って大丈夫な人間とダメな人間を見分けてますからね。」
カナン
「やっぱ弄ってんじゃねえか！！」
クレア

「はぁ…」
ハル
「あはははは。冗談ですよ～。
次に行きましょうか。」
カナン・クレア
「コンニャククラゲ…」
カナメ
「嫌いな物が二流料理屋っていうのは何でですか？」
ハル
「あぁ…それですか…
中途半端に習得した料理をお客様に出してお金を稼ぐなんて許せないだけですよ。
店舗に並べるのなら、環境、設備はもちろん、一品一品、真剣やってもらいたいものです。
それすら出来ないのなら、職人など辞めてもらいたいですね…」
ヴィヴィオ
「つ、つまりハルさんは料理は楽しくやるものじゃないって言ってるのかな？」
ハル
「ただ、自分は職人というプライドを持ってやって欲しいだけです。
楽しく、でも真剣にって感じです。」
祐希奈
「ハルは？」
ハル
「もちろん楽しく真剣に作っていますよ。
他にもいろんなことを学べるので執事になって良かったです。」
祐希奈
「なるほどね～。
案外執事ってのも楽しそうね♪」
メイデン

「では次は私から…ハルさんでもキレたことがあるのか？」
ハル
「あははは。多少怒ったことはありますが、キレるとまではいきませんよ。」
クレア
（嘘ですの…昔に散歩の最中に二流料理屋の店にたまたま入った私達は、とりあえず店の自信作と書かれていたメニューを注文したんですの…）
一同
（ごくり…）
クレア
（それを食べた時のハルの顔は相変わらず笑顔ですの…
でも、圧倒的な存在感を放ちながら店長のところに行ったんですの…
その時の店長の顔と言ったら…真っ青で、ボロボロと泣いてハルに土下座していたんですの…）
一同
（怖えー！！！！）
ハル
「皆様黙ってどうされたのですか？」
一同
「何でもないです千春様！！！」
ハル
「そ、そうですか？」

ヴィヴィオ
「まだもう一件あったんだけど、流石に長いから終わろうか…」
祐希奈
「終わりましょう！！速やかに、今すぐに！！」
カナン
「そうだな！！さっさと終わろうな！！」

カナメ
「わ、私はまだ本編に関係ありませんのでこれにて失礼しますね！！」
メイデン
「あ、カナメさん！！ずるいぞ！！」
クレア
「では、私が言うですの！！魔法少女リリカルヴィヴィオ」
一同
「始まります！！」
ハル
「？何をそんなに…」
祐希奈
「撤収ーーー！！！」
一同
「アイサーーー！！！」
ハル
「やれやれ…」
▼▼▼▼▼▼▼▼「どうしたああ！！もっとこいやあああああ！！！！」
『はぁ…』

そう言い放つカナンの体はボロボロ…
当たり前である…ここまで一時間以上の間、光弾、砲撃、突撃、全てを避けずにいたのだから…
しかし、それでもカナンは倒れない…
寧ろ、勢いを増している。

「く…いい加減しつこいですの！！」
『もう容赦はしません！！』

再び光弾の嵐がカナンに放たれる。
同時に翼から刃が展開され、羽ばたく…

「その技じゃ…俺を落とすことは出来ない…」

自身に放たれた光弾を、弾き飛ばす…
正面に来た最後の光弾に対して大上段に振り上げる…

「おうらあああ！！！」

殆んど抵抗すらなく、光弾が真っ二つに切り裂かれる…
あえて攻撃を全て受けるという強引なリハビリにより、カナンの体は、凄まじい勢いで目覚め始めていた…

「『ウィングセイバー！！』」

音速を破り突撃をしてくる機竜に瞬間で納刀…
今更避けるつもりなど全く無かった。

「参式抜刀剣術…」

威力…速度…質量…そんなものどうでもいい…
向かって来るならぶった斬る！！
己の攻撃範囲に入った時…動きが川の流れのように鮮やかに振り抜かれる。

「絶！空！！」

ガッキィーン…
体格五メートルを誇る機竜と、一人の少年の力が拮抗する…

「なっ…」

確かに機竜の巨体が、傾いた…
機竜がカナンに押し負けたのだ。
進行方向から外れ、カナンを通り過ぎる…

「ちっ…」

カナンも防いだことは防いだが、ギリギリだったため、体勢が崩れ、
腕が痺れる…
そして…自分の稀少技能が告げる…
攻撃がまだあると…
力は戻った。
しかし、反応がまだ追い付かない。

『捕まえましたよ…』

「くそ！」

長い尾が体に巻き付く、そのまま急降下していく…
絶対痛いな…

「『クラッシュ！！』」

機竜の尾が魔力コーティングされ、白く輝く…
こりゃあ第一関門クリアだな…

「『テール！！！』」
ドゴオッ！！

「が…は！！」

音速を破る速度で急降下し、受け身も全く取れない状態で叩きつけられたカナンは、地面を砕き、深々と埋もれた。

「地面に落としたので合格ですの。
さぁ、次は…」

「どこ見てんだよ…」

叩きつけられた筈のカナンが機竜の目の前に立っていた…
これが…風間カナンの空間突破…模造品とは格が違うですの！

「シルフィス！」
『プロ…』

「反応が遅すぎだ！！
エクス！！カリバー！！！」

「きゃあああ！！」
『く…制御！』
完全に張られていない未完成のプロテクションで防ぎきれる筈もなく、機竜が数メートル後ずさる。
シルフィスの制御により機竜は倒れなかったが、カナンはさらに追撃をする。

「そんなもんか！？」

空間突破を使い、機竜の周囲を動き回り、斬撃を叩き込んでいく…

「速い！でも！！」
『捉えました！！』

一瞬カナンが止まった所にアームを伸ばす。
しかし、間違いを悟った…そして、悟った時には既に遅すぎた…

「壱式抜刀剣術…」

カナンは、機竜の攻撃を誘っただけだった…
迫るアームの速度など、カナンには、スローモーションに見えている。

「暗夜…一閃…」
キン…

「え…？」
ガシャン…
カナンが納刀すると同時に機竜の二本の右腕と右翼が斬り落とされた…

「クレア…」

「はい…ですの…」

実力差は歴然…試験にすらならないですの…
こんな内容じゃ不合格ですの…

「自分より動きの速い奴と戦う時、目だけで追ってたら確実に後手になる。

目を閉じてみろ。」

「は、はいですの。」

「俺のいる所、魔力でわかるだろ？
目では俺は消えたように見えるかもしれない…でもな。」

「あ…」

魔力の反応が確かに軌跡を残しつつ、自分の正面へと動いた…
大変なことには変わりないけれど…頑張れば反応出来ない速度じゃないですの…

「クレアと似たタイプで言うと祐希奈だけどな…
高機動魔法が使えない祐希奈は、そうして捌いてるんだ。
目だけに頼るな。相手を感じろ。」

「はいですの！」

「それを頭に入れたらもう一回挑戦だ。
シルフィス、再生出来るよな？」

『もちろんです。』

消失した右腕と右翼が再生し、再び完全な状態の機竜が復活する。

「もう一度チャンスを下さってありがとうございますですの！」

その言葉にカナンがキョトンとする。
そして、優しく微笑んだ。

「何かを守りたいって思ってる奴の協力ならいくらでもするさ。
二度とだろうが、三度だろうが、クレアが強くなるまでやってやる
から、失敗なんか恐れずに、思い切ってこい！
何度だってチャンスはやる。」

「カナン…貴方は好い人…ですの。」
『誤解をしていました…申し訳ありません…』

「ははは！好い人か…ただ、世話焼きなだけだ。」
『そうだ。マスターはこれが普通だからな。
いちいち気にすることはない。』

「そういう事だ。そんじゃ、第ニラウンド…行くぞ？」

「お願いですの。」

仕切り直しという形で、再び機竜とカナンは対峙する…
▼▼▼▼▼▼▼▼
「全く…つまり合格するまでやるってことでしょ？
試験の意味ゼロね。」

「あはは…なんとなくこうなる気はしてたんだ。
でも、カナン君大丈夫なのかな～？
いつもより反応が遅いし、右足が痙攣してる…」

「やはりまだ本調子では無いようですね。
体が負担に耐えきれないかもしれませんよ？」

「アイツは筋金入りのバカだからね。

やるって言った以上は、やるわよ？」

「やれやれ…病み上がりと言っていたのは誰だったんでしょうか。」

ハルは自身のリスクも省みず、相手の事のみを考えたカナンの優しさに呆れつつ、少し感心する。

自分より、他人を大切にする人間ですか…

だから、彼は…いや、彼等はこの短期間で異常な強さを手に入れたのかもしれませんね。

ハルの視線はカナンだけでなく、隣にいる少女達にも向けられる。

「執事さん？どうかしましたか？」

「いえ、後、僕には敬語は必要ありません。

呼び方も御嬢様と同じくハルで結構です。」

「じゃあ、ハル？」

「はい。どうかされましたか？」

「暇。」

「ゆ、祐希ちゃん…そんなことハルさんに言っても仕方ないよ…」

「あははは！承知致しました。少々御待ちください。アスラ、頼みます。」

『了解した。』

アスラが反応すると、ヴィヴィオ達の前には、白いテーブルとイスが並ぶ…

そこには、ティーカップ、ティーポット、クッキーが乗っていた。

「え？ええ！？こ、これは！？」

いきなり出てきたテーブルとイス…ヴィヴィオはわけが分からず混乱する。

そんなヴィヴィオに、ハルは、ティーポットの中に御茶の葉を入れ、アスラにタイムを測るように命じたところでヴィヴィオに返答する。

「アスラには、こう言った執事の為の機能が入っています。御嬢様を退屈させないようにとの機能ですが、人目のある所では使えないのであまり意味は無いかもしれませんね。」

「は、はぁ…」

『時間だぞ。』

アスラが時刻を告げると、ティーカップの中のお湯を捨て、紅茶を注いでいく…

「御嬢様方、御待たせしましたが、準備の方が出来ました。」

「「わぁ…」」

その一角のみは、上流階級の人間となんらかわりない空間が出来上がっていた。

「紅茶は、クレア御嬢様の好みのためダージリンしか御用意出来ませんでしたが、味の方は、問題ないとは思います。」

仕事の後に笑顔で話すハルは、いつもの三割増し爽やかに見えた…

「「美味しい～♪」」

「それは光栄ですね。」

激闘が繰り広げられる中、のほほんとした雰囲気が流れていた…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一方、カナンとクレアの模擬戦は、クレアが徐々にではあるが、カナンの速度に反応しつつあった。

「シルフィス！左翼ですの！」

『プロテクション！』

ガキィ！

「お…」

『感心している場合ではないぞ…』

「ラスターカノン！！」

プロテクションで防ぎ、カナンの動きを止めた機竜は、アームを向け光弾をカナンに放つ。

しかし、即座に空間突破を発動し、光弾の射線上から離脱する。

「クレア！まだ遅いぞ！自分の感覚を疑うな！」

「はいですの！」

クレアはカナンの動きを感じる…

まだ私は遅いですの…もっと速く…もっと！もっと！！

「いいぞ…もう少しだ…頑張れ。」

機竜の中からでもクレアの集中が高まっていくのがわかる…
機竜から無駄な動きが消え、最初は撹乱されうろうろ動いていた足は完全に止まる…

「いくぞ！！」

再び空間突破を行い、四方八方から斬りつける！
ここでカナンは笑みを浮かべた。

「よし！クレアその調子だ！！」

（右腕…左足…頭…背中…首…）

カナンの斬撃が叩き込まれるその場所にピンポイントでプロテクションが張られ、防いでいく…
さらにそれだけではない。

「クラッシュテール！！…そこですの！！」

「おっしゃ！！」
ギィン！！
カナンが斬撃を加える場所を瞬間で察知し、尾を振り下ろす。
その攻撃を受けたカナンは何故だか嬉しそうにする。

『ラスターカノン！！』

「ぐあっ！！」

尾を受けている最中の動けないカナンに、後ろに向けられたグラップラーアームの先から光弾が撃ち込まれ盛大に吹き飛んだ…

「『シャイニングブラスター！！』」

未だ吹き飛んでいるカナンに砲撃が放たれる。
直撃する瞬間カナンの体が消え、砲撃はそのまま通り過ぎる。
そのカナンは地面に空間を繋げ、一瞬で着地…走り込む！

「兵装全開放！！」
『ぶっ飛ばします！！』

四つの腕、機竜の口内に光が集う…
構わずカナンは直線に突っ込んだ。

「『フルバースト！！』」

光弾が視界を多い尽くすほど連射され、止めとばかりに少し遅れて前方１８０度を薙ぎ払う砲撃が撃ち込まれた。

「おおおお！！！！」

閃光が疾り、カナンの進路を阻む光弾は斬り飛ばされる…
砲撃が来る瞬間、カナンは思い切り飛び上がった…
術後硬直で頭は動かないが、機竜は腕をこちらに向けようとする。

「弐式抜刀剣術…虚空閃！！」

「きゃう！！」

振り上げられた空間斬撃は、機竜の頭にアッパーカットのように叩き込まれ、バランスを崩す。
しかし、シルフィスが体勢を崩しながらも腕を制御し、光弾を溜める…

「やるな！」

『伊達や酔狂で白姫家に開発されたわけではありませんから！』

「『ラスター！』」

「剣舞次の舞…」
『何！？』

再び納刀されるエクスカリバー…
鞘の中で魔力コーティングを施す…

「烈花！！」
『マ、マスター！？』
ズドン！！
抜刀された剣は、針の穴を通すようなコントロールで機竜の頭へと突き刺さる。これには流石にカナンを狙えない…

「く！！」
『リカバリー！！』

修復を試みるシルフィスだが、機竜の頭には既に蹴りの体勢のカナンがいた…

「終演…なんつって！！」
『全く…本当にカナメさんかと思ったぞ…』
バキャア！！

「きゃあああ！！」

頭に刺さった剣を蹴り抜かれ、貫通する。
機竜の巨体が揺らぐ…

「まだですの！！」
『ネバーギブアップです！！』
ズシン…
踏ん張り、巨体を支え、立つ…

「決めてやる！！」

一メートル程空いた距離を詰め、胴体部分に斬りかかる。
しかし、接近は許されない…
アームがカナンに向けられた瞬間、カナンは飛び退いた。

「穿て！！」
『ピアシングカノン！！』
ズドン！！

「あぶなっ！！」
『直撃を受ければアウトだったな…』

先程までカナンがいた所に、二本の光剣が突き刺さっていた…
連射が出来る光弾に…前方を薙ぎ払う砲撃…接近をすれば超高密度の魔力刃、離れすぎれば音速を破る突撃…

とんでもないデバイスだな…

「あ～！惜しかったですの！」

『ちっ！頭の仕返しにこちらも串刺しにしてやろうと思いましたのに…避けやがりますか…』

「もう敬語の意味ねえよ！！」

『デバイスとは思えないな…』

シルフィスの言葉遣いに呆れつつも、エクスカリバーを鞘に戻す…

さて…もうクレアは' 今の' 俺の速度には反応出来るようになった…

試験としては十分だな。

そろそろ足も感覚無くなってきたし、終わらせないとな…

カナンがそんな思考をしているとも知らず、自信をつけたクレアは攻勢に出る！

「シルフィス！決めるですの！！」

『了解です！デストロイタイムの始まりですね！！』

「…だからな？」

『マスター…もう言うな…無駄だと思う…』

「『はぁ…』」

ため息をつく二人だが、そんな事など、歯牙にもかけず、機竜は突っ込む。

「ラスターカノン！！」

『ピアシングカノン！！』

腕の二本ずつから光弾、光剣の連射が始まる。
それを、光弾は斬り飛ばし、光剣は避けるが、カナンはどんどん押し込まれていく…

「おわっ！！」

ついにカナンの膝が負担に耐えきれなくなり、ガクンと崩れ落ちた…

「容赦は…」
『しません！！』

「そうだ…全力で来い！！」
『やれやれ…』

「『ラスターカノン！！』」

「はあああ！！」

斬り飛ばす…とまではいかなかったが、腕の力のみで何とか弾き飛ばす！
そして、剣を支えに立ち上がる…

「『ピアシングカノン！！』」

「くっ！！」

力の入らない足にむち打ち、ギリギリで飛び上がり回避。
しかし、予測通り追撃が待っていた…

「『シャイニング！！』」

溜められる白光…
回避は不能…
なら、選択肢は一つ…

「エクス！！」

不安定な体勢のまま、今出来る最速のスピードでチャージをしていく…
黄金の光が刀身へと集まる…

「『ブラスター！！』」

「カリバー！！」

放たれる金光と白光…
衝突し、相手を押し返す力が拮抗する…
遂に勝負はつかないまま炸裂する光…
不安定な体勢のカナンを吹き飛ばす！
受け身をとり、起き上がるころには、音速を破り光剣を突きだしながら迫る機竜がいた…
今までのカナンは光剣を全て避けていた…
ならば、この攻撃なら決められる。
そう確信し、直進した。
しかし、クレアは見る…黄金に輝く髪と瞳を…

「『大地の力よ！！』」

地上から溢れる力が、カナンの腕へと集っていく…
目の前の機竜を見つめ、袈裟に振り抜く…

「有り得ないですの…」
『無念です…』

エクスカリバーは、光剣を砕き、それでも勢いを落とすこともなく機竜の頭から、翼にかけてバッサリと斬り落とした。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
「ほら、大丈夫か？」

「はいですの…」

機竜が召喚魔方陣の中に消え、倒れ伏したクレアに手を差し出し起こす。
何故だか落ち込んでいる…
俺、何かしたっけ？

「最後は惜しかったな。
ただ、自分の力より、相手の力が上だった場合は、カウンターに気を付けないといけない。
音速破るスピードで突っ込んでカウンター叩き込まれたらああなっても仕方ないさ。
次から気を付ければ良いだけだ。そんなに落ち込むな。」

「でも…私…不合格ですの…」

「へ？」

「カナンに負けたから…不合格ですの…」

あ～成る程それで落ち込んでたわけね…

熱くなりすぎて試験内容ぐちゃぐちゃになってるんだな。

「クレアは合格だ。」

「…はい？」

「だ～か～ら～合格だって言ってんだよ。
試験の内容は、空間突破を使う俺に勝つことじゃなくて、空間突破に反応出来たら合格だったろ？
クレアはもう反応出来てる。
つまり、合格だ。」

「合…格…？」

「ああ。文句なしでな。」

「やったあああ！！合格ですのーー！！！」
『マスター！おめでとう御座います！』

「やれやれ…ホントに同い年か？」

小さな子供のように跳び跳ねるクレアを見て、腕組みをしながら苦笑する。

「ヴィヴィオや祐希奈もああいった一面は持っている。
恐らくマスターが大人過ぎるだけだろう…」

「まぁ、祐希奈に鍛えられたからかもしれないな…」

「肝心な部分は幼児並だがな…」

「ん？今何か言ったか？」

「いや、空耳だろう。」

「おかしいな…」

確かに今メイデンがボソッと幼児とか言ってた気がしたんだが…
本人が空耳って言ってるんだからそうなんだろうけど…う～む…

「御嬢様、カナン様、お疲れ様です。」

「ハル～！合格ですの～！！」

「おめでとう御座います。では、御嬢様、あちらでヴィヴィオ様と祐希奈様がお茶をしてなさいますから、ご一緒に楽しんで来てはいかがでしょう？」

「はいですの！ヴィヴィオさ～ん！祐希奈さ～ん！合格ですの～！！」

「わぁ～！白姫さんおめでとう！！
これからもよろしくね！」

「御祝いに飲むわよ～♪」

「「「お～♪」」」

いや、飲むわよって…酒じゃあるまいし…
ノリノリの二人もどうかとは思うが…

「カナン様、御嬢様が反応出来るように手解きをしてくださったようですね。
ありがとうございます。」

「手解きって程のもんじゃないって。
俺はちょっと背中を押しただけ、頑張ったのはクレアだよ。」

「それでも、僕は貴方にお礼が言いたかったんですよ。」

「様づけをやめてくれれば、十分お礼になる。
クレアにも言ったけどな…様づけされると寒気がするんだ…
出来ればやめてくれ。」

「わかりました。これからも御嬢様をお願いしますよ。カナン君。」

「君って…別に呼び捨てでいいだろ…」

「いえ、僕は自分が認めた相手しか呼び捨てにはしない主義なので。」

「ほっほ〜う…つまり俺はまだお前には認められてないと？」

「今の貴方は精々ＡＡＡ程度でしょう？
最低、元の力を取り戻していただかない限りは認められませんね。」

野郎…何でこういうムカつく言い方をするかな…

「いつかぶん殴ってやるから覚悟しとけよコンニャク執事…」

「ふふ…それは怖いです。
まぁ、ぶん殴る日が来ればいいですがね。」

「やっぱ俺はてめえが嫌いだ！！」

「正面から言われると傷つきます♪」

「嘘つけえ！！笑顔で傷つきますとか言われても信じられん！！」

「僕は顔で笑って心で泣きますから♪」

「嘘だ！！顔で笑って、さらに心では大爆笑してるだろ！？」

「そんなこと…カナン君にはありますね♪」

「やっぱ今殴る！！」

「あはははは～♪」

走り回る二人を見て、メイデンは思った。

「この二人は、実は仲が良いのではないか？」

メイデンには、この二人が、殴り合いを行うようなそんな関係になるとはまったく思えず、寧ろ、何でも話せる男友達…になるような気がした。

▼▼▼▼▼▼▼▼「じゃあ白姫さん、また明日ね。」

「残り一週間の間に、猛特訓するわよ。」

「はいですの！今の私ではまだ力不足ですの。
よろしくお願いしますですの。」

「さて、ではまた明日、午後からよろしくお願いします。」

「まぁ、それはいいんだけどな…
な～んか忘れてるような…」

「あ…私、食材忘れてたよ。」

「食材？どこによ？」

「病院のカナン君の部…屋…」

そこで、カナンの忘れていたことと、クレアの忘れていたことが思い出された。

「「あーー！！！」」

「息ぴったりだね。」

「な、何よ二人して！？」

「やれやれ、漸く思い出されましたか？」

「ハル…？覚えてたんですの…？」

「もちろんです。旦那様のバナナとカナン君は無断で病院から抜け出していることでしょう？」

「覚えてるんならさっさと言えよ！！」

「ハルさんが何か言おうとしても問答無用で飛びかかっていたのはマスターだが？」

「う…」

そういえばそんな節もあったような気がする…
でも、念話を使えば伝わったような…

「半分以上は面白そうだからわざと教えなかったんですけどね。」
プチ…

「「このコンニャク執事がー！！」」

「あははは！このまま病院まで走りますか～。」

「「ぶった斬る！／ぶっ飛ばすですの！／」」

「わっ！待ってよ～！！」

「よく飽きないな…」

「何で最後の最後に走らなきゃいけないのよ…」

病院までの道のりをほとんどノンストップで走り抜けた一行は、行きと同じく再び奇異の目で見られていたとは気付きもしなかった…

「バレないように部屋に戻らないとな…」

「無理だと思うよ？」

「私もそう思うぞ…」

「は？何でだよ？」

「「『バカだから／ですの』」」

「お前等…見てろよ…華麗に忍びこんでベッドに戻る俺の勇姿を！」

一同が見守る中、カナンは正面の入り口から、侵入していった…

窓から侵入せず、正面から行く辺りやはりバカである。

「きゃあああ！！意識不明の風間君が動いてるぅぅぅ！！」

「な、何！？うわあああ！！来るな！来るなあああ！！」

「ええい！！これでもくらええい！！！」

「ちょ！ちょっと皆さん落ち着いて！！」

「「「「悪霊退散！！！！！」」」」

「ぎゃあああああ！！！」

尚、これは、ヴィヴィオ達の所に届いている声だ。

それほど中は凄いことになっているらしい…

「さて、カナン君は放って置いて、旦那様の所に行きましょう。」

「はぁ…」

「そ、そんなに嫌なお父さんなの？」

「見てればわかるですの…」

「ま、まぁ私達もいるし、頑張りなさい。」

「はいですの…」

なるべくカナンの方向は見ないようにして、一行は一つの病室へと向かう…

名札は…『白姫竜蔵』

「失礼しますですの…」

「旦那様お待たせ致しました。」

「む…我が娘よ…儂が何時にお願いしたか覚えておるか？」

「はいですの…」

「そうか～…儂の娘はバナナの形もわからないほどスカポンタンな頭をしておったわけじゃな？」

ピキ…

「し、白姫さん…血管が浮き出てるよ？」

「まぁ、あの親父ならわからないでもないわね…」

ちなみにヒソヒソ声のため、本人達には聞こえていない。

「す、少し店が混んでいたんですの…」

「ほっほ～う?儂の今日の食べたい物を間違え、折角教えてやったのにそんな言い訳をするか…
流石スカポンタンクレアちゃんじゃな?」
ブチッ！

「御父様の食べたい物など私は今日までわからかったですの…」

「今日まで?もうわかるのじゃな?」

「ゴリラはバナナ食ってればいいですのー！！！」

「誰がゴリラか！！
このチビ牛が！！」

「やっぱり御父様はいっぺん死んで来た方がいいですのー！！！」

「お前こそ死んで牛の娘として育つがよいわ！！！」

ドタバタと闘争が繰り広げられる…
ヴィヴィオと祐希奈はボーゼンと立ち尽くしていた…

「あ、あはは…こんな親子もいるんだね…」

「な、仲が良いみたいで微笑ましいわね～…」

「いつものことですから大丈夫ですよ。」

慌てず騒がず、爽やかな笑顔で止めようともしないハル…

「と、止めないんですか？」

「あははは。嫌ですよ～。とばっちり受けますしね。」

「「…」」

この人は確実に執事のあり方を間違えている…

「そこの娘達、中々に可愛いの。
どうじゃ？クレアの代わりに儂の娘にならんか？」

「え、遠慮しておきます…」

「私も結構よ…」

「そう言わずに、娘になってくれれば、何でも好きな物を…むがあああ！！」

「喋らないで欲しいですの！！
ヴィヴィオ様と祐希奈様が汚れるですの！！」

バナナ三本が竜蔵の口に突っ込まれ、強制的に黙らせる…
ママ大好きのヴィヴィオと父さん大好きの祐希奈には到底理解不能な領域に白姫家の両者は到達していた…

「むぅ！！何をするかあ！！
父に向かってそんなことをするとは…ゆるさーん！！この胸を…」

「娘にセクハラをする父親なんて消えれば良いですの！！シルフィス！！」

『旦那様…デストロイさせていただきます…』

病室の中に召喚魔方陣が発生し、機竜が出現する…

ぎゅうぎゅうだ…

「ま、待て！娘よ！話せばわかる！」

「修理費は御父様が出してくださいですの♪」

『それでは…』

「『デストローイ！！』」

機竜の口内に光が集う…

狙いはもちろん己の父親…

「『シャイニングブラスター！！』」

「のわあああああああ！！！」

ドゴーン！！

白姫さんのお父さんは夜空のお星様になりました…

「ちなみに、旦那様が入院している理由は高血圧です。

これでは退院など不可能というものです。」

白姫家当主がぶっ飛んだと言うのに、ハルさんは爽やかな笑顔を崩さない…

「「あは…あはははは…は…」」

ヴィヴィオ、祐希奈の二人はひきつった笑みを浮かべながら、カナンを探すという名目で退室した…

第三話　特訓（後書き）

少し前に大会があったのですが…イヤッフィィィ！！大阪のあんまし強くないペアに負けちまいましたヨシュアです…

いや、県大会ベスト４って…国体メンバーとしてはかなり恥ずかしい記録をだしました…未だに泣きそう…　　その話は置いといて…アクセス３０万に今日届きます！多分！！　辛い練習もこの数字を見れば頑張れます！マジで読者の皆さんには感謝感謝です！ありがとうございます！！

第四話　二等空尉の重圧

祐希奈
「さて、皆さんこんばんは。」
カナメ
「さっさと進めましょう。質問…」
カナン
「待てええい！！早すぎだろ！！」
ヴィヴィオ
「でも、今回はゲストさんも来る予定でアリサ道場も借りたんだよ？」
メイデン
「ゲスト？聞いていないぞ？」
ハル
「ゲストさんはですね。
期待の後輩さんと言った所でしょうか？」
祐希奈
「１７歳のガキがなにいってんのよ…」
クレア
「そういう祐希奈様は１３歳ですの。」
祐希奈
「大丈夫。作者は中身は幼稚園児以下だからね♪」
ヴィヴィオ
「最近は幼稚園児でも携帯を持ってるんだね～。」
カナメ
「いえいえ、生まれた時から持ってる方もいらっしゃいますよ♪」
メイデン
「そうなのか！？」
カナメ

「はい♪生まれた時から携帯でもパソコンでも使えるスーパー赤ちゃんがいます♪」
ヴィヴィオ・メイデン
「凄いな～！／す、凄いな…」
カナン
「んな気持ち悪い赤子がいるかあああ！！」
祐希奈
「さて、本日の質問はぁ～♪」
カナン
「スルー！？俺のツッコミスルー！？」
カナメ
「え～と、『ハルってカナンより強いんですよね？なら、もしかしてタカトのような凄い過去を…』らしいですが？」
カナン
「まさかの二連発！？」
ハル
「そうですね～あそこまで重い過去ではありませんが、多少はありますね。お話する機会があればその時に。」
カナン
「もういいよ…」
祐希奈
「あともう一件は、あのバカに対してだからまた今度ね。」
ヴィヴィオ
「あの人が来るんだ…」
カナメ
「敵ですけど大人気ですからね～♪」
メイデン
「では、また後書きでな。」
クレア

「私全然喋ってないですの…」
ハル
「まぁまぁ、では。」
ヴィヴィオ
「魔法少女リリカルヴィヴィオ」
祐希奈
「始まるわよ♪」
▼▼▼▼▼▼▼▼▼「「はぁ…」」

とりあえず、白姫竜蔵の部屋の前で二人同時に溜め息をついた…

「私…初めて親って人間に恐怖心を持ったよ…」

「奇遇ね…私もよ…」

それ以前にアレを親と言っても良いのだろうか…
世の中の親の方々に大変失礼な気がする。
でも、アレも一種の愛なんだろうな…
だとすれば…

「「親バカって怖い…」」

白姫さんには悪いけど…あんな親の人じゃなくて本当に良かった…

「ふぅ…さて、と！気持ちを切り替えてカナン君を探しに行こ～！！」

「そうね！さっさと忘れて帰りましょ！」

「「ゴー！！」」

ダッ！！
（注）病院内で走っては行けません。
そんな当たり前のルールを破ってでも、あの父親のことを忘れたかった…
廊下を走る二人のスピードは、自己ベストを更新した…
そんなこんなで無我夢中で走っていると、病院の一角に追い詰められたカナンを発見する。

「か、観念しろ化け物め！！」

「大人しく成仏してください！！」

「成敗させていただきます！！」

鬼気迫る表情でカナンをさらに壁際へと追い込んでいく看護師＆ａｍｐ；医師チーム。

「と、とりあえず落ち着いて下さい…
俺はこの通り喋れますし、皆さんに危害を加える気も全くないっすから…まずは話し合いで…」

「「「問答無用！！」」」

「問答無用で殺人っすか！？おわっ！！ホントにシャレになんないですって！！」

次々と注射器やら、メスやらが宙を舞い、カナンへと投げられる。
カナンは何とかそれらを回避はしているものの、これだけの攻撃密度…
針山になるのも時間の問題であった…

「カナン君がピンチだよ！！」

「良い考えがあるわ！！私に合わせなさい！！」

「う、うん！！」

ダダン！

祐希奈に続きヴィヴィオが跳躍、医師達の頭上を越えカナンの目の前へと着地…

「プロテクション！」

「ゆ、祐希奈！？／祐希ちゃん！？」

なんと、祐希奈は一般人の目の前でプロテクションを張り、攻撃の全てを防ぎきった…

「な、何だ！？」

「貴方は確か…風間君のお見舞いに来ていた…」

「あ、あはは…こんにちは…」

「今の光は何だい？

まさか君達もその化け物の仲間なのかい？…ならば！」

再び攻撃体勢に入ろうとする医師達に、祐希奈はこう言った…

「こんな奴の味方をする奴なんていないわよ！！」

「「えええええ！！？？」」

「なら…今の不思議な力は？」

「私達は、巫女よ。
近くに悪霊の気配を感じて滅却しにきたの。
貴方達のような素人が下手に手を出すのが一番危険なのよ…
ここは私達に任せなさい。」

「巫女だって？」

「そ、そうです。私が最近彼に会っていたのはこういう事態を防ぎたかったからなんです。」

祐希奈のハッタリにヴィヴィオが必死にあわせる。
その必死具合が本気に見えたのか、医師達の瞳から疑いの目が消えていく…

「今から滅却するわ…窓開けて…
邪気が溜まると再生するから外に放出するわ。」

そして変身…それを見て完全に信じた看護師の一人が窓を開け放つ。
祐希奈はとても嬉しそうな顔をした…

「ま、待て…祐希奈…話せば…」

「一撃滅却♪」

祐希奈の拳には、確かに滅却出来てしまいそうな炎が纏われていく…

「ヴィヴィオ！！助けてくれ！！」

「えっと…ごめんなさい…」

最後の頼みの綱、ヴィヴィオからも無情なる死刑宣告が降された…

「ドンマイ…俺…」

「烈破滅却天昇♪」

ドッゴオオオオン！！！

「ぎゃあああああぁぁぁ……」

キラリーン…

遥か彼方にまでカナンは飛んで行った…

「滅却完了♪そんじゃね♪」

「はぁ…」

「Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ！」

「おわっ！！」

医師達の目の前から残像を残しながらヴィヴィオ達が消失した…

その後、医師達はカナンが吹き飛んだ方向を見上げる。

「まぁ、何だ…化け物よ…」

「「「ドンマイ…」」」

敵として相対した筈の化け物が可哀想に思えた医師達は、空に向か

って手を合わせたと言う…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
ヒュルルル…ズザザザー…カナンは、学校のグラウンドまで吹き飛んでいた…

「……」
『マスター？生きているか？』

「……」
『マ、マスター！？マスター！！』

マスターはピクリとも動かない…
こ、これはマズイかもしれない！
急いで待機フォルムから人形フォルムになり、カナンに近づく。

「マスター！？大丈夫か！？ってわあああ！！？」
ガシッ…

「メイデン…お前…何で俺を助けようとしなかった？」

「その…私が喋るとダメだろう？」

「いつもはロボットだとか適当に言うくせにか？」

うつ伏せで顔を上げないまま、低い声で淡々と質問をしてくる…
やはり怒っているのか…

「済まなかった…
正直に言うと怖かっただけだ…

次からは頑張るから許して欲しい…」

「誰が許すかああ！！」

「っ！！」

今回は私が悪い…
マスターの気が済むまで受けよう…
瞳を閉じ、来るべき痛みに備えた。

「ていやあああ！！」
コチョコチョ…

「マスター！？う…あ…あはは！！ちょちょっと待！！あははははは！！！あはははは！！！」

「まだまだー！！」
コチョコチョ

「あはははは！！済ま！！あはははははははははは！！！ほ、本当に！！！あはははは！！！」

つ、辛い！！これは痛み以上に辛いぞ！！

「反省したか？」

「し、した！！あはははは！！したから！！！や、やめて！！あはははは！！！」

「ホントか～？」

「あ、ああ！！」

「なら、許してやるか。」

「何が許してやるかよーーー！！！」

バッキャアアア！！！

「がはあああああ！！！」

ズザザザ～…

「はぁ…はぁ…」

「あはは…メイデン大丈夫？」

「ヴィヴィオ～！！」

ギュウ～！

「よしよし。怖かったね～。」

ヴィヴィオ達は、高速移動魔法を使いそのまま、カナンを追跡、メイデンをいじめているカナンを発見、祐希奈が制裁を降したという具合だ。

「祐希奈！！いきなりなんだ…ストップ！！祐希奈様！！」

「嫌よ♪」

ドカッ！バキッ！ズドドド！！！

「ぎゃあああああ！！！」

「あはは…見ない方が良いよね…」

「ああ…寝られなくなりそうだ…」

風間カナン…本日二度目の悲鳴が夕方の校庭に響き渡った…
その光景は、想像の中でお願いする…

「ふ～スッキリ爽快ね♪」

「……」

数十分後、再び三途の川へと飛ばされたカナンが校庭のど真ん中で横たわっていた…
対する祐希奈は、達成感に酔いしれている。

「ゆ、祐希ちゃん…カナン君病み上がりなんだよ?
もう少し手加減してあげた方が良かったんじゃないかな?」

「流石に私も不憫に感じるぞ…」

「は?ちゃんと手加減してあげたじゃない…ね♪」

「ね♪…じゃないっつーの!!
全部急所外された分、痛みが凄まじかっただろうが!!」

「わっ!!」

「も、もう起きたのか!?」

「一応手加減はしてたみたいだからな…」

「ま、ストレス発散が理由だし、すぐに意識飛ばしたら面白くないじゃない♪」

「やかましいわ!!俺はお前の楽しみのために…」

「存在してるに決まってるじゃない。」

「早くないっすか!?
もうちょい考えてくださいよ!?」

「あはははは!!ご、ごめんなさい!!ちょっと待ってね…あはははは!!」

「「……」」

「成る程な。わからないでもない。」

突然腹を抱えて笑い出すヴィヴィオを見て、祐希奈、カナンの二人はキョトンとして固まり、メイデンは何か納得したようだった。

「ふう…ご、ごめんね?」

「いや、別に良いけど…意味が分からない。」

「何か笑うところあった?」

「…」

いや…笑うところならかなりあったと思うが…

あの二人は、狙っているわけではなかったのか…

逆に悩まされるメイデンなのであった。

「あのね、一月も会ってなかったのに、二人が毎日会ってるみたいに変わってないから、嬉しくて、可笑しくて…」

「そっか…俺、一月も寝てたんだったな…」

「そういえばそうだったわね。
アンタが、あんまりにもバカのまま変化が無いから半日で忘れてたわ。」

「ゆ、祐希奈…お前…もうボケが…」

「ん？もう一度寝たいのかな？
その辺りをよく考えて発言してごらん？」

優しい祐希奈の口調は、カナンにとっては、生身で猛獣の前に立たされた気分になったという…

「申し訳ございませんでした！！！」

「ま、今日は許してあげるわ。」

「ありがとうございます！！」

「善きかな善きかな♪」
土下座をするカナン君の前で嬉しそうに満面の笑みを浮かべる祐希ちゃん…
あの笑みは、カナン君が復活した嬉しさからの笑みか、弄る人が帰ってきたというサディストの笑みどっちの笑みだろう…

「と、とにかく、カナン君が起きてくれて良かったよ。」

「あの阿呆の敵にも感謝しなくてはな。
やり方はどうあれ、私達を眠りから起こしてくれたのだから。」

「そういや、俺は起きられたんだ？」

「それは、あの敵が持っていた古代ベルカの武具が関係があるのだろう。
何の武具かは知らないが、奴の力との共鳴で強制的に目を覚まさせられたんだ。」

「共鳴って…やっぱり伝説の武具は違うのね～。」

「私達もそうだが、ヴィヴィオと奴がぶつかったのが幸いだったな。
奴は武器を使わなかったが、ヴィヴィオは王の血を引くもの…
その血に奴の武器が反応したのだろう。」

「連鎖反応ってわけか…」

「連鎖反応…テ○リスね♪」

「なら、ぷよ○よでもよくないか？」

「コラ○スでもいけるわよ♪」

「「テ○リス？ぷよ○よ？コラ○ス？」」

「「パズルゲーム。代表的な落ちゲー。」」

「「な、成る程…」」

ヴィヴィオとメイデンの反応を予測し、素早く答えられる辺り、この二人は大したものである。

「何か今日は堅苦しい話ばっかね～。
明日のクレアの相手私がやっていい？」

「お前がか！？」

「何よ…文句あるの？」

「いや、お前が教導なんて…」

「は？出来るわけないじゃない。
だいたい、戦闘なんて教えなくてもその場で成長してくもんでしょ？」

常にぶっつけ本番で人生を生きてきた祐希奈らしい解答…
確かにそうかもしれないけどな…
でも、クレアは祐希奈とやるには早いかもしれないし…

「ヴィヴィオ…」

「えと…ごめんね。
白姫さんには明日って言っちゃったけど…
明日は試験があるんだ…」

「試験？何のだよ？」

今学校は夏休み…
ヴィヴィオは成績優秀、補習などは有り得ない…

「魔導ランク昇格試験だよ。
そろそろ受けてくれって話が来たんだ。」

「確かヴィヴィオって二等空尉だよな？
その階級で上って言ったら…Sランク試験ぐらいか？」

「あ～、アンタまだこの子の魔導ランク知らなかったっけ？
ヴィヴィオの魔導ランクはBランクよ？」

「は！？Bランクぅ！？だってあの破壊力で、スピードだってオーバーSだし…二等空尉だろ！？
おかしくないか！？」

「えと…私の階級は、目標なんだ。」

「目標？」

「うん。飾りだけの二等空尉の階級…
六課に入る前の私の階級は、二等空士。
でもね、ミゼット提督っていうとっても偉い人がいてね？
私は、ある意味有名だったから、ミゼット提督が話しかけて来てくれたんだ。
その時に、無理を承知で二等空尉の肩書きだけの階級を頼んだんだ。
肩書きだけって言っても、書類には書かれるし、無茶だっていうのはわかってた。
でも、二等空尉の肩書きがどうしても欲しかったんだ…
ママの隣に行くまで怠けないように…憧れの人に追い付くまで、決

して止まらないようにね。
そんな気持ちをわかってくれたのか、承認をもらえた。
もちろんお給料とかは前のままだよ？でも、周りの環境は変わった。
」

「それって…辛くないか？退路を自分で無くしたようなもんだろ？」

それは、階級に縛られることを意味する…
二等空尉の階級を持っていれば、相応の働きを期待され、風当たりもきつくなる…
当然、力も技術も必要となってくる。
そんな道を目の前の少女は自分で選んだ。

「私は、小さい時にママ達に甘えてた…
ママ達に守ってもらって…自分は助けを呼ぶことしかしなくて…
でも、こんな私を育ててくれた。
その恩を、返したかったから、二等空尉になれば、がむしゃらにでも特訓しなくちゃいけないからね。
強くなるにはうってつけの環境だったよ。
しばらくしてちょっと自信がついたから試験を受けようか？って話になったんだけど…
どのくらい強くなってるのか分からなかったから受けたランクは無理せずBランクを受けたんだ。
だから、二等空尉だけどBランク。」

ヴィヴィオはケロッとしているが、実際は辛かったのだと思う。
でも、今は慰める時ではない。
ヴィヴィオは、苦難を乗り越えてここにいるのだから…

「試験、頑張れよ！！」

「うん！頑張っちゃうね！！」

互いに拳を突きだし、コツンと当てる。
二人から自然と笑みがこぼれた。
そして、周りを見回す…

「「あれ！？」」

周りには、祐希奈もメイデンもいなかった…
いるのは自分達のみ…

「「置いてかれた！！」」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「やれやれ…たまにはラブらせてあげましょうか…」

「祐希奈も苦労がたえないな。」

「ていうかライバルの筈なんだけど何で私が譲ってるのかわかんないわ…」

「ライバル？ということは…」

「ヴィヴィオはカナンが好きだって認めたわよ。」

私とカナンを争う気は全くなさそうだけどね…

「なんというか…祐希奈は苦労するな。」

「やっぱり？」

「ああ。優柔不断なマスターですまないな…」

「鈍いのは今に始まったことじゃないし…
待つのは慣れてるわよ。」

三年待っても気付く気配ゼロなのが悲しいけどね…
そりゃあ私も悪いんだろうけど…
それらしいシチュエーションもカナンが態度を誤解して潰しちゃったし…
先は長いわね～。

「はぁ…」

「い、今はヴィヴィオの影響かは知らないが、徐々に目覚めていると思うぞ！！」

「ヴィヴィオの方にね…」

「はぅ！！」

しまった！これでは意味がないではないか！
え～と…え～と…

「祐希ちゃーん！！」

「何で置いてくんだよ～！！」

プチ…

「あ～あ…マスターのバカ…」

よりによって今に追い付いてくるとは…

ある意味、才能だな。

「やっかましいわ！このヘタレがあああ！！！」

バッキャアアア！！！

「くぼはあああああ！！！」

「わあ～！！カナン君しっかりー！！」

「やれやれ…タイミングが悪いマスターだな…」

本日三度目となるカナンの空中浮遊を見ながらメイデンはため息をついた。

その後は、意識を取り戻したカナンと別れをつげ、家へと戻る。

「ただいま～…」

「遅くなりました～。」

「おかえり、祐希奈は何でそんなに元気が無いんだい？」

「ちょっとカナンの相手が疲れただけよ…

あのバカ…明日から手加減抜き…」

「おや、カナン君が起きたのか。

それは良かったね。
今日は豪勢にいかないとね。」

「ま、雅樹さん意外とあっさりですね…」

寝たきりだったカナン君が復活したと言うのに、雅樹さんは当然のように言い切った。

「彼ならいつかは起きると思っていたからね。
遅いか早いかの違いだけだよ。
驚く程のことじゃない。」
「そうなんですか。」

十分驚くことだと思うんだけどなあ…
校長になるとこんなものなのかな?
などと、全く関係の無い理由で納得した…

「豪勢にするんなら明日にしましょ。
ヴィヴィオの合格祝いとカナンの復活祝いで丁度良いじゃない。」

「合格祝い?ヴィヴィオさん何か試験を受けたのかい?」

「ま、まだですよ!試験は明日です。」

「受かるって言えば受かるのよ!!」

「ＡＡＡの試験だよ?
そんなに簡単にはいかないと思うけど…」

「ヴィヴィオ…?」

ニヤリと黒い笑みを祐希ちゃんが浮かべる…
背筋に冷たい物が流れた…

「はいっ！！」

「受かるって言いなさい…？」

「そ、それは…」

「てあああああ！！！」

「きゃあああああ！！！」

「おやおや…」

頬っぺた弄りの悪夢再び！！
ムニムニとヴィヴィオの頬をこねくりまわす。

「受かるって言いなさい！！」

（出来る限りは頑張るから～！！痛い！！）
ムニー

「言わないと～…」

（痛い！！痛いよ！！）

「千切れるまで引っ張っちゃうわよ～♪」

（う、受かります！！）

「誓う？」

（誓います！！）

（落ちたらカナンに好きってことばらすわよ♪）

（受かります！！絶対に受かります～！！！）

「んじゃ頑張りなさい♪」

ようやく頬っぺたが離されるころには、ヴィヴィオの頬は、赤くなっていた。

「うぅ…落ちるわけにはいかないよ…」

明らかに理不尽な条件にも素直にしたがってしまう天然さん…

「受かったら私からも何かプレゼントをしないとね。」

「い、いいですよ！！」

「私がしたいんだ。
ヴィヴィオさんに拒否権はないよ。」

「そ、そんな！雅樹さん！！」

「はっはっは。」

笑いながら居間へと入ってしまった…
やり方こそ違うが、やはり親子、強引な所はそっくりだった…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
そして次の日…
早朝から三人の姿は林の中にあった…
もちろん、ヴィヴィオ、祐希奈、カナンである。
ちなみに、メイデンは爆睡中…

「それじゃあ行ってくるね。」

「パーティーの準備しちゃうから落ちるんじゃないわよ?」

「プレッシャーかける奴がどこにいるんだよ…
力抜いて、焦らずいつも通りにな。」

「大丈夫だよ。私には御守りもあるからね。」

「「御守り?」」

「うん。」

そう言ってバリアジャケットの胸元からカナンからもらった子犬のネックレスを取り出した。

「あ…持っててくれたのか…」

「うん。カナン君からの大切なプレゼントだからね。ずっと持ってたよ。

だから、大丈夫！！」

「ヴィヴィオ…」

「はあっ！！」

ドゴッ！

「がはっ！！な、なんで…」

「サービスは一回だけよ。」

「あはは…ごめんなさい。」

「い、意味がわからん…」

「あ、時間だ…じゃあね。」

ヴィヴィオの足元に魔方陣が輝く…

「誓い…忘れんじゃないわよ？」

「は、はいぃ！！」

怯えた顔をした所でヴィヴィオは消えた…

「お前…リラックスさせる気ゼロだったろ？」

「大丈夫よ。あの子は軽く追い詰められてるくらいが丁度いいんだから。」

「あ～確かにそうかも…」

「ふあ…もう帰るの面倒だし、ここにいるわ。」

「なら、俺も待つか。」

「私寝るわよ？」

「俺も寝るから気にするな。」

転がったカナンは仰向けのまま目蓋を閉じた…
その隣まで祐希奈は移動し、寝転がる。

「おやすみ、カナン…」

クレアとハルが来るその時間まで、二人は眠りへと落ちていった…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「さて…フェアリー…行こうか！」

『はい。マスターは不器用なんですから、加減なんてしちゃいけませんよ？』

「あはは…不器用だから加減出来るほど器用じゃないし、大丈夫。」

『なら安心ですね。全力全開で行きましょう。』

「なんか複雑な気分だよ…」

一歩、また一歩と試験会上へと近づいていく…
そして、景色が開けた…
目の前に広がるのは、懐かしい、初めて試験を受けた時の街並み…
もちろんデータで出来た紛い物だけど、私にはかけがえのない思い出の場所…

自然と緊張は収まっていく…

「ヴィヴィオ久しぶりだな。
試験官は俺、クロノ・ハラオウンが務めさせてもらう。
よろしく。」

「クロノさん、お久しぶりです。
今回はよろしくお願いします。」

「緊張はしていないみたいだな…
わかっているとは思うが、フェイトの娘だからと言って贔屓するつもりはまったくない。
準備はいいか？」

「いつでもいいですよ！！」

「では…高町ヴィヴィオ二等空尉、試験は空戦ＡＡＡランク…間違いないな？」

「はい！」

「よし…試験内容は、基本的にはＢランクと変わらないが、回避ゾーン、攻撃ゾーン、防御ゾーンがある。足を止めて指示通りに動いてくれ。
では、合図が見えたら試験開始だ。
頑張れよ。」

「ありがとうございます！」

モニターが消え、信号機のようなものが左に出現

瞳を閉じる…
身体中に魔力がみなぎっているのが分かる…
コンディションは最高、あとは全力全開でやるだけ！！

「３・２・１…」
ビーー！！

「行くよフェアリー！！」
『了解です！』

虹色の煌めきを残しながら空へとヴィヴィオは飛んでいった…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼ヴィヴィオ
「再びやって来ました。
召喚後書きコーナーです。」
祐希奈
「まんま道場のパクりだけどその辺は気にしたら負けよ♪」
メイデン
「では、ゲストの方の紹介だ。」
ハル
「魔法少女リリカルなのは　ＦＡＮＴＡＧＹ　Ａ　ＣＬＩＳＴＥＲから、麻衣　美緒様、綾瀬　玲奈様、御影　遥様です。」
祐希奈
「召喚！！」
パアアア…

美緒
「主人公の美緒だ。」
玲奈
「ヒロインの玲奈です。」

遥
「もう一人のヒロイン遥よ。」
カナン
「風間カナンだ。よろしくな。」
ヴィヴィオ
「高町ヴィヴィオです。
よろしくね～。」
祐希奈
「で、私が一之瀬祐希奈よ。」
遥
「ふ～ん…貴女が祐希奈さん？」
祐希奈
「出たわねチート遥さん？」
遥・祐希奈
「ふふふふ…」
バチバチ！！
ヴィヴィオ
「うわ～最初から敵対心全開だね…」
玲奈
「似た者同士ですからね～。」
カナン
「お前が麻衣美緒か。」
美緒
「ああ。」
カナン
「まぁ、大変だろうけど頑張れよ？」
美緒
「わかってくれるのか？
お前も大変だろ？」
カナン

「そりゃあもう…」
美緒
「俺もだよ…」
クレア
「なんかカナンと美緒、遥様と祐希奈様って感じが似ていることがないですの？」
ハル
「情報によりますと、ベースが同じだからとのことです。」
メイデン
「成る程、では、私も挨拶に言ってくる。」
カナメ
「私も行きましょうか。」
クレア
「今回は傍観者でいかせてもらうですの。」
ハル
「ですね～。後に戦争が起きそうですし。」
メイデン
「なんの事だ？」
カナメ
「あえて火の中に飛び込むのが楽しいんですよ♪」
ヴィヴィオ
「あ、メイデン。カナちゃん。」
玲奈
「初めまして玲奈です。」
メイデン
「マスターのユニゾンデバイスのメイデンだ。」
カナメ
「カナン君の従妹の鷹月カナメです♪」
遥
「ん？カナメさんってなんだかカナンに…」

カナメ
「それは暗黙の了解ですので、気にしない方向でよろしくお願いします♪」
カナン
「あー！！お前はまた勝手に出てくんじゃねーよ！！」
美緒
「ど、どうしたんだよ？同じ仲間なんだろ？」
カナン
「こいつは…」
祐希奈
「デストローイ！！」
遥
「させないわよ！！」
ガキィ！！
カナン
「お、遥ありがとな。」
祐希奈
「何よ…アンタ達邪魔する気？」
美緒
「作者からカナンの護衛を言われてるんでな…」
玲奈
「いくら祐希奈さんでもこの三人の相手は無理ですよね？」
メイデン
「確か三人ともほぼＥＸ魔導師だったな。」
ヴィヴィオ
「あの…悪いことは言わないから逃げた方が良いと思うよ？」
美緒・遥・玲奈
「はい？」
カナン

「あ～あんまり戦うのはオススメ出来ないな…」
美緒
「何でだよ？この三人ならオーバーＳの祐希奈とはいえ勝てるだろ？」
祐希奈
「私に勝てる？
これを見てから言いなさい！！」
カナメ
「では、能力詳細どうぞ～♪」

一之瀬祐希奈（神化）
称号…全てを破壊する者
稀少技能…ゼウスフィールド
魔力…ＥＸ
力…ＥＸ
速度…ＥＸ
防御…ＥＸ

概要…アリサ道場の力を受けた最強の祐希奈。
稀少技能は、分解…伝説の武器だろうが、相手の稀少技能だろうが、祐希奈に害を成すものは消滅する…
デコピン一撃で大地を砕くその気になれば次元断層など軽々発生出来る。
なお、アリサも本気を出すとこうなる。

美緒・玲奈・遥
「・・・」
祐希奈
「時休めだかドレインだかＡＭＦ無効化だか知らないけどね。
ここで私が本気を出せばアンタ達…朝日を拝めなくなるけどそれで

いい？」
美緒
「こ、これって守るとか不可能じゃないのか？」
祐希奈
「アンタ達三人が同時にかかって来るんなら三％くらいは勝率あるんじゃない？」
玲奈
「一人では一％なんですか！？」
遥
「無理！！絶対無理！！」
カナン
「美緒、玲奈、遥…お前等がチートキャラなのはよく分かってる…でもな…ここで祐希奈に勝とうなんて思うな。
道場にいるアリサさんと祐希奈は、全なのはキャラクターで最強なんだ…
かの有名なチート兄弟が全力で戦ったとしても、この二人には勝てないんだ…」
ヴィヴィオ
「だから、大人しくお話を楽しもうよ。」
美緒
「そうだな…カナン…ごめん。」
玲奈
「私達では力不足でした…」
遥
「情けないけど…流石にあれは無理…」
カナン
「気にするな。
逆にお前等の方に祐希奈を呼べば勝てるだろ？」
美緒
「成る程！」

祐希奈
「まぁ、そんなことしたら強制的に道場に召喚してアリサと一緒にじっくりいたぶって次元断層に放り込むわよ♪」
玲奈・遥
「怖！！！」
祐希奈
「ま、私を怒らせなければいい話よ♪」
メイデン
「なんだかんだ言いつつ祐希奈は優しいからそんなに怯えなくても大丈夫だ。」
カナメ
「ですよね～♪
美緒君はともかく、玲奈さんと遥さんは大丈夫ですよ♪」
美緒
「何故に俺だけ！？」
ヴィヴィオ
「ベースがカナン君だからじゃないかな？」
カナン
「美緒…大丈夫だ…」
美緒
「何か方法があるのか！？」
カナン
「不死身講座をしてやるから…」
美緒
「やられるのは確定っすか！？」
祐希奈
「もちよ♪」
玲奈
「美緒君、応援してますからね。」
遥

「美緒なら大丈夫よ。
しっかり逝って来なさい♪」
美緒
「何の応援!?そして逝って来いって何!?」
祐希奈
「では、記念すべき三途の川ツアーにご案内…」
カナン
「待て待て!!まだ何もしてないだろ!?
さすがに理由も無しでは…」
ハル
「先程のカナメさんのこいつ扱いを忘れていますよ♪」
カナン
「コンニャククラゲえええええ!!!!」
祐希奈
「理由も出来たわね♪」
美緒
「いや…俺は?」
ヴィヴィオ
「祐希ちゃんに勝てるって言ったからじゃないかな?」
美緒
「ゲ、ゲストなんだから手加減の余地は!?」
メイデン
「一つ教えておこう。
この道場の中で遠慮という概念は存在しない。
ましてや、ここはＬＶの出張道場だからな…
ゲストだからと言って加減するようなことはしない。」
美緒
「丁寧に地獄行きの片道切符持たせてくれてありがとな!!」
カナメ
「安心して下さい。美緒君が行く所は三途の川、そしてカナン君も

一緒ですから帰ってこれますよ♪」
カナン
「任せとけ！慣れてるからな！！」
美緒
「そんな親指立てて言われても！！」
祐希奈
「天破爆砕！！豪激龍昇破！！」
ヴィヴィオ
「わぁ…タカトの技のアレンジなんていつ考えたの？」
祐希奈
「もちろん今♪」
バッコーーーン！！！
カナン・美緒
「・・・」
メイデン
「声もなく逝ったな…」
カナメ
「お見事です♪」
祐希奈
「ふぅ…疲れたわ…適当に名前を考えるのが♪」
玲奈
「な、何だか凄いところに来ちゃいましたね…」
遥
「そ、その内慣れるんじゃない？」
祐希奈
「そそ。ここには道場因子ってのも存在するからキャラ変質は当たり前よ？」
玲奈
「因子って…な、何か害を及ぼすんですか？」
ヴィヴィオ

「大丈夫だよ。人によって個人差は有るけどそんなに変わらないから。」
遥
「ちなみに、ヴィヴィオはどんな感じになるの？」
ヴィヴィオ
「私はあんまり…」
祐希奈
「また分かるわよ…」
カナン・美緒
「はっ！！」
メイデン
「起きたかマスター、美緒さん。」
美緒
「あ、危なかった…」
カナン
「いや、流石俺とシオンがベースなことはあるな。アレだけの攻撃でこのタイムなら優秀だ。」
美緒
「マジでか！？おっしゃあああ！！」
祐希奈
「美緒はあんな感じでバカになってるでしょ？あれが因子のパワーよ♪」
玲奈
「危ないですね…」
遥
「気をしっかりもたなくちゃね。」
美緒
「今、バカって…」
カナン
「祐希奈の言葉を真に受けるな…

精神崩壊を起こすぞ？」
祐希奈
「だから、アンタは何を教えてんのよー！！」
バキャッ！！
カナン
「ふがっ！！」
美緒
「さ、流石遥のベースだ…
口の悪さに加え、暴力的とは…」
遥
「どうせ私は口が悪いわよ～！！」
バキャッ！！
美緒
「ぐはああ！！」
祐希奈
「ナイスキック♪」
遥
「祐希奈もね♪」
メイデン
「アレが因子だ。」
玲奈
「し、しっかり感染してるね…」
カナン
「美緒…今なら不意をつけば祐希奈の能力は潰せる…」
美緒
「ああ…行くぞ！」
カナン
「応！！」
カナン・美緒
「たあああああ！！！」

祐希奈
「ちっ！」
遥
「カウンターシールド！！」
カナン
「ぐはあ！！」
美緒
「邪魔するなああ！！」
祐希奈
「消してあげるわ！！行くわよ遥！！」
遥
「オッケー！！任せなさい！！」
一同
「はあああああ！！」
ヴィヴィオ
「皆何してるのかな？」
玲奈
「こんな乱闘騒ぎ起こす為にゲストで来たんですか？」
一同
「へ？」
メイデン
「カナメさん、クレアさん、ハルさん逃げるぞ…」
カナメ
「分かりました！」
クレア
「見なかったことにするですの！」
ハル
「あははは～。失礼します。」
ヴィヴィオ
「カナン君も祐希ちゃんも…」

玲奈
「美緒君も遥ちゃんも…」
ヴィヴィオ・玲奈
「頭…冷やそうか…」
祐希奈
「ヴィヴィオ…落ち着きなさい…
確かに私達が悪かったわ…でも…」
カナン
「そうだぞ。仲良くするから…な？」
ヴィヴィオ
「目覚めよ破壊の天使…」
美緒
「玲奈？お前は大人の女性だろ？
こんなことやめろよ…な？」
遥
「そうそう。二十歳なんだし、ここは大人の広い心で…」
玲奈
「超弩粉砕…」
一同
「ストップ！！ストップ！！」
ヴィヴィオ
「ディストラクション…」
玲奈
「アポカリプス…」
一同
「ご慈悲をーーー！！！！」
ヴィヴィオ・玲奈
「問答無用！！ブレイカーーー！！！！」
一同
「ぎゃあああああああああああああああああ！！！！！

！！」

終幕♪

第五話　昇格試験

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
？

「はっはっは！今回はこの魔法美形伝説リリカルピーを見てくれてありがとう！！

何？題名が無茶苦茶？案ずることはない！！

この作品の題名なんてさしたる意味をもたないからね！！はっはっは！！

ピーの部分が気になる？案ずることはない！！

僕の名前が決まっていないだけさ！！

ついては、僕の名前を募集したいんだけどね！

素晴らしくエレガントな名前を期待しているよ！！」

一同

「…」？

「どうしたんだい諸君！！いつもの元気がないじゃないか！！

そうかアレだね？

僕がいないからマイハニー達は寂しかったんだね？

案ずることはない！！

僕が今から熱い抱擁をしてあげるよ！！

さぁ、何人でもドンと来いさ！！」

祐希奈

「抱き締めて肉片になるまで潰してあげましょうか？」

？

「何？そんなに僕を愛してくれるのかい？

ならば僕も相応の覚悟で迎え入れなければならないね…

よし！子供を…」

カナン

「ロリコンは、死あるのみ！！！！」

？
「おやおや、何をカナ吉は怒っているんだい？
はっ！まさか禁じられた愛を…」
カナン・祐希奈
「ちょっと黙っとけ破滅的バカ！！」
ヴィヴィオ
「あはは…す、凄いや…」
ハル
「よく動く口ですね～。」
クレア
「お父様…いえ、ゴリラ親父でさえここまで喋らないですの。」
ハル
「御嬢様？言い直しても親父と認めていますよ？」
クレア
「ちょっとした間違いですの！！」
ハル
「ちょっとですか？
ゴリラ親父と言うことは御嬢様はゴリラの娘と言うことに…」
クレア
「うるさいですの！！」
メイデン
「はぁ…冷静キャラがほとんどいないのは辛いな…」
ヴィヴィオ
「そうだね～。私達だけだよ。」
祐希奈
「アンタ達も冷静キャラじゃないわよ？」
カナン
「天然キャラだからな…
つまりこのＬＶに冷静キャラは…」
カナメ

「ゼロということになりますね♪」
カナン
「俺のセリフが！！」
？
「案ずることはない！！全ては僕の愛でカバーしてみせるさ！！」
祐希奈
「一番前書きをカオスにしてる奴がほざくな！！」
ヴィヴィオ
「祐希ちゃんも大変になってきたね。」
祐希奈
「たく…ボケが凄すぎるのよ…」
カナン
「ツッコミの人数が少な過ぎる…」
メイデン
「仕方ない…私とヴィヴィオがツッコミに回ろう。」
ヴィヴィオ
「わ、私も！？」
クレア
「一番無理がある人選だと思うですの…」
ハル
「あははは。わかりませんよ？
意外と鋭いツッコミをお持ちかもしれません。」
？
「マイハニーがツッコミに行くのなら僕もツッコミにいかないとね！
何故なら愛の力があるからさ！！」
メイデン
「消えろ…」
グシャ…
ヴィヴィオ
「わぁ～メイデンのツッコミ凄いね～。」

メイデン
「そうか?私もツッコミキャラとして…」
祐希奈・カナン
「アホかーーー!!!!!」
スパーン!!
ヴィヴィオ
「ひゃう!!」
メイデン
「なかなかに痛いぞ…」
祐希奈
「今のはツッコミじゃないわよ!!」
カナン
「問答無用でボケを潰すツッコミがどこにいる!!」
?
「案ずることはない!!僕は愛が有る限り…」
メイデン
「消えろ…」
グシャ…
ヴィヴィオ
「わぁ~メイデンナイスだよ~♪」
祐希奈・カナン
「アホかーーー!!!!」
スパーン!!
ヴィヴィオ
「ひゃう!」
メイデン
「痛いぞ…」
クレア
「同じこと二回もやってまだわかってないですの!?」
ハル

「さすがといいますか…」
カナメ
「進まないので質問に移りたいと思います♪
『？って敵…ですよね？前書きに出していいんですか？』
らしいです。」
？
「僕が敵？何を言ってるんだい？
僕は味方だよ？」
カナン
「そうなのか！？」
ヴィヴィオ
「で、でも私殺されかけたような…」
？
「清き乙女のね♪」
祐希奈
「消え去れーー！！！」
バッキャアアア！！！
？
「アディオ～ス♪」
ヴィヴィオ・メイデン
「ていっ！」
スパーン！
祐希奈
「痛っ！！何すんのよ！！」
ヴィヴィオ
「だ、だって祐希ちゃんもボケの人を…」
メイデン
「だ、だから、私達も祐希奈に…」
祐希奈
「ふふふ…アンタ達が私に歯向かっていいと思ってんの？」

ゴゴゴ…
ヴィヴィオ・メイデン
「ごめんなさい！！／済まなかった！！」
祐希奈
「呼吸困難になるまでくすぐってやるわ！！」
ヴィヴィオ
「いやあああ！！！」
メイデン
「も、もうアレは嫌だ！！！」
ダッ！！
祐希奈
「待ちなさ～い！！」
クレア
「では、これにて前書きは終わりですの。」
カナン
「ちなみに今回は俺達は出ないな…」
ハル
「ですね～。
変わりに次回はヴィヴィオさんが少なめですよ？」
カナメ
「私なんてまだゼロですよ♪」
カナン
「いや、お前は永久に…」
カナメ
「雪月花！！」
カチーン…
カナメ
「今度私が出た時に癒えない傷をつけてあげますね♪」
クレア
「な、何だか怖いですの…」

ハル
「では、そろそろ…魔法少女リリカルヴィヴィオ。」
カナメ
「始まります♪」
カナン
「ちくしょう…」

▼▼▼▼▼▼▼▼「フェアリー！ターゲットの大体の位置を教えて！」
『了解。左右ビルに十体ずつ、残りは言わずもがな３６０度全てです。』

「わかった。一気に行くよ！！」
『セカンドモードに真・ソニックフォームもですよね？』

「さすがだね♪」
『マスターのデバイスとして当然です。』

スタートからここまでヴィヴィオは、ターゲットを一機も撃墜していない。
当然それは、ターゲットに包囲されることを意味する。
しかし、今のヴィヴィオの表情は笑み。
囲まれることを狙っていたからだった。

「疾風一閃！！」

『攻撃開始！！』

正面から突っ込んでくるヴィヴィオに対し、十機のターゲットは砲撃を開始。

螺旋を描くように動き回避し、接近していく…

『Ａｃｃｅｌ　ｌａｎｃｅｒ！』

フェアリーの補助により、突撃するヴィヴィオの周囲に光槍が出現
未だ放たず四機を見据える…

「ウィンド！スラッシャー！！」
思いっきり横に薙ぎ、ど真ん中の四機を撃墜。
まだヴィヴィオは終わらない。
待機させていたスフィアナイフに魔力コーティングを施す。
「ヴァリアブル！シュート！！」

周囲の六機に向けて狙い違わず殺到、ＡＡＡランクともなるとＡＭＦ処理が加えられるが、コーティングされたナイフは構わずぶち抜いた。

「行くよフェアリー！」
『ご遠慮なく！』

その場で一回転し、勢いをつけ、フェアリーが上空へと投げられる…
ブーメランのように弧を描きながらターゲットを撃墜していく…
ヴィヴィオ本人は左右に手を向ける。

「サンダー！！」

両手に展開されるミッド式魔方陣…
十分な魔力が溜められ、解き放たれる！

「スマッシャー！！」

左右のターゲットも全て撃墜するが、ヴィヴィオは丸腰…
下方と背後にいたターゲットが砲撃を溜める…
ヴィヴィオは迷わず下方に突っ込んだ。
放たれる砲撃を回避しながら自分のパートナーを信じてターゲットへと突き進む！

『Ｂｒｅａｋ　ｗｉｎｄ！』

遥か上空にいたフェアリーが自身の判断でカートリッジを使い、加速。
ヴィヴィオさえも追い抜き光速でターゲットへと突き刺さる。

「はあああ！！」
『集束開始…』

突き刺さった刃を引き抜くと同時に回転し、ターゲットを破壊。
その勢いのまま放たれて来る砲撃へと体を向ける。

「ウィンドザンバー！！ブレイカー！！！」

最大集束では無いため、大きさは小さめだが、それでもターゲットの砲撃を押し返すには十分。
集束砲は勢いを落とさず、ターゲットを飲み込んだ…

「ラスト！！」
『サードモード起動！！』

一気に急上昇…頭上へと虹色の爪を振り上げる…
手甲からカートリッジが排出される…
五十メートルはあろうかという巨大な爪に変化した…

「あああ！！天衝墜牙！！」

巨大な虹色の爪痕を残しながら左右にあるビルへと降り下ろされる…
ヴィヴィオは中に入ることもなく、ビルごとターゲットを破壊した…

「よし！急ぐよ！！」

『了解です。』

一気に殲滅したことでタイムは大幅に短縮、最速のタイムを更新し、
さらに進んでいく。

『止まって下さい。ここで回避力の試験を行います。』

「わっとと…」

そうか…ランクが高くなると正確に判断しなくちゃいけないから止
まらないといけないんだった。

『試験内容は、これから百機のターゲットが貴女を狙います。
一分間の間、回避をしてください。防御を行っても被弾と見なしま
すので御注意ください。
ターゲットを破壊した場合は、一秒経過と見なします。』

つまり…たくさん破壊すればそれだけ時間が短くなるってことだよ
ね…
出来るかな？

『３・２・１…スタート！！』

丸でドームのようにヴィヴィオの周囲にターゲットが出現…
それらから一斉に射撃、砲撃の雨が降り注ぐ。

『Ｓｎｉｃ　ｍｏｖｅ！』

その雨を神速の速さで縫うように移動…
しかし、いかに速くとも、途切れることのない攻撃は、次第にヴィヴィオを追い詰めていく…

「数を減らすよ！」
『了解しました！』

少しでも数を減らすためヴィヴィオの周囲にアクセルランサーが出現する。
が、全て発射前に撃ち落とされた…

「あ～あ…」
『面倒な試験ですね…』

この密度のために砲撃は使えず、射撃は撃墜される…さらに試験は次の段階へと進んだ。

『二十秒経過、レベル２へと移行します。』

レベル２になると今まで周囲を囲っていただけのターゲットが接近をしてくる…
弾速は上がり、距離も近づく…
ヴィヴィオですら避けきれない…
' 今のまま' ならば…

「フェアリー、全部避けようか。」
『そうですね。単純で分かりやすいです。』
カナンが寝ている間、ヴィヴィオも祐希奈も何もしなかった訳ではない。
カナンに追い付くために日々訓練を積み重ねていた…

「行くよ！！」
『Ｓｎｉｃ ｍｏｖｅ Ｂｌｉｔｚ ａｃｔｉｏｎｔｗｉｎ ｂｏｏｓｔ！』

ソニックムーブとブリッツアクションの同時使用。
身体の速度、四肢を動かす筋肉の魔力強化…
結果、神速の速度に加え、ヴィヴィオは神速の身体の動きまでをも獲得した。
本来ならブースト魔法で行うべき作業を一人で確立したことになる。
ヴィヴィオは、体を右に左に捻り、避けながら且つその場所から移動するという人間離れした機動で回避していく…
それは、フェイトですら不可能の機動…
単純なスピードだけなら、ヴィヴィオは母を越えた…

『さらに二十秒経過…レベル３に移行します。』

「なっ！！」

レベル３…それは、ターゲットの魔力刃展開…
接近戦の開始を意味していた…
無論、砲撃は続いている。しかしそれらをＡＭＦで無効果しながら突っ込んでくる。

「フェアリー！フルドライブ行くよ！！」
『フルドライブ…起動！！』

双刃剣が消え、グローブが装着される。
瞬間ヴィヴィオの体がブレる…
その速度は高機動戦を得意とする魔導師の限界速度まで達していた。

「ウィンド！！」

斬り揉み回転をするように動き、砲撃の雨を避けながら手足に風を纏う…
させまいとターゲットが一斉に飛び掛かった。

「インパクト！！」
『連続集束開始…』

飛び掛かって来るターゲットを風弾で蹴散らしながら試験時間を減らす…
ブリッツアクションと体術の相性は凄まじく、囲まれているにも関わらず、全く寄せ付けない。
ドームの中心でヴィヴィオは踊る…
そして、遂にラスト十秒…

『レベル４に移行…』

「まだあるの！？」
『マスター…ＡＭＦが強化されました…』

体の重さは大して変わってないけど…一体一体が堅くなったな…
それまでは、五メートル程の距離で止まっていた動きが徐々に縮ま

り始める…

「でも、もう少しだよ！！」

『ラスト五秒です！！』

そこで無情にもアナウンスの声が響く…

更なるレベルアップ…

『レベル…ファイナル』

ターゲットの射撃が完全に止み、全機が一斉に突撃を開始、さらに速度も防御上がっている…

「…」

防ぎきれなくなったのか、頭上、右前方、左の三方向からターゲット三機がヴィヴィオへと突貫していく。

『頭上が若干遅いです！！』

「ありがとう！！」

ヴィヴィオに必要だったのは三機との距離を知ること、それは確かに伝わった…

通常の風よりもさらに左腕と右足に風を集束していく…

「ハイウィンド！！」

ターゲットを見据える…頭上は無視！！

若干前に踏み込みながら左腕を右前方ターゲットに叩きつける！

「クロス！」

そのまま回転…祐希奈直伝の回し蹴りを左に放つ。
そこにはピッタリのタイミングでターゲットがいた…

「インパクトー！！」

零距離でターゲットに放たれた風弾は、ＡＭＦに構わずぶち抜いた。
そこで初めて頭上を意識する…
数センチ上には魔力刃…

『Ｂｕｒｓｔ　ｍｏｖｅ！』

風を炸裂させ、術後硬直を０にする…
次の瞬間には立ち位置が逆転…
ヴィヴィオがターゲットの上にいた…

「フルアクセル！インパクト！！」

ヴィヴィオの拳がターゲットを貫通…そこで試験は終了した…
風の加速、ブリッツアクションの神速の四肢の動き、どちらかが欠けたら不可能な結果だった…

「フルドライブ解除。シューティングモードでお願い。」
『了解。』

真・ソニックフォームは意地したまま、シューティングモードを起動し次の目的地へと飛ぶ。

『マスター。ビルの中に…』
「撃ち抜くよ！！」
『…容赦ないですね。』

少しでもタイムを縮めるため、ヴィヴィオは迷わずビルの破壊を選択する…
さすが、なのはの娘である。
ビルの上空にてデバイスを真下に構える…

「ディバイン！」

カートリッジ二発を排出…フェアリーから虹色の翼が広がった。
二重の環状魔方陣が展開され膨大な魔力が蓄積されていく…

「バスター！！！」

放たれた砲撃は、屋上から一階までを撃ち抜き、炸裂。
ビルを倒壊させた…

「次行くよ！」

虹色の軌跡を残しながら、ヴィヴィオは次なる場所へと加速していく。

『ドンマイです…』

その際、フェアリーからターゲットに向けて哀れみの言葉がかけられたが、ヴィヴィオは気付かず突き進む。

『止まって下さい。

攻撃能力試験を行います。今から出現するターゲットを全機撃破すればクリア。
被弾した場合減点、ただし今回は防御魔法を使用しても構いません。
始めて下さい。』

「うわ…バラバラだ…」

始まりの合図と共に出現したターゲットは、塊では配置されず、一機ずつ微妙にずらして配置されていた…しかし、動いてはいない、なら！行ける！

「フルドライブもう一度行ける？」
『知りませんよ？』

リボルバーマガジンが起動したのを確認し、１２発一気にリロードした…
ヴィヴィオの周りには、六発のスフィア、１００発のアクセルランサー。
更にバレルを展開している…
当然全てをヴィヴィオが操作出来る筈はない。

「フェアリー！ランサーの操作お願いするね！」
『デバイス使いが荒いですね。』
「あはは…」
『出来る限りは頑張りますよ。』
「ありがとう！」

スフィア１００発の制御など出来るデバイスはそうはいない。
フェアリーがいるからこそ使える拡散攻撃。

「スターライトブレイカー…中距離殲滅モード！！」
『Ｓｔａｒ　Ｌｉｇｈｔ　Ｂｌｅａｋｅｒ　ａｎｎｉｈｉｌａｔｉｏｎ』
「全力全開！！スターライト！！ブレイカー！！！」

振り上げられたデバイスが下ろされると同時に、バレルからやや小さめの集束砲撃が四つ、スフィアからの六発の砲撃、アクセルランサーも全て発射される。
天災クラスの砲撃の雨が一斉にターゲットに襲い掛かった…
ＡＭＦが防ごうとするが、魔力コーティングがされた攻撃には意味をもたず、スフィアすらも防ぐことが出来ずに撃墜されていく…
その業火は、ヴィヴィオの正面のターゲットを一機残らず殲滅した…

「フェアリーよくあんなに制御出来たね～凄いよ。」
『あんな大威力の砲撃を撃ちこんでケロっとしてるマスターの方がよっぽど凄いですよ…』

『し、試験はクリアです。次の目的地へ向かって下さい…』

若干ひいているアナウンサー…
ここまで無茶苦茶をした魔導師は一人しかいない…
もちろん、高町なのはである…
高町ヴィヴィオ…
『問答無用情け容赦無し全力全開魔法少女』
として認定される日も遠くはないのはここだけの話…
そんなことなど知らないヴィヴィオは次なる目的地へと向かっていた。

「フェアリー時間は？」
『最速記録大幅更新中です。

ちなみに最速記録保持者はなのはさんです。』
「へぇ～…」
『マスター…ターゲットを通り過ぎましたよ…』
「わっ！フェアリーお願い！！」
『やれやれ…』

再びブーメランのように投げられ、ターゲットを破壊し、目的地へと到着した。

『最後は防御試験です。
回避をせずに防御技能だけで制限時間まで耐えて下さい。
では、始めます。』

これまで通りターゲットが配置…
違うところは、正面に十機いる所。

「祐希ちゃんなら余裕なんだろうな～。」
『六課でもトップレベルの防御力ですからね。』

まずは簡単な射撃から始まる…
これくらいなら私でも余裕かな？

「プロテクション！」

次々と射撃が当たるが、破壊される様子はない…
しかし、数と出力が上がるにつれて押され始める。

「く…やっぱり私って強度低いなぁ…」
『せめて砲撃がくるまでは耐えて下さいよ？』
「が、頑張るよ…」

と、言ったものの、十機目が射撃に加わった時点でミシミシと嫌な音が鳴り始めた…

「ごめんフェアリー…無理かもしれない…」

『はぁ…仕方ありませんね。』

カートリッジを一発排出し、プロテクションＥＸへと強化…

ちなみに祐希奈ならまだまだ余裕の領域である。

『レベル２に移行します。』

砲撃へと切り替わり、一機、二機と増えていく…

三機目を迎えた時点で再びヴィヴィオの表情は苦悩の表情へと変わっていく…

「ぐ…」

『マスター…強度が低すぎです…』

「ふぇぇん！酷いよ～！！」

『泣いていると破壊されますよ？』

四機目で再びプロテクションが軋み始める…

ランクにすればＡランクに入った所くらいである。

つまり、なのはの通常のディバインバスターで簡単に破壊される強度になる。

「む、無理だよ…」

『フロントもこなすならもう少しプロテクションを強化した方がいいですね…』

「ごめんなさい…」

そして、更に一発排出し、プロテクションパワードになったわけだが、現在五機で最大強度のパワードを使っていては、全機を防ぐなど到底無理な話だった…

「『はぁ…』」

現在八機のレベル３…ランクにしてＡＡ程
しかし、ヴィヴィオのプロテクションは限界を迎えていた…
残る防御手段はあと２つ…

「バリアブレイク…」
『了解…』

その一、バリアブレイクで砲撃を一時的に押し返す…
もちろん、一時的なのですぐに稀少技能を発動する。

「聖王の鎧…」
『了解…』

その２、稀少技能の出力を上げて防ぐ。
そこに九機目が参加、一時的には凌ぐが…

『マスター…これ以上は負担が大きすぎます…』
「あはは…仕方ないね…限界です。」

ヴィヴィオの聖王の鎧は、本人に負担がかかりすぎるため、出力リミッターが掛けてある。
短時間なら全開も出来るが、防ぎ続けるなど不可能だった…

『了解、試験は終了です。ゴールへと向かって下さい。』

若干気落ちしつつ、ヴィヴィオはゴールへと向かって飛んでいく…

「あ、あれだね。」

『マスター！魔力反応です！！』

「え…？」

ターゲットは全機破壊した魔力反応などある筈はない…

しかし、フェアリーは確かに感知している…

『この反応は…ストラーダです！』

「エリオ！？」

何でエリオがここに！？

『Ｌｕｆｔ　ｍｅｓｓｅｒ！』

背後からの奇襲を飛び上がることで回避。

直後、先程までヴィヴィオがいた所に斬撃が通過した…

振り返ると油断なくストラーダを肩の位置に担ぐエリオがいた…

「さすがだね。

完璧に奇襲出来たと思ったのに…」

「フェアリーが教えてくれなかったら危なかったよ…それより、何でここにいるの？」

「ＡＡＡランクからは、ＡＡＡ以上の力を持つと判断された場合、こういった奇襲を行うことになってるんだ。

事前に知らされていない脅威を臨機応変に対処するためにね。」

『Ｓｐｅｅｒ　ａｎｇｒｉｆｆ…』

ストラーダから魔力の火が吹き出し、解き放たれる時を待つ…

「倒しちゃってもいいんだよね…」

『Ｂｒｅａｋ　ｗｉｎｄ…』

刃の片方を消し、風を噴き出すフェアリーを肩の高さに持ち上げる…

「出来ればね！」

「出来るよ！」

『『Ｂｏｏｓｔ！』』

お互いにデバイスの力を解放、ヴィヴィオは投擲し、エリオは突貫する！

「ストラーダ！」

『Ｊａ！Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！』

カートリッジを使いストラーダのブースターが勢いを上げる…

「フェアリー！こっちも！」

『了解です！！』

フェアリーもロードし、さらに勢いを上げる。

ヴィヴィオ自身はエリオの背後へと回り込む。

「サンダー！！」

砲撃を溜めるヴィヴィオを見て、エリオは次の指令をストラーダに命じる。

「ストラーダ！フォルムツヴァイ！！」

『Ｆｏｒｍ　Ｄｕｓｅｎ！』

サイドブースターが展開され、火を噴く…

そして、強引にフェアリー刃の方向を横にずらした。

当然、フェアリーは横に飛び、ヴィヴィオは丸腰になる…

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ！』

さらにソニックムーブを使い接近…

撹乱しながら近付き的を絞らせない。

「スマッシャー！！」

放たれた砲撃は、外れ見当違いな方向へ飛んでいった…

このチャンスにエリオは一気に斬りかかる。

「おおお！！」

『Ｓｔａｈｌ　ｍｅｓｓｅｒ』

「ウィンド！スラッシャー！！」

「え…？」

刃同士が合わさる音が響く…

ヴィヴィオの手にフェアリーが握られていた…

先程の砲撃の着弾地点は、フェアリーの刃…

横にずれた刃は、砲撃によって方向修正…逆噴射を行いながら刃を再生、ヴィヴィオの手元へと収まる。
砲撃は元々エリオに向けて放った訳ではなかった。

「やるね！」

「危なかったよ…」
『マスターの思考に合わせて動くのは疲れます…』

「よく…あんな手を思いつくね…」

「あはは…思いついてもフェアリーじゃなかったら出来ないよ…」
『距離、威力、角度これら全ての計算を瞬時に出来ることが条件ですからね。』

ギリギリと刃を合わせながら二人は会話する。
先に動いたのはエリオ。

「フォルムドライ！」
『Ｕｎｗｅｔｔｅｒ　ｆｏｒｍ！』

エリオの魔力変換資質を最大限に生かすサードモード…
バチバチと刀身に雷を纏い始める。

「っ！」

まずい！離れないと！
距離を離そうとするが巧みに刃を操り離してくれない…

『Ｅｘｐｒｏｓｉｏｎ！』

「サンダー！！レイジ！！」

「く…あ…」

刃を通して雷が流れ込みヴィヴィオの体を痙攣させる…
尚も威力が上がる…

「終わりだあああ！！」

ストラーダに内蔵されたカートリッジを全て使い、豪雷に匹敵する雷を放出する！
しかし、ヴィヴィオの体の痙攣は止まっていた…

「はあああ！！」

「なっ！」

刃の触れた所に風を集め、距離を離していたからだった…

「吹き飛べ！！」

「くあっ！！」

風が炸裂…両者ともに距離が開く。

ヴィヴィオ相手に距離を離しちゃいけない！

急いで近づこうとするが既に遅かった…

「フェアリー！！」

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ　Ｂｌｉｔｚ　ａｃｔｉｏｎ　ｔｗｉｎ　ｂｏｏｓｔ！』

圧倒的な速度でエリオに接近…
正面からフェアリーを振りかぶる。

「く！！簡単には負けない！！」
『Ｍｅｓｓｅｒ　ａｎｇｒｉｆｆ！！』

魔力刃を展開、さらにブースターを使いヴィヴィオに突っ込んでいく。
刃が合わさる瞬間…

「が、あ…」

エリオは…後ろ…から斬られた…
ヴィヴィオは、合わさる瞬間に刃を引き、ブリッツアクションの特徴を生かしてエリオの背後に回り込んでいた…
二つの高起動魔法を同時使用出来るヴィヴィオだけの芸当…

「エリオ！ごめんね！！」

そのままの速度で一気にゴールまで駆け抜け、ヴィヴィオの試験は終了した…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
「はぁ…はぁ…」
『お疲れのようですね。』
「だ、だって最後にあんな神経使う模擬戦させられるとは思わなかったから…

魔力がギリギリだよ…」

あとエリオが数分粘っていたら私に勝ち目は無かった。
あそこで突っ込んでくれて良かったよ～。
へたっているとモニターにクロノさんが映った。
慌てて立ち上がり姿勢をただす。

「まずは、お疲れ様、だな。
立っているのも危ないみたいだし、座ってくれて構わない。」

「バ、バレましたか？」

「足が震えているのが見えてるからな。」

「あはは…では、お言葉に甘えさせていただきますね。」

体育座りをしながらクロノの見る。
内心ドキドキしていた。

「結果は出てるが…後の方がいいか？」

「いえ、今お願いできますか？」

「そうか…なら結果を伝える。」

書類を取りだし、クロノさんがじっと見ている…
は、早く言ってくれないかなあ？

「では、高町ヴィヴィオ二等空尉。」

「は、はい！！」

「魔力ＳＳ＋、攻撃技能Ｓ、防御技能ＡＡ、回避技能ＳＳＳ＋、と判定。
奇襲にも冷静に対処、更に撃墜をしクリアタイムも優秀。
特に問題は無いとされ、ここに貴女をＡＡＡランク魔導師として承認する。」

「あ、ありがとうございます！！」

「ただ、防御が低すぎるな…
この回避力なら早々には当たらないだろうが、何が起こるか分からないからちゃんと訓練をしておくようにな。」

「すいません…」

「…これから言う言葉は提督としてではなく、君の伯父としての言葉だ。
本来ならヴィヴィオには前線には出て欲しくない。
僕は怖いんだ…君の母、なのはも強大な力を持っていた…
でも、あんな事件も起きた…
ヴィヴィオを前線に置くことは僕個人としては反対だ。」

「クロノさん…」

「でも、ヴィヴィオはなのはとフェイトの娘だから僕の言うことなんか聞かないだろう…
だから、一言だけ言っておくよ。
…な、何か困ったことがあったらいつでも相談してくれ。
どんなことでも構わない。伯父として、出来るだけの協力は約束す

る。」

真っ赤になってクロノがそう言った…
親バカならぬ伯父バカがここにいた…

「あ、クロノさんに聞きたいことありました！」

「そ、そうか？」

「その…男の子ってどういうことをされるのが嬉しいんですか？」

頬を赤く染めながら聞くヴィヴィオ…
カチリ…と間違いなく地雷を踏んだ。

「好きな子とは一緒にいるだけで嬉しい…」

「それじゃダメなんです。
もっと喜んでもらえる方法はないですか？」

「あるにはあるが…教えたとして誰に行うつもりなんだ？」

「え！？えと…その…カナン君です…」

ピシッ！！
あのガキかぁ…
こりゃあ、お話をしないとな…

「あ、あのクロノさん？」

「すまない…ちょっと答えられないな…

デュランダル…行くぞ…」
『O…OK…ｂｏｓｓ…』
氷結の杖を手にし、転移を行おうとするクロノ…
「わぁ！ちょっと！ごめんヴィヴィオちゃん！またね！！」
クロノさんをエイミィさんが押さえつけつつモニターは閉じた…
「アナウンスの人ってエイミィさんだったんだ～。」
『マスター…激しくずれてます…』
最後に特大の爆弾を残しつつヴィヴィオのＡＡＡランク試験は終了した…
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
俺の目の前には祐希奈とクレアが対峙している。
まぁ、対峙するまでにいろいろあったわけだが…
まず、俺はこの状況に頭が痛くて説明出来ない…
「はぁ…」
「溜め息をつくくらいなら何故承諾したんだ…」
「いや、だって祐希奈が…」
「お兄ちゃ～ん♪」
「お～う。頑張れよ～♪」
「は～い♪」

「アレだぞ？」

そう…祐希奈は寝ぼけたままクレアと模擬戦を行うことになった…
原因は、可愛さに負けた俺にある。

「もう少しあの祐希奈に免疫をつけるべきだ。」

「いくらSランク魔導師とはいえ、寝ぼけた状態では御嬢様に勝つのは至難の技になると思いますよ？」

「だよな…やっぱり止めてくるよ。」

祐希奈へとゆっくり近づいていく。
頑張れ俺！！

「祐希奈。」

「ん？あれ？お兄ちゃんどうしたの？」

くはあ！！く、首を傾げるな！！
認めたくないが可愛い！！

「いや、あのな…」

「あ、そっか～。
アドバイスしてくれるんだよね？」

「う…」

「なになに～♪」

そんな純粋な瞳で見つめないでくれーーー！！！

「クレアは武装が正面に集中してる。
背後に回り込むように戦え。」

「は～い♪」

ああ負けたよ…何とでも言え！！
俺は祐希奈の味方につく！！

「尻尾にも気を付けるんだぞ？」

「うん！！」

「よし。後は精一杯頑張れ。」

頭に手を置き撫でると気持ち良さそうに目蓋を閉じた…
あ～寝ぼけ祐希奈万歳…

「じゃあな。」

「頑張るね～♪」

あの祐希奈が満面の笑みで手を振ってくれている…
可愛いぞ！！

「マスター…後押ししてどうする…」

「はっ！しまった！！」

「やれやれ…御嬢様。
説得は失敗です。
始めて下さい。」

「あ、あの祐希奈様と戦うんですの!?」
『知りませんよ?』

「あ～!!お姉ちゃんバカにしたね～?
私、怒っちゃうよ?」

「可愛いですの…」

「だろ～?」

メロメロのクレアとカナン…
そんな二人を見てメイデンとハルは同時に溜め息をついた。

「「はぁ…何でこんなことに…」」

いつもの二倍以上気疲れが溜まる二人だった…

第五話　昇格試験（後書き）

しばらく模擬戦が続きそうです。　クレアは二連戦ですが、相手は寝ぼけ祐希奈なのでカナンとはまた違った戦いになると思います。　その違いを楽しんでいただければ幸いです。

第六話　戦慄

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

祐希奈
「パラパラッパラ～♪
御影遥さん、ＫＤＧ入門ありがとね～♪」

カナン
「ぎゃあああああ！！！！」

ヴィヴィオ
「カナン君…仕方ないよ…」

メイデン
「ああ…時期が少し早まっただけだ…」

クレア
「ベースが祐希奈ならいつかはこうなる運命だったんですの…」

ハル
「あはは。僕も入りましょうか？」

祐希奈
「是非♪」カナン
「やめい！！チート二人とコンニャククラゲが加わったら逃走すら出来ないだろうが！！」

ヴィヴィオ
「元々祐希ちゃんと零ちゃんがいる時点で逃走は無理だと思うよ？」

カナン
「う…」

祐希奈
「久しぶりに呼んでＫＤＧ集会活動でもやりましょうか♪」

メイデン
「マスター…強く生きてくれ…」

カナン

「そのセリフはタカトさん思い出すからやめてくれ！！」
カナメ
「こんなこともあろうかと風間ハーマイオニーに慣れるようにセットを持ってきましたよ♪」
カナン
「いきなり出てきてなんつうもんを持ってきてんだよ！！」
？
「案ずる…」
祐希奈
「帰れーー！！」
バッキャアアア！！！
クレア
「い、今一瞬あの方が…」
ハル
「ボケる暇さえ無かったですね…」
メイデン
「む～やはり祐希奈もツッコミ失格なのではないか？」
祐希奈
「はいはい。可愛いだけだから睨まないの。」
メイデン
「だ、だから…私は…はううう…」
プシュ～～…
カナン
「久しぶりだから免疫力が足らなかったみたいだな…」
クレア
「こ、これはどういうことですの？」
ハル
「データによりますとメイデン様は誉められるのに極端が耐性が低いようです。」
メイデン

「はううう～はううう～…」
ヴィヴィオ
「う～ん…タカトが入ればすぐに回復出来るんだけど…」
カナメ
「仕方がないですよ。
無理矢理に質問コーナー♪」
カナン
「マジで無理矢理だな…」
カナメ
「気にしちゃダメですよ風間君♪」
カナン
「ひいいいいい！！」
祐希奈
「こっちも久しぶりね…」
クレア
「カナンが震えてるですの…」
ハル
「ファイトですよ。風間君♪」
カナン
「やめろおおおーーーー！！！！！」
メイデン
「はううう…はう…はううう～…」
ヴィヴィオ
「二人が再起不能になっちゃったよ？」
カナメ
「細かいことは無視して進みます♪
それがカナメのクオリティー♪
『カナメちゃんの出番はいつあるんですか？』
予定ですと、学校が始まってからになりますので、まだもう少しかかりますね。」

ヴィヴィオ
「そういえばカナちゃんの出番最近ないよね？どこにいるの？」
カナメ
「私は皆さんの近くにいますよ♪」
祐希奈
「は？見てないわよ？」
クレア
「私も会いたいですの。」
ハル
「ここでしかお会いしてませんからね。」
カナメ
「私、人見知りするので♪」
祐希奈
「これのどこが？」
ヴィヴィオ
「人懐っこいと思うよ？」
ハル
「とにかく、本編でお会いしたらよろしくお願いしますね。」
クレア
「私とも仲良くして欲しいですの！」
カナメ
「大丈夫ですよ。お会いする話の中では、ちゃんと私の人格ですからね♪」
ヴィヴィオ
「人格？」
祐希奈
「何の話よ？」
カナメ
「秘密です♪」

メイデン
「う～ん…私はどうしていたんだ？」
ヴィヴィオ
「あ、メイデンおはよう。」
メイデン
「おはよう…して、私は…」
ハル
「聞いたらまた気絶しますよ？」
メイデン
「そ、そうなのか！？なら聞かない…」
祐希奈
「ま、メイデンも起きたし本編始めましょっか♪」
ヴィヴィオ
「カナン君起きてないよ？」

祐希奈
「カナンなんてほっときゃいいのよ♪」
カナン
「ひどくないっすか！？」
ハル・カナメ
「寝ていましょうか？風間君♪」
カナン
「＊！－％＜ー＋！！！！」
バタリ…
祐希奈
「ナイスよ♪」
ハル・カナメ
「ありがとうございます♪」
ヴィヴィオ
「ちょっと可哀想かな…」

メイデン
「ああ…霞んで見えるな…」
祐希奈
「あ、そうだ…ヴォルカニック！アロー！！」
シュゴー…
ヴィヴィオ
「ゆ、祐希ちゃん？今のは何で？」
祐希奈
「ん？ああ、シオンがバカなことしたから制裁よ♪」
ヴィヴィオ
「届かないと思うなあ…」
祐希奈
「大丈夫よ。○ソンジャンプ機能を付加したからね♪」
クレア
「またコアな作品を…」
メイデン
「シオンさん…強く…生きてくれ…！！」
カナメ
「では、無茶苦茶な締めは私が♪
魔法少女リリカルヴィヴィオ」
一同
「始まります。」

▼▼▼▼▼▼▼▼「ゆ、祐希奈様？準備は宜しいですの？」

「うん。いいよ～♪」

「はぅ…」

こ、この可愛さ…見てるだけなら問題ないにしろ…

模擬戦を行うとなるとかなりやりづらいですの…

「御嬢様？性格は変わってしまっていますが中身は祐希奈様ですから油断なさらないようにしてください。」

「わ、わかってるですの！シルフィス！！」

『了解！起動開始！』

クレアのすぐ横にミッド式の魔法陣が展開。
機竜が召喚されクレアが中に乗り込む。
精神集中…よし！油断はしないですの！！

「わ～！恐竜さんだあ～♪
凄い凄～い♪」

「はぅぅ…」

呆気なくクレアの集中は途切れた…
それほどまでに破壊力満点の笑顔…

「えと…アシェル？
お願いするね？」
『はぁ…了解しました。』

こんな状況で戦えるのか激しく不安になりながらも一応は主の指示には従わなければならないため、バリアジャケットを展開する。

「シルフィス…威嚇をお願いですの。」
『仕方ないですね。』

『ギャオオオオ！！！』

両翼を目一杯広げ、空に向かって一吠え…
祐希奈と戦いたくないために威嚇という行動を選択したのだが…

「がおおお～♪」

祐希奈が可愛く吠えた…

「「ぐはあああ！！！」」

クレアとカナンに戦わずしてダメージを与える…
恐るべき能力が発動した…

「シルフィス…牽制を…」
『ラスターカノン。』

スフィア並の威力しかない光弾を四発だけ祐希奈に放つ。
これで終わると思っていた…

「わっ！」

驚きながらも飛び上がり回避した…

「避けた！？」

さらにそれだけでは終わらない…
祐希奈の右腕が光を放つ…

「あれは！！」

『一之瀬祐希奈の弓は非常に強力な技が多いです！
手加減している場合ではありません！！』

私は何をやってるんですの？
相手の行動だけで弱いと決めつけて！
バカですの！！

「シルフィス！飛ぶですの！！」
『了解！！』

祐希奈の弓を回避するため飛び上がり、狙いをつけさせない為に周囲を旋回する。

「ん～と、ブルーゲイルかな～？」
『良い選択ですね。』
「えへへ。」

しかし、祐希奈が選択した弓はブルーゲイル…
いくら素早くとも当たる絶対必中の弓…

『マスター！あれは避けられません！』
「なら撃ち落とすだけですの！！」

一旦動きを止め、迎撃するために光弾を溜める…

「えと…カートリッジ？」
『分かりました。』

手甲が上下に動きカートリッジが二発排出される…
引き絞られる弓には、魔力コーティングが行われた一本の矢…

「え～い！！」

「ラスターカノン！！」

直線に飛んでくる矢に対して手加減抜きで光弾を叩き込む。

が…

「散って！！」

「なっ！」

直撃する瞬間、矢は８つに分かれ、光弾を回避そのまま機竜へと襲いかかる！

「き、きし…う～！！」

『ウィング展開…』

上手く言えない祐希奈だが、アシェルが意思を読み取り、翼を広げる…

「シルフィス！」

『プロテクション！！』

意外と冷静な祐希奈に対してクレアは目の前のことしか考えられないほど焦っていた…

８つの矢は防いでも再び方向を修正し、機竜に襲い来る…

祐希奈はカートリッジを使って一発辺りの持続時間を上げていた…

さらに…

「反射出来るかな？」
『もちろんです！』

祐希奈の稀少技能により光弾が反射され機竜へと直進する。

「シルフィス！矢を吹き飛ばすですの！」
『了解しました！』

一時プロテクションを解除、翼を思い切り広げ、矢を退け再度展開。
光弾を凌ぎきる。

「もう容赦はしないですの！！」
『シャイニングブラスター！！』

機竜の口内に光が溜められ、祐希奈へと手加減抜きで発射した…

「嘘…ですの…」

そこでクレアの思考は停止する…
何故なら吹き飛ばした筈の８つの矢が祐希奈の手元へと集束しつつあったのだから…

「レイザーフォーテル？」
『よく言えましたね。』

一度飛ばした矢を手元に戻し、再度圧縮…
時間がかかる集束を一瞬で終え、弦を引き絞る…

「ジャッジメント…アロー！！
わ～い！言えた～♪」

『…』

放たれた白銀の矢は、砲撃をあっさりと貫通し、機竜へと突っ込む！

「く！！」

翼を羽ばたかせ、移動するが、矢は足を貫きなおも止まらず天空へと消えた…

「強いですの！！データにはあんな使い方は…」

『祐希奈様が近距離を得意とするのに対し、あちらの祐希奈様は遠距離が得意なようですね…

普段の場合、止めの一撃にしか使わない筈の弓ですが…

寝ぼけた場合は弓の性能を１００％引き出しています…』

「あ、あり得ないですの…」

『しかし、遠距離が強くなったということは…』

「近距離が弱くなった可能性があるですの…」

しかし、これは賭け…

距離をとってしまった以上…

近づくのは容易ではない…

『来ます！！』

「っ！！」

感知と同時に加速を開始。

直後に大威力の矢が通りすぎた…

「このままではじり貧ですの…

なら…」

『勝率の高い方へと行きましょう！』

行動は決まった…
後は突き進むのみ。
機竜は急降下を開始。

「わっ！！」

驚きつつもブルーゲイルを召喚し、連射する！
その数二十…

「もう効かないですの！」

回転をしながら矢を吹き飛ばす。
矢の威力自体は低めなため簡単に弾け飛ぶ…
さらに接近してしまえば集束の時間もない…

「あああああ！！」
『ピアシングカノン！』

速度を落とさず光剣を突きだしながら着地した…
あまりの衝撃に土煙があがり視界を潰す…

「けほ！けほ！目が痛い…」

光剣は避けたものの砂が目に入り祐希奈の動きが止まる…
しかし、機竜の中にいるクレアには関係のない話だった…

「フルバースト！！」

無数の光弾が、巨大な砲撃が煙を切り裂き祐希奈を襲う！

「きゃあああ！！」

『ウィング展開！！』

稀少技能を展開しながら逃走する祐希奈…

もう、クレアに手加減の文字は無い…

「待つですのー！！」

音速を破り、あっという間に祐希奈へと追い付く…

アームを伸ばし掴もうとした瞬間に異変は起きた…

「来ないでー！！」

祐希奈を中心にベルカの魔方陣が出現…

闇雲に逃げていたのではない…

誘ったのだ…

神の裁きが降るその場所へと…

「まさか！？シルフィス！！」

『了解！！』

「わあああああ！！！」

魔力が込められ、天へと届く光の柱が機竜を飲み込んだ…

「はぁ…はぁ…」

光の柱が収まっていく…
祐希奈の目の前には所々を損失し動かない機竜がいる…

「勝った…勝ったー！！」
『祐希奈！まだです！！』
「え…？」

「ちょっとびっくりしたですの…」
『ギリギリでしたね…』

ボロボロの機竜の体が再生していく…
祐希奈の技が発動する瞬間、クレアは地面に向かってフルバーストを叩き込み威力を減衰…
撃墜されずに済んでいた…

「でも…」

「あ…あ…」

完全に復活した機竜が翼を広げ羽ばたく…
赤い光が翼に集まり、さらに力を増していく…

「終わりですの！！」
『ウィングセイバー！！』

迫り来る機竜に祐希奈の体は強張り動かない…
容赦無くクレアは突っ込んだ！

（ごめんなさいですの…）

『プロテクション！！』

アシェルが自己の判断でプロテクションを展開、一瞬防ぐがデバイスのみのプロテクションでは防げる筈がなかった…

「きゃあああああ！！！」

翼に打ち上げられ、宙に舞う…
追撃をかける機竜を前に祐希奈の意識はとんだ…

「ピアシング！カノン！！」

発動された光剣は祐希奈へと進み…
そして止まった…

「あれ？」

「いきなり襲いかかられるようなことした覚えないんだけど…」

「…あり得ないですの。」

本日二度目の発言…
クレアが同じ発言をしてしまう程の出来事…
それは…

『片腕で止めるとは…』

光剣を祐希奈の燃える片腕で止めていた…
しかも、祐希奈は辛そうな表情はしていない…

「で、何でこうなったか教えてくれる？」

「…」

「固まってるわね…カナン！！
三秒以内に答えなさい！！」

「お、俺か！？え～と…」

「時間切れ～。はっ！」

バキッという音と共に光剣が折れる…
それを肩の高さにまで持ち上げた…

「待て…俺は騎士甲冑を…」

「バイバイ♪」

「ぎゃあああああ！！！」
風切り音と共に光剣が投げられ、カナンに着弾…
爆発を起こした…

「ハル！説明しなさい。」
カナンからメイデンをかっさらいちゃっかり離脱をしていたハルに
問いかけた。

「祐希奈様が寝ぼけたまま模擬戦を行っていただけですよ。
決して寝込みを襲ったわけではありません。」

「ふ～ん。なら別に怒らなくていいわね。
クレア続きをやりましょ？」

「片腕で止められた…
片腕で…」

「まだショック受けてるの？
あれは炎の密度を多くして威力を殺しただけよ？
簡単に言うなら超分厚い手袋をしてたのよ。」

「そんなことをあの一瞬で出来るんですの？」

「一月前なら出来なかったわよ？
でも、訓練したからね。
ヴィヴィオも似たようなこと出来るわよ？」

カナンが寝ている間に祐希奈もまた強くなり、本来嫌いな細かい魔力コントロールを身に付けることで、以前の祐希奈より、五倍以上の怪力を出せるようになっていた…
ヴィヴィオは速度を、祐希奈はパワーをそれぞれに上げた。
全てはカナンが起きた時に足手まといにならないようにと…
そうなると自分は足手まといなだけではないのか…
そんな考えが脳裏を過る…

「私は…弱いですの…」

前の模擬戦はカナンが自分に合わせてくれていただけ…
私は…

「まぁ、弱いわね。」

「う…」

遠慮なく祐希奈はズバリと言い切った…

「弱いから何？やっぱり戦うのやめる？」

「…」

「これから強くなれば良いだけじゃない。
私だって、最初からこんなに戦えたわけじゃないわよ？」

「でも…今からじゃ…」

「かーつ！！！！」

突如祐希奈が怒声を上げる。
空気が震えるような大声だった…

「ひっ！！」

「クレア、アンタって信念みたいなものある？」

「信念？」

あるにはある…
ただ…今の自分の力でそれを言っていいものか…

「無いの？」

「えっと…私は…犯罪を無くして皆が笑顔でいられるように、あらゆる脅威から守りたいですの…」

「また夢みたいな話ね…
ぶっちゃけ無理よ。」

「ええ！？」

励ますんじゃなくて突き落とすんですの！？
しかし、祐希奈はニコリと笑った…

「でも、いいんじゃない？
壮大な夢ってことはそんだけクレアが頑張らないといけないわけだし、それに向かって全力で頑張りなさい。
戦闘技術やらなんやらは後からついてくるわよ。
最初から諦めるなんて選択する奴は私は大嫌い。
やってみなくちゃわかんないんだからね。
必要なのは、努力と根性と気合いの３つ。
以上！！！」

「…」

祐希奈に圧倒されポカーンとしてしまう…
なんと大雑把で適当な教えだろう…
でも、言ってることは単純で分かりやすい。
要するに…

「邪魔な壁は片っ端からぶち抜けば良いですの！！」

「そそ。悩む暇があったら一発でも多く壁を攻撃よ♪」

「祐希奈…ありがとうですの…」

「どういたしまして。
それじゃあ…今のクレアの壁は私よ…どうする？」

「もちろんぶち抜くだけですの！！」

機竜は翼を広げ突撃を決行する。
その答えに祐希奈は笑う…

「小細工無しのガチンコ勝負燃えるわね！！」

ブレードを展開し、カートリッジを排出。
まるで右腕全てが燃えているような紅蓮の炎が舞い上がる…

「「はあああああ」」

接触した瞬間に激烈な爆発。
機竜と少女が拮抗していた…

「へえ…私の一撃を受け止めるなんてね…」

「あの速度で突っ込んだのにあっさり受ける祐希奈様の方がびっくりですの…」

牙にブレードをくわえ、抑え込み押し潰そうとする機竜…
その巨体を片腕に魔力を集め受け止める祐希奈…

「「あああああ！！！」」

再び叫ぶ、押し潰そうと…押し返そうと…

「くう…」

徐々に機竜の頭が後ろに押されていく…

「パワーで負けるわけにはいかないのよ！！」

一気に力を込める。
しかし、次の瞬間には体が宙に舞っていた…
押す力と引く力を合わせ、機竜に投げ飛ばされたからだった…
さらに目の前には魔力を纏う尾が迫る！

「クラッシュテール！！」

「この程度！！烈破！爆砕拳！！」

左手に炎を纏い殴り付けることで強引に方向をずらす。
そのまま突撃！！

「まだ！！」

機竜は、翼を羽ばたかせ巨体をバク転…
再度、尾の一撃が祐希奈に迫る。

「なっ！アシェル！！」
『プロテクション！！』

プロテクションで防ぐが体勢が不十分…

直撃こそ避けたものの地面に叩きつけられた…

「止め！！」

口を開くと同時に祐希奈が土煙の中から飛び出す。

「そんなに口開けて…これでも食べてなさい！！」

そう言って機竜の口の中にブレードを突っ込んだ…

お互いに退かず魔力を放出する！

「ブレードエクスプロージョン！！」

「シャイニングブラスター！！」

至近距離で凄まじい爆発が起き、祐希奈、機竜は後方に吹き飛ばされた…

が、祐希奈は動く…

「もう一撃…」

吹き飛ばされながらも地面に炎拳を叩き込み、止まる…

さらに、衝撃で浮いた土の塊に向け腕を軸に回し蹴りをぶちかます！

『物質…加速、強化！！』

物質加速、物質強化の術式を土の塊に使用…

鋼にも相当する質量へと変化する…

「ぶっ飛べーー！！！」

炎を纏い、塊が蹴り飛ばされ、機竜へと一直線に向かう！

「それくらいで！」
『ピアシングカノン！！』

鋼を光剣で破壊…
しかし、祐希奈が目の前にいた…
紅蓮の炎を右腕に纏いながら…

「残念ながら囮よ！烈破爆砕！！」

「それくらい分かってたですの！！」

こちらも予測済み…
口内に光…腕からも翼からも魔力が供給され最大級の魔力光が煌めく…

「ブラスター！キャノン！！」

光の塊と言うに相応しい大きさの砲撃…
それを前に祐希奈は再び笑う…

「業炎爆烈衝破！！」

フルリロード…
炎の色は、紅蓮から蒼炎へと変わる…
その拳と砲撃が交わる時…祐希奈達は極光に包まれ、遅れて爆音が響き渡った…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ん～♪楽しかった～♪」

拳を放ったままだった姿勢を解く…
晴れ晴れとした表情を浮かべ伸びをする祐希奈に対し…

「あ、アレを正面から受け止めるなんて…本当にあり得ないですの…」

押し負けた機竜は吹き飛び、木々を薙ぎ倒して止まっていた…

「もうちょい弱いかと思ってたけど、意外とやるじゃない。」

「複雑な気持ちですの…
というか…祐希奈様は何ともないんですの？」

「ん～…ちょっと手が痺れてるような…気がする。」

「ちょっとって…しかも気がするって…」

ブラーンと右手を揺らし軽く言う祐希奈。
圧倒的なパワーに激しく落ち込む…
カナンに続き二連敗…

「でも、十分強くなれる素質あるんじゃない？
パワーもそこそこあるし、スピードもそこそこだしね。」

「そこそこって…
私の取り柄はないですの？」

「そんなものは自分で作るのよ。

私なら圧縮とパワー、ヴィヴィオなら集束とスピード、カナンなら…まぁアイツは分かんないわね…
魔導師にオールマイティーは数えるくらいしかいないんだから、自分の得意な所を見つけて磨きまくれば良いのよ。
苦手な所の補強はその後よ。
あ～教導って疲れるわね…」

果たしてこれを教導と言ってしまってもいいのだろうか…

「お前はなんつう無茶苦茶な教え方してんだよ…」

カナンが呆れながらこちらにやって来る…若干焦げてはいるが…

「いえいえ、意外とそういう物かもしれませんよ？
事実、高町一等空尉やテスタロッサ執務官は、それぞれに特技を極めた人物です。
その他の魔法はあのお二方にとっては、攻撃の幅を増やす為に過ぎません。
僕は、あながち間違っているとは思いませんよ。」

「特技を極める…」

「クレア。極めるって言っても、無茶して体壊したら結局遠回りだ。
やるにしてもゆっくりやれよ？」

「はいですの！」

「…なんかアンタ妙にクレアに優しくない？」

「そうか？
別にこんなもんだろ？」

「あっそ…」

祐希奈はプイっと横を向く…

「え？お、おい。俺なんか怒らせたか？」

「別に何でもないわよ…」

「いや、何でもないって…怒ってるし…」

「怒ってないわよー！！」
バキャッ！！

「どこがーー……」

「ふん！」

「やれやれ…マスターは地雷を踏むのが上手いな…」

「あの態度でわからないとは…病気ではないのですか？」

「び、病気！？病のことか！？今までは鈍いだけだと思っていたのだが、そんな病もあるのか！？」

「ええ…重病です…
無自覚とは…可哀想に…」

「っ！！治せないのか！？」

「残念ですが…不治の病の一つです…♪」

あははは。鈍いのなんて治るわけないじゃないですか～♪

「マスター！！」

飛んで行こうとするメイデンの肩を捕まえ、首を振る…

「伝えない方がいい真実もあるんですよ…」

「うぅ…マスター…」

「ハ～ル～！！」

機竜が立ち、ハルの目の前に立ち塞がる…

「おや、何ですか御嬢様？」

「冗談はほどほどにしないといけないですの。」

「冗談なのか！？」

「はい♪」

「よ、良かった…」

「良かったですね～。」

「冗談は人を見てから言うですの！！」

「人を見て言いましたよ？信じてくれそうな人…」

「そっちの見るじゃないですのー！！」

「あははは一。つい勘違いをしていました♪」

「…シルフィス。」

『ラスターカノン…』

「『一度あの世に行って性格を変えて来い！／ですの！』」

連続で発射される光弾…

「痛いですからご遠慮しておきますね～。」

弾いたり、避けたりと爽やかな笑みを崩さずにいるハル…

「「「カオスだ…」」」

祐希奈、カナン、メイデンの三人の思考が一致した瞬間だった…

▼▼▼▼▼▼▼▼

機動六課…

「じゃあ、シャーリーさんよろしくお願いしますね。」

「了～解。フェアリーのフルメンテ～♪忙しそうですね～。楽しくなりますね～♪」

「あはは…」

『シャリオさんはお変わりないようで…』

「はい♪さて…早速データを…
おお♪こんな魔力運用方法をするなんて…
これは、新たに強化をしないといけない部分が…
う～ん♪忙しい忙しい♪」

「じゃあ、私は八神部隊長と話してくるね。」
『了解しました。』

嬉々としてフェアリーのデータに没頭するシャーリさんを後にした…

「高町ヴィヴィオ二等空尉です。」

「お～ヴィヴィオかぁ～。どうぞ、入ってーな。」

「失礼します。お久しぶりです。
八神部隊長。」

「うん。久しぶりやね。
クロノ君から聞いたよ。
合格おめでとう。」

「ありがとうございます。」

ぺこりと頭を下げると、八神部隊長が苦笑いを浮かべた…
何か悪いことしたかな?

「ヴィヴィオも変わらんな～。」

「何がですか？」

「態度が固いな～って思てな？
八神部隊長なんて呼ばんでもええよ。
祐希奈やカナンみたいに、はやてさんで十分や。」

「えと…でも、八神部隊長は私の上司で…」

「ほんならなのはちゃんもやけど？」

「ママは…ママですから。」

「そうかぁ…私もヴィヴィオのことは我が子のように見てたつもりやったんやけどなあ…
ヴィヴィオにとっては、他人なんやなあ…しくしく…」

そう言って机に伏してしまった…
気まずい…

「あの…八神部隊長？」

「しくしく…しくしく…」

「お話をしたいんですが…」

「しくしく…しくしく…」

はぁ～…上下関係は、区別しないといけないと思うんだけどなあ…

「はやてさん。」

「ん?なんやヴィヴィオ♪」

「う、嘘泣きだったんですか!?」

「そんなことあらへんよ?ヴィヴィオが呼んでくれたから涙が一瞬で引っ込んだだけや。」

「そ、そんなに嬉しかったんですか?」

「そうや。天にも昇るくらいの幸福やったわ…」

「昇っちゃダメです!!」

「冗談や。」

「そんな冗談やめてください…」

「こんな冗談に引っ掛かってくれるのはヴィヴィオだけやけどね♪」

「…」

私ってそんなに引っ掛かり安いのかな…

もちろん!!…と祐希奈とカナンがいれば言うだろう。

「話があるんやったな?

もしかして、グングニルが関係するんか?」

それまでの雰囲気が消え、機動六課部隊長としてのはやてさんに切り替わる。

「やっぱり…来ましたか？」

「少し前にやたら高飛車な女性が来たんよ…
なのはちゃんとフェイトちゃんと交戦、一撃当てたら化粧がどうとか言って逃がしてしもたんやけど…」

高飛車な女性？…
こっちに来たのはハイテンションな男性…
部隊があるのかな…

「銀色の人型自律兵器は来ませんでしたか？」

「下見って言ってたらしいし、本気で潰す気はなかったみたいや。
そっちは？」

「こっちは結構本気だったかもしれません。
カナン君の空間突破を持つ人型兵器三機と、男性が現れました…」

「なんやて！？
カナンの能力て…よう大丈夫やったなあ…」

「と言っても能力は劣化してますしカナン君と何度も戦った私は慣れてましたから人型の方は、白姫クレアさんと朱皇千春さんの協力により破壊しました。」

「それはまた偶然が重なったもんやなあ…」

「ですが、新たに現れた男性は桁違いです…
カナン君が起きなかったら私は死んでいました…」

「カナンが起きたことや敵はロストロギア持ちって言うのは祐希奈から聞いてたけど…
そんなんは知らんかったわ…」

「敵はどんな能力を持っているかわかりませんから直接お話したかったんです。」

「警戒しとかなあかんなあ…
情報ありがとう。
ほんまに助かったわ。」

「いえ、ただ警戒を…」

そこでいきなりアラートが響く…
同時、地震のような揺れが起きた…

「わ、あ…」

「グリフィス君！どうしたんや！？」

『何者かが六課に攻撃を加えている模様です！』

「そんな…六課の周囲には結界が張ってあるのに！！」

正式な管理局員で無い場合は、直接転移は不可能。
急襲なんて出来る筈ないのに！！
しかし、再び襲う揺れが事実だと肯定する…

「こんな時に！！」

苦虫を噛み潰したかのようにはやてさんの表情が歪む…

「ママ達は!?」

「先の問題の報告に本局や…
ヴィータも、シグナムもおらへん…」

隊長陣がいない…
敵はこれを知っていたのかも知れない…

「スバルさん達はいますよね!?
私達で出ますから、はやてさんとシャマルさんとザフィーラで六課を守って下さい!!」

「せやけど、ヴィヴィオは試験が終わったばっかで…」

「スバルさん達もいますし大丈夫です!失礼します!!」

フェアリーを取りに行かないと!!
走っているとシャーリーさんもこちらに向かってくれていた。

「フェアリーを!!」

「分かりました!!」

投げ渡されると同時に起動…
近くにあった窓を突き破り外へと飛び出した…
既に戦闘が行われているのか、金属音が響いている…

「急がないと！！」

加速し、向かうと…そこには、フードを被った人間…人型はいない…

「ヴィヴィオ！！」

「すいません！遅れました！！」

フォワードメンバーは四人…

ギンガさんも呼び出しか…きついかも…

「やっと来たのかよ…

おせえぞ…聖王。」

聞き覚えのある声が響く…今の声は…カナン君に似ていた…

「え？」

「驚いてる暇があったら構えろ…死ぬぞ？」

フードの中で顔が笑った気がした…

第七話　対の存在

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「っ！！」

体に震えが走った…
フードを被った男は動かない…
動かないが、圧倒的な存在感を放っている…
いつでも殺れるとでも言うように構えもとらない…
ただ、棒立ちでこちらを見ているだけ…

「はぁ…はぁ…」

背筋に冷たい汗が流れる…何もしていないのに息が上がる…
それは、前線メンバー四人も同じだった…

「貴方は…何が目的なの？」

「聞いてどうする？
敵にそんなのを教えるわけないだろ。」

やはり話し合いが通じる相手ではない…
やるしかない！！

「スバルさん…行きますよ！！」

「オッケー！！」

ヴィヴィオは腰を落とし疾走の準備をとり、スバルはウィングロー

ドを展開し道を作る…

「貴方を…拘束します！！」

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ！』

「はっ！出来るかな？」

残像と共に男の背後へと移動、横殴りの一撃を叩きつける。

「止まって見えるな！」

振り向かずに身を屈め、あっさりと回避、そのまま足を蹴り上げる！

「く…」

刃を蹴られフェアリーが頭上に高々と弾け飛ぶ…

即座にフェアリーを追いかける。

「逃がすか！」

追撃をかける男の背後にスバルが殴りかかる！

「はぁああ！！」

「やっときたか怪力女…」

「リボルバー！キャノン！！」

「ふん…」

片腕で張られたプロテクションとスバルの拳がぶつかり合う…
男のプロテクションは並の魔導師なら易々と破壊するスバルの剛力を受け止める…
しかし、スバルの目的は達せられた…

「ティアー！！」

「任せなさい！！」

ヴィヴィオとスバルが稼いだ時間を無駄にしない！
男の後頭部に当たるレーザーサイト…
男の背後のウィングロード…
そこにティアナはいた…

「ファントムブレイザー！！」

環状魔方陣から発射される砲撃は、真っ直ぐに男へと向かっていく…

「それがどうした！！」

両手を広げスバル、ティアナからの一撃を受け止める。

「「ヴィヴィオ！エリオ！！」」

「「はい！！」」

「あの赤髪…いつの間に…」

エリオはスピードを生かしヴィヴィオと空中で合流…ストラーダをツヴァイフォルムへと変更…

「猛きその身に力を与える祈りの光を…
シュート&ストライク！！」
『Ｂｏｏｓｔ　ｕｐ　Ｂａｒｒｅｔ　ａｎｄ　Ｓｔｒｉｋｅ　ｐｏｗｅｒ！』

キャロからブースト魔法が四人同時にかけられる。
スバルもティアナも出力が上がりプロテクションにヒビを入れていく…

「「カートリッジロード！！」」
『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ！！』
『ｍｅｓｓｅｒ　ａｎｇｒｉｆｆ！！』

ヴィヴィオは刃に風を纏い高速化、エリオはブーストにより男へと一気に接近する！！

「「ソニックドライバー！！」」

交差するように二人の攻撃が男に降り注ぐ！

「やるな…」

それを見て、男は、ひし形のバリアタイプの防御へと変更…
しかし、四人の攻撃がバリアを蝕む…

「「「「おおおおお！！！！」」」」

割れる瞬間…ヴィヴィオは見た…

男の右腰に出現した銀色の剣と鞘を…
そして男が呟いた…

「参式抜刀剣術…絶空…」

「嘘…」
バリアを中から突き破った斬撃は…三人をあっさりと斬り飛ばし、
砲撃も消し飛ばした…

「ヴィヴィオ！スバル！エリオ！
な、なんなのよアイツは！？」

「一人だけ仲間外れはいけないよな？」

「っ！！」

十メートル程あった距離を一瞬で詰め、ティアナの目の前で剣を振
り上げる男がいた…

「モード２！！」

「じゃあな…」

殆んど反射だけでダガーモードにした刃を持ち上げたが振り降ろさ
れる凶刃は、関係なくティアナを地面に叩き落とした…

「ティアナさん！！」

「おっと…お前もいたんだったな…」

「っ！！」

男はティアナの時のようにキャロの目の前へと現れる…
再び剣を振り上げる男…

「あ…」

対処が間に合わない…
キャロは死を覚悟した…
しかし、金属音が響く…

「やらせないよ…」

「よく間に合ったな？」

「知ってる技だからね…」
よく知っている技…
それ故に斬られる瞬間に衝撃を軽減し、キャロの救出に間に合った…
だが…この技を使える人間は自分の知っている限りは一人だけ…
故に聞かなければならない…

「貴方は…誰？」

「ふ…対の存在だ…」

つばぜり合いになって初めてフードの中の目が見えた…
青い…目だった…

「何故…」

「今の情報はサービスだ…
良かったな…死ぬ前に部隊に貢献できて！！」

「くぅ…」

ブースト魔法は継続している…
それでも、押し込まれる…
地面にヒビが入っていく…

「ははははは！！！聖王ってのも大したことなかったな！！！」

「ヴィ……オ…」

キャロの声が遠く聞こえる…
腕の感覚さえ消えていく…

「ラ……テン！」

「じゃあなあ！！」

男からさらに魔力が吹き出す…
ヒビが広がっていく…

「ハンマアアアーーー！！！！！！」

「な…がああああ！！！！」

ぼうっとする頭にさえ聞こえた努声…瞬間、男の体が吹き飛んでいった…

「はぁ…はぁ…はぁ…」

全身の力が抜けフェアリーを杖にやっと立っている状態だった…

「よく頑張ったな。
さすがなのはの娘だ。
後はあたしに任せな。」

ポンっと頭に手がのせられる…
スターズ2ヴィータ副隊長がそこにいた…

「ヴィータ…副隊長…
すいません…」

「何謝ってんだ。
お前はよく頑張ったじゃねえか。
こっちこそ遅くなって悪かったな。
ゆっくり休め。」

「てめえええ!!よくも邪魔しやがったなあ!?」

「うっせえ!!男がピーピー叫ぶんじゃねえよ!!
あたしが相手だ!かかってこい!!」

「上等だ!チビが!!!」

次の瞬間には男が消える…やはりあの能力は…空間突破…

「死ね!!」

ヴィータの目の前に現れた男が袈裟斬りを叩き込む…視認するのもギリギリな速度にヴィータはガッチリとアイゼンを合わせた…

「何!?」

「何でお前がカナンの能力もってんだか知らねえけどな…」

カートリッジロード…アイゼンが変型、再びジェット噴射を開始する!

「ぐ…何だ…このチビ…」

「あたしをチビって言ってただですむとおもうなよーーー!!!」

怒声と共にカートリッジが排出されていく…
噴射の威力があがり、地面を抉りながら男が押されていく…

「うおおおぉぅうらぁあああ!!!!」

「がはっ!!」

剣を弾き飛ばしハンマーの突起が体にめり込んだ後も勢いは止まらない…
そのまま男を回転振り回す!!

「終わりだあああああ!!!!」

止めとばかりにだめ押しの一発を排出…
両手でアイゼンを持ち唐竹割りのように男を地面に叩きつけた!!
その威力たるやヴィータから周囲五メートルに深いクレーターを作

ってしまった…

「ふん！鉄槌の騎士ヴィータをバカにしたからこうなんだよ。」

「す、凄いや…」

相手のパワーも凄かったけど、ヴィータ副隊長のそれは、もっと凄かった…

「さて、と…コイツをはやての所に連れてかねえとな。」

何重にもバインドされた男を引きずりながらヴィータ副隊長がやってくる…

「ヴィータ副隊長、どうしてここに？
本局に行ってたんじゃ…」

「はやてから連絡もらってな。
幸いあたしは、なのはのオマケみたいなもんだったかし、すぐに動けたんだ。
シグナムは、単独で本局に行ったんならこれたんだろうけど、フェイトが一緒だったからな…
フェイトの部下っていう立場上、会議から出られなかったんだろ。
事件とかの場合は、なのはより、フェイトが忙しくなる。
結果的にはシグナムもとばっちりだな。」

なのはの部下で良かったと苦笑いをしながら言うヴィータ副隊長…

「「ご迷惑をお掛けしました…」」

「ヴィヴィオは試験の後らしいし、キャロはフルバックだ。
今回は仕方ねえよ。
とにかく、捕まえられたんだからいいじゃねえか。な。」

「「ありがとうございます！！」」

「はっ！呑気なもんだな…」

「っ！！」

気絶していると思っていた男が起きていた…

「何か情報を言うかと思って気絶したふりをしてたのによ…
話すことは、どうでもいいことばかり…
付き合ってられねえよ…」

「なっ！」

何重にも巻かれたバインドをあっさりと引きちぎる…

「アイゼン！！」
『Ｊａ！』

即座にヴィータ副隊長はグラーフアイゼンを起動構えるが…

「もう遊ぶのも疲れた…
もう帰る。」

展開されるベルカ式魔方陣…

「帰らせると思うか！？」

アイゼンが男へと叩きつけられる瞬間、ヴィータ副隊長の手からアイゼンが弾き飛ばされた…

「え…？」

「油断さえしなけりゃ、お前みたいなのには負けねえよ…」

そう言い残し、男は転移して、この場所から消えた。

「ヴィータ副隊長！大丈夫ですか！？」

「ああ…でも、アイツ逃がしちまった…くそ！！」

ヴィータ副隊長は悔しそうにうつむいている…

最後に見せた斬撃…

間違いなくカナン君の剣速だった…

「対の存在か…」

何故、ロストロギアを集めるのか…

何故、そんな存在がいるのか…

わからない、わからないけど…

これだけは、はっきりしていた。

「まだまだ訓練しなくちゃいけないなあ…」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「はやて…ごめん…」

「ええよ。ヴィヴィオ達を助けてくれただけでも十分過ぎる。ゆっくり休んでな？」

「うん…」

やはり逃したのが悔しいのかヴィータ副隊長は退室まであまり話さなかった。

「はやてさん。ロストロギアで全く同じ能力の物ってあるんですか？」

「う～ん…似たようなもんはあると思うんやけど、全く同じもんはちょっと知らんなあ…」

「ですよね…
やっぱりアレは違うロストロギア…」

「そないなこと聞いてどうしたん？」

「相手がカナン君と同じ技を使ったもので気になったんです。」

その言葉にはやてさんは目を見開いた。

「同じ技やて！？
エクスカリバーは、発見されてるロストロギアの中でも相当高位な方に入るんやで！？
見間違いとちゃうか？」

「いえ、間違いなくカナン君の抜刀剣術でした…
本人は、対の存在だとも言っていましたし…」

「ちょっと調べなあかへんな…
ユーノ君に頼んどくわ。
何かわかりしだい情報送るわ。」

「ありがとうございます。では、失礼します。」

「ヴィヴィオ、気いつけなあかんよ?」

「はやてさんも、お気をつけて…」

退室し、再びメンテナンスをされているフェアリーの元へと向かう。
部屋に入るとシャーリーさんが近づいてきた。

「ヴィヴィオ!丁度良いところに~」

「どうしたんですか?
フェアリーに何か問題が?」

「ううん。メンテナンス自体は問題ないんだけど、フェアリーが困ったこと言うのよ。」

「フェアリー。
シャーリーさんを困らせちゃダメだよ。」

『何も困らせてなどいません。
マスターも見れば納得されますよ。』

「ん？これって…」

目の前に出現したモニターの字を読んでいく…

「フェアリー、十分困らせる内容だよ…」

『そうですか？
しかし、マスターの力を生かす最適のパーツですよ？』

フェアリーがシャーリーを困らせていた物、それは強化プランであった…
アシェルの物まで作成してある…

「あのね～フェアリー。
ヴィヴィオの能力を最大に生かすことが出来ても、こんな無茶苦茶な強化はヴィヴィオに負担がかかるんですよ？」

『たかが、魔力消費の５割増し程度マスターには何の影響もありませんよ。』

フェアリーが作った強化プランは、放出魔力量の強化、カートリッジの大型化、刃の出力上昇、集束量の強化…並の魔導師なら一撃放つのが精一杯になる強化プランだった…

「フルドライブのカートリッジまで大型化したら本人はもちろんフェアリー自身危険です！
１２発装填だってかなりの負担何ですよ？」

『ですから、私のフレーム強化も頼んでいるではないですか。』

「く…貴方は修復出来ますが、ヴィヴィオが耐えられるという保証がありません！」

「5割増しって…スフィア一発でどれくらいの魔力を使うんですか？」

「え？え～と…ヴィヴィオで言うとショートバスター一発ぐらいかな？」

「それくらいなら私、大丈夫ですよ？」

「…それで決着まで戦えるんですか？だいたい負担が…」

『魔力も負担も解決する方法がありますよ？』

「そんな方法は…」

『マスターのリミットを二段階程外せば、魔力も上がり、魔法の衝撃からも守れますよ？』

「あ～成る程…」

思わず納得してしまった。

「聖王の鎧の負担が増えますよ！」

『それは問題ないでしょう。マスター？サードモードのフルドライブを行った後、何か体に異常

はありましたか？』

「ううん。ママにやられた所以外はなんともなかったよ？」

『完全に制御していなかったとはいえ、六割以上は出ていた筈です。つまり、今のマスターは六割まで外しても制御出来ています。負担による外傷などの心配はありません。』

「う…」

『まだ納得されませんか？仕方がありませんね…後二時間程、付き合って…』

「わかりました！！全く…マイスターにここまで意見するデバイスも珍しいですよ…」

『光栄です。』

「誉めてません！！幸いパーツはありますから今から作業は出来ますけど、丸一日はかかりますよ？」

『ええ。よろしくお願いします。』

「フェアリーが無理言ってすいません。」

「まぁ、ヴィヴィオの力になりたいと思ってのことですし、楽しそうだからいいですけどね。」

前半呆れていた顔は、後半になると笑みへと変わっていた。

やはり、機械弄りが出来るのは嬉しいらしい…

「よろしくお願いします。」

「は～い♪お仕事お仕事～♪」

シャーリーさんは嬉々として研究室へと戻っていった…

「う～ん…今日は六課にお泊まりか。
祐希ちゃんに言っとかないと…」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ふああ…ヴィヴィオどうしたんだろ…
試験、長引いてるのかな…」

にしても、一人って暇ね～。
家にヴィヴィオが来てから余計にそう感じるようになったわ…
お祝いの準備でもしようかな…
そう思った矢先、念話が入る。

（祐希ちゃん。私、ヴィヴィオだよ。）

（あ、ヴィヴィオ。アンタ今どこにいるのよ？）

（六課にいるんだけど…ちょっと襲撃にあっちゃって…）

（成る程襲撃に…って襲撃！？
ちょっとそこまでみたいな言い方してんじゃないわよ！！
大丈夫なの！？）

（うん。大丈夫だよ。
でも、強化プランに丸一日かかるみたいだから今日は帰れないんだ。
）

（話が飛び過ぎて意味わかんないんだけど…
何がどうなって強化プランに繋がるのよ…）

（え～と…私が襲撃者に負けちゃって、はやてさんに報告してる間
にフェアリーが決めちゃって、問題ないから採用って…自分で言っ
ててわかんないや…）

（…ヴィヴィオに説明を求めた私がバカだったわ。）

（だ、だってね？フェアリーがね？）

（はいはい。とにかく今日は帰れないのね？）

（うん…）

（ん。じゃあ切るわよ？）

（ごめんね？）

（何謝ってんのよ…
怒ってないから、ゆっくりして来なさい。）

（ゆっくりって…何を？）

（は？ヴィヴィオって言ったらもちろんママに…）

（もう！！）
ブチ…

「あらら、切られちゃった。」

『からかい過ぎですよ。』

「だって楽しいんだもん。」

『友達無くしますよ？』

「この程度でいなくなる友達なんてこっちから願い下げよ。」

『はぁ…』

「何よ…？」

『いえ、それよりこれからどうしますか？』

「ん～父さんは今日はいないし…」

『確かお仕事ですよね？』

「夏休みの終わりが近いから。
この時期はあんまり家にいないのよ。
学校に泊まり込みの時もあるしね。」

『すると、今日は祐希奈一人だけですね。』

「む～暇ね…よし！」

ごそごそとタンスをあさり、衣服、カバン、パジャマ等が床に飛び出す。

『何をする気ですか？』

「ん？宿題をやろうと思ってね。」

普段の言動とは違い、きちんと畳まれてカバンの中に入れられていく…

クリアファイルに挟まれた宿題を入れ、移動し洗面所から歯ブラシをケースに入れる。

『もしかして、泊まりに行くつもりですか？』

「まぁね。答えを写しに行かないと。」

『自分の力で…』

「出来るような頭してたら苦労しないわよ…」

最後に悲しい言葉を残して祐希奈は外へ出た…

向かうのはもちろんカナンの家。

十数分歩くと白い家が見えてくる…

しかし、祐希奈は玄関を通りすぎ、庭へと向かう…

「よっと！」

屋根に手をかけ登っていく…

完全に泥棒と化していた…

『何をするつもりですか?』

「何をって挨拶よ♪」

絶対ろくなことにはならないとアシェルは確信した…そうして登って行くうちにカナンの部屋の上へとたどり着く…

「よいしょっと…」

身をのりだし、カナンの部屋の窓を叩き、即座に屋根の上へと上がる…

カラカラと窓が開けられカナンが出てくる…

「ん?今確かに窓が…」

「こんにちは~♪」

「おわあああああ!!!」

屋根に足だけ引っかけ、ブラーンとカナンの目の前へと祐希奈が出現…

ホラー映画のようである…

「ほっ!」

スタッという軽い音と共に祐希奈がカナンの部屋へと侵入した。

「お前なあ!!もっと普通に来いよ!!」

「普通に来たら面白味がないじゃない？」

「んなもん知るか！！」

「マスター？何をそんなに騒いで…
ん？祐希奈、いつ来たんだ？」

騒いでいると扉が開き、お盆を持った、１６０センチバージョンメイデンが登場…

「やっほ～。で、何でメイデンおっきくなってんのよ？」

「ああ、これか。
お茶を入れに行っていたんだ。
普段はマスターが一緒だから扉を開けるのに苦労はしないんだが、
今日は宿題とやらをやるから動けないらしくてな？」

「宿題って…アンタまだ出来てないの！？」

これじゃ私の完璧な計画が意味ないじゃない！！

「あのなあ…俺は昨日に起きた所だぞ？
普通に考えたらわかることだろ…」

「うわぁ…カナンって使えないわねぇ…」

「いきなり押し掛けてきて使えない発言してんじゃねえよ！！」

「使えないから使えないって言っただけでしょ！！

何が悪いのよ！！」

「全面的にお前が悪いだろうが！！」

「アンタが寝ながら宿題やれば済む話でしょ！？」

「意識不明で宿題やれる奴がどこにいんだよ！！」

「何事も努力と気合と根性よ！！」

「無理！！いくらなんでも無理！！！」

「アンタのせいで私までピンチじゃない！！
私の宿題を提出出来なかったらどうすんのよ！！」

「んなもん知るかあ！！自分でやればいいだろ！？」

「だから出来れば苦労しないってさっき言ったじゃない！！」

「俺は初耳なんですけど！？」

「とにかくさっさとやれーー！！」
バキャッ！！

「ぐはあ！！！な、何故に蹴られる…」

「まぁ、二人共お茶でも飲んで落ち着け。」

日々の賜物か、カナンが吹っ飛ぼうがまったく気にしないメイデン…
コトリと湯飲みが置かれ、部屋から出ていった…

「何でアイツ出ていったんだ？」

「知らないわよ…」

互いに無言の時間が流れた…

今、一歩踏み出さなきゃ…

「宿題…」

「へ？」

「教えてくれない？」

「…」

そう言った途端、カナンの表情が固まった…

「何よ…」

「いや、お前が自分から宿題やるなんて…

熱でもあるんじゃないか？」

ピキッ

「ふ～ちょっと窓から投げたい気分だな～。」

「な、何をだ？」

「…」

あえて何も言わず、私の渾身の笑みでカナンを見た…
カナンから汗が滝のように流れる…
恐らくカナンの中では、凄まじい想像が渦巻いているに違いない。
やがて、決心した…

「宿題…やるか…？」

宿題に逃げようと…

「わかればよろしい♪」

カナンの部屋にあった簡易のテーブルを出し、その上に宿題を広げる。
当然の如く全教科。
毎回毎回、宿題多すぎよね…

「お前…見事に真っ白だな…」

「何言ってんのよ？
ちゃんと書いてあるじゃない。」

数学のワークブックの第一問目に式のみ書いてある…
以前ヴィヴィオと一緒に宿題をやった日に書いた物だった…

「一問目だけ書いてあった所で白紙と何も変わらないだろ…
しかも違うし…お前はかけ算も出来ないのか？」

「だってXがあるし…」

「Xなんて中学校じゃ飾りみたいなものだ。

一ページ目は無視してやれば出来る…」

「へぇ…」

「ていうか…ヴィヴィオは教えてくれなかったのか？」

「ん～教えてくれようとしたみたいな記憶があるような…」

「寝たのか…」

「多分ね。確か、問題見た途端に睡魔が襲ってきて…」

「お前は…アレか…テレビアニメのトンボメガネをかけた小学五年生から進まないあの少年か？」

「あそこまではひどくないわよ。
魔導師試験だってパスしたんだしね。」

半分はティアナさんが怖かったからだけど…

「だな。まぁ、そん時の気合いを出して頑張ってくれ。」

その後、カナンは下を向き、サラサラと答えを書いていく…
時折、ペンで頭を数度叩いて考える仕草、そして頷いてまた書いていく…
ぼーっとカナンのその姿を見ていた。

「おい…お前進んでないぞ？」

「え…？」

「え?、じゃない。そんなに分からないのか?」

何も言えない間にカナンが立ち上がりこちらに歩いてくる。
そして、隣に座った…

「今から俺がやるから解き方見てろよ?
まず、これをだな…」

カナンが何か説明しているが私には聞こえない…
ほとんど密着状態で説明されても聞こえる訳がない…
心臓の鼓動がカナンに聞こえないか心配だった。
突如、ため息と共に頭を捕まれ、無理矢理方向を変えられた…
目の前にはカナンの顔…

「お前は話を聞いてんのか?
やる気が無いなら教えないからな?」

「…」

「無視か…もういいよ…」

立ち上がって戻ろうとする…
反射的にカナンの服の袖を掴んでしまった…

「な、何だよ?」

「聞く…から…」

「へ?」

「ちゃんと話…聞くから…行かないでよ…」

一緒にいて欲しかった…
二人きりなんて滅多にあることじゃないから…

「あ、ああ…どうした？
顔、赤いぞ？」

それは、自分でもわかってる…
恥ずかしいけど、一緒にいたい…

「な、何でもないわよ…大丈夫だから…」

「そうか？ならいいけどな。」

ストンとまた座り込み、説明を開始する。
今度は一緒に解いていく。
カナンの教え方は、大雑把だったけど、私にはそっちの方が分かりやすかった。

「ふぅ…」

「おし。もうだいたい出来るな。
後は自分で頑張れよ？」

再び立ち上がり、向かいの机に行こうとするカナンの袖をまた掴む私がいた…
何だろ…今日は、妙にカナンが愛しい…
ずっと一緒にいたい…

「ど、どうしたんだ？
まだ何かあるのか？」

「隣で…やってて欲しいんだけど…」

「はぁ！？お前マジで熱あるだろ！？」

そうかも知れない…
だって、さっきからずっと体が熱を持っている。
でも、これは風邪とかそんなんじゃない…

「何ともないわよ…」

「何ともない奴がそんなこと言わないって…
ちょっと待ってろ、体温計を…」

「行かないで！」

立ち上がろうとしたカナンの袖を思い切り引っ張ったせいか、カナンがバランスを崩した…

「おわっ！！」

「ひあっ！！」

そのまま、私に覆い被さるように倒れ込む…

「あっぶね～…」

キスまで残り数センチという所でカナンは踏ん張っていた…
もう、無理だ…

「お前な～…」

「カナン…」

「な、何でしょうか？」

「ごめん…」

「何…ん！？」

「ん…」

我慢出来なかった…
カナンの頭を抱き締めるようにして互いの唇が合わさる…
それは、驚くほど気持ちいい感触だった…
しかし、それも終わる…
カナンが飛び退いたからだった…

「ゆ、ゆゆゆゆ祐希奈！？
なななな何したかわかってんのか！？」

「あ～…キス？」

してしまったからか、体の熱は徐々に冷めていく。

「そんな軽く言うんじゃねえええええ！！！！」

「だってしちゃったし…
」

「お、俺はともかくだな！
お前は、重大なことだろ！？
その場の勢いで俺なんかとやるもんじゃ…」

「まぁ、勢いもあったけど、後悔はしないわよ。」

「ななな何で！？」

「普通それ聞く？」

ホントにデリカシーの無い男ね…

「カナンのことが物凄く嫌いじゃないからよ。」

「つまり…それって…」

「じゃ、今日は泊まるし、意味考えときなさいよ？」

扉を開け、階段を降りていく…

「うわあああああああああああああ！！！！！
乙女心ってわからあああーーーん！！！！！
うわあああああああああああああ！！！！！！！！
誰かあああ教えてえええ乙女心をーーーーーー！！！！！！！！！！
！！！」

「近所迷惑よ～。」

そして魔力反応…あのバカ逃げるか…

「うわあああああああああああぁぁぁぁ…」

カナンは転移し、家から消え去った…

「とりあえず、これで退けなくなったわけね…」

階段を降りながら、私は唇に残る感触を思いだしながら、夕食を作りにキッチンへと向かった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

祐希奈

「後書き雑談コーナー♪」

ヴィヴィオ

「何か私がいない間に凄いことしてるね…」

祐希奈

「先手必勝ってね♪」

メイデン

「所でマスターは？」

祐希奈

「あれよ。」

祐希奈の指の先にはケージに閉じ込められたカナンがいた…

ヴィヴィオ

「何か叫んでない？」

祐希奈

「あれからずっとね。だから防音ケージにぶちこんであるのよ。」

メイデン
「静かなシオンさんとは逆パターンだな…」
ヴィヴィオ
「シオン君は生気が無かったからね～」
祐希奈
「いつか銀杏や飛鳥もあんな感じにかもね。」
祐希奈
「楽しみね～♪」

ガシャーン！！
ヴィヴィオ
「わっ…カナン君。」
カナン
「はぁ…はぁ…」
祐希奈
「おっす♪」
カナン
「う…あ…ああ…
シィイイオオオン！！！
いや…センパアアアイ！！！
乙女心教えてくれえええええええええ！！！！」
ドヒュン！！
ヴィヴィオ
「うわ～凄いスピード…」
メイデン
「どこに行くつもりだろうな？」
祐希奈
「さぁ？」
ヴィヴィオ
「聞きに言ったとしても、シオン君も乙女心わかんないと思うけど

なあ…」
祐希奈
「基本的にオリ主ってのは鈍いからね。」
メイデン
「だな…」
ヴィヴィオ
「あ、そろそろ終わりだよ。」
祐希奈
「そうね。とりあえず一言だけ…
アリサ、避けなさいよ？」
メイデン
「あの矢のことか？」
祐希奈
「シオンの巻き添え食らっちゃ可哀想でしょ？」
ヴィヴィオ
「あはは…シオン君は直撃してもいいんだ…」
祐希奈
「もち♪」
ヴィヴィオ・メイデン
「はぁ…」
祐希奈
「んじゃ、魔法少女リリカルヴィヴィオ」
一同
「また見てね～♪」

第八話　一歩前進

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

祐希奈
「皆さんこんにちは♪
前話から人気急上昇中の祐希奈です♪」

ヴィヴィオ
「フェアリー強化中で影が薄いヴィヴィオです。」

メイデン
「最近、女性の方から支持が多いメイデンだ。」

カナン
「そして、前話からミニフラグ男として認定されたカナンだ…」

ヴィヴィオ
「うぅ…私の活躍が無いよ…」

祐希奈
「まぁ、仕方ないわよ。
今は私が主体の話だし。」

メイデン
「私が主体の話もあるのか？」

カナン
「ああ。メイデン視点でオールで進む話もリクエストにあるからな。」

メイデン
「それは嬉しいが…私でもつのか？」

ヴィヴィオ
「読者さんによるとメイデンが話すだけでテンションが三割上がるらしいよ？」

メイデン
「よくわからないが、ありがとう。」

祐希奈
「さて、それにしても前話は凄かったわね…」
カナン
「新記録更新だからな…」
ヴィヴィオ
「カナン君の言う通り、読者の皆さんのおかげで前話は新記録を更新しました。
ＰＶ１２０８４人、ユニーク１２０７人のアクセスありがとうございました！」
一同
「ありがとうございました！」
祐希奈
「ちなみに、前回の記録は、カナメが登場したＰＢＭで、ＰＶ１０４３１人とユニーク９８６人よ。
まぁ、こっちも凄い記録だったんだけど、ＥＸでの宣伝効果と思って公表はしてなかったんだけど…」
カナン
「何で…何で俺よりカナメが…」
カナメ
「呼ばれて来ましたカナメちゃんです♪」
カナン
「呼んでねえ！！」
カナメ
「とりあえず、祐希奈さんおめでとうございます♪」
祐希奈
「ありがとね♪
最高の気分よ♪」
メイデン
「今、人気投票を行ったら確実に祐希奈が１位だな。」
ヴィヴィオ

「カナン君は最下位かも…」
カナン
「大丈夫だ…
俺にもファンはいるから…」
祐希奈
「こんな奴応援してても良いことないから私を応援してね～♪」
カナメ
「さて、カナン君が前話で無茶苦茶をしてくれたので、メッセージが祝福とカナン君へのブーイングで一ページ進んでしまいましたよ？どうするんですか？」
カナン
「明らかに俺のせいじゃないよなあ！？」
メイデン
「きっかけを作ったのはマスターだが？」
カナン
「知らん！！」
ヴィヴィオ
「何かお祝いムード全開だけど、そろそろ質問答えないと。」
祐希奈
「そうね。じゃ…召喚！！」
パアアア…
アレン
「ん…ここは…どこだ？」
カナン
「誰こいつ…」
ヴィヴィオ
「ＥＳのアレンさん。
ＥＳの質問なんだけど、読者さんからこっちで質問を答えてくれって要望だったから。」
アレン

（何だここは…よくわからないな…
それに…この子供…理解不能だ…）
カナメ
「アレンさん喋りませんね…」
祐希奈
「お～い。ア～レ～ン？」
アレン
「お前達は誰だ…」
ガターン！！
一同
「だあああ…」
カナン
「開口一番それかよ！！」
アレン
「誰だと聞いている。
ティアナをどこへやった？
返答次第では、戦闘もやむを得ん…」
祐希奈
「いきなり大剣抜こうとしてるんじゃないわよ！！！」
バキャッ！！
アレン
「ぐあ！」
パアアア…
アレン
「…そうか、ここは出張道場という所なのか
済まないな…」
メイデン
「今のでわかったのか！？」
ヴィヴィオ
「さすが祐希ちゃん…」

カナン
「とにかく、理解したんなら進めるぞ？
いいか？」
アレン
「ああ…私に答えられることなら答える。」
カナメ
「では…
『超人的な能力を持つアレンですが、カナンに勝てますか？』
いきなりバトルですね…」
アレン
「そうだな…難しいと…思う。」
カナン
「思う？」
アレン
「ああ…今の私は不安定な状態だ。
いつ記憶を思い出すか、自分でも予想が出来ない…
故に、まだ何か出来ることがあるかもしれない。
だが、現状では難しい。」
祐希奈
「成る程ね。
でも、難しいってことは今でも勝てる要素もあるんでしょ？」
アレン
「剣撃戦なら恐らくは…」
ヴィヴィオ
「確かにアレは反則かも…」
メイデン
「私の力など及ばないからな…」
カナン
「つまり、今の売りは馬鹿力だけってことか？」
アレン

「現状でお前に勝てる要素はな…」
祐希奈
「じゃ、次ね。」
カナメ
「はい♪
『アレンはティアナのことをどう思いますか？』
バトルの次はコイバナですか…」
アレン
「どう思う…か。
大切な…仲間…だな。」
祐希奈
「あれ？そっち系？」
アレン
「そっち系の意味がわからない…」
カナメ
「つまり、好きじゃないんですか？」
アレン
「好き…雰囲気は嫌いではないが？」
ヴィヴィオ
「う～んと…一個人としては？」
アレン
「先程と同じに聞こえるが…」
カナン
「記憶無くした状態の奴に聞いてもわからねえよ。」
アレン
「済まない…」
メイデン
「とりあえずは友人と言った所か。」
祐希奈
「みたい。質問は終わりね。」

ヴィヴィオ
「今回はわりと平和に終わったね。」
カナン
「ゲストが無口だからな。」
アレン
「重ね重ね済まないな…」
メイデン
「こればかり仕方ない。」
祐希奈
「ま、質問があったらこっちに呼ぶし。」
アレン
「ああ…」
ヴィヴィオ
「それじゃあ本編が始まります。」
カナメ
「私の出番はいつですかね～。」
祐希奈
「ちなみに今回クレア達がいないのは、アレンが来たからだから次からいるし。」
カナン
「可哀想に…」
祐希奈
「さて、次は誰が消えるのか…」
ヴィヴィオ
「消えるの！？」
メイデン
「私達でも消えるのか！？」
祐希奈
「ヴィヴィオとメイデンは大丈夫よ。」
カナメ

「相変わらず安定した人気をもっていますからね♪」
カナン
「ま、お前は一発型だからな…」
カナメ
「うるさいですよ♪風間君♪」
カナン
「その名で呼ぶなあああ！！」
祐希奈
「じゃ、アレンよろしく♪」
アレン
「私が言ってもいいのか？
作品が違うぞ？」
ヴィヴィオ
「このＬＶにそんなの関係ないから大丈夫だよ。」
アレン
「そうなのか…
魔法少女リリカルヴィヴィオ…」
一同
「始まります…」
カナン
「暗！！！！」
祐希奈
「やりなおーし！！過去のアレン召喚よ！！」
パアアア…
一同
「無茶苦茶だ…」
アレン
「おっしゃあ！！そんじゃ、魔法少女リリカルヴィヴィオ！」
一同
「始まるぜ！！」

アレン・カナン
「アホの集団だな…」
祐希奈
「やっかましいわあああ！！」
バッキャアアア！！！
アレン・カナン
「ぐはあああ！！」
ヴィヴィオ
「アレンって前はあんなのなんだ…」
メイデン
「凄いな…」
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「メイデ～ン何やってんの～？」

リビングに行くと、人間サイズのメイデンがテレビを見ていた。

「見ての通り、ただの暇潰しだが…
マスターはどうなったんだ？
凄い叫び声がしたが？」

「あ～ちょっと自分探しの旅にでも出たんじゃない？」

いくら何でもキスしたなんて言えるわけがない…

「自分探しの旅…また急にだな…」

「探したくなるような出来事が起きたのよ♪」

正確には起きたのではなく、起こしたの間違いである…

「転移まで使ってか？」

「まぁ、カナンだし、バカだから。」

「マスターだからか…それもそうだな。
その内帰って来るだろう。」

カナンだから…
これだけの理由で納得されてしまう少年の悲しさ。

「ところで、伯父さんいないの？」

「ああ。市内の集まりがあるそうだ。」

「ふ～ん…」

てことは、明日まではカナンとメイデンしかいないわけか…
存分に遊べるわね♪
主にカナンで♪

「カナンが帰って来る間に晩御飯作ってあげよっか？」

「本当か！？」

「う、うん。どうしたの？」

メイデンは晩御飯発言に目を輝かせて見ている…

「いや、祐希奈の料理などしばらくぶりだからな。

つい嬉しくて…」

「そっか。ヴィヴィオも入ればもっと美味しいの作れるんだけど…」

「祐希奈だけでも十分過ぎる。
英治さんは、そんなに得意では無いし、マスターは美味しいが種類が少ないからな。」

「メイデンは作らないの？」

「わ、私か！？
私は…料理とかは作ったことが無い…」

「なんだ。苦手じゃなくて作ったこと無いだけなの？
じゃあ、練習ついでに私と一緒に作ろっか？」

「いいのか！？」

余程嬉しかったのか、身を乗り出して来る。
あの大きさだと迫力あるわね…

「もち♪」

「ありがとう！」

う～ん…やっぱりメイデンは大きくなってもメイデンね♪
めちゃくちゃ可愛い♪

「それでは、最も定番料理の日本食を作りたいと思います。
あれ？どっかで見たぞとかは無しね～。」

「日本食…難しいか？」

「全然、魚の焼き加減以外は修正がきくから難易度は１ね。」

「私にも出来るか？」

「余裕余裕。私がついてるから安心して。」

「ああ。よろしく頼む。」

「とりあえず、煮干し昆布とかでだし汁を作って～。」

「ふむふむ…」

「適当～に時間が経ったらお玉に味噌をのっけて、ゆっくりかき混ぜながら溶かす。
ちなみにカナンは濃いめが好きだから、ちょっと入れすぎぐらいで丁度いいかもね。」

「もう味噌を入れるのか？」

「まだ、だしも出てないのに入れたら誰かさんみたいにうっすぃ～のが出来るわよ？」

「それは怖いな…
味などないんじゃないか？」

何気なく酷いことを言う辺り、メイデンは祐希奈の影響を微妙に受けている…

「とりあえず、だし汁が出来るまでの間にご飯と焼き魚ね。
最近は、便利だから、誰でも設定するだけで完成ね。
はい、基本的な日本食講座終了～。」

「なんというか…わかりやすい講座だな…」

「まぁ、基本的な日本食だから大雑把に言ったからね。
とにかくこれで…」

「ただいま…」

ふふふ…帰って来たわね…

「お帰り～♪」
「お帰りマスター。」

「う…く…ああ…ただいま…」

ほっほ～…叫びそうになるのを堪えたか…
なら…

「お風呂にする?ご飯にする?」

「へ?」

「それとも…♪」

自分を指差す…

「……」
ドサッ…
無言のまま顔を赤くし、直角に倒れた…

「あ、倒れた…」

「倒れたな…」

数十分後…

ベッドに運ばれたカナンが目を覚ます…

「ん…」

「起きた?」

「一つ…聞いていいか?」

「何よ?」

「楽しいか?」

「うん♪スッゴく楽しいよ♪カナン君♪」

満面の笑みで答えてくれました…
チキショー…ヴィヴィオの真似なんかしやがって…
お前なんかなあ…
可愛いな…
やはりバカである。

「初めての感想はどうだった？」

「っ！！お前なぁ…自分から聞くか？」

「で、どうなのよ？」

何でコイツはこんなにケロっとしてるんだよ…
やっぱり乙女心は、分からん…

「途中からいっぱいいっぱいだったから、一瞬しか分かんなかったけどな、ぼ～っとしたな。」

「良かった…」

「へ？今なんて？」

「な、何でもない！！」

私と同じってことは、悪くは無かったってことよね。

「今更赤くなるなよ…
俺まで恥ずかしくなってきた…」

お互いに俯き、無言の時間が流れる…
何か話さなくてはいけない…
わかっているけど話せなかった…

「返事…」

沈黙を先に破ったのはカナンだった。

「……」

「お前への返事は、もう少し待って欲しい…」

「うん…ごめん…」

やっぱり無理やりは、ダメだったか…
しょうがないよね。

「何、謝ってるんだ？」

「だって、好きでもない相手にされるの嫌だったんでしょ？」

「嫌なわけないだろ！！」

「え…？」

嫌じゃない？
もしかして私はまだ嫌われてない？

「こんなの一回しか言わないからな！！
聞き逃すなよ！？」

真っ赤になりながら思い切り息を吸い込んだ…

「お前は可愛いし、いい奴だし、ちょっと乱暴な時もあるけど、それがあるから話しやすいんだ！
俺なんかには勿体無い女の子だよ！
そんな子からキスされて嬉しく無いわけないだろ！

未だに夢みたいな感じなんだぞ！
ぶっちゃけ、嬉しすぎるよ！
でもな、俺はそんなふうに想ってくれてるなんて知らなかったから、時間をかけて真剣に考えた後で返事を言いたいんだ！！」

カナンは一息にそれだけを言い切った…

「………」

「な、何か言えよ…
俺がバカみたいだろ…」

カナンは先程よりさらに真っ赤になる…
そうだ…何か言わないと…

「恥ずかしくない？」

あ……間違えた……

「う…うあああ！！！！！！！！！！」

カナンは部屋から飛び出し叫びながら階段を降りていった…

「マ、マスター！？
出掛けるのか！？
晩御飯はもうすぐ出来るぞ！？」

「ちょっと走るぅぅぅーーーーーーー！！！！」

扉が壊れたかと思うほどの勢いで叩きつけた音が響く…
外を見ると凄まじいスピードでカナンが走って行く所が見えた…

「やっちゃった…」
『勇気を出して言ってくれた相手に何で止めさすんですか…』
「たまたま口から出たというか…」
『たまたま出た言葉が必殺とは…
困った口ですね…』
「あははは…我ながらさすがだわ…」

後で謝っとかないと…
ていうか、アイツ今日帰って来るかな…
お詫びも兼ねて、部屋の掃除でもやろっかな…
二人の夜はまだ続く…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一方ヴィヴィオはスバルとティアナにたかられていた…

「ねえ、ヴィヴィオ。目覚めたカナンと何か進展はあったの？」

「進展って…カナン君起きて1日しか経ってないですよ…」

「起きた時ヴィヴィオを助けてくれたんでしょ？
何もないなんてことはないんじゃない？」

「あはは…さ、さぁ…？」

「あったんだ～

お姉さん達に話してみようか。」

「無理です！！」

「そういう態度とると、祐希奈に言いつけるわよ？」

「な、何をですか？」

脅しだ…私には何もない。

「もちろん、私達が今まで調べたヴィヴィオの秘密の数々を…」

秘密の数々！？

私そんなに何かしたのかな？

こ、怖いよ…

「私は隠してることなんて…」

「スバル、祐希奈に連絡つないで。」

「うん。え～と…」

目をつむり、いかにも念話を始めそうだ！

「わぁー！ちょっと抱きついちゃっただけです！！」

「どんなふうに？」

「心配だったので泣いてました…」

「これは、＋だね。
カナンはグラついてると思う。」

「そうね。女の涙は効くわよね。」

「……」

この二人ってこんな人だっけ？
目の色が違うような…
ヴィヴィオは、コイバナを前にした女の恐ろしさを初めて学んだ…

「ヴィヴィオ～いる～？」

「あ、ママ。お帰りなさい。」

扉が開いて現れたのは、久しぶりに会ったなのはママ。

「久しぶりだね。まずは、ＡＡＡランク試験合格おめでとう。
クロノ君が誉めてたよ。」

「えへへ。ありがとう。」
そして、少しママの顔が暗くなった…
何かあったのかな？

「襲撃の話も聞いたよ…
助けにいけなくてごめん…」

「ママも忙しいから仕方ないよ。
ヴィータ副隊長が助けてくれたから皆怪我もないし、謝らないで？」

「ありがとう…
お詫びってわけじゃないけど、フェアリーの強化、私も協力するからね。」

「わぁ。ママが協力してくれるんなら砲撃強化も期待できるね！」

「フェイトちゃんも時間が空き次第手伝ってくれるから、仕上がりは期待してていいよ。
ただ、かなり強力になっちゃうから、明日私と模擬戦して馴らそうか？」

ママと模擬戦が出来る…
私の力を思い切り試せる…
故に、聞く…

「全力でやるよ？」

「うん。私もリミット外すよ。
さすがにヴィヴィオより下のランクじゃきついからね。」

「何段階外すの？」

「オールリミットブレイクだったらどうする？」

その言葉に、恐怖ではなく、歓喜に満たされていく自分がいる…
ママと全力でやれる…
今から、明日が楽しみで仕方ない！

「ありがとうママ！！」

「にゃはは。お礼ならはやてちゃんに言って？
最近は、地上も静かになってるから昔よりは楽になったとはいえ、
お願いしなくちゃいけないことには変わりはないからね。」

「うん！後から言ってくるね！！」

「それじゃあ、私は行くから、夜更かししちゃダメだよ？」

「うん！」

明日は模擬戦♪
ママと模擬戦♪
楽しみだなあ～♪
上機嫌ではやての部屋へと向かった。

「ティア…明日六課壊れるんじゃないかな？」

「そうね…私もそんな気がしてきたわ…」

元祖、全力全壊魔法少女と新、全力全壊魔法少女がフルパフォーマンスで戦うのだ…
何も損害がないなんてことは有り得ない…
気が重くなりつつも二人は、眠ることにした。
平和の有り難みを感じるために…
▼▼▼▼▼▼▼▼▼
カナンが帰って来たのはあれから二時間後だった…

「はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…」

「お帰り～。」

「遅かったな。晩御飯が冷えてしまったぞ。
少し待ってくれ。」

メイデンは、覚えたばかりの電子レンジを使い、晩御飯を温め直す。

「それは悪かった…。けどな…」

「うん。まぁ、今回は私が悪かったわ…」

「何をしたんだ?」

メイデンが温め直した晩御飯をカナンの前に持って来た。

「ありがとな。
理由は、ちょっとな…」

「カナンに止めをさしたとだけ言っておくわ…」

「マ、マスター!?死んでいるのか!?」

「何でそうなる!!
どう見たって生きてるだろうが!!」

「メイデン…私はカナンの中身を殺してしまったのよ…♪」

「中身!?マスターは中身が死んでいるのか!?」

「そうだよなあ…やっぱお前はそういう奴だよなぁ!!」

「何を今更言ってるのよ？
あの程度の事でカナン弄りが終わるなんて思ったならもう一度人生最初からやり直しなさい♪」

「マスター！！結局マスターは死んでいるのか！？」

「主に脳がね♪
だから、カナンはバカなのよ♪」

「そうか…マスターがバカなのはそのせいだったのか…」

「死んでねえ！！納得するな！！」

「自分が死んだとも気付かずにいるなんて…♪」

「マスター…気付かなくて済まなかった…」

「気付かなくて当たり前だ！！」

「だから、自転車にも乗れないのよ…♪」

「ぐふっ…あ、あれはだな…時間が足りなかっただけで…」

「じゃあ、今から練習すれば？」

「出来るかあ！！！」

「今なら私が手伝ってあげるわよ♪
思い出の写真も撮ってあげるわ♪
題名は、カナン奮闘伝ね♪

『俺は今日、自転車に補助輪なしで乗れるようになった。
これも祐希奈様のおかげだ。
死ぬまで尽くすことに決めた。』
やったわね♪」

「俺は自転車ごときで何で人生を決めてるんだよ！！
俺の人生どんだけ価値無いんだよ！？」

「ん～価値があるのはセミの寿命くらい？」

「俺の人生の価値は二週間すか！！」

「じゃあ…血小板？」

「1日！？減ってるし！！生物ですらねえし！！」

「そして、今日その価値は終わったわね♪」

「アレか！！アレでか！？」

「済まない…二人の勢いについていけない…」

「全く…カナン最低…」

「今メイデン二人って言ったぞ！！
明らかにお前も入ってるからな！？」
ガシッ…ズルズル…

「よく喋る口ね…」

「ちょ、ちょっと祐希奈さん!?
ここ風呂場ですけど!?
しかも、まだ水しか入ってないですけど!?」

「頭冷やして来なさい♪」
ガボッ!!

「ごぼぼぼぼぼ!!!」
バシャッ!!

「はい、冷えた♪」

「普通に死ぬわあ!!」

「え?もう一回冷やしたい?仕方ないわね…」

「言ってないっす!!!」

「Ａｈａｈａｈａ!!!」

「な、何故に英語!?ぎゃあああああああ!!!!!
拳燃えてる!!それ冷やせない!!燃えます!!」

「萌える?変態ね♪」

「ちがーーーう!!!」

バッコーーン…

「ふぅ…疲れた。

先に上に上がるわよ？」

「……」

「マスター…頑張れ…」

「ああ…」

祐希奈は全くいつも通り…もしかして…あの暴力って…好きだからやってたのか？

だとすると…俺が暴力振るわれてるのってかなり前からだよな…

そんなに前から好きだったのか！？

鈍！！俺、鈍！！！

「メイデン…乙女心ってわかるか？」

「漸く気付いたのか…

だが、生憎私は乙女として生きていなかったのでな。

然程わからないが、私が今の祐希奈の立場なのだとしたら…早く部屋に来て欲しいと思う。」

「何で？」

「マスターに会うために止まりに来たんだぞ？

一緒にいたいと思うのが普通だろう。」

「じゃあ、ここに入ればいいじゃないか…」

「ここには私がいるだろう？

二人きりにはなれない。」

何でそんな回りくどいことをするのかわからない…

「直接言えば…」

「マスター…祐希奈だぞ？」

「アイツは直球で言うタイプだろ？」

こう言うとメイデンは、大きなため息をついた…

いや、だって祐希奈だろ？

「直球で言えるのは、日常だけだ。

はっきり言うが、祐希奈は奥手だ。」

「奥手！？アイツがか？」

誰がどうみても奥手には見えないだろ…

「ああ。奥手で無ければ何故、今まで祐希奈が気持ちを隠していたのか理由がない。」

「でも、今回はアイツから…」

キスは確かにアイツからだった…

「それは恐らく、今まで溜まっていた分が一月も会わないという負担で溢れ出た結果だろう…」

「…成る程。」

メイデンさん…貴女は十分乙女心を理解していらっしゃる気がしますが…

「わかったら早く行ってやれ。
痛いだろうがな…」

「痛い？」

「いや、何でもない…気にしないでくれ。」

「あ、ああ…ありがとな。
参考になったよ。」

「マスター…もう一つの方は気付いているか？」

「もう一つ？」

「やれやれ…何でもない。」

「そうか？じゃあ行ってくる。」

やはり気付いていないな…
まぁ、あまり期待はしていなかったが…
急に挟まれると苦労するぞ…マスター。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「祐希奈何…」

「遅いわああーーー！！！」
バッキャアア！！！
「がはああ！！！」
痛いって…このことか…
メイデン凄えな…
「たくっ！早く宿題やるわよ！」
「そうだな…」
再び二人で並び勉強を始める…
コイツが俺をか…
思わず手を止めて横顔に見入る…
整った顔立ち、長いサラサラの銀髪、そして小さな口…黙ってたらモデルでいけそうな気さえする…
祐希奈の顔がこちらを向き、髪が靡き甘い匂いがした…
「さっきから何見てんのよ…」
「お前、良い匂いだな…」
「っ！！そういうことを…」
「ん？」
「面と向かって堂々と言うなあああ！！！」
ドゴッ！！

「がはっ！すんません…」

「もういい！寝る！！」

バンっと乱暴にワークを閉じ、バッグをあさりパジャマと歯ブラシを取り出し始めた…

「風呂は？」

「明日の朝入る！！」

そう言って部屋から出ていった…

「匂いの話はダメなのか？
乙女心…複雑過ぎるぞ…」

乙女心がわかる本…っとか売ってないかな…
アホなことを考えていると歯磨きと着替えを終えた祐希奈が帰ってきた。

「アンタも早く歯、磨いて来なさい…」

「俺もか！？」

まだ起きているつもりだったのに…

「私が寝るんだから当たり前でしょ？」

「いや、当たり前って…俺関係ないだろ？」

「ここで寝るんだから関係あるわよ。」

「……はい？」

今何か幻聴が聞こえたような…

「私の顔は一度まで…よ？」

短！！せめて二回にしません！？

「俺は男だぞ？」

「私と寝るの…嫌？」

そんな俯いて言われたら断れないだろうが…

「何するかわからないぞ？」

「それは大丈夫。カナンだし。」

信じているから大丈夫なのか、ヘタレだから大丈夫なのか…

いや…ヘタレと信じているから大丈夫なんだな…

ちょっと泣けてくる…

「わかったよ…」

「じゃあ、さっさと行きなさい。」

「へいへい。」

カナンが部屋から出ていくのを確認したのかアシェルが話す。

『祐希奈…今日は随分頑張りますね。』

「何事も勢いよ。」

『確かに今日の勢いを逃すとまたしばらくは停滞しそうですね。』

「うるさいわね…

どうせ、心臓バクバクしてるわよ…」

あんなこと…普段に言えるわけないじゃない…

「カナン…何もしないわよね？」

『キスでアレですから不可能でしょう。』

「確かにね…」

ヴィヴィオも加わったら本当にカナンは崩壊するかもしれないわね…

十分後、カナンが部屋に戻り灯りが消えた…

「布団…足りてるか？」

「ええ…」

カチカチと時計の針の音がやけに大きく聞こえる…

「祐希奈…」

「何よ…」

「鈍くてごめんな…」

「ホントにね…」

またしばらく無言が続いていく…

「返事はね…」

「ん？」

「役者がそろうまで聞かないから…」

「役者？」

「おやすみ。激鈍カナン…」

「役者…わかった！」

「え？」

「いや…でも恥ずかしいな…」

「は？」

何を言ってるんだろう…

「機動六課全員の前で返事を言うんだろ？」

「違うわあああ！！！」

ドゴッ！！！

「がはあああ！！！」

カナンは意識を飛ばした…

全く究極のバカね…

「でも…」

ごそごそのカナンの横に動く…

「そういう所が好きになったのかもね。」

隣で目をつむり、まどろみの中に落ちていった…

第九話　巣立ち

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ん…朝か…んん!?」

窓から光が差し込み目が覚めると同時に右頬に吐息を感じた…
この時、完全に顔を向けなかった自分を称えたい…

「すぅ…すぅ…」

「ったく…無防備すぎる…
襲われても文句言えないぞ…」

一瞬だけ目に入ったのは、胸元まではだけたパジャマ…
何かの拍子にボタンが取れたのだろう…
凶悪的に可愛い寝顔とその姿は、カナンでさえもう一度視線が行きかけた程だった…
しかし、そこは並の精神をしていないカナン。
無理やり理性を押さえつけ、視線を向けずに布団をかけなおし、部屋から出た…
理由はもちろん。

「あんなベッドで寝てられるかっつーの…」

次に見たら、良くて全力ダッシュ崩壊。
最悪…襲うかもな…

「って俺は、何を考えてるんだよ…

相手は祐希奈だぞ…」

自分が考えたことに苛立ち、後頭部をガリガリと書きながら階段を降りていく。

「随分早いな。
おはようマスター。」

「お、おはよう…」

何でメイデンが起きてるんだ?
いつもは最後なのに…

「私が起きているのが不思議そうだな。
私は必ずしも睡眠を取る必要はない。
融合機の睡眠は、情報の処理が主だ。
だが、幼いリィンフォースやアギトと違い、私は成熟しているからな。
情報処理など生活中の合間で十分だ。」

「へぇ〜。でも今までは寝てたのに、どうしていきなり起き出したんだ?」

「どれだけ掘り出されているか調べていたんだ。」

「ベルカの伝説の武具と防具をか?
そんなこと出来たんだな。」

「と言っても私と親しい者だけだがな。
結果だが、聖剣や神剣の類いは問題なかった。

魔剣などは好戦的な者も多いが、それでも奴等には回収されていない者ばかりだった。
管理局に回収された者も含めて皆元気だ。」

「元気って…やっぱりお前みたいな管制人格がいるのか？」
「そうだな。性格もそれぞれだ。
ロンギヌスは、魔槍と呼ばれてはいるが、数少ない常識人だ。
神剣ランドグリーズの人格は…神剣だがうるさいな…」

ため息をついている所を見ると、ランドグリーズとか言う管制人格は、かなり苦手らしい…

「簡単に言うとどんな感じで話すんだ？」

「そうだな…話し始めると、止まらずほぼ永続的に話し続ける…
今回は強制的に交信を切った。」

「マシンガントークってやつか？
一方的に話し続けるっていう…」

「ああ…それが近いかもしれないな…はぁ…」

再び大きなため息…思い出すだけで疲れるらしい…
凄い管制人格もいたもんだな。

「結局、何が消えたのかわかったのか？」

「いや、大して進展はしていない。」

「大して？何かあったのか？」

「私の姉上が消えている…わかったのはそれだけだ。」

「姉上！？」

メイデンに姉妹が！？
っていうか融合機にそんなのあり得るのか！？

「私と同類の存在として作られた、カラドボルグだ。
同類とはいえ、向こうが先に生まれていたからな、一応は姉ということにしたんだ。
その姉上が消えている…」

「…敵に回った可能性は？」

その問いかけに、メイデンの顔が悲しみに歪んでいく…

「生まれた当初はいい人だった…
だが、姉上は…壊されてしまったんだ。
より強い力を求めた研究者によってな…
それからだ…姉上が魔剣と呼ばれるようになったのは…
取り込んだ主と破壊の限りを尽くし、最終的には、私の前主の手によって封印された。」

こいつらは姉妹なのに、戦ったのか…
どれだけ辛かったことだろう…

「だが、その事件でわかったこともあった…
暴走すれば、通常より強い力を発揮出来るとな…
そして、次こそは暴走すら制御出来ると信じた愚か者がいた…」

「もしかして、それでお前は…」

「後はマスターが一番知っている筈だ…」

力を制御する鞘を破壊…結果…メイデンは姉と同じ道を辿った…

「辛かったな…」

「確かに辛かったかもしれないが、それを経てマスター達に出会えたんだ。
今は…幸せだ。」

そう言って儚く笑った…
嬉しさと悲しみがない交ぜになった笑顔だった…
姉が封印から解かれたのだとしたらまた自分が封印しなければならない。
その悲しみをまた背負わなければならない…

「メイデン…」

「…何だ?」

「お前の姉さんは、俺が助けてやる。」

「…気持ちは有りがたいが、無理だ…
力を出し惜しみして勝てる相手ではない。
姉上の力は、私より強い…だが、使用者とのシンクロは低い筈だ。
だから…今度は消滅させよう…」

こちらに背中を向けながらそう言い切った…

「もう…いいだろ？」

「……」

「お前はもう十分頑張って来た。
お前だけ、そんなに頑張らなくてもいい。」

「しかし…」

「頼りないマスターかもしれないけど、頑丈さは俺の取り柄だ。
お前が説得成功するまで、踏ん張ってやるから、俺も頑張るから、
姉さんのことを諦めるな。」

「うぅ…」

「お前は、いい子過ぎるからな。
祐希奈はちょっとアレだけど…ヴィヴィオだってたまにはワガママ
言うんだ。
お前も言え。
日頃全然言わないんだ。
たまのワガママくらい、何でも叶えてやるから。」

「…たい。」

「ん？」

「私は…姉上を助けたい…優しかった姉上と…もう一度…一緒に…
過ごしたい…」

肩を震わせ、振り向いたメイデンの瞳から涙が流れていた…
何百、いや、何千年かもしれない。我慢していた願い…

「任せろ!!
姉さんと過ごすなんて姉妹なら当たり前だ!
そんな願いくらい、俺が叶えてやる。」

「本当に…ありがとう…
もう…マスターには逆らえないな…」

涙をごしごし拭いつつメイデンが笑った。
先程とは違う、綺麗な笑顔だった。

「逆らってもいいけど…」

「けど何だ?」

「乙女心のご教授をお願いします!!」

頭を下げると無言の空間が完成した…
メイデンがポカンとしている。

「ふふ…あはは!わかった…出来る限りの援助を約束する…あはは!」

「わ、笑うことないだろ!」

「す、済まない…だが…くすくす…
代価が乙女心の教授とは…さすがは私のマスターだ…あはははは!」

「うるせえよ…」

「くすくす…では、一つアドバイスだ。
早々に前回の強さを取り戻した方がいいな。」

「へ？何で？」

「マスターを目指して強くなったんだぞ？
ところが、今のマスターは鈍っている。
前回の半分も実力は出ていない。」

「う…」

確かに筋力はそれなりに戻ったけど、反応や空間突破の形成速度、体捌き…以前より明らかに弱くなっている…

「目標の人物が自分より弱くなっていて何も思わないわけはないだろう？」

「な、成る程…確かに祐希奈はそういうタイプかもしれない…」

返事とか以前に嫌われたら意味が無い…

「祐希奈だけではないがな…」

「へ？」

「まぁ、その内苦労することだろう。
私も協力はするが、答えは自分で出せ。」

「ちょ、ちょっと待て、今祐希奈だけじゃないって…」

「どうだったかな…とにかく、まだ朝も早い。
早速訓練に行こう。」

「まさか美鈴か?祐希奈みたいに絡んでくるし…
神楽は違うよな…」

「何故外野を狙うのかがわからないがな…」

「外野!?」

「もうヒントは無しだ。自分をあまり格下げしないことだな。」

扉が閉まり先に行ってしまった…

「いや、だって俺みたいな男に…祐希奈がついたわけか…
まさかヴィヴィオ…いや、いくら何でも知り合った期間が短い…」

「ふぅ…恋に期間は関係無いというテレビをマスターと一緒に見たような気がするが…
思い出して欲しい物だな…」

悩みながら進むアウトフレームのメイデンは、道行く人を振り返らせながら歩く。
その十分後、カナンがメイデンに追い付き、人々（主に男性）の殺意を浴びながら林へと向かった。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

所変わって、機動六課訓練場

「ん～。」

直線になるように開脚し、前に倒れる。
止まる事もなく地面に近づいていく。

「うわ～ヴィヴィオ身体柔らかいね。」

「ホント、よくそこまで曲がるわね…」

「身体柔らかくないとブリッツアクションを生かせないので、柔軟を頑張ってたら自然と出来るようになりました。」

そして、高機動魔法の同時行使という無茶苦茶な使用方法が可能となった。

「「へぇ～」」

「あ、なのはさん。おはようございます！」

「「おはようございます！」」

向こうでギンガさんを筆頭にライトニング三人の声がした。
視線を向けるとママとシャーリーさんがいた。

「ママ、シャーリーさんおはよう。」

「「おはようございます」。」

「「おはよう。」」

軽く挨拶を交わし、ママが近づいてきた。

「はい、フェアリーだよ。以前と比べて大幅に出力が上がってるから、気をつけてね？
でも、仕上がりは完璧だから後はヴィヴィオ次第。」

「ありがとう。ママ、シャーリーさん。」

再び自分の手に戻ってきたパートナー。
私の視線に答えるようにキラリと光る。

「おかえり。」
『ただいま帰りました。』
「調子はどうかな？」
『最高ですね。
これで、私がマスターの足枷にはならなくて済みそうです。』
「足枷なんてそんなこと思ってないよ。」
『ですが、私の力が足りないばかりに、マスターを何度も危険な目に合わせています。
特に、今回の相手に関しては完全に私の力不足でした。』
「私の技術が足りないだけだよ。
フェアリーは悪くない。」
『しかし、全く悪くないということにはなりません。
ですが、今の私ならマスターに十分答えることが出来ます。
安心して思い切りやってください。』
「うん。ありがとう。」

ここまで私の事を思ってくれてる…

期待に答える為にも頑張らなきゃ！

「ヴィヴィオ、フェアリー、二人は無茶が得意だけど、今回の強化でもっとそれが効くようになっちゃってる。
するなとは言わないけど、頭に入れておいて。」

「うん。」
『了解しました。』

「なのはさんが言っても説得力ゼロですよ…」

シャーリーさんが呆れている…
いや、前線メンバー全員だ。

「にゃはは…何の事かなあ？」

「小学三年生から集束砲、四年生で危険なベルカ式の投入、禁止されていたエクセリオンモードの使用、改修後はエクシードになりマシになりましたが、ブラスターシステムの追加、ゆりかご内での長期使用、最大魔力値が低下したにも関わらず未だ現役、さらに…」

「ごめんなさい…」

ママがシャーリーさんに負けた…
なかなか見れる光景では無い。

「ふぅ…お説教をしにきたわけではないので終わりにします。
さて、模擬戦の場所はいつも通りの街、結界も展開しますから遠慮なくやってもらって結構です。
でも、サードモードのフルドライブは禁止です。

なのはさん…あくまでも慣らしですからね？」

「は～い…気を付けます…」

とは言うものの、多分無理だとメンバーは理解していた…

あの親子が戦って加減なんか出来る筈がない…

シャーリーがコンソールを操作し、街が出現、ヴィヴィオとなのは、十メートルを挟んで対峙する…

「行こうか、フェアリー」

『了解です。マスター』

「セットアップ！」

『起動開始！』

「こっちもだよ！レイジングハート！」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ』

「セットアップ！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ　Ｓｅｔ　ｕｐ！』

二人の姿が光に包まれ、バリアジャケットを装着、光が収まる…

「あれ？ちょっと違う…」

ジャケットのインナーが黒くなりっていた…

「ママ、これは？」

「もうそろそろ私の格好からは卒業かなってね

これからは、高町ヴィヴィオ個人として有名になって欲しいな」

ヴィヴィオが上位試験に受かったら巣立ちだと思っていた。
もう、ヴィヴィオは一人で歩いて行ける…
私から手を放す時が来た…
それだけの話

「もう、私と同じ場所だよ
私についてくるんじゃなくて、自分の力で頑張って」
それは、自分もまたヴィヴィオを対等の立場として認めるということ。

「なのはママ…」

「…これが、母親としての最後の教導」

「うん…」

「これが終わったらどこが悪かったのかは言ってはあげるけど、どうすれば良いのかは自分で考えようね
ヴィヴィオなら出来る筈だから」

「うん。今までありがとう…なのはママ…お世話に…なりました…」

お別れじゃないのに…
何故か涙が止まらない…
悲しい…いや、違う…

「じゃ…やろうか！」

「うん！」

私は嬉しいんだ…
対等と認められたこと、娘ではなく高町ヴィヴィオとして見てもらえたこと、嬉しくって泣いてるんだ…

「高町ヴィヴィオ…行きます！！」

「受けて立つよ！！」

互いにデバイスを構え、相手に向ける…
その先に灯るのは、己が主砲！

「「ディバイーン！！」」

集まっていく青色と桜色…

「「バスター！！！」」

放たれた砲撃は、互いに衝突…
激烈な光と共に母と子としての最後の戦いが始まった…
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

炸裂する光…
光は、二人の視界を一瞬白に染める…
しかし、二人は構わず動く

「アクセルシューター！！」

展開される５０のスフィア…
その全てを確認、ヴィヴィオが唱える術は…

「行くよ！」
『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ！』
「させない！」
幾多の残像を残しながらなのはに突っ込むヴィヴィオにスフィアが降り注ぐ…
「アクセルランサー！」
『Ｂｌｉｔｚ　Ａｃｔｉｏｎ！』
光の槍を自身の背後に展開、さらに四肢を高速化し、スフィアの雨を避け、肉薄…
最後のスフィアを避け、そのままの勢いでデバイスを振りかぶる！
「セカンド！」
『了解！』
瞬間で刃を展開、一切無駄の無い動き。
「プロテクション！」
ヴィヴィオの速度にすら反応し、刃を防ぐ。
「っ！」
筈だった…
接触の瞬間ヴィヴィオは刃を引きなのはの背後へと走り抜ける…
振り向き様に展開される魔方陣。

「サンダー！スマッシャー！！」
『Ａｃｓｅｌ　ｌａｎｃｅｒ』

「止まると的だね…」
『Ｆｌａｓｈ　ｍｏｖｅ！』

直撃の瞬間に高速化し、上空へ回避する。
背後に響く風切を斬る音…
フェアリーが弧を描きながら飛翔していた。

「はぁ！！」

だが、なのはの目はしっかりと捉えている
レイジングハートの本体で殴り付け吹き飛ばす。

「ウィンド！」

「甘いよ！」
フェアリーを囮に使ったその一撃さえも見切る。

「インパクト！！」

「はっ！」

右に回転…
振り向く力を利用し、裏拳のようにヴィヴィオの拳の方向をずらす。
消滅する風…フルドライブ状態では無いため拳のコーティングに過ぎない。
故になのはの体勢すら崩せない。

向けられるレイジングハート…

「来て！フェアリー！！」

『Ｂｒｅａｋ　ｗｉｎｄ！』

「っ！！」

『Ｆｌａｓｈ　ｍｏｖｅ！』

音速を越える速度で突っ込んでくる刃をギリギリで避ける…

フェアリーはヴィヴィオの手に吸い込まれるように戻る。

突撃の勢いを殺さず回転…

両者同時にカートリッジ排出…

「エクセリオン！」

「ウィンド！」

抜き打ちに対して放つは斬撃…

「バスター！！」

「スラッシャー！！」

超威力の砲撃に、勢いと体重を乗せた斬撃がぶつかる！

やがて、拡散するように桜色の砲撃が弾けた。

ヴィヴィオが砲撃を叩き斬った結果だった…

両者の一瞬動きが止まり、再び接近する。

「はぁあああ！！」

「……」

疾る剣閃、袈裟に横薙ぎに斬り上げ…
そのことごとくを受け、避け、弾く…
接近戦はなのはの本職では無い。
しかし、そんなことを微塵も感じさせずヴィヴィオの猛攻を冷静に捌く…

「く…」

「……」

刺突…しかし、それも横殴りの一撃に阻まれそれる…
おかしい…
私が確実に押してるのに、なのはママは、涼しい顔だ…
そっちがその気なら！

「はぁあああ！！」

「我慢が足りてないよ！！」

力を込め、上段から振るった斬撃は、軽いバックステップで回避される…
カートリッジ排出、再び抜き打ち！

「エクセリオン！バスター！！」

放たれた砲撃は、ヴィヴィオを…通り抜けた…

「なっ！」

冷静だったなのはの表情が驚愕に変わる…

「捕まえた！！」
『シューティングモード！』

目の前には、レイジングハートをがっちりと掴んだヴィヴィオがいた…
誘ったつもりが誘われていた…
突きつけられる杖…カートリッジが排出され光が灯る！

「エクセリオン！！」

回避不可能…
しかし、なのはもただで貰うわけにはいかない…
指をヴィヴィオへ向ける。

「クロスファイヤー！！」

螺旋を描きながら集まるスフィア
それは、砲撃へと姿を変える…

「バスター！！」

「シュート！！」

巨大な爆煙…
お互いに離れるように吹き飛んでいく…
至近距離で受けたにもかかわらず、受け身をとり、即座に起き上がる。

「誘ったつもりが誘われてたとはね…
びっくりしたよ…」

なのはは、砲撃をくらった腹部を押さえながら相手を誉めた。

「私も、迎撃するなんて思わなかった…」

く…威力では勝ってた筈なのに…
頭にくらったせいかな…
ダメージが大きいや…

「ヴィヴィオ…まだ、使わないの？」

「……」

「リミット…まだ外してないでしょ？」

「えへへ、ごめんなさい。
今までの力でママと勝負したかったから」

「ヴィヴィオ…」

「じゃあ…いくね…リミット…ブレイク！！」

瞬間、溢れる魔力…
聖王の鎧の出力が上昇していく…虹色の光が視認できる程にまでになった時、改めてヴィヴィオが構える。

「ディバイーン！！」

明らかに今までの魔力の集束量ではない…
その威力は元祖を越える。

「バスター！！」

放たれた砲撃はなのはには当たらず、大きくそれビルを撃ち抜いた…
さらに、ヴィヴィオを吹き飛ばし転倒させる。

「あれ？」

「ヴィヴィオ…頑張って」
『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ！』

転倒したヴィヴィオに対して容赦なく撃つ！

「わああ！」

着弾…しかし、直撃を受けたヴィヴィオは、先程と変わらず転けたままだった…

「アクセルシューター！」
３６０度を囲うように展開されるスフィア…
降り注ぐ！

「フェアリー！」
『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ！』

密集され逃げ場を無くされる前に上空へ離脱、再びデバイスをなのはに向ける！

「ディバイーン！バスター！！」

放たれる砲撃になのははは構えも取らない…

またも大きくそれ、なのはから四メートル以上右に着弾した…

「なんで！？」

さっきより力を込めて押さえつけたのに方向を制御出来ない！

「セカンドモード！」

『了解』

砲撃がダメならこっちで！！

一気に接近、カートリッジ排出！

「ウィンド！スラッシャー！！」

「プロテクション」

全力で振り下ろした一撃は、プロテクションに阻まれる…

「え…？」

力を込めようとしたのに私は飛んでいた…

「ヴィヴィオ、フェアリーは今までと同じじゃないよ？」

同じじゃない…

じゃあ戦い方を変えるのかな？

至近距離で向けられるレイジングハート…

「最後にヒント、フェアリーに任せるんじゃなくて、自分でも…だよ？」

『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ！』

「きゃあああ！！！」

直撃…バランスを崩し、地面に落ちていく…

落下中に体勢を整えるころには第二撃が集束されていた。

「エクセリオン！」

「自分でも頑張る…わかった！！」

『さすがです！』

「バスター！！」

迫る砲撃、それを見据えカートリッジ排出…

「集中…」

『そうです』

私が風を纏める…

ただの暴風だった風が刃に纏われ、束ねられていく。

「ウィンド！スラッシャー！！」

袈裟に斬り下げられる一撃は、砲撃を斬り裂き拡散させる！

「そうだよ！」
『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！』

「ありがとう！ママ！！」
『では、お返しですね。
シューティングモード』

お互いにカートリッジを排出し、デバイスを相手に向ける！

『『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ　ＥＸ！』』

「「ディバイーン！バスター！！」」

衝突する砲撃と砲撃…
しかし、変化が起きる…

「撃ち抜くよ！」
『了解！』

ヴィヴィオの砲撃がなのはの砲撃を押し返す。

「強い…レイジングハート！」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ！』

「行けーー！！！」

ついに砲撃を押しきり、なのはへと直撃をくらわせる！

「ちょっと…びっくりしたかな…」

爆煙の中から声が響く…
風にさらわれ煙が晴れた時、なのはの姿が変わっていた…
エクシードモードへと…

「フェアリー…今の状態でどれだけもつ？」
『砲撃勝負では話になりませんね。
近接にしても一撃で撃墜される確率は高いです
良くて１分、最悪１０秒と言った所でしょうか？』

話している間にもレイジングハートが持ち上がる…

「…やるしかないか」
『マスターにしては潔い選択ですね』
「だって、あの魔力だよ？」

集束されていく魔力はリミットを解除した自分を遥かに凌ぐ量…
潔くもなると言うものだ。

「エクセリオン！！」

「フルドライブ！！」
『了解！』

姿が変わりレオタード姿になる…
即座に集まる風…

「バスター！！」

「フェアリー！」
『Ｂａｒｓｔ　ｍｏｖｅ！』

ヴィヴィオが消えた次の瞬間、砲撃が放たれ、着弾し光が炸裂した後、３０メートルが更地となった…

「一撃必殺か…」

『来ますよ！』

圧倒的な加速で飛び上がったにもかかわらずなのはの目はしっかりとヴィヴィオについてきており、大量のスフィアが待機されていた…

「行くよ！」

『はい』

爆発的な加速と共になのは目掛けて突っ込む！

「アクセルシューター！！フルシュート！！」

全てのスフィアが自分を標的にしている…

だが、自分には避けきる自信がある！

「ツインドライブ！出来るよね！」

『もちろんです！』

加速に加え、四肢の動きも高速化…

動き回るヴィヴィオにスフィアは追い付けない…

しかし、これはなのはの放ったスフィア、ターゲットが放つような直線的な動きだけではない。

全てのスフィアが上に移動…豪雨と化し降り注ぐ！

「その程度なら！」

前面で風を炸裂させバックステップ。
豪雨を避けきる！
が、突如スフィアが別れる…

「ドライブ！！」

その中から現れたのはＡＣＳを展開したなのは。
前面のスフィアは、動きを見せないための目潰し…

「お願い！」
『Ｗｉｎｄ　ａｒｍ！』

風を両掌に集束、胸の前でＡＣＳを受け止めるが、身体ごと持っていかれる…

「ブレイク！！」

「サード！ウィング！」
『Ｗｉｎｇ　ｆｏｒｍ！』

「シューーーート！！」

アクセルチャージャーの先端から砲撃が放たれる瞬間、思い切り翼を羽ばたかせ舞い上がる。
追跡するようにスフィアが来た…

「シューティング！！」
『了解！』

セカンドフルドライブを解除、服装がレオタードからドレスタイプの物へと変化する
サードモードに使っていた魔力を砲撃に集め、カートリッジも使い一気に巨大化…

「スターライト！ブレイカー！！」

巨大な光は、スフィアを全て飲み込み直進する。
その光を見もせず後ろにデバイスを向けカートリッジをさらに排出！
そこにはなのは…高速移動魔法で回り込んでいた。

「「バレル展開！！」」

放つはフォースバースト、お互いに手加減などありはしない…

『『Ｂａｒｒｅｌ　Ｓｈｏｔ！』』

先端から衝撃波が放たれ、激突…周囲のビルが砕け散る！

「「エクセリオン！！」」

バレルから四つの砲撃が放たれる。
ぶつかりその身を削りあう…

「「バスターーーー！！！」」

砲撃を纏めるように中心からの大砲撃！
凄まじい光が溢れ、衝撃に限界を感じたコンピュータがアラームを流すが、二人には聞こえていない…

「ブラスターリミット1！
リリース！！」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ！』

「リミットオフ！バースト！！」
『リミット解除！』

なのははブラスターリミットをリリース…
ヴィヴィオは、鎧のリミットを解除…
さらに魔力が上がっていく…

「ブラスター！！！」
「バースト！！！」

「「シューーート！！！！」」

砲撃が巨大化…スターライトブレイカーをも凌ぐ威力となり、炸裂する！！！
二人の周囲は最早なにも残っていない…
魔力衝突に耐えきれず、全て倒壊したからだ。

「なのはさん！！ヴィヴィオ！！ストップ！ストップです！！！」

シャーリーが叫ぶが、当然の如く聞こえていない…

「ブラスター３！！！」

「リミット！フルブレイク！！！」

二人の存在がフィールドを歪ませ、軋み、破壊していく…

立ち上る魔力は、測定不能の領域…

「全力！！全開！！！」

ブラスタービットが展開その数、四機…
その全てに集束される桜色…

「目覚めよ！破壊の妖精！！！」

防御に展開されていた己の聖王の鎧の力さえも攻撃に回し、集束されていく虹色…

「スターライト！！」

「ディストラクション！！」

全く同じの動きで掲げられ、巨大な魔力球が極光を放つ…
もう、目の前の相手以外はどうでも良かった…
今はただ、放つだけ！

「「ブレイカーーーーーーー！！！！！！」」

放たれる集束砲撃は、混じり合いながらぶつかり、衝撃波を起こし、フィールドを砕き、崩壊させる…
放った持ち主すらも飲み込む光…
ドームのように広がり、他の人物から見たそれは、地上に出来た太陽に見えたという…
▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「「……」」

無言で立ち尽くすこと十秒…
そして、同時に倒れた…

「私、助けに行く！」

「はふぅ…」

スバルが駆け寄る中、もう一人倒れた…
崩壊したフィールドを手動で回復させながら、ギリギリで持たせたシャーリーだ。

「僕が行きます」

エリオによって即、医療施設へと運ばれていく…

「なのはさん！ヴィヴィオ！」

近づいていくとなのはさんが反応を返した。
と言っても仰向けになっただけ…

「にゃはは…魔力切れで動けないや…」

「にゃはは…じゃないです！！
そうだ！ヴィヴィオは…」
駆け寄ってもヴィヴィオは動かない…

「ヴィヴィオ！って…はぁ…」

「すぅ…すぅ…」

魔力を使い果たし、眠っていた…

「スバル！二人の容態は！？」

エリオに知らされたのかシャマル先生がやってきた。

「魔力切れで動けないのはさんと、ヴィヴィオは疲れはてて寝てるだけです」

「もう！ブラスターシステムなんて使ってまた何かあったらどうするんですか！！」

「前回みたいに長時間じゃないから大丈夫だと…」

「それでも無茶には変わりありません！！
二人を運ぶのを手伝ってください」

「あ、はい！ティア～ちょっと手伝って～！」

「はいはい」

なのははシャマルとスバルに肩を貸してもらいながら、ヴィヴィオはティアナに背負われながら医療施設へと運ばれていった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

そのころカナンは…

「はぁ…はぁ…ちっ！」

二時間以上やってるのにまるで変わらねえ…

こんなんじゃダメだ！！

「どうした？もう限界か？」

正面には余裕の表情のメイデン…

いくらコイツが高性能だからって…ここまでやられるなんてな…

「限界なんてのは、倒れるまでは来ないんだよ！！」

空間突破でメイデンの目の前に駆ける！

「遅い、甘い、軽い…」

「くそ！」

下段からの一撃を回し蹴りで弾きそのまま回転、右手に集まる大地の力…

また…反応…出来ない…

「はぁああ！！」

「がはっ！！！」

腹部に疾る激痛…

遅れて衝撃、２０メートル以上もすっ飛ぶ…

「ちくしょう！！何で！！何でだよ！！」

地面に打ち付けた拳に血が滲む…

何で、こんなにも遅い…

自分の弱さに腹が立つ！

「マスター…ゆっくり頑張ろう。
まだ時間はある」

「そんなもんねえよ！！
こんなんじゃ…お前の姉さんも救えない！！
守れるものが無い…」

「マスター…」

近づこうとすると足音が聞こえる…

「一つでも多く守りたいのなら…
嘆いてる暇など無い筈ですよ？」

「お前…何で…」

視線の先、いつもの笑みではなく、刺すような鋭い目をしたハルがいた…

「僕の能力は、風さえあれば情報を集められるので…
そんな話は後でも出来ます…
何かを守れる力を取り戻したいですか？」

「ああ…でも、いくらやっても変わらないんだ…」

「当たり前です…
君はメイデン様より強いと思ったまま…
無意識のうちに過小評価をしているのですよ」

「あ…メイデン…ごめんな…」

確かにそうだ…
下に見てた…

「構わない。事実だ」

「さすがに御嬢様では君には勝てませんが、メイデン様は君を理解し、戦いの場では最も近くにいた方です。
この意味、わかりますよね？」

「ああ…データがバレてるのになめてかかって勝てるわけ無いってことだろ？」

「そうです。
しかし、言ったところで無意識を治すのは難しいだから、特別に僕が君を訓練してあげますよ」

言葉使いは優しいが、その眼光は未だ鋭いままだ…
多分、こいつは強い…

「ありがとな…頼むよ」

「では、行きますよ…」

「ああ…」

構えを取る俺に対し、ハルは姿勢を低くする…

「一つ…忠告しておきます…」

「何だよ…」

「様子見などしないように…でないと…」

「なっ！」

目の前にはハル…
霞む程の勢いで右足が動く…

「殺しますよ…」

「がはっ！！！」

膝を腹部に叩き込まれ、吹き飛び訓練と言う名の死合が始まった…

第九話　巣立ち（後書き）

カラドボルグはとある文献によるとエクスカリバー…かもしれないという面白い事実が発覚したので使って見ました。

後、今回前書きが無かったのは、質問が無かったのと、ネタが浮かばなかったんです…申し訳ないです。

では、また次回に。

第十話　お節介（前書き）

結構急いで書き上げました。
　ざっと見直しはしましたが、どこかは抜けているかもしれませんので協力してくださると嬉しいです

第十話　お節介

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ハル
「皆さんこんにちは。前話から黒い！
という声が響いているハルです」
クレア
「最近出てないクレアですの」
ジル
「は～はっは！！ジル・ローディアスとは僕のことだよ！！
これで僕もクロスに出られると言うものだね！
諸君ご苦労！！」
カナン
「まぁ…とりあえず、一言…」
祐希奈
「そうね…」
カナン・祐希奈
「誰だ！！この破滅的バカに名前をやったのは！！！」
ヴィヴィオ
「え～と…『ハゲ様』からだよ？」
カナン
「何その適当なペンネーム！？」
祐希奈
「しかも、ハゲなのに様って何よ！！」
メイデン
「二人とも、架空の名前なのだから文句を言うな…」
ヴィヴィオ
「そうだよ～

一生懸命考えたペンネームかもしれないんだよ？」
カナン
「んなわけあるか！！」
祐希奈
「きっと二、三秒で思い付いたに違いないわ！！」
カナメ
「呼ばれて飛び出てカナメちゃんです♪」
カナン
「呼んでねえ！ひとっ！！ことも呼んでねえ！！」
クレア
「いつも以上にぐちゃぐちゃですの…」
ハル
「まぁ、それがＬＶのクオリティですし…」
メイデン
「気にしたら負けだ」
ジル
「案ずることはない！！
例えぐちゃぐちゃになろうとも、僕の愛は無敵だからね！！」
ヴィヴィオ
「それでは張り切ってどうぞ～」
カナン・祐希奈
「消え去れーーー！！！！！」
バッキャアアア！！！
ジル
「ぐ…」
クレア
「初めて効いたですの！！」
ハル
「あまり意味のない気がしますが…」
カナメ

「そうですね
多分、無意味を通り越して…」
ジル
「ふふふ…愛は…邪魔をされればされるほど燃え上がるのさ！！！」
メイデン
「まったくの逆効果だな…
仕方ないな…」
ジル
「さぁ！マイハニー！！僕達の愛の証を残そうじゃないか！！」
ヴィヴィオ
「きゃあああああ！！！」
メイデン
「潰れろ…」
グシャ…
祐希奈・カナン
「とーーどーーめーーー！！！！」
チュドーーン…
クレア
「この間はダメじゃなかったんですの！？」
ハル
「あの方に対しては遠慮は無用らしいですね」
ジル
「しかし…しかしだよ！！」
ヴィヴィオ
「いやあああああああ！！！」
フェアリー
「Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ　ＥＸ！！」
ドーーーン…
ジル
「あーはっはっはっはっは…流石はマイハニー…」

キラーン…
祐希奈・カナン
「ヴィヴィオナイス！！」
ヴィヴィオ
「えへへ♪」
クレア
「喜ぶんですの！？」
メイデン
「まぁ、ヴィヴィオだからな」
カナメ
「ですね～」
メイデン
「ではお便りの時間だ」
クレア
「え？…え？」
カナメ
「ファイト、ですよ♪」
クレア
「ついていけないですのーーー！！！」
メイデン
「『カナンの訓練の目的って祐希奈に嫌われないよいにですよね？何故、あんなことに？』
捕捉をしようとしていたのだがその前にきたな」
カナン
「まぁ、最初はそうだったんだけどな…
メイデンとやってるうちに頭からいろいろと抜け落ちていって…
最終的には目的がすりかわるという…」
ジル
「つまりはカナ吉が阿呆だったと言うことだね！」
祐希奈

「まぁ、それには同意見だわ」
カナン
「く…」
クレア
「ぶっ飛ばしたり加勢したり…祐希奈はどっちの味方なんですの？」
祐希奈
「私はカナンの敵よ♪」
ジル
「そして、僕はマイハニーの愛人さ♪」
カナン・祐希奈
「ちがうわあああああ！！！」
バッキャアアア！！！
ジル
「案ずることはない！僕はゆっきゅんのことも等しく…」
祐希奈
「ガ○！！スーパーナッコォ！！！」
ドゴアアア！！！
ジル
「アディオース…」
メイデン
「危ないぞ…」
ハル
「○ソンジャンプに続いてですね」
クレア
「わけが分かんないですの…」
ヴィヴィオ
「祐希ちゃんの行動は突然だから」
祐希奈
「何よ！じゃあ、バカばっ○とか、ゲキガンフ○アとかの方が良かったっていうの！？」

カナン
「元ネタ全部アレ出し！！
ゲキガンフ○アはガ○スーパーナックルと同じだからな！？」
祐希奈
「オタク…」
カナン
「俺だけか！？」
ジル
「仕方ないな…僕がカナ吉と…」
カナン・祐希奈
「ダァブルゲキガンフ○アーーー！！！！！」
ドゴアアアーーン！！！！
ジル
「あっはっは！カナ吉は恥ずかしがりやだなーー！！」
キラーン…
メイデン
「今回はいろいろ大変だ…」
カナメ
「ちなみに最後に二人の技はリクエストだったりします♪」
ヴィヴィオ
「あれ？白姫さん？
わぁー！！白姫さーん！！」
クレア
「ふあああ…」
ハル
「どうやらお嬢様の許容範囲を越えたようですね」
カナメ
「何だか倒れた方も出ましたので終わりますね～」
祐希奈
「じゃ、魔法少女リリカルヴィヴィオ」

カナン
「始まるぞ～」
▼▼▼▼▼▼▼▼「ごほっ！ごほっ！」
蹴り飛ばされ、三メートルほど距離が空く…
なんつう速さだよ…
一撃も重い…何か稀少技能があるのか？
次の瞬間には接近を察知する！
三メートルの距離が一瞬にして縮まる…

「く…」

「言った筈ですよ？」

袈裟に斬った一撃はあっさりと避けられ、左をハルが通る…
何だ…こいつの動き…

「様子見などしていたら殺しますと…」

「ぐあぁっ！！」

背中から思い切り蹴られ宙を舞う…
眼下には自分を追ってくるハルが見える…

「ちっ！！」

「遅いです…」

下方に放った突きを半歩だけ動き避けられる…
蹴り上げられる足！

「そう何度も！」

「防御をするような状況ですか？」

「え…」

再び腹部を襲うと思われた足は、カナンの足を蹴り上げた…
回転しながら落ちるカナンの体…

「ふっ！！」

「がはっ！！！」

上下逆さになったカナンの腹部を殴り前に体重を移動…吹き飛ばす！

「く…そ…」

「君のスタイルはスピードを生かした攻撃…
防御など前は最低限だけだった筈ですが？」

「そうだな…」

確かにそうだ…
防御の行動を取った時点でこの結果は決まっていたんだ…

「壱式抜刀剣術…」

「そうです…」

繋げる空間はアイツの真横！！
手加減抜きでぶった斬る！！

「暗夜！一閃！！」

「ですが…」
「マジか…」

次の瞬間にはカナンの方向に一歩踏み込み肘を押さえ込むハルがいた…

「斬り込むタイミングがかなり遅いですよ」

「ぐああ！！」

直蹴りを叩き込まれ十メートルの距離を飛ぶ…
受け身を取り剣を突き立てる！

「グランドスパイク！！」

「目測も甘い…」

地中から出る石針を最小限のサイドステップで避けながら近づく…

「暗夜一閃！！」

一瞬のスキに横に薙いだ…
しかし、そこにハルはいない…
見えた場所は自分の頭上…
前宙…踵が後頭部に迫っていた…

「狙いは悪くありませんでしたが、距離感が掴めていませんよ…」

「っ！！うあああ！！」

「…反応した？」

吹き飛びこそしたが、確かに金属を蹴った感覚が踵に残る…

「弐式抜刀剣術…」

「頑丈ですね…」

構わず走り込む！

「虚空閃！！」

背後で上がる土煙…

振り抜いた形で止まっているカナンに突っ込む！

「敵前で止まるとは…」

跳び上がり、加速、重量落下を使い、跳び蹴りをカナンに放つ！

カナンが消失…

しかし、ハルは止まらず着地と同時に回転、背後に蹴りをかます！

感触は無い…

「おや…？」

「はぁあああ！！」

自身の頭上で剣を下に向け刺突を放つカナンがいた！
バックステップ、回し蹴り！
吹き飛ぶカナン
しかし、またも金属の感覚…

「くそおぉ！！」

「やはり…君は…」

戦闘の感覚を取り戻している…
それも急速に…
跳び蹴りの後の回し蹴りで僕は直撃を受けると思っていました…
しかし、君は避けて見せただけではなく…反撃まで加えた…

「お前の動き…ちょっとずつだけどわかってきたな…」

「そういうことは、一撃加えてから言ってください！」

走り込んでくるハル…
アイツが一瞬でこっちに来るように見える原理はわかった…
後はタイミングを合わせるだけだ！

「参式抜刀剣術…」

「行きますよ！」

目を閉じれば見える…
アイツの動きが…距離が…タイミングが！！
一メートルの距離に入った瞬間、抜き放つ！

「絶空！！」

「いいですね！！
ですが、がら空きですよ！」

一メートルを薙ぎ払う一撃を屈むことで回避…
そのまま滑るように足払いを放つ！

「そっちがな！！」

「やりますね…」

先に繋げていた空間に入り一メートルの距離を離す…
初めてカナンからの攻勢が始まる！

「あああ！！」

「さすがです…」

剣が疾る！
袈裟に真横に逆袈裟に斬り下げに！
それらの剣撃を紙一重の動きで避けていく…
しかし、気にもせず突き進む！
ハルも黙って避けていた訳ではない…
剣筋を分析、見切り、カナンの肘に直蹴りを放ち剣を弾いて猛攻を止める…

「反撃と行かせてもらいます…」

「もう…くらわねえ！」

「さて…君に見切れますか？」

ゆっくりと構えがとられ引き絞られる拳…

「ぐうっ！！」

次にカナンが見たのは、己に打ち込まれた拳…

何だよ…今の…

「まだまだです…」

「がっ！あああ！！」

カナンの体が少し浮いた間に十発を越える拳が叩き込まれる…

高々と上がる足…

「くらわないのでは無かったのですか？」

「があああああ！！！」

頭に踵落としをもらい地面に叩き落とされる…

カナンから周囲二メートルに亀裂が入る程の威力…

動かないカナン…

「終わりですか…

あっけないですね…」

「誰がだよ！！！」

「っ！！」

突然向けられた掌…
歪むハルの足元！
閉じられると同時に地面が砕け体勢が崩れる…
最初に見えたのは、青空…
次にハルが見たのは、自分の目の前に現れた少年だった…

「うらぁあああ！！！」

「ぐっ！！！」

執事服の襟を引っ張られ重心が前に移動した刹那…ハルの顔面に拳が叩き込まれる！

「ちょっとは効いたかよ…？」

「く…何か武術の経験がおありのようで…」

「ちょっと空手をな…」

「成る程…」

お互いに横を向き、口の中の血を吐き出す…

「お前はこんなことしないと思ってたけどな…」

「ふふ…僕も元はこちら側の人種ですから…」

「一つ教えてくれ」

「はい？」

「お前は何でこんなに強くなった？」

聞くと予想通りというか、ハルの顔が少し暗い物となった…

「あまり話したくはないのですが…
お答えしないといけませんか？」

「じゃ、俺が勝ったら教えてくれるか？」

「それは負けるわけにはいきませんね…」

小休止が終わり気が張りつめていく…
お互いに距離を開けていく…

「壱式抜刀剣術…」

「……」

わかる…
この少年は、感覚を七割は取り戻している…
先程までとは明らかに違う…

「暗夜！一閃！！」

「ですが…まだ本来より格段に遅いですね…」

カナンが残像を残しながら迫るのがハルには見える…

「ふっ！！」

ハルの拳は、空を切った…

カナンは、空間突破の最中に方向を少しずらし、ハルの拳を避けた…

「かかったな！！」

がら空きの胴にすれ違い様に剣を叩き込む！！

「な…んで…」

「君が遅いからです」

しかし、叩き込んだ筈のカナンは宙を舞っていた…

拳を突き出した勢いを殺さないまま、ハルが回し蹴りを放ち、カウンターで決まった結果だった…

木々さえもなぎ倒しながらカナンが吹き飛ぶ！

受け身をとり、剣を突き立てるが勢いは止まらず地を滑る…

「行け！！」

剣から魔力を流し込み、剣を刺した地点から巨大な石針が飛び出す…

「僕の進路を塞ぐ…という考えは悪くはないですが、針の堅さが足りませんよ…」

「ちっ…無茶苦茶だな」

石針に走り込み先端を蹴り上げ叩き折る…
そして跳躍…石針の先端を片手で持つ。

「堅さが足りない結果…相手に武器すらも持たせてしまっては…本末転倒ですね…」

「そんなことするのはお前ぐらいだよ…」

「どうでしょうね！」

投擲！
自身の放った石針が投げられる。
頭に飛んできたそれを首を捻ることで回避…少量の血が吹き出るが構っていられない…
空中ならアイツは動けない…決める！

「エクス！カリバー！！」

放たれた砲撃は真っ直ぐにハルへと向かう！
しかし、曲がった…正確には曲げられた…
ＡＡＡ相当の威力をただの蹴りのみで方向がずらされる…

「三度目ですよ…
様子見をするなと何度言わせる気ですか？」

「っ！！」

声が隣から響く…
アイツは…折れた石針の上に着地した所だった筈…

しかし、空間把握が事実だと告げる…
さきに見切るコツを掴んだ歩法…
また騙されていた…

「はぁっ！！」

「がっ…あああ！！」

顎を蹴り抜かれ、宙に浮いた所を回し蹴りで飛ばされる…
もう何度目だよ…
受け身もとれず転がりながら二十メートルは距離が開いた…

「げほっ！！」

口の中が血の味しかしない…
切ったのか、それとも内蔵の何処かが傷ついたのかはわからない…
ただ、身体中が痛い…

「お前…げほっ！！凄いな…」

「……」

「原理はわかった…
後は反応だけだな…」

確かに、ハル自体の速さもあるが、未だ魔法を使っていないハルが、
視認不可能な速度で動ける筈はない。
日本の武術には、頭を動かさずに迫ることにより錯覚を起こさせる
特殊な歩法がある。
ハルはその初動が極端に速いため、一瞬で動いたように見えていた…

速くとも、あくまでも錯覚…気配で感じれば反応出来る筈だった…
しかし、ハルの物はそんなに甘い物ではない…
どこかでフェイントが入る。
それこそ一秒にも満たない一瞬のフェイント…
だが、それが感覚をずらし、再度錯覚の世界へと誘われる…
結果…こうなる…

「まだ…」

「何だよ…」

「まだユニゾンをしないつもりですか？」

「俺の勝手だろ…」

「わかっている筈ですよ？
ユニゾンもしないで回避するのは不可能だと…」

刃物のような鋭い目が俺を射抜く…
やっぱりバレてるか…

「君は、直線にはほぼ永続的進むことは出来る…
しかし、視界に入っていない動きはユニゾンしていなければ長距離は不可能のです」

「全部捌けばいい話だろ…」

「どの口がいってるんですか？」

「もちろんこの口だ」

「……」

再びハルが錯覚を起こしながらカナンに迫り、拳を構えた…
音をも越えた一撃がカナンに放たれる…

「そこだっ！」

「おや…」

ハルの一撃に剣を合わせ、防いだ…
ハルに痛みが疾った筈だが、眉一つ動かない…

「いつまで防ぎきれますか？」

「お望みなら最後までやってやるさ…」

「残念ながら今の君では無理ですよ」

「どうだろな！」

疾る左右の拳撃と二筋の剣閃！
打ち下ろしから裏拳、正拳突き、回し蹴りと次々に変わるハルの攻撃…
頬や腹部にかするが、それでも必死に捌き、避けるカナン…
その均衡も次第に崩れ始める…

「はぁっ！」

「ぐっ…」

直蹴り…かするだけだった攻撃は、頬を捉え蹴り抜かれる…
気合いでハルを横目で見る。
次なる顔面を狙う拳を屈んで避ける！

「参式抜刀剣術…絶空！！」
薙ぎ払った場所にハルはいない。
背後に跳び上がって回避、背後に着地していた。
そして両肩に衝撃…倒立のように逆立ちをしたハルがいる。
ハルの足がカナンの頭を挟み込む…

「しまっ…」

「受け身…取らないと骨が砕けますよ？」

挟み込んだままハルは前に倒れる…

「がはっ！」

地面に叩きつけられ、肺の空気が吐き出された。
既に起き上がっているハルがみぞおちの上に拳を構え呟いた…

「…忠告を守りませんでしたね。
アスラ…起動…」
『わかった』

「く…そ…」

ハルの拳に集束されていく魔力…
下ろされた拳の一撃は、地砕き、十メートルがクレーターとなり、

さらにその周囲は亀裂が広がる…
その亀裂の範囲は百メートルに達した…

「ふぅ…それでいいんですよ」

拳を止める一本の腕。
即座に空間突破を使い二十メートルの距離を空けて対峙する…

「はぁ…はぁ…」
『大丈夫か？』
「動きづらい…」
『それは仕方がない所ではあるがな…』

「いいじゃないですか」

「うるせえよ…」

「可愛いですよ？」

「茶化すな！！」

声は確かにカナンだ…
しかし、姿はいつもの髪より少し長いセミロングの金髪…
メイデンに近くなったカナンがいた…

「やはり、ユニゾンの力も下がっていましたか。
御嬢様と模擬戦の時ヴィヴィオ様は怪訝な顔をなされていましたが、
カナン君は一瞬で解いてしまったのでわからなかったようですね」

「お前…よくあの一瞬で気付いたな…」

「僕は目が良いので…
融合事故の心配は無いのですか？」

「せざるを得ない状況を無理やり作った奴が言うな…」
『マスターが七割、私が三割程だからな。
融合事故の心配は無い』
「かなり動きにくいけどな…」

ユニゾンは、完全に力を引き出せる者だった場合は、瞳の色や髪の色が変わる程度で済むが、引き出せない者の場合、主の力が弱ければ弱い程、デバイスの外見に似ていく…
最終的には、デバイスと同じ外見になり、取り込まれる事を融合事故と言う

「では、早く十割まで行きましょうか」

「軽く言うなよ…」

「大丈夫ですよ
僕は女性には優しいので」

プチ…

「誰が女性だ！！」

空間突破で距離を詰め、斬りかかる！
先程より剣速が上がったにもかかわらず、最低限の動きで避ける…

「言われたく無いのなら戻すことですね」

「黙れ！コンニャク！！」

「おや…」

独特の歩法でカナンの腕の内側まで迫る…
風を切り裂き唸る膝…
しかし、空を切る…
カナンが空間突破で一気に五十メートルの距離を空けていた。
歪むカナンの前面…

「もう効かねえよ…」

「来ますか…」

「四式抜刀剣術…光刃！」

「……」

さすがに速い…ですが！
ギリギリで見えた一度目の横薙ぎを腕で受け流す…

「二閃！！」

「はぁっ！」

「っ！」

振り向かず、足を蹴り上げる！
それは折り返して来るカナンにぴったりの位置だった…

そのまま突っ込んでいれば…
ハルの動きに反応し、空間を途中で遮断し、カナンはバク宙…
回転しながら納刀。

「虚空…破砕断！！」

地面に叩き込まれた大きな傷痕…
その真ん中にはハルが片腕を上げるだけで耐えていた…
スタリと着地。

「その細い身体でよく受けられるな…」

「カナン君とメイデン様の力が完全な場合は無理ですけどね」

「そうか…よ！」

次の瞬間には、カナンの目の前にハルがいた…
腹部を狙った拳を剣の腹で受け止める…

「反応…随分良くなりましたね…」

「誉めてくれて…ありがとな！」

回転しながら拳を受け流し、その勢いのまま叩きつける！
ハルは流された拳を即座に持ち上げ防ぐ…
しかし、カナンの動きが変わっていく…

「はぁあああ！！！」

「……」

剣速が上がる…まだ上がる…上がっていく…
防がれた後のタイムラグが無くなり、即座に次の太刀がハルを襲う。

「ふふ…」

「笑ってんじゃねえ！」

「すいません」

横薙ぎを下がって避ける…
続いてくる袈裟に合わせ、下段から蹴り抜いた！

「おわっ！」

「行きますよ！」

宙を舞う剣…
流れるように距離を詰め、肘鉄を打ち込む！

「ぐっ…」

「なっ！」

浮くと思われたカナンの身体…
しかし、踏み止まり、掲げられる腕に戻る剣…
集まる魔力…
離れようにもガッチリと捕まれ不可能…

「気合いと根性は…鍛えられてるんでな！！」

「毎日吹き飛んでごくろうさまです…」

「やかましいわぁ！！」

怒声と共に振り下ろされた一撃…
叩きつけられたハルと共に地面が沈み込む…
二つ目のクレーターが完成した…

しかし、ハルは倒れない…
体の三分の一以上埋まりながらもしっかりと立っていた…
直撃をくらう瞬間にカナンに踏み込み威力を減衰したからだった…

「髪…戻りましたね」

「お陰さまでな…」

さらに力が込められミシミシと広がる亀裂…

「さて…カナン君の力も戻ったことですし…」

「何だよ…」

「終わりにします…」

「く…」

やっぱりコイツ本気だしてねえし…

「アスラ」

『三割くらいか？』
「それくらいが妥当でしょう」
『了解した』

ハルの足に魔力が集束していく…
軽く上げられ下ろされる…

『マスター飛べ！』
「ちっ！」

空間を空へと繋ぎ、離脱した瞬間…ハルを中心に地面が砕け陥没する…

「あのサイボーグコンニャクめ…」
『もう、意味がわからないぞ…』

ハルが跳び上がって来るのが見えた…
もうアイツには驚かないな…

「受けられますか？」

「さあな…」

お互いに空中で回転…カナンは横薙ぎを、ハルは回転蹴りを放つ！
その一撃は、触れると同時に衝撃波を生み出し、暴風となり二人を弾き飛ばす！
吹き飛ばされたまま、カナンは納刀する…

「四式抜刀剣術…」

光の速さに大地の力を練り込む…

「はぁ…」

カナンに合わせるように
酸素を取り込む…

「金剛閃牙！！！」

「はぁあああ！！！」

交わる刃と拳、再び炸裂する余波に構わない、止まらない、ただ進む！
激突の結果、押し負けたのはカナン。
空へと弾け飛ぶ剣…
しかし、ハルも振り抜くまでは行けず体勢を崩すのみに終わる。
が、丸腰のカナンに畳み掛ける！
右腕に魔力を集め顔面目掛けて叩き込む！

「馬鹿力め…」

「いえいえ、カナン君も中々ですよ…」

カナンの右拳とハルの右拳がぶつかっていた…
二人の右足が霞む！
再びぶつかるハイキックとハイキック…
反発するようにバックステップ、カナンの拳がハルの蹴りがぶつかり合う！
右からソバットを繰り出すハルに肘で対応、叩き落とし、崩れたハルに左拳をかますが、右腕で防がれる…

激しい体術の攻防。

「はぁああ！」

「見切った！！」

足払いを避けた後に叩き込まれたハルの左ハイキック。
それを掴む…
右手に剣を呼び戻す！
ほぼ零距離にもかかわらず光を集める…

「エクス！！」

「残念ながら…」

片足一本で飛び上がり、脚を引く…
放つよりもハルの蹴りの方が速かった…

「終わりです！！」

「ぐふっ！！！」

砲撃をの前に腹部に蹴りを入れられ、吹き飛ぶ！
ハルは静かに着地…脚を強化、数十メートルを跳び上がる！

「メイデン…」
『わかっている…』

もう…身体が動かない

空間を形成しようにも入れない…
最早、回避は不可能…
さすがに死ぬわけにはいかないため、体を強化し、硬質化する…
恐らくヤバい威力なので結界も展開…
遥か上空でハルの脚が空色いの光を放っていた…

「ちくしょう…」

重力落下…
まだ…ハルの所には届かなかった…

「紛塵裂脚…」

「がっ！！あああああああ！！！！」

再び腹部に直撃したハルの脚…
沈み込むカナンの体…
激震と共に結界内、周囲一キロが陥没し砕ける…
最初に放った拳の一撃など比べるまでもなく上回っていた…

「ふぅ…」
『ふぅ、ではない…相手が結界を張ってくれたから助かったものの、市街地まで被害がいきかけたではないか…』
「すいません。
この少年は油断ならないもので…」
『しかし、少年に放つ技ではない…
三割とはいえ、直撃ではないか…
家につれていけ』
「わかってますよ」

次の瞬間…足首に感触がした…
カナンだ…あの威力を耐えきっていた…

「本当に君は…驚かせてくれますね…」

「今…は…勝てない…けど…な…
いつか…話を聞き…出して…やるからな…」

息も絶え絶えにしかし、強き意思の瞳が見つめる

「やれやれ…カナン君は物好きな方ですね」

「はは…バカ…だから…な
んで…やられっぱなしも…嫌い…だからな…」

「でしょうね」

左手に剣を転送、光が集束されていく…

「…くらっとけ!!」

「……」

最後の力を振り絞り、ハルの顔面に放たれた光の砲撃…
その一撃も首を捻り、髪を掠めるだけに終わった
結果を見る前にカナンは倒れていた…
肩に担ぎ家へと歩いていく…

「まったく、僕の話を聞き出してどうする気ですか…」

「お前が…悲しそう…だから…
昔に…何があったのかは…知らないけど…
お前が悲しそうな顔をしたから…
過去に縛られて幸せになれない奴がいるんなら…助けたいから…」

「何故ですか？」

「俺が…過去に…縛られていたから…かな…
過去を乗り越えれば…楽しいことが待ってるって…俺が知った…こと…だ…か…ら……」

最後にそう言って気を失った…

「復讐に縛られていた人間だから…ですか」

まったく…お節介な人間ですね。
カナン君にはいつか追い付かれてしまいそうで怖いです。
話を聞くまで諦めてくれそうにないですからね…

「はぁ…」

余計なことを話した僕のミスですか…
若干足取りが重くなりつつ、ハルの家つまり白姫家へと向かった。

第十一話　墜ちた者（前書き）

途中から携帯が変わったのでどこかおかしいかもしれません…

第十一話　墜ちた者

祐希奈
「はい。今回全く出番の無い、一之瀬祐希奈よ♪」
ヴィヴィオ
「ほとんど無いヴィヴィオだよ～」
カナメ
「未だ一度も出番が無いカナメです♪」
クレア
「久しぶりに出番がもらえたクレアですの」
メイデン
「毎回、地味に出番があるメイデンだ」
ハル
「恐らく今回で格下げとなるハルです」
カナン
「そして」
祐希奈
「デストローイ」
バキャ！！

カナン
「カナンです…」
ヴィヴィオ
「祐希ちゃん自己紹介くらいさせてあげようよ？」
祐希奈
「コイツ出番多いからいらないわよ」
メイデン
「マスターは動かしやすいらしいからな」
ハル

「いろいろと余計なことに首を突っ込むのが大好きですからね」
カナメ
「バカですからね♪」
カナン
「お前もな！！」
カナメ
「ふぅ…そんなことをまだ言われますか…」
カナン
「な、何だよ？」
カナメ
「カナン君大好き～♪♪」
ギュウウウ！！
カナン
「ぎゃあああああああ！！！」
ヴィヴィオ
「あはは。カナン君良かったね」
カナン
「良くない！！全く良くないよ～！？」
祐希奈
「カナン君大好き～♪♪」
ギュウウウ…ミシミシミシミシ…
カナン
「ぎゃおおあああああああ！！！！」
メイデン
「いろいろと大変だな」
クレア
「カナンは毎回大変ですの…」
ハル
「では質問コーナーです」
クレア

「ハルも慣れ始めてるですの？」
ハル
「あはははは。まぁ…
『祐希奈のパワーが五倍って書いてありましたが、ハルとやりあったらパワーでは勝てますか？』
どうでしょうね、恐らく、まともにパワーだけでぶつかるなら五割は出さないと勝てませんね」
祐希奈
「でも五割なのね…」
カナン
「お前、あの力見ただろ？」
祐希奈
「見たけど…周囲一キロ破壊ってそんなに凄い？」
ヴィヴィオ
「う～ん…あんまり…」
カナン
「マジで！？」
メイデン
「マスターは、普通にやれば今で漸く二人と同等だからな」
クレア
「普通に？」
ハル
「リヴァースモードがありますからね」
カナン
「アレは最終手段だからな…」
カナメ
「まぁ、目覚めたばかりですし、一月特訓してた二人に遅れてるのも仕方ないですよ」
メイデン
「では、二件目だな。

『リミットってヴィヴィオの任意で外せるのですか？』
どうなんだ？」
ヴィヴィオ
「外せるよ～。ママのブラスターシステムみたいな感じかな？
でも、私のリミットは元々私の力だから、ママほど負担は無いけどね」
祐希奈
「私も何か欲しいわね…
例えば、ゴッドリミットとか…」
クレア
「神化を本編で使ったら話がぐちゃぐちゃになるですの…」
ハル
「ですね～」
カナメ
「私はありますよ？その名もＰＢＭです♪」
カナン
「もしかして…アレか？記憶が無かった時の…」
カナメ
「そうですよ♪」
カナン
「うわぁ…俺のイメージが…」
祐希奈
「何二人で話てるのよ？」
ヴィヴィオ
「内緒の話なのかな？」
メイデン
「普段からそれくらい仲良く出来ないのか？」
カナン
「これは特別な事情だから仕方ない…」
カナメ

「ちょっと他の方には無理です」
ハル
「皆さんそろそろお時間ですよ？」
祐希奈
「もう？しょうがないわね…」
クレア
「今回は白姫家で起きる日常ですの」
ハル
「僕とカナン君とクレアお嬢様がメインです」
カナン
「じゃあ…」
カナメ
「魔法少女リリカルヴィヴィオ始まりますよ♪」
カナン
「お前関係ないだろ！？」
カナメ
「あんまりにも出番が無いので、カナン君のセリフを削ってるんですよ♪」
カナン
「ひ…」
祐希奈
「バイバ～イ♪」
カナン
「セリフが！！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

林から歩くこと約一時間。

ハルはクレアの直属ということもあり、執事の中でも、トップの権力を持つ
別に迎えを呼んでもよかったのだが、あえて迎えを呼ばなかったのは、クレアに無断で出てきたので、そのことについて、クレアと無用な言い争いをしたくなかったからである。
しかし…

「何故、起きていらっしゃるのですか？」
門の前に腕組みをしながら仁王立ちをして立っている人物…白姫クレアがそこにいた。

「いつも鍛練をする時間帯になっても外に出ていなかったからですの」

「おや…アレを見られていたのですか？」

「いつも、朝の5時丁度に開始していた鍛練…でも、今日は現れない…
不信に思ってハルの部屋を覗いてみてももぬけの殻…
屋敷を探しても見つからない…
そうなると、無断外出以外は考えられないですの」

やれやれ…御嬢様を出し抜くのは僕には不可能なようですね。

「すいません。
お話はまた後で聞きますので、カナン君の手当てをさせていただきたいのですが」

「カナンと模擬戦をしたんですの？」

「ええ。ちょっと彼には興味もありましたし。
少し手合わせをしてきました」

「…まぁ、ハルは考え無しに行動をするような人じゃないですし、
今回は不問でいいですの」

「ありがとうございます」

今回は考え無しだったんですけどね…
考えどころか、少し…感情的になっていたかもしれません。

「ふあ…次に無断外出した場合は、ハルの部屋は物置小屋ですの」

「あははは。それは困るかもしれませんね。
御嬢様、まだ時間も早いですし、お休みになられては？」

「言われなくてもそうするつもりですの」

「では…お休みなさいませ、御嬢様。」

「お休みですの…」

クレアを見送り、自分の部屋のベッドにカナンを寝かせた。
突如、カナンの腰の辺りが光だす…
回復のためになっていた待機フォルムから人型へとなったメイデン
だった。

「ん…ふああ…」

「おはようございます。メイデン様」

「ハルさんか…
ここは…ハルさんの部屋なのか？」

「そうです。手当てのためにお連れさせていただきました」

「そうか…ハルさんに負けたのだったな。
マスターがあそこまで負けたのは初めてだ」

「いえいえ、僕も三割も出した相手は久しぶりでしたよ」

「三割…か。
今のマスターがハルさんの本気とやりあったらどれだけ耐えられる？」

「恐らく…最初の一撃で死にますね」

「死、死ぬ！？」

「僕はほとんど魔法は使えません。
体術中心なので基本的には非殺傷は無理です。
四割以上になると、常時魔力強化が施されるので非殺傷設定も出来ないこともないですが、威力も上がりますので、衝撃だけでも致命傷かと。
本気でやれば、非殺傷設定なんてあって無いような物ですね。
三割の僕を捌けないようでは、はっきり言って話になりませんよ」

「そ、そうか…」

無茶苦茶だ…

非殺傷設定で人を殺せるレベルだと？

「カナン君に当たれば…の話ですけどね。
彼は、まだまだ発展途上です。
斬撃の軌道や重心の移動や反応速度、空間突破や空間把握でさえも、
成長の余地がまだあります」

「それはそうだが…」

「逆に言えば…こんな荒削りで三割の僕とやれる才能が怖いくらいです。
アスラを使わされたのは、本当に久しぶりだったんですよ」

御嬢様と出会って執事として働いて１０年…その間に使用した回数は十指にも満たない。
三割以上の解放をしたのは、旦那様、先代執事、そして…奴だけ

「本当に凄い人ですよ…君は…」

始まりは僕と同じような道を歩き…
しかし、今は真逆の人生を歩んでいる少年。

「僕も、君みたいな生き方が出来れば良かったのですけどね」

「ハル…さん？」

「さて、雑談は終わりにして手当てをしましょうか」

いつも笑っているハルさんが、とても悲しそうな表情をしていた…
応急措置を施すハルさんは元に戻っているが…

さっきの表情は一体なんだったんだろうか…

「メイデン様？」

「はえあ！？」

目の前にはハルさんの顔があった…

はえあって何だ…

「あははは！可愛らしい反応ですね」

「ハ、ハルさんまでか…私は…デバイスだぞ…まったく…

可愛いと言われても…嬉しくなど…いや…やはり嬉しいが…そういう言葉は…人に言う物であって…」

「では、可愛らしいメイデンさん。治癒魔法をお願いできますか？」

「わ、わざとだな！？私を…からかって…いるんだろう！？」

「ふふ…可愛らしいのは事実ですよ？」

「はうぅ…」

ダメだ…頭が熱くなってぐるぐるしてきたぞ…

「がはっ！！」

突然マスターが血を吐いた…

まさか…危ないのか！？

「ハルさん！マスターの容態は！？」

「肋骨二本骨折と胸骨三本にヒビって所ですね。
後は、何処かの内臓が傷ついてるかもしれません」

「何故早く言ってくれないんだ！！」
肋骨が内臓に刺さっていたら死んでしまう可能性もあり得る。

「刺さるようなことにはなってませんよ。
僕の力加減が間違ってさえいなければの話ですが」

「…確かに」

治癒魔法をかけてみると、肋骨二本は、勢いよく折れたわけでは無く刺さっていない、胸骨にしても問題無い。
内臓の傷も死に直結するような傷ではない…

「良かったですね」

「驚いたぞ…」

まったく…冗談の質が悪すぎる…

散々ハルにからかわれながらも、カナンの傷は完治した。

「お疲れ様です」

「……」

「どうされましたか？」

相変わらず爽やかに笑っている…
少し…灸を据えてやった方が良さそうだな。

「ハルさん…一度マスターと会ってこい…」

「あははは。それは遠慮しておきます」

霞むほどの速さでハルさんが逃げた…

「素直に謝るのなら軽くで終わってやろうかと思ったが…無しだな…」

風の力で加速！ハルに追いすがる！
アウトフレームを起動…拳に集めるは大地の力…

「待てーー！！！」

「嫌ですよ。痛そうですし～♪」

拳を紙一重で避けまくりながら、メイデンとハルの鬼ごっこは続く…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

所変わって機動六課

医療施設にて、シャマルの精密検査を終えた所だった。

「とりあえず…二人共何ともありません」

「良かった～」

「うん」

「ですが！！」

「「はい…」」

「ブラスターシステムも、リミットバーストも、模擬戦で使うレベルではありません！！」

「「ごめんなさい…」」

「次からは十分気をつけてください。以上です」

「「ふぅ…」」

一番の難関は越えた…
その安堵からか自然と息が漏れる。
しかし…シャマルから事実が告げられた。

「私からは…ですが」

「「…え？」」

親子一緒に、表情が固まった…

「はやてちゃん、フェイトちゃんどうぞ～♪」

「なのはちゃん、ヴィヴィオ、大丈夫かぁ？」

入ってきたはやての表情は笑顔…
しかし、底冷えする寒さを感じた…

「は、はは、はやてちゃん、大丈夫だよ？
ノープログレムだよ？」

「なのは、ヴィヴィオ、かなり無理をしたみたいだね」

後から入ってきたフェイトの表情もやはり笑顔…
そして、底冷えする寒さは増していく…

「フェ、フェ、フェイトママ、私もなのはママも無理なんかしてないよ？
ドントウォーリーだよ？」

何とか笑顔で返す二人の目の前まではやてとフェイトが歩く…

「ほんなら…」

「お話しよっか？」

「「ごご、ごめんなさい！！」」

「うふふ…私は席を外しますね。
何かご用があれば呼んで下さい」

「うん。シャマル、おおきにな」

「いえいえ、では、ごゆっくり…」

「「シャマルさん!!」」

二人の叫びも虚しく無情にも閉じられた扉…

「さて…」

「「本当にごめんなさい!許して下さい!!」」

「二人共、いややなぁ…私らはお話をしに来ただけやでぇ?」

「そうだよ?ゆっくり…頭の芯にまで叩き込まれるようにね?」

「「ふぇ…ふぇ…」」

親子が抱き合い、見事にシンクロしながら半泣きになっていく…

「「あはははは…」」

「「にゃあああああああああああああ!!!」」

医療施設に、二名の悲鳴が響き渡った…

中で何が起きていたかは…誰も知らない…

「ひっく…ひっく…」

「ふぇ…」

一時間後、泣きじゃくる二人がベッドの上に倒れ伏していた…

ちなみに、前者がヴィヴィオ、後者がなのはである。

「私らの想いの強さ…わかってくれたんか？」

「「（ガクガク！）」」

「うん。二人ならわかってくれるって信じてたよ」

「「（ガクガク！）」」

最早思考すらままならない二人は、反射的に首を縦に振るのみだった…

「ええ子やね～♪
ほんなら、これくらいでお話は終わりにしよか？」

「そうだね。まだ疲れもあるだろうし、ゆっくり休んでね？」

「「（ガクガクガクガク！！）」」

「「おやすみ～♪」」

2つの驚異が今、過ぎ去った…

「ママ…」

「…何？」

「人って、限界を越えると何も考えられなくなるんだね…」

「うん…私も久しぶりにこの感覚を思い出したよ」

「魔法って怖いね…」

「怖いね…」

しばらくの沈黙…

「「おやすみ…」」

最終的には現実逃避をすることとなった…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

白姫家にて遂にカナンが目を覚ました…

「ん…ここ…は？」

周囲を見渡しても誰もいない…
やたら広い…大理石だったか？
そんなんで出来た床…

「で…何で俺の服は無いんだ？」

真っ白なベッドに上半身裸で眠っていた…
いや…何故に？

「あ～…落ち着け…とりあえず、ここは何処だ？」

今度は注意して周囲を見渡し特定出来る物を探す

ホントに広いな…

「もしかして…ハルに連れてこられたのか？」

だとしたら…ここはアイツの部屋で、クレアの執事だから…現在地は白姫家ってことになる。

「メイデ～ン？……」

返事なし…
呼び出すか？
やっぱいいや。めんどいし…散策するか。

「服…ってマジかよ…」

ハルの部屋にあるクローゼットには厳重に鍵がしてあった…
そういや、アイツの執事服って特注なんだっけ…
しゃあない…
隣にあった靴を履き、部屋を出て廊下に出た。
ていうか…靴があるのに何で服が無いんだよ…
廊下は…めちゃくちゃ長かった…

「ここ、日本だよな？
何この、パリにでもありそうな…ってパリ行ったこと無いだろ！！」

長い廊下に虚しく響くツッコミ…
果てしなく無言。
く…一人でツッコミやってても寂しいな…

「とりあえず…服を探さないと…」

この屋敷のどこかにはクレアがいる筈だし…
廊下を歩いて、適当にあった部屋に入った…

「え…？」

「お、ビンゴ…」

部屋の中には確かにクレアがいた…
着替え中で下着姿だったが…
ていうか…あの胸は１３歳じゃないな。

「いつまでジロジロ見てるんですのー！！！」

ガシャーン！！
部屋にあった巨大な壺をカナンに投げつけた！
見事直撃…

「ナイッショット…」

ドサリと血を流しながら崩れ落ちる…

「あ…ごめんなさいですの！！」

急いで着替え、倒れたカナンを部屋に入れる。

「カナン！カナン！！死んじゃ嫌ですの！！」

カナンの体を揺すると目を開けた。
しかもすっきりと…

「残念ながらこれくらいじゃ死ねないな」

「だ、大丈夫ですの？」

さっさと起き上がり、壺の破片を払う。
その動作もしっかりしている。

「大丈夫大丈夫。こんなんで死んでたら、祐希奈の蹴りに耐えられないし」

若干遠い目をしながら、あれはすげえぞ…などと言っている…

「本当にごめんなさいですの…」

「いいって。俺が悪いんだからな。
それより、何か服を貸してくれないか？」

「カナンの服は？」

「どっかいった…」

「ふふ…どこかって…カナンの服ですの」

「ん～多分、コンニャクかメイデンが持ってると思う…」

実は、メイデンが発生させた風に巻き込まれ、一緒に鬼ごっこ中である。

「そうですの？

ん～…昔にハルが着ていた執事服ならあるですの」

「執事服か…似合わないかもな…」

「何事も挑戦ですの！」

「しゃあない、ちょっと目を閉じてろよ？」

「こ、ここで！？」

「めんどいしな」

慌てて目を閉じると布擦れの音が響く…

こんなにデリカシーの無い男性、初めてですの…

「ん、いいぞ」

「ふぅ…あれ？」

「やっぱ変か？」

執事服は、上のボタンまできっちり止めて着る。

しかし、カナンはボタンを外しネクタイも外し、かなりいい加減。

でも、カナンには崩した方が似合っているような…

「お～い、クレア～？」

「あ、は、はい！似合ってると思うですの！」

「そうか？ならいいけど大丈夫か？」

「御嬢様、そろそろ起床の…あれ？君！ダメじゃないか！！」

新しく部屋に来た執事に注意された…

「いや、俺は…」

「ほら！さっさと朝食の準備に行きたまえ！！」

「だからな？」

「さては…君、新米だね？
調理場までの行き方がわからなくて、それで御嬢様の部屋に…」

「クレア、事情の説明頼む…」

「あ、はい。この方が迷いこまれてしまったようですの」

「そうそう…迷いこまれて…って、えええええ！？」

「やっぱり…失礼しました。
もうしばらくお待ち下さいませ」

「はいですの♪
あと、私の朝食はその方にお願いですの♪」

「ちょ、ちょっとクレア！待て！！」

「御嬢様だろう！！

まったく…よくそんな言葉使いで執事になれたものだね！」

「おわっ！！俺は執事じゃねえええええ！！！」

その声を最後に扉が閉まり、カナンは引きずられていった。

十数分後…食堂へと移動するとカナンが非常に機嫌の悪そうな顔で私の席の隣に立っていた。

「カナン、お疲れ様ですの」

「阿呆…誰のせいだよ」

言葉使いやら何やらでびっちりと先輩執事に言われたせいだろう…イライラしているのが伝わってきた。

でも、料理を作ってくれるあたり、やっぱり優しいと思った。

「本日のメニューは、白ご飯と焼き鮭と味噌汁とたくあんと納豆と牛乳だ。

何だよ…文句あるなら食うな。

俺みたいなのに料理を頼んだお前が悪い」

「くすくす…まだ、何も言ってないですの」

とは言っても、この料理は、食べたことが無いものばかり…

特に…このねばねばしている物が…

「これ…食べ物ですの？」

「お前なぁ…一応、日本人だろうが。

納豆と言えば日本人、日本人と言えば納豆って言うくらいなんだぞ？」

「ごめんなさいですの…御父様が和食が嫌いな物で、ほとんど食べたことが無くて…」

「ふ～ん…じゃあ教えてやるから聞けよ？
納豆はなぁ…とにかく混ぜろ！ひたすら混ぜろ！！」

「こ、こうですの？」

普通に箸を持ち、軽く混ぜる…やっぱり食べ物とは思えない…

「違う違う。箸をこう拳みたいに握ってだな…
ぐあああああああっと！」

「ぐあああああ？」

何か…容器の中からぐちゃぐちゃって音が…
箸もねばねばですの…

「で、醤油、ネギ、鰹節なんかでもいいな。
それをご飯と一緒に食べてみろ」

「ベタベタですの…
それに臭いも…」

「何事も挑戦、だろ？」

ニヤリと笑いながらカナンが先程の私と同じことを言った…

自分が言った手前、引けない。

「うぅ…」

口に含む…やっぱり…不味くない…
それどころか美味しい気がする…

「うまいだろ？」

「凄く美味しい…」

「やっぱり日本人には納豆だろ？」

「はいですの！」

カナンの作ってくれた料理は全て美味しかった。
一流のシェフなんかよりもよっぽど…

「ただな、納豆はあんまり女の子が食べる物じゃないんだ」

「美味しいのに…」

「臭いがあるだろ？
いくらうまくても、頻繁に食べるわけにはいかないってわけだ。
まぁ、男は気にせず食うけどな」

「口臭…それはちょっと気になるですの…」

「そこで秘密兵器の登場ってな。
緑茶だ。さすがに良い葉があったよ。

玉露なんて、なかなか飲めないから、俺も飲ませてもらってもいいか？」

「はいですの。
緑茶はあまり飲みませんし、なんならお持ち帰りいただいても結構ですの」

「マジで！？それは嬉しいな！！
でも、緑茶は体にいいんだぞ～？
消臭効果はもちろん、身体に良い成分がたっぷりだしな。
カテキンなんかが代表例だ。
おし。出来た」

湯呑みが目の前に置かれ、カナンも隣に座る。

「入れたばっかだし熱いからゆっくりな？」

「……」

ハルの入れてくれたダージリンも美味しい、でも、それに負けないくらいカナンの入れた緑茶も美味しかった…

「私…日本食、好きかもしれないですの」

「そりゃあ良かった。
ハルなら大抵作れるらしいし、アイツに頼め」

「そうするですの」

飲み終えると片付けまでやってくれるらしい。

「もう、執事のフリはいいですの」

「ん？まぁ、良い経験になるかもしれないから。
それと、ハルはどこに行ったかわかるか？」

「ハルならさっきはお庭で走り回ってたのを見たですの」

何故か周りが潰れたり砕けたり石針が飛び出したりしていたけれど…

「わかった。行ってみるよ」

「あの…」

「何だ？」

「ごちそうさまですの」

「ああ、お粗末様でした。クレアには物足りなかったかもしれないけど、勘弁な」

「いえ、本当にとても美味しかったですの！」

「そうか？なら日本食を父さんと母さんにも進めてくれよ」

「了解ですの！」

「じゃあな」

そう言ってひらひらと手を振り出ていった。

「やっぱりカナンって面白い人ですの」

怒っているのに優しくて、たまに熱血で、世話焼きで。
カナンだけでこの楽しさ…ヴィヴィオ様や祐希奈様もメイデン様も
加わったらどれだけ楽しい日々を過ごせるだろうか…
様々な想像をしながら部屋までの道を進んだ。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「庭…ってこの敷地のどっかだよな…」

一旦外に出てみたのは良いものの、広大な敷地のせいでハルはどこ
にいるのかさっぱりわからない。

「あれ？」

今、向こうの林っぽい所で爆発したような…
間違いない…木が燃えている

「まさか…」

走って向かう、その間に凍りついた木、切り裂かれた木、中心から
いきなり折れている木…
視界が開ける…炎の中心にハルとメイデンがいた

「何やってんだよ！！」

「おや、カナン君少し困っていまして…
この火、どうしましょうか？」

「はぁ…はぁ…ハルさん…観念しろ…」

ヘラヘラしてるハルと何故かキレてるメイデン…

「お前…メイデンがキレるような事言ったのか？」

「いえいえ、ちょっと可愛らしいなぁと言っただけですよ♪」

「ほう…ちょっと…か…マスターの治療中ずっと背後で可愛らしい
可愛いいなどと言っているのはハルさんの中ではちょっとなんだな
…？」

「やっぱり言ってるじゃねえか…」

「あははは。おかしいですねえ♪」

周囲を炎に囲まれ、逃げ道は無い…
この状況で笑ってられるこいつが凄いと思える。

「助けてやらない事もないけど？」

「条件付きで、ですよね？
お断り…」

「さて…ハルさん反省しような？」

炎の壁がさらに高くなり、熱もあがっていく…

「前言撤回をさせていただいてもいいですか？
僕は大丈夫ですが、庭が全焼しかねませんので…」

「条件は…」

「わかってますよ…
やれやれ…面白い話じゃないですよ！」

「おし！」

多少卑怯な気もしないでも無いけど…
そこんとこは、まぁ…アレだ。日頃の行いだ。
地面に手をつき魔方陣を展開。メイデンを呼び戻す。

「うわっ！マスター！？」

「ほら、火を消せ。
ここは人の家だからな？」

「しかし…」

「ハルはああいう奴だってわかってただろ？
割りきれって」

「わかった…」

「何だか複雑な心境なんですが」

「助けてやるんだから文句言うな」

やがて、火は消火され、庭もメイデンが修復。
元通りになった。

「ふぅ…では、僕はこれで失礼します」

「メイデン…やっぱり燃やして…」

「冗談ですよ…まったく、庭を盾にとるとは困った人ですね…」

「逃げようとしたお前が悪い」

「さて…少し長くなりますから…」

『うむ』

光が放たれ、収まった場所には、ティーセットと、イス、テーブルが置いてあった…
無駄な能力だな～…

「さてと…やはり最初からですか？」

「当たり前だ」

アールグレイがカップに注がれ、コトッと目の前に差し出される。

「わかりました…
まず、事の始まりは、僕の十歳の誕生日パーティーだったんですよ。
さすがに御嬢様ほどではありませんが、それなりに裕福だった僕の家は、誕生日パーティーを開いていたんです。
母や祖父母、友達や親戚を一挙に集めてそれは楽しかったです」

「ちょっと待て…父親はいないのか?」

この質問にハルの表情が明らかに暗くなった…

「父はいましたよ…
とても優秀な魔導師でしたが…後から調べてわかった結果ですが、
発掘調査の護衛として同行していた父は何かに吸い寄せられるように発掘現場へと入って行ったらしいです。
その後…赤い光と共に発狂、発掘隊と管理局員を殺害、サーチャーに映像がありましたよ…」

「なぁ…まさか…その発狂した日って…」

「僕の誕生日ですよ…」

次の瞬間、ハルの握っていたティーカップが砕け散る…
気配でわかる…こいつは、怒ってるなんてもんじゃない…
憎悪…それが一番近かった…

「発狂した父は、管理局へと戻り…まぁ、今となっては何故かはわかりませんが…
自分の部下達を一人残らず殺害…
それでも止まらず、自分と関係のある者を殺して行きました…
予測ですが、恐らくその時には既に父の人格は無かったはずです。
頭に残っていた人物を片っ端から殺した…それだけでしょうね」

待てよ…このまま行くとこいつの過去って…

「頭に残っていた管理局にいる人間はあらかた殺した…

もう残っているのは身内の人間だけです。
武装した局員も抵抗はしたようですが、壊滅、出会った人間は、老若男女関わらず殺して殺して殺して…転移ポートへ向かう奴の後ろには、屍の山が出来たでしょうね。
地球に転移、夜遅かったのが幸いしたのか地球には死者はいませんでしたよ。
身内以外はね…」

楽しげな雰囲気に包まれていた僕の家…
突然開け放たれた扉の先にいた血塗れの父…
最初は、大怪我を負ったんじゃないかと心配をした…
でも…奴は…駆け寄った母に…凶刃を突き立てた。
嘘みたいに噴き出した血飛沫…
その血を浴びて、奴は愉しそうに笑っていた…
地獄絵図…まさにその表現が相応しかった。
僕の祖父母を、友達を、親戚を、愉しそうに殺していく奴…
命乞いをする人も逃げようとした人も関係なく殺していく…

「もういい!!わかった!!わかったから!!」

語るハルの目は、もう何も写さない…
自嘲するようにくすくすと笑いだす…

「ふふ…そんな奴を見て、僕はどうしたと思いますか?
立ち向かったわけでも、逃げたわけでも無い…
隠れたんですよ…死体の山に埋もれてね…
奴の力で、死体は宙を舞っていましたし、そう難しいことではありませんでしたよ…
誰かもわからないほど傷ついた身体の下に埋もれて、難を逃れて…
奴が歩き去ってから、漸く恨みを抱いて…

その場では、醜く隠れていたくせに、脅威がさったらソイツを恨んで…
バカですよ…」

こいつは…俺と似ていた…
規模が違うが、身内を殺され、恨みを抱いたまでは同じだ。
ただ、恨んだ相手は自分の父…

「君は…ヴィヴィオ様と祐希奈様に救ってもらい、元の道へと戻った…
でも、僕はそのまま堕ちていったんですよ。
力を求め、奴を殺すことのみ考え、道を阻む者を倒し、強くなっていった。
最初は弱かったですよ…でも、奴を殺すという憎悪だけで生きているうちに、無茶苦茶な鍛練を積み重ね、十三歳の時、今の力を手にしました」

「じゃあ…何で執事なんかに…」

「御嬢様のおかげなんですよ。
偶然、とは恐ろしい物ですね。
旦那様とお母様、御嬢様は世界旅行をして、クレア御嬢様の執事選定中でした
その時に出会ったんですよ。
道端に寝ている汚い僕と…ね。
ふふ…その時の御嬢様のセリフは面白かったですね。
恨みの気持ちが一瞬とはいえ消えましたから」

ここに来て漸く、ハルの表情が明るくなった。

『あの人カッコイイから私の執事にするですの！』

『…は？』

「な、何だそれ！？
執事の能力関係してねえ！！」

カッコイイから自分の執事って…しかも、道端に寝ているコイツをカッコイイって…
クレア…やってくれるな…

「訳がわかりませんでしたよ。
ボーっとしているうちに、旦那様からアスラを渡され、儂と勝負せいでしたからね」

『儂と勝負せい！！』

『は？何言ってんだ？バカか？』

『いいから四の五の言わんと構えい！！』

『パパ～頑張れ～！』

『あなた、あんまり無理しないでね？』

『ぬはははは！儂がこのような小童に負けるわけなかろう！！』

『んだと？死んでも文句いうなよ…』

「十分後には見事にノックアウトさせられていましたね～」

「お前がか！？」

「アスラを使いこなせなかったとはいえ、全力でやったんですけど、全く敵いませんでした」

クレアのおっちゃんスゲー…どんな奴だよ…

「でも、何故か認められて…そんなこんなで執事をやってます」

「省略しただろ…」

「まぁ、先代執事と殺りあったりはしましたが、それくらいですよ」

殺りあったりって…どんだけ殺伐とした家なんだよ…

「じゃあ、復讐はどうなったんだ？」

「奴は…僕が殺します」

やっぱりなぁ～…根に持ちそうだし…

「復讐なんて良いことないぞ？友達いなくなるし、面白く無いし…」

「僕にはもう友達はいませんので」

「じゃあ、俺が今からお前の友達だ！だから復讐やめい！！」

「無茶苦茶ですよ？」

「友達を悲しませたらダメだからな！？
復讐なんてしたら絶交だからな！！」

「別に構いませんが？」

「俺が構うんだ！！
だから、俺を悲しませたらダメだからな！！
わかったか！？」

「くすくす…」

本当にこの少年は…面白い…
強引に約束を取り付け、解約も不可能とは…

「笑うな！！」

「では、君が僕に友達だと思わせることが出来たら、考えますよ」

「言ったな！？俺に服従したくなるくらい友達だと思わせてやる！！」

「それ、奴隷ですよ？」

「この際、奴隷でも何でもいい！！」

「あははは！まぁ、頑張ってください」

さて、仕事に向かわなくては…

「おう！メイデン！セットアップ！！」
「はえ！？りょ、了解だ」
背を向けるハルの背後で騎士甲冑を装着…
柄に手をかける
「壱式抜刀剣術…暗夜！一閃！！」
一瞬でハルへと斬りかかる！！
「これで、俺に服従しろよ…がはあああ！！！」
「全く…バカですね」
即座に反応し、回転蹴りを叩き込み吹き飛ばした
でも、少しだけこれからの日々が楽しくなりそうですね。
吹き飛んだカナンをそのままに、ハルは仕事をするべく屋敷へと消えた…
「くそ…絶対に服従させてやる…」
「マスター…目的がすり変わってるぞ」
冷静なメイデンのツッコミを最後に、カナンの意識は闇へと落ちた…

第十二話　ナイト

カナン
「ふぅ…ただいま～！」

ヒュウウウ…

カナン
「ま、まさか…このパターンは！！」

祐希奈
「ども～♪」

バキャアア！！

カナン
「ぐはぁあ！！」

ハル
「皆さんこんにちは♪」

ズドーン！！

カナン
「ひぎゃああ！！」

カナメ
「○ソン式、強制転送ＫＦＣの時間です♪」

ドゴォオ！！！

カナン
「ぐへぇあ！！」

ヴィヴィオ
「もとい、リリカルヴィヴィオです」

ヒュルルル…ズドン！！

カナン
「げは…」

クレア
「…いきなり激しいですの…」
メイデン
「帰って来たという感じだな」
カナン
「誰か心配しないのかよ！！」
祐希奈
「やっかましいわあああ！！」
チュドーン…
カナン
「お、俺が…悪い…の…か？」
ハル
「まぁ、アレだけスベリましたしね」
カナメ
「折角なので、フルボッコセンターも導入したんですよ？どうでしたか♪」
カナン
「あ～…うん…いろいろ…ごめんなさい…」
祐希奈
「何か好評みたいだから毎回使いましょうか♪」
カナン
「何故に！？今、どの辺りが好評だと！？」
ハル
「読者さんに、ですよ♪」
カナン
「俺の意思は！？」
祐希奈
「そんなの昔から無いわよ」
カナン
「シオン…新しくサッパリコース追加出来そうだ…」

ヴィヴィオ
「さも当たり前のように言われてるから確かにサッパリかもしれないね」
メイデン
「さすがだ、マスター」
カナン
「ありがとな♪」
ハル
「さて、カナン君が壊れて来た所で、これを飲みましょうか？」

祐希奈
「あ、タカトにもらったＦＴＧＦＯＰね♪」
ヴィヴィオ
「いい香り～♪」
クレア
「ですの～♪」
メイデン
「私でも良い葉だとわかるな」
カナメ
「美味しいですね～♪」
ハル
「タカトには良いものを貰いました」
クレア
「ま、まさか呼び捨て…そこまで、認めたんですの！？」
ハル
「アレ程の人間はなかなかいませんよ」
カナン
「お前とタカトさんが揃ったらまずい…ひっじょ～にまずい…と、言うことで今すぐ仲違いしてこい！！」
ハル

「まったく…今世紀稀に見るスベリ方をした癖に、傲慢ですよ♪」
カナン
「グッサーーーーー！！！
き、傷口を抉るな…」
メイデン
「まぁ、マスター…たまには仕方ない」
カナン
「め、メイデンに言われたーーーーー！！！」
ヴィヴィオ
「うん。こんなこともあるよ」
カナン
「ヴィヴィオまでーーーーー！？」
ジル
「ははははは！！まったくしょうがない奴だなぁカナ吉は～♪」
カナン
「のおおおう！！！！」
祐希奈
「さて、カナンも再起不能になった所で質問コーナー♪」
カナメ
「わ～♪」
カナン
「ふふ…これ…爽やか？それともしっとりかな～…あはは…」
クレア
「カナン！しっかりするですの！！」
祐希奈
「まぁ、バカはほっといて、アレン！しょーかん！！」
パアアアア…
アレン
「久しぶりだな…」
ヴィヴィオ

「アレン、久しぶりだね～」
アレン
「ああ…元気だったか？」
ヴィヴィオ
「うん♪」
アレン
「そうか…綺麗になったな」
ヴィヴィオ
「わっ！恥ずかしいよ…」
祐希奈
「はいはい…ヴィヴィオとアレンの仲良し話はいいから、質問行くわよ」
カナメ
「では、質問です。
『アレンって人間ですよね？
何で生身でそんなに頑丈なんですか？』
らしいですが？」
アレン
「…さぁな。
過去の私に聞けば分かるかもしれない…」
クレア
「何でそんなに投げやりなんですの！？」
アレン
「私自身がわからないからだ…」
祐希奈
「え～召喚しといて面倒ね…旧アレン！召喚！！」
旧アレン
「な、何だ？またここかよ」
祐希奈
「ほら、さっさと答える！」

旧アレン
「な、何を?」
ヴィヴィオ
「何でアレンは頑丈なの~?」
旧アレン
「ああ、それか、えっとな…俺は勇者に選ばれた時点でほとんど人間じゃなくなってるからだ」
一同
「ええ!?」
旧アレン
「そりゃあそうだろ。
人間の頑丈さのまま、魔王討伐なんて行ってみろ。魔王どころかその辺のザコにやられてしまいだ。説明終了」
祐希奈
「何とも適当な説明ね…」
旧アレン
「じゃあ次の質問な」
メイデン
「アレンさんが読むのか!?」
旧アレン
「ついでだついで。
『ハルはタカトに勝てますか?
また、勝てるとしたらどれくらいの力を出しますか?』
だとよ」
ハル
「あははは。体術勝負だけならまだしも、僕には遠距離なんてほとんどありませんし、次元断層、起こすことが出来る相手に勝てる気はしませんね。
勝てる勝てないを別にしても全力でやらないと確実に死にますし、いや~怖いですね~♪」

祐希奈
「ちなみにタカトは体術だけでＡＡ相当の威力だけど、ハルは？」
ハル
「体術だけなら互角という所ですかね」
旧アレン
「タカトって奴、そんなに凄いのか？」
ヴィヴィオ
「うん。タカトは、なのは作品でもトップクラスの強さなんだよ～♪」
旧アレン
「そりゃあスゲーな！！
タカトって奴！どんな奴何だ？」
メイデン
「そうだな…無愛想なようで、世話焼きで恥ずかしいことを平気で言うような人だ」
旧アレン
「おもしれぇな！！」
祐希奈
「弟や兄も個性的な奴らね。
ヘタレオンに、セクハラ兄貴だし…」
旧アレン
「…そいつらの家、大丈夫なのか？」
カナメ
「ご想像にお任せします♪」
クレア
「そろそろ終わりですの」
旧アレン
「最後に…そこのガキ、大丈夫か？」
カナン
「しっとり…爽やか…サッパリ…さぁ、貴方の好みは…ど～れ～か

～な～♪」
ヴィヴィオ
「えっと…後遺症かな？」
祐希奈
「その内帰ってくるわよ」
旧アレン
「じゃあ、魔王少女リリカルヴィヴィオ」
ヴィヴィオ
「魔王じゃないもん！！」
旧アレン
「あ、間違った、魔法少女だったな。
今回の話はいろいろ大変だ。
そんじゃ…任せた」
メイデン
「わかった。始まるぞ」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「遅い…」

朝、一緒に寝ていたはずのカナンはいない…
下に降りてみるが、メイデンもいない…
小一時間待ってみたが、帰って来ない…

（あんたらねえ！！どこ行ってんのよ！！）

（うわっ！！祐希奈か…びっくりしたぞ…）

念話に意外にもメイデンが応答した。

（あれ？あのバカは？）

（それが、ちょっと気を失っている…）

（は？何でよ？）

（え～と…朝の訓練をしていたんだが、たまたま来たハルさんと模擬戦をして、負けて気絶した。
そのあと、介抱のために白姫家にお邪魔している）

（最初のえ～とは何よ…）

（少し訳ありの場所もあって言えないんだ…）

（ま、いいけど…今日ヴィヴィオのお祝いあるんだからそれまでには帰って来なさいよ？）

（わかった。マスターにも言っておく）

（じゃ、また後でね）

（ああ。済まないな）

さてと…一旦家に戻ってヴィヴィオを迎えなくちゃね。

上にあった微妙に進んだ宿題を片付け、日用品を鞄に入れる。

「え～と…鍵はと…あったあった♪」

植木鉢の下にある鍵と、何やらいろいろ詰まったぐちゃぐちゃのポ

ストの下から鍵を取り出す。
同時に差し込み、捻るとカチリと音が鳴り、閉まったことがわかった。

「折角の二重ロックも隠し場所がバレバレじゃ意味無いわね…」

風間家のセキュリティなど祐希奈には全く意味を成さない。
開けかたから、隠し場所までバッチリ把握していた…

「いっぺん泥棒でもしてセキュリティの甘さを指摘してやった方がいいかもね」

などと、肩をすくめながら祐希奈は風間家を後にした。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「じゃあ…皆さんお元気で」

模擬戦が終わった直後は大したこと無かったのに、なんか体が重い…
でも、祐希ちゃんがお祝いしてくれる…これ以上先伸ばしにしちゃいけない

「カナンとうまくやりなさいよ？」

「でも、祐希奈とは喧嘩しないようにね」

「三人とも仲良くしなきゃダメだからね？」

「あはは…頑張ります」

スバルさんもティアナさんもギンガさんも私のことばかり言ってるけど…自分はいいのかな？

「次は、ヴィヴィオの速度についていけるように訓練しとくよ」

「もっと…ちゃんとした戦いなら…エリオの方が…私より強いよ」

「ヴィヴィオ、助けてくれてありがとう」

「ちょっと…情けなかったけどね」

フォワードメンバーと別れを告げ、転移魔法を展開し、準備する。

「あんまり無茶しちゃだめだよ？
後…カナンには気を付けてね？」

「フェイトママが…心配してるような人じゃないから…大丈夫」

「さっきフラついてたけど…
リミットの反動かな？」

「うん…いきなり全力でやったから…体が疲れちゃったみたい」

視界が揺らぐ…
抵抗力が落ちたせいかもしれない…

「気ぃつけなあかんよ？」

「はい」

「風邪もやけど…」

「わかってます…」

「なるべく、皆と固まって行動するんやよ？」

「わかりました」

六課に直接転移出来るほどだ…
地球のどこにだって出来るだろう…
敬礼をして、魔力を流し込み、転移する。

「ふぅ…とと…やっぱり足がふらつくや…」

いつもの林を四苦八苦しながら抜け、道行く人の視線を集めながら
一之瀬家を目指す。
しばらく進むと、誰かがこちらに走ってくる…
長い銀髪…祐希ちゃんだ…

「ヴィヴィオー！！どうしたの！？
どっか怪我したの！？」

「あのね…」

「体…熱いわよ？
まさか…風邪ひいたの！？」
こちらが何も喋らなくても理解してくれる…
やっぱり祐希ちゃんは、凄いなぁ…

「そうかもしれない…」

「魔力反応感じて来てみたら…
風邪ひいて帰ってくるなんてね」

「ごめんなさい…」

「とりあえず、うちに行くわよ？」

「うん…」

「もっと私を支えに使っていいから」

「ありがとう…」

私のほとんどの体重を支えながら嫌な顔一つせず、歩いてくれる…
なんとかかんとか、一之瀬家に到着、即ベッドに寝かされた。

「はぁ…はぁ…」

「熱上がってるわね…」

「初めてでいきなり全力出したから…その反動が…激しくって…」

「どうして、もっとゆっくりして来ないのよ…」

「お祝い…先伸ばしにしちゃったから…」

「はぁ…ちょっと薬探してくるから」

「うん…」

最早微熱などのレベルでは無い。
お祝い程度、いくらだって伸ばせるのに…
何であの子は、こういう無理をするかなぁ…

「薬…無いなぁ…」

風邪など、小さな時に一度だけ、吹雪の中、父さんに助けてもらった時しかひかなかった。
故に、今ある薬は、小さな子供用の物しかない…

（カナン！！メイデン！！）

（な、何だ！？どうしたんだ！？）

（まだカナンは寝てるの？）

（あ、ああ…）

（起こしなさい！殴ってもいいわ！！
私が許す！！）

（よく分からないが…緊急なんだな！マスター！！起きろ！！）

（ごぶぁはぁあああ！）

（早く起きなさいバカ！）

（な、何で…こんな仕打ちを…）

（ヴィヴィオが熱出したのよ！！）

（な、何！？大丈夫なのか！？）

（メイデン…ゴー！！）

（わかった！！）

（ちょ、ちょっと！ぎぃあああああ！！！）

うん♪天然は扱い安くていいわね♪

（大丈夫ならアンタに連絡しないわよ）

（すいません…）

（ちょっと薬買いに行ってくるから、私ん家に来て。鍵は開けとくから）

（待て！こっから結構時間がかかるって！）

（ヴィヴィオが名前を呼んでるわよ♪
カナンく～ん…ってね♪）

（な、何で！？）

（さぁ？とにかく私じゃダメね。
希望のアンタがさっさと来ないとヴィヴィオが…）

（わ、分かった！五分で行く！！）

（頑張ってね～♪）

二階へ上がり、自分の机から財布を探す…

「えっと…財布は…あったあった。
ヴィヴィオ、ちょっと薬局に行くから待ってて。
カナンもすぐ来てくれるし、大人しくしてるのよ？」

「う…ん…」

消え入りそうなヴィヴィオの声…
ここまで体調を崩すほどの反動って…いったいなにをしたら…
新たに氷枕を敷いて部屋を出た。

「私も急ぐから…」

家から飛び出し、薬局へと走った…
空からの視線にも気付かずに…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「わりぃ！何かヴィヴィオが風邪ひいたみたいで、大変らしいから帰るな」

「そ、それは大変ですの！
急いで帰ってあげて欲しいですの。
今、車を…」

「いいよこっちの方が速い…メイデン！」

「了解した」

銀の騎士甲冑を纏い、空へと浮かぶ…

「じゃあ、カナン、これ…お茶ですの」

四角い缶に入った玉露をくれた…

マジでくれるのか…

「ありがとな。じゃあ…」

「すいません…少し待ってください…」

「何だよ？」

隣に立っていたハルが目を閉じ、微量だが、魔力を使い始めた…

「襲撃者です…」

「もう！？何処だ！？」

「場所は…祐希奈様の家と祐希奈様の背後…急がないとまずいかもしれません。今回は二人です！」

祐希奈はまだしも…家には熱で動けないヴィヴィオ…

確実にまずい！！

「ハル！！協力しろ！！」

「仕方ありませんね」

ハルが腕に捕まったのを確認し、空間を形成…

「カナン！私も…」

「クレアはシルフィスに乗って後から来い！
お前じゃアイツらの相手はまだきつい！
周辺住民の結界外への転送頼む！」

「でも！！」

「御嬢様？市民の皆様を守れるようになるのでしょう？
戦うだけが、局員の仕事じゃないはずです」

そうだ…
戦闘能力は私はまだ低い…二人には敵わない…
なら、今の私に出来る精一杯のことをやればいい

「了解ですの！」

「おし！行くぞ！！」

空間突破発動！
風を切り裂き、音を超え、光の速さで突き進む！！

「シルフィス！」
『了解です』

機竜召喚…溶け込むように搭乗…

翼を広げ飛び上がる！
こちらも、カナンには勝てないものの、音速を破る速度で進んでいく…

「場所が近い祐希奈様は僕が向かいます」

「頼む！」

「メイデン様、空中に壁を作れますか？
出来るだけ頑丈な物をお願いします」

『分かった！凍てつく結晶よ…集え！！』

カナンの少し先に氷の塊が形成、すれ違うと同時にハルが手を放す…

「アスラ一時フル稼働…その後、三割に戻してもらえますか？」

『承知した』

ハルの足に纏われる空色の魔力…
氷の塊の側面を蹴り、ロケットのように祐希奈の方角に跳んでいった…
もちろん、塊は跡形もなく砕け散る…

「マジでか…」

『最大の力で作ったのだがな…』

ハルの力に呆れつつ、祐希奈の家を目指す…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「はぁ！！はぁ！！へばるな！！祐希奈！！」

自分を叱咤しながら全力疾走を続ける。
薬局で買った薬の入った袋のせいで片腕が触れない…それでも走る。
しかし、突如止まった全力疾走…

「え～めんど～…」
『気付きましたか？』
「スカリエッティといい今回といい…何で私はこんなに急襲ばっかり…」
『起動開始！』
「爆砕烈脚！！」

目視もせずに後ろに放った回し蹴りは、何かを捉え、粉砕した。
砕け散った銀の破片…
これがヴィヴィオが言っていたカナンの劣化した能力をもつ銀の人型…

「で…誰よ…私、物凄く急いでるんだけど…」

「たかが小娘が、よく反応したものね。
誉めてあげるわ！」

空から降りてきたのは緑色の髪に、チャイナ服っぽい物を着た奴…

「……」

「どうしたのかしら？
私（わたくし）の美しさに声を出すのも忘れてしまったとか？」

「また、小賢しい真似するのね…」

無造作に背後に手を伸ばし掴む…

このバカは注意を自分に寄せて、ザコに始末させようとしていた…

「あら…性格が粗暴な割に…冷静なのね」

「アンタ…今の私が冷静に見えるんなら…その腐った目…潰しなさい…」

ギシギシと祐希奈の背後で掴まれている偽カナンから軋む音…

やがて、ガシャンという音と共に頭が砕け散る…

「私…急襲とか、奇襲とか…大っ嫌いなのよ…

覚悟出来てんでしょうね？」

「怒り…醜い感情ですこと…」

「はっ！顔が醜いよりマシよ…オ・バ・サ・ン♪」

「誰がオバサンじゃこらあああああ！！！」

性格が豹変…

そんなに皺寄せたら余計オバサンになるのに…

「アシェル…結界内の民間人の転送出来る？」

『時間さえあれば…』

「やらせるかぁ！小娘がぁ！！」

「はぁ…うるさいオバサン…」

残像を残しながら迫る相手を驚異の胴体視力でしっかり捉えブレードを構える…

「死ねぇえ！！」

「私は…今は！！」

右から迫る拳に対し、振り上げたブレードで弾き上げる！
流れるように距離を詰め、左拳に纏う紅蓮の炎。

「機嫌が悪いって言ったでしょ！！」

「発動…イージスの盾」

拳が触れた瞬間、爆発が起き黒煙が上がる…
その威力にもかかわらず、相手は不動だった…

「硬〜…」

「最強の盾…なめるなよ！！」

「く…」

怒声と共に振り抜かれる赤い盾…
吹き飛んだ先には民間人の家…それも、まだ中に人間がいる可能性もある…
飛行魔法を使いギリギリで止まる…
しかし、既に目の前にいる相手…

「小娘ぇ！かかったわね！」

「プロテクション！！」

「あはははは！！」

驚愕…祐希奈のプロテクションが相手の攻撃を全く防げず破壊され、
打ち上げられる…
尚も続く追撃…

「何コイツ…」

「それそれそれぇ！！さっきの威勢はどこいったぁ！？」

縦横無尽に振り回される相手の右腕…
ブレードで受け続けるうちにヒビが入る…

「消え失せろ！！」

刺突…こういう単純な攻撃を待ってた！！

「アシェル！！」
『Ｂｌａｄｅ　Ｅｘｐｒｏｓｉｏｎ！』

「ふ～ん…」

爆発の衝撃で、刺突を避け、側面に回り込む！
一時的になら高機動魔法に匹敵する速さ…当然相手は空振りする…
ブレードは折れたが、丁度良い。

「烈破爆砕!!」

拳に纏われる炎の色は、紅蓮から蒼炎へ…
相手の胴体に向け、全力で打ち放つ!!

「業炎爆烈衝破!!!」

「ぐわあああ!!!」

触れた瞬間、二人を中心に衝撃波が発生!!
蒼い火花を撒き散らしながら大爆発を起こした…

「嘘…」

「な〜んて…最強の盾をこの程度でぶち抜くなんて不可能よ」

今出来る自分の技ではかなり高位に位置する技…
相手が何をしてもぶち抜く自信があった…
しかし、結果は違う、巨大な赤い盾がもう一つ。
ダブルシールドとなった相手がいた…
その片腕で自分の拳は防がれている。

「ぐぅ!!」

「あはははは!!痛い?それは痛いわよねぇ!?
衝撃がまんまアンタに返ったんだから!!」

微動だにしなかった相手…逃がせなかった衝撃は、祐希奈の拳に返り、骨を砕いた…

滲み出る血…しかし、そんなことより、まずい事が起きた…

「魔力反応…まさか…」

「大正解～♪もう一人いるのよ♪
前日の借りを返したいってさ♪」

前日…ヴィヴィオは襲撃されたと言っていた…
今のヴィヴィオじゃ無理だ！
急旋回、家の方角へと加速する！

「どこ行くの～？」

その声が響いた瞬間に、地面に叩き落とされた…
目の前に降り立つ相手

「邪魔を…するな…」

「私の目的がアンタの排除及び足止めだからそれは無理ね」

「そこを！！どけっつってんのよ！！！」

溢れる魔力…広がる白銀の翼、フルドライブ…右腕が痛むが構ってられない…ヴィヴィオが危ないのだから。

「だから～無理♪」

「はぁあああ！！！」

残った左腕、両脚に蒼炎を纏い、殴りかかるが、相手は余裕の表情

で防御するばかり…

「スキだらけよ…」

回し蹴りを弾かれ、バランスを崩した所に叩き込まれた右の盾…
今度は止まれず、住宅を破壊しながら飛んでいく…

「げほっ！くそ！！」

「そろそろ終わりにしましょうか？」

ミシっと右腕から音が聞こえた…
見ると、相手の足が上にあった…

「うあああああ！！！」

「いいわねえ…その悲鳴…もっと聞かせてよ…」

愉しんでいる…
コイツは…私の悲鳴を聞いてとても愉しそうに笑っている…
止めたいけど…止められない…

「あああああああ！！」

情けなくも涙まで出てしまう…
そんな私をみてさらに笑みを広げた相手…

「あらあら～泣いちゃって～痛い？終わりにして欲しい？」

「ぐ…はぁあ！！」

顔を近づけた相手の顔に左拳を叩き込んだ…

「ぐっ！」

「気持ち悪いから…寄らないでよ…オバサン…」

「よくも…私の顔を！！」

一瞬にして表情が変わり、殺意が放たれる…

「多少…整形出来て良かったじゃない…」

「小娘がああ！！！」

振り上げられた盾…

もうプロテクションを張る力も出ない…

カナンの返事…聞けなかったな…

「死ねぇえええ！！！」

「それは困りますね」

そんな声が聞こえた…

「がはあああああ！！！」

そして突如吹き飛ぶ相手の体…

クルクルと回転しながら隣に着地した男

「すいません、少し遅れました」

「ハル…」

この状況においても微笑みを絶やさない最強執事ハルがいた…

「粉砕骨折という所ですか」

「ちょっとね…」

「少し痛みますよ？アスラ」

『うむ』

何故か出現する痛み止めの注射

「医師免許…」

「大丈夫です。ありますよ」

少しの痛みと共に、注射針が射し込まれる…

「少ししたら効いてきますので、安全な位置まで逃げてください」

「ヴィヴィオが…」

「そちらも大丈夫です。
彼が向かっていますから」

「何すんのよぉおおお！！！！」

両手を振り上げ、背後から迫る相手…

「ハル！危ない！！」

「動かないでください…針が折れます…」

未だ振り向きもせず、注入に集中している…

「あはははは！！二人一緒に死ねぇええ！！」

「ハル！！」

「これでよし…と！！」

何が起こったか理解出来なかった…

私に見えたのは、ハルが両手を地面に両手をつけたところまで…

「が…は…」

「さて…本来、女性にはこんなことはしたくないのですが…」

相手の腹にめり込んでいるハルの右脚…

馬蹴りのような感じになっていた…

カウンターの衝撃で浮く相手の体…

霞むほどの体捌きで回転…蹴りを叩き込み、五十メートル以上吹っ飛ばした…

「自称・友人・からの頼みですので」

それに…奴の情報も聞き出せるかもしれませんし…

「何より…御嬢様のご友人を痛め付けていた貴方には、個人的にも…腹立たしいので…」

「貴様ぁああ！！ぶち殺してやる！！！」

あれだけ吹き飛ばされたにもかかわらず、ダメージなど無かったかのように接近してくる…

しかし、そんなことよりも…目の前のハルが気になった…

少し見えた横顔、すぅっと笑みが消え、鋭い目付きへと変わる…

「少々…痛めつけさせていただきます…」

寒気…相手の殺気など話にならない…

これまでで感じたことの無い殺気を放っていた…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「げほっ！げほっ！」

とっても寒い…

でも、体は熱い…

頭がくらくらする…

ここまで酷くなるとは思わなかったなぁ…

（よう…朝は凄かったのに今はそのざまかよ。

聖王ってのも大したことねえなぁ）

脳内に響く声…

この声は、カナン君…いや、違う…昨日の人だ…

「フェアリー…結界を…戦わなくちゃ…」
『無茶です！マスター！一旦逃げましょう！！』
「私が逃げたら…民間の人達に被害が出ちゃう…」
『しかし！！』

（安心しろ…
せめてもの情けだ…結界なら俺が張ってやる…）

結界展開と同時に砕け散る屋根…
破片をプロテクションで防ぎ、何とか起き上がる

「はぁ…はぁ…」

「ふふ…辛そうだな？聖王…」

目の前にはフードを被った人間…
体調は最悪…でも、逃げるわけにはいかない…

「連日私を狙うなんて…随分…しつこいんだね…」

「仕方ないさ…お前がいると、奴らの力が強くなる。
強くなられると面倒なんでな…
お前を消さなくちゃならない…」

「げほっ！！奴って誰？」

「さぁな…後は冥土で考えな…」

「っ！！」

ぼやける視界の中、自分の勘を信じて杖を立てる

「あうっ！！」

「ははは！その状態でよく防いだな」

防いだが跳ばされる…
足に力がまるで入らない…
壁にもたれ掛かり、必死に相手に杖を向ける…
しかし、剣が振り払われ、杖が宙を舞う…

「はぁ…はぁ…」

「ほら…もう武器はねえぞ？」

ズルズルと滑り落ち、ぺたりと床に座り込む…
ダメだ…立たなきゃ…立って…

「出来れば、朝みたいなお前を殺りたかったんだがな…
まぁ、無理なもんはしょうがない…死ね…」

ゆっくりと振り上げられる剣…
動いて…私の体…動いてよ…
願いもむなしく動かない両足…
銀の剣が下ろされた…
ギン…と金属特有の高い音が鳴り響く…

「なっ！」

「カナン君…」

「間に合ったな…」

二人の間に現れた黒髪、銀の鎧の少年…

剣を裏手に持ち、右腕には何故か玉露…

「ども～風間宅配便です～」

「えええええ！？」

ヴィヴィオの叫び声が響き渡った…

第十二話　ナイト（後書き）

漸く敵の登場です。　　たまにはしつこい敵もいいかなと思い、いつもと違った感じになりました。

最近バトルが不調なので次回をうまくかけるか自信がありませんが、よろしくお願いします

第十三話　覚醒

「はぁあああ！！」

「……」

横殴りの一撃を、軽く後ろに飛ぶことで回避、着地と同時に霞む右脚。
大盾で防ぐも、一秒間に十以上の蹴りが放たれる
その一撃一撃が、祐希奈の爆砕拳と同等…
そして、ハルが女の背後へ走り抜け蹴り飛ばす！

「あれって…そんなに速い？」

遠方から見ている祐希奈にはそれほど速くは見えない…
しかし、相手にしてみれば、錯覚によって前後の距離感を潰され、
気付けばハルが横を通り過ぎているように見えている…

「ちぃ！」

「……」

何だコイツは！！
うざいうざいうざいうざい！！！

「鬱陶しいのよーー！！！」

大盾が地面に叩き込まれ、跳ね上がるコンクリートの柱…

「……」

しかし予測済み…軽く脚を上げ、踏みつける！
震脚…その動作によって柱は砕かれ、さらに止まらず、地面に触れた瞬間、コンクリートの下の剥き出しになった土から大量の土煙が舞い上がる…

「鬱陶しいに加えて小賢しいのよ！！」

大盾を振るい、土煙を吹き飛ばした…
そして見る…目の前に膝を沈め溜めを作っている男を…

「…その程度ですか？」

伸びる左膝…連動する右脚全身のバネを使い、膝で女の顎を打ち抜いた…
宙に浮く女…同時に跳び上がったハルの畳まれた脚が胴体に直撃…
吹っ飛ばされた…

「ふぅ…」

「くそ…がああ！！！」

女は吹き飛びながら、盾の中心から砲撃を放つ！
軽く左腕を上げ、斜めに弾く…

「軽いですね…」

「はぁ…はぁ…あ…ああ…」

全く息を乱していないハルと既にボロボロで息も絶え絶えの女…
女の額から血が流れ落ちる…

「つ、強い…カナンが負けるのも納得出来るわね…」

私が全く敵わなかった相手に、圧倒的なまでの強さを見せつけている…
その意識がこちらへと向いた…

（祐希奈様）

（な、何？）

（その距離では足りません。もう少し離れて下さいますか？）

（足りないって…）

私が今いる位置は戦闘区域より３００メートル以上離れた空中…

（結界の境界線ギリギリまで下がって下さい）

（わ、わかった）

今のハルが冗談を言うとは思えない…
思い切り離れ、ほとんどハルが点になる位置まで下がる…

（下がったわよ？）

（後は、プロテクションの展開を…）

（う、うん）

展開した瞬間、街に赤い光が突き刺さる…
そして、再び体を突き抜ける寒気…

「な、何これ…」

一キロ以上の距離があるにもかかわらず、冷や汗が、震えが止まらない…
こんなの間近で受けてるハルは！！

「うあああああ！！殺す…よくも私の顔に傷を…許さない！！！！」

「……」

禍々しい魔力と共に赤い大盾の中心が開き、女と思われる顔が現れる…
大盾の中の女の視線が向いた先が石化していく…

「『アイギス』ですか…」

「そうよぉ…イージスの盾のもう一つの名前…
よく知ってるじゃない」

「文献でチラリと見た覚えがあったので」

「じゃあ…この能力も知ってるわよね！！」

ハルへと向けられる大盾…飛び込むように横へと回避…
先程立っていた場所が石化していた…

「よく避けたわね…
でも…いつまで避けられるかしら!?」

「……」

その場に留まり、振り回される大盾…
視線の先が次々と石化していく…
俊敏に動き回り、視線を避ける…

「あはははは!!逃げ回りなさい!!」

「……」

しかし、次の瞬間、ハルは女に突っ込んだ!

「ふふ…死になさい!」

向けられる大盾…
視線の中心から徐々に石化していくハルの体…
それでも、無表情に接近し、回し蹴りを放つ!

「なっ!」

「ふっ!!」

右腕の盾を弾き飛ばし、左拳のアッパーカットで左腕の盾を飛ばす…
すると、ハルの石化は止まり、砕けた…
直蹴りを放ち、女を盛大に吹き飛ばす!

「げほっ！き、貴様！！」

「残念でしたね…アレがデバイスである以上、貴女の魔力が必要…
途切れさせれば石化は解ける…」

「貴様…おかしい…イカれている！」

いくら石化が解けると言っても失敗すれば、終わり…
通常なら、踏み込む勇気など出ないはずだった。
その質問にハルは、少し笑った…

「ええ…僕はイカれていますよ。
恐怖なんてものは、感じない。
死ぬのなんて怖くないんですよ…」

その時、女はゾクリとする…
私が、この男を恐れた？あり得ない…あり得ない！！

「お前は…危険だ！」

「なら…どうします？」

「全力で排除する！！」

アイギスを発動して初めて、女から余裕が消えた。
大盾を呼び戻し、攻勢にでる！

「ふん！！」

「はぁあああ！！」

振り払われる右盾！
回転しながら叩き込まれる右脚！
視線に当たった右脚は石化を始める…
しかしハルは構わない…
投げ出すようにバク転、大盾を打ち上げる！

「死ね！！」

振り上げられた左腕…
軽くバックステップを踏み、避けるが、大盾に魔力がこもる！

「吹っ飛べ！！」

「……」

大盾が叩きつけられた位置から衝撃波が放たれ、ハルの体が宙を舞う…

「終わりよ！！」

「おや…」

投げられた大盾は、このままの軌道ならハルを挟み込む…
体勢不十分…回避不能…

（ハル！！これ使いなさい！！！）

一キロの遠方から飛んでくる物があった…
巨大な石の塊…祐希奈が物質加速を叩き込み、投擲した物だった。

「アスラ五割に…」
『了解した』

直撃コースに飛んできた石を、着地するように両足をつける…
石を砕き、流星のごとく女へと向かった。

「ちっ！！」

「はぁあああ！！」

呼び戻した盾と勢いを乗せた蹴りが激突！
石化が始まる右脚…
完全に石化する前に力を込め、蹴った勢いでクルリとバク宙、同時に左脚と右拳に纏われる空色…
次の瞬間には胴体を殴っているハルがいた…
着地の動作無しで踏み込んだため、女は反応が出来なかった…

「が…は…」

「瞬牙…」

ハルが呟くと、遅れて来た衝撃が相手を音速の速さで吹き飛ばす！

（祐希奈様、ありがとうございます）

（私にはこれくらいしか出来ないからね…任せちゃってごめん…）

（いえ、女性を守るのは男性としての役目ですし、お気になさらずに）

祐希奈なそう伝えた後、再び正面を見る…
吹き飛ばした先、立ち上る魔力…

「やれやれ…頑丈な方ですね…」

「もう…いいや…全部面倒くさい…」

そう言って、女が立ち上がる…
首を傾げたまま、何故か笑っていた…
そして、盾を正面に構えながら直進してくる！

「……」

地面を踏みつけ、土煙を巻き上げ、視界を潰す。
女は構わず突っ込み盾を振り、煙を飛ばした。

「そろそろ…決めさせてもらいます」

煙に紛れ、女の背後に回り込んだハル…
直蹴り！弓のように曲がる女の体…ミシミシと骨が軋みを上げながら吹き飛ぶ！

「あはははは！」

笑い声を響かせながら無茶苦茶な体勢で右盾を地面に突き刺し、止まる…

「く…」

無理矢理向けた左盾から赤い閃光…
跳び上がり回避したものの、閃光が通り抜けた先は一瞬にして石化した…
そして追撃、振り上げられる大盾。

「死んじゃいなさいよ～～♪」

「まだ…無理です」

腕で防御するが、轟音と共にハルが地面に叩き落とされる…
再び舞い上がる土煙…
しかし、次の瞬間には跳び上がるハル…
頭上から踵落としを放ち、入れ替わるように叩き落とした。

「……」

「そんな怖い顔しないで…もっと楽しみましょうよ!!」

瞬牙を叩き込んだ後から様子がおかしいですね
タガが外れたのかもしれません…

「殺り合いをさぁ!!!」

またも直接軌道…
盾の内側に入り込み、顎を蹴り上げる!
宙に浮く女…しかし、またも無茶苦茶な体勢から回転…

「っ!!」

「あはははは!!もっと!もっと!!」

大盾の一撃は、ハルを容易く殴り飛ばし、建造物を破壊しながら突き進むハルが止まらない…

「右腕がやられましたか…」

左手を着き、脚を滑らせ火花を散らしながら漸く止まる。
盾を防いだ右腕は、完全に石化していた…

「そ～れ！！！」

「……」

豪快な破壊音と共に大盾がこちらに飛翔する…
軽く横に跳び、回避。
正面からは、女が盾を振り上げながら迫る。

「あはははは！！」

「はぁあああ！！」

回し蹴り、カウンターと同時に叩き込み、今度こそ女は吹き飛ぶ…
しかし、頭をこちらに向け、ニタリと笑い、掌をクイッと内に捻る…
背後から聞こえる風を切る音…
ほとんど直感だけで左腕を振り抜く！
硬い感触が広がり大盾が飛んでいった…

「二肢が使えなくなりましたか…」

右腕、左腕の肘から上が石化…

全く動かない…

「あは♪さぁ…ピンチよぉ…
足掻いて見せてよ…どうするのかな…」

「ふぅ…」

腕が二本使えなくなりながらも、ハルの表情は何も変わらない…
ただ、相手の動きを見ているだけ…

「まだそんな顔出来るんだ…
じゃあ、次は足を潰すわね…」

「残念ですが、もう貴女に勝ち目はありません」

「何ですって…？」

「両腕が使えない今、僕は本気を出さなくてはいけません…
死にたくないですしね」

「あはははは！手加減してたみたいな言い方ね！」

「正確には、出せなかった…ですけどね。
何せ、貴女と戦う理由が祐希奈様の仕返し…程度のことぐらいでしたし。
ですが…このままでは生命の危機、僕はまだ死ぬわけにはいきません…」

「ふふ…負け惜しみってダサいだけよ～？」

「どう言う意味にとっていただいても結構ですが…僕は、一人以外は人殺しはしたくないんです。
ですから…」

ハルが女の横を通り抜けた…

「っ！！」

「死なないでくださいよ…？」

ソバット！背中を蹴り抜かれ、吹き飛ぶ！！

「この…」

「ちなみに常時五割で行きますので…お気をつけください…」

吹き飛ぶ女に跳躍で追い付くハル…
腹部を踏み抜く！！
地面が砕け、陥没する！！

「あああ！！！」

「どうしました？カナン君なら反応しますよ？」

女の顎に爪先で蹴り上げ、再びソバットで横腹を蹴り抜いた！！
くの字に曲がり、飛んでいく…

「このままなら死にますよ？」

追撃に追撃を重ね、再び追い付く…

「調子に…乗るな！！」

右盾が振られ、発生する衝撃波！！
ハルはそれを…蹴り飛ばした…
風は2つに裂け、ハルの左右に突き抜ける…
しかし、一瞬のタイムラグ、それを狙っていた！

「あはははは！！石になれええ！！」

向けられる大盾、放たれる赤き閃光！！
ハルは、閃光は避け、残像を残しながら迫る！
視線に入るだけでも石化は進む…
現に、ハルは三分の二は石化している
自由なのは、頭半分、右足と左の太股から下だけである。
それでも、ハルは、残る右足で跳躍…横に滑るように回転蹴りで防御の上から女を吹き飛ばす！

「ぐ…でも…もう私の勝ちね！！」

（右足一本あれば十分ですよ…）

ほとんど石化しながらも微塵も表情を変えずに迫る…

「ちっ！！」

女は、ハルとは逆方向に飛び、閃光を放つ！
その先の空には…祐希奈がいた…
ギリギリで反応し、直撃は避けたものの、石化し墜落女に捕まえられた…

「きゃあああ！！！」

「あはははは！！さっさと離脱しなかったのが運の尽きね！！！」

「祐希奈様！！！」

「さて…動いたらどうなるか…わかるわよね？」

「ふふ…」

「何を笑っている！！」

「いえ、僕まで彼に影響されるとは思いませんでしたよ」

「どういう…」

言葉の途中で女の体は吹き飛び強層結界にぶち当たり、全体にヒビを入れた…

女のいた場所には、祐希奈がそのまま残っていた…

「自分の信条を曲げてまでほど仲間を助けたいと思う日が来るとは…ね。

まったく…彼には困った物です」

「へ？」

ハルが言い終わるのを待っていたかのように石化が解けた。

「は、ハル？今何したのよ？」

「出力全開で蹴り抜いただけですよ？」

「…何よこの惨状はーーーー！！！！」

「あはは！まぁ、結界内ですし」

先程ハルが立っていた場所から後ろから先…結界の端までが更地と化していた…

家など一つ残らず倒壊している…

「民間人、大丈夫なんでしょうね…」

「さぁ？」

「さぁって何よ！さぁって！！

冗談じゃ済まないわよ！？」

「済みますよ。

御嬢様が回収を終えてましたし大丈夫です♪」

プチ…

「ハル…特別に烈破紅蓮爆砕撃の一発で許してあげるわ…

大人しく座りなさい…」

「あははは。何か背後に黒いオーラが立ち上ってますよ～？

危なそうなので逃げるとします♪」

「待てコラーー！！！」

▼▼▼▼▼▼▼

「成る程…確かにお前なら間に合っても不思議は無いな…」

「神速が売りの風間宅配便だからな…」

ギリギリとつばぜり合いが続く…

「ヴィヴィオ、ちょっとこれ持っててくれ」

「う、うん」

右手から投げられる玉露…
剣を両手持ちにし、相手を弾く…
一メートルの後退…納刀し膝を落とす…

「お前らの目的は俺だろ…何でヴィヴィオを狙った？」

「お前の中に流れる血が答えだよ…」

「…血？」

「お前みたいなただの人間が、エクスカリバーのような高位のロストロギアを使いこなせるか不思議じゃ無かったのか？」

「全っ然！！」

「…アホだろ」

「やかましいわ！！」

「ま…サービスタイムも終わりだ。
後で調べてみろよ」

フードの中でニヤリと笑った気がした…
クルリと剣を回し、ゆっくりと納刀していく…

「生き残れたらな…」

「っ！！」

消失…次の瞬間には、再びつばぜり合いになっていた…

「ほう…あの距離で受けたか…」

「形が似てると思ってたけど…こんなに早く会えるなんてな…」
『姉さん…』

男は、剣を弾き上げ、幾筋もの銀の閃光を煌めかせる！
それら全てを叩き落とす金の閃光…
一秒の間に十合を斬り結ぶ！！

「ちっ！」

「もうへばったのか？」

しかし、徐々に金が遅れ始める…
一撃の重さが違う…
弾く度に重くなる銀。

でも…退くわけにはいかない…

「うらぁああ！！」

「ふ…」

一際高い音が響き、またも距離が開く…

「そのカス…いつでも守れる位置から動いたらどうだ？」

「カスじゃねえ…大切な仲間だ…」

「ごめんなさい…」

自分が退けば、背後にいるヴィヴィオを守る者がいなくなる…

「甘い奴だな…」

再び疾る剣閃…
全て受けきり、弾いた瞬間前に出る！

「後で直すからな…」

相手の頭を掴み、突進！壁をぶち抜き、外へと押し出す！

「広い位置に出たってことは…お前の死ぬまでが早くなるんだぜ？」

「死なねえよ…
今度約束を破ったら呪われそうだしな…」

二人の姿がぶれる…
すれ違うように剣をぶつけ合い、火花を散らす！
しかし、力負けしたカナンの体勢が少し崩れた…

「おらよ！！」

「ぐぅ…」

回転と共に放たれた斬撃は、受けたカナンを吹き飛ばす！

「弐式抜刀剣術…」

裂ける空間…背後に空間を形成、三メートルの後退をする。

「虚空閃…」

裂けた空間から斬撃だけに留まらず、真空刃まで放たれ、カナンに向かう！
無理に体を捻り、回避…しかし、目の前に相手がいた…
下段に構えられた剣に集まる光…

「死ぬぜ？」

放たれる極光…飲み込まれる前に、刺突を打ち込み、弾く！
多少ダメージを受けるが、無視、圧縮に集中…

「貫け！！」

剣の先から光が放たれ、銀の光を貫く！
しかし、相手には届かず、相殺され消滅した…

「はぁ…はぁ…」

「よく耐えたな？」

「うるせえ…」

『マスター…』

「大丈夫だ…俺が姉さん助けてやるから…」

「助ける？俺より弱いお前がどうやってだよ？」

「助けるっつったら助けるんだよ！！」

「お前じゃ無理だって言ってんだ！！」

「『「『ユニゾン・イン！！』」』」

カナンは黒髪から金髪、金色の瞳へ…

相手もフードに隠れていなければ、銀髪、銀色の瞳だろう…

「「四式抜刀剣術…光刃！！二閃！！」」

同時にぶれる二人の体、交わり、弾ける火花…

振り抜いた形の二人が止まる…

「ぐ…」

「お前じゃ勝てねえよ…」

カナンの腕から血が流れポタポタと地面に落ちていく…

「黙っとけ！！」

突っ込みつばぜり合いから力を込め、吹き飛ばそうとするが、相手は動かない…

「主としての能力も…デバイスの力も俺が強い…お前達では勝てん」

「ぐあああ！！！」

力負け…地面に叩き落とされ、土煙が上がる…相手は急降下…刺突をカナンに叩き込む！！空間突破で回避したカナンを追撃するように大量の石針が飛び出す…

「くそ！！」

翻って避ける…が、接近を感知…

「聖王も…」

「ぐぅぅ！！」

横殴りの一撃に耐えきれず、再び吹き飛ぶ！

「お前も…」

呼吸の間も無く飛ばされ、盛大に住宅を破壊しながら地面を滑る…

「弱すぎる！！」

追撃…銀色の極光は、カナンを追うように、放たれ、爆発した…

「死んだか？」

「誰がだよ…」

背後から響く声…
空間把握の能力でさえ捉えきれない速度でカナンが回り込んでいた…
左手に集まる大地の力…

「もう…」

「ふん！！」

衝撃波と共にぶつかり合う剣…
カナンは、空中に氷の塊を形成…右足で踏みしめる…
脚にも集まる大地の力…

「くぅ…」

「下がらない…」

重心を移動し、カナンが相手を吹き飛ばす！
追撃！上段から振り下ろし叩き落とす！
まだ止まらない…直進、納刀！！

「甘いんだよ！！」

虚空破砕断…

巨大な裂け目から放たれた斬撃は、カナンを通り抜ける…
空間突破を発展…湾曲させ避けていた…
男の真横にカナンが進む…地面激突寸前で直角に湾曲…突き進む!!

「なっ!!」

「抜刀剣術…零式…」

直進!直進!直進!直進!!
交わった剣をまだ押し込み、止まらない!!
湾曲…空へと男の体ごと持っていく!!
火、水、風、土、雷、氷…全ての光が剣へと集まっていく…

「龍神演舞!!」

遂に剣が振り抜かれる…吹き飛ぶ相手の体…
それを追うように6つの属性の龍が剣が飛び出し、相手に喰らいつく!!

「うわあああああ!!!」

喰らいついたまま地面へと落ちていく…

(ヴィヴィオ!最大出力で防御しとけ!!)

(わ、わかった!!)

着弾…地面に叩きつけられた衝撃で家は倒壊していく…
しかし、まだ龍は消えていない…
演舞は終わっていないのだから…

最後の属性…光がカナンの剣に宿る…

「終演…光龍天墜顎！！」

放たれた光は、光龍へと姿を変え、六龍と衝突…
それを震源に結界内で大地震が起きる…
更地…どころレベルでは無かった…

「おし！メイデン！行ってこい！！」
『ああ！！』

エクスカリバーを投擲…カラドボルグの鞘へと吸い込まれるように入った…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

深い闇の中に私は立っていた…

「姉さん！！姉さん！！」

「誰…」

銀髪の私とそっくりな女性が現れる…

「私だ！エクスカリバーの管制人格！貴女の妹だ！！」

「妹…私にそんなものは存在していない…
邪魔物は排除する…」

踏み込む相手…唸る拳を避けながら説得を続ける

「いたんだ！！貴女は記憶が封じ込められているだけだ！！
一緒に帰ろう！！」

「……」

無言で殴りかかってくる姉…
拳が体をかすった…

「話を聞いてくれ！！」

「……」

重い一撃を、受け止め、動きを止める…
しかし、拳の次は膝が動き、腹部を抉った…

「がはっ…姉…さん」

「……」

蹴り上げからの回し蹴り…吹っ飛ぶメイデンの体…

「げほっ！」

「……」

追撃…容赦無く、攻撃を加えていく…

「あ…」

「消えろ…」

頭へと迫る一撃…
それが止められた…
カナンによって…そして思い切り殴り飛ばす！

「ぐ…」

「マスター…どうやってここに…」

「アイツの体からカラドボルグ外して無理やり侵入したんだよ。
早くしないと俺まで取り込まれそうだ…」

「マスター…そこまでしなくていい…私が…」

「お前一人で頑張らなくていいって言ったろ？」

「マスター…」

「排除する…」

再び接近してくる姉…
その一撃をカナンは顔面にまともに受けた…
しかし、足を踏ん張り耐える…

「お前…そんなもんじゃないだろ…
何で魔法を使わない？
使えないんじゃないのか？」

「……」

頭、腹部へと連撃が叩き込まれるが、それでもカナンは動かない…

「げほっ！どうした？メイデンの話だと、お前のが強いって話だけどな？
俺一人倒せないのか？」

「黙れ…」

「ぐ…」

めり込む拳…
その一撃にカナンは笑った…

「やっと感情出したな…
やっぱりお前…この中では自我あるだろ？」

「っ！！そんな物はない！！」

「じゃあ…何でそんなに怒ってるんだ？
言ってることおかしいって気付いてるか？」

「黙れ！人間風情が！私を…無茶苦茶にした人間のくせに！！」

怒りで震える拳…
それを受けながらもまだ話す…

「じゃあ聞くけどな…無茶苦茶のままでいいのか？
助かりたく無いのか？
妹と一緒にいたくないのか？

言ってみろよ？」

「やめてくれ…私に…これ以上、希望などを与えないでくれ…」

「一緒にいたいのかって聞いてんだよ！！」

「姉さん…マスターなら大丈夫だ…言え」

「いたいです…妹の貴女と一緒に…」

「うん…」

メイデンがしっかりと姉を抱き締める…

「おし。そんじゃ、契約といきますか！」

「それは…ダメです…
貴方を巻き込んでしまいます…
妹と話せて良かった…後は消滅を…」

「そうだな～メイデンが汚れ無き者だし…名前…どうするかな…」

「私の由来は適当では無かったのか！？」

「ん？あ～気にするな」

「気にするぞ！！」

姉の話を無視して名前を考えていた…

「貴方達！聞いていますか！？」

「な～名前何が良い？」

「姉さんも一緒に考えよう」

「完全に聞いてないですね…」

「おし！お前はレナスだ！！」

「ちなみに由来は何だ？」

「どっかの神様！以上！！」

「またか！？また適当なのか！？」

「ですから…貴方が取り込まれると…」

「そうと決まったら契約だな」

「良かったな姉さん」

「人の話を聞きなさい！！」

「「却下」」

「えええ！？」

なんという無茶苦茶な主と妹だろう…

というか…私の妹こんな性格でしたっけ？

「暴走押さえつける必要ないからな」

「え？」

「お前の人格だけ抜き取って、エクスカリバーの中に入れる悪いとこは全部切り離すから問題無し」

「そんなことは…」

「俺とメイデンがいれば出来るさ。鞘も剣もほとんど同じプログラムだし、後はお前がいじってエクスカリバーとカラドボルグを分割すれば出来るはずだ」

「無茶苦茶ですね…」

「まぁ、マスターは無茶苦茶が売りだからな」

「ひでぇ！！」

「ふふ…ですが、やってみましょうか」

「よっしゃ！！」

三人が手を繋ぎ、魔方陣が展開…宙に浮き始めていく…

「我…レナスは…汝を主と認め、管理者の権限を汝へと譲り渡し、全てを汝に委ねんとする…」

「プログラム解析…

管制人格抜粋…鞘…剣…排除完了…メイデン…頼んだ」

「エクスカリバー…プログラム…改変…管制人格レナスをここに…姉さん…」

「はい…解析…修正終了…分割終了…マスター…風間カナンと認識…完了…」

一本の剣の中に二つの管制人格…
普通なら不可能…しかし、エクスカリバーとカラドボルグほとんど同一の剣だからこそ出来る荒業。

「鞘、返す！！」

最早カラドボルグの鞘は必要無くなったため、フードの男へと返却した。

「貴様…何をした！？」

「メイデンの姉さんを抜き取っただけだ。
その中にいるのは、ただの破壊神ってとこか？」

この言葉に、男はクスクスと笑う…

「丁度良い…俺が欲しかったのは純粋な力だけだったからな…」

「そりゃあ…お互いに目的が果たせて良かったな…」

「しかし…少しばかりこの力は俺の手に余るらしい…
今すぐ葬ってやりたいが、俺まで暴走しかね無いんでな…退かせて

もらう…」

「……」

「また会おう…」

展開される魔方陣…やがて男は消え去った…

「ふはぁ…ヤバかった…」

膝がガクリと落ち、地面に倒れ込む…
変身が解け、レナスとメイデンが現れた。

「大丈夫ですか？／大丈夫か？」

「いや～危なかった…」

大技を使った上に、暴走をしないように抑え込んでいた疲労…
正直、アイツが暴走するか、まだ戦えたら、終わっていた…

「そうだ…ヴィヴィオは…」

「あはは…ここだよ…」

数メートル先の地面にヴィヴィオが倒れていた…

「悪い…今、結界解くから…」

結界が解かれ、町並みが元に戻る…

「さて…と…風邪ひいてるのに、無理させたな…ごめん…」

「ううん…私が悪いんだもん…いいよ…」

自分の体もボロボロの中、ヴィヴィオを背負い、祐希奈の部屋へと運ぶ…

が、ベッドにヴィヴィオを寝かせたところで、ダウン…二人一緒に夢の中へと旅立った…

「なんというか…凄い人ですね」

「ああ。マスターは良くも悪くも凄い人だ」

「そうなんですか？」

「間違いない…ふあ…」

「疲れましたね…私達も寝ましょうか？」

「そうしよう…」

カナンとヴィヴィオの頭の上で姉妹もまた眠りについた…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

カナン

「いや…バトル二つで一話終了って…」

祐希奈

「まぁ、しょうがないじゃない。

敵の能力全部ばらす訳にはいかない関係上この作者にはここまでが限界ってことよ」

ヴィヴィオ

「私達も活躍しなきゃいけないしね～」

メイデン

「今日はこの四人なのか？」

カナン

「人数捌ききれなくなるからな」

祐希奈

「そんじゃ…魔法少女リリカルなのはＡｎａｔｈｅｒ　Ｓｏｗｒｄから、夜十神慎吾さんと朽刃梓さんよ。どうぞ～♪」

慎吾

「初めまして夜十神慎吾だ…あれ？梓は…」

カナン

「初めまして、慎吾さんカナンだよろしくな。」

慎吾

「ああ、よろしく…で…何でそんなに離れてるんだ？」

カナン

「おい。お前らもうちょいこっち…」

ヒュルルル…ゴガーン！！ザッシャアアア…

慎吾

「成る程な…」

カナン

「いや…いきなりっすか…」

梓

「こんにちは♪北斗の拳継承者の朽刃梓とは私のことよ♪」

祐希奈

「梓さん…」

梓

「梓でいいわよ？私も祐希奈って言うから」

祐希奈
「じゃあ、梓…グッジョブ！！」
梓
「やっぱり♪」
パンッ！！
ヴィヴィオ
「うわぁ…意気投合してるよ…」
メイデン
「ヴィヴィオ…辞書って刺さるのだな…」
ヴィヴィオ
「ホントだ。地面から煙が出てるよ…」
慎吾・カナン
「誰か心配しろよ！！」
梓・祐希奈
「黙れ○原モドキ！！」
バッキャアアア！！
慎吾・カナン
「ぎゃあああああ！！！血がーー！！！！」
ヴィヴィオ
「祐希ちゃん○原さんって誰？」
祐希奈
「まぁ、アレよ。人外の存在」
梓
「それと便座カバー♪」
メイデン
「え？え？」
ヴィヴィオ
「○原さんって便座カバーなんだ～」
カナン
「違うからな！？」

慎吾
「後ネタが危ないからな!?」
梓
「え?辞書のアンコール?」
祐希奈
「私にもやって欲しいって?」
梓・祐希奈
「しょうがないわね～♪」
カナン
「言ってないっす!!」
慎吾
「お前ら仲良すぎだろ!!」
梓
「まぁ、リリカルなのは楽屋裏で会ってるし」
祐希奈
「そうよ。あ、次、ＥＸなんでシオンさんスタンバってください。とか聞くでしょ?」
梓
「そうそう。実はなのは小説の人物とは皆会ってるわよね♪この後は飲み会に行く予定よ♪」
ヴィヴィオ
「そうなんだ～。だから、他の作品にもすぐに出られるんだね～」
メイデン
「まさか、小説の裏ではそんな所が出来ていたとはな」
カナン
「お二方!違いますよ!!そんなスタジオみたいな設備じゃ無いからね!?」
慎吾
「お前らな…時と場合と人を見て軽口を叩け」

ヴィヴィオ
「え?スタジオ無いの?」
メイデン
「何だ…この後、シルフレを訪ねてクラウンと遊ぼうかと楽しみにしてたのに…」
梓・祐希奈
「こいつらが嘘ついてんのよ♪」
ヴィヴィオ
「カナン君酷いよ…」
メイデン
「うぅ…クラウンに言いつけてやる…」
カナン
「何度言わせる気だよ!!
祐希奈の言うことは九割は疑え!!」
慎吾
「梓の言うことは十割疑え!!」
祐希奈
「ほっほ〜う?」
梓
「便座カバーの分際で私達に歯向かう気?」
カナン・慎吾
「まず俺達は人間だ!!」
祐希奈
「天!!」
梓
「ちゅぅうーー!!!」
ズガーン!!
カナン
「ぐはっ…広辞苑…」
慎吾

「川が見えるぜ…」
ヴィヴィオ
「いつにも増して飛んでるね」
メイデン
「まぁ…ＬＶに来たからには仕方ない」
祐希奈・梓
「イェーイ♪」
パンッ！
カナン
「ふっかーつ！！！」
慎吾
「お前達の気持ちはよくわかった…」
祐希奈
「何よ…また広辞苑でも…」
梓
「まずい…」
ヴィヴィオ
「メイデン、逃げよっか？」
メイデン
「そうだな、アレはまずい」
カナン
「カナンと…」
慎吾
「慎吾の…」
カナン・慎吾
「お説教タイム…２４時間…」
祐希奈
「だ、誰があんたらにお説教なんか…」
慎吾
「座れ…」

祐希奈
「う…」
梓
「あの～慎吾？釈放の余地は？」
カナン
「変わりに俺が答えてやる…無しだ♪」
梓
「……」
慎吾
「さぁ…今日も皆仲良くレッツお説教タイム…」
祐希奈・梓
「いやあああああああ！！！！！」
ヴィヴィオ
「じゃあ、今日はここまでです」
メイデン
「召喚に応じてくれた蒼天の騎士さんありがとう」
ヴィヴィオ・メイデン
「またね～／ではな」

２４時間後…祐希奈と梓の涙で四つの川が出来たそうな…

第十三話　覚醒（後書き）

次回は…ヴィヴィオとカナン、メイデンとレナスの話…の予定です。

第十四話　衝撃（前書き）

少し遅れました～
ろいろあります…

今回も次回も日常編となりますが…い

第十四話　衝撃

祐希奈
「はいど～も♪この前書きの司会として定着してる祐希奈よ♪」
ヴィヴィオ
「アナウンサーのヴィヴィオです♪」
メイデン
「ア、アイドルのメイデンだ…」
クレア
「次期当主のクレアですの♪」
ハル
「執事のハルです♪」
カナン
「ただのカナンだ…」
カナメ
「質問読み上げ担当のカナメです♪」
レナス
「前回から参加のレナスです」
ヴィヴィオ
「たくさんになったね～♪」
祐希奈
「まぁ、そろそろ捌ききれなくなってるから消すけどね♪」
ハル
「あははは。必然的に僕たちが裏方にまわりますかね？」
クレア
「歴代メンバーには負けるですの」
レナス
「ところで、メイデン？」
メイデン

「何だ？」
レナス
「貴女はアイドルだったのですか？」
メイデン
「違うっ！！」
レナス
「では何故あのような自己紹介を…」
メイデン
「あれは…祐希奈にやれと言われたから…」
祐希奈
「私は何も言ってないわよ♪」
メイデン
「ええ！？だ、だってさっきに！！」
ハル
「自分でアイドルと言えるなんて相当の自信なんですね♪」
メイデン
「な、何でそうなるんだ！！
違うと言っただろう！」
ヴィヴィオ
「メイデンならアイドルでもできると思うよ？」
メイデン
「な、何で皆私をいじめるんだ…」
カナン
「何だ？また理由を言って欲しいのか？」
カナメ
「それはですね～♪」
メイデン
「言わなくていい！！」
一同
「可愛いから♪」

メイデン
「はぅう…」
プシューーー…
レナス
「メイデンも苦労しますね」
祐希奈
「さて、今日はきつきつだし、カナメ！」
カナメ
「はい♪最初の質問はですね…
『何故、零式なんですか？』
はい。カナン君どうぞ♪」
カナン
「あ～あれはだな、元々無い技だからだな。
本来は、あそこで金剛閃牙の予定だったんだけどな…その場のノリと思い付きで新技で行こう！みたいな感じで変更になったわけだ。
だから、存在しない抜刀剣術…零式って訳だな」
ヴィヴィオ
「ちなみにネーミングだけで一時間考えていたという経歴があったりします」
祐希奈
「めちゃくちゃ無駄な時間ね…
カナンの技なんて全部…
『ヘタレオンスラッシャーーー！！！！』
でオッケーよ♪」
カナン
「いやいやいやいやいや…明らかに描写がわからん上に、名前が適当すぎる…」
レナス
「そうですか？私は格好いいと思いましたが？」
カナン・祐希奈

「えええええ！？」
クレア
「祐希奈様まで驚くのですの！？」
祐希奈
「ちょ、ちょっと待ちましょうね？
ヘタレオンスラッシャーよ？」
レナス
「わかっていますよ？」
カナン
「格好いいか？」
レナス
「はい。響きなどがとても」
カナン・祐希奈
「……えええええ！？！？」
カナメ
「はいはい。次に進みますよ～♪
『レナスとメイデンってレナスの方が強いんですよね？メイデン使う必要が無くなるのでは？』
はい、レナスさんどうぞ～♪」
レナス
「それはこの子の謙遜ですよ。
そもそも、私とメイデンは得意な属性が違います。
メイデンは雷、風、氷です。
対して私は地、火、水が得意なのですよ」
カナン
「待て…地ってメイデンじゃないのか！？」
メイデン
「違うぞ…」
ヴィヴィオ
「あ、メイデンおはよう～」

メイデン
「ああ…私は姉さんより地の力は負けている…というよりは、勝負にならない」
祐希奈
「じゃあ何でよく使ってたのよ？」
メイデン
「使い勝手もあるが、姉さんのようになりたかったんだ」
ハル
「憧れから使ってたということですか」
メイデン
「そうなる」
クレア
「ちなみにどれくらい違うのですの？」
レナス
「得意な属性とそうでない属性の差は、約二倍～三倍ですね」
ヴィヴィオ
「うわぁ…凄いや…」
祐希奈
「ホントにカナンには勿体無いわね…」
カナン
「ほっとけ…」
カナメ
「では、質問も終わりましたので、本編に移ります」
ヴィヴィオ
「今回は…」
カナン
「まぁ…うん…」
祐希奈
「何よ？」
ヴィヴィオ

「魔法少女リリカルヴィヴィオ！」
カナン
「始まります！」
祐希奈
「逃げたわね…」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼
カナン達が眠りに落ちてから一時間後…

（カナン君。カナン君起きてください）

「ん…誰だ？」

（僕ですよ）

（何だ、ハルか…）

（とりあえず、すいません）

（は？いきなりなんだよ？）

（祐希奈様を救出して相手は倒したんですが…逃げられまして…）

（…倒したのに逃げられた？）

意味がわからない…
倒したんなら、気絶してるかなんかじゃないのか？

（あははは。ちょっと祐希奈様と遊んでいる内に逃げたようで…）

（ドアホーーーー！！！）

（すいません…）

（って言うのは冗談だ。
お前…わざとだろ？）

（はい？）

（お前と殺ったのがどれくらいの奴かは知らないけどな、アレだけの力持ってる奴らだ。
お前のオッサンとも関連があるかもしれない。
大方、追跡用の発信器かなんか着けて逃がしたってとこだろ？）

（やれやれ…）

こいつがこの態度の時は大抵図星だ。
それくらいはわかってきた。

（アジトの場所特定しても一人で行くなよ？）

（何故ですか？君には…）

（関係無いかも知れないけどな、死ぬ覚悟で妨害してやる…）

（…わかりました。行きませんよ）

（よし。怪我は？）

（祐希奈様が粉砕骨折をしています）

（は！？わかった。早くこっちに…）

「カナン君…」

ギュウウウ…

ヴィヴィオにしっかりと抱きつかれてしまった…

（来るな…医療班か何かいるだろ？）

（いますが、メイデン様なら…）

（頼む…今、祐希奈に見られたら死ぬ…）

（……青春してますね♪）

（見たな！？お前今見ただろ！？）

窓は開いている…

絶対に能力使いやがった！！

（カナン君の弱味を一つ握りましたね）

（卑怯者！！！）

（おや…では今からそちらに…）

（ハル様は、お優しい方ですよね！？）

（ふふ…）

こいつ…いつか絶対にぶん殴ってやる…

（では、これで失礼しますね）

（ああ）

念話が遮断される…

ここで問題発生…念話が途切れると、意識が全てこちら側に集中されることになるだが…

ヴィヴィオは今、俺の腕に抱きついている訳だ…

成長真っ最中の体な訳だ…祐希奈より大きい訳だ…

出来るなら思い切り叫びたい…

助けてくれと…起きてくれと…

しかし、ヴィヴィオは熱を出しており、寝かしておいた方がいい…

地獄の拷問！今、ここに降臨！！！

祐希奈の時よりさらにまずい…

殺人級に可愛い寝顔はもちろん、体の一部が触れているのだから…

理性がすっ飛ぶ前に抜け出さなくてはならない…

「ん…んぅ…」

ぎゃあああああ！！！

顔が！！顔が隣にぃ！！！

理性崩壊までのカウントダウンが始まった気がした…

（まずい…今視線向けたら終わりだ…いろいろと…でも…きっつ～）

「んぅ…」

隣のヴィヴィオの瞼が開く…
理性が限界を迎える直前ヴィヴィオが起きてくれた。

「た、助かった。
ヴィヴィオ熱は…」

「ん…」

「んん!?」

強制的に中断させられる会話…
熱を聞こうと顔を向けた途端…思考が止まった…
合わさる唇と唇…
あまりにも長い時間…ほんの数秒が永遠にも感じられる…

「ふは…」

ゆっくりと唇が離れ、ヴィヴィオが倒れた…

「ちょ…て…え…?」

「すぅ〜すぅ〜…」

寝ている…
ぐっすりと…まるで今までのことなど無かったかのように…

「じゃあ今のは…ヴィヴィオの意思じゃない…」

祐希奈とは違う…

ヴィヴィオは、俺を好きだなんて思っていない…
なのに…俺は!!
少し気をつけていれば…一緒に寝なければ…
それももう手遅れ…
大切な友達の大事な物を奪ってしまった…

「バカ野郎…バカ野郎…」
罪の意識が涙を流させる…

「マスター?／主?」

メイデンとレナスの二人も起き出してきた。

「マスター!?どうしたんだ!!
まさか戦闘の傷が痛むのか!?」

「それはいけない!主!早く治療を!!」

俺なんかの心配をしてくれている…

「違うんだ…何でもない…」

精一杯安心させてやろうと無理に笑った。

「何でもない訳がないだろう!!」

「主!隠さずに言ってください!!」

「ホントに何でもないんだよ…」

「マスター…／主…」

「ん…どうしたの？」

騒ぎにヴィヴィオまでも目を覚ます。
一気に罪悪感が押し寄せてきた。

「おはよう…ヴィヴィオ…」

「うん。おはようって…
あはは！夕方だよ？」

無邪気な笑顔…それが痛い…

「熱…大丈夫か？」

「えと…多分…」

「お粥作ってやるから食って寝とけ…」

「ありがとう、カナン君」

「っ！！」

違うんだ…俺は最低な奴で…ヴィヴィオの大切な物を奪ったろくでなしだ…
お礼なんて言われる奴じゃない…
俺は逃げ出すように部屋から出た。

「カナン君どうしたのかな？」

「わからない…
ただ、さっきは苦しそうに泣いていた」

「カナン君が！？」

「はい…戦闘の傷では無いと無理に笑っておられましたが…」

「そう…」

そういえば、さっき一度も目を合わせてくれなかった…

▼▼▼▼▼▼▼▼

一之瀬家調理場

「謝って済むレベルじゃねぇぞ…」

コトコトとただ土鍋が沸騰する音だけが響く…

「ちくしょう…何であん時止まったんだよ…動けよ…ヴィヴィオが寝ぼけるのくらい知ってただろうが…バカタレ…」

そうすること、十分、土鍋から完成を告げる匂いが漂い始めた。
ヴィヴィオの所へ戻らなくてはならない…
火を消し、二階への階段を登る。

「出来たぞ…」

部屋にはいつもと変わらないヴィヴィオがいる…

それが辛い…

「わぁ…いい匂いだね～♪」

「確かにな、美味しそうだ」

「素晴らしい出来ですね、主」

「そうか…仲良く三人で食べるなり、なんなりしてくれ…」

ここは辛い…背を向け、帰ることにした。

「帰っちゃうの？」

「ああ…メイデンとレナスは置いてくから、話相手には困らないだろ？」

「どうやってお姉さんを助け出したとか教えて欲しいな？」

「メイデンに聞いてくれ…」

「マスター…ヴィヴィオがこう言っているんだし、マスターから教えてやれば…」

「うるせえよ！！」

「わっ！！」

「マスター…」

メイデンが浮かべたのは、いきなり怒鳴られたという怒りではなく、心配の表情だった…

「悪い…今、ちょっと一人になりたいんだ…」

「主…いったいどうされたのです？
先程までの主とは明らかに違いますよ？」

「嫌な夢見たんだよ…」

めちゃくちゃな理由だということくらいわかっている…
でも、これ以上この部屋にいたく無かった…

「あの！！今日、私のお祝い会やってくれるんだよね？
来てくれるよね？」

「わからない…」

「カナン君！！」

「ごめん…」

ゆっくりと扉を閉め、走り出し、家から飛び出した！！
家の前で祐希奈、ハル、クレアの三人がいたが走り抜けた…

「カナン！？アンタどこ行く気よ！？」

「帰る！！」

「はぁ！？ちょっと待ちなさいよ！！」

「カナン！お祝い会やるんじゃないですの！？」

「くっ！！」

遂には言葉を無視して、家に向かった…

「やれやれ…手間のかかる人ですね。
ちょっと呼びもどしてきます」

「あ、うん。お願い」

「ハルが他人に関わるなんて…ヴィヴィオ様の熱がうつったんじゃないですの？」

「ただの気分ですよ。では」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ただいま！！」

「あれ？カナン君、今日は遅くなるって…」

「予定が変わったんだよ！」

「そ、そうかい」

ほとんど怒鳴り付けるように伯父さんに言ってしまった…
後で謝らないと…
部屋のベッドに倒れ込んで反省する…

「はぁ…」

しばらく後で、コンコンと部屋の扉がノックされた…

「悪いけど…今は一人になりたいんだ…」

無視を決め込む…

しかし…

「ふぅ…」

ドガアアア!!!

「でえええ!?」

壮大な破壊音と共に扉がぶっ飛んだ…

扉を破壊した男は…ハルだった…

「君は何をしてるんですか?」

「な、なな!?お前何してんだよ!!」

「……」

「うお!!」

無言で詰めより、胸ぐらを捕まれる…

暗闇でもわかった…ハルの顔が笑っていない…

「君があの行動を取ったことで、ヴィヴィオ様がどれだけ傷ついたと思っているんですか？」

「でも…俺は…」

「……」

無言の後、胴体をハルの拳が殴っていた…

「がはっ！！何すんだよ…」

「映像を見せます…」

コンソールが出現、祐希奈の部屋が映る…

『私が…私がカナン君に何かしたんだ…
ううん…今までからきっと何かしてて…それで今回の一件で溢れ出して…私が悪いの…』

『違う！ヴィヴィオ、マスターはヴィヴィオを責めてなどいない！あの人のことだ。
私にはわかる！
ヴィヴィオを責めるはずがない！』

『私もそう思います。
あの方は、他人を責めるような人間ではありません。
きっと何か理由があるんですよ』

『でも…カナン君、私を明らかに避けてた…
目も見てくれなかったもん！！』

『自分を責めるな！絶対にヴィヴィオじゃない！！』

『そうですよ。もう少し待ちましょう？
きっと帰って来てくれますよ』

ボロボロと涙を流すヴィヴィオ、慰めるメイデン達が移っていた…

「……」

「これは少し前の映像です…
この意味…わかりますか？」

「今…は…？」

「メイデン様達の言葉も御嬢様の言葉も、祐希奈様の言葉でさえ、
届いていませんよ」

俺が…ヴィヴィオから逃げたから…？
嫌われるのが嫌で…逃げた結果がこれか？

「君は言いました…守れる力が欲しいと…
しかし…今、君がしているのは、ただの破壊行動ですよ？」

「……」

「例え、今ヴィヴィオ様に嫌われたとします…
君は、それで諦めますか？仲を修復しようとは思わないんですか？」

何で…こんなことに気付かなかった…

「ヴィヴィオ様が自分を責め続けて、心の修復が出来なくなったら、手遅れなんですよ…
僕なんかより、君の方がヴィヴィオ様を理解しているはずでしょう？」

そうだ…ヴィヴィオは精神面は驚くほど脆い…
加えて溜め込む性格なのに…

「俺…バカだ…」
「後悔するより先にする事があるでしょう？」

「ヴィヴィオ！！！」

嫌われてもいい…その時は、また仲直り出来るまで努力するだけだ…
家から飛び出し、ヴィヴィオの元へと走った…

「ふぅ…全く世話が妬けますね…」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ただ、ひたすらに走り、祐希奈の家に戻ってきた…
扉を開けると、祐希奈がいた…

「……」

バシーーン！！
平手打ち…コイツが本気で怒る時だ…

「ごめん…」

「さっさと行ってあげなさい…」

たった一言、それだけを言った…

それが逆に効いた…

「ああ…」

「カナン…頬が…」

クレアが心配して来てくれたが、手で制す。

「いいんだ…全部俺が悪いんだから…」

階段を踏みしめて上がっていく…

取っ手に手をかけ、押した…

「マスター！！今まで何をしていた！！！」

「ごめん…」

「主…反省すべきです…」

烈火の如く怒るメイデンと氷の如く冷たい視線のレナス…

「ああ…レナスも来たばっかなのに迷惑かけたな…」

そして、視線をベッドへと向ける…

布団にうずくまり、他者を拒絶するヴィヴィオがいた…

「ヴィヴィオ…出てきてくれないか？」

「……」

「二人で話そう…屋根で待ってる…」

「……」

返事は無かったが、聞こえていると信じて、屋根に上がる…
綺麗な夕焼けだった。
寝転がり、ひたすらヴィヴィオを待った。

「……」

やがて、幻想的な夕焼けも終わり、満天の星空が広がる…
既に三時間を経過していた。
さらに一時間が経ち、ギシリと梯子を登る音がする…

「やっぱり来てくれた…ヴィヴィオは優しいな」

「ごめんなさい…勇気が…出なくて…」

「いい…こっちこいよ」

「うん…」

並んで寝転がり空を見上げる…

「あのな…」

「うん…わかってる…私、カナン君を怒らせる何かをしたんだよね

…」

「違う…」

「え…？」

「俺な…逃げたんだ…自分のために…
ヴィヴィオのことを考えずに…
ヴィヴィオは何も悪くないんだ。
俺が自分を守るためにお前から逃げたんだよ…」

「何が…あったの？」

「…これから言うことは、ヴィヴィオにとってショックだと思う…
俺を嫌ってくれても構わない」

「そんな…カナン君を嫌いになるなんてこと…ないよ」

そう言うと、カナン君は少しだけ笑った…

「ありがとな。
ふぅ…俺は、ヴィヴィオのファーストキス…奪っちゃったんだよ…」

告げられたのは全く記憶に無いこと…

「う…そ…」

私が…カナン君とキスしてた？
どうやって…

「ホントだ…
ヴィヴィオが寝惚けて近づいて来た…
でも、避けれたんだ…
なのに…俺は動けなかった…いや、動かなかったのかもな…
ホントにごめん…
後は、罪悪感から逃げて…お前を傷つけた…」

「私は…カナン君に何もしてないの？」

「ああ…お前は何も悪くない…
俺だけだよ…
謝ってすむ問題じゃないけど…ごめん…」

「あ…ううん…私が寝惚けてたのが悪いんだもん…気にしないで」

ろくに考えず…口から出たのは慰めの言葉…
違う！私が言いたいのはこんなことじゃない！
こんなこと言ったら今のカナン君は、拒絶だと受けとる！

「ホントにヴィヴィオは優しいな…
お祝い会、めちゃくちゃにしてごめん…
今日はこれで帰るよ」

「あ、待っ…」

屋根から飛び降り、家に帰って行った…
下手な慰めは、相手を傷つける…
確実にわかった…
今、私とカナン君の間に溝が出来た…

「何とか…嫌いじゃないって誤解を解かないと…」

「はぁ～しょうがないわね～」

梯子の下のベランダに祐希ちゃんがいた…

「祐希ちゃん…さっきはごめんなさい…」

「いいわよ。あのバカ、しばいて若干すっきりしたしね。
それより、簡単に修復する方法、教えてあげよっか？」

「あるの！？」

「夏祭り…二人で言ってきなさい」

「え…」

「そしたら仲直りくらいすぐよ。じゃ…」

「でも！夏祭りって祐希ちゃんも…」

当然祐希ちゃんもカナン君と行きたいはず…

「今はあのバカと行く気分じゃないのよ…
それだけ…浴衣なら父さんが注文してくれた特注品があるからそれ着て行きなさい。
行かないなんて言ったら殴るわよ？じゃね」

そして気配が消える…行ってしまったらしい…

「祐希ちゃん…」

祐希ちゃんが折角チャンスをくれたんだ…
頑張らなくちゃ！！

「たく…カナンもヴィヴィオも世話が妬ける…」

「祐希奈様も苦労しますね～」

「でも、祐希奈様、本当によろしいんですの？」

「まぁ…正直、良い気分じゃないけどね…
私、あの二人は友達としても好きだから、仲直りして欲しいのよ」

「不利ですね」

「性分だからってことで諦めてるわ…
で、こんな話いつまでもしたくないし、変えましょ？」

「ですの。じゃあ…皆さん自己紹介大会を始めるですの～♪」

「わ～♪さすがですよ御嬢様～♪」

「じゃ、レナスだっけ？今日1日で仲良くなるわよ～♪」

「お願いいたします」

ヴィヴィオのお祝いパーティーの変わりにレナスとの親睦を深める

目的に変わり、一行は夜を過ごしていく…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

風間家、屋根の上

「ふぅ…気にしないで…か…」

ヴィヴィオらしいと言えばらしい答えだけどな…

祐希奈も祐希奈で怒らせちまったし…

さて…これからどうするかな…

「ん？あれは…」

街の中心がやたらと光が多い気がする…

何かあったのか？

いや…違う…

「祭りだ！！」

毎年行っていた祭り…

いろんな露店や花火もあり、盛り上がる。

仲直りまでは行かなくても、気まずい空気くらいなら消せるかもしれない…

「おし…頑張るぞ…」

そうと決まったら行動しないとな…

「あ！！」

脳が前向きになり始めたからか、忘れていたことを思い出した。
部屋に戻り、机を調べる。金…あった！
今日買いに行くつもりだったプレゼント…何で忘れてるんだよ…

「まだ店開いてるといいけど…」

明日はオールで開くため、店の閉店も早い…
ギリギリだった。

「くそ…遅かった…」

案の定、シャッターが閉まった店ばかり…

「どうしたんだい？」

この辺りには珍しい…祐希奈と同じ銀髪の長髪…
緑の目をした長身の男…
喋らなければ女性と間違えたかもしれない…

「ちょっと…アクセサリーの類を扱ってる店…知りませんか？」

「ふむ…この辺りはもう無いね」

「そうっすか…」

「しかし、案ずることはない！
特別サービスだよ？」

「え？」

「いや～何故かはわからないが、君は気に入った。
僕の店に招待しよう！」

「ちょ、ちょっと！？」

引きずられるようにして移動…
しばらく移動した所で止まる…
裏道のような所を通ると店があった…
シャッターが開けられる…

「ようこそ！宝石店ローディアスへ！！」

「マジで…」

めちゃくちゃ幸運だった…まさか、宝石店の主人に会えるとは…

「さぁさぁ、こんな気まぐれは二度とないよ？
入りたまえ！」

「あ、ああ…」

店内は思ったより広かった。
綺麗に清掃もされている。一番驚いたのは…

「すっげ～…部屋中に宝石がある…」

「面白いことを言うね！
宝石を扱う店なのだから当たり前さ！！
しかし、このローディアスに揃わない宝石は無いけどね！！」

「あの…値札が書いてないんだけど…」

「ああ。僕の気分で値段を変えるからね！！」

「……」

それはいけないんじゃないかと思ったが、我慢しておいた…

「ちなみに…今日の気分は？」

「ふむ…一つ３０万の気分…」

「帰ります…」

手持ちの金でも足りない…１０万あれば足りると思っていた…

宝石って高いな…

「だったのだが、今は気分がいい。

君が値段を決めればいいよ」

「…は？」

高級そうなイスに座りクルクルと周りながらあり得ないことを言った…

「君が決めて構わないと言ってるのだよ？」

「じゃあ、全部タダで…な～んて…」

「構わないよ？好きなだけ持っていきたまえ」

「…冗談っす」

「そうかい？僕はいっこうに構わないよ？」

な、何だこの超めちゃくちゃな店主は…

「あの…これを…買いたいんです」

「ふむ…」

選んだのは、ヴィヴィオの魔力光と同じ青い宝石の指輪とひし形の銀のイヤリング…

「君は目利きのようだね、この中からブルーサファイアと純銀のダイヤモンドコーティングイヤリングを選び抜くとは…」

「え！？あ、やっぱり…」

しかし、店主はニコリと笑った…

「ますます気に入ったよ♪
ささ、持っていきたまえ！！」

「で、でも…」

「案ずることはない！
今月の利益は大赤字だからね！！」

「それは良かった…」

待てよ?赤字って…

「ダメじゃん!!!」

「あっはっはっは!気分で売るからね!!」

「これ…」

「返品は不可能だ。
さ、もう店を閉めるよ?」

「ま、待ってくれ!じゃあ、せめてこれだけでも…全然足りないけど…いつか返すから!!」

今の手持ちは十万しかない…
ポンっと頭に手を置かれた…

「その心…それだけで僕は満足さ…」

この人めちゃくちゃいい人だ!!

「君のラヴ…確かにこのジル・ローディアスが受け取った!!」

「あ～どうも…」

一瞬だけ抱いた憧れの心は砕け散った…

「また来てくれたまえよ!!」

「本当にありがとうございました」

「うむ！彼女達と仲直り出来るといいね！！」

「ああ！」

手を振り、背を向けて家へと戻ろうとしたが疑問が浮かんだ…

「何で知って…あれ？」

もう、店の主人はいない…あるのはシャッターが閉まった店だけ…
また聞けばいいか。
この時には軽く考え、帰路につき、明日に備えて睡眠をとった…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

後書き召喚コーナー♪

ヴィヴィオ
「はい。非常に気になる終わり方でしたが、アリサ道場と同じく無視な方向で進んでいきます♪」
メイデン
「ヴィヴィオも最近慣れてきたな」
ヴィヴィオ
「まぁ、これだけ経てばね」
カナン
「で？今回は誰なんだ？」
祐希奈
「ちゃっちゃと召喚するわよ～♪
魔法少女リリカルなのはＢｒａｖｅ　Ｓａｖｅｒｓから、草薙　翔

さんよ♪」
翔
「よろしくな」
ヴィヴィオ
「大人の人だぁ～♪」
メイデン
「ハルさんと同じくらいか？」
翔
「１９歳だから、そうだな」
祐希奈
「さすがにデッカイわね～。
カナンとは大違い…」
カナン
「どうせまだ１６０しかねえよ…」
翔
「心配するなってまだ１３歳だろ？
男はこっから伸びるんだよ」
カナン
「よ、良かった…俺だけもう伸びないかと…」
祐希奈
「座高だけ伸びるのよ♪」
カナン
「おかしいだろ！？
何でどんどん短足になってだよ！！」
翔
「あ～ドンマイ」
カナン
「ええ！？確定！？俺短足確定！？」
ヴィヴィオ
「カナン君可哀想…」

メイデン
「マスター…頑張ってくれ…」
カナン
「即信じるのな！！」
翔
「ははは。冗談だって」
カナン
「なら真顔で言わないでくれ…」
翔
「多分…」
カナン
「怖いっす！！」
祐希奈
「……」
ヴィヴィオ
「……」
メイデン
「……」
翔
「どうした？」
祐・ヴ・メ
「その箱…」
翔
「ああ、忘れてた。
アップルパイを作って来たんだ。
食べるか？」
祐・ヴ・メ
「（コクコク）」
カナン
「そういうのがうまいって話題だったな」

翔
「いや、それほどだと思うけどな？
ほら」

パクり…

一同
「……」

翔
「な？そんなに…」

カナン
「うまっ！！」

祐希奈
「く…負けた…」

ヴィヴィオ
「美味しいよ～♪」

メイデン
「たいしたものだ…」

翔
「そうか？」

カナン
「最近はお菓子作れる男が流行りなのか…」

翔
「そんなことは無いと思うけどな？」

祐希奈
「う～ん…女として負けてるのは癪ね…」

ヴィヴィオ・メイデン
「♪♪♪～」

もぐもぐもぐもぐ…

翔
「す、凄い…あっという間に無くなっていく…」
カナン
「この二人は甘いの大好きだからな」
祐希奈
「大抵こうなるのよ」
翔
「へぇ～…」
ヴィヴィオ
「美味しかったよ～♪」
メイデン
「大満足だ♪」
翔
「そりゃ良かった」
祐希奈
「でさ…翔さんのプロフィールが届いてるんだけど…」
翔
「あ、ああ…何だ？」
祐希奈
「翔さんって…女？」
翔
「ぐふ…それを言わないでくれ…」
カナン
「長風呂だろ？料理だろ？温泉旅行だろ？女顔だろ？ウィンタースポーツって言うのも女性が好きな人が多いし…」
翔
「がふっ！！」
祐希奈
「これはもう…女装するしかないわね♪」

カナン・翔
「ぐはああ！！」
ヴィヴィオ
「何でカナン君までダメージ受けてるのかな？」
カナン
「ノーコメントでお願いします…」
翔
「女装は勘弁してくれ…」
祐希奈
「ところがどっこい…ここはＬＶよ？」
メイデン
「祐希奈～これでいいか～？」

女装セット多数…

翔
「い、嫌だ！！」
祐希奈
「フッフッフ…さぁ…どれがいい？」
翔
「どれも嫌だ！！」
ヴィヴィオ
「う～ん…それは無理かな？」
カナン
「まぁ…諦めろ…相手が悪い…」
翔
「こうなったら！！ウィングビット！フルバースト！！」
ちゅどーん！！
翔
「よし！今のうちに…う！！」

ギシリ…

祐希奈
「わざわざ外してくれるなんて、翔さん優しいのね♪」

翔
「く…」

ヴィヴィオ
「翔さん祐希ちゃんの力知らなかったんだね…」

メイデン
「まぁ…翔さん…ファイトだ！」

カナン
「祐希奈から逃げるんだったら全弾狙わないとな…神だし…無駄かもしれないけどな…」

翔
「か、神！？」

祐希奈
「この道場内では…私とアリサに勝てる存在はいないのよ…」

翔
「ええー…聞いてねー」

祐希奈
「さぁ…メイド服？ナース服？シスターなんてのもあるわよ～♪」

翔
「釈放の余地は？」

一同
「無いわよ／無いかな？／無い／無いな」

翔
「ナイス…シンクロ…」

祐希奈
「さぁ～て…前歴が無いナース服にしましょうか～♪

青かピンクどっちがいい？」
翔
「青…」
祐希奈
「ピンクね～♪さっすが～♪」
翔
「俺の意思は！？」
カナン
「翔さん…ここに来た時点でそんなものは消え去るんだ…」
祐希奈
「さぁ…可愛くしてＢｒａｖｅ　Ｓａｖｅｒｓの世界に返してあげるわ…」
翔
「ま、待て…こんな姿あいつらに見られたら！！」
祐希奈
「フフフフ…」翔
「ぎゃあああ！！！」

ヴィヴィオ
「さて、翔さんの精神が痛め付けられてる最中ですが、今回はこれで終わりです♪」
カナン
「東吾さん。今回は平和に終わった方だけど、要望があれば激しくいくからな？
キャラ召喚ありがとう。また頼みに行くかもしれない」
メイデン
「最後にお知らせだ。
今、海鳴温泉の方で人気投票をしているんだ、そちらに投票を頼みたい」
ヴィヴィオ

「私達以外にも賑やかなメンバーがたくさんだから是非読んでね？」

一同

「ではまた次回～♪」

翔

「あはは…はは…」

祐希奈

「翔ナース爆・誕！！」

翔

「Ｂｒａｖｅ　ｓａｖｅｒｓもよろしく…じゃあな…」

第十五話　夏祭り（前書き）

２４時間テレビ三輪車感動しちゃいますね！！
ただ、それだけがいいたい！！
やぐっつぁーーーん！！！

第十五話　夏祭り

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ヴィヴィオ
「皆さんこんにちは。本日のメインヒロインのヴィヴィオです」
カナン
「メインだけど読者のイジメにあってます…カナンです…」
祐希奈
「まぁ、今回はこの二人に譲るわ」
メイデン
「そういえば、クレアさん達がいないが？」
レナス
「本当ですね」
祐希奈
「あの三人なら今回はオフよ？」
メイデン
「何故だ？」
祐希奈
「ほとんど出てこないからよ？」
レナス
「では何故私達はいるのですか？」
祐希奈
「私達は、今回は重要なキャラだからよ」
メイデン
「そうなのか？」
祐希奈
「とは言っても、進行はあの二人に任せるから、はい、後は二人で頑張ってね。

私達は楽屋裏から呼んでくるから」
ヴィヴィオ・カナン
「ええ！？／マジか！？」
祐希奈・メイデン・レナス
「バイバイ♪／ではな／失礼します」
バタン…

ヴィヴィオ
「ど、どうしよう…」
カナン
「とりあえず、質問に答えるぞ？」
ヴィヴィオ
「うん、じゃあ、一つ目…無理かな」
カナン
「読む前に解答言っちゃった！？」
ヴィヴィオ
「だって…これだよ？」
カナン
「何…うん。無理♪」
ヴィヴィオ
「でしょ？」
カナン
「罰として送った奴！覚悟しろ！！ペンネーム公開決定！！」
ヴィヴィオ
「えと…ペンネーム『友達』さん？」
カナン
「どこが友達だよ！？無茶苦茶過ぎる！！」
ヴィヴィオ
「一応…読んどくね…
『以前のＥＸで学生編があったやんか？

で、クロスでＥＸとＬＶを混ぜて続きがみたい』
だって」
カナン
「もう、名前まで公開してやろうか？」
ヴィヴィオ
「えと…問題になる前に、次の質問に移ります。
『クレアは学校に通うのですか？』」
カナン
「これについては迷ってる最中だったりする。ちゃんと答えられな
くてごめんな？」
ヴィヴィオ
「じゃあ、質問は終わりだよ？」
カナン
「おし。じゃあ本編に…」

ライトが照らされ、バンジージャンプの台があらわれる…

ヴィヴィオ
「わわっ！」
カナン
「何だぁ！？」
涼
「ついに俺にも出番が来たぜ～！！
ひゃっほ～い！！」
ピューーー…
祐希奈
「スパイラルフレア！！」
ジュ…

涼

「なっ！紐が！！ぎゃあああ！！！」
ズドーーン！！…
銀杏
「騒がせてわるかったな。
始めてくれ」
涼
「ピクピク…」

涼を引きずって、銀杏が退場…

カナン
「あ～…魔法少女リリカルヴィヴィオ」
ヴィヴィオ
「始まりま～す…」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ん～…改めて自分の服への興味の無さを思い知らされたな…」

今日は、夏祭り…服選びから気合いを入れ、一番良いのを選ぶべくタンスの中の服を全て広げたんだが…俺のタンスから出てくるのは、上は黒と白、下はジーパンしかない…

「うわ～…何だこの惨状は…バリエーション少なすぎるだろ…
今にして思えば、最近の男としては失格かもな…」

服の種類も無いし、アクセサリーの類いなんかもないし…髪型は結構好きなんだけどな…クセっ毛なために分け目あたりが若干立ち、しかし前髪は左右が長く額あたりは短い…
よくセットしてるだろ！とか言われるが…

ふ…小さな時に間違って切れてしまった髪型が気に入ったと言う理由だったりする…
さすがだ…小さい時の俺…センスバッチリだ…

「何を朝から鏡みて笑ってんだよ俺は…」

結局、白いTシャツと黒い上着、普通のジーパンという定番スタイルで祭りに行くことにした。
一応、一番高いやつだから大丈夫だよな!!

「伯父さん!俺、変じゃないよな!?」

思わず部屋から出てきた寝起きの伯父さんに聞いてしまった…

「え、あ…ああ。
いつも通りのカナン君だよ?」

「おし…」

「どうしたんだい?やけに元気じゃないか」

「勝負の日だからな…」

「何だい?告白でもするのかい?」

「ぶはっ!そんなもん出来るか!!」

「じゃあ勝負って…まさか誰かに告白の返事をするのかい?」

「んなもんもっと出来るかあああ!!!」

まだ答えは出ていない…だいたい…考えただけで顔が火照る…
俺は、適当に昼食をとるためキッチンへと向かった…

（青春してますね～♪）

「ごふぅ！！！」

「か、カナン君？扉は開けないと…」

「わ、わかってる…」

俺は、いきなりの念話に扉に顔面から突っ込んでしまった…

（あははは！焦ってますね！）

（お前がいきなり青春とか言うからだろ！！）

（いや～だって、顔を赤くして…青春じゃないですか～♪）

（お前も若いだろうが…）

（いえいえ、もう僕はそんな歳ではありませんよ）

（嘘つけ…で？）

（ヴィヴィオ様がそちらに向かいましたよ？）

（な、何～！？）

（可愛らしい浴衣を着ておられましたよ）

（え…）

ってことは、ヴィヴィオは誘ってくれようとしてるのか？
昨日、あんなに傷つけたのに…

（それと、ヴィヴィオ様の歩行速度は、いつもより遅く、そちらに着くのは３０分後と予想します）

（わ、わかった！）

（ちなみに、今日は祐希奈様は僕達と行くらしいので二人きりで頑張ってくださいね～♪）

（へ！？おい！！ハル！！）

切りやがった…
ふ、二人きりだと…地獄の拷問再び！！
今から３０分後って…約１２時！！
俺は中学生だから祭りは夜の１０時で帰るにしても…無理！！間が持たん！！

「伯父さん！！女の子が喜びそうなこと知らないか！？」

「そんなこと知ってたら妻がいるよ？」

「……」

ダメだ！！このオッサン使えねえ！！

乙女心なんてわからないってのに…

「喜びそうなことを探す前に、普段通りに接することを頑張ることだな」

「そうですね。
喜ばせようとするとかえって空回りする事の方が人間は多いです」

この声は…

「メイデン…レナス…」

「今回の件はバカなマスターだけでは、苦労しそうだからな？」

「私達に出来ることなら協力しますよ？」

昨日…あんなに迷惑かけたのに…来てくれた…

「ありがとう…」

「いや、何が起きたかはわからないが、マスターが逃げ出すほどの事だ。
一方的に責めてしまって済まなかった…」

「私も主だけを責めてしまいました…申し訳ありません…」

「いや、お前らが怒るのも無理ないよ…ごめん」

「それより、さっきのことは重要だぞ？」

「いつも通りならいいんだな？
なら、なんとかなる」

「甘いですね…喧嘩別れをした相手といつも通りに話すのは、想像以上に難しいですよ？」

「だよな…」

「部屋に戻るぞ？練習あるのみだ」

「練習？」

「ほら、主、行きますよ？」

「あ、ああ」

俺は勢いに押されるまま、自分の部屋へと戻った。
練習っつっても…どうする気だよ…

「じゃあ…行くぞ！マスター！」

「いつも通りに、ですよ？」

メイデンとレナスが光に包まれ、アウトフレームフルサイズになった…まではわかったが…

「な、何でヴィヴィオが！？」

俺の目の前には、制服姿ではあるが、ヴィヴィオが立っていた…

「変身魔法…という物もあるのでな？」

「でも、こんなにそっくりになるんだな…」

同一人物と言ってもおかしくはない…

声だけは二人のままだからわかるけど…

「メイデンと私が力を合わせればこれくらい普通に出来ますよ。さらに…行きます…」

偽ヴィヴィオが目を閉じ、少しの間の後ゆっくりと開いていく…

「あはは。カナン君、こんにちは」

「マジで…」

唯一のヒントだった声までヴィヴィオになってしまった…

「どうしたの？」

「う…あ…その…」

「リラックスだよ？カナン君」

「あ…う…コンニチハ…」

漸くでた声は、ロボットみたいな抑揚の無い声だった…

目の前にヴィヴィオがいる…それだけでこんなにも変わる。

「あはは！声が片言になってるよ？」

「ふぅ…よう。ヴィヴィオ元気か？」

「うん。カナン君は元気？」

「あ…ああ…とりあえずは…」

「とりあえずって…どうして？」

「そ…れは…俺が…ヴィヴィオを…」

「ていっ！」

ペシッ

「いて！」

ヴィヴィオから軽くチョップを落とされた…

そしてヴィヴィオは腕組みをする。

「いきなりそんなに気にしてどうする？」

「ヴィヴィオが…男口調に…」

「マスター？」

「その姿でマスターって呼ぶな！！なんか危ない！！」

「では、主ならよろしいですか？」

「よくねえ！！」

「マスター？／主？」

「頼むからその姿でそう呼ぶのはやめてくれえええ！！！」

「じゃあ、カナン君、練習頑張ろ？」

「ああ…頑張るよ…」

練習すること、１５分…全くいつも通りに喋れない。
ヴィヴィオの顔が見れず、視線が下がっていく…

「ほら、ちゃんと目を見て話そうよ？」

「く…」

オッドアイと目線があった途端に視線が逃げ出したくなってしまう…

「カナン君…逃げないで？
カナン君なら出来るはずだから…ね？」

頭を固定され、正面から見つめ合う…
これは…練習以前に顔が近すぎて…

「ふあああ…」

「マスター！？／主！？」

そんな至近距離で見つめることないだろ…
そして…呼ぶな…

「出来るようになったね」

「何とかな…」

結構恥ずかしいこともあったが、練習が功を制し、正面を向いて話せるようになった。
変身魔法が解除され、二人の女性に分かれる。
そっくりだな

「ただ、これは私達のヴィヴィオだ」

「ヴィヴィオさん本人は目を合わせて下さるかわかりません」

「マスターがいかにヴィヴィオと話せるかが問題になってくると思う」

「後、五分です。準備をしてヴィヴィオさんをまちましょう」

「ああ。お前らがいて助かったよ」

「特製オムライス一つで勘弁してやろう」

「じゃあ私は、蟹が食べたいです」

「オムライスと蟹って…まぁ、いいけど…」

「「楽しみだな♪／楽しみです♪」」

姉妹でここまで好きなものが違うのか…

メイデンとレナスの違いを改めて実感しながら、下に降りた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ふぅ…」

私は今、カナン君の家の玄関で止まっている。
とても…とてもここまでの道のりが長く感じた…
いつもなら、すぐに着くのに、今日は、物凄く遠かった…
まるで、今の私とカナン君の距離を表しているかのように…

「大丈夫…勇気を出さなくちゃ…」

取っ手に手を伸ばした時、扉が急に開いた。

「え…」

ゴンッ…

「ゴン？」

「あぅ…」

「え…あ…うわああ！！ごめん！！大丈夫か！？」

「あ、カナン君、おはよう」

「あ、ああ。おはよう…じゃなくて！！顔打っただろ！？大丈夫か？傷は？血とか出てないか！？」

喧嘩していたはずなのに、カナン君は、本気で心配してくれている。

「……」

「ちょっと待ってろよ？
今、救急箱を…」

「ううん。大丈夫だから」

「そうか？」

「うん。それで…もうわかってるかもしれないけど…えと…その…
あのね？お祭り…私と一緒に行ってくれないかな？」

「…ああ。俺なんかでいいんなら喜んで」

良かった…カナン君が笑ってくれてる…
まだちょっとぎこちない笑みではあるけど、これなら大丈夫だ…

「驚いたよ…扉、開けたらこんな可愛い子がいるとは思わなかった。
黒の浴衣に…百合か？
ヴィヴィオに黒のイメージは無かったけど…似合ってるよ」

嬉しい…カナン君が誉めてくれた…

「あの…雅樹さんがね？可愛い浴衣も良いけど、こういうのも着なくちゃねって…プレゼントしてくれたんだ…」

「ま、確かに黒って大人の女性が着そうだよな。
ヴィヴィオは可愛いからは卒業するか？」

「えっと…もうちょっと可愛いでいいよ…」

浴衣ってスースーして不安になるな～

「ははは！じゃあ、行くか」

「うん」

昨日よりは、目を合わしてくれるようになってる…

でも、まだ気まずい…話題が浮かばない…

「良い音だな…」

「え…？」

「下駄だよ。カラン、カランってさ。

そう思わないか？」

「うん！思うよ！」

「騒いで賑やかなのも良いけど、こういう静かなのも、俺は好きだ」

「そうだね」

気持ちの良い風が通り抜け、私達の髪を揺らす。

お互いに話はしなかったけど、多分、私達は楽しんで会場まで向かっている。

そうだよね？カナン君…

「良い風だ…」

「うん…」

家を出た時に空いていた前後の距離、会場に向かうまでには縮まっていた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「うわぁ…凄い人…」

通りには、これまで見たことも無いくらい人通りがあった。

道路が見えない…

たくさんの建ち並ぶお店、聞いたことの無い楽器の高い音と太鼓の低い音が響き渡っている。

これが…夏祭り…

「ヴィヴィオ。昼飯、食ったか？」

「ううん…忘れてた」

浴衣の着付けや、気持ちの切り替えなんかですっかり頭から飛んでいた。

「祭りに来たらアレを食うのがお約束だ」

カナン君が一点を指さした。

その場所に書いてあった言葉は…

「イカ…焼…き？」

「そ。ホントは女の子が食う物じゃないかもしれないけど…」

「イカ焼き…食べたいな？」

ニッコリとカナン君が笑ってくれた。
それだけで私まで嬉しくなれるからカナン君は不思議。

「おし。行くか！俺の後ろから来いよ？」

「うん！」

人混みをかき分け、進んでいく。
私が飲まれないように先導してくれるカナン君。

「おっちゃん！イカ焼き２つ！」

「お、元気なガキだな。はいよ！っとそんな可愛い子がいるならサービスだ。半額にしてやるよ。４００円ね」

店員さんは、頭にタオルを巻いた３０代くらいの元気な男の人だった。

「おお！？おっちゃんいい人だな！」

「ありがとうございます」

「おいガキ…サービスしてやったんだから…うまくやれよ？」

「ぶほっ！な、なな何言ってんだよ！！」

「うまく？カナン君うまく何をやるの？」

「そりゃあ嬢ちゃん、告…」

「しないっつ～の！！からかうなよな！！」

「え？…え？」

オジサンから離れるようにカナン君に押されて店から出た。

「毎度あり！また来いよ！」

「誰が来るか！！」

「ははははは！！」

周りの人達にも笑われながら、私達は人混みを避け道の端へ移動する。

「ったく…ほら、イカ焼きだ」

「う、うん…」

「うめ～！！」

イカさん丸々一匹の形で焼かれている。
ちょっと怖かったけど、食べてみた。

「美味しい…美味しいね！」

「だろ～？あのおっちゃん良い焼き加減だな」

結構な大きさがあったのにカナン君はもう食べ終えてしまっていた。

「さて、次はかき氷を食わなきゃな」

「カ、カナン君、私、まだ食べてるよ…」

「食べ歩きも祭りの醍醐味ってな？」

「お行儀が悪いよ？」

「祭りでそんなもん気にしてたら楽しめないって、行くぞ！」

「ま、待ってよ～」

カナン君に着いていくと確かに周りの人達も食べながら歩いてる…

これが当たり前なのかな？

「あったあった。ヴィヴィオ、食い終わったか？」

「な、何とか…」

「おばちゃん…いや、お姉さんだな？かき氷２つくれ」

「おやま…口の上手な子だね？

サービス狙いかい？」

今度は、人のよさそうなおばさんが出てきた。

「まぁね」

「はっはっは！堂々とまぁ…いいわ。サービスしてあげる。彼女さん？何の味ががいい？」

「またかよ…」

「か、彼女だなんて…」

一気に体が火照ってきた。

恥ずかしいよ～

「違うのかい？お似合いだと思うけどねえ？」

「も、もういいだろ？この子はイチゴ、俺は宇治でよろしく」

「宇治？珍しいね」

「俺は甘いのダメなんだよ…」

「ありゃま…そりゃあ人生の五割は損してるね」

「ほっとけ…」

何でカナン君はこんなに知らない人と早く仲良くなれるんだろう…

「拗ねるな拗ねるな」

「拗ねてねえよ…」

「よしわかった！今回は１００円にまけてあげる」

「マジか！？さすが！！」

「わぁ…いいんですか？」

「構やしないよ。こんなの氷の塊削ってるだけなんだから」

「ぶっちゃけたな…ま、ありがとな」

「彼女さんと仲良くね～♪」

「だから違うっつ～の！！」

「えへへ♪私、カナン君の彼女だって」

「ごめんな？俺なんかにはもったいないよ」

「そんなこと無いと思うな？
カナン君を好きな子結構多いと思うよ？」

「んなわけないだろ…」

「ううん。カナン君が意識不明の時、お見舞いに来てた子もたくさんいたんだよ？」

「嘘…だろ？」

「私は嘘が得意なように見えるのかな？」

「見えない…」

「そういうことだよ」

「…うそやーーん!!!」

「あはは!カナン君、やっぱり面白いね!」

楽しい…カナン君と話しているだけで、私の世界に色がついていくみたいな…そんな感じがする。

「このショックを…金魚すくいではら～す!」

「あはははは!!意味がわかんないよ!!」

「兄ちゃん!二回頼む!」

「おっしゃ!任しときぃ!わいが全部はらしたるわあ!!」

「頼むわ…っておかしいやないかーい!!」

「ナイスや!!ナイスツッコミやで!!」

「しまった…体が反射的に…」

「兄ちゃん…わいと漫才せえへんか?」

「いや～それはちょっと…」

「残念や…く～この悔しさをわいは金魚すくいではらす！！」

「はらしたれ！！ってそれ俺の金やないか！！」

「兄ちゃん…マジで組まへん？」

「あはははは！！お、お腹痛いよ…あはははは！！」

お店のお兄さんまで巻き込んでカナン君が騒いでいる。

「そこだ！！」

カナン君がポイと呼ばれる物を水の中に入れると破れてしまった…

「兄ちゃん！惜しいで！光の速さまでもうちょいや！！」

「俺は金魚すくいを極める！！って…」

「「しまらへんわ～」」

「仲良いね～♪」

「わいもこんなに気が合う男久しぶりや。
兄ちゃんやっぱりわいと漫才を」

「もうええわい…」

「「どうもありがとうございました～♪」」

何でこんなに息が合ってるんだろう…

お兄さん実は魔導師で念話を使えるとか？

「あ、破れちゃった」

「残念やな…ってどわあああ！！
嬢ちゃんどんだけすくてんねん！！」

「うお…スゲー…」

私の容器の中には金魚さんがいっぱい入っていた。
あれ？これってすくえるように出来てるんじゃ無かったの？

「嬢ちゃん…アンタ…プロやな？」

「え？…え？」

「「金魚すくいにプロはおらへんわ～い！！」」

「えと…もうええわい」

「「……」」

「あれ？」

「さ、こんだけ多いと大変やね…
郵送させてもらうわ。
住所お願い出来るかあ？」

「あ、あの…」

「ああ…おし。じゃ、兄ちゃんまたな」

「おおきに～」

最後まで私は無視されてしまった…

もう…いいもん…

「ふぇぇえん！！」

「兄ちゃん！泣かしたらアカンやないか！！」

「先に、お前が流したんだろ！？」

「わいは腐っても商人や！お客を泣かせるようなことはせえへん！！」

「したよな！？今、確実にしたよな！？」

「どうでもええけど、行ってまあたよ？」

「なっ！バカタレ！！」

「わいは…わいはボケやあ！！」

「そんなこと聞いてねえーー！！！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

しばらく一人で歩いてるとカナン君が追い付いて来た。

「ひっくひっく…」

「ごめんな？アレはヴィヴィオを仲間ハズレにしたんじゃなくて、そういう漫才もあってだな…」

「うん…私、慣れてないから誤解しちゃった…」

「ホントにごめん…
ヴィヴィオ、好きな動物はなんだ？」

「兎さんと犬さんと猫さんが好き…」

どうしていきなりそんなことを聞くんだろう…

「よし！全部俺が取ってやるよ。
こっちだ」

「え…」

手を繋ぎ、引かれながらどんどん進んでいく。
あれは…鉄砲？

「今度は姉ちゃんか。
射的一回頼む」

綺麗な…雰囲気は祐希ちゃんに近いものを感じるお姉さんだった。

「彼女泣かせたお詫びに射的を選ぶんだ…
一回５００円、十発ね？」

「彼女じゃねえ…よっと…」

鉄砲に弾を込め、座っている犬さんのぬいぐるみに狙いを定めるカナン君。

「腕に自信があるんだ？」

「まぁ…それなりに…な！」

パンッと軽い音が響き、犬さんの頭の真ん中に命中、上体がぐらつき、ポトリと落ちた…

「わぁ…凄いね…」

「ほっほ～アレを一発で落とすか…やるわね」

「そりゃどうも…あと2つもらうな？」

「落とせればね？」

「落とせないような的狙わなきゃ落ちるさ…」

落とせないような的？、あの大当りと書かれた小さな箱のことかな？また軽い音が響き、猫さんが落ちた…

「猫…ゲット…」

「ホントに凄いガキンチョね…名前は？」

「カナン…おし！怪獣ゲット…」

「貴女は？」

「ヴィヴィオです」

「へぇ～やっぱり外国人…ガキンチョ、見る目あるわね…
この子、相当、美人になるわよ？」

「そ、そんなこと…」

「だろうな…」

「あぅ…」

そうこうしている間にカナン君は兎さんに狙いを定めていた。

「ラスト…兎だな…」

ここまで、全て一発命中…銃身が固定され、音がなった…
ポトリと落ちる兎…

「ほら、さっきのお詫びの三匹だ」

「うわぁ…ありがとう！カナン君！！」

兎さん、犬さん、猫さんを本当に取ってくれた…
大切にしなくちゃ…

「あれ？ガキンチョ、残り七発はどうすんの？」
「別に目的は三匹だけだから俺はいいんだけど…

ヴィヴィオ、やってみるか？」

「わ、私？でも、初めてだし…カナン君がやった方が…とれるよ？」

「三匹は取ったからもういらないって。
教えてやるから」

「う、うん…」

「この横のを引いて、弾を込めるんだ。
後は、体を乗り出して、なるべく目標に力が入る角度を選んで、打つ。
わかったか？」

「頑張るよ」

簡単に説明を聞いて、教えられた通りに、引き金を引いた。
お守りに当たったのに、落ちない…

「惜しいな。小さな的の場合は、軽いから真ん中よりちょっと下くらいが丁度良い」

「う、うん…」

言われた通りに打ったけど、やっぱり落ちない…
見た目よりずっと難しい遊びらしい。
落ちないだけじゃなくて、当たらなかったりもした…

「後…一発…」

あのお守りを…
打とうとした時、背中に温もりを感じ、私の手に、新たな手が重なった…

「え…？」

「あのお守りだろ？」
すぐ隣にカナン君の笑った顔があった。
嬉しかった…仲直り…出来たんだ…
ゆっくりと、カナン君の手に誘導され、微調整されていく…

「この辺だ…大丈夫…当たるさ…」

「うん…」

しっかりと固定し、引き金を引いた…
当たって飛んだ…

「やった……」

「惜しかったな…」

お守りは、後一押しというところで落ちなかった…

「なんか熱いわね！！」

「あ…」

お姉さんが商品に向けて思い切りうちわを振り、お守りが落ちた…

「良かったわね。二人で取れてさ」

「姉ちゃん！アンタ最高！！」

「やっぱり？」

「ありがとう…ございます！！」

ちょっとズルしちゃったけど…欲しかったものが取れた…

「カナン君…これ、あげるよ」

「ん？何で？頑張って取ったのに…」

「その…私の力だけでは取れなかったけど…カナン君にあげるために狙ってた物だから…」

正面を向いて漸く笑えた…良かった…

「そっか…物凄いご利益があるお守りだな。毎日、着けるよ」

「うん！！」

「ラブラブね～♪人前でよくそんな恥ずかしいことが言えるわね。ガキンチョ、アンタも良い男になれるわよ♪」

「…うるせえ」

「あの…その…はぅ」

「あはは!真っ赤になっちゃって♪」

「ヴィヴィオ!行くぞ!」

「え?わっ!!」

突然手を引かれ、お姉さんから離れていく。
お姉さんは、こっちを見て笑いながら手を振ってくれていた。

「ったく…今年の祭りの店員はろくなのがいないな…」

「でも、楽しいよね?」

そう言うと、カナン君は目を細めて優しく笑ってくれた。

「そうだな。お?ちょっと待ってろよ?」

「え、うん」

カナン君が人混みに消えた…
今までは一緒に行ってたのに、どうしてかな?

「お待たせ」

「あ、カナ…」

ふわふわした物をもつ…鬼さんがいた…

「ひゃあああああ！！！」

逃げようとすると、肩を捕まれる。

「ははははは！ヴィヴィオ、俺だよ。
これはお面だ」

鬼の顔が取れ、涙目になっているカナン君がいた…

「怒るよ？…んぐ！？」

ふわふわした物を口に突っ込まれた…
とっても甘かった。

「まぁまぁ、わたあめ食って機嫌直してくれ」

「もう…ずるいよ。
…あれ？祐希ちゃんだ…」

「祐希奈？わ、悪い！アイツに渡すもんがあるんだ。もうちょっと待っててくれ」

「うん」

さてと…そろそろ時間だし、移動しようかな。
カナン君の気がそれたのをきっかけに私は動くことにした。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「祐希奈！！」

祐希奈は、ヴィヴィオとは対照的な白い浴衣、書いてある花は桜だった。
身長の高いハルがいたから余計に目立つ。

「あ、カナンですの」

「お、クレアも可愛いの着てるな」

クレアは、薄い青色。ヴィヴィオと祐希奈とは違い、花は書いていないが、御嬢様オーラというかなんというか…それで補って余りある。

「ありがとうですの♪」

「おや、ヴィヴィオ様はどこに？」

「ちょっと待っててもらってる」

ハルは相変わらずの執事服で爽やかに笑みを浮かべている。
周囲の女性が釘付けになっていたのは気のせいだろうか…

「にしても、祐希奈もよく似合ってるな」

「…あっそ」

やはり祐希奈の返事は素っ気ない…
こちらを見ようとすらしなかった。

「祐希奈…お前に渡すもんがあるんだ…」

「何よ…」

ポケットから、イヤリングのケースを取り出し、祐希奈に渡す。

「これで…許してくれとは言わない…ただ、貰って欲しい…」

ケースを開けた祐希奈の目が見開かれていく。

「これ…高いんじゃ…」

「いや、働いたら返すって言ってタダにしてもらった」

「ありがと…後、私は別に怒ってない…」

「へ？でも昨日…」

「怒ってないのよ！！」

「は、はい！！」

なんだか知らないけど、祐希奈は俺を嫌いになってはいないらしい。

「じゃ、俺、行くから…って…あれ？」

先程いた所にヴィヴィオの姿が無い…

「どうしたのよ？」

「ヴィヴィオがいなくなった…探さないと！！」

「待って…」

走り出そうとした時、祐希奈に手をつなぎ止められた。
じっとこちらを見ている。

「な、何だよ？」

「ヴィヴィオ…いなくなったんならさ…ほっといて私と行かない？」

「なっ！！」

あの祐希奈が俺を誘っている…
顔を赤く染めながら…

「私と行くの…嫌？」

ホントに可愛い…

「嫌じゃないよ…むしろ嬉しい」

「なら、行きましょ？」

「でも…俺がいなくなったら…ヴィヴィオが一人になる。
だから…ごめん…」

「……そう」

「ごめん…」

「ま、ここで見捨てるような奴なら冷めてたけどね？ヴィヴィオなら公園にいるわ。
行ってあげなさい」

「へ？」

てっきり、何か言われるめんだと思ってたから、拍子抜けした…

「アンタがそういう奴ってことぐらいわかってるわよ。
何年一緒にいたと思ってんの？」

「じゃあ…何で…」

「だから、カナンはカナンのままってことの再確認しただけよ。
元々、一緒に行く気なんかないわ。さっさとヴィヴィオのとこに行きなさい。
これは計画してたことなの」

「そ…うなのか？」

「言ってるじゃない。ほら、行った行った」

「あ、ああ。場所教えてくれてありがとな」

「さっさと行け！！」

「おう！」

祐希奈達に背を向け、公園に向けて走り出す。

「祐希奈様…いいのですの？」

「何がよ…」

「だって、カナンと一緒に行けば…」

「今日はヴィヴィオに譲るって昨日から決めてたからね。
野暮なことはしないわよ」

「あ～！祐希奈様？あそこにたい焼きなどがありますが、食べませんか？」

「ん？いいわね。クレア行くわよ！」

「は、はいですの！」

私とハルに出来ることは、祐希奈様のお祭りを楽しくすることだけですの。
頑張るですの！！

「たい焼き全部くださいですの！！」

「御嬢様さすがです♪」

「やめなさ～い！！！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「はぁ…はぁ…いた！」

公園のベンチに座り、リンゴ飴を舐めているヴィヴィオを見つけた。
夕焼けも終わり、夜が近づいていた…

「来てくれたんだ」

「ったく…一人で動くなよ…危ないだろ？」

「うん。ごめんなさい」

ゆっくりとベンチから立ち上がり、柔らかく笑いながらヴィヴィオが近づいてくる。

「ヴィヴィオにもいつ渡そうか迷ってたんだけどな…これ…」

ブルーサファイアの指輪を取り出す。
暗いにも関わらず、ケースの中で幻想的に光っていた…

「わぁ…綺麗…」

「間違っても左手の薬指にはめるなよ？」

「どうして？」

「そりゃあ…あれだ…」

「何かな？」

「け、結婚の時にはめる指だからだよ…」

「っ！！そ、それは気を付けないとね…」

お互いに真っ赤になって目を反らす…

「右手ならいいのかな？」

「多分…な」

ケースから指輪を取り出し、右手の薬指にゆっくりと通していく…
大きさもぴったりだった…

「どうかな？」

顔の前で手をヒラヒラと動かし見せてくれた。

「うん…似合う…これしか言えないのがちょっと残念だけどな…」

「えへへ♪
でも、これ高かったんじゃないの？」

「気にするな」

「気になるよ？」

「まぁ…うん」

「うんって何？」

「はっはっは～」

「？？？」

その内ヴィヴィオも諦めたのか、聞かなくなった。
二人でベンチに座り、花火の時間まで話すことにした。

「楽しかったか？」

「うん。ずっと覚えてると思う」

「良かった…」

「うん…」

ヤバい…話題が無い…
何か…何か…メイデン…レナス…ヘルプ

「ねえ…カナン君？」

「な、何だ？」

「昨日のこと、ホントに気にしなくていいからね？
とっさに出ちゃった言葉だけど…本心だから」

「でも…俺は…」

「いいの…」

ヴィヴィオが立ち上がり、少し進んでこちらを振り向く。
その姿が…とても綺麗で…つられるように俺も立ち上がっていた。

「何で…ヴィヴィオはそんなに優しいんだ…」

「あはは。いくら私が悪くても、キスされたら怒るよ」

「でも…今、話してくれてる…」

「何でだと思う？」

見上げながら首を傾げるヴィヴィオ…

「さぁ…？」

「答えはね…」

「ん！？」

「ん…」

リンゴ飴の味が口に広がった…

背伸びをしてヴィヴィオがキスをしたからだ…

今度は自分の意思で…

「私がカナン君を好きだから…だよ？」

笑うヴィヴィオの背後で巨大な花火が咲いた…

「……」

頭が真っ白に染まっていく…

カナンクンノコトガスキダカラ

「…マジで？」

「さっきも言ったよ？
私が嘘が得意に見えるのかな？」

「見えない…」

「じゃあ…そういうことになるね」

「とりあえず…花火を見よう…」

「うん♪」

仲良くベンチに座って花火を見る…

「綺麗～♪」

「そうだな…」

大きな花火が咲く度、俺の脳はさっきの映像を繰り返し流し、感触までも呼び起こしてくれた…

「待てよ…」

『役者が揃うまで、返事は聞かないから…』

あの時祐希奈が言ってた役者って…

「ん？何かな？」

「ふ…はは…は…は」

つまり、結構前から祐希奈は知っていたと…
そして、それより前からヴィヴィオは俺が好きだったと…
花火が次々に広がり、散っていく…

「た～まや～♪」

最後に特大の花火が咲き…散った…
同時…俺の精神も散った…

「うおあああああああああああ！！！！！！！！
あり得ねえええええええ！！！！！！！
いっそ殺してえええ！！！？？？？」

「わ、カナン君！待ってよ～！！」

そこから先の記憶は無い…ただ、力尽きた俺をヴィヴィオが運んでくれたらしく、家のベッドで眠っていた…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ヴィヴィオ
「皆さん改めましてこんにちは。
後書き召喚コーナーです」
カナン
「何か前書きで落ちてきたような気がするんだけど…」
祐希奈
「気にしちゃだめよ♪
じゃあ、本日のゲスト来なさい」

カチャリ…

銀杏
「おう。Ｓｉｌｖｅｒ　ｆｒｉｅｎｄの…」

祐希奈
「ロリコン主人公と名が高い神代銀杏よ♪」

銀杏
「違うだろ！？」

祐希奈
「じゃあ…ペドとなが高い…」

銀杏
「同じだろうが！！」

祐希奈
「しょうがないわね…小さいよりは大きい胸が好きな神代銀杏よ」

銀杏
「そうそう…って違ーう！！」

ヴィヴィオ
「あれ？でもそうやって言ってましたよね？」

銀杏
「アレは…内の作者の陰謀によってだな…
後、ヴィヴィオなんだから敬語はいらない」

ヴィヴィオ
「うん♪銀杏パパ♪」

銀杏
「ごふぁ！！」

ヴィヴィオ
「パパ。どうしたの？」

銀杏
「い、いや…何でもない…」

祐希奈

「やっぱり銀杏ってロ…」
銀杏
「違う！！」
カナン
「あのさ…お前ら普通にトークしてるけど、もう一人忘れてないか？」
ヴィヴィオ・祐希奈
「誰かな？／誰よ？」
銀杏
「おい、涼！！いつまで待ってる気だよ！！いつまで待ってもお前のことなんか話題に出てこないぞ！！」
ヴィヴィオ・祐希奈
「あ…」
涼
「どうして…ゲストを忘れるかな…」
銀杏
「早く降りてこい！」
涼
「じゃあ…気を取り直して…Ｓｉｌｖｅｒ　ｆｒｉｅｎｄの真の主人公、風祭涼とは俺のことだぜ！！とぅ！！」
ピューーー…

ハル
「お茶を持ってきましたのでどうぞ～」
クレア
「裏方でも、お手伝いですの♪」
カナメ
「本日のお茶は、タカトさんから戴いた最高級ダージリンの余りと、美緒さんから戴いたバウムクーヘンですよ♪」
ハル

「ではごゆっくり」
銀杏
「お、ありがとな。俺からも約束してたバウンドケーキだ。結構自信作なんだ」
ヴィヴィオ
「わ～い♪」
祐希奈
「これ、ずっと食べたかったのよ♪」
カナン
「だからな？お前らな？忘れるなよ？」
銀・ヴ・祐
「誰を？」
カナン
「……」
ズドーン！！

涼
「ま、まさか…紐が切れたままとは…
しかし！これだけ目立てば！！」
銀杏
「この紅茶…めちゃくちゃうまいな…」
祐希奈
「ホント。ＦＴＧＦＯＰだっけ？
控えめな甘さのバウムクーヘンと合うわね♪」
ヴィヴィオ
「ケーキも美味しいよ～♪
メイデンもレナスも遠慮しなくで出てきていいよ？」
メイデン
「銀杏さん、いいのか？」
レナス

「私もご一緒しても？」
銀杏
「全然構わないって。
お前らそっくりだな…」
レナス
「私はメイデンの姉のレナスです」
銀杏
「成る程…うちの作者がまた喜ぶかな？」
ヴィヴィオ
「性格が好きかもしれないよ？」
銀杏
「帰ったら聞いてみるか。
まぁ、今は楽しもう」
ヴ・メ・レ
「♪♪♪～」
祐希奈
「は、早い！！レナスが加わったことでさらに早くなってるわ！！」
銀杏
「解説ごくろ～さん」
カナン
「あの…そろそろ弄ってやろう？」
一同
「誰を？」
涼
「誰か相手をしてくれよーーー！！！！」
銀杏
「あ～…そういやいたな…帰っていいぞ？」
祐希奈
「うん」
涼

「うわあああ！！！もうこねえええええええよおおおおう！！！！！」
ビュン！！
カナン
「涼さん！！あいつらの冗談だから！！」
ギュオ！！ガシッ！！
銀杏
「お～涼の速度に追い付いた。空間突破はさすがに速いな」
ヴィヴィオ
「通常でＳＳＳランクの速度だからね～」
涼
「は、離せ！！あんな奴等大嫌いだ！！」
銀杏・祐希奈
「別に構わない」
涼
「うおおおおあああああ！！！」
カナン
「お前ら！！もうちょっと加減しような！？」
メ・レ
「♪♪♪～」
ヴィヴィオ
「あ、二人共ずるいよ～！！」
カナン
「お前らお菓子以外にも興味を持て！！」
銀杏
「まぁ、逃げたのがクラウンとか百夜なら追いかけたかもしれないけどな…」
祐希奈
「涼さんだしね」
涼

「百夜ってお前の敵だろうが！！
俺達はダチだろ！？」
銀杏
「はっ？」
涼
「え…？ま、まさか…まさか！！」
銀・祐
「パシりに決まってんだろ♪」
涼
「ふおおおおおおあああ！！！」
カナン
「涼さん！落ち着け！！！
祐希奈が言ってるから銀杏も冗談…」
銀・祐
「本気だけど？」
涼
「本気と書いてマジとよむううぅぅぅぜえええぇぇぇ？？？？」
カナン
「頼むから正気に戻ってくれえええ！！」
祐希奈
「しょうがないわねぇ…」
バキャアアア！！！
涼・カ
「ぐぼはああ！！」
銀杏
「おっと！！」
ドゴオオオ！！
コンボが繋がった☆
涼・カ

「がふうう！！」
ヴィヴィオ
「きゃあああああ！！」
フ『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ！！』
ちゅどーーん！！
コンボが繋がった☆

涼・カ
「ぎゃあああ！！！」
祐希奈
「まだ来るか！！」
シュドドド！！！
コンボが繋がった☆

涼・カ
「ががががが！！」
メ・レ
「邪魔をするな！／邪魔をしないでください！」
グッシャアア…
止めを刺した☆

涼・カ
「……」
銀杏
「ふぃ～サッパリした～」
祐希奈
「新コースサッパリコースよ♪」
ヴィヴィオ
「やった人がサッパリするんだ…」
銀杏

「今、思ったんだけどな？
コイツらの役目って今回これだけか？」
メイデン
「マスターは毎回こんな感じだぞ？」
レナス
「私はまだあまり見たことはありませんがそのようです」
銀杏
「初めて来たけど…怖いな…」
祐希奈
「心配しなくても、カナンの味方をしないかぎりは大丈夫よ♪」
銀杏
「…したら？」
祐希奈
「そく、ＫＦＣに送るわ♪」
銀杏
「それ…カナンファンクラブだろ？」
ヴィヴィオ
「銀杏パパ違うよ。
カナンフルボッコセンターになったんだって」
銀杏
「……カナン、スマナイ…」
メイデン
「涼さんはいいのか？」
銀杏
「涼は…○原だから大丈夫だ」
祐希奈
「あ、忘れてた…え～と…」
銀杏
「な、何だそれ！？」
祐希奈

「見て分からない？バニーとメイド服よ？」
銀杏
「どうする気だ？」
祐希奈
「翔さんが欲しいんだって。
だから、プレゼントよ♪
私、優しいから♪」
ヴィヴィオ
「パパも欲しいの？」
銀杏
「い、いや…うちは結構、執事服とか揃ってるし…」
祐希奈
「〇ソン式プレゼントヴォルカニックアロー…セット完了…アリシアさん達、逃げなさいよ？」
カナン
「させるかあ！！翔さんから頼まれたんだ！！！」
祐希奈
「はいはい。潰れましょうね～♪」
グオオオ…ミシミシ
カナン
「ぎゃあおあああああ！！！！」
涼
「カナンの敵は俺の…」
銀杏
「祐希奈が後々怖いからやめろ」
アジェ『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ！！』
ちゅどーーん！！
涼
「さ、最後まで…言わせろよ…」
祐希奈

「発射！！」
ドシュ！！…ポワン…
ヴィヴィオ
「翔さん喜んでくれるかな？」
メイデン
「欲しいから祐希奈に頼んだんだろう？
喜ぶに決まっている」
レナス
「何か陰謀めいたものを感じなくもないですが…気のせいですよね？」
銀杏
「翔…誰だか知らないけど…ヴォルカニックアローは…痛いぞ…」
カナン
「ぐふっ…翔さん…ごめん…」
涼
「ふ…か」
祐希奈
「さて、キリもついたし終わりましょうか？」
涼
「何でもいいから最後まで言わせろよ！！」
銀杏
「はい。今のので終わりな」
涼
「え…ち…」
ヴィヴィオ
「銀杏パパ、涼さん出演ありがとう。
次回は…」
零
「私達の出番よ♪」
クラウン

「楽しみです♪」
祐・零・ク
「カナン弄りが…」
カナン
「既に決定事項っすか！？」
メイデン
「クラウン、次はよろしく」
レナス
「よろしくお願いします」
クラウン
「こちらこそ、メイデンもレナスもよろしくです♪」
祐希奈
「じゃ、本日はここまで」
ヴィヴィオ
「パパ、一緒にやろうよ」
銀杏
「そうだな」
ヴ・銀
「明日に向かって♪」
一同
「Ｆｌａｙ　ａｗａｙ！」
涼
「お…」
祐希奈
「よっ！」

終幕

第十五話　夏祭り（後書き）

何か暴走しまくりで恥ずかしかった内容です…

僕はあの関西弁の兄ちゃんの辺りは結構好きですが、皆さんはどこでしょうね…

次回は、どうなることやら…では♪

第十六話　夏休み最終日　（前編）

祐希奈
「……」
ヴィヴィオ
「あ、あの…皆さんこんにちは」
カナン
「リリカルヴィヴィオの前書き質問コーナーです…」
メイデン
「早く終わらせよう！」
レナス
「重いです…」
祐希奈
「ふぅ…いつまでも気にしてるのは嫌だしね。ゲストも来るし、早速の質問コーナーよ♪」
カナン
「はい！じゃあ、ちゃっちゃと行きます！レッツゴーヴィヴィオさん」
ヴィヴィオ
「はい！
『ヴィヴィオと祐希奈、カナンはどんな体型の人がタイプですか？』
……ええ！？」
メイデン
「ど、どう答えるんだ？」
レナス
「主からどうぞ！！」
カナン
「俺か！？体型つっても…まぁ…普通が一番だろ？」
ヴ・祐

「え～！！」
カナン
「じゃ、じゃあ、あんまり肉付きが良すぎるのは嫌かな？」
メイデン
「胸囲はどれくらいだ？」
カナン
「そ、それも答えるのか！？」
ヴ・祐
「答えて！！」
カナン
「あ～…B～C…」
ヴ・祐
「よし！！」
レナス
「気合いが入ってますね」
メイデン
「まぁ、あの二人にとっては大問題だからな。ヴィヴィオと祐希奈は？」
ヴィヴィオ
「私！？え～と…私よりおっきくて…どっちかって言うと肩幅が広い人はちょっと…
筋肉質過ぎるのもいやかなぁ…」
祐希奈
「ヴィヴィオと同じよ」
カナン
「おまっ！それはずるいだろ！！」
祐希奈
「大体ね…今好きな奴の体型に決まってるでしょうが…」
一同
「・・・」

カナン
「うん！ゲスト来るし終わろうか！」
ヴィヴィオ
「はい！そうですね！」
祐希奈
「それじゃ、魔法少女リリカルヴィヴィオ！」
一同
「始まります！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

『さぁ…カナン？役者は揃ったわよ？
さっさと返事を聞かせてもらいましょうか？』

『あ、あの…私達は、どっちを選んでくれても大丈夫だから…ね？』

浴衣姿のままの二人が俺に答えを求めている…まだ、早いよな…

「もうちょっと待ってくれ…まだ、俺には決められない」

そう返答すると、二人が赤くなりながら近づいてきた。
正直どちらも可愛すぎる…

『もう…待てない…カナン早くして！』

『カナン君…私も聞きたい…』

「もう少し考えさせてくれ…」

さらに二人が接近…逃げようにも何でか体が動かなかった…

『じゃあ…もう一回キスしてどっちが気持ちよかったかで決めましょ？』

「ま、待て！」

『うん…恥ずかしいけど…頑張るよ…』

「おい！！そんな簡単にするもんじゃ…」

『カナン…／カナン君…』

「うわあああ！！！っで！！」

頭に鈍痛が走った…

周りを見渡してもヴィヴィオも祐希奈もいない…

時計を見ると、朝の7時だった…

「何だ、夢かよ…いや、夢で良かったけど…

よく考えたら、あの二人があんな方法に出るわけないよな…」

にしても…やたらリアルな夢だったな…

ここまで鮮明に覚えてる夢も珍しい…

あ～目が覚めたな…

「朝から賑やかですね。主？」

肩に軽い感触…口調からしてレナスかな？

「レナスか？何で起きてるんだ？」

「デバイスとして、主が起きたら気付くのは当たり前ですよ」

「……」

取り敢えず、無言でベッドを指差した。

「く～す～」

「……寝てますね」

「主が起きたら、気付くのは当たり前？」

「すいません…メイデンは例外のようです…」

少し苦笑いをしながらレナスが肩で座り込んだ。

「この様子じゃ、起きそうにないな」

「ですね」

「おし！買い物ついでに散歩行くか！」

「買い物…メイデンの情報内の知識によると開いている時間帯ではないですが？」

「探せばどっか一件くらい開いてるって」

「ふふ…そうですね。考えなしの行動もやってみれば楽しいかもし

れないですから」

無邪気に笑うメイデンとは違い、優しい笑い方だ。
そっくりでも雰囲気が全然違うな…

「脱出成功…」

「…ここは牢獄だったのですか？」

「違う違う…こんな綺麗な牢獄は無いって…」

「でも、主は今、脱出と…」

「やっぱりお前らは姉妹だよ」

「はい？」

ああ、ちくしょう…可愛いじゃねえかよ…
首を傾げるレナスを娘2号と認定した。

「調子はどうだ？」

「あ、はい。全く問題はありません。
むしろ、以前より調子が良いくらいです」

「そっか」

「ただ、私が入ったことで、主の剣に若干の違いが出ます」

「例えば？」

「主に威力強化などですね。
今までの主の通常斬撃は、ＢからＡと言った所でしたが、Ａ～ＡＡぐらいにはなると思いますので、注意が必要です」

「ちょっと待て…ってことは今までの技は…」

「1ランクから2ランクアップとなりますね」

「全力で使えない技が出てくるんじゃないのか？」

下手をすると七式以上が不可能かも…

「それは問題ありませんよ。
私は、身体強化に関してはメイデンより上ですので…主のためにメイデンと二人で色々とエクスカリバーをいじってます」

「そんな簡単にいじってもいいのか？」

「正確にはいじって入らない部分を排除しなければ、フルで使えないと言うのが現状です」

「窮屈な思いさせて悪いな…」

「いえ、妹との共同作業など久しぶりですので楽しんでやらせていただいてます」

「俺も使いこなせるようにならないとな…」

「ふふ…色々と追加してますから、大変ですよ？」

「おいおい…」

まさか、エクスカリバーが変形したりするんじゃないだろうな…
大変になりそうだ…

「主の方はどうだったのですか？」

途端に忘れていた夢がフラッシュバックする…

「……聞くな」

「まさか…仲直りが出来なかったのですか！？
いけません！こんなことをしている場合では無いですよ！？」

レナスが近くで叫んだせいでキーンと耳鳴りがする…

「耳元で叫ぶな！！大丈夫だから…仲直りは出来た…」

というか、行き過ぎたような気がする…

「良かったです。心配していたのです」

「ま、お前らのお蔭でな」

「蟹…」

「わかったって。何で蟹なんて好きなんだよ…」

「え？可愛くないですか？」

…今、確実に聞いてはならない言葉を聞いてしまった気がする…

「今…何て？」

「蟹、可愛いですよね？」

神よ…我が娘に何て無茶苦茶な感性をプレゼントしてくれたんだよ…

「何処が…」

「あの鋏や、泡を吐く口や、目なんて最高ですよ」

「可愛くねえ…」

口と目は特にな…

「え…？蟹…可愛く無いのですか…？」

だー！！半泣きになるなーー！！！

「ま、まぁ…百歩譲って可愛いとしよう…」

「可愛いです！」

「…可愛いとしよう…それを食えるのか？」

「だって美味しいですから」

「……」

可愛いさＶＳ美味しさ＝可愛いさ＜美味しさ＝可愛くても食う
訳のわからん公式が完成…物凄く流したい話題だが、敢えて言おう…

「意味がわからん！！！」

「意味ですか…弱肉強食ですか？」

「おかしいよ！？それ絶対におかしいよ！？わかってますかレナスさん！！」

「盛者必衰ですか？」

「あ～…ちょっと待てよ…ふ～む…」

「き、緊張しますね…」

可愛い蟹が栄える＝レナスが可愛い蟹を求めて現れる＝…食われる＝衰える＝盛者必衰式、完成…

「正解！！」

「やりました！！」

「じゃあ、可愛い蟹を求めて行くぞ！」

「はい♪」

なんかレナスに染められた気もしないでも無いが、気のせいと言うことにしておこう。

可愛ければ全て良しだ。

▼▼▼▼▼▼▼▼

その頃、少女達は…

「ここは？」

「う～んと…ここのカッコの中を展開して、Xは左に、数字は右に移項して割ればでるよ？」

「ふむふむ…」

祐希ちゃんがワークにサラサラと書き込んでいく…

後、数ページで祐希ちゃんの宿題も終わりを迎える。

「ん～眠た…」

「国語…終わったですの…」

「日誌も終わりましたよ」

白姫さんとハルさんの協力もあり、早朝から始めて二時間ほどで、出来てしまった。

「手伝わせちゃって悪いわね…」

「私は、お祭りのお礼もあるから」

「私は、何もないですの～」

「いえいえ、無理を言って泊めさせていただいたのですから、何も無いことは無いですよ？」

一昨日から二人は泊まりっぱなしのままだった。
何でも、一般人の日常を経験するためだとか。

「ハルは、教員免許も持ってるですの…
全部ハルがやれば良かったのですの！」

「あははは。日誌だけで精一杯でしたから」

「１０分で終わってたですの…」

「気のせいですよ♪」

白姫さんもハルさんも相当眠たいはずなんだけど…全然見えない…
特にハルさんが…

「ところで、ヴィヴィオ様？」

「はい。何ですか？」

「その指輪…彼からもらったのですか？」

聞かれた瞬間に昨日の感触が蘇る…
私、よく自分から言えたな～

「あの…はい…」

「本物…ですね…祐希奈様の物と言い…盗んだりしてないと良いのですが…彼に限ってないとは思いますが」

「「え？」」

「祐希奈様のは純銀と…何が加工されてるですの。ヴィヴィオ様の物はブルーサファイアですの～♪」

「し、白姫さん…そんなに凄い物なのかな？」

「良いものなら、私の家を買い取れるぐらいの宝石ですの」

「ち、ちなみに…白姫さんの家のお値段は？」

「え～とですね…〇億ぐらいですね」

今、私の耳が聞き取りを拒否した…

と、とにかく…そんな凄い宝石を…私がもらってしまった…

「こ、これ…仮に、私が働いて返せますか？」

「ふふふ…」

「あははは！」

「え？」

白姫さんとハルさんが明るく笑っている…

「「一生かかっても無理です（の）」」

「……えええええ!?」

「あのバカ…ホントに何処で手に入れたのかしら…」

「まぁ、白姫家のデータに裏ルートでのそんな商品の売買はありませんでしたし、彼が誰かから貰った…という可能性もありますが…御嬢様はお譲りしていませんか？」

「いくら私でも、それは無いですの。ゴリラ親父ならあるいは…」

あのオジサンなら確かにやりそう…でもカナン君とは会ってないし…

「彼ならいつか話してくれますよ。では、僕は朝食の準備をしてきますね」

「あ、あの！」

「はい？何でしょう？」

「白姫さんとハルさんは、美食家ですよね…」

「私はともかくとしてハルは間違いなく美食家ですの」

「いえいえ、御嬢様も一定以上では無いとお食べにならないじゃないですか」

「キレるハルよりマシですの…」

「僕はキレるなんてことはありませんよ？」

『よくもまぁ、いけしゃあしゃあと…』

「シルフィス？言葉使いが悪くなった原因は貴女ですか？」

『貴方のそのふにゃふにゃした性格が原因です』

「…やれやれ」

「あ、あの…あの…」

「すいませんお話の途中でしたね。
僕と御嬢様に何か？」

「わかったわ…アンタ達で味見をして欲しいってことね？」

「う、うん…」

「わかりましたが…何をですか？」

「あ～でも、昼の方がいいわね。
アイツの好きな物って…カツ丼やラーメンだし…」

「カナンですの？」

「うん…」

「では、審査は昼食にしましょうか」

審査って言われると物凄く緊張するなぁ…

「お願いします、後、もう一つ…フェアリー」

『了解しました』

ウィンドウが開き、データが表示される。

「これって…」

『私の強化プランですね…』

「アシェルの物は少し特殊なパーツが必要なんです…六課で準備するにも時間がかかってしまうんです」

「弓などのパーツですね？御嬢様、どうでしょうか？」

「これくらいならすぐに揃えられるですの」

「祐希ちゃん…今のアシェルじゃ、限界、感じてるでしょ？」

「私の技術が無いだけよ…アシェルは…」

『遠慮など、貴女らしくありませんよ？
私の性能では貴女のパワーに耐えきれなくなっているのは事実です』

祐希ちゃんとの訓練の時、炎熱の火力に耐えきれずブレードが折れることが多かった…
魔力圧縮に耐えきれず、弓が破壊されてしまった時すらあった…
フェアリーと同じく、アシェルも限界を感じていたはず…

「でも、アシェルは母さんの大事な形見で…知らない人達に任せる

なんて…嫌よ…」

「知ってる人ならいいのですの？」

「信頼出来るなら…」

「では、久しぶりに僕が頑張りますよ。
これならどうですか？」

「えっと…ハルさん？まさか…」

「デバイスマイスターの資格も持ってますので」

え～…ハルさんって…ホントに何物…

「ハルなら…でも、久しぶりなんでしょ？」

「強化は久しぶりですが、アスラやシルフィスのメンテナンスは僕が担当していますので、恐らく大丈夫かと」

「じゃあ、パーツ代はいつか返すから…」

「僕がお出ししますよ。いえ…出させて下さい。
稀少技能のサポートに弓の転送など、その他にも多数の機能を持つデバイスを触らせて貰えるのですから、それくらいはさせて下さい」

「いいの？」

「はい。信頼して下さったお礼も含めて」

「じゃあ…お願いするわね…」

「必ず満足のいく強化をしてお返ししますので、では朝食をお出しした後に早速作業に移りますね」

そう言ってハルさんは下へと降りていった。

雅樹さんがいるけど、昨日から仲良くしてたみたいだし、大丈夫だよね

「フェアリー、どんな強化プランなのよ？」

「見てないの！？」

「ミッドの字なんて読めないわよ…」

「あ、そっか…」

『火力と防御の強化、弓の追加、残りはマスターにも行ったことですが、カートリッジの大型化、魔力変換の効率の上昇、圧縮率、魔力集束や放出の強化などです。

魔力消費も比例して上昇しますが、ブレードや弓を破壊するほどの魔力なら問題ないでしょう』

「私も祐希奈様なら大丈夫だと思うですの」

「ま～た随分凄いプランたててくれたわね…」

『扱いに苦労しそうではありますね』

「あはは…ちょっとだけ難しいかな？」

「う～ん…あのバカに模擬戦頼もっかな…」

「私じゃダメなの？」

「ダメなことは無いけど…私、アイツと模擬戦やったことないのよね」

「あ～…確かにそうかもしれないね」

「そうなんですの？てっきりやってる物だと…」

「アイツの従妹とはやったんだけどね」

「そういえば、カナちゃん元気かな？」

「カナちゃん？」

「ええ。鷹月カナメ、アイツの従妹で、結構強いのよ？」

「会いたいですの…」

「まぁ、待ちなさいよ…ちょっと計画を練ってる所なのよね…」

何か、とっても楽しそうに祐希ちゃんが笑っている…この笑い方の祐希ちゃんに関わると、大抵、私は泣かされている…

カナちゃん…頑張ってね…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「へっくし！！」

何だ？今、何か身体に寒気が…

「主！主！蟹です！蟹がたくさんですよ！？」

「お、おう…」

俺達はいま、海鳴市のスーパーが開いていたため、入って見たのだが…なんと生きた蟹を展示して客寄せしているのか知らないが、まぁ、水槽の中にたくさんの蟹がいた…

「わぁ～♪可愛いですね♪ね、主？」

「ま、まぁな…」

何だこのレナスの変わりようは…ほとんど別人に見える…

自分より大きな蟹を可愛いって…

「主！この子を買いましょう！」

レナスが目を輝かせている…ただ、蟹が可愛いと言う理由だけど…

「で？どうするんだ？」

「食べます」

「……」

食べるんだ…やっぱり可愛さ＜美味しさの式は変わらないらしい…

「たらば蟹ねえ…レナス。それは蟹じゃないだぞ？

テレビで見ただけだから何だったかは忘れたけど…」

「蟹では無いのですか！？」

ガビーンという効果音がピッタリの表情をしている…蟹のために…

「そうらしい」

「…で、ですが…私はこの子がいいです！」

物凄く可愛い顔をして頼んでいるが、後で食うという事実は変わらない…

「しゃあない…朝から蟹を買って帰る中学生って、どんなんだよ…」

「うむぅ…ワシはこれが良いのう…」

指を指したのはズワイガニ。

しょうがないか…

「はいはい。わかったよ。行くぞ？」

タラバガニとズワイガニの二匹を掴み、レジに持っていく…

すっっっげー怪訝な顔をされたけど、気にしないことにした。

「蟹～♪可愛いです♪」

「うむ。うまそうじゃ♪」

「そりゃ良かったな」

そうして俺達三人は…待てよ?…三人?

「お前誰だよ!?」

いつのまにか隣にいた少女に驚いた。
少女は、全身真っ黒のワンピースタイプの服に、猫耳を思わせる黒い帽子…帽子の中に何があるのか激しく気になる…

「ワシか?ワシは夜天黎華じゃ。
お主こそ誰じゃ?」

「風間カナン…」

「レナスです」

「カナンにレナスか。ワシのことは黎華と呼ぶがよい」

「呼ぶがよいじゃなくてだな…何、勝手に人に買い物させてんだよ…」

「お主は、はいはいっと言ったぞ?」

「あれは…お前があまりに自然に言うから…」

「なら、ワシはこの蟹をお主に返さねばならぬのか…残念じゃが…
ほれ!!」

「……」

いや、そんな腕をプルプル震わせて涙目で言われたら、俺が悪者みたいだろ…

「いいよ…」

「え…？」

「蟹ばっかいらねえよ…家で食え…」

「お主…良い奴じゃの」

「そうか？じゃあ、良い奴ついでに親、探してやるよ。お前、両親は？」

「さぁ？何処かにはおるのではないか？」

「何処かって…はぁ…やっぱりお前迷子か…」

「迷子ではない！無礼じゃぞ！！」

「へいへい。とりあえず迷子センターか警察探さないとな…」

「うぅ…」

落ち込んだ姿など、ホントに子供にしか見えない。

「主、この方は、子供ではありません…というより主より年長の方です」

「へ？」

「レナスとやらわかっておるではないか！
そうじゃ、ワシはこう見えても二十一歳ぐらいなんじゃぞ！」

「ぐらいって何だ…」

「正確に覚えているのがそこまでなのじゃ！」

いや…胸を張って言われても…

「ホントか～？」

「本当じゃ！！なら、ワシの力を少しだけ見せてやろう…むぅ…」

黎華が集中を始める…

「何だこれ…」

体の内側から探られるような…そんな感覚が広がっている…
異変は俺だけじゃない…レナス…さらには、民間の人達までもざわつき始めた…

「どうじゃ？」

「信用する…だから…止めてくれ…」

「うむ♪」

ニッコリと笑うと、力の波動は収まっていった…

「お前…一体…」

「秘密じゃ♪」

「あっそ…答える気がないんなら聞いても仕方ないな…俺達、これから帰るんだけど、来るか？」

「う～む…もうすぐ面白い見せ物があるのじゃ…じゃから今回はやめておくのじゃ」

「そっか。じゃあ、また会えるといいな」

「うむ♪ではの」

「じゃあな」

黎華は、元気に手を振りながら走って街中へと戻って行った。

「なぁ、レナス、何でお前は黎華が子供じゃないってわかったんだ？」

「昔に少しだけ見たことがあったのですよ」

昔って…メイデンとレナスの昔は幅が広いからな…

「まだ、自我があった頃ですから…数万年は昔になりますね」

「へぇ～数万年…ってアイツもか！？」

あれはどうみても、小学生～中学生並だぞ！

「見た目の話なら、私やメイデンも変わっていませんが？」

「お前らは一応、デバイスだから…」

「あの方は魔神ですよ？」

「魔神って…あんな可愛いのが魔神？」

「アレは本来の姿ではありませんよ？
戦闘の時にあの方を見ればわかりますが…逃げることをお勧めします」

「何で？」

「あの方は、魔法を作った方であり、勝つには、物理的な攻撃しか通りません、それにしても人間の力であの方に勝つのはほぼ、不可能です」

「魔法を作ったって…
じゃあ、魔法はアイツの前では使えないのか？」

「使えないことは無いですが、あの方の稀少技能は反則レベルなので、意味はないですね」

「へ、へぇ～」

あんなちびっこがなぁ…世の中わからないもんだな…まだまだ、魔法の世界は知らないことが多そうだ…

「敵…では無いよな？」

「味方でもありませんが…あの方が関わった場合…全滅します」

「死人は？」

「楽しむことを第一とされる方なので、殺したりはしませんよ」

まぁ…それは良かったけど…えらいのと知り合いになっちまったな…

「……」

誰かにトントンと肩を叩かれた…

「ん？…アンタは！！」

振り返るとそこには…あの人がいた…

「ちょっとそこで話をしないかい？」

「ああ！俺もアンタに会いたかった」

「そうかい？それは嬉しいなぁ」

俺達は人気の無い公園へと足を運んだ…

▼▼▼▼▼▼▼▼

「武装…追加終了…確認…異常無し…カートリッジシステム異常無し…サポートに異常…デバイスアップデート…再度確認…異常無し

…」

美味しい朝食の後、ハルさんはずっとコンソールを操作し続けている…

その速度は、私達なんか比べ物にならないくらい速い…

「祐希奈様」

「な、何？」

「アシェル本体にリミットがかかっているようなのですが、外してしまってもよろしいですか？」

「リミット？アシェル、どうなの？」

『今の祐希奈なら大丈夫です。外してください』

「分かりました。後は、白姫家でパーツを追加した後にすぐにお渡しします」

「ハルさん、もう出来たんですか？」

「元々、パーツを入れるための空白を作っていただけですから、そんなに時間はかからないんですよ」

「白姫さん…ホントなのかな？」

「並の人なら、丸一日かかる作業ですの」

「いえいえ、アシェルさんが優秀でしたので」

「そうなの？」
『いえ、私はほとんど何もしていませんが？』
「「……」」
「あははは。何故僕は睨まれているのですか？」
「ハル…謙遜も度が過ぎると嫌みにしか聞こえないのよ？」
「というか…ハルはわざと嫌みを言ってるとしか思えないですの…」
「あはは…」
確かにそういう傾向があるかもしれない…
「それよりヴィヴィオ様？そろそろ昼食が出来るのでは？」
「あ、ホントだ…」
「「話をそらすな！！」」
「すいません…最近、ボケが始まったようで…」
「絶対記憶を持ってるハルがそんなはずは無いですの…」
「で？わざと嫌みを言ってるのか…正直に答えたら、加減してあげる…」
「お料理もうすぐ出来るから来てね～…」

なんかちょっとまずそうな雰囲気なので、私は逃げることにした。
扉が閉まった瞬間…

「わざとです♪」

「「デストローイ!!」」

ガッシャーーン!!ドドド!!バコーン!!

「あはは!全然加減が無いですよ?」

「「そんなもん無いわー!!!」」

ドゴーーン!!
何か…部屋から恐ろしい音がした気がするけど、気のせい気のせい…
しばらくして、相変わらず笑顔のハルさんと、疲れはてた白姫さん
と祐希ちゃんが降りてきた。

「ハルさん、大丈夫ですか?」

「大丈夫じゃないですね。身体中が痛いです♪」

どうやら大丈夫らしい…

「ぶっ飛ばす…」

「シルフィス…起動準備を…」
『お任せを…』

「あ、あの…白姫さん、せめてシルフィスはやめて欲しいな?お家

が無くなっちゃうよ」

「…名前で呼んでくれればしないですの…」

「お名前？」

コクりと白姫さんが頷いた。

「クレアちゃん？」

「はいですの！」

パアアアっと白…クレアちゃんの顔が明るくなった。

そんなに呼んで欲しかったのかな？

「じゃあ、クレアちゃんとハルさん、こっちに来てください」

二人が並んで居間に座った。

「これを…二人に食べて欲しかったんです」

机の中心の鍋の蓋を開け、取り出したのは豚の角煮…カナン君が好きな物の一つだった。

「成る程…確かに朝食には向いてませんね」

「良い匂いですの♪」

ここ一月ほど練習して、変な味にもならないようになった。

祐希ちゃんからも雅樹さんからも合格を貰った…この二人から貰え

れば…
ゆっくりと、箸で割られ、食べられた…

「ん…私は美味しいと思うですの♪」

「よし…」

ハルさんは、ゆっくりと味わいながら食べている…

「……」

ハルさんは、しばらく無言のままだった…

「ダメ…ですか？」

「白姫家で厨房担当をやってみませんか？」

「え？」

それからいつものように笑って言ってくれた。

「文句無しです♪
よく練習されたようですね？」

「良かった…」

「練習っていうか…アレは訓練に近いわね…
お肉の最適の薄さとか…鍋に入れるまでのタイムリミットとか…火の余熱の計算まで…全部完璧に出来るまでやるんだから…付き合わされたこっちの体が持たないわ…」

「そうですか。炭酸水は使われましたか？」

「はい！！秒数も数えてました！！」

「一般の材料でそれだけの気配りをされているのならまず間違いはないですね。是非食べさせてあげましょう」

「じゃあ、今夜カナンを呼んで、ヴィヴィオのお祝い会をもう一度やりなおしましょ？」

「え？いいの？」

「もちろん。ね？」

「賛成ですの～♪」

「はい♪」

「ありがとう…」

ここにいる皆が、優しい…
いい人達ばかりだ…

「どうせなら彼を驚かせるようなこともしたいですね。
そこでですね…面白い物を見つけたのですが…」

廊下に出ていくハルさんが持ってきたアクリルケース…

「「あー！！！」」

それは…かつて封印したはずの…ドレスだった…

「どど、何処でそれを!?」

「ていうか…何でハルが!?」

「あははは。さっき暴れられた時に、ちょっとクローゼットが開いていたので…」

「わ…私、着ないよ!?」

「私だって嫌よ!!」

次の瞬間、しゅるりと手首を紐で縛られた…

「さて…後はよろしくお願いします♪」

「はいですの♪」

物凄く良い笑顔のクレアちゃんが近寄ってきた…

ハルさんは退室…

「お着替えですの～♪」

「「いやあああああああああああ!!!!」」

私達の断末魔の叫びが、響きわたった…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

公園

「はっはっは！そうかいそうかい！僕のお陰で仲直りが出来たのかい！」

「ああ。ホントにありがとう…」

俺は、今、ジルさんと話している。
レナスは待機フォルムで隠れて貰った

「さすれば…君は僕にすることがあるね？」

「へ？」

「僕に服従を誓いたまえ！！」

ズビシ！っと目の前の地面を指差して言ってくれやがりました…

「……殴っていいか？」

「何？恩人を殴るだって…そうか…恥ずかしがっているのだね！！
案ずることは無い！！僕を崇めることは、神を崇めることと道理だからね！！
さぁ！僕にひざまずきたまえ！！」

もういいや…恩人なんて思わない…

「いっぺん死んでこい！！」

ドゴッ！！

「ふふ…君のその恥じらいを…受け止めて見せるよ！！！
カモーーン！！」

ガバッと腕を広げクイクイとしている…

「恥じらってねえ！！全力で嫌なんだ！！」

「またまた…赤くなって否定しなくても…」

「殺すぞ？」

「全く…ツンデレさんだなあ…
しかし、案ずることは無い！！君の凍てついた心を溶かすのは僕の愛！！」

「俺はそっち方面に興味はねえーー！！！」

バッキャアアア！！！
祐希奈直伝の飛び蹴りを炸裂させたが…果たして効いたのか…

「ふむ…ならば…そこの女性」

「は、はい！！」

その辺にいたそこそこ綺麗な姉ちゃんを捕まえてこちらにきた…
ジルさん…いや、ジルは間違いなく美形なため、肩を組まれた姉ちゃんは顔が真っ赤だ…

「僕に服従するのであれば、この女性を君の彼女にしてあげよう！！」

なんつ～無茶苦茶な…

「ええ！？」

「アホを抜かすなあああーー！！！」

シュドーーン！！！

鳩尾に炸裂した拳が効いている間に姉ちゃんは逃げた…

「ぐっふう…さすが…キングオブツンデレだね…簡単には落ちないか…」

「一生落ちねえよ！！」

「ならば…」

次の瞬間、結界が展開され、銀の人型が俺達の周囲に現れる…

「なっ！！」

「む…？」

「ジル！俺の後ろに！！レナス！！」

『はい！！』

「セットアップ！！」

『了解しました』

「ほう…これが…」

金の鎧が装着され、銀の剣が現れる…
いつもと逆だ…

「これは？」
『ふあ…マスター？おはよ～』
『メイデンは起きたばかりみたいで…』
「はぁ！？いや、もう昼だぞ！？
寝過ぎだろ！？」
『まぁ…カラドボルグの練習…ということで…許して上げてください』
「慣らしにしてはちょっと数がな…」

初めてやるのに…俺の人型は、軽く三十はいる…しかも後ろにはジル…

「そうだ！！」

破滅的バカが動いた…

「……」

タンッタンッと両足を肩幅に音を鳴らして開き、右手で額の前の髪を払い、ビシッと指を差した…

「これに負けたらカナ吉は僕に服従したまえ！！」

「んなこと言ってる状況かアホぉぉおおお！！！！」

物凄く不安な戦いが始まろうとしていた…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

祐希奈
「はい、毎回のごとく後書き全力全壊司会者の祐希奈です♪」
零
「久しぶりに召喚されました神代　零です♪」
クラウン
「メイデンの大親友のクラウンです♪」ヴィヴィオ
「あはは。二人とも元気みたいだね」
メイデン
「クラウン！これ…マジカル通信に出た時に貰った物だが…一緒に食べよう？」
クラウン
「はいです♪」
レナス
「私もご一緒してもいいですか？」クラウン
「もちろんです♪
あのテーブルの上で食べるです♪」
ク・メ・レ
「♪♪♪～？」
メイデン
「あれ…今、動かなかったか？」
レナス
「不安定ですね…」
クラウン
「だってテーブルじゃなくて…」
祐・零
「カナンだし♪」

ヴィヴィオ
「ええ！？」
カナン
「……何で俺がこんなめに…」
祐希奈
「そんなの決まってるじゃない」
零
「久しくやって無かったＫＤＧの活動よ♪」
祐希奈・零
「ね～♪」ヴィヴィオ
「あ、あの…私もクッキー食べていいかな？」
ク・メ・レ
「いいですよ♪／いいぞ♪」
ヴィヴィオ
「わ～い♪」
カナン
「良いわけあるかぁ！！」
ガッシャーン！！
ヴ・ク・メ・レ
「ああ！！」
祐・零
「サイッテー…」
カナン
「人をいきなりテーブルにしておいて何を抜かすか！！…ってあれ？」
クラウン
「シルバーダガー…」
メイデン
「空の怒りよ…」
レナス

「大地の怒りよ…」
ピシャーーン！！ゴゴゴゴ！！ザクザクザク！！
カナン
「ひぎゃあああああああああ！！！」
祐・零
「さて、メインディッシュは～♪」
ヴィヴィオ
「ディストラクション…」
カナン
「俺は逃げる！」
ギュオ…
零
「ナッシング♪」
カナン
「しまった！毎回銀杏に任せていたから…」
祐希奈
「ついでに動きも封じるわね♪」
ギシリ…
カナン
「ぎゃおああ！！」
ヴィヴィオ
「カナン君…食べ物は…粗末にしちゃいけないんだよ？」
カナン
「ど、どっちかって言うと…一人だけクッキーを食べられ無かった恨みの方が…あ…」
カチリ…
祐・零・ク
「バ～カ♪／です♪」
ヴィヴィオ

「ブレイカぁぁああーーー！！！！！」
カナン
「のわあああああああああ！！！！！」
ドサッ…
ヴィヴィオ
「ふぅ…」
カナン
「あ～いて…」
一同
「早っ！！！」
カナン
「シオン！まだ負けないぜ♪」
クラウン
「死ねばいいです♪」
祐希奈
「死ね」
零
「うん。喋らずに死ね」
カナン
「扱いが厳しい！！！！！」
祐・零
「人外だし…」
カナン
「ふふ…目の前が霞むな…」
クラウン
「涼と同じくらいいらないです♪」
カナン
「俺…もう…ゴールしてもいいよね？」
レナス
「危ないですよ～」

メイデン
「少々弄り過ぎたか？」
カナン
「ゴ～…」
祐希奈
「キモい…」
カナン
「ごはっ！！」
零
「ウザイ」
カナン
「げふぅ…」
クラウン
「やっぱり、ジャルトと変わらないくらいいらないです♪」
カナン
「……」

チーン…

ヴィヴィオ
「な、何かいつもよりさらにカナン君が見てられないよ…」
カナン
「だが、しか～し！！こんなもんで負けてたら主役の一人の名が泣く！！」
祐・零
「人外のクセに？」
カナン
「いや…あの…人…です…人…内です」
零
「陣内○則？」

カナン
「ちゃうわい！！」
祐希奈
「あ～あ…ほらね？微妙なテンションでツッコミいれるからしけちゃったじゃない…」
カナン
「お前らが俺の調子を下げるからだろ！？」
零
「アンタに調子が良い時なんてあった？」
カナン
「がふぅ！！い、一番効いた…」
ヴィヴィオ
「それくらいにしてあげようよ？」
祐希奈
「まぁ、仕方ないわね。
泣かれても迷惑だし」
零
「根性無しはこれだから困るわね」
カナン
「もういいっす…」
クラウン
「カナンを仕留めたです♪」
涼
「経験値が…」
メ・レ
「潰れろ／潰れてください…」
グシャアア…
涼
「ぐふ…」
カナン

「涼さーーん！！！」
祐希奈
「ったく、呼んでもないのにくるからメイデン達からツッコミが入るのよ…」
零
「へぇ～あれツッコミなんだ」
ヴィヴィオ
「凄いでしょ～♪」
クラウン
「メイデン達、流石です♪
前に教えたことの奥義を体得してるです♪」
メイデン
「奥義？」
クラウン
「言うこと聞かないなら殺っちまえばいいですよ♪」
メイデン
「成る程…」
レナス
「そうすれば相手は殺られたくないが故に…」
カナン
「物騒な考えに走るのはやめてくれ！！」
クラウン
「カナンなら死なないから安心ですよ♪」
カナン
「お前はどんな育ち方をしたらそんな考えになるんだよ！！」
零
「だって…うち、極道だし？」
祐希奈
「あ～ならその考えも納得ね」
零

「でしょ？」
祐・零
「イエーイ♪」

パンッ！

カナン
「何が！？何がイエーイ！？」
ヴィヴィオ
「同じ境地にたどり着いたからじゃないかな～？」
カナン
「冷静に解説せんでください！！」
祐希奈
「ということで」
零
「お祝いにＫＦＣに行きましょうか♪」
カナン
「え…？」
祐・零
「一命様ご案な～い♪」

ズルズル…

カナン
「命になってますよ！！
死にますよ！？誰か！！助け…ぎぁあああああああああああああああ！！！！」

クラウン
「行ってしまったです」

メイデン
「マスターも大変だな」
レナス
「全くですね」
ヴィヴィオ
「うん」
銀杏
「楽屋で零達を待っててても来ないから見に来て見れば…」
クラウン
「あ、マイロード」
銀杏
「お前らなんつうことをしてるんだ…」
ヴィヴィオ
「私もなの？」
銀杏
「当たり前だ。帰る前に全員お仕置きしてやる…」
ヴ・ク・メ・レ
「銀杏パパ…」

キラキラキラキラ…

銀杏
「やっぱ気が変わった…」
ヴィヴィオ
「わ～い♪」
声
（このロリコンがーーー！！！！）
銀杏
「まぁ…今回は悪かった…」
ハル

「神代銀杏様ですね？」
銀杏
「ん？ああ」
ハル「お土産にこれをと思いまして」
銀杏
「こ、これは！」
ハル
「シャトー・ペトリュスです。
日本酒がお好きと聞いていたのですが、皆様で飲めるようにこちらにしました」
銀杏
「い、いいのか？」
ハル
「あははは。血の色に似ているせいか、旦那様達もお飲みになられないんですよ。
まだ、３０年ほどしかたっていませんが、よろしければと思いまして」
銀杏
「絶対やらねえ…」
クラウン
「マイロード？私も飲みたいです」
銀杏
「これは、ちびっこの飲むもんじゃねえ！！」
ヴィヴィオ
「パパも未成年だよ？」
銀杏
「俺は良いんだよ！」
零
「何がいいのかな～？お兄ちゃん？」
銀杏

「れ、零…」
零
「一人だけそんなワイン飲む気？」
銀杏
「いや…だってこれ…かなりうまいし…」
零
「私達にもわけてくれるよね～？」
銀杏
「……」

ダッ！！

零
「逃がすかぁ！行くわよ！クラウン！」
クラウン
「はいです！！」
ヴィヴィオ
「また来てね～♪」
メイデン
「シルフレでも頑張れ」
レナス
「応援してますよ～」
祐希奈
「じゃ、そういう訳で終わりよ♪」
一同
「まったね～♪」
カナン
「俺を…出し…て…くれ…」
祐希奈
「死人がでてこないのよ♪」

ガシャン！

終幕

お礼

ｎａｏｎａｏさんこの度の召喚ありがとうございました♪

非常に楽しくかかせていただきましたが、口調などがおかしかったやも…

とにかく本当にありがとうございました。

第十六話　夏休み最終日　（中編）（前書き）

すいません…日常を書いてたら文字数が…後編はＥＳの後にお届けします。

第十六話　夏休み最終日　（中編）

祐希奈
「はいはい。毎度お馴染み、前書き質問コーナーよ」
カナン
「最近は落ち着いてるみたいだな」
ヴィヴィオ
「番外編をやるほどは来なくなったからね～」
メイデン
「さて、文字数もあまり使ってはいけないし、早速質問に…」
レナス
「待ってください…マジカル通信所からキラーの砲弾…ミニロブスターも来ています…」

ピキ…

祐希奈
「鬱陶しいのよ…カスがあああああ！！！！」
ヒュルルル…ドドドドドドド！！！！

カナン
「うわ～…軽く花火だな…」
メイデン
「む…プレシア邸からも砲撃だ！！」
祐希奈
「あ～そっちはこれでいいわ」

ガシッ

カナン
「へ？」
祐希奈
「風間プロテクション♪」
カナン
「待てーい！！」

シュゴオオオ！！！チュッドーーーン！！！！

カナン
「ぎゃあああああああああ！！！！」
祐希奈
「ふう…」

ポイッ…ドサッ…シューープスプス…

カナン
「痛えじゃねえか！！」
ヴィヴィオ
「痛いで済むんだ…」
メイデン
「ん？　何か落ちてきたぞ？」

レナス
「二つの箱と…手紙ですね」
祐希奈
「何々？…ほっほーう…ふむふむ♪よし♪」
ヴィヴィオ
「何て書いてあるの？」
祐希奈

「え～とね…たまになら女装は大歓迎です♪ってのと、召喚の際には、お菓子を沢山だすっていうのと…ふふ…」
カナン
「ま、まさか…その笑いは…」
祐希奈
「ＫＤＧ入団志願書よ♪」
カナン
「のおおおおう！！！！」
メイデン
「まぁ…諦めろ。フェイトさんの姉なら避けられない運命だったんだ」
ヴィヴィオ
「ほ、本編ではアリシアさんは出てないから大丈夫だよ」
カナン
「だからこそ…たまにある出演がキツくなるんだろ…」
祐希奈
「さて、カナンはそれが役目なんだし、どうでもいいわ♪箱の中の確認をしなきゃね♪」
カナン
「役目ってなんだよ！？」
祐希奈
「は？　吹っ飛ぶ役目に決まってんじゃない？」
カナン
「当たり前のように言うな！！」
祐希奈
「オールナイトＫＤＧラジオ局全時空では共通よ？」
カナン
「いや、わかる人にはわかるから伏せ字使おうな！？」
祐希奈
「まぁ、そういうことだから」

カナン
「あっさり打ち切った！？」
ヴィヴィオ
「マジカル通信所からは…雅也さんのクリームサンドイッチだ♪
翔さん達は…凄～い♪たくさんだよ♪」
祐希奈
「シュークリームデカ！！
二つもある…って、１つはヴィヴィオちゃん達用？」
カナン
「クロスに出られないからお詫びとしてじゃないのか？」
ヴィヴィオ
「わぁ～♪いいの～？」
祐希奈
「わざわざありがとね」
ヴ・メ・レ
「♪♪♪～」

パクパクパク…

カナン
「早っ！！」
祐希奈
「既に三分の二が無いわ…」
カナン
「と、とりあえず、翔さんのは後書きで食べよう」
祐希奈
「ゲストが美緒だしね、お菓子の方が良いでしょ」
カナン
「ルミオ…クリーム食えるかな…」
祐希奈

「食べられないなんて言ったら…口にぶちこむだけよ♪」
カナン
「いや、折角作ってくれた雅也さんに失礼だからな？」
祐希奈
「それもそうね。とりあえずルミオに聞いてダメだったらヴィヴィオに美味しく戴いてもらえばいっか」
ヴィヴィオ
「ごちそうさま～♪」
メイデン
「美味しかったな♪」
レナス
「ええ。とっても♪ホイップとカスタードや焼き加減なども、完璧でしたね」
祐希奈
「食べ終わるまで…一分無いって…」
カナン
「ヴィヴィオ達の甘いもの好きは気にするな…気にしたら負けだ…」
祐希奈
「そうね…」
カナメ
「質問コーナー♪」
カナン
「どわっ！！」
カナメ
「何ですか？　その何処から現れたんだみたいな顔は」
カナン
「よくお分かりで…で？　どっから出た？」
カナメ
「愚問ですよ♪
カナン君が一番分かっているでしょう？」

カナン
「……」
ヴィヴィオ
「カナちゃん久し振りだね」
カナメ
「はい♪では、一件目の質問いきますよ。
『漸く第三部序盤に追い付きました…バーストリミットについてですが、反動は絶対にくるのですか？』
はい、ヴィヴィオさん、お願いしますね♪」
ヴィヴィオ
「えっとね、絶対じゃないよ？
前は、全部外しちゃったから、極端に体が疲れちゃっただけで、八割くらいまでなら大丈夫かな？」
カナン
「九割にいくとどうなるんだ？」
ヴィヴィオ
「九割でフラフラで抵抗力が下がって、全開なら…本編通りになるかな」
祐希奈
「ブラスターとまともにやっても押し負けないんだから、それくらいはね」
メイデン
「ちなみに、ヴィヴィオは砲撃にしか使っていないが、他にもバリエーションがあるらしいぞ」
カナメ
「では、次の質問はレナスさんどうぞ♪」
レナス
「はい！
『ふと思ったら我らがカナメちゃんの能力詳細がないです！！頼みます！！』

らしいですよ」
カナン
「お前が出てきた理由はこれか…」
カナメ
「まぁ、そうなりますね。
では、どうぞ♪」

鷹月カナメ
推定魔導ランク：ＡＡＡ

詳細：カナンの従妹として、現れた美少女。
住んでいる所、魔導師としての活動履歴など謎が多い人物。
人当たりが良く、その美貌のために、客寄せなどには恐ろしい才能を発揮する。大人しかったり、弾けていたりと性格が変わる時がある。
かなりの剣士であり、軽い身のこなしからの斬撃、属性剣術を多く使う

使用剣術

剣舞初の舞…閃花
威力：ＡＡ＋～ＡＡＡ
速度：？

相手の技を避け、そのままの勢いで魔力斬撃を叩き込む。
剣速などは、相手の速度や角度に合わせて変わるため、不明である。
状況に応じて属性を追加するため威力も変わる。

剣舞弐の舞…烈花
威力：ＡＡ～ＡＡＡ

速度：ＳＳ＋

一度納刀し、剣に魔力を通わせ、神速の抜刀と共に投擲する。
その後、相手に刺さるもしくは防御した場合、柄に乗りから飛び上がり、追加で重力落下からの振り下ろしを叩き込む。
バリアを利用した技であり、扱いが難しい。
尚、カナンも見よう見まねで使うようである。

剣舞参の舞…水仙花

威力：ＡＡＡ＋～Ｓ
速度：ＳＳ

大量の水分を剣に集め、巨大な水柱を吹き出させ、相手を打ち上げる。
水柱の範囲は、五メートル以上とかなり広く発動までもかなり速いため、回避は困難。

終演剣舞…雪月花

威力：ＡＡＡ＋～Ｓ＋
速度：測定不能

水仙花からの派生技、納刀と共に水柱が氷結され、相手を拘束する。
放って置いても死に至るが、カナメの意思で任意の場所を破壊、もしくは解除可能。
水仙花の水を使うため、魔力消費はかなり低い。
水柱の発動と同時発動しているため、水仙花が当たった場合回避不能である。

カナメの中では、高い威力を誇る。

剣舞四の舞…桜

威力：ＡＡ＋

速度：Ｂ

地面に剣を突き刺し、魔力を流し込み…爆破。

土を炎の刃で斬りつけ、小爆発を起こし前面を１８０。を攻撃する。

本来は、煙での目眩ましの効果を狙った物だが、小爆発で軽い攻撃なら相殺出来る。

カナメ

「こんなものですか？」

ヴィヴィオ

「カナちゃんの技って綺麗だよね～」

カナメ

「ありがとうございます♪」

メイデン

「随分、ややこしい技が多いな」

カナメ

「使い所を間違えると大変ですから、よく考えて選ばないといけません」

カナン

（思い付きで発動した技に考えなんてねえよ…）

カナメ

（そういうことは黙っていてください）

カナン

（人の思考を読むな！！）

カナメ
（なら考えなければいいのでは？）
カナン
（不可能！！）
カナメ
（それくらいわかってますよ）
カナン
（く…ムカつくー！！！）
カナメ
（ふふふ♪）
祐希奈
「ん、長くなっちゃったけどこれで終わりね。久し振りにカナメ、言っちゃって？」
カナメ
「はい♪魔法少女リリカルヴィヴィオ、始まりますよ♪」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

後ろの阿呆に突っ込んでいると機械音が響く…

『排除…開始…』

「ちっ！」

三十の人型が一斉に動き出した。
前方二体を弾き、左右を軽く後ろに飛び回避。
回転の勢いと共に弾き飛ばす！
無言で吹き飛んだ二体は、他、数体を巻き込みながら飛んでいく…

『主！上です！』
「弐式抜刀剣術！」

一瞬で納刀、空間把握で位置を確認、目視もせずに抜き放つ！

「虚空閃！！」

袈裟懸けに一閃…二体の体がズレ…切断された。

まだ、終わりではない、振り抜いた勢いをそのままにその場で回転…

空間突破で接近して来た三体も纏めて吹き飛ばす。

「さぁ！何をしているんだい！！カナ吉をやってしまいたまえ！！」

「お前はどっちの…」

五体の接近を確認…十分に引き付け…斬撃に魔力を乗せる…

「味方だあああ！！！」

周囲３６０。に銀光が疾りぬける…

一瞬の停止の後、五体の体は、地に落ちた…

「はっはっは！おかしな事を言うね！！

もちろんカナ吉さ！だからこそ負けてくれと言ってるんじゃないか！！」

「意味がわからん！！」

ジルの会話にツッコミながら、下段から一気に斬り上げる！

銀の人型の残り、二十…

『『壱式抜刀剣術…』』

人型が一斉に納刀…放つはカナンの剣術…
真似るようにカナンも納刀する…

『『暗夜一閃』』

「パクるな！！」

二体が残像を残しながら迫るがカナンが消失…背後に振り抜いた形で出現した…撃墜…

『虚空閃…』
『虚空閃…』
『虚空閃…』

時間差で放たれる空間斬撃をバックステップ、斬り払いバク宙で回避…
上下逆さになりながら魔力を集める…

「おお！カナ吉！！見事な曲芸だね！！」

「やっかましいわあああああ！！！」

怒声と共に、銀色の砲撃を放つ！！
真っ直ぐに人型の集団へと向かい…弾かれた…

『『絶空…』』

「へいへい…じゃあな…」

未だ光集束するカラドボルグを軽く振る。
集団の上…空間が裂けた…そこから放たれる銀色の砲撃！！
大半は避けたが、絶空を放った二体は動けずに爆散した…

「うむぅ…どうしてそんなに君はツンデレさんなんだ…
この僕に！！服従することが出来ると言うのに！！」

バッ！ババッ！！と変なポーズを取るジルをジト目で睨み付ける…

「おや…その熱い眼差しは…」

「冷めてるよ！！果てしなく冷めてるよ！！」

その時、一体が接近、刃を振りかぶるが…粉々に砕け散った…

「全く…主？戦闘中ですよ？」

「ちゃんと見てるって」

拳を打ち抜いた形でレナスが立っていた…

「ほう…美しいね…どうだい？
僕のマイハニー第１２６号になってみないかい？」

「いえ、お断りします」

「お前…斬るぞ？」

会話をしながら、飛びかかってきた人型を弾き飛ばした…

「案ずることはない！僕はその辺にいるボンクラな男では無いよ？生涯安泰、毎日とろけるような愛を…」

「黙っていて下さい」

地面が揺れ、ジルを囲むように石壁が完成した。

「これでは、カナ吉が負ける所を…」

「レナス…喋れない程度に潰しとけ…」

「了解しました」

「むぐぅぅう！！」

石壁の幅が狭まり、ジルは軽くサンドイッチ状態になった…

「漸く落ち着ける」

「相手にするから…」

無造作に掌を向ける…その先には納刀した人型が三体、止まっていた…その周囲の空間は歪んでいる。

「ですよ？」

掌を閉じると同時に大量の破片をばら蒔きながら、砕け散る…

「まぁ…」

カナンの手が霞み…剣の柄に掛かる…
閃光が疾り、金属音が鳴り響く…
空間突破で迫っていた五体が弾かれ、体勢が崩れた…納刀

「悪かったよ…」

絶空…人型の上半身と下半身が分かれた…
カナンの姿が消失、レナスの背後の人型を叩き斬る！
同時、レナスの左脚がカナンの右を突きつける…木っ端微塵に人型の頭を蹴り砕いた…

「お～流石、姉さんの名前は伊達じゃないな」

「感心してる場合ですか？」

二人の姿が重なり、銀髪、銀色の瞳へとカナンの容姿が変わる…

「ん～…」
『どうされました？』
「いや…」

十体が一斉に突貫！
カナンただ一人を狙い振り下ろされた剣の威力は地を砕き、Ｓランクに値する。
当たれば…だが…
遥か上空にカナンはいた。

「なんか…前より身体が軽い…」
『エクスカリバーとカラドボルグとで、良い所だけ抜き出しましたし、ユニゾンすると能力強化も相まって、余計に感じているのかも

しれませんね』
「成る程…」

話している内に数体がカナンの居場所に気付き突貫…後に続くように人型が動き出す！

「全部…見える…」

突貫してくる人型を急降下をしながら次々と弾く…
直線に一体となった時、空間を下に形成、人型を頭から両断し、着地する…
弾かれた人型は直ぐ様反応、空間形成…突撃！
カナンにはそれらの動きがスローモーションのように見えている…

「遅い…」
『主が速いのです』

剣を地面に突き刺し、魔力を込める…

「『グランドスパイク！！』」

次の瞬間…針山と言っても過言では無いほどの石針がカナンの周囲十メートルに出現した…
人型は一体残らず串刺しとなり、しかし、まだ動こうとする…

「レナス…やり過ぎだろ…」
『はい？私は主の魔力量に従って発動しただけですよ？
メイデンと私は得意な属性が違うのですから、魔力も少なめでいいのですよ？』
「忘れてた…まぁ、いいや、終わりにするぞ」『はい』

既に動ける物はいないため、剣の先端を上に向ける…瞬く間に雨雲が発生…雷を轟かせながら広がっていく…

「『天の裁きを…ギルティーレイン！！』」

ピンポイントで人型に雷が直撃！
あっさりと消し炭にしてしまった…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ふぅ…」

今回は雑魚だけだったな…
にしても…何でも急にあらわれた？

「主、あの方はどうしますか？」

「あの方？」

「あの、ジルとかいう人です」

「そういやいたな…」

途中からしずかだったから忘れてた…

「もういいだろ。ジルを出してやってくれ」

「はい」

大地の壁が消え、少し怒っているのか知らないが、腕組みをしたジルが出てきた。

「全く…君達はひどいことをするね」

「あ～悪かったって、でも、ああしないと危なかった…」

「そっちのことではないよ。
何故、勝ってしまったんだい…」

「は？何故って言われても…負けるわけにはいかないだろ？」

「やれやれ…困った子達だ…
わかった…君達がそんなにも僕を拒むのなら、もういいさ」

漸く俺がノーマルってことをわかってくれたのか？

「わかってくれて何よりだよ。
いくら言われようが、俺はそっち系には興味ないからな」

「君達は気に入っていたのだけどねぇ…
全く持って残念無念だよ」

踵を返し、ジルは俺から離れていく…

「また会おうな～」

「カナ吉…」

「ん？」

「マイハニー達も君達もその気が出来たら何時でもこの僕の胸に飛び込んできたまえよ！！
なぁに…案ずることはない！！
僕はタフだからね♪君達の一人や二人、生涯守って見せるさ！！
浮気はダメだよ？この僕にしか君達を受け止められる人間はいないからね！はっはっは！！！」

やっぱコイツは…会いたくないかもしれない…

「俺はノーマルだあああああああ！！！！」

「僕は大好きだあああああああああ！！！！」

「何を公衆の面前で叫んでるんだよお前は！！！」

「全く…カナ吉は…恥ずかしいじゃないか…」

「帰れーーー！！！」

「アディオ～ス♪」

高々と手を振りながらジルは帰っていった…

「はぁ…はぁ…」

「大丈夫ですか？」

「ああ…帰ろう…」

「はい。帰りましょう」

疲れる…ジルの相手をまともにすると激しく疲れる！！
これからはもう少し軽めにしよう…
あ…ヴィヴィオ達のこと何で知ってたのか聞くの忘れてた…
まぁ…いっか。

（カナン君？聞こえますか～？）

（またお前かよ…最近多くないか？）

（いえ、ちょっと御嬢様達はお取り込み中でして、たまたまですよ）

（で？何でお前は助けに来なかった？）

（雑魚の相手は面倒ですので）

（……平和を守ろうという気は無いのか？）

（君を信頼していましたからね♪）

（……嘘…）

（ですよ♪）

（……からかうだけなら念話を切るぞ）

（あははは。からかうのはついでです）

（ついでの方が用件より先ってどうよ…）

（まぁまぁ、そうジト目で見ないでください）

（別にお前を見てねえし…さっさと用件を言え）

（今日の晩御飯はお祝い会の仕切り直しをするので食べにきてくださいとのことです）

（あ～…）

俺のせいでぶち壊しにしちゃったやつか…

（目の保養になりますし、来た方がいいですよ？）

（は？）

（何より、お二人がカナン君が来なかった場合、暴走される可能性が非常に高いので♪）

目の保養？暴走？なんの話だ？

（困惑してますね～）

（いちいち能力使って見るな！！）

（あはははは。では、お待ちしていますので）

（おい！行くとは…）

（あれは～小学生の時～羞恥心に欠ける二人は～一緒にお風呂に入

ったり～一緒の布団で～）

（行きます！！行きますから暴露するな！！）

何でだ…何でコイツがそのことを知ってるんだ…

（おや…流石ですね♪お優しいことで♪）

（…どこで聞いた？）

（さぁ…どこでしょうね～）

（言うなよ？祐希奈は忘れてるんだから…）

（それはまぁ、君の行動によりますね）

くそ…腹黒コンニャククラゲめ…

（へいへい…後、オムライス作ってやってくれないか？後で蟹もそっちに持ってくから、頼む）

（わかりました。それくらいならお安い御用ですよ）

（ありがとな。じゃ）

（はい。また後で）

「レナス、良かったな。
ハルが蟹を調理してくれるってさ」

「本当ですか！？本当に今日、蟹を食べられるのですか！？」

「あ、ああ…」

物凄く可愛いが…蟹を食うことになんの抵抗も無いのか？
いくら方程式があるにしても…

「か～に～♪か～に～♪」

「……」

無いらしい…サラバ…タラバガニ…
せいぜい可愛がられながら食われろ…

「メイデン、起きてるのか？」
『一応はな。本体は家にあるが…来た方がいいか？』
「家って…」
『マスターに言っていなかったな…
姉さんと私で別行動が出来るように、管制人格の切り替えの自由化を行ったんだ。
これなら、どちらかがマスターと一緒に入れば、呼び出す手間もいらない。
即座に戦闘体勢に切り替えられる』
「お前が寝てたのってその作業のせいか？」
『まぁ…元はエクスカリバーだからな…
私の方が若干作業が大変だったのもあるが…』
「そっか…大変だったのに悪いこと言ったな…ごめん」
『構わない。寝過ぎていたのは事実だ。』
「礼…とは言わないけど、ハルにオムライス頼んどいたから、俺なんかより絶対うまいし」

『そうか。それは楽しみだな♪』
「帰るまでちょっと時間かかるし、もうちょっと寝とけ」
『ああ。実は情報処理がまだ出来ていなくてな…そうさせてもらう…』
「おやすみ」
『おやすみ…マスター…』

以前、片手間で出来ると言っていたものが出来ないほど作業は大変だったらしい。
感謝しないとな…
晩飯までの時間を潰すためにも、レナスといろいろ街を回りながら、ゆっくりと帰宅した…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

??? ジル視点

「ジル…ローディアス…」

はぁ…やれやれ、全く毎回毎回うるさいことだね。

「なんだい？」

「エクスカリバーの主とまた勝手にコンタクトを取ったようだな…」

「そうだが？なんだいなんだい、僕には人と会う権利も尊重されてないのかい？閣下殿？」

こんな阿呆なやからとマジメに話してられないよ。やれやれ、ふ～。

「お主の思考は全くわからない…
何を考えている…
もし、我々の計画が漏れるようなことがあれば…」

「僕を排除する…かい？」

「そうだ…」

ふむ…一々言い訳すると面倒そうだ…
怒らせてさっさと帰るとしようか。

「いい加減聞き飽きているのだけどね？
これも、前に言ったことだが、僕は別段、組織の邪魔をするような行動を取ったわけでも無いし、考えなど無いさ。
自由に気が赴くままに行きたいから…話したいと思ったから彼に会ってきた。それだけだよ。
その度に排除、排除言われてたんじゃあ、うるさくてうるさくて、閣下に僕の言っていることがわかっているかな？…Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ？」

さて…これだけ言えば、帰れるかな…

「貴様…我を侮辱しているのか！」

相変わらず、血が上りやすい方だ。
美容にも良くないと言うのに。

「よくわかってるじゃないか。
同じことを何回も言われれば腹も立つと言うものだよ？
仏の顔も三度まで…と言う言葉を知っているかい？

僕は仏でも無いのに、三度も耐えてあげたのだよ?感謝したまえ」

「貴様!我を誰だと思っている!!」

「偉大なる閣下…らしいけど…まぁ、僕には知ったことじゃないさ。
上下関係なんてバカらしくてやってられないね。
ふああ…眠い…もうかえっていいかい?退屈だ」

「いいだろう…貴様と話すのは疲れる…
だが、これだけは言っておく…裏切ればその首…無いと思え…」

「君はバカかい?
これだけの組織に入って裏切ればどうなるかくらい、僕にだってわかっているよ?
但し…彼らとのコンタクトは止めるつもりは無いけどね」

「何故だ…」

「何故だって?理由は、楽しいからさ!」

「それだけか?」

「おやおや…人には誰にでも隠し事の百や二百はあるものだよ?
それらを包み隠さず話せとは…閣下殿…ヤキモチかい?」

「……」

さて…チャンスだね…

「図星か!!

はっはっは！しかし案ずることはない！！
愛を理解すれば…隠し事など手にとるようにわかるものだよ？
故にだね！閣下に足りないのは愛…愛なのだよ！！
愛と言うものはだね、時に燃え上がるように熱く！時に刃物のように鋭利に突き立つこともある…実に面白いと思わないかい？思うだろう！！
知りたいだろう？そうか、ならば僕が教えてしんぜようではないか！
案ずることはない！！無償で構わないよ？
何？それでは悪いって？」

「もうよい…」

僕の足元に魔方陣が展開され転送の準備がされた。

「大丈夫さ！愛さえあれば、僕はお金なんて…」

そして景色が変わる…どうやら宝石店の前のようだね。
既に夕刻か…長々と話をしてしまったみたいだ。しかし…

「話が変わっているのに気付かずに帰すとは、中々甘いお方だ」

「あの～」

一人の女性が店の前に現れた。
ふむ…お客様か

「ようこそ！愛を買う宝石店ローディアスへ！
ささささ、中に入りたまえよ！
今日の気分は一括して三万円だよ？」

「は、はい！」

宝石店ローディアスの1日はこうして始まる…

▼▼▼▼▼▼▼▼

「お～い。そろそろ行くぞ～？」

ったく…まだ寝てろっつったのに…帰ってきた早々から作業に入るんだもんな…頑張りすぎだ。

「遅いな…まさか…」

何となくあの二人ならありそうな気がしてきたから部屋に向かうとやっぱり作業を続けていた。

「やっぱりこれはいらないのではありませんか？危険な物ですし…」

「私も斬り離そうと思ったのだが…姉さんなら、プログラムを改変して何とか出来るのではないか？」

「出来ないことも無いですが、またオーバーしてしまいますよ？」

「その分は、私のバックアップを削れば…」

「記憶を消すのですか？」

「前マスターの戦闘の癖など必要の無いデータもかなりあるからな。ギリギリまで削れば何とかなるだろう」

「無理なようなら、私のも削りますよ？」

「いや…何とか…なりそうだ…」

「良かったです。では、早速プログラムを改変しましょう」

「ああ、もう少し頑張ろう」

「はい♪」

「おい、そこの天然姉妹…話を聞いてないのか？」

「マスター？／主？」

はい、揃って首を傾げてくれました…
可愛いから無視されたのは忘れよう。

「もう、時間だから祐希奈の家に行くぞ？」

「もうそんな時間か！今、着替える」

「少しお待ちください」

二人の体が、金と銀の光りに包まれ、収まると服装が替わっていた。
ちなみに、いつもは、メイデンは銀の鎧、レナスは金の鎧を着ている。
それが、メイデンは黒いワンピースとレナスは白いワンピースになる。
俺は、この服装のことをお出かけスタイルと勝手に命名している。

肩の露出が多いが、この二人は身体関連の羞恥心はないため、至って普通な表情をしている。

「お前はそれ好きだな～」

「マスターが一番似合っていると言ってくれた服装だからな」

あ～…今は懐かしきデートの時な…

「私は変ではないですか？」

「お前らに似合わない服の方が少ないよ」

「ま、マスター…何を…言って…いる…」

「主…不意討ちは…反則…ですよ…？」

まぁ、この通り、言葉には真っ赤になることは変わらないわけだが…ホントに慣れないな…

「ほら、行くぞ？」

「ああ／はい」

両手に華ならぬ、両肩に華状態の俺。

これ、最初は恥ずかしかったんだよな～…

「じゃ、行ってくるな～」

蟹の入った発泡スチロールを脇に抱え、靴紐を結び、扉に手をかける

「ではな／行ってきます」

「ご迷惑をおかけしないようにね」

「わかってるって」

伯父さんに別れ?を言い、祐希奈の家へと出発した。

「マスター、ふと思ったのだが、少しアウトフレームになってもいいか?」

「ん?まぁ、いいけど?」

服装はそのままにメイデンがアウトフレームフルサイズへと変更し、俺と並んで歩く。

「やはりか…」

「何が?」

「マスター…身長が伸びたな?」

「そうかぁ?」

言われてメイデンと視線を合わせるが、特に変わったように思えない。

ちなみにメイデンも１６０センチだ。

「姉さん、頼めるか?」

「わかりました」

肩からレナスが浮き上がり、頭の上に移動する。

「あ、主の方が少し高いですよ？
一センチでしたか…それくらいです」

「スッゲー微妙に伸びたな…」

寝る子は育つ…アレは迷信だったか…
一月も寝て一センチって…ちょっと悲しい…
再びメイデンが人形サイズへと戻り、肩に乗る

「よく気づいたな」

「一センチも変われば気付くぞ」

「俺、全然気付かなかったけど？」

「別視点から見ると意外とわかるものですよ」

「そんなもんか？」

「はい」

それからも適当に喋りながら歩いていると、いつのまにか祐希奈の家の前に付いていた…
扉を開けると、クレアとハルがいた。

「いらっしゃいませ、カナン君」

「いらっしゃいですの、カナン」

「お、おう」

「どうして二人が出迎えなんだ？」

「ヴィヴィオさんと祐希奈さんは…」

「ちゃんといらっしゃいるですの。
まだ、お夕食の用意が全て出来てないということですの」

「それが、蟹ですね、お預かりします」

発泡スチロールの箱をハルに渡す。

「ああ、頼むな、ちゃんと作れよ？
俺のじゃなくて、レナスのなんだからな？」

「わかりました。カナン君の食事は適当で宜しいのですね？」

「んなこと言ってねえだろ！！」

「冗談半分です♪」

やっぱり冗談か…って…

「半分本気か！？」

「あはははは！では～」

「おいこら！！適当になんか作るなよ！？聞いてんのかコンニャク執事！！」

最後にこちらに振り返り、爽やかに笑った後、台所へと消えた…

「今の笑みは何だあああああ！！！」

「カナン、もう少しかかるですの。祐希奈様の部屋で待ってて欲しいですの」

「へ？いや、俺も手伝うぞ？」

「結構ですの」

「何で？」

「邪魔ですの」

グサリとクレアの言葉が突き刺さる…

「そうっすか…」

「マスター、元気を出すんだ！！」

「主が活躍する時もありますよ！！」

「あると良いな…」

やたら足取りが重い中、階段を上り、祐希奈の部屋で時間を潰す…
と言ってもボーっとしていただけだが…

「お待たせですの。カナン、準備完了ですの！」

二階までクレアが呼びに来てくれた…

「そんじゃ、楽しむとしますか」

階段を降りる時点でかなりの良い匂いが漂ってきている…
でも…和洋中…どの匂いもするような…

「お～…う…」

「あはは…カナン君、いらっしゃい」

「さっさと座りなさいよ…」

新緑と深紅ドレスに身を包んだ、超絶美少女達が部屋にいた…
正面からみただけでもかなりの露出だ…
胸元近くまで開いている…恐らく背中も似たようなものだろう…

「……」

「カナン？早く座るですの」

「まぁ、そうなるのも仕方ないかな。
私もかなり驚いたからね」

「目の保養になったでしょう？」

「その…目のやり所に非常にこまる…」

「言わないで！／言うな！」

三人の赤面と共にお祝いパーティーは始まった…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

祐希奈
「後書き召喚コーナー♪」

一同
「わ～♪」

祐希奈
「最近頻繁に出演依頼があって嬉しいわね♪」

カナン
「まぁ…ドンマイ的なのもあったけどな」

祐希奈
「…それ以上言ったら潰す…」

ゴオオオ…

カナン
「すいませんでした！！」

ヴィヴィオ
「カナン君の扱いは何処に行っても変わらないよね」

カナン
「いやいや、静か～に終わった平和系のもあるぞ？」

メイデン
「それは、相手が優しい性格だったからではないのか？」

レナス
「一人だけでしたしね」
カナン
「そんな気もするが…
さぁ、今日は静か～に終わったレアな作品の主人公の麻井美緒さんの登場だ」
祐希奈
「な～に…アンタごときが私のセリフとってんのよ…
今すぐ這いつくばって土下座しないと塵にするわよ…？」

ゴオオオアアア！！

カナン
「申し訳ございませんでした！！！祐希奈様！！」
祐希奈
「で、美緒～さっさと来なさい？」
美緒
「じゃあ、失礼しますね」
ヴィヴィオ
「わ～…ホントに女の子になっちゃってるね」
美緒
「お父さんのお陰です」
祐希奈
「スカリエッティねえ…
そっちでは随分と良い奴になってるみたいね」
美緒
「はい。とても良いお父さんです♪」
カナン
「まぁ、アイツの話は置いといてだな、これ、この前の礼に…」
美緒

「凄い量ですね…全部カナン君が作ったの？」
メイデン
「違うぞ、マスターも挑戦はしてみたみたいだが、無理だった」
レナス
「ですので、前書きにて送られてきた翔さんのシュークリームカスタード&ホイップデラックス、苺のミルフィーユ、プリンタルトに、主用のアーモンド入りビターチョコレートですね」
美緒
「最近の男の人って凄いなぁ…
そんなにたくさん作れるんですね」
ヴィヴィオ
「ね～。私もびっくりしたよ」祐希奈
「まぁ、とにかく食べましょ？」
カナン
「ん、丁度良いな。甘いの苦手ってよく覚えてたな…」
祐希奈
「翔さんだからね♪」
美緒
「どういうことですか？」
祐希奈
「きっと…相手の好き、嫌いな食べ物をメモってるのよ！！」
カナン
「いやいや…これ以上、翔さんの女性っぽさを強調するなよ…」
ヴィヴィオ
「もぐもぐ…ごっくん。でも…私達よりお料理が上手って…どうなのかな？」
パクパクパクパク
メイデン

「ゴクッ…きっと翔さんは、女性に憧れた時があったんだ」
レナス
「ん…今もかもしれませんよ？
ああやって、服の注文を送られた方ですし…」
祐希奈
「アンタ達…速すぎよ…」
美緒
「凄いね…」

既にテーブルの上のお菓子の半分は消えている…

カナン
（違うんだ…アレは…悪魔の陰謀なんだ！！）
祐希奈
「ケケケケ♪」
美緒
「祐希奈ちゃん？　あの…背中にコウモリみたいな翼が見えますよ？」
ヴィヴィオ
「あはは。ホントだ～♪可愛いね」
祐希奈
「小悪魔スタイルってやつ？」ハル
「御嬢様方～とヘタレ君」
カナン
「誰がヘタレかコンニャク執事！！」
ハル
「君以外にはシオン君しかいませんが？」
カナン
「え…？あの…素で返されると傷つくんですけど…」
ハル

「今回のお茶はアッサムをミルクティーにしてみました。
かなり甘いものが多く見えたので」
カナン
「無視すな！！」
美緒
「この方がハルさんですか？」
祐希奈
「そうよ。やたら強いのよね」
ハル
「いえいえ、そこら辺にいるCランク魔導師ですよ」
カナン
「あの…」
ヴィヴィオ
「クレアちゃ～ん一緒に食べない？」
クレア
「いいですの？」
美緒
「もちろん良いですよ♪」
クレア
「白姫クレアですの。
どうぞよろしくお願いいたします」
美緒
「麻井美緒です。よろしくお願いいたします」
ヴィヴィオ
「わぁ～」
メイデン
「これが、テレビで見た上流階級の品格というものか…」
祐希奈
「ていうか、クレアって口調、直せたの？」
クレア

「普段は疲れるのでこれですの」
ハル
「普段からお使いにならないので疲れられるのでは？」
クレア
「堅苦しいのは社交の場だけで十分ですの」
ハル
「おやおや…では、僕は失礼致します。御嬢様方はごゆっくりどうぞ」
カナン
「あの…最後まで無視っすか…？」
美緒
「まぁまぁ、この苺のミルフィーユ、美味しいですよ？」
カナン
「食えねえって…」
祐希奈
「じゃあ、甘くないミニロブスターをどうぞ～♪」
カナン
「もっと食えん！！」
祐希奈
「あははははははは♪」

ガコッ！！！

カナン
「ごほお！！！」
クレア
「カナン…鉄が食べれるのですの！？」
ヴィヴィオ
「カナン君凄～い♪」
メイデン

「マスター！流石だ！！」
レナス
「ふふ…主？美味しいですか？」
美緒
「あ、あの…そろそろ止めませんか？」
ヴ・ク・メ・レ
「え？」
美緒
「……」
祐希奈
「は～はっはっはっは！！！」
カナン
「ひひはす…（死にます…）」
美緒
「カナン君！大丈夫ですか！？」
カナン
「ノー…キディング…」
祐希奈
「まさか…全然余裕さ♪」
カナン
「勝手に意味を変えるな！！まさかで終わりだっつーの！！」
祐希奈
「私、勉強出来ないし～」
カナン
「嘘つけぇ！！英語だけはできるだろうが！！」
祐希奈
「ＮＯ　Ｉ'ｍ　ｃａｎ'ｔ　ＥｎｇＩｉｓｈ♪（英語なんて出来るわけ無いじゃない♪）」
カナン
「発音が外国人の発音に聞こえるのは俺だけか？」

ヴィヴィオ
「二人とも話がずれてるよ？」
カナン
「あら？」
美緒
「結局、大丈夫なんですか？」
カナン
「まぁ、アレくらいは軽めだな」
祐希奈
「軽めなのに死にますとか言うなぁあああああ！！！」

バッキャアアアア！！

カナン
「何でーー……」

キラーン

メイデン
「お～今回は中々の飛距離だな」
レナス
「本家は違いますね」
クレア
「綺麗ですの」
祐希奈
「さて、今回は平和に終わったわね♪」
ヴィヴィオ
「いつもよりはね」
美緒
「これで平和なんですか？」

一同
「うん」
美緒
「やっぱり凄い…」
祐希奈
「じゃあ…」

ヒュルルルル…ドゴーーーン！！！

カナン
「……はっ！本日の召喚はここまでだ。
じゃあな～」
祐希奈
「だ～か～ら～ね～？」
カナン
「……」
祐希奈
「私のセリフを取るなっつってんのよーーーー！！！！！
ヴォルカニック！！アローーー！！！」

ちゅど～～ん…

カナン
「ふは……」

ドサッ…

ヴィヴィオ
「じゃあ、美緒ちゃん、私が送るね？」
美緒

「あ、ありがとうございます」
一同
「またね～／ではな／またです／またですの／じゃな～」
美緒
「……」
ヴィヴィオ
「復活…早いね…」
美緒
「ちょっとトラウマになるかな…」

終幕…

謝辞

彼方さん、美緒の召喚が遅れてすいません！
後はお礼を…美緒のお陰で比較的平和に終わることが出来ました。
ありがとうございます♪
では♪

第十六話　夏休み最終日　（後編）　（前書き）

ども♪　　打ち上げから帰って急いで仕上げたので、どこかおかしいところがあれば、教えてくださると嬉しいです。

第十六話　夏休み最終日　（後編）

祐希奈
「フィーバー♪」
バキャッ！
カナン
「ごふっ！」
ヴィヴィオ
「あはは…皆さんこんばんわ」
メイデン
「妙に元気だな…」
祐希奈
「まぁ、そりゃあね♪
せーの♪」
一同
「インターハイベスト１４位＆ａｍｐ；知らない間にＰＶ読者数４９０００人突破おめでとう＆ａｍｐ；評価点ＭＡＸもついでにおめでとう～♪」
カナン
「最後に至っては今更だけどな…」
ヴィヴィオ
「それは、作者が忘れてたのが悪いんだよ」祐希奈
「実は、バグで２９９点だけどね」
レナス
「多分、すぐに上がるかと思いますが」
ヴィヴィオ
「あとは…」
一同
「練習に打ち込み過ぎて、更新遅れてすいません…」

カナン
「まぁ、帰ったらバタンキューの日々だったからな…」
祐希奈
「で…漸く投稿出来たと」
ヴィヴィオ
「謝罪はこの辺にして質問コーナーに…」

ヒュルルル…

祐希奈
「いい加減に！」
メイデン
「待て、アレは御菓子みたいだぞ？」
カナン
「なら貰っても…」
祐希奈
「私は…アンタからの贈り物がいらないのよーー！！」
ヴィヴィオ
「！！」
フェアリー『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ！』

ヒュン！
ドドドドド！！！

レナス
「勿体ないです…」
祐希奈
「ヴィヴィオ…その手に持ってる物も寄越しなさい…」

ゴオオオオ！

ヴィヴィオ
「いくら祐希ちゃんの頼みでも…無理かな…」

ゴアアアア！！

祐希奈
「う…」
メイデン
「祐希奈が押されている…」
カナン
「甘いものが関わると別人だな…
さすが、タカトさんを従わせるだけはある…」
祐希奈
「さ、さて、質問コーナーに映りましょうか…」
ヴィヴィオ
「うん♪」
カナン
「負けたな…」
祐希奈
「黙ってなさい！！」
バキャッ！

カナン
「がふっ！」
メイデン
「ほら、たまにはマスターが読め」
カナン
「この状況を見てよく読ませる気になるな…」
メイデン

「何かおかしいか？」
カナン
「いや、良いけども…
『カナメちゃんの出番はまだですか？』
そんなものは！」
カナメ
「もうすぐですよ♪」
カナン
「出てくるな！！」
カナメ
「なら、私の出番を読者さんからどれだけ楽しみにされてるか見てみますか？」
カナン
「……（確認中）」
ヴィヴィオ
「どうなのかな？」
カナン
「ふふ…目が霞む…」
レナス
「あ、主！？　どうして泣かれているのですか！？」
カナン
「まぁ…自信喪失しただけだ…」
カナメ
「そういうことですよ♪」
祐希奈
「何でカナンが自信喪失してんだかわからないわね…」
カナメ
「ちなみにこの方からリクエストも来ていますよ？」
ヴィヴィオ
「内容は消されててわからないけど、前向きに検討するみたい」

レナス
「また主関連の話でしたら…」
カナン
「次だ次ぃ！！」
レナス
「主…」
メイデン
「本気で泣いているな…」
カナン
「早く…」
カナメ
「はい♪
『作者さん達って、どうやって話を考えてるんですか？　何かコツでもあるんですか？』
らしいですが？」
ヴィヴィオ
「う～ん…うちの作者は…ノリ…だよね…」
祐希奈
「そうね。コツなんて無いわよ。
今日は書けそうだな～ってノリになると、勝手に出てくるらしいわよ？」
メイデン
「そのせいで夏休み編がかなり長くなったわけだが…」
レナス
「作中の時間は一週間しか進んでないですからね」
カナン
「質問は終わりか？」
祐希奈
「みたいね。じゃ…」

ガチャ…

？

「こんばんわ～」

一同

「？」

雅也

「祐希奈ちゃん、ちょっと良いかな？」

祐希奈

「雅也さん？　何よ？」

雅也

「ちょっと出演依頼をしにきたんだけど…」

祐希奈

「雅也さんの？」

雅也

「いや、アイツの…」

祐希奈

「却下」

雅也

「やっぱり？」

祐希奈

「あんな毎回腹立つ行動する奴を召喚してやる気は無いわ」

雅也

「これでなんとか頼めないかな？」

祐希奈

「御菓子ねえ…雅也さんだけなら手を打ってあげてもいいわよ？」

雅也

「じゃあ、俺が好印象だったら他の人もお願い出来ないか？」

祐希奈

「アイツは出さないかもしれないわよ？」雅也

「まぁ、俺の面目が保てればいいかな」
祐希奈
「じゃあ、今は召喚が混んでるから三話後くらいになるけど」
雅也
「ああ、楽しみにまってるよ。
後、これ…」
祐希奈
「この箱はなに？」
雅也
「片方は御菓子だけど、銀色の方は、開けない方がいいかもしれない…」
祐希奈
「アイツ？」
雅也
「いや、今回は違うけど…多分…」
祐希奈
「まぁ…今回は開けないわ。
そのうち気が向いたらね」
雅也
「邪魔してわるかったね。
じゃあ…」
祐希奈
「気を付けてね～」

バタン…

ヴィヴィオ
「お話って何だったの？」
祐希奈
「御菓子と出演依頼よ」

ヴィヴィオ
「御菓子！？」
カナン
「ルミオも来ることだし、そん時に食べような？」
ヴィヴィオ
「うん♪」
メイデン
「では、魔法少女リリカルヴィヴィオ、始まるぞ」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
「と、とりあえず、ヴィヴィオ、ＡＡＡランク試験合格おめでとう」

「あ、うん。ありがとう」

「じゃ、ヴィヴィオの合格を祝して…」

《かんぱーい！》

最初は固まっていた俺達だけど、少しずつ緊張もほぐれ、ぎこちない会話が出来るようになってきた。
そして…ハルが、料理を運んで来たが…

「何だこれ…」

机に並べられるのは、スパゲティから始まり、炒飯、エビチリ、コーンスープ、寿司、刺身…ｅｔｃ…
もう訳がわからない…

「祐希奈様が何でもいいから大量に作れと言われましたので」

「もうちょっと考えて作れよ…」

「バイキングのように食べて下さい」

「バイキングって…」

普通は家ではやらない…というか出来ない…
材料費は、多分コイツかクレアが出してるとして…このメンバーで食いきれるのか？

「美味しいです♪」

若干一名、物凄い勢いで蟹を食べているが、あの体の何処に入るのか…

「わぁ…凄いや…」

「こ、これは…」

「ハル、流石ですの♪」

驚きながら食べるヴィヴィオと祐希奈、満面笑顔で食べるクレア。

「こんなに美味しい夕食を食べられるなんてね…ハルさん、ありがとう」

「いえいえ、少し急いで作ったので、あまり自信は無いのですが」

試しに一つ手元にあった唐揚げを食べてみた…

「唐揚げって…こんなに美味くなるんだな…」

「揚げ加減と油の質だけでも変わりますからね。
素材の味を潰さずに揚げるのに苦労します」

「ふ～ん…ま、そんだけじゃ無いんだろ？」

「おや…よくお分かりですね」

「お前は何にしても隠し事が多いからな。
一週間も話せば嫌でもわかる…」

「そ、そうですか…」

ん？　何か今、ハルが動揺してなかったか？
普通だな…気のせいか

「で、何でそんなドレス着てるんだ？」

「「っ！」」

「気分よ！　気分！！」

「や、やっぱり…変かな？」

「「う…」」

「場違いではあるな」

「でも、似合うよ。

パーティなんかにいても、なんの違和感も無いな。
二人とも綺麗な顔立ちだし、御嬢様でもいけるんじゃないのか？」

「はぅ…」

「バ、バカ！」

「バカって…聞かれたから答えたのにそれは無いだろ…」

「似合うだけでいいのよ！　パーティ云々は言わなくていいの！！」

「何で？」

「アンタはそれがわからないからバカだって言ってんのよ！！」

「そ、そうか…ごめん」

相変わらず、俺に乙女心を読み取る能力は無いらしい…
よくこんなんで…目の前の二人に告白してもらえたな…

「あ、あの…／でも…」

「ん？」

「「ありがとう…」」

「お、おう…」

思わず目線をそらしてしまった…
だって…上目遣いのヴィヴィオと、横目に見る祐希奈の真っ赤な顔

が色々とヤバかったから…

「でも、これからドレスのことは触れないでよ？」

「うん…私もそうして欲しいな？」

「わかった…」

頼むからその視線をやめてくれ…
精神が壊れる…

「じゃ、プレゼントコーナーと行きましょ？」

「「え？」」

「ま、待て…俺、何にも聞いてないぞ？」

「私も…」

「心配しなくても、私とクレアとメイデン達だけよ」

「私達もか！？」

「ふぇ？」

いや、レナス…可愛いけど、とりあえず蟹を離そうな？

「大丈夫、私に任せなさいって。
メイデン達は歯磨きしてきなさい」

「な、何故だ？」

「今…この部屋にはメイデン達を狙った虫歯菌がいるのよ…」

「そうなのか！？」

いや、いないからな？
いたら奇跡だからな？

「早く行かないと歯に穴が空くわよ♪」

「ね、姉さん！」

「はいぃ！」

あ～完璧に信じてるな…天然姉妹め…
と、メイデン達が戻ってきた。

「マスター、オムライス…食べるなよ？」

「主、蟹…食べないで下さいね？」

「ええからはよいけーーー！！！」

「「？」」

思わず関西弁になってしまったせいか、姉妹揃って首を傾げながら、
洗面所へと飛んで行った。

「よし…クレア」

「はいですの♪　私からはこれですの」

それは、様々な装飾がなされた写真立てだった。
なるほどな…

「皆で記念撮影をするですの～♪」

「わぁ…ありがとう！」

「写真撮影は最後にしましょ？
この後のイベントが終わってラストが写真なら、多分、皆笑えるしね」

「そうだな。クレア、いいか？」

「もちろんですの♪」

「次のプレゼントは、私ね。
在り来たりだけど、ケーキよ」

祐希奈が冷蔵庫から、ピンク色のケーキを取り出した。
もちろんワンホール…

「祐希ちゃんもありがとう！！
でも、いつ作ったの？」

「気付かれないように徹夜作業よ」

「スゲーな…」

これだけ友達想いな奴も珍しい…

「だから、冷蔵庫触らせてくれなかったの？」

「そ、バレたら嬉しさ減っちゃうでしょ？」

ん？　何かヴィヴィオが震えてるような…

「祐希ちゃん大好きーーー！！！」

ガバッ！

「っと…よしよし♪　私も好きよ♪」

「えへへ♪」

「微笑ましいですね♪」

「はいですの♪」

「絵になりそうだな…」

優しく頭を撫でる祐希奈とはにかんだ笑みで抱きつくヴィヴィオ…

この二人はずっと仲良くしてるな…

「じゃ、ヴィヴィオ、食べてくれる？」

「うん♪」

「……」

「カナン君？　顔が赤いですよ？」

「うるせえ…」

それくらい、今のヴィヴィオの笑顔は破壊力満点だった…

「祐希ちゃん、美味しいよ♪」

「そう、徹夜した甲斐があったってもんね」

「本当にありがとう♪」

「どういたしまして、さて…ラストは…もういいわよ～♪」

「え？」

祐希奈が声を響かせるとヴィヴィオの背後に魔方陣が二つ広がる。

「ヴィヴィオ」

「合格おめでとうございます」

ギュ…

背後からアウトフレームのメイデンとレナスが現れ、ヴィヴィオを抱きしめる。

さらに、頬に軽くキスをした。

「わっ！　あはは！　びっくりしたよ～」

「祐希奈さんからこうするものだと聞きました」

「喜んでもらえたか？」

「おい、祐希奈…」

「あは♪」

ジト目で睨むと、ピースをして笑顔１００％で笑ってくれましたよ…
そんなんされたら怒れねえだろ！！

「スッゴく嬉しい♪　お返しだよ～♪」

ガバッとヴィヴィオがメイデン達を抱きしめ返す…
ヤバイ…これはかなりヤバイ…

「わっ…あはは♪　ヴィヴィオは元気だな♪」

「喜んでもらえたようですね♪」

「二人も大好きーーー♪」

ダメだこりゃ…俺には耐えられん…
壁にもたれ掛かり、目を閉じてやり過ごす。
そのあとも、祐希奈がヴィヴィオに抱きついたり、クレアまで抱きついたり…それはそれは、精神崩壊直前でしたとも…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

とりあえず、拷問に耐え抜き、写真撮影をすることになった俺達。
ヴィヴィオを中心に祐希奈クレアが隣り、俺とハルは後ろだ。

「父さん早く！」

「いや、こんな若いメンバーの中に私は入れないよ。私が撮ろう」

「いいの？　じゃあお願いするわね」

「任せなさい。はい、笑って～？」

と、言われても、作り笑いは中々難しい…

「カナン君、表情が固いよ？」

案の定、雅樹さんに注意された。

「別にいいっすよ」

出来ないものは仕方ないというか…
しかし、隣りのコンニャクが爽やかに笑った瞬間、寒気がした…

「それはいけませんねー…あれは～小学生の時～」

「うわぁ！　バカ！」

「小学生の時何があったのですの？」

「聞くな！」

「そんなに言いたくないことなのか？」

「隠し事は良くないですよ？」

「俺の人生に関わる出来事Ｎｏ．２だから言えない…」

「どうせろくなことじゃないわよ。
ヴィヴィオの着替えを覗いたとか♪」

いくら何でもそれはありえないって…

「ええ！？　カナン君…そうなの？」

信じちゃうのか…

「小学校の時にヴィヴィオを知らねえっての！」

「あ、そうだね」

「じゃあ、Ｎｏ．１は、出会ってから覗いたってことね。
最低～♪」

「あ、あの…私、怒らないから…」

「違うし！　しかも覗かれたんなら怒れよ！」

「えと…じゃあ…めっ！　だよ？」

いや、可愛いけども…すっげぇ可愛いけども！！

「覗いてねぇ！！」

「わかってるわよ。何言ってんの？」

そりゃあもう、冷徹にツッコミを殺してくれましたよ…

「……」

「あはは…冗談だったんだ…」

「はぁ…ったく、毎度のことながら…」

「皆、こっちを向いて～」

雅樹さんの声に、全員がカメラの方に顔を向ける。

「はい、チーズ」

このメンバーは賑やかだな。

そう思った時、シャッターが押され、映った俺の顔は、驚くほど柔らかく笑っていた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「さて、写真も取り終えたことですし、行きましょうか」

「はいですの♪」

「行く？　どこにだよ？」

「クレアのための最後の仕上げ…＋新アシェルの練習ってとこね」
待て…食後の運動に全力で模擬戦をやれと？
「今日の夕食のメニューがイマイチだったのはそのせいですよ。思いの外、アシェルさんの強化に手間取りまして」
いや、料理はうまかったけども…
「で、別に私だけでも良かったんだけど、クレアの訓練もかねて、チーム戦をやろうってことになったのよ」
「折角のパーティーなのに、模擬戦なんかしなくてもいいだろ…」
「甘いわね…これが何の祝いのパーティーだと思ってるのよ。ＡＡＡ昇格祝いよ？　実力試験のパーティーなんだから締めは、模擬戦に決まってるじゃない♪
はぁ、ドレスって肩凝るわね…」
「……」
確実にドレスの肩凝りをほぐすためだな…
「ヴィヴィオはどうなんだよ？」
「私は、祐希ちゃんに任せるよ」
「流石ね♪」

「そ、そんなあっさりと…」

「だってね？　最終的には祐希ちゃんには勝てないし、それに…」

「それに？」

「カナン君に私の力も見て欲しいって気持ちもあるんだ」

真っ直ぐな視線が俺を射抜く…

止まることを知らない向上心…それは、俺や、祐希奈よりさらに上…

油断すれば、置いていかれかねない成長速度。

どこまで俺に追い付いたのだろうか…

ひょっとしたら追い抜かれているかも知れない…

そう思うとゾクゾクする…

「じゃ、やるか！！」

「うん！！」

「ヴィヴィオの言うことは素直に聞くんだから…」

「言い方の違いだ。

お前は命令、ヴィヴィオはお願い。

この違いは大きいぞ？」

「ふ～ん…カナン…私と模擬戦して欲しいな？」

何故だかゾワっと体が震えた…

「い、いい…命令で…」

「提案しといてあからさまにひいてんじゃないわよ！！」

バキャッ！！

「ぐふぅ…」

ザザザー…ガシッ…ズルズル…

「ほら、アンタ達も行くわよ！」

「あ、うん」

「やっぱりこのメンバー祐希奈が中心ですの」

「そうですね。
彼を見ていると身に染みてわかります」

ちくしょう…俺は何か悪いことしたのか？俺は、祐希奈に引きずられながら林へと向かった…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「チームはカナンとクレア、私とヴィヴィオでいいわよね」

「お～い…俺はチーム戦苦手だぞ？
クレアにヴィヴィオをつけた方が良いんじゃないのか？」

「だから、アンタの訓練にもなるじゃない」

「しゃあないか…クレア、頑張ろうな」

「頑張るですの！」

「ヴィヴィオと組むのも久しぶりね」

「そうだね～頑張ろうね」

少しの間が空き、各自のデバイスを起動する。

「「「セットアップ！！」」」

光が溢れ、バリアジャケットを装着した三人と機竜が現れる…

「へえ…ヴィヴィオ、ジャケット黒くなったんだ…」

「うん。これからは、高町ヴィヴィオとして有名になって欲しいって…」

祐希奈はブレードヴィヴィオは、２ｎｄモードを起動する…

「ね！」

響く金属音…

ヴィヴィオの目の前には銀の剣を持つカナンがいた…

「流石だな…」

「チーム戦って言ってんでしょうが！」

「大丈夫だ…クレアならな…」

「あっそ！」

ゴウッと燃えるブレード、叩きつける瞬間…カナンが下がり、しゃがむ、その上を通り抜ける四つの光弾！

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ！』

ヴィヴィオが祐希奈の手を引き離脱。
しかし、再びカナンが目の前に現れる！

「祐希ちゃん！」

「オッケー！」

予測済み。
祐希奈を振り回し、炎の回転斬りを放つ。
弾け飛ぶカナン、その方向には機竜…

「クレア！」

「突撃ですの！」

翼を広げ、頭にカナンが着地、カナンは刺突の構えを取りながら、機竜は音速を破りながら突っ込む！

「アシェル！」

『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！』

空薬莢が弾きだされ、祐希奈の右手に巨大な炎の腕が出現…

「「はぁあああ！」」

「だぁあああ！」

重い音が響き、祐希奈の片腕がカナンの刺突を受け止める…

「ウインドスラッシャー！！」

その隙にヴィヴィオが突撃、機竜の翼を斬り飛ばす！墜落する機竜…

「『ユニゾン・イン！』」

カナンがレナスとユニゾン…大地の力を腕に集める。剣を手放し、墜落する機竜の頭を捕まえる…

「クレア！　行くぞ！」

「クラッシュテール！」

「「！！」」

カナンをが機竜を振り下ろす！
強化された尾の一撃は、怪力も合わさり、プロテクションを展開した二人ごと地面に叩き落とす！

「エクスカリバー！！」

「シャイニングブラスター！！」

未だ舞い上がる土煙に向かって、銀と白の砲撃を叩き込む！
しかし、着弾したはずが爆発しない…

「まずい！　クレア避けろ！」

「くっ！」

カナンの指示に従い、左右に別れる。
瞬間、禍々しい黒い矢が通りすぎた…

『ｔｗｉｎ　Ｄｒｉｖｅ！』
「フルアクセル！」

「ちっ！」

カナンの目の前に神速の拳を打ち出しているヴィヴィオの姿…勘で受ける。

「しまっ…」

「インパクト！！」

加速された膝蹴りは、カナンの剣速をも超え、鳩尾へと打ち込まれた。
同時に風弾が叩き込まれ、カナンの身体が宙を舞う…

「ピアシングカノン！」

術後硬直のヴィヴィオに接近し、光剣を放つ…

しかし、狙っていた人間、ヴィヴィオは機竜の下にいた…

「く…」

尾がしなるが既にヴィヴィオは風の集束を終え、カートリッジまで排出していた…

「リボルバー！　ストーム！！」

「きゃあああ！！」

巨大な竜巻に吹き上げられ、カナンのすぐそばまで機竜の身体が打ち上がる。

「剣閃烈火…」

ヴィヴィオが二人の相手をしているうちに、最速で飛び上がる祐希奈がカナン達の上で、巨大な蒼炎剣を腰だめに構えていた…

「蒼龍！　煌塵閃！」

一切の容赦無しに巨剣は振り抜かれ、カナン達を叩き落とす！

さらに、振り抜かれた剣からは蒼炎の真空刃が放たれ、止めとばかりに横一文字に青い炎の壁を作り出した…

「うわ…何この威力…全然違うじゃない…」

SSランク相当の威力に祐希奈自身が驚いた。

「そうだな…」

背後から響くカナンの声…振り向きざまにブレードを叩き込んだ所にカナンの剣があった…

「よく避けたわね…」

「あんなのもらったらヤバいからな…」

「遠慮しなくていいわよ！」

炎と共にカナンを弾き飛ばした。
しかし、攻勢に出ようとした祐希奈の背後にカナンが出現…

「絶！／爆砕！」

引き抜かれる剣と同じくして、祐希奈の脚がしなる…

「空！／烈脚！」

紅蓮の爆発を起こしながら、剣と蹴りが衝突し、互いの距離が離れる…
磁力が働いているかのように吸い寄せられる…

「はぁあああ！」

疾る銀閃、数十にも及ぶ斬撃を、持ち前の胴体視力で全て捉え、弾き、あるいは片腕で展開したプロテクションで防ぐ…

「私もいるんだよ！」

背後にヴィヴィオが現れる…

「わかってる…」

神速で放たれる拳を一メートルのみの空間を形成、横に動くことで回避、祐希奈とヴィヴィオが追撃をかける。

「なぁ？」

「ウィング！　セイバー！！」

その一メートルの場所に、魔力刃を展開した機竜が突撃する！

クレアは祐希奈の斬撃を完全に避けられはしなかったものの直撃は受けずに耐えきっていた…

「く…／ちっ！」

辛うじて避けるが、風圧が二人に襲いかかり、体勢を崩す…

「七式抜刀剣術…」

カナンが放つは本気の一撃…

今のヴィヴィオと祐希奈に手加減の余裕など無い。

故に、対象は一名のみの七式…

最初から一石二鳥など狙っていない。

「双龍！　獄炎陣！！」

レナスの得意属性の炎…

その威力、ＳＳ…魔力変換を持つ祐希奈の威力と並び立つ。

「炎で…負けてたまるかあああ！！」

『Ｆｉｒｅ　ａｒｍ』

空間を形成する直前のカナンに突っ込み、巨炎に包まれた掌をつきだす！
ぶつかる二筋の獄炎と蒼炎…

「終わりだああ！！」

「ぐ…あ！」

獄炎は蒼炎を蝕み、祐希奈の身体へとクロスに叩き込まれ巨大な爆発が起きる！
煙を上げながら墜落する祐希奈の身体…
しかし、祐希奈の瞳が見開かれる！

「よくも！」

「なっ！」

祐希奈の右腕から、炎の腕が再度伸び上がり、カナンを掴む…

「やったわねえええ！！！」

「がっ…は！」

二十メートル上空から一気にカナンを振り下ろし地面に叩きつける！
あまりの威力にカナンの身体が跳ね上がる…
さらに急速落下！

「倍返しにしてあげるわよ！！」

『Ｂｌａｄｅ　Ｅｘｐｒｏｓｉｏｎ』

「うお！」

逆に跳ね上がったのを利用し、復帰、無理に身体を捻り、ギリギリで避ける…
祐希奈はそのまま地面にブレードを突き刺した。

「カートリッジロード！！」
『Ｇｅｎｏｃｉｄｅ　Ｂｒｅａｋ！』
「ぐぅ！」

ドーム状に爆炎が広がり、カナンを巻き込み吹き飛ばす！
受け身を取り、カナンが立ち上がるが、ダメージがひどいのか膝をつく…

「どうよ…」

「面白い…」

ニタリと笑うカナンの姿が消失、次の瞬間には、弾ける火花…
祐希奈はその場に止まり、斬撃の雨を耐え凌ぐ…
カナンが納刀…
祐希奈も同時に魔力を集束…

「金剛閃牙！」

「火龍一閃！」

炸裂する大地の力と紅蓮の炎！
お互いに衝撃で距離が開くが、空間を形成される前に、祐希奈が突っ込む！

右手には、蒼炎！
カナンはその場で魔力を集束、属性は水！

「業炎爆裂衝破ぁ！」

「水龍降誕！」

蒼炎と水龍が接触した瞬間、凄まじい煙と共に爆発！
辺りの木々を吹き飛ばす！

「っと…」

「終わりだな…」

祐希奈の体勢が崩れたなに対し、カナンは不動のままだった。祐希奈は、新アシェルの性能を御しきれなかった。

「誰が…」

「祐希ちゃん！　避けてーー！！」

「嘘…」

上空でクレアの砲撃を止めてくれていたヴィヴィオが支えきれず、大量の光弾が降り注ぐ！
百以上の魔力の塊をオートプロテクションで防ぎきれるはずもなく、祐希奈が倒れた…

「ナイスだクレア！」

「ヴィヴィオ様に勝てた…ですの…」

「クレアだから、ヴィヴィオに勝てたんだよ…」

クレアの一番の長所は、誰にも負けない超速連射。
最大威力こそヴィヴィオの砲撃に劣るものの、Ａランク相当の光弾が途切れもなく放たれれば、いかにヴィヴィオとて防げはしない…

「あはは…ピンチ…かな？」

「決めるぞ！」

「はいですの！」

ヴィヴィオを挟み込むように上下から突進！
しかし、カナンはあり得ない光景を空間把握によって見た…

「挟み撃ち…なんて…させない…」

フラフラになりながらも、祐希奈が立ち上がり、弓を構える。
右手に握るのは、クリムゾンアロー…

「撃ち貫け！！炎の天使！　ヴォルカニック…アロー！！」

放たれた業炎を纏う巨大な火矢！
空気をぶち抜き、音速を越える！

「クレアー！　避けろー！！」

「きゃあああああ！！」

事前に見ていたカナンは、ギリギリで回避…
だが、小回りの効かないシルフィスは避けられるはずもなく、直撃を受け、機竜のパーツをバラバラにしながらクレア本人が地面に落ちていった…
ハルが動き、クレアをキャッチ。
それと同時に祐希奈も意識を失った…

「ま、まだ、ろくに制御も出来ないアシェルでヴォルカニックアローを射つって…とことん無茶苦茶な奴だな…」

「余所見してると危ないよ！」

「っと！」

屈むと同時に頭の上を風弾が通り過ぎる。
衝撃は、鎧の出力をあげて耐え抜いた。

「たぁあああ！！」

爆発的な加速で距離を詰め、回転しながら拳、蹴りを叩き込む。
拳は避け、蹴りは剣で縦に受ける。

『Ｂａｒｓｔ　Ｓｈｏｔ！』

ヴィヴィオの踵で風が炸裂、サマーソルトのように回転し、カナンの顎を蹴り抜いた！

「ちっ！」

強引に身体を回し、横薙ぎに叩きつける！

『Ｗｉｎｄ　ａｒｍ』

「くそ…」

その一撃を、ヴィヴィオの腕が受け止めていた…

しゅるりとカナンの腕にヴィヴィオね腕が絡み、引き寄せる！

「いっけーー！！」

『Ｈｉ　Ｗｉｎｄ　Ｉｎｐａｃｔ！』

「がはっ！」

拳が腹部に叩き込まれた瞬間、流星のごとき速さでカナンが地に落ちる…

舞い上がる土煙…それが突如吹き飛ぶ…

口が斬れたのか、カナンが血を地面に吐き出し、ヴィヴィオを見据える…

「ごめん、俺とレナスじゃ無理だ…フォームチェンジ…頼む…」

『謝らないでください、私よりメイデンの方がサポート向きですし、主の判断は正しいですよ。

メイデン、お願いしますね』

『ああ、任せてくれ。行くぞマスター！』

「『ユニゾン！　イン！』」

金髪、金瞳、銀の鎧へとカナンの姿が変化し、剣も銀から黄金へと変わる…

「これで…ヴィヴィオにも速度は負けねえ…」
『空間の補助は任せろ！』
「頼むな！」

「フェアリー！」
『Ｔｗｉｎ　Ｄｒｉｖｅ！』
「全力全開！　オーバーアクセル！」
『Ｉｇｎｉｔｉｏｎ！』

カナンは納刀、ヴィヴィオは空薬莢を二つ弾き出し、踵に緑の羽が広がる…

「「はぁあああ！！！」」

刹那の時間に、拳が、刃が入り交じり、弾き、防ぎ、叩き込む！
ヴィヴィオの四肢の動きについていくために、振り抜く腕の前に空間を作り出し、剣速をさらにあげるカナン…
四肢の加速で避け、魔力加速で回り込み揺さぶりをかけるヴィヴィオ…
互いにスピードで並び、隙が一切生まれない…

「絶空…」

カナンが呟く…納刀もせずに、剣に風を集束していく…
ヴィヴィオの風を使ったため、メイデンの力は必要ない…

「旋龍破！！」

タイムラグゼロで衝撃波を叩きつけ、ヴィヴィオを吹き飛ばし、納刀…

集束される全ての属性…

「零式抜刀剣術…」

「クロスドライブ！」

『Ｃｌｏｓｓ　Ｄｒｉｖｅ！』

１ｓｔ，２ｎｄのフルドライブ同時使用…

虹色の翼を広げる杖を手に、前面に風を集束…

「龍神演舞！」

「アクセル！」

『Ｂａｒｓｔ　ｍｏｖｅ！』

抜刀されると同時に放たれる六属性の龍を、炸裂加速で引き離しながらカートリッジを全弾排出…

「バレル展開！」

『Ｂａｒｒｅｌ　Ｓｈｏｔ！』

衝撃波が放たれ、六龍の進みを止める…

「殲滅砲撃！」

『Ｓｔａｒ　Ｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ　Ａｎｎｉｈｌａｔｉｏｎ！』

瞬時に展開される百発の光槍・砲撃スフィア…そして、五つに分割された魔力球…

「全力全開！　スターライト！！　ブレイカーーー！！！」

龍達に降り注ぐ、光槍・直射砲撃、四つの集束砲撃に、一体、二体と消えていき、遂に龍達は消滅…

しかし、その先にカナンの姿はない…

満天の星が広がる夜空…そこにカナンの姿は在った。

沈んだはずの太陽の輝きを放ちながら…

「光龍！　天墜顎！！」

遥か上空から、ＳＳＳランクの光龍がヴィヴィオに突き進む！

「いっけーー！！」

ヴィヴィオは、残しておいた一発の方向を光龍へ向け、放つ！

しかし、ＳＳＳとＳランクでは天と地の差…

すぐさま押されはじめ、光龍がヴィヴィオへと進む…

「リミットフル…」

『九割ですね』

「え？」

マスターの言葉を言い換え、九割の鎧の力を解除。

光龍の進行が止まるが、返らない…

「『おおぉおお！！』」

カナンとメイデン、二人分の魔力が合わさり、さらに威力をあげる！

「あ…」

「そこまでです」

光龍がヴィヴィオに直撃する瞬間、衝撃波と共に光龍が消滅した…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ハ、ハルさん…」

私の目の前には、ハルさんが立っていた。
ハルさんがカナン君の龍を消滅させたらしい…
やっぱり凄いや…

「ヴィヴィオ様、大丈夫ですか？」

「は、はい…」

尻餅をついている私に手を貸し、起こしてくれた後、カナン君を見た。

「やれやれ…君はとことんバカですね。
もう勝負はついていましたよ？」

「…悪い」

「私も熱くなりすぎた…」
「新学期早々にヴィヴィオ様を休ませることになりそうでしたよ…」

「ヴィヴィオ…ごめん…俺、面白いとついやっちまうんだよ…」

少し落ち込みながら、カナン君が謝ってくれた。

「面白かったの？」

「そりゃあもう！　最高だったな！
接近戦では、メイデンに頼らないと話にならなかったし！　全力でやってるのに簡単に避けたり防いだりしてくれるし！
もう一回やりたいくらいだな」

「良かった♪」

カナン君が喜んでくれてるんなら、ちょっと悔しいけど、いいや。

「ふ…あ…眠い…」
『リミットを九割までとはいえ外しましたからね。気だるいのはそのせいでしょう』
「あ…フェアリーもしかして私のために…」
『苦しむマスターを見たくありませんから』
「ありがとう…」
『いえ』

優しいデバイスに巡り会えて幸せだなぁ…

「では、ヴィヴィオ様もお疲れのようですし、カナン君、出番ですよ？」

「へ？」

「御嬢様は僕が運びますが、お二人はカナン君が運んでください」

「わかったよ…ヴィヴィオ、抱っこかおんぶ、どっちがいい？」

「え？　い、いいよ…
私…歩け…」

立ち上がった途端に足がふらつき、カナン君に支えてもらわないと立てなかった…

「じゃあ、おん…いや、抱っこな」

「わっ！」

いとも簡単に私の身体が持ち上がり、カナン君は、私の膝と首を手で支えている。

「お姫様抱っことは、カナン君もやりますね♪」

「うるせえ…おんぶは色々と問題があるんだよ」

「色々って何かな？」

「それを俺に聞かないでくれ…」

赤くなってカナン君が視線を反らした…
何でだろう…

「じゃあ、ハルさん？」

「残念ですが、僕も同じ返答しかお返し出来ませんね」

「気になるよ？」

「もう少し大人になってその天然が抜けたらすぐにわかる…」

「う、うん…」

天然っていうのがどういう意味かわからないんだけどなぁ…

その後、カナン君は祐希ちゃんを背負い、部屋まで送ってくれた。

「じゃ、また明日、学校でな？」

「うん」

「ヴィヴィオ、おやすみ…」

「おやすみなさい…カナン君…」

カチリとライトを消し、カナン君が去っていった。

明日から学校…また頑張ろうと思い目を閉じるとすぐに眠気が訪れ、

ゆっくりと意識が離れていった…

私達の夏休みが終了した瞬間だった…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

祐希奈

「召喚♪」

ヴィヴィオ

「後書きコーナー♪」

ドンドンパフパフ♪

カナン

「ヴィヴィオまでやけにテンションが高いな…」
メイデン
「今回も御菓子がたくさんだからな」
レナス
「最近ＬＶに届く御菓子、多いですよね？」
カナン
「というよりは、作品を通しての交流が深くなってきた感じだな」
ヴィヴィオ
「祐希ちゃん♪　早く早く♪」
祐希奈
「ルミオを出すまで待ちなさいよ？
出でよ！　ルーミーオー！」

パラパラッパラ～♪
ポン！

ルミオ
「どんなけ適当な召喚音だ！」
カナン
「ＬＶ空間で一々気にするな。飛ぶぞ…」
ルミオ
「ゲスト…」
メイデン
「毎回説明しているが、この空間内では、ゲストなどの概念は存在しない。
故に、ルミオさんでも…飛ぶ…」
ルミオ
「……」
ヴィヴィオ
「じゃあ、ルミオも来たし…」

祐希奈
「はいはい。高級チョコレートにシュークリームにビスケット、クラッカーにクリームサンド、翔さんからのお土産のクッキーも追加して…」
ヴィヴィオ
「わぁ♪」
ルミオ
「凄ぇな…」
カナン
「見てるだけで胸焼けしそうだ…」
メイデン
「マスターはビスケットとクラッカーしか食べれないからな」
レナス
「もったい無いですね」
カナン
「やかましい！」
ルミオ
「それ、一応俺の口癖なんだが…」
祐希奈
「結構他の作品も使うわよね～…ん。さすが高級チョコレート…ちょっと持って帰ろうかしら…」
ルミオ
「何気にセコいこと考えるのな…」
カナン
「あ～あ…」
祐希奈
「さぁ！　記念すべき第一回目のぉ！」
ルミオ
「しまった！　ＣＳ展開！」
祐希奈

「ＺＦ展開…二人まとめてぇ…逝って来い！」

ガシャーン！（ＣＳ粉砕）バッキャアアアアアア

ルミオ
「がああああ！」

カナン
「ぐふ…何故…俺…ま…で…」

チーン…

ヴィヴィオ
「私、シュークリームが好き～♪」

メイデン
「私はクリームサンドだな」

レナス
「クッキーが一番好きですね」

パクパク…

祐希奈
「御菓子の力って偉大ね…」

カ・ル
「はっ！」

祐希奈
「おかえり。ちょっと時間かかったわね」

カナン
「ルミオ！　危ないだろうが！」

ルミオ
「済まん…」

ヴィヴィオ
「どうしたの～？」
カナン
「いや、ルミオがな？　走って向こう側に逝こうとしたから…」
ルミオ
「危なかった…」
メイデン
「マスター、コツを教えてやったらどうだ？」
カナン
「ん～…まず、強い意識を持つこと、綺麗な方に行かないことだな。俺達の世界は、暗黒の世界だ。
河を見たら、綺麗な方とは逆に走れ！
ちなみに、早く戻らないと道が無くなるし、攻撃レベルによって時間も違うから、急げよ？」
ルミオ
「お前…何気に凄いことしてたのな…」
カナン
「慣れだ！　さぁ、君も、レッツトライ♪」
ルミオ
「するか！　そしてさせるな！」
レナス
「すっかり感染してますね」
ルミオ
「何が？」
一同
「ＫＤＧ因子…」
ルミオ
「何だそれ！？」
祐希奈
「この空間内で男性キャラが来た場合、八割の確率で、ツッコミも

しくは弄られもしくは両方になるのよ。
ルミオは両方ね♪」
ヴ・メ・レ
「おめでとう♪／ございます♪」
ルミオ
「嬉しくねえ！　これっぽっちも嬉しくねえよ！
それくらいわかれ！」
祐希奈
「この天然ズに求めるのが間違いね」
天然ズ
「？」
ルミオ
「だー！！」
カナン
「まぁ、俺達と一緒に限界を越えようや」
ルミオ
「達って…」
カナン
「俺とシオン」
ヴィヴィオ
「銀杏パパと涼さんも準レギュラーだよ？」
ルミオ
「待ってくれ…俺は不死身じゃない…」
祐希奈
「人は…限界を越えてこそ成長出来るのよ♪」
ルミオ
「本編で言っただろ！　限界を越えたらおかしくなるんだよ！」
祐希奈
「もうおかしいからＴｈａｔ'ｓ　ａｌｌ　ｒｉｇｈｔよ♪」
ルミオ

「ごふっ！」
カナン
「ドンマイ…ＬＦＣを立てるとか言った時点で、お前の運命は終わってたんだ…」
ルミオ
「ＬＶって…怖いな…」
カナン
「俺はどこに行っても怖いさ…」
ルミオ
「俺…お前らが輝いてみえる…」
カナン
「ははは…そりゃあ、嬉しいなぁ…」
ヴ・メ・レ
「あー！！」
祐希奈
「ど、どうしたのよ？」
ヴィヴィオ
「御菓子がないよ！！」
メイデン
「無くなっている！！」
レナス
「まだ、食べてない御菓子もありました！！」

タララ！　タララ！　タ～ラ～♪

祐希奈
「じっちゃんは！　いつも一人！！」

ビシッ！

カ・ル
「火曜サスペ○スとコ○ンと金田○を合わせるな！！」
祐希奈
「ここは密室…入り口は楽屋からの一つだけ…」
カ・ル
「無視か！？」
祐希奈
「うるさい…」
カ・ル
「……」
祐希奈
「わかったわ！　犯人は！」
一同
「犯人は？」
祐希奈
「物凄くペラッペラな奴が扉の隙間から入って食べたのよ！」
天然ズ
「成る程！」
祐希奈
「物凄くペラッペラな奴を捜索よ！」
天然ズ
「了解！」
カ・ル
「アホかーーー！！！」
カナン
「そんな奴いねえよ！」
ルミオ
「ペラッペラって…ペラッペラって何だよ！」
祐希奈
「は？　ペラッペラって言ったらペラッペラなのよ。ルミオ…もし

かしてバカ？」
ルミオ
「バカはお前だあああああ！！」
祐希奈
「ほっほ～う…ルミオの分際で私の名推理にケチをつけると…」

ゴウッ！！

ルミオ
「え…何この理不尽な展開…」
カナン
「まぁ、一言で片付けると、ＬＶだからだ」
ルミオ
「あ～成る程…」
カナン
「わかってきたようで何よりだ…」
祐希奈
「さ～あ…良い感じにルミオが悟った所で、逝きましょうか…
光栄に思いなさい？
最強の技で逝かせてあげるわ…
撃ち貫け…炎の天使…」

ゴウアアアア！！

ルミオ
「あ～カナン？」
カナン
「何だ？」
ルミオ
「アレの威力はどれくらいだ？」

カナン
「アシェル強化後ならＳＳＳ、神化ならＥＸランク間違いなし…」
ルミオ
「…マジでゴールしていいか？」
カナン
「じゃあ、俺がカラスになって迎えに行ってやるよ…」
ルミオ
「頼むな…」
カナン
「任せろ…」
祐希奈
「連れていってあげましょうか？　ＬＶの…願いの叶う場所へ…」
ル・カ
「どんとこいやぁ！！」
祐希奈
「ヴォルカニック！！　アロー！！！」

チュドーーーン！！

ルミオ
「ゴール…」
カナン
「さて…行ってくるか…ルミオ～…」ヴィヴィオ
「あはは…結局御菓子を食べたの誰なのかな？」
メイデン
「それなんだが…三分経ったら消えるそうだ」
レナス
「と、言うことは…」
祐希奈
「ったく…無駄な力使わせるんだから…」

ルミオ
「ふっ！」
カナン
「か～つ！」
ヴィヴィオ
「は、早いね…」
ルミオ
「カナンが優秀だからな」
カナン
「伊達に幽体離脱を経験してたわけじゃないさ」
ルミオ
「本編でも逝ってるのはお前くらいだからな…」
カナン
「まぁ…な…」
ルミオ
「でも、強いんだよな…」
カナン
「お前もだろ？」
ルミオ
「感覚が完全に戻ればな」
カナン
「手伝ってやろうか？」
ルミオ
「冗談言うな」
カナン
「俺は、お前ともやってみたいけど？」
ルミオ
「そうだな…一応…考えておく」
祐希奈
「いつまで話してる気よ」

メイデン
「随分親しくなったものだな」カナン
「まぁ、男って少ないし…」
ルミオ
「俺の周りも男がいない…」
カ・ル
「お疲れ…」

ポンポン…

ヴィヴィオ
「あはは…」
祐希奈
「とりあえず、ルミオも帰って来たし、最後に企画発表～♪
じゃ、アイドル達、よろしく♪」
メイデン
「ち、違うぞ？」
レナス
「アイドルなどでは…」
ルミオ
「綺麗な容姿なのは事実だけどな」
メ・レ
「っ！！」

ボン！！

メ・レ
「あう…あう～…」
カナン

「あ～あ…いきなり真顔でいうから…」
ルミオ
「わ、悪い…」
ヴィヴィオ
「じゃあ、替わりにルミオが言えばいいんじゃないかな？」
ルミオ
「おかしいだろ！？」
祐希奈
「気にしない気にしない♪
この空間で常識なんてものを期待しないことね♪」
ルミオ
「いや、常識キャラ…いないのか？」
一同
「いない／かな／わね／な」
ルミオ
「即答かよ！！　考えろよ！！」
カナン
「じゃあ、思い付くか？」
ルミオ
「……クレアとか…」
祐希奈
「胸」
ルミオ
「じゃあ…ハル…」
カナン
「腹黒い」
ルミオ
「……ヴィヴィオ…」
祐・カ
「天然爆弾」

ヴィヴィオ
「？　どういうこと？」
ルミオ
「気にするな…」
祐希奈
「ね？　いないでしょ？」
ルミオ
「悲しいくらいな…」
祐希奈
「ってことで、はい、台本♪」
ルミオ
「ＬＶ緊急告知～。
今回の投稿で５０万に届きそうだから、時期は中途半端だが、人気投票を行うらしい。
投票方法は、順位無しの三人まで、もし、途中で変更したくなった場合は、改めて頼む。
期間は、八月末まで。
メッセージ、感想での応募待ってるな…って…やっぱおかしいだろ！！」
祐希奈
「あの二人をダメにしたルミオが悪い」
ルミオ
「そうなのか…」
祐希奈
「もち♪」
ルミオ
「なんか段々そんな気がしてきた…」
カナン
「洗脳されないでくれ！！
数少ない味方が！！」

祐希奈
「次の召喚で落としてやるわ…」
カナン
「やめい！！」
ルミオ
「っと…そろそろ戻らないとな」
カナン
「じゃ、ヴィヴィオ」
ヴィヴィオ
「うん♪　では、皆さんまた次回」
一同
「お楽しみに～」

白河シンジさん、本日の召喚ありがとうございました♪
そして、キャラ変質すいません。しかし、楽しく書けました♪
やたらカナンと親しそうに書いてしまいましたが、ルミオのキャラではないような…
何かあれば、すぐにいってくださいでは。

第十七話　学業再開（前書き）

とりあえず…前書きがかなり危ない内容になっています。

そしてすいませんでした！

第十七話　学業再開

祐希奈
「前書き質問コーナー♪」
ルミオ
「……」
カナン
「……」
ヴィヴィオ
「あはは…」
祐希奈
「はい、元気な唱和ありがとね♪」
ル・カ
「どこがだよ！！」
祐希奈
「こうでもしないと進まないでしょ？」
ルミオ
「まず…何でまだ俺がいるんだ！！」
祐希奈
「この作者お得意の危ない綱渡りに決まってるじゃない」
カナン
「さも当然のように言うな！！」
ルミオ
「まぁ…うちも言えないかも知れないが…」
祐希奈
「でしょ？　許してくれるわよ♪」
カナン
「ほんっとに申し訳ない！！」
ヴィヴィオ

「ごめんなさい…」
メイデン
「済まない…」
レナス
「申し訳ありません…」
祐希奈
「ごめんね♪」
ルミオ
「お前が一番誠意を持って謝れ！！」
祐希奈
「ルミオが謝れば謝るわよ」
ルミオ
「シンジ…申し訳ない…」
祐希奈
「さて、質問コーナー♪」
ルミオ
「謝れよ！！　ていうか何で俺が謝ってんだよ！！」
祐希奈
「だって、作者さんが怒ってきたらこの作品終わりだし、謝る意味無いでしょ？」
ルミオ
「少しくらい抵抗しろよ！！」
祐希奈
「私は、潔い性格だからね♪」
カ・ル
「それは嘘だ…」
祐希奈
「速答するなあああああ！！！」

バッキャアアア！！

カ・ル
「がふっ！／ごほっ！」
ヴィヴィオ
「わああ！！　本当にごめんなさい！！」
メイデン
「これが祐希奈なんだ！！」
レナス
「勝手に召喚した上に蹴ってしまわれるのが祐希奈さんなんです！お許しください！」
祐希奈
「心配ないわよ♪　きっと祐希奈…グッジョブって許してくれるわよ♪」
ヴィヴィオ
「それは無いと思うよ？」
ルミオ
「この作品に常識は通じないってことが良くわかった…」
カナン
「だろ？」
祐希奈
「悟りが早くてなによりよ♪
はい、これ読んで？」
ルミオ
「もういいや…どうにでもなれ…
『今更だけど、メイデンとレナスの容姿って初代リインの色違いみたいなものですか？』
だってよ…」
メイデン
「そうだな…まず、あれほどに胸囲は無い」
レナス

「後は、髪の長さは私達はセミロングとなっています」
カナン
「後はちょっとリインの目を開かせて…完成だな。
碧陽学園〇徒会議事録、通称生徒会シリーズを持ってる人は椎〇真
冬が近いと思う。
わからない人は頑張って目の開いた初代リインを画像で探してくれ」
ルミオ
「想像って何気に難しくないか？」
祐希奈
「そうね～。
ちなみに、この作者の参考は、原作、F〇、クラ〇ド、生徒会シリ
ーズ、だからその中からこれだ！
的なものを入れるといいかも」
ヴィヴィオ
「また危ない橋渡りしちゃってるよ…」
ルミオ
「ってことで次の質問に逃げるぞ。
『最近シオンが出てこないが、もしかしてカナン、喧嘩したのか？』
よし！　言ってやれ！」
カナン
「おっしゃあ！　わざわざ…」
祐希奈
「ヤッフィイイ！！！」

バッキャアアア！！！

カナン
「ごはああ！！」
ルミオ
「カナーン！！」

ヴィヴィオ
「だ、大丈夫？」
メ・レ
「……」
祐希奈
「大丈夫よ、ヘタレオンは良い奴だから喧嘩なんてしてないわよ。ちょっと最近一杯で呼べないだけで、また頼みにいく予定もあるしね」
カナン
「いや…こんな質問…」
祐希奈
「からかいのメッセージでも、真剣に答える…それがＬＶクオリティ♪」
ルミオ
「なんていうか…やっぱりＬＶって無茶苦茶だな…」
カナン
「というか…祐希奈が…」
祐希奈
「てい♪」

ブチ…
頭を踏みました…

カナン
「ぐえ…」
ルミオ
「カナン…キレるなよ？キレたら敗けだぞ？」
カナン
「ふふ…俺を誰だと思ってんだよ…」

祐希奈
「バカ」
ハル
「バカ」
アリサ
「バカ」
フェイト
「バカ」
ティアナ
「バカ」
アレン
「バカ」
カナン
「よ～し！！　最後の天然野郎だけぶっ飛ばす！！」
ルミオ
「男には強いのな…」
カナン
「だぁああ！！」
アレン
「力場転換…」
カナン
「でえええ！？」
アレン
「倍加！！」

ドゴッ！！

カナン
「あああぁぁぁぁ……」

キラーン…

ルミオ
「魔術ってすげえな…」

ヴィヴィオ
「な、何か凄いことになっちゃったけど、これで終わるね」

ルミオ
「魔法少女リリカルヴィヴィオ」

一同
「始まります」

祐希奈
「普通に慣れてるわね…」

ルミオ
「自分でもビックリだ…」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「えへへ♪」

朝食を食べた私達は、制服に着替えて、登校準備中。
鏡の前で回っている私を見て、祐希ちゃんが怪訝な顔をして近づいてきた。

「何やってんのよ？」

「また制服を着られるのが嬉しくて♪」

「ほっほ～…そんなにミニスカートが着たかったわけね？」

「ち、違うよ！　制服を着られるのが嬉しいの！」

「そういうことにしといてあげるわ」

「もう！　スカートは関係ないの！」

ふふ、と祐希ちゃんが笑いながら部屋から出ていった…

絶対信じてないよ…

「もう…違うのに…」

「はいはい。わかったから早く鞄取ってきなさい。置いてくわよ？」

「わっ！　ちょっと待ってよ！」

急いで居間の鞄を取り、外に出た。

今日も朝から太陽さんが絶好調…

「暑いなぁ…」

登校時間にはまだまだ余裕がある、ゆっくりと行くことにした。

「９月って言っても夏みたいなもんだしね。

ちなみに今日の気温は３６度よ♪」

「う～祐希ちゃんは何でそんなに平気なの？」

「さぁ？　ミニスカートだから、みたいな♪」

くるりと祐希ちゃんが回りウィンクを決めた…

「はぁ…」

「まぁまぁ、そんなに落ち込まないの。個人差があるんだし」

「それでも祐希ちゃんは強すぎるよ…」

「しょうがないわね…そんなに暑いんなら…」

「何？」

ススス～っと祐希ちゃんが私の背後に移動した。後ろを向いた瞬間…

「ひゃうう！！」

「あはは！　気持ちいいでしょ？」

「な、何入れたの！？」

「保冷剤♪」

「つ、冷た！！」

制服の中に氷の塊が滑り込んできた。

「ん？　中に入っちゃったの？」

「ふぇえん！　冷たいよ～！」

「はい、ヴィヴィオ♪　ホップステップジャンプ♪」

「う、うん！」

祐希ちゃんに言われた通りに跳ぶと、カサリと音を立てて、保冷剤が地面に落ちた。

「冷たかった…」

「はい、お疲れ様♪」

「もう…酷いよ…」

「体は冷えたでしょ？」

言われてみると、確かに冷えてる…

「うん、ありがとう」

「あらら…お礼言っちゃうわけね」

「えへへ…お返し！」

私は、保冷剤を祐希ちゃんの服に入れた。

「ひあああ！！　ゆ、油断させといて反撃とはやるわね…」

服をパタパタとして保冷剤を落とす。

「気持ち良かった？」

「まぁね…ん？　あれはカナンね」

「あ、ホントだ」

五十メートルくらい先にカナン君が鞄を担いで歩いていた。
メイデン達は待機中みたい…

「ピッチャー振りかぶってぇえええ！！」

祐希ちゃんが何か野球のピッチャーさんの構えをしていた。
手には保冷剤…まさか…

「祐希ちゃ…」

「投げたぁああ！！」

「あ…」

保冷剤は霞むほどの勢いで投げられ、一直線にカナン君へと向かい…

「ん？　がふっ！」

ほとんど無意識で発動していた空間把握で保冷剤を捉え、振り向いたところで顔面に直撃した…
ドサリとカナン君が倒れてしまった…

「ど真ん中ストラーイク♪」

「カナンくーん！！」

「いきなり何すんだド阿呆！！」

すぐに起き上がったから大丈夫みたいだけど、頬が赤い…

「あ、あの…おはよう…」

「ああ…おはよ。
保冷剤か…どうりで固いわけだな…
ちょうどいいや」

「「あ…」」

カナン君が自分の頬に保冷剤を当てた…
私達の服の中に入っていた保冷剤を…

「ん？　どうした？」

「べ、別になんともないよ」

「顔赤いぞ？」

「な、何でもないよ…」

「ったく…このバカ」

「いやいや！　何でいきなりバカ扱い！？」

「ほっほ～う…カナン君はまた朝から何をしてるのかな～？」

「おはようございます」

私達の後ろからの声…美鈴ちゃんと神楽ちゃんだった。

「おはよう、美鈴ちゃん、神楽ちゃん」

「おはよ、久しぶりね」

「で、美鈴の答えだけど、別に何もしてねえし」

「何もしてないのに二人が赤くなっていると？」

「あ、ああ…」

「兄ちゃん…とりあえず、署の方で…」

「何故に！？　俺何もしてねえって！」

「犯罪者はみんなそういうんや…
ほな、いくで…」

「い、嫌だ！！」

「まぁまぁ…カツ丼でも食いながらゆっくり話きこか？」

「強制っすか！？」

「カナン君だからね♪」

「なにその俺だからなにしても許されるみたいな言い方！？」

「「許されるし」」

「一名増えたぁ！？」

美鈴ちゃんと祐希ちゃんがカナン君の首根っこを掴み、学校へと引きずっていった…

「カナン君、起きたんですね」

「え？　あ、そうだね」

美鈴ちゃんがあまりに普通に話してるから説明するの忘れてた…

「良かったですね、ヴィヴィオちゃん」

ニッコリと笑いながら神楽ちゃんが言ってくれた。

やっぱり私は、心配をかけていたらしい

「ありがとう神楽ちゃん」

「では、行きましょうか」

「うん！」

私は、カナン君が起きた経緯を、心配をかけないようにぼかしながら神楽ちゃんに説明しながら学校へ歩く。

神楽ちゃんは追及もせず、そうなんですかの一言で終わってくれた。

色々あったのは、恐らくバレているけど、聞かないでいてくれる。

ホントにいい友達を持てたことに感謝をした。

▼▼▼▼▼▼▼▼

「お、風間、起きたのか、おかえり」

「お、おう、ただいま」

「お前の席はそこで固定だから心配すんな」

「何のだよ…」

「貴様…」

「いきなり睨むな…」

という具合に、カナン君の復帰は、意外なほどすんなりと受け入れられていた。

「風間ぁ！　てめぇのライバルは俺しかいねえんだから、勝手に死ぬんじゃねえぞ！？」

「ていうかお前の名前すら知らねえよ…」

「んだとぉ！？」

「あ～うぜ～…」

「上等だぁ！　因縁の戦いのケリを…」

「邪魔…」

バキャッ！！

「ごほぉおお！！　い、一之瀬…相変わらず…ツン…だ…な…」

「センセー…この生ゴミ燃やしていい？」

「生ゴミ！？　俺ちゃん生ゴミか！？」

「生ゴミは燃やしちゃダメよ、一之瀬さん」

「先公！？　まず、生徒を生ゴミ扱いするのやめろや！！」

「じゃあ、塵にしていい？」

「そうね～とりあえず、明日にしましょうか？」

「は～い」

「くぅ…一之瀬…ツン過ぎるぜ…たまにはデレてくれよ…」

「おわっ！　なんだこりゃ！？」

「カナン君の宿題だよ？」

「いや、あのちょっと？」

「宿題！？　普通免除なんじゃ…」

「クラスの皆がカナン君なら起きるからってとっておいてくれまし

た」

「お前らなぁ！！」

《グッドラック！！！》

「何がだよ！！　イジメかよ！？　信じるのは良いけど何これ！？　新手のイジメだろ！！　信じるとか言いつつホントはイジメだろ！！」

《……》

「イジメかぁ！！　やっぱりイジメかぁ！！」

その後、カナン君は、半泣きになりながら宿題の山を片付けていた。
ちなみに、不良さんは、教室の角でのの字を書いていた。
無視されたのが相当こたえたみたい。

「カナン君、やっぱり私、手伝うよ」

「いや、いい…一応、クラスの皆が信じてくれてたがために出来たもんだしな…」

《え…？》

クラス全員がきょとんとした顔になった…

「お前らなぁ！！　人が折角実は良い奴ら的に済ませてやろうとしてるのにぶち壊しにしやがって！！
Sか！？　このクラス全員Sだろ！！」

《カナンにだけ》

見事に揃った一言…

「あはは…」

「何だそれ!?　俺限定Sになるクラスってある意味すげえな!!」

《バカだし、ヘタレだから》

「バカでヘタレだからって何言っても許されると思うな!!
謝れ!!　今すぐ全国のバカでヘタレな皆さんに謝れ!!」

何故、こんなにクラスの答えがハモるのか、それは、後ろに答えがある。
祐希ちゃんと美鈴ちゃんが、ロッカーの上でクロッキー帳に次のセリフを書いているからだった。
と言っても、ここまで付き合いの良いクラスも珍しいんだけど…

《はっ！　バカの相手はやってられねえな。
黙って宿題やっとけ》

「てめえらぁあああああああ!!!!!」

《ぎゃあああああ!!　風間がキレたぁああ!!》

遂にカナン君が怒り狂った…
ちなみに、祐希ちゃんと美鈴ちゃんは、お腹を抱えて笑っている。

「カナン君…皆は悪くないですよ？
あのお二人です」
神楽ちゃんが指を指した先をカナン君がゆっくりと振り返り、見た…
「……」
「「あは♪」」
「ぶっとばーーす！！」
「「来いや♪」」
ガシャーーン！！　ガラガラ！！　ドーン！！
壮絶なやり取りが行われている中に、たった一人で近づいていく人がいる。
「風間、一之瀬、橘…」
「「「……」」」
一時限目の数学の先生だった。
お説教の時間が最も長い先生として有名。
「ちょっと生徒指導室まで行こうな？」
「え…いや、俺はイジメに…」
「この光景をみたらそうは思えないが？」

「じゃ、じゃあ、私達は関係無い…」

「火種を撒いたのはお前らだろう？
ほら、行くぞ」

「ちなみに…お説教の時間は？」

美鈴ちゃんがおずおずと訊ねると、先生はとてもいい笑顔で笑った…

「午前中の授業は、休みだ。嬉しいだろう？」

「「「……」」」

三人の表情が固まってしまった…
アレだけのことをしたら無理無いよね…

「というわけで、自習だ。
各自でやっておけ」

《はい！！》

私と神楽ちゃん、神田君以外の生徒は元気良く返事を返していた。

▼▼▼▼▼▼▼▼

俺達は、一時限目から休み時間もぶっ通しで先生からのお説教（途中から呪文）をくらい、昼飯の時間に漸く解放して貰えた…

「ふぅ…よくあんだけ言葉が出てくるもんだな…」

「全くね…」

「……」

俺と祐希奈は、もっと凄まじい、それこそ死線と呼ばれるものをいくつか体験したためか、割りと復活が速かったが、美鈴に至っては脱け殻もいいとこだ。

「「ただいま～…」」

《おかえり！　我がヒーロー達！》

男子がそれはもう良い笑顔で迎えてくれた。

一番面倒な数学が潰れたからだ。

「あ、おかえり～」

「おかえりなさい」

「おう」

「いや～疲れたわ…」

「（コクコク）」

ふぅ…この二人ののほほ～んとした空気に触れるだけで多少は回復出来るな。

証拠に美鈴も復活し始めている。

「午後から文化祭の出し物を決めるんだって♪」

「そういや、テスト終わったらすぐだな…」

「テスト！？」

いや、まさかとは思うけど…

「忘れてた…なんてことはないよな？」

「知らなかったわ…」

あ～ダメだコイツ…

「ゆ、祐希奈、休みあけにテストがあるのは常識ですよ？」

「ヴィヴィオ…知ってたの！？」

「え、うん。予定表にも書いてあったよ？」

「ぐふっ…」

ちなみに、テストは、明後日からで、二日～四日に分け、テストの午後から模擬店などの準備をするという予定だ。

「夏休みの宿題の中だし、そんなに難しいのは無いと思うぞ？」

「宿題なんてねえ…ヴィヴィオに教えて貰った数学以外は人任せよ！！」

「いや…断言されてもな…」

《かっこえええ！！》

「どこがだよ！？
今の祐希奈に憧れ抱いた時点でお前らダメ人間だからな！？」

「だれがダメ人間だって？」

「あはは…それはもちろん俺っすよ？」

「そうよね～♪」

「そうっすよ…」

「ダメ人間は大人しく散れぇえ！！」

バッキャアアア！！

「ごはあああ！！」

ガシャーーン…
ナイス…キック…
次に起きた時には、既に全員昼飯を食べ終えていた…

「ったく…思い切り蹴りやがって…」

「ねえ！！　カナンどうしよう！！　かなりヤバイのよ！！」

人を蹴り飛ばしておいてそれは無いだろ…

「知らん」

「蹴り飛ばしてごめん！　つい何時ものノリで蹴っちゃって…謝るから、だから…お願い。ね？」

っーー！！　これだからコイツはズルい…
気の強いところが抜けた場合だけ、可愛い女の子になるんだからな…いや、普段も可愛いけども…

「わかったよ…俺の家かお前の家、どっちだ…」

「ヴィヴィオ、どっちがいい？」

「ん～…カナン君のお家がいいな？」

「じゃ、泊まりに行くからよろしく」

「待て…ヴィヴィオも泊まりに来るのか？
ヴィヴィオは勉強出来るだろ？」

「ダメ？」

だあああ！！　可愛く首を傾げるなぁああ！！　兵器だ…コイツらは兵器以外の何者でもない！

「わかった…好きにしろ…」

「わ～い♪」

はぁ…俺…やっぱコイツらには一生涯勝てない気がする…

越えられない壁を感じつつ、俺は昼飯を食べ終え、机に突っ伏した…

▼▼▼▼▼▼▼▼

午後になると、文化祭のクラス発表による内容が決められる。
普通は中々決まらないことが多いが、このクラスは違う。
何故なら祐希奈がいるからだ。
祐希奈の性格は、こういった仕切りには持ってこいだ。
男子、女子、共に祐希奈を嫌う奴はあまりいない。
あれだけやっても嫌われないのは、程度をわきまえ、相手が嫌がる絶妙な位置で止まるという天性の才能があるからだ。
そんな祐希奈が纏めると…

「はいは～い、じゃ、文化祭にクラスで何をしたいか言いなさい。一人一回は強制だから、言わないとぶっ飛ばすわよ♪」

《こええ…》

「はい、そこの男子一同何か言いなさい？」

「え、えっと…」

「ちなみに、壁画とかしょうもない提案も無し」

《えええ！？》

男子が真っ先に思い付く楽な物は潰していく祐希奈…必然的に残るのは、ダンス、劇、合奏など、派手な物。

「劇ね。決定！

反論する奴は表に出なさい相手してあげる♪」

《無いです…》

反論の意見を取り入れるのではなく、潰す…

これが、一之瀬祐希奈流のまとめ方…

「劇の内容は!!　これよ!!」

バンっと張り出された紙…最初から劇やる気なんじゃねえかよ…

題名『シンデレラ』

脚本：アリサ・バニングス

監督：適当（サボりたい奴）

シンデレラ：祐希奈

王子：カナン，アリサ

長女：ヴィヴィオ

次女：メイデン

三女：レナス

魔女：すずか

ナレーター：美鈴

音響：神楽

エキストラ：クラスメイト一同

「以上よ♪」

「祐希奈…ちょっと言っていいか…」

「何よ?」

「キャスティング明らかに間違ってるだろ！！
クラスに関係ねえのまでいるし！！
しかも、王子二人って何！？
クラスメイトもう少し使えよ！！」

「知らないわよ。考えたのアリサだし」

「私、お姉さん役だって～♪」

「喜んでるけど意地悪なお姉さんだぞ！？
ヴィヴィオに出来るのか！？」

「ええ！？　い、意地悪…？　えと…大丈夫…海よりも深い意地悪を演じてみせるよ？」

「……」

無理だ！！
最後疑問系になっちまってるし…ヴィヴィオじゃ不可能！

「そもそも、俺が王子なんて出来るか！！」

「私だってシンデレラなんて出来ないわよ！！」

「……」

終わった…このクラス終わったよ…
主役二名が出来ない劇って何…？
未だかつて聞いたことねえよ…

「変更は？」

「アリサやすずかさんが導入しちゃってるからもう無理ね」

死刑宣告が俺達に下された…

「ま、何とかなるわよ。
午後からは、個人で模擬店とか開けるからその辺は各自で材料費とかを計算してから提出ね」

もういいや…どうにでもなれ…

「カナン」

「何だよ…」

「午後からでいいから、文化祭の模擬店にカナメに応援頼みたいのよ。
聞いといてくれない？」

「は…い…？」

今、カナメと申されましたか？
聞き間違いですよね？

「だから、模擬店にカナメの応援を頼みたいのよ」

「何で…」

「翠屋でのあの接客能力…あれがあれば、売上一位間違いなしだからよ♪」

接客？　カナメになってた時って…そんなのやったか？

「カナン君、お願い出来ないかな？
カナちゃんと連絡がとれなくて…
カナン君ならカナちゃんの家に電話出来るよね？」

あ～…最近パソコンの存在忘れてた…
そういや、アドレス交換したんだったな…

「別に頼んでも良いけど…アイツが接客に回るんなら、俺はいないからな？」

「どうして？」

「従妹と接客なんてやってたらからかわれるだろ…だからパス」

分身なんて出来ないからな…

「どうしてもダメ？」

「ヴィヴィオの頼みでも、これは無理だ」

「まぁ、カナンはどのみち来れないだろうし」

「へ？」

「そうなの？」

「ちょっと勇気がいるだろうし、カナメが来てくれるんならいいわ」

俺が行けない？

祐希奈の奴…何する気だ…

「で、ヴィヴィオにもお願いがあるんだけど、後で話すわね」

「う、うん」

「さて、忙しくなるわよ～♪」

何か知らんが、祐希奈がやたらハツラツと活動計画を練って美鈴と会話していた…

まぁ、それよりも問題は…

「鷹月カナメ…なぁ…」

久しぶりだから口調をミスらないと良いけど…

その後、ＬＨＲも終わり、下校となった。

「美鈴、神楽、また明日な」

「「バイバイ♪」」

「また明日～」

「さようなら」

美鈴と神楽に別れを告げた後、ヴィヴィオ達にも一応のサヨナラを

する

「また後でな」

「頑張ろーね」

「ちゃんと教えなさいよ？」

「へいへい。そんじゃな」

「うん♪」

「じゃね」

はぁ…カナメの服発掘しないといけないのか…

初めての文化祭で訳のわからん劇に女装かよ…

トラウマになりそうだ

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ただいま～」

「おかえり、カナン君／おかえりマスター／おかえりなさい、主」

伯父さんにメイデン、レナスの三人が笑顔で迎えてくれた。

「今日、ヴィヴィオ達が泊まりに来るから、よろしくな」

「わかったよ。仲良くね？」

「わかってる。メイデン、レナス、ちょっと」

「「？」」

手招きをすると、首をかしげながらも、ちょんと両肩に着地する。
そのまま部屋に向かい、劇のことを教えた。

「私達が劇に？」

「私達も出ていいものなのですか？」

「まぁ、多分ダメなはずだけど、校長が雅樹さんだから出れると思う」

「私達は、そのシンデレラ、とやらの話を全く知らないのだが」

「簡単な役だし、それは問題無いと思うけど…役がな…意地悪なんだ…」

ヴィヴィオ、メイデン、レナス…この三人には意地悪な三姉妹役なんて絶対に無理だ…

「意地悪…か…な、何とかなるだろう」

「そう…ですね…気をしっかり持てば出来ると思います」

「…頑張れ」

気をしっかり…っとか言ってる時点で苦手意識全開じゃねえか…

「マスターは何の役何だ？」

「お…おう…じ」

「「……」」

うわ～物凄い哀れみの目で見られた…

まぁ、こんだけ鈍い奴が王子だったら、跡取り問題とかヤバいだろうしな…

「ファイトだマスター！」

「気の持ちようですよ！」

この応援が止めをさしているのに気づけよ…

「お～う…」

「と、とりあえず、シンデレラとやらは誰がやるんだ？」

「祐希奈…」

「「！！！」」

あぁ…コイツらでもわかるんだな…

「それは…なんというか…無理だろう？」

「祐希奈さんは、どちらかと言うと…何でもありません…」

うんうん。わかるよ。アイツこそお姉さん役が相応しいと思ったんだろ？
シンデレラってアレだぞ？　最初は、お姉さんにパシりに使われる役だ。
ちょっとやってみるか…

ヴ『早くしなさいシンデレラ！！』

メ『そんなんだから貴女は汚いままなのよ！』

レ『使えない子ね！！』

祐『はい…御姉様…』

カナン
「無理だ！！　不可能だ！！　幻想以外の何者でも無い！！
例え劇だとしても、祐希奈にシンデレラなんて合わなさすぎる！！」

「「あ…」」

「ふふふ…」

「あはは…カナン君、今晩わ…」

「はいぃ！？」

扉の前には、笑っている祐希奈と苦笑いをしているヴィヴィオがいた…

「いや、あの…祐希奈さん？　これには深い事情がありまして…」

「うん♪」

「それで…その…うん…すいませんしたぁ！！」

床に頭がぶつかるほどの勢いで土下座していた。

クイッと顔が祐希奈に上げられた…

「仕方ないから、今回は許してあげる」

「あ、ありが…」

「なんて言うと思ったかバカタレーー！！！」

ドゴォ！！

気づいた時には、顔面を裏拳で殴られ、目の前には部屋の壁…

「へぶしっ！！」

「カ、カナン君、大丈夫？」

「まぁ…今回は俺が完璧に悪いしな…」

ちょっとやり過ぎだと思わなくもないけど…

「わかってるじゃない♪

ところでさ、メイデン達学校にいなかったけど、何してたのよ？」

「ああ、私達はエクスカリバーとカラドボルグの最終調整をしていたんだ」

「主の要求に最大限に答えられるように頑張りました！」

「ありがとな、ちょっとデータ見るぞ…」

「ああ…」

メイデンに触れると流れ込んでくるエクスカリバーのデータ…
これ…ヤバいかも…
ザッと見ただけでもヤバい数値が表示されている…フル稼働なんて…

「カナン君？　どうしたの？」

「い、いや、何でもないぞ？」

「アンタ…使いこなせないほどヤバい能力になったんじゃないでしょうね？」

「何言ってんだよ。
そんなわけないだろ…ほら、さっさと勉強始めるぞ」
「うん！」

「はいはい」

ぶっちゃけ、祐希奈の言う通り…
今の俺では、半分の力が限界だった…

（メイデン…こんなの無理だろ…）

（いや、本気のマスターなら充分使いこなせる。

マスターは、まだどこか力を抑えている節がある）

（つってもなぁ…前回の模擬戦でも、一応全力は出してるつもりなんだぞ？）

（マスターは同じ全力でもムラがある…
高い時ならＳＳＳ以上にも届いているが、低いとＡＡＡも無いからな…）

（うわ～…ある意味スゲー…）

（自分の力を最大まで引き出せるように頑張らなければな）

（へ～い）

とは言うものの、そんな切り換えなんて意識して出来るのか？
ハルなら何か知ってるかもしれないな…
もう一回アイツと…やっぱやめとこう…下手するとマジで死ぬし…

「社会なんてどうやって覚えればいいのよ！！」

考えごとをしていると祐希奈が怒り狂っていた…

「先生によって出すとこだいたいわかるだろ？
俺らのとこで言うと…人物名や出土した物とかが多いな」

「ふむふむ…年号は？」

「大きな事件が起きたとこだけでいいだろ」

「理科は？」

「んとね、実験方法や器具、何が出来るのか、どうして出来るのかがよくでるよ？」

「暗記なら得意よ！」

なら、全部答えを覚えれば出来るだろ…

暗記じゃない数、英、国のうち、数学はやったと言っていたし、英は俺より出来るし、つまり国だけ…

「何でこれで出来ないのかがわからん…」

「だって、授業とか眠くなるじゃない」

「「……」」

コイツは、三年間確実に苦労するタイプだ…

眠くなるのは、頭が動いていないから眠くなるのであって…

「お前…いっつも丸写ししかしてないのか？」

「ん～小学校からずっと丸写しね」

「……」

「あはは…」

アホだ…土台となる小学校から丸写しって…

「チェストー♪」

ドゴォ！！

「ええ！？　祐希ちゃん！？」

「がはあああ！！」

「今、アホだって思ったでしょ♪」

「……」

こええ！！　祐希奈こええ！！

あっさり読心術使いやがった！！

「あはは♪」

「いや、あの…勉強…しません？」

「息抜きも必要よね♪」

「始めて十分しか…」

「は～はっはっは♪」

満面の笑顔で壁際まで追い詰められた…

「マスター、私達は下に行く」

「主…御武運を…」

「カナン君…ごめんなさい…」

「え、あのちょっと皆さん!?」

バタンっと扉が閉まり、俺と祐希奈だけの空間が完成…

「カナンく～ん♪」

「……」

「底なしのアホが私を見下すなんて六十八億年早いのよーーー!!!」

「地球出来てます…ぎゃあああああああああああああああ!!!!!」

ドカッ!　バキバキ!!!　ゴキッ!!!　ドゴォ!!!　ミシミシ…

その後、俺が目を覚ましたのは、約３０分後のことだった…

記憶が無いのは幸か不幸かどっちだろうな…

ヴィヴィオ達は、怖かったのか知らないが、晩飯を食べた後、即、寝た。

俺と祐希奈は、何事も無かったかのように、二時過ぎまで勉強を続けた後、就寝、眠りについた。

夏休み明け早々から凄まじい学業生活の幕開けだった…

楽しいからいいけどな…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

祐希奈
「召喚♪」
一同
「後書きコーナー！」

祐希奈
「さぁ、本日のゲストは…魔以下略」
カナン
「適当…」
祐希奈
「やかましい！」

バキャア！！

カナン
「もうルミオはいねえ……」

ザザザー…

ヴィヴィオ
「い、いきなりだね…」
メイデン
「さすが祐希奈だ…」祐希奈
「続きね♪　Ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ　Ｏｆ　Ｓｗｏｒｄ　Ｅｍｐｅｒｏｒから大人げないことこの上無い、子供相手でも容赦なし、プレシアさんに勝ち逃げされたことで有名な…レン・テスタロッサのコンチキショーよ♪」
レン
「なぁ…いきなりなんだが…斬っていいか？」
ヴィヴィオ

「あ、あの、祐希ちゃんは悪気があって言ってるわけじゃなくてですね？
あくまでも、ゲストさんとの対話を円滑にしようとして…」
祐希奈
「祐希ちゃんはいつでもどこでも本気でしか言わないわ♪」
ヴィヴィオ
「ええ！？」
レン
「だ、そうだが？」
メイデン
「と、とりあえず、始まったばかりだし、耐えて欲しい」
レナス
「お願いします」
レン
「わかった…
で、あそこに倒れてるのがカナンか？」
カナン
「ようこそ…ＬＶへ…」
レン
「呪われそうだから寄るな」
カナン
「初対面の相手にひどいっすね！！」
レン
「っ！！　死にかけから復活しやがった…」
カナン
「慣れっす♪」
レン
「全力で慣れたくないな…」
祐希奈
「それはレンさんのつく側によるわね」

レン
「あ～ＫＤＧとかいうやつか…」
ヴィヴィオ
「やっぱり有名なんだ…」
メイデン
「知らない人がいないのではないか？」
レナス
「祐希奈さんの宣伝が凄いですからね」
祐希奈
「はい、ＫＤＧ招待状♪」
レン
「何で二枚？」
祐希奈
「琥珀さんも来てるんでしょ？
良かったら渡しといてよ」
カナン
「待てえい！！　チート型をさらに増やす気か！！」
祐希奈
「エクスカリバー対決とか面白そうね♪」
カナン
「聞けよ！」
祐希奈
「やかましい！」

バキャア！！

カナン
「二回目……」

ザザザー…

レン
「なぁ…ヴィヴィオだっけ？」
ヴィヴィオ
「はい？」
レン
「コイツらよくこんなんで友達やってるな」
ヴィヴィオ
「あはは…それはこの二人だから、としか言えません」
レン
「だろうな…カナン、大丈夫か？」
カナン
「とりあえずは」
祐希奈
「ふふふふふ…」
レン
「な、何だよ？」
祐希奈
「カナンを助けたわね？」
一同
「あ…」
レン
「まさか、これも敵対に…」
祐希奈
「入るわ！！」
レン
「あり得ねえ！！　ちょっと手を貸したら終わりか！！」
祐希奈
「カナンはほっとくが吉よ♪」
カナン

「何だそれ!?　害虫みたいに言われたぞ!?」
祐希奈
「は？　今更？」
カナン
「害虫…俺…害虫っすか…ははは…」
レン
「祐希奈…いくら何でも害虫はやめてやろうな？」
祐希奈
「何言ってんの？　カナンに味方する奴は、害虫、もしくはゾンビよ♪」
レン
「ほう…俺もか？」
祐希奈
「もちのろんよ♪」
レン
「…シュラウド」
シュラウド
『Ｙｅｓ　ｓｉｒ…』

ガシャリ

ヴィヴィオ
「わぁ!!　ごめんなさい!　ごめんなさい!!」
メイデン
「祐希奈の冗談だ!!」
レナス
「大人な対応で流してください!!」
レン
「く…」
祐希奈

「私に手を出したらまたチビッコイジメになっちゃうもんね♪
ねぇ？　殺すとか言ってプレシアさんに勝ち逃げされた人♪」
レン
「…ガキだからって何言っても許されると思うなよ…」

ゴオオオオオ…

祐希奈
「ふふ…見た目だけの大人なに言われたくないわね♪」
カナン
「レンさん、この空間内では、祐希奈に逆らわないほうがいいと思う…」
レン
「知るか！！　いくら温厚な俺だってな…」
祐希奈
「作者さんはしっかりキレるかもってコメントに書いてたわよ♪」
レン
「おい作者あああ！！」
ヴィヴィオ
「ゆ、祐希ちゃん、やり過ぎだよ…」
祐希奈
「え～でも、いくらでも弄ってって言われたし…」
メイデン
「既にキャラが壊れているぞ…」
祐希奈
「因子に感染するのが悪いのよ」
レン
「ホーリーギャラクシー…」
カナン
「レンさん！　やめろーー！！」

レン
「ブレイカーー！！！」
祐希奈
「必殺！！」

ガシ！！

カナン
「のおおおう！！！」
祐希奈
「風間プロテクション♪」
カナン
「ぎゃあああああああああああああああああああああ！！！！」

チュドーーーン…

レン
「あ…死んだか？」
カナン
「やっべえ…久しぶりだった…
目の前に花畑があったのは…」

シュウウウウ……

レン
「既に意識が戻ってるあたりスゲーな…」
カナン
「伊達に不死身1号を名乗ってないっすから…」
祐希奈
「さすが風間プロテクションね♪」

カナン
「お前なぁ！！」
レン
「ドンマイ」
カナン
「いやいや、レンさんがキレたからっすよ！？」
レン
「ＬＶ空間初めてだし、祐希奈の弄りに慣れてなかったんだよ。アレだ。緊張のあまりやっちまったってやつだ」
カナン
「緊張したらレンさんは集束砲を撃つんすか！？」
祐希奈
「うるっさいわね…」

バッキャアア！！

カナン
「がふぅ…」
レン
「扱いがひでえ…」
祐希奈
「しょうがないからレンさん弄りはこれくらいで終わっとくわ。大人の人って加減が難しいのよね」
レン
「加減…してたか？」
ヴィヴィオ
「シオン君が初登場の時は、問答無用で蹴り飛ばしてました」
レン
「加減…してるな…」
祐希奈

「ヘタレオンは、なんとなく蹴りやすいのよね～」
メイデン
「道場の扱いがアレだからな…」
レン
「なんつ～か…頑張れヘタレオン…」
祐希奈
「さて、そろそろ時間も押してるし…今回のお土産はこんなのを用意してみたわ♪
嬉しい？　嬉しいわよね～♪」
レン
「これ…なに…」
祐希奈
「巫女服♪」
レン
「俺は男だあああああああ！！！」
祐希奈
「え…」
レン
「……」
祐希奈
「ごめん…」
レン
「一番傷つく！！　それ一番きつい一言だって！！」
ヴィヴィオ
「祐希ちゃん…女装させるのにハマってるの？」
祐希奈
「女装させるのって言うか…プライドを傷つけるのにね♪」
レン
「黒！！　祐希奈、黒！！」
祐希奈

「ありがと♪」
レン
「ほめてねえ！！」
祐希奈
「ん～翔さんにもあげたいわね…
ま、嫌だったらアリシアさんとリニスさんとリインで着といて♪
え？　何？　シオンも銀杏も着たいって？
しょうがないわね…大盤振る舞いよ♪　発射♪
要請があれば、一之瀬コスプレ店にどうぞ♪」

シュゴーーー！！！

レン
「色んな奴…ドンマイ…」
カナン
「頼む…避けてくれ…」
ヴィヴィオ
「もう…知らないよ？」
メイデン
「まぁ…祐希奈の性格はよくわかっているだろうからな…」
レナス
「逆襲…なんてことがないといいですね…」
祐希奈
「じゃ、レンさんには巫女服とＥＳに登場した焼酎『魔王』をプレゼントよ♪
度数４０は越えてるから気を付けてね♪
未成年の琥珀さんに飲ませちゃダメよ？　よろしくね♪」
レン
「巫女服…琥珀に着せてやろうかな…」
ヴィヴィオ

「後が怖いですからやめたほうがいいと思いますよ？」
レン
「だろうな…」
祐希奈
「じゃ、また呼ぶかも知れないから」
レン
「出きれば普通に頼む」
祐希奈
「気が向いたらね」
一同
「さようなら～」
レン
「はぁ…」

パアアア…

メイデン
「では、次回のリリカルヴィヴィオもよろしく」
カナン
「人気投票もよろしくな」
一同
「ではまた♪」

樟葉櫂さん、まず…すいません！！
レンが明らかにおかしいです！！
最初はこんなはずじゃなかったんですが、大暴走しちゃいました！！
でも、楽しんでました！！
かなり弄り過ぎましたが、許していただければ幸いです…

ではまた♪

第十八話　文化祭前日（前書き）

今回はちょっと短めになってしまいました。

第十八話　文化祭前日

祐希奈
「前書き♪」
カナメ
「質問コーナー♪」
カナン
「本編で出番の無い奴がなんでここにいる？」
ヴィヴィオ
「え～とね…人気投票で一定以上の数字を集めてる人が出てるみたい」
メイデン
「とはいってもいつものメンバーと大差無いがな」
レナス
「そうですね」
ハル
「ですが、御嬢様より僕が上…というのも複雑ですね…」
祐希奈
「クレアはまだメインの話が出てないから仕方ないわよ」
カナン
「ていうか…お前が濃すぎたな…」
ハル
「当初はオマケ程度の設定だったんですけどね」
メイデン
「そんな裏事情をばらすな…」
レナス
「そうですよ。クレアさんを書いてて十秒で発案されたキャラクターがハルさんなんていう裏事情は…」
カ・祐

「言ってない…」
レナス
「あ、あれ？」
カナメ
「レナスさんも冷静キャラのはずが、いつのまにやら…」
カナン
「お前も黙ってような？」
カナメ
「てへっ♪」
カナン
「ひぃいいいいいい！！！」
ヴィヴィオ
「カナちゃんそんなキャラクターだったっけ？」
カナメ
「今のは風間君をいじめただけです♪」
カナン
「風間君言うなぁあああああ！！！！」
ハル
「あ～久しぶりに来るといいですね」
祐希奈
「ハルとクレアは最近本編での出番が無いからね」
ハル
「次回に出てくるらしいですが…まぁ、気にしていても仕方ないです。
質問コーナーを進めましょう」
カナメ
「はい♪
『ＬＶの主要キャラクターにＣＶをつけるとしたら誰ですか？』
との質問です」
ヴィヴィオ

「声優さんかぁ…私は、ママ達と同じでそのままだよ」
祐希奈
「私は平〇綾さんらしいわよ？
知ってると思うけど、ハル〇で有名ね」
メイデン
「私はゆか〇さんだ。
ジアビスに出ているティ〇・グランツさんだな」

レナス
「私は前〇愛さんらしいです。
調べたところ、作者が知っていたのは、戦国〇双の〇市さんぐらいでした」
ハル
「僕は小〇大輔さんです。
なのはシリーズにはでていらっしゃいますが…この作品では、同声優も多々いらっしゃいますから問題無いと思います。
ヴェロッサ・アコース様や別作品ならば…A〇Rの国〇往人様などですね。
御嬢様は…最初は矢〇晶子様だったのですが、少し性格が豹変しまして…思考中とのことです」
カナン
「何気に怖いこと言ってないか？」
ハル
「気にしないほうがよろしいかと」
ヴィヴィオ
「カナン君は誰なのかな？」
カナン
「俺か…朴〇美さんだ…」
祐希奈
「あ～…鋼の？」

カナン
「エドワード・エ◯リックだ」
祐希奈
「確かにヘタレ、ツッコミ、戦闘も揃ってるわね」
カナン
「いや、戦闘を最初に書こうよ！？
ヘタレが主で戦闘がオプション的な感じになってるって！」
カナメ
「え…違うんですか…」
カナン
「オイ…コロスゾ？」
カナメ
「さて…私は脇役に入るのですが一応言っておきますね♪」
カナン
「……」
カナメ
「川澄◯子さんとなっています♪
ＦＡ◯Ｅのセイバ◯さんと言えば大抵はわかると思います」
祐希奈
「文章力無いクセにＣＶだけやたら豪華ね…」
ヴィヴィオ
「この内容なのにこれだけのメンバーがいたらアニメ化された時のクレームが凄そうだね…」
カナン
「まぁ…絶対に無いから安心だけどな」
ハル
「少し文字数が多くなっていますよ？」
ヴィヴィオ
「あ…そろそろやろうか」
祐希奈

「ってことでもう一件は次回に持ち越しね」
カナメ
「実は作者が眠いだけだったり…
読者の皆さん、ここだけの話、前書きは本編の後に書かれているんですよ♪」
カナン
「曝露すな！！」
祐希奈
「まぁ、だからスランプ状態の作者が書いてるってことよ。
テンション的にも今回は低めでしょ？」
ヴィヴィオ
「コホン…本編の方は、一応、今後のためとは言え、今作品のベスト5に入るぐらいのカオスとなっています」
メイデン
「内容は短めだが…恐らく、これはなんの作品か考えさせられる場面が出てくる」
レナス
「ちなみに、日常編は近々抜けられるように頑張るとのことですので、どうかご容赦ください」
カナメ
「では、魔法少女リリカルヴィヴィオ♪」
一同
「始まります」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

試験前日の夜…

「カラドボルグ…行けぇえええ！！」

天に向かって一筋と銀光が螺旋の風を引き起こしながら飛翔する…

『あ、主！　制御失敗です！』

「おわっ！」

しかし、制御失敗…その魔力の余波は、カナンを容易く吹き飛ばす…一本の大木へと…

ゴーン…

「いってぇえええ！！」

「だ、大丈夫ですか？」

レナスが慌ててユニゾンを解除しカナンの治療へと動く。

だくだくと流れる血は止まり、傷口も閉じた…

「今のでどんだけだ？」

「私の予測ですと…四割弱です…」

「姉さんは甘い、三割だな」

「マジで…」

カナン、メイデン、レナスは、夜の林で制御訓練を行っていた。

ちなみに、ヴィヴィオと祐希奈は、自宅で勉強中（ヴィヴィオは祐希奈の付き添い）

カナンも誘われたが、用事があると言って、断り、学校から帰ってから今まで制御訓練に当てていた。

しかし、結果は全く出ていない…

「これで三割って…どうしろってんだよ…」

「マスターは魔力の圧縮が雑なんだ。
故に余波が起こり、吹き飛ばされる」

「砲撃はメイデンが拡散型なのに対し私の場合は貫通型になりますから、少し変わります」

「拡散に変更とかは無理なのか？」

「出来ないことはありませんが、それだとメイデンを使っていた方が効率的ですよ？」

「そっか…なら、もうちょい頑張るかな…」

「主、無理をして私をお使い下さらなくとも良いのですよ？
主の戦闘データからして、主は貫通には向いていません」

「確かに向いてないかも知れない…
でも、それじゃ宝の持ち腐れだろ？
折角レナスも凄い力持ってるんだ…
なのに、使わないなんてレナスが可哀想だ。
それに、カラドボルグも使いこなせないと、オーバードライブが使えない…それじゃダメなんだよ…」

正確には使えないことも無い…
ただし、過ぎた力は身を滅ぼす…
カナン自身の魔力に耐えきれなくなり、使えば死に至るのみ…

「マスター、勘違いしてもらっては困るな…
今のマスターではエクスカリバーも全ては使いこなせないぞ？」

「だろうな…今まで使えた技くらいは完璧にしないとな…
でも、まずはカラドボルグからだな…
レナス、ユニゾン頼む」

「無理はなさらないでくださいね？」

「レナス、答えはわかってるだろ？」

「「はぁ…」」

悪戯っぽく笑うカナンを見て、メイデンとレナスは溜め息を漏らす。

カナンの瞳はこう言っていた…
『無理無茶無謀は俺の専売特許だ』
その後、百発近い銀光が夜空に輝いていたのは言うまでもない…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

試験当日

「今から解答用紙をくばるぞ～。
全員、鉛筆はまだ置いとけ？」

「センセー、今時鉛筆使ってる奴なんていませ～ん」

いや、美鈴よ…わざわざ言わなくても…

「橘～？　反論すると１０点減らすぞ～？」

「センセー、それは不公平で～す」

「先生は生徒に何しても許されるんだ」

「無茶苦茶で～す」

「橘、うるさい。さっさとやれ。
一之瀬を見ろ。あの真剣な表情を…」

「センセー、祐希奈は丸暗記した答えを忘れないうちに書いてるだけで～す」

「うっさいわね！　黙ってなさい！」

「センセー、祐希奈が突然キレました～」

「ん～？　それほざくと先生もキレるぞ～？」

「キレちゃや～よ♪」

《お前ら二人がうるせえよ！！》

「ほう…俺に口答えした男子…全員０点だ…」

《アンタはそれでも教師か！？》

「はっはっは。残念ながらな」

「なんつ～クラスだ…」

「あはは…」

「仕方ないですよ」

隣のヴィヴィオも神楽も苦笑いしている…

テスト中にも関わらずこのカオス具合…誰かなんとかしてくれ…

頭を悩ませつつも、解答用紙に答えを書き込み、１５分ほど余ったので、顔を上げると、ヴィヴィオは見直し、祐希奈は爆睡、そして…

「センセー、終わったんですけど暇で～す」

「見直しをしよ～な？」

「もう何万回もしました～」

「そりゃあ凄いな。じゃあ億まで挑戦してみろ」

「アイアイサー♪」

しばらくの無言…

「出来ました～♪」

《めちゃくちゃ早ええな！　オイ！》

「お前らホントにうるせえよ！　マジで黙れよ！」

《うるせえヘタレ》

プチ…

「センセー…男子全員殺していいっすか…」

「テストが終わったらな～」

《止めろよ！！》

キーンコーンカーンコーン♪

「ぶち殺す！！」

《ぎゃあああああ！！》

「風間～やっぱ殺すのは止めとけ」

《おお！》

「半殺しでな？」

「おっしゃあああああ！！！」

《ぎゃあああああ！！！》

その後、神田以外の男子をボコり、すっきりしたところでテストが再開。

一日目も二日目も似たような感じの日々が続き、遂に全教科の終

わった…

▼▼▼▼▼▼▼▼

「終わった～♪」

隣にいる祐希奈が、シャーペンを放り投げて遊んでいる。

「一之瀬さん？　取り合えず解答用紙を持ってきてください」

「ほれ、行け下僕」

「誰が下僕だ！！」

「返事してる時点でアンタしかいないじゃない」

「……」

何で俺は返事をしたんだよ…

俺の中で、祐希奈が言う下等生物＝俺。みたいな感じでインプットされてしまっていた…悲しいな…

「早くよこせ…」

「ん♪　ホントに持ってってくれる辺り、アンタはいい奴よね」

「は？」

「あ…今のは冗談！　なんでもない！」

「あ、ああ…」

いい奴…とか聞こえた気がするけど…祐希奈が学校で言うわけないよな…

俺が解答用紙を届けている間に祐希奈がヴィヴィオ達に何か話していた…

「ええ!?　そんなことするんですか!?」

「あはは♪　どこで手に入れたの?」

「ちょっと友達にね♪」

「可愛いなぁ…私は楽しみだよ♪」

「は、恥ずかしいですよ!!」

「そうかな?　神楽ちゃんも似合うと思うよ?」

「そういう問題じゃありません!」

祐希奈、ヴィヴィオ、美鈴は乗り気だが、神楽は真っ赤になっている。

「何の話だよ?」

「あ、カナン君、あのね~祐希ちゃんが…」

「ヴィヴィオ!　ストップよ!」

「え？」

「計画が漏れたら嫌だし、カナンにも教えないわ」

「何だそりゃ…俺に言えないことなのか？」

「極秘事項よ…」

「さいですか」

祐希奈の表情からして、これ以上突っ込むと制裁を降されそうなため、俺は、さっさと退散を決め込んだ。

「あ、カナン、メイデンとレナス貸して」

「へいへい、お前ら、出てきて良いぞ」

『わかった／わかりました』

胸ポケットから光が溢れ、ひょっこりとメイデンとレナスが顔を出した。

「メイデン、久しぶり～♪」

「お久しぶりです」

「ああ、美鈴も神楽も元気そうだな」

メイデンとレナスがふわふわと飛び、ヴィヴィオの肩に着地した。

「そっちのそっくりな人は？」

「初めまして、メイデンの姉のレナスです」

「お姉さんですかぁ…」

「姉妹そろって美人さんだね♪」

ボン！

「だだ…だからな？　わ、私は…びび、美人などでは…ないと、い、言っているだろう…？」

「そ、そうですよ…め、メイデンは…とと、ともかく…私なんかは…」

「ね、姉さんの方が綺麗だろう…」

「え、ええ！？　いえ、メイデンの方が…」

「メイデンと同じで、お姉さんも誉められるのが弱いんだね」

「そうですね～」

美鈴は間違いなくわざと試したに違いない…ドンマイ…

「ありがと、じゃ、アンタは行って」

「はいよ。全員仲良くな」

「カナン君はどこに行くの？」

「適当に他の模擬店とか手伝ってくる」

「放課後に劇の練習あるから体育館に来なさいよ？」

「わかった」

ひらひらと手を振り、教室を後にした。

にしても…アイツらなにする気だ？

ヴィヴィオも乗り気だったからそんなに危険は無いだろうけど…

まぁ、今はそれより、放課後か…

シンデレラねぇ…あのメンバーで出来るか確認には丁度いい…っていうか、俺が出来るかわからないけどな…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

放課後…

ついにリハーサルの時間がやって来たわけだが…どうなることやら…

「はい、キャストは揃ってるわね？」

何故かある校長室の椅子に座り、紅茶を飲んでいるアリサさん…

すずかさんは、その後ろでニコニコしている。

「取り合えず、台本みながらやって見てよ。

はい、スタート♪」

反論も許されず、ステージの上に立たされる俺達…ナレーションの美鈴と音響の神楽、エキストラのクラスメイトは見学。

まず、最初の部分…祐希奈とヴィヴィオとメイデンとレナスだ…

「ちょっとシンデレラ」

「お、お城で開かれる舞踏会は明日なのですよ？
ささ、さっさとドレスを仕上げてください」

「ま、まったく、ウスノロだな…お前からも何とか言ってやれ」

多少口の聞き方が違う気がするが、まぁ、妥協の範囲だろう…
問題はヴィヴィオなんだけどな…

「は、はい！！　は、早く仕上げてくれないと…夕飯を…夕飯を…
ぬ…ぬ…抜けないよ……シンデレラさん、可哀想だよ……」

ドターン！！

アリサさん、すずかさん以外のメンバーは壮大にずっこけた…
泣いちゃったよ…意地悪なお姉さん泣いちゃってるよ…

「ヴィ、ヴィヴィオ？　アンタは…意地悪なお姉さんなのよ？
同情してどうするのよ…」

「うん…わかった…今度はもっと頑張る…
夕飯抜きでも構わないよ…っ」

《姉がぬいてどーする…》

アリサさん…どう考えても配役ミスだろ…

「というか、この台本、ヴィヴィオが悪役の台詞しか無いのだが…」

「不公平です。ちゃんと普通の台詞を入れてあげてください」

「悪役だから悪役の台詞しか無いんだよ！」

「好い人にはならないのか！？」

「可哀想です…主、助けてあげてください」

「助けられるんなら最初から助けてるっつーの！！」

ダメだ…このメンバーでシンデレラをやろうとしていた時点で間違いなんだ…冒頭でこの状態でどうしろと？

「ん～…これは想像以上の問題ね…」

「当たり前だ！　何を考えてキャスティングしたんだアンタは！！」

「可愛さよ？」

「あほかぁあああああああああ！！！
可愛くても配役が悪すぎるわ！！
可愛かったら許されるの範囲を既に出ちまってるっつーの！！」
「うっさいわね！！　ヘタレに言われる筋合いは無いわよ！！」

「またか！？　またヘタレ発言か！！」

「キャスティングが問題あるんなら、台本をキャストに合わせて台詞を作ればいいんでしょ！？」

「なんだそれ！？」

「シンデレラの雰囲気を匂わせる台本を作ってやるわよ！！」

「それは既にシンデレラですらねえよ！！」

俺のこの発言に美鈴が手をあげた。

「いいと思うよ？
隣のクラスも水〇黄門は、黄〇様もス〇さんもカ〇さんも皆、女だった設定らしいし…」

「和製チャーリーズエンジェル……！！」

何故か祐希奈がネーミングをつけた…

《つまり…オ〇ンさん以外にもお風呂シーンがあるということ！！》

さらに、男子共が無駄に盛り上がり始めた…
水〇黄門…俺はあんまり知らないんだよな…

「ってことで…書くわよーー！！
すずか！　手伝いなさい！！」

「うん」

「え…いや、マジで？」
いきなりアリサさんとすずかさんがやたら早く台本を書き始めた…
その時、体育館の扉がバンと開いた…

「やぁやぁ…僕が来てあげたよ!!
嬉しいかい？　嬉しいだろう!!
そうかそうか！　思わずエアーズロックで愛を叫びたくなるくらい嬉しいのかい!!」

やたら長い台詞と理解できない言動の嵐を放つ男は俺が知っている男の中では一人しかいない…っていうか何人もいたらそれこそ大変だ…

「……何で貴様がここにいるぅううう!?」

「カナン君知ってるの？」

「アイツ誰よ？」

「あ…ああ…もう…やだ…」

ズカズカと歩いてくる夏なのに白いコートを来た銀髪長身の男…
ジル・ローディアスがここにいた…

「僕の名前はジル・ローディアスさ!!
いやぁ、カナ吉、風の噂によると君たちはシンドゥエレラをやるらしいじゃないか!!
この僕が直々に服を編んで上げよう!
さぁ、時は金なりっ！　さくさく整列しつつ僕の前で全てをさらけ出したまえ!!　特に女性は優先的にね♪」

「お前なぁ!!　どうやって学校に入った!?」

アリサさん達は卒業生だからわからないことも無いが、コイツは

確実に部外者だと思う…

「案ずることはない！！
愛し合う僕らの前に立ち塞がる壁などヒョイとくぐって侵入するのみさ！」

《きゃあああ♪》

「何が！？　何がきゃあああ！？」

「さて、カナ吉、そろそろ僕の愛に答える気になったかい？」

「なるかぁ！！　なってたまるかぁ！！」

《えええ…》

「そこの女子共は何をもとめてんだよ！？」

「それはもちろん…ラヴさ！！」

「ちが…」

《コクコク》

「まさかの正解ぃいいい！？」

「はっはっは！　さぁカナ吉！！」

「腕を広げるなぁ！！　誰もいかねえよ！！」

「な、何コイツ…」

「あはは…凄い人だね…」

祐希奈はドン引き、ヴィヴィオは苦笑い…メイデン達は怯えて隠れてしまっている…

「ふむ…カナ吉はツンデレさんだからね…仕方がない…マイハニーズ!!　きたまえよ!!」

「いつから私はアンタのハニーになったのよ!」

「わ、私も遠慮しておきます…」

「ふ…嫌よ嫌よも好きのうち…
そんなに僕が好きなら…さぁ!!　この胸に飛び込んできたまえ!!
ついでにスリーサイズも計ってあげよう!!」

「「死ねえぇえええええ!!!!」」

バッキャアアアア!!!!
なんと、祐希奈とコンビネーションキックが出来てしまった…

「ぐふ…しかし…捕まえたよ!!

蹴ったはずの足をジルの手が握っていた…

「「しまっ!」」

「さぁ!!　始めようじゃないか!!
ほうほう…ゆっきゅんは今日は白の…」

「いやあああああああああああああ！！！」

「祐希ちゃぁぁああん！！！」

「殺すぞ！　このど阿呆がああああ！！！」

「はっはっはっは！！　楽しいねえ♪」

「閃いたわよ！！」

「こんな感じでどうかな？」

「いいわね♪」

《ここ…学校だよな…》

もう、何が何だかわからなかった…
気づいた時には台本を渡され、サイズも全て調べられていた…
何故、ジルがここに来たのか理由もわからないまま、俺達の前日準備は終了した。
明日の明朝から、学校が開くのでリハーサルを行い本番らしい…
短い劇なので細かい部分は飛ばして進めるので、そんなにむずかしくは無いとのことだった…
まぁ…もう劇がどうなろうと知ったこっちゃ無いがな…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「あの人…何がしたかったのかな…」

「服作りに協力してくれるんじゃない…」

「取り合えず…アイツの知り合いとしてすいません…止められませんでした…」

「いいわよ…なんかもう…いろんな意味で凄い人みたいだし…」

「「ははははは…」」

祐希ちゃんとカナン君が乾いた笑いを響かせている。
でも…あの人の声…どこかで聞いた気がする…
どこだったかな…

「っと、ここで終わりだな。
じゃ、また明日」

「カナン、ちゃんとカナメに言っといてよ?」

「う…わ、わかってるって」

今、カナン君が凄く辛そうな顔をした。
何かあったのかな?

「大変そうだけど、劇…頑張ろうね」

「いや~アレはもう大変そうとかいう領域じゃないっていうか…」

「そうね…」

「わっ!　二人共しっかりして!」

二人は、空を見上げて何だか遠い目をしていた。
主役という立場もあるから、余計に辛いのかもしれない。

「マスター、そろそろ行かないと…」

「ん…あ、そうだな。
悪いけど、今日も用事あるから、じゃあな」

「あ、うん。バイバイ」

「明日、遅れたら承知しないからね！」

私達の声に、手だけ振って答えて、カナン君は行ってしまった。

「さて、私達は私達で最後の仕上げに行くわよ？」

「うん♪」

文化祭での午後からの模擬店には、なのはパパと桃子さんの協力が必要不可欠。
計画実行に向けて私達も動き出した。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

？？？

「おいコラ…ローディアスさんよぉ…
お前は何を考えてるんだ？　あぁ？」

男が…女が…高い柱の上からジルを見下ろす…
円形に立っている十本の柱の中心部にジルは立っていた…

「何を考えているだって？　そんなことを僕が話すと思っているのかい？」

「アンタ…この人数の前でそういう態度とってるとどうなっても知らないわよ…」

柱の上から次は女性の声が響く…

「これは失礼したね。これが僕の性格なものでね。こればっかりはどうしようもないのさ。
例え人数が増えたとしても変わらないというものだよ」

やれやれと言わんばかりにジルは肩をすくめる。

「ちょっと痛い目みねぇとわからねぇみてぇだなぁ…」

「やれやれ、すぐにそうやって力で解決しようとするね。
カルシウムが足りていないのではないかい？
牛乳を飲みたまえよ」

「やっぱり、俺はおめぇが気に入らねえ…」

「奇遇だね。僕も君が一番嫌いだよ」

「殺すぜ？」

「君程度の存在で出来るのならね？」

柱の上から巨大な炎が吹き上がる…
広間の気温が秒単位で上昇していく…
相手からは明らかな殺意が放たれているのに対し、ジルの表情は冷ややかなままだった…

「てめぇら…うるせえよ…」

「う…」

「僕もかい？　とばっちりじゃないか」

膨大な魔力が広間に溢れ、柱の上の男は殺意を無くす。
それほどの魔力が一際高い柱から放たれていた。

「ジル」

「なんだい？」

「お前の計画を全て話せとは言わないさ…
ただ、聞かせて欲しい…奴は強くなったか？」

「あぁ、カナ吉のことか…
ふ～む…まだ自分の力の使い方に戸惑いを感じているようだよ？
彼は優しいから…多分、きっかけが必要なんだと思うね」

「ちっ！　めんどくせ～奴だな…」

「まぁ、こちらは僕に任せて欲しい。
君達は、近々出るのだろう？」

「俺は出ないがな…楽勝すぎて面白くねえし、もう言っていいぞ」

「おい！　こいつは任務をすっぽかしたんだぜ！」

「俺の決定だ…文句あるか？」

「く…」

「感謝するよ。では、失礼」

ベルカの魔方陣が展開され、ジルが広間から姿を消す…

「ってことだ。指示があるまでどこにも行くんじゃねえぞ…」

宝石店…

「さてと…僕は僕の仕事、服の製作に取りかからねばいけないね！！
うむ…やはり、ゴージャスかつスレンダーな衣裳がいいね！
マイハニー達！！　期待して待っててくれたまえよ！！」

本日は、ローディアスは臨時休業。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

祐希奈
「後書き召喚コーナー♪」
ヴ・メ・レ
「わぁ～♪」
デフォ（カ・シ・銀・涼・ル）

「ぎゃあああああああ！！」
祐希奈
「今日はみんな言ってくれて嬉しいわ♪」
カナン
「いつのまに録音したんだよ！！
しかも男は叫び声なんですけど！？」
祐希奈
「ただの叫び声じゃないわよ♪
毎回最新版の叫び声に替える予定よ♪」
カナン
「その…つまり、毎回飛べと？」
祐希奈
「ゲストによるけどね♪
じゃ、本日のゲストはこちら。
リリカルなのはＢｒａｖｅから…なんか強敵と戦った後、記憶喪失になったのに後書きなんかではちゃっかり思い出して、自分で後、何話後に記憶を取り戻すとか行っちゃってるカナンに負けず劣らず目頭が熱くなること請け負いの、作者からも三途の川おいてけぼりを告知されるという悲しき主人公の日比野未来さんよ♪」
未来
「ふふ…いきなり泣きそうだ…」
カナン
「あ～…これが祐希奈だから…な？」
未来
「しょうが…」
祐希奈
「チェストーーー！！」

バッキャアアア！！！

カ・未
「がはああ！！」

ザザザー…

ヴィヴィオ
「わっ！」
メイデン
「速いな…」
レナス
「二番目です…」
カ・未
「いきなり何するんだよ！！」
ヴィヴィオ
「わっ！　こっちも速いよ…」
メイデン
「未来さんおめでとう。
現在吹っ飛びまで速度ランキング第二位だ」
未来
「え？　あ、ああ…ありがとう」
祐希奈
「おめでと～♪　未来さんバンザーイ♪」
一同
「バンザーイ♪」
未来
「えっと…バンザーイ？」
カナン
「流そうとするな！！」
祐希奈
「ふん！！」

バッキャアアアア！！

カナン
「またっすか……」

ザザザー…

カナン
「っ～…ったく、何でこんなに早くに二回も逝かなくちゃならないんだよ」

一同
「早っ！！」

カナン
「自分でもびっくりさぁ…」

未来
「で？　理由を話してもらおうか？」

祐希奈
「ＬＶだから」

未来
「成る程…って納得出来るわけないだろ！」

ヴィヴィオ
「え…」

メイデン
「そうなのか？」

レナス
「では、なんと説明すれば…」

未来
「ちょっと待ってくれ…
本気でそれが理由なのか？」

一同
「（コクコク）」
未来
「俺…とんでもないとこ来たのかも…」
カナン
「ＬＶのカオス具合は有名だからな。
今回の本編の話見ればわかる」
未来
「…（確認中）」
祐希奈
「はい、答えをどうぞ♪」
未来
「納得！」
祐希奈
「イヤッフィィイイイ♪」

バキャッ！

未来
「何でー……」
カナン
「俺達の世界は暗黒…俺達の世界は暗黒…俺達の世界は暗黒…」
未来
「はっ！！」
ヴィヴィオ
「な、何だか凄いね…」
メイデン
「不死身講座ならぬ、不死身経典と言ったところか…」
レナス
「主は凄いですね～」

未来
「今の蹴られた理由は？」
祐希奈
「祝、ＬＶのカオスを理解したぜ。万歳蹴り」
未来
「……」
祐希奈
「しょうがないわね…
ホントの理由は、今、作者が微妙にスランプ気味でネタが無いから
未来さんを蹴り飛ばしてるのよ」
未来
「なにそれ！？　そんなために蹴られてる俺の存在って…」
祐希奈
「はぁ…また言わなきゃいけないの？
カナンに喋りかけた時点で扱いは、害虫並になっちゃうのよ♪」
カナン
「待て！　普通に待て！！　前回の理由より酷くなってる！！」
ヴィヴィオ
「前回は…カナン君を助けたら…だったよね？」
未来
「どちらにしても無惨には変わりないな…」
祐希奈
「よく考えたら、喋りかけること事態がカナンを助けてるような気
がするからそうしたのよ♪」
カナン
「気がするだけで扱い低下かこらぁ！！」
メイデン
「もう大差ない気がするがな…」
レナス
「主は大変ですね…」

カナン
「諦めか!?　既に俺の扱い低下は諦めてるのか!?」
未来
「なんか…噂以上の扱いだな…」
カナン
「俺、噂になってるのか!?」
未来
「まぁ…カナンを街で見かけたら逃げましょう、祐希奈が蹴りに来ます程度の噂だけどな」
祐希奈
「まったく、カナンは歩く災害ね♪」
カナン
「俺のせいじゃねえだろ!?
どっちかって言うと祐希奈だろ!?」
祐希奈
「私は害虫駆除担当よ♪」
カナン
「まず…その害虫扱いをなんとかしてくれ…」
祐希奈
「じゃあ…地球外人造生命物体、ＫＡＮＡＮ?」
カナン
「問答無用で地球内だよ!　っていうか人造かよ!!　なにそのちょっと地球を侵略しに来たエイリアンみたいな名前!?」
未来
「なぁ…祐希奈の人外発言が偉大に思えてきたのは俺だけか?」
ヴィヴィオ
「あ、私もそう思います」
メイデン
「私もだな」
レナス

「私もです」
カナン
「え…」
未来
「いや、だってな？　普通、害虫以外って言ったらもう少し悩むところだろ？
それが地球外人造生命物体まで即座に考えついたんだぞ？
ここまで来ると感銘を覚えるんだが…」
一同
「（コクコク）」
祐希奈
「ふふ♪　やっぱり？　私って流石よね♪」
カナン
「いや、あの、未来さん？
祐希奈の人権無視発言を凄いと言ったのは貴方だけっすよ？」
未来
「そうなのか？　意外だ…」
カナン
「ダメだ！！　未来さんは因子に感染しやすい体質だ！」
未来
「いや～祐希奈様は凄いなぁ…」
祐希奈
「はっはっは♪　もっと褒め称えなさい♪」
未来
「祐希奈様万歳！」
カナン
「死んだ目で祐希奈を崇めてるし！！」
ヴィヴィオ
「カナン君、もしかして、未来さんの体から抜けたままなんじゃないかな？」

メイデン
「確かに脱け殻のように見えなくも無い」
レナス
「助けに行った方がよろしいのでは？」
カナン
「……つまり、逝けと？」
祐希奈
「手伝ってあげるわね♪」

ジャキ…

カナン
「え…いや…蹴りで逝けますぜ？」
祐希奈
「カートリッジロード！！」
アシェル
『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！』
カナン
「無視！？」
祐希奈
「ブレードエクスプロージョン…ジェノサイドブレイク！！」

チュドーーン！

カナン
「ふ…は……」

ドサッ…

三途の川…

未来
「あ～どうする…帰れない…」
カナン
「いや～悪い悪い。経典は未完成だったみたいだ」
未来
「カナン！！　来てくれたのか！？」
カナン
「はは…まぁ、ゲスト逝かすわけにはいかないからな」
未来
「良かった…うちの作者が言った通りになりかけた…」
カナン
「とは言うものの、俺もあんまり時間無いから走るぞ！」
未来
「どういうことだ？」
カナン
「祐希奈がジェノサイドブレイクなんて使うもんだから…ほら」
未来
「い、いつの間にお花畑の扉が目の前に！？」
カナン
「ダッシュ！」
未来
「おう！」

ＬＶ版アリサ道場

祐希奈
「さて、終わりましょうか」
ヴィヴィオ
「い、いいの？　まだカナン君起きてないよ？」

祐希奈
「待つの面倒だしね。
幸い、未来さん（脱け殻）は動いてることだし、最悪このまま本編に返しちゃっても…」
未来
「させるかぁ！！」
カナン
「あっぶね～…」
祐希奈
「ちっ…」
未来
「舌打ち!?　今舌打ちしたか!?」
祐希奈
「逝けば面白かったのに…」
未来
「な、なんか…俺の扱い酷くないか?」
メイデン
「未来さんは、なんというか…」
レナス
「そうですね…主に似ていると言いますか…」
ヴィヴィオ
「未来さんは普段が普通、たまに怒るってところかな?」
祐希奈
「カナンは、普段がバカ、たまにキレるってとこ?」
未来
「バ、バカって…」
カナン
「もうそれは自他共に認めてるからどうでもいい…」
未来
「お、落ち込むなよ。な?」

カナン
「俺のことはいいけど…俺に似てると言われたからには、これからの作品で注意したほうがいい…」
未来
「な、何で？」
カナン
「それは、未来さんの意識次第だな…
もし、俺と同じ運命を辿ったなら…今日の教訓を生かしくれ…」
未来
「全力で運命に抗うよ…」
祐希奈
「じゃ、キリもついたところでこれで終わりよ♪」
一同
「また次回に♪」

謝辞…
ｍｅｂｉｕｓさん未来の召喚ありがとうございました♪
祐希奈が言っていたように、若干スランプ気味ですので、面白かったのか自信がありません…
そして、未来の立場がカナンに近くなってしまいました…すいません。
しゃべり方については、カナンを若干丁寧にした感じで書いてましたが、おかしければ言ってください。
未来君…初の脱け殻になってしまいました…
弄りが多すぎたかも…ですが、それがＬＶですのでお許しいただければ幸いです。
では♪

第十八話　文化祭前日（後書き）

いやぁ…取り合えず皆さんすいません。なんかいつものテンションが取り戻せないヨシュアです。　　なんかいつにも増して会話主体の小説となってしまいました…あんまり心の中を書くのが得意では無くて…

　次回は、劇の時のみカナン視点の台本書きになるかもしれないことをご了承ください。

では♪

第十九話　文化祭（前書き）

今、僕はカナンの偉大さを知った…彼無しではギャグが成立しないという恐怖をしった。そのことがよくわかる作品です…

第十九話　文化祭

祐希奈
「前書き質問コーナー♪」
一同
「わ～♪」
祐希奈
「で、先に言っとくけど、今回の後書き召喚コーナーは暗いわよ♪」
カナン
「お前のせいだろうが！！」
ヴィヴィオ
「文字数が今回二万文字になっちゃってるから早くしないと！」
メイデン
「そうだな」
ジル
「では、この僕が進めてあげようじゃないか！！
読者の諸君…光栄に思いたまえよ！！
そして、携帯とＰＣの前で僕に服従を誓いたまえ！」

ビシッ！

カナン
「すいません…ホントにすいません…
後でぶっ飛ばしときますんで、はい」
ハル
「それでは…」
カナメ
「質問コーナースタート」
クレア

「ですの♪」
レナス
「お、多いですね…」
ジル
「では、一つ目の質問だよ！
『パーフェクトでゴールデンデリケートグレードベストコメンテーターのジルさんのＣＶを是非この私めにお教えください』
ふむ…流石…わかっているようだね」
祐希奈
「質問を勝手に」
カナン
「改竄するなぁあああああ！！！」

バッキャアアア！！

ジル
「痛いじゃないか！！」
カナメ
「ジルさんはどうでもいいですから早く答えてください♪」
ジル
「ふむ…子安武人君だね。
ガン○ムのム○・ラ・フラガ
ボボボーボ・○ーボボなんかもあるよ？」
カナン
「どんだけ高望みしてんだよ！！」
ヴィヴィオ
「でも、中々ジルさんの勢いについていけるＣＶさんっていないと思うなぁ…」
ジル
「そうだろうそうだろう！！

僕はこの作品の主人公だからね！！」
カ・祐
「ポッとでの奴に渡してたまるかぁ！！」
ハル
「では次の質問です。
『人気投票はどんな感じですか？』
らしいですが？」
祐希奈
「ポイントは見せると読者が萎える可能性があるから、伏せとくわね」
カナン
「まぁ…やたら多いとだけ伝えておく…」

一位：ヴィヴィオ
二位：メイデン
三位：祐希奈
四位：ハル
四位：カナン
六位：ジル
六位：レナス
六位：カナメ
九位：クレア
十位：シオン

ランク外、零、銀杏、ルミオ、翔、美鈴、神楽、センセー、対の存在、盾持ってた奴

ヴィヴィオ
「わぁ…私また一番だよ♪」
メイデン

「わ、私が二番か…」
祐希奈
「く…メイデンに負けたわ…」
カナン
「おいコンニャク！！　お前どんだけ票集めてるんだよ！？」
ハル
「それでしたら僕よりジル様に言ってください」
ジル
「はっはっはっは！！　僕としては十位以下のに言った方がいいと思うがね？」
レナス
「確かに…これは奇跡ですね…
シオンさんに至ってはベスト１０入りしていますし…」
カナメ
「まぁ、ＬＶキャラ内と言わなかった作者も悪いんですが…」
祐希奈
「面白いからって理由でＬＶキャラ以外も採用しちゃってるし…」
ヴィヴィオ
「い、いいんじゃないかな。
斬新な発想で…」
カナン
「今更カオスを止めようとも思わないけどな…」
クレア
「ちなみに、ランク外に置いて書いた順番は関係ないですの」
ヴィヴィオ
「ただ面白いから最初に召喚キャラがかかれているだけです」
ジル
「とりあえずはこれで終わりだね！！
さぁさぁ…遂に始まるシンデレラ…
そのカオス具合に注目したまえよ！！」

クレア
「魔法少女リリカルヴィヴィオ、始まりですの♪」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

聖中校門前

「凄いですの～…」

「そうですね。この私立聖祥大付属中学校の文化祭は、ここ海鳴においてはかなりの規模を誇っています」

私達は、ヴィヴィオ様から是非来て欲しいとの連絡をもらい、邸から逃走を謀った。
逃走と言ってもいつものこと。
ハルが私に着いてくるという条件を飲めば、大抵は許してもらえる。

「ハル！　ハル！」

「なんでしょうか？」

「あの小さな店は何ですの？」

「あれはですね。生徒達が自分達で経営する模擬店と呼ばれるものです。
表向きには、社会に慣れるための体験などの意味合いがにとられていますが、生徒達は一部例外を除いては、楽しいから行っているだけと思われます。
一部の例外と言うのは、その方面の進路に進もうとこの時点から考

えている生徒のことです」

お店を自分達で開く…楽しそう…

「折角ですし、買ってみますか？」

「いいですの？　ハルは…」

仕事に関してはプライドが高い…
下手をするとお店が潰れる可能性が…

「御嬢様？　彼らは職人ではありません。
ただ、楽しんでいらっしゃるだけです。
そのような空気を壊すほど僕は捩れて見えますか？」

「ごめんなさいですの…」

「まぁ、あんまりにも酷ければそれなりの対応はさせていただきますが…」

「……」

『折角の説得を台無しにされましたね』

相変わらず爽やか（私には腹黒く）笑いながらハルが私の返答を待っている…
やっぱり、ハルと外で食べるのはやめておいた方がいいかもしれない…

「私だけ食べるですの」

「おや、僕は無しなのですか？」

「ヴィヴィオ様達が午後からお店を開くはずですの。
ハルはその時までは、ダメですの」
『懸命なご判断です』

「では、仕方がありませんね。
御嬢様、買い占めたりしてはいけませんよ？」

「それくらいわかってるですの…」

「ちなみに、カードもダメですよ？」

「ダメなのですの！？」

「やれやれ…」

まさか、この世の中にカードがダメなお店が存在とは…
取り合えず、ハルから硬貨三枚（３００らしい）を貰い、焼きとうもろこしと言う食べ物を買った。

「美味しいですの♪」

「それは良かったのですが、あまり満面の笑みで笑われるといろいろと大変ですよ？」

「？」

「ふぅ…御嬢様、ちょっと目を閉じていていただけますか？」

「は、はいですの」

私がわからないと首を傾げると、ハルは溜め息を一つしてそう言った。

「な、なぁ…あの子可愛くね？」

「執事もひょろそうだし…ナンパしてみるか…」

「ふっ！」

ハルの鋭い呼気が聞こえたと思うと、ゴウッと言う音が響いた…

「何か…御用でしょうか…？」

「「ひぃいいいいい！！！」」

ハルの声の後に、男性の声が聞こえ、走り去ったらしい…

「もう結構ですよ」

「何をしたのですの？」

「いえ、ちょっとソバットの練習を」

「…何故？」

「祐希奈様風に言うならば、ただのノリです」

多分、ハルは聞いても答えないと思った…

仕方がないので、とうもろこしを食べながら歩くことにした。

お行儀が悪い気もしたけれど、祐希奈様がお祭の際に鍛えて下さったせいか、そこまで抵抗なく校内を歩けた。

「カナン達は演劇を行うとヴィヴィオ様から聞いたですの」

「はい。そのようですね。プログラムにも、多分…シンデレラと書いてありますし」

「多分？　もっと分かりやすく言って欲しいですの」

いつも分かりやすく言うハルにしては珍しく多分と言っている…

「ですから、多分…シンデレラなのですよ」

「意味がわからないですの…」

「行けばわかりますよ」

「はいですの」

こうして、シンデレラの多分の意味がわからないまま、私達は体育館と呼ばれる所に向かった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「はぁ…」

俺はもう何度目かわからない溜め息をついた…

もうすぐ、あのカオス劇場が始まる…

しかも、それが終われば校舎裏に隠したカナメの服に着替えて何

かをしなければならない…
それを思うとやっぱり溜め息しか出なかった…

「何今さら落ち込んでんのよ。
ここまで来たら全力でやるだけよ」

「カナン君、リラックスしよ?
衣装も似合ってるし、リハーサルでも上手くいってたから大丈夫だよ」

そんなに落ち込んでるように見えたのか、ヴィヴィオと祐希奈がこっちに来てくれた。
二人とも普通の私服。昔の人の普段着の制作時間が無かったからだ。
ドレスはそれはもう凄いことになっていたが…
ちなみに、俺の格好は白いタキシードに黒いマントを着けている。
同じ王子役のアリサさんは、上は俺と同じくタキシードっぽいがロングブーツを履いていた。そしてやっぱりマント（赤）

「ありがとな…お前らは大丈夫か?」

「アリサのお陰でね」

「うん♪　多分大丈夫だと思う」

「メイデン達は?」

「えっとね…アリサさんが洗脳したから一番大丈夫だと思うよ?」

「洗脳って…」

大方、完璧に演じないと何かがおこる的な感じで脅したんだろう…
その時、パンパンとアリサさんが手を叩いた。

「さぁ、もうすぐ開幕よ！！
緊張せずにリハーサル通りやれば何も問題ないわ。
ね、監督♪」

「そうだね！！
僕の愛を存分に受けた君たちなら何も恐れることはないさ！！
しかし…もしも怖くなったのなら…僕の胸に飛び込んできたまえ！
！」

「「「……」」」

何でアイツが監督やってるのかは知らないが…取り合えず無視に限る…

「なんだいなんだい…皆揃ってツンの時期なのかい？　しかしだね、ツンと言うのは、デレさせるまでの過程が一番楽しいからね…君達が僕の愛にデレデレになってくれる日を心待ちに…いや…やはりツンも残しておいてくれたまえよ。
やはり、ツンとデレが揃っているからこそ萌えという要素が絡み合ってだね…」

「「黙っとけ！！！」」

甘かった…俺と祐希奈にコイツを無視るのは限りなく難しい…

「カナン君」

「何だよ…」

「萌えって何かな？」

「……」

ヤバい…久し振りに来ちゃったよ…
今、こんな時に天然発揮しちゃったよ…

「マスター、ツンとは何だ？」
「デレとは何ですか？」

三人揃っちゃったよ…

「俺に聞くなぁあああ！！！」

「「「？」」」

「萌えと言うものはだね、こう…」

「教えなくていいわよ！！
ヴィヴィオ達をこれ以上汚さないで！！」

ナイスだ祐希奈…

「汚すだって？　まだ僕は君達の処…」

「「そんなこと言うなぁあああ！！！」」

『一年四組の皆さん、お願いします』

おお…神だ…アナウンスの人がこんなに輝いて見えたことは無い…

舞台裏だから姿見えないけど…

「それでだね…」

「行け！！　今すぐに！！」

「わかってるわよ！！」

「「「わっ！！」」」

祐希奈が三人を引きずりながらステージの幕に待機する…

「全く…いつになったら君達は僕の愛に答えてくれるんだい？」

「一生答えねえよ！！」

「ああ…僕はこんなにも君達を愛しているのに…」

「結構だよ！！　寧ろ愛想尽かして離れてくれてかまわねえよ！！」

「いや…まだ僕は諦めないさ…

君達の愛がある限りわね♪」

「さっきからねえっつってんだろうがぁあああああああ！！！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「それでは、一年四組の劇で、『多分、シンデレラ』どうぞ♪」

《それ、タイトルなんだ！？》

観客席のプログラムを読んでいない人からツッコミが入るが、美鈴が華麗に無視してナレーションを始めた。

美鈴
「ワーンス　アポン　ア　ターイム。
シンデレラという美しい少女がおりました。
シンデレラは、諸々の事情で継姉の三人に日々いびられていましたが、心根も美しい彼女は健気に謙虚に暮らしておりました」

《おお～～！！》

ヴィヴィオ、メイデン、レナスが登場すると会場がざわめき指を指す…

レナス
「シンデレラ、どこに行ったのですか。シンデレラ」
メイデン
「シンデレラ…ドレスは仕上がったのか？　城で開かれる舞踏会は今夜なんだぞ？」
祐希奈
「ったく…うるさいわね…何よ？」

パカッと真っ黒な衣装に身を包んだ祐希奈がサーチライトに照らされる。
何故かイスに座って堂々と紅茶を飲んでいた…

メイデン
「な、何をノンキに茶を飲んでいる！？」
レナス
「そういう態度とってるということは…出来ているのでしょう？」
ヴィヴィオ
「い、妹達…そんな威圧感を放たなくても…」
レナス
「黙ってください…これは私達の命がかかってるのです…」
メイデン
「そうだ…」
ヴィヴィオ
「ええ！？」
美鈴
「何故か黒いオーラを放ちながら、姉を押す妹達。果たしていったい何があったのか…」
祐希奈
「…素人にドレスなんて作れるハズないでしょ？
体張って笑いを取りに行きたいんなら作ってあげるけど？」
メイデン
「とりたくはない！！！」
レナス
「話の進行上しかた無いのです！！」
祐希奈
「そんなことより姉さん、一緒にお茶しない？」
ヴィヴィオ
「わぁ…いいの～♪」
レナス
「なんで貴女はそんな優雅な暮らしをしてるのですか！？」

《すっげぇ…すっげぇシンデレラだぁ…何あの自己中…》

会場の全員は早くも真っ白になっていた…

美鈴
「さて、今夜はお城の舞踏会。
噂によれば王子のお嫁さん捜しも兼ねているとあり、自分が玉の輿に乗り左団扇で暮らしたい妹達は躍起になっておりました」

メイデン
「お前の大事な姉さんを返してほしければ…」

レナス
「早くドレスを仕上げてください…さもなくば…」

メ・レ
「殺す…」

ヴィヴィオ
「えええ〝っ!?」

祐希奈
「姉さん…」

美鈴
「いや~何があったのかな~♪
リハーサルではこんなに悪役出来なかったのに、凄いね~♪」

《いや…バラすなよ》

ヴィヴィオ
「あ、あのあのあああああ…」

ズルズルズル…

祐希奈

「あ～あ…どこぞの王子が舞踏会なんか開くから姉さんが…コロス…」

《こえぇえ！！　シンデレラこえぇえ！！》

美鈴
「シンデレラもまだ見ぬ王子に恋い焦がれているようです♪」

《どこが！？》

美鈴
「お気になさらず～♪」

《無理！！！》

美鈴
「取り合えず、話をすすめよ～ね～♪」

《……》

祐希奈
「こうなったら…私がそこに乗り込んで…ん～でもドレスも作らないと姉さんが…困ったわね…
取り合えず…お茶でも飲んで落ち着くしかないわね…」

《何故に！？　ドレス作ろうよ！？》

サーチライトが動き、昔のなのはのバリアジャケットにそっくりのを着るすずかが登場した。

すずか
「大丈夫だよ。心配いらないからね、シンデレ…」

バシャバシャバシャ…
《御嬢様!!　お美しいです!!》

月村家ＳＰから猛烈なフラッシュ…
それは、すずかの目をチカチカさせる…

すずか
「え…っと…魔法使いです…うぅ…」
祐希奈
「かなり間抜けな登場ね…」
すずか
「気を取り直してと…心優しきシンデレラ。
今夜は君のためにどんな願いも叶えてあげるよ」
祐希奈
「へぇ…じゃあ…舞踏会場を灰になるまで燃やして♪」

《優しくねえ!!　シンデレラじゃねえよ!!》

すずか
「えっと…それ犯罪だから、もう少しソフトで純粋な願いをお願いしたいなぁ…」
祐希奈
「純粋…じゃあ、王子とサシで勝負させて」
すずか
「そうじゃなくてね…っていうか…王子を殺す気満々なの？」
祐希奈

「血沸き肉踊るわね…ふふふ…」

《いや…あの貴女…シンデレラ…だよね…？　ね？》

美鈴
「ツンデレラだよ♪」

《ナニィイイイイ！？》

祐希奈
「うっさいわね！！　さっさと話を進めなさいよ！！」

美鈴
「あ～はいはい。結局ドレスにしました」

《適当…》

レナス
「シンデレラ！」

メイデン
「ドレスは出来たな！？　出来ていてくれるんだな！？」

美鈴
「あの～メイデン？　半泣きだよ？」

メイデン
「気にしないでくれ！！」

祐希奈
「ま、取り合えずドレスはこんなもんでいい？」

祐希奈の後ろには、純白と金と銀のドレス…
ジルがわざわざ作ってきたドレスである。

メイデン
「良かった…出来ていた…」
レナス
「綺麗です…」
ヴィヴィオ
「シンデレラちゃん凄いよ!!
こんな綺麗なドレス…上手だね！」
祐希奈
「ふふ…私の' 手作り' のドレスをそんなに気に入ってもらえて嬉しいわ♪」

《まんまと自分の手柄にしやがったー!!!!》

観客の中でなんか色々とシンデレラのイメージが崩壊していく…

メイデン
「よし、これに着替えて行こう！」
レナス
「はい！　とにかく行きましょう!!」
ヴィヴィオ
「え…あの、シンデレラちゃんは?」
メイデン
「行くぞ！」
レナス
「行くしかありませんよ!!」
ヴィヴィオ
「え、あのでもあああああ…」

ズルズルと鬼気迫る姉妹にヴィヴィオは引きずられて行った…

祐希奈
「ふぅ…グッジョブ魔法使い」
すずか
「あえて聞かないけど…
さぁ、次は貴女の番だよ。シンデレラ？
さぁ…願いを…」
祐希奈
「王子とサシで…」
すずか
「カボチャの馬車に乗って舞踏会にチャッチャと行こうね！」
祐希奈
「サシ…」

《ナイス！　マジで魔法使いさんグッジョブ！！》

観客はすずかのぶったぎりに涙を流したという…

美鈴
「半ば魔法使いに仕切られる形でシンデレラも舞踏会に行ける事になりました。
さて、そんな舞踏会は今、盛り上がり中」
カナン
「ちっ…」
美鈴
「ただ一人王子だけはぶーたれたヘタレの極みのような…」
カナン
「うるせえよ！！　最近はことあるごとにヘタレヘタレヘタレヘタレ言いやがって！！」
美鈴
「王子、今はナレーション中ですからそういう口は後で言って」

カナン
「わかったよ…」
美鈴
「いい子だね♪　後で頭撫でてあげる♪」
カナン
「いらん！　さっさとやれ！」
美鈴
「は～い♪」

《いや…王子…ナレーターと会話してるよ…》

アリサ
「何ぶーたれた顔してるのよ。
アンタのために開いた舞踏会なのよ？
誰かナンパして来なさいよ」

《王子二人目来ちゃったぁあ！？
しかも女だよ！？》

美鈴
「細かいことは無視して王子～セリフ言っちゃってください♪」
カナン
「…うるせぇな…興味ねぇよ。
お前一人で行ってこい…」
アリサ
「はぁ…そんなんだからアンタはキス程度で精神崩壊起こすのよ」

《は…？》

カナン

「何でアンタが知ってるんだよ！？
そして言うなよ！　アンタ仮にもお嬢様だろ！！
今すぐどっかのコンビニ行って' 品' ってもんを買ってこい！！」
アリサ
「心配してやればその態度は何よ！！
アンタこそ' 根性' 買ってきなさいよ！！」

「ヘタレに先越された…」
「うわっ…あんな奴に抜かれた…」

カナン
「うるせぇ！！　観客、ぶった斬るぞ！！」
美鈴
「王子、落ち着かなきゃ。
え～と…友人王子の親身な説得も空しく王子は誘われても踊りません。
逆にイライラが募っていきました…」
エキストラ
「王子様私と…」
カナン
「断る…」
エキストラ
「王子様、踊ってください！」
エキストラ
「いえ、私と！」
カナン
「断る！　他の奴と踊ってろ！」
ヴィヴィオ
「王…」
カナン

「踊らねえっつってんだろうが！！」
ヴィヴィオ
「あ…はい…」
カナン
「！！！」

《ドンマイ王子…》

ヴィヴィオ
「失礼しますね…」
カナン
「待っ…」
美鈴
「もちろん継姉の誘いも冷たく断るのでした」
カナン
「お…」
美鈴
「断るのです」
カナン
「……」

フラフラとカナンはアリサの元に戻り、額を押さえて座り込む…

カナン
「俺…なんでこんな事してんだろ…」
アリサ
「（素で落ち込んでるわね…）」

《今、まさにゴーンって音が聞こえたな…》

美鈴
「会場の盛り上がりとは対照的にテンションが下がっていく王子でしたが、満を持してシンデレラがやって来ました」
祐希奈
「ここが舞踏会場ね…ふふふ…」

《赤!!　シンデレラあっかー!!
その赤は血の赤だろ!?》

祐希奈が着ているドレスはクリムゾンレッド…
なんというか、やはり祐希奈には赤が似合っていた…

ヴィヴィオ
「わぁ…綺麗な人…」
アリサ
「ふふ…これはチャンスよ?
誘ってきなさいよ?」
カナン
「マジで拒否っていいっすか?
なんかアイツヤバイ気がします…」
美鈴
「シンデレラの美しさに一目で恋に落ちた王子はダンスを誘いに行くのでした」
カナン
「嫌だ!!　死にたくない!!」
美鈴
「大丈夫。生きて帰れるって信じてるからね♪」
カナン
「なんかされるの確定じゃねえか!!」
祐希奈

「さて…取り合えず…あ、なんか美味しそうな食べ物あるじゃない。なにこれ？」
カナン
「……おい」

シュっと腕を持ち上げファイティングポーズをとりながらカナンが祐希奈の前に立つ…

カナン
「俺と…踊れ！！！」
祐希奈
「……」

バキャッ！！

カナン
「がふぅ……」

ザザザー…

《ああ！　王子！！》

カナン
「断られた！！」
アリサ
「何喜んでるのよアンタは…」
美鈴
「王子！　再チャレンジだよ！」
カナン
「お前、俺の何が気に入らねえんだよ！？

そんなに殺したいのか！？」
美鈴
「え？　死んでほしく無いけど、飛んでほしいな～って♪」
カナン
「お前を飛ばしてやろうか！？」
アリサ
「とにかく早く行きなさいよ！！」
カナン
「わかったよ！」

《頑張れ…頑張れ王子！！》

美鈴
「肩の力を抜いて自然に話しかけるんだよ？」
カナン
「（それで何が変わるんだよ…
相手は祐希奈だぞ…しかもテンションハイの…）
え～あ～…」
祐希奈
「ふふふ…これとこれを合わせれば…」
カナン
「得体のしれないものを作るな！！」
祐希奈
「…何よ？」
カナン
「話をしないか…俺と…」
祐希奈
「話ねぇ…
今夜のアレは凄く楽しみじゃない？」
カナン

「いや…アレが何がわからねえし…
頼むからもっと会話が成立する話題を選んでくれ…」

ゴーン

祐希奈
「ん？　何だ…もう時間なの？
そろそろ帰るわね」
カナン
「（よし！　生き残った！！）」
祐希奈
「てぃ！」

ガコーン！！
祐希奈は、ガラスの靴を回し蹴りと共にカナンの顎に飛ばした…

カナン
「いってえぇえええ！！！」
祐希奈
「じゃ、確かにわたしたから」
カナン
「お前はどんなシンデレラだよ！！」
美鈴
「１２時の鐘が鳴り終わると魔法がとけてしまうシンデレラは、身の裂ける想いを胸に、王子の元から去りました♪」
祐希奈
「あ～もっと薬物作りたかったのに…」

《危険だ！！　このシンデレラ…危険だ！！》

アリサ
「このガラスの靴を手掛かりに探しに行きなさいよ！」
カナン
「いや…いい…平和に過ごしたい…」

ドゴッ！！

カナン
「がふっ！！」
アリサ
「つべこべ言わずにさっさと行けって言ってるのがわからないの…？
ていうか、行きなさい…早く…今すぐに…」
カナン
「…ただの脅しじゃん…」

バッキャアアア！！

カナン
「がはぁあ！！」

「先生！　アレはただの暴力です！」

「そうだな～」

「止めましょう！」

「金持ちに手を出したら後が怖いからパス。
やるんならお前らだけでやれ。
退学になりかけても、助けてはやらないがな」

「マジでアンタは教師っすか！？」

「ああ、教師だ。お前らに一つ言ってやるよ。
教師だって生活かかってんだ。
たかが一生徒のために路頭に迷うようなことはしたくねえよ」

《たかが…今…たかがって言ったよ…》

アリサ
「流石ね王子♪　アンタなら行くと思ってたわ♪」
カナン
「……」
美鈴
「友人王子の辛抱強い説得に、遂に王子は心を動かされました」
カナン
（辛抱強くねえ…）
美鈴
「そう…大切な事に気がつくのです。
ああ…もう一度あの人に会いたいと…」
カナン
（俺は会いたいとなんて一言も言ってねぇのに…っ！！）
美鈴
「それから王子は街中の娘にガラスの靴を履かせまくります。
ガチンコでサイズのあった人こそ彼女だと思ったからです…ってこの王子ってさ、顔覚えるのどんだけ苦手なの？　しかも履かせまくるって効率悪すぎだって気づかないのが凄いよね～。
流石、カナン君だね♪」
カナン
「俺じゃねえ！！　いきなり振るな！！」

美鈴
「じゃあ、カナン君ならどうする？」
カナン
「…人に聞く」
美鈴
「そうして遂にシンデレラの家に辿り着きました」
カナン
「聞いといてスルーか！！」
美鈴
「だって、どの道効率悪いし…
ほら、同じバカなんだから演じやすいよね？
さぁ、レッツトライだよ♪
バカ王子♪」
カナン
「お前は喧嘩売ってんのか！？」
美鈴
「失礼な…私はカナン君をイジメて高らかに心中で笑ってるだけだよ！」
カナン
「尚悪いわ！！
心中ってのがさらに腹立つ！！」
美鈴
「さて、進めるよ～」
カナン
「……」

《やべえ…王子の不憫さに涙が出てきたよ…》

レナス
「私の靴ではありません」

メイデン
「私の靴でも無いな」
ヴィヴィオ
「私のでも無いです」
エキストラ
「この家に他に若い女性はいないのですか？」
メイデン
「ああ、ネズミ一匹いない」
カナン
「そうか。帰るぞ」
ヴィヴィオ
「待ってください！
まだシンデレラちゃんが…」
カナン
「く…余計なこと言うなよ…」
ヴィヴィオ
「え？　え？」
美鈴
「王子～今のセリフはあってるよ～？」
祐希奈
「乱暴はよしなさい…」
カナン
「っ！！」

ザッ…
　反射的に体が戦闘体制に移行する…
祐希奈が、ゴポゴポと泡立つ緑色の液体を持ちながら現れた…

祐希奈
「姉さんに手を出したら…私が許さないわよ…？」

ヴィヴィオ
「シンデレラちゃん！」
祐希奈
「そろそろ来る頃だと思ってたわ。
その靴は確かに私があの夜残していった物…
返しなさい」

《偉そうだぁ…このシンデレラ、ホント偉そうだぁ》
《しかも、またなんか作ってるよ…》

祐希奈
「ここへ来た理由もわかってるわ…
姉さんとの結婚を申し込みに来たんでしょ？」
ヴィヴィオ
「え？」

ボン！

カナン
「なん！　なな、なんでそ…っ！　バカか！？　そんなわけねえだろうが！！」
エキストラ
「いえ、一応そんな理由ですよ。王子。
ここに来たの」
ヴィヴィオ
「あ、あの…」
祐希奈
「じゃあ、まさか私と…？」
カナン
「ち、違っ！！　だいたい！　お前らの告白の返事もまだだっつー

のに！！」
ヴ・祐
「っ！！」
カナン
「あ…」

シーーン…ジーーーーーー……
会場の視線がカナンに集まり、カナンからは滝のように汗が流れ出す…

美鈴
「ほっほ～う？　これは良いこと聞いたな～？　いつの間にそんな関係になったのかなぁ～？」
カ・ヴ・祐
「……」
美鈴
「フフフフフフフ♪」
すずか
「はいはい。その辺で終わろーね？」

《ええーーー！！！》

すずか
「これ以上詮索するんなら、あなた達の個人情報が流出することになるけど？」

ニコニコと笑って言うすずかの言葉にはやたら恐怖を煽るなにかがあった…

《どうぞ、先に進めてくださいませ！》

すずか
「うん」
祐希奈
「や、やっと来たわね…私の忠実なパシり…」
ピキッ…

すずか
「…まぁ、セリフだから許してあげる。
取り合えず、貴女と王子の結婚がうまくいかないことはわかったよ…
だから、もう一度聞こう…貴女の…本当願いを…」
祐希奈
「私は…」

祐希奈が目を閉じ、少しあとにゆっくりと開く…決意を持って…

《ゴクッ…》

祐希奈
「私は…王子とサシで勝負したい！」

祐希奈の姿が輝き、バリアジャケットに変身した…そんな事実より、観客の頭の中には…

《最後まで引っ張るんだ決闘…》

まさかまさかの超引っ張りで真っ白な灰と化していた…

すずか
「…では王子、貴方は死なない程度にサシで勝負しなさい」

カナン
「え…マジで言ってます？」
すずか
「レディー…ゴー！！」
祐希奈
「業炎爆裂衝破ぁ！！」
カナン
「ちょっ！　プロテクション！！」
祐希奈
「ぉおおおお！！！！」

バキーン…ドゴッ！！

カナン
「ふ……」

ドゴーーン！！！

《ああ…なんかホントに王子ドンマイ！！》

祐希奈
「しょーり♪」
ヴィヴィオ
「か、カナンくーん！！」
メイデン
「まずい！　治療を！！」
美鈴
「え～こうして王子とは別の道を生きることになってしまいましたが、結婚に依存せずとも、女は強く生きられる事を証明したシンデレラは、いつまでも幸せに暮らしていたそうです♪」

おしまい♪

「それで…これは何の話しだったのですの…？」

「ですから、多分、シンデレラです♪」

真っ白な灰になっている観客の中で、ただ一人だけ無事だったハルの言葉を最後に体育館は暗闇へと包まれていった…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

舞台裏

「あ〜終わった…もう知らん…
クレームとか来ようが無視するからな…」

「あはは…カナン君お疲れ様」

「すっきり♪」

「そりゃあ、あんだけ思いっきり殴り飛ばしたらすっきりするだろうさ…
そういや、ジルはどこいった？」

周囲を見渡すが、ジルの姿は見当たらない。
一応は服のお礼を言いたかったんだけどな…

「ジルさんならカナン君が気絶してる間に帰ったよ？」

「そうなのか…」

「なんか珍しく暗い表情をしてたわね。二秒くらいは」

「短！！」

まぁ、ジルがずっと暗かったらそれはそれで怖いけどな…

「さてと、じゃあここには用はないな…
俺、カナメ読んでくるから後よろしく」

「え？　カナちゃんもう来てるの？」

は～い…ここにいま～す…
なんて言えるわけないよな…

「ああ。模擬店で昼飯食べてるから迎えにいかないとな」

「ふ～ん…ま、頼んだわね。
四組に来るように言っといて」

「はいよ」

俺は、ランニング程度に走りながら校舎裏へと向かい…

「すぅ…はぁ…皆さんお久しぶりですね。
よし…多分大丈夫…」

口調の練習をしたあと、例の服に着替え、カツラと変声機を装着…
一応、鏡で可笑しくないか確認し、準備万端！　いやだなぁ…こ

んな準備万端…

「はぁ…行きますか」

溜め息をつきながらも、教室に向かう…

そこで、恐ろしいことが怒るとも知らずに…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一年四組教室

「こんにちは～。カナメですけど…」

教室に入ると、何故かいるのはヴィヴィオ達と桃子さん…

「あ、カナちゃん久しぶりだね」

「カナメさん、久しぶりだな」

「初めまして、メイデンの姉のレナスです」

「はい。ヴィヴィオさん、メイデンさん、お久しぶりです。レナスさんは初めまして。鷹月カナメです」

ふぅ…取り合えず口調は大丈夫かな…

「こっちこっち、早く来なさいよ」

「あ、はい」

「行こ？」

「え…あ…と…」

目の前のヴィヴィオが微笑み、俺の手を引きながら祐希奈達の元へと向かう。

「わぁ…ホントに綺麗な子だね…」

「はい…」

「ありがとうございます。でも、貴女方も十分お綺麗ですよ？」

「あはは。ありがと。
それにしても…カナメちゃんってホントにカナン君の従妹？」

「ど、どういう意味ですか？」

コイツ意外と鋭いとこあるからな…
まずいかも…

「いや～…何かカナン君とは真逆の従妹だなぁと。
何をどう間違えたらこのか弱そうな血筋からあそこまで頑丈なサイボーグヘタレ君が出来るのかってね♪」

誰がサイボーグヘタレだよ！
お前そんなこと思ってたのか！？

「ふふ…私、これでも空手やってたんですよ？」

「うっそ～…」

「ホントだよ？
とっても強くって、私達じゃ勝てないんだ」

「凄いですね…ヴィヴィオちゃん達が勝てないなんて…」

「ただの経験の差ですよ。
お二人が同じだけ私と空手をやれば、すぐに負けちゃいます」

「ま、そんな話は置いといて、着替えるわよ？」

「……はい？」

イマナントイワレマシタカ？
キガエル…ソウキコエマシタガキノセイデスヨネ…？

「だから、着替えるのよ。これにね♪」

「そ…れ…は…」

「メイド服よ♪」

アア…オレノジンセイ…タノシカッタナ…

「そうですか。まさかメイド服で来るとは…びっくりしました。
ですが、私はちょっと恥ずかしいので、ベランダで着替えてきますね♪」

「え？　別に私達しかいないし、気を使わなくてもいいじゃない？」

「実は…私…胸にコンプレックスがありまして…すいませんが…ちょっと…」

「そ、そう…胸にね…」

「あはは♪　ドンマイ祐希奈♪」

「うるさいわよ！！」

怒鳴る祐希奈さんを置いて、私はメイド服に着替えた。
メイド喫茶で働いてもなんら問題は無いメイドとなった私。
カナン君が泣いてしまいそうですね♪

「お待たせしました♪」

「カナちゃん可愛いね♪」

「いえ、ヴィヴィオさん達には負けますよ」

私の目の前には、ニコニコ笑うヴィヴィオさん、若干拗ねている祐希奈さん、首を傾げている姉妹さんお二人に、祐希奈さんをイジメ、或いは慰めている美鈴さんと神楽さん。そして…

「はい、じゃあ、皆よろしくね？」

メイド長兼ホールスタッフの高町桃子さん。
推定４０歳を越えているはずですが、誰もその実年齢を当てることは多分無い。

「士郎さん、入ってきてもいいわよ～」

「お、やっとか。また可愛い子達がいっぱいだね。
こりゃあ、売れそうだ」

全員が着替えるまで廊下で待機していたのか、士郎さんが入ってきた。

「先程から聞きたかったのですが、何故お二人が学校に？」

「ああ、祐希奈ちゃんから頼まれてね。
喫茶店を稼がせてあげるからスタッフとして手伝ってくれってね」

「成る程…」

祐希奈さんらしい頼み方ですね。

「じゃ、喫茶翠屋ｉｎ聖中…開店よ♪」

『お～♪』

「じゃあ、まずは客寄せをお願い出来る？
カナメちゃん、メイデンちゃん、レナスちゃん、外でこれを着けてね？」

「猫耳ですか♪
楽しそうですね♪」

「こんなものを着ける意味はあるのか？」

「私も意味はよくわかりませんね…」

「取り合えず、行けばわかりますよ♪」

「あ、ああ…／はい…」

『頑張ってね～♪』

「任せてください♪」

ガッツポーズを決め、猫耳を持ったままのお二人を引き、廊下からグラウンドへと…

やっぱり目立つのか、一斉に視線がこちらへと向いた。

「メイド喫茶翠屋へ来てください♪」

「場所は一年四組の教室だ」

「皆さんのご来店を心からお待ちしています」

私は笑顔で、お二人は顔を赤らめながらお店の宣伝をする。

後一押しってとこですね…

「待ってますニャン♪」

ネコポーズが効いたのか、爆発三秒前ってところですね♪

「お待ちしております御嬢様」

「ですの♪」

「うぉおおお！！」

「きゃあああああ！！」

「「「わっ！！」」」

違いました。僅か一秒弱で爆発。
急いでお二人の手を引き走り出す。
すると、原因となった人物も着いてきた…

「貴女が鷹月カナメ様ですの？」

「はい。そうですが…貴女方は…クレアさんとハルさん、ですか？」

「おや、ご存知でしたか…改めて自己紹介を…執事の朱皇千春です」

「では私も、鷹月カナメです。
風間カナン君の従妹です。よろしくお願いしますね」

「はい。よろしくお願い致します」

「ふ、二人共！！」

「自己紹介などを」

「する場所を激しく間違ってるですの！！」

「「お気になさらず♪」」

「「「無理／だ／です／ですの！！」」」

普段天然のお二人とクレアさんからツッコまれてしまいました。
やっぱり楽しいですね♪
来た道を逆走し、教室に飛び込む。

「頑張りました♪」

「さて、大変ですよ？」

「あれ？　何でハルさんがいるんですか？」

「偶然です。それより、今は…」

ドドドドド…

「「このお客さまを何とかしましょうか♪」」

『わぁあああ！！』

いつかに合った喫茶翠屋の再来でした。
ただ、規模は今回の方が凄かったのですが、ハルさんがいたお陰で前回よりは楽です。

「ヴィヴィオちゃん、チーズケーキ追加～」

「はい！　ありがとうございます！」

「ああ…可愛いな…」

一生懸命なヴィヴィオさんは、男女比は男性が多いです。
とは言ってもその人当たりやたまに見せる天然などで女性からもかなりの注文を集めてはいましたが…
男7：女3

「祐希奈～フルーツケーキ～」
「はは。頑張れよ」

「あぁもう！　自分で取りに来なさいよ！」

祐希奈さんは、男女比は平均的に人気です。
ただし、嫌いな男性は無視という扱いも多々ありましたが…
男5（一部無視）：5

「メイデンちゃん可愛いね～」
「いやいや、レナスちゃんの方が…」

「ち、ちが！！　何を言っている！！」

「あ、あの…嬉しいのですが、恥ずかしいです…」

「ああ…癒される…」
「可愛い過ぎる…」

メイデンさんとレナスさんも意外と平均的に注文されてます。二人ワンセットが多いですね。
男6：女4

「クレアちゃーん、ショートケーキ頼むわ」
「こっちも～♪」

「はいですの♪　すぐ行くですの♪」

クレアさんは女性中心です。
美容の秘訣を聞いている方が多数です。
高嶺の花、という意識があるのか、話しかける男性はそれなりに礼儀正しい人ですね。
男３：女７

「ハルさ～ん♪」
「おまかせで紅茶お願～い♪」

「ふふ…かしこまりました。御嬢様」

「「きゃあああああ♪」」

「コンニャク野郎…」

ハルさんは、ホールにはただ一人と言うこともあり、女性達からぶっちぎりの人気です。
でも、その爽やかな笑顔は、男性には殺意を抱かせるようで、睨まれていることもしばしばです。
男－１：女１１
だいたいはこんな感じでした。
ちなみに、美鈴さん、神楽さん、桃子さんは、忙しくなった厨房に回っています。

「カナメちゃ～ん♪」

「カナメちゃんが食べたいケーキ奢ってやるよ」

「ありがとうございます。御主人様♪」

「萌え…」

「美味しいですニャン♪」

『うぉおおおおお！！！』

ちなみに私はですね、男性の方においてはぶっちぎりですが、女性はちょっと低めです。

どうにもぶりっこだと思われているようで。

やってみれば楽しいと思うんですけどね。

男９：女１

「ありがとうございました～」

大繁盛の元、メイド喫茶翠屋は閉店。

売り上げは他の追随を許さないぶっちぎりのトップ。

どうやら校内新記録らしいです。

「メイド喫茶、楽しかったですね♪」

「うん♪　忙しかったけど充実してたよ♪」

「そうですね。こういうものも悪くないかもしれません。

ただ、犠牲者が多いのが問題ですが…」

「そうね～士郎さん、大丈夫？」

「あ、ああ…少し疲れたけどね」

生き残っているのはこのメンバーのみ、後の人達は机に座り、伏しています。

「さて…そろそろ返しますか…」

「え？」

「いえ、何でもないですよ…」

では…後は任せますよ…カナン君♪

「あれ？」

「カナちゃんどうしたの？」

「え…いえ」

何でいきなり夕方に…っつうか…昼からの記憶が無い…

「では、僕はそろそろ失礼しますね。御嬢様がお疲れですし」

「う～…ハル達が底無しなんですの～…」

なんか知らないうちにダウンしてる、祐希奈、クレア、天然姉妹。

ハルがクレアを背負い、帰っていく…

「コン…ハルさん、さようなら」

「…はい。失礼します」

あっぶね～！！　コンニャクって言いかけた…

ハルは一瞬疑ったが、行ってしまった。

多分バレてないと信じたい…

「じゃあ…今日のバイト代を渡さないとね…」

「いらないわよ」

士郎さんの言葉を教室から出てきた祐希奈が拒否した。

まぁ、コイツの性格上受け取らないだろうな。

「どうして？　随分頑張ってくれたよ？」

「材料費とか、ミスとか…他にもたくさんの迷惑かけたし…お店に使ってよ…私達はお金儲けするためにやってたんじゃないし…」

「じゃあ…これは、寄付として受け取ってくれないか？」

渡された封筒を除くと万札が１０枚…多すぎだろ！

「知らないわよ？」

「これでも売上の三分の一も無いんだよ？」

いやいやいや…どんだけ稼いだんだよ！？

「なのはパパ、桃子さん、今日はありがとう。楽しい思い出が出来たよ♪」

「そうか…孫娘の喜ぶ顔が見れてお祖父ちゃん嬉しいよ」

「お祖母ちゃんも嬉しいわ♪」

「う～ん…やっぱり違和感バリバリね…」

「そうですね。お二人とも顔立ちが若すぎますし」

「あと、これ、良かったら見て欲しいな？」

ヴィヴィオが渡したのは、一枚のＣＤ
多分、シンデレラと書いていた…

「お、ありがとう」

「家で早速みるわね」

「うん♪」

いや…見られる側としては微妙な立場なんだが…
取り合えず、士郎さんと桃子さんともお別れを言い、美鈴達が起きたので帰路に着く。

「すいません、少しお聞きしたいんですけど…私…上手く仕事出来てましたか？」

こう聞くと全員がニッコリと笑った。

なんとかなっていたらしい。

「カナちゃん凄かったよね～♪
私は恥ずかしくてあそこまでは出来ないよ」

「え…」

「そうだな。前回よりさらに凄かったのではないか？」

「前回は知りませんが、確かに凄かったですよ？」

「はい。カナメちゃん可愛かったです」

え…いや…俺は何をしてたんでしょう…

「…そんなに凄かったですか？」

「ニャン♪　とか言ってたし…」

「御主人様♪　とかも行ってたよね」

祐希奈と美鈴が当初の俺の真似をしているのか、ネコポーズをとったり、スカートの裾をあげる動作をしている…

「は、はは…そ、そうですか…」

何か…ガラガラと崩れ去ったようなするのは気のせいだと信じたい…

「あ…私、忘れ物しましたから、取りに戻りますね…

さようなら…」

「待ってるよ？」

「いえ、ご迷惑ですし、いいですよ。それでは」

「う、うん。バイバイ」

「またね」

「お疲れさま～」

「さようなら」

ペコリと頭を下げたあと俺は服を取りに校舎裏へと走った！　とにかく走った！　そうしないとマジで泣きそうだったから。

もう女装なんて嫌だぁあああああああ！！！

その夜…

「だぁありぁあああああああ！！　く…」

ゴーン…

またしても圧縮に失敗し、大木にぶつかる…

ぶつかりすぎて、木が傾き始めていた…

「まだまだぁあああああああああ！！！」

『あ、主？　そろそろお休みになった方が…』

「休まねえ！」
『な、何故だ？』
「この悲しみを無くすまではなぁ！！　やめられない止まらない！
明日は休みだしモーマンタイだコノヤロー！！」
『マ、マスターが壊れた…』
「チックショオオオオ！！！！」

その夜、カナンが家に帰ったのは、午前三時…魔力切れで倒れた
カナンをメイデン達が運んできたのだった…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

祐希奈
「後書き召喚コーナー♪」
一同
「わ～♪」
カナン
「なげー…」
デフォ（シ）
「シャラップ、す」
カナン
「デフォルトシオンになんか言われた！？」
祐希奈
「略してデフォルオンね♪」
カナン
「なんかちょっとカッコいい！！」
メイデン
「何か機械的な響きだな」
レナス
「文字数も多いですし、早くしましょう」

ヴィヴィオ
「そうだね～じゃあ、今日は私が言うね。アニメ&ゲームキャラ大集合　世界大戦争兼マジカル通信司会。雅也さんです。どうぞ～」
雅也
「ど、どうも」
祐希奈
「漸くの召喚ね。長い間待たせてごめんね」
雅也
「いや、こっちも大変みたいだし、構わないけどな」
カナン
「そう言ってもらえると助かる」
メイデン
「ちなみに、通信所で祐希奈のことを怖がっていたみたいだが、心配しなくとも大丈夫だ」
雅也
「な、何で？」
レナス
「祐希奈さんは、弄る人と弄らない人をあらかじめ決めていますから」
祐希奈
「雅也さんはなんかいい人っぽいから弄りにくいのよね～。レンさんみたいに適度に不良っぽいなら大人でも弄れるんだけど…」
ヴィヴィオ
「ゆ、祐希ちゃん…レンさんがまた怒るよ？」
祐希奈
「大丈夫よ♪　私には天下無敵の風間プロテクションがあるんだからね♪」
カナン
「誰が…」

バキャッ！

カナン
「がふっ…」

祐希奈
「発言して良いなんて誰が言ったのよ？」

カナン
「いちいち許可取らないといかんのですか！？」

祐希奈
「いかんのですよ♪」

雅也
「うわ～…ヤバイ…なんかこのノリについていけない…」

ヴィヴィオ
「あはは…慣れないと仕方ないです」

メイデン
「どちらかと言うと雅也さんよりは皐月さんの方がこの空間には向いているかもしれないな」

雅也
「確かに…アイツならすぐに適応しそうだな…なんか似てるし…」

ギシギシギシ…

カナン
「ぎゃおぁぁあああ腕がぁああ！！」

祐希奈
「あはははははははは！！！」

雅也
「いつもモニターで見てるより黒くないか？」

ヴィヴィオ
「多分、雅也さんを弄れない分がカナンに行っているんだと思います…」
雅也
「え…じゃあ、もしかして俺がいるからカナンがあんなことに？」
メイデン
「まぁ、間接的にだが、そうなるかもしれないな」
レナス
「さらに言えば、雅也さんが来たことで謎人さんのことを思い出しているのだと思います」

ピク…

祐希奈
「あの変なのがどうしたって？」

ゴオオアア！！

一同
「何でもないです！！！」
祐希奈
「ふん…」

ドゴッ！

カナン
「ぐふっ…」

ポロリ…

雅也
「そのミニロブスターは…あの時の？」
カナン
「ああ…貰ったはいいけど…正直あんまり意味ない…」
祐希奈
「なーんーでーそんなものをまだ持ってるのかなぁ…？」

ゴオオオアア！！

カナン
「なっ？」
雅也
「あ～確かに…逆効果だな…」
祐希奈
「ＺＦ展開！！」

グシャ…

雅也
「お、おお…あの無駄に機能が多いミニロブスターが木っ端微塵に…」
カナン
「まぁ…祐希奈に敵対する対象を破壊する能力だからな…
だから、アイツに勝つには素手で勝つしかないわけだけど…ＥＸランクってな？　物理的法則じゃどうにもならない力なんだ…評価規格外っつったかな…
祐希奈はそれがオールＥＸ…
謎人はそれに勝ったわけで…」
雅也
「戦闘描写どうする気だろう…

速さとかシュンとかいう領域じゃないな…」
ヴィヴィオ
「な、何か暗いね…」
メイデン
「祐希奈の機嫌が最悪だからな…」
祐希奈
「ああ！！　もう！！　あんな奴の話しは終わりよ！！
思い出すだけで腹がたつ！！」
一同
「ごめんなさい！！！」
祐希奈
「ちっ！」

バキャッ！

カナン
「な、何故…に…」

ドサ…

雅也
「ゆ、祐希奈ちゃん、御菓子とかどうかな？
ミルフィーユ焼いてきたんだけど…」
祐希奈
「後でね…」
雅也
「そ、そう…」
メイデン
「仕方がないな…こんな空気を破壊出来る人物を呼ぶしかない！」
レナス

「雅也さん、今以上に影が薄くなりますが、この辛さをバネに本編で活躍してください」
雅也
「あ～うん…元はと言えばアイツがバカやったせいだしな」
カナン
「来い！　神よ！！」

パアアア…

ジル
「はっはっはっは！　僕をよんだかい？」
祐希奈
「呼んでないわよ…帰りなさい…」
ジル
「おや…ゆっきゅんはご機嫌ナナメさんのようだね…よし…きたまえ！！僕が君の全てを癒してあげよう！！」
祐希奈
「今、私は機嫌が悪いのよ！！」
ジル
「わかっているともさ！！だからこの僕がマイハニーに愛を注ぎ、元気にしてあげようと言っているではないか！！」
祐希奈
「マイハニーじゃないってんでしょ！！」
ジル
「何…ハニーより上を望むと言うのかい！？そうかいそうかい！！　ゆっきゅんも漸くデレたのだね！！」
祐希奈
「自分に都合の良い方に解釈するな！！」

ジル
「はっはっはっは！！　愛は偉大だからね！！！」
祐希奈
「アンタはいちいち意味がわからないのよ！！」
雅也
「凄い…一瞬にして空気を変えた…」
カナン
「雅也さんマジでごめん…
ゲストなのになにもゲストらしいことしてないな…」
ヴィヴィオ
「オマケにこんな調子になっちゃって…」
雅也
「はは。まぁ、祐希奈ちゃんがあんなに怒ってるとは思わないのに頼みに来た俺も悪いさ」
メイデン
「いや、多分祐希奈は雅也さんには怒っていないぞ？」
レナス
「あくまで謎人さんだけだと思います」
雅也
「だといいけど…」
祐希奈
「いい加減に黙れぇえええ！！」

チュドーン！

ジル
「アディオース♪」
祐希奈
「はぁ…はぁ…」
雅也

「だ、大丈夫？」
祐希奈
「え？　あ、ああ、うん。いつもの事だしね」
雅也
「いつもなんだ…」
祐希奈
「そうなのよ…アイツは本編でも前書きでも無茶苦茶で…」
ヴィヴィオ
「祐希ちゃん…暗いお話が長かったせいで時間が…」
祐希奈
「え？　も、もう？　雅也さんごめん！
何も面白い話が出来なかったわ…」
雅也
「はは。仕方がないさ。
謎人にはこっちから自己中もほどほどにって言っとくから」
祐希奈
「ま、まぁ…私も言えないんだけどね…
後、やっぱりこの銀の箱返しとくわ。
ロブスターは当分ダメみたい…
壊しちゃったら死神さんにも悪いしね」
雅也
「わかったよ。返しとく」
カナン
「で、雅也さんの次の召喚の話しは？」
祐希奈
「そうね…魔導師メンバーくらいはいた方がいいかもね」
ヴィヴィオ
「うん。ちょっと雅也さんが真面目だからね」
カナン
「いや、俺は真面目な人が…」

祐希奈
「うん。真面目な人だけだと間が持たない…いい教訓になったわ。また呼ぶときは皐月さんとカナンを弄るわ！」
カナン
「堂々とイジメ宣言された！？」
メイデン
「マスター…」
レナス
「主…」
ヴィヴィオ
「カナン君…」
雅也
「カナン…」
カナン
「ああ！　痛い…憐れみの視線がすっげえ痛いよ…」
祐希奈
「さて、ではこの辺で♪」
一同
「ではまた次回♪」

謝辞…

青いタヌキさん、すいません…何故だ…何故こんなに暗い話に…
結論的に、弄る奴がいないと辛いとなりました。
ということで、もし次回の召喚があれば、皐月などをお借りしますね♪
では♪

第二十話　語り合い

祐希奈
「前書き質問コーナー♪」
一同
「わ～♪」
ＪＫシオン
「このコーナーまだ続いてたのな…」
カナン
「お前はまだ女体化してたのか…」
ＪＫシオン
「アリサさん次第だからな…」
カナメ
「さて、シオン君はいつになったらＰＢＭが発動するんですか？」
ＪＫシオン
「一生しねぇよ！！」
カナメ
「それでは、一生ヘタレですよ♪」
ＪＫシオン
「だ、大丈夫だ…な？　作者さん？」
ハル
「海鳴で不死身漫才コンビの相方だと作者様も認めてらっしゃいますが？」
ＪＫシオン
「気のせいだ！！」
メイデン
「こちらが地だと言っていたが？」
祐希奈
「女体化が地なんてシオン、流石ね♪」

ＪＫシオン
「あのなぁ…」
ヴィヴィオ
「シオン君、女の子になりたかったの？」
ＪＫシオン
「んなわけあるか！！
ヴィヴィオは実力ばっかじゃなくて、頭も鍛えろ！！」
ヴィヴィオ
「私、成績そんなに悪くないよ？」
レナス
「というよりは優秀ですね」
メイデン
「シオンさん、知らなかったのか？」
ＪＫシオン
「違う…違うんだよ…頭を鍛えろって言うのは…意味が違うんだ…」
カナン
「諦めろ。ヴィヴィオの天然が抜けることは、天変地異にも匹敵する驚きだ」
ＪＫシオン
「だろうな…」
ヴィヴィオ
「…怒るよ？」
祐希奈
「はいはい、アンタは喋り方が優しすぎるからなめられるのよ」
ＪＫシオン
「お…」
カナン
「（ふるふる）」
ＪＫシオン
「（コクり）」

ハル
「（シ）お前は逆にきつすぎるけどな…
（カ）シオン、やめとけ飛ぶから…
（シ）そうだな…平和に終わろう。
ってとこですか♪」
カ・ＪＫシ
「人の心を読むなぁ！！」
祐希奈
「はい、証明、お疲れ♪」

バッキャアアア！！

カナン
「がふっ…」
シオン
「久々だ…」
祐希奈
「ふぅ…やっぱり、カナンとシオンは蹴り心地が違うわね♪」
カナン
「って～…」
シオン
「ったく、相変わらずだな…」
ヴィヴィオ
「おかえりなさい」
カ・ＪＫシ
「ただいま」
祐希奈
「そう言えばアンタ達ＫＤＧに対抗するためにルミオがＴＫＯって
言うのを作ったみたいよ♪」
カナン

「ＴＫＯ？」
ＪＫシオン
「なんだそれ？」
祐希奈
「え～と…『吐血！？　カナン…お墓に…』よ♪」
カナン
「なんだそれ！？　しかも微妙に意味変わってないか！？」
祐希奈
「じゃあ、『吐血！？　彼らはお墓に…』でも良いわよ♪」
ＪＫシオン
「俺まで入った！？
っつうか、吐血する前に何があったんだ！？」
祐希奈
「そりゃあ…ルミオの裏切りじゃない？」
カ・ＪＫシ
「何ですと！？」
祐希奈
「（ル）
さぁ、ＴＫＯ設立だ！
（カ）
おっしゃ～これでＫＤＧにも対抗出来る！
（ＪＫシ）
長かった戦いも終わるんだな…
（ル）
ふ…

ザシュー！

（カ）
ぐふ…ルミオてめぇ…

（ＪＫシ）
裏切ったのか…

ガクッ…

（ル）
ふ…仲良く墓にはいってな…』
みたいな♪」
カナン
「ルミオ裏切り早っ！！
一体あいつに何が！？」
ＪＫシオン
「ていうか、俺まだ女体化してるし！？
嫌だ…せめて男の姿で死にたい…」
ヴィヴィオ
「あはは…大丈夫だよ。
ＴＫＯは（特攻神風カナン応援団）だから」
カ・ＪＫシ
「散るの前提かよ！！」
祐希奈
「ファイト♪」
カ・ＪＫシ
「……」

ズーーン…

メイデン
「シオンさん、落ち込んでいる所で悪いが、読んでくれるか？」
シオン
「ん？　ああ、わかった。

『堕ちた者まで追い付き、思ったのですが、カナンの過去の話ってほとんど触れられてないですよね？書いてくださると嬉しいのですが…』

過去話リクエストだな…珍しい…」

カナン

「俺のか？　簡単にだけど話したろ？」

祐希奈

「かなり省略されてるけどね」

ヴィヴィオ

「うん、大体の部分しか知らないよ？」

カナン

「シオンやタカトさんみたいに壮絶な過去はないぞ？」

シオン

「いや…あったら逆に怖いって…」

カナン

「まぁ、補足として本編に- 書ける場面があれば- 書くらしい」

ハル

「基本は無計画ですからね」

ジル

「さて、続いての質問は僕が答えてしんぜよう！！

さぁ、シオ…丸か吉、神っちなんてものもあるがどれがいいかな？」

ＪＫシオン

「な、なんだコイツ…」

ヴィヴィオ

「ジル・ローディアスさん」

メイデン

「作者曰く」

レナス

「なのはＳＳ史上最高レベルのド阿呆らしいですよ？」

ジル

「ふ…誉めないでくれたまえよ…」
カ・ＪＫシ
「誉めてねぇよ！！」
祐希奈
「頭痛い…」
ジル
「まぁ、僕を誉め称えてくれるのは嬉しいが、次回出演までにあだ名を決めておくことだね。
さすれば、僕との愛がより一層深くなること間違いなしさ！」
ＪＫシオン
「なりたくねぇ！！　だから、あだ名も考えねえ！！」
ジル
「まぁ、どうしてもと言うのなら僕がつけよう…ジェラシオンなどどうだい？」
祐希奈
「あ、カッコいいかも…」
ＪＫシオン
「……」
カナン
「諦めろ…ジルには誰もついていけない…
因子感染とかじゃなくて、コイツはこれで素だから…」
ジル
「さて、そろそろ進めないといけないらしいね…僕としては、もっと愛を深く語り合いたいところなんだが…」
ＪＫシオン
「どうぞお先に進みください！！」
ジル
「ふむ…仕方がないね…
『どす黒執事ハルの好きな食べ物を知りたくないですが教えろ』
さぁ、ハルッち！」

ハル
「質問の改竄は無視しますが…コンニャクとクラゲです」
カ・ＪＫシ
「と、共食い！？」
ハル
「何故、そうなるのかがわかりませんが…美味しいですよ？」
カ・ＪＫシ
「どこが？」
ハル
「ふふ…それはですね」
一同
「ゴクリ…」
ハル
「まぁ、冗談ですが♪」
カ・ＪＫシ・祐希奈
「……」
ハル
「おや、そんなに殺意を放たれてどうかされましたか？」
カ・ＪＫシ・祐
「コロス…」
ハル
「あははは。それは困りますね」

ダッ！

カ・ＪＫシ・祐
「切り刻んでくれるわ、コンニャククラゲが！！」

ダッ！

クレア
「ハルの好きな食べ物は、水羊羹だったりするですの」
ヴィヴィオ
「あれ？　意外だね」
メイデン
「案外普通なんだな」
レナス
「そうですね」
クレア
「ただし…ハルが納得するような水羊羹は滅多に無いとか…だから、自分で作ってる所をよく見るですの」
ヴィヴィオ
「へぇ…」
メイデン
「それは大変そうだな…」
クレア
「厨房が立ち入り禁止の時は作ってる時ですの」
ヴィヴィオ
「なんか…ハルさん怖いよ…」
レナス
「入ったらどうなるのでしょう…」
クレア
「それは…」
ハル
「企業秘密ということで、では♪」
カ・ＪＫシ・祐
「待てーー！！！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

なんか暑い…しかも痛い…そして眩しい…

「何だぁ…」

不信に思いジャージ姿のまま起き上がると…

「あはは。なんで俺、林にいるんだろうなぁ…」

昨日あのまま倒れたのか？
にしてはどこも痛くないし…

「おはよう、カナン」

「……」

嫌だ…これは夢だ…よし、寝よう…
ゴロリと転がった瞬間、ザクッという音が耳元で響いた…
恐る恐る薄目を開き、隣を見る…

「ひぃいいい！」

金色の魔力刃がすくそばに突き刺さっていた…
その距離まさに数ミリ…

「おはよう」

「お、おはようございます…フェイトさん」

ニッコリと笑うフェイトさんがいた…
お互いに笑いながらもあり得ないくらい冷たい空気が流れている…

「あの、何でフェイトさんがここに？」

「ふふ…ヴィヴィオからＣＤが送られて来たんだけどね…」

「…救済の措置は？」

「取り合えず、話を聞いてから決める。
一応は、認めてあげたからね」

「ふぅ…了解っす…」

前回のような問答無用のお仕置きは、回避出来るかもしれない…
この限りなく冷たい空気は無視しよう…気のせいだと信じよう…

「ＤＶＤを見てもらった通り、俺は二人から告白されました…」

うわ～…人に言うのってすっげぇ恥ずい…

「うん。返事がまだらしいけど？」

「それは…まさか二人が俺なんかのことを好きだなんて思ってなくて…
俺…恋愛なんてしたことないんですよ」

「そうだろうね」

う…即答された…

「ヴィヴィオも祐希奈も、二人供、好きで…大切で…

確実に'好き'ではあるんです…
他の人とは違うってのも分かってます…
でも、二人供にその気持ちがあって…
どっちが上とか下とかわからない…いえ…比べたくないのかも…
どっちかに決めれば必ず片方は傷つく…
どんなに上手く言おうが、取り繕おうが…傷つくんです…
しかも…俺…不器用だから多分…何も言えないと思います…
下手したら逃げ出すかもしれない…
だから…時間をくれって言って考える振りをして…結局は問題の先送りでしかないのに…」

こんなに話すつもりは無かったのに、スラスラと言葉を繋げていた…

やっぱり、人に聞いてもらいたかったのかもしれない…

「多分、二人は理解してると思うよ?
カナンが不器用だってことも、優柔不断で答えが中々出ないってことも…
あの二人はカナンの答えが出るまでずっと待ってると思う。
二人供、中学生だけど、真っ直ぐだから軽い気持ちで決めたわけじゃないだろうしね。
だから、カナンの答えを何年経っても待ってる…
じゃあ、カナンはどうする?
二人に甘えてずっと今の関係を続ける?
三人仲良く、こう言うと悪いけどぬるま湯に浸かっていたい?」

「いえ…いつかは決めます…
傷つけたとしても、そこから歩めば、傷が癒えればまた好きになる奴がいると思う…
でも、俺が待たせてたら結局は三人とも不幸で終わってしまうから

…」

言ってしまったからには向き合わないといけない…逃げるために閉じた蓋を開けよう…

「いつかは…か…」

「はい…そんなに簡単に決まるような奴なら、悩んでなんていませんよ」

「もう、逃げてない？」

「……」

そうか…この人は試しに来たのか…

俺が、正面から自分と向き合えるのかどうかを…

どうやら、その第一関門は、知らないうちにクリアしていたらしい。

「絶対に逃げてないです…」

「証明出来る？」

「じゃあ…じっくりと語り合いますか…俺の剣で…」

「うん…」

転がっていた地面から起き上がり向き合う…

メイデンを呼び出す…

「決めたようだな…」

「フェイトさんが来てるの知ってたのか？」

「はぁ…何故今回はこんなに日が高いと思っている？」

あ～成る程…しっかりと考えられるように寝かせてくれたのか…

「すいません、待たせたみたいで」

「ううん、寝苦しそうにしてるカナンを見るの楽しかったし」

「……」

やっぱり、俺に対する酷い扱いは完全には消えないらしい…

問答無用で攻撃されるよりかはましだけど…

「メイデン！」

「バルディッシュ！」

「「セットアップ！」」

『了解だ！』

『Ｇｅｔ　Ｓｅｔ！』

騎士甲冑とバリアジャケットを装着し、互いにバックステップ…

俺はクルリと剣を回し納刀、ゆっくりと空気を吐き出しながら膝を落とす…

フェイトさんは、バルディッシュを軽く前で振り払い、下段に両手で構えた…

「風間カナン…」

「フェイト・Ｔ・ハラオウン…」

二人の間に風が吹き抜けた…

「「参る！！」」

同時に踏み込み、己が剣と斧をぶつけ合った！

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「はぁあああ！」

「やぁあああ！」

気迫と供に重心移動…重い斬撃を次々とぶつけ合う…

カナンは下段から、フェイトは袈裟からの一撃！

互いに手に伝わる衝撃にニコリと笑い、正面からの剣撃を続ける…

一メートルを挟んで舞う…舞う…舞う…

斧を袈裟に放てば剣は下段から斬り上げ、回転と供に剣が横薙ぎに払われれば、同じくして回転していた斧が激突し、火花を散らす…

着かず、離れず…舞いながらも激烈に…

そんな時間が十分以上続く…そして舞いは、唐突に終わりを迎える。

「行くよ…」

『Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ａｒｍ！』

「っ！」

踏み込みと同時にフェイトはバルディッシュを背後に放る…

雷を纏う利き腕である右の手甲で剣を受けとめ、無造作に伸ばした左手にバルディッシュが吸い込まれるように収まり、風を切りながらカナンへと向かう！
即座に痺れる腕から剣を手放しバックステップ…バルディッシュが目の前を通りすぎるのを確認し…

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ！』
「やぁあああ！」

金色の弾丸と化したフェイトを見た…
未だに雷を纏う拳を握りしめ、打ち抜く！
屈み避けながら納刀…飛び上がる。何故なら…

『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！』
「ハーケンセイバー！！」
左手で持っていたバルディッシュがハーケンフォームになっていたのを見たからである…

「絶空！！」

飛翔する魔力刃を一太刀で叩き斬り、尚も空間を背後に結合…下がる。
刹那…先程までカナンがいた所をフェイトが斬り払っていた…
外したと分かると即座に加速しカナンに斬りかかる！

「逃がさない！！」
『Ｂｌｉｔｚ　Ａｃｔｉｏｎ…』

「逃げねぇし！！」

互いの間に剣閃が幾筋も疾る！
しかし、四肢の加速を行っているフェイトは、カナンよりも重心移動が素早く出来、結果、カナンが押されていく…

「はぁあああ！」

「ちっ！」

重い一撃は、カナンの剣を止め、弾き飛ばす！
空間を繋げて離脱しようとするカナンより尚早く、フェイトが零距離まで密着し、腹部に左手を押し当てた…

「プラズマスマッシャー！！」

速射…威力は下がるが、零距離に詰めることで補い雷光と供にカナンを確かに撃ち抜いた…

「へへ…お返しだ！」

が、黒煙を上げながらも、押し付けられた腕を掴んでいるカナンがいた…
左手に呼び戻された剣の柄がフェイトの鳩尾に突き刺さる…

「ぁぁああ！！」

「っと！」

痛覚を無視して振るわれたバルディッシュをギリギリで身体を反らし、繋げた空間で距離を開く…

「げほっ！　ちょっとびっくりした…」

「いや～そりゃこっちですって…
痛いのなんの…」

「その割りには…ピンピンしてるね…」

「男なんで…」

「理由になってないよ！」

「そうっすか！」

小休止が終わり、再び接近する二つの身体…
しかし、今度は一瞬にしてフェイトの身体が地面へと叩き落とされた…

「く…何…急に剣速が…」

「さぁ…何故でしょう！！」

「…っ！」

暗夜一閃…ほとんど反射的にバルディッシュを縦に構えた瞬間、
カナンが目の前に出現し、十文字を描くように剣が重なった…

「俺…今までは、手数を増やして相手に攻撃させないほどの太刀数で押せば勝てるって思ってました」

「うん…」

ギリギリと互いのデバイスが押し、押され、つばぜり合いが続く…

「でも…ヴィヴィオやハルは、俺なんかより攻撃が速い…
で、思ったんです…緩急をつければいいんじゃないかって…
速く軽い斬撃の中にいきなり重い一撃を入れたりとか…」

「そんなの…」

不可能、そう続けようとしたが言葉が止まる…
カナンと剣速は同等だが、身体の加速のお陰で重い斬撃を放てる
自分を迎撃しながら吹き飛ばした先程のカナン…まるで、全体重を
乗せたかのような重い斬撃を確かに放った…
だが、フェイトを迎撃していた剣速は変わっていない…
比較的に質量の軽い両刃剣で重い斬撃を放とうとすれば、重心を
移動ながら、両手で持つ、或いは少し振りかぶる必要がある。
重心移動だけなら出来ないこともないが、振りかぶる動作などすれ
れば、フェイトには止まって見えるほどだ…先のカナンの動作にそ
れは無かった…
冷静に吹き飛ばされた時のことを思い出し分析するが答えは出な
い…
尚もカナンは言葉を紡いでいく…

「実際…拳ならまだしも、剣でやるには難度が高かったっす…
拳なら重心移動するだけで同じ動作からでもかなり威力は変わりま
すから…
剣は重量が重ければ重いほど難しくなり、軽い両刃剣でも多少は振
りかぶらないと無理でした。
だから…俺は' 一瞬で' 振りかぶる方法を探して…そして、見つけ
た…

最初はメイデンの補助が無いと出来ませんでしたが…夜練を重ねて…まだ連続二回までしか出来ませんけど…修得しました…これがその…」

カナンの'周囲'が歪む…ほんの一瞬、バルディッシュにかかっていた力が消えた…

「成果っす！！」

次の瞬間、激烈な威力と供にバルディッシュに剣が叩き込まれ、フェイトの手が痺れた…

さらにカナンが叩きつけた方向とは'逆'に光の速度で回転し、痺れたフェイトの手からバルディッシュを弾き飛ばす！

「っ！！」

「暗夜！」

片手を伸ばしプロテクションを展開…

「一閃！！」

するよりも速くカナンの斬撃がフェイトへと叩き込まれ吹っ飛ばした…

「っう！」

激痛に顔を歪ませながらも姿勢制御し、クルリと一回転…正面を向いた時、既にカナンは距離を詰めていた！

「暗夜一閃！」

その速度に驚愕するが、身体は動き、横薙ぎに対して屈んで避ける。

突如、悪寒を感じてソニックムーブを使い、バルディッシュを回収しつつ下がった…

フェイトの勘は正しく、下がった瞬間にカナンの刺突が地を抉っていた…

しかし、タダでは下がらない…

「サンダー！　レイジ！！」

バルディッシュを地に突き刺すと同時にカートリッジを排出…

エリオの技を借り、紫電を周囲に流す！

もちろんカナンは離脱しているが、構わない…元々時間稼ぎに放った技でしか無かったからだ…

回転と供にカートリッジを更に四発排出…

ザンバーフォームに変更と同時に振り抜く！

「はぁぁ！」

「まずっ！」

なのはのバレルショットと同じ衝撃波…避けようにも範囲が巨大過ぎて避けられず、カナンは直に受けてしまう…

「ジェットザンバー！！／Ｊｅｔ　Ｚａｍｂｅｒ！！」

返す力で己がデバイスと供に叫び、巨大な魔力刃がカナンへと伸びる！

カナンはそれに苦笑いをし、呟く…

「しゃあないか…」

と…そして、重い衝撃が確かにフェイトの手に伝わった…

「流石に重い…な…」

『済まないな…私の力ではこれが限界だ』

ユニゾンを行い大地の力で受け止めていた…それでもフェイトの一撃は、カナンの表情を苦痛に歪ませるには十分な威力を持っていた…

さらに触れた剣からは雷が流れ込み、痺れ、というよりは痛みがカナンを襲う…

押し返したいが、リミットが外れたせいか、フェイトがカナンに力負けしていない…故に押し返せない…

「今回は…出し惜しみなんてさせないよ…」

「そうっすね…でも、別に前も出し惜しみしてたわけじゃないっすけど…っ！」

雷以外にもカナンの身体を攻撃する物がある…

それは、自分自身の魔力…

未だに完全に制御出来る魔力はＭＡＸ四割弱…

しかし、フェイトの一撃は、七割以上の力を出すことを余儀なくしている…

「辛そうだね…」

「まぁ…それなりには…」

「でも…加減してあげる気は無いよ…」

「させる気も毛頭ないっす…って言うか…」

ほんの少しザンバーを押し返し、空間を真下に繋げ、回避…湾曲、直角に折れ曲がり、向かう先はフェイトの正面！

フェイトは振り払った形から回転！

「出来るんすか！！」

「無理かな！！」

放つは横薙ぎ…全体重を移動し、激突させる！

大地の力を使うカナンに対し、フェイトはカートリッジで出力を上げることで対応…その威力は互角…故に同時に下がり、同時に動く！

「金剛…っ／トライデント…っ」

「閃牙ァァァ！！　／スマッシャァァァ！！」

放たれた魔力砲撃、相手を飲み込まんとするその牙に真っ正面から突っ込み抜き放つ！

光が弾け、反れた砲撃が粒子となりながらカナンの周囲に着弾、爆煙を舞い上げる…

「ォォオオオ！！」

「バルディッシュ…」

『Ｙｅｓ　ｓｉｒ…』

「良い子だ…」

遂に砲撃が断ち斬られ、フェイトの元へとカナンが駆ける！
刹那…カナンが盛大に吹き飛んだ…
受け身をとり、剣を地面に突き刺し漸く止まる…

「って～…あの速度を普通捌きますか？」

「軌道は見えてたからね…そんなに難しい話じゃないよ…」

視線の先…真・ソニックフォーム、ライオットザンバー・スティンガーを構えるフェイトがいた…
砲撃は軌道予測と時間稼ぎ…そうして見切り、片手で斬撃を受け流し、もう片手で一刀をカナンに叩き込んで吹き飛ばした。

「Sランクで撃つ必要ありました？」

「用心には用心を重ねないと…特にカナンには常識は通じないし…」

「そりゃどーも…」

誉められているのか貶されているのかわからなかったが、そんなことは後回しにする。
何せ、リミットフルパージ状態のフェイトが目の前にいるのだから、余計なことは考えていられるはずもない。

「「はぁぁ……」」

互いに呼気を吐き出し、気を充実させていく…嵐の前の静けさ…
今が正にその時だった…

「「…っ！！」」

カナンは消失、フェイトは残像を残しながら突撃する！
次の瞬間には、下段からの斬り上げたカナンに対し、交差して振り下ろした形のフェイトがいる…
何度目かのつばぜり合い…その中でニヤリとカナンが笑う…

「重くて速い斬撃…行きますよ！」
『私の出番だな！』

「さっきの私と同じだと思わないでね！」

カナンが振り抜く瞬間にメイデンが空間を形成、ＳＳランクの速度維持したまま体重の乗った斬撃を叩き込む！　何度も…通るまで！
フェイトは、双剣にて受ける…受け続ける！
幾度も幾十も幾百も…終わらない剣撃戦…
体重の乗った一撃をフェイトが受けられるのは、スティンガーのお陰だ…
左右の剣の出力を柄から繋がっているロープで調整しているために力負けしない…
次なる剣撃の場所を即座に判断し、最適の出力で受ける…
長年培ってきた勘と己の技量…それは、カナンには無いもの…今、存分に見せつける！

「なっ！」

太刀筋を見切り、双剣にて挟み込む！
同時に展開される巨大な魔方陣…

『Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｆａｌｌ』

「ちっ！」

空が黒ずみ、雷雲が発生…轟く！

轟雷が堕ちる瞬間に足払いでカナンの体勢を崩し、フェイトは離脱。

同時、巨大な稲妻が降り注ぐ！

「ァァァアアア！！」

「やっぱり…常識は通じないね…」

しかし…天の怒りを、剣一本で受け止める…カナンを見てフェイトは苦笑する。

メイデンの得意属性の雷…それを剣に吸収していく…

『マスター！　返してやれ！！』

「絶空！！！」

鞘を外し、目の前に掲げ、雷を纏う剣を無理矢理に納める…

「青龍破ァァァ！！！」

周囲に５０メートルにＳＳＳランクの雷撃が放たれ、辺り一面を破壊しつくし、一瞬で草木を燃やし、塵へと還す…

「はぁ…はぁ…く…」

「カナンは…本当に無茶苦茶だね…」

「……」

「カナン？」

ソニックムーブで離脱していたフェイトが収まったのを見計らい、戻ってくる…

しかし、カナンは膝をついたまま返事をしない…

「どうし…た…の……」

ドクン…ドクン…

結界内が揺れる…まるで心臓の鼓動のように…

目の前のカナンの存在によって…

鼓動に合わせて魔力が吹き出し地を砕く…

「ぁぁあああ！！　ちくしょう！　痛ってぇなぁ！！」

「え…？」

突如、カナンが叫びだし、揺れが収まり、魔力も元に戻っていった。

「カナン、今のは？」

「あ～…気にしないで下さい。

最近よくなるんですよ。レナスの時なんかもっと頻繁なんで。

でも、ほら、何ともないっす」

『私も何ともないぞ？』

「みたいだね」

ピョンピョン跳ねるカナンを見て、フェイトも安心する。

「まだいける？」

「だから、気にしないで下さい」

苦笑いをしていたカナンが消失…

「まだ心配っすか？」

そんな声がすぐ後ろから響いた…

「わざわざ気を使ってくれてありがとう！！」

「どういたしまして！！」

振り向くと同時に刃を叩きつける。カナンは剣を縦受けたのを確認、時間差で二刀目を下段に払う。跳躍し避ける、続いて膝蹴り、それを見、空間を背後に繋げ、一気に下がる。

「虚空…」

空間斬撃…フェイトは、回避を選ばず、加速し正面から突き進む！

「破砕断！！」

縦に裂けた巨大な裂け目から真空刃が飛び出す…四肢加速を叩き込み、地を蹴る！

空間斬撃が体を掠り痛みを感じるが、止まらない！

「ライオットザンバーカラミティ…」　振り抜いた姿勢のカナンに叩き込むべく、二刀を一つに纏め、巨大な刃としさらに踏み込む！

「エクス！！」

輝きを放つ剣、しかし、それでも恐れず尚進む、集束時間からして明らかに威力不足…対して、フェイトは十分な加速、重心移動と必殺の一撃！

「カリバー！！」

振り抜かれた黄金の剣…何も起こらない…不発かと疑問を抱く…その答えは迫ってきていた…

「っ！！」

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ！』

大剣を振り抜く前に制止をかけ、上空へと飛び上がる！

瞬間、フェイトの背後の裂けた空間から金色の砲撃が放たれていた…

フェイトが避けた今、砲撃の先にいるのはカナン…不適な笑みを浮かべていた…

そして、フェイトは己が失策を悟る。

即座に思考、検証、実行可能と結論を出し、カートリッジ排出。

「エクスカリバー！！」

先に放っていた砲撃を剣に吸収、さらに魔力を束ねて強力にした

砲撃を上空へと撃ち放つ！

「撃ち抜け雷神！」

『Ｊｅｔ　Ｚａｍｂｅｒ！』

同じ技名でも威力の桁が違う…

一刀両断…振り下ろされた刃は、砲撃に抵抗すら許さない！

「ちっ！！」

カナンは、振り抜いた姿勢から、投げ出すように無理に体を捻り直撃こそ避けたものの、衝撃波で体勢が崩れ反撃不能…

「サンダーレイジ！！」

「ぐぅ！！」

巨剣からさらに雷撃を流し込み、追撃。　雷撃が体に流れ、黒い煙が上がる…

しかし、未だ雷が流れているにも関わらず、カナンは立ち上がる…消失！

「閃閃斬っなんつって！！」（ライジングスラッシャー）

「っ！」

雷を纏う斬撃が叩き込まれる！

片腕を突きだし、プロテクションを展開、紫電が弾ける…それさえも剣に吸収…さらに威力を増していく剣！

「ォォオオ！！」

「く…」

プロテクションが悲鳴をあげるようにゆっくりと徐々にヒビが広がる…

「いっけぇえええ！！」

思い切り踏み込み、全体重を乗せて叩き込む！！

「バルディッシュ！」

『Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｂｕｒｓｔ！』

魔力が流し込まれ、プロテクションが炸裂！

カナンが踏み込んでくるのをフェイトは待っていたのだった…

「剛…」

爆煙の中で、小さな声を聞いた…

集中しなければ聞こえないほどの小さな声を…

直感に従い、ライオットザンバーを持ち上げる！

「閃牙ァァ！！」

瞬間、光の速度で煙をぶち抜き、カナンがフェイトのザンバーに突撃し、その体ごと持っていく！

飛行魔法で踏み止まろうと試みるが、それすら許さず止まらない！

角度が緩やかに地へと傾き、着地…壮大に土煙をあげながら二つの影は尚も進む！

「くっ！」
「くぅらぁえぇぇ！！」

木々をなぎ倒し、ぶち抜き、破壊し、吹っ飛ばしながら、進む、進む、進む、止まらない…
装甲など皆無に等しい真・ソニックフォームのフェイトは、生身で木々に激突しているようなものだった…
しかし、激痛に顔を歪ませながらもその瞳は輝きを失わず増していく！

「負けてあげない…私が勝つ！！」

「俺だって負けられねえよ！！」
カナンも負けるわけにはいかない…
自分の覚悟を証明しなければならないから…

「雷光…一閃っっ！！　プラズマザンバーっっ！！！」

全ての力を左足一本に移動し、金剛閃牙を押し止める！！
一気に薙ぎ払い、一メートルの距離が開いた…
カートリッジフルリロード！！
空が暗闇に変わり、轟雷がライオットザンバーに降り注ぐ！！

「エェェクゥゥスーーっっ！！！！」

制御出来ない魔力が身を傷つけ、カナンの体が雷を纏っているようなそんな状態になりながらも、集束を止めない…限界まで痛覚を無視する！

溢れる魔力が地を砕き、紫電を疾らせ、衝撃波を放つ！！
距離が近過ぎること、結界を破壊してしまうかも知れないこと、
その他のことは抜け落ちる…
バトルマニア…結局はフェイトもカナンも完全にそちら側の人間
だという証明だった…
空白の十秒間…二人の瞳孔が開く！

「ブレイカァァァーっっっ！！！！！」

「カリバァァァーっっ！！！！！！」

同時に放たれた雷を纏う巨砲と黄金の巨砲…
木々が消え失せ…草花は燃え…大地は砂へと姿を変える…
互いに衝撃が襲いかかるが、無視！　集束砲の維持が一瞬でも途
切れた方がこの戦い敗者となる。
それをわかっているからこそ踏ん張り、打倒せしめんと限界まで
魔力を振り絞って集束砲に注ぐ…
一分以上経っただろうか…砲撃戦は突如終焉を迎えた…

「うっ！」
『マスター！？』

「え！？」
いきなりカナンの砲撃が消え去り、倒れた…
当然、フェイトの砲撃はカナンに叩き込まれ吹っ飛ばす！！

「カット！！」
『Ｙｅｓ　ｓｉｒ』

激闘はフェイトの勝利という形で決着を迎えた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ど、どうしたの！？」

フェイトは慌てて吹き飛んだカナンに駆け寄る。
既にユニゾンを解き、メイデンが回復魔法を使用していた。

「……はぁ…四割しか制御出来ないマスターが負担を無視して放った結果だな」

少しの間の後、メイデンが溜め息をつきながら言った。

「大丈夫？」

「ああ…問題は無い…休めばそのうち起きるはずだ…」

「そう…」

取り合えず、大事は無いようなので、倒れているカナンの隣にフェイトがゆっくりと座る。

「マスターはどうだった？」

「うん。一太刀一太刀に気持ちがこもってたし、迷いのある斬撃も一つも無かった。
カナンなら必ず答えを出してくれる。
もう、カナンは楽な方に逃げない。
自分から辛い道を選べる強さをカナンは持ってる。百点満点、合格」

隣に眠るカナンの頭を撫でながらニッコリと笑うフェイト。

「ただ…頑張りすぎっていうのはあるね。
特訓も良いけど、たまには完全休養も取るようにって言っといてくれると嬉しいんだけど」

「わかった。私もそれは言おうと思っていたんだがな…私達のために頑張ってくれていると思うと中々難しくてな…
だが、体を壊しては元も子も無い…
確かに伝えておく…」

「うん、じゃあ、私は帰るね」

「ヴィヴィオ達に会っていかないのか？」

「はやてに無理言ってこっちに来させてもらってるから、これ以上迷惑かけるわけにはいかない。
じゃあ、バイバイ」

「ああ…ではな」

フェイトは終始笑顔のまま魔方陣を展開し帰っていった…

「マスター…済まないな…下手に強化など、するべきでは無かったのかもしれない…」

メイデンの謝罪は、静かな林にポツリと響いた…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

祐希奈
「後書き召喚コーナー♪」
ヴ・メ・レ
「わ～♪」
カ・ＪＫシ
「……」
祐希奈
「そこのヘタレーズ。何でそんな隅っこに逃げてるのよ」
カナン
「あ～…うん」
ＪＫシオン
「今回、ヘタレで良いから帰っていいか？」
ヴィヴィオ
「どうして？」
カナン
「いや、だって今回のゲスト…なぁ？」
ＪＫシオン
「あぁ…俺なんて…向こうに召喚された時なんて凄かったぞぉ…」
カナン
「確かに、喋ってなかったよな…」
祐希奈
「ま、アンタ達のことなんてどうなろうが知ったこっちゃ無いわ」
カ・ＪＫシオン
「……」
メイデン
「さて、今回のゲストは、三度目の召喚となった。
ＦＡＮＴＡＳＹ　Ａ　ＣＬＩＳＴＥＲから美緒さん（第三部仕様）だ」
美緒
「こんにちは～♪」

レナス
「待ってました！！」
美緒
「わっ…っとビックリした…」
ヴィヴィオ
「レナス、いきなり飛び付いたら美緒ちゃんびっくりするよ」
レナス
「すいません…つい…」
美緒
「あはは。ちゃんとお土産ならあるよ。はい。上海蟹♪」
レナス
「わ～♪　蟹です～♪　たくさんです～♪　可愛いです～♪」
ＪＫシオン
「蟹って可愛いか！？」
レナス
「はい♪」
カナン
「でも、レナスは食うぞ」
ＪＫシオン
「可愛いのに食うのか！？」
レナス
「だって、美味しいですから」
ＪＫシオン
「理解出来ない…」
美緒
「ところで、そちらの女子高生の方は？」
祐希奈
「あぁ、そいつはシオンよ」
美緒
「……趣味は人それぞれだよね♪」

ＪＫシオン
「趣味じゃねえ！！
これは、アリサさんにやられたんだ！
ついでにそこにいる悪魔のせいだ！！」
祐希奈
「……わかるわよ…辛い事から目を反らしたくて責任転嫁しちゃう
気持ちはよくわかるわ…」
美緒
「シオン君…」
ＪＫシオン
「く…ただの視線がこれほどまでに痛いことも珍しい…」
ヴィヴィオ
「あはは…私は知ってるから大丈夫だよ？」
メイデン
「私も事情は知っている…」
ＪＫシオン
「ありがとな…支えが出来た…」
美緒
「ヴィヴィオちゃん…メイデン…優しいね…」
祐希奈
「ホントね…シオンの精神を支えるために自ら変態を庇うなんて…」
ＪＫシオン
「なんかお前ら妙に俺に絡むな！？
いつものカナン弄りはどうしたんだよ！！」
祐・美
「ビシッ！」

『探さないでください（ｂｙカナン』
ＪＫシオン
「まさかの逃走っすか！？

メインキャラが逃げる後書きってどんなだよ！！」
美緒
「それは澪君のせいかもしれないよ？」
祐希奈
「姉さんとお茶会をするなんて殺す…ってメッセージが届いたからね♪」
ＪＫシオン
「シスコン！？」
美緒
「を飛び越えちゃってるかも…」
祐希奈
「あ～確かに…」
レナス
「蟹～♪　か～に～♪」
ＪＫシオン
「お前はいつまで蟹と遊んでる気だ！」
レナス
「食べるまでですよ？」
ＪＫシオン
「…もういいよ…俺だけでこのメンバー捌くの無理だ…」
美緒
「ついに身も心も女の子に…」
ＪＫシオン
「何でだよ！？」
祐希奈
「ツッコミが出来なくなったシオンなんて女の子と変わり無いわね」
美緒
「意外と脆いところがあるよね」
祐希奈
「ヘタレだからか弱い女の子に慣れるわよ♪」

ＪＫシオン
「もうここ嫌だぁあああ！！
アリサさん女体化解いてください！！！」
美緒
「まぁまぁ、女の子も悪いことばかりじゃないよ？
色々と私の体験談教えてあげようか？」
ＪＫシオン
「すいません…マジで勘弁してください…
説き伏せられそうで底知れない恐怖を感じます…」
ヴィヴィオ
「ねぇねぇ、シオン君」
ＪＫシオン
「何だよ…」
ヴィヴィオ
「男の子の意識のまま女の子になるってどんな感じなのかな？」
美緒
「あ、それは私も気になるな～♪
私はお姉ちゃん達に性格矯正受けちゃったから」
祐希奈
「ふふふ…さぁ…シオン？」
ＪＫシオン
「あ～…胸が重い…」
美緒
「あ、確かに♪」
ヴィヴィオ
「そうかな？」
メイデン
「私もよくわからないな…」
レナス
「蟹～♪　か～に～♪」

祐希奈
「……」

ガシッ…

ＪＫシオン
「え…あれ？　祐希奈？」
祐希奈
「一命様ＫＦＣにご案内～♪」
美緒
「私も一緒に行こうかな♪」
ＪＫシオン
「い、嫌だ！！　こういうのはカナンの役目だろ！？」
祐希奈
「ふふ…シオンは免許皆伝を受け入れた…
もう、カナンもシオンも扱いは変わらないわよ…」
ＪＫシオン
「前から変わらないような…」

カチッ…

美緒
「流石シオン君、わざと地雷を踏めるとは神業だよ」
ＪＫシオン
「ゆ、祐希奈？　俺、また元祖道場に帰らなきゃ行けないし、手加減してくれるよな？」
祐希奈
「（ニッコリ♪）」
ＪＫシオン
「……」

祐希奈
「ダ・メ♪」
ＪＫシオン
「ぎゃあああああああああ！！！！」

ドカッ！　バキッ！　ゴキッ！　プチ…

カナン
「ふぅ…なんとか助かった…」
ヴィヴィオ
「あ、カナン君」
美緒
「ふふ♪」

ガシッ…

カナン
「へ？」

美緒
「逃がさないよ♪」
カナン
「……お前、俺の味方じゃなかったか？」
美緒
「これ」
カナン
「ＫＤＧ入団届け…ま、まさか…」
美緒
「カナン君を弄りたいから入団しちゃった♪」
カナン

「い、嫌だ…」
美緒
「あはは♪　シオン君が待ってるよ♪」

ズルズル…

カナン
「嫌だぁあああああああああ！！！！」

蟹～♪　か～に～♪

只今、非常にグロテスクな音が流れております。
レナスの声を聞きながらお待ちください。

ＪＫシオン
「……」
カナン
「……」

ピクピク…

祐希奈
「ふぅ…スッキリ♪」
美緒
「楽しかった♪」
ヴィヴィオ
「二人供大丈夫かな…」
メイデン
「少し不安だがな…」
レナス

「蟹～♪　か～に～♪」
美緒
「っとそろそろ時間ですね」
祐希奈
「お土産は…私達の手作りクッキーよ♪」
ヴィヴィオ
「ディメンジョンなら大抵そろっちゃうから、有名なお酒やお菓子じゃ意味ないかなって思ったんだ」
メイデン
「ヴィヴィオは甘め、祐希奈は控えめな甘さ、私達の物は少し失敗したかもしれない…
マスターの物よりはマシだがな…」
ヴィヴィオ
「あはは…カナン君、甘いの苦手だから、お菓子作ったことないみたいでちょっぴり焦げちゃってるけど味は美味しかったから」
美緒
「うん。皆、ありがとう。
また来るね」
一同
「バイバーイ♪」
カナン
「さて、本日の召喚はここまで」
ＪＫシオン
「じゃ、また次回に～♪」
祐希奈
「ちっ…痛めつけ方が足りなかったか…」
カ・ＪＫシオン
「お前な…」
終幕

第二十一話　想い（前書き）

今回のお話は、のほほん系ショートバトル＋シリアスです♪

はい、ではどうぞ♪

第二十一話　想い

祐希奈
「何が『想い』よ！　前半全く関係ないじゃない！
どうなのよ！！」
カナン
「俺に言うなぁ！！　そしてネタをバラすなぁ！！」
祐希奈
「アンタがこの話でウジウジウジウジしてるからでしょうが！！」
カナン
「やかましいわぁ！！
そりゃあもう、きつかったんだ！！」
祐希奈
「ヘタレが！！」
カナン
「俺の心境になってまだ言えるのか！？」
祐希奈
「ここまでズルズル引っ張ったアンタが悪いんでしょうが！！」
カナン
「シオンだって似たようなもんだろうが！」
祐希奈
「ヘタレオンは一年も立ってないでしょ！
アンタは何年、私を待たしたと思ってんのよ！？
しかも私から告白してるし！！」
カナン
「あんな分かりにくい表現で気づけるか！！」
祐希奈
「周りにはバレバレだったのよー！！」

バキャッ！！

カナン
「マジで……」

ザザザー…

ヴィヴィオ
「えっと、前書き質問コーナーの時間です。」

ＪＫシオン
「前回から出されっぱのシオンだ…で、何このド初発カオス…」

ヴィヴィオ
「今はカナン君主軸の話だから私達の出番が少なくて祐希ちゃんが怒ってるの」

メイデン
「大半はマスターの話題だったからな…」

レナス
「私達の活躍はまだ先ですね」

カナメ
「私の活躍はいつになるんでしょう…」

カナン
「ネタギレだから活躍は…」

カナメ
「人格破壊しますよ風間君♪」

カナン
「……すいません」

ＪＫシオン
「俺も気を付けよう…」

カナメ

「なんなら私が…」
ＪＫシオン
「いや…やめてくれよ…マジに…俺のイメージが…」
祐希奈
「イメージ？　ヘタレオン以外になんかあるわけ？」
ヴィヴィオ
「え～と…天然？」
ＪＫシオン
「ヴィヴィオに言われた！？
俺、そこまで天然か！？」
ヴィヴィオ
「え？　シオン君、私が言うと何か問題があるのかな？」
一同
「……」
ハル
「質問コーナー♪」
ヴィヴィオ
「あ、あれ？」
一同
「わぁーー！！！！」
ヴィヴィオ
「ね、ねぇ、私は無視なの？」
クレア
「しゃあ、今回は私が読むですの～♪
『ＥＸの概念が無いってどっかの感想で書いてたけど、測定不能ってＥＸじゃないのか？』
じゃあ、カナン、答えるですの！」
ヴィヴィオ
「くすん…もういいもん…
アリサさんにシオン君にイジメられたって言った後にタカトにお願

いしてくるから…」
ＪＫシオン
「ちょっと待てー！！
死亡フラグだから！！　アリサさんとタカ兄ぃって確実に死ぬから
！！」

トュルルル…ピッ♪

祐希奈
「あーアリサ？　シオンがヴィヴィオを泣かしたから制裁よろしく
♪」
アリサ『オッケー♪　肉体的には効かないからシオンには精神的に
抉り抜くわね♪』
祐希奈
「ナイスよ♪」
ＪＫシオン
「抉り抜くってなんですかぁあ！？
しかも早くも予約済みぃぃ！？」
ヴィヴィオ
「えぐっえぐっ…」

ゴオオオオオ…

ＪＫシオン
「……なんか物凄い重圧を感じる…」

ヒラヒラ…

ＪＫシオン
「ま、まさか…あの紙切れは…」

今のうちに遺言書でも書いておくことだ…（ｂｙタカト

ＪＫシオン
「アンタは何処から見てるんだぁあああああああああ！！！」

カナン
「あ～…シオン、悪いけど質問答えるから叫ぶんならこっちな？」

ズルズルズル…バタン

ＪＫシオン
「ふぉあああああああああああああ！！！！！」

カナン
「ふぅ、で、ＥＸ概念の話だったな。
まぁ、確かに俺の力は時間を止めたりして、世界すら従えられるすげぇのがあるけど、タカトさんやトウヤさんみたいに存在だけで世界を歪ませるなんて離れ業は不可能だ。
Ｔさんの話によると、威力や速度だけじゃＥＸにはなれないらしい。
他にも何か秘密があるらしいが…まぁ、俺がなれたとしても、この作者が書かないさ。
一部作品を除いてはこの作者は最強設定が苦手だからな。
そんなわけで、俺は普通の魔導師の範囲内に収まるわけだ。
説明終わり！」

祐希奈
「ぶっちゃけ…ＥＸ設定って何？」

ハル
「簡単に言えば、無限の力ってことになるんでしょうが…」

ヴィヴィオ
「ちょっと違うような…」

メイデン

「情報の完全公開もされていないのに考えるだけ無駄だ」
レナス
「取り合えず、主の測定不能の数値は、ＳＳＳ＋以上、ＥＸランク以下と言うことですね」
ＪＫシオン
「まぁ…うちの作者は伏線とか大好きだから、よくわからないうちにＥＸランクを使うと痛い目を見るかもしれない。ということを覚えておいた方がいいかもな」
カナメ
「長くなりましたが、続いての質問に移りますね♪
『カナンの過去のことで思ったんだけど、レナスの過去も気になるよ』
とのことですが？」
レナス
「私ですか？
そうですねぇ…本編に組み込むのは難しいので、番外編という形で公開するかもしれません」
メイデン
「必然的に私の過去も明かされることになるのか…」
ヴィヴィオ
「二人とも結構暗い過去だよね…」
ＪＫシオン
「まぁ…ユニゾンデバイスってそういう傾向が強いからな」
祐希奈
「ちなみにあくまでも予定だからいつになるかはわからないからね」
カナン
「ふぅ…なんか二本で妙に時間食ったな…」
ＪＫシオン
「天然事件が発生したからな…
俺…次の道場で生きてられるか…？」

祐希奈
「大丈夫よ♪　骨まで燃やしてあげるから♪」
ＪＫシオン
「いや、骨、拾ってくれません！？
っていうかやっぱり死ぬ！？」
ヴィヴィオ
「じっくり反省してね？」

ゴオオオオ…

ＪＫシオン
「…久しぶりにヴィヴィオの闇が深い…」
メイデン
「何やら大変そうだが、ここで終わりだ」
レナス
「今月末で人気投票を締め切ります。
もし、投票してくださるのでしたら、メッセージ、感想等お待ちしています」
カナン
「じゃ、魔法少女リリカルヴィヴィオ」
一同
「始まります」
ＪＫシオン
「ちなみに、今回の後書きは都合により無しだ。
次回からまた再開はするけどな。
そんじゃ、始まり始まり～」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

フェイトさんとの激闘を終え、取り合えず家に帰った俺達は、レ

ナスも加えてデータの確認中…

「ん～…やっぱり完全に制御出来てるのは四割弱しか無いな…」

戦闘のデータを見ても、見事なまでに半分以下…最終的にはダメージを負いながら無理矢理に術を発動させていた…

「これでは長期戦など不可能だな…
自身の魔力に倒される魔導師など聞いたことがないぞ…」

「すまん…」

六式以上は確実に四割以上の魔力を必要とされる…つまりはダメージを受ける…
今、俺が'-'完全'-'に使える最大威力の剣術は、金剛閃牙（メイデンＶｅｒ）
レナスに至っては、まだ、ただの斬撃に属性乗っけるぐらいしか出来ることが無い…
かなり火力が下がってしまっている…
まだまだ問題は山積みだ。さらに、一番の問題は…やっぱ…俺だな…

「レナス…今の俺がオーバードライブ成功する確率は？」

「今は六式で限界の主ですから…一割程…最悪、一割を切ります…」

「だよなぁ…」

成功率一割…使えたもんじゃない…

「よし…やっぱり、特訓に限るよな！」

「待てマスター」

早速特訓に移ろうとすると、メイデンから止められてしまった…

「な、何だよ？」

「たまには休息を取れ。これは、私からの願いでもあり、フェイトさんからの指示でもある」

「そんな時間は…必要…だな…
悪い…ちょっとこれから考え事するから、今日は言葉に甘えて、休みにするよ」

「そうですね。データに関しては私達がまとめておきますから、主はお休みになってください」

「マスター、焦るな？」

「わかってるさ…」

今日はアイツらと向き合う時間にしよう…
一日使って一から振り返ってみるか…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一之瀬家

「つぁあっ！！」

「やぁああっ！！」

ヴィヴィオと祐希奈の上段蹴りと上段蹴りがぶつかり合う…
ヴィヴィオは勢いを利用して回転、逆方向から蹴りつける。
祐希奈は軽く右手をあげ、重心を左足に移動、微動だにせず耐えきった。
互いに弾かれるように距離を取り、踏み込む！

「「はぁああっ！！」」

拳同士がぶつかる、流石にヴィヴィオは力負けし上体がのけ反るが、そのまま倒れ込みバク転しながら復帰、追撃をかける祐希奈に上段回し蹴り！
しかし、その動きは祐希奈の顔の真横で止まる…
ヴィヴィオの目の前にも祐希奈の拳があった…
拳と脚を地面に降ろし窓際に座り、『当番表』と書いた紙を取り出す。

「ん～…今度は私の負けかな？」

「引き分けってとこじゃない？
ヴィヴィオのカウンターの威力が高かったら私の敗けだったし、低かったら私の勝ちだったからね」

「じゃあ、夕御飯は二人で作る…で、良いかな？」

「そうね。じゃ、次はお風呂掃除当番ね」

「は～い♪」

当番表に夕食は二人でやると書き込み、再び立ち上がり、構える…

「三勝四敗一分け。部屋の掃除、食器洗い、トイレ掃除、窓洗い…これ以上面倒なのを貰うわけにはいかないわ…」

「私だって、包丁研いだり、靴磨き、フィルターの取り付けとか…大変だからこれ以上はいらないよ…」

この二人は、掃除の分担を組み手によって決定していたのだった…実はカナンが意識不明の間から執り行われていたりする…

「何で私ばっか掃除の類いをしなきゃいけないのよ!!」

「この前の組み手では私が掃除ばっかりだったもん!!」

喋りながら互いの拳と脚が入り乱れ、激しい格闘戦が繰り広げられる…

避け、弾き、そして激突する。

「はぁっ!」

祐希奈の拳が、ヴィヴィオの顔面を捕らえる瞬間、ヴィヴィオが屈み、祐希奈に背中を向ける…

腕を掴み、祐希奈の体を背負い、投げる!

祐希奈は投げられた直後に受け身をとり跳ね起きているが、祐希奈の目の前にはヴィヴィオの靴…

この瞬間、祐希奈の風呂掃除が確定した。

「えへへ♪　これで私の勝ち…だよね♪」

「次の時は全部掃除をヴィヴィオに回してやるからね…覚えときなさいよ…」

「負けないよ…」

数秒のにらみ合いの後、二人は同時にクスクスと笑い出す。

「な、何よこの変な敵対意識…」

「な、何だろうね…わかんないや…」

互いに訳がわからなくなり、笑いすぎてうっすらと涙を浮かべている。

「か、買い物でも行く？」

「そ、そうだね。牛乳も無くなっちゃってたし」

未だに笑いながら外出の支度をし、玄関から歩き出す。

もちろん手を繋ぎながら仲良く街中へ。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

白姫邸

「おや…」

ハルが偵察のために能力を使用したついでにカナン、ヴィヴィオ、

祐希奈を探してみると、何やら考え事をしながら歩くカナン、手を繋ぎながら家を出たヴィヴィオ達を発見。

「暇ですの～」

部屋のベッドでは、クレアがだらけている…
ちなみに先程からこの言葉しか話していない。

「外出なさいますか？　今ならカナン君もヴィヴィオ様達も外出していらっしゃいます」

ハルが言った瞬間、クレアの顔が輝く。
とてもわかりやすいのだった。

「今すぐに行くですの！！」

以前は外出をするかと聞いても、家にいても暇だからという理由で外出していたクレアのこの変わりようにハルは苦笑する。

「やはり、君の影響は恐ろしいですね」

改めて自称友人を名乗るカナンの影響力には驚かざるを得なかった。

「ハル、出来たですの！！」
白いワンピースに麦わら帽子をかぶるクレアがハルの前に現れる。

「では、行きましょうか」

先立って動き、部屋の扉を開けるが、クレアがジーっとハルを見

つめていた。

「何でしょうか？」

「……ハル…暑くないですの？」

ハルの格好は年中、長袖長ズボンの黒を基調とした執事服。
にも関わらず、ハルは汗をかいていない…

「暑いですが？」

「…何で汗をかかないですの？」

「……」

顎に手を当て、少し考える仕草を取る…そして…

「執事ですから♪」

「答えになってないですの！！」

「おかしいですね…真剣に考えたのですが…」

「それの！！　どの辺りが！！　真剣に！！　考えたと！！　どの口が！！　言えるですのー！！！！！」

一言一言に怒気を発しながらハルに迫るが、相変わらずハルは爽やかに笑ったままだった…

「御嬢様？　執事は人前で汗をかかないように訓練されているので

す」

「嘘ですの！！」

「本当です。常に一定の体温に保つための訓練を行うのですよ？」

「……」

「信じてもらえますか？」

「はぁ…取り合えずは信じるですの…」

そうでもしない限りはハルが説明出来ないので信じることにした。

「あ、御嬢様、ハル先輩、今日は暑いですので外出なさるのでしたら十分お気をつけください」

扉の前でクレア達を見つけた執事がいた…

そして、クレアは見る、その執事の首元にかいている汗を…

「ハ～ル～…」

「あははは。どうやら僕が特殊なだけなようですね」

ハルは、過去の経験から、汗などの自身の特定の証拠になるような物は意識的に出ないように出来ることをクレアは知らない。

執事だから、というわけでは無いが、あながち嘘をついたわけでもない。

「覚悟は…」

「出来てませんから逃げます♪」

爽やかに笑うハルの姿が霞み、クレアの前から消え去る…

「待つですのーーっっ！！！」

「待ったらただでは済まない気がしますので」

こんな光景に、屋敷の執事、メイド達は苦笑いを浮かべる。そして、『ああ…またか』と全員が思ったのは言うまでもない。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

起動六課、部隊長室

「フェイト・T・ハラオウンです。
ただいま帰投いたしました」

「フェイトちゃん、入って～な」

はやての声を確認したあと、フェイトは部隊長室へと入室する。

「ただいま」

「おかえりや。フェイトちゃん」

ニッコリと笑うはやてにフェイトは、ポケットからバルディッシュを取りだしはやてに渡す。
その表情は少しだけ固い…

「どうしたんや？　ちょっと怖い顔しとるよ？」

「大丈夫…これ、カナンと私の戦闘データ…見てほしいんだけど…」

「…わかった」

はやての心配を軽く流して、仕事の時のような低い声で淡々と話すフェイトにはやては何かを感じとり早速映像に移す…

「わぁ…また凄いことしとるなぁ…
無茶苦茶もええとこ…前より酷くなっとるんとちゃうか？」

「ここまでは良いんだけど…ここ…見て…」

絶空青龍破を放った映像でフェイトが止め、設定を切り替える…

「魔力表示…ＳＳＳランクなぁ…確かに凄いけど、サンダーフォールの雷利用したからやろ？
カナンの技は天候でえらい威力変わるし…」

はやての言葉にフェイトは黙って首を振り、さらに映像を流す…
カナンが倒れた映像が流れた瞬間、はやての表情が驚愕に固まった…

「嘘…やろ…？　フェ…フェイトちゃん？　冗談でデータ改竄なんか…」

「してない…誓っても良い…なんなら、本局に提出して確認してもらってもいいよ…
ここに表情されてるのは全部事実…

私も少し前に気になったからデータ整理した所で、まだ信じられない…」

「ほ、ほんまにか？」

コクりとフェイトが頷く…

はやての目に映っていた映像には、赤い文字が点滅していた…『ＥＲＲＯＲ』と…

レイジングハートと肩を並べる高性能デバイスのバルディッシュがである。

「こ、この後のカナンはどうやったんや？」

「この後は、起き上がって私と続きをした後、最後は気絶した…もっとも、こっちは本当に疲労とダメージが限界を越えたからだけど。

今のカナンは、一定以上の力を使えない、もしくはダメージを受けるみたい」

「ほんなら…疲労とダメージが限界を越える前に、さっきみたいな大技使ったら…」

「多分、またエラー表示が出るくらい魔力の揺れ幅が広くなると思う。ただ、本人はすぐに回復したから、抑え込む技術はあるみたい」

フェイトのこの言葉にはやては取り合えずホッとする。

抑え込み方を知らないなら、リミットをかけて前線から下げる必要があるからだ。

抑え込み方を知っているなら、最前線とまではいかなくても、援護に回れば戦力になる。

「せやけど…援護…なぁ…」

「う～ん…カナンが援護…か…」

カナンの速度が速すぎるがために妨害になってしまう可能性すらある。

さらに、本人の性格が性格…

『無策特攻型殲滅魔導師』

そんな言葉が二人の脳裏に浮かんだ…

とてもじゃないが、背中を任せる気にはなれる魔導師ではない…

「「援護…無理かも…」」

二つの溜め息が部隊長室に響き渡った…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

起動六課訓練所

訓練所では、二つの光がぶつかり合っていた…

片方は青、スバル・ナカジマ、片方は黄、エリオ・モンディアルである。

「はぁあああっ！！」

『Ｓｐｅｅｒ　ｓｃｎｎｅｉｄｅｎ』

「やぁあああっ！！」

『Ｋｍｕｃｋｌｅ　Ｄｕｓｔｅｒ』

互いにカートリッジを一発使い、槍斬撃と拳撃をぶつけ合う！
押されたのはエリオ、直撃は受けていないが、デバイスを伝う衝撃で数メートルの後退をさせられた…

「はっ！」

直後に来た回し蹴りをギリギリで屈んで回避、ソニックムーブでスバルの背後に回り込む！

「ブースト！」
『Ｓｐｅｅｒａｎｇｒｉｆｆ！』

ブースターが噴射され、刃がスバルに吸い込まれていく…が…

「この程度の力じゃ…私には届かないよ！　エリオ！！」

瞬時に全身を強化し、リボルバーナックルの片腕でストラーダの刃を受け止めるスバルがいた…
自分から強引に刃をずらし、回避…拳を振りかぶる！
エリオは、無防備になるまえにブーストを停止、カートリッジを排出、振り向くと同時に叩きつける！

「リボルバーキャノン！」
『Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ』

「ストラーダ！」
『Ｓｔａｈｌ　ｍｅｓｓｅｒ！』

衝撃！　リボルバーナックルとストラーダから火花が舞い踊る！
魔力が通っている間に互いのデバイスを何度もぶつけ合う！

激しい音が鳴り響き、つばぜり合いにて押し合う…しかし…

「うぉおおお！！」

「くっ…」

スバルの馬鹿力にエリオは顔を歪める…

ゆっくりと、刃が押し返され始めた…

やはり力では勝てないと判断…ならば、勝てるように戦うだけとエリオの中で戦術が変更された。

「フォルムツヴァイ！」

『Ｄｕｚｅｎ　ｆｏｒｍ！』

「くらぇえええ！」

サイドブースターを展開し吹かせ、強引に体を回転、拳を受け流し、スバルの背後から斬撃を叩き込む！

「まだまだぁ！」

『Ｃａｌｉｂｕｒ　Ｓｈｏｔ』

が、スバルは、流れに逆らわず倒れ込み、地に手をつきマッハキャリバーを蹴り上げる！

その蹴りは、ストラーダの刃を捉え、弾き上げた…ギュルっとマッハキリャバーが唸りを上げ、スバルの体が回転、連動しながら蹴りを放つ！

「やぁあああ！！」

「く…っ！」

左に回転しながら右、左とキャリバーシュートが叩き込まれる…
エリオは反射的にストラーダを縦に構え防ぐが、さらに回転は加速していく…
スバルの右腕に渦巻く螺旋を見た瞬間、プロテクションを展開。
ダイレクトに拳をプロテクションに押し当て、スバルが紡ぐ…その術名を…

「リボルバーシュート！！」

「ぐぅ…」

ミシミシと軋みを上げる障壁…そして…体に衝撃が疾る…
スバルのリボルバーシュートによって砕かれたのだった…
その威力を存分に発揮し、エリオの体が木の葉のように打ち上がる…

「カートリッジロード！！」

が、スバルは手応えから撃墜には不十分と判断。エリオが衝撃を後ろに飛んで逃がしたのを見逃してはいなかった…
火花を散らしながら、止めを叩き込むために空へと駆ける！
右手の先にスフィアを展開しながら突っ込む！

『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ｚｅｒｏ』

魔力が集束され、秒単位でスフィアが巨大化していく…

「フォルムドライ！」

吹き飛んだエリオも漸く復帰、刺突の構えを取り、ウンヴェッターフォルムへと変更、雷光が集束していく…が、まだエリオは満足しない…

「僕達の力は…こんなものじゃないはずだ…」

『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ…』

「撃ち抜け…雷神！」

ストラーダの刃の先に５メートルはあろうかという巨大な雷刃が出現、さらにブースターからは、六枚の翼を思わせる大噴射が行われ、エリオの体ごと飲み込む…

「一撃…っ！　必倒っ！！」

エリオの技が高威力なのはわかっている…

しかし、スバルは止まらない…

何故なら、これまで鍛えた自分の力を、デバイスの力を信じているから…

そしてそれはエリオも同じ…

勝てると信じているからこそ突き進む！

「ディバイィィン！！／サンダァァァ！！」

瞬間、エリオの姿が消失し、スバルの目の前へと出現する！！

もちろん、スバルはその速度を捉えた上で拳を放つ！！

「バスタァァァ！！／アングリフ！！」

訓練所の中心に爆煙が舞い上がり、端からは端まで雷光が疾り抜けた…

「エリオ、やるねー」

「いえ、スバルさんこそ」

「「あはははは！」」

煙が晴れると、二人はゴロリと寝転がっていた…その汚れた顔には、眩しい笑顔が輝いている。

「スバル～エリオ～お昼…って何よこれ！？」

昼食の時間となったため、ティアナが訓練所に入って来たのだが、焦げ臭い匂いに驚愕する。

「あ、ティア～、もうお昼？」

「わざわざありがとうございます。ティアナさん」

「あんた達ねぇ…いつ襲撃があるかわからないのに全力で模擬戦やるなんて何考えてるのよ！！」

「え～と…最初は軽く運動のつもりだったんだけど、エリオが…」

「スバルさん！？　やろうって言い出したのはスバルさんですよ！？」

「あはは～そうだっけ～？」

「そうです！！」

「どっちでもいいからさっさとシャワー浴びてきなさい！！」

「「了解！！」」

これ以上ティアナを怒らせると後が怖いために二人は全力疾走を開始、シャワールームへと向かった。

この二人は後に、なのはから軽くお話を食らったのは余談である。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

公園

海の音が妙に大きく聞こえる…

周囲には誰もいない俺だけだ…

「やっぱ…難しいよな…」

ベンチに腰掛け、空を見上げる…

様々な形の雲が浮かび、空を賑やかにしている…

こんなに空は穏やかなのに、俺の心は暗く雨が降りそうだ…

決意した…だから、閉じていた蓋は開けた…

どちらが大切なのか比べようとした。

でも、決められない…

いざ開けてみると、二人供…全部…好きだった…

コロコロと変わる表情、その大半は明るい笑顔だった。

もちろん、時には怒ったり、泣いたり、喧嘩もしたけれど…嫌いになったことなんて無かった…なれるはずが無かった…

内面だってちゃんと考えた…

二人供、優しくて、厳しくもあって、自分の行動には責任を持っ

ていた。
どちらの方が優しいだとか思いやりがあるだとか…そんなのわからない。
つまりは、二人を好き過ぎた…愛しくて愛しくて…苦しい…
出会った時から俺は、二人が好きになっていたのだとしたら…秤に乗せて、どちらが好きなのかなどわかるはずもない…
想いの量の桁が違いすぎた…

「俺が…決めなくちゃいけないのに…」

辛いなんてもんじゃない…痛い…心が…悲鳴をあげている。
考えれば考える程に、二人が好きになり、さらに苦しくなる…

「どうすればいいんだよ…決められねぇよ…」

ポタポタと涙が溢れてきた…
泣いてる暇なんて無いとわかっているのに…
自分の不甲斐なさに涙が止まらない…

「そんな時は…どうもしないのさ」

不意に響いた声に涙を拭うのも忘れ、顔を上げた…
柵にもたれ掛かり、真っ白なロングコートを纏い、空を見上げているジルがいた…
いつものようなバカな雰囲気は一切無い…

「人間…というのは不思議でね…
いくら悩んだ所で答えなんて出る人間は、滅多にはいないのさ…
もちろん、今のカナ吉のように、悩むのも結構だ。多いに悩みたまえ。

若者は悩みの数だけ成長出来るのも確かだ。
ただ、限度を知らなくてはならない…
深い思考の闇に捕らわれ、抜け出せなくなった時、人の心は死ぬ…
悪魔に取りつかれるのさ…そして、何かの間違いを犯す…
それが、自殺なのか殺人なのか、はたまた全く別の事をするのかはわからないけれどね。
取り合えず、人の心は消えるのだよ…
だから、そうならないためにも、悩んだ末に答えが出なくても自分を追い詰めるのではなく、一度切り替えるのがいいのかもしれないね。
これだけ悩んで答えが出ないのなら仕方がない。またいつか考えようとね。そうやって明るくなって生きていると、案外あっさりときっかけが降りてきて答えが出るかもしれない。
暗いままだと、それを見落としてしまうかもしれないから…
つまり、僕が言いたいことは自分の気持ちに気づくには何かきっかけが必要…ということだね。
それが来るまでは、悩むのは程々にして、前を向いて歩くと良い。
強く生きていれば必ずその時は来るのだから…」

ポンッと頭に手を置かれ撫でられた…
まだまだ、俺は子供なんだと実感させられてしまった…

「ありがとう…俺…頑張るから…見落としたりなんかしないように…頑張るから…」

「ああ。そうしたまえよ…

ふぅ…ちなみに僕の今日の悩みは、カナ吉が受け、攻めで例えるならどちらなのかという悩みだね！！」

感謝の気持ちやらなんやらが突風に持ってかれたみたいに飛んでいったような気がする…

「……何が？」

「何がだって？　それはもちろん僕との愛の育みだよ！！」

「ないから…」

「なんだいなんだい？　自分が恥ずかしいから言えないのかい？ならば仕方がない…僕から答えよう…」

頑張れ俺…こんなんでも耐えろ俺…

「いや…いい…」

「受け攻めで例えるなら…僕は受けだぁあああああああ！！！！！」

「やっぱりお前はアホだぁあああああああああ！！！！！」

やっぱり、ジルにまともに敬意を抱くことは未来永劫無さそうだった…

第二十二話　危機（前書き）

今回はあれ？　と思うところがあるかもですので、気になった場合はどうぞ聞いてください。答えられる範囲で答えます。

第二十二話　危機

▼▼▼▼▼▼▼▼

「んで…愛云々の話は置いといて、何でお前がここにいるんだ？」

毎度毎度急に現れ、服従しろだとか、僕の愛に答えろだとか訳のわからないことを話してはいつの間にかいなくなるジル。

今回は俺が先手を打っておくことにした。

「そんなのは決まってるじゃないか。
僕とカナ吉の…」

「愛云々は置いとけ言うとろうが！！」

「障害を越えてこそ愛は燃え…」

「上がらんつーに！！
無いから！！　俺とお前の間に愛は無いから！！
つーか、さっきの話聞いてたんならお前に傾くわけないだろうが！！」

「むぅ…ツンデレ過ぎるのも…」

「違うから」

ジルにペースを握られないためにも、先に潰しておく必要があったのだが…

「ボケ殺し…それは、信頼し合う二人の間に生まれる漫才…」

「おい…強引に解釈ねじ曲げるな…」

「つまりは！！　僕とカナ吉とで夫婦漫才をするしかないと言う神の思し召しだね！！」

「そんな神がいてたまるかぁ！
今すぐ神の座から引きずり下ろす！」

「まぁ、僕が神なんだがね！！」

「よし決めた！　ぶった斬る…じゃなくてだなぁ！！！
質問に答えろ！　何でお前がここにいるんだ！！」

危ない危ない…注意したのにペースを握られかけた…

「二人が出会うのに…理由が必要かい？」

「……真剣に殺していいか迷ってるんだが…メイデン達、呼んで良いか？」

「やれやれ、では話すとしようか…
分かりやすく要件だけ言うよ…
３０…いや、一時間はこの公園から出てはいけない。
カナ吉、わかったね？」

先程と同じく遊びの雰囲気が消え真剣な表情で翠の眼が俺を真っ直ぐに見つめていた…
勢いで頷いてしまいそうになるがなんとか止める…

「何でだよ？」

「……実はだね…このベンチには伝説があるのだよ…座った人間は、恋が実らずに終わると言うね…
でも、大丈夫さ。一時間の間、この公園の敷地から出なければ何も起きない。だから、出てはいけないよ？」

「それ…嘘だろ…」

いくら何でもそんな今の俺にピンポイントな伝説はあり得ない。

「嘘だと思うなら公園から出てみればいい。
後悔するのはカナ吉だろうけどね…」

やれやれふ～などと言いながら、ジルは踵を返して去っていく…
なんかアイツがこんなにあっさりひくとちょっと怖い…

「本当に一時間なんだな？」

瞬間、ジルがバッと振り向いた…
会心の笑みを浮かべている。
その笑みは、俺が女なら間違いなく惚れただろうけど、生憎、男なため、胡散臭さが増しただけだった。

「ああ、もちろんだとも！！
ふふ…やはりカナ吉も…」

「言っとくが、断じてお前に対しての愛なんかでは無いからな」

「そうかい…あと一押しといった所だね！！」

「一押しされようが二押しされようがお前には惚れねぇよ！！」

「はっはっはっ！　アディオース♪」

「聞いてんのかてめぇえええええ！！！！」

叫ぶが、ジルはスキップをしながら上機嫌で去っていった…

「ったく…久し振りにゆっくり空でも見るか」

ベンチにもたれ掛かり、見上げた空は相変わらずの穏やかな晴れ。
何も変わらない空なのに、何故か先程の空よりも綺麗に見える。

「きっかけ…か…」

いつ訪れるかわからない物を見落とさないように頑張らないとな。
ボーッと空を見上げつつ、そんなことを思った。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

デパート出口付近

「えへへ♪」

「ヴィヴィオの強運には驚くわね…」

私の横でヴィヴィオが熊のぬいぐるみを抱き締めながら上機嫌で歩いている。

ウィンドウショッピングで時間を潰していた時にたまたま福引きをやっていたから試しにやってみたんだけど…
見事にヴィヴィオが熊の人形（四等）を引き当ててしまった。

「福引きで狙った賞品あてるなんて中々出来ることじゃないわよ？」
「べ…別に欲しかったわけじゃないよ？」

「嘘つかないの。熊しか眼中になかったクセに…
しかも、さっきまで満面笑顔で熊を抱き締めてたのは誰よ？」

「えと…熊さん…可愛いよ？」

「……」

熊をキュッと抱き締めて私を見つめるヴィヴィオ…
私に言わせれば熊ごときよりアンタの一挙一動が可愛すぎるのよーー！！！
っと思いきり叫びたいが、グッと堪えた。

「祐希ちゃん？」

「ふぅ…何よ？」

「お人形さん…これ以上は祐希ちゃんに迷惑かな…」

「バカね」

確かに、祭りの一件で三体の人形が追加され、さらに熊が追加されるとなるとそれなりにスペースを取るけど…

「人質が増えて便利だから気にしないわ♪」

「ええ！？　ダ、ダメだよ！
人質にするなんてお人形さんが可哀想だよ！
お人形さんは私が守るもん！」

「勝手にすれば？」

ヴィヴィオに対しての人質だしね♪
これから楽しみが増えそうね～♪

「祐希ちゃん、何笑ってるの？」

「べっつに～♪」

「？」

「先いくわよ」

首をかしげているヴィヴィオを置いて先に歩くと、トテトテと効果音が聞こえて来そうな足取りでヴィヴィオが着いてくる。

「祐希ちゃん待って…わっ！」

「あっ！」

ヴィヴィオがつまづき、転がりそうになる。　助けようと手を伸ばすが届かない…
倒れるヴィヴィオの体、しかし、その動きが急に止まった。
ゆっくりと直立の姿勢に戻る。

「足元は注意をしなければ危ないですよ？」

「ハ、ハルさん…ありがとうございます」

「いえ、お怪我は？」

「大丈夫です」

ヴィヴィオを助けた人物はハルだった。

相変わらずの笑顔。というより、この顔以外はほとんど見たことが無い。

「ヴィヴィオ様～大丈夫ですの？」「ん？　あれは…」

「クレアちゃんだね」

十メートルくらい先からクレアが走ってきた。

「ハルがいきなり走り出したからびっくりしたですの」

「すいません。つい体が反射的に動きまして」

「構わないですの」

ハルが持ち場を離れたことより、友達を助けてくれた方が嬉しいみたいね。

「クレアちゃんもハルさんもお買い物？」

「というよりは…ヴィヴィオ様と祐希奈様と…」

成る程、暇だからハルに私達を探してもらったわけか…
で、いざ言おうとすると、慣れてないからどもるってとこね。

「ほら、なにやってんのよ?
私達と遊ぶために来たんじゃないの?」

「よろしい…ですの?」

「もちよ♪　さぁ、一之瀬祐希奈プレゼンツ、ヴィヴィオＶＳハル。
底無し体力はどちらか決定戦の始まりよ♪」

「え…え?」

「ヴィヴィオ様、負けませんよ…」

「ほ、ほんとにやるんですか!?」

「ノリです♪」

「二人とも頑張るですのー!」

「流石ね…ハル…」

「執事ですから♪」

「関係あるの!?」

ビシッと私とハルが親指をつきだす。

いや～ここまでノリ良いとテンション上がるわね♪

「レディィー…」

「な、何!?　何をすれば良いの!?」

「それは…自分の魂に聞くのですよ♪」

「ええ!?」

私達の訳のわからない発言に、ヴィヴィオが混乱し始めた。
漫画とかなら、目が渦巻いている所が容易に想像できる。

「ゴー♪」

「ふぇえええ!!!」

「あはははは～」

「二人とも速いですの～♪」

最終的に混乱したヴィヴィオは半泣きで全力ダッシュ。
ハルも爽やかに笑いながら走っていく…
１００Ｍタイム、９秒強を叩き出す速度を出しつつも二人は人にぶつからない。

「ターン♪」

「ふぇえええ!!!」

「あはははは～」

「凄いですの～♪」

私の声に即座に反応、全身のバネをフルに使い、急停止、折り返す。

物は試し、ということで…

「わぁあああん！！」

「ほら、ヴィヴィオ、おいで♪」

ガッバァアアア！！

広げた腕にダイビングをするようにヴィヴィオが飛び込んできた。

弾丸と化したヴィヴィオを受け止めるために、魔力で身体強化、ガッチリと受け止め、良い匂いのする頭を撫でる。

「えぐ…えぐ…ふぇえええん！！」

「よしよ～し♪

もう大丈夫よ～。私がいるからね♪」

「祐希ぢゃーーん！！」

「あははは。感動のシーンですね～」

「ですの♪」

私は泣きつくヴィヴィオの頭を撫で続けた。

こんな可愛い妹がいたなら、間違いなく私はシスコンになってい

たに違いない。

「よく頑張ったわね。
ご褒美にパフェを食べに行きましょうか♪
もちろんハルの奢りで♪」

「うん！　うん！！」

「そこに良さそうなお店があるですの♪」

「おや、僕に拒否権は無しですか？」

「ヴィヴィオを泣かした罪は重いのよ♪」

「ふふ…わかりました。
では、僕が悪いということで。
行きましょうか？」

「「は～い♪」」

「うん♪」

ヴィヴィオ、クレアと手を繋いで近場の喫茶店へと行くことになったんだけど、ハルが少し止まって空を見上げる…
二人を先に行かせて話を聞くことにした。

「どしたの？」「あぁ…いえ、カナン君がいないなと思いまして」

「能力使えば？」

「それが、何処かの密室にいるのか、姿が見えないのですよ…」

「密室って…」

部屋閉めきってなんかしてるのかしら…

部屋の窓が閉めきってるなんて、空好きのカナンには考えられないんだけど…

「公園にいたはずなのですが…僕に見られたくない話があって移動したのかもしれませんね」

「まぁ、カナンも今は大変だろうし…

私が言うのもなんだけど、気が向いたら相談に乗ってあげてよ」

「僕はそちら方面の話は苦手なのですが…」

「ハルはパーフェクト執事でしょ。お願い」

「やれやれ…努力はしてみます」

「ありがと♪」

「祐希ちゃーーん！」

「ハーールーー！」

少し先でヴィヴィオとクレアが催促している。

私達は同時に苦笑を浮かべて歩き出す。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

本局の遥か上空に三つの姿があった…
二人は女性、うち一人は、細身の長剣を腰に帯び、眼を閉じ青筋を浮かべながら浮いている。
格好としてはシグナムの髪が青い姿に近いもう一人は、ハルと戦ったチャイナ服、緑の短髪の女性。こちらも青筋を浮かべている…
ただ一人、静かに立つ黒い長髪の男性、背中には１M程の片刃の黒い剣…

「あ～もう！　あのカスドも…私をこんなに待たせるなんて後でしばいてあげますわ！！」

「手伝うわよ…」

「……」

ちなみに、前者が青い長髪の女性、後者が緑の髪の女性、最後が男性である。
ガミガミと口喧しい女性二人に、男性が遂に口を開いた…

「貴様ら…静かにしないなら殺す…」

「戦闘の時には一番やかましい貴方にいわれたくありませんことよ」
「我にとっては戦場こそが我が住みか…」

「あ～はいはい。ど～でもいいから早く連絡とってくんない？」

「……交信開始」

男性は念話を飛ばす…多次元にいる存在へと…

（まだか…）

（こっちだって探してんだよ！！
たくっ殺り合いに来たってのによぉ…
魔力反応がちっともねぇ…
おい、魔力量だけなら一発でわかるレベルじゃなかったのか！！）

（そのはずだ…）
（わからないからいってるんだっつの！！
槍と犬の野郎共が探知が得意だってっから連れてきてやったのに、
使えねぇ…）

（其奴らで発見できぬのなら誰にも見つけることは出来ぬ…）

（あぁ！？　冗談じゃねぇ！！
けっ！　殺り合いが出来ねぇんなら俺は帰るぜ！！）

（あ…／いたぞ…）

（何ぃ！？）

その念話を聞くやいなや、男は念話を遮断、ギラリと眼が光る…

「ククク…さぁ…楽しみだなぁ…
何人殺せるかなぁ！！
はーはっはっは！！！」

「やっときましたのね」

「ふふ…漸く…運動が出来るわね」

三人の人影は、ゆっくりと本局へと降りていく…

少しでも多くの管理局員に' 見つかる' ために…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

公園

「そろそろ…か…」

時計は、５５分を回った所、後、数分で、伝説の効力が切れる…

ってか…あったのかはわからないが…

「ん…」

首を捻るとコキリと言う音…そして…

ガシャーンっという何かが割れたような音が公園に響く…

「な、何だ!?」

「およ?」

「あれは…」

公園の入り口で小さい黒い物体がキョロキョロと周囲を見渡している。

確か、前に会ったような気がする…

「なんじゃ、結界が張ってあるから中で戦闘をやっとるのかと思う

たのにハズレではないか…」

「あ、黎華だ！！」

「む？　おお！！　お主はカナンじゃったな？」

名前を呼ぶと、にぱーと笑いながら走ってこっちにやって来た。

「お前、危ない…」

「へぶっ！！」

遅かった…顔面からびたーん！　と地面に突っ込んだ黎華…

時計を見ると、一時間は立っていたので、助けに行くことにした。

「大丈夫か？」

「儂を誰だと思うておるのじゃ！！」

「…子供」

「ガーーン！！」

へなへなと崩れ落ちる黎華。

なんともからかい安い奴だった。

「冗談だ。で、何しにここに？

ハズレとか聞こえたような気がしたけど」

「それは儂が聞きたいことじゃ。

何故、このような結界の中にお主がおるのじゃ？」

「結界？」

そんなのを張った覚えは無いし、違和感も全く感じなかった…

「知らぬのか？」

「全然」

そういうと、黎華はそうかとだけ頷き、眼を閉じる…

「おぉ！！　向こうの方が楽しそうじゃな♪」

「は？」

結界なんかのことを忘れたように、黎華のテンションは上がっていく…

そして、魔法陣が展開され輝く…

ミッド式、ベルカ式が複合された魔法陣を取り巻くように三重円…全く知らない魔法陣…

「おい！！　どこに行くんだよ！？」

「ミッドチルダじゃ♪

向こうが面白そうなのでな？

あ、ついでじゃから教えておくがの、こちらに三人程お主を標的に来る者がおる。

気を付けておけ。ではの」

「はぁ！？　それって…おい！！」

残光を残しながら黎華の姿が消失…

一応確認のために魔力を探ろうとして…やめた。

探るまでもなく、三つの巨大な魔力がこちらに急接近している…

「メイデン！　レナス！」

「な、何だ！？」

「主！？　どうされたのですか！？」

かなり急に呼び出したので、二人が驚いているが、説明する暇もない！

「説明は後だ！

騎士甲冑、急げ！！」

「…ああ！」

「了解しました！」

素早く状況を理解した二人は、デバイスモードへと変わり、俺の手に収まる…

「メイデン…セットアップ！！」

『起動！！』

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

騎士甲冑を身に纏った瞬間に前方に空間突破で駆ける！
今さっきまで立っていた所に雷光が降り注ぎ、爆発を起こした…
さらに、周囲に炎で作られた犬のような物体が現れる…

「だぁああ！！」

幸い、強度は低く、一太刀で斬り払えた…
しかし、目の前に巨漢が現れ、巨大な炎剣を振りかぶる…

「くっ！」

剣を持ち上げ、眼前に構えた瞬間、猛烈な衝撃と、灼熱の業火が襲い来る！

「おらぁあああ！」

力では勝てないと判断、自分から飛び、飛行魔法で静止をかけるが、止まらない…

「ちっ！」

剣を地面に突き立て、無理矢理に停止、納刀して次に備えた…しかし、来ない…

「やるじゃねぇか！！
パッと見ヒョロイから終わるかと思ってたぜ」

と極剣、全身真っ黒、なもじゃ髭男が豪快に笑いながら言った…

「油断は禁物だ…」

と、槍を持つ仮面を被る短髪、ツンツン白髪の小柄な男が注意する…

「加減などしていい相手じゃないですよ?」

と、眼鏡をかけたストレートヘアー赤髪の…どっちだろうな…

まぁ、さらに注意した。確実に分かることはコイツらが全員、俺狙いであること、強いこと…

「お前ら…誰だ…」

相手は構えてすらいないが、状況は三対一…油断など微塵も出来ない…

警戒しながら、取り合えずは尋ねる…

「それを俺らに聞いて答えると思うのか?」

「いや…一応、嘱託魔導師だから聞かなくちゃならないだけだ…答えが帰ってくるなんて思ってねぇよ…」

「エクスカリバーを渡すなら、教えてやるよ」

ニタニタと笑いながら男が言った…

アレは…完全に教える気など無い…

「渡したら…丸腰の俺を殺すってとこか…」

瞬間、目視すらギリギリの速度で雷光が放たれる!

予め待機させていた空間に入り込み回避、俺の周囲を炎犬が取り

囲む。
　噛みつかれる寸前で上空に空間を繋げ、包囲を抜ける…すぐ後に爆発音が鳴り響く…
　そんなことよりも、今は目の前の方が問題だ…

「さっきの答えだがな…正解だ…
まぁ…長いか短いかの違いだけだがな…」

　声が目の前の男から放たれた…
　雷光も炎犬も、この一撃のためだけに放たれた囮だった…
　規模が大きすぎるが…

「死ねよぉ！！」

　直撃すれば、即死確実な極剣を剣を掲げ受け止める…
　レナスとのユニゾンがギリギリ間に合った…

「ほぉ…止めたか…だがな…
ぼちぼち…行くぜ…レーヴァテイン！！」

「なっ！」

　極剣に纏われていた炎がさらに巨大に膨張していく…

「ぶっ飛びな！！」

　その言葉の後…俺は灼熱の業火へと飲み込まれていった…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

遊んでいた一同は、襲撃と同時に察知、二班に分け、出撃していた。
クレアとハルは、百体にも及ぶ銀の人型と対峙していた…

「今回はかなりまずいですの…」

「はい…まさか…カナン君が結界の中にいたとは…気づきませんでした…」

風を遮断し、中の生体反応を消せる結界を一瞬で張れる人物がいるとはハルは思っていなかった…
故に、カナンの発見が遅れ、今の今まで楽しく遊んでいた…
その結界が破壊されたと同じくして屋内からの転移魔法でカナンを襲撃した三人の人間…
同時、人型が街中に現れ、足止め…
完全に後手に回ってしまっていた…
唯一の救いは、人的被害が出なかったことくらいである…

「カナンは…大丈夫…ですの?」

「わかりません…
彼は今、完全に制御出来るのは四割と言っていました…
恐らく、今の彼では勝てません…
ヴィヴィオ様達が間に合えば、なんとかなるかもしれません…」

下手をすれば、ヴィヴィオ達ごとやられてしまうかもしれない…

「何でハルが行かなかったのですの…」

「あの中で、最速なのは間違いなくヴィヴィオ様です…

必然的にヴィヴィオ様は救出チームは確定
お嬢様は、広域型ですからこちらです。
後一人ですが…祐希奈様は集団相手に有効な魔法が少ないですし、
また、祐希奈様の体格ならば、ヴィヴィオ様が高機動魔法で運べますから…」

その言葉を最後に、ハルはゆっくりと拳を握りしめる…
人型達も冷徹な殺意を放ち始めた…

「わかったですの…
取り合えず…この雑魚を壊滅するですの…」

「僕が突っ込みます…
お嬢様は砲撃が溜まりしだい、僕に構わず撃ち込んでください」

「どうなっても知らないですの…」

「自分の身くらいは…自分で守ります！！」

瞬間、ハルは単体で百体を越える人型の集団へと突っ込んだ！

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

空を飛ぶ…ただひたすらに…一心に…少年の身を案じながら…

「嫌だ…嫌だ！　嫌だよ！！」
『Ｂｕｒｓｔ　ｍｏｖｅ！』

『ヴィヴィオ様…ミスを犯した僕が言うのも腹正しいでしょうが、
聞いてください…なるべく急いで下さい…

いくら彼とはいえ、ロストロギア持ち三人相手は荷が重すぎます…
最悪……ですが、貴女方が間に合えば、助かるかもしれません…
カナン君が…まだ…生きていたのなら、短距離でもいいです…転移してください。絶対に戦ってはいけません…カナン君は確実に大怪我をしています。
三対二では、無理です。
全力で逃げることを考えて下さい』

ハルさんは言った…非常に危険だと…間に合わなければカナン君は……

「そんなの嫌だぁあああ!!」

風の集束が無茶苦茶過なせいか速度が変わらない…
もっと速く…速くしないといけないのに!!

「ヴィヴィオ、落ち着きなさい…」

手を引いている祐希ちゃんからそんな声が静かに響いた…

「でも…でも!」

「カナンを信じてあげなさい…
アイツは、二回も約束破る男じゃないわ」

約束…カナン君はどこにもいかないと言った約束…
『死なねぇよ…二回も約束破るわけにはいかないからな…』

前回の襲撃の時に今度は守ると言ってくれた…
祐希ちゃんの言う通りだ…

私達が信じてあげなくちゃいけない…

「落ち着いた？」

「うん…ありがとう…
行くよ…フェアリー！！」
『Ｉｇｎｉｓｉｏｎ！』

みるみる景色が変わっていく…
さっきまでの速度が嘘のようだった…

「その調子♪」

「うん！！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

機動六課

「なんでや…グングニルはこっちやろ…っ！」

はやての部隊長室のモニターには、燃える本局が映っていた…
死傷者多数のテロップが流れ、さらに苛立ちが募る…
既に指示は出した隊長陣全員と回復魔法が使えるシャマルとキャロ、他のメンバーは六課の護衛として残ってもらった。

「何で本局に…狙われるだけやろ……まさか…まずい！！」

本局、そこは、最重要拠点…
襲撃されれば、どの部隊も動かねばならない…

全ての眼が、本局へと向けられ、他の世界のことなど抜け落ちる…

「シャーリー！　大至急地球をうちのモニター映して！」

『ち、地球ですか！？　…嘘…』

「やっぱり…っ！」

はやてのモニターにはカナン達では無い魔力反応が三つ…その全てがカナンの所に集まっていた…

「シャーリー！」

『わかってます！　カナン君の映像…でます！』

「……」

映像を見たはやての表情が固まる…

その映像には、血だらけで剣を杖がわりになんとか立っているカナンが映っていた…

「あかん…まず過ぎる…」

今、地球に行ってくれる人員などいない…

個人転送で行くにしても、魔力消費が激しく、下手をすれば足手まといになる可能性がある…

転移ポートまでの道は…人型が防いでいた…

「最初っからこれが狙い……」

機動六課は、かつて無いほどのピンチを迎えていた…

Ｓｅｅ　ｙｏｕ　ｎｅｘｔ　ｔｉｍｅ

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

メイデン
「人気投票結果発表～」
一同
「わぁ～♪」
デフォ
『いやぁあああああああ！！！
そこはサッパリなんてならないってぇえええ！！
無理無理無理無理無理いいいいいいいいい』
ＪＫシオン
「ほ、ほら…ヴィヴィオ、始まったから、な？」
ヴィヴィオ
「まだまだ…だよ…」
ＪＫシオン
「いや…ヴィヴィオさん…そろそろ許し…あーーーーっ！！！
鷹！？　何故に鷹ぁあああああああああああ！？」
ヴィヴィオ
「あはは…道場にいたから…」
ピキャー！

ＪＫシオン
「痛っ！　き、傷口を抉るな！！
え…あ…まさか…」
ヴィヴィオ
「続き…やろうか…

次は…殲滅砲撃避けだよ…（バリアジャケット無し）」
ドゴーーン！！

ＪＫシオン
「いぃぃあああああああああああああああああ……」

ガク…

祐希奈
「さぁて…こっちも続きといきましょうか…」カナン
「無理！　無理ぃぃぃあああああああああああ！！
届いたケーキもたないでぇえええええええ！！！！」
祐希奈
「大丈夫…甘く無い…ケーキだから♪」

ガボッ！

カナン
「ぴぎゃあああああああああああああああああ！！！！
かれぇえええええええええええええええ！！！」

ガク…

ＪＫシオン
「カ、カナン…」
ヴィヴィオ
「次は何がいいかなぁ…」

ペラペラ…

ＪＫシオン
「そのメモ帳…何すか…」
ヴィヴィオ
「タカトから貰った…『これがあれば貴女も立派なシオンマスター！　神庭シオン拷問方一覧メモ帳』だよ？」
シオン
「何をわたしとんじゃバカ兄ぃいいいいいいいいいい！！！」
ヴィヴィオ
「何がいいかなぁ…」
ＪＫシオン
「ちょい待ち！！　俺がケーキを作るから、それで手打ちにしてくれないか？」
ヴィヴィオ
「う～ん…厳しくいくよ？」
ＪＫシオン
「う…具体的にはどのレベル？」
ヴィヴィオ
「タカト」
ＪＫシオン
「……みもりくらいは？」
ヴィヴィオ
「さて…続きはと…」
ＪＫシオン
「やります！！　やらせて頂きますともタカ兄ぃに並ぶケーキをつくってみせらぁああ！！」
ヴィヴィオ
「頑張ってね♪」
ＪＫシオン
「うぉおおおおお！！！」
祐希奈

「さて、シオンも壊れた所で、人気投票結果発表～～♪」
一同
「わぁ～～♪」
ＪＫシオン
「とりあえずクリームの味見を…」
ヴィヴィオ
「雑。やり直しだよ」
ＪＫシオン
「めちゃくちゃ厳しい！！」
メイデン
「まぁ、それだけヴィヴィオの怒りは深いと言うことだな」
レナス
「さて、遂に発表ですが…主は…」

ピクピク…

レナス
「Ｂｒａｖｅケーキ…予想以上に辛かったようですね…」
祐希奈
「味覚潰れたんじゃないかしら」
ヴィヴィオ
「え、えと…発表です！」
祐希奈
「現実逃避ね…」

第一位　高町ヴィヴィオ　２１Ｐ
人気理由『天然万歳！！
一生懸命頑張ってる所が萌える！』

ヴィヴィオ

「わぁ～♪　たくさんだぁ♪」
祐希奈
「また、凄い量の投票ね…」
メイデン
「海鳴の影響かわからないが、新読者さんもかなり増えたからな」
レナス
「さらに今回は三人まで可でしたから…」
メイデン
「一人で良かったのではないか？」
ヴィヴィオ
「それにしても、人気の理由が天然万歳って…私は普通だと…」
祐希奈
「普通な奴はこんなに人気は出ないの」
ヴィヴィオ
「うぅ…あ、また萌えだって。
ねぇ、萌えって何かな？」
祐希奈
「広辞苑で調べて…私には答えられないわ…」
ＪＫシオン
「このクリームでどうだぁ！！」
ヴィヴィオ
「確かに立ってるけど、固いよ。
空気を上手に入れなくちゃ。
やり直しだよ」
ＪＫシオン
「ちくしょおおおお！！！」

祐希奈
「ゲストなのに話せてないわね」
ヴィヴィオ

「ケーキには妥協しないもん」
ハル
「それでは、第二位です♪」

第二位　メイデン　１８Ｐ
人気理由
『メイデンは我らが神！
理由なんていらんやろメイデンやから』

メイデン
「私か！？」
レナス
「メイデン、おめでとうございます」
ヴィヴィオ
「メイデンって神様なの？」
メイデン
「私は神様だったのか！？」
カ・ＪＫシ
「あり得ねぇからぁあああ！！！」
ヴ・祐
「……」

ゴオオオオ…

カ・ＪＫシ
「すいません…でしゃばりました…」
ヴィヴィオ
「特にシオン君は、ケーキ作るまで帰してあげないよ…」
ＪＫシオン
「カナン…手伝ってくれないか？」

カナン
「仕方な…」
ヴィヴィオ
「ダメだよ。カナン君は関係ないもん」
カナン
「だとよ」
シオン
「くそぅ…師弟揃って厳しい過ぎる…」
祐希奈
「さて、シオンが去った所で、続きよ。はぁ…メイデンに負けるなんてね…」
ハル
「いえいえ、実は…」

第二位　一之瀬祐希奈　１８Ｐ
人気理由
『やっぱりカナンいじめ！！　ＫＤＧ最高！キスシーンが良かった！！　萌えた』

ハル
「土壇場で１Ｐ獲得されまして、同率二位となりました」
メイデン
「祐希奈、流石だな」
祐希奈
「ありがと♪　でもやっぱりメイデンは凄すぎるわ…」
メイデン
「何がだ？」
レナス
「出番は少なめですが投票は凄まじいですから」
メイデン

「人気理由はよくわからないがな…」
祐希奈
「作者の友達だからそんなもんよ」
J

ダダダッ！！

ＪＫシオン
「これで！！」
ヴィヴィオ
「スポンジが固すぎるかな」
ＪＫシオン
「くっそぉおおおお！！！」
カナン
「これ…今日中に終わるのか？」
カナメ
「気にしない方向で行きましょう♪
さて、第四位です♪」

第四位　風間カナン　１５Ｐ
人気理由『ぶっとび漫才最高！！
戦闘と普段のギャップがいい！！』

カナン
「喜びたい…喜びたいけど…なんだこの理由はぁ！！
ぶっ飛ばすぞてめぇら！！」
祐希奈
「まぁ、カナンの存在価値なんてそんなもんよ♪」
カナメ
「公認ぶっ飛びキャラとして、これからも頑張ってください♪」

カナン
「お前らさえ…お前らさえ真面目だったなら！！」
ハル
「まぁ、大してかわりは無かったでしょうね」
カナン
「なんか俺もそんな気がしてきた…」

ズーン…

メ・レ
「マスター…／主…」

ダダダ！！

ＪＫシオン
「こ、これでどうですか…」
ヴィヴィオ
「トッピングが雑だよ」
ＪＫシオン
「ふぉおおおおおお！！！」
祐希奈
「流石にちょっと可哀想になってきたわ…」
ヴィヴィオ
「まだまだ…だよ♪」
一同
（一番怖いのはヴィヴィオだ…／ですね）
クレア
「どんどんいくですの～♪
ここからは激戦区ですの…」

第五位　朱皇千春　１４Ｐ
人気理由『なのはＳＳに存在せし○執事、これからも頑張れ！
カナン、タカト、大変だろうけど、二人の相棒として頑張れ！！』

ハル
「おや、僕ですか」
メイデン
「少し前まではマスターと並んでいたのだがな」
レナス
「直前に入った一票の差でこうなりました」
祐希奈
「人気の理由がまた特徴的ね」
ハル
「黒○事ですか…セバス○ャン様には敵わないと思いますが？」
カナン
「いやいや…」
ハル
「あくまで執事ですから♪」
カナン
「お前がその台詞を使っちゃいかんだろ！！」
ハル
「あははは。お気になさらず♪」
カナン
「するっての！！　作品存亡がかかってるんだぞ！？」
祐希奈
「今更、カオスを止める気は無いわ！！
寧ろ、この作者はカオスを誇ってるから末期ね！！」
カナン
「カオスを誇るなぁあああ！！」
祐希奈

「てぃ♪」

ガボッ…

祐希奈
「キュウリ、美味しぃ？」
カナン
「ふごぁああああああああああ！！！！　いぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃあああああああああああ！！！」

ドサッ…

クレア
「カナンのキュウリ嫌いも、ここまで来ると病気ですの…」

ダダダ！！

ＪＫシオン
「お、お許しを…」
ヴィヴィオ
「ん～…もっと甘くして欲しぃな？」
ＪＫシオン
「……」

トボトボ…

メイデン
「さ、さて、続いては二人同時に発表だ！」

第六位　レナス　１３Ｐ

人気理由『まさかの蟹好きにびっくり、でも、かにかにコールが可愛いから逆に良いかも！！』

第六位　ジル・ローディアス
人気理由『何度見ても笑える！
表と裏の人格が違いすぎて気になる奴』

レナス
「あ、ありがとうございます！」
ジル
「ふぅ…僕を一位にしないとはね…
僕として…」
カナン
「レナス…なんでもう一票集めてくれなかったんだよ…」
祐希奈
「レナスとジルが同立なんて納得がいかないわ！！」
ジル
「そうとも！　僕はもっと上に…」
カ・祐
「黙っとけド阿呆がぁあああ！！」

バキャアアア！！

ジル
「…そうか…これは、俗に言う好きな子…」
カ・祐
「死ね！！」

ドゴッ！　バキ！　グシャリ…

ジル
「ぐっふう…流石…世界が認めるツン…」
メイデン
「グランド…」
レナス
「ウォール！」

ゴゴゴゴ…

ジル
「むぐぅうう！」
カナン
「静かになったとこで次だな。
八位も同立だ」

第八位　神庭シオン　１１Ｐ
人気理由『カナンとシオンは二人で一人前なんだろ？
ヘタレオン…君は…君は…グッジョブ！』

第八位　鷹月カナメ
人気理由『前書きの黒さが好き！
カナンと別人格というところがＥー！』

ヴィヴィオ
「シオン君、八位だよ？」
ＪＫシオン
「へ？　俺１０位じゃなかったのか？」
カナメ
「それが、外部キャラもＯＫにした所、新たに入ったんですよ」
ＪＫシオン

「と、いうことは、１０位は…」

第十位　白姫クレア　１０票
人気理由『まさかの１３歳巨乳…ロリ巨乳好きとしてはたまらん』

クレア
「外部キャラに負けたですの…」
ＪＫシオン
「ま、まぁ、俺はちょっと特殊だし…そんなに落ち込むなよ」
クレア
「女装なんてしてる変態に負けちゃったですの～！！！」
カ・ＪＫシ
「ぐっさーーーーーーー…」
カナン
「変…」
ＪＫシオン
「態…」
カ・ＪＫシオン
「変態ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ…はーはっはっは！！！　イヤッハァアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」
祐希奈
「壊れたわね…」
ヴィヴィオ
「シオン君、ケーキは？」
ＪＫシオン
「俺にかかればぁ…ケーキなんぞちょちょいのちょいのちょいのちょいだぜべいべーー！！」
カナン
「ブラウニータカトがなんぼのもんじゃーい！！

すぐにこえたらぁあああああ！！」
ＪＫシオン
「行くぜ！」
カナン
「イェッサー！」
カ・ＪＫシ
「我ら！　変態ブラザース！！
はーはっはっは！！」
ヴィヴィオ
「こ、怖いよ…」
メイデン
「マスター！　シオンさん！」
レナス
「お気を確かに！！！」
ハル
「お嬢様、精神的に限界だった二人に変態は少々きつかったようです…」
クレア
「二人とも…ごめんなさいですの…」
祐希奈
「あ～…サブ＆ａｍｐ；外部キャラランキングでも見てちょっと待ってて？」

サブ＆ａｍｐ；外部キャラランキング

第一位　神庭シオン
第二位　センセー　５Ｐ
第三位　ルミオ　３Ｐ
第四位　神代銀杏、神代零、草薙翔　２Ｐ
第八位　橘美鈴、白河神楽、対の存在、盾持ってた奴

カ・ＪＫシ
「ふはははははははははははははははははは！！！
変態ブラザースに敗けはない！！！」
ヴィヴィオ
「シ、シオン君、許してあげるからケーキはちゃんと作ろうね？」
祐希奈
「消し炭何個作る気よ…」
ハル
「後の掃除が大変そうですね…
タカト、僕でも全ては不可能みたいです…
元凶の二人の暴走が止まりません…
なるべく掃除しておきますので…」
カナン
「伊織のブラウニーが」
ＪＫシオン
「なんぼのもんじゃーい！！」
カ・ＪＫシ
「はーはっはっはっはっはっは！！！！」
メイデン
「…取り合えず終わろうか…」
レナス
「作者さんのお友達の皆さん、たくさんの投票ありがとうございました」
ヴィヴィオ
「そして読者の皆さんも前回を越える票数、本当にありがとうございます」
祐希奈
「本編は珍しく鬱になりそうだけど、こっちはこのままだから、息抜きとして楽しんでね」

クレア
「それでは皆様」
一同
「また次回〜♪」
カ・ＪＫシ
「伊織タカトが…ん？　ひぃいいいいいいいいいい！！！」
ゴオオオオオ…
ブラウニー
「絶…天…衝ぉおおおおおお！！！！」
カ・ＪＫシ
「ふごらはぁぶへぇえええええ！！！！」
ドサッ…
終幕…

第二十二話　危機（後書き）

「自分が傷つくのは良かった　　変わりに守れるものがあるから　　ただ、人が傷つくのは嫌だった…　　いろんなことから守りたかった。だから力を欲したのに…手にしたのに…」

第二十三話　守るために　（前編）　（前書き）

あり得ません本格的なバトルにすら入れませんでした…
恐らく、次話の文字数…やばいです…　では、どうぞ。

第二十三話　守るために　（前編）

祐希奈
「はいは～い。恐らく三部構成になりそうなダークネス物語を破壊する勢いでカオスを広める司会一之瀬祐希奈です♪」
ヴィヴィオ
「ほ、本編を壊しちゃダメだよ？」
ペンキチ
「ピューイ」
カナン
「…あえてスルーでお願いします」
ペンキチ
「ピューイ！」

ガツッガツッ

カナン
「痛っ！　ごめんなさい！　スルーしてごめんなさい！」
メイデン
「動物にまで謝るのか…」
レナス
「まぁ、あの大きさですから無理もないかと」
ジル
「はっはっは…」
祐希奈
「ウィングビット、やっちゃって」

ヒュンヒュンヒュン！

ジル
「僕こそが…」
祐希奈
「ヴァルキリーフルバースト…ゴットストライク…」
チュドーーン!!
ジル
「ジル・ローディアス〜……」
キラーン…
カナン
「容赦ねぇなオイ…」
ヴィヴィオ
「祐希ちゃん、いつのまに翔さんの技覚えたの?」
祐希奈
「あ〜これ? 翔さんから飛んできたウィングビット改造して使ってるだけよ♪」
メイデン
「い、いいのか?」
祐希奈
「私が世界の中心だからね♪」
カナン
「助けてください!!」
祐希奈
「はいはい黙ってましょうね〜♪」
ヒュンヒュンヒュン…チュドーーン!

カナン
「ぎゃあああああああす！！」

パタリ…

祐希奈
「あははは～♪　本編出番多いからって調子乗んなよボケ♪」

チュドーン！　チュドーンドッゴーン！

カナン
「いぎゃあああああああああ！！」
ヴィヴィオ
「ゆ、祐希ちゃん、カナン君が死んじゃうよ！」
祐希奈
「心配ないわよ。こないだので生きてるんだから」
メイデン
「姉さん…連鎖を断ち切ろう…」
レナス
「…質問コーナーです！
『レナスの蟹好きは何故ですか？』
はい？　私ですか？」
祐希奈
「そういえば、理由って何よ？」
ヴィヴィオ
「ちょっと私も知りたいな？」
レナス
「何故…と言われましても…可愛いから…ですが？」
カナン
「その可愛いからが…」

祐希奈
「黙れ外道♪」

ヒュンヒュンヒュン！

カナン
「…俺？」
祐希奈
「ファイアーーー♪」

チュドーーン！！

カナン
「……」
ヴィヴィオ
「じゃ、じゃあ何で食べるの？」
レナス
「美味しいからですが？」
祐希奈
「はい、読者さんのために結論を纏めると、感性は人それぞれってことでよろしく」
メイデン
「姉さんはちょっと特殊なんだ…」
カナン
「イグアナ好きなお前が…」
祐希奈
「あは♪」

ヒュンヒュンヒュン…

ルミオ
「俺達！　T」
ＪＫシオン
「K」
クラウ
「お…O」
祐希奈
「消え去れカス共♪」

チュドーーン！！

ＴＫＯ
「がっふぅ…」
カナン
「ルミオ！　シオン！　そして…地味な人ぉぉぉ！！」
ヴィヴィオ
「ちなみに、最後の人を除いて改めて召喚予定の方達です…」
メイデン
「何故クラウさんは呼ばないんだ？」
レナス
「消してしまいそうで怖いそうです」
祐希奈
「ＬＶはキャラが濃いからね♪」
カナン
「他作者さんも苦労するだろうな…」
ヴィヴィオ
「リリオムとか、代表例だよね…」
祐希奈
「まぁ、それだけ私が偉大ってことよ！」
ジル

「そうさ！　偉大な僕に作者共々ひれ伏すといいよ！！
そして、レギュラーメンバーとして…」
ヴィヴィオ
「長くなりましたが終わりだよ。
本編はやはりシリアスです。
ではどうぞ♪」
ジル
「マイハニー！！」

ガバァ！

ヴィヴィオ
「きゃあああああああ！！！」
カ・祐
「死ねやぁあああああああ！！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

落ちる…ポタリ、ポタリと…血が地面にシミを残す…
そして、赤いシミの数は増えていく…
その血の持ち主、カナンは、しゃがみこみ、膝をついている…

「馬鹿力が…」
『主…大丈夫ですか？』
「直撃は避けたけどな…肋骨が折れたっぽい…治療頼めるか…
血止めは後で良い…
後は…レナスは回復魔法だけに集中しててくれ…
多分、これから骨が何本も折れると思う…
制御は俺だけでやるから…頼むな…」
『わかりました…』

暖かな力が体に溢れるのを感じ、痛みが無くなると同時に立ち上がり、相手を睨む…
極剣を肩に担ぐ巨漢がニタリといかにも残忍な笑みを浮かべた。
「咄嗟にバリア系の防御で炎熱を反らすたぁ、やるじゃねぇか」
「……」
男の会話に耳を貸さず、柄を握りしめる…
カナンの脳内にあるのは、戦術のことのみ。
「四式…抜刀…剣術…」
『主っ！』
「回復に集中しとけ！」
『はい…』
魔力を斬撃に集束していくが、制御しきれない魔力が弾け、カナンにダメージを与えるが、耐え…抜き放つ！
「金剛…閃牙ァァ！」
カナンが消失、ほぼ同時に凄まじい激音が鳴り響く…
男へと肉薄し、つばぜり合いになるカナンがいた…
男は、大地の力を重ねたにも関わらず片腕で縦に構えたレーヴァテインで受け止めている…
「オォォォッ！！」
尚も力を込め、叩き込もうとするが、巨漢は微動だにしない…

「いいねぇ…その勝てる気満々な直線攻撃…
その気分をぶち壊して逃げ回るお前を見るのが楽しみで…」

いとも容易くカナンの剣を弾き飛ばし、再び業炎が極剣に纏われる…

「くっ！」

ゆっくりと…相手に避けてもらうのが目的のように大上段に掲げる…

しかし、カナンは避けない…剣を呼び戻し、力を集め、内側へと踏み込み横殴りに叩き込む！

「逃げずにかかって来た度胸は認めてやる…だがなぁ…」

「なっ…ちっ！」

相変わらず微動だにしなかった巨漢に舌打ちをしつつ、全力で下がる…

そして、地鳴りと共に極剣が地面に叩きつけられた…

背後にいた二人は転移魔法を使いこの公園から消える…

「やるならこれくれぇは、やれや！！」

次の瞬間、巨漢から灼熱の竜巻が広がり、公園を蹂躙していく！

ほとんど反射で剣を地面に突き立て、魔力を流し込み、自身はラウンドシールド、鎧の出力を最大に…

「ぐぅ…っ！」

『癒しの力を！』

シールドは数秒後、あっさりと砕け散り、最後の砦の剣に炎熱を纏わせる要領で盾とする…
それでも、骨にヒビが入る激痛が襲う…
レナスが常時回復を施し、業炎の竜巻をなんとか耐えきった…

「くっ…はぁ…はぁ…」
『主、ご無事で！？』
「ああ…助かった…ありがとな…」

「呑気に膝ついている暇は無い…」

「っ！」

'後ろ'から声が聞こえた…
短距離転移で現れた男が掌をカナンへ向ける。
同時、炎犬が数体接近。
しかし、カナンは反応、薙ぎ払う！

「爆ぜろ…」

炎犬が光を放ち、膨張していく…
瞬間、黒煙をぶち抜き、カナンが吹っ飛ぶ…巨漢の元へと…

「くそったれ…っ！」

痛む体に鞭打ち、グルリと反転、大地の力を込める…
巨漢がニタリと笑い、極剣を下段に下ろす…

「おら…受けろや！！」

振り上げられた極剣と剣が激突！
力を使ったにも関わらず、拮抗すら出来ない
カナンは、腕の骨が砕けたのを感じた後、壮大に打ち上げられた…

「輝け…雷光…」

カナンは、空間把握にて認識出来る限界範囲、つまり５０Ｍ上空に槍を掲げる相手を見た…

「メイデン！」
『わかっている！』

ユニゾンチェンジ…腕の骨が再生した瞬間、黄金の剣を空に掲げる…
投擲された槍から爆発音にも似た音と共に、雷が剣へと降り注ぎ、弾ける…

「焼き尽くせ…ブリュナーグ…」

雷は、槍の部分からさらに四つに分かたれた…

「うぁあああああああああああ！！！！！」

吸収しきれない四筋の雷は、カナンの体へと吸い込まれるように動き、カナンに直撃した…
数秒、青白い光が弾け、漸く消える…
そして、黒煙を上げるカナンが地へと落ちていく…

「わりぃが…止め…刺させてもらうぜ？」

落ちるカナンの目前に、巨漢が現れ、背中に届く程に極剣を振りかぶる…

「モード…リヴァース…」

カナンが呟いた時…黄金から銀に剣が変わり、凄まじい輝きを放ち出す…

「今更何しても無駄だっての！　死ねぇえええ！！」

業炎を纏う極剣を、最大の力で振り下ろし、カナンを叩き落とした…

が、巨漢は、腕に違和感を覚える。

まるで最初にカナンを斬った時のような軽い感触が残っていた…

「やっぱり生きてやがったのか」

巨漢の視線の先、叩きつけられたはずのカナンが、完璧な受け身を取り、構え直している姿を見る…

身体中見える部分は血だらけではあるが、瞳は輝きを失っていない…

「魔力が上がってやがる。

まぁ、これからの楽しみが増えた…何だ？」

構えているカナンが突然膝をついた…

時を同じくして、カナンの体から紫電が弾け出す…

通常状態で制御出来ないカナンが、リヴァースモードを出来るは

ずが無かった…

「はぁ…くっ！」

『主っ！／マスター！』

ドクン…

「黙ってろ…」

ギリッと奥歯を噛みしめ、暴れる魔力を理性で抑え込む…

「レナス…この力…使えるんだな？」

『は、はい。主の今の状態を読み取って、威力を固定、治療してもその威力と魔力のまま使えるように改良はしましたが…』

「身体強化…頼む…」

『で、ですが…』

「痛みなら…慣れてる…気にするな…」

『…はい』

いつ意識が飛んでもおかしくない激痛…

加えて、使った所で勝てるかわからない絶望的な状況…

圧倒的不利な状況は変わらない…

「自滅する気かよ？」

「しねぇよ…っ！」

時間を巻き戻したかのように、最初と同じく、カナンの姿が消失し、巨漢とつばぜり合いになっていた…

「お…」

巨漢は、今度は、自分の力に押し負けないカナンににやつく…

「これで…力は…同等だ…」

「だがな…」

カナンの背後から無数の炎犬が飛びかかり、頭上からは五雷が降り注ぐ！

しかし、見えていたカナンは、刃を反らし、真横に繋げた空間で退避する…

「数的不利はどうするよ？」

「……」

さらに、カナンにはタイムリミットがある…

激痛に負け、倒れれば、即、死に直結してしまう…

「ちっ…」

相手の問いに対し、カナンは舌打ちで返すのが精一杯であった…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

本局の周辺…そこには、浅い傷を負っただけにも関わらず、苦しみ、虫の息の武装隊、石化した局員、氷付けにされた民間人が至るところに転がっていた…

「はっはっはっ！　こんなもんかぁ！？
時空管理局って奴は！　弱すぎて話しにならんぞ！」

「本当にやかましい男ですこと…」

「だから私は、あんな男と組みたくなかったのよ…
レヴァ剣戦闘狂の方がまだマシだわ…」

「同意しますわ…」

はぁ…と女性二人は溜め息をつく…
この二人もかなりの戦闘狂なのだが、男を見ていると萎えるらしい。

「ディバイン！／トライデント！」

響く声…三人は、数十メートル先に輝く桜色と金色を見つける。

「来たみたいね…どうする？
防いだ方が良い？」

「いえ…避けてあの男から離れましょう…
一定以上の実力者なら、周りにいる私達まで危険に晒されます…」
この男、戦闘になると敵味方の見境がつかなくなるという危険分子であった…
目的の一致から仲間になってはいるが…

「バスター！／スマッシャー！」

女性二人は、男を中心に左右に別れ、桜色と金色の砲撃を回避す

る。
男は、剣を掲げ、振り抜く…
砲撃は、なんの抵抗も無く消滅した…
なのは、ヴィータが男に対峙する…

「民間人を巻き込むなんて…」

「てめぇ！　どういう頭してやがる！」
二人は男を怒気のこもった瞳で睨む…
男は、ただただニタリと笑うだけ…

「ぶっ飛ばすしか無いみたいだね…」

「ああ…骨の五、六本へし折ってやった方がいいみてぇだ…」

二人同時にカートリッジ排出…
なのはは、レイジングハートを男へ向け、ヴィータは、ゆっくりと回転、加速していく…

「エクセリオン！／ラケーテン！」

男の頭上から、桜色を煌めかせながらなのはが、ブースターを噴かせながらヴィータが己がデバイスを振りかぶる！
男はゆっくりとそれを見上げ…

「ひひっ…」

不気味に笑った…

「バスター！／ハンマー！」

そんな男に構わず、ななはは砲撃を放ち、時間差でヴィータが技を叩きつけるため、砲撃にて発生した煙に突っ込む！

「さて…これで私も楽しめるわ…
私の相手は、誰がしてくれるのかしら？」

大盾を展開し、来るべき相手に備える…
瞬間、ビルを薙ぎ倒しながら連結刃が女性に叩き込まれる！
即座に反応、大盾で受け弾き飛ばす…

「私の弟子が世話になったようだな…」

「剣の騎士シグナムと烈火の剣聖アギト様がお礼をしにきてやったぜ…？」

シュランゲフォルムからシュベルトフォルムに戻し、ツカツカとシグナムが女性の元へ歩く…
その姿にアギトが重なり、髪、騎士甲冑が変化、背中からは炎の翼…

「弟子ぃ？　ああ…もしかして、あの雑魚ガキ？」

「雑魚？　私は弱い者は弟子になどせん…」
『てめぇの眼、腐ってるんじゃねぇか？』

数メートルを挟み停止、レヴァンティンを正眼に構え、瞳を閉じ、ゆっくりと呼吸する…

「あはは！　あんな雑魚を弱いって言わなくてどういうのよ？師匠のアンタも弱いんでしょ？」

「その問いは…」

カッと瞳を見開き、流れるように踏み込む！

「己が身に聞け！！」

「はっ！　雑魚の分際で！」

袈裟に放たれた斬撃と、振り上げた大盾が激突し、激音を響かせた…

「向こうも始まったみたいですわね。こちらもそろそろ始めます？」

首をかしげながら対峙する女性、フェイトへと軽く聞く…

「どうして…貴女達はこんなに酷いことを…」

フェイトは俯き、怒りに握りしめられたバルディッシュがカチャカチャと音をならす…

殺人…しかも、無関係の民間人さえも巻き込む連中のやり方に今にも叫びそうなフェイト…

「はぁ？　理由なんてありませんわ。

ん～ですが、強いて言うなら、ただ、そこにいたからですわね」

フェイトの頭の中でピンと張っていた細い線がプツリと切れた…

「本来…執務官は…冷静な判断で物事を見なければならない…けど…っ！」

カートリッジが一発弾き出され、バルディッシュが変型…

ザンバーフォームとなり、金色の魔力刃が伸びていく…

「今回ばかりは…許せない…」

「ふふ…偽善者気取りも程々に…」

もう言葉は無く、ダンッと踏み込む音が鳴り響き、フェイトと女性は、己が剣を叩きつけた！

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

クラナガン上空を白き竜が力強く羽ばたきながら進んでいく…

キャロ、シャマルの二人とフリードである

「フリード急いで！」

「ギャオオオ！！」

キャロの願いに答えるように、真の姿となったフリードが速度をあげる。

「キャロちゃん…何か来ます…」

「え…」

クラールヴィントの探査魔法に引っ掛かった魔力反応、転移魔方陣がフリードの前方に出現…

黒ずくめロングコートにフードを被った人間が一人現れる…

「あれは…フリード、ブラスト…何?」

前回の敵と判断し、フリードに指示を出そうとした瞬間、黒ずくめがフルフルと首を振る…

一端空中に停止し、様子を見ることにした…

すると、黒ずくめは、一本の短剣を取りだし、掌に乗せ差し出す…

「貰えってこと?」

コクりと黒ずくめが頷き、さらに詰め寄る…

「シャマルさん…」

「少なくとも、危険な力は感じませんが…」

疑っていると、なんと、黒ずくめは頭を下げた…

早くしてくれと言わんばかりに、さらにグイッと手を差し出す。

「……」

キャロがゆっくりと手を伸ばし、短剣の柄を掴んだ…

瞬間、魔方陣が展開し、黒ずくめが消え去る…

「何だったんでしょう？」

「さぁ…？」

余りの出来事に、固まっていたが、目的を思いだし慌てて進む。
取り合えず、短剣は懐にしまっておいた…
キャロは、心なしか温かい力が流れ込んだような気がしていた…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

砕ける…腕が、頭が、胴体が…
銀色の破片を撒き散らしながら人型が次々と砕けていく…
銀の渦となった中心に、機竜とハルがいる…
その中心でハルが目まぐるしく走り回る。
機竜に近づく人型を砕く、砕く、砕く…しかし、その表情は涼しいまま…

『『『壱式…』』』

機竜の背後にて、三体の人型が剣の柄をかけると同時にハルが動こうとするが…

「これくらい、片手間で出来るですの」
『クラッシュテール！』

ハルより速く、機竜の輝く尾に殴り飛ばされ周囲の人型を巻き込みながら吹っ飛ぶ！
クレアは、確認などしない。
即座に口内に集まる白光…
しかし、膨大な魔力を察知した人型が一斉に機竜へと狙いを定め

る…

「やれやれ…」

『粉塵裂脚…』

が、ため息と共に踏みしめられた脚が地を砕く…よってバランスが崩れ遅れる…

「シャイニングブラスター！！」

白光一閃…前方１８０度に砲撃が放たれ、紅蓮の爆発に包まれ、人型がまとめて消し飛んだ…

直後、機竜は、飛び上がる…

その下方には、剣を振り払った形の人型…

「たぁああ！」

轟音…機竜がその重量を持ってして人型を踏み潰していた…

「あと何体ですの？」

全く疲れのない声でクレアが人型の集団の中にいるであろうハルに尋ねる。

瞬間、動きの止まった機竜の背後に人型が現れ…砕け散る…

蹴り砕いた人物、ハルが着地し、コキリと首を鳴らす。

「約５０ですね……無茶をしてくれます…」

手首の調子を確かめながら言った後、空を見上げてぽつりとハルが呟いた…

「どうしたのですの？」

「少し事情が変わりました。
今すぐこの雑魚を消します…
お嬢様、飛び上がっていただけますか？」

珍しくハルが笑顔を崩し、冷徹な眼が開かれる…
この様子に、クレアは無言で飛び上がる。
昔からハルがこの表情をした時は、何かよくない事が起こっていたからだった…
そんな機竜を人型が一斉に追いかける…

「アスラ…」
『加減をするのだぞ…』

両手両脚に空色の魔力が纏われると同時にハルが消える…次の瞬間には人型達の目前で拳を構える姿となっていた…
身体強化、それの領域を遥かに越えている…

「空破掌…」

眼にも止まらぬ拳を打ち出すと同時、全ての人型が縮み…潰れた…

放出口が無い注射器を思い浮かべて欲しい。
その中に、固体を入れピストンを押し込むと、空気圧によって固体が縮む、もしくは砕ける。
ハルが成したのは、それと同じ原理。
通常、空気は周囲に拡散するが、無理矢理に纏め、短距離とはいえ、人型に放った。

ただ、それだけ…しかし、なんの魔力変換資質も持たない者が放った…それは明らかな異常…

「ハル、腕は大丈夫ですの？」

「ええ。手加減して放ちましたから、そこまで負担はありません。それよりも…急ぎましょう…カナン君が危険です…」

右腕を軽く振って調子を確かめた後、機竜の背中へと飛び乗った。

「了解ですの！」

『しっかり捕まっていてください！』

巨翼を広げ、数秒の滞空…そして、音速をぶち破り突き進む！

「これだけを巻き込みながら…自分だけ死ぬなんて…許しませんよ…」

遠くにいる自称友人に向かってハルの言葉が静かに響いた…

▼▼▼▼▼▼▼▼

ヴィヴィオ、祐希奈の二人は、公園まで後一分という距離まで迫っていた。

「ヴィヴィオ、気づいてる？」

「うん…この魔力…リヴァースモードだよね…」

嫌な予感が二人によぎる…

一月前、カナンがリヴァースモードを使用した時は、体が傷つく度に能力が上がる、負荷に耐えきれず体が傷つく…さらに能力が上がるといった無茶苦茶の能力だったからである。

「前みたいな怖い感じはしないけど…」

「使わなきゃならないくらいかなり危ない状況ってことね…」

一筋の汗が、空から地面へとポタリと落ちた…

脳裏に浮かぶのは、嘘のような血飛沫を上げながら倒れたカナンの姿…

「「今度は助ける…」」

決意と共にヴィヴィオがさらに速度を上げるが…前方に大量の魔方陣が広がる…

カナンに近づけさせまいと、置かれた伏兵だった…

その数、三百以上…どこらそれだけの数を作り出したのか、なぜ全てがカナンと同じ顔をしているのか、-そんなこと-は抜け落ちていく…

「「邪魔をするなぁあああああ!!!」」

ヴィヴィオは風を、祐希奈の炎を繋いでいた手に纏う…

「「バニシング!!　ストォォォム!!!!」」

急降下、着地し、踏み込み、互いの拳を同時に打ち出した!

二人の拳から発生する紅蓮の竜巻!!

互いの弱い部分を補い、強い部分はより強力に…

威力、速度はSランク、射程はミドルレンジにまで増長…次々と人型を飲み込み蹂躙し、前方を破壊していく…

漸く竜巻が消え、残った人型が動き出すが、二人はそれを許さない…

全てのカートリッジを弾き出す…

ヴィヴィオはシューティングモードへ、祐希奈はブレードを構え、蒼炎を纏う…

「バレルフィールド…展開！！」

『Ｂａｒｒｅｌ　Ｓｈｏｔ！』

人型達に普段の数倍の大きさへと強化された物理衝撃砲が突き刺さり、不可視のバインドで動きを封じる…

「ヴィヴィオ！　魔力、もらうわよ！」

「好きなだけ良いよ！」

互いに片手を出し、手を繋ぐ…その手から、魔力を供給…蒼炎がより巨大に…高熱へと変わっていく…

３０メートルにも届く蒼刃を纏い、祐希奈が人型に突っ込む！

ヴィヴィオ自身も集束砲、スフィアナイフ５０発と、砲撃スフィア３個を浮かべ、振りかぶった…

「「ブラストカラミティ！！！」」

口上を合図に、振り下ろされた蒼炎の真空刃と放たれた砲撃、遅れて放たれたスフィアの雨！！

満たす…満たしていく…バレルフィールドの中が爆炎へと満たされる…

まだ終わらない…祐希奈が白銀の翼を広げ、フィールドを包み込む…そこへ、スフィアが突っ込んだ…

「「エクスキュージョン！！」」

翼の内部で、スフィアが反射され、乱れ飛ぶ…やがて、翼が紅蓮へと変化…そのままフィールドを抱くように縮小していき、消えた…

人型は一体残らず消滅した…

「フェアリー！」

『Ｂｕｒｓｔ　ｍｏｖｅ！』

一瞬の空白の後、ヴィヴィオが加速する！

「祐希ちゃん！」

「オッケー！」

ヴィヴィオがすれ違い様に伸ばした手に捕まり、公園までの道を急ぐ…

既にここまで激音が響いていた…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「うぉおおお！」

「ガキ！　もっと来い！！」

剣を打ち付ける度、血が飛び散り地を彩る…

それらは、全てカナンの血…

しかし、カナンはリヴァースモードを発動してから未だ無傷…この血は…

「ごほっ！」

全て、カナンが吐血して飛び散った血だった…

一瞬出来た隙に巨漢は構わず極剣を打ち付ける！

「そらよぉ！！」

体勢不十分…ろくに重心移動も出来ていなかったカナンは、風を切り裂きながら吹っ飛び、土煙を上げながら転がっていく…

「フルンティング…喰い殺せ…」

剣を杖代わりに立ち上がるカナンの背後に、巨大な炎犬が出現、ガパリと口を開く…

「レナスっ！」

『グランドスパイク！』

無数の石針が飛び出し、炎犬の口内に突き刺さり、消滅させる…が…

「「終わり…」」

左右から、投擲されようとしている槍…既に光を放つ炎犬があった…

カナンの眼にスローモーションのように映る…しかし、体が動かない…

「「はぁあああ！！」」

突如、ぶっ飛んだ、槍を持つ男が、炎犬を使役している男が…
蹴り抜いた形のヴィヴィオと殴り飛ばした形の祐希奈がいた…

「カナン君！／カナン！」

即座に膝をつくカナンに走り寄る！
魔力結合、転移魔方陣を展開！
だが、カナンは叫ばなければならない…見えてしまったから…

「来るなぁあああああ！！！！」

「連れていかれちゃあ…こまるんだよなぁ…」

「「っ！！」」

二人の行動を予測し、カナンの上空から、巨漢が急降下を仕掛けていた…

「逃げろ！！　早く！！」

カナンの叫び、しかし、二人は逃げなかった…

「カナン君は…」

「カナンは…」

「「今度は私達が守る…っ！！」」

過剰な程に燃える蒼炎、暴発寸前の集まる暴風…
己が剣を、拳を、思いきり振り上げる!!　対し、巨漢も全力で極剣を振り下ろした!

「うっ!」

白光の後、余りの衝撃波にカナンの体が吹っ飛び数十メートルを一気に飛んだ…やがて、光が納まる…

「はっはっはっ!　中々だったが俺様に勝つには力が足りなかったな!!」

「「く…そ…」」

ドサリと二人の体が倒れるのをカナンは見た…

『すまんな…カナン…／ごめんね…カナン…』

その姿とフラッシュバックする映像…

嫌だ…嫌だ!　嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ!!!
行くなよ…俺を置いていかないでくれ…
ドクン…ドクン…

「そんじゃ…止めだ…しっかり見とけ?」

ヴィヴィオ達に止めを刺すべく巨漢が極剣を持ち上げる…
ドックン!　ドックン!!　カシャンとカナンの理性は砕けた…

「ぉあああああああああああああ！！！！
嫌だぁあああああああああああああ！！！！！」

カナンから魔力が溢れだし…魔力が、天をつく柱となる…
心臓の鼓動のような揺れは大きく…強く…！

「がはぁ…」

瞬間、巨漢の体に剣がめり込み音速超過で吹き飛んだ…
銀の剣を鞘に納め、魔力を加えていく…

「ドライブ…オーバー」
『主！？／マスター！？』

呟きと共に、カナンが纏っていた魔力の柱が消し飛び、公園は砂漠へと姿を変えた…

「な、何だよてめぇ…それはよ…」

「あれは危険だ…退却を推奨する…」

「同意…」

炎犬使いに、槍使いが頷き冷や汗を垂らす…
ギラリと光る紅い目…全身真っ黒な鎧…伸びた黒髪…腰には二本の黒剣…

「ハァアアア……オオオオオオ！！！！」

殺戮衝動の塊と化したカナンがそこにいた…
怒りに我を忘れたカナンは、オーバードライブを失敗したのだった…

Ｎｅｘｔ　Ｓｔａｇｅ……

第二十三話　守るために　（前編）（後書き）

「守りたくて…でも守られて…俺は、昔となにも変わってはいなかった…昔と重なった光景に一杯になった頭は、真っ赤に染まって…
…そして、闇に堕ちた…はずなのに…光が見えた…」

第二十三話　守るために　（中編）　（前書き）

遅れてすいません…分割バトルがこんなにも大変だとは…おかしなところもあるかもしれませんので、ご報告していただけると嬉しいです。

第二十三話　守るために　（中編）

祐希奈
「皆さんこんにちは、ＤＪの祐希奈Ｙｏ♪」
メイデン
「こんにちわ。メイデンだ」
祐希奈
「あれ？　他のメンバーは？」
メイデン
「あそこだ」
ペンキチ
「ピューイ！」

バチバチバチバチ！！

カナン
「ぎぃあああああああああ！！！」
祐希奈
「…鷹って放電出来たんだ」
メイデン
「そして、姉さんは…」
バル〇ン星人
「フォッハッハッハッ！！」
レナス
「蟹です～♪」

バキッ…バキッ…

バル〇ン星人

「！！！」

レナス

「クセがありますが意外と美味しいです♪」

祐希奈

「あれって一応、バル○ン星の人…なのよね…人食いレナス？」

メイデン

「見た目が蟹のような容姿をしていたことを恨んでくれ…」

祐希奈

「ヴィヴィオ、なにやってんのって…反抗期の子供教育方って…え！？　何それ！？」

ヴィヴィオ

「あのね、シオン君が…」

祐希奈

「……」

ゴアアアア…ヒュン！

ぎゃあああああああああああああ！！！！

何！？　祐希奈、いきなり何を…ダメだ…そこは…いやぁあああああああああああああああああああ！！！！！

真サッパリコースって…あれ以上サッパリには……え…あのちょっと？　ふぎゃあああああああああ！！！！！

私のヴィヴィオを汚した罪…

身をもって償えぇえええええ！！

何…ヴィヴィオを汚しただと…祐希奈殿…俺も手伝おう…

いやぁあああああああああああああああああああ！！！

じゃあ、私達は、この光景の写真集を、すずか、いくわよ♪

準備万端！　細かいところもバッチリだよ♪

そんなもん録らんで……えちょっとお二人共…俺は男だぜ？

シオンも純血…無くしましょうねぇ…

さぁ……軽く第二の人格が出てくるほどに痛め付けてやる…

それは既に軽くとは言わねぇえええって…ぎぃあああああああああああああああ！！！
許して！！　なんかもう色々と失う…きゃあああああいあああああああああああああ！！！！

ヴィヴィオ
「反抗期だからお勉強してたんだけど…あれ？　祐希ちゃん？」

カナン
「シオン…生きてるかなぁ…」

ヴィヴィオ
「大丈夫だよ。私の子供だもん」

メイデン
「しかし…司会がいなくなってしまったな…姉さんは相変わらずバル〇ン狩りをしているし…」

パアアアア…ポン…

ルミオ
「へ？」

カナン
「あ、あれ？　ルミオ！？」
ルミオ
「カナン！？　ってなんでＬＶ道場に俺はいるんだ！？」

ヒラヒラ…

メイデン
「む…手紙か？
『ルミオ君、次回の後編の召喚まで司会がヨロシクｂｙヨシュア♪』
……」
ル・カ
「♪じゃねぇえええええ！！！」
ヴィヴィオ
「ルミオ～おめでとう～♪」
メイデン
「ルミオさん、おめでとう」
レナス
「ふふぃふぉふぁんふぉふぇふぇふぇふぉふぁふぃふぁふ！」
ルミオ
「おめでとうって…いきなり天然発動してるんじゃねぇよ！
しかも、レナスはまだ食ってんのか！？」
ペンキチ
「ピューイピューイ♪」
ヴィヴィオ
「ペンキチも食べてるよ？」
メイデン
「ああ。食べているぞ、ルミオさん」
ルミオ
「違う…聞いてほしい所はそこじゃない…」

天然ズ
「？」
ルミオ
「…質問コーナー」
カナン
「ああ…それが正解だ…
さすがだ、ルミオ…」
ルミオ
「なんか…慣れてきたかも…
『ルミオとの模擬戦前に暴走スキル手にいれたらヤバくね？』
だ、そうだ」
カナン
「心配するな。今回は特別条件重なっただけだし大丈夫だって。…
…多分」
ルミオ
「最後に底知れない不安がよぎったが気のせいか！？」
カナン
「任せろ！」
ルミオ
「何を！？」
ヴィヴィオ
「さて、続いての質問は～」
ルミオ
「俺が司会だろ！？　流すのか！？」
メイデン
「肩書きだけだからな」
ルミオ
「あっさりぶっちぎりやがった！！」
ヴィヴィオ
「あはは…

『ＬＶって、クライマックス近いんか？』
はい、ルミオ」
ルミオ
「ちょっと待て…明らかにおかしいと気づけ…」
メイデン
「司会なのだろう？」
ルミオ
「……俺はＳＡＳのキャラクターだぁあああああああ！！！」

いやぁあああああああああああああ！！！
お許しを…あああああああああ！！！！

ペンキチ
「ピューイ！」

バリバリバリ！

カナン
「ぎゃあああああああああああああ！！！」

プシュー…

ヴィヴィオ
「えと…ルミオ、なんだっけ？」
ルミオ
「……え～、ＬＶは、いつまで続くか、いつに終わるか未定みたいだ。
以上」
メイデン
「なんだ？　やはり知っていたのか」

ルミオ
「なんか才能が開花したみたいだな…
他作者の予定まで見えるとは…」

ムク…

カナン
「とりあえず、司会お疲れ、次回も頑張れ」
ルミオ
「マジでか？」
カナン
「マジで…」
ルミオ
「はぁ…なんかおごれよ？」
カナン
「ああ…すまん…愚痴なら聞くから頼むわ」
ルミオ
「しゃあねぇ…じゃ、魔法少女リリカルヴィヴィオ」
ヴィヴィオ
「カナン君暴走編」
カナン
「始まるぞ～」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

壊してやる…俺の大切な人に近づく者…全てを！　ぶっ壊してやる！！

「ウォオオオオオオオオオオオ！！！」

カナンの魔力によって全てが吹き飛び、最早、ただの砂地と化した公園に咆哮が響く…

同時、魔力が吹き出し、突風が走り抜け、対峙している三人に襲いかかる！

「撤退を推奨する」

炎犬使いが再度撤退を進めるが、巨漢はニタリと笑い極剣を構えた。「撤退ぃ？　あんなもん、ただ魔力がでかいだけで、獣と同じだ。

獣一匹にビビって逃げるわけが…」

言葉の途中、倒れる二人の場所にいるはずのカナンが巨漢の目前に現れる…既に柄から黒剣が抜き放たれようとしていた…

「このガキっ！」

反射的に振り下ろした極剣と黒剣が激突…

瞬間、巨漢の体が吹っ飛んだ…

答えは単純、カナンが一瞬で極剣を押しきった結果でしかない…

今までのカナンとは明らかに違う威力の斬撃に、舌打ちと共に停止。

「ハァアアア……」

「な…」

不気味な呼気を背後から聞き、直感的に極剣を盾にした…

そして、激烈な衝撃が叩き込まれ、巨漢の体は、宙を舞った…

「うぜぇ！」

吹き飛びながらも、極剣に業炎を纏い、振り放つ！！
紅蓮の奔流が、カナンを飲み込み、尚も地面を焼き尽くす！

「フウゥゥ……」

再び背後から響いた呼気…
いつ回り込まれたのかすら分からない超速度に驚愕するのもつかの間、轟音を立てて巨漢が叩き落とされる！

「輝け…雷光…ブリュナーグ…／喰い殺せ…フルンティング」

左右から襲いかかる巨大な炎犬と五雷！

「ハァアアア……」

「「！！」」

二本を抜刀…裏手に持ち変え、五雷、炎犬を吸収していく…
右手に紅蓮、左手に轟雷が纏われ、体に巻き付けるように剣を構え、睨む…巨漢を！

「俺から潰そうってか…調子に乗ってんじゃねぇぞ…」

小さくなっていく…レーヴァテインに纏われていた業炎が…
ゆっくりと極剣を持ち上げ、首の後ろにまで振りかぶる…

「ォアアア！！！」

「ガキがぁあ！！！」

交差しながら振り抜かれた黒剣からは、紅蓮と轟雷の光が放たれ、極剣からは、黒炎と化した巨大な奔流が放たれる！
互いの中心で激突！

白光が煌めき、衝撃波が吹き抜ける！
数秒の拮抗が遂に崩れ、紅蓮と轟雷を押し返す黒炎の奔流！

「ちっと手間取ったが…終わりだぁあ！！」

叫びと共に、黒炎がさらに勢いを増し、カナンの姿を丸ごと飲み込む！

「はっ！　俺をなめるから…だ…」

巨漢が異変が気づく…
本来なら、カナンを飲み込んだ黒炎は、天へと突き抜けるはずだった。
しかし、その黒炎は、突き抜けず、球体へと纏まっていく…

「ウゥゥゥ……」

獣を思わせる声が静かに響いた時、巨漢達は、一斉に障壁を展開。
大気中の全てが球体へと吸収されていく…大地も大気も…そして、静けさが満たす…
ヴィヴィオと祐希奈を何十にも大地の壁が取り囲んだ…

「ウォオオオオオオオオオオオ！！！！」

瞬間、球体の内側から魔力が吹き出し、今まで纏めていた力を周囲に放つ！

音が消えた…否、聴覚で聞き取れる範囲を越えたのだ…

放たれた破滅の力は、さらに広がっていき、公園の外にまで被害を広げる…

触れた場所を削り取り、蹂躙していく…

巨大な暗黒の塊は、十秒以上の時を刻み、漸く消えた…

公園だった場所には、膝をつく三人と、その円の中心にカナンがいた…

「ちくしょうが…」

悪態をつく巨漢に、カナンが向き直る…

ボタボタと血が落ちた…メイデン、レナスは、殆どカナンに取り込まれているために、身体強化が出来ていない…

超威力の技に体が耐えきれていなかった…

しかし、いずれ死に至る状態になりながらも、カナンは進む…

大切な人に近づく者を破壊するために…

「仕方ねぇ…退く…」

転移魔方陣を展開する間もなく、巨漢の体が吹き飛んだ…

その背後にはカナン…未だ体勢を立て直せない巨漢の目の前へと出現…

「ブリュナーグ！」

五雷が疾り、カナンに向かうが、左腕の黒剣に吸収された…

「ハァアアア！！」

「っ！」

二刀を重ねるように刺突の構えを取る…
雷がもう一刀にも移り、さらに威力を上げる！
巨漢が気づいた時、黒剣は既に腹部を貫通していた…

「ぐぁあああ！！」

一瞬で腹部から黒剣を抜き去り、大量の血飛沫が宙を舞う…
止めと大上段に振り上げる…
カナンの体が巨漢の前から消え去り、入れ替わるように蹴り抜いた形で別の男が立っていた…

「ごほっ！…てめぇ…何で敵を助けた…」

「……」

カナンを蹴り飛ばした男…朱皇千春が、圧倒的な殺意を放ち、巨漢を睨んだ…

「うっ！」

残像と共に、拳が顔面に炸裂し、巨漢が盛大に吹き飛んだ…

「死にたくないのなら、早く消えてください…」

「んだとてめぇえ！」

極剣を構え、突撃しようとする巨漢の体を多重にバインドが縛り上げ、転移魔方陣が展開される…

「なっ…てめぇら、離しやがれ！」

「今の貴方では勝率は低い…
このまま撤退します」

「はぁ！？　ここまできて退却だぁ！？
何言ってやがる早く離しやがれ！」

炎犬使いは、無視を決め込み、眼を閉じる…
尚も巨漢は喚くが、そのまま消え去った…

「さてと…」

ハルはゆっくりとカナンに向き直る…
紅い眼が苦しそうにハルを見ていた…

「カナン君…お二方は守れました。
戦闘状態を解除してください」

「フゥウウウ……」

ギリギリと奥歯を噛み締め、カナンがハルを睨んでいた…

「大切な…人…近づく奴…は…俺が…殺す…」

「そうですか…御嬢様…お願いします…」

「了解ですの！」

ハルがポツリと呟いた瞬間、機竜が現れ、ヴィヴィオと祐希奈を囲っていた岩を至近距離で砲撃を放ち破壊する！

「俺が…守る！」

駆け出そうとするカナンの目前には既にハルが走り込んでいた！

「っ！！」

勢いをつけた上段回し蹴りを、持ち上げた黒剣で防いだが、不意打ちに耐えきれずに吹き飛ぶ！

その隙に機竜がヴィヴィオと祐希奈を抱えて離脱。

さらに、結界を張り完全に気配を無くした。

「あ……」

「アスラ…全開で行きますよ…」

『様子見は…』

「今から戦う彼は…加減が出来る領域を越えているのですよ…加えて…メイデン様達の抵抗が無くなれば、強制的にユニゾンされます…

オーバードライブに加えて、あの方達の自然の力が完全に制御下におかれれば、止められません…

今のうちにメイデン様達を分離させます…」

『その後はどうするつもりだ…

いかにお前とて、無傷では済まんぞ…

しかも、お前…こういうことは嫌いでは無かったか？』

こんな状況だというのに、ハルは空を見上げる…

そして、どこか諦めたような表情をしていた…

「嫌いだったはず…なんですけどね…
僕の中に…いつの間にか彼がいました…」

『……』

「'友人'の過ちは、友人が正してあげませんと」

『そうか…』

カナンに向き直るハルの手脚に空色の魔力が纏われ、圧倒的な存在感を放ち出す…

「大切な…人…返せ…」

カナンから魔力が吹き出し、地を揺らす…
しかし、ハルは見据えたまま動かない…

「彼女らにとっては、君も大切な人なのですよ…」

「オァアアアアアアアアアアア！！！」

揺れる、吹き荒ぶ、砕ける…
最早、ハル達は、カナンにとっては守るべき人をさらった人物として認識されていた…

「やはり話しは通じませんか…
なら…君達の仲間らしく行きます…
物分かりの悪い友人は、ぶっ飛ばしてでもご理解していただきます…」

仲間として、闇に堕ちてから初めての友人として、過ちを正すた

めに、正面からぶつかることを決意したのだった…

▼▼▼▼▼▼▼▼

なのはのエクセリオンバスターとの連繋…通らないはずはないと思っていたヴィータの表情が驚愕に染まる…

確かに攻撃は通っていた…

男の脇腹へとピックはめり込んでいる。

しかし、男は微動だにしない…

ヴィータは、様子見のため、一旦下がり距離をとる…

「非殺傷だぁ？　戦場でなめたことするなよ…
殺るか殺られるかのやり取りが面白いんだろ？」

男の会話は無視し、なのはとヴィータは念話を繋げた…

（ヴィータちゃん、あの人何かしたの？）

（いや…手応えはしっかりあった…
効いてねぇはずはねぇんだが…）

男は未だ何か話しており、ダメージを受けた様子は全く無い…

「まぁ…クドクド話すよりは、甘いことやってると死ぬって事を教えてやる」

「「っ！」」

背中から引き抜かれた一メートル弱の黒い曲刀…

眼を引くのは、ドス黒いオーラ…

二人は、まるで、死神を前にしているような、そんな殺気を刀に覚えた…

「ククク…甘ちゃん共…この刃に当たらないように気を付けろよ…」

スーッと…静かに男が地を滑るようにヴィータに迫る…

ヴィータの眼には、ケタケタと笑う骸骨が男の背後に見えていた…

「そら…」

ゆっくりと曲刀を横薙ぎに払った男…

ヴィータは、寒気を感じ、直感的に体を反らせた瞬間、暗黒の軌跡を残しながら曲刀が振り抜かれていた…髪数本が宙を舞う…

「ククク…そら…そら！」

ゆっくりと振っているはずの曲刀…

だが、その一太刀一太刀が急激に加速し、ヴィータを何度も襲う！

「何だよ…これ！」

今までに戦ったことのない太刀筋に、反撃の隙を見つけられずに下がっていく…

そして、背中に固い感触が広がる…

倒壊しかけのビル…そこにヴィータは追い込まれていたのだった…

「しまっ…」

「さぁ…お前の悲鳴を聞かせてくれ…」

ニタァと笑い、男が不気味な動きでヴィータに近づいていく…

（ヴィータちゃん！　動かないでね！）

（ああ！）

刃が迫るなか、幾多の戦いを共に切り抜けたパートナーを信じ、ヴィータは動かない…

「シュート！！」

瞬間、ヴィータの目前に、桜色の豪雨が降り注ぎ、男を飲み込む！
なのはのアクセルシューターだ。
スフィアの操作を簡易にすることで、弾数の増加に回したなのは…
その数、３００発近い…未だ降り注ぐ中、だめ押しとばかりに砲撃を集束していく…

「ディバイーン！　バスター！！」

豪雨の中に叩き込まれ突き立つ光の柱…
しかし、その中から徐々に曲刀が突きだす…

「っ！」

ヴィータが飛び上がったと同時に、ビルに曲刀が突き刺さり、轟音をたてて男を巻き込みながら倒壊してしまった…

「死んだか？」

「わからないけど…」

言葉を繋げようとしてなのはは絶句する…
視線の先、瓦礫の山を押し退け、一本の腕が突き出した…
ピシリと山にヒビが広がり、あっさりと砕け、中から男が現れる。
腕や脚など、所々出血はしているものの、全く意に介していない…

「うらぁああ！」

動きを止めている間に、ヴィータが槌を振りかぶり男の頭を横殴りに叩きつけた！
テートリヒシュラーク…並の魔導師なら撃墜、上位の魔導師でもまともに受ければ吹っ飛ぶこと確実な一撃！

「だからな…」

ドゴッと重い音が鳴り響き確かに直撃したにも関わらず、男はほんの少し揺れただけ…
ゆっくりと振り上げられる曲刀…

「非殺傷なんてするなって言ったろうが！！」
ヴィータがプロテクションを展開した瞬間、暗黒を纏う刃が激突し、異変が起きた…

「なっ！」

暗黒がプロテクションを侵食し、黒く染まっていく…
やがて、完全に侵食され、プロテクションが消え去った…
アイゼンを盾代わりに受けるが、アイゼンまでもが黒く侵食されていく…
突如、男がヴィータから離れ、距離をとる。

刹那、桜色が目前を通過し、薙ぎ払う！

「ヴィータちゃん！」

「助かった…アイゼン…大丈夫か？」

『Ｊ…Ｊａ…』

ノイズが流れた後、リカバリーを発動し、アイゼンが元の色へと戻る…が、ヴィータとなのはの表情は、苦いものとなっていた。

「あれ…かなりヤバイもんみたいだ」

「だね…グラーフアイゼンでこれなら…私たちが受けたら…」

急速に口内が渇いていくのを感じる…

多重に対魔力防御を施されたデバイスでさえ、侵食を止められなかった…

それは、人体に触れればほぼ確実に命を奪う力となるだろう…

「ビビってても仕方ねぇ…やっぱり、あたしが行くしかないだろ…

あたしは魔力生命体だ…

なのはよりは、危険性は少ない…」

「そんなの！　もうヴィータちゃんは、人と変わり無いよ！」

「確かに…限りなく人に近づいちまったが…よっぽどじゃねぇ限りは即死はしねぇ…」

なのはに背を向け、待っているかのように佇む男に進んでいく…

「ヴィータちゃん！」

「それに…」

頭だけ振り向き、ニカッと笑う。

「高町なんとかって言う最高の親友が後ろで援護してくれんだろ？」

「…もう…間違えないで名前呼べるようになるまで絶対に死なせたりなんかさせてあげないからね！」

二人はフッと笑い、共にデバイスを構え、叫ぶ！

初めて気持ちが通じた時の言葉を…

「ちゃんと合わせろよ！　高町なのは！」

「ヴィータちゃんもね！」

「うるさい雌豚共だ…殺すか…」

ダンっとヴィータが踏み込み、重心移動をしながら、アイゼンを横殴りに男に叩きつける！

浸食される前に引き離し、リカバリーをかけながら突き進む！

「ほう…」

「うらぁあああ！！」

速度が上がる、さらに重く、さらに速く、縦横無尽にアイゼンが煌めき、男を押し込んでいく！

「鉄槌の騎士、ヴィータと…鉄の伯爵、グラーフアイゼン！！」
『Ｇｉｇａｎｔ　ｆｏｒｍ！』
カートリッジを弾き出すと同時に一際高い音が鳴り響き、少しの間が開く…
しかし、男は音もなくヴィータに接近！
「スターダストフォール！！」
瓦礫に環状魔方陣が展開され、男に降り注ぎ、土煙を舞いあげる！
が、男は無視、曲刀を薙ぎ払う！
曲刀が起こした風圧によって煙が払われた…が、ヴィータはいない…
「轟天…爆砕！！」
「っ！」
声が響く…男の頭のすぐ上から…
「ごふっ！」
巨大な槌が、男の腹部に炸裂し、伸びながら振り回し、吹っ飛ばす！
「うぉおおお！！」
さらに柄を伸ばしながらヴィータが男を追撃、上半身を思い切り捻り構えをとる！

「高町なのはと、レイジングハートエクセリオン！　行きます！」
『Ｂａｒｒｅｌ　Ｓｈｏｔ！』

物理衝撃砲が、男に追い付き、ビルへと縫い付け、拘束…
カートリッジ全弾排出…煌めく五光！！

「エクセリオンバスタァアア！！／ギガントシュラァァアク！！」

同時に叩きつけられた巨槌と五光！！
ビルを破壊し、直線に在った建造物を全てぶち抜きながら男の体が吹っ飛んでいく！

「どうだ…」

「やった…？」

倒壊した建物を見据え、動くものが無いか注意深く睨む…

「ぐぁあああ！！」

突如、ヴィータが“背中”から血を吹き出し、地に倒れた…

「ヴィータちゃん！？」

「死ね…」

その背後には、曲刀を振り上げる男の姿…

「くっ！」

『Ｆｌａｓｈ　ｍｏｖｅ！』

男の目前からヴィータの姿が消え、目標を無くした曲刀が地面を砕いた…

「どうやって…」

「なに…簡単な話だ…吹き飛んだ後、魔力と気配を殺し、回り道をしてそいつの背後に回り込んだ」

追撃する気は無いのか、男は曲刀を肩に担ぎ、なのはを見たまま動かない…

「うあ…あああああああ！！！」

「ヴィータちゃん！？」

ヴィータの傷口が黒ずみ、ゆっくりと全身へと広がっていく…

「そいつは死んだ」

「まだ…助かる！」

「クク…死ぬさ。
それがこの剣…タナトスの力だからな。
まぁ、自分の名前がついてるってのもおかしな話だがな…」

男の言葉など、今のなのはには届かない…
なのはの眼には最早ヴィータしか移っていない…

「ヴィータちゃん！　ヴィータちゃん！！」

「そのチビ…人間じゃねぇみたいだが、いつまで持つかねぇ…クク…じっくり見物させてもらう…
その後は、絶望の淵にいるお前だ…
ああ…楽しみだな…」

ドッカリと座り込み、男は舌なめずりをしながら、叫ぶなのはと痙攣を起こし始めたヴィータを愉しそうに見ていた…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

激突する！

「はぁああ！！」

剣と

「ふん！」

大盾が…

「「でぁああ！！」」

衝撃の余波を撒き散らしながら激しい音を奏でていく…
斬り結ぶこと二十合…刺突を叩き込んだ剣と正面から受け止めた盾が火花を散らし動きが止まる…

「どうした…貴様の力…この程度では無いだろう…」

「アンタ程度に見せる必要は無いってね！」

強引に押し込み、シグナムを弾き飛ばす！

「ならば…」

吹き飛ばされながら体を回転、カートリッジを弾き出す！

シュランゲバイセン、大きく弧を描き、盾を構えた女に叩き込まれる！

「重…い…」

「出さずにはいられないようにするまでだ！！」

『猛れ炎熱！　烈火刃！！』

さらに体を逆に回転し、連結刃を引き戻す…

アギトの力により、炎を纏った刃を再度解き放つ！！

「私の防御…そんなもんで崩せると思うな！！」

女は、避けず、正面から受け止める！

が、刃は止まることを知らない…

女の体ごと引きずり持っていく！

「『飛龍一閃っ！！』」

「ごほっ！」

遂には大盾を弾き飛ばし、女に直撃、そのまま空へと打ち上げる！

シュベルトフォルムに戻しながら最速で女へと接近、下段に構える炎剣！

「紫電！」

「なめるなぁあ！！」

「一閃っ！！」

即座に大盾を呼び戻し、横殴りに振り払う！
対し、シグナムは袈裟に叩き込み、巨大な爆炎が二人を包み込む…

「祐希奈の痛み…受けとれ！！」
『轟炎…食らいやがれってんだ！！』

「っ！」

爆炎の中…女は、シグナムが右手をレヴァンティンから離し、炎の球を作り出したのを見た…
瞬間、紅蓮の爆発が起こり、女は黒煙を纏いながら吹っ飛んだ！

「まだ出さないのなら…」
『これで終わりだぁ！』

未だ吹き飛ぶ女に、シュランゲバイセンを叩きつける！
その刃が盾で受けられた時…石へと変わり…砕ける…

「来るか…」
『さぁ…こっからだぜ…シグナム…』
「わかっている…」

膝を落とし、レヴァンティンを斜めに構えた…

女はうつ向きながら左手を真横に突き出す…
その手に呼び出される二つ目の大盾…

「そんなに見たいんならぁ…しょうがないから特別に見せてあげる…」

両盾の中心からメデューサの顔が浮かび上がり、邪悪な力が立ち上る…
ガバァっと顔を向けた女の顔は笑み…

「ただぁ…死んでも後悔しないでねぇ！？」

愚直なまでの直進！
回避を全く考えていない行動にシグナムは精神を集中、冷静に距離を算出する…

「『紫電…っ！』」

シグナムとアギトの動きが重なり、剣の炎熱の出力は上がっていく…
女が目前へと迫り、盾を振り上げる！
同時、合わせるように女に詰めより、剣を真横に構えた…

「ぶっ飛べーっ！！」

「一閃っ！」

重心移動、カウンター、剣の角度…全ての条件が重なった剣とただの勢いに任せた盾がぶち当たる！！

「がはっ！」

瞬間、流星のごとく地面に叩きつけられた…シグナムが…

「な…に…」

『嘘…だろ…』

自分達が成した最高レベルの斬撃を、ただの腕力だけで押し返された…

あり得ない現実を見させられていた…

「やっぱ大したことないじゃん…」

「…っ！」

大盾が向けられる前に、地面に剣を叩きつけ、土煙を発生させる…

「それってさ…私と同等かそれ以上の奴がやるから意味ある方法だってこと…わかる？」

しかし、女は構わず突っ込み、風圧で土煙を吹き飛ばし、大盾をシグナムに叩きつける！

レヴァンティンを持ち上げ、防ぐが、余りの衝撃に地が割れ、膝が笑う…

「さぁ…な…」

「あっそ…死ねば？」

女は片腕、シグナムは両腕を使用している…

つまり…女はもう片腕はフリーということ…
動けないシグナムを、殴り付け吹っ飛ばす！
右腕の骨が砕け、激痛に意識を手放しかけた…
しかし、再び目を見開き、意識を繋ぐ！
飛行魔法を駆使し踏み止まる！

「剣閃…」
『烈火…』

左手に燃え盛る炎の剣…踏み込みと同時に薙ぎ払う！！

「無駄だっての！」

「火龍…一閃っ！！」

盾を構える女に一瞬、相手がどれだけ高い防御を誇るか…左手で勝てるか…考えた…
だが、振り払う…関係ないと…
剣を振る時に考えていては、勝てる物も勝てないのだから…
今、自分に出来る事、最高の一刀を相手に叩きつけることのみが脳内を満たしていく…

「ァアアアア！！！」

「ぐ…何…コイツ…威力が…」

ギリギリと押し込み…そして、紅蓮の剣は、女の体へと吸い込まれ、巨大な爆発と共に消滅した…

「はぁ…はぁ…」

『気を抜くなよ…』
「それはお前だ…アギト…」

立ち込めていた爆煙が晴れる…
確かに立っている人の影を見た…

「やはり…しぶといな…」
「まぐれで通ったからって調子に乗らないで…
しかも、左手一本で私に勝てるわけないでしょ…」

「いや…」
『腕なんか関係ねぇ…』
「『勝つ!!』」

「調子に乗るなってんのよ雑魚が!!」

「アギト…言ってやれ」
『もう人の事言えねぇよ雑〜魚!』

プツリとアギトの挑発に女は見事にキレた!

「ぶっ殺す!!」

「『やってみろ!』」

吸い寄せられるように接近した二つの影は、激烈な衝撃波を放ちながら己が武器を叩きつけ合った!

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「「はぁああ！！」」

最早、十以上の数を行ったつばぜり合い…
ここまで、互いに技を使わず、剣撃のみで幾度も刃を交わしていた…
剣を押し合う中、女が笑う…

「随分慎重なんですのね…
いえ…怖じ気づいて踏み込む勇気も無い…の間違いですわね…」

「どっちが…」

女の挑発に対して、フェイトは短く返し、剣を弾きあげる！

「Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ！」

開いた距離を即座に詰め、横薙ぎに払う。
残像を残しながら迫る雷剣を長刀を縦に構え、あっさりと受け止める…

「まぁ、このままやっても私の勝ち…ですが…！」

ソニックムーブで背後に回り込んだフェイトにも反応し、斬り上げる！
しかし、斬ったフェイトは残像…本体は女の真横に動き、刃を叩きつける！

「氷壁よ…」

瞬間、フェイトと女の間に氷壁が出現し、刃を受け止め、砕けた…

雷剣が真一文字に振り払われたが、女の姿はフェイトの頭上…氷壁にぶつかったタイムラグが女に回避の時間を与えてしまっていたからだ…

上体を捻り、回転の勢いと共に長刀を振り下ろす。

「くっ！」

上体を反らし、そのまま後ろへとバックステップで下がる…

「踊りなさい…クラウ・ソラス！」

口上が響くと、長刀が炎剣へと変化、蛇のようにうねりながらフェイトを追撃する！

『Ｂｌｉｔｚ　Ａｃｔｉｏｎ！』

身体加速を叩き込み、うねる炎剣を屈み、回転し、斬り払うことでいなしていく…

「これならどうかしら…」

炎は、長刀から離れ、フェイトを炎の竜巻の中に閉じ込める…

回避不能、防御も困難…ならば、選択する行動は、ただ一つ…

「手札は見えた…決めるよ…バルディッシュ…」

『Ｙｅｓ　ｓｉｒ…』

「ソニックフォーム！」

『Ｇｅｔ　ｓｅｔ』

フェイトのバリアジャケットが輝き、爆ぜる！

その衝撃は、炎の竜巻を吹き飛ばし、炎熱を女の元へと押し返す！
炎熱と同時に突撃していたフェイトが女の前で、ライオットザン
バーカラミティを振りかぶる！

「中々速いですわね…」

「はぁあああ！」

次々と叩き込まれる剣撃に女は交代しながら受けていく…
さらに、ただ下がるだけには終わらなかった…

「降り注げ…」

猛攻を行うフェイトの背後に出現する、無数の炎針と氷針…

「たぁあ！！」

郡が動くと同時にフェイトは女を弾き飛ばし、カラミティを分離、
二刀流に変更…霞むような速度で舞い踊る…
一切無駄の無い動きで、郡を叩き落とし、或いは避け、締めとば
かりに両手を左右に振り払い、最後の針を叩き折った…

「よく耐えましたわ…ご褒美に…最後のカード…お見せいたします
わ…」

背後から響く声に即座に反応、振り向いた瞬間、剣が抜刀され、
同時、視界が真っ白に染まった…

「あぁあああ！！」

フェイトの目は、最早何も映さない…
圧倒的な光によって一時的に視力が奪われてしまっていた…

「光剣の名の由来…わかっていただけましたか？
炎と氷は私自身の変換資質…
この剣…クラウ・ソラスの力ではございません」

「成る程ね…これが本命ってことか…」

「そういうことになりますわ。さてと…」

ふふふと笑いながら、近づいてくる音が響く…
ヒュッと長刀が風を斬り…
金属音が鳴り響く…フェイトの剣と女の刀ががっちりと合わさっていた…

「なっ！」

「目が見えないのなら…音と気配だけで戦うだけ！！」

圧倒的不利に陥ったにも関わらず、未だ戦うことをやめようとしないフェイトに女は苛立つ…

「正義の味方気取りもいい加減にしなさいな…」

「今は…そんなものに興味はない…
さっきに言った…私は個人的な怒りから貴女を倒したいって…
だから…この命が消えるまで…戦い続ける！！」

怒号と共に剣を振り上げ、女を空中へと打ち上げる！！

「生意気を！！」

「どっちが！！」

天へと延びる光剣と雷剣…

互いにビルを吹き飛ばしながら右回転…長大な剣を叩きつける！

光が溢れる…

「「まだまだぁ！！」」

叫びと共に激音がこだましていた…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

逃げる際、クレアが張った結界の形はすでにもう無い…

ハルとカナンのぶつかり合いによってあっさりとくだけ散っていた…

二つの影は目まぐるしく交じりあい、放つ…

拳を、蹴りを、刃を、果ては存在する自然の力を呼び覚まし、力の限り放ち続ける！

一瞬…衝撃波の間がひらく…

同時に二人が突っ込む！　踏み込みの威力に耐えられず、大地は砕け、岩盤がめくれ上がる…

自分達を押し潰さんと迫る壁を無視…ハルは回転からのソバットを、カナンも同じく回転から剣を薙ぎ払う！

「っ！！」

「ァアアアア！！」

蹴りと剣が激突し、激烈な衝撃波を撒き散らす！
ただの体術と剣撃…その余波は、互いがめくり上げた岩盤を木っ端微塵に打ち砕く！
砂塵が舞い、視界が不良になる中、両者構わず動く！
砂塵を突き抜け、ハルがカナンの眼前にて拳を引き絞る！

「はぁああ！」

音速を越える拳は、カナンを“突き抜けた”
消失、などというレベルではない…
ハルの前には、確かにカナンの姿がある…それが、霞むように消え去った…
しかし、既にハルは目などほとんど頼っていない…
気配のみでカナンを捉え、振り向かずに踵を跳ね上げる！！

「ハァアアア…」

直撃まで、コンマ一秒もかからないハルの蹴り上げを受け止めるカナンがいた…
振るわれる左の剣を見、しかし、回避など考えず片脚で飛び上がり、刃が届くより尚早く、カナンの胴体を蹴り抜く！

「ハァアアアア…」

吹き飛びながらくるりと回り、即座に復帰。
その瞳に映ったのは、ハルの顔…直後、頭を抱えられ、顔面に膝を叩き込まれ盛大に吹っ飛ぶ！

「はぁあああ！！」

追撃とばかりに跳び上がり、回転蹴りを打ち込む。

「ウウウ…っ！」

両の剣で受けられ、刃が執事服を切り裂き…脚から血が流れ出る…
だが、ハルはカッと瞳を見開き、さらに力を込め蹴り飛ばす！
地面に叩きつけられ、めり込むカナン…
今のカナンには、常識など意味がない…だからこそ、ハル自身も
常識を越えた攻撃を叩き込まなければ助けられない…

「粉塵裂脚！！」

故に、未だめり込み、動けないカナンの胴体を狙い、踏みつける
！！

「ウォオオオオオオオオオオオ！！！」

あと数センチ、という所でカナンが左の黒剣を振り抜き、暗黒の
波動が粉塵裂脚を押し留め、さらには弾きあげた…

「くっ…」

「ウォオオオオオアアアアア！！！！」

右腕に集まる二つ目の暗黒の波動…そして、数瞬もおかずに放た
れる！
絶望を運ぶ波動を見ながらも回避をしない…右足一本に集まる空
色…

「っっあああああ！！」

ハルが咆哮を上げる！

波動と蹴りが激突…真横にそれる！

「オオオオオ！！」

「っ！」

が、頭上に現れたカナンに腕を持ち上げることしか反応できず、空中から叩き落とされた…

しかし、ハルは起き上がる…大量に舞い上がる砂塵を、右腕を振り払い吹き飛ばす…

「さぁ…続きと行きましょうか…」

「ァアアアア！」

咆哮を上げながら空間突破で現れるカナン…

刺突を放つ剣を、屈み、片手を地面につき、足払いを放つ…が、それすらも飛び上がり、避けられる…

「オォオオオオ！！」

一瞬で左手に集束する暗黒の光…

またしてもハルは避けず、振り下ろされる腕の軌道を見切り、足払いから伸ばした脚で挟み込み、地面に頭から叩きつける！

大地が割れ、常人なら間違いなく死んだであろう一撃を受けながら尚もカナンは跳ね起きる…

「…っ！」

ハルが体を反らした瞬間、前宙からカナンの剣が振り下ろされ、地を砕く！

さらに派生、溢れんばかりに魔力が注ぎ込まれ大地の針が無数に飛び出す！

「粉塵裂脚…」

目前に迫る針を無視、本体である地面を砕き、根本から針を破壊する！

同時、側面に直蹴りをぶちかました！

何もなかったはずの空間、そこにカナンがピンポイントで現れ、一瞬で吹き飛ぶ！

さらに追撃、吹き飛ぶカナンに追い付き、拳を握りしめる！

「瞬…」

しかし、次に吹き飛んだのはハル…

ハルの視認限界を越え、背後に回り込み、剣を叩き込んでいだ…

「……」

咄嗟の判断で体を捻ったため、右腕に浅い傷を負っただけだが、ハルの執事服が大きく破れ、ポタリと血が落ちる…

「ハァアア…オォオオオオ！！！」

「まずいですね…」

咆哮を上げるカナンに大地が…そして大気が集まり始め、圧縮が始まっていく…
ブラックホール…まさにそれを思わせる…
カナンが剣を投げ飛ばし、掌をハルへと向ける…そこには、小さな球体があった…

「アァアアア！！」

「っ！！」

球体が放たれる瞬間に横に飛び、回避…直後に圧縮されていた大気弾が爆発…　地面を大きく削り取り、巨大な風圧によってハルの体が宙に浮いた…
その目前には、既に剣を振りかぶるカナンの姿があった…

「はぁあああ！」

「アァアアア！」

横薙ぎに叩き込まれた剣と、回転の勢いを使い振り抜かれた脚…
二つの激突は、公園から見える海にまで影響を及ぼし、波を五十メートル近く交代させる！
片膝をつきながら地を滑るハルに、追い付く黒い影…

「ハァアアア！！」

「くぅ…」

叩き込まれる重い斬撃…地を砕く一撃をカナンの手首で受ける…
一瞬早く踏み込みが遅れば、間違いなく腕ごと斬り落とされてい

た…

「壊…す…奪った…奴…全て…ぶっ壊す！！！」

「お二人は生きています…」

「守る…俺が…大切な人ぉおお！！！」

「……」

カナンは泣いていた…何がそこまで駆り立てているのかはわからないが、ハルは思う…

やっぱり…カナンと自分は似ていると…

「助けます…必ず…君には…明るい道を進んで欲しいですから…」

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

咆哮と共に、カナンの背後に龍が生まれる…

十体…百体…千体…と色とりどりの龍が増えていく…

さらに、二本の剣に暗黒が纏われる…

「ウォオオオオオオオオアアアアアアアアアア！！！」

「がはっ！」

一匹の黒龍が黒剣を飛び出し、ハルを加え海上へと進出。

そして、海面に叩き込まれる…

海を二つに裂くような、巨大な水柱が出現し、その威力を物語る…

「オォオオオオオオオ!!!!」

黒龍を追いかけるように、龍達が海へと突撃し爆散していく…

「ハァアアア!!」

未だハル浮かび上がらない…止めとばかりに、もう一刀から黒龍を打ち放ち、巨大な爆発を巻き起こし、次は間違いなく海が裂けた…

そして、左の剣を下に向ける…その先の海が氷結し始めた…

氷結は止まらない…やがては地平線の彼方まで氷結しつくした…

静けさが辺りを包む…

しかし、その静けさも長くは続かない…氷結されたはずの海にヒビが入り、割れていく…

「はぁあああ!!!」

そして、現れる…氷結を突き破りハルが…

氷の床と化した海の上に立ち、カナンを睨む…

だが、みるみるうちに氷面がハルから流れた血によって赤く染まる…

「はぁ…はぁ…く…」

『お前が息を乱すとはな…とんでもない相手だ…』

「ええ…」

『解除術式…打ち込めるのか?』

「打ち込みます…どんな手段を使っても…」

『その手段が一番の問題だろう…』

「です…ね!」

「ゴ…ア…」

カナンの行動を見切り、正面に現れたと同時に顎を蹴り上げる！
衝撃が上空へと突き抜け、カナンの体を浮かび上げる…
自身も跳び上がり、カナンの眼前へ…

「空破掌！」

「ハァアアア！！」

全力で打ち出した空気圧を、二刀の剣を交差し吸収していく…
が、ハルは止まらず、空中で後転しながらサマーソルトで剣を蹴り飛ばす！
再び呼び戻されるまえにカナンの頭を掴み、落下、腹部に膝を押し当てる！

「ガ…ァアアア！！」

カナンの体がくの字に曲がり、氷結した海を砕きながら沈み込む！

「ごふ…」

しかし、ハルが吐血…カナンの拳が腹部へとめり込んでいた…

「オォオオオオ！！」

バキッと音が響き、遂にはハルの肋骨が折れ、再び上空へと吹き飛ばされる…
その背後には既にカナンが回り込んでいた…

「う…おおお！！」

痛覚を無視！　強引に体を捻り回転蹴りでぶっ飛ばした！

ハルらしくない…ドサリと地に落ち、呻く…

「ごほっ！！」『お前…肋骨が…』

「どこかの内臓に刺さってますよ…だから何ですか…

今さら…体のことなど気にしていられません…」

『……』

大量に吐血しながら、ハルが起き上がり、同じくカナンも起き上がる…

瞬時に接近、薙ぎ払われる剣の内側に踏み込み、肘鉄を顎に打ち込み、浮いたカナンに裏拳、膝蹴り、踵落としを決め、カナンを氷の海の底に叩き落とした！

しかし、即座に背後に現れる…

朦朧とする意識を繋ぎ直蹴りと刺突がぶつかり合う！

反発しあう力によって、地平線までの氷床が真っ二つに分かたれる…

威力は互角…両者共に百メートル近くを音速を突き破りながら吹っ飛ぶ！

「オォオオオオ！！」

カナンは、血を撒き散らしながらもすぐさま起き上がり、咆哮を上げるが、ハルは受け身すら取れず、氷面を滑り転がっていく、さらに血の量を増やしながら吐血する…

『ハル！』

「ごほっ！！　大丈夫ですよ…
この程度…最初から予測してました…
彼は殺す気で来ますが…僕は殺すわけにいきませんし…リスクは覚悟していました…」
『まだ分離すら出来ていないのだぞ…お前…死ぬ気か？』
「死にません…友人が悲しみますから…」

いつのまにか生存目的が変わっていることにハルは気づかない…

「カナン…今…助けますから…」
『まさか…』
「こんな方法…僕らしくないのはわかってます…ですが…」

激痛の中、起き上がり、右手に術式を展開…環状魔方陣が浮かび上がる…
ユニゾンの強制解除術式…
元々は、デバイスとユニゾンに近い状態となるクレアをいつでも助けられるようにとハルが作り出した魔法…
それを構えて動かない…否、動けない…

『や、やめろ！　助からんぞ！』「ですから…死にません…死にたくないんです…
もう少し…彼らを…見ていたい…」

「アァアアアアアアアア！！！！」

動けないハルを狙い、カナンが空間突破を発動！
瞬間、ハルの腹部の中心を刺し貫いた黒き剣…
引き換えに、術式がカナンへと吸い込まれていった…
そして、剣が引き抜かれ、鮮血を撒き散らしながらハルが倒れた…

「ま…だ…」
まだ、カナンの暴走は止まったわけではない…
メイデンとレナスを分離させる術式を打ち込んだだけだった…
故にカナンの暴走は止まらない…

「ハァアアア…」

「はは…いきなりピンチですね…」
『ハル！！』

振り下ろされた凶刃は、ハルに向かい…弾き飛ばされ、カナンが吹き飛ぶ！

「間に合い…ましたか…」
『メイデン殿…レナス殿…』

メイデンがハルに近づき、回復魔法を施し、転送する…

「ありがとう…ハルさん…ゆっくり休んでくれ…」

眩しいほどの金と銀の髪を靡かせながら…

「後は、私達がお引き受けします…」

二人の女神は、少年と対峙する…

「ウォオオオ！！！」

咆哮するカナンに、メイデン、レナスの二人は悲しそうな顔をす

る…

「マスター…貴方は強い…
貴方の心は、闇に飲まれていないと信じている…
私達は、全力で貴方の意識を呼び覚ます…
聞こえたなら…答えてくれ…」

「私もメイデンも頑張りますから…主も、頑張ってください…」

「ウウウ……」

カナンが戸惑いを見せ動きを止めると同時に、二人は掌を合わせ、瞳を閉じる…

「「ユニオン…ドライブ…」」

二人の姿が重なり、眩い光に包まれる…
光が収まった時、一人の女性が立っていた…
金色の長髪、胸当て、純白の腰布を纏い、右手には両刃の大剣。
巨大な三対の翼が羽ばたかれ、舞い散った…
開かれた瞳は、金と銀のオッドアイ…

「……」

「ウォオオオオオァアアア！！！！」

咆哮を上げるカナンを、静かに見続け…やがて呟く…

「貴方には帰るべき場所がある…
待っていてくれる人もいる…

一緒に帰ろう…マスター…」

Ｎｅｘｔ　Ｓｔａｇｅ……

第二十三話　守るために　（後編）　（前書き）

すいません。試験が近く、中々執筆出来ずにお待たせしてしまいました…

次回は早く出来るように頑張ります。

第二十三話　守るために　（後編）

ルミオ
「毎度お馴染み、前書き質問コーナー」
一同
「わ～♪」
ルミオ
「はい、ありがとな～。
前回、司会者に抜擢されたルミオだ。
よろしく」
祐希奈
「さてと、いきなりだけどルミオ」
ルミオ
「ん？」
祐希奈
「とりあえず、蹴り飛ばしていい？」
ルミオ
「なんでだ！？」
祐希奈
「やっぱ、私以外の人間が仕切るのは許せないわ」
ルミオ
「俺は被害者だぞ！？」
祐希奈
「爆砕…」

ガシッ

カナン
「俺もぉおおお！？」

祐希奈
「烈脚♪」

ドゴッ！

ル・カ
「ごふっ…」

ヴィヴィオ
「い、いきなり凄いね…」

メイデン
「ルミオさん…頑張れ！」

レナス
「これがＬＶ空間なんです…」

ムクッ…

ルミオ
「悟りを開いた俺には通用しない…」

カナン
「悟りってスゲーなオイ…」

祐希奈
「まぁ…」

ゴウッ…

ルミオ
「え…」

カナン
「まさかの…」

祐希奈

「二回目逝ってらっしゃい♪
烈破紅蓮爆砕撃！！」

ゴオオオオ！！

ル・カ
「ごっふう！！」

ザザザー…

祐希奈
「さて、これならルミオでも使えるでしょ。
魔方陣を介して奔流打つだけだし。
ガードにも使えて、威力も高め、加えて変換資質ある人間は集束の手間がないから出るのも速い。
私、オススメの一撃よ♪」

ヴィヴィオ
「誰に向かって宣伝してるの？」

祐希奈
「全時空に向けて宣伝よ♪」

天然ズ
「えええ！？」

コソコソ…

カナン
「さて、最初の質問は…ルミオ」

ルミオ
「おう…これは、テスタメントさんとこにもあったな。
『暴走カナンＶＳ暴走シオン、ＬＶ視点で語って欲しいです』

だとよ。どうなんだカナン？」
カナン
「まぁ、ぶっちゃけ暴走状態じゃ決着はつかないって考え自体は変わらないな。
近接戦に関してのみ、やや反則級の一撃があるから、大罪スキル発動前に叩き込めば、多少は効くかもな。
発動された場合、暴走状態の俺じゃちょっとな。
グリィドに対向手段が、最強バージョン俺にならないと無いし。
な？　案外俺の暴走状態、弱いだろ？」
ルミオ
「あれを弱いと言っていいのか…」
カナン
「所詮は暴走状態。
理性もなんもない状態じゃ、力の半分も出ないってことだ」
ルミオ
「半分でハルを倒すってどうなんだよ…」
カナン
「それは仕方ないって。
ハルも本気を出しきれないわけだし」
ルミオ
「そ、そうか…次いくぞ」
カナン
「はいよ～」
ルミオ
「『メイデンとレナスって実力的にはどの辺りに位置してるの？』
確かにあんまり戦ってないからな」
カナン
「ん～…ＡＡ＋～ＡＡＡ－ってとこか」
ルミオ
「ＬＶにしては低い方か？」

カナン
「まぁ、アイツら単独ならの話しだが…
ぶっちゃけ、ユニオンしたアイツらの戦闘能力は、普通の俺じゃ勝
てん」
ルミオ
「一応聞くが、何でだ？」
カナン
「簡単に言うとだな…
ＬＶ版無尽刀っていえばわかるか？」
ルミオ
「お、おっちゃん級なのか！？」
カナン
「いや、だからＬＶ版な？
自然を操る女王だな。
ちなみに、意図的に強化しない限り、魔力消費はゼロだ」
ルミオ
「それは…ダメだろ…色々と…」
カナン
「気にしない方向で行…け…」
祐希奈
「アンタ達ぃ？」
カ・ル
「……」
祐希奈
「なぁに二人だけで質問全部答えちゃってんの？」
ヴィヴィオ
「あはは…まぁまぁ、祐希ちゃん、二人も大変なんだし、ね？」
メイデン
「たまには良いではないか」
レナス

「ということで、祐希奈さんは私達が止めておきますので、最後までお二人でどうぞ」
ルミオ
「じゃ、魔法少女、リリカルヴィヴィオ」
カナン
「俺、暴走編。始まるぜ」
祐希奈
「ぶっとばぁあああす！！」
ヴィヴィオ
「まぁまぁ、抑えて抑えて」
メイデン
「我慢も時には重要だぞ？」
レナス
「少しばかり危険ですので、しばらく身を隠した方がよろしいかと」
カナン
「しゃあないか。ルミオ、楽屋に来いよ」
ルミオ
「いいのか？　一応他作品のキャラだぞ？」
カナン
「大丈夫だって。シオンとか銀杏とかも楽屋に来るわけだし、茶でも出すよ」
ルミオ
「わかった。なら、ゆっくりさせてもらう」
カナン
「一名様ご案内～と」

バタン…

これが、後にカオスを呼ぶことを二人はしらない…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

紅い目が、迷いを浮かべながら女性を睨み、唸りながらも動かない…

「苦しいのだな…」

「ウウウオオオオオオ！！！」

迷いを絶ちきるようにギンと目を開き、黒剣を抜き放つ！
同時、カナンが立っている場所から石針が大量に飛び出し、女性を襲う！

「下がれ…」

女性が呟く…
そして、石針は、眼前にて停止し…砕けた…
しかし、次の瞬間には、背後に回り斬撃を放つカナン。
轟音が鳴り響き、衝撃波が吹き抜ける！
衝撃波の中心には、二刀を見向きもせず、片腕で受け止める女性がいた…

「オオオオオオ！」

二刀に大地の力が集束していくが、女性の大剣はビクともしない…
受け止めたままゆっくりと振り向き、正面から向き合う…

「そのような我の力の“一部”いくら使おうが、届くことは未来永劫ありはせん…」

女性が大剣を両手で持ち直し、一歩を踏み込む！
瞬間、音速を突き抜けカナンが吹っ飛ぶ！
女性は、屈み掌を地面につけ、目を閉じた…

「大地よ…我が声が聞こえたならば我に従え…」

突如、女性が掌をつけた場所から大地が裂け、地割れが起きる！
跳ね起きたカナンは、飛行魔法を使い。

「落ちろ…」

「グゥ…オォオ…」

上空からカナン単体に対して暴風が直撃し、闇へと押し込まれ。

「閉じよ…」

地割れが閉じ、カナンごと押し潰す…
が、女性は構えを解かず寧ろ、気を張る…

「……ゥゥウオオオオオオオ！！！」

「くっ！」

閉じたはずの大地からカナンが飛び出し、女性に肉薄…吹き飛ばす！
迷いは消え、純粋な殺意のこもる斬撃は、桁違いに威力が上がっていた…
尚も追撃、女性に追いすがる！

「ウォオオオ…っ！」

追撃をやめ、カナンはいきなり体を捻る！
コンマ一秒おかずに石針がその場を射抜いていた…

「はぁっ！」

「ァアアア！！」

風の力で加速し、下段から叩き込む女性に対し、カナンは回転斬りで対抗、両者吹き飛び、止まらない！
空中で体勢を立て直し、女性は風を、カナンは空間突破にて突撃。
轟音を響かせながらすれ違い様に叩きつけるように斬撃を重ね、交じり合う金と黒…

「はぁあああ！！」

「ウゥゥ…」

変化が起きた…大剣が黒剣を押していく…
交じり合う度、踏み込み、徐々に押し込みながら追い詰めていく！

「本来の貴方は！！」

「ガァァ…」

激突と同時に弾き上げ、横殴りの一撃を胴体に叩き込み、吹き飛ばす！
さらに追撃、刺突に構え突撃する！

「こんなにも弱くはない！！」

「グゥ…」

刺突を受けたカナンの背後から石針が飛び出し打ち上げる！
風で加速、体勢を立て直す前に大剣を振り下ろし、防御もろとも撃ち落とす！

「幾度…幾百…幾千の貴方の斬撃を一緒に見てきた！
一緒に強くなってきた！！
だが…これは何だ…
こんな力が欲しかったのか…貴方は…違うはずだ！！
ヴィヴィオや祐希奈を守りたいのはわかる…
だが…貴方は、ろくに使えもしない力を使った…
こんなことをして、先に貴方が死ねば悲しむのは誰だと思っている！？
貴方が守りたいヴィヴィオと祐希奈だろう！！
誰が欠けても行けないんだ！！」

「ウゥゥ…」

叫びながら、追撃に追撃を重ね、吹き飛ばし、叩き込み、打ち下ろす！
石針がカナンを取り囲み動きを封じる…
振り上げるは大上段…螺旋を描きながら黄の魔力が大剣に集束していく…

「何か理由があるのなら…抱えるな…
貴方が言ったんだぞ…一人で頑張るなとな！」

大地を砕きながら踏み込み、全くの手加減抜きで大剣を叩き込ん

だ…
自ら作り上げた石針を打ち砕きながら、進む大剣。
しかし…空気を震わす轟音を響かせ、大剣が止まった…
カナンが、黒剣を交差し、女性の一撃を受け止めていた…

「っ！」

「……」

一瞬にして黒閃が女性に叩き込まれる！
いくつかもらうが、痛みに耐え、受け止め、弾く！

「ハァアアア…」

「くっ…声では届かないのか…」

弾けど弾けど一瞬にして距離を詰められ、何度も叩き込まれ、さらに黒の斬撃の数が増えていく…
対し、金の斬撃は、避けられ始め、遂には防戦一方へと変わる…

「このままでは…」

重く速い斬撃に、女性は表情を苦にする…
ここまで反応出来たのも、今までの経験から反応していたに過ぎない…
だが、今のカナンはデータ以上の速さを叩きだし始めている…

「仕方ない…か…」

「ハァアアア！！」

女性の真上にカナンが現れ、黒剣から暗黒の波動が叩き込まれる！
しかし、波動は周囲に四散し弾け飛ぶ…
それを成した人物はただ一人しかいない…

「貴方を止めることを最優先で動く…
骨の七、八本は我慢しろ…」

女性が持つ大剣の色が透明に近くなり、その剣腹を縦に境目を作るように宝石が埋まっていく…

「貫けっ！」

到底届くはずのない高度にいるカナンに向かい、刺突を放つ！

「がふっ…！」

緑の宝石が輝いた瞬間、カナンの体がくの字に曲がり、吹き飛ぶ！

「雷鳴よ…」

女性が剣を振り下ろす…金の宝石が輝き、雷鳴が轟き、堕ちる！

「ウゥ…オオ！！」

が、黒剣に光が集まり、吸収され、振り抜かれた剣から女性に返る！

しかし、女性はそれをさらに吸収…次に光るの金と青の宝石…

「疾れ…水牙…」

雷を伴う水の槍が大量に出現、次々とカナンに放たれ、視界を覆い尽くすまでに水槍は突撃していく！

「ウォオオオ！！」

関係ないとばかりに、剣を抜き放ち、水槍を斬り飛ばしながらカナンが突撃、刹那の時間に女性に肉薄、体を捻りながら剣を叩き下ろす！

しかし、女性の姿が二つに分かれていた…

翻る二つの体、金髪と銀髪が光を反射し、煌めきながらカナンに落ちる…

「「いっけぇえええ！」」

回転と共に大地の力が込められた蹴りは、背中へと打ち込まれ、流星のように叩きつけられたカナンは、巨大なクレーターを作り上げた…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

なのはの腕の中でヴィータは最早声すら出さない。痛覚の限界を越えビクビクと痙攣を起こしながら浅い息を繰り返しているだけだ。

「はっ…はっ…」

「クク…存外…耐えるもんだな…お？」

「ヴィータちゃん…もう少し頑張ってね…すぐに終わらせるから…」

ヴィータにレイジングハートを向け、短距離転送で安全な位置まで飛ばす…
そして、男に振り替えるなのはからこれまでとは比べ物にならない程の怒気を纏う！

「殺る気に…」

直後、男の体が吹き飛び、ビルを貫く！
男が立っていた場所には、デバイスを振り抜いた形のなのは…

「エクシードモード！」
『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ…Ｓｅｔ…ｕｐ』

レイジングハートが変形すると同時に振り上げる。
なのはの背後から男が曲刀を叩きつけていた…

「ほう…」

「ディバイン…バスター！」

なのはは、受けたまま砲撃を真横に放つ。
結果、勢いによってなのはの体は刃から逃れる。
即座にカット、がら空きの男に大上段にデバイスを持ち上げる！

「甘い…」

スッと男が一歩を踏み込み、流れるように体重移動、曲刀は方向を変え、なのはを襲う。

『Ａｃｃｅｌ　ｆｉｎ！』

しかし、最初から近接など囮として使ったに過ぎない…
翼を広げ、上空に飛び上がる。デバイスを男に向ける…放つは抜き打ち！

「エクセリオン！　バスター！！」

「クク…やるねぇ…だが…まだ足りん！」

砲撃をもろに浴びながら、男が飛び上がり、なのはへと突撃！
ジリジリと迫る男になのはは、冷徹な瞳で見つめ返すのみ…

「なら…本気の一撃…あげる…」

カートリッジが排出された瞬間、男は大きく目を見開いた。
何故なら、ロストロギア持ちの魔力をも凌駕する圧倒的な魔力の輝きをなのはに見たからだ…
砲撃の中で、男の笑みが広がる。

「ははははは！　いいぞぉ女ぁあ！！」

「ブラスト…シュュゥウウト！！」

突撃する男を一瞬にして押し返し、地面に叩きつけ、尚止まらない！
莫大な魔力は、続けて放たれ続ける砲撃に耐えきれずドーム状に広がり、触れた物を破壊していく…

「はぁあああ！！」

なのはの叫び。
それが響くと同時に桜色の奔流は勢いを増し、一気にドームへと叩きつけられ、聴覚を潰すような爆音がクラナガンに響き渡った…

「……」

確実に殺人級の砲撃を放ちながらも、なのははレイジングハートの構えを解かず、爆煙を睨み付けながら動かない…

「クク…」

押し殺したような小さな笑い声がする…

「はーはっはっは!!　いいぞ…いいぞいいぞいいぞ!!
これだよ…俺はこれを待ってたんだ…
存分に殺しあいを楽しもうぜぇ!　女ぁぁあ!」

「私は…殺さない…」

静かに、しかし、強い意思を持ってなのはが男に言い放つ…

「なんだと…?」

「戦いを楽しんで、ただ、力を振るうだけの…命の価値もわからないような…そんな人…殺す価値なんて…ない…
さっさと倒して、私達の前から消えてもらうよ…」

「クク…やってみろ…その気にならなきゃ…俺がお前を殺すだけだ…」

ただただ…冷たい風が、なのはと男の間に吹き荒れ…

「アクセルシューター！」

桜色のスフィアが風を切り裂き駆け抜ける！
男はそれを確認。

「ふん！」

しかし、正面から突っ込み、スフィアの豪雨に身をさらす…
微塵も表情を崩さずなのはに接近。

「バースト！」

瞬間、男をスフィアが取り囲み爆ぜる！
小規模の爆発が重なり、やがては巨大な爆発へと変化、空気を震わす爆音を響かせる！

「っ！」

悪寒…魔導師としての直感が警鐘を鳴らす！
本能に逆らわず、投げ出すように背後に飛ぶ。
直後、一筋の閃光を残しながら眼前を曲刀が通りすぎた…

「ディバインバスター！」

即座に集束したショートバスターを“真横”に撃ち放つ！
そして、黒煙を上げながら吹き飛ぶ男…
クルリと空中で回転し、ニタリと笑う…

「よく気づいたな？」

「……」

男の言葉をなのはは相手にせずスフィアを浮かべ、レイジングハートを構え直す。

「おぉ…怖い怖い…ひひ…」

「エクセリオンバスター！」

レイジングハートの先端に光が放たれると同時に桜色の軌跡を残しながらスフィアの豪雨が再び放たれ撹乱しながら男に向かう！

「クク…芸が無いな…」

避けられた…それだけでは無かった…

なのはは、自分の目を疑う。

男の体が一体、二体と残像を残しながらゆっくりと、近づいてくる…

カナンやフェイト、ヴィヴィオのように速すぎて目がついていけないわけではない…

男はゆっくりのまま、残像を増やしていくのだ…

「くっ…！」

片っ端から男の残像にスフィアを叩き込み、打ち消すが、それより早く残像の数が増えていく…

遂には、なのはの周囲を取り囲みぐるぐると旋回を始める…

「お前には」
「わからない」
「だろう…」
「どれが本体なのか…」
「死神の刃と一緒に」
「楽しいワルツの始まりだ…」
「さぁ…」
「解体ショーの」
《始まりだ…》

「っ！」

一斉に死神が動きだす…全てがバラバラの動きをしながら…

『Ｆｌａｓｈ　ｍｏｖｅ！』

高速化し、四方八方から斬りつける刃を避け、受け流しつつ、スフィアで撃ち抜く…
全てが実態であるはずがない…
しかし、曲刀が空を斬る風も、音も、感触すらもなのはは感じとる…

「俺の」
「能力はなぁ…」
「弱い奴には意味はない」
「一定以上の強さを持つ…」

「つまり」
「五感」
「が」
「鋭ければ…」
「鋭いほど…」
「強くなる」
《貴様のようにな》

さらに残像が増え、男の姿でなのはが覆われ、さらに男がニタリ

と笑う…

《さぁ…どうする？》

この状況になのははは奥歯を噛み締める…

打破出来る手札はなのははにはあることはある。

《来ないならこちらから行かせてもらう》

なのはただ一人に向かって、残像の群れが一斉に動きだし突撃する！

「仕方ないよね…ブラスター…」

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！』

「え？」

レイジングハートがオートでカートリッジを排出し、なのはの頭上にプロテクションパワードを展開する。

「っ！」

男が驚愕しながら頭上を見上げた瞬間…

降り注いだ…炎の雨が…それらは、残像を瞬く間に消し、破壊し尽くしていく！

炎の雨が止んだ後、残っていたのは、なのはと黒煙をあげる男…

「まさか…来るとはな…」

ぽつりとそんな事を男が呟き、空を見上げた…

▼▼▼▼▼▼▼▼

鳴り響く…一定のリズムを刻みながら激音が…
リズムは決まって金属音の後に爆発を思わせるビルへの激突音…
そして、ガラガラと倒壊するビルの音…
瓦礫を突き抜けながら、シグナムが現れ、直ぐ様女が現れる…

「ほらぁ！」

「はぁっ！」

女の右腕から振るわれる大盾に、内側へ一歩踏み込み、打ち込む。
石化を防ぐと同時に女の怪力を潰すためだ。

「無駄無駄ぁ！」

「くっ…」

引き絞るように左腕が引かれ、放たれる！
シグナムは、左腕を眼前に引き戻し、刺突を防ぐ…しかし、大盾の勢いは止まらない…
次の瞬間にはシグナムの体が宙を舞う…
先程からこの繰り返しだった…

「くらいなさい！」

大盾が向けられ、血のような赤い閃光が放射。
しかし、その先のシグナムが不規則な動きを行い閃光を避ける！

「鬱陶しい！」

レヴァンティンシュランゲフォルムをビルに巻き付け、飛行魔法ですら不可能な不規則な動きから女の周囲を旋回、次々と閃光を避けていく！
その動きが急降下、ビルの前で剣を構える！

「もらったぁ！」

動きの止まったシグナムに閃光を放つが、構わない…
一閃！
ただの一太刀でビルを地上から切り離し、踏み込んだ勢いのまま回転、ビルを殴り付ける！
同時に周囲を取り巻く環状魔方陣…
紅蓮の業火がビルを包み込む！

「うぉぉっ！」
『ブッ飛びやがれぇ！』

「なっ！」

瞬間、ビル丸々一棟が女に突撃する！
石化の光がビルに当たるが、質量が違いすぎる…
閃光を浴びながらもビルの加速は止まらない…そのまま盾を構える女へと叩きつけられ、轟音が響き渡る…

「ぐぅぁあ……」

いくら女が怪力と言えど、物質加速、強化、魔力変換資質を叩き込まれた５０ｍの質量だ。
その衝撃は尋常ならざる物がある。

「飛竜一閃！」

「ぐ…うっ！」

さらに女の盾に直撃する炎を纏う連結刃！
数メートルの後退、踏み止まる…
しかし、女は違和感を覚えた…
左腕とはいえ、初撃の威力と違い、軽すぎることに…

「まさか…」

ダンっという音が背後に鳴り響いた瞬間、疑問は確信へと変わる。
背後に光…そして、身を焦がす熱を感じとる！

「祐希奈直伝！」

アウトフレームとなったアギトが、右腕に紅蓮の炎を纏い、女へと踏み込んでいた…
ビルも、連結刃も囮、本命はアギト！

「烈破爆砕拳！！」

激烈な衝撃と共に拳が叩き込まれた！
直後、炎が女を包み込む！

「が…はっ！」

空気を吐き出す女の体は、拳に吸い付くように持っていかれ。

「うぉおぉぅらぁあああ！！」

腹の底から声を出したかのようなアギトの叫びが響き、紅蓮の爆発が起こり、女を天高く打ち上げる！

「紫電！」

「調子に…」

止めとばかりに一気に接近するシグナムに、女はクルリと体勢を立て直し、大盾を振りかぶる！

「一閃！！」

「乗るなぁぁあ！！」

ビリビリと空気が振動し、轟音が鳴り響く…

続いて紅蓮の爆発。黒煙の中から飛び出したのは、シグナム…

さらに大盾がシグナムを追撃する！

「うぉぉっ！」

空中で急停止、さらに自身の最速を持って突っ込み、勢いと重心移動を合わせ、盾を上段から叩き落とす！

瞬間、シグナムの頭上を影が覆う…

遥か頭上より音速を突き破りながら女が大盾を振り上げ、シグナムへと迫ってきていた。

「死ぃねぇえええ！」

驚異を見据え、鞘を放り上げ、連結…双刃剣へと姿を変えた…
レヴァンティンを頭上に掲げ、回転、加速していく！

「アギト…力を貸せ…」
『おうよ！』

双刃から伸びる炎の刃…二頭の火竜がそこにいた…

「『紅龍！』」

回転の勢いを落とさぬまま、下段から炎剣を跳ね上げる！
音速超過で振り下ろされた大盾と激突し、衝撃波が吹き荒れ、拮抗…相殺！

“炎刃の片方”が…

シグナムは、自身ごと回転、結果、炎剣も回転し、大気すら焼き付くしながら女へと向かう！

「っ！」

「『絶炎双牙ァァ！！』」
そして、叩き込まれる瞬間、炎剣は消滅した…

「『何！？』」

否、鎮火したのだ…
人を凍らせるほどの冷気によって…

「まさか…こっちに来たの！？」

女の表情が驚愕に染まり、空を見上げた…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

視力を失っているフェイトは、ライオットザンバー・スティンガーを上下段に構え、動かない…

「いい加減にしなさい！」

女が怒鳴りフェイトの周囲に氷槍が現れ、一瞬の空白の後、放たれる！

「はぁぁ…」

氷槍が迫る中、フェイトはゆっくりとした呼吸で精神を集中…極限まで研ぎ澄ます…

遠くから響く爆音も、轟音も、フェイトの意識から切り離され、残るは氷槍が風を切る音…

「やぁぁっ！」

「くっ！」

目が見えないにも関わらず、フェイトの斬撃は寸分の狂いもなく氷槍を斬り飛ばす。

その光景に苛立つ女が飛び上がり、炎剣と化したクラウ・ソラスを振り下ろす！

「上か…」

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ』

その飛び上がる小さな音さえも聞き逃さず、方向を判断、ソニックムーブで背後に動き、距離をとる。

「…チョロチョロと面倒ですこと！」

フェイトを追撃し、うねる炎剣、時には右から、時には下から…不規則な動きで迫る剣を、出力を上げた双剣で受け流し、後退に後退を重ね、遂には攻撃範囲から抜け出した。

「あぁぁっ！」

防いでは逃げを繰り返すフェイトに、苛立ちが募り、女は加速を行い。

「ごふっ！」

「はぁぁっ！」

直後に突っ込んできたフェイトの二刀を腹部にもらい吹き飛ぶ！しかし、さしてダメージを受けた様子も無く、女は体勢を立て直す…

「さぁ…まだまだいけますわよ？」

「……」

カウンターで叩き込まれた女がダメージをあまり受けていないのには理由がある。

二刀に、フェイトの重心が乗せきれていないからだ…
さらに、目が見えないがために、、相手が動いている場合、急所に当てることが不可能なのだ。
結果、一撃が軽く、ダメージも少ない。
問題はまだあった…

「次はどんなねこだましを見せてくださるのかしら？」

表情にこそ出していないものの、フェイトは内心焦っていた…
何故なら、今までは、不意打ちにのように攻撃していたのだが、それももう不可能に近い。
つまりは、手札がないのだ…
弱い相手なら同じ手札を繰り返して使えるが、今回は間違いなく強者…同じ手は通用しない…

「ネタギレ、のようですわね？
では…そろそろ決めさせていただきますわ」

「出来ればね…」

「虚勢は見苦しいだけですわよ！」

女の体がぶれ、ソニックムーブに匹敵する速度でフェイトに接近。
その勢いのまま長刀を叩きつける！

対し、左腕を振り上げ、凌ぎ、右腕で刺突を放つ！
が、既に女の体はそこにはない…

「っ！」

残像を残しながら、フェイトの周囲を回転し、長刀が次々と放たれていく。
一刀はフェイトの急所を狙い、また一刀は甘い斬撃で緩急をつけ、感覚を狂わせる…

「ふふ…いつまで耐えきれますの？」

女がわざと長刀を地に滑らせながら雑音を響かせ聴覚を潰す…
さらに長刀を炎剣に変化、横薙ぎにフェイトへと叩きつけた。
二刀を交差し、受けた瞬間、炎剣が天へと伸び鎌首をもたげる…

「蛇炎一閃…」

ギンッと高い音が響き、フェイトの体が女から離れた…
そして、フェイトは、炎蛇に丸飲みされる瞬間、蛇の姿を“見た”

「ふふ。……？」

炎蛇の様子がおかしいことに女は気づく…
本来なら飲み込んだ後、また鎌首をもたげるはずなのだが、蛇は動かない…

「ギシャァアア！！！！」

「！？」

瞬間、炎蛇を串刺しにするように腹を貫く長大な雷剣…

「うぉおお！！」

叫び。
それは炎蛇の中から響く…
腹を貫いた位置から横薙ぎに払われ、真っ二つに切り裂かれ、消え去る炎蛇…
長大な剣が元の大きさへと戻る。
そこには、肩の高さに剣を構える雷姫、フェイト・Ｔ・ハラオウンがいた。

「後少しというところで…忌々しい！」

「これで形勢逆転…お前を…倒す！」

二つの体がぶれ、金と白の光を纏いながら、混じり合うたび火花を散らす！

「「はぁぁっ！」」

最早倒壊を待つだけとなったビルを縫うように移動し、弾丸と化した勢いのまま、同時に袈裟と逆袈裟から剣を叩きつけ、その場で回転、フェイトは下段、女は上段から剣を振り抜き、さらに剣撃を重ねていく。
重い斬撃に勢いを落とさず、寧ろ増していく剣撃戦。

「しつこいですわよ！」

フェイトが放った逆袈裟からの一撃を、受け流し、刺突をフェイトの頭へと打ち放つ！

『Ｂｌｉｔｚ　Ａｃｔｉｏｎ！』
「やぁぁ！」

対し、フェイトは四肢加速を発動、首を捻り刺突を避ける。
即座に踏み込む！

「がっ！」
下段から振り上げられた剣は、がら空きだった女に直撃し、打ち上げる！
が、女の体が斜めに回転する…
フェイトは追撃せず、その場で溜めを作り、カートリッジ排出…

「光閃剣！！」

「ジェット…」

三日月を描きながら襲い来る巨大な光剣、しかしまだフェイトは放たない…
自信の数メートル手前まで来た瞬間、踏み込み、抜き放つ！

「ザンバァァー！！」

「っ！」

女の表情が驚愕に染まる…
フェイトはジェットザンバーを光剣に対して斜めに叩き込むことで、力の加わる方向を変えていた…
その方向は、女がいる上空…
つまり、フェイトの体は、刃に引っ張られる形で飛び上がる…
光剣を滑るように進む！

「終わりだ！」

「ちっ！」

そのままの勢いで斜に振り払った剣は、女を捉えず空を斬る…
女が光剣を手放し、無理矢理体を捻ったからだ。
しかしフェイトは止まらない…
通り過ぎたとわかると自身の体を捻り、斬撃の方向を斜めから真横へ変更、眼前には丸腰の女！

「「っ！！」」

しかし、二つの体は反発するように同時に離れた…
瞬間、二人を裂くように轟雷が降り注ぐ！

「新手…？」

「違いますわ…あれは…」

半ば諦めたような表情で、女が空を見上げる…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

戦いが止み、機動六課、ロストロギアメンバー、全ての視線がそらを見上げる…
その先には…

「儂も仲間に入れてもらえぬか？」

空から降りてくる小さな影…それは、少女だった…
顔には満面の笑みを浮かべ、ここが遊び場とでも言わんばかりに

幸せオーラを出していた…

《……》

誰も、何も話さない。

ロストロギアメンバーは、苦虫を噛み潰したかのような顔で少女を睨み、六課メンバーは、混乱している。

当たり前である。見た目が幼すぎるのだから。

「ふむ…やはりこの姿では威厳がでぬか…

では…これならどうじゃ…」

少女の姿が一回り、二回りと大きくなり、鈎爪が伸び、夜空を思わせる翼が背中から広がる…

それと同時に膨れ上がる魔力…

ミッドチルダ全域が一つの存在によって震えた…

「う…そ…」

自身の手を見る…ガタガタと震えていた…

無敵のエースと呼ばれた自分が…

これまでにないほどに恐怖を感じていた…

それは、フェイトもシグナムも、さらにロストロギアメンバーさえも同じ…いや、一人だけ違った…

「ククククク…ここまで来ると笑えてくる…

女は後回しだ…魔神狩りと行こうか…」

そう言って、男は少女…だったものに向かって単身飛び上がる！

「タナトスか…懐かしいのう…
じゃが…お主ただ一人では羽虫を払うに値せぬ…闇に落ちよ…」

掌が向けられた瞬間、男が闇に飲まれた…

「あれは…はやてちゃんの…デアボリックエミッション…？」

しかし、デアボリックエミッションを広域魔法であり、詠唱も必要とする。
だが、魔神は無詠唱、さらに、ピンポイントで発動させていた…

「その程度で落ちると思ったのかぁ！？」

叫び、直後、男が闇を抜け出し、魔神へと斬りかかる。

「じゃから、お主だけでは勝てぬ…」

面倒くさそうに、右手を降ろす…
直後、男が進路を変え、地面へと突撃し、轟音を立てて落ちた…

「ほれ…全員でこぬのか？
逆らわずして全滅するをよしと思うのなら構わぬが？」

この言葉に、なのはは、フェイト、シグナムへと念話を飛ばす。
（フェイトちゃん、シグナムさん…逃げ切れると思う？）

（いや、不確定要素が多すぎる…
この魔力…何をされるかわかったものではない…）

（私もシグナムに賛成…倒すのは無理にしても、隙をつけば…）

（うん…ヴィータちゃんも危ないし…
一気に行こう…）

そう。ヴィータに残された時間は少ない…
先ほどの様子からして、五～十分が良いところだ…
急がなくてはならない…
倒すのは不可能なら、撤退に全力を注ぐ。

デバイスを魔神へと向け、カートリッジ排出、膨大な桜色が集束していく…

「エクセリオン…バスタァァー！！」

フォースバースト。エクセリオンバスターの最大出力砲撃。
それを見て、魔神は少し笑う…

「さぁ…楽しもうぞ…」

「嫌だよ！」

突き出された右腕…ミッド、ベルカ、それを囲うように三重円の魔方陣が展開され、砲撃を受け止める…ブラスターリミットを解放したなのはのフォースバーストをだ…
しかし、驚いてはいられない…撃ち抜くための言葉を紡ぐ！

「ブラスト…シュート！！」

四つの砲撃を纏めるように極大な砲撃が放たれる。

「しまいかの？」

「っ！」

撃ち抜けない…未だに砲撃は受け止められたまま相手は微動だにしていない…

「軽いのぅ…儂をやるなら…これくらいは…」

ゆっくりと上げられる左腕…
その掌に浮かぶ桜色の球体…
展開された魔方陣に重ねるように球体を当てた。

「やらねばな？　エクセリオン…バスターじゃったか？」

魔方陣から砲撃が放たれ、なのはのエクセリオンバスターをあっさりと押し返す！
なのはの視界を覆い尽くす自身の砲撃…

「なのは！」
『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ！』

「フェイトちゃん！」

直撃する瞬間、術後硬直で動けないなのはの体をフェイトが引っ張り離脱。
直後、巨大な爆発が起き、二人を衝撃波で吹き飛ばす！

「流石じゃな。まだまだ楽しめそうじゃ♪」

ニコリと笑うその背後に飛び上がる影…

「そうもいかん！」

『猛れ炎熱…烈火刃！』

アギトとユニゾンをしたシグナムだ。

カートリッジを排出しながら、さらにアギトの補助によって左腕のレヴァンティンは炎の出力をあげる！

「終わらせる！」

紫電一閃。大上段から降り下ろされた一撃！

「嫌じゃ」

そう言い放ち、剣が魔神に吸い込まれる前に姿が消える…

シグナムが見たのは二つに裂けた異空間…

「何！？」

『マジか！？』

そして、肩をトントンと叩かれる…

半ば結果を予想しつつも、振り返らなければならない…

「がっ！」

『シグナム！』

直後、シグナムの額にデコピンが炸裂した。

しかし、その威力は人の領域を遥かに越え、吹き飛んだ距離は、二十メートルにも及んだ…

「遅いのぅ…」

「まだ…まだ！」

『おうよ！』

しかし、吹き飛びながらもカートリッジ排出、強引に体を捻り、魔神を狙う…

「『飛竜一閃！』」

炎を纏い、連結刃が放たれ、迷いなく魔神へと突き進む。

「効かぬな…」

それを、軽く右爪で薙ぎ払い弾き飛ばした…

だが、シグナムは連結刃を巧みに操り、再度方向を修正…

「効かぬと言うておるのじゃ…む？」

魔神は、自身の上空に魔力を感じ取った…

その答えを裏付けるように空薬莢が目の前を落ちていく…

轟雷が降り注ぎ、雷剣へと吸い込まれる…

「テスタロッサァァァ！！！」

シグナムが叫ぶ…本命を叩き込めと言う想いを込めて！

「プラズマザンバー…ブレイカァァーッ！！」

自身の力の全てを乗せて、極大の魔方陣から雷撃を纏う集束砲を解き放つ！

「ふむ…雷ならば…フォース、ブリンガーでもいくかの」

軽い台詞とは裏腹に、圧倒的な魔力が即座に集束…速射。
にも関わらず、フェイトの集束砲と互角にぶつかり合い、紫電が弾け、互いに身を削り合う！

「くぅっ…」

さらに、徐々にだが、フェイトが押され始めた…
集束砲などを真・ソニックフォームのフェイトが受けたらどうなるか…間違いなく撃墜…殺傷設定なら死亡確実…

「させん！！」
『Ｂｏｇｅｎ　ｆｏｒｍ』

「それでは無理じゃな。完全に足を止めた時点で、お主の敗けじゃ」

「っ！」

意味を理解し、離脱しようとしたシグナムだが、闇に飲まれ、真っ逆さまに地上へと落ちる…

「シグナム！」

「他人のことを気にしておる余裕があるのかの？」

どこまでも台詞は軽く言われる…

それとは逆に出力を上げる青白い雷撃を纏う集束砲…

「終いじゃな」

「そっちが…ね…」

しかし、フェイトは苦しげにだが、確かに笑った…

「全力…全開！」

なのはの前面に展開されるブラスタービット…そして、響く言葉…
スターライトブレイカーＥＸ…
最強クラスの集束砲撃が、輝き、さらに巨大になっていく…

「なんと、お主までも囮とはな。少し驚いたのじゃ」

相変わらず楽しそうに笑ったまま魔神は右腕で集束砲を維持、左腕に集まる黒炎…

「久しぶりじゃが…アザディエア…やってみるかの」

創造される黒い大剣…非殺傷設定など関係なしに人など一瞬で蒸発させることすら出来る魔法の常識を覆す代物…
なのはは、体がまた震え出すのを感じつつも引かない…
終わらせなければならないから…その鍵を持つのは間違いなく自分だと自惚れなどではなく、確信していたから…

「スターライト…ブレイカァァアーッ！！！！」

「さて…これくらいかの…」

黒炎を纏う剣が振り抜かれ、集束砲と斬撃が激突し、弾け合う…
瞬間、三方向から魔神に突撃する影があった…

「魔神だかなんだか知らねぇが…俺に殺せねぇものなんざねぇんだよぉ！」

「撤退だってんでしょバカタレが！！」

この三人に入った連絡…エクスカリバーの主の捕獲に失敗、即座に退却せよと指令…
命令に従おうとした二人だが、男は反発、押さえ込めずに今に至る…

「ここまで来てしまっては仕方ないですわ。
魔神に一撃入れてすぐに退却します！」

その時、魔神の意識が三人へと向いた…

「もう少し早ければ遊べたのじゃが、少し遅かったの…火裁（ソドム）」

空に浮かぶ無数の煌めき…直感的に悟る…
まともに受ければ危険なものだと…

「私の後ろに！」

「ええ！」

大盾を展開し、衝撃に備える二人…しかし…

「一々怖じ気づいてられるか！！」

「「タナトス！」」

血が上っているのか、タナトスと呼ばれた男はそのまま突撃。
言うことを聞くような男では無かった…

「お主バカじゃな。さらばじゃ」

その言葉を最後に、空から火矢が降り注ぐ！
男と、女達ピンポイントで狙って…

「が、あぁああ！！」

「き…つ…」

「まずい…ですわね…」

突撃したタナトスは、火矢の豪雨に身をさらし、直撃を受け続ける…
盾を構えた女さえも、衝撃に顔を歪める…

「しかし、あの娘達…人間にしては、やるのぅ…」

魔神は、自身に集束砲で対抗し続けているフェイトとなのはを見る…
少しでもなのはの負担を減らそうと、限界を越えても集束砲をやめないフェイト、親友を助けるために負担の大きいブラスターリミットを解除してまで戦うなのは…

「うむ♪」

魔神はニコリと頷き、瞬間、魔神の黒剣によって、両者の集束砲は切り裂かれ、消滅した…

「そんな…」

「く…」

終わりかと思ったその時、魔神の姿が少女へと戻っていく…

「え…？」

「ここまで楽しめたのも久しぶりじゃ♪
何か急いでおるようじゃし、もうよいぞ？」

「な、何で？」

あまりの唐突な変化になのはは戸惑い、思わず聞いてしまった…

「儂はただ、楽しめればそれでよい。
今回は充分楽しめた。じゃから終いじゃ」

「「は、はぁ…」」

「まぁ…こういうバカがいなければもっと楽しめたのじゃが…」

ポツリと呟いた少女の背後に現れた者はタナトスだった…

「クク…死…」

「お主…嫌いじゃ…」

今までの表情とはうって変わって冷徹な表情へと変わる少女…
次の瞬間、タナトスが盛大に吹き飛んだ…

「およ？」

少女の眼前に突き刺さる、柄に鎖が繋がっている両刃の大剣。
そして、持ち主と思われる男が一瞬にして現れ、大剣を抜き取る…

「いや、申し訳ない。あの男は、レディに対する心構えが全くなっていなくてね」

ペコリと少女に頭を下げる銀の長髪の男は…ジル・ローディアスだった。

「まぁ、よい。
儂の名前は夜天黎華じゃ。お主らとは、また遊べればよいの♪
それではな。」

ニコリと笑い、少女、黎華の姿が消える…

「てめぇ…どういう…」

瞬間、轟音が鳴り響き男の体が地面にめり込み動かなくなった…
ジルが男の頭を大剣で思いきりぶん殴ったのだ…

「貴様が予定外の行動を取るから…僕が命令され、わざわざ止めに来たのだバカ者…

ふぅ…そこのバカ者、連れていっておいてくれるかい？」

「え、ええ」

「一応、礼を言っておきますわ」

女二人と、タナトスに魔方陣が展開される…

「行かせない！」

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ！』

フェイトが加速を使い、駆けようとする。

しかし、その鳩尾に突き刺さる拳…

「が…は…」

「フェイトちゃん！」

気を失い、ジルにもたれ掛かるフェイトをお姫様抱っこで抱え、なのはへと近づき目の前でゆっくりと降ろす…

その間にタナトスらは転移した…

「貴方は…敵…なんだよね？」

油断なくレイジングハートを突きつけながらジルに問う…

「そういうことになるね」

そう言いながらも、ジルはレイジングハートから逃れようとすらしない…

正面を向いたまま転移魔方陣を展開する。

「これから、数分後、医療班がくるはずだ。
タナトスに斬られた赤毛の女の子をピンクの髪の少女に診せて欲しい…」

「キャロ？　何故？」

「あの娘しか、救えないからだよ…それではね」

静かにジルの姿がなのはの前から消えた…

「あの人は一体…」

敵でありながら、アドバイスを残していく…あれは誰なのか…

「それは後回し…」

考えた所で答えが出るはずもなく、なのはは、今、自分に出来ることをすることにした。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

カナンを蹴り落とした後、動きがない…
以前、土煙を舞い上げたままだ…
しかし、だからこそ油断してはならない…
油断してカナンに倒された相手を何人も見てきたからだ…
故に油断をせず、ユニオンを行い、剣を構えて待機する…
少しずつ、土煙が晴れていく…クレーターが顕になり、その中心にある黒い姿…

「やはり耐えたか…だが、もう少しか？」

「ウゥゥ…」

二刀を逆手に剣を持ち、低姿勢でカナンが唸る…
そこで女性は悟る…自分の考えは絶対に違うと…

「強引な手で来たな…」

自然を操る力のせいで自分が劣性になると本能的に判断したカナンは、魔力を多く流し込み、威力の底上げを謀った…

「ウァァアア！！！」

ギンッと目が見開かれ、空に向け、カナンが咆哮する。
その叫びに応えるようにカナンを中心に石針が飛び出し、女性に向かう。
しかし、女性は避けようともせず、左手を前に突き出す。
女性の前から突き出す石針。
石針と石針がぶつかり合い、破片を撒き散らす！

「ハァァァッ！！」

「ふっ！」

空間突破で頭上に現れたカナンを斬り上げで迎撃、石針の激突によって舞い上がった土煙を吹き飛ばす衝撃波。
カナンは、激突の勢いを利用し、クルリと後転、瞬間で納刀、集まる轟炎と轟雷…

女性も大剣を弓を引き絞るように構える…キラリと光る黄と青の宝石。

「ハァァァッ！！」

「うぉぉおっ！！」

振り抜かれた二刀、突き出された大剣、それぞれに集束されていた力が解放され、二刀からは、炎龍と雷龍が、大剣からは、地龍と水龍が。

互いに体を巻き付けながら牙を突き立て、消滅の間際に暴風を巻き起こす！

二人はそんな風に構わない…

互いが回転し、同時に展開される大気中にある全ての水分が凝結。背後に展開される無数の氷槍…

一瞬にして絶対零度の空間が出来上がる…

作り出すのも同時ならば、放つタイミングも全くの同時。

激突、四散、再構築、突撃…無限のループが産まれ、飛び散る破片が幻想的な風景を作り出す。

「はぁぁあっ！」

「オオォォッ！」

そんな幻想の中で、響く激音。互いに渦巻くのは大地の力…

二刀を縦横無尽に操りながら圧倒的な速度で叩き込むカナン、足りない手数を自然の力でカバーし、カナンの猛攻を防ぎ、隙あらば即座に反撃に転ずる女性…　二人が刃をぶつけ合う度、氷の破片を吹き飛ばし、幻想はさらに広がっていく…

そして、二人は、幻想の創造者であり、破壊者でもある…

「ウォォオオオ！！！！」

「ちっ！」

二刀を束ね、女性へと上段から叩き込む！
流石に二振り分の大地の力は支えきれず、斜にして受けると同時に弾け飛ぶ…
直後、カナンの背後に出現する色とりどりの万を越す龍…二刀の黒剣には巨大な闇…
驚愕の暇すら与えず、カナンは剣を抜き放つ！
闇は黒龍へと姿を変え、龍達を従えながら女性へと突撃する！

「我には効かぬ…」

空中で停止、掌を龍達へと向ける…
掌から先の空間が歪み、龍達を放ったカナンにまで到達する…
女性がゆっくりと掌を空へと掲げる…
その意思に従い、ボコりと地面を削り取り、空間ごと空に浮いていく…

「滅せよ…」

掌を閉じると同時に龍達が圧縮され、巨大な空間ごと圧砕される…
圧砕されなかった者は、一人だけ、カナンだ。

「ハァァァ……」

「しぶとい…」

無傷、というわけではないが、五体満足、戦意も魔力も十二分にみなぎっている…
その姿が消える…しかし、予測済み、左に現れたカナンに刺突を叩き込む。が、またしても消失…

「見えている…」

背後に現れたカナンの体を石針が'貫いた'
殺さないようにしているため、普通なら打ち上げられるだけの威力の石針がだ…
つまり、そこにはカナンはいない…
女性の頭上、闇を纏うカナンが現れる!

「っ!」

投げ出すように横に飛んだ直後、暗黒の波動が地へと叩き込まれ、爆風が女性を吹き飛ばす。

「風よ…」

風が女性を取り巻き、通常より素早く体勢を立て直す。
しかし、それですらカナンには遅い。
女性の目の前には既にカナンが迫っていた…

「雷鳴よ!」

金の宝石が輝いた瞬間、カナンへと轟雷が降り注ぎ、貫いた…

「ハァァァ…」

「くっ！」

背後から響く不気味な呼吸…
前方のカナンはまたしても残像。本人は既に背後へと回り込んでいた…
さらに、女性の驚愕は終わらない…
カナンの左腕に集まる過剰な光…
世界に唯一認められた人としての姿のまま、人の領域を越えることが出来る力、カナンにだけ許される世界の理の破壊…

「カラドボルグに干渉…結界…最大範囲で展開！」

瞬時の判断で威力減衰、結界を海鳴市全域に張り巡らせる。
自身は右腕に全開で大地の力を集束！

「ウォオオオオオオオオ！！！！」

次の瞬間、海鳴市に張り巡らせた結界にヒビが入る…
ヒビの中心には女性、公園から結界まで一気に弾き飛ばされていた…
その道には最早なにも残らず、風が吹き抜けるのみ…

「げほっ！　…減衰を行って尚この威力か…」

女性がデバイスでは無ければ、防御に関係なく殺されていた…
しかし、魔導生命体といえど、女性も人と同じく、痛みも感じれば、血も流れる。
回復魔法を使えば全快するが、その隙をカナンが逃すはずもない…

「ウォォォオオオオ！！！」

「ちっ…」

身を捻る…刹那、右からの斬り上げが女性の髪を掠め、過ぎ去った…

どれだけ距離が開こうが、カナンの視界に入る限りは何処までも一瞬で到達出来る。

それがカナンの空間突破…

「二人共…済まんな…完全回復は待ってはもらえんらしい…」

女性に出来たのは四肢の関節の回復、最低限の止血のみ。後は常時回復に頼る他はない…

悪循環はさらに続いていく…

「やはり！」

黒剣を弾き上げ、電光石火で大剣を突き出すが、手応えはなく、カナンの残像を突き抜ける…

風を切る音が響く…反射的に手首を返し、右に薙ぎ払う。重い感触。

直後、女性が地面に叩き落とされた…

もうもうと上がる土煙の中で、女性は確信する。

「完全にデータは役に立たなくなったか…」

これまで蓄積してきたカナンのデータ。

今までのカナンは、それの延長線上にあった。

しかし、最早今のカナンは、完全にその領域を脱した…

「ならば、これからは私の判断で戦うだけだ…」

大剣を振り払い、土煙を吹き飛ばす！

「ウォォォオオオ！！」

頭上から現れ、黒剣を振り下ろすカナンに斬り上げを放ち、轟音を響かせ互いに反発、距離が開く。

先に動いたのは女性、大上段に振り上げる…

「はぁぁぁっ！」

緑の宝石が輝き、剣を振り抜くと同時に放たれる鎌鼬！

しかし、到達の直前にカナンが消える…

「うぉぉっ！」

「ハァァッ！」

瞬間、背後に現れたカナンと女性の剣が十文字を描く。

カナンの右手が動き、剣の柄にかかると見るや、一気に後退。

直後、閃光が女性が元いた所を薙ぎ払う…

「オォォォォ！」

数瞬おかずにカナンが反応、未だ後退途中の女性に追撃をかけ、黒剣を束ねて振りかぶる！

集束していくのは水…回避不可能な量にまで膨れ上がる…

「業炎よ…」

下段に構えた大剣に集束していくのは業炎…
その熱によってカナンと女性の姿が揺らぐ…
二人が同時に叫び、同時に剣を叩きつける！
しかし、その轟音は聞こえない…
二人が起こした爆発音が人が聞こえる限界を越えたからだ…
爆発の正体は、巨大な水蒸気爆発…
それを起こした二人は互いに吹き飛び、しかし、まだ動く…

「ウォォオオオッ！！！」

女性の周囲を氷槍、水槍が取り囲む。
一斉に放たれる攻撃に、女性は急停止、回転、加速していく！

「その程度っ！！」

赤と緑の宝石が輝く…回転する女性が紅蓮の竜巻へと包まれ、氷槍と水槍を燃やし尽くす！
その業火に構わず突っ込むカナン…竜巻に激突する寸前、クロスに斬撃を叩き込み、業火を吸収…
女性は回転軌道から踏み込み、勢いを乗せた刺突を放つ！

「オォォォォ！！！」

紅蓮の竜巻が吸収された直後に激突する大剣と紅蓮の双刃！
刃から放たれた炎の奔流は、女性を避けるように炎のトンネルを作り上げる…
なぜ奔流が女性を避けたのか…答えは、周囲に風が渦巻いていたからだ。

「貫け！！」

「ガ…ア……」

その風が刀身へと集束し、奔流を突き抜けカナンを穿つ！
くの字に曲がったカナンの体は、冗談のように遥か彼方へ飛んでいく…

「ォォォオオオオッ！！！！」

しかし、カナンは吹き飛びながらも空間を繋げ、即座に突撃。
二刀を束ねた横殴りの一撃を叩き込む！
女性はギリギリで地面に突き立てるようにして縦にした大剣にて拮抗。

「ぐぅ…」

しかし、カナンの力は凄まじく、女性の足が地を滑っていく…

「ハァァッ！！」

遂に上空へと弾け飛ぶ女性の体、カナンとの距離が約三十メートル近く離れた…
体勢を崩された…追撃が来るかと汗が伝うが、来ない…
カナンを見ると叫んでいる…
しかし、何故か何も聞こえない…

「……！！！」

あることに気づいた…それは、息が出来ないこと…
そして、それは一つの結論へと辿り着く…

声が響かないのは、空気が振動しないためだ。　空気が振動しない、つまりは真空状態…カナンが行っているのは大気の吸収…やっていることは、最初と同じ…しかし、桁が全く違っていた…

圧力で潰されないように身体強化を行い、さらに大地の壁を何重にも展開、強化を重ねる！！

石壁の向こうでは、カナンが身を縮めていた…

そして、空へと咆哮する！！

解放される、全大気…

ひたすら静かに、音もなく…結界の中で海鳴市は消滅した…

「ハァァァ……ウォォォオオオオオオォォォォォォ！！！！！」

街並みも、自然も、海さえも、消え去った空間で獣が空へと吼える。

「オォォォォ……アア！！？？？」

突如、咆哮が止まる、浮き上がるカナンの体…

足掻けど足掻けど上昇は止まらない…

「無駄だ……最大の力で空間を歪めて閉じ込めた……

いかに貴方と言えど、数分間は動くことは出来ぬ……」

膝をつく女性が、右腕から血を流しながら、地上に現れる…

直撃の瞬間、空間圧砕を使い、限界まで大気を押さえ込み、威力を減衰、右腕を破損したものの、耐えきっていた…

「ウォォオオオオォォォォ！！！」

「無駄だと言っている……」

右腕を押さえながら、ゆっくりと女性が飛び上がり、遥か上空へと上っていく…

「今、助け出してやる…
悪しき者を滅する刃よ、この手に集え…

女性が空へと手を突き出す…
広がるは三対の白銀の翼、羽ばたかれ、さらに上空まで舞い上がる…

「戦乙女の名において…神技…スピリチュアル…クラスター」

女性が上体を捻る、光が集い、１００メートルはあろうか、巨大な槍が現れ、カナンへと向けられる…
動けないカナンに向けて、巨大な槍は投擲され…

「ォオォォァァアアアアアアアアアアアアアアア！！」

完全にカナンの体を刺し貫いた…
同時に展開される巨大な環状魔方陣。

「浄化せよ…」

カナンを縛り付けるように環状魔方陣がカナンへと吸い込まれ、
地面へとカナンが落ちる…

「風よ…」

フワリと風がカナンを包み、落下速度が減衰、ゆっくりと着地する…

「ふぅ…終わったか…」

女性も地上に降り立ち、剣を消す。

瞬間、カバりとカナンが起き上がり、空間突破を発動！

「ウォォオオオオオオォォォォ！！」

一瞬にして距離を詰め、大上段に振りかぶる！

「しまっ…」

言葉を言い終わる前に、黒剣は、女性へと降り下ろされていた…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「俺は…どうなったんだろうか…

俺を狙う奴と戦って、でも死にかけて…

ヴィヴィオと祐希奈が助けに来てくれて…

それで…それで…アイツらは…俺を守って…俺のせいで…

俺が、もっと強ければ、アイツらを守ってやれたのに…

いつもそうだ…力はあるのに、肝心な時はいつも、いつも、いつも…俺は間に合わない…

もっと、もっと力が欲しい…力が…」

そう思うと、俺の体は沼に沈むようにズブリの闇に沈む…

「この闇の先に…アイツらを守れる力があるのなら…俺は闇に堕ち

る…」

ズブズブと沈み込んで行く体…
残りは上半身だけとなった時、闇に浮かぶ光が生まれた…
小さいのに、とても強い光を放つそれは、やがて人の形となっていく…

「何だ…」

『闇に負けちゃダメ…貴方らしくない』

「じゃあ…どうすればいい…もう…俺の目の前で人が傷つくのは見たくない…嫌なんだ…」

『辛いのはわかる…でもそれは…逃げでしかない…
貴方はたくさんの人達の希望になれる。
でも、闇に堕ちた貴方は絶望しか運ばない…』

「このままでいたとして、弱いままでどうすんだよ！」

『ううん、貴方はとっても強い』

「強くなんかねぇよ…力が足りない。
これじゃあ…とても…人の希望になんかなれねぇよ」

『本当にそうかな？　戦う力だけが希望になりえると思っているのなら、それは大きな間違い。
貴方に出会った人達は、皆笑顔になってる。
貴方は知らないうちに幸せを運んでる。
明るい気持ちがある所に希望は生まれる。

事実、貴方との接触で、闇から救い出せた人もいるはず。
もちろん、私もその一人。だからこそ、今の貴方を止めにきた』

「え…？」

ニッコリと光の人間が笑った…
それだけで、暖かな気持ちが広がり、沼が消えていく…

『貴方は強い。
貴方は、たくさんの優しさを持ってる。
人のために体を張れるし、相手を受け入れられる広い心もある。
それは、何よりも強い力になるから…
戦うだけの力なんかより、もっと強くて、揺るぎない物だから…』

「俺は…今のままで、いいのか…？」

『うん。今のままの貴方でも素敵。
でも、もっと素敵になれる方法、教えてあげる。
自分を受け入れて？』

「自分を…？」

『光があるから闇もある…それは人間、大なり小なり持ってる物。
ゆっくりでいいから、目を背けずに…わかったかな？』

「まぁ、努力するよ」

『その意気。頑張って』

今まではっきりとしなかった光が、完全に人を形取る…

「そっか…お前なんだな…」

『うん。じゃあ、帰ろう？　皆、貴方を待ってるから…』

「ああ…」

差し出された手を取り、空に浮き上がる…

俺達は、光を広げながら、闇の中から飛び立った…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

カナンの剣は、女性の眼前で停止、ピクリとも動かない…

「……」

「マスター？」

ゆっくりと左手が差し出され、女性の頭へと乗せられる…

「ただいま…」

瞬間、ユニオンが解け、メイデンとレナスがカナンに抱きつく。

「遅いぞ…馬鹿者…」

「全くですよ…」

「ああ、うん。俺が悪かった…から…泣く…な……て……」

スルリとメイデンとレナスの頭からカナンの手が滑り落ち、カナンが倒れた…

「マスター！！／主！！」

何もない結界の中で、メイデンとレナスの叫びが響き渡った…

Ｎｅｘｔ　Ｓｔａｇｅ……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

祐希奈
「さてと、本編のシリアスをぶち壊すスーパーカオス劇場、後書き召喚コーナー♪」

デフォ（ヘタレーズ）『あは…あははは…い、いやぁぁあ！　真爽やかコースはぁやめてぇぇえ！！』

デフォ（タ・ト・祐・ア）
「カカカカカカカカ」

カナン
「い、いやぁあああああ！！
爽やか！？　爽やかって何！？
爽やかブレックファーストフードだぜ。イヤッハァアアアア！！！」

ドサッ…

ヴィヴィオ
「カナン君。気をしっかり持って！」

メイデン
「本編で復活したばかりだぞ！

漸く普通に喋れるんだ！」
レナス
「叫ばなくていいんですよ、主！」
カナン
「そ、そうだ…漸く鬱も終わりだし、頑張るか…」
祐希奈
「そんじゃ、ルミオを呼ぶわよ～♪」
カナン
「へ？　ルミオなら楽屋にい…」
祐希奈
「ウォオオオオオオオオ！！　いでよ！　ルミオ！」

チュドーーン！！

ヴィヴィオ
「あ、あれ？　召喚機が爆発したよ？」
ルミオ
「な、何だ！？　今の爆発！？」
一同（カナン以外）
「あれ？」
ルミオ
「な、何だよ？」
祐希奈
「なんでルミオが楽屋から出てくるわけ？」
カナン
「いや、後書きで出てもらうのに帰す必要ないから楽屋にいてもらってたんだが…」
祐希奈
「そういうことは早く言いなさい！」

バッキャアアア！！

カナン
「すんませっ…」

ザザザー…

ルミオ
「で、今の爆発は何だ？」
ヴィヴィオ
「えと…召喚機が壊れたみたい」
メイデン
「ルミオさんがここにいるのに使ったせいだろうな」
レナス
「あの～」
一同
「？」
レナス
「召喚…出来ちゃってるみたいなんですけど…」
祐希奈
「え…ちょっと待ってよ…」
カナン
「いや、いくらＬＶでもこれは…」
ヴィヴィオ
「いけないんじゃ無いかな…」
白河シンジ
「はぁ…やっと仕事が終わった～」

ズズズ～…

ルミオ
「シンジィイイイイイイイイイイ！？！？！？！？！？」
白河シンジ
「ん？」

一同
「……」
白河シンジ
「いや〜こんなにリアルな夢は久しぶりだなぁ♪
まさか、ＬＶキャラクターやルミオが前にいるなんて」
一同
「ええ！！！！」
白河シンジ
「ほら、ヴィヴィオ、お菓子あげるからおいで？」
ヴィヴィオ
「わ〜い♪」
カ・ル
「普通に喜ぶなぁぁああ！！！」
メイデン
「あ、あの…シンジさん？」
レナス
「すいませんが…手違いが…」
白河シンジ
「お、ほらほら〜メイデンとレナスもお菓子あげるよ〜？」
メイデン
「ほ、本当か！？」
レナス
「嬉しいです♪」
カ・ル

「ダメだこの天然ズ！！」

祐希奈
「まぁ、とりあえず、シンジさん、間違いだから元の世界に…」

白河シンジ
「君が祐希奈かぁ…
毎回ルミオを悟らせてくれてありがとう」

祐希奈
「え、あ、うん。こちらこそ」

ルミオ
「今の会話だけ待てぇえええ！」

天然ズ
「♪♪♪～」

パクパク

ルミオ
「お前らもちょっとは状況把握しやがれ！」

白河シンジ
「まぁまぁ、これは私の夢だし、落ち着いて…」

ガシッ…

白河シンジ
「あれ？　夢なのに感触が…」

カナン
「グラシアスまで送ります！！」

ギュオオオ！！！

祐希奈

「また来てね～♪」
ルミオ
「やめてくれぇえええええ！！！！」
天然ズ
「♪♪♪」

パクパク

十分後……

カナン
「ぜぇ…ぜぇ…ただいま…」
ルミオ
「おう…お帰り…」
祐希奈
「ふむふむ…作者も呼べるんだ…
次はテスタメントさんを…」
カ・ル
「頼むからこれ以上危険なネタを作らんでください！！」
ヴィヴィオ
「シンジさん、良い人だったよ？」
メイデン
「お菓子をたくさんくれたぞ？」
レナス
「またお呼びしたいです」
ルミオ
「いや…色々とまずいことになりそうだから無しだ…」
ヴィヴィオ
「まずいことって何かな？」
カナン

「例えば…シンジさんの復讐劇とか…」
祐希奈
「白河流…真ドッキリコース…みたいな♪
ＴＫＯ全員で♪」
カ・ル
「シオンとか巻き添え！？」
祐希奈
「大丈夫。ヘタレオンなら快く参加してくれるわよ♪
なんたって、ヴィヴィオ自慢の息子だしね♪」
ヴィヴィオ
「でもね、シオン君ね、私のこと、ママって呼んでくれないの…」
メイデン
「それは悲しいな…」
レナス
「なんとかしてあげたいです…」
祐希奈
「簡単よ、タカトに頼みなさい♪」
ヴィヴィオ
「そっかぁ♪　タカト、躾上手だもんね。
頼んでみるよ～」
カナン
「ヤバイ…カオスが止まらねぇ…」
ルミオ
「何もしてねぇのに、シオンに死亡フラグが立っていく…
恐るべしＬＶパワー…」
カナン
「とりあえず、ルミオ…次から楽屋待機はやめよう…
カオスが加速するみたいだし…」
ルミオ
「ああ…ノアくらいは予測してたが、まさかシンジを呼ぶとは…」

チラリ…

祐希奈
「何よ？」

カ・ル
「侮れん…」

祐希奈
「一撃粉砕♪」

カ・ル
「なんでぇえええええええ！？」

祐希奈
「理由？　ルミオに伝授してあげようかなって、私、優しいわね♪」

ルミオ
「普通に伝授を願いたいです…」

祐希奈
「あ～、でも、シンジさんの切なる願いを無下には出来ないわ♪」

ルミオ
「あんな願い、無下にしろよ！！
つうか、お前が個人的…」

祐希奈
「大正解♪」

ドッゴオオオ！！

カ・ル
「がふっ！！」

ドサッ…

祐希奈
「さて、ヴィヴィオ～」
ヴィヴィオ
「何？　あ、あれ！？　ルミオ、カナン君！？」
メイデン
「いつのまに逝ったんだ…」
レナス
「マスターはともかく、ルミオさんは大丈夫でしょうか…」
ハル
「大丈夫ですよ」
ヴィヴィオ
「ハ、ハルさん！？
その格好は！？」
ハル
「まぁ、羊ですね…」
祐希奈
「メ、メルヘン！！」
ハル
「コホン…その話は置いておきましょう…」
ヴィヴィオ
「やっぱり恥ずかしいんですか？」
ハル
「これでも一応、１９歳ですからね…
さて、シンジ様からこれを預かりました。
バトラーズ全員にだそうですが…」
レナス
「もこもこ羊着ぐるみ…ですか…」
祐希奈
「ちょっと待って…バトラーズ全員ってタカトも！？」
ヴィヴィオ

「ちょ、ちょっとダメなんじゃないかな？　色々と…」
カナン
「ふぅ…」
ルミオ
「てぇ…」
シープハル
「おはようございます」
カ・ル
「どぅわぁあああああああ！！！！」
Ｓハル
「やれやれ…」
祐希奈
「まぁ、日頃が執事服しか着ないし、いきなり羊ハルじゃ、この反応も無理ないわね…」
ヴィヴィオ
「うん。私でもびっくりすると思う…」
カナン
「ハ、ハハハ、ハルさん！？
貴方は何を着ていらっしゃるの…」

バキッ！

カナン
「ごはっ…」
ルミオ
「は、早い…拳が見えなかった…」
Ｓハル
「さて、シンジ様からのご要望です。
ルミオもこれに着替えましょうか？」
ルミオ

「い、嫌だ…」
Sハル
「抜け駆けは許しませんよ…」
ルミオ
「嫌だぁあああああああああああ！！」
ヴィヴィオ
「何か、最近よく聞くね」
祐希奈
「まぁ、同じ言葉でも、全然感じが違うけどね…」
メイデン
「ルミオさん…強く生きてくれ…」
レナス
「希望はきっと見つかります…」

十分後…

Sルミオ
「フフ…ハハハハ…ハハハハ…」
Sハル
「さて…次はタカトですね…」
Sルミオ
「行こうか…」
Sハル
「はい…」

パアアアア…

カナン
「なぁ、あの二人止めなくていいのか？」
祐希奈

「まぁ、面白いのが見れそうだし♪」
ヴィヴィオ
「私も、タカトの羊さん姿、ちょっと見たいかな…」
メイデン
「アリサ道場と繋がったぞ」
レナス
「タカトさん…ファイトです…」

Sハル
「さぁ…タカト…一緒に地獄へ落ちましょうか？」
Sルミオ
「タカト…落ちようぜ」
タカト
「な、何だ…お前達…その羊は…」
Sハル
「貴方の衣装ですよ？」
Sルミオ
「まだ地獄はあるんだからさっさと着やがれ…」
タカト
「全力で抵抗していいか？」
アリサ
「あら、また面白そうなことやってるわね」
すずか
「今度はタカト君がターゲット？」
シオン
「うわ…」
Sルミオ
「シオン、ちなみにお前死亡フラグ二本は立ったから」
シオン
「しゃべる前に死亡フラグ告知！？」

Sルミオ
「細かいことは気にするな…」
シオン
「生死を細かいと言っちゃったよ…」
アリサ
「ま、タカト、これ着なさい♪」
タカト
「…どうしても…ですか？」
アリサ
「うん♪」
タカト
「くっ！！」

しばらくお待ちください…

Sルミオ
「世のため人のため、今日も俺たちは世界を走る」
Sハル
「我らの行方に悪あれば、鉄をも砕くこの拳が猛り」
Sタカト
「我らの行方に善人の姿があれば、執事魂が燃え盛る…」
Sルミオ
「我ら三人世界を守る最強執事」
シープズ
「その名もシープバトラーズ！！」

シャキーーン！！
バタリ…

アリサ

「あ、三人とも倒れたわね…」
シオン
「とりあえず、病院に行くか…」

ブツ…

祐希奈
「ふぅ…シンジさん、グッジョブ！」
カナン
「執事じゃなくて良かった…ホント…執事じゃなくて良かった！！」
ヴィヴィオ
「タカト、お願いまでに起きてくれるかな？」
メイデン
「大丈夫だろう。タカトさんだからな」
ヴィヴィオ
「うん。そうだよね」
レナス
「ハルさんとルミオさんは大丈夫でしょうか…」
カナン
「あの二人も一緒に逝ったんなら、心配ないだろ…」

ゴオオオオ…

カナン
「あの…祐希奈さん？
この炎…何でしょう？」
祐希奈
「締まらないから、逝ってルミオ達と幕閉じよろしく♪」

ドッゴオオオ！！

カナン
「ふ……」

ザザザー……

三途の川…

カナン
「……」

ドッゴーン！　チュドーン！　ドドドドド！！

ルミオ
「雷牙瞬連斬！」
タカト
「天破紅蓮！」
ハル
「粉塵裂脚！」

バゴアアアアア！！

カナン
「三途の川って言うよりは、地獄なんだが…っていうかあいつら帰る気無いな…
ま、適度なとこで時間止めて抑えとくから心配するな、じゃ、またな」

ブツ…

外伝　なのはランブル～突撃リポート（前書き）

後書きだけの予定が、文字数が暴走しました…

また不定期に外伝を突っ込んで書いてきます。

外伝　なのはランブル～突撃リポート

なのはランブルー、それは、皆が愛すべき学園生活を描くはずの物語…
しかし、そんなことは知ったこっちゃないと、作者を泣かせるフリーダム生徒達が繰り広げるカオス物語である。
そんな生徒達を止めるべく、ある生徒が最強を目指して突き進んで行く、愛と涙があふれる、青春の物語である。
これは、そんな世紀末の時代のある１ページ…

カナン
「全く関係ないから気にするな。
で、改めまして、今回、なのはランブル～宣伝係として抜擢された風間カナンだ」

理由は、頑丈かつ、ヘタレ。
これほどまでにあの学園に突撃させるに相応しい人材がいようか…
いや、いな…あ…シオンなら大丈夫か…
っていうか…シオンでも出来るな。うん。

カナン
「お前でしゃばりすぎ…
で？　今回の任務内容は何だよ？」

うむ。今回の任務は、神庭家から、学校に向かい、トラブルを引き起こしながら頑張れ。以上！

カナン
「…後半は無視するとして、何で神庭家？」

それは、あれだよ。ランブル～の家の中では、1、2を争うカオス住宅だからだよ。
神代家にしようか迷ったけど、テスタメントさん企画ってことで。

カナン
「初っぱなからハードになりそうだな…」

そんなこともあろうかと、アシスタントを用意してやったぞ。

カナン
「アシスタント？」

ポン…

カツラ……

カナン
「いらねぇえええええええええええええええええ！！！！！」

まぁまぁ、女の子にしか出来ないこともあるし、必要な時は、チェンジシステムで交替してくれ。

カナン
「まさかのサモン◯イト！？
っていうか、カツラ被るだけじゃん！」

さて、なんか無駄に長いから、そろそろ行け。

カナン
「へいへい…」

夢と冒険の世界へ、レッツゴー♪
ピッピカチュー♪

カナン
「ポケ◯ォォォォォォォォォォォォン」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

神庭家…庭

カナン
「ふぅ…なんつー作者だ…」
シオン
「絶影！！」

背後に殺気、身を屈めて刃を避ける！
空間把握で捉えたのはシオン、ブレイズフォーム…
双剣となったイクスを逆手に持ち替えた…

シオン
「連牙ァァ！」
カナン
「おわっ！！」

即座に剣を呼び出し、横薙ぎを縦に受け止め、しかし、体重の乗った一撃に弾け飛ぶ！

シオン
「セレクト、ノーマル」
トランスファー
シオン
「剣魔ァァ！！」

シオンは止まらない、イクスを構え、刺突の体勢をとり、空気をぶち抜きながらカナンに迫る！
驚愕しつつも体は動く…瞬間で納刀、刃に魔力をのせる…

カナン
「絶空！！」

刺突と居合い抜きが激突し、衝撃波を撒き散らす！！
威力は互角…互いに押され、一メートル下がって剣を納めた。

シオン
「腕は鈍ってないみたいだな。
久しぶりだな、カナン」
カナン
「直に話すのは久しぶりか。
けどなぁ…いきなりは危ないつ～の…」
シオン
「カナンならあれくらい大丈夫だろ？」
カナン
「いやいや…シオンの一撃はやたら鋭いから神経使うって…」
みもり
「シン君達、いつまで遊んでるんですか？
朝御飯覚めちゃいますよ？」
カナン

「これ…遊びって言うのか？」
シオン
「みもりの言うこと一々気にしてたらキリないって」
カナン
「まさか…天然か？」
シオン
「若干あるかもな？」
みもり
「シン君！　お友達に何を話してるんですか！？」
シオン
「何でも無いって、な？」
カナン
「まぁ、みもりさんの性格について語ってたってとこか」
みもり
「…カナン君？　シン君はどんなことを言ったんですか？」
カナン
「あ～、みもりさんが…」
シオン
「さぁ、飯だ飯だー！」

ガシッ！

カナン
「何か恥ずかしいみたいだから、またの機会だな」

ズルズル…

みもり
「教えてくださいよ～。シンく～ん！」
シオン

「知らん」

こうして、俺は、シオンに引きずられつつ、神庭家の食卓に向かった…はずだった…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

神庭家食卓

みもり
「シン君てば！」

シオン
「知らんったら知らん」

カナン
「いい加減、首が締まって苦しいんだが…」

シオン
「と、わりぃ」

シオンが漸く首根っこを開放してくれた。
イクスを何年も振り回してるだけあり、そこそこ力が強い。
まぁ、この程度でどうこうなる体はしてないが…

カナン
「で…ここは何処の高級ホテルだ？」

シ・み
「は？／はい？」

カナン
「いや、二人揃って首かしげるなよ…
朝っぱらから懐石料理食う家がどこにある？」

シオン

「これくらい、普通…だよな？」
みもり
「はい。いつもに比べれば…普通です」
カナン
「普通の家は懐石料理なんぞ食わんというのがわからんのか！！」
タカト
「朝から騒ぐなやかましい…」
―徹！―

カナン
「ごはぁ！」
シオン
「あ、タカ兄ぃ、おはよう」
みもり
「おはよう御座います」
タカト
「ああ、おはよう。おい、そこの。
それくらいで逝くようなら三枚におろすぞ？」
カナン
「いや…大丈夫っすけど…」
タカト
「なら、さっさと起きて手伝え」
カナン
「はい？」
タカト
「ルシアとバカ兄を起こしてきてくれ」
カナン
「まぁ…いいっすけど…
おい、そこのお経唱えとる二人…」
シ・み

「……」

二人は顔を見合わせた後、空中で十字架を描いた…

カナン
「お経をせめとらん！
なんで、そんな宗教的なことをしとるんか聞いとるんじゃ！！」

みもり
「私の口からは…うぅ…」

シオン
「…お前のことは忘れないからな…」

カナン
「あ、そう…」

だいたいの予想はついたな…
つまり、トウヤさん、ルシアさんのどちらか、或いは両方、危険人物がいるってことだ…

カナン
「タカトさん…」

―撃！―

カナン
「がふっ！」

ザザザー…ピシャン…

カナン
「襖閉じられた！？」

仕方ない…行くか…
テクテクと歩き、行き着いたのはトウヤと書かれた部屋…

カナン
「トウヤさ～ん？　起きてます？」

返事がない…仕方ないので中に入る。
普段が普段だから、○○本が散乱でもしてるかと思っていたが、
綺麗に片付いた部屋だった…
その先のベットに静かに眠る叶トウヤその人がいた…

カナン
「トウヤさ～ん？　朝ですよ～？」
トウヤ
「……ユウオ～～～♪♪」

ガバァ！

カナン
「ぎあああああああああああ！！！」
トウヤ
「ユウオ～～♪」

スリスリ…

カナン
「気持ち悪いわバカタレがぁあああああ！！！」

―徹！―

「ごふっ！」

全身のバネを使って正拳突きを鳩尾に叩き込み、トウヤさんをぶっとばしてしまった…

カナン
「しまった…」

むくりと起き上がるトウヤさん…
まずい…グノーシス一位がキレれば、確実に俺の存在は消滅する…

トウヤ
「おや、カナン君、だったね？
わざわざ起こしに来てくれたのかい？　見苦しい所を見せてしまったね」
カナン
「あ、あの…すいません…思いきり殴りました…」
トウヤ
「何、タカトの場合なら踵落としが容赦なしに顔面だからね、どうってことないさ」
カナン
「…そう、ですか…」

わからん！　神庭家の朝の風景が全くわからん！
とにもかくにも、部屋を後にし、トウヤさんに教えてもらったルシアさんの部屋に到着…

カナン
「女性の部屋に勝手に入っていいのか…」

まぁ、タカトさんが怖いから入るわけだが…

カナン
「ルシアさ～ん、入りますよ～？」

凄い美人が部屋で寝ていた…
確か、シオンの初恋の人だっけ？
納得出来るな。

カナン
「ルシアさん、朝ごはん、出来たらしいです」

のそりと起き出し、時計をチラリ…またしても布団に潜った…

カナン
「あ、あの…」
ルシア
「ん…後十分…」
カナン
「いや、タカトさんが頑張って作った料理ですし、今食べましょう？」
ルシア
「じゃあ…五分…」
カナン
「え～と、行きましょう？」
ルシア
「五分…」
カナン
「ダメですって」

再びのそりと起き出すルシアさん。
そして、右手に光る魔力球…

カナン
「あれ？」
ルシア
「後五分って言ってるでしょうがぁあああ！！！」

―滅―

カナン
「ぎゃあああああああああ！！！」
ルシア
「あれ？　タカト…じゃない？」

煙を上げる俺を人差し指でツンツンとつつくルシアさん…

ルシア
「誰？」
カナン
「…なのはランブル～突撃リポーターの風間カナンです…」ルシア
「え…あ～、あの不死身主人公で有名な…
私、ルシア・ラージネス、よろしく♪」
カナン
「よろしくお願いします。
じゃ、行きますか」

普通に部屋から出ようとすると、ルシアさんは意外そうに首を傾げる。

ルシア
「あれ？　怒らないの？」
カナン
「何をっすか？」
ルシア
「何をって…私、貴方に砲撃を撃ったのよ？」
カナン
「あ～、俺の知り合いにヴィヴィオって子がいるんですけど、キレたら集束砲を撃ちますから、それに比べたら、ルシアさんの砲撃ぐらい、なんてことないといいますか、寧ろこれくらいで済んで安心してるくらいっす」
ルシア
「なんか…シオンより凄いわね…」
カナン
「まぁ…伊達に元祖やってないんで」
ルシア
「今、物凄く君が輝いて見えるわ…」
カナン
「毎回これくらいならマシなんだけどなぁ…」
ルシア
「あぁ！　なんかカナン君が遠い目をしてるわ！」
カナン
「あれは…すっげぇぞぉ…」
ルシア
「ど、どうしよ！　タカトー！！」

シュバ

タカト
「起きたか。で、どうした？」

ルシア
「カナン君が、なんかヤバめよ！」
タカト
「なんだ…そんなことか…天破紅蓮…」
ルシア
「タカト！？」

一轟一

カナン
「あぶっ！」
タカト
「ちっ…」
カナン
「ちって…」
ルシア
「タカト、いくら何でも死んじゃうわよ…」
カナン
「いや、死にはしませんが、三秒程気絶しますね」
ルシア
「さ、三秒！？」
タカト
「言っておくが、カナンに関わった奴は、ほとんどの場合、十秒弱で復帰する。
シオンなんぞ、カナンと同レベルだ」
ルシア
「どんな壮絶な人生辿ってきたらそうなるのよ…」
カナン
「あ～、祐希奈と関わったらオートでスキル習得可能っす」
ルシア

「なんか聞いたことあるわね…
アリサの友達だとか…」
カナン
「まぁ、だいたいあんな感じです。
多分、ルシアさんなら友達になれるかと。
ＬＶ道場来てみます？」
ルシア
「考えとくわ」
タカト
「話が終わったのなら、いい加減に行くぞ」
カナン
「あ、了解っす」
ルシア
「不死身ねぇ…ちょっとシオンに試してみようかしら…」

なんか後ろでルシアさんがシオンがどうとか言ったような気がしたが、聞き返すのも面倒だし、そのまま食卓へと向かった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

タカトさんの料理はうまい。
それはもう、叫びたいくらいにうまい。けど、隣の相棒（シオン）が泣いているために遠慮した。
何故、シオンが泣いているのかと言うと…少し前に時間は遡る。

カナン
「うわ～…すっげ～…」
タカト
「そうか？」
カナン

「こんな料理、滅多に食えませんし」

テーブルの上に所狭しと並べられた懐石料理。
なんか、場違いなとこに来た気がするが、一応、神庭家の中だ。

ルシア
「うん。今日も美味しいわね♪」
タカト
「ルシア…行儀が悪いぞ…」
トウヤ
「うむ。つまみ食いはいけないね」
タカト
「堂々と座って食えばいいと言うものでもないぞ。兄者よ…」

タカトさんがため息をついている。
この二人には、タカトさんも手を余しているらしい…

シオン
「タカ兄ぃ、この二人には無駄だって」
タカト
「そうだな…食べるか…」
みもり
「では、皆さん合掌してください…いただきます」
一同
「いただきます」

で、物凄く気になったので聞くことにする。

カナン
「シオン、母さんがいるんじゃなかったのか？」

シオン
「は？　いるだろ。そこに」

シオンが視線を向けたのは、どうみても十代の女性…

カナン
「…神庭君のお母様ですか？」
アサギ
「は～い♪　神庭君のママのアサギです♪」
カナン
「神庭君にはいつもお世話になってます…」
シオン
「カナン…口調がおかしいぞ…」
カナン
「いや、だって…えええええ!?
見えねぇって！　俺はお姉さんかと…」
アサギ
「あら、嬉しいこと言ってくれるわね♪」
シオン
「あのな…あれでもあの人はよ…」

ザクッ!!

カ・シ
「……」

なんか今、銀色の閃光が俺とシオンの間を抜けたような…
カタカタと首を回し、背後を見た…

カ・シ

「ぎゃあああああああ！！！」

ほ、包丁が！！　突きたっとるぅううう！！

アサギ
「シオン君？　何を言おうとしたのか、言ってみようか？」
シオン
「母さんはどうみても女の子にしか見えないなぁって話だ。な！！」
カナン
「ああ！　そうともさ！！
シオンの恋人でもいける…」

ザクッ…

カナン
「え…？」

俺の髪を掠めた銀色の閃光…
冷や汗が吹き出す…

みもり
「アサギさんが…シン君の…何って言いましたか…カナン君？」
カナン
「あ、あの笑顔は！！」

ひどく…良い笑顔を浮かべたみもりさんが、包丁を指の間に挟んでこっちを見ていた…

カナン
「いや…あの…すいません…」

みもり
「次はありませんよ…」
カナン
「イェッサー！」
ルシア
「あはは！　なんかシオンがもう一人いるみたいね」
タカト
「こんな愚弟はもういらん」
トウヤ
「全くだね」
シオン
「あんたらひどくないっすか！？」

まさかの弟のいらない発言にシオンが軽く半泣きになっている…
肉体は強くても、精神面は結構弱い俺達なのであった。
そこで、止めの一撃がアサギさんから投下された…

アサギ
「ところでシオン君？」
シオン
「な、何？」
アサギ
「母さん、じゃなくて、ママ、でしょ？」
タカト
「さて、新聞を取りに行くか」

なぜ新聞を取りに行くのに縮地を使うんだタカトさんよ…

トウヤ
「アサギママ、私も失礼するよ。

学校の準備が忙しいものでね」
アサギ
「は～い♪　トウヤ君大好きよ♪」
トウヤ
「私も大好きだよアサギママ♪」

なんだろうか…トウヤさんが言うと違和感を微塵も感じない…
次第に冷や汗が流れ始めるシオン…

ルシア
「アサギちゃん、私も例によって行くわね」
アサギ
「生徒会活動、頑張ってね♪」

多分、ルシアさんの生徒会云々は、逃げるための口実だろう…

みもり
「シン君、今日も一日、頑張りましょう…」

歩き去るみもりさんの目から光る物が見えたのは気のせいではないだろう…

シオン
「カナン…お前も行ってくれないか…」
カナン
「そうしてやりたいのは山々なんだが、わりぃ…任務だ。ほら」
シオン
「任務？」

表示されたモニターにはこう書かれていた…

『面白可笑しいことを録音せよ。
宣伝のために（笑）』

シオン
「（笑）ってなんじゃあああああああ！！」
カナン
「というわけだ。済まん」
アサギ
「カナン君、その年齢で働いてるの？
偉いわね～」
カナン
「あ、いえ、それほどでも」
アサギ
「皆どこか行っちゃったし、懐石料理、どんどん食べてね♪」
カナン
「はい。ありがたくいただきます」
アサギ
「さて、と…シオン君？」
カナン
「こっちも準備オッケーだ」
シオン
「く…アサギ」
アサギ
「うんうん♪」
シオン
「ママ…うわぁあああああああ！！！」
カナン
「おしっと…ん？」

通信があったので、モニターを展開すると、拗ねたヴィヴィオ…

カナン
「ヴィヴィオ？　どした？」
ヴィヴィオ
『シオン君…私にはママって言ってくれないのに…アサギさんには言うんだ…』
アサギ
「あらあら、可哀想に…
ほら、シオン君、可愛らしいママも言ってあげなさいな♪」
シオン
「え、いや…それは…ヴィヴィオはまるっきり他人…」
ヴィヴィオ
『ふぇ…』
カ・シ
「まずい…」

最終兵器乙女の涙が充鎮されていく…
あれが落ちれば、二人の魔王が！

アサギ
「シオン君…？」

ジャキ…

カ・シ
「三人目だぁあああああああああああああああああ！！！」

十本の指の間に装填される包丁…

祐希奈
『ヴィヴィオを泣かしたら殺すわよ…』
カ・シ
「四人目ぇえええええええええええええええ！！！！」

恐るべし、ヴィヴィオの最終兵器、乙女の涙…
瞬く間に敵が増えていく…

タカト
「今、ヴィヴィオの泣きそうな声が…」
カ・シ
「ヴィヴィオママぁあああ！！！！！！！！！！」
アサギ
「あらあら♪」
ヴィヴィオ
「あ、あれ？　カナン君も私の子供だったの！？」
カナン
「違うけど…なんか…怖かったんだ…」
シオン
「流石…俺の友達だな…」

ドサッ…
そこから先のことは覚えていない。
なんかみもりさんが叫んでたような気がするが、俺達の意識は闇に落ちた…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

それから約十分後、目を覚ました俺達は、学校へ向かうことになった。

シオン
「あれ？　カナン、何で制服あるんだ？」
カナン
「あのなぁ…俺は現役学生だっての…
突撃リポートっつっても、中等部からの、学校見学として参加するだけだ」
シオン
「じゃあ…うち来る必要無くね？」
カナン
「それは俺の知るところじゃない…」

適当にブレザーを着た所で、みもりさんが部屋に入ってきた。
少しだけ不機嫌な様子だ。

みもり
「もう…何で男の子って、きちんと制服を着ないんですか？」
シオン
「何でって…そりゃあ…なぁ？」
カナン
「俺らが真面目君に見えます？」
みもり
「それは…見えません…」

そうだろうな…真面目な奴なら、ぶっ倒れるまで戦ったりはしないだろうし、自身の限界を越えた無茶ははしないだろう。

シオン

「ま、そういうことだ。行くぞ」
カナン
「はは。まぁ、諦めてください。
真面目になんて、多分俺達には無理っすから」
みもり
「はぁ…わかりました」

若干気落ちしつつ、みもりさんも後についてきた。
一同
「いってきまーす」
アサギ
「はい、行ってらっしゃい♪」

テクテクと通学路を歩く俺達。
程なくして見える、言わずとしれた極道一家。神代家を通りかかる。

カナン
「でけぇ…これが銀杏の家…」
シオン
「海鳴市に住んでるんだろ?
見たことないのか?」
カナン
「俺んちからじゃこっちの道は通らないからな。
しかも、一応、極道の家だし、絡まれると色々面倒だろ?」
みもり
「神代の人達は皆、いい人ですよ?」
カナン
「いや、神代の方じゃなくてな…あれだ」

神代家の門の前に五人ほどいるどっかの門下の奴ら。

極１
「おうおう、神代銀杏とか言ったな？
俺らの仲間に手を出してくれたみてぇじゃねぇか…あぁ！？」

銀杏
「うっせぇな…お前らが俺のデザートタイムを邪魔したからだろうが…」

極２
「デザートだぁ？
んなもんのためにキレるバカがどこにいんだ！」

極３
「あんま調子こいてると、ぶっ殺すぞ！
さっさと謝れやぁ！」

銀杏
「スイマセン」

極４
「ホントに謝ってんじゃねぇよ！」

銀杏
「謝れっつったのはそっちだろ？」

極５
「てめぇにはプライドってもんがねぇのか！」

銀杏
「雑魚に頭下げるくらいでどうこうなる程度のプライドじゃないからな」

極１
「な…殺っちまえ！！」

銀杏
「ったく…だりぃな…」

シオン

「だりぃなとか言うんならな…」

―撃！・撃！―

極２
「ぐぉ！」
極３
「ぐあ…あ…」

背後からの手刀、足払いから、相手の頭を持ち、後頭部を地面に打ち付け気絶させる。

カナン
「もうちょい上手く言えよな」

―徹！・撃！―

極４
「が…は…」
極５
「ぐぉあ！」

俺は男二人の間に入り込む…
瞬間、男達の鳩尾に肘鉄を叩き込み、回転から上段回し蹴りで吹き飛ばす。

銀杏
「お、サンキュ！」

―破！―

極1
「ぐふ…」

笑いながら銀杏が目の前の男に近づき、膝蹴りを頭に叩き込み、昏倒させた…
やはり極道の長…膝を使うとは容赦ない…

カナン
「ふぅ…」
シオン
「終わったな」
みもり
「二人とも何をしてるんですか！」

なんだかみもりさんが怒っている。
正直、容姿が可愛いために怖くない。

シオン
「何って…」
カナン
「なぁ？」
銀杏
「いや、俺に振るなよ…」
みもり
「銀杏さん！」
銀杏
「俺は知らないって！！」

なんか知らんが、みもりさんの怒りの矛先は銀杏に向いたようだ。

シオン
「あ、やべ！」
みもり
「わっ！」

シオンがみもりさんの手を引いて横に飛ぶ。

百夜
「星！」
カ・銀
「ぎあああああああああああ！！！！！」

直後、背後からの集束砲が俺と銀杏に直撃した…
何故、俺まで…

百夜
「銀杏！　ボクというものがありながら、また新たな女に手を出したな！？
言い訳があるなら言ってみろ！」
銀杏
「……」
百夜
「何も言えないのか…ボクは…ボクは悲しいぞ！」

銀杏を物言えぬ状態にして無理言うな…

カナン
「つうか…シオン、わかってたんなら言えよ…」
シオン

「いや、ギリギリだったから間に合わなかったんだ…」
カナン
「昼飯」
シオン
「わかった…」
カナン
「カツ丼だな」
シオン
「Ａランチじゃ…」
カナン
「ダメだ」
シオン
「わかったよ…高いんだよなぁ…
今月の金、ピンチなのに…」
カナン
「知らん。宿題の答えの売買なんぞしてるからだ」
シオン
「くっ！」

ちなみに、Ａランチ（５８０円）は、一般的な生徒達向けの定食。
しかし、カツ丼は、単品で定食の値段を上回ると言う（８００円）
学食では結構高値だ。

みもり
「あの、シン君？　カナン君、銀杏君、百夜ちゃん…遅刻です」
一同
「……」

現在時刻、８時４０分。一時限目、８時５０分から…既に間に合
わない…

“普通なら”生憎、普通ではない。

カ・シ
「さぁ、行くぞ！
我らが便利移動人類、神代銀杏よ！」
銀杏
「誰が便利移動人類だドアホども！！
しゃあない…つかまってろよ！」

と、何だかんだ言いつつも、イーターを使ってくれる銀杏。
一瞬にして、校舎内へと景色が変わる…

カ・シ・百
「余裕」
銀杏
「てめぇらなんもしてねぇだろうが！！」
みもり
「すいません…」
カナン
「じゃ、俺は職員室に行くから」
銀杏
「クラスは俺らのクラスだろ？」
シオン
「今日一日、よろしくな」
カナン
「おう」

シオン達に手を振り、職員室へと向かう。
そのままヴィータさんに連れられ、教室へ…

ヴィータ
「おし、お前ら静かにしろよ～。
今日一日だけ中等部から来た風間カナンだ」

壇上で礼をすると、クラスが拍手をしてくれた。
正直恥ずい…

カナン
「こんなの…小学生以来だな…」
ヴィータ
「ま、お前なら大丈夫だろうけど、仲良くな？」
カナン
「あ、はい」

こうして、俺の突撃リポートが始まったのだった…

第二十四話　理由　（前編）（前書き）

はい、いきなり遅れてすいません。
なんでこう期限が遅れるかな…
とりあえず、どぞ♪

第二十四話　理由　（前編）

祐希奈
「前書き、質問コーナーって、また少ないわね……」
ヴィヴィオ
「カナン君とレナスがいないよ？」
メイデン
「まぁ、今回はあれだ」

巨大蟹
「ガァァアア！」
ゼッ○ン
「ゼッ○ーン！」
レナス
「蟹～♪」
カナン
「待てレナスぅぅぅ！
いくら何でもゼッ○ンと巨大蟹のバトルの最中には…」
巨大蟹
「キシャァァ！」

ジャキン！

カナン
「のわっ！」
ゼッ○ン
「ゼッ○～ン」

ゴオオオオ！

カナン「ぎゃあああああああ！
無理！　助けてウルトラ◯ン！！」

テケテン、テケテン、テケテケテケテケテン♪

ゴ◯ラ
「ピギャアアアオオオオ！！」
カナン
「ウルトラ◯ンじゃねぇえええええええ！！」
レナス
「かに～♪　か～に～♪」

パキパキ…グシャリ…

巨大蟹
「キシャァァ！？」
レナス
「あ、身が詰まってて美味しいです♪」
祐希奈
「……何これ？」
メイデン
「気にしたら負けな気がしてきたぞ…」
ヴィヴィオ「と、取り合えず質問コーナーに移ろうよ？」
祐希奈「そうね…」
ゴ◯ラ
「ピギャアアアオオオオ！！！」
カナン
「こうなったらやったらぁぁああ！！！
エクスカリバァァアアアアアア！！」

チュドーーン！！

ゼッ◯ン
「ゼッ◯ーン！」

チュドーーン！　ゴオオオ！！

カナン
「まさかの後ろぉぉおおおお！！」
祐希奈「あぁ、もううっさいわね！
Ｂｒａｖｅ特性激辛カレーでも食べときなさい！」

ガポッ！

カナン「……ぃぃぃぃあああああ！！！！！　うぉあああああああああ
あああああああああああああああああぁ！！！！」

ゴオオオオ！！

ゴ◯ラ
「オオオォ！？」
ゼッ◯ン
「ゼッ◯～ン！？」
ヴィヴィオ
「す、凄いよ！　カレーで吹いた火でゴ◯ラさんとゼッ◯ンさんを
押してるよ！」
レナス
「♪♪　美味しいです～♪」

バキッ！　バキッ！

巨大蟹
「……」
メイデン
「死んだか…姉さんの糧となれ…
さて、質問コーナーだ。
今回は一つだけである意味助かったな…
『ユニオンしたメイデンとレナスと全開ハルってどっちが強いんですか？』
そうだな…ハルさんの方が強いな」
ヴィヴィオ
「あれ？　でも、カナン君を抑えたのはユニオンメイデン達だよね？」
メイデン
「あれは、ハルさんが私達を抜き出したことによってマスターの能力が落ちたことが理由だな」
祐希奈
「アイツは、落ちたのに海鳴市消し飛ばしたわけ？」
メイデン
「落ちたとは言っても、私達の力は残っているからな…
大気爆発の集束時間に遅れが出るとはいえ、マスターの魔力ならほとんど補える。
もし、強制的にユニゾンされていたなら、海鳴市どころか、日本くらいは消し飛んだかもしれないな」
ヴィヴィオ
「そんな滅茶苦茶な力使って大丈夫なのかな…」
祐希奈
「それは、今話で明らかになるわね。
オーバードライブの反動は大罪スキルまではいかないけど、中々凄

いわよ？」
メイデン
「では…」
カナン
「ゴ◯ラとゼッ◯ンにカレーで勝てたぁぁあ！！」
レナス
「ごちそうさまです♪」
メイデン
「……私も何か特技を持った方がいいのだろうか…」
ヴィヴィオ
「あはは…メイデンはちょっと無理じゃないかな？」
祐希奈
「人気があればそれでオッケーよ♪
最後にシオンにお知らせ～♪
イナゴとかふざけた答え言うなんて、次回に覚えときなさいよバカレオン♪」
ヴィヴィオ
「覚えといてね、シオン君…」
メイデン
「……リリカルヴィヴィオ、始まるぞ……」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「もうすぐ医療班本隊も到着しますから、到着までに出来る限り、生存者の止血を！　石化した人達は、一ヶ所に集めて下さい！　助かる可能性はありますから！」

《了解！》

上空から指示を飛ばし、なのは自身は空から被害者を探す。
ミッドチルダ首都、クラナガン。
本来なら、一般市民も出歩き、多いに賑わう場所である。
しかし、今、声を発しているのは、なのはが指揮する救助隊のみ。
武装局員、民間人、共に被害者の数は把握しきれない。
そして、死者も少ないとは言えない。
特に、死を与える魔剣タナトスに斬られた者は、ヴィータ以外の生き残りはいない。
そのヴィータも止血を行ってはいるが、冷たくなっていた。

「ヴィータ……くっ！」

「は、ぁ……はぁ……」

意識を取り戻したシグナムが悔しげに見守る中、ヴィータは最早ピクリとも動かず、浅く息をするのみ。

「っ！！」

なのはは遠目からだが、それでもわかるヴィータの現状。
だが、今すぐに向かいたい衝動を押さえ込む。
今、なのはしか行けないような、場所もある。
一等空尉という立場上、自分のことを優先するわけにはいかなかった。

「なのはさ～ん！！」

「あの声は……」

声がする方向に振り向くと、巨大な白竜、フリードがこちらに飛

んできているのが見えた。

「お待たせしました！」

「キャロ！　シャマルさん！」

「被害者さん達は何処ですか？」

「こっちです！」

なのはがフリードを誘導し、被害者達の元へと向かう。

「これは…」

「酷いですね……」

が、そのあまりの惨状にキャロ、シャマルは絶句。

負傷者は数知れず、戦いに巻き込まれ石化した人達、そして死者。

目にすることはあっても到底慣れるようなものではない。

そして伝えなければならない事実になのはは表情を影らせた。

「キャロ、こっちに来てくれるかな？」

「あれ、は、ヴィータ副隊長！！」

「え……」

そして、キャロの叫びに、シャマルはヴィータを見つけてしまう。

フリードに乗っているのももどかしいと、シャマルは個人で飛行、

ヴィータの隣へ必死の表情を浮かべて座る。

「ヴィータちゃん！　クラールヴィント！」
『Ｊａ！』
「……」
シャマルが駆け寄り、回復魔法を施すと、すぐに傷口は閉じた。
しかし、ヴィータは目を覚まさず、浅い息のまま、動かない。
「何で、何で起きてくれないの！？」
「シャマル、落ち着け……」
取り乱すシャマルの肩にシグナムが左手を置き、落ち着くように促すがシャマルは振り払う！
「落ち着いてなんかいられない！！　何で貴方はそんなに落ち着いていられるの！？」
「シャマル、よく聞け」
「話をしてる暇なんてない！　ヴィータちゃんが！」
「馬鹿者！」
再度回復魔法を施そうとしたシャマルの頬をシグナムが思いきり叩いた。
一瞬呆けた表情を浮かべるシャマルだが、何をされたのかを理解するとシグナムを普段からは考えられないような形相で睨みつけた。

「何を！」

「一人に構って、ここにいる人々を殺す気か、お前は！！　治療すれば、助かる命がまだある。お前の力はその為の物だろう！」

「でもヴィータちゃんが！」

「ヴィータのことを思うのなら尚更だ。ヴィータは、助かる命を見捨ててまで自分を助けろと言う奴ではない」

シグナムが言い放ったその言葉に、シャマルの動きが停止する。ヴィータならどう言うのか、それをシャマルは考えて、頷く。

「そう、よね……」

「わかったのなら早く行け！！　一人でも多くの命を救ってこい！」

「はい！」

シグナムの一喝に、シャマルはヴィータに背を向けて走り出す。シグナムの言葉通り、一人でも多くの人命を救うために。

「シグナムさん、すいません。シャマルさんに何て言ったら良いのか、説明出来なくて……」

「いや、なのはもヴィータとは長い付き合いだ。無理もない。私もシャマルにああは言ったが、正直、私がシャマルの立場だとしても、同じことをした気がする…」

なのはの横で、キャロがキョロキョロと見渡し、フェイトがいないことに気づいた。
フェイトは彼女の親のようなものだ。心配しないはずもなく、表情に焦りが募っていく。
「なのはさん！　フェイトさんは！？」
「大丈夫、ちょっと気を失ってるだけだから、命に別状はないって。今は、医療施設に搬送されてる。
「そうですか……」
無傷とはいかなかったものの、フェイトが生きていると知ったキャロは安堵の息を漏らす。
が、なのはの言葉で一瞬にして安堵は不安へと変化した。
「それで、キャロをこっちに呼んだ理由なんだけどキャロ、ヴィータちゃんを治せる？」
「私が…ですか？　シャマルさんで治せないのに私では……」
出来ない。そう繋げようとした瞬間、キャロの胸が熱くなった。
正確には、バリアジャケットの内側に入れておいた短剣がだ。
トクトクと、鼓動しているようにも思える。
「キャロ、それ……」
「これ、途中で貰ったんです……フードを被った人に……」
ジルは言った。キャロしかヴィータを救うことは出来ないと。

そんな見知らぬ人間から貰った短剣がどのような力を持っているか定かではないが、放って置いても、ヴィータはいずれ死んでしまう…
ならばと、なのはは賭けに出ることにした。
何もしないよりは、マシだ。と。

「……やってみよう」

「え？」

「そうだな。キャロ、ヴィータに近づけ。何かが起きるかもしれん……」

「は、はい……」

シグナムに促され、頷いたキャロがゆっくりとヴィータに近づいていく。
最早、神頼み以外の何物でも無い。
しかし、行動しなければ何も起こらないのだ。
起こるかもしれない奇跡になのはは、シグナムは、そしてキャロが、祈る。
横たわるヴィータの側にキャロが膝をつき、正座する。

「そのまま、回復魔法をかけてくれるかな？」

「はい。ケリュケイオン。ヒーリング」
『Ｐｈｙｓｉｃａｌ　Ｈｅａｌ』

ヴィータの胸に手をかざし、ヒーリングをかけてみる。
淡い碧の光がヴィータの胸に輝き、暖かな波動が漏れる。

しかし、ヴィータは相変わらずのまま、動かない。
なのはが、シグナムが、顔を伏せた。

「ダメ、か……」

「ヴィータちゃん……」

「っ！」

――助けたいのに……助けたいのに！！

自分の力の無さに、自然と涙が零れた。
その時、短剣がトクンと脈を打つ。
瞬間、今までとは比べ物にならない暖かな波動がキャロを包む。

「え……？」

――キャロちゃん、貴女は優しいね。ニーナは、優しい人が大好き。その人を助けたいんだよね？

声は誰かはわからない。
でも、その声がとても暖かくて、信じるに値するモノだということは自然に理解できた。
だから、願う。

「うん。助けたい……」

「キャロ？」

声が聞こえないなのはは怪訝な顔をするが、キャロにその声は届

かない。
雑音の一切を遮断し、意識は既に短剣との交信に全て向いていた。
――キャロちゃんが助けたいのは、その人だけ？
「私は、ここにいる人達……ううん、もっともっとたくさんの人達を助けたい……」
――うん。やっぱり、ニーナはキャロちゃんのこと好きになれそう。
「じゃあ、私と来てくれる？」
――もちろん♪　ニーナとキャロちゃんでいっぱいいっぱい助けよう？
「うん。一緒に頑張ろうね。ニーナちゃん」
――うん♪
心を繋いで、声を交わして、意思を一つに。
そうして、小さな鼓動は、キャロとの交信を通じて大きく、強く変わっていく。
キャロはバリアジャケットの内側から、短剣を取り出し、先端を地面へと着ける。
同時、キャロを中心に広がるは巨大なベルカ式魔方陣！
「っ！」
「キャロが古代ベルカ式だと？　しかもこの魔力は…」

キャロから放たれる衝撃波にも似た魔力の風。
しかし、何故か体に暖かな物が流れていくことをなのはとシグナムは自覚する。
そして、なのはとシグナムは、自分に起きた出来事を悟る。

「嘘、こんな……」

「腕が、治った……？」

なのはとシグナムだけではない。
被害者達の傷口もみるみる内に閉じていき、立ち上がる者まで出始める。
シャマルでも不可能な広域型回復魔法、それを召喚魔導師であるはずのキャロが行っていた。

「古代ベルカより存在せし古なる精霊よ、我が力の元、時空を越え今ここに顕現させん……」

短剣から光が溢れ、女性の姿を成していく。
そして、鼓動はキャロだけでなく、なのは達にも届くほどに強くなる。
まだ、まだ上昇は止まらない。

「我が名はキャロ・ル・ルシエ。我が言霊が響き、汝に導が届いたのなら、永久の眠りから目覚め、我の前に姿を顕せ！　希望の光、アゾットの剣が精霊、ニーナ！　精霊招来！！」

瞬間、光が弾け、黄金色の雨を思わせる風景が広がる。

「希望の光、精霊ニーナ、さん、じょー！　ブイ！」

と同時、ショートカットの胡桃色の髪に、翡翠の瞳、緑の上着にマフラーを巻き、フレアミニスカートを靡かせながら、元気に少女がニパッと笑いながらピースを作った。

「「……」」

なのはとシグナムは、言葉を無くし無言。

苦笑いを浮かべるキャロの肩に停まり、？マークを浮かべるニーナ。

「あれ？　あれ？　ここは盛り上がる所じゃないのかな？　希望の光だよ？　ニーナだよ～？」

「えっと、ニーナちゃん、今はそういう空気じゃない、かな？」

「そうなの～？　じゃあニーナは空気を読むよ～♪」

ニパーッと笑ってキャロに満面の笑みを見せるニーナ。

なのはとシグナムは、額に手を当てて唸っていた。

到底これが救世主になりえるとは思えない。

「あはは。うん。ありがとうニーナちゃん」

「それで、キャロちゃんはこの人を助けたいんだよね？」

「うん。出来るかな？」

「まっかせといて～♪　このくらい、夕飯前だよ～♪」

「ニーナちゃん、朝飯前だよ……」

「あれ？　てへへ。失敗失敗♪　じゃあ、キャロちゃん、ユニゾンいってみよ～♪」

「わかった……」

ニーナは軽く言うが、ユニゾン、それはデバイスとの相性が悪ければ融合事故へと繋がる危険な行為。

それを知っているからこそ、キャロの表情からは、余裕が消える。

「キャロ」

「大丈夫です」

なのはの声に、キャロは振り向き、少し緊張した表情で笑った。

自分しかできる人間がいないのだから、やるしかない。

そんな決意をキャロは胸に抱く。

「あ～そこの人～！」

「え？　私？」

「そう、貴女～！」

キャロの肩から、二対の透明な翼を広げ、なのはの目の前へと飛び上がる。

「な、何かな？」

「ニーナの力、信じてないでしょ～！　ニーナはね～、これでも同調は得意中の得意なんだよ～？　戦闘だけの無愛想な金髪のお姉ちゃんなんかより、ずっと、ず～～～と上手なんだから～！」

「えっと、ごめんなさい……」

「うん♪　わかればよろしい♪　ってことで、キャロちゃんも安心していいよ～♪　ユニゾンなんて、呼び出すより簡単だし、問題ないない♪」

常にニコニコ顔のニーナに、キャロの中の不安も消えていく。
何も怖がることはない。
ニーナを呼び出す時、一つになった時の感覚。
あれを恐れる必要など、何一つ、ない。

「ごめんね、ニーナちゃん、もう大丈夫！」

「謝る必要もないよ～♪　だって、ニーナとキャロちゃんはパートナーだもん♪」

「いこう。ニーナちゃん！」

「準備オッケー。万端整ってま～す♪」

目を閉じたキャロとニーナの姿が重なっていく。
自然と、言葉が出た。

「『ユニゾン・イン…』」

光が溢れ、キャロの姿が変わっていく。
ピンクを基調としていたバリアジャケットは緑へと変わり、ケリュケイオンの宝石は翡翠へ、開かれた瞳もまた、翡翠。

『髪はキャロちゃんのピンクが可愛いから残して見ました～♪』
「あ、ありがとう…」
『ニーナとのユニゾンの感想は？』
「不思議な感じ…」
『えへへ。ニーナは気持ち良いくらいだよ～♪　キャロちゃん、おかしな所、ないかな？』
「ううん、全然。暖かい……」
『良かった～♪』

異状が無いとわかると、キャロは、ヴィータの方へと向き直る。
広域回復魔法を受けても、依然目を覚ましていない。
危機的状況にもかかわらず、絶対に大丈夫だという確信がキャロを満たしていた。
だからこそ、迷いはない！

「今、助けます…」
『行っくよ～！』
「うん！」

再び展開される巨大なベルカ式魔方陣。
三角形のそれぞれの角から、金色の光がキャロの右腕、短剣へと集う。

「『消散せぬ命の光よ、我らの願いを聞き届け、集え。疲れし者よ、傷つきし魂よ、我らが安らぎの光にて死の呪縛から解き放たん……。アゾットの剣よ、今ここに、死を退ける力を示せ…』」

なのはとシグナム、そしてレスキューの人間達が見守る中、キャロは魔方陣の中心に短剣を突き立てる。

「『天使の福音（エンジェリックゴスペル）』」

中心から広がる光の波動は人々を飲み込み、戦闘区域全域に広がっていく。

ただ静かに、春の訪れを知らせるような暖かな光が溢れていく。

「『昇、天！』」

キャロとニーナが叫びと同時に、光は上空へと集い、空へと消え去る。

それはまるで、この世の闇を空へと連れて行ったかのようだった。

「ふぁ……」

「疲れたぁ……」

それを見届けたキャロはドサッと倒れ、その横にニーナが転がる。

互いに横を向き顔を見合せニコリと笑う。

光の波動が通り抜けた場は、損壊すらも直り、何事も無かったかのようにただ、青空が広がっていた。

さらに。

「ん、あ？　あれ、あたしは……」

「「ヴィータちゃん！」」

死に蝕まれていたはずのヴィータが眠そうに目をこすりながら起き上がる。
歓喜のあまりか、なのはとヴィータが抱きつくが、本人は何がなにやらという様子。

「おわっ！　な、なんだよなのは、シャマル、離れろって、シグナム、どういうことだ？」

「取り合えず、生きていることに感謝しておけ」

「はぁ？」

「「ヴィータちゃぁぁあああん！！」」

「だから何なんだよお前らはぁぁ！！」

小柄なヴィータは押し倒されてしまったが、シグナムはそれを見てただ笑うのみ。
今はただ、幸福をかみ締めたいから、説明はあとでも許されるだろうと。

「高町一等空尉！　石化していた人々が！」

石にされていた人々が動きだし、キョロキョロと周囲を見渡している。
少し騒ぎになっているが、それすらも平和な証だ。

「異状を訴える人は医療施設に搬送してください。その後は、暴動なんかが起きないように市民の皆さんに軽く説明を」

「了解しました！」

救護班に指示を出した後、なのははキャロの方へと向かう。

「キャロ！　ってあれ？」

「すぅ～」

「くぅ～」

なのはがキャロを見ると、既にニーナと一緒に眠りに落ちていた。

「あれほどの力を使ったのだ。無理もないだろう」

「そうですね。この子には感謝しないと」

「ヴィータちゃぁぁあああん！」

「だぁぁあ！　いい加減にしやがれぇぇえええ！」

抱きつくシャマルにキレるヴィータ。

そんな光景すらも微笑ましく見える。

先程までの苦し気なヴィータを見るよりはずっと良い。

「取り合えずは、一件落着、ですね」

「まだまだ問題はありそうだがな」

「はい♪」

ニコリと笑いながら、なのはとシグナムはこの平和な光景をずっと見ていた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

病院

「ん…あれ？　ここ…何処だ？」

暗闇の中、カナンはベッドにいた。

そして、間も無くして声が変なことに気づき口元に手を当てると硬い感触…

「呼吸…機？　な、何でだ？」

硬い感触の正体は自発的に呼吸を行えない患者の補助として装着される呼吸機だった…

暗闇に慣れてきた目で自分の体を見て唖然とする。

ベットから落ちないよう、ベルトで固定されているのだ。

左腕には点滴、輸血もされている…そして、身体中に巻かれた包帯。

カナンはここで漸く血が巡り始めた。

「そうだ…俺は…暴走して…メイデン！　レナス！」

頭を動かし、メイデンとレナスを探すと、すぐとなりの机に、剣型のキーホルダーが金と銀の二つ存在していた。

「お前ら！　っ！！」

体に激痛が流れる…
脳が目覚め始めたがために麻痺していた痛覚もまた目覚めた。

「くぅ…あ…」

本来、カナンの体はボロボロであり、叫んだりしてはいけないほどだ。
その代償の痛みは凄まじく、しばらくは痛みに悶えることとなる。

「交代の時間になったので見に来てみれば…何をしているのですか…君は…」

パチッと音が響き、病室の明かりが灯る…
ドアの入り口に立っていたのは…

「ハ…ル…ぐぅ！」
白衣を来たハルが呆れた表情でカナンを見ていた。

「やれやれ…君の体の状況理解していますか？」

「お前…こそ…ぅぅ！」

「ですから、怪我の程度を考えてください…全く…困った方ですね」

ハルは、カナンの隣に移動し、右腕に注射を打ち込む…
数分後、カナンの体から痛みが消えた。

「何か、聞きたいことはありますか？」

「取り合えず、今打った薬は？」

「そうですね…ヘロイン…」

「それ覚醒剤…がふっ！」

叫ぼうとしたカナンが吐血し、倒れ込む。

「ただの鎮痛剤ですが何か？」

「てんめぇ…」

爽やかに笑うハルを睨み、変わらないハルとのやり取りにカナンは笑う。

「生きてて良かった…」

「その言葉、そっくりそのままお返しします」

笑みを消し、懐からカルテを取りだして、カナンに見せる。

カナンからだらだらと汗が流れるのを確認し、ハルはカルテをしまった。

「……マジ？」

「何なら全て読み上げましょうか？

四肢複雑骨折、筋肉細胞に刺さった数五本。

肋骨四本骨折、うち二本は右肺に刺さる。

腱もほぼ全て断絶。後遺症確実。

大量出血、早急な輸血が必要…また…」

「わかった…もういい…やめてくれ」

「ご感想はどうでしょうか？」

「よく生きてるな俺…」

そこで、カナンは喋れることの不思議に気づく。
右肺が潰れているのなら、喋れるはずがない。

「もしかして…コイツらが待機フォルムなのって…」

「ご明察です。
君に回復魔法をかけ続けた結果、お二人は軽くオーバーヒートされてしまいました。
今は、会話機能を停止し、お休みいただいています」

「そっか…ただでさえ大変だったのにな…」

暴走したカナンと戦い、限界に近い力で押さえ込み、さらにその後でカナンの回復魔法を行った。
メイデンとレナスの二人で無ければ壊れていてもおかしくない量だった。

「お前も…な」

「まぁ、お二方程では無いにしろ、それなりには大変でしたよ」

カナンに負担を掛けないように軽く言うハルだが、実際、ハルが意識を取り戻したのはカナンが意識を取り戻す二日前。
ハルは五日、カナンは一週間の日々を昏睡状態で過ごしていた。

「何か、俺に出来ること、あるか？
俺に出来ることならやるからさ…」

「言いましたね？　しっかりと聞きましたよ？」

瞬間、ハルが爽やかな笑みを取り戻す。
その変化にカナンは若干恐怖を覚えるが、一度言ったからには貫こうと思った。

「では…」

「さっさと言え」

「君の過去を…」

「……」

ハルの言葉に、流石にカナンも顔を俯けた。
しかし、しばらく考え込んだ後顔を上げる。

「どっからだ…」

「事件が起きた日の最初からお願い出来ますか？」

大きな溜め息をついた後、「しゃあないか」と呟き、ハルに向き合う。

「ったく…一応聞くが、何でだ？」

「君は暴走しているにも関わらず、ヴィヴィオ様と祐希奈様を守るように戦っていました。
それに、戦っている間、大切な人を帰せと言っていました。
君が人を守ることに執着する理由は過去にあると思い、今に至ります」

ハルの理由に、カナンは苦笑を浮かべ、バツの悪そうな顔をする。

「まぁ、正解っちゃあ正解か…
ちょっと長くなるかもしれないぜ？」

「構いませんよ。夜は長いですから」

「夜は長いって…そこまで長くなら無いとは思うけどな。
あれは…祐希奈と合う前だから、俺が八か九歳くらいかな…」

ゆっくりゆっくりとカナンが思い出しながら語っていく…
その瞳に、過去の自分を映しながら…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

俺がまだミッドチルダにいた頃、“最初”は真っ白な洋風の家に住んでいて、家族三人で仲良く暮らしていた。
父さんは有名な研究者だったらしく、学会や研究に明け暮れて、家にいることは滅多に無かった。
母さんは病気がちで、寝込んだりして入院したりすることも多かった。
かと言って、それで両親を責めたことは無い。
父さんの事は、カッコいいと憧れていたくらいで、俺も将来学者になりたいと思っていたし、母さんにしても、家にいる時は一緒に

いてくれた。体調が良い時は、軽くだけど遊んでくれたりもした。
でも、やっぱり子供としては元気いっぱいに父さんと一緒に遊んだりもしたいわけで…
父さんの気を引くために結構なことをした覚えがある。

「風間夏楠選手、打ったぁぁぁぁ！！！」

トスを上げ、金属バットを振り抜くと、キーンと高い音が鳴り響き、僕の打ったボールはお父さんのお部屋の窓に一直線に向かい…
ガシャーンと壮大な音を立てて窓ガラスが砕け散った。

「コラァァ！　夏楠、またお前はガラスを割ったな！？」

窓ガラスから顔を出したツンツン髪のジーパンにYシャツ姿のこの人が僕のお父さん、風間夏輝。
なんでも、物凄い研究をしているらしい。
ただ、最近は仲間の人達との意見の違いが辛いとちらりと聞いた。

「だって、お父さん家にいるのに寝てばっかなんだもん！
たまには僕と一緒に遊んでよ！」

「お父さんはなぁ、徹夜上がりで疲れてるんだ！　たまには寝させろ！」

「たまにはって、いつもお父さんは遊んでくれないじゃないかぁ！」

「遊ばなかったらガラスを叩き割れなんて教えをした覚えは父さんはないんだがなぁ！」

「この前話した叔父さんが子供はワンパクなくらいで調度良いって

言ってくれたよ！」

「知らない叔父さんの話なんか無視しなさい！」

「やだ！」

「何で！？」

「お父さんより叔父さんの方が正しいと思ったからだよ！」

「何を根拠に父さんを正しくないと決めつけた！」

「自分が正しいと思ったことを信じなさいって言ったのはお父さんだけど！」

「そうだ。でも正しいのはいつでも父さんだ。
よって夏楠の正しいよりも父さんの正しいの方が強い！
だから父さんの勝ちだ！」

「意味わかんないよぉぉーー！！！」

腹がたったので、ボールをお父さんの部屋へと叩き込む！

「うわっ！　夏楠やめなさい！
重要な器具も…あああぁぁぁぁ！！」

お父さんと言い合っていると、家の扉が開き、エプロン姿、黒い長髪を縛り、ポニーテールにしたこの女の人が、風間奈津美、僕のお母さんだ。
ちなみに、昔はなっちゃんコンビとしてラブラブだったらしい。

なつという時を入れたいということで、僕の名前も夏が入っている。お母さんの場合は当て字だけど、愛情でカバーと言っていた。

「コラコラ、おイタはダメでしょ夏楠君？」

「だってお父さんが…」

「うん。お父さんは遊んでくれないね。
でもね？　お父さんは頑張ってお金を作ってくれるの、わかるよね？」

「うん…」

「昨日はお父さんは寝てなくて、本当に疲れてるんだ。
もし、夏楠君が眠るのを邪魔した事で、お父さんが倒れたりしたらどう思うのかな？」

「やだ…」

すると、お母さんが抱き締めてくれた。
お母さんは、僕とも、お父さんとも違う、良い匂いがする…

「嫌だよね、夏楠君は優しい子。
じゃあ、今日は我慢しよう？
代わりに、お母さんが一緒に遊んであげるから、ね？」

「でも…」

「うん？」

お母さんは、体が弱い…
よく病気にもかかるし、薬をいつも持ってる。

「お母さんの体の心配してくれてる？
お母さんは優しい息子を持てて幸せだよ♪
でもね、今日は体調も良いし、いっぱい遊べるよ？」

「じゃあ、ちょっと遠くまで行って良い？」

「？　お散歩だけでいいの？
キャッチボールでもサッカーでも良いんだよ？」

「いいよ。僕、散歩が好きだから」

「そう？　じゃあ、お弁当作ろっか？」

「うん！」

僕は、ニッコリと優しく笑うお母さんが大好きだった。
いつも笑った顔でいて欲しいから、いつも散歩なんかで終わらせる。
本当は、キャッチボールもしたかったし、サッカーもやりたかったけど、僕の我が儘でお母さんが苦しむのはもっと嫌だ。

「じゃあ、ちょっと待っててね？」

「うん。ゆっくりでいいから」

「ありがとう♪」

ニコリと笑いお母さんが家の中に入っていく…

「お父さんのバカ…」

俯きながらポツリと呟くと、僕を覆うように影が広がった。

「バカとは何だバカとは、人が眠い中遊んでやろうというのに」

「お父さん！」

顔を上げると、苦笑いを浮かべたお父さんが立っていた。
久しぶりにお父さんを近くで見た気がする。

「ん、まぁ…悪かった…夏楠も我慢してくれてるんだよな…」

「ううん…お父さん頑張ってるのは知ってたのに…ごめんなさい…
我慢、出来てないや…」

謝ると、頭に置かれる大きな手。
そして、脇を持たれて持ち上げられた。
そのまま頭に上げられ、肩車になる。
すごく高くて、ちょっと怖かった。

「う…わっ！」

「十分我慢してるさ。
本当は、もっと遊びたいのに散歩で我慢してくれてるもんな。
たまの我が儘くらい、叶えてやらなきゃ父親失格ってな」

「い、いいよ！　お父さんは寝てて！」

「さっき言ったろ？　夏楠より俺が正しい。だから、俺が遊ぶっつったら嫌でもお前は遊ばなきゃならんのだよ。かっかっかっ！」

「うん！！」

「おっしゃ！　そんじゃあ、走るぞ～！」

「お～♪」

お父さんの高さから見る景色はとても高くて、速くて、ちょっとだけ怖かったけど、とっても楽しかった。

「あらあら、夏輝さん、寝るんじゃ無かったの？」

「寝る？　いや、今日は一日、夏楠と奈津美さんとの遊びの日だろ？」

「ふふ♪　知りませんよ？」

「お母さん、お父さんが決めたら絶対なんだって～」

「そうだぞ。黙って俺に着いてこ～い！」

「着いていく～♪」

「はいはい♪」

僕達は、久しぶりに三人で仲良くピクニックに出かけることとな

った。

今にして思えば、最後に楽しめと神様か誰かが与えてくれた時間だったのかもしれない…

Ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ……

第二十四話　理由　（中編）（前書き）

えっと、ごめんなさい…
めちゃくちゃ文字数増えちゃいまして、急遽中編が入りました…
今回は質問も一件しかなかったので、前書きは次回に持ち越します。
重ね重ねすいません。

第二十四話　理由　（中編）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

僕、お父さん、お母さんの三人は、首都には行かず、一時間ほどかけて公園へと到着した。

「ふぅ…」

「お母さん、大丈夫？　苦しくない？」

僕が聞くと、お母さんはニコリと笑う。

「大丈夫、大丈夫。心配してくれてありがとう」

「どっちかって言うと、俺のが辛い…」

僕の下から、お父さんがそう言った。

家からずっと肩車していたからなぁ…

「ふふ…夏輝さん、代わりましょうか？」

「ん、まぁ、後少しで着くし…」

お父さんが僕をお母さんに渡そうとしているのに気付き、お父さんの腕にしがみついた。

「あらあら♪」

「おい…夏楠…」

「ダメ！　お父さんが僕を運ぶの！」

「…お父さんは夏楠の家来か？」

「…じゃあ、歩いてあげるよ」

「何だその仕方ないから歩いてやるよ的な言い方は…そんな子とは遊んでやらん？」

「え……うぅ…ひっく…」

遊んでくれない…お父さんが、僕と遊んでくれない…

「っとに夏楠は泣き虫だなぁ…
そんなんじゃ、友達無くすぞ？」

「無くさないもん！　お父さんのバカぁぁ！　わぁあああん！！」

すると、体が後ろから抱き抱えられた。お母さんだった。

「よいしょっと…お父さんは意地悪だね。
よしよし。夏楠君は悪くないのに、ね～？」

「ひっく…ひっく…うわぁぁあん！」

「大丈夫だよ～。お母さんは夏楠君の味方だからね～。
折角、夏楠君が歩いてくれるって言ってくれたのに、あんな言い方するお父さんは悪い人だね」

よしよし、とお母さんが何度も何度も頭を撫でてくれた…
それだけで、涙が収まっていく…

「ちょっと言い方が悪かっただけなのに、遊んでやらないなんて言い方、酷いよね～？」

「あのなぁ…奈津美さんは夏楠に甘過ぎるだって。
俺は夏楠のことを思ってだなぁ…」

「それにしたって、もう少し柔らかい言い方は出来なかったんですか？
泣き虫だとか、友達無くすなんて言い方、あんまりです」

「いや、俺はそういう気遣いは苦手だって、奈津美さんは知ってるだろ？」

「私は知ってますけど、夏楠君はまだ子供ですし、無理があります」

「子供つっても、もうすぐ七歳になるって…
そろそろ泣き虫くらいは直さんと…」

「私は十三まで泣き虫でしたよ？」

「う～あ～」

お父さんは低く唸った後、諦めたように両手を上げる

「…わかりました！　俺の負け、降参！」

「じゃあ、夏楠君に言うことがありますよね？」

「俺が悪ぅございました！　以後最新の注意を払うことを誓います！」

「はい、夏楠君、お父さんは、お母さんが懲らしめてあげたから、もう大丈夫だからね？」

「う、うん…」

何でかわからないけど、こういう時は、お母さんが物凄く強い。

いっつもお父さんが謝って終わる。

「お父さん、どうしてお父さんはいつもお母さんに謝るの？」

「夏楠…お前も彼女でも出来れば嫌でもわかるようになる…

今の俺の姿、忘れるなよ？

将来きっとぶち当たる壁だから…」

「お父さん…うん！　忘れない！」

またわからないけど、忘れてはいけない事のような気がした。

「夏輝さん、子供に何を教えてるんですか？」

「男としての心構えだ！！！」

…やっぱり忘れなくてはいけない気がした。

この前テレビで見た、第六感って所が激しく反応してるような…

そんな気がしたからだ。

「そんなものは、人によって違うんだから、気にしなくていいんだよ。夏楠君なら、きっと素敵な男の子になれるから、ね？」

「僕、お母さんみたいな女の子、お嫁さんにもらえるかな？」

「大丈夫、大丈夫♪　夏楠君ならね。
でも、まだカッコ良くなっちゃダメだよ？」

「どうして？　わっ！」

キュッとちょっと強く抱き締められた…
お母さんは柔らかくて、良い匂いで、温かくて…とっても心地よかった。

「夏楠君がカッコ良くなっちゃったら、すぐに彼女さんが出来て、お母さんの可愛い夏楠君が取られちゃうから。
だから、もう少し、可愛い夏楠君でいてね？」

「うん…お母さんが嫌ならこのままでいい…」

「ありがとう♪」

「はぁ…親バカ子バカとはこの事だな…
夏楠が奈津美さんから離れられなくなっても知らないからな」

「あら、夏楠君に妬いてるんですか？」

「んなわけない…たかが子供に…」

「心配しなくても、ちゃんと愛してますよ夏輝さん♪」

「っ～～～！！！」

あ、お父さんが真っ赤になった…

まぁ、僕にはそれよりも気になることがある。

「お母さん？」

「ん、何かな？」

「妬くってなに？」

お母さんは、こめかみに人差し指を当てて、考え始めた。

「ん～…夏楠君が大好きな物って何かな？」

「お母さん」

「ふふ…ありがとう。私も夏楠君は大好きだよ。

じゃあ、夏楠君とお母さんは恋人同士です」

「なっ！　奈津美さんそれはダメだ！」

また何でかわからないけど、お父さんが急に怒り出した。不思議だ…

「まぁまぁ、ただの仮定ですから、抑えて抑えて」

「くっ！」

「さて、恋人であるお母さんと夏楠君、そこに一人の男の人がやって来ます」

「僕とお母さんが恋人同士で、そこに男の人…
男の人ってお父さん？」

「そうだね。分かりやすくそうしようか」

「ちょっと待てコラぁあああ！！」

「抑えて抑えて。我が子の成長のためです」

僕のお父さんながら、なんて怒りやすい人なんだろう…
僕は優しい男になろうと決めた。

「さっきの続きね？　その男の人は、お母さんの昔の友達で、二人は夏楠君が分からない話で盛り上がってます。
さて、夏楠君はどう思うのかな？」

「やだ…」

「うん。簡単にだけど、それが妬くってことだね」

「お父さん嫌い、お母さんを返して！」

お父さんは酷い人だ。僕からお母さんを取り上げる悪い人だ！

「物凄い不本意な恨みを買ってる気がするんだが…俺は大人だ…
ＣＯＯＬ…ＢＥ…ＣＯＯＬ…」

「でも、大丈夫…」

「わぷっ！」

「！！」

ギューと思いきりお母さんが抱き締めてくれた…

「お母さんは夏楠君にゾッコンだから、浮気なんてしないよ♪」

「わぁ…うん！」

「もう我慢ならん！　夏楠！　奈津美さんは俺の嫁さんだぁあああ！」

「ほら、夏楠君、お母さんを守って？」

お母さんが僕を降ろし、後ろに隠れた…

僕がお母さんを守ってあげなくちゃ！

「うん！　だから、お母さんは僕の恋人だよ！」

「は～い♪」

「許さんと言うとろうがぁぁあああ！！」

「っ！！」

なんだろう…最近になって、集中すると、皆の動きがとても遅く見える…

僕は、あっさりとお父さんの股を通り抜けた。

「「え…？」」

「てぇえええい！！」

そして、膝裏を蹴るとお父さんがガクンと崩れ落ち、膝をつく…
ジャンプしてお父さんに飛び乗る。

「ぐえ…」

「勝ったぁぁ♪」

蛙のような声で鳴くお父さんの上でガッツポーズをしていると、
お母さんは驚きながらこちらをジッと見ていた…

「お母さん？　どうしたの？」

「ううん。凄い凄～い♪　お父さんに勝っちゃうなんて、流石お母さんの恋人だね」

「うん！」

「ちぃ！　しかしな夏楠！
お母さん争奪戦はまだまだ続くぞ！
次は野球で勝負、その次はサッカーだ！」

「負けないよ！」

「あはは。夏楠君、頑張って～♪」

野球もサッカーも力一杯お父さんと戦い、勝ったり敗けたりした。
それでも、時々、お父さんとお母さんが驚いたような目でこっちを見てたけど…
しばらくして、疲れたのでシートにお父さんと僕は転がった。

「「はぁ…はぁ…疲れたぁ…」」

「はい、お疲れ様♪　お茶でもどうぞ」

「お、ありがとう」

「美味しい…」

「今日のお茶は、頑張ってみました～♪」

「やっぱり、お父さんのお茶よりお母さんの方が美味しいね♪」

「あはは。毎日煎れてるお父さんに勝っちゃった」

「うるっせぇ…飲めるんだから文句言うな」

僕の家では、基本的に家事はお父さんが担当する。
お母さんに楽させるためだ。
もちろん僕もお風呂掃除や洗濯を手伝ったりしている。
だけど、体調が良い時のお母さんにはまだまだ及ばない。
料理なんて、お父さんのとお母さんのを比べると明らかな差がある。

「お弁当もいつもより頑張ったんだ。ほら」

「「うわぁ…」」

おせちって何かのお祝いの時に食べるんじゃなかったっけ…
取り合えず僕とお父さんは玉子焼きを食べた。
苦手な甘い玉子焼きじゃなくて、だしをちゃんと使ってくれていた。

「美味しい？」

「「……」」

お父さんと僕の間に火花が散った…

「あはは。二人とも凄いね～」

数分後……

「ぷはぁ…ご馳走様でした」

「食った食った。ご馳走さん」

「はい、お粗末様でした」

何を言うでもなく、お父さんが空を見上げた。
つられて僕もお母さんも空を見上げた…
吸い込まれそうな程の、蒼、蒼、蒼。…どこまで見渡しても蒼天が広がっていた…
それがとても綺麗で、釘付けになった…

「綺麗な空だな…」

「うん…」

「そうですね…」

「ホント、綺麗な空ですね」

「「「え？」」」

不意に響いた声。振り向くと、茶色いスーツ姿で、銀髪のとっても綺麗な女の人がいた…

こっちを見てニコッと笑った顔は、もっと綺麗で、お母さんと同じくらい綺麗だった…

「こんにちは」

「「「こ、こんにちは」」」

「まぁ…仲が良いことですね」

三人揃って頭を下げたのが可笑しかったのか、また少し女の人が笑った。

「ごめんなさいね。邪魔しちゃったかしら？」

「全然です！　こっちは僕のお父さんで夏輝お父さん、こっちはお母さんで奈津美お母さんです！」

「何でお前はいきなり名前をばらすかな…」

「まぁまぁ、こっちの子は夏楠君です。
夏楠君も貴女様が気に入ったようですし、お茶くらいなら御出し出来ますが、御一緒にどうでしょう？」

「じゃあ、可愛い夏楠君のお願いだし、ちょっとだけお邪魔させて頂きます」

お母さんが誘うと女の人は僕の頭を撫でてくれた。
長い銀髪から、この人からも良い匂いがした…

「私は一之瀬奈央、よろしくね、夏楠君」

「は、はい！」
そして、奈央さんは、僕の隣に座ってくれた。
キラリと胸元に光った青い宝石…

「わぁ…」

「この宝石が気になる？
この子はね、アシェルって言うの。
アシェル、夏楠君に挨拶して？」
『Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ』

「喋った！」

「インテリジェントデバイス…か…
となると、貴女は管理局の方ですか」

「ええ。風間夏輝さん。貴女の活躍も聞いていますよ？

ただ、異動先が災難でしたね」

「知られてましたか…
まぁ…あの人も話せばわかってくれますよ…」

そういえば、異動してからのお父さんの所属先を聞いたことが無かった…
聞いたのは、仲間とのいざこざなんかばかりだ…

「風間博士…早急に異動届けを出した方がいいです…
奴と関わっていてはろくなことにはなりません」

「…奈津美さん、悪いけど、ちょっと…」

お父さんがお母さんを見ると、お母さんが立ち上がった…

「夏楠君、お仕事の話になりそうだから、お母さんとお散歩に行こうか？」

「え…でも…」

「夏楠…頼む」

真剣にお父さんが僕に頼んでいた…
そんなに、怖い話なのだろうか…

「うん…」

「すぐ終わるから、ごめんなさいね夏楠君」

「夏楠君、行こ？」

「わかった…」

お母さんにつれられて公園の砂場で山を作ったりして遊んだ。
でも、僕はさっきのお父さんの顔が忘れられなくて…なんだか、
もうすぐ、お父さんが帰ってこなくなるような気がした…

「さてと、もう終わったかな？
行ってみようか？」

「うん！」

シートに戻ると、奈央さんとお父さんの話は終わっていた。

「お、夏楠、ナイスタイミングだ。
お前のガールフレンド候補を聞いてたとこだ」

「え～！　夏楠君にはまだ早いと思う…」

「ふふ…子供の成長は早いものよ？」

二人の間で笑ってるお父さん、ガールフレンドを渋るお母さん、
お母さんを説得する奈央さん。
とても賑やかだ。でも、さっきまでと違ってそれは不自然に作り
出された空間に思えた。
失敗を誤魔化すかのような、そんな感じ…

「夏楠君、私の娘にね、祐希奈って子がいるの。
今は地球って所に、夫と住んでるんだけど、機会があったらこっち

に連れてきたいと思ってるし、お友達になってあげてくれないかな？」

「はい…」

自分が何を言っているのか、よくわからなかった。

女の子の名前が出た気がするけど、それより僕の興味はお父さんの仕事に向いていた…

「奈央さんの娘なら相当に美女になるぞ～？夏楠、本気で狙っていけよ？」

「うん…」

「ダメ～！　夏楠君はまだ私の所にいて！」

「うん…」

それから何度かよく覚えていない返事をした後、奈央さんが立ち上がる。

「じゃあ、そろそろお暇するわね。夏楠君、またね？」

「さようなら…」

「祐希奈ちゃん、待ってますね。うちの息子のガールフレンドとして♪」

「お友達としてです！」

奈央さんは、軽く笑って銀髪を靡かせながら、帰って行った…

「そろそろ、俺たちも帰るか？」

「お父さん…」

「うん？　あ～またお前は泣いて…なんだ、今度はどした？」

何も喋れない。
代わりにたくさんの涙が流れた。怖かったんだ…お父さんがいなくなりそうで…

「夏輝さん…」

「ああ…わかってる…
夏楠、大丈夫だ…ごめんな…
俺が仕事の事で不安にさせたんだろ？
不自然だったよな…いくらお前が子供でも、わかるよな…」

抱き上げて、揺られる。　こんなこと、何年やられていないだろうか…
本当に小さな子供もあやすように僕は揺すられ続ける…

「お父さん！　お父さぁぁぁん！！」

「大丈夫だ…俺は大丈夫だから…
お前はそんなに気にしなくていいんだよ…
子供らしく、笑って母さんと家で待っててくれれば、俺は頑張れるから…」

揺すられるうちに眠気に襲われ、疲れていたのか、抵抗も出来ずに眠りに落ちた…

その夜、夏楠の父、夏輝の仕事用デスクには、遅くまで灯りが灯っていた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一段落を終えた彼は、軽く溜め息をついてこちらを見据えた…

「ハル…この後、俺達は襲われる…
でも、いきなりなんだ…繋がりがわからない…
俺が父さんと一緒にいない間、本局で父さんが何をしてたか、ハッキング出来ないか？」

本局へのハッキング行為、それは罪になる。
しかし、彼自身が知りたがっている…
自分が知らない間に何がどうなって逃避行が始まったのかを…

「君の過去を知りたいと言い出したのは僕です。
それくらいの協力はさせていただきますよ」

以前の僕なら、こんなことはしなかった…
自ら危機に飛び込んでまで他人に関わる必要がなかったからだ…
今はリスクを犯してでも、彼の過去を知ってみたい…
いや、そんな物は前置きで、実際は…カナンに協力してあげたいだけなのかもしれない…

「ありがとう…ハル…」

「いいえ…では、本局端末へのハッキング…開始します…」

「頼む…」

記憶に残る全てのデータを算出、プロテクトを解除していく…
十近くのプロテクトを解除した時、漸くそれと思われる映像を見つけた…

「映像…出ます…」

「ああ…」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

風間夏輝は、薄暗い研究施設で、ジェイル・スカリエッティ率いる、地上本部の裏の顔、闇の研究施設へと異動されていた…

「うぅ…あああぁぁあああああ！！！」

「くっ！！」

金髪オッドアイの幼女に肉体実験が加えられていく…
その光景を見ても、スカリエッティは勿論、他の研究者もただデータを集めるだけ…

「あああぁぁあああああ！！！」

この様に、夏輝は俯き、決意をしたかのようにスカリエッティへと向かって行った。

「待ってろ…今、助けてやるからな…」

「これは明らかに人道に外れた研究です…
薬物投与だけでも相当な負担になっています…
やめましょう…あの女の子が可哀想です」

「可哀想だって？　ククク…失敬…ククク…」

夏輝の言葉にスカリエッティを筆頭に他の研究者まで笑いだす。
コイツらはイカれている。そう夏輝は思った。

「風間博士…“アレ”はね、人ではない…君もその事を知っているだろう？」

「作られたとしても…クローンだとしても…物ではないですよ…
れっきとした、人間です。我々と同じく、血が通う人間です…」

この言葉にさらに笑い声が大きくなった…
拳を握りしめ、夏輝は耐える…

「君の言う通り、アレは、確かに私によって作られた人だ…
そうだねぇ…私にとっては娘かな…」

「ならば…こんな実験は…」

夏輝の発言を遮り、スカリエッティがまだ言葉を続ける…

「そう…作られし私の娘、聖王の器の最高傑作なのだ！
彼女は、私にとって『娘』と言う題名の作品なのだよ！
アレは私が自分で作った作品なのだ…私が私の作品に修正を施して

何が悪い？」

夏輝の拳から血が流れた…限界まで握られたことにより爪が皮膚を切り裂いたからだ。

「けんな……」

「何だって？」

「ざっけんじゃねぇぞてめぇはぁあああああ！！」

怒りに任せ、振り抜いた拳は、何かの物体が浮いている試験管を砕いた…

それを見てもスカリエッティは笑みを崩さない…

夏輝はスカリエッティの胸ぐらを掴み、壁に打ち付ける。

「最高傑作だと！？　作品だと！？　てめぇ！　人の命を何だと思ってやがる！！

あの子は…明らかに痛くて泣いてるじゃねぇか！！

あんなに小さな子供が…泣き叫んでるのに何とも思わねぇのか！

クローンにしろ、てめぇの娘なんだろうが！！

何で心が痛まない…何でそんな平気な顔してレポートとってんだ！！

てめぇも、てめぇも、てめぇもだ！！

ここにいる全員、心が無いのか！？

こんな研究、なんの意味も無いってわからねぇのか！　何とか言ってみやがれ！

あぁ！？　笑ってんじゃねぇぞコラぁぁああ！！！」

キレる夏輝に、周囲の嘲笑は止まない…

寧ろ、どんどん大きくなっていく…

「ククク…風間博士、何故、心が痛まないのかと聞いたね？」

「だからなんだってんだイカれ野郎！！！」

「簡単な話さ…ここにいる全員が、アレを人ではなく、物として見ているからに決まっているだろう？」

「死んどけこの変人が！！」

夏輝は、スカリエッティの顔面を殴り飛ばし、自身の懐から紙をスカリエッティに放った…

「なんだいこれは？」

「アンタらにとって、俺は邪魔でしかねぇ…
俺もこんな変人ばっかのとこ、もう嫌だ…
さっさと異動して消えてやるよ…」

スカリエッティに背を向け、夏輝が研究室を離れていく…

「風間博士！」

「……」

スカリエッティの声に無視を決め込み、暗い廊下を歩いていく…

「さようなら…」

「死んどけ…カス…」

夏輝の背後ではスカリエッティが残忍な笑みを浮かべていた…

そうとも知らずに、夏輝はとある部屋へと向かう。

「これだな…ごめんな…俺にはこれくらいしか出来ない…
頑張って逃げてくれ…そして逃げ切って、幸せな家庭で、育ってくれ…」

聖王の器と呼ばれる女の子が近々別の研究施設に搬送されることを知った夏輝は、女の子が入る装置に作動後、一定時間立つと止まるように仕掛けを施し、その場を去った。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

映像が終わると、カナンはベッドにいくつものシミを作っていた。
その正体はもちろん涙以外他に無い。

「父さんってさ…仕事…向いてなかったよな…
どうして…あんな職業選んだんだろな…
バカみたいだ…正義感の塊みたいな人で、悪行とか、見過ごせないような、そんな人だったのに…」

「学者全てが、薄暗い仕事なわけではありませんから…
君のお父様は、少し、優秀過ぎて、そして、善良過ぎただけです…」

運が悪かった。そう言う他にはない事。

「あんなクソ親父…死んで当たり前だ…
俺や母さんまで巻き添えにしやがって…」

そう言うものの、カナンの涙はいっこうに止まる気配が無い…

「君は…お父様が嫌いになりましたか？」

「嫌いだ…あんな…親父…大っ嫌いだ…でも…俺の…自慢の…父さんだ…
あんまり遊んでくれなかったけど…
いっつも喧嘩ばっかりしてたけど…
母さんと同じくらい、大好きだった俺の…父さんだったよ…
もう、この世にはいないけど、今も昔も変わらない…二人共、大好きだ…よ…」

ほとんど顔を覆うようにして静かに泣いているカナンは痛々しくて…今にも壊れそうで…
もう、大体の事情は把握した…だから…

「そうですね…良いお父様やお母様だと言うことは僕にもわかります…
もう、君も辛いでしょうから、ここから先は…」

もういい。そう言おうとしたのに、カナンは首を振った…

「いや、言うよ…」

「ですが、君が…」

「辛いけど…お前だって、話してくれたろ?
だから、俺だってお前には話してやる…
気にすんな。俺だって男だ。
これくらい、自分の過去くらい、受け入れられないようじゃ、ダメなんだ…」

カナンは今、辛い過去から目をそらさずに正面から向き合おうと

している。
　傷つきながらも立ち向かえる勇気を彼はいつ手に入れていたのだろうか…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

　スカリエッティの魔の手から逃げる日々が始まるその日。
　父さんがやたら早く帰ってきたのを覚えている。
　今にして思えば、仕事を早く終えて帰宅したのではなく、仕事を投げ出したから早く帰ってきていたんだ…
　ただ、その時の父さんの顔は印象的で、怒り半分、悲しさ半分と言った所だった。
　父さんは、奴の発言に対する怒りと、ヴィヴィオを救えなかった悲しさが混じっていたんだ…
　そんな難しい顔をした父さんが帰ってきた所から崩壊への歯車は回り始めたのかもしれない…

「ただいま…奈津美さん…仕事、変えてきた…」

「そうですか。少し待っていて下さいね？　今、お茶を淹れますから」

　仕事を変えた。そう聞いてもお母さんは、いつものように笑ってお茶を淹れに行った。
　体を投げ出すように椅子へと座り、腕をダラリと足らす。
　その手に見えた赤い物は…血だった…

「お父さん…血…」

「ん、ああ。ちょっと転けてな？

それより夏楠、喜べ。　これからは、前より遊んでやれるし、お前が心配するようなことも、もう無いから」

「ホント？」

お父さんは優しく「ああ」と言ってくれた。
お父さんは嘘をつかない人だから、多分、本当なんだ。

「やったぁ！」

「そっか。嬉しいか！」

「うん！　いっぱいいっぱい遊べるんだよね？」

「ああ。いっぱいいっぱい遊べるぞ。
それこそ、夏楠が嫌って言うぐらいにな？」

「言わないもん！」

「そうかぁ？　お父さんはタフだぞぉ？」

「言わないったら！」

「あらあら、今日はずいぶん夏楠君が賑やかだね。
お母さんも混ぜて混ぜて～♪」

僕とお母さんとお父さん、三人でたくさんのお話をした。
休みが取れたら、旅行に行こうって話になって、ここに行こうって、決めて、凄く楽しくて、夜まで喋っていたんだ。

そうこの時が、今までで、一番楽しかったかもしれない。
俺も、父さんも、母さんも笑って、まだまだ先の未来を想像して、凄く楽しかったんだ…なのに…楽しかった時間は…壊れた…

「じゃあ、じゃあ、ここ…」

地図とにらめっこしながら、お父さんとお母さんとで行き先を決めていた…そんな時、家中に響く大きな音…

「な、何!?」

「奈津美さん、ちょっと夏楠を見ててくれ、様子を見に行く…」

「は、はい…夏楠君、おいで」

「う、うん…」

お母さんに抱き上げられ、玄関の方へと進んでいくお父さんの背中をじっと見ていた…
お父さんが扉を開けると…廊下が無く、もうそこは外だった…

「誰だ!!」

どうやら、誰かいるらしい…

「がぁ…」

お父さんの体がくの字に曲がる。
そして、次の瞬間にはお父さんがこっちに飛んできていた…
机を砕き、お父さんが呻く…

「くぅ…」

「夏輝さん！／お父さん！」

「大丈夫だ…」

扉から、女の人が三人、入ってきた…
全員、光の羽のような物が間接についている…
そのうちの一人の目が光った…そしてモニターが表示され、映ったのは、紫色の髪の男の人…

「ジェイル…スカリエッティ…っ！」

『やぁ…風間博士。ご家族との団欒、楽しそうだったねぇ？
そんな君に、プレゼントを送ったのだけど、気に入ってもらえたかな？
戦闘機人の失敗作だ。受け取ってくれると嬉しいなぁ？』

「てめぇ…」

「おっと…怖い怖い…」

モニターの人を睨みながらお父さんは、これまで、見たこともないような顔で怒っていた…

「何の真似だ…」

『もちろん、証拠の隠滅さ。
聖王の実験について、知られたからには、始末しなければね？

異動なんて、出来ると思ったのかい？』

「実験の事を公言するつもりはない…」

『それはダメだよ…君が人に言わないなんて保証がどこにある？
私は完璧主義でね…少しでも危ない橋は渡らないんだ…
だから、君達を始末する…』

お父さんの仕事先が変わるから、始末？
どうして？　この人は何を言っているの？　お父さんからは冷や汗が流れていた…
お父さんが焦っている…

「お母さん…」

「大丈夫…大丈夫だからね…
夏楠君、これは演劇の練習なんだよ？
でも、面白くないよね、だから、寝てて？」

嘘だ…お母さんの声が震えてる…
劇なんかじゃ、ない…

「なら、異動は無しでいい…
これからは、研究にも協力する…だから…」

『ククク…その条件なら飲めない。
何故なら、風間博士、君は邪魔だから…ね？
邪魔な人間はいなくなるのが一番だろう？』

「家族を巻き込むな…情報を知ってるのは俺だけだ…俺を殺れ…」

「夏輝さん！　ダメです！　そんなの私は許しませんよ！！」「全員殺されるよりはいいだろ…任せて悪いけど…夏楠を頼む」

「嫌、嫌ぁぁ！！」

僕を…頼む？　どうして？

どうしてお父さんは僕をお母さんに頼むの？

どうしてお母さんは泣いてるの？

『風間博士の嫁の…確か、奈津美さんだったね…安心していい…私は優しいのだよ…』

「え…」

本当に楽しそうに男の人は笑みを浮かべた…

『優しいから、寂しくならないよう、全員殺してあげるからね…ククク…』

「くそっ！　奈津美さん逃げるぞ！」

「はい！」

お父さんがお母さんの手を引き、走り出す。

部屋の窓を突き破って僕達は闇夜に出た…

『さぁ…鬼ごっこの始まりだね…

ナンバー０１、０２、０３…行け…』

《了解、ライドインパルス、発動します》

「「っ！」」

まだ部屋の中にいたはずの三人が、僕達を囲っていた…

「せぁぁぁ！」

《回避…》

お父さんの回し蹴りを軽く屈んで女の人は避けてしまう…

「うぉぉお！！」

しかし、お父さんは止まらず、女の人に体当たりをし、吹き飛ばす。

「奈津美さん、行け！」

「でも！　夏輝さんが！！」

「俺だって簡単には死なないし、暫く耐えれば管理局も来てくれる。大丈夫さ」

確かに、お父さんは空手の有段者で、とっても強いけど、あの女の人達は、なんだか僕達とは違うような気がする…

「お父さん…嫌だよ…一緒に行こうよ！」

「生き残るにはこれが最善なんだよ！

さっさと行きやがれ！」

「っ！」

お母さんが、走り始めた…
お父さんの背中が遠くなっていく…

「お父さん！」

「師匠を信じろ！」

それだけ言って、お父さんは女の人達に突撃して行った…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

どれだけ走っただろうか、それはわからないけど、明らかにお母さんの顔色が悪い…

「はぁ…はぁ…」

「お母さん！　もういいよ！　僕も走れるから！」

「ううん…まだ、大丈夫だから…」

そう言ってお母さんはまた走り出した。
もう、お母さんの体は限界なのに…

「大丈夫。夏楠君は私が守ってあげるから…
お父さんとの、約束だから…」

泣きながら、お母さんは走る…
あの女の人三人が相手だ…
いくらお父さんでも相手が悪い…
闇の中で、お母さんの荒い息遣いだけが響き、そして…

《目標捕捉》

「「っ！！」」

機械音にも似た声が三つ、周囲から響いた…
こんな声の人は忘れたくても忘れられない…あの女の人だ…

《排除…開始…》

「夏楠君！」

「お母さん！」

もう、逃げられなかった…だから、お母さんに思いきり抱きついて、死を待った…
しかし、女の人より速く、僕達のすぐそばに光の矢が突き立つ…

「フィールド全開！」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　ｆｕｌｌ　ｐｏｗｅｒ！！』

そして、矢から光が伸び僕達を包み、女の人の刃を受け止める…

「一撃…必中！！」

闇夜に輝いた銀の光、遥か上空から、誰かが弓矢を引く姿が見え

た…

《退避…》

「ジャッジメント…アローー！！！」

瞬間、三つの光の柱が突き立ち、あまりの眩しさに目を閉じる。

続いて爆発！

「くぅ！」

「わっ！」

爆風で、お母さんに抱えられたまま、ゴロゴロと地面を転がる…

「ふあぁああ…」

「目が回るよ～…」

「あら、ごめんなさいね。やり過ぎたかしら？」

聞き覚えのある声に顔をあげると、すぐまえに奈央さんの顔があった…

「わぁ！！」

「ふふ。夏楠君、危なくこんなおばさんにファーストキスする所だったわね」

可笑しそうに笑う奈央さん。

僕は、別に奈央さんになら構わなかったりするのだけど、今はそ

れどころではない。

「一之瀬さん…夏輝さんを…見ませんでしたか？」

お母さんの質問にも、奈央さんはニッコリと笑った。

「もうすぐですよ」

「「え？」」

「奈津美さん！　夏楠！　どこだー！」

「ほら、ね？」

叫んだりしているってことはお父さんは元気な証拠だ…

生きてた…お父さんが生きてた！

「夏輝さーん！／お父さーん！」

叫ぶと、足音がどんどん近づいてきて、お父さんが現れた。

所々、怪我をしているけど、元気だった。

「な？　大丈夫だったろ？」

ニカッと笑うお父さんの笑顔を久しぶりにみたような気がする。

「夏輝さぁぁあん！／お父さぁぁあん！」

「うぁぉあああ！！」

嬉しくて、泣きながらお母さんと僕が抱きついたのに耐えきれず、お父さんが倒れた…

「風間博士、仲が良いですね？」

「はは。まぁ、お陰様で助かりました」

少し笑った後、お父さんは真剣な顔になり、奈央さんを見据える…

「俺達を助けた…これは、管理局の指示ですか？」

「いえ、私の個人的な判断です。
あの日、話した後、貴方は異動届けを出すと予測し、勝手ながらサーチャーを飛ばし貴方を監視していました。
貴方に死なれては、困りますから…
奴を捕まえる手段は貴方が持っているのですから」

「…俺に奴をあぶり出せと？」

「そういうことです」

「しかし、未だ、スカリエッティが陸と組んでいる以上…俺を庇えば、貴女は…」

「いいのです…
拡大を防げるならば、犠牲は少ない方がいい…
陸の裏にいるスカリエッティを逮捕するには、貴方の生存は絶対に必要、頼みました…」

真剣な顔のまま、お父さんと奈央さんは言葉を交わしていく。

「お母さん…話がよくわからないよ…」

「わからなくていいんだよ。
夏楠君は、こんなこと、知らなくていいの…」

「うん…」

お母さんは、これから何が起こるのか、わかっているように、涙を流していた…
子供である僕は聞くべきことではないのかも知れない…

「俺達と一緒に…は無理なのでしょうね…」

「追っ手が来ます…逃げ切るには足止めが必要不可欠です…
貴方にはすぐに逃げて欲しいのですが、風間博士…いえ、夏輝さん、私の最期の我が儘、お願い出来ますか？
私の人格をアシェルにコピーして欲しいのです…」

悲しそうに笑う奈央さんは、アシェルをお父さんに差し出す…
アシェルを受け取ったお父さんは奈央さんと同じように笑う…

「親バカですね…貴女も…」

「そう、ですね…」

「わかりました。やってみます。
奈津美さん、夏楠を連れて先に行ってくれるか？」

「はい…」

ゆっくりと離れていく二人の姿、お母さんの背中越しに奈央さんを見ていると、こっちを見て手を振ってくれた…
僕も振った。振り続けていた…

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一之瀬奈央に関する最期の映像…

「夏輝さん、無理なお願い、叶えてくれてありがとうございました…」

「いや…巻き込んでしまったんだ…
貴女も…貴女の家族さん達も…
お礼なんて…言わないでくれ…」

夏輝の言葉に、奈央は首を振る…

「私が勝手に首を突っ込んだのですから…夏輝さんは悪くないです…
お願いも叶えてくださいましたし、やっぱり、ありがとう、ですよ…
さぁ、そろそろ行ってください…
貴方方が逃げ切る時間は稼いで見せますから…」

「すいません…」

「違いますよ?」

「え?」

俯いた夏輝の顔をクイッと持ち上げ、デコピンを喰らわせる…

「って！」

「こういう時は、ありがとうって言ってください？
明るい言葉で別れた方が、いいでしょう？」

ニコリと笑う奈央に、夏輝も笑い、ゆっくりと息を吸った…

「ありがとう、奈央さん！」

「どういたしまして、では、また会いましょう」

「はい！　では！」

また会いましょう。それは叶わぬこと。
この二人が会うことは、もう、二度と無い。
笑顔のまま、嘘をついたまま、二人は別れた…

「さて、と…」
『最期まで明るいままとは、貴女らしいです』
「流石はアシェル、よくわかってますね」
『当たり前です。貴女は私なのですから』

奈央は瞳を閉じ、再度バリアジャケットに変身、右手には銀の弓…

「じゃあ…」

瞬間、滲み出すように現れるガジェット四型、完全に包囲されていた…

「最初で最期の私と私の共同戦線、いってみようかしら！」

『有終の美を飾ってみせますよ！』

ＡＭＦを意に介さず、ガジェット四型へと突っ込む奈央。
待っていたかのように、四型も一斉に動き出す…

「はぁぁあ！」

美しき銀髪を月夜に煌めかせながら、奈央は、アームを避け、至近距離で速射を撃ち込み撃墜していく…
その舞いを抜け、四型が四方から飛びかかる。
しかし、奈央はそれに構わない…
銀弓を下方へと向け、弓に魔力を流し込む…

「断罪の雨よ…罪人達を許すことなかれ…
光の内にて、歌を奏で、永久の眠りへと誘わん…
ソウル・オブ・レクイエム」

空に浮かぶは女性の天使。
羽衣を靡かせ、白銀の翼を広げ、弓を引く…
その動きは奈央と完全に同調していた…

「安らかに眠れ…」

奈央の指が弦を解き放つ。
瞬間、周囲に降り注ぐ銀の柱。
それら全てが四型へと突き刺さり、破壊しつくしていく…
爆発に次ぐ爆発。眩い光が闇夜に煌めき、散っていく…
収まる頃には、四型は一体残らず消え去った…

「これで…雑魚はいなくなった…」

しかし、もうこれからの奈央の運命は決まったも同然だった…
ＡＭＦの中で、結合も中途半端なまま、大技を放ったがために、大量に魔力を消費、最早、奈央の魔力はほぼゼロだった…
何故、結合を中途半端なまま放ったのか…それは、夏輝達を逃がすためには、一体たりとも四型を通すわけにはいかなかったからだ…
しかし、奈央の敵は四型だけではない…

「惜しい…貴様程の戦士なら、万全な状態で挑みたかった…」

奈央の前に現れた一人の女性。
その人は、トーレ…ナンバーズ中、最強クラスの戦闘能力を持つ戦闘機人だった。
奈央が倒した三体は、トーレの失敗作、本人とは比べ物にすらならない。
そんな相手を前にしても、奈央の表情はさして変わらない…笑みのまま…

「ありがとう…でも、通すわけにはいかなかったから…」

魔力が無い今、弓は使えないため、ブレードを展開…
勝てる見込みは無い。だが、逃げるという選択肢は奈央の中には存在していない…

「貴様が粘ろうと、私が貴様を倒し、追い付けば同じことだ…いくぞ！」

羽のように大きく広がるライドインパルス。
残像と共に振るわれる右腕をバックステップで避けるが、トーレは、即座に肘を突きだし刺突を放つ！

その刺突を奈央はまともに受けた…

「がふ…」

心臓は避け、即死は免れたものの、確実に致命傷を負った…
それは、流れ出る血の量が証明していた。

「っ！！」

「捕まえた…」

余る左腕でトーレの腕を掴み、離さない…
奈央は避けられかったのでは無い。避けなかったのだ。
戦って、隙をつかれ、即死させられるよりは、自分から受け、短期決戦に持ち込み、トーレの動きを止めることを選んだ…

「はぁぁあああ！！」

最期の力を振り絞り、トーレの腹部にブレードを突き刺した…

「が…あ…貴様…」

トーレと言えど、流石にこの傷では、追跡など不可能。
満足げに、奈央は笑っていた…

「これで…私の…役目は…終わった…」

互いに致命的な一撃を受け、仰向けに倒れる…
戦闘機人のトーレは、余程で無い限りは死ぬことはない…
しかし、奈央は違う。生身の人間だ。　そしてもう、助からない…

痛みの感覚など、とっくに麻痺し、今は眠気と戦っていた。

「ダメだ…眠い…アシェル、やっぱり私、助からないみたい…」

『そうですか…予想していたとは言え…辛いですね…

何か…言いたいことがあれば、私が貴女として、伝えておきます…』

「じゃあ…祐希奈に…雅樹さんはわかってくれてると思うから…」

『はい…』

「私の…愛する…祐希奈へ…」

囁くような小さな声でアシェルへとメッセージを伝えていく…

「終…わ…り…」

『お疲れ様でした…』

「じゃあ…よろしく…ね…もう一人の…私…」

『はい…お休みなさい…一之瀬…奈央…』

「お休み……」

メッセージを言い終えた数分後、奈央は静かに息を引き取った…

一之瀬奈央に関する映像…終了。

第二十四話　理由（後編）

祐希奈「は～い。シオン、あ～ん♪」

シオン「む、無理、嫌だ」

祐希奈「私が食べさせてあげるなんて滅多にないわよ？
ほ～ら、大きくお口をあけて～？　あ～んは？」

シオン「……」

ヴィヴィオ「シオン君、好き嫌いはダメだよ？」

シオン「なら、ヴィヴィオは蝉を食えるんだな？」

ヴィヴィオ「私は食べられないよ。
私が食べられない物を子供に食べさせる気はないよ？
だから、ケーキを食べさせてあげるって言ってるのに」

シオン「それはＢｒａｖｅの対殺人用ホールケーキだろうがぁぁ！
！」

祐希奈「ふふ……こうなったら最終手段ね」

ゴオオオオ……

シオン「く、口が開いていく！」
祐希奈「たっぷり、食べなさい♪」

ヴィヴィオ「その次はケーキだよ～？」

シオン「いやぁぁあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

一方のアリサ道場。

ＪＴカ「……」

アリサ「ふぅ……。ＪＫシオンに続く、カナン聖中Ｖｅｒ完成よ♪」

すずか「うん。似合ってるよカナン君♪」

ＪＴカ「全力で嬉しくないっす……」

アリサ「カ～ナ～ン？」

ＪＴカ「はい？」

パシャパシャ！

ＪＴカ「何してるんですかアンタは！」

アリサ「何って、アルバム作り？」

すずか「だね～♪」

カナン「ったく、もういいっす……」

アリサ「それにしても、案外ダメージ少ないわね？」

ＪＴカ「まぁ……」

すずか「実はどこかで女装してたとか？」

ＪＴカ「っ！」

アリサ「あれれ～？　真っ赤になっちゃって～図星？」

ＪＴカ「んなわけ」

ポイ

ＪＴカ「んぐっ！　何飲ませた！？」

アリサ「……」

ワキワキ……

ＪＴカ「い、いや……」

すずか「可愛い反応するね♪」

パシャ。

ＪＴカ「口調がおかしい……」

アリサ「て～～い♪」

バサッ！

ＪＴカ「きゃ！」

パシャ！

アリサ「うん。スカートめくりって、やるがわは楽しいわね♪
ちなみに、さっきアンタが飲んだ薬は、タカト製、女の子口調になる薬よ♪」

ワキワキ

ＪＴカ「きゃぁあああああ！！
来ないでぇぇえ！！」

アリサ「すずか！　取りまくるわよ！」

すずか「任せて♪」

パシャパシャパシャ！

ＪＴカ「ふぇぇえん！」

ＬＶ道場

祐希奈「なんか、アイツその辺の女の子より可愛く見えるわ……」

ヴィヴィオ「シオン君といい、カナン君といい、顔立ちが女の子みたいだからね～」

メイデン「ところで、シオンさんは大丈夫なのか？」

シオン「……」

ピクピクッ

祐希奈「あ～あれね？
蝉やいなごの形したお菓子だから大丈夫よ。
言ったでしょ？　精神をえぐるって♪」

レナス「つまり、シオンさんは、思い込みで虫を食べたと思っているわけですか？」

ヴィヴィオ「そうなるね。ケーキはただのケーキだし、訳がわからなくなったシオン君には、あれで十分かな。
でも、後で一緒にデザートバイキングに行って、甘いものの素晴らしさを次のアリサ道場までに教えるつもりなんだ」

祐希奈「あ～あのレンさんに貰ったバイキング券ね？
カナンと行くんじゃ無かったの？」

ヴィヴィオ「我が子のためには我慢しなくちゃ」

祐希奈（取り合えず、シオン…頑張りなさいよ…
この子、ヤバイわよ…）

ヴィヴィオ「どうしたの？」

祐希奈「何でもないわ。
それじゃ、質問コーナー♪」

メイデン「『カナンの一人称や名前が代わったのには訳があるので

すか？』
らしいが、マスターはいないな……」

レナス「代わりに私がお答えしますが、ネタバレになるので断片的に。
主は過去から目を背けています。
何故背けているのか、気になる人は、続きをどうぞ♪」

祐希奈「じゃ、魔法少女リリカルヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「カナン君の過去編最終話　『理由』後編、始まります」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

奈央さんが助けてくれたお陰で、なんとか逃げ切れた僕達は、（僕はお母さんに抱えられているけど）ずっと林を歩いていた。
その間、奈央さんのことは訊ねていない。
お父さんが何も言わないのなら、僕には知る必要のないことだと思ったからだ。
無言で歩き、隠れられる場所を見つけた時、休むこととなった。
全員が座ると同時にお父さんは頭を下げた……

「ごめんな。俺が我慢してればこんなことにはならなかったのに……」

「違いますよ。夏輝さんが謝る必要はありません」

「うん。僕もお父さんのせいじゃないと思う」

「は？」
僕とお母さんの言葉が意外だったのか、お父さんがキョトンとし

ている。

「悪いのは、明らかにスカリエッティの方です。
夏輝さんが異動届けをだすほどの仕事場。
余程酷い実験を行っていたことは容易に想像できます。
私と夏楠君には、何があったのかはわかりませんが、夏輝さんは、
夏輝さんの信念を貫いただけでしょう？」

「僕は、まだ難しいことはわからないけど、真剣なお父さんが言ってることはわかったし、間違ってることは無かったよ。
それでもこうなっちゃったんなら、いつかはこうなっちゃったと思う。
だから、お父さんは悪くないと思うな？」

「奈津美さん、夏楠、ありがとう……
よし。夏楠、弟子として、情けない師匠を思いきり殴れ！
気合いを入れなおさにゃならん！」

お父さんは膝立ちになり、僕の前にどっしりと構えた。

「え……そんな野蛮な」

「うん。行くよ！！」

「おし来い！！」

「はぁ～夏輝さんの弟子とはいえ、夏楠君に空手なんてさせるんじゃ無かったなぁ。
私の可愛い夏楠君が……あぅぅ……」

落ち込むお母さんが気になるけど、師匠の言葉は絶対だからやらなくてはならない。
だから、拳固めた右手を前に、拳を開けた左手を胸の前に構える。

「構えだけは、いっちょまえになったな？」

「やっぱりそうかな！？　僕、強く見える！？」
お父さんを驚かせようと、自主トレを頑張ったせいかがでた！！

「おう。見える見える。そこらの不良なら逃げちまうな。
さ、成長したお前の拳、父さんに見せてくれ」

「うん！」

軽く飛ぶことを繰り返し、タイミングを計る。

「はぁ……」

細く、長く、息を吐き出し、集中……
僕の耳から周囲の音が消え去った。

「せぁぁっ！！」

「なっ！」

景色が霞む。左手を握り込み、お父さんの鳩尾へと正拳突きを叩き込んだ！

「ぐふ……」

「あれ？　お父さん、どうしたの？」
いつもならケロリとしているお父さんがうずくまって震えていた
「き、効いた……夏楠、マジで強くなったな……」
「そう！？　僕、強くなってる！？」
「ああ！」
跳ねる僕の頭にお父さんの手が乗り、グシャグシャと撫でられた。
この撫で方は、一番出来た時にしてもらえる撫で方だ！
「お前、やっぱ才能あるよ。
正直な話、俺なんかよりずっとな。
空手、これからも続けて精進しろよ？」
「うん！！」
「さて、と……奈津美さん、汗かいたろ？」
「夏楠君が……可愛い夏楠君が……うぅっ」
お母さんは、僕達よりちょっと離れた所で、何故か半泣きになっていた……
「奈津美さ～ん？　お～～い？」
「え……あ、はい？」
「汗かいてないかって話なんだけど？」

「えっと、ちょっとだけですから大丈夫です」

「ダメだな。ちょっと綺麗な湖か池、探してくるから夏楠、頼むぞ」

「は～い」

「え、ちょっと夏輝さん！！
そんなのいいですよ！」

「ダメだ。じゃな」

お母さんは体が弱い。汗なんかをかいたまま寝たら、確実に風邪をひいてしまう。

「お母さん、お父さんには何いっても聞かないから、しょうがないよ」

「あはは。そうだね」

お父さんだからしょうがない。
それで納得出来てしまうほど、お父さんは頑固な人だった。
それからしばらくして、お父さんが帰ってきた。

「あったぞ。こっちだ」　草を踏み、お母さんと僕のためにお父さんが道を作ってくれる。
そして、見えたのは綺麗な水の川。

「じゃ、俺はここで火を起こして見張りに立つから、行ってこい。
ちょっと冷たいけど、体洗えよ？

タオルはこれで我慢してくれるか？」

そう言って、お父さんは長袖の肩から服を破き、お母さんに渡した。

広げれば、小さなタオルくらいの大きさにはなった。

「わかりました。覗いたりしませんよね？」

「っ～～！！　しないし、出来ないからさっさと行けって」

お母さんの言葉に、真っ赤になるお父さん。

お父さんはこういうのにとても弱い。一方、お母さんは強い。

この二人の立場が入れ替わる不思議な所だった。

「じゃあ、夏楠君も行こう？」

ニコリと笑うお母さんに頷きかけるが、行くわけにはいかない。

「い、いいよ！　僕も見張りする！」

「だから、お父さんが覗いたりしないか、夏楠君が見てて欲しいな？一緒に入れて、覗き対策も万全。流石お母さん♪　じゃ、行こうか？」

「あ、う……お父さん……」

お父さんに助けを求めたけど、ニカッと笑うお父さんを見て諦めた。

「お前は六歳の分際で何を意識してるんだ？」

「もうすぐ七歳だよ！」

「六歳も七歳も変わらないって。
ほら、さっさといってこい」

「う～～」

確かに、お父さんから見たら僕の年なんて、変わらないように見えるかもしれない。

でも、ちょっと腹が立った僕は最後の反撃をすることにした。

「お父さんとお母さんが僕に隠れてちゅ～してるとこ知ってるんだからぁぁあああああ！！！」

「……」

「あはは。見られてたんだ」

お母さんはちょっと赤くなるだけだったけど、お父さんは固まった。

「ふん！」

「あ、夏楠君、待って～」

固まるお父さんを無視して、川へと向かう。

すぐ後からお母さんは追いかけてきた。

数秒後、ドサッという音と共にお父さんが倒れた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

やってしまった。お父さんが見つけた川は意外と深くて、僕の身長では足もつかなくて……

「夏楠君を抱っこして浸かるのなんて、久しぶりだなぁ♪」

そう。僕は、お母さんに抱えられながら川に浮かんでいる状態。
もちろん背中を向けているけれど。
川の水は冷たくはないけれど、温かいわけでもない。
でも、僕は、これはお湯じゃないのかと思うくらい熱かった。

「あはは。夏楠君、顔が赤いよ？」

そして、くるりと回転していく体……

「わっ！　回しちゃダメだよ！！」

抵抗もむなしく、お母さんと向かい合わせにされてしまった。

「親子なんだから、気にしなくていいの」
「もう……」

親子でも、流石に恥ずかしいので、空を見ることにした…

「わぁ……月が綺麗……」

「ほんとだね～」

木々に遮られることなく、月光が僕達に降り注いでいた。
しばらく眺めた後、お母さんが「ごめんね」と謝った。

「どうしたの？」

「一緒に入ろうって言ったのはね、お母さん、怖かったんだ……
今にも一緒にいられるこの時間が終わっちゃいそうで……
もう、こうやって夏楠君と一緒に入ることも出来ないような気がして。
怖かったから、お母さん、我が儘言っちゃった……
夏楠君、嫌がったのにね……
だから、ごめんなさい」

「お母さん……」
お母さんの笑顔は消えて、泣いていた。
僕は、まだ子供だから、どんなことが起きているのか、あまりわからない。
わかるのは、あの人達が危ない人であることくらいだ。
でも、お父さんやお母さんは、僕より長く生きていて、賢い。
そんな二人は、今、何が起きているのか、この時間がどれだけ大切なのかがわかっていて……
だからこそ、怖くなるのかもしれない。
僕には、二人が何を思っているのかわからないから、何も言えない。
だから、今は僕に出来ることを……

「僕、お母さん大好きだから、我が儘、言ってくれてもいいよ？
お母さんのお願いなら、聞いてあげる。また、一緒に入りたいって
お母さんが言うんなら、恥ずかしいけど、一緒に入る。
僕に叶えてあげられることなら、するから。
ちょっとくらいの無茶でもするから。
一生懸命頑張るから……お母さんが笑ってくれるまで、僕、頑張る

から……泣かないで？」

「夏楠君！」

抱き締められて、ちょっと苦しいけど、お母さんが泣き止んでくれるなら僕はそれでいい……

「ごめんね。苦しいよね。でも、後少し、後少しだけ……」

「うん。それが、お母さんがしたいことなら……」

しばらく抱き締められ、離された後のお母さんの顔は笑っていた。

「ありがとう……夏楠君から元気をたくさん貰ったし、これでお母さんは無敵だよ！」

「うん！」

川から出た僕達は、体を拭き、服を着て、お父さんの待つ林に帰る。

お父さんは、復活していて、火を起こしてくれていた。

それは、とても温かくて、お母さんにもたれ掛かりながらあたっていると、眠気が襲ってきた……

ボーっとする頭でお父さんとお母さんが話しているのを聞いていた。

「夏輝さん」

「ん？」

「夏楠君、こんなに小さいのに、私の不安を受け止めてくれました。

私が笑えるように頑張るからって……そう、言ってくれました」

「そっか……」

「私の親ばか、当分治りそうにありません。
可愛くて、カッコ良くて、泣き虫で、怒りんぼさんで……
夏楠君をこれからもずっと、見ていたい」　お母さんに優しく、髪を撫でられていた……

「お～お～。奈津美さんが本格的に夏楠に惚れそうだな？」

「もう、惚れてますね。ゾッコンですから。
夏楠君が私を好きなように、私も同じくらい夏楠君が大好きですから」

「はは。こりゃあ、ピンチだな。
奈津美さんを連れさられないように、俺も頑張らないとな」

「大変ですよ？」

「大丈夫さ。コイツはまだ子供だからな？
大人は大人らしく、攻めるから」

僕の隣に、お父さんが移動してきたのを感じた……

「あら？　私は何をされるんでしょうね？」

二人の体が近づき、お父さんとお母さんの体温が肌越しに感じられる……

「こうする……」

「ん……」

二人は、僕の頭の上で多分、ちゅ～をしている。

言ったそばからするなんて、お父さんはやっぱりドジだ。

起きようと思えば起きられたけど、たまにはいいかとそのまま眠気に身を任せた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

朝、太陽の光と何かが焼けるが香ばしい匂いとのダブルパンチで目が覚めた。

「ふあ……」

「あ、夏楠君、よく寝てたね～。おはよう」

お母さんが膝枕をしてくれていた。柔くて、また眠気が……

「お母さん……、もうちょっと寝ていい？」

「いいよ。いくらでも待っててあげる」

「うん……。おやすみ……」

「は～い♪」

お母さんに髪を撫でられながら、僕は眠りに落ちようとした。しかし……

「ダメだっつの」
「あ、夏輝さん」
「いて！」
額に痛みを感じた。お父さんが僕にデコピンをしたからだ。
「二度寝は余計に眠くなる。
一度起きたんならさっと起きろ。阿呆」「だってぇ～眠いよ～」
「武術家たるもの、それくらい我慢しろ」
「は～い……。それで、お父さんは何してるの？」
「見てわからないか？」
たき火の周囲に突き立てられた魚があった。
テレビなんかで見たことがある。
「それ、美味しいの？」
「わざわざ竿作って釣った魚だからな。うまいぞ～？
まだしばらくは焼けないから、お前は川で顔洗ってこい」
「うん……。くあぁ……」
「夏楠君、一人で行ける？」
「だいじょ～ぶ～……わっ！！」

僕は、石につまづいて転けてしまった…
膝が痛い……。膝から血が出ていた……。

「「あっちゃ～～」」

「痛いよ……。痛いよぉぉおお～～！！」

「あ～夏楠君！」

「ったく、泣き虫も度が過ぎると困りもんだ。
奈津美さん、ちょっと行ってくるから、見ててくれ」

「私が行きますよ？」

「いや、俺が行く」

「わぁぁあああん！！　痛いよぉぉ！！」

泣いているとお父さんが来てくれた。
少し苦笑いをしている。

「泣き虫め。よっと」

抱えられ、川の方へと降りていく……

「ちょっと染みるぞ？」

「っ！！」

水が、擦りむいた膝に染みて痛かった。
また涙が溜まり始めたのを感じとる。

「また泣くのか？」

泣きそうな僕に構わず、お父さんは水で傷口を洗っていく。

「……っ！」

溢れそうな涙。しかし、お父さんは構わない。

「お前、お母さんが笑ってられるように頑張るんだってな？」

「うん……」

「俺、お前がそう言ったってお母さんから聞いて、嬉しかったんだぞ？
人のために頑張るってことは、それだけで相手を守ってるって事に繋がるんだからな。
でも、言うだけじゃ意味ないんだ。
例えば、今みたいにすぐにお前が泣いたら、お母さんは心配するよな？
心配なのに、お母さんは笑えると思うか？」

「ううん……」

思わない……。心配な時、笑えるような気持ちにはなったりしない。

「そうだ。笑えるわけないよな。
男だから辛くても泣くななんて俺は言わない。泣きたきゃ泣け。

ただ、それをして良いのは、本当に辛い……、そうだな～精神的に……あ～まだ難しいか……。
どう言ったもんかな……。
うん。これだ。心だ。お前の中にある心」

「心？」

「そう。心。例えば、仲良くしてた誰かが引っ越しをしたとする。
それでお前は、何かを感じるか？」

「うん。お別れは嫌だよ……。
これが、本当に辛いってこと？」

それまで一緒だった子がいなくなる……。
なんだか、日々にポッカリと穴が空いたようで寂しい……。

「ああ。それは心が痛がってるからなんだ。
そんな時は、泣いてもいいんだ。寧ろ泣け。
こういうのは、感情に出した方がいいからな。
でも、これは違うだろ？　お前は自分の不注意で転んだだけだ。夏楠、心は痛いか？」

「痛くない……」

「なら、我慢しなくちゃな？
つっても、何もいきなりやれなんて言ってない。
ゆっくりと、最初は泣き叫ばないことから始めような？
よし！　じゃあ、父さんの説教終わりだ。歩けるか？」

「歩く……痛くても我慢する」

ヒリヒリと膝が痛むけど、これくらい、大丈夫……。痛くない、痛くない。

「えらいな。じゃあ、父さんからのご褒美だ。
今回は特別に俺が肩車してやる。
次からは、軽く転けたくらいじゃ、助けてやらないからな？」

「わっ！」
脇をもたれ、一気に持ち上げられた。
この間と同じように、肩車をしてくれた。

「お父さん、僕、泣き虫、治るかな？」

頭の上からお父さんを除き込むと、お父さんはニカッといつもの明るい笑みを向けてくれた。

「出来る出来る。お前は俺の息子だからな。
泣き虫が治ったら、お前はモテるぞ～？
顔立ち良いし、成績優秀だし、弱い奴の味方。
うん。これで惚れない女はいないね」

「お母さんも？」

「あ～……」

この質問に、お父さんたっぷり悩むこと約二分。

「奈津美さんは、お前が生まれた時からお前にゾッコンラブだったからなぁ……。

夏楠が俺と同い年で、奈津美さんと出会ってたらヤバかったかもな？」「やったぁ♪」

「はは。まぁ、しゃあないわな」

「お父さん、ちょっとだけ降ろして？」

「あ？　ああ」

首を傾げるお父さんだけど、ゆっくりと地面に降ろしてくれた。

「何するんだ？」

「お花を……あった！　お父さん、僕、先に行くね！」

両手に五本ほど野花を摘み、お父さんを置いて走り出す！

「お、おい！　ったく、怪我してたのは誰だよ」

しばらく走ると、お母さんの姿を見つける。

足の痛みなんて、もう感じることもなく、僕はお母さんに駆け寄った。

「お母さん！」

「夏楠君。怪我は大丈夫だった？」

「うん。僕、これから泣き虫治すの！」

そう言うと、お母さんは優しく笑ってくれた。

「そっかぁ。泣いてる夏楠君が見れなくなるのは残念だけど、夏楠君が成長した証だもんね。
なら、お母さんは応援するよ」

「それでね？　泣き虫が治ったら、ね？」

さっき摘んだ花をお母さんの前に出す。

「わぁ♪　綺麗なお花だね」

「泣き虫が治ったら、僕と結婚してくれる？」

「夏楠君…っ！」

キュッと抱き締められ、お母さんの良い匂い広がった。

「お～い……何やってんだお前ら～……」

「夏輝さん……」

「な、何だ？　そんな泣きそうな顔して？
はは！　奈津美さんまで泣き虫に逆戻り……」

「私、夏楠君と結婚するね。ごめんなさい……」
「お父さん、ごめんなさい」

「……」

無言のお父さんは、ピクピクと動いていた。
なんとなく、命の危険を感じる。

「あのなぁ……。親バカ子バカもいい加減にしやがれ……。状況よんでから漫才しろやぁぁぁあああああああああ！！！！！」

「「きゃあああああああああああああああああああああ！！！！！」」

僕は本気だったのに、お父さんがキレた。
何で？　お母さんも良いって言ってくれたのに…
やっぱりお父さんは意地悪な人だった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

今だからわかる。父さんと母さんは、俺が元気でいられるよう、不安を押し退けて、明るく振る舞ってくれていたんだ。

「俺達の行き先は機動六課だ」

「機動六課！？」

「機動六課？　何処かで聞いたような……」

「はは。そりゃそうだ。夏楠、エースオブエースに会えるかもしれないぞ？」

「高町なぬはさん！？」

「なのは、な？」

「わぁ♪」

高町なのはさんと言えば、よくテレビなんかによく出てる綺麗な人で、正義の味方で、とってもカッコいい、僕の憧れの人だ。

最近は、機動六課にてんぞく？　して、フォワードメンバーの隊長さんとして活躍している。

「あ～えっと、確か無敵のエースって言われてたりもする人でしたよね？」

「ああ。その人だ」

「お父さん！　早く行こう！！
早く高町なのはさんに会いに行こうよ！」

早く行こうと言っているのに、お父さん達は立ち止まって話している。意地悪だ。

「は～や～く～！」

「……なんでアイツはあんなにはしゃいでるんだ？」

「夏楠君、なのはさんの大ファンですから。
なのはさんシリーズのストラップなんかも持ってたりするんですけど、恥ずかしいからって机の中に隠してる所なんて、可愛くて可愛くて♪」

「……なのはさんに夏楠を取られても知らんからな？」

「大丈夫ですよ。買ってあげる代わりに、一番は私だよ？　って確認とってますから」

「あっそ……。もう勝手にしてください……」

「夏輝さん？」

はぁ～～っと長い溜め息をつきながらお父さんが漸く歩き始めた。

「夏楠、先に行っとくが、なのはさんに会えたとしても、飛び付くような真似はするなよ？」

「大丈夫です！　そんなことさせませんから！」

「いや、奈津美さんに聞いてないんだが……。まぁいいか」

なんだかわからないけど、お母さんがやる気を出していた。

「お父さん、フェイトさんなら良い？」

「ダメだっつの……」

「じゃあ、はやてさん」

「ダメ」

「シグナムさん」

「ダメ」

「ヴィータさん」

「ダメ」

「シャマルさん」

「ダメ」

「むぅ……、じゃあ、ザフィーラでいいよ……」

「ダメだっつの！　上の人は忙しいんだから、飛び付くの禁止！！」

お父さんはケチだった。

ちょっとくらい……あ、上の人じゃ無ければいいのかな？

「スバルさんは？」

「スバル？　誰だその人、六課の人か？」

なんと、お父さんはスバルさんを知らなかった！

フォワードメンバーの前衛さんなのに……

「スバルさんは、なのはさんの部下で、りぼるばーなっくるとまっはきゃりばーを使ったきんせつせんとーを得意とする」

って、機動六課のことを頑張って調べたパソコンには書いてあった。

「ティアナ・ランスターさんや、キャロ・ル・ルシエさんや、エリオ・モンディアルさんなんかもいるんだよ～」

「は、はぁ……」

「あはは。夏輝さん、わかってます？」

「サッパリ」

「他にも、シャリオ・フィニーノさんに、ヴァイス・グランセニックさんに……」

ここで、お父さんが降参とばかりに両手を上げた。

「わかった！　もういい！　隊長陣意外なら何してもオーケー！」

「わ～い♪」

「ただし、迷惑にならないようにすること。
お仕事してる時なんかに喋りかけたりするなよ？」

「夏楠君、良かったね～？」

「うん♪」
たくさんお話して、たくさん想い出をつくろうっと♪

「ただな、夏楠……」

「何？」

「ここから六課まで、何日かかるかわからないし、辛いかもしれないけど、我慢出来るか？」

そんな答え決まっていた。
機動六課の人達に会えるんなら、いくらだって我慢出来る。

「出来るよ！」

「よし！」

ここから俺達は、三週間以上歩き続けることとなる。
魚や、木の実、生きている動物も初めて食べた。
そんな野生に戻ったかのような生活をしても、俺は、父さんや母さんがいてくれるから安心して眠ってられた。
でも、父さんと母さんは、神経を磨り減らしていたんだ……
得に母さんは体が弱いこともあり、体力の低下が激しかった……
それでも、歩き続けた。機動六課につけば、安全が保証されるから……
なのに、俺達を待っていたのは……

「お父さん！　機動六課ってアレだよね！？」

人目のつかない道を進み、漸くついた機動六課の建物。

「ああ……。なんとか、着いたな……
奈津美さん、大丈夫か？」

「はい……」

お父さんの顔が最近は見れなかった笑顔になった。　その横で肩を借りながらもお母さんも笑った。

「お母さん、大丈夫？」

「うん……。でも、ちょっと疲れちゃったかな……」

お母さんは本当に辛そうで、熱がありそうな赤い顔をしていた……

「お父さん、機動六課に行けば、お母さんも治してもらえるよ！」

「そうだな。奈津美さん、もう少しだけ、辛抱出来るか？」

「大丈夫です……」

ゆっくりと進み、薄暗い道から、大通りに出る寸前、魔方陣って言われてる物が、僕の目の前に現れて光る……

「あれ？」

そこから現れる細長くて丸い機械。
ニュースなんかで見た、ガジェットって機械にそっくり……

「夏楠！　逃げろ！」

「え…」

ガジェットは、こっちをゆっくりと振り向き、カメラで僕を捉えた……
逃げなきゃいけないのに、足が震えて動けない。
ガジェットのカメラの先に青い光が灯った……

「あ……」
どうしようもなく怖かった……
なのに、足は動いてくれない……

「させるかぁぁぁ！！」

僕を飛び越える影、お父さんだ。
ガコッと重い音がなり響き、気づいた時にはお父さんがガジェットを蹴り飛ばしていた。
着地したお父さんに抱えられ、裏道へと走り込む。
少し行くと、お母さんが走っているのに追い付いた。
そして、凄まじい爆発音が響き渡る……
機動六課が……、あんなに頑張って目指してきた機動六課が燃えていた……

「お父さん……怖い、怖いよ……」

「大丈夫だ……。幸い、シェルターは近いから、そこに行くぞ」
そう言いながらもお父さんの顔は険しいままだ……

「夏輝さん、シェルターに行くには……、通りに出ないと行けないのでは……？」

辛そうに走りながらお母さんが言った。
その言葉に、お父さんは頷く。

「ガジェットが即、夏楠を攻撃した所を見ると、スカリエッティがモニターで見てたか、俺達の顔を登録してたかのどっちかだ。
だとすると、追っ手が必ず来る……
この裏道じゃ、隠れるとこが少なすぎるし、何より、熱源を探られたら一発でアウトだ……
通りに出て、シェルターまで逃げ切る方が、まだ生き残れる確率は高い……
奈津美さん、俺におぶされ。
途中までは背負って運ぶから……

激化してきたら降ろすから、シェルターまでなんとか走ってくれ。
夏楠、走れるな？」

「うん……」

また、お父さんは残るのだろうか……
あれから、奈央さんからの連絡は無い。
今度は助けてもらえないかもしれない……

「夏輝さんは……、また……、囮になるのですか……」

「いや、今度は俺が奈津美さん達を護衛しながらついてくから、最後まで一緒だ。
安心しろ。絶対守ってやっから」

「うん！／はい！」

お父さんが一緒。なら、安心だ。
お父さんは強いもん。僕なんかより、ずっと、ずっと……

「こっから出られる。夏楠、せ～ので行くぞ？」

「うん！」
心臓が、破裂しそうなくらいバクバクと鳴っていた。
助けもなく、僕達三人だけでシェルターまで走らなくちゃならない……

「せ～のっ！！」

襲撃で、炎が立ち上る通りに一斉に飛び出す！

ガジェット達のカメラが、一斉にこっちを向いた……
まただ……。また、体が動かない……

「後ろは見るな！　前だけ見て走れ！」

「っ！」

怒鳴り声驚いたのか、わからないけど、とにかく体は動くようになった。
青い光が放たれるけど、走った。
走らなきゃ死んでしまうから……
僕達の行く先を通せんぼするみたいにガジェットが集まってきた。

「どけぇえええ！！」

「うわぁぁああ！！」
怖かったから、僕も叫びながら走った。
上で鉄パイプに殴られたガジェットが飛んでいくのが見える。

「奈津美さん、行けるか？」

「はい！」

お父さんの背中からお母さんが飛び降り、ガジェットが復帰するまえに走り抜けた。
距離を進むにつれ、厚くなるガジェットの壁。
お母さんを降ろしたお陰で、お父さんが頑張って押し退けてくれてたけど、お父さんの息は既に荒い……

「キリがねぇな！！

たかが一家族に、どんだけガジェット注ぎ込んでんだか！！」

前のガジェットを吹き飛ばした時、急に視界が開け、何も障害物は無くなった。

「チャンスだ！　奈津美さん、夏楠、後ろは止めとくから走れ！！」

お父さんに言われ、お母さんと僕は走り出す。しかし……

「うっ！」

今まで一緒に走っていたお母さんがガクリと崩れ、倒れてしまった。

ここまで来て、お母さんの体は限界を迎えてしまったんだ。

「お母さん！」

「夏楠君……お母さんは後で行くから……、先に……」

「やだ！」

お母さんの手を引っ張り引きずる。

でも、僕の力ではお母さんを数メートル引きずるので限界だった

……

「夏楠君……、お願いだから……、お母さんの言うこと……、聞いて？」

「やだ！！　やだやだやだやだやだ！！！」

僕が見捨てたら、お母さんは帰ってこない。
多分とかじゃ無くて、絶対だという確信があった。
力を振り絞ってお母さんを引きずる。
そんな僕の背後でゴロリと何かが転がるような音が聞こえた……

「っ！」

丸い、真ん丸な大きいガジェットが僕の真後ろで、こっちを見ていた……
左右についた太い腕が、しなる。

「夏楠君！！」

「あうっ！」

お母さんが僕を抱き抱えたと思うと、冗談のように吹き飛ばされ、コンクリートに叩きつけられる。
でも、僕は平気だった。お母さんが庇ってくれたからだ……

「お母……さん？」

呼び掛けても、お母さんは動かない……

「お母さん！！」

揺する。その時、指についた赤い水……。お母さんの血だった……

「う……あ……、お母さん！　お母さん！」
必死に呼び掛けると、お母さんがあお向けになり、震える手を僕の頬に当てて、笑った……

あんなに好きだった笑顔は、血塗れで……

「お母……さん……」

「は～……い。お母さんは……、ここ……だよ……」

「やだよ……。お母さん……、死んじゃやだ！！」

「あはは……。死なないよ……。夏楠君の……、成長を……またまだ見るんだから……」

そう言いながらも、お母さんの体は明らかに冷たくなっていく……

お母さんの血が止まらない……

「お父さぁぁあああああん！！！」

気づけば、遠くで戦うお父さんに助けを求めていた。

さっきの大きなガジェットが迫って来るのにも構わず、僕はお父さんを呼び続けた。

『ガーーー』

機械音が鳴り、また腕がしなる。

「うぉぉおおお！！」

叫びが響く……。次の瞬間、大きなガジェットに投げ込まれたのは、鉄パイプ。

突き刺さった箇所が爆発を起こし、距離が離れる。

「奈津美さん！　夏楠！」

少し間を置いて、お父さんが走ってきた。
お父さんの左腕が無かった……

「お、お父さん……腕が……無い……」

「気にすんな。それより奈津美さんは？」

「は……ぃ……」

お母さんの息が、小さく細くなっていた。

「奈津美さん、肩を貸すから、歩こう……」
無言でこくりと頷くお母さん。
お父さんの肩を借り、一歩一歩と歩いていく。
逃げ切れるような速度ではなく、すぐにガジェット達に囲まれ、
正面には鉄パイプが突き刺さっているにも関わらず、未だに動く大きなガジェットがいた。

「あ……あ……」

どうしようも無かった……。
前も後ろも横も、空すらも逃げ道がない……

「夏楠君……、おいで……」

「お母……さん？」

「お父さんと……、お母さんが……、守って……あげるから……、

おいで……」

言われるままに、お母さん達に近づく。
お父さんとお母さんに抱き締められた……

「え……」
「夏楠、俺達の分まで生きろよ？
俺達が世話をやけるのはここまでみたいだからな
あ～……、言いたくなかったが言っとくわ。
夏楠、愛してる。うぇ～とか言うなよ？」

お父さんが苦笑いしながら言った……
意味がわからない……。わかりたくない……。

「夏楠君……。辛いことも悲しいことも、これからもたくさんあるかもしれないけど、それと同じくらい、嬉しいことや悲しいこともきっとあるから……
夏楠君大好き……。愛してるからね……」

なんで、そんなことを言ってるの？
そんな……お別れみたいなこと……言わないでよ……

「やだ……。お父さん……、旅行に行くって……、お母さんも行くって……、そう、言ったじゃないか！
まだ行ってない……。お父さんとお母さんとの想い出作ってないのに！
全然遊び足りない！　まだお父さんとお母さんと一緒にいたいよ！！」

僕の言葉に、二人は悲しそうに笑う……

「済まんな……。夏楠……」

「ごめんね……。夏楠君……」

「い……や……っ！！」

瞬間、二人の体に打ち込まれる閃光……
お父さんとお母さんの目から生気が消えた……
崩れ落ちる二人の体……。
僕だけが、その場に生き残っていた…

「置いていかないで……。
僕を置いていかないでぇぇえええええ！」
動かない……。
叫んでも、泣いても、揺すっても、二人の体はピクリと動いてくれない……
絶望的な状況の中で、機械音を聞いた……

「お前らが……、いるから……。
お前らなんかがいたからっ！！」

鼓動する……。
僕の中で何か大きな物が起き出したのを感じる…
だから何だ……。
取り込まれようが、されまいが、知らない…

「お前らなんて……、僕が……、“俺が”っ！！　全部ぶっ壊してやるからなぁぁあああああああああああああああ！！」

ここから先の記憶はほとんど無い。
鉄パイプ一本で暴れたことのみ記憶があった。
予測だが、この時に俺の中に眠っていた力が目覚めたんだと思う。
でなければ、ガジェットに殺されておしまいのはずだから……
撃墜されたのか、全部潰したのかはわからないが、俺は気絶していた。
その間に身元を調べられたのだろう。
治療の後、伯父にあたる、風間英治さんの所に辿り着く。
それから約一年、小学校に行かないかと、英治さんに進められる。
気だるかった。学校なんざ行きたくなかった。
でも、伯父さんには世話になってたからって理由だけで学校に入ったんだ。

「今日から転校してきた風間カナン君です。
皆、仲良くしてね？
カナン君、自己紹介して？」

「カナンです……。よろしく……」

俺は、夏楠であって、夏楠ではない。
風間夏楠はあの時点で死んだ。
だから、いっそのこと弱いときの名前なんて変えてしまいたかった。
でも、父さんと母さんがつけてくれた名前だから、カタカナでカナンと言う名前を名乗ることにした。

「……え～と、好きな物とか無いのかな？」

「ない……」

「じゃ、将来の夢とか」

「ない……」

そんなもの、もう、どうでも良い。

うざったい担任の質問、早く終えてしまいたかった。

「……じゃあ、カナン君の席はあの窓際の所ね？」

「わかった……」

ひきつった笑みを浮かべていた教師。

俺に質問なんかするお前が悪い。

「私、一之瀬祐希奈。よろしくね？」

隣の席の、綺麗な銀髪をした子が挨拶をしてきた。

今まで無かっただけに、少し驚いたが、どうせコイツも離れていく……

適当によろしくと答え、空を眺めた……

たった一つの好きなことだったから……

「なんで好きなものがないの？」

「あったかもしれないけど、忘れた……」

「ほんとはなりたい夢、あるでしょ？」

「今は、わからない……」

休み時間、周囲の奴らがウザい……
好きな物はないとさっき答えたし、将来の夢だって、覚えていない。
こういう交わりがあるから、他人と関わらないといけないから、だから学校なんて嫌だったんだ……

「欲しい物は？」　仕方ない……、これだけ真面目に答えてやるか……

「力だ……」

俺の唯一にして、一番欲しい物、奴を、スカリエッティを殺せる力が、欲しい物だった……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

こうして全てをハルに話し終える……
辛かったけど、いろんな発見があった。
例えば、俺は泣き虫だったり、六課のファンだったりと、蓋を開けなければ思い出すこともなかっただろう。
何よりも、話したからか、肩が軽い。

「お疲れ様です」

ハルは何を言うでもなく、それだけを言った。

「俺、さ。強くなったつもりでいたんだ。
いや、確かに力を手に入れて強くはなったけど、中身がな……
守りたい守りたいって散々言ってきたけど、俺が守ってきたのは、

俺だ……
俺が、お前らを失うのが怖いから、守るって言って誤魔化して……
突っ込んで、心配させて……
そんなんで、本当は誰も守ってなんかない。
過去のトラウマに怯えて、今と昔は違うって言い聞かせて、暗い過去から目をそらしてただけ。
良いとこだけ見て、嫌なとこは見向きもしない。
そんなんで、本当に守れるものなんか無いのに……
こんなんじゃ、コイツらを完全に扱えなくて当たり前だよな」

マジで笑える……。
メイデン達を使えなかったのは、制御技術のせいなんかじゃない。
俺が、俺自身を否定してたから…
光の部分も、闇部分も、俺の力には違いないのに、バカみたいだ。

「随分と、遠回りしたものですね？」

「ああ。よく今までこんなんで生きてたな」

「遠回りした理由は君の力が強すぎたのも問題なのかもしれませんね？」

「あ～～」
強引に勝利をもぎ取ってたからなぁ……
フェイトさんに負けて正解だった。
勝ってたら、まだ過去を見直さなかったかもしれないし……
辛い道を進む勇気をくれたのはあの人だ。
他にも、迷った時に立ち止まる勇気をくれたのジルだ。
あの二人がいなければ、楽な道を選んでいたかもしれない。

「最後に一つだけ、聞いてもよろしいですか？」

「ん？」

「君は、昔の夏楠に戻るのですか？」

「ん～～、戻らない」

「やはり……、ありがとうございました」

理由も聞かず、ハルは退室した。

別に過去の俺に戻ってもう、問題ない。

“僕”は“俺”なんだから。

でも、それでも戻らないと言ったのは、夏楠が向こうで父さんと母さんと一緒に幸せな時間を過ごしているだろうから、わざわざ戻る必要は無いと思ったからだ。

夏楠は父さんと母さんが一番好きだったし、俺は他に一番が出来た。

夏楠の魂は天界で幸せに、肉体は、俺が受け継ぎ、幸せに暮らせている。

良いじゃないか。どっちも幸せならこのままで。

「ま、今更返せっても返さんがな。ここ、面白すぎるし。そっちはそっちで、父さんと母さんとで楽しくやれよな」

一人言を言うと、まるで、笑うように、じんわりと朝日が病室に差し込んできた……

本当に昔の俺が笑ったみたいな、そんな錯覚を覚えた。

「オッケーって受けとるからな？」

俺なりに整理をつけ、過去を受け入れた今、俺は漸く、風間カナンとして、初めての一歩を踏み出せたのかもしれない……

Ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

カナメ「後書き、召喚コーナー♪」

一同「わぁ～♪」

祐希奈「本日は前書きにてカナン＋ヘタレオンが死亡したから、カナメを読んでみたわ♪」

ヴィヴィオ「カナちゃん久しぶり～」

カナメ「はい♪　皆さんお久しぶりです♪」

メイデン「挨拶も済んだ所で本日のゲストの紹介だ」

レナス「本日は、魔法少女リリカルなのは　黒の王と剣の騎士からの登場でゼロさんです♪」

パアアアア…

祐希奈「ゼロさんだっけ？　はじ…」

ゼロ「てい！」

祐希奈「…プロテクション」

ズドォォオオン！！

ゼロ「む？　ダイナマイトを防ぐとは、やるな…風間カナン」

ゴゴゴゴゴ…

ヴ・メ・レ・カ「あ…」

祐希奈「いきなり来て質量兵器投げつけるたぁいい度胸ね…
ゴミ虫のように潰してあげるわ…」

ゼロ「ふむ。出来ればありんこくらいには格上げしてほしいものだね？」

祐希奈「意味わかんないわよ！！」

ゼロ「何…ありんこの意味がわからないと？
ありんことはだね、こう、黒い物体で、例をあげてみようか？
カモーンありんこ！」

パンパン！　…ズーン…

アリ「キシャァァア！」

ゼロ「これが最も一般的なクロアリだよ」

祐希奈「いやぁぁあああああああ！！！」

ヴィヴィオ「ありさんってこんなに大きいのもいるんだぁ」

メイデン「全長４０メートルと言った所か？」

レナス「可愛いですね～♪」

カナメ「あの…これは、私がつっこまないといけないのでしょうか…」

ゼロ「このアリはだね、うちに遊びに来ている（拉致）二人を餌に呼び寄せたクロアリだ。
よって、君達に一匹プレゼントしよう」

アリ「キシャァァア！」

ヴィヴィオ「わ～い♪」

祐希奈「ヴォルカニック！　アロー！！」

チュドォォォン…

メイデン「ああ…生き物だぞ？」

レナス「可哀想です…」

ゼロ「まぁ、こんなこともあろうかと、耐魔力は最高レベルだがね？」

アリ「キシャァァア！」

祐希奈「いやぁぁあああああああ！！！」

ヴィヴィオ「アリさん生きてた～♪」

メイデン「良かったな。これで飼えるぞ」

レナス「主もびっくりするでしょうね」

カナメ「そりゃあもうびっくりしますよ。
軽く三途の川が見えるくらいに…」

ゼロ「さてと、クロアリよ。カナン君を探せ」

アリ「キシャァァア！」

ズーンズーン…

祐希奈「これは夢…夢なのよ…」

カナメ「祐希奈さん、神化で潰してしまえばよろしいのでは？」

祐希奈「あんなもん潰したら変な液体飛び散るでしょうが！！」

ドゴーン！

カナン「へ？」

ゼロ「見ぃ～つけた♪」

アリ「キシャァァア！」

ポク、ポク、ポク、ポク、ポク、ポク、チーン♪

カナン「なんでアンタがここにいるぅぅうううううう！！！？？？」

ゼロ「そんなの、ゲストで呼ばれたからに決まってるではないか。訳がわからないことを言うカナン君は、アリの餌にしてしんぜよう」

アリ「キシャァァア！！」

カナン「メイデン！　レナス！」

メイデン「残念だが、私は生物は大切にするのでな」

レナス「アリさん可愛いじゃないですか♪きっと、主と遊びたいんですよ♪」

カナン「んなわけあるかぁぁぁあああああああああああああ！！！」

アリ「キシャァァア！」

ドドドドド！

祐希奈「ふふ…ふふふ…私が虫ごときにビビってると思ったら大間違いよ…」

ヴィヴィオ「アリさぁぁぁん！逃げてぇぇえええ！」

メイデン「逃げろ逃げるんだぁ！」

レナス「死んじゃいますよー！！」

カナメ「この場面だけよんだら激しく間違いが起きそうですね…」

祐希奈「はぁぁあ！！」

ゴオオオオ！

ゼロ「む？」

アリ「キシャァァア！！」

祐希奈「ふん…次元断層に叩き落としてやったわ」

ヴィヴィオ「あぁ…アリさん…」

メイデン「新しい仲間が…」

レナス「後でお墓を作りますからね…」

カナメ「……」

カナン「いや、誰か俺の心配しようよ？」

カナメ「皆さん、カナン君が死んだ所でなんとも思いませんから」

カナン「思えよ！　特にお前は思えよ！」

ゼロ「…クロアリが殺られるとは」

祐希奈「ふん。アリなんて、何匹こようが同じことよ」

ゼロ「そうかい？　なら、こっちは我慢していたのだが、カモーン！　シロアリ軍団！」

ワサワサワサワサワサ…

シロアリズ「キシャァァ！」

祐希奈「う…」

ヴィヴィオ「たくさん来たね～♪」

カナン「ヴィヴィオ、知らんのなら言っておくが、シロアリはアリじゃねぇ」

ヴィヴィオ「え？　じゃあ…何？」

カナン「ゴキブリの仲間だな」

ポク、ポク、ポク、ポク、ポク、ポク、チーン♪

祐・ヴ「いぃぃいいいいいいぃぃいいいいやぁぁぁぁあああああああああああぁぁぁぁああああああああああああ！！！！！！！」

メイデン・レナス「？」

カナン「お前らはゴキブリを知らなかったな…」

カナメ「……」

カナン「流石にカナメは大丈夫…ん？」

ドサッ…

カナン「うっそぉぉおおおおお！？
いや、おまっ…えぇぇえええ！？
どんだけ中身まで女の子になってんだ！？」

ゼロ「さて…カナン君…君の味方は全て倒した…」

カナン「限りなくせこい倒し方だけどな…」

ゼロ「さぁ、白状したまえよ！」

カナン「何を…」

ゼロ「私からの贈り物である…このコ◯ド◯ムが欲しいと！」

カナン「いや全く」

ゼロ「恥ずかしがらなくてもいいじゃないか」

カナン「そもそも、それが何かすらもわからん」

ゼロ「！！！」

カナン「シオンとかルミオと普通に話してるから忘れがちかも知れないけどな…

俺達は“中学”一年生な？
ゼロさんの会話からして、それがそっち方面の品ってのはわかる。
でもそれだけだ。欲しくも何ともない」

ズーーン…

ゼロ「な、何だって…この世にこれが欲しくない男がいるなんて…」

パアアアア…

カナン「あ、帰るんならそのシロアリもな？」

ゼロ「……」

パアアアア…

カナン「そんじゃ、ゼロさん、クードさんによろしく～。
さてと、コイツらまだ伸びたままか…」

メイデン「マスター。あれはそんなに怖い物なのか？」

レナス「私達にはよくわかりません…」

カナン「そうだな…祐希奈が唯一、超女の子に見えるようになる虫
…だな。
映像いってみよう！」

ブン…
　あれは、いつの日か祐希奈の家に泊まりに行った日…

祐希奈「きゃぁあああああああ！！」

カナン「ど、どうした！？」

祐希奈「ゴキブリ…ゴキブリ…カナン…助けて…」

カナン「え…あ、ああ…」

祐希奈「退治した？　もういない？」

カナン「おう。外に投げて潰した」

祐希奈「良かった…良かった～！
えっと…その…さ…」

カナン「ん？」

祐希奈「あ、ありがと…」

カナン「あ、ああ…どういたしまして」

ブン…

メ・レ「……」

カナン「な？　ゴキブリ怖いだろ？
あれ？　お～い？」

メ・レ「……」

カナン「ま、まさかの全滅かよ…
と、とにかく、これで終わりだ。
そんじゃ、またな！」

ブツ

第二十四話　理由（後編）（後書き）

いや、長かった（笑）
それにしても、一人称が難しく感じました。
三人称のが向いてるのでしょうか？
さて、どうでもいいことは置いといて…
夏楠がカナンと名乗っている理由、僕が俺になった理由。
それは、弱い自分は死んだことにして、強い自分として新しく始めようとしたからでした。
結構ベタな話だったりしますが（笑）
ではまた次回に

第二十五話　進むべき道（前書き）

え～と、遅くなってすいません。
スランプではないでしょうが、執筆速度が上がらなくて……
次回に外伝を入れるので、後書きは無しです。
その分前書きが……
見直しはしてますが、後半急いだのでまだあるかもしれません。
見つけたら報告をお願いしたいです。
では、二十五話どぞ♪

第二十五話　進むべき道

カナン「前書き質問コーナーって……」

奈津美「わ～♪」

夏輝「はぁ……」

カナン「まず、何で父さんと母さんがここに？」

夏輝「なんかな、一家が面白かったから特別出演依頼が来たらしくてな？」

奈津美「夏楠く～ん♪」

カナン「どわぁぁあああああ！！」

ガッバァ！！

奈津美「こんなにおっきくなって、お母さんは嬉しいよ～」

カナン「いや、わかったから！！
母さん、わかったから離れてよ！！」

奈津美「赤くなっちゃって、相変わらず照れ屋さんだね～。
そうだ！　この後一緒にお風呂入ろっか？」

カナン「無理！！　もう中学生だぞ！？」

奈津美「お母さん、嫌いになっちゃった？」

カナン「なんで！？　嫌いになんてなってないよ！
父さんからもなんとか説得って……」

ゴオオオオ……

カナン「何で？」

夏輝「一発でいい。殴らせろ」

カナン「久しぶりにあった息子に鉄拳制裁かこらぁ！！」

奈津美「夏輝さん、ダメですよ？
可愛い夏喃君の顔に傷がついたらどうするんですか？」

カナン「母さん、待って、頼むから待って。
中学生男児を可愛い言わんでください」

夏輝「ほう、夏喃、わかってるじゃないか。
可愛くないから殴ってもいいよな？」

カナン「どっちにしろバッドルート！？」

夏輝「呼び出すやいなや奈津美さんを誘惑するなんて根性、直さんといかんだろ？
いさぎよく諦めろ……」

カナン「父さぁぁぁん！　激しく勘違いしてるから言っとくが、俺は誘惑なんかしてないぞ！」

奈津美「そうですよ。私と夏喃君は、以前から相思相愛なんですから、ね？」

夏輝「ほっほ～う？」

カナン「ちょっと待てぇぇえええい！！！小さい時の話を今するなぁぁああ！！」

奈津美「やっぱり夏喃君は私の事……」

カナン「いや、だから大好きだって！本編であんだけ言ってただろ？」

奈津美「じゃあ、お風呂入ろっか♪」

カナン「誰かこの無限ループ、ヘルプミー！！！」

ガチャ。

祐希奈「あれ？　あ、そっか、今日は特別ゲストで来てるんだっけ？」

カナン「ゆ、祐希奈、助けてくれ！」

夏・奈「祐希奈ちゃん！？」

祐希奈「え？　なんで私の名前を……」

ガシッ！

夏輝「そうか！　君が祐希奈ちゃんか！
いや～これからも夏喃と仲良く頼むな！」

ブンブン！

祐希奈「う、わっ！」

奈津美「祐希奈、ちゃん？」

祐希奈「な、何？」

奈津美「夏喃君のこと“お友達”として、よろしくお願いね？」

祐希奈「は、はぁ」

ヴィヴィオ「祐希ちゃ～ん、何してるの～？」

祐希奈「あ、ヴィヴィオ！」

夏輝「ヴィヴィオ……
君、まさか、そうか！　いや～良かったなぁ！！」

ヴィヴィオ「は、はい？」

夏輝「良かった良かった！
で、もしや君も彼女候補の一人か？」

ヴィヴィオ「え？　え？」

祐希奈「まぁ、そうなるわね」

カナン「祐希奈ぁあああああああ！！！」

夏輝「なんだお前、モテモテだな」

カナン「……やかましいアホ親父」

夏輝「照れるなよ。そっか。お前に春がなぁ」

カナン「いい加減にぶん殴るぞ！！」

夏輝「奈津美さん、夏喃は幸せみたいだから諦めてって、何してるんだ？」

奈津美「ヴィヴィオちゃん、祐希奈ちゃん。
私と夏喃君をかけて勝負しましょうか？」

ヴ・祐「勝負？」

奈津美「この三人の中で誰と一番お風呂に入りたいか、なんてどうかな？」

祐希奈「勝負と聞いちゃ、種目はどうあれ退く気は無いわ。
やるわよヴィヴィオ！」

ヴィヴィオ「え？　えええぇえええ！？」

奈津美「夏喃く～ん、誰と入りたい～？」

カナン「……」

夏輝「夏喃、奈津美さん選んだら殺すぞ？」

カナン「息子に殺人宣言すんな！！
んでもって、選べるわけないだろ！！」

奈・祐「拒否なし」

カナン「超理不尽！」

奈津美「もちろんお母さんだよね？」

祐希奈「マザコン……」

カナン「選んでねぇし、なら聞くが、お前らを選べってか！？」

祐希奈「変態」

カナン「どうしろってんだちくしょうが！！」

ヴィヴィオ「仲良く入ればいいんじゃないかな？」

奈津美「ヴィヴィオちゃん、夏喃君の一番じゃなくてもいいの？」

ヴィヴィオ「えと、そういうのは、無理強いして決めることじゃないと思いますから」

奈津美「そう、だね。じゃあ、仲良く入ろっか♪」

ヴィヴィオ「はい♪」

祐希奈「しょうがないわね。でもま、引き分けもたまには良いかも」

夏輝「一件落着だな」

カナン「ちょっと待てお前ら……俺の意思は？」

夏輝「夏喃、好きな女の前では男の意思なんてあってないようなもんだ」

カナン「正論かもしれんが、母さんと俺が入ることに変わりないぞ！？
許さないんじゃ……」

夏輝「ヴィヴィオちゃんと祐希奈ちゃんがいるんなら別にいい。
二人きりが許せないだけだからな」

カナン「え……」

奈津美「じゃあ、レッツゴ～♪」

祐希奈「ほら、さっさと行くわよ」

ヴィヴィオ「カナン君、行こ？」

カナン「いや、何で……何でこうなるんだぁぁあああああああああああああ！！！！！」

夏輝「前書きっつか、軽くネタだったな……

質問答えて終わりにするかな。
『カナンの父さんってなのはキャラで言ったらどれくらいの強さですか？』
俺か？　作者によると、六課に入ったばかりのスバルより若干強いくらいらしいが……
こっちは、スバルって誰よって話だけどな？
そんじゃ、リリカルヴィヴィオ、始まります」

カナン「助けて、父さぁああああああああん！！」

夏輝「幸せな悲鳴あげてるな。頑張れよ～」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

戦いは終わり、騒ぎも鎮静化したと確認したはやては、退却命令を下した。
今は、情報収集のために、現場に赴いたメンバーに話を聞いているのだが……
機動六課の面々は皆、苦笑いをしている。と言うのも……

「ほな、もっぺん聞いてええかな？
ニーナちゃんは、古代ベルカのロストロギアで、アゾットの剣の精霊兼管制人格、これは間違いないんやね？」
はやての十数回に及ぶ質問の末、わかったのは未だにここまで。
別に、ニーナが非協力的な訳ではない。

「そうだよ～♪　ニーナはね～、剣の精霊でね～、とぉっても凄い力があるの～♪
メイデンお姉ちゃんより凄いよ～♪

どこがって言うとね～、ニーナの方が可愛いし～、大人だし～、お胸は大きいし～、オシャレだし～、見て見て～♪　この帽子なんてね～羽がついてて可愛いでしょ～～♪
欲しいの？　ダメだよ？　これはニーナの帽子だからね？
あ、でもキャロちゃんになら作ってあげる～♪
どんなのが良いかな～♪　サイズ測らせてね～？
はやてちゃ～ん、測るの貸して～？」

ニーナは、一息にこれだけを喋り、はやての机に乗り、手を差し出す。

「あ、あの、ニーナちゃん、帽子は嬉しいんだけど、今はお話の最中だから後にしようね？」

「は～い♪」

キャロの言葉に素直に頷き、再び肩に止まるニーナ。そして……

「何のお話～？」

《う～ん……》

「ごめんなさい！　今度は大丈夫ですから！」

「キャロちゃん、何を謝ってるの？」

このやり取りがメンバーの苦笑いの原因である。
ニーナは、話の途中で違うことに気がそれ、脱線してしまっていた。
故に、ニーナがキャロと契約を交わし、専用のデバイスとなった

所までしかわからない。
　ちなみに、ニーナ本人は知らぬ所ではあるが、胸はニーナよりメイデンの方が大きかったりする。余談だが…

「あはは。まぁ、ニーナちゃんも気になって喋れんのかもしれへんし、先にサイズ測ってしまおか」

「い、いいですよ！」

「遠慮せんと、な？　ほら、ニーナちゃんも手伝ってや」

「は～い♪」

「う～すいません……」

「やから、気にせんでもええよって♪」

だが、はやては伊達にヴィータやリインの世話をやいてきた訳ではない。
持ち前の気の長さで、ニーナが満足するまで付き合うことにした。

（はやてちゃん、急がなくて良いの？）

はやてに念話を繋ぎ、訊ねたなのは。
部隊長と言う立場上、今回の件での書類がどっさりとあるからだ。
それも、下手をすれば徹夜になりかねないほどの書類が……

（この手のタイプはしゃあないんよ。
落ち着いた時に聞かんとちゃんとしたこと聞けへんかもしれんしな？
なんやったら、私が話聞いとくし、なのはちゃん達はオフにしてゆ

っくりしてもらってもええよ？）

（じゃあ、オフにさせてもらう代わりに、書類は私達も手伝うよ。はやてちゃんは、必要最低限の書類だけやってくれればいいから、ね？）

（そんな、なのはちゃん達に悪いて……）

（はやて？）

（フェイトちゃん？）

（はやて、最近忙しくてあんまり休養とれてないよね？）

黙って念話を聞いていたフェイトが割り込みをかけ、諭すように優しく言った。

（そんなことないよ？　ちゃんと寝とるし、寧ろ、暇すぎて……）

フェイトはキャロの後ろに回り、つまりははやての正面でニコリと笑う。

（私が六課の皆の情報を知らないとでも？特に、なのはとはやては友達だし、ね？）

フェイトは、優しく、さらに心配性な性格。
故に、部隊の管理は怠っていない。
ある程度の域を越えた部隊員に休暇をとるように進めたりもしている。
それは、なのはの一件があってからだ。

（部隊長やし、多少の無理はしゃあない…）

あの笑顔には良い思い出が少ないため、冷や汗が止まらないはやて。

それでも、反撃を試みるが、あっさりと潰されることとなる。

（じゃあ、はやての仕事情況、お兄ちゃんに言ってもいいかな？お兄ちゃんなら、笑顔でなんて言うかなぁ？）

（そ、それは堪忍や……。フェイトちゃん、あかんよ？　やめてーな？）

フェイトの兄、クロノは、設立当初はもちろん、今もはやて直属の上司である。

そんなクロノに、“また”はやてがろくに休みもせずに働いているとフェイトの口から出たものなら、なのはのような、“お話”は無いかも知れないが、長々と説教を言うことはまず間違いはない。

（あはは。はやてちゃん。フェイトちゃんが言いたいのはね？友達なんだから、もっと頼ってって言いたいんだよ？はやてちゃんは隠してるつもりなのかもしれないけど、最近凄く疲れた顔してるのよく見るし……）

（そんなに？）

（（うん））

迷いなく即答する二人に、心の中で苦笑する。

付き合いの長い二人、書くし通せるはずは無かったのだ。

（二人には敵わへんなぁ。ほんなら、ちょっとだけお願い出来るか？）

はやてにコクりと頷き、なのはとフェイト、ヴォルケンズ一同は部隊長室を後にした。

「さて、ほんなら……やってまおか♪」

はやては、制服の上着を脱ぎ、カッターシャツとなり、腕を捲る。

「やるやる～♪　飛びっきり可愛い帽子作ったげるね～♪」

ニーナは相変わらず、キャロの周りを忙しく飛び回り、さらにご機嫌になっていた。

そんな二人の様子に、キャロは若干の恐怖すら覚えた……

「あの、ニーナちゃんはともかく、はやてさんは何でそんなにやる気になってるんですか？」

「ん～？　キャロ、私はな？　やるとなったらとことんやるんや……。

やると言った以上は、妥協は許さへんよ？　覚悟しいや？」

「えへへ～♪　私もオシャレには自信があるんだ～♪

ちょっと時間はかかるかもしれないけど、我慢してね？」

「……」

メジャーを伸ばし、顔の前に構える二人を前にしたキャロは、い

つぞやのティアナ撃墜の時のなのはの姿に二人が重なって見えていた。
二人の背後に、見えるはずのないオーラが見えていたからだ。
「キャロ、無心になってピクリとも動いたらあかへんよ？」
「はい……」
「いっくよ～♪」
その後、再び部隊長室に戻ってきたなのはとフェイトが見たのは、帽子の見取り図を完成させ満足げに笑う、はやてとニーナ、そして、ここではないどこか遠くを見つめるキャロだった……
この光景に、二人が頭を抱えることになったのは言うまでもない。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼
「うわぁぁあああああああ！！！」
「ん…あ？」
あれからカナンはすることもなく、喋り相手もおらず、仕方がないのでもう一度眠りについていたのだが、突如として響いた叫び声に目を覚ます。
「うぁぁ……ひっく……ぐす……」
「メイデン？」
「う？」

カナンのすぐ横、机の上でメイデンが涙を流していた。
カナンには、メイデンを泣かすような事をした覚えは、少なくとも寝ている間には無い。

「どした？」

「マスタァァァァ！！！！」

「ちょ！　待っ…」

みなまで言えず、メイデンはカナンの胸に飛び込んでいった。
本来なら軽すぎる衝撃、しかし、今のカナンは重傷を負っており、鎮痛剤の効力も薄れて来ている。つまりは……

「ぎぃぁぁあああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

口から血を撒き散らしながらカナンが叫んだ。
叫び終わるとそのままグッタリと倒れて動かなくなった……

「あ……す、すまない！　今、回復させるからな！！」

メイデンの回復魔法によって、内蔵の傷や靭帯などの、傷が重い部分を治癒してもらい、カナンはなんとか意識を回復。
ベッドからゆっくりと起き上がった。

「お前なぁ……」

「本当にすまない……。つい……」

「ったく」
基本的に、女性には甘いカナンは、特には怒らず、「で？」とメイデンに問いただす。
もちろん、なぜ泣いていたのかを聞くためだ。
「ニーナが目覚めた……うぅ……ひっく……」
「はぁ～」
「わっ！」
膝の上で、再び泣き出しそうになるメイデンを、なんとか指を動かし、頭を撫でた。
最初こそ驚いたメイデンだが、徐々に気持ち良さそうに目を細めた。
「落ち着いたか？」
「ああ。ありがとう、マスター」
「ゆっくり、俺にわかるように言ってくれるか？
時間かかっても構わないから、な？」
頭を撫でるのをやめ、メイデンをチョコンと肩に乗るように促す。
しかし、少し顔を赤らめたメイデンは膝の上から動かない。
「お～い……。メイデンさ～ん？」
「その……頭を」

「へ？」

「撫でていて欲しい……ダメか？」

「ああ。わかったよ」

上目遣いで頼み込むメイデンに、カナンはフッと笑い、了承する。
再び頭を撫でられ、気持ち良さそうにしながらメイデンは、カナンに違和感を感じとる。

「マスター、何かあったのか？」

「は？」

「優しいというか……いや、今までも優しかったのだが、何か違う気がする」

「ん～。もっとお前が可愛く見えるようになったから、かな？」

「そうか、私が可愛く……か、可愛く！？　な、何を言ってるんだ！？　わ、わたわた、私は、変わらないぞ！？」

真っ赤になるメイデンを、からかうでもなく、撫で続けた。
カナンは冗談などではなく、本気でそう思ったから言っていた。

「多分、俺の見方が変わったんだろ。
ちょっと余裕が出来たってだけだ」

「私達が寝ている間に何かあったのか？」

「まぁな。色々スッキリしたよ。
それより、お前の話だろ？」

「う……」

泣きそうになるメイデンの頭を撫で、話し出すのを待つ。
やがて、メイデンがゆっくりと話し出した。

「簡単に言うと、ロストロギア、アゾットの剣の管制人格、それがニーナだ。
そのニーナが起きた」

「ロストロギアか。それがめちゃめちゃ強くて、怖くて泣いてたってことか？」

「違う。ニーナは味方のようだ。
ニーナの性格上、嫌いな相手には、まず、なつかないからな」

「味方？　じゃあ、良かったんじゃないのか？」

「ああ。敵になるよりはずっとな……」

しかし、そう言いながらもメイデンの表情は暗いままだった。

「じゃあ、お前は何を泣いてたんだよ？」

「あの子は、ニーナは、何かというと私に挑戦してくるんだ……っ！！」

「へ？」

「可愛さ、料理、オシャレ、胸、身長、能力、他にもまだまだある。私はそんなものどうでもいいと、勝負など意味はないと言っているのに、訳のわからない言動で、私に話してくるんだ……」

「つまり、お前はニーナって子が苦手ってことか？」

「苦手……私はニーナが苦手なのか？」

「いや、俺に聞かれても困るんだが……ん？」

肩に軽い感触がしたことに気づき、カナンが横を見るとレナスが苦笑いをしながらカナンの肩に座っていた。

「取りあえずは、おはようございます、主」

「ん、ああ。おはよう。レナス。話、聞いてたか？」

「はい。ニーナについてですが、あの子は、メイデンの天敵、と言うのが一番近いかと」

「あ～かもしれない」

普段落ち着いているメイデンが涙を流すほど苦手と言うニーナは、天敵、という言葉がピッタリ当てはまった。

「メイデン、ニーナはお前の天敵だ」

「天敵か！！」

「分かって良かったな？」

「ああ。ん？　何かおかしいような……」

「ふっ！　くっ！」

会話の内容がずれているということに、未だに気づかないメイデンにカナンは、押し殺した笑い声をあげる。

「主、メイデンをからかうのもほどほどにお願いしますよ？」

レナスは言ってはいるものの、レナス自身の口元も微妙に笑っている。

「わかってるよ」

「？？？」

なんてことない騒がしい日常。

それをいつも以上に楽しんでいることを実感しながら、カナンは優しく笑っていた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「マスター、お茶だ」

「ん、サンキュ」

ニーナの一件が漸く終息し、落ち着いたメイデンがポットからお茶を注いでカナンに手渡した。

「にしても、お前ら何も言わないのな？」

「私は一言くらいは言いたいですが……」

レナスはチラリとメイデンを見た。

聞かれるのを待っていたかのように、メイデンはため息をつき。

「マスターが何か言って直る性格ならとっくに言っている。

言っても直らないから放置しているだけだ」

抑揚の無い声でキツイ言葉をつむいだ……

「すいません……」

「別に謝って欲しいわけではない。

謝罪の言葉は止めた時に聞いた。

だから、私はそれだけで十分だ。

それに、謝った所で、いずれ貴方は無茶をするのだろう？」

「だ、だろうな」

「ならば、次回まで謝罪の言葉は必要ない」

「お、おう」

それなりに長い付き合いになってきたメイデンは、カナンの事は大抵は理解しており、それだけ言うと、膝から飛び上がり、肩に移る。

「まぁ、私達には必要ないだけで、他には必要だがな？
だろう？　祐希奈」

「へ？」

カチャリと開いた病室の扉。
その入り口には、制服姿で買い物袋を持った祐希奈が立っていた。

「よ、よう」

「……」

カナンの挨拶には無言のまま病室へと入り、パイプイスを組み立て、カナンの隣に座った。

「ではな、マスター」

「主、私達は、出ていますから」

「へ？　おい！」

カナンの叫びは届かず、メイデンとレナスは、フルサイズとなり、病室から、いや、病院から出ていった。

「「……」」

カナンと祐希奈、二人きりの果てしなく静かな時間が流れていく。
このままではいけないと思い切って口を開いたのはカナン。

「祐希奈」

「何よ？」

「学校は？」

「サボった」

「そ、そうか……」

三秒で会話終了……

気まずい時間は流れ続ける。

カナンは、何か話題ないかと必死に考えるが全く話題が浮かばない。

ダラダラと冷や汗が流れ始めた時、「ふぅっ」とため息をつき、祐希奈は買い物袋から果物ナイフを取り出した。

「どう？」

「どうって……殺人はちょっとやめて欲しいな～なんて……」

「はぁ？」

本格的に焦るカナンに、祐希奈は首を傾げるだけだった。

「いや、だからその、ナイフ……」

「アンタ……本気で刺すわよ？」

「ごめんなさい！」

「あのね、いくら私が機嫌が悪くても殺したりしないわよ。
私が聞いてるのは、りんご買ってきたから剥いてあげようかってこと。
それくらい言わせないでよバカ」

「済まん……」

「で？」

「ん？」

祐希奈は、無言でりんごを取り出し、果物ナイフを深々と突き刺した。

「食べます！　食べさせていただきます！！」

「ったく……皿、ある？」

「こ、こちらに！」

「ありがと」

ビビるカナンに特になにも言わず、祐希奈は、りんごの皮を綺麗に剥いていく。
三分とかからず、りんごは身だけとなり、適当な大きさに切り分けられ、つまようじが刺さる。

「はい。どうぞ」

「ゆ、祐希奈、今、気づいたんだけどな？」

先程にも増してカナンが冷や汗をかいていた。
なぜなら……

「腕、動かねぇ……」

「……」

祐希奈は無言で買い物袋をあさり、輪ゴムを取り出した。
それをカナンの額に押し当てる。

「ちょっ！」

「バ～カ」

罵声。
バッチィィィイン！！！！
引き延ばされた輪ゴムがカナンの額に炸裂した。

「いってぇぇえええええ！！！　……うぐぉあああああああ！！」

悶える。メイデンが治療したのは、内蔵や複雑骨折の部分のみ、
命に直結しないような部位は、未だに骨折や打ち身のままだ。
つまり、激痛がカナンを襲うことになる。

「二重でバカね」

「誰のせいだよ！」

「アンタのせいよ」

「う……」

確かに、カナンは自業自得のため、言い返せるはずはない。

「しょうがない奴。ほら」

「へ？」

カナンは自分の目を疑った。

なんせ、祐希奈がつまようじを自分の口下に持ってきていたのだから。

「い、いいっ！」

「断る権利無し」

「何故に！？」

「折角剥いたのに、もったいないじゃない」

「お前が食えよ！」

「私、朝ご飯食べてきたからお腹減ってないし」

「俺だって！」

ぐぅぅっとカナンの腹の虫が鳴いた。

当たり前である。点滴の栄養分以外はとっていないのだから。

「ちくしょう！　タイミング悪すぎだろ！」

「ほ～ら、諦めろって神様言ってるじゃない」

「お前、神様とか信じてたっけ？」

「信じるもなにも、私が神だから」

「祐希奈さん！？　真面目な顔して凄いこと言いましたよ！？」

「そんなツッコミいらないから、早く食べなさいよ」

「お前……もしかして、機嫌悪いか？」

「私達が気付いたらアンタはまた意識不明。
これでニコニコしてるバカ、いると思う？」

訊ねた予感は的中。
半眼で睨む祐希奈に、カナンは若干の寒気を覚えた。
例外もあるが、基本的に祐希奈は怒っている時ほど暴力を振るわない。
付き合い上、それはよく知っていた。
祐希奈は、りんごの乗った皿を机に置き、カナンを正面から見据える。

「ごめん……」

「謝るくらいなら最初から無茶しないで。
アンタが無茶が得意なのも、私達のために無茶をしてくれたのも分かってる。

こんなこと言ったところでやめる奴じゃないのも分かってる。
でも、でも……」

祐希奈にキッと睨まれた瞬間、身構えた。
言い訳する気も何も起きず、ただ、正面から向き合いその時を待った。

「いい加減、一線を引くの止めてよ。
何に怖がってるのかは知らないけど、アンタは壁を作ってる。
鬱陶しいのよ！　私がそういうの一番嫌いって知ってるでしょ」

「知ってる……」

「……覚悟は？」

「出来てる……」

振りかぶられた祐希奈の右腕、容赦手加減一切無しに平手がカナンの頬に炸裂した。
乾いた音が、病室に響き渡る……

「はぁ……はぁ……りんご食べときなさいよ」

「ああ。わざわざありがとな」

祐希奈は、お礼を言われたことに首を傾げ、悩んだ末に何も言わずに退室した。
祐希奈が病室から出ていった後、カナンはベッドに倒れ込み、赤くなる頬に手を当てる。

「喧嘩、か。とことんバカだな俺は」

「祐希ちゃん、怒ってないと思うよ？」

「へ？」

声と共に、再び開いた扉、そこには祐希奈とは違い、笑顔のヴィヴィオがいた。

「おはよう。カナン君」

「え、あ、おはよ」

「折角祐希ちゃんが剥いてくれたんだし、りんごでも食べながらお話しようか？」

「お、おは、なし？」

その単語により、ヴィヴィオの笑顔が、凄まじい恐怖へと姿を変える。

「カナン君……。頭、冷やそうか？」

『モード１ｓｔ、起動します』

ヴィヴィオの左手に握られる、フェアリーシューティングモード。

ゆっくりとカナンに向けられる。

「ディバイン！」

灯る魔力光、みるみるうちに集束されていく。

「待てぇえええ！！」

「って言うのは冗談だよ？
あんまり得意じゃ無いんだけど、楽しんでもらえたかな？」

集束を解除したヴィヴィオは、全く邪気の無い笑顔でそう言った。

「……ヴィヴィオがやるとシャレになってねぇえええええ！！！」

「わっ！　あ、あの、えと、ハルさんがカナン君をリラックスさせるためにはこれが良いって……。驚かせちゃったならごめんなさい……」

「……オーケー。ヴィヴィオは悪くない。
ヴィヴィオ、ちょっとだけ耳を塞いでてくれるか？」

「う、うん」

カナンの指示に素直に従い、ヴィヴィオは両耳に手を当てた。
それを確認したカナンは、思いきり空気を吸い込み……

「ぶっ殺すぞコンニャククラゲェエエエエエエエエエ！！！」

病院に響く咆哮を上げたのだった……

「あはは……」

耳を塞いでも完璧に聞こえた言葉に、ヴィヴィオは苦笑いを浮か

べる。
　ちなみに、その声を、未だ病院に滞在しているハルが聞き、笑っていたのだった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「あ～んして？」

　結局、りんごが食たべられないカナンは、ヴィヴィオに食べさせてもらっていた。
　赤面しながらも、なんとか最後のひときれにたどり着く。

「あぐっ……んく。ごちそうさま」

「お粗末様でした。
でも、お礼なら祐希ちゃんに言ってね？」

「まぁ、仲直り出来たら言っとくよ」

　祐希奈は意地っ張りなことを理解しているカナンは、すぐに許してくれるとは思ってはいない。

「あはは。やっぱり我慢出来なかったんだ」

「へ？」

　やっぱり。ヴィヴィオはそう言った。
　つまり、予想していたと言うことだ。

「あのね、祐希ちゃんが、私にこれを買っといてって」

「湿布？」

ヴィヴィオが袋から取り出したのは、普通の湿布。

「祐希ちゃん、ちょっと言いたいことがあるから先に行くけど、我慢出来なくて、手を出しちゃうと思うからって」

「はぁ……」

恐らく、なんらかの暴力を振るってしまうことを予想した祐希奈は、あらかじめアフターケアのために、湿布をヴィヴィオに頼んでいたのだった。

そう、自分で予想を立ててしまえる程に、カナンは祐希奈に心配をかけていた。

「俺、許して、もらえるかな？」

「祐希ちゃん、手を出しちゃったんだよね？」

「まぁ、な」

完全にカナンが悪いとはいえ、祐希奈が手を出したことには変わりない。

「祐希ちゃんは、自分が思うような行動を取れなかった時、嫌悪感でいっぱいになっちゃうんだ。
カナン君、謝ったんだよね？」

「一応……」

「なら、時間はかかると思うけど、許してくれると思うよ？
だから、カナン君も許してあげてね？」

「ああ。っていうか、俺が悪いんだから許すも何もないけどな」

「うん……。それでね、それで、ね……」

翡翠と紅の瞳に瞬く間に溜まっていく涙。
数秒またずに大粒の涙が溢れ出す……
最初こそ驚いたカナンだが、直ぐ様悟る。

「我慢、しようとしてくれてたんだな……」

「カナン君……、祐希ちゃんともめちゃったみたいで……、これ以上……、負担になりたくなくて……」

カナンは、泣いているヴィヴィオの頭に、ぎこちない動きで腕を持ち上げ、頭を撫でる。

「カナン、君？」

カナンの表情は、笑っていた……
今までのカナンとは、どこか違うとヴィヴィオもまた、感じとる。

「そんなの、我慢しなくていいんだよ。
全部俺の自業自得なんだから、ヴィヴィオも祐希奈みたいに平手打ちしてくれたって、良かったんだ」

「そんな……」

ヴィヴィオの言葉を遮り、カナンは「それに」と続ける。

「壁、取り払った……、いや、取り払えたのは今日なんだけどな？
壁があった時でも、お前らを負担だなんて、思ったことはねぇよ。
確か、前に言ったような気がするけどな、俺はお前らの事を知りたいんだ。
どんな些細なことでもいいんだよ」

そこまで話した後、カナンは笑みをやや崩し、苦笑いへと変える。
バツが悪そうに目線をヴィヴィオからそらし、また語り出す。

「俺、さ。自分で言うのもなんだけど、鈍いだろ？
だから、お前らが何を思ってるとか、あんまりわかんないんだ。
せいぜい、怒ってるとか、悲しんでるとか、基本的なことだけで。
今回だって、ヴィヴィオが我慢して笑ってくれてたのすら気づいてねぇし、ちょっと考えれば、心配してないはずないって、わかるのにな。
ホントにごめん……
逆に、ヴィヴィオ達に負担かけてるな……」

「そんなことないよ！！
カナン君、私達のことよく見て、慰めてくれたり、励ましてくれたり、たくさんの良い所、私達知ってるよ？
人だから、悪い所もちろんあるけど、そういう所も含めて、好きだから！」

「え、えっと……、あ、ありがとな」

「あ……、うん……」

ここまで一気に言い放ち、自分が言ったことに赤面するヴィヴィオ。

まさか、この局面でまた告白されるとは思っておらず、不意打ちの告白に赤面するカナン。

無言の時間が続く。

異常なまでに火照っていく体。

「あ、あの……カナン、君？」

「え、あ、何だ？」

「体は……、大丈夫？」

「ん～……、後は骨折したままの腕と足を治して、この包帯とれば完治みたいだけどな。前ほどじゃないにしろ、ちょっと鈍ってるかもしれない」

目を覚ましてから、若干の体の重さをカナンは感じていた。

一週間とは言え、寝たきりで全く動かなかったカナンは、仕方がないと言えよう。

「あのね、もし良かったらだけど、祐希ちゃんの家に来てくれないかな？

その、心配だから来て欲しいって言うのが、私達の本音なんだけど……」

「私、達？　祐希奈もか？」

「うん。祐希ちゃんも多分、ていうよりは、間違いなく心配してる

と思うから。
それに、明日の学校までに元通りになった方が良いと思うんだ」

「そうだな……。
気まずいのは嫌だし、泊まりに行くよ。
学校が終わる時間に行くし、ヴィヴィオは学校に行ってくれよ。
俺のために学校サボらせて悪いな……」

「ううん。ハルさんからカナン君の知らせを聞いた時、私も祐希ちゃんも学校のこと頭から抜けちゃってたから、カナン君は謝らなくてもいいよ。
それじゃあ、ゆっくり休んでね？」

「ああ。じゃな」

ペコリと礼をして、ヴィヴィオは退室した。
カナンは、ヴィヴィオの気配が完全に消えたのを確認し、長い溜め息をつく。
それを待っていたかのようにメイデン達が入ってくる。

「話しは終わったようだな？」

「ああ」

「お二人がいかに心配していたか、わかりましたか？」

「バッチリ、な。
また、泣かせちまったよ……」

「当たり前だ」

「でも、もう大丈夫だから」

「マスター？／主？」

静かに、しかし、確固たる決意を固めた言葉が病室に響く。

「俺は、アイツらが、笑って待ってられるくらい、強くなってやる。
転けたって、悩んだって、それがなんだ。
もう俺は、支えになってくれる人も、道標だってある。
アイツらがいる限り、何度だって起き上がって進んでやる。
例え、進むべき道に障害があってもぶっ壊してでも進んでやる。
遠回りなんてしない。それが俺だから。
安全な道ばっかじゃ、面白くないだろ？
ちょっとくらいスリルがあって、楽しい人生のが良いじゃんか」

「「……」」

ニカッと笑って宣言するカナンに、あっけにとられる二人だが、やがて、溢すように笑みを浮かべた。

「やれやれ、マスターの無茶はいつまで続くのだろうな？」

「多分、ずっとだ」

「あっさりと言いきられると困るのですが……、主の無茶もなんだか慣れてきました」

「その内、ま～た無茶してって、笑ってられるようになるから安心しろ」

「まず、無茶をしている時点で笑っていられないと思うのだが……」

「大丈夫だって。絶対帰って来るってわかってるから笑ってられる」

なんの根拠もない、ただの言葉。

しかし、何故だか二人はそんな未来も来るような気がしていた。

「まぁ、期待はしないで待っている」

「はい。私もそうしておきますね」

「ひでぇ！！」

「だが／ですが」

カナンの目の前まで飛んでいき、会心の笑みを浮かべる二人。

カナンがこれまで見てきた二人の笑顔の中でも、一位は確実だ。

「「これからもよろしく頼む／これからもよろしくお願いします」」

「ああ！　二人ともよろしくな！」

三人は、小さな子どものような無邪気な笑みを浮かべて笑いあっていた。

▼▼▼▼▼▼▼▼

一方、機動六課では、六課の柱である、はやて、なのは、フェイト、さらに契約者であるキャロの四人が、漸くニーナから事情を聞

くことが出来ていた。
しかし、ニーナはまだ覚醒していない時の話、記憶は朧気であり、大抵の話しは、信憑のほどは定かではない。
ただ、その断片的なニーナの記憶の中で、最悪の言葉が含まれていた。

「えらいことになってもたなぁ……」

「「……」」

はやてはイスにもたれ掛かり、なのはとフェイトは力なく佇む。
脱力感に襲われる中、キャロは再度、ニーナに確認をとるために、はやてのワークデスクに座るニーナと正面から向き合った。

「ニーナちゃん、さっき言ったことは……」

「ニーナはね、まだ眠ってたからあんましハッキリとは言えないんだけど、神々の黄昏を～とか、作り直す～って言葉を聞いたような気がするの」

「そう……。ありがとう」

「どういたしまして～♪　ねぇ、キャロちゃん、ニーナ、役に立ったぁ？」

事の次第をよくわかっていないニーナは、明るいままだ。
心配をかけないよう、キャロも精一杯の笑みを作り、笑いかけた。

「うん。でも、たくさん話して疲れなかった？」

「実はね～、さっきから眠いの。
ニーナ、ちょっと寝てもいいかな？」

「うん。おやすみ」

「おやすみなさ～い。また明日ね～♪」

ニーナが光に包まれ、短剣へと吸い込まれていく。
騒がしいニーナがいなくなると、とても静かな空間が隊長室に出来上がる。

「キャロ、なのはちゃんとフェイトちゃんとの三人で話しがしたいんやけど、ええか？」

「はい。失礼します」

はやての意図を読み取り、キャロは隊長室から退室する。
キャロとしても、整理をつけたかったために丁度良かった。

「神々の黄昏、作り直す、この二つの言葉だけで考えても、世界規模、もっとかもしれへん。
下手すると、全時空規模の出来事が起こる可能性が出来る……
正直、頭がついていかへんけど、確実にわかることがある。
私らがやらなあかんことはただ一つや」

はやての言葉に、なのはとフェイトが頷き、改めて決意する。

「グングニル、絶対に守りきらなきゃね……」

「なのはちゃん、フェイトちゃん、今回の戦闘のデータをまとめて、

フォワード陣の訓練メニュー作成、お願いや。
何か足らんことがあったら言うてな？
こうなったら隊長やなんや言うてられん。私もなるだけ訓練に参加する。
何が来ても対処出来るように万全の準備をしとかんとな。
ちょっと忙しなりそうやけど、頑張ろか！」

「「了解！」」

来るべき恐怖に備えるため、機動六課の三本柱が動き出した。
なのは、フェイトは、ヴィータを交え、訓練メニューの再考、はやては、デスクワークを片付けた後、自ら無限書庫へと赴き、古代ベルカの情報をユーノと共に調べる。
なのは、フェイト、はやて、この三人の作業は日付が変わっても終わらず、夜明け近くまで続けられていた。
後に、シャマルから雷が落ちたのは余談である。

ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ……

外伝、なのはランブル～突撃リポート。その２（前書き）

頭痛の中、激痛に耐えながらなんとか書ききりました！
とりあえず、いろんな作者様ごめんなさい！

外伝、なのはランブル～突撃リポート。その２

ぱらぱらぱっぱっぱっぱっぱっぱ～～♪♪

カナメ「はい、読者の皆様こんばんは♪
いきなりですが、この効果音は、何でしょうか？
当てられた方にはもれなくこのヴィヴィオさん＆ａｍｐ；祐希奈さんの入浴写真集をプレゼントしますよ♪
とまぁ、これは皆様の気を引き付けておくフェイクです♪
さてさて、改めまして、お久しぶりです。
皆様の心の湖、カナメちゃんですよ～♪
はい。まぁ、ここからお読みになる方はいらっしゃらないとは思いますが、私のことがわからない方は、第二部、十九話にて調べてくださいね♪
さてさて、前回のおさらいをしてみましょうか♪
スイッチオン♪」
ブン……

カナン『がふっ！』

カナメ「無言でタカトさんに殴られて締め出されましたね♪」

ルシア『後五分ってんでしょうがぁぁぁぁー！！！』

―滅―

カナン『ぎゃあああああ！！』

カナメ「ルシアさんに砲撃を喰らってますね～♪」

シオン『あの人はあれでもよ……』

ザクッ

アサギ『シオン君、何を言おうとしたのか、言ってみようか？』

シ・カ『ぎゃあああああああ！！！』

カナメ「女の子の年齢は永遠の十代ですよ♪
包丁を投げたアサギさんは無罪です」

カナン『ああ！　そうともさ！　シオンの恋人でもいける……』

ザクッ

みもり『アサギさんが……シン君の何って言いましたか？』

カナメ「本当に無神経な少年ですいませんでした」

百夜『星！』

カ・銀『ぎゃあああああああああああ！！』

カナメ「銀杏さん、浮気はダメですよ♪
さて、これでもうお分かりかと思いますが、この外伝の目的は、なのはランブル～のスポンサーとしてＬＶが応援しようと企画されたものです。
なのはランブル～がどのような作品なのか、よくわかる映像でしたよね♪
この映像の通り、のほほんとした学園コメディです♪

え？　わからない？　おかしいですね。最大限に引き出せる映像だと思ったのですが……。
では仕方ないですね。私が軽く説明します。
神庭家でふっ飛びながら面白おかしく学園までの道のりを頑張りました♪
ふぅ。疲れました。これで大体の読者様に理解された作品だと思います。
今回は学園午前の部です♪
リポーターとか言ってた気がしますが、用はなのランがどんな物か伝われば問題ないと言うことで、ギャグ満載です。
キャラ崩壊すらあるかもしれませんが、それはご愛敬。
では、どうぞ～♪」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ここは、私立聖祥大附属高等部。
様々な魔導師が集い、学習し、青春し、そして、破壊する。
え？　３つ目がおかしいって？　いや、正しいさ。

ヴィータ「んじゃ、この問題を……そうだな。シオン、やってみろ」

シオン「げっ……」

銀杏「まぁ、頑張れよ、神庭君？」

シオン「銀杏～っ」

ヴィータ「おら、さっさと黒板に答えかけ」

シオン「う～～っ」

基本、優秀なシオンが珍しく黒板の前で頭を悩ませている。
その横で、ヴィータさんは笑って見ていた。

カナン「銀杏、銀杏」

俺の席の前、銀杏の肩をつつくと気づいた銀杏がゆっくりと首を回してこっちを見た。

銀杏「ん？　どうした？」

カナン「なんでシオンあんなに悩んでるんだ？」

銀杏「あ～あれな、シオンはノートを丸写しでやったから頭に入ってねぇんだよ。
多分だけどな？　先生ズにそのことがバレたんだと思う」

カナン「成る程……」

前回の銀杏との銭を巡るやり取りだ。
何の理由があったのかは知らないが、シオンはノートを丸写しにした。
そのツケが今になって返ってきたということだ。

シオン「と……確か、こんな感じで……」

案の定と言うか、シオンの解答が段々あやふやになり始めた。
「もういい」とヴィータさんは打ち切り、笑った。

ヴィータ「ま、わかるわけないよな。

丸写しをするからこうなんだ。
次からはセコいことすんなよ？」

シオン「すいません……」

トボトボと席に戻るシオン、ジト目で見ているのはティアナさんだ。

ティアナ「バカ」

シオン「くっ！」

未来「まぁ、こんな時もあるって、な？」

シオン「ああ……ありがとな、未来」

銀杏「これに懲りたら丸写しはするなよ？」

シオンの肩にポンっと銀杏が手を置いた。
ニコリと笑い一言だけ言った。
それに対し、ぴくりと反応するシオン。
銀杏と同じく肩に手を置き返し互いの肩に手が乗った状態となった。

シオン「……君だって写そうとしてたよねぇ、神代君？」

銀杏「嫌だなぁ、この僕がそんなことするわけないだろ、神庭君？」

シ・銀「あははは♪」

ミシミシと音を響かせながら、シオンと銀杏は肩の潰し合いを行っている。
お互いに力は相当ある。

カナン「なぁ、未来さん？　どっちの肩が先にイカれると思う？」

未来「いや、カナン！？　止める気ゼロか！？」

カナン「止めたいんだけどな、面白いことを撮影するのが俺の任務だから。
それに、ほら？」

未来「……」

のぞみ「どっちも頑張れ～。そこで捻る！！」

カコ「ねぇねぇ、お兄ちゃんは参加しないの？」

サラ「てか、カナンと未来でやっちゃいなさいよ」

Ｂｌａｖｅ組を筆頭に今や、教室がさわぎだすという事態に発展していた。
銀杏とシオンは、それにヒートアップしたのか、最早、間接技までかけている。ひたすらにどちらも笑顔だが。

カナン「未来さん、この際だし、やるか？」

未来「やらないし、何だこの授業……」

ヴィータ「てめぇら……」

シ・銀・カ・未「あ……」

教壇の上に立ったのは、青筋を浮かべたヴィータさん。
その手には、次々とカートリッジを排出し、変形するアイゼンが握られている。
変形したフォルムは、グラーフアイゼンギガントフォルム。
「授業崩壊させるなら出ていきやがれぇぇぇ！！
ギガント、ハンマァァアアアア！！！」

ドゴッ！！！
うわ、すげぇ、綺麗に四人ならんで飛んでるよ……
俺達は、教室の壁をぶち抜き、外へと落ちていった。

カ・シ「はっ！」

銀・未「て～っ！」

三途の川を瞬時に往復、フローターを使い、しっかりと校庭に着地した。

《わ～～～っ！！！》

シオン「すげぇ歓声……」

銀杏「生徒数はかなり多い方に入るからな」

未来「しかも、大半は魔導師だし」

カナン「なぁ」

シ・銀・未「ん？」

カナン「三つの教室から物凄い魔力が感じられるのって、俺の気のせいか？」

なんていうか、怖いを通り越して笑えてしまえるくらいの魔力値を感じる。

そんな俺の疑問に、窓際に立つのは、とある三人のお方。

レン「てめぇら、こちとらマラソンのことで血圧あがってんだ……。取り合えず、憂さ晴らしに集束砲ぶちこむけど、いいよな？　まぁ、断ってもぶちこむわけだが」

キレ王こと、レン・テスタロッサさんが、ラグナロクを構えて笑っていた。

あの人と殺り合うには、まず、俺や未来は暴走、シオンはアヴェンジャーにならないと勝負になるかどうか……。

どこまでが本気かわからない人である。

美緒「うん。取り合えず、軽く集束砲撃ち込むね♪」

元男児。そして、元は味方であった麻井美緒。

ぶっちゃけ神様に匹敵する力を持っており、それこそ、祐希奈（神化のゼウスフィールド抜き）とまともにやり合える数少ない女帝。

神化祐希奈と比べる時点で間違いだが……アイツは、勝つとかそんなのは、ほぼ不可能。

どっちにしろ、美緒の相手はするだけ無謀だ。

なのは「四人とも、頭、冷やそうか？」

そして、もちろんこの人、なのはさん。

もう、説明するのも不要なくらいの悪魔さんです。

一同「……」

レン「ホーリーギャラクシー！！！」

美緒「デストラクション♪」

なのは「スターライト……」

一同「絶対にまた会おうな！！」

三人「「「ブレイカァァァァーーーー！！！！！」」」

四人できつく握手を交わし、閃光の中へと消え去った……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

その頃、四人が壮大にぶっ飛ぶ光景を他人事のように見つめる瞳と同情を込めて見つめる瞳があった。

ボスキャラにも関わらず、家事が超絶凄いために、いいように使われている伊織タカトと、家事において、タカトに双肩を並べるほどの実力を持つ第二のフラグ王、草薙翔である。

タカト「全く、あの四人は騒がしいことこの上ない……」

集束砲を受けた四人の心配はせず、タカトはその騒音に迷惑していた。

タカトにとって、あの四人の安否などどうでもいい。

そんなタカトに、翔は苦笑いを浮かべた。

翔「タ、タカト、ちょっとはあの四人の体も心配してやれよ」

タカト「必要ないだろう。あの四人があれくらいでくたばるような輩に見えるか？」

翔「まぁ、見えないけどさ……ん？」

タカト「どうした？」

翔「いや、なんか声が聞こえないか？」

タカト「……」

翔の言葉に、タカトは耳をすませ、集中。

確かに、声が聞こえた。

そしてそれは、段々と大きくなっていく……

タ・翔「まさか……」

？「〜〜ぉぉわぁぁぁあああああああああ！！！！」

タ・翔「っ！」

瞬間、二人は同時にから跳躍、同時。

ドンガラガッシャンガラガラガラ！！

一同《どわぁあああ！！／きゃあああああ！！》

教室の至るところから声が響き渡る。

幸い、この学校にいるのはほとんどが高ランク魔導師。
三年ともなると、ほぼ全員が一騎当千の能力だ。
その中でもずば抜けて高い、タカトと翔ほどには上手く避けてはいないものの、各々で回避、もしくは防御をしていた。

？「いって～……」

タカト「やはり貴様か」

翔「か、カナン？」

カナン「あ、あれ？　タカトさんと翔さん？
ってことは、ここは二年の教室か」

二年の教室に飛来したのは、リポーターである風間カナンであった。
校庭から集束砲の威力でここまでぶっ飛んだのだ。

カナン「えっと、取り合えず翔さんはお久しぶりで、タカトさんは朝ぶりです」

翔「あ、ああ。久しぶり。体は大丈夫か？」
カナン「え？　ああ。そっちは全然」

翔「あっはは……。やっぱり全然平気なんだな」

カナン「慣れっす」

何度言われても、この世で一番慣れたくないものだとクラス全員の考えは一致している。

悲しいことに慣れ始めた人間が数人いるが……

タカト「それで、お前は今、絶賛授業妨害中な訳だが？」

カナン「げ……」

カナンが振り向くと、教壇の上にはシグナムがいた。
やれやれと言わんばかりに、教科書をたたんで座っている。

カナン「す、すいません。続きをとうぞ！」

シグナム「……では、机を……」

？「ぁぁぁあああああああーーーー！！！」

タカト「ごふっ！」

ドンガラガッシャンガラガラ～！！
再び窓ガラスを突き破り、ついにはタカトすらを巻き込んで机を吹き飛ばす。

翔「タ、タカト！？」

シオン「っ～～。でも、なんか思ったほどの衝撃なかったな。ラッキーだ」

カナン「シ、シオン、下、下……」

シオン「あれ？　カナンもこっちに飛んだのか？」

カナン「そんなんいいから、下を見ろっ！」

シオン「さっきから下下って変な奴だな……。俺の下に何……が……」

下を見た瞬間、シオンの表情は固まった。

何故なら、仰向けになったタカトを下敷きにしていたからだ。

先ほどの衝撃が少なくてすんだ理由はこれである。

ダラダラと冷や汗を流しながらシオンはなんとか笑顔を絞り出す。

シオン「た、タカ兄ぃ。元気？」

タカト「……さぞ、兄を見下ろすのは爽快だろう？」

シオンの問いには答えず、タカトは珍しく笑った。

底知れぬ寒さをシオンは感じていたが……

シオン「あっはは、はは、はは……」

タカト「カカカカカカカ」

静かなる教室に、シオンのひきつった笑い声と、黒い笑い声が響く……

そして、シオンの腹部に押し当てられた右掌。

眩い光が、集う、集う、集っていく。

その技は、一切の手加減抜きで圧縮された天破光覇弾に他ならない。

シオン「タカ兄ぃ！　それはやり過ぎなんじゃ！？」

翔「本当に待て！　タカト！　そんなもの打ったらシオンはともかく校舎が！！」

カナン「なぁ、翔さん、何気にシオンはともかくって酷くないか？」

翔「う……。ちょっと本音が出ただけだよ」

シオン「本音って言ってるじゃないっすかぁぁ！！」

翔「と、とにかく、タカト、やめろ！」

タカト「知らん。処理はどうにでもなる。翔、こんな言葉を知っているか？」

翔「な、何だ？」

タカト「人間、やらなくて後悔するより、やって後悔した方が、良いだろう？」

シ・カ「そのネタはあぶなぁぁぁい！！」

タカト「やかましい。天破光覇弾！」

―煌！―

シオン「～～～！！！」

放たれる光弾にシオンの叫びはかきけされ、タカトの放った光弾は、存分に威力を発揮した。

せめてもの救いは、翔が展開したバリアのお陰で天井に大穴を開

けることが無かったことと、怪我人が出なかったことだ。

シオン「……」

約一名、三途の川へと旅立った銀髪の少年がいるが……

カナン「うわぁ……、相変わらず容赦ねぇ……」

ユラリと立ち上がるタカトは、カナンへと向き直し、絶望の一言を放った。

タカト「安心しろ。今貴様も逝かせてやる……」

カナン「……へ？」

タカト「シオンと同じか、燃やされるか、痺れるか、好きな方法を選べ……」

つまり、タカトが言っているのはこういうことである。

天破光覇弾か、天破紅蓮か、天破震雷か、どれが良いのかと。

カナン「ちょ、ちょっと待ってください？

俺はタカトさんに何もしてませんけど……？」

タカト「貴様が此処にいるからシオンが飛んできた。

つまりは、貴様さえいなければ俺は何もない平和な日常を送れていたと言うことだ」

カナン「た、確かにシオンが飛んだのは俺のせいかもしれないっすけど……」

タカト「けど、何だ？」

カナン「俺がいなくてもこの学校で平和な日常は不可能かと……」

一同（バカだ……）

翔「う～ん……ちょっとまずいんじゃないか？」

カナン「へ？」

肩に軽い感触、振り向くと、まだ距離があったはずのタカトが、一瞬にして距離を無くしていた。

タカト「そうだ。カナン、今お前は真実を言った。この学校において、平和な日常など求める方が難しい。だが、この学校とて、常におかしいわけではない。少なくとも、“今は”平和な時間だったわけだが、お前は、その貴重な平和な時間を潰してくれた。それなりの礼はさせてもらうのが筋だろう？」

カナンは、やや意識が遠くなるが、繋ぎ止め、左手に魔方陣を展開。叫び。

カナン「……メイ……」

タカト「天破紅蓮！」

―瞬―

―煌！―

カナン「ごふぁっ！！」
　きる前にタカトの拳がカナンの鳩尾に叩き込まれ、圧縮された炎が爆発、紅蓮の煌めきを放ちながら轟音を響かせる！
　カナンは、教室の壁をぶち抜き、止まらない。
　風を切り裂いて廊下をすっ飛んでいく。
　実に、教室からは５０Ｍ近くの距離を飛んでいた。

カナン「……」

翔「た、タカト、いくら何でも死んだんじゃないのか？
ピクリとも動かないぞ？」

タカト「いっそ死ね……」

　しかし、数秒たたずに、シオンとカナンが同時に起き上がる。

カ・シ「ふっか～つ！！」

タカト「ちっ……」

翔「おいおい……」

シオン「タカ兄ぃ、零距離は流石にやめようよ。
カナンが来たから戻れたけど、ちょっと危なかった」

翔「それでもちょっとなんだな……」

シオン「慣れてますから」

翔「一日にそんな不憫な言葉を二回も聞かせないでくれよ……」

タカト「翔、そのうちこの二人には不憫だなどとも思わなくなるから安心しろ」

翔「……」

翔は思う。自分だけはこの二人に中立でいようと。

実際問題。翔がＫＤＧになど入った場合、祐希奈はもちろんのこと、レン・テスタロッサ、切裂百夜、麻井美緒、アリサ・バニングス等の特に理由が無くともノリで二人をぶっ飛ばす者。

さらに、伊織タカト、神代銀杏、高町なのは等の理由が無ければ特に害は無いが、該当した場合、危険な存在になる者もいるため、抑制役がいなくなった場合のカナン達には、悲惨な運命が待っているのは言うまでもない。

ちなみに、上記のメンバーのほぼ全てが、ヴィヴィオの切り札『乙女の涙』によって動く。

最近は、ママ問題により、シオンがかなり危険なポジションだが、誰も助けてくれることはない悲しき少年だ。

シオン「なんだろうな、今物凄い悲しいこと言われた気がする……」

その時、授業終了のチャイムが鳴り響いた。

結局、後半は何も出来なかったことにシグナムは頭を抱える。

シグナム「……まぁ、今日は覚悟していたからいいだろう。続きは明日からだ。では、終了する」

しかし、カナンが来ると言うことで、ある程度の被害は考えていた教師陣営はさすがだ。

というより、多少の妨害程度、予測できないようでは、この学校

の教師などやっていられない。
休み時間を利用し、カナンとシオンは、二年の教室から一年の教室へと戻る。
すると、何故かヴィータ、銀杏、未来が廊下に出ていた。

ヴィータ「お、カナン、シオン、良いとこ来たな。お前ら、後で反省文書いて、あたしに提出な？」

カ・シ・銀・未「俺らが悪いんすか！？」

ヴィータ「当たり前だ。ちゃんと出せよ？　そんじゃな」

カ・シ・銀・未「理不尽だぁぁぁぁ！！！！」

彼らの苦悩はまだまだ始まったばかりである。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

舞台裏

そんなこんなで、一時間目終了だ

カナン「え……ちょっと待て、この密度で一時間目か！？」

いや、密度って言うけどな？
後半は授業とかなんも関係ないし

カナン「それは……お前のせいなのでは？」

そんなこと言うとカナメにレギュラー渡すぞコラ♪

カナン「すいません！！」

ということで、舞台裏では真面目にカナンに紹介してもらいましょう。
何を紹介するのかと言いますと、部活動なんかどうかなと。

カナン「待て……。キャラ名もろくに覚えられてないのに無謀な挑戦をする気か？」

今更カオスになろうとしったこっちゃないね！

カナン「もうやだ……」

てなわけで、本日の部活動はこちら。
聖高の生徒会～♪
それ行け！　ヘタレンマン♪

カナン「だ～か～ら～、ネタを使うなっつの。
はぁ……。定番でまだ良かったけどな……
そんじゃ、行ってくる」

ピッピカチュー♪

カナン「まだ引っ張んのかソレ！？」

シュン。

神の力により、強引に時間をずらされた学校では、既に放課後を迎えていた。
ちゃんと転送されたなら、生徒会室にいるはずだ。
お、ちゃんと生徒会室の扉の前だな。

カナン「こんにち……」

なのは「ディバインバスターー！」

カナン「へ？」

―轟！―

扉を開けた瞬間に、俺の目の前を埋め尽くした桜色。
こんなん、避けられるわけねぇだろ……

カナン「ぎゃあああああああああす！！」

激痛が全身を襲う。河が見えてきたので即座に踵を返し闇へと戻る。

カナン「はっ！」

なのは「おはよう」

カナン「……」

目の前のなのはさんは、背後に黒いオーラが見えていた。
もういやだ。何で一日に二回もこの人の悪魔モードに出会わなくちゃいけないんだ……
いったい俺が何をしたって言うんだよ。

いや、してますけど、余りに理不尽だ。

カナン「な、何か？」

なのは「私たちが予算でもめてるって知ってるよね？」

カナン「はいぃ！」

なのは「なら、何でまたすぐに教室を破壊するのかなぁ？」

あ～、集束砲の後の教室壁抜きか……

カナン「いや、アレは俺っていうよりはタカトさんが……」

なのは「タカト君とシオン君はあの通り反省してるよ？」

カナン「……」

なのはさんの視線の先に広がった光景、それは……

フェイト「タカト、次はマロングラッセが食べたいな？」

はやて「私はミルフィーユがええな～？」

みもり「えっと、じゃあ、イチゴタルトをお願いします」

ティアナ「あ、私も同じでお願いします」

アサギ「じゃあ、私はチーズフォンデュね♪」

タカト「わかった……」

アサギ「先に言っとくけど、市販の物で作っちゃだめよ？
全部最高級の素材を“とってきて”ね？」

タカト「くっ！」

シュバッ

まず見えたのは、ケーキを注文されているタカトさん。
問題はただ注文されているのではなく、素材をとりにいかされている所だが……

翔「……はやて、やっぱり手伝ってやっても」

はやて「あかんよ♪」

フェイト「翔が手伝ったら罰ゲームにならないからね」

翔「タカト、すまん」

シュバッ！

タカト「……いや、たかがデザート３００種くらい、どうと言うはない……。
あれに比べればな……」

翔「まぁ、な」

タカトさんと翔さんが見たのは、イスに座りながら誰かと話して

いるシオン。
　っていうかアレは……

祐希奈「さて、それじゃあ、もう一回言ってみなさい♪」

シオン「ま、まだ……なのか？」

ヴィヴィオ「やっぱりシオン君は私のことを……」

祐希奈「……ヘタレオン、蒸発したいの？」

ゴオオァオァ！！

シオン「朝っぱらから理不尽過ぎるだろ！？」

祐希奈「理不尽だろうとなんだろうと、シオンとカナンには何しようと許されるのよ♪」

シオン「くっ！　ヴィ、ヴィ、オママ……」

ヴィヴィオ「わぁ♪　うん♪　ヴィヴィオママだよ♪」

祐希奈「でも途切れすぎだからもう一度ね♪」

ヴィヴィオ「え？　私は読んでくれたからいいよ？」

祐希奈「全くヴィヴィオは甘いわね。
もし、ヴィさんや、ヴィヴィさんや、オさんって、人がいたら間違えちゃうじゃない」

シオン「いや、いくらなんでも有り得ねぇから！！」

ヴィヴィオ「それは大変だよ。シオン君、もうちょっとだけ頑張ろう？」

シオン「なんで信じんだよ！？　いるわけないだろ！！」

祐希奈「世界にはね、有り得ないことなんて無いのよ♪」

ヴィヴィオ「そうなんだって～」

シオン「……」

祐希奈「そもそも、家族なんだから別にそんなに恥ずかしがる必要ないんじゃない？」

シオン「なら祐希奈は他人を家族っぽく言えるか！？恥ずかしくて……」

祐希奈「アリサお姉ちゃん♪」

アリサ「ん？　祐希奈？　呼んだ？」

シオン「しまったぁぁあああああああ！！！ってヴィヴィオ？」

ヴィヴィオ「えぐっまた、他人って……」

祐・ア「シ～オ～ン？」

シオン「ごめんなさぁぁぁあああああい！！」

バキッ！　ゴキャッ！　ミシミシミシ……

シオン「ぐおあぁぁあ……」

カナン「親友……」

いや、なんか涙が止まらないんだが……
リポートとか出来る余裕がねぇよ……

なのは「さて、カナンはどんな“お話”がいいかな？」

カナン「いや、どんなのでもいやっす……」

なのは「却下だよ？」

カナン「遂になのはさんまで人権無視！？」

なのは「じゃあ、カナンには決められないみたいだから、私が決めてあげるね。
トウヤ君、お願い出来るかな？」

トウヤ「任されよう」

カナン「あんた今どっから出てきやがりましたか！？」

トウヤ「美女の呼ぶ所、叶トウヤは存在するのだよ」

ユウオ「はいはい、変なこと言わないでね～」

シュドっ！

トウヤ「がふっ！」

カナン「ユウオさん、貴女もどっから!?」

ユウオ「トウヤがセクハラする所にボクはあるんだ」

カナン「……」

　ムクリと背後で何かが起き上がる。
　ユウオさんの攻撃により吹っ飛んだトウヤさんだ。

トウヤ「さて、カナン君、行こうか?」

カナン「ど、どこに?」

トウヤ「もちろん、サッパリ教室にだよ?」

ユウオ「祐希奈ちゃん提供の紙芝居もあるし、安心して?」

カナン「何をどう安心しろというのでしょうか!?
それどころか、生命の危険すら感じますが!?」

トウヤ「まぁ、話しは後でいくらでも聞こう。もっとも」

カナン「もっとも?」

トウヤ「君が会話が出来たのなら、の話だがね?」

カナン「やっぱいやだぁあああああああ！！
離せぇえええ！！　俺はまだ死ねないんだぁぁあああ！！」

ユウオ「あはは。殺したりなんかしないよ～。
精神を破壊するだけだから」

カナン「殺すより残虐だぁぁあああああああああああああああああああ！！！！」

細い体とは思えない力で、俺の首元を捕まえ引きずっていくトウヤさん。
なのはさんはと言うと、にこやかに手を振っていた……。

ブツ

以上、生徒会メンバーの紹介でした♪
ちなみに、アリサだけは違いますので。

外伝、なのはランブル～突撃リポート。その２（後書き）

どうでしたでしょうか？
最近のＬＶは暗めの話が多いので、息抜き、という感じです。
後半の部活動紹介、各キャラが何部なのかすらほとんどわかっていないので、もちろん僕も頑張りますが、作者の皆様に協力していただけると嬉しいです。
ではまた次回に♪

第二十六話　挑戦者（前書き）

うわぁ、見事に文字数が爆発して日常を抜けきれません。
伏線すらほぼ引けずに終わっちゃいました。
もしかすると、次話か次々話で漸く、かもです。

第二十六話　挑戦者

祐希奈「前書き質問コーナ～♪」

カナン「（ゴクッゴクッ）ふぅ……」

ヴィヴィオ「か、カナン君？」

カナン「ん？　何だ？」

ヴィヴィオ「シオン君のアドバイスとは言え、飲み過ぎじゃないかな？」

メイデン「すでに七本目だぞ……」

レナス「主、お酒は二十歳になってからですよ？」

カナン「酒を飲まなきゃやってられないこともあるんだよ……」

祐希奈「しっかし、アンタ、強いわね……」

カナン「母さんが強くてな？　そのせいかもしれない。体が弱いのにアルコールに強いって、凄いよな……」

祐希奈「そうね。はい、カナン、おつまみにカツ丼♪」

カナン「つまみにカツ丼って明らかにおかしいだろ……。まぁ、腹減ってるからいいけどさ……あ、やばっ！　これめちゃくちゃうま……い？」

祐希奈「ま、Ｂｒａｖｅから届いたカツ丼だけどね♪」

カナン「……」

ドサッ……

ヴィヴィオ「カナン君が無言で倒れたよ！？」

メイデン「いったい何が入っているんだ！？」

レナス「カツ丼って、怖いですね……」

祐希奈「ま、そんなわけで質問コーナー♪」

ヴィヴィオ「え？　えぇ！？　カナン君は！？」

祐希奈「放置♪」

メイデン「そ、それは大丈夫なのか？」

祐希奈「まぁ、カナンだし大丈夫でしょ。で、この質問なんだけどね？　正直、ＬＶでは判断しかねるんだけど、読むわね。

『カナンの瞬刃破光断でしたか？　奥義についてなんですが、あれって、時間の概念を無視してカナンは動いてますよね？あれは、ＥＸランクにはならないのですか？』

ん～、近い、とは思うんだけどね～」

ヴィヴィオ「カナン君のは、タカトみたいに存在自体が異常ってわ

けじゃないからね」

メイデン「だが、確かにあの技の中では概念を無視して動いていると説明に書いたが……」

レナス「神の力を使って世界の理をねじ曲げているのはどうなのでしょう？」

祐希奈「一時的にＥＸ化？　ん～よくわかんないわね。ちょっと頼ることになるんだけど、テスタメントさん教えてくれる？」

ヴィヴィオ「迷惑かけてごめんなさい……」

レナス「質問は以上ですが、主は起きませんでしたね……」

メイデン「後書きまでには起こさなければな……」

祐希奈「それじゃあ、魔法少女、リリカルヴィヴィオ、始まるわよ♪」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「１０００っと……ふぅ」

幾つもの水滴が、床に光を反射しながら落ちていく。
それらの正体は、筋トレによってカナンが流した汗だ。
その光景を半ば呆れた表情で見る、メイデンとレナス。
なぜなら、カナンは回復魔法により、完治したばかりにも関わらず即座に筋トレを始めたのに他ならない。

「治した直後くらい、ゆっくりしていてはどうなんだ？」

「そうですよ。もう少し身体を労ってください」

「ん～でも、アイツらが学校から帰ってまで何もしないってのも暇だしな。
それに落ちた体力も戻さないといけないし、たったこんだけで息上がってるようじゃ、まだまだ頑張らないと。
後、もうちょいだけ、な？」

そう言うカナンに、メイデンは全く信頼をしていない視線を送る。

「もうちょいだけ、とは後どれだけやる気だ？
先ももうちょいだけ、と言いつつスクワットと腕立てを各１０００回以上やっているわけだが？」

「あはは、は……」

渇いた笑い声を絞り出すカナンに、メイデンは深い溜め息をつく。

「とは言うものの、マスターは言うことを聞くはずは無いし、気の済むまでやればいい」

「良いのか？」

「ただし、限界が来たと私達が判断した場合、無理矢理にでも止めるからそのつもりでいろ」

「ちなみに、俺がその制止を無視した場合は？」

瞬間、カナンは後悔をすることになる。
何故ならメイデンがやたら冷たい目付きでカナンをジッと見ていたからだ。
そして、短く一言だけ言葉を紡ぐ……

「聞きたいか？」

「う～ん……」

背中から冷や汗が吹き出したのをカナンは感じる。
ロボットのようにメイデンから目をそらす。

「いや、いいっす……」

「懸命な判断だ」

それだけ言って、メイデンは目を閉じた。
そのスキに、カナンはレナスへと念話を繋げる。

（レナス、何でメイデンの奴あんなに機嫌が悪いんだ？）

（主に怒っているわけではありませんが、やはりニーナの件で精神的に疲れてるのではないかと）

（俺、謝った方が良いか？）

（いえ、メイデンから流れてくる感情は、罪悪感ですので、主にあたってしまったことを後悔してるみたいですね。
後で謝りに行かせるので、許してあげてもらえませんか？）

（わかった。ありがとな）

（いえ、ではこちらは私に任せてください）

「やるか！」

メイデンの事はレナスに任せ、カナンは、自分の衰えた筋力を戻すために、スクワットを開始した。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

その頃、聖中では……

「はぁ……」

予想通りカナンにあたってしまった祐希奈は、周囲にも用意にわかるほどに落ち込んでいた。

カナンがいないことに加えて、普段、騒ぎの中核となっていた祐希奈が喋らない一年四組の教室は、休み時間にも関わらず、不気味な程の静けさ。

「ねね、ヴィヴィオちゃん、祐希奈の奴、何があったわけ？」

「あんなに落ち込んでる祐希奈、見たことがありませんよ？」

もちろん、友人である美鈴と神楽は心配している。

いや、ほぼクラス全体が祐希奈を心配していた。

そんな中で、唯一落ち着いている人物がいる。

祐希奈の一番の真友であるヴィヴィオだった。

「えと、ちょっとカナン君と喧嘩、かな？」

「あ、カナン君、やっと起きたんだ。
そんでもっていきなり喧嘩って、相変わらず不器用ね」

「そ、それで、仲直りは出来そうなんですか？」

美鈴は祐希奈に呆れながら、神楽はさらに心配そうな表情でヴィヴィオに詰め寄る。
対し、ヴィヴィオは笑みを浮かべた。

「私と祐希ちゃんの喧嘩の場合とは違って、今回の喧嘩は、カナン君も祐希ちゃんも優しいから起きた喧嘩。
だから、すぐに元通りになると思うんだ。ただ……」

「「ただ？」」

ここで、ヴィヴィオの笑みが崩れ、苦笑いへと変化する。
その変化に二人は首を傾げ、答えを待った。

「カナン君はともかく、祐希ちゃんは意地っ張りだから、話しかけるきっかけ作りが大変なんだ。
私が二人の橋渡しをしてあげないと」

「あっはは……。流石って言うか、天然って言うか……」

「え？」

すると、次は美鈴が苦笑いを浮かべた。

立場逆転、ヴィヴィオが首を傾げることとなる。

「あのさ、仲が良いのは良いことだとは思うよ？
でも、こういうのって、ヴィヴィオちゃんにとってチャンスなんじゃないの？」

「チャンスって……何のチャンスかな？」

ガシャーン！！
これには美鈴だけでなく、祐希奈以外のクラスメイト全員が壮大にずっこける。

「？　み、皆どうしたの？」

「うん。それがヴィヴィオちゃんの魅力だよ。魅力だけれども！！
限度って物があるんじゃないかな？」

「仲が良いのが、かな？」

《違うわーい！！／違うよ～！！》

「ふぇぇえ！？」

クラスメイト全員からのツッコミに、ついには半泣きになるヴィヴィオ。
ヴィヴィオの天然はどうしようもないとクラスメイト全員の意見は一致した。
そんな中、なんとか復活した美鈴が話を続ける。息も絶え絶えだったが……

「あ、あのね、祐希奈とカナン君は喧嘩してるわけでしょ？
そのスキに、もっとカナン君と親密になろうとか、そういうことは思わないの？」

「え？　私とカナン君、もう仲は良いよ？」

ガシャーン！
漸く建て直していたクラスメイトは再び倒れ伏す。

「ふぇ？」

《友達のほうとちゃうわーーー！！！》

「え？　と、友達の方じゃないって……もしかして……」

《コクコク》

「あの……、えと……、はうぅ……」

《かわええ！！》

真っ赤になるヴィヴィオに男子生徒が叫ぶと、祐希奈がギロリと睨む。
その視線だけで気温が下がったかのような錯覚を男子一同は感じとる……

「うっさい……。男子全員窓から放り出すわよ……」

《ごめんなさい祐希奈様！！》

「ったく。はぁ～あ……」

再び祐希奈の視線がヴィヴィオ達から離れた所で、美鈴は改めて話し出す。

「じゃあ、ヴィヴィオちゃん、私の言ってたことの意味、わかるよね？」

「えと、うん……。
わかるけど、そういうこと、あんまりしたくない」

「どうして？　ヴィヴィオちゃんと祐希奈は、ライバルなんでしょ？」

コクりとヴィヴィオは頷く。その表情は、はにかむような笑顔を浮かべていた。

「そうだよ。祐希ちゃんは、真友で、ライバル。だからこそ、かな？だから、同じスタートラインで、一緒に走って、ズルなんかしないで勝ちたい。
多分、祐希ちゃんもそれは同じだから。
私がカナン君とギクシャクしてた時、背中を押してくれたのは祐希ちゃんなんだ。
だから、祐希ちゃんが止まってる間は私も進まない。私が手を引いてあげるんだ。
ライバルだからって、蹴落とすようなそんな関係に私はなりたいんじゃなくて、同じ速度で進んで、辛いときは肩を貸して、一緒に頑張る。
私は、ズルして祐希ちゃんに勝ったって嬉しくない。
祐希ちゃんがズルして私に勝ったんなら祝福なんか出来ない。

でも、一緒に助け合って頑張ったのなら、その時は辛いかもしれないけど、きっと祝福することが出来るから。
誰よりも、その子の頑張りを近くで見てた自分だから、誰よりも祝福出来ると思うから、気持ちよく終われるようにするために、私はしないし、祐希ちゃんもしない。
今は祐希ちゃんが困ってるから私が助けてあげる番。
えと、これ、答えになってるかな？」

不安になり、話を打ち切るヴィヴィオ。
そんなヴィヴィオを、クラスメイトは、呆けたように見つめていた。

「ほぁ～……。随分しっかり考えてるんだね～」

「そうかな？」

「でも、こりゃあ、カナン君も責任重大だね。
ヴィヴィオちゃんと祐希奈がここまで考えてるなんて、カナン君わかってんのかなぁ？」

「大丈夫。カナン君だもん」

なんの根拠もなく、自信満々に言うヴィヴィオに、美鈴は笑う。
ただ、これだけ信頼されているなら大丈夫だと安心した。

「ま、カナン君だから不安な所もたくさんあるんだけどね～って祐希奈？　鞄なんか持ってどこいくの？」

美鈴の声に、祐希奈はゆっくりと振り返る。

「なんかもうメンドイし、午後はサボるわ。
ヴィヴィオ、先生に適当に言っといて」

「うん。わかったよ」

「ついでに美鈴」

「はえ？」

「カナンは鈍いけど、期待を裏切るような奴じゃない。
本人はあんまり自覚してないけど、アイツ、私達のこと見てるのよ。
それこそ、私達まで知らないような深いとこまでね。
何て言うか、表面的な読み取りは下手だけど、深層の読み取りは驚異的に上手いって言うか、よんわかんないわね。
とにかく、アイツが鈍いのは、無意識なんじゃないかって思わされる時があるのよ。
そうね……、笑ってごまかすってよくあるでしょ？
でも、アイツにはそれが通じない。
そんな奴が、本気で私達のことを考え始めたら、こんなことくらい、すぐにバレるわよ。
カナンは私達の気持ちに気づいた上で悩んでる。
ヴィヴィオも私も、それがわかってるからずっと待ってる。
それじゃあね」

「……」

「祐希ちゃん、バイバイ」

「ん。バイバイ」

美鈴にそれだけ言った後、祐希奈はさっさと教室を去る。
あまりのことにシンとなる教室。

「ていうか、祐希奈とカナン君は喧嘩してたんじゃないの？
普通、あんだけ庇う？」

「あはは。祐希ちゃん、意地っ張りだけど優しいから」

「さすがはツンデレラってとこね～」

美鈴の言葉に、クラスメイト一同は一斉に頷いたのだった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「そろそろかな？　ラスト十回！」

時計が午後の3時を示す頃、カナンはスクワットの筋トレを終えようとしていた。
一応、千回1セットの予定でやっていたカナンだが、途中で数を忘れたために最早何回目かすらわかっていないが。

「終わりっと……着替えあったかな？」

ベッドの側にあった鞄を探っている時、カナンの空間把握が姿を捉える。
もちろん、レナスとメイデンである。
事前にレナスから聞いているカナンは、ゆっくりとメイデン達に向き合う。

「ほら、メイデン？」

「あ、あぁ……そ、そのマスター……ふあっ！」

何故メイデンが驚いたのか、それはカナンがいきなり強制召喚で肩に移動させたからだ。

「お前は謝らなくてもいいよ。何も悪くない」

「し、しかし、私はマスターに八つ当たりを……」

「あのなぁ、あんなもん八つ当たりなんて言えん。どこに八つ当たりで人の心配する奴がいるんだ？俺みたいなバカは、ああでもしないと止まらない。だからお前は言った。そんだけだ。はい、終わり」

「マスター、ちょっと待ってくれ！」

「待たん」

「え……、えぇ！？　ま、待ってもらえないのか！？」

「金髪で金眼の子は待ってもらえないって法律だ」

「そ、そうか……。なら、仕方が無いな……」

「嘘だけどな？」

「マスターー！！！　またからかったな！？」

「はっはっはっ」

「答えろマスター！！」

「アイドントスピークジャパニーズだ」

「嘘をつくな！！」

「いや、前に祐希奈が言ってたろ？
俺、ゾンビなんだ……」

「ゾ！？　し、しかしマスターは違うと……」

「あの時は、咄嗟の判断でな……」

「そうなのか……」

「嘘だけどな？」

「マァァーースゥゥーーターァァァーーーー！！！」

「かっかっかっ」

「笑い事ではない！！」

「……」

二人の話に、レナスは入りらず、ジッと見つめる。
始めこそキョトンとしていたレナスだが、時間がたつにつれ、その表情は優しい姉の笑顔となっていた。

「主、ありがとうございます」

「何の話だ？」

「ふふ。いえ、何でもありませんよ」

ニヤけて言うカナンに、レナスも笑って返す。

カナンは、メイデンが罪悪感から解放されるよう、わざとおかしなことを言っていた。

レナスの礼の理由はそこにある。

「姉さん！　理由もなくマスターに礼などいらん！　だいたいだな！　マスターは発言に責任感が無さすぎるんだ！」

「だから悪かったって、いい加減機嫌直してくれ」

「全く……仕方の無いマスターだな……」

「ありがとな」

「うわっ！」

カナンがメイデンの頭を撫でると、途端にメイデンの表情が緩み目を細めた。

「マスターはズルい……」

「撫でられるのに弱いお前が悪いんだよ。んじゃ、そろそろ行くか」

「「はい／ああ」」

両手に華ならぬ、両肩に華を乗せ、カナンは病室を後にする。
しかし、数分とせずに異変に気づいた。

「なんか、視線が……」

そう。医師や看護師とすれ違う度に、驚きや、怖れと行った視線がカナンに突き刺さっていた。

「それは仕方がないことだろう。ハルさんが事前に言ってくれていた事とはいえ、重体だった患者が一週間程で歩いているのだからな」

「むしろ、これくらいで済んでいる方が凄いことではないかと。ハルさんはどういう言い方をしたのでしょう……」

「まぁ、ハルだし……」

「ああ。ハルさんだからな……」

「はい。ハルさんですからね……」

謎多きハイスペック執事、朱皇千春。
気にするだけ無駄だというのはカナン達にもわかっていた。

「か、風間カナンさんですね。朱皇千春先生から話しは聞いています。
退院おめでとうございます」

「ども」

若干、引き気味ではあったが、受け付けにも退院を通知され一週間ぶりに外を歩くカナン達。

「そういや、クレアに会って無いけど、どうてるんだ？」

「あぁ、クレアさんはな、修行に行っている。
クレアさんはというよりは、ハルさんもだが。
ハルさんには会えたのか？」

「ん、まぁな。てことはあの後どっか行ったのか……」

「あの後と言いますと？」

「まぁ、借りを返すというか、そんな感じだ」

「「？」」

「そんなにベラベラ言える話じゃ無いんだよ。
こんな時間に話す内容でもないし、また今度な。
で、ハルとクレアの行き先はどこなんだ？」

「まぁ、話しにくいことなら構わないが……」

「だ～か～ら～、いつか話すって。
何だよ。先にハルに話したのが納得いかないってか？」

「いや、そういうわけでもないが……、やっぱり、付き合いは私の方がハルさんより長いのだから……」

「主、メイデンはこうみえて結構独占欲があるのですよ？
そうですねぇ、昔なら、ロンギヌスと話していた時に……」

「わ、わぁ～！　そんなことは言わなくてもいい！」

姉妹仲良く戯れる姿に、カナンはずっと笑っている。
そんなカナンに、メイデンは首を傾げた。

「どうしたマスター？」

「いや、別に。で、ハルとクレアはどこ行ったって？」

「おかしなマスターだな……。ハルさんとクレアさんは、機動六課に向かった」

「なんでまた機動六課？」

「情報交換と、模擬戦、らしいですが？」

「ちょっと待て、クレアはともかく、ハルもか！？」

「はい」

「大丈夫かな……」

カナンが心配しているのは、もちろんハルの事。
本気を出すとは思っていないものの、ハルの攻撃は魔法ではなく、体術。
しかも、シャレにならない威力を誇った総合武術。
相当な強度を持つカナンの鎧でさえ、まともに受ければ骨折確実

というレベルである。

「ま、まぁ、大丈夫だよな。ハルだし……」

ハルだからこその不安があるのも確かなのだが、そこは現実から目をそらす。

今までまっすぐ歩けていた道を蛇行している時点で、かなり動揺しているが……

「……ナンくーん」

「ん？」

「あれは……」

「ヴィヴィオさんですね」

聞こえた声に振り向くと、ヴィヴィオが“走って”来ているのを見た。

ヴィヴィオは当然制服であり、聖中の女子の制服はミニスカートである。

走った場合、風でめくれ上がることは容易に想像出来た。

そして、まの悪いことに近くにはそれを狙っている男三人。

「……」

「ふぇ！？」

ヴィヴィオの横を光の速さで通り抜ける何か。

「ごふっ！」

「がはっ！」

「へ？」

中心の男を除く二人が息を吐き出しながら吹っ飛ぶ。
呆然とする男の目の前に現れたのはもちろんカナン。
霞む勢いで足払いが放たれ、倒れた男の背中を踏み、腕をねじあげる。

「いでぇぇえええええ！」

「随分と、しょうもない事が趣味なんだな、オッサン？」

「お、オッサンって、俺はまだ２５……ぎゃぁあああああ！」

言葉の途中で、カナンがさらに腕をねじあげ、黙らせる。

「そうかぁ、２５の若者が女の子をなぁ……。
オッサンなら、日頃の疲れもあるだろうし、多少は加減しようかと思ったけど、若者がそんなことしちゃ、ダメだよなぁ？
ってことで、この腕へし折るけど、良いよな？」

さらにねじあげ、骨がミシリと軋みだす……

「ぎぃあああああああああああああ！！！
タンマ！！　もうしないから、ちょっとタンマ！！」

「か、カナン君！」

「よっ。ヴィヴィオ」

「あ、うん。こんにちは」

手を上げるカナンに、ペコリとお辞儀するヴィヴィオ。
そんな場合ではないのだが……

「ぎゃぁあああああ！　た、助けてくれ……っ！」

「あぁ？　誰に助け求めてんだてめぇ……」

「あ、あの、その人も悪気があったわけじゃないと思うから、許してあげて？」

「そうそ……ぎゃぁあああああ！！！
折れる！　マジに折れるぅぅうううう！」

「嘘ついてんじゃねぇよ……」

「ご、ごめんなさい！」

「ほ、ほら、謝ってるし、もう私はいいから、ね？」

「しゃあない、ヴィヴィオに免じて許してやるからさっさと行け」

「は、はいぃ！！」

男は、脱兎のごとく知り合いであろう二人を置いて、走って逃げていった。

「ったく、次見かけたら問答無用でへし折ってやる……」

「あ、あはは……」

風間カナン、自分の友人に害を為した者、こと、ヴィヴィオと祐希奈については、容赦など欠片もない男子だった。

「マスター／主」

「メイデンとレナスだ～。久しぶりだね～」

「ああ。前は入れ違いになってしまったからな、ヴィヴィオ、久しぶりだ」

「ヴィヴィオさん、お久しぶりです」

挨拶をすると、メイデンとレナスはヴィヴィオの肩に停まる。

それを確認して、ヴィヴィオとカナンは歩き出した。

「ヴィヴィオは、もうちょっと周りに気を使おうな？」

「うん。ごめんなさい。もう大丈夫だよ」

途端、仕事モードの顔になるヴィヴィオにカナンは苦笑する。

「あのな、俺が隣にいるときはいいんだよ。空間把握で見ててやるから」

「ありがとう、カナン君」

「別に。ああいうのから女の子を守るのは男の仕事だし」

「あの、私だって、カナン君を守れるよ？
カナン君がさっきみたいなことをされたら次は私が止めるね」

「……ま、まぁ、必要ないとは思うけどな」

「どうして？」

「それを聞くか……」

「？」

少々ずれた答えに膝がカクリと崩れるが、なんとか耐え、再び歩きだす。

「あのな？　ああいうのは、大抵は女の子が標的なわけで、俺を狙うような男は……」

そこで浮かぶは一人の男、今まで幾度と無く愛を叫んできた男の存在を思い出す。

「……いるな」

「はっはっは！　そこに行くは迷える子羊のカナ吉じゃあ、ないか！！

さぁさぁ、迷うこと無く僕の胸に飛び込んできたまえ！！」

「そうそう。こんな奴……って……」

「あ、ジルさん、でしたよね。お久しぶりです」

「う、嘘だ……」

カナンの瞳が驚愕に固まり、一点を見つめる。

その先にいるのは、銀の長髪をみつあみにし、夏にも関わらず紫のロングコートを纏うとんちんかんな男。

ジル・ローディアスその人であった。

「おや、そんなに情熱的な瞳で見つめるなんて、カナ吉、遂に僕に……」

「違うから消えろ！！」

「やはりツンか……。しかし、それがいい！！

難攻不落と呼ばれるカナ吉の城壁をひょいとよじ登りデレさせる至高の瞬間を待ちわびているよ！」

「蹴落としてやるよ。この変人変態変質者！！」

「か、カナン君、それは失礼だよ……」

「そうだよ失礼だね。マイハニー傷ついた僕の心を癒しておくれ、その、か……」

「ぶっとべぇぇえええええええええええ！！！」

バッキャアアアア！！

「へぶっ！」

カナンの右足がジルの顔面にめり込んだ。

しかし、ジルは吹っ飛ぶどころか、その足を掴む……

「そうか……。カナ吉はSなのだね？

しかし案ずることはない！　僕は受けだからね！！」

「ヴィヴィオ、警察だ。警察呼べ」

「え……えぇぇ！？」

「警察だって？　そんなものに僕とカナ吉の愛が阻めるとでも思っているのかい！？

甘い。甘いよマイハニー！！　どれくらい甘いかと言うと、チョコレートに蜂蜜をかけて練乳をかけ、止めにグラニュー糖をまんべんなくかけるくらい甘いよ！」

「うぇぇ……甘ぁ……」

「か、カナン君、大丈夫！？」

ジルの言葉は、甘いものが苦手なカナンにとって、戦意を無くすに十分な一撃だった……

へなへなと崩れ、ヴィヴィオに肩を借りるカナン……

「マスターがダウンしたから私が代わりに問おう。

ジルさん、何故貴方がここにいるんだ？」

「ふむ。マイハニー０３番いい質問だね♪」

「わ、私もか！？」

「ちなみに、そちらの銀髪は０４番だよ？」

「私もですか！？　何故！？」

「世の女性は、全て僕に愛される……いや、美人は全て僕に愛されるためにあるのさ！」

「最低だな！？　女性全てならまだマシだが、美人に言い直した時点で人間として最低だな！？
清々しいくらいだよそれ！」

力を振り絞ったカナンにジルはとろけるような笑みを浮かべた……

「チョコレート蜂蜜練乳グラニュー糖味♪」

「おえぇぇ……」

「カナンくーん！！！」

言った言葉は最低ランクの代物だったが……
カナンに止めを刺した所で、ジルは、さて、と仕切り直す。

「宝石店ローディアスの露店商をやっているのだよ♪
みたまえ、この輝く宝石達を！！」

ジルがロングコートを大きく広げると、その中には眩い光を放つ色とりどりの宝石。

「わぁ……すご～い……」

「綺麗だな……」

「綺麗です……」

その輝きに、三人娘の視線は奪われ、釘付けになる。

そんな中、漸く復活したカナンが立ち上がった。

「で、本日のお値段は？」

「ふむ……一個、二千万と言った所だね♪」

「高っ！！」

「しかし、マイハニーが僕に口づけをして……」

「黙っとけド阿呆！」

バッキャアアアア！

「ふごっ！」

本日二度目の飛び蹴りをジルの顔にめり込ませ黙らせる。

普通はやったら犯罪になるが、ジル相手にそんなことは無視する

カナン。

「ヴィヴィオ、行くぞ」

「え、え？　でも、ジルさん、鼻血が……」

「行！　く！　ぞ！」

「でも、でも、あぁぁぁ……」

ヴィヴィオの左手を掴み、その場を立ち去るカナン。

こうでもしない限り、ジルの呪縛からは逃げられないがためにカナンはそうしたのだ。

「また来るのだよ～♪」

「は、は……」

「誰が来るか！」

はいと返事を返そうとするヴィヴィオを遮りカナンは怒鳴り返した。

あっと言う間にいなくなるカナン達にジルは苦笑する。

「また、はずれか……」

そう呟いて、暗い顔で座り込む。

二秒後、その目の前を女性が通った。

「そこを行く女性。貴女のような絶世の美女にこそ、この宝石は相

応しい……
少し、見ていかないかい？」

「え、あ、はい……♪」

「いや、相応しくないか……宝石が輝きを失っているね……君の魅力でね」

「まぁ……♪」

こうしてまた、ジルに落ちた女性がまた一人増えたのであった……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

機動六課隊長室

その部屋には、八神はやて、高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、そして、朱皇千春が存在していた。

ハルは、それぞれの前で各ロストロギアのこれまでにわかった能力の詳細をモニターに表示していた。

「この通り、軽く目を通していただいただけでも、相手の強さは充分に理解していただけたかと思います。
資料の方は、八神様のデータにお贈りしましたので、後程ご覧ください」

はやてとなのはが落ち着いている中、ただ一人フェイトだけは心配そうな顔をしていた。

「ハルさん、カナンはどうなったんでしょうか？

暴走しながらでも、ヴィヴィオ達を守ってくれてたのは見ました。
でも、カナンは？　無事なんですか？」

「テスタロッサ様、ご安心を。彼は無事ですよ。
ちょっと手荒い方法をとりましたが、止めましたし、ここに来る前に会ってきましたが、会話も出来ました。
後で念話でもしてあげてください。喜ぶと思いますから」

「はい……。カナンを助けてくれてありがとうございます」

「いえ、友人ですから」

ニッコリと笑うハルに、フェイトは漸く安心する。
そんなフェイトを、珍しい物でも見るかのように、なのはとはやてがジッと見ていた。

「な、何？　私、何かおかしなこと言ってた？」

「フェイトちゃん、そんなにカナンと仲良かったっけ？」

「うん。それを私も言いたかったんよ。
ちょっと前のフェイトちゃんなら、ヴィヴィオを危険な目に合わせただけでお話やったのに……」

なのはとはやての言葉に、フェイトは少し苦笑いを浮かべた。
反撃しようにも、事実なので否定出来ない。

「その、なんかね、カナンが気に入ったって言うのかな……真っ直ぐだし、言った事の理解も早い。
最近は……ちょっと可愛いなって思ったり……」

「にゃはは。凄い進展してるね」

「まさかフェイトちゃんがカナンをなぁ」

なのはもはやてもフェイトがカナンを認めることは無いと予想していたために、苦笑いしか浮かんで来ない。

そこに、ポットを持ったハルが現れ、アスラを起動、テーブル、イス、カップが現れた。

「「「うわぁ……」」」

アスラの機能を初めてみるメンバーは、目を丸くする。

そんなメンバーに、微笑み、紅茶を注ぐハル。

隊長室に紅茶の香りが漂いだした。

「いっそのこと、彼を弟子にでもしたらどうですか？

彼もテスタロッサ様のことは信頼しているようですし」

「カナンが私の弟子、か。聞いてみようかな？

なのは、はやて、どう思う？」

「カナンがフェイトちゃんの弟子？

確かに、フェイトちゃんならカナンに教えられる事もたくさんあるだろうし、悪くはないと思うよ？」

「そんな楽しそうなフェイトちゃんを私は止めるなんてできへんわぁ」

「ふふ。じゃあ、聞いてみようかな」

笑顔で団欒するなかで、琥珀色に輝く紅茶を一口……

「「「え……」」」

「気に入っていただけましたか？」

なのは達の口内に広がるのは、渋みが無い、スッキリとした紅茶。甘すぎるわけでも、物足りないわけでもない、絶妙な味、翠屋で働いていたなのはですら、飲んだことの無い上品な味に、メンバーはもう一口……

「あの、ハルさん？」

「はい。なんでしょう。高町御嬢様？」

「お……えっと、これは何て言う紅茶ですか？」

「これは、Ｈｅｒ　Ｍｅｊｅｓｔｙ’ｓ　Ｂｌｅｎｄ、意味は、女王陛下のブレンドという意味ですね。
“通常は”リッジウェイの物を指します」

爽やかに笑って通常はの部分を強調した。
つまり、この紅茶は、ＨＭＢを元にしたハルのオリジナルブレンドということになる。

「「「材料を教えてください！！」」」

三人とも、料理は得意な部類であり、はやてに至っては最高レベルに分類される。

そんな三人が、ブレンドの材料を知りたくないはずはない。

「企業秘密です♪」

「「「ちょっとだけ……」」」

「あっと、そろそろ時間ですので、御嬢様達の模擬戦のデータをとらないといけませんので。
無くなったら僕にお申し付けください。代わりをお持ちいたしますので♪」

「つまり、私らには見破れへんとの自信やね？」

「紅茶にはちょっと自信がありますから♪」

「ええやろ……世界各国の味を極めた私にわからへんもんはない……私が正体を見破ったる！」

「私も翠屋の娘として、見破ってみせるよ！」

なのはとはやてがやたら燃え上がるなか、フェイトは冷静だった。

「私は普通に楽しみますね」

「それが懸命かと」

モニタリングの準備をするハルが、フェイトに爽やかに笑いかけた。
すべての準備を終え、モニターに訓練所の景色が映る。
そこにいたのは、黒髪とピンクの髪の少女。

風で互いの服が靡くなか、相手を見据えて立っていた……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

機動六課訓練所。互いに見つめ会うは白姫クレア、キャロ・ル・ルシエ。

自信にあふれた表情はしていない。しかし、自分の力を試したい気持ちも確かにある。

二人に渦巻くその感情は、不安と、好奇心。

そう。二人は挑戦者。

クレアは、能力のわからない魔導師、そして、ロストロギア使いと、キャロは見たこともないデバイス使いとロストロギアを使う初めての戦闘。

二人にお互いの能力は知らされていない。

この訓練は、高め合うことはもちろん。初めて戦う相手にどこまで柔軟に対応出切るか、という目的もあるからだ。

「初めまして、白姫クレアと申します。
貴女のお名前をお聞かせ願いたいですの」

緊張の中、最初に切り出したのはクレア。

口調こそ落ち着いているものの、その内に流れる血が脈打ち、速いリズムを刻む。

「私はキャロ・ル・ルシエ、よろしくね、クレアちゃん」

「ニーナはニーナだよ～♪　クーちゃんって呼ぶね～♪
ニーナのことはニーナって呼んでね？
ニーナはね～、キャロちゃんのデバイスで～、とっても凄いの～♪」

「二、ニーナちゃん、落ち着こうね？」

「落ち着いてるよ～♪　ニーナはれいせいちんちゃくなんだ～。れいせいちんちゃくって言うのはね、クールってことなの～♪」

「あ、あはは……」

全くもって冷静沈着とは思えない行動に、キャロは苦笑いしか浮かべられない。

「元気なデバイスですの♪」

『そうですね。ああいうのは一辺泣かせないと静かになりませんし、泣かします』

「シ、シルフィス！？　何を言っているのですの！？」

『支離滅裂な行動をとる者は好きにはなれないもので……』

「あ、あはは……」

持ち前の毒舌をかますシルフィスに、クレアもまた、キャロと同じく苦笑いしか浮かばない。

「あ～！　失礼なデバイスだよ～！　頭の固いデバイスは私は大嫌いだよ！」

『別に貴女に好かれなくても結構、むしろ喜ばしいです』

「む～！　キャロちゃん」

『……マスター』

「『叩き潰しちゃおう？／叩き潰しましょう』」

「「あ、あはは、はは……」」

シンクロするデバイスの発言と、クレアとキャロの苦笑い。

「とにかく、キャロ様、よろしくお願いしますですの」

「うん。改めてよろしくね」

お辞儀の後、同時に展開されるは魔方陣。
クレアは白、キャロは桃、巨大に広がるのは召喚の印。
二人が瞳を閉じると輝きを増していく。

「我が名の元に、幾万の錬鉄よ、型を為せ。
我が願うは竜の型、聞き届けたなら顕れよ。
錬鉄融合。出でよ我が竜、シルフィス！」

「我が乞うは、蒼窮を走る白き閃光、我が翼となり、天を駆けよ。
来よ、我が竜フリードリヒ！」

互いに願うは自分の竜。
クレアの背後からは機械で作られた銀光を放つ機竜。
キャロからは、肩から飛び立ったフリードが白き巨大な竜と化す。
召喚によって生じた風をもろともせずに瞳を開く！

「「竜機召喚！／竜魂召喚！」」
『『Ｉｇｎｉｔｉｏｎ』』

クレアは機竜へと溶け込むように消え、キャロはフリードの背中へと騎乗する。

「『ガアアアアァァーー！！！！！』」

二頭の竜は、天に響くような咆哮をあげた……

Ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

祐希奈「後書き、召喚コーナー♪」

ドンドンパフパフ♪

カナン「まぁ、一言」

一同「文字数増えすぎ」

ヴィヴィオ「あはは。いくら何でも半日も進まないなんてね……」

メイデン「題名を変えるはめになったからな……」

レナス「さてさて、それは置いておきましょう。
本日のお客様は……祐希奈さん？」

祐希奈「待って、私が読むわ。本日のお客様は、リリカルなのはＢｒａｖｅ　ｓａｖｅｒｓから、目指せ第２のフラグ王、作者も応援ハーレムエンド！　普段は優しいお兄さん、でも何故か東吾さんにだけは手厳しい、女性だとしてもモテモテだったろう、二回目出演の草薙翔さんと、アリシア・テスタロッサさんよ♪」

翔「祐希奈ちゃん、頼むからもうちょっとマシな紹介してくれよ……。
これじゃあ、俺が女たらしみたいじゃないか？」

アリシア「事実なんだから仕方ないんじゃない？」

翔「あ、アリシア！？」

ちょんちょん

翔「ん？」

ヴ・メ・レ「翔さん……」

翔「あはは。ちょっと待ってくれよ？
はい、今日はラズベリーパイとちょっと変化をつけてパンプキンパイを焼いて見たんだ。どうかな？」

ヴ・メ・レ「わぁ……♪」

パクパクパク。

アリシア「うわ～、噂通りの速さね……
確かに翔の焼いたパイは美味しいけど、ここまで速いなんて」

カナン「しっかし……」

アリシア「あ、そうだ♪」

ジャキ！

カナン「へ？」

アリシア「飛んでけ～♪」

カッキィィン！

カナン「げふぁ！」

翔「アリシア！？　いきなり何をしてるんだよ！？」

アリシア「えっとね、一応ＫＤＧとして挨拶かな？」

祐希奈「ナイスよアリシアさん♪」

アリシア「えへ♪」

ドシャ……

カナン「何でいきなりフルスイングやっとるんですかコンチキショー！！」

祐希奈「やかましいぞボケ♪」

バッキャァアア！

カナン「へぶしっ！」

アリシア「お～あれが本家の蹴りかぁ、凄いね～」

祐希奈「やっぱり？」

翔「か、カナン？　首、大丈夫か？」

カナン「あ～はい。ここまで理不尽なゲストは久しぶりな気がしますけど……」

ヴィヴィオ「あ、あれ？　カナン君どうしたの？」

カナン「何でも無い……」

祐希奈「もう、カナンたら、地面這いつくばってお米を探しちゃって……」

メイデン「ま、マスター……」

アリシア「そんなに苦労してたんだね……よよよ……」

レナス「主……」

カナン「お前らあり得ない話をしてんじゃねぇよ！しかも、信じてんじゃねぇよ！！」

天然ズ「？」

カナン「あ～！！」

翔「誰も味方がいないのは辛いよな……」

アリシア「そんな辛いこともこれがあれば忘れられるかも」

祐希奈「じゃじゃーん、お米券♪　進呈♪」

カナン「いらねぇし！　ネタがあぶねぇ！」

アリシア「うぐぅ……」

カナン「それもあぶねぇ！」

祐・ア「ここ曲がる～♪」

カナン「最早意味すらわからねぇ！！」

翔「だ、ダメだ、お兄さん悲しくなってきた……」

ヴィヴィオ「か、翔さん大丈夫ですか？」

翔「あぁ、時が見える……」

カナン「あんたもかぁぁぁあああああ！！！」

翔「いや、カナンがツッコミたいのかなと」

カナン「ツッコミたくねぇよ！　もうツッコミ疲れたよ！」

祐・ア「嘘だ！」

カナン「もうやめてぇえええええええ！！」

ドサッ……

ヴィヴィオ「わ、わっ！」

メイデン「まずい。マスターが限界を越えた……」

レナス「急いで治療を！」

アリシア「あ～楽しかった♪」

祐希奈「正直、ネタを調べるのが疲れたわ」

翔「お、鬼だ……」

祐希奈「さて、と、お楽しみはこれからよ？　翔さん♪」

アリシア「祐希奈ちゃん。言われた通りこれでどうかな？」

祐希奈「上出来ね♪」

翔「え、何、その羊……」

祐希奈「ふふ♪」

アリシア「さぁさぁ、ずずいっと行こうよ♪」

翔「いや、待て、よるな！　うわあああああ！」

バサッ！　バサッ！

シープ翔「……終わった、俺の人生終わった……」

ヴィヴィオ「わぁ、翔さんが羊さんだよ～！」

メイデン「本当だ♪」

レナス「可愛いです♪」

ガバッ！

シープ翔「ちょっ、ちょっとヴィヴィオちゃん、メイデン、レナス！？」

ヴィヴィオ「もふもふ～♪」

メイデン「ふかふか～♪」

レナス「ほわほわ～♪」

シープ翔「なにその三重奏！？」

祐希奈「あ、翔さん、ちなみにこれ、ＢＳと繋がってるわよ？」

シープ翔「……ってことは？」

リニス「翔、これはちょっとお話の必要がありそうですね？まさか、翔にそんな趣味があったとは思いませんでしたよ？」

リイン「翔、残念です……」

シープ翔「ちょっと待ってくれ！　これは不可抗力で……」

ヴィヴィオ「大好きだよ～♪」

メイデン「私もだ♪」

レナス「はい。大好きです～♪」

リ・リイ「どこがですか？」

シープ翔「誤解だぁぁぁあああああああ！！」

アリシア「これは、罰ゲームが必要だよね～♪」

祐希奈「ってことで、翔さん頑張って♪」

パアアア……

シープ翔「何を！？」

祐希奈「強制召喚、顔パスバトラーズ！」

パアアア……

シープルミオ「この世に悪がある限り！」

シープタカト「問答無用情けもかけずに吹き飛ばし！」

シープハル「この世に善の人あれば！」

シープ翔「最高級の持て成しを致します！」

シープルミオ「我ら！」

カ！　カ！　カ！　カ！

バトラーズ「シープバトラーズ！ＮＥＯ！！」

シャキーン！！

ドサッ……

カナン「うわぁ……」

シープルミオ「いきなり呼び出されたと思ったらなんでいきなりバトラーズをしなきゃいけないんだよ！！」

カナン「知らねぇよ！　ノリノリだったじゃんか！」

シープルミオ「勝手に体が動いたんだから仕方ないだろ！」

カナン「仕方ないなら俺にキレるなよ！」

ムクリ……

シープタカト「取り合えず、カナン、殴らせろ……」

シープハル「そうですね……君なら大丈夫でしょう？」

カナン「なんかすっげぇ理不尽な暴力振るわれようとしてるんだけども！」

シープ翔「ぼ～～～～～～～～～」

ヴィヴィオ「か、翔さんの魂が抜けてるよ！」

メイデン「ど、どうすればいいんだ！？」

レナス「危ないです！　翔さんが逝きそうですよ！」

アリシア「うわぁ、凄い賑やかになっちゃった……」

祐希奈「ま、私にかかればこんなもんね。なんてったって、神だから！」

シープルミオ「こんな神絶対いらねぇ……」

祐希奈「ん～？　ルミオ～絞め殺されたいのかな～♪」

シープルミオ「とんでもありません！」

祐希奈「まぁ、この収集は私がつけとくわ。翔さん大変なことになっちゃったけど、大丈夫？」

アリシア「うん。あれでも翔は頑丈だからね」

祐希奈「じゃ、最後に私からのお土産、雲州みかんよ♪」

アリシア「あれ？　珍しく普通だね」

祐希奈「まぁね、実は、オレンジのお菓子にはまってて、翔さんに作って欲しいってのが本音なんだけどね？」

アリシア「成る程。でも、ハルさんは？」

祐希奈「なんか、ハル自身も翔さんの腕前が気になってるみたいなのよ」

アリシア「そういうことなら、貰って行くね。翔～帰るよ～？」

翔「コクコク……」

祐希奈「またね～♪」

パアアア……

祐希奈「で、後はこっちか、アンタ達！」

タ・ハ「む？／はい？」

ドゴッ！

カナン「がふっ！」

ルミオ「終わりか？」

祐希奈「そゆこと。じゃあ、ヴィヴィオ、よろしく♪」

ヴィヴィオ「では、また次回にお会いしましょう♪」

一同「ではでは～」

ガシャン！

ども。ヨシュアです♪
まずは東吾さん。召喚、ありがとうございました♪
なんかやっちゃった感がありますが、まぁ、ＬＶということで、お許しください。
さてさて、百話とＰＶ百万、どっちもえらいことになりました。
無謀な試みから始まった小説がここまで続くとは……
これも作者様方の支えと、読者様のお陰です。
ありがとうございます♪
さてこのＬＶ、終盤のような雰囲気を醸し出してますが、多分まだまだ先です。
正確には思いつきで話を入れるので予想ですが……
ダブルオー記念（どんなだ……）と言うことで、オリキャラを募集しようかと思います。
実はある人からの助言だったりしますが（汗）
六人～八人くらいですかね。
僕程度の文才で使いこなせるかはわかりませんが……
一応、お一人様一名のみ、（例外もあり得ますがその場合は僕が直接交渉をしますので）
先に申し上げておきますが、神などはお断りします。
ただ、カナンのように一時的に片鱗を借りたりはオッケーです。

名前
階級（使わないかもしれません）
年齢
性別
デバイス
容姿
ジャケット
性格（ここ重要です）

魔導ランク
希少技能、有か無
備考（ここも重要です）

ちなみに、ＬＶでは、性格はかなり大事かもです。
僕はノリの作者なので（笑）

後、気に入ったオリキャラは……やっぱり、おたのしみと言うことで、では、お待ちしています。

第二十六話　挑戦者（後書き）

さてさて、もうすぐ三部も終わりです。
ラストスパート、の前に、ＥＳを書いた後、海鳴を頑張ってきますので、少々お待ちください（汗）

第二十七話　竜騎と竜使い（前書き）

瞳が開く、それはセカイが震えた瞬間でもあった。

第二十七話　竜騎と竜使い

カナメ「前書き質問コーナー♪」

一同「わぁぁぁぁ」

カナメ「はい、皆さんこんばんは。ただいま復帰を望む声ナンバーワンのカナメちゃんです♪」

ジル「ジル・ローディアスとは……」

カナメ「はい、今回はカナン君達がいないためにこの二人でお送りしますね」

ジル「僕の……」

カナメ「後書きに関しては、一時的に呼び戻すのでご心配なく～♪」

ジル「さきほ……」

カナメ「さて、文字数の関係上ちゃっちゃと行きます。
あっと、いい忘れましたが、感想にて書かれたネタは、カナン君達が復帰したら使いますので♪
流石に五歳時をいじめるのは可哀想ですしね。私は好きだったりしますが♪
はい、ジルさん、何かご用ですか？」

ジル「ふぅ……取り合えず君を抱くと……」

カナメ「雪月花！」

カッキーン。

ジル「……」

カナメ「女の子になんてこと言うんですかジルさん。相変わらず変態さんですね♪」

シュウウウ……

カナメ「あ、あれ？」

ジル「僕の愛の炎はこの程度で消えはしないのさ！」

カナメ「終式剣舞　蒼覇天蓮華♪」

ジル「し、新わ……ざ……」

ゴオオオオ！　チュドーーーーーン！

カナメ「私は容赦しませんよ♪　さて、前回の質問、カナン君の八式はＥＸか否かの答えは、テスタメントさん的には、擬似ＥＸランクらしいです。
と、いうことは……

（祝）カナン君ちょびっとＥＸ化取得♪

ですね♪
まぁ、今のカナン君では一瞬の概念破壊が精一杯なので、実質ラン

クは変わりません」

ジル「さて、次の質問は僕が読んであげよう！
この質問の読者、僕に服従を……」

カナメ「そういう発言をすると飛ばしますよ♪」

ジル「こほん……
『フェイトがカナンを弟子にといってましたが、強さ的にはカナンの方が強いのでは？』
ふむ。強さとは、力だけにあらずということだね。
彼らは不安定で穴だらけだ。それを埋めるのもまた、師匠の役割なのだよ」

カナメ「さて、ジルさんが珍しく答えたことでブリザードが起きないことを祈りつつ」

ジル「リリカルヴィヴィオ、始まるのだよ！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

天への咆哮、後に互いに放つは衝撃波。
巨翼を羽ばたかせ、風を切り裂き、天に舞い上がるのは白竜、フリードリヒ。
機竜は地上でそれをただ睨むのみ……。
ただ、自分の主からの指令を待つ。そして……。

「シルフィス！」

「フリード！」

「『ガァァアアアアーーー！！』」

咆哮、次いで口内に集束される魔力。

その魔力だけで、計測されるランクはＡＡＡランク。

「「シャイニングブラスター！／ブラストレイ！」」

二人の口上と同時に放たれる閃光。

片や純白、機竜シルフィスと白姫クレア。

片や紅蓮、白竜フリードリヒ。

威力は同等、勝敗はつかずに砲撃は終わらない……

しかし、フリードとは違い、機竜には他に攻撃手段がある。

そう、シルフィスにはグラップラーアームと呼ばれる四つの腕があった。

「ラスターカノン！」

『マキシマムシュート！』

機竜から広げられた翼に赤い粒子が集束、即座に四つの腕に溜まるは巨光！

従来の光弾に比べ、さらに圧縮、魔力を注ぎ込んだ砲撃に相当するの白球！

「っ！」

砲撃を放っているフリードには動くことは出来ない。

つまり、騎乗しているキャロもまた然り。

迫り来る四発の光弾を完全に防げるほど強固な障壁はキャロにはない……

「まっかせて～♪」
「ニーナちゃん!?」

そう。キャロには……。
だが、ニーナにはそれが出来る故に自信に満ちた表情のまま、ニーナは前に出る。

「セレクト、ん～と、ウィンドゲート、クローズ♪」
「え？」

ニーナが指を鳴らす。
瞬間、光弾の前に集束する風の門。
直撃。光が弾け、空気を揺らすが、風の門は微動だにせず光弾を耐えきった……

「なら、こっちを押し返すだけですの！」
『出力最大！』

光弾を防がれたと知るや、砲撃の出力をさらに上げ、直にフリードに叩きつけようと作戦を立て直す。
クレアの魔力と、シルフィスの性能が加わった砲撃はさらに太く、強力へと変貌を遂げる。

「ガァァ……」
「フリード！」

あまりの出力に、フリードは低く唸る……
砲撃対決の均衡が崩れ、白光が紅蓮を押し返す！

「ニーナちゃん、一旦防いで時間を稼いで？」

「ガァァ……ァァ…っ！」

しかし、フリードは抗議を上げるようにまた唸る。

「フリード？」

「ふーちゃんカッコいい♪　竜としての誇りがあるからあんなヘンテコな竜には負けたくないんだって～♪」

「ニーナちゃん、フリードの言葉が？」

「わかるよ～♪　ニーナは凄いからね♪

ふーちゃんの名誉のためにも、ニーナ、支援しちゃうよ～♪　セレクト、ブーストゲート、オープン♪」

フリードの口前に、環状魔法陣が展開される。

ブラストレイが通過した瞬間に威力が数倍に膨れ上がり、再び白光を押し返す！

「シルフィス、頑張るですの！」

「フリード、もう少しだよ！」

「『ガァァアアア！！』」

クレアとキャロの願いに応えるように機竜と白竜は咆哮をあげる。

さらに、白光はより強く、紅蓮はより紅く染る……

放たれる砲撃が互いの中心で膨れ上がり、球体に変化。

巨大に膨れながら、尚且つ光を放ち出す……

「「っ！」」

眩い閃光……

一瞬の空白、しかしそれは、エネルギーが爆散する予兆でしかない……

「「プロテクション！」」

プロテクションを展開、待っていたかのような暴虐なる破壊の風が、プロテクションを軋ませ、歪ませる……。

「シルフィス、行くですの！」
『突っ込みます！』

「フリード、ニーナちゃん、来るよ！」
「は～い♪」
『ガァァァ！』

しかし、クレアは光が収まると暴風にも関わらず、機竜の巨翼を広げ、飛び上がる！
迎撃すべく、キャロもフリードに指示を出し、航空戦へと雪崩れ込む。

「ラスターカノン！」

接近しながら放たれる光弾の超速連射。
視界一杯に広がる光、しかし、フリードは、回転をしながら風を切り、巨体とは思えぬ機動で光弾の雨を避けていく。
そして、急転換！

「ブラスト……」

「遅いですの！」

言葉を紡ぐ前にその眼前に現れた竜、機竜以外の何者でもない。
白光を放つ尾が、既にキャロの目の前に迫っていた……

「っ！」

回避不能、防御不能、完全に不意打ちを受けたキャロは、せめての盾と腕を頭に上げ。

「さ～せない♪」
「え？」

ニーナの明るい声を聞いた……
瞬間、巨大なベルカの魔方陣が展開、機竜の尾を受け止め、揺るがない……。

「だったら！」
『ぶち抜きます！』

即座に反転、機竜の口内から放たれるはシャイニングブラスター。
至近距離から放たれる砲撃に、流石に軋みを上げる……。

「うわ、やるねぇ。あの二人～♪　ニーナの防御を軋ませるなんてちょびっとだけ凄い♪」
しかし、ニーナの顔は笑ったままだ。
そんなニーナに、キャロは少し焦りを感じた。
ニーナの展開したプロテクションは、既にヒビが拡がり初めていたからだ。

「二、ニーナちゃん、早く逃げないと抜かれちゃうよ」

「何で逃げるの？」
「何でって……それは……私はバックスだから……」
「それ、言い訳だよ。今は一対一の模擬戦。ポジションなんて滅多にとれない。
逃げる理由は何？　危ないから？　怖いから？　さっきも言ったけど、これは模擬戦だよ？　自分の力、目一杯試せるんだよ？　なのに、どうして逃げるの？」
「……」

「『はぁぁあああ！』」

悩むキャロ。しかし、その間にも、時間は止まらない……
ニーナの障壁はヒビが隅々まで拡がり、すでに消滅の危機を迎えている……。

「ニーナ、同調した時にキャロちゃんが今までどれだけ頑張ってきたか、見たんだ。
キャロちゃん、ここの皆に迷惑かけないように、頑張ってたの見たの。
あんなに頑張ってたのに、何で逃げるの？」
「ニーナちゃん……」

瞬間、砲撃に撃ち抜かれた障壁は砕け散り、爆煙が舞い上がる……

「通った、ですの？」
『恐らくは……』

クレアは、一旦距離を取り、様子を見る。
煙は、徐々に風にさらわれ、未だに羽ばたく白竜の姿をクレアは捉える……。

「そうだよね。これは模擬戦、自分の力を怖がる理由は何処にもない……」

『そ～そ～♪　思いっきり頑張ればいいと思うよ♪』

そのフリードの頭上に、抜き身の短剣を逆手に構えるキャロ。

その姿は、深緑、何処か、スッキリとした笑みを浮かべていた。

「失敗しちゃったらごめんね？」

『大丈夫、大丈夫～♪　その時はニーナがカバーするよ～♪』

「ありがとう、ニーナちゃん」

会話の後、キャロは改めてクレアに向き合った。

クレアも攻撃は行わず正面から見据える……。

「クレアちゃん、ちょっと遅くなっちゃったけど、これから私達の全力、見せてあげるね」

「やっぱりまだ上があったですの？

面白いですの……。正々堂々、受けて立つですの！」

守りを固めていたキャロからの初めての攻勢宣言に、クレアも高揚感を感じていた。

『ニーナとユニゾンしたキャロちゃんは無敵なの～♪

クーちゃんはともかく、そのデバイス、けちょんけちょんにしてあげる～♪』

『貴女のような小娘とユニゾンせねばならないとは、ロードの方もお気の毒ですね』

『むぅ～！　泣いて謝らせてやる～！』
『残念ながら私は泣けませんが何か？』
「「はぁ……」」
相変わらずの相性の悪さに二人揃って溜め息をつき、仕方がないことだと切り替え、小休止を終わらせた。
「シルフィス、ウィングセイバーですの」
『了解です』
巨翼に魔力刃が展開され、力強く羽ばたかれる……。
「フリード、来るよ……」
『グゥルル……』
キャロは短剣をしっかりと握り、瞬きすらせずに機竜の動きを観察する。
張り積めた空気が流れ、クレアとキャロの意識は完全に相手へと向き、雑念は消え去る……。
一度、二度……三度目のはばたきで二頭の翼に力がこもる！
「「突撃！／回避！」」
『『ガァァアアア！』』
破られた均衡。しかし、フリードはシルフィスが到達するより尚速く、フリードはさらに上空へと舞い上がる。
シルフィスが反転を終えるころには、フリードは遥か高みへと上

っていた。
「逃がさないですの！」
だが、シルフィスの速度は単純な直線だけなら音速を越える。
いとも容易くフリードに追いすがる。
「シャイニングブラスター！」
フリードの背後から機竜が砲撃を放つ！
しかし、旋回が速いフリードは、落ちるようにして回避。
『ガァァアア！！』
機竜の首が振られる……。
その行動を予測していたフリードは、さらに右へと回転しながら砲撃を避けていく……。
「追撃……」
「『光に仇なした者、心せよ。汝は咎人、対なる力にて裁かれるであろう』」
「っ！」
再びフリードに追撃をかけようとした機竜の“上”から声が、空全域に響き渡る……。
クレアが見上げた先には、半透明な翼を背中に広げ、飛んでいるキャロがいた……。
「『闇よ、咎人に裁きの鉄槌を下すがために、我らが手に舞い降り

ん……』」

さらに繋がる呪文。

そしてクレアは見る。キャロの右手に持つ、アゾットの剣に纏われた暗黒の力を……。

「シルフィ……」

一度距離をとろうとした瞬間、激烈な衝撃が機竜を襲う！

そして、何が起きたのかもわからないまま、機竜はまっ逆さまに地上へと墜落していく……

「っ！　シルフィス！　体勢の立て直しを！」

『腕部、脚部、右翼、中破。現状、立て直しは不可能です』

「何が……ぐぅっ！！」

言葉の途中、機竜は地面へと叩きつけられ、クレアの言葉は遮られる……。

もうもうと舞い上がる土煙。しかし、キャロは止まらない。

「『シューティングレイ！』」

キャロの魔力と、ニーナの魔力が合わさり、３０近くのスフィアがキャロの前面に展開される。

「リカバリー……ですの」

『了解です』

痛みを耐え、損害箇所を修復、翼を広げ飛び立つ。

クレアは相手が何の手札を持つかわからぬまま、再び大空へと上

がる……。

「『シュート！』」

「まだっ！　ウィングセイバー！」

加速に乗る前に降り注ぐキャロのスフィアが機竜を襲う！
小回りが効かない機竜は、魔力刃を展開し、回転、強引にスフィアを叩き落とす！
しかし、その機竜を巨影が覆う……
今まで回避に徹していたフリードだ。

『オォォオオオ！』

「プロテクション！」

機竜の頭から背にかくて障壁を展開、殆ど同時に降り注ぐはブラストレイ！

「うぁぁあああ！」

クレアの叫び。プロテクションが輝きを増し、紅蓮の炎から離脱、音速超過でフリードを振り切る！

「はぁ…はぁ…データは……」

しかし、クレアの消耗は激しく、息は荒い……。
リカバリー、魔力刃、プロテクションパワード。
息つく暇もなく使用された魔法の負担故だ。

『損害、貫通の類いの魔法だと予測されます』
「かん、つう……？」
『はい』

キャロは召喚魔導師であり、キャロ自身は貫通などの破壊力のある魔法は習得してはいない。
しかし、事実、キャロは使用した……。

「ふふ……」
『どうされましたか？』
「面白いですの……」
『はい？』

慣れない魔法を使って向かってくるキャロに、クレアは嬉しくなった。
何故なら、キャロはクレアを対等以上と認めた。
だからこそ、勝つために制御出来るかわからない魔法で賭けに出ている……。
ならばと思う。

「目には目を、歯には歯を……」
『まさか……』
「賭けには賭けで！　一か八かで全力で行くですの！」
『……』
「ブースター全開ですの！」
『知りませんよ？』

やや呆れ気味にシルフィスは承諾する。
そして、左右巨翼に噴射孔が出現、白い光を放つ……。
暴風が吹き荒れ、セッティングされたビルの窓ガラスが音を立て

て割れていく……
その様子を、空からキャロとニーナ、さらにもう一人、キャロの肩に乗っている、悪魔のような翼をはやした、ツインテールの少女が見ていた……

「多分、クレアちゃんの限界に近い力だよね……」
『うん。ニーナもそう思う。だって、魔力集束が上手くいってないもん』

真剣に二人が話す中、一人、拳を握りしめる少女。

「いいねぇ！　あたしは好きだぜ。必殺技ってのは、制御出来ない方が面白いってもんだ！」
『あのね～！　そんなのだから同調が上手くいかないんだよ？』

「うっせぇ！　だいたい、何であたしがこんなのに合わせなきゃいけねぇんだよ！」
『召喚に応じたんだからキャロちゃんは、貴女のロードなの！』

「こんなちんけな奴がロードなんて、あたしは認めねぇ！」

『キャロちゃんをちんけとかいっちゃダメー！　それに、ちんけだとしても応じたのは貴女なんだからキャンセルは出来ないの～！』

「知るか！　認めねぇもんは認めねぇんだよ！」

プイッとそっぽを向く少女に、キャロは苦笑いをする。
その間にも、爆発的な力を集束し、今にも突っ込んできそうな機竜を警戒しながら、キャロは少女に言う……。
「じゃあ、クレアちゃんと同じで、賭けようか」

「はぁ？」

「私が、貴女を呼び出せるレベルの召喚魔導師なのか、そうじゃないのか、審判は貴女に任せるから、今だけ力を貸して？」

「……ぜってぇ認めねぇかんな……」

「うん。頑張るね」

「認めねぇってんだろ！？」

噛みつく少女をキャロは笑っていなす。
そして、短剣をゆっくりと構えた……。

「話しは、終わったのですの？」

「うん。やっぱり待っててくれたんだ？」

「いえ、実際、姿勢制御でいっぱいいっぱいなだけですの……」

つまり、クレアはまさに限界ギリギリ。
キャロには見えないが、冷や汗が止めどなく流れている。

「いく、ですの！」

「『勝負だよ！』」

「けっ……」

機竜が加速、踏みきりと同時に辺りのビルが崩れ落ちるほどの爆風が機竜から放たれる！
一瞬で音速の壁を越え、キャロに迫る！

「セレクト、ディメンジョンゲート、クローズ！」

短剣を突き出した先が歪む……。
空間が歪み、キャロまでの道のりを閉じたのだ。
しかし、クレアは突き進む、ただぶち抜くために！

「ソニックセイバァァァー！！」
魔力刃が歪みに叩きつけられ、その歪みごと切り裂かんと突き進む！
だが、その背後に、現れるフリード。動きの停止した機竜を狙い打つ！

『ガァァァァァ！』

容赦無しに放たれた紅蓮。
しかし、直撃の瞬間、機竜の姿が消え去った……。
否、ブースターの方向を変え、遥か上空へと飛び上がり、回避していた。
機竜を捉えていたキャロは空を見上げる。
上空では、機竜が宙返りを行い、突撃をしかけようとしていた。
対して、キャロは短剣を空へと向ける。
今、キャロは逃げるつもりなど更々無かった。

「『セレクト、ダークネスゲート、オープン！』」

キャロの眼前に開くは闇の扉、その前にいるのは悪魔の少女。

「我の前に神が流せし嘆きの雨を……ブラッドレイン」

機竜へと向けられた手。

同時、背後に開かれた扉から暗黒の雨が天へと登る。

正確には、雨ではなく、極小の刃だ。

降れれば一瞬にして切り刻まれることは容易に予測できた。

「はぁぁぁっ！」

しかし、クレアは全く躊躇せずにその刃の雨に突っこんだ！

前面にプロテクションを展開、魔力刃を翼に纏い、回転しながら雨の中を突き進む！

機竜によって弾き飛ばされた刃が地上へと落下、まさに血の雨となって降り注ぐ。

「ちっ……これなら……っ！」

『グゥルル……』

少女が左右に手を延ばす。

極小だった闇が固まり、背後の闇の扉の中から、獣のような唸り声が響いた……。

その扉の中から飛び出したのは黒き獣……地獄の番犬として知られるケルベロス……

「食っちまえ！」

『ガァァァ！』

少女の指示に従い、ケルベロスは正面から突撃し、機竜に牙を向く！

「犬は所詮犬ですの！」

しかし機竜は止まらない。グラップラーアームを構え、ケルベロスの突進を受け止める！

激烈な衝撃が風となり、空を切る！

『ガァァア！』

咆哮と共に二つの頭が機竜の腹部に噛み付き、引きちぎる。

しかし、機竜は生物ではない、痛みを感じぬその体は、苦痛に動きを止めることはない……。

「クラッシャーファング！」

逆に、機竜がケルベロスの首に牙を突き立て、片方の首を食い千切る！

ケルベロスからは、鮮血のような闇の飛沫が吹き出す。

『ギシャァアア！』

「止め！」

『シャイニングブラスター！』

苦しむケルベロスに容赦なく噛み付いた部位から砲撃を撃ち込み、消滅へと導いた……。

「くらえぇぇぇ！」

そのまま、機竜の持ち味である砲撃の薙ぎ払いを少女とキャロへと撃ち放つ。
しかし、砲撃はキャロとニーナの堅牢な防御魔法を貫けず、フリードは高度な旋回により避けきった。

「ちっ！」

だが、それで良い。クレアの狙いは攻撃の担い手である少女を落とすことにあった。

「感謝なんてしねぇかんな……」
「なっ！？」

そんな声が、機竜の頭上から響き渡る……。
砲撃の斜線上にいた筈の少女だった……。
何故、少女が頭上にいたのか、それはキャロとニーナが召喚魔法で少女を指定の座標に飛ばしたからに他ならない。
そんな理由はクレアにとってはどうでも良い。
少女が頭上に現れた、それが意味するのは機竜は危機的状態ということだからだ。

「終わらぬ嘆きは人界をも呑み込む激流となろう……ブラッディストリーム」

詠唱が終わると同時に降り注ぐのは、無数に枝分かれを繰り返す闇の河。

「きゃぁぁあ！」

一本一本が高い貫通性を備えており、高い強度の機竜でさえ容易に刺し穿つ。
ほとんど地面に縫い付けられるようにして墜落した……。
唯一の救いは、詠唱の間があったため、直撃は避けられたくらいである。

「シルフィス、破損部分を廃棄、リカバリーで復帰するですの！」
『了解、廃棄します』

縫い付けられた部位を任意に破壊し、リカバリーを施し立ち上がる。
立ち上がった瞬間、クレアは表情を驚愕に染める。

「あれはっ！」

クレアの視線の先、キャロが再び巨大な魔方陣を展開していた。
その術式はミッド式、フリードの眼前に広がっていた……。
そして、風に乗せて、詠唱がクレアの耳へと届く……

「『天地貫く業火の咆哮……』」

結界の中が揺れる。キャロから吹き出す強大な魔力に、耐えきれない建造物は崩壊するのみ。
あまりの魔力にクレアは震える……
しかし、恐怖からではなく、武者震いだった……
怖くて、嬉しくて、楽しくて、ない交ぜになった感情から導き出された答えは、やはり一つしかない。
“全力で応える”
ただ、それだけしか浮かばなかった。

「フルドライブ、ですの！」
『お待ちください！　アレはまだ制御が……』
「何も動くなんて言ってないですの。固定して集束砲を一発撃てれば十分ですの」
『……了解しました。フルドライブ開始』
機竜の瞳が紅く光る……。
最大まで広げられた翼から、紡錘型のパーツが展開、それが射出され、機竜の左右に円を作り上げる……。
「はぁぁぁぁ……」
翼と円が、周囲にある魔力を吸収し、機竜の口内へと集束していく……
やがて、口内に収まりきらず、眼前にまで膨れ上がる光弾。
「『遥けき大地の永遠の守り手。我が元に来よ、黒き炎の大地の守護者。龍魂招来、天地轟鳴、守護者たる力を我が竜に……』」
『ガァァァァ！！！！』
咆哮。フリードの体は黒へと変わり、鎧のような堅き皮膚を纏う……。
ヴォルテールの魂と力をフリードに憑依させる、キャロの新しい切り札。
クレアもキャロも、少し制御を失敗すれば、暴発間違いなしの魔力、それを二人は制御していた……
「すげぇ……」

少女は何をするでもなく、ただ、二人の結末を空から見守っていた。
いや、見守ることしか出来なかった。
それほどまでに二人の魔力は凄まじく、邪魔をすることを許さなかった。
不気味なほどの静けさはやがて終わりを迎える。

「『大地の咆哮！（ギオ・エルガ）』」

「イノセントフレア！」

上空、地上、そのどちらからも放たれた巨砲！
片や、燃やせぬ物など存在し得ない紅蓮の業火。
片や、飲み込めぬ物など存在し得ない浄化の焔。
燃やし尽くそうと、飲み込めもうと互いが互いに反発し、削り合う！
そのまま終息へと向かう。

「ラスターーーっ！！！」

筈の集束砲の魔力を、さらに吸収、普通なら、放てる筈の無い光弾をクレアは作り出していた……

「カノーーーン！！！」

何も言えずに、キャロはその光弾の直撃を受け、地上へと落ちていった……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ん……」

ゆっくりとキャロの瞼が開く。

「ここは……」

埃ひとつない、清潔な空間。医療機器が置いてある所から、キャロは施設に運び込まれたことを認識する。

それを待っていたかのように、施設の扉が開き、クレア、ニーナ、フリード、そして少女が入室する。

「あ～♪　キャロちゃん気がついたんだね～。おはよ～♪」

「キャロ様、おはようございますですの」

「きゅくる～♪」

「……」

「うん、おはよう。ここにはクレアちゃんが運んでくれたの？」

「はいですの」

「そう。ありがとう」

キャロはクレアにお礼を言い少女と向き合った。

当の少女は相変わらず不機嫌そうな顔をしていた。

「私、負けちゃったけど、どうだったかな？　貴女のロードとして、

認めてもらえた？」

「あったりまえだよ～♪　これで認めないなんてそんな……」

「認めねぇよ……」

キャロを認めない。そう、少女は言った。

瞬間、満面の笑みだったニーナが少女をキッと睨む……

「どうしてそうなるの？　キャロちゃんの力は充分貴女を扱うのに問題無かった。

ミスだって無かったし、認めない要素なんてどこにもないよ！」

「うっせぇ！　黙ってろドチビ！」

「ど、ドチビ！？　身長なんて大して変わらないもん！」

「あたしがドチビつったらドチビなんだよドチビ！」

「使い魔なのに管制人格に反抗するなんておかしいよ！」

「うっせぇな！　ドチビに従う義理はねぇんだよ！」

「またドチビって言った～！」

「ニーナちゃん、ちょっとだけ我慢して？」

「キャロちゃん……うん」

喧嘩を始めたニーナと少女をキャロは止める。

ニーナもキャロには従い、肩へと移る。

少女はキャロを睨み付けるように見ていた……。

「不合格なら仕方ないよ。契約を解約して、貴女には休んでてもらうから、それで……」

「待てよ……」

「？」

キャロの言葉を遮り、若干赤くなる少女。

「そこのドチビのせいで邪魔されたけどな、あたしはお前のことは認めねぇ……
けど……、な、なんかお前ら、危なっかしいから、あたしがついてやるよ……
勘違いすんなよ？　楽しそうだからとかそんなんは一切ないんだからな！」

「えっと、それってどういう……」

「だぁーもう！　一緒にいてやるってんだよ！」

「「……わぁ♪」」

最後は最早怒鳴りながら少女はこう言った。
数秒後、キャロとニーナの表情が明るくなる。

「うん、うん！　これからもよろしくね！」

「よろしくね～♪　ニーナのことお姉ちゃんって読んで良いよ～♪」

「うわっ！　何すんだよ！」

少女の体をキャロが抱き上げ、ニーナは少女へと突進するように抱きついた。

真っ赤になりながら少女はもがくが解放されない……

「離せ、離せってんだよ！　てめぇは抱くな！　てめぇは抱きつくな～！」

「「あはははは♪」」

「笑ってんじゃねぇよ！　やっぱ契約すんじゃなかったぁぁあああ！！」

ベッドから飛び出し回転しながらキャロ達は部屋をくるくると回る。

「一件落着ですの♪」

『やれやれ、ですね』

「きゅくる～♪」

そんなキャロ達をクレアはニッコリと笑っていつまでも見ていた

……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

隊長室

『そうだ。ね、貴女、名前を教えて欲しいな？』

『はぁ？　んなもんねぇよ。あたしはニーナと違って、ただの使い魔だ。
名前をつけてくれるような奴、いなかった……』

『悲しいですの……』

『じゃあ、皆で貴女の名前を皆で考えようよ？』

『良い案ですの♪』

『賛成だよ～♪　何がいいかな～？
え～と、はいは～い♪』

『はい、ニーナちゃん』

『デビルちゃん♪』

『ちょっと待てドチビ！　そのまんますぎるだろうが！』

『じゃあ、悪魔ちゃん？』

『尚悪い！』

『サタンちゃんは？』

『まず見たまんまの所からでやがれ！』

『デスマスタ～♪』

『消し飛ばすぞてめぇ！』

『よく考えると、名前って考えるの難しいかも……』

『アルティス、なんてどうですの？』

『……ドチビよりはマシだけどな、響き的に綺麗すぎるだろ』

『アルちゃんかぁ、可愛い名前だね♪』

『ドチビ！　まだ決まったわけじゃねぇぞ！』

『ア～ルちゃん♪』

『うっせぇ！　黙れ！』

『でも、悪くはないんじゃないかな？』

『まぁ、な……』

『じゃあけてーい！』

『何でてめぇが仕切ってんだドチビーーー！』

施設からの映像を見て、フェイトとハルは笑みがこぼれた。

ちなみに、はやて、なのはは未だに紅茶の成分を研究中である。

「キャロ達、上手くいったみたいですね」

「はい。お互いに高め合えたようですから、後は……」

《失礼します》

隊長室にそんな声が響いた。

その声を発したのは、ティアナ、スバル、エリオ。

緊張した面持ちで敬礼をして立っていた……。

「良いタイミングですね。皆様、準備はよろしいですか？」

《はい！》

「では、行って参ります、モニタリングお願いいたしますね」

「はい。こっちは任せてください。スバル、ティアナ、エリオ、頑張ってね？」

フェイトに全員が敬礼を返し、先に出たハルへと続く。

「ハル、さん？」

「はい。なんでしょう、ナカジマ様？」

「何で三対一なんて模擬戦を……」

「模擬戦などという考えは捨ててください」

「え……？」

ハルの言った意味がわからず、スバルは立ち止まる……。

それは、エリオもティアナも同時だった……。
ゆっくりと振り返ったハルの眼光は鋭く、先程までの雰囲気は一切無かった……。

「これから行うのは、戦闘です。まだお若い貴女方はその経験がまだ足りない。
故に、僕はここに呼ばれて来ました。これから貴女方には濃い戦闘経験を積んでもらい、状況判断能力の底上げを行います。
骨の一本や二本は覚悟してください以上です」

一方的に言い付け、ハルは訓練所へと歩いていった……
ハルの様子から冗談ではないと悟り、スバル、ティアナ、エリオの三人は、戦場に赴くかのように表情を引き締めてハルへとついていくのだった……

Ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

祐希奈「後書き、召喚コーナー♪」

わぁぁあああ！

祐希奈「おしまい♪」

ガシャン。

５カ「待てぇぇい！」

祐希奈「ん～ボク～？　どうしたの～？」

５カ「いや、もうそのネタ良いです……」

ヴィヴィオ「さてさて、今回も始まりました後書きコーナーの時間です」

祐希奈「ふふ……今日のゲストは凄いわよ……」

５カ「へ？」

祐希奈「ナデ○コからやってきたアッキーよ！」

パンパカパーン♪

昶「……勝負だ！」

祐希奈「さて、バカな人はほっといてと」

昶「ちょっ！　振っといてスルーとか！」

祐希奈「今回のゲストは、リリカルなのは、Ｃａｌｉｂｕｒ＆Ｐｈａｎｔｏｍから神藤昶さんよ」

昶「またスルーか！？」

祐希奈「はい終わり♪」

ガシャン……

昶「んなわけあるかぁぁあああああ！」

ドゴーン！

祐・ヴ「え？」

昶「何だそれ！？　コタツだしてミカン食ってる！？」

ヴィヴィオ「あれ？　終わったんじゃ……」

祐希奈「全く、出番が欲しいからってや～ね～♪」

昶「俺はゲスト……」

５カ「アレアレ」

昶「アレ？　ここに来た時点でゲストの概念は破壊されます、ご注意をって……」

祐希奈「じゃ、そゆことで」

昶「だから待てって！　ほら、ちゃんとオレンジで作ったケーキ持ってきたから」

ヴィヴィオ「わぁ♪」

メイデン「何だ、ケーキか？」

レナス「私も食べます♪」

昶「な、なんだ、どっから出てきた？」

祐希奈「ま、そんなことより、昶さん、知識不足ね」

昶「へ？」

祐希奈「見なさい！」

昶「はっ！」

ヴ・メ・レ「ごちそうさま♪」

昶「はやっ！」

祐希奈「あの子達がいることを想定して、ここ、ＬＶではケーキ２０ホールは常識よ？」

昶「２０て…」

５カ「まぁまぁ、しょうがないっすよ。
昶さんはここに来るのはじめてなわけですし」

昶「っていうか、この子、誰？」

祐希奈「カナンよ？」

昶「……俺は五歳児に敗北宣言をしてたのか……」

５カ「いやいや、違うから！　俺は１３っすよ！」

昶「よしよし、ツッコミとしての成長を楽しみにしてるな？」

5カ「いや、だから！」

？「夏楠く～～ん！」

5カ「まさか……」

奈津美「大好き～～～♪」

ガバァッ！

5カ「ちょ、母さん、今は後書き！」

奈津美「あははは～♪　ちっちゃくて可愛い～♪」

グルグル

5カ「うわぁぁっ！」

昶「はは。平和だなぁ♪」

祐希奈「平和ね～♪」

ヴィヴィオ「平和だね～♪」

ズズズー……

5カ「昶さん、昶さん！　のほほんとしてると何もしないまま時間が！」

奈津美「そだ。シオン君も呼んでお風呂に行こっか♪」

５カ「待てぇぇい！　昶さん、ヘルプ！」

昶「はは。いいんじゃないかぁ？」

ほわぁぁん

５カ「なんか抜けてる！？」

祐希奈「ふふ……このタカト＆ハル製、超リラックスティーにかかればこんなもんよ！」

ハル「いやぁ、頑張りました」

昶「あははは～」

５カ「何してくれとんじゃいコンニャク＆ブラウニー！」

昶「祐希奈様、ばんざ～い」

祐希奈「さらに、前回の未来さんの魂抜きの応用でパーフェクトな仕上がりよ♪」

タカト「ああ。俺とハルに抜かりはない」

５カ「自信もって言うことか！？　この際なんでタカトさんがいるのかはスルーだ！」

昶「スルー、それは人を傷つける行為だ……

よって、カナン、お前を叩き斬る！」

祐希奈「洗脳もバッチリよ♪」

５カ「いい加減にしような！？　キャラ崩壊させすぎだろ！？
もう、昶さんであって昶さんじゃねぇよ！」

昶「俺は昶だ。それ以上でもそれ以下でもない」

５カ「クールだった昶さんがネタを使い出してるだろ！
どうするつもりだ祐希奈！」

祐希奈「いいんじゃない？　ティアナさんにしばかれれば」

５カ「ものすっげぇ適当に流しただろ！？」

祐希奈「この世の男の生命なんて、私の命に比べればゴミクズに等しいわ！」

昶「イエス、ユア、ハイネス！」

５カ「昶さぁぁぁん！　頼むから戻ってきてくれぇぇえ！」

ヴィヴィオ「奈津美さん、シオン君を連れてきました♪」

５シ「ちょっと待て！　ただでさえウチがカオスなのに！」

奈津美「わぁ、シオン君も可愛いね♪」

ヴィヴィオ「私の自慢の息子ですから」

５シ「話を聞けよ！？」

５カ「もう、訳がわからん……」

５シ「カナン、諦めんな！」

奈・ヴ「レッツゴー♪」

５シ「いーーやーーだぁぁあああああああ！」

祐希奈「……ＥＸに続く♪」

ハル「いえ、さすがにこれはスルーで構いませんので」

昶「はっ！」

祐希奈「あれ？　もう効果きれちゃったの？」

昶「祐希奈ちゃん、俺は今まで何を？」

祐希奈「大丈夫。ちゃんと自分の作品の宣伝をばんばんしてたわよ♪」

昶「そ、そうか。ウチの作者に言われてたからな。ちゃんと宣伝できてたんなら良かったよ」

祐希奈「じゃ、最後になってきたから、締めの宣伝をいっちゃって？」

昶「まださせてくれるのか？　祐希奈ちゃんは優しいな」

祐希奈「あっはは。私は懐が広いのよ♪」

昶「みたいだな。じゃ、俺の登場するＣａｌｉｂｕｒ&Ｐｈａｎｔｏｍは、俺、神藤昶が、イクスから三年後の時代を行く、なのはのオリジナルストーリーだ。
様々な宝具を巡って巻き起こる問題や、未だ謎の敵とのバトルもある。
俺だけじゃなくて、エリオなんかの成長も書かれてるから一度読んでみてくれると嬉しい」

祐希奈「昶さんは、自分で自分の能力をチートって言っちゃうオチャメさんよ♪」

昶「お、オチャメ！？」

祐希奈「さらにさらに、バイク対決でまでその能力を使っちゃうサービス誠心全開よ♪」

昶「あ、あれは、その勝ちたかったというか……」

祐希奈「んでもって、クールっぽいバカを演じる実力者よ！」

昶「クールっぽいバカって……」

祐希奈「カナンやシオンと同じく、ヘタレの道を歩むのか否か、こうご期待！」

昶「ま、まぁ、よろしくな」

祐希奈「まったね～♪」

昶「じゃな～」

ガシャン

第二十七話　竜騎と竜使い（後書き）

はい。ここまで読んでくださりありがとうございます。
しばらくは模擬戦、日常、模擬戦と続きそうです。
では、ここまで見てくださった方々ありがとうございました。

第二十八話　繋がり（前書き）

それは、ゆっくりと歩き出す。その眼に虚空を映して。
それが目指すは、繋がる糸の先……

第二十八話　繋がり

祐希奈「前書き、質問コーナー♪　なんだけど、ここで、お知らせよ」

ヴィヴィオ「お知らせと言うのは、後書きコーナーについて、です」

カナン「たくさんのキャラが待っているなか悪いんだが、作者がまた風邪をぶり返してな、これではつまらんカオスになるから書きたくないと言うことで、今回はお休みだ」

メイデン「次回か次々回辺りに、前後編になるから、前後二連続で召喚するそうだ」

レナス「次回のゲスト様は未来さんとクレイさん、その他愉快な仲間達は決定しています。もう片方は過去歴を確認してないので、過去順でいくそうです」

祐希奈「んでもって、ヴェインさん、咲さん、レイさん、風雅さん、咲夜さん、のオリキャラ五名、大幅な変更があるから殴るならカナンをどうぞ♪」

カナン「へ？」

祐希奈「じゃあ取り合えず、一番一之瀬祐希奈、いっきまーす♪」

カナン「ちょっ！」

祐希奈「ピラフよ！」

バキャッ！

カナン「何が～……」

ヴィヴィオ「え～今のは私達の名前のアクセントは何処ですかって質問で、祐希ちゃんはピラフと同じ発音と言う意味です」

祐希奈「さて、蹴ったしカナンを五歳にしてと♪」

５カ「嫌だぁぁって時すでに遅し！？」

祐希奈「これぞ、カオス・オブ・カオスのクイーン祐希奈の力よ♪
崇め称えなさい♪」

５カ「もういいや……で、何故にピラフ？」

祐希奈「読者さんは皆ピラフが大好きなのよ！
ピラフがあればご飯三杯はいける男よ！」

５カ「ピラフがご飯なのにさらにご飯を食うのかよ！」

祐希奈「しかも朝飯前よ！」

５カ「こえぇ……」

ヴィヴィオ「えぇ！？　朝御飯の前にまだ食べるの？」

５カ「そっち！？　そっちの意味にねじ曲げたぁ！？」

メイデン「朝御飯の前にピラフ三杯……」

レナス「ご飯はどれだけ食べるのでしょうか……」

祐希奈「もちろん、炊飯器にあるだけよ♪」

ヴィヴィオ「読者さん凄いね～♪」

メイデン「ああ。私など茶碗一杯で限界だ……」

レナス「同じくです」

５カ「スルー……」

祐希奈「あれよ。甘いものがいくらでも入るのと、レナスで言うなら蟹と同じくらいピラフとご飯が好きなのよ」

ヴ・メ・レ「成る程～」

５カ「スルー出来るかぁ！　洗脳も程ほどにしとけよ!?」

祐希奈「やかましいわ♪」

ガボッ！

５カ「ごふっ！　な、なに飲ませやがった!?」

祐希奈「く・す・り♪」

５カ「あれ……何か頭が……」

カクン……

祐希奈「3、2、1、はい♪」

5夏「あれ？　ここどこ？　お姉ちゃん達、誰？」

ヴィヴィオ「わぁ……カナン君が……」

メイデン「こ、これは……」

レナス「可愛いですね」

祐希奈「祐希奈お姉ちゃんよ～、夏楠♪」

5夏「祐希奈、お姉ちゃん？」

ヴィヴィオ「私はヴィヴィオだよ？」

5夏「祐希奈お姉ちゃんと、ヴィヴィオお姉ちゃん？」

祐・ヴ「は～い♪」

5夏「わぁ……お母さ～ん、お父さ～ん、僕、お姉ちゃんが二人も出来たよ～！」

パアアア……

奈津美「夏楠君、良かったね～♪」

夏輝「俺に、娘が二人なぁ……」

ヴ・祐「夏輝パパ♪」

夏輝「ま、悪くないかな」

奈津美「あ～浮気ですか？」

夏輝「違うって！」

５夏「じゃあ、僕がお母さんと結婚する！」

奈津美「え、ほんと？」

夏輝「まてぇぇい！」

祐希奈「あ～あ、夏楠はお姉ちゃんは嫌いなの？」

ヴィヴィオ「悲しいなぁ……」

５夏「そ、そんなことないよ！　お姉ちゃんも大好きだよ？」

祐希奈「お姉ちゃん達とお母さん、どっちが好き？」

５夏「え、えっと、えっと……」

祐希奈「なんてね、夏楠、おいで～♪」

５夏「わっ！」

祐希奈「高いたか～い♪」

５夏「あははは！」

メイデン「いい加減に終わらないと長いぞ？」

レナス「可愛い主を見ていたい気もしますが、ね？」

祐希奈「そうね。確か、タカトから宿題があったのよ」

ヴィヴィオ「最強と無敵の違いは何かって、宿題だよね？」

５夏「そんなの簡単だよ～♪　負けないのが最強で、死なないのが無敵！　あのね、ゲームで覚えたんだ」

祐希奈「うん♪　割り込まれたけど可愛いから許すわ♪　ただ、私の答えも夏楠と同じなのよね～……」

５夏「お姉ちゃんと僕、同じ？」

祐希奈「そう。同じよ？」

５夏「やった～！　僕、お姉ちゃんと同じだよ」

祐希奈「祐希奈お姉ちゃんと同じで嬉しい？」

５夏「うん♪」

祐希奈「そう♪」

ヴ・奈津美「い～な～……」

メイデン「それで、ヴィヴィオの答えは何だ？」

ヴィヴィオ「えっとね、最強は、一番強い人って言うのは同じなんだけど、無敵は、敵を作らない人じゃないかなって、思うんだ。例え、今は敵でも、話し合えば通じると思うから、通じたなら敵じゃなくなると思うから」

レナス「つまり、力は関係ないと言うことですか？」

ヴィヴィオ「うん。無敵って、心の在り方で誰でもなれる気がするんだ。って、これは私の考えだからタカトとは違うかもしれないんだけど」

祐希奈「じゃ、ヴィヴィオ論でいくと今の夏楠は無敵ね」

５夏「僕が？　どうして？」

祐希奈「可愛くて手なんか出せないから♪」

キュウウ……

５夏「わっ！」

ヴィヴィオ「あ、祐希ちゃんずるいよ！」

祐希奈「アンタにはシオンがいるでしょ？」

ヴィヴィオ「シオン君、抱かせてくれるかな？」

祐希奈「させるわ！」

夏輝「なんか知らんが、シオン君、頑張れよ……」

奈津美「それじゃあ、今回はこの辺で」

５夏「えっと、今回はハルさんとＦＷ陣の模擬戦でね、なんか、可哀想なことになるんだって」

祐希奈「はい、よく言えました♪」

５夏「えへへ。僕、頑張った？」

祐希奈「よしよ～し。偉い偉い♪」

奈津美「あ、祐希奈ちゃん、私もなでなでする～！」

ヴィヴィオ「わ、私はシオン君がいるから我慢する……」

夏輝「何だかなぁ……最近の男子は不憫な奴が多いな」

メイデン「確かに。さて、漸くだが魔法少女リリカルヴィヴィオ」

レナス「始まりますよ」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

新たに展開された訓練所に、向かい合って立つ一人と三人。

構える四人に対し、ハルは各関節部分を確かめていた。

十数秒後、顔を上げたハルに三人の表情は引き締まる。

「さて、これから始めさせていただきますが、僕は一人だからと言って迷うことがないようにお願いします。
僕に情け容赦は一切不要です。意識が飛ぶまでは試合中。意識を刈り取る止めの一撃を叩き込むまでが試合です」

《はい！》

「良い返事です♪」

元気良く返事を返す三人にニコリと微笑み、「では」と繋げる……。

その言葉に、各自デバイスを展開し、ティアナは顔の横に銃を、スバルは胸の前に拳を、エリオは下段に槍を向ける……。

「始めますか……」

鋭い目付きと化したハルが、ティアナの前、エリオとスバルの横に立っていた……。

「「なっ！」」

ティアナとスバルが驚愕する中、動いた者が一人。
唯一、ハルの動きを目で追えたエリオである。
重心移動、ストラーダを薙ぎ払う！

「はっ！」

一瞬の出来事だった……。
ハルが短く呼気を吐き出した瞬間に蒼天へと放たれた右の蹴り。

凄まじい衝撃がエリオの掌に流れ、痛みが走る。
ストラーダの薙ぎ払いにハルが蹴りを合わせたのだ。
結果、ストラーダはハルに届くことなく宙を舞った……。
瞬く間もなく、エリオの脳天に踵落としが降ろされる！
しかし、エリオが得意とするのはスピード。
その動体視力は音速の蹴りをも捉え、頭一つ分をずらす……。
瞬間、ハルの蹴りが眼前を通りすぎ。

「甘い……」

地面を打つ、その勢いを利用、ハルの体が浮き上がる。

「がっ！」

「「エリオっ！」」

エリオが気づいた時には既に自分の体が跳ね上がっていた……。
ハルが勢いのまま左脚を振り上げ、エリオの顎を蹴り抜いたからだ。
さらにハルは止まらない、宙に浮いたエリオの頭を掴み、振り回す！
それは、スバルとティアナをも巻き込む一撃。

「ちっ！」

「うわっ！」

ティアナは舌打ち、スバルは驚きながらも回避する。しかしエリオはそうもいかない。

「行きますよ……」

「うわぁぁああ！」

アンダースローで投げ飛ばされ、ビルを貫通しながらエリオが消える……。

「はぁっ！」

「……」

背後を見向きもせず、ハルは屈む、瞬間に通りすぎるはキャリバーショット。

屈んだ膝のバネを使い、その場から跳躍、直後に橙の弾丸が過ぎ去った……。

「マッハキャリバー！」

『Ｗｉｎｇ　Ｒｏａｄ！』

空中のハルに伸びる一筋の光の道。

拳を握り締め、カートリッジ排出と同時に走り出す！

「リボルバーっ！」

ナックルスピナーに渦巻く螺旋の風。

突撃して来るスバルに合わせ、ハルは回転、身を捻る！

「はっ！」

だが、合わせた筈のハルの回転蹴りは空を切った……。

スバルがギリギリで跳躍して避けたからだ。

「ファントム！」

響く声。

地上からハルへと真っ直ぐな光が突き刺さる。

その正体はターゲットサイト。

突撃してくるスバルは攻撃の担い手に加え、ブラインドの役割も果たしていた。

つまり、ハルを狙うのは、頭上からのスバルと地上からのティアナになる。

「良い攻撃です」

「シュート！／ブレイザー！」

「僕の能力さえ無ければ、ですが……」

『三割でいいな？』

「ええ」

脚に纏われる空色の魔力。

回転を加速、砲撃を蹴り、軌道を強引にねじ曲げる！

そして、腕を交差し、スバルの拳撃を受け止める……。

「うぉぉぉっ！」

しかし、スバルの力は並みでは無い。

いかにハルとは言えど、地に脚が着かない状態で止めるのは不可能であり、衝撃波が放たれると同時に真下へと落下する。

轟音！

地面に叩きつけられた筈のハルが土煙を舞い上げながら、立っていた……。
蹴りを地面に叩き込み、衝撃を無理矢理に減衰したからだ。
しかし、攻撃の間が空いたのは一瞬。
既に、ハルの背後に雷が輝いていた……
復帰したエリオが、右腕に雷を纏い、踏み込む！

「紫電っ！」
引き絞られる右腕、バリアジャケットの袖が雷電によって弾け飛び、その威力を物語る。

「一閃っ！」
閃光が走り、エリオの拳から先に雷撃が突き抜ける！
しかし、ハルの頭へと叩き込まれる拳は空を切った……。

「くそっ！」
エリオの足下、見向きもせずに屈んで避けたハルがいた……。
完全な不意打ち。それすらも避けられる。
さらに、拳を撃ち抜いたエリオの腕を持ち、バリアジャケットの袖を握り、エリオの体を背中に乗せる……。
その技は日本武術、背負い投げに他ならない。

「うわっ！」
解除も出来ずにエリオは１０ｍ近くを投げ飛ばされた。
しかし、それで良い……
エリオは、受け身を取ると同時に背後に手を伸ばす。

「エリオ！」

「ありがとうございます！」

ティアナから放られるストラーダ。

スバルとエリオがハルを止めている間にティアナはストラーダを回収したのだ。

回転しながらストラーダはエリオの手へと収まり、カートリッジを弾き出す！

「ほう……」

ハルが感心したような声を上げ、少し笑う。

そのまま、魔力を纏う右腕を天空へと持ち上げ、拳を解く。

「……おぉうりゃぁあああ！！」

「Ｋｎｕｃｋｌｅ　Ｄｕｓｔｅｒ！」

「これは中々……」

刹那、流星のごとくスバルがハルの真上に落下する！

上空のウィングロードから飛び降りたのだ。

放つはナックルダスター。全身を強化した渾身の一撃は、地面を陥没させる程の勢いで放たれたが、ハルが突き出した右腕によって受け止められた……。

「「はぁぁぁっ！」」

「Ｓｐｅｅｒａｎｇｒｉｆｆ！／Ｃａｌｉｂｕｒ　Ｓｈｏｔ！」

しかし、もうＦＷメンバーが驚くことは無い。

驚愕の暇が惜しい。それが自分達の敵なのだから。
スバルは、逆立ちの勢いから蹴りを放ち、エリオはハルの正面から突撃する！

「借りますよ……」

ハルが思い浮かべるは友人の顔、そして技。

「絶空っ！」

「「う……っ！」」

魔力が拳から脚に移り、ハルが高速で回転、形成されるは竜巻。
蹴りと突きは、竜巻を破れず、逆に弾き飛ばされる！
位置はハルの正面、最悪の位置……。
ハルは竜巻が収まると同時に踏み込む。

「ファントムブレイザー！」

だが、オプティックハイドを使い、回り込んだティアナがいた……。
滲み出すと同時に放たれる至近距離砲撃！

「……」

対し、ハルがピンポイントで背面蹴りを打ち放った……
天空へと進路を変更する砲撃にティアナは奥歯を噛み締め。

「いい加減！」
『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！』

クロスミラージュカートリッジを排出する。
“新たに転送された”クロスミラージュのカートリッジを……

「おや……」

「喰らいなさいっ！」
『Ｗ・Ｓｈｏｏｔ！』

ティアナの二連砲撃は遂にハルを捉え、爆煙を舞い上げる。

「はぁ……はぁ……」

「油断大敵、敵が攻撃を受けても止まらない場合もありますよ？」

「がはっ……」

声が響いた瞬間、ティアナの鳩尾へと蹴りが入る……
ティアナの目の前には、左腕の袖が破れたハルがいた……。
うずくまるティアナに、左脚を振り上げる……。

「「やらせるかぁぁぁっ！」」

ティアナを守るため、背後からエリオとスバルが飛びかかる。
ハルは横目でそれを見る……。

「さて……」

二人の視界からハルが消え去り、二人の間を通り抜け、抜き去る。
背後で回転、かろうじで捉えたスバルは見向きもせず、プロテク

ションを展開。

「くうっ！」

同時に叩き込まれる回し蹴りの威力に、ティアナを巻き込んで吹っ飛び、もろともビルを貫通する……。

ガラガラと崩れ落ちるビルをハルはただ見ていた。

静けさが辺りを包む。ハルは何故か笑う。

「終わりですか？」

と、呼び掛けた。

“分かりきった”結果を知りながら。

弾け飛ぶ瓦礫、その中心には同じく笑うＦＷ三人……。思いきり空気を吸い込む。

「「「誰がっ！！！」」」

「良い返事です」

怒鳴る三人、その瞳は輝きを増すのみ……。

「スバル、エリオ、残りのチップ私に全賭け……出来る？」

「出来ます！　何でも言ってください！」

「当然だよっ！　全賭けってことは自信があるんだよね？」

「ちょっとね……」

不適に笑うティアナ。

ティアナは自信過剰どころか、メンバーの中では最も自分に厳しい。
そのティアナがちょっと自信があると言った。
それは、自信満々、叩き込む気全開。を意味する。

「じゃ、予定通りね！」

「「了解っ！」」

ティアナは背後へ走りながら姿を消し、スバル、エリオはハルへと突進する。

「足止め、ですか……」

ハルは、スバル、エリオを無視、ティアナを潰そうと走り出す。

「サンダー！」

「範囲雷撃……」

しかし、数歩も進まない内にエリオがハルに到達、振りかざすはストラーダ、３ｒｄモード，ウンヴェッターフォルム。
叩きつけられた刃に雷が纏われる！

「レイジっ！」

「粉塵裂脚……」

雷撃が放たれた瞬間、砕ける地面。
電流は伝うものが無ければ雷撃は届かない。

つまりは、無効化されたと同じである。
だが、エリオの目的は攻撃を喰らわすことには無い。
それを一番わかっているのはハルだった。
策士に時間を与えれば与えるほど攻略は難しくなる。
故に、魔力を脚に纏い、膝に力を溜める……。

「リボルバーっ！」

「やれやれ……」

しかし、そう簡単にはいかない。
足場が悪いにも関わらず、スバルは猛進する。
ウィングロードとアブソーブグリップがある以上、スバルに道は必要ないからだ。

「キャノンっ！」

ハルへと叩き込まれた拳は、同じく拳によって相殺されていた……。

カードリッジを使った一撃が止められた。
しかし、スバルは思う。だから何だと……。
自分の極めたシューティングアーツは……。

「止まらないのが……」
『Ａｃｃｅｌ　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ……』
「売りなんだぁぁぁっ！」
『Ｒｅａｄｙ　Ｇｏ！』

マッハキャリバーは火花を散らしながら、左脚のローラーを後ろに、右脚のローラーを前に回転させる。

結果スバル自信が回転し、脚が跳ね上がる！
振動！
ガードしたにも関わらずスバルの蹴りは空気を振るわす凄まじい威力を誇っていた。
さらに、それは一発に限ったことではない……。

「はぁぁぁっ！」

片脚で跳躍、体を捻る勢いと体重を合わせ、リボルバーキャノンを叩き込む。
ハルは、スバルに踏み込み、右肘を押すことで受け流す。
しかし、スバルは止まらない……。
着地と同時にマッハキャリバーは火花を散らし、即座に方向転換、キャリバーショットが放たれる！

「たぁぁぁっ！」

「……」

打つ、打つ、打つ、打つ、打つ、打ち放つ！
スバルから放たれるは無限とも思える連続した回転蹴り。
それら全てが直撃を受ければ昏倒ものの一撃。
ハルは、ひたすらに冷静に流し、避け、或いは撃ち落とす！

「アクセルっ！」

それらに終止符を打たんがために、自信が舞い上げた風をナックルスピナーに巻き込み、威力を上げ続ける！

『三割、解放するぞ』

「はい……」
スバルがカードリッジを排出したその一瞬、アスラが自己判断で能力を解放、ハルの腕、そして脚が強化された……。
「ブレイクっ！」
「ヒュっ！」
スバルは叫び、ハルは呼気を吹き出す。
上半身を捻りながら、全重心を前へと移動、相手より速く、強く！
その想いは同じ。
それは、最高レベルの拳撃へと昇華する！
「「はぁぁぁっ！」」
突き抜ける衝撃波！
お互いの体が風に押され、しかし負けじとさらに力を込めて突き進む！
「負けない……。拳だけは……誰にも負けないっ！！　マッハキャリバァァァっ！！」
『Ｄｒｉｖｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ！』
マッハキャリバーから翼が広がる。
その姿は正しくスバルのフルドライブ、ギア・エクセリオン。
打ち抜く。ただそれだけのために……。
完全に戦闘モードへと移行したスバルの脳内に、即座に打ち抜く方法が浮かぶ。
瞬間に実行っ！　スバルの“左”に集まる蒼の魔力。
環状魔方陣が展開。魔力スフィアが生まれ、輝く！

「ディバインバスターゼロレンジっ！　くぅらぁえぇぇぇーー！！！！！」

リボルバーナックルを引き、ハルの体がスバルへと近づく。
その勢いに、さらにスバルの踏み込みが追加され、右拳の魔力スフィアがハルの鳩尾へと向かうっ！
しかし、ハルの左腕が動き、スフィアを受け止めた……。

「構うかぁぁぁあああああっ！！！」

「ちっ……」
『執事が舌打ちをするな阿呆』

炸裂する魔力スフィア！
ガードをしたハルを構わず吹き飛ばす！
黒煙を突き抜け、ハルの体が宙を舞った……。
だが、ただでは飛ばない。それがこの男……。
身を捻る。地上にいるスバルへと反転……

「空破掌……」

撃ち放たれるは圧縮された空気。
大技を放った直後のスバルは硬直で動けない……。

「ぁぁぁっ！」

咆哮！
スバルを守るようにエリオがブースターを噴かせ、空気の中心に突貫。カートリッジ排出、遂には貫く！

空中のハルへと突撃し……、顔を歪める。
腕に再び集められた魔力によって、刃が受け止められ、ハル本人へ届いていなかった。

「僕だって……」
『Ｅｘｐｒｏｓｉｏｎ！』
「皆を守るために強くなったんだっ！」

カートリッジを排出しながら、ブースターの出力が上がって行く。
刃は届かない。しかし、ハルは押されて行く。
これが何を意味するか……。

「うぉぉぉっ！」

「くっ……」
『まずいな……』

ハルが呻く。何故なら押され続けた体は障害物として存在するビルに縫い付けられたからだ。
同時、エリオの背後から飛び上がる影。
ストラーダは変形、サイドブースター展開。噴き出す威力はハルを振り回す！
振り向く先にいたのはスバルだ。
リボルバーナックルを振りかぶる！

「「ストライク、ドライバァァアア！！」」

「……」
『いかん……』

豪撃！
挟み込むように放たれたそれは、エリオとスバルのコンビネーション奥義。
二人の成長も合わさったその威力は、オーバーSを弾き出す。
瞬間威力だけなら、幼きなのはの時、スターライトブレイカーを抜き去る……。
そんな一撃を受けたハルは、アスラの声を最後に真っ逆さまに地上に落ちた。
受け身も取れず、体は地面に叩きつけられた……。

「「……」」

ヒヤリとした感覚が二人に走る。
ハルが死んだかもしれないと言う不安。
それは、杞憂に終わる……。
ストンとスバルの背後に軽い音が響く……。

「「っ！」」

「……」
『お二方、逃げろ……。死ぬかもしれん』

二人は寒気を覚える。
そして悟る。この人は、“たった今、起きた”と……。
殴られて、吹き飛んで、叩き落とされて、漸く、ハルの体は起き始めた……。
かつて、鈍ったカナンに対峙した時のような、冷たい光をハルの瞳が映す。

「「ぐっ！」」

『ハル！』
「死にはしませんよ……」
霞む腕、エリオとスバルの頭を掴み、ビルへと叩きつける！
そのまま落下、ゴドン！　そんな沈み込むような音が辺りに響いた……。
頭を掴んだまま、ビルの高さから叩きつけたのだ……。
スバル、エリオはグッタリとして動かない……。
『お前、殺す気か！？』
「気を失ってるだけです。それに、彼等はこの程度で死ぬほど、弱くはありませんよ……」
アスラの心配をよそに、ハルは駆け出す。
策士を潰すために……。
ティアナは、訓練をつんだとはいえ、女性には変わり無く、対し、ハルは殺すつもりで訓練をつんだ復讐者、その走る速度は段違いであり、二分とかからず、結界の端へと辿り着く……。
そこには、オプティックハイドは解け、魔力切れが近いティアナがいた……。
「も、もう少しだったのに……」
「何をするつもりかは知りませんが、残念でしたね……」
ハルにとってティアナとの一対一赤子の首を捻るような物に等しく、ティアナもそれをわかっているため、少ない魔力で展開したダガーを構え、後ずさる……。

「終わりです……」

「っ！」

ハルが霞む……。

数瞬おかずにティアナの前へと出現、回し蹴りが放たれ……

ティアナが“砕けた”。

「成る程……」

ハルの瞳にあった冷たい光りは消え、再び戻った笑み。

「はぁぁぁっ！」

ハルの胸に、交差に叩き込まれたダガー。

そして、背後に滲み出すようにティアナが現れる。

「「うぉぉぉっ！」」

ティアナの頭上を風と化したスバルとエリオが突き抜ける！

スバルは両手に展開したスフィアを一つに束ね、環状魔方陣を展開、術式は、一転貫通！　巨大な魔力球を作り出す！

エリオはストラーダから発生する三対の雷翼に包まれながら、自身を巨大な光の槍と化し、突貫する！

「動け、動け、動けっ！」

ティアナの背後のビルの影に、２００発にも及ぶスフィアが展開されていた。

それらは全て、スバルとエリオが時間稼ぎの間に作り出した物。

故に、ティアナは魔力切れが近かったのだ。

「「一撃必倒！／一閃必中！」」

『ＡＣＳ　Ｏｖｅｒ　Ｂｒａｅｋ　Ｃａｎｎｏｎ！／Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ａｎｇｒｆｆ！』

叫びと共に、スバルは極光を撃ち放ち、エリオはストラーダを投擲、雷鳥と化しハルへと向かう！

ハルが光に飲まれる！

ハルがいる場は壁際。それは最大の威力を叩き込むために準備された舞台だった。

魔力の粒子が周囲に弾け飛ぶ、それは集束する物がいる。

ティアナだ。

集束砲とはそこに粒子があれば、トリガーとなる最低限の魔力があれば放てる。つまり……

「全力全開っ！　スターライトブレイカー……」

『Ｆｕｌｌ　Ｂｕｒｓｔ　Ｓｈｏｏｔ！』

「いっけぇぇぇぇーーーっ！！！」

スフィア、集束砲撃が同時に放たれ、合流。

一点に集められた各自最大の攻撃は、結界にヒビを入れ、作られた路面を破壊し、更地に戻す……。

「我に殺せぬ者は無し……」

呟き、しかし、それは確かにティアナ達に届く。

瞬間に、天に突き立つ紅い柱……。莫大な力が放たれる！

三人は極寒を感じる。目の前の柱の中の存在が人とは思えぬ殺気を放っていることを……。

「滅神絶覇哮……」

「「「っ！」」」

ハルの声が響くと同時に集束された技は弾け飛び、爆風が吹き荒れ、三人もまた、吹き飛ばされる！

凄まじいアラートを鳴り響かせながら、訓練施設は崩壊、なにも残らず消え去った……。

「ふぅ……。あまり使いたくない技なのですが……」

『ならば使うな。ハル、お前は本当に死人を出す気か？』

「そんなつもりもありませんし、使ったのもなんとなく、ですよ」

『なんとなく、か……』

「はい」

『今は信じておく』

「ありがとうございます」

ハルが立っている位置を中心に掘り込まれている『滅』の文字。

それを、ハルはずっと見ていた……。

「うわぁ……」

「凄いですね……」

「何をどうやったらこうなるのよ……」

各々、声を上げる、スバル、エリオ、ティアナ。

もちろん、滅の文字を見て、驚いていたのだ

「おや……」
『起きたようだな』
「皆様、お疲れ様でした。訓練は終了です」
ニコリと笑って言うハルに、三人は微妙な反応をとる。
スバルは悩み、エリオは苦笑い、ティアナに関しては怒りにも似たような感情だった。
「答えてください。最後、何で引っ掛かったんですか？」
「といいますと？」
「とぼけないで！」
「ティ、ティア……」
ティアナの怒りの原因は最後の勝負にある。
ハルの能力に粗方の見当をつけていたティアナはクロスミラージュに採取させたハルの戦闘データのウィンドウを展開した。
「これ予測だけど、貴方の能力は空間の認識、それも、カナンなんかより大規模な、ね。違う？」
「いえ、正解です。風の知らせと言って、風が通る場所ならば、見ることが出来る、と言うものです」
「じゃあ、やっぱり！」
「気づいてましたよ……。と言えれば格好がつきますが、残念ながら、僕の能力には欠点がありまして」

「え……？」

キョトンとするティアナにハルは微笑し、言葉を続ける。

「この空間、結界に封鎖されてましたよね？」

「う、うん……」

「ということは、風を動かせるのは動いてる人だけ、ということになります。恐らく、ランスター様は、オプティックハイドを使って石の後ろにおられたのでしょう？　動かない物は見えない、加えてオプティックハイドで視認も出来ない。流石に呼吸程度の微弱な流れでは余程注意しなければわかりませんしね」

「ってことは……」

「貴女様の作戦に騙されていた、と言うことです。お二人はランスター様を潰した後に改めて潰そうかと思っていましたが、予想外の反撃がありましたので」

「ま、まぁいいわ……」

ハルに言いくるめられ、何処か釈然としないものの、ティアナは引き下がる。

「えっと、じゃあハルさんに質問！」

「はい、ナカジマ様？」

「最後の力は何ですか？」

「……」

途端に思案顔になるハルにスバルは焦る。

ティアナは「バカ」とジト目で睨む。

「あ、あの、答えにくいならいいですよ？」

「いえ。そうですね、唯一の繋がりにして、切り離したいもの」

「……」

繋がりを切る。それはスバルにとっては衝撃の言葉。

誰よりも仲間を大切にするスバルの心に突き刺さる……。

「の、筈ですよ？」

「え？」

ハルは、珍しく困惑したような表情を浮かべていた。

スバルはその意味はわからない。

「さて、皆様の御体も心配ですし、医療施設に行きましょう」

「え、あ、はい！」

こうして、ハルと、ＦＷ三名の実戦式訓戦は終了した。

様々な疑惑を残したままに……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

時空管理局、第零番運用部。

「はぁ～……」

その中で、壮大に溜め息をつく、人物がいた。

その姿は金髪ツインテールに紅蓮の瞳。Yシャツにジーパンと言った、管理局員ならざる格好をしていた。

しかし、カジュアルな格好にも関わらず、どこか品のある空気を出す女性は部員の目を引き付けるに充分な魅力を放つ。

数名の局員が、その美女が悩める姿に見とれ……。

「何を呆けていますの？　そのような暇があるのなら手を動かしなさいな。それとも、仕事を倍にして差し上げましょうか？」

「「「結構であります！」」」

ややつり上がった瞳は局員の恐怖を煽る。

女帝、そんな言葉が女性には似合っていた。

「凛三等空佐、仮にも部長が内部を乱してどうするのですか……」

扉が開き、お茶を盆に乗せ、女の子としか思えないようなやや垂れ目の小顔に、背中まで伸びる髪を靡かせて小さな男の子が入室する。

その服装は女性とは違い、見本のような局員の正装。

「貴方は確か、新しく転属させられた……」

「クレイ・アレイザ陸曹であります。海城・G（グランチェスタ）・凛、三等空佐殿」

「よろしくお願いしますわ。アレイザ陸曹」

盆から、凛のデスクにお茶を置き敬礼する。
この零部署に来る者は大抵が訳あり、それだけを理由に階級に関係無しに送り込まれる者もままいる。
それは、執務官や凛のような佐官クラスまで様々。
それを知っているからこそ、凛はあっさりと自己紹介を終える。

「さて、ではアレイザ陸曹は、今零部署の部外で動いている方々のチェック、お願い致しますわ。私は書類の方がありますので」

「了解です。確認を終わりましたらお手伝いします」

「ありがとうございます」

「はい」

凛はクレイに微笑を返し、デスクに向く。
クレイは、ウィンドウを展開、情報処理を開始する。

「待て、今、部長が笑ったか……？」

「ああ、笑った……」

「半年ぶりくらいだろ……」

ざわざわと部署がざわめき、広がっていく……。
最初は無視していた凛だが、徐々に青筋が浮かび上がる……。

「そんなに仕事が嫌なら、私の所に来てもらえませんこと？　優しく“個人面談”をして差し上げますわよ……？」

《結構です！》

「賑やかですね」

部署の風景にクレイも微笑を浮かべる。

そんな平穏を破壊する知らせがクレイのウィンドウに開く……。

「これは……凛、三等空佐」

「はい？　何です？」

「副官の御名前を、教えていただけますか……」

クレイの奇妙な質問に凛は首をかしげ、とりあえずは答えることにした。

「レイ・リーフライン執務官ですが……」

「僕の、上官は……」

この質問に、凛は呆れ返る。自分の上官の名前を知らない局員など普通はいないからだ。

「ヴェイン・アルベリス一等空尉になりますが、お調べにならなかったのかしら？」

「では、咲・A・エルリウス空曹長、大河内風雅陸曹、春野咲夜二

等空尉の皆さんは……」

「全て私の部下ですわよ。だからどうしたと言うのです？」

「全員、任務の途中にて消息不明です……。発信器の反応もありません……」

「なっ！？」

部署の内部は凍りついたように固まった……。

Ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ……

第二十八話　繋がり（後書き）

はい、遅くなりましてすいません。
しかもよくわからんとこで切ってます。
さて、動かし切れるかわかりませんが、なんとか次回も頑張ります。
召喚待ちの方々、今回は勝手に変更してすいませんでした。
最後に、毎回のごとく、おかしな所がありましたらご報告下さい。
ではまた次回に。

第二十九話　アクシデント（前書き）

いや～文字数大爆発（笑）　予定の半分も日付進んでないです。
ついては、前書きが……あり得ないです。
このばを借りて作者さまに先に謝罪を、申し訳ありません。
ではではどぞ。

第二十九話　アクシデント

祐希奈「前書き、質問？　コーナー♪」

５未「わ～……」

５ル「わ～……」

カナン「でぇぇあああありゃあああああああ！！！」

ゼロ「はっはっは！　では私からは帰ってきたクロアリを……」

祐希奈「とっても大好き、タカえ～もん～♪」

ブンブンブン！

ゼロ「あ、アリが！？」

祐希奈「ちゃん♪」

クロ「ぎしゃあああ！」

キラーン……

ヴィヴィオ「えっと、皆さんこんにちは。高町ヴィヴィオです」

ギュ♪

5シ「わ、ま、ママ……。か、顔パスだから呼ばれたシオン……です……」

ノア「皆さん初めまして。ルミオが良いなら良いだろということで許可もとらずにやってきた、ノアです。よろしくね～」

5ル「何故かノアに抱かれてるルミオだ……。何でいるのかって言うと、祐希奈による、S（灼眼のシンジさん）SE（開発エピソード）に悪のりした灼眼のシンジという存在によって幼児化、叩き込まれた……」

カコ「ｍｅｂｉｕｓさんなら許してくれるさ～ってことで、ノアちゃんと同じく召喚されたカコです。はい、次はお兄ちゃんね？」

5未「何故か妹に抱かれてる未来です……。ってカコ、いい加減に離せって！」

カコ「え～、嫌だよ。こんな可愛いお兄ちゃん早々には見られないからね」

クレイ「で、俺がクレイって、わけだが、カナンは何をあんなに頑張ってるんだ？」

カナン「ふぐぅあああああああああああ！！！」

5ル「あ～それな。なんかアルカンシェルやらウルトラ光線やらその他もろもろ叩ききろうとしてるらしい」

ノア「相変わらず無茶っていうか、有り得ないよね……」

5未「ていうか、アルカンシェルって斬れるのか？」

ヴィヴィオ「えと、作者の話しによると、カナン君の二つ目の奥義なら可能らしいです。ただ、今は制御出来ないので、苦戦中ってことです」

ゼロ「何だここは、妙にのほほんとしているじゃないか！　そんなことは許さない。カモーンシロアリ……」

タカト「コーフーコーフー……」

5シ「あ、タカ兄ぃだ……」

ゼロ「何！？」

祐希奈「タカト、パンチよ♪」

タカト「ま　ぢ！！」

5ル・5未「やめいっ！」

―滅！―

ゼロ「ごふぁぁあああ！！」

カナン「でぇぇあああありゃあああああああああ！！！！」

―斬っ！―

カナン「はぁ、はぁ……終わった……」

クレイ「まぁ、そう簡単には終わらんがな」

カコ「ＢＳ方面から新たな砲撃確認したよ！」

カナン「ちっ！」

タカト「そ～らを自由に～飛びたいか～？」

祐希奈「はい♪　ヒトコプター♪　風間プロテクションＶｅｒ♪」

ブンブンブン！　ギュオオオ！！

カナン「のわぁあああああああ！！！」

ノア「わぁ、光の速度の回転だ。凄いねルミオ！」

５ル「ノア、ちょっとはカナンの心配をしような？」

ノア「あ……なんかなれちゃったかもしれない……」

５ル「お前にだけは普通でいてほしかった！」

タ・祐「必殺忍法火の鳥だ～……」

バヒューーン！　チュドーーーン！！

カナン「ぎゃあああああああああああああああ！！！！」

ノア「シオン君、これ、押そうか？」

5シ「え……ママ……？」

ヴィヴィオ「大丈夫。ただの録音機だから、ね？」

5シ「うん……」

ポチ。

白デフォ『うるさいうるさいうるさい！』

5ル「なぜにシンジ！？」

祐希奈「カオスだから♪」

クレイ「成る程……」

カコ「納得出来る答えだね」

5未「出来無いよ！　しちゃダメだろ！？」

ヒュルルル……

ヴィヴィオ「あ、翔さんからのプレゼントだ」

祐希奈「ありがとね♪」

ブン……

一同「？」

シープ翔「皆、強く生きろよ……」

カ・5ル・5未「はい！！」

祐希奈「じゃ、みかん大福、皆で食べましょ♪」

パクパク……

クレイ「ほう……やるな」

カコ「だね～。ちょっとびっくりしちゃった」

5未「あ、うん。これは美味いな……」

ノア「うちにもこれくらい作れる人が欲しいな～」

ジー……

5ル「待て、俺は確かにバトラーズだけど、執事は仮な？」

ノア「翔さんは執事じゃないみたいだけど？」

5ル「……善処する」

ノア「うん♪　やる前から諦めちゃダメだよね」

カナン「ん～、俺はちょっと苦手な甘さだな」

祐希奈「こんなに美味しいのに不憫な舌ね～？」

カナン「うっせ……」

ヴィヴィオ「はい、シオン君、あーん♪」

５シ「あ、あーん……」

パクっ

ヴィヴィオ「美味しい？」

５シ「うん……ママも……」

ヴィヴィオ「ママにもくれるの？」

５シ「あーん……」

ヴィヴィオ「あーん♪」

パクっ

５シ「美味しい……？」

ヴィヴィオ「ん♪　シオン君が食べさせてくれたから何倍も美味しいよ♪」

ギュウウ……

５シ「わ、わ……」

タカト「まーーー」

祐希奈「タカト、何してんの？」

タカト「まーーー（シオンが戻った時に叩き込もうと思いましてな？）」

祐希奈「そ。期待してるわね♪」

タカト「まーーー（御意に）」

男一同「お前もわかるんかい！」

ハル「ふむ……。程よい酸味、甘さ、形、ほぼ完璧ですね。流石です。翔」

カナン「もう名前！？」

ハル「翔もバトラーズの一員ですしね♪」

祐希奈「さて、最後にハル、タカトの宿題の答えは？」

ハル「そうですね……。どうにも、僕は自分の考えよりも、論理的な思考を優先するようで、明確な答えは見つけられませんでした。が、タカトと僕は似た部分があるので、最終的にはそこにたどり着くかと。

タカトと違う所と言えば、収める鞘はありませんが、隠す物を持っています。それが、僕が笑っている所以です。笑っている相手が、恐ろしい武器を持っているとは普通は考えませんからね」

5未「武器は捨てられないのか？」

ハルハル「そうですね……。簡単に言うなれば、物凄く頑固ってことになるのでしょうね。頭ではわかっていても、やはり力を捨てきれない僕達がいて、タカトはわかりませんが、僕の場合は怖がりとも言えるかもしれません」

一同「へぇ～」

ハル「タカト、こんな所でよろしいですか？」

タカト「まーーーー……まーーーー（む？　何か言ったか？）」

ハル「いえ、ではまた後で」

男一同「お前もかい！」

祐希奈「さて、雑談が長引いちゃったけど、またまたお知らせよ♪」

カナン「今回はあんまりにも予定外に文字数が伸びたから無しになりかけたんだが、待っててもらってそれはあんまりだからな。未来さん達は前書きに召喚させてもらった」

ヴィヴィオ「召喚が伸び伸びになってるけど、次回も未来さんは前書きに出たまま、後書きにも召喚させていただくのでご了承ください」

祐希奈「ちなみに、顔パスの人達は勝手に呼ぶから、拒否権は無しね♪」

カナン「いや、拒否権あるから、すんません……」

祐希奈「え～！」

ヴィヴィオ「では、長くなりましたが、本編どうぞ！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

機動六課医療施設にて、シャマル、キャロ、ニーナがそれぞれ一人ずつＦＷメンバーの治療にあたる。

ハルは自分で処置を施し、今は上半身裸で右腕に包帯を巻き付けていた。

「シャマル先生、痛い、痛いです！」

「我慢しなさい。全部自分のせいなんですから」

幸いメンバー全員に、死に直結するような傷も無く、打ち身などの軽めで済んでいたため、原始的な方法。つまり、包帯やら湿布やらをメンバーに張り付ける。

スバルはシャマルに手当てをして貰いながらも涙を浮かべているが、シャマルは構わずに作業を続ける。

「ちょっと染みますよ？」

「っ！」

「だ、大丈夫ですか？」

「平気。続けて？」

「はい。続けますね……」

打ち身などは少ないが、切り傷が多いティアナは、キャロによって消毒液を塗られている。

時折顔をしかめるティアナだが、そこは大人。騒がず治療を受け続ける。

「もう少しだけ我満してくださいね？」

「大丈夫よ。アレに比べればね……。私、後は自分でやっとくから、あっちに行っても良いわよ？」

「大丈夫ですよ。エリオ君も男の子ですし……」

瞬間、ガタンと何かがが倒れる音が医務室に響く……。

「うわぁぁあああああ！　ダメ！　ニーナ、それは手順を……」

「我満我満、だよ～。エリ君男の子でしょ～？　えい！」

「ぁぁあああああ！！！」

戦闘中かと思える、エリオの叫び。

その理由は、ニーナの治療法にある。

エリオも当然打ち身や切り傷だらけであり、治療が必要。

手当てくらい出来ると言ったニーナを信じたキャロはエリオを任せたわけだが、案の定、出来なかった……。

ちなみに、今の手当て方法は、切り傷に、エタノール（液体）をぶっかけて手当てをしていた。

「よ～し♪　流石はニーナだよ～♪　この調子で行くからエリ君も大船に乗ったつもりでいてね～♪」

「た、助けて……キャロ……」

「ごめん、エリオ君、ティアナさん、今、下着だから……」

「その、エリオ、後でなんか奢るわ」

「そ、そんな！」

キャロとティアナからエリオに死刑宣告が下された……。

そして、ニーナの治療は、いわば拷問に近い代物となる……。

「エリ君、次は打ち身の治療をしようね～」

「ちょ、ちょっと待って……どうして打ち身の治療に金槌が出てくるの！？」

「ニーナは力が無くってね？　そのせいで、ちゃんと張れないかもしれないから、これで叩くんだよ？」

「た、叩っ！？」

打ち身を金槌で叩けばどうなるか、間違いなく激痛がエリオを襲う。

そんなことをされたくないエリオは駆け出し……

「逃げちゃダメ～！」

「うっ！」

風のバインドによって四肢を拘束、そのままベッドに持ち上げられた……。

ちなみに、ニーナの得意とする魔法は防御と補助である。

それも、自然にある全てを利用しての物。バインドの拘束は、実になのはの最高の拘束魔法レストリクトロックに相当する。

戦闘ならば頼もしい力だが、今のエリオには最悪の状況しか生まない……。

「優しくしてあげるから、大人しくしててね？」

「無理だよ！」

大人しくする。ということは受け入れることと同義であり、鉄槌を喰らうこととなる。

故にエリオは抵抗するが動けない……。

「も～。エリ君ってば仕方ないな～……この辺かな？」

「わぁぁあああ！！」

結局、抵抗してもしなくても鉄槌は下ろされた……

叫びながらエリオは目をきつく閉じる。

「あああ～！　ってあれ？」

一、二、三、それだけの秒を刻んでも痛みは来ない。

少しずつ目を開ける。そこには鉄槌を受け止める黒い物質……。

「ったく……」

「アルちゃん、邪魔しちゃダメだよ～！」

「うっせえドチビ！」

ニーナの鉄槌を受け止めていたのは、アルティスの背後から出現した黒き針だった。

「ドチビじゃないもん～！」

「ドチビって言われたくないならその金槌しまいやがれ！」

「これは治療のための物なの～！　アルちゃんはわかってないなぁ～」

「わかってねぇのはどっちだチビボケ！」

「ニーナはチビでもボケでも無いよ～！」

「わぁったよ！　チビでもボケでもねぇから、ピンク頭手伝ってこい」

「キャロちゃん？　どうして？」

「あ～……」

「ニーナちゃん、ちょっと手伝って欲しいんだけど、いいかな？」

「え？　う～ん」

アルティスが悩んだとほぼ同時にキャロからニーナに手伝いの願いが入り、ニーナは悩む。

エリオの治療もニーナとしては中途なためだ。

「痛い！　死んじゃうかも！」

「え！？　わ、た、大変だよ！　アルちゃん、お願いしていい？」

「任せろ」

「うん！」

ティアナの声に、ニーナは急いで飛んでいき、エリオは平穏を得た。

そして、エリオの肩に悪魔の翼をたたみ、アルティスが着地する。

「災難だったな？」

「あはは……でも、お陰で助かったよ」

「まぁ、ドチビも悪気はねぇんだけどな」

「うん。わかってる」

エリオとアルティスはお互いに苦笑いを浮かべる。

その後、アルティスは再び翼を広げ、小さな体で綿にエタノールを染み込ませる……。

「え……？」

「ちょっと染みんぞ？」

アルティスは手慣れた様子でエリオの傷口を消毒していく。

続いて湿布を取りだし、打ち身の部位に当て、テープで固定、それを続ける……。

「あ、あの……」

「ん？　ああ、わりぃ、痛かったか？」

「そうじゃなくてさ」

「何だよ？」

「ありがとう。君、ホントは優しいんだね」

「っ！」

瞬間、ボンっと音がなりそうな勢いでアルティスが赤く染まる……。

「お、おま、お前なぁ！」

「な、何？」

「あたしは使い魔、悪魔だぞ！　それにこの羽みたらそれくらいわかんだろうが！」

翼を羽ばたかせ、悪魔だと言うことを主張するアルティスにエリオはくすくすと笑う。

「悪魔でも、君が優しいってことに変わり無いよ」

「はぁ!?　あたしは優しくなんてねぇよ!　あ、お前、これで勘違いしてるんだろ!　違うからな!　これはあたしが優しいんじゃなくて、ニーナに任されたからだ!　仕方なく、嫌々やってんだよ!」

「あはは!」

「何笑ってんだてめぇは!　ぶっ飛ばすぞ!」

いくらアルティスが脅そうが、エリオは笑ったまま。

そのうち、アルティスはぷいとそっぽを向く。

「これだから人間って奴は嫌いなんだ……」

「ごめんごめん。怒らせたんなら何か欲しいのあげるから、許してよ」

この言葉に、アルティスはピクリと反応、少しだけエリオに向き直る。

「……ホントか?」

「ホントだよ。何か欲しいものあるの?」

「じゃあ、血……」

「血？　血って、この？」

エリオは腕にある切り傷を指す。アルティスはコクりと頷いた。

「あたしは力を蓄えるのには血がいるんだ……。ニーナは契約者の魔力で成長するんだけどな……。あたしは、血なんだ……。嫌いになったろ……。悪魔なんて、こんなもんだ……。その内、ピンク頭だって契約解くさ……」

それまでの雰囲気が一変して変わるアルティス。

その目の前に、エリオは腕を差し出した。

「え……？」

「死んだりはしないよね？」

「あ、ああ。そこまでは必要ないけど……」

「なら、どうぞ？」

「嫌いに……ならないのか？」

「ちょっとびっくりしたけど、嫌いになんてならないよ。要するに、ご飯なんだよね？　僕なんかの血で良ければ」

ニコリと笑うエリオにアルティスは困惑した表情を浮かべ、笑った……

「お前、やっぱ変だよ」

「かもしれないね」

「い、いただきます……」

腕にカプリと噛みつくアルティス。

目を閉じ、血を吸うアルティスにエリオは頭を撫でた。

「ぷあっ！　な、何すんだよ！」

「ダメかな？」

「別に、ダメじゃないけどよ……」

恥ずかしくなったのか、再び腕に噛みつくアルティス。

その光景を見ている人物が、四人。

キャロ、ティアナ、スバル、ニーナである。

ちなみにシャマルは現在カルテを書いている。

「エリオ、アンタってそういうのが好みだったんだ……」

「いくら可愛いからって、これはちょっと……」

「え……え！？　ち、違いますよ！？」

旗から見れば、エリオはアルティスに腕を吸わせて笑っている変態にしか見えていない。

故に、スバルとティアナの視線は冷たい……。

「エリオ君、ちょっとだけ幻滅しちゃった……」

「エリ君、キャロちゃんって人がいながら、アルちゃんにしちゃうの？」

「キャロ、ニーナ、これは誤解で！　アルティス、君からも違うって……」

「ぷあっ……ごちそうさま。美味かった。ありがとな」

血を満腹まで吸ったアルティスは、最悪のタイミングで笑っていた……。

時が止まる。そんな感覚をエリオは体感する。

「「……」」

「ご、誤解……」

「「頭冷やそうか？」」

「誤解ですってぇぇえええええ！！！」

スバル、ティアナはエリオの首を持ち、医務室を後にする。

エリオの叫びが虚しく響き渡っていた……

「なぁ、何キレてんだか知らねぇけど、あたしは血を貰ってただけだぜ？」

「あ、そういえば、アルちゃんは吸血しなきゃいけないんだったね～。ニーナ、忘れてたよ～」

「じゃあ、エリオ君は……」

「「無実だね／だな」」

「……エリオく～ん！」

「あたしも行った方がよさそうだな……」

「ニーナも行くよ～♪」

キャロも医務室から出ていき、ニーナとアルティスもキャロに続いて出ていった……。

嵐が去ったように静まり返る医務室にいるのは、クレアとハルのみとなる

「賑やかですの～……」

「あははは。お嬢様は見とれてましたからね」

「わ、笑うこと無いですの！」

「すいません。さて、お嬢様、何かお話があるようですが？」

「そう、ですの……」

クレアとしては、ハルと二人で話したかったために、この状況は待ち望んだ物だった。

「では、私は外に出ていますね」

「ありがとうございます。シャマル様」

「いえ、何かあったら呼んでください」

気を聞かせたシャマルがいなくなり、遂にハルとクレアだけの空間が完成する。

服装を正そうと、ハルが執事服に手を伸ばしたその腕を、クレアがきつく握る……。

「っ……あははは。お嬢様、何ですか？　まさか、僕の半裸を見ていたいなどと……」

「千春」

「……はい」

クレアの表情が変わり、いつものような子供っぽさは消え、白姫家次期当主としての顔つきへと変わる……。

そして、ハルではなく、千春と呼んだ……。

それは、今は当主として接することを意味する。

堂々とした態度は、貫禄すらも思わせる……。

わかっているからこそ、ハルからもおどけた雰囲気は消えた……。

「千春、その右腕、どうされました？」

「クレアお嬢様のご心配を仰ぐようなことでは……」

「今一度聞きます……。その右腕、どうされましたか？　隠し事は許しません。次は無いですよ？」

「あの技を使いました……」

「何故？」

「わかりません……」

「嘘、偽りではありませんね？」

「命に誓って……」

「……」

正面からハルを見据え、瞬きもせず、数秒間視線を交わす。

すぅっとクレアの瞳が閉じ、深呼吸の後に開かれる。

「なら、この話は終わりですの。ハ～ル～。お腹空いたですの～」

そこには、いつも通りの白姫クレアが座っていた。

当主には遠い、無邪気な少女にハルは笑う。

「では、食堂に行きましょうか？」

「はいですの♪」

執事服を来たハルとクレアは仲良く並んで食堂へと向かったのだった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

その頃、ヴィヴィオとカナンは一之瀬家に到着していた。

時刻は午後４時３０分、学校が終わった後とはいえ、まだ季節は秋に差し掛かろうかとする所。
外はまだまだ明るいが、カナンの心は重くなり始めた。

「着いた……な」

「うん」

カナンは、一之瀬家の前で立ち止まる。
長い付き合いとは言っても、喧嘩というのは気まずい、いや、長いからこそ、より気まずいと言える。

「怖い？」

「ちょっとな……」

ヴィヴィオの質問に、カナンは苦笑いをして頷いた。
祐希奈に嫌われていたら、拒絶されたらと思うと、カナンは怖くて動けないでいる。

「頭ではわかってる。祐希奈はそういう奴じゃないって。嫌ってたら見舞いなんか来ないような奴だってな。
でも、悪い方にばっかり考えちまう……」

「マスター……」

「主、私達が先に行って祐希奈さんと話してきましょうか？」

「ダメだよ」

「「え……？」」

レナスの提案を、ヴィヴィオが、否定する。
意外な人物からの否定に、メイデン達は目を見開いた。

「それはダメ」

「し、しかし、ヴィヴィオ……」
「一番最初から逃げてたら、これから大変だよ？
きっかけは私が作るけど、踏み出すのはカナン君なんだから、頑張ろう？」

「わかってる……。お前らもありがとな」

「いや、マスターが良いなら構わないが……」

「では、私達もきっかけ作りを頑張りますね」

「サンキュ……」

元より、カナンはメイデン達の助けを借りるつもりは無かった。
意を決し、一之瀬家の引き戸を横に引いた……。

「あ、おか……」

そこには、丁度、階段から降りてきた所の祐希奈がいた。
言葉の途中でカナンと認識し、睨む……。

「祐希……」

「何しに来たの。アンタなんか呼んでないわよね？」

「……」

問答無用に言葉をぶった切る祐希奈に、カナンは俯き、少し悲しそうな顔をし、顔を上げた。

「ああ。呼ばれてない」

「じゃあ、帰って……」

「……」

「ほら、用無いんでしょ？」

ここまで来ると、追い出そうとしているのが丸分かりなのだが、祐希奈は構わない。

寧ろ、わかったのなら帰れと言った様子だ。

突き刺さる言葉の刃に、カナンは瞼を閉じ、直ぐに開く。

「いや、ははは……」

「？　何よ、気色悪いわね……」

「じ、実は、追い出されちまって……。今回ばかりは愛想がつきた！　って言われてな？　つまり、俺、プチホームレスなんだけど……」

「……で？」

「その～良かったら泊めてほしいなぁ、なんて……」

「良くない。帰れ」

「そこをなんとか！」

「……」

「頼む！」

拝んで頭を下げたカナンに、祐希奈は溜め息をつき、顔を上げるように言った。

「……変なことしないって約束出来る？」

「しない！　ってか何でんなこと聞くんだ？」

「今日、うちに先生達呼んで会議するみたいなのよ」

「な、何でまた？」

「父さんの話だと、学校や酒場とはまた違う顔が見れるから。とからしいけど？」

「へぇ～。で、それと変なことのなんの関係があるんだ？」

「……」

カナンを半眼で睨んだ後、祐希奈は「にっぶいわね～」と溜め息と共に言い放つ。

「会議ってことは、生徒が部屋に立ち入るのはダメなわけ。特に期末が終わったから、成績の話だと思うしね。となると、居間は使えないし、私達が使えるのは私の部屋とお風呂、これで理解できた？」

「客間は？」

「空いてるけど、今日は夜冷えるみたいだし、ストーブはまだ出してない、こたつもそう。布団だけよ」

「別に平気だろ。我慢すればなんとかなる」

「アンタ、雨の水音も気になるくらい鋭敏なくせに、隣で騒いでるオヤジとオバサンの声を聞きながら寝れるわけ？」

「お前……よく知ってるな」

カナンは素直に驚いていた。

何故なら、雨の音などが気になるタイプなど誰にも話したことが無いからだ。

その、話したことが無いことを祐希奈は知っていた。

「物音立てたら一瞬で起きるくらいだからそれくらい予想出来るわよ。

はぁ……立ち話して疲れた……。私の部屋に布団敷くからね？」

「お、おい！　それはまずいっ！」

カナンに背を向け、自分の部屋に向かおうと階段を登る祐希奈を呼び止めるが、祐希奈は階段を登ることを止めない……

「同じ部屋は嫌なわけ？」

階段を登りきり、一応といった感じで祐希奈が振り向く。

「いや、そういう問題じゃなくて！」

「それ以外の反論は認めない。まぁ、反論したら泊めてあげないけど……」

「選択権ねぇ！？」

「当たり前じゃない。バーカ……」

「肯定された上にバカ呼ばわりされた！？　あ、いや、ちょっと待てって！」

カナンが話しているうちに、祐希奈は再び背を向けて部屋へと消えた……。

「……」

確定された事実に、カナンは茫然とする。

メイデンとレナスは妹や娘と言った感情なので、カナンは特に何とも思っていない。

しかし、ヴィヴィオと祐希奈となると話しは別。

なんだかんだで結構一緒に寝ているカナンだが、こればかりは慣れるものではない。

「上手くいったの？」

カナンは、話が終わるまで外で待機していたヴィヴィオから声をかけられ、漸く反応する。
上手くいったのか……。上手くいったと言えば上手くいっていたが、カナンとしては微妙な所。

「なんかな、一緒に寝ることになったみたいだ……」

「そっか」

ニコリと笑ってヴィヴィオが頷いたことに、カナンは疑問を抱く。
それを察して、ヴィヴィオは「あのね？」と繋げる。

「祐希ちゃんは祐希ちゃんでカナン君を心配してるから一緒に寝ようって言ったんだと思う。
これなら直ぐに仲直り出来ると思うよ？」

ヴィヴィオに言われて、成る程と思うカナンだが、同時に情けなさも込み上げた。

「まだまだ……だな」

「え？」

「アイツの内面、まだよくわかんねぇ……」
カナンは、相手が何を思って、どんな気持ちでいるかをわかりたい。
しかし、ほとんど読み取れないことがカナンは悲しかった。
そう簡単なことではないとわかってはいても、だ。

「私と違って、祐希ちゃんは複雑だと思うから」

「ん～……微妙……」

「ふぇ？」

「何でもねぇよ」

「う、うん」

表面に感情こそ出すものの、必ずしも外面と内面が同じとは限らない複雑な祐希奈。

心の扉さえ開けば道は真っ直ぐに違いが、鍵の選択を間違えれば溜め込んでしまうヴィヴィオ。

どちらにしろ、カナンにとっては複雑な女の子達だった……。

ここまで理解している時点で、カナンは最初に比べ、かなりの成長を見せているのだが、本人が気づくことはない。

とにもかくにも、家の中に入り、雅樹達が帰るまで、ヴィヴィオとカナンは居間で座り、テレビをつける。

祐希奈が部屋から降りてくる様子は無い。

部屋からは出てこずに、カナンと顔を合わせないようにしていたからだ。

どうやって仲直りするか、カナンの脳内にはそればかりが浮かぶ……。

そんな気分を破壊する出来事、胸ポケットが震えた。

「ん？」

「カナン君のだよね？」

「あ、ああ。誰だろ……」

胸ポケットで振動するのは、殆ど使用することが無い、カナンのＰＨＳ。

取り出して開けるが電話番号が表示されるだけ。

つまり、カナンが登録していない人間だ。

不振に思いつつも、客間へと移動、通話ボタンを押した。

「もしもし？」

『あ、もしもしカナン？』

「……フェイトさんすか？」

『うん。そうだよ』

カナンに電話を掛けていたのはフェイトだった。

当然、カナンに教えた覚えは無い。

「電話番号教えたの……コンニャククラゲっすか？」

『こ、コンニャククラゲ？　何の事？』

「えっと、ハルの事です」

『ハルって、朱皇千春って人のこと？　それなら、そうだね。さっき教えて貰ったんだ。ダメかな？』

「いえ、ダメじゃないっすけど……念話で良かったんじゃないっすか？」

『うん。そうなんだけど、携帯って念話より便利なこともあるから、いいかなって』

「は、はぁ」

『それで、どう？　大怪我したみたいだけど』

「アイツ……また余計なことを……取り合えず、怪我なら大丈夫っす。わざわざありがとうございました。それじゃ……」

『あ、ちょっと待って！』

「へ？」

『電話したのは、怪我のこともだけど、もう１つあって……』

もう用は済んだと思い切ろうとしたカナンに制止がかかる。

暫くの無言、やがて、軽く深呼吸をして。

『あのね、もし、カナンさえ良ければなんだけど……その、色々と危なげな所もあるし、私の技術を教えたりしたいなぁなんて思ったりしてるんだけど……』

と、フェイトは言った。

カナンの脳は理解出来ず、固まる……。

数秒の後、漸く理解したフェイトの言葉。

しかし、理解したが、カナンは信じられなかった。

「それは、俺に、フェイトさんの弟子になれ、と？」

『も、もちろん嫌なら強要するつもりは無いし……』

「マジッスか！？　聞きましたよ？　もう変更は聞きませんからね！？」

『え、え？　そんなに嬉しいの？』

「当たり前っす！」

戸惑うフェイトに、カナンは笑いながら答えた。

カナンにとって、フェイトは大切な事を教えてくれた人の一人であり、戦いにおいても技量に至っては卓越したものがあり、カナンとしては願ってもない事だった。

『そうなんだ……じゃあ、本格的に教えられるのはいつになるかわからないけど、よろしく』

「はい！　ありがとうございます！」

大きな声でそう言った瞬間、客間の襖が開く……

「うっさいのよ！」

バッキャァ！

「ぐはぁっ！」

『か、カナン！？　カナン！？』

「ふん！」

襖が開くなり、祐希奈がカナンに跳び蹴りを放ち、吹き飛ばす。
いきなりの不意打ちに、久しぶりに受けた蹴りに、カナンは勢いを殺せず、受け身も取れない……。
そして、心配するフェイトの声を最後に、カナンは意識を闇に落とした。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

機動六課食堂

「カナン！？　カナン！？」

鬼気迫るフェイトの声に、食堂の全員の視線が集まる。
ちなみに、フェイトは食事中などに電話はせず、きちんと目立たない端でしている。。
今となっては、あまり意味は無いが……。
案の定、一番の友達であるなのはがフェイトに近寄る。

「フェイトちゃん、カナンがどうしたの？」

「えっと……祐希奈の声がして、凄い音がなった後、いきなり切れたんだ……カナン、大丈夫かな？　電話、掛け直してみたんだけど、繋がらなくて……」

「じゃあ心配無いよ。いつものじゃれあいだと思う」

「そ、そう」

ただのじゃれあいにしては派手だった音に不安を覚えるフェイトだが、なのはが全く心配していないため、渋々携帯をしまった。

「それで、カナンはどうだったの？」

「あ、うん。凄く嬉しそうに了承してくれた」

「へぇ～。ホントに仲良くなってたんだね」

半信半疑だったなのはは、感嘆の声をもらす。
今までの行いを見ていては無理もない反応だった。

「うん。私もちょっとびっくりしてる。カナンが私の弟子、か。これから楽しみ」

そして、フェイトは本当に嬉しそうに笑う。
荒削りの才能を、自分の手で研き上げるのだ。
フェイトは、これが楽しみで仕方なかった。

「そういえば……」

何かに気づいた様子で、フェイトは周囲を見渡す。
食堂の中心にいる、六課ＦＷメンバーを数える。

「あむ、あむ」

「アンタ、いつもより食べてる量多くない？」

「そっかな？　いつもより疲れたからかも」

「あっそ……もういいわ……」

「？」

端から、大皿に乗ったスパゲティを三皿平らげたスバルと、それに呆れるティアナ。

「え、エリオ君も食べ過ぎじゃないかな？」

「そうかな？　まだ食べたり無いくらいなんだけど……」

「あはは、そう、なんだ……」

スバルには及ばないものの、大皿二枚を平らげているエリオに苦笑いを浮かべるキャロ。

「アルちゃんそれ食べないの～？　食べないならニーナが食べて上げる～♪」

「はぁ！？　何言ってんだドチビ！　これは最後に残してんだよ！」

「あむあむ……美味しかった♪」

「あぁ～！？　てめぇ何食ってんだよ！」

「あれ？　いらないんじゃ無かったの？」

「許さねぇ……。あたしのトマトを食うなんて……許せねぇ！　ブラッドレイン！」

「わっ！　ゲートクローズ！」

アルティスから放たれる無数の黒針、ニーナの前面が歪み、それらを受け止める。

「おらおらおらぁ！！」

「む～～～！！」

《わぁぁああ！！》

アルティスの猛攻、受け止めるニーナ。
弾き飛ばされた針が周囲に被害を広げる。

「アルちゃん、私のトマト上げるから！」

見かねたキャロが、アルティスに叫ぶ。
声が聞こえたのか、アルティスの攻撃がピタリとやんだ……。

「いいのか？」

「うん……。あとね、ここはセルフサービスだから、好きなだけもらえるよ？」

「……悪い」

素直に謝るアルティス。
一件落着かと思われたが、爆弾が投下される。
無論、ニーナの手によって……。

「も～アルちゃんはお転婆さんだね～！」

「あぁ……？」

《げ……》

まさに、異口同音。食堂にいたメンバー全ての声が見事にハモる……。

数秒後……着火……。

「元はと言えばお前のせいだろうがクソチビニーナ！」

「ニーナは悪くないよ！　アルちゃんが勘違いしたからでしょ～！」

「勘違いさせるようなことしたのはてめぇだろうが！　んなこともわからねぇのか！　だから脳ミソがいつまでたっても犬以下なんだよドチビ！」

「失礼だよ～！　ニーナ、メイデンお姉ちゃんより何倍も賢いもん！」

「いちいちアイツと比べんな！　お前みたいな補助しか脳が無い融合機とは格が違うんだよ格が！」

「アルちゃんだって、攻撃しか出来ないくせに～！」

「今はてめぇの話をしてんだよ！　年中脳内お花畑クソチビ！」

「ニーナの頭の中にお花畑なんかないよ～！」

「そんな意味もわかんねぇからドチビなんだよてめぇは！」

「ふ、二人とも落ち着いて、ね？」

「「ふん！」」

「ほら、喧嘩しないで？」

言い争うニーナとアルティス。それを必死にキャロが間を保ち、仲直りさせようと頑張る。

そんな中、全く気にせず食事をしている者がいた。

自称、ただの執事、朱皇千春である。

いや、気にはしていた。己に降りかかる埃を払い除かなければ、くらいには……

ハルは、降りかかる位置を見極め、片腕で破壊しつつ、食事を続けていたのだった。

「いや～賑やかでしたね♪」

「さっきの騒動の中で笑って食べてられるハルには呆れるですの……」

「緊急時には慌てず騒がず冷静に、ですよ♪　お嬢様」

「昏倒確実な攻撃が飛び散ってる中でそんな三原則守ってる方がおかしいですの！」

「執事ですから♪」

「関っ！　係っ！　無いっ！　ですの！！！」

「あははは。お嬢様、魔力が吹き出してますよ～？」

「ふーっ！」

『ぶっ飛びますか？』

「いやぁ、流石にそれは遠慮したいですね♪」

大変危険な状態にも関わらず、笑みを崩さず、慌てず騒がず冷静にいるハルと、１３歳とは思えぬ胸を揺らしながら、怒るクレア。

「んあ？　どうした？　ルキノ、アルト？」

「いえ、ちょっと泣きたくなりました……」

「同じく……」

「ま、まぁ、頑張れや」

その隣のテーブルでは、クレアの胸を見たルキノとアルトが鬱モードへと突入していた。

ヴァイスは訳がわからず、首を傾げるのみ。

「はぁ……」

「ヴィータ？　どうした？」

「悩みごとですか？」

「話してみろ。我らは家族のようなものだろう？」

「……はぁ～」

シグナム、シャマル、ザフィーラを順に見て、ヴィータはさらに溜め息をついた

「お前らじゃ役に立たねぇ。はやてかリインじゃねぇと……」

「「「？」」」

クレアの胸に地味にダメージを受けている人間がここにも一人存在していた……。

「やっぱりいない……」

一通り食堂のメンバーを見渡したフェイト。

探しているの人は見つけられていない。

「フェイトちゃん、さっきから誰を探してるの？」

「探してるってほどじゃないんだけど、はやてがいないなって」

「……にゃはは」

「なのは、何で笑うの？」

「はやてちゃん、お腹壊しちゃって……」

「……紅茶で？」

「うん……」

紅茶のブレンドを解析するため、何杯も飲んだためだ。

故に……はやてはいない。

結局、はやては食堂に来ないまま、一同は解散、それぞれの仕事を仕上げ、自分の部屋へと戻っていった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一之瀬家

「ん……」

「マスター、起きたか」

「気分はどうですか？」

「大丈夫だ……」

意識を取り戻した時、俺は祐希奈の部屋のベッドに寝かされていた。

話しによると、メイデン達が運んでくれたらしい。

「ヴィヴィオ達は？」

「先程祐希奈はパジャマを持っていたので風呂だとは思うが」

「ヴィヴィオさんは、電球を持ってましたね」

「電球？」

「届くかな？　と、少しばかり不安そうでしたが……」

そうか……どっかの電球が切れたんだな……。

今は雅樹さんが会議中だから自分で……。

「手伝ってくるよ」

「私達も行った方が良いか？」

「着いて来たいんなら構わねぇけど？」

「では、遠慮をして起きましょうか。主が良いところを見せるチャンスですからね」

「ああ。そうだな」

「あのなぁ……別に俺は良いところ見せたいとかそんなんじゃねぇよ……」

「そういうことにしておいてやるか」

「主も男の子ですからね♪」

まるっきり信じてねぇし……しゃあない。

「……お前ら、蟹とオムライス、当分無しな？」

「「えええぇ！！！？？？」」

「じゃ……」

「マ……！／あ……！」

パタンと扉を閉めると、中から叫びが聞こえたが、無視して階段を降りた。

「う～ん……一番の問題児は、やはり……」

「……」

襖の奥から聞こえる担任の言葉。

一番の問題児、そんなの聞きたくもない。

もし俺だったら嫌だし、走るか。

「お、いたいた」

廊下を真っ直ぐに進むと、丁度、脱衣室の隣辺りに、ヴィヴィオが脚立を立てて、電球を取り替えていた。

やっぱりというか、届いてない……

「ん……」

「待てって！」

「ふぇ？」

座ったままでは無理と思ったのか、立ち上がろうとするヴィヴィ

オを止めた。
俺だとわかると、ヴィヴィオは笑みを浮かべる。
「カナン君、目が覚めたんだね」
「今さっきな。で、ヴィヴィオが電球代えようとしてるって聞いてな。手伝いに来た」
そう言うと、ヴィヴィオは嬉しそうに笑ってくれた。
この顔が見れただけでも、言った価値がある。
「わぁ、ありがとう♪　ちょっと怖かったんだ。じゃあ、お願いするね？」
「はいよ」
ヴィヴィオが脚立から降りたのを確認してから、登る。
しっかし、脚立なんて久しぶりだな。
「はい」
「サンキュ」
ヴィヴィオから電球を受け取り古いものと交換、あと1つ……。
「マスターーー！！！／主ーーー！！！」
「へ？」
廊下の先から物凄い勢いでメイデンとレナスがこっち飛んできて

いた……。

「マスター！　謝る、謝るからオムライスは！」

「蟹だけは許してください！」

「ちょっ！　お前ら、顔、近いって！！」

ほとんど目の前、メイデンとレナスが必死に訴える。

あまりのドアップに俺は体を避けた……。

「カナン君！　あんまり暴れると……わわっ！」

「やばっ！」

脚立が揺らぐ……。

何とか建て直そうと、体を捻ったが、脚立は止まりそうにない……。

「あー……」

痛そうだな……。

と、それを最後に、扉をぶち抜いた……。

「つ～……ん？」

倒れた部屋がなんか温かいし甘い匂いがする……。

湯気？　それに、右手がなんか平らだけど柔らかい物に触ってる……。何だこれ？

「んっ！」

「……」

指を動かすと声がした……。　声！？　声ぇぇぇぇ！？

おそるおそる、頭を上げる……きめ細かい肌……、濡れた銀髪……、巻かれたタオル、で、俺が触っていた物は……

「そう……。今日を命日にしたいわけね……」

「祐……希……奈……」

タオルの上から、祐希奈の胸に触っていた……。

瞬間で引っ込めるが、既に後の祭り……。

「こ、これには深いわけが！」

「ほ～？」

「ヴィヴィオ！！」

「きゅ～……」

「のう！」

倒れた脚立に巻き込まれたのか、ヴィヴィオは気絶していた……。

「メイデン、レナス！」

「マスター、謝るから！」

「蟹だけは～！」

「……」

ダメだ……この二人、ことの次第をわかってねぇ……。

「で、理由って何よ？　胸を触ったのは事故としても、アンタ、今も絶賛覗き中なんだけど……？」

「っ！」

これほどまでに、俺の中で回れ右が速かったことは無い。

別に、見ていた訳じゃない。胸のことで頭が一杯だっただけだ……。

「さてと……」

祐希奈が呟く、同時に展開された結界……。

現実と世界がズレ、祐希奈と俺意外の気配が消える……。

「私、ねちねちやるの、嫌いなのよね……」

「知ってますですよ……」

恐怖で上手く舌が回りすぎて口調が変だ……。

「嫌いだから、アンタが私に勝てたら、壁作ってたのも、胸を触ったのも、覗きしてたのも、全部綺麗さっぱり水に流してあげる……」

瞬間、俺に走り抜けたのは安堵などではなく、戦慄……。
冷たい物が、背筋に流れていた……。

「ま、負けたら？」

「ん？」

空間把握が捉える祐希奈の姿、左脚が踏み込まれ、沈み込む床……。
まずいと、脳が警鐘を鳴らすが、空間を形勢する前に、祐希奈の掌が背中に当たった……。

「死刑♪」

「がっ……はっ……」

右腕の身体強化を行った掌底。だったと思う……。
一之瀬家の壁をあっさりとぶち抜き、俺は宙を舞った……。
アシェルの補助無しでこの威力……。
案外、祐希奈の言葉は嘘じゃないかもしれない……。

Ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ……

第二十九話　アクシデント（後書き）

二極に別れた目的地に、それは決断を下す。
再び歩み、それが目指す先は……

第三十話　聖剣と魔弓（前書き）

“それ”が現れる……。
刻んだ繋がり目指し、歩みを止めずに進みだした……。

第三十話　聖剣と魔弓

クレイ「前書き、質問コーナー」

一同「わぁ～！」

クレイ「って、これは俺が仕切って良いものなのか？」

未来「良いんじゃないか？　祐希奈に任すって言われたんだし」

クレイ「それがかなり不安ではあるんだけどな……」

ジル「まぁまぁ、文字数も多いことだし、さっさと始めてくれたまえよ！」

クレイ「何だこのえらそうな奴……」

未来「カナンによるとスルーしてくれって話だ」

カナメ「そうですね。ジルさんのことは無視にかぎります」

ク・未「どっから出てきた！？」

カナメ「いつも～♪　振り向けばすぐそこに～♪　カナメちゃん♪」

ク・未「こわっ！」

ジル「ほらほら、漫才をやっている時間などないと言うのに！　や

れやれふ～」

未来「お前はマジでうざいな！」

クレイ「頭いてぇ……。シャッフルさんからたくさんの質問を貰った。質問その一
『ヨシュアさんは何故岐阜に？』ってことだが？」

カナメ「未来さん、なんでだと思います？」

未来「お、俺！？　そうだな……友達と遊びにいったとか？」

ジル「甘いね！　作者は愛の巣を育みに……」

ピッキーン……

カナメ「下ネタはやめてくださいね♪
答えは、明鏡止水を極めに、でした♪」

クレイ「うん。家族旅行だからな？」

カナメ「ダメですね……。クレイさん冷静過ぎます。ＬＶではバカにならないと死にますよ？」

クレイ「そんなこと……」

未来「あながち間違いじゃないんだよな……」

クレイ「何！？」

ジル「さて、次の質問だね！」

クレイ「いつのまに！？」

ジル「ふ……ラブパワーは無限大と言うことだよ！」

カナメ「一滴も注いでませんよ～♪」

ジル「勝手に取るからね♪」

未来「最低だ！」

ジル「さてさて、クレイことレイレイはクーデレかツンデレか、ふむふむ……」

クレイ「同じ名前だと複雑な気分だ……」

ジル「ではこちらをパンダ君と呼ぼうか？」

クレイ「ごめん乞うむる！」

ジル「ツンデレとは、ツンツンデレデレ、つまり、僕とカナ吉のような関係だが……」

シュゴォォォ！　ちゅどーーん！

ジル「ぐふ……。こ、これがツンだよ、レイレイ……。しかし、愛ゆえに僕には気持ちいいとしか感じないね！」

カナン「ふっ！」

ギュン！
シュドドドド！　ドカ、ベキ、バッキャァアア！

ジル「はっはっは！　そんなに僕のことが愛しいのかい♪　ツンツンだなぁ全く♪」

カナン「誰がじゃ破滅的バカ！」

カナメ「さて、キリが無いので私が。クレイさんは、クーデレかと。ルシフェルさんにはツンツンですが……」

未来「間違いなくうちのクレイはクーデレだけどな……」

クレイ「三枚に卸すぞ？」

未来「さて、次、ポジションはどこになりそうかだが？」

カナメ「そうですね……。ガードウィングだろうと思います。続けて最後の質問となりました。カナン君はいつまでヘタレと呼ばれるのか、について……」

一同「ずっと」

カナン「一番嬉しくねぇ満場一致だよ！
ああクソ！　リリカルヴィヴィオ、始まりやがれ！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

風を切る。冗談などではなく、カナンは本当に風を切り、吹っ飛

んでいた……。
デバイス無しとは言え、手加減抜きに祐希奈に掌底を叩き込まれたからである。

死刑か……

全身に流れる激痛に耐えながら、その言葉の意味を考える。
普通の人間ならば、冗談だと思う。
しかし、カナンは冷や汗が吹き出していた……。

「ジャッジメントっ！」

２００m先、レイザーフォーテルをつがえる祐希奈を見たからだ。
カナンが騎士甲冑を纏っていないにも関わらず、だ。
無論、そんな状態でレイザーフォーテルの一撃を受ければ、非殺傷と言えど、ただでは済まない。
一応、最低限の警戒として、回避は出来るよう、魔力を掌に流し、手をつき、吹き飛ぶ勢いを止める。

「アローー！！！」

「マジで撃ちやがった！」

そして即座に跳躍。その真下を白銀の矢が過ぎ去っていった……。
カナンの背後で爆発が起こり、あっさりと民家が崩壊する……。
カナンは思った。

アイツは殺る気だ……

と……

「ブルーゲイルっ！」

カナンが思考している間にも、入れ替わる弓。
選択するは、蒼き翼が広がる蒼弓。
弦を引き絞ると同時に周囲に生まれる無数の矢……。
そしてそれは、迷うことなくカナンに放たれる！

「ちっ！」

メイデン達を呼ぶことも叶わないカナンは、左手に剣のみを転送、腰だめに構える……。
ブルーゲイルは絶対必中。逃げる意味は無いからだ。

「はっ！」

鋭き呼気の吹き出しと共に、一瞬にして放たれるは閃光の乱舞。
その閃光の一閃一閃が矢を捉え、斬り飛ばす！
剣に触れる度、光矢が弾け、魔力の粒子として辺りに散らばっていく……。
その矢がほんの一瞬、途絶えた。
感じた違和感に疑いをかけず、カナンは乱舞を終え、投げ出すように身を捻る。

「だぁぁぁっ！」

直後、熱風と爆煙が発生する。
祐希奈が空中からの落下の威力を追加した紅蓮の拳をカナンがいた場に叩きつけたからだ。

「烈破紅蓮……」

カナンが回避する。その程度、祐希奈には予測済み。
故に、祐希奈は既に次のフェイズへと移っていた……。
前面へと展開される、炎で描かれたベルカ式魔方陣……

「こ……のっ！」

瞬間で屈み、膝のバネを使って跳躍、直後……。

「爆砕撃っ！」

左腕が魔法陣に叩きつけられると同時に迸るは紅き炎。ただ、敵を燃やし尽くさんと蹂躙し、奔流は、前方２０ｍを炭化させた……。

「逃がすか！」

尚も祐希奈は止まらない。右腕に即座にブレードを展開、炎が纏われる……。
体勢不十分、さらに飛行魔法も使用不可。
カナンに残された選択肢はただ一つ……。

「来い……。メイデェェン！」

展開される金色のベルカ式魔法陣。
強制召喚。メイデン達の意思に関係なく、呼び出すことが出来る術式だ。

「ふあ？」

「オムライス承認！　セットアップ！」

「！！　了解だ！」

意味を瞬時に理解したメイデンは、カナンに騎士甲冑を纏わせ、自身は一度、鞘と同化する。

しかし、この時には既に祐希奈はカナンの目前へと迫っていた……。

「くっ！」

「紫電一閃っ！」

振るわれるは上段からの一撃。

なんとか剣を持ち上げたカナンだが、体勢を維持出来ず、空から叩き落とされる……。

もうもうと上がる土煙。しかし、一陣の突風によってそれが吹き飛ぶ！

その中心に、黒き鎧と剣を持つ男子がいる。カナンだ。

「ってぇ～」

『マスター、大丈夫か？』

「ま、何とか……。それに言ってられねぇみたいだしな……」

空間を歪め、３ｍの後退。降り注ぐ光の矢！

それを放ったのは祐希奈。会話を待つ気などさらさら無い。

「ジャッジメント！」

「おいおいっ！？」

カナンは表情を驚愕に染める。
白銀の翼、その背後にうっすらと顕現している羽衣を纏う巨大な女性の天使。
しかし、不安定なのは明らかであり、それは幾度も天使に走るノイズが証明していた……。
だが、構わない。天使に弓が転送弦が引き絞られる……。

「アァァロォォォーー！！！」

「っ！」
『マスター！』
「わかってる！」

祐希奈の動きと天使の動きが同調。
ジャッジメントアローは単発でＳ＋の威力を誇る白銀の矢。
それが、計２０発。天使から放たれる！
バックステップを踏む。同時に着弾する矢の爆風に身を任せ、自分から飛ぶことで爆発的な加速を得る、続いて来た正面からの矢を確認。
抜刀、地へと突き刺し、急停止、慣性の法則を利用、弾かれたように飛翔する。

『ラストだ！』
「おおぉぉらぁ！！」

矢の一本、左腕に剣を転送。横殴りに殴り付ける。
無論、ただの斬撃とＳランクを誇る矢。カナンが勝てるはずもなく、切り揉みしながら弾き飛ばされた。
しかし、カナンはそれで良かった。
残りの矢を全て避けることが出来たのだから……。

高く、高く、弾き飛ばされたカナンは星空をバックに漸く停止。
その瞳がカッと開き、祐希奈までの距離を計算、カナンと祐希奈の間が歪められる……。

「壱式……抜刀剣術……」

ゆっくりと納刀、翔けるは一瞬！

「暗夜一閃っ！」

消失と同時に現れ、剣が振るわれた。普通ならそう見える。

「アンタ……ナメてるわけ？」

「別に、そんなんじゃねぇよ……」

“普通”なら
暗夜一閃。それは幾度も見た技。
スキを突いた一撃ならまだしも、万全の上体で構える祐希奈には通らない……。
それを証明するように、袈裟に放たれた一撃は、確かに炎に包まれた右腕によって受け止められていた。　カナンから力が込められ剣が音を鳴らすが、微動だにしない……。

「無駄……」

引き絞られる祐希奈の左腕、その手は紅蓮。
それを見た瞬間、カナンは地上へと空間を繋げる。

「よっ！」

祐希奈の拳がカナンの顔面を捉える瞬間、消失。
同時に飛行魔法を解除、祐希奈の体が落下する。
その先にはカナン、既に剣は納刀されていた……。

「絶空っ！」

カナンを中心に、竜巻が形成、それは鉄壁の防壁と化す！

「はぁぁぁっ！」
破れぬモノは無いと、意思標示をするように、祐希奈は身体強化を行い、ブレードを突き立てる！
絶空が鉄壁の城門なら、刺突は破壊の衝車。
守りきるか、破壊されるか、二つに一つ。
竜巻と刺突が火花が舞い踊らせ、夜に明るく輝く……。

「メイデン、やるぞ！」
『任せろ！』
「アシェル、行くわよ！」
『了解です！』

叫ぶも動くも全く同時。
鞘から現れたメイデンがカナンに溶け込み、鎧は銀へ、髪と瞳は金へ……。
アシェルが輝くと、祐希奈の背に広がる白銀の翼、ブレードに纏われる紅蓮……。
さらに激しくなる火花、それに幕を引こうとカナンは剣に風を、祐希奈は手甲をスライド、カートリッジを弾き出す！

「旋っ！　龍っ！」

剣に渦巻く風、解き放たれる瞬間を待ち受ける……。

「ジェノサイドっ！」

剣に纏われる炎を、尖端に圧縮、放つは祐希奈の十八番……。

「破ァァっ！／ブレイクっ！」

反発するお互いの存在に呼応するようにまたしても同時に重なる咆哮と技。

竜巻の内側から、それを破壊するように撃ち放たれる暴風。

ブレードの尖端から、撃ち抜くことだけを考えた紅蓮の巨爆。

紅蓮を吹き飛ばさんと、暴風を貫かんと、互いが互いを反発し、滅ぼし合う。

その余波は結界内の風景を削り取っていく……。

「『……ォォオ！』」

カナンとメイデンの叫びと共に、厚くなる壁、威力を増す暴風。

それに祐希奈は奥歯を噛み締めて耐え忍ぶ。

しかし、明らかに威力は負けていた……。

『祐希奈？』

「許さないんだから……」

俯いた祐希奈から、透明な雫が落ちる……。

引き絞るは左腕、カートリッジを三発弾き出す。

纏われるは、紅蓮より、遥かに高い熱を発する蒼炎……。

ブレードを引くと同時に踏み込む！　共に、雫が背後へと零れて

いった……。

「胸を触ったことも！」

激震が走る。

祐希奈の拳が風の衝撃波に叩きつけられたからだ。

祐希奈は叩きつける。想いを打ち込むように。

「他人のことばっかで、重い過去を一人で背負ってずっと話してくれなかったことも！！」

「なん……で……」

蒼炎を纏う拳を、蹴りを、息つく暇なく打ち込む！

揺らぐ……また揺らぐ……。その度に大きくなる振動。

そして、カナンの疑問。何故、祐希奈が知っているのか……。

「アンタの壁を取り払ったのが、私達じゃなくてハルだったことも！！！！」

「……」

打ち込まれる拳撃の威力に、風の流れが乱れ、防御能力が弱まり始める……。

それを無視して、カナンの心はある仮定にたどり着く。

俺が、過去を話す前、ハルは言っていた。“交代の時間”と、その交代した相手が、祐希奈達だったとしたら？　何かが理由で戻ってきたのだとしたら？

もし、過去の話を祐希奈が聞いていたとしたら……

巡る思考の結末、祐希奈がカナンに関わった最初にして最大の理由、それは。

瞬間、衝撃波を切り裂いて、祐希奈がカナンの前に着地、その顔は、涙で濡れていた……。

「支えに……成りたいのに……アンタに支えられるばっかりじゃなくて、私が！　アンタの支えに成りたいのに！！！
身勝手かもしれないけど、今回は許さないから……許せないから……。全部、許す気ないから！！」

「祐希奈……」

確かに身勝手な願い。しかし、カナンには祐希奈の気持ちもわかる気がした。

約六年前から、支えになると決めた祐希奈。

その祐希奈からしてみれば最も支えになってやりたい出来事である。

それを、横から来たハルがあっさり聞き、カナンは過去を乗り越えた。

つまる所、祐希奈はやるせなさで一杯なのだ。

自分は必要では無かったのかもしれないという……。

その不安定な心に、追い討ちをかけたのがこの一件、ということだった。

「業炎！」

話は終わりと、右腕に宿る蒼炎が物語る。

カナンは、黙って右腕に剣を持ち変え、剣腹に左掌を当てる……。

「爆裂衝破ァァ！！！」

祐希奈が走り込み、カナンへと接近。
瞬間、カナンの腕が剣腹にそってスライド、剣から弾ける雷光！
それは、カナンの掌へと集束される……。
祐希奈に合わせるように地を滑る脚。
拳と掌底が激突！
一瞬の静けさ、そして極大な振動が結界内を揺らす。
爆煙の中で、カナンと祐希奈は打ち込んだ姿勢のまま停止していた……。

「祐希奈……。あれは、ハルに借りがあるからだ……」

「そんな言い訳……」

「ああ。証明にはならない。だから……お前が言った通り、お前に勝って許してもらう！」

「良いわ……。私は自分で言ったことは曲げないわ……。来なさいよ！」

「言われなくてもな！」

弾かれたようにバックステップを同時に行い、カナンは左に、祐希奈は右に、回転を行いながら跳躍する！

「せいやぁぁぁっ！！／だぁぁぁっ！！」

咆哮と共に、開始のゴング代わりの蹴りと蹴りの激突音。
どちらも蹴り抜くことが出来ず、反動で下がる……。

互いに止まる気は無い。踏み込む！

「はぁっ！」

祐希奈からの右手の正拳突き、ギリギリまで引き寄せ、眼前で払う！

「せぁぁぁっ！」

左拳を握りしめ、大地の力と共に、鳩尾に叩き込んだ。

祐希奈の体がくの字に曲がる……。

「がっ……」

仰向けに倒れる瞬間、祐希奈が片腕を地につけた……。

寒気が、カナンを襲う。

「っ！」

感じた寒気に半歩分カナンの体が後退した直後、紅蓮の蹴り上げが眼前を通過した……。

「痛い……でしょうが！！！」

さらに、跳ね起きる祐希奈の体。捻られる腰、重心移動、軸足固定、放たれるは回し蹴り！

「爆砕烈脚！！！」

「ちっ！」

反射的に身を屈める。爆砕烈脚はカナンの頭上を通過、しかし、カナンの体は吹き飛ばされていた……。
蹴りの風圧で、だ。

「はぁぁぁっ！」

ブレード展開。カナンを追撃する祐希奈。
横殴りに叩きつけられたブレードと縦に構えた剣が火花を散らす。
そのままつばぜり合い。

「弱いっ！」

「くそっ！」
高い音が鳴り響き、エクスカリバーが弾け飛ぶ。
振り抜かれたブレードが顔にかすり、カナンの頬が浅く切れた……。
しかし、多少の痛みには構っていられない。
既に祐希奈は動き始めているのだから。
一秒もたたずに、空に紅蓮の十文字が描かれる……そこにカナンはいない。

「エクス！」

祐希奈の頭上、十数メートルの高さにカナンは移動していた。
輝きを放つ剣を腰だめに構えながら……。

「カリバァァー！！！」

目映い光を放ちながら、黄金の柱は祐希奈へと降り注ぐ！

その光を、祐希奈は持ち上げた蒼炎を纏うブレードで受け止める！

「こんな中途半端な集束で……」

ブレードが蒼炎がさらに吹き出し、巨大な炎剣へと形どる……。

「止められると思うなぁぁぁ！！！」

振り払われた蒼炎剣。その技は、蒼龍煌塵閃。
祐希奈の中で、最高ランクを誇る斬撃。
その刃は、カナンの砲撃を切り裂き、天空へと飛翔する。

「んなもん、思ってねぇよ」

「っ！！」

背後から響いた声……。
全く反応出来なかったことに祐希奈は驚愕するが、体は経験からか、既にブレードを振り払っていた。
剣とブレードがぶつかり、音を奏でる……。

「抜刀連術……壱ノ型」

コンマ一秒、その僅かな時間に閃光が煌めく……。
ブレードを弾き飛ばした直後、祐希奈の背後から前へとカナンが空間突破で駆け抜けた……。

「虚夜七連閃（きょやしちれんせん）……」

「か……はっ！」

カナンが呟き、納刀する……。
同時、祐希奈の鳩尾に七連続で太刀が打ち込まれた……。
暗夜一閃の速度と虚空閃の空間斬撃、その二つの融合技だった……。
さらに、カナンは止まらない。剣を地面に突き立てる！
「終式剣舞……」
「がっ！」
祐希奈を打ち上げたのは山を思わせる巨大な石針。
まともに受けた祐希奈は宙を舞う……。
それを見て、カナンは少し辛そうにするが、やはり、止まる気は無かった。
祐希奈は全力だから。自分も全力でやらなければ、相手の気持ちを踏みにじると知っているから……。
意を決し、柄を握る。剣に雷が落ち、蒼白く光る……。
「蒼覇っ！　天蓮華ェェェっ！！！」
振り抜きながら引き抜く！
雷撃は石針を迷い無く進み、石針の頂上で夜空に蒼い華を咲かせた……。
「……やっぱりな」
カナンに浮かぶのは苦笑い。
煙の中で、存在感を示す白銀の翼に包まれながら、祐希奈は雷撃に耐えきっていた……。

祐希奈が左手を突き出すと、レイザーフォーテルが転送される。
「我が弓よ……。内に秘めたる力、今、解き放て……」
「へぇ……」
レイザーフォーテルが鼓動した。
カナンは、その鼓動は喜びと嬉しさからのものだと理解する……。
溜まった力を発散するかのように、レイザーフォーテル自体から魔力の波動が感じられる。
「雷弓……。ヴァジュラ……」
天候が美しき星空から、激しい雷雨へと入れ替わる……。
弓に纏われるは雷。魔力の雷撃変換。
デュランダルの凍結能力と同じものだ。
「乾坤一擲……」
弦が引かれる……。
放たれようとしているのは、まさに稲妻。
たった一人の少女が、天災を巻き起こそうとしていた……。
「メイデン、叩っ斬るぞ！」
『はぁ……、回避は？』
「しない！」
『……わかった』
その稲妻を斬らんと、笑っている男子がいた……。
雨の中、その瞳は好奇心に輝いている……。

「ヴォルテック！！」

「金剛……っ！！」

稲妻の落ちる先、剣の向かう先、どちらも道は一本。
ならば結果は一つしか得られない……。

「「アロォォォー！！！／閃牙ァァァ！！！」」

同時に咆哮！
光を撒き散らしながら激突する稲妻と剣、単純に考えれば剣が稲妻に勝てる筈はない。
しかし、メイデンがいる。それによって、雷が剣に吸収され、弱体化していた……。
故に同等。否、剣が稲妻に食い込み始める……。
進む……。とてもゆっくりと、しかし確実に……。

「ォォォォ！！！」

稲妻が消え去る……。
祐希奈の発動限界までカナンが断ち切ったからだ。
稲妻を切り裂けば、進路を阻むものは無い。
残光残る中を一気に駆け抜け、斬り払う！

「はぁぁぁっ！！」

袈裟に斬りつけた瞬間、一際高い音が鳴り響き、剣が止まった……。
Sランクを誇る斬撃を受け止めたモノそれは翼だった……。

無論、祐希奈の翼だ。これにより、限界を越えた一対の翼は消えるが、役割は果たした。

「終わりよ！」

祐希奈が弓をつがえる……。圧縮する魔力！

「誰が終わるかぁ！」

右手に剣を転送。集束、砲撃を至近距離から叩き込む！

「掛かったわね……」

「なっ！？」

祐希奈の翼が黒く変色、カナンの砲撃を吸収する……。

砲撃分の魔力が黒矢に上乗せされ、威力が上がる！

「魔弓……シヴァ……」

レイザーフォーテルが完全に闇に染まり、同時に祐希奈の翼も鋭利なモノへと変わる。

この弓の能力は、希少技能で受けた魔力を矢に上乗せすること……。

「ヴォルカニック！！！」

黒矢が燃え盛る！

周囲の気温が秒単位であがっていく……。

「くっ！」
『マスター！　間に合わん！　障壁を張れ！』
即座に剣を斜に構え、ラウンドシールドを展開。
しかし、衝撃は、来なかった……。
「……」
「え？」
黒炎が消え、弓が消え、結界が消え……。
遂には、祐希奈の敵意が消えていく……。
「今回こそ、ブッ飛ばすって決めたのに……、決めたのにぃ……、
何で、肝心な、所で、我慢、できないのよ……」
「お、おい？」
ポタポタと涙を流し始めた祐希奈に動揺するカナン。
一旦は集中することで押さえ付けた悲しみが、祐希奈の心の関を
切ってしまった。
「アンタなんか嫌い！　大っ嫌いなんだからぁぁ！！」
「あ～……悪い」
泣きながら怒鳴る祐希奈に、言い返せるはずも無く、こめかみを
掻きながら謝るしかなかった。
「嫌い、嫌い……」

「ごめんな？」

「な、何……！？」

カナンは祐希奈に近づき、軽く抱き締めて、背中を優しく叩いた。

「俺が、過去を受け入れられたのは、何も、ハルだけのお陰じゃないさ。お前らと会って、ちょっとずつ進んで、強くなって、だから受け入れられた。

全部繋がってるんだ。祐希奈に会ったことも、ヴィヴィオに会ったことも、ハルにも、クレアにも、六課の皆にも、たくさんの人に関わって、俺は、風間カナンとして漸くここまで来れた。

お前が必要無かったなんて事は絶対に無い。誇れ。私は凄いんだって思っとけ。もし、それをバカにする奴がいたら、俺がブッ飛ばしてやるから」

背中を叩きながら、カナンは言葉を紡いでいく……。

祐希奈は、ただ、その言葉を聞いていた……。

「まだ、納得してもらえないか？」

「もういい、けど……、その……」

「何だ？」

「もうちょっと、好きでいてあげる……」

「っ！！！」

不意打ち気味の一言に、カナンは赤く染まる……。
しかし、何とか自制心を取り戻し、深呼吸。

「か、帰って風呂に入らないとな……」

「そうね。私も結構汗かいちゃったし、もう一回入るわ」

「覗かないからな！？」

「……」

ジーっと視線を反らすカナンを半目で睨み……。

「そんなに見たいんなら一緒に入る？」

「で、でで、出来るかぁぁぁあああああ！！！」

「冗談よ。冗談♪　ほら、帰るわよ♪」

「おわっ！」

カナンの手を引き、一之瀬家に向かって飛行する。
最初は抵抗していたカナンだが、やがて、諦めたのか、祐希奈と並んで飛んでいく……。

「素直でよろしい♪」

「やかましいわ！」

『ふぅ……』

祐希奈とカナンが仲直りをしたのは良いものの、人形形態に戻るに戻れないメイデンだった……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

機動六課

夜。訓練も無く、警備員以外は皆、部屋でその日の活動報告を纏める時間。

まとめ終わった者は、自由に出来る至福の一時。

風間カナン

ランクＳ＋～測定不能値

術式：古代ベルカ式

希少技能（有）：空間干渉系

戦闘方法：抜刀剣術

攻撃（平均値）：Ａ＋～Ｓ＋

まだまだ伸びる可能性有り。一番の重要課題。

威力強化だけでなく、剣撃以外にも幅を増やすことが必要。

全体的に見て、拳に纏わせる等の圧縮は苦手な様子。

攻撃（最大値）：Ｓ＋～測定不能値

カナンは、感情の高ぶりによって大きく変動するらしい。

無理な指導は悪影響を及ぼす可能性があるため、可能な限り、必要最低限に留める。

速度：ＳＳＳ～測定不能値

攻撃と共に、育てていけるようにする。
通常とユニゾン時で段違いになるため、対応した指導を。

防御：Ｓ

絶空があるため、優先度は低め。
障壁の強度はあるが、出力調整が苦手な様子。
後に響くことが無いよう、注意

回避：Ａ～ＳＳ＋

始まった直後は回避を行うが、集中力が上がる度、確率は低下。
攻撃ごと叩き斬る場合が多く見られる。
しかし、無理に指導を行うとカナンのリズムを狂わせるため、カナンが求めた時は指導。

その他

口調が変わり始めたら注意が必要。
完全にスイッチが入っているため、中途半端な攻撃は行わないこと。
特に遠距離はカナンが叩き斬ることを想定し、先読みしてから放つこと。

「……あ、まだあるかな」

コンソールを操作し、速度の欄に、希少技能以外にも移動系の魔

法を、と追加するフェイト。

「ん？　なのは、はやて」

「フェイトちゃん、随分頑張ってるね～って……うわぁ、これって……カナンの、だよね？」

「ほんま、凄い能力の高さ言うか……
あ、フェイトちゃん、コーヒー、飲むか？」

「ありがとう。貰うね」

三人でコーヒーを飲みながら、主にカナンについての談笑を交わす。

「それにしても、よくこれだけデータ取れたね？」

「それは、バルディッシュが頑張ってくれてるから」

「そうかぁ。バルディッシュ、お疲れさんやね。そや、今度シャーリーにメンテ頼んどくわ」

「良かったね。バルディッシュ」
『Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ』

「その時に、レイジングハートも一緒に受けようね」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ』

短く返事を返したデバイスに笑いかけ、談笑が続く。
その時、機動六課が大きく揺れた！

「わっ！／なっ！？／うっ！」

あまりの揺れに三人はバランスを崩して床に倒れる。
そして、警報が鳴り響き、赤く光る部屋の中……ウィンドウのカナンのデータが消え、浮かんだのは……

『Ａｌａｒｔ』

の文字。はやては、ロングアーチの六課の監視メンバーへと通信を繋ぐ。

「ロングアーチ！　今の揺れの原因は！？」

『こちらグリフィス！　どうやら、六課の内部で……うわぁ！』

「「「っ！！！」」」

二度目の巨大な揺れ！
緩まるのを待ち、もう一度、グリフィスが報告する。

『朱皇千春さんの部屋が原因のようです！』

「原因て、なんのや！」

『理由はわかりませんが、千春さんがあ……』

「グリフィス君！？」

肝心な理由を聞き出す前に、グリフィスとの通信がいきなり途絶

えた。

「あかん。通信が途絶えた……わかったのはハルさんの部屋でなんかあったってことだけや」

「話してても仕方ないよ。はやてちゃんはここで……」

「私も行くよ！　現場がここなら私が直接原因を調べなあかん！」

待ってて。そう言おうとしたなのはを遮り、はやては強く言った。

なのはは、そっかと笑い、フェイトを見る……。

「走ろう。なのは、はやて！」

「うん！／了解や！」

隊長陣三名は、原因を究明するため、ハルの部屋へと走り出す。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

六課全体を揺らすほどの振動だ。これで起きない者はまずいないだろう。

ＦＷメンバーもそれは同様だった。

「きゃ！」

「うわぁっ！」

エリオとキャロがベッドから転げ落ち、アゾットの剣がデスクか

ら落ち、高い音を響かせる。

「な、なになに～!?　揺れてる!?　地震、地震だよ～!」

「んなことはわかってんだよ!　お前はうるせぇから喋るなドチビ!」

剣から落ちた衝撃で目を覚ましたニーナをどやしつけ、アルティスはキャロへと飛ぶ。

「ピンク頭。これ、どういうことかわかるか?」

「う、ううん……。私、寝てたから……」

「そうか……。エリオ、お前は?」

「僕も同じだ。ごめん……」

「寝てて普通だ。謝る必要はねぇよ」

翼をたたみ、キャロの肩に舞い降り、瞳を閉じるアルティス。

一方、ニーナは、ブンブンと飛び回る……。

「は、速く行かなくちゃダメだよ～!　怪我してる人がいるかもしれない!」

ニーナの言葉に、アルティスは片目を開け、キャロに問うような視線を向ける。

「……ピンク頭、今、動くのは得策か?」

「えっと……違う、と思う。今は待った方がいいかな？」

コクりとアルティスは頷く。地震では無かった場合のことも考えねばならないからだ。

「それにドチビ。お前はなんも感じ無かったのか？」

「え？」

「自然の力ならお前はここにいる面子の中では一番敏感なはずだろうが。何かそういう予兆があったか？」

「あ……忘れてたよ～」

「ド阿呆……」

「む～！！！」

呆れながら言い放つアルティスに、ニーナはむくれる。

当のアルティスそんなニーナを無視をする。

「あたしの予想だと、地震でも、ましてや襲撃なんかじゃねぇ……だろ？　嬢さん？」

アルティスが両目を開き、扉を見つめる。

すると、扉が開き、ゆっくりと、クレア、ティアナ、スバルが入ってきた……。

キャロには、悲しんでいるように見えた。

「あのバカ執事を止めるの、手伝って欲しいですの」
いきなり本題から切り出したクレアにキャロは一瞬驚き。
「……うん」
と、短く答えた。
お互いに、それ以外は話さず、クレア、キャロを先頭に、一行は原因の部屋に走り出す。
ハルの部屋へと……ハルに起きた出来事とは……。
Ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ……
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
祐希奈「後書き召喚コーナー♪」
カ・未「ぎぃあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！」
クレイ「そうか。叫びを上げるくらい美味いか。遠慮するな。残せとは言わん」
カ・未「しぃぬぅぅうううううう！！！！！」
祐希奈「全く、やかましい連中ね。こんなに美味しいのに」
ヴィヴィオ「あはは。でも凄い量だよね～♪」
メイデン「読者さんのために全て書くと……。

ショートケーキ、チョコケーキ、ガトーショコラ、チーズケーキ、モンブラン、ロールケーキ、フルーツタルト、ミルフィーユ、ミル・クレープ、シュークリーム、エクレア、ティラミス。各×５個ずつだ」

レナス「そして紅茶は凄いですよ～♪」

祐希奈「テスタメントさんから勝手に拝借した、タカトが操作するギガンティスが入れた、ＦＴＧＦＯＰよ♪
略してギガ茶♪」

カナン「無意味！　果てしなく無意味！」

未来「ていうかタカトもそんな無駄なことに付き合うなよ！」

祐希奈「ネタのためにごり押ししたわ♪
その時のタカトとの駆け引きがこちら♪」

カ・未「撮ってんのかよ！」

祐希奈『タ～カト、やって♪』

タカト『御意に』

プツ

祐希奈「いや～タカトとの交渉は疲れたわね～♪」

未来「どこがだよ！？　二秒で終わってるし！」

クレイ「お前はこの二秒にありとあらゆるやり取りがなされたのかわからないのか」

未来「わかんの！？」

クレイ「……さぁ、次はあまぁ～いケーキだぞ？」

未来「逃げた、今逃げ……むがぁぁあああああ！」

カナン「ドンマイ、未来さん……」

クレイ「何を言ってるんだ？　お前もだ」

カナン「い、いや、いぃぃやぁあああああああああああああああああああ！！！」

ポン

クレイ「ん？」

５カ・５未「う……う……」

クレイ「よ、幼児化！？」

５カ・５未「わぁぁあああああああああん！！！！　お兄ちゃんがいじめるよぉぉおおお！！！」

ゴォォアアア……。

奈津美「私の可愛い息子を泣かせたのは誰かなぁ？」

カコ「私の可愛いお兄ちゃんを泣かせたのは誰かなぁ？」

クレイ「え……」

奈津美「そっかぁ、君？」

カコ「なぁんだ。じゃあ、遠慮はいらないね……」

クレイ「まずい！」

ヒュン！

カコ「遅い……」

ガシっ！

クレイ「な、何！？」

奈津美「じゃあ、美味しいケーキを食べに行こうね～♪」

ズルズル……。

クレイ「いや、カコ、とカナンの母さん、俺が悪かった。っていうか、チビ化したのは事故であって！」

カコ「事故でもなんでも……」

奈津美「許す気はありません♪」

クレイ「……」

バタン……

祐希奈「あ～、防音室に入っちゃったわね……」

ヴィヴィオ「クレイさん大丈夫かな？」

メイデン「ここは本家の道場因子と比べ、暴力的に変化する割合が高いからな……」

レナス「灰になっているかもしれませんね……」

５未「じゃあ、カナン君、おさらいしよ～よ」

５カ「うん♪　せ～の！」

５未・５カ「覗きは犯罪です。常識を持ってください」

ヴ・祐「可愛い～♪」

ギュー♪

５未・５カ「うわぁ！」

メイデン「まぁ、あの顔で言われればな」

レナス「甘やかしたくもなりますよね」

ジル「しかし、しかしだよ！　今回のおさらいは間違いだね！」

カナメ「全く、何を勝手に出てるんですか……」

メイデン「ジルさんとカナメさんか。どうした？」

ジル「覗きとはだよ！　文化なわけだよ！　男のロマンともいえるモノさ！」

カナメ「そんな変態的なロマン、持たないでくださ～い？」

ジル「男は皆変態さ！　カナ吉だって今回の一件で階段を登り、その先を見たくなったはずさ！　そう、あのトウヤ君とユウオ君のように！　あれこそ！　せ……」

カナメ「雪月花♪」

ピッキーン。

５未「お姉ちゃん、あの人なんで氷づけになってるの？」

ヴィヴィオ「う～ん、どうしてだろうね～？」

祐希奈「取り合えず、あのバカの言うことは聞いちゃダメよ？　腐るから」

５カ・５未「は～い♪」

祐希奈「良い子ね～♪」

ガシャァァン！

ジル「く、ここには同士がいないようだ……。
仕方がない。トウヤ君と涼君を呼ぶしかないようだね！」

カナメ「呼んだら爆破しますよ？　ジルさん♪」

ジル「爆破ごとき！」

カナメ「核弾頭で♪」

ジル「すいません……」

奈津美「あれ？」

カコ「あ～あ、あんまり出てないのに終わっちゃった」

クレイ「……」

ドサ……。

ポン。

カナン「わっと！」

未来「ん？」

ジー……

カ・未「クレェェェェェェェェイ！！／さん！！」

クレイ「俺は、ウ◯トラ星に一足先に帰るよ……」

未来「気をしっかり持て！　お前はウ◯トラ星に帰れないから！」

クレイ「なんだって……ならばもう、俺に帰る場所は……」

カナン「何でそうなるんすか！？　そんなにウルトラ◯ンになりたかったんすか！？」

クレイ「うちの、作者が喜ぶからな……」

未来「クレイ、あんたってやつは……」

クレイ「ジー◯ジオン……」

カナン「それウル◯ラ関係ねぇよ！？　その時代までいったらウル◯ラマン必要ないし！」

ガク……

未来「間違ったまま逝くなぁぁあああああああ！！！！」

カコ「なんか向こうは盛り上がってるね」

祐希奈「アホの集まりね……」

ヴィヴィオ「そ、それはあんまりじゃないかな？」

メイデン「取り合えず、これでおしまいだ。カコさん、どうせだから言ってしまうと良い」

カコ「オッケー♪　私達はリリカルなのはＢｒａｖｅで活躍中です。他にも、たくさんのキャラクターが大暴れしてます。是非、見てください♪　それじゃあね～♪」

一同「バイバ～イ♪」

第三十話　聖剣と魔弓（後書き）

疼く。何かを破壊したくて、でも破壊したくなくて……。
いつかこれに飲まれて消えるのだろうか。
やっと手に入れた繋がりを捨てなければならないのだろうか。

次回、第三十一話『覇神の右腕』

進む道は、暗闇に包まれて

第三十一話　覇神の右腕（前書き）

すいません。理由がわからないのですが、一ヶ所改ページ作業が出来ません。
また日を置いて修正してみますので、ご了承ください。

第三十一話　覇神の右腕

祐希奈「今日は休みよ！」

カナン「いきなり何を言ってんだお前は……」

祐希奈「後書きは休みっていってんのよ」

カナン「またかよ！？　休みすぎたろ！？」

祐希奈「まぁ、あれよ。ピラフパワー切れね」

カナン「まだそのネタ引っ張りますか！？」

祐希奈「当たり前よ！　ついでに五歳児ネタと薬は不滅よ！」

５カ「それは滅されてほしかったって既に五歳児ぃぃぃ！？」

ヴィヴィオ「あはは♪　可愛いから良いんじゃないかな？」

５カ「そんなキラキラした目でみるなぁぁあああ！」

祐希奈「あ、そうそう。読者さんにお知らせよ♪」

ヴィヴィオ「え？　私、知らないよ？」

祐希奈「私個人的に♪」

５カ「絶対ろくなことにならん気がしますが！」

祐希奈「ふふ♪　え～、本日から、神庭シオン君のことは、シオンちゃん、しーちゃんと呼んであげてね♪　きっと、涙を流して喜ぶわよ♪」

５カ「全くこの作品関係ないこと言うなぁぁぁ！！　しかも、なんかフラグが三本くらいたったろうがぁぁあああ！！」

祐希奈「うるさいわね……。ヴィヴィオがヘタレオンにベッタリだから妬いてんの？」

ヴィヴィオ「あ、そうなの？」

５カ「いや、それは助かってる場合もあると申しますか……」

祐希奈「親友なら！　ヴィヴィオに抱かれて一緒に絵本読んでもらえるくらいの覚悟はある！」

５カ「まさかの言い切られた！？　無いですよ！？」

祐希奈「あるのよ！」

５カ「いや、だから俺が決めることじゃね！？」

祐希奈「ヘタレマイナスＰがあるから♪」

５カ「いや、ホントそれ万能だな！？」

ヴィヴィオ「じゃあ、どれが良いかなぁ♪」

５カ「既にやる気満々ですかヴィヴィオさん！！」

祐希奈「さらに、今回はヴィヴィオを聖王モードにして、よりお母さんっぽくする！」

５カ「どんだけ言い切るつもりじゃぁあああああ！」

祐希奈「Ｏｎｅ ｆｏｒ Ｙｕｋｉｎａ Ａｌｌ ｆｏｒ Ｙｕｋｉｎａ♪（訳）【一人は祐希奈のために。皆も祐希奈のために】」

５カ「名言を汚すなぁぁあああああ！！」

祐希奈「失礼ね。より輝きを増したと言っても過言じゃないわ♪ね～ヴィヴィオ～♪」

ヴィヴィオ「え？」

祐希奈「私って最高の真友よね～♪」

ヴィヴィオ「もちろんだよ♪」

祐希奈「ほら、祐希奈最高だって♪」

５カ「それ誘導尋問って言うの知ってますか！？」

祐希奈「最高の方向に誘導してあげてるんだから感謝しなさい？特に、アンタとシオンと銀杏にルミオ、んでもって、レンさんと翔さんと未来さん♪」

５カ「どんだけ傲岸不遜な性格！？」

祐希奈「じゃ、リリカルヴィヴィオ、始まるわよ♪」

5カ「ちょっと待たんかぁぁぁあああ！！！」

ヴィヴィオ「♪♪♪～。　あ、カナン君、不思議な国のア○スとかどうかな？」

5カ「え！？」

祐希奈「ふ♪」

ガシャン！

カナン「あああああああああああ！！！！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「うぅ……あぁぁあああ……っ！」

床に倒れ、部屋で呻くのはハル……。

紅く光る右腕が、床に、或いは壁に、叩きつけられる度に、陥没し、吹き飛び、六課に響く轟音と化す……。

苦痛の中で、思うは、関わり。

もう、心の扉は開かないと、あの日から決めていたのに……。

強引に扉を開けられた事を良いことに、仕方がないと、いつか閉め出そうと決めていた……。　しかし、すがりたい程に、それは暖かくて、眩しくて、ずっと求めていた温もりで……

いつ“壊して”しまうかもわからないのに……。

「バカ……ですね……っ」

『ハル！　何故私を外した!?』

「壊れたいのですか……。貴方はっ！」

苦しそうにうめき声のような声でアスラを睨む。

床に転がるのは、執事服に着けていたネクタイピン。

これこそがアスラの本体であり、そして、ハル自身のリミッターでもある……。

『私が壊れようとも、お前が死ぬよりはマシだろう！』

「死には……しませんよ……」

『お前が……、朱皇千春の魂が死ぬと言うのだ！』

「ですから……っ！」

右腕が振り抜かれ、六課の壁を木端微塵に粉砕……。否、消滅と言った正しい。

「ぁぁあああああっ！！！」

体の内側から焼かれる。そんな感覚をハルは体感する。

必死に耐え忍ぶハルの脳内に声が響く……。

《ワ……ヲ……イレヨ》

「く、うぅぅあああっ！！！」

所々にノイズが走る声。

同時にハルの体が悲鳴を上げるように痙攣を始めた……。

《ワレヲ……》

「無、理……、ですっ！」

響く声に、喉奥から絞り出した声で反論する。

すると、声は消え、代わりに凄まじい痛みがハルを襲う！

「は……ぁ……っ！！！」

『ハル！　壊れようとも構わん、私を……何故首を振る！？』

ビクビクと痙攣を続けるハルにアスラは叫ぶが、ハルは苦しげに首を振るのみ……。

『このままではお前は消えるのだぞ！？』

「まだ……消えません……奴を……殺すまで……それまでは……」

『風間殿やクレア様達はどうでも良いのか！！』

「……」

朦朧とするハルの意識の中に、アスラの言葉が突き刺さる……。

『お前が大切だと、護りたいと思った方達だろう！』

「それも……潮時なのかも……しれません……」

「なっ！？　お前は……」

所詮、自分は復讐に縛られた存在だから……。

いつか壊してしまうなら、自分から離れる。

そう、答えたも同じ。

しかし、ハルが辿り着いた答えはあまりに冷たく、悲しい答えだった。

もう、アスラは何も話さない。否。話せない。

暗闇の中で痛みに唸るハルの声を聞くだけだった……。

静寂。それを破る足音が響く……。

「「「ハル君！」」」

部屋の壊れた壁から現れたのは、なのはフェイト、はやて。

「くっ！」

『隊長陣のお三方か！』

三人は、床で苦しむハルの姿を見て、そして、固まった……。

「嘘……」

「え……」

「なんや、これ……」

最早、ハルのいた部屋は部屋では無く、外だったからだ。

それだけならまだ驚きも少ないが、外が見えると言うことは、ハルは壁を破壊した筈。

だが、その破片が見当たらない……。

『危険は承知で頼む。ハルに私を着けて……』

「避けてくださいっ！」

アスラの言葉を遮り、突如立ち上がったハルが叫ぶ！

ガタガタと震える右手を握り締め、踏み込む！

「「「っ！」」」

二手に別れ、横っ飛びに三人は回避。瞬間、轟音と共に、ハルが殴った壁は、“消滅”した。

三人の表情は驚愕に染まる。
同時に思う。何がどうなってこうなったのか……と。

「なのはっ！／なのはちゃん！」

「っ！」

ハっとしたように、フェイトとはやてが叫びを上げる。
なのはが起き上がる時、既に紅き光を放つ拳は眼前……。
しかし、その拳は進路を変え、真下へと叩きつけられる！

「う、わっ！」

爆風になのははは吹き飛ばされ、そして、ゴキリと言う音が嫌な音が響いた……

「ぐ、うぅ……！」

「ハル、君……」

ハルから上がる苦悩の声……。
なのはが見た光景、それは、肘から下がおかしな方向に曲がったハルの右腕。
一瞬だけコントロールしたハルが自分で折ったのだ……。

「早く、逃げて……うぅぁあああああ！！！」

「……レイジングハート」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ！』

だが、腕はまだ動く。ハルの腕では無いように、苦痛に叫ぶハルを無理に動かそうとする……。

逃げろと言うハル、紅く光を放つ右腕、危険なのはわかっていたが、理由は後で聞くことにして、なのははハルをなんとか助けたかった……。

そのためにバリアジャケットを装着、その横に、フェイト、はやても並ぶ……。

「フェイトちゃん、はやてちゃん……」

「なのは一人で頑張らないで？」

「私らもいるんやよ？」

「ありがとう」

フェイトとはやてにニコリと笑い、なのははレイジングハートをハルに向ける……。

「ハル君、ちょっと痛いけど、我慢してね？」

レイジングハートの宝石に集まる光。

その光は桜色。幾人もの人間を打倒してきた。その名は。

「ディィバァァイィィィン！！　バスタァァァァァ！！！」

なのはの主砲と呼ばれた魔法。ディバインバスター。

その光は、迷い無くハルへと向かう！

「く、ぁぁああ！」

桜色が弾ける！
折れた筈の右腕を突きだし、砲撃を迎撃したからだ。
撃ち抜こうとする砲撃と、消し去ろうとする右腕が光を撒き散らす！

「っ！」

「ぐ、うぅぅ……」

が、次第になのはの表情が歪み始める。
砲撃の中をハルが何の抵抗も無く押し進む。
そもそもとして、勝負になっていないのだ。
ハルの腕に触れた時点で、消滅していたからだ。
つまり、砲撃がハルを押しているのではない。ハルが右腕に抵抗している事になる。

「逃げ……て……！」

それも長くは続かない……砲撃は消え去り、さらに踏み込もうとする動きを見せるハル。

「させないっ！」

その背後に金色の鎌を振りかぶるフェイトが現れる。その鎌はバルディッシュハーケンフォーム！
「たぁぁっ！」

重心移動と共に、バルディッシュに勢いを乗せ、雷撃を纏う魔力

刃をハルに叩きつける！
しかし、その刃は即座に翻る右腕によって防がれた……。

「くっ！」

フェイトは、己が手に響く激痛に歯を食いしばる。
それほどまでに、右腕から流れる力は凄まじかった。
バルディッシュのダメージも尋常ならざるものがある。
実際は触れたに近いほどの腕、それだけだが、バルディッシュは軋み出していた……。

「バルディッシュ、あと少しだけっ！」
『Ｙｅ……ｅｒっ！』

バルディッシュは、ノイズが走りながらもに強く答える……。
フェイトの想いが伝わってきたから、想いに答えたいから！
煌めく雷光、リボルバーが回転し、カードリッジを弾き出す！

「おぉぉっ！」

弾ける紫電にフェイトは構わない。
頭に浮かぶのは、ただ、己にある力を振り絞り、押し込むのみ！

「うぐ、ぁぁあああ！」

さらに右腕から吹き出す未知なる力。
体が震えるのをフェイトは感じるが、叫び、恐怖を打ち消し叩き込む！

「はぁぁぁっ！」

「行くよ……」

稼がれた時間、その間に、莫大な魔力をつぎ込む者……。

「我が手に携えしは悠久の眠りを呼び覚ます古き輝き。眩き包容の内にて幻想を終えん」

視界が揺らぐほどの超高熱を発するのは、はやて。

長き詠唱を終え、夜天の魔導書を開く……。

展開される２０以上の魔方陣。術式は古代ベルカ、型は……広域！

「フェイトちゃん、行っくでぇぇえええ！！！」

「了解っ！」

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ！』

はやての叫びに、フェイトの姿が霞む。

逃がすまいとハルの腕が動き。

「エクセリオンっ！　バスタァァァ！！！」

同時に桜色の砲撃がハルに再び突き刺さる！

放つのはもちろんなのは。こちらもカートリッジを連続で排出し、消滅した端から叩き込む！

砲撃に反応した右腕だが、その間にフェイトは高速で離脱、既に射程圏外。

確認したはやては、シュベルトクロイツをハルへと向ける。

「古なる剣にて、誘え！　裁断の剣、フラム、ベルジュ！」

魔方陣が輝く……。
高速で回転しつつ、放たれるは無数の炎弾！
「あああぁぁぁぁ……」
叫びを上げるハルの声がいつしか遠くなる……。
炎弾が起こす爆発によってだ……。
右腕の処理限界を越え、空気を震わす紅蓮の爆発がハルを覆い尽くしていく……。
本来、炎弾一発はスフィアバーストと変わらない程の威力。
しかし、連鎖反応によって小爆発は巨爆へと姿を変えていた。
さらに炎弾は尽きることを知らない。
より紅く、より大きく、紅蓮は姿を変えていく……。
その紅蓮を狙い済ます、なのはとフェイト。
一瞬のアイコンタクト、はやては頷き、炎弾をコントロールし、集束……！
「レイジングハート！」
『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ　ＥＸ！』
「バルディッシュ！」
『Ｔｒｉｄｅｎｔ　Ｓｍａｓｈｅｒ！』
巨大になる紅蓮に合わせるように、輝く桜、弾ける黄金！
その輝きは、たった一人の青年へと向けられる。
三人の意思は同じだ。
ハルを苦しみから解放する。そのために！
「「「撃ち抜けぇぇぇぇぇぇ！！！！」」」

想いと共に叫ぶ！
直後、六課のハルの部屋の位置から突き抜ける光！
無論、なのは、フェイト、はやて、三人の砲撃だ。
それは、地を焦がし、過ぎ去りし道を焼き尽くす！
約５０ｍを突き進み、輝く尾を残しながら漸く消える……。
そして、ハルの体が地を転がった……。

「やっ……た？」

「多分……」

動かないハルにデバイスを構え、慎重に近づく。
残り１ｍの距離、瞬間、右腕から光が溢れる！

「フェイトちゃん、はやてちゃん！」

「わかってる……」

「もう一頑張りやね……」

各自デバイスを持ち直し、気を張り直す……。

「うぅ……ぁぁあああああああああああああ！！！！！！」

苦しげに叫ぶハルから目を反らしそうになりながらも、目を離さない……。
油断すれば、間違いなく死が待っているからだ。

「ァアア！」

跳ね上がるハルの体。なのはは、吹き飛ばそうとレイジングハートに集束し。

（高町一等空尉、お二人様の動かないで欲しいですの！）

クレアの声を念話にて聞いた……。

返事も返す間も無く、天空よりハルに突き立つ白光と橙光。間違いなく砲撃だ……。

予想外の砲撃に、ハルの体は地に縫い付けられる！

そして、白光と橙光の砲撃を追うように、空からユニゾンしたキャロ、アルティス、スバル、エリオが降り立つ！

「高町一等空尉！　アスラはどこですの！？」

そして、機竜の操作をシルフィスに完全に委ね、クレアがなのはの前に着地し、訊ねる。

「え、あ、ハル君の部屋！」

「私に考えがあるですの！　封印処置、ご協力お願いするですの！」

「……うん！」

必死にクレアが訴える。

クレアはハルの一番の理解者。

故になのはは、クレアの考えに乗ることに頷く。

一瞬だけニコリと笑い、なのはが指を指した場へとクレアは走り出す。アスラを回収するために。

「はやて、私達も……」

「任せてや！」

フェイト、はやてもなのはの隣に並び、各自、杖に魔力を流し込む……。

（アンタ達は３０秒、時間稼いで！）

「応！／はい！／しゃあねぇな」

スバル達は、時が満ちるまで時間稼ぎを振り当てられていた。
四人がキャロの前に立ち、壁となる。
キャロの役目は、ハルの動きを止めること。
実質、この作戦の要だとクレアに言われ、キャロは少し、怖かった。
自分が失敗すれば、全ては失敗へと加速するからだ。
震えが走る。その時、エリオが振り向き、笑った。

「キャロ」

「え、な、何かな？」

「キャロなら出来る。絶対に。僕が保証する」

エリオの優しい笑顔に、キャロは安堵を覚えて頷いた。
恐怖はもう無い。短剣をしっかりと握りしめて……前を向く。

『エリ君、ニーナは？　ニーナに応援は無いの～？』

「え？」

「うっせぇドチビ！　気ぃ張っとけ！」

『張ってるもん！　なんたってニーナは……』

ニーナが話だそうとした瞬間、機竜とティアナからの砲撃が打ち消され、ハルが立ち上がる！

「来る！」

スバルの言葉に、全員完全に臨戦態勢へと移行し、ハルを睨む……。

「ァァアアアア！」

最早ハルに意識は無い。右腕に操られるのみ……。

それでも、無意識で抵抗しているのか、動きは模擬戦時よりも遅い。

「ハァァっ！」

「行きます！」

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ！』

ハルの姿が霞むと同時に駆けるはエリオ。

エリオは駆けつつストラーダを握り締める……。

「止めて見せる！」

『Ｓｔａｈｌｍｅｓｓｅｒ！』

「ォォオオ！」

エリオはストラーダに纏われる雷刃を振りかざし、ハルは狂気を孕む右腕を引き絞り、交わる！

刹那、残光を煌めかせながら、雷斬と拳撃が入り乱れる！

「ァァオオオ！」

「くっ！」

ハルが使用している、否、唯一満足に使用出来るのは右腕のみ。

しかし、その腕の能力は触れたら最後、相手は消滅する。

直に一撃触れれば終わる。その恐怖はエリオの体力を大幅に削っていた。

それでも逃げない。十秒は自分が稼ぐと作戦前に決めたから！

右腕に触れると同時に消滅する魔力刃をカートリッジで精製し直し、さらに斬り結ぶ！

3……

エリオの中で、カウントダウンが始まった……。

ハルからの一撃を斜に構えた雷刃で受け止め、回転、流す……。

2……

流した直後、恐れを捨て、ハルに踏み込む！

体勢を崩しながらも、裏拳で放たれた拳を踏み込みから沈み込み、避ける……。

1っ！

カートリッジ排出……。

ブースター展開。噴き出す力と、踏み込んだ勢いとを合わせ、左手を離し、流れるように片手持ちへ……

「ストラァァダァァァァ！」

『Ｂｒａｅｋ　Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ！』

投擲と同時にストラーダは音速超過！

一筋の光と化し、ハルの腹部に突き刺さり、その身体を吹き飛ばさんと、ブースターがさらに噴射、出力を限界近くまで引き上げる！

「ハァ、ァァ……」

徐々に下がるハルの身体。

土を抉りながら、後退……、それも止まる……。

「ァァアア！」

ハルの咆哮。残像を残しながら、払われる右腕。そして、エリオは見る。

バラバラになった相棒が中に舞うのを……。

コアとなるヒビの入った宝石のみが、エリオの足元に転がった。

「スト……ラーダ？　嘘、だよね？」

相棒は答えない。

弱々しく、点滅を返すのみだった……。

ストラーダは単体でリカバリーすら発動出来ない状態にまで損傷

していた……。

「ハァァア！」

しかし、ハルは構わない。絶望するエリオに拳を構え。

「ディバィィィン！　バスタァァァァ！！！」

「ォアアア！」

真上から撃ち下ろされた蒼き砲撃に狙いを変え、引き絞った右腕を打ち放つ！

拮抗すら出来ずに、蒼砲は消滅、粒子へと分解された。

ハルは自分を妨害したスバルに狙いを変更、跳躍。

「っ！」

眼前にハルが現れた瞬間、スバルはウイングロードから飛び下りる！

直後、空間を軋ませながら、ハルの右拳が打ち抜かれた……。

スバルから吹き出す冷や汗。

昼間のハルとは別人のような威力に恐怖した。

だが、スバルの“囮”の役目は終わった……。

砲撃はハルの狙いを自分に向けるためにあり、ハルの隙を突くためにある。本命は……

「今だよっ！」

「ブラッド、レイィィン！」

スバルの叫びに答えたのはアルティス。
遥か上空にて、アルティスの背後に開く暗黒の扉。

「ガ、ァァァァ！！！」

降り注ぐは上空からの黒き雨！
ありったけの魔力を全て注ぎ込み、ハルの体を完全に地面に縫い付ける！
関節と言う関節を全て押さえ込んでいるために、ハルも動けない……。

「ウ、ゥゥ……」

ギシリと黒針が軋む。
ほぼ同時、右腕を押さえていた黒針は消滅を始める……。

ちっ……あの腕、実数空間からの干渉を拒絶してやがる……。面倒な能力だぜ。やっぱピンク頭しか無理か……

アルティスは内心毒づく。
と同時に、ここにいるメンバーで正面から腕を止められるのはやはりキャロだけと言うことを認識する。

「エリオ！　ショックなのはわかるが、ソイツから離れろ！　ピンク頭が封印にかかる！」

「……」

「聞こえてんのか！？　てめぇが退かねぇと巻き込むってんだよ！」

アルティスの忠告に、エリオは動かない。
ストラーダを失ったショックにより、アルティスの言葉は聞こえてすらいなかった……。

「いい加減にしやがれ！　てめぇがここで死んだら誰がストラーダを使ってやんだよ！　てめぇがソイツの復活を一番信じてやらねぇで誰が信じるんだ！　わかってんのかボケェェ！」

遂にブチキレたアルティスの言葉はエリオに届く……。
その瞳に光が宿った。

「そう、だ……。ごめん！　アル！」

「礼はいいから退けってんだよ！」

「わかった！」

エリオがストラーダの宝石を回収し、下がると同時に大量の黒針が砕け散った……。
それは、ハルが自由になることを意味する。

「ピンク頭、ドチビ、やれるな！？」

「うん！」
『ニーナにお任せ～だよ～♪』

ハルの正面、虹色に輝く刃を手に、キャロが立つ。
その背後には、シーリングのために砲撃を構える、なのは、フェイト、はやて、ティアナ。
そして、アスラを手に持つ、白姫クレア。

「止めるよ！　ニーナちゃん！」
『アイアイサ～♪』

「ハァァアアアア！！！」

駆けるは同時、腕を引き絞るもまた同時。
ハルは紅き光を放つ右腕を肩の高さに……。
キャロは右手に虹色の輝きを放つ短剣を逆手で左頬の高さに……。

「ォオオオオ！！！」

「『やぁぁあああ！！！』」
互いに踏み込みながら、霞む右腕とタイミングを合わせ、キャロは短剣を突き出す！
二人の中間に弾ける光！
消滅させんと輝きを増す右腕だが、アゾットの剣は右腕からの干渉を拒絶する。
ロスト・ロギアは未知なる力を秘める物。
特に武具は、主以外の干渉は認めない。
干渉をするためには、管制人格を破壊、もしくは侵食する必要があるが、アゾットの剣の管制人格ニーナはキャロと完全に同調しているため、破壊も侵食も不可能。
故に、アゾットの剣の消滅も不可能ということになる。

「ァァァアアアア！」

干渉さえされなければ、残るは右腕の腕力のみだが、ハルが抵抗しているため、ユニゾンしたキャロに及ばない。

『べーだ！　ニーナとキャロちゃんの間に隙なんかないよ～だ！』
「一気に、行くよ！　アルちゃん、お願い！」
「おうよ！」
キャロに応えた上空アルティスからハルとキャロを中心に、北、南東、南西の三方位に黒針が放たれ、天空にて交わり、結合。三角柱を形成。
ベルカ式魔方陣が展開。黒針に合わせるように大きさがピッタリ収まる。
「ァァアアア！」
咆哮を上げるハルをキャロは正面から見据える。
恐れは無い。あるのは想いのみ！
「今、助けます！」
同時、短剣から弾けた虹色の光。
それは、魔方陣を伝い、黒針へと移動する……。
「『四属の違う（たがう）力にて、汝に絶対なる戒めを我は与えん』」
左腕を眼前に、そして、印を組む……。
溢れ出す力。柱が輝き、魔方陣もまた、輝きを増していく……。
「『地！』」
大地から吹き出す力！　柱を伝い、黒針が創る三角柱の頂点へと上る！

「『空！』」

降りるは空の力！　その力を柱へ、大地の力と同じく柱を伝い頂点へと上り詰める！

「『冥！』」

吹き出すは暗黒の力。
残り一本の柱に纏われ、頂点に集束。
三つの力が集まり、眩き輝きを放ち出す！
それを見上げ、キャロは印を結ぶ左腕を持ち上げ空より遥か上を指した……。

「『天！』」

暗雲を突き抜け、光槍を思わす閃光が三角柱へと降り注ぎ、三属と交わり、黄金の光と化す！
三角柱は、最早光の檻と同義であった。

「『四属光術　神縛』」

キャロが印を閉じる。同時、三角柱が縮み、ハルを締め上げ拘束する……。
キャロが認知出来るモノなら神であろうと捕縛する。それがこの神縛の力。
右腕の力があれど、全力で無いハルでは、抜け出せない。

「皆さん、お願いします！」

振り向いたキャロになのは、フェイト、はやて、ティアナは頷き魔力を解放！

《シーリング！　シュウウウト！》

四つのデバイスから放たれた砲撃は、動けないハルの右腕へと突き刺さる！

「ガ、ァァァアア！！」

鈍くなる紅き光。それを確認すると同時にクレアが走り出す！
その手には、アスラが握られていた。

「この……バカ執事ーーーーーーー！！！！！」

跳躍。ハルへと飛び付くようにアスラを押し付ける！
瞬間、右腕からゆっくりと消える光……。

「クレア、ちゃん？」
『クーちゃん、上手くいったの～？』

「はい、ですの……」

やや暗い顔で、クレアが頷いた。
取り合えず、キャロは神縛を解除し、クレアに近づく。
……クレアは静かに泣いていた。

「大丈夫……ですの。私は白姫クレア。白姫家の次期当主……このくらい我慢出来るですの……」

揺れる肩。それをキャロは背中から抱き締める。

「クレアちゃん……。我慢しないで思いっきり泣こう？　お話はまたにして、ね？」

キャロの言葉に、クレアは震え出すが、気丈にも首を振った。

「……ダメ、ですの。今、優しくされると、迷惑が……」

「あんまり実感無いかもしれないけど、私、クレアちゃんよりはお姉さんなんだよ？　後輩は後輩らしく、弱味を先輩に見せてくれなきゃ、ね？」

それを最後に、クレアの自制心は崩れ去った……。

「うぁぁぁぁ！　ハルが……ハルがぁぁ！！　今ま、私、黙って……わぁぁああん！！！」

ほとんど、キャロを押し倒すように抱きつき泣き叫ぶ。

止まらぬ涙は、キャロの胸を塗らす。

「うん……。うん……。辛かったね。大丈夫。きっとハルさんもわかってくれてるよ」

そんなことに構わず、キャロはクレアの背中を優しく叩き続けた……。

その光景をなのは達はジッと見ていた。

「これは、しばらく間を置いた方がよさそうやね」

「うん。簡単に聞ける話でも無さそうだし、明日に落ち着いてたら聞こうよ」

「やね。ほんなら中も混乱してる筈やし、行ってくるわ」

「行ってらっしゃい」

なのはの提案にはやては頷き、事態の収拾のために六課内部へと戻っていった。

「スバル、ティアナ、ハルさんを運ぶの手伝ってくれる？」

「「はい！」」

「なのは……」

「わかってる。フェイトちゃん、エリオをお願いするね」

「うん」

なのはは、ハルを移動させるためにスバルとティアナを連れ、フェイトの元を去った。

フェイトは落ち込んでいるであろうエリオの元へと向かう。

エリオは、何をするでも無く、ただ座っていた。

その肩にはアルティスが止まっていた。

「エリオ、大丈夫？」

「あ、フェイトさん」

意外なことに、エリオはそれほど堪えた様子は無い。
不思議に思ったフェイトだが、隣に座り、話を聞く。

「僕なら大丈夫ですよ」

「そっか」

それ以上は何も言わず、フェイトは座ったままでいた。

「アルに言われたんです。僕がストラーダを信じなきゃダメだって。まだ、返事はしてくれませんけど、シャーリーさんに見せたら直ると思いますから」

エリオの前向きな言葉にフェイトはニコリと笑い、肩に止まるアルティスへと視線を移す。

「アルティス、だっけ？」

「ん？　あぁ」

「エリオへの叱咤、カッコよかったよ。私からもお礼言っとくね。ありがとう」

「あいよ。ま、エリオ、心配すんなよ！」

フェイトに短く返事を返した後、アルティスは翼を拡げ、エリオの前に飛び上がる。

「何が？」

「ストラーダだけどな？　かなり損傷はしちゃいるが、完全に壊れちゃいねぇし、お前とまた戦いたがってるみてぇだ」

アルティスの言葉に、エリオ、フェイトは「へぇ～」と感嘆の声を出す。

気分を良くしたようにアルティスは少し笑った。

「そんなことわかるんだ？」

「当ったりめぇだ。あたしはアルティス様だぜ？」

「あはは。理由になってないよ」

「それは置いといて、だ。お前もストラーダと戦いたいだろ？」

「もちろん！　僕の相棒はストラーダだからね」

「おし！　覚えとけよ？　絶対だかんな？」

ニパッと笑ったアルティスは、エリオに念を押す。

「う、うん。でも何で？」

が、あまりに押すので、エリオは首を傾げた。

「特に理由はねぇよ」

「な、無いんだ……」

次はニシシと意地悪く笑うアルティスにエリオはガックリと肩を

落とす。

この様子なら、大丈夫かな。

と、内心フェイトは安心する。

アルティスの計らいにより、エリオはそれほどダメージを受けていなかった。

「じゃあエリオ、アルティスと仲良くね」

「はい。ありがとうございました」

「じゃな」

「うん」

エリオは元気であり、クレアはキャロが慰めている。もう、心配無いと判断したフェイトは、エリオに別れを言い、六課へと向かった。

▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲

機動六課医療施設

フェイトが様子見訪ねると、ベッドでハルが静かに眠っていた。

その横に付き添っているのはなのはだ。

なのははフェイトに気づくと、ニコリと笑って隣を進めた。

フェイトは頷き、隣に座る。

「ハル君、どうなの？」

なのはは、フェイトの質問に難しい顔になる。
フェイトはそんなに難しい質問をしたと思っていなかったため、首を傾げた。

「それが……。フェイトちゃん、ハル君の右腕、確実に折れてたよね？」

「う、うん。音もしたし、痛がってたから。それがどうかしたの？」

「折れて、ないんだ……」

「え……？」

なのはから告げられた話が信じられなかった。
確かに、途中からハルは右腕を酷使していたが、骨の痛みによる苦しみはしてはいなかった。
フェイトもおかしいとは思っていたのだが、それでも、信じられない。

「さっき、シャマル先生が精密検査したんだけど……。ハル君ね？右腕だけ、骨格構造とか、筋組織とか、一般人とかけ離れてるんだって……」

「右腕、だけ？」

「うん。右肩から上は一般人の肉体と変わらないって。どういうことだと思う？」

疑問に顎を持ち、フェイトとなのはは思考する。

ハルの言動と行動をよく思いだし、繋げる……。

「「ハル君の望んだ力じゃない」」

「え……？」

「あ……」

顔を見合わせる。

「な、なのは、も？」

「う、うん……ふふ」

ハモったこと、意見が一言違わず一致した事が可笑しくて、なのはとフェイトは笑う。

「ハル君、良い人、だよね」

ハルを見つめながら、なのはは確認する。

それに、フェイトは迷わず頷き、苦笑い。

「うん。優しい人で、頭の良い人だと思うけど、どこかカナンと似た所を感じるんだ」

意外な言葉に、なのははクスクスと笑い。

「じゃあ、ハル君もおバカさんなのかな？」

冗談めかしてなのはは可愛らしく小首を傾げる。
「かもしれないね？」
なのはの真似をし、フェイトも小首を傾げ。
「「あはははは！」」
二人して笑った。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
一之瀬家祐希奈の部屋。
「っくし！」
祐希奈の部屋で、珍しくカナンがくしゃみをしていた。
そんなカナンをジト目でベッドにいた祐希奈が睨む。
ちなみに、現在は部屋のミニ机にて向かい合ってカナンとヴィヴィオは勉強中。
無論、祐希奈はしていない……。
「アンタ、湯冷めしたんじゃないの？」
「無い無い……」
「わ、大変だよ。カナン君、寒くない？　お熱測らなきゃ！」
「って聞いてるか～？」
即座に立ち上がり、体温計を引き出しから取り出す。

一之瀬家は最早、ヴィヴィオに完全掌握されていた。　ヴィヴィオは全幅の信頼をおかれているため、雅樹も祐希奈も何も言わないが……。

「はい、カナン君、お口開けてね～？」

「お～い。ヴィヴィオさ～ん？　俺は大丈夫ですぜ～？」

「ダメだよ。風邪ひいてたらどうするの？」

「いや、だからな？」

自分の病気には鈍いが、他人の病気には相変わらず過保護とすら感じさせる一面があった。

「ヴィヴィオ、そんな時は、額と額よ♪」

「あ、そうだね。じゃあ、カナン君……」

「やらんでよろしい！　くわえりゃ良いんだろ！」

不意打ちでも無い限り、そんな恥ずかしい真似はカナンは出来ないタイプなため、ヴィヴィオから体温計を奪い取りくわえる。

「アンタ、ホントに耐性ないわね……」

「うっせ……」

「ま、からかい安くて良いけどね♪」

「っとに清々しいくらい嫌みだなお前は！」

「あっ！」

「「ん？」」

急に何かを思い付いたように、ヴィヴィオが声を上げる。

それに二人は注目。視線を向ける。

「二人共仲直り出来たんだね。おめでとう」

「「……」」

ちなみに、仲直りしてから数時間は経過している……。

「「今更かい！」」

「え？」

祝福したのにツッコまれた理由がわからないヴィヴィオ。

天然には敵わないと脱力。崩れ落ちた。

その時、体温計が音を鳴らす。

それをヴィヴィオに見えるように持ち上げた。

「ほら、熱なんて無いだろ？」

「あ、ホントだね」

「ヘタレは風邪引かないって言うしね♪」

「ヘタレじゃねぇ！　バカだ！」

「どっちにしろ当てはまるじゃない？」

「うっ！」

「バ～カ♪」

「うるせぇよ！」

「あ、あの、二人共、仲直りしたんだから、今日くらいは仲良くしよう？」

「「無理」」

「えぇぇ！？　が、頑張ろうよ！」

断言するカナンと祐希奈にヴィヴィオが驚く。

いつもの日常がそこにはあった。

その光景を、別の屋根から眺める影が二つ。

「アレが風間カナン……。危険な力の持ち主、か」

顔立ちは暗闇でわからないが、首にかけられた何かが月明かりに反射し、キラリと光る。

「はは！　面白い奴。そんなに危険には見えないけどな。ま、かなり不安定な力の持ち主ってのはわかるが……」

もう一人は夜でもわかる赤ワインのような透き通る朱い瞳の持ち主。

「だから、近々話し合いに言ってくるつもりだよ」

先に話した男がもう一人の男に話しかける。

男は頷くが、「一応」と繋げる。

「アイツ、風間カナン君、だっけ？　芯は強いぞ？」

「言われなくてもわかってる。俺は説得に来たんだ」

「まぁ、お前が考え無しに動くとは思ってないよ。ただ……」

「ただ？」

「行きはよいよい帰りは怖いってな……」

その言葉に、二人、共に苦笑いをする。

そして、氷のように冷たい笑みを浮かべる人物を同時に浮かべ……

「「怒るだろうなぁ。部長……。はぁ～～～」」

二人揃って壮大に溜め息をついた。

その二人が微妙に恐怖に震えたのを月明かりは鮮明に照らしていた……。

第三十二話　降臨　（前編）（前書き）

断ち切ろう。
目覚めた時、そう決めた。
とても容易いことだった。
少し前までと同じく、他人は他人。自分には関係ないと割りきれば終わりだ。
でも、それはいつしか難しいものへと変わっていて……。
自分に苛立つ。
どうしてこの程度が出来ないのかと……
しかし、どこかで、安心している自分もいて……
半端な自分に、何故か笑えた……

第三十二話　降臨　（前編）

祐希奈「Ｇｏｏｄ　ｅｖｅｎｉｎｇ　ａｎｄ　Ｍｅｒｒｙ　Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ♪
祐希奈系訳（皆さん、こんばんは～。そんでもってクリスマスおめでと～♪）」

ヴィヴィオ「クリスマスだね～♪」

クレア「クリスマスですの～♪」

メイデン「クリスマス……とは何だ？」

祐希奈「お、久々に出たわねメイデンの疑問。レナスも知らないんじゃないの？」

レナス「はい。実は……」

ヴィヴィオ「クリスマスはね、サンタさんがプレゼントをくれる日なんだよ？」

メ・レ「サンタさん？」

バン！

サンタ１「そうさ！　一度呼ばれれば良い子のヒーローサンタ。ここに見参したとも！」

祐希奈「今、サンタのイメージぶっ壊れたわ……いくらなんでも…

…」

クレア「バレバレですの……」

ヴィヴィオ「わわ、ホントにサンタさんいたよ～！」

メイデン「あれか！　あれがサンタとやらなのか？」

レナス「なんだかモジャモジャした顔をしてますよ！」

クレア「信じてるですの……」

祐希奈「……ま、ツッコミ面倒だからスルー」

サンタ１「そんなツンの王道を行くゆっきゅんにはこれさ！　バストアップマ、スィーン♪」

祐希奈「……さて、殺すか……」

ゴオオオオ……

サンタ１「ふふ……熱く……」

祐希奈「死ね」

天然ズののほほんラジオを聞きつつしばらくお待ちください。

ヴィヴィオ「好きなものはマ……マ、マ○オです！」

メイデン「わ、わた、私はか、可愛くなど、な、なな、無いぞ！？」

レナス「か～に～♪　か～に～♪」

終了。

祐希奈「はぁ……はぁ……」

サンタ１「ゆっきゅん、激しいね。疼くじゃないか♪」

祐希奈「何がよ……」

サンタ１「それはもちろん……」

ガチャ……

ヴィヴィオ「わぁ、サンタさんがたくさんだ～……」

メイデン「一人やたら小さいのが気になるが……」

レナス「きっと小人族なのですよ」

サンタ３「……ふふ」

クレア「サンタ３、我慢ですの……」

サンタ２「取り合えずサンタ１様。黙りましょうか？」

サンタ１「むぅ。君が来たのなら仕方がないね」

サンタ３「お前、今のでわかったのか？」

サンタ１「サンタ３ももう少しでわかるようになるさ♪　なんなら僕が……」

サンタ２「下ネタが多いですよ……」

サンタ１「仕方がないね。では、僕からのプレゼントを渡すとしようか……」

サンタ３「もったいぶらずにさっさと出せ阿呆」

サンタ１「ジャン。これさ！　その名も勝負下……」

バッキャァアア！！！

サンタ１「ふ……」

ガシャァアアン！！

サンタ２「やれやれ。困った方ですね」

サンタ３「お前、今全力で蹴ったろ？」

サンタ２「いえ♪」

祐希奈「で、アンタらさっきから何したいわけ？」

サンタ２・３「もちろん良い子にプレゼント届けに」

ヴィヴィオ「私ももらえるの？」

メイデン「私もか！？」

レナス「わ、私もですか？」

サンタ３「もちろん。ハ……じゃなくて、サンタ２、翔さんやタカト、銀杏らの協力のもとで作った特大ケーキだ。無論、全部食っていい！」

バーーン！

ヴ・メ・レ「わぁ～♪／これは……／凄いです～♪」

祐希奈「でか……」

簡単に説明。土台が四方一メートルの大きさのイチゴケーキの上に各段ごとに、ブルーベリー、オレンジ、ピーチ、最後にそれらをばらまいたフルーツケーキが最上段に置かれた物。

。

ヴィヴィオ「美味しいよ～♪」

メイデン「いくらでも入りそうだな♪」

レナス「幸せです～♪」

天然ズ「ありがとうサンタさん♪」

サンタ３「いやいや。喜んでもらえて何よりだ」

サンタ２「良かったですね」

サンタ３「ああ……ふあ……」

祐希奈「アンタ達、徹夜してまでよくやるわね」

サンタ２「徹夜したのは彼だけですけどね」

祐希奈「へぇ……やるじゃん♪」

サンタ３「ったく、余計なこと言うなよな……」

祐希奈「照れない照れない」

クレア「ところで、そのサンタ３って……」

３・祐「聞くな……」

クレア「は、はいですの」

サンタ２「では、最後に質問で終わらせていただきます。
『ＬＶの名ゼリフ、名シーンあえては？』
ですが、作者はカナン君が二部のラストで別れの言葉を言った所が好きらしいです」

祐希奈「そんで、読者さんにも聞きたいんだけど、ＬＶの名ゼリフや名シーン、あえてあげるならどこ？
暇な人は適当にメッセージや感想で送ってね～。
作者友人を強制参加で入れて意味なくランキングやっちゃうわよ～♪」

サンタ2「それでは降臨。前編をどうぞ♪」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

六課医療施設

そこでは、ハルのベッドの隣で、なのはとフェイトが肩を寄せて眠っていた。

何故、なのはが医療施設で眠っているのか。

その理由は、ハルがいつ起きるかわからないので、起きた時に直ぐ様対処出来るよう、シャマルに願い出たからである。

本来、部下であるスバル達がやるべき仕事ではあるが、負担を考えたなのはの優しさ故の行動だ。

フェイトはと言うとなのはだけにさせるわけにはいかないと、見張りに付き添っていた。

「ん……」

なのはの瞼がゆっくりと開き、色素の薄い蒼き瞳が光を取り込む。

「すぅ～……」

隣で眠るフェイトに微笑み、ハルへと視線を移し

「え……」

視線が止まる。捲られ、藻抜けのからとなった布団がそこにはあった……。

それはハルがなのはとフェイトに気配悟られず、抜け出したことを意味する。

「すぅ……はぁ……。うん」

一瞬慌てかけたが、瞳を閉じて深呼吸。
フェイトを横にして、なのはは立ち上がり、医療施設を後にする。
焦らず、小走りで六課内を移動。

「ん？」

なのはの足が止まる。そこは厨房。
六課のバックとして雇われた人物が働く場。
通常、隊長陣やＦＷ陣が入ることはほとんどない。
だが、なのはは何度も入ったことがあった。
昔、幼きヴィヴィオにキャラメルミルクを作るためだ。
そんな場所でなのはの足が止まったにはわけがある。

「わぁ～♪」

「凄～い！」

「やるもんねぇ……」

口々に聞こえる。女性達の声が原因だった。
早朝だと言うのに歓声を上げていれば気にもなる。

「失礼しま～す」

扉を開けてなのはが入ると、女性達の視線が一斉に集中。強張る……。

「なのはさん、すいません……」

「あ、いえ、そういうことじゃないんですけど……」

代表して謝るのは寮母、アイナ・トライトン。

かつて、ヴィヴィオの世話をしていたことがあり、なのはとは交流も長い。

そんなアイナに、注意しにきたわけではない意思を告げる。

「ただ、何でかなって気になって」

「あぁ。それならあの方が手伝って下さってるんですけど、それが凄くて♪」

「あの方？」

「はい。あちらの……」

ニコリと笑うアイナが、厨房の奥に視線を送る。

そこにいたのは執事服を着こなし、耳までかかる黒髪、珍しく真剣なのか、瞳を開いた……。

「にゃはは……。ハル君」

なのはの探し人、朱皇千春その人であった。

ハルはなのはに気づかないのか、中華鍋からタレと思われるモノを机に置かれたオムライスのようなモノに次々とかけていく。その数、２０皿。

出来た料理は、天津飯であった。

「次は何でしょうか？」

「スタミナがいるので……小籠包出来ますか？」

「了解しました」

「は、ハル君！」

「……？」

再び作業にかかろうとしたハルになのはは慌てて止める。

ハルは本当に気づいてなかったらしく、不思議そうに視線をなのはに向けた。

「おや、どうかなされましたか？」

「ど、どうかって……。取り合えず、お話出来るかな？」

「……少々お待ちを」

「う、うん」

なのはが頷くと、ハルは小籠包作りに取りかかる。

五分後、下準備を終えたハルが手を洗い、なのはの元へとやってきた。

そして、女性達に惜しまれつつ、ハルは厨房を後にする。

腕のことを聞こうとしたなのはだが、いきなり過ぎると思い直し、考えを変えた。

「何で厨房に？」

「早朝から何をされているのか気になったので、見ると大変お忙しそうでした。僕は暇でしたし、助力をしていたのですよ。朝から中華を作るとは思いませんでしたが」

ハルの言葉になのはは苦笑いしか浮かばない。

確かに、朝から中華、しかも油物を食べる人達は少ないだろう。

「にゃはは……スバルとエリオがいるからね。量が……」

「確かに、お二方には驚きました。毎日ですか？」

「お恥ずかしながら……」

なのはは頬を紅く染める。

スバルやエリオなどのＦＷメンバーは、なのはにとって、部下というよりは、身内に近い感情を抱いていたため、そのちょっと恥ずかしい一面を指摘され、理由はわからないが、自分まで恥ずかしくなったからだ。

「あははは。何故、高町一等空尉が紅潮を？」

「え……あ、そう、だよね。おかしいなぁ」

何のへんてつも無い、ただの会話。

そこになのはは若干の違和感を感じる……。

しかし、気のせいかと思い、次の話題、本題に入ることにした。

「右腕、大丈夫？」

「お陰様で大丈夫のようです。ご迷惑をおかけしました」

「理由は……まだ聞かない方がいいかな？」

「申し訳ありませんが、僕個人だけの話ではなくなってくるので……」

つまり、クレアの許可がいるということだった。

なのははは、どのみちクレアから聞くことにしていたため、こちらは後でもいい。

「事情もありそうだし、急いでないからそっちはまた今度でもいいんだけど……」

「何でしょうか？」

なのはが気にしていたのは、クレアとハルの仲だ。

クレアの信頼を理由があれども裏切ったハル。

傷つけたのは明確であり、その傷も浅くはない。

「クレアちゃんにはちゃんと謝らないとダメだよ？」

「そうですね。“お会い出来れば”に謝罪をしておきます」

「お会い、出来れば？」

今度こそなのははハルに明らかな距離感を感じた。

自分から会いに行くのではなく、偶然会えば謝罪する。

「それ、おかしいよ……」

「はい？」

クレアとハルは当主と執事。　常に一緒にいると言ってもおかしくない間柄。

それが、偶然会えればとハルは言ったのだ。

「ハル君……。ハル君が悪いんだから、自分から行かないと、許してもらえないよ？　クレアちゃん、悲しくて泣いてた……」

「そうですね。時期を見て……」

「違うでしょ……」

時期を待つ。その方法は両方が悪い時は頭が冷えるまで待つのは正しい。

しかし、今の状況において、それは間違いである。ハルが悪いのだから……。

苛立ちながら、なのはは、ハルの正面に動き、キッと睨む。

「ハル君……本当にわからないの？」

なのはの口から出たのは自分でも驚く程の低い声……。

「……何か用意をしろという意味でしょうか？」

不思議そうにするハルになのはの怒りはさらに募る……。

いつものハルなら、こんなに簡単な問題がわからない男ではないとなのはは思っていたから……。

「そうじゃなくてっ！　どうして今から会いに行ってあげないの！

？」

「今、ですか？　まだ起きていらっしゃらないと……」

「そんなの関係ない！　泣かせるくらい心配させたんなら、クレアちゃんが起きるまで待てばいい！　ハル君ならこれくらいわかるでしょ！」

「……ふぅ」

六課の通路になのはの怒鳴り声が響く……。

しかし、ハルの態度は変わらず、冷静なまま。

それは、なのはにより距離感を感じさせる。

自分の言葉はハルに届いていないとわかったからだ……。

「高町一等空尉、少し落ち着かれた方がよろしいかと。紅茶でも飲まれますか？」

怒るなのはに、ハルは笑ってそう言った。

見下ろすハルと見上げるなのはの視線が交差する。

そして、なのはの視線が、怒りから悲しみへと変わった。

「どうして……。どうして今日のハル君はそんなに、人と距離を置いてるの……？　どうしてそんなに、遠くから見てるの……？」

目の前にある笑顔……。

昨日も見ていたはずのハルの笑顔。

同じ笑顔。しかし、それが凄まじく遠くに思えた……。

「……混乱されているようですね。まだ時間も早いですし、お休みになられては？」

「混乱なんてしてない！　ハル君のバカ！」

走り去るなのはをハルはジッと見ていた……。

これからの戦いに繋がりは枷でしかない。

なのは達はハルの中で他人と化さなくてはならない。

“筈だった”

『お前……』

「はは……。案外辛いものがありました。末、彼は恐ろしいですね」

ハルは自嘲するように笑う。

カナンによって相手を信頼出来るようになっていたハル。

容易く、いつでも切れると思っていた信頼と言うなの繋がり。

しかし、その繋がりを断ち切るのは思いの外難しいものだった。

「もっと辛辣な言葉を言えれば良かったのですが」

どうしても、相手の涙を見るのが辛かった。

故に、相手を怒らせて時間を稼ぐくらいしか出来なかったのだ。

「アスラともそろそろ別れ時かもしれません」

『必ず死ぬとは限らんだろう……』

「身体は生き残るかもしれませんね……」

そう言い残し、ハルは出ていった。

出来るだけの被害を出さないために、訓練施設へと……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

第零番運用部

「あぁ！」

《ひっ！》

バンっとデスクが壮大に叩かれ、様々な書類が宙を舞う。
苛立っているのは、運用部部長、海城・G・凛。
怯えているのはその部下達である。
何故、凛が苛立たっているのか。
それは部下の消息が今だ掴めていないからだ。
プラス部下に押し付けられた仕事量もある。

「そこ！　仕事の手が遅いですわよ！」

「すいませんです！」

とばっちりを受けるのは無論、余った部下達だ。
既に五度目となる怒声が運用部に響いた……。

「ん～……」

そんなことを気にも止めず、コンソールを操作するのはクレイ・アレイザ。

「アレイザ陸曹！」

「残念ながらまだです」

（頼むから早く見つかってくれ～！！）

若干キレる凛に、クレイはひたすら冷静に話すのみ。
そして部下達はひたすら怯えるのみ。

「あのピアニッシモ……。仕事が遅すぎませんこと？」

「海城三佐、さっきから３０秒しかたっていませんよ？」

「アレイザ陸曹、ツッコミが細かいですわね……」

凛が言うピアニッシモとは、とある査察官のことである。
有能な部下の大半が消えたため、情報に関してのスペシャリストである、査察官に捜査協力を依頼したのだが、たまたま手が空いていたのがその査察官ということである。
ちなみにアコースの部下であり、色々な意味でお気に入りの人物。
さらにその査察官は交友の広いアコースを通じて凛とも面識があり、何度か手伝いという名のパシリに駆り出されたこともある。

「……」

クレイに言われたこともあり、苛立ちながらも凛が黙ること約五分……。

「失礼します」

扉を開けて入ってきたのは、メガネをかけたスーツの男性。
やや長いサラサラの髪は、質が柔らかいせいか、前髪が目にかかっている。
その肩に小さな狼が乗っていた。

「海城三佐、お久しぶりです」

『ちっす』

ペコリと頭を下げた男と、軽く言った狼。
その姿を凛は真っ直ぐに見て。

「遅い！」

開口一番吠えた……。

「お、遅いって、急な依頼にしてはかなり頑張ったんですけど……」

男が依頼されてから、現場査察し、報告しに来たまでの時間は約30分。
確かに十分に頑張ったと言える時間である。

「言い訳無用ですわ。さっさとしてくださいな」

しかし、凛は関係無いとばかりに一刀両断にした。
自分が遅いと感じたら周りから見ていくら早かろうと、遅いのだ。
そんな凛に、男は溜め息をつくしかない。

「全く……人使いが荒いんだから困るよなぁ……」

「何か仰いまして？」
「い、いえ、何も！」

問答無用の凛に対し、愚痴を漏らしながらも自己紹介すらせずに男は魔力を紡ぐ。
様々なデータが凛、クレイの脳に直接送り込まれるデータの山。
男の希少技能、『複数処理伝達（マルチスキャンディング）』と呼ばれるもので、簡単に言え

ば、複数の相手に同時に情報を送ることが出来る能力だった。
全ての情報を送り終えた瞬間、凛は驚愕する

「ち、地球！？」

何故なら、自分の部下の行き先は地球だったのだから……。

「はい。かすかに残った魔力残子から情報を引き出して当てはめた所、第９７番管理外世界が引っ掛かりました。レイさん達はそこに向かったと思われます」
「地球、と言うと、ロスト・ロギア使いである風間カナン、現在管理局からは高町ヴィヴィオが在住している世界ですね」

クレイが言った言葉に、凛が反応し、眉をつり上げた。

「ロスト・ロギア使い？」

「はい。確かに珍しいですが、なにか問題でも？」

「アレイザ陸曹、ちょっと見せてくださいます？」

「はい。どうぞ」

凛の前にカナンのデータウィンドウが展開。データを読み上げる凛の表情は、徐々に苦いものへと変わっていく……。

「なんとなく予想出来ましたわ……。そうなると……アレイザ陸曹ランクはＳランクは越えていますか？」

「は、はい」

「では、私に着いてきなさい」

「え……は、はい！」

デスクの上にある指輪を左手の薬指に着け、立ち上がる凛。

困惑したクレイだが、着いていくために立ち上がる。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！」

異論の声を上げたのは男。

凛は振り向き。

「フォルテ・アスパイア査察官兼経理！」

「はいぃ！」

響き渡る声に、男、フォルテは直立姿勢になる……。

凛の声はそれほどまでに迫力があり、佐官の貫禄を感じさせたからだ。

フォルテもかなりの地位があるのだが、性格的に凛には勝てないという意識があった。

「後の事は任せますわよ」

「はい！　って、え？」

「アスパイア査察官兼経理、お願いしますね」

「え、え？」

クレイからも頭を下げられ、さらにフォルテは混乱する。

そして、結論に辿り着く。
フォルテの能力は、別に、距離が離れていようと使用出来る。
にも関わらず、フォルテがここにいるのは凛に呼び出されたからである。
何故かと不思議に思っていたが……。
「まさか、僕が呼ばれた理由って……」
「適度な理由の作成、及び雑務をお願いしますわ」
「やっぱりパシりですか……」
「返事は！」
「はいぃ！」
これを人は脅しと言うが、そんなことは凛には関係ない。
食うか食われるか。運用部では特にそれが顕著であった。
「では、失礼します」
足早に運用部をさる凛と小柄なため、小走りに凛の後にクレイが続く……。
フォルテが気づいた時には後の祭り……。
「おかしいだろ……。これ、絶対おかしいだろ……」
「さっさとしねぇと陽がくれるぜネクラ♪」
今まで面白いがために黙っていた狼型ユニゾンデバイストライト

ンはご機嫌な声だ。

「ネクラ言うな！」

フォルテはトライトンにツッコミを返すだけで精一杯であった……。

本人としてはかなり頑張ったつもりだったが。

「イマイチキレがねぇんだよなぁ……」

「う、うるさいっ！　ツッコミなんて出来なくても仕事は出来るだろ！」

「だからネクラって言われんだろうが……」

フォルテはトライトンの指摘に溜め息をつき……

「……取り合えず、頑張ろう……。海城三佐とアレイザ陸曹の仕事はどれだ？」

「逃げたな……」

「で、どれだい？」

近くにいた運用部の局員に聞くと、指差されたのは書類の山、山、また山……。

「あ、アレか？」

「アレですよ。頑張ってくださいね……。リーフライン執務官達の仕事もありますから……」

「鬼だ……」
『何を今さら。撃ち抜かれたくなかったら頑張るこったな』
「くそぉ……」

フォルテは歯を食い縛り、仕事に取りかかる。
無言で取りかかるその弱い立場と有り方から、演奏記号フォルテ『とても強く』の反対の意味、ピアニッシモ『とても弱く』のあだ名がついたのかもしれない……。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

所変わって聖中ではテスト返しが行われていた。

「げぇえええ!?」

「うわぁあああ!!」

「母ちゃんに殺されちまうよ～!!!!」

そんな叫びが響き渡る。叫びを上げるのは主に男子生徒。
全てのテストを返し終えた所で、一年四組担任、北里先生が教壇に立ち、手を叩く。
シンと静まり返る教室。生唾が飲み込まれる音がよく聞こえた。

「全体の平均点は……62点です!」

《ぎゃあああああああああああああ!!!!!》

先程よりさらに叫びが上がる。
平均点の半分以下。所謂赤点生徒の叫びだ。

「３１点以下の人は課題があるからちゃんとしてくるよーに」

「くぉおおお……っ！」

「相変わらず多いぜ……」

「あぁ……前が霞む……何も見えねぇよ……」

そう。聖中では赤点の生徒には課題が配られる。
それも、分厚い辞書に相当する程の課題が……
赤点生徒達はそれを見て皆崩れ落ちた……。
だが、そんな中、我関せずといった様子で頬杖をつく少年、カナンがいた。

「課題が嫌なら勉強しろっての……あのアホどもめ……」

「か、カナン君、言い過ぎだよ。きっと皆頑張ったと思うよ？」

「頑張った奴は赤点なんざとらねぇよ……」

「まったく持ってその通りね♪」

「お前が言うなお前が……」

ジト目で祐希奈を睨みつつ、ツッコミを入れるカナン。その背後に近づく人物……
その人物はいきなりカナンに覆い被さった。

「ぐえ……」

蛙が泣くような声を出し、カナンは机に押し付けられた。
実際は認識はしていたが、避けるとその人物が危ないため、態と押し付けられただけ。
気づかない所で地味に優しい所があった。

「まね～。祐希奈はヤマが当たっただけだし」

「うっさいわね！　運も実力のうちよ！」

「あはは……」

そうとも知らず、ご機嫌でカナンにのし掛かる人物。
そして、カナンを無視して話す祐希奈
その様子に苦笑いぎみのヴィヴィオ。
カナンはいつまでもこの状況でいるわけにもいかず……

「美鈴、重い……」

「あ、女の子に重いなんて言っちゃいけないんだぁ～」

「重いもんは重い。言われたくなきゃ乗るな」

「うぅ……カナン君最低……」

「嘘泣きはいいからさっさと退けっての……」

「は～い。このくらい？」

軽く退いた美鈴。が。

「全部だっつの阿呆……」

呆れたようにジト目で睨み一刀両断にするカナン。

そんなカナンに、美鈴は指を唇に当て……

「カナン君と離れたくないよ……」

瞳を潤ませてそう言ったが、カナンの視線は変わらない。寧ろ冷めていく。

「俺は全力で離れたいです」

「もう♪　照れ屋さん♪」

「締めるぞ……？」

「抱き締めてくれるの？」

「骨が砕けるくらいな……」

「あっはは♪　情熱的だね♪」

「いやぁ、俺の心の中はダイヤモンドダストが吹き荒れてますが？」

「綺麗だね。まるで私達の関係を表して……」

「あらゆる生物が死滅する魔の輝きを放ってるだろうな」

「わお♪　そして生物が死滅して二人っきりに……」

「いつまで漫才やってんのよ！」
スパコーンと快音一発。
「って！」
「あたっ！」
珍しく祐希奈が軽めに二人にツッコミをいれ、漫才は漸く終わりを迎えた。
「カナン君は美鈴ちゃんの対応に慣れてますね」
隣で優しく笑うのは神楽。唯一と言っても過言ではないほどの数少ない常識人だ。
「まぁ、付き合い長いしな。嫌でも慣れるだろ」
「ところでカナン君、赤点とらなかったの？」
普通のテンションに戻った美鈴がカナンに尋ねる。
この質問にカナンは溜め息をついた。
「とると思うか？」
「カナン君ならネタのためにとってくれるって信じてるから！」
「んなもん信じんな！」
「ネタのために生きてるもんね！」

「生きてねぇよ！　寧ろ普通に生きてぇよ！」

「カナン君からネタをとったら何が残るの！」

「残らないと思ってるお前がびっくりだよ！」

《えええええ！？》

「てめぇらもかぁあああああああああああ！！」

とことん、ノリの良いクラスだった。

そのクラスを笑いながら見ていたヴィヴィオだが、首を傾げてカナンのブレザーのポケットを見つめる……。

「カナン君、携帯、光ってるよ？」

「へ？　またか？」

普段使わない携帯が、またしても光っていた。

開けた画面に表示されたのは……またも見知らぬ番号……。

教室は賑やかなため、教師にバレないよう、廊下へ移動。

「もしもし？」

『あぁ、カナン君ですか？　僕です。千春です』

電話の相手は、ハルであった……

「ハル？　お前、携帯なんか持ってたのか？」

『一応は。君と同じで使いませんけどね』

「ならなんでまた……まぁいいか。そういや、お前何でミッドと地球が携帯通じるのか知ってるか？　気になってんだけど」

『また唐突ですね……。白姫家他、バニングス家等が関連しているらしいですが、詳しいことはわかりません。地球の拠点にされているくらいですから、何か設置されたのかもしれません』

「お前でも知らないことあるのな？」

そして、携帯から響くハルの溜め息……。

『僕を何だとお思いで？』

「コンニャク執事」

『即答ですか……』

「んで、友達で仲間だろ？」

『……っ』

カナンの耳に微かに聞こえたハルの息をのむ声。

それにカナンは「やっぱりな」と呟いた。

「お前、俺に何か言いたいことあるのか？　言えよ。俺にも聞いてやるくらい出来るしな」

『敵いませんね。君には……』

「阿呆。何も理由無しにお前が電話なんか使うか？　誰でもわかるって。で？」

『僕に代わってお嬢様をお願いします』

「は？」

静かにハルはそう言った。カナンはついていけずに聞き返すが、ハルは無視し、『それと』と繋げた。

『ありがとうございました……』

「ハル？　意味わかんねぇって！」

困惑するカナンにハルはかまわない。繋げていく……。

『君のお陰で、短い間ですが楽しめました……』

「おい！　聞いてんのか！？　ハル！！」

『僕の“最期”の友、風間カナン……さようなら……言いたかったのはこれだけです。では……』

「最後！？　最後って、さようならって何だよ！！　説明しやがれ！！　ハル！！！」

怒鳴るカナン。

しかし、携帯はツーツーっという音が鳴り、切れていた……。

「あんのボケ！！」

「カナン君！　君、今何してたの！？」

カナンの怒鳴り声に気づいたのか、担任が教室から現れるが、カナンは既に走っていた。

「カナン君、どこいくの！」

「走りたくなる病気にかかりました！　欠席で俺のことはいいんで！」

「ちょ、ちょっとカナン君！？」

むちゃくちゃな理由を並べ、カナンは走り去る。

やや遅れて、担任の隣を二つの影が通り過ぎた。

「あ、ちょっと、ヴィヴィオさん、祐希奈さん！？」

この二人は完全に担任を無視して走り去った……。

「ねぇ、センセ、センセ」

肩を叩かれる感触に担任は振り向くと美鈴と神楽がそこにはいた。

「美鈴さん、神楽さん？」

「センセ、あの二人は、女の子のアレです♪」

「あ、アレ！？　そんな二人同時になんて……」
「ホントですよ。ね、神楽ちゃん♪」
「はい。朝から聞いてました」
「か、神楽さんが言うなら、そうなのかしら……」
神楽は学年でトップの成績をもっているため、こう言った信頼は高い。
故に担任も渋々引き下がる。
「よし……」
「後は応援ですね……」
上手くいった二人は、「頑張って」と小声で応援し、祈りながらその後ろ姿を見送った。
「メイデン、レナス、行くぞ！」
『一応聞くが、どこにだ？』
テバイスフォルムのメイデンが尋ねる。
その質問の間に、カナンは二階の窓から足をかけ、飛び降りた……。
カナンは光に包まれ、黒鎧を纏い、軌跡を残しつつ飛翔する。
「ミッド！」
『主はまた無理をされるのでしょうね』
「多分な……」

ハルの様子からして、何かが起こることは間違いない。そう判断したカナンは、転移すべく高度を一気に上げる。

「っ！」

『マスターっ！』

しかし、それを阻害するように、カナンの右から黒弾が眼前を通りすぎる。

カナンが反応し、停止したのもあるが、やや狙いが甘かった。避けれた最大の理由はそれだ。

「悪い。それしか君が止まりそうに無かったから」

「誰だお前……」

カナンはゆっくりと右を向く。

そこには、黒眼、黒髪のツンツン頭、右半分が白のラインが入った黒。左半分が黒のラインが入った白。

左右の胸には黒と白の十字架が輝く。

左右の腕に握られているのは、カナンを撃ったであろうショットガンに酷似した銃。

そして最大の特徴は、頬に刻まれた十字の傷……

「俺はレイ・リーフライン。君と話し合いにきた。君のロスト・ロギア、エクスカリバーを渡して欲しい」

「……」

ピリピリとした空気が、カナンとレイと呼ばれる男の間に張り積

めていた……。

「カナン君！／カナン！」

ヴィヴィオと祐希奈が遅れながらも、カナンに並び、その足下が輝きだした……。

「「え……？」」

「ヴィヴィオ！　祐希奈！」

広がる術式は強制転移。

気づいた時にはすでに遅く、ヴィヴィオと祐希奈は転移し、消えた……。

そしてカナンは、凄まじい形相でレイを睨む……。

その赤き瞳は、レイへの怒りによって燃えるような真紅に変わる……。

「誤解しないでくれ。彼女達に危害を加えるつもりはない。俺は公平に君と話し合いたいだけだ」

「……」

「参ったな……」

冷静に事情を話すレイだが、カナンは怒りを納める様子は無い。

少し困った様子でレイは悩む。

が、「仕方ない」と溜め息をつき、怒気を放つカナンと正面から向かい会った。

「君が俺を警戒するのはわかる。だから先に言っとく。君が聞き入れてくれれば何もしないし、俺は君の敵じゃない。これだけは覚えておいて欲しい。
ロスト・ロギアを回収する理由も今から話すから聞いてくれ。
君の力はかなり不安定ではっきり言って危険だ。先の暴走から君もわかってるだろ？」

「……」

カナンは返事をしなかった。
しかし、レイは話を続けていく。

「そんな危険な力を野放しにするわけにはいかないんだ。もちろん、君の人を護りたいって気持ちもわかる。だから、代わりのデバイスは準備するし、出来る限り要望には答えるつもりで俺はここにきた」

「俺は、コイツらをただのデバイスなんて思ってない……。メイデンとレナスは、大切な仲間だ……代わりなんて、いない」
『マスター……／主……』

「そうか……残念だ」

「じゃあな」

そう言ってレイの隣を通り過ぎるカナン。
瞬間、首を捻る！　その横を黒弾が過ぎ去った……。
黒弾を放ったのは無論、レイ・リーフライン。

「なら、実力行使でいくしかなくなるな……」

「……」

カナンが振り向く。視線と視線が激突する！

カナンはエクスカリバーを鞘から引き抜き、切っ先でレイを指した……。

レイは全く動じず、デバイスは銃型から、右は黒と左は白の剣へと姿を変える。

「急いでるからな……。加減出来る余裕は無い……」

「お前みたいな自分の力を制御出来ない奴が俺に加減なんて出来ると思っているのか？」

二人の姿が同時に霞む！

瞬間、激しい金属音が鳴り響き、交差する二人が火花を散らした……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一方、強制転移で移動させられた祐希奈は、結界が張られた海鳴市の中心街にいた。

「ったく、こういうやり方する奴嫌いなんだけど……」

正々堂々、が、好きな祐希奈はそうぼやく。

そして、背後に立つビルの屋上を見上げた。

「で、アンタ達、誰よ？」

「おわ、気づいてたか」

「ヴェインさんが隠れるの下手なんだよ」

祐希奈が睨んでいるとわかったのか、男、少女の二人組が祐希奈の元へと舞い降りる。

男はウェーブのかかった黒髪。色素の薄い鋭い目付きの赤眼、黒のロングコートに灰のカッターシャツ、黒ズボンにフェイトのような鋼鉄の靴といった格好。

少女は、藍の髪をショートボブで纏め、前髪をピンで留め、オシャレに気を使っているのか、ジャケットだと言うのに淡い水色のワンピースに胸元に灰色のリボンをつけていた。

「始めまして。一之瀬祐希奈ちゃんだね？　俺はヴェイン・アルベリス、よろしく」

「……ふ～ん」

「あらら。悲しい反応」

軽く流した祐希奈に、ヴェインは苦笑い。

ヴェインの前に、少女がピョコンと飛び出てニコリと笑う。

「咲・A・エルリウスだよ。よろしく。あ、祐希奈ちゃんはエリオ君のこと好き？」

「は？」

咲はいきなりそんなことを祐希奈に聞いた……。

隣のヴェインは、困ったようにこめかみを掻いている。

「だ～か～ら～エリオ君は好きかって聞いてるんだって！」

祐希奈は、咲をジト目で睨み……

「……バカ？」

「なぁぁ！？」

「あっちゃぁ……」

と一言。頭からバッサリぶった斬った。

ショックを受けて涙目になる咲と、頭を抱えるヴェイン。

しかし、祐希奈にとってはどうでもいいこと。

「用がないなら退いて。漫才やってる気は無いのよ」

「待った」

ヴェインを押し退け、祐希奈は進もうとするが、ヴェインはその肩を掴む。

「今、レイって奴がカナン君に説得してる。公平にするために……う～わ……」

「……説得ねぇ。何処が？」

「いや、うん、あはは～……」

会話が止まる。何故なら、二つの魔力のぶつかり合いを感じたか

らだ。
つまり、レイとカナンが戦っていることになる。
「ヴェインさ～ん。ヴェインさんの説得力がゼロ」
「うん。今、俺も思った……。まぁ、ロスト・ロギアが関わった時点でレイは若干冷静さが消えるからな……」
「ねね、カナン君って、力押しで認めてくれる子だっけ？」
「それはない……」
ほとんど考えずにヴェインが首を振る。
簡単にわかってしまう程、カナンは真っ直ぐだった。
「私、行くから。だからその手離してよ」
しかし、ヴェインは手を離さなかった……。
「それがそうもいかないのが悲しくてね。多分、今回はレイの言い方が悪いんだろうけど、アイツも悪気があって言ってるわけじゃない。
ロスト・ロギアは危険な物ってわかるよね？　アイツはその被害者だから……。危険からカナン君を助けたくてやってる所もある。だから、俺はアイツの気持ちもわかってやりたい」
「アンタの気持ちはわかった。私もカナンが悪いこととしても何か理由があるって思うし……」
「じゃあ……」

「でも」

ヴェインの言葉を遮り、祐希奈が繋げる……。

そして、ヴェインの手を祐希奈が掴む……

「メイデンとレナスがそんな危険な物なわけないでしょうが……仲間の悪口を……」

「くっ！」

「うっそ……ヴェインさんが……」

祐希奈より身長が３０ｃｍ以上大きいヴェインが高速回転する。

祐希奈の力によって……。

さらに言うなら、ヴェインはエース級の実力を持っている。

現在も身体強化で抵抗している。しかし、意味がないのだ。

「言ってんじゃないわよぉぉぉおおおお！！！」

「っ！」

一陣の風が発生し、続いて起こるは破砕音……。

ヴェインが投げ飛ばされ、ビルに突っ込んだのだ。

「あっぶな……」

槍にしたデバイスをビルに突き刺し、ギリギリで直撃を避けたヴェイン。

しかし、口調のわりに、まだ余裕が感じられる。

「烈破……」

だが、祐希奈がこの程度で終わる筈もなく、右手に紅蓮を抱え、既にヴェインの眼前。

「ヴェインさんっ！」

「げっ……」

「爆砕拳っ！」

響くは3つの声。直後に轟音をたてて砕ける高層ビル……。

回避すら許さず、その拳から顕現せし紅蓮は、ビルの反対側までを撃ち抜いていた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一方ヴィヴィオは、強制転移により、いつも訓練を行っている林へと飛ばされていた。

無論、結界が張られている。

「行こう」

『警戒をしてください？』

「わかってる」

止まっていても仕方ないとヴィヴィオは、しばらく歩いたが、人影も無く、気配も何も感じない。

「これって……」

『はい。まず間違いなく、マスターが合流するのを妨害するための時間稼ぎでしょう』
「そっちがその気なら……」
『勝手に出れば良いだけの話ですね』

構えられる杖。集束する蒼光。展開される環状魔方陣が刻むは貫通力を高める術式！

「風雅っ！」

「はいっ！」

左右から響いた声。直後、疾風のごとくヴィヴィオに襲い来る人影。

「来たっ！」

しかし、砲撃は囮。術が解除され、ヴィヴィオの体が回転するっ！

「フェアリーっ！」
『Ｍｏｄｅ　２ｎｄっ！』

宝石が輝き、展開される翡翠の巨刃を持つ双刃剣。
回転運動からの捻りを合わせ、背後に振り上げ、その動きは止まった……。

「「……」」

ヴィヴィオの背後にいるのは男。
その首筋には大剣の刃が寸止めされている。

しかし、ヴィヴィオの頬に影が覆っている。
男の拳によって光が遮られていたからだ。
刃と拳。そのどちらもが互いの数ミリといった所だったのだ……。

「貴方は……？」

「大河内……風雅と言います……」

互いに武器を突きつけたまま、静かに行われた自己紹介。
男、風雅は、幼い顔つき、短く黒い髪。
黒のインナーに半パンタイプのジャージというジャケットは一目でわかるほど、防御がが薄い。
逆に言えば、それだけ軽いということだ。

「目的は……？」

「話し合いによる解決、だったのですが、気づいてますよね？」

「うん……」

「そうなると、足止めに変わります……」

「そう……」

会話が終わり、張り積める空気……。
風雅の肘の筋肉が動く。それは拳が打ち抜かれることを意味する。
しかし、頬を捉える筈の拳は空を切った。

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ！』

電子音を風雅は背後から聞いた……。
振り抜いた形から前方に跳ぶと同時に翡翠の刃が風雅の背後で風を斬り裂く……。

「はぁっ！」

ヴィヴィオは再び弾丸と化して風雅に突っ込む！
音速で薙ぎ払われた刃。その刃にはまたしても手応えは無い。
ヴィヴィオの頭上、風雅がクルリと回転していた。
刃が払われる直前、風雅は腕をつき、そのバネで飛び上がったのだ。
結果、風雅の真下にヴィヴィオが無防備な後頭部頭をさらしていた……。

「ごめんっ！」

風雅はそのまま縦の回転からヴィヴィオの頭を蹴り抜いた。
吹き飛ぶヴィヴィオ。
だが風雅思う。
手応えが軽い

と……。さらに気づく。ヴィヴィオの双刃剣が消えていることに……。
そして、背後からなにかが噴き出す音がした……。

「っ！」

ほとんど勘で空中で無理に身を捻る。
瞬間、風雅が存在していた場所を射抜くように、双刃剣が突き抜

けていった……。
その剣は、左手を出したヴィヴィオに収まる……。
「「……」」
改めて向き合う二人。膝に力を込め……。
「月時計……」
「「っ！？」」
呟きが響き、ヴィヴィオと風雅の体は固定されたように動かなくなった……。
そして、ヴィヴィオの前に銀髪ショートヘアー、半袖メイド服、ミニスカートといった格好の女性が舞い降りる。
「咲夜さん、何で僕まで……」
「風雅、うるさい……」
「……」
咲夜と呼ばれた女性は、異論を上げる風雅を一刀両断にし、黙らせる。
そして、ヴィヴィオの顔をジーっと見た……。
「ん～……」
「ひゃう！」

女性は、ヴィヴィオの肌に触れるか触れないかのギリギリの所で首筋をなぞる……。
何故か動けないヴィヴィオは受けるのみ……。

「やっぱり可愛い♪」

「え……わっ！」

いきなりの不意打ちにキョトンとなるヴィヴィオだが、術が解けたのか、自由が戻る。

「ふふ……フフフフ……」

「咲夜さん!?　ダメです。ダメですよ!?」

「???」

笑う咲夜、焦る風雅。困惑するヴィヴィオ。
やがてそれは……爆発した……。

「可愛い子や物は皆、私のものよぉぉぉぉぉっ!!」

「はぁ、すいません……」

止めようとしたが暴走を開始した味方に呆れながらも風雅は構える……。

「フフフフ……」

「えぐ……えぐ……ま、負けないもん……」

ある意味。ヴィヴィオは最凶の敵に出会った……。
風雅はともかく、ヴィヴィオには咲夜が怖すぎた……。
そのあまりの恐ろしさに、ヴィヴィオは半泣きになりながらも対峙した……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

機動六課訓練所

そこでは、約３０以上ものウィンドウを展開し、ハルがコンソールを操作していた。
止めどなく動く文字と指と目、そしてそれは、止まる……。

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ……』

ウィンドウにはそう表示されていた。
実行するにはキーを軽く押せばいい。それだけ、たったそれだけで……

もうすぐさよなら、ですね

瞳を閉じ、短い間だが、満ち足りた時間に想いを馳せる。

機動六課の仲間達。
一之瀬祐希奈。
高町ヴィヴィオ。
白姫クレア。
風間カナン。

自分を救い、長らく欠落していた感情を思い出させた人物達に感謝し、同時に涙を溢した……。

まさか、泣かされるとは

そしてハルは、笑った。

変わった自分が嬉しくて、終わることが悲しくて。

泣きながら、笑っていた。

「お元気で……」

それら全てに決別するように、軽く押されたコンソールのパネル。

打ち込んだプログラムが一斉に活動を開始。

機動六課のシステムを掌握。訓練所に強層結界が展開され、隔離される。

今、機動六課のロングアーチは大混乱に陥っていることだろう。

結界形成以外の六課全てのシステムが落ちてしまったのだから……

「さて、アスラとも……」

『待て。もう貴様のフォローは疲れた。連れていけ』

「……先代になんと謝ればいいのです？」

『知らん。あの世で精々殴られていろ』

「僕があの世に逝けますか？」

『それも知らん。心配ならば死ぬな』

「さて、どうでしょうね」

ドクンっと、ハルの右腕が鼓動を発する。

瞬間、アスラに入る亀裂。

それと同時に、ハルの瞳から光が消えていく……。

右腕が鼓動を放つ度、ハルから何かが抜け落ちる……。

培った感情、大切な仲間、貫くべき信念、そして、守らなければいけない筈の……約束。
逆に満たされていくものがあった……。
それは憎悪。時間を巻き戻すように、昔のハルへと近づいていく……。

「……来たか」

ハルが見た先に、何もない筈の空間に人がいた……。
頭を覆う黒き仮面、その身を外套に包み。男が顕現する。
結界すらも意に介さず、男は入ってきたのだ……。
どうやって。そんな疑問は男には意味はない。
原理を聞いた所で、理解出来る範囲から超越した存在。それがこの男。

「……」

男が足を踏み出す。
同時、底知れぬ恐怖がミッドチルダ全てを覆った……。
何重にも展開された結界が軋み、悲鳴をあげる。
その波動を至近距離で受けたにも関わらず、ハルは微風くらいにしか感じていない。
寧ろ、憎悪が吹き出した……。

「殺す……。殺す！　ぶっ殺す！！！」

「……」

ハルの右腕から放たれる波動を浴びつつも、男は何も感じないといったようにただ立つ。

互いに圧倒的な存在感を放ちながら、その姿は対照的とも言える程、違っていた……。

Ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ……

第三十二話　降臨（前編）（後書き）

絶不調～……。
重要な部分なのに言葉が浮かばないこの状態……。
次回は綺麗に纏まるよう、頑張ります。
ではでは。

第三十二話　降臨　（中編）（前書き）

なんとか投稿出来ましたが、かなり遅れました。
でも中編になったという……。
見直しの段階でかなり間違いもみつかりましたので、まだあるかもです。
見つけたらご報告お願いします。

最後に、もののけイイね！

第三十二話　降臨　（中編）

カナン「ぎゃぁぁぁあああああああああ！」

暴マコ「サイクロン、ブロウ……」

バゴァァアアア！

祐希奈「アンタね、こっちまで被害がくるでしょうが。ちゃんと相手しなさいよ！」

カナン「手枷はめられた状態で……」

暴マコ「ブラスト……」

カナン「やめてぇぇえええええええ！！！」

シュゴォォォオオ。

祐希奈「ったく、こっちはこっちでパクリフィーバー奥義と死闘を繰り広げてるってのに……」

村正さん感想参照。

祐希奈「あ～メンド……カモーンシオン！」

パァァアア……

シオン「へ？」

祐希奈「神庭プロテクション、ＥＸドライブ♪」

シオン「それだけのための久々な俺！」

ピー。

ＥＸから入手したアリサししょ～のチラ見せシーンをしばらくお楽しみください。

祐希奈「ふぅ」

しー「ふぅ、じゃねぇ！　しかも用だけすんだらまたしーちゃんかコノヤロー！　しかも映像がバレたら俺が死ぬ気がする！」

テスタ「いつものことだろ♪」

しー「……な、なななな、なぁにィィィ！！？？」

祐・テ「クー◯ポコ？」

しー「ちがわぁぁい！！！　何で作者がここにいるんだぁぁあああああああ！！！」

ヴィヴィオ「えっとね、オーケーもらったからだよ？」

しー「やるなぁぁあああああああああああ！！！！　そしてもらったからって出すなぁぁあああああああああああ！！！！」

祐希奈「ま、丁度良かったのよ。これから暗くなるし質問も無かっ

たから程よく明るくするサプライズゲストよ♪」

テスタ「これくらいのサプライズいい加減なれような。しーちゃん♪」

しー「だからしーちゃん言うなぁぁあああああ！！！　っていうかなれられるかぁぁあああ！！」

テスタ「お～固有結界連発」

祐希奈「しーちゃん化してから凄いわね」

テスタ「それはアレですな。しーちゃんパワー♪」

ヴィヴィオ「テスタメントさんはしーちゃん好きなんですか？」

テスタ「いや～……」

しー「作者！」

テスタ「大好きですね♪」

しー「ぐふ……」

テスタ「ふふふ……このテスタメントがお前の喜ぶことをするとでも？」

しー「知ってたさ……お前が究極のSだってことぐらいはなぁぁあああ！！！」

テスタ「誉めるな誉めるな」

しー「誉めてねぇよ！」

祐希奈「自他共に認めるドS容赦が無い。流石ね♪」

テスタ「いやいや、祐希奈には感謝してます。うちのシオンをいい具合に抉ってくれますし」

祐希奈「任せて♪　私の十八番よ♪」

いまここに、ドS同盟が誕生する！

祐・テ「バンサーイ♪」

しー「シクシク……」

ヴィヴィオ「よしよし。ママは味方だよ？」

しー「ママ……っていけるかぁぁあああああ！！」

祐・テ「ちっ……」

しー「なにその舌打ち！？」

テスタ「ではでは、リリカルヴィヴィオ、降臨、始まりますよ～♪」

祐希奈「ちなみに、このテスタメントさんは本人が執筆よ！」

ヴィヴィオ「えぇぇ！？」

しー「いや、違うから……」

幕

カナン「あれ!?　俺は!?」

暴マコ「ハァァァ！」

バゴァァアアアア！

カナン「がふ……」

テスタ「ＥＸ直伝、放置！」

祐希奈「さっすが～♪」

テスタ「いやいや～♪」

真・幕

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

機動六課。

けたたましく鳴り響くアラート、またしても大きく揺れる六課。

しかし、前回とは違うところがあった。

静かなのだ。

これだけの揺れ、内部で何かしらのアクションがあってもなんら不思議ではないはずだった。

それが、全くない。
理由は簡単だった。アクションを起こす人物がいないだけ。
機動六課の至るところで倒れる人々。
アイナなどの補助メンバーはもちろんのこと、グリフィス、シャリオ等のロングアーチ陣、さらにスバル達ＦＷメンバー、遂にはヴィータ、シグナムの隊長陣の二名さえも倒れ付していた。

「く……そ……なんなんやこれ……」
壁づたいに歩きながら、苦し気に呻くのは、はやて。
はやては得体のしれない恐怖感と必死に戦い、今にも離れそうになる意識を繋ぎ止めながら進んでいく……。

「あ……」

しかし、体は限界を迎えていたのか、視界は揺らぎ、意識が飛びかけた……。

「はやてちゃん！／はやて」

倒れる瞬間、二つの声が通路に響く。
そして支えられる体。朦朧とする意識の中で、はやては弱々しく瞳を開く。

「なのはちゃんと……フェイトちゃんか……？」

応答したはやてになのはとフェイトは頷き、笑う。
そしてなのはは、黒い丸薬を取りだし、はやての口元へと持っていく。

「はやてちゃん、お口開けて？」

ゆっくりとはやては口を開け、そこになのはは丸薬を入れる。

「んっ！　けほっ！」

途端にはやてがむせる。苦いとかではなく、体が受け付けなかった。

「はやて、我慢して飲み込んで！」

「ん……くっ！」

涙目になりながらも、はやては無理矢理丸薬を飲み込んだ。

すると、今まで自身を蝕んでいた得体のしれない力が幾分かマシになる。

「はやてちゃん、大丈夫？」

「酷い目おうたわ……」

よく頑張ったと言うように、なのはは、はやての瞳から溢れた涙を優しく指で拭き取った。

「お、無事みたいだな。アレ、アンタには辛かったろ？」

通路をアルティスが三人を目指して飛んでくる。

そして、フェイトの肩にゆっくりと着地した。

「あの丸薬、作ったのアルティスなんか？」

「丸薬つ～か、まぁ、闇の力の塊だけどな」

事も無げにアルティスは軽く告げた言葉に、はやてに冷や汗が流れる。

最もな話、闇の力などと聞いては不安になるのも無理はない。

「……そんなん飲んで大丈夫なんか？　物凄い拒絶反応出たんやけど……」

「あたしのだから大丈夫だって。ていうか、アンタは属性が『聖』寄りだからな。拒絶反応が出たのはそのせいだ。そこの胡桃色と金髪はそこまで酷くねぇ」

「そうなんか？」

「ちょっと違和感はあったけど、ね、フェイトちゃん？」

「うん。特に問題は無かったかな」

頷く二人にはやては漸く安心。

落ち着いたのを確認し、アルティスは再び飛び上がる。

「さっき局内グルッと見てきたけどな、今起きてるのは耐性があったアンタ達、あたしと契約してたピンク頭、後はドチビだけだ。他はダメだ……。だから、今回はあたし達は中で治療に当たるから、アンタ達は外で執事が張った結界の維持を頼む。あの強層結界が壊れたらここは間違いなく崩壊する」

「執事て……」

「ハル君だよ……。昨日の暴走は、前触れみたいなモノで、一時的に納まってたに過ぎない」

わかった事実をフェイトが告げる。

その横でなのはは悔しそうな表情となった……。

「ハル君、わかってたんだと思う……。もうすぐ何か来るって。だから、私達と距離をとって、巻き込まないようにハッキングまでして強層結界の中で戦ってる……」

そして、なのはは崩れ落ち、ハルの真意に気づけなかった自分への悔しさと悲しさに打ちひしがれて、泣いていた……。

「私が、私があの時に気づいてれば止められたのに……。ハル君は、逃げてたんじゃなくて、守るために距離をとってただけなのに！」

「だ～もう、面倒な奴等ばっかだなここは……」

自分を責めるなのはに、アルティスは苛立つ。

基本、彼女は女々しいのは嫌いだからである。

「あのな胡桃頭、お前は何だ？　相手が隠してることわかりたい？　お前バカだろ。簡単にわかるわけねぇだろが。ただの人であるお前が。神にでもなったつもりか？　そりゃすげぇ。だったらこの騒ぎを止めてくれよ。……そんなん出来ねぇだろうが。お前は神じゃ無いからな。もっぺん言っとく。お前はただの人間だ。人間は万能じゃない。不器用だから目の前にある一つのことしか出来ねぇ。今、お前がやる目の前にある一つの出来ることをやれ。悔やむのはそれが失敗してからだ」

一気にそれだけ言い放ってから、アルティスは「寒っ……」と震えた。
そんなアルティスの言葉だが、なのはには届いていた。
「うん……。やるよ。今出来ることを！」
「なのは、大丈夫？」
「ごめんね。フェイトちゃん、はやてちゃん、情けなくて。私らしく無かった」
なのははフェイトとはやてに頭を下げる。
次に上がったなのはの顔にもう迷いはない。
「アルティスも、ありがとう」
「けっ……わかったんならさっさと行け」
言葉は悪いものの、紅潮したその頬が恥ずかしがっているだけというのを主張していた。
「うん！」
そして、なのは達は走り出す。ハルが戦う地獄へと……。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
結界の中では、まるで、悲鳴をあげるように紫電が流れ、空間が軋む……。

その中で、衝撃波を撒き散らしながら猛進するハルがいた。

「っぁぁあああ！」

「……」

払い、突き、薙ぎ。ハルから縦横無尽に繰り出される全ての技が地を砕き、空間を軋ませ、消滅させる。

それを恐れなど無いかのように、男は半歩ずらすだけで全て避けていく。

「らぁあああっ！」

音速を突き抜け、天へと打ち放たれた蹴り。

それすら半歩下がるのみで回避された。

「ちっ！」

しかしハルに停止はすることは無かった。

跳び上がり、回転蹴りで薙ぎ払う！

当たらない……。屈んで避けられたからだ。

だが、予測済み。着地の挙動無しに踏み込み、男の頭に肘を落とす！

その一撃は、余波だけで陥没を起こし、一体の建造物を無へと返す……。

「くっ！」

ハルが振り向く。その視線の遥か先にあるビルの上に、黒い外套を纏う男はいた……。

たった今まで目の前にいた男が、一瞬の内に一キロ以上もの距離を移動したのだ。

「逃げんなぁぁああ！！」

ボッという音が響き、ハルの両脚に纏われる紅い魔力。
跳躍。しかしその力は半端ではない。
瞬きの時間の間に、男との距離を半分まで縮める。
瞬間、男が消えた……。
直後、ハルは背後に感じた殺気を感じとる。
強引に体を捻り、回転し、背後を蹴り払う。
感触は、無い。

「がはっ！」

驚愕の暇すら与えず、ハルの体が弓なりに曲がった……。
その背中にめり込む男の拳。回り込みにつぐ回り込み。
ハルを相手に男は易々と決めていた……。
それだけではない。男の拳に圧縮される暴風。

「滅烈風……」

「ぐぁあああっ！！！」

男から静かに紡がれた言葉。対照的に、拳から炸裂した風は、残酷なほどに強力極まりなく、ハルの骨を粉砕しながら吹き飛ばす。

「やはり貴様はこの程度か……」

「くっ！」

響く声。吹き飛ばされた進路上にハルを打ち上げた筈の男が腕組みをしながら立っていた……。
その脚から出現する紅蓮。さらに、収束、圧縮が加えられ、踵が上がる……。
ハルは、防御をすべく、右腕を持ち上げる。
その腕に構わず、真っ直ぐに振り下ろされた踵。発火！

「滅爆煌……」

空に咲いた紅蓮の大花。強層結界を揺るがせる。あまりにも大きすぎる爆音は、音として聴覚は捕らえきれず、消こえない。
今の一撃を、仮にランクで表すとＳＳＳ＋＋。
魔導師の限界ランクに限りなく近い一撃を男は軽々と出したことになる。
そんな一撃をガードしたとはいえ、受けたハルは、黒煙を引きながら真っ逆さまに地上に落下、叩きつけられた……。
男は容赦はしない。倒れるハルの前に一瞬で現れ、左脚を上げる……
弾ける紫電。圧縮されたそれは、雷を越える……。

「滅轟雷……」

ハルの背中に踏み込まれた左脚。
炸裂する轟雷は地を走り、易々と結界の中を破滅へと導いていく……。
ハルは叫び声すらあげられず、体は地へと沈む……。
まだ止まらない。もう一度上げられる左脚。
収束、圧縮を繰り返し、先よりも強力な一撃を溜め、踏み込まれた。

再び音が消え失せ、崩壊だけが静かに進む世界が出来上がる……。

「……」

無言のまま、男は己が左脚を見る。

止められていた。地面から突き出した腕によって……。

瞬間、魔力が吹き出し、ハルが陥没した地面が割れ、飛び出すハル、紅き光を放ちながら放たれる右脚からの回し蹴りは残光を放ちながら男の眼前を通過した……。

不意打ちにも関わらず男はまたしても半歩動いたのみで避けたのだ……。

「死、ねぇぇっ！」

しかし、ハルは構わない。左膝に力を溜め、弾丸と化して男へ右拳を叩きつける！

が、男に直撃かと思われた拳。その拳は手前で停止。

何かに阻まれているかのように通らない……。

「はぁあああああ！！！！」

右腕から紅い力が吹き出し、激しく紫電が舞い散る。

そして、何かは砕け散り、男の顔面に拳が叩き込まれる！

片腕を持ち上げガードはしたが、男は吹き飛び、一気に数十メートルの後退をさせた。

だが、それだけ……。

今までハルの右腕に触れたモノは消滅していた。

男にはそれが起こらない……。

男はゆっくりと歩き出す。左腕に纏われる疾風。

暴風が唸るが、それは風の悲鳴……。

全身で警戒しながらハルは構えた……。

「この世には必ず光と闇がある……」

語る男の声に、コツ、コツっと歩く音。その他に、空間が軋む音が後には続く……。

「我は闇、貴様も闇、故に滅せず……」

そして止まる。静寂に満たされた空間……。

「だからなんだ……」

「貴様には闇が足りない。憎しみも、怨みも……」

「黙れ！」

出力をあげた右腕。残像を残しながらハルが突っ込む！

その視線から男が消えた……。

否、いた。目の前に……。

「希望を捨てろ。絶望に染まれ……」

「黙れってんだよ！」

踏み込み、絶大なる威力を持つ右腕を打ち込む！

瞬間、時間の流れが遅くなる。そんな感覚をハルは体験した……。

音速を破っている筈の己が右腕は驚くほど遅い。

対し、相手は川が流れるように滑らかに拳を避け、懐に入り、掌が腹部に触れた……。

「我は力の求道者にして覇壊神、グラースなり……」

炸裂する暴風！

ハルの背後に風が突き抜け、進路を破壊する……。

呆然と立つハル……。突如、崩れ落ちた……。

「ごほっ！」

倒れ伏し、ハルは滝のように吐血する。

暴風は肋骨を粉砕し、さらに内蔵が潰れていた。

そのハルを男、グラースは首を持ち、容易く上げる……。

「貴様は闇を持ちながらも希望を捨てない。故に半端な貴様は我には勝てん。朱皇千春、あの時は邪魔が入ったが、今一度問おう……。貴様が言った、力より大切なモノとは何だ……」

「……」

“二度目”となる質問に、ハルは答えない……。そして、何故か笑った……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「はぁぁああっ！」

叫びと共に、光を反射する黄金が赤い火花と空のキャンバスを彩る。

担い手はカナン。持ち前の剣速を生かし、相手のレイを押し込み、止まらない！

「エクスっ！」

剣に集まる黄金の光。

至近距離のほぼ密着状態にも関わらずカナンは光の集束をやめない……。

「カリバァァー！」

そして、斬撃の速度はそのままに、自身も巻き込むことも構わず砲撃をレイへと叩きつける！

舞い上がる爆煙から先に離脱したのはレイ。続いてカナンが追撃する！

「まだまだぁ！」

「……」

レイは無造作に首を捻る。直後に通過する黄金の刺突。

直撃こそ避けたものの、レイの頬に剣が触れ、浅く切れた。

それに構わない。右下から白剣を振り上げる。

カナンは咄嗟に身を引き、避けるが、カナンの超速の剣撃は止まった……。

さらに、振り上げた勢いからレイは回転。左の黒剣に纏われる黒いオーラ……。

「黒撃……」

「ちっ！」

回転から放たれるは黒き斬撃波。

三日月を描き、カナンへと飛翔！
剣を横薙ぎに振り抜き、斬撃波を払い除けるが、その時には既にレイはカナンへと躍り込んでいた。

「お前の攻勢は終わりだ……」

「勝手に決めんな！」

右の白剣が弧を描きながら下ろされる！
カナンは斜に構えた剣で受ける。が、即座に空間突破で下がる。
一瞬遅れでその場に何十ものスフィアが通過した……。

「勝手じゃないさ」

「っ！」

カナンはいきなり剣を振り払う！　高い音が鳴り響き、スフィアの中から放たれた黒弾を弾き飛ばす。
しかし、その剣速をも抜いて、黒弾はカナンの体へと突き刺さる！
走る痛みにカナンの剣速が一瞬鈍る。
そこに狙い済ましたかのように突っ込むスフィアの雨！
走る鈍痛に奥歯を噛み締め、カナンは納刀、魔力を込める！

「邪魔……だぁぁああ！」

振り抜かれると同時に形成されるは竜巻。
スフィアは一つ残らず消し飛んだ……。
だが、カナンは見る。絶空が消えた瞬間に撃ち放たれた白と黒の弾丸を……。
だが思う。大した威力じゃない……

と……。

強引に空間を形成。弾丸の壁を突き抜けてレイの眼前へと突っ込み、抜刀から斬り払う！

「か、は……」

筈だった。しかし、結果は違う。

カナンの胸に交差に走る白と黒の太刀筋。

カナンの眼前にクロスに斬撃を叩き込み、残心を行うレイがいた……。

「終わりだって言ったろ」

落下するカナン……。

直撃を受けた激痛に頭がボウッと霞んでいくのを感じる……。

まだだ……終われない！

しかし、カナンは諦めが悪かった。

遠退く意識を繋ぎ止め、ギンと瞳を開く！

再度空間を繋げ、突っ込む！

「はぁっ！」

怒りに任せ、思いきり横薙ぎに剣を叩きつける！

だが、そこにレイはいなかった……。

空間把握が捉えたレイの移動……。

まるで、空間突破の位置がわかっていたかのようにカナンが突っ込む前に高速移動魔法でカナンの背後に回避していた……。

レイのいる場所は頭ではわかっても体が追い付かない。
カナンが振り向くより速く、向けられる双銃……。

「カオススパイラル」
『了解した』
『ぶっぱなせ～♪』

「く、そっ！」

振り向いたカナンの眼前を、光が覆い尽くした……。
黒と白。螺旋を描く砲撃が至近距離からカナンに炸裂し、爆煙の煙を引きながらカナンが吹っ飛び、建造物に激突。
さらに、レイは集束を止めようとしない……。

『これ以上はオーバーキルになるが？』
「まだだ。この時点ではまだ意識がある」
『しつこいね～。撃っちゃえ撃っちゃえ』
「そのつもりだ」

レイの能力、一を知り、十を知る。
厳密には能力では無いが、対象が取るであろう行動を先読みするというものだ。
故にレイはカナンはまだ来るとわかる。
だからこそ容赦無しに打ち込まれる砲撃。
それらは全てカナンに直撃し、意識を刈り取ろうとする。

「が、ぁ……」

「悪いな……」

辛そうな表情で、レイは特大の砲撃を呻くカナンへと向け、撃ち放つ！

壮大に爆煙が舞い上がり、砲撃は漸く止んだ……。

ゆっくりと高度を下げ、ボロボロになったカナンを見つけた。

「わかっただろ。それはお前じゃ使いこなせない力だ。これ以上は俺もやりたくない。大人しく渡して欲しい。管理局は破壊するわけじゃない。眠ってもらうだけだから」

すると、瓦礫を押し退けてカナンが起き上がる……。

「お前……」

いつ意識を失ってもおかしくない状態にも関わらず起き上がったカナンにレイは少し驚く。

「……けんな」

静かに、カナンが言った。

ゆっくりと、だが、しっかりした足取りでカナンが立ち上がる……。

レイを睨む紅き瞳は、尚、戦意を失わず、寧ろ、増していた……。

「ざっけんなよ……。何が眠ってもらうだけ、だ……。軽く言いやがって……コイツらが悲しみ背負って、辛い思いして、姉妹で殺し合いまでして……。何百、何千かもしれない、何万かもしれない！　どんだけの間、コイツらは離ればなれで、本当にやっとの思いでまた姉妹一緒になれたと思ってんだ……。幸せを手にしたと思ってんだ！　それを知りもしない奴が、メイデンとレナスは

危険だから、眠ってもらうだけだと？　勝手なこと抜かすんじゃねぇよ！！　そんな横暴、許すわけねぇだろうが！！！」

瓦礫が吹き飛び、カナンから魔力が溢れだす！　まだ止まらない。さらに上がる！

吹きすさぶ風を受けながらレイは冷静にカナンを見据える。

「白、アイツのランクは？」

『はいは～い。え～とね、あれ？　さっきより3ランクも上がってる』

「SS＋か……。暴走される前に止めないと……」

レイはカナンが不安定な魔力値としか知らない。

どのような時に力が解放されるのか、その条件をレイが知っていれば少しは変わったかもしれない　カナンにしても、レイの理由を少しでも知っていれば態度も変わったかもしれない。

しかし、レイはカナンを止めねばならず、カナンはレイに二人を渡すわけにはいかない。

この戦いはお互いが譲れないが故に起きた戦いだった……。

「レナス、ぶっ飛ばすぞ！」

『私の力、全て主に任せます』

「ああ！　来い！」

銀光が弾ける！

ユニゾンした直後にカナンの姿が消失。

次の瞬間にはレイと銀髪となったカナンは刃を合わせ、密着していた……

「金、剛っ！！」

カラドボルグが魔力に包まれ、眩き光を輝き放つ！
集束する力は大地の力、放つはそれを練り込みし破砕の豪牙！

「……」

しかし、レイは焦らない。腕から力を抜くと同時に回転。
それが意味するのは刃の受け流し……。

「閃牙ァァ！！」

一瞬遅れでカナンが光に等しい速さでぶち抜いて行く。
レイは、突き抜けるカナンに見向きもしない。
頭一つ分屈む……。刹那、銀閃が通過する……。
空間突破を折り返してきたカナンだ……。
回転の力をフルに使い、威力を上げつつ双剣を一本に変更、纏わるは白と黒……。
カナンの胴体へと吸い込まれるように叩き込まれ、カナンは空気を突き抜け吹っ飛ぶ！

「ちっ！」

「今度こそ終わらせる！」

血痰を吐き出し、カナンは突っ込んでくるレイを見る……。
逃げる気は無い。正面から受け止める！

「「せぁぁああ！」」

交わる剣と剣。霞む剣は相手を打倒せんと風を切り裂く！

激音を響かせながら、二つの光は交差し、幾度も幾度もぶつかり合う！

「らぁぁっ！」

「くっ！」

叩きつけられるように放たれた剣を受けたレイは腕が震えたのを感じる。

即座にまともに打ち合うのは不利と判断する。

「ふ……」

カナンの袈裟の動きに合わせ、回転しながら受け流す。

その力をも利用し、剣を握り締める。と同時に剣に纏われる黒いオーラ……。

「黒天撃！」

両刃剣から黒き三日月がカナンを襲う。

避けようと、考えた時にはそこに道は無い……。

「白天撃！」

逃げ道を塞ぐように、カナンの左右に白き三日月が連続で放たれる……。

斬撃波は速く、カナンは剣を納める暇もない。だが、納める必要もない。

「どけぇぇ！」

逃げ道がないのなら押し退けるのみ。
剣に纏わる大地の力。眼前にある三日月を斬り払う！
「カオススパイラル！」
斬り払った瞬間には次の攻撃が迫っていた……。
「レナス！」
『はい！』
自身の周囲の空間をねじ曲げ、光速と化した斬撃を放ち、砲撃ごと叩き斬る！
一旦空間を繋げ、射程外まで下がる……。
何でだ……何で読まれる……。
そう思い、カナンは奥歯を噛み締める。
手数も威力もカナンが勝っている。
しかし、レイには通らないだけでなく攻めこまれていた。
一瞬悩み、らしくないと首を振る。
「いいや。めんどい」
レイの能力を気にしないことに決めた。
相手に呑まれればそれでおしまいと、直感的にカナンはわかっていたからだ。
「よし」
顔を上げる。

空間突破によってカナンとレイの間に開いていた距離は最早無い。
残像を残し、レイが接近！　両刃剣は双剣へと姿を変える。
対し、カナンはスゥっと目を細めた……。

「はぁぁっ！」

レイが双剣を振るう。その様は正に乱舞。縦横無尽に振るわれる剣閃の嵐。
カナンは、攻勢には出ず、乱舞をひたすらに落とし、ひたすらに避け、ひたすらにいなす。それでも何度ももらう……。
激痛に顔を歪めながら歯を食い縛る……。

「っ！」

だが、長くは持たない……。
疲労からか痛みからかはわからないが、顔を歪めたカナンに、隙が生まれる……。

「黒撃！」

それをレイは逃さない。能力によってカナンが今そうなるであろうことは分かっていた。
故に、完璧なタイミングで左の剣が渾身の力を込めて振るわれる！

「くらうかっ！」

「っ……」

が、怒号が響き、光速で切り払われた剣によって迎撃され火花が散った。

一瞬驚いたレイだが、即座に高速移動魔法を使用。
そこに突き立つカナンの剣……。
先読みされているが故にカナンの攻撃は当たらない……。
さらに、がら空きになった背後にはレイ……。
既に上段から下ろされた剣はカナンの頭上。
斬られる瞬間、またしてもカナンの剣が追い付き、迎撃。つばぜり合いとなる……。

「さっきから、チマチマチマチマと……」

カナンが呟く……。
と同時に、カナンが剣を弾き上げ、袈裟に剣を振り払う。
しかしレイには当たらない。一瞬早く下がっていたからだ。

「鬱陶しいんだよ……」

「……」

静かに苛立つカナンにレイは黙って剣を構え直す。
レイにして見れば、先読みして叩き込んだにも関わらず、カナンは反応し、迎撃したのだ。
それも二度も。

「終わりにするぜ……」

「っ！」

カナンが消失すると同時に右腕を持ち上げる。瞬間に叩き込まれる上段からの剣！

勢いは止まらない。ギリギリと押し込みレイの体が押されていく……。

そして、消えた……。直後に響く轟音。

市街地を破壊しながら突き進むカナンとレイがいた。

「ぉぉおおおっ！」

つばぜり合いのままカナンが地上まで突っ込んだのだ。

余りの力にレイの力では止められない。

「だが甘い！」

ならば流せばいいだけの話。

今までと同じく、回転を使い、受け流す！

過ぎ去るカナン。だが、その体は止まる……。

それは、レイの予想とは違う結果……。

「がはっ！」

急制動の反動を利用。回転も加えた一太刀がレイを高々と吹き飛ばす！

その頭上の空間が歪み、カナンが出現、振り下ろす！

「は、あっ！」

だが、レイには先読みによってわかっていた未来。

強引に体を捻り、吹き飛ばされた勢いも加えて刃を叩き込む！

互いに走る腕が折れたかと思う程の一撃……。

「はぁぁぁあああ！」

「っ！」

だが、数瞬おかずに銀閃が走り、レイが弾き飛ばされる！
レナスとユニゾンしたカナンは抵抗すら許さない。
再び市街地から上がる土煙。それを見ながらカナンは剣を鞘へと納める……。
納まった剣は鞘も含めて全てが光を放つ。
直後、レイは信じられない未来を見ていた。
一人の少年によって、周囲一キロが掌握されるという未来を……。

「出来る……今の俺なら……」
『はい。可能です！』
『当然だ』

空間把握が広がっていく。それひ意味するのは、視界の拡大、攻撃範囲の増大。
先読みをされるなら、避けられない攻撃を放つというカナンなりの結論！

「『虚空！』」

カナンとレナスが叫ぶ。一キロ全ての空間が歪む。
ただ、レイ一人を倒すために……。

「『破砕……』」

発動直前、カナンとレイに上空から流星の如く魔力矢が降り注ぎ、土煙の中へと消し去った……。

『主!?』
「誰、だ……」
攻撃の最中では、回避も出来ずまともに直撃を受けていたカナンは地に倒れ付していた。
その眼前に、金髪ツインテールの女性が着地。
純白を思わせるインナーに黒いマントを羽織っている。
女性はカナンの質問には答えず、乱れた髪を手で払い、カナンを見つめる。
「誰だって聞いてんだよ!」
「……やかましくってよ?」
ガバリと起き上がるカナンを冷たい目付きで睨む。瞬間。
「おごっ!」
ズン、と重い音が響き、カナンの頭に肘鉄が落とされる。
追加ダメージに耐えきれず、カナンは崩れ落ちた……。
「アンタはだれだよ……敵か?」
「急いでいるのではなくて? ここは引き受けますわ。早く行きなさい。ハッキリ言うならば邪魔です。消えてくださいな」
相変わらず、女性はカナンの質問には答えない。
その様子にカナンは溜め息が出た。

「任せていいんだな？」

「二度は言いませんわ」

「わかった……」

とりあえずは敵では無さそうなため、好意……といってもいいのかはわからないがありがたく頂戴することにした。

カナンがレイにこだわる理由は無いからだ。

「……誰か知らないけどありがとな。レナス。座軸頼めるか？」

『はい。直ぐにでも。メイデンと二人でやれば１５分程で到着かと』

「助かる」

ベルカ式の魔方陣が展開され、カナンの姿が消え去った。

カナンが次元転移でロストしたのを確認し、女性は視線を一点に向ける。

そこには、レイが立っていた……。

「部長……」

部長と呼ばれた女性。その名は、海城・Ｇ・凛。

レイ及び、ヴェインの上官である女性だ。

「レイ、今回は少し浅はかでしてよ？」

怒ってもいるが、比率としては呆れている割合が高い凛。

任務放棄、無許可での単独転位、そして、戦闘行動。

ミッドに帰ればレイには相応の処置がとられるだろう。

「わかってます……」

そんなことはレイはわかっていた。わかっていたが……。

「今止めないと、アイツは取り返しのつかないことになる……邪魔しないでください。今すぐ転移すれば、まだ間に合う……アイツを助けられる」

カナンを助けたいがためにとった行動。

しかし、それを聞いても凛は眉一つ動かさない。

「わかっている？　今なら助けられる？　レイ、お節介も程ほどにしなさいな。あの少年を少し見ればわかりますわ。あの少年は自分で道を切り開けますし、貴方が助けなくても、支えとなる人はちゃんといます。本来、こういった読み取りは貴方の本業の筈ですわよ？」

「でも、アイツはいつ暴走してもおかしくないくらい不安定なんですよ。今回だって、急に魔力値がはね上がりました」

「だから？」

「はい？」

「だから何ですの？　相手が不安定な力だから、有無を言わさず相棒を奪いさって良いのですか？　こう言った繊細な問題は、時間をかけて行うもの。話し合いに話し合いを重ね、互いに納得するまで意見を交わす。それが正しい在り方では？　今回の貴方のやり方で納得してくれる輩がいるのなら、見てみたいですわね」

レイの訴えを、凛はバッサリと切り捨てる。
凛は優しくはない。間違いは間違いとハッキリ言う。
決して、凛がレイを嫌っていたり、非情なわけではない。
逆に、部下を思うが故に、凛は厳しいのだ。

「今回は……時間がなかった……見逃せば、アイツは行ってしまう……だから」

「それは違いますわ。貴方はロギアを恐れる余り、前方が見えていなかったのです。妹さんのことは気の毒に思っていますが、それを少年と重ねて見るのはやめなさい」

「でも……でももし、力に取り込まれでもしたら！」

思いが強すぎるが故に、レイの空回りは止まらない。
頭ではわかっていた。だが、過去のとある出来事はレイを追い詰めるに十分で……。

「少し煮詰まった頭を冷やした方がいいみたいですわね……。相手をしてさしあげますから、構えなさい……」

静かに、しかし威厳を持って、凛は命令する。
驚いたレイは慌てて首を振った。

「俺は部長とやり合う気は……」

「貴方にはなくても私にはありますわ。貴方がいないお陰でどれだけの仕事が私に回されたと思っているのかしら……。個人的にも叩きのめさないとスッキリしませんし、さっさと構えなさい。言っておきますが、全力でやらないなら殺傷設定で撃ち抜きますわよ？」

瞬間、レイから冷や汗が吹き出した……。
何かしらの制裁は覚悟していたが、戦うことになるとは思わなかったからだ。
レイは副官という立場なため、凛に同行し、その戦闘に立ち会ったことがあった。
その時は運用部の仕事で外回りに二人で出掛けていただけなのだが、たまたま、本当にたまたま、集団で破壊活動という事件が勃発。
正義感が強い凛は一人先行したわけだが……。
レイが見たのは、一秒も立たずに吹き飛んだ犯罪者達の山。
犯罪者は一人一人がB、高い者はAAはあったにも関わらず、抵抗も許さず撃退したのだ。
さらに、凛曰く、かなり加減したとのこと。
何故自分の上に凛が立つのか、レイが納得した事件でもある。

その凛が、レイに敵意を向けている。
冷や汗が流れない方がおかしい。

「構えないなら知りません。撃ちますわ」

「くっ！」

言うやいなや、レイの眼前を魔力矢が覆い尽くした……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

大砲のような轟音が響き、空気が振動。
続いて、ビルが中心から真っ二つに折れ、倒壊。
それを成したのは少女、一之瀬祐希奈の拳。
AAAを誇る威力を存分に見せつけていた。

「ふ～ん……」

だが、祐希奈は面白くないと言わんばかりに一声。
その拳は、突きだされた掌の前で回転する黒の三角形の障壁、トライシールドによって防がれていた。
張った人物は、無論、ヴェインである。

「データで事前に見てはいたけど、やっぱり凄い威力だ。少し危なかった」

ヴェインの表情は驚愕ではなく、ましてや戦慄などというモノとは程遠い、余裕。

この程度、本気になる必要がないと言われたようで、祐希奈は苛立つ。

「俺達は戦いに来たんじゃない。理由が無いだろ？」

「理由はある……」

「さっきのことは謝るよ。ただ、そういうロギアは多いから一般的な知識から……」

「まだあるわ」

謝罪をするヴェインの言葉を遮り、祐希奈は睨む。
障壁に叩き込まれた拳が開き、押し込まれる！
祐希奈の指が食い込み、紫電が弾け、軋みを上げる障壁を見ながらヴェインはまだ動かない。

「私、見下されるの嫌いなのよね！」

「そんな気はなかったんだけど……」

引きちぎられるようにしてトライシールドは砕け、消滅する。

引かれた右腕に纏うは紅蓮。同じ技を繰り出す祐希奈に、ヴェインは同じく障壁を張った。

「次はぶち抜く！」

祐希奈が吠えると同時に障壁に突き立つ拳。

その言葉に違わず、直撃の瞬間に障壁にヒビが広がる。

同じ技で威力が極端に変わった理由、それは、踏み込んだ脚にも身体強化を叩き込んでいたため、拳に入る力も倍近くに上がったのだ。

「はぁぁあああ！」

一気にぶち抜こうとさらに力を込めていく。

何も起きなければ、数秒ももたずに障壁は砕けただろう。

何も起きなければ……。

「残念……」

と、ヴェインが呟く。

「っ！？」

瞬間、コンクリートで作られた地面が、祐希奈の踏み込みに耐え

きれず没落する。
足場を無くしたヴェインは、祐希奈の力に押されるままに、吹っ飛ぶ。
しかし、それはあらかじめ狙っていたこと。
故に、ヴェインは何も無かったかのように着地する。

「……」

空中で静かに怒るのは祐希奈。
無言のまま、ブレードを下方へと向ける……。

「やわな建築のせいでアイツ殴れなかったじゃないっ！」

怒号が響いた瞬間に、轟音が鳴り響き、天へと火柱が伸びる！
その光景を、ヴェインと咲は呆然とみる……。

「「スッゴい八つ当たり……」」

確かに、八つ当たりと言えばそうなのだが、規模が一般人のソレとは全く違う。
無論、その八つ当たりを受けたビルは消し炭となり灰を辺りに撒き散らしていた。

「燃やす……」
『Ｄｒｉｖｅ　Ｉｇｎｉｔｉｏｎ』
祐希奈から吹き出す魔力に、ヴェインは表情を引き締める。
祐希奈がここまでキレては話し合いなど不可能だからだ。

「咲、手伝え！」

「作戦前には手を出すなって言っといて……」

「ＤＸパフェ三つ！」

「了解ですヴェイン・アルベリス一等空尉！」

多少、裏取引があったものの、咲はデバイスとなる銃、バァレルクを構え、ヴェインは槍を構える。

「セレクション！」

『Ｙｅｓ　ｍｙ　ｓｗｅｅｔ』

「エレメントバレット」

『Ｓｅｔ　Ｒｅａｄｙ』

バァレルクが蒼く輝く。下がる気温。待機中の水分が凝結する。

生まれるは氷。無数の鋭利な氷柱が咲の周囲に展開される。

「シュート！」

「……ふん」

放たれる氷柱を、祐希奈は横目に捉える。

右腕に纏うブレードの炎熱が燃え盛り、祐希奈に届く前に氷柱は溶け、蒸発した氷柱は、祐希奈の周囲に霧のように霧散する。

その霧の上、咲が上下逆さになりながら現れる。

銃は消え、脚にはマッハキャリバーのような鋼鉄の靴。

ただ違うのは、グラーフアイゼン、ラケーテンフォルムのような噴射口がついていること。

「はぁぁああ！」

ブースターが噴射し、霧を真上から叩き斬るように霧の中に蹴りが打ち込まれる！

そして、咲の脚は、確かに蹴った感触を捉えた。

「アンタからか……」

霧の中から声が響く。咲の蹴撃が当たった位置は背中。

強固な防御力を持つ、リフレクションフェザーが発動している位置だ。

故に、咲の脚撃は届いていない……。

「わっ！」

逆に、足首を持たれ、振り回される！

形としてはジャイアントスウィングが近い。

ただし、祐希奈はそれを片腕で行っている。

「飛ん、で……」

そのまま地面に叩きつけようとした祐希奈だが、突如回転を止め、ブレードを胸の前に立てる。　直後、火花が弾け、漆黒の槍が突き立つ……。

「「……」」

一瞬、祐希奈とヴェインの視線が交わる。

だが、次の瞬間にはヴェインら分裂したかのように突きが放たれる！

祐希奈も応戦。襲い来る漆黒の閃光を払い除けるようにブレードで弾く！
己が急所を狙う突きをひたすらに弾き飛ばす！
が、ヴェインも執拗なまでに突きを止めない。

「鬱陶しい！」

怒りの力を乗せ、剣に炎熱を重ねて槍を吹き飛ばす！
追撃を重ねるべく、踏み込む。

「うぐっ！」

が、横腹に漆黒の槍が突き刺さった。
無論、非殺傷ではあるが、それでも直撃のダメージは大きい。
そんなことよりも問題なのは正面のヴェインがどうやって横から攻撃したのか、だ。
痛みに顔をしかめながら、横を向く。

「ごめん……」

「何で……」

そこにはヴェインがもう一人立っていた……。
では、今まで自分が戦っていたのは誰なのかと、祐希奈は混乱する。

「いい加減……」

動きが止まった瞬間、隙を狙っていた咲が動きを止めた祐希奈に左脚を振りかぶっていた……

『祐希奈！』
「しまっ……」
気づいた時にはすでに遅い。噴射口から魔力が吹き出し、咲の脚が霞んだ後だった……。
「離してってば！」
頭に走る激痛を認識した直後、蹴り落とされた祐希奈は地面に沈み込んでいた……。
「く、う……」
祐希奈が犯した失態。
それは完全に動きを止めたということ。
祐希奈は一人、だが、相手は少なくとも二人。
多対一の状況で、たった一度でも、大きな隙を作ればそれは致命的な失態となる。
「発動……シャドウチェイサー」
祐希奈を中心に三角形に囲むのは全てヴェイン。
そのそれぞれが持つのは、漆黒の武器。剣、槍、戟。
「発動。セレクション・エレメンツ」
咲のバァレルクに、蒼に黄のラインが入り、紫電を放つ！
それの銃口を上空から真下の祐希奈にゆっくりと向けた。

「撃ちまーす！」

引き金が引かれる。現れるのは雷を纏う水弾。
当たれば麻痺し、その時点で戦いは終わる……。

終わる……

そう思った時、祐希奈の中で燃え上がる何か……。
負けず嫌いの心に着火したのだ。

「アンタらみたいな自己中共に負けるかぁぁあああ！！！」

「っ！」

翼が広がり、突き立つ射撃を全ての敵に向けて反射。
ヴェイン達は持っていた武器で弾くが、反射されるのは放った主である咲へも同じこと。

「あぶな！」

攻撃の最中だったために、慌ててプロテクションを展開した咲だが、その眼前に蒼炎の巨腕が伸びていた……。

「咲ィィィ！」

「くっ！」

ヴェインの声に反応し、離脱しようとした咲だが、巨腕はそれを許さない。
プロテクションごと咲を捕まえ、縮む。

蒼炎を纏うブレードを右腕に展開する祐希奈の元へと……。

「蒼龍！！　煌塵閃っ！！！」

祐希奈が振りかぶった時、初めて巨腕は消滅。
身を翻した時、回避は不可能。再度プロテクションを展開。
直後、ブレードが叩き込まれる！

「バァレルク！」
『Ｌｏａｄ！』

咲はカートリッジを全て弾きだし、プロテクションを出力最大にまで上げる。

「関っ！　係っ！　あるかぁぁあああああああああ！！！！」

「く、ぅ！！！」

しかし、祐希奈の剣は止まらなかった……。
振り抜かれ、咲の体は空気をぶち抜き吹っ飛んでいく。　それを追うように、蒼炎の刃は飛翔する。
やがて直撃し、大輪を咲かせた蒼炎は、爆音を轟かせ咲の意識を刈り取った。

「さぁ……次は、アンタらよ……片っ端から、ぶっ潰してあげる……」

そう言いながら、祐希奈の息は荒い。
予想以上に、咲から頭に受けたダメージが大きかったのだ。

「もう終わりだよ。あの状態から咲を倒したのは凄いけど、君の負けだ。止めよう」

ヴェインの一人が、祐希奈の状態を気遣い、そう言う。

が、祐希奈は譲らない。

「負けてない……私が倒れるまでは、負けじゃない……」

「それも俺の気分次第で負けに変わる。もう一度言うよ。俺達はそんなことをしにきたわけじゃないんだ」

祐希奈を止めようとするヴェイン。

そのヴェインの言葉が響いた瞬間、祐希奈に話すヴェインを残して、左右二人のヴェインは消えた……。

「では、何をしにきたのですか。ヴェイン・アルベリス一等空尉？」

キン、と刀を納める独特の高い音。

祐希奈の前に、両腕に籠手、両脚に装甲を纏い、腰に小太刀を二本、白の長髪、開かれる瞳は蒼眼に輝く少年が立つ……。

「アンタ誰よ……」

「一之瀬祐希奈さんですね。僕はクレイ・アレイザと言います。よろしくお願いします」

クレイは、まるで模範のような挨拶をする。

角度、滑舌、声の大きさ等、その他にもあるが、とにかくその全てが完璧といえた。

だが、祐希奈は何も言わず、クレイの瞳を見つめる……。

「何ですか？」

「アンタ……」

食い入るように見つめる祐希奈。

見た目はただの好青年だ。だが、何かがおかしいと祐希奈は感じた。

「クレイ・アレイザ、陸曹だったか？」

ヴェインの声にクレイは祐希奈から視線を外し、振り向く。

朱瞳と蒼眼、対極的な視線が交差する。

「はい。貴方の部下、ということになってます」

抑揚のない声でクレイはヴェインを見続ける。当のヴェインはと言うと苦笑いをしている。

「で、その部下が何でここにいる？」

「海城三佐が、上官を叩きのめすのも部下の仕事だと。もっとも簡単にいくとは思っていませんが……」

最早問答無用と、小太刀を引き抜くクレイ。

その様子に、ヴェインは頭を掻いた。

「部長、どうだ？」

「簡潔に言うならばキレてます」

短く言い放つクレイにヴェインは真剣な表情に変わる。

「よし。お前倒して逃げる。死にたくないし」

「させると思いますか？」

今ここに、副部長とその部下の戦いの火蓋が、切って落とされようとしていた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

林の中で、木々が吹き飛び、土煙がもうもうと上がる。

「抵抗を止めて大人しく私と遊びなさぁぁぁぁい！！！」

「にゃぁぁあああああ！！！」

咲夜から走る銀閃。

咲夜の右腕には、ナイフが握られていた。咲夜のデバイスのルナだ。

唸りを上げながら襲い来る銀閃を、確実に受け止め、流し、後退を繰り返すのはヴィヴィオだ。

そのヴィヴィオは、涙を振り撒きながら、なのは幼き時代の絶叫をあげる。

ヴィヴィオは銀閃が怖いわけではない。今までもこの程度の剣撃戦はこなしてきている。

ならば、ヴィヴィオが泣いている理由は……。

「フフフ……」

咲夜自体が怖かったのだ。

ヴィヴィオの前にいるのは先ほどの可愛らしい少女ではなく、獲物を狩る猛獣。
所謂、二重人格、それが咲夜だ。

「楽しいわぁぁ！」

「く……」

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ』

身を屈めた咲夜、それにヴィヴィオは一気に下がる！
直後、下段から鋭い斬り上げがヴィヴィオの眼前を通過していた。
咲夜は止まらない……。小柄な体のどこからそんな力が出るのか、咲夜が地を蹴った瞬間、めくれ上がる地面。
ニヤリと笑う咲夜はヴィヴィオの目の前。

「ひゃうぅぅ！」

泣きながらも首を捻る。直後にナイフが直ぐ横を突き抜ける！
密着した咲夜は、左腕にもナイフを転送、霞む！

「か、かか。ひっく……」

『Ｌｏａｄ！』

が、ヴィヴィオは避けただけでは終わらず、ヴィヴィオの拳に風が渦巻いた……。
泣きじゃっくりのお陰で喋れていないが……。

「う、う、ウィン、ド」

『Ｉｎｐａｃｔ！』

涙が散った時には、咲夜の鳩尾に拳が炸裂していた……。
フルドライブではないため、風弾までは出ないが、それでも技として十分な威力を誇る。
事実、咲夜の体は弓なりに曲がり、崩れた……。

「いい……」

「ふ、ふぇ？」

ぐったりとしたまま、咲夜から声が上がる。
不思議そうにするヴィヴィオの腕を咲夜は掴む！

「っ！」

「可愛い。ア～ンド強い……これぞ……新しき萌えの境地！！！」

「ふぇえええええ！！！」
『マスター！　落ち着いてください！』

ガバリと顔を上げた咲夜にヴィヴィオは恐怖で支配される。
冷静さを失ったヴィヴィオにフェアリーの声は届かない。
風雅が背後に現れたことも、気づかない……。
その姿はまるで獣。溢れ出る魔力は獣の姿を形どる。

「四獣拳……牙狼」

「うっ！」

飛びかかるようにして横殴りに振るわれた風雅の魔力爪は、ヴィヴィオの肩から入り、小さな体を吹き飛ばす！

受け身も取れず、ヴィヴィオは地面を跳ね、転がる……。

「う、うぅ……」

「風雅！　私の子なんだから邪魔しないで！」

「貴女に任せておいたら何か間違いが起きそうなので無理です！」

「間違いって何よ！　私はあの子をお持ち帰りテイクアウト……」

「それが間違いだって言ってるんだぁぁあああ！！」

普段は弱気な筈の風雅が咲夜に珍しくツッコミを入れる。

二人がそんな漫才を繰り返す間に、ダメージは受けたが、逆に痛みによって、ヴィヴィオの頭は急速に冷静さを取り戻していた……。

ヴィヴィオが起き上がる。その瞳に動揺はない。

「……ごめん」

『いえ、反撃といきましょう』

頭上でフェアリーをクルクルと回す……。

否、そんな生易しいものでは無かった。

回転するフェアリーは、風を集束し、辺りに砂塵を舞い上げ、ヴィヴィオの姿を覆い隠す……。

「ソニックフォーム！」

『Ｓｏｎｉｃ　ｆｏｒｍ　Ｓｅｔ　ｕｐ　Ｒｅａｄｙ』

内部から弾ける砂塵。その中心に出でるは防御を無くしたにも等しい薄いジャケット。レオタード姿の高町ヴィヴィオ。

振り払われたフェアリーに纏われるは疾風。

「行くよ、フェアリー！」

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ！』

響く電子音。

発動するのは先程と同じソニックムーブ。

だが、同じ技でも速度は桁違いに上がっていた。

音速の壁を易々とぶち抜き、風雅の眼前に剣を薙ぎ払うヴィヴィオがいた……。

しかし、風雅も伊達に薄い装甲はしていない。

言い合いをしていたにも関わらず、頭一つ分屈み、避ける……。

ガントレット型デバイスのクラヴィアが風雅に応え、輝く！

四肢に纏われる緑の光。風雅の姿もまた、霞む……。

「「はぁぁぁ！」」

「ちょっと風雅！　傷物にしたら許さないわよ！」

咲夜が怒鳴る。その間にも二人は十合以上の剣撃を重ねていた。

それも、止まってではなく、咲の周囲を旋回しながらだ。

「やぁ！」

「せいあ！」

咲夜を差し置き、ヴィヴィオと風雅はさらに交じり会う……。

「四声怒涛（フォースアクセルレイト）！」

『Ｇｅａｒ　１ｓｔ』

ヴィヴィオが胴を払えば風雅は飛び上がり、避け、風雅が頭に拳を打ち込めば、剣を立てたヴィヴィオが回転で受け流す！
ヴィヴィオが回転から双刃の逆刃を跳ね上げ、風雅が肘で打ち下ろし、ならばとヴィヴィオが独楽のようにしてさらに回転を加速。
避けるために飛び退くように風雅が下がる。

「セカンドギア！」
『Ｇｅａｒ　Ｓｅｃｏｎｄ！』

四肢に纏われる緑の魔力は、風雅の背後で何かの形を現す……。

「四獣拳……」

形の招待は動物。止まることを知らない破壊の獅子。
まるで、憑依するかのように、その力は風雅に移る……。

「疾風、一閃……」

対し、全ての風を集めるかのようにヴィヴィオの双剣に風が唸り、集束される。
最大に満ちた瞬間、二人の体は同時に霞む。
あまりの速度に、蹴られた空気は衝撃波となり二人の背後突き抜ける！

「獅子破吼！／ウィンドスラッシャァァ！」

「うわっ……」

風雅の拳と、ヴィヴィオの斬撃が激突！
激突の衝撃に、咲夜は腕で風を防ぐ。

「「はぁぁぁっ！」」

吹きすさぶ風は、容赦無く二人を襲うが構わない！

叩き込もうと、お互いがお互いに思い、揺るがぬ思いはさらに力を引き出し放つ！

「「っ！」」

激突の末、お互いに体が後ろに引っ張られるそんな感覚を体験し、吹き飛ぶ！

風雅とヴィヴィオは同時に着地するが、ヴィヴィオは寒気を感じてその場から飛び上がる！

感覚は正しく、今さっきいたところに幾本ものナイフが突き立つ……。

それだけに終わらない。ヴィヴィオを囲うように転送されてくるナイフがあった……

「フェアリー！」

『Ａｃｃｅｌ　Ｌａｎｃｅｒ！』

即座に位置を特定し、頭上に光槍を展開、落下させるようにして放ち、撃ち落とす！

「四獣拳……」

ヴィヴィオの背後から声が響く……。

迎撃の一瞬の間、そこに突っ込める超速の男は一人しかいない。

そう、風雅だ。

風雅は飛べない。故に跳んだ筈だが、跳躍という次元を越えてい

た……。

「牙狼！」

風雅の手に纏われるのは爪。狙うはヴィヴィオの頭！
ヴィヴィオが振り向いた時には既に頭に直撃だろう。
が、ヴィヴィオも伊達に死線を通ってきてはいない。
戦士としての直感が働くままに、動く……。

「ブースト！」
『Ｔｗｉｎ　Ｂｏｏｓｔ！』

普通ならばあり得ない速度でヴィヴィオの腕が霞み、風雅の爪に合わせ火花を散らす！
高速移動魔法の同時行使。これによってギリギリで受け止めていた……。

「咲夜さん！」

が、そんなことには構わず、風雅は力の限り叫ぶ……。

「え？」
『マスター。囮です！』
「っ！」

そう、風雅は囮。本命は咲夜だったのだ。
離脱しようとしたが、既に遅かった……。

「希少技能発動、月時計」

ギシリと歪む空間。
咲夜の能力によって、ヴィヴィオは空間の檻に閉じ込められた……。
ヴィヴィオは動けない。だが、風雅は違う。
「くっ！」
「後で事情はお話します……」
ヴィヴィオへと風雅は爪を振りかぶり……消えた。
否、何者かに吹き飛ばされたのだ。
ヴィヴィオの目の前に、銀に輝く刀を持ち、金髪を輝かせて、眼鏡をかけ、コートを風に翻す男が一人、立っていた……。
「あ～、アレだな」
何を思ったか、男は天に人差し指を向けた。
「おばあちゃんが言っていた……。弱いものイジメをする奴は殺っちまえって。多分……。そしたら俺、悪くないし」
「あの、貴方は？」
男はヴィヴィオに振り向き、一振り。
同時に空間の檻は避け、ヴィヴィオは自由となった。
「なんだっけか……。天の道を行き、渉るただ一人の男、天道渉だ。とか？　まぁ、どうでもいいや。テレビで見たの真似ただけだし……」

「？」

「渉でいい」

「は、はい」

マイペースな様子の男に、ヴィヴィオは困惑しながらも頷く。

渉はと言うと、さも眠そうに欠伸をかました。

そして、無造作に首を捻る。直後、ナイフが渉の横を過ぎ去った……。

「危ないだろが……」

「ちょっとアンタ！　その子は私のモノよ！　いきなりでしゃばってきて何様のつもり！？」

考えることたっぷり三秒、渉は考える。

そして、無表情に咲夜を見下す……。

「俺様？」

「なぁあああああ！？」

「うわ……」

『凄い方ですね』

殺伐とした雰囲気になる戦場にヴィヴィオはなにも出来ない。

ちなみに、渉は適当に言っているだけで他意はない。

実はこの渉、極度の面倒くさがりであった。

「渡さない。その子は私のモノなんだからぁぁあああ！」

「うっせぇなぁ……。おら、相手してやっから、来い」

咲夜を挑発する渉。
その頭上に何故か風雅がいた……。
渉に吹き飛ばされたが、復帰したのだ。
その回復力は獣と等しい。

「はぁあああ！」

当面の敵である渉に風雅は容赦は無い。
風雅の爪は音速を持って下ろされ、止まった……。
ヴィヴィオが途中に割り込んだのだ……。

「お～。嬢ちゃんスゲーな。じゃ、ソイツ頼むわ」

「は、はい！」

渉は風雅をヴィヴィオに任せ、咲夜へと飛んでいく。
ヴィヴィオを守りに来たのか、そうでないのか、全くよくわからない。
よくわからない男を戦線に加え、戦いはまだ続く……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

訓練所、グラースの問いにハルは笑う。その笑みは憎しみのこもった視線に変わる……。

「大切なモノだと……んなもんねぇよ。俺にあるのはてめぇに復讐をすることだけだ……」

グラースに首を締められ、呼吸すらままならない中で、ハルはグラースを睨み、答える……。
グラース喉元にあるグラースの腕をハルが握り、ミシミシと万力のように締め上げる。
しかし、痛覚などないかのようにグラースは離さない……。

「……ならば、何故貴様はこんなにも弱い？」

「殺すっ！」

腕の力で右膝を跳ね上げ、グラースの腕に打ち込み、拘束から逃れる。
着地と同時に、踏み込み、グラースの鳩尾に右拳を叩き込む！

「オオォォォ……っ！」

直進……直進、直進！
拳の叩き込んで尚ハルは止まらない！
急停止、地に脚をめり込ませながら踏み込み、全ての重心を右拳に乗せる！
またしても、グラースの手前で拳は止まる。

「ラァァアアア！！！」

が、ハルは構わず咆哮を上げた。
直後、拳を止めていた力は砕け、ハルの拳撃は鳩尾へと炸裂し、音速をぶち抜きグラースが風を切り裂く！
やがて、結界の壁に衝突しヒビを入れながら漸く停止……。
瞬きの間もない。グラースの眼前にはハルの姿！

「消え去れっ！」

激震に次ぐ激震。その揺れはハルの動きと重なって……
拳が、肘が、脚が、膝が、ありとあらゆる体術がグラースに連続で打ち込まれる！
動かないグラースに、ハルは脚を天へと振り上げる！

「粉塵裂脚っ！」

一キロ四方が陥没し、地震を思わせる揺れが結界の中を襲う！
が、ハルの踵は、グラースの右腕が止めていた……。

「興醒めだ……」

武術にして、最高ランクに位置する、無拳動での体術。
その無拳動から放たれた左拳はハルの腹部に突き刺さっていた……。

「がは……」

グラースの腕にボタボタとかかる赤い水。
全て、ハルの吐血によるものだった……。

「やはり貴様は弱くなった」

グラースが軽く飛ぶ。半回転から放たれる蹴りは超速を持ってハルを吹き飛ばす！

「くっ！」

体を裁き、体制を整えた時にはグラースはいない。
ハルの実力でも捉えきれない速度……。
その歩法は、かつて、仙人が使っていたと言われる空間歩法。
現在、名を縮地と残す。

「殺す、殺すと吠えながらも、その拳には殺意が足りん……」

「っ！」

それを持って、ハルの右にグラースは立つ……。
そして、言葉を刻み込むかのように、ハルの体を空高く蹴り上げた。

「何を迷う。何故迷う。希望なぞに何故すがる」

次は反応すら出来ずに背中ら打ち下ろされる……。
痛みに麻痺するハルの体は、脚なのか、腕なのか、もうわからない……。
ただ、叩きつけられた衝撃に、意識を手放さないよう、それだけに集中していた……。
全身が悲鳴を上げる中、ハルは立ち上がる……。
その視線の先には、既にグラースがいた……。
霞む右腕、グラースがハルの頭を掴み、先程とは逆に、結界の壁に叩きつける！

「終わりか……」

「ぐ、う……」

暗闇に落ちかける意識を必死に繋いで、ハルはグラースを睨む……。

そして、弱々しく、グラースの頭を掴み返す……

ここでハルが死ねば、グラースは六課を破壊する。

その中にはハルの大切な仲間も、クレアもいる。

「させねぇ……今度は、俺が……てめぇから、守る」

遂に、ハルの口から溢れた本音……。

大切なモノなど無いと、口では言えても、心のどこかで感じていた、光。

ちっぽけで、弱々しくて、今にも消えそうな、光。

だが、ちっぽけでも、弱々しくても、消えそうでも、それは確かに俺の心にあった。

消したいのに、消えてくれない。

俺自身がどこかで消したくないと望み始めたから……。

いつしか、コイツをどんなことをしても“殺す”と思っていた気持ちは、どんなことをしてもコイツから“守る”に変わっていた……。

「チェックメイト……だ。お前も、俺もな……」

瞬間、ハルの右腕が、一際激しく輝いた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

時は少し遡る。

訓練所、結界外にて、なのは、フェイト、はやて、の三人は、ハルが展開した強層結界の上に、三重に展開した結界を強化、及び補

修を外部から行っていた。
ハルとグラースが内部で激しい死闘を繰り広げても壊れていないのはこれによる功績が大きい。
が、激突の衝撃による度重なる破壊は、なのは達の負担を矢継ぎ早に増加させていた。
さらに、内部のハルとグラースの力から放たれる波動は、精神的にも削っている。

「ハル、君……」

辛そうに、なのはは表情を歪める。
結界内部の光景がなのは達には見えているからだ。
なのはの目には、常人なら間違いなく死んでいる一撃を何度も受けるハルが映る。

「はやて、やっぱりハル君を助けに！」

見ていられなくなったのか、フェイトははやてに訴えかけるが、はやては首を振る。

「耐えなアカン……。今の私らが行ってもハル君の邪魔にしかならんよ……」

俯きながら、はやてはフェイトに静かに言った。
そんなはやてに、フェイトは苛立つ。

「でもこのままじゃハル君が死ぬのを見てるだけになる！」

「ほんならどうするん！？　震えでろくに力も入らん足で、あんなバケモンと戦えるんか！？　仮にリミットを外した所で、効果も無

い援護が関の山や！」
「私が前に出てアイツを引き付ければいい！」
「何を言うてるんや！？　無茶と無謀は違う！　そんなん許可出来るわけないやろ！」
「はやての許可なんていらない！」
救出にいけない怒りとやるせなさが爆発し、二人は口喧嘩をしてしまう。
「あ、あ……ハル君、が……」
「なのは？」
「どうしたん！？」
なのはが見ていた映像を、フェイトとはやてが見る。
そして、固まった……。
そこには、グラースの頭を持ち、今までとは桁違いの紅い光を放つハルがいた……。
『滅神……絶覇吼……』
ハルが呟く……。
瞬間、結界が軋みを上げ、揺れ始める！
ハルの結界から数えると、四重に展開した強層結界がだ……。
「まさか……」

「間違いない。ハル君は自滅覚悟。はやて、止めない、と……」

フェイトが言葉途中に止まる。
何故なら、巨大な魔力反応がまた一つ、増えたからだ。
だが、グラースやハルの力とは違う、巨大ながらも、芯は暖かいそんな力……。

「この感覚……」

この三人の中では、最もその力の持ち主と親しいフェイトが顔を上げる。
天空を見上げた時、なにかが煌めき、結界へと落下する。
直後、四重の結界の内部に貫通するように突き抜けた……。

「間違いない。状況も見ずにあんなバカするのは……」

「「カナンだけ」」

答えた二人に、フェイトはコクりと頷いた。
そして、フェイトははやてを改めて見つめる。

「弟子が突っ込んで師匠がいかんけにはアカンてか。後二分だけ。せめてリミット解除の申請が通るまで待ってや……部隊長としてやない。友達として、これだけは譲れん」

「わかった……。ただし、二分経ったらまだでも行くよ」

納得したフェイトは、バリアジャケットを展開し、結界を見据える……。

「はやてちゃん」

「やと思ったよ。既に申請済みや。なのはちゃんもフェイトちゃんと一緒に突入」

「ありがとう。押し付けちゃってごめんね？」

「ええよ。私は広域型やし、高機動戦は苦手や。今回は補助がええやろ。結界はまかしとき」

力強く言うはやてに頷き、なのはもフェイトの隣に並ぶ。
二人はただ静かに結界を見ていた……。
ハルとカナンの無事を思いながら……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「滅神……絶覇吼……」

グラースに押し付けた掌から光が弾ける！
同時、ハルは全身が燃えるような激痛に襲われる。
だが、ハルは構わない。出力をさらに上げる！

「愚策だ……」

グラースは、特に苦しむ様子もなく、左腕を引き絞る。
どれだけ凄まじい威力だろうと、ハルを先に倒せば終わりだからだ。
が……。

「こんの、クソッタレコンニャクがぁぁぁあああ！！！！」

「ごふっ！」

怒号が響いた瞬間、何かに殴られ、グラースの手からハルが吹っ飛ぶ！

無論、技の発動は止まり、予想外の一撃に、ハルの意識は闇へと落ちる……。

殴り飛ばした少年はハルを持ち上げ、端に運ぶ。

「レナス、このバカの面倒頼むわ」

「はい。こちらはお任せください」

銀髪の少女をハルの側に起き、少年はグラースの三メートル背後に移動。

グラースはゆっくりとした動作振り向き、少年を見る。

「風間、カナン……」

「お、よく知ってんな。まぁ、あのバカに代わって俺がアンタの相手してやるよ……」

カナンの声は、初めは明るく、後半にいく程低く、視線が鋭利なモノへと変わっていく……。

「気をつけろ……。自分でも何するかわかんねぇからよ……」

静かに怒りを放つカナンを見てもグラースは何も感じないのか、ただ、見続ける。

「来い……風間カナンよ」

「言われなくてもな……。いくぞ、メイデン……」

『任せろ。私も奴は不快だ。思いきりやれ』

同時、二人の姿は消失した……。

Ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ……。

第三十二話　降臨　（後編1）（前書き）

ども（汗）　このままのペースだと、あまりにも遅くなりそうなので、無理矢理一万四千文字で切りました。
いや、オリキャラバトルが難しくて……。
次話を書いたら結合しようか迷ってます。
しないほうが、いい、という方は、感想やメッセージを送ってください。
考えますので。
ちなみに、名シーン、セリフ、は集計中ですので、次回に発表したいと思います。

第三十二話　降臨　（後編1）

祐希奈「あっはははは♪」

ドキャ、バキッ！

カナン「がはっ！　ぐふっ！」

祐希奈「更新遅いわ♪」

メキメキメキ！

カナン「ぎゃぁあああああ！」

ヴィヴィオ「あ、あの、凄い音、してるよ？」

一真「ヴィヴィオ、心配すんな。あれくらいでくたばる奴じゃねぇよ」

千歳「殺してもしなない男の子みたいだしね」

神無『まぁ、一真の攻撃を受けて生きる奴なんて、そうはいないわね』

ヴィヴィオ「ふ、ふぇ！？」

一真「あぁ、自己紹介忘れてたな。リリカルなのは、七つの大罪から来た、神童一真だ」

神無『一真のデバイス、神無よ』

千歳「ゆーちゃんの親友、ちーちゃんこと千歳です」

ヴィヴィオ「えと、初めまして高町ヴィヴィオです」

祐希奈「ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　ＬＶ♪」

シュゴォォ！

一真「ん？」

カナン「わぁぁっ！」

ゴーン！

一真・カナン「ぐぁぁあああああ！！」

祐希奈「何二人して頭押さえてんの？　バカ？」

一真・カナン「お前が投げつけたからだろ！」

ヴィヴィオ「わわ、初めてなのにぴったりだよ～」

カナン「……驚くとこ、そこ？」

ヴィヴィオ「え？　えと、凄いとんだ……よね？」

カナン「……いい。ヴィヴィオはな。そのままでな……くっ！」

千歳「な、なんか、カナン君辛そうだね……」
神無『ここでは味方がいないらしいから』
一真「まぁ、安心しろ。俺が来てやっただろ？」
カナン「ありがとうございます……」
祐希奈「まぁ、そんな奴は片っ端から私が潰すわけだけど」
一真「ほう……。俺を倒せる気でいると？」
祐希奈「気じゃないわ。確定事項よ？」
一真「いいだろう！　冥道斬月破！」
祐希奈「ふん……」
バチン！
一真「なっ！？」
祐希奈「冥道？　そんなまっちょろい技で私を倒せるとでも？」
説明しよう！
祐希奈は多分のカオスを従えているがために、冥道が吸い込みきれないのである！
祐希奈「ごくろうさま♪」
ヴィヴィオ「ふは～……」

千歳「え、何!?　今の解説ヴィヴィオちゃんなの!?」

神無『なんか、物凄い真剣な声だったんだけど……』

ヴィヴィオ「糖分パワーが抜けちゃったよ～……」

千・神「なにそれ!?」

カナン「うん。まぁ、ここのヴィヴィオは凄いんだ。ＥＸ感想欄では、アンリミテッドしーちゃんワークスを発動した程だしな」

神無『しーちゃんって、何……』

ヴィヴィオ「しーちゃんはね～、私の子供なんだよ～♪」

千歳「子供!?　なんかさらりと凄いこと言ったよ!?」

祐希奈「まぁ、そんな細かいことは置いといて……」

一・千・神「『細かいのか!?／の!?』」

祐希奈「私を殺るなら、これぐらいはしなさい！　冥王、斬月覇ァァァァ！」

ゴォオアアア！

一真「冥王ってなんだぁぁあああああ！」

カナン「……一真さん、細かいことは気にしないでほしいっす」

一真「これも細かいのか！？」

カナン「はい」

一真「即答か！」

祐希奈「人がゴミのようだ♪」

カ・一真「ネタ的にあぶねぇぇえええ！！！」

ズガァァアアン！

千・神「『一真ぁぁあああああああああ！！』」

祐希奈「あはははははは♪♪」

プツ……

ヴィヴィオ「え～、祐希ちゃんが危ないため、私達が質問に答えたいと思います」

しーちゃん1「……1って何？」

しーちゃん2「気にしたら負けなんじゃね？」

しーちゃん3「もうツッコム気にもならないな……まぁ、あえてツッコムが……」

ワラワラワラワラ……

しーちゃんズ《怖いわぁぁあああああああああ！！！》

ルミオ「やかましい！　そのくらいにしとけよ」

しーちゃん３５６「なんでルミオまでいんだよ」

ルミオ「知るか。顔パスだから呼ばれたんだろ」

しーちゃん１００６「顔パス増えすぎだろ……」

ルミオ「いいんだよ。ＬＶだから……」

ヴィヴィオ「質問、祐希奈様とヴィヴィオはカナンが死んでしまったらどうしますか？」

しーちゃん２５６「いきなりヘビーだな……」

ルミオ「お前のお陰でそこまでヘビーに思えないがな」

しーちゃん１４８「好きでやってんじゃねぇよ……で、ヴィヴィオは？」

ヴィヴィオ「えぐっ、えぐっ、うわぁぁあああん！　死んじゃやだよぉぉおおお！」

ルミオ「やっぱりな……」

しーちゃん５８９「祐希奈は……」

ブン……

祐希奈「殺す……」

カナン「ぎぃあああああああああああ！！」

ルミオ「まぁ、許さないと。死に方にもよるだろうけどな」

ヴィヴィオ「ひっく、ふ、二つ目……カナンを上回るヘタレが出てきた場合、祐希奈様はどこまでぶっ飛ばしたますか？」

しーちゃん１００９４「……どうなんだろ」

ルミオ「取り合えず、お前ら邪魔」

しーちゃんズ《だから！》

ルミオ「やかましい！　いっぺんにしゃべるな！　ほら、祐希奈！」

ブン……

祐希奈「ん～多分、ぶっ飛ばすっていうより、無視するわね。害虫のがよっぽどマシだし」

カナン「なんか微妙な心境……」

ヴィヴィオ「なかなかいないんじゃないかな？」

カナン「ヴィヴィオ、それ、痛い……」

ヴィヴィオ「ふぇ？」

しーちゃん５８９４「無垢なる言葉は痛いよな……」

ルミオ「まぁ、お前にも言われてるみたいなもんだからな」

しーちゃん１「うるせぇ！　自分でもわかってるっつの！　次行け次！」

ヴィヴィオ「うん。カナン以上にフラグ立てる奴は出てきますか？」

ルミオ「カナン、そんなにフラグ立ててるか？」

しーちゃん２３６７「ヴィヴィオ、祐希奈、奈津美さん……」

ブン

カナン「おい、シオン、母さんは違うだろうよ……」

奈津美「カナン君、酷い……」

カナン「なんでいるんだぁぁあああああああ！！！」

ヴィヴィオ「と、取り合えず、ＬＶにはいないんじゃないかな？次はね、カナンはフラグを全部折るようなことはしますか？」

ルミオ「あ～……全部は折らないんじゃないか？」

しーちゃん７５９６「一応、考えてるみたいだしな。ラスト」

ヴィヴィオ「えと、祐希奈様が今、一番ＫＤＧに入れたい人は誰で

すか？」

ブン

祐希奈「ん～……オリキャラ全部？」

カ・ル・しーズ《やめぇぇぇぇえええい！》

祐希奈「ったく、うっさいわね……。じゃあ、ユウオさんね」

ヴィヴィオ「何でなの？」

祐希奈「だって、戦力的に申し分ないし、トウヤさんも自動でセットよ？」

ヘタレーズ「っ！！！」

ヴィヴィオ「トウヤさんかぁ。そういえば、何かを私に教えてくれようとしてたみたいだし、ちょっと話してみたいな」

しーちゃん1「ヴィヴィオ、トウヤ兄ぃに一人で会うのだけはやめてくれ！　ホントに、後生だから！」

ルミオ「ああ。俺もあの人は危険な気がする……」

ヴィヴィオ「そうかな？　いい人だよ？」

祐希奈「ま、会うときは私がついていくから大丈夫よ」

ヘタレーズ「余計危険だ！」

祐希奈「変な奴ら……」

ヴィヴィオ「大丈夫だよ～」

カナン「俺が守るしかない……」

しーちゃん「俺も協力する」

ルミオ「近くにいたら呼んでくれ……」

祐希奈「ま～、長いし、終わるわね」

ヴィヴィオ「バイバ～イ♪」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一瞬前には誰もいない。

しかし、次の瞬間には誰もが我が目を疑うであろう。

誰もいなかった筈の空間に黒装束を纏う仮面の男と、銀の鎧を纏う、金髪の少年が出現したのだから……。

男、グラースは右足で踏み込み、震脚から右に上半身を捻り、左腕からの叩き下ろすように豪拳を。

少年、カナンの動きはグラースと同じく、右から踏み込み、上半身を右回転、空間突破を発展させた神速の斬撃を下段から振り上げる！

「はっ！」

「ヒュ！」

吐き出す鋭い呼気と共に打ち放つ！
互いに重心移動から放たれた一撃。激突した瞬間、剣と拳とは思えない、重い音が空気を振動させる！

「……」

「ぐ、ぅ……」

拮抗は一瞬。一秒と持たずにカナンの腕が震えだす。
グラースは何もしていない。答えは単純、カナンの力負け。
押し負けたカナンは、重心が傾くのを感じる……。
一秒にも満たない刹那の隙がカナンに生まれた。
グラースはそれを逃さない。
トン、そんな軽い音が響いた時、グラースの体は軽く浮いていた……。
拳を叩き下ろした勢いを利用し、体が回転。
そして、カナンは見る。グラースの右脚に紅蓮が圧縮と収束が加えられていくのを……。
身体強化、剣に魔力を流し込み、カナンは跳んだ……。

「滅爆煌……」

瞬間、カナンが爆煙に包まれ、直後に突き抜ける。
空中で体を捻り、剣を突き刺して強引に勢いを止める。
ダメージはあるものの、直撃は避けていた。
歯を食い縛り、グラースを睨む。が、その姿は無かった。
カナンの背後、グラースが縮地を使い、現れる。

「ぶち抜け！」
『グランドスパイク！』

それにカナンは振り向かず、剣から魔力を流し込む。
魔力に答え、大地が変動、グラースを囲うように、石針が刺し穿つ！
カナンは止まらない。空間を上空に繋げ、一気に巨光を集束、黄金の光を放つ剣を振りかぶる！
そのランク、ＳＳＳ＋！

「エクス！　カリバァァァ！！！」

太陽をも凌ぐ輝きを放つ黄金の集束砲は、その威力を維持したままにグラースに降り注ぎ。

「滅水牙……」

集束砲は、高圧水流を纏ったグラースの右腕に真っ二つに寸断され、目標の左右へと着弾、地表を抉り、凄まじい光を放ちながら、魔力粒子へと散っていった……。

「効かんぞ。風間カナンよ」

「うるせぇよ。イカれ野郎……」

結界どこかで、崩壊したビルから瓦礫の破片が落ちた……。
カツ……。
破片が地面に叩きつけられ、そんな音を響かせる……。

「はっ！！！」

カナンの姿が消失。同時、グラースは腹部に衝撃が走るのを知覚する。
数にして七回。同じ部位に立て続けに炸裂する！
その技の名は、虚夜七連閃。
それを放ったカナンの姿はグラースの頭上。
大きく体を右に捻り、柄を握りしめていた……。

「金剛！」

己に向けられている莫大な力を目にしても、グラースの表情は変わることはない。
纏うは烈風、グラースの右腕には風の悲鳴。

「閃牙ァァァ！」

「滅烈風……」

流星の如く突っ込んだカナンの剣と、天空に向けて打ち放たれた風纏う拳が激突！
拮抗、そして崩れた。グラースの方が……。

『マスター！』

メイデンが警告の声を上げる……。
そう、グラースは“崩れた”のではない“崩した”のだ。
カナンを己の攻撃から逃がさないように……。引きよせるように右の拳を眼前に、左の拳に紅蓮が猛る！

「滅爆煌」

拳がカナンに触れる直前、カナンが燃え盛るグラースの左腕に、剣から右手を離し、軽く当てた……。

「ごほっ！」

カナンの体が弓なりに曲がり、地上へと叩きつけられる！

しかし、グラースは己の左腕をジッと見ていた。

何故か、グラースの収束、圧縮していた筈の紅蓮がいきなり消滅したからだ……

何故、炎が消えたのか、それは、先にカナンがグラースの腕に触れた時、グラースの腕から炎熱を吸収したからだ。

「二度は無い……」

呟き、グラースは左腕を上に持ち上げる。

「しねぇよ！」

直後、怒号が響き、グラースの頭上に空間突破で現れたカナンが大上段から振り下ろす！

その剣は“握られた”

「くっ！」

またしても止められた刃。それに呻く。

だが、止まるまいと、空いている右腕に転送しようとし。

「滅水牙」

「っ！」

グラースの声を聞き、転送を止めた……。
首を捻った瞬間、グラースの右腕から発生する水刃が首を掠めて突き抜ける！
それだけに終わらない。右腕からの突きは、残像を残しながらカナンを襲う！
堪らずカナンは剣から手を離し、後退しながら体を捻り、ギリギリで避けていくものの、水刃は鎧など存在しないかのように触れた箇所を切り裂いていく……。
突如、連撃に徹していたグラースが、深くカナンに踏み込む！

避けろ！

脳内で警鐘が鳴り響く！
反撃も防御も、その後の行動の事など抜け落ちた。
ただ、その一撃を避けるためだけに勘の任せるまま、真横に飛んだ。

「ヒュッ！」

下段からグラースが鋭く呼気を吐き出しながら、右腕を振り上げる！
瞬間、“余波”が突き抜け、結界の天井が寸断……。
余波でこの威力。
カナンが先と同じく、ギリギリで避け、体を掠めていればまともに当たっていなくとも血飛沫が舞っていたことだろう。

まずい！

カナンは冷や汗が吹き出すのを感じる。
水刃はなんとか避けた。

しかし、カナンの今の状況は最悪に近い。　剣も無く、体勢も無茶苦茶。対し、相手は四肢の四つのうち、三つは自由……。
術後硬直など、期待出来る相手ではない……。
そして、カナンの予想は当たる。
グラースが向き直りながら左の掌を返し、クルリと剣が回る。
そして、刃がカナンへと向けられた……。

「が、あっ……」
『マスター！』

カナンは己が剣に腹部を穿たれていた……。
グラースから剣が投擲されたのだ。
非殺傷の筈の剣は、鍔まで深々と突き刺さり、刀身をから血の雫を垂らす……。

「……」

グラースは止まらない。
カナンの眼前に縮地で現れ、右脚に轟雷を纏い踵を振り上げる……。
カナンは、激痛に表情を歪めながら、左手に剣を転送、柄を逆手に持ち、右手もしっかりと柄を握り締める。

「リ、ヴ……ァス……」
『あぁ……』

小さな声で、掠れる声で、今にも消えてしまいそうな声で、呟いた……。
メイデンが応え、カナンのダメージ分の威力が剣に上乗せされる。

「滅、轟雷……」

しかし、グラースは構わなかった。
轟雷纏う蹴撃は、空間を破壊しながらカナンへ下ろされ、そのエネルギーを遺憾無く発揮。受け止めたカナンごと地面に叩き落とす！
舞い上がる土煙の中に、グラースは降りる。

「は、ぁっ！」

直後、グラースの背後から振るわれる金閃！
右横からの弧を描く一撃をグラースは目視。

「滅烈風」

次の瞬間には剣腹に右拳を打ち下ろす！
空気に振動が走る！
烈風と剣撃が激突！　直後には烈風の圧縮が解かれ、炸裂！
先手を打っていたカナンが吹き飛ばされ、血を撒き散らしながら受け身を取り、納刀。

「っ！」

カナンの消失と同時に地面にクロスを描く斬撃に続き、雷撃が後を追う！
その技は、抜刀剣術七式、双龍青雷陣！
速度で勝るカナンの一撃に、グラースは防御すべく片腕を持ち上げた。

「はぁぁぁっ！」

リヴァースモードも合わさったその威力は、グラースと言えど止められない！
徐々に押し込まれながらグラースは口を開いた……。

「風間カナン、やはり貴様は興味深い。アレの在り方が変わりつつあるのは貴様の存在が在るからだろう……故に、アレと共に我の対象となった。闇を持ちながら、光の道を行く、貴様がな」

「黙っ、とけ！」

遂に剣は振り抜かれ、雷光が降り注ぐが、そこにグラースはいない……。

止まるな……

納刀される剣、集束されるは暴風！
自身も回転しながら、柄から引き抜く！

「旋龍破ァァ！」

「滅爆煌……」

形成される風の壁に、グラースの蹴撃が炸裂し、紅蓮が旋風を吹き飛ばす！
位置は上空。距離は５ｍ！

止まるな。止まるな！

「エクスカリバァァァァ！」

腰を捻り、速射で砲撃をグラースに叩き込む！
グラースはただ、拳を横に払う……。
砲撃は拮抗すら許されず、屈折した……。

止まるな！！

が、先の砲撃は囮。繋げた空間からカナンはグラースの背後に突っ込み、既に納めていた剣が抜き放たれる！
光と化して、カナンはグラースを“突き抜けた”。
もう、何度目かの、背後への縮地……。

「止まるなぁぁ！！」

止まれば終わると、カナンは無理矢理に体を左に捻る！
血が噴き出すが、構っていられなかった。
グラースの首筋へと刃は突き進み、止まった……。

「っ！」

カナンの腕の内側へとグラースは踏み込み、高威力の刃ではなく、腕を受け止めていた……
ただ、受け止めていたのなら、対処のしようもあった。
しかし、グラースはカナンの左腕を掴んでいた。

「我が、力をくれてやる……。風間カナン、耐えて見せよ」

「なん、だと……」
『マスター、早くソイツを振り切れ！』

メイデンの声に、カナンはハッとするが。

「ぐぅ、ぁぁ……」

次の瞬間、カナンは地面に打ち付けられていた……。
カナンごとグラースが縮地で飛んだのだ。

「我が拳は、神の息吹！」

グラースの引き絞られた右腕に纏われる暗黒を、カナンは肩越しに見た……。

「う、あ……」

また、カナンの脳内で警鐘が鳴り響く……。
警鐘の大きさは、水刃の比ではない。
感じたのは、危険、ではなく、恐怖。

「堕ちたる種子を見いだし、秘めたる力を紡ぎだす！」

空間が壊れる音を聞き、何か、恐ろしげなモノがグラースの右腕に宿ったのを、カナンは感じる。

「っ！」

『マスター！　まだ間に合う　思考を止めるな！　何とか避けろ！』

メイデンの怒声。　カナンもわかっていた。避けねばならないと。
だが、グラースの左腕がカナンを離さない……。

「美しき、滅びの母の力を……」

最後まで、グラースの腕は許さず、カナンの背中には、拳が突き立った……。

グラースの右腕から、闇がカナンに吸い込まれている、そう取れる光景が広がる。

カナンは、ビクビクと、痙攣を起こしていた……。

「う、ぁあああ……ぁあああああああ！！！」

『そ……んな……』

厳重に掛けてあったエクスカリバーのプロテクトが、管制人格のメイデンのコントロールを受け付けず、次々に解除されていく……。

『何だ……これは……！』

メイデンもまた、苦悩の声を上げる。

何かが、エクスカリバーの中に入ってくる、そんな感覚を覚えていた。

そして、メイデンは一つの結論にたどり着く。

エクスカリバーに強引にシフトし、干渉、最低でもコントロールを乗っとる、最悪、管制人格の破壊、後に支配する力だという結論に。

先の投擲されたエクスカリバーが一時的に殺傷設定になっていたのはこれが原因。

一瞬の流した力でそれだけの力を誇るなら、存分に力を使って打ち込んだ拳ならば、どうなるか……。

「く、ぅぅ……ぁぁあっ！！」

『マス……タ……っ！』

苦しむカナンとメイデンをグラースは見下ろし……。

「やはり、光の力など、この程度か……くだらん」

水刃を右腕に纏い、カナンへと向け……。

「エクセリオン！　バスタァァァ！」

上空より降り注ぐ桜色に向けて進路を変更し、斬り上げる！

水刃が砲撃と激突するが、何も存在しないようかのに水刃が切り裂き、砲撃は粒子と散った。

「カナンを！」

その背後から、轟雷を纏う大剣を下段に構え、グラースに直進する、雷姫、フェイト。

フェイトの後ろは、地割れが出来ていた……。

それは、大剣に纏われた轟雷の威力を物語る。

「離せぇぇぇぇ！！！！」

鬼神、今のフェイトは正にそれを思わせた。

普段の優しい表情は消え失せ、瞳孔は開ききり、怒りに瞳は燃えていた。

グラースは、何も言わず、カナンから手を離し、水刃から烈風に変更、円を描くように、右腕を引き絞りながら、左脚を軸に右脚が地を滑らせ、流れるように振り向く……。

その眼前には刃を横薙ぎに叩きつけようとするフェイトがいた……。

「あああああああ！！」

「滅烈風！」

左回転から雷刃を叩きつけたフェイトと、右回転から風拳を叩きつけたグラース。

激突は衝撃波を発生させ、周囲に散らばっていた瓦礫が消し飛ぶ！

轟雷弾ける中で、烈風吹き荒ぶ中で、尚、威力は収まる気配は無く、風景を削り取る！

「うっ！」

至近距離にいたカナンはボロボロの状態で衝撃波に耐えきれる筈もなく、吹き飛ぶ。

「レイジングハート！」

『Ｆｌａｓｈ　ｍｏｖｅ！』

「届け！」

グラースから解放されたため、衝撃波で吹き飛んだカナンを、瞬時に反応したなのはが腕を掴む。

「よし……」

しっかりと掴んだのを確認し、レイジングハートを衝撃波の発生地点へ向け、カートリッジ排出。

「防いで！」

『Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ．　Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ』

前面の広範囲を防ぎ、かつ、防御に優れるラウンドシールドを展

開しつつ、カナンを引き寄せ、抱き止める。
シールドを張りながら、なのはは友、フェイトを見つめた……。
その時、事態は動く！

「はぁぁぁあああああああ！！！！」
『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！』

肺の中の酸素を全て吐き出すような、咆哮をフェイトがあげる！
応えるはバルディッシュ。リボルバーマガジンが撃鉄を起こす度、連続して回転し、カートリッジを次々に弾き出す！
刃は、雷そのものを武器にしたかのような状態となり、烈風に食い込む！
瞬間、グラースの姿が消え去った……。
遅れて響くは爆発に近い轟音。
フェイトは振り抜いた形で止まっている。
グラースは、フェイトの６０ｍ程先で、黒煙を上げていた……。
フェイトの攻撃がグラースに入ったのだ。

「はぁぁっ！」

ガン！　とフェイトの脚甲が地面を叩き、さらなる追撃を加えんと加速する！

「カナン？　カナン！？」

「え！？」

が、なのはの声にその加速は止まる……。
フェイトが振り向くと、カナンはなのはを押し退け、地面に転がっていた……。

「グルゥゥ……」

右腕が、地面に叩きつけられ、地面を破壊、右腕が沈み込む……。
続いて左腕、同じく地面を破壊し、沈む……。
そして、前傾姿勢になりながら、カナンは立ち上がった……。

「ハァァァ……」

指の間接を鳴らし、開かれた口から不気味な呼気を吐く……。
髪は、背中にまで伸び、生きているかのように、浮いていた……。
金だった剣は漆黒に、銀だった鎧も同じく漆黒に……。

「オオオォォォォォォォォォ！！！！」

「「っ！」」

カナンの咆哮に、ビリビリと震える大気。
咆哮だけで発生する衝撃波に二人は表情を歪める。
こんな状態のカナンは一度だけ、暴走の時だ。

最悪だ……。

と、なのはとフェイトは、全く同時に思う。
カナンは暴走し、止めなければならない。
それも、グラースという万全の状態でかかっても勝てる気がしない敵を相手にしながら……。

「……滅せよ」

「「っ！」」

静かに響いた声に、二人の視線はカナンからグラースへと移る。
視線の先、両掌を合わせ光弾を生み出しているグラースがいた……。

グラースは、カナンの変化を見ても、何ら変わらず、術を完成させたていたのだ。
今までですら、桁違いの数値を叩き出していたグラース。
フェイトですら、カートリッジを四発分使用せねば勝負にすらならなかった程。
しかし、光弾は、さらにその上を行く威力……。
圧縮、加速をしながら回転、それは遂に魔導師の限界ランクを突き抜ける……。
仮にランクを表示するならば、ＳＳＳ＋＋＋＋＋。
その光弾の正面には文字が浮かんでいる。

滅

と……。　グラースに時間を許すという、致命的な失態に気づいたなのはとフェイトだが、時既に遅し。
グラースの掌の内で、一際に、光弾が輝く！

「滅天覇光」

グラースに、情けも容赦も、一切存在しない。
故に、迷いなく光弾は掌から放たれる。
なのはもフェイトも、何も言えない。
光弾は、光の残光を残し、二人の眼前を真っ白に染めた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

残像が走り抜ける……。
数瞬遅れて赤い矢がその場を埋め尽くした……。

「ディスカート・アーシェル！」

一般人には確実に捉えられない凛の腕。
その腕から、矢が形成され、放たれていく。
矢の形成から、発射までの時間、僅かコンマ一秒。
一秒に十発近くの矢を放っていることになる。
それだけでも、驚異的な速さである。
だが、凛は“それだけではない”。
人差し指と中指の間に一本、中指と薬指の間に一本、薬指と小指の間に一本、計、三本の矢を放っているのだ。
一秒間に三十発。これが、凛の“疲れない”速度。

「黒撃！」
避けながら、黒い三日月を凛に撃ち放つ！
矢が一発、二発と三日月に撃ち込まれ、三日月を穿った……。
壁、それすら許さない。

「白！」
『またぁ～？』

再び高速移動魔法を使用し、矢の雨降り注ぐ位置から脱する。
左手の黒剣を、銃へと変更、走りながら凛へと向ける。

「ブラックバレット！」

凛の狙いがレイに向く前に、銃から黒き弾丸を凛へと連射。

高速の弾丸は、矢に撃ち落とされることなく、凛へと突っ込む。

「ふん……」

つまらない。とでも言うかのように、凛は弓を払う。

飛翔する弾丸は、払われた弓に阻まれ、消え去った……。

凛の弓、プロミネンスバスターは、凛の連射の速度が異常なためにオリハルコンを持って作られた、凛のためだけの弓。

その強度はＡＡ以下の攻撃では傷つけることも叶わない。

「黒天撃！」

だが、元より弾丸は囮。

一瞬途切れるその隙に合わせ、完璧なまでの一撃が放たれる！

巨大な三日月が両刃剣へと変更された剣から凛へと向かう！

その時、凛は初めて動き、下がりながら赤き矢を二本作り出し、一本へと重ねた……。

眼前に迫る三日月を冷静に見据えながら、左手で弦を引き、矢をつがえる。

「ディスカート・シェルノーム！」

凛が叫んだ瞬間、閃光が走り、眼下の街に巨爆が発生する。

遅れて三日月は半分に分かたれるようにして消滅。

意味することは一つだけ。矢が三日月を通り抜け、三日月の消滅より先に街に着弾したのだ。

「……」

無言のまま、凛はプロミネンスバスターを持つ右腕を背中へと振

り払う。
直後に金属音。
横殴りに叩きつけられた剣と、弓が、火花を散らしていた……。
「はぁぁっ！」
袈裟、斬り上げ、刺突と次々に変化する剣閃に、凛は下がりながら弓を手首で回転させ、受けていく……。
二つの光は、阻まれることなく、火花を散らしながら進んでいく……。
そして、凛は背中に固い感触を覚える。
結界の端に到達したのだ。
レイから剣が振られ、凛の眼前でピタリと止まる。
「部長、俺の勝ちです……」
静かに告げるレイに、凛は無表情のまま……。
その様子に追い詰めている筈のレイはゾクリと背筋に冷たいモノが流れていくのを感じた。
「貴方は現時点で、三つの間違いを犯しています」
人差し指が、レイの前に持ち上げられ、立つ。
「一つ、全力でやれ、という警告を無視したこと。私の善意を無下にした時点で許しがたいことですが、さらにありますわ」
二本目、中指が立つ。
「二つ、相手を倒してすらいないのに勝利宣言をしていること。こ

れはまぁ、私が上司、さらに女であることも考慮してのことかもしれませんが、私が全力でやれ、と言っている時点で手加減するな、ということですし、正直、ナメられたようで不快ですわ」

ビシリと薬指が立つ。

「三つ。私、近接大っ嫌いなんですの。よって、被告人、レイ・リーフライン執務官。グランチェスタ式裁判に基づき、回避訓練スペシャルを……」

スッと、凛の細身の体がレイに倒れ込む……。

レイの胸に両手を当て、凛が見上げた……。

元々、凛の顔立ち、スタイルは完璧に近く、絶世の美女ともいえる程。

あまり興味がないレイにしろ、一瞬止まる……。

そして、凛はニッコリと笑った……。

「言い渡しますわね？」

「っ！」

止まったのが間違いだった。

凛の両掌に込められた魔力を見た時には既に遅い。

弓の連射のために日々、身体強化訓練を行っている凛のそれは並の魔導師を遥かに越える。

押す。それだけの動作で２０ｍの距離が開く！

凛を相手に２０ｍ、その距離がいかに遠いかは先の戦いが立証している。

「ディスカート・ルシェル！」

現れるは、一本の巨大な赤き矢。
凛が矢から指を離した直後、矢は、拡散し、幾万という矢が凛の前方に広がった……。
今までのような、一点集中型ではなく、広域殲滅型、多対一を前提とした技だった。
凛はそれをレイたった一人に対し、躊躇なく放ったのだ。
眼前を埋め尽くす矢に、レイは回避ではなく、防御を選ぶ。
瞬間に、障壁に突き立つ、矢、矢、矢。
瞬く間に障壁にヒビが広がり、軋みを上げる……。

「ネロ、リミット外してくれ！」
『良いのか？』
『っていうか出来るの～？　申請は？』
「早くしてくれ！　あの人がやれって言ったんだから出来るんだ！」
『ふむ。まぁ、良いだろう。やってみよう』
『わわ、ホントだ。許可出てる』
「急ぐ気あるのか！」
『やれやれ。せっかちな奴は白髪になる』
『なるなる～♪　や～い。白髪～♪』
「砕くぞ……」
『ひゃわぁぁ！　ごめんなひゃあい！』

漫才を繰り広げる間に、障壁はもう、砕ける寸前。
放って置いても砕けたであろうその障壁。

「愛の鞭、ということにしておきますわね」

つがえるは二本の矢。それを合わせ、巨矢とする……。
弓の側面が、三度スライドし、火花を散らす。

カートリッジを使った筈だが、薬莢が排出される気配は無い。
その様子に、凛は頷き、意識を圧縮に集中させる。
放つ技は、ディスカート・シェルノーム。
未だ降り注ぐ矢の雨の中心に撃ち込む！
一瞬の閃光が凛から地上へと走り、爆発を起こした……。
だが、爆煙の中から眩い輝きを放ちながら、三日月が凛へと飛翔する！

「ふぅ……」

凛は予想していたのか、驚くこともなく、ただ、横に移動するだけであっさりと回避。
煙が晴れるのを待つ。
ゆっくりと煙が晴れ、ダメージを受けた様子がない、レイが立っていた。

「じゃじゃ馬と猫は出さなくてよろしいのかしら？」

「まぁ、アイツらは……」

瞬間、レイの肩の上が輝き、ショートヘアーに、ショートパンツに赤い半袖と、見事にショートづくめの、恐らく女の子が、現れる。
続いて、レイの胸ポケットからハムスターが現れる。

「誰がじゃじゃ馬だ！」

（私は猫じゃない！）

口と念話で同時に叫ぶ一人と一匹に凛は、いたのかと言う程度に見下ろし。

「ぴったりですわよ？」

頭からバッサリぶった切った……。

それに、少女とハムスターはキレた……。

「俺がじゃじゃ馬ならてめぇは牛だな！　牛女！」

（あ、そうだね。牛女だ！）

ケラケラと笑う一人と一匹に、凛は目を細める……。

「管制人格を消し、虎皮にされたくなければ黙りなさい……」

「……」

（……）

冗談とは思えない冷たい声で、凛は言い放つ……。

一瞬にして二つの笑い声は消え、一人と一匹は隠れるようにしてレイのポケットへと消えた……。

「こういうことになるので……冗談ですよね？」

「無論、冗談ですわ。三分の一は……」

ビクリと震えるポケットにレイは苦笑いをしながらポンポンと叩く。

「ところでレイ。あの少年を追いかける気はどうしましたか？」

「あります。けど、戦ってる間に、大分頭は冷えましたよ。部長の言う通り、アイツは、真っ直ぐな目をしていた。危険な奴には見えない。ホント今更なんですが、今度はちゃんと話してみようかなって思ってます」

カナン以外の人物と戦うことで、レイは頭を冷やし、焦っていたことを認める。

潔いレイに、凛は溜め息をつき、腕組みをした。

「遅すぎですわね」

「反省してます……」

「全く……世話の妬ける……」

「すいません」

申し訳なさそうに頭を深々と下げたレイに、凛は少しだけ笑った。

「さて、続きやりますわよ」

「……え？」

あまりにも自然に話した凛に、レイは思わず我が耳を疑った。

何か、恐ろしげなことを聞かなかったか、と……。

「終わるとでも？　先の話とこの戦いは既に別件。私はあんな少年のことなんてどうでもいいですわ。以上。始めます」

「ちょ、まっ！」

始まりと同じく、唐突にレイの眼前を矢が埋め尽くす。
レイは、内心溜め息をつきながら双剣を構えた……。

『レッツゴ～パピ～♪』
『誰がパピーだ……』
「双連、白夜！」

同時に撃ち放たれた斬撃は混じり合い、十字の三日月を描きながら飛翔する！
矢と斬撃が激突し、矢は斬撃を撃ち落とそうと、斬撃は弾幕を突破しようと互いの身を削りながら突き進む！

「カオス、スパイラル！」
「成る程……」

レイは、自身の斬撃に砲撃を重ね、追い風とする！
ＡＡＡランクの斬撃に、ＡＡＡランクの砲撃、対し、凛の矢はＡＡ＋ランク、防ぎきれる筈もなく、斬撃は加速し、弾幕を抜ける！
斬撃を避けようともせず、凛は矢をつがえた……。

「ディスカート・ルーチェ」

放つは拡散。
凛の眼前にて一矢が万矢に拡散し、斬撃に零距離で叩き込まれる！
瞬く間に斬撃は歪み、やがて、矢を塞き止めていた斬撃は消滅した……。

「はぁぁぁっ！」

双剣を構えながら、レイは矢の雨に突っ込んでいく！
時には斬撃を放ち、時には直接弾き飛ばし、時には避ける。
リミットを解除したレイですら、全ては捌くことは出来ない。
体の至るところに走る痛み。だが、構わない。否、構えない……。

「ディスカート・ノーム、ルーチェ……」

つがえられる矢は二本。
時間差をもってして放たれ、拡散……

「っ！」

レイは高速移動魔法を使用し、その場から一瞬早く離脱、直後、
レイの頭、その位置を閃光が走り抜け、爆音を轟かせた……。
二本のうち、一本はディスカート・シェルノーム、高威力貫通矢である。
万を越える矢の中に、一本だけの貫通矢……。
一度だけに終わらない。休む暇なくレイに放たれる貫通矢！
それらの矢は、頭や鳩尾といった一撃で沈む位置ばかりを狙い射つ！
それを、レイは先読みし、紙一重の動きで避けていく……。
止まらないレイは、遂には矢の雨を抜け、凛の頭上に姿を現す……。

「ディスカート・アーシェル……」

だが、凛は揺るがなかった。
弓の狙いを即座に変えながら、矢を生成、後には放つだけとなった矢があった。

そして、射ち抜かれた矢は、レイの“残像”を捉えた。
結果、レイには当たっていない……。
刹那の時間が延長され、凛が引き絞る動きとレイが腕を引き絞るのはほぼ同時。

「ディスカート……」

「目覚めよ烈火……」

プロミネンスバスターが撃鉄を起こすのも、レイの右手に炎が宿るのもまた同時。

「シェルノーム！」

「撃ち抜け！」
『『プロミネンスバスター！』』
互いに狙っているかのように、またしても同時に撃ち放ち、巨矢と炎砲は激突する！
威力は互角、轟音響かせ矢と砲撃は爆ぜる！
その黒煙と衝撃波が二人を襲うが、止まらない！
凛は弓を引き絞り……。驚愕しながら身を右にずらす。

「ぐっ！」

突如として腹部に突き刺さる紅蓮槍に激痛に顔を歪めた。
レイが投擲したのだ。先に体を動かさなければ鳩尾にもらい、凛は意識を失ったであろう。
だが、事実として凛は直撃は避け、意識を繋いでいる……。

「ディスカート！」

引き絞りながら、凛は弓を持ち上げる。
直後、爆煙の中から、空へとレイが飛び出し、凛へと加速！

「ルーチェ！」

レイの肉薄より先に、凛の矢が万へと別れ、レイを襲う！
しかし、レイは先読みで凛の動きを読みきっていた……。
故に、右腕に持っていたのは、風纏う槍……。

「吹き荒れろ！」
『サイクロンサイクロ～ン♪』
『ここはストームのほうがいいだろう……』

振り払われた風槍はその効力を遺憾無く発揮し、風の壁が矢をことごとく吹き飛ばす！
頭上に槍をかざし、振り回しながらレイは凛へと降下！
槍は風を巻き込みながら威力を上げる！

「烈旋風刃槍！」
『サイクロンスピアー♪』
『いや、だからストーム……』

レイが成した結果に目を見開く凛へとそのままの勢いで槍を穿つ！
瞬間、“レイ”の体は、切り揉みしながら弾けんでいた……

「え……」

自分が見ていた未来とは全く違う現実に、レイは痛みより驚愕が勝っていた……。

凛の次なる動きが全く見えなかったのだ……。

「ふぅ……」

凛は、尖端が銀に光る、赤い槍を手にしていた……。
それで、レイを攻撃ごと弾き飛ばしたのだ。
ただ、振り払うのみで……。

「終わりですわね」

「がはっ！」

切り揉みをするレイに、凛は槍を振り上げ、柄の部分を叩き込み、打ち下ろす！
地面に叩きつけられたレイは、大の字になりながらボーッとしていた……。
その隣に、凛が着地、乱れた髪を手で払う。
手入れを怠っていないのか、それだけで、髪は綺麗に元通りとなった。

「部長、能力使いました？」

「ええ。まぁ、０．７８秒程。たまには使わないと鈍りますから。かと言って、おいそれと使える能力でも無いですし」

「……始末書どうするんです？」

「今ごろピアニッシモが頑張ってますわよ」

事も無げに言う凛だが、実際は、頑張る程度で済む代物では無い。

レイは帰ったら地獄が待っていることを覚悟した。

「部長、またフォルテさんをパシりに使ってるんですか？」

「ピアニッシモなんてどうでもいい存在の話はさておき……個人面談、やりますわよ」

瞬間、レイの脳内からフォルテを気遣う気持ちなど吹っ飛んだ。

代わりに、底知れない恐怖がレイを襲う。

「……断るのは……」

「無しですわ」

「……」

レイは、両手をバインドで縛られたのを確認し、一瞬の後、目の前が真っ白になったことだけを記憶に残していた……。

第三十二話　降臨　（後編２）（前書き）

さてさて、次回が打ち上げなので、今回は普通にカオス無しでお送りいたします。
次回の前半にゲストをお呼びしたいと思いますが、後半はおそらく……。
まぁ、今回は、お話単品をを楽しみください。

第三十二話　降臨　（後編２）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「成る程……」

ジト目をしながら、腕組みをし、祐希奈は立っていた。
その瞳は、左右に動き、ヴェインとクレイの戦いをを見る。
当人、クレイとヴェインは、高機動戦を繰り広げ、すれ違い様に火花を散らす。

「ま、大口叩くだけの実力はあるみたいね」
『参加しないのですか？』
「残念だけど、まだ頭がクラクラするのよ。この人の蹴りのせいで……」
「う～あ～……」

祐希奈の隣に、銀色のバインドで三重に縛られながら、咲・Ａ・エルリウスが目を回しながら伸びていた。

『そこまで強力だったのですか……。よく落とせましたね』
「かなりイチバチだったけどね……。あとは、アイツの意表を突けたのが重なったからか」

そう言って、祐希奈は視線を右に走らせる。
そこには、ヴェインの高速の突きを、小太刀で受け流しながら、反撃を加えるクレイがいた。
反撃は、当たる。しかし、ヴェインは霞むように消え去り、何故かクレイの背後に現れ、次は刃を叩き込んでいく……。

横殴りの斬撃を、右手の縦に構えた小太刀で受け、反対の左の小太刀を回転しながら打ち込む。
ヴェインはバックステップを踏みながら避け、クレイの背後に新たに出現させたヴェインと共に挟み込む。
同時に繰り出された斬撃に、クレイは受けるが、支えきれず、数mの後退をした……。

「……アイツもよくわかんないわ」
『何がです？』
「ん～……脱力系っていうか、カナンとは違うタイプのヘタレオーラを感じるわ」
『ふふ。おかしな子ですね』
「うっさいわね……。ただ、一つ確実に言えるのは……」
『はい』
「あんまり好きじゃない。ってか、嫌いなタイプに入るわね。なんかムカつく」
『は、はぁ……』

なんとなくで嫌いと言った祐希奈に、アシェルは困惑したように返答する。
それっきり、会話は途絶え、祐希奈はクレイとヴェインの戦いをジッと見ていた……。

―クレイ・ヴェイン―

右と後……それから

思考を重ね、クレイは魔方陣で足場を作り、バックステップし、頭上に小太刀を交差させる。直後、右からは槍の突き、頭上にから剣が下ろされ、火花が散った……。

前……

体を捻り、回転しながら背後の刃を受け流す。

距離にして数センチ動いたクレイの体は、正面からの戟による突きを避けていた……。

「はっ！」

回転の勢いから、クレイは小太刀をヴェインに叩きつけ、ヴェインが跳ね上げた戟の柄で小太刀を弾く。

クレイを囲う三人が己が武器を上段に振りかぶり、振り抜く！

「流演舞……」

だが、クレイは回転を止めない。寧ろ、加速。

回転しながら、クレイは滑るように、動く……。

右からの槍、斜に構えた右手の小太刀を当て、前に踏み込みながら受け流す。

背後からの剣、頭上に持ち上げた左の小太刀を傾け、既に安全な右へ動き、左に流す。

正面の戟、長柄は近距離では振るえない……。

包囲を全て避けきったクレイは小太刀を一瞬放る。

「蛇咬爪！」

刹那、クレイの両腕に魔力爪が展開され、回転を緩めずに薙ぎ払う！

光線が走り、クレイを囲うヴェインは“三体とも”霞と消えた。

「上官を試すなよ……」

「っ！」

そんな声が、クレイの頭上から響いた直後、クレイは脳天に激痛を知覚し、地へと叩きつけられ、土煙を上げる……。

クレイが立っていた場には、漆黒の槍を担ぐヴェインが滲み出すように現れる。

クレイも大事無いのか、直ぐ様立ち上がった。

「お前、その小太刀は攻撃に使わないだろ」

ヴェインからの指摘に、クレイは少し驚く。

何故なら、こんなに早くバレるとは思っていなかったからだ。

「よく、わかりましたね」

「戦い方見ればすぐわかる。お前は正式な小太刀の使い手に比べると微妙に間合いが近い。ってことは、だ。小太刀より間合いが近い武器って言ったら、徒手空拳くらいしかないよな？」

ヴェインは淡々と述べていくが、実際は区別がつかない程の差違である。

それをヴェインは数分で言い当てた。

凛の副官の名は伊達ではないことが証明される。

「すみません。自分の上司となる人物の力を知りたかったんです」

ペコリと頭を下げたクレイに、ヴェインは「まぁ、いいさ」と返事を返す。

「上官相手にそんだけの余裕があるんだ。お前は期待できそうだ」

「ありがとうございます」

「そんな新人倒すのは忍びないが、悪いな。死にたくないんでね」

仕切り直しと言わんばかりにヴェインは槍を構え。

「ダメですよ。相応の罰は受けませんと……」

小太刀を納め、右拳をゆっくりと引くクレイ。

「「行くぞ！／行きます！」」

降下するヴェインと地を蹴るクレイ、二人は一瞬にして距離が縮まる。

だが、二人の得物はヴェインは槍、クレイは拳、どちらが先に到達するかは容易に想像できた。

音速を持ってヴェインの槍は穿たれ、空を切った。

槍の下には魔方陣。それは足場だった。

ヴェインがそれに意味に気づいた時には既に遅く、頭上に影が出来る。

「蛇咬脚！」

「ち……」

クレイの脚に爪が生成され、ヴェインの背後から、首を引っ掻けるようにして脚が当たる……。

そのままにしてクレイは腰を捻り、ヴェインを叩き落とした……。

「お返ししましたよ！」

さらに足場を頭上に設置、上下逆さになり、蹴る！

流星の如くクレイは落下。右腕を背中まで振りかぶる！

「そりゃどぅも！」

『Ｕｐ　Ｓｅｔ　Ｒｏｕｎｄ　Ｆｉｒｓｔ』

身体強化、さらには武器にまで魔力が施され、漆黒のオーラがヴェインから溢れ出す。

クレイを見上げ、踏み込んだその右足は、地鳴りを起こし、沈み込む！

槍を頭上で一回転させ、勢いをつけ、振り上げる！

「「はぁぁぁっ！」」

叩きつけられた槍と拳。

二人が交わった瞬間、轟音が鳴り響き、衝撃波を発生させ、空気がビリビリと振動する。

二人の知らぬ所ではあるが、遠方から見ていた祐希奈の長髪が後ろに靡き、咲はゴロゴロと転がる程だ。

そんな一撃を放って起きながら、二人は止まる気配は無い。

クレイはヴェインの槍を掴み、身を翻すようにして蹴りを放つ！

しかし、ヴェインは許さない。クレイが槍を掴むのを見るやいなや、クレイごと槍を持ち上げ、叩きつける！

目標を見失った蹴りの進路は地上へと進路を変え、砕く！

ヴェインは正面に、クレイは横目に、互いの姿を捉える。

トトン、とクレイはステップを踏み、素早く下がる。

ヴェインは槍を銃へと姿を変え……。

「スプレッドスフィア」

即座に展開した漆黒のスフィアを周囲から撃ち放つ！
その数、３０。
スフィアは直接当たらず、クレイの周囲を動き回る
クレイを囲う様は正に檻。一斉に降り注ぐ！

「それくらい！」

霞む速度でクレイは地面に両手をつき、回転！
回転しながら打ち放たれる蹴撃、武術では、カポエラが近い。
それをもってして、降り注ぐスフィアをことごとく蹴り砕く！
硬直なく、バク転をして直ぐ様体勢を立て直す。

「♪～。やるなぁアイツ」

ヴェインは口笛を鳴らし、銃をクレイへ向けた。

「バーミリオン！」
『Ｙｅｓ　ｓｉｒ．Ｓｈｏｏｔ　Ｂａｒｒｅｔ！』
「テンペスト！」

銃から音速を突き抜け、クレイへと撃ち込まれる！
紙一重、クレイは身を捌き、一発を避け、左腕を眼前に……。

「スパイクプロテクト！」

発生するのは三角柱。弾丸は、その表面に当たり、流される。
クレイはそのまま突撃を開始する！

「成る程。だが甘い！」『Ｉｔ' ｓ　ｓｏ』

ヴェインはそのまま弾丸を連射する。
その弾丸は、全てが三角柱の頂点に直撃し、弾けていく……。

「っ！」

三角柱にピシリとヒビが入った……。
クレイが砲撃の受け流しのために開発したスパイクプロテクトだが、弱点もある。
三角柱というのは、面で受けないために範囲が広い砲撃には強い。が、点で受けた場合。頂点から響く衝撃は、三角柱全てに行き渡る。
それが連続して続けばどうなるか……。
答えは単純、頂点から崩れる……。
そしてそれは、クレイの障壁も間近であった。

「ドライブテンペスト！」

止めとばかりに、ヴェインは弾丸に回転を与え、三角柱の頂点に叩き込む！
硝子が砕け散るように、三角柱は消える。
が、そこにクレイはいない。

「ははっ。流石に若い」

かくいうヴェインも２０であり充分若いのだが……。

余談はさておき、クレイは障壁が砕け散る瞬間、横に飛んだのだ。
足場を展開しながら。
そしてそれは、五角形の形に複数展開され、ヴェインまで続いている。

「翔！」

残像を残し、クレイは駆ける。
次なる足場へと。

さて……どうする？

クレイの動きを見ながらヴェインは思考を加速させる。
牽制程度にスフィアを放ったヴェインだが、足場を蹴り、高速で動き回るクレイを捉えきれない。
その姿は瞬きの間に眼前にあるだろう。
剣へと変更、居合いのように下段に構えた……。
重心移動、左下の膝から上へ、斬り上げる！

「そこだっ！」

そしてそこに現れたクレイはまた消えた……。
足元には、回転し、抉られたような跡がある。
ヴェインは悟る、回り込みの動作だと。
強引に体を捻り、剣を背後に薙ぎ払う！

「裂光掌！」

「ぐっ！」

予想通り、確かに背後にクレイはいた。
だが、剣が振るわれるより速く、ヴェインがのけ反る。
その背中には、輝く掌底が叩き込まれていた。

輝きは増し、炸裂する！
直撃を受けたヴェインは、煙を引き、風を切りながら吹っ飛ぶ。
即座に受け身を取り、体勢を立て直すヴェインだが、その眼前にはクレイが右手に生成した巨爪を振りかぶっていた……。

「轟砕牙！」

ＡＡＡ＋をもって限界まで圧縮を加えられた巨爪は、外れることもなく、ヴェインに下ろされ、地面を陥没させる！
巨爪の威力は風圧だけで地面に爪痕を残す程。

「痛そう、というか痛いんだろうな実際」

「なっ！？」

その破壊の爪を左腕一本で防ぐヴェインがいた。
そして、他人事のように語っている。
衝撃も逃がさずにそんなことをすれば、確実に左腕の骨にヒビが入っている筈なのだが。
ヴェインは素振りを見せない。

「取り合えず……」

それどころか、使い物にならない筈の左腕で、クレイの右腕を掴む。

「っ！　蛇咬脚！」

驚愕も束の間、魔力爪を纏う蹴撃を叩き込む！
が、それすらヴェインは右腕一本で防いで見せた。
そして、ヴェインの左右に、新たに生まれる、槍を持つヴェインが二人……。

「返すな？」

「ぐっ！」

ヒュッ！　っと槍が風を切り裂き、槍がクレイを腹部を穿つ……。
先とは逆、クレイが吹っ飛ぶ番だった。

「はぁ、くっ」

痛みに呻きながらも構え直すクレイに、ヴェインは銃へと変更したバーミリオンを向けた。

「お前は確かに強いよ。才能もある。――でも、俺とは少し相性が悪かったかもな。俺が模擬戦で負けた人は五指に余る。何故だかわかるか？　それは、非殺傷だから、だよ。非殺傷設定では、痛みはあっても、よっぽどのことがないかぎり死にはしない。その痛みが問題なんだ。俺は……痛覚が死んでるんだ……」

「え……」

告げられた事実に、クレイは唖然とする。
痛みを感じないと、ヴェインは言っているからだ。

「まぁ、そこはさして気にする所じゃない。なんでわざわざお前に情報をやってると思う？　今のままじゃお前は勝てないって言ってるんだ。いくらお前が攻撃しようと、俺がお前に反応できる限り、倒れることは無い。部下をボロボロにしたくない。お前は退いてくれればそれでいいんだ。俺は部長のほとぼりが冷めたら帰る。痛みを我慢して戦う程の理由じゃないだろ？」

聞いていると、物凄く格好良く聞こえる言葉だが、要約すれば、

「これ以上痛くしないから早く逃げさせてくれ」である。

少し考えたクレイだが、瞳を見開き固まる。

「あ……」

そして、ヴェインの背後を指差した。

「あ？」

「説明長いわぁぁぁぁああ！！」

「がはっ！」

振り向いたヴェインは怒号と共に叩き込まれた紅蓮の一撃をまともに受け宙を舞う。

残っていたビルを貫通しながら尚、止まらない……。

その一撃を放った少女、一之瀬祐希奈は頭を押さえた……。

唖然とするクレイは、祐希奈の状態を思いだす。

「大丈夫なのですか？」

「……アンタも飛ぶ？　これが大丈夫に見えるわけ？」

「すみません……」

謝罪するクレイに「ったく」と祐希奈は嘆息する。

「こんなんでも助けたのはね、アンタに聞きたいことがあったから」

「はい？」

始まりと同じく、二人の視線が交差する……。

真っ直ぐに、そらすことなく……。

「アンタさ、なんていうか、ここまで、とか決めつけてない？」

祐希奈の質問に、クレイは少し驚くが、すぐに元の冷静な顔に戻る。

「何故そう思うのですか？」

「妙な感じがする……。達観してるっていうのかしら……。昔のアイツみたいに……」

祐希奈が思い浮かべるのは、出会った頃のカナン。

目標を目指し、それ以外には目もくれない。

小学生とは思えぬ発言をしていたカナンに、クレイがどこか重なる。

「僕は、まだ旅人です」

深くは語らず、スッキリと笑うクレイに祐希奈はさらに苛立つ。

その笑みだけでカナンのような復讐などと言ったモノとは違うとわかる。
しかし、苛立つ。祐希奈自身も何故かはわかっていない。だが、確実に苛立っていた。

「じゃあ、旅が終わったら旅人はどうするの……。何を目標に旅人は進めばいいのよ……」

「それは……」

言葉に詰まるクレイに、祐希奈は視線をそらす。

「ここまでって決めるからわかんなくなる。目標なんて、曖昧で、朧気で、見えにくいままで丁度いい。って私は思ってる」

「……」

押し黙るクレイに、祐希奈は視線を彼方へと向ける。
その視線の先には、ヴェインが立っていた……。

「さて、別に私の考えを今すぐ理解して。とか言ってるわけじゃない。片隅くらいに置いといて、まずはアイツを倒すわよ。クレイ」

「え、は、はい、えっと……」

何と呼べばいいのか、迷ったクレイに祐希奈は怒りを納め、笑う。

「祐希奈でいいわ」

「祐希奈、さん、貴女は僕が嫌いなんじゃ……」

「アンタは嫌いよ」

問答無用にバッサリ切り捨てた祐希奈に、クレイは若干落ち込む。

しかし、祐希奈の言葉には続きがあった。

「でも、何かに一生懸命なバカは嫌いじゃない。プラマイゼロで普通、だいたい、ホントに嫌いな奴に名前なんて呼ばせないし」

「……はい！」

元気よく、本来の笑みを浮かべながら笑ったクレイに、祐希奈は「よし」と頷く。

「やばい、かな」

チームを組んだ二人にヴェインは少し冷や汗を足らす。

祐希奈が手負いとはいえ、その怪力には十二分の威力があり、何発も受けられるものではなく、クレイの戦闘力は先の戦闘でも確認済み。アレだけではないとヴェインの直感は告げている。

「仕方ない、やるか」

アイツめ……

外面は真剣に。

内面さっさと起きない咲に苛立ちながら、ヴェインは構えた……。

「ブッ飛ばす！」

「倒させてもらいます！」

「悪いが本気で行く！」

それぞれに咆哮を上げ、地を蹴った。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「アンタなんかに用は無いの！」

怒声を上げるのは咲夜。

右腕から、袈裟、横薙ぎ、斬り上げと閃光が変化する。

「ふぁ……眠ぃ……」

欠伸をしながら合わせるのは渉。

斜に構え、次は縦に、次は横に、下がりながら刃を交えることにより、咲夜の魔力で生成されたナイフは軽く火花を散らすだけに終わる。

「どけぇぇぇえ！」

左腕にナイフを生成、腕を振り抜くと同時に投擲される！

距離は一メートルもない。

「……」

スゥっと、渉の体が滑らかとも言える動きで沈み込み、横に構えていた刀を手首を返し、縦へ、ナイフと刀が触れる……。

「せっ！」
斬光一閃。
刀が斬り上げられ、ナイフを真っ二つに叩き斬る……。
「か～かった♪」
「怖ぇよ……」
正に眼前。
渉の顔の前に、咲夜の笑みを浮かべた顔がある。
だが、渉の表情は変わらず、ジト目で見るのみ。
密着状態とも言えた。
それはナイフを振るうにも、刀を振るうにも近すぎる。
「あはははは！　野郎は消え去れぇぇぇ！」
「ぐっ！」
瞬間、渉の表情が痛みに歪む。
何故なら、弾丸と化した咲夜が鳩尾にタックルをかましていたのだから無理もない。
咲夜はタックルの体勢のまま渉を押し込み止まらない。寧ろ、加速していく！
余談だが、咲夜は“華奢”な女の子である。
「ＫＹ男は！」
咲夜の膝に力が溜まる。
それは、跳躍の力だ。咲夜は自身より重い筈の渉ごと飛んだ……。

「デストロォォイ！」

「ぐ、あ……」

そのままの勢いで渉は木に叩きつけられた。
それだけならまだ良い。
違った。渉の背中に突き立つのは十数本にも及ぶ、魔力のナイフ。
咲夜は予め接地した剣群に突っ込んだのだ。
激痛に襲われながら、渉の体は宙を舞い、受け身も取れず、叩きつけられた体は転がる。
完璧な手応えに咲夜は頷く。

「さて、後はあの子と……」

踵を返す咲夜。
が、直後に寒気……。
振り向くと、渉は既に立っていた。
だが、半開きだった渉の瞳はしっかりと開かれ、首を傾げる、コキリと響く骨の音。

「さて、準備運動は終わりだ。今まで好き勝手やれて楽しかっただろ？」

「本気じゃ無かった……。って言いたいわけ？」

「いや、寝起きで……」

「じゃねぇな」と首を振り、指を一本立て、空を指す。

「お祖母ちゃんは言っていた……。能ある鷹は爪を隠すとな」

そして、テレビで得た知識をそのままパクって言い放つ。
それを見る咲夜の視線は冷たい……。

「今、寝起きって」

「そんなことはどうでもいい。ただの気分だ」

咲夜のツッコミを適当に流し、踏み込む。
いきなりの踏み込みに咲夜は驚愕するが、ステップを踏んで背後に飛ぶ。
直後、肩から腰にかけて、閃光が通過する。

「ちっ。当たれよ」

「ちょっと！　物には順序ってものが……っ！」

「知らん」

問答無用とばかりに渉が上半身を使い、弧を描く斬撃を咲夜に打ち込む。
首を反らして避けた咲夜に渉はまた舌打ちをする。

「避けんなよ……」

「成る程、敵に容赦はしない主義ってわけ……」

「いや、面倒なだけだ。強いて言うなら早く寝たい」

礼儀を払わないのは、眠いから。

そんな理由をぶっちゃけた渉に咲夜は青筋を浮かべる。

「……あああああああ！　コイツムカつくゥゥゥゥゥ！」

咆哮を上げた咲夜は、刀にナイフをぶつけ、後退を止める。
だが、渉は進むのを止めない。
そして、刀が描く緩やかな曲線にそってナイフが滑る。
体が流れる。がら空きの咲夜に渉は刀を持つ右腕を引き絞る。

「ぐっ！」

刀の柄を咲夜の額に叩き込み、重心を乱し、浮かせる。
渉は尚動く。手首を返し、正眼へ、そして上段に構え、両手で柄をしっかりと握る。

「じゃあな」

咲夜は、袈裟に斬られたことのみを知覚する。
声も上げられない。それほどまでに激しい痛み。
意識を手放しそうになり……“メイド服を着て半泣きになったヴィヴィオ”が思い浮かんだ。
瞬間、意識が覚醒し、空中で身を捌き、咲夜は体勢を立て直す……。

「オーケーオーケー……」

「ん？」

「萌えの神は私を応援してるってわけね……。Ｄｏ　ｙｏｕ　ｗａｎｔ　ｔｏ　ｓｅｅ？　って聞きたいわけね……。貴女はこれを見

て萌え萌えしたくないのですかって聞きたいわけね……」

「は？」

意味がわからないと、渉は首を傾げる。

瞬間、咲夜が霞む！　駆けるは刹那、渉の眼前！

驚愕しながらも渉は刀を咲夜に斬り上げる！

「Ｙｅｓ　Ｉ　ｄｏ！　だぁぁあああああああああああ！！！」

「……アホだ」

斬り上げられた刀と、振り下ろされたナイフが激音を奏でる！

両腕の刀に対し、咲夜は右腕一本で互角の威力……。

さらに、咲夜の左手に光が点る。

「そらそらそらそら！　野郎なんて用無しなのよ！」

「あ～うっせ……」

咲夜の咆哮に耳鳴りを感じながらも、両腕から放たれる無数の閃光を右手首を返すという最小限の動きを行いつつ、バックステップ、咲夜が深く踏み込めば刀で流し、浅ければ下がって避ける。

幾度の激音が響いただろう、幾度の火花が散っただろう、数えきれない程の合を重ね、尚も進みは止まるを知らない。

「月閃！」

ナイフから黄の魔力が輝き、数段強力になった斬撃が上段から振り下ろされ、三日月を描く。

だが、その一撃は渉を掠めるだけに終わる。

「月閃、月閃月閃月閃！」

しかし、一撃に終わらない。

幾度も振るわれる高威力の斬撃。

太刀筋は滅茶苦茶だが、その滅茶苦茶な太刀筋は、型をもって戦う人物には型を取る隙を与えない驚異にもなる。

そしてそれは、刀を使う渉にも有効だった。

というより、刀こそ、型を作らねばならない武器である。

本来、刀とは一刀両断という言葉があるように、一撃にかかる力は非常に大きい。

裏を返せば、大きすぎるが故に連撃は出来ないに等しく、型からの必殺の一刀にかけるのだ。

その型を作り、必殺の一刀をいかにして叩き込むか、剣士の思考は常にそこにある。

強力だが、扱いが難しい。

それが、刀。

「……」

その刀を使う中で、自ずと必要になってくる技術に、見切りがある。

無論、渉も例外ではなかった。

激音の中で、渉は神経を研ぎ澄ましていく……。

渉の視界が狭まり、景色が色あせ、消えていく。

それはやがて暗黒となり、中には己と相手のみとなった……。

暗闇に閃光が映える。景色が無いために、軌道が手に取るようにわかる。

左腕からの袈裟懸け、最も会わせやすい一撃を待ち、そして時は来る！

「月閃！」

迷い無く振るわれた一撃に合わせる……。
ジャリ、っと左足が地を滑り、半身に体が開く。
右下から刀が半月を描き、ナイフと激突！

「はぁぁぁっ！」

押しきらんと、咲夜が咆哮を上げ、刃の出力を上げる！
渉は、押し込む相手の力には抵抗せず、引き入れる。
余りにあっさり拮抗が解けた。
それが意味するのは、咲夜の重心のズレ。
渉の瞳が鋭くなり、左膝に力が込められる！

断ち、斬る！

一気に上半身を左下に捻る。
刀は動きに連動し、跳ね上がる！
シャン。っとナイフに纏われた魔力刃が砕け散り、粒子として辺りに舞う……。

「まだ！」

咲夜は残る右腕を振るい、斬撃を叩きつける！
しかし、渉は冷静に刀を返し、腰を次は右に捻り、横薙ぎの一撃をもってナイフを迎撃。
腕だけのナイフの一撃と重心の乗った刀の一撃。
結果は火を見るよりも明らかだった。
刀はナイフをあっさり砕き、渉の前には無防備となった咲夜がい

るのみ……。

「天道流……舞ノ太刀」

踏み込みながら、手首をさらに返し、頭上に刀を構える……。

天道

天の道を行く。

意味はそのまま。

頂点を進み、誰にも負けない、剣術を目指す。

そんな馬鹿げた名前の流派があった……。

一対一、一対多、どちらにも対応できる技を極めようとする流派だ。

天道流は厳しく、才ある者が残り、才ある者の中でさらに篩（ふるい）にかけ、落とされていく……。

その天才達の中で抜きん出ている若者がいた。

師範の息子である。

是非もないと、若者を後継者としようと、周囲は動いた。

しかし、若者は突如、道場を去る。

理由は「音楽をやりたいから」それだけの理由で、用意されたレールから若者は降りる。

その若者の名は……天道、渉。

咲夜が相手をしている、その人であった。

「飛斬燕閃！」

渉が叫び、逆袈裟に一閃が走る！

しかし、咲夜は直前に踏んでいたバックステップで距離をとっていた。

まだ、ある。

咲夜がそう思うには理由があった。
構えから一閃までの時間の間隔が広すぎるのだ。
咲夜の勘は当たる。
振り払われた一閃の光から、何かが飛び出す！
確認の暇は無い。真横に飛び込む。
何かは、咲夜の今さっきいた所を突き抜けた……。
受け身で体勢を渉に向けた咲夜は、突撃の構え。

「決める！　沈めぇぇえええ！」

右腕にナイフを転送し、走り込む！
ゴウッ！　そんな音を咲夜の聴覚は捕らえた。

「おい、降ってくるぞ」

刀の切っ先を鞘口に当てながら、渉が呟く。
不覚にも、敵の言葉に咲夜は気を取られ、見上げる。

「なっ！？」

渉の言葉通り、確かに降ってきていた。
色の無い、巨大な燕が…
これが、先に放った渉の斬撃の姿である。
既に回避不可能なことを悟った咲夜は歯を食い縛る。

「だから、何だってのよぉぉぉ！！！」

突撃を止め、その反動を利用し燕に右腕を跳ね上げる！
一メートル近い大きさの燕は、咲夜の斬撃に向かう。

「普通に考えて燕がそんなにデカイわけないよな」

涉の言葉が響く。

瞬間、燕の姿が分かれた。

数十匹もの普通サイズの燕に……。

「嘘ぉぉぉぉぉ！？！？」

「ホント」

キン。

涉が刀を鞘に納める。

同時、分かれた燕は、四方八方から咲夜に降り注ぎ土煙を舞い上げる……。

人が倒れる音がする。無論、咲夜だ。

「やりすぎたか……」

女の子相手に叩き込む技では無いと、少し反省し、涉は咲夜に歩み寄っていく。

「秘技、死んだフリ！」

しかし、咲夜はまだ意識を手放しておらず、転がっている状態から、生成したナイフを涉に投擲。

身体強化を行っていたのか、ナイフは音速を越える！

「バレバレだから」

が、渉は軽く体を捌き、ナイフを避けた。

「お前の負けだ」

「う～！」

刀の切っ先を咲夜の首筋に突きつけ、渉はヴィヴィオ達の方向を向く。

「……」

瞬間、渉の視線は固まった……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

拳を打ち出す者、風雅と、刃を叩きつける者、ヴィヴィオが、音速の領域で激突を繰り返す。

「「はぁぁっ！」」

咆哮を上げつつ接近。

放つは横殴りの拳と刃。

叩きつけた衝撃は、互いの手に流れるが、無視する。

無視するのは同時。

しかし、攻撃速度は風雅の方に軍配が上がり、回転しながら回し蹴りがヴィヴィオを襲う。

「くっ！」

『Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ！』

間一髪頭を反らし、ソニックムーブを発動、風雅の範囲から退避する。

「逃がさない！」

『Ｇｅａｒ　３ｒｄ　Ｇｅｔ　ｓｅｔ』

だが、風雅は速度がさらに上げる。

その速度は、真・ソニックフォームのヴィヴィオを越え、接近していく！

「アクセルランサー！」

動きながら自身の周囲に光槍を展開。

八発の槍が風雅へと向けられる。

「ファイア！」

一斉に撃ち放たれたそれに、風雅は突っ込んだ……。

光槍は風雅の手前で拳撃に弾かれ、光と散る。

牽制にすらならない……。

「やぁぁ！」

だが、ランサーは囮。

逃げていた筈のヴィヴィオは、急停止し、反動で風雅へと飛んでいた。

勢いと重心と、二つを合わせた斬撃は残像を残しながら一閃、外れていた……。

『上です！』
「っ！」

風雅は避けていた。
不意打ちにも等しい程の斬撃を、跳躍して……。
叩き落とそうと、跳ね上げた刃は弧を描きながら振り上げられる。

「……っ」

が、それより速く、風雅の踵がヴィヴィオの後頭部に炸裂していた……。
声にもならず、ヴィヴィオの頭がガクンと下を向く。
体が浮き、吹き飛ぶ！
当然、止まることなど出来る筈もない。
突っ込んでいた方向に蹴られたのだから……。

「うぐっ！」

受け身も取れず、勢いも殺せず、慣性に従うままにヴィヴィオの体は地を滑る……。

「牙狼！」

「くっ！」

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！』

風雅は瞬く間に距離を詰め、未だ体勢を立て直していないヴィヴィオに爪を振り下ろす！
ヴィヴィオは右腕を風雅に突きだし、障壁を張る。

「はぁぁぁ！」

障壁は約一秒にして軋み、ピシリとヒビを広げた。

当たり前である。ヴィヴィオは、構えて張ったプロテクションですらＡＡランク程しか防げないのだから……。

そんなことはヴィヴィオが一番わかっていた。

故に、時間稼ぎ程度にしか思っていない。

先の一秒の間に、既に起き上がり、膝に力を溜め、地を蹴っていた……。

「きゃ……」

ヴィヴィオの口から悲鳴が少し漏れた。

飛んだ直後に爪が地面に叩きつけられたわけだが、ヴィヴィオはその衝撃波を至近で受けていた。

一瞬とはいえ、重心がずれた。

その一瞬は風雅にとっては長すぎる。

「かは……」

ヴィヴィオの鳩尾に風雅の拳は決まり、また飛ぶ……。

残像を残し、風雅は跳躍、次の瞬間には吹き飛んでいるヴィヴィオの眼前。

振りかぶられた拳を見て、ヴィヴィオは大剣を持ち上げる。

「眠ってください……」

「うっ！」

力のこもらぬ受けに関係ないと、証明するように風雅は大剣ごと殴り、打ち落とす！
みるみる迫る地面、ヴィヴィオは大剣を突き刺して強引に停止、逆立ちから身を投げ出す。
そこを切り裂く風雅の爪。

進む、進む、また進む。
下がる、下がる、また下がる。

風雅は疾風怒濤に拳を蹴りを時には爪を、叩き込み続ける。
対しヴィヴィオは、反撃も出来ず、苦しげな表情で受けることしか出来ない。

フルドライブ……。

一瞬、そんな思考がヴィヴィオの頭をよぎるが、そんな隙を見せれば風雅は止めの一撃を叩き込み、ヴィヴィオは沈むだろう。
受け続けながら、思考を加速させる。
とは言っても、長々と出来るものではない。
こうしている間にも、カナンは誰かと戦っていることには変わりないのだから。

焦っちゃダメ……。

よく聞かされた言葉。

誰に？

どんな状況でも覆してきた不屈のエース、自分の母親、高町なのはに。

そのなのはに教えてもらっていた頃を思い出す。
自分より、速い相手に、対抗する方法……
記憶の扉は開かれる。
『それはね？』
ヴィヴィオは、頭の中で、笑顔のなのはが頷いた気がした。
「ランサー！」
『お任せください！』
後退しながらアクセルランサーを周囲に展開。
先刻放ったモノより数が多い。３０以上はある。
しかし、それらを風雅の目は全て捉えきる。
「ファイアァァァ！」
至近距離から撃ち放たれる光槍に、風雅は構わない。
ヴィヴィオより手数が多い風雅は、今まで攻撃に回していた分を迎撃に回せばいいのだから。
仮に、手薄になった所に攻撃が来ても、捌く自信が風雅にはあった。
ヴィヴィオに拳を打ちはなって、蹴りで光槍を砕いて。
また、何もせずとも速度に追い付けず後ろに流れていく光槍もある。
「うっ……」

さらに、ヴィヴィオの後退の速度が遅くなる……。
見つけた隙。風雅は逃さず、大きく踏み込む！
踏み込みは地を砕き、風雅は怒れる獅子をその身に纏う！

「獅子破吼！」

「フェアリー！」
『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　ＥＸ！』

拳を打ち放つ風雅に対し、カートリッジを弾き出し、プロテクションの強度を上げる！
だが、風雅の一撃はＡＡＡ＋は誇る一撃。
防御が苦手なヴィヴィオが防ぎきれる威力ではない。

あれ？

何かの違和感を風雅は感じとる。
先刻の一撃ですら防ぎきれないヴィヴィオがまた受けたという違和感を。
疲労で仕方なく、それならば納得はいく。
故に見つけた隙に風雅は打ち込んだのだ。
しかし、疲労にしてはおかしな部分があった。
プロテクションを張っているヴィヴィオに息切れがない。
重心も安定している。
追い詰められている筈のヴィヴィオが、焦りもなく、デバイスと息を合わせて防御している。
ここまで揃うと一瞬に近い時間とはいえ、風雅は止まる。
その一瞬を狙い、先の隙が“作り出されたモノ”だとしたら……。

「……っ！」

そして、先に放ち、過ぎ去った光槍の操作をヴィヴィオがまだ止めていないとしたら……。
光槍が風雅の踵近くの地面に刺さり、光を増していたとしたら――

『それはね？　一瞬で良い、まずは主導権を握ること。これが一番大切で、大変なこと。どうやって、相手から主導権を奪うか……。私？　う～ん……。私なら、スフィアの応用を使うかなぁ？　攻撃とは、当てるだけに在らず』

――それは、形成を逆転する引き金となる！
風雅が気づいた時には既に遅い……。
光の弾と化したランサーが輝く！

「バースト！」

「しまっ！」

爆ぜる！
風雅の立っていた足元が！
風雅に飛行適正は無い。
故に、ヴィヴィオの前にいるのは体勢が崩れた風雅だ。

「『後は……撃ち抜く！』」

ヴィヴィオとなのはの言葉が重なる……
フェアリーが輝き、双刃剣から杖へと姿を変えた。
柄を両手で持ち、構える。
弾ける火花は撃鉄の火花、溢れる魔力はヴィヴィオの力！
放つは砲撃、名は！

「ディバィィィン！　バスタァァァァ！！！」

極光が輝き、進路上の草木を無へと返す。
極光は止まることを知らない。
少女から放たれたとは思えぬ光は、蹂躙を続け。
閃光爆裂。
少女の遥か先で突如として炸裂し、蒼いドームが出来上がる。

「……わぁ」
『どうされましたか？』
「やり過ぎた、かな？」
『そんなボケをかましている余裕があるとは流石です、マイマスター』
「ち、違うよ～！」

戦闘を終え、いつものポケポケとしたヴィヴィオに戻る。
その二人を見るのは、渉。

「最近の女の子はスゲーな……」

どこか遠い目をしながらポツリと呟いていた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「はぁ、仕事押し付けた上にこんなことまでさせるんだからあの人は……」
『ガハガハ！　まぁ、お前が戦闘に参加した所で瞬殺だろうからな』
「悔しいけど、否定できないのが悲しいな……」
『だろ？　誰もが認めるピアニッシモだからな♪』

「その呼び方やめろって何度言わせるんだ！　ったく……」

制裁を加える者、戦いを続ける者、戦い終えた者。
それらを映像で見ている、男性、フォルテ・アスパイアと、肩に乗る狼型デバイス、トライトンがいた。
その指は会話をしながらも止まることはない。

レイ・リーフライン
ヴェイン・アルベリス
春野咲夜

三人の名前がウィンドウに上がり、展開されては消えていく……。

ネロ・白
バーミリオン
ルナ

次はデバイス名が表示され、文字の羅列が流れていく。
両手の指がコンソールの上を滑り、舞う。
数分とかからずプログラムを書き換える。

『相変わらず見事なハッキング技術だな。惚れ惚れするぜ』
「嬉しくない褒め言葉ありがとう……」

そして、フォルテの小指はコンソールのエンターキーを叩いた……。

『……／はっ！？／……』

映像の中で、レイ、ヴェイン、咲夜のうち、ヴェインが特に大き

なに反応を見せる。
三人のうち、二人は戦闘不能なのだから仕方がないが……。
『おい、バーミリオン！？』
ヴェインが声をかけるが、バーミリオンは返事をしない。
当たり前である。
フォルテによって遠隔操作からシステムを落とされたのだから。
バーミリオンのシステムが落ちた、ということは、ヴェインが張った結界も砕け、バリアジャケットも消えることとなる。
ヴェインの驚愕も当然である。
『『はぁぁぁっ！』』
『容赦無しだな！？　というか結界消えたんならヤバイって！』
『張り直したわ！』
『祐希奈ちゃん対応早いね！？』
それだけなら良かったが、ヴェインは未だ戦闘中。
「アーメン」
『南無のほうがよくねぇか？』
そんなどうでも良いことをフォルテとトライトンは論議していた……。
『アスパイア査察官兼経理』

フォルテの前にウィンドウが開き、凛の顔が映る。
これらは、全て凛からの指示である。
もっとも、指示された所で、実行出来る局員が何人いるかという話だが……。

「はい。上手くいきましたか？」

『そうですわね。お疲れさまと言っておきましょう』

「いえいえ、海城三佐に情報を貰っていましたし。そちらもお疲れ様でした」

『ええ、まぁ。こちらは私が引き続き当たりますから、私達が帰るまで、仕事をお願いしておきますわね？」

フォルテは、苦笑いをしながら頷く。
途中までやっておいて投げ出すのは彼は嫌いなのだ。

『ついては、アスパイア査察官兼経理』

「はい？」

『何か届いたのではなくて？』

「え……あ！」

まさにピッタリという様子でコンソールにメールが届く。

「来ましたね、え～と、海城・G・凛三等三佐、レイ・リーフライン執務官の能力の無断使用、無断でのリミット解除……って、これ、

始末書じゃないですか！　まさか……」

『それもお願い致しますわ』

そう言い残し、通信は途絶えた……。

ブルブルと、フォルテの肩は震え始める。　フォルテはやっとのことで凛とクレイが出撃したことの承認を貰えたばかりなのである。

それだけでも大変な疲労がフォルテにはある。

が、凛は始末書すらもフォルテに押し付けたのだ。

怒らないはずがない。

『まぁ、なんだ。頑張れよ、フォルテ……』

「こんな理不尽、認めるかぁぁあああああああ！！！」

ダン！　とデスクを叩き、立ち上がるフォルテの前に、また凛が映る……。

『ちなみに逃げ出した場合、アコース査察官からなんらかのお話があると思われますわ』

「何を、したんですか……」

『特には何も。今度お食事にでもとお誘いしただけですわよ？　それでは……』

そして、凛は消えた……。

フォルテは怒りが消えていくのを感じる。

脱力し、そのままイスに座った……

「売られた？　僕、売られましたか？」

『リーフラインの奴が帰ってきたら手伝ってくれるさ。頑張れよ。な？』

あまりにいたたまれなくなり、トライトンがフォルテを慰める。

フォルテは力無く頷き、コンソールを操作しはじめた……。

《アスパイア査察官兼経理！　手伝います！》

「皆さん……っ！」

こうしてまた、零番運用部の面々との友情を深めたフォルテであった……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ここは……俺はアイツと戦って……真っ暗になって……」

真っ暗な空間の中でカナンはただ一人、浮いていた……。

上も下も右も左もわからない。

本当に何もない空間の中で存在が在るのは己のみ。

「寒いな……」

カナンの体が震える。

騎士甲冑を纏っているのに、寒い筈はない。

第一、季節は秋になりかけるという所。

震えるほど寒いわけがないのだ……。

《ナンジ、ナニユエニワレヲコバム……》

「誰だ……」

視線を周囲に巡らし、声の主を探す……。
そして、それは、“それら”はいた……。

「何だよ、コレ……。意味がわかんねぇよ……」

気が狂いそうな光景が広がっていた……。
闇が避けるように開き、目が現れる。
一つが開くのを待っていたかのように、次々と目が開く。
カナンの周囲を囲うモノは、闇に浮かぶ、幾万、幾億というほどの目だった……。

《ウケイレヨ……》
《ミセテミヨ……》
《サラケダセ……》

周囲から響く声。
その声を聞く度、体温が下がり、寒くなる。
そして、意識が朦朧とし始める……。

「黙れ！　勝手なこと言ってんじゃねぇ！」

意識を繋ぎ止めるために、力の限り叫ぶ。
例え、効果が無いとしても。
そうしなければ、意識が無くなりそうだった……。

《ウケイレヨ》
《ウケイレヨ》

《ウケイレヨ》
《ウケイレヨ》
《ウケイレヨ》

やはり、効果はない。
それどころか、声の数が増える。増え続ける。
どうしようもなく、寒かった……。
いっそ、受け入れたら楽になるだろうか、そんな考えが頭をよぎる。

「違う……。違う違う違う！　楽に逃げるな！」

歯を食いしばる。
受け入れまいと、拒絶をし続けろと自分に言い聞かせる。

《ウケイレヨ》
《ウケイレヨ》
《ウケイレヨ》

「うるさい……黙れ、黙れ、黙れぇぇぇ！」

うずくまり、耳を塞ぐ。
それでも声は消えない。
その行動に意味は無かった……。
震える体を自分で抱くように小さくなる。
本能的に悟っていた。眠れば終わってしまうと。

「寒い……」

言葉は止んでいない。

しかし、カナンの聴覚が麻痺し始めていた……。
意思に反して瞼が落ちる。

「マスタァァァァ！　諦めるなぁぁぁぁ！」

声が聞こえた。
顔を上げると、先程までは無かった扉があった。
白い、白い扉が……。
そこから声は聞こえているようだ。
その声を、カナンは間違える筈は無かった。
毎日を一緒に過ごしてきた相棒の声なのだから。

「メイ、デン？」

「貴方は！　まだするべきことがあるだろう！　それを放り投げて、自分一人で逝くなど、許さない！　絶対に、許さないからな！」

メイデンの声に、冷たい体が温まっていくのを感じる。
そして、力一杯、左腕を扉の中に伸ばした。
瞬間、カナンの体は中に引っ張り込まれる。
その扉の中には、メイデンがいた……。

「ありがとな……」

「いつものことだ」

そして二人は光の中へと消えた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

なのはとフェイトの瞳に映る、白光。
瞬きが終われば自分の命は消える。
なんとかしようと、思考を加速させるが、魔導師ランクの限界を越える一撃を前に何が出来るというのか……。
ただ、この絶望を受け入れるしか無かった……。

「オオオオァァァァァァ！！！」

だが、瞬きの間に行動出来る者がそこにはいた。
暴走している筈のカナンだ。
カナンは、なのはとフェイトを守るように二人の前へ。
光弾に漆黒の刃を叩きつける！
同時、暗黒の波動が刃を覆い尽くす……。
瞬間、光弾は弾け飛び、三人の遥か背後にて炸裂する。

「「っ！」」

背後から襲った衝撃波に、二人の体は浮く。
だが、何かにバリアジャケットの腰辺りを抱かれ、止まる。

「グルゥ……」

「「カナン！？」」

そう、二人を助けていたのはカナンだ。
偶然でもなんでもなく、カナンは二人を助けるために動いていた……。
ゆっくりと二人を下ろす。

「自我が、あるの？」

フェイトが訊ねると、カナンの頭がフェイトに向く。
目の色が違っていた。
右目は濁った赤、左目は、透き通る赤。

『自我はあるが、時間がない』

「「メイデン！」」

響いたメイデンの声に、二人は思わず笑みを浮かべる。

『事情は後だ。今は手短に話す。奴に侵食されていたシステムは切り離したから、一先ず暴走の心配はいらないが、余裕はない。大半のシステムを切り離したがために、オーバードライブの殺戮衝動の増大にマスターがいつまで耐えられるかわからない。よくもって５分、それまでに奴を倒してくれ』

メイデンの言葉に二人の笑みは一瞬にして消える。
５分以内にグラースを倒さなければ、カナンは暴走を開始すると告げられて、笑える筈もない。

『無茶だが、やるしかないんだ。身勝手で済まないのだが、頼む……』

なのはとフェイトは謝らなくていいと首を振る。
そして、前を見た。
グラースは不動。待っているかのように、ただ、立つ。

「やろう、三人ならきっと勝てるよ！」

レイジングハートを構えながらなのはが笑い。

「うん。カナン、師弟タッグ、行ける？」

「ガルル……」

『もちろん。だそうだ』

「よし！」

バルディッシュを構えてフェイトが意思を固める。

三人同時に頷き……。光は三つに別れた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

三人がグラースの視線上から消える。

だが、グラースは揺らがない。

ただ、右腕に暴風を纏って、佇んだ……。

「滅……」

その体が回転し、背後を向く。

左脚を前に踏み込み、正に震脚といえる激震を起こし、右腕を霞ませる！

「ォォォアアア！！」

拳の狙う先、何もいなかった筈の空間にカナンが現れ、逆手に持った暗黒を纏う黒剣を叩きつけようとしていた。

「烈風！」

瞬間、背後に現れたカナンの黒剣と暴風が激突する！
威力は互角、されど、グラースには炸裂効果がある。
それは存分に発揮され、凄まじい暴風はカナンを吹き飛ばす！
グラースは止まらず、空いた左腕を背後に振り放つ。

「ぐ、ぅ！」

紫電が弾け、呻き声が響く。
グラースの背後に現れたのはフェイト。
バルディッシュの姿は既にリミットブレイク状態、ライオットブレード。
にも関わらず、片腕一本で迎撃され、吹っとぶ！

「ディバイン！」

しかし、グラースの頭上、砲撃を構えるのは、なのは。
充分に集束した砲撃を構える。

「くだらん」

が、無情にもグラースの姿はなのはの真横。
水刃纏う右腕は、既に霞んでいた……。

「アアアアアアア！！」

「させるかぁぁぁ！！」

怒号が響く。
瞬間、グラースの腰から肩にかけて二筋の閃光が交差する！

片や黄金、片や漆黒。
カナンとフェイトの一撃は、グラースに確かに通る。
さらに、なのはは下方に向けていたレイジングハートを回転、方向修正。

「バスタァァァァ！」

真っ直ぐに、砲撃はグラースへと叩き込まれる！
が、不動。
砲撃を受けるのも構わず、グラースは水刃を走らせる！

「っ！」

首筋を狙う水刃を下がって避けようとする。
しかし、明らかになのはの動きが遅く、水刃が速すぎた……。
首筋へと向かう水刃。

「オォォォォォォ！」

が、それは咆哮が響いた瞬間に消え去る。
なのはの眼前を、漆黒の砲撃が通過する。
この砲撃がグラースを叩き落としたのだ。

「なのは！」

「うん！」

フェイトの言葉になのはは恐怖を振り払う。
カナンとフェイトは同時にグラースに突っ込んでいく！

「グルゥ……」
『突っ込むそうだ』
「わかった！」
正に雷光！
ギロチンのように黒剣と雷剣は叩き込まれる。
“地面に”
そこにいた筈のグラースの姿がない。
「滅天……」
呟きが響く。
その姿は、なのはよりも上。
合わさる両掌に集束される白光！
三人の内、最も速く反応したのは上から見ていたなのは。
反転し、レイジングハートをグラースへと向ける！
「エクシード！」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ』
なのはの体が輝き、アグレッサーモードからエクシードモードへと、変更。
さらにカートリッジが弾き飛ばされ、光が集う！
「ハァァァァ！」
「覇光……」
続いて反応したカナンが、放たれた光弾に暗黒纏う刃を叩きつけ、

光弾の方向をそらし、吹き飛ぶ！
盛大に叩き落とされたものの、役目は果たした……。

「エクセリオンバスター！」
『Ｆｏｕｒｔｈ　Ｂｕｒｓｔ！』

放たれるは四つに分かたれた砲撃。
グラースは、四つが自身へと集まる前に消えた……。
砲撃を放つなのはの“前”へと現れる……。
右脚に紅蓮を猛らせて……。

「滅爆煌……」

「フルバースト！」
紅蓮を纏う蹴撃と四つを合わせるように放たれた砲撃とが同時に放たれ、炸裂する！
砲撃は膨張し、やがては巨爆を起こす！

「くっ！」

吹き飛ぶのはなのは、グラースの前で体勢が崩れる。

「滅烈風」

グラースに纏われた暴風は、体勢を崩したなのはを捨て置き、回転から背後に打ち放たれる！
激突するのは雷刃、フェイトだ。

「なのは、今のうち……に……」

「フェイトちゃん！」

フェイトの体が弓なりに曲がった……。
拳は受けたが、蹴撃までは防げなかったのだ。
鳩尾に入った蹴りにフェイトの口から空気と共に血が落ちる……。
驚愕するなのはに、フェイトの体は投げられる。
「う、くっ」

グッタリするフェイトをなのはは受け止め、己の頭に影が覆うのを感じる。

「散れ……」

影の招待は高々と振り上げられたグラースの右脚だった……。
そして、影は消える。
眩い轟雷の輝きによって……。

「プロテクション！」
『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！』

空いた片腕でレイジングハートを構え、カートリッジ全てを弾き出してプロテクションパワードを張る。
直後に突き立つ雷光の一撃、ビシリと広がるヒビに、なのはは後ろに飛んだ……。

「ぐぅっ！」

無論、なのはは体を地面へと叩きつけられる。
だが、防御が破壊され、直撃を受けるよりはマシ。
そう、マシなだけだ。　全身に走る激痛に、なのはの体は上手く

動かない。
その上にフェイトを担いで動くなど、不可能だった……。

「滅、爆煌……」

だが、グラースは違う。
既に縮地を使い、なのはの頭上で回転から蹴りを放っていた……。

「っ！」

最初に軽く抱き締められたような感触がなのはに広がり、直後に高熱と衝撃が体を打つ。
なのはとフェイトは、抱えられ、吹き飛んでいた……。
グラースとなのは達の他に人は一人だけ、カナンだ……。

「っ！」

叩きつけられるような音をなのはは聞き、そして投げ出されて、なのははフェイトを抱き締めながら地面を転がる。

「くぅ……」

頭を振ると、すぐそばにカナンが倒れていた……。
黒煙を上げ、動かない。

「カナン！」

近寄ると、鎧は砕け、酷い火傷が背中にあった……。
なのはとフェイトを庇い、グラースの一撃を背中に受けたのだ。

『大丈夫だ！　止まるな！』

メイデンからの警告に、なのははハッとする……。

遅い。

そう言うかのように、風を纏うグラースの姿は前に在る。

「……」

「っ！」

無言で拳が放たれる！

唯一動けるなのはは、レイジングハートを拳に向けぶつける。

「え……」

止まった。

体がその場に縛り付けられたように動かない。

拘、束っ！

気づいた時には手遅れ。

風が集まり、自分達へと向いているのを感じとる……。

いままでとは明らかに異質な技だ。

「滅神、旋嵐」

風が唸る……。

グラースが拳を打ち出す。

全ての風はなのは達へと向かい、炸裂する！

激震が結界を揺らし、土煙が舞い上がり、最早三人の姿は見えな

い。

「……」

縮地を使い、グラースは土煙の上へ。

「ァァァアアアアアアアアアア！！！！」

咆哮。

こんな咆哮を上げるのはカナンしかいない……。

土煙が吹き飛び、巨大な風を纏うカナンをグラースは見る……。

瞬間、グラースの体は結界の端へと叩きつけられる！

カナンが、肩口からグラースに突貫したのだ。　カナンの左手と右手が霞み、右腰と左腰に走り、抜刀、その刃は巨風を纏う！

グラースの打ち放った風、それを吸収していた……。

「ハァァァアアアアアアアアア！！！！」

再び激震が結界に走る！

カナンが零距離から巨風をグラースに叩き込み炸裂させたのだ……。

その一撃は正方形に展開されている結界を歪に歪ませる……。

カナンの自爆に近い一撃はグラースの体をさらに結界に押し付け、カナンの体を地上へと叩きつける！

「撃ち、抜け……雷、神！」

『Ｊｅｔ　Ｚａｍｂｅｒ！』

呟きが響く……。

ライオットザンバー、カラミティを背中に担ぐフェイトだ。

捨て身の一撃を無駄にすまいと、朦朧とする意識の中で、魔力を紡ぐ。

「はぁぁぁぁぁぁっ！」

「……」

地から天へと、雷刃が伸び、グラースを叩きつける！

雷刃はグラースに突きたったまま、強層結界の二枚をぶち抜き、轟雷を放つ！

轟雷が弾ける中で、グラースは腕を交差し、防御をしていた……。

『Ｆｌａｓｈ　Ｍｏｖｅ』

「全力、全開！」

グラースの３ｍ手前、そこになのはは現れる……。

即座に膨大な光を集束し、振りかぶる……。

あまりにも隙が大きく、無謀すぎた……。

グラースはダメージは受けているものの、意識ははっきりと持っている。

今までは続けざまに叩き込んだために受けに回っていたに過ぎないのだ。

「滅……」

「オォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！」

「やらせるかァァァァァァァァァァ！！！！！」

しかし、グラースの声は最後まで紡がれることなく轟音へと消える……。

結界の天井に真一文字に閃光が走る！
神速で突っ込んだカナンとフェイトがグラースの鳩尾に横薙ぎの斬撃を叩き込んでいたのだ……。
また一枚、結界がガラスのように崩れる……。
そして、終わる……。
超弩級の集束砲の準備が！

「スターライト……」

漆黒と黄金が反発するように左右に分かれる。
その場に残されたのは、ひび割れた結界に沈み込んでいる、グラースのみ。
桜色は膨張し、３ｍの距離を零とする……。

「ブレイカァァァァァァァァァ！！！！」

そして、それは、容赦なしにグラースに叩き込まれ、桜色の奔流がその姿を覆い尽くす！
現砲撃魔導師の中でも最高ランクの集束砲を叩きつけられた結界は数秒ともたない。
あっさりと砕け散り、集束砲は尚、進む！
行き先は、天空、どこまでもどこまでも進む桜色は、雲を突き抜け、穿つ……。

「滅、神……」

「え……？」

未だ止まぬ集束砲の中から、ポツリと響く低い声……。
空間が割れる……。

瞬間、集束砲が曲がり、捻れ、粉砕される……。
なのはの眼前、右手に暗黒の球を持つグラースがいた……。

「黒掌」

「うっ！」

グラースの掌がなのはに炸裂する瞬間、その体は吹き飛ぶ。
突き飛ばしたのは、少年だった……。
カナンに叩き込まれた拳、暗黒の球体がカナンを包む……。
やがて、それは小さくなっていく……。

「「カナァァァァァン！！！！」」

なのはとフェイトから、悲痛な叫びが響く。
直後、球体にヒビが広がった……。

「『オオォォォォォォォォォォォォ！！！！』」

咆哮が響く！
ヒビは球体全てに行き渡り、遂には弾け飛ぶ！

「「っ！」」

あまりの衝撃波になのはとフェイトは障壁を張り、堪え忍ぶ。
やがて、何かが地面に叩きつけられた音が聞こえた。
力を使い果たしたカナンだ。

「「カナン！」」

倒れ伏すカナンに二人は飛んでいく。
カナンは最早、騎士甲冑すら纏っていない……。
しかし、二人が近づくと手をつき、起き上がる……。
その時、トンッと軽い音を響かせ、グラースが三人の前へ降り立った……。

「終わりだな……」

「やらせない！　絶対、カナンは守る！」

即座に反応したのはフェイト。
ボロボロの体で、ライオットザンバーを構え、グラースと対峙する。
なのははその後ろでレイジングハートを構えた。

「滅してやろう……」

グラースは、あれだけの攻撃を受けながら、しっかりとした足取りで歩む。
その右手には、暗黒。
なのはもフェイトも、膝が震えたのを感じるが、退く気は無かった……。

「我が、か、て……」

「さ……せ、な……い……っ」

二人は何も話さない。否、話せない。
それほどまでに目の前の光景は信じ難かった……。
もう、動くこともままならない筈のカナンが、グラースの腹部を

突き刺していた……。
その刃は、体を貫通し、背中に抜けている。
つまり、殺傷設定である。

「……」

「ガ、ァ……」

「「カナン！」」

だが、グラースが止まったのは一瞬。
カナンの髪を掴み、真横に投げ飛ばした……。
しかし、それだけ。
追撃を加えるでもなく、腹に刺さった剣を引き抜き、背後に投げた。

「やはり、貴様達の在り方は我には理解し出来ぬ……。何故、自身より弱い者のために力を振るう……。力とは、己の存在を誇示するために在るモノだ……。風間カナンよ、何故だ……」

グラースからの問いにカナンは顔を上げる……。

「理由、なんて……無い」

そうだ。俺は、バカだから。

「守りたいから……」

ヴィヴィオも、祐希奈も、メイデンも、レナスも、ハルも、クレアも、機動六課の皆も。

「護り、たいから……」

俺に関わった全ての人を！

「護るんだ！」

結局、過去を受け入れても、俺はあんまり変わってないかも知れない。

でも、いいんだ。

だって、俺はバカだから。

物分かりが悪くて、鈍くて、迷惑かけてばっかだけどさ。

皆が笑ってられるよう、頑張るって決めたから……。

「……」

グラースは何も話さず、見ているだけだ。

「でもやっぱり、カナンは無茶苦茶するから私達がいないとね。なのは？」

「うん。でも、結構慣れてきた私もいるんだけどね」

グラースを前に、なのはとフェイトは笑みを浮かべる。

油断ではない。余裕が生まれ始めたのだ。

体が軽い。そんな感覚を共有する。

「カナンやからなぁ。しっかり見てんと何するかわからへんしね」

グラースの背後からやわらかな関西の方言を混ぜた。人影が一つ……。

「全くだな。アホなことしたらあたしがアイゼンでぶっ叩いてやるか」

「いや、そんなことをすれば、かえってバカが酷くなるかもしれんぞ？」

その左右に、小柄な人影と長身の人影がまた増える。

「ってか、ひょっとしたらバカがうつるかもしれないわね」

「ね、何でこっちみながら言うの～？」

「うっさいバカ」

「ひ～ど～い～よ！」

「ま、まぁまぁ、お二人とも落ち着いてください」

漫才を繰り広げる人影と、仲介をする人影。

「こんなので良いのかな……」

「ま、まぁ、楽しいのは良いこと……の筈ですの」

「オッケーオッケー♪　文句なしだよ～♪」

「キュクル～♪」

「やっぱバカ集団だなココは……」

苦笑いをする二つの人影と、元気な鳴く動物の影、肩に乗る小さな人影。
その全てが、グラースを取り囲み、戦闘体勢を取っていた。

「これが、光の、繋がりの力か……。やはり貴様は興味深い男だ、風間カナン……。――ここで全てを滅するのは容易い」

《っ！》

グラースは冗談を言っているのではない。
放たれる波動がそれを証明していた……。

「が、貴様達はまだ強くなる余地がありそうだ……。故に今回は我は去ろう……。だが、ゆめ、忘れるな……。貴様のソレは理想だと言うことを、力無き理想なぞ、ただの妄言に過ぎんことを。貴様の護るべきモノ全てが消え去った時、まだ吠えられるかな？」

それだけ言い放ち、グラースはハルを見る。
致命傷となる傷はレナスによって塞がり一命を取り止め、今は、眠っていた……。

「今より72時間後、“あの地”にて待つ」

それだけ言い残し、グラースは消え去った……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

《終わった～！》

全員緊張の糸が切れたのか、ＦＷ陣を筆頭に大半が倒れた。
その光景を、なのはとフェイトは微笑みながら見守る。

『ダメだ……離れろ！』

瞬間、メイデンから叫びが響く！
タイムリミット……。
グラースの危機は去ったが、カナンの暴走の危機はそのままだ。

「ウゥゥ……」

拍動が始まる。
カナンから紫電が弾け、瞳は濁った赤へと変わる……。
暴走間近のカナンに近寄る人物がいた。フェイトだ。

「フェイトちゃん！」

即座に反応したのはなのは。
しかし、フェイトは笑う。

「大丈夫。カナンはそんなに弱くないよ。ね？」

カナンの眼前まで歩き、首を傾げる。
慈愛に満ちたその笑みをカナンは見た……。

「グルゥゥ……」

迷っているのか、赤く光る瞳が細くなる……。
その隙に、フェイトはさらに歩み寄り抱き締めた……。

「ほら、中身は優しいカナンのままだ……。もう、敵はいない。終わったんだよ？」

「……」

『信じられん……』

髪が短くなり、拍動は消える……。

瞬間、鎧が弾け、学ランに戻ったカナンはフェイトに倒れ込んだ……。

「メイデン、傷は？」

「今回は活動時間が短い上に、マスターも頑張ったからな。深い傷は先に治したし、後は包帯などで大丈夫だろう。ただ、ゆっくり寝させなければ……っと……」

「あ、大丈夫？」

飛行していたメイデンが急にぐらついた。

フェイトは手を差しだし、メイデンを支える。

「それは貴女もですよ。メイデン？」

不意に声が響く。

ハルの治療を終えたレナスがフェイトの肩に乗っていた。

「いや、姉さん、私は今回のデータを……」

「ダメです。システムの大半を切り離したんですから、貴女も休みなさい。修繕とデータ整理は私がやっておきますから」

「いや……しかし……」

「姉からの命令です。嫌なら無理矢理にでも休ませますからそのつもりでいてください」

「う～……」

姉には勝てないのか、メイデンは低く唸る。

とはいっても、涙目で唸っているだけなので、他からすれば可愛らしいだけなのだが……。

「じゃ、メイデンも私の部屋においで。カナンの治療もするから、隣にいられるよ？」

「良いのか？」

「もちろん。今日くらい、いいよね。なのは？」

「ふぇ？　あ、え～と、うん。良いよ？」

いきなり話題を振られたために、なのはの口調が少しおかしい。

そのことを少し笑いつつ、フェイトは頷く。

「では、フェイトさん、ふつつかものの妹ですが、よろしくお願いします」

レナスの天然に、フェイトはキョトンとして、ニッコリと笑った……。

「……妹さんは幸せにしますって言えばいいのかな？」

予想外のフェイトの言葉に、メイデンは首が鳴るほどの勢いでフェイトに向く。

「私は結婚するのか！？　というか出来るのか！？」

「あはは。可愛いなぁ」

「わ～！　わ～！　だだだ、だから私は可愛いくないんだ！」

カナンを抱き上げ、賑やかにフェイトは立ち去る。

そんなフェイトをなのは達は呆然と見送る。

「な、なんや、もしかして、フェイトちゃんカナンのお母さんにでもなってるつもりなんやろか？」

「気に入った子には甘いからねぇ。フェイトちゃんは……」

そんなことを言いつつ、皆笑う。

取り合えず、危機は去ったことを喜ぶこととしたのだった。

外伝　税一周年（前書き）

祐「2日オーバー2日オーバー2日オーバー」

すいません……ホントすいません……。

ひたすらに謝りつつ、カオスな中身、そして、毎度毎度、勝手な召喚すいません！

最後に、一年間、読者の皆様、作者の皆様に支えてもらい、ここまで来ました。

本当にありがとうございます。

これからも、キャラ達共々、よろしくお願いします。

では、一周年特別丸ごとネタ一本、どぞ（笑）

外伝　税一周年

祐希奈「税？　題名間違ってやんのって思った読者、直ちに私に税を納めなさい♪」

カナン「いきなりのフェイク！？　題名すらネタに使うってどうなんだ！？」

祐希奈「全て私だから許される。これ、世界の常識♪　どれくらいかって言うと、息するってのと同義なくらい常識♪」

カナン「無茶苦茶すぎんだろうがよ！？　そして今更だが、なんの税だ！？」

祐希奈「カオス税」

カナン「もんの凄い真顔で言われますね！？」

祐希奈「ちなみにこれの常識レベルは……」

カナン「ヴィヴィオ、始めてくれ……」

ヴィヴィオ「あ、うん。改めまして、皆さんこんばんは。リリカルヴィヴィオ、通称ＬＶ、一周年記念会場へようこそ～」

カオス！　カオス！　カオス！　メイデンは俺の嫁！
カオス！　ＬＶ！　カナメは俺の嫁！　カオス！　カオス！

ヴィヴィオ「盛大な大半カオス時たまおかしなコールありがとうご

ざいます」

カナン「……」

ヴィヴィオ「どうしたの？」

カナン「あ～、俺から一言……。ヴィヴィオはスピーチ内容おかしいし、一周年記念なのにＬＶコール一回っておかしいだろうが！後なぁ……メイデンを貴様らの嫁になんかやらん！　カナメとか言ったボケは消え去りやがれぇぇぇぇぇぇ！！！」

カナメ「いつも～♪　振り向けばそこに～♪　カナメちゃん」

奈津美「アンド～♪　奈津美ちゃん♪」

カナン「出てこんでいいからかえってくれぇぇぇぇぇ！！」

レン「相変わらず、いつ来てもここは凄いな……」

凛「何故か、いるだけで背中に冷たいものが流れるのですが……ここ、おかしいんじゃなくて？」

レン「心配すんな。すぐに染まる」

凛「染まるって何にです！？」

祐・レ・カ「カオス因子」

凛「いやですわよ！」

メイデン「まぁ、凛さん、落ち着け」

レナス「ここでは逃れようもないことですから」

カナメ「安心して身を任せるといいですよ♪」

凛「なんか、もうどうでもよくなりましたわ……」

ヴィヴィオ「さて、遅くなりましたが、今日のゲストは……」

誰が呼んだか叫んだか、文句無しのチート主人公！
頭もよくて、強い、さらにはカッコいい！
ヘタレキャラの敵か味方か中立か、一番微妙な位地に立つのはこの男！
唯我独尊傲岸不遜の完全無欠！
レン・テスタロッサ！

そして、最早作者もどうしようかと悩むほどの強さを見せつけた運用部の部長さん！
スラリと伸びる長い足、きめ細かい美しい肌、全てを見通す聡明な瞳。
だが、誰もが怖れるその姿は、美しすぎて近づけない、水面にただ一つ浮かぶ睡蓮。
ツンツン若干Ｓ系最強美人！
海城・Ｇ・凛！

詳しくは、樟葉櫂さんの書く、ＥＯＳＥを読んでみよう！

ヴィヴィオ「はぅ～……パワー切れだよ～……」

祐希奈「ほら、ヴィヴィオ、マロングラッセ。あ～ん♪」

ヴィヴィオ「あ～ん。……んぐ。美味しいよ～♪」

祐希奈「復活？」

ヴィヴィオ「うん♪」

レ・凛「……」

カタカタカタカタ……

カナン「ま、まぁまぁ、抑えて抑えて……」

祐希奈「我慢出来るかぁぁぁぁあああああ！！！！」

カナン「えぇぇぇ！？　そっちぃぃぃぃ！？」

バキャァ！

祐希奈「なんで、なんで、ヴィヴィオがあんな口調してるのよ。おかしいでしょうが！　なんか言ってみなさいよ！　どーなのよ！！！」

バキッ！　バキッ！　バキッ！

カナン「げふっ！　いや、俺に、言われても！」

祐希奈「アンタが知らなかったら誰が知ってんのよーー！！」

バキャァ！

カナン「ごふぁぁああ！！」

ザザザー……

祐希奈「答えは私が知っている♪」

カナン「意味わからんわぁぁあああああ！！　損か！？　蹴られ損か、あぁ！？」

祐希奈「烈破爆砕拳！」

ドゴォ！

カナン「なんでじゃぁぁぁぁあああ……」

祐希奈「……カッとなった？」

カナン「そのネタ引っ張るのやめぇぇぃ！」

カナメ「このネタがわからない人は感想欄、テスタメントさん感想、しーちゃん＆amp;タカト漫才をご覧ください♪」

凛「何も言う気が起きないのは私だけですの？」

レン「なんつうかさ、取り合えず、やっぱ祐希奈凄ぇとしか言えないよな……」

祐希奈「同じ吹っ飛ばし方でも千差万別に使い分ける、これ、カオスの基本なり……」

レン「俺の場合、吹っ飛ばすっていうよりは、死刑に近いからな。無理だ」

凛「私は……拷問に近いですわね」

ヴィヴィオ「……どれにしろ危ないから止めた方がいいと思います……」

祐・レ・凛「嫌ね／だな／ですわ」

カナン「相変わらずの嬉しくない即答だが……何か一瞬で答えが想像できた俺が一番悲しいわ！」

奈津美「よしよし。カナン君、お母さんの胸に抱きついてきていいよ？」

カナン「母さ……ってさりげに誘導しようとしてないか！？」

奈津美「え、ううん。カンペが出てたから……」

カナメ「惜しいですね……」

カナン「こんのクソッタレがぁぁぁああ！！」

カナメ「カナン君、女の子にそんなこと言っちゃダメですよ♪」

奈津美「そうだよ？　女の子には優しくしてあげなきゃ」

カナン「え、いや……」

凛「……それとも、貴方はその方が男だとでも？」

カナメ「そんなこと言わないですよね～♪」

ヴィヴィオ「カナン君、カナちゃんは女の子だよ？」

祐希奈「こんな男いたらひくわね……」

ジル「ある意味、萌えるがね！」

カ・レ・祐「お前は出てこんでいいわぁあああああ！！！」

ジル「はっはっは。なんだいなんだい、皆して僕を邪険に扱うことは無いじゃないか。この、ラブハンターであるジル・ローディアスをそんな扱いにするとは愚の骨頂と思わないかい。そうか、やはりそう思うかい。はっはっは！　案ずることはない！　僕は君達がツンであることくらいすでに理解しているからね。思う存分ツンツンするがいいよ！」

レン「ホーリーギャラクシー……」

ガチャ。

クレア「皆様～、お茶ですの～って、え？」

ハル「やれやれ。久しぶりに来てみれば……」

ゴヒュ！

クレア「ハル！？」

レン「ブレイ……」

ハル「すいませんが、邪魔させていただきますよ」

ゴウッ！

ガコッ！！

レン「おわっ！」

ドギャァアアン！

カナン「ぎゃぁあああああああああああ！！！！」

なぜなに、ＬＶ～♪

祐希奈「はい、本日も始まりました祐希奈と」

ヴィヴィオ「ヴィヴィオの～」

祐・ヴ「なぜなにＬＶ～♪」

祐希奈「さてさて、本日も始まりまったけど、ヴィヴィオ、今回はどうなったわけ？」

ヴィヴィオ「一から言うと、耐えられなくなったレンさんがジルさんに集束砲を撃とうとしたみたい」

祐希奈「で、ハルとクレアが来たのよね？」

ヴィヴィオ「うん。それで、ここを壊されちゃたまらないと思ったハルさんはレンさんの前に走ったわけだね」

祐希奈「そこでゴウって音がなって変な音が鳴ったと」

ヴィヴィオ「あれはね、ゴウって言うのが、ハルさんの回し蹴りの音で、ガコっていうのがレンさんのデバイスが蹴られた音」

祐希奈「で、方向が変わって、カナンに当たったと」

ヴィヴィオ「では皆さん、続きをどうぞ～♪」

祐希奈「とかまぁ、アホなことやってる間にケリついてるわね」

ヴィヴィオ「あ、ホントだ……」

カナン「ぐぁぁ……」

シュゥウウー……。

ジル「これが、オメガツンか……」

レン「俺がやらなくても結局終わってるしよ……」

凛「私は矢ですから、執務官長ほど酷くはありませんわ」

ハル「どのみち、用意したお茶が消え去ったのは事実ですよ？」

クレア「勿体ないですの～……」

ヴィヴィオ「ハルさん怒らないんですか？」

ハル「まぁ、ジル様相手なら妥協しましょう」

レン「で、カナンはほっといていいのか？」

祐希奈「次のページでは起きてるわよ。じゃ、ゲスト召喚は終わりだけど、レンさん達は引き続きよろしく♪」

凛「もしかして、私達が最初に呼ばれた理由は……」

祐希奈「どうせ次で引っ張り出すからついでよ」

レン「だろうと思った……」

ヴィヴィオ「では、このページとはこの歌でさよならです。曲はしーちゃんはね。どうぞ♪」

カナン「なんかいろいろ待てぇぇぇい！」

しーちゃんはね。
編曲：祐希奈
歌手：ヴィヴィオ

しーちゃんはね、シオンて言うんだホントはね。
だけど、カオスに染められ私の子供になったんだ♪
可愛いね。しーちゃん♪

しー「絶対なんか言われるだろぉぉぉぉぉ！！！」

祐希奈「ほら、あんたの出番はまだ先よ？」

しー「嫌だぁあああああああああ！！！！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ア「アリサど～じょ～！」

す「Ｅ・Ｘ！」

ぴしゃーーん！！

しー「待てぇぇぇぇぇ！！！」

ア「うっさいわね。いきなり何よ？」

しー「いやいやいやいや！　ＬＶッスよね！？　なんでＥＸになってるんスか！？」

ア「はぁ？　最初っからＥＸだったじゃない。アンタの暴走も終わってるし」

しー「いやいやいやいや！」

す「しーちゃんそれハマってるの？」

しー「いやいやいやいや……」

ア「やっぱハマってんじゃない」

しー「だから違います、て。勝手に終わらせちゃいけませんし、何むちゃくちゃを……」

ドゴッ！

祐「祐希奈ど～じょ～！」

ヴ「Ｅ・Ｘ！」

カ「待てぇぇぇぇぇ！！！」

祐・ア「同じネタを二回も使うな！」

ドキャ、バキッ！

カ・しー「えぇぇ……」

ザザザー……

ヴ「あれ？　なんでＥＸのアリサ道場が……」

す「なんだかわからないけど気にしちゃ負けなんじゃないかな？」

ヴ「えと……はい。気にしないようにします」

ア「これは、まぁ、アレね♪」

祐「うん。アレね♪」

ア・祐「「カオスがカオスを求め合い、お互いの道場を次元を越えて合体させたという謂わば、カオスの融合現象」」

カ「あり得ねぇだろ……」

しー「てか、息ぴったりな所からして示し合わしてたな……」

ア・祐「「カオスがカオスを求め合い、お互いの道場を次元を越えて合体させたという謂わば、カオスの融合現象……」」

軋！

カ・しー「アイ、アイマム！！」

Mレン「なんというか、難儀な二人だな……っていきなりメイド化かコラァァアアア！」

凛「何がどうなってこうなったのか、全く理解出来ませんわ……」

す「レン君と……」

凛「初めまして。海城・G・凛と申しますわ」

ペコ

す「あ、ご丁寧に。月村すずかです」

ペコ

レン「二つ名は神速の弓術家　（ファステック・アーチャー）で通

ってる」

ア「……究極の神、アルティメット・オブ・ゴットで通ってるアリサ・バニングスよ♪」

祐「……究極にて混沌の女帝、アルティメット・オブ・カオスクイーンで通ってる一之瀬祐希奈よ♪」

カ「いや、祐希奈、凛さんはお前のこと知ってるだろ……」

祐「なんか、二つ名言われると負けてる気がするから改めて紹介したまでよ」

カ「理由そんだけ!?」

祐「うっさい……。蹴り飛ばすわよ小僧……」

カ「理不尽だけどごめんなさい!!!」

祐「ほら、アンタも跪きなさい」

しー「関係……」

祐「蹴るか……」

しー「ごめんなさい!!」

ア「さて、下僕が跪いた所で、メイドレン、準備しなさい」

Mレン「逆らっていいか?」

ア「スク水か、巫女服か、シスターか、ナースか、貝殻ビキニなんてのもあるし、はたまた女体化して下着にYシャツとかもあるけど、どれがいい？」

Mレン「メイドでいいです……」

祐「違う違う♪　が、に言い直して♪」

Mレン「メイド“が”いいです……。うわぁぁあああああああ！！！」

ア「“が”は可哀想ね。“も”にしてあげるわ♪」

祐「さん、はい♪」

Mレン「え、あ、メイドもいいで、す……」

ア・祐「変態♪」

Mレン「うわぁぁあああああああああああああああああああああああああ！！！！」

チーン……。

凛「あの、元気を出してくださいませ？」

Mレン「かつて無いほど精神的に抉られてる気がする……」

祐「ほら、さっさと準備しなさいよ変態♪」

ア「うちのメイドに負けるわよ。変態♪」

舞台裏

Mレン「理不尽だ……」

巫未来「それも大分なれたじゃないですか……」

Mレン「そうか……。EXも繋がってるってことはお前もいるんだったな……」

巫未来「出来れば逃げたい……あの二人がいる限り、叶わない願いですけど……」

Sタ「話してる暇があるならレン先輩も未来も手を動かせ。いつまでにたっても完成せん……」

Sル「そうだ……。ステージ丸々作らないといけないんだからな……」

カラカラ……

S翔「食材の方はなんとか調達してきたぞ……」

Sハ「やはり、この姿で調達に行くのは精神的に辛すぎます……」

Mレン「お前らは……」

巫未来「シープバ……」

Ｓタ・ハ「ヒュ！」

轟！

Ｓル・翔「はっ！」

閃！

巫女未「……」

Ｓズ《禁句だ／禁句です》

Ｍレン「お前ら、その格好のせいで余計こえぇよ……」

なぜなにＬＶ～♪

カ・シ「ネタがあぶねぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

祐「黙れヘタレ小僧共が……。私とアリサがいるんだから何しようがいいのよ……」

カ・しー「すいませっ！！」

ア「惜しい。後コンマ一秒速ければセーフよ♪」

バッキャァァアアア！！！

カ・しー「嘘だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーー……」

きらーん♪

ヴ「……はい、皆さんこんばんは」

祐「なぜなにＬＶの時間よ♪」

ア「これは、どうなったかを簡単に説明するコーナー♪」

す「というか、カナン君としーちゃんの二人はスルーなんだね……」

祐・ア「ヘタレだから」

ヴ「あはは……。多分二人なら大丈夫かと……」

祐「あの二人はどうせ死なないから、そんなことより有意義な未来さんの状況解説お願いするわ」

ヒュルルル……

ズゥゥゥン……

ガバッ！

カ「確かに死にはしないがな、ちょっとくらいは気にかけません！？」

しー「てか、俺らの安否より未来の状況解説のが優先度高いってどういうことだよ！？」

ア「ヴィヴィオ、いいから言っちゃって」

カ・しー「スルーはやめてくれぇぇぇぇ！！」

祐「オーケーオーケー♪」

煌！

カ・しー「そっちはいらねぇぇぇーー……」

ヴ「い、いいのかな……」

ア「大丈夫大丈夫。どうせ死なないから」

ヴ「は、はぁ。状況だけ言うと、タカトとハルさんが未来さんの前後から回し蹴りを放って、ルミオと翔さんが左右から剣を突きつけてるってことだね」

す「怖い場面だけど、シープ化してるから面白いけどね」

もこもこ羊着ぐるみを着た四人が巫女未来に上記のことをしている場面をよく思い浮かべてください♪

祐「なんていうか、爆笑っていうか、地味にこない？」

ア「ええ……。逆に地味過ぎて凄いわね……」

す「ギリギリで面白いって感じだね」

ヴ「ちょっと凄いや……」

なぜなにＬＶ　　完。

カ・しー「俺ら最後までスルーされた！？」

飛ぶのがお前らの役目さ！

カ「よし……」

しー「斬るか……」

Ｓタ「邪魔だ……」

煌！

カ「俺だけぇぇぇーーーー……」

しー「いや、タカ兄ぃ、言葉通じるからさ……」

Ｓタ「ツッコミだ」

しー「そのボケがいつまでも通じると思うなよ！？」

Ｓタ「……つい」

しー「カッとなったネタもさせねぇよ！！」

Ｓタ「む……」

瞬間、タカトの体が不意に揺らいだ……。

Ｓタ「おっと……足が滑った？」

煌！

しー「新ネタぁぁぁーーーー……」

Sハ「ほら、タカト、貴方がいなくかったら進みが遅くなりますし、お願いしますよ」

Sル「アイツらとじゃれ合いたいのはわからなくもないが……」

S翔「頼むぞブラウニー」

Sタ「済まんな」

その後四人は即席とは思えないような連携でステージを組み立てていく……。

Mレン「俺達さいらなくね？」

巫女未「この格好じゃ手伝えないですから……」

Mレ・巫女未「はぁぁ……」

ちなみにこれは神の陰謀だったりする。

五分後……完成

カ「早っ！」

しー「明らかに人間業じゃない気がする……」

祐「だって、羊だし」

カ・しー「成る程！」

Ｓズ「あ～手が……」

カ・しー「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！」

ア「ま、取り合えず……レディース&ジェントルメーン！　今夜は盛り上がっていきましょーーーー！！！」

ワァァアア！！！

祐「さて、いよいよお待ちかね、名言&名シーン、再現祭りよーーーー！！！」

ワァァァアアアアア！！！

祐～希～奈！　ア～リ～サ！　祐～希～奈！　ア～リ～サ！
カオスばんざぁぁい！！！

しー「もの凄いいろいろとツッコみたいことがありすぎてどこにツッコめばいいかわからなくなりつつあるが、取り合えず、相棒！」

カ「応っ！　祭りだとかんなもん聞いとらんわぁぁぁあああああああああああああ！！！！」

ア・祐「言ってないし」

カ「込めたのに……渾身の力を込めたのに……あっさりバッサリ頭からズバッと切られた……」

ぽんぽん

しー「カナン、泣くなよ。後でゆっくり飲もうぜ？」

カ「あぁ……」

ヴ「しーちゃん、5歳なのにお酒なんて、めっ！　カナン君ももちろんダメだよ？」

しー・カ「意外な所にもう一人敵がいた……」

す「あはは……。もう笑うしかないね」

ア「まぁ、ヘタレ共がどうなろうが知ったこっちゃないってことね」

凛「バニングスさん？」

ア「ん？　どしたの部長さん？」

凛「いくらなんでもこれは人権……」

祐「成る程成る程。流石の部長さんでもしーちゃんがいるから可哀想、と。でも、安心して♪」

凛「わかっていただけたようで……」

祐「ヘタレに人権なんて無い。これ、世界の常識♪」

カ・しー「変な常識を作るなぁぁあああああ！！！」

ア「ま、そういうわけだから、名シーンの中から台詞抜粋して、上位三本、やっちゃうわよ♪」

カ「また、またか……」

しー「なんか俺達、今回はツッコンではスルーされ、飛ばされるの繰返しじゃないか？」

カ「そんな気もするな……ははは……」

まぁ、アリサの言う通りにヘタレは無視して、上位三本ランキングにレッツゴーです♪

カ・しー「作者ぁぁあああああああああああああああ！！！！」

はっはっは。君らの叫びは我が糧じゃよ。

祐「さてさて、第三位♪　メイデンとレナス、ユニオンシーンに三票」

ア「二人共、カモン♪」

ポン♪

メ「な、何だ！？　私達も出てもいいのか？」

レ「人数が危ないのでは？」

祐「人ならざるモノも出てるからオーケーよ♪」

カ「誰のことだこらぁぁあああ！！！」

ア「アンタ達」

しー「やっぱり即答！？」

メ「それで、呼び出された理由はなんだ？」

祐「ユニオンした時の名台詞言って♪」

レ「それは、何故です？」

ヴ「祐希ちゃん達は楽しいからやってるだけだから、理由なんてないんだよ」

祐「そゆこと♪」

レ「は、はぁ……」

メ「名言、といってもな……」

レ「最後の台詞でよろしいですか？」

す「いいと思うよ？」

レ「では……メイデンからですね」

メ「わ、私か……。恥ずかしいな……」

メ～イデン！　メ～イデン！　メ～イデン！　俺の嫁ぇぇ！

カ「てめぇら頭から斬るぞこらぁぁあああ！」

ヴ「わ、メイデン！　早くしないとカナン君暴れそうだからお願い」

す「それでは第三位、メイデンとレナスで、主カナン君のために体を張って止めようとするシーンから」

メ「……マスター、貴方は強い。
貴方の意識は闇に飲まれていないと信じている……。
私達は、全力で貴方の意識を呼び覚ます……。
聞こえたなら……答えてくれ……」

レ「私も、メイデンも頑張りますから……。主も頑張ってください……」

メ・レ「「ユニオン……ドライブ……」」

メ＆レ（ユニ）「貴方には帰るべき場所がある……。待っていてくれる人もいる……。一緒に帰ろう……マスター……」

ワァァアアアアアアアアアアアアアア！！！！

祐「うん、カッコいいじゃない♪」

ヴ「わぁ～わぁ～♪　二人とも凄いよ～♪」

ア「本当にカナンなんかデバイスにはもったいないわよ」

す「それは言い過ぎかも……」

凛「それにしても、合体とはおそれいりますわね」

メ「凛さんだったか、それが出来るのは私達は元々の設計がほぼ同じだからだ」

レ「普通ならそんなことをすれば、一方は消えてしまいますから」

凛「でしょうね。まぁ、あの少年は良いパートナーを見つけたものですわね」

カ「ぶった斬る！」

ぎゃあああああああ！

凛「普段はアレですが……」

ア「メイデン達お疲れ。取り合えず、観客斬ろうとしてるバカ、止めてきてくれる？」

メ「ああ。そうしようと思っていた」

レ「では、皆さん失礼しますね」

祐「さてさて、票数のポイントを言って無かったわね。三票で、えっと八ポイントね」

ア「中々ね～♪　さて、二位はこの人」

ポン♪

ハ「おや、シープ化は解けましたか？」

祐「ま、真面目なとこだしね♪　話、わかってる？」

ハ「まぁ、舞台裏で聞いてましたからね。名言でしたか？」

ア「ハルは……別れの言葉、九票」

ハ「どちらの、ですか？」

ヴ「えと、友達陣からの要望は電話の方が別れの言葉っぽいとのことです」

ハ「了解しましたが、アレは彼との電話ですよ？」

祐「こんなこともあろうかとカナンの台詞は録画しといたわ♪」

一同「いつのまに……」

祐「神だから♪　じゃ、流すわよ～♪」

カ『お前、俺に言いたいことあるのか？　言えよ。俺にも聞いてやるくらい出来るしな』

ハ「敵いませんね、君には……」

カ『阿呆。理由も無しにお前が電話なんて使うか？　誰でもわかるって。で？』

ハ「僕に代わってお嬢様をお願いします」

カ「は？」

ハ「それと、ありがとうございました……」

カ『ハル？　意味わかんねぇって！』

ハ「君のお陰で、短い間でしたが、楽しめました……」

カ『おい、聞いてんのか！？　ハル！！』

ハ「僕の“最期”の友、風間カナン……さようなら……。言いたかったのはこれだけです。では……」

カ『最後！？　最後って、さよならってなんだよ！！　説明しやがれ！！　ハル！！

ツーツー……

カ『……あんのボケ！！』

ハ「ボケ扱いとは、カナン君も酷いですね」

祐「なんか、会話聞いてると、いい話っていえばいい話なんだけど……」

ヴ「うん。納得出来ないよね。強引過ぎて……」

ア「ってことでハル、散りなさ……ってアレ!?」

す「ハルさんならあははは～では～とか笑いながら凄いスピードで逃げてったよ?」

祐・ア「あんのボケ!!」

ヴ「あの、それカナン君の台詞……だよ?」

祐・ア「ツッコミが温い子は黙ってなさい!」

ヴ「ふぇ……」

しー「ま、まぁ、ヴィヴィオ、元気出せ、て」

ヴ「ママって呼んでくれたらでるよ……」

しー「それだけは嫌なんだが……」

ヴ「ひっく……ぐす……」

Sタ「そ～らを自由に、飛～びたいか～……。カカカカカカカ」

しー「ヴィヴィオママぁぁぁぁ!!!　俺がいくらでも呼ぶから泣き止んでくれぇぇぇ!!!!」

ヴ「ギュってしていい?」

しー「好きにしてください！」

ヴ「わぁ♪」
ギュっ……

Ｓタ「さて、絞めるか……」

しー「逆効果だったぁぁぁあああああ！？」

ヴ「しーちゃんいじめたら私タカト嫌いになる……」

Ｓタ「な、何……」

しー「ヴィヴィオママすげぇ！！」

ア「何かアホなことになりつつあるわね……」

凛「それは、もうしょうがないのではなくて？」

す「だね～」

祐「ま、一位は……アレか……。ちなみに私は嫌いね」

ア「あ、成る程わかるわ。取り合えず、カナ～ン、出番よ～？」

カ「はい？　俺っスか？」

メ「だそうだぞ。マスター、いってこい」

レ「そうですよ。ほら、観客さんはおいておきましょう」

カ「しゃあないか……次変なこと言ったら斬るからな……」

イェッサ～……。

カ「で、どこの台詞っスか？」

ア「ココ」

カ「うわぁ……よりにもよって……」

す「え～、一位はカナンＶＳスカリエッティ、カナンから二人への別れの言葉です」

祐「まぁ、読者さんもこれはほとんど入れてたからね……」

ヴ「それ、なんだ……。ちょっと好きにはなれないかなぁ」

カ「まぁ、ぶっちゃけ俺もだけどな、協力頼む」

祐「はいはい。我慢してあげるわよ」

ヴ「しょうがないもんね。うん。いいよ」

ア「じゃ、張り切ってどうぞ～」

ス「そんなゴミをまだ守るとはね、興醒めだ！！　一緒に死ぬといい！！」

　快楽を邪魔された怒りか、スカリエッティはグングニルの先端から砲撃を放ち、カナンごと消そうとした。

カ「おおおお！」

カナンは剣を縦に振り、砲撃を切り裂く。
出血は止まらず、血の水溜まりが出来ていく……。

ヴ「やだ！！　やだよ！！　大丈夫だから！！　そんなに無茶しないで！！　カナン君が死んじゃうよ！！」

祐「私ならそれくらい防げるから！！　カナン！！　やめなさい！！」

カ「俺は……お前達に会えて良かった……
だから、お礼の言葉を言うから聞いてくれ……」

ヴ「そんな……」

祐「お礼なんて後でいいわよ！！」

カ「今、言いたいんだ……。
祐希奈……お前には小さい時から迷惑かけたな……。
やり方は無茶苦茶だったけど、アレは俺が一人にならないようにしてくれてたんだよな……
なのに……酷いこと言ってごめんな……。んで、ありがとう……」

祐「そんなこと言わなくていい……。止めてよ……」

カ「ヴィヴィオ……。お前と過ごした時間は短かったけど、ずっと前から友達みたいな感じで、すっげぇ信頼出来た……。
俺って肝心な時に鈍くてな。何回も泣かせてごめん……。

んで……一緒にいてくれてありがとな……」

ヴ「聞きたくない！！　聞きたくないよ！！」

カ「お前等と過ごした毎日が楽しかった……。
お前等とずっとバカやってたかった……
これで礼は終わりだ……じゃ、行くとするか！！」

スカ「なっ！？」

カナンは力を込め、赤い砲撃を切り裂く。
納刀……。

カ「最期に……、ヴィヴィオ……約束守れなくてごめん……」

ヴ「っ！！　カナン君どこにもいかないって！！　俺は死なないって言ったよね！？
約束は絶対守ってくれるんじゃなかったの！？」

カ「守りたかったけどな……。もう……これしかお前等を助ける方法が無いんだ……」

そう言って振り向いたカナン君の顔は笑顔……。
ただ、世界で一番悲しい笑顔だった……。

カ・ヴ・祐「「「終わったぁぁあああ～～」」」

ドサッ

ア「お疲れ～。ナイス演技力だったわよ♪」

す「思わず涙が……」

しー「今思うと、カナン、よく生きてたな」

カ「その言葉はシオンにも言えるけどな……」

しー「う……」

ヴ「そうだよ～。無茶しちゃダメっていつもいってるのに……」

しー「いや、だけど、無理と無茶は俺の特徴であり、得意技であり、燃えの発端でもあるわけでてすね？」

祐「最近空気だったけどね」

しー「言うなよ！？」

ア「そんなだからたまに活躍すると殺られるのよ」

しー「殺られてません！」

ア「だから、これはアンタの暴走の後の話だから、アンタは死んだのよ♪」

しー「まだ引っ張ってた！？」

カ「まぁ、とにかくお前と俺は似た者同士ってことだ。死ななきゃいい。お話くらい何べんでも聞いてやるさ」

しー「そう、だな。怒られるって幸福なことらしいし、お話くらいなら……」

祐・ア「よっしゃぁぁあああああ！！！」

カ・しー「へ？」

祐「じゃ、早速いくわよ♪」

カ「ど、どこに？」

ア「そりゃあ、もちろん♪」

しー「も、もちろん？」

祐・ア「ＫＤＧ総会に♪」

カ・しー「いいいいいいやぁぁぁぁぁぁああああああああああああ！！！！！」

祐・ア「あははははははははははははははははははは♪♪♪」

ズルズル……。

ヴ「わぁ……」

す「取り合えず、黙祷……」

南無～。

ヴ「えと、大半のメンバーがいませんが、これにて今日は解散となります」

す「皆さん、最後までお付き合いいただき」

一同「ありがとうございました～」

レン「やっと出ていいのかよ。何しに来たんだ……」

凛「まぁまぁ、ぼやくのは後にしてくださいな」

巫女未「で、俺の巫女化は最後まで解けないと……もう慣れたけどな……」

Ｓル「んなこと言ったら、俺だってシープ化したままさよならだ。しかも出番裏方の一回だけだしよ……」

Ｓハ「ルミオ、執事は影、ですよ?」

Ｓタ「うむ。目立つ必要性はない」

Ｓ翔「でも、俺達は主人公だからちょっとは出たいってとこも考慮してくれないか?」

Ｓハ「だからこそのこの会話でしょう?」

Ｓル「この会話の意味そんだけかよ……」

Ｓタ「ではヴィヴィオ、続きを言うといい」

ヴ「あ、うん。ＬＶは恐らくまだまだ続きます。時間はかかるかもしれませんが、温かい目で、時には厳しく、よろしくお願いします」

メ「メッセージ感想等は、とても励みになっているそうだ。私から礼を言う。ありがとう」

レ「たまに遅くなることもありますが、返信は返すらしいですから、ご心配なく」

ヴ「では皆さん」

一同《さようなら～♪》

終幕♪

外伝　税一周年（後書き）

さてさて、次回はようやく日常に戻った話の予定です。
更新は未定ですが、どれだけ早くても一週間くらいかと（汗）

では、皆様、また次回に♪

第三十三話　Ｔｉｍｅ　Ｌｉｍｉｔ　３Ｄａｙｓ（前書き）

ははは。一日どころか半日しか進められなかったです……。
きちきちになっても日付を進めた方が良かったかもですね。

毎度のごとく前書き召喚だけで２５００文字あります。
ＺＥＲＯさん後書きに出せなくて申し訳ありません。
ネタが浮かばないかと思ったのですが……。

まぁ、個人的な話はさておき、見直しはしましたが、出来立てなので、ミスがありそうです。指摘があればよろしくお願いします。
ではどうぞ。

第三十三話　Ｔｉｍｅ　Ｌｉｍｉｔ　３Ｄａｙｓ

祐「皆さんこんばんは、はたまたこんにちは～ってなわけなんだけどさ、この話、書く意味あったわけ？」

カ「いやまぁ、和んでくれってことで……」

ゼロ「ＬＶに和みなんかいらねぇんだよ！」

ドゴッ！

カ「えぇ……」

祐「さて、本日のゲストは、リリカルなのは、ＳｔＳ、ＺＥＲＯＳＴＯＲＹ――絆――から、ゼロ・Ｓ・アームストロングよ♪」

ヴ「初めまして～」

ゼ「ああ、初めまして。こっちのヴィヴィオは随分大きいみたいだな」

ヴ「１３歳ですから」

カ「つ～。なんで前書きに……」

ゼ「それは、貴様が逃げそうだったから先回りして殺しに来ただけのことだ……」

祐「まぁ、ぶっちゃけ、ネタが浮かばないから前書きに出されたっ

ていう裏話が……」

ヴ「祐希ちゃん、それ、言っちゃダメなんじゃないかな……」

カ「いや、確実にダメだ……」

ゼ「何を言う。祐希奈様の判断に間違いはない！　ふざけたことぬかすと殺すぞ……カナンだけ」

カ「俺だけってつけんなよ!!　他にもいるだろ！」

ジ「はっはっは！　世界中の美女は僕のものさ！」

カ「アレとか！」

ゼ「あんな得体のしれない輩触れたくもない」

カ「じゃあ、俺も得体のしれない奴でいいよ！　不気味だろ。触んなよ！」

ゼ「害虫は駆除するだけだが？」

カ「おかしいだろうが！　何で!?　何で俺は触れてアイツは触れねぇんだよ!?」

祐・ゼ「へ」

カ「最早言わなくても雰囲気でわかるわ！　ヘタレだからだろ！」

ヴ「すご～い♪」

カナンはヘタレーダーの能力を手に入れた♪

カ「いらねぇぇぇぇぇぇ！！！」

祐「しょうがないわね……ゼロ」

ゼ「御意に祐希奈様」

シュバ！

カ「さっきから思ってたけど、あの人なんで様づけ？」

ヴ「あのね、最初はカナン君の味方だったはず、なんだけど、途中から祐希ちゃん大好きになっちゃったみたいで……」

祐「これぞカリスマ♪」

カ「嫌なカリスマだな！？」

シュバ！

ゼ「祐希奈様、ＥＸにも張ってきました」

祐「うむ。ごくろう♪」

しーちゃんはヘタレーダーを覚えた。

そして、カナンとの合体技、ツインヘタレーダースキャンを使用可能となった。

カ・し－「『いらねぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！』」

ゼ「お前達にこれほどに便利な技はない。祐希奈様に感謝するんだな」

カ「一応聞くが、効力は……」

祐「その会におけるＨＭＰがわかるようになるわ♪」

カ・し－「『やっぱりいらねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！』」

ヴ「あはは……。でも、いつか役に立つかもしれないよ？」

カ「例えば……」

ヴ「え！？　えと……それを逆算して要所で急所を避けられる、とか？」

カ「アイツ相手に？」

祐「あはは♪」

ヴ「……無理だね」

ゼ「祐希奈様がそんな甘い筈がないだろ。完膚無きまでにフルボッコにし、貴様らは木端微塵だ」

カ「死んでるよな、それ……」

ゼ「ああ。潔く死ね」

ジャキ！

ゼ「な、に……！？」

ヴ「しーちゃんは殺らせないよ……。どうしてもって言うなら、撃ち抜くけど、良いよね……」

しー『なんか、嬉しいけど物凄い悲しいんだが……』

カ「だろうな。ってか、子供じゃないって誤解はいつ解けんだろうな……」

祐「そもそも、しーちゃん化がいつ解けるかすらわかんないわよ♪」

しー「そろそろ作者も飽きるだろ。いくらSだっつっても、限度が……」

ヒラリ……

ゼ「祐希奈様、こんな紙が落ちて来ましたが？」

祐「お♪　我が同士からよ♪」

いやぁ、まだまだですよ～♪　主人公たるもの、弄る時には弄りませんと♪　ふふ……

作者Tより

しー『何だろ……。俺の敵は、おっちゃんでもタカ兄ぃでもなくて、

アイツな気がしてきた……』

ゼ「奇遇だな。それは俺も思う所がある」

カ「俺は違うな……。作者の予定すら狂わす奴がそこにいるから……」

祐「真の主人公は私だからね♪」

ヴ「私はね、タカトの一番の理解者で、しーちゃんは私の妹として登場するんだ～♪」

カ「ちょっと待て。それ、ＥＸの感想欄のリリカル祐希奈ＥＸだよな!?　シオンが黒子からいっきに格上げされてないか!?」

しー『心境としては微妙だけどな……』

祐「ゼロも出演する？　配役は～立ちふさがる敵で、仲間になるみたいな♪」

ゼ「面白そうだ。是非やりましょう。祐希奈様！」

祐「じゃあ、告知告知♪」

次回、ＬＶが生まれ変わる！
ＥＸを書くスーパーなバトルを生み出してきたテスタメントさんと、ＬＶを書く、スーパーなカオスを生み出してきたヨシュアがついにクロス！
魔法少女リリカル祐希奈Ｅ・Ｘ！

祐「この世界は私が救う！　アンタ達全員燃やし尽くして」

ゼ「ははははは！　祐希奈、貴様にそれが出来るかな！？　雑魚にすら勝てなかった貴様が！」

祐「そんなの、忘れたわ！」

少女は誓いを胸に、前へと進む……。
振り向かずに、ただ、前だけを見て……。

タ「崩壊などさせん……。俺は護り抜く。見ていてくれヴィヴィオ！　しーちゃん！　真名、解放！」

青年は想いを胸に、前へと進む……。
時には立ち止まり、歩みを止めたとしても、進む。護るために……。

ヴ「タカトと祐希ちゃん一人で頑張らせたりしないよ！　私も戦う！　一緒に頑張るんだ！」

少女は愛を胸に、前へと進む……。
世界を巻き込まん激流の中で、進む。友と青年を支えるために

しー「ばぶ～」

黒カ「ひらひら～……」

その他も頑張る。いろいろと。
魔法少女リリカル祐希奈ＥＸ、近日公開！！

幕！

祐「いや～楽しみね♪」

ヴ「ちょっと、面白そうかも……」

ゼ「全くです。俺の名演技を見せる時が来たか……」

しー『タカ兄ぃノリノリだな！？　台詞がばぶ～っておかしくない！？　俺何歳だよ！？　台詞くらいねぇのか！？』

カ「それ以前にひらひら～って何だ！？　しかも公開しねぇし！？　意味のわからない告知して信じたらどうすんだよ！」

ゼ「その時はアレだ。お前が土下座すればいい」

祐「全くね♪」

カ「何でだよ！　もうええわ！」

一同「ありがとうございました～♪」

ヴ「えぇぇ！？」

ようやく、幕！

祐「ラスボスは……トウヤさん？」

ゼ「いや、それだと締めが甘い……」

カ・しー「『ええ加減にせんかいいいいいいいいいい！！』」

ヴ「というか、この文字数、充分後書きで書けたよね？」

一同「カオスパワーだ」

ヴ「空気が温まったどころかオーバーヒート気味でしたが、読者の皆様は本編を読んで、クールダウンしてくださいね。じゃあ、リリカル祐希奈……じゃなくて、ヴィヴィオ、始まります」

祐「間違えてるわ……」

ゼ「間違えてるな……」

ヴ「ふぇぇえん！　言わないでよ～！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

戦いは終わり、地球、海鳴市では、命令違犯、戦闘行為、その他諸々を含め、凛から、部下に対する判決が行われようとしていた。

ちなみに、場所は人通りが少ないということで、咲夜達が戦っていた林である。

何故そこなのかは、これから行われることを人目につけないためである。

「さて……」

瞳を閉じ、佇む凛の前に、バインドをかけられた、ヴェイン、咲、風雅、咲夜が並んでいる。

「あの、部長？」

「却下ですわ」

試しにヴェインが話しかけてみたものの、凛は内容すら聞かずに却下を言い渡す。

ヴェインは苦笑いをしつつ、隣の部下達に首を向けた。

「言い訳聞く耳は無いみたいだ」

「もう、どうとでもなれって感じです……」

「風雅君に同じく……」

項垂れるヴェイン、最早脱力し、遠い所を見つめている咲。

「「「はぁ～……」」」

そして、三人同時に長い溜め息をついた……。

生きて帰れるのか、そんなことばかりが浮かぶ。

「み、皆、そんなこの世の終わりなんて顔しないで、大丈夫よ」

興奮は解け、冷静なもう一人の咲夜が風雅と咲を励ますが、二人はチラリと咲夜を見るだけで、再び虚空へと視線を飛ばした……。

「あぁ、もう、ヴェインさん、この中で一番上司の貴方がそんなのでは行けませんよ。ヴェインさんが元気を出せば、皆明るくなりますから」

なんとか場の雰囲気を良くしようとムードメーカー的存在である

ヴェインに頼むが、ヴェインはやはりどんよりとした空気を放つ……。

「あのなぁ、咲夜……。今はマシだが、レイが、口喧嘩させたら右に出るものがいないとすらされたあのレイが……どんな理不尽な理由だろうと大半の相手を丸め込めるレイが……何も喋らずに魂抜けた表情して体育座りしてるのを見たら元気なんぞ出せないに決まってるだろ！」

「一体、レイさんに何が……」

あまりの事に押し黙る咲夜。

余談だが、レイの中で一番の丸め込みは、訓練施設を破壊したことに対する言い訳である。

「さて、と、刑罰が決まりましたわ」

《っ！》

ビクリとメンバーが反応する。

先の余談の続きになるが、訓練施設を破壊したのはこの女性、凛である。

本人曰く、試し射ち程度に的に連射した所、あっけなく壊れてしまったとのこと。

「痛覚がないヴェインがいますし、煮込みうどんコースにさせていただきました」

煮込みうどんコースとは、表向きは面談だが、簡単に言えば、個人の弱みなどをこれでもかと言うほど抉り、気絶するまで行う精神

的な尋問である。
　尚、補助として次の面談者の一名が在籍するが、恐怖に耐えきれず、ほとんどの者は倒れる。

「俺に隠してる弱みなんて、無いですよ？」

「だから何ですの？」

「……はい？」

「無ければ今、作るだけですわ。後は、私がそれを広めれば問題ありません」

「……」

　あまりにもあっさりと言う凛に、ヴェインは目の前が白く染まっていくのを感じる……。

「いっそのこと、ミゼット提督にでも会いに行きますか？　確かファミリーネーム違いの孫、ですわよね？」

　凛の無茶苦茶な提案に、ヴェインは頭痛を感じた。
　そう、ヴェインは、ファミリーネームこそアルベリスになっているものの、伝説の三提督である、ミゼットクローベルの孫にあたるのだ。
　本人は隠しているものの、運用部で知らないメンバーは誰一人としていない。

「婆ちゃんに会いに行く意味がわかりません……」

「……小さい時の逸話探しでもしましょうか」
「やめてください。本当に、婆ちゃんには敵わないので……」
頼み込むヴェインに、凛は肩に手を置いた……。
「やめておきます。下手をすると貴方の過去に土足で踏み込みませんし」
「部長、ありがとうございます」
「では、作り話の方向でいきますわ」
「……」
ヴェイン以下、四人は同時に思う。
この人は鬼だ。
と……。
その光景を遠巻きに見ているのは復帰したレイとクレイだ。
「仲が良い、部隊ですね」
クレイが笑いながら呟く。
仲が良いと言えば良いのだろう。
上司が部下をこれほどに構う部隊などそうはない。
大半はピリピリとした雰囲気が流れている。
逆に言えば、空気が柔らかな部隊の方が、優秀な部隊ともいえる。
それだけ柔軟ということなのだから。
「あぁ。部長があんなだからかもしれないな」

柔らかな風を受けながらレイは笑う。
先刻の殺伐としたレイはもうここにはいない。

『副官の一人は白髪だからかも……』
「白、よっぽど砕かれたいらしいな」
『まぁ、悪く言うな。白もお前を心配していたのだ』

ネロの言葉にレイは少し溜め息をついた。
そして、顔の前に腕についている白いブレスレッドを持ち上げる。

「余計なお世話だ」
『うぅ……ごめんなさい』

一言だけ言うと、申し訳なさそうにする白にレイはまた笑った。

「……後でメンテ行くか」
『……うん！』
『デレたな……』
「ネロ、お前はメンテ無しな」
『……済まない』
「ったく。ん？　何だ？」

レイの視線は隣で笑うクレイへと移る。
レイはおかしなことでもしたのかと、少し気になったが、そういうわけでは無かった。

「リーフライン執務官はデバイスとも仲がよろしいのですね。楽しそうです」

「まぁ、飽きはしないな。レオナって虎とフレアっていうユニゾンデバイスもいるんだが……」

（い、嫌だよ……。人付き合い苦手なの、お兄ちゃん知ってるでしょ？）

『面倒だからパス』

この一人と一匹にレイは肩をすくめて首を振る。

レオナは念話だが、フレアの言葉はしっかりと聞いていたクレイは少し落ち込む。

「僕は、嫌われているのでしょうか……」

「そんなことないさ。コイツらはいつもこんな感じだから、気にしない方がいい。気長に待っていてくれないか？」

「はい。わかりました」

レイの言葉に素直に頷いたクレイにレイも頷き返す。

しばらく無言で風を受けていた二人だが、ふと、レイが辺りを見回す。

「さて、そういえば、女の子二人ともう一人いないとおかしいんだが……」

「高町ヴィヴィオさんと、一之瀬祐希奈さんなら、次元転移でミッドへと向かわれました」

「あの歳で次元転移……凄いな」

「男性は……わかりません」

クレイとレイが言う、男性というのは渉のことであるが、その渉は、いつの間にやら消えてしまっていた。

レイは渉の扱いについてどうするか少し悩む。

「まぁ、敵とかではなさそうだし確認だけで大丈夫だろ。登録あるかどうかだけ調べてくれるか？」

が、ヴィヴィオを助けていたことや、敵意などは感じられなかったために、正規の魔導師であるかのみ調べることで、妥協することにした。

「はい。すぐに調べます」

程なくして、嘱託魔導師の履歴に渉の名前が見つかる。

「大丈夫だな。お疲れ」

「いえ」

問題なしとレイは判断を下し、その場に転がる。

凛と戦ったせいか、身体の至る所が痛みを訴えていた。

「じゃあ、アイツらのコースが終わるまで寝るかな」

「長くなりそうですしね」

クレイも隣に座り、制裁が終わるのを待つことにする。

いつの間にか消えていた渉だが、その理由が次なる寝場所を探し

にいったという適当な理由だとは誰も知らない……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

機動六課その近くに、二人の少女が着地する。
ヴィヴィオと祐希奈だ。

「ふぅ……。祐希ちゃん、補助ありがとう」

「別に～。にしても、やっぱ次元転移は疲れるわ……」

「そうだね。魔力も半分くらい使っちゃうし」

会話をしながら、二人は機動六課へと進路を向け、歩き出す。

「おかしいなぁ……」

機動六課に連絡をとろうとしていたヴィヴィオが首を捻る。
展開されたモニターには、何も表示されていない。

「どうしたのよ？」

「通信出来ない。何かあったのかも……」

「何かって、平和よ？」

「うん。平和だよね……」

ならば何故通信が六課に繋がらないのか……。

「訓練所の方に行ってみようよ。この時間帯ならママ達がいるかもしれない」

「ま、止まってても仕方ないし、私はついてくだけよ」

しばらくの間、二人は無言で歩き、やがて見つける。
黒煙を上げるボロボロになった訓練施設を……。

「なのはさんがスターライトブレイカーでも連発したのかしら……」

「……ママでもそれはちょっと無理じゃないかなぁ？」

祐希奈の言葉に苦笑いをするヴィヴィオだが、一瞬言い淀んだのを祐希奈は見逃さない。

「出来そうだなぁって思ったでしょ？」

「そ、そんなことないよ！」

「怪しい……」

「そんなことより行かないと……」

ジーッと祐希奈が見ていると、話をそらそうとするヴィヴィオ。
瞬間、祐希奈の弄り魂に火が灯る……。

「へぇ～。ふ～ん。ヴィヴィオは真友の言葉を流すんだぁ。私傷ついたなぁ、真友だと思ってるのは私だけなんだぁ……」

俯き加減に言う祐希奈を見て、ヴィヴィオは傷つけたのかと焦る。
実際の祐希奈はニヤついているが……

「そんなことない！　私も祐希ちゃんは大切。とってもとっても大切。嘘じゃないよ？」

おし！　キタぁぁぁ！！

と、内心祐希奈はガッツポーズをする。
まさにこれが祐希奈の狙いである。

「じゃあ、教えて♪」

「はぅ！」

「さぁさぁさぁ！　白状しなさい。白状しちゃいなさい。楽になれるわよ～♪　簡単じゃない。うん。ママなら出来るねって頷くだけよ♪」

「う～う～……」

パッと上げられた祐希奈の顔は明るい……。
ヴィヴィオがはめられたと気づいた時には既に遅い。
そもそも、ヴィヴィオが祐希奈の弄りに抵抗出来るはずがないのだ。
片や、弄って弄って弄り抜いて来た弄りのプロ、祐希奈。
片や、天然、マザコン等を理由に弄られてきた弄られの天才、ヴィヴィオ。
ヴィヴィオが祐希奈の弄りを避けるなど、万に一つあるかわからない。

そして、その弄りのプロ祐希奈逃げ道を塞がれたヴィヴィオは、徐々に追い詰められる……。

「ほらほら♪　意地張らないで♪」

「えと……ちょっとだけ……」

ニヤリと笑った直後、祐希奈は六課へと向き直る！
思いきり肺に空気を吸い込み、叫ぶ！

「なのはさ～ん！　ヴィヴィオが～！」

「わっ、わわ、ダメ!!　言わないで！　言わないでよ～」

とんでもないことを口走ろうとする祐希奈にヴィヴィオ慌て、半泣きになる。

「あぁ、可愛い♪」

「ふぇ？」

そんな、半泣きのヴィヴィオを祐希奈は抱き締める。
何がなんだかわからないヴィヴィオは、キョトンとする。
祐希奈の目的は、このヴィヴィオを見たいだけなのだ。

「ん？」

が、抱き締めたは良いものの、祐希奈は少し違和感を覚え、最後にヴィヴィオを抱き締めたのはいつだったかを考える……。
長々と考え、視線を落とし、ヴィヴィオの胸を見る。

「な、何？」

「ヴィヴィオ、胸、おっきくなってない？」

「え？」

そう言って、祐希奈は抱き締めるのを止め、ヴィヴィオの胸の辺りに手をあてる。

「うん。やっぱり」

感心したように触り続ける祐希奈。二人の間に無言のまま時間が流れる……。

一秒、二秒、三秒、着火。

正に文字通り、ヴィヴィオの顔が真っ赤に染まる。

ヴィヴィオは、こう言った女子のじゃれ合いに免疫がない。

その免疫が無いヴィヴィオにそんなことをすればどうなるか……。

答えは単純。

「ふぇぇぇぇ！？」

爆発する。

「ゆ、ゆゆゆ祐希ちゃん！？　何、ななな、何してるの！？」

「何って……セクハラよ。セクシャルハラスメント。それをしてるの。一応、犯罪よ？」

パニック状態のヴィヴィオ、ひたすら冷静に解説する祐希奈。

何故祐希奈がこんなに冷静ななのか、それはヴィヴィオをさらに混乱させていく。

「良いではないか♪　とか言ってあげましょうか♪」

「何がしたいの!?」

「悪代官様」

走り出したらやめられない止まらないのが祐希奈であった……。
至って真面目な顔でヴィヴィオに言い放つ！

「冷静に言わないでよぉぉーーーー!!!!」

もう、ヴィヴィオは半泣きではなく、本泣きである。
それが祐希奈には楽しくて仕方がない。

「あっはは♪　たまにはいいじゃない♪　女の子同士だしね♪」

「たまにもでも女の子同士でもよくないよ!!　というか女の子同士の方が問題だと思うよ!?」

「おお、ヴィヴィオが珍しくキレのあるツッコミをしたわね……そんなヴィヴィオを私の相方に任命よ♪　嬉しいわね～♪」

「祐希ちゃん聞いてない～……」

ヴィヴィオは怒っているつもりだが、祐希奈には全く効果がない。
当たり前である。
それすら祐希奈の思惑の中であり、楽しんでいるだけなのだから

……。

それがわかっているからヴィヴィオは遂に拗ねた……。

「もういいもん……。今度は私が祐希ちゃんに抱きついて仕返しするから……」

「いつでもカモンよ♪」

「あ、あれ？」

『マスター、相手は嫌がっていませんが……』

結論、やはりヴィヴィオは祐希奈に敵わないことを改めて理解するに至った。

天然はSには勝てないのだ。

「てか、いい加減アホなことやってないで情況確認しに行かないとね」

「あ、そうだね」

「もう、ヴィヴィオは困ったさんね♪」

「あぅ……ごめんなさい……って、あれ？　私が悪いんだったっけ？」

「細かいこと気にしない気にしない、行くわよ♪」

「あ、待ってよ～！」

駆け出す祐希奈をヴィヴィオは急いで追いかける。

先の出来事を見事にうやむやにされていた……。
とにもかくにも、訓練施設に近づいていくと、見知った人物が立っているのを見つける。
シャーリーことシャリオとティアナである。
何やら二人してコンソールを操作しながら唸っている。

「シャーリーさん、ティアナさん、こんにちは」

「お久～。元気？」

ペコリと丁寧におじきをするヴィヴィオと、片手を上げて簡単な挨拶をする祐希奈。
そんな二人を見て、シャリオとティアナは笑った。

「来ると思ってたわ。話は聞いてる？」

「いえ、直接ここに来たので」

ティアナがコンソールを操作しながら二人に訪ねるが、無論知っている筈も無く、首を振る。
ティアナは、ウィンドウから視線を外し、二人を見た。

「私も当事者じゃないからよくはわかってないけど、ハルさんの宿敵か何かが襲撃してきたみたいでね」

「「っ！」」

驚愕する二人。
それから、ティアナは知っている限りのことを二人に伝えていく。
ハルの様子がおかしかったこと、暴走まがいの事件をおこしたこ

と、その敵が恐ろしい敵であったこと、なんとか撃退し、ハルもカナンも無事なこと。

「とにかく、二人も皆さんも無事みたいで良かったです。ティアナさん、お話ありがとうございます」

「うん。まぁ、もっと詳しいのが知りたかったら、なのはさん達に聞くといいわ」

コクりと頷くヴィヴィオ達に、ティアナは再びウィンドウに向き直り、コンソールを操作する。

「で、被害情況はどんな感じなの？」

祐希奈に尋ねられ、ティアナは少し考える。
何を言おうか迷っている、二人はそう捉えた。

「戦いの場になったこの訓練施設は見てのとおりよ。復旧はいつになるかわからない。六課の方はちょっとシステムが落とされちゃったけど、まぁ、近々復旧出来るとは思うわ」

「今はその作業中ってわけですよ。忙しくて忙しくて……。午後からストラーダと二人きりの予定だったんだけどなぁ」

ティアナの横から顔を出し、苦笑いをするシャリオ。
ＦＷ陣ではなく、ストラーダ単体という所にヴィヴィオは疑問を抱く。

「ストラーダ、どうかしたんですか？」

「あ、そっか。それも知らないだね。えっと、簡単に言うと、大破しちゃってるんだ」

「大破って、エリオがそんな無茶苦茶すると思えないんだけど」

「うん。エリオは大切に使ってくれてたよ。でも、ちょっと理由があってね……。今は非人格型の槍型デバイスで我慢してもらってる」

流石に、ハルが破壊したとは言いにくいのか、シャリオは言葉を濁す。

それだけで、ある程度の事情があると判断した二人は深くは追及しなかった。

ただ、一つだけ聞くことにする。

「直るんですか？」

「……力の及ぶ限り頑張るつもり」

少しシャリオのトーンが下がる……。

それは、現状では直るかどうかすらわからないと言うことだ。

もちろん、まだエリオには知らされていない……。

少しでも力になれないかとヴィヴィオは考える。

「シャーリーさん、作業、私が代わりますから、シャーリーさんはストラーダの所に行ってあげてください」

ヴィヴィオの言葉にシャリオは少し驚くが、すぐに優しい笑顔へと戻る。

「そんなのいいよ……って言いたい所だけど、今回は言葉に甘えさ

せて貰うね。ありがとう」

「いえ、頑張ってください」

「うん！　シャリオ・フィニーノ、頑張ってきます！」

グッと力こぶを作るようなポーズを取り、笑顔になったシャリオは走っていった。

一方で、ヴィヴィオを手伝いたいのは山々な祐希奈だが、どうしようかと悩み。

「こういうの、私ダメだから……アシェル」

『わかっていますよ。任せてください』

「ありがと。ってことだから、はい」

「うん。しばらく預かるね」

デスクワークなどといった事務作業が苦手なことはわかっているため、アシェルに任せて退散を決める。

祐希奈の首から一対の翼を形をした銀色のペンダントが外され、ヴィヴィオの掌に置かれる。

が、それはいいものの、今度は手持ちぶさたになってしまった祐希奈は何をしようかと腕を組んで考える。

「向こうでスバルとエリオが軽く組手やってるから祐希奈はそっちに行ってあげて？」

「あ、ホント？」

ティアナからの言葉に祐希奈はニッと笑う。

身体を動かせるのなら祐希奈にとって是非もない。

「じゃあ、軽く運動して待ってるわね」

頷くティアナとヴィヴィオだが、祐希奈とスバルが揃って軽い運動などになるわけが無い。

この後、作業が区切りがつくまでエリオまでも含めた三人が組手をやることになるのは言うまでもない。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一方、六課の一室の布団の中でカナンが目を覚まそうとしていた。

なんか、良い匂いがする……。

鼻腔をくすぐる甘い香りに、カナンの意識は徐々に目覚める。

瞳が開き、真紅の瞳が光を取り込み、輝いた。

「くあ……」

起き上がると同時に大きな欠伸を一つ、気だるさを取り除くために伸びをする。

そして、違和感。

上着は脱がされ、近くに畳んで置いてあった。

「あ、医療施設ー、じゃないなどうみても……」

カナンが寝ていたのはダブルベッド。

しかも、それなりの値段が張りそうであり、フカフカである。

医療施設にそんな物があるわけ無いため、即座にその考えは消え

た。
何か位置は特定出来ないかとグルッと周囲を見渡す。
クローゼットに、小さめの棚とソファーがあるのみで、綺麗過ぎて見事に手がかりが無い……。
わかったのは、女性の部屋であること、もう夜であることくらいである。
クローゼットを開ければわかるような気もしていたが、流石にそれはやめた。
取り合えず、上着である学ランを着て、しばらく悩んでいると、シュインと、この部屋の隅にある扉が開く。
カナンが出口と思っていたそこから湯気が上がる。

「あ、カナン、起きたんだね。おはようはちょっと遅いか。こんばんは、かな」

風呂上がりと思われるフェイトが部屋へと入ってきた。
ちなみに、格好は六課の制服の下に着ているカッターシャツである。
取り合えず、部屋の主は確定した。
なのはとフェイト、二人が使う部屋である。

「……」

途端にカナンは紅くなり、フェイトからおもむろに視線をそらした……。
不思議そうにフェイトはカナンに近づき、覗き込むが、カナンはまた視線をそらした。

「どうしたの？　どこかまだ怪我があった？」

「い、いや、あの……」

心配そうにするフェイトだが、カナンが紅くなっている原因は当人、フェイトのカッターシャツの格好にある。

いつものフェイトならピシリと着ている筈だが、珍しく前が大きく開いていたのだ。

普通の一般的男子なら喜ぶかもしれないが、生憎カナンはそう言った耐性は零に等しい。

「その、え～……」

「ん？」

カナンは意を決し、肺一杯に空気を吸い込む。

「……ねが……」

そして、蚊の鳴くようなとても小さな声を出した。

だが、そんな声を聞き取れる筈もなく、フェイトは首を傾げる。

「ごめん、聞き取れなかった。もう一度言ってくれる？」

「フェイトさん、Ｓッスか……」

思わず口から出た言葉は静かな空間に響き、聞き取ろうとしていたフェイトに聞こえてしまった……。

「う～ん。どうだろう……」

「いえ、違います！　間違いです！　すいません！　ごめんなさい

！　てか答えてほしくないです！」

「う、うん」

思わず苦笑いをするフェイトにカナンはかなり本気で謝罪する。
その謝りっぷりに少し驚くフェイトだが、許したのか、再び聞き取るために静かにする。
次こそはと、カナンは深呼吸をして、カッと瞳を開く！

「むっ！」

「む？」

「……が……」

「え～と……無我？　違うね。なんだろう……」

しかし、結局は同じように声は小さくなっていき、カナンは俯いてしまった。
案の定、フェイトもわからず、考え込む。

「いや、もういいッス……」

「そ、そう？　私ならもうオフシフトだから気にしなくていいよ？」

「いや、ホントにいいです……。俺の中で、新たに風呂上がりのフェイトさんが越えられない壁ランキングにランクインしただけの話ですから……」

目に見えて落ち込むカナン。

なんとかしようと、フェイトは額に指を当て、先までのカナンの言葉を思考し、閃いた。

「あ、胸が、かな？」

そう言って、フェイトは開いていたボタンを襟元まで止めてニッコリ笑う。

カナンは、凄いものでも見たかのようにフェイトを見つめたまま固まる。

「ちょっと走ってきます」

「い、いきなりどうしたの？　私、もしかして悪いことした？」

立ち上がるやいなや、訳がわからないことを言い出すカナンに不安になるフェイトだが、何故かカナンの目は若干涙ぐんでいた……。

「いや、理解してもらえたのが感動しすぎて泣きそうなんで鎮めてきます」

「日頃の扱いがどうなのか一言でわかるね……。でも、時間も時間だし、止めとこう？」

「はい……」

フェイトの言葉に頷き、大人しく座ったカナンにホッとする。

「……明日、朝一で走ってきます」

が、カナンは先伸ばしにしただけで走るのを止めたわけではない。

それほどまでにカナンの感動のレベルは低い……。
というよりは、日頃の扱いが悪すぎ、下がってしまったというほうが正しい。

「走るのは止めないんだ……。じゃあ、走る前に、朝の訓練を軽く私達とやって、それから一緒に走ろうか。一緒に走った方が、ペース配分もわかりやすいから、身体の負担も軽減出来るし、ね？」

「……」

「カナン？」

カナンは再び呆然と立ち上がり、無言のまま部屋の外へ……。
瞬間、ゴン！　っと鈍い音が響いた……。
再び部屋に入ってきたカナンの額は赤い……、

「な、何してるの！？」

「夢じゃないなって……」

つまり、カナンはこれが夢でないのを確認するために部屋の外で頭をぶつけて確認していたのだった。

「もう少し簡単な確かめ方にしよう？」

苦笑いをするフェイトは棚から救急キットを取りだし、カナンの額に消毒したガーゼを当て、布テープで固定する。
カナンはその間、腕をつねったりして、未だに夢ではないかと確かめていた……。
そんな時、ふと気づいたようにカナンが周囲を見渡す。

「そういえば、メイデン達は？」

「メイデン達なら、途中からキャロ達に呼ばれてついていったよ。見に行く？」

「あ、はい。気になるんで。いいっスか？」

カナンにフェイトは「もちろん」と頷く。

エリオとキャロの部屋を教えてくれたカナンは頭を下げ、フェイトの部屋を後にした。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

その頃、エリオ達の部屋では……

「ほらほら～。ね～♪　ニーナの方がメイデンお姉ちゃんよりも背もお胸も大きいでしょ～♪」

「うん。ああ。そうだな。そうに違いない。ニーナは凄いな。私では敵わない」

メイデンとニーナが比べ合いをしていたわけだが、メイデンは棒読みのセリフを返すのみしか出来ていない。

これ以前にも可愛い比べ、オシャレ比べ、速く飛べるか比べ等々、様々な比べ合いをさせてられてきたメイデンは体力の限界が近づきつつあった。

それでも付き合っているのは、歳上であるという肩書きがあるからだ。

ちなみに、キャロとエリオ、アルティスはメイデンの「関わらな

い方がいい……」と言う発言により、部屋のベッドでキャロとエリオは苦笑い、アルティスは無言のまま怒りを堪えている。

「ニ、ニーナ？　メイデンは未だにシステムは全復帰していないのですから、多少は気にかけてやってくれませんか？」

レナスはシステム復帰のために黙っていたのだが、流石にメイデンが限界なため、助け船を出すことにする。

ニーナは「しょうがないなぁ」と呟く。

「じゃあ、最後は～、ロードもキャロちゃんの方が凄いよね～♪」

この言葉にはメイデンは反応し、真っ直ぐとニーナを見た……。

今までと違うメイデンに、ニーナは少し驚く。

「いや、そればかりはマスターだ」

「む～……絶対キャロちゃんだよ～！　ね～？」

「「え……？」」

「はぁ……」

突如としてニーナが振り向き、三人に質問を振る。

当然、振られると思っていない三人は意表をつかれ、エリオとキャロは顔を見合わせ、アルティスは溜め息をつく。

「おい、質問、なんだ？」

「キャロさんとマスターどちらがロードとして優れているか、とい

う質問だ。思う方を言ってくれて構わない」

再度メイデンが質問を言い直し、聞いた三人は考える。

最初に口を開いたのはキャロだった。

「多分、カナンだと思う。私はまだロードとしては未熟だし、ニーナちゃん達と知り合ってまだ短いから」

「キャロ本人がそういうなら、そうなんだろうね」

「え～！」

キャロとエリオの言葉にニーナは不服そうに頬を膨らませる。

最後の希望とばかりにアルティスを見るが……。

「論外だな。話にならねぇ」

「だよね～♪　私達とキャロちゃんが負けるわけが……」

「こっちがだ。ドチビ」

「えぇー！　嘘だー！　だってカナン君とかいう人、今回ボロ負けだったもん～！」

味方がいないことにニーナは不満をもらすが、三人はニーナの言葉に冷や汗を流す……。

「……ニーナ」

メイデンが出した低い声に、ピシリ空気が固まる……。

カタカタと震えるニーナはメイデンに振り向く。
同時、震えは激しくなり、止まらない。
ニーナはメイデンの地雷の真ん中を踏んでしまった。

「あわわわわ……」

「ならば、お前が奴と戦えば良かっただろう……。どれだけギリギリの死闘だったか、知りもしないお前が、マスターのことをとやかく言う権利は無いと思うが……？」

静かに怒気を放つメイデンに、ニーナは震えるだけで何も言えず、助けを求めて三人に振り返るが、無論助けてくれる人はいなかった。

「ニーナちゃん、カナンは六課のために頑張ってくれてたのに、それはダメだよ……」

「ま、正直、あたしはあんな化け物に勝てるとは思わないね。生きてるだけでもアイツは凄いぜ」

「ニーナ、素直に謝った方がいいんじゃない？」

「でも……だって……」

「謝る気が無いのならそれでいい。もう、私に話しかけるな……」

「う、う……」

泣き出しそうなニーナにメイデンは構わずそっぽを向いた。
と同時に、その足元に魔方陣が輝く……。

「ま、マスター！？」

若干裏返った声を上げながらメイデンが消える。

だが、その身体は直後に部屋に入ってきたカナンが摘まんでいた。

「んなしょうもないことで後輩いじめんなよな。ニーナとか言ったか？　悪かった」

「え、あ、ううん……」

あっさりと頭を下げたカナンにニーナも首を振る。

不服そうなのは今やニーナではなく、メイデンである。

「しかしだな……。奴がどれだけ強いかも知らず、ニーナは……」

「ボロ負けしたってか？　いいだろ。事実だし。俺が弱かった。腹立てることか？　もしかしたらアレだ。俺よりキャロのがアイツに勝てたかも知れない。なぁ？」

「え！？　そ、そんなの無理だよ」

またもやいきなり振られた話題にキャロは驚きつつも思っていることを言う。

キャロはグラースに勝てるなど、微塵も思っていない。

「わかんないだろ？　なんか覚醒するかもしんないし」

「覚醒って……あはは」

ニヤニヤと悪戯っぽく笑うカナンに、キャロは苦笑いで返す。

「とにかく」とカナンは纏める。

「俺はな、強くはなりたいけど、別に誰が一番とかそんなのはどうでもいいんだよ。だから、お前も怒んな。わかったか？」

「……わかった」

若干不満げだが、メイデンはコクりと頷いた。

それを確認して、カナンはメイデンをゆっくり降ろした。

「でも、俺のために怒ったんだもんな。ありがとう」

メイデンに礼をするカナンだが、メイデンは快く思えないのか、表情は暗い。

「結局はマスターの顔を汚すような結果になった……礼を言われるようなことは……ひひぇひひゃい……何をするんだ！」

メイデンの言葉がおかしくなった理由それは、メイデンの言葉の途中でカナンは鼻を押さえたからだ。

怒鳴るメイデンにカナンはただ笑っているだけだ。

「ありがとう言われてんだから、どういたしましてだろうが、はい、やり直し」

「いや……意味がわひひゃひゃい……。だから！」

叫ぶメイデンだが、カナンはその眼前に人差し指をつきつけ、次はニタリと子供のように笑う。

「俺が言えっつってんだから、さっさと言え。主命令だ」

「無茶苦茶だというのがわかっているのか！？」

「何を今更。無茶苦茶なのは昔からだ」

「開き直るなバカマスター！」

「はいはい。俺はバカだ。バカだから何度でも言ってやるさっさと言え」

「ああ言えばこう言う……」

「それはお前だろうが。俺はどういたしましてって言えと言ってるだけだが？」

「意地でも言わない……」

メイデンはカナンから視線をそらし、意地を張る。

それを見るカナンはふむふむと頷いていた。

「お～？　へぇ～。そういう手に出るのか……。じゃあ、明日は一日レナスを使う」

「うっ……好きにすればいい」

「ほう、耐えたか……」

確かに耐えた。

だが、初戦にしてメイデンは既にぐらついている。

勝ち目がないのは誰の目に見ても明らかだ。

「次だな……何にしようか……」

「な、何を言おうとも無駄だ」

カナンとメイデンの会話をキャロ、エリオ、アルティスの三人は置いてけぼりを食らったようにポカンとしている。

ただ一人レナスだけはクスクス笑っていた。

「レナス、さん？」

「ふふ。レナスで良いですよ。キャロさん」

「じゃあ、レナス。あの二人は、喧嘩してるのかな？」

キャロが視線を向ける先にはもちろん、カナンとメイデン。

はた目から見ると喧嘩のようにしか見えていない。

「いえ、あの二人はいつもあのような感じなのですよ。正確にはメイデンが深く抱え込まないように主がおかしなことをやっているだけですけれど」

「へぇ……」

案外と考えてるんだと関心するキャロ。

だが、実際は前半だけしか考えておらず、後半はその場のノリで言っていることは、レナスは黙っていた。

「あの、レナスお姉ちゃん……」

そのキャロの右肩に、力無くニーナが停まり、怯えるようにレナスを見た。
怒られないか心配なのである。

「ニーナ、貴女が大好きなキャロさんを大したことが無いと言われて怒るように、あの子も同じように大好きな主を侮辱されると怒るのはわかりましたか？」

「うん……ごめんなさい」

反省した様子でニーナがレナスに頭を下げた。
元々、さして気にしていなかったレナスはニコリと笑う。

「何だかんだであの子も子供っぽい所がありますから、貴女も理解してあげてくださいね。私からは以上です」

「メイデンお姉ちゃんにも謝ってくる」

「今はやめておいたほうがいいでしょう。噛みつかれますよ？」

「は、は～い」

ニーナと話を終えたレナスは、視線をキャロの頭の上にいたアルティスに移す。

「それで、使い魔の子、今はアルティス、でしたか」

「あぁ。どうだ？」

珍しく心配そうな表情をするアルティス。

実は、カナンが来る前、アルティスはメイデンとレナスにとあるお願いをしていた。
この今現在は、二人にしか出来ないお願いを。

「話はしてみましたが、保留、といった所ですね」

「なんて言ってた？」

「素質はありそうだが見てみないことにはなんとも、だそうです。ただ、貴女からだと言ったら驚いていましたが」

「そりゃあ驚くだろうな……。あたしが頼み事なんてすんのは初めてだし」

「良い結果だと良いのですが……」

「こればっかりはしゃあねぇな」

「アルちゃんとレナス、さっきから何を話してるの？」

「「何でもない」」

合わさる言葉に、アルティスは驚き、レナスを見つめる。
レナスは楽しそうに笑っていた。

「ですよね？」

「あぁ」

「？」

互いに笑う二人に、キャロは首を傾げるしかなかった。
教えてくれそうに無い二人に、仕方なくキャロは視線をカナンとメイデンに戻し。

「あ……」

固まる。
その反応は、本日二回目となる。
一度目はクレイ。二度目はキャロ。
その反応が指す意味は一つしかない。

「どうやって言わしてやろうか……」

そうとは知らず、未だにメイデンと戯れるカナン。
しかし、その背後を影が覆う……。

「どうやって制裁してやろうかしら♪」

「……へ？」

カナンは空間把握で見る。
とても、ニコォ。っと明るく笑っている銀髪の美少女、一之瀬祐希奈が降臨していたのを……。
ちなみに、ヴィヴィオはその後ろで苦笑いを浮かべている。

「刈るか♪」

良い笑顔のまま、祐希奈の右脚がしなり、風を切る！
驚愕しながらカナンは避けようとするが、遅すぎた。

「ちょまっ！」

バキャァ！

と、凄まじい音が鳴り響き、カナンが廊下まで吹っ飛ぶ！

だが、即座に起き上がり、走る！

直後、カナンの背後で、頭の位置に膝をかました祐希奈がいた……。

壁がクレーターのようにへこんでいる所からして、身体強化を使っている……。

「お前なぁ！　いくら何でも頭にそれ受けたら死ぬぞ！？」

「大丈夫♪　痛くないように一撃で刈るから♪」

「笑顔で言うの怖いわぁぁぁぁああ！！　ってか刈るって何を！？」

「魂♪」

「グレート、アップ！？」

走り続けながら逃げるが、身体強化はカナンはメイデンがいないと苦手である。

一方、祐希奈は熟練と言っても良いほどに訓練を積み重ね続けている。

結果、差はみるみると縮まり、追い付かれるのも時間の問題であった。

賭けるか……

前方に分かれ道が見えた時、カナンは決意する。
分かれ道でスピードを緩め、精一杯の身体強化で壁をかけあがる！

「逃がすかぁ！」

祐希奈も跳躍し、必殺の威力を誇る飛び蹴りがカナンへと向かう！

「いっくぜぇぇぇぇ！！」

「なっ！？」

ダン、と壁を蹴り、祐希奈の飛び蹴りをすんでの所で身を捻り、避ける。
そのままのスピードで祐希奈とは垂直に飛んでいった……。

「ちっ！」

着地すると同時に祐希奈はカナンが飛んだ分かれ道へと走り込み、正面にあった部屋に突っ込んだ。

「あれ？　フェイトさん？」

その部屋はフェイトとなのはが使っている部屋。
その部屋にカナンの姿は無い。
部屋では、ベッドの上でフェイトがウィンドウを開きコンソールを操作していた。

「ん？　あぁ、成る程」

最初は驚いていた様子だが何かを理解した様子で、ウィンドウを

閉じる。

「フェイトさん、カナン来なかった？」

「来たよ。でも、あの窓から飛び降りたみたい」

「ちっ……素早い……」

舌打ちする祐希奈にフェイトは楽しそうに笑う。

「いつもの、やってるの？」

「まぁね」

「今回はカナンの無茶のお陰でいろいろ助かったんだけど」

「わかってる。でも蹴るわ。取り合えず蹴るわ。なんと言おうとも蹴るわ。じゃ、私行くから、おやすみなさい」

「うん。おやすみ」

祐希奈が部屋から出ていった瞬間、フェイトの隣で布団がもぞもぞ動く。

「助かりました……」

「大変だね」

出てきたのはもちろんカナンである。

カナンが賭けたのはフェイトが祐希奈から庇ってくれること。

ただし、フェイトがカナンが飛び込んできたことを理解出来なければ終わり。
故に賭けということだ。

「じゃ、ありがとうございました」

「どこ行くの？」

お礼をして出ていこうとするカナンをフェイトは呼び止める。
どこ、と言われてもカナンには行くあてはない。

「適当な部屋で……」

「隊員証が無いとはやてかグリフィスに言わないと開けてもらえないよ？　それに、今、通路に出ると祐希奈がいると思うけど……」

「しまったぁぁぁぁぁ……」

「？」

フェイトの言葉に逃げ道が無いことを思いだし、ガックリと膝を落とすカナン。
しかし、フェイトは不思議そうに首を傾げる。

「ここで寝ないの？」

「へ？」

「私はもうそのつもりで、なのはにはやての部屋に泊まってもらっ

てるんだけど……」

そう、フェイトはカナンがいつ起きるかわからなかったために既に準備をしていた。

無論、カナンは激しく首を横に振る。

「いやいやいやいや、俺は男だって言ってるのになんで皆無視ばっかり……」

「カナン、なんで男と女、一緒に寝るのはダメって言われてるか、知ってるの？」

「はは。そりゃあ、そりゃあ……そりゃあーー……」

ポカンと開けていた口を閉じ、額に手を当てて、瞳を閉じて思考の海に身を投じる。

そうだ。変なことするからだ。でも変なことって何だ……

探す。何故寝てはいけないのかという理由を……閃く！

「わかった。寝相だ！」

しかし、壮大にずれていた！

「カナンは寝相悪いの？」

「そういうのは聞いてないッス……じゃあ、いびき？」

「私が朝に連れ出した時は無言だったよ？」

自分の案は次々とフェイトに潰されていくことにカナンは焦る。

このままだと流されてしまう……。

考える。必死に、記憶を絞り出す。

「……男は獣だ。近づくんじゃねぇぜ。ベイビー」

そして、カナンは意味もわからないまま、テレビで知り得た言葉を取り合えず言ってみた。

「はいはい。テレビで見た言葉を言っただけだよね」

近い言葉だったもののベイビーの下りで即座に看破され、打ち砕かれる……。

考えてみたものの、結局はわからず、諦めた。

幸い、ソファがあったのでそれで妥協することにする。

「じゃあ、お言葉に甘えますけど、ソファで寝ます」

「風邪ひくよ？」

「そんなやわな身体してたら生きてませんて……」

カナンは着ていた学ランを脱ぎ、身体にかけてソファにもたれ掛かり瞳を閉じる。

「それじゃあ、明かり、消すね？」

「どうぞ～」

固くななカナンに、フェイトはカナンらしいと笑い、部屋の明かりを消す。

暗闇に包まれ、しばらく無言となる二人。

ヤバい……

そんな中で、カナンは鼻にむず痒さを感じていた。

無論、カナンのそれは寒さくるものではなく、純粋にいきなりくるものだ。

フェイトに大丈夫と言った手前、くしゃみはしたくなかった。

今すれば、ほらやっぱりと言われかねないからだ。

耐えろ、俺……。

くしゃみに抵抗するが、残念なからくしゃみというものは中々にしつこい。

我慢しようとして出来るものならこの世からくしゃみをする人はいなくなるだろう。

つまりは、カナンはいずれはすることになるのだが、カナンは我慢しようとしている。つまり……。

「くちゅ……」

女の子がするような可愛らしいくしゃみが部屋に響いた……。

カナンは、フェイトが寝ていることを祈る……。

「ふふ……」

しかし、無情にも圧し殺した笑い声が確かに聞こえた。
明かりを消して五分も経っていないのだから当たり前だが。
闇の中で、カナンはギリッと奥歯が軋むほど強く歯をくいしばり、恥ずかしさで紅くなっている。

「……笑えばいいじゃないッスか……自分でも女の子みたいなのしたって思いましたよ。いっそ大爆笑して俺の心を粉砕してくれた方がいっそ清々しい……」

「あはははは！　ご、ごめん……あはは！」

言葉の途中でフェイトは抑えきれなくなり、カナンの心を深く抉った……。

「準備前に笑われると結構来るな、コレ……」

自分で言ったことに自分で落ち込むカナン。
一般に、世間ではこれを自爆という。
やっぱりフェイトはSなんじゃないか、そんな考えがカナンの脳裏によぎる。

「ごめんね。でも、寒いなら寒いって言えばいいのに。ほら、一緒に寝よ？」

「いや、寒かったわけじゃ……もういいや……意地張るのもかったるい……」

脱力しながらカナンはフェイトの隣に潜り込む。
普段ならそんなことをする筈はないのだが、『女の子くしゃみ事件』のダメージは行動をおかしくするのに充分だった。

せめてもの抵抗として剣をフェイトと自分の間に転送し、バリケードとしたわけだが……。

「えっと、カナン？」

「いや、もういいッス……。自分でも思ったんで……」

その行動がより女の子っぽいことに気づいたカナンはもう何も考えたく無くなった……。

「じゃあ、明日ね？」

「はい……おやすみなさい……」

「うん。おやすみ」

瞳を閉じると、すぐに眠気が襲ってくる。

グラースとの戦いの疲れがまだ回復しきっていないのだ。

俺、やっぱマザコンなんだろうか……

まどろむ意識の中で、今日、気を使って優しくしてくれていたフェイトが、カナンの記憶の中にいる母親と重なってみえた事は心の奥にしまっておくこととした……。

Ｎｅｘｔ　Ｓｔａｇｅ……

第三十四話　Ｔｉｍｅ　Ｌｉｍｉｔ　２Ｄａｙｓ　（前編）（前書き）

まずアンケートを頂いた皆さんに謝罪します。
すいません！
アンケートの実地は後編となりました（汗）
六課メンバー出番少ないし、ちょっとかさまし、くらいな感じだったのですが、何がどうなったのか２．５倍になっちゃいまして、急きょ変更となりました。
前書きは、ちと体力的に厳しかったので、本日は無しです。
前書き後書きが好きな方、すいません。
ただ、祐希奈さんがカバーしてくれると思うので、お楽しみください。
では、指摘等、いつも通りお願いします。
では、二日目、午前の部、どぞ♪

第三十四話　Ｔｉｍｅ　Ｌｉｍｉｔ　２Ｄａｙｓ　（前編）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

エリオ達の隣の一人部屋、そこが、クレアが一時的に借り受けた部屋であった。
外はまだ暗闇の中、その部屋には明かりが灯っていた。
部屋のベッドで仰向けに転がりながら、虚空を見つめている。
これは、昨日の晩からずっとである。

「はぁ……」

クレアは疲れきったように深い溜め息をする。
昨日から何度目の溜め息になるのかわからない。
この機動六課において、最も苦しんでいるのは、カナンでもハルでもなく、この白姫クレアその人である。

「私は、どうすればいいですの……」
『バカ執事ですか？』
「そうですの……」

ハルの右腕の事も、グラースの事も、今現在、全てを知り得るのはクレアのみ。
そう全てだ。
何故、ハルがあのような右腕を持つのか……。
何故、ハルがグラースを憎むのか……。
何故、ハルは留まっていてくれるのか……。
話さねばならない。なのはにも話すと言った。
しかし、この問題はクレアは知っているだけで、正しくはハルの

問題だ。
それも、ハルの心に確実に踏み込むであろう、とても重大な問題だった。
故に、迷う。
話せば、おのずとなのは達もハルの心に踏み込むことになる。
それを、主であるとはいえ、他人である自分から話してしまうのは間違いだと、クレアは思っていた。
事情が事情だ。どうしても話せないと言えば、なのは達ならば待ってくれるかもしれない。
だが、なのは達にはあっても、ハルに時間がない。
それは、グラースが言い残した3日というタイムリミット。
このまま何もしなければ、ハルはグラースの元へ向かう可能性が高い。
聞いていないという可能性はあるが、クレアの中ではその可能性は限りなく零に近い。
仮に聞いていないとしても、能力を使ってグラースを探すと予想できた。

「やっぱり、護られる立場の私からでは、ダメですの……」
『でしょうね。あのバカ執事の中でその意識が変わるとも思えませんし、失礼ながら私が期待出来るとすれば、あの少年しかいません』
「カナン……」

ハルの口から直接聞き出し、尚且つ、救い出せるとすれば、残るのは唯一ハルに友と認められているカナンだけだと、クレアは思っていた。

「肝心な時に他人任せで申し訳ないですの……」
『今までは一人で貴女はここまで頑張ったのですから、肩を借りろということですよ』

「私は、本当に頑張れていたのか、わからない……。いつだって、空回りばっかりですの……」
『あのバカ執事もそれくらいはわかっていますよ。自信を持って、後はバカ執事が起きるのを待ちましょう』
「はい、ですの……」
頑張って、ですの。
それしか言えないことが悲しい、だからせめて、精一杯の想いを込めて……。
『さて、そうと決まれば睡眠をとってください。この後のことを考えるなら、少しでも寝ておいた方が利口かと思われます。バカ執事を看護するおつもりなのでしょう？　看護をする側が体調を崩してしまうようでは意味がありませんから、お休みください』
「え、え～と、私は朝練に……」
『却下です。睡眠もとらずに参加すれば、それは他の方の迷惑にもなります。私が伝えておきますから』
「はい、ですの」
シルフィスの言葉にクレアは渋々といった様子だが、頷き、瞳を閉じる。
考えすぎて疲れていたのか、数分ともせず、クレアは眠りに落ちた……。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
フェイトの部屋に明かりが差し込み始める……。

その光を感じ取ったのか、フェイトの寝息が一瞬途切れ、ピクリと身体が動く。

朝、か……。

浅い睡眠によって見ていた夢は終わり、フェイトは額に右腕を乗せて脳が完全に目覚めるまでの間にボーッとする。

ふと、カナンと寝ていることを思いだし、隣を見る。

「おはよ……ってカナン？」

そこにカナンはおらず、布団から余程静かに抜け出したのか形だけが残っていた。。

フェイトは、カナンが寝ていた位置に手を当てる。

少し温かさはあるものの冷えているといった方が近い。

つまり、カナンが起きたのは今さっきの話ではないということだ。

起こしてくれてもよかったのに……。

とフェイトは声には出さないが、少しだけ落胆する。

だが、落胆もつかの間、足音がフェイトの部屋へと近づいてきているのを聞き取った。

扉へ視線を向けていると、予想通りカナンだった。

「あ、おはようございます。フェイトさん。すいません。起こしちゃいました？」

笑いながら挨拶をした後、気まずそうに言うカナンだが、フェイトは首を振る。

「ううん。今起きた所だけど……」

言葉の途中で、カナンが持っている盆に視線が止まる。
盆の上に乗るのは、ティーポットとカップ。

「じゃ、丁度良いか……」

カナンがベッドの隣にある棚に盆を置く。
それは、緑茶だった。
淹れたてなのか、湯気を上げている。

「良い香り……」

そのカップをフェイトは持ち上げ香りを楽しむ。
フェイトが飲む所をカナンはジッと見つめる……。

「うん。美味しい」

ニッコリと笑うフェイトに対し、カナンは安堵の溜め息をもらした。

「良かったぁ……。フェイトさん、紅茶派だったらどうしようかと……」

「ううん。私も緑茶は飲むよ。母さんが淹れてくれるんだ」

「へぇ……」

仲の良い家族だなとカナンは頷くが、その緑茶というのは、リンディ茶という角砂糖にミルクを入れるという、緑茶とはいえない代物であり、極限られた人間しか飲むことは出来ない。

無論、そんな甘いお茶を飲めば、カナンは悶絶し、気絶することは間違いない。

余談はさておき、フェイトは終始笑顔のまま一杯目を飲み干した。

「ふぅ……。緑茶、淹れるの上手いんだね。母さんより美味しいかも……なんて」

「いくらなんでも、男の俺が、フェイトさんのお母さんには敵わないかと。　それに、俺の場合は、緑茶が淹れるのが上手いというか、緑茶くらいしかまともに淹れられないというか……。　ほら、俺の家、伯父さんしかいないから紅茶なんて洒落た飲み物、淹れる機会が無くて、まぁ、その代わりに緑茶好きなもんだから淹れてるうちに自然と上手くなったって感じッス。　ただ、緑茶が無かった日にはどうしようかとも思いましたけど、機動六課にそんな心配はいらなかったというか、うちよりよっぽどしっかりしてました」

「成る程」

説明するカナンにフェイトはにこやかに相槌を打つ。

朝によくある穏やかな時間が二人に流れる。

「そういえば、何で淹れてくれたの？」

「何でって……空きっ腹に運動は毒かなと思って」

「それだけのために朝早くに起きたの？」

立て続けに来た質問にカナンは首を傾げる。

その表情は困惑と疑問が浮かんでいる。

「おかしい、ッスか？」

「ううん。良いことだと思うよ。そういうことを当たり前に出来るから、二人に好きになってもらえたんじゃないかな？」

「……あ、朝からその話題、止めません？」

フェイトの言葉に若干頬を紅くなり染めながら、恥ずかしさから視線をそらす。

「もしかして照れてる？」

「ドやかましいです……」

居づらくなったのか、フェイトに背を向け、「先に行きます」と言い、出口の前へ……。

スライドした扉の向こうに人がいた……。

ボーゼンとした表情の祐希奈である。

朝に弱いヴィヴィオとは違い、起きれば即に動き出すタイプの祐希奈は、歯磨きと洗面、その他の都合により六課内を歩いていたのだが、盆を持って歩くカナンを発見、追跡、今に至る。

「「……」」

互いに無言。

しかし、反応は全く違う。

冷や汗を流し、恐怖と驚愕に染まりながら、目の前の祐希奈を見るカナンと、ボーゼンとした表情から鋭い目付きに変わり、段々と怒気を放ちながらカナンを見る祐希奈。

「え～祐希奈さん？　これには深ぁぁぁいやむを得ない事情と言うものがありまして……」

「で？」

「これはですね。昨日貴女様の襲撃を窓から逃げ仰せた後に、帰ってきてですね？　空いている部屋が無いということで、フェイトさんの温情に預かりまして……」

「で？」

「いや、だからですね？　やむを得ない事情が……」

「で？　だから何？　ひゃっほいと言わんばかりにフェイトさんの部屋に止まって添い寝をしてもらったあげく、私にバレないように朝早くにフェイトさんに茶でも飲ませて口封じをした後、あわよくばかくまってください的なお願いもしたってわけね？」

「後半は間違いです……」

「アウト～。口答えしたからぶち殺す……」

「えええぇぇぇ！？　真実を言っただけなんですけど！？」

「散れ……」

「ごぶっっっ！？」

問答無用に一言。

瞬間、驚愕するカナンの顔に祐希奈のハイキックがめり込む！

蹴りは尚を威力を失わず、カナンの身体を宙に浮かせる。
踏ん張りを失ったカナンは最早抵抗の術はない……。

「死ね！　変態が！」

「ごはぁぁあああああ！！！」

残像を残しながらカナンの身体が吹っ飛び、フェイトの部屋の窓をぶち抜いて一階まで落ちていった……。

「さて、殺るなら確実に……」

祐希奈の左腕が輝き、レイザーフォーテルが転送される。
ひたすら無表情にカナンが吹き飛んだ窓へと近づいていく……。
流石に六課で殺人を行わせるわけにはいかないと、慌ててフェイトが祐希奈に近づく。

「ゆ、祐希奈、違うから！　カナンが言ってることは本当で、私から進めたの。だから、それくらいで許してあげよう？」

「庇わなくていいわよ？」

「庇ってない。本当」

祐希奈はフェイトが言うならと、怒気を緩め、改めて窓に近づいた。

「ふん……」

「祐希奈！？」

フェイトが驚愕するのも無理はない。
許したと思っていた祐希奈がレイザーフォーテルから矢を射ち放ったのだから。

「うぁあああああ！！！」

響き渡る轟音、そして悲鳴。
それだけを確認して祐希奈は窓から離れる。
フェイトが窓からカナンを見ると、黒煙をあげていた……。

「しょうがないから一発で勘弁してあげたわよ……じゃ、また後でねフェイトさん」

カナンと祐希奈の関係に混乱するフェイト。

「……準備しよう」

しかし、これがあの二人の普通なのだと、無理矢理に脳を納得させ、朝練の準備を始めたのだった……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

機動六課の朝練に休みの日は滅多に無い。
それは、訓練所が使えない今回であっても同じこと。

「はい、集合！」

なのはの指示が飛び、準備運動をしていたＦＷメンバー、そして、

地球組であるヴィヴィオ、カナン、祐希奈を加えて整列する。
教導官は三人、なのは、フェイト、ヴィータである。
四人を代表し、なのはが一歩前に出た。

「皆も知っての通り、訓練所が使えなくて、機能停止状態。だから、本当なら今日は模擬戦やろうと思ってたんだけど、変更にさせて貰うね。今日は、初心に返ると言う言葉を実践して、皆、自分で基礎をやってみようか」

《はい！》

「うん。良い返事だね。ただし、あんまりにも基礎が崩れちゃってるようなら、夜、デスクワークが終わった後に、私とマンツーマンで完璧になるまでやるから、そのつもりでね？」

なのはとマンツーマン。
局員ではなく、一般の民間人が聞けば美人のなのはと二人っきりでの教導という、羨ましがるであろうシチュエーション。
しかし、管理局員においては、泣きたくなるようなシチュエーションなのである。
こと、機動六課においては特にそれが顕著であり、ＦＷメンバーどころか、スターズの副隊長であるヴィータでさえ、少し顔色が青くなっていた……。

「あれ？　皆、顔が青くなってるけど、大丈夫？」

《大丈夫です……》

「う、うん。体調が悪くなったらすぐに止めるんだよ？　じゃあ、ヴィヴィオとライトニングは回避トレーニング。祐希奈とスバルは

防御トレーニング。ティアナは久しぶりに私とインターセプトトレーニング、やってみよう」

《はい！》

なのはの指示に、次は元気良く返事を返し、なのはとヴィータ、FWメンバーは散っていく。

残ったのはカナンとフェイト。

「俺はいいんスか？」

「カナンは六課には初めてきたから、基礎訓練、初歩からやらなきゃいけないよね？」

フェイトが言うと、なんとなく理解したのか、カナンが頷く。

「要するに、効率良くするためってことっスよね？」

「そういうこと。本当はやらせてあげたいんだけど……」

効率のためにはみ出し者にしたという罪悪感から、フェイトは少し俯くが、カナンは何も言わずにフェイトから大股で三歩ほど離れ、左腕に転送した剣を肩に担ぎ、首だけをフェイトに向け、ニカッと笑う。

「早くやりましょう。楽しい訓練を。フェイトさんが教えてくれるんスよね？」

師匠が教えてくれるなら是非もないと、カナンは、そんな表情をしていた。

気にしていない様子のカナンに、フェイトは俯いていた顔を上げ、ニコリ頷き、訓練だというのにバリアジャケットを展開。カナンもそれに習い、騎士甲冑を身に纏う。

「じゃあ、軽く身体を動かしながら、教えていくから」

「わかりましたよ。フェイト師匠」

「ちょっと恥ずかしいね」

「まぁ、確かに」

苦笑いを浮かべる二人は、どちらからともなく動き、瞬く間に距離を詰め、カナンは下段からの金閃を、フェイト上段からの閃斧を叩き付けた……。

―ヴィヴィオ&ライトニング―

その場所には、既に被弾したのか、一時的に離脱しているキャロと、二人同時に射撃の雨に身を晒すヴィヴィオとエリオがいた、

「流石にちょっと難しいね」

「そう、だね」

ヴィヴィオとエリオは話をしながら、二人は軽く足を上げ、足元に飛来したスフィアからの射撃を避ける。

タンっと、ステップを軽く踏み、それを連続して行う。

時には軽く身を捻り、ある時には回転しながら、またある時は、

互いの位置を入れ換えながら、降り注ぐ射撃を回避するヴィヴィオとエリオ。

その動きは、二人が舞っているようにも見える。

しかし、実際はそのように簡単なものではない。

互いと互いが動く障害物であり、射撃のブラインド効果と共に相手とぶつからないように常に集中していなければならない状態。

さらに、時間がたつにつれ、射撃の間隔は短くなり、その集中の中で、判断も加速させていかねばならない。

スピード、反射神経、フットワークに自信がある二人であるから出来る芸当であり、高機動戦が苦手なキャロにはまず不可能な訓練だった。

「二人共、凄いなぁ……」

「速いね～♪」

「感心してねぇで、お前ももうちょい努力しろ……」

「アレは……努力でなんとかなるのかな……。ブースト使っても私じゃ難しい気がするんだけど……」

そう言って、苦笑いを浮かべるキャロが、ヴィヴィオとエリオへと視線を戻す。

そこには、金色の閃光と化した二人がいた……。

互いにブリッツアクションを用いて凄まじい速度で先の動作を加速させているのだ。

視線で追うのが精一杯となっているキャロだが、少し昔ならば、フェイトの動きを追うことが不可能だったキャロが、現在は二人を追えているということは、やはりキャロも成長していると言える。

「「っ！」」

閃光同士が正面と正面から向かい合う。
このまま行けば激突という動きをした二人に、ミスをしたのかと、キャロは思ったが、違った。
二人を中心に、ドーム型に広がっていた設置型スフィアは、ほぼ、全く同時というほどに射撃を撃ち込む！
だが、二人はキャロの視認速度を追い抜き、消え去る……。
直後、着弾した射撃が、土煙を上げ、小爆発を起こす。

「パーフェクト、かな？」

「ごめん、被弾1だ」

「っ！」

突如として左右から響く声に、キャロはビクリと反応する。
無論、声の主はヴィヴィオとエリオである。

「びっくりした……」

「あ、ごめんキャロ、驚かせた？」

「ごめんなさい……」

謝る二人にキャロは気にしていないと首を振る。

「エリオ君、被弾したの？」

「あ、ちょっと肩にね」

「ホントだ～♪」

ニーナがエリオの肩に近づき、確認する。

確かに、エリオの肩の端に、被弾とエリオは言うものの極小であり、かすった程度に跡が残っていた。

「エリオ、ちょっと動きづらそうだったけど、やっぱり……」

「高機動魔法で動く時はストラーダが補助してくれてたからね」

「そっか……」

ストラーダの状態を知るヴィヴィオとキャロは、暗くなるが、エリオは笑っていた。

「悲観はしてないよ。僕の本当の力って言うとちょっとおかしいけれど、自分を鍛えるチャンスなんだって思うことにしてる。鍛えて、ストラーダを驚かせてみようかなって」

「エリ君かっこい～♪」

「その意気だぜ。エリオ」

「ありがとう、ニーナ、アル」

明るい三人だが、エリオの言葉を聞いても、ヴィヴィオとキャロは複雑な感情を抱いたままだった。

というより、言葉を聞いたからこそ、より複雑な感情を抱いたとも言える。

ストラーダが直らないかもしれないということを二人は知っていた。
もし、これを知ったらエリオはどうするだろうかと、二人は思う。

「よし、始めようか」

「うん。やるよね、ヴィヴィオ」

「やる、よ」

それでも、エリオはストラーダが直ることを信じるだろう。
ならばと、今、エリオの力になることが出来るのだから、迷わず力になろうと思った。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

そんな複雑なライトニング分隊を差し置き、ヴィータ、スバル、祐希奈は白熱していた。
そう、ヴィータもである。

「はぁっ、はぁっ……どうよ……。チョロいもん、ね……」

「くっ……、何て、力……」

祐希奈の前に、スバルは膝をつく。
なんのことはない。魔力の枯渇による脱力である。
魔力値においては、ＦＷメンバーの中でも飛び抜けて多いスバルが、この短時間で枯渇になるほどにこちらの防御訓練は激しいモノと化していた。

「さぁ、勝負だ！　祐希奈！」

「潰してあげるわ……」

グラーファイゼンを突きつけるヴィータに、祐希奈は不適な笑みを浮かべる。

教導官であるヴィータが何故このような状態にあるのか、それは、少し前に遡る。

もちろん、始まった当初はヴィータは冷静であり、基礎的な部分で見つけた細かな間違いを指摘していた。

しかし、祐希奈が言った発言から、教導は壊れ始めた……。

何度目かのスバルの攻撃を防ぎきった祐希奈が交代してスバルを攻撃する番なのだが、祐希奈は動かない。

「なんかさ、どうせなら面白い訓練しない？」

「あのなぁ、訓練に面白さなんて必要あると思うか？」

「別に、面白いだけじゃないわよ。面白くて、訓練にもなる、ちょっと考えてみたんだけど？」

少し考えたヴィータだが、祐希奈の意見を取り入れるのも何か発見かもしれないと思う。

「採用はわかんねぇが、言ってみろ」

来たとばかりに、祐希奈が嬉しそうに笑う。

「斬って殴って防いでじゃんけんぽん第三回♪」

提案したのは悲劇しかおこさない遊戯であった……。
ヴィータは急激にやる気が失せ、ジト目で祐希奈を睨む。

「却下……さっさと訓練しろ」

即座に祐希奈の意見を切り捨てるヴィータだが、祐希奈はまだ笑っている……。

「そっか。ヴィータさんは私にボコボコにされるから逃げるってわけね？」

背後から言い放たれた言葉に怒りのオーラを発し、祐希奈に振り返る……。

「んだと……」

その小さな身体と可愛らしい外見に反して、ドスのきいた、それこそ、男性ですら震え上がって逃げるであろう声を響かせる。

「だから、怖いんでしょ。勝てないってわかるのが……」

「てめぇ、祐希奈……あんまなめてっとぶっ潰すぞ……？」

「あ、あのヴィータ副隊長？　あれは祐希奈の挑発ですよ？」

わかっている。
スバルに言われずとも、これは祐希奈の策略であると、ヴィータも頭ではわかっていた。

「うっせぇ！　ここまで喧嘩売られて黙ってられるか！」

しかし、祐希奈に負けず劣らずの負けず嫌いであるヴィータは、年下である祐希奈に挑発をされて黙っていられるようなタイプではなかった。

「……やる？」

「やってやろうじゃんか。泣かしてやる！」

「えぇ！？　ちょっと、ヴィータ副隊長！？」

こうして、スバルをも巻き込んで今に至る。

「「じゃんけん……」」

ヴィータと祐希奈の視線が交わり、火花を散らす……。

「「ポン！」」

気合いの入った声と共に出した手は、祐希奈がグー、ヴィータが、パー。

「ちっ！」

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！』

即座に祐希奈が前面に障壁を展開。

本来のルールなら、この時点で防御組の勝ちなのだが、祐希奈が考えたルールに、そんな甘いものは無い。

「ラケーテンハンマー……」
『Ｒａｋｅｔｅｎ　Ｆｏｒｍ！』
肩に担いだグラーフアイゼンを両手で握り、回転を開始、カートリッジが弾き出され、加速をしていく……。
「抜けるもんなら抜いてみなさいよ！！　鉄槌の騎士の力でね！！！」
「言われなくても……抜いたらぁぁぁぁああ！！！」
祐希奈の咆哮、応えるようにヴィータが数メートルの距離を詰め、遠心力を利用したラケーテンハンマーを障壁へと叩き込む！
激しく火花が舞い躍り、防ぎきらんと、ぶち抜かんと、真逆の力が働き、お互いを否定する！
「ぶち抜けぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇーー！！！」
「抜かせるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁーー！！！」
二人の瞳孔が開ききると同時に、巨爆が起こり、土煙の中からヴィータ、祐希奈が吹き飛ぶ！
つまりは引き分け。
しかし、二人は腕をつきながら立ち上がる……。
「「じゃ～んけん！」」
起き上がるやいなや、祐希奈は拳を、ヴィータは鉄槌を振りかぶりながら、一直線に突撃する！

「「ポォォォォン！」」

まだじゃんけん段階の筈なのだが、轟音が響く……。
何故なら、もう既に鉄槌と拳を叩きつけていたのだ。
最早、二人の頭のボルトは緩む所か抜けている。

「これがあたしのパーだぁぁぁぁーー！！！」

そうして叫びながら叩き込むのはギガントハンマー。
確かに、叩かれれば頭がパーになるであろう。

「薄っぺらい紙切れなんざ石でぶち抜いてやるわ！！！」

そう叫んで叩き込むのは業炎爆裂衝破。
正式なじゃんけんのルールなら負けなのだが、祐希奈式には関係ない。
より強い方が勝つ。

「「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」」

ビリビリと大気をも振るわす威力を叩き込み続ける二人は完全に周囲のことなど見えてはいない。

「これ、何の訓練だっけ……」

そんな中で、スバルは珍しく冷静にツッコミを入れていた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

そして、その光景を一足先に小休止に入っていたティアナとなの

はが見ていた……。

「あれ、なんでしょうか……」

「ヴィータちゃん流の新しい訓練かなぁ……」

ジト目で見るティアナと苦笑い気味のなのは。

なのはは止めようかとも思ったが、訓練のやり方はともかく、防御、攻撃共に危なげがない、正しい方法で戦っている二人を止めるに止められず、今に至る。

「なのはさん、祐希奈もヴィータ副隊長も言っても止まらない人達ですし、こっちはこっちで続きやりませんか？」

やや諦めた表情を浮かべ、ティアナはなのはに放っておくことを提案した。

なのはは、「そうだね」と頷き、インターセプトトレーニングを再開した。

「じゃあ、インターセプト、最終段階、やってみようか」

「はい！」

インターセプトトレーニングとは、簡単に言えば、迎撃訓練である。

様々な種類、弾速、効果があるスフィアに、回避は行わず、的確な弾丸をセレクトし、撃ち落とすというもの。

最初こそ色分けがされているが、段階が上がるにつれ、色分けが無くなり、軌道だけで瞬時に判断することが必要とされる。

それの最終段階ともなると、全てが同じ色。
浮いている状態では全く区別がつかない。

基礎とはいえ、訓練の中では過酷な部類のモノだ。
故に、ティアナは、クロスミラージュをツーハンドモードで展開、周囲のスフィア全てに気を巡らせる……。

「インターセプトトレーニング、レディー……ゴー！」

ティアナの準備は完了したと判断したなのはは、ゆっくりと右腕を上げ、振り下ろす。
と同時に桜色のスフィアはそれぞれ別の軌道を描く。
それは、螺旋であったり、直線であったりと様々だ。
周囲の情報を把握したティアナが描くは己を中心とした日時計……。

3時、1時、5時。

右に動く視線を追って、右腕が肩の位置に上がり、弾丸を選ぶ。
そして、時計でいう、3時、1時、5時の位置に直射型を三発叩き込む。
直射型の弾丸は真っ直ぐにスフィアを捉え、消し去る……。

6時、8時……12時！

ティアナの背後に回り込むようにして螺旋を描くスフィアが二つあった。
正面を向いていた身を右足を引いて捻り、3時の方向を向き、もう一度右手のクロスミラージュから6時と8時の位置に弾丸を放つ。
その弾丸は同じような螺旋を描きスフィアと衝突、砕け散る。

瞬間、ティアナは左腕を上げ、直射型を１２時に撃ち放つ！
ヒット……また砕ける。
その際、横目で背後の状況を確認し身を裁き回転、向く方向は８時の方向。

１１時、４時と角度プラス５０……

ほぼ対角となる二つの位置。
向かってくるスフィアは、１１時は螺旋、４時は直射型でやや上に存在している。
右腕を肩と平行に、左腕を肩から５０度上げ、左右同時に放つ！
最早ティアナは結果は見ない。当たったと感覚で掴んでいるティアナは、先からの一連の動作のように右足をずらし、向くは１０時の方向。

１時、７時……

左右に瞳が走り、肘を曲げた左腕と右腕が交差する。
どちらも直射、７時のスフィアは砕けるが、１時は弾かれ、ティアナの弾丸が消える……。

炸裂……

が、ティアナは驚くこともなく、冷静にもう一度弾丸を撃ち込む。
直後、小規模な爆発とともに弾丸は互いに消滅する……。

「成長したなぁ」

ティアナによって、次々と撃ち落とされていくスフィアを見ながら、なのはは笑う。

六課に所属してすぐのころ、精神的に弱く、実力不足に悩んでいたティアナ。
しかし、今、なのはの前にいるのは、自信に溢れ、己の力の使い方を磨いてきた強いティアナだ。
その実力の土台作りをかつて、自分が担っていた。
それが嬉しかったのだ。

「ふぅ……」

やがて、ティアナから吐息が漏れる。
なのはの訓練用スフィアを全て撃墜したティアナは、額に浮いた汗を手の甲で拭う。

「全て撃墜、か。凄いね。ティアナ」

「ありがとうございます。なのはさん」

お礼を言うティアナの息は、まだそれほど乱れてはおらず、余裕があった。

「さてと、あんまりにもティアナが凄いから予定よりちょっと早いけど、時間も中途半端だし終わってクールダウン、一緒にやろうか」

「はい。お願いします」

そうして、なのはとティアナは、筋肉への負担を軽くするため、ストレッチをしてクールダウンを開始する。

「痛っ！　なのはさん、限界です！」

「ダメ。もっといけるでしょ？」

「無理です～！」

「あはは。我慢我慢」

隊長と部下とは思えない程に二人は仲良くストレッチを行い、立ち上がる。

少しの休憩となったティアナとなのはは、他の訓練へと視線を巡らせ、一点で止まる……。

「初めにチラッと聞こえてたんですけど、軽めとか言ってませんでしたか？」

ティアナがジト目で見ている視線の先、残像を残しながら剣と斧を叩きつけ合うカナンとフェイトがいた……。

ティアナの目には、どうみても軽めには見えない。

「軽めなんじゃないかな。あの二人にしては」

「……」

が、なのはには軽めに見えるらしく、迷うことなく、ティアナの問いにあっさりと返答を返した。

それにティアナは苦笑いを浮かべる。

どこがよぉぉぉぉーー！！！

そして、内心なのはに向けてツッコミを入れていた……。

「ん？　ティアナ？」

「いえ、すいません」

なのははそれを知る止しもない……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

なのはとティアナのやり取りが行われている中、戦いを繰り広げる二人の表情は、涼しい顔をしている。

なのはの言う通り、“軽め”なのだ。

「せっ！」

「ん……」

カナンが放った袈裟斬りの一撃を、フェイトは斜に構えたバルディッシュの柄で受け止める。

「抜刀からは上手いけど、抜き身の袈裟からも重心乗せられるように頑張ろうか」

「はい。ん～とっ！」

フェイトを弾き飛ばした後、右足から一気に踏み込み、閃光と共に振り上げ、再び袈裟に叩き込む！

フェイトは同じように斜に構えたバルディッシュで受けるが、右腕を引き、回転、受け流す。

そのままカナンの背後に回り込み、下段からの振り上げを放つ！

が、カナンは前に踏み込んだ勢いを殺さず前宙、上下逆さで納刀した……。

「こんな感じっスか？」

「うん。流された時の対応もするんだよ？」

「了……解っ！」

フェイトが軽く背後にステップを踏む……。

瞬間、脳天から空間斬撃が叩き込まれ、地を抉る……。

しかし、フェイトは先のステップにより避けている。

「バルディッシュ」

『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ……』

つまりは自由、膝に力を溜め、同時にカートリッジを弾き出す……。

バルディッシュが変型し、斧だった位置から金色の雷刃を左右に伸ばす……。

ハーケンフォームとなったバルディッシュを肩に担ぎ、跳躍、上段に持ち上げる！

対し、カナンは、迎撃を考えず、地上へと空間を歪めた。

「はっ！」

フェイトが金色の雷刃にて半月を描くが、それはカナンを捉えない。

空間突破で地上へと回避したのだ。

『Ｈａｋｅｎ　Ｓａｂｅｒ』

だが、それくらい予測できないフェイトではない。

先に放った斬撃から延長するように雷刃が飛翔する！

「……」

フェイトがあの程度で終わる筈はないと、カナンは既に納刀し準備していた。絶空で斬り払おうと、カナンの左腕が柄を握るが、直前で背後に空間を繋げ、一気に退いた。

「うん。よく見てる……」

『Ｐｌａｓｍａ　Ｓｍａｓｈｅｒ』

ニコリと笑ったフェイトが左の掌に展開された魔方陣からプラズマスマッシャーを撃ち放ち、ハーケンセイバーごと破壊する。

その位置は、先にカナンが絶空を放とうと停止していた所だ……。

「はは。怖い怖い」

「そうは見えないけど？」

振り向き様にフェイトがバルディッシュを下段から斬り上げ、金属音と共に剣を弾く。

フェイトの背後、既にカナンがそこにいた。

弾かれたカナンは左に回転、勢いも合わせて叩き込む。

が、両手で縦にバルディッシュを構えたフェイトは簡単に防いで見せた……。

少し強引だよ。そう、忠告をしようとしたフェイト。

が……。

「ラスト二十秒だけ、お願いします……」

カナンから呟かれた言葉。
剣の柄を握る指に力がこもるのをフェイトは確認した。

「えっと、カナン？」

『Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ』

一瞬の内に三つもの閃光がフェイトを襲う！
困惑しながらも、高速で下がり、閃光を避ける。

「っ！」

悪寒を感じてたフェイトは壁を前面に展開。
直後、カナンの姿が消失した……。

「暗夜一閃っ！」

ほぼ同時に障壁に刃が叩き込まれ、紫電を散らす！
激烈なその一閃の威力に、フェイトは苦笑いを浮かべた。

スイッチ、入っちゃったんだ……
そう、先のラスト二十秒だけという言葉。
それは二十秒だけ、本気でやって欲しいとの意味だった。
フェイトは返事はしない。
だが、返答は出来る。

『Ｐｌａｓｍａ　Ｂａｒｒｅｔ』

攻撃の意思がその証。
つばぜり合いのまま周囲に展開される雷槍……。
その数３０！

「ファイア！」

一斉に放たれる雷槍に、カナンはフェイトの障壁を蹴り、反動で放れ、雷槍を引き付ける……。

「はぁぁぁっ！」

閃光が乱舞する……。
断ち斬られた雷槍。
が、それらは消える直前、雷撃を放ち、炸裂する！
プラズマバレット、ランサーに比べ、速度や追尾は劣るが、炸裂効果があり、単発の威力はそれを凌駕する。
カナンは、身体に走る痛みに耐えながら、前を向く。
そして、眼前を覆った雷刃を目にした……。

「ちっ！」

反射的に振り上げた斬撃が受け止めていたモノ、それは、ハーケンセイバーだった。
エクスカリバーを削り取らんとするように、激しい火花が舞い踊る！
ハーケンセイバーを受け止め、動けないカナンの背後に現れるフェイト……。

「まだ、まだ！」

「っ！」

だが、勝負は決まらない。

フェイトが身を退いた直後、カナンから放たれた蹴り上げが貫いていく！

「うぉぅぅらぁぁ！」

咆哮を上げ、剣を振り抜く！

弾け飛ぶ金色、ハーケンセイバーを断ちきったカナンはフェイトへと突っ込む！

「残念、おしまい」

「へ？」

フェイトが告げた直後、カナンは背中に何かから直撃を受け、地上へと落下した……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

カナンを背後から襲ったモノ、それは、カナンの背後に回り込む前に弧を描いて飛ぶよう、放っておいたもう一発のハーケンセイバーだった。

単純な二連発なら気づいたかもしれないが、回り込まれれば、嫌でもそちらに意識がいく。

事実、カナンは挟み撃ちにされたことに意識が集中し、少し視界から外れただけのもう一撃に気づかなかった。

ハーケンセイバーの特殊な軌道と、カナンの性格を理解した上での勝利だった。

「ちっくしょう……アホだ俺……」

仰向けに転がりながら、カナンが呟く。

空間把握という能力がありながら意表をつかれたことはカナンにとってかなりのダメージとなっていた。

「今回は二十秒って制限時間もあったから、焦ったのも仕方ないよ」

「言い訳にしかなんねぇッスよ……」

「そうだね」

カナンはふて腐れた表情をしていたが、実際、制限時間があったからこそ楽に勝てたのだ。

短い時間に少しでも多くフェイトと戦いたいカナンは、反撃にばかり身が入ってしまい、回避、防御といった余裕が無くなっていたのだ。

結果、道は一本に絞られ、フェイトの手玉にとられたということである。

戦闘に関しては、周囲の状況、運さえも自分が弱いからだと言うカナンに朝、祐希奈に散々言い訳を言っていたカナンとを重ね、フェイトは笑った。

「？　何笑ってんスか？」

「ごめんね。ただ、朝も祐希奈にもそうやって周りのことを言い訳せずに真っ直ぐ言えば許してくれたんじゃないかなって」

祐希奈に言い訳をせずに真っ直ぐ言う、そのことを考えカナンは

微妙な顔をした……。

「祐希奈は、言いがかりの理由自体適当なんで、真っ直ぐ言った所で普段なら蹴られるだけッスよ……。まぁ、蹴ってくる時は怒ってないってことッスから、この後も普通に話してくると……」

「てい♪」

声が響いた瞬間、フェイトと話していたカナンが屈む！

ブン、という風切り音と共に上段回し蹴りがカナンの頭上を通過した……。

「ちっ……外した」

「思いますよ？　話してる途中に蹴るな……」

蹴りを放った人物は、その人、一之瀬祐希奈である。

ジト目で祐希奈を睨むカナンと舌打ちをする祐希奈にフェイトは苦笑いを浮かべた。

「……ノリ？」

「意味がわかりません！」

「じゃあ、気分♪」

「同じ意味だろ！」

二人が漫才を繰り広げていると、訓練が終わったメンバーが続々と集合する。

「あ、あの、祐希ちゃん？　カナン君が避けられなかったら怪我しちゃうかもしれないし、ね？」

「ふ～む……」

流石にヴィヴィオの言葉には効き目があったのか、祐希奈は腕組みをして悩む……。

「危ないカナン！」

「は？」

祐希奈が叫び、数瞬おかず……

バキャァア！

という、凄まじい音が響き、回し蹴りを見舞われたカナンが５ｍ弱の距離を飛翔していた……。

だが、カナンは数秒とせずに起き上がる。

「……意味わからん」

「避けられるように堂々と蹴ってみました♪」

「避けさせる気なかっただろ！」

「２％くらいあったわ！」

「それはあるとは言わん！」

「あの、二人共、その、ママがね、困ってるから……」

いつまでも終わりそうにないため、ヴィヴィオが仲介に入る。

正に仕方ない、という様子で祐希奈はカナンを弄るのを諦める。

しかし……。

「よし。ヴィヴィオで遊ぼうっと♪」

「ふぇぇぇえ!?」

その弄りはヴィヴィオへと飛び火したのであった……。

祐希奈に回されているヴィヴィオにカナンは哀れみの目を向け、取り合えず拝んでおいた。

「なのはさん、俺、ちょっと走っておきたいんですけど、いいッスか？」

「ん～。いいけど、朝食の時間もあるから短めにね？」

「はい」

「なのは、私も行ってくるね」

「え、あ、うん」

なのはに背を向けるカナンに、フェイトも追い付く。

昨日、一緒に走るという約束を実現してくれようとしているのだ。

「別にいいッスよ？　俺、ちょっと行きたいとこありますし」

約束はしたものの、多少は気まずいのか、そう言うカナンにフェイトは首を振る。

「付き合うって言ったのは私なんだから、気にしないで」

「じゃあ、よろしくついでに少し道を聞いてもいいッスか」

「うん。行こうか」

「はい！」

気まずい雰囲気は消え、カナンは明るく笑う。

フェイトも笑みを返し、二人は六課隊舎から出発した。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

始め、出てからしばらくは歩きたいと言ったカナンの要望に答え、フェイトは歩く。

「……」

「カナン？」

六課は都市部から離れているために、周囲には自然が多く、それは大通りの手前にも広がっている。

六課から約４００ｍ、林が広がっている位置でカナンが止まる。

「こんなに近かったのに……」

「どうしたの？」

「あ～……いえ」

「……そう」

フェイトの問いに、一瞬迷ったような表情を見せたカナンだが、無理矢理に笑みを作り、答えることはなかった。

何かがあると察したフェイトは頷くだけに終わる。

そこから左に曲がり、大通りの端を二人は歩く。

無言のままに……。

「ここ、か……」

再びカナンが止まる。

そこは、先の林から、５００ｍも進んでいない。

六課から測ったとしても、一キロも無いだろう。

フェイトから見たカナンの瞳は、一点を見つめ、何かを見ているようでいてはあるが、それは、この世界に在るモノを見ていない。

そう捉えられた。

「フェイトさん……」

「うん。何？」

静かに、呟きにも等しい声で、カナンが口を開く。

それに、フェイトは優しささえ感じられる口調で問う。

「花屋って、ミッドにありますか……？」

「もちろん。近くにあるから帰る前に教えてあげる」
「ありがとう……、ございます……」
何故、花がいるのか、フェイトは聞かない。
理由はわからない。
しかし、自分は、それを聞くには相応しくないと思ったからだ。
「行こうか？」
「はい」
その場所から二人は離れる。
カナンは、一度も振り返らなかった。
「あぁぁーー！！　ちっくしょぉぉぉぉぉーーー！！！！！」
そして、咆哮しながら全力疾走を開始する！
「カナン！？　フラワーショップはそっちじゃないよ！？」
カナンの走り去った後には、それを追うように、水滴が落ちていた……。
「カナーン、だからこっちだよー！」
それに気づいていたフェイトだが、やはり何も言わず、若干暴走気味のカナンを呼び戻しフラワーショップを紹介し、二人は六課へと帰ることにした。

後編に続く

第三十四話　Ｔｉｍｅ　Ｌｉｍｉｔ　２Ｄａｙｓ　（後編）（前書き）

はい、アンケートの結果発表となりました今話。
まぁ、妥当な線ですが、予想以上にシリアスになった部分もあったり（汗）
そのため、前書きは控えめにしています。

第三十四話　Ｔｉｍｅ　Ｌｉｍｉｔ　２Ｄａｙｓ　（後編）

ヴ「み、皆さんこんばんは。前書きの時間です……あぁ……」

メ祐「何でヴィヴィオがオロオロしてるのかって？　アレよ」

５カ「お母さんの方が綺麗だよ！」

しー「……ママ……だよ」

ビクビク……。

奈「ふ、二人とも、どっちも綺麗ってことで、ね？」

５カ・しー「「ヤダ……」」

奈「うわぁ、どうしよう……」

ヴ「えと、えと、どうしましょうか……」

メ祐「親二名は大変ねぇ……ってまた一真さんから攻撃？　でも、今回は無駄よ……」

ドシュウ！

千歳「一真……メイド化した祐希奈になんてことしやがる……」

メ祐「ちーちゃん、お願い♪」

千歳「任せろ。殺してくる……」

メ「さて、一真さんはアレで死ぬとして……」

ヴ・奈「二人とも止めてー！」

しー「……ぜちゅえい……」

５カ「あんやーいっせんー！」

ズバシュ、ギン！　ギィン！

メ祐「えらいハイレベルな戦いしてるわね……取り合えず、撮るか♪」

しー「……えいっ」

―撃！・撃！・撃！・撃！―

しーちゃんのゴスロリ服が翻り、その可憐さとは真逆の、激しい太刀筋がカナンを襲う！

５カ「負けないもん！」

―烈！―

しー「……怖いよぅ……」

カナンから発生するは竜巻、参式抜刀剣術、絶空。

しかし、しーちゃんは踏み込みを止め、半泣きながらもバックス

テップで避けている……。

5カ・しー「あんやーいっせんーっ！／……ぜちゅえい・れんが……」

―閃！・烈！―

超速の二人は踏み込みにて暴風を炸裂させながら、すれ違い様に火花を散らす……。

「負けないー！」

「……（ビクビク）」

―閃！・撃！・烈！・破！・轟！―

空で、陸で、苛烈なまでに巻き起こる剣撃の乱舞！

全ては！

ヴ「しーちゃん……」

カ「えくすかりばー！」

奈「カナン君……」

ママのために！

しー「……きりんさん……」

―滅！―

夏輝「取り合えずお前ら、好きなだけお菓子やるから落ち着け」

5カ「わ～い♪」

奈「カナン君、食べ過ぎないようにね？」

しー「……ヴィヴィオママ、食べていい？」

ヴ「うん。いいよ～♪」

かくして、風間夏輝という人物の手によってママ戦役と呼ばれる大戦は幕を閉じたのだった。

完！

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

午後が始まってすぐ、はやてさんに呼び出しを受けた、俺、ヴィヴィオ、祐希奈の三人は部隊長室に入って話を聞いていたんだが、正直、意味がわからない。

俺の頭の中は混乱して聞いた言葉の半分も理解してない。

だから、返す言葉とすれば、これしかない。

「「は？」」

「えと……？」

奇遇にも、俺の隣にいた祐希奈も同じく声を上げた。

ヴィヴィオは意味は理解してるみたいだが、首を傾げている所から

して、疑問に思ってるんだろう。
俺達の反応を見て、部隊長、はやてさんが苦笑い。

「うん。何となくこうなるって予想は出来てたよ。確かに、三人にしたら訳がわからんと思うんよ。そやけど、白姫クレア陸曹が、三人、特にカナンには肩の力を抜いといて欲しいから、お願いって必死に頼まれてなぁ。多分カナンに負担がかかるから、せめてって感じなんやろうけど……」

なんか知らんが、これはクレアの差し金らしい。
まぁ、肩の力を抜けって提案で俺達に休みをお願いしたってとこまではわかる。わかるが……。

「何でデートなんスか……」

「私に聞かれてもなぁ……。楽しんでこいってこととちゃうか？」

「自分でも言うのもなんですけど、俺、そういうの苦手ッスよ？」

自慢じゃないが、女の子をエスコートするなんて俺には逆立ちしても不可能だ。

「うん。それもわかるわ」

「……」

即答されるとされるで辛いもんがあるんだが、はやてさんもなのはさん程じゃないにしろ、ボケッとした部分があるからスルーしよう。

「うん……わかったわ！」

「は？」

沈黙していた祐希奈が何故か明るい声。

こういう時は大抵俺の人権やら意思やら、そんなもんはないと俺の記憶は告げている。

「……」

なので、スルーしてみた。

「聞けよ♪」

「ゆ、祐希ちゃん？　加減、加減を忘れちゃダメだよ？」

ミシミシ！

と軋みを上げるのは捻り上げられた俺の右腕だった……。

「折れる！　折れますって！　何がわかりやがったんでしょうか！？」

口調はどうでもいいらしく、右腕はダラリと下がった。

熱を発する右腕をさすりながら祐希奈を見ると、やっぱり笑っている。

「行くわよ。デート♪」

「マジで……？」

「マジで♪」

最初のテンションはどうしたよ……。

「間が持たなくなるかもしれないぞ……」

「ごちゃごちゃうるさい奴ね……よし♪」

「ふぇ？」

祐希奈が何やらヴィヴィオを壁際に連れていき、ゴニョゴニョやっている……。

すぐに二人は帰ってきて、俺の視線、約３０度したにヴィヴィオが屈む。

「ダメ……？」

「ぐっ！」

紅と翡翠の瞳が俺に正面から突き刺さる！

祐希奈に何を言われたかはわからないが、ヴィヴィオさん、上目遣いはいけません！て……

「嫌……？」

「嫌……じゃないです……」

何となくこうなるんじゃないかってわかってたがな！

ど～せ俺は祐希奈には勝てないってわかってたさ！

「チョロいチョロい♪」

ピースをしている祐希奈を取り合えず睨んでおこう……。

「ったく、やるなら自分でやれ、阿呆……」

「嫌……？」

バッチリやってくれましたよコンチクショウ……。

「……行くぞ」

「カナン君、顔、紅いよ？」

「ヴィヴィオ、アレはね♪」

「じゃかぁしい！　さっさと行くぞ！」

「仲良くな～♪」

はやてさんに一礼し、俺達は部隊長室から退室した。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

んで、ミッドで学ランのままデートすると目立つということで、俺はエリオに赤い上着と黒のシャツ、後は普通のジーパンを借りている。

正直、少しダボっているが我慢しよう。

「お前ら、ホントに来なくていいのか？」

「ああ。まだ本調子ではないのでな」

「私達はやることもありますし、主達で楽しんで来てください」

メイデンとレナスは、遠慮するらしい。
また変な気を使ってる気がしないでもないが、追求はしないでおこう……。

「んじゃ、土産は？」

「仲良く帰って来る。私達にはそれが一番のお土産だ。また喧嘩などした日には大変だからな」

「そうですよ。それだけは気を付けてください？」

「へいへい。頑張りますよ」

何で俺はデバイスのコイツらに心配されてんだろうか……。
マジで情けないとしかいいようがない……。

「ほら、ご到着のようだ」

「では、失礼しますね」

ヴィヴィオと祐希奈が来ると、二人は戻っていった。

「わぁ、カナン君が赤だ……」

「ま、珍しくはあるわね」

「お前らもな」

視線を向けると、白いジャケットの上着に、赤いワンピースを着ていると思われる祐希奈と、帽子のついている青いジャケット、ダメージがあるジーパンをヴィヴィオが着ている。

「いつもなら逆だろ？」

「う～ん……。そうかもしれないね。私はジーンズはあんまり着ないから」

「ヴィヴィオはワンピースタイプの服が多いしね。にしても慣れないわ……変じゃない？」

「私もどう、かな？」

いつもと違う格好だから気にしているのか、ヴィヴィオ祐希奈が若干不安そうに聞いてくる。

ボーイッシュなヴィヴィオと可憐な祐希奈、どっちも新鮮でいつもとは違った魅力がある。

「素材が良いからな。俺はお前らに似合わない服のが見たい」

自然に口から出た言葉。

それに何でか二人は紅くなる。

「あの……ありがとう」

「……バカ」

「何で礼言われたかもけなされたのかもわからないんだが……」
女の子はやっぱようわからん……。
「あ、アンタも！」
出発しようと、背を向けた時、祐希奈が叫ぶ。
何かしたっけか……。
「ん？」
「アンタも……その、似合ってる、わよ……」
飛んできたのは蹴りでも罵倒でもなく、誉め言葉。
びっくりしたが、誉められて嫌な奴はいない。
「ああ。サンキュ。ってかお前、大丈夫か？　何かふらついてるぞ？」
「だ、大丈夫、です……」
「……何で敬語？」
どうにも祐希奈がおかしい。
さっきは何ともないと思ったんだが……。
確かめるか。
「っ！」
「こら、動くな」

「……ん」

額に手を当てるとやっぱちょっと熱い。

「熱あるぞ。止めるか？」

「だ、大丈夫だから！　何でもないから！」

「んじゃ、保険な？　蹴るなよ？」

変化を感じ取れるよう、祐希奈の手を握るとビクリとした反応がある。

「な……んで？」

「何でって、行きたいんだろ？　これ以上体調が悪くなったらすぐに感じ取れるようにって措置。嫌かもしれないけど、これが嫌なら帰るしかない。どうする？」

ちょっときつい言い方になったかもしれないが、俺にそういう気の回し方は出来ない。

祐希奈もわかってくれたのか、小さく「行く」と答えた。

「あ、の、カナン、君……」

後ろでヴィヴィオが絞り出すように小さな声で俺の名前を呼ぶ。

「何だ……っておわ、ヴィヴィオもか！？」

「ふぇ？」

不思議そうにするヴィヴィオも熱っぽい顔をしていた！
何だ！？　六課で風邪の大ブームでも起こってんのか！？

「ほら、ヴィヴィオも手。多分わかるけど、辛かったら言えよ？
頼むから、な？」

「……うん」

何で嬉しそうに笑ってんでしょうかこの病人さん……。
まぁ、取り合えず、歩いてる分にはしっかりしてるし、大丈夫か……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

Ｓｉｄｅ・祐希奈

私達はモノレールらしきモノを乗り継いだ後、ミッドチルダ東部に位置するというテーマパークに行くために歩いていた。
隣では、ヴィヴィオと地図を見ながらカナンが歩いている。
もちろん、手は繋いだままだ。
コイツ、やっぱバカなんじゃないか、今まで一緒にいて、何度そう思ったかわかんない。
けど、今回ばっかりは心底そう思う。
カナンは私達がカナンの事を好きって知っている筈。
なのに、手を繋いでる理由が熱って……。
好きな奴が額に手を当てたり手を握ったりしたら紅くなるに決まってるじゃない……。
気づいてないんだろうから、カナンはやっぱりバカね。

「どした？　ちょっと歩くの速いか？」

「う、ううん。大丈夫よ」

まぁ、そんなシチュエーションでどもってる私も私か……。
どうにも、私は、いざとなると喋れなくなる傾向があるらしい。

「祐希奈」

一番素直になれる場面が戦闘中ってどんな女の子よ……。
キスした時みたいに頭のネジが吹っ飛んでくれたら素直になれるのかしら……。

「祐希奈～？　ダメか。しゃあない……ごめんな、ヴィヴィオ」

「うん。別に私は気にしてないから大丈夫」

「すいません、えっと……この子と俺、ペアで」

「かしこまりました～♪　ペアは一人が無くすと再度支払っていただかなければ出ることが出来なくなるのでお気をつけください」

「はい」

「では、彼女さんとごゆっくりお楽しみください♪」

「っ～……」

でも、ネジが吹っ飛んだら自分でも自分が抑えきれなくなるからそ

れも危ないかもしれないし……。

「お～い。祐希奈さ～ん？」

「え……？」

顔を上げると、カナンの顔が真ん前に……。

「う、わっ！」

あ……。

「ごふっ！」

驚いて思わず振り上げた私のアッパーカットがカナンの顔面を打ち上げていた……。

何で出たのよ、私の右手……。

「あ、アンタが悪いんだからね！　人の顔覗き込んだりしてるから！」

違う、こんなこと言いたいんじゃなくて……。

「悪かったよ……。ただ、ボーッとしてたからさ……」

カナンは怒ったのか声がいつもより声が低い……。

そりゃあいきなり殴られた上、こんな事言われればカナンでもそうなるわよね。

それでも、手は離さず、繋いでいてくれた。

「ん。これ、無くすなよ？」

ある程度進むと、若干顔が紅いカナンが赤い腕輪らしきものを差し出した。

「何コレ……」

「お前なぁ……。まぁ、しゃあないか……。このパスで飲食料金の精算するんだよ。ヴィヴィオと違って俺とお前のでペアになってるから、無くしたら俺も出られなくなる。だから無くすな。いいな？」

考え事をしている間に、目的地であるテーマパークに着いていたどころか、受付すら終わっていたらしい……。

そんなことはどうでもいい。

私にはもっと気になることが一つある。

「……何でペア？」

ペアって一般的に……もしかして、ここは違うのかしら……。

「お前がボーッとしてて、話しかけても進まないし、後ろにも迷惑かかるからだな、その……」

「も、もういいわ……」

「助かる……」

カナンの言おうとしていることは、最後まで言わなくてもわかる。

やっぱり、どの世界でもペアで入るとなると、そういう扱いになるらしい。

カナンの声が沈んでいたのは、怒ってたとかじゃなくて、こっちの理由が大きかったのかもしれない……

「ホント、悪い……。ギリギリまで聞こうとしたんだけどな……」

「べ、べべ、別に謝らなくたっていいわよ……。アンタさえ、私が彼女と思われてもいいんなら……」

しまった……。

この言い方だと、下手すれば答えが返ってくる……。

カナンがゆっくりと口を開いていくのが見えた……。

鼓動が高鳴る。聞けるのか、聞いていいのか、今、ここで……。

「ありがとな」

ニッコリと笑ってカナンはそう言った。

どっちつかずの解答。

カナンのクセに、こういう避け方は上手い。

「……優柔不断な奴ね」

「はは。お前を彼女と見られて嫌がる男なんていやしないって。俺も釣り合いがとれるくらいの顔はしてるってことかもしれないだろ？」

「アンタはホントにバカね」

「まぁな」

「しょうがないから教えてあげる」

「お、聞きたいな」

ホントにカナンはバカだ。
そんなの簡単じゃない。
私には小学生の問いよりも簡単な答え。そんなの……

「最低ね♪」

「はは！　ひでぇや」

カッコいいに、決まってるじゃない。バカカナン。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

Ｓｉｄｅ・カナン

入り口の一件から、祐希奈から固さが取れ、俺達はいつも通りとなった。

「次アレね♪」

「た、高いね……」

祐希奈が指差すのはアトラクションに乗って、斜面７０度近い所の頂点から、一気に滑り落ちるという、簡単に言えばジェットコースターの最初の急なやつだ。
ただ、水浸しは確実だ。

「Ｌｅｔ' ｓ　Ｇｏ♪」

「ゆ、祐希奈、ちょっとタンマ……」

やたら良い発音で腕を引っ張る祐希奈。

だが、俺の足は動かない。

絶叫系七回連続ぶっ通しは辛いものがある。

てか、昼飯が食えなくなる……。

「何、もしかしてアンタへばってるわけ？　魔導師なのに？　あの程度の速度で？」

「アレは自分で動く方決められるだろうが……」

「似たようなもんじゃない」

「いや全く……」

空戦が下手な魔導師ってこんな感じなんだろうか……。

「じゃあ、アレ最後にして昼御飯ね♪」

「うぇ……」

結局乗るんかい！　っとツッコミたかったが、生憎そんなスタミナは無い……。

「か、カナン君、最後だから頑張ろう？」

「おう……」

俺が二人を引っ張ってた筈なのに、今は逆。

完全に俺がグロッキー。二人はピンピンしている。
何で女の子は絶叫系が得意なんだろうか……不思議だ……。

「二人席、だね」

施設の中に入り、アトラクションが見えると、ヴィヴィオが若干暗くなっていた。
正直、ペアにしたことを少し後悔した。
ヴィヴィオは一般として扱われるから、俺と祐希奈とは別席。一人だけだ。
一緒にいるのに一人だけ、かなり可哀想だ。
なんとかしてあげたい。

「ペア席の後ろ、空いてるぜ？　頼めばヴィヴィオが行けるかもしれない。言ってみる」

「え！　い、いいよ。迷惑になるし……」

そう言いながらも、ヴィヴィオの顔は一瞬明るくなったのを俺は見逃していない。
ここでやらなきゃ男じゃない。

「ちょっと待ってろよ？　すいません」

「カナン君……」

「ほっときなさい。どうせ聞かないから」

「ありがとう……」

「あの、あそこのペア席の後ろ、空きますよね？　この子、入れてあげたいんですけど」

ヴィヴィオのお礼に片手をあげて返し、近くにいた係員に聞いてみる。

係員は男性。しかも難色を示した。

典型的な仕事ガッチリの融通が効かないタイプ……。

「申し訳ありませんが、あの席はペア専用となっておりますので一般の方は後尾となります」

「そこをなんとか！　この子も友達なんです！」

「申し訳ありませんが、これぱかりは決まりなもので」

「じゃあ、私が後ろに行くわ」

俺の後ろからの声。

腕組みをしながら祐希奈が立っていた。

感じからして、怒っている……。

「それで良いでしょ。入れてあげて」

「それも出来ません。先にも申しあげましたが、決まりです」

「入れないとアトラクションぶっ壊す……」

「祐希奈、それ意味無い……」

係員は子供だと思っているが、祐希奈なら片腕一本で破壊も可能だ。

しかも、やりかねないから余計に怖い……。

「お客様、ルールとは守るためにあるのですよ？」

「ルール？　柔軟に状況に対応出来ないルールなんてぶっ壊した方がいいんじゃない？」

「ルールがあるからこそ、上手く世界は動いていると私は思うのですが？」

だが、あんまりにも堅いコイツにはカチンと来た。
少なくてもコイツの言葉は客に言う言葉じゃない。
祐希奈に黙ってろと手で制止し、前に出る。

「カナン君」

その時、服の袖が少し引っ張られ、振り向くとヴィヴィオがいた……。

「もう、いいよ。私が後ろに座ればいいってだけなんだから、そんなに頑張ってくれなくたっていいから……ね？」

「でも……」

「他の人も楽しくなくなっちゃうよ。私ならいいから。充分、楽しいから」

「……わかった」

よくよく考えれば、こんなことになったのは、俺がペアで入場した

からだ……。
係員は当たり前のことをしてるだけ。

「すいませんでした……」

「いえ、理解していただけて何よりです」

最後まで暗い気分のまま、アトラクションは終わってしまった……。
昼御飯は、店には入らず、立ち食いをすることにした。
まぁ、こんな所にケバブみたいな食べ物があってびっくりもしたが……。

「うん♪　店なんかよりこっちのがよっぽど美味しいわ♪」

「皆案外気づいてないんじゃないか？　掘り出しもんだ」

明るくする演技には俺も祐希奈も自信があった。
周囲からすれば普通に見える筈の光景。
でも、ヴィヴィオは「ごめんね」と謝った……。
演技だとバレてたらしい。

「ホントはもっと美味しいお店で食べたかったよね……。でも、お店も二人席があったから、私に遠慮して入らなかったんでしょ？いいよ。私はお散歩でもしてるから、行ってきて？」

俺達はさっきのみたいなのを警戒してヴィヴィオに遠慮したのは本当だ。
でも、ちょっと違う。
三人で食えないなら俺達は嫌だと思っただけだ
店なんかどこだっていい。

「お花、摘みに行ってくるね？」

「お花？」

テーマパークにそんなとこあっただろうか……。

（聞くなバカ。トイレのことよ）

「あ、ああ。わかった」

「うん。“二人で”楽しんで来てね……」

そう言って、寂しそうな笑顔を浮かべて、ヴィヴィオは俺達に背を向けた……。

「二人って……ヴィヴィオ！」

聞こえた筈なのに、ヴィヴィオは人混みの中へと姿を消した……。

「やばっ！」

急いで立ち上がり、追いかけようとすると服の袖を捕まれ、止められる……。

止めたのはもちろん祐希奈だ。

何で止めるんだ……。

「今行っても結果は同じよ。コレ、持ってきなさい」

「お前……」

祐希奈が差し出したのはペアの証である赤い腕輪。
これを外すと祐希奈が……。

「アンタね。私がヴィヴィオみたいに一筋縄でいくと思ってるわけ？　バカにしないでよ。絶対一緒に楽しんでやるんだから」

そうだ。
祐希奈はルールなんかに従うタイプじゃない。
何かしてくれる筈だ。

「悪いな」

「いいから、はい、集中。それくらい出来るでしょ？　寧ろやれ。やらなきゃ殴る」

「ああ……」

この能力があって良かった。
人探しにこれだけ便利な能力はないかもしれない。
障害物も何も関係なく、見つけた所に行けるのだから！
意識するのは三メートルの視認距離限界。
ドームを内側から押し広げていくイメージで魔力を流す……。

「いた！」

「よし、次！」

後は……人混みをぶち抜いて一直線に……！

「Ｒｅａｄｙ……Ｇｏ！」

「行ってくる！」

空間突破を発動し、俺はそこから目的地へと突き抜けた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

テーマパークに置いても、人通りが少ない暗い道。
トボトボと歩く後ろ姿があった……。

Ｓｉｄｅ・ヴィヴィオ

なんだか当たり散らしたみたいに逃げちゃった……。
後で謝っておかなきゃ……。
でも、どうやって謝ればいいんだろう……。
こんな、憎しみにも似た感情を抱いたままに……。

「ねぇ、フェアリー」
『はい。何でしょうか？』
「私、ダメな子になっちゃった……」
『何がです？』
「我慢、出来なかった……」

祐希ちゃんとカナン君が隣同士で笑ってる所を見るたびに、祐希ちゃんを羨ましく思う私がいて、ズルいと思う私がいて、羨望と苛立ちで頭の中、ぐちゃぐちゃだよ……。

「好きなのに……二人とも、大好きなのに！　こんな、こんなの…

…嫌だよ……っ！」

祐希ちゃんがズルい、卑怯だ、もしかしたらわざとペアになるようにしたんじゃないか。
私を押し退けようとしてるんじゃないか。
私だって一緒にいたい。
カナン君の近くで笑ってたい。
祐希ちゃんよりもっと近くに来て、カナン君に見てて欲しい。

祐希ちゃんよりも……
祐希ちゃんよりもっと。
祐希ちゃんよりもっともっと！
私だけを……見て欲しい！

そんな、暗い感情ばかりが私の中にある。

「こんなの、こんな気持ちで真友なんて、言えないよ……。どうすればいいの？　どうすれば消えてくれるの？　こんなのじゃ、祐希ちゃんに笑えないよ……」
『恐らく、それは、どうしようもないのですよ。その気持ちはマスターが認めるしか、無いのです』

認めたら、私は、祐希ちゃんと正面から話せなくなる。
真友だって、言えなくなる。
上っ面の会話になって、関係は壊れておしまい。
でも、カナン君で繋がってるから離れられない。
そんな日々、死んでも嫌だ！

「嫌……」
『その選択はありません。同じ人物を好いた時点でこの道は必ず辿

ります。壊れるか否かはマスター達がどうするか、それにかかっています』

私達がどうするか？

そんなの、どうしたって悪い結果は避けられない。

こんな暗い感情、どうしようもない……。

抱え込んで私が壊れるか、祐希ちゃんとの関係が壊れるか、その二つしか浮かばない……。

「どうしようも、ないよ……」

「それはないだろ。頭冷やしてみ？」

「ひゃう！」

私の頬に冷たい感触がして、驚いて飛び退いた。

「はは！　頭冷えたか？」

「カナン、君……」

横を振り向くと、ジュースの缶をもったカナン君がいた。

正直、今はあんまり会いたくなかった……。

「盗み聞きは良くないんだけどな、悪いけど、最初っから全部聞いてた。まぁ、ベンチもあるし座ろうぜ？」

「うん……」

ベンチに座るとカナン君がジュースを渡してくれた。

自分でも驚くほど冷たいジュースが美味しい。

「落ち着いたか？」

「うん……」

「で、結論は？」

「話したく、ない……」

それは変わらない。

カナン君は「そっか」と呟き、空を見上げる。

「悩みの種が俺だったな。じゃあ、解決してやろうか」

カナン君の目付きがキツくなり、空を見ていた視線を私へと移す……。

カナン君の瞳は笑っていない。

鋭い視線が私を真っ直ぐに見据えている……。

怖かった。戦ってる時なんかより、もっと、ずっと、私はその視線が怖かった……。

「まだ手が届くのに、何にもやらない奴なんて俺は嫌いだ。今のヴィヴィオは大嫌いだ」

「っ！」

言葉が痛かった……。

刃物で刺されたみたいに、胸の中が痛い……。

泣きそうになって、逃げ出したくなった。

その時、カナン君の手が頭に置かれた。
その顔は笑っていた……。

「今のままならな。でも、違うだろ？　踏み出す勇気、ヴィヴィオは持ってるだろ。俺と気まずくなった時、最初に踏み出してきたのはヴィヴィオだぜ？　――てか、大半はヴィヴィオが先頭に立ってるんじゃないか？　祐希奈なんて、こっちから謝らないと仲直り出来ないし、それをしたんだろ？　俺と祐希奈が喧嘩した時も、背中押してくれたのはヴィヴィオだし……。な？　軽く考えるだけでも、あげられるくらいたくさんの勇気をヴィヴィオは持ってる」

「それでも……怖いよ……」

希望は見えた。
でも、それは細い光に見えて、とても頼りない……。

「手、出して？」

「うん……」

カナン君は、優しい手つきで私の腕輪を外して、新しく、赤い腕輪をつけてくれた……。
カナン君の腕輪はついたまま、つまり、これは……。

「祐希、ちゃん……っ！」

「ほら、祐希奈もヴィヴィオといたいってさ」

もう、溢れだした涙は止まらなかった。
こんなに薄汚い私に、おいでよって、手を差しのべてくれる人達が

いる。
行こう。謝らなくちゃ、信じきれてなかったことを……。
「えと……ご迷惑を、おかけしました……」
カナン君にも頭を下げる。
言ってくれなきゃ本当に私は折れていたかもしれない。
「許さん」
「え……えぇ!?」
許してもらえなかった……。
驚いていると、カナン君は悪戯っ子みたいに笑って、私の手を引っ張り、走り出す。
「わっ！　カナン、君?」
「罰として観覧車な♪」
「……うん!」
カナン君はやっぱり素敵な男の子だった。
そして、やっぱり不思議な男の子。
そして……やっぱり私はこの男の子が。
「大好き!」
「ちょっ！　ヴィヴィオ、人いるから!」

《お先にどうぞ》

「ありがとうございます」

「恥っず！！！」

真っ赤なカナン君と、私は、観覧車へと乗り込んだ。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

Ｓｉｄｅ・カナン

俺から言い出したにも関わらず、ヴィヴィオに主導権を握られた観覧車。

その観覧車は、夕焼けに染まり始めた空を登っている。

「カナン君、凄いね～」

「はい、凄いですとも……貴女もね……」

「ふぇ？」

いや、そこで首をかしげられると困るのは俺なんだが……。

俺に言えるはずもなく、外を眺めた。

観覧車は頂点に差し掛かる所。普通ならキスの一つもするんだろうが……

何気なしにヴィヴィオを見たのが悪かった。

丁度、俺と同じで、ヴィヴィオも外から視線外した所で、真っ正面から当たっている……。

「どうしたの？」

「いや……」

「言って欲しいな？」

何でこの子はいつもピンポイントで地雷を踏むんだろうか……。

天然がなせる技だ……。

「普通のカップルならこの辺りでキスでもするんだろうなって思っただけ」

「普通はキスするんだ。って、え……？　ふぇぇぇ！？　キ、キス！？　し、ししし、した方が良いのかな！？」

なるべく意識しないように言ったのに、ヴィヴィオが紅くなったせいで俺も火照ってきた……。

「お、俺達は普通じゃないからいいんじゃないッスか？」

「う、うんうん……」

もんの凄い気まずい沈黙。

何で言ったかな、俺……。

「か、カナン君なら、いいよ？」

真っ赤になりながら、ヴィヴィオさんがとんでもないことを言ったような……。

「へ？」

「キス、いいよ？」

ヴィヴィオが向かいの席から隣へと移動してきた。

良い匂いがする……。毎度思うがこの匂いは何だろうか……。

頭が痺れる……。

「いい、のか？」

「うん……」

後は無言だ。目を閉じて、ヴィヴィオの顎を軽く上げて、顔を傾ける……。

顔が近づいていくにつれ、爆発しそうなくらいの心臓。

なんかもう、死んでもいいかななんて思える。

「いやぁ、ラブッてるわね♪」

「「わぁぁあああああああああああ！！！！！！」」

俺達は叫びを上げる。

観覧車が揺れたことにでも、もちろん、心臓が爆発したからでもない。

祐希奈の声がしたからだ。

「よっ、と」

観覧車の屋根から、扉を開けて祐希奈が対面に座る。

で、何をするかと思えば、携帯のカメラを構える。

「どうぞどうぞ♪」

「出来るかぁぁぁぁぁ！！！」

「ちっ……」

いや、舌打ちされる意味がわからないですが！？

「あ、あの、祐希ちゃん、どうやって……」

「変なこと聞くわね。飛んでに決まってるじゃない？」

「「……」」

さも当たり前のように言う祐希奈。

でも、確か、非常時以外、飛行は認められてないんじゃなかったか……。

見つかってたら間違いなく厳重注意だ……。

「さて、アンタ達がまごまごしてるから観覧車ももう終わりね」

お前は俺がキスでまごつかない男だとでも思ってたのか。

という質問は、すると蹴りが返って来そうなので止めておいた……。

「お疲れ様で～す♪　って……え？」

観覧車の扉を開けた係員が固まっていた。

まぁ、二人が三人になってたら無理ないな……。

「カナン、ヴィヴィオ、ダッシュ♪」

「ふぇ？」

「ったくお前は……。ヴィヴィオ、行くぞ！」

「う、うん！」

俺と祐希奈で、ヴィヴィオの手を取り、呆然とする係員の隣を一緒に駆け抜ける。

多分、そんときの俺の顔はニヤついていたんだと思う。

横を向いた時、祐希奈がニヤついていたから。

「そんじゃま、いっちょルール、ぶっ壊しますか！」

「おっしゃ♪　任せときなさい♪　壊すのは得意よ♪」

「こ、壊すって？」

俺と祐希奈が意気投合するなんて滅多にない。

不安そうにするヴィヴィオ、一方で、少しの期待を含んだ瞳で、俺達を見つめる。

「三人一緒に楽しむだけさ。な！」

「ええ。それだけね♪」

「あはは。何か不安だよ？」

ルールを壊す、とは言っても、俺達は別段大したことをしたわけじゃない。
ペアで縛られるアトラクションを三人で遊ぶだけだから。

「やぁ、係員さん」

「こんにちは～」

わざと、あのお堅い係員の前を通り、俺とヴィヴィオはニッコリと笑ってやった。
当然、事情を知ってる係員は、ヴィヴィオを一般席にしようとしたが、腕輪の色見て止まる……。
ヴィヴィオと俺の腕輪の色は赤、ペアの色だ。

「文句ないですよね？」

「まぁ、お友達、ということでしたから、それくらいは黙認しましょう……」

こういうお堅いタイプは、目の前で問題が起きてない限り、関わってはこない。
注意した所で、傍目から見れば正しいのは俺達で、自分に利益がないからだ。

「では、こちらへ……」

不満そうに、最前列へと案内してくれた。
まぁ、予定通りだ。

「ど、ドキドキするね……」

「前は楽しめなかったからな。今度は楽しもうぜ」

悪いことをする前ってのは無意味に楽しい。
ブザーが鳴り響き、上へ上と上がり、しばらくすると頂上へと達する。
後は落ちるだけ。丸太をモチーフにした船が傾き始める……。
さぁ、やろうぜ。祐希奈！

「祐希奈様、参上よ♪」

声が響き、俺達の前の余白に空から降りた祐希奈が着地。
加速までは後、数秒。
女の子が何もつけずに前にいると、背後から悲鳴があがってるが、
祐希奈にそんなもんは必要はない。
「監視スフィアは？」

「もち、潰した♪　私のスフィア置いといたから偽装もばっちし♪
すぐにはバレないわ♪」

悪戯に関しては俺より上手の祐希奈に死角は無かった。
確かにすぐにはバレない。

「あはは。ダメだよ～」

「問題無し♪」

といいつつも、ヴィヴィオも笑っている。
祐希奈は話ながら、片手を丸太の先端に引っ掻け、魔力を込める……。

ミシミシという音は、多分、指を捩じ込んでいるんだろう。
そして数秒、落下！

「き、た！」

「あはははは！　ヤバ♪　クセになるわねこれ♪」

「きゃあああああ♪」

凄まじい風が耳元で唸るが、祐希奈は微動だにしない。
というか、余裕だ。
ヴィヴィオも楽しんでいるのがわかる悲鳴だ。
俺達以外は祐希奈が何をしているかわからないんだろう。
本物の悲鳴が上がっている。
数秒も経たないうちに、水面を丸太が叩き、俺達は頭から水を被る。
水飛沫が収まるころ、俺達の前に前に祐希奈はいなかった。

「写真、貰いに行くか」

「綺麗に写ってるかな？」

撮影用のカメラ、もしかしたらスフィアかも知れないが、見事に俺達三人を撮影していた。
ガキみたく笑う俺、ピースまでしてる祐希奈、そして、ちゃんと心から笑ってるヴィヴィオも写っていた。

「こ、これは……？」

まぁ、係員が混乱するのも無理はない。
騒動になるまえに、三枚分の金を払い、ダッシュでその場を後にす

る。
悪いことはしているが、多分、捕まるようなことはしていない。
ほっとけば勝手に終息するだろう。
他にもペアでしか乗れない園内一週のチャリっぽいやつの屋根上に祐希奈が乗って三人で回ったり、二人乗りのボードに三人で乗ったりと、ルールを無視して俺達は楽しんだ。

「あっははは♪　サイッコ～ね♪　地球でもやってみる？」

結局バレてなかったのか、諦めていたのか、何も言われず、夕方の遅く、俺達はテーマパークを後にする。
祐希奈はテンションが高いまま、爆笑している。

「流石にパス」

「わ、私もそれはちょっと……」

地球でそんなことやった日にはどうなることやら……。

「え～。ノリ悪いわね……」

派手に動いた祐希奈が一番バレてる危険が高いんだが、そんなこと気にするタイプじゃなかった。というか、ノリノリだ……。

「何だかんだで、結構楽しめたな。クレアに感謝しとかないとな……」

「そうね。まぁ、アンタはこれから大変だからって気遣いなんだろうけど……」

「やっぱり、ハルさんのこと、かな？」

「多分な……。まぁ、特に何もする気無いけど。アイツのことはアイツが決めることだ」

「「え……？」」

意外そうな声が帰ってくる。

でも、俺の意思は変わらない。

復讐者になって、グラースを追うか、俺達の所に残るか。

それは、俺が決めることじゃない。

「決めるのはハルだ。俺は口出しはしない」

そろそろ、俺とクレア以外にもハルに踏み込んでくれる人が必要になってくる筈だ。

てか、踏み込んでる人がいるかもしれない。

誰かはわからない。

でも、口出しは任せる……。

「帰るか」

「「うん……」」

静かに頷いた二人と一緒に、俺達は帰路につき、半日のデートは終了した。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

三人が機動六課に着いたのはもう勤務時間を過ぎた頃だった。

クレアにお礼を言おうと、ハルの所に向かう。

「……すぅ～」

が、ハルのベッドの隣に置いたパイプイスの上で、クレアは静かに眠っていた……。

肩を軽く叩いて確かめたカナンだが、ピクリともしない。

「熟睡してるな……」

「爆睡でもいいんじゃない？」

「……どっちでも同じだと思うよ？」

流石に、起こしてまで言うことではないため、クレアに毛布をかけ、退室する。

「はやてさんには俺が言っとくから、お前ら先に風呂行っとけ」

「で、でも、外出時の報告は外出したメンバーで行かないと……」

「デートの報告くらい大丈夫だろ。じゃ、風呂終わったら念話で言ってくれ」

カナンは、ヒラヒラと手を振り、ヴィヴィオの言葉も受け付けず、部隊長室に歩いていった……。

何故カナンが一人で行ってしまったのか、ヴィヴィオにはそれはわかっている。

祐希奈と二人でいられるよう、気を使ってくれたのだと。

「祐希ちゃん、あのね、お話が、あるの……」

「……話？」

緊張しながら言ったヴィヴィオに、祐希奈は少し意外そうにしながらも、頷く。

「ヴィヴィオからなんて久しぶりね。もちろん良いわよ。いくらでも、どんなことでも聞いてあげる。行きましょ？」

「ありが、とう……」

「うん」

優しい光をその瞳に宿し、祐希奈は笑う。

静かに、ヴィヴィオの戦いが始まった……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

Ｓｉｄｅ・ヴィヴィオ

お風呂に入って１０分、私はまだ言い出せないでいた……。

いざとなると、やっぱり怖い。

祐希ちゃんは、何も言わないでいてくれる。

言おう、待っててくれる真友に言わなくちゃダメだ……。

「お話……っていうのは、ね？」

「うん」

声が震える……。
悪い方向に考えが流れかける。
けれど、祐希ちゃんは、聞いてくれるんだ……。
逃げちゃ、ダメ……。

「わ、私、私、ね……え、えっと祐希ちゃんに、ね……」

上手く言えない……。
言わなくちゃ、言うんだ。口を開け……。

「ヴィヴィオ、落ち着いて？　私はずっといてあげる。だから、ゆっくりでいいから」

「ごめんね……」

「こんなことで気にしないの。ほら、深呼吸」

祐希ちゃんに言われるままに、私は大きく息を吸い込んで、ゆっくり吹き出す……。
よし……。ちょっと落ち着いた……。
これなら言える……。

「私ね、今日、祐希ちゃんが羨ましい……、ううん、妬ましかった」

「うん。それで？」

祐希ちゃんはまだ待っていてくれていた。
こんな自分の得にもならない話の続きを聞いてくれようとしている。
それが、嬉しかった……。

「私は、カナン君の隣で笑ってる祐希ちゃんが妬ましくて、ズルいと思ってて、わざとじゃないかって思ってて、何で祐希ちゃんだけがって……思ってて……」

話をしているうちに私は祐希ちゃんを正面から見られなくなっていく……。

もう、水面だけが私の視界に映っている……

「うん」

「その気持ちが、段々強くなって、祐希ちゃんより、祐希ちゃんなんかより、カナン君に私を見て欲しいって、私だけを見て欲しいってそんな気持ちばっかりが溜まっていって……」

「うん」

祐希ちゃんの声の調子は変わらない……。

今、どんな顔で、どんな気持ちで、私を見ているだろうか……。

怒りか、悲しみか、憎しみか、軽蔑かもしれない……。

それでも、私は言うんだ。そう、決めたから……。

「カナン君を独占したいって、祐希ちゃんなんか見ないで、放っておいて……。そうだ。祐希ちゃんなんか、カナン君と喧嘩しちゃえって……。初めて、そんなことを願った……。そしたら、カナン君は私だけを見てくれるって、そんな卑怯な、最低な考えに、至った自分がいた。大切で、大好きな、祐希ちゃんに、私はそんなことを、願ったんだ……。それを認めるのが嫌で、あのままじゃ、醜態をさらしそうで、怖くて、それで、二人の前から逃げた……」

「そう……」

祐希ちゃんから、溜め息が混ざった声が聞こえたけれど、まだ言うことがある……。

「あの時、当たり散らすようなことしてごめんなさい。そして、この事も、本当に、ごめんなさい……。謝って許される内容じゃないから……覚悟は、出来てます……」

頭を下げて、最後まで言い切った……。
罵倒されても、殴られても、軽蔑されても仕方ない。
それだけ最低な事を私は祐希ちゃんに願った。

「バカな子……」

「え……？」

パシャリと水飛沫が舞う。
私に来たのは、罵倒でも暴力でもなく、抱擁……。
強く、強く、私は、祐希ちゃんに抱き締められていた……。

「何が覚悟よ。真剣な顔してるから、何かと思えば、ただのヤキモチみたいなもんじゃない。それくらいで私がヴィヴィオを嫌いになるわけない。嫌いになんて、なれるわけないでしょ……寧ろ、もっと好きになったわ」

「祐希、ちゃん……」

もう、ダメだ。
今日、どれだけ泣いたかわからないけれど、もう、溢れ出る涙は抑えきれない……。

「大好きよ。私のおバカさん……ずっと一緒だから、最期まで、真友ね？」

「うん。うん！　ごめんなさい！　本当にごめんなさい！！」

私は、思いっきり、祐希ちゃんを抱き締め返していた……。

「うん。言ってくれてありがとう……。私もごめんね。もっと早くに変化に気づいてあげられれば良かったのに……。辛かったわね……」

「い、いの……。私は、いい、から……」

「私が良くないから、ヴィヴィオは泣いて、溜まったモノを全部吐き出すの。ちょっと頼りないけど、胸を貸すくらいは出来るつもりよ？」

その胸が頼りないなんてことは、無かった。
全てを聞いた上で、受け止めてくれたのだから……。
今日は、謝ってばかりだったから、明日起きたら言おう。

ありがとう

と……。

Ｎｅｘｔ　Ｓｔａｇｅ……。

第三十五話　Ｔｉｍｅ　Ｌｉｍｉｔ　Ｌａｓｔ　Ｄａｙ（前書き）

微妙に不調です（汗）
おかしなところがあればよろしくお願いします。

第三十五話　Ｔｉｍｅ　Ｌｉｍｉｔ　Ｌａｓｔ　Ｄａｙ

メ祐「たくっ。また文字数オーバーしてるし……ちゃっちゃと行くわよ～」

ヴ「ねぇ祐希ちゃん、前話から思ってたけど、どうしてメイド服なの？」

メ祐「あ～これ？　ちーちゃんからのプレゼントなのよ。貰ったもんは着ないわけにはいかないでしょ？」

５カ「祐希奈お姉ちゃん可愛いよ～？」

メ祐「あはは。ありがと♪」

ジ「ゆっきゅん、その素直な笑みを僕にもプリーズ！」

メ祐「死ね」

ジ「やはり一筋縄ではいかないようだね……そぉれ♪」

バサァ！

祐「っ！」

ジ「ふむ。その恥じらう顔が……」

ミシィ！

ジ「うぉっぷ……」

祐「ヴィヴィオ、先進めといて……」

ズルズル……バタン……。

ジ「こ、これぞ新しい……ぐっはぁぁあああああ！」

ゴキゴキィ……

メ祐「さぁ、次は……」

ジ「ま、待ちたまえ！　これは読者サービスというものもだね……」

メ祐「規制が厳しくなった時にんなもんやるなぁぁあああああ！」

ジ「そ、それは言っていいのかい！？」

メ祐「ＬＶはなんでもアリって知られてるからいいのよ！」

※本当です。作者さんは気を付けましょう。

ヴ「さ、さて、久しぶりの質問コーナーです。しーちゃん、隠れてないで手伝って？」

トテトテ、ポス。

しー「（ビクビク）あの人、怖いの……」

ヴ「じゃあ、ママとカナン君と一緒に、ね？」

しー「（コクン）」
５カ「え～とね。『少し前に次のカナンＶＳシオンを匂わせる発言がありましたが、結局やらないんですか？』僕としーちゃん？　戦ったの？」
ヴ「うん。凄い戦いだったんだよ？」
しー「……僕、凄い？」
ヴ「うん♪　凄い凄い♪」
ギュ♪
５カ「ずるい～。僕も僕も～」
ヴ「う～ん、奈津美さんに悪いけど、いいか。おいで～♪」
５カ「うん♪」
ヴ「よいしょ、と。さて、答えですが、未定です。今の所、そういった企画は持ち上がってはいません」
５カ「えへへ～。良い匂い～♪」
しー「……ヴィヴィオママだもん」
５カ「あのね～。お母さんも良い匂いするんだ～♪」
しー「……そう、なんだ」

ヴ「仲良しさんだね♪」

しー「……カナン君、楽しい」

5カ「僕も楽しい♪」

ヴ「そっか～♪　じゃあ楽屋で遊ぼっか♪」

しー「（コクン）」

5カ「はーい♪」

ヴ「それでは本編どうぞ～」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

朝、一般的には夜とも言える零時から始まる午前の時間帯。
その中で、様々な動きが行われ、終わっていく。

正午、風間カナン、八神はやてに報告の後、“外出”
午前1時12分、高町ヴィヴィオ、祐希奈に抱きつき、泣き疲れ、就寝。
午前1時22分、一之瀬祐希奈、ヴィヴィオを抱き締めながら、就寝。
午前2時50分、朱皇千春、“起床”。

暗闇に包まれる中、ハルは起き、隣に眠るクレアを見た。
クレアはハルが起きたことも気づかず、パイプイスに座ったまま、頭を垂れて静かに眠っている。

「世話役を世話する主など、見たこともありませんよ……」

苦笑いをしながら、ハルは呟き、ベッドから降り、パイプイスに眠るクレアを頭と膝を腕で支え、ゆっくりと自分が寝ていたベッドへ降ろし、寝かせた……。

『相変わらず、化け物じみた自己再生能力だな……』

「おや、無事でしたか」

ハルは少し意外そうな表情を浮かべる。

自身の相棒、アスラの声が響いたからだ。

ベッドの傍らに畳んで置いてあった執事服、それにハルは視線を向けた。

『六課の技師、シャリオ・フィニーノ殿と言ったか。非常に優秀な方でな。アレほどのデバイスマイスターはいないだろう。最も、損傷が最深部に届いていれば誰にも直せなかっただろうが……。風間殿が来なければ……』

「グラースを倒せたかもしれませんね……」

『もしくは、貴様の無駄死にで終わるか、だな』

「……ふぅ」

ハルは、アスラの厳しい言葉には答えない。

無言を貫き、溜め息だけを静かについた……。

『何でもいいが、さっさと私を持て。また暴走などされたら話しにならん……』

「いくらなんでも、グラースがこの次元に存在していない時に暴走

なんてしませんよ。そこまで落ちぶれてません」
『どうだかな……』
「おや、心外ですね」

着替えようとしたハルだが、執事服はボロボロであり、着れたモノでは無かった……。

「アスラ……」
『替えならばないぞ』
「予備が一着在った筈ですが？」
『知らんな』
「……」

アスラはしらを切っている。
確実にそれとわかる反応にハルは黙る……。
黙ること数分、二度目の溜め息をつき、ハルは病人服から執事服に着替えた。

『それに意味はあるのか？』
「ほぼ無いでしょうね。病人服よりはマシでしょうが……」

が、執事服は所々破け、特に、グラースの滅烈風をまともに受けた腹部は酷く、さらに、風の威力で背中にまで大穴が空いていた……。

『行くのか？』

ハルは、迷い無く頷く。
グラースの所に行くという決意は固かった……。

「どのみち、一発防げるかどうかの違いですから……」

一発。

その一発を防げるかどうかがグラースとの戦いでは命運を分けるということをハルはよく知っている。

が、それは口にしない。

嘆いた所で、何も変わりはしないのだから。

『いかに貴様とて、完治というわけではないのだろう？』

「“リンク”もしましたし、そのうち治りますよ」

『それはそうだろうが……居場所はわかるのか？』

「半覚醒状態でしたからね。聞こえてましたよ」

止めようとしているアスラだが、話しは終わりと、ハルは医療施設の出口を向く……。

「ハ……ル……」

「お嬢様？」

呼ばれた気がしたハルは、クレアへと振り向くが、クレアは眠ったままだ……。

寝言。

クレアが行ったのはそれ以外の何物でもない。

だが、ハルはそれに何かを感じたのか、振り向く……。

「おやすみなさいませ、クレアお嬢様……」

丁寧に、心を込めて、クレアに頭を下げた……。

クレアは何も言わない。

静かな寝息が、静かな空間に響いただけだ……。

寂しささえ覚える最後の仕事を終え、ハルは踵を返し、医療施設から外に出る……。

「ハル君、随分早いね」

瞬間、ハルの右手から声が響いた……。

「……成る程」

それだけで、おおよその事実を把握したハルは、ゆっくりと、声をかけてきた人物に身体を向ける……。

「おはようございます」

「うん。おはよう」

視線と視線が交じり合う……。

午前３時００分。白姫家次期党首、クレア嬢直属執事、朱皇千春、医療施設前にて、スターズ分隊隊長、高町なのはと接触……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

無言のまま、ハルとなのはは視線を逸らさない……。

負の感情が渦巻く、にらみ合いではない。熱く見つめあっているわけでもない。

ただ、見ているだけ……。

互いに感情を波立たせず、熱を含まない冷たい視線だけが交差する……。

沈黙だけが続いていく……。

「コレ、必要だよね？」

先に沈黙を破ったのはなのはだった……。
左腕に持つのは執事服。
しかも、ハルのために作られた特注の執事服。
つまり、替えが無かったのは、なのはが持っていたからだ。
何故、なのはがその執事服を持っているのか……。
答えは単純。アスラとなのはが手を組み、その手に渡ったというだけの話……。
この執事服は、ハルにとって重要な服であり、手に入れておきたいもの。
簡単に言えば、ハルを引き留めるための餌。

「高町一等空尉、僕としては返して頂けると非常に有難いのですが？」

そんなことはわかってはいるが、グラースを相手に少しでも勝率を上げたいハルは、手に入れておきたい品のため、ハルは餌に食いつくしかない。

ここまでは予想通り……。後は、私の力量次第……。

食いついたことになのはは緊張の糸を張りつめる……
これで、ではない。ここから、だからだ。

「条件があるんだけど……」

「まぁ、そうでしょうね。聞きましょう」

ハルを相手に選択肢を間違うわけにはいかない。
下手をすれば、なのはがハルの話術に呑まれてしまうからだ……。

だからこそ、なのははは慎重に、慎重に言葉を選ぶ……。

「じゃあ、その距離を置いた階級呼びを止めて、最初の時みたいに、高町……ううん、なのはって呼んで欲しい」

なのはの要求は、ただ名前を呼べというだけのモノではない。

ハルが空けた距離、それを溝に例えるなら、それを渡るための梯のようなものだ。

ハルは、その意味を理解しており、少し悩む。

「なのは様、これでよろしいですか？」

が、心の扉を閉じ、鍵を渡さなければ問題ないと割り切り、梯を渡すことを許した……。

なのははゆっくりと頷き、梯を渡る……。

「距離なんて空けずに、相談して欲しかったな……」

「相談していたならば、何かが変わったのですか？　貴女方に言ったところで、意味はないでしょう？」

ハルの辛辣な言葉に、なのははは一瞬たりとも視線を逸らさない。

なのはは、意味がないことなど、無いと信じていたから。

「言わなきゃ、変わらない」

「言ったところで、変わりませんよ……」

「変わる可能性が出る」

自虐的な考えに走るハルになのはは道を譲らない。
仲間を信じるか、信じないか、二人の違いは真っ向から食い違う……。

「変わらない可能性もあります。そして、今回の相手は変わらない可能性は限りなく高かった」

「それでも、ゼロじゃなかった！」

なのはは怒鳴り、無理矢理ハルの言葉を押さえつける。
主導権を握らせない。
言論で握らせないためには、相手をいかにして黙らせるかだ。
そして、相手が怯んだなら、畳み掛ける！

「言ってくれたなら、六課皆で悩んで、対策を考えて、たくさんの準備が出来た。ハル君のリスクだってずっと小さく出来たかもしれない。その可能性をハル君は自分で潰したの、わかってるの！？」

なのはの怒声に、ハルは奥歯を噛み締める……。
冷静だったハルの目付きは、睨むような目付きへと変わっていく……。
なのはは退かない。見つめ続けた……。

「それでも、潰したくもなるんですよ……。準備をした結果、奴と戦って仲間が死ぬくらいなら、一人で奴と相討って死にます……」

ハルの仮面を剥ぎ取り、本音を引き出したなのはは、ハルの心の扉へと近づいていく……。
ここまでは、カナンも来ている……。
しかし、なのはが目指すのは、この先にある……。

「どうして、そんなことを思うのか、話して……？　本当は、クレアちゃんの許可なんていらないんだよね？」

鍵を求め、扉の内のハルに手を伸ばす……。

「嫌、と言ったら……？」

が、ハルから帰ってきたのは拒絶の言葉。

当たり前だ。

カナンならば渡したかもしれないが、ハルにとって、なのはは友人ですらない。

たまたまきっかけが重なって踏み込まれただけというだけの人物。

そんな人物に、扉の内を見せる気にはなれない。

しかし、なのははこじ開けてでも見なければならない。

そして、ハルの無茶を止めなければならない。

なのはの中では、ハルは既に友達なのだから……。

「コレを返さない……。ここでこうする……」

なのはは、バスターモードとなったレイジングハートを執事服へと向け、壁に押し当てる……。

集まるは桜色。なのはが主砲、ディバインバスター……。

六課の壁を撃ち抜くことになるが、ハルの死と比べれば安いもの。

容赦なしになのはは放つだろう。

「僕が貴女が放つ前に、貴女を昏倒させることを狙っているとしたら？」

だが、ハルも右脚に空色の魔力を輝かせていた……。

なのはは、全身にハルからの敵意を感じとり、鼓動が速まるのを感じる……。

急速に喉が渇いていく中、口を開いた……。

「一流執事はそんな手荒な真似はしない……」

なのはの解答が響く……。

その後、ハルの脚から空色が消え去り、敵意も消えた……。

「はぁ……。いいでしょう。その代わり、服は返していただきます。逃げませんからご安心を」

本日三度目の溜め息をつきながら、ハルがそう言った。

ようやく折れたハルに、なのはは執事服を返す。

逃げるなどとは微塵も思ってはいなかった。

「場所を変えた方が良いかな？」

「出来ればお願いしたいですね」

「じゃあ、ちょっと外に出ようか？　先に行くね？」

「了解、しました……」

ハルの着替えのために気を使ったなのはが先に歩き出し、ハルはもう一度医療施設戻り、中で執事服へと着替え、なのはに続き、二人は六課を後にした……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

湾岸地区、南駐屯地内、Ａ７３区画、機動六課から、東北に向けて真っ直ぐ黒い光が進んでいく……。
始末書と引き換えに、はやてから飛行許可をとったカナンだ。
無論、はやてにも問題となるわけだが、事情を話すと、はやては何も言わず、始末書二枚をカナンに渡しただけだった。

「いい人だよな。はやてさん……」
『ああ。事情が事情とはいえ、な』
『始末書、真面目に書かないといけませんよ？』
「わかってるよ」

レナスに返事を返し、カナンはさらに進んでいく……。
カナンの眼下に広がる光景は、ミッドチルダとは思えない、田舎とも言える風景が広がっていた。
中央地区に繋がる路上、後は数十ｍ置きにポツポツと家が存在するだけで、大部分は草原や林ばかりだった……。
中央から少し離れるだけで、ミッドは色々な顔を見せる。
豊富な自然が残る湾岸地区ではそれは特に顕著だった。

「あれ、かな……？」

カナンが一点に視線を止める……。
そこには、自然と一体化しているような、廃墟が存在していた……。
廃墟の前に、カナンは着地し、見上げる……。

『これ、なのか？』
「多分。手入れも無しによく潰れてなかったな……」
『自然が支えてくれていたようですね』

自然と一体化した廃墟は、自然に支えられ、家の半分近くが壊れ、ボロボロにも関わらず、しっかりと建っていた……。
カナンは、ゆっくりと瞳を閉じて、深呼吸を行う。

「ただいま。父さん、母さん」

そして、ニッコリと笑いながら、カナンはそう言った……。
そう、ここは、風間家。
家族が幸せに満ちていた、だが、絶望と共に崩壊した、そんな場所。

「マスター、私が言うのもなんだが、ここでいいのか？　話しによると、マスターの両親は……それに、ここは、その、マスターに辛い場所でもあるだろう？」

デバイスモードを解除し、アウトフレームとなったメイデンが肩に停まり、俯いていた。

「気遣ってくれてありがとな……大丈夫だよ」

「ん……。そうか……」

その頭をカナンは指先で撫でる……。
黙って撫でられるメイデンに微笑み、カナンは空を見上げた。
雲一つ無い、星空。

「いいんだよ。ここで……。ここだから、いいんだよ。幽霊なんてのがいるなら、間違いなくあの三人はここにいる。苦しんでた時より、幸せだった、この場所に……」

哀愁が漂うその笑みに、メイデンとレナスは何も言えない。
「うしっ」と一声、カナンは改めて家へと視線を向ける。

「入ってみるか！　突撃風間本家。俺の部屋を探れ！」

「俺の部屋？　残っているのですか？」

「多分な。吹き飛んでるのは家の半分くらいだし、俺の部屋、正確には母さんの部屋だけどな。確か、二階の奥の筈だから」

話しながら、カナンは生い茂る緑の壁をかき分け、リビングから侵入する。
「ほら、階段は残ってる」

「本当だな……」

リビングを進んでいくと、無傷の螺旋階段が姿を表した。
無傷とは言っても、手入れもされず、雨風にさらされたせいか、相当に古く見える……。
軋む階段を踏み抜かないよう、カナンは慎重に上る……。

「部屋が三つありますよ？　主とお母様は同室だったんですよね？」

「あ～……いやまぁ……うん。気にするな……」

「は、はい」

「おかしなマスターだな」

歯切れの悪いカナンに二人は首をかしげる。
部屋が三つあるのは、カナンの一人部屋もきちんと存在していたからだ。
しかし、夜が怖いという理由でカナンは奈津美と一緒に寝ていたのだった。
奈津美はもちろん断る筈もなく、カナンのマザコンに拍車をかける結果となった事例でもある。

「それで、どの部屋だ？」

「ん、ああ。正面のやつだな」

ボーッとしていたカナンだが、メイデンの声に気づき、正面の扉を押して開ける……。
ギィィ。と、軋みながらも扉はゆっくりと開いた……。

「嘘、だろ……」

「これは……凄いな」

「はい……信じられません」

その部屋は、何かに護られていたかのように、床、棚、机、服、布団に至るまで、全て無事なままだった……。
揺れによる配置の僅かなズレ以外は特に大きな問題は見当たらない。
住めそうですらある。

「マスター、この写真は……」

カナンが部屋を見渡していると棚に置いてあった家族写真をメイデンとレナスは見つめていた。
カナンも懐かしい気持ちでそれを手に取る。

「俺達だな。このツンツン頭が父さん。学者で、結構凄かったらしい。ただ、中々遊んでくれない人だったから、気を引こうとして、ガラス割ったり、データぶっ壊したりしてな。よく怒られてたよ」

苦笑いを浮かべながら、カナンはその時の情景を思い出す。
ガラスを破壊したり、よくわからない機材を破壊したりとやりたい放題していたことを今更ながらに後悔していた。

「この人が母さん。身体が弱いのに、俺のために遊んでくれた優しい人だよ。チビん時は父さんと俺で母さん争奪戦を……」

「「争奪戦？」」

「いや、何でもない……」

紅くなりながら、カナンは視線を二人から逸らした……。

「コホン……。で、この間にいるのが六、七歳の俺」

「可愛いな。しかし、この写真、父親より母親にベッタリだが……」

「……気にするな」

何度目かのスルー希望発言をし、カナンは写真を棚へと立て、元に戻した。

「主はお母様似なのですね」

「らしいな。写真見た母さんが自慢にしてた気がするし……」

――確かこの写真を撮った時も、母さんはしゃいでたしな……。

『夏楠君、可愛いですよ～♪　ほら、夏輝さん、私にソックリ♪』

『あ～、はいはい。そうですね～。わかったから親バカはその辺でな？』

この部屋の中心で、そんなやり取りが行われていたことをカナンは思い出していた……。

「マスター、いつまでここにいる気だ？」

声が響き、肩に軽い感触。

右肩に探索を止めたメイデンが停まっていた。

「話が終わるまで、だ」

「話？」

「ま、話もしないような、見込み違いの人ならハルはもういないだろうけど……」

やってくれる。

カナンはそれを信じて疑わない。

何故なら、カナンの中で、機動六課は、どの部隊よりも最高の部隊なのだから。

「よし。俺は俺で頑張るかな。メイデンとレナスも来るか？」

「ああ。付き合おう」

「はい。行きます」

カナンは、部屋を出る前に名残惜しそうに視線を向け、扉を閉めた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ハルとなのはは、未だ暗闇に包まれる海を眺めていた……。

「さて、話すとは言ったものの、数が多すぎて……」

「あ、それは大丈夫。全部聞くつもりでいるから」

「全部、ですか？」

「うん。全部。孤独を選ぶ理由に関連してくるんだよね？」

「……と、言われましても、自分でも正確な位置は……」

「だから、全部」

かいつまんで話そうとしていたハルは、なのはの言葉に面食らう。

なのはの言葉は、ハルの逃げ道を潰すことに他ならない。

なのはに話をするといった時点で、ハルの負けだった……。

「はぁぁぁ～～～……」

「な、何かな？」

壮大な溜め息をついたハルになのははは驚く。
ここまで壮大な溜め息は滅多に聞くことはないからだ。

「いえ、厄介な方だなと……」

「な、何が？」

珍しく、ハルがジト目をしながらなのはを睨む。
なのははわけがわからず首を傾げるしかない。
そんななのはを、ハルは無視して海へと視線を向けた。

「さて……取り合えず、先代のことからですかね」

「先代さん？」

「僕の前の執事ですよ。綾瀬、夾。ほとんどの事柄に夾が関連して来ますから」

ハルにとって、忘れもしない。忘れることなど出来はしない。先代執事、綾瀬、夾。
カナンと同じように、ハルにとっては認めるのを避けていた道、その道を、なのはに押され、ハルは進むことを決めた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

勝負に負けた僕は、連行されるようにしてヘリに乗せられ、白姫家に連れられた。
僕の頭の中は脱走することでいっぱいで、その時は、まさかこの家に仕えることになるなんて、思いもしていなかった。

回想・出会い

「千春さん千春さん、あそこですの！　あそこが私の家ですの！」

隣でクレアとかいうガキが騒いでいる。
正直、ウザくて、鬱陶しいことこの上ない。
怒鳴っても良かったが、ガキ相手にそこまでするのは流石に気が引けた……。

「あーそうかい。そりゃあ良かったな……」

「貴方は、これからあそこで私の執事になる修行をするですの～♪」

「……はぁ？」

なんだ、まさかこのガキは本気で俺を執事なんぞにするためにお持ち帰りしたってか？

「おい、クソオヤジ。このガキ、マジで言ってんのか？」

後ろの席で寝ていたクソオヤジ、白姫竜蔵とかいった奴は、面倒くさそうに片目を開けた……。

「最初に言ったじゃろうが？　それとも何か？　お前はもう耳が悪うて聞き取れんかったか？　そりゃあ済まんかった」

「てめぇ……俺が聞きてぇのは、何でこんなクソガキの執事なんぞに俺がならなきゃいけねぇんだってことだ！」

「儂だって可愛い娘、さらに将来勇猛な巨乳ちゃん候補の激可娘を主なんぞのクソタレ甘ちゃんストリートチルドレンに渡しとうないわぁ！」

前半はどうでもよかったが、後半は凄まじくムカついた……。
警告だぞ。クソオヤジ……。

「殺すぞ……」

「はっは～。貴様なんぞが儂を倒せると思うなペーペーの青二才めが！」

「ベロベロバー」とかいいながら後部座席で俺をバカにしているクソオヤジ……。
これは、アレか。殺してくれという合図だな？

「ぶっ殺す！」

「無理じゃと言うたであろう？」

「旦那様、お客様も、暴れられますと危険ですからお座りください！」

「きゃぁあああああ！」

座席のベルトを引きちぎり、オヤジへと突っ込む。

ヘリが大きく揺れ、パイロットとガキが悲鳴をあげたがしったこっちゃない。

「あらあら、元気一杯ね～。でも、あんまり暴れるなら落としますよ～？」

のほほんとした声からおぞましい言葉が響く……。

にこやかに笑いながら、白姫静瑠とかいう、クソオヤジの妻がヘリの扉を解放していた……。

そんなことより恐ろしいのは凄まじいまでの殺気……。

これまで色々な猛者と殺りあってきたが、これ程の殺気を放つ奴はいただろうか……。

いくつもの死線を越えた筈の俺の背中に冷や汗が流れた……。

「おい、小僧、静瑠ちゃんはキレると儂より怖いから、停戦といかんか？」

そしてそれは、クソオヤジも同じらしい……。

地上ならこの女にだって負けねぇ自信はあるが、ここは空、場所も狭い。

「しゃあねぇ……」

グラースの奴と戦う前に死ぬわけにはいかねぇからな……。

「うむ。思ったより話が通じる小僧で良かったぞい」

「はい。仲良く行きましょうね」

「お母様凄いですの～♪」

「クレアもこれくらいにならないといけませんね？」

「はいですの！」

ガキ、おれはな、それになったら女として終わりな気がするぜ……。

まぁ、口に出しては言ってやれねぇわけだが……。

「千春さん？　どうしたのですの？」

「いや……」

答えようかとも思ったが、そもそも、俺は去るのだから関わらなくてもいい……。

ガキもそれ以上追求することもなく、ヘリはゆっくりとバカでかい敷地に着陸した……。

外に出ると、世話係だろうか、男と女が半分に別れ、列を成して並んでいる……。

《お帰りなさいませ》

「うむ」

「出迎えお疲れ様です」

「皆～、ただいまですの～」

三人は笑いながら二つの列の中央を進んでいく。

だが、俺は行かない。

こんなとこに居座るつもりなんてねぇからな……

「待てよ」

踵を返した俺の右腕に、強く握りしめられた感触が広がる……。

「んだよ……」

振り向くのも面倒だ。

少し相手して、適当に流してそれで終わりだ……。

「お前、新入りだろ？」

声色は明るく、透き通っている……。

それだけで俺のような薄暗い奴とは逆のタイプだとわかる……。

「俺、綾瀬夾。新入り、お前の、名前は？」

なんなんだコイツは……図々し過ぎるだろ……。

「名前だよ名前。あるだろ？　それくらい」

「ちっ……。朱皇千春」

「千春、千春ねぇ……ハルで良いだろ。な♪」

もう我慢ならねぇ……。

何でこんな初対面の奴にあだ名までつけられてんだ！

「いい加減に……」

「じゃ、行くぞ、ハル！」

「お、おい！」

爽という奴は、そのまま俺の腕を引っ張っていく。

そして、顔も見ないままに、白姫家へと引っ張りこまれてしまった……。

Ｎｅｘｔ　Ｓｔａｇｅ……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

祐「後書き召喚コーナー♪」

梓「本日のゲストはこの人♪　Ａｎｏｔｈｅｒ　Ｓｗｏｒｄから、夜十神慎吾～」

慎「梓、お前もだからな……」

梓「は？　私はＬＶのキャラだから違うわよ」

祐「騎士さんから逃げてきたんだって」

慎「いや、逃げたくなる気持ちもわからないでもないんだけどな……」

カァァアアアオオォォォォォォス！　バンザァァアアアアイ！

慎「こんなこと言ってる奴だし。なぁ、カ、ナ、ン？」

カ「うりうり～。クソガキ。弱いな～♪」

グリグリ。

ポテ。

５カ「うわぁぁああん！　このお兄ちゃんやぁぁだぁぁああ！」

ヴ「あ、カ、カナン君泣かないで？　カレルさん、そんなことしちゃダメですよ」

カ「はぁ？　何で僕がそんなことしなくちゃいけないのさ？　ボンバヘッ！　を愚弄したのはコイツだぜ？」

ヴ「それは、そうですけど……」

５カ「むぅ！」

ヒュン！

カ「おっと……ガキの直線的な斬撃なんて、梓の辞書を食らってきた僕には止まって見えるね。ホレ」

ペチ（輪ゴム）

５カ「うわぁぁああん！　痛いよーーー！」

カ「あれ？　もしかしてコイツが弱いんじゃなくて、僕が強すぎるとか？　うっひょぉ。マジで♪」

慎「アレ、カナン？」

祐「様々な陰謀が重なり（主にテスタメントさん）ああなってるのよ」

慎「重なりの辺りに……」

梓「慎吾～？　その辺りは気にしちゃダメよ？」

慎「まぁ、いいけど……。アレ、ほっといてもいいのか？」

祐「多分ね～。ほら、友情パワーよ？」

慎「アレ、誰だよ……」

祐・梓「しーちゃん」

慎「他作品ーーー！？」

祐「もう準どころかほぼレギュラー化してるから問題ないわ！　テスタメントさんだってコレを読んで、仕事場の休憩所で「いやぁ、流石は我が同士ですね～」とか言ってるに違いないし」

梓「しーちゃん、カレルなんか殺っちゃいなさ～い♪　六法全書で援護射撃でもしましょうか？」

慎「梓、死人、死人でるから……」

梓「カレルなんてバッテリー交換すれば生き返るじゃない」

慎「それもそうだな。しーちゃんとカナン、許可する」

カ「僕は人だぁぁぁぁあああああああ！！　ったく、あの二人はいくら僕でも、ガキ相手に負けるかよ……」

しー「……カナン君……大丈夫？」

５カ「ぐす……大丈、夫……」

しー「……怖い、けど」

カ「あん？」

しー「……弟をいじめるのは、許せないの……お姉ちゃん、頑張る、ね？」

５カ「お姉ちゃん、僕も、やるよ！」

一同「弟ぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！？」

ヴ「はぅ～♪　可愛いよ～♪」

カ「お、驚いたぜ……」

しー「姉……神庭、シオン……」

５カ「弟、風間カナン！」

しー・５カ「推して参ります……／参る！」

カ「ふん、当たらなければどうということは……」

ドドドドドドドドド！

カ「な、い？」

梓「あ～驚いた～」

祐「あんまりに驚いたもんだから辞書で縫い付けちゃったわ……」

慎「俺もついハリセン投げてた……」

カ「ねぇ！　アンタら意外に冷静ですよね！？」

祐・梓・慎「気のせい気のせい」

カ「嘘だぁぁぁあああああああああああ！！！！」

しー「……神覇伍ノ太刀」

5カ「よんしきばっとうけんじゅつー！」

しー「剣魔・れちゅ……」

5カ「こんごー！　せんがー！」

メキャァアア……。

カ「げふぅぅぅぅぅ！！！」

カッキィィィィン！

カ「うわぁぁぁあああぁぁぁぁーーー……」

しー「……よく、出来た、ね。カナン君」

5カ「えへへ。偉い？」

しー「……うん」

5カ「やったぁ♪」

ヴ「えへへ。しーちゃんコレクションが増えた～♪」

祐「ヴィヴィオ、アンタも何気にえげつないわね……」

ヴ「ど、どうして？」

梓「気づかないからこそよ」

ヴ「？　あ、そういえば慎吾さんは？」

祐・梓「あそこ」

慎「よくやった、と言いたい所だが、しーちゃん、君は女の子だろ？　もう少し人前に出ることを考えれば……」

ピュー

ポス

ヴ「あ、あれ？　どうしたの？」

しー「……あの人、怖いの……」

ヴ「そ、そっか。よしよし。でも怖い人じゃないんだよ？」

しー「……カナン君とヴィヴィオママ以外は皆怖いの……」

ビクビク……キュ。

ヴ「可愛いよーーー♪♪♪」

祐「なんていうか、アンタもう少ししーちゃんに耐性つけなさい……」

5カ「お姉ちゃんをいじめるなぁ！！」

慎「え、そうなるのか！？」

梓「カナン、今の慎吾ならガキのアンタでも勝てるわ！　魔法なんて使えないに等しいから思いっきり、そこで踏み込む！」

カ「うん！」

ザシュ！　ヒュヒュヒュン。ギィン！

慎「梓、お前、覚えとけ、よ！」

梓「ごっめーん♪　最近物忘れが激しくてさ♪」

慎「嘘つくな！」

祐「なんか終息つかないのはいつもね。じゃ、今回も無理矢理に私

が閉めるわ。騎士さん、三人の召喚ありがとね。じゃ、また♪」

ガシャン！

カ「しーちゃん、可愛かったな……」

業者「萌えないゴミ発見、焼却しま～す」

カ「いやぁぁあああああああああああああああああああ！！！！！」

終われ

第三十六話　空を見上げて　（前編）　（前書き）

もし間違いなどありましたら、よろしくお願いいたします～。

第三十六話　空を見上げて　（前編）

メ祐「……」

ヴ「昔昔～あるところに～おじいさんとおばあさんが……」

５カ「桃太郎！」

ヴ「残念、違うよ～？」

しー「……かぐや姫？」

ヴ「それも違うね～？」

５カ「白雪姫、親指姫、鶴の恩返し！」

ヴ「ふぇぇ！？　当たっちゃった……。えとえと、それじゃあ、次のご本を……」

カ『絵本ってそういうもんじゃねぇだろ……』

メ祐「うぁぁあああああああああああ！！！！」

バキャァ！

カ『何故に！？』

メ祐「平和なんて前書きにいらないって何度言わせるのよ！！」

カ『いや、意味わかんねぇし、そもそも幽霊蹴るってお前……』

メ祐「くぅぁあああああああああああ！！！」

ゴキゴキ！

カ『いいいいぃぎゃぁぁあああああああ！！！』

メ祐「暇～ひ～ま～！」

メキッ！　メキッ！

カ『いぐっ！　じゃ、ラディと、ぐあっ、呼べば！？』

メ祐「そっちはネタ仕込み中だから次なのよ！！」

バキャァ！

カ『さいで……』

しー「……幽霊さん」

カ『ん？』

しー「……ママとカナン君との楽しいご本の時間を邪魔しないで……」

カ『え、え、あ、すんません……』

しー「……ん」

トテトテ。

メ祐「……ダッサ」

カ『自分でもわかったさ！　わかったからもうジト目で見るの止めてくれ！』

メ祐「じゃあ……」

カ『見下した目で見るのも止めてくれ！』

メ祐「違うわよ。これはアリを見る目よ？」

カ『んな細かい情報知るかぁぁぁぁ！！』

5カ「お兄ちゃんうるさい！　邪魔しないでって言った！」

カ『すんません……』

メ祐「やーい。バーカバーカ」

カ『棒読みは中々に辛いですぜ……』

メ祐「ふはははは！　クズが！　消え失せろ！」

カ『極端！！』

ヴ「二人とも、少し静かにしようか……？」

ゴオオオ……。

カ・メ祐「『すいません！』」

ヴ「えと、ラディさん？　今回は呼べなくてすいません。次回は必ず出させていただきますので、失礼しますね。さん、はい！」

しー「失礼します……」

5カ「しつれいします～！」

ヴ「よしよし♪　良くできたね～♪」

カ・メ祐（甘いなぁ……）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

風間家近辺にて、カナンは活動し、何かを探すかのようにカナン達はうろついている。

「この辺りなどどうだ？」

「ん～家も海も綺麗に見えるし、いいか。レナス～！」

風水等で良い方角があることも知っていたが、カナンは詳しくないために、風景のみであっさりと決める。

「いきますよ～！」

「お～」

やや遠方から、フルサイズとなったレナスが手を振り、地面に手を当てる……。
地鳴りが響き、カナンの目の前に突き出すのは石の壁。
「しかし、良いのか？　大切な両親の墓がこんなモノで」
そう、カナン達は、手作りで両親の墓を作ろうとしていた。
「いいんだよ。堅っ苦しいのは嫌いな人達だからな。それにこれぐらい大雑把な方がらしいよ」
家族三人が幸せに暮らしていたころ、それは、厳かに、などという言葉は似合わない。
元気に、仲良く、明るい一面ばかりだ。
故に、カナンの言葉は軽いモノだった。
寧ろ、手作りの方が良いと言う。
「さて」と石の壁を見上げたカナンは左手に剣を転送。
「メイデン」
「ああ」
言葉を合図にメイデンが輝き、黄金の鞘と化して、カナンの腰へと装着、剣を納めた。
「……はっ！」
呼気が吐き出されると共に、幾筋も輝く金閃。
それは、石の壁を取り囲むように疾る……。

風切り音が止み、剣を鞘に納める独特の金属音。
瞬間、ガラガラと石の壁がずり落ちる……。
数瞬前までは石の壁だった物が分かたれ、三つの墓標となっていた……。

「上出来だろ」

石碑の前で腕を組み、満足げに笑うカナンの肩に、メイデンとレナスが着地。
共に石碑を見上げた。

「お喜びになると思います！」

「後はどうする？」

「名前を掘る。これも手伝ってくれるか？」

「ああ／はい」

そうして、カナン達は石碑に名前を掘り始める。
書き込む名前は、夏輝、奈津美、そして夏楠の三人。
三人はいつも一緒という願いからだ。

「「「出来た～！」」」

丁寧に丁寧に、掘り進めた石碑は、達筆とは言わないものの、想いが込もった、世界に一つだけの物となった。

「レナス、時間は？」

「はい。４時３２分、残り１５秒で４時３３分となります」

「もうちょいかかるかな……うん。かかるな」

勝手に頷いたカナンは欠伸をして地面に転がる。

「１０分経ったらよろしく……」

「あ、ああ……」

「カウント、開始しますね」

「ん～」

現在時刻、４時３３分、この時点でグラースの告げた三日という制限時間の一日を切った……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一方、ハルの過去話は、出会いから次の場面へと進んでいた。

回想：千春と夾

俺の腕を引っ張る、綾瀬夾という執事はどこに向かう先があるのか、屋敷の奥へ奥へと進んでいく。

冗談じゃねぇ。

何で俺がこんな茶番に付き合わなきゃならねぇんだ！

「放、せ！」

渾身の力で腕を振るったが、綾瀬夾は俺の腕を離さない……。
確かに、全力で、綾瀬夾が脱臼するのも構わずに、思いきり振るったのに、離さないだと……
まさか、俺が、力で負けた？
こんな、執事なんかをやってるもやし野郎に？　有り得ない……。
そんな俺に気づいたのか、綾瀬夾が足を止める。
振り返ったその顔立ちは、パッと見ただけでは、男なのか、女なのか、わからない……。が、そんなことはどうでもいい。

「おい、ハル。何ボーッとしてんだよ？」

止まったかと思えば、このもやし野郎は……！

「何勝手にあだ名で呼んでやがる！」

「勝手じゃねぇよ。さっき決めたろ？」

「俺は許した覚えはねぇ！」

「別にお前に許してもらわなくてもいいさ。勝手に呼ぶし」

「プライバシーとかいうのに引っ掛かるだろうがよ！」

「知らん。もう決めた。お前はハルだ」

「ぶっ殺すぞてめぇ！」

綾瀬夾は、俺の話に聞く耳を持たず、俺の言葉は一蹴の元に砕け散る……。

「嫌か？」

「嫌だ！」

「どうして？」

「親しくなんかなりたくねぇ。繋がりなんざ、いらねぇんだよ！」

繋がりは邪魔なだけ。

ただの足枷にしかならない。

俺に必要なのは、アイツを殺せる力だけだ！

これだけはっきり言えば……。

「ははは！　お前、バカだろ？」

「あぁ！？」

「んなもん。どんだけ拒絶したって、無駄なんだよ」

答えを知っているかのように、綾瀬夾は笑い飛ばした……。

意味がわからない。

繋がりなんて弱いモノ、簡単に拒絶出来る。

「ま、いずれわかるさ。いやぁ、こんなバカに会ったのは久しぶりだなぁ」

「んだと！？　待てコラァ！」

「かっかっか。答え教えて欲しけりゃ、そこの部屋の中にある執事服着てきな」

「ぜってぇ教えろよ！」

で、執事服に着替えた所で気がついた。
俺は、綾瀬夾に乗せられたんじゃないか、いや、間違いない。
やっぱあの野郎はぶち殺す！

「てめぇ、騙し……た……」

ドアを蹴破ると、確かにあった筈怒りは、俺の中で戸惑いへと変わった。

「お前、蹴破るこたぁないだろうに……。お、執事服、似合ってんじゃんか♪」

綾瀬夾の“野郎だった”奴は、背中まで届く黒髪を持ち、あんまりにも綺麗な“女”になってたんだから……。

「おん……な……？」

「っ……！」

呟いた瞬間、綾瀬夾の右手が霞んだ……。

「おごっ！」

「誰が女だコンニャロウ♪」

その右手はいつの間にか俺の首を締め上げていて、壁に叩きつけられていた。
綾瀬夾は笑っているが、確実に言えるのは、このままだと殺される

ということ。

「ごめんなさいは？」

「誰が……ぐぁぁ！」

「ははははは♪　さっさと言わねぇと殺すぞ♪」

ダメだ！　この力だと窒息する前に首の骨が粉砕する！
こんなとこで死ねない……。
かと言って、謝る気もない……。

「っぁっ！」

「っ！」

全身を使って蹴り上げた左脚は届かない。

「いっつっ……」

届く前に、俺の身体は投げ飛ばされ、反対側の壁に叩きつけられたらしい。
五体満足……動く！
だが、壁にめり込んだ身体を引っ張り出した時には詰みだった……
綾瀬夾がいつの間にか踏み込んで俺の前にいた……。

「悪かった……。髪が長くなってたから間違えた……」

「ったく……。まぁ、服の中に入れてたのは俺も悪いから、今回は許してやる」

「何で……」

「外の仕事が多くて邪魔だったからな」

邪魔なら切れよ。

と言いたかったが、それを言ったらまた危ない気がする。

「邪魔なら縛れよ……」

「そうする前に、お前が扉蹴破ったんだろうが……」

そう言って、綾瀬夾は胸ポケットから髪紐を取りだし、口でくわえ、手慣れた手付きで髪を後ろに縛る。

「ほら、これで男だろ」

「……だな」

結局、女みたいなポニーテールだし、あまり意味はないと思ったが、黙っておくことにした。

「今の間が気になるが……ま、いいや。仕事行くぞ。お前には死ぬほど覚えてもらわにゃいかんし」

ダメだ。この辺で打ち切らないとマジで執事なんぞにならないといけなくなる……。

幸い、綾瀬夾は変態オヤジよりかはずっと話が通じる。

言うなら今しかない。

「だから、俺の話を聞け！」

「却下」

「俺は……って……なんつった？」

聞き間違いじゃなければ、綾瀬夾は……。

「だから、却下」

やはり却下と言っている……。

コイツもかよ……。コイツも話が通じない奴なのかよ……。

「何でだよ！　俺には目的があんだよ！」

「だから？」

「だからって……。わかんだろ。こんなとこで時間潰してる暇はねぇんだ！」

怒鳴っても、綾瀬夾の表情は変わらない、いや、呆れともとれるかもしれない。

ガキの言うことを聞き流す親みたいな、今の綾瀬夾はそんな感じだ……。

「なら、行きゃあいいじゃねぇか」

「は？」

訳がわからない……。

「邪魔してるのはてめぇら……」

俺が最後まで言い終える前に、綾瀬夾は壮大に溜め息をつく……。

「お前、俺達が邪魔してるように見えるのか？」

邪魔をしている。

だって、俺を無理矢理こんな所に連れてきて、騙して、こんなコトをさせようと……。

「邪魔なら、退ければいいじゃねぇか。何で俺達に従う理由がある？　別に、オヤジ達はお前を縛ってここまで連れてきたわけじゃないし、従えなんざ、一言も言ってねぇ。お前が勝手に流されて、勝手に着いてきてるだけだ」

「俺が、流された俺が悪いってか……」

はっ……。傑作だ……。

巻き込んだのはコイツらで、俺は雑魚の血なんざ見たくねぇから、話し合いで済ませてやろうってのに……。

コイツはそれを俺が悪いと言いやがる……。

まぁ、いい。出ていくことは出来るらしいからな。

「じゃあな。クソ野郎……」

綾瀬夾に背を向ける。

だが、俺の身体は一歩として動かない。違う。動けないんだ……

綾瀬夾が左肩を握って動きを疎外していたから……。

「離せよ……。俺は出ていく……」

「行かせねぇよ」

「何でだよ！　従う必要はないんだろうが！」

コイツはどうにもイライラする、殺してやろうかとも思うくらいに……。

「ああ。従う必要はない。お前の意思だからな。出ていきたきゃ出ていけ」

「出ていくから離せっつってんだろうが！」

「俺が嫌だ。だから立ち塞がる。これが邪魔だ。わかるな？」

わかる。わかるから、離せ。

その、ガキを諭すような眼を向けるな……。

じゃないと、俺はもうキレそうだ……。

「お前、話聞いてたか？」

その、呆れたような顔をするな……。

苛立ちに任せてグチャグチャにしたくなる……。

「あぁ！？　聞いてたさ！　聞いてた！　だから離せよ！」

「やっぱ聞いてねぇじゃんよ。邪魔なら退けろ。俺はそう言ったんだぜ？」

「だから退けっつってんだろうが！」

「わかんねぇ奴だな……。邪魔なら……」

「っ！」

瞳を閉じ、乱暴に髪を引っ掻く綾瀬夾。
そして、ゆっくりと開いた瞳には冷たい光が宿っていた……。
アレは、そうだ。闇の道を進んできた奴の眼だ……。
なんでだよ……。こんなとこで執事やってる奴が、なんでそんな眼をしてる……。
なんで、こんな奴に、俺は震えてんだよ！

「殺してでも進めっつってんだよ……」

「うるせぇ……。黙れよ……。言われなくたって……」

「わかってるか？　本当に？　なら、殺して見ろよ」

「え……」

左肩の力が消え、ノーガード状態の綾瀬夾が俺の前に立つ。
コイツは……何を考えてんだ……。

「何を迷ってんだ？　今さっき知り合ったばかりの他人だろ？　邪魔してるのは俺だ。殺すには十分な理由だ」

「……確かにな」

綾瀬夾に恨みはない。
だが、コイツは自分で邪魔な奴は消せと言った……。

いいさ。なら、言葉通り、俺の道を邪魔すんなら、ぶち殺すだけだ！
簡単だ。左脚に重心乗せて、上半身を右捻り、後は右脚の踏み込みから捻り戻して掌底を叩き込めば、人間の頭なんざ簡単に砕け散る……。

「ちっ！」

だが、俺の右腕は、自分でも検討違いの方に進んで、壁をぶち抜いた……。
強引に方向を変えたせいか、手首辺りが軋んだ気がする……。

「お前は強い。そこらの奴じゃ相手にもならないくらいに。でも、甘い。根が優し過ぎる。闇の道を進むのは向いてねぇよ」

「うる、せぇ！」

どいつもコイツも、俺のことは子供としか見ない。
どれだけ力を見せても、脅しても、殴った奴でさえ、俺が甘いと言う……。甘い甘い甘い甘い！！！
もう、たくさんだ！　俺はただ一人以外は興味が無いと、見逃してやってるだけなのに！

「もう一度言う。お前に闇の道は向いてねぇ」

「なら、向いてないなら、どこで強くなればいい！？　こんなぬるま湯みたいな道で、希望と未来に溢れたこんな世界で、強くなれるわけねぇだろうが！！」

人間は楽な方に流れる。
誰だってそうだ。

なら、周りの環境を苦に変えなきゃ、どうしようもない。

「なれるさ。というか、最終的には闇の道なんかより、お前が言うぬるま湯の世界の方が、ずっとずっと、強くなれる」

「戯れ言だ……」

そんなわけない。

事実、表の道の奴に俺に勝てる奴はいなかった。

尻尾を巻いて逃げるような、そんな腰抜け共。

個人では何も出来ない、雑魚。

「信じられないみたいだから、例え話をしようか？　剣の達人と剣の達人、実力、体力、気力、ある一点以外は全て同等な人物が戦うとする。ある一点とは、真っ当な道でそれを極めたのか、闇の道で修羅と化して極めたのかって違いだ。戦いは苛烈。お互いに一歩も退かない。体力も気力も尽きた時、どちらが勝つ？」

「……」

達人を支えているのは剣を極めたという自信だ。

それはどちらも同等、なら、他の要素は……。

「簡単だ。真っ当な道の剣士が勝つ。絶対に。これは揺るぎない」

綾瀬夾は、確信を持って言い切る……。

何でだ……。何でそこまで言い切れる……。

「何でだって顔してるな。教えてやるよ。芯があるからさ。最後に勝負を決めるのは想いが砕けるかどうかっていう精神的なモノにな

る。力にすがって来た闇の剣士は、力が同等という事実に自信は打ち砕かれてる。だがな、光の剣士は、力なんてとこに自信は無い。ソイツから何かを護るためか、譲れない道があるのか、それはわからねぇが、何か心に決めた太い芯があるんだ」

心の芯。

そんな不確かなモノに、勝負を決める力があるのかはわからない……。

少なくとも、今の俺に理解することは出来ない。

「ま、これは勝負に関してだけのことだが、他にも、逃げるが勝ちという言葉があるように、命があればそれで勝ち、死ねば負けって考えもある。闇の道には、逃げるなんて選択肢、ギリギリになった時しかないだろうが。話せばまだまだあるが、ようは闇の道なんざ進まなくても強くなれるってこった。戦闘方とか、技術とかは俺が教えてやるから、そっちは心配しなくていい。心の成長はお前次第だ。強くなれる可能性が広がった。そう考えてここにいろ。損はしない筈だからよ」

理解することは出来ないが、理解してみたいとは思う。

だから……――

「無駄だと思ったら即出ていく。それでいいな……」

「おぉ。いいぜ。ま、邪魔する俺を倒せたらだけどな？」

「言っとけ。すぐに追い抜いてやる……」

――だから、もう少し、ぬるま湯に、光の道にいてみようとそう思った。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「皆～。今日から入った朱皇千春だ。通称ハル。仲良くしてやってくれよな～！」

《はい！》

と、綾瀬夾の声に執事やらメイドやらが一斉に返事を返した……。

前言撤回。

今すぐここから出ていきたい……。

正確には綾瀬夾から離れたい……。

大ホールに連れてこられたかと思うといきなりこれだ……。

「おい、綾瀬夾……」

「ん？　何だ？　嬉しさのあまり跳びはねそうか？」

何だ。コイツはアレか。またか。わざとか。

何でこの状況でそんな解釈が出来る？

「逆だ！　何でこんな大々的に発表してんだよ！」

「いや、恒例だし」

「先に言いやがれボケェェェェ！！！」

「いや、だって言ったらお前逃げたろ？」

「当たり前だ！」

「面白くねぇじゃん♪」

「……殺すぞ？」

「あ～はいはい。わぁったよ。皆、もういいわ。解散」

本当にコイツはわかっているんだろうか……。
最初に会った時からどうにも流されている気がする。

「さて、と……ハル、右腕貸せ。ヒビ入ってるだろ？」

正直、驚いた。
バレてないと思っていたから。

「……ほっときゃ治る」

「そんな人間いねぇから。いいから貸せ」

「あ、おい……」

半ば強引に、綾瀬夾は俺の右腕を取り、袖を捲りあげる。
そうして、手首に人差し指と中指を当てた……。
不思議な、緑色の光がそこから溢れた……。

「ん……」

その光に抜き出されるように赤い光が俺の手首から出現、吸い込まれるようにして綾瀬夾の中に緑と赤の光は消え去った……。

「はい、治療終わり」

その言葉に間違いはなく、俺の手首から痛みは消えていた……。
知っている。これは魔法だ。
だが、魔方陣やそれらしき類いのモノは無かった。

「……レアスキル、か？」

「微妙に違うが、似たようなもんか。綾瀬家に伝わる技能、“らしい”ぜ？」

他人事のように、綾瀬夾はそう言った。
明らかに何かあるのはわかったが、必要以上に関わる必要もない。

「さてと、そろそろ仕事に……」

「千春さ～～ん♪」

この能天気な声は、クレアとか言うガキか……。
距離は５ｍ、部屋から出てきたってとこか。
だいたいこういうガキの取る行動はわかるが……。

「避けんなよ？」

だと思った……。
背中に体当たりでもするかのようにガキが抱きつき、おぶさる形となった。

「夾～、二人で何してるですの～？」

「えっとですね。これから掃除に向かおうと思ってたんですよ～。

クレアお嬢様」

「そうですの～。千春さんもですの？」

「あぁ……。いい加減重い。退けよ。ガキ」

「は、はいですの……」

ガキが降りると、綾瀬夾は慰めにかかる。
ガキは泣きかけているが、避けなかっただけで感謝して欲しいぐらいだがな……。

「クレアお嬢様～？　ハルはこれが普通で、不器用な奴ですから、落ち込んじゃダメです。ファイトですよ！」

「はい、ですの！」

元気になるガキ。やっぱりガキは単純だ。
まぁ、コイツの慰めだからって効果もあるだろうが……。
さっきとは天と地ほども差がある。

「狸……」

「あぁ？　何か言ったかクソガキ……」

「別に。空耳だろ」

「……覚えとけよ？」

「何のコトだか？」

このガキの前じゃ、コイツは手出しは出来ないらしい。
これは今後役に立ちそうだ。

「きょ～～う～～ちゅわぁぁぁ～～ん♪」

ガキの次は変態オヤジか……。
てか、何でアイツは蛙みたく跳ぶ……。
キモいことこの上ない。

「ちゃんづけすんなっつってんだろうがクソオヤジィィィィィィィィィ！！！！」

「ごぶぁぁぁぁあああああああああああ！！！！」

綾瀬爽の右腕が霞んだかと思うと、変態オヤジの右頬に裏拳が炸裂し、壁をぶち抜いて吹っ飛んでいった……。

「はぁっはぁっ。消え去れクソオヤジ！」

「爽カッコいいですの～♪」

この家はようわからん……。
というか、俺はこの家に馴染む日が来るんだろうか……。
俺には半永久的にこない気がした……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

Ｓｉｄｅ・なのは。

ハル君は懐かしいと言うように、目を細めて笑っている。
それは見ただけでわかる程、自然で、満ち足りた笑顔。
私は知らない、……少なくとも六課にいる間に見せたことはない、
自然な笑顔。

「さて、出会いから生活の始まりまでを話したわけですが、ここまでで何か質問はありますか？」

「えっと……」

聞きたいことはたくさんあるけど、それは、また今度でも聞けることばかり。
なら、私が本当に聞きたいのは、一つだけ。

「ハル君は、今は、楽しい？」

「成る程。そう来ますか」

「ダメかな？」

「いえ、面白い方だなと」

「厄介なのか面白いのか、どっちなのかな？」

「あははは。どちらも、と答えておきます」

ハル君の笑顔から何も読み取ることは出来ない。
ハル君と私では、生きてきた道が違いすぎるから。
でも、今なら、今のハル君なら、手が届く気がする。
だから、私がした質問は、他愛ない質問。

ハル君の核心をいきなり突くような、そんな質問じゃなく、日常の会話の中にでもあるような、その程度のモノ。
けれど、それで、それだからこそいいんだと思う。
他愛ない質問だから、ハル君は質問を真剣に考えた上で、過去と今とを吟味した上で、ちゃんとした答えをくれる。
下手に聞いて、無理矢理傷口を抉るなんかよりよっぽど核心に触れられる。
そんな気がした。
そして、予想通り、ゆっくりと、言葉を探すかのようにハル君が口を開いた……。

「少し前までは、楽しいなどと感じた事はありませんでしたね」

「そっか」

考えて、本当に必死に考えて、言葉にして、私に伝えようとしてくれてる。
なら、私の役目は、いつまでも待つ。それだけ。
しばらく待つと、ハル君の表情から一切の感情が消えた……。

「自分に向けて、大抵の場合、周囲はこう言います。何を考えているかわからない。得体が知れない。掴み所が無い。酷いモノになると、気味が悪い、化物なんかもありましたか」

やがて、語り出すハル君の口からは無機質な言葉の羅列が溢れ続ける。
ハル君の言葉は棒読みじゃないけれど、機械のように片言でも無いけれど、寧ろ、その響きはタレントさんみたいで、上手ですらあるけれど。
ハル君の言葉は、淀み無く、果てなく清く、とても綺麗で、綺麗過

ぎた。
言葉に色があるのなら、ハル君のそれは、間違いなく無色透明、そう思える。
その綺麗過ぎる言葉は、世界の穢れを知っている私には痛く、苦しいとさえ感じる。
でも、耳を閉じちゃいけない。
友達の内側を受け止められないようで、友達を名乗る資格なんて、無い。

「まぁ、そんなことを言われたところで、笑って流すしか出来ませんでしたが」

これ以上聞くな。
そう、私の頭の中に、警鐘が鳴り響く。
でも、踏み出さなきゃ。
私はまだ、質問の答えを貰ってすらいない。
今はどうなのか、それを聞くために、踏み出さなきゃいけないんだ……。

「どうして？」

途端に、ハル君は悲しさを感じさせる笑みを浮かべた。

「それは……、自分自身を、朱皇千春という一個人として見られなかったから、ではないでしょうか？　自分を一歩退いた位置から見ているもう一人の自分。周囲から何を言われようが他人である心は傷つかない。だから、笑って返せる。心が別にあるから、真の繋がりなんてモノは無くなる」

ハル君の言葉は、今までの苦痛が冗談のように、凄く痛くて、凄く

苦しくて、凄く、悲しかった……。
自分を自分として見ない。
それは、どれだけ辛いことなんだろう……。
傷だらけの身体で、復讐という目的だけのために一人で歩いて、支えは振り払って……。

「ですが」

「え？」

声が響き、視線をハル君に戻すと、ハル君は、悲しそうな表情から破顔一笑、苦笑い。

「そんなことすら関係なく、手を伸ばしてくれる人達が三人もいました」

三人？
クレアちゃんと、カナンと、後一人、夾さん？
悩む私にハル君はクスクスと笑っていた。

「不思議そうな顔をされている貴女ですよ。なのは様」

「ふぇ？　私？」

「ええ。やり方はこれまでに類をみないほど強引でしたが」

「そ、それは……えっと、仕方なく、ね？」

「仕方なくで砲撃を撃つというのが高町なのはという人物なのですか……。新たにデータに追記しておかなければならないようですね」

「ち、違うよ！　ハル君、違うからね！　アレは、ハル君がああしないと行っちゃうと思ったからああしただけで、いつもいつもがあんなじゃないんだよ！？」

「あははは！　冗談ですよ。半分は」

「半分本気にしないで！」

冗談ばかりで、人をからかってばかりいる、優しいハル君が、私の前に立っていた。
このハル君が、さっきのようなことを思っているとは到底思えないし、思いたくない。
「今は楽しいですよ。予定を狂わせてくれる、今は、とても、ね」

「そっか」

大丈夫。
私の声は届いてる。
私は、この笑顔が嘘だなんて、信じない。

「さて、次はどの辺りをお話しましょうか……」

「どこでも。ハル君が話したいところをお願い」

もう、無理強いはしなくても話してくれる。
そんな確信が私にはあった。
ハル君はニコリと笑うと頷いてくれる。

「では……」

多分、本番はここからだ……。

一言も聞き逃さない、私に出来る精一杯のことをやろう、そう決めた……。

Ｎｅｘｔ　Ｓｔａｇｅ……

第三十六話　空を見上げて　（中編）（前書き）

一人称なためかいつもより雑な感じがするかもしれません（汗）
何かおかしなところがありましたらお願いします。
後……規格外に文字数増えてすいません……。

第三十六話　空を見上げて　（中編）

ラ「皆さんこんばんは～」

セ「前書き質問コーナーの時間ですよ～♪」

ヒュウウウウ……

ラ「誰もいねぇし！」

セ「えっと、本日のゲストはリリカルなのは、償いの槍から、ラディオン・メイフェルスと、セラフィムですよ～？」

ヒュウウウウ……。

カ『あ～お前らタイミング悪かったな』

ラ「か、カナン！？　なんか透けてないか！？」

カ『まぁ、幽霊みたいなもんだしな』

セ「な、何でですか？」

カ『いや、幼児化してるせいで身体が無いから……』

セ「くっ、残念です……」

カ『ん？　今日はまともなゲストなのか？』

セ「折角、百一匹メカちゃんを準備したのに！」

百メ『ガルゥ……』

カ『あ、間違いですね。わかります。貴女はかなりおかしいですはい』

ラ「ま、まぁ、平和にはちがい……」

セ「こうなったら、ラディだけでも潰すです♪」

百メ『ガルゥ♪』

ズガガガガガガン！

ラ「そこ見逃そうよォォォォォォォォ！！！」

カ『ラディ……南無』

ラ「カナァァァァァァァァァン！！！」

セ「ラディはほっといて、メイデンさん達もいた筈ですが？」

カ『ああ、アイツなら、ほら』

レ「蟹ですよ～♪　こうばこなのです～♪」

メ「美味しいのか？」

レ「ズワイガニの雌なのです。美味しいですよ～♪　いろはさん、

ありがとうございます♪」

メ「ほう、取り合えず、いろはさん、ありがとう」

レ「か～に～♪　か～に～♪　メイデンも歌うのです」

メ「か、か～に～。か～に～」

セ「何ですかアレは……」

カ『蟹の唄』

セ「意味がわかりません！」

カ『心配すんな俺もわからん。さて、平和なまま質問に行くか』

セ「はい♪」

ラ「カナァァァァァァァァァン！　ちっとも平和じゃねぇぞォォォォォォ！！」

カ『あーラディ？　そういうこと叫ぶと……』

セ「うるさいです♪」

百メ『ガルゥ！』

ドガガガガ！！！

ラ「ミサイルはいやぁぁあああああああ！！」

チュドーン……。

カ『騒ぐと危ないのに……あ～大丈夫かな……』

セ「質問いきます♪」

カ『主は無視！？』

セ「はい♪」

カ『え、笑顔……』

セ「はい、質問、ザッフィーはいずこに？」

カ『あ～犬化してるからアルティスが気づけなかったってネタがあるんだが、使えそうにないな……』

セ「ＳｔＳ、最後の見せ場も、犬のまま。ｂｙセラフィム」

カ『……そういや、エピローグでヴィヴィオ肩車してる以外は犬のままだったな……』

ラ「ザッフィー救済をお願いしまァァァァァァす！」

セ「ミサイル発射♪」

百メ「ガルゥ♪」

ラ「また、またかぁぁあああああああああ！」

カ『いや、ホント、スマン』

セ「じゃあ次、ＫＤＧと反ＫＤＧの戦力状況は？」

カ『え～と、反は俺、シオン、未来、一真さん、祐輔さん、ラディだな。銀杏も入ってくれるかもしれない。で、ＫＤＧは……祐希奈、アリサさん、タカトさんのスリートップ、原作多数、シルフレに零さん、Ｂｒａｖｅ女性陣ほぼ全員、ＢＳはアリシアさん、リニスさん、七つの大罪に千歳さん、後は……ああ、もうわかんねぇや……』

セ「絶望的ですね♪」

カ『まぁ、チビ化してる限りは結構安全だけどな……ってか、なんでこんなに組織が巨大化してんだよ……。どこぞのグノーシスよりよっぽど怖ぇよ……』

セ「神が二人いる時点で勝てないですね～♪」

ラ「だが、勝機はあるはずだ！」

カ『あー……時間稼ぎぐらいは出来るかもしれないけど、勝機は多分無いな。ゼウスフィールドの能力、わかりやすく言うと……』

カナンのわかりやすい説明講座～♪

祐「祐希奈の名において命ずる……。死ね！」

一同《ジーク・祐希奈！》

パァアアン……。

カ『以上だ』

ラ「祐希奈怖ぇぇぇ！」

セ「さ、流石カオスを統べし者です……」

ラ「で、その祐希奈はどこに？」

カ『ほら。ただ、覚悟して見ろよ？』

ラ「何で？」

セ「始まりますよ」

ブン……。

スーパー銭湯“女湯”

ヴ「は～い、しーちゃん、お目々閉じて～？」

しー「ん。閉じたよ。ママ」

ヴ「じゃあ、洗いま～す。シャカシャカ～♪」

しー「……うにゅ～♪」

奈「カナン君も洗っちゃおっか♪」

5カ「は～い」

奈「ほら、ここにおいで～♪」

5カ「えへへ」

アサ「さぁ、タカト君、今はなのはちゃんだっけ♪　綺麗にしよっか♪」

タカトinな「あ、アサギさん、俺は、帰……」

アサ「ダ・メ♪」

祐「じゃあ、私は前を洗ってあげるわ♪」

アサ「うん。そうだね。女の子に洗ってもらった方がいいかも♪」

タカトinな「ゆ、祐希奈殿!?」

祐「女同士ならなんのその～ってね♪」

アサ「さぁ、観念しなさい♪」

タカトinな「ゆ、祐希奈殿、俺は、意識は男で……」

祐「あーそうね」

タカトinな「だ、だから……」

祐「ま、面白いから良しとするわ♪」

タカト・ｉｎな「くっ！」

祐・アサ「「あはははは♪」」

しー「ママ、洗いっこ……」

ヴ「わぁ……♪　うん。洗いっこ～♪」

しー「……んしょ、んしょ」

ヴ「しーちゃん上手～♪」

しー「……ママのために頑張る」

奈「皆仲良し～♪」

５カ「ダーイブ！」

奈「あ、カナン君、危ないから飛び込んじゃダメ～」

５カ「貸し切りだから大丈夫だよ～」

ラ（女）「そうですわね～♪」

ブチ……。

ラ「なんか色々ヤバかったけど最後のはヤバすぎる！」

セ「ラディ、最低です……」

ラ「アレは俺じゃねぇぇぇ！」

ゴオオオオ……。

ラ「何だ、この音？」

カ『そういや、一真さんがラディ殺すとか言ってたような……』

ラ「え゛……」

―滅！―

ラ「……」

セ「……死にましたか？」

カ『ふぅ、ラディ。全力で扉から離れろ。さもないと……』

セ「死ぬ、ですか」

カ『エリオとキャロに会えなくなるぞ？』

ラ「ぬぁぁあああああああ！」

セ「す、凄いです！」

ラ「エリオ、キャロ……兄ちゃんが、今いくぞ！」

カ『成る程。不死身経典は何かしら執着しているモノがあると有効

的、と……ラディ、サンキュ』

ラ「え、あ、ああ」

カ『そんじゃま、そろそろ時間だし、終わるな。言っとくか？』

ラ「ああ。じゃあ……魔法少女、リリカルヴィヴィオ」

セ「ハルの過去、丸々一話」

ラ・セ「「始まるぜ／始まります」」

カ『ついでにラディ、さっきの情報はエリオとキャロにも流れてるからな。祐希奈が細工してた』

ラ「何ィィィィィィィィィィィ！？」

完。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

初めての人々と共に生きるという試み。
それは、とても難しく、正直、僕一人では数日と持たない程だった。
でも、夾は僕が失敗する度にフォローに廻ってくれ、そのお陰か、何とかやっていけた。
そのようにして、一週間程たった時の話。

回想・始まる繋がり

「シッ！」

「ほっ」

回し蹴り、上段に打ち込むも、綾瀬夾は頭一つ分下げるだけで完全に回避。
もう一発叩き込む、それも下がるだけで回避。
それが何だ……。何十発避けられようが、今日こそ、当ててやる。

「らァァァァァ！」

進め、前を見ろ。動きは速くない。打ち込み続けろ！

「ん～……」

拳を、蹴りを、払いを、突きを、顔面に、胸板に、足元に、鳩尾に。
俺の連打に綾瀬夾の表情は揺らぐことはなく、的確にその瞳で動きを追っている。
顔面は左腕で受け、胸板は横にズレ、足元は下がり、鳩尾は右肘で打ち落とす。
腕に鈍痛が流れたが、構わない……蹴り抜く！

「くら、え！」

「お？」

俺の突き蹴りを綾瀬夾が降ろした右腕で受け、数mの後退をした……。
届く……届く！
ここ一週間、まともに当たりすらしなかった綾瀬夾に、届く！
なら、勝てる！

「今日は、勝つ！」

未だガード体勢のままの綾瀬夾に踏み込み、右腕を引き絞り、渾身の拳を打ち込んだ。

「まだ早ぇよ」

「なっ！」

筈だった。

それなのに、俺の身体は何故か宙を舞っていた……。

インパクトの瞬間、右拳に軽く添えられた綾瀬夾の両掌を見た。

こっからは推測だが、沈み込んだ綾瀬夾に、踏み込んだ脚を蹴られ、掌で拳を下に押されたんだと思う。

後は簡単、軸を失った俺は慣性に任せて吹っ飛んだってとこだろう。

まぁ、原理がわかった所で、もう受け身くらいしかとれない。

「ぐっ！」

俺の力をそのまま変換した衝撃は半端なく、激痛が疾った……。

受け身を取って跳ね起きるなんて不可能だった……。

「一応受け身を取ったってことは、反応はしたんだな。ちょっと遅かったみてぇだが。お前は今の間に死んだ」

綾瀬夾の言う通り、俺は確かに死んだだろう。

即死を防いだとしても、転がってるようでは意味がない……。

追撃されて終いだ……。

だが……。

「っぁ！」

俺は綾瀬夾に向かって跳ね起きながら蹴りを放つ。
不意討ちなるものもある。
だが、その不意討ちも、当たることはなかった……。
俺の前にいた筈のその姿が消えていたからだ……。

「ふぁ、眠ぃ。つまんねぇことしねぇでいいから飯作りに行くぞ～」

綾瀬夾は、俺の背後で伸びをしながらそう言った……。
コイツの動きは時々だが、全く見えない。
瞬間移動を思わせる。
そして、恐らくだが……。

「ん～？　どした？　鍛練ならまた明日の朝な？」

「ああ……」

コイツの力は、まだまだこんなもんじゃない……。
確信めいた自信が俺の中にはあった……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「千春さ～ん！」

来た……。
朝も早いと言うのにあのクレアとか言うガキは毎朝毎朝よく飽きない……。
数秒後、俺の背中にクレアのガキが飛び付き、肩から顔を出した。

「おはようございます。ですの～♪」

「おはようございます。クレアお嬢様」

毎度のごとく、仮面を被るのが上手い綾瀬夾。

普段の粗暴な口調の欠片も残っていない。

「千春さん？」

「あぁ」

「あぁ、じゃなくて、おはようございます、ですの」

何でこんなガキにんなことを注意されなきゃならん……。

綾瀬夾は……まぁ、予想通りだ。

「くく……。だってよ？」

コイツは俺とガキのやり取りを見るのが面白いらしい。

いつか殴る……。

「ち～は～る～さ～ん？」

「ったく……ガキのクセに生意気だぞお前……」

挨拶代わりに撫でてやると、気持ち良さそうにするガキ。

単純なガキだ。

「んに～♪　ガキだからですの～♪」

「もういいだろ。降りろ」

「はいですの♪」

まぁ、このガキは駄々をこねないだけ幾分かはマシだ。
その辺りはこの家の教育が良いらしい。

「大分慣れたな」

「嫌でもな……」

いくら人付き合いが無い俺でも、毎朝毎朝背後から抱きつかれていれば慣れる。

「でも、そろそろ千春さんの口からおはようって聞きたいですの」

「無理」

「ダメですの」

「諦めろ」

「い～や～で～す～の～」

他のコトは諦めるのに、挨拶に関してだけは、このガキはやたら頑固だ。

「お前も折れりゃいいだろうに。簡単だぜ？　ちっす！　って言ってみ？」

「誰が言うかボケ！」

「ん～……」

何を思ったか、綾瀬夾はガキを抱き上げてニカっと笑う。

「ちっす♪」

「ちっす。ですの♪」

「ウゼェ。消えろ」

「道は長いですの……」

まず、その言い方で俺が返すと思ってる時点でその道は途切れてるがな……。

「ネバギバですよ！」

「ネバギバですの！」

「そんなもん粘るなボケ共！」

コイツらの相手は疲れる……。

いや、俺が繋がりに慣れてないだけか……。

「あっと、そろそろ朝食を作りにいかないと。失礼しますね」

「あ、はいですの。お疲れ様ですの」

とは言うものの、ガキは何か言いたそうに俺を見ている。
別に、無視しても良かった。
よくわからない。わからないけどなんか、スッキリしない。

「んだよ？」

「千春さんが嫌なら、私、千春さんから離れるですの」

ガキながらに、俺が疲れていることに気づいたらしい。
このガキが鋭敏なのか、それともガキでもわかるほどに俺がわかりやすいのか……。
取り合えず、どう言ったものか……。

「嫌なら避ける……」
つくづく、俺はこういうことは向いてないと思う。
かと言って、他に言い方もわからない……。

「え？」

「つまり、ダイビングいつでも来いやってことですよ」

「わぁ……♪」

「拡大解釈すんな！　いつでもなんて言ってねぇ！」

「うぅ……」

一瞬輝いたガキの顔は、俺の一言でまた暗くなる。
なんか、このガキは能天気じゃないと、調子が狂う……。

「あー……その、なんだ……」

こんなことを思うなんて、一週間の間に俺の中で何が起きたんだろうか……。

まぁ、大半はこのガキと……

「くくく……どした？」

「クソが……」

このニヤついている狸執事の綾瀬夾とかいうクソ野郎のせいなんだろう……。

「千春さん？」

「たまになら……構わない……」

「……ですの～♪」

「う、おっ！」

沈黙の後、ガキは凄まじい跳躍で抱きついてきた。

ったく、なんなんだこのガキは……。

まぁ、不思議と悪い気はしないが……。

「千春さ～ん♪　千春さんは優しいですの～♪」

「たまにっつったろ。離れろ！」

だが、流石にヤバイ。

時間も時間だ。そろそろ誰かが来てもおかしくはない……。

「もうちょっと～ですの♪」

離れる様子がないガキ。

不本意だが、綾瀬夾に何とかしてもらう他には道はない。

「綾瀬夾！」

「はっはっは。羨ましいなぁ、千春君♪」

ニッコリと笑ってサムズアップしてる綾瀬夾……。

そのまま背を向けて厨房へと向かっていった……。

「おいコラァァァァ！」

「で～すの～♪」

その後、俺がガキから解放されたのは１０分後だった……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ハル、ソルト」

「……」

あんな事があったにも関わらず、普通に話しかけてきた綾瀬夾にムカついた。

だから、思いきり投げつけてやった。

「サンキュ♪」

が、パシンと言う音が響き、綾瀬夾は見事に受け止めていた。
わかってるくせに何も言わない辺りがさらにムカつく……。

「魚、二匹」

「……」

思いきり投げつける。
普通なら魚が潰れる勢い。
しかし、綾瀬夾は勢いを殺し、二匹とも綺麗に受け止める。
要求され、叩きつけ、要求され、叩きつけ、そんな俺達を見て感心したのか、拍手が響いた……。

「うるっせぇ！　てめぇら切り刻むぞ！」
「お～い。他の奴に八つ当たりすんなよ」

「お前が当たればいい話だろうが！」

「無茶苦茶言うな……。朝飯食えなくなるだろ……」

「知るかボケ！」

「あ～はいはい。愚痴なら後で聞くからこれ作れ。手順は見てたからわかんだろ？」

そう言って差し出されたのは一通りの素材。
やってられるか！

「何でんなもん俺が……」

「へぇ。ハルはこんなことも出来ない奴なのか。じゃあいいよ。俺がやるから」

出来ない、だと？

たかが、魚捌いて、焼いて、煮て、味付けするだけの作業が、出来ないっつったか？

「やってやるよ……貸せ！」

「止めとけ止めとけ。出来ないんなら無理すんな」

「出来るっつってんだよ！」

綾瀬夾の調理法は見た……。

動きも全部頭の中にある……。

後はそれを実行して、越えるだけ。

「どうだよ……」

綾瀬夾は俺が作った料理の余りを少し食うと、うんと頷く。

「お疲れさん。じゃ、持ってくぞ」

そして、綾瀬夾はさっさと料理をカートに乗せて持っていく……。

もしかして、俺はまた乗せられただけなのか……。

「てめぇ……覚えとけよ……」

「何のことだか？」

コイツ……前の嫌がらせか……。
てか、仕返しとか案外ガキっぽい……。
完全にやる気が失せた。

「ハル、扉」

「ったく」

この白姫家、どこの部屋も基本的にデカイ。
特に、生活に必要となる部屋は桁違いだ。
そんな部屋だ。自ずと扉も大きくなり、何か物を持ってたりすれば開けられない。
だから、基本的に白姫家の執事やメイドは二人一組で行動している。
こういう事態の時、迅速に行動するためらしいが……。

「面倒なら蹴破ればいい……」

「お前、仮にも住まわせて貰ってる奴の言葉か？」

「違うな“住まわさせられてる”んだ」

出ていこうにも、コイツに勝たない限りは出られない。
まぁ、今の所はまだ有意義だから出ていくつもりもないが……。

「飯食わして貰ってんだからグダグダ言うな。女かお前は」

お前よりは男だと言ったらどうなっただろうか……。
まぁ、恐らくは、殺られる。

「さっさと行かないとまずいんじゃないか？」

だから、俺は話をそらすことで逃げを選んだ。

悔しいが、俺の実力はまだ綾瀬夾には届かないことくらいはわかる。

「ん、あぁ。そうだな」

特に追求もせず、綾瀬夾はカートを押し、中に入ると、正面に変態オヤジと並んで右にガキの母親、左にガキ。

流石に慣れたが、やっぱりこの無意味なテーブルの長さは無駄なだけだと思う。

「ふむ。夾ちゃん。朝食は何じゃ？」

このオヤジは学習機能が欠落している。

あんだけ殴られといてまだちゃんづけで言うとか、アホ過ぎる……

いや、ある意味天才か……。

「人肉ミンチにすんぞクソオヤジ……」

予想通りというか、俺の隣では綾瀬夾が鍛練でも見せたことの無い冷たい表情で、オヤジに殺意を向けている。

ほっといてもいいが……。

「綾瀬夾、取り合えず朝から胃が下るような発言はすんな」

「そうじゃぞ。なんじゃいヌシ、誰がこの家の主かわかっ……」

「ガキが泣く」

「……」

クソオヤジなんざどうなろうが知ったこっちゃないが、クレアのガキには辛いだろうからな。

「執事長？　それで、今朝の朝食は何かしら？」

「あ、はい。前菜にサーモンと白身魚のパテ、フィッシュスープ。ストン風イカスミリゾット、メインにアンコウと海老の串焼きグリル、サンランライス添え、となっています」

「夾ちゃん、儂の扱いとえらい違わんか……？」

オヤジが疑問を投げ掛けるが、綾瀬夾は完璧に無視して白姫静瑠と話し込んでいる。

白姫静瑠も気づいている筈だが、わざとなのか、何も言わない……。

「こ、小僧……」

「俺は日が浅いんでな。お前がどうなろうと知らない」

「く、貴様、クビに……」

「そんなことしたらお父様大嫌いになるですの！」

「ぬぁぁあ……。クレアや、それだけは、の？」

俺から見て、この家でこのオヤジの人望はゼロに近い。

事実、今も娘にすがりついている……。

「まぁ、“ソレ”は置いていて、朝食にしましょうか」

「くぉぉ……」

物扱いされたオヤジの料理は出されることは無く、最終的には見かねた他の執事が並べ、俺達はオヤジ達の後ろに立つ。

この二人の関係、初日はよくわからなかったが、他の執事曰く、毎度のことらしい。

何故こんなことが習慣化しているのか、疑問に思っていたが、小耳に挟んだ情報によると、オヤジはオヤジでこの屋敷のバランサーで、あの振る舞いもわざと。

この屋敷に置いて、本当の意味であのオヤジが嫌いな奴など存在しないという。

「夾ちゃん、食べさせてくれい！」

「何をほざいてやがる……。あぁ……？」

「ぐぬぁぁあああ！」

「執事長？　頭が砕けない程度でお願いしますね？」

「はい。料理が穢れますから」

「……」

まぁ、アイアンクローを受けて、命より料理を優先されてるようなオヤジを見ても、そんなことは微塵も信じられないんだが……。

「千春さん、美味しいですの～♪」

振り向いたガキは満面の笑顔。

いちいちそんなことを報告されたところでどうしろと？

「？　本当ですの」

だから、俺に振るな……。

なんて返せばいいかわからない……

ガキは俺の返答を待っているのか、こっちを向いたまま……。

「あー……。そうかよ……」

考えたってろくな言葉が出ない。

それでも、ガキは俺との会話が続いたのが嬉しいのか、笑っていた……。

「千春さん、お料理も上手なんて、凄いですの♪」

「は……？」

「違うのですの？　爽はこれが千春さんが作ったお料理だって言ってたですの」

まさか……、俺に料理を作らせたのは……。

「綾瀬、爽……」

視線を向けると、綾瀬爽はアイアンクローをしたまま、ニッと笑っ

た……。

「いやぁ、ハルがお嬢様のために作りたいと♪」

「え!?　そ、そそ、そうなのですの？」

ガキに罪はない……。

元凶は、アイツだ……。

「くだんねぇことしてんじゃねぇよボケがぁぁぁ！！！」

「嬉しいサプライズだろ♪」

「やっぱてめぇは殺す！」

「はははは！　お前は楽しいなぁ♪　おっと」

「待ちやがれ！」

「やなこって～」

笑いながら、綾瀬夾は俺の拳を避けていく……。

途中、テーブルを叩き割ったりもしたが、知らない。

コイツだ。コイツさえいなくなれば！

「あらあら、遊びなら外でやりましょうか？」

『認証、白姫静瑠と認識。ゼルフィクス起動します』

「「「え……？」」」

ニッコリと笑う白姫静瑠の背後には、いつの間にか、２０ｍ強はあ

る黒龍が現れていた……。
その口腔に集束するのは紫の光の弾……。

「ヘルブラスト♪」

撃ち放たれるはこれまで見たことも無いような巨大な砲撃。
射線上には、俺、綾瀬夾、オヤジの三人。
俺達は、何も出来ないままそれを受け、吹っ飛んだ……。
次に目を開いた時、そこは青々とした芝生の上……。

「綾瀬夾」

「ん～？」

嬉しそうな声が聞こえたのはすぐ隣。
視線を向けると、やっぱり綾瀬夾は笑ったままだった。

「何が可笑しい？」

「いや、久しぶりなんだ。静瑠さんのお叱り受けるの。なんか、久しぶり過ぎて、なんか笑える」

「やっぱ変な奴……」

「だったらお前も仲間な？」

「は？」

「お前も、笑ってんじゃんか」

「……」

指を唇の端に当てると、確かに俺は笑っていた……。

あの日以来、怒りや憎しみはあっても、自然に笑うなんてことは無かったのに……。

この俺が、無理矢理連れてこられて、たった一週間いただけで、こんなにも自然に笑っているなんて、信じられなくて……。

「笑ってねぇよ……ボケ」

「生意気な奴め」

そう言うと、頭をグシャグシャと撫でられた。

かなり、ウザい。

「や、めろ！」

「へいへい。ハルは照れ屋だからな」

綾瀬夾、ヒラヒラと手を振りながら去っていった……。

撫でられた時、大半はウザかったウザかったが……、少しだけ、嬉しかった……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

あの一件の後、俺はずっと大穴が空いた白姫家の修理をしている。

とはいうものの、精々雨風でどうにかならない程度にしか出来ないが……。

「てか、何でこんなことしてんだ俺は……」

外を見れば既に暗い。
太陽が沈んだのはかなり前だし軽く正午は廻っているだろう。
ぶち抜いた当人、白姫静瑠は明日にも業者が来るからもう休めと言った。
それでも、何かしたかった。
初めて、この家のために何かしたいと思えたから。

「ハル、さん？」

「……誰だ？」

聞き慣れない声。
まぁ、ハルと読んでいる以上はメイド辺りだろう。
返事を返すと、驚いたのか、気配が震えた。

「どこ、ですか？」

「窓の外」

「え……？」

暗闇のせいでよく見えないが、足元に、女の顔らしき顔が現れる。
やっぱり知らない。
女は、事情を把握したのか、表情が驚愕に染まっていった。

「な、何でぶら下がってるんですか！？」

「何でって……」

窓枠にぶら下がるしか外側直す方法が無かっただけだが……。

「あ、ああ、危ないです！　降りてください！」

「一段落したらな」

「はい～って意味無いですぅ！」

やかましい女だな……。

そんなヘマをするわけは無いし、万が一した所で、落下の高さは３０ｍ弱、問題はない。

「降りてくださ～い」

しかし、この女の話し方、イライラする。

殴りたいくらいだが、女には手は出したくない……。

「アンタ。ウザいから消えろ」

「う、うぐ……、酷いこと言われました……。でも、負けません！　頑張るのです。　ファイトなのです。お～！」

……何か最近変な奴とばっか知り合う気がする……。

「……何しにきた？」

「先輩さんとしてビシリと言うのです！　話を聞きなさい！」

「どっちがだボケ！」

「あうあう……ボケって言われました～……。酷いのです～。でも負けません！」

さっきもこの言葉聞いたような気がするんだが……。
てか、いい加減に用件くらい言って欲しい……。

「もう一度言う。何しにきた」

「あ、はい、ええとですね。私が何をしにきたかともうしますと、えとえと～」

「簡潔に言え……用件」

「差し入れに、です。頑張っていらしてるようでしたので」

そう言って、先輩らしい女は、窓際にカップを置いた。
それだけのために、こんな時間まで起きてられる。
俺なら考えられない。

「悪い、な……」

ありがとうと言えれば一番良いのかもしれない。
でも、やっぱり俺は不器用で、素直に言えなかった……。

「い～え～。あ、名前、私、詩織って言います。名字は天津。普段は地下でデバイス開発。えへへ。こんなですが、一応主任です」

デバイス開発、主任、天津詩織。

ってことは、アスラや、あの黒龍を開発したのもコイツ。
予想外に凄い奴だったらしい……。

「俺は……知ってるな。まぁ……よ、よろしく」

「はい～♪　よろしく、なのですよ～♪　明日から頑張ってくださいね！」

「は？」

「じゃ～また♪」

「あ、おい！」

天津詩織は、走って行ったのか、俺が窓から入った時には既に姿が無かった……。
明日から頑張れ。
確かに天津詩織はそういっていた……。

「何をだ？」

その疑問は翌朝になって解けることとなる。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「避けんな！」

「無茶言うなよな～」

朝の鍛練の時間帯。

アスラを起動して戦えと言うので、取り合えず起動して戦っているわけだが、避ける。とにかく綾瀬夾は避けまくる。
まだそれだけならいい。
両手を頭の後ろに組んで余裕綽々で避けまくるからかなりムカつく……。

「お、らぁぁ！」

振り下ろした俺の拳が、地面に叩きつけられた所で、綾瀬夾が右手を上げた。

「おし、休憩」

「はぁ、はぁ……」

さっきからどうにもおかしい。
いつもの数倍のペースで体力が無くなっていく……。

「どうだ？」
『魔力運用の筋は悪くないが、やはり保有魔力量がCランク程度ではな……』
「そっか。やっぱ他の魔法は廃止だな」
『妥当な線だ。身体強化一本に絞れば長期戦も行える』

俺が体力回復を待つ間、綾瀬夾はアスラ初号機と俺の二代目アスラのチューンアップの相談をしているようだ。
まぁ、専門的な知識は俺には無いため綾瀬夾に一任する。

「おはようござ……へぶっ！」

体力回復を待っていると、突如、昨日聞いた声。
天津詩織だったか、ソイツが１００m程先で転けていた……。

「わ、わ～！　何ですか！？　足が何かに捕まれてますぅ～！　はっ！　これはまさか、お化けさんですか！？　ごめんなさいごめんなさい～。悪気は無かったのですぅ～！　たまたま前に美味しそうなデザートがあったから食べちゃっただけで～」

「「……」」

天津詩織は、何故か勝手に自爆している……。
てか、朝っぱらから幽霊って。
しかも、アイツ、俺より歳上の筈、まだ幽霊信じてんのか……。

「ハル、助けてやれ」

「は？　何で俺が？」

「あの人は天津詩織、アスラの調整やらで世話になってんだよ……」

「ならお前が行け……」

「俺、あの人苦手なんだ。また埋め合わせはするから、な？」

綾瀬夾が苦笑いを浮かべていた。
どうやら本当に苦手らしい。
かなりネジが吹っ飛んだ人物のためだろう。
まぁ、天津詩織と話すのがが得意な人物というのも見てみたい気もするが……。

「ったく……」

「おっしゃ！　クソオヤジサンドバックをやろう」

「いらねぇよ！」

現当主を執事が売るとかどんな家だココは……。

「お許しをお許しを～。悪霊退散、南無阿弥陀～。です～」

「悪霊退散言ってる時点で許してもらえないと俺は思うがな……」

「は、ハルさん！？」

天津詩織は、どこをどうやったのか、草に全身を捕らわれ身動きを封じられていた……。

世に言う、不幸体質というやつなんだろうか……。

「助けてやるから……」

「は、ハルさん、昨日やっぱり窓から落ちて……。お化けになって出てきたのですか！？　それで私に取り付こうと！？　だ、ダメですぅ！　ひ、人としての意思があるのなら、せめて男の人に乗り移ってください～！」

「……いっそ、てめぇをここで殺して幽霊にしてやろうか？　あぁ？」

「ご、ごめんなさいですぅぅ～！」

「ったく……」

仕方が無いので、絡まっている植物を引きちぎり、天津詩織を助けてやった。
昨日は暗くてわからなかったが、天津詩織は白衣に、眼鏡をかけ、やや癖毛の短い黒髪をして、身長は１４０センチ程。
俺はよくわからないが、恐らく美人の類いだろう。

「ふへぇ～……ありがとうございます～♪　では、成仏してください～」

「死んでねぇっつってんだろボケが！」

「は、はいぃぃぃ！」

「ハル、その辺りにしとけ」

見かねたのか、結局は綾瀬夾がやって来た。
来るなら最初から俺に頼むなって話だが……。

「夾さん、おはようございますぅ」

「あぁ。おはよう。お前ら知り合いだったのか？」

「はい♪」

「知らん……」

「ガビーン！　そ、そんな、ハルさぁぁん……」

天津詩織が近寄ってきたが、無視した。
綾瀬夾でさえ大変なのにこれ以上変な奴と近づきたくはない。
「なんともまぁ、ハルによく近づけたな。何か言われたろ？」
「そうなんですよぅ。ハルさん、ウザいとか、ボケとか言うのですぅ……」
「事実だ」
「ひどい～ですぅ～」
「まぁ、今更なことは置いといてだ」
「何か今さらりとひどいこと言われませんでしたか！？」
「じょ、冗談冗談。ははは」
確実にわかる。
綾瀬夾は本気だった。
ついうっかり口から出た、そんな感じだ。
半信半疑だったが、どうやら本当に天津詩織が苦手らしい。
「夾さぁぁん？」
「そういや、もう準備出来たのか？」
「あ、はい～。万端ですよ～♪」
「逃げたな……」

「うっせぇ……」

それはともかくとして、準備？
もしかして、昨日、天津詩織が言っていた明日から云々の話だろうか？

「千春さ～ん。爽～」

「この声は……」

「お、来たか」

「みたいですね～」

ガキの声に、二人は来ることがわかっていたような反応を見せた。
ガキの方を見ると、ガキだけではなく、クソオヤジ、白姫静瑠、他の執事やメイドも勢揃いだ。

「え～い♪」

飛び込んでくるガキの飛距離は明らかに足りない。
このままでは、転ける。

「っ、ボケ！」

ほとんど何も考えず、俺の身体は反射的に動き、ガキの身体を受け止めていた……。

「おはようございます。ですの♪」

「おはようじゃねぇだろうが……」

腕の中で、ガキは驚いた様子も無くいつも通り。
俺が動くと信じていたのか、誰一人動いていない……。
どうやらまたはめられたみたいだった……。

「いちいち危ねぇんだよ。お前は……」

「ごめんなさい、ですの」

謝ってはいるが、ガキは笑顔のまま。
明らかに反省なんかはしていない顔だ。

「合格、だな」

「ですね～」

「は？」

話が全く見えない。
だが、周囲は拍手すらしている奴もいる。
そんな俺の肩をクソオヤジが叩いた……。

「今の反応速度、クレアを守るに相応しいと儂は判断した。クレアの訓練に同行を認めよう」

「ちょっと待て、綾瀬夾、何の話だ？」

「あれ？　言って無かったっけか？　お嬢様の訓練の同行者に、俺

の他にお前も推薦しといた。今のがその試験だ」

「はぁぁぁぁ！？　んなもん知るか！」

「今知った。そういうことだから」

また、またコイツは、勝手に事を進めて、俺を巻き込みやがった……。

「ちなみに、行き先はサバンナだ。生命力養うには持ってこいなんだとさ」

サバンナ？

なんで、なんで、この俺がそんなとこにいかなきゃならない……。

しかも、自分のためじゃなく、他人の訓練ために……。

綾瀬夾もクレアに付き添うだろうから鍛練も期待出来ない……。

まるっきり無駄な時間だ。

「ふ……」

《ふ？》

「ふざけんじゃねぇぞてめぇらぁぁぁぁあああああああああああ！！！！」

結局、この後、俺は綾瀬夾とガキの説得に折れ、サバンナなんていう訳のわからない所に行くことになった……。

後編に続く。

第三十六話　空を見上げて　（後編１）（前書き）

お待たせしてすいません！
慣れない寮生活でリズムが崩れまして（汗）
早く慣れるよう、努力します。
それでは

第三十六話　空を見上げて　（後編１）

回想・望んだ力

サバンナ、野性の獣がうようよしているそんな場所。
通常、人間が行く場合、武装をし、かつ、現地住民の力を借りることが多い。

「ハル？／ハルさ～ん？／千春さ～ん？」

「……」

が、俺の前にいるメンツはそんな奴等とは程遠い。
ふざけた女顔執事、ボケボケデバイスマイスター、あげく、戦力外のガキ。
ろくな戦力がいない……。

「どうしたんだよ？　もうすぐ楽しい旅行だぜ？」

何が楽しい旅行だ……。
このメンツでサバンナに突っ込んで楽しいわけがない……。

「あ、そうか。お前、緊張してんのか。可愛いとこあんじゃんか♪
よし、夾様に任せとけ。良い具合に解して……」

「だれが可愛いだ！　ふざけたこと抜かすと叩き落とすぞ！」

これは、綾瀬夾の策だ。

そんなことはわかっている。
わかっているが、ガキや天津詩織がいる関係上、ほっとくと後々ダルい。
乗らざるを得ない俺に、綾瀬夾はやはり笑う。

「ちっ……クソ野郎……」

「千春さん、そんな言葉はダメですの！」

「そうですよ～。夾さんが悪い言葉を覚えちゃったらどうするんですか～」

「ですの！」

「いや、覚えねぇからさ……」

いつのまにか、攻撃の矛先が綾瀬夾へと向いていた。
もしかしたら、天津詩織がいるせいかもしれないが。
発言が支離滅裂なせいで綾瀬夾と言えど、コントロール出来ないらしい。

「だいたいですね～。夾さんは元々が言葉使いが荒いのです～。シルフィスが最近乱暴な言葉を使うのは夾さんのせいかもしれませんし」

「アイツはアレだろ。性能を上げすぎただけで……」

「はっ！　まさか夾さんは自分の分身としてシルフィスを……、夾さん、いくら出会いが無いとはいえ、デバイスを子供にするのは如何かと思うのです！」

「いや、だから……」

「その、どうしてもと言うならば、ご当主にお見合いのお話でもされてみては？　いえ、いっそのこと夾さんでバニングス財閥とパイプを通しましょう。夾さんとバニングス財閥の娘さんとでご結婚をされれば……」

「話を、聞いてください……」

デバイスと思われる内容から、加速しながら天津詩織は離れに離れ、暴走していく……。

綾瀬夾が頼み込むも全く聞く耳を持たない……。

綾瀬夾をも苦手とする天津詩織は、ある種、白姫静瑠に次ぐ脅威なのかもしれない……。

「千春さん？」

「んだよ？」

「旅行、嫌ですの？」

「嫌、嫌じゃない以前に、メンツが問題だろうが……。３６０度警戒しながら、夜行性の動物なんかにも気を張らなきゃならない。対して、護衛は二人、護衛対象も二人、いくら動物が相手とはいえ、万が一ってこともありえる」

どんなことにも失敗の可能性は付きまとう。

俺や綾瀬夾だけなら問題はないかもしれないが、ガキや天津詩織の護衛もとなると、失敗の可能性は高くなる。

「大丈夫ですの」

「何を根拠に……」

「千春さんと夾なら大丈夫ですの」

何を言うかと思えば、ガキらしい短絡的思考。
俺と綾瀬夾でも、失敗はする。
大丈夫なんて、言い切れない。

「千春さんと夾なら、万に一つもないですの」

「んなもん、わかるかよ……」

「ないですの！」

何でだよ……。
何で、コイツらは会って間もない人間をここまで信頼出来る……。
それは、俺だって、コイツらが敵だとは思わない。
思わないが、完全に味方だなんて、思ってもいない。
なのに、コイツらは白姫家に入って日が浅い俺を仲間として認め、跡取りの娘の護衛に命じさえした。

「悩んでるな。少年♪」

「うるせぇよ……」

いつのまに復活したのか、綾瀬夾が笑っていた……。
相変わらず、ムカつく……。

「そんなに深く考えんなって。簡単で、単純で、明快な答えだぜ？」

コイツがニヤニヤ笑っている時は大抵の場合、俺にはまずわからないことだ……。

いや、正確にはわかっても、俺が言いにくいこと、だ。

俺が言いにくいこと、これまでの言動から考えて、まず言わないであろうこと……。

多少恥ずかしいが、何度も負けるのは癪だ……。

「……好きだから、か？」

羞恥を全力で押さえつけ、精一杯の冷静な声で言った。

確かに言った筈だった……。

「「「……」」」

なのに、何故だ……。

何故、そのままの表情でコイツらは固まる……。

「……ふ、く、はははははははははははははははははは！！！！！　好きだから。うん。いいぞハル。うんうん大正解。く、く、む、無理……。はははははははははははははははは！！！」

「夾、笑いすぎですの……」

「ハルさん、泣けますぅ～！」

「詩織さんは泣きすぎですの……」

どうやら、俺の答えは間違いだったらしい……。
辛い思いをして、裏をかいたつもりで言った答えは、間違い。
綾瀬夾と天津詩織は感情は真逆なれど、共に涙を流している。
この中では、クレアのガキが一番まともに見えた……。

「は、腹痛ぇ……。くくくく……いやいや、ハル、いい。お前、最高……ふっ……ははははははははははははははは！！！」

「まぁ、何だ……。取りあえずの妥協案として、てめぇ、死ね……」

いかに綾瀬夾と言えど、ヘリの中では体捌きも鈍る筈。
今なら、殺れる……。

「ヘリパイ。ドア開けっから気を付けろ。んじゃ」

「執事長！？」

が、綾瀬夾はヘリの扉をこじ開けると、そのまま飛び降りた……。
地点はサバンナの上空、下には広大な土地が広がっている。

「逃がさねぇ……。今日こそはぶっ殺す……」

アスラを起動すれば、この程度、どうってことはない……。
上から叩き潰す！

「待ちやがれぇぇぇ！！！」

「夾さんとハルさんはスカイダイビングですか～。では、いざ、私もですぅ～♪　ハッ！　でもパラシュートが無いです……。で、で

すが、夾さんとハルさんに可能ならば、私だってガッツでカバーすれば！」

「しし、詩織さん、一般人は真似しちゃダメですの！　ガッツとかいうレベルを超越してるですの！」

色々あったが、俺達は全員サバンナという野生の王国に到着した。
後から知った話だが、先の答えは天津詩織が動物が嫌う特定の電磁波を発生させる機械を設置するから、だった。
電磁波のせいで、野生の動物も電磁波すら感知しにくくなった、極端に感覚が鈍い動物しかこなくなり、感覚が鈍った動物とは、大抵は老齢の動物。
故に、ガキは俺達二人が万に一つも老齢の動物に劣ることはない、との意味で言っていたということだった。
浅いのか深いのか、思考がよくわからない連中とのサバンナでの日々は始まったばかりだと言うのに、先が思いやられた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

Ｓｉｄｅ・なのは

「……」

これだけの間、スラスラと言葉を繋げていたハル君の口が止まった……。
今回の話に、ハル君が出ていく理由らしいお話は含まれて無かった。
日常の楽しい思い出ばかりで、辛い部分は何一つ無い。
確かに理由の一つには含まれるかもしれない。
けれど、“決定的”なモノは無い。
多分、ハル君なりの、逃げ、なんだと思う。

短く出来るお話を、先伸ばして、話を逸らせて……。

「その後で、その後……で……」

「うん」

でも、それを責めるなんて、しないし、出来ない。
だって、ハル君はお話が一区切りする度に、こうして本題に入ろうとしてくれていた。それはもう、何回目になるかわからない。
爽さんとの出会いが終わった時のお話から、向かおうとして逃げて、また向かおうとしてまた逃げて……。
その話が積み重なって、長くなってしまった。
ただ、それだけだから。
でも、その逃げ道も無くなってしまったみたいで、目に見えて辛そうな表情でハル君は無言で立っている。

「ふぅ……」

小さく、溜め息を着きながらハル君は瞳を閉じた……。
静かになった。
本当に、とても、静かになって……。

「お待たせしてすみません。どうにも、逃げてしまいますね」

不意に、風が吹いて、ハル君と私の髪を撫で付けた。
それに、気持ち良さそうに笑いながら、ハル君は言った。
辛そうではあるけれど、まだ少しの余裕はありそうで、安心した。

「いい加減、終わらせましょうか……」

「え……？」

違う……。余裕なんて、全く無かった……。

ハル君の開いた瞳に光は無い……。

そして、始まりよりも唐突に風が止み、私の隣には冷たい瞳でハル君が虚空を見る……。

静かな空間がゆっくりと凍てついて行く、そんな感覚が私にある……。

まただった。またあの、“綺麗過ぎる”ハル君が私の隣に立っていた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「おっしゃ、早速訓練やるか」

「はい～♪」

「ですの～♪」

「かったりぃな……」

サバンナに着いて早々に、ガキの訓練を行うと言うメンバーに、俺は渋々ながらも、従うしか無かった……。

綾瀬夾だけでも面倒なのに、その上、ガキと天津詩織までが束になれば、鬱陶しさが五倍にも十倍にもなるからだ。

「お嬢様、気を付けてくださいね？」

「大丈夫ですの。ちゃんとお母様に教えてもらって、自分ではシュミレーターで練習してたですの」

「では、記録を開始しますね～」

「……」

そんなわけで、訓練を行うことになったわけだが……。
白姫クレア、年齢は知らないが、恐らくまだ、六、七歳と言った所の筈だ。
そんな、ガキが……。

「待つですの～！」
『ガァァァ！』

何で、あんな戦闘を想定とした大型デバイスを駆っている……。
まぁ、やっているのは戦闘ではなく、チーターとの鬼ごっこみたいなもんだが……。

「お嬢様とシルフィスとの同調率は？」

「はい～。良好ですぅ～♪」

綾瀬爽と天津詩織は俺から離れた所で、ガキと機竜ことシルフィスをモニタリングをしてデータを取っている。

「レベルもブルー。安全域ですぅ♪」

「ま、一先ずは大丈夫そうだな」

「これなら、暴走の危険も無いかと」

「だと良いんだけどな……」

少しだけ聞こえた会話に、恐ろしい単語があった……。
暴走。という、単語が……。
俺にはそんな話は聞かされていない……。

「おい、綾瀬夾……」

「ん？　ハル、持ち場から……」

綾瀬夾が珍しく不機嫌な顔でこちらを見ていたが、そんなこと、知ったこっちゃない……。

「暴走って何だよ……」

「は？」

「バックレてんじゃねぇよ……」

俺が聞かされたのは、ガキがデバイスの訓練をするから、サバンナという広大な土地が必要だったってことだけ。
もしかしたら、ガキが乗るシルフィスが暴走する危険があるから、こんな土地を選んだのではないだろうか……。
俺に監視を頼んだのは、そういった問題が発生した時に、迅速に対処するためではないだろうか……。

「答えろよ……」

「……聞いたとこで……」

「四の五の言ってんじゃねぇ！　さっさと言え！」

「あわわわ、ハルさん、これには深い訳が……」

「てめぇは黙ってろ！」

「ひゃ、ひゃい！」

怒鳴ると、天津詩織は黙り、横に退く、綾瀬夾は疲れたような顔をして俺と向き合った……。

「シルフィスは他のデバイスよりかなり特殊なんだ」

んなのは見ればわかる。

人が乗り込んで戦うなんてデバイス、聞いたことも、見たこともない。

「シルフィスは、ロストロギアって訳じゃねぇんだが、ロストロギア級の規格外デバイスだ。表向きは白姫家が開発した独自のデバイスってなことになってるがな……」

「んなのはどうでもいい、どこが規格外なんだよ」

「シルフィスは自らの意思を持って、主を選ぶ」

「……ナメてんのか……」

俺だって、インテリジェントデバイスという、ある程度の会話をこなすデバイスくらいは聞いたことがある。

だが、自らの意思を持って主を選ぶなど、あり得ない……。

「いや、マジな話だ。ちなみに、ゼルフィクスも同じらしい。静瑠さん以外にはピクリとも反応しないんだとさ。まぁ、会話や細かな調整くらいは出来るけどな」

「……百歩譲ってその話が本当だとして、そんな得体の知れないデバイスを、何故ガキに使わせる必要があんだよ。てめぇら、暴走っつってたな……。あのデバイスがガキを取り込むなんて、馬鹿げたこと抜かすなよ……？」

融合事故。

デバイス側が主を取り込み肉体を支配すること。

そんな可能性があるのなら、そんな可能性があって、それをコイツらが知りながら放って置いているのであるならば……。

「低い確率だが、シルフィスがお嬢様を主に相応しくないと思えば、有り得る……」

そんな言葉、コイツから聞きたく無かった……。

ガキの命を一番に考えてそうなコイツが、こんな、訳のわからないことをさせるなんて思いたく無かったのに……！

力づくでも、止めさせる奴だと、思ってたのに！

「てん、めぇ！」

俺が掴みかかろうとすると、綾瀬夾は腕を振り抜き、払われるようにして俺の腕は進路を変える……。

「っ！」

「きょ、夾さん！　貴方までダメですよ～！」

天津詩織の声など聞こえていないかのように、綾瀬夾は俺を睨み付けていた……。

初めて、正面からコイツの怒りを受けたが、殺気でうすら寒いなんてレベルは通り越している。心臓の動きがどうにかなっているのか、グラグラと視界が揺れ、呼吸は浅くなる……。

「自分の我が儘を、他人に押し付けてんじゃねぇよクソガキが！」

「我が儘、だと……？」

「我が儘だろうが！　あの子の身を心配するのはわかる。俺だってすっげぇ心配だよ！　お前が思ってる通り、今すぐに止めたいくらい、心配だ！　でも、あの子はそれを望んでねぇ。シルフィスと空を飛びたいって望んでんだよ！

あの子は賢いから、自分がおかれた次期当主って立場をもう理解してる……。期待の大きさを理解してる！　あんな、小さな身体で、大きな責任を背負って、期待に応えようって、頑張ってるのに、周囲の大人は、白姫家と血縁関係になるためだけにあの子にすりよるクソ野郎ばかり……。さらに悪いことに、あの子は出来すぎた……。どれだけ疲れていても笑っていたし、レッスンも難なくこなしていたし、勉強だって躓くことなく一度で理解していく……。結果、特に問題なしのレッテルが張られて、俺達はそれを信じてあの子をよく見ちゃいなかった。そんな環境でも何も言わなかった。いや、言えなかった、だな。そんな環境で、あの子がどうなったのか、わかるか……」

「……」

もう、その先は言わなくても結末はわかった……。
あのガキは……クレアは……。

「あの子は……壊れた……」

ほぼ、予想通りだった。
捌け口もなく、そんな環境にいれば、当たり前とも言える。

「機械のように、与えられたコトをするだけ。笑顔なんて見せてくれなくなった……。そして、壊れた時から放浪癖が出てきた。夜中にいきなり起き出して屋敷の外に出ようとしたりして、あれは、もしかしたら、死にたがってたのかもしれない。もうあの子がダメになりかけていた時、屋敷の地下から咆哮が聞こえた。屋敷を建てる際に掘り起こしたゼルフィクスがいた所だ。行ってみると、そこには、あの子とシルフィスがいたんだ。その時にあの子は、シルフィスを飛ばせてあげたいとそう言った。無くした筈の笑顔で。あの子とシルフィスの間に何が合ったのかはあの子にしかわからない。でも、あの子がシルフィスを飛ばせたいと望むなら、俺はそれを叶えるだけ。もう、あの笑顔を消さないよう、頑張るだけだ」

「危険を孕んでも、か？」

「危険からは俺が護る……。絶対に」

コイツの眼は本気だ。
クレアに害を成すような輩が現れれば、殺しかねない程に。
そしてそれは、俺も例外には含まれない。

「夾！　千春さん！　何してるですの！」

「「っ……」」

いつのまにか、クレアのガキがすぐそこまで来ていた。
さっきから天津詩織がいないと思っていたが、どうやらガキを呼び戻していたらしい。

「何でも無いですよ。おら、ハル、飯作っぞ。調理の間、護衛しろ」

綾瀬夾は悟られまいと、いつもの調子に戻った。
ガキにバレると面倒なことになる、か……。

「いっそ襲われてろ……」

「何か言ったかクソガキ」

「何も言ってねぇよクソ野郎」

取り敢えず、この場はこれで凌げるだろう。
予想通り、ガキと天津詩織は首を傾げているだけだった……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

飯を食い終わると、もう周囲は暗闇に包まれていた。
当然、照明などはないため、たき火をすることになった。

「……ちょっと出てくる」

綾瀬夾はただ一人、闇夜の中へと消えていく……。
それを確認すると、ガキが移動してきて俺の隣に座った……。

何も話さないまま、十分ほどたった時、ガキの口が開く……。

「千春さん」

「んだよ……。トイレとか言うなよ？」

「違うですの。こんな土地で、夜に出歩くのは夾でも危ないですの。だから、千春さんが迎えにいってあげて欲しいですの」

「アイツは殺しても死なねぇよ」

「千春さんが迎えにいってあげて欲しいですの」

「……」

恐らく、先程の一件を誤魔化せていない……。

このガキは、何があったかだいたいわかった上で言っているに違いない……。

子供と言える洞察力を越えている。

所謂、天才、というやつかもしれない。

「そうですね～。サバンナにはライオンさんとかがいますし、ガオーってされたら夾さんも危ないですし～」

天津詩織、コイツはガキよりもバカなのは確定した。

「千春さん」

「ったく……。何か危険感じたら念話使って知らせろ。わかったな？」

「はい、ですの♪」

「笑ってんじゃねぇよ。生意気なガキが」

「前にも言ったとおり、ガキだから、ですの～」

「自分で誇るな阿呆」

本当に、世話が妬ける姫様だ。
いや、俺が妬いてもらっているのか……。
こんなガキに妬かれるなんて、情けない、な……俺達は。

「風よ……」

ここは野外だ。
あまり得意ではないが、俺の能力なら、見つけられる……。
程なくして、綾瀬夾の気配を補足した……。
どうやら、近くにあった林の中にいるみたいだ。
川らしきモノも見えたから恐らくは飲み水の補給と言った所か。

「天津詩織、ガキを……」

「あ、熱いですぅ！　む、むぅ、炎さん、揺らめいちゃダメですぅ！　あち！　だから……はえ？　何か仰いましたか？」

「……ガキ、天津詩織を頼むぞ」

「了解ですの！」

「そこはかとなく酷いことを言われた気がするのですぅ！」

何か天津詩織が叫んでいたが、これ以上離れると補足が面倒になるため、無視して歩き出した。

「つっても、どうするか、だな」

歩き出したはいいものの、別段、何か考えがあって向かっているわけじゃない。

そもそもとして、綾瀬夾が俺に話してくれるかすらわからない。

奴相手に何も対策を取らないなんて、バカかと自分でも思う。

だが、ガキに言われるまでもなく、俺は歩き出しただろう。

何も考えが無くても、話してくれるかわからなくても、それでも、歩いた筈だ。

何故歩くのか、そんなモノ、わからない。

また謎が一つ増えた。

謎に次いでまた謎があって、解けないのにまた謎を与えられる。

白姫家に来てから俺には答えを与えられることはなく、謎だけが与えられた。

つか、こんな謎に悩むこと事態が謎な訳だが……。

「お前がこんだけグチャグチャにしたんだから責任持って付き合えボケ！！」

真横にあった木に拳をぶつけ、ぶっ飛ばす。

視線を向けると、月夜に輝く水の中で、綾瀬夾がいて……。

「「……は？」」

その身体には男にあるはずの無い膨らみがあって、それはどうみて

も女で。
どうすることも出来ずに俺達は固まったまま視線を交わす。

「っ～……」

紅く染まったかと思うと、綾瀬夾はバシャリという音とともに、肩まで一気に浸かった……。

「……この場合、俺はどんな反応をすれば良い？」

「取り敢えず、ジロジロ見るのは止めてくれ……。出来れば後ろを向いてくれると助かる」

意外にも、綾瀬夾は冷静で助かった。
とはいえ、声が震えている所からすると怒ってはいるんだろうが……。
まぁ、今は綾瀬夾に従い後ろを向くことにする。
響くのは立ち上がったと思われる水飛沫があがる音、そして、布擦れの音。

「もう、いい……」

声に振り向くと、未だ少し紅潮しながら目を背ける綾瀬夾がそこにいた。
が、それも一瞬。

「何で来た。お前の役目は護衛だろうが……」

もう目の前には男になった綾瀬夾しかいなかった。
なら、こちらもいつも通りでいい。

先のことは後回しだ。

「ガキに……いや、俺の意思だ。ガキにも許可は貰ってある」

そうだ。

これは俺の意思。

俺の言葉で、伝えなくちゃ意味がない。

「お前のさっきの言葉を聞いてから、何かひっかかりがあった。それは何か、考えてみれば簡単だ。お前はクレアを護るために命を張る、そう捉えていいんだな？」

「……それが？」

「何故、あのガキにそこまでこだわる。主と執事っつってもそこまでの理由にはなんねぇだろ」

「……聞いてどうする？」

「さぁな。俺は後先は考えてねぇし、わからねぇよ」

俺の言葉に、綾瀬夾は値踏みするような視線を向けた。

それを、正面から見る。

真っ直ぐに揺るぎなく。

俺が退かないとわかったのか、綾瀬夾は深い溜め息をついた。

「はぁ～あ、一回しか話さねぇから聞いとけよ。涙腺崩壊の超大作の話だぜ？」

綾瀬夾は、他人事のように、笑ってそう言った……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

昔々、あるところに、歴代にして最高の力を持って生まれた女の子がいました。
その子の力は、いかなる概念をも無視し、身体から精神に至るまでの傷を全く別の場所に移し代えることが出来る、それはそれは大層な力でした。
その力は、あらゆる奇跡を可能とし、慣れてくると他人の傷を他人へと、人の傷を動物へと移し代えることすら可能となりえる力でした。
少女はその力をこっそりと使って“一生懸命歴代にして最高の力”を磨き続けます。
しかし少女はその力を人前で安易に使ったりはしませんでした。
何故なら少女の家は代々から続く名家だったからです。
大きな少女の家では毎日たくさんの人達が集まりました。
力の御披露目なるモノがあった時、少女は力を抑えて歴代にして最弱の力を使用しました。
大人達の前で公に力を使えば、きっと悪いことが起きると、少女の母に厳しく教えられていたからです。
ですが、ある時、少女はその力を持って、事故にあったというお友達の飼い猫を助けてあげます。
飼い猫は三日持てば良い方と言われた程の大怪我で、助からないと言われていたにも関わらず、少女の力によって元気に走り回れるようになりました。
移し代えた対象である鼠は死んでしまいましたが、お友達は飼い猫が助かった喜びでそんなちっぽけな事は気にも止めません。
少女もお友達が喜んでいる姿を見て、とても喜びます。
そして、一つの命を助けたという達成感は少女を酔わせてしまいます。

その酔いは鼠という動物の一つの命を奪ったということを忘れさせました。
そこから、母の言葉に回転を止められていた歯車は噛み合ってしまいます。
友達から友達へと、その友達の友達の友達、その友達の友達の友達の友達と、連鎖はどんどん繋がっていきます。
少女は、家を抜け出しては、たくさんたくさん、友達の動物を助けてあげました。
少女は、家を抜け出しては、たくさんたくさん、近くにいた動物を殺しました。
救って救ってまた救って、殺して殺してまた殺して。
いつしか、少女の近くには籠に捕まえた鼠等を代価に、動物を助けてもらう人々が現れ、それが当たり前となっていきます。
最初は、幼い子供達でした。
次は、幼い子から兄や姉達になりました。
次は、幼い子から聞き付けた、兄や姉となりました。
次は、それを聞き付けたその人らの知人達となりました。
疲労を感じながらも、少女は治し続けます。
だって、涙を流して喜んでくれる人もいるのですから。
それが嬉しくて、少女は治し続けました。
結果、ついに少女は辿り着いてしまいました。
“人を治す”という所に。
それは、軽い怪我でした。
その辺りで転んだという、放って置けば治るという程度の。
ですが、その子少女よりも小さな女の子でした。
女の子は泣き叫びます。
「痛いの。とっても痛いの」と。
あまりにも泣き叫ぶ女の子に、少女は力を使って助けてあげました。
対象は野良猫にしました。
初めて、人を治すということをしましたが、いつもと同じように、

女の子の傷は野良猫へと移り代わりました。
女の子は、びっくりしたように立ち上がり、満面の笑みでありがとうと言いました。
その言葉に、少女も微笑みを返します。
そして、少女はお家に帰ってしまいます。
いきなり来た痛みに叫びを上げ、転けた野良猫を気にも止めずに……。
少女が帰った時、門の前には仁王立ちをする父がいました。
少女の行いが父にバレてしまったのです。
その場に、母はいませんでした。
何故なら、少女の行いに心を病み、倒れてしまっていたからです。
少女はそんなことにも気づかずに毎日毎日、行いを続けていたのです。
母をも気にかけず、毎日出掛ける少女に、父は見張りをつけました。
そして、行いを知りました。
父は怒っているにも関わらず、静かに言います。
もう、帰って来るな、と。お前は私の子供では無い、と。
少女はその意味がわかりませんでした。
しかし、父はそんな少女に構いません。
首を掴むと、痛がる少女を無視して家の外へと投げ飛ばします。
そしてそのまま、門を閉じてしまいました。
少女がいくら叫んでも、父は振り向きもせず家の中へと姿を消します。
父が厳しい人なのは知っていました。
ですが、一日もすれば開けてくれるだろうと、少女は門の前に座って待ちました。
しかし、次の日、一度として門は開きませんでした。
少女は途方に暮れます。
家の前にいるからダメなのかもしれないと思い、少しの間、離れてみることにしました。

家から離れて、時間を潰していると、少女は物陰から現れた大人の男達に囲まれてしまいました。
「綾瀬夾ちゃんだね？」
男達は笑ってそう言います。
「警戒しなくていい。僕達は君のお迎えにあがった者だよ」
優しく、男達はそう言いました。
SP、という存在を知っていた少女はそれを信じ込み、男達が呼んだ車に乗り込みます。
と、同時に、何か音がしました。
男達と少女の間にはガラスのような物で遮られています。
驚いた少女は逃げようとしますが、ロックされた扉は開かず、少女の意識は闇に落ちました。
次に目を覚ましたのは、薄暗い、研究室らしき部屋の中。
周りには何故かたくさんの男達。
そこで少女は苛烈なまでの暴力を受けます。
服も原型を止めない程ボロボロになり、瀕死になった少女の姿を見て、研究者らしき人物はニッコリと笑います。
「これ以上痛いのは嫌だろう？　君の力を見せてくれないか？」
と、とても優しく、研究者はそう言いました。
震えながらも、言われた通りに、少女は頷きます。
「じゃあ、自分の傷を、ソイツに移すんだ」
ニッコリと笑って、研究者は近くにいた男を指差しました。
ニヤついていた男は悲鳴をあげました。
まさか、自分が指名されるとは思って無かったからです。
少女は頷きました。
だって、死にたくなかったからです。
そして、“瀕死”の自分の傷を“全て”男に移します。
仲間に縛られた男は、一瞬の痙攣の後、泡を吹いて倒れます。
全快した少女は男を哀れみましたが、自分の命には変えられません。
ごめんなさいと謝って、目を背けました。

そんな少女の顎を太い指が持ち上げます。
次に少女を襲ったのは、骨が砕けたと思える程の激痛でした。
地獄はこれで終わりでは無かったのです。
その光景を見て、研究者は笑っていました。
再び瀕死の少女に、研究者は同じように命じます。
再び上がる悲鳴。
少女はまた謝って、全ての傷を移します。
研究者は、モニタに移った少女と男の状態を書き、再び命じました。
「やれ」
と。いとも容易く言い放ち、張り付けたような笑みで笑っていました。
永遠とも思える激痛の地獄は長く、長く続きました。
やがて、痛みにも慣れた頃、地獄はパタリと止みます。
「実験は終了した」
ニッコリと微笑みながら、研究者は言いました。
周囲には実験体となった男達の死体の山がありました。
血は海となって、少女と研究者の足を流れています。
何故、男達は逃げなかったのか、少女は疑問に思いました。
が、“そんな光景よりも”少女は研究者の一言に驚きました。
これで終わるのかと、笑みさえ浮かびました。
「ご協力ありがとう。では、次の実験に行こうか」
しかし、あっさりと少女の希望は砕け散りました。
絶望する少女に構わず、研究者は懐から一本の注射器を取り出します。
「これはね？　人間が持つ自己再生能力を高める私の作った新薬でね？　その被験者一番が君だ。おめでとう」
そして、躊躇なく、少女の首に突き刺し、注入しました。
同時に、少女の身体は痙攣を始めます。
「多少の痛みが伴うかもしれないが、痛みに堪えれば自己再生能力が活性化し、滅多なことでは死なない身体になれる筈だ。最も薬で

……」

そこから先の言葉は、少女は聞き取れませんでした。

少女の身体の中で、拒絶反応が起こり、痛みで何も聞こえなくなったからです。

何度も何度も、水の無い所で魚が跳ねるように、少女の身体は地を跳ねました。

何時間が経ったでしょうか。

外と内から焼かれた少女は心身ともにボロボロとなっていました。

それでも、少女はかろうじで生きていました。

隣では、研究者が歓喜に狂う声が響いています。

「素晴らしい！　では、次は、手に入れた自己再生能力を試そうではないか！」

最早、少女は研究者が何を言っているのか、理解出来ません。

たった一つわかるのは、研究者が刃物を持って自分を刺していること。

痛みに麻痺する少女の身体は何も感じませんでしたが、失われていく血の量を見て、死ぬのだろうと思いました。

死にたくない……。

ボロボロになった少女はそれでも少女は生にすがりつきます。

死にたくない……。死にたくない。死にたくない。死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない！！！！！

なら、どうすればいい。

答えは簡単でした。

この傷を移して研究者を殺せば良い。

そうと決まれば、少女の行動は速いものでした。

少女は突き刺さった刃物を持つ研究者の腕を掴みます。

それは、とても簡単なことでした。

研究者は狂って単調に刺してくるだけだったからです。

そして、自身のまだ塞がっていない傷を研究者の足へと移しました。

悲鳴を上げて、研究者は転けます。

その間に、少女の傷は塞がってしまったので、研究者の手から刃物を取り上げて、突き刺しました。
何度も何度も、動かなくなるまで突き刺しました。
そして、生き残った少女は研究室から脱出します。
研究室の外は、どことも知れぬスラム街。
ほとんど裸の少女を見て、男達が寄ってきます。
邪魔なので、殺しました。
持っていた刃物で突き刺して、或いは、振るわれた痛み分を全ての返して。
少女は男達から衣服を剥がし、自分の服として纏います。
少女は生き残るために、殺害や強奪を繰り返して、生きていました。
帰ろうなどと思いませんでした。
あの父がこんな娘など認めないだろうと思ったからです。
そうして一年を過ごして、自分が狙われるのは何故だろうと考えました。
それは、女だから、でした。
だから、一人称を私から俺に変えました。
するとどうでしょう。
狙われる数が明らかに減りました。
便利だと思った少女は女であることを捨てました。
男であることを信じ込ませるために、刃物を捨て、体術をがむしゃらに鍛えました。
簡単には死なない少女は、どんな鍛練でも出来ます。
毎日血だらけになっても、鍛練を続けた結果、少女はとても強くなれました。
そうして、三年程過ごしていると、その街で、無敵の少女のことを知らない人間はいないと言う程に、噂が広がりました。
幾度傷つけても死なず、呪いのように返され、自分が死に至る。
もう、少女の力は、救いの力ではなく、殺しの力として変貌を遂げていました。

そんな、誰にも近づかれなくなった少女に、ある時、古ぼけたマントと帽子をかぶった男が近づいてきます。
「儂と一緒に来んか？」
何を思ったか、男はそう言いました。
少女は答えます。
俺に構うな
と。
殺意を込めて、警告の意味でも少女は男を睨み付けます。
それでも、その男は退きませんでした。
「儂は白姫竜蔵。儂のメイドをやってみんか？」
少女はメイドと言う言葉を知りませんでした。
だから、男の声はうるさいだけでしかありません。
うるさいのは嫌いでした。
だから、殺すことにしました。
死ね。
そう言って、男の顔面に向けて、蹴りを放ちました。
「今月は大当りじゃのう♪」
そんな男の声を少女は遠くで聞いていました。
後頭部に衝撃を受けたかと思うと、意識が傾き、沈んで、次に目が覚めたのはどこか知らない屋敷のベッド。
「あ～う～♪」
少女の横には、邪気の無い笑みで笑う赤ちゃんがいました。
「おはようじゃな。綾瀬夾ちゃん」
男の声が響いて、ようやく少女は男に連れさられたのだと理解しました。
もちろん、少女は混乱します。
「大丈夫ですか？」
少女の頭を優しく撫でる女性がいました。
身体が動かない少女はここはどこだと尋ねます。
「ここは白姫家。貴女の新しいお家です」

女性は笑って迷いなくそう言いました。
その言葉に少女はますます混乱しました。
「う～♪」
その時、隣の赤ちゃんが少女の指を握ります。
驚いた少女ですが、振り払うことはしませんでした。
「クレアも気に入ったみたいじゃし、どうじゃ？　今すぐに答えを出せとはとは言わん。他の執事やメイドも夾ちゃんと同じような体験をしておる。話を聞いてみてそれから答えを聞きたい」
こう言った男に、少女は問う。
正気か。
と。
殺人を犯した人間を屋敷に置くなど、少女の中ではまず有り得なかったからです
でも、男は笑っていました。
「そうせねばならん理由があったんじゃろ？　儂の目に狂いはない。可愛い娘に悪い娘はおらんのじゃよ」
そう言って、男は笑って去っていきました。
男の思考は少女には全く理解出来ません。
「あの人は気にしないでください」
女性の言葉に頷き、少女は赤ちゃんを見つめていました。
その視線を好意と受け取ったのか、赤ちゃんは再び笑みを作ってくれました。
「♪～」
クレアという赤ちゃんの笑みは、数年の間、疑うことしかしなかった少女の凍てついた心を溶かしてくれました。
そして少女は殺人鬼になっていた自分を助けてくれようとしているこの家で生きていくことを考え始めます。
ただ、一つだけ、譲れないことがありました。
もう、弱い女は捨てた。俺は男になった。
と、それだけは認めないまま生き、綾瀬夾という執事は生まれまし

たとさ。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ま、こんなとこだ。俺は、あの子に助けられた。だから俺はあの子を命張って護るそんだけだ」

綾瀬夾は話の内容にはほとんど触れず、それだけを言った。
恐らくは、触れるなという警告でもある。

「助けられたから助け返す、か。だが、クレアはお前が命張って護って欲しいとは思ってないだろ。一緒に生きて行きたいって思ってる」

出会って一週間程度の俺がわかるのはこれくらいしかない。
が、これがわかれば十分だ。

「俺だって、むざむざ死ぬ気はねぇよ。もしもの話だ」

「死なせねぇよ」

「は？」

「だから、俺が、お前を死なせねぇ」

コイツがクレアを護るんなら、俺はコイツを護るだけ。
そうすれば、死人なんて出なくて済む。

「お、お前、何言って……」

「お前が死にそうな時は俺がなんとかしてやる。勝手に死ぬな。俺が言いたいのはそれだけだ」

「ハル、その言い方は下手すると誤解するから止めてくれ……」

若干綾瀬夾の顔が紅い気がするが、俺は何か言っただろうか？

「何がだ？」

「い、いや、何でもない」

バカか俺は、とブツブツ呟きながら綾瀬夾は首を振る。

「話は終わったんなら。俺は帰るぞ。“夾”」

「っ……。一番ややこしい時に呼び捨てにすんじゃねぇよ！」

「だから何が？」

「知るか！　そして聞くな！」

何か知らないが、夾の様子は帰り道の間、ずっとおかしかった。

病気かと尋ねてみると、何故か殴られた……。

相変わらず、考えが読めない奴だ……。

「朱皇千春、確認した」

何か、今名前を呼ばれたような気がする……。

「夾、呼んだか？」

「呼ばねぇよ！」

何キレてんだか……。

爽は寝るまで元に戻ることはなく、よくわからないままだったが、サバンナでの一日目は特に問題もなく、終了した。

（後編２に続く）

第三十六話　空を見上げて　（後編２）（前書き）

なんとか一週間で投稿出来ました～（汗）
さて、シリアスなためにまたまた前書きはありません（汗）
次回から投入予定です。
では過去編ラスト、どぞ♪

第三十六話　空を見上げて　（後編２）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

『誕生日おめでとう、朱皇千春君』

……え？

何で親戚の伯父が生きている？

それに、その前で笑っているのは……。

『えへへ。ありがとうございます。伯父様』

『千春、皆さんも待っていらっしゃるから、挨拶してらっしゃい』

『は～い♪』

幼い時の俺と、母親？

待て、伯父はなんと言った……誕生日おめでとう！？

これは、この夢は！

『……』

破壊してしまう程に、大広間の扉が開かれる……。

来る……。来てしまう。奴が。

『貴方！？　その血は！？』

行くな……。行くな！

ソイツはもう、親父じゃない！

『……』

『貴、方……？』

母親の首から、紅い鮮血が噴き出した……。
ソイツは倒れる母親の血飛沫を浴びて、壊れたように笑っていた……。

回想・死した心

「うぁぁあああ！！！！」

「うぉぉぉぉぅ！？！？」

跳ね起きると、何故か俺の声に重なる声があった。
見渡すと、夾が転んでいた……。

「……何してんだ？」

「お前がいきなり跳ね起きるからビビったんだろうが……危うくキ……」

「キ？」

「何でもねぇ……」

そこまで言って、夾は紅くなってしまった。
どうやら、昨日からまだ回復していないらしい。
夾は首を振り、雑念を振り払って、再度こちらに向いた。

「お前、うなされてたみたいだけど、大丈夫か？」

「別に……。それこそ何でもねぇよ……」

ここしばらく、あんな夢は見なかったのに、何で今更……。
ひょっとしたら、夾の話を聞いたからかもしれない……。

「何でもないって顔してねぇぞ？　真っ青だ」

「うるせぇな……。ほっときゃ治る」

あんな話、人にするものではない。
第一、夾自身、昨日に相当辛い思いをしたはずだ。
なのになんでコイツは俺のことを気にかける……。
普通に考えれば、自身の回復を優先した方が良い。

「けど……」

「ほっときゃ治るっつってんだろが。それより、ガキ達は？」

「お嬢様達なら、そこで朝飯食ってる。お前は？　食えるか？」

「ああ……」

立ち上がると、足元がフラフラする。
オマケに頭痛が酷い。
夾の作った飯は、美味かったんだろうが、あんな夢を見た後じゃ、なんかの肉、くらいにしか感じられなかった……。
夾もガキも天津詩織も心配そうにしていたが、何でもないとだけ答

えると、渋々ながらも頷いてくれた。
朝飯が終わって昼になっても気分は回復しない。
そんな最悪の状態のままガキの訓練の時間がやって来た。

「千春さん？　千春さん？」

「……？　何だ……」

ボーッとしていたらしく、俺の前には休憩時間を迎えたのか、ガキが見上げていた。

「千春さんは、今日はお休みした方がいいですの」

「大丈夫だって言ってんだろうが」

朝から何度も繰り返した台詞を言ったが、ガキは今度は引き下がらなかった……。

「私の方は、夾がいてくれるから大丈夫ですの」

「俺のことは俺が一番よくわかってる。どうしてもダメだって思ったら勝手に休む。だから、お前は気にせずに訓練しろ」

「でも……」

本当に、心からガキが心配しているのがわかる。
俺なんかを、こんな、最低の奴を心配してくれている。
そう思うと、何故か、勝手に笑えてきた。

「シルフィス、飛ばしてやるんだろ？」

「え……、は、はいですの」

そうか。この話は俺は知らないことになってたのか……。
まぁ、いいだろ。

「だったら、俺はいいから飛んでろ。それに、今、気にするのは俺じゃない。夾だ」

「夾、ですの？」

「あぁ。だから……」

朝見た感じでは、いつもと特に変わりはない。
それでも、アイツが何も変化がないなんてことはない。
恐らくそれは、俺が気づけない位置で起きている。
原因がわからないが、確実に何か起きている。
なら、アイツが一番元気になること、それは――

「だから、お前はいつも通りでいてくれ。これはお前にしか出来ない。心配した顔なんかより、笑った顔見せてやれ」

――それは、ガキが、クレアが笑っていることが一番だと思う。

「……わかりました。ですの！」

「つっても、今お前を心配させてるのは俺だし、一応、休ませてもらう。頼むぞ……。クレア」

「千春さん、今、名前……」

「じゃあな！」

「千春さん、もう一度聞きたいですの～♪」

「知らん！」

追いすがるクレアを、全力疾走で振り切り、林の中へと突っ込む。
流石にここまでは追ってはこなかった。

（らしくねぇことしてんじゃねぇよ）

夾からの念話。
だろうとは思っていたが、感づいていたらしい。
まぁ確かに、らしくないとは自分でも思う。

（俺は何もしてないが？）

（嘘つけ。丸聞こえなんだよ。隠し事するんならもうちっと静かに喋れ）

（別に隠し事もしてねぇし、する気もない）

（お前、昨日から生意気度が増したな……）

（さて、な）

（ったく、ガキのクセに）

恐らく、今ごろ夾は苦笑を浮かべているのだろう。

言葉の端々にそんな感情が読み取れた。

（それだけか？）

夾はどうだか知らないが、俺はそこまで魔力量は多くない上に、魔力運用の練度が低い。

だから、そろそろ念話を飛ばす距離の限界が近い。

用件があるならここで聞いておかないと届かなくなる。

（ハル……。サンキュ）

（は？）

（ゆっくり休め。んじゃな）

（お、おい！）

夾は、一方的に念話を切ってしまった。

「結局何の用だったんだ、アイツ……」

また、俺に対するからかいだろうか？

まぁ、次に会った時に聞けばいいだろう。

そんなことを思いながら、朱皇千春は軽く一歩を踏み出し。

楽しく、希望に満ちた時間から、手を離してしまった……。

「朱皇千春……」

夾との念話の範囲外に出た直後、朱皇千春の世界は崩壊へと加速していく……。

「くっ！」

膝が崩れる程の殺気と、魂が震える程の重圧と共に、何かが来て。

「誰だっ！」

それでも、踏ん張って、振り向いて、負けじと殺気を放って。

「何故、貴様は光の道を歩んでいる？　力を手にしたいのならば、闇の道を進め。憎悪を糧に前へ進め」

「てめぇ、は……」

振り向いた先に存在したのは、絶望そのものを具現化した、ヒトであり、ヒトならざる力を手にした、とある男。

「闇に、染まれ……」

「てめぇはァァァァァ！！！！」

男は、“身内”を手にかけ、たった一人の少年に絶望を突きつけ、叩き落とし、闇の道を示した。
全ては、自身の力の糧とするために。
覇界神と呼ばれし、世界に絶望を運ぶ者。
その者の名はグラース。
だが、それは、覇界神と成りし者に名付けられる、言わば仮の名の

ようなもの。

「春人ォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！」

その男の名は朱皇春人。

少年、朱皇千春の実の父親であった……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

父親に向けて、ハルは憎悪を込めた視線で射ぬく……。

春人、否、グラースは全く動じない。

「何でだよ。何で、あん時、お前は……！」

低く、唸るように、ハルは問いかける。

昔、聞く間もなく姿を消した父に、人間らしさの最後の希望を求めて。

夾と合う以前のハルならば、問答無用だった筈であり、夾との出会い、それは確かにハルに変化をもたらしていた。

「理由が必要か？」

「何、だと……」

その希望を、根本から引きちぎるように、グラースはハルに問い返した……。

何か、理由があったと、そう思わせて欲しくて、思わせて欲しかったのに。

グラースの前に、ハルの希望は粉々に砕け散った……。

「力を求めること、我の目的に最短な道があの道だった。それだけだ。他意など無い。我は……」

「もういい……。黙れ……」

『フルスペック解放、身体強化、開始します』

グラースの言葉を切り、ハルは空のオーラを放ちし右腕を振り払う。

瞬間、風圧で地面に亀裂が疾り、砂塵が宙を舞う……。

「お前はここで……、朽ち果てろ！」

ハルの背後に衝撃波が突き抜ける！

成したのはただの踏み込み。

衝撃波の正体は、踏み込んだ際、足が地を叩いた衝撃でしかない。

そしてその当人、ハルは既にグラースの懐の中、竜巻よろしく右に身体を捻りこむ……。

「おおォォ、らァァァ！！！」

捻り込んだ回転のベクトルを全て右腕に乗せ、打ち出された右拳、対してグラースは何の挙動も見せられず、その拳を顔面に受ける。

確かに打ち込まれた右拳の一撃は、激突の際、走り出した時より凄まじい衝撃波を打ち放つ！

しかし、それは吹き飛ばすなどという生易しいモノではない。

その“衝撃波”だけで、触れたモノを粉砕しえる破砕の豪風。

衝撃波だけでそのクラス。

本体である拳の威力は触れれば人の身など物言わぬ死体と化す。

そう、“触れれば”

「う、くっ！」

呻き声と共に、宙に鮮やかな朱き鮮血が舞った……。
噴出場所はハルの右腕。
顔面に叩き込んだ筈の拳は、グラースの数センチ手前で停止。
その拳は、グラースを守るように展開された歪みの球によって遮られていた……。
堅い壁を全力の拳で殴ればどうなるか。
至極、答えは簡単だ。
壁を打ち抜き攻撃を通すか、または打ち抜けず、拳が砕けるか、二つに一つ。
今回は後者だった。
ただ、それだけの話。
ハルの“全力の一撃”はグラースを揺るがすことなく終わった、たった、それだけの話……。

「クソ……。クソ！！」

「……」

届かない。
それも、絶望的な程に、届かない。
ハルには、体術しかない。
アスラを使うにしても、未だ運用がわかっていない力を応用するなど、不可能だった。
つまり、全開の身体強化の全力の一撃。
これがハルの最強の一手であり、唯一の技。
これが防がれたということはもう何も通らない。

「クソ野郎がァァァァァァァァ！！！！」

それでもハルは再び全力を持って回し蹴りを顔面に叩き込む！
ハルは小細工はしなかった。
グラースもまた、何もせずに受け止めた。
歪みと蹴りが衝突し、衝撃波が生まれ。

「ぐ、ぁぁ！」

そして、鮮血が宙を舞った。
先程と全く同じ結果。
脚の支えを失い、崩れ落ちるハルをグラースは見下すように見ているだけ。

「真面目にやれ！」

崩れるハルの姿が残像と化し、グラースの背後に現れる。
攻撃が通らないとしても、止めるつもりは無かった。
何故なら、ハルは、グラースを殺すことだけが目的で生きてきたのだから……。
そのためなら、己の腕が砕けようと、脚が千切れようと、構うことはない。
故に、揺るがぬ殺意を込めて、後頭部に踵落としを打ち込んだ。

「緩い。遅い。そして何より、弱い」

「っ！」

そんな声が、背後から響いた……。
グラースの姿は既にハルの前には無かった。
確認をすることもなく、ハルは身体を丸め、左腕を側面に持ち上

げて。

「滅、爆煌……」

直後に触れたグラースの左脚が炸裂し、悲鳴すらあげられず、業炎に包まれ吹き飛んだ……。

その距離、実に３００メートル近い。

弾丸と化したその勢いを止める力もなく、ハルは地面に叩きつけられるようにして止まった……。

「ごほっ！　ごほ！」

内臓が傷ついたのか、血を吐きながらハルは倒れ伏す。

起き上がるどころか、動くことすら困難な状態だった……。

たった一撃。

その一撃だけで、ハルの身体は限界を迎える。

だが、その一撃を耐えることすらギリギリだった。

ハルがなんとか生きているのは、夾との鍛練で鍛えられたから、そして、執事服の防御力によるところが大きい。

そのどちらかが欠けていれば、ガードすら出来ずにハルは死んでいる。

「終わりか。朱皇千春……」

「っ、ごふ！」

――誰が！

そう、叫びたかった。

しかし、口から出たのは真っ赤な血のみ。

ハルにはもう、グラースを睨むことしか、出来ない。

「力が欲しいか？」

――欲しい……。てめぇを殺せるなら、どんな力でも！

「我が力をくれてやる……」

「……な、に？」

意味がわからなかった。

敵である筈のグラースが力を与えるという。

そんな思考を信じられる筈も無かった。

「我が拳は神の息吹。堕ちたる種子を見出だし、秘めたる力を紡ぎ出す」

だが、グラースの言葉に偽りは無かった。

歩みを始めるグラースの右腕に、何かが降りるかのように黒きオーラが纏われ、吹き上げる……。

空間が軋み、恐れの悲鳴をあげ始めた。

そんなグラースの腕を見て、ハルは思う。

――アレを喰らえば、俺は確実に強くなる。だが……

どんな力でも、確かにハルはそう思っていた。

しかし、グラースの力はあまりに桁違いで、喰らえば後戻りが出来ないことをありありとハルに突きつける。

――戻れない、か。とうとう俺もイカれたかな。

宿敵を仰向けに見上げて、ハルは想いを馳せた。
白姫家に、クレアに、そして、夾に。

「美しき、滅びの母の力を……」

打ち下ろされたグラースの右腕はハルの鳩尾へと炸裂し、その腕から何かがハルの体内、否、魂へと流れ込む。
不思議と、痛みは無かった。
痛覚が飛んだのかもしれないが、ハルはそんなことはどうでも良かった。

「ぐぅ、ァァアアアアアアアアアアアア！！！！」

内側から、何かが暴れだし、ハルの人格を破壊する勢いでのたうちまわる！
ハルの身体が朱く明滅し、巨大な意思に飲まれまいとする。
抵抗を止めれば楽に終わったかもしれない。
しかし、ハルは屈することなく、引き換えに最早、人体が感じ得る痛みを越えた痛みを受けることを選んだ。

「何故拒む？　貴様が望んだ力だ……」

「か、かかか、える……」

――俺は、帰るんだ……。力は貰う。だが、屈しない。力をモノにして、グラースを倒して、帰るんだ！

「我には理解できん。絶対的な力を前に、他に何を望む？　そのようなモノは存在せん……」

淡々と語るグラースに、ハルは焦点が揺れるなか、グラースを睨み付けた。

「お、れ、れれ、俺に、は、ある……」

――力は欲しい。

だって俺は、コイツを殺すために生きてきたのだから。

でも、それ以上に、今は、アイツらと一緒にいたい。

それが、どれだけ困難な道だろうと、成し遂げる。

「ありがとな。お前がそう思ってくれて、嬉しいよ」

そんな、強い想いに応えるように、ハルの耳に見知った声が響きわたった……。

「きょ……う？」

「あぁ。俺だ。悪ぃな。二人の避難にちょっと時間食った」

ハルの身体が夾に持ち上げられた。

直後、景色は一点、林の中へと変化する。

「後少し耐えろ。すぐに終わらせてくっからよ」

そう言って、夾はハルを寝かせた後、背を向ける。

「……行く、な」

ハルは、声を振り絞って、夾を呼び止める。

グラースとハルの問題に巻き込みたくなかったからだ。
爽は、その小さな声に振り替えって、子供を安心させるかのように、優しく笑う。

「お前、言ったよな？　俺を死なせねぇってさ。でも、それじゃ不公平だ。だから、俺も、お前を死なせねぇ」

「お前、は……、関係……」

「お前だって、関係無いことに首突っ込んだろうが。これでおあいこだ。じゃな」

「待っ……」

ニッと笑った爽の姿は、最早そこには存在しない。
関係の無いことに、爽を巻き込んだ。
その事実が、ハルの心を大きく揺らす。

「クソ、野郎……がぁ！」

もう、ハルに出来ることは一つだけ。
人格を破壊されないように、爽が帰ってくるまで待つ。
爽が帰ってくる、それだけを信じて、ハルは激痛と戦いを始めた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

トン、そんな軽い音をたてて、爽はグラースの三メートル程手前に着地する。

「初めまして。ハルの親父さん。俺、綾瀬爽っていいます」

「……」

ニッコリと笑って挨拶をする夾に、グラースは無反応。
その様子に、夾は笑みを崩し、溜め息をついた。

「息子が息子なら親も親だな。ったく……」

愚痴を漏らした夾。
イライラしているのか、左腕を持ち上げ、後頭部を掻く。

「滅烈風」

瞬間、その眼前に、突如としてグラースが現れ、烈風纏う拳を打ち放っていた……。
が、夾は見えていたかのように既に屈んでおり、膝のバネを使い、白い魔力を纏う右脚を蹴り上げる。
不可視の障壁と蹴り上げが激突し、“一瞬の拮抗も許さず”グラースの顎を蹴り抜いた。
宙に浮いたグラースの身体を追撃し、夾も跳躍、右腕を引き絞り、打ち抜く！
グラースの身体は流星のように落下し、土煙を上げながら叩きつけられた……。

「防がれたか……。まぁ、アイツの父親だしな」

音もなく着地する夾は打ち抜いた右腕を軽く振る。
まるでそれは、先の一撃は準備運動だったと言わんばかりに。

「久方ぶりだ……。我に一撃を当てた輩は……」

声と同時に、風が吹きすさび、土煙を吹き飛ばす。
夾の一撃が全く効いていないかのように、グラースは立っていた……。
夾を明確な敵と判断したのか、その視線はまっすぐに夾を貫いている。

「これでもハルよりは長く生きてるんでな。運用の応用くらいは出来るさ」

グラースが放つ殺意に、微動だにせず、夾は軽く言う。
誰にでも出来る、簡単なことと言うように。

「我は覇界神……。グラースなり……」

「そんじゃ改めて。白姫クレア直属執事にして、執事長の綾瀬夾だ。二つ名は、死神……」

覇界神と死神。
二者は互いに殺意を放ち、視線を交わす……。
ひび割れ、歪み、軋んで、砕ける。
二者の存在感に空間が絶叫する。

「滅せよ……」

「刈るぜ……」

二人の神は最早何も言葉を交わさない。
人間としての理から外れた戦いが、静かに、始まりを迎えた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

空間が軋む中心。
そこには、写る姿の違う鏡があった。
踏み込むも同じなら打ち出す拳もまた同じ。
ひたすらに、拳を打ち、蹴りを叩き込み、空間を粉砕する。
そして、全く同じように動く夾とグラースの二人はトン、と軽い音をたててフワリと浮いた……。

「滅、爆煌！／崩天裂脚！」

その軽さと裏腹に、回転からの蹴りは激烈な威力を孕み、互いの左脚が触れると同時、紅蓮の巨爆と白光が轟き轟音を奏でる。
威力は“ほぼ”同等と言える。
弾かれるようにして二人は交代し、グラースは正面を向きながら、夾は滑りながら着地する。
共に“外傷”は無い。
しかし、“体勢”は明らかに差があった。
勢いを殺しきれず、未だ立ち上がれない夾の背後にグラースが縮地にて出現した……。

「チッ！」

舌打ちをしながら、夾は両掌を地へとつける。
グラースは人体を破壊するに充分過ぎる肘鉄を打ち下ろした……。
地面を破砕する音を聞きながらも、グラースは消え去る。
一瞬速く腕の力で跳ね上がり、離脱していた夾を叩き潰すために。
グラースに速度など関係無い。　風を切る速度で飛翔していた夾に易々と追い付き、烈風纏う右の拳を引き絞る……。
縮地とは一種の空間転移術に等しいモノ。
それが音速でも光速でも、追い付けないモノは存在しない。

「滅……」

「くらっとけ！」

だが、夾も反応し、前転からの踵を打ち込む！
直後、グラースの身体がユラリと揺れた……。
足場があるかのように、グラースの身体が滑る……。
空を切るのは夾の右脚。
グラースは無傷のまま、己が拳の必殺の位置へと滑り込む。

「アスラ！」
『了解』

「烈風！」

直撃の瞬間、夾は眩く輝く両腕を交差し、打ち下ろされるようにして放たれたグラースの烈風を受け止める。
激震が疾り、一瞬、時が止まったかのように二人は制止。
直後、夾の身体は軌跡を残しながら地へと叩きつけられた。
筈だった。
しかし、大地は何も起こらず、全くの無振動。

「天、牙ァァァ！」

「っ！」

声が響いた瞬間、グラースの身体が弓なりに曲がる……。
グラースの背後には、拳を叩き込む夾がいた……。
今度こそ、大地が激震に揺れ、亀裂が疾る！

断層でも起きているかのように、大地が大きく沈み込んだ……。

「勢い丸々返したぜ……。痛かったからオマケつきだ……」

そう、爽はグラースの滅烈風を受けた威力のベクトルをそのままの勢いで返していた。

通常なら、そんな方法は無い。

が、出来る方法もある。

空間転移術である縮地を使えば可能。

縮地とは、移動ではなく、座標に向けて跳んでいる。

移動ならば一度止まらねばならないが、縮地にそれは必要がない。

つまり、ベクトルを死なせないままに跳ぶこともまた可能。

だが、移動しながらの縮地は座標が常に変わり続けるため、不可能とされている。

転移魔法が戦闘に置いて実用化されないのもそのためだ。

それを、爽は成した。

幸か不幸か、爽は普通とはかけ離れている……。

「我の他にも縮地を使う者がいるとはな……」

静かに、声が響き、衝撃波の乱風が瓦礫を吹き飛ばす……。

「使える奴がもう一人いる。後、可能性がある奴ももう一人」

「ほう……。興味深い……」

「ま、その興味も満たされないけどな」

爽の姿が、ブレる。

その姿はグラースの正面。

一切の小細工なしに、正面から右腕を引き絞る！

「てめぇは、俺が止める！」

「やってみろ……」

光線のように、夾の拳から白光が打ち出される。

それを、グラースは持ち上げた片腕で防ぎ、防ぎきれずに吹き飛ぶ！

追撃をかけんと膝に力を溜め。

「滅天、覇光……」

「っ！」

襲い来る光弾に中断。

回避を行うために左脚で地を蹴り、右に跳んだ。

直後、夾の遥か後方一キロが白光に染まり、爆風が夾の長い髪を靡かせる……。

着弾したその地にはもう何も残らず、風のみが吹いていた……。

さらに、グラースは光弾を撃ち放たんと両掌に光を集束する……。

――……そう簡単にはいかせねぇってか。

内心、舌打ちをしながら夾は風を突き抜け走り出す。

自身が“空けてしまった”距離を埋めるために。

「滅神、覇天烈光」

光弾が千切れる。

そして、グラースの右腕と、左腕に宿る……。
その光景に、夾はヒヤリとした感覚を感じた……。

――まさか……

悪い予感は当たる……。
左右の腕を連続して霞ませたかと思うと、先程のなんら変わらぬ威力の光弾が放たれた。
一発、二発、三発、四発、五、六、七、八、九、十と！
それら全てが先の“一発”と同じ威力！

「チィィィッ！」

夾の脳内で、演算が高速で行われ、弾き出されるは座標軸。
一度、二度、三度、四度、五、六、七、八、九、十と、縮地を連続して行う！
夾が消える度、その場は無と帰り、消滅する……。
景色がどうなろうと、グラースは構わない。
ただ、相手を滅するまで撃ち続ける！

「くっ！」

遂に、夾の縮地が止まる……。
座標軸の高速計算は、凄まじい負担を夾の脳にかけている。
そして、負担の結果、限界を迎えてしまっただけの話。
寧ろ、ここまで縮地を連続して使用していた夾が異常なのだ。
だが、その異常な夾を持ってしても、回避が出来ないことに変わりはない。
そして、グラースが撃ち続けることにも、変わりはない……。
足を止めた夾にグラースは光弾を壁とするように連射する。

逃げ道は無い。
だから、夾は光弾を睨む。

「しゃらくせぇ！　アスラ！　ぶっ飛ばすぞ」
『死ぬなよ？』

そして、夾は駆け出した。
その“両腕のみ”に、超高密度の魔力を束ねて。

「はぁぁぁァアアア！！！！」

その腕を振り払いＳＳＳ＋＋＋＋＋のランクを誇る光弾を“砕く”
木端微塵に、跡形も無く、粒子へと破壊する！
夾の両腕には、“全身分”の魔力が叩き込んである。
アスラは、フル稼働状態になると、Ｓランクを誇る全身の身体強化を行う。
単純な話、体術の一発一発がＳランクになると考えてもらってもいい。
夾が行っているのはその応用。
他の部位を通常に戻し、“一撃のみに全身強化分の身体強化を叩き込む”。
さらに、それを炸裂させることで、威力を底上げしている。

「邪魔すんなぁぁあああああ！！！！」

砕く、砕く、砕く、砕く、砕き続ける！
限界を越えた夾の腕は血飛沫を舞わせるが、即座に傷は塞がり、再度迎撃に参加する。
“少女は滅多なことでは死なない”から。
確実に己に進行する夾に、グラースは連射は無駄と判断し、再び

両掌を束ね、集束を開始。
瞬間、輝きの中から夾が現れ、走り込む！

「真覇……」

「くらいやがれ……」

グラースの掌の内、これまでとは比べ物にならない程巨大な光の弾が生まれた……。
夾の引き絞った右腕に、視界を真っ白に塗りつぶす程の白光が輝いていた……。
その二つの光は、世界に存在する魔力を根刮ぎ奪うように、螺旋に回転し、渦巻きながら巨大化していく……。

「覇天、烈光穿ッ！」

「絶覇掌ォォォォ！」

グラースの掌からは、砲撃に近い白光が放たれ、同じく白光を纏う夾の拳と激突し、世界を揺らす……。
たった二人で、世界に異変を起こした。
だが、それがなんだと言わんばかりに二人は力を込めていく！

「……ォォ！」

「アアアァァァァ！」

空間が、大きく歪む！
ピシリと、何も無い筈の空間に亀裂が生まれる。
魔導師がいれば、一目でわかる、その亀裂。

通常なら異なる世界同士は、お互いに干渉しないよう、別次元に存在する。
次元とは、地球からミッドにはいかな高性能なスペースシャトルを用いても行くことが出来ないように、それは絶対のモノだ。
だが、この二人はその絶対の領域たる次元の壁を破壊しようとしていた。
魔導師は、それをこう表する。
次元断層、と。
正規の門たる転移魔法を介さずに次元の概念を破壊すると起こる現象だ。

「っ……」

「くっ！」

激突の末、決着はつかずに弾け飛ぶ。
次元断層という危険があるなか、二人は止まらない！
そもそも、気にしてなどいなかった。

「ヒュ！」

「消えろ！」

グラースの姿が消え去り、夾の頭上にて打ち下ろすように蹴りを放ち、夾は迎撃のために拳を打ち上げる！
同等の威力で激突し、対消滅の余波として、再び起こるは衝撃波の嵐。
夾の拳からは天空の雲を突き抜ける槍が。
グラースの蹴りからは、大地を陥没させる鎚が。
それぞれに叩きつけられる衝撃にグラースの身体が浮き、夾の身

体は膝が沈む。

「空破穹天掌！」

「滅、轟雷！」

その互いに打ち込まれた力ですら力へと変え、夾は膝のバネから大気を纏めた拳を放ち、グラースは風を引き込むように回転しながら轟雷を蹴り落とす！

蹴り抜いたのはグラース。

大気を抜き、余波である雷が夾に槍と化して突き刺さる！

だが、グラースは止まらずに右腕に風を纏い。

「滅、烈風！」

続けざまに、自信の右腕を正面に振り抜く！

正面に打ち放たれる拳は空を叩き。

「ぐ、ぅ！」

直後、バキリという音が響かせ、グラースの右腕が縮地にて跳んでいた夾を捉えた……。

夾も受けてはいたものの、左腕一本で防ぎきれる筈もなく、腕の粉砕と共にその身体は地面へと叩きつけられる！

土煙の中に、グラースの瞳は膝をつく夾の姿を捉える。

血だらけではあるが、確実に生きていた……。

「滅！」

音もなく、夾の背後に縮地で移動したグラースは、右脚に紅蓮の

業火を圧縮していく！
舞っていた土煙すらも圧縮しつくし、グラースは回転する……。
夾が死にかけだろうと手加減は一切無かった。

「お前の、敗けだ……」

静かに響くは夾の言葉。
その口元は、ニヤリと笑っていた……。

――ハル、怒るかもしれねぇけどな……。

轟、と言う唸りをあげて、夾の身体が回転する。
そして、グラースの重心が移動する前に左脚を払った……。
少しだが、確かにグラースの重心がズレる。

「……」

しかしグラースは、一瞬でそのズレを修正してしまう。
その眼前には、未だ魔力を纏いし拳を振りかぶる夾。
対し、グラースはもう蹴りを放っている。

――お前と親父さん、やっぱ親子だったよ。戦法が似てる。

その蹴りを先の一瞬の隙に持ち上げた夾は光を纏う右腕で、受け止めた……。
炸裂する光、紅蓮の巨爆が夾を包む……。
腕の細胞が粉砕され、焼ききられ、骨が木端微塵に砕け散る。
内部から破裂するように、夾の右腕は焼失した。

――まぁ……。

それでも夾はその場でＳＳＳ＋＋＋誇る一撃を踏ん張った……。
そして、右脚で威力を無くしたグラースの脚を蹴り上げる。
仰向く身体に夾は身体を捌き、左肘を鳩尾へと打ち込む。
叩きつけられるグラースの身体。
振り上げられた夾の左腕は何重にも展開された環状魔方陣が輝いている。

――そのお陰で、勝てるんだけどな！

右腕が爆砕される、それにどれ程の痛みがあるだろうか。
そしてその痛みと傷を、一ヶ所に纏めて叩き込めばどうなるだろうか。

「ここで、終われぇぇぇぇぇ！！！！」

叩き込むは単体でも次元震を起こし得る絶覇掌。
送り込むのは右腕一本分を爆砕する傷。
それが叩き込まれた瞬間、天変地異に等しき激震と、光の柱が空を突き抜けていった……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「はぁ、はぁ……う、くぅぁあ！」

一方、ハルは夾が帰ってくることを信じ、侵食を耐えていた。
しかし、それも限界が近づきつつあった。

――くそ。ヤバイ、な。

手足の感覚はもう無い。
痛みを感じている筈なのに、なぜか眠けを感じている……。
なんとなく、ハルは感じとっていた。
眠れば、自分は破壊するだけの兵器と同じになると。
それは、絶対に嫌だからこそ、歯を食い縛る。

「ハル、生きてるか……？」

「っ！」

弱々しい、だが確かに夾の声をハルは聞き取った。

「よぅ……」

だが、ガサリと草を掻き分けて現れる夾の姿に、ハルは絶句する。
右腕が、無い。

「お、前……！」

「ん？　あぁ、はは。少年にはちょっと刺激が強かったか？　まぁ、許せ。服なんて探してる暇無かったし」

「違、う！」

そう茶化す夾に、ハルは怒りを覚えた。
そんなことを気にしているのではないと、睨み付ける。

「あぁ、腕の方か。それなら大丈夫だ。関係ないしな」

何が！

そう、叫びたかったが、ハル自身もボロボロであり、意識があること自体奇跡に近い。
睨み続けるハルの顔に、夾は左腕を置いた……。

「今から、助けてやる……」

「なっ！」

夾の左手が輝き、ハルの負った傷を自身へと移す……。
ハルから瞬く間に傷が無くなり、対し、夾は吐血した……。

「やめ、ろ！」

声を絞りだし、夾を止めようとするが、夾はハルの言葉を無視して作業を続ける……。
そして……与えられた覇神の力すら移し始めた……。

「何してんだ！」

「ん？　上位存在からの観察対象をお前から俺に替えてんだよ。俺の力は、ありとあらゆる概念を無視する。その代わり、代価はいるけどな」

問いただすハルに、夾は笑いながらハルに言うだけだった。
その声に、恐怖といった感情は読み取れない。
ハルは、身体を蝕んでいるモノが弱くなっていくのを感じる。
逆に言えばそれは、夾の身体に力が移っているということ。

「何でお前がそんなことをする！　力を望んだのは俺だ！　お前は関係ない！」

「うん。関係ないな」

一度、力を使うのを止め、爽はハルと向き合う。
その顔は、とても優しく笑っていた。

「けど、言ったろ？　俺がお前が死ぬのが嫌だから。それが理由だ」

「死なない！　俺は耐えきる！」

「無理だ。今はアイツがいないから耐えられてるが、いつかきっと、お前という人格は破壊されてしまう」

「倒したんじゃ……」

「いや。逃げられた。上位存在にリンクして、な。簡単に言えば、幽霊になったみたいなもんだ。肉体の有無は関係ない。アイツは生きてる」

ならば尚更、爽は生きているべきだとハルは思った。
その視線だけで読み取ったのか、爽は首を振る。

「もう、今の俺じゃ無理だ。この腕じゃな。わかるだろ？」

そんな言葉をハルは聞きたく無かった。
爽ならば、腕の一本くらいなんとか出来る、そんなことを言うと思っていたからだ。
だが、爽ははっきりと言う、無理だと。

「それに、俺はお前に生きてて欲しい。あのな、お嬢様があんなに

早く心を開いたのお前が初めてなんだ。あの子は、いつも他人を警戒してる。けど、お前にはしなかった。お前なら、あの子を普通の子にしてあげられるかもしれない。俺には無理だったことをお前がやって欲しい」

そう言って、爽は作業を再開する。

その身体は作業を進める度に痙攣が激しくなるが、爽は何も言わずに作業を進める……。

「ガキは、クレアは、お前を必要としてんだぞ！　俺なんかじゃ、アイツのことをわかってやれない。お前がいなくなったら、アイツは絶望する！」

「かもしれないな」

「だったら！」

「けど、それだって、時間が経てば解決してくれるさ。お前が一緒にいてくれればな？」

「なら俺は、消えてやる。生き残ったとしても、あの家には帰らない！　復讐するために奴を探す！」

流石にこの言葉には、爽も少し考える。

少しの思考の後、「じゃあ」と提案した。

「せめて、あの子に友達が出来るまでの間、一緒にいてやってくれないか？　それまででいい。それでも、お前があの子から離れたいと思ったら、去ってくれて構わない」

「何でだよ……」

「ん？」

「何でそこまでお前は俺が一緒で大丈夫だって信じられる！　俺は元は復讐者だぞ！　そんな約束守る可能性もねぇし、おかしいだろうが！　あの家にはもうストッパーがいない。何するかわからない奴を信じてんじゃねぇよ！」

「あぁ、そんなことか……。簡単で、単純で、明快な、答えだぜ？」

弱々しく、夾はここに来た時のように、笑った……。

確かに、弱々しい笑みだったが、それは輝きに満ちていて。

「好きだから、だよ。お前が多分、初めて話した時から、ずっと、人間としても、そして“女”としても、な」

「っ！　女は捨てたっつってたくせに……今更……」

「あぁ。捨てたよ。捨てた筈だった。けど、お前になら、女として扱われても、いいかなって、そう思えたんだ。白姫家に来てから初めて、思えたんだ。ちょっとくらい我が儘言ったって良いだろ？最期の時くらい、さ」

笑ったまま、夾は最期の作業、ハルの右腕から力を自分に移そうとして。

「ハ、ル？」

「ざっけんなよ……」

その夾の腕を、ハル左腕が振り払った。
作業は中断され、夾の表情は疑問に変わる。

「勝手に人を巻き込んで、勝手に人を変えて、勝手に人の問題に首突っ込んで！　それで勝手に、てめぇだけ満足して死のうなんざ、許さねぇぞ！　お前は死なせねぇ。どんだけ泣こうが、苦しもうが、俺が死なせねぇ！　死ぬなんて、許さない！　俺が奴を倒すまで生きてろ。いいな！？」

ハルに言葉をぶつけられた途端、夾の身体から力が抜け、地へと伏した……。
もう、夾の身体は限界だった……。

「夾！？」

動けることに気づいたハルは左腕で夾を支え、抱き上げる。

「お前が変なこと言うから、力抜けちまったよ……」

降りてくる重い瞼に抵抗をしながら夾は呟く。
ハルは感じる。
腕の中で、夾の力が失われていくのを……。

「おい、死ぬなっつってんだろが！」

「俺、死ぬのか？　にしては温かいな……」

「ボケたこと抜かすな！　夾！」

「あのさ……、ドラマで見たんだけどよ……。こういう時、恋人同士って、お互いの形見を何か渡すすんだ。だから……、だからさ、俺のアスラとお前の……交換してくれよ……」

「待てよ……。お前と俺は、まだ、そんなんになってすらいねぇんだぞ！　まだ、始まってもいないことを、終わらせようとしてんじゃねぇよ！」

そう、ハルは叫ぶ。

叫ぶが、爽の瞼は閉じて、開かなくなった……。

爽の右手が持ち上がり、ハルの頬をなぞる。

それだけが、まだ爽に意識がある証拠……。

「そっか……。じゃあ、次、起きた時は……、俺とお嬢様とで……三角関係、か……。面白そう、だ……な……」

ストンと、爽の腕がいきなり力を無くし、地に落ちた……。

「勝手に……、寝んなよ……。まだ、俺は、お前に、お前に言いたいことが山程あるってのに……寝てんじゃねぇよ……。爽ォォォォーーーーッッッ！！！」

ハルの絶叫にも、爽は何も応えない。

それから、爽が目を覚ますことは無く、眠り続ける……。

白姫家のヘリが迎えに来た時、ハルの瞳に光は無かった……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

これは白姫家での、爽が眠りについて、しばらく経った日のお話。

「お嬢様？　お辛いのでは？　お部屋にお帰りに……」

「私が見なくては、爽が可哀想ですの。大丈夫ですの」

詩織の言葉には、クレアは揺るがない。

爽は死した訳ではなかった。

正しく、眠っているかのように、目を覚まさない。

初めてその姿を見た時、クレアは数日間塞ぎ込んだ。

その間に、ハルは執事となるべく、学校に行ってしまう。

二人は言葉を交わすことすらなく、離れていった……。

誰もが心配したが、クレアは自力で立ち上がり、持ち直す。

そしてこの日、爽の身体の“保存”が行われる。

いつ、起きても大丈夫なよう、肉体年齢をそのままに凍結するのだ。

クレアは、爽に近づき。

「爽、いつの日か、起きてきて欲しいですの」

たった一言告げるだけでその場から立ち去った。

いつの日か、爽が起きた時にたくさん話をするために、話題を置いておくために。

その日から、約二年後。

執事の教育機関から、特に優秀、ということで、ハルは五年の期間を二年に縮めて卒業する。

その間、一度も帰って来なかったハルとの対面を楽しみにしていたクレアは、ご機嫌なままに、門の前で待つ。

ハルの迎えらしき車が止まり、その中から執事服を纏う青年が立ち上がる。

「千春さーーん♪」

「おや、お嬢様、お久しぶりですね」

「え……？」

その丁寧な一言で、クレアは悟る。

ハルは別人になってしまった、と。

粗暴ながらも、根が真っ直ぐなハルが好きだった。

その好きだったハルは、二年の間に、人との距離を置いて、仮面をかぶっていた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「お嬢様？」

正直、酷だとは思う。

この少女は鋭い。

“僕”の変化など、直ぐ様感じ取ってしまうだろう。

それでも、決めたこと。

“僕”は、もう、他人に心は開かない……。

開いた結果、夾のような被害者が出てしまうのなら、“僕”は一生、この仮面をかぶろう。

そして、奴と再びまみえた時、その時はこの手で、潰してやる……。

「……“ハル”、早速お仕事ですの♪」

「了解しました」

「っ！」

その程度で揺らがないさ。
もう、決めたんだ……。
奴を殺すまで、誰にも頼らず、生きていくと……。
傷つけるだけだから、これ以上、俺に関わるな。
そう警告を込めて、俺は仕事を始めた……。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

Ｓｉｄｅ・なのは

「以上です。何か質問はありますか？」

全てを話終えたハル君は平坦な声でそう言った。
納得はいかない。いくわけがない……。

「ハル君、今のお話の中に、ハル君が一人で頑張らなきゃならないなんて理由、どこにもないよ？」

「わからない？　存外、貴女もバカですね」

「私はバカだよ。昔から、物分かりは悪いし、頑固だし、だから、納得出来るまでお話をする。それが私のやり方なの」

そう、ＰＴの時だって、闇の書事件の時だって、私は自分の道を貫いてきた。
今回だって同じ。
何を言われたって、納得出来るまで退く気はない。

「僕は、どう足掻いた所で奴を呼び寄せる餌でしかありません。無駄に被害を拡大させるより、単体で破滅した方がマシというものでしょう？」

「違う違う、違うよ！　どうしてそんな考えになるの？　自分を犠牲にするなんて考え、ダメだよ！」

「なのは様」

ハル君に、名前を呼ばれた。

でも、かつて、これ程に冷たく響いた名前があった記憶が無い。

それでも、名前を呼んでくれている以上、まだ届く。届く筈なんだ。

けれど、ハル君を正面から見ると、その表情は氷のように冷たくて……。

「犠牲無くして、平穏は得られませんよ？」

「それは、わかるよ。わかるけど、それとハル君が一人で消えるのとでは話が！」

「同じですよ。言ったでしょう？　グラースを倒さない限り、奴は世界を壊し続ける。僕は、曲がりなりにも奴を止められる力がこの腕には宿っている。僕ただ一人が奴と消えれば、少なくとも奴という脅威は無くなる。僕一人が生き延びている限り、僕と、その周りの人間は奴に殺される。ほら、どちらが良い結末か、わかるでしょう？」

確かに、世界に問えば、確実に後者を選ぶと思う。

犠牲は一人で脅威がなくなるのなら、誰でもリスクの少ない方を選ぶ。

だけど、だけど！

見捨てられたたった一人の犠牲は、誰からも手を差し伸べられず、消えてもいいの……？

違う。そんな答えは間違ってる！
世界が正しいと言っても、私は言おう。
間違いだと！

「命が消えるのに、良い悪いなんて、あるわけない……。そんな極論、認めない！　最初から希望を捨てて弱い方に流れるなんて、おかしいよ！」

「貴女は綺麗事が多すぎますよ。これは真理です」

違う……。
こんな残酷な真理、あるものか。
私は絶対に認めない。

「どのみち、出ていくつもりでしたし、丁度良いですよ」

「じゃあ……」

お話の中で、夾さんハル君に言った筈だ。
クレアに友達が出来るまでの間、一緒にいてくれって。

「どうして、今まで一緒にいたの？　仲間を巻き込みたくないのなら、離れれば良かったのに」

私の言葉に、確かにハル君の表情が揺らいだ……。
ハル君の氷のようだった表情は解け、悲しそうに笑う。

「実際、去ろうと、思ったんですよ。でも、彼が朝練をしていて、気になって行ってみたら、こじ開けるように強引に踏み込まれて。それが、楽しくて……」

彼というのはカナンのことかもしれない。
カナンとの出合いがハル君になんらかの影響を及ぼし、今まで留めていた、だいたいのお話はそんな感じだ。

「居たいんなら居ればいいんだよ。一人で犠牲になんてならなくたっていい。私達は皆で頑張って立ってる。そこにハル君が入るだけ。ちょっとくらい問題を抱えてたって、皆でハル君を護るから、ハル君が恐れてるような事は起きないから、行かないで。ハル君。爽さんだって、ハル君に一人に犠牲になってもらうために頑張ったんじゃないんだよ？　爽さんは、ハル君に希望を感じて欲しくて、普通の人みたいに笑って欲しくて、頑張ったんだよ？　その想いを、無駄にしちゃダメ。ハル君も、逃げないで、立ち向かおう？　皆で、一緒に！」

ハル君は、驚いたような表情をしていたけれど、やがて、ゆっくりと笑った。

「……はい」

「ハル君！」

止まってくれた。
私の言葉はハル君の心に届いてくれた……。
それが嬉しくて、いきなり涙が溢れた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「そろそろ、かな」

寝転んでいた少年、カナンの瞼が開き、朝になり輝き始めた太陽の光を取り込み、ルビーのように明るく光る。

「よっ！」

反動をつけ、跳ね起きるカナンは大きく伸びをし、身体を捻って気だるさを飛ばす。

「ふぅ……」

「おはよう、マスター」

「おはようございます。主」

「あぁ。墓参り、行こうぜ」

「ああ／はい」

コキリと、首を鳴らした後、カナンはメイデンとレナスを肩に乗せ、手作りの墓へと歩を進め、墓の前で三人は手を合わせる……。

そして、カナンは左腕に剣を転送し、地面に突き立てた。

一旦瞳を閉じて、深呼吸をしながらゆっくり開く……。

「父さん、母さん、ついでに夏楠。まだ俺は、二人みたいに強く無いからさ。ガキみたいに迷うこともあるかもしれない。けど、絶対に曲げないから。自分の道は自分で選んで、真っ直ぐに進むから。風間カナンとして進むから、見ててくれよな」

カナンは、柄を握ると、剣の尖端から魔力を流し、自然の力を操り、墓の周囲を花でいっぱいにする……。

「マスターの母君、マスターには私達もついている。安心しているといい」

「絶対に護りますから、ご安心ください」

「おいおい……」

容赦ない二人にカナンは苦笑しつつ剣を引き抜き、土を払ってから鞘へと納めた。

「そんじゃあ、また来るよ」

明るく笑いつつ、カナンは三人の墓に背を向ける。
子供が家を出る時の言葉は一つだけ。

「行ってきます！」

瞬間、カナンの姿が一瞬にして消失した……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

涙を流したなのはに、ハルは優しく掌を頭に乗せて。

「そう言えれば、どれだけ幸せだったでしょうか……」

「え……？」

その笑みを、また悲しみに染めた……。

「ハル、君？　どう、し、て……？」

「すみません……」

そして、なのはに手刀を叩き込み、気絶させた……。
普段なら、絶対に気絶しない程の力。
しかし、なのはは歓喜に気が緩んでいた。
故に、その身体は簡単に崩れ落ちる……。
ハルは、なのはを支え、芝生に寝かせると歩みを進める。

「僕は、貴女程、強くはなれないのです……」

そう言い残し、ハルの姿は機動六課から消え去った……。
ハルが消えてそれからしばらくして、ハルの姿はクラナガンの中心街にあった。

「さて」
『転移ポートならここから北だ』
「おや、協力的ですね？」
『貴様が言葉で止まるとは思わないからな。諦めたに過ぎん』
「微妙にバカにされてる気がしますが……」
『しているのだから当たり前だろう。アホ執事』
「やれやれ……」

そんな問答を繰り返しながらハルは転移ポートのある北を目指し、進む。

「空、ですか」

不意に、空が好きだった少年、カナンを思い出し、ハルは空を見上げる。

「空、いつから好きになったんでしょうか？」

カナンと出会ってから、ハルはたまに空を見上げている時があった。

何を思うでもなく、のんびりと眺めるのは嫌いではない。

寧ろ、好きに近かった。

――全く、どこまで人を変える気ですか、君は。

自身の好みをも変えてしまったカナンに苦笑しつつ、歩みを進めようとして。

その足は突如として止まった。

何故なら、自分の周囲が世界から切り離されたからだ……。

「結、界？」

『ハル、来るぞ！』

――敵襲！

ヒヤリとした感覚を頭上に覚え、ハルは右腕で頭を庇うように持ち上げる！

瞬間、雷光のように降り注いだ光とハルの右腕が激突し、地を揺らす！

「よぅ。コンニャク執事」

「っ！」

剣を叩きつけながら、降り注いだ光、カナンはニヤリと獰猛な笑みを浮かべていた……。

Ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

祐「後書きコーナー。ミニ♪」

ヴ「はい、皆さんこんばんは。実施されたクイズですが、皆さんは答えはあっていましたか？」

祐「難しいとこだけの解答よ♪　まず、ハルとグラース、親子だったのよね～」

カ「ま、これはそこそこわかってたとは思うけどな。
次、俺の六、七、八式の共通点は、名前に龍がつく、だ。」

ヴ「ユニゾンしないと使えないって答えは六、七、八式に限った話ではないので誤りとさせていただきます」

ク「では最後ですの。覇神の右腕を授けたのは誰か、は簡単ですの。グラースですの～」

ハ「そして、何故右腕だけになったのかは、爽が力を己へと移したからですね。途中の僕の行動までは予測は難しいと思われますので、爽の力というワードがある方は正解としました」

カナ「ちなみに、何故最後だけ中途半端になったのかと言うと、当初はきちんとしていた筈が、こっちのが良くね。的な展開を思い付いた作者が変更したからです♪　約束ぐらい守りやがれって感じで

すよね♪」

カ「そこまでバラすなよ！？」

カナ「うるさいですよ。風間君♪」

カ「名字はイヤァァアアアア！！！！」

メ「まぁ、こんな所だ。参加してくれた皆さん、ありがとう」

レ「ではでは、この後もお楽しみに、です」

一同「ではでは～♪」

第三十七話　誇り　（前編）（前書き）

まず謝罪します。
遅れてすいません（汗）
そして、前書きなくてすいません。
ネタはあるのですが、前書き書くとさらに一日か二日遅れるかもなので（汗）
じ、次回に書けるよう、頑張ります！

第三十七話　誇り　（前編）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「よぅ。コンニャク執事」

遊びに誘うかのように軽く言われた言葉。
天空から降りし少年、カナンは、剣を叩き込んだ事をハルに詫びる事もなく、これから悪戯を行うかのように、ニヤリと笑っていた。
対し、ハルは最初こそ驚いていたが、やがて、その瞳は鋭利なモノへと変わっていく……。

「お？」

無言のまま右腕を振り払い、カナンは宙を舞う。
しかし、カナンは空中でクルリと回り、何事も無かったかのように静かに地面に着地した。
向かい合うも互いに無言、長い長い沈黙が続く。

「止めに来たのですか？」

沈黙を先に破ったのはハルだった。
だが、カナンは問いに答えない……。

「どうせ、お前は止まらないんだろ？」

答えない代わりに、カナンはハルに問い返した。
ハルの答えは決まっている。
止まらない。そう、決めたこと。

相手がなのはだろうが、カナンだろうが答えは変わらない。

「はい」

故に、ハルはしっかりと、強く、答えた。

「そっか」とカナンも短く答え。

「それは、六課の誰かに説得されての答えか？」

続けてもう一度ハルを問う。

「なのは様に過去を話して、それから説得もされましたが、答えは変わっていませんよ」

「その気持ちは揺るがなかったんだな？」

ほんの一瞬、ハルは思考し、頷く。

それを見たカナンは、首を振った……。

「ダメだな」

「……はい？」

「お前、今、一瞬考えたろ」

そう、ハルは決めたと言いつつも、揺らいだことに少し思考した。

即答出来る筈の質問に、確かに一瞬だけ、悩んだ。

「こんな簡単な質問に悩むような奴を通すわけにはいかない。帰れ」

最早、問答無用とカナンはピシャリと言い放つ。

「何ですか、それは……」
「は？」
ハルはその拳を固く握り締め、カナンを睨む。
「君達は、いつも、いつも、いつも！　自分勝手で、押し付けがましい！　これは僕の問題だと言っているでしょう！　口出しをしないで下さい！」
――あの女も、このガキも、鬱陶しい！
内に秘める激情を押さえ込む。
そうしなければ、自分が破壊してしまいそうだったから……。
「“口出し”はしねぇよ」
もう一度、カナンはニヤリと笑う。
その笑みを見たハルは固まった……。
「気に入らなかった場合は“横槍”は入れるけどな」
何故なら、その笑みが、あまりに、自分を変えた彼女に、綾瀬夾に似ていたから……。
引きずり込まれそうになる笑みに、ハルは幻を振り払う。
「お前は関係ないと、何度言えばわかる！」
そして怒鳴る。
が、ハルは分かっていなかった。

その怒号は、さらに夾を思い出させることになると……。
カナンは「そんなことか」と一蹴する。

「『俺が嫌だ』」

幻である筈の夾がカナンと共にそう言った……。
その言葉にハルは石像のように固まった……。

『んなもん、どんだけ拒絶したって無駄なんだよ』

ハルが繋がりの力をバカにした時の夾の言葉を今更ながらにハルは思い出していた。

「うるせぇよ……」

眠りについていながら尚、夾はハルに語りかける。

『ハル君が一人で頑張る理由なんて、無いよ?』

カナンの言う通り、なのはの言葉もまた、ハルの心を揺らしていた……。

「うるせぇんだよ……。てめぇらは……」

それらの言葉から目を背けるように、ハルの右腕からは覇神の力が溢れ出す……。
空間が歪み、恐ろしげな音を響かせるが、カナンは微動だにせず逃げる気配はない。

「警告だ……。退け……。カナン……」

“一応”ハルは警告としてそう言った。
そう、一応だ。
この質問に意味はない。
――コイツが、夾に似てるなら……。
「バーカ。言っただろ？」
ニヤリと笑うカナンの、髪が、瞳が、黄金に染まっていく……。
「嫌だね。通りたいなら俺を倒して通るんだな」
溢れ出る魔力が覇神の力を押し返し、激突する力と力は衝撃波となって吹き荒れる。
――やっぱり、な。
予想通り過ぎる答えに内心溜め息をつきながら、ハルは拳を握り締めた……。
――俺の考えは変わらない……。理想を叶えるためなら、少しの犠牲は、切り捨てる！
「交渉決裂……。死んでも恨むなよ！」
「上等だ。こちとら細かい話は苦手なんだ。てっとり早くて助かるぜ……」
瞬間、二人は霞と化し、消え去った……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「消え去れ！！！」

「黙れど阿呆！」

怒号を響かせながら、カナンとハルはぶつかり合う！
抜刀からの横薙ぎと左回転からの蹴りが、上段の振り下ろしと下段の打ち上げが、激突する衝撃に痺れを実感しながらハルは突き進み、カナンは剣を鞘に納めた……。

「壱式……！」

クンと、カナンが一気に膝を沈め、腰を捻る。
いつもと違う構えにハルは警戒し、だが止まらない！

「暗夜！」

――速い！

その一太刀は光線のように黄金の軌跡を残し、ハルの膝から下を薙ぎ払う。
視認すら危うい閃光の一撃。それにハルは驚愕しながらも、その一撃を右脚で踏みつけるように止めていた……。

「粉塵、裂脚！」

輝く右脚、数倍に膨れ上がる脚力にモノを言わせ、ハルは剣を踏み砕かんとする！
蜘蛛の巣のようにひび割れて行く地面、軋むカナンの両腕。

それでも、少年はニッと笑った……。
カナンが剣を握りしめ、見る。
“ハルの後ろにある空を”
瞬間、ハルに衝撃波が打ち付けられる。
同時にハルの右脚が“何もない地面”を踏み砕いた……。
――加減無しの、突破か！

先の衝撃はカナンがハルを突き抜けた余波。
ハルがそれを認知した時点で、カナンは既に雲の上……。

「一閃ッ！」

雲が光に穿たれ、その中心に大穴を開ける。
直後、上下逆さになりながら、ハルに叩き込まれるは雷をも抜き去る神速の斬撃。
かろうじで右腕を持ち上げるも、超高度から叩きつけられた斬撃を殺しきれず、ハルの身体は沈み込む……。

「はぁぁぁぁあああ！！！」

非殺傷と言えど、人体を圧殺しかねない威力を打ち込みながらも、カナンは尚力を込めることを止めない。
“少しでも負荷を与えるために。”
カナンはもう知っていた。
自分がこの後どうなるのかを……。

「ウッゼェ！」

ハルが怒鳴り、箱を無理矢理抉じ開けるように、ハルの腕がゆっ

くりと確実に持ち上がっていく……。

「メイデン！」

『ああ！』

ハルが斬撃を受けたのは覇神から授けられし、右腕。

覇神の力と言えど、直接打ち込まれない限りはロストロギアであるエクスカリバーに干渉はされないが、その右腕の恩恵は、滅することのみではない。

ハルの右腕から先は人間からかけ離れた構造をしている。

それらも全て右腕の力だ。

ただでさえ、アスラで強化されたハルにその力も加われば、正に止められるモノはほとんどいない。

そしてそれは、カナンも同義だった。

「邪魔、だぁぁぁ！」

右腕が振られ、あっさりと、カナンの身体は直角に吹き飛んでいく……。

結界内に取り込まれていた建造物を突き抜け、カナンは真っ直ぐに飛んでいく……。

「ちっくしょ……。クソ力め……」

『やはり、力では勝てないな……』

ビルの三つ目を突き抜け、四つ目に激突してようやく、カナンは止まっていた……。

先に身体強化をしたため、外傷はそれほどでもないが、流石に右腕の一撃を止めることは出来ない。

『速度を計算に入れても、この戦い、かなり厳しくなるぞ……』
「んなもんわかってる……」
――でも、それでも！
カナンとハルとの間に開く距離は約２００ｍ。
土煙が舞い上がり、視界は悪いが、音は聞こえた。
２００ｍ以上離れているにも拘わらず、ブン、という音が……。
――無理矢理にでも、押し付けがましくても、“まだ”俺が、アイツを止めてやらなきゃ！
キン、と、空気を振動して、鞘に剣を納める独特の金属音が静かに、鳴り響く。
そして、膝を落とす。
行ったのはそれだけ。
されど、周囲の空気は糸を張り積めたように引き締まる……。
「てめぇは……」
瞬間、土煙を吹き飛ばして、巨大なビルがカナンに突っ込んできていた。
それは、ハルが投擲したに他ならない。
視界を覆い尽くすビルを前に、カナンは歯を食い縛る。
「死にに行くんだろうが！」
カナンが抜刀した直後に閃光が縦にビルに疾り、貫通する！
正に一刀両断。
カナンの左右に別れてビルは一直線に吹っ飛んでいく！

「てめぇだって何度も何度も死にかけてんだろうが！　それと何が違う！？」

しかし、ビルはブラインドでしかない。
その影から残像を残し、ハルは突き進む！
カナンは抜刀から剣を斬り返し、ハルは左腕を叩き込む！

「俺は死にに行くために命賭けてんじゃねぇよ！　いつ、俺が死ぬために命賭けて突っ込むっつった！？」

「てめぇが突っ込むのは死にに行くのと同義なんだよクソガキが！」

旋風が巻き起こる。
それらは、剣と体術とを激突させた余波で起きたモノだ。
だが、その中心にいる二人は意に介すことはない。
元々、単体で次元震を起こせる二人にとって、旋風など微々たるモノだからだ。
“そんなこと”よりも、二人は相手に一撃を叩き込もうと、より速く、鋭く、霞と化して打ち込み続ける！
単純な話、ブチキレている。

「それでも死にに行ってくるなんて言ってねぇだろうが！」

怒号をあげながらカナンは大上段から叩きつけるようにして振り下ろし。

「結果的に周り巻き込んでなんとか助かってる奴が何言ってやがる！」

同じく怒号をあげながら、ハルは、左脚を蹴り上げる！
中心にて激突する一撃は周囲の建造物を木端微塵に打ち砕く！
力で勝てないカナンは、押し負けたその反動を利用し、カナンは宙天、閃光を疾らせる。
直後、円を描くように空間が斬り裂かれる……。
驚愕に見開かれるハルの瞳。
剣に集束されるは、黄金の極光！

「てめぇだって今同じ立場だっつの！」

撃ち放たれた極光。
それらは、円形に五つに裂かれた空間からハルへと向かう！
集束砲一発一発は対した威力は無いが、合流すればSランクに到達する！

「てめぇらが……」

眩い光を前に、ハルは逃げない。
ギシリと空間が軋み、右腕から紅いオーラが立ち上る……。

「勝手に来てんだろうが！」

拳を解いた右腕を突きだし、受け止める！
触れただけで強層結界をも突き抜けるSランク相当の集束砲撃を受けながらも、ハルの右腕は揺らぐことはない……。
集束砲の衝撃は確かにハルに襲いかかっている。
が、身体強化を行うハルの障害となりはしない。
数秒の拮抗の後、押し潰すように、拳が閉じていくにつれ、集束砲は歪に形を歪ませる……。

「来るに……」

「チッ！」

ハルの背後で、風が揺れる……。

歪んだ空間からカナンが現れ、剣を納める姿をハルは能力で捉えた。

大地から力が噴き出し、その身と剣にみなぎり、輝く！

放つは四式金剛閃牙！

「決まってんだろうが！」

メイデンとのユニゾンでは、威力がSランクに届く数少ない剣撃だ。

刹那、カナンが消失し、次の瞬間には横一閃に黄金の閃光が突き抜ける！

その閃光すら、カナンの速度には程遠い。

「はァァァアアア！！！」

「くっ！」

だが、ハルは左腕を持ち上げて受けることに成功していた。

カナンの速度は、ハルの希少技能と、桁外れの身体能力、アスラの身体強化、この三つが揃っても、危うかった。

事実、ハルの重心は片寄っていた。

しかし、危うかったとしても、ハルは止めた。

その事実は、変わることはない。

二人の周囲に黄金の粒子が散る……。

それは、カナンが時間稼ぎに放った集束砲が、ハルの右腕に粉砕されたことを意味した。

カナンがハルに勝てる要素はスピードだけ。
それを失った時点で、カナンの勝利は限りなく薄くなる。

「終わりだ！」

軋む空間、打ち込まれる右腕、迫る絶望。
それらを前に、少年、カナンはニヤリと笑う。
カナンのスピードは、まだ、死んでいなかった。

「誰が終わるかァァァァァァ！！！！」
『は、はい！！』

右腕を前に、得物を放棄し、カナンは消え去る。
この時、ハルの反射能力は普段を遥かに凌ぐ速度であり、カナンが消えた瞬間、否、能力を使う気配を見せた時から既に自身の能力をフル稼働していた。

――どこ行った！？

全ての景色がスローモーションで動く中、ハルの意識は結界の中を駆け巡る。
瞬間、鳩尾に内蔵が潰れたかと思える程の衝撃を受けた……。
受けてから、ハルは気づいた。
カナンが、自身の懐に潜り込んでいることに。
そして、利き手ではない、右腕で、さらに裏手で、金剛閃牙を叩き込んでいることに。

「ご、ふ……！」

「おおおぉぅぅらぁぁあああ！！！」

吐血したハルに構わず、カナンは空間突破で突っ込んだそのままの速度で、ハルを結界の壁に叩きつけた……。
結界に、激震が疾り、大きく揺れる。

『主、右手は大丈夫ですか？』
「……やっぱ折れた……。治しといてくれるか。俺、余裕無いからさ……」
『わかりましたが……先程の一撃は……』
「抜刀のために左手戻してたらアイツが反応するからな。無理言って悪い」
『いえ、私はいいですよ。少しは驚きましたが……』

カナンが何をしたか、簡単に説明すると、ボクシングのワンツーが近い。
一発を牽制に使い、二発目に本命を打ち込む。
カナンはその本命を右手で行っただけ。
右手で足りない力は即座にユニゾンチェンジしたレナスの力で補い、増強する。
かなり強引な手であることはお分かりいただけるだろう。
その代価が、現在のカナンの右手首骨折、ということだ。

「てめぇは、俺の気持ち、考えたこと、あるのかよ……。家族も、親類も、仲間も、死んでいったんだぞ……。俺のせいで！」

舞い上がる粉塵が吹き飛び、中心にはハルが立つ。
冷たい殺意を放つハルを見て、カナンは何故か悲しみを感じる……。

『主……』

「レナス、一瞬もユニゾン解くなよ……」

納めた剣に軽く手を乗せながら、カナンは緊張を高めていく。
静かに、ハルは歩み出す。
緩やかに加速を始め、数秒後には弾丸と化す！

「わかんのかって聞いてんだ！」

絶対の威力を誇る右腕が真っ直ぐに打ち抜かれる。
しかし直線。
瞬間で屈んで避けたカナンは刹那に抜刀し、ハルの首筋を斬り払う！
瞬間、吹き飛んだ。
ハルではなく、カナンが……。　何の重心移動もない。ただ、左腕を振り払われただけ。
それだけで、レナスの力を借りているカナンを吹き飛ばした……。

「く、そっ！」

仰向けに吹き飛ぶカナンは、クルリと回転し、着地と同時に前を睨む。
その眼前には既に、ハルが旋風巻き上げて踏みこんでいた……。

「ごあ！」

直後、反応すら間に合わず、ハルの蹴り上げがカナンの顎を打ち上げた……。

「調子ノッてんじゃねぇぞクソガキャァ！」

浮いたカナンの横腹を狙い、跳躍しながらハルの右脚から蹴りが薙ぎ払われる！

「うるっせぇ！」

対し、打ち上げられながらも、カナンはグルリと回転し、そのままの勢いで蹴りに剣を斬りつける！

大地の力とアスラの力が拮抗を結び、剣と脚は銀色と空色の波動を打ち放つ！

衝撃に揺らぐ結界、ひび割れる地面、加減の文字は欠片もない。

「ちっ！」

数秒の拮抗は突如崩れ、弾丸のようにカナンが吹き飛ぶ！

しかし、そのカナンより尚早く、ハルが駆ける。

が、ハルは追撃の最中に身体を右に半歩ずらす。

「はぁっ！」

瞬間、そのハル残像を脳天から股にかけて、銀の光が叩き割る。

外したことを感覚のみで察知し、脊髄反射で身体は反応する。

銀光は止まらず、直角に進路を変更、叩き斬る！

斬れた筈のその姿が消え去った……。

――これは、アイツの！

背後に回り込んだ筈のカナンの背後に、ハルがいた……。

カナンの空間把握でも捉えることが出来ないその動き。

正真正銘、グラースや夾が使っていた空間転移術、縮地だ。

「オオオオ！」

ギシリ、と空間が激しく歪む……。
普段は小振りなハルが大きく右腕を引き絞った。
いかに縮地で回り込んだとはいえ、それだけのタイムラグがあればカナンは逃げ切れる。
だが、カナンは逃げを選ばない。
数mの距離をとるだけでハルと正面から対峙する。
その理由はハルが意味もなく好機を逃すとは思えなかったから。
そしてその予感は当たる！

「滅破旋掌！」

空間の悲鳴と共に圧縮される空気、否。大気。
硬く固められた大気はハルの右腕から放たれ、それらはハルの前面を覆い尽くす。
一見、何事もなさそうに見える風景。
しかし、空から見れば人目でわかる違いがあった。
ハルから先の風景が潰れていっているからだ……。
何が起こっているのか、そんなことを考える時間は等に無い。
カナンの中にあるのは、空破掌の発展だろうと言う予測だけ。

「カラド、ボルグッ！」
『主なら出来ますよ！』
『ああ。マスター、狙いは一点だ』

カナンの前面に銀の三角形が浮かび上がった。
術式は無論、古代ベルカ式。
大円、中円、小円という順に並ぶそれらは回転し、銀の円となる。
その中心を睨み、カナンは銀の剣を振り上げる。

金の光をエクスカリバーを太陽とするのなら、銀の光を放つカラドボルグは闇夜を照らす銀月。

「ぶち抜けぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！！」

優しさと苛烈さを輝かせる銀月を残光残しながらカナンは振り抜く！

撃ち放たれるは銀の集束砲。

巨大な集束砲は、円を通る度、小さく、鋭利に変化する。

拡散とする魔力を圧縮し、より密度を高く、より鋭く。

三つ目の円を越えた時には既にその光は銀の槍と化す！

銀の槍は、膨大な大気の塊と激突し、歪み、弾け、しかし、砕けない！

激突した二つの周囲で、激烈な紫電が疾り、結界の中を暴れまわる！

突如、紫電が一際輝いたかと思うと、鼓膜を破壊しかねない程の轟音と共に弾け飛ぶ！

「くっ！」

弾けとんだのはハルの技もまた同じだった。

広範囲のハルに対してカナンは一点貫通を行った。

簡単にすると、紙の中心に鋭利な針を刺したようなもの。

当然、針は紙を貫く筈。

そして、貫いた針、集束砲は、その向こうハルをも穿つ！

咄嗟に構えた右腕で槍を受け止め、されど押し込まれる！

――だが、まだ！

限界を知らないかのように、ハルの右腕が吠えるように紅く輝く

……。

分解されるようにして、魔力の結合が砕け、消え去り、粒子と帰る……。

――あと、少し！

「はぁぁぁっ！」

全ての意識を槍の破壊へと向け、ハルは遂に槍を砕ききる！

雪のように、銀の光が舞い散る中で、ハルは後悔した。

“全ての意識を”槍に向けてしまったことに。

カナンの動きから、一瞬でも意識を逸らしてしまったことに。

「っぁぁぁあああ！」

その一瞬。

それをカナンは見逃さなかった。

ハルの意識が逸れた直後に砲撃をカットし、空間突破で駆けていた。

一秒を延長した世界。

そこでハルは自身へと向かうカナンを見る。

ひどく、鈍く感じた。

カナンも、そして自身も。

剣の軌道は頭。

全重心と大地の力を乗せた必殺にも等しい斬撃。

来るのがわかっているのに腕は鈍く、ほとんど動かない。

――負けたな。

清々しい程の思いを感じながら、ハルはカナンを見る。

必死な表情を見て、笑いそうにすらなった。

『我は覇界神。グラースなり』

――ッ！

景色が朱く染まる……。

首を跳ねられた親、宙を飛ぶ親類、半身が千切れた友達、扉も、壁も、床も、食べ物も、一面にある色は鮮血の、赤、紅、朱。

――あの日が始まり……。

『あの人カッコイイから私の執事にするですの』

――無茶苦茶な出会い……。

『俺、綾瀬夾。新入り、お前の名前は？』

――そして、ムカつく奴と出会った……。

『千春。千春ねぇ……。ハルでいいだろ。な♪』

――手を引かれて、希望に手を伸ばした……。

『今から、助けてやる……』

――でもソイツは、俺のせいでいなくなった。

必要とされてたソイツの代わりに、生き残ったのは、朱皇千春、なんていうどうしようもない屑。

夾は皆に必要とされていて、幸せだった。

それを奪ったのは俺だ。
だから、その幸せだった時間を、返してやると決めた。
その間に、たくさんの護りたい人達も出来た。
こんな屑の命でたくさんの人が助かるなら、俺は喜んで死んでやる。
だから、だから！

「……お前、しつこいぞ」

轟音が響き渡り、静けさに包まれた結界の中で、発せられた声はカナンの悪態。
その悪態の中に混じる感情は呆れしかない。
銀の剣は、ハルが持ち上げた左腕一本が、かろうじてその眼前で止めていた……。
ハルを動かしたモノ、それは、腕力でも技術でも無く、想い。
昔、ハルが理解出来なかった不確かなモノ。

「終われねぇんだ……。グラースを倒すまでは！　相討っても絶対に成し遂げる！　こんな俺でも、誇りなんてもんがあるなら、それが俺の唯一の誇りだ！」

振り払われる左腕。
振り出しに戻ったかのようにカナンはクルリと着地する。
俯いたカナンはユニゾンを解き、剣を納める。

「カナン……。退いて、くれるのか？」

静かに佇むカナンに、ハルは歩み寄り、前に立つ。
言葉を探すかのようにハルは視線を巡らせる。

「悪い……。後は頼む……」

たったそれだけを告げて、ハルはカナンの隣を通り過ぎる。
否、過ぎようとした。

「それが……」

「カナ、ン？」

ゾワリと、背筋を冷たいモノが這う。
驚いて振り向くと、軋む空間と、紫電の中心で、莫大な魔力を放つカナンがハルを睨んでいた。

「それが、誇りなんて、ふざけんじゃねぇよ！」

「っ！」
怒鳴る。
ただそれだけで無茶苦茶な魔力波が放たれ、ミシミシと結界が歪む。

「誇りってのは絶対に譲れないモノがある時に懸けるモノだぞ……。俺はお前が“死にに行く”ことを止めに来たんだ。お前が、最初っから帰れる可能性があることを諦めてるから、それを止めに来たんだ！　俺は、俺はなぁ！　お前が一言帰ってくるって、それだけ言ってくれたら、止める気なんか無かったんだ。協力するつもりでさえいたんだぞ……。それが何だよ……。死にに行くことが誇りだと……？　譲れないモノが死んで通す道だと……？　ふざけんなよ……。ふざけんなよてめぇ！！！！」
怒りながら、カナンは涙を流し、ハルを睨んで怒鳴り続ける。
カナンの気持ちを知って驚いていたハルだが、ハルも止まる気は、無い。

「俺なんて屑の命よりか、大事な奴等がいる……」

「そうやって、最初から諦めてる奴は大嫌いだ！　足掻けよ！　這ってでも生き延びる方法探せ！」

「足掻くのは、もう疲れた……」

「逃げてんじゃ、ねぇよ！」

ブチり、そんな音が響き、カナンは怒りの余り食いちぎった唇の端から血を流す……。

瞬間、爆発するように魔力が炸裂し、建造物が一挙に崩れ去った……。

身体を全て漆黒に身を包み、怒りに燃えた紅蓮の瞳がハルを射抜く……。

「オーバードライブ……使えるのか？」

「……てめぇのお陰でな」

「だが、それを使うなら確実に息の根を止める」

「好きにしろ。出来るならな……」

カナンが呟き、瞬間に結界が張り直される。

その数、グラースと戦っていた時と同じ、四枚。

「もう細かいことは無しだ……。俺を殺せばお前は進む。俺は時間になるまで足止めする。いいな……」

「異存はない……」

正真正銘、互いの命を賭けた戦いが静かにゴングを鳴らした……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

同時刻。

白姫家にて、天津詩織が忙しく歩き回っていた。

ちなみに、何一つ忙しいということはなく、本日も白姫家は平和である。

ならば何故、詩織がパタパタと歩き回っているのか。

「はぅ～。また迷いました～……。ここはどこですか～。危ないのです。英語で言うならデンジャラスなのですぅ～」

何のことはない、ただの迷子だった。

とある目的地に辿り着けずに迷子になっている。

詩織は、一応、ハルの先輩に当たるため、この屋敷にはハルより長く住んでいる筈なのだが、未だに目的の場所へ間違わずに一発で行けるのは入口である扉と、お出迎えの門程度のものという、壊滅的な方向音痴だった……。

ハル曰く、デバイスの知識以外は幼児並、または以下。

「はっ！　これはまさか、壁が勝手に動いて迷宮へと私を陥れようとしているのですか!?　ぴ、ピンチなのです！　で、でも私、めげません！　天津詩織はめげないことが強みなのです！　ファイト～、オ～！　です！」

そうして自分を励まして歩くこと約五分。

「あれ？　詩織さん、また迷ったんですか？」

「ま、迷ってないです。そう、これは探索なのですよ」

と、詩織は答えるものの、信じる人物はこの屋敷にはもういないことを詩織は知らない。

「はぁ。取り合えず、お気をつけて」

「は～い～。ありがとうございます……っちょわぁ！」

執事に見送られた直後、詩織は何もない所で豪快に転けて顔面を床とぶつける。

「大丈夫ですか！？」

「大丈夫です。慣れていますので」

「……あの、本当に大丈夫ですか？」

「本当に慣れていますので～大丈夫ですよ。ご心配くださりありがとうございます～」

その言葉に嘘は無く、転ける瞬間に眼鏡だけはどうやったのか死守していた。

ただし、執事の二度目の質問は、転けるのに慣れを感じている詩織の頭を心配していたのだが……。

詩織はしるよしもなく、歩いていく。

「あ、静瑠様、おはようございます～。お早いですね」

「あらあら、主任さん、ええ。おはようございます」

やんわりと挨拶する二人。

のほほんとした空気が周囲にまで満ちる。

「それで、また迷子かしら？」

「うっ！　あはは～。違いますよ～。ちょっと探し物をしているのです」

瞬間、詩織の心をグサリと言葉のナイフで貫いた……。

事情により言い辛い詩織はなんとか苦笑いで受け流し。

「ふふ。探し物って御花かしらね？　摘みに行くのなら真っ直ぐ行って四つ先の左の扉よ？」

「……ありがとうございますでず……」

とある目的地とは、静瑠が言った通り、御花摘み。簡単に言えば化粧室、さらに簡単に言えば、御手洗いのことだ。

詩織が迷子にも関わらず人に聞けなかった理由はこれにある。

静瑠に当てられた詩織は、恥ずかしさのあまり、半泣きになりながらほとんど全力疾走で走り出す。

「ふふ。主任さん、楽しい人ね」

静瑠の笑みを見て、周囲にいたメイドや執事はなるべくこの静瑠には関わりたくないと思ったのは言うまでもない。

「死ぬかと思いました～。まさか、あんなトラップがあるとは……」

用を済ませた詩織は、家の中にいると危険、ということで外に追い出されていた。

ついさっきも、化粧室で洗剤を引っくり返したあげく、撒かれた洗剤の上を滑って回転して勢いを乗せた蹴りをタンクに叩き込んで穴を開け、化粧室を一つ水浸しにして壊滅させた程度の被害を起こしていた。

「はぇ～。私って、どうしてこう、上手くいかないのでしょう……」

――ハルさんや夾さんは、それこそ魔法みたいに何でもやっていましたのに……。

「何か、他に出来ることを探さねばですね。主任さんの名が泣きます！」

「ファイト～」と、詩織が定番の自己暗示のようなことをしていると、来客の知らせの鐘が鳴り響く。

「そうです！　これくらいなら大丈夫です」

そう思い、詩織は門にあったカメラの映像を自身のコンソールに展開する。

応対くらいなら問題ないと、

大概の人物が車で訪れる屋敷に、その人物は珍しく徒歩。　執事服を身に纏い、ワックスなどの類いを全くつけていないそのままの髪。日本人にしては大きい、１９０近い身長。

というより、その人物は白姫家において知らない人物がいない、

“朱皇千春”であった。

「ハルさんじゃないですか！　何故鳴らしたのです？　ハルさんなら認証で終わりですよ？」

「あははは。すみません。少し驚かせたくなりまして」

「ダメですよ～。朝とはいえ、忙しい方もいらっしゃるのです～。私だからまだいいですけど」

責めつつも、笑いながら、天津詩織は、“朱皇千春”を屋敷の中へと迎え入れた……。

後編に続く

第三十七話　誇り　（後編）　（前書き）

期限を守れなくてすみません（汗）

ほぼバトルオンリーですが、楽しんでいただければ幸いです♪

第三十七話　誇り　（後編）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

クラナガン、結界が張られている土地へと、魔導師達は飛んでいく。

カナンとハルが戦っているのはミッドチルダ、首都クラナガンのど真中の市街。

当然、無許可。

カナン達は知らない所であるが、管理局は既に動いていた。

既に一個中隊の規模で武装隊は現地へと急行する。

「ＡＡＡランクオーバーなんてバカでかい魔力で戦ってる……いや、それ以前に持ってる奴なんて……かなり限られるってのに」

魔導師の集団の中、とある局員がぼやくようにポツリと呟く。

計測された魔導ランクは、ＡＡＡランク。

しかも、世界と切り離している結界から漏れだしている量のため、実質さらに高くなる。

しかし、局員達の中にはそれほど緊張はない。

中隊規模という人数から生まれる余裕があったからだ。

意見は多々あるが、やはり、単純ながら人海戦術は有効な手段であり、確実だ。

そう思いながら、局員達は結界の手前へと１００ｍの位置へと着地する。

「何だ、これは……」

隊長は局員に待機の命令を出した。

何故か。
それは、結界周囲１００ｍの位置に目印をつけるように、地面を削った後がびっしりとあったからだ。

「そこから先は、進むことはお薦め出来ませんわよ？」

「何……？」

そんな威圧的な声が響き、トンっという軽い音と共に、一人の女性が舞い降りた。

「海城、三佐……！」

隊長の瞳が見開かれる。
その女性とは、海城・Ｇ・凛。
強大過ぎる力故に、訳ありの人物が揃う、零番運用部へと移転させられ、その中で部長を勤める女性だった。
その名を知らぬ者は管理局にはほとんどいない。

「これは、三佐が？」

指を指した先には削られた地面。
質問に対して凛は「ええ」と頷いた。

「目印でもしておかないと、無駄な犠牲が増えますので、警告の意味を込めて」

「警告、ですと？　何のです？」

さらに隊長が質問を重ねると、それくらいわかれよと言わんばかりに凛は隊長をジト目で見る。

「では、隊長さん、その線から一歩、前へ進みなさいな」

「は、はぁ」

よくわからないまま、隊長は一歩を踏み出す。

直後、隊長の膝が崩れ落ちた……。

その線を越えた瞬間に、身体中を寒気が走る。

加えて重圧のように重い魔力がのし掛かり、身体は最早いうことを聞かない。

遠くなる意識、手放す直前に凛の溜め息を聞き。

「お分かりになって？」

凛に胸を押され、尻餅を着きながら隊長は日常へと帰ってきた。

中にいたのはほんの数秒。

しかし、隊長には耐えきれなかった。

「今のは……まさか」

「中で戦っている人物の力と魔力、その一部です」

隊長は信じられない。

中で戦っている人物の力が、そして、その範囲内にいながら、平然と立っている凛が。

「レイ！　ヴェイン！　アレイザ陸曹！　結界が歪んでますわよ！　早く直しなさい！」

そして、異常な人物はまだいた……。

その範囲の中で、結界維持に集中している二人の男性と、一人の少年

「つってもこれ実際かなり辛いんですけど！」

歯を食い縛りながらヴェインが不満を漏らし。

「我慢しろ！　持たせ無かったらまた地獄なんだ！　というか、後でまた大量の始末書書かされる！」

その横でレイがもう嫌だと言わんばかりに叫ぶ。

「ミスったら俺の始末書、任せた！」

爆風にも等しい中で、ヴェインはかなり本気で叫び返し。

「ふざけるな！　ただでさえ俺は多いんだ！」

冗談ではないと負けじとレイは怒鳴り返す！

「ふふ。お二人共まだ元気ですね」

その二人の間で、ニコリと女の子のような笑みを浮かべながらクレイが笑う。

「「どこが！」」

「十分元気じゃないですか」

結局の所、三人はまだ余裕なのだった。

その光景を睨むのは凛。
背中越しに三人は寒気を感じとる。

「「「持たせます！」」」

「持たせる、ではなく、直しなさい。いいですわね？」

「「「了解です！」」」

三人に喝を入れた後、凛は改めて局員達へと振り向く。

「貴殿方が武装隊という誇りがあるのは存じています。ですが、この力は一定以上の力の持ち主以外は近づくことすら出来ません。ここにいても犠牲が出るだけですし、ここから先は私達が引き継ぎます。異論は？」

スッと、手が上がる。
手を上げたのは、隊長。
凛は嫌がる素振りも見せず、「どうぞ」と言った。

「海城三佐、我々に手伝えることは……」

「ありませんわね。邪魔になるだけですから帰っていただけると助かります」

凛は遠慮をしない。
下手に遠慮をして巻き込むことを嫌う。
厳しいようだが、これは凛の優しさでもある。
知ってか知らずか、それで隊長は引き下がった。
何も出来ないことに悔しがる人物が何人もいた。

「恥じる必要はありませんわ」

優雅に踵を返し、凛は結界へと進んでいく。

自分も、防衛線維持に加わるために。

「これは、神との交信を可能とする者の戦い。擬似的にとはいえ、神同士が戦っているようなモノなのですから恐れて当然。寧ろ、その恐れを大切にしなさい」

「神との交信？　神同士が戦う？　貴女は何を？」

凛の言葉を信じられない武装隊はざわつく。

「質問に答えるつもりはありませんわ。それより、帰るなら早くお帰りになった方がよろしくてよ？」

「は？」

キョトンとする武装隊。

瞬間、結界にヒビが拡がり、内部の力がさらに漏れだす……。

その力は凛の目印を越え、武装隊を呑み込んだ……。

「ですから言いましたのに……」

呆れ返る凛の背後で、武装隊の隊員は意識を失い、一人残らず倒れてしまった……。

武装隊を捨て置き凛は三人の背後に立つ。

救助をしている暇は、無い。

「状況は？」

「部長、アイツらが、キレました……」

レイが冷や汗を流しながら現状を報告すると、凛は「頭が痛いですわ」と呟き、しかしそれも一瞬。

次の瞬間には部長の表情を取り戻す。

「結界維持に専念、この際砕けなければ構いません。多少雑でも良いですから、全力で押さえつけなさい」

「「「了解！」」」

結界の外でもまた、戦いが始まっていた……。

神と神との力を、押さえつけるために……。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

遥か空の上、そこに存在するのはメイデンとレナス。

地上のカナンを案じるかのようにジッと見る。

「姉さん、姉さんから見て、マスターはどうだ？」

「一先ず、暴走の心配はなさそうですね」

「そうか……」

安心したのか、メイデンは胸を撫で下ろす。

一方レナスは、冷静な表情なまま崩れることはない。

「……主は凄いですね。きっかけ一つで、あれだけの力を制御して

しまうのですから」

「あ、ああ！　何せ、私達二人を使いこなし始めているからな。マスターは凄いんだ！」

ポツリと呟いたレナスにメイデンは誇らしげ笑う。

一方レナスは、カナンから目を離さない。

――主、貴方は本当に凄い人です。それは、誰もが認めることでしょうね。

より一層集中を始めた姉に習い、メイデンもまた、眼下へと視線を向けた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ッ！」

何の小細工もなく、カナンは短い呼気の吐くと共に消失する。

駆けるは一瞬、左腰から抜刀し、ハルの胴体に剣を叩きつけ、されどそれは叶わない。

瞬間で反応したハルが右腕の肘鉄を剣腹に打ち込み、叩き落としたからだ。

左腕にかかった衝撃に、カナンは表情をしかめた。

――流石に、重い！

重心が右に偏る。

直後に襲うハルの左腕。

加速した思考が答えを弾き出し、カナンの右手が剣を求め右腰へと霞む。

黒閃が疾り、左腕を迎撃、その一撃は左腕と激突し、押し負けるが、カナンは拳の進行方向に合わせて回転する。　腕を巻き込むようにしてカナンは左腕を避け、回転から斬撃を叩き込む！

「らぁぁっ！」

「っ……」

後頭部。

そこにカナンの剣は打ち込まれ、ハルの身体は衝撃に前へと揺らぐ。

だが、ハルは倒れず、強引に回転し、振り向き様に右脚から蹴りを放つ！

その蹴りは空を斬る。

カナンは跳躍し、避けていたからだ。

それを狙い、ハルは蹴り上げへと変更、カナンを“突き抜ける”。

空間を繋ぎ、ハルを貫通したカナンはその背後。

既に剣を納め、柄へと手をかけていた。

「粉、塵！」

背後を取られたハルは右脚を輝かせ、振り下ろす！

「絶空……」

抜刀された際に摩擦によって火花が散り、カナンの周囲に円を描く……。

「裂脚！」

直後、右脚は叩きつけられ、地面を易々と踏み砕き、石礫が弾け

飛ぶ！

「旋龍破ァァ！」

カナンが咆哮を上げると同時、衝撃波が放たれ、砕ける地面の進行を止め、ハルが散らせた石礫を押し返す！

「チッ！」

衝撃波を至近距離で受けたハルは対応が間に合わず、石礫を全身に受けながら暴風に吹き飛ばされていく……。

「はぁぁ……！」

体勢が不安定なハルに向けて、剣を振りかぶる。
集束するは夜より深い闇を映す漆黒の塊……。

「エクス、カリバァァァァ！」

オーバーSランクを持って、漆黒の砲撃はハルの姿を呑み込み、吹き飛ばす！

『いい？　カナン。確かにカナンの能力は高いけどそれを過信していつも突っ込んだ戦いしてちゃいけないよ？』

朝、模擬戦をやるまえに、フェイトから聞いた言葉。
初めて、人から教えてもらえた魔法での戦闘方法。

『長所を生かせる戦い方を覚えないとね。頭の中で構想を組み立てて、相手に合わせて組み換えて、一番大事な所で一番ベストな状態に持っていく。じゃあ、やってみようか』

――今が、ベスト！

ギシリと空間が歪む……。

ハルの進行先に、宵の闇をその身に宿し、カナンが現れた……。

「抜刀剣術、零式！」

そこには、剣を完全な形で型に入り、二本の剣に集束を終えたカナンがいた……。

集束された漆黒は日蝕を起こした月のように、光を食い尽くす……。

「龍神！」

ハルが吹き飛んだ勢いと踏み込みの勢い、二条の力が合わさった斬撃がハルの背へと疾り、弾き飛ばされるようにハルの身体は地面に落ちる。

「が、あ！」

「演武！」

抜き放った剣の勢いのままに、回転しながら、右の剣を振り払う。

顕れるは六属性の龍。

龍は顎を大きく開き、ハルへと牙を向く。

落ちながら、ハルは右腕を大きく引き絞る。

その右腕には大気が圧縮され。

「はぁぁぁっ！」

解き放たれると同時に眼前のモノを破壊し尽くす……。
それは、龍もまた同じ。
抵抗もままならないまま、潰される……。

「黒龍天墜顎！」

しかし、その大気の壁をも喰い破り、巨大な黒龍がハルへと突き進む！

「ぶち抜く！」

打ち出されたハルの右手の拳が解かれ、開かれる……。
右腕一本。
それだけで、ハルは龍の突撃を押し止め、直撃を免れる。
それどころか、龍を破壊しにかかった……。

「な、に……？」

だが、その瞳は驚愕に開かれることとなる。
月が、在った。
黒い、黒い月が。
“自身の真下に”
そこに、カナンが、いた……。

「双ォォォ牙ァァァッ！」
黒い月は黒い龍へと姿を変え、下からハルに食らいつく。
咄嗟に左腕を出したが、今の身体強化で防げる次元を遥かに越えた一撃。
黒龍は止まらず、初撃の龍へと突撃した……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

上空。時間は少し遡る。

――確かに貴方は凄い人です。それは誰もが認めるでしょうね。

そう思い、レナスは激突する二人を見据える。

メイデンも集中しているのか、言葉はない。

その眼下では、ハルを相手に互角以上の戦いを見せるカナンがいる。

“少なくともメイデンにはそう見えている”。

だが、レナスは違っていた……。

――主、貴方は魔力値、能力値、成長率、天賦の才に、貴方は恵まれています。

カナンが衝撃波を放ち、ハルを吹き飛ばす。

無防備なハルにカナンが空間突破で回り込み、零式を叩き込む。

――その才は、歴代の魔導師達にも劣ることはないでしょう。

それ程の力を、貴方は持ち、尚且つ傲ることもなく、真っ直ぐに道を進んでいます。

ハルが龍達を迎撃し、大気圧で押し潰す。

しかしカナンは止まることなく黒龍を打ち放つ。

受け止め、破壊しようとするハルの背後に、カナンは現れ、二体目の龍を放ち、ハルを挟撃する。

二体の黒龍に、ハルの身体は呑まれていく……。

――でも、それでも……。

「何、だと？」

メイデンが驚愕に染まる。

瞬間、黒龍は膨れ上がり、内部から爆発。

魔風が吹き荒れ、メイデンとレナスの髪を揺らす。

上空にまで伝わる、異常なまでの冷たい力に、メイデンは震えた……。

――まだ、ハルさんには届かない。それが、全てです……。

静かにレナスは視線を落とした……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

無言のまま、ハルは右腕を振り払う。

意志があるかのように紅き力は溢れだし、未だ限界を見せようとはしない。

コツコツと、ハルは歩む。

カナンを殺すために……。

「はぁ、はぁ……あんにゃろう……。底無しかよ……」

対し、一気に莫大な魔力を放出したカナンの息は荒い。

崩れそうになる身体を、突き立てた剣を支えにしてなんと立っている。

いつ倒れてもおかしくない。

誰が見ても、そう見える。

だが、カナンは倒れない。

倒れるわけには、いかない。

――まだ、行ける！

カナンが消え、瞬間に現れた位置はハルの目前。
左の裏手に剣を構え、顔面目掛けて刺突が唸る。
至極当前のように、ハルは持ち上げた左腕で防ぎながら半歩を下がる。

「っぁあ！」

一瞬遅れでカナンの右腕が薙ぎ払われ、黒閃が空を斬る。
半歩の動きのみでそれを避けた。
しかし、ハルの動きは止まらない。
一閃の回避。
カナン相手のそれに、対して意味などありはしない。
閃光の雨。
そう言う他ない幾筋もの太刀はハルへと注がれる！
紙一重。
閃光の雨を身体を霞めながらハルは下がる。
瞬間、カナンは消えた。

「シッ！」

ハルは迷わない。
左に回転しながら、その脚を上段に蹴り抜く！
重い感触がハルの右脚に広がる……。
背後にいるのは剣を縦に構え、蹴りを防いだカナン。
互いに空いた右腕、噴き出すように纏われた大地の力と、覇神の力が輝く……。

「「はぁぁぁぁっ！」」

全くの同時。
相手のことを一切無視した一撃は重低音を響かせた……。
そして、バキリと、嫌な音も鳴り響く……。

「ぐ……！」

カナンの瞳が激痛に見開かれ、直後に霞と化す。
結果は単純。
覇神の力に押し負けたカナンの右腕が粉砕骨折を起こしただけ。
ただ、先とは違い、原型を止めない程、木端微塵に……。
だが、腕よりもカナンには大きな問題がある。
吹き飛ばされているために、無防備なのだ……。
飛行魔法での制御も出来ない……。「……」

進路方向に縮地にて現れるはハル……。
右腕が進む……。
そのインパクトと、カナンのハルへの到達はほぼ同時……。
先に待つは死……。

――応えろ……。応えろ！！

カナンの中で、これは賭けだった。
そう、右腕を犠牲にするまでは“想定内”。
怒鳴る。
一発逆転の引き金を起こせる札を呼ぶために。
しかし、何も起こらない……。

――従えって……。

左腕から剣を放る。
突き立つ剣に意識を向け、魔力を向ける……。

――言ってんだ！！

強引に、それこそ従わせるように、魔力で何かを捩じ伏せ、己が力として身に纏う。
その時点でハルの拳とカナンの距離は数センチ。　炸裂の瞬間、凄まじい暴風が吹き荒れた……。

「……ごほ」

弓なりに曲がる。
ハルの身体が……。
ハルの突き出された右腕は力無く下がり、代わりに、力強く、真っ直ぐに鳩尾に叩き込まれた漆黒の剣……。
その身体の内側に、カナンがいた……。
先にカナンが従えたのは風の力。
飛行魔法が無駄と分かったカナンは、操った風を自らに叩きつけ、強引に身体を拳の軌道からずらし、自身とハルとの勢いを合わせた刺突を打ち込んだ。

――危なかった……。

そう、風が応えなければカナンは死んでいた。
エクスカリバーがあるとはいえ、大規模な自然の力はカナンだけではあまり使えない。
故に、正確には、風が答えたというよりも、魔力で屈伏させたに近い。

「手間かけさせやがって……コンニャククラゲが……」

ハルの鳩尾から剣を引き、カナンは下がる。

ハルを支えて帰ろうと倒れて来る位置に待ち構えて。

――倒れて、来ない！？

「マスター！　まだだ！　まだ終わっていない！」

「主、もう無理です！逃げてください！」

「……が、あ！」

二人の叫びを聞いて、気を張り巡らした頃にはもう遅い……。

右の肩口を打ち砕き、ハルの右脚が炸裂していた……。

「言ったろ……。終われねぇって……」

呟き、ハルは駆ける！

その動きに疲れなどは感じさせることはない。

――焦るな……。同じだ。長所を、生かせ……。

吹き飛びながら、カナンは意識を研ぎ澄ます。

右腕の感触はもうない。

それでも、カナンは逃げを選ぶことはなく、空間を駆ける！

カナンが駆けるは頭上、振りかぶる！

ハルの左脚が迎撃、“何故か互角の力”。

――コイツ、魔力が……。

ハルにかかっていたアスラの身体強化が弱まっているのをカナンは感じる。
無論、カナンも相当の魔力を使用したが、それでもまだ三割以上は残っている……。
――なら、勝機はある！
カナンは肘を曲げ、ハルの懐に潜り込む。
着地の直後に襲う四肢の連打。
得体の知れない右腕だけは確実に避け、その他は受ける。
四肢の内、二つは剣が打ち落とし、右腕は避ける。
弱くなった力とはいえ、それでも受けた腕が痺れる、痛みに悲鳴をあげる。
だが、カナンはただ、受け、避ける。
「ぐぅ！」
それでも、何発かはまともにもらっていた……。
一発は頭に、一発は足に、一発は右腕に……。
だが、耐えた……。
脳を揺らす一撃を足で踏ん張り、崩れ落ちそうになる足を意思で持ち直させ、気の遠くなる激痛に表情を歪ませ、それでも、倒れない……。
「いい加減に……！」
苛ついたのか、ハルは右腕を大きく引き絞る……。
――来た！

その隙の瞬間を逃さない。
オーバードライブで加速した斬撃は、ハルが動くことすら許さず、止めとばかりに頭に打ち込まれた……。

「くっ！」

筈だった……。
打ち込まれた左腕を掴む、ハルの左腕……。
万力のように締め付けられ、抜けない……。

「もう無駄だ……」

――バレ、た！？

まともに打ち合ってもハルには勝てない。
わかっていた。
ならばどうするか？
答えは簡単だ。まともに打ち合わなければいい。
カナンが考えたのは、速度を生かし、相手を捌いた上でのカウンター。
それまでは全て囮。
そう、本気の巨砲すらも、また、囮。
逆に言えば、“本気の巨砲をも囮に使わねば、最初から勝負になりすらしない”。
バレたら終わり。
互角に見えるだけの、実際は、薄氷の上を歩くような、限りなく危険な戦い。
これは、最初から今まで、そんな戦いだった……。
そして、薄氷は……、遂に砕けた……。

ハルの先の苛立ちの素振りはそれを確かめるための布石。
それを今知った所で時間はもう、戻らない。

「死ね！」

打ち込まれた腕を掴み、投げから地面に打ち付ける！
全身を襲う激痛にカナンの意識は明滅した。
跳ね上がるカナンにハルは容赦をしない。
殺すと決めた拳は躊躇無く打ち込まれる。

「ぐ、ぅぅぅ……！」

しかし、左腕は止まった。
仰向けになりながら、カナンは剣をつき出して受け止める。
オーバードライブ状態ということもあり、左腕の進行は止められた。
だが、右腕は、動く！
頭を狙って叩きつけられる拳をカナンはかろうじて首を捻って避ける。
右腕は破片すら飛ばさず、打ち付けた側から消滅させていく……。

「避けるな……」

「ぐ、ぁぁあああああ！」

――コイツ、力が！

避けられたことに苛立ったのか、ハルの左腕が輝き、他の部位の輝きは消える……。
瞬間に襲いかかるのは有り得ない重圧。

ハルは、身体強化のすべてを左腕一本に集中させ、カナンを押し潰そうとする。　地面は耐えきれず、カナンを中心に沈み込んでいく。

――逃げ、ねぇと！

ハルの前からカナンが消え去る。
その姿は既にハルから５００m近い距離をとっていた。

「く、そ……」

カナンの息は荒いまま戻る気配はない。
肉体的なダメージ、精神的な重圧、それらは纏めてカナンに襲いかかる。
寧ろ、この状況で逃げないというだけで、カナンの精神力は相当なモノがある。

――祐希奈、今は感謝しとく……。

度胸と根性を鍛えてくれた祐希奈に感謝しつつ、カナンは気を限界まで張り積める……。

――さぁ、仕切り直しだ……。

そう思い、剣に手をかけ、息を整え。

「消し飛べ……！」

「な、に……！」

背後から響いた声に驚愕に染まる。
そこには既に右拳を打ちはなったハルがいた……。
空間把握を持つカナンが虚を突かれた理由。
それは、ハルがカナンの動きを先読みしたに他ならない。
カナンが退避した時にはハルは既に臨戦態勢で待ち構えていたのだ。
カナンが逃げなければならないよう、追い詰めて……。
再び、生と死を分ける狭間の時間に二人は落ちる。

――くっ！

剣を持ち上げる、そんな動作が酷く遅い……。

――このままじゃ、死ぬ……！

迫る右腕を前に、カナンはそう思った……。

「らァァァァァ！！！」

瞬間、時間の流れが戻り、ハルが咆哮しながら右腕を振り抜いた……。
結界の一枚目に大きくヒビが入り、広がり、砕けた……。
カナンが殴り飛ばされ、激突した結果だ……。
結界の壁には、カナンが磔られたように叩きつけられ、頭から血雨を降らせ、約５ｍの高さから地面に落ちた……。

――流石に、効いた、な……。

闇に堕ちかけたカナンの脳は活動を始める……。
剣越しとはいえ、直撃ならカナンといえど死んでいる。

しかし、正に本能的に、無意識ながらにカナンは後ろに飛んでいた……。
それが生と死を分かち、重傷を負いながらも生きていた。
が、それとてダメージは酷く、立ち上がる等、普通なら出来るモノではない……。
――何で生きてるのか……。わからねぇ……。
しかし、危うい足取りながらも、カナンは立ち上がる。
朦朧とする意識を繋ぎ、震える膝にむち打ちながら。
――けど、動ける……。なら、行こう……。
血が失われ下がっていく体温。
次いで、低下する思考速度。
到底戦えるとは思えない状態になりながら、カナンは前を見て進む。
諦めの意思は、無い。
「……かかって、来いよ……。まだまだ余裕だぜ……」
震える左腕を上げ、中指を立てて内側に引く……。
それは、挑発のサイン。
ハルは、死した瞳でその行動を、ただ、見た……。
パキリと、ハルの指の間接が音を鳴らす……。
「っ！」
直後、カナンは首を捻る。
宙に残るは紅い軌跡。

確実に殺す。
そんな明確な意思を込めた右腕が頭の位置を通過していた……。
ハルの動きに隙は無い。
止まること無く回転し、襲い来るは左脚。
剣を縦に、腕が使えない分を足で剣を押さえ、補い、受け止める。

「ぐあ！」

それでも、ハルの左脚は止まることは無かった……。
直撃では無いものの、押し込まれるようにしてカナンは飛んでいく……。

――頼む。力を、貸してくれ……アイツを止めたいんだ！

剣を突き刺し強引に停止。
瞬間にカナンに溢れるは大地の力。
軋む身体を無視し、カナンは進む。一直線に！

「はぁぁあああ！」

袈裟懸けにハルに振り下ろされた剣。
正面過ぎる、あっさりと避けられた一撃。
それを、ハルは持ち上げた左腕で受けた……。
ひび割れる地面にも構わず、ハルとカナンは視線を交わす。
たった一撃。
それを持って、カナンの攻撃は終わりを迎えた……。
ハルが避けなかったのは、カナンを殺すため以外には理由はない……。
より、容易く、より、確実に……。

「終わりだ……」

呟きが響いた瞬間、再び四肢の連打がカナンを襲う……。

だが、カナンは何か違和感を感じた。

――遅い……？

一撃の重さは変わらない。　だが、ハルの動きは先に比べて遅く、かろうじながら左腕一本で捌いていけた。

振り下ろされた左腕をバックステップを踏み、避ける。

僅かながら距離が開く。

――今なら、反撃出来る！

その距離をハルは一跳びで潰し、右腕を引き絞る。

先刻と同じように……。

しかし、血を失ったカナンの思考はそれを予測しきれず、その懐に深く踏み込む。

「……ぇ……？」

――膝、が！

その身体が崩れ落ちる。

ハルに対抗するために使ったオーバードライブの負担、そして、受け続けたハルの重い一撃の数々。

負担に耐えきれなくなったカナンの膝は悲鳴を上げていた……。

それを見抜いたが故に、ハルは、ギリギリで捌ける速度で体術を放っていた……。

結果、最悪の場面で膝は潰れてしまう……。

「これで、終わりだ……」

「くっ！」

――死んで、たまるか！

向かってくる右腕に対し、出力を最大にしたプロテクションを張る。

これで耐えきれるとは思っていない。

それでも、直撃を受けるよりは、遥かにマシ。

「ごふ……！」

瞬間、カナンが吐血した……。

鳩尾に突き刺さるはハルの“左腕”。

右腕はフェイク。

今のカナンに右腕など使わずとも、左腕の一撃で十二分な威力があった……。

鎧は紙切れのように破壊され、ハルの拳はカナンを吹き飛ばす……。

「浅いか……」

拳の感覚から入りを掴んだハルは呟く……。

鎧はハルによって破壊されたのではない。

リアクティブパージ。

魔導師達のバリアジャケット、騎士甲冑に搭載されている、緊急用防御機能だ。

自ら防御を破砕し、その衝撃で相手の攻撃を無効化、または緩和

する。
それによって、ハルの一撃はカナンに直撃を与えられていない。
だが、それだけだ。
リアクティブパージは、味方がいなければほとんど意味をなさない。
大概の敵は、止めをさそうとする。
阻んでくれる者がいなければ、結局は殺されて終わり。
そして、今のハルに、情は無い……。
進もうとして。

「朱皇千春、それ以上進めば恩人と言えど、斬る……」

首筋に押し当てられた冷たい刃……。
ハルの背後に立つは、美しいながらもどこか冷たい光を放つ女性だった……。
その金と銀に輝く瞳が冗談ではないことを告げていた……。
だが、女性の意思次第で首が落ちる状況になっても、ハルの瞳に恐れはない……。

「先に死にたい、と？」

「やってみろ。我はマスターのように甘くはないがな……」

放たれる殺気と殺気。
背筋が凍らせるような互いの殺気が結界の中に再び満ちていく……。

「勝手に、終わったことにすんな……」

声が響く。

剣を支えに、カナンが立ち上がっていた……。
そして無言のまま女性を見る。「下がれ」カナンの瞳はそう言っていた。

「マスター……。わかった。早まって済まない」

心配そうにした女性だが、カナンを信じたのか、二つの光へと分かれた。
カナンの肩に、メイデンとレナスが着地する。

――早まる？　何をだ？　今のコイツに、アイツを退かせるだけの力は無い筈……。

明らかに有利な状況を、カナンは捨てた。
女性に戦わせれば、勝率は上がる。
だが、それをカナンは選ばなかったことにハルは疑問を抱く。

「てめぇは俺がブッ飛ばす……。他に理由はいらない……」

ハルに浮かんだ疑問にカナンが答えた……。
いかにもカナンらしい言葉にハルは……。

「バカだな。てめぇは」

素直に笑みを浮かべていた。
その事実をハルは知らない。
それほど自然に出た笑みだったからだ。

「てめぇだって同じだっつの。コンニャク執事」

思わず、カナンも笑みを返す。
されど、互いにそれも一瞬で消え去る……。

「ドライブリリース……」

カナンが呟き、オーバードライブが解除され、髪の長さが戻り、剣は黄金の輝きを取り戻す。
何故、オーバードライブを解除したか。
答えは単純。
オーバードライブ状態でのユニゾンをカナンがまだ使いこなせないからだ。

「ユニゾン！」
『イン！』

ユニゾンを行うはカナンとレナス。
姿が重なり、メイデンは鞘へと溶け込む。
鎧は再生成され、剣は銀に、鞘は“金に”変化する。
一瞬にして組まれる巨大なベルカ式魔方陣。

「っ！」

――右腕が！？

カナンの力に反応し、ハルの右腕が鼓動する……。
カナンに相反するように、腕は一層輝きを増す……。

「カラドボルグの日本語直訳、知ってるか？」

――何、を……。

カナンは尋ねる。
しかし、答えを待つつもりは無い。。
そもそもとして、待つ必要すらない。
自らが、その答えを示しているのだから……。
腰に帯びられる銀の剣から過剰な光が溢れ出す……。
光の正体は“銀の雷”。
見ただけでわかる、この世では起こり得ない現象。

「硬き雷（イカズチ）……」
『セカンドリミット、ブレイク！』

銀光が弾ける！
雷の力は、元々はレナスが得意としていた力だ。
ならば何故、使えなくなったのか……。
至極単純な答えだ。
力が強力過ぎて、封印せざるを得なかった。
それだけの話……。

「『雷神よ、汝が力を我らが手に、時をも砕く一撃を……』」

――北欧の、神！？

かつて、カナンはギリシアの時の神、クロノスを呼び寄せたことがあった……。
しかし、今回呼ばれた神は北欧の雷神、トール。
特定の神を呼ぶことが出来る人物はある程度はハルも知っている。
だが、カナンのように、全く神同士の間に関連がないにも関わらず、呼べる人物は知らない。
何故呼べるのか、そして何故、神々がただの人であるカナン応え

るのか、わからない。
わからないが、わかることが一つだけあった。
それは右腕の疼きと関係している……。
――わかってるさ……。騒がなくても……神もろともアイツを殺す……。
瞬間、歓喜の声を上げるかのように右腕が力を発する。
ハルに迷いはない。
『邪魔するなら、殺してでも進め』
またしても響く夾の言葉に、ハルは歯を食い縛る……。
「殺してやるさ……。アイツも、俺の心も、な……」
だがもう、言葉で止まる段階は終わってしまっていた……。
何も残らない結界の中で、カナンもハルも、ただ力を蓄える。
片や、友人の命を繋ぎ止めるために。
片や、友人の命を断ち切るために。
「はぁぁぁぁ……っ！」
引きずりだされる神の力に結界が軋む……。
カラドボルグから溢れた眩い銀光が視界を潰した瞬間、剣に触れている世界が狂い始める……。
早朝から夕方に変わり、夜になり、朝を迎え、夜に戻り、昼へと進む。
太陽と月が東と西に狂ったように動き回る。
時間概念の崩壊。

未来と過去に、或いは進み、或いは戻り続ける。
激変する世界に人間はついていけず、結局、その場に止まることしか出来ない。
“通常なら”

「我に殺せぬモノは無し……」

だが、神が起こしたことならば、それを上回る力でその事象を潰してしまえは問題はない。
そして、ハルの右腕には、神すら殺せる力がある。
崩壊に呑み込もうとする世界を否定し、殺す。
完全なまでの否定。
近づくモノを拒絶するその力は、ハルの心に似ていた……。

「『今ここに、封じられし祖の力、示せ！』」

――てめぇが俺達に見つからないように心の鍵を隠そうが破壊しようが、関係ねぇ……。その扉の奥に、てめぇがいるってわかってんなら……。

周囲に飛び散っていたイナズマは一本の剣へと集束されていく……。

膨大な量のイナズマを剣は呑み込み、蓄える……。
ハルはカナンの準備を待つことはしない。
ハルにとってこの戦いは、殺し合い。
そこに正々堂々などという言葉はない。
故に、ハルは縮地を使い右腕を叩き込む！

「『奥義！』」

――何度だって、その分厚い扉ごとぶっ壊してやる！

叫ばれると同時、カナンがハルの動きに合わせ、踏み込む！
鞘から抜き放たれるは時すら撃ち抜く銀の雷。
対するは、全てを拒絶する悲しみの右腕。
狙い済ましたような対角線から激突し、発生した衝撃が逃げ場を求めて結界に突き当たる！

「『天、神！』」
「滅、神！」

だが、衝撃は死した。
二つの神の名を冠する力によって……。
激突する力と力は、さらなる破壊を呼び、世界を崩壊へと導いていく……。
現時点で、結界が崩れれば、このミッドチルダは消え去る運命を辿る。
制御を考えない、否、考えられない。
互いに他に回せる思考の余裕が、無い。

「聖雷降封刃ッ！」

「絶覇吼っ！」

真っ白に染まる視界、相手を倒すことしか考えられなくなった脳……。
空間が絶叫を上げ、一つ、また一つと大穴が空いていく……。

「「オオォォォォォォォォォ！！！！」」

壊れていく世界の中で、二人は咆哮を上げ、己に残る力を流し込む！

希望の銀、絶望の朱。

二色の光は、その余波すらも互いの存在を敵と見なし、その身を削る。

「「っーーッッ！！！！」」

最早音は無く、声も響かない……。

それでも、二人は叫び続ける。

互いの想いをぶつけるように……。

それに呼応し、溢れ出る光と光は、決着がつかないままに、カナンとハルの身体を呑み込み、音も無く、消え去った……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

カナンとハルとの戦い、白姫家での出来事から、約数時間後。

そして、グラースとハルとの約束の時間までは後四時間余り……。

その時間帯で、とある組織にて“試験”が行われていた。

試験は、組織に入るために必要なこと。

合格するためには、組織内の人物を、殺すこと。

「クラウ、ソラスぅぅぅ！」

息も絶え絶えに、悲鳴を上げるようにして、フェイトと戦ったロストロギア、クラウソラスを持つ女性が叫ぶ。

振り抜かれた剣から現れるは一体の炎蛇。

「食い、殺せ！」

こちらは必死の形相で、炎を纏う巨大な魔犬を使役する、フルン

ティングを使う男性。
男性に応え、炎蛇と並び、巨大な炎犬が牙を向く。
この二人は武力もさることながら、普段は冷静な思考で相手を追い詰めることを得意とする。
しかし、今の二人に冷静などと言う言葉は似つかわしくない。
誰の目から見ても、はっきりと焦燥の色が見てとれた。

「……」

二人に対峙するのはジルと同じく、真っ黒なフードコートを纏う人間。
地をも溶かす二体の炎熱を前に、その人物は身動ぎもしない。
不気味な程冷徹に、ただ、立ち尽くす。
そのままの体勢で左右から、二体に噛みつかれた……。
女性と男性は、終わったと気を緩め。

「なっ！？」

「理解、不能……っ！」

そして、次の瞬間には驚愕に染まる。
二体を貫く、白き光。
炎蛇と炎犬は、一瞬にして内部から破壊され、消え去る。
破壊したのは、フードの人物。
天に振り抜かれた右腕がそれを示す。

「はっはっは！　まさかここまでとはね。流石に僕もびっくりだよ。さてさて、楽しみだねぇ」

戦いの最中に、雰囲気をぶち壊して銀髪の美男子、ジル・ローデ

ィアスが高らかに笑う。

「アンタさぁ、笑ってて良いわけ？　アレ、アンタの新しい監視役でしょ？　相当ヤバイわよ？」

そう話すのはあらゆるモノを石化させるアイギスの盾を持つ女性。

「そのくらいはケセラセラ、さ♪　そういえばアテネ君、キャラ作りはやめたのかい？　まぁ僕はすぐに化けの皮が剥がれるとは思っていたがね！」

「……マジウザ……」

「だがしかし！　僕はそんな素の君が大好きさ！」

ニコリと笑い、キラリと白い歯を見せるジルに、女性は拳を握りしめる。

「ねぇ～、殺していい？」

「現状、ジル・ローディアスの戦力を無くすのは痛手となりますのでお止めください」

真面目に答えるのはブリュナーグを使う眼鏡の男性。

賛同を得られないことに女性は歯軋りをする。

「なんかアンタは、信用出来ない……」

ジト目で睨む女性に、ジルは珍しく真面目な表情へと変わる……。

「信用なんてそんなモノ、ここにあるのかい？　互いに互いを利用するためにここにいる……」

「そうね……」

「同意見です」

一つ間を起き、「そう！」とジルは高らかに叫ぶ。
握り拳を作り、胸の前に構えて……。

「信ずるべきは、愛さ！！！！　さぁ、わかったなら僕の愛人となり幸せなマイライフを謳歌しようじゃないか！　はっはっは！　案ずることはない！　このジル・ローディアス、愛を語らせれば誰にも劣るなんてことはない！　安心したかい？　というわけで挙式の話だが……」

――やっぱコイツただのアホだ……。

ジルの態度に呆れる女性。
これ以上は無駄と、試験に視線を戻す。

「……圧倒的、ね」

「まぁ、実力差を考えれば頑張った方だよ」

そして、その視線は固まる。
二つの血溜まりへと……。
フードの人物の腕に貫かれた女性と男性の腹。
その二人はピクリともしない……。
ジルと女性と男性が話していた五分間。

その短い時間の間に二人は殺されていた……。
死体は浮かび上がり、やがて消える……。

「監視役決定、と。もう措置もとられてるみたいだし、御愁傷様」

「はっはっは。楽しい生活が始まりそうだね。君々、これからは僕と一つ屋根の下だよ。嬉しいかい？」

「……別に」

「むぅ、またツンか……」

「てか、措置されてる相手にツンも何もないでしょうに……」

考え込むジルに、静かにツッコミを入れる女性。
「まぁいいさ」と女性に笑いかけた後、ジルは踵を返す。
瞬間、その背後にフードの人物が現れ、後に続く。
突如として現れた人物に驚く女性を尻目に、ジルは転移魔方陣を展開。

「では、アディオス♪」

そのまま、フードの人物と共に、次なる目的地へと飛んだ……。

Ｎｅｘｔ　Ｓｔａｇｅ……。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ヴ・メ・レ「ピーンポーンパーンポーン♪」

メ「ここから先は、恐らく非常にカオスだ」

レ「先に言って起きますと、理不尽極まりない空間です」

ヴ「本編の空気を保ちたい方はここでバック。壊れてこそＬＶ！という方は先にどうぞ」

カ「……まともに終わるって選択肢は無いのか……」

祐「そんなのこのＬＶの存在否定に等しいわ♪」

カ「……本編は？」

祐「本編がオマケよ♪」

カ「あんだけ書いといて！？」

祐「それがＬＶクオリティ♪」

ヴ「それでは、始まります」

祐「よし。崩壊してもいいって勇者が集ったみたいね♪」

カ「……なんだかなぁ……」

ヴ「わくわく♪」

カ「……こっちもなぁ……」

祐「ま、久々だし今回はゆっくりいくつもりよ。まずは軽めに質問コーナーミニをして、徐々に慣らしていくって計画」

カ「ふぅ……」

ヴ「質問です。爽さんの胸のサイズは？　ってふぇぇ！？」

ゴウ！

爽「よぉし……。殺されたい奴、前に出ろ……」

カ「どこがゆっくり！？　いきなりトップギアなんスけど！？」

祐「細かいことは気にしない♪」

カ「細かくねぇぇぇぇ！！！」

メ「取り合えず爽さん、胸囲は？」

爽「……ちょっと待て……。言わせんのか？」

メ「？　何か恥ずかしいことがあるのか？」

カ「いい加減羞恥心持ってくれ！」

ヴ「あ、あの、こういう質問は無視でもいいかと……」

夾「あ、あぁ、そうさせてもら……」

ト「ふむ。却下だ」

レ「何故トウヤさんが……」

ト「なに、今日はここで面白い見世物があると聞いてね？」

夾「で、理由を話してもらおうか……」

ト「エロ、さ！」

カ「いや、握り拳作って力説する意味がわかんねぇッス……」

夾「取り合えず、死ね……」

ト「ふむ。今の時世にサラシとは中々……」

夾「っ！！！！」

ト「成る程、８４といったところかい？」

夾「っ！？！？　何、で！？」

ト「ふ……。このトウヤ・アイをもってすれば雑作もないこと」

夾「……殺す！」

ト「ふっ！」

―滅！・滅！・滅！・滅！・滅！―

カ「……あの人、避けてるし……」

祐「あんな人がグノーシスのトップでいいのかしら……」

ヴ「えと、たまには真面目な時もあるんだし……」

ト「この叶トウヤ。全ての女性の等身大フィギィアを作るという野望のため、散るわけにはいかないのだよ！」

ヴ「良くないね。うん」

ギュン！

一同「？」

ユ「もう、トウヤ、帰るよ？」

―撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃―

夾「……奴を、捉えた？」

ト「くっふぅ！」

ユ「もう、トウヤったら、ちゃんと合ってるよ♪」

ト「ふふ……カナン君。このラブラブさ、羨ましいかね！？」

カ「いや全く。てか、ラブラブには見えないッス」

ト「君とは、ユウオのマロさについて、一日語り合わなければ……」

ユ「も～。恥ずかしいってば！」

―滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅―
―滅！！！！！―

ドサ……。

メ「……さすがに、死んだのではないか？」

ムクり

ト「諸君、覚えておくといい。痛みも度を越えると快感になるのだよ……」

ユ「お騒がせしました～」

ズルズル。

カ「女って怖い……」

祐・夾「何でこっち見てんのよ？／何でこっち見てんだ？」

カ「い、いやぁ、別に～。ヴィヴィオは癒されるよ。ホント……」

ヴ「え、えと、良くわからないけど、元気になってね？」

ハ「祐希奈様と夾が怖いからでしょうね」

カ「バッ！　いきなり出てきて何を！？　って、ぎゃあああああ！！！！」

祐「ほう……？」

カ「いやあの、祐希奈さん？　僕は決してあなた様に悪口をいったわけではなくてですね？」

祐「で？」

カ「怖いっていうのは恐れ多いという意味でして……」

祐「で？」

カ「いや、だからその、出来れば寛大な処置を……」

祐「で？」

カ「……え～と……ごめんなさい！」

祐「よし。死ね♪」

バキャァアアアア！

カ「やっぱりね……」

夾「容赦ねぇな……」

ハ「夾は怒らないのですか？」

夾「女扱いされるよかマシだろ。てか、その話し方止めろ。鬱陶しい……」

ハ「鬱陶しがられるように話しているのですから当たり前ですよ♪」

夾「てめぇ……曲がった性格になったな？」

ハ「あはははは。いえいえ、貴女程ではありません♪」

夾「言うようになったなぁ、クソガキが……」

ハ「男装が趣味な誰かさんのお陰ですよ♪」

夾「ははははは♪　上手いこと言うじゃねぇか♪」

ハ「あはははは♪　お褒めに預かり光栄です♪」

―軋！―

ヴ「ど、どうしよう……」

メ「まぁ、止めるだけ無駄だろうな」

レ「では、放置ですね」

メ「ああ。人もいないし、私達が、次回予告をしておこう」

ヴ「ハルさん中心に巡る物語、ママと言葉でぶつかり、カナン君と

の激闘の果てに、物語は遂に最後の時を迎える。一方で、別の場所では別の動きが始まっていた……。次回、魔法少女リリカルヴィヴィオ、『心の在処』」

メ「同時収録、後書きは、始まるは少年達の鎮魂歌。少年達に未来はあるのか？」

レ「約一名、女性ですが悲しい運命がありますので該当する女性は覚悟を決めてくださいね」

ヴ「それでは皆さんこの辺りで」

ヴ・メ・レ「バイバ～イ♪」

第三十八話　心の在処　（前編）（前書き）

なんとか書き終えたと思ったら時間が全く進んでおりません（汗）
わかりやすくさくさくが僕の売りですのに……。
いつものごとく、何かおかしなところがあればお願いします。

第三十八話　心の在処　（前編）

カチリ、と何かが噛み合った音が鳴り響く……。
それは、時の歯車。
カナンによって狂わされていた時間が戻り、再び時を刻み始めたのだ。

「ぅ……」

静かに時が進む中で、倒れ伏す一人の人影……。
弾け飛ぶは銀の光。
倒れたのは、少年、風間カナンだった……。
力を使い果たしたカナンの傍らにはメイデンとレナスが眠る。
カナンと同じく、力を使い果たしていた。
そして、勝者、朱皇千春は、カナンの背後で右腕を押さえ、膝を着く。

「相殺、か……」

激突した神と神の力。
それらは、互いに互いを喰らい、殺し尽くした……。
そして、相殺という終幕を迎えた。
結果、本来ならどちらか一方が消えていた筈だが、満身創痍ではあるが、どちらも死んではいない。

――良かった……。

殺しもせず、殺されもしなかった終幕に、ハルは内心、安堵の溜め息を漏らす。
殺さなくて終わるのならば、それに越したことはない。
ハルにとって、カナンは友人なのだから……。
そのままカナンに背を向けて、ハルは進む……。
否、進もうとした。

「待て、よ……」

「っ！！」

だが、その歩みは数歩の内に止まることとなる。
声が、響いたから。
たった一人の友人の声が……。
ゆっくりと、恐れるように、ハルは振り返る……。
その視線の先に、震える腕で身体を起こそうとする、カナンがいた……。

「ふん……。死に損ないが……」

――もう、立つなよ……。

すれ違う、ハルの心。
バレないように、必死に取り繕った仮面で隠して……。
弱い心を、限界まで圧し殺して……。

「確かに、死に損ないだ……」

壊れかけの機械のように、途切れては繋がる意識。
その度に揺れる身体を、歯を食い縛って耐え、膝を着く。

「ハル……。何で……、俺は、死んでない？」

「知るか……」

ゆっくりと、カナンが立ち上がっていく。
ボロボロの身体はそれだけで軋みをあげ、激痛が流れている。
それでも、カナンは立ち上がり、顔を上げる。
ハルを見る紅蓮の瞳は、未だ強き輝きを残し、射抜く……。

「誇りは、どうしたよ……」

カナンの問いに、ハルは答えない。
答える資格が、無い。
その様子に、カナンは怒りを顕にする。

「まだ、俺は死んでない……。なのに、てめぇは進もうとした……。邪魔する奴は全員ぶっ殺してでも進むんじゃねぇのか!?　アイツと一緒に死ぬのがてめぇの誇りなんだろ!?　何か言ってみろクソハル!!」

「……」

これだけの言葉をぶつけられても、ハルは答えない。
カナンを殺さずに済むならそれでいいと、思ってしまったから……。

「この程度で揺らぐようなモンを、誇りだなんて言ってんじゃねぇよ!!」

咆哮を上げ、カナンは地を踏み締める。
二人の距離は三メートルも無い。
カナンが構えるは拳。
固く握り締めた、型も何もあったものではないただの拳。
それでもカナンは進む……。

「歯ァ、食い縛れェ！！」

ただ、がむしゃらに、その拳は風を切り裂く。
それを、ハルは避けようとはしなかった……。
“避ける意味すら、無かったから”……。

「満足したか……？」

鉄の仮面を剥ぎ取り、表情を悲しみに染め、ハルはカナンを見下ろす。
その頬には、確かに拳は届いている。
しかし、殴り飛ばす力など、カナンに残っている筈も無かった……。
それがカナンの最後の力だった。
必死に繋いだ意識はプツリと途切れ、膝から折れてカナンは再び倒れ伏す……。
冷たい風が、ハルに吹き付け髪を揺らす……。

「今度こそ、さようなら……」

踵を返し、カナンからハルは離れていく。
否、逃げていく。
カナンが起きない内に。
これ以上、扉を壊させないために……。

「アンタの一撃、私が引き継いで上げるわ！」

「なっ！？」

が、またも、ハルの足は歩みを止める。

苦い表情で見上げるは上空。

顔を覗かせる朝陽の光に輝く銀の髪。

全てを燃やし尽くす紅蓮を右手に、隕石を思わせる炎の尾を引きながら、少女は降り注ぐ！

「歯ァ、食い縛れェ！」

「ぐ、ぅ！！！」

叩き込まれた右腕が、戦いによって生まれた瓦礫の山をその一撃が消し飛ばす……。

持ち上げた右腕を、左腕で支えなければならない程の超威力。

下手をすれば、カナンをも上回るその力に、ハルは本当に歯を食い縛って堪え忍ぶ。

ハルは、膝を使って衝撃を逃がし、回転し、少女を吹き飛ばす。

「祐希奈、様……」

苦しげに見るハルの視線の先に立つのは、一之瀬祐希奈。

問答無用の一撃を叩き込んで起きながら、悪びれる様子は毛ほどにもない。

「何？　バカやってんだから殴っても良いわよね？　弁明でもあるなら言えば？　まぁ、言った所で殴るけど」

そんなことを言うつもりは全くない。
今やハルの脳を埋めるのは、いかにしてここを突破するか、その一点だ。
祐希奈が来た、ということは六課のメンバーが感づいてもおかしくはない。
六課メンバー全員、否、祐希奈だけですら、消耗したハルには厳しい。

――縮地で……。

故に、未だ祐希奈に見せたことのない縮地で一気にケリをつけようと、ハルは結論を出す。
走り出す。ただ一直線に。
分かりやすく、右腕を引く、祐希奈もそれに合わせて身体を半歩ずらし、ハルを迎える。
同時に打ち出された拳。
しかし、片方は消える……。
打ち出す祐希奈の背後に、ハルは現れ、次は左の拳を放って。

「ナイスよ。ヴィヴィオ♪」

――受けた？

しかし、その拳は瞬時に持ち上げた祐希奈の左腕が受け止めていた。
それだけではない。
ハルの左腕を押し返し、祐希奈の腕が外に開いていく。

「吹っ飛べぇ！」

「くっ！」

体格差など物ともせず、祐希奈は腕を振り抜いた。
祐希奈に吹き飛ばされ、宙に浮く身体を立て直し、ハルは着地。
だが、勢いは凄まじく、壮大に土煙を上げながらハルの身体はようやく停止した……。

『もう一人、いるようだ』
「ええ……」

祐希奈が始めてみた縮地を受けた。
その際に、言ったヴィヴィオという名前。
どこかにいるヴィヴィオが祐希奈にハルの動きを伝えた。
敵は、二人……。
能力を使い、ヴィヴィオを捜索、と同時に屈む。

「はぁぁぁっ！」

瞬間、土煙を突き破り、祐希奈がブレードを突き出す。
が、屈んでいたハルに先端は当たらない。

――潰す！

「っ！」

祐希奈の内に滑り込むハルの身体。
唸る右腕。
回避不能の一撃に祐希奈は息をのみ。

「なんちゃって♪」

ペロリと舌を出した。

ハルの背後で唸るは風。

現れるは、高町ヴィヴィオ、セカンドモード、フルドライブ。

「なっ！？」

能力の壁をも突き抜け、ヴィヴィオが現れたことにハルは驚愕する。

同時に思い出した。

ヴィヴィオの魔力変換資質、『風』を。

ヴィヴィオは、その力を持って風の動きを狂わせ、ハルの能力を打破したのだ。

そして隠れる必要が無くなった今、ヴィヴィオは細かい計算は捨て去っている。

その右手に集まるは、叩き込むことだけを考えた、攻撃のための風……。

「ちっ！」

体勢を崩すハルは、それでも恐ろしい程的確に強引に回転し、右脚で薙ぎ払う。

「全力！」

『Ｂｕｒｓｔ　Ｍｏｖｅ』

対し、ヴィヴィオは風の炸裂による爆発的な加速を行う。

翡翠の翼、ソニックセイルを腕と踵に広げ、刹那の時をヴィヴィオは駆ける。

「全開！」
『Ｂｕｒｓｔ　Ｌｉｍｉｔ　Ｐｕｒｇｅ！』
――疾、い！
打ち抜かれたハルの右脚。
だが、ヴィヴィオの姿は霧散する。
ハルの前に、五人ものヴィヴィオが拳を振りかぶっていた……。
最高速度はカナンの空間突破には劣っている。
しかし、瞬間的な加速なら、ヴィヴィオの方が、上！
「くっ！」
ハルを囲うように放たれる拳達に、回避を諦め、ハルは腕を交差する。
「ヴァニッシュ！」
囲っていたヴィヴィオすらも、霞と消える……。
ヴィヴィオは、一瞬にしてハルの背後に回り込む。
その加速を、ハルは捉えることすら出来ない……。
「が、あ！」
『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！』
「インパクトォォォォォォォォ！！！！」
背中から弓なりに曲がるハルの身体。
台風すらも撃ち抜く風の弾丸は容赦なしに叩き込まれ、ハルを木

の葉のように吹き飛ばし、結界の最後の一枚に激突させ、大きくヒビを入れた……。

「あ……」

『マスター……二度目です……』

「え、えと、えと……」

あわあわとするヴィヴィオに祐希奈はニパッと笑って近づいて耳打ちをする。

「ふぇ？」

「……死んだんじゃない？」

「……ふぇぇぇ！　ハルさぁああん！」

急いで応急処置に走り出すヴィヴィオを見て、祐希奈はただ笑うだけ。

『祐希奈、からかう相手は選びましょうね？』

「選んでるわよ♪」

『なら、ヴィヴィオさんは向いていないのはわかるでしょう……』

「だって可愛いじゃない♪　ふぇぇぇ、なんて、言って半泣きなのよ？　可愛すぎるわ♪」

『はぁ、もう貴女には何も言いません……』

そんなことを言われているとも知らず、ヴィヴィオは応急処置のために回復魔法をかけていた。

無論、半泣きで。

「どうしよう、どうしよう……」
『心配せずとも、死んではいませんよ』
「で、でも、こんなにボロボロに……」
『それはあの少年と戦っていたからでしょう。死の危険度で言えば、風間カナンの方が危険です』
「そ、そうなの!?　えと、じゃあ、カナン君を、で、でもでもハルさんが……」
『まぁ、放っておいても丸一日は死なないでしょうが……。マスター、聞いていますか？』

そんなフェアリーの問いかけが聞こえている筈も無く、ヴィヴィオはオタオタと歩き回る。
完全に冷静さを欠いたヴィヴィオは、祐希奈が言うように、可愛いとしか言えない。

「が、頑張る！」
『……なんというか……』

結局、ハルを先に治すことにしたヴィヴィオは回復魔法を施そうとして。

「どうして、貴女方は、邪魔をするのですか……」

響いた声に手を止める。
ユラリと、幽霊のようにハルが立ち上がる……。

「ふぇ……？」

「ホント、可愛いわね♪」
『……祐希奈』

可愛らしく首を傾げたヴィヴィオにさらに機嫌を良くしながら、祐希奈はヴィヴィオに並ぶ。
もうその瞳に、遊びはない。
状況を理解したのか、ヴィヴィオも表情を引き締めた。

「ハル、アンタの事情は知らないけど、やるってんなら受けてたつわよ？」

右腕のブレードから火柱を立て、敵対の意思を見せる祐希奈。
祐希奈の戦う理由、カナンが敵対した、それだけで十分すぎた。
「祐希ちゃん、待って？」

「ったく……五分よ」

「うん。ありがとう」

だが、ヴィヴィオがそれを止めに入る。
渋々祐希奈が引き下がった所でヴィヴィオが前に出た。

「ハルさん、我が儘は、止めませんか？」

一つ間を置き、ハルが聞いていることを確認し、ヴィヴィオは続ける。

「ハルさんが何をしようとしているのか、それはわかりません。ううん……、わかりたくもありません。だって、カナン君は、間違ったことには違うよって、言ってくれる。逆に、正しいことには、絶対に賛成してくれる。そんな人……。その人に大切なことなら、止めたりなんか、しない」

ハルは話さない。
わかっているから。
カナンが正しいと、自分が間違っていると。
それでも、止まるわけにはいかないから、ハルは心を殺す。
「彼が否定する道が、唯一の道なのだとしたら？」
「違う」と、ヴィヴィオはゆっくりと首を振る。
その動きに迷いはない。
「カナン君、言いませんでしたか？　始めから諦めてる奴は嫌いだって。どうして、カナン君が諦めてる人が嫌いなのか、わかりますか？」
確かに、カナンはハルに言っていた……。
答えないハルを待たず、ヴィヴィオはさらに言葉を紡いだ。
「これしかないって決めてる人の先にあるのは、絶望だって、知ってるから、ですよ。絶対に後悔する。それを身を持って知っているから、カナン君は諦めるのが嫌いなんです」
始まりは、子供の頃。
これしかないと決めた父と母は、息子を護り死亡した。
力を求めた少年は、目の前の力に魅せられ、手を伸ばす。
救い出されるも、少年は、強大な力の前に、限界の力を振るい、仲間を哀しみの海へと落とした。
もう、そんなことをしたくないから、させたくないから、少年は誰よりも負けず嫌いになりました。
決して、諦めないようになりました……。

その心は、周囲の人物にも影響していく。
ヴィヴィオも、その一人。

「諦めない限り、道は細くても、見え辛くても、必ず、あります。ハルさんは、それを探そうともしていない。正確には見つけてはいるけど見ようとしない。自分の道が一番確実って思い込もうとしてるだけ。だから、貴方のそれは、ただの我が儘です」

言葉を終えたヴィヴィオの掌に光が生まれ、杖を成す。
杖をクルリと回し、握りしめ、前を向く。

「ハルさん、頭、冷やしてあげます……」

「そんじゃ、私は……」

黙っていた祐希奈が右腕を肩の高さに持ち上げる。
猛るは炎熱。
紅蓮の炎は火柱と化し、空を焦がす……。

「頭でなんも考えられなくしてあげる……」

改めて対峙する二人に、ハルは嘲笑する。
その笑みは、悲しみを感じさせた……。

「結局……」

話の間に回復した右腕の力。
無限とも思える力が吹き出し、空間を軋ませる……。

「殺すしかねぇってか……」

悲しみの笑みを浮かべながら、ハルは膝に力を込める。
ヴィヴィオと祐希奈は緊張を張り巡らせて。

「待つ、ですの！」

「「「っ！」」」

双方の間に着地した巨大な竜に動きを止める。
竜の内部から現れる黒髪の少女に、ハルは視線を逸らす。

「ちっ……」

「ようやく会えましたですの。“千春さん”」

今ここに、過去に置き去りにされた二人は巡り会う……。▼▼▼

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「お二人共、ご迷惑をおかけしましたですの」

ペコリと頭を下げるクレアに二人は首を振る。
クレアが辛い立場なのはわかっていたからだ。

「クレアちゃん……」

「後は、任せてほしいですの」

迷いを断ち切った、真っ直ぐな瞳をヴィヴィオに向けた。
問題ないと判断したヴィヴィオは、ニコリと笑って変身を解く。

「ま、ヴィヴィオが納得したならいいわ」

祐希奈は渋々といった様子だが、それでも信用し、変身を解く。
これで、クレアを護る人間はもういない。
対等な立場となって、主は執事と向き合った……。

「千春さん」

凛とした声がクレアから発せられる。
いつもの無邪気さはそこにはない。

「んだよ、クソガキ……」

対し、ハルの声は暗い。
なのは、カナン、ヴィヴィオ、祐希奈、自身の行いを邪魔する人物。
クレアもまたそうだと、ハルは決めつけていたから。

「私は、止めないですの」

「……何？」

しかし、返ってきた答えはハルの予想を裏切るモノ。

「私は、魔導師としても力不足で、主としても頼りなくて、いつも、爽や、千春さんに護られて、生きてきた、弱い存在ですの。だから、私に、千春さんのことを咎める資格は、ないですの」

静かに、呟くように、クレアは言葉を紡ぎ、されど、その言葉は一言一句漏らさずハルに届く。

「今回の件、千春さんが夾を起こすためなのか、私達を護るためなのか、そのどちらもなのか、それはわからないですの。それでも、千春さんが、繋がりを壊してでも、行きたいって想いだけは、わかるですの。だから、どうしてもと言うならば、私は止めないですの」

「なら、どうしてここに来た……」

そう、それがハルにはわからなかった。

止めに来る気が無いのなら、何故、危険な場所に来る必要があるというのか？

「だって、おかしいと、思ったからですの」

「……おかしい？」

クレアはそう言った後、儚げに笑った……。

その笑みに、ハルはゾクリとしたモノを感じる。

クレアに敵対の意思はない。

だが、ハルは、カナンと戦う何倍も恐ろしさを感じていた。

「私が持つ場所の情報を知れば、カナン達はまたそこに向かう。犠牲を少なくしたいのなら、まず、私を消しておくのが、一番の良策ですの。なのに、千春さんはそれをしなかった。だから、おかしいのですの」

「止める気は、ねぇんだろうが……」

「違うですの。止める権利が無いだけで、止めたいとは思っている。だから……、情報提供は拒まないですの……」

遠回しながら、クレアの言葉が指していた意味。
『行くのなら、殺していけ』
それがわかるからこそ、ハルは奥歯を噛み締めた……。
『邪魔なら、殺してでも進めってんだよ……』
夾の言葉が頭に重くのし掛かる……。
カナンの時とは訳が違った。
その場から姿を眩ましてしまえば居場所がわからないカナンに対し、クレアは戦いの場所、時間をわかった上で立ち塞がっている……。
――何で、こうなる……。どうして、どうして！
ハルは、仲間を助けるため、護るために進もうとしている。
しかし、命を代価とするそれを周囲は認めない。
護りたいのに、護るためには刈らねばならない……。
矛盾。
『犠牲なくして、平穏は得られませんよ？』
――誰だろうか、そんな、残酷な言葉を言ったのは……。
そうだ……。その言葉を言ったのは、俺……。
周囲との関わりを断ち、一切を拒むために、高町なのはという人物に浴びせた、言葉の刃……。
自分で言っておいて、自分が迷っている……。
取るべき答えは、ただ一つ……。
世界を取るか、個人を取るか、そんなの、決まってる……。

「うぅォォアアアアアアアアアアアア！！！！」

――最初っから決まっちまってるじゃねぇかよ！

完全に力を取り戻した右腕とそしてハルとが悲しみの咆哮をあげる……。

それを前に、クレアの表情は尚、穏やかなまま……。

「くっそォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！」

「ちょっ！？」

ハルの膝に力がこもる……。

踏み込んだ地面を木端微塵に踏み砕いて、右足が地を蹴る。

弾丸と化してクレアに迫るハルに、見守っていた祐希奈は驚愕しながら止めようと突っ込む。

が、時既に遅し。

祐希奈の速度では、ハルに追い付けない。

ヴィヴィオは、動いてすらいない……。

クレアは、己へと向かう殺意を全て受け止め、それでも退かない……。

「千春さん……」

瞬く間にハルはクレアに到達し、右腕を引き絞る。

「今までありがとうございました、ですの」

笑いながらクレアはそう言った……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

時は過ぎ去り、迎えるは約束の時間……。
場所はアフリカ、その広野に、ただ一人立つその男。
覇界神、グラース。

「……何故、貴様がここにいる……」

腕を組んだままに、グラースは問いかける。
その背後に現れる、黒ずくめのコートに、黒いフードをかぶった二人組……。

「いやぁ、正直君の所になんて来たくもないがね。これも一応、任務な訳だよ。やれやれと言いたいね」

肩を大袈裟にすくめながら、黒いフードを外すその男。
銀の長髪に碧の瞳、ジル・ローディアスがそこにいた……。

「朱皇千春はどうした？」

「カナ吉以外の男はどうでもいいわけさ！　僕は一途、これぞフォーリンラブというやつだね♪」

拳を握り込みながら、語るジルに、グラースは無反応。

「なんだいなんだい？　僕と――」

「ヒュ……！」

語りの途中、グラースがなんの挙動も見せず右脚を蹴り上げる。

されど、武術の極みに至るその蹴りは当たらない……。
頭一つ分ずらしたジルが避けていたからだ……。

「……」

「――カナ吉のラブラブ具合にヤキモチでも妬いてるのかい？　いやぁ、モテる男は辛いね。だが、諦めてくれたまえよ。男で認めたのはカナ吉以外にはいないからね♪」

二人の姿が霞む……。
体術を叩き込み続けるグラースと、避け続けるジル。
不意に、ジルが顔の前に手を持ち上げる。
吸い込まれるように、グラースの左腕が叩き込まれ、衝撃が突き抜け、ジルの長髪が後ろに靡く……。
しかし、不動……。

「退け……」

ボッと、爆発するように、グラースの左脚が着火する。
身体が高速で捌かれ、回転、放つは蹴撃、滅爆煌！

「ふむ……」

左手から襲い来る炎熱に対し、ジルは腕を突き出す。
輝く左手、ジルの口が、静かに呟いた……。
『バルムンク』
と。
直後、左脚が触れ、巨爆が起こり、ジルの身体を炎が包み込む、

「君に行かれると、困るのだよ。色々と、計画が狂ってくるのでね」

黒煙が晴れる……。
グラースの脚は止められていた。
ジルの左手に握られた鈍く銀色に輝く巨剣によって……。
最大の特徴は、柄から伸びる、長い鎖。

『ローディアス、呼び出すやいなやこの扱いとは酷いですね。痛いじゃないですか！』
「僕のための盾となれたんだ。光栄に思いたまえよ！」
『私は野郎などの盾になりたくはありません。散るのなら女性を護る騎士のように散りたい。そして、倒れる私を女性はその豊満な胸に包み込む……』
「む、それは同感だね」
『でしょう！？』
「『流石は同志！』」

「『はっはっは』」と笑い会う一人と一本は、場に流れる重い空気を払拭していく……。
そんな二人に、グラースは構うことはない……。
脚が防がれたなら拳で、それだけしか考えてはいない。
そして、その拳はもう、ジルの眼前。

「……」

だが、その拳は進路を変え、地面を叩き割る……。
蹴り落とされたからだ。
ジルとグラースの間に割って入った黒フードに……。
黒フードは、そのまま身体を捌き、回転から蹴りを叩き込む。
不可視の障壁が蹴りを阻むが、一瞬の拮抗の後に砕け散り、グラースへと打ち込まれる。

グラースは片腕で防ぐものの、数メートルの後退をした……。

「……ローディアス」

「はっはっは。そんなにも怒らないでくれたまえよ。君を信じていたからこそさ！」

肩を叩くジルの手を、黒フードの人物は片腕で払い除ける。

『ツンですねぇ。萌えますねぇ……くふふ』

「今年はツンツン祭りなのさ」

『なぬ！？』

「はっはっは。羨ましかろう！　ペッタンにボインまで勢揃いさ！」

『くぅぅ！』

楽しげに話す二人に、黒フードはどうでもいいとばかりに、溜め息を漏らし、静かに構える。

「……準備は？」

言葉少なに尋ねる黒フードに、ジルは頷く。

それだけで伝わったのか、黒フードはそれ以上は何も尋ねない。

「……」

相変わらずの無反応ながら、明らかに変わった所があった。

それは、滅すべき対象として、ジル達を認めたこと……。

凄まじい重圧がジル達に襲いかかる……。

「さてさて、やる気になった所に水を差すようで悪いのだかね？

僕は君とやりたくはない」

ジルの足元に現れる、古代ベルカの魔方陣。
身の丈程もあるバルムンクを片腕で軽々と薙ぎ払い、その剣圧地面を砕く。

「滅天……」

術の効果は不明。
そんな中でグラースが弾き出した答えは、何をしようとそれごと消し飛ばすという無茶苦茶なモノだった……。
それを可能にするだけの威力が、掌に回転する光弾にはある。

「覇光……」
光の速度を持って、光弾は撃ち放たれる。
それは、迷いなくジルへと突き進み。

「っ！」

ジルの前に現れた黒フードが輝く右手で受け止める！
激突に弾ける紫電、黒フードの身体を光弾は押し込み、徐々に後ろに下がる……。

「ぁぁああ！」

咆哮と共に、輝くは右脚。
踏み込むは左脚、同時、大陸をも揺らす地震が発生する。
重心が移動され、腕へと伝わり、払われる！
直後、粒子となって光弾が弾け飛ぶ！

「上々だね♪」

「……っ、っ、早く……」

「任せたまえよ！」

バルムンクが唸り、地へと突き刺さる。
グラースの足元、そこから延び出す光の鎖！
幾本も絡まる鎖をグラースはただ見て。

「くだらん……」

たった一言、そう言った……。
ビキリと鎖にヒビが入り、今にも千切れそうに軋みを上げる。
長く持たないであろうことは容易に予想出来た。

「ふむ、これでもＳＳまでは止められるのだがね。君には効かない、か」

一本、また一本と千切れていく鎖。
自由になっていくグラースに、ジルは近づいていく……。

「流石だね。覇界神と呼ばれるだけはある。君を相手にするなど自殺行為に等しい。僕とて、君には勝てないだろうからね。今回はあの子がいたから優位に立てた。まぁ、いくらあの子がいても、こんな任務、二度とやる気は起きないがね。命がいくつあっても足りない」

その言葉に反し、ジルの表情は余裕の笑み。
カツ、とわざとらしく音を鳴らし、ジルはグラースの前に立つ…

…。

懐に手を入れ、取り出したのは黒いひし形の物質……。

「これから、君を次元の狭間に叩き落とす。これくらいでは君は死なないだろうが、しばらくは介入が出来なくなる。出てくるころには手遅れかもしれないね？　世界は、どちらに歪むかな？」

「っ！」

実に楽しそうに、ジルはひし形をグラースに放る。
瞬間、空間が割け、口を開き、グラースを飲み込んだ……。
後には何も残らず、ただ風が吹くのみ……。

「さて、帰ろうか」

「……了解」

振り向いたジルの表情はやはり笑顔。
その表情から内面は伺えない……。
そしてそのまま、二人は大陸から転移し、消えていった……。

Ｎｅｘｔ　Ｓｔａｇｅ……▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

祐「ここ、読んでるってことは、覚悟はいいのね？　前回にも増して危ないわよ？　今なら引き返せるわ。ちょっとだけ待つわよ？」

祐「はい、おしまい♪」

カ「はやっ！？　四行しか空いてねぇですよ！？」

祐「だって、皆早く散って欲しいだろうしアレ」

カ「アレ？」

ゼ「祐希奈様ぁぁ！　ご慈悲をぉぉ！」

祐「うん。却下♪」

ヴ「えと、本日のＬＶ舞台裏、ゲストはゼロさんです。フルネームは……」

祐「あーいいわ。どうせ死ぬのは確定だし」

ヴ「え、あ、う、うん」

カ「紹介すら放置！？　いや、元は味方だろ？」

祐「は？　女の子に手を出すような愚か者がＫＤＧにいるはずないじゃない？」

カ「いや、でも、メンバー欄に……」

『ゼロ・Ｓ・アームストロング』存在抹消。

団長一之瀬、副団長アリサ・バニングスはこれを認める。

カ「既に消えたことになっとるぅぅぅ！？」

祐「さてと、じゃ、行くわよ」

ヴ「は～い」

カ「どこに？」

祐「家庭裁判所♪」

シュン！

祐「これより裁判を行うわ！」

アリサ「準備は万端よ♪」

セラフィム「メカゴジラも準備しました！」

零「魔法は私が潰すし♪」

フェイト「足なら私だね」

千華「いや、もうめんどくさいから砲撃で撃ち落とすわ♪」

カコ「うん。それが一番てっとり早いよね」

千歳「取り合えずぶっ殺……」

カ「嘘だろ！？　家庭裁判所にこんな理不尽なメンツがそろってる筈ねぇし！　弁護する余地すらねぇ！」

シオン？「（びくびく）。ママ、怖いよう……」

ヴ「大丈夫だよ。皆優しい人だからね～♪」

カ「シィィオオォォォン！！！！！！」

シオン？「……？　カナン君、おっきくなってる……」

カ「祐希奈ぁぁぁ！　俺のダチに何をしたぁぁぁ！？」

祐「は？　でっかいまま中身をしーちゃんに変えただけよ？」

カ「そんなさも当たり前のように！？」

祐「私に逆らって能力使ったシオンが悪い」

一同《悪い》

カ「ちくしょう。ここに味方がいねぇ！」

ルミオ「カナン、取り合えず傍聴席に来いよ」

カ「ルミオ！？　何でお前そんなとこに！？」

レン「俺もいるぞ」

未来「ちなみに俺もだ」

一真「俺もいたりする」

銀杏「よっ。久しぶり」

カ「……てめぇら、シオンを見捨てたのか！？」

シ「カナン君が怖いよう……」

ヴ「大丈夫だよ～？　すぐに落ち着くからね？」

シ「……うん」

キュ♪

カ「こんなんシオンじゃねぇぇぇぇ！」

祐「うっさい……」

―滅！―

カ「ぐはぁぁぁ！」

銀「ほら、さっさとこねぇから裁判長がご機嫌ななめじゃねぇかよ……」

カ「傍聴席に吹っ飛ばすやつが裁判長って何！？　これ、始めから判決決まってねぇ！？」

ア「傍聴席は静かに！　魂砕くわよ！」

セ「肉体は潰しますよ！」

ラディオン「セラフィムお前何してんだ！」

セ「一斉照射♪」

男性陣「ぎゃあああああああああああ！！！」

ガバッ！

男性陣「ラディ！！！」

ラ「何！？　俺のせいなの！？」

祐「さて、静かになったわね」

カ「いやいやいや！」

祐・ア「静かになったわね？」

―軋！―

男性陣「っ！」

―撃！―

カ「ごっふぅ！」

レ「あぁ。問題ない。静かになった」

カ「て、てめぇら……」

ル「我慢しろ。中立でいた方が生存率はあがる……」

カ「いや、でも……」

未「今は辛くとも耐えるんだ。俺達は仲間だ。見捨てたりなんかしない……！」

カ「わかったよ……」

シ「ママ、これから何するの……？」

ヴ「えっとね、裁判って言って、悪い人なのかどうかを判断して、ダメっていうのか、貴方は大丈夫だよっていうのかを決めること、かな？」

シ「あの人、悪い人……？」

ヴ「それはこれから祐希奈お姉ちゃんが決めるんだよ？」

シ「お姉ちゃん、偉い？」

ヴ「かな？」

シ「そうなんだ……。ママ……」

ヴ「ん？」

シ「大好き……」

ヴ「シオン君……！　私も好きだよ～！」

カ（ちくしょう！　なんだあの意味不明な会話は！？　祐希奈の話

の後に大好きって何!?　あぁ、ツッコみたいのになんてジレンマ！）

ル（我慢、我慢だカナン。シオンは悪くない。悪くないんだ……！）

祐「さて、と、裁判を始めるわけだけど罪人ゼロ・S・アームストロング」

カ（既に罪人確定!?）

銀（こ、こら、動くな!）

カ（ムガァ!）

ゼ「ちが……」

祐「罪人は黙りなさい」

カ（マジで弁護する余地ねぇ!!）

ア「被害者、A・Tさんは罪人に一方的な暴行を受けた、それで間違いないわね?」

A・T「はい。頭が割れるかと思いました……」

カ（アリシアさぁぁぁん!?）

A・T「（ペロッ）」

カ（なんか舌出てますけど!?　なんかイタズラしちゃった♪　み

たいな舌がぁぁ！！）

未（カナン、止めろ！　ここで叫べば奴等の思う壺だ！）

ゼ「あ、アリ……」

祐「黙れってんのよ罪人……」

ゼ「り、理不尽……！」

祐「さて、めんどいからさくっと判決行くわよ～」

カ「もう我慢ならん！　意義あり！」

ＫＤＧ一同「却下ァ！」

カ「ちょ、えぇぇ！？」

―滅！―

カ「どうしてこうなった……」

シ「カナン君、悲しそう……」

ヴ「うん。後で慰めてあげようね？」

シ「うん……。私、お姉ちゃん……」

ヴ「偉い偉い♪」

ナデナデ。

シ「うにゅぅ……」

祐「さて、もう意義はないわね？」

男性陣「（ガクガク！）」

祐「じゃあ、刑は……」

セ「やっぱり二十年は確実です♪」

カコ「り、リアルな数字ね……」

零「成る程。そして出てきた自分の姿を見て絶望する、と……」

A・T「……私、その程度じゃその人を許せません！」

祐「じゃ、死刑ね♪」

ア「はいはい死刑、と。記録も残したしオーケーよ♪」

ゼ「じゃあ！？　じゃあで人の……」

祐「黙れ外道……」

カ「それはお前だぁぁあああああ！」

祐「ふ～ん……。私に逆らうんだ……。じゃ、連帯責任で傍聴席全員死刑ね？」

カ「……くっ！　でもな、祐希奈、傍聴席には、半ＫＤＧの面々が……」

ヒュウウウ……。

カ「って誰もいねぇ！？　ちくしょう逃げやがったな！？」

祐「じゃあ……判決！」

ズウゥゥン！

ア「っ……何？」

ル「待たせたなカナン！」

未「今から助けに入る！」

レ「ま、今回ばっかりは加勢してやるよ」

銀「ぼさっとしてんな！　ちゃっちゃとずらかるぞ！」

カ「皆……！」

グ「滅してやろう……」

ジ「はっはっは。カナ吉、僕が来たからにはもう安心さ！」

ト「今こそその真価を見せる時が来たね！？　発動、トウヤ・アイ！」

ア「ところがぎっちょん、てなぁ！　坊主、元気か！」

カ「なんか凄いのも来てますけど！？」

ル「仲間だ！」

カ「かなり無理ない！？」

未「皆、お前を見捨てたりなんかしないってことさ！」

男性陣一同（本当は逃げられなかっただけだけどな！）

カ「おいぃぃぃ！？　今心の中でなんか叫んだだろ！？　具体的に仕方ないから来た的なこと！」

ポン。

カ「ジル？」

ジ「……Ｌｏｖｅ、さ♪」

カ「いよぉぉし！　なんかもうどうでもよくなったぁ！」

アル「なんか壮大に壊れてんなぁ……」

カ「さぁ、反撃返……」

祐・ア「てい♪」

―滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅滅
滅滅滅滅滅滅滅滅滅―

―滅！―

男性陣一同「いや、無理だろ……」

―きら～ん♪―

シ「ママ、ママ、お星様……」

ヴ「うん♪　綺麗だね～♪」

シ「……ママ、大好き」

ヴ「私も大好きー♪♪♪」

―完―

タ・ｉｎな「ふぅ……助かっ……」

ガシ……

タ・ｉｎな「祐希、奈殿……？」

―ニパァ♪―

祐「タカトは次回よ♪」

タ・ｉｎな「っ！！」

終わっとけぃ♪

第三十八話　心の在処　（中編）（前書き）

すんません！
後編だけにまとめきれませんでしたぁ！

タカト弄りも次回に持ち越しとなりました。

中編で書くのはどうかと思いまして（汗）

返信を返せていない方々、明日の夜には全て返すつもりでいますので、ご容赦ください。

では、中編、どぞ♪

第三十八話　心の在処　（中編）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

戦いが終わり、約二時間強の時が流れグラースとの約束の時間まで、七時間を切った頃。
機動六課、医療施設。
そこで、止めどなく冷や汗を流す少年、カナンがいた。

「あの……」

「……右腕粉砕骨折に、肋骨にヒビ」

沈んだ声でカルテを告げるのはシャマル。
その声の割に、やたら笑顔。
ぶっちゃけた話、シャマルがキレていた……。

「加えて、未完成なオーバードライブの使用したための負担がほぼ全身……。“今回も”これだけですか……。カナン君も好きですね～」

「あ、あはは」
――ひぃぃぃ！！

ニッコォっとそんな音すら想像出来てしまう程に、シャマルの張り付いた笑みがカナンに向けられた……。
内心涙目になりつつ、カナンは笑顔で返す。

「どうして、カナン君はこんなに怪我するんでしょうねぇ」

「……い、いや、今回はいつもに比べると大分マシ……いでで！」

言葉の途中、カナンの額にシャマルの指先が押し込まれ、グリグリと弄る。

シャマルは腕組みをして、溜め息を一つ。

「全く、三日前にあれだけのことをしておいて、またすぐにこんな無茶をするなんて、どういう頭の構造をしてるんですか？　流石の私でも怒りますよ？」

「えっと、不可抗……ぅぅぅ！」

「どの口がそんなこと言っているんですか？」

再び額をグリグリとされてカナンは押し黙る。

「思ったより元気そうだね」

「あ、なのはさん」

しばらくシャマルにグリグリされていると、なのはが、医療施設の中へと入ってきた。

直後、カナンは再び冷や汗がドッと溢れ出す……。

「お、おお、お話ッスか？」

「？　ああ、うん。まぁそうかな」

「あ～……」

――サラバ。俺……。

「ハル君のことでね。カナン、ありがとう」

――さぁて、今回は久しぶりにお花畑かぁ……。片道分の切符は嫌だなぁ……。せめて特急券辺りで……、はは。なのはさんだもんなぁ、無理かぁ。

「って、へ？　今、もしかしてお礼言われました？」

「そ、そうだけど？」

全力で悟りを開いていたカナンは、思いっきり真逆の言葉を言われ、キョトンとする。

何故、お礼を言われるのか、カナンには心当たりはない。

お話の心当たりなら、一瞬で思い当たる物が幾つもあるのだが……。

「俺、なのはさんにお礼言われるような何かしました？」

「え？」

逆に、予想外の返答に今度はなのはがキョトンとした。

「えっと、カナンが私の代わりにハル君を止めてくれたからそれでお礼を言いに来たんだけど……」

「あ～それか！」

「良かった。じゃあ……」
言われて合点がいったようで、カナンは大きく頷いた。
ようやくわかってくれたカナンになのはは改めて息を吸い込む。

「でも、お礼なんていらないッスよ。俺は俺が嫌だからって理由だけで止めただけなんで。ごく個人的な理由ッス。それでお礼を言われるなんて、おかしくないっスか？」

そう、カナンは別段、ハルのためを思って止めていたわけではない。
結果的に、ハルのためになることだったとしても、それは偶然の結果であって、行動理由には入らない。
カナンがハルに敵対したのは、ハルの在り方が気に入らない。
ただそれだけ。
自己中心的で、短絡的思考、本当に個人的な理由。
それを知ったなのはは、またもキョトンとするが、次は後に笑顔が咲いた。

「カナンは、損する性格してるね」

「まぁ、効率や利益を考えて動ける人間じゃないんで……」

「でも、嫌いじゃないよ。そういう人。好きかな。もちろん、人間として、ね」

「はは。どもっス」

そして互いに笑い合う。
そんな二人を見て、シャマルは苦笑い。
何故なら……。

――似た者同士、ね。

二人を重ねて、そう感じていたからだった。

和やかな時間が流れる中で、突如として平穏は砕かれる……。

「アンタ、何でなのはさんを口説いてるわけ……？」

「へ……？　ひぃぃぃぃ！！！」

シュン、と医療施設の扉がスライドして開く。

そこに現れるは黒いオーラを纏いし祐希奈。

当然ながら、その後ろにはヴィヴィオも着いてきている。

「ゆ、ゆゆ、ゆゆゆ、祐希奈、さん？」

「そう、アンタ、既婚のなのはさんと、隠れ美人のシャマルさんに手を出したのね……。仲良さそうでいいわね？」

「て、手を出したって、いや、普通に話してただけで……」

「アシェル……」

『でも、嫌いじゃないよ。そういう人。好きかな。以上です』

「これは、何？」

――その後が聞こえてないぃぃぃぃ！？

なんとも最悪の部分で切られていた録音に、カナンは内心で絶叫する。　実は祐希奈が切っただけなのだがそんな事実をカナンが知る筈もない。

なんとか被害を少なくしようと、カナンの脳はフル稼働し答えを探す……。

「祐希奈、落ち着け。まず、なのはさんから話を……」

「なのはちゃんならさっき出ていきましたよ？」

「え……？」

「邪魔すると悪いからって」

――寧ろ邪魔して欲しかった！

ともすれば泣きそうなカナンは、最後の希望、ヴィヴィオへと助け船を願い、視線を向ける。

「カナン君、私もお話があるんだけど、いいかな……？」

――寒い！？　ヴィヴィオの笑顔がなんか寒いぞ！？

ある程度、自分の気持ちに素直になったヴィヴィオは、アシェルの再生を聞いて、何か、モヤモヤしたモノをカナンに感じていた。

自分が知らない場所で、カナンが女性と仲良くして、好きだと言われた。

頭ではわかっている。母親であるなのはとカナンがどうにかなるわけではないと。

だが、理屈ではない何かがヴィヴィオの中を満たしていた。

人は、それをこう言う、ヤキモチ、と。

――もしかして俺、今回味方ゼロ！？

今更ながらに事実を知ったカナンは焦るが、それも既に遅い。

「別に私は、アンタが誰と仲良くしてようが、気持ちは知ってるわけだし、どうでもいいけど、今回は、ヴィヴィオがいるから仕方なく、同席するわ。そう、仕方なく、ね」

――仕方なくね……。

その割には指の関節をバキバキならしている祐希奈に、カナンは目が遠くなる……。

それから約五分後、少年は真っ白に燃え尽きていたのは余談である。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

――どうして世界は、こんなにも、薄暗い……。

どうして、こんなにも辛い世界に、俺は生まれてしまったんだろう……。

暗闇の中で、ハルは嘆く。

世界の暗さを、辛さを。

「ん～、人は生まれる場所は選べへんからなぁ。嘆いても仕方ないんよ」

「なっ！？」

ハルのすぐ横から独特のイントネーションを持つやんわりとした関西の地方の話し方が響く。

予想外の返答に、浮いていた意識は覚醒し、ハルは飛び起きる。

「っ……」

「あ、ボロボロなんやから急に起きるとあかん～って、ちょっと遅かったか……」

「ここは……」

ハルは周囲を見渡すが、医療設備らしいモノといえば救急キットくらいなモノで、施設とは言えない。

「あ、今は医務室が大変やからハル君は私の部屋にいるんよ。散らかってるけど、堪忍な？」

苦笑いをしながら女性、八神はやては手を合わせて謝る。

ハルは驚いていた。

自分が機動六課にいることに、そして、いつも通りに接してくるはやてに。

「いいのですか……」

「？　何がや？」

尋ねるものの、はやてはわかっていない様子で首を傾げた。

その様子に、ハルは心底呆れ返る。

「はぁ……」

「な、何や？」

未だに首を傾げるはやてに、ハルは溜め息をつく。

そして思う。
やはりこの部隊は変人の集まりだと。

「僕は犯罪者ですよ？　殺人未遂すら起こした。そんな危険人物を、手当てするなんて、火に油を注ぐようなモノです。いつまた先刻のようなことをするかもわからないのに……」

何故、当事者の自分がこんなことを被害者側に説明しているのか、バカらしくさえ思った。
が、そこは我慢して全ての話を終える。

「それやけど、ハル君は誰も殺してへんし、事情も事情やし、私からは何も言わへんよ。ハル君自身、そんなことする気も無いやろ？」

一通り説明した後もはやてはニコリと笑う。
確かに、はやての言う通り、ハルにはもうその気は無かった……。
世界と個人、ハルが取った答えは、個人。
クレアを生かす方だった。
助けようとする意思と殺そうとする力が反発し、暴発。
運ばれて、今に至っている。

「無い、と言うよりは、そもそもとして、貴女方がさせないでしょう」

「まぁ、せやね」

迷いなく頷くはやてにハルは苦笑いを浮かべる。
本当に、困ったように、ハルは笑みを浮かべていた。

「お節介な人達ですよ。本当に」

「まぁ、それが六課の売りみたいなもんやからなぁ。それ言われると痛いわ」

笑みを浮かべ合い、沈黙が数秒、意を決したようにハルは溜めていた空気を吐き出す。

「ですが、僕は完全に折れたわけではありませんよ……」

部屋に響き渡る、ハルの淀みのない声。

そしてそれは、はやてに言われた言葉ではない……。

はやての部屋の扉が開き、入ってくるのは、カナンの見舞いを終えた、なのは。

「ほんならまぁ、私は席外しとこかな」

二人の間に流れる空気に、はやては気を使い、その場から立ち上がる。

そして、「頑張りや」と、なのはの肩を軽く叩いて立ち去った……。

「僕は……」

「もう、いいよ。そんな“無駄なこと”は。ハル君が折れようが折れまいが、もう、関係ない」

そう切り捨てるなのはに、ハルは疑問を抱く。

何が無駄なのか、皆目検討もつかない。

「帰ってきてくれたんなら、完全にじゃなくても、少しでも考えを変えてくれたんなら、希望を、持ってくれたなら、私達が、その光を繋ぎ止めて見せるから、対消滅なんて、させない……。六課は誰にも負けない。勝つよ。絶対」

絶対勝つ。だから、最終手段など必要ない。考えるだけ無駄なこと。

だから、なのはは切り捨てた。

強い答えに、ハルは一瞬虚を突かれるが、すぐに冷静な表情を取り戻す。

「中核の貴女が、本領ではないレンジで戦わざるを得ないとしても、ですか？」

「そうだね。今の私は、クロスレンジじゃ、グラースどころか、ハル君にだって敵わない」

「だから」そう、なのはは言葉を繋ぐ。

瞳は一切揺らがない。

迷いなく、なのはは考えを口にする。

「敵わないから、グラースに懐に入られても、最低限回避くらいは出来ないといけない。だからお願い。今から私と模擬戦をしてほしいの……。もちろん、本気で……。グラースに一撃で落とされたりなんかしないように」

その言葉に、ハルは呆れ返る。

いかに管理局のエースオブエースと言われるなのはと言えど、無理があった。

なのはとて、クロスレンジの訓練は積んでいる。

事実、昔、シグナムと模擬戦をし、互角以上に戦っている。　それでも、足りない。
クロスレンジが出来るとはいえ、本業はやはり砲撃によるミドル、ロングレンジだ。
本業が違う人物を、グラースに対抗しうるまでに育てる。
到底不可能とハルは判断する。

「何を言うかと思えば……。間に合うとでも？」

故に、分かりやすく呆れの表情を見せた。
だが、なのはは諦めることを、しない。

「何も、ずっとクロスレンジで戦うなんて言ってない。最低限の回避が出来ればそれでいいの。幅を広げて、皆で倒す。私一人で戦うわけじゃない。皆で、一緒に戦えば、なんとでもなるよ」

譲らないなのはに、ハルは心底溜め息をつく。
このまま行っても平行線。
なら、賭けてみよう。そんな想いをハルは抱いた。

「非殺傷などありませんよ？　直撃が当たれば殺してしまうかもしれません。それでも……」

「うん。やるよ」

「わかりました……」

苦笑いを浮かべながら、頷いたハルになのはも笑う。

「やっと歳上の先輩らしく振る舞えたかな？」

「正直、なのは様を歳上だとは思えませんけどね。言動がカナンと変わらないので」

「う～酷いなぁ……。カナンが大人っぽいんだよ」

剥れるなのはをからかいながらハルは立ち上がる。

少し痛みに顔をしかめたが、座り込むようなことは無い。

「大丈夫？　傷を塞いでからの方が……」

その意味がわからず、なのはは説明に首を傾げる。

「夾の身体のことをお話しましたよね。それのお陰ですよ」

『リンクと言ってな。ハルの身体と夾の身体は繋がっている』

「まぁ、そうなります」

「つ、繋がっている？　よくわからないんだけど？」

「夾の身体を蝕んでいるのは、覇神の力です。その覇神の力は、元々は僕に向けられた力ですが、夾はそれを無理矢理に自分へと移した。お分かりですね？」

「う、うん」

「本来、覇神の力は個人に向けたモノであり、普通は分割など出来る筈もありません。当然、力は一つのモノとして在り続けます。僕は右腕に、夾は残りの部位に、簡単に言えば、夾の中に僕の力があ

るわけです。右腕を介して、繋がっているわけですね。その結果、能力の共有などというおかしな現象が起きています。その一つが、僕の異常な回復力というわけです。無論、劣化はしますが。確証はありませんが、夾にも同じことが起こっていると思われます」

「え～と……、つまり、右腕がある限りはハル君は滅多に死なないってこと？」

「そう思ってもらって構いません」

要約すればそれだけの内容になる。

最初からそう言えば良いのだが、ハルはあえてそうしなかっただけ。

――やられっぱなしはスッとしませんしね。

頭を抱えるなのはを見て、ハルは笑う。

話しているうちに着いた直ったばかりの訓練施設。

なのはは、ゆっくりとハルへと向き直る。

その身体に、バリアジャケットを纏い、一言。

「それじゃあ、やろっか」

「ええ」

静かに、風が吹く。

訓練施設に、強層結界が張られ……。

「行くよ！」

「……っ！」

和やかな空気を吹き飛ばし、二人は模擬戦を始めた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

キャロ・エリオ部屋。

そこで手当てを受けていたクレアは、外で戦い始めたなのはとハルをしっかりと見ていた。

「おいおい。戦い始めちまったぞ？　普通は何か言いに来るだろ。アイツ、バカか？」

そう、エリオの肩の上で罵倒するのはアルティス。

元々、ハルのような人間が嫌いなのか、イライラしているのが見てとれた。

「あ、アル、もう少し遠慮しようよ……」

「けっ！　バカをバカっつって何が悪い？　それともあんな礼儀のねぇ奴を敬えってか？　無理だね。無理無理。ぜってぇ無理！　頼まれても敬ってなんてやんねぇよ」

「ご、ごめん！　クレア！」

ハルを罵倒するアルティスに、何故かエリオがクレアに頭を下げた。

「きっとハルも、迷っているだけですの」

気にしていないと、クレアはエリオに笑って首を振る。
その肩に、パタパタと透明な翼を羽ばたかせ、ニーナが降りる。

「クーちゃん気にしちゃダメだよ～？　アルちゃん自体が礼儀が無くておバカさんだから～♪　どおぞくけんおって言うんだって～♪」

「てめぇにだきゃ言われたくねぇ！　年中花畑咲かせてるようなボケた頭してやがるてめぇだけにはな！」

「む～！　ニーナ、賢いもん！　メイデンお姉ちゃんだって認めてたでしょ～！」

「あれはてめぇがごり押ししたんだっつのドチビが！」

「チビじゃないもん～！　自分がおバカさんだからって～！」

「身長とバカは関、係、無いだろうがクソチビィィ！」

「ニーナ、アル、それくらいで……」

「エリ君は関係ないでしょ～！／エリオは関係ないだろうが！」

「ごめん……。悪かったよ……」

デバイス二人に怒鳴られてシュンとなるエリオに、キャロは苦笑いしつつ、クレアへと身体を向ける。

「本当に気にしないでね？　アルちゃんはちょっと言い過ぎる所があるから……」

「大丈夫ですの。私も、ハルのことは敬うなんて無理だと思うですの」

「どうして？」

キャロの中では、ハルは悪い印象ではない。

最近の行いを差し引いても、何か理由がない限りはハルは紳士的であったからだ。

「ふふ。昔のハルを知っていれば、きっとそんなことは思えないですの」

だが、ハルの昔を知るクレアは、可笑しそうに笑う。

紳士的、昔のハルに最も遠い言葉と言えた。

「そ、そんなになの？」

「はいですの。元々、ハルは凄く不器用で、傷つきやすい、そんな人ですの。だから、今回のことも、気長に待つつもりですの」

慣れているのか、クレアは特に焦る様子はない。

完全にハルのことを信じきっていた。

『まぁ、あのバカ執事が今回の戦いで死ななければ、の話ですが』

「ほら、長年の付き合いのデバイスにすら罵倒されているくらいですの」

『ええ。大嫌いですからね。あのふにゃふにゃした笑顔を見ると喰い千切りたくなります』

「ちなみにいつもこんな感じですの」

「「「「……」」」」

ぶった切るシルフィスに、一体どう返せばいいのか、言い淀む四人に、クレアは「でも」と付け加える。

「今はバラバラでも、ハルは、いつか、来てくれる」

『まぁ、今更仕事を放棄されても困りますからね』

「これが終わって、整理がついたら、きっと、“これから”を言ってくれる筈ですの」

ニッコリと笑って、確信を持って、クレアはそう言った……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

機動六課部隊長室。

いつもならはやて専用の仕事机があるだけなのだが、少し変わり、新たに椅子が設置されている。

「お待たせや～♪」

「お待たせなのです～♪」

何故か、部隊長である筈のはやてが自らお茶を淹れていた。

完璧にこだわったお茶は、良い香りで部屋を満たす……。

「部下にやらせれば良いものを。変わってませんわね」

響くは威厳に満ち満ちた声。

新たに設置された椅子に座るは、零番運用部、海城・G・凛。

厳しい凛に苦笑いをしつつ、はやてはお茶を手渡した。

「それは凛ちゃんもや。ホンナにかとうならんでもええし、皆、座ってな～？」

そう言って、はやては凛の後ろに直立不動で立つ、レイ、ヴェイン、クレイの三人に笑いかける。

凛とは違い、優しいはやてに、三人の表情が緩む。

瞬間、凛に睨まれた……。

「誰が、座って良いと言いましたか？」

「「すみません！」」

「ええよって。私が言うてるんやから。立ってられると落ち着かへんし、な？」

「ですが……」

「り～んちゃん？」

「……わかりましたわ。座ってよろしい……」

はやてに押し負け、凛は渋々了承する。

普段の凛とは違い、はやてに噛みつくようなことはしない。

それもその筈、凛の中では、はやて、なのは、フェイトは、認めた先輩であるからだ。

認めた相手にはそれなりの敬意を払う。

先輩ともあれば尚更だった。

余談だが、先輩であろうが上司で認めていない相手には容赦がない。

「リイン、お茶を渡したってくれるか？」

「はいです～♪」

フワフワと飛びながらお茶を渡すリインを見て、改めて凛ははやてに向き直る。

「まずは、お礼やね。二人を運んでくれてありがとう、や」

「元々六課に行くついでですわ。必要で無ければ放っておきます」

「またまた～。私はわかっとるよ。凛ちゃん、ホンマは優しいもんな？」

「つ・い・で・で・す！」

「まぁ、そういうことにしとこか。凛ちゃんは譲らへんし」

「全く……」

少し紅くなりながら、プイッと顔を逸らす凛にはやては笑う。

そんな光景を見て、驚愕するのは後ろの部下達。

「……個人面談、今、ここでやりますか？」

《申し訳ありません！》

異口同音に頭を下げた三人に凛はまた溜め息を一つ。

今回は不問にしたのか、なにも起こさずレイ達は事なきを得た。

「三人共、扱いがちょっとくらい悪くても、落ち込んだらあかんよ？　凛ちゃんが連れてきてるってことは、信頼されてるってことなんやから」

「いい加減、怒りますわよ……？」

「あはは。ごめんなぁ。そろそろ凛ちゃんいじめるのは止めとこか」

（（（凄い……）））

凄みを効かせる凛だが、はやては全く意に介さず、あっさりと受け流す。

そんなはやてに後ろの三人組は驚くばかり。

「コホン……」

「またえらい古典的な……」

「誰のせいだと？」

「堪忍や～」

眉をつり上げて怒りをアピールするが、はやてには通じず、ニコニコ顔で流される……。

どうにも調子が狂わされている凛は、もう一度咳払い、次は厳粛に、つけこむ隙はない。

「大変そうですわね？」

「そら、まぁ……。覇界神の問題やからね。今回は管理局の協力も

ちょっと期待出来へんし……」

少し辛そうにはやては語る。

凛は片手間でコンソールを展開し、グラースの過去を漁る。

簡単に漁ってはいるが、佐官クラスにならなければ見れない機密事項の一つだ。

「覇界神、グラース。元の名前は朱皇春人。管理局員。最終的な階級は二等空佐。ロストロギア回収の際、原因不明の光に包まれ暴走。局員、民間人問わず大量殺戮を行い、局ですら追跡出来ない場所に消え、問題だけが残される。被害は甚大、追跡も不可能、募るのは民衆の不安と憤り。遂には暴動が起こり始めたため、仕方なく、終わったことにされた事件」

「り、凛ちゃん、機密事項をそんなペラペラと……」

「どうせあの三人は知っていますわよ。ハッキングが得意なお友達もいますし、ね」

流し目で見る凛の視線を、三人は冷や汗を流しながら回避する。

「まぁいいですわ」と、決してよくないことを黙認する辺り、凛の器は良かれ悪かれかなり大きい……。

「取り合えず、現状は？」

「ダメダメやな。議題にすらあがらん。まぁ、気持ちはわかるんやけどね」

一度解決した問題を、もう一度掘り起こすことは、管理局に限らず、組織という団体は嫌う。

ただそれだけで全体の信頼低下に繋がるからだ。
そしてそれは、問題が大きければ大きい程、難しくなる。
つまりは、グラースに戦うことに関して、六課への管理局からの支援は、無い。

「もう少し事態が大きくなれば嫌でも動くでしょうが……」

「あの覇界神が本格的に動き出したら、それこそ被害はとんでもないことになる……」

魔力が無尽蔵のようにあり、かつ、力は絶大、さらに、攻撃目標は手当たり次第。
ハルという避雷針が無ければ、グラースという雷は、たちどころに世界を破壊しつくす……。
そんな事態になってからでは、遅い。

「加えて、いつ動くかわからないアンノウン」

「うん……。せめて……」

「「敵に攻められてもしばらく持ちこたえていられる戦力があれば……」」

重なる二人の言葉。
無論、示し会わせた訳ではない。
凛がはやての思考を読み切り、合わせたのだ。
故に、はやては驚き、凛の顔を見つめる。
凛は、珍しく、微笑みを浮かべていた。

「凛ちゃん？」

「ようやく、後輩として、役に立てますわね。本来の目的とは違うものの、六課に貸しを作っておくのも悪くないですし」

「貸し？」

「そうですわ。守りは、私達、零番運用部が引き受けます」

「はぁ……？」

凛の言葉が理解出来ず、はやてはポカンとする。

ゆっくりと、染み渡るように、はやての思考は言葉を噛み砕き、理解へと達する。

「え、ちょ、何言うてるん！？」

「ふふ。二度は言いませんわ。遠慮をする必要もありません」

「あかんて！　遠慮以前に、まず零番運用部が動ける筈が……」

「それはまぁ、ピアニッシモが頑張りますので問題ありません」

ピアニッシモとはフォルテ・アスパイアという人物である。

ちなみに、本人はピアニッシモというあだ名を認めてはいないが、周囲は既に定着化している。

そのフォルテは、現在は山のような始末書を処理し終え、パシリから解放され、平和な時間を過ごしている。

「ぶちょ～、アスパイア査察官兼経理は担当部署が違いますよ～？」

「そんな“些細な問題”はレイに任せれば終わりますわ」

後ろから入ったヴェインのツッコミを一刀両断に切り捨てる。

勿論、些細な問題などではない。

故に、無言で崩れ落ちたレイの肩を、左右でヴェインとクレイが優しく叩いていた。

ここに、フォルテとレイを不幸にする負の連鎖が完成したのだが、凛は一考だにしない。

「でも……」

「先に言いましたわ。“本来の目的とは違う”と。元々、私達がここに来たのは、反撃の狼煙を上げるための下準備。その準備には六課も必要、ですが、その六課は大きな危機に直面している。だから、予定を切り上げた、ただそれだけです」

簡単に言う、凛。

勿論、フォルテ、レイにも相当の負担がかかる。

しかし、凛とて、何もしないでいる筈はない。

管理局は、巨大な組織だ。

そうそう簡単に、零番運用部という問題の塊のような部隊を動かすことは容認出来ない。

あげく、協力先はただでさえ異常とされる機動六課だ。

何も起きない方が不思議であり、おかしい。

管理局には、なのは達のようなお人好しを絵に書いたような人物も存在する。

と同時に、頭の固い悪人のような人物もまた、存在する。

そんな人物が、凛達の勝手な行動を許すか許さないかで言えば、答えは否である。

その否を、可にするために、凛は動く。

自分についてくれる味方を探し、嫌いな上司に何度も頭を下げ、山のような始末書を書き、事情を理解していない局員からは罵倒される。

それでも凛は、何でもないと言わんばかりに、簡単に言う。

はやては、立場的に似ているため、その苦労は手に取るようにわかる。

「凛ちゃん……」

「ただし、私達が後ろを守って差し上げるのですから、きっちりと、誰も欠けることなく、覇界神の問題を解決すること。いいですわね？」

片目だけを瞑り、首を傾げながら問いかける凛に、はやては、頭を下げた。

「ありがとうな……」

「先輩が困っている。後輩として、力になりたいと思うのは、当たり前です。だから、顔を上げてくださいな。そんなことをしてもらいたいわけではないのですから」

「凛ちゃん、やっぱ優しいなぁ……」

「……だから優しくなどないと……」

その手の話には弱いのか、凛は少し赤くなる。

途端に形勢が逆転し、はやてが優位に立った……。

「優しいよ～。素直やないだけで、な？」

「……覇界神の問題を解決した後で、そんなことを言えるかどうかわかりませんわよ？」

「でも協力してくれるんやろ？」

「それは、まぁ……そのつもりで来ているわけですし……」

「ほら、な？」

「もう……勝手にしなさいな……」

あまりにしつこいはやてに、凛は遂に折れる。

それにはやては、より一層ニッコリと笑う。

「あはは♪　凛ちゃんが照れとる～♪　可愛ぇなぁ♪」

「う、うるさいですわよ……」

先輩後輩、というよりは、同級生の友達のように二人はじゃれる。

とは言っても、凛が一方的にやられているだけだが。

しばらくは和やかなムードが流れ、「ほんなら」のはやての一言で空気が引き締まる。

「凛ちゃん、ううん、海城三佐……」

「はい……」

「他力本願で申し訳ないんやけど、六課の守り、お願いしてええかな？」

「ええ。後方は気にせず、存分に戦ってくださいな」

笑みを交わしながら、はやてと凛は握手も交わす。

ゆっくりと指が解かれ、腕が離れる。

「それでは……」

「あ、凛ちゃん」

準備もあるため、キビキビとした動作で踵を返す凛を、はやては呼び止める。

不思議そうに首を傾げた凛に、はやては先輩の表情を見せ。

「これが終わったら、お休みとって、なのはちゃんらも混ぜて、遊ぼうな。私もよく言われるんやけど、たまには息抜きせんとあかんし、特に、凛ちゃんは頑張りすぎるから……」

「……まぁ、考えておきますわ」

言葉はいかにも渋々、といった様子だが、表情は満更でもなさそうに緩んでいた。

改めて礼をした後、凛達は退室する。

「さて、と……私も頑張らんと。な？　リイン？」

「はいです～♪　リインも、たっくさん、たくさん、お手伝いするですよ～♪」

「ん。リインもありがとうな」

「えへへ～♪」

リインの頭を軽く撫でた後、はやてはコンソールを展開し、データを打ち込んでいく……。

最適な陣形、戦い方、万が一に備えての対策。

それらは全て、六課のために。

少しでも勝率を上げるために、はやての戦いは既に始まっていた……。

グラース消失まで、残り後五時間……。

後編に続く。

第三十八話　心の在処　（後編１）（前書き）

何故にこうなった……。

題名と内容が激しくずれちゃいました（汗）

次回分は既に半分書けていますし、タカト弄りも完成してますので、すぐに投稿出来るよう頑張りますのでお許しください。

第三十八話　心の在処　（後編１）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

機動六課の訓練施設は広い。
故に、分化して個別に訓練することが可能だ。
普段は滅多に使われることはない機能。
何故なら、教導する人間の数が足りていないためだ。
だが、今回は違う。
使えるものはフルに使わねばならない、そんな状況。

ライトニング分隊＋α

疾る！

「っぁああ！」

紫電の槍が！

「はぁっ！」

疾風の刃が！

「「っ！」」

互いに引き寄せられながらも、否定し、反発する！
激突するはエリオとヴィヴィオの横薙ぎ。
結末は互角、エリオは後退し槍を構え、ヴィヴィオはクルリと回りながら空で体勢を立て直す。

同時、ヴィヴィオの周囲に生まれる光槍。

『Ａｃｃｅｌ　Ｌａｎｃｅｒ！』

「ファイア！」

３０もの数の槍が放たれた直後、エリオ霞む。

ジグザクと、雷のように進むその姿。

光の槍は、その速度を追いきれず、地へと光の道を描くのみ……。

槍の雨を脱し、自由の雷と化したエリオは、跳躍し、ヴィヴィオに襲い掛かる。

だが、ヴィヴィオも高速戦闘を得意とする者。

その動きを完璧に捉え、新たに左右に生成した光の槍を二本、放って。

「甘い！」

一筋の閃光が真一文字に振り払われ、光槍を打ち砕く……。

瞬間、サイドブースターを展開、噴射する。

その行動の意味は、ヴィヴィオと軸をずらすための回転。

何故か。

ずらさなければ、一撃の元に落とされるからに他ならない！

『Ｍｏｄｅ　ｆｉｒｓｔ．　Ｓｈｏｏｔｈｉｎｇ！』

流れる電子音、輝く剣。

エリオの身体は噴射によってヴィヴィオから横に逸れていく。

逃がすまいと、双刃剣から杖へと変化したフェアリーを構え、同時、カートリッジ弾き飛ばす。

「バスタァァァ！」

「くっ！」

咆哮の直後、エリオの脇腹を蒼砲が突き抜ける！
威力を犠牲にし、速射に変更されたショートバスター。
それでも、エリオの身体を激流の中へと引っ張り込もうと猛威を振るう。

「負けるもんかぁぁぁ！」
脇腹に流れる鈍痛を無視して、エリオは砲撃を引きちぎるようにして回転する！
横一閃に残光が疾り抜け、金属音を鳴らし、ヴィヴィオの手から杖が弾け飛ぶ！
即座に放たれる刺突の連撃。

「くっ！」

首を捻る、身体を捌く、ステップを踏んで距離を取る。
霞んで消えるヴィヴィオの残像を槍が次々と穿ち、消し飛ばす！
二人の動きは止まることを知らない。
幾体モノ残像を残し、エリオは穿ち、ヴィヴィオは避ける。
刹那、二人の間に生まれる空白、エリオが狙うはその一瞬！

「一閃、必中……！」

槍に雷が轟く！
魔力刃が展開され、突撃のための構えを取り、ブースターから魔力が爆ぜる！
最早回避は間に合わない。
それ程までにエリオの加速は凄まじい。

「っ！」

かろうじで展開された障壁に槍は突き立ち、深々と突き刺さる刃がヴィヴィオの眼前で止まる……。

当然ながらヴィヴィオは動けない……。

薄い障壁にヒビを入れ、ジリジリと進む刃に、ヴィヴィオは冷や汗を足らして。

「ジャケット……」

――回避は、これを、狙って！？

待ってましたと言わんばかりに笑みを浮かべる。

悪寒を感じ、槍を引き抜こうにも抜けはしない……。

障壁に深々と刺さってしまっているのだから。

エリオの眼前、ヴィヴィオの姿が、光を放つ！

反射的に左手を突き出して、プロテクションを張って。

「パージ！」

「うぁあああああ！」

瞬間、ヴィヴィオのジャケットが弾け飛び、その爆散を至近で受けたエリオは吹き飛ぶ！

建造物に激突し、身体を沈ませながら、エリオは止まる……。

しかし、ヴィヴィオは止まらない……。

「行く、よ！」

ソニックフォームとなったヴィヴィオが霞み、宙を舞っていたフェアリーを回収、竜巻のような風がその刀身に纏われる！
翡翠の軌跡を残し、回転する漆黒の姿。
風が、止む……。
直感に任せ、エリオはストラーダを地面に突き立てる！

『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！』
「ソニックブラスト！」

「く、ぅぅぁ……！」

瞬間、ヴィヴィオから暴虐なまでの破壊の風刃が撃ち放たれ、エリオの身体を風の刃が切り刻む！
歯を食い縛り、ストラーダを離さないことだけに集中。

「疾風、一閃！」

轟、と唸る風……。
堪え忍ぶエリオの頭上、双刃を回転させ、風を巻き込み、威力を増大しながら、降る、ヴィヴィオがいた……。
来ると、わかっていたから。
わかっていたから、必死に掴んでいたストラーダを掲げる。

「ウィンドスラッシャァァァ！」

「っぅぅ！」

翡翠の刃が音速の壁を突き破り、上空から神速で叩きつけられる双刃の威力に、エリオの膝が笑う。

「ぁぁぁああ！」

ガクガクと今にも崩れそうになる膝を叱咤し、エリオは咆哮を上げる。

槍に纏われる、雷……。

ウンヴェッターフォルムとなったストラーダから、カートリッジが弾け飛ぶ！

瞬間、轟音が鳴り響き、黒煙が上がる……。

飛び出すはヴィヴィオ。

体勢を崩すこともなく、静かな音を立てて着地する。

だが、その姿は止まることはない……。

身体が霞み、消える。

「はぁぁああ！」

直後、黒煙上部よりエリオが飛び出し、槍を引き絞る……。

雷を纏う槍は、残像を残すヴィヴィオ相手に、揺らぐことはない……。

ブースターの号音を轟かせ、一直線に、放たれる！

「っ！」

その加速は確かにヴィヴィオを捉えている。

角度、速度、威力、共に揃った一撃に、ヴィヴィオは驚愕しながらも、回転しながら跳躍し、身体を捻る。

その直ぐ脇を槍は穿ち、地を砕く……。

「逃がさない……！」

そんな声をヴィヴィオは背後で聞いた……。

槍の回避に気をとられ、エリオから目を離した一瞬。
その一瞬で、エリオはヴィヴィオの背後に回り込む。

「くらえ！」

「フェアリー！」
『Ｗｉｎｄ　Ａｒｍ！』

突き立つ槍を掴み、突っ込んだ勢いを利用、槍を支点に、グルリと回り、蹴りを放つ！
かろうじで展開した風の籠手で蹴りを防ぐ。

「あああ……！」

が、即座にそれも打ち破られ、肩口に炸裂した蹴りに、吹き飛ぶ！

――雷の、蹴り……。

痛みを堪え、ヴィヴィオはエリオの一撃を分析、紫電一閃の応用と判断した。
速い上に、威力も折り紙つき。
だが、扱いも難しい筈の力を、エリオは一瞬で発動出来るまでに、使いこなしていた……。

「切り裂く！」

「負けない……！」

術後硬直を吹き飛ばし、エリオが駆け、ヴィヴィオは体勢を立て直す。

上体を捻り、肩口から振り下ろす一撃、スタールメッサー。
踏み込み、腰から刃を振り上げる一撃、ウィンドスラッシャー。
互いに同時に打ち放つ斬撃に、激音が。

「く、そ！」

響かない……。
響いたのは、火花が散った音。それこそ、パチリと、本当に小さな小さな、火花。
空振りをした体勢で、エリオが歯を食い縛る。
その内に、烈風を巻き起こし、回転しながらヴィヴィオが潜り込んでいた……。
力では叶わないヴィヴィオが鍛練を重ねて習得した受け流し、そして、体捌き。
その速度はエリオの視界から消える程。
故に、思考が追い付いた時には既にヴィヴィオは下段から腕を霞ませている。
だが、エリオは諦めない。
身体中に魔力を流し、身体の限界を越える！

「ストラーダ！」
『……』
「あ……」

「はぁぁああ！」

否、越えようとした。
だが、声に相棒は応えず、魔力の流れは加速をしない……。
つまり、ソニックムーブは発動しない……。
そのまま斬撃はエリオへと叩き込まれ、盛大に吹き飛ばした……。

声すら上がらず、エリオの身体は地を滑る……。

「エリオ……。ごめんなさい。寸止め、出来なくて……」

吹き飛び、仰向けになっているエリオにヴィヴィオは近づき頭を下げた。

だが、ヴィヴィオはわかっていた。

エリオは痛みによって起きられないのではないと。

「エリオ……」

「ごめん。ヴィヴィオは悪くないよ。僕が避けられなかっただけだから」

二度目の呼び掛けでようやく気づき、エリオはゆっくりと身体を起こす。

隣に刺さる相棒を見て、寂しげな顔をしたが、それも一瞬のこと。

「まだまだ、これからだ！」

声を響かせ、相棒を抜き取って振り払い、寂しさを吹き飛ばすように、エリオが構える。

それに応え、ヴィヴィオも双刃を構え直す。

「じゃあ、行くね！」

言葉の終わりは戦いの始まり。

互いに示し合わせたかのように、同時に姿を霞ませと神速の世界へと消えた……。

「なんか、向こうも盛り上がってんじゃない♪」

二人の戦いを見ていた祐希奈が明るく笑い。

「ヴィヴィオとエリオか。戦い方が似ている分、激しくなるのかもしれないな」

同じく見ていたシグナムは冷静に分析する。

互いに踏み込むはほぼ同時。

身体強化を巡らせ、祐希奈は居合いの如く下段から振り上げ、シグナムは叩き割るように上段から袈裟懸けに振り下ろす。

全くもって、本気には見えない一撃。

しかし、激突と同時に二人の周囲に衝撃波が発生し、土煙を舞い上げる！

その中で、自身へと引き込むようにシグナムが回転し、横殴りの一撃を叩き込む！

「んっ」

だが、その一撃は屈んだ祐希奈の頭上を通過し、風を切り裂くだけに終わる。

トン、と軽くシグナムがバックステップ。

半歩分下がった直後、祐希奈の右脚が跳ね上がり、シグナムの眼前を掠めていく……。

何事も無かったように二人は構え直し、対峙する。

「シグナムさん？」

祐希奈は首を傾げる。

何故なら、シグナムが柔らかい笑みを浮かべていたからだ。

「何？」

「いや、済まない。強くなったと思ってな。始めの頃など、回避など出来なかったというのに」

「う、うっさいわね……。私はただの一般人だったんだから大目に見てよ」

ほとんど木偶の棒状態だった自分を思いだし、恥ずかしくなったのか視線を逸らす祐希奈に、シグナムは続ける。

「ただの一般人、という所には疑問を抱くが？　来て早々にヴィヴィオと大喧嘩をしていたからな。ヴィヴィオが怒るなど、思いもしなかった」

「う～あ～……あ、あれはその、一杯一杯だったというか……」

「なのはの訓練メニューを強引に変えさせた輩は、お前達だけだろうな」

「だから～……」

「だから？　何だ？」

必死に考えるものの、浅はかだった過去の自分はどうしようもないことであり、シグナムの言っていることは事実だ。

変えようのない答えに、祐希奈は黙り。

「……」

「どうした祐希奈？」

右腕のブレードから紅蓮の炎が立ち上る……。
結果がわかりながらも、シグナムは聞く。
瞬間、祐希奈の右脚が地を蹴り、突っ込む！

「うっさいのよ！　そんなもん知るかぁぁぁ！」

「やれやれ、仕方の無い奴だ」

苦笑いをしながら、シグナムも右脚を滑らせ、剣の柄を両手で支える。
祐希奈の腕、シグナムの剣から火花を散らし、弾き飛ばされるカートリッジ。
一発、二発と空薬莢が地へとカラリと音を響かせる……。
その寂しげな音を吹き飛ばす、互いの剣の轟と吹き上がる紅蓮の炎。
自身の魔力と、カートリッジ二発分の魔力とを秘め、燃え上がる剣は空気を焦がす……。
しかし、まだ足りぬと、祐希奈は、シグナムは、互いに思う。

「「もう一発！」」
『『Ｅｘｐｒｏｓｉｏｎ！／Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！』』

右の手甲から、レヴァンティンから、カートリッジの三発目が弾き出された。
大きすぎる紅蓮から放たれる光赤光に頬を染め、二人の身体は磁石のように引き合う。

「「紫電ッ！」」

片や、その一歩は荒れ狂う嵐のように激しい一歩を踏み出し。
片や、その一歩は清純なる水面のように厳かに一歩を踏み出す

「「一、閃ッ！」」

吸い込まれ、触れ合う、薙ぎと薙ぎ。
激突の瞬間、互いの動きが止まり、放たれる激烈な衝撃波！
掛かる負荷に耐えきれず、飛び散る瓦礫。
だが、それに二人は構わない。
金属を強く擦り付けたような音が響く……。
祐希奈が強引に手首を捻り、レヴァンティンを流したからだ。
交差し、離れていく紅蓮の軌跡。
だが、それも長くは続かない……。
祐希奈の軌跡は高速で大円を描き、シグナムの軌跡は転身し、縦に構えられる。

「はぁぁぁあああ！」

「ふ、ぅ！」

十字を描く二本の紅蓮。
回転の力も加えられ、威力を増した祐希奈の剣に、シグナムは歯を食い縛り、それでも耐えきれずに地面を削りながら下がっていく……。

「からかってくれた……」

「っ！」

押し込みながら祐希奈が呟く、押し込まれながら、シグナムが息を呑む……。

カートリッジを弾き出した祐希奈の左腕が蒼き炎を纏い、巨腕と化していたから……。

「お礼よ！」

『Ｆｉｒｅ　Ａｒｍ！』

怒号と共に放たれる左腕、しかしその腕はシグナムを捕らえない。

シグナムは、腕の力を抜き、祐希奈の力をも利用して、吹き飛ばされるようにして背後に跳んでいたからだ。

「逃がすかぁ！」

蒼炎の巨腕が拳を解き、道を焼き払いながらシグナムを追う。

強引なからもそれを行える魔力と、それを可能とする成長をした祐希奈にシグナムは笑い。

「逃げる気など……」

『Ｒｅｌｏａｄ！』

鮮やかに火花を散らして踵を地につける。

同時、その手に握る、カートリッジ三発を放り、綺麗に弧を描いたそれをレヴァンティンが喰らう……。

直後に噛み砕くように撃鉄を起こし、再びその剣に炎を纏う……。

「無い！」

鬼神と化し、シグナムが瞳をカッと開く！
先の踏み込みが遊びかと思える程に、深く踏み込む。
限界まで引き寄せ、全重心を地から天へと、突き上げる！
切り裂くとまではいかなかったが、殴られ、腕の進路は歪められる。

「やっぱ最高ね、シグナムさんは！　どこぞのヘタレとは威力が違うわ！」

だが、楽しそうに笑みを浮かべながら、再度巨腕をしならせ、袈裟に振り下ろす！

「この程度、こなして見せねばお前に示しが着かん！」

シグナムも普段は滅多に見せない笑みを浮かべ、未だ炎を纏い続ける剣を振るい、腕へと叩き込む！
激突する腕は受け流され、シグナムの背後へと進み、進路上を破壊、或いは炭化していく……。

「流石は師匠ってとこ！？」

「私など、まだまだ未熟者だがな！」

会話をしながら、一度、二度、三度と、地を揺らす程の衝撃を起こす巨腕が叩き込まれ、されど、迎撃する剣に阻まれ、一度として通らない……。
何度叩き込もうと、だ。

「ちっ！」

「無駄だ！」

だが、祐希奈は諦めることを選ばない。
確かに巨腕は、一度として通ってはいない。
しかし、一度として、砕かれてはいない！

「意地でも、砕くっ！」

巨腕が引かれる……。
その時、シグナムは攻め手を変えるのかと思い、しかし、一瞬でその思考を捨て去った。
祐希奈は、筋金入りの負けず嫌いだと、理解していたから。

「アギト！」

「やぁっと、アタシの出番か。中々呼んでくれねぇから退屈だったぜ」

シグナムに言われ、待機していたアギトが気だるそうに肩を揉みながらシグナムの肩へと舞い降りる。
だが、それも数秒。
後にはやる気満々と言わんばかりに瞳を爛々と輝かせる。

「アタシが言うのも何だけどよ。避けねぇのか？」

「ほう、避けて欲しいのか？」

「はっ！　冗談キツいぜ！」

「だろう？　それに、私も避けるのは性に合わん」

アギトは尖った犬歯を見せつけるようにニヤリと笑う。
対し、シグナムは静かなる闘志を燃やし、レヴァンティンにカートリッジを装填する。

「行くぞ……！」

「オウよ！」

「『ユニゾン・イン！』」

二人の姿が重なり、アギトがシグナムへと溶け込む……。
甲冑は蒼く変化し、その背中から二対の炎翼が発生、カートリッジすら必要無く、レヴァンティンには炎が纏われる……。
両手で柄を握り、身体を捻るようにして剣を引く……。
烈火の如く睨むは一点。
高速で回転している、祐希奈以外に他ならない。

「怪我させたら、ごめんね！」

謝りながらも、祐希奈の手甲が火花を散らし、カートリッジを弾き出す。

「気にするな。お互い様だ」

言葉は優しいが、引かれた剣からはまたしても全てのカートリッジが落ちていく……。

「そういう割りきった考え、大好きよ……」

「奇遇だな。私もそうだ……」

瞬間、祐希奈が踏み込み、二人を囲う結界が激震に揺らぐ……。

「そんじゃあ、遠慮無く……、ブッ飛ばす！」

伸びる、伸びる、伸びていく……。

回転の勢いと、祐希奈の身体強化を合わせ、左の巨腕は遠心力で延長、進路上にある幾多もの建造物を薙ぎ払うようにして打ち砕き、真っ二つに叩き割る！

拳が解かれ、炎爪と化した巨腕は、横殴りにシグナムへと降り注ぎ。

「こちらも遠慮はしない……」

『ブッた斬る！』

「『火竜、一閃！』」

対し、シグナムも踏み込みながら、シュランゲフォルムとなったレヴァンティンを振り抜く！

炎が首をもたげた姿は正に火竜の如く、突き進む！

蒼炎の爪と、紅蓮の刃。

互いに回避のことを微塵も考えず、全力で振り抜いた一撃。

その一撃はまるで、獲物を見つけたかのように、互いの技と技とに吸い込まれ。

「「はぁぁぁぁあああ！」」

激突の轟音を響かせる！

二人の周囲は炎の渦が包み、結界の中は煉獄の空間へと姿を変える……。

建造物を無くし、水分という水分を蒸発させ、それでも二人は止まらない。
否、止まることを忘れたかのように、さらに力を込めて。
「「っーーー！！！！」」
声無き咆哮を上げる二人の姿は巨爆の内に消えた……。
――激突から数十秒後、視界が消え失せるような爆光が収まり、煙の中には、打ち抜いた影、或いは振り抜いた影が二つ……。
「飛竜……一閃！」
姿も確認させないままに、声を響かせ、シグナムのシルエットは腕を霞ませる。
煙を穿ち、長く、長く、刀身が突き進み。
「エクスプロージョン！」
『Ｊｅｎｏｃｉｄｅ　Ｂｒｅａｋ！』
対するように刺突を放った祐希奈のシルエットと、激突、刺突と刺突が火花を散らす。
飛竜の牙の威力に右腕に流れる痺れを祐希奈は自覚しながら、より深く、足を踏み込む。
同時、ブレードの先端が蒼く輝いた……。
「撃ち、抜く！」
瞬間、弾かれたように祐希奈の右腕が反動で持ち上がる。
その、自身が撃ち放った巨爆の威力故に……。

空気を震わせる轟砲に迎撃された竜は、痛みに悲鳴を上げ、宙に首を投げ出す。
その結果を見たシグナムは、シュベルトフォルムに戻し、動きを止める。

「よし」

「くっ……」

シグナムは満足げに、祐希奈は悔しげに声を漏らす。
それを待っていたかのように、ブレードが綺麗に真ん中から折れ、カランと音を鳴らす……。

「あぁ～！　また敗けた！」

本当に悔しそうに、祐希奈は拳を握り締める。
……ちゃっかり手甲にカートリッジを装填しながら……。

「そう言うな。私と祐希奈には、経験の差があるからな」

怒る祐希奈をなだめながら、シグナムは苦笑いをする。
……これまたちゃっかりカートリッジを装填しながら……。

「経験なんて気合いと根性でなんとかなる程度よ！」

「いや、ならんだろう……」

「なるったらなる！　私がなるってんだからなるのよ！」

「……はぁ」

無茶苦茶なことを断言する祐希奈に、シグナムは諦めたように溜め息をつく。

「ってなわけでもっぺん勝負！　返事はＹＥＳかはいかＯＫ以外には認めない。いいわよね♪」

ブレードを再生しながら、祐希奈は、恐らくカナンとヴィヴィオにすら、滅多に見せない輝くような可愛らしい笑みを浮かべる。

心から、シグナムとの戦いを楽しんでいるからだ。

「好きだな。お前も」

そんな弟子の命令にも等しい頼みをシグナムは断らない。

言葉を呟いた瞬間、祐希奈がシグナムに飛び込み、袈裟に斬りつけ、シグナムは縦に構えた剣で受け止める……。

「そういうシグナムさんも、人の事言えないでしょ？」

問いかけ、身を翻し、横薙ぎを放ち。

「こればかりは、直ることは無いのでな？」

シグナムは手首を返し上段から叩き下ろす！

「たまんないわね。この痺れ♪」

「同意、と答えておくか」

加減無しで剣を打ち付けた二人は、衝撃の余波を撒き散しながら、

尚も笑う……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

外で激しい訓練が行われている中、六課内部では、ガリガリと近頃には珍しい音が響いていた……。

その音を響かせるのは、右腕をセメントで固めた、カナン。

「い～な～模擬戦……。俺もやりたいなぁ……」

そんなことを呟きながら“鉛筆削り”を回す。

鉛筆削りは、電動ですらなく、手動。

削り終えた鉛筆を手に、カナンは椅子に座り、机の上にある紙の山と向かい合う。

「あ～、フェイトさん？　俺達もちょっとだけ……」

机の向こうで何やらデータを纏めるフェイトに助け船を要求してみたが、なんとなく予想がついていた。

「ダメ。そういうのは仕事を終わらせてからね」

「でもグラース戦は……」

「その前に本局に書類を出しておかないと、カナンが犯罪者扱いされるよ？　自分で撒いた火種は自分で処理しないと。それでも少ないくらいだよ？」

「少ない、ね……」

そう言って、自身の目の前に積み上げられた書類の山を見る。
それら全てが、カナンの行動による始末書等の類い。
駆逐するのは、余りに頼りない鉛筆……。

「何でワープロの勉強しなかったんだよ……。俺のバカ……」

フェイトが操作するコンソールの速さを見て、本気でそう思う。
そう、カナンはパソコンが使えない。
正確には使えないこともないが、打っているくらいなら書いた方が速い。
故にこその鉛筆。そして、鉛筆削り。

「てか、鉛筆削りくらい電動の奴買おうよ。六課の皆さんや。いや、買うべきだ。そして電動の鉛筆削りの素晴らしさを今一度体感すべきだ……」

軽く六課に八つ当たりしつつ、カナンは遠い目をする。
鉛筆削りが電動であろうが大差はないのだが、今のカナンには馬の耳に念仏状態である。

「ほらほら、口じゃなくて手を動さなきゃ終わらないよ？」

「しゃあない……やるかぁ！」

気だるさを吹き飛ばすように声を上げ、カリカリと鉛筆を紙の上に走らせる。

「う～あ～……」

「さっきのやる気は？」

しかし、十分後には机に顔を張り付け、呻くカナンがいた。
そんなカナンにフェイトは苦笑いを浮かべるしかない。

「法律消えねぇかな……」

「執務官の前でよくその台詞を言えるね……」

「いやいや、冗談ですって。あははは……」

良い笑顔になり始めたフェイトに、カナンは視線を逸らして渇いた笑い声を響かせる。

「もう、ちゃんとやってね？」

「了解っス！」

呆れながら作業に戻ったフェイトに最大級の敬礼を送った後、カナンは再び書類の山と向き合う……。

――面白くねぇー！！

フェイトが怖いので、手だけは動かしながら、カナンの内心気だるさで満ちている。
基本、カナンはこのような単調な作業は嫌いな傾向にある。
授業などは新しい知識を入れるという楽しみがあるため、嫌いではない。
しかし、始末書等は、簡単に言えば、自身が犯した過ちを、自分で書き連ねていくだけなので、面白いことが一つもない。
仕事の一環なので、仕方がないとも言えるが、それでも、やはり、

面白くないものは面白くない。

「ん？」

「どうしたの？」

「メール……、いや、電話みたいで……」

そんな時、カナンの胸ポケットにある携帯が震え着信を知らせる。
開けてみると、知らない番号が並んでいた……。
取り合えずフェイトに出てみると断り、通話ボタンを押す。

『やっほ～。元気～？』

明るく、聞き覚えのある声が通話口から流れた。

「……何故にお前？」

『さて、何でしょう？』

明らかにからかいの声色が感じられたので、カナンは電源ボタンを押そうとして。

『あ～カナン君、切っちゃダメだからね？』

先読みした通話相手が釘を指す。

「よくわかったな……」

『インスピ♪』

「……で？　何だよ美鈴」

『うっわ～。ボケたのにスルーって酷いなぁカナン君は』

と、言いつつも、通話相手、美鈴は確実に笑みを浮かべていることがカナンには容易に想像できた。

「ってか、何でお前が俺の番号知ってるんだよ。教えた覚えねぇぞ？」

『ふっふっふ。美鈴ちんネットワークをナメちゃいかんぜよ♪』

「……」

『またスルーとは……。嘘嘘、普通にハッキングしただけだよ♪」

「何普通に犯罪しとんじゃコラァ！」

『冗談冗談♪』

「だよな……」

『ホントは適当にボタン押したら繋がりました～♪』

「マジか！？」

『愛の力を感じるよね～』

「残念ながら俺はお前にだけは感じたくない……」

『え～どして？』

「お前はある種、祐希奈よりヤバイ……」

カナンがそう思うのも無理は無かった。

この美鈴、祐希奈すら認める、ドがつくSなのだから。

正確には祐希奈もドSに等しい行動をするが、美鈴は祐希奈とは違う、ベクトルが違うタイプのSだ。

『またまた～♪　祐希奈より歪んだ女なんておりゃしませんて♪』

「その普通に友達を歪んだとか言う思想がヤバイんだ！」

『まま、私と祐希奈の間柄だから何してもオーケー♪』

「どんな間柄だよ！？」

『……ちょっと、人には言えない……』

「はぁ！？」

『私、祐希奈が好きでね……』

「お、おう……」

『こういうの、ダメ、かな？』

「い、いや、恋愛は人の自由だとは思うけどさ……」

『だよね。じゃあ、私、祐希奈に告るね♪』

「ちょ、ちょい待った。あのな、美鈴、祐希奈は一応まだ俺の答え待ちなわけであって、だからその、告白とかは俺との問題がちゃんとしてから……」

『まぁ、冗談なわけだけど♪』

「……」

『私が好きなのはカナン君だけだって♪』

「死ね！　いっそ死ね！　さっさと死ね！」

『カナン君も私と死んでくれるなら……いいよ？』

「嫌じゃボケェ！」

『もう、恥ずかしがっちゃってぇ♪』

「誰がだ！？　今のどこに恥ずかしがる要素があった！？」

『でも、そんな素直じゃないところも好・き♪』

「遊びで好き好き言ってんじゃねぇ！」

『遊びじゃないよ……』

急に響いた真剣な声に、カナンは固まる。

背中に嫌な汗が一気に噴き出す……。

「は？」

『遊びじゃ、ない……』

「え、いや、その、お前、マジで？」

何かの間違いであって欲しいと、そう願いをこめて、美鈴に聞き直す。

『……大マジ……』

「……いや、その……」

告げられた答えに、カナンは何と返すか悩む。

悩んで、悩んで、また悩んで……。

『じゃないです。あは♪』

「……は？」

やたら嬉しそうな声を最後にカナンの思考は途切れた……。

『カナン君はからかいの対象としては満点だけど、残念ながら、“今は”、ちょっち私の好みじゃないんだよね～』

おどけて言う美鈴に、カナンは頭の中でプツリと言う音を聞いた……。

その音は、美鈴の会話の細かな部分を吹き飛ばす。

「てめぇ、やっぱ死ね！　人の気持ち弄んで楽しいか！？」

『うん♪　すぅっごぉぉおく、楽しい♪』

恐らく満面の笑みを浮かべているであろう美鈴に、カナンは携帯を握りしめた……。

ミシミシと携帯が悲鳴をあげたが、気にしない。

「もう切るからな！」

『あ、待った待った。本件がまだだって』

「あぁ！？」

『わぉ、そんな怖い声しなさんな。一言応援したかっただけなんだって。じゃなきゃ、こんな朝っぱらから電話なんかしません』

「……で？」

『えっとね、大抵、カナン君達が長い間いない時って危ないことに首突っ込んでる時なんだよね？』

「……まぁ、な」

『あ、やっぱり。じゃあ、お友達である美鈴ちんからの言葉だから、心して聞くよ～に！』

すぅ、と通話口から聞き取れる、空気を吸い込む音。

『まだまだ中学生活満喫したりないんだから途中でリタイアなんか

しちゃダメだからね！　なるべく怪我もしないで、それでいて早く帰ってくること！　学校のことは私と神楽ちゃんがなんとか言っとくから心配しないで！　カナン君達は中学生なんだから、難しいことは考えずに、後を気にせず、目前の問題だけを解決することに全力を注ぐこと！　在り来たりだけど中学生に難しいことを求めないで下さい！　以上、私と神楽ちゃんからの応援メッセージでした！』

言い放たれた美鈴の言葉の雨に、カナンは呆然とする。

「応援ってか、命令だな。最後とか滅茶苦茶だし」

そして、クスリと落とすような笑みを浮かべた。

『残念ながら、私達は映画の俳優さんみたいな、名台詞は、浮かばないからね。友達としての、言葉ならこれくらいが限界かな』

叫んだからか、若干息を切らせつつ、美鈴は話す。
その一生懸命さは、言葉よりも確かにカナンに届いて。

「ま、サンキュ。なんか、なんとかなりそうな気がしてきたよ」

『それは光栄。感謝するよ～に』

「あぁ。帰ったらなんか奢るくらいはする」

『はい！　パフェ食べ歩き！』

「気が早ぇっての。まぁ、いいけど。好きなだけ食わせてやる」

『うし！　じゃあ今から断食しとくね！』

「頼むから普通にしててくれ……じゃな」

『うん♪　ちなみにカナン君がお休みの理由は、カナン君にも女の子特有のアレってなことにしといたから♪』

「……待て。女の子特有って何!?　てか俺男なんですけど!?」

『……グッジョブ♪』

「せめてグッドラックだろ!?」

そのままプツリと切れた携帯をしまい、胸ポケットにしまう。

苦笑しつつ、机の上に散乱している始末書の山を見て。

「んじゃま、帰るために宿題は残せねぇし、やりますか！」

手近な一枚を手に取り、凄まじいまでの勢いで鉛筆を走らせ始めたのだった。

後編2に続く。

第三十八話　心の在処　（後編１）（後書き）

次回投稿予定日ですが、火曜日くらいを目標にしています。
遅くとも一週間いないには……。
後編が一段落したらお返し出来ていない感想も返せますのでもうしばし、お待ちください（汗）

第三十八話　心の在処　（後編２）（前書き）

風邪をひいちゃいました……。
お陰で約束から大きく遅れてしまい、申し訳ありません……。
さて、タカト弄りですが、もう一話だけ、伸びそうです。
楽しみにしてくださった皆さんには申し訳ないのですが、ちと重くなりまして……。
外伝的な形になりそうです。

第三十八話　心の在処　（後編２）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ライトニング分隊が模擬戦を行う中、ただ一人、訓練を個人スキルに費やす少女、キャロがいた。
ターゲットが不規則に右に左に動く。
その数は実に２０はある。

「ブラッド、レイン！」

それら全ての動きを頭の中でシュミュレートし、キャロは黒い、短剣を縦に一閃。
黒閃から延長するように、生まれる黒い針、それらは樹木の根のように空間に蹂躙し、ターゲットを貫き穿つ！
が、数機が黒針から逃れ、素早い動きでキャロの背後へ、射撃の光が灯る。
それにキャロは振り向かない。ピュッという鋭い一閃を下段から放つ。
瞬間、ターゲットの足元から黒針が飛び出し、オブジェクトにするかのようにターゲットを串刺しにした……。

「アレくらい、外してんじゃねぇよ」

呆れた声が響き、短剣は銀の輝きを取り戻す。
同時、黒い塊が生まれ、キャロの肩で水のように弾ける。
漆黒の翼が拡がり、包まれていたアルティスが現れた。

「ごめんね。私が下手なばっかりに……」

「ホントにな。あたしのが上手いんじゃねぇか？　ロードのが使い魔より下手って、聞いたことねぇぞ……」

「む～。アルちゃん言い過ぎ～！」

空から様子を見ていたのか、キャロの肩に新たにニーナが乗り、アルティスをビシリと指差す。

一方アルティスは、またかと言わんばかりに溜め息をつく……。

「空から見てたけど、外したのはたったの二、三機だよ？　しかも、討ち漏らしたけどちゃんと倒したんだし、そこまで酷く言わなくてもい～でしょ～」

「あのな……、あたしは仕方無くてめぇらの訓練に付き合ってやってんだぜ？　それなりの結果ってもんを出してもらわなきゃ、やってられねぇっつの。二、三機討ち漏らしただぁ？　あんなもん、一発で全機撃墜出来て当たり前だ」

淡々と述べたアルティスに、キャロは少し俯く。

キャロが一度討ち漏らしたのは、たった二、三機。

だが、その二、三機を対処している間にも時間は待ってくれない。

そして、一瞬の時間も無駄には出来ない相手もいる。

今回のグラースに限らず、正体不明のロストロギア使い達も、そう。

「つ、次は頑張るね」

「次、ね……。ピンク頭、お前じゃ、あたしは使えねぇよ。お前とあたしじゃ、相性が悪すぎる」

アルティスは単体でも攻撃を行える使い魔だが、その攻撃はあくまで個人のみの力であり、全ての力を出しきるには、アゾットの剣に同調し、ロードと力を合わせる必要がある。
そのタイミングが、キャロとアルティスは波長がずれている。
フルバックで、味方の援護が主な、優しい、キャロ。
攻撃的で、前衛向けの魔法を持つ、直情的な、アルティス。
この二人は、正反対の位置に属していると言っても過言ではない。
故に、キャロとアルティスは、相性が悪い。
いかにニーナと相性が良かろうと、一対一で攻め込まれれば、終わる。

「はっきり言うが、このままじゃてめぇ、殺されるぜ？」

「っ！」

「アルちゃん！　なんてこと言うの～！」

「事実だろうが！　あたしは雑魚のロードと一緒に死ぬなんてごめんだかんな！」

「貴女がそんな気持ちでいるから上手くいかないんじゃないの！？」

「何だよ。それ……。あたしのせいだってのか！」

にらみ合い、今にも飛びかかりそうな二人にキャロは焦る。

「ふ、二人共、落ち着こう？　仲良くして。ね？」

「アルちゃんなんか知らない！」

「けっ！　こっちだって知るか！」

仲良直りさせようとしたキャロの言葉にも耳を貸さず、二人はソッポを向いた。

あげく、アルティスは翼を拡げ、飛び上がる。

「アルちゃん、どこ行くの？」

「知るか！　てめぇらなんかと訓練やろうと思ったあたしがバカだった！　勝手にやってろ！」

怒鳴り散らし、アルティスは高く高く、飛んで行く……。

その姿が消え、見えなくなった……。

「ニーナちゃん、あんな言い方はダメだよ」

「だって、アルちゃんがキャロちゃんのことを悪く言うから……」

「確かに、言い方は悪かったけど、アルちゃんはアルちゃんなりに、私のことを心配してくれてたんだと思うから。だから、ニーナちゃん、後で、仲直り、出来るよね？」

「むぅ～……」

ニーナは膨れっ面のまま、頷くことはない。

アルティスの言動は相当頭に来ているらしかった。

この二人をどうしようか、そんなことを頭に悩ませながら、キャロの訓練の時間は過ぎていった……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一方、スターズ分隊。

「オラァ、防御が甘ぇぞスバル！」

「くぅっ！」

『Ｗｉｎｇ　Ｒｏａｄ！』

怒号が響き、グラーフアイゼンが障壁の上からスバルを殴り飛ばす。

が、蒼き道を展開し、立て直すやいなや、火花を散らすマッハキャリバー！

「リボルバァァァ！」

『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！』

風を巻き込み、唸りをあげるリボルバーナックルを引き絞り、弾丸の如く突っ込む。

「アイゼン！」

『Ｆｌａｍｍｅ　Ｓｃｈｌａｇ』

対し、ヴィータは回避は行わず、迎撃を行うため、グラーフアイゼンを振りかぶる。

「シュゥゥゥト！！／ブッ潰せぇぇぇ！！」

衝撃波と槌が起こるは熱風。

フランメシュラークが起こした爆発を、衝撃波が吹き飛ばしたが故だ。

どちらもが必倒の威力を誇る。
しかし、力ではヴィータに軍配があがり、スバルは大きく下がり、退避する。
逃がすまいと、ヴィータはスバルに追撃の構えを取り。

「クロスファイアー！」

「ティアナか！」

しかし行えない。
橙色の弾丸がヴィータの周囲に現れ、阻害したからだ。
ティアナがいるのは、建造物の一角……。
見つかりにくいとは言えない所だが、弾丸を放つまでバレなければそれで良い。
そしてそれは、成った！

『Ｐａｎｚｅｒｈｉｎｄｅｒｎｉｓ！』

「シュウウウト！」

ヴィータの周囲に展開される全方位型のバリア。
直後に殺到する弾丸が、その壁を揺らすが、元よりヴィータは、防ぎきるために使った障壁ではない。

「カードリッジロード！」
『Ｇｉｇａｎｔ　Ｆｏｒｍ！』
「そこ……」

元より、ティアナを見つけるための時間稼ぎのための障壁なのだから……。

ヴィータが手に持つ、巨大な鉄球。
睨むはティアナが隠れしビルの影！

「かぁぁ！」
『Ｋｏｍｅｔｆｌｉｅｇｅｎ！』

咆哮をあげ、障壁の内から鉄球が打ち出される。
ティアナはスフィアコントロールを止める。回避をしようと、影から飛ぼうとして、直後、鉄球が炸裂し、ビルを丸ごと吹き飛ばす！

「ディバイィィン！」

「チィッ！」

瞬間、蒼き道が展開され、ヴィータの背後に現れるスバル……。
簡単にヴィータが回り込まれる筈は無い。
先にティアナがオプティックハイドを使用して回り込ませたのだ。
が、不意を突かれたとはいえ、ヴィータも伊達に副隊長を名乗ってはいない。

「一人であたしを倒すのは早ぇよ！」

ギガントフォルムのままのアイゼンを振りかぶり、スバルへと怒号を飛ばす。

「ファントム！」
『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｅ！』

そんな声を待っていたかのように、スバルに続き、ヴィータの正面にも、ティアナが現れる。

一人じゃないと、告げるかのように。
先にビルの影にいたのは、ティアナの幻影……。
本人はチャンスを伺い、挟撃のチャンスを待ち構えていた。

「「バスタァァァッ！／ブレイザァァァッ！」」

同時に撃ち放たれるヴィータを挟み込む、二筋の砲撃。

「っ……」

――強くなってんじゃんか。

自身を狙う光に、舌打ちをしながらも、内心成長した二人の力に笑いつつ、その姿を巨爆の中へと消す……。

『Ｐｆｅｒｄｅ！』

「オメェラにこんな魔法使わされるなんて、な！」

そんな声が、スバルの頭上から響く……。
ヴィータの脚に渦巻く魔力。
名をフェアーテ。
ヴィータの唯一の高速移動魔法だ。
ヴィータが自分に対して初めて使った魔法に、反応が追い付かない。
スバルは巨大な槌が、自身へと向かっているのを察知する。

「く、う！」

「スバル！」

頭上から横殴りに吹き飛ばされ、スバルの身体はビルへと叩きつけられる……。

――へぇ……。

ヴィータは追撃を考えず、ニヤリと笑う。

アイゼンを肩に担ぎ、吹き飛ばされた方向を見た……。

瞬間、瓦礫が吹き飛び、スバルが現れる……。

「一応聞いとっけど、大丈夫か？」

「はい。なのはさん達に比べれば、これくらい」

「まぁ、な。ただ、なのは達と比べるのは止めとけ」

訓練所の中心部、そこがなのは達が戦っている場所。

そこを見て、ヴィータは苦笑いを浮かべる。

釣られたようにスバルとティアナを視線を向ける。

直後、巨大な桜色の砲撃が放たれ、蹂躙、建造物を次々と破壊しながら突き進み、されど、粒子と化して空間に散る……。

対峙する、なのはとハル。

「この程度ですか……？」

「まさか……そんなわけないよ……」

並の局員を遥かに上回る砲撃が放たれては、散っていく……。

なのは達から視線を外し、ヴィータ、スバル、ティアナは苦笑いを浮かべる。

「アイツらに合わせてたら、訓練じゃなくなるかんな。ったく、後で叱っとかねぇと……」

「あはは……。副隊長も大変ですね」

「お疲れ様です」

「まぁ、慣れては来たけどな。んじゃ、始めっぞ？」

「「はい！」」

それぞれに溜め息を着いた後、ヴィータ達は再びデバイスを構え、訓練を再開する。

無論、自分達のペースで……。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

桜が散っていた……。

桜の木など存在もせず、隔離された訓練施設の中で、桜吹雪と言えるまでに……。

「はぁっ、はぁっ」

桜は、正体は光の粒だった。

桜の光は、一人の女性によって生まれたモノだった。

桜吹雪は、一人の男性によって生まれたモノだった。

創造者の一人、高町なのはは、己が生み出した光の中で、愛機、レイジングハートを構える。

「っ！」

『Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｌｄ』

唐突にその構えが砕かれ、レイジングハートを前へ、障壁の展開直後に残像残すハルが現れ、その勢いのまま障壁の面に直蹴りが打ち込まれる！

ヒビが拡がる、されど、抜かれない。――されど、前にはハルの姿はもう無い。

なのはは動じない。

レイジングハートを掲げ、振り下ろしながら自身も回転、それをなぞるように天空からハルが右脚での蹴りを打ち込む。

なのはに受け流された蹴りは地面を叩くことなく方向を修正、地を滑り、勢いを殺さず、次手である左脚が叩き込まれ。

『Ｆｌａｓｈ　Ｍｏｖｅ！』

加速したなのはの残像を砕くに終わる。

なのはは下がり、上空でスフィアを生成。

――やっぱり、天の邪鬼、だったんだ……。

心底、なのははそう思う。

カートリッジが一発弾き出され、スフィアの数が増す。

それらの狙いはただ一人。

細かな制御を無くし、速度のみを重視。

「シュート！」

打ち出される桜の雨にハルは構わない。

ただ、一直線に走る。

「全身、五割です」

『妥当だな』

全身に行き渡る空色。
必要最低限、頭だけは左腕で庇いつつ、襲い掛かる雨に身を晒す……。
が、桜の雨は通らない。
水が弾かれるように、ハルの身体に触れた直後に砕け散る。
――だって、こんなに……
『Ｄｉｖｉｎｅ！』
なのはのリンカーコアへと光は吸収され、続いて、杖の先へと集束される、桜色。
加減はしない。出来る筈もない……。
「バスタァァァァ！」
――強引なんだから！
想いと同時に、桜色の砲撃は撃ち放たる！
第一印象は礼儀正しくて、知的で、呆れる程に冷静で、合理という元に動く、そんな人物と思われていて。
しかし、実際は、礼儀などは無に等しく、直情的で、呆れる程に強引で、目的を達するためならば自身の命すら捨てる。
カナンと同じく、否、内容によっては己の死すら計算に入れるハルは、カナンよりも質が悪い、バカ。
それが、朱皇千春の本質――
「はぁぁぁ……！」

スフィアを弾き切ったハルは跳躍の姿勢。
右脚、そして、右腕だけに輝く、空色。
眼前を埋め尽くす桜色。

「砕く……」

――それが、朱皇千春という、男の姿だった。
正に、天の邪鬼もいいところであった。

「はぁぁぁっ！」

全身分の魔力を二分し、踏み抜かれる右脚、破壊、その意思を顕に、ハルの右腕は砲撃の壁へと突き立つ！
もう、何度目になるだろうか……。
桜吹雪が舞うのは……。

「くっ！」

なのはの眼前、砲撃を桜の粒子と変えて、ハルが跳躍してきていた……。
起きた事柄、幸が二つに、不幸が二つ。
幸いしたのは、砲撃の力でハルの拳の魔力を削り落とせた。
そのお陰か、ハルの跳躍の軌道が少しずれ、なのはへと拳は届かなかった。
不幸なのは、瞬間で対応したハルが右脚だけに空色を移したこと。
そして、二つ、その姿はもう霞んでいること……。
「うぅぁあああ！」

しかし、なのはは耐えた。
レイジングハートの補助も借りず、出力を一点に絞り、縮小した

プロテクションによって。
形勢逆転。
なのはの前には、宙に浮く、ハルがいる。
零距離、砲撃を集束する時間はない。

「クロスファイア！」

左腕のレイジングハートをハルへと向ける。
ハルの眼前に灯るは桜色、六つのスフィアは回転しながら円を作り、輝く！
射撃からの砲撃への発展。
それはかつて、なのはがティアナのために作った魔法。
桜色の輝きがハルの視界を潰した時、紡がれる、引き金となる言霊。

「シュウウウウト！」

避けることを許さず、爆煙があがり、桜花が空に咲く……。
なのはの放った砲撃は、人の意識を刈り取るに十二分の威力を持つ。

『Ｍａｓｔｅｒ！』
「え……っ！？」

それが、“通常”の人ならばの話だが……。
警告を上げるレイジングハートに次いで、なのはの表情が驚愕に染まる。
突如、自身の重心が一気に傾いたからだ。
何故？
原因は単純。

故に、原因の答えは、すぐそこにあった。
砲撃を放ったレイジングハートを掴む、ハルの腕。
その姿は、なのはの下方にある。
なのはが傾いた理由は、ハルがレイジングハートを掴み落ちたからだ。
その表情は、無……。
砲撃を受けたにも関わらず、瞳はしっかりと開いていた……。
ハルは、異常な人の中でも飛び抜けて異常な存在。
なのはがそれを改めて知った時には既に遅い……。

「貴女は、甘い……」

「うぁ！」

呟きが一言。
片腕一本、それだけでハルは下半身を跳ね上げる。
余りに速すぎるその体裁きになのははついて行けず、右肩に直撃した蹴りに、なのはは顔を歪め、後に襲った慣性に従い、地上へと落ちていく……。

「やはり、無謀です……」

――速すぎる！

地上に落ちる寸前、なのはの背後に、ハルの声……。
縮地を使い、背中合わせに現れたその左腕に、空色が灯る……。

「……は、ぁっ！」

ハルの裏拳がなのはの背中に炸裂し、その華奢な身体を弓なりに

曲げる……。
無理矢理に肺の空気を押し出され、なのはは悲鳴すらあげられない……。
下から前へ、強引に変えられたベクトルに従い、なのはの身体は直角を描いて吹き飛ぶ。

「ふぅ……」

「あ、ぐ！」

溜め息、そして、苦痛の吐息がハルとなのはから漏れる。
吹き飛んでいたなのは、しかし、その身体は地へと伏せられていた……。
左手で背中を押さえ込むようにして、ハルはなのはの右腕を捻りあげる……。
激痛に表情を歪めるなのは。
しかし、ハルはその右手を放すことは無かった……。

「八度目……」

淡々と、無表情に、ハルはなのはへと数字を告げ、なのはを持ち上げ、左手の拳を堅く握る……。
その数字は、今までに八度、なのはが死んだという結果。
それは、ハルの予測ではあるが、限りなく、事実に近い。
ハルが殺せると判断したのなら、ハルより強く、容赦が無いグラースに殺せない道理はない。

「まだだよ……」

しかし、なのはは呟く。

まだ、死んではいないと。カウントに入れるのは早いと。
その答えを示すのは、桜色の輪。
設置型のバインド、なのはの集束型の最高位捕獲魔法、レストリクトロックを持って、ハルの四肢を拘束する！

「それが？」

だが、ハルは意に介さない。
込められた力に、バキン、と、一瞬にして左腕のバインドは悲鳴をあげる。
もう、砲撃も、射撃すらも撃つ余裕は無い。

「ぁぁあああ！」
『Ｆｌａｓｈ　Ｉｎｐａｃｔ！』

「ちっ……」

だからこそ、なのははハルの懐に潜り込む！
己の力の全てを込めて、レイジングハートを引き絞る！
その一撃は、ハルを舌打ちさせる程に、輝いた……。

「行っけぇぇぇえええ！」

「ごほっ！」

炸裂する桜の光。
その過剰な輝きは、直撃したハルの腹部から溢れ出す。
全力の一撃を持って、ハルを上空に吹き飛ばす！
しかし、されど、尚、止まらない。止まることを考えない！　止まりたく、無い！

「エクシード！」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｆｕｌｌ　Ｄｒｉｖｅ！』
「エクセリオンバスター！」
『Ａｃｃｅｌｅｒａｔｅ　Ｃｈａｒｇｅ　Ｓｙｓｔｅｍ．　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ！』

レイジングハートがなのはに応え、形を変えていく……。
拡がるは三対の桜色の翼。
苛烈なまでに魔力コーティングがされた一本の魔力針が尖端から現れ、その存在を主張する。

「ドライブ！」
『Ｉｇｎｉｔｉｏｎ！』

翼が羽ばたかれ、羽を散らせて舞い上がる！
障害物は何もない。
進むはただ一直線に、単純ながら、最高の一撃を叩き込む！

「そろそろ行けます……」
『いや、まだ……』

己へと向かうなのはを受け止めるためアスラに指示をとばすが、渋られる。
いかに回復力が常人離れしたハルと言えど、完治にはまだ明らかに早い。
故に、アスラは渋る。

「行けるっつってんだろうが……てか、やれ……」
『もう知らん……』

が、ハルはその心配をよそに命令する。

呆れ声のアスラは主の意に従い、身体強化のレベルを上げる……。
ピクリと、ハルの眉が歪むが、それも一瞬、打ち抜くための拳を引き絞る！

「オォォァァアア！」

「くっ！」

獣の如く咆哮を響かせ、突撃してくるなのはに左腕を突き立てる！
放たれた轟撃は、なのはの最大速度での進行を止めた。
だが、それがなんだと言わんばかりになのははグリップを強く握り締め。

「ブレイク！」

ハルの眼前で灯る桜色。
なのはが持つ、ガード無視の零距離砲撃。
回避、不能。防御、不可。反撃、論外。
手を考えても、ほぼ全ての手が詰み。

「滅せよ……」

故に、ハルは余計なことは何も考えてはいない。
砲撃を破壊した先になのはがいるから、破壊する。
ユラリと光が立ち上る紅き右腕……。
それをハルは一瞥するだけに終わる。
動こうとするハルに抵抗するように負担に軋みを上げる身体。だ

が、ハルは無視する。
なのはは、ハルがそうするだろうと予測していたため、集束する光の速さは遅れるどころか加速していく……。
ハルが右腕を引き絞り、なのはが集束を完了するのは全くの同時。
退く気は元より無い。

「消し飛べっ！」

「シュウウウト！」

ハルの右腕に触れる桜色。
なのはの砲撃は、相当な魔力密度を持っている。
その砲撃は、覇神の力の片鱗を持つ右腕と言えど、容易には滅せない……。
されど、なのはの砲撃は零距離にも関わらず、ハルの右腕から先に進まない……。
滅しきれず、貫ききれない。

「頑張ろう！　レイジングハート」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ！』

「っ……」

ゆっくりと、撃鉄が引かれ、確かな火花を散らせながらカートリッジが弾け飛ぶ。
一発、また一発と薬莢が落ちていくにつれ、砲撃の出力はあがり、反対に、ハルの表情は歪んでいく……。

「行っけえええええええええええええ！」

「ちっ……」

響くは、なのはの全力の咆哮と、ハルの小さな舌打ち。
後に輝き散る、桜吹雪、響くは、炸裂の轟音。

「はぁ、はぁ……」

地面では、肩で息をする、“ハル”がいた。
なのはは、ハルの十数メートル先の建造物に身体をめり込ませ、小さく呻いていた……。
激突の勝者は、砲撃の炸裂の直前に右腕の出力を上げた、ハルだった。
正確には、上げざるを得なかった、というのが正しいか。

――あれだけ、強化したのに……。

建造物から身体を引きずり出し、レイジングハートを杖に、なんとか立つ。
その視線の先にある、砕け散った、否、尖端が消滅した、最大で展開したA・C・S。
不幸中の幸いなのは、レイジングハート本体にはダメージが届かなかったこと……。

――違う。手加減、されたのかな……。

なのはが吹き飛ばされたのはハルの右脚を受けたから。
ハルは、フレームを破壊した後、瞬間で蹴り抜いたのだ。

「加減なら、していませんよ……」

「え……？」

そんななのはの心境を読んだのか、ハルは静かに告げる。

「覇神の力は、負担が大きいので、今の僕には少しばかり、身に余るといいますか……」

苦笑をしながら、ハルは自身の右腕を、忌々しそうに睨み、されど一瞬。再び笑みで繕う。

その繕いに、未だどこか影を孕むその笑みに、まだ少し、距離感を感じる――

「大丈夫そう？」

「僕は特には問題ありません。寧ろ、なのは様の方が心配ですが？」

「私なら大丈夫。頑丈さがウリだから、ね」

――感じるが、なのはは笑みを返すことが出来た。

ハルは、自分の訓練に付き合ってくれている。

期待をされていると、希望を捨てていないと、感じられたから。

「私、頑張るから」

「やれやれ……」

仕切り直しとばかりに構え直すなのはに、ハルは大きな溜め息をつく。

そして、自身も構えて。

「……う、ん？」

「ハル君？」

何か、おかしな物でも見るかのように、ハルの視線が右腕に向き、困惑を浮かべていた。

何度も何度も、右腕を見て、ハッとしたように何かに、気づく……。

「嘘、だ……」

『ハル？』

「ハル君？　ねぇ、どうしたの？　大丈夫？」

愕然と、ハルは膝をつく。

その表情は、驚愕、そして、恐怖に染まっていた……。

心配になったなのはは構えを解き、ハルへと近づき、肩を叩く。

が、ハルはアスラの呼び掛けにも、なのはの呼び掛けにも、反応を見せない。

かと思うと、その肩は、揺れ始める……。

表情の驚愕と恐怖が、消えていく……。

代わりに満たすのは、“暗い、嘲笑”。

「っ！」

「くく……。ははは……。あははは！　アハハハハハハハハハハハハハ！」

『ハル、どうした！？』

ハルは笑う。

なのはが怯えていようが、ハルは既にそんなことを気にしていない。
その笑みは、欠片も人間味を感じられない、壊れた人形のように、響き渡る……。

「アイツが、約束を守るなんて、何で、ハナッからそんな前提で話を進めてんだよ、俺は……。ハハハ。バッカじゃねぇの？　奴が動いた時点で、この可能性はあったんだ。寧ろ、何で、何で、想定しなかった？　アハハハハ！　ホント、バッカじゃねぇの！」

「な、何が、あったの？」

自虐的な発言を始めるハルに、おそるおそるなのはが尋ねた。
ハルの頭が、機械のようになのはに向き、冷たい視線がなのはに刺さる。

「夾が殺された……」

「……え？」

唐突に告げられた言葉に、なのはの脳は処理が遅れる。
ハルは、くく、と影を孕む笑みを浮かべながら、ゆっくり、口を開く……。

「夾の反応が、右腕からずっと、感じてた夾の力を、感じなくなった……。つまり、死んだってことだ。だが、アイツは、眠ってるんだ……。老いや病気で死ぬわけがない……。ってことは白姫家に何者かが侵入して、夾を殺す以外は方法はねぇ……。クソジジイはいねぇが、それでも、白姫静瑠がいる白姫家に、突っ込んで、かつ、白姫家の最深部にいる夾を殺せるなんて奴、化けモンだ……。んな

ことが出来る奴、もう、わかるだろ」

わかる。わかるが、引っ掛かりをなのははは感じる。

グラース。

その人ならば、成せる。

だが、ならば何故、ハルに日付と時間の宣告をしたのか、それがなのはの引っ掛かり。

万全と万全、お互いに全力で殺し合うため、というのがなのはの見解。

しかし、ハルに既に思考などという余裕はない……。

「結局、俺の在るべき正しい場所は、絶望の中……。馬鹿げた希望を持ったから、夾は死んだ……。ざまぁねぇや……」

「そんな、憶測だけで……」

「憶測、な……。穴が空いたような、決定的に自分に何か足りないとわかっているこの状況が、憶測で済むのか……。そりゃあ、傑作だな……。」

嘲り笑う。

ただ、ひたすらに、自分の無能さを、折れた信念を、すがってしまった希望を。

六課ならなんとかなるかもしれない。

そう、思った自分自身が腹ただしくて。

ハルは嘲笑し続ける……。

そのまま反転、なのはから離れていく……。

「どこ行くの!?」

呼び止めたなのはに振り替えるハルは、死人のような瞳を向ける……。

「どこに、だと？　ボケたことぬかしてんじゃねぇぞ……。殺しに行くんだよ……」

「待ってよ。ハル君。あと、後少しで皆準備が出来るから……」

「しなくていい……。俺、一人で行く……」

「そん、な……」

ハルの瞳は揺らぐことはない。

なのは達は、苦労して、話し合って、戦って、命を賭けて、ようやく、ハルを連れ戻した。

ハルも少しは六課を信じ始めてくれていた。

なのに、ハルの瞳は、なのはとぶつかる前、いや、それ以上に無感情……。

完全に振りだし。

「お前達には、感謝、してる……。こんな俺を、助けようとしてくれたんだから……。だから……悪い……」

再びハルは、六課から離れていく……。

二度目は無理。そんな確信めいた予感がなのはを過る……。

止めようと、一歩を出そうとして……。

「く、あ……」

「ハル君！？」

突如、前のめりに倒れたハルになのははは驚愕する。
急いで近づき、確認すると、ハルは眠っていた……。

『元々無理をして動いていた上に、覇神の力を使って、さらに精神での負担、諸々の事情が重なったせいだろう。まぁ、こ奴なら心配はいらん。どうせ約束の時間には起きる。そういう奴だ』

「良かった……」

アスラの言葉に安堵の溜め息を漏らしたなのはだが、そう楽観的にはなれない。

『次は止まらんぞ……』

「うん。夾さん、だもんね……」

それほどまでに、夾はハルに多大な影響を与えた人物である。
それが、グラースによって殺されたとなれば、恨みも重なり、止まらないということは容易に想像できた。

「……取り合えず、運ぶね」

『申し訳無い……』

「うん。よい、しょ！」

医療施設にハルを連れていくべく、なのははハルの腕を首に回し、

歩いていく。

――どうすれば、いいのかな……。

内心は、深い思考の海に落としながら、なのはは歩く。

殺人、または、相討ちという形以外での結末。

全員が笑って過ごせるような世界。

それをなのはは考える。

壮大な、根源的なズレを忘れたままにして……。

Ｎｅｘｔ　Ｓｔａｇｅ……

外伝、スーパー祐希にゃんタイム♪（前書き）

なんとか終わりましたぁ！

当初はちょっとかさましする程度だったのにこの有り様……。

遅くはなりましたが、それなりに弾けた内容になりましたので、楽しんでいただければと思います。

ではどぞどぞ♪

外伝、スーパー祐希にゃんタイム♪

ヴ「皆こんにちは♪　お待ちかねのスーパー祐希にゃんタイムのお時間だよ～」

わぁあああああああ！　祐希にゃぁぁあああん！

メ祐「やっほ～♪　皆～元気～？」

カ「……いや、ツッコミたいとこは多々あるんだが、まず、その格好は……」

祐「プレゼントされた猫耳メイド服だけど？」

ゆっきーにゃん！　ゆっきにゃん！

カ「貴様らやかましいんじゃゴラァあああああ！」

ヴ「か、カナン君、口調がおかしいよ？」

カ「……悪い。頭冷やすわ……」

祐「にゃん♪」

カ「……は？」

わぁあああああああ！！！　祐希にゃぁあああああん！

メ祐「か、勘違いしないでよ。別にアンタのためにこんなことして

るんじゃないんだからね！」

カ「……ぁぁ」

パタリ……。

ヴ「わぁぁぁ！　カナンくぅぅぅん！」

メ祐「何倒れてんのアンタ。バカ？」

カ「誰のせいだ誰の！」

メ祐「文句言うならヴィヴィオに膝枕して介抱してもらってるそのヘタレＭＡＸなこと、止めてから言ってよね」

カ「膝？　ってマジでやってるし！？　ヴィヴィオ、いいから！」

ヴ「ダメ。まだお熱持ってるの、見ればわかるもん」

カ「ひっじょ～～に、恥ずいんですが……」

ヴ「？　何が？」

カ「いや、その、何がって言われてもさ……」

ヴ「？　私のことなら気にしなくていいよ？　お膝、痛くなんてないし」

カ「……もう何でもいいです……」

ヴ「ふぇ？」

メ祐「アンタ、弱いわね……」

カ「アンリミテッド・ナチュラル・ワークスには勝てんさ……」

ジ「はっはっは！　無限天然とはね！　それは天然系萌えの到達点だね！　うむ。素晴らしいじゃないか！」

メ祐「にゃん娘肉球拳♪　（烈破爆砕拳）」

ドゴァアアアア！

ジ「……にゃん♪」

キラーン♪

カナメ「アホですね♪」

メ祐「あーはっはっ！」

メイデン「祐希奈、悪役のようだぞ」

カ「いきなり出てくんな！　ついでにネタが危ないわぁ！」

メ祐「うるさいわよ♪」

ドゴォ！

ヴ「わぁあああああああ！」

カ「み、鳩尾に、肘は、いかんて……」

メ祐「ま、ファンサービスはこのくらいでいいわよね。あー疲れた」

メ「ぶっちゃけたな……」

メ祐「そこが私の良いところ♪」

カナ「確かにと頷けてしまう所がなんとも凄いです」

メ祐「神だからね♪」

カ「適当～……」

ジャキ！

メ祐「なんか言ったかヘタレ小僧♪」

カ「いえ、何も！」

ちゅどーーん！

カ「言ってない、です……よ……」

メ祐「ま、言ってなくても殺るけどね♪」

ヴ「……祐希ちゃん、カナン君が可哀想だから先に進もう？」

メ祐「ま、こんなのただの前置きだしね。んじゃ、本題に行きます

か！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

爽「絶！　対！　嫌だぁぁあああああ！」

メ祐「あはは♪　私だってこんな恥ずかしい格好してるんだから爽ちゃんもやるのよ♪」

爽「俺は男だぁぁあああああいあああ！」

バタバタ！

タｉｎな「ヴィヴィオ、一体これはどういうことだ？」

メヴ「ふぇ？」

タｉｎな「聞いていた話では、爽、という女性ではなく、俺の処罰のはずではなかったか？」

メヴ「えと、そうらしいんだけど、祐希ちゃんによると、華は多い方がいいからって、爽さんに頼みに言ったらああなっちゃって……」

タｉｎな「目的がすりかわった、と。俺にとってはありがたいことだが……。取り合えずはヴィヴィオ、その格好は……」

メヴ「えへへ。可愛いでしょ～♪　猫さんのお耳なんてピコピコ動くんだよ～♪」

タｉｎな「……あえて、何も言うまい……」

メイドメ「タカトさん、何を悔しそうにしているんだ？」

メレ「メイデン、タカトさんは照れているのですよ」

タｉｎな「いや、それだけは断じて違うと言っておく……」

ヴ・メ・レ「？？？」

タｉｎな（冷静に、冷静になれ……。これは祐希奈殿の罠に違いない……。気にしてはならない。何故、全員が猫耳メイド服なのかなど、ツッコミを入れてくれるな。伊織タカトよ……！）

タｉｎな「む、ぅ……」

メヴ「タカト？　右腕を押さえてどうしたの？　痛いの？　私、何か持ってこようか？」

メイドメ「何かは知らないが、大変そうだな。私も協力しよう。患部を見せてくれるか？」

メレ「なら私も。三人で処置した方が早く治せますし」

タｉｎ「頼む……。猫耳をピコピコさせながら覗き込むのは止めてくれ……。ツッコミが、ツッコミが……」

ハ「はーまいおにー君、出番ですよ♪」

風は「嫌じゃぁぁあああああ！」

ク「大丈夫ですの！　今のカナン、凄く可愛いですの！」

風は「だからこそ嫌なんだってのをわかろうよ！？」

ハ「ま、行きましょうか」

風は「てめぇ他人事がゴラァ！」

ハ「えぇ♪」

―撃！―

風は「ちょ、ま！」

タｉｎな「丁度良い……ツッコミを入れたかった所だ……」

―軋！―

風は「タイミングバッチシだなあんたら！？」

タｉｎな「ディバイン光覇……」

―煌！―

風は「へ？」

―瞬！―

カナｉｎ風は「そんなことされたら、私、泣いちゃいますよ？」

―もじもじ―

タｉｎな「ぐはぁ……！」

メヴ「カナン君可愛いよ～♪」

ハ「……可愛らしいといえばらしいのですが、正直、気持ち悪いですね……」

―瞬！―

風は「おぅぅぇぇぇぇぇぇぇ……」

ハ「まぁ、本人が一番ダメージが大きそうですがね……」

風は「俺の、青春が……」

メ祐「邪魔」

バキャァアアア！

風は「ごぶっ！？」

メヴ「あぁ、カナン君！？」

メ祐「やほ～。タカト、楽しんでる♪」

タｉｎな「……」

メ祐「言葉も出ないくらい楽しい、と♪　そりゃあ、頑張って企画した甲斐があるわね♪」

タｉｎな「祐希奈殿……」

メ祐「ん～♪」

タｉｎな「流石、とだけ言っておこう……」

メ祐「ありがと♪　さて、じゃ、本番ね」

タｉｎな「……は？」

メ祐「言ったでしょ。潰す……って……♪」

―ニパァ♪―

タｉｎな「っ……！」

メ祐「何で、私がなのはさんにお話されなきゃならないのよ……。私、悪いことしてないじゃない……。たかが盗撮程度で……」

タｉｎな「いや、盗撮は立派なはんざ……」

メ祐「神である私に罰を与えていいと思ってるわけ？　ねぇ、唐変木。教えてよ……」

タｉｎな「と、唐変……」

メ祐「恋愛編からの判断で行くととしてはタカトもハルもカナンも変わらないのよ！」

ハ「あははは。確かに……て、え……？　僕もですか！？」

夾（Ｖｏｉｃｅ）「何を今更……」

ハ「今更！？」

タｉｎな「いや、祐希奈殿、そもそもとして俺はなのはを振っている。その判断は間違い……」

メ祐「黙れってんのよ……。最近登場回数がやたら多くなってきたからって調子乗るんじゃないわよ……」

タ・ハ「……」

メ祐「そうよ。八つ当たりよ。悪い？　何か言いたいわけ？　焼死体になりたいなら言えば？」

―軋！―

ジ「何やら話についていけない読者もいることだろうから、ゆっきゅんがヤンデレ化している今の間にこの僕自らが分かりやすく説明してあげよう！　ちなみにこのお礼として、各作品の女性陣のセクスィーな写真を僕に納めるように！　これは義務だよ！
さて、では行こうか。手短に説明するとだね、以前、前書きにてＥＸメンバーとお風呂、という話があったのを覚えているかい？　その際、タカト君の弱味を握ろうとしたゆっきゅんが写真を撮ったわけだね。実に羨ましい……。それはさておきタカト君はなのは君の身体なわけだ。それをゆっきゅんは盗撮したため、なのは君本人が怒ったわけだね。後は大体分かるだろう？　まぁ、話を聞けばわかるとは思うがね、タカト君は……ウハウハ体験を楽しんだと

言うことだよ！」

タ.ｉｎな「どうしてそうなるこのたわけが！」

―轟！―

ジ「ふ……。クロスオッ○イカウン……」

タ.ｉｎな「しまっ！」

―撃！―

ジ「……ふ。まさかその姿で、出るとはね。夾ちゃん……」

夾（アリサ道場仕様）「今すぐこのドたま握りつぶしてやろうか……あぁ？」

ヴ「うわぁ……♪」

―輝！―

夾「う……な、何だ？」

ヴ「可愛いですね夾さん♪」

夾「……うん。ありがとな……」

ハ「……くく……」

夾「てめぇも殺す……」

ハ「遠慮します♪」

ジ「ノンノンハルッち♪　ツンな君の心の内を僕が代弁してあげよう。何、感謝の言葉などいらないさ♪　僕はＬＯＶＥハンターであり、キューピットでもあるからね♪」

ハ「……所々にツッコミたい所はありますが、取り合えず、こちらも遠――」

ジ「君に散らされるなら本望さ！　大好き夾ちゃん♪　Ｉ　Ｌｏｖｅゅ～ん♪」

―轟！―

ジ「む？　何やら夾ちゃんの神がサ○ヤ人のように浮きはじめているようだが、気のせいかい？」

メ「いや、気のせいではないな……」

レ「烈火の如く怒ってらっしゃいますね……」

ハ「……僕もですか？」

夾「……遺言は？」

ハ「いえ、あの……」

夾「了解。お嬢様に残す遺言は『いえ、あの』だな？」

ハ「……素で言うが、それ、似合ってるぞ？」

――爆！――

カ「いやいや、どんな効果音！？」

祐「ま、そんくらい夾ちゃんが紅くなったってことよ♪」

夾「てめ、この、バカハル！」

――撃撃――

――撃！！！！――

ハ「な、ぜ…………」

ジ「そして僕も何だね……。だが……タンマリと見えた夾ちゃんの太ももを、僕は、命という名の金庫にしま……」

夾「……散れ」

――滅！――

カ「が、顔面スタンプ魔力入り……エグい……」

ジ「……ナイス、アングル……」

夾「ま、あと頼むわ……」

ズル……ズル……。

タｉｎな「……今のうちか……」

ガシィ！

タｉｎな「ぬ、ぅ！」

メ祐「あっは♪　タ～カ～ト♪　どっこいっくの♪」

タｉｎな「……御花摘みに」

メ祐「もちろん却下よ♪　さて、やるわよ♪」

タｉｎな「な、何を、だ？」

メ祐「私達みたいに猫耳メイド化も考えたんだけど、やっぱ夏だし、シンプルに行くことにしたわ♪」

タｉｎな「祐希奈殿、意図がよくわからないのだが……」

メ祐「ヴィヴィオ、タカトにわかるように、説明お願いね♪」

ヴ「うん♪」

タｉｎな「……ヴィヴィオが説明という時点で非常に不安なのだがな……」

ヴ「むぅ、大丈夫もん。絶対タカトも気に入るよ？　だって、とっても“可愛い”から♪」

タｉｎな「一つ、気になる単語があったんだが……可愛いとかなんとか……」

風ハ「いや、それは聞かん方が……って遅いし」

タｉｎな「……貴様、謀ったな……。日頃の鬱憤を今ここで晴らそうと、そういう魂胆か……」

風ハ「何故にそげに解釈が捻れた！？」

メヴ「えと……カナン君も可愛いから大丈夫！」

メイドメ「ああ。文句無しに可愛いな」

メレ「ええ。本当に女の子のように可愛いです！」

風ハ「今のどこから何が大丈夫と捻れたかわからん上に女の子に見えるとかナイフで抉るのやめましょう！？」

メヴ「ふぇ？　カナン君可愛いよ？」

風ハ「ＨＡｈＡＨＡ！　モウワタシニホンゴワカリマセーン！　ニホンゴムズカシーデスネ？」

メ祐「キモい。死ね」

風ハ「言葉の暴力って知ってます！？」

メ祐「……Ｉｔ　ｈａｓ　ｎｏｔｈｉｎｇ　ｔｏ　ｄｏ　ｗｉｔｈ

ｍｅ（祐希奈訳：私には関係ないことね」

風ハ「……えーと？……って他人事か！？　このままいくと俺イジメになるんですが！？　地味に訴えていいか？」

メ祐「Ｇｏ　ａｈｅｄ．　Ｉ　ｃｏｕｌｄ　ｃａｒｅ　ｌｅｓｓ（祐希奈訳：好きにすれば？　別に構わないわよ？」

風ハ「いや、かまわないじゃなくてさ……話をね……」

メ祐「Ｄｏ　ｙｏｕ　ｈａｖｅ　ａｎｙ　ｔｈｉｎｇ　ｔｏ　ｓａｙ？（祐希奈訳：何か文句ある？」

風ハ「いや、だから……ってか英語で話すのやめい！　頭ん中で訳してたら何に怒ってるか忘れたわ！」

メ祐「結果オーライってやつね♪」

風ハ「もうツッコム気も起きねぇよ……。勝手にしてくれ……」

タｉｎな「よし今――」

メヴ「タカト、私、一生懸命選んだんだよ？」

最終兵器、発動！

タｉｎな「それ、は……」

名を『乙女の涙』という。

メイドメ「私なりに、頑張ったんだがな……」

さらに、その最終兵器は。

タｉｎな「く！　だが……」

メレ「蟹、我慢して買ったのですが……」

タｉｎな「それは、済まない、とは、思うが……」

属性、『天然』を持つ、三名が発動した時。

アリサ「ふふふ……タカト……死ぬ？」

すずか「後書きくらいでは仲良くしたかったのになぁ……」

しー「おねにーちゃん……メッ……」

祐「♪♪♪～。はいはい、ドンドンカモ～ン♪」

パァアア……。

フィル「小さい女の子いじめちゃ、ダメだよねぇ……？」

ルシア「祐希奈に呼ばれたから来たわよ♪　タカト、取り合えずしばいていいわよね♪」

ユウオ「さらに僕もルシアちゃんに呼ばれて来たよ～」

アサギ「タカト君。何か言いたいことはあるのかな♪」

奈津美「タカト君？　女の子は大切にしないと、ね♪」

タｉｎな「何、だと……！？」

殲滅包囲網が完成するという伝説があった……。

ヴ・メ・レ「ダメ……？」

タｉｎな「……好きに……してくれ……」

メ祐「これぞタカトキラーね♪」

タｉｎな「く……っ！」

風ハ「いや、流石は外伝。ツッコミ所満載な？」

しー「カナン君、こんにちは……♪」

風ハ「……よぅ。しーちゃん。また幼児化されたのか……」

しー「ダメ……。私、お姉ちゃん。お姉ちゃんって呼んで……？」

風ハ「うん。お姉ちゃん、いろいろ頑張れな？」

しー「？　カナン君、困ったさん？」

風ハ「まぁ微妙に。この格好見りゃわかるだろ？」

しー「カナン君、可愛い……」

風ハ「さて、やり場の無いこの怒り、どうしてくれようか……」

しー「カナン君、妹さんになったの……？　妹さん、嬉しいな……♪」

風ハ「……海のバッキャロォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！」

しー「……楽しいの？」

風ハ「ああ！　流行の最先端だぜ！　バッキャロォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！！！」

しー「ばっきゃろ～～～♪　うん。楽しいの♪」

風ハ「俺も泣きたいくらい楽しいさぁ！！！！」

風ハ・しー「バッキャロォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！／ばっきゃろ～～～♪」

メ祐「さて、仲睦まじい姉妹の触れ合いの間に完成したわよ♪」

タｉｎな「……いっそ殺してくれまいか……」

メヴ「大丈夫。とっても可愛いから！」

タｉｎな「カカカカカ……」

メ祐「じゃ、お披露目タ～イム♪」

バッ！

メ祐「ピンク一色、シンプルビキニ～♪」

わぁぁあああああああ！

ジ「うむ。見事なプロポーションだね♪」

トウヤ「そうだね。恥じらうなのは君が中々萌……」

ユウオ「トウヤ～♪」

―破！―

ト「……ふふ、ユウオ、ヤキモチとは可愛いね」

ユ「中身だけとはいえ、自分の弟にムラムラしてる人間に妬くわけないよ」

―軋！―

ト「ならばこの、アイアンクローをやめないかね？」

ユ「何か凄く嫌だから嫌……」

ト「それを世間は妬くと……」

―軋軋軋―

ト「ふふ……気持ちよくなってきたね……」

ユ「本気で潰すよ……？」

ジ「うむ。Ｌｏｖｅ、だね♪」

しー「ん～……！」

風ハ「一応聞くが……何してんだ？」

しー「？　好きな人にはこれするんじゃないの？　私、カナン君好きだからやるの……♪」

風ハ「さいですか……」

しー「でも、上手く掴めないの……」

メ祐「こうするのよ♪」

バキャァァ！

風ハ「ごふぁぁぁ！」

メ祐「蹴り倒して～、地面な押さえ付けて～♪」

風ハ「や、止め……」

ガシッ！

メ祐「潰す♪」

―軋軋軋軋軋―

風ハ「ぎゃぉぅぃぁあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

ドサ……。

メ祐「ね♪」

しー「ありがとう……。祐希奈お姉ちゃん……♪」

メ祐「このくらい朝飯前よ♪」

しー「頑張る……！」

タｉｎな「……カカカカカ」

メヴ「タカト、そんなに私達、おかしなのを選んだのかな……」

タｉｎな「いや、素晴らしい。シンプルだからこそ、なのはの長所が良く活かされている……」

メヴ「良かったぁ♪」

タｉｎな「活かされている、が……。中身が俺ではな……」

メヴ「タカト、可愛いよ？」

タｉｎな「……成る程。これは、くるな……カカカカカ。カナン、

貴様の気分が初めて理解出来た……」

メヴ「えとえと、私だけじゃないよ？　皆も可愛いって言ってたから、本当だよ？」

タｉｎな「そうか……。それは……」

―轟！―

タｉｎな「その皆とやらに礼をせねばな……！　祐希奈殿、今回ばかりは、反撃させてもらう！」

メ祐「ふ……。甘いわね……」

タｉｎな「何を……」

メヴ「私が、タカトがキレた時ように何のカウンターも準備していないとでも？　別に私が相手しても良いけど、それじゃあ面白くないからね……」

カシャン……。

タｉｎな「これ、は……！！！」

メ祐「抉る時は徹底的にってねね♪　最近の後書きはどこも甘いってのよ！」

全ＫＤＧ「流石は祐希奈！　そこに痺れる憧れるぅ！」

全オリ主「ネタが危ないっつってんだド阿呆共ォォォォォォォォ

ォォォォォォ！」

メイドメ「行こう」

しー「妖精さん……？」

メイドメ「いや、違うが……まぁ、とりあえずは何でもいいから離れるぞ」

メレ「危ないですからね」

しー「でも、カナン君が……」

メヴ「しーちゃ～ん。ママと行こう？　カナン君はしーちゃんの妹さんだもん。きっと大丈夫」

しー「……うん。ママと行く……」

タｉｎな「貴様、何故、そこに……」

祐「なのはさんに退いてもらって空いたタカトの身体にグラースを叩き込んだのよ♪」

グラｉｎタ「そう言うことだ。伊織タカト……」

タｉｎな「それは、予測しないでも無かった……無かったが……この有り様は何だ！？」

メ祐「え？　究極のタカト抉りネタ……。猫耳メイドタカトｉｎグラースよ♪」

ジ「分かりやすく言うとだね。猫耳メイド服のタカト君の中にグラースが入っているという有り様さ♪」

ト「これは流石の私でも許容範囲外だね！　吐き気を催す素晴らしい品だ」

風ハ「もうツッコミ所多すぎて意味がわからんわ！！！！」

メ祐「じゃあ死んで♪」

風ハ「何故に！？」

バキャァァ！

風ハ「いきなりですかぁぁぁー……」

メ祐「気分だにゃん♪」

風ハ「可愛くすれば許されると思うーー」

ジ・ト「許す！」

風ハ「許しちゃったぁ！？」

タｉｎな「……カカ、カカカカカカカカカカ……。カカカカカカカカカカカカカカカカ！！！！」

グｉｎタ「来い……。貴様とはいずれ戦わねばならんと思っていた……」

タｉｎな「いいだろう……。ここで幕を引いてやる……」

グｉｎタ・タｉｎな「ここで、終われ……」

風ハ「でぇい！　ややこしいわぁ！！」

グｉｎタ「滅天……」

タｉｎな「ディバイン……」

グｉｎタ・タｉｎな「光覇弾！」

―滅！―

メクレア「さて、収集がつきそうに無いので、私達が締めさせていただくですの」

ハル「いや、なんというか、タカトが悲惨でしたね……」

メクレア「それは、まぁ……」

夾（アリサ道場Ｖｅｒ）「最初っからそういう話らしいからな」

ハル「……まだ着ていたんですか……」

夾「いいだろ別に……」

ハル「もしかして、気に入りましたか……？」

夾「うるっせぇな！　着替えが無かっただけだよ！」

メイドク「猫耳メイド服ならあったですの」

夾「あんなもん着れませんよ！」

ハ「そちらの服の方が……恥ずー―」

夾「あぁ……？」

ハ「いえ、何も」

メクレア「そろそろ文字が限界ですの。終わるですの～」

夾「……まぁ、テスタメントさん、キャラ崩壊は悪かった。年長組として謝るわ……」

ジ「いまの夾ちゃんならブルマの端をチラリと上げて見せればテスタメント氏なら「ＯＫ！　モーマンタイ！」と言ってくれるさ！」

ト「……ふむ」

夾「そこでカメラ構えてる奴、後で殺す……」

メクレア「まぁまぁ……。では、本日はここまでですの。最後まで読んでくれた読者の皆様、ありがとうございましたですの～」

一同「ありがとうございました～♪」

メ祐「うんうん♪　善きにはからいなさい♪」

風ハ「何でお前が威張るんだ！？」

メ祐「え？　そりゃもちろん私が――」

タｉｎな・グｉｎタ「終われ……！」

―滅！―

第三十九話　存在価値　（前編）（前書き）

う～む……。久しぶりにきました絶不調……。
思ったように地の文が書けず、文字数はかなり少な目となってしまいました（汗）
次回までには持ち直すよう、頑張ります。

第三十九話　存在価値　（前編）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

俺は、バカだ……。

馬鹿げた所で迷って、迷ったせいで遅れて、あげく、希望をもったが故に絶望に落とされた、ただのバカだ……。

何度、落とされれば気がすむのだろうか……。

六課を信じて、カナンを信じて、白姫家を信じて、夾を信じて……。

結局、希望なんてものはないのに。

最初っから、一人でいればなんの問題もなく……いや、いっそ、俺が生まれて来なければ、こんな悲しいことは起きずに済んでいたかもしれないのに……。

なら、何故、未だに俺は生きている？

他人の人生を引っ掻き回し、あげく、助けてくれた人間の命の伊吹を刈りとり、それでも尚希望にすがり……。

俺のようなゴミが、何を、望む？

結局、行き着くのは奴と果てることだけじゃないか……。

俺の在り方は、昔も、今も、変わらない……。

何だ、こんなに、単純なことに、何で、迷い続けていたんだろう……。

なら、行こうじゃねぇか……。

もう、振り向かずに、一直線に……。

俺の、終演へと……。

Ｓｉｄｅ　ｏｆｆ

「離せ……」

「え、ハル君？」

呟きが響く……。

訓練施設からハルの肩を持ち、運んでいたなのはは、そちらに気がいき、ハルが起きたことには反応したものの、何を言ったかまでは聞こえていない。

「離せ！」

「きゃ！」

そんななのはにハルは苛立ち、右腕を振り払う。

倒れるなのはに、ハルは視線すら向けない。

『ハル、お前は！』

「黙れ……。もう、話す時間すら惜しい……」

『恩を仇で返すか！』

「ふん……」

怒鳴るアスラを無視し、ハルは進もうと歩み。

「行かせない！」

立ち上がったなのはがその進路を両手を広げて妨げる。

先刻のなのはとは違う、不意など突くことは出来ない。

「退け……。次は殺す……」

「っ！」

だが、ハルも、先刻のような情は無かった……。
最早、問答無用と、殺意を放つだけとなった瞳が、なのはを射抜く。
全快には程遠い状態のハルに対してさえ、なのはは震える。
その殺意は本気だと、肌で感じ取れたから……。
それでも、だからこそ、めいいっぱい腕を広げて、退かない！

「ハル、君！！　ダメだよ！」

「二度は言わない……」

未だに構えることすらしないなのはに、音もなく、ハルが接近する。
あまりにも唐突に、ハルは魔力を纏う拳を引き絞って打ち放つ。

「何してんだ、てめぇ……」

だが、その拳はなのはを捉えることは無かった……。
瞬間でなのはとハルの間に現れたカナンが、左に転送した剣で止めていたからだ。

「なのは！」

「フェイトちゃん、カナン……」

向けられた殺意に、膝が限界だったのか、崩れ落ちるなのはを、カナンの後から現れたフェイトが支える。
カナンはそれを一目見た後、改めてハルを睨む……。

「てめぇ、マジで殺す気だったろ……」

「ああ。邪魔だったからな……」

「止まったんじゃ、ねぇのか……」

ハルの中で、カシャリとなにかが砕けた……。

それは、ハルの最後の箍（たが）だったのかもしれない……。

「そう、それが間違いだったんだ……。ククク、確かに止まった。だから、だから、アイツは、夾は死んだんだよなぁ。俺が、バカ過ぎたから……アハハハ！」

「ハ、ル？」

突如、壊れたかのように高笑いを始めるハルに、カナンは恐怖すら感じた……。

――コイツ、何か、違う……。

先刻戦った時よりも、激しい違和感がカナンを襲う。

何か、根本的な部分から、ハルがおかしいと。

そして、決定的な違い……。

ハルから感じる闇の濃さだ……。

「お前も、死ぬか……？」

「ド阿呆が……！」

完治な筈はない。

そんな筈はないのに……。
ハルの右腕から伝わる鼓動は、先刻より遥かに強く感じた。
その力の源をカナンはよく知っている……。
何故なら、少し前の自分と、同じだったから……。

「闇に、喰われるぞ……」

そう、カナンの中では、暴走していた頃の、復讐のみを考えていた自分と、今のハルが、重なっていた。
だからこそ、誰よりも、闇に染まろうとするハルのことがわかるからこそ、止めたいと、そう思って。

「いいんだよ……」

「何……？」

「ククク……」

カナンの前で、ハルはまた、壊れた嘲笑を始める。
可笑しくて、可笑しくて、たまらない。
腹を抱え、つり上がった笑みを浮かべて、しかし、死んだ瞳をそのままに、笑い続けた……。

「何が可笑しい……。何がいいんだよ……あぁ!?　ふざけたこと抜かすんじゃねぇよ!」

「クク、アハハハハ！　だから、いいんだよ！　だって、だってもう、俺の存在価値は、アイツのためだけにあるんだから!」

「まだ、んなこと抜かしてんのか……」

烈火の如く、カナンはその瞳を正しく紅蓮に燃やして、ハルを睨み付ける。
しかし、ハルは変わらない。どこまでも、ただ、暗い笑みを浮かべて笑うのみ。

「アイツと死ぬしか、俺はもう、価値がない。ハナッからわかってたことだ……。お前のせいだ……。お前の在り方は、俺を狂わせる……。だから、喋んなよ……？」

「知るか……。勝手に――」

狂え。
そう繋がる筈だった言葉。
だが、その言葉は発せられることは無かった……。

「聞こえなかったのか？　喋んなって、俺は、言ったんだぞ？」

「っ！」

「「カナン！」」

カナンが驚愕する、なのはが、フェイトが怒鳴る。
それ程までに唐突に、ハルはカナンに右腕を打ち放つ！
覇神の力による、絶対的な一撃を……。

「はぁっはぁっ、大、丈夫？」

「ありがとう、ございます……」

右腕は、地面を広大に消滅をさせたものの、カナンへは当たらなかった。
瞬間で反応したフェイトがカナンを助け出したからだ。
現在は、２０ｍ強の距離を挟んで対峙していた。

「フェイトちゃん！」

なのはの声に、フェイトが反応、直後、ハルの姿はフェイトの眼前！

「バルディッシュ！」
『Ｚａｍｂｅｒ　Ｆｏｒｍ！』

振り抜きながら、バルディッシュは高出力の雷刃を纏い、雷光の軌跡を残し、下段から一気に天空へと疾り、ハルを迎撃。

「邪魔、すんなよ……」

「なっ！？」

ハルは左腕にて雷刃を横殴りに叩き、いとも簡単に雷刃を叩き壊す……。
フェイトは元よりパワー型ではない。
それでも、ザンバーの雷刃を叩き割れる人物など、ごく少数。
一撃という条件ならば言わずもがなだ。
ハルはそれを簡単にやってのけた……。
まともに打ち合ってはならない。それをフェイトは痛感するが、遅い……。
最早、次手の右腕が唸りをあげていたからだ。

「え……？」

瞬間、フェイトを横に突き飛ばし、カナンがその前に飛び出す。
左腕を霞ませ、魔力を纏い、黄金に輝く剣を叩きつけ。

「くぅぁぁあああああ！」

「この程度で……」

押されていく……。
どうしようもなく、抗うことすら許さず、カナンを呑み込もうとするように右腕から紅き光が拡がる……。

「エクス……」

紅に染まる程の光の中で、カナンは呟く……。
応えるように、剣は拍動し、輝きを増す……。
目を眩ませるような過剰な光に、二人は構わない。

「カリバァァァッ！！」

黄金の輝きは、そのまま至近で解放される！
その輝きは、問答無用に持ち主とハルとを呑み込み、膨大な光の玉となった魔力は、送り続けられる魔力に耐えきれず、炸裂を起こし、爆音を轟かせた……。

「メイデン、ユニゾンするぞ！」
『仕方ないか……』

黒煙を上げ、吹き飛びながら、カナンは受け身を取り即座に跳ね

起きる。
次いでメイデンが現れ、カナンに重なり。
「トロい……」
「『っ！』」
ユニゾンの半ばでカナンの眼前にハルが現れる……。
明らかに異常過ぎる速さにカナンは呻く。
打ち放たれているのは左腕。
とはいえ、当たれば即死は免れない……。
「う、くっ！」
そう、当たれば。
ハルの拳は止まっていた。否、止められていた。
カナンとハルとの間に割って入った祐希奈によって……。
ハルの一撃にひび割れる障壁、しかし、通さない！
「……随分、楽しそうなことやってるわね……。私も混ぜなさいよ……」
「ふん……」
祐希奈の挑発を、ハルは無視した。
ゆっくりと右腕を頭上に水平に構えて。
「はぁぁぁぁっ！」
雷光の如く空から再生成した刃を刺突に構えて降り注いだフェイ

トを受け止める。
それも一瞬、回転しながらフェイトを受け流す。
両者、身体を捌き一回転、左腕と雷刃が激突し、紫電が舞う……。

「お前が止められる、とでも？」

「くっ！」

本気で力を加えるハルをフェイトは支えきれない。
軋みを上げるバルディッシュと、震え始めるフェイトの両腕。
どうやっても、押し負ける……。

「フェイトさん退いて！」

「うん！」
『Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ！』

が、押し勝つ必要も無かった。
故に、躊躇なく、高速移動魔法で下がる。
フェイトは、時間を稼いだに過ぎないのだから！

「烈破……」

引き絞られた右腕からカートリッジが弾け飛ぶ……。
その右腕が発するは、空気を焦がす紅蓮の炎……。

「行くぞ……。メイデン！」
『任せろ！』

右手を構え、祐希奈が飛びかかり、カナンはその背後で剣を固く

握り締める……。

「うぜぇ……」

「爆砕拳！」

呟くハルは左腕を打ち出し、対する祐希奈も合わせて叩き込む！

ビリビリと震える大気、激突の余波は地面を砕く……。

「ォォッ！」

獣のようにハルが吼える！

ゆっくりと祐希奈の拳を押し返し、吹き飛ばす！

吹き飛ばされた祐希奈の様は正に弾丸。

だがそれでも、祐希奈はニヤリと笑う……。

何か来る。そう感じたハルは追撃を開始。

「させません！」

「止める！」

しかし、それは叶わない。

前後から襲い来る翡翠と金色の斬撃を避けねばならなかったから……。

一瞬で膝を落とし、這うような低い姿勢でハルは斬撃を回避して見せた……。

残像を残し、交差するのはヴィヴィオとエリオ。

横薙ぎの軌跡が消え去る前に、二人は身体を捌く……。

「「はぁっ！」」

体勢を整えることを許さず、上下段から斬り込む。
刹那、二人の手からフェアリーとストラーダが宙に舞う……。
そう、ハルに体勢整える必要など無かった……。
地面に手を着き、旋風のように回転した両脚が唸る！

「ゲートクローズ！」

蹴撃が二人を捉える瞬間、その先に扉が出来たかのようにハルの脚は進行を止める……。
遥か遠方、ユニゾンし、深緑の姿となったキャロが発動した防御魔法だ。
遠距離なためか、稼げた時間は一秒にも満たず、扉は蹴り砕かれる。
しかし、ヴィヴィオとエリオに一秒という時間は離脱するに十分過ぎた。
事実、蹴りが動き出す時には二人の姿は残像となっていた……。
二人の疾さに苛立ちながらも、ハルは前を見て。

「行くわよ……。カナン！」

「金剛ォォォォォォォォ！」

――ちっ……

内心舌打ちをする。
ハルは、カナン達に時間を与えすぎた。
祐希奈の姿はカナンの剣の上にあった……。
そう、大地の力が満ち溢れる、光輝く剣の上に……。
カナンが踏み込む、地面が揺らぐ程の震脚をしながら……。
祐希奈が膝を曲げる。全身に身体強化を巡らせて！

「烈砕牙ァァァァァァ！」
光の疾さで祐希奈が打ち出されて跳んでいく！
背後に拡がるは紅蓮の路。
まるで、海が二つに裂けたかのように焔が燃え盛る。
間に合わないと判断したハルは右腕を構え、祐希奈を睨む。

「打ち、砕けぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

「……くっ！」

祐希奈が怒号を響かせ、瞬間、強大な衝撃が六課へと突き抜ける！
祐希奈から打ち出された拳は、衝撃のみでハルから背後に地砕きを起こした……。
その衝撃を右腕で防いだとはいえ、まともに受けたハルは、呻く。
その右腕が祐希奈に触れれば終わる。
だが、祐希奈は恐れない。
故に、拳に纏う炎の威力は下がらず、寧ろ、猛り狂う！

「取り合えず、止まれよ。ハル……。それで、何があったか、ちゃんと話せ……」

「……」

その背後から、ハルの首筋に剣を当てられる……。
直線ならば、いかな障害物をも無視することが出来る空間突破を用いて、ハルの背後に突き抜けたカナンだった……。
カナンはただ静かに、無表情にハルを諭す……。

「アンタ、一度協力するって決めたんだから、それを曲げんじゃな

いわよ。ハル、自分がどんだけバカなことしてるか、わかってる？」

一方、祐希奈は怒りを顕にしながらハルに語る。
中途半端な位置に立つ。
それは、祐希奈が最も嫌いとすることだから……。
ハルの前には祐希奈、背後にはカナン。

「ハルさん、わかってくれたんじゃ、ないんですか……。私、ハルさんと戦いなんて、したくない……。皆、仲良く、していたい……。こんなの、こんなの嫌だよ……。ハルさん……」

そして、頭上には杖となったフェアリーを構えるヴィヴィオ。
その瞳には、大粒の涙が溜まっていた……。
どうして、仲間同士で争わなくてはならないのか、それがとても悲しかったから……。

「仲良く、ね……クク」

俯き、ハルがヴィヴィオの言葉を嘲り笑う。
暗い笑みを浮かべて、ハルの口元が歪む……。

「んなことしてるから、トロくなった……。互いに馴れ合うから、情が移った……。邪魔ばっかだ……。んな存在、いらねぇんだよ……」

「お前ら離れろ！」

「「っ！」」

危険だと、直感で判断し、カナンが怒鳴る。

反射的にヴィヴィオ、祐希奈共に反応し、ハルから離れ。

「仲間なんてなぁ！！！」

瞬間、ハルの周囲は朱い波動に染められていく……。

塵となり、消滅していく地面。　退避が後一瞬遅ければ、消滅させられていた三人はハルの力に戦慄を覚える。

「じゃあな……」

「しまっ！」

戦慄の間に稼がれた距離と時間は、ハルに演算の時間を許し、それに気付いたカナンが駆け出そうとするが、既に遅く、ハルは消え去った後だった……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「あんのクソッタレコンニャクが！　俺、あのバカ執事追います！」

「なら、私達も！」

「うん！」

即座に転移魔法を展開に入ろうとするカナンに合わせ、なのはとフェイトも行こうとするが、カナンは首を振る。

「六課のメンバーは予定通りに来てください！　グラースとの戦いまで時間無いんで！」

その言葉は正しい。
もう、グラースとの戦いの時刻まで、一時間と猶予はなかった……。
万端の準備でなければ、グラースの相手など出来るわけがない……。

「カナンだって、私達と状況は同じだよ？」

心配そうにフェイトが言うが、カナンは聞かない。
着々と転移魔法陣を完成させていく……。

「アイツの、覇神の力にまともに対抗出来んのは、こん中では俺だけみたいなんです。だから、やっぱり俺が行かないと……」

「止めても、無駄なの？」

半ば諦めたようにフェイトはカナンに問い掛ける。

「師匠の頼みでもこればっかりはちょっと……」

そして帰って来る答えはどこまでも予想通りで……。

「うん。わかった……。カナンだからね……」

「すいません……」

苦笑いを浮かべながら二人は笑みを交わし合う。
フェイトが認めたが最後、六課の中でカナンを止める人物はもういない。

「安心してフェイトさん。あのバカは私達が護るし」

「うん。だから、フェイトママ、心配しなくていいよ？　ハルさんだって、混乱してるだけだもん。きっと大丈夫！」

「……へ？」

そう、六課の中には。

カナンの友人であるヴィヴィオと祐希奈にそんなことは関係ない。

カナンがハルを止めに行くなら自分達も。

それが当たり前。

それが、仲間というものだから……。

「ちょっと待てお前ら。今のアイツは危ない……」

「でも、カナン君は行くんだよね？」

「いや、そうだけど……」

「なら、どうして私達はダメなの？　私達もハルさんのお友達で、仲間だよ？」

「いや、だから……」

首を傾げるヴィヴィオに、カナンはなんとか止めようと思考を始める。

が、その思考は凍結した……。

ニッコリと笑みを浮かべる祐希奈を見たが故に……。

「ねぇ、カナン……？」

「お、おう」

「ここでピクリとも動かずに待つか、私達を連れていくか、どっちがい～い？」

「……」

優しく、祐希奈が笑いながらカナンに問う。
燃え盛る火炎を、その右腕に宿しながら……。
ダラダラとカナンの背筋に汗が流れていく。
熱さのためではなく、笑顔の祐希奈に対しての恐怖感で……。

「さっさと答えろヘタレ♪」

「ゆ、祐希ちゃん、本気じゃない、よね？」

「さぁ？　カナン、アンタに判断は任せてあげる♪」

――この顔はマジだぁぁぁ！

長い付き合いのため、何も言わずともカナンは祐希奈の言いたいことは大抵はわかってしまう。
悲しいかな、今現在もそうであった……。
結局諦め、溜め息混じりに顔を上げる。

「わかった……。お前らは聞かないんだろうしな……」

「うん。ありがとう。カナン君」

「礼言われるようなことなのかこれ……」

「？」

どこかずれたヴィヴィオの言葉にカナンは苦笑いをする。
そんなカナンがわからないのかヴィヴィオは可愛らしく首を傾げていた。

「そそ。こんな奴にお礼なんていらないわよ？」

「お前は少しはヴィヴィオを見習えよ……」

「アンタには無理」

「何故に俺限定！？」

「ヘタレだから」

「えー……」

「ふふ♪」

いつも通りに漫才を繰り広げながら祐希奈は笑う。
これから戦いに行こうなどという空気はではない。
いつでも自然体でいられる。
簡単なようでその実とても難しい。
それは、三人の強み。

「まぁいいや……。そんじゃあ……行くぞ……」

「うん……」

「ええ……」

カナンが魔法陣に魔力を流し込むと、より一層金色の輝きは光を増して……。

「待ってほしいですの！」

「「「クレア？／クレアちゃん？」」」

その輝きの中で、カナン達は走ってきたクレアの姿を見る。

息を切らし、クレアは何故か首を振る。

「カナン達が、危険を侵してまで止める必要はないですの……。あのバカ執事は、きっともう、帰って来ない、ですの……」

クレアは、ハルに何があったのかは、知らない。

知らないが、遠目から見ただけでもわかる、ハルの絶望を感じさせる立ち姿……。

その姿から、夾が眠りについた時を連想するのは容易に出来たから……。

「ああ。帰って来ないだろうな」

「っ！」

カナンが告げる残酷な事実はクレアの心を深く抉る……。

わかっていた、それでも、辛く、痛い言葉……。

その痛みに俯くクレアの頭に、優しく手が置かれた。

「え……？」

ボーッとするクレアを、グシャグシャと頭を撫で回し、ニッと笑った。

「だから、友達が引き戻すんだろ？　あの阿呆を一発ぶん殴って目を覚まさせて、そんで、帰る。だから、心配すんな」

明るく笑うカナンに、クレアは頷きそうになり、しかし、歯止めがかかる……。

「連れ戻せても、ハルが、壊れてしまうかもしれないですの……」

確実に、ハルにとって良くないことが起きている。

そんな確信がクレアにはある。

只でさえ、心をすり減らしているハルがそれに耐えきれるのか、クレアは不安で……。

「アイツも、そこまで弱い人間じゃねぇよ。もし、危なそうだったら、クレア、お前が支えてやればいい」

「支、える？　どうやって？」

「それはだな――」

カナンがクレアに近づき、その言葉を伝える。

キョトンとするクレアにカナンは再び笑った。

「な、出来るだろ？」

カナンの問いかけに、クレアは満面の笑みを浮かべて、ニコリと笑う。

「はい、ですの！」

「おし！」

そして、大きく頷いたのだった。

クレアの肩を叩いて、カナンは踵を返し、魔法陣の中へ……。

「カナン、取り合えず、殴っていい？」

「いや、何故に！？」

「まぁ、それがカナン君の良いところだから、我慢しよ？」

「我慢って何を！？」

「甘い、甘すぎるわヴィヴィオ！　遊園地の時くらいのアンタをもっぺん出してみなさい！」

「えと、もう整理はついてるから、無理だね」

「いや、だから、俺にわからん次元で話を進めんでもらえませんか！？」

叫ぶカナンを、祐希奈は無視し、ヴィヴィオは苦笑いで受け流し続けた……。

「俺、なんかしました!?」

「知らない!」

「あはは……」

「くぁぁあああ!」

「マスター、なんというか、いろいろと前途多難だな」

「わかってんなら教えろよ!?」

「無理だ」

「即答っすか!?」

そのまま、カナンのツッコミを最後に三人は光と消え、機動六課から消え去った……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

地球、海上。

「海の上、だね……」

カナン達の眼下には青い海が果てなく広がり、海流も穏やかに流れていた……。

普段なら見とれる所であるが、そんな状況ではない。

「……そういやアンタ、場所聞いたの?」

「いや、聞いてない」

バカじゃないの？　そんな意味を込めて、祐希奈はジト目でカナンを睨む。

だが、振り向いたカナンの瞳はもう真剣そのもの。

「あのな、ピンポイントで転移して、アイツの不意打ち受けりゃ終わりだ。聞く意味がない」

「えと、じゃあどうやって場所を特定するの？」

「それなら簡単……」

瞳を細め、カナンは地平線の先を見る。

瞬間に、待っていたかのように噴き出す力。

離れていてもわかるほどの、悪寒……。

「な？」

「確かに、分かりやすいっちゃ分かりやすいわね……」

「うん……。あっちが凄く、痛い……」

答えは単純。

力が強くなっていく方角に飛べばいい。

方角さえわかっていれば、短距離転移などを使うまでもなく、カナンなら一瞬で到着出来る。

「で、急いでる時に限って妨害ってあるのよね～」

「このタイミングでの妨害、おかしいよね……」

「ま、向こうでもなんかやってるってのが妥当か」

カナンと祐希奈は溜め息をつき、ヴィヴィオは冷静に状況を判断する。

そう、三人はいつのまにか囲まれていた。

銀色の集団に……。

「あれ、ホンッとにアンタに似てるけど、知らないわけ？」

尋ねながら祐希奈は右腕にブレードを転送し。

「知るか！　こっちが聞きたいくらいだ」

カナンは腰を落として柄へと指を引っ掻け。

「何が目的かは知らないけど、好きにはなれないかな……」

ヴィヴィオは杖を構えてマガジンをデバイスにセットする。

相手が何ににせよ、三人がやることは変わらない。

「そんじゃまぁ……」

カナンが呟く。

同時、ヴィヴィオと祐希奈も息を吸う……。

心を一つに、瞳を見開く！

今、やるべきことは……。

「ぶっ壊す！／ぶった斬る！／撃ち抜く！」

一刻も速く、ハルの元へと辿り着くこと。
故に、分析もせず、ただ突破することだけを考え、三人は集団に突っ込んでいった……。
後編に続く▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

メヴ「にゃんにゃん♪」

メシー「にゃんにゃん♪」

メヴ「にゃ～♪」

メシー「にゃう？」

メ「……後書きコーナーの時間だ」

カ「シィィィィィオオォォォォォォォォォォォォォォォン！」

カナ「うるさいですよ。風間君♪」

カ「風間君言うなぁ！　そして出てくんなぁ！」

カナ「メイド服、着たくなってきました……♪」

カ「ごめんなさい勘弁してください絶対無理です嫌です御免被りますやりたくありませんていうか出来ません寛大な処置で御勘弁願いますカナメ様！！！！！」

カナ「あぁ、楽しい……♪」

カ「くそが……」

カナ「あ～メイ――」

カ「何も言ってませんですはい！」

カナ「――デンさん。相変わらず可愛らしいですね♪」

メ「え……？　か、かわ！？　あ、その、流れがよくわからないんだが、何度も言うように、私は可愛くなどないとだな……」

カ「……」

カナ「カナン君、何か言いたそうですね？」

カ（本気で性格悪いなコイツ……）

「いや、何も……」

カナ「聞こえてますよ♪」

カ「へ？」

カナ「さて、着替えてきますね♪」

カ「止めてくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

カナ「ふふ♪」

メヴ「うにゃ～♪」

メシー「にゅ～？」

カ「もういいや……。で、何でまたまたしーちゃん化？」

チャイナ祐「ん？　私に無許可でおっきくなったからよ？」

カ「……」

ゴシゴシゴシゴシ

チ祐「何よ？」

カ「あー……」

ジ「ノンノンカナ吉、いくらゆっきゅんがペッタ……いや失礼、貧にゅ……いやいや失礼、まな板だからといっても言葉くらいはかけてあげたまえよ！　それが紳士というものさ！」

チ祐「ペッタンで貧乳でまな板で悪かったわね……」

ゴォォォォォ……

ジ「ゆっきゅん、そこは貧乳はステータスだ！　希少価値だとだね？」

メ祐「消えろ。屑が……」

バキャ！　ドゴォッ！　ズダダダ！　キュピーン！　シュゴァァアアアア！

メ「何かはよくわかないが、凄いことになっているな。流石は祐希奈だ」

カ「それ誉めるとこか！？」

ジ「……ふ。殺られる間際に見える、チャイナ服のスリットからチラリと見えるその映像を、命と言う名の金庫に……」

祐「それ、既出」

メキャァァアア！

ジ「……」

ポク、ポク、ポク、チーン♪

祐「テヘッ♪」

カ・メ「南無……」

メヴ「にゃ～にゃ～？」

メしー「にゃにゃにゃにゅにゅにょ～♪」

メヴ「にゃ～♪」

カ「で、何だっけか……」

メ「シオンさんが云々という所からだな」

チ祐「だから、シオンは私の許可無しで戻ったからよ」

カ「いや、もしかしたらアリサさんの許可出たんじゃ……」

チ祐「何言ってんの？　アリサと私、“両方”の許可とらないといけないに決まってんじゃない」

カ「いつ決めた！？」

チ祐「それは――」

シュバ！

ハ「今決めたんですね。わかります」

チ祐「そゆこと♪」

ハ「では」

カ「ちょと待てぇぇい！」

ハ「はい？」

カ「今の、今の何！？」

ハ「何と言われましても、渡された台本通りに言っただけですが？」

カ「いや、台本て何！？」

祐「知らないの？　やっぱアンタバカね」

メ「マスター、流石に私でもわかるぞ……」

カナ「ちなみに私もわかります♪」

メヴ「私たちもわかるよ。ね～。しーちゃん♪」

しー「にゃ～♪」

カ「あぁ、またしても感じる疎外感！」

ハ「……ふ」

カ「野郎てめぇぶっ殺ぉぉす！」

ハ「ネタになってますよ？」

カ「んなもん今更どうでもええわあああ！」

チ祐「ま、何でもいいわ。しーちゃ～んおいで～♪」

メしー「にゅ？」

トテトテ。

メしー「にゃに？」

チ祐「ん～♪」

ポン♪

メシオン「……え？」

メヴ「あ、シオン君、こんにちは～♪」

チ祐「シオンってば、そんな格好してヴィヴィオに合わせるなんて、よっぽどママが好きなのね♪」

メシ「合わ、せる、て、何……。え？」

チ祐「はい鏡♪」

キラリーン♪

メシ「……」

バタッ

メヴ「あれ？　シオン君？　ねぇ、シオン君!？　大丈夫!？」

メ「何やら、魂が抜けたような顔をしているな……」

チ祐「ま、こんくらいで許してあげるわ。ちょっと軽すぎた気がしないでもないけど」

メ「十分だと思う……」

メヴ「カナン君、カナン君は!？」

メ「あそこだな」

カ「待ぁぁちぃいやぁぁがぁぁれぇぇぇぇ！！！！」

ハ「あははは♪　全力で遠慮します♪」

―斬斬斬斬斬斬―

メヴ「ど、どうしよう……。シオン君、帰って来られないよ！」

チ祐「そんなにダメージ酷かったの？　ま、私の知ったこっちゃないけど」

メヴ「ふぇぇん。祐希ちゃ～ん！」

カナ「私に任せてください！」

ヴ・祐・メ「？」

カッ！

メヴ「わぁ♪」

チ祐「うわぁ……」

メ「これ、は……」

ドドドド！

カ「コンニャククラゲぇぇぇぇぇぇ！」

カナ「ハルさんこっちです！」

ハ「助かります」

カ「逃がすかぁ！」

カナ「ふふ。かかりましたね、カナン君……」

カ「何がだ……。今は、止まらねぇぞ……」

カナ「これを見ても、そう言えますか！？」

カッ！　カッ！　カッ！

カ「なっ！？」

カナ「ご期待に応えまして、ウェディングドレスになっちゃいました♪」

カ「……」

バタッ

カナ「仕留めました♪」

チ祐「ナイスよカナメ！」

メヴ「良いのかな……」

メ「大丈夫だろう。マスターとシオンさんなら、な」

三途の川にて。

カ「何か、久しぶりにきた気がする……」

シ「よぉ。カナン……。悪いけど、もう少しここにいるわ……」

カ「やっぱりな。俺の相棒が帰れないなんてことはないと思ってたんだ」

シ「今は、戻りたくない……」

カ「わかる。わかるさ。よくわかる」

シ「ああ。お前ならわかってくれると思ってた」

カ「よし！」

カ・シ「愚痴ろう！」

かくして二人は制限時間ギリギリまで互いの境遇について愚痴ったとかそうでないとか。

ジ「ふふ……。ゆっきゅんの、生足……。そして、苦労した、ヴィヴィオ君の生着替え……む、少しピントがぶれたか……。否、これはこれで……」

シュバ！

タカト「ジル・ローディアス……」

ジ「む？」

タ「貴様はここで、終われ！」

―滅！―

そして、三途の川の端では何やら爆発が起きていたが、気にするものはおりませんでしたとさ。

―めでたしめでたし♪―

第三十九話　存在価値　（中編）（前書き）

なんとか早めに書くことが出来ました。
ただ、返信待ちの方々、これからちと出掛けなければならないので、
もうしばしお待ちください。
なるべく急いで帰りますので。
それでは、どぞです♪

第三十九話　存在価値　（中編）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

幾閃もの閃光が、一拍遅れで連続して続く……。
袈裟、上段、下段、刺突。
それぞれの斬撃を、避けて、捌いて、下がり続ける。
残像を残し、下がるのはヴィヴィオ。
回転し、袈裟をやり過ごし、杖を掲げて上段を受け流し、下段を跳んで避け、首を捻ることで刺突をかわす。

「弐式……」

――遠距離……

人型の一体が遠方にて剣に手をかける……。
ヴィヴィオはそれを一別するに終わる。
振り抜かれると同時にヴィヴィオがいる空間が歪む。
直後、銀の閃光は、ヴィヴィオの残像を真っ二つに斬り裂いた……。

ヴィヴィオ本人は、鮮やかに宙を舞っていた……。
その姿は、正に踊るように儚げに、宙にて身が捻られる。
人型は、当然ながらそれに見とれることもなく、破壊することのみを考え、人型二体が突撃。
二体に続き、次々とヴィヴィオ一人へと人型が進んでいく……。

「……！」

刹那、ヴィヴィオの身体が激しくブレる……。

交差する二筋の銀閃、それらは全くの同時に、機械的に放たれた寸分の狂い無き完璧な一撃。
それ故に二体は同時に回転したヴィヴィオに受け流される……。
「クロスファイア……」
『セカンドモード起動します』

行われるは弾丸形成、そして、フェアリーの変型。
後ろの二体をヴィヴィオはもう振りも向かない。
スフィアに展開されるのは環状の魔方陣……。

「バースト！」

スフィアから撃ち放たれる蒼き砲撃。
攻撃を流された二体は体勢すら立て直せず、崩れたままに胴体を撃ち抜かれ砕け散る……。
ヴィヴィオは止まらない。
撃ち抜いたという、絶対の自信があるからこそ、ヴィヴィオの動きのシークエンスは次へと移る。
手にした筈の双刃、それは既に二振りの剣へと姿を変えていた……。
その視線は、左右から現れる人型へと疾る！

「はっ！」

鋭い呼気と共にヴィヴィオが腕を霞ませる……。
瞬間、人型の中心に突き刺さる翡翠の剣……。
まだ、止まらない。
ヴィヴィオの右脚へと旋風が渦巻き、風が唸る！

『一……』

ヴィヴィオの背後から響く機械音……。
それを最後まで紡ぐことをヴィヴィオは許さない……。
上半身が捻られ、全身のバネを使い、打ち上げられた蹴りは、人型の頭を容易く打ち砕く……。
背後を潰すと、剣を人型から引き抜き、一気に下がる。
待っていたかのようにヴィヴィオが立っていた場所を斬り裂く斬撃の雨……。
未だ四体もの人型が残っていた……。
人型達は、何も考えず、逃げる対象を追い、進む……。

「ごめんね……」
『サードモード、起動します』

敵にも関わらず、ヴィヴィオは謝った。
直後、ヴィヴィオの手から剣が消え去る。
新たに展開されるのは、杖でも、剣でもない……。
天を突くかと思える程の、巨大な、虹色の爪。

『危険……』

回避は無駄と、四体の内一体が防御の構えを取る。
それに習い、残り三体も剣を斜に構える。
その行動にヴィヴィオは構わない。

「おやすみ……」

虹色の巨爪は、空を斬り裂き、人型達へと降ろされる。
創られた虹の軌跡は、人型に接触しても止まることはなかった……。

紙をカッターで斬るように、鮮やか過ぎる程あっさりと、その姿を縦に裂いた……。

『マスターの周囲に反応ありません。援護に向かわれますか？』

「そうだね。早く追い付かないといけないし……」

祐希奈とカナンの援護に行こうと、ヴィヴィオはその姿を探す。

そして、意外な程あっさりと、カナンの姿が見つかった。

「え……？」

その瞳はあり得ない事柄に大きく見開かれた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

祐希奈の周囲を取り囲む、銀色の人型達。

囲まれている当人は、涼しい、否、冷めた表情でそれらをただ見る……。

「っとに、スピードだけは一級品ね……」

そう毒づき、祐希奈はやる気無さげにブレードを右に払う。

瞬間に弾ける火花、吹き飛ぶは銀の人型……。

体勢を崩した人型を祐希奈は一別するに終わる。

不動のまま右腕を頭上に掲げて……。

「ま、見えてるけど」

残光一閃、祐希奈の頭へと叩き込まれる二筋の閃光。

しかし、それは掲げられたブレードに阻まれる。
二体分の一撃を受けながら、祐希奈は尚、不動……。
背後の敵を捨て、祐希奈は瞳を閉じる……。
拡がるは銀の翼、太陽にも劣らぬ輝きを放ち、祐希奈の身体を包み込む。

『『放射……』』

瞬間に叩き込まれる上空と地上からの砲撃。
その砲撃は仲間のことなど考えず、祐希奈へと斬りかかっていた二体を粉砕しながら翼へと撃ち込まれ、粒子を散らす……。

「アンタ達に感情なんて求めたりしたって、意味ないんだろうけど……」

砲撃など関係ないと言わんばかりに祐希奈の翼は拡がっていく……。

『『援護……』』

さらに二体分、祐希奈へと叩き込まれる銀の光。
合わさることで出力を増した砲撃は太く、より輝きを増して……。

「そのやり方、嫌いよ！」

それでも拡がっていく翼は止まることを知らない！
打ち返されるように、放たれた砲撃はその本人達へと方向を変化、当然回避など出来ず、人型達は自身の光に呑み込まれ輝きの中に姿を消した……。

「まともに相手してほしかったら！」

一回転、勢いを乗せた斬撃にて背後を斬り払い、狙ったように現れる人型が吹き飛ぶ……。

スキを見せた祐希奈に人型は迷わず突っ込み。

「正々堂々かかってきなさいよ！」

しかし、その突貫も届かず蹴り上げられた右脚に頭部を粉砕される……。

感情の無い人型に自棄、というものは存在するのか、それはわからないが、吹き飛ばされた人型は、小細工もなく、祐希奈へと再度突貫を開始する。

ガムシャラに、祐希奈が避ける方向を追い、銀の剣は縦横無尽に空を疾る。

「……へぇ」

ただひたすらに斬りかかる一体の人型に、祐希奈は半目しか開いていなかった瞼を完全に開き、光を取り込む……。

機械的で、手段を問わない人型達の戦いで冷えてしまった祐希奈の闘志に、火が灯る……。

ギィン、そんな激しい金属音が空気を震わせる……。

袈裟と袈裟、回避しか行わなかった祐希奈が人型と刃を交え、止まっていた……。

「来なさい！」

その一言を皮切りに人型は乱舞を再開する。

祐希奈はもう回避をしない。

横薙ぎに合わせ、刺突を打ち払い、上段には下段から打ち合い、火花を散らし合う！

「はぁっ！」

鍔迫り合い、祐希奈の力はそれすら許さない……。

一気に押しきり、吹き飛ぶ人型を追撃、ブレードを上段に掲げて、カートリッジを弾き飛ばし、轟と猛る紅蓮は、軌跡を残しながら人型へと進む。

『殲滅、する……』

人型も退くことを選ばない。

ただ、対象を破壊することを考えて、腰だめに構えた剣に光を集めて。

「はぁぁぁっ！」

『放射！』

撃ち放ち、斬り払う！

放たれる銀の光に祐希奈のブレードが叩き込まれ、紫電と粒子が舞う……。

「ふぅ……」

溜め息が響く……。

銀の砲撃は、炎の剣を止めることさえ叶わなかった……。

砲撃は斬り裂かれ、銀の剣すらも叩き斬り、歴然の差を見せつけるように人型本体をも頭上から斬り裂いて、破壊する……。

「まぁ、私とまともにやるには弱すぎるか」
『正々堂々やれと言ったり、弱すぎると言ったり、どちらなのですか……』
「どっちもよ♪」

ニコリと笑う祐希奈にアシェルは心底呆れ返る。
ともあれ、敵を倒した祐希奈はカナンとヴィヴィオの姿を空から探して……。

「何、あれ……」

簡単にカナンの姿を見つけてしまう……。
最悪の形で、目印が宙に描かれていた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

動く。
銀色の集団が津波と化して、飲み込まんと押し寄せる。
たった一人、カナンに対して十体。
そして、一体一体が音速を越える領域。
敵に発動される、空間突破の劣化能力。
刹那に密集する銀の人型は、カナンの存在を斬り刻むべく、銀の一閃を一斉に叩き込む。

「遅い」

が、その剣閃全てが空気を切り裂く……。
次いで響くは剣を納めた金属音。
襲い来る銀の人型達など意に介さず、カナンは津波の背後に立っていた。

先の行為が無駄だと言わんばかりに背を向けて。
即座に振り向く銀の人型、カナンへと集まる感情の無い無機質な視線視線視線。
激烈な体捌きで人型達は反転し、剣を握る。“筈だった”
しかし身体は動かない……。
人型を構成する部品が落ちていく……。
力を司る腕が、重心を司る脚が、そして、思考をする頭が……。
あまりにも綺麗に、銀の身体は海へと沈んでいく……。
九体分の身体が……。

『抹殺する……』

カナン背後に、たった一体、閃撃を避けた人型がいた……。
無機質な音を響かせて、柄に手をかけて。
カナンは半歩だけ左脚を静かに引いて……。

「だから……」

『……』

背中を向けたままのカナンと、剣へと手をかける人型。
一秒、二秒、三秒、幾度時を刻んでも、状況は変わらない。
人型は、動かない……。
カナンの左腕に逆手に握られた、黄金の剣……。
向かう先は、人型の胸の中心部……。
ようやく、動きに追い付いた時が、人型の腕を力無く下げさせる……。

「遅い」

人型を空間把握で捉えたカナンが先に攻撃した人型の速度を上回り、反撃した結果だ。

「祐希奈！　ヴィヴィオ！　平気か！」

二人は大丈夫かと、カナンはさらに上空で戦う二人に声をかけて。

「っ！」

感じた悪寒に剣を前方に斜に構える。
もう何もいない筈だった空間。
しかし、確かに響く金属音と加わる力。
それは、敵がまだいることを表していて……。

「メイデン、腕治せ……」
『ああ。そうした方が良さそうな相手のようだ……』

カナンの右腕を光が包む。
ギプスを振り払うことで捨て去り、同時に回転しながら剣を叩き込む！
カナンに合わせるように背後に黒い影が現れ、漆黒の一閃、鮮やかな火花が散った……。
そのまま鍔迫り合いにもつれ込み、カナンはその相手の姿をしかと見る……。

「次は黒、か……」

『殲滅、開始……』

――気分が悪くなる……。

その相手は、銀から黒へと変色した、自分だった……。
機械音を響かせる人型にカナンわ苛立ち、鍔迫り合いを終わらせようと力を込める。

――剣が、重い！？

が、弾き飛ばせない。
相手の力が強い、重心移動が上手くなっている。
そんなことよりも、カナンは身体に違和感を覚えた。

「っ……ぅ！」
『これは……まさか……』

直後に襲い来るは、凄まじい頭痛、そして、吐き気。
視界がどうしようもなく揺らぎ、膝に力が入らず、笑う。

『暗夜……』

「くっ！」

そんなカナンに人型は容赦をしない……。
逆にカナンを押し返し、一瞬で納刀……。
ふらつく足を踏ん張り、カナンは体勢を立て直す。
迫る刃に必死に剣を持ち上げる。

『マスター！　危……！』

『一閃……』

叫ぶメイデンの声をカナンは頭の奥で聞いた気がした……。
今、カナンの脳内を満たすのは、激痛の警報。
真っ青な海に、朱い雫が波紋を立てた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

肩を斬り裂かれ、鮮やか過ぎる鮮血の華を咲かせて、カナンは海へと落ちていく……。
持ち上げた剣のお陰か、傷は血は出ているが死に至る程には深くはない。
姿勢を立て直そうと、飛行魔法を発動。

『四式……』

「っ！」

しかし、そんな余裕すら無くなる……。
感じる寒気。
それは正しいと空間把握が敵の姿を捉えた……。
無機質な瞳が上空からカナンを射抜く……。
歪む空間、それは、より完全に近づいた空間突破……。
消失と言うべき速さで人型は消え去る……。

『マスター！　後ろだ！』

「くっ！」

肩の痛みを無視してカナンは回転すると同時に剣を抜き払う。
しかしそれは、攻撃のための抜刀ではない
自身の身を守るための、防御の抜刀……。

『光刃……』

「っぅぁ！」

斜に構えた直後、激烈な威力と共に閃光が弧を描いてエクスカリバーに炸裂する！

――何で、止まらねぇ！

打ち込みを止められず、二つの光は空を駆けていく……。

相手の力が強い。否。

踏み込みが深い。否。

支点が完璧。否。

否、否、否。

そう、全ては……。

――見え、ない……！

全ては、カナンの身体の状態にあった……。

揺らぐ視界、震える腕、笑う足、割れそうに痛む、頭……。

意識が霞む中で、カナンは直感的に背後を振り向き、薙ぎ払う。

『二閃……』

「く、そっ！」

瞬間に疾る銀の閃光。

凄まじい火花を散らしてカナンの手からエクスカリバーを弾き飛ばし、カナンを叩き落とす！

だが、それはまだ幸運と言える結果だった。

最悪に近い状態で一撃を凌いだのだから……。

これが、カナンの知る技では無かったなら、相手の人型の能力が完全にオリジナルなら、その身体は斬り裂かれている……。
幸運。そう、これはとても幸運なこと……。

「金剛……」

それでも、状況は最悪からは好転することは無かった……。
ゆっくりと、終わりの時間を味わえと言わんばかりに、銀の剣は鞘へと納まっていく……。
一目でわかる、集束されていく大地の光……。
動かなければ。そんな思いがカナンを満たす……。
しかし、身体は重く、ただ落ちる……。

『閃牙……』

両者共に、その姿は消え去り直後、海面が大きく斬り裂かれ水柱を高く打ち上げる……。
剣を振り抜いた形の人型の動きが止まる……。
そこに、カナンの姿は無い……。
人型は空を見上げる。
その視線の先で、カナンの姿はまだ宙に浮いていた。
一人の少女に抱き締められながら……。

「ヴィヴィ、オ……？」

「良かった……。間に合って、良かったよぉ……！」

涙を瞳に溜めながら、ヴィヴィオはカナンに抱きついた。
カナンが斬り裂かれる瞬間、ヴィヴィオが己の危険も省みず、助け出したのだった。

ほんの一瞬でも遅ければ、カナンの命は、ここに無い。

――また、俺は……。

泣かせないように、心配しないでも済むように、決めた決意は、実行することは難しく、カナンは目の前で泣く少女になんと言えばいいのか、迷って。

「ありがとう。助かったよ」

「……うん。うん！　どういたしまして！」

謝罪ではなくお礼を言った。

頼られた。そのことがわかったヴィヴィオは笑みを作って大きく頷く。

「ヴィヴィオ！」

「大丈夫！」

その背後、銀の人型が現れ、剣を振りかぶる。

笑みを消し、刹那に反応するヴィヴィオは杖を構えて。

「アンタらの天然には呆れるわ……」

そんな声と共に降り注いだ銀の柱が人型を吹き飛ばし、海面へと叩き落とす！

声を発したのは祐希奈。

カナン達の前に降りてくるその表情は不機嫌そのもの。

「アンタ達ね、そういうのは戻ってからにしなさいよね」

「「あ……」」

腕を組み、ジト目で睨む祐希奈に二人は顔を合わせて、改めて何をしていたか赤面する。

「ごめんなさい……祐希ちゃんもいるのに……」

「別に。怒ってなんかないわよ……」

そう言いながらも、祐希奈は相変わらず不機嫌なままで。
それもその筈、好きな人が自分の見ている所で抱き合っていていい気分な筈もない。

「祐希奈……」

「ま、いいわよ。また埋め合わせしてくれれば」

両手を広げ、気にしていないと祐希奈は言う。
だが、カナン達と正面から向き合おうとはしなかった……。

「それより、アンタ、ヴィヴィオと一緒に先に行きなさい」

「「え？」」

唐突に言われた言葉にカナンとヴィヴィオは思考が追い付かず、呆ける。

「「出来るか！／出来ないよ！」」

遅れて理解する二人は同時に首を振り、叫ぶ。
何でよ？　祐希奈は流し目に見た視線で問いかける。
「アイツは俺と同じかそれ以上の力持ってんだぞ？　お前一人残して行けるか！」
「で？」
「でって……、真剣な話してんだから聞けよ！」
怒鳴るカナンに、祐希奈は肩で大きく溜め息をつく。
改めて振り向いたその表情は苛立ち……。
「アンタ以上の力がある？　だから何よ。私はアンタより強いんだから問題ないじゃない」
「なっ！？」
言葉に偽りはないと、祐希奈は表情を変えずに言い放つ。
そんなことを言われるとは思わず、カナンは驚愕する。
結局の所、祐希奈はまだ怒っていた。
「マスター、祐希奈の言い方は悪いが、そうした方が良い」
「ですね。私も祐希奈さんに賛成します」
賛同の声を上げるのは肩に現れたメイデンとレナス。
だが、納得のいかない表情をカナンは見せる……。

「原因は、わかっているんだろう？」

「何となくはな……」

それでもとカナンは顔を上げて……。

目の前にあった祐希奈の顔に驚愕する。

「アイツを振りきるには今のアンタよりヴィヴィオがいた方が速いだろうし、振り切った後はアンタのがもっと速い。私達の時間はあんな奴のために使うもんじゃないでしょ？　私なら大丈夫だから、信じて……」

諭すように祐希奈はゆっくりと、カナンへと語る。

諭されて、カナンは迷う。

仲間を信じる。それは過去の自分がしなかったこと。

だから、踏み出そうと、意を決して……。

「祐希奈……」

「うん」

視線が交わる、想いを交わして、口を開く……。

「頼む……」

「オッケ♪　任せなさい♪」

二人は手を振りかぶる。

パァン、と乾いた音を響かせて、互いの手と手が音を打ち鳴らす。

そのまま背を向けた祐希奈にカナンとヴィヴィオはまだ後ろ髪を

引かれながら飛び上がる。

「あ、そだ。カナン！」

「ん？」

何かを思い出したのか、祐希奈がカナンを追って飛び上がる。

呼ばれたカナンは振り向いて……。

「ありがと♪」

「へ……？」

頬に感じる柔らかな感触にまたしても呆ける……。

それは、祐希奈の唇。

頬からパッと離した祐希奈は少し顔を赤らめながら。

「お礼と、さっきの仕返しね♪」

軽くウィンクをしながら背を向けて飛んでいく……。

カナンは感触をなぞるように頬に手を当てる……。

「私も、負けてられないなぁ……」

「ふぇぁ……」

何か対抗心を燃やすヴィヴィオの横で、赤面したカナンがフラりと身体が揺らがせて、落ちていく……。

「わぁぁあ！　カナン君！？」

「祐希奈……。それは今はマズイぞ……」

「主が耐性が無さすぎるのもあるのですがね～」

どこまでも穏やかに一同はハルを止めるべく飛んでいった……。

「さて、と……、熱いわね……」

『それはあんなことをすればそうなるでしょうね……』

「う、うっさい……。何か、嫌だったのよ……」

何か、嫌。

それが先の行動理由。

何も考えず、衝動で動いた祐希奈だが、祐希奈もまた、カナン同様に赤くなり、胸元にパタパタと風を送っていた。

だが、それもすぐに止まる……。

『対象、一之瀬、祐希奈……』

何故なら、吹き飛ばした筈の人型は、無傷に近い状態で立っていたのだから……。

祐希奈も先の攻撃の効果には期待していない。

精々、説得の時間稼ぎくらいとしか計算にいれていなかった。

「アレ、強いのかしら？」

『一応、カナン君は自分と同等と言っていましたからね』

「ふ～ん……」

人型を見下ろしながら、祐希奈は右腕を振り払うと同時にブレードを展開する。

「でも、何か今は……」

自分を信じてくれた、好きな人の顔を思い浮かべて、それが恥ずかしくて、でも嬉しくて、祐希奈は笑っていた……。

「誰にも負ける気がしないわね！」

『祐希奈、命令は？』

優しげに、アシェルは祐希奈に指示を尋ねる。

祐希奈の中で弾き出される答えは一つ……。

「もち。フルドライブ！」

『了解。行きましょうか』

拡がる背から顕れし銀翼、燃え上がる右腕のブレード。

祐希奈は、翼を大きく羽ばたかせる。

「『叩き潰しに！』」

声を揃えて、祐希奈は恐れることなく突き進む……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一方、ハルもまた、銀の集団に進路を阻まれていた。

カナン達よりも遥かに多く、ハルの前方を埋め尽くさんばかりに存在する銀の光……。

しかし、それは阻むという意味をなさない……。

ハルにとって、それらはただの障害物、敵という概念すら持ち合わせてはいなかった……。

「オォォオオ！」
『もう止めろ！　貴様の身体が！』
「んなこと知るかぁ！」

怒鳴り散らし、打ち出す右腕から放たれる覇神の波動。
消えていく、塵も残さず、存在から否定され、カナンの人型が跡形もなく……。
ひた走るハルの姿は誰の目から見てもボロボロで、戦えるとは思えなくて。
逆に、その存在感を増し続ける、異様な右腕の力……。
まるで、ハルの身体を蝕んでいくかのように……。
暗黒に染まっていく心に、ハルは気づいている。
気づいているのに……。

――構わない……。これで、いい……。

最早ハルは力を制御しようとすら考えない。
例え果てようが、それでも構わないと、そう思う。
グラースさえ、己の存在する価値さえ満たせば、どんなに酷い結末だろうと構わないと……。

『目標、確認……』

その進行方向に現れる、あの、黒い人型……。
真っ黒な、闇を思わせる光を剣に集束、振りかぶる！
ＳＳランクに相当する闇を集め、ただ、目標を殺すことだけを考えて……撃ち放つ！

「邪魔だ……！」

だが、深い闇は、一瞬の拮抗も許さず砕け散る……。
右腕の一振り、ただのその一振りで砲撃を滅し、ハルの姿は人型の前にある……。
人型の瞳には、ケタケタと笑う死神がハルの背後に写っていた……。
ゴトリ、そんな音をたてて人型の首が地に落ちた……。
放たれた右腕が人型の胴体を打ち抜き、消滅させていた……。
相手が人外とはいえ、そこには、一切の躊躇も加減という文字もない。
危険な力を際限無く使う。
それは、ハルという存在自体がヒトから外れつつあるという証明だった……。

「待ってろ……。今、行ってやっからよ……」

呟きながらとハルが歩き出す……。
目標地点までは後少し。
向かう場所は、グラースと戦った、光の日溜まりから奈落の闇へと堕ちた戦いの場……。
進もうと歩いて、止まる……。

「ディバイン！」

よく知る、少女の声が響いたから……。
響くは頭上、蒼の光を輝かせて、少女、ヴィヴィオはハルへとその砲口を向ける！

「バスタァァァァ！」

「ふん……」

降り注ぐ蒼光、それを見上げて、その奥にいるヴィヴィオを冷たい瞳で睨んで……。

「ウゼェよ、お前……」

「っ！」

地上では砲撃が炸裂し、土煙が上がっている……。

しかし、響いた声はヴィヴィオの背後……。

縮地、それを用いて回り込んだハルがいた……。

そして、その右の拳は背を向けたままのヴィヴィオに放たれる……。

「ォォォォオオオ！！！」

「ぐっ！」

その表情が歪む……。

天空から降り注いだカナンの剣を肩口に叩き込まれて！

衝撃波が生まれる。

それは、叩き込んだ剣が全力であることを意味する。

カナンの力は抵抗を許さず、ハルの姿は傾いていく……。

「ブッ飛びやがれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

怒号と共に剣は振り抜かれ、ハルの姿は流星と化し、ソニックブームを響かせながら吹き飛び、受け身すら許さず地面へと叩きつけ、彼方で土煙を上げる……。

「おし。悪くないな」

「あ、あの、今のはやり過ぎなんじゃ……」

ハルに構わず身体の調子を確かめるカナンに、叩き込まれた側であるハルを心配するヴィヴィオだが、カナンはまだまだと首を振る。

「アイツ相手にやり過ぎなんて言葉はねぇよ……」

一切の油断無くカナンは冷静に語る……。

視線の先、その言葉通りに土煙が吹き飛び、紅い光を放つハルがいた……。

一瞬驚いたヴィヴィオだが、即座に切り替え、杖を握りしめる……。

ヴィヴィオは、甘い考えを捨てる……。

仲間に向けるには強すぎる殺意を放つハルを見たから……。

自分の道を阻んだ。

今のハルにとって、殺すという選択を選ぶにはそれだけで十分だった……。

「いい加減、俺に関わるなよ……」

空間が軋む音を、カナンとヴィヴィオは確かに聞き取る。

躊躇いの無くなったハルの本気、その力は、カナンですらわからず、未知数……。

「ヴィヴィオ、気を付けろ……」

「カナン君も、ね……」

今一度、カナンとヴィヴィオはハルと対陣する。
世界のためと自ら滅びを選び、逃げようとする仲間を連れ戻すために……。

（後編に続く）▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

祐「後書きコーナー♪」

ヴ「わ～♪」

カ「え、マジで？」

祐「何よ？」

カ「いや、だってさ、本編アレだぜ？」

祐「ハルとのループ対決でしょ？」

カ「ループ言うなよ！？　あん時とはまた状況がだな……」

祐「ま、そんなのはどうでもいいから置いといて」

ヴ「あの、私も久しぶりに見せ場なんだけど……」

祐「あ、じゃあ、カナンの動きはどうでもいいってことにするわね♪　皆、ヴィヴィオと私の応援よろしく♪」

カ「俺、俺は！？」

祐「最初の一行でハルに殺られんじゃない？　ハルの蹴撃、カナン

は死んだ。みたいな」

カ「短っ！？　あんだけ引っ張っといて！？」

祐「よくあるでしょ？　引っ張りに引っ張って脇役だからやっぱあっさり負けました、みたいなのが」

ヴ「えと、それだとカナン君は当てはまらないんじゃ……」

祐「何言ってんの？　ソイツが脇役。私が主人公よ♪」

カ「俺、脇役なのか……」

祐「つまり死ぬ」

カ「うわぁあああ！」

ヴ「カナン君大丈夫だから！　死なない脇役さんもいるよ！」

カ「やっぱ脇役なのかぁぁあああ！」

ヴ「あ、あれ？」

祐「ヴィヴィオ、ナイス天然♪」

ヴ「私、何かおかしなこと言ったかな……」

祐「うんうん。そのボケたとこ大好きよ♪」

ヴ「えと、あの、ありがとう」

祐「大好き過ぎて誰にも渡したくなくて愛する余り殺したくなる……」

ヴ「ふぇぇぇ！？」

祐「うん♪　その反応が見たかったわ♪」

ヴ「えぐ……、か、からかっちゃ、ダメ、だよ？」

祐「じゃあマジ」

ヴ「ふぇぇぇ！！　祐希ちゃんが怖いぃぃぃぃ！」

カ「俺、脇役……」

祐「うんうん。絶景かな♪」

レ「祐希奈さん、あまり皆さんを弄りすぎては……」

祐「蟹禁止」

レ「か、蟹だけは！　蟹だけは止めてください！」

祐「か～に～♪」

レ「あぁ、私の蟹さん！」

メ「祐希奈、何でもいいが、早く後書きを始めるなら始めよう……」

祐「後書き？　やらないわよ？」

メ「……何？」

祐「本編があんなにくらいのに空気ブレイクなんて出来ない出来ない♪　ってなわけで今日は無しょ♪」

カ「こんだけ引っ張って！」

祐「黙れ脇役♪」

カ「ぐはっ！」

メ「重症だな……」

祐「さてと、ヴィヴィオも言ってたけど、久しぶりの見せ場なんだから、ホントに応援してよね♪　ついでぐらいにそのヘタレな脇役も応援してくれればいいから」

カ「つ、ついで……て……」

祐「そんじゃね♪」

一同「本当に終わるんだ！？」

祐「それが祐希奈クオリティょ♪」

マジで完！

第三十九話　存在価値　（後編）（前書き）

くっそぅ、終わらない……。
遅くなりました～。
後書きと前書きは都合によりありませんが、近々外伝をいれるつもりなので、またそこでいろいろやろうかと思います。
え～、返信待ちの方々、もうしばしお待ちください。
企業訪問さえ終われば返せますので（汗）

第三十九話　存在価値　（後編）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

海が裂ける。

「はぁぁぁぁああ！」

祐希奈の怒号と共に、銀と黒、二つの光が蒼を切り裂いて、突き進む光は止まらない。

鍔迫り合いの姿勢から押し込み続ける！

されど、人型とてただでやられているわけもない。

『祐希奈！』

「ちっ！」

アシェルの声に祐希奈が投げ出すように身を捻る。

シャン、と清んだ音が響く。

祐希奈の翼へと縦に閃光が疾り、斬り裂いていた。

背後には、振り抜いた形の人型。

――アイツが警戒するだけはある……。

祐希奈が納得する程に、人型は疾い。

祐希奈の体勢は未だ不完全。

しかし、人型は追撃どころか剣を斜に構える。

瞬間に火花が散った。

「けど」

横薙ぎに叩きつけられるブレード。
体勢が不完全故に腕の力だけで振られた剣。
腕と身体全身、言わずとも身体全身の方が力が入る。
だが、弾丸と化して人型は吹き飛んだ。
祐希奈にとって、同じ身体強化を得意とする相手でも無ければそんな“些細な問題”は関係ない。

『金剛……』

吹き飛びながらも人型は剣を鞘へと納める。
その疾さに祐希奈は追撃に入れず、体勢を整えるのみ。
輝く剣を抜き放ち、人型は空間を駆ける！

『閃牙……』

「温い！」

怒号が響き、水柱が高く高く上がった……。
そう、祐希奈は腕だけでも相当の力を持つ。
しかし、構えた祐希奈はそれを凌駕する。
それこそ、人型の金剛閃牙を上回る程に。
ブレードを振り払い、祐希奈は海を見下ろす。

『流石、カナン君が互角と認めるだけはありますね』
「……ふん」

不満そうに祐希奈が海を睨み続ける。
水柱が凍りつく。
それは打ち砕かれ、氷の礫が幻想的に宙に舞う。

凍りついた海の上で、立ち上がる人型。

『現状確認……』

『来ます！』

「っ！」

機械的な声を響かせて、カナンの人型は飛び上がり、空間突破を使い祐希奈に斬りかかる！

激烈な打ち込みに火花が踊る。

「こん、の！」

金属が擦れる音と共に人型が弾き飛ばす。

人型は何事もなくクルリと回転し、剣を納刀。

それはまるで、今の一撃は確認だったと言わんばかりに……。

『対象、一之瀬祐希奈。推定能力値以上……。更新、終了。対象の能力が推定値を上回ったため、破滅の幻想（ファントム・デストラクション）を使用します……』

――何か、変ね……。

機械的に呟く人型。

そして、突如として静まり帰る空間。

まるで、音を立てることが禁忌なのだと言うように……。

明らかな変化を祐希奈は感じとり、瞳を細めた。

「んっ！」

瞬間、鼓膜を破りかねない不協和音が鳴り響き、祐希奈の脳を揺らす。
一瞬、ほんの一瞬だけ祐希奈の意識が人型から外れる。
その一瞬は、人型が祐希奈に距離を詰めるのに十分過ぎた。

「くっ！」

刹那に人型から数十の閃光が叩き込まれる。
反射的に障壁で防いだものの、不意打ちに等しいそれは祐希奈の反撃を許さない。

――チョロチョロと！

眼前にいた筈の人型は既に消失し、祐希奈の周囲で姿を霞ませていた。
上下左右、予測できない方向から何度も何度も襲い来る閃光の一閃を祐希奈は直感で察知し、ブレードで受け、或いは障壁で防ぐ。
かと思うと下がり、叩き込まれる空間斬撃を避けていく。
捌いてはいるものの、防戦一方と言えた。
その中で、祐希奈は尚冷静。
当たり前だ。
「捕まえた……」

カナンとヴィヴィオ、全くタイプの違う高速型の二人と、祐希奈は何度となく戦っているのだから。
眼光鋭く、祐希奈が上空に左手を掲げる。
瞬間に叩き込まれる一筋の光の槍。
しかし、炎が纏われる左腕が脳天に迫っていた剣をしっかと握っていた。

「火龍！」

過剰な炎熱がブレードに伝い、燃え盛り、景色を揺らがせる。
火竜が牙が求めるは己が主を傷つけんとした人型の他に無い。
空気を焦がし、紅蓮の軌跡が宙に描かれる。
人型は右腕に剣を転送、火竜へと振り放ち。

「一、閃！」

問答無用に噛み砕く！
最早障害物は何もなく、人型はただ切り裂かれるのみ。　そして、
火竜は人型の身体を食い破る。

『破滅の幻想……発動』

筈だった。
祐希奈も自身の技を止められる者などもういないと確信していた。
否、確かにこの場に祐希奈の技を止められる者などもういない。
もう、止める必要すら無いのだから……。

『祐希奈！』
「……！」

クルクルと宙に踊る黒き剣の動きが遅く感じた。
次いで祐希奈が感じたのは、言葉で表すことも難しい程の瞳に刺さるような真っ白な光。
それが敵の技なのだと理解した時には既に遅い。
祐希奈の身体は光の中へと吸い込まれ、消えていく……。
直後、人間の認識する音の限界を越えて、真っ白で巨大な太陽が海上で炸裂した……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一閃、二閃、三閃と間髪を入れずに閃光が疾る。
しかしそれら全てが空を切るのみに終わる。
刹那の四閃目、二つの姿が交わり、止まる。
片や黄金、カナン。片や漆黒、ハル。

「随分、トロイな？」

「うるせぇよ……」

クスリとハルは笑う。
カナンの剣を左手で包み込み、刃を握りしめながら。
カタカタと力を加えられた剣が震えるがその左腕はビクともしない。

「ランサー！」

カナンが未だハルと押し合うなか、ヴィヴィオはその背後で光槍を生成。
その数３０。
射線上にカナンがいる。
それに、ヴィヴィオは構わなかった。

「ファイア！」

主の意思に従い、光槍は一直線に駆けていく！
当たる。
“そのままなら”

カナンは剣を放棄、宙に身を踊らせた。
背後も見ないままに空中で身を捻り、槍の雨を避けていく。
空間把握。
この能力の範囲内にある物は全てカナンの視界。
死角は、無い。
カナンが避けた今、槍の進路に残されるはハル。
囲うようにして光槍が放たれ。

「……ふん」

右腕の一振りで光槍は木端微塵に砕け散る。
元より二人は射撃などに過度な期待はしていない。
着地と同時にカナンが駆ける。
沈み込む身体、その右腰に転送される剣を握る。

「金、剛ォォォォ！」

輝く剣にハルは回避を選ばない。
砂塵が舞う程の体捌きと共に、ハルの身体が左へと回転する。
ハルが右腕を突き出すのと、カナンが剣を抜き放つのはほぼ同時。

「閃牙ァァァ！」

「ォォオ！」

激震が疾る！
光が弾け、激突の余波か地面が大きくひび割れる。

「くっ！」

拮抗は一瞬。
後には力の差のみが現れ、カナンは表情を歪ませる。
大地の力を加えて尚、右腕の力には届かない。
裏でもかかない限り、カナンはハルに負ける。
その結論通り、カナンは押し負け、弾丸と化して飛んでいく。
そんなことはカナンにも予測出来ていた。

「ディバイン！」

「あぁ……？」

出来るからこそ、風を操れる、ハルの網を抜けられる少女に託した。
追撃に膝に力を溜めるハルの背後に霞む影。
追撃など許さない。
意思を込めてフェアリーの先に集まる膨大な蒼光。
ハルはそんなヴィヴィオの姿を肩越しに見る。
ハルの瞳に写るヴィヴィオはどうしようもなく鈍重で、救いようがない。
いかに裏を取ろうと集束など、縮地の速度に叶う筈もなかった。

「っ！」

その演算さえ出来れば、の話だが。
ハルの頭上が裂け、放たれるは空間斬撃。
遠方にて体勢を立て直したカナンが放った技だった。
斬撃自体は腕を持ち上げて防いだハルだが、それは決定的な遅延。
演算は、間に合わない。

「バスタァァァァァ！」

『Ｆｕｌｌ　Ｂｕｒｓｔ！』

ハルの姿は一瞬にして呑み込まれ、蒼光の中に消える。
ヴィヴィオは砲撃を緩める気配はない。
加減はしない。
そう、決めたから！

「フェアリィィー！」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ！』

咆哮を上げるヴィヴィオに応え、フェアリーはカードリッジ全てを弾き出し、砲撃の出力を限界まで引き上げる！
その威力たるや、射線上全てを蹂躙し、更地へと変えていく。

「はぁァァァァァァ！」

獣のような咆哮が響く。
瞬間、空間が歪み、軋みを上げた。
同時に砲撃も捻り潰され、粒子と散る。
そんなことが出来る人物はハル一人しかいない。
その姿は、ヴィヴィオの眼前！
振るわれる右腕、捉えたモノは何もない。
“消失”というべき疾さでヴィヴィオは消えていた。
何処に？
その答えはハルの頭上に見つかった。
ヴィヴィオの砲撃、それすらも囮。

「暗夜……」

響く声、放つは最速、そして、最高の斬撃。

選ぶは壱式。
それは、自分が一番に使いこなした斬撃の名称。

「疾風……」

重なる声、巻き込むは風、そしてやはり、最高の斬撃。
選ぶは剣撃。
それは、自分が一番努力した斬撃の名称。

「「一ッ！」」

弾丸が如く、二筋の光が螺旋を描いて急降下。
振りかぶるは大上段、己が力を一振りの斬撃に全て乗せる。
最早二人に思考はない。
ただ一撃を叩き込む。
考えられるのはそれだけ。
故にこそ、放たれる斬撃は過去最高の斬撃と昇華する！

「「閃ッ！」」

光は、最後まで止まることを知らない。
最高の斬撃は速度、威力を落とさぬままにハルへと吸い込まれ、叩きつけられた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ポタリ、ポタリ、と朱い雫が海へと落ちていく。
少女、祐希奈の立ち姿は先刻とは大きく変わっていた。
バリアジャケットは所々が消滅し、翼はボロボロ、美しい銀髪は滴る血に濁って……。

『祐希奈！　祐希奈！』
「怒鳴らなくても聞こえてる……何よ……」
破滅の幻想のダメージか、額を押さえながら祐希奈がアシェルに返答する。
その声に、いつものような覇気は無い。
それでも、返答を返した祐希奈にアシェルは安堵する。
『身体の方は……』
「平気……。ギリで防御が間に合ったから。ちょっと頭はズキズキするけどね……」
光が炸裂する直前、祐希奈は反射的に身を翼で包み、直撃を避けていた。
とはいえ、祐希奈の防御を持ってしても防ぎきれない。
それは、並の局員の防御壁程度、紙同然に破壊することを意味した。
とにかく、一度体勢を立て直すべく、祐希奈は下がる。
「アレ、アイツの最大攻撃だと思う？」
『恐らくは。ＳＳＳに到達していましたし……』
「ギリ持つか……」
『はぁ……』
次なる戦いに備え、思考を始める祐希奈にアシェルは心底溜め息をついた。
出来れば退く、という選択肢を選んで欲しかったから。
『データは不完全な推測値です。アテにはならないかもしれません』
「アレがアイツの最大ってわかれば十分よ」

『はぁ……わかりました。勝ちましょう』

半ばわかりきっていた返答にアシェルは呆れ、そして納得する。
それでこその自身の主であり、自身の――だから。

「アシェル、ジャケット再生成、ついでに止血用になんか巻いといて」

『了解しました。ジャケット生成、開始します』

直後、祐希奈が光に包まれ、破れてしまったバリアジャケットは復活を果たす。
頭にはスバルのようなハチマキを巻いて祐希奈は瞳を開く。

「ブレード、展開！」

『了解。展開します』

右腕から延長するように、ブレードが飛び出し、炎を纏う。
準備は万端、情報も十分。
恐怖は、無い。

「はぁぁぁぁ！」

咆哮を上げて祐希奈が空を駆けていく。
その声から位置を把握した人型が無機質な瞳を祐希奈に向ける。
剣に集まるは、闇。

「紫電！」

しかし祐希奈は止まらない。
集束されていく闇に、最高速を維持して突撃していく。

人型の砲撃など恐れるに値しない。

『放射』

「一閃！」

砲撃ごと叩き斬れば良いだけの話なのだから。

闇に放たれる紅蓮の刃。

その一撃は闇を削るかのように徐々に進む。

「おぉォオオオオ！」

そして、真っ二つに闇を斬り払った。

砕け散る闇の中、祐希奈の眼前に新たな闇が現れる。

それは人型。

術後硬直のタイミングを狙い空間突破で現れたのだ。

タイミングは正に完璧。

瞬きの間に閃光は祐希奈の首を切り払うことだろう。

“祐希奈が完全に術後硬直をしていれば”の話だが。

祐希奈は止まらなかった。

瞬間の判断で祐希奈は加速し、人型の真横を通過する。

残るは光の軌跡と朱い血。

人型の斬撃は、祐希奈の首筋を掠めるが、落とせない。

『金剛……』

即座に人型は反応し、振り向きの動作と共に剣を鞘に納める。

刃に大地の力を乗せて。

祐希奈に叩き込まんと身体を霞ませる！

『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！』
「烈破！」

人型が振り向くまでの間に祐希奈は急停止、その反動をも利用して自身も振り返る。
ブレードが仕舞われ、その腕に煌々と燃ゆるは紅蓮。

『閃牙』

「爆砕拳！」

空間突破が開いた距離を刹那に詰める。
されど、人型の声に祐希奈の声も同時に混ざる。
祐希奈はその拳を既に打ち出していた。
意表など突かれよう筈もない。
構え、技、そのどちらも情報は祐希奈の中にある。
故に、祐希奈は距離を詰めずにその場で拳を放っていた。
人型は間違いを犯している。
祐希奈を仕留めるなら先の斬撃で仕留めなければならなかった。
避けられた以上、その時点で人型のアドバンテージは終わりを迎えている。
そして、祐希奈が構えている中には追撃を仕掛けてはならない。

「はぁぁあああああ！」

祐希奈が万全の体勢で待ち受ける中で攻勢に出ようと、結果は決まっているのだから。
人型は力では、祐希奈には勝てない。
それが、全て。
輝く剣は粉砕され、作用点は消え去った。

『生成……』

――やっぱり

しかし、人型は既に次なる剣を握っていた。

剣はいくらでも作られる。

つまり、幾度祐希奈が破壊しようと、それは無駄なこと。

『更新、更新、更新』

「っ！」

さらに厄介なことが起きた。

人型の戦闘方法の原型が崩れ始めた。

今までの人型の動きのほとんどはカナンの延長上にあった。

それが、変わっていく。

右腰から抜刀される剣に祐希奈はブレードを合わせ打ち砕き、にも関わらず次は左から横一文字に閃光が疾る。

右の剣は“壊れたまま”

「くそっ！」

ブレードを叩きつけ斬り、拳で握り潰し、脚で打ち砕き。

砕く、砕く、砕く砕く砕く！

弾ける火花、飛び散る破片、それらは全て剣の形。

幾度砕いただろうか、最早砕いた数がわからなくなる程、そのブレードで、拳で、脚で、剣を砕き続ける。

しかし、閃光の乱舞は終わらない。

人型は、剣が破壊された瞬間に次の剣を転送していた。

カナンの延長線、そんな領域を飛び越え、全く未知の領域の戦闘方法。
それはいつしか、祐希奈の反応の上を行く。

「う、ぐっ！」

ブレードを胸の前に構えた直後交差に疾る黒閃。
叩き込まれる二刀に重心がズレ、祐希奈が一歩退いた。
それは、ほんの少しだったのかもしれない。
しかし、その一歩は保っていた均衡を崩してしまう。
人型の手に握られる剣が霞み、消え去る！

『避けて！』

アシェルの声に祐希奈は首を捻る。
瞬間に耳元で唸る風切り音。
投擲された剣が祐希奈の頭スレスレを通過する。
それは一撃だけに終わらない。
再び輝く人型の手。
刹那的に祐希奈は判断し、急上昇。
その姿を追うように黒光が放たれていく。
祐希奈は狙いを絞られないよう、旋回を行い、避ける。
無論、祐希奈がただ逃げるわけはない。

「ブルーゲイル！」
『はい！』

高速飛行しながらその手に転送されるは一対の翼を思わせる蒼き弓。
弦を引き、急停止。
狙いもつけぬまま撃ち放つ。

キィン、と火花が弾け、剣は海に落ちていく。
構わない。祐希奈はただ矢を放ち続ける。
祐希奈が弦を離す度、必ず剣に命中し、撃ち落とす。
絶対必中。
ブルーゲイルが備える力だ。

「降り注げ……！」
『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ』

カートリッジが弾け飛ぶ。
祐希奈の周囲に現れる光の矢。
その数１００。
それら全てが絶対必中。
威力は低いが、ただ撃ち落とすには十二分。
弦が離される。
矢は、光の雨と化し、輝きの豪雨が降り注ぐ！
豪雨は、剣を弾き尽くして尚、有り余る。
それは全て人型に方向を変え、牙を向く。

『迎撃……』

だが、人型を倒すには弱く、不十分。
人型の周囲に疾る閃光の乱舞が光矢のことごとくを蹴散らし、斬り払う。
威力不足。そんなことは祐希奈も百も承知。

「一撃必中！」

故に、新たにその手に現れる銀の弓。
祐希奈の体躯程もある巨大な弓は魔弓・レイザーフォーテル。

左手を弓に、右手で弦を引き絞り、祐希奈は人型を見据える。
弓へと集束する魔力は圧縮され、紫電を散らす。

「ジャッジメントアロー！」

裁きの弓の名の通り、人型に断罪を与えんと矢は一直線に駆け抜ける。
人型に直撃する前に人型は消え去る。
が、避けられたことに祐希奈は驚かない。

「まだまだぁ！」

人型の空間突破は不完全。
急場凌ぎで発動した場合、距離は短くなり、発動は雑になる。
ならば、当たるまで打ち続ければいい。
それが祐希奈の考え。
最も、自身の魔力だけでは不可能な話。
しかし、この場はカナン、ヴィヴィオ、祐希奈、そして人型の計四人分の魔力が散らばっている。
祐希奈の集束技術はカナン、ヴィヴィオには劣るものの、それでも尚有り余る。
祐希奈が矢を放つ度、吹き上がる水柱。
回避を行う人型は徐々に遅れ、身体を掠めるまでに速度が落ちていく。

「ラスト！」

終わりと言わんばかりに大きく弓を引き絞り、撃ち放つ！
人型は未だ空間を歪めることすら出来ていない。
降り注いだ光の柱は、貫く。

『続行、可能』

「っ！」

“その右腕を”

回避が出来ないと判断した人型は直撃を避けるためだけに動いた。

意思を持たない人型は、腕の一本が破壊されようと、任務さえ確実にこなせばいいのだから……。

痛みの表情すら見せず、人型は完全な空間突破を発動する。

その場は、祐希奈の頭上。

次弾を構えていた祐希奈は虚を突かれ、驚愕に瞳を開く。

大きく振りかぶられ剣に暗黒が纏われるのを見るしか出来ない。

『祐希奈！』

『放射……』

アシェルが自身の判断で障壁を張った直後、暗黒が放たれ、祐希奈の姿が闇に呑まれる。

やがて、暗黒から吐き出されるように祐希奈が黒煙を上げて落ちていく。

いかに祐希奈とはいえ、デバイスの自動展開した障壁で防ぎきるのは無理があった。

それでも、減衰してくれたアシェルのお陰か、意思ははっきりある。

否、祐希奈の意思がはっきりしているのは別の理由。

『アイツは俺と同じか、それ以上の力を持ってるんだぞ？』

先刻にカナンが言った言葉を祐希奈は思いだし、苛立つ。

「ブレード、展開……」

――確かにコイツは強い。速いし、バリエーションがある。

弓を消し、ブレードを展開、クルリと空中で体勢を立て直す。

痛みがあったが、そんなものより苛立ちの方が勝っていた。

『暗夜一閃……』

祐希奈が生きている。

そう認識した人型は容赦なく祐希奈に斬りかかる。

祐希奈は、叩きつけられるようにして放たれる斬撃を左腕で右腕を支え痛む身体で押し止めた。

『破滅の幻想……発動』

――けど！

その剣がまたしても光を放つ。

破滅を呼ぶ光が輝きを増し、祐希奈を呑み込んでいく。

それまでの穏やかさが嘘のように、嵐の如く風が吹き荒れ、海流が暴れまわる。

推定、ＳＳＳランクの膨大なエネルギーが解放される！

暴発の直前、距離をとった人型がそれを眺める。

『任務……完……』

人型の言葉が途中で止まる。

否、止められた。
その視線は腹部へと落ちた。
視線の先にあるのは、銀色に輝くブレード。
人型の正面には、己を睨む、祐希奈の姿。
翼と障壁、この二つで一点突破を行い、破滅の幻想を耐えきっていた。

『排……』

「アンタの方が！」

人型が動き出す、それより尚速く、右腕の手甲がスライドし、カートリッジを弾き出す。
赤々と、人型の体内が輝く。
容赦は、しない。

「強いでしょうが！」

轟音と共に炸裂するブレードの先端部。
人型の体内が爆破され、留めきれないエネルギーは解放を求める。
直後、人型は木端微塵に吹き飛び、その破片を撒き散らせる。

「ったく、こんな雑魚とアンタを比べるんじゃないわよ……バカ……」

腕を組み、祐希奈は空を見上げて愚痴る。
これが祐希奈の苛立ちの理由。
人型と自分が同等、そう言ったカナンが腹ただしい。
祐希奈の中では、人型などよりカナンの方が何倍も強いのだから。

『結局、祐希奈は自分とカナン君とどちらが強いと思っているのですか？』

突如投げ掛けられた質問に祐希奈は少しだけ考え。

「私が自分より弱い奴、好きになると思うわけ？」

『自分の方が弱いと認めている、と？』

その言葉には流石にムッと頬を膨らませる。

認めていると言えば認めているが、やはり腹が立つものは性なため仕方ない。

「ほんのちょっとだけよ？　差なんて一ミリも無いんだからね？　あんなヘタレ、私が本気出して、一日鍛練すればすぐに抜けるくらいなんだから！」

『やれやれ……』

「何よその溜め息は！」

怒鳴る祐希奈に、アシェルは慣れたことと言わんばかりにいなし続ける。

一時の平穏な時間。

だが、そこ居続けるわけにはいかない。

「休憩、終わり」

『ですね』

自身の一言で気持ちを切り替え、祐希奈は最大速度で飛行する。

仲間が戦う戦場へと……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ハルへと叩き込まれた二人の最高レベルに達する斬撃。
それは、ハルに到達することもなく、宙で止まる。

「「っ！」」

「何か、したか？」

ハルの口元がつり上がる。
不安定ながらも、ハルの周囲を覆う球体。
カナンとヴィヴィオの斬撃を阻んだそれは、グラースが纏っていたモノと同じモノ。
それをハルが纏っている。
つまりは……。

「てめぇ、そんなわけわかんねぇ奴に身体渡す気か……」

「クク……」

ハルが覇界神との結び付きを強めたに他ならない。
そんな力に頼るハルが苛ただしくて、でも、ハルは壊れたように笑みを浮かべるだけで、それがまた、苛立ちを呼んで。

「ハイウィンド……」

「っ！」

呟きが響く。
瞬間、カナンの隣に烈風が突き抜ける。
零から最高速へ、その爆発的な加速は、カナンに、そしてハルにさえ、指一本動かすことを許さない。

ヴィヴィオの姿は既にハルの眼前、いつ、引き絞ったのか、重心移動を行ったのか、わからない。
わからないが、暴風吹き荒れる右の拳はその鳩尾へと確かに叩き込まれようとしていて。
されど、ハルを覆う防御壁に阻まれる。

「イン、パクトォォォォォ！」
『Ｌｏａｄ！』

ピシリという音を響かせて、一気に亀裂が拡がり、拳はさらに押し込まれて。
亀裂は止まらない。
一方的に拡がるのみで、修復など追い付かない。
ヴィヴィオは押し込み続ける。

「オオォォォォォォォォ！」

「……おぁ！」

普段からは想像も出来ない咆哮を響かせて、ヴィヴィオは深く、深く踏み込み。
ガシャンと、ガラスが砕け散るように防御壁は撃ち抜かれ、拳はハルの鳩尾に抉り込む！
全力で振り抜かれた拳、零距離で炸裂する風弾、その威力にハルの身体は弓なりに曲がり、声すらあげられずに吹き飛んでいく！

「……」
『……』

カナンもメイデンも呆然としたまま動かない。

もちろん、驚いたせいもある。
だが、それ以上にそれほどまでにヴィヴィオが怒っているのがわかったから。
とても悲しんでいるのがわかったから。
カナン達は、動かない。

「てん、めぇ……」

３０ｍは飛翔しただろうか、地面に叩きつけられたハルは、腹部を押さえてヴィヴィオを睨む。
憎悪と殺意を溢れさせて。
ヴィヴィオは、そんなハルに怒りを向ける。

「私は、今の空っぽハルさんなんか怖くない……」

拳を握りしめて、ハルから視線を反らさず、射抜く。
誰も話さない。話せない。許されない。

「私の知ってるハルさんは、優しくて、冷静で、いつも笑ってて、クレアちゃんや、私達を護ろうって、一生懸命で、仲間のために駆け付けてくれた、とっても芯が強い、そんな人。そんな人だから、私達もすぐに受け入れられたし、すぐに好きになれた」

「だけど」と、ヴィヴィオは言葉を繋げる。
正面にいるハルを見て、ヴィヴィオは首を振る。

「今の貴方をハルさんだとは思えない。そんな力で、そんな貴方で、人を救えると、護れると、本当に思ってるいるのなら、私はもう、貴方を仲間なんて思わない……」

本気で、ヴィヴィオはハルに語りかける。
考え直して欲しくて、仲間の繋がりを信じて。
強かったハルを、思い出して欲しくて……。

「うるっせぇな……」

しかし、ハルから返ってきたのは拒絶。
その言葉にヴィヴィオの拳は固く握りしめられ、表情は俯き、奥歯が噛み締められる。

「クク……。お前さ、何か勘違いしてるだろ？　俺は、誰かを救いたいなんて思ってねぇし、護りたいとも思っていない。言った筈だ。仲間なんて、いらねぇんだよ……！」

流れていく……。
俯いた顔から透明な滴が。
少女の細い身体は震え、滴は止まらない。
ポタポタ、ポタポタと、流れて続ける悲しみの涙。

「今なら何もしない。こんな奴に関わるな……帰れ……」

ただ静かに、ハルはそう言った。
だが、ヴィヴィオはその場を動かない。
ゆっくり顔を上げたヴィヴィオの表情は、怒りとも、悲しみとも取れる。

「朱皇、千春……。貴方を、犯罪者として、拘束する……！」

未だ溢れんばかりの涙を溜めた赤がかった瞳で、ヴィヴィオはハ

ルを睨む。
ヴィヴィオの周囲に烈風が吹き荒れ、踏み出されんと膝が沈み込む！

「こ～ら」

「ふぇぇっ！？」

瞬間、コンと言う軽い音。
小突かれた程度なため、痛みは無かったが、周囲が見えなくなっていたヴィヴィオは驚き、頭を押さえてキョロキョロと左右を見渡す。
小突かれたのは後頭部なわけだか……。
ようやく気づいたヴィヴィオが振り返り、その瞳の先には苦笑いを浮かべるカナンがいた。
取り合えずとして。

「……叩いたら、痛いよ？」

首を傾げて可愛らしくヴィヴィオがカナンを見つめた。

「……うん。ごめん」

ツッコミたいが、状況が状況だけカナンは流す。
無理矢理押さえたためにその左腕は震えていたりするが。
仕切り直すため、少し間をあけ、カナンは笑う。

「取り合えず、さ、もう少し落ち着こうな。ヴィヴィオがそんな思い詰めなくても、大丈夫だから」

「でも……」

俯くヴィヴィオにカナンは「大丈夫」そう繰り返した。

「さっきの言葉、届いてるよ。――多分、アイツも自分がどんだけ矛盾してるか、理解はしてるんだ。今のヴィヴィオと同じ。混乱して、頭ん中グチャグチャで、取り合えずわかることからやろうとしてるから、こんなことになってる。――でも、俺達がやることは変わらないだろ？　混乱してるアイツの言葉に俺達は混乱しちゃいけない。俺達だって、絶対に正しいわけじゃないと思う。けど、アイツよりはまともに考えられる」

何をすればいいのか、カナンの話を聞くうちに、ヴィヴィオの脳は理解していく。

力に翻弄されるハルを見て、それでもいいと言うハルを見て、混乱していたヴィヴィオ。

だが、そんな言葉に迷う必要など、無かった。

カナンの言う通り、自分達のやることは変わらない。

「結局さ、俺達は学生だから、難しいこと考えずに動けばいい。コレ、美鈴の受け売りな？」

「あはは。そっか。うん。そうだね」

ニッと笑ってカナンはヴィヴィオから視線を外し、前を向く。

涙に濡れた頬はもう乾き、ヴィヴィオは笑っていた。

「人の話の最中に割り込むのはマナー違反だぜ……」

優しかったカナンの瞳が鋭く変わる。

瞬間、カナンの腕が霞み、剣が閃光が如く抜剣される。
放つは横薙ぎ、対するは、ハルの振り下ろし。
ハルの不意討ちにより、和やかな雰囲気は消し飛び、張り詰める空気。

「もう一踏ん張りいけるよな……？」

カナンは打ち合わない。
まともな力勝負は命取り。
知っているからこそ空間突破で距離を取る。

「大丈夫。もう、迷わないから」

カナンに並び、ヴィヴィオが拳を構える。
言葉を、想いを、届かせるために、戦う決意を固めて。

「お前を！」

「貴方を！」

「「連れ戻す！」」

もう、二人は止まらない。

第四十話　サヨナラ　（前編）（前書き）

遅くなりました！
今回は弁明出来ません。
友達の遊びを断ることが出来ずにいました。
本当に申し訳ございませんでした。

第四十話　サヨナラ　（前編）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

獣を思わせる動きで走り出すのはハル。
姿勢は低く、その右腕は唸りをあげて風を切る！

「ヴィヴィオ！」

「うん！」

行われるアイコンタクト。
最早二人の間に言葉はない。
視線だけで相手を理解し、動きを決める。

「ォォオオ！」

「うっせぇぇ！」

ヴィヴィオが飛び上がった直後に薙ぎ払われる右腕。
同じく横薙ぎに剣を払い、迎え撃つ！
刹那の拮抗。
カナンの肘が曲がり、ハルを巻き込むように回転、受け流す。
続いて振りかぶるは大上段、全力で、叩きつけるが如く降り下ろす！
ハルも身体を立て直し、上半身の捻りから右脚を蹴り上げる！

「っぅ！」

勝負は一瞬。
全力の一撃を容易く撃ち抜いたハルの右脚。
絶対的な無防備。
ハルは勢いを殺さずに次は左脚を放って。

「主はやらせません！」

その蹴りはカナンの鞘から飛び出したレナスが両の腕でしっかりと止めていた。

「『終式剣舞』」

稼がれた時間は、カナンに立て直す時間を与える。
剣が刺さる、大地が揺らぐ、震源はハルが足元！

「『蒼覇！』」

打ち出されるは巨大な石針。
しかしそれはハルを捉えない。
石針が発生するより疾く、ハルがその場より跳躍したからだ。
跳躍したハルを石針は追う。

「チッ……」

己を穿たんとする石針を足元に見て、ハルは舌打ちをし、右脚を輝かす。
瞬間、大量の石礫が周囲に吹き飛び、大地に叩き込まれる！
粉塵裂脚。
瞬間的に身体強化による爆発的な脚力を生み出し打ち砕く技。
それは、石針とて例外なく踏み砕く。
その程度、ハルを知るカナンが予測しない筈はない。

空中に呼び出すことが目的なのだから。

「『天！』」

剣に纏われる紫電。

轟雷を思わせるそれは、下段に溜められる。

「『蓮！』」

ただ、真っ直ぐに、カナンの瞳は空中のハルを射抜く。

刹那、剣が霞んだ……。

「『華！』」

雷の蔓は、華開かせる場所を求めて放たれる！

伸びる、伸びていく。

正に雷が如く瞬く間に光はハルへと到達。

蒼い華を空に咲かせ、美しく輝いた。

「温い……」

しかし、カナンの技はハルには届かない。

覇壊神の力によって阻まれ、通らないのだ。

「バーストドライブ！」

『Ｖａｎｉｓｈ　Ｉｎｐａｃｔ！』

怒号が響く。

その存在にハルが気づいた時には既に遅い。

ハルの背後に五人ものヴィヴィオが重なっていた。

その左腕に集まるは、聖王の魔力をも継ぎ足した嵐が如く激しい暴風。
フルアクセルインパクトをも上回る、必倒の轟打！
「はぁぁァァァァァァァ！」
カナンの一撃によって破壊された覇壊神の防御は再生出来ず、ハルは風弾と拳に脳天を殴られて急転直下で地面に叩き落とされる！
「ァァァァアアア！」
その威力にひび割れる地面。飛び散る瓦礫、舞い上がる土煙。
されどハルは咆哮を上げて未だ立ち上がる。
「オーバーアクセル！」
『Ｓｏｎｉｃ　Ｓａｉｌ！』
次の瞬間にはヴィヴィオの身体がハルの頭上にあった。
肘に、そして踵に、拡がるは深緑の翼、ソニックセイル。
行われるは極限を思わせる身体加速。
「行っけぇぇぇぇぇ！」
ヴィヴィオの四肢が霞む。
打ち込まれるタイムラグはほぼ零に等しい。
瞬間にして計二十発もの風弾がハルへと叩き込まれ、大地を振動させ、さらに瓦礫を撒き散らす！
「調子に！」
叩き込まれ続ける風弾の雨にハルは構わない。

受けながら、右腕を大きく引き絞る。
歪む空間、輝く朱。
どうしようもない冷気がヴィヴィオを覆う。

「乗るなぁァァァ！」

叫びと共に空間を歪ませながら右腕から波動が放たれる！
避けられない。
その範囲は避けるには広すぎた。
風弾全てを呑み込みながら、波動はヴィヴィオへと迫り。

「ぐ、ぅぅぁぁ……！」

「カナン君！」

瞬間でヴィヴィオの前へと現れたカナンが剣を構え、ラウンドシールドを展開し、防ぐ。
とはいえ、到底防ぎきれる威力ではなく、直撃ではないにも関わらず、カナンの腕からは血が噴き出す……。
否、これだけで済んでいるのが奇跡的とも言えた。
並のデバイスならシールドごと消滅させられてしまうのだから……。

「後ろ！　防げ！」

「っ！」

カナンの声にヴィヴィオは反応し、背後に振り向く。
そこには既に右脚を降り下ろさんとしているハルがいた。
右腕にシールド、風の盾を二重に構えてヴィヴィオは蹴りを受け。

「ぅぁあああ！」

ミシリ、という嫌な音をカナンは、ヴィヴィオは、聞いた。
シールドも、風の盾も、容易く打ち抜いたその蹴りがヴィヴィオの右腕に炸裂したからだ。
悲鳴が上がる。
瞬間、ハルの右脚は振り抜かれ、流星のようにヴィヴィオが吹き飛び、叩きつけられた。

「ヴィヴィオォォ！」

ダメだとわかっていてもカナンの意識はそちらにいってしまう。
そしてそれは、やはり間違いでしかない。

「余所見すんなよ……」

「がぁっ……！」

ハルは回転を落とさず、さらに左脚をカナンの背中へと叩き込み、打ち落とす。
吹き飛ばされたのは背後。
しかし、カナンは前から頭を掴まれていた……。
地上には、ハル。
カナンの頭を握るハルの左腕に力がこもる……。
それだけで、抵抗をしていたカナンの腕がダラリと下がった。

「ふん……」

カナンは動かない。

もう、抵抗の意思する見せることなく。

「はっ……」

その口が、笑った……。

直後、カナンの腰にある鞘が、消える。

「はぁぁっ！」

ハルの腕が突如として凄まじい弾かれる。

舞うは銀髪。

フルサイズとなったレナスがその右手に現れていた。

ハルの腕はその脚によって弾かれた。

「お、ぐっ！」

「悪いが、飛べ……」

湿ったような音をハルは自身の腹部に聞く。

踊るは金髪。

ハルの正面に潜り込み、拳を叩き込むメイデンがいた。　華奢な腕には有り得ない程の怪力。

それは、地球の重力を容易く突破し、ハルの身体を弾丸が如く吹き飛ばす！

「「はぁぁぁ！」」

跳ね起きるハルの左右で、烈風が吹き荒れた。

右はメイデン、左はレナス。

互いに対なる拳を構え、風の力を利用し加速する！

「「っ！」」

拳は当たる。
メイデンとレナス、“お互いの拳同士が”
なら、ハルの姿はどこか。

「粉塵……裂脚」

頭上に影がさす。
二人が顔を上げた時には既に遅い。
輝く右脚がすぐ頭の上に落ちてきていた。
下にいる二人ごと右脚は地面を踏み砕く！
広大な大地を陥没させ、地形すら変える。

「どうした？　随分と弱いな？」

陥没する大地の中で、靡くは金の長髪、纏うは銀の鎧、射抜く瞳は金と銀。
ハルの眼下にはユニオンをした二人の姿がある。
その右腕に握られる大剣がハルの脚を止め、揺らがない。

「弱いかどうか、試してみるか……？」

ハルの右脚が輝きを増す。
女性の右腕も呼応するように輝きを増した。
踏みつけるハル、支える女性。
この図は変わらない。
しかし、周りの地形は、沈んでいく。
亀裂が拡がり、割れていく大地の中心で、二人だけが涼しい表情

をしている異常。

「く……」

「クク……」

そんな異常も続かない。

女性の表情が歪む。

メイデンとレナスをも上回る女性の力をもってしても、ハルのそれはさらに上。

下がっていく女性の右腕。

潰される、女性がそう感じた直後、ハルの姿が消え去る。

女性の頭上に通過する、蒼い巨砲。

ヴィヴィオの主砲、ディバインバスターだ。

「まだ、まだ……！」

叩きつけられたせいか、その頭からは血が流れ出る。

しかし、瞳は揺らがず、意思は未だに折れてはいない。

「ウゼェ！」

砲撃に裏拳のように叩き込まれる右腕。

覇壊神の力が砲撃を喰らい、一瞬の後に消滅させる。

「てめぇがな！」

ヴィヴィオを援護し、カナンの砲撃がハルの左手より撃ち放たれる！

ハルは対応が遅れ、左腕で受け止める。

覇壊神の力がない左腕では砲撃は消滅させられない。

「邪魔だ！」

それでも、その進路を強引に変える程の力が左腕にはある。
だが、カナンの攻撃はあくまで援護でしかない。
わかっているからこそハルは一旦全員を正面に見渡せる位置に下がり。

「「オオォォォォ！」」

直後、咆哮をあげながら突貫を行うカナンと女性がいた。
全身のバネ、勢いを加えた剣を横に薙ぎ払い。

「軽いな。お前ら……」

瞬間に二人の姿は空へと舞っていた。
二乗分の力が加わった剣を右腕を振り上げただけでハルは吹き飛ばす。
が、カナンの姿はハルの背後にあった。
吹き飛ばされた瞬間に繋いだ空間を突き抜けて。
同時に、それはハルも予想していたこと。
故に、踏み込みも、振り返るも、全くの同時。

「エクス……！」

「滅、神……」

輝く黄金、轟く朱、
光と、闇。

それを表すように互いの光は互いを否定する。
もう、止まらない。

「カリバァァァ！」

下段から振り抜かれる黄金は、太陽の輝きをもってハルの視界を埋め尽くし。

「絶覇哮……！」

上段から振り下ろされる朱は、血の淀みをもって、カナンの視界を塗り潰す！

「「オオォォォォ！」」

砂塵が舞う、紫電が散る、空間に亀裂が疾る！
創造の黄金、破壊の朱、互いに互いが呼応し、否定し合う力は、その主が制御を受け付けず、互いを滅ぼすために激突する！

「ハハハハ……。ゴミだなお前！？」

「クソ、が……！」

激突の最中にハルが理性を無くし、狂う。
ハルは、覇壊神に近づき過ぎた。
それは、人の意思など容易く打ち砕く。
このままではいけないと、カナンは思うが、相手の力は凄まじく、押し返せない。
それどころか、右腕はカナンに迫りつつあった。
自身の破滅を前に、カナンは戦慄し、“笑う”

「ほら、来るぞ……」

ハルの背後には、エクスカリバーをも上回る威力を持つ、巨大な銀の槍が構えられていたのだから。

持つは女性。

輝きの三対の翼を羽ばたかせ、高々と空へ舞い上がる。

押しつつも、徐々にしか進まない腕と、遅れつつも、一切の障害物などない槍。

どちらが先に到達するかは容易に予測出来る。

「光の内に散れ……」

「チィッ！」

ハルの舌打ちと同時に投擲される槍、消え去るカナン。

右腕は自由になったが、迎撃するには余りに時間が無さすぎる。

「オオォォォォォォォォォォォォォッ！！！！」

故にこそ、ハルは左腕一本で巨槍を受け止める！

吹き荒れる砂塵、飛び散る瓦礫。

５０ｍはあろう巨槍と比較するにあまりに小さすぎる身体、しかし確かに槍を押し止めていた。

獣が如く咆哮を上げながら、ハルは強引に身体を右に捻る。

唸る右腕、轟音と共に右腕が槍に叩き込まれ、槍へと亀裂が走る！

「エクス……！」

直後に、声がハルの背後から響いた……。

攻撃の巻き添えを受けないよう、退避した筈のカナンがそこにいる。

否、カナンは最初から逃げてはいない。

攻撃に巻き込まれるかもしれない恐怖の中で、カナンは前に出た。

覇壊神の力と反発し、暴発しそうな輝きの球を抱えて！

ハルの周囲の空間が歪む。

ハルを守る、強固な覇壊神の防御壁。

「カリバァァァァァァァァァァァァァッ！！！！！」

瞬間、女性が放つ槍を穿ち、天空へと光の柱が突き抜け、空に広がる雲に風穴を開けた。

覇壊神の防御壁など最初から無かったかのように撃ち抜き、光の柱はハルを呑み込む。

その一撃は正しく死力を込めた全身全霊の一撃。

放った結果、自分がどうなるかなど考えもせず、全ての魔力をただ一撃に懸けた。

「くっ……」

故に、カナンは脚に力が入らず、膝をつく。

その眼前には、黒煙を上げる、ハル。

「クク、惜しかった、なぁ？　普通の奴なら終わりだろう……」

ニヤリと、壊れた笑みをハルは浮かべる。

ダメージがないはずがない。

しかし、ハルの足取りは揺らがない。

何故か。

それは、カナンの攻撃が非殺傷だからという単純な理由。

非殺傷設定は、主に魔力ダメージでのノックアウトを前提としているモノが多い。
しかし、覇壊神の力がある限り、ハルにはほぼ無尽蔵とも言える魔力が供給される。
これによりその可能性はほぼあり得ない。
もう一つ、非殺傷とはいえ、相応の痛みはある。
その痛みでの意識の刈り取り。
元よりカナンはそちらを狙っていた。
しかし、事実としてハルは立っている。

「アハハハハハハ！」

空間が悲鳴を上げ、軋む、割れる、否、喰らわれる。
何かもわからない得体のしれない力が世界を喰らう。
最早、ハルが、ではなく、右腕がハルを動かす。
膝をつくカナンをハルは壊れた笑みでただ見るだけで……。
瞬間、その顔はカナンの眼前にはあった。
その距離、数センチ。
視線と視線が交わる。
燃える紅蓮、死する暗黒。
それぞれに思う感情は真逆とも言えて。
それでも、互いに瞳を逸らすことはなくて。

「終わりだ。バァカ……」

そう言って、カナンは笑った。

「っ！！」

そして、ハルは気付く。

己の身体に起きている異変に。
指一本、否、筋一本として全く動かない。
まるで、ハルだけが時間の流れを止めたように右腕を振りかぶったまま固まっていた。
ハルの周囲で歪む空間。

「捉え、ましたよ！」

ハルの頭上で、掌を向けるレナスがいた。
行われるは空間圧砕の応用。
それは、空間の檻の中に他者を封じ込める。

「邪魔、すんなぁぁアアアアアアアアアアアア！！！！」

「くぅ！？」

バチリとレナスの身体に紫電がが疾る。
ハルの力は空間すらも破壊するヒトから外れた力。
過剰な力はレナスが形成する空間を食い付くそうと暴れまわる。
その力は封じ込めようとするレナスに襲いかかる。
喰い破る瞬間、ハルに疑問が浮かぶ。
何故、“レナスが単独になっているのか”と。
“レナスはユニオンをしていたのではなかったか”と。

「『ユニゾン……』」

「っ！」

答えはすぐにやって来る。
ひたすらに静かに、ひたすらに厳かに、響く二つの声。

ハルの背後で重なっていく二人の金色。

「『イン！』」

姿が重なった瞬間、眼を眩ませる黄金が視界をうめ尽くす。
輝く光の中に見るは、神々しさすら放つ高町ヴィヴィオ。

「チィッ！」

「あっ！？」

その姿に舌打ちし、ハルはレナスの空間を破壊する。
瞬間、駆ける。
否、駆けようとした。

「っ！」

「が、あ！」

だが、突如として頭から降り下ろされた剣に迎撃を余儀なくされる。
左腕を振り払い、容易くカナンを吹き飛ばす。
吹き飛ばされたカナンはまだ笑っていて。
それにハルは失策を悟る。
カナンは不意打ちなど狙ってはいない。
ほんの一瞬の隙を作ることに目的がある。
そしてそれは、成った。

「リミットフルバースト！」
『風の力よ。荒れ狂え！』

『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！』

轟、と嵐が吹き荒れる！
砂塵が舞い、周囲に散在する瓦礫を跡形もなく吹き飛ばし、尚もその嵐は勢い止まない。
渦の中で、ヴィヴィオの右腕に生まれる風の槍。
正真正銘、純粋な魔力と自然の力のみで創り上げた、たった一本の槍。
フルドライブの風の集束力、メイデンの力、さらにはカートリッジの力、聖王の力、己が持つ力の全てをただ一本に集めて！

「『ブレイクッ！』」

「こんな所で！！！」

ヴィヴィオが、メイデンが、同時に槍を引き絞る。
シン、と静まり返る空間。
そこにハルの怒号が響き、朱き力が咆哮を上げる！

「『ストォォォォォォォォォォォォォムッ！！！！！』」

「終われるかぁアアアアアアアアアアッ！！！！！」

嵐そのもの、と言っても過言では無いほどの風と共に、ヴィヴィオの手から槍が放たれる！
同時、ハルもその力を際限なく使い、槍へと拳を突き立てる！
刹那、それまで静かだったことが嘘のように耳をつんざく轟音が響き渡る！
激突する余りの威力に大地が耐えきれず、砕け、遂には割けていく。

最早誰も近づけない。

「こんなもんじゃ、ねぇだろ……」

誰にも聞き取れない呟きが嵐の中で響いた。
瞬間、ハルの右腕が鼓動を始める。
その鼓動は世界を震撼させるに等しき力の顕現。

「こんなもんじゃねぇだろうが！　覇壊神の力はっ！」

ハルの視界が真っ赤に染まる。
痛みとも呼べない何かがハルの中を疾り、動き回る！
構わない。
全て、望んだことだから。

「ォォォアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！」

回数にして三度、連続して空間が軋む。
瞬間、ハルの拳は風槍を噛み砕き、木端微塵に破壊する！
嵐を喰い破った今、ヴィヴィオとハルとの間に隔てる壁は何もない。

「『目覚めよ。破壊の妖精……』」

ただ在るは、輝きの球体。
その左腕に握られているのは、杖となり、翼を拡げたフェアリー。
ヴィヴィオの武器には確かにスピードがある。
だが、本来の最大の武器は母親譲りの集束技術と、どう動けば当てられるのかという、直感。
ハル程の相手となると相応のフェイクが必要となるが、メイデン

とのユニゾン状態ならばそれも可能。
残るは決断力。
今のヴィヴィオに躊躇という言葉は存在しない！

「な、にっ！？」

（気を付けろよ？）

驚愕するハルの脳内に念話が響く。
その声は既に遥か上空に退避したカナンからのもの。

（ヴィヴィオの本気は、洒落にならねぇからな）

それだけを言い残し、念話は途絶える。
そんなことを言われずとも、ハルは理解していた。　仲間の能力値は、その脳内に叩き込まれているのだから。
高町ヴィヴィオ、集束技能、ＳＳＳランクオーバー。
ハルの脳内で、警鐘がけたたましく鳴り響く。

「『デストラクション！』」

振り上げられる杖。
球体の大きさは、防御、回避、そのどちらもが無駄だとハルへと告げる。

「終われねぇんだよクソッタレぇぇエエエエ！！！！」

残るは一つ、迎撃。
だが、先の一撃でハルの身体は限界に近かった。
それも計算済み。

全力全開での2連撃、そんなことを想定する輩など、そうはいない。

いや、冷静なハルなら出来たかもしれない。

しかし、今のハルに、そんな余裕はない。

この差が、雌雄を決した。

「ウォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ！！！！」

「『ブレイカァァァァアアアアアアアーーーッ！！！！』」

満足に力を出しきれないハルと、存分に力を出しきったヴィヴィオとメイデン。

結末は、最初から決まっていたも同然だった。

それは最早、拮抗すら許さない程圧倒的に。

ハルの姿は虹色の奔流の中に呑み込まれ。

その名の如く、破滅の光と化した集束砲が地表を削り、蹂躙を続け、遥か彼方で虹色の巨爆が起こし、炸裂した……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「はぁっ、はぁっ……」

『ヴィヴィオ、大丈夫か？』

「うん……。ちょっと疲れただけだから……」

荒い息を吐きながら、メイデンに応え、ヴィヴィオはゆっくりと地表に降りる。

と同時に膝が折れ、バランスが崩れた。

「あっ」そんな声がヴィヴィオの口から漏れるが、倒れる身体は止まらない。

だが、その身体は突如として止まる。

カナンが抱き止めるようにして支えたからだ。

「カナン、君……」

「無理させた。ごめん……」

カナンの言葉にヴィヴィオは首を振る。

ヴィヴィオが無理をしなければ勝てない、そんな相手だったのだから。

「風を使えるのは、やっぱり、私だから……」

そう、ハルの風の知らせを抜けない限りは、ハルに攻撃をまともに当てることは難しいためだ。

そしてそれは、カナンでは役不足。

「私は大丈夫だから、ハルさんを、ね……？」

「わかった……」

ヴィヴィオが嘘を言っているのはわかっていた。

バーストリミットは、危険なために抑えている聖王の力を利用、瞬間的に解放し、爆発的な火力を得る力。

言わば、なのはのブラスターリミットのようなモノだが、やはりその反動は凄まじい。

本来ならば動くのも辛いほどなのだ。

それでもカナンが頷いたのは、ハルがそれだけ油断ならない相手だから。

いざとなれば、すぐに動けるよう、警戒だけは緩めない。

「っ！」

「嘘……」

そして、その時は直ぐ様やって来た……。
彼方から襲い来るは身体の芯が凍り付くような殺意の冷気。
だが、ハルは未だ立ち上がっていない。

「ヴィヴィオ、下がれ……」

ヴィヴィオの前に、カナンが立ち、柄に手をかける。
安心させるような言葉は何も言えない。
そんな余裕すら、無い。
ハルが倒れる場から、伸びだす朱い、腕の形をした何か。
それが何なのか、二人はわかっていた。
それは、ハルの制御を離れた、覇壊神の力。
何本も、何本も、地面から生える腕は、恐怖の塊でしかない。

「早く、下がれ……」

「嫌だよ！」

「頼むから……」

「嫌！」

ヴィヴィオは嫌だと首を振り続ける。
カナンはヴィヴィオよりは動けるとはいえ、魔力はほとんど空に近い。
無数にある覇神の腕を相手にするなど、誰の目から見ても不可能

だった。

「適当に時間稼いだら逃げるから、な？」

「嘘！　嘘嘘嘘！　カナン君、嘘ついてる！」

説得は叶わない。

当たり前だ。飛行し、逃げられるだけの魔力が残っていないのだから。

どうすればいいか、考えるカナンの隣に、メイデンとレナスが現れ、重なる。

現れるは翼を持つ女性、大剣を振り、前を睨む。

「我が、止める……。マスター達は逃げろ」

「お前だって満足に動けないだろうが！」

「っ……」

カナンが怒鳴る。

メイデン、レナス、この二人が合わさった姿がこの女性。

つまり、二人が消耗をすれば女性も消耗する。

結局、状況は変わらない。

否、変わった。

最悪の方向に……。

「「「っ！」」」

三人の数メートル手前から地面を突き破り、腕が伸びだす！

驚愕する三人に、腕は構わず降り注ぎ。

「轟絶貫掌！」

光の如く降り注いだ何かが腕を貫通、跡形もなく消し去る。
カナン達の前には、長い黒髪が風に靡く。
普段は優しげな顔立ちが厳しくなったその人。

「クレイ、さん？」

ヴィヴィオの問い掛けにゆっくりと振り向き、警戒がほどかれ、ニコリと笑った。

「はい。直接はお久しぶり、になるんでしょうか。カナンさん、ヴィヴィオさん」

零番運用部、クレイ・アレイザがそこにいた。
意外な人物の登場にカナンとヴィヴィオは目を白黒させる。
そんなことに構わず、覇神の腕は現れ続ける。
だが、クレイは今度は迎撃を行わない。

「バァレルク！」
『Ｙｅｓ　ｍｙ　Ｓｗｅｅｔ』
「フロストエッジ！」

大気中の気温が下がり、一瞬で氷点下へ、水分が凝結され、生まれるは１０ｍ強をあろう巨大な氷柱。
その数、２０。
それを空中で構えた女性はニコッと笑う。

「ストラ～イク♪」

明るく元気に場違いに。
凄まじく空気を読まない声が響くやいなや、その声とは裏腹に問答無用に氷柱が覇神の腕に叩き込まれ、刺し穿つ！

「咲だよ～。覚えててくれた？」

「あ、いや、まぁ……」

あいまいに返事をするカナンに咲はぷーっと頬を膨らませる。
何か言おうとしたのか、口を開く咲だが、隙だらけのその背後から腕が地面を突き破り高々と現れる。

「雑談は後にしろ」

しかし、その腕は一閃の元に断ち切られた。
現れたのはレイ・リーフライン。
零番運用部の副部長兼経理を担当している人間だ。
そして、メイデン達を破壊しようとした人物でもある。
理由があったにしろ、はいそうですかと割り切れるほど人間は単純な生物ではない。
カナンもまた、例外ではない。
睨み付けられたレイは、なんといえばいいのか迷って……

「っ……」

答える前に腕に囲まれ舌を打つ。

「雑談は後、じゃなかったのか？」

そんな声が響き、一行を護るように黒槍が周囲に出現、包囲した腕郡を狙い済ましたかのように刺し穿ち、破壊する！

「カナン君、だっけ？」

空から舞い降りるは零番運用部副部長、レイと同等の実力を持つ、ヴェイン・アルベリス。

黒槍を肩に担ぎ、カナンをただ、見る。

「状況は、わかるね？」

「……ああ」

不服そうに頷くカナンにヴェインは苦笑いを浮かべた。

「君達はそれでいい」

「は？」

「ふぇ？」

カナンとヴィヴィオに近づき、グシャグシャと頭を撫でる。

カナンとヴィヴィオはその言葉の意味がわからない。

答えをだすまえに、ヴェインに肩から抱き寄せられて。

「取り合えず今は……」

「「えっ？」」

捕まれたことにカナンとヴィヴィオは驚いて顔を上げる。

ヴェインの顔には冷や汗が流れ、ニッと笑みが浮かんでいる。
零番運用前線メンバーの全てが、一斉に地に伏せる！

「伏せろっ！」

「どぅわっ！？」

「ふぇぇっ！？」

二人はヴェインに体重をかけられ一気に沈む。
前には大量の腕があるにも関わらず、だ。
何故？
そんな思考が二人に過る。

「ディスカート・アーチェッ！」

「フラム、ベルジュッ！」

刹那、後方から答えはやって来る。
数十、数百、数千、幾万！
途切れをしらない閃光が、紅弾が、カナン達の頭上を通過していく。
神速と言っても過言ではないほどの速さで二人の人物によって射ち出された。
一発一発の威力は低いため、破壊、とまではいかないが、確かに腕の動きを止める。

「流石は凛ちゃん、狙いが正確や～」

「私としてはそれだけ外して私とヒット数が同等、というのが驚き

ですわ……」
弾幕を放つは運用部部長、海城・G・凛、そして、六課課長、八神はやて。
話ながらも、二人の攻撃が止むことはない。
「あ……」
そんな中で、ヴィヴィオが嬉しそうに声を上げる。
大好きな二つの魔力を感じたから。
はやてと凛が二つに別れる。
「エクセリオンッ！」
「トライデントッ！」
瞬間に輝く桜と金。
砲撃を構える人物は高町なのは、フェイト・T・ハラオウン。
狙うは、はやてと凛が開いた道の先。
朱皇千春、本人。
「「バスタァァァッ！／スマッシャァァァッ！」」
桜と金の砲撃は迷い無くハルへと向かう。
が、ハルを護るように腕が何重にも出現、砲撃の直撃をすんでで押し止める。
されど、道は、開くっ！
「今や！」
《はい！》

はやての号令に応え、蒼き道がハルへと伸ばされる。
その上を走るのは六課の前衛メンバー。

《っ！》

許さないとばかりに二本の腕が伸び始めるが、ＦＷメンバーは足を止めかける。

「構うな！　走れ！」

「させねぇからよ！」

『『Ｅｘｐｒｏｓｉｏｎ！』』

しかし、背後から響いた声に勇気を貰い、再び走り出す。
走る走る。ただひたすらに、一直線に！
覇神の腕は眼前、それでも、信じた。

「ラケーテン！」

「紫電！」

自分達の副隊長達を！
真紅の螺旋回転を描きながら空からヴィータが。
紅蓮の軌跡を一文字に残しながらシグナムが。

「ハンマァァァッ！」

「一閃ッ！」

降り注ぐ！
ヴィータが一撃は腕を頂点から粉砕し、シグナムが一撃は止まることを知らずに地面まで一気に両断する！

「四属光術を直接叩き込みます！　援護、お願いします！」

「応っ！／了解！／わかった！」

スバル、ティアナ、エリオが同時に頷き、四人は加速、腕が蠢く中へと突貫する！

「クロスファイアー！」

腕が迫る、恐怖がティアナを支配する。
だが、ティアナはそれらの感情を切り捨て、立ち止まる。
自身の意識の全てを、橙色の弾丸に込めて。

「シュゥゥトッ！」

放たれた弾丸は真っ直ぐに、ハルへと向かう。
その光は覇壊神の力に比べれば余りに弱く、拙い。
しかし、その弾丸を総勢にして２０もの全ての腕が受け止める。
“予想通り”の結果にティアナはニッと笑う。

「思考能力なんてろくに無いわ！　スバル、エリオ、挟み込んで！
三方向から纏めて叩く！」

ティアナの指示に従い、三つに別れたウィングロードの上をスバルとエリオが駆け抜ける！

ハルを中心に描くは三角形。

「リボルバーシュート！」

「ルフト・メッサー！」

「ヴァルアブルシュート！」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！》

弾き出される空薬莢。

必要なのは威力ではない。

ハルに到達するだけの、射程と正確さ。

それぞれのデバイスの先端に、風が、魔力刃が、弾丸が形成される。

《行っけぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！》

その一撃は惑い無く、横たわるハルに疾る！

腕が迎撃をすれば瞬く間に消し飛ぶ威力。

しかし、腕が選ぶは防御。

ハルという脳が無ければ、溢れ出した力は甚大なれど、力は所詮力の塊。

「離脱！」

考えなしの敵を手玉に取ることなど、ティアナには容易い。

頭のキレこそ、彼女の武器なのだから。

防いだら反撃。

決められたセオリー通りに動く腕達は逃げる三人を追ってハルか

ら離れる。
だが、進行速度は勝る。
ゆっくりと、三人に追い付き、触れると同時に消滅させた。
その、“幻影”を。
ならば本体はどこなのか。

「ティアナは大胆な作戦ばっかり思い付くね。いくらなんでも危ないよ？」

「すみません、フェイトさん」

フェイトに抱えられながらティアナが笑い。

「スバルもスバルで、すぐにティアナにはオーケーだしちゃうんだから。悪い癖だよ？」

「あはは……。こっちもすいません」

その隣ではなのはに抱えられながらスバルが苦笑い。

「行こう。キャロ！」

「うん。エリオ君！」
『王子様とお姫様みたいだね～♪』

二人のエースをも利用して立てられた作戦。
最後を彩るはストラーダの推進力で空へと駆け上っていたエリオと、ニーナとユニゾンし、背から妖精のような透き通る羽を拡げた、キャロ。
その二人の前に現れる、凛。

「わざわざ出向いて後方指揮、というのも煮えきりませんし、援護して差し上げますわ」

「「ありがとうございます！」」

二人の礼に軽く頷いて凛は矢をつがえる。
その弓輝くは一本の巨矢。
カートリッジ内の魔力だけが抜き出され、弓の上下から魔力粒子が放出される。

「ディスカート・ルーチェ……」
放たれた瞬間、一本の巨矢は万の矢へと姿を変える。
それは、空を覆い尽くす光の雨と化す！
命中制度は低い、しかし、それを補って有り余る量の矢が一斉に大地に叩き込まれる！

「『四属の違う力にて、汝に絶対の戒めを我は与えん……』」

キャロが、ニーナが、呟く。
創造の空、命の地、暗黒の冥、光の天。
選ぶは四属、光は四種。
右手に持つアゾットの剣にそれらを集めて。
ハルが横たわる大地へと急降下。
覇壊神の腕が蠢く中へと身を踊らせる。
かろうじで凛の矢から回復した腕がキャロを消滅させようと動くが。

「スタール・メッサー！」

キャロを囲う前に、巨大な雷刃が集団に疾る！
元より凛の矢で消滅しかけていた腕だ。
これ以上の存在は無理だった。
塵のように宙に散らばる。
キャロとエリオは加速していく。

「うぉぉォォォォオオ！」

数は減ったとはいえ、次々現れる腕。
触れれば終わり。
そんな恐怖を圧し殺し、エリオは雷刃を振るい続ける！
横薙ぎに、袈裟に、或いは胃割りのように、薙ぎ払い続ける！
当然、エリオの疲労は増していくばかり、それでも、目の前の覇神の腕を斬り裂こうとして。

「くっ！」

腕が上がらない……。
エリオの眼前を朱い光が覆い尽くす……。

「「はぁぁぁあああああっ！」」

その腕に交差に光が疾る！
最上段から、最下部まで一気に止まることなく！
成したはカナン、そして、ヴィヴィオ。
自らも限界が近いにも関わらず、エリオを援護するために力を振り絞ったのだ。
されど、今の二人には一本が限界。

「退けぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

“二人には”
怒号と共に、遥か上空から蒼炎が軌跡を残す。
次に響くはソニックブーム。
刹那、エリオを覆いかけていた腕は中程から両断される。
降り注いだは一之瀬祐希奈。
作戦は知らない。
祐希奈はただ、直感的にそう判断しただけ。

「ぼさっとすんな！　後はお前だ！」

「エリオ！　頑張って！　後少しだよ！」

「何か知らないけどミスったらぶん殴るわよ！」

三者それぞれの思いを叩き付けられ、エリオは奮起する。
重い腕を持ち上げて、キャロの左腕をしっかと握る！

「エリオ君なら、出来るよ。信じてる」

「任せて！」

キャロの呟きを背に受けて、エリオは右腕一本でストラーダの尖端をハルへと向ける！
囲うは再生した腕。
関係、ない！
もうエリオの判断が鈍ることはない。

「一閃、必中ッ！」

再度尖端に展開される魔力刃。
ストラーダからブースターが、展開、最大出力で魔力の炎がブースターから噴出される！
引き絞られる右腕、キャロが左腕を固く握ったのを皮切りに、あらんかぎりの力を込めて！

「突き抜けろォォォォォォォォォ！！！」

雷光が如く、エリオ、キャロが駆けていく！
エリオの右腕にちぎれるかという程の力がかかる。
しかし、エリオは離さない。
歯を食い縛り、腕郡へと突っ込む！
幾重にも重なる腕が進行を妨害。
拮抗、貫通、拮抗、貫通、貫通貫通貫通！
ストラーダの推進力は落ちることはなく、寧ろ、増していく！

「うぉォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ！！！！」

雷は鳥の形を成し、立ち塞がった腕全てを貫き、そのままの速度で大地へ到達、最大速度からの急停止。
そんな慣性を片腕一本で支えられる筈はない。　受け身すら取れず、エリオの身体は大地を滑り、やがて力無く横たわる。
護るべきキャロだけは、その身で受け止めながら。

「キャロ、止まらないで！」

「うん！」

本来なら、治療したい。
したい、が、今は止まれない。

ここまで道を開いてくれた全員のために、エリオの声を背に、キャロはハルへと加速。
再生しだす腕はキャロの視界から消え失せる。
周りを気にする、そんな余裕は、ない。

「地！　空！　冥！　天！」
『動きも魔力も、全部封じるよ～！』

引き絞られる輝きの短剣。
人間だから、そんな加減を出来る枠をハルは越えている。
故に、キャロが選ぶは捕らえる、ではない。封じるための力。

「四属光術ッ！」
『これが、全開の～！』

右手に握る短剣を固く握り締め、ハルの胸の前で引き絞る。
瞬間に螺旋を描き、再び四属が短剣へと降り注ぐ！

「『神縛ッ！』」

空へと突き立つ光の柱。
発生する覇神の腕が苦痛をあげるように暴れ回る。

「ォォォォォアアアアアアアアアアアッ！！！」

溢れ出す力を無理矢理に押さえつける。
それは使い手、ハルに凄まじい負担を強いる。
眠っていた筈のハルが跳ね起き、叫び苦しむ。
そんなハルに、キャロは目を逸らしたくなるが、逸らさない、逸らせない。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！」

「う、く……っ！！」

『こんな、あの人何抱えてるの～！？』

一瞬でも気を抜けば、即座に神縛は破壊されることがわかったから。

自分は最後の砦。

託された想いがある、だからこそ、負けるわけにはいかなかった。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

負けるわけにはいかない。

いかなかったのに。

ハルを拘束する光の柱は無惨にも砕け散る。

自由になったハルの目の前に存在するのは、直接光術を叩き込んだキャロ。

「逃げろ。キャロォォォォ！」

エリオの咆哮が響く。

ギロリと獣のようにハルの瞳がキャロを睨んでいた。

無造作に薙ぎ払われる右腕、それをキャロは見ることしか出来ない。

が、キャロの姿が消える。

「大丈夫ですか？」

キャロの目の前にあるのは見上げる形からのクレイの顔。
ハルの右腕が直撃する前にクレイが助け出したのだ。
刹那の一瞬、その姿はハルの遥か後方にある。

「少し、待っていてください」

そう言って、クレイは右腕を大きく引き絞る。
風が渦巻き、形成されるは黒き魔力スフィア。
構えられる砲撃の名は、ディバインバスター。
それを構え、クレイは残像と化す！

「ディバイィィィンッ！」

次の瞬間にはクレイの姿はハルの背後にある。
しかし、いくら速かろうと、ハルの能力の網は抜けられない。

「白天撃ッ！」

故にこそ。

「ブラストショット！」

クレイは一人ではない。

「ドライバニッシュッ！」

前面からはレイが魔力を纏う白刃を振りかざし、左手からは咲のブースターを噴射する蹴撃が、右手からは、前面に三角垂を展開するヴェインが槍を構えて突撃する！

それら全ては全く同時。
合わせるようにクレイの拳はハルへと到達する。
四人それぞれの威力が重なり、ハルを中心に輝く光。

「バスタァァアアアアッ！！！」

その塊は、クレイが放出した魔力によって炸裂する。
否、筈だった。
酷くゆっくりと、時間が流れる。
クレイから光弾へと流し込まれていく魔力。
だが、クレイは見る。
右腕を首に巻き付けるようにして笑う、ハルを。

《っ！》

瞬間、右腕が払われ、四人分の魔力全てを消し飛ばし、それだけにあきたらず纏めて一気に吹き飛ばす！
余りの威力に四人はリカバリーをとることが出来ない。
誰かが、死ぬ。

「ぶち、殺す！」

そんな絶望的な想いを四人が共有した時、ハルは動きを止めた。
今までの殺気が可愛いと思える程の憎悪を放ちながら……。

「待て！　ハル！」

その意味に気づいたカナンが怒鳴るが、もう、ハルには届かない。
カナンに見向きもしないまま、ハルの姿は消える。

「ちっくしょおおオオオオオオオオオオオオオオ！」

カナンは空に悲しみの咆哮を響かせる。

迎えるは、約束の刻……。

（後編に続く）

第四十話　サヨナラ　（後編）（前書き）

ふぅ、遅くなりました……。
テストやら文化祭やら、先月はやたらと忙しく時間が中々とれなくて……。
取り合えず、どぞです♪

第四十話　サヨナラ　（後編）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

Ｓｉｄｅ・ハル

カナンが怒りからか、悔しさからか、叫びをあげるのを確かに聞いた。
その咆哮をあげさせたのは間違いなく俺で、でも、今更止まれなくて。

『そんな力で、そんな貴方で、人を救えると、護れると、本当に思っているのなら……』

わかってる、わかってる。わかってるんだ……。
んなことは、言われなくたって、わかる。
度を越した力はもう、破壊しか呼ばない。
救いの力にはなりえない。
こんなことしたって、夾は、喜ばない。

「わかってる、けど、何でだろうなぁ……」

俺は、やっぱり、アイツを殺したい。
朱皇春人、奴に対する憎しみは、抑えるには大きすぎる。
良いじゃねぇか、自己満足で、良いじゃねぇか、奴さえいなくなれば、少なくとも一つの脅威はなくなるのだから。
俺は奴と殺しあって、果てるだろう。
けど、けど、さ……。

「クク、愉しい、だろうな……。アハハハハ！」

笑いが止まらない……。

殺り合いが、愉しみで、愉しみで、たまらねぇ……。

この感情は、右腕が俺をおかしくしたからか？

それとも、俺が元々からおかしいのか？

何でもいい、これは、俺の感情には変わりないのだから。

「だから、待ってろ。クソ親父……」

幾多もの大きな魔力の塊が動いている。

カナン達が動き出した。

俺を止めるためだろう。

だが、無駄なことだ。

アイツらの動きは分かりやすすぎる。

加えて、向こうは俺を見つけられていない。

俺の行き先は、もう、変わらない。

すぐそこだ。

爽が眠りについた場所。

「さぁ、終演だ……」

降りよう、この、柵（しがらみ）から。

そして、この、世界から。

朱皇の血を、血に染まる罪深き血を、無くすために……。

Ｓｉｄｅ・Ｏｆｆ

ハルはそこに近づこうとした。

阻むものはもういない。

視認出来ないグラース。
見えないからといって、いないとは限らない。
いや、いるというハルには確信があった。
自分が行けば、必ず現れるという確信が。
だからこそ、気を張り積めながらそこを目指し。

「っ！？」

景色が一転、目指した場所を通り過ぎる。
その場所は、ハルの背後へと移動していた。
転身して、突き抜けて、また転身して、突き抜ける。
まるで、侵入者を拒むように、一定領域内には踏み込めない。

「誰だ……」

その正体は結界。
ただの結界ではない。
結界魔法のスペシャリストである結界魔導師が発動する、封時結界。
さらに言うならば、それに障壁効果をも加えた、鉄壁の守りを誇る、高等結界。
通常は、被害を出さないため、または、被害の拡大を防ぐために使われる。
しかし、この結界は違う。
一般人に認識と侵入をさせないのだから、わざわざ外壁にまで防御機能を追加する意味はない。
魔力の無駄だからだ。
この結界は、誰にも邪魔されないように、逃がさないように、そんな思惑を感じ取らせる。

「春人は……」

そんなことは許さないと。

ユラリと揺らぎながらハルは右の拳を持ち上げる。

吠える、覇壊神。

ハルの腕は全てを否定する牙となる。

ヒトも、神も、そして恐らく、己すらも……。

「俺が殺すっ！」

不可視の壁。

そこに突き立つ朱き柱！

外部からの侵入を拒絶する結界は、大きく揺らぎ、空間に亀裂を疾らせる！

「っ！」

しかし、覇壊神の力は押し負け、ハルの腕が弾かれ、その身体が後退する。

一度で打ち抜けない。

あらゆるモノを消滅させてきた、覇壊神の力を持つ、右腕が、だ。

それは、驚愕と共にハルに確信させる。

やはり、誰かがグラースと自分との接触を邪魔しているのだと。

何故かはわからない。

わからないが、その誰かの目的は、確実にグラース。

「させ、るかっ！」

血が滲む程に、拳を握り締めて、ハルはヒビ割れた結界を鋭い眼で睨む。

燃え上がるように、朱い力がハルの右腕を覆う。

「ハァァァアアアアアアアア！」

咆哮を上げながら、ハルの右腕はヒビの中心部へと放たれる！
激震に揺らぐ結界、拡がる亀裂。
が、またしても打ち抜き切れず、弾かれる。

「オゥラァァァ！」

されど、弾かれた直後にハルは右脚にて地を蹴り、飛びかかるようにして跳躍、大きく右腕を引き絞る。
続けて叩き込まれた右腕に亀裂は進行を再開。
空間が揺らぎ、内部の情景が一瞬映る。

「な、に！？」

映った光景にハルの思考は停止する。
炸裂する光の向こうに見える相手は二人。
対するはグラース。
グラースはハルの到達点にて、終演を選んだ人物。
ハル、カナン、なのは、フェイト、それだけの連戦を行い、全てを破った者。
その、最強とも言うべき男が、たった二人を相手に、捕らわれていた……。
地面から発生する無数の鎖によって。
無論のこと、グラースは鎖を引き千切る。
しかし、対峙する相手はゆっくりと歩みより、懐から何かを取り出した。

「待て……」

嫌なものを感じて、ハルは無意識に口から言葉を漏らす。

直感的に悟る。

相手が手にする何かは、確実にグラースと自分とを引き離す代物だと。

「待てよ……」

このまま行けば、グラースは消えるかもしれない。

世界のためには、それが良い。

犠牲も何もなく、問題が終わろうとしているのだから。

しかし、ハルは？

グラースを憎み、仲間に牙を向け、唐突に爽が死に、発狂の後にわけがわからなくなり、二度も仲間を傷付け……。

ただ、グラースを殺すことだけしか存在価値を感じることの無くなった、ハルは？

「ウァァアアアアアアアアアアアア！」

遂にハルが結界を突き破る。

と同時に、グラースへとひし形の形をした何かが放られる。

それは、一瞬だった。

パックリと、空間が口を開けるかのように裂け、グラースの身体を呑み込んだ……。

瞬間、ハルの思考は真っ白に染まって。

「テメェラァァアアアアアアアアア！！！」

その憎しみは、グラースを消し去った二人組へと向けられる。

声は届かない。
二人組は、転移魔法を発動し、既に光の内にある。
直後、ハルは駆けた。
己の内に蠢く、殺戮衝動に身を任せて、縮地を使い、二人組の正面に。
それでも、間に合わない。
かぶり直したフードの内で、銀髪の人物は確かにハルを見て、そして、笑う。

『灯台、それが君達』

声はないが、微かに、だが確かに、唇がそう動いた。
ハルはそれを見る。
しかし、思考など行う筈もなく、拳でその顔面を、否、それがあった空を撃ち抜いた……。
ガクリ、と、力を無くしたハルの膝が落ちる。
先の問いの答えを言おう。

爽との約束を破り、爽を助けるという誓いも無くなり、存在価値であったグラースが消えた場合。
ハルを動かしていた力、つまりは生きる原動力がもう無くなるということ。
結果、朱皇千春という人物は終演を迎えた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ハル！」

ハルから遅れること、数分後、カナン達が到着し、茫然自失とするハルを見つける。

状況判断は難しい。
戦いの形跡はあるが、ハルの外傷はなく、カナン達と戦った時のまま。
わかることは、ただ一つ。
ハルが精神に深い傷を負ったということ。

「……話は、後だね」

フェイトの言葉に六課、そして運用部の面々は頷く。
見るに、ハルが話を出来る状態ではないことは明らかだったからだ。
最早、動けるかどうかさえも、怪しい。
最悪、強制転移で連れ帰ることも考える一行だが……。

「カナン君……。うん。そうだよね」

「ま、そうなるわよね」

たった一人、カナンだけはハルに向かって歩いていく。
立つは正面、生気溢れる瞳と、死した瞳の視線が交差する。

「終わったんなら、帰るぞ。いつまでも座ってないで、立て」

カナンの命令をハルは無視し、動かない。
瞬間、ハルの襟をねじ上げ、カナンがハルを持ち上げる。
瞳の奥に怒りが宿り、その指には力がこもる。
そんなカナンをハルは見るだけで……。

「帰るっつってんだろうが！　腑抜けてんじゃねぇぞ！」

「……どこに？」

冗談ではなく、本気でハルはカナンにそう訊ねた。
仲間の元に。
そんな答えをハルは待っているのではない。

「こんな奴ほっとけよ……。関わるだけ無駄だ。それどころか、俺はもう、災厄の塊でしか無い」

感情の起伏を感じさせず、悟った老人のように、ハルは語る。
ハルは全てを捨ててきた。
文字通り、全てを。
仲間も約束も心さえも。
今やハルの中には何もない。ただの、脱け殻。

「災厄の塊だから何だよ。帰るっつったら帰るんだ」

苛ただしげにカナンは無茶苦茶な理由を並べ、言い放つ。
無論、ハルは動かず、ただ、カナンを見る。

「帰る理由も、意味もない。だからさ、お前が終わらせてくれないか？」

「何、だと？」

ハルの言った言葉にその場の空気が凍りつく。
六課も、運用部も、全くの無言。
理由は一つ、意味がわからない。
ただそれだけ。

「俺の生きていた意味は、夾との約束と、復讐、それだけだ。だが、それも、終わった」

確かにもう、ハルの役割はもう存在しない。
クレアには友達が出来、起こすべき夾は殺され、グラースは討滅された。
故にこそ、ハルは脱け殻。
故にこそ、終演、つまりは死を選ぶ。
魂の抜けきった瞳で、ハルはカナンに静かに語る。

「カナン、お前が俺を、殺してくれないか……？　お前になら、満足だ」

凍りついていた空気が急速に溶けていく。
それは、ハルの言っている意味が浸透したことを意味する。
全員の思考が、ようやく現実へと追い付いて。

「ふざけ……な……」

呟きが響く。
誰よりも早く、思考回路が脳へと早く繋がったのは一之瀬、祐希奈。
祐希奈から魔力が吹き出し、風となってその銀髪を吹き上げる。
祐希奈の瞳は真っ直ぐに、ハルへと突き刺さる！

「ふざけるなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

「祐希、ちゃん！」

怒号を上げながら走り出そうとする祐希奈をヴィヴィオが咄嗟の

判断で後ろから両腕を組み上げる。
それでも尚、祐希奈は止まることはない。
ヴィヴィオごと引きずりながら、祐希奈はハルの元へとゆっくりと歩み寄る。

「アンタは！　アンタはもう知ってるでしょ！？　ソイツが！！　カナンが！！　どんな過去抱えて今に生きてるか、知ってるでしょうが！　それなのによりにもよってアンタは！　まだカナンに背負わせるつもりでいるの！？　しかも、自分の自己満足のために！！　ふざけるな！！　そんなこと、冗談でも許さない！！　私は！　絶対に許さない！！！」

「祐希ちゃん、祐希ちゃん！　落ち着いて！　大丈夫だから！」

今にも飛びかかりそうな祐希奈をヴィヴィオが必死に止める。
しかし、祐希奈は暴れることを止めなかった。
生きたくても生きられなかった、カナンの両親のことを、病院で聞いていたから。
それを知りながら、自己満足のためにカナンに介錯を任せたハルが許せなくて。

「……それがお前の望みなんだな？」

カナンから紡がれた言葉。
瞬間、再び場の空気が凍てつき、時間を止める。
提案したハルですら、一瞬とはいえ眉を潜めたのだから。
それほどまでに、カナンが紡いだ言葉には効力があった。

「カナン、君……？　嘘、だよね？」

ヴィヴィオからの問いにカナンは答えない。
黙ったまま、左指を柄へとかけ、ゆっくりと黄金の剣を引き抜いた。

「カナン！　アンタ、何やろうと……っ！」

黙れ。
物言う祐希奈にそう言わんばかりに、カナンは剣を真横に鋭く振り抜く。

「死にたいって……」

しかし、カナンの声は、怒るでもなく、冷たくもない。
そう、それは最早、諦めたかのように、とても平坦な声。

「もう、どうしようもなくて、死にたいって気持ちも俺にはわかるから……」

カナン自身が、昔はそうだったからこそ、わかる。
カナンは絶望の底から這い上がった。
だが、ハルは這い上がれなかった。
それだけの、話。

「ハル……。俺で、いいんだな……？」

「あぁ……。満足だ……」

二人の間での短い最終確認。
行う側も、行われる側も、そのどちらにも先には暗闇しか訪れることのない、最悪の形での幕引き。

そんな二人を止めなくては、ヴィヴィオは、祐希奈は、そう思うのに、身体は凍りついたまま動いてはくれない。
ゆっくりと振り上げられる黄金の剣。
ハルは受け入れるかのように頭を垂れ、首を差し出す。
その光景は正に断頭の儀式。

「「じゃあな……」」

一瞬だけ視線を交わした二人は、全く同時に別れの同じ言葉を言う……。
そして、皮切りに凍りついた時間が動きだし、全員が動き出す。

「「いやぁぁあああああああああっ！！！！！」」

空気を震わせる大絶叫。
ヴィヴィオと祐希奈、二人の悲鳴のコーラスを聞きながら、カナンは剣を振り。
“放り投げた”

「なんて誰が言うかぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！！！！！」

「か、はっ！」

踏み込んだ右脚を軸足に、左脚を上げ、ハルの鳩尾に深々と膝蹴りを打ち込んだ。
全重心を移動した膝、さらに、気を緩めていたこともあり、ハルの身体はくの字に折れ曲がる。

「え……？」

「は……？」

突如として広がった光景に目を丸くするのは他でもない、悲鳴を上げていたヴィヴィオと祐希奈だ。

二人は止まる。だがカナンは止まらなかった。

折れ曲がるハルの身体の内側に自身を捩じ込み、左腕を引き絞る！

「せぇぇぇぇっ！」

「がっ！」

一秒と待たず、怒号と共にカナンの左腕が放たれ、ハルを殴る。

先刻とは違い、全力で、そして、顔面を。

二度の不意打ちの勢いを殺しきれず、宙に浮いたハルの身体は約２０ｍもの距離を飛び、地面に叩きつけられて停止する。

「何が、理由も、意味も、ない、だ！」

「て、めっ！」

倒れるハルにカナンが馬乗りとなり、言葉を区切る度、右、左、と拳を打ち込む。

余りに力を込めすぎたせいか、カナンの拳の皮が破れ、血が流れ出ていたが、そんなことは気にも止めない。

「災厄の塊だ？　それが何だよ……。んなもん、気にする奴、この中にはいねぇんだよ！　んなちっぽけなこと気にするくらいなら、最初からこんな手間かけて助けに来ると思うのか！？」

「うる、せぇ！」

降りかかる言葉の雨に、揺らぐ自分の心に、首を振りながら、ハルは左腕を振り払う。

だが、その左腕をカナンはあっさりと退くことで回避する。

ハルが立ち上がる、引き絞るは右腕。

それでもカナンは、剣を取ることはしなかった。

真っ直ぐ睨んで、両拳を胸の前に。

その間、ハルは既にカナンへと踏み込んでいた。

「ぶち壊せぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！！」

絶大にして、無限にも等しい力を誇る、覇壊神の右腕。

しかし、凶器と化すのは技術と合間ってのこと。

ハルが繰り出した一撃は確かに速い。

速いが、直線だった。

何も考えず、眼前の敵を払うためだけに、放ってしまったが一撃。

そしてそれは、払われる。

完璧なまでの上段払い受けで。

外から内に、回転しながら流れていくハルの身体。

逆に、カナンの身体はハルへと流れるように近づき、がら空きのサイドを奪う。

「必要とされていないと思うなら！」

「っは！」

ハルの腹部、丁度肝臓に当たる位置にカナンの脾臓打ちが炸裂し、肺の中の空気全てを吐き出させ、自身は回転、左腕を曲げて、狙うは鳩尾！

「いっぺんくたばれ、コンニャク執事！」

「お、ま……え……」

猿臂（えんぴ）　と呼ばれる多くの格闘技では全面的に禁止されているいわば肘打ち。

その威力は言わずもがな、格闘技では最高クラス。

弱っていたハルの意識を削り取るには十分すぎる威力だ。

それでも、朦朧とする意識を繋ぎ、ハルはカナンへと右腕を伸ばす。

「ったく……」

が、やがては力なく下がり、倒れようとした身体は空中でカナンに支えられる。

支えるカナンの表情は呆れと同時に、柔らかく微笑みを浮かべていた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

出来事からほぼ丸一日、ハルは眠り続け、目を覚ます。

身体は気だるい。

それもそうだろう。

それだけのことをたった一日にして全て受け止め、ろくに休みもせず、戦い続けたのだから。

結果は燦々（さんさん）たるものではあったが……。

起きたくもない、もう一度寝よう、そう考えて、ベッドに倒れ込んで。

――ベッド……？

ボーッとしていた脳が働き始める。
何故、ベッドに自分は寝ているのか？
わからない。なら、ここはどこなのか？
答えを求めて起き上がり、グルリと周囲を見渡す。
視界に入るのはベッド、クローゼット、靴箱、あるのはそのぐらいの飾り気のない白い部屋。

「俺の……部屋？」

そこはハルの自室。
そこにいる、ということは、意味するところは一つだけ。
帰ってきたのだ。
白姫邸に、幸福と絶望、そのどちらもを自身へと与えた場所に。

「ふん……」

ハルの決断は早かった。
新品の執事服に着替え直して、靴を履いて、扉をあける。

――何だ、これ……

直後にハルの視界に飛び込んできたのは、不自然に、廊下に突き刺すようにして立っている木製の看板。
一瞬とはいえ、これにはハルも面食らう。

『コンニャクはこちら』

看板にはそうして矢印が書いて、否、彫ってあった。

続く先は大広間、恐らくは来いという命令。
しかし、ハルは「馬鹿馬鹿しい」と吐き捨て、看板とは逆にある、大ホールへと向かった。

「っ！？」

瞬間、銀の光を視界の端に捉える。
反射的に屈み、銀の光をやり過ごし、バックステップ。
今度こそ、ハルは我が目を疑った。
数瞬前にハルの頭が存在していたその場所に、交差するようにして銀の槍が穿っていたのだから……。

「何で、セキュリティが……」

そう、これは白姫家に内装されている、防犯セキュリティ。
正確には、檻、とでも言った方が正確か。
この家には侵入した輩を逃がさないよう、様々な仕掛けが施されている。
それこそ、認識票が無ければ出られない程の。
余りにも危険なため、監視員が異常を感知しない限りは作動などするはずもないのだが。
それが今、ハルに対して作動している。
つまりは逃がすつもりはないと言うこと。
屋敷内の状況を把握したハルは自室の部屋に戻り、ネクタイピンを二つ取りだし、窓を開ける。
一方は高々と、一方はそのまま落とす。
空に舞うネクタイピン。
何か、赤い網のようなモノが空に疾ったかと思うと、それは唐突にしてジュッと音を立てて消失した……。
それを見た直後、ハルは窓を閉じ、瞳を閉じる。

同時、庭が輝いたかと思うと、屋敷を震わせる轟音が鳴り響き、庭を紅蓮に染め上げる……。

――空も地上も無理、か。

逃がさない。

そう言うように赤々と燃える庭を見て、ハルは結論する。

――座標……

空も、地上も、脱出不可能なのならば、それ以外から行けばいいだけの話。

幸いにもハルには縮地という技もある。

早速演算を開始して。

「ぐ、ぅ！？」

この世のモノとは思えない、脳をかきみだす不可解な音が部屋に鳴り響く。

強引に跳ぼうと、進めて行くと、音はさらに大きく、酷くなってハルを襲う。

これには、徐々に形が出来ていた演算は中止せざるをえない。

やがて身体が弛緩し、身動き一つ取れなくなる。

脳が麻痺し、神経に電気信号を送れなくなって来ているのだ。

苦しむハルを狙い済まし、学校のお昼に聞くような、プツリという音がなる。

『き～んこ～んか～んこ～ん♪』

――それはチャイムだ……。

響いた能天気な声に内心ツッコミを入れつつ、ハルは、声の主、天津詩織の声に耳を傾ける。

『え～、ハルさん、お久しぶりですぅ～♪　本日はお日柄もよく、絶好の、絶好の……、何日和です？　え～と、え～と……弱りました……。ハルさん、何日和です？』

「知るかボケぇ！」

この状況で、相変わらずボケまくりの詩織に対してあらん限りの力でツッコミを入れている辺り、ハルは案外元気なのかもしれない。

『びび、びっくりしましたです。昔のハルさんみたいで……。え～と、取り合えず、ハルさん、余り怒鳴ったりすると、今は非常に危険なので、やめて欲しいです』

どういう意味だ。

そう聞こうとして、聞かずともわかってしまう。

グラリと揺らいだ身体は何も出来ずに真横に倒れる。

指一本動かせずに。

『ただいまハルさんは、脳が出す電気信号、つまりは指令ですが、それを一時的に阻害する機器を部屋に設置しました。元々は縮地の妨害用に頼まれて作ったモノなんですが……。えへへ、ちょっと強力になりすぎちゃいまして～』

詩織の話を聞く内に、なんとなくハルは先が読めていた。

天津詩織、デバイスマイスターにして、三歩歩くごとに何かやらかす天然開発主任。

十中八九、ちょっと、がちょっとな筈もない。

『あのですね、脳が完全に活動停止するまで止まらなくなっちゃいまして～』

そして、ハルの直感は当たりすぎな程当たっていた。

何故、少し照れているのか。

そんなことも思ったが、ハルは詩織だからと割りきった。

『あ、大丈夫ですよ。ちゃんと遠隔操作で止められるように、デバイス？　いえ、どちらかと言うとテレビのチャンネルなような……、どっちでしょう』

「何でもいい……。さっさと止めろ、ボケ主任……」

人の命が危機的な状況にも関わらず、詩織はボケる、ハルが冷徹にツッコむ。

死にたい、そう思っていたハルだが、詩織のボケによる死、という悲惨な死に方だけは嫌だった。

『ところが、です、私はこれを止める――』

「大広間に行きゃあいいんだろうが……！　さっさと止めろ！」

『読まれましたですぅ！？』

これから説明しようとしていた詩織が驚くが、長々と説明されていたのなら、ハルの身体は冷たくなっていたかもしれない。

何はともあれ、狂わされていた脳は戻り、身体の自由を手にする。

ちゃんと行くように、と詩織は釘を刺し、放送を切った。

「チッ……」

おもむろにハルは舌を打つ。

今や災厄の塊と化したハルは、もう誰とも話したくなどなかった。

これで、最期、何度目かの最期の誓いを言い聞かせ、ハルの足は大広間へと向かった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ツカツカと、早足で大広間の扉の前まで来たハルは、作法など知らないと言わんばかりに、苛立ちを叩きつけるように扉を蹴り開ける。

扉の奥は昼間にも関わらず、闇。

何かの催しの際にしか使わない蝋燭が、僅かな光を放ち、道を指し示す。

その先に。

「千春さん、こんにちは、ですの」

「……あぁ」

白姫クレアがたった一人で大広間の中心に立っていた。

不器用に返すハルにクスリと笑う。

かと思うと、腰に手を当てて、頬を膨らませる。

昔のように。

「千春さ～ん？　あぁ、じゃなくて、こんにちは、ですの」

昔のままの言葉にジクリと、ハルの心が痛む。

昔のままなら、夾が隣でニヤついていた。
今もある筈だった、本来の形。
それを奪ったのは自分。
どうしようもない罪悪感を感じていた。
これは、クレアなりの報復なのかもしれないと思い。

「……ガキのクセに生意気だぞ、お前」

昔のままに、返す。
それだけのことをした。
寧ろ、まだ足りないくらいだと、そう思う。

「ガキだから、ですの～♪」

そこまで紡いで、クレアはハルをニコリと見上げる。
その笑顔が眩しくて、目を逸らしたくて。

「ガキだから、私は、千春さんを困らせる……」

「……クレア？」

声の調子が変わり、クルリと踵を返し、ハルから離れていくクレア。
その様子に、ハルは結局目を逸らせなくなる。

「わかってるですの。でも、ガキだから、物分かりが悪くって、ごめんなさい」

振り向くと同時に、深々と頭を下げたクレアに、なんと言えば良いのかわからない。

ハルが迷っている間にクレアが頭を上げる。
ゆっくりと深呼吸。

「本当に、物分かりが悪いから」

――いつからだろう、こんな感情があったのは。

「千春さんが災厄の塊でも」

――今？　専属になってから？　話だしてから？

「私のことを嫌いでも」

――それとも、出会った瞬間から？　わからない。わからないけれど、わかる。

「もしも、人の道を外してしまったのだとしても、変わらない」

――そう、私は。

「貴方が好きだから」

――人としても、男性としても、そのどちらも、私はこの人が、好き。

「……悪いが」

「答えはいらないですの。ただ私は諦めない。それに今は、そんなことを言いたいわけではなくて」

クレアにとって、自身の気持ちは今は二の次。

本当に言いたいのは、別の事。
告白に気をとられたハルは気づかない。

「私には、貴方が必要ですの。他の誰でもない、貴方が」

瞬間、脳天を殴られたような衝撃がハルを突き抜ける。
必要とされること。
それはつまり、無価値ではないということを意味する。

「いつの間にか、生まれていたこんな気持ちでも、今は確かに私のモノだから、私はもう、貴方以外の人なんて考えられないから、私は貴方が必要なんですの」

恋心は厄介だ。
好きになっている間は、その人物のことしか考えることが出来ず、常に一緒にいたいと思う。
常に、必要としてしまう。
常に、無価値では、無くなる。　恋は盲目、その前には何も眼中に入らない。

「それに、本当の私は弱いから、誰かが傍で護ってくれないと、崩れちゃうかもしれないですの。それは、今では千春さんが一番良く知っている筈ですの」

ニッコリと笑うクレアに、ハルは呆然と立ち尽くす。
何か言わなくては、そんな焦りを感じて。

「俺は、夾を、お前から奪ったんだぞ……」

やっとのことで口から出たのは、自身が最も悔いて止まない事柄

……。

この現実だけは、誰も覆せない。

クレアは、少し悲しそうな表情を浮かべたが、その口が開くまでには時間はかからなかった。

「千春さんは、私から夾を奪ったりしてないですの」

「よく、そんなことが言えるな……」

クレアの言葉に、ハルの拳が握りしめられる。

顔を上げると、クレアに掴みかからんばかりの勢いで詰め寄る。

「アイツはなぁ！　俺に関わったせいで眠らされて、あげく、殺されたんだぞ!?　俺さえいなけりゃ、ずっと、生きてられたんだ！　俺なんかを助けるから！」

広間に響き渡る恐ろしげなハルの怒声。

至近でそれを浴びているクレアは怖い筈。

だが、クレアは怖がってなどいなかった。

不動のまま、一言一句聞き逃さず、ジッと聞いている。

「千春さんは、夾が後悔していると思ってるんですの?」

「それは……」

後悔はしていない。

眠る間際、夾は本当に嬉しそうに瞳を閉じていった。

ハルを助けられたことが嬉しくて、ハルが助けようと抵抗してくれたことも嬉しくて。

満ち足りたまま眠りについた。

後悔はしていない。
例えあの場で夾が死んでいたとしても、夾はハルを恨むことなど考えもしないだろう。
ハルもわかるからこそ、それ以上は何も言えない。
一方、クレアは笑う。
正に、呆れたように。

「夾は、そういう人だから、仕方ないですの。これも、ハルさんならわかる筈ですの」

苦笑いを浮かべるクレア。
確かに、ハルの中の夾はそんな人物だ。
護りたいモノは例外なく全力で護る。
それが何でも、相手が誰でも、夾の前には意味をなさない。
夾は、嫌だからという子供のような理由で護っていたのだから。
必要とされ、気に病むべきことも消えた。
最早、意地を張る意味すら無くなった。

「ははっ……。今まで、何をしていたのでしょうね」

「ふ～む、歪んだ己を見直す修行、ですの！」

「あながち、間違いでもないのかもしれません」

今までが嘘のように自然に話すクレアに、ハルは本当にバカらしくなる。
肩の力を抜いて、ゆっくりと周りを見渡せば答えはこんなにも近くにあったのに。
そして、機会は何度となく与えられていたと言うのに。
その機会を全て不意にし、切り捨てた自分。

それでも、手を伸ばし続けてくれた仲間に、待ち続けてくれた主に、感謝する。

「じゃあ、改めて、ですの～♪」

「はい？」

クレアがパン、と手を叩く。

それが合図だったのか、全ての蝋燭が消え、広間の明かりによって全域が照らされる。

その光景を見て、ハルは驚くしか無かった。

「せ～の！」

元気良く、クレアが広間に声を響かせる。

クレアに耳打ちしたカナンはこう言った。

『お帰りって言ってやるといい。帰ってくる場所はここだぞって頭に刷り込んでやれ』と。

《お帰りなさ～い！》

「ですの～♪」

その言葉のままに、白姫家フルメンバー＋αで実行した。

静瑠や詩織は無論のこと、執事やメイド等の使用人、なのは、フェイト、はやてを筆頭とする六課メンバー、そして、凛、ヴェイン、レイら、運用部メンバーまでもが参加した、フルキャストと言っても過言ではないほどの人数。

発案はもちろんクレア。

はやてや凛も乗り気であり、メンバーはすぐに集まった。

「あはははは！」

広間を埋め尽くさんばかりに集まった面々を見て、ハルが笑う。
腹を抱えて、皆から涙を流しながら、とても可笑しそうに。
静まり返る空間。
その中心で、笑い終えたハルは直立し、全員を見渡す。

「朱皇千春、紆余曲折の末、戻って参りました。このような若輩者ではありますが、皆様にご教授願いたく、何卒、よろしくお願いいたします」

響き渡る凛とした声。
深々と下げられる頭。
予想と違う反応に、一同は呆気にとられ。
その間にハルは顔を上げる。
浮かぶは、満面の笑み。

「まぁ、たった一人のために仕事をサボる集団に教えてもらうことがあるかどうか別問題ですがね」

そして、ニッコリと笑みを浮かべたまま、毒を吐いた……。

「ハ～ル～！！！！」

「ハル君、お話しようか……」

「そうだね。なのは、私も手伝う……」

「奇遇やね、私も参加してええやろか……？」

「これまた奇遇ですわね？　私も殺らせていただきますわ……」

「あははは。冗談ですよ♪」

《問答無用！》

クレアが、なのはが、フェイトが、はやてが、凛が、ドス黒いオーラを放ちながらデバイスを取り出す。

その後、白姫家に天災を思わせる大地震が起きたのは余談である。

――取り合えずは一区切り、かな……。でもまだ、いっぱいいっぱいで、怖くてさ……。だから、今は言葉だけだけど言っとくよ。今まで俺のせいで縛り付けてごめん。もう、お前に頼らなくても仲間がいるから、大丈夫だと思う。だから、おやすみ。そして、サヨナラ、夾。

賑やかな喧騒の中で、ハルは自分の呪縛から夾を解放することを決意する。

自分は十分過ぎるほど夾を独占してしまったからこそ、サヨナラをして、完全に背を向ける。

もう、依存しないために。

死、それを気に一つの終わりを迎え、新たに始まるモノもある。

それがどのようなモノなのかは、また別の話……。

第四部に続く▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

祐「後書きコーナー♪」

カ「マジか！？」

ヴ「ふぇ？　どうしたの？」

カ「いや、第四部の締めに俺ら出ないのか！？」

祐「だって、主人公ハルに交替みたいだしね。サブキャラがでちゃダメでしょ？」

ヴ「ハルさんおめでとう～♪」

ハ「いやぁ、すみません♪」

メ「そうか、では私達の出番も少なくなるのか。まぁ、仕方がないな」

カ「嘘だよ！？　すっげぇ分かりやすい嘘だからね！？」

ハ「まずはゴタゴタしている身の回りの整理からですから、四部の最初は少しゆっくりです」

祐「そうね。読者も混乱してると思うし」

カ「……わかってたさ。久しぶりの後書きでスルーをされるってことはさ……」

ヴ「えと、取り合えず元気だそうよ！　ね？」

メ「マスター、挫けてはいけない。強く生きるんだ！」

カ（アンタらの勘違いも結構原因なんだよ！　……とはツッコめな

い！　あぁ、なんてジレンマ！！）

ハ「ちなみに本来の理由は別にありますので～♪」

祐「ま、そこで悶えてるヘタレはほっといて、次回の話でもしとくわね。まず、次回はもうわかるわよね？　お馴染みの外伝。三部終了祝いと、溜まった質問解答、ゲストも仕方ないから呼んであげるから感謝しなさい♪」

流石は祐希奈！　そこに痺れ

カ「でぇぇい！　やかましいわ阿呆どもが！！」

ポンポン。

カ「んだゴラァ！！」

カナメ（ウエディング）「キラッ☆」

カ「ごぶっ！」

ヴ「カナン君！？　カナン君大丈夫！？」

メ「マスターが吐血した！　誰か救護班を！」

祐「グッジョブ♪」

カナ「ありがとうございます♪」

祐「さてと、じゃ、予告でも」

夾「悪ぃが、ちょっといいか……」

祐「夾ちゃん？　どしたの？」

夾「だからちゃん付けを……まぁいいや。先に言わせてもらってもいいか？」

祐「ま、いいけど。何？」

夾「ふぅ……。あのなぁ！　俺は女は捨てたって言ってんだろうが！　なのに全員が全員、夾ちゃん夾ちゃん言いやがって！　あげく、夾ちゃんテラ萌えスとか、夾ちゃん大好きとか、メッセで見えねぇからって大概にしろよ！？　いい加減後書きにも出なくなんぞ！？」

祐「あ、それは大変ね。皆夾ちゃん大好きなのに♪」

夾「だろう！？　皆大好き夾ちゃんが本編どころか後書きにすら出なくなっても良いのか！？」

祐「コスプレもみたいし♪」

夾「そうだ。あんまり言うようだとなぁ、コスプレだってしてやんねぇからな！　……って、あれ？」

祐「うんうん。皆わかってくれたと思うから、はいこれ。Ｙシャツ♪」

夾「あ、あぁ、え？」

祐「えっとね、下着だけで、Yシャツのボタンは全開。見えるか見えないかくらいがベストらしいわよ？」

爽「あ、ああ……。って、出来るかぁぁぁあああああ！！」

祐「きゃ～♪」

カナ「あれはしばらくは終わらないですね」

ハ「では、その間に予告の再生を……」

ク「ポチッとな♪　ですの～♪」

ハ「いやまぁ……」

予告。

シ「ナンバー・オブ・ザ・ビーストを知ってるか？」

祐「いきなり何言ってんのバッカじゃないのアンタ？」

刃を向ける銀髪の少年に、同じく銀髪の少女は睨み付ける。

それが、始まり。

カ「てめぇ、何してやがる！」

シ「速いが、それだけだな……」

次は少年と少年。

言葉を交わすより尚速く、刃を叩きつけ合った二人。

シ「お前ら、俺に関わるな……」

戦って、孤独であろうとする少年が気になった。
それが一際大きな波紋を生んだ……。

シ「あっこから再生すんのかよ……」

少年、シオンは危機を迎える。
相手は万全、自身は不全、命すら危険な状況で。

祐「何コイツ。散々大口叩いてこの程度なわけ？」

カ「あのな、どう見ても実力出しきれてねぇだろうが……」

シ「てめぇらは……」

彼らは再び出会う。
それは運命か神の悪戯か。

祐「てめぇじゃなくて祐希奈。覚えときなさいよバァカ」

カ「んで、俺はカナンだ。よろしくな」

シ「関係……」

カ「あるんだなこれが。前の決着つく前にお前に死んでもらっちゃ俺が困る」

祐「私もアンタを一発ぶん殴らないと気がすまない」

カ「ってなわけだ。関係なんてこれで十分だろ？」

ニヤリと笑って言い放つカナンに、シオンもまた笑う。

この二人がお人好しだとわかって、そして、自分もまた、同じだと理解して。

「神庭シオンだ。協力してくれるか？」

「貸し１、ね？」

「後で全部話せよな！」

「お前らが生きてたらな！」

「「上等！」」

後に、この出会いが世界を揺るがす出来事へと発展していくことを、少年達はまだ、知らない……。

新連載。魔法小女リリカルなのは　ＬＶｓ　ＥＸ

ヴ「助けて……。カナン君、祐希ちゃん、シオン、君……」

カ・祐「邪魔だ退けぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

シ「絶対に、助けに行くから！　待ってろぉぉォォ！」

プツン。

ヴ「わくわく♪」

祐「いやぁ、楽しみね♪」

カ「いや、だからさ、何度も言うけど、やらねぇし……」

終わっとけ♪

外伝・祝　三部完結！（前書き）

頑張って書きました～♪
マジで勢いしかないけど気にしねぇ（笑）
さて、明日は返信に一日使うとして、なるたけはやく次話の執筆と、
ＥＳの執筆を再開しようと思います！
では、どぞ～♪

外伝・祝　三部完結！

祐「祝、三部終了～♪」

ヴ「わ～♪」

カ「お～、遂にか」

メ「長かったようで」

レ「短かったです……」

ハ「とは間違っても言えませんね～♪」

ク「誰のせいですの！？」

一同「ジー……」

ハ「あははは。いやぁ、誰でしょうね～♪」

タカト「貴様だたわけ……」

―轟！―

ハ「いえいえ～♪」

―瞬！―

ハ「僕にも言い訳出来るぐらいの理由はあると思いますよ～？」

タ「黙れ。貴様の戯言なぞ聞く気にもならん……！」

―軋！―

タ「カカカカカカカカカカ！」

ハ「あはははははははは♪」

―撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃―

―裂！―

カ「……取り合えず、何でタカトさん？」

祐「ん～？　ま、実は深い事情があってね？」

レ「はぁ、深い、ですか？」

メ「ほう、何だ？」

祐「暇だったから♪」

カ「全然全くもって深く無い気がするんですが！？」

祐「何よ。文句あるわけ？」

カ「大有……」

祐「脇役のくせに」

カ「脇役……。そうだ、俺は、脇役だったんだ……」

ヴ「えと、嘘はやめようね？　本当は、ＥＸ本編で私を仲間外れにしたことを謝りにきたらしいんだけど……」

祐「面白半分で今までのハルの行いをヴィヴィオがやられるとこ限定で流してみた♪」

タ「朱皇千春、貴様は、ここで、終われ！」

ハ「出来ればこの空間での終焉は勘弁したいかと♪」

―滅！―

祐「ちょっとやり過ぎた♪」

カ「ちょっとで終わるかぁぁあああああ！」

ヴ「わわ、カナン君落ち着いて！」

メ「落ち着いて話し合おう！」

カ「出来るかぁぁあああああ！」

祐「話し合いは大事よ？　“ねぇ”？」

？「うん。そうだね～。お姉ちゃん♪」

祐「薙ぎ払え♪」

？「わかんないけどわかった～♪」

カ「どっち!？　っていうか誰ぇぇぇぇ!？」

？「セイクリッド！　バスタァァァァ！」

―轟！―

カ「……」

祐「うん。絶景かな♪」

ヴ「だ、大丈夫かな？」

メ「まぁ、マスターだから問題はないだろう」

レ「ですね。道場の被害も甚大ですが……」

祐「ま、直しといてよね。シオン♪」

シ「えぇぇ!？　ちょ、えぇぇぇぇぇ!？」

続いては質問コーナー♪

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

祐「さて、次はたまった質問をちゃっちゃか消化していくわよ」

ヴ「えっと、皆ごめんね？　場面的に後書き追加するのが難しかっ

たんだって」

カ「今回であらかた答えられるとは思うけど、１５ページ前までの感想のとこまでだ。もしかしたらそれ以前のもんが埋もれてるかもしれない」

メ「答えて欲しい。や、何がまだ疑問点があれば、遠慮なく送ってくれ。答えられる範囲ならば答えよう」

祐「ま、最近は鋭い人も増えてるけど、ダイレクトアタックみたいな質問はちょっと無理だから勘弁ね？」

カ「それじゃ、質問の方に……」

ジ「待ちたまえよ！」

一同「……」

ジ「君達、遅れてしまったのだから、何か詫びを入れるのが筋と言うものじゃないのかい！？」

カ「……まぁそうだろうけどさ。具体的には？」

ジ「やはり、最近人気再爆発のヴィヴィオ君と祐希にゃんの水着プロマイド、さらに、抽選で五名様にはちょっぴりえっちぃ格好をした二人の写真をプレゼントするというのは……」

―轟！―

タ「カカカカカ……。貴様、まだ生きていたのか」

ジ「ふ、このジル・ローディアス、愛とエロがあるならば何度でも蘇ろう！」

タ「貴様がその二点で蘇えるのならば、二つを感じ得ぬまでに殺し尽くす……！」

ジ「殺れるかい？　君に、この僕を……？」

タ「俺を誰だと思っている？　６６６……。ナンバー・オブ・ザ・ビーストの名を侮るな！」

ジ「ふ……。その名、既に錆び付いているんじゃないかい？」

タ「試してみるか？」

ジ「試させてあげようか？」

タ「天破紅蓮……！」

ジ「ＬＯＶＥストーム♪」

―閃！・撃！―

タ「ぬるい……！」

ジ「はっはっは。そちらもね？」

―撃撃撃撃撃撃撃撃―

カ「え～と、まぁ一言。親バカというか、師匠バカも程ほどに」

祐「ジルに関しては言うまでもないから無視ね」

ヴ「う～ん……」

メ「ヴィヴィオ？　どうした？」

ヴ「水着プロマイドの水着って、何着ればいいのかな？」

カ・祐「そんなもん着んでいい！」

ヴ「ふぇ？」

メ「ふむ、ヴィヴィオがダメとなると、私か？」

レ「二人一組みたいですし、私もですね。何か買わなくては」

メ・レ「マスター／主、お金を貸して欲しい／です」

カ「何でそうなるんだぁぁあああああ！」

天然ズ「？？？」

祐「え～と……。もう寒いからまたにしなさい？」

ヴ「あ、そっか～」

メ「成る程。では仕方ないな」

レ「ですが、この間読んだ雑誌には温水プー……」

カ「カニやるから黙ってろ！」

レ「カニですか！？　か～に～♪　か～に～♪」

ハ「見事なまでにクダグダなので、質問に移りますね♪
『質問、ヴィヴィオと祐希奈、カナンと結婚式をあげるならミッド、地球、どちら？』」

カ「てめぇ、コーナー横取りって……はぁぁあああ！？！？」

祐「ハル、あんたね、今の今まで傍観しといて、な、なによこれぇぇ！？！？」

ヴ「結局どっちなのかな？　ってふぇぇぇぇ！？！？」

ハ「一件落着ですね♪」

ク「見事なまでの質問のチョイスですの……」

ハ「ともかく、どちらですか？」

カ「す、スルーでいいんじゃないか！？」

祐「そ、そうね。まだそこまでの話じゃないんだしね！」

ヴ「う、うん。焦って決めることでもないよ！」

ハ「解答を待たせた揚げ句、解答しない、と？」

カ・ヴ・祐「う……！」

ハ「それほど難しく考える必要はありません。ようは、自分がどちらで結婚したいか、です。君達はカナン君と、を意識し過ぎるから混乱するわけです。カナン君は取り合えず置いといてください」

ヴ「そ、そっか……。えっと……私は地球が、いいかな。ミッドには地球の知り合いの人達を呼ぶわけにはいかないし、でも地球なら、ちょっと難しいけど、ミッドからも来れる。私は幸せですって、たくさんの人達に見てもらいたいから……。カナン君は、嫌かな？」

カ「いいい、嫌なんてことはないと思います！」

ヴ「あのね？　私、ウエディングドレスって着てみたいんだけど、ダメ？」

カ「い、いや、そりゃまぁ、女の子の晴れ舞台だし、それくらいするもんだとは俺も思いますよ？」

ヴ「あはは。良かったぁ♪」

カ「つ、疲れる！」

ハ「ですから、難しく考えないでもいいと……」

カ「俺にそんな器用な真似が出来るかぁぁあああ！」

メ「そうだな」

レ「無理ですね」

カ「……即答されるとされるで辛いんだが……」

ハ「まぁ、理解されているということで……」

シュバ！

祐「きゃっ！」

ハ「祐希奈様、逃げないでくださいね～♪」

祐「う、うぅ～……バカハル……」

カ「祐、祐希奈が、照れてる……？」

祐「殺す……！」

ミキミキミキミキ！

カ「いぎゃぁぁぁあああああああああ！」

バタリ……。

祐「ふん！」

ハ「今のはカナン君が悪いですね」

カ「すんませんでした……」

メ「それで、祐希奈はどちらが良いんだ？」

祐「こ、答えさせるの！？」

レ「気になります……」

ヴ「私もちょっと、聞きたいかな？」

祐「しょうがないわね……。私も地球よ」

ヴ「あ、祐希ちゃんも？」

祐「でも、私は堅苦しいのは嫌だし、何より恥ずかしいし、規模は小さい方がいいわね。本当に仲良い人だけみたいな感じ」

ハ「少々意外ですね。祐希奈様ならもっと派手に行くかと思ったのですが」

祐「だから！　そんな姿を人に見せるのが恥ずかしいって言ってんの！」

ハ「成る程そういうことでしたか♪　いやぁ、カナン君？」

カ「なんだよ……」

ハ「将来安泰ですね♪」

カ「それが今無い頭必死に使って考えてる奴に言う台詞か！？」

ハ「いやぁ、もちろんわざとですが♪」

カ「メイデン、剣出せ……。やっぱ殺しとく……」

メ「マスター落ち着け！　仲間だろう！？」

カ「こんなコンニャク仲間なんかじゃねぇぇぇぇ！！！！」

ハ「あははは。ちょっとしたフレンドシップじゃないですか♪」

カ「うるっせぇぇぇぇ！！！！」

―閃閃閃閃閃閃閃閃閃閃閃閃閃閃閃閃―

カ「避けんな！」

ハ「嫌ですよ。痛いですし♪」

ヴ「えと、取り合えず、次に行こっか？」

祐「そうね……。なんか疲れたわ……」

メ「では、次の質問だ

『一部の頃よりカナンが弱体化しているように思うのですが？』」

祐「ま、凡人にはなったわね」

カ「凡人言うなぁ！」

ヴ「あはは……。あのね、弱くはなって無いんだよ？　私達の強さ以上に相手の強さが上がってるだけでね？」

メ「分かりにくいが、昔のマスター達と今を比べると、戦い方に若

干の差異が出ている」

レ「押し込むだけの戦い方だった主は、様々な応用を行ってますし、ヴィヴィオさんは全てのレンジにバランス良い対応が、祐希奈さんは、威力の高い攻撃をいかにして相手に当てるか、等、それぞれに成長を見せています」

カ「簡単に言えば、最初の方は力だけがモノを言わせていた。出力だけで言うなら、一部の俺は、今の俺と大差ない。だから、二人相手だろうがごり押しで勝てたわけだな。ま、ごり押しで六課を圧倒したバカもいるわけなんだが……」

ハ「あははは。誰でしょうね？　最近物忘れが激しくて♪」

一同「……」

ハ「さて、次に行きましょう♪」

カ「逃げたな……」

祐「逃げたわね……」

ハ「あはははははー」

ク「すっごい棒読みですの！？」

レ「コホン、では次は私が。
『カナン、現在好きなのはどっち？』
これは……」

カ「似たような質問送った奴だれだぁぁぁあああああ！！！！」

ハ「まぁ、折角ですし、答えてください」

カ「は……？」

ヴ・祐「ジー」

カ「え、あ、ちょ！？　無理ですよ！？」

ヴ・祐「ジー」

カ「え～と、その～、俺にも心の準備的なもんもいるわけでしてー……」

ヴ・祐「ジー」

カ「あの～……（ダラダラダラダラ）」

ヴ・祐「ジー」

カ「……えっと」

ハ「いやぁ、困ってますね～♪」

ク「それを見て笑ってるハルは最低ですの……」

ハ「僕はいつもこんな顔なので♪　まぁ僕のことは置いておくにして、カナン君、ピンチですよ？」

ヴ・祐「ジー」

カ「う……」

シュバ！

タ「困っているようだな？」

カ「タカト、さん？」

タ「貴様は何も心配する必要なぞない。俺が解決してやろう」

カ「タカトさん……やっぱり良い人な……」

タ「本気の二人に中途半端な気持ちで答えるなぞ俺が許さん。完璧になるよう、一から鍛え直してやる……」

カ「わけなかったぁぁあああ！！！」

ジ「ふむ。僕も協力しようじゃないか♪」

カ「お前らさっきまで喧嘩してなかったか！？」

ジ「ふ、カナ吉のためにタカト君が愛の教育をするとなれば話は別、昨日の敵は今日の友、さぁ、覚悟したまえ！」

タ「カカカカカカカカ！」

ジ「はっはっはっはっは！」

カ「い、や……」

―軋！―

カ「わぁぁぁあああああああああああああああああ！！！！」

祐「弄り過ぎたかしら？」

ヴ「ふぇ？　睨めっ子してたんじゃないの？」

ク「……祐希奈様、貴女という人は……」

祐「さっきの仕返し。あんだけ恥ずかしい思いさせられたんだからこれぐらいは当たり前でしょ？」

ク「相手が間違ってる気がするですの……」

祐「ん～？　じゃあクレアをいじめてあげましょうかぁ♪」

ク「全力で遠慮するですの！」

ヴ「と、取り合えず、最後の質問に行こっか」

ハ「最後は……。あぁ、これはちょっと難しいですね」

ヴ「読むね～。

『ハルの右腕は概念破壊に含まれるのでは？』

あ～、少し難しいね」

ハ「この右腕は、上位存在と呼ばれる覇壊神とリンクするために、

発動時は完全に外界から遮断されて、あらゆる干渉を否定はすることが出来ますが、僕の意思というよりは、人間の意思では、概念を崩壊させることは出来ません」

祐「？　む、難しいわね……。分かりやすく言ってよ」

ハ「神の作った法則に逆らうことは出来ますが、自分からは壊せないということですね」

祐「も、もっと！」

ハ「止められた時間の中で動くことは出来ますが、自分では止められない」

祐「あ、それならなんとか……」

ハ「ただこれは、僕の心に覇壊神が興味を持ったための特殊な事例であって、グラースの力とはまた別の……」

祐「わ、わかった！　取り合えずグラースの話はまたでいいわ！取り合えずアンタがとんでも人間ってことでいいわね！？」

ハ「僕よりも、どちらかと言えば彼の方が――」

祐「質問は終わりね！？　終わりなのね！？　ヴィヴィオ！」

ヴ「ふぇ？　う、うん。では次はゲストさんの紹介です」

▼▼▼▼

祐「ってなわけで、改めて、本日のゲストのＲｅｆｒａｉｎでお馴

染みの意外と黒い、なのはさんの娘、さっきに砲撃ぶちかましてくれた高町伊織ちゃんと、フェイトさんにゾッコンラブ、最早おっさんとしか言えない三十代に突入した、御薙冬矢さん、その他ＥＸメンバーは今更だから省略ね～♪」

ゆっき～にゃん！　ゆっき～にゃん！　ゆっきにゃん！　わぁあああああああ！

祐「はいはいありがとね～♪」

冬「はは。確かにおっさんかもしれないな。御薙冬矢です。よろしく」

カ「すげぇ、大人の余裕だ……！」

伊「初めまして。高町伊織って言います。うわぁ、どうしよう、何言えばいいのかな……」

祐「取り合えず、伊織だよ～。がお～って言っとくと良いわよ♪」

伊「ありがと～♪　伊織だよ～。がお～～♪」

いおりぃぃぃいいいいいん！

祐「ほら、ヴィヴィオも言わないと♪」

ヴ「ふぇ！？　えと、うん。ヴィヴィオだよ～。がお～～！」

ヴィィィィィィィィヴィオォォォォォォォオオオ！

祐「せ～ので♪」

伊・ヴ「がお～～♪」

伊織ィィィィ！　ヴィヴィオォォォォ！

ゆっき～にゃん！　ゆっき～にゃん！　ゆっき～にゃん！

カ「……冬矢さん、この祐希にゃんコール感染するみたいだから気を付け……」

冬「ゆっき～にゃん！　ゆっき～にゃん！」

カ「起きんかぁぁあああ！」

―撃！―

冬「はっ！　俺は、何を？」

カ「すんません。この道場はアリサ道場って道場の簡易版で、因子ってのがあるんです。冬矢さんはそれに感染しかけてたから仕方な……」

冬「ゆっき～にゃん！　ゆっき～にゃん！」

カ「言ってるそばからかかんなぁぁぁぁ！」

―撃！―

冬「はっ！　すまない……」

カ「はぁ、何か今日は因子が強いな……」

冬「……多分、伊織ちゃんとせいだと思う」

カ「……まさか」

冬「伊織ちゃんにはいおりんワールドという力が……」

カ「いおり～ん！」

―斬！―

カ「ごはっ！」

冬「備わっているからな」

カ「何事もなかったかのように話続けるな！？」

冬「あぁ、すまない。つい……」

タ「足が滑った」

―撃！―

カ「ふごぁ！」

ハ「では僕も滑りますか♪」

―轟！―

シ「ごふっ！」

冬「屋根の上まで……」

カ「ぜってぇおかしいだろ！？」

シ「特に後半の奴！」

タ・ハ「ほう……？」

カ・シ「すんませんしたぁ！」

冬「聞いてはいたが、立場が弱いな……」

祐「ま、しょうがないわよ。ヘタレだし」

伊「うん。しょうがないね。ヘタレだもん」

カ・シ「ど～せ、ど～せ俺達は影薄くなってるさ……はっ」

ヴ「あ、あの、違うから、違うからね？　皆わかってるから、元気だそう？　ね？」

メ「祐希奈はともかくとして、伊織さんだったか？」

伊「好きな呼び方でいいよ～♪」

メ「では、伊織、大丈夫か？」

伊「？　何が？」

レ「おかしな聞き方をしますが、身体は自分のものですか？　何か異常は？」

伊「うん。えっとね、なんかね、ポカポカするんだぁ……。でもね、カナンさんとヴィヴィオさんが仲良くしてるの見ると、お胸の奥が、チクチクするの。これ、何かなぁ？」

カ「へ？」

祐「……へぇ？」

―軋！―

カ「ひぃ！　ちょ、ちょい待ち！　俺、何もしてないよな!?　今回は自信あるぞ!?　断じて伊織ちゃんには何もしてない！　な！？」

伊「カナン“お兄ちゃん”私、どうしちゃったのかな……。ねぇ、教えてよ。お兄ちゃん……」

冬「間違いなく、恋だな」

カ「冬矢さん!?」

冬「ん？　何か悪いことといったのか？」

カ「あんたもベクトル違いの天然かぁぁあああああ！」

ガシッ！

ミキッ、ミキッ……

カ「あ……（カタカタカタカタカタカタ）」

祐「ちょっとだけ、私と二人っきりで話し合いね♪」

カ「ち、違う。誤解だ……。俺は、何もしてない……！」

祐「うん。わかってるわよ♪」

ニコッ♪

カ「祐希……」

祐「アンタは何もしなくてもフラグ立てるぐらいのことはするって
ことはね！」

カ「やっぱ何もわかってねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ
ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ
ぇ！！！！！！！」

ズルズル、バタン……。

祐「あんな小さな子に手をかけるなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ
ぁぁぁぁぁ！！！！」

カ「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああ！！！　俺は無実だぁ
ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああ！！！！！」

伊「ふぅ、楽しかったね～♪」

ヴ「あの、伊織ちゃんは本当に……？」

伊「お兄ちゃんのこと？　違うよ～♪　だって、会ったばっかりだよ？」

ヴ「ふぇ！？　じゃ、じゃあ、さっきまでのことは……」

伊「ポカポカしてたのは本当だけど、好きとかそういうんじゃないと思うよ？」

一同「……」

伊「ふぇ？　固まっちゃってどうしたの？」

ジ「案ずることはない！　この僕が説明してしんぜよう！　高町伊織君はね？　元々から向こうの後書きでもそっち方面の資質があり、ＢＳの翔君などを弄っていたりしたわけだがね、ここ、ＬＶでの出演によって、因子感染、その力が大幅に増幅されたと言うわけさ！　人の心を撃ち抜く無垢な笑顔、いおりんもＬＶに出演すればあら不思議、黒い笑顔となってしまうわけさ。あぁ、怖い怖い。分かりやすくこう名をつけよう！　黒伊織、とね！」

黒伊「えへへ～♪」

冬「黒、伊織、だと！？」

タ「通称、黒りん、か……」

ハ「お、恐ろしいです……」

ク「黒りん、怖いですの……！」

ヴ「伊織ちゃん、そんな……！」

黒伊「あはは♪　この世界に最早祐希にゃんは存在しないよ♪　つまり、私に逆らえる人なんて、もう、いないってこと。大人しく私の意思に呑まれるといいよ～♪」

冬「そんなことはさせない。祐希にゃんがいなくても、俺達が止める！」

ヴ「ううん、止めるんじゃないよ……。助けるんだ……。伊織ちゃんを！」

ハ「ですね。数刻とはいえ、彼女はもう仲間ですし」

ク「私達が諦めるわけにはいかないですの！」

タ「黒き意思を消し飛ばせばいい。単純明快だ……」

黒伊「えへへ～。出来ると思ってるの～？」

冬「出来るかどうかじゃない。やるんだ！　いくぞ！　皆！」

一同「応！」

ジ「さぁ、冬矢君達は世界を救えるのかな？　頑張れカオスナンジャー。負けるなカオスナンジャー！」

CM

メ「さぁ、皆もカオスナンジャーソーセージを食べて強くなろう！

レ「誰にも負けない勇気、希望、これ一口で君も勇者の仲間入りです！」

メ「オムライス味と！」

レ「かに味が」

メ・レ「同時に発売！　さぁ、今すぐカオスナンジャーに仲間入りだ！」

冬「君の入隊を待ってるぜ！」

黒伊織「まだまだ私も負けないよ～♪」

ジ「さらに同時発売。黒りんドロップス、闇の力を手に入れろ！」

チャチャ、チャ、チャッチャチャッチャチャーン、チャチャチャ！

シ「いい加減に誰か突っ込みやがれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

タ「さて、次はケーキか。俺が心血を注いだこのケーキならば、ヴィヴィオもきっと満足する筈だ」

ヴ「楽しみだね～♪」

祐「あ、それだけど次回に回すわね？」

タ「なん、だと……！？」

祐「いやだって、もう文字数半端ないし、適当に流すより次回にちゃんとやった方がタカト的にも良くない？　ついでに呼びたいゲストもまだいるし」

タ「むぅ、しかし、余り時間を置くとケーキが……」

ヴ「あ、それはちょっと嫌だね～。勿体ないし……」

祐「大丈夫よ。時間凍結なんて私にとっては片手間で出来るわ♪」

流石は祐希にゃん！

カ「もう突っ込まない……」

シ「あぁ、今更だしな……」

祐「ってなわけで、テスタメントさんには悪いんだけどちょっと待っててね～♪」

メ「さて、話も纏まったようだし、伊織、冬矢さん、宣伝をして締めてくれ」

冬「あぁ。俺達が活躍しているのは、魔法戦記リリカルなのはＲｅｆｒａｉｎだ」

伊「伊織はね～、なのはママ達の娘だよ～♪」

冬「そう、なのは達は結婚して、子供が出来た後の話になるんだ。なのはの娘が伊織。フェイトの娘であり、俺の娘でもある、リア、そして息子のユーリ。はやての娘である、ことは。主人公は誰かって？」

伊「伊織だよ～♪」

リア「私です！」

ユーリ「僕だよ！」

ことは「うちやうち！」

チビーズ「ねぇ！？」

冬「はは。さぁ、誰だろうな？　まぁ、こんな感じで賑やかな話が多いから、気楽に読んでもらえると思う。気になったなら読んでみてくれ。それじゃあ、お別れだ。返すぞ」

カ「はいはい。ま、四部もどうなるかわかんないけど、気長にみてくれると助かる」

ヴ「皆、四部で会おうね～♪　待ってるよ～」

祐「四部も私達の応援よろしくね♪　カナンはいらないけど」

カ「酷くないッスか！？」

ヴ「あはは。大丈夫だよ。ね？」

メ「余り目立たないが、私達も頑張ろうと思う」

レ「なので、忘れないでくださいね？」

ハ「僕もようやく復帰ですし、応援よろしくお願いいたします」

ク「私も四部では活躍ですの～。よろしくですの♪」

シ「ちなみに俺とタカ兄ぃはここのキャラじゃないからな？」

タ「まぁ、頻繁に出ると思うが、突っ込まない方向でよろしく頼む」

一同「じゃあね～♪」

スポンサー・アリサ
演出・祐希にゃん
脚本・すずか
ご覧の番組は、ＬＶ道場の提供でお送りしました♪

第四部一話　始動　（前編）（前書き）

ども。遅くなりましてすみません（汗）
ただ、今回は長くなりそうだったので中途で切ったため、９０００時程度しかありません。
後編は後書きやらなんやらでぶっ壊れるでしょうから、前編でドキドキを味わってくだされ（笑）
では、どぞ♪

第四部一話　始動　（前編）

運命が鍵は三つ。
一つ、悲痛なる過去の主、闇染まる無敗の剣持ちし時、始まらん。
一つ、仲間多き王、主との闘争を経て、強き誓いを己に誓う。
一つ、烈火の女将、その力目覚めし時、王との解禁を果たし、共に志を同じくとする。
三つの鍵が揃いし時、主が闇の扉は開き始める。
これ、始まりを告げる鐘と同義なり。
主、王、女将、必然の運命の元に、合間見え、対立の後に真なる友となるであろう。
三名の力は合わさり、幾多もの困難をも越える。
されど、剣が主、己が迷いを振り切らぬままに力を振るう。
その弱き心、主の安らぎを脅かすものなり。
果て、剣が主、己が迷いを断ち切れず、怨敵と闘い、自らを絶望に貶め、友を哀しみの涙に染めるであろう。
主、世を去りし時、王と女将が時もまた歩みを止めん。
永遠なる雨が二者に降り、そして続く悲しみの雨。
雨が海となりて二者が心を飲み込みし時、終焉の笛は鳴り響く。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一之瀬家
そこにて、祐希奈が忙しく動き回っていた。
本来なら学校に戻る筈の予定だったが、予定外のアクシデントにより、やむ無く休んだのだ。
せかせかと一階に降り、ガスコンロにかけてあった小さめの土鍋二つを盆に載せ、階段を上がる。

「アンタ達、大丈夫？」

部屋に入るなり、祐希奈は床に敷いた布団とベットに入っている二人に呼び掛ける。

「こほっ。私は大分マシだけど……」

敷かれた布団に入るのはヴィヴィオ。

多少咳き込んではいたが、起き上がり、返答する程度のことは出来る。

「別に、俺も、大丈……ごほっ！」

「夫じゃないわね。どう見ても……」

が、もう一方、ベットで震えているカナンは重症だった。

そう、ヴィヴィオとカナンは風邪を引いたのだ。

ヴィヴィオはバーストリミットの反動から、カナンは度重なる戦闘の負担から。

特に、ハルとの戦いはかなりの無茶をしただけはあり、相応の代価を払うことになったわけだ。

また、レナスも負荷からか、メンテナンスが必要となり、現在は白姫家で休眠状態。

風間家にいるのは、治癒は出来るが治療は出来ないメイデンと、家事はからっきしな伯父。

当然の如くあたふたし、結局は祐希奈に頼ることになったわけである。

「ったく、ホントならハルも帰ってきてお祝い気分の筈なのに、アンタ達は……」

「ごめんなさい……」

「わ、る、げほっ！」

病床で謝ろうとする二人に祐希奈は苦笑いをする。

なんか、おかしいわね。

そう思う。

楽しくなる筈だった日を潰されて、本来なら怒っても良いくらいな事の筈なのに。

何故か祐希奈は、全く嫌ではなく、寧ろ、嬉しくすらあった。

三人が揃って平和な時を過ごす。

そんな何でもない時間が。

今でこれなら、学校が始まればもっとそんな時間が楽しくなる。

そんなことを考えていると、怒る気などにはならない。

「謝らなくてもいいわよ。ほら、お粥作ったから、ヴィヴィオ、食べられる？」

「た、多分……」

「じゃ、食べられるだけでいいから、終わったら置いといて」

お盆の片方をヴィヴィオに渡すと、祐希奈は次はベットの方へ。

カナンは起き上がるのも辛いのか、動かない。

「俺、いい……」

「アンタは食べるの。無理してでも胃になんか突っ込まなきゃ治るもんも治らないでしょ？」

祐希奈の言葉にも一理あると思ったのか、カナンはノロノロと起き上がる。

「マスター……」

「ああ。心配すん、ゲホッ、な。頑丈なのが、俺の取り柄……だ！し！」

「マスター、大丈夫か！？　辛いのならさすろうか？　それとも何か飲み物でも飲むか？　何でも言ってくれ」

心配そうにするメイデンになんとか笑みを作ったカナンは答えようとしたが、咳に遣えて上手く話せない。

それは逆にメイデンを心配させることとなり、カナンは見栄を張ったことを後悔する。

「マスター、マスター？」

心配そうにカナンを覗き込むメイデン。

そんなメイデンを、カナンは不謹慎にも可愛いと感じる。

親バカなのを再認識して内心苦笑いした後、そんな少女を安心させてあげたくて。

「ケホッ、ちゃんと、頼りにしてるって……。う～ん……、じゃ、濡れタオル、頼めるか……？」

「ああ！　任せてくれ！」

正に電光石火。

カナンの手からタオルを掠め取ると、光の矢の如くメイデンが飛

んでいった。
それを確認した後、祐希奈はカナンへと近づく。
「無駄にして、悪い……」
そう言って、カナンは額に張っていた真新しい熱冷ましシートを剥がして捨てた。
メイデンに頼んだ濡れタオルは必要なかったのだ。
熱に浮いた頭では、それくらいしか、思い浮かばなかったから。
「あのね、あんなに一生懸命なメイデン見て、そんなことで私が怒るわけないでしょ」
「ああ。でも、悪いのは悪いから……」
呆れながら祐希奈はベッドにいるカナンに盆を渡す。
ゆっくりとした動作でカナンは膝に置いた。
レンゲを手に取り、土鍋の蓋を開ける。
立ち上るのは湯気。
「ニラ粥か。美味そうだ」
笑顔を見せながらレンゲで粥をすくい、口元へ。
「熱いから気を付けなさ――」
定番となる忠告をしようと祐希奈が口を開き。
「つっ！」

「あっ！」

言葉を紡ぎきる前にカナンがレンゲを取り落とす。
当然の如く、祐希奈のベッドに落ちる、お粥。

「あ～もう、アンタは……」

「ごめん……」

謝るカナンを無視し、祐希奈は盆ごと鍋を奪う。
そのまま祐希奈はカナンの隣に腰かけ、レンゲで改めてお粥をすくい、息を吹き掛けて冷ます。

「い、いい、よ……」

咳を我慢しながらカナンは断る。
祐希奈が何をしようとしているのか、それがわかったから。
所謂、あ～んである。

「黙って口開ける」

「自分で――」

食う。
そう言いたくて、口を開く。
無論、恥ずかしいが故に。

「また溢されでもしたらかえって迷惑なの、わかんない？」

「う……」

しかし、祐希奈の言葉には黙るしかなかった。
身体さえ起こすのが辛い状態で、また先程のようにお粥を溢さないとは限らない。

「あの時、私達二人にだけ嘘つくからバチが当たったのよ」

「く……」

二人にだけついた嘘、とは、カナンがハルの願いを聞き入れるフリをしたことだ。
カナンはハルに信じ込ませるために、予め六課と運用部に念話を飛ばし、妨害しないで欲しいと頼んでいた。
ヴィヴィオと祐希奈を除いて、だ。
案の定、二人の反応は素晴らしく、簡単にハルの虚を突くことが出来たのだ。
二度の攻撃にカナンは耐えきれず、結局は折れるしかない。

「悪い……」

「アンタは気を使いすぎよ」

「うぉ！？」

仕方ないわね。
そう言わんばかりに祐希奈が腰に手を当ててカナンの顔を覗き込む。
それこそ、互いの吐息がかかる至近距離。
距離にして二センチほどしかない。
あまりの近さにカナンは目を見開くが祐希奈は不動。

「あのねぇ、私が好きでやってんだからそんなに謝らなくたっていいの。私は嫌なら嫌って言うし、だいたい、嫌なら学校休んでまで世話なんて妬くわけないでしょうが。アンタ達二人は、今日一日は私に世話されとけばいいの！　わかった？」

「は～い♪」

「わ、わかった……」

言うだけ言って満足したのか、祐希奈は再びレンゲを手にとり、カナンに差し出す。

納得したのか、それとも諦めたのか、どちらにせよ、もうカナンは抵抗しない。

「……ありがとな」

ボソリと、聞こえるかわからない程の声でカナンが呟く。

しかし、祐希奈はしっかりと聞き取っていて。

嬉しくて、とても嬉しくて。

「バーカ♪」

「うるせぇよ」

笑いながら罵倒した。

そんな祐希奈にカナンも笑い返す。

楽しそうに言葉を交わし。

「バカは、ケホッ、風邪ひかねぇっつの」

「じゃあアホね♪」

「同じだろ」

まだ交わし。

「じゃあボケ♪」

「それも同じ……」

まだまだ交わし。

「カス♪」

「似たようなもんだ……」

まだまだまだ交わし。

「クレイジー♪」

「狂ってねぇよ……」

交わし続けて止まらずに。

「マスター、待たせた……な？」

「あはは。お帰りメイデン」

その間に濡れタオルを持ってメイデンが部屋に戻り、固まる。

取り合えず、ヴィヴィオの肩に停まり、瞳をパチクリさせる。

「これは、どういう状況だ……？」

「仲良しさんだよね～♪」

「いや、ヴィヴィオ、その言葉と今の状況は激しく食い違っているような気が……」

「今なんつったコラァ！！」

「アルティメットなヘタレっつったのよバカ！」

二人は交わし続けた結果、じゃれあいを通り越し、本気の喧嘩へと発展していた。

その光景にメイデンは頭を抱えるしかない。

「言わせとけば散々言いやがって……」

「ヘタレにヘタレって言って何が悪いわけ？　へ・タ・レ！」

「てんめぇ……」

「喧嘩するほど仲良しさんって言うよね♪」

二人が睨み合って火花が飛び散る、加速する熱の中でヴィヴィオがのほほんと笑う。

そんな中で、メイデンの中で何かが弾けた……。

「文句あるなら出てけば！？」

「言われなくてもな！」

「マスター、祐希奈……」

「「は……？／え……？」」

普段からは想像も出来ないような低い声でメイデンが唸る。

時間が止まる。

絶対零度にも等しい冷たい瞳をしたメイデンが二人の顔の横に浮いていた……。

瞬間、着火。

「いい加減にしろぉおおおおおおおおおおおお！！！！」

「「はいいいいいいいいいいいいいい！！！！」」

この後、この日はただの一度として二人が喧嘩することは無かったという、伝説を残した出来事であった……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

散々抵抗していたハルが帰ってきた反動か、主人も、他人も、使用人も、全てが関係なく大いに盛り上がっていた。

「ティア～♪」

「何って、うわっ！？」

やたら幸せそうな顔で背後からスバルがティアナに抱きつく。

「あぁ、もう！　こんな所で抱きつくな～！」

「えぇ～、いいじゃん別に～♪」

「離しなさいってば～～！」

振り払おうともがくティアナ、それにスバルは構わない。

何故、スバルがこんなにテンションが上がっているのか？

非常に答えは単純。

ホールに並ぶ、豪勢な料理の数々に機嫌が急上昇したためだ。

こうなるとベタつくちょっとやそっとではスバルは振り払えない。

昔からの付き合い上、知っているからこそ、ほとんど全力に近い力で抵抗するものの、腕力で執務官のティアナが未だ最前線で出撃しているスバルに勝てるはずもない。

「ほらほら～、ティアもカリカリしてるとお肌に毒だよ？　というわけで甘い物でも、えい♪」

「むぐっ！？」

逆に手近にあったケーキを手にとり、空いたティアナの口に突っ込んだ。

ビクンと、驚いた反応があった後、ティアナは抵抗を止める。

「お、美味しい……」

「でっしょ～♪　さて、次々～♪」

「ちょ、スバル！？」

「聞こえない聞こえな～い♪」

一瞬の隙を突かれ、ガッチリとホールドされたティアナは人混みの中へと引きずられていく。

余談だが彼女がスバルから解放されるのはそれより三時間も後であり、ひどくお腹を気にしていたという。

閑話休題。

一方、ライトニング分隊である二人はというと、少し席を外し、医務室にいた。

「エリオ君、最近カナンみたいになってきたね」

「そう、かな？」

「うん。痛いのに我慢する所とか、特に」

疑問を浮かべるエリオにキャロは肯定の笑みを返し、エリオの右腕に包帯を巻いていく。

エリオは、今回の戦闘に置いて、カナン、ヴィヴィオ、祐希奈に次いで身体に負担をかけた人物。

その身体には複数の生傷があり、地面に叩きつけられた際の打撲に関しては大きく腫れていた。

心配かけまいと、我慢をしていたのだがキャロに見抜かれ今に至ってる。

「でも、カナンには敵わないよ。この一週間だけで、三つは死線を跨いでる。その三つを完璧にではないにしても、渡りきった。僕にあんな真似は出来ない」

「あはは。真似しちゃダメだよ。でもそう考えると、カナンって凄

く強運だよね」

確かにとエリオは頷く。

覇壊神グラースとの限界ギリギリでの闘い。

朱皇千春との二度に渡る死闘。

なのはとフェイト、ヴィヴィオと共に戦ったことを計算に入れても、その二人と戦って生きているカナンは強運と言える。

「キャロちゃん、ずぅっと何話してるの～？」

医務室に響くのはニーナの声。

ひょこりとカーテンの間から覗いたその顔は若干不機嫌なモノ。

「あ、ごめんね？」

「も～。ニーナだけ置き去りにして～！」

その言葉にエリオは少しの疑問を覚える。

「ニーナ、だけ？」

ニーナはアルティスと共にいた筈なのだ。

そのアルティスの姿はここにはない。

「キャロ、ひょっとして……」

「うん。まだ喧嘩してるみたいでね。中々剣の中から出てきてくれないの……」

「アルちゃんが勝手にしてるだけだもん。気にすることないよ～」

冷たいニーナの声。
剣をキャロが所持しているにも関わらずだ。。
例え待機状態であろうと、アルティスには聞こえている。
つまり、わざとだ。

「こんな調子なわけか……」

「うん。二人とも仲良くして欲しいんだけどね……。私が悪いから……」

エリオの予想通り、アルティスはニーナと喧嘩して以降、ニーナが出ている時は完全に音信不通であり、原因がキャロを巡ってのことのため、普段温厚なニーナも譲らない。
あの日以来、悪循環が続いていた。

「少し、アルと話がしたいんだけど、剣、借りてもいいかな？」

「お願い、出来る？」

「やってみるよ」

頷いた後、エリオは短剣を受け取り、アルティスとニーナがお互いに刺激しないよう、二人は別々に行動を開始。
大ホールの対に位置し、接触を遮断したところで、エリオは短剣を取り出して。

「てめぇもあたしを説教しにきたのか？」

耳元から響いた声にエリオは笑う。

いつの間にか、エリオの右肩にアルティスが不貞腐れた顔で座っていた。
この話はたくさんだ、そう言わんばかりに。
「君にそんなことをする必要は無いだろ？」
「……」
「だって、君は、キャロを心配してるだけなんだから」
「っ……」
押し黙る。
あまりにも簡単に見抜かれたことに驚いて。
そう、アルティスの怒りなど等に冷めている。
キャロにも、ニーナにも、最早怒りなど感じていない。
「半分は当たり、だ」
しかし、それでは半分だとアルティスは言う。
普段には珍しく、大人しい笑みを浮かべてアルティスが賑やかな光景に目を細めた。
「話したくないんなら――」
無理には話さなくてもいい。誰にでも隠したいことはある。
そう言おうとして、しかし、首を振ったアルティスに言葉を止める。
「後半分はあたしにもよくわかんねぇんだ。ピンク頭とかドチビと

か、お前とか、一緒にいるのは楽しい。けどな、ピンク頭と同調してから、あたしはおかしい事に気付いた。いや、元々目覚めた時から違和感はあったんだ。最初は気のせいだって思ってた。でも、違う。よくわかんねぇけど、あたしはヤバイ。ピンク頭が使えないなら、いっそのこと、使わない方がいい」

アルティスの言葉が何を意味するかはエリオはわからない。
ただわかるのは、アルティスは何か得体の知れないモノに怯えている。
それだけは明確にわかる。

「アルが危ないなんて、そんなこと、ないよ」

「何を根拠に……」

そう、根拠はない。
が、そもそもとして、根拠など必要もない。
何故なら。

「アルの話だって根拠なんてないだろ？　同じさ」

アルティスの話も、何か根拠があるわけではない。
何一つとして明確なことはなく、なんとなく、それが現状。
ならば、全てはアルティスの気のせい、そんな可能性もある。

「んっ！」

「おわっ！？」

重たげな空気を吹き飛ばし、エリオは伸びをする。

アルティスがバランスを崩し肩から落ちかけるが、エリオがキャッチし、頭の上へ。

「わぷっ！　てめぇ、髪の毛引っこ抜くぞ！」

キレるアルティスを無視しながら、エリオはパーティのただ中を進んでいく。

遠慮する必要もない。

アルティスにそう教えるように真ん中を突っ切って。

人の輪の中に入るのに、何ら違和感などない。

それは、仲間であることの証明。

「一つだけ、言っておくよ」

「……あん？」

「もし、本当にアルが危ない存在だったとしても、僕は、僕達は、アルの優しさを忘れたりしないから。本当のアルを、僕達は知っているから、自分がわからなくなったら、僕達を信じて」

その言葉に、アルティスは赤く染まった。

当然のことだが、エリオには見えていない。

「こ、こっ恥ずかしい台詞を白昼堂々とてめぇは……」

「え？　何か変かな？」

「知らねぇよ！　ヴァァカ！」

口では毒づきながらも、アルティスの口元は笑っていた。

エリオと話す前と後とで、明らかに気分が軽くなっている。

仲直り、してもいいかもな。

と、思うまでに。

もちろん、すぐ仲直り、というわけにはいかず、まだ時間がかかるわけだが、それはもう少し後のお話。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

聖王教会。

「――鳴り響く」

厳かに響いていた声は止み、差し出された掌に一枚のカードらしきものが落ちる。

「……ふぅ」

と同時に、一息をつき、教会騎士団、騎士、カリム・グラシアが深く椅子へと座り込む。

普段から凛としている彼女にしては非常に珍しい光景だ。

その視線は掌にあるカードへと注がれている。　彼女の能力、プロフェーティン・シュリフテンの力の結晶とも言える一枚に。

「騎士カリム」

「シャッハ？　入って？」

「はい」と、キビキビとした声を響かせて、シスターシャッハが入室する。
持ってきたティーセットの一通りをシャッハのデスクへと並べ、手際よく紅茶を注ぐ。

「どうぞ」

「ありがとう」

シャッハから紅茶を受け取り、一口、謀らずも頬が緩み、優しげな笑みが零れた。
カリムはそこで初めて、根を積めていたことを自覚する。

「またその予言ですか……」

「ええ。やっぱり気になってしまって……」

ウィンドウを展開し、今までに纏めたデータを大きく表示する。
ウィンドウは二つ。
予言に書かれた古代ベルカ語が表示され、その右側にはカリムが翻訳したミッド語の文字の羅列が並ぶ。

「今回は例の突発的な発動ではない、という話ですが……」

「ええ。違うわ。これは、前回の発動の時に作成した予言書」

カリムの能力、プロフェーティン・シュリフテンには二通りの発動例がある。
一つ目は、ミッドにある二つの月が重なった時に発動出来る限定的なモノ。

二つ目は、発動条件がわからず、カリムの意思に関わらず、突発的に発動するモノ。
六課の設立の由来などは後者にあたる。
今回は前者。
正規の行いで手に入れた予言書である。

「この予言は、以前からゆっくりと解析をしていたモノだし、今の所は解釈ミスなんかは無い、とは思うのだけど……」

「自信がない、と？　心配ありませんよ。騎士カリム。貴女ならば――」

歯切れの悪いカリムに、元気づけようとしたのかシャッハが言葉を紡ぎ。

「違うのよ」

「え？」

首を振ったカリムにシャッハの言葉が止まる。
そう、カリムは解釈ミス等を心配しているわけではなかった。
寧ろ、読み取れているからこその不安。

「何となくだけれど、最近になって、このカードが私を呼んでいる気がするの。恐らく、この予言は、当たる。確実に良くないことが起きる……」

「貴方が気にしているのは、終焉の笛、ですか……」

終焉の笛。

その意味を、カリムとシャッハはよく知っていた。
友人であるはやてから、その由来を聞いていたからだ。
きっかけは実に何気ない。オフの日のお喋り。

『私の魔法な？　どうも地球の昔の神話って言うのが関連してるのが多いんよ～。代表的なのはラグナロク、終焉の笛が響いた後に起こる、神々の黄昏なんやって。そうなると私の魔法、大層な名前やと思わへん？』

魔法に名前負けしないようにしなければ。
はやては笑いながらカリム達に話してくれた。
平和な日常の会話から、このような所で戦慄することになるとは思いもしない。
何故なら、はやての話が正しいのなら、そして、予言が正しいのなら、世界を巻き込む戦いが始まるのだから。

「ねぇ、シャッハ……？」

「はい……」

酷く難しい表情をしながら、声だけでカリムはシャッハへと訊ねる。

「この予言にある、悲痛なる過去の主と、仲間多き王、烈火の女将、心当たりが無いかしら？」

「っ、まさか……」

シャッハの頬に一筋の冷や汗が流れていく……。
否定したい。

そんな人物など心当たりはないと。
しかし、ここ半年、管理局の中ではとある話題が持ち上がっていた。
とある話題とは、管理外世界第９７、通称地球にいる三人の存在である。
高町なのは、フェイト・テスタロッサ、八神はやてに匹敵する逸材だと。
その噂はもちろんこの聖王教会へも伝わる。
名前もよく知られていた。

「こう、ならない？」

カリムがウィンドウに文字を打ち込み、イコールで結ぶ。
悲痛なる過去の主＝風間カナン。
仲間多き王＝高町ヴィヴィオ。
烈火の女将＝一之瀬祐希奈。
シャッハの嫌な予感はそのまま的中してしまう。
このままの意味で当てはめてしまうのなら……。

「もしかしたら、この予言はもう始まっているのかもしれない……。
仮に、始まっているのなら、最近のロストロギアを使う敵が現れたのも頷けるし、辻褄もあう……」

「それは、つまり……」

否定したくとも、シャッハの脳は既に理解している。
もう、逃げ道はない。

「近い未来、ラグナロクが、もしくはそれに匹敵する何かが、起こるかもしれない、と？」

ゆっくりと、苦虫を噛み締めるように言うシャッハに、カリムは重く頷いたのだった……。

後編に続く

第四部一話　始動　（前編）（後書き）

さて、後書きまで読んでくださり感謝感謝です♪
微妙に不調なの、お分かりになりましたか（汗）
取り合えず次回は、引き続き闘病生活と、詩織等の白姫家サイドのお話になりますかね。
悩みましたが後編にしました。
後書きはまぁ、うん（笑）
では、次回もよろしくです♪

第一話　始動　（中編）（前書き）

はい、ごめんなさい！
時間がかかった上に中編かよ！
って突っ込まれた方も多いと思います。
でも、下手すると四部いきそうな勢いなんですが……。
取り合えず、待たせているタカトケーキ、ごめんなさい……。
そして、たくさんの感想を送ってくださった方々、本当に申し訳ございません。
就活が忙しく、返せなくなってます。
それどころか執筆も危うい状況にあります。
時間が出来れば少しずつ返信していきますので、状況が落ち着くまでのご理解をお願いいたします。
では、どぞ♪

第一話　始動　（中編）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

白姫家では今も興奮下がらないままに、オールナイトにでもなりそうなパーティが続いている。
しかし、全員が全員、というわけではない。
欠けている人物、というよりは、このパーティ事態が皆の気を逸らすための布石。

「ごめんなさいね。貴方も楽しみたいでしょうに。私とお話なんて」

「いえ、問題ありませんよ。静瑠様からのお話は久方ぶりですし」

ニコニコと笑いながら、クレアの母、白姫静瑠が謝罪する。
対面するのはハル。静瑠と同じく笑みを浮かべている。
二人がいるのは静瑠の部屋。
白いテーブルを挟んで向かい合う二人は、恋人のように見えなくもない。
だが、それは虚像でしかない。
証拠に、ハルが淹れた極上とも言えるアールグレイはすっかり冷めている。
普段の静瑠なら、湯気も消えないうちに飲む筈だった。
つまりそれは今の二人の心の距離も同じ。
笑う二人の間には、ほのぼのとした空気などはなく、刺すような張り積めた空気が流れていた……。
正確には二人ではなく、静瑠一人、だが。
どちらかと言えば、ハルは受けている側。
威圧と緊張が混ざりあって今の空気を成している。

「静瑠様、この度は――」

「千春さん」

均衡を破ろうと、先手を打とうとしたハルの思惑を読み、静瑠は首を振る。

続けようとした。

しかし、それ以上の言葉を続けることが出来ない。

それほど、静瑠の重圧が増してきていたから……。

「貴方の愚かな行いについて、私からは言うことはありません。意味はわかりますね？」

「……はい」

ハルは項垂れる。

いっそのこと、怒鳴って、殴ってくれた方が良かった。

それで相手の気が済むのなら、楽なものだから。

しかし、静瑠はなにも言わない。

その意味は、どれほど愚かなことをしたのか、自分自身で全てを受け止めろ。

楽な道を選ぶことは許さないという、静瑠なり厳しさだ。

「その意味わかるなら、貴方は反省しているということです」

フッと、ハルにかかっていた重圧が消える。

向かい合っていた静瑠はもう、本当の意味で笑っていた。

こんな態度を取られては、余計に反省するしかない。

「……申し訳、ありませんでした」

「はい、良いですよ」

深々と頭を下げたハルに静瑠はただ微笑む。

この人には敵わないと、改めて再認識した直後、静瑠はもう一度笑みを消す。

「やはり貴方は本物の朱皇千春さん、ですか」

「本物、の？」

静瑠の一言にハルは激しく引っ掛かりを覚える。

そう、静瑠の言葉を鵜呑みにするならばそれは――

「はい。貴方がこの屋敷に帰って来ていました。貴方が存在出来る筈のない時間に」

「……僕、です、か？」

もう一人、朱皇千春がいることを認めることになる。

無論、ハルに兄弟などはいないし、従兄弟ですらいない。

それは簡単に証明することが出来る。

何故なら、ハルの親族は、朱皇春人を除き、全て死んでしまっているのだから。

文字通り、全て、だ。

悪夢の誕生日でそれを目の当たりにしたのだ。

間違いたくても間違えようがない。

「その、時間は……」

「ハル君がカナン君と一度目の戦闘をしている時間と同時刻や」

声が響き、扉が開く。

凛とした表情をしながら、六課の隊長陣が、運用部の面々が部屋に入ってくる。

「皆様……」

「私がお呼びしたのですよ。こういうことは、魔法の専門家に聞いた方が、早いですし、ね？　――これです」

「お預かりします」

静瑠から何らかのメモリを一枚受け取り、はやてはその場でコンソールを開く。

流れるのは白姫家の映像。

白姫家のセキュリティは万全。

それこそ、縮地が無ければハルですらも危険と言わしめるような絶対の牢獄。

無論のこと監視の目も抜かりはない。

２４時間体制で屋敷の至る所に監視の目がある。

その映像が映すのは。

「……っ」

「見事なもんやね……」

ハルが息を呑む、はやてが瞳を細める。

一行が目にするのは、朱皇千春その人に他ならなかった……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

そんなやり取りが白姫邸で行われているころ、一之瀬家では一波乱が起きていた。

「く～……す～……」

「んぅ……」

疲労が溜まっているのか、ヴィヴィオ、そして、怒鳴りつかれたメイデンが同じ布団で仲良く昼寝をしていた。

こちらは問題ない。

寧ろ、仲睦まじく、ほほえましい程である。

「けほ、あの、さ……」

「な、何よ……」

頬を染めて、真っ赤になりながら二人が声を出した。

話しかけて起きながら、また、返事をしておきながら、互いに沈黙の時間は長い。

「別に、けほ、無理、しなくても……」

「嫌よ……。私の布団が汗臭くなるじゃない……」

「ん、それは、そ、なんだけどさ……」

コシコシと、優しくカナンの肌を擦る祐希奈。
現在、祐希奈が行っているのはカナンの汗を拭き取る、という作業である。
何故、こんなことになっているのか、時間は少し遡る。

さて、二人共ご飯食べたし、薬も飲んだ、後残ってるのは……着替えと布団も換えといた方がいわね。
となると、タオルか。

休む暇なく、祐希奈は階段を下り、廊下を疾走、洗面器にお湯を注いで、タオルを二枚脱衣所から拝借し、再び階段をかけあがる。

カナンはまぁ、メイデンに任せればいっか。
流石にこればっかりは恥ずかしいし。

そう思いながら、扉を開け放って。

「ヴィヴィオ、そろそろ汗拭いたげるからお風呂場まで――」

「く～……」

「す～……」

「――って寝てるし……」

ヴィヴィオとメイデンの二人が仲良く眠る姿を視界に入れた。
先に眠られ手持ち無沙汰、にはならなかった。
することは、ある。

ほっとくわけには、いかないわよね。

そう思い、祐希奈は自分のベッドに横になっているカナンへと身体を向ける。

「……カナン？」

「……ん？　何か、用か？」

カナンは呼び掛けに数テンポ遅れて返事を返す。

身体を起こすことすら辛そうであり、未だ顔も熱っぽい。

まぁ、それは先刻の怒鳴り合いのせいも多分にありそうだが、それはさておき。

「その、さ」

歯切れが悪い祐希奈にカナンは首を傾げる。

どうにかしている。

祐希奈自身、それはわかっていたが、病気なのだ。

それも、自分の好きな男の子が。

恥ずかしくても、放っては置けない。

「？　どうした？」

「へ、変な勘違いしないでよ！？　これは今日アンタの世話を任された責任からなんだからね！？」

「お、おう……」

「別に、私がしたいとかじゃ、ないし、その、仕方なくであって…

…、私しかする人がいないからで……布団、汚されるの嫌だし……」

自分がおかしい。
思考がぐるぐる空回りして口がおかしなことばかり言う。
本当は、純粋にカナンが心配なだけなのに。
余計な言葉はいらないのに。
私が、言いたいのは、そんなんじゃなくて！

「あぁもう！　身体拭くからパジャマの上着脱いで！」

「……へ？」

「さっさと脱げぇぇぇーーーーーーーー！」

「ちょ、おまっ、やめろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

と、このような経緯があり、今に至っている。
今はカナンが上半身裸、祐希奈が背中を拭いている。
当然、そんなことを男女間でしたのは初めてであり、両者共に会話が弾む筈もない。

何か、会話しないと……
気まずい状況に、祐希奈は冷や汗を足らす。
何かないかと、カナンとでも話せるような、共通の話題を探して、でも探すほどに頭の中に答えは出ない。

あぁもう！　バカ！

いつもなら考えなくとも出てくる筈の話題なのに、肝心な時に役に立たない脳に祐希奈は苛立つ。

「あの、祐希奈……」

「え、えぇ！？　な、なな何？」

思いもよらぬ方から声をかけられ、上ずった声で祐希奈は返事をする。

恥ずかしかったが、それもネタになれば会話も出来ると思い。

「すっげぇ、痛いんですけど～……」

「あ……」

カナンの背中を見て驚いた。

先の苛立ちで力を込めていたのか、カナンの背中は赤くみみず腫になっていた。

つまり、カナンは話題を振ったのではなく、ただの訴え。

「ごめん、ね……」

「いや、良いけどさ……」

再び沈黙。

次は、力を入れすぎないよう、注意しつつカナンの背中を見て。

「アンタ、本当にボロボロね……」

「ん、あぁ、こんだけバカやってればな」

傷だらけの身体を目にした。

その傷は、カナンがどれだけの無茶をしてきたかを物語る。
今回のハルの一件でもまた、増えたに違いない。

「俺は、良いけどさ、お前らは、作んなよ？」

「は？」

カナンの話をしていたのに、矛先が自分達に向いたことに祐希奈はキョトンとする。
それにカナンは笑って。

「台無しになる」

「何が？」

何とはなしに聞いた質問。
しかし、今度はカナンが困ることとなった。
祐希奈から視線を逸らせて、小さくモゴモゴと口を動かす。

「折角……可愛、い、のに……」

「……」

小さな声だったが、祐希奈は確かに聞き取った。
恥ずかしくも嬉しいその言葉、加えて、カナンが意識しているというこの状況。
普段、カナンは無意識的に可愛いと言うことは多々あるものの、意識して言うことはあまりない。
はっきり言おう、祐希奈にとって今の意識バリバリのカナンは餌でしかない。

ニヤリと意地悪い笑みを祐希奈は内心浮かべた。

「もう一回♪」

「む、無理……」

「この前、埋め合わせするって言ったわよね？」

「うっ……」

ジリジリと追い詰められていくカナン。

逃げ道を探すが、この手の話で祐希奈がそんなものを残すはずもない。

正に、八方塞がり、動けない。

やがて、意を決したのか、カナンが祐希奈を真っ直ぐに見る。

「っ……」

真剣な様子に、祐希奈は振っておきながらドキリとする。

頬に赤みが差していくのが自分でもわかる。

何で私がドキドキしてんのよ！　こんな予定じゃ、落ち着かないと……。

ゆっくりと深呼吸――

「傷なんてついたら……」

「え、あ、ちょっと待っ」

「折角可愛いのに台無しになんだろうがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

――する前にカナンがそこいら一体に響くような大声で叫んだ……。

爪先から顔へと、身体中の血という血が集まり、爆発したかのように紅くなるカナン、そして、祐希奈。

「バ、バ、バカァァァァァァァァ！！！！」

「ごふっ！？」

ズドン、そんな鈍い音を響かせてカナンの鳩尾へと祐希奈の拳が叩き込まれる。

体調不良ということもあり、あえなくカナンは撃沈。

――体調が万全であろうとも撃沈していただろうが。

そのまま仰向けに布団に倒れ込む。

その上に祐希奈も倒れ込む。

「お、おい……祐希奈さ～ん？」

「もうやだ。服着せるのも面倒だし、今日はこのまま寝てやるんだから……」

「はぁ！？」

ふてくされたようにそう言って、祐希奈は瞳を閉じる。

冗談ではなく、本当に、寝そうな勢いで祐希奈の力が抜ける。

「寒くはないでしょ……」

「待て、確かに寒くはないけども、風邪うつすし、な？」

「アンタの風邪ならいい。貰ってあげる……」

「っ～～！」

寒くはない。

寧ろ、火照り過ぎてどうにかなりそうなカナン。

祐希奈はもうどうにでもなれという勢いなため、絶賛暴走中。つまりは自棄だ。

しばらくは抵抗していたカナンだが、無理矢理に寝ることにしたらしく、やがては静けさが部屋を満たした。

そんな中、寝たと思われていた祐希奈がピクリと動く。

「って言っても、流石に後の言い訳が面倒だし……」

これくらいなら、良いわよね、うん。なんだかんだで結構一緒に寝てるし、私の寝るとこないし、うんうん、問題ない。

などと勝手な理由をならべ、カナンに布団をかけ直し、その左側に潜り込む。

「おやすみ……」

祐希奈も疲れていたのか、十分となく寝息をたて始めた。

そんな二人の横で、また動く人物がいる。

「ねぇ、メイデン？」

「何だ？」

一連の騒動で眠っていられるはずもなく、ヴィヴィオとメイデンが起きていたのだ。

「カナン君、左側には祐希ちゃんがいるけど、右側寒そうだよね？」

「まぁ、結局上半身は何も着ていないしな」

「私も入ってもいいかな？」

「問題ないだろう。マスターも風邪だ。酷くなるよりは少しでも温かい方がいいはずだ」

「そうだよね。一人より二人、だもんね」

邪気のない笑顔でヴィヴィオはそう言った。

驚きなのは、ヴィヴィオの場合、これがヤキモチなどという感情ではなく、素で言っていることにある。

それ故に全くの躊躇がなく、即断するわけだが。

この即断がカナンにとって吉とでるかは別の話。

素直になれない恥ずかしがりやな姫と、素直過ぎる天然ボケの姫と、両手に爆弾を抱えて三人は仲良く夢の中……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

淡々と映像が流れていく。

流れていく、抗いようもなく、ただ緩やかに、ただ冷酷に、時を刻む。

崩れていく、直っていく、繋がっていく。

矛盾を正し、事柄が一つになった時、生まれ落ちるは……。

映像記録。

物珍しそうにキョロキョロと周囲を見渡すハルが詩織は気になった。

ハルは、構造を全て熟知している筈であり、珍しいようなものなどない筈なのだ。

「ハルさん、どうかしましたか？　さっきからちょっと変ですよ？　探し物です？」

詩織の質問にハルは視線を合わせ、ニコリと笑う。

その笑みは朱皇千春その人のものであり、誰も疑うこともない。

詩織もまた、同じだった。

「いえいえ、注意深く見ると細かい変化というものもありまして、それを探しているのです」

「へぇ～♪　宝探しみたいですね♪」

「宝探し……。言い得て妙、というものですね」

「私だってやる時はやるのです！　えっへん！」

胸を張る詩織だが、その実、意味など全く理解していない。

これで出来れば、歩く災厄などとは言われないのだ。

「ところで、クレアお嬢様はどうされたのです？　ご一緒に修行、という話でしたが……」

白姫邸に帰ってきたのはハル一人だけ。
直属執事のハルだけが帰ってくることはおかしいと、そう思うだけの常識は詩織にもある。

「お嬢様は……」

「あ、わかりました！　力不足を感じたお嬢様は一人秘密の特訓、というわけですね！？　当たりです？　当たりですぅ？」

「あははは。随分鋭いようで。その通りです」

「やりました～♪」

まぁ、その正しい常識を間違った方向に吹き飛ばすのが病的に得意なわけだが……。
思考の加速と発展。
この頭脳はデバイス開発においては優れた能力を発揮するが、日常においては全く役に立たない代物。
さらに言うなら、今は非日常の中にある……。
邸内の人間、信頼の置ける人物、ハルとはよく話す。
簡単な話。

「とにかく、そんなわけで、仕事もない今の内に、邸内を少し散歩でもしたいのですが……」

「ご一緒します～♪」

天津詩織という女性は、カモフラージュという盾には最高の条件を満たしている。
たった一人の女性を除いては、の話だが……。

「お二人共、仲がよろしいようで何よりです」

気配無く、そんな穏やかな声が二人の背後に響く。

二人は驚いて――

特にハルの驚きようは酷いものだった。

――同時に身を翻す。

「あらあら、詩織さんはともかくとして、執事長まで、珍しいこともありますね？」

背後には、頬に手をあてながら、上品に微笑む静瑠がいた。

「し、静瑠様、びっくりしましたですぅ……」

「ふふ、少しからかいがすぎたかしら？」

あくまでも静瑠は穏やかなままだ。

何を考えているかなど、読みきれる人物は少数だろう。

「執事長も、ごめんなさいね？」

「いえ、この程度察知出来ないようではまだまだです。鍛練を重ねておきます」

ハルも先の行動以外にはおかしなことはなく、模範的な解答でその場を切り抜ける。

少なくとも、隣にいる詩織には見抜かれてはいない。

スゥっと、静瑠は瞳を細め、ハルを見定めるように居抜き。

「執事長？」

「はい？」

「一人は仕方ないとして、これ以上の浮気は、許しませんよ？」

凍りのような冷たい笑みを浮かべ直し妙に凄みのある声で一言、釘をさした。

返答は一つ以外にはありえない。

「……はい」

「え？　え？　何の話です？」

「よろしい♪　私からはそれだけです。では、約束を破らないように」

笑いながら、静瑠はハルの横を通りすぎる。

違う意味で固まったハルと、キョロキョロする詩織を放って静瑠は角を曲がり視界から消える……。

「一体なんの話なのですぅぅぅぅ！？」

「まぁまぁ、お気になさらず♪」

「う～！　う～！」

「あはははは～」

蚊帳の外にされたことに、涙を浮かべながらハルを睨む詩織。

ハルは当然のように笑顔で受け流し、先に進む。

「あ、待ってください～！」

いつまでも怒っているわけにもいかない。

詩織は開発主任ということもあり、研究室にこもることが多い。

ハルは執事長、そしてクレアの直属という役目があるため、ハルもまた、暇はない。

二人して休み。

滅多にないことだ。

そんな貴重な日を遊ばれたくらいで逃すわけにはいかない。

故に、詩織は走る、笑顔で、本当に楽しそうに。

「大体の部屋は回りましたね～。やっぱりハルさんがいると迷いません♪」

「……まだ、一つ忘れていますよ」

「……はい？」

それが、本当のハルならば、どれだけ良かったのだろう。

本当のハルだったなら、きっと、最後まで、楽しくて、笑っていられて、ずっと、笑顔で……。

だが、軋む。

たった一言で、詩織の願いは、亀裂が広がる。

「夾の部屋は、どこですか？」

「……夾、さん？」

崩壊の序曲が始まる。
崩れていく音が、彼方から響き、世界は色褪せていく。

「急に、どうしたんですか？」

「急？　寧ろ、遅すぎたくらいでしょう……？」

亀裂から、あんなにも暖かかった空気は冷めていく。
あんなにも、色とりどりだった詩織の心の中が、灰色に。

「だってそんな、いきなり言われても……」

「相応の覚悟をして、僕はここに来ました……」

暗黒に。

「だって、理由が……」

「理由……？」

ハルが、薄く、悲しそうに、嘲るように、笑った。
瞬間、詩織の世界は闇に染まる。

「僕に、理由（それ）　を言え、と……？」

「っ……」

唇を噛む。
フラッシュバックする過去の映像。
片腕が無く、死んだように動かない夾と、瞳から光が消え、絶望

に打ちひしがれるハルが。
余りに痛々しくて、見ていられなくて、詩織は目を閉じた。
次に目を開けた時、目の前にいたハルは、別人のような話し方で、それは、誰にでも同じで。
もうハルからは、“特別”の居場所は消えていた。
ちゃんと周りがハルを支えたならば、自分が支えられたならどれだけ良い結果があっただろうと、何度悔やんだかわからない。
その当事者であるハルの口から、理由を聞き出すなど、詩織に出来るわけがなかった。

「ごめん、なさい……」

闇が、詩織を包む。
ハルは何を思い、夾に会いたいと言っているのか、わからない。
しかし、わからないままでは通せない。

「御安心を……」

「……はい？」

闇の中の詩織に一点の光が差す。
目の前のハルが、穏やかな笑みへと変わっていた。

「僕は夾に会って、何をしよう、何をしてやろう。そんなことは一切考えていません。ただ、会いたいのです」

ハルは、瞳を閉じる、意思を感じる、強い、意思を。

「逃げ続ける日々を終わらせるために……」

やがて開いた瞳に、詩織は吸い込まれていく。
本気で、ハルはここにきた。それを感じさせる力がある。
本気な気持ちには本気で向き合わなければといけない。

「わかりました……。ご案内、します」

そうして詩織は、首を縦に振り、頷いた。
研究室と、夾のいる部屋にだけは、詩織は迷わない。
何度も、何度も、何度も、往復した道だから。

「ここ、です」

「隠し通路……」

視点を変えてみよう。
今、闇に呑まれそうな詩織の心には一点の光が差している。
逆に言えば一点以外は闇しかない。
つまり、詩織は闇の中心にいることになる。
詩織は闇に呑まれたくはない。
光が差す方向がかわったなら、そちらへ動くだけだ。
もし、光が闇の意思によって標されたモノだとしたら?
もし、闇が入り込めない堅牢な扉の前に詩織を誘導しているのだとしたら?

「あの中で、夾さんが眠ってるのです」

「ありがとう、ございます……」

そしてもし、詩織が扉の鍵を持っているのだとしたら?
いかに堅牢な扉でも、鍵さえあるならば話は別。いとも容易く開

いてしまう。
簡単に、闇が入り込めてしまう……。
「では、つもる話もあるでしょうし、私はこれで失礼するです」
「重ね重ねすみません……」
ハルに背を向けて、詩織は部屋から退室する。
部屋には、何も出来ない綾瀬夾と、朱皇千春を演じる闇の二人きり……。
闇が歩む。
凍り漬けの生体ポットの中に、昔と変わらぬ姿で眠り続ける綾瀬夾の姿があった。
「綾瀬、夾……」
闇が呼び掛ける。
夾は当然のように動かない。
そんな何も出来ない夾に闇は笑い。
「来い……」
腕を振り払う。
広げた掌が輝き、握られるは身の丈もある鎖に巻かれた銀の大剣。
それを軽々振り上げ、夾を見据える。
白く輝く剣、狙いは最早言うまでもなく綾瀬夾。
振り下ろさんと柄を握り締め。
「そこまでです……」

声が響き、首筋に、胸に、腹部に、人体の急所でも特に重大な位置に営利な感覚。
見渡せば、三人の白姫邸の使用人達が銀のナイフを闇に当てていた……。

「ぐあっ！」

「きゃっ！」

「ぐ、ぅ……」

だが、三重奏が響いた
直後に使用人達は吹き飛び壁へと叩きつけられ、その場で気を失った……。
魔力による衝撃波を闇が瞬時に放ったのだ。

「よく、分かりましたね。白姫静瑠様……？」

闇が入り口へと向き直る。
立っているのは一人の女性、クレアの母、白姫静瑠。
静瑠にいつもの笑みはない。
膨大な魔力が静瑠を包み、その全てが闇に向いていた。

「ハルさんは、“執事長”と呼んでも返事はしませんから。彼の中で、執事長は一人だけ。夾さんしか、いませんからね。それだけですよ」

静瑠の背後に魔方陣が広がり、巨大な黒竜が姿を顕す。
最早、静瑠に相手の言葉を聞く気はない。

「やれやれ、困ったものだね……」

ニヤリと口元を吊り上げて闇が笑う。

グルリと大剣を回し、両手で肩身に構え直す。

「ハルさんの姿で、主任さんを騙し、そして、夾さんを殺そうとした貴方を、私は捕らえるとは言いません」

静瑠の身体が黒竜へと融けていく。

同時、命が吹き込まれたように黒竜の目が紅く輝いた……。

同時、夾を入れたポットを壁多い、魔力のシールドを展開する。

巻き込まないように……。

『ガァァァァァァァァァァァァァァ！』

ビリビリと空気を振るわせる黒竜の咆哮。

それを聞いて、無言のまま闇は笑みを崩した。

「私が、貴方を殺します……」

「それは怖い……」

殺意の冷気振り撒く戦いが、幕を開けようとしていた。

後編に続く

第一話　始動　（後編）（前書き）

申し訳ない。
あんまりにも時間がかかったので、後書きタカトの話は後でくっつけようと思います。
結合次第、活動報告でさせていただきます。
では、どぞ♪

第一話　始動　（後編）

魔導師での間で行われる戦い。
多くの場合、それは模擬戦であったり、教導であったり、理由は様々にしろ“訓練”である。
見た目は派手でも、人を殺める力はない。
そう、仮になのはの砲撃を零距離で受けようとも死ぬことはないのだ。
しかし。

「ダークネス、カノン……」

「ォォッ！」

映像に展開される戦いは、“殺し合い”だった。
直線を疾る闇弾を、銀の大剣が横薙ぎに払い飛ばす！
両者、様子見程度のものだったのだろう。
だが、その一撃は地面を削り、弾かれた闇弾が炸裂した壁には巨爆が起こる。
実在する壁が破壊されるということは、ファイアリングロックは外されている。
当たり前のように非殺傷設定など外されているだろう。
ただの一撃、直撃を受ければ致命傷。

「薙ぎ払え……」
『仰せのままに』

そんな一撃を静瑠はハルの姿をした男に叩きつける。
放たれるは先の闇弾。

ただし、黒竜の両腕から放たれる数は、２０。
男の視界が闇に染まる。
受ければ塵も残さない。

「ふっ……」

迫る闇弾、笑う男、炸裂する、闇の輝き。
男の姿は。

「やれやれ、事前に調べてはいたものの、やはりここの人間は化物揃いだね？」

静瑠の頭上、深々と天井に突き刺さる大剣から伸びる鎖に掴まる男がいた。
その背後、紅い光が二つ、暗闇に映える……。
男の動きに驚異の速度で反応した黒竜を駆る静瑠だ。
大剣が天井から抜け落ち、男の手に納まるのと、紅い光の翼が羽ばたくは同時。

「切り裂け……」
『ウィング、展開』

「ちっ……」

男は振り向かない、否、振り向けない。
単純に体捌きが間に合わないのだ。
故に、大剣を背中に担ぐ。
瞬間、紅き刃が大剣に真一文字に叩き込まれる。
火花が散ったかと思うと、地面は床が砕け散る。

「ゼルフィクス……」
『ォォォォォォオオオオ……』

攻撃はまだ、止まない。
黒竜が咆哮を上げ、口内に闇の光が灯る。
竜の内にて、静瑠が煙の中を指差す。
冷たい光を放つ瞳は瞬きすらさせず、ただ、静かに。

「ヘル、ブラスト……」
『アアアアアアアアアアアアアア！！！！』

目標の破滅を命じた。
ゼルフィクスはそれに従い、漆黒の砲撃を煙の中へと叩き込む。
止まない砲撃、膨れ上がる魔力光、炸裂すれば静瑠とて巻き込まれるかもしれない。

「訂正、だ……」

最も、炸裂すれば、の話だが……。
そして、それは叶わない。
天へと疾る一筋の光。
光が砲撃を叩き斬り粒子へと返し、余波が突き抜けた天井に巨大な爪跡を後に残す。

「……ぅっ！」

突如、黒竜の制御が静瑠の手を離れ、地面へと急降下。
リカバリーも取れず、叩きつけられた衝撃の全てをその身に受けて、黒竜の身体が砕け散る……。
半壊した身体に巻き付くのは光の鎖。

相当な強度があるのか、黒竜がもがこうにも千切れない。

「この邸内での化物は、貴女だ。全く、他の使用人達が可愛く見えるね」

カツカツと、床に反響する足音。

煙の中から姿を表すのは額から一筋の血を流す、ハルの偽者。

やれやれと言わんばかりに両手を広げ、肩を竦める。

「とはいえ、邸内で全力を出せる僕と、その逆の貴女では、勝負にならないのが道理だろう？　反応や技術が同等なら火力が低い方が不利なのは目に見えてる。敗因はそれだけだよ」

言う必要も無いことを男は静瑠に話続ける。

ここでは自分には敵わないから止めておけ。

「だから、何ですか……？」

「……何？」

不利なことは百も承知。

例外を除いて、守る方が不利になるのは当たり前だ。

それでも、静瑠は退くわけにはいかない。

「この邸は、私の娘や、ハルさんや、夾さんの、帰る場所なのですから……」

静瑠が輝く。

身体には黒竜の一部を纏い、両肘からは紅い刃を伸ばし、鎖へと振り払う。

「夫がいない今、妻である私が邸を守らなくて、誰が守ると言うのです？　ハンデがあろうと、なかろうと、私は、皆さんの居場所を守るだけですよ」

「……成る程」

シャンと、鎖が砕け散る。
どこか納得した様子の男に静瑠は真っ直ぐに駆け、右腕を振るう。
瞬間、男の身体が消えたように見えた。
しかし、実際にはスウェーで避けただけだ。
身体を沈めている男の首に静瑠は左肘の刃を突き刺すように打ち下ろす。

「くっ！」

が、男は転がるようにして刃を避け、同時に静瑠の足を蹴り払った。
崩れるバランス、倒れ行く身体、それでも静瑠は片腕をついて受け身を取り、転がる。
直後に大剣が叩きつけられ地面を砕いた……。
その場に止まっていたのなら、静瑠は死んでいたことだろう。

「はっ！」

跳ね起き様に静瑠は右腕を振るう。
延長するように右肘から魔力刃が飛翔し。

「流石に狙いは良いね。しかし――」

薄く笑った男は棒立ちのまま左手を翳す。
人指し指を一本、下へと向けて。

「少々、軽い……」

ニコリと笑うその眼前で魔力刃は砕け散る。
触れてすらいないにも関わらず、だ。
男が何をしたか、静瑠にわかる筈もない。
わかる必要も、無い。
元より、ただの目眩ましでしかないのだから。

「ヒュッ！」

「ほぅ……」

刃のような呼気が静瑠の口から吹き出される。
大きく振りかぶられた左腕、そこから発生するは同じ技。
対し、男は大剣を回転しながら下段から剣を叩き込む！
だが、斬れない！

「これは、中々……っ！」

ここに来て初めて、男から余裕が消えた。
正直、男は静瑠単体の力を侮っていたのだ。
黒竜さえ使わせ無ければ問題はないと。
しかし、今回の静瑠の一撃は男の予想を遥かに上回り。

「グランド、クロス……！」

「っ！」

そして、飛び抜ける！
男を止める、それだけの一撃を放ちながら尚、静瑠は動きを止めなかった。
男の背後、残像を残し、現れた静瑠。
振りかぶるは最上段。
男は眼前の魔力刃に手一杯。

「終わりです！」

静瑠が吠え、最大級の威力をもってして男の脳天に光の柱が突き立った……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

炸裂した静瑠の技の威力に土煙が舞い、天井からは瓦礫がパラパラと落ちていく。
静寂が周囲を包む中で。

「やれやれ……」

ジャラリという音が鳴り。

「っ！？　ぁぁぁあああ！」

静瑠の悲鳴が響き渡る……。
やがて、土煙が晴れていく。
その中で、魔力の鎖に絡み取られ、身動きが取れなくなった静瑠と、平然と立つ男がいた。

「この後のことを考えると、あまり魔力を使いたく無かったのだが

ね……」

ぶつぶつと何やら独り言を呟き、思い出したかのように男は静瑠を右腕で持ち上げる。

動けない中で静瑠は男を睨み付け、敵意を消さない。

それに男はニコリと笑った。

「強い芯だね。そういう目が出来るのは、羨ましく思う」

意表をつく一言に、静瑠は一瞬とは言え敵意を潜めた。

瞬間、ズンッ、と内から響く鈍い音。

「でも、敵の言葉に、心を揺らすようでは、ダメだね」

「が、は……」

静瑠の鳩尾に突き立つ男の拳。

それは、強制的に静瑠の意識を奪い去り、闇へと導く。

ぐったりとする静瑠を丁寧に地面に寝かせ、男は再度大剣を手に取る。

「さて、お待たせしてしまったようだね。綾瀬夾ちゃん」

歩く。一歩、また一歩と夾へと近づきながら、その手の大剣に魔力の光を集束しながら。

夾の眠る生体ポットへと。

「怖いかい？」

あくまでも涼しげに夾へと男は語りかける。

夾は話すことなどないのに。

「あぁ、覇壊神のことなら大丈夫さ」

輝く剣を振り上げて、男は笑う……。

揺らぐ、揺らぐ揺らぐ揺らぐ、揺らぐ！

激震が起こる最中で、たった二人、男と夾だけは動かない。

突如としてシン、と静まり返った。

「案ずることはない……。一撃で終わらせるからね。痛みも苦しみも無いだろうさ」

瞬間、男が持つ大剣は太陽が如く輝きを放ち、空間すら切り裂き、破壊し、夾へと振り下ろされた……。

この一撃は、隠し部屋の機能を全て破壊、後には瓦礫しか残らなかったという……。

映像記録はここまでで途切れていた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

重い沈黙が部屋を覆う。

なんとかしようと、各々が口を開きかけるが、ハルの様子を見て口を閉じる。

ハルは、拳を握りしめて、震えていた。

「正直、貴方に見せるかは迷いました。ですが、夾さんは……」

「……グラースに殺されたのでは、無いのでしょう」

「……はい」

ゆっくりと静瑠はハルの言葉を肯定した。
介入者が使っていたのは変身魔法に他ならない。
自身を他者の身体へと魔法を使うのは高度な技術だが、不可能な話ではない。
それをグラースが行うのか？
答えは否である。
良くも悪くもグラースという男は小細工などしない。
事実、機動六課に正面から挑んでくる輩だ。
グラースが夾を殺しに来たのなら、そのままの姿で現れるだろう。

「本当に、僕はバカですね……」

ギシリとイスが軋んだ。
音の出所はハルの席。

「ちゃんと順を追って解き明かして行けば、無意味な戦いなどせずに済んだのに、混乱して、グラースに擦り付けて、周りの声から耳を塞いで、挙げ句、大切なモノを自分で壊しかけた。救い用のない、バカですよ……」

悔しくて、悔しくて。
利用されたことが。
夾を殺されたことが。
何より、翻弄されてしまった自分自身が。
一番冷静でいなければならない場面で、動揺してしまった自分が、本当に、悔しくて。

「そうだね。ハル君はバカだよ。大バカ」

響いた声に一同は息を飲む。
最も声の出しづらい場面で口を挟んだなのはに。
ハルがなのはを見る。なのはもハルを見る。

「だから、皆で考えようって、私は言ったよ？」

「……そうですね」

「一人で頑張らないでって、言ったよ？」

「……はい」

「止まるチャンスはあったのに、ハル君は無視した。見ないフリをした。目を背けた。翻弄されて当たり前だよ」

「わかってます……。そんなことは、わかってますよ……」

言葉を連ねるにつれ、段々と空気が重くなる。
そして、椅子の軋みはより大きくなっていく。
周囲が冷や汗を足らす中で、なのはと静瑠だけが冷静。

「だから、あんなことになる。良い結果なんて何一つない、ただいたずらに被害だけ広げて、迷惑かけて――」

「わかってるっつってんだろうが！」

「っ！」

瞬間、バキリと音が響き、ハルが椅子の手すりを握り潰す。

ハルが立ち上がり、弾丸が如く速度でなのはの襟を持ち、壁に打ち付けていた。
まずいと、はやてが、凛が、止めようと立ち上がる。
「はやてちゃん、凛ちゃん、いいから」
「せ、せやけど……」
「大丈夫」
「わかりましたわ……」
が、なのはの言葉に渋々と着席する。
ただ、いつでも駆け出せるよう、気だけは抜かずにいた。
なのはは友人達の心配をよそに自分を睨むハルと視線を合わせる。
「それで、何がわかってるのかな？」
怒るハルに、あくまでも静かになのはは語る。
まだ、わかっていない。
連れ戻すだけではまだ半分、もう半分が欠けたままでは余りにハルは不安定。
「てめぇが言いたいのは、全部俺のせいだって、そう言いたいんだろうが……」
「違うよ」
「何が違う！？　どう違う！？　俺がもっと冷静だったなら、被害

は少なくて、もっと良い結果が待ってた。違うのかよ!?　違わねぇだろ!」

「うん。そうだね。きっとそうなってたと思う」

「でも」そう、なのはは繋げた。

ハルにわかって欲しいのはそうではなくて、“そちらの方”ではないから。

「ハル君、それはね、もうどうしようもない話なんだよ？　時間は戻らない。爽さんは亡くなったし、ハル君がバカをやった事実も消えない」

そう、ハルが言っているのは全て“もしも”の話。

後悔先に立たず。

いくら悔やんだ所で時間は進む。

残酷なほど確実に未来へと歩みを進める。

「過去を忘れろ、なんてことは言わないし、引きずって歩くのも仕方ないと思う。だけどね、囚われちゃいけない。私達は進まなくちゃいけないんだ。抱えた過去が、どんなに重くても、辛くても、いつかは歩かなくちゃいけない」

なのはは笑う。

たかが、映像一つで、ハルの未来を潰さないために。

全ては持って上げられなくても、肩を貸すくらいは出来るから。

一緒に頑張ろうと膝をつくハルに、今、もう一度手を伸ばす。

「爽さんとお別れ、するんだよね？」

「……はい」

諭してもらって、いっぱいだった頭は冷えた。
映像を見て、真の意味でハルはハルとして帰る。
口先だけではなく、中身を伴うハルとして。

「じゃあ、今、ハル君がすべきことは？」

今から、歩もう。
俺は大きく遅れをとったかもしれない。
それでも、動くための足があるのなら、歩もう。
そう決めて、ハルは大きく息を吸い込む。

「二度と、間違わないように、前を向いて歩きます。今度は、一緒に……」

「うん！」

本当に嬉しそうに笑うなのはにハルは苦笑する。
他人のことなのに、まるで自分のことのように笑える人間。
お人好し部隊。
そう呼ばれるのも納得出来るかもしれない。

「取り合えず、邸内の人間にお礼を言って来るといいですよ。大分気を使わせてしまいましたし、特に、詩織さんには入念に、ね？」

「はい」

そう、邸内での出来事。
使用人達がそんなことを知らない筈もない。

わかった上で、人並み以上にハルと普段通りに接する。
これがどれだけ神経を使うかはおわかりになるだろう。
特に、詩織に関しては利用された当事者。
その上でのあの放送は負担を強いたに違いない。
本当の意味で帰ってきたと安心させるためにも、必要なこと。

「なのは様にも失礼なことを……」

「にゃはは。私はいいよ。敬語じゃないハル君とも話せて新鮮だったし」

なのはの言葉にハルはバツが悪そうに顔を背けた。
本人としては、直した筈だったのだが。

「今後は注意します……」

「話し方、戻してもいいと思うけどな？」

「考えておきます」

「うん」

当たり障りのない返答を返し、ハルは、実に執事らしく、綺麗な角度で腰を折り、一礼。
それから数秒、空白の間が空いた。
考えて、考えて。

「行って、きます」

《行ってらっしゃい♪》

全員が笑って返し、ハルも笑みを浮かべて背を向ける。
周囲に比べると少し遅いハルのスタート。
それでも、踏み出したこの足を、もう、止めないように、真っ直ぐ、時には迷いながら、仲間と歩もう。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一時間、二時間、三時間、四時間、五時間。
みるみる内に陽は傾き、海鳴市を夕焼けに染め上げる。
機動六課と運用部は皆オフとなり一時解散。
はやて、凛はまだ話があるらしく道を別れ、なのはとフェイトは祐希奈の家へと向かっていた。
三人の見舞いに行くためだ。

「そういえば、君達は灯台、グラースと戦っていた二人の内一人がそう言っていました」

頭に響く、数時間前のハルの言葉がこびりついて離れない。

「灯台、かぁ……」

「何だろうね……」

うーん、と共に悩みながらなのはとフェイトは道を歩く。
ハルの一件が一区切りついてから、仕事の話となったわけなのだが、ハルから思わぬ情報が舞い込んできたのだ。
混乱していた頃には吹き飛んでいた事柄だったが、改めて考えるとおかしい。
敵である自分達と言葉を交わす必要が皆無だからだ。

「……挑発、かな？」

確かに、相手方を混乱させるために行う場合もありえた。

しかし、フェイトは違うと首を振る。

「それにしてはタイミングがおかしいし、何も相手はハル君じゃなくても良かった筈……」

「挑発をするには少し危ない相手だもんね……」

そう、あの時のハルは他人の言葉に聞く耳を持てるような状態ではない。

グラースを倒した相手ともなれば見境もなくなる。

問答無用で殺しに来る相手に向かって挑発などするだろうか？

普通はしない。

実際、ハルの話によれば後少し速ければ男を殺していたという。

それほどの危険をおかして男は言葉を残した。

「特徴はフードコートと、銀の髪……」

思考の海へと二人は潜っていく。

フェイトはわからないとばかりに首を振る。

だが、なのはの中で一人だけ該当する人物がいた。

名前は知らない。

予測だが、キャロにアゾットの剣を渡し、その後で、敵と言いながらヴィータを助ける方法を教えてくれた男。

なんとなく、勘に近いがその男なような気がした。

だとすれば。

「余計にわからなくなったかもしれない……」

その男の行動事態が全く読めないのだ。
敵の中にいながら味方のような行動を取るが、かと言って協力的ではない。
事実、仲間を庇うためにフェイトを昏倒させている。

「「う～ん……」」

二人して頭を抱え、そしてやはり答えは出ない。
そもそもとして、ヒントが少なすぎる。
そうこうして悩む内にいつのまにやら一之瀬家の前にいた。

「考えすぎてもよくないよね」

「うん。たまには頭を休ませないと疲れるだけになるから」

苦笑するなのはにフェイトは合わせるように笑う。
何も、焦ることはない。
“凛の提案した作戦”までにはまだ期間がある。
今日、はやてと凛が話し合って、大まかな計画を立てて、自分達を加えて組んでいく。
まだまだ初期段階。
最終段階になるまでにじっくり考えればいい。
今は、日常に戻ろうと二人は頷いて。

「「こんばんは～♪」」

引き戸がカラカラと音を立てて開いていく。
上質な畳の匂いが香る、和風の落ち着いた家。
カナン達が集まって騒いでさえいなければ、一之瀬家は元々は静

かな家なのだ。

「「？」」

それにしても静か過ぎる。
人の動いている気配が全く感じられない。
なのはとフェイトは顔を見合わせて。

「ね、フェイトちゃん、行ってみよっか？」

「うん。もし誰かいても謝ればいいんだしね」

何かあったら大変と二人して頷き靴を脱ぐ。
誰もいないのはわかっているが、一応、断ってから部屋を回っていく。
客間、居間、台所、人のいそうな所を回るが、見事にハズレ。
残るは祐希奈の部屋と雅樹の部屋のみ。
流石にどうしようか、少し思案して。

「おわぁぁぁあああああああああ！！！？？」

突如として轟いた悲鳴に二人はハッと上を見上げる。

「悲鳴！？」

「今のはカナンの……。上！」

もう躊躇してはいられない。
階段を走って飛ぶようにして駆け上がり、祐希奈の部屋の扉を開

け放ち、そして、そして……。
祐希奈のベッドで仲良く川の字に眠っている。否、眠っていたが正しいか。
その川は崩れかけている。

「ヴィヴィ、オ、寝ぼけてる、のか！？」

「ふぇ……？　私、起きてるよ～～～～……？」

「嘘つけぇ！？　だったら放せ！」

二人が見たのは眠ってある程度体力を回復したのか顔色がよくなったカナンとそれに抱きつこうとしているヴィヴィオだった。
ちなみに祐希奈は未だ幸せそうに爆睡中……。

「ふぇぇ～？　兎さん、こっちだよ～……？」

「俺、兎、じゃ、ねぇ！！」

とろんとした目付きでヴィヴィオがカナンを抱き寄せようとする。
カナンはそれを阻止しようと抵抗する。
しかし、カナンも人間。
人間、風邪の際には自分でも驚く程に力が出ない。
それこそ、自分の体重も支えられない程に。
ヴィヴィオとカナンは共に風邪。
どちらにも当てはまることだが、状態が違う。
本日、祐希奈と喧嘩し、さらにはダメージを受け、休んでいるにも関わらずダメージを受けた重い風邪の人間と、素直に言うことを聞き、回復に専念していた軽度の風邪の人間、どちらが体力があるだろうか？

答えは、言わずもがな後者である。

「おいで～……？」

「わぷっ！？」

カクンと、抵抗していたカナンの肘が折れ、ヴィヴィオに抱き締められる。

ふにんとした感触にカナンは冷や汗を流す。

カナンの顔の位置はヴィヴィオの顔より少し下。

成長期真っ盛りの胸のど真ん中に顔を埋めていた……。

「兎さん、暖かい……♪」

「～～～～っ！！？」

「ん、ぁ……。コラ、暴れちゃダメ……。くすぐったいよ～……」

さらに強くヴィヴィオがカナンを抱き締める。

さらに温かく柔らかな感触がカナンの顔に広がる。

逃がすまいとガッチリと両腕でホールドし、兎さん（仮）のヘッドロックを完了した……。

ロックされた兎さんとしてはたまったものではない。

精神的な意味で後一分と持たない。

何とかせねばと兎さんは上に寝ていたメイデンを引っ付かんで。

「ふあ……？　ますたぁ～……？」

可愛らしい寝惚け方をしたメイデンだがこの際無視！

恥ずかしさでどうにかなりそうな頭で必死に空間を歪め、脱出。

「あ……兎さん……」

「ふぅ……。ほれ、新しい兎さんだ……」

「わぁい……」

「おやすみ……」

宙を泳ぐヴィヴィオの手にメイデンを渡し、一件落着。

メイデンも何事も無かったかのようにすやすやと寝息をたて始めた。

元兎さん、カナンは顔を真っ赤にしてその場に倒れ込む。

「いつのまにこんなことに……」

未だ顔に残るヴィヴィオの胸の感触。

途端にボン、と爆発したかのように紅くなり、雑念を振り払うべく首を振る。

「心臓に悪い……」

「大変だったね？」

「えぇ、そりゃあもう……へ？　へ！？」

背後から響いた声にカナンは電光石火で振り返る。

そこには、久し振りに“良い笑顔”のなのはとフェイトがいた……。

「カナンがそういうことをしないっていうのは知ってるけど、もう少し、警戒心を持とうか？」

「いや、あの、フェイトさん？　今回のこれはですね？　俺の知らない間に起きた出来事でして……」

「うん。その辺りの話もじっくり聞かせてもらうし」

笑顔は、消えない。

なんかもう、今日は踏んだり蹴ったりだなぁ。ちくしょうめ……。

最早、半ば諦め気味に裁断の言葉を待つ。

もしかしたら、そんな期待を僅かに持って。

「「取り合えずお話しようか？」」

「ほら、やっぱりいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！」

まぁ、脆くも崩れ去ることとなったわけだが……。

こうして、ゆっくりと平和な一日が終わっていく。

約、一名を除いては。

Ｎｅｘｔ　Ｓｔａｇｅ……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

本当の意味で、ハルを仲間に加えて、カナン、ヴィヴィオ、祐希奈は歩み続ける。

例え、彼等が歩む道行く先には何も見えなくとも……。

「何だよ、それ……っ！　何で、何で、何で！　お前がっ！」

「僕もね、君達は、好きだったよ……？　だから、本当に悪いと思っているさ」

「ならっ！」

激動の中で、少年は信じていた告げられる、言葉と想い。

認めたくなくて、それでも、現実は……。

「良いことを教えてあげようか？　“あんなこと”になっているのは、誰のせいだと思うんだい？」

「そうかよ……。そういうことかよっ！！！！」

現実は、いつも、辛い真実を突き付ける……。

「我が、恐くはないのか、貴様は……」

「恐いよ。すっごく……」

少女は、一人の人間と合間見える。

数々の殺人を犯し、現魔導師において最凶を誇る男と。

それでも、逃げない。

何故ならば――

「相手が誰でも、どんな人でも、話もしないで最初から決めつけちゃったら、仲良くなんてなれっこないでしょ？」

「……滑稽だな」

「それでも、それが私だから、曲げないよ」

それが少女が決めた信念とも言えるものだから。

絶対に、曲げない。

「アンタは、私が、止める……」

もう一人の少女は悲しみの最前線へと突入する。

何度となく、ぶつかった。高めあった。一緒に、強くなった。

しかし、この戦いは、悲しみしか生まない。

「こんな形で、戦いたくなんてなかったけど、今だって、嫌で嫌で、逃げ出したいけど……」

逃げ出したい。

そう思いながらも、少女が選ぶのは荊の道。

例え、辛くても、悲しくても、傷ついても、逃げない。

「一番辛いのは、アンタだから……。友達が苦しんでるのに、私だけ逃げるなんて出来ない。だから、私が助け出す……」

荊の先に、求める安らぎがあるのなら、今がどんなに辛くとも、

少女は先を目指し、進む。

悪い夢だと教えるために。

「悪い夢は終わるから……。たかが夢で泣いてないで、何時もみたいに、ふぇ～って言って寝惚けてなさい。ちゃんとご飯の前には、

起こしたげるから……」

今は、戦おうと決めた……。

一人の男は、迷いの果てに何を選ぶのか……？

「強くなったな、ハル……」

「……チッ」

「道なら、示してやろうか……？」

真実は闇に呑まれ、不確かになっていく。
何が目的だったのか、誰が敵で、誰が味方か、それすら曖昧になる闇の中。

「ハル、ハル！！　逃げて……。逃げるですの！！」

「第三の選択肢も増えたぜ？」

示されるは幾筋かの選択肢。
しかし、そんなものは既に男にはない。

「生憎、後先考えないタイプなんでなぁ！！」

踏み出した先に、彼女がいるのなら、男は迷わずそこに進むと決めていた。
その歩みは惑うことなく。

「お前は、“どちらだ”？」

「意味わかんねぇこと言ってんじゃねぇぞ……」

定められし時は、狂う。

「光と闇、その――」

「黙れよ……。それ以上ほざけば、全員まとめてぶち殺す……」

狂った未来の先に、選ばれし子は、瞳に何を映すのか。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

メ「追加の後書きコーナー」

レ「ですよ♪」

ヴ「あむあむ♪」

タ「美味いか？」

ヴ「うん♪　とぉっても美味しい～♪」

タ「それでだな……」

ヴ「大丈夫。文句なしで合格だよ～♪」

タ「それは、良かった……」

ジ「説明しよう！」

カ「またいきなりだな！？」

ジ「カナ吉、細かいことを気にしていると……」

カ「ハゲんわ！！」

ジ「アリサ君に今話の映像を渡すよ？」

カ「ごめんなさい！！」

ジ「よろしいよろしい。では、説明に入ろうじゃないか。さて、何が合格なのか、それはだね、ＥＸ外伝で桃子君とケーキを作った場面があったろう？　そこでタカト君はヴィヴィオ君を審査員から外してしまったわけだ。このように、ＥＸの話なのだが、知っての通り、ヴィヴィオ君は大変な甘いもの好きだ。はずされたことが許せなかったんだろうね。それはもうお怒りでね。危うくタカト君を嫌いになりかけたわけだが、ロリの鏡である彼はなんとかヴィヴィオ君を繋ぎ止めようと甘いもので釣ろうと……」

―撃！―

ジ「ぶはっ！」

タ「くだらんことを言うと、殺すぞ……」

ヴ「タカトタカト～♪」

タ「む……？」

ヴ「あ～ん♪」

タ「……それはヴィヴィオのために作ったケーキだ。俺はいらん」

ヴ「一緒に食べたほうが美味しいよ～♪」

タ「しかし……」

ヴ「ね？　あ～ん♪」

タ「むぅ、では」

パク。

ジ「ふ、これをロリと言わずして何と言うんだい……」

―轟！―

タ「何か、言ったか？」

ジ「僕に構う前に、自分の心配をしたまえよ」

タ「……何？」

―轟！―

な「やっぱりタカト君って、“そっちの人”なのかなぁ……？」

タ「……何故、なのはが……？」

ト「さぁ、何故だろうね？」

タ「……貴様か、兄者……」

カ「あの～、いきなり出てきたトウヤさんとか、殺伐としてるタカトさんとか、いろいろツッコミたいとこは多々あるんですが～……」

タ・ト「……む？」

カ「無視されたなのは様が放送禁止した方が言い顔でレイジングハート構えてるんですけど……」

タ・ト「……何!?」

な「頭、冷やそうか……」

タ「待てなのは、これには事情があってだな!?」

ト「そうだとも。まずはこちらの言い分を聞くのが筋というものではないのかね!?」

な「……事情？」

ヴ「美味しかった♪　タカト～、大好き～♪」

―ピキリ―

タ「……終わった、な……」

ト「……中々、有意義な一時だったよ……」

カ「南無～」

タ「何を言っている……？」

カ「へ？」

ト「死なばもろとも、という言葉を知っているかね……？」

カ「いや、今使う言葉じゃ……」

タ「問答……！」

ト「無用……！」

カ「えー……」

な「お仕置き。なの♪」

ジ「うむ。可愛いね！！」

―滅！―

祐「向こうはケリついた見たいね～」

ニコォ♪

しー「ひっ！？」

祐「で、こっちはどんなのがいいかしら？」

ジ「説明しよう！！」

カ「まだ生きてたんかい！！」

メ「いや、マスターも大概だと思うが……」

ヴ「皆元気だね～」

レ「その表現もどうかと……」

ジ「説明しよう！！」

カ「流れは無視！？」

ジ「我らが祐希にゃんが何故キレているのか、それは、自分の胸がしーちゃんより１０センチ――」

―煌！―

カ「あ、あぁ……」

ジ「ビバ、ツンデレ……（ガクッ）」

祐「ごめ～ん♪　思わず手が滑って頭にエクスプロージョン撃っちゃった♪」

しー「滑るとかいう領域超越してるだろ！？」

祐「黙れ女男……」

しー「態度急変!?」

カ「いやまぁ、あんな画像祐希奈に見せたら――」

祐「てい♪」

―轟・撃!―

カ「ごふっ!!」

しー「カァァァナァァァアアアン!!!!!」

カナメ「3～!　2～!　1～!」

かんかんかんかーん!

カナメ「優勝は、一之瀬祐希奈さんで～す!」

ヴ「よくわかんないけど祐希ちゃん優勝おめでとう～♪」

メ「よくわからないが優勝おめでとう」

レ「おめでとうございます♪」

祐「おしゃぁぁあああ!!!!」

しー「いや、何がだよ!?」

祐「黙れ。牛……」

しー「そこまで言うか！？」

祐「あんまりぎゃーぎゃー騒ぐと、二期が決定したギャグバトルアニメの中にその姿のまま突っ込んで、ハラショーとか言われたあげく、これは伝説の聖〇だ……！　とか言われるように設定組み直して歴代最高のムッツリ主人公のお付きにするわよ！」

しー「待て！　わかる人にはわかるし、ていうか答えだし！　そもそも設定組み直し、て……」

祐「神に不可能はない！」

しー「これ以上ないくらい断言した！？」

祐「あぁ、ちなみに、僕は神だぞ？　とか言って人を洗濯ばさみやらトイレットペーパーだと思わせられる温いレベルの神じゃないわよ？」

メ「具体的には？」

祐「洗濯ばさみやトイレットペーパーそのものにする♪」

しー「は……？」

祐「アンタが見せ場の時を想定しましょうか」

しー『セレクト、カリヴァー！』

シオンが叫び、その身体の周囲に魔力が纏われる。

吹き荒れる風、それは全てシオンが巻き起こしたに他ならない！
光に包まれるシオン。

敵『なっ！？』

驚きに見開かれる敵の瞳。
無理もない。
ここまでの変化があるなどと予測出来ただろうか？　否、不可能である。
やがては、光が弾け、風が消し飛ぶ！

しー『いくぜ！』

敵『く、ぅ！』

―コロン……！―

そんな恐ろしい音を敵の耳は捉えた。
そこには、トイレットペーパーとなったシオンが転がって……。

しー『神覇ノ太刀、奥義……！』

しー「止めてくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

祐「やだ♪」

しー「頼むから、頼むから世界観を崩壊させないでください！！」

祐「さぁて、次は洗濯ばさみ編を……」

しー「やぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁめぇぇぇぇぇぇぇぇぇてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

ハ「さてさて、彼はどうなってしまうのか？　頑張れしーちゃん。負けるなしーちゃん。続く♪」

続かねぇ（笑）

完！

第二話　ただいま（前書き）

はい、みなさま明けましておめでとうございます。
今年初の投稿です。
いやぁ、暗い話じゃなくて良かったなと（笑）
感覚が空いているせいか、若干不調気味かもしれませんが、なんとか戻して見せます。
では最後に、皆様、今年もよろしくお願いいたします。
では、どぞ♪

第二話　ただいま

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「はい、では次はアウトフレーム、いけるです？」

「はい。やってみます……」

二人の女性の声が響く。

ここは、天津詩織の研究室、もとい、個人部屋だ。

研究室に間違われても仕方のない、なんだかよくわからない機器が多量にあるが、あくまで詩織の個室である。

そこでは、カナンのデバイス、レナスの調整が詩織によって行われていた。

専用の調整機械がいるため、本来は部屋で出来るようなものではないのだが何故か詩織の部屋にはソレがある……。

「♪～　あ、楽にして貰ってても大丈夫ですよ～♪」

「は、はい……」

慣れないのか、ポットの中ではレナスはカチンコチンに固まっていた。

それもその筈、生まれてこの方、フルメンテなど体験したこともないのだから。

「レナスさんは不思議な構造しています～。流石は古代ベルカ式のロストロギア。このデータを見てるだけで……じゅるり……」

「あ、天津さん!?　気を確かに!!」

「ハッ!!　すみません～」

「あはは……」

苦笑いをしながら、レナスは内心緊張していた。

ハルの知り合いとはいえ、知らない人物に自分の内部をさらけ出しているのだから無理もない。

とはいえ、やはりこの邸にいるだけのものは、ありますね……。

調整を受けながらレナスは確信していた。

やはり、白姫邸にいる人物に、普通の人間はいないのだと。

一番まともだと思っていた天津詩織でさえ、レナスの解析を始めた途端、不調な部分のデータを改編し、即座に修正していく。

古代ベルカのロストロギアなど、見たことも触ったこともないにも関わらず、だ。

詩織が本気を出せば、自分など、そう思い。

「……私が怖いですか？」

レナスが思うと同時に、コンソールの手を止めて、微笑みながら詩織はレナスに視線を向けた。

何故、わかったのか、レナスは詩織を警戒する。

「い、いえ、そんなことは――」

「今のレナスさんは、嘘ついてもバレバレですぅ」

そう言って、詩織はコンソールを操作すると、何かの波形をレナスに見せた。

「これは、深い思考なんかに入り込んだ時のレナスさんの脳波、とでも言えばいいんでしょうか？　ちなみに今は臨戦態勢ってとこです？」

「あ、いえ……、すみません……」

「いいのです」

詩織は再びコンソールに指を踊らせ、調整を再開する。

慈愛にも似た笑みを浮かべながら……。

「実際、昔の私はそう思われても仕方のない事をしてきたわけですし……」

「え……？」

まるで、懐かしいとでも言わんばかりに、詩織の視線が虚空に向かい、意識は宙に浮いた。

「私はですね、昔はハッカーだったわけですよ。生きていくために必要だったとはいえ、悪事も働きました。レナスさんみたいなデバイスさんの、命も奪い去った人間です……」

デバイス、とは機械。

心があるインテリジェントデバイスとはいえ所詮は人の道具のために使われる。

その人に使われるための道具が人に壊せない筈はない。

プログラムによって作動するのなら、プログラムを破壊し、無茶苦茶にしてしまえば作動しなくなるわけだ。
簡単に説明すれば、ハッカーというのはそういったプログラムを弄るスペシャリスト。
言わば、デバイスの天敵とも言えるかもしれない。

「たくさん悪いことをしました。たくさんのデバイスさんの命を奪いました。全て、この手が、この私が、やったことです……」

「天津、さん……」

触れてはいけない部分に触れてしまったとレナスは後悔する。
が、詩織の表情は笑みに変わっていた……。
自信に満ちた、笑みに。

「だからこそ、です。だからこそ、私は、デバイスさんを助けるのです。それで、罪が消えるなんて思ってはいないですけど、絶対に、直します」

「……お願いしますね」

「はい！」

真剣なその言葉に、レナスはもう、疑いの心を消していた。
信頼に値する人物だと、思えたから。

「ここで修行を積んで、いつか、ミッドでお店を開いて、スクラップになるデバイスさんをゼロにするのが、私の夢です！」

「素敵な夢、ですね」

「ありがとうございますぅ♪」

「さぁて～」っと、スパートに入ろうとしたのか、大きく息を吸い込んだ詩織。

レナスももう、全てを彼女に委ねるつもりで笑い。

「詩織、様！！！！」

叫びながら詩織の部屋に駆け込んできた“男”

「あ、千春さんみたいですね」

“いつも通り”にレナスが微笑みながら詩織に伝える。

が、それはおかしい。

「ち、千春、さん、ですか！？」

「はい！　この度は真に申し訳ないことを……あ……すみません！！！」

突如、ハルが凄まじい勢いで頭を下げた。

何か、悪いことでもしたかのように、だ。

うっすらとその頬は紅い。

「……千春さん？」

「……」

「……見たのです？」

「……はい」

ハルの返事を聞いたかと思うと、詩織は反転、何やらごそごそと引き出しをあさり、取り出したのは一枚のメモリ。

「昔に隠し撮った夾さんと千春さんの思い出がたくさん詰まったメモリです。静瑠様に渡してきます……」

ツカツカの持ち場を離れ、いつものおっとりした歩みはどこへやら、速足で進んでいく。

「……詩織様!?　そんなものをいつ撮ったのですか!?」

しばらくして自分の危うさに気づいたのか、ハルが詩織を追いかけて部屋から去った。

そんな二人にレナスは苦笑しながら。

「しかし、何故急にこんなことに……？」

首をかしげ、深く考えてみたが理由はわからない。

考えられる限り、詩織はハルに対して怒ってはいたが、自分が何かされたというよりは、レナスのために怒ったという様子。

ハルは、何か見てはいけないものを見たのか、全力で視線を逸らした。

「何か、複雑な想いが交差しているのでしょうね」

という風に勝手に結論付けてレナスは納得する。

ちなみに全くそんなことはないわけだが。

何故か、そんなものがわからないのは、メイデンとレナス程度のモノだろう。
ヒントを言うと、レナスはメンテのために調整機械の中に入っている、ということ。
また、レナスとメイデンぐらい、というのもヒントの一つ。
劇中のリインフォースツヴァイを思い出して貰えれば、すぐに答えにたどり着く。
ここでは省くが、つまりは、そういうことなのであった。
その後、ハルと夾の生活を盗撮したメモリが静瑠に届けられたかどうかは、定かではない。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ふぅ……」

先の出来事から一日が過ぎた午前４時、秋も終盤、未だ太陽も見えぬ闇の中、静かに響いた吐息の音。
ゆっくりと深呼吸、秋から冬へと変わりつつある冷たい空気を肺一杯に取り込んで、少年、カナンは光に包まれる。
闇空を見上げるカナン、その姿はすでに漆黒の鎧を纏う。

「マスター、平気なのか？」

「風邪のことなら平気だ。誰のお陰とは言わないけど、思いっきり寝たからな……」

若干、遠い目をしながらカナンはメイデンへと返答する。
カナンの脳からは、昨日、夕方頃からの記憶が飛んでいた。
何故だか、夕方から現在までカナンは一度として起きなかった。
正確には眠らされたが正しいかもしれない。
確かに起きたはずの自分を待っていたのは、恐ろしい笑みと二人

の女性。
そこから先は自己防衛本能が記憶を消したのだ。
「マスター……」
「頼むから哀れみの目を俺に向けんでください……」
「大丈夫だ。断片的にしか私はみなかったが、マスターは奮戦していた！」
それのどこが大丈夫なんだか……
あたふたしておかしなことを言うメイデンにカナンは内心そう思う。
なんとなく自分がどうなっていたのかはわかったが、メイデンが必死にフォローしようとする姿を可愛く思ったカナンは微笑を浮かべたまま指先でメイデンを撫でる。
「ん……マスター、本当だぞ？　マスターは頑張っていて、それで……」
「わかったよ。お前がそう言ってんなら俺は頑張ってたんだろ」
「ああ。だから、だから、その……」
「その？」
「奮戦、していたんだ……」
他に励ましの言葉がみつからなったのか、シュンとするメイデン。
傍目から見ても落ち込んでいるメイデンにカナンは微笑から苦笑

へと変わる。
元々、カナンが悪いために起きた事柄であり、メイデンが気にする必要などないのだから。

「お前は、ホントに俺なんかにはもったいないよ。俺みたいなガサツな奴より、他の奴のとこ行ったほうが良かったんじゃないか？」

「？　……マスターは私が嫌いになったのか……？」

「なんでそうなるかなぁ」

苦笑を崩さないままカナンはメイデンを撫でる指先に力を込める。
髪型が崩れ、跳ねたりもしたが、カナンは構わない。

「うぅ、ま、マスタ～、痛い……」

「バァカ、俺がお前を嫌いになるわけないだろ？」

「わ、私だってマスターを嫌いになどならん！」

「お前の話だっつのに……」

「まぁいいや」と一言。
カナンを中心に結界が発動、小山を多い尽くす。

「メイデン、危なかったら止めてくれ。全力で殴っていいから」

「ああ……」

瞬間、カナンの纏う雰囲気が変わる。

錆びた刃が、鋭利な刃へと、時間を刻む毎に研ぎ澄まされていく……。

ゆっくりと瞳を閉じて、左手を右腰の剣の柄へ。

「フゥゥ……」

吐息が漏れる、同時に風が巻き起こり、草木を揺らす……。

始めは、そよ風程度のモノだった。

しかし、風は徐々に強く、やがては嵐の如く草木は身体をしならせる。

軋み、耐えきれなくなった木々が倒れ、吹き飛ぶ！

カナンにも変化が訪れていた。

首までしたない筈のカナンの髪が背中にまで到達、風に煽られて生き物のように蠢く……

「オーバー……ドライブ……ッ！」

ギンと開かれた紅蓮の瞳。

瞬間に発せられるは突風にも等しき暴虐の風！

地割れを起こし、木々を根本からへし折って、天空の雲には風穴を広げる。

「は、ァァァ、ァァ……」

「っ！」

メイデンが息を飲む。

カナンから発せられ始めた痛いほどの殺気、展開した結界が歪み、軋みを上げる。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

「マスター！」

天に向かってカナンが吠え、重力が何倍にも増したかのように身体が重くなる。

止めなければ！

そう思い、動こうとして。

「チッ……」

歯を食い縛りながら、カナンが小さく舌打ちをする。

直後、地震は止まり、風が止み、結界は安定、カナンの髪も短髪に戻り、何事もなかったように静まり返る……。

「マスター……。大丈夫、なのか？」

「ま、一応な……」

問いに対し、カナンは歯切れの悪い返事を返す。

沈黙が二人を包む。

そんなカナンの様子に訊ねようか、訊ねまいか、悩んで。

「メイデン」

「ふぁ！？　な、なな、なんだマスター！？」

「ははは！　何、焦ってんだよ？」

不意を突かれ、声が裏返ったメイデンをカナンはカラカラと笑った。
カナンが沈んでいないことに安堵するが、同時に笑われたことにムッとする。
「マスターが落ち込んでいないか考えている時に話しかけるから…。そんなに笑わなくても、いいじゃないか……」
「悪い悪い。謝るから、な？」
「全く……」
溜め息混じりにメイデンはカナンを許すことにした。
カナンはその気配を感じたのか、笑みに戻る。
「落ち込んでる暇があったら鍛練しないとな」
「ああ。だが、次は段階式でいってもらうぞ？」
「おう」
「素直なのは良いことだな」
朝陽も照らさぬ闇の中、微笑む二人の姿が重なり、小さな金色の光が海鳴市へと輝いた……
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
先の出来事から二時間後の午前６時。
「くぁ……」

ムクリとベッドから銀髪の少女、祐希奈が起き出した。
ボーッとしたのも十秒程。寒気をものともせずベッドから這い出る。
彼女は朝御飯という役割があるために、そうそうゆっくりもしていられない。
炊事、洗濯、勉強、運動、非の打ち所のないヴィヴィオも朝だけは頼りにならない。
ヴィヴィオは超がつくほど朝が苦手なためだ。
このような理由からほとんどの場合、一之瀬家では朝食は祐希奈が担当している。

「アシェル、フェアリーも、おはよ」
『おはようございます、祐希奈』
『はい。おはようございます』

傍らに置いてあった二つのデバイスの内、銀の翼を模したアシェルを首にかけ、階段を駆け降り。

「よっ」
『はしたないですよ?』
「誰も見てないわよ♪」

最後の四段を飛び降り、音無く着地、盛大にパジャマがめくれ、お腹が見えたが家庭内では祐希奈は気にしない。

「ん〜〜」

洗面台へ向かい、若干跳ねた髪を手櫛で直し、洗顔、歯磨きを丁寧に行う。

『そういえば祐希奈』
「？　ふぁふぃ？」
『すすいでから話します……』
「ふぁいふぁい」

歯磨きをしながら話すという女の子らしからぬ行動はさすがに許されず、仕方なく祐希奈は口をすすぐ。

「で？」
『カナン君が、鍛練のために出るから、祐希奈が起きたらありがとうと伝えてくれと言われました』
「いないと思ったらそのせいか……」

薄々気づいてはいたが、カナンがいないという事実に祐希奈は少し残念に思う。
ヴィヴィオとは同じ家に住んでいるが、カナンは幼馴染みとはいえたまにしか遊びにこない。

「朝御飯くらい、食べてけばいいのに……」

つまり、料理を食べてもらえるのはそのたまの時しかない。
しかし、カナンはもういなくなっている。

『祐希奈、そう気を落とさずに、ね？』
「別に～。アイツの分を買い足した分が溜まるなって思ってただけよ」
『ですから――』
「ほら、話は終わり。朝御飯作らないといけないんだから」

そう切り捨てて、祐希奈は台所へと向かう。
そこには、万端の下ごしらえを終えた米と、味噌汁、冷蔵庫の中にはわざわざ買った鮮度の高い鮭がある。
朝は和食。
一之瀬家ではなんとなくそう決まっていた。

「朝御飯は捻ったものはいらないから、一日を頑張れるように、栄養がいくものを食べる……」
『祐希奈……』

その影には、幼いながらに祐希奈が覚えた、数少ない母の言葉の影響がある。
朝食の数は、“四人分”
一之瀬家では、雅樹、祐希奈、ヴィヴィオの三人しかいない。
残る一つは、カナンの分だ。

「アイツ、朝御飯も食べなくて、平気かな……」
『平気ではないでしょうね。成長期ですし、食欲旺盛な筈です。ですから――』
「……ヴィヴィオ起こしてくるわ」
『祐希奈！』

目に見えて肩を落とし、祐希奈は味噌汁を完成させ、炊飯器のスイッチを入れ、台所を後にする。
アシェルは怒ったように声を荒げたが、祐希奈は聞く耳を持たない。

「ただいま～。はぁ～、寒いし、何より腹減った……」

「あぁ、早く朝御飯が食べたいものだな」

「……は？」

だが、突如として開いた戸に、響いた声に、固まる。

「あ、ただいま。流石に早ぇな」

「祐希奈、おはよう」

「は？　え？　え？」

「「どうした？」」

今まで祐希奈が何故落ち込んでいたのかも知らない二人は笑顔で挨拶。

そんな二人に祐希奈は状況を掴めずあたふた。

「アシェル……」

『私は言おうとしましたよ？　カナン君は鍛練が終わったら帰ると言っていましたよ、と』

「早く言いなさいよ！？」

『話を聞かなかったのは貴女でしょう……』

ようやく状況を把握した祐希奈は「はぁぁぁ」と溜め息を一つし、ガクリと肩を落とす。

「落ち込んで損した……」

「な、なんか知らねぇけど、元気出せよ。な？」

「はぁー？」

瞬間、空気が凍る……。

おおよそ女の子らしくない声を上げながら祐希奈がカナンをキロリ、否、ギロリと睨む。

「元はと言えば、アンタのせいでしょうが……」

ドスの効いた声を響かせ、視線を一点に。

祐希奈が一歩を踏み出すごとに、カナンとメイデンはビクリと震える。

「ま、まま、マスター！　謝れ！」

「俺！？　何もし――すんませんしたぁぁぁぁ！！！！」

弁解などしている場合ではないと悟ったのか、カナンはプライドを投げ捨て土下座する！

それはもう、見事なまでの土下座であった。

「ったく、朝御飯食べてくれればいいわよ」

「……へ？」

この世の見納めかと、そんな風にすら考えていたカナンは、拍子抜けする。

恐る恐る顔を上げると、笑顔の祐希奈。

「お、おう！　ありがたく食べさせてもらうな！」

祐希奈につられてカナンも笑みを浮かべて――

「じゃあ、十発、ううん、取り合えず十億発ね♪」

「……何ですと？」

「い～ち♪」

「がぁっ！？」

――瞬間、視界が明滅する。

見事なまでの正拳がカナンの顔面に炸裂していた。

わけがわからぬまま吹き飛ぶカナンを空中で襟を掴み、祐希奈は引き寄せる。

「十億発も打ったら死にますよ！？」

「知るかボケ♪」

「ごふっ！！」

「マスタァァァー！！！！！」

二発目の拳がカナンの顔面へと炸裂する。

まぁ、一撃目で昏倒しないだけでも流石ではあるが。

「ふぁ……。祐希ちゃん朝から何をしてる――わぁぁ！？　カナン君！？」

「あ、ヴィヴィオ、おはよ♪」

「おはよう……」

「あ、うん。おはよー♪」

挨拶を返している場合ではないのだが、ヴィヴィオにそんな常識は通用しない。

にこやかに挨拶を返した後、のほほんと着火……。

「なな、何してるの！？」

「「ツッコミ遅いわ！」」

「ふぇぇぇぇ！？」

何故か、やられている側のカナンにすら突っ込まれ、ヴィヴィオが焦る。

「よし♪　続き続き♪」

「まだやる気かお前は！？」

再度構え直す祐希奈にカナンは問い掛け、祐希奈は思考を光よりも早く終了。

「もちのロンよ♪」

「もう少し考えてもらえません！？」

「うん♪　却下♪」

凄まじく明るく可愛らしい笑みで中指をカナンに向けて、上げた……。

つまり、死ね。という意味である。

間違っても女の子が使うような仕草ではないが、祐希奈は気にしない。

しかし、流石に可哀想なのか、ヴィヴィオがカナンを助けるために割り込み。

「ゆ、祐希ちゃん、ダメだよ。カナン君が痛いし……」

「じゃ、痛くないように殴る♪」

「あ、それならいいかな」

「納得すんなぁぁぁあああああああ！！！！」

即座に説得される。

以前にも言ったかもしれないが、ヴィヴィオが祐希奈に口論で勝つことは、例外を除き、ほぼ有り得ない。

「それじゃあ遠慮なく♪」

「ちょま！！」

「優しくしないと怒るよ～？」

朝からにぎやかな声が一之瀬家に響き渡る。

風邪の時であってもある程度は賑やかであった三人。

しかし、万全となった時はそれを遥かに凌ぐ。

これがこの三人の普通。楽しく過ごせるライン。

「烈破♪」

「祐希ちゃぁぁぁぁぁぁぁぁあああああん！？！？」

「やめろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

まぁ、たまには、少々行きすぎる場合もあるが……。

とにもかくにも、三人の日常はもう一度始まったと言える。▼▼

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「学校、楽しみだね～♪」

「また勉強の日々とかめんどいだけじゃない……」

「お勉強、楽しいよ？」

「そう思えるヴィヴィオは凄いわね……」

他愛もない会話をしながらヴィヴィオと祐希奈は久しぶりとなる登校路を歩く。

三人は、グラースの襲撃から学校に行っていないため、実質一週間以上も学校を休んでいることになる。

祐希奈の父親、雅樹は校長なため、教師陣には多少の融通は効くが、成績面には大きく響く。

特に、英語以外は赤点ギリギリな祐希奈は死活問題。憂うつにもなろうというものだった。

「ヴィヴィオ、勉強教えてくれる？」

「もちろん。一緒に頑張ろ！」

「持つべきものは友ね。じゃあ、早速宿題を写させて♪」

「ダメ。教えてはあげるけど、それは自分でやらなきゃ、ね？」

「くぅ！！！」

ヴィヴィオの答えに祐希奈は唇を噛む。
世の中そんなに甘くはない。
そこに「ははは」と、渇いた笑い声が響く。
振り替えると、焼いた食パンを加えたカナンがいた。
学ランに着替えに帰る際、焼いてきたのだ。

「ま、協力はしてくれるって言ってるんだし、頑張れ」

「随分余裕じゃない……。言っとくけど、アンタも溜まった宿題はあるのよ？」

「あぁ、そうだろうな。めんどいめんどい。あむ……」

口ではそういいつつ、余裕綽々でモシャモシャとトーストを食べているカナン。
そう、カナンはバカでヘタレではあるが、阿呆ではない。
順位で言うなら上の下、上の中程度の成績。
宿題程度は片手間で出来てしまう程に頭はいい。

「カナン君、お行儀悪いよ？　それに、朝御飯あんなに食べたのに……」

「ん、あぁ、悪い。最近やったら腹減ってな～」

「あ、飴ならあるから、休み時間にあげるね」

「お？　サンキュ♪」

ニコニコと笑いながら二人は並んで歩き始める。
その後ろでは、祐希奈が暗い笑みを浮かべていた……。

「ふふふ……」

「えと、祐希ちゃんも飴、欲しいの？」

「いや、ヴィヴィオ、違うから……」

「？」

ヴィヴィオの天然を軽く受け流しつつ、カナンは苦笑い。
あまりにも、宿題を気にする祐希奈が可笑しくて。

「何よ……？」

「そんな落ち込まなくたって、お前がわかるまで教えてやるよ。なぁ、ヴィヴィオ？」

「？　宿題の話？　元からそのつもりだったけど、どうしたの？」

当たり前のことのように二人は言った。
余りにもあっさりと言ったせいか、祐希奈はキョトンとして。

そんな祐希奈を見て、二人は可笑しそうに笑う。

「何……」

「「ん？」」

何故か笑われる、それがなんだか、悔しくて。

祐希奈の闘志に火が灯る。

「何、笑ってんのよ。アンタ達はぁ！」

「あはは。祐希ちゃん怖～い♪」

「さて、逃げるか！」

「待て、こらぁぁあああああ！！！！！」

駆けていく。

カナン、ヴィヴィオ、祐希奈の三人が、全速力で。

その道は登校路。

三人以外にも歩いている学生はたくさんいる。

当然、視線は集まるが、三人は速度を緩めない。

「お♪」

「あ、皆さん」

「なんか面白そう！　神楽ちゃん、いこ！」

「え、あ、はい！」

そこに、美鈴が加わり、神楽も加わる。
五人は駆けていく、息を切らして、何故か笑いながら、校門へと到着。

「な、なんで走ってんだっけ、俺ら……」

「わ、忘れたわ……」

「いやぁ、朝から青春だね～」

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……疲れました……」

秋も終わりに近づき、寒さが増しているにも関わらず、四人は汗をかき、校門にもたれ掛かって息を整える。
そんな中、ただ一人ピンピンしているヴィヴィオは、大きく伸びをして。

「ただいまーーー！！！！！」

満面の笑みで空に向かってそう言った。
その大きな声に四人は目を見開くが、笑い直して。

「「ただいまーーー！！！！！」」

カナンが、祐希奈が叫び。

「おっかえりー！」

「おかえりなさい！」

美鈴が、神楽が続く。
走っていた時とは比べ物ならない注目される。
当たり前だ。
ここは、校門なのだから。

「わわ……恥ずかしいや……」

「で、ですね……」

「「「今さら!?」」」

まさに今更の如く紅くなる二人に三人が鋭くツッコむ。
取り合えず、教室に行こうと、カナンが言い出したのをきっかけに5人は頷き、歩き出す

「全く、朝から元気ですわね……」

「まぁ、カナン達だから。許してあげよう?」

「でも、こんなことしててもいいんですか? “アイツ”も“俺”も“貴女達”も、立場が立場ですし……」

「そこはまぁ、“レジェンドオブパシり”の腕の見せ所ですわね」

「あははは……」

そんな五人を、校舎の中から見つめる人影があった。
それを五人が知るのはもう少し後の話……。

Ｎｅｘｔ　Ｓｔａｇｅ……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一同「新年、明けましておめでとうございま～す！」

祐「だにゃん♪」

うぉあああああああ！！！　祐希にゃぁあああああああああん！！！！！

祐「さん、はい♪」

ゆっきーにゃん！　ゆっきーにゃん！　ゆっきーにゃん！　ゆっきーにゃん！　わぁぁあああああああああ！

祐「オーケーオーケー♪　アンタ達の想いは受け取ったわ♪」

カ「新年からやかましい奴ら……っていうかそいつら誰よ……」

ヴ「設定によると、ＫＤＧ軍団の想いの欠片らしいよ？」

カ「怖いわ！！！！　っていうかその事実を平然と言うヴィヴィオも怖いわ！！！」

ヴ「えへへ♪」

カ「誉めてないですよ！？　何照れてんですかヴィヴィオさん！？」

祐「ほっ」

バキャァアアアアア！！！

カ「えーー……」

ハ「いやぁ、新年初蹴りですね♪」

ク「おめでたいですの～♪」

カ「どこがだよ！」

メ「相変わらず見事な復帰力だな、マスター」

レ「流石です♪」

カ「嬉しくねぇやい！」

祐「まぁ、このバカは置いといて」

ハ「いやぁ、新年初スルーですね♪」

ク「おめでたいですの～♪」

カ「お前ら絶対楽しんでるだろ……」

ヴ「まぁまぁ、カナン君も年明けから飛ばしすぎないで、ね？」

カ「あ、あぁ。そうだな」

ジ「飛ばされてるの間違いだがね！　はっはっは！　上手い。座布

団一枚をくれたまえよ！」

巫女夾「帰れ……」

ドゴォ！

ジ「ごばっ！？　袴に下着はご法度なのだよ！？」

巫女夾「んなもん知るかド阿呆！！　死ね！！　除夜の鐘の如く死ね！！！」

振り替えれば～♪　そこに～♪　カナメちゃん♪

巫女カナメ「間違っても、巫女さんにそんなこと聞いちゃダメですよ♪」

カ「何着とんじゃゴラァァァァァァァァァ！！！！」

ヴ「わぁ、カナちゃん可愛い♪」

巫女カ「ふふ。除霊しまくっちゃいますよ♪」

ジ「がふ、がふ……。ヴィヴィオ君、祐希にゃん……是非、君も、巫女服、を……」

巫女夾「あぁ……？」

ゴシャァァアア！！！

ジ「祐希にゃん、君は恥ずかしがってるのかもしれないが、君にな

ら、僕は、除霊されても、構わない……！」

祐「あ、私、滅却しちゃうから無理♪」

カ「凄い断り方だな！？」

メ「さて、勢いはいいが、どう終わったものか……」

レ「質問に答えてられる雰囲気でもないですしねぇ……」

祐希にゃん！

祐「オーケー。アンタ達の想いはわかったわ！」

カ「今ので！？」

ヴ「ここでの祐希ちゃんに常識を求めちゃダメなんだと思うよ？」

カ「ヴィヴィオが違う方でなんか悟ってる！？　というかこれは天然！？」

ヴ「ふぇ？」

カ「天然か！！！！」

巫女カナメ「やかましいですよ風間君♪　変質者に間違われてもしりませんよ？」

カ「風間君言うな！！　そして確実に俺よりお前のが変質者だド阿呆！」

祐「ホントにうるさい♪」

バキャァアアアアアア！

カ「俺、悪くなくね！？」

ヴ「わわ、手当てしなくちゃ！！」

祐「で、アンタ達の言いたいことはこうよね」

おう！

祐「新年早々手ぇ抜いてんじゃねぇぞこんにゃろうがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

まさかの僕か！？

祐「そうよ。他の作者さんは新年ネタ絞りだしてるってのに、アンタは何？　オマケだけなわけ？」

いや、しかし、感想の返信すら追い付いていないのに、外伝なんてしてる暇は……。

祐「はぁ？　アンタが血ヘド吐いてでも書きゃあ良い話でしょーが！」

血ヘドて……。

祐「取り合えず、さっさと返信返してなんかやれ！」

アイ、サー！

祐「ふぅ……だにゃん♪」

カ「今更可愛く言っても！」

ジ・ト「許す！」

カ「またか！　そのネタ二回目だぞ！？　そしてトウヤさんどっからアンタは現れたぁぁぁぁ！？」

ジ「ふ、可愛い子在る所我らあり、さ……」

巫女夾「全、然、かっこよくねぇよ！！」

ドゴォ！

ジ「ヴィヴィオ君、可愛いよ……♪」

ヴ「ふぇぇぇ！？　あ、ありがとうございます！？」

ジ「うむ♪　眼福♪」

カ・夾「シネェェェェェェェェ！」

祐「ついでに参加～♪」

―撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃―

ジ「その身体は、無限のエロで……」

カ・夾「汚すなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

祐「ていてい♪」

―滅！―

祐「ヴィヴィオもゴーよ♪」

ヴ「ふぇ？　うん」

フ『Distraction Braker！』

―破！！！！―

ジ「……」

ハ「いやぁ、初日の出ですね～♪」

ク「おめでたいですの～♪」

取り合えず完！

第三話　依頼（前書き）

さてさてまた遅くなりましてもうしわけありません。
あまり期間をあけると書けないとはわかってはいるのですが、忙しくて（涙）
さっさと内定もらいたいとこなんですが。
ネタもなく、道場すらかけませんでした。
楽しみにしてたかたにはもうしわけないです。
取り合えず、どぞ

第三話　依頼

校門で壮大に叫び、全員の視線を集めながら登校した、ヴィヴィオ、カナン、祐希奈、美鈴、神楽の五人。
当然、クラスに帰ってからも注目の的。

「ヴィヴィオちゃんが一番最初なんだって？」

「案外大胆なことするんだな。びっくりだぜ」

「ふぇ！？　あの、えとね？」

一週間以上ぶりの登校にも関わらず、触れられずにいることはラッキーなのかもしれないが、取り囲んでの質問の雨に、これはこれで一同は参っていた。

「風間、なんであんなことしたんだ？」

「バカだもんな？　でもな？　目立ちたいからってそれはいけねぇよ。いけねぇな？」

「うるっせぇ！　気分だ気分！」

混乱するヴィヴィオの横ではカナンがやや苛立ち気味に怒鳴り散らす。
いくら彼とはいえ朝っぱらから質問攻めは苦らしい。
掻き分けて進んで行くが、カナンの言葉は飛び火する。

「気分って、ヴィヴィオちゃんも？」

「風間がけしかけたんだろ？」

「ヴィヴィオちゃんもこのバカに従うことないのに～」

「ふぇ！？　ふぇ！？　ふぇぇぇ！？」

四面楚歌もいい状態となり、ヴィヴィオの脳は処理を越え、グルグルと回り始める。

その様子にカナンは足を止めて助けようと振り替えるが、待ち受けるは人、人、人。

「だいたいお前復帰早々女の子と登校とかすんなよ！」

「見せつけてんのか？」

「やだ～。風間君、そんな趣味が？」

「だーもう！　なんだって良いだろ！　いい加減に――」

囃し立てる声に本気で苛立ってきたカナンは勢いのままヴィヴィオの元へ進もうとして。

「てい♪」

「うごほぉぁ！」

《ぐぁぁあああ！》

ピョンと一飛び、スカートをはためかせながら美鈴がカナンの後頭部を飛び蹴り。
狙い済ましたかのように男子生徒数人のみを巻き込み、カナンは吹っ飛び、山の下に埋まる。

「ほらほら、そろそろ止めないと、雷が落ちるよ？　ああなりたくなければ止めなさい♪」

「カナン君、無事ですか～？」

ビシリと美鈴が指差した先には生徒の山に埋もれ、ピクピクと痙攣した手を出すカナンと、ツンツンとその指をつつく神楽。
ゾッとしたのか、質問は止まったが、勇気あるバカはいるときはいるもので――
まぁ、シンデレラの一件からわかるように、このクラスは基本バカの塊クラスだが。
一歩を踏み出す。

「ちょっとくらい、二股生活の真髄というものを聞きたいんだ！！！！！」

握り拳を握って男らしく、一息にヴィヴィオに叫ぶが、発言自体はただのバカである。
ここまでくるとわざとだとわかりそうなものだが。

「ふぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

「ヴィヴィオちゃん、ナイス反応！　可愛い。可愛いよ！」

「美鈴ちゃん……」

「いや～、天然いいね♪　ヴィヴィオちゃん万歳♪」

わからないのがヴィヴィオの凄い所だ。
冗談が通じないのがヴィヴィオという少女。
それは、弄ることを楽しむ者には至高の逸材。
絶叫するヴィヴィオの後ろでサムズアップをする美鈴に神楽が冷ややかな視線を送っていたが、本人はどこ吹く風。

《くふふ……》

「えぐ、えぐ……」

今や、半泣きのヴィヴィオは格好の獲物。
弄ることを楽しむ輩の目が、光った……。気がした

「アンタ達さ～？」

抑揚の無い声が小さく、しかし、確実に全員の耳に届く。
刹那、ダァン！　と、床が陥没しそうな程の激音を響かせて君臨する。
そう、このクラスの女王が！

「その娘？　困ってるのわかんないわけ……？」

サァァっと波が退くように熱が冷めていく。
全員の視線の先には、教壇の上に仁王立ちをする、少女。

「祐希、ちゃん……」

「ヴィヴィオ、もう大丈夫よ」

ニコリと笑った祐希奈に、感動を覚えたヴィヴィオは思わず走り出して。

「よく覚えときなさい！　この世界でヴィヴィオを弄っていいのは私だけなのよ！」

《ははっ！》

「ふぇえええええええええええええええええええええええええええええええ！！！！？？？」

今年最大級の「ふぇえぇ」を響かせたのだった。

「祐っ希～奈！　祐っ希～奈！」

「悪くないわね♪」

「阿呆だ……」

何故か勝ち誇った顔の祐希奈と、それを称賛するクラスメイト。

ただのノリだが、ここまでになると感服する。

たった一人、祐希奈コールの輪の中から抜け出し、カナンのみが冷静にツッコミを入れていたという。

余談だが、この祐希奈コールは担任が祐希奈を注意するまで続いていた。

だが、全員から凄まじい形相で睨まれたのは言うまでもない事実である。▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

朝の一件を終えて、普段通りのざわつきに戻った教室。
出席をとりながら、半ば諦めたように「静かにしましょう」と声を発する北里先生。
それでも静かになることもない教室。
“普段なら”
「今日は臨時の教員さん達が“また”来てくださっています！」
《また？》
やけに“また”の部分を強調した北里教師。
雰囲気からして余り歓迎していないのがわかる。
当たり前だ。
自分のクラスに臨時の教員を入れると言うことは、臨時の教員が働いた分、自分の給料からマイナスされていく。
しかも、“二度目”ともなれば尚更だった。
「マジか……」
「わぁ……」
「ふ～ん……」
余りの事実に視線が固まるカナン、驚きに口に手を当てるヴィヴィオ、腕を組み、目を細める祐希奈。
そろそろ何か手を打ってもおかしくはないと思っていたが、予想外。
「海城・グランチェスタ・凛。今日からしばらくの間、よろしくお願いしますわ」

「皆とは二度目だね。覚えててくれるかな？　フェイト・テスタロッサ・ハラオウンです」

この二名が入ってきた途端、水を打ったように静かになる教室だったが、それは、嵐の前の静けさと知る。

《フェイトさんだぁぁぁあああああああ！！！？》

《もう一人もきれいな人だぞぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！》

狂ったように叫び、歓声を上げるカナンを除く男子陣。
それを見つめるのは女子陣の冷たい視線。
しかし、最高ボルテージに達した男子陣は気にしない。

「アホくせ……」

ただ一人、男子陣ではそんなことはどうでもよく、これからどう平和に学校生活送るかを静かに考えるカナンは周りの女子陣からはそれは格好よく見えたそうな。
その視線にはカナンは気づかないが、少女二人はやはり敏感なもので。

「……」

「おごっ！」

無言のまま祐希奈はカナンの後頭部を殴り、机へとカナンを叩きつける。

「何すんだよ！？」

「ふん！」

「カナン君だもん。許してあげよう？　ね？」

「何を！？」

自分のわからない次元の二人の会話に原因を探そうにもそれが見当もつかない。

俺は何をしたんだ！？

いきなり不機嫌になった祐希奈と、わけがわからないフォローをしているヴィヴィオ。

何、何、何が起きた！？

「美鈴！　俺何かしたか！？」

「はぁ～あ」

やれやれ、そう言わんばかりに美鈴は肩を竦めて苦笑い。

「わからないかなぁ、カナン君は？」

「だから何を！？」

「相変わらず罪な男だね」

「はぁ！？」

「ここで一句、古池や、カナン飛び込む、水の音。橘美鈴。うん♪
座蒲団一枚♪」

「意味わかんねぇし、いろいろ混ざってるし、飛び込んだの俺になってるし、何より今なんも関係ねぇだろうがぁぁああ！」

「うん♪　だってカナン君のツッコミ聞きたかっただけだからね♪」

「がぁぁあああ！！！！」

全く教える気のない美鈴にカナンは髪をかきむしる。
そしてそのまま力を無くして机にへたりこんだ。
考えることを放棄したのだ。
結局、カナンをそのままに一時限目のチャイムは鳴り響く。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

キーンコーンカーンコーン。
午前の科目の終了のチャイムが鳴り響く。
数学の担当となっていた凛は時計を見ると、フムと頷く。

「まぁ、キリは悪いですが、終わりにしますわ。各自、この問題を次の授業までに解いて提出、忘れた方は職員室まで来なさいな。お話をしてさしあげますわ」

「きりーつ！　気を付けー！　礼！」

《ありがとうございました！》

「着席！」

学級委員が号令をかけ、凛が疲れを感じさせぬ姿で教室を後にする。

《終わったぁ……》

と同時、ほとんどの生徒が崩れ落ちるように机に突っ伏した。

この中には、祐希奈に加え、カナンも含まれている。

つまり、クラスの三分の二以上の数が凛の授業に疲れを感じていたのだ。

「カナン君、祐希ちゃん、大丈夫？」

「大丈夫じゃないわよ……」

「祐希奈に同じ……」

数少ない生還者であるヴィヴィオは二人の様子に水筒を取り出して、紙コップにお茶を注ぐ。

「はい」

「「ありがと／サンキュ」」

天の恵みとばかりに二人は一気に飲み干し。

「「ぷはー！」」

ほぼ同時に飲みきった。

驚くべきことに、動作すらほぼ同じである。

「カナン君はともかく、祐希奈がそれはいけないんじゃない？」

「うっさいわね。いつから女子がこういうことはダメって決まったのよ？」

「江戸時代だけど？」

「嘘……」

「嘘♪」

「……美鈴ーーー！！！！」

「きゃ～♪　祐希奈が怒った～♪」

ドタバタと繰り広げられる光景に、カナン、ヴィヴィオ、神楽は苦笑い。

「よくあんな元気があるもんだ」

「そうですね。私もちょっと疲れました」

「凛さん、厳しかったね～」

その会話を笑って出来るヴィヴィオと神楽をカナンは素直に凄いと思う。

何せ、凛の授業の厳しさは尋常ではなかったからだ。

神楽がちょっとと言ったが、カナン達はそんなレベルではない。

凛が行ったのは、基本、応用、そして、理解力の確認。

それ自体は簡単なように思う。

「これをこうして……」

少し時間が遡り、数学の時間に戻る。

とある男子生徒が指名され、黒板に公式を書き、答えを導く。

公式は正しく、最終的に答えは合っていた。

しかし。

「では、何故この公式を使うのか？　この位置の移行は何故行われるのか、答えられますか？」

「え……っと……」

男子生徒は答えに詰まる。

それは当人にとって、予想外の質問だった。

いや、当人だけでなく、クラスのほとんどか。

通常、公式で解き、答えがあっているのなら、理解をしていると見なされる。

しかし、凛の教えはそれよりもワンランク上。

どうしてこれをここで使い、求められるのか。

この質問は、公式を覚えているだけでは答えられない。

公式の構造を理解した上で、どこがどうなるかを理解していなければならない。

そんなものをわかっている学生など、少数。

大半は、この式の時はこれを使えという教師の教え通り、暗記しているだけなのだ。

凛の教えはそれが通じない。

「もういいですわ。戻りなさい」

「はい……」

男子生徒が席についたのを確認すると、凛は教壇に立ち、全員を見渡す。

凛の美しさに浮き足だっていた教室は静まり返る。

人には、なにもせずとも周囲を自分に注目させることが出来る人間がいる。

生まれもってのカリスマ性とでもいうのだろうか？

凛は間違いなくそれを持っていた。

「今までは知りませんが、少なくとも私は妥協することは許しません。暗記という付け焼き刃ではいずれ詰まります。ですから、あなた方には完璧に公式の構造を理解した上で解けるようになっていただきますわ。中身さえ理解していたなら、応用でも問題なく解けるでしょう。寝たいなら構いません、勝手に寝ていなさい。その代わり、どれだけ暗記し、計算が出来ようと私はそんな人間には点数を与えません。聞いてくるなら、どれだけ出来なくとも、出来るようになるまでお教えします。まずは聞くこと。遠慮はいりません。今からプリントを配布します。各自、理解したと思ったなら手をあげて私を呼びなさい。間違っても、勝手に先に進まないこと。では、始めます」

それだけのことを言い切ると凛はプリントを配り始めた。

どれもが簡単で、時間にすれば３０分も必要となく解ける問題。

しかし、凛が求めているのは速さではない。

真に理解する力だ。

捻って捻って、ようやく一問を解き明かす。

そんな時限が先の授業。

「少数精鋭と、人海戦術、か」

フェイトの教え方は凛とは逆とも言える。

担当している教科が化学になったせいかもしれないが、フェイトの教え方は要点をきっちりと押さえ、数をこなす教え方。

ただ数をこなすだけでなく、基本の中には少し捻った応用もあり、理解力も鍛えられている。

少しずつ捻っていくため、知らずと応用も解けるようになり、礎は完成するという方法だ。

「取り合えず、飯食うか」

「うん♪」

考えていてばかりいてもしょうがないと、各自昼食をとることにした。

ちなみに、聖中では給食ではなくお弁当という形が取られている。

「メイデン、昼飯」

『そうか。わかった』

カナンの一言に反応し、黒いワンピースを着たメイデンが、通称、お出掛けフォーム姿でカナンの肩に現れる。

「昼飯、今日は作ってる暇が無かったから、こん中から適当に選んでくれるか？」

「ふむ……」

来る前にコンビニにでも寄ったのか、カナンの鞄の中にはビニール袋。
サンドウィッチや惣菜系のパンや菓子パン、サラダ、プリンまであった。

「ここはやはり卵サンドだな」

「お前も卵好きだなぁ……。飽きないか？」

「……ダメか？」

既に食べられるものと思っていたのか、卵サンドを引っ張り出していたメイデンは少し涙目になりつつカナンに尋ねた。
この顔を見たら、間違ってもダメとはいえない。

「別にお前がそれがいいならダメなんてことはねぇよ」

「ありがとう。マスター♪」

「いえいえ、どういたしまして」

はむはむとサンドウィッチの一番上から頬張るメイデンに微笑みつつ、自分はコロッケパンに手を伸ばして頬張る。

「私達も食べよっか」

「そうね」

「さんせ～い♪」

「はい♪」
美味しそうに食べるカナンとメイデンに影響されたのか、四人は弁当箱を取りだし、開ける。
どこにでもあるお昼の風景が広がっていた。
まぁ、美少女の中に男子が一人という光景を除けば、の話だが……。
余談はさておき、平和な昼休み。
「あぁ、このクラスでしたか」
「？」
決して大きくはない声。
しかし、よく通った声に祐希奈は食事の手を止め、扉の方に視線を向ける。
一番に祐希奈が反応したのは、メンバーの中ではその声に聞き覚えがあったから。
「皆さん」
扉に視線が集まる。
そこには、聖中女子の制服、背中まで伸びる美しい白髪、清楚な顔立ち、ニコリと笑えば星でも飛び散りそうな、“美少女”がいた……
「どうで――」
「アホかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

「「祐希奈!?／祐希ちゃん!?」」

「うわっと……」

正に電光石火。

祐希奈のスカートが翻り、凄まじいジャンプ力を見せながら美少女へと飛び蹴りを放つ。

が、なんと美少女も対応し、腕の甲で受け止めていた。

クルリと着地し、祐希奈は美少女を睨む。

「祐希奈さん、危ないじゃないですか」

「知るかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

「やめろって!」

「祐希ちゃん、ストップ!」

再び美少女に襲い掛かろうとする祐希奈をカナンとヴィヴィオが後ろから抑え、取り合えずは事なきを得る。

が、目の前の美少女が誰なのか、カナンにもヴィヴィオにもわからない。

「ふふ、取り合えず、お話がありますので外に出ませんか?」

「ガルル!」

「こら!　祐希ちゃん、メッだよ?」

誘われたが、祐希奈の向きだしの敵意は収まらない。

それを見て、美少女は薄く笑った。
その笑みでクラスの3分の1のハートは打ち抜かれていた。
「はぅ！」とかなんとかいう気持ちの悪い声を全力でカナンは無視しつつ、美少女と視線を会わせた。

こいつ、どっかで……。

そう、思う。
輪郭に僅かに見覚えがあるような、そんな感覚。
このような場合は、大抵は関わりが薄い場合だ。

「なんなら、カナンさんだけでも良いのですが？」

にこやかに告げられた言葉。

てめぇ、またたぶらかして来やがったな！？

俺が何かしたのか！？

、クラス男子陣の殺意が一斉にカナンに向いた。
見に覚えの無い殺意の視線を受け流し、学校ならば問題ないと判断、とにかく話を聞かねばわからないと頷こうとして。

「「ダメ！」」

「そこはそろうのな……」

二人の少女が阻止した。
ヴィヴィオはともかく、半暴走状態と言ってもおかしくなかった祐希奈まで即座に現実に戻すのなだから、恋の力とは恐ろしい。

《死ねばいいのに……》

「口に出してそういうの言うのやめません！？」

「はっ！」

カナンのツッコミに何を思ったか美鈴がクロッキー帳を持ち出して、鉛筆を走らせ。

「書けばいいって話でもねぇよ！！」

「てへ♪　バレたか♪」

「ったく……」

はぁ～、と深い溜め息をつきつつカナンは美少女へと視線を戻した。

今までの行動にクスクス笑っていた少女は、カナンの視線に気づいたのか、手招きしながら廊下へ、さらに奥へ奥へと進み、人気の無い場所へ。

「ここまででいいでしょ……」

「そうですね。そろそろいいかもしれません」

祐希奈の一言で一行は停止、廊下の片隅に集まる。

とうぜんながら、人気はもう無い。

「で？　アンタはなんでそんなキモい格好してるわけ？」

「あはは。酷いですね」

やはり顔見知り。

ただ、ヴィヴィオとカナンはイマイチピンと来ない。

「コイツ、誰？」

「私もちょっとわかんなくて……」

「は？」

ほんの一瞬、キョトンとした祐希奈だが、何か思い当たる節があったのか、うんうんと頷く。

「あぁ、そっか、アンタ達は顔会わせた時間が私より短いからわかんなくても無理ないわね」

「“僕”は“部長達”に比べるとそんなにインパクトが強い方ではないですしね」

「「僕？」」

「はい」

静かに笑う美少女、否、少年。

ヴィヴィオとカナンの頭の中で検索がかかる。

二人が知っている、「僕」という一人称の人物は意外に少ない。

代表格として、ハル、ジル、エリオ等などが上がるが、違うのは容易にわかる。

もう一つの検索ワード「部長」これが決めてとなった。

「ソイツの名前はクレイ・アレイザ、カナン、アンタとはベクトル違いのヘタレよ……」

「「あ～！」」

思わず二人は声を上げながらうんうんと頷く。

後からクレイに対して失礼だと思い、急いで口を閉ざしたが。

面識が薄い上に女装までされては無理もないかもしれない。

「って、然り気無く俺のこともヘタレって言ったよな！？」

「は？　何よ今更？」

「ナチュラルに返すのやめてください！！」

「じゃあ何？　無言で見てるとかのが良かった？」

「もっと嫌じゃぁああ！！」

「そ、それよりほら、クレイさんもお話があって私達を読んだんだし、聞こうよ。ね？」

ヴィヴィオの計らいにより渋々だがカナンは引き下がり、祐希奈も軽く鼻をならしながらクレイに向き直る。

「ありがとうございます。ヴィヴィオさん。一応弁解しておきますけど、僕は好きで女装しているわけではありませんよ？」

「「好きでしてたら本気でひくわ！」」

「ま、まぁまぁ……」

鋭いツッコミを浴びつつ、クレイは笑みを崩さない。
この状況を楽しんでいるかのようにも見える。
とはいうものの、これ以上茶化しては二人が本気でキレかねないため、本題へ。

「簡単に言うと準備ですね」

「「「準備？」」」

首を傾げる三人にクレイは「はい」と頷く。

「現在、凛部長の指示の元、敵方の拠点を探っています」

その言葉の意味するところは、攻め手に回るということ。
今までは相手の出方がわからないために守勢に回るしかなかった。
しかし、それは六課と地球陣営だけならばの話。
運用部の面々が揃い、協力してくれるのなら、なんとかなるかもしれない。

「上手く見つかれば、最悪でも今後の出鼻を挫くくらいは出来る筈との考えです。敵方の目的が何にしろ、守ってばかりでは辛くなりますしね」

だからこそ、敵方が様子を見ている内に仕掛けよう。
そう、凛は判断したのだ。
軽薄とも思われるかもしれないが、多少のリスクを負わなくては

この戦いは、厳しい。

「それで、準備って言うのはどういうことですか？」

ヴィヴィオの言葉にクレイは少しだけ笑みを濁し、それでも伝えねばならないことを話そうと顔を上げる。

「それですが、凛部長はあなた方も戦力に入れた上で作戦を立案中です。正直、敵方に狙われているカナンさんには外れてもらいたいのが本音ですけど、部長はあなた方はカナンさんが特に必要なのだと仰っていて……」

「俺が？」

話を聞いて、カナンはキョトンとするばかり。

当然といえば当然だ。

カナンと凛、面識で言えば二度しかなく、しかも、言葉を交わしたのはほんの少し。

そんな重要な作戦に選ばれる意味がわからない。

「まぁ、別に必要なら協力は――」

「「待ちなさい／待って」」

「へ？」

協力したい。そう言おうとしたカナンの言葉は、ヴィヴィオと祐希奈によって遮られる。

静けさの中に感じるのは、怒り。

「アンタ、その返事返したら、危険のまっただ中に放り込まれるってわかってんでしょうね？」

そう、そういう事だ。

カナンが特に必要、ということはカナンにしか出来ないことがあるということ。

カナンは、魔法の知識面では祐希奈と同じく素人も良いところ。

必要最低限のことくらいしか知らない。

カナンが突出しているのは戦闘面。

となると、そちら方面の話で必要とされているのは簡単に予想がついてしまう。

簡単に頷いていい話ではない。

それを理解しているのかと、祐希奈に問われて。

「……ああ」

それでも尚、カナンの意思は曲がらなかった。

つまりそれは、クレイの言葉を理解した上で協力しようと言っているということだ。

「これは、凛さんの人選。今までみたいにカナン君が無理して関わる事件じゃないんだよ？」

今までは、そうだった。

ロストロギアにしろ、スカリエッティにしろ、ハルにしろ、自分に関係がある事件ばかりに対処してきた。

今回は違う。

凛が必要だと言っているだけで、カナンは従う必要はない上、クレイが言ったように、狙われている立場であるカナンは本来なら関わらない方がいいくらいだ。

「それでも、知っちまった。危ないかもしれないし、お前らにまた心配かけるのかもしれねぇけど、無視なんて、出来ねぇよ」

「カナン君……」

困っている人が、自分の手の届くところにいるのなら、ましてや、その人が自分を指して呼んでいるのなら、応えたい。

素直にそう思う。

「だから、助けたい」

「あっそ」

「そっか」

ニッと笑って、真っ直ぐ、カナンは二人に告げた。

ずるいなぁと、少女二人はそう思った。

そんな笑顔を見たら、何も言えなくなる。

逆らえなくなることは予想していたことだけにヴィヴィオと祐希奈は苦笑いを浮かべるしかない。

「ま、今回は最初から俺一人じゃないわけだし、お前らもいてくれんだろ？」

「うん。私は局員だし、断る理由もないしね」

「アンタ達二人が行くのに、私がいかないなんて言うわけないでしょ？」

苦笑い気味にヴィヴィオが、不満を見せつつ祐希奈が、カナンの言葉に同意する。
カナンは、振り回されているようでいて、肝心なところでは振り回す側だ。
無自覚ではあるが、それがまた厄介なところではある。

「話は纏まったようですね……」

頃合いを見計らい、クレイが話しかけると、三人は同時に頷いて見せた。
危険な場所に三人、しかも内二人は民間協力者。
故に、クレイの反応は微妙なもの。

「放課後、あなた方がよく訓練所にする小山で部長から話があるそうなので、忘れないでくださいね」

「それでは」
そう残してクレイは廊下を進んでいき、人混みに消えた。

「あーーーーー!!!!」

「どわっ!?」

「ど、どうしたの!?」

突如として叫んだ祐希奈。
何事かとカナンとヴィヴィオは凝視する。

「結局、なんで女装してたのかはぐらかされた!!」

「……さいですか」

「あはは……」

が、すこぶるどうでもいい事実に二人の溜め息と苦笑いが出たのは言うまでもない。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

トン、そんな音が静かな裏路地に響いた。

とある人物が何もない所から現れたのである。

纏うは黒いフード、闇に溶け込むように裏路地を進み、密かに佇む宝石店の中へ。

「ただいま」

「おや？」

中にいたのはジル・ローディアス。

何かの作業をしていたようだったが、黒フードを見ると途端に笑みになり、両手を広げる。

「さぁ来たまえ！」

「取り合えず、アレだ。死ね」

「ははは。冗談さ」

カラカラと笑うジルに、黒フードは溜め息一つ。

「それで、何か情報は？　君のことだ。ただ、買い出しに行ってき

たわけではないのだろう？」

「まぁ、な」

「大したことではない」と告げてから、黒フードは適当な椅子に腰をかけた。

「帰り際、アイツらの学校に行ってきた」

「ほうほう。また大胆なことをしたね。続けてくれたまえ」

「探りを入れてみたんだが、アイツら以外にも魔力反応、結構大きめのが三つと、バカでかいのが一つ、恐らくは増援だろうが、バカでかい魔力持ってる奴は危険だな。もうちょい踏み込みたかったんだが、バレかけたんでな」

「そうかい。ありがとう」

確かに、大した情報は得られてはいないが、ジルは満足そうに笑うだけ。

増援が来ているという情報さえわかれば、彼には十二分だからだ。

「アンタは凄いな……」

そう、ポツリと黒フードは漏らした。

呆れているような、尊敬しているような、複雑な声の質。

いや、実際の話、どちらもなのだろう。

「うん？」

「アンタの思い通りに周りが動いていく……。未来がアンタに動かせるみたいだぜ……」

「そんなことはないさ。そんなことが出来るなら、僕は……」

笑みが陰る。

あまり見られないその表情に、黒フードは吸い込まれる。

先を知りたいそう思って。

「僕は……？」

訊ねられた黒フードの言葉を、ジルは薄く微笑みを返し、受け流した。

答えは望めまいと部屋の奥に進もうとした黒フード。

「そんなことが出来るなら君と熱い夜を過ごすね！」

「……」

その黒フードの背後からジルが抱きついた。

「むふふ」等と言いながら匂いを嗅ぐジルに、黒フードはなにも言わないが、確実に変化は訪れている。

ビキリという空気に亀裂が入った音が、響いた気がした……。

「男女の見境もねぇのか、てめぇは……」

「む？　それはもちろん美女に越したことはないがね？　本当に愛し合っているのなら、性別の差など関係ないと僕は思うのだよ！」

「きっしょいなお前……」

あくまで平坦な声の黒フードだが、フードが脱いだのなら間違いなくその表情はドン引きを表しているに違いない。

「まぁ、そういう愛もあるということさ。君は同性愛者が嫌だと言うのだろう？　ならば、僕は君には遠慮をする必要は――」

「晩飯まで死んどけ……」

刹那、黒フードの姿がブレ、霞む！

「おぅふ！」

ズドン！

そんな、凄まじい音を奏でて、ビクリと痙攣したかと思うとジルの身体は黒フードからずり落ちる。

汚らわしいものでも触ったかのようにフードを叩き、「ふぅ」と一息。

微細な痙攣を続けるジルを投げ捨て、黒フードは調理場のある部屋の奥へと消えた……。

第四話　開戦準備　（前編）（前書き）

お待たせしました。
くそう、就職きまんねぇ……。
またちまちまと感想を返していきますので、よろしくです。
遅れた方、ほんとすみません……

第四話　開戦準備　（前編）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

謎の美少女、ではなく、美少年、クレイ・アレイザの指示通り、カナン、ヴィヴィオ、祐希奈の三名は仮の訓練所としている小山を登っていた。

「なぁ、ヴィヴィオ？」

「？　何かな？」

クルリと後ろを向いて、ヴィヴィオと祐希奈を正面に、カナンは進む。

足場が悪い道でのその行為は怪我に繋がりかねないもの。

しかし、カナンは危なげない動作で進み続け、続けて跳躍、大きめの石の上に座った。

「アンタね、危ないでしょうが……」

「鍛練鍛練。見えてるから平気だって」

ニヤリと笑って祐希奈に返答したカナン。

意味なく、わざわざ危険な行為をしたがること。

その辺りは、カナンも少年であることを裏付ける。

そんなカナンを祐希奈がジト目で睨んでいたが、スルーしつつ、質問を再開。

「海城、なんとか、凛、だっけ？」

「海城・グランチェスタ・凛三佐？」

「ああ。その、凛さん？　ってさ、俺、あんまり知らねぇんだけど……」

「あはは……」

「はぁ～……」

「な、なんだよ？」

その言葉に、ヴィヴィオは苦笑いを浮かべ、祐希奈は、呆れながら盛大に溜め息。

二人がそんな反応を見せるのも無理はない。

面識はあるとはいえ、殆ど知らないような相手。さらに自分にメリットの無い任務をカナンは引き受けようとしているからだ。

二人は、どこかにカナンと凛を繋ぐモノがあったかと考えていたのだ。

そんなモノが無くとも、カナンは助けを求める相手なら助けにいく。

カナンのことはよく知っていた筈なのだが、こうも成長がないと落胆もする。

さらに言うならば、本人にその自覚がないのも大きな理由。

取り合えず、何も知らないのはカナンのためにもよくないため、ヴィヴィオは思い出せる限りで凛のことを話すことにする。

「海城・グランチェスタ・凛さん。階級は三等空佐、現在年齢は２３歳。至上最年少の七歳で管理局の嘱託魔導師として活動を開始」

「「七歳!?」」

コクりと頷いたヴィヴィオに二人は絶句する。

七歳という年齢。

地球にして一、二年生、まだまだ遊んでいたい盛りの年齢。

事実、この年齢の時にカナンは母親に甘え、魔法の力に目覚めてすらいなかった。

管理局で七歳で働き始めたということは、七歳より前に魔法の力を習得し、鍛練を積んでいたといいことになる。

それを可能にするには、類いまれな魔法の才能、血の滲むような努力、慢心しない強い心。

道を踏み外さず、それだけのものを持っているのは、はっきり言って、異常だ。

夾、ハルに並ぶ、いや、それを上回るかもしれない。

「あ、凛さんとカナン君と共通点があるね」

「共通点？　何かあったか？」

カナンは首を傾げる。

わからないのも当たり前だ。

「魔導師ランクは“推定”ＳＳＳ＋」

「正確なとこは？」

首を振るヴィヴィオ。

その意味がわからず、二人はヴィヴィオを待つ。

紡いだ、事実は。

「えと、測定不能」

「は？」

「だから、測定不能なんだ。高すぎて、測定しようとしても無理なんだって～。カナン君と同じだね」

のほほんと告げるヴィヴィオだが、当のカナンはポカンとするばかり。

カナンは自身の魔力値などに興味はなく、メイデンから上下が不安定だとしか聞いていない。

まさか、自身と凛にそんな共通点があるとは思ってすらいなかったのだ。

「そう。だけど、部長と君との違いは意識的にその力を使えるか、そうでないか、だな」

「「「っ！！」」」

響いた声の方向に三人は一斉に振り向く。

カナンの空間把握の限界、三メートルより引いた木の上に、零番運用部副部長、ヴェイン・アルベリスが立っていた。

「やぁ♪」

「ちっ……」

軽く腕をあげて挨拶するヴェイン。

不意を突かれたのが気に入らなかったのか、祐希奈は舌打ちを一つ。

つかつかと木の幹に近づき。

「ふん！」

バキャアアア！

祐希奈が力んだ声をあげたかと思うと、拳を木の幹に一撃。同時、凄まじい音が鳴り響いた……。

停止する時間、固まる一同。

「ぎゃあああ！？」

悲鳴をあげるヴェイン。

目が点となったカナンとヴィヴィオの前で、木は根元から折れ、倒れ付す。

無論、ヴェインを巻き込みながら……。

「うん、すっきり♪」

「いやいやいや！！？？　すっきりってお前なぁ！？」

「何よ？　文句あるわけ？」

「ありすぎるわ！！！」

「ああ……？」

「無いです！！」

祐希奈に常識を求めようとしたカナンだが、ドスの聞いた声を発した祐希奈に逆らえず、ツッコミ二回にてあえなく撃沈。

残像を残すほどの速さで土下座する。

「だ、大丈夫ですか！？」

「な、なんとか……」

一方、被害者であるヴェインは二人に完全に忘れ去られている。

唯一の常識人であったヴィヴィオがいたのは救いであった。

「ふぅ……」

「アンタごときがなんで私に文句いっていいと思ってるわけ？　ねぇ……？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

カナン君も大変だ。

身体についた土を払い落としながら、額を地面にこすりつけながら土下座するカナンに同情する。

まぁ、あんまりにも豪快にスルーされたので、少なからずヴェインにはショックがあったのだが、そこは大人。華麗にスルーする。

ひたすら奥歯を噛み締めながら……。

「で？　クレイの流れからして、アンタもこっち組に入れられてるってわけ？」

「ゆ、祐希ちゃん、歳上の人だし、階級が……」

「いや、構わないさ」

歳上に対しても態度を変えない祐希奈をヴィヴィオは咎めたが、ヴェインは最早諦めていたのか軽く流す。

「祐希奈ちゃんの言う通り、俺も地球組だ。ただ、部長と同じで教師側でね。挨拶にいけなくてすまなかった。まぁ、歩きながら話そうか」

「ああ／はい／ん」

先を促すヴェインに三人揃って頷き歩みを進める。

話す。

確かにそう言った。

しかし、三人の後ろを歩く彼は話し出す気配がない。

もう頂上の休憩場が見えているのに、だ。

別段、話してもらわずとも困ることはない。

そう考えて。

「俺達の目的は準備だってのはクレイが伝えたと思う」

凛の姿が見え始める。

と同時、ヴェインが突然語り出した。

何故、このタイミングで？

ヴェインの意図がわからず、首を傾げる三人。

「ただ、次の作戦は大規模なものでね。人選を重ねる必要があるわけだ。クレイからはどう聞いてた？」

「凛さんが、俺達の力を、中でも、俺の力を必要としてるって……」

ヴェインは、「あぁ、やっぱり」と、少し苦笑いを浮かべる。

まるで、そうではないと言い渡すように。

必要とされていないならば、何故自分達がここにいるのか、そう考えてしまう。

「君達は戦力“候補”だよ。まだ正式に使うかどうかはまだわからない。特に……」

言葉を区切り、ピシリと指を指す。

「カナン君、君は、ね」

「……」

指の先にいるのは、カナン。

作戦には最も必要とされている筈の少年だった。

「さっきも指摘したし、レイにも言われた覚えがあるはずだ。君は“不安定”だと」

地球組、いや、六課を合わせたとしても、最大魔力では一、二を争うカナン。

しかし、その力は非常に不安定であり、本人にも制御すら出来ていない。

平均的にSランク程度、という推定のものしかない。

「最大魔力は良いとしても、カナン君の場合、能力にまで影響して来てる。君、モチベーションが高い時の自分の動きと低い時の自分

の動き、見たことあるか？」

「……ない、な」

「認識から動き出すまでの反応速度、空間の形成能力、発動時間、安定性、魔法の威力、他にもまだあるけど、全体的に低下しているんだ」

ヴェインは話のわかる優しい人間だと三人は認識していた。

ロストロギアの騒動に参加はしていたものの、まず話し合いの場を設けようとしたり、無理をしようとする祐希奈を諭したりと、わざわざ面倒な道を自ら選びとっている。

だが、今のヴェインからそんな雰囲気を感じることは出来ない。

瞳に暖かさが、無い。

「はっきり言って、低い時の君は使い物にならない。寧ろ、邪魔にならないだけだ」

「邪魔って……そんな……」

あまりにもはっきり言ったヴェインにヴィヴィオはショックを受けたが、彼の厳しい目付きは緩むことはない。

子供に対する余計な情など、既にヴェインは捨てていた。

それこそ、邪魔でしかないからだ。

「ヴィヴィオちゃん。厳しいようだけど、事実だ。これを伝えなきゃ、自覚して貰わないと作戦に支障をきたしかねないんだ。君も局員なら、力の自覚が無い者がどういう結果を生むか、わからないでもないだろ？」

「それは……」

何かを言おうと、口を開いたヴィヴィオだが、結局閉じるしかない。

言い方は悪いが、ヴェインの言っていることは正しいからだ。

そんなヴィヴィオを見て、祐希奈が庇うように前に出る。

キッと睨むその瞳は、明らかに怒気を孕んでいる。

理由はどうあれ、仲間を悪く言う輩を祐希奈が好意的になど思う筈もない。

「アンタさぁ……、私達の力を借りたいんでしょ？　なんでそんなに上から目線なわけ？　不安定だとか、邪魔だとか、随分な言い様ね？　何様のつもりよ！」

そう言い放った祐希奈に、ヴェインは大きく溜め息をつく。

これくらい、わかれよ。そう言わんばかりに。

「だから、言ったろ？　君達は“候補”だって。まぁ、借りたいのは事実だけど、今のままじゃ使えない。さっきもそう言った筈だ。使えないなら、第2候補の人間を使う。それだけさ。別に、君達が参加しなくても遂行が出来ないわけじゃない。多少やりにくくなるだけだ」

「ふ～ん……」

余りにも遠慮がない言葉の刃の羅列。

いや、ここまでいくと“あからさま”とでも言えるだろう。

まるで、怒らせることを前提としているように。

事実、祐希奈は明らかに雰囲気が変わってきている。

その証拠に、祐希奈からは魔力が溢れだしていた。

堪忍袋の限界が近いのだ。

「ヴィヴィオちゃんは局員でそれなりの地位もあるけど、祐希奈ちゃん、君はただの女の子だし、まだ民間からの協力者に過ぎない。後で隠れていても、誰も文句は言わないよ？」

「ただの、ね……」

この言葉が止めとなった。

瞬間的に膨れ上がり、内から爆発するかのように炸裂した魔力の奔流。

それは風となり、周囲の木々を軋ませる。

祐希奈から突き立つ天を穿った光。

制服が弾け、蒼いバリアジャケットが祐希奈を包む。

光の内にて祐希奈が右腕を振り上げ、払う。

祐希奈の周囲に散る木の葉が一気に燃え盛る。

光の柱は炎柱となり、身を焦がす熱をヴェインは感じた。

しかし、その身に感じるのは冷たい感覚。

「流石は炎神……」

その魔力量には舌を巻く。

祐希奈は魔導師になって日は浅いが、潜在的な力なら、なのは達に並ぶ逸材。

一般の魔導師と比べれば話にならないほどの実力を秘めている。

「この私に隠れてろ、ね。誰に物言ってんの……。アンタ、いっぺんぶん殴っていいわよね？」

「祐希ちゃん！　ダメ！」

「退きなさい。ヴィヴィオ……」

間違ってもただの女の子扱いをすべき対象ではない。

また、それを祐希奈に言って良い筈もない。

彼女は、弱者扱いされるのを凄まじく嫌うのだから。

止めようとするヴィヴィオを押し退け、紅蓮を纏う少女は地を焦がしながら一歩を踏み出し。

「まぁ、待てって」

「カナン……／カナン君……」

やけに落ち着いた声。

背後にいた筈のカナンがヴェインと祐希奈の間に現れていた。

その速度にはヴェインですら眉を少しつり上げる。

……データより、速くなかったか？

そう、思う。

少し、様子を見ようと前に立つカナンを見る。

ゆっくりと、軽く目にかかる髪の内から、カナンの瞳がヴェインの方へと向いた……。

声とは裏腹に瞳に映すは怒り。

「っ！」

瞬間、ヴェインは頭を剃らし、飛び退いた。

眼前を過ぎるは金色の閃光。

危ういところで避け、正面を睨む。

その先にはいつ顕現させたのか、金色の剣が握られている。
閃光は斬撃。カナンが空間突破で距離を詰め、斬り払ったのだ。
ヴェインに対しての抜刀の速度は神速の域に達している。

「ごちゃごちゃごちゃごちゃ、うるせぇんだよ……。こっちが黙ってりゃ好き勝手言いやがって……」
『マスター。無駄だと思うが、落ち着け』
「無理だ……。ぶっ飛ばす……」
『はぁ……』

宥めようとしたメイデンだったが、カナンは聞かない。
――最も、最初から諦めていたようにヴェインには聞こえていたが……。
ヴェインに向けて、剣の切っ先をを向ける。

「アンタ、俺の力が不安なんだろ？」

「……ああ」

カナンの敬語が崩れ始めてきている。
返事を返した直後、轟と再び吹き荒れる魔力の風。
軋むに終わっていた木々はミキミキと悲鳴を上げ、倒れていく……。

「だったら、全力でやってやるから、しっかり見とけよ……」

「少し予定とは違うけど、まぁいいか……」

紅蓮に燃ゆる紅き瞳はヴェインを射抜く。
それを軽く受け流し、暴虐の風が吹き荒れる中で、ヴェインはた

だ静かに立つ。

「ヴィヴィオちゃんと祐希奈ちゃんは頂上で指南を受けてくれ。受ける気があるなら、でいいけどね」

「どうする？　祐希ちゃん」

「……」

迷う素振りを見せた祐希奈だが、それも一瞬。

「アンタ」

「ん？」

「私がこの作戦に選ばれて、上手く成功させたら、全校生徒の前で土下座ね？」

げっ……！

表情は涼しいものの、内心は苦虫を噛み潰したかのような顔となっているヴェイン。

やる気を出してくれたのは嬉しいが、全校生徒の前で土下座はさすがにきついものがある。

とは言うものの、作戦失敗を願うことなど出来るはずもなく。

「お安いご用さ」

「アシェル、録音とった？」

『バッチリです』

「じゃ、そゆことで♪　ヴィヴィオ、行くわよ～」

「あ、う、うん！」

「……」

祐希奈の悪知恵の完璧さに途方にくれたヴェインだが、もう忘れようと目の前の少年に視線を戻す。

相手のカナンは、暗い気持ちを引きずって、集中力を欠いた状態で戦って勝てるような相手ではない。

「さて、待たせちゃったね。そろそろやろう――」

「“お前”さ……」

ヴェインの言葉を遮り、カナンが口を開く。

カナンの口調に最早歳上に敬意などは無くなっていた。

運用部は使う側の人間のことは一通り調べている。

カナンの口調が変わっている。それは――

「俺のことをどう分析してたかしらねぇけどよ……。余裕かまして怪我してもしらねぇからな！！！」

カナンが無意識的にかけているリミットが弾け飛んでいることを意味する。

こうなると、カナンは何をいっても無駄だ。

少し、やり過ぎたかな……。

怒鳴っただけで空気を震わせる魔力を放つカナンに、ヴェインは

内心苦笑い。
それでも、その余裕は崩れることはなかった。
伊達に実力主義の運用部で副部長の座にいるのではない。

「試験のルールは簡単だ。部長の合図までに俺からダウンを一本取れれば合格。出来なければ不合格。いいね？」

「ようはお前をぶっ飛ばせばいいんだろうが……」

「まぁ、そうだね」

礼を忘れたカナンに怒りもせず、ヴェインはあくまでも平静を保っていた。
下手に冷静な輩よりも、カナンのようなタイプの方が扱いやすいが故だ。
そのまま何も言わないまま、ヴェインは直槍を右手に、尖端を下方に向けて。

「言うほど簡単じゃあ、ないけどね？」

少し、意地悪く口の端をつり上げて笑った……。
瞬間、ヴェインの前面が大きく歪む。

「言っとけ！」

音速の壁すら易々と越え、カナンが歪んだ空間から現れる。
抜刀される剣から火花が散り、黄金の軌跡は正に光速。
放つは壱式、暗夜一閃。
闇夜をも一閃の煌めきの元に断ち切る、カナンの最も練度の高い剣術。

磨き抜かれた剣術は全力を持ってヴェインの胴体を真一文字に突き抜けた……。
無論、非殺傷のため死ぬことはないが、衝撃ダメージは相当なものがあり、昏倒は免れない。
「怪我、させるんじゃないのか？」
「っ！！　がぁ！」
声が響く。
驚き、直感的に飛び退こうとしたカナンだが、その前にカナンの身体が宙を舞う。
カナンが飛び退く前に、ヴェインが槍を反転させて柄で殴り飛ばしたのだ。
ドシャリと地面に叩きつけられたカナン。
追撃される前に、跳ね起き、前を見る。
が、不動のままヴェインは立っているだけだった。
「試しに受けてみたのに、この程度じゃ軽すぎてダメージなんて残らないな。全力で来るんじゃないのか？」
挑発するように、ヴェインは伸びをしてノーガード。
斬りかかれば直撃を与えられるだろうが、カナンは何もしなかった。
それ正しい選択。
ヴェインという男は痛覚が死んでいるのだから今のカナンで彼を倒す術はほとんどないに等しい。
“今のカナンでは”
「メイデン……」

『そうくるだろうと思っていた』
「『ユニゾン！』」

鞘から光が空に浮かび、カナンと一つに重なる。
瞬間、再び吹き荒れる魔力の風。
さらなる力がカナンへと注がれ、鼓動する！

「何も感じねぇなら、身体が限界越えるまで叩き込む。それだけの話だ……」

相手が少々特殊だろうと、カナンは怖じ気づくということなどない。
その特殊ごと、捩じ伏せる。
それが、カナンという少年の戦い方。
単純な方法だが、力がある人間には最強のスタイルでもある。
このスタイルをとる人間に、小細工など一切通じないのだから。

「君は面白いね」

「うっせぇ！」

カナンは含み笑いをするヴェインに剣を叩きつけ、改めて、試験開始のゴングを響かせた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

所変わって機動六課。
時刻は１７時。
あと一時間もすれば前線メンバーの訓練の時間も終わり、晩御飯という時間帯。

“普段なら”
今回は、特別措置、ということで訓練の時間が短くなっていた。

「こ～ら～！」

「待ちなさいってば！」

「きゃはははは♪」

響くのはスバル、ティアナの明らかに訓練ではない声。
そして、女の子と思われる無邪気な声。
年齢でいけばエリオとキャロは六課内で低年齢だが、二人は１６歳前後。子供と呼べるような年齢は離れつつある。
つまりは別人。

「てぇぇい！」

「甘い甘～い♪」

「チッ、スバル！」

「うん！」

「まだまだいくよ～♪」

「うわっ！」

明るく声を発しながら、飛びかかるティアナを、時間差で飛びかかったスバルを、ひょいひょいと避けていく女の子。
怪我をさせないよう、加減しているとはいえ、現役局員である二

人を避けるというのは中々に難しい。
それだけ少女がすばしっこいのだ。
ピョコピョコと動く青髪のロングツインテールを弾ませながら、女の子は振り向いた。
七歳か八歳かという幼い顔立ち、クリンとした碧眼の瞳。
将来有望な顔立ちの美少女がそこにいた。

「「セシリアー！！」」

怒鳴る二人にセシリアと呼ばれた少女はニパッと微笑む。
少女の中で、スバルとティアナはただの遊び相手に過ぎない。

「てぃあ～、すばる～、こっちだよ～♪」

元気一杯手を振り、跳び跳ねるセシリア。
端からみれば可愛らしいものだが、振り回される側からすればたまったものではない。
なんせ、なのはの厳しい訓練の後で、ヘトヘトとなった身体に鞭打ち、倒れ付したいのを我慢して走り回っているのだから。
故に、長くは付き合ってはいられない。
場所は機動六課、ロングアーチの本部。
隠れる場所などごまんとある。

「今よ！　エリオ、キャロ、クレア！」

「「「はい！／ですの！」」」

「わわ！」

ティアナの号令に従い、物影から三人が一斉に飛び出す。

流石にセシリアも驚いたのか表情が固まり。

「なんてね～♪」

「「「うっ！」」」

即座に笑うと縫うようにして三人を避け、通り抜けた。

結果、ゴン、という鈍い音を響かせてエリオ、キャロ、クレアの三名は額を激突させた。

そんな三人を尻目に、セシリアはロングアーチ本部から脱出。

「おや？」

「ちはる～、隠して隠して♪」

紅茶を盆に乗せたハルに出くわすと、膝裏に隠れる。

その際に溢れそうになった紅茶だが、ハルの驚異的なバランス感覚のお陰か溢れない。

《待て～～～～！！！》

セシリアが隠れた直後、全力疾走で前線４人＋クレアが走ってくる。

事の次第を察したハルは、中途半端に隠れるセシリアをそっと後ろに隠して５人からは見えなくした。

「もういいですよ」

「はる、ありがと～♪」

「いえいえ、鬼ごっこ、頑張ってください」

「うにゅ、頑張る～♪」

ニコニコ顔のセシリアの頭を撫でながら、ハルは腰を落とし、セシリアと視線を合わせる。

キョトンとするセシリア。

「ただ、余り遅くまで振り回してはいけませんよ？」

「うん♪」

細い指を一本たてて、そう言ったハルにニパッと笑ってセシリアは駆けていく。

それを見送り、ハルはロングアーチ本部へと入室する。

そして、奥に座るはやての隣に紅茶を置いた。

「いや～、子供って元気やね～……」

「あはは。そうですね」

威厳の欠片すらない声ではやてが言った。

普段仕事場では表面的に疲れを見せないはやてにしては非常に珍しいと言える。

こんなにもはやてが疲れ果てている理由は、昼から今まで、セシリアの相手をしていたからにある。

セシリアは好奇心旺盛であり、あれこれとはやてに聞いては弄り回し、彼女の神経を秒単位で削り取っていたのだ。

流石に限界を感じ取ったロングアーチ陣は、訓練を行っているなのはに早めに切り上げてくれるように頼んだのだった。

「ホンマに、ハル君達が来てくれへんかったらと思うとゾッとするわぁ……」

「まぁ、タイミングは良かったですね」

愚痴るように言うはやてにハルは同意の声を発した。

何故、ハルがいるのか、そしてセシリアがいるのかは、今から約五時間の時を遡る。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

聖中では昼休みと呼ばれる時間帯、白姫邸には平穏をぶち壊す人間が訪れていた。

とはいうものの、その人が危険な人間、というわけでもない。

その人が危険なのではなく、その人物が危険な仕事を運んでくる、というものだ。

話し合いがしたい、ということで、ハルが掃除したせいか、輝きを増した巨大な客室で丸いテーブルを挟み、ハルを後ろに従えるクレアと女性が向き合っている。

さほどぴりぴりした感じではなく、ふたりして紅茶を飲んでいたりもするが、内容自体は会話が弾むような内容ではない。

「現状、戦力が不足しています。貴方方も協力してくださいな」

「は、はぁ……。ですの」

「ほう……」

余りにも軽くいう女性にクレアは面食らい、ハルは瞳を細めた。

高圧的な物言いながら、上品さは失わせないその女性の名は、海城凛である。
会話の内容はごく単純なもの。
戦力が足りないために六課に出向いて合流してほしいというものだった。
ただし、お願いではなく、命令のような言い方ではあるが……。

「私なんかの力でもお貸し出来るなら、喜んで、ですの～」

「ありがとうございます」

快諾するクレアに頷いた後、凛は視線をハルへと飛ばす。
ハルはと言うと、なんとも言い難い、難しい表情を浮かべていた。

「お嬢様はともかくとして、僕も、ですか？　僕は――」

「ただの執事、という言葉なら結構ですわ。先の事件で貴方の力は見ていました。私の部下が同時にかかって勝てない相手など滅多に見れませんし、あれだけの力を示しておいて、ただの執事とは、言えませんわよ？」

やれやれ……。

内心ハルは溜め息をついた。
凛の作戦は、クレアに加えて自分をも頭数に加えられているのがはっきりしたからだ。
頷けば、またしばらくの間はただの執事の生活とはおさらばだろう。
カナン達に関わってから引きずり回されてばかりで得なことがないと彼は思う。

「わかりました。機動六課の方々にはお世話になりましたし、ね」

それでも、頷いてしまう自分に苦笑した。

ハルには見えていないが、前に座るクレアも嬉しそうな笑みを浮かべている。

他でもない、ハルの変化に。

さほど接点がなかった凛ですら、それを感じてうっすらと笑みを浮かべていたのだから――無論、コンマ一秒で消えたが――かなりの変化には間違いない。

「貴女方が入れば、六課に心配はいりませんわね」

「が、頑張ります。ですの！」

「余り過度な期待をなさらないようにお願いします」

話は終わったと判断したのか、凛は席を立ち出口へと優雅にツインテールに纏めた黒髪を揺らしながら歩く。

一度だけ振り向いた凛はまた少しだけ――常人には決してみわけがつかない――笑みを作って。

「“過度な期待”はしていませんわ。“至極当然な結果”は期待していますが」

そう言って、凛は客室をあとにした。

最後に凛が言い残した言葉の意味は簡単。

クレア達ならば、出来て当たり前のこと、つまりは簡単なことだと言っていたのだ。

「やれやれ、お嬢様、中々骨が折れそうですよ？」

そう言って肩をすくめるハルの横で、クレアが浮かべるのは笑みだった。

それも、ただの笑みではなく、挑戦的な笑みだ。

「望むところ。ですの。ハル、御母様のところへ言って許可を貰ったら仕度ですの」

先んじて部屋を出ていくクレアにハルはまたしても苦笑い。

白姫クレアは白姫家の次期当主。本来なら守られるべき立場の人間だ。

その命を狙うものは多いが、それでも、静瑠は許可するだろうことは予想出来た。

内に込もって怯えているばかりの主には誰もついてこない、という両親の考え。

故に、クレアはその身の上にありながら管理局で働き、自由な生き方をしているのだ。

しかし、危険が伴うというのもまた事実。

だからこそ、爽が、そしてハルがいた。

来るべき巣立ちの日まで守り抜くために。

「かしこまりました」

間違いを犯した自分を未だ隣に置いてくれているクレア。

その優しさは、結果返す。

ただ静かに闘士を燃やし、、ハルは先行くクレアの後を追った。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

その後、機動六課へと向かう湾岸地区の道をハルとクレアの二人は歩いていた。
静瑠の答えはやはりＹＥＳ。
二つ返事で了承されたクレア達は着替えなどの寝泊まりのための道具を準備したあとすぐにミッドチルダへと飛ばされた。
飛んだのではない。飛ばされたのだ。
凛の部下達によって。
あまりの手際の良さにクレアは凄い人だとしきりに驚いていたが、ハルはというと警戒を強めていた。
六課へと向かう途中、そんな空気が伝わったのかクレアは耐え兼ね。

「ハル、どうしたんですの？」

「いえ、サービスが良すぎるな、と思いまして」

「手際が良いのはいいことですの」

「海城三佐のような人間になりたいですの～」っと隣で笑っているクレアに溜め息一つ。
ハル態度に苛立ったのか、むぅっと頬を膨らませそっぽを向いてしまう。
クレアがこうなるとしばらく何をしても無駄なことをハルは知っている。

あの凛という人間の性格からすると、自力で行け。というタイプですし、このサービスは普通はあり得ない……。となると、僕達に無駄な魔力を使わせないようにしている、といったところですか……。

クレアが頑固モードを入ったのを気に、ハルは一気に思考を加速させ、答えを弾き出す。
凛が頼みにきた時から、若干嫌な予感はしていたのだ。
浮かび上がる答えは溜め息しかついてこないようなものばかり。

これは、どうやら……。

瞬間、ハルが答えを導く必要すらなくなった。
響くはピピピッという高い音。通信だ。
クレアは前述の通り、頑固モードなため、ハルが端末を開き、ウィンドウに展開。
ウィンドウに映るのはハルが三人目の友人として認めた高町なのはであった。

『ハル君、ちょっとだけ、久し振り、だね♪』

「まぁ、そうですね……」

歯切れの悪いハルになのはは小首を傾げるが、気にしないことにしたのかニコリと笑って。

『凛ちゃんから聞いたんだけど、今日からしばらくクロスレンジの臨時教官として教えてくれるんだって？』

ハルが全く知らされていない仕事をなのはは嬉しそうに言った。
しかし、ハルは「やはりですか」程度にしか思わず、逆に予想通り過ぎて軽く溜め息をつくしまつ。
あの凛がただでサービスをしてくれる筈が無い。
ハルが考えていたのは代価だったのだが、たった今その代価はな

のはが教えてくれた。
ハルとしては知りたくもなかったが。

「いえ、お手柔らかによろしくお願いします」

頭を下げたハルになのははは視線を逸らしてにゃははと笑う。
ハルは確信する。

コイツ、ぜってぇ予定みっちり詰め込みやがったな……

内心毒づくハルだが、表面にはださず、笑っておく。
ある程度ハルの心に近づいているなのははそれが氷の笑みだと気づき、ひきつった笑みを浮かべていた。

『ごめんごめん。シフトは考え直すから、許して？　ね？』

「いえいえ～、別に構いませんよ～♪　なのは様が厳しい方だと言うのは有名ですし♪」

ずっと笑顔のままのハルだが、なのははウィンドウの中で小さくなっているように見えた。
余りに追い討ちをかけると感づいたクレアにどやされるためハルは笑みを解く。

『う～……怖かった……』

「やれやれ。困った方ですよ。貴女も……」

『も？』

「カナン君と同レベルです」

『私中学生と同レベルなの！？』

カナンと同レベル扱いをされたなのはは本気で落ち込んだのか項垂れる。

ちなみに、なのはもハルも、二人揃ってカナンに失礼だという気全く持って皆無という共通点があった。

この時はお昼過ぎ。

午後の授業でどこかの少年がくしゃみをしたという話は置いておこう。

落ち込んでいたなのはだが、パッと顔を上げると笑みを浮かべていた。

よくも悪くも、切り替えの早い女性ではある。

『でも、ありがとう。凄く助かるよ。クロスレンジは私ではやっぱり力不足だけど、ハル君が教導してくれるなら安心だね♪』

「はぁ……」

笑いかけるなのはを視界から消した。

単純に目蓋を閉じただけだ。

光のない世界の中に、なのはの笑みが浮かんだ。

あの笑みは犯則だろ……。

そうハルは思う。

なのはからの厚い信頼が感じられる。

本当に心からハルを信じているのがわかるほどに。

期待されていることがありありとわかった。

『ハル君？』

「精一杯、努力させていただきますよ。友人の、頼みですし、ね」

キョトンとしていたなのはだが、友人という言葉に反応し、目を線にして笑った。

本当に嬉しいのだろう。

『うん！　待ってるからね！』

てめぇは子供か……

満面の笑みで通信を切ったなのはに取り合えず、ハルは内心でツッコミを入れておいた。

かくいうハルも信頼されて悪い気はしていないわけだが。

「ハル……」

「はい？」

沈んだクレアの声にハルは振り向く。

何故か、ジト目をしたクレアに思いっきりにらまれていた。

見に覚えのない怒りをぶつけられ、ハルはわけがわからない。

「なのはさんは、既婚者ですの……」

「は、はぁ、そうですね」

それだけを言うやクレアは速足で行ってしまう。

おいてけぼりを食らったハルは何がいけなかったのかを考えるが、謎は解けない。
まぁ、わからないものは仕方ないと切り替え、進もうとして。
「おに～さん、ストォップ♪」
「……？」
服の裾を握る感触に後ろに振り返る。
フリルのついた真っ白なワンピースタイプの服、胸には大きなピンクのリボン、耳のようにピョコピョコと動く青のロングツーテール、瞳は碧眼、真っ白な肌、まごうことなき美少女がそこにいた。
一瞬固まるもすぐに笑みを作り直したハルは少女と視線を合わせ、頭に手を置く。
「どうしたのですか？　もしかして、迷子ですか？」
「ん～ん、あたしは迷子じゃないよ～♪」
「そうですか～」
「うん♪　迷子じゃないの♪」
元気一杯に頷く少女にハルは考えを巡らせる。
迷子じゃないという子供は大抵は迷子。
なんとかしてやりたいものの、ハルは子供は得意な方ではなく、泣かれでもしたら対処の仕方などわからない。
かといって、今歩く道は湾岸地区にあり、街中からは離れており、迷子センターなるものはない。

「貴女のお名前をお教えいただけますか？」

名前から両親のことを調べ、片っ端から縮地で跳ぼうと、コンソールを展開。

迷子センターに跳ぶという手もあったが、両親の所在地が遠距離だった場合も考えての判断だ。

手間はかかるが、ハルだからこそ出来る芸当。

「あたし～？　あたしはね、セシリア♪」

セシリアと端末に打ち込み、ハルの手が止まる。

いや、進めないのだ。

「ファミリーネームはなんですか？」

「しらな～い♪」

それを聞くや、無言でコンソールを閉じた。

ミッドチルダだけでも、セシリアという名前だけで絞ったとして、どれだけの数のセシリアがいるか、わかったものではないからだ。

さらに、ここは魔法が発達した地球より遥かに技術革命が進んだ都市。

新たに別次元から転移してくる人間もいるかもしれない。

不特定多数の中からセシリアという名前だけで絞るにはいかにハルというど、無理があった。

どうすればいいのか悩む。

「おに～さん名前も教えてほし～な～♪」

それもそうだと思い、もう一度少女と視線を合わせる。

少女はそれだけで嬉しいのか、碧眼の瞳をキラキラと輝かせた。

「申し遅れました。朱皇千春です」

「しゅおう？」

「す、お、う、ですね」

「しゅおう～♪」

「いえ、ですから……」

それから、何度となく名前の練習をさせたのだが、気に入ってしまったのかセシリアは直そうとしない。

「もう千春でいいです」

「ちはる？」

意味などない。わかってはいたが、呼ばれた以上、答えないという選択はない執事。

「はい。何ですか？」

「ちはる～♪」

「っと……」

返事を返してもらったのが嬉しかったのか、セシリアはハルにダイビング、受け止めないわけにもいかない。

抱き止めるとセシリアはニパニパと笑みのまま。

「危ないですよ？」

咎めるが恐らく意味がないであろうことはわかってはいた。
案の定、腕の中で暴れるだけでセシリアは反省の色はない。
どうすることも出来ず、自分の名前を連呼するセシリアにひたすら対応を続けた。

「ちはる～？」

「……はい」

何度目、否、何十回かもしれないが、名前を呼ばれたハルは返事を返す。
ただ、元気はなくなりはじめてはいたが。

「きど～ろっかって、どこ～？」

「六課、ですか？」

突如として投げ掛けられた質問にハルは首を傾げる。
なぜ、少女が六課を目指すのか、理由がわからないからだ。

「うん♪　ゆ～めいなろっかをみにきたんだ～♪　ちはるは場所わかる？」

「それはまぁ、今から向かうところですし……」

「ほんと!?　つれてってつれてって～♪」

二の腕にぶら下がって可愛らしい駄々をこねるセシリアにハルは苦笑する。

行きたさ余りにあてもなくさ迷っていた、というところですか。

セシリアの行動力には感服するが、少々危険な行為。

興味が別に向き、またフラフラとされて事故にでもなったら後味が悪い。

幸いにも、六課には女性が豊富だ。

親を探す間、子供の一人くらいは預かってくれるだろうと結論を下す。

「わかりました。行きましょうか」

「やた～♪

跳び跳ねて喜ぶセシリアを見て、ハルは笑う。

もう一度促すとセシリアはツーテールをピョコリとさせて頷き、ついてくる。

その後、十分……。

最初こそ元気だったセシリアだが、だんだんと歩みが遅くなり始めた。

どうしたのかと歩みを止めたのが運の尽き。

「ちはるちはる～、おんぶして～♪」

両手を前に出してせがむセシリアにハルは嘆息する。

今日は厄日なんだなと勝手に決め付け文句も言わずにセシリアを

おぶった。

「わ～い♪　高い、高いよ～♪」

しかし、きゃっきゃっとご機嫌なセシリアを見てこの笑顔が見れたならいいか、などと思ってしまう。

セシリアは終始ご機嫌なままニコニコ笑顔で六課に到着。

「わぁ～♪」

「ここが、機動六課です」

セシリアはハルの背から目を輝かせたかと思うと、即座に飛び降り猛ダッシュ！

その速さたるや、疲れていたのではなかったのかとツッコミたくなるほどだ。

「やれやれ……」

あの勢いだ。止めても無駄だろうとたかをくくり、ハルはゆっくりと六課の自動ドアを潜る。

「きゃはははは～♪」

セシリアはもう無邪気に走り回っており、止まる気配がない。

セシリアが奥に走っていくのを流し目にみつつ、ハルは正面を見た。

感じるのは、異常な圧迫感、いや、緊張感かもしれない。

ハルを出迎えようとしていたのか、訓練の休憩時間に抜け出した高町なのはが目の前に立っていた。

「すみません、あの娘も御厄介になります……」

「ハル君……」

深々と頭を下げたハルをなのははは信じられないものでもみるかのような目で、見る。

やはり、まずかったか……。

と、内心後悔する。

六課に女性が多いとはいえ、遊びたい盛りの子供など、世話役がどうしてもいる。

余計なところに人員を割かなければならないのだ。

六課は少数精鋭。人員はそこまで多くはない。

それでも、他に頼れるところもない。責められるのを覚悟で、頭を上げなかった。

「あぁ、えっと、頭を上げて？　あの娘のことなら平気だから、ね？」

「すみません……」

ゆっくりと頭を上げると、いつも通りのなのはがいた。

――若干赤い顔を逸らしてはいたが――

「うん。いいよいいよ。心配だったんだよね。“お子さんのことが”」

「は……？」

なのはが言ったことに、ハルは頭がついていかない。
しかし、そんなハルになのはは構わない。
たまに見せるなのはの天然も入り、勘違いは、加速する。

「でも、少し驚いたなぁ。ハル君にもう子供がいるなんて」

「……子供？」

「あの娘、違うの？」

キョトンとしたなのはは走り回るセシリアを指差す。
理解に遅れること約三分、ようやくハルの脳がことの次第を理解する。
と同時、感じるのはなにかが切れた音。

あぁ、仮面、取れたな……。

「ハル君？」

どうにも最近感情を前ほど隠せなくなってきていることをハルは痛感するが、今はそれに身を任せることにする。
ハル目の前で可愛らしく小首を傾げている女性にわからせてやらなければならない。
――結果、半泣きになるかもしれないが……。
そう、これは、教育、ただの、教育だ。
ハルは決して怒っているわけではない。
大きく息を吸い込む。

「アイツはただの迷子だボケェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェ

エエエエエ！！！！」

「ふぇえええええええええええええええええええ！！！？？」

「きゃはははは♪　ちはるが怒った～♪」

なのはは、自分の勘違いに恥ずかしくなったのか、ハルの大声にどなったのか、それとも両方なのか、それは定かではないが、娘のヴィヴィオに負けずおとらずの「ふぇえぇ」を響かせた。

こうして、白姫家からはクレアとハル。そして、迷子のセシリアは機動六課と合流した。

Ｎｅｘｔ　Ｓｔａｇｅ

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

たらったらーんたら！　たらったらたら～！

ジ「愛を叫べば瀕死だろうが生き返る。その名はスパ〇ダーマン！」

カ・祐「マニアックなものをやるなぁぁあああ！」

ドギャアアアアア！

ジ「ひでぶ！」

ハ「それも危険ですからね～♪」

メ「見事にグダグダだな……」

祐「召喚♪」

伊織「ていくつ～、ていくつ～いってみよ～♪　ヴィヴィオお姉ちゃん、ていくつ～って何？」

ヴ「やり直しのことだよ～。伊織ちゃん♪」

カ「いきなり出てきた伊織ちゃんに反応した！？　っていうかヴィヴィオがまともな返答を返した方がびっくりだ！？」

ヴ・伊「頭冷やそうか……？」

―煌！―

カ「なん……だと……？」

ドサ……。

レ「あ、主……」

祐「ほらほら、厨二発言してないで起きなさいよ」

ヴ「それでは～♪」

伊「改めまして～♪」

ヴ・伊「スーパー前書きタ～イム♪　行っくよ～♪」

キュルリン♪

カ「ヴィ、ヴィヴィオが壊れた……」

祐「可愛いから許す♪」

ていくつ～♪

ジ「からの～、僕がこの世界を乗っ取った！　長い間読んでいる読者諸君はわかるとはお思いだろうが、聞いてくれ。この前、後書きは本編を書いた後に書かれているのさ。現時点での文字数は、改行抜きで１５０００文字だ。ありなら２００００文字になっているかもしれない。そんな中で前書きをやっているにはわけがある！　そう、このジル・ローディアスが！　チョコを貰えなかったかもしれない君達のためにイベントを用意した！」

いや、貰ってても用意したような……

ジ「作者は黙っていたまえ！　今の僕には祐希にゃんと言えど逆らえな――」

ちゅどーーん！

祐「面白いから見てるだけよ。ふざけたこと抜かすと……」

祐希奈の手にはカナンの人形……。

グシャ……。

祐「リアルで潰すからそのつもりでね♪」

ジ「アイ、アイ、マム！」

祐「よろしい♪」

カ「説明わかりやすいけどひでぇな！？」

シュン……。

ジ「こほん、今の僕は祐希にゃん閣下の次に凄いから覚悟したまえ！！」

次にって、祐希にゃん閣下って……。

ジ「気にしないことさ！　イベントの内容だがアンケートで決めたいと思う！　どうせ、ヴィヴィオとカナンとか、祐希奈とカナンだろ。程度に思っている君達。バカかい！？」

いや、失礼だからさ……。

ジ「この僕が、そんな面白くないアンケートを取るとでも？　僕が企画した内容はだね。特定のキャラならば誰と誰をくっつけても構わない！　わかりにくいから例えをおこうか。

祐希にゃん&僕
ヴィヴィオ君&僕
メイデン君&僕
レナス君&僕
クレア君&僕
カナメ君&僕
夾ちゃん&僕
凛君&僕
奈津美さん&僕
美鈴君&僕

神楽君&僕
とまぁこのように誰と誰をくっつけてもオーケなのさ！　ふ、そうかいそうかい皆僕にそんなに表をいれたいのかい。案ずることはない！　僕はハーレムを実現して――」

ちゅどーーん！

ジ「……」

祐「調子乗んな♪」

ジ「アイ、アイ、マム！」

祐「次やったら」

カナンの人形。

グシャ……。

祐「こうよ？」

カ「二回もやらんでも！？」

ジ「まぁ、簡単に言うとだね、奈津美さんのように既に故人であったとしても夢のコラボは成立するわけさ。そう君達が望むなら！　カナ吉&カナメたんも成立する！　断言しよう！　成立させてみせるとも！

ついでにもう許可なんてとってもいないが、特別ゲストだ！

しーちゃん&カナン。

どうだいこの組み合わせは！　萌えるだろう！？　許可？　そんなもの、このジル・ローディアスに任せておきたまえよ！　しーちゃんをかっさらってみせよう！」

カ「無許可なんじゃねぇか！　つうかしーちゃんは男だ！」

ヴ「しーちゃんかぁ、協力なライバルだね……。ママ、負けない……」

カ「はいそこぉ！　男だつってる側からライバル視すんなよ！」

祐「ふん、あんなもの、どうせ大人になったらただの脂肪よ。私の方が理解してるわ……」

カ「なんでお前はそういう話だけ流せないんだ！？」

ジ「いやぁ、楽しみだね。では諸君！　ルールは一人三票まで。同じ組み合わせへ票を三票叩き込むもよし、分割して一票ずつ投票するもよし。感想欄だけでなく、この作者はメッセもかなりくるからね。予測が大切だ。さぁ、迷いたまえ！　そして眠れぬ夜を過ごすがいいさ！」

カ「なんでこんなボスキャラみたいになってんだコイツ……。まぁ、適度に頼むな。そんじゃ」

ヴ・伊「魔法少女リリカルヴィヴィオ、はっじまっるよ～♪」

キュルリン♪

カ「もう、何もいわねぇ……」

完！

第四話　開戦準備　（前編）（後書き）

ちなみに、イベントは外伝ですので本編には影響しませんよ～（笑）

第四話　開戦準備　（中編）（前書き）

くっそ、どうしてこうなった……。
かなりはやめにかきはじめていたのに中々投稿できませんでした（涙）
つ、次こそは！
っていうか感想かえさねば！
必要な部分とはいえ、話の路線が結構ずれちゃって長くなりました。
申し訳ありません……

第四話　開戦準備　（中編）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

カナンがヴェインと戦っている頃、先に仮訓練所へと到着したヴィヴィオと祐希奈は、凛、クレイ、フェイトの三人と合流していた。
三人を代表してか、凛が一歩前にでる。

「ここに来た、ということは、戦う意思はある、という風に取りますが、よろしくて？」

「はい……」

緊張した面持ちのヴィヴィオがゆっくりと頷く。
凛の朱眼が意思の強さを確かめるようにヴィヴィオと視線を合わせ、瞳の奥をものぞきこむ。
感じるのは一定以上の力を持つものが放つ威圧感。
凛のそれは、ただ、目を合わせているだけにも関わらず、ヴィヴィオに恐怖を植え付ける程。
それでも、逸らさない。真っ直ぐ見続けた。
その様子に凛は無言で頷き。

「流石はなのはさんの娘さんですわね。良い目をしています」

「……ふぅ」

放っていた威圧を解いた。
圧迫されるようなプレッシャーから解放されたヴィヴィオはホッと息をついた。

一先ず、第一の関門はクリアしたらしい。

「貴女も、よろしくて？」

「ふん……」

凛は祐希奈にも同じく威圧をかけ始めたが、祐希奈はヴィヴィオとは違い、腕組みをしたまま全く動じることなく視線を交差させ続ける。

「成る程……」

少し関心したように凛は声を上げた。

その理由は、凛の威圧を押し返し、逆に、祐希奈が凛を威圧しはじめたからだ。

表情を変えるでもなく、凛は祐希奈を見る。

同じ視線の筈なのだが、二人のそれは質が逆。

それをあえて言うならば、氷の凛、炎の祐希奈と言った所か。

「どうやら貴女は私が嫌いなようですわね？」

「ええそうね。試験とかが嫌いなのもあるけど、何よりアンタのその私を下に見る視線が気に入らないわ」

そう言う祐希奈に凛は表情は動かさず目だけで笑った。

まるで、当然とでも言うかのように。

祐希奈は良くも悪くもはっきりしている。

その言動に遠慮はなく、歳上だろうと関係なし。

カナンにも似た所があるが、カナンは理性が働いている間は我慢をしている。

それが、祐希奈にはない。常にリミットオフ状態だ。

「ねぇ、アンタホントに私より強いの？」

「ええ。まず間違いなく強いでしょう」

「ふ～ん……」

表情の一切を崩さず凛はそう言い放った。
凛のそれは自己満足などでは決してない。
積み重ねてきた経験と技量、その二つからくる自信だ。
そんな凛に祐希奈は静かに眼前に手を持ち上げ。

「じゃあ、これくらい余裕よね……！」

グッと拳を握る。
瞬間に猛る、紅蓮。
祐希奈がヴェインの際に表した怒り、それは引っ込んだわけではない。
あの場で最も苛立っていたのはカナン。
そのカナンが自分で動くならと、彼に譲っただけの話。
自信を下に見る人間に祐希奈が簡単に矛を納める筈がなかった。

「凛、これ以上は……」

「祐希ちゃんも、ね？」

挑発をする凛と怒る祐希奈を宥めようとするフェイトとヴィヴィオだが、両者の間に流れる空気は払拭されることはない。
凛からすれば当たり前のことを言っただけで悪気はなく、祐希奈

は凛が気に入らないだけなのだからどうしようもない。

「構いませんわ。フェイトさん、高町二等空尉も、退いてくださいな」

「「え？」」

突然の提案に驚き、フェイトとヴィヴィオの意識が凛に飛ぶ。

しまったと思った時には既に遅く、祐希奈は紅蓮の尾を引いて凛の前に跳躍していた。

クレイなら間に合ったかもしれない、いや、確実に間に合っていたが、彼は薄い笑みを浮かべているのみで、動こうとはしない。

「烈破爆砕拳ッ！」

凛の顔面を目掛けて撃ち抜かれた紅蓮の拳。

刹那、爆風が轟く！

もうもうと上がる黒煙。

しかし、展開された凛の障壁が拳の進行を阻んでいた。

中々硬いわね……。

ヒビ一つ入っていない障壁に祐希奈は舌打ち。

なら、割れるまで打ち込めば良い。

そう考えた祐希奈は空いた左腕に紅蓮を発現、引き絞り――

「っ！」

『Ｐｒｏｔｅｃｓｉｏｎ！』

即座に中断、凛と入れ違うように全力で障壁を張る。

祐希奈が拳を放つより尚早く、突きつけられるは弓。
凛は右腕を障壁に使っている。
弓を構えるは左腕一本。
通常の弓ならば両腕で無ければ弦を引くことは不可能だが、凛や祐希奈の弓は弦は魔力の糸で繋がれている。
魔法とは、イメージが非常に重要だ。
なのはのディバインバスターも、魔力の塊をもっと遠くに飛ばしたいというイメージから出来たもの。
もし、凛が“弦が自動で引かれ矢を打つ”、というイメージを明確にイメージ出来るなら――

「ディスカート・ルシェル」

――それは可能となる。
手を添えずとも自動で引かれていく弦、生まれいずる輝きの巨矢、紡ぐ、言霊。

「ぁ、くぅ！」
『祐希奈！』

「……ふむ」

一瞬にして防御では間違いなく三人の中で一番の祐希奈の障壁が歪に歪んだ。
威力Aランク、それが万以上も零距離で叩き込まれればそれも仕方のないこと。
むしろ、防ぎきった祐希奈に凛は関心していた。
だが、それも一瞬。

「終わりですわね」

ひび割れる障壁の奥から祐希奈が歯を食い縛る。
祐希奈が防御に回った今、凛の両腕は完全にフリー。
先に上げたように魔法にはイメージが重要だ。
それは自分がイメージしやすければしやすいほど楽になる。
本来の型である、矢をつがえるという動作のイメージなど雑作もない。
それが意味するのは、矢の生成速度の上昇、威力の増大。
結果、祐希奈が瞬きもせぬまにつがえられた矢があった。

「ディスカート・シェルノーム」

放たれた巨矢。
ディスカート・シェルノームは凛が魔力の圧縮を行った一点貫通型の威力重視の技だ。
リミットがかかっているとはいえ、人の意思を刈り取るには十分すぎた。
“当たれば、だが”

「一撃、必中！」

そう、凛の矢は雲を穿って天へと消えていた。
すんでの所で障壁を解除した祐希奈は飛行魔法で強引に身を捻り、避けた。
カナンとヴィヴィオ、二人のスピード型との訓練の賜物か、本能的な反応を見せたのだ。
さらにただ避けたに祐希奈は終わっていない。
凛と同じく、構えられる弓。名は、レイザーフォーテル。
銀に輝く魔弓だ。
カートリッジを弾き出す籠手、高速生成された巨矢が銀に輝き、

凛へと狙いを定める！

「ジャッジメントアロォォォォォォォォ！」

轟と言う音を響かせて、風が吹き荒れた。
解き放たれるは銀の巨矢。
空気を切り裂き、瞬きの間に凛へと迫る巨矢。
狙いは精確無比。
当たる、その場にいた誰もがそう思った。

「チェックメイト……」

眼前に迫る矢を冷静に見据え、凛が呟く。
弦が引かれた状態から張られ、時間を短縮、さらに、凛の弓からは蒸気が吹き出しカートリッジが使用された。
瞬間、先と同じ大きさの巨矢を“二本”つがえる凛がいた。
カートリッジによって生まれた莫大な魔力を一瞬にして硬め、矢としたのだ。
生成が速い云々の話ではない。最初からそこにあるように矢は出現した。
そして、己へと向かう銀矢に向けて一本を放ち。

「なっ！？」

祐希奈の渾身の矢を打ち砕き、相殺した。
刹那の時に生成した矢の速射で、だ。
対し、祐希奈はレイザーフォーテルでは全力とも言っても過言ではない威力。
当然、術後硬直が起こり、どんなに短い間であれ、動きは停止する。

凛を相手に、それは致命的な時間だ。

「っ！」

相殺の衝撃で舞い上がった土煙の向こうから一筋の光が土煙に風穴をあけた。

無論、正体はもう一本つがえられていた凛の矢に他ならない。

「チッ……」

自身へと向かってくる光に祐希奈は最後に手を矢に向かってかざすだけだった……。

直後、耳をつんざくような爆音が鳴り響き、地面に亀裂が走り抜け、凛の矢の威力を物語る。

吹き上がった土煙の中から祐希奈が転がり、倒れ伏す。

「祐希ちゃん！」

走り出すヴィヴィオを流し目に見つつ、凛は弓を転送、バリアジャケットを解除した。

余りにも冷静な凛にフェイトが厳しい顔つきで正面に立った。

「凛、いくら何でもやりすぎだと思う……。後で祐希奈に謝りに……」

「やりすぎ？　あれくらいで丁度良いと思いますが？　寧ろ、軽いくらいですわね」

悪びれる素振りのない凛に流石にフェイトも苛立ったのか睨み付けるような視線を凛へと叩きつけた。

そんな視線を受けて尚、凛は動じることはない。

「前々から思っていましたが、フェイトさん、貴女は少し過保護が過ぎますわよ？　あの程度でどうこうなるような器を私が選ぶとでも？」

「凛！！」

凛の態度に怒鳴り、怒りを露にしたフェイトの裾をチョンチョンと何かがつつく。

「フェイトさん、何でそんな怒ってるの？」

「何って、凛が……って、え？」

後ろを振り返ったフェイトは絶句した。

フェイトの背後には凛の矢の直撃を受け、気を失っている筈の祐希奈がいたのだから。

隣ではヴィヴィオが心配そうにあわあわしていたが、祐希奈はどこ吹く風、ピンピンしていた。

「その、祐希奈？　平気、なの……？」

「？　別に平気よ？　当たってないし」

「「当たってない？」」

ヴィヴィオとフェイトは同時に首を傾げた。

あの瞬間を見る限り、どうみても直撃にしか見えない。

「ええ」と頷く祐希奈の口から答えが出るのを待つ。

「あー、当たったちゃあ、当たったのかもしれないわね。握り潰したわけだし」

「つ、潰した？」

「……」

ケロッと言ってのけた祐希奈にヴィヴィオは唖然とし、フェイトは押し黙る。

事の真相はこうだ。

このままでは直撃を受けるとわかった祐希奈は、ファイアアームを構えて矢を掴み、身体強化を持って握り潰した。

ただ、矢に込められていた魔力量が多く、炸裂したために爆発がおき、吹き飛んだという話だった。

あまりの無茶苦茶さに、ヴィヴィオとフェイトは苦笑い、凛は溜め息、クレイは薄く笑う。

一通り説明を終えた祐希奈は凛の前へと進み、明るく笑う。

そこに曇りはない。

「流石に部長張ってるだけあって強いわね。少なくとも今の私では勝てないことはわかったわ。わざわざ相手してくれてありがとね」

「わかっていただいて何よりですわ」

相変わらず口調は変わらないものの、明らかに祐希奈の中では凛の印象は変わっていた。

口先だけではないことが今の一戦で理解出来たからだ。

ただ、祐希奈が黙ってこれで終わるかと問われると、否だ。

「頬、切れてるわよ？」

「……本当ですわね」

祐希奈に指差されて凛は初めて頬が薄く切れていることに気づいた。

傷は浅いものの、頬のせいか血が少し垂れてくる。

ハンカチを取りだし、軽く血を拭う凛を見て、祐希奈は笑う。

素直に、ではなく、ニヤリと口元を吊り上げて。

「それが今のアンタと私の差。いつか抜いたげるから首洗って待っときなさい」

ビシリと指差して言い放った祐希奈に凛は微笑を浮かべる。

凛は祐希奈にかつての幼い頃の自分を、祐希奈に重ねていた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

それは、十年程も昔の話。

ドサリと相手が倒れ伏す。

審判とおぼしき局員が旗を上げ、試合を止める。

「勝者――」

昔、管理局で訓練の一環として行われる模擬戦で常勝不敗を誇る少女がいた。

少女の年齢は十三歳程。だが、その可愛らしい見た目とは裏腹に、驚異的な強さを見せつけていた。

周囲からは天才だと表される中で、少女は孤独を感じていた。

共に高め合える仲間がいない。何を目指せばいいのかわからない。

全て、少女が強すぎるために、少女は一人だった。
最初は、勝つのは嬉しかったのを覚えている。
勝って勝って、勝ち続けて、気づいた時には少女とまともに戦える人間などほとんどいなかった。
日々失われていくものは少女の情熱。
次元の守護者、時空管理局といってもこの程度の人間しかいないのか、そんな気持ちが少女の心に巣くった時期があった。

「貴女が、凛ちゃんかしら？」

「……そうですが？」

昼食をとっていると、優しげな声がかかり、チラリと視線を上げた少女、海城・G・凛。
視線の先には銀髪蒼眼の美女がニッコリと笑っていた。

「私は一之瀬奈央って言います。よろしくね」

そう言って、女性、一之瀬奈央は名刺を渡した。
丁寧に受け取った凛の視線が名刺に走り、情報を読み取る。

一等、空尉……。

途端に奈央を見る凛の視線は厳しくなった。
最前線の隊長クラスの人間が自分に何のようなのか、わからないためだ。
普通なら話しかけたりは滅多にしない。

「いきなりで悪いんだけど、模擬戦の相手、してくれないかな？」

初対面、今さっきあったばかりの凛に、奈央は笑ってそう言った。
これには流石に凛も驚くが、表情に出さぬよう、鉄の意思で感情を内に押し込む。

「……なぜ、私に？　一之瀬一等空尉程の人ならば、私よりもっと適任の人がいるはずです」

「残念ながら、育児休暇から復帰したばっかりでね。どの部隊さんも相手にしてくれないのよ。だから、凛ちゃんにお願いしてるの。強い強いって話をしょっちゅう耳にするし、個人的にもやってみたいなって思ってたし」

「ただの噂ですわ……」

「ふ～ん。そう来るかぁ……」

正に一刀両断。
噂に引かれてきた人間など、何人もいた。
そんな人間にろくな人間はおらず、全て叩き潰した。
それが、階級が上の人間だとしても関係ない。
文字通り、全てだ。
そして、凛はこう判断した。
興味本意でよってくる人間の勝負を受けること自体がバカだった、と。
固くなな凛に「ん～」と困ったように笑う奈央。それにまた、凛は苛立つ。
理由もなく話しかけてきた上、急な模擬戦の誘い、さらにはこの――

「じゃあ、凛ちゃんが私に勝ったら何か好きなもの食べさせてあげ

る。ダメかしら？」

「っ……」

この、自分を子供扱いする優しげな視線、態度、それが凛には我慢ならなかった。

ダンッと机を叩き、凛は立ち上がり、奈央を睨んだ。

「……私が勝ったら、私に二度と近づかないでくださいますか？」

「ふふ、怖いわね」

そうは言いつつも、凛を見る奈央の優しげな視線は変わることはなかった。

数日後、両者は有給を使い、休みをとった。

無論、模擬戦のためだ。

使っていない訓練所の許可を取り、両者は構える。

互いの、弓を。

奈央の手に握られる銀の弓を見て、凛の目が見開かれた。

「魔弓……！　貴女が使い手……」

「ふふ、詳しいの？」

相変わらずの笑みを浮かべる奈央に、凛は睨んで返す。

この弓を使えたのならと、夢見たことが凛にはある。

故に、一通りのことは調べていた。

「主を意思を持って選び、固定された形は無く、主に呼応して姿を変える、ロストロギア……」

「そう。そして……」

己の左手に握る弓を見て、奈央は少し種類の違う笑みを浮かべた。

本当に悲しそうに、奈央は笑った。

「もう、私は主じゃない。お願いして待ってもらってるだけだから、この弓の力を１００％使えない……」

悲しみを残す瞳が、凛を射抜いた……。

怖かったわけではない、だが、奈央の瞳に凛は固まった。

「凛ちゃんが次の使い手に選ばれてくれたら、良かったのにって言ったら、怒るかしら？」

「次の、選定者は……」

完全に、脚が止まっていた。いや、思考そのものが停止し、選定者のことしか考えられない。

奈央の左手がゆっくりと自分に向いていることをようやく悟った。

「これも、凛ちゃんが勝てたら、教えてあげるわ」

「っ！」

反射的に凛は右腕をつきだし、障壁を張った。

直後、凛の遥か後方で起きる爆発。

「な……」

絶句した。
全力で張ったはずの障壁に風穴が空いている。
簡単な話、奈央の放った矢は凛の障壁を意に介さず、貫通したのだ。
矢は“奇跡的”に凛の頭の横を通り、背後にて着弾、現状に至る。
外れた？　いや……。

「ご期待には、そえそうかしら？」

「えぇ、とても……」

頭一つ外れたのではなく、頭一つ外されたのだ。
圧倒的な実力差を凛は奈央に感じていた。
それでも、凛は久しく、高揚感を覚える。
自分が目指すべき人はまだいると、目標を持てたからだ。
孤独を感じていた少女に、光が差し込んだ瞬間だった。

「ディスカート・アーチェ！」

「ふっ！」

凛の右腕が霞んだ、同時、奈央が飛び上がる。
何百発と言う矢が奈央の残像に突き刺さり、空を穿つ。
外したことを感覚的に悟った凛の弓には次なる矢。

「逃がしませんわ！」

巨矢が放たれた瞬間、奈央の眼は矢しか映さない。
ディスカート・ルーチェ。

拡散用の矢、その矢の数、万を越える。
それ自体には奈央はどうとも思わない。
万には万で、返すだけ。

「起きなさい。ブルーゲイル」

ドクンと、レイザーフォーテルが鼓動する。
レイザーフォーテルは蒼く、翼を象どった弓となり、奈央が弦を引くと光の粒子が背後に集束していく。

「降り注げ……」

奈央が弦を解放する。
瞬間、奈央と凛の間に、花火のような光が弾ける。
膨大な数の光矢は全く同数の光矢によって迎撃され、それが花火のように弾けているのだ。

「流石、若手ナンバーワンね」

ふふ、と笑った奈央はブルーゲイルをレイザーフォーテルへと戻し、勢いをつけて振り払う。
何かが奈央の眼前で弾かれ、逸れていく。
万の矢に混ぜられた巨矢を奈央が弓で迎撃したのだ。
動作は非常に単純ながら、一般の魔導師が見ればそれがいかに異常かがわかる。
何せ、凛の巨矢はＡＡＡを誇るほどのモノ。

少しでも角度や加減を間違えれば直撃しかねない。
それを速射で打つ凛も凛なら、容易く弾く奈央も、奈央だ。

「っと……」

少し驚いた表情を見せた奈央は障壁を張った。
そこに時間差で放たれたシェルノームが炸裂。
障壁自体はビクともせず奈央は無傷だが、濃密な爆煙が奈央を包んでいる。
奈央の表情から初めて余裕が消えた。

「アシェル、ブレードをお願い」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ』

主武装である弓を剣へと変更、回転をしながら一気に背後までを薙ぎ払う！
ギィン、と響く鋭い金属音。
拮抗する、凛の槍と、奈央の剣があった。
奈央の視界を潰している間に武器を変更した凛が肉薄したのだ。

「本来、近接戦は大がつくほど嫌いなのですが、貴女を相手に、手段を選んでいられませんから……」

「近接戦はおばさんにはちょっと、辛いんだけどね……」

そう言って、両者は火花を散らして一旦下がる。
腰だめに構えられた槍からの残像を残す三連突を、剣が弾きあげ、叩き落とし、切り払い、同時に踏み込んで入れ替わり、反転の勢いで両者の槍と剣が叩き込まれて激音を鳴らす。

「凛ちゃん、近接も、強いのね」

「お褒めに預り光栄ですわ！」

斬り結ぶこと二十合。
奈央の言葉に偽りはなく、凛に比べて動きが悪い。
数を増す刺突に対し、剣撃は明らかに減っている。
徐々にではあるものの、凛が奈央を押していた。

「はぁぁああ！」

「っ……」

突く。
一心不乱に。
突く。
疾風怒濤に。
穿つ。
一之瀬奈央という相手を打ち倒さんがために！
勝つ。
その想いを反映するかのように、凛の刺突は疾く、鋭く、強くなっていく。
疾風怒濤の攻撃に奈央の表情からは余裕は消え失せ、斬り流すのに精一杯となりつつあった。
それでも、苦手なクロスレンジで捌き続けているのは経験の差か。

「強い強い……！」

「まだ、まだぁぁぁ！」

凛は突き、奈央は捌く。
形こそ変わらないものの、技量をぶつけ合う全力の近接戦。

奈央と凛は互いに配分などは考えず、汗を飛び散らせながらひたすらに打ち合った。
そのまま六十合は打ち合ったであろう。
事態は、動く！

「くっ……」

先に苦い表情を浮かべたのは一之瀬奈央だった。
凛の猛攻の前に奈央は少しずつとはいえ後退をしていた。
広い訓練所は障害物を気にせず戦うことが出来る。
しかし、それ故に忘れがちな距離感。
苦手な近接戦で打ち合い続けた結果か、奈央はいつのまにか壁際に追い詰められていた。

「シード・クラッシュ……！」

凛の槍にこもる魔力。
好機と見た凛は連撃を捨て、全ての力を一撃に回す。
ブゥン、と、風を巻き込みながら槍は凛の後方で一回転。
脇に挟んで回転を止め、十二分に引き絞る。
距離にして一メートル弱、この距離ならば、例え大技だろうと、間違いなく当たる。
後は、穿つのみ！

「それを待ってたって言ったら――」

「どうする？」そんな意地悪い笑みが、奈央の表情に浮かんでいた。
引き絞られるは右腕、弾き出されるカートリッジ、奈央の全身にみなぎる魔力の光。

今までの剣撃は全て、大振りな一撃を呼び込むための布石。
凛が壁際に追い詰めたのではなく、奈央が追い詰めさせたのだ。
もしも凛がそのまま戦っていたのなら、呆気ない結末が待っていたのかもしれないが、凛は見事に引っ掛かった。
苦しげな表情すら見せていた奈央の策士ぶりに凛は内心では歯噛みをするが、即座に切り替えた。
策略ごと潰し、勝てばいいだけなのだから。

「「はぁぁぁあああああっ！」」

二人の腕が霞むは同時。
刺突と刺突。
剣と槍の尖端同時が激突し、大きな火花を咲かせる。
激突の余波は凄まじく、衝撃波を巻き起こす程のものだったが、二人はそれをまともに受けつつも尚不動。
両者一歩を動かず、刺突の威力は互角。
“刺突は”だが。

「このブレードには秘密があってね！」
『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！』

奈央の言葉に凛の目が驚愕に見開かれた。
カートリッジが弾け飛ぶと同時に赤熱するブレード。
根本からゆっくりと尖端へ。
それは正に、噴火の予兆！

「ブレードエクスプロージョン！／Ｂｌａｄｅ　Ｅｘｐｒｏｓｉｏｎ！」

凛の瞳に映るのは視界一面に広がる紅蓮。

全力の攻撃の最中に誰が防御が出来ようか。
凛の身体は紅蓮の奔流に呑み込まれ、爆破衝撃によって黒煙を引きながら落ちていく。

ま、だ……っ！

それでも凛は鉄の意思で意識を繋ぎ止め、左手に弓を、魔力を凝縮、奈央に定める！
奈央もそれを予感していたのか、既に弓が構えられ、銀の魔力光が集まっていく。

「ジャッジメント……ッ！」

「ディスカートッ！」

轟く銀、煌く紅。
粒子は集い、圧縮に圧縮を重ねられたソレは、矢と成り、一際大きな輝きを放つ。
奈央と凛が示し合わせる筈もない。
だが、両者は呼応するかの如く同時に弓を引き絞る！

「アロォォォォォォォ！」

「シェルノォォォォム！」

旋迅疾駆。
全く同じタイミングで放たれた両者の矢は、音速超過で空間を駆け抜ける！
二筋の光は瞬きもせぬまに相手へと到達するだろう。
障害物が無ければ。

この場合の障害物とは、奈央には凛の矢であり、凛には奈央の矢。
必然、光が激突を選ぶ。
相手を喰い破った方が勝者となる。

「っ！」

結末は見るまでもなかった。
激突は一瞬。
コンマ一秒すらあったかわからない。
刹那的に紫電が散った瞬間、紅矢、つまり凛の矢が砕け散ったのだ。
凛が“全力で圧縮した最高威力の矢が”だ。
全く速度を落とさぬまま、銀の矢が凛の眼前にあった。
が、凛は、まだ食らいつく！
そのために弓を内に溜めて。

「ぁあアアアア！！！！」

凛の眼前で火花が散った。
咆哮としか聞こえない声を凛が叫び、内から振るった弓を矢に叩きつけたのだ。
凛の弓はその連射速度に耐えるため、完全オリジナル性、オリハルコンで出来た強固なモノ。
その強度は、オーバーSランクであろう奈央の矢と激突しても折れなかったことで立証されている。
“一瞬”ではあるが……。

「っ、ぅ！！」

ミシリと響く嫌な音。

オリハルコン製の弓に亀裂が入っていた。
このままでは、折れる。
否、折れる前に、自身の腕が奈央の矢を支えられないと凛は判断した。
奈央の矢が凛の身体強化の限界を越えているが故にだ。

これで、力を出しきれていないと!?

歯を食い縛りながら凛は相手の強さを再確認。
奈央は言った。
私はもう主ではないと。
正統な主ではない状態でこの力を持つならば、実際の主を持った魔弓は、いかほどのものになるのか、見当もつかない。
ただ、わかるのは、その継承者は……。

あぁ、成る程、だから私が怒る、ということですか……。

凛の思考が答えに辿り着いた瞬間、彼女の腕は限界を越え、激痛と共に意識は途絶えた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

それから数時間、医務室に運ばれた凛は眠り続けた。
全力で戦い、魔力を使い果たした上での魔力ダメージ、無理もないと言える。

「ん……」

「あ、凛ちゃん、おはよう」

瞳を開いた凛は横から聞こえてきた声に視線を送る。
そこにはやはり、一之瀬奈央がいた。
気絶した凛を医務室に運び今まで待っていたのだ。

「模擬戦に付き合ってくれてありがとう。楽しかったわ」

「いえ……、こちらこそ、ありがとうございました」

ベッドから頭を下げた凛に奈央は微笑んで返す。
無敗、という肩書きから叩き落としてくれた奈央に凛は心から感謝した。
局に目指すべき目標が一人、出来たわけだ。
強すぎて孤独になっていた凛に敗北を経験させることで目標を与える。
奈央の狙いは始めからソレだったのではないかとすら思える。
本人に聞けば気のせいだと返すに違いないが。

「一之瀬、一等空尉……」

「ふふ、奈央でいいわよ」

「奈央さん、私は、何をすれば良いのですか？」

「ん？」

いきなり訪ねられたせいかキョトンとする奈央。
自分から振っておいて忘れている奈央に溜め息をつきつつ、凛は再度、口を開いた。

「私は貴女に負けました。ですから、貴女の出す提案を一つだけのみます。そういう模擬戦だったはずですわ……」

「おばさんとしては、模擬戦を受けてくれただけで十分なんだけど？」

「納得いきませんわ。条件は同じにしてください……」

譲らない凛に奈央は「困ったわね」と苦笑いを浮かべる。

奈央としては目的は凛を負かした時点で終了しており、そこは必要ないのだが、凛は譲らないといって聞かない。

「凛ちゃん、現時点でここに行きたいって担当とかないわよね？」

「？　ええ。今のところはありませんが……」

その答えにニコリと笑った奈央に何故か凛は嫌な感覚を覚えた。

そしてそれは、当たる……。

「じゃあ、凛ちゃんは、私の部下になりなさい」

1、2、3秒と、凛の思考は停止した。

あまりに発想がふっとんでいたために脳の処理が追い付かなかったためだ。

一分ほど額に手を当ててたっぷりと悩んで凛は顔を上げる。

聞き間違いと確かめるために。

「……今、何と？」

「凛ちゃんは、私の、部下に、なる。これが提案。面白そうでしょ

う？」

もう一度聞き返して見ても奈央の答えは変わらないまま。

頭痛すら感じ始める。

「いえ、全く……」

「ふふ」

本気で嫌な顔を浮かべた凛に奈央は悪戯っぽい笑みを浮かべた。

一之瀬奈央。冷静なようでいて行動の予測が全くつかない。その癖、人望が厚く、仕事も優秀で任務も確実にこなすため、上も強くは言えない。

「この人に目をつけられたら平穏は終わりと思え」そんな風に言われている人物であることを凛は知らなかった。

友達と呼べるような友達が一件によりいなかったので雑学に等しい情報に乏しいのは仕方ないといえば仕方ないが。

「手続きなどは……」

「抜かりなく、今やってるわ」

「抜かってくださって結構でしたのに……」

「ふふ、部下に凛ちゃんみたいな優秀な人、欲しいから」

あまりに手際が良すぎる奈央に凛は心底呆れる。

不本意ではあるが、約束は約束であり、凛としても一度言ったことを取り消しにするなどという情けないことはしたくはない。

「私が奈央さんにつけた傷、その傷が今の私と奈央さんの差……。部下になっている間に追い抜きます。絶対に……」

挑戦状を叩きつけた凛に奈央は咎めることはなく笑うだけ。望むところ。そう言わんばかりに右手を差し出して。

「じゃあ、それまではよろしくね。凛ちゃん」

「よろしくお願いいたしますわ……」

凛はそっぽを向きながらも差し出された右手をしっかりと握り返した。

結局、奈央に押しきられる形で凛は奈央の部下となったのだった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

それからしばらくたって、貴女がいきなり死んだと聞かされた時は悲しさと同時に貴女を恨みすらしました。

この私から勝ち逃げなんて、許せませんでしたから。

私には絶対に届かない高みへと、貴女は行ってしまったのですから……。

「本当に、本当に怪我はない？」

「だから、大丈夫だってば！　心配性なんだから……」

「だって、だって……」

「こんなんで半泣きにならないの！　あーもう可愛いわね！」

ふと、凛はヴィヴィオと何やらもめている祐希奈に視線を送る。
祐希奈の弓は間違いなく奈央が使っていた魔弓。
奈央があの時に悲しそうな顔をしていたのは、次の選定者が娘である祐希奈だったからだ。
その魔弓について、凛はある程度の確信を得ている。

巨大な力の代償に、持ち主を争いへと巻き込む呪いの魔弓……。

奈央も恐らくこのことを知っていたのだろう。
だからこそ、選ばれたのが凛ならば良かったのに。と言ったのだ。
身勝手な願いだとはわかっていても、子に災厄を与だかる親など普通はいない。

「やるせないですわね……」

自分達大人ではなく、まだまだ子供のカナン達が戦いの中心にいること。
そして、その力を使わざるを得ない自分と、今の状況に落胆にも近い感情を持つ。
風間カナンの勝利の剣。
一之瀬祐希奈の魔弓。
そして、高町ヴィヴィオの聖王の力。
あまりにも大きな力を三人は持ちすぎている。
保護をしようにも相手が相手、守りきるには分が悪い。　ならば。

私は私なりの方法で彼らを守る。それだけです

かつて、奈央が自分にしてくれたように、目標になり、踏み台となろうとも構わない。

それで道が開けるなら喜んでやる。
そんな思いを込めて、凛は未だにもめる二人の元へと歩き出した

Ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ

第四話　開戦準備　（中編）（後書き）

さて、企画ですが、結構な票が集まっています。
いや、わりと予想外なペアが集めててびっくりなんですが（笑）
まだ逆転のチャンスはありますので、感想、メッセ等、どちらでもどぞ～。
最後に、地震等で大変な方々、僕には頑張ってくださいと、応援しか送ることが出来ません。
頑張っている方々に頑張れ、というのは失礼なのは百も承知なのですが、他にきのきいたことも言えません……。
こんな月並みの言葉でしかありませんが、送らせていただきます。
では！

第四話　開戦準備　（後編）（前書き）

後書きはやっちまったなぁ感で一杯です（笑）
さぁて、この話のあとで感想を一気に返してきたいと思います。
感想を送っていただいた皆様、大変お待たせいたしました。
試験が今週にあるので、それが終われば少しは落ち着けるかと。
では、後編どぞ♪

第四話　開戦準備　（後編）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

凛が本格的な訓練を始めることが決定し、訓練が始まろうかという頃。

「チッ……」
『マスター！』

林の方ではガシャリと音を立ててカナンが膝をついていた。
何度も攻撃を受けたであろうカナンの姿は土に汚れており、鎧も所々砕けている。
その相手をしていたヴェインは涼しい顔をしている。
“外見上は”だが。

コイツは、予想外だ……。

そう思いながら、喉の奥から込み上げてきたモノをカナンから顔を背けて吐き出した。
ピチャリと音が響き血痰が地面に落ち、吸収されていく。
ヴェインは、カナンをキレさせた以上、非殺傷に回す配慮が少なくなることは予想していた。
元々、非殺傷設定とは相手を殺さないようにするための機能だ。
使い手が全開で戦う時、その設定限界値を越えればそのダメージは通ってしまう。
なのは達のように、熟練者ならば全力だろうと本人がデバイスを補助し、魔力ダメージのみに抑えることも可能だが、カナンはまだ魔法を使って半年。全開時ほぼメイデンに頼っている状態だ。

だが、カナンは出力だけならば凛と同レベル。
メイデンだけでどうこう出来るレベルではない。
並大抵のデバイスならその出力に耐えきれず壊れてしまうほどなのだ。
故に、ヴェインは血痰自体には興味を示さない。
彼が気にしているのは、カナンが戦いの中でそれだけのダメージをヴェインに蓄積させていたことだ。

この子も、伊達に生き残ってるわけじゃない、か。

苦笑を浮かべながら、ヴェインは槍を突き立て、左手で右肩を握る。
ゴキッ、と嫌な音が鳴り、右肩の肩があるべき所へと納まる。
戦いの最中、カナンの一撃で右肩が外れていたのだ。
右肩が外れた状態で戦い、カナンを今の状態にまで追い詰めた辺り、ヴェインの実力が伺える。

「でも、立つと。結構痛めつけたんだけどなぁ……」

相変わらずの苦笑を浮かべながらヴェインは後頭部を掻いた。
外傷こそヴェインが優秀なために少ないモノの、蓄積ダメージ自体はヴェインを明らかに上回っているはずのカナンが真っ直ぐに立ち上がっていた。
普段には絶対に見ることが出来ない獰猛とも言える笑みを浮かべなからカナンは身体を沈め、剣の柄を握りしめた。
対し、ヴェインは突き立てた黒槍を掌でクルリと回しながら尖端を下げて刺突に構える。

「ハッ……。俺は祐希奈の小学生からの付き合いでね……」

「あぁ、そうだったね。確かに祐希奈ちゃんの幼馴染みならその頑丈さも納得がいく」

文面だけ見ると、他愛もない会話を交わす。
だが、さらに状況は緊迫し、糸が張り詰めていく。
と、不意に強風が吹き、木々がざわつく。
二人の間に落ちた、木の葉、開く、金眼と朱眼！

「そう言うこった！」

「羨ましいね！」

叫んだ直後、木の葉に閃光が疾り抜け、真っ二つに裂ける。
切り裂いたのはカナン。
音速の壁を易々と突き抜け、抜刀の軌跡を後に、ヴェインの元へと切り抜け、ヴェインはいつ引いたのか、残像残す刺突が唸り。

「オラァァァァ！」

「シッ！」

その速度のまま互いの下段から剣を、正面から槍を叩きつける！
速度に違わぬ凄まじい金属音と大きな火花。
激突に痺れたのか一拍の猶予が開き。

「影の追跡者！　（シャドウ・チェイサー）」

カナンより早く、ヴェインが仕掛ける。
ヌルリとヴェインの背後に伸び上がる二体の影。
それは正にヴェインの姿を形作り、同じく影から出来た槍を得物

とし、三人のヴェインが同時に構えをとった……。

『マスター！　気を付けろ！』

「嫌でもわかる！」

「……受けろ」

メイデンの警告にカナンは柄を握る左手に力を込める。

ヴェインの優しげな瞳から光が消えた……。

瞬間にして、三十近くの火花が散った。

乱れ飛ぶは刺突の雨。斬撃の嵐。

ヴェイン三人から高速で放たれるそれはカナンとの間合いを漆黒に染め上げる。

その“ほぼ”全てを、カナンは叩き落として見せた。

流石に速度が追い付かず、軌道を逸らすだけに終わった刺突が何発かはあり、直撃ではないにしろダメージを受けている。

劣勢なのはカナンだ。

「上げていこうか！」

『Ｓｅｔ　ｕｐ　Ｒｏｕｎｄ　Ｆｉｒｓｔ！』

「うっせぇよ！」

『強化、開始！』

言葉を引き金に両者の身体に纏われる魔力光。

一撃一撃がより強く、疾く、激突は苛烈を極める。

ただ、三対一という状況はあまりに厳しすぎる。

「『グランド……ッ！』」

「っ！」

故に、カナンは状況を打破するために呼び掛ける。大地に！
危険を悟ったヴェインは影を置き去りに大きく飛び退き。

「『スパイク！』」

瞬間に大地が変動、石針の山がカナンの周囲に出来上がる。
置き去りにされていた影達は身体中を串刺しにされて姿を散らす。

「絶、空ッ！」

「お～……、とんでもないな……」

苦笑を浮かべながらヴェインは障壁を張った。
避けきる自信がなかったがために。
言霊が紡がれると同時、真一文字に閃光が疾り、石針の中心、つまりカナンから竜巻が発生。根本から綺麗に断ち切られた石針が宙に浮かされていた。
風の動きが変わり、ヴェインの頭上へと石針が移動、それら全てがカナンの力。
宙に浮く石郡の上にはカナンがいた……。

「これでも……喰らっとけぇぇぇぇ！」

余程ヴェインの言動に苛立っていたのだろう。
怒号を響かせながら石針に剣を叩きつけ、打ち出していく。
次々と石針が降り注ぐ様は正に雨と言っても過言ではない。
叩きつけられる度に地上が揺らぎ、大地が破壊されていく。
結界内でなければ大惨事だ。

全てを打ち出したカナンはヴェインの位置から十mほど距離を取り、着地。

「ふぅ……」

『少し、やり過ぎではないか？』

「いや……」

相手のこととはいえ、心配したメイデンだがカナンは即座に首を振る。

「あんなもんで終わってたら、運用部ってとこの副部長はやってられねぇよ……」

不意打ちとはいえ、部長である凛の放った矢をカナンは避けられなかった。

全開で戦って、副部長であるレイには一撃を当てることすら困難だった。

今回の相手はレイと同じ副部長。実力は同等と考えていい。

レイを基準に考えて、今の攻撃で終わったとはカナンは信じることは出来ない。

だからこそ、土煙から目を離さず、臨戦態勢を崩すことなく、睨み続けた。

「その通り……」

「なっ！」

響いた声は背後。

空間把握は何もカナンには見せていなかった。

だが、背後に実態があることを教えている。

反射的に柄に左手が動き、抜刀。
振り向き様に叩きつけた閃光は、ヴェインを胴体から“真っ二つに切り裂く”
斬れる筈のない非殺傷設定の剣で斬れた。
それは、カナンの失策を意味した。
カナンの背後にいたヴェインは影だ……。

「しまっ！」

「また、俺の勝ちだ」

となれば、本体はまだ土煙の中にいたことになる。
空間把握が状況を伝える。
土煙の中からヴェインが飛び出し、槍を構えている。
苦し紛れに身体を回転させ、剣を振るも、ヴェインはカナンの剣を斜に構えた槍で軽くいなし、刺突を放つ。
みるみる内に黒槍の刺突がその胸に迫る。
刹那、カナンの姿が歪み、消え失せる。
その姿を正面に見ながら、ヴェインは脇から後ろに槍を思いきり引いた。

「が、ぁ……」
『マスター！！』

槍の石突きが空間突破でヴェインの背後へと突き抜けたカナンの鳩尾に突き刺さっていた。
苦痛に呻くカナンと悲鳴とも言える声を上げたメイデンにヴェインは構わずカナンを振り落とす。
人体の急所への直撃にカナンはうずくまり立ち上がれない。

ただ視線だけはヴェインを睨み付けていた。

「発動までコンマ三秒、早くなったじゃないか」

影を消し、槍を肩に担いでヴェインは笑う。

が、その笑みも数秒後には消え失せる。

「でも、君は素直すぎる。それじゃあ俺に勝てないよ」

ヒュン、と槍が回転し、宣言するようにカナンの鼻先へと突きつけられる。

瞬間、槍が弾け飛び、宙を舞った。

カナンが剣を振り払って吹き飛ばしたのだ。

「その台詞は、てめぇが言うような台詞じゃねぇな……」

ニッと笑いながら、カナンが剣を支えにゆっくりと立ち上がる。

蓄積されているダメージは軽いものではないにも関わらず、足取りは揺らぐことはない。

「てめぇはどうだかしらねぇが、少なくとも俺は、てめぇに負ける気なんて、しねぇ……」

「それだけボロボロにされてどこからその根拠がくるんだか……」

根拠無く強気なカナンにヴェインは呆れ果てた。

同時に、カナンの真っ直ぐさを羨ましく思う。

ヴェインはもう、捨ててしまったモノだから。

「さっさと構えろ。仕切り直す……」

「若いねぇ……」

促すカナンにお馴染みの苦笑を浮かべながらヴェインは右腕をつきだす。

黄金の鞘へと納まる剣。ヴェインの右手に生まれでる黒剣。

纏われるは互いの魔力光。カナンは金、ヴェインは黒。

「はぁぁあああ！」

「おぉォオオオ！」

金の下段と黒の上段、互いが互いを否定しながら、激音を奏で、二人の戦いは再度始まりを迎えた……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

一方その頃機動六課。

セシリアと前線メンバーの追いかけっこはセシリアの勝利という方向で終了していた。

のだが……。

「まてまて～♪」

「わぁぁぁ！　はやてちゃぁぁん！　助けてです～！」

今度は機動六課部隊長室でセシリアがリインと追いかけっこを楽しんでいた。

最も、ここで楽しんでいるのはセシリアだけで、リインは半泣き

なことを付け加えておこう。

「ごめんなぁ。リイン……。私はもう、限界や……」

「そそそ、そんなぁ～！」

ワークデスクで、ぐでんと伸びたはやてはリインを助ける気力すら残っていない。

それもそのはず。部屋に飛び散る紙、紙、また紙。

無論、セシリアとリインの騒動によるものが原因だが、この紙が問題なのである。

この紙は所謂報告書であり、上層部に提出しなければならない。

データ化が進んでいるとはいえ、ハッキング等の危険もあるため、こういった類いのものは紙で提出しなければならない。

はやてだけの報告書ならまだ良かったのだが、はやては部隊長であり、彼女の部屋にはロングアーチ全員分の報告書が一挙に集まっている。

午前の間からそれらの整理や確認を行い、後少しという所でこの来襲だ。

もう見事なまでにぐちゃぐちゃにかき混ぜられ、彼女の頑張りは無と化した。

「私の半日……パーや……」

呟いた直後、ショックに首で頭を支えられなくなったのか、ゴン、と額をデスクにぶつけ泣きそうになっていた。

もう今日は徹夜かと気が滅入り始めていたはやてだが、ツンツンと脇をつつく感触に重い頭を回し、視線を向ける。

「はやて～……」

「あ～……、セシリアちゃん……、どうしたん？」

いつのまにか、走り回っていた筈のセシリアがはやての隣で俯いていた。

「ごめん、なさい……。あたしが……、はやての、ひっぐ……」

俯いていたために瞳は見えないが、泣きじゃくっているセシリアを見て、はやては苦笑した。

今まで、なのはがヴィヴィオを育てていくのを見ていたが、これは大変だと思う。

甘やかすだけではなく、叱ることもしなければならない。

本人のためとはいえ、叱られていい気分になる子はいない。

嫌われるリスクを負わなければならないのだ。

「うん。ええよ」

だが、自分には難しいとはやては思う。

部隊長という肩書きがあるために隊員達に厳しいことも言うことはあるが、元来、はやては優しい人間だ。

部隊になんの関係もない子供を叱るのは無理だった。

「ホント……？」

「ホントホント。私は怒ってへんから、気にせんでええよ」

「……遊んでてもいい？」

「加減はしてあげてな？」

「わぁ♪　はやて、ありがと～♪」

俯いていた顔を上げ、パァっとセシリアが笑う。
恐らく、また遊び始めるであろうことはわかったが、強くは言えない。
自分があとで頑張ればいい話だと諦めた。

「セシリア。いけませんよ」

「あ……ハル君……」

セシリアが遊びを再開しようとした直後にハルが現れる。
ハルは部屋の惨状を見るや、盛大に溜め息をついた。

「スバル様達が見失ったというので探してみれば、こんなところで暴れていたのですか……」

「あばれてないもん。遊んでたんだもん！」

プクゥっと頬を膨らませたセシリアにハルは再び溜め息。

「ね～、ちはるもあそぼ～♪」

「貴女はこの部屋の状態を見て何も思わないのですか？　自分の家ならまだしも、明らかに迷惑でしょう？」

せがんだものの返ってきた答えはノーの一言
ニコニコ顔に戻ったセシリアは直ぐ様不機嫌となる。
ハルならば遊んでくれると思っていたのに、拒絶され、おまけに

説教だ。
叱られるのが好きな人間などいない。
「だって、あたし、お家わかんない～！」
「ならば尚更です。宿を借りている身で人様の家で迷惑をかけるというのは恥ずかしいことですよ？」
「むぅ～！」
ハルの言葉に、セシリアはどんどん不機嫌となっていくのは目に見えて明らかだった。
その証拠に、セシリアの瞳はハルを睨み付け始めている。
「ハル君、私がええよって言ったんやから、そんなにセシリアちゃんを責めたらんたって？」
「ほら～！　はやてだっていいよって言ってくれたもん！」
「いいと言われたから何ですか？　貴女はいくらでも迷惑をかけてもいい、と？　はやて様もセシリアを庇わなくて結構ですよ」
「む～！　む～！　む～！」
可哀想だと思ったのか、ハルが嫌われるのとを危惧したのかはわからないが、はやてが口を挟むもののハルは耳を貸さない。
手ごわいハルにダンダンと地団駄を踏むセシリアだが、頭では理解出来ているのか何も言い返せない。
しばらく拳を握って俯いてジッとしていたセシリアだが、キッと涙目のままハルを睨む。

「ちはるのばかぁ！　大っ嫌い～！」

そう叫びながら、憤慨したセシリアはハルの隣を走り抜け、部隊長室を去ってしまう。

少しの沈黙が流れ、ハルは疲れたように溜め息をついた。

「ハル君、ごめんな？」

「はやて様が謝る必要はありませんよ。何もしていないのですからね」

「でも、ホンマは私が言わなあかんことやったのに……」

そう呟くはやてに、「何か見られて困るものは？」と唐突にハルが訊ね、はやてが首を振るとハルは手近にある書類から集め始める。

ボーッとしていたはやてはハッとしてから書類集めに参加する。

二人は無言のまま、ただ書類を集め続ける。

「こういうことは、慣れた人間が請け負うのが一番ですよ。ですから気にしないでください」

先に沈黙を破ったのはハルだった。

だが、気にするなと言われても、自分が甘かったせいで汚れ役をハルに押し付けてしまった罪悪感がはやてにはある。

そんなはやての心情を読み取ったのか、ハルは「あははは」と軽く笑った。

「な、何が可笑しいんや？」

「あぁ、すみません。本当に子供の相手に慣れていないのだなと思いまして」

そう言われて少しムッとくることがあったのか、はやては書類集めを中断。ハルも一旦集めた書類をデスクに置いて、はやてと正面から向き合った。

「あのなぁ、私はヴィータとリインの世話してきたんよ？　まぁ、今回はちょっと迷惑かけてしもたけど……」

「申し訳ありません。説明不足でしたね。僕が言っているのは躾の方に対してです」

ハルの言葉にはやては小首を傾げた。

余談ではあるが、ヴィータははやてより遥かに歳上であり、間違っても子供ではないことを知らせておく。

本人がはやての言葉を聞いていたなら、「あたしは子供じゃねぇ！」という台詞が炸裂していたことだろう。

閑話休題。

「子供と言うのは、頭では理解していても、反発したがるものなので、今回のセシリアのようになってしまいますが、先にも言った通り、こちらが正しいということはわかっています。ですから、瞬間的な憤怒の後、大抵の場合は嫌悪感に悩まされます。謝りに来たいのですが、言ってしまった手前謝り辛い子供は別の大人の助けを求めます」

「別の大人……」

「はい。ここ、機動六課には成人した女性が多く、探すのには事欠

きません。その大人の中で、親身に話を聞いてくれそうで、優しく、セシリアの場合だと僕に関わりのありそうな女性、となると――」

優しげな笑みを浮かべながら、ハルは扉の方へと向き直る。

同時、コンコン、と控えめなノックが響いた。

「高町なのは一等空尉です」

「彼女、となりますよね」

「お見通しやね。どうぞ～」

「失礼します」という声と共に扉がスライドし、制服となったなのはが入室する。

その足にしがみつくセシリアの頭を撫でながら。

「お疲れさまです」

「にゃはは。着替えてる途中にセシリアちゃんに抱きつかれたからびっくりしちゃったよ。ちはるを怒らせちゃったって泣いてたけど、どうしたの？」

「怒っていたわけではないのですがね」

セシリアから見れば、優しかったハルが淡々と話し、主張を聞いてくれないハルが怒っているように見えたのだろう。

ハルから簡単に話を聞いたなのはは事情を把握したのか頷いた。

そのまま屈んでセシリアと同じ視点に合わせる。

「ほらね？　ハルお兄ちゃん、怒ってないって。私も一緒にいてあ

げるから、だから、頑張ろう？」

「ホント……？」

「うん。本当」

「ホントにホント？」

「本当に本当。なのはさんを信じて。ね？」

「うん……」

「えらいえらい♪」

二度にわたる確認の後、セシリアはほんの少しだが、頷いた。
頭を撫でられ、勇気が出たのか、なのはの影に隠れていたセシリアがおずおずと、ハルの前に現れる。
その瞳は、恐怖に揺れて、ハルを見上げている。

「ちはる、はやて、散らかして、ごめんなさい……」

「私はさっきも言ったけど、もうええよ。怒ってへんから安心してな？」

はやての優しげな言葉に安心したのか、ホッ息を吐くセシリア。
だが、ハルは無言。

「……ちはる、は……？」

「謝るだけなら、先程も貴女はやっていましたね？」

「うぅ……」

その言葉の意味は、まだ謝罪と認めないということ。
ハルは決して怒っているわけではない。
ただ、甘やかす気はない、というだけ。

「話を聞くのは、この部屋の片付けをしてからにしましょうか。もちろん。貴女が、ですよ？　自分の行動に責任を持ちなさい。後始末は自分でやれということです。出来ますね？　お二方とリインフォース様は手伝わないようにお願いします。では、しばらくしたらまた来ますので失礼いたします」

それだけを一気に言うと、ハルはセシリアの返事も聞かず部屋を出ていってしまう。

「にゃはは。な、中々厳しいね……」

「せ、せやね……」

「ちはる～……」

流石にこの対応は予想外だったのか、なのはもはやても驚きを隠せないでいた。
セシリアは肩を落とし、再び泣きそうになっていた。

「「あ……」」

「ぐす……」

しかし、そんな状態になりながらもセシリアは書類を集め始めた。
ハルとはやてが片付けたため、残りはそれほど多くはないが、身体の小さいセシリアが部屋に散らばる書類を集めるとなるとかなり動き回らなくてはならない。
それでも、文句も言わず、集め続ける。
そうすること30分。ようやく全ての書類をはやての机の上へと集め終わった。
直後、部隊長室の扉が開き、右手に箱を持ってハルが帰ってきた。

「ぴ、ぴったり……」

「ハル君どっかで見てるんか？」

「いえいえ、たまたまです♪」

なのはとはやてに爽やかノンフライな笑みを返しつつ、視線を下に、つまりセシリアを見る。

「ちはる……」

「はい」

ビクリとしたセシリア。その姿にハルは笑いかける。
ポン。と優しく左手を頭に乗せて、撫でた。
屈んで右手に持つ箱をセシリアに差し出した。

「ちはる……？」

「良くできましたね。ですからこれはそのご褒美です。夕食の時にデザートにでもしてください」

状況を飲み込めていないのか、セシリアは首を傾げる。
取り合えずは与えられた箱を開けると、中には可愛らしいショートケーキが入っていた。
女の子はケーキが好き。それはもちろんセシリアにも当てはまり、目を輝かせる。

「たべていいの!?」

「その代わり、夕食までは大人しくしていること。良いですね？」

「うんうん！　するする～♪」

余程嬉しかったのか、箱を掲げてセシリアは走り回り、そのままの勢いで廊下へ。
思いきり息を吸い込んで。

「ちはる～、だいすき～♪」

「おやおや……」

そう言い放つとさっきまでのしおらしさはどこへやら、どこかへと走り去ってしまう。
その様子を苦笑しながら見送ったハルを迎えるのは二人の優しい視線。

「ハル君も素直じゃないね～。セシリアちゃんが可愛いくせに～」

「な～？　わざわざケーキ作る時間稼ぎとかしてな～？」

「さぁ、どうでしょうね？　ただの気分ですよ」

からかう二人をかわしつつ、肩を竦める。

それでもなのはとはやてはからかっていたが、のらりくらりと掴み所のない性格を遺憾なく発揮し、受け流す。

「さて、お二人にこれ以上からかわれるのも面倒ですし、書類の整理でもしていますよ」

「あ、流石にそれは私が――」

「いえいえ、暇を持て余していますので♪　お借りします」

はやてが止める間もなく、ハルは着席、「ふむ」と一旦頷いたかと思うと霞むほどの勢いで手が動き、日付、種類、人物、別に整理を始めてしまった。

その早さは正に圧巻の一言。

ハル一人いれば六課の雑務は事足りそうな気さえする。

「改めて見ると、ハル君みたいなとんでもない人もいるもんやなぁ」

「ちょっと頑固だけどね？」

「聞こえていますよ？」

「あら……」

「失敗失敗」と可愛らしく少しだけ舌を出したなのはにハルはため息をつくと作業を再開。

しようとして。

「よ～せいさんみ～け♪」

そんな声に、三人は頭を抱えた。

大人しくしていると言ってからまだ十分も経っていない。

まぁ、六課内部のほとんどは幸いオフの時間帯なので前線メンバーに迷惑をかけるまだ多目に見られる――

「あぁ！？　てめぇ誰……、こっちくんなぁぁあああ！」

「あぁ、アルちゃん！？」

「大変だ！　アルを助けないと！」

「くるんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

「まてまて～♪」

「あたしに向かってくるってんなら相応の覚悟はあんだな！？　ブラッド！」

「「ダメぇぇぇぇ！／待ってぇぇぇぇ！」」

――筈もなかった。

セシリアをこのまま放っておいた場合、騒動が収まる前に六課が風穴だらけになってしまう。

「わ、私、遊び相手なってくるよ……」

「ほんなら、私も行こかなぁ……」

「お願いします……。仕事は終わらせておきますので……」

三人は壮大に溜め息をつく。

セシリアがいる間はゆっくり休めそうもないと覚悟を決める。

六課の苦悩の日々はまだしばらく続くこととなる。

Ｎｅｘｔ　Ｓｔａｇｅ▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

後書きコーナー。

祐「キラッ☆」

カ「なんか最近お前の行動が読めないんだが……」

ト・ジ「だがそれがいい！」

祐「ありがと♪」

カ「そんだけのために出すなよ！？」

ヴ「ま、まぁまぁ、抑えて抑えて」

カ「いいや、今日ばっかりはひかねぇ。祐希奈！　最近のお前の横暴は目にあまる！」

祐「へぇ……？」

カ「あぁ言ってやるとも！　だいたいだな――」

しばらくお待ちください♪

夾　（スク水）「むっす～……」

夾　（チャイナ服）「ふん……」

夾　（ゴスロリ）「……あ？」

夾　（ドレス）「……殺す」

夾　（ナース）「……面白いか？」

尚、この撮影はジル、トウヤ両名による命懸けの撮影のたまものです。

よく噛み締めてご想像ください♪

ジ「しかし、裸Yシャツだけは……」

ト「無理だったよ……」

夾「……じゃあ殺すけど……遺言はそれでいいな……？」

ジ・ト「我が人生にいっぺんの悔い――」

夾「死ね♪」

―滅！―

大変お待たせいたしました♪

カ「――わかったかぁ！！」

祐「全、然♪」

カ「何故に早送りされたし！？」

爽　（メイド）「大変お待たせいたしましたご主人様ぁぁ！」

ドゴァアア！

カ「がっは……」

爽　（メイド）「んだって俺がこんな格好を……」

ヴ「いっぱい服着せてもらえて羨ましいです。似合ってますし～」

爽　（メイド）「くっ！」

キラリン☆

ヴ「ふぇ？」

祐「鉄の精神を持つ爽ちゃんを泣かせるなんて、ヴィヴィオ、相変わらず恐ろしい子ね……」

ヴ「そ、そんなつもりで言ったんじゃないよ？」

祐「またまたぁ♪　謙遜しないでよ魔王の娘さん♪」

ヴ「私はバルバ〇スの娘じゃないもん！」

祐「いや、そこまで言ってないんだけど……」

ヴ「あ、あれ？」

カナメ　（ラ◯カ仕様）「グッダグだなまま召喚です。キラッ☆」

カ「アァァァァァジィィィィィィィ！！！　訳（てんめぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！）」

祐「何あいつ、夾ちゃんに殴られておかしくなったのかしら……？」

ヴ「さ、さぁ？」

ジ「カナ吉の元ネタについてははニコ◯にて探してくれたまえ！」
いらんことといってんと次にいってみよ～（笑）
注）ここから下は危険なため、普通のカオスをおのぞみのかたはスルーしてください。

祐「本日の召喚は～、神加速（ｇｏｄａｃｃｅｌ）さんの作品、留まらない流れから、村雨流留（むらさめるる）　さんのラッキーボーイ三世よ♪」

流「村雨流留だが……ラッキーボーイ三世、とは？」

祐「ん～、違うか。どっちかっていうと変態第一候補？」

流「意味がわからん……」

は「そんな、私と熱い夜を過ごした仲やない……」

流「何故はやてがここにいるのかは知らんが断じてそんなことはなかったと言っておく」

祐「召喚理由なんてただのノリよ！　悪い！？　なんか文句あるわけ！？」

流「……無いが？」

祐「何コイツ……。究極的に冷めてるわね……」

は「まぁ、流留やしね～」

カ「取り合えず、初めまして。カナンです」

流「あぁ、よろしく」

祐「……祐希奈よ？」

流「高圧的だな。まぁ、よろしく」

ヴ「ヴ、ヴィヴィオです」

流「ヴィヴィオ……？」

ジー……

ヴ「え、あのあの……」

ジー……

は「る、流留がヴィヴィオに狙いを定めとる!?　危ない。襲われるで!?」

ヴ「ふぇぇぇ!?　お、おそ!?　襲われるって私食べられるの!?」

カ「いや、ないから……」

ジ「食べる。あながちその表現も間違いではないね！　こう……」

夾　（メイド）「説明せんでいいわぁぁあああ!!」

ドグルシャ！

ジ「さ、さすがは夾、ちゃん……」

ドサ。

ヴ「ふぇぇぇん！」

流「……」

祐「って、そうこうしてる内にヴィヴィオが壁際に追い詰められてるわ！」

は「危ない。ヴィヴィオが流留の餌食に！　私もそうやった……。嫌がる私を無理矢理流留が。……よよよ……」

夾　（メイド）「にしては危機感ねぇなアンタ……」

は「だって……、そんな流留の強引な所が……」

ポッ。

祐「強引……」

ジー……

カ「な、何だよ？」

祐「べ、別に！？」

プイ！

は「祐希奈も強引にこう、ガバッとベッドに押し倒されてやな～♪」

祐「な、何されるの？（ドキドキ）」

カ「ちょ、ちょっと待て！　こっから先は聞いちゃダメな気がするんだ――」

バキャアアア！

カ「うそぉ！？」

祐「つ、続きは……？」

は「ふふふ、それはもちろん――」

夾　（メイド）「変な妄想してるとこ悪いが、ヴィヴィオがピンチ

だぜ？」

カ・祐「ハッ！」

ヴ「ふぇぇぇぇぇぇん！　忘れられてる～！」

祐「取り合えず、カナン！」

カ「おう！」

は「リングバインド♪」

カ「はぁ！？」

ビターン！（転けて顔面から地面に突貫）

爽　（メイド）「大丈夫かこいつ……？」

ガバッ！

爽　（メイド）「うぉ！？」

カ「大丈夫だけども！」

祐「さ、流石ね……」

カ「おう！」

カナメ「でも頭はダメージ負ってますね♪」

夾　（メイド）「発言がおかしいからな……」

カ「何すんだよはやてさん！」

カナメ「そして今更ですね♪」

祐「本気で心配なってきたわ……」

は「まぁまぁ、流留は変態候補やけど大丈夫やって♪」

カ「どこにその根拠が！？」

は「（２１）には興味ないからや♪」

カ「ネタがあぶねぇ！？」

カナメ「ちなみにロリって読みます♪」

ジ「わからない人は走り書きで（２１）と書いてみたまえ！　ちなみに僕はどちらでも――」

夾　（メイド）「聞いてねぇよ♪」

ドグルァァァ！

ジ「鳩尾に抉り込むストレートー……」

ドサ。

祐「で、バカやってる間に間に合わないけど？」

カ「しまった！？」

は「（ニヤリ）」

カナメ「アホですね♪」

流「……」

ヴ「ふぇ、ふぇぇ……」

祐「あぁ、半泣きのヴィヴィオ可愛い……♪」

カ「そんなこと言ってる余裕あるんだ！？」

祐「だって神ですから♪」

祐希にゃんですから！

カ「なんかすんません……」

は「ヴィヴィオちゃんがピンチ！　はたして、どうなってしまうのかぁぁ！」

夾　（メイド）「ノリノリだな……」

流「……」

ヴ「ひっぐ……」

ポン。

ヴ「ふぇ……？」

流「大きく、なったな……」

ナデナデ

ヴ「……えへへ。ありがとうございます♪」

は「ほら、平気やろ♪」

カ・祐「それだけのために今まで引っ張ったのかお前はぁぁあああああ！！！！」

流「な、なんだ？　何がどうなって――」

カ・祐「死いいいねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

流「ぐぁあああああ！！！」

は「やっぱ、人を焚き付けるのってオモロイな♪」

夾　（メイド）「世話をハルに押し付けた俺がいうのもなんだが、アンタ最低だな……」

は「因子のせいやからね♪」

カ「よくわからないまま、完♪」

ジ「ちなみに、アンケートだが、次話で締め切るので急ぎたまえよ！」

ほんとによくわからないまま、完！

第五話　男じゃねぇ！！（前書き）

一月もあいてしまった……。
就活終わったと思ったら次は国家試験の勉強がまってました。
趣味に没頭できると思ったのに世の中甘くなかった……。
とにかく、お待ちかねの第五話、どうぞです♪

第五話　男じゃねぇ！！

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

切り裂いていく。
空を駆け、雲を穿ちながら銀の矢が夕闇に染まる空を一直線に。

「はぁ、はぁ……」

荒い息づかい、全身で呼吸しているかのように身体が上下に揺れる。
その人は祐希奈だ。
下ろしていた銀の髪を邪魔なためか後ろに縛り、普段の涼しげな表情は見る影もなく、頬を伝ってきた汗を右手で雑に拭う。

「どうされました？　まだまだですわよ？　早くしてくださいな」

「わかってるわよ……うっさいわね……」

隣で急かす凛を睨み、祐希奈は弓をつがえ、ジャッジメントアローを空に打ち放つ。
何故、そんなことをしているのか、それは一時間程前に遡る。

「私が貴女に必要としているのは矢の精度、ですわね」

「精度ぉ？」

凛の言葉に祐希奈は顔をしかめ、うげぇとでも言いたげな表情を浮かべた。

いかにも細かそうな作業故に、だ。

「そんなに外したことないわよ？」

「それは、ロングレンジでも、ですか？」

「それは……」

反論しようと口を開きかけて、そのまま閉じる。

そう、祐希奈は遠距離時矢の命中精度がかなり低い。

彼女のスタイルは近接がメインであり、矢の威力は絶大ではあるものの、ほとんどの場合は外しにくい場面でしか使用しない。

凛は今までの戦闘データからそれを見抜き、祐希奈に突きつけているのだ。

「苦手という自覚はある、と……」

そう言われ、イラついたのキッと凛を睨みあげる。

それを凛は氷の視線で受け止める。

「何か言いたいことが？」そう言わんばかりの凛の視線。

「なら、近づいて倒せばいいんでしょ。弓なんて使わなくたって負けないわよ！　今までだってずっと――」

「黙りなさい」

「っ！」

視線に反論しようとした祐希奈を一言でピシャリと黙らせる。

普段の祐希奈ならばここで黙る筈はないが、今回は、押し黙った。

それは、何処かで足りないと思う部分があったからだ。

「今までは通じた？　ふざけるのも大概にしてくださいな。“今のままで”はなく、“これから”通じる力を身に付けろと私は言っているのです。今のままで、力不足を一度として感じたことはないと？　苦戦すらしたことがない、と？」

「うっさいわね！　アンタこそ黙りなさいよ！」

並び立てられる言葉に俯いていた祐希奈が怒鳴り、今度は凛が黙る番だった。

一分、二分と、沈黙が流れる。

「そんなに言われなくたってわかってるわよ……。力が足りないことくらい……。今の私で通じない相手なんだってことぐらいは……」

目の前に上げた拳を握り締め、ゆっくりと祐希奈が口を開く。

祐希奈がロストロギア使いとまともに戦ったのは一度だけ。

アイギスの盾を持った女性、ただ一人だ。

祐希奈が全力を持って叩き込んだ一撃は大盾によってあっさりと阻まれ、あげく、衝撃で自身の腕の骨を砕いた。

あの時はハルが助けにきたために無事ですんだが、遅れていたなら……。

守られるだけは嫌だから、逆にカナンを守るため、ずっとヴィヴィオと鍛練を積み重ね、強くなったと思ったのにまだ届かない相手がいる。

レーヴァテインを持つ大男にはヴィヴィオと二人がかりで対峙し、止められもしなかった。

最近はハルの一件に必死だったために忘れていたことだが、思い返すといかに力が足りないのかがわかる。

そんな自分が嫌になったのか、自嘲気味に祐希奈が笑う。

「ハッ……、笑えてくるわね。アンタにこんだけ啖呵切っといてさ……。よくよく思い出してみれば肝心の敵に勝ったことないじゃない……」

まだ、凛は話さない。

己の力を自覚し、相手との力量の差に絶望したとしても、だ。

このまま祐希奈が逃げに走ったとしても止める気もない。

祐希奈がそこまでだったということなだけ――

「それで、自覚した貴女はどうしますか？」

「決まってんじゃない……」

――最も、そんな道を祐希奈が選ぶ筈はないと確信していたが。

自分ならどう考えるか、辿り着く答えは一つ。

炎の祐希奈と氷の凛、真逆なれど、どこか似ているこの二人。

不適に笑う祐希奈を見て、同じ答えに至ったのだと確信した。

「今まで負けた分、きっちりお釣りもつけて返すわよ」

「良い答えですわね」

「そのためには強くならないとね。で、その最短距離をアンタが知ってる、と……」

「最短距離かどうかは保証出来かねますが、少なくともがむしゃらにやるよりは効果的だとは思いますが？」

その言葉に祐希奈がふむと頷き、納得したのか弓を転送。
銀に輝く光を凝縮し、一本の矢へと纏めていく。

「ま、しょうがないから聞いたげるし、従ったげる。アンタは惜しみ無く教えなさいよ？」

「物言いは気に入りませんが、良いでしょう。軽い気持ちではなさそうですし、ね」

年相応な笑みを浮かべた祐希奈に凛は微笑を返した。
訓練を初めてからようやく一本の銀矢が空を疾る。
大きく回り道をしながらも、祐希奈の訓練はこうして始まった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「プラズマランサー！」

上空に響くフェイトの声。
彼女の周囲に浮かぶ無数の雷の槍。
狙うは眼下に見える高町ヴィヴィオ。

『敵スフィア上空より来ます』
「ありがとう！」

それを察知したフェアリーが情報をヴィヴィオに伝え、ヴィヴィオは加速。

「ファイア！」

と同時、ヴィヴィオに追いすがるように空から雷槍が次々に降り

注ぐ。
が、高速で撹乱飛行をするヴィヴィオを捉えきれないのか地面に着弾し、土煙を舞いあげる。
『反応、高速接近中』
「っ……」
視覚情報を得るため、飛行しながら一回転。
その瞳に捉えたのは自身を囲む魔方陣。
タン、そんな静かな足音をヴィヴィオは頭上より聞く。
「セカンド！」
足を止め、形成された双刃剣を唸りとともに振り上げる。
弾け飛ぶ火花。
ぶつかり合うは刃と拳。
頭上から一撃を叩き込んだ人物はその反動でヴィヴィオの後方へと飛んでいく。
タン、と響くそれは人物が着地した音。
風を切り裂きながらヴィヴィオが振り向いた先には、膝のバネを存分に溜めるクレイがいた。
「翔！」
瞬間にクレイの足に魔力が渦巻き、音速の領域へと突入する。
クレイは歩方と呼ばれる独自の移動術を持ち、それは何種類か存在する。
翔は、簡単にいえば直線での移動を凄まじく速くする、というものだ。
その翔を持って、勢いを乗せた拳を引き絞り、打ち放つ！

「流石にこの程度は捉えますか……」

「カナン君で鍛えられてますから……」

が、ヴィヴィオは双刃の剣腹を盾にするようにしてその一撃を防いでいた。

直線でのスピード。

確かにクレイの歩方も速い。だが、それ以上にカナンの空間突破は疾い。

何せ、空間ごと縮めて目の前に現れるのだから空間を駆けるというよりは空間を跳ぶが近い。

そんな直線最速に等しいカナンと訓練を積んできたのだ。

クレイの一撃を止められるのも納得がいく。

「安心なさらないようにお願いします……！」

「してませんよ！」

空中で静止していた二人の身体がフワリと離れる。

その最中、クレイの身体には魔力が流れ、ヴィヴィオの双刃剣は二振りの双剣へと変化する。

「っ！」

短い呼気の放出と共に、クレイが四肢を霞ませる。

直打、蹴り上げ、回し蹴り、打ち下ろし。

踊るように鮮やかに、しかし、鮮烈な体術がクレイからは放たれる。

それら全てを二振りの双刃を一撃一撃にあてがうようにして受け

流し、捌ききる。
防御が薄い。
その欠点を補うために技量を磨いてきたヴィヴィオだからこそ出来る芸当。
その技量は、運用部に所属しているクレイにも引けをとることはない。
十合、二十合と剣撃を交わしていく。

こ、こ！

「……っ」

自身の右側から打ち出された拳を流すのではなく、沈み込みながらヴィヴィオは避けた。
ただ沈むのではなく前へと踏み込みながらだ。
クレイもそれに対応し、障壁を張ったが、ヴィヴィオは既に前にはいない。

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ』
「遅い！」

クレイの動きを先読みしたヴィヴィオは即座に回転しながら方向を修正。
クレイの右側を抜けていた。
巻き付けるようにして引いていた剣は裏拳を放つようにしてクレイの後頭部を狙う。

「はぁぁぁっ！」

「くっ！」

が、ヴィヴィオの相手はクレイ一人ではない。
頭上に煌めく雷光。
そう、フェイトまでもがヴィヴィオの敵だ。
アサルトモードのバルディッシュを振りかぶり、正に雷の如く降り注いだ……。
ほとんど術後硬直がないヴィヴィオ。
そんな彼女でも、攻撃の最中に回避運動は困難を極める。
直撃を受けないよう剣を持ち上げて。

え……？

フェイトはそのままヴィヴィオを通りすぎる。

「か、は……」

「残念……」

瞬間、背中に激痛が走り抜けた。
ヴィヴィオの背中に叩き込まれたのはクレイの掌低。
フェイトは囮。本命はクレイの一撃。
フェイトは薄い防御であるヴィヴィオに直撃を入れるための布石でしかない。
直撃の痛みはヴィヴィオの強みである動きを止める。
激痛に顔を歪めながらヴィヴィオは振り向く。
その頭に影が指した……。

「すみません……」

「がっ！」

謝罪の言葉と共に、頭上から蹴りが襲来し、ヴィヴィオの肩を打って叩き落とした。
リカバリーの魔法も使えなかったのか、地面からは土煙が上がっている。
直撃なのは明らかでありクレイが攻撃の手を止める。

「バルディッシュ……」
『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ……』

その隣でフェイトが雷球を右手に浮かばせていた。
フェイトが構えている魔法はプラズマスマッシャー。
ランクにしてＡＡを越える砲撃魔法。

「フェイトさん、それは余りに――」

「辛いよ……」

クレイの言葉を遮りフェイトは静かに呟いた。
その表情には確かに辛さが滲み出していて。

「辛いけど、本来なら君と同じであの子達を戦いになんて巻き込みたくないけど……」

かつて、ヴィヴィオの母親の代わりであったフェイト。
いや、今もヴィヴィオのことが心配でたまらず、自分の近くにいてほしいとすら願っている。

「ううん、違うね。巻き込みたい、なんて思ってる人いないよね……。でも、状況はそれを許してくれそうにないし、いずれは関わる

ことになるんだと思う。だから凛は少しでもリスクが低い今、動いたんだろうね。戦いが本格化するまえに、あの子達を強くするために……」

無鉄砲なカナンが心配で、言うことを聞かない祐希奈が心配で、娘のように思っているヴィヴィオが心配で。

心配でとても心配で。

でも、だからこそ、フェイトは手抜きをしない。

「強くなることが、あの子達が元気に帰ってこれることに繋がるなら、辛くても、今だけは、鬼にでも悪魔にでも、なる……！」

フェイトから迷いが消えた瞬間、雷鳴が轟く。

待機されていた術が完成を迎えたのだ。

未だにヴィヴィオは土煙の中、フェイトの動きは見えていない。

「プラズマ、スマッシャァァー！」

それでも、一切の躊躇なく砲撃を叩き込んだ。

存在していた木々を吹き飛ばし、空気が振動する程の爆音が鳴り響かせ、地を揺らす。

「それにね、凛が他人の祐希奈をあれだけ信じてたんだから、私がヴィヴィオを信じてあげないのは、おかしいよね？」

砲撃が直撃した場所を中心に陥没している。

しかし、自身がヴィヴィオに放った砲撃の惨状を見てフェイトは薄い笑みを浮かべていた。

「ほら、大丈夫」

「あれが、聖王の力……」

眼下に輝く、虹色の光の柱を瞳に写しながら……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

聖王の鎧の出力をあげることでフェイトの砲撃を防いだヴィヴィオは、上空の二人を警戒しつつ、体勢を整える。

「流石に、クレイさんとフェイトママ相手じゃ簡単にはいかないね……」

『そうですね。今のは危なかったです』

2対1、それも、フェイトとクレイのコンビだ。

戦い慣れした二人だ。急造とはいえ相手の動きに合わせるぐらいはやってのける。

事実、ヴィヴィオが直撃を受けるまでになってしまったのもそのコンビネーション故だ。

「突破力、かぁ……」

ヴィヴィオが凛に課せられた訓練は突破力の強化だ。

決してヴィヴィオに突破力がないわけではない。

彼女は1対1に置いて、格上の相手に対しても考えを巡らせることで数々の相手を打倒してきている。

だが、それでは足りないと凛は言った……。

「それが十分に出来るのは1対1の時ぐらいですわね。2対1の場合は直感的に判断しなければなりませんわ。貴女の戦い方では通用

しません。貴女にはこれから、リミットをかけたフェイトさんとアレイザ陸曹とのチームと2対1での模擬戦を行ってもらいます。どちらか一人を倒してみなさい」

そう言われて始まりを迎えたヴィヴィオの訓練。
直感的に、その場で起きた現象をその場で捌く。
そうすれば一対一だろうと多対対一だろうと関係なく戦えると、凛はヴィヴィオに教えた。
その時は凛の勢いに負け、頷いたヴィヴィオだったが、ここにきて疑問を抱く。

何か、違う気がする……。

そう、思った。
直感的に判断してその場を凌げば突破口が開けるとはどうしても思えなかった。
多対一ならば、不利なのは当然にして一だ。
相手の人数分の情報を一挙に処理をし、最善の選択を選ばねばならない。
凌げるだけでは状況はかわらない。
いかにして相手のスキを作り、突破口を探し当てるのかだ。
さらに今回は相手の方が上手であり、それこそ死に物狂いで考えねばならない。
なのに、凛は直感的に判断して一人を倒せといった。
これの意図を考える。
土煙が風にさらわれ、視界が良くなっていく。
それは訓練再開へのカウントダウン。

「……よし」

と、ヴィヴィオが頷いてフェアリーを握りしめる。
その瞳は揺るぎない。

「フェアリー、一緒にあの二人を出し抜く方法、考えてくれる？」
『それはご協力しますが、よろしいのですか？　指示に逆らうことになりますが？』

フェアリーの言葉にヴィヴィオは「うん」と力強く頷く。
そこに一切の迷いはない。
マスターであるヴィヴィオが自信に満ち溢れた表情で良いと言うのだからフェアリーが従わないはずはない。

「勝つよ。絶対。私なりの戦い方でも勝てるってこと、無理じゃないってことを、凛さんに見せつけよう！」
『了解です』

ヴィヴィオが空に飛び出したと同時、煙は完全に吹き飛び、鍛練は再開を迎える。
その状況を祐希奈に指導しつつ遠方から観察していた凛は満足そうに目を細める。

「吹っ切りましたわね……」

普段ならば、違反には厳しい凛だが、この時ばかりは状況が違った。
ヴィヴィオが指示に従わないことこそがこの訓練の最大の目的なのだから。
そう、ヴィヴィオに必要なのは突破力でも、考えなしの直感的戦い方でもない。
ヴィヴィオに必要なものは置かれた状況を把握し、自分の意思で

判断する力だ。
ヴィヴィオは真面目だ。
凛からすれば、真面目すぎるとすら思う。
与えられた仕事はミスもなくきっちりこなす。
上官からの命令ならばまず逆らうことなくこなしていく。
だが、凛が欲しいのは逆らうことのないロボットではなく、おかしいところはおかしいと、反抗できる人間だ。
だからこそ、ヴィヴィオに向いていない戦い方を教え、縛り付けた。
まぐれ勝ちが起きないよう、二対一という不利な状況のオマケまで追加して。

「はぁぁぁぁ！」

遠方からヴィヴィオの咆哮が響き、フェイトが放った砲撃を切り飛ばす。
次いで、砲撃を回避したヴィヴィオを狙おうと現れたクレイと斬り結ぶ。
が、数合を合わせただけでクレイが後ろに下がる。
リミットのかかったクレイは下がらざるを得ないのだ。
そんなクレイに有無を言わさず距離を詰め、ヴィヴィオが押していく。
クレイを援護しようと背後に回り込んだフェイトだが、読みきっていたヴィヴィオが両刃剣を大きく薙ぎ払い、クレイとフェイト両名を吹き飛ばす。

「ヴィヴィオがあんな強引にいくとこ初めてみたわ……」

小休止がてらその様子を見ていた祐希奈が感嘆の声を上げた。
それほどまでにヴィヴィオの一撃一撃に力がこもっている。

ペース配分など全く考えていないことが遠目から見てもわかるほどヴィヴィオの攻勢は激しいものだ。

「あれも策でしょう」

「そうなの？」

「二対一、相手に余裕があるこの状況で叩き込むためには相手に劣勢に立たされたと思わせること、ですわね。そうなれば――」

激しい攻撃に押し込まれていく自分。

さらにいうならば、二人がかりにも関わらず、敵は鬼神が如く、ものともせずに押し込んでくる。

劣勢になった時、人間が考えるのは打開策。

よし！

ヴィヴィオが振りかぶるは大上段。

大振りな一撃は威力こそ高いものの、読まれやすいゆえに、当たりづらい。

ヴィヴィオの一撃もそれに等しく、クレイが身体１つ分を右にかわし、反撃の力を右腕にためて。

「フェアリィィ！」

『Ｆｕｌｌ　Ｂｏｏｓｔ！』

振り抜かれ、剣先が下を向いている剣。

だが、ヴィヴィオの剣は双刃剣。

片方が下を向いている時、もう片方は上を指している。

その上側の刃が消え、炸裂するは魔力風。

刃を握るヴィヴィオはそのまま下へ加速。
クレイの拳を避け、地面に突撃していく。
追撃をしようとクレイは方向修正。が、見た。
ヴィヴィオの右手の前にある蒼光の魔方陣を。

「チェーンバインド！」

「くっ！」

魔方陣からのびだす魔力の鎖は方向修正直後のせいか動けなかったクレイを固く縛る。
直後、クレイの身体は真下へと引きずりおろされた。
ヴィヴィオが使ったチェーンバインドは設置型等のバインドに比べれば応用性には劣るが、長さを自由に変えられ、術者が直接操るために耐久力にも優れている。
そう、急降下の力にも耐えきれる程に……。
鎖がピンと張る。
それが意味するのは鎖の長さの限界。地面スレスレの所でヴィヴィオが停止していた。

「えぇぇい！」

そのまま身体を大きく捻り、魔方陣を下に向ける。
鎖が引かれ、クレイの落下はさらに加速、身体はがんじがらめのままで体勢を整えられるはずはない。

「が……！」

背中から地面に叩きつけられたクレイは肺の空気全てを吐き出し、苦痛に呻く。

「ブレイク……！」

そんな呟きを耳にする。

仰向けになっているクレイの瞳に映るのは、投擲の構えを取るヴィヴィオと、再び炸裂の風を集束するフェアリー。

標的はもちろん回避不可能な状態にあるクレイだ。

「させない！」

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ！』

助けに入ろうと上空のフェイトが加速、背後を向いているヴィヴィオに突っ込んで。

「執務官！！　違います！！」

クレイの必死の叫びに現状を悟る。

背中を向けていた筈のヴィヴィオがこちらを睨んでいた。

フェアリーの刀身は既にフェイトを捉えている。

風で、身体ごと！？　狙いは、こっち！？

ヒヤリとしたものがフェイトの背中を伝った。

高速に加速している自分と、これから高速で放たれる双刃。

今や回避は不可能な距離であり、正面きっての力勝負。

それでも、やるしかない。

「はぁぁぁッ！！」

『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ』

カートリッジを弾き飛ばしたバルディッシュがザンバーフォームへと変更され、魔力刃を輝かせた。
大きく引かれたフェイトが放つのは雷光の一撃！

「ウインドォォォ！」
『Ｂｏｏｓｔ！』

砕け散った。
雷は、風の前に。
呆気ないほどに簡単にフェイトが繰り出した一撃をヴィヴィオが投擲したフェアリーが撃ち抜き、その余波でフェイトを吹き飛ばしてしまった。
リミットが重いが故に。
ＡＡランクの一撃とＡＡＡランクの一撃。
激突すれば余程なイレギュラーがない限りはＡＡＡランクが勝る。
今回もそれだけの話だ。
簡単な話――

「あの二人相手に、押してる……」

「それはそうでしょう」

ヴィヴィオの力に驚いている祐希奈に、当然と言わんばかりに凛が目を細めた。

「枷の外れたヴィヴィオは貴女方のような最大魔力値だけではなく、技術と力が伴った正真正銘のオーバーＳランクなのですから。あの二人では勝てませんわね」

――二人がかりだとしてもＡＡランクではＳランクには勝てない

というだけの話。
正面からぶつかれば敗北しか産み出さない。

「まぁ、“今だけ”ですが」

呟かれた瞬間、肌で感じ取れる程の魔力が二つ、吹き出した。
1つはフェイト、もう1つはクレイ。
その魔力ＡＡＡ。
それが意味するのはリミットが一段階外れたということ。
無論、凛の指示だ。

そして無論、ピアニッシモとレイが頑張ることだろう。
閑話休題。

「行くよ。ヴィヴィオ……」

「次は簡単には、いきませんよ……？」

三メートルほどの距離を挟んで、ダメージから復帰したクレイとリカバリーしたフェイトがヴィヴィオを挟む。
オーバーSといえどＡＡＡランク二人の相手は辛いものがある。
ＡＡＡランクといえば、局でいえば間違いなくエース級。
そして元々は個人戦でも勝てるかどうかというレベルの二人の技術。
それでも、ヴィヴィオは揺らがない。

「やることは変わらない。道を探すよ。フェアリー……」
『そうですね。探しましょう』
「『勝つための道を！』」

再び戦いを始めたヴィヴィオを見ながら、祐希奈はしばらく無言で話さず、数分の後にようやく口を開いた。

「……あのさ、一つ聞いていい？　アンタから見て、私達三人の中で誰が一番？」

ほとんど抑揚のない声で祐希奈が訪ねた。
凛は顎に手を当て、少し考えただけで答えを見つけた。
凛から見てそれほど明らかな実力差があるということだ。

「はっきり言って、一部例外を除き、貴女方三人の中では最も強いですわね」

そしてその答えを一切の遠慮なく祐希奈に伝える。
それが凛という女性だ。

「……そう。泣き虫のあの子がね……」

叩きつけられた言葉に祐希奈は一瞬優しく笑い、瞳を閉じる。
数秒な時を置き、瞳を開いた祐希奈はいつも通りの強気な瞳を取り戻していた。
再び弓を手に取り、ヴィヴィオが戦う方向とは逆を向く。
ここからはヴィヴィオの方は一切見ない。そう心に決めて。

「ぶっ倒れたら叩き起こしてね……」

「わかりましたわ」

短い会話を交わし、祐希奈は魔力を集束していく。
凛の目的はどこにあるかなど祐希奈は知らない。

だが、これで強くなれるなら、脇目も振らない。
今、そう決めた。
「協力を依頼した私が言うのもなんですが、そこまで頑張る理由は？」
膨大な光の中で、静かに凛が訪ねた。
だが、返答はこない。
聞こえなかっただけだろうと凛は特に気にせず瞳を閉じ。
「負けられないのよ。あの子には……。全力で競い合って二人で決めてるから。全部、ね……」
「……成る程」
祐希奈の答えに凛が常人には決してわからないほどの微小を浮かべた時、銀の閃光が空へと突き抜ける。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
「せっ！」
「がぁ！」
叫びが響き、槍での横殴りの一撃を受けたカナンが吹き飛んでいく。
蓄積されたダメージからか、ろくな受身もとれずカナンが勢いのまま転がり倒れ伏す。
一撃を叩き込んだヴェインは一度構えを解き、息を吐き出す。

「っと……」

と同時、身体が浮くような感覚が広がりフラりと揺れる。
倒れることこそ踏ん張って耐えたものの、「やばいな」と内心思う。
模擬戦でここまで痛め付けられたのは彼の経歴上ほとんど存在していない。

「お前、がたついてんじゃねぇか……？」

ザリッと砂を踏みしめた音をヴェインの聴覚は捉えた。
ヴェインが戦っている相手はただ一人、カナンしかいない。
必然、先の言葉はカナンが放ったものだ。
未だカナンの闘争心衰えていないことを確認したヴェインは苦笑いと共に槍を構え直し。

「君ほどじゃない……」

そう言った。
視線の先にいるカナンの姿は先刻より悲惨な物となっていた。
銀の光を放っていた鎧は所々が砕け、幾度も地面を転がったことを証明するようにカナンの顔は土に汚れていた。

「君は俺には勝てないよ」

そんなカナンに、ヴェインは静かに敗北の言葉を告げた。
一瞬の空白、ギリリと軋んだカナンの奥歯。

「勝手に決めんな！」

怒りに満ちた声がヴェインの左から響いた。
空間が歪み、カナンが現れ、体を捻りながら抜刀、真横一文字に薙ぎ払う。

「唯一の売りの速度も落ちてる……」

が、無挙動で発生した障壁が剣を防ぎ、押し止める。
挙動無しの障壁は通常より脆いことをカナンは知っている。

「そんなもんで！」

叩き破ろうと力を込め、ビキリとヒビが広がった。
だが、そこまでだった。

「やれやれ……」

溜め息と共に、ヴェインの槍が地面を穿つ。
カナンがいる方向とは検討違いな場所に突き立つ槍。
その意味を、カナンは身を持ってしった。

うご、かない……！

まるで石のように固まるカナンの身体。
ひび割れた障壁にいくら力を込めようとも割れはしない。
最早剣の力など障壁にはかかっていないのだから。

「なに、しやがった……」

「君の影を縫い付けた。それだけだ」

そう言われてカナンはヴェインの槍に視線を向ける。
確かにそこにはカナンの影に突き立つ槍があった。

「影縫いって技でね、俺は他人の影も限定的にだけど、こうやって利用出来るんだ」

「得物がなくなるから1対1でしか使えないけどね」と、ヴェインは笑った。
その笑みが、消えた。

「ほら、勝てないだろ？」

そう告げられた瞬間、木々をなぎ倒しながらすぐ側を砲撃が突き抜けていった。
開ける視界。カナンとヴェインは横目でその光景を見た。

「彼女達も、かな」

ヴィヴィオが、祐希奈が膝をつくその姿を。
ヴィヴィオはリミットを解放した二人に追い詰められ、祐希奈は極度の疲労から魔力の枯渇をおこしている。
が、膝をついていたのも束の間、立ち上がる。
立ち上がった彼女らの姿を、カナンは見つめて。

「負けられねぇよな……！」

「な……」

瞬間、バキリという音をカナンから聞いた。
非常にゆっくりとした速度だが、カナンの身体が動き始めていた

のだ。
それは、影縫いの拘束力よりカナンの力の方が上回り始めているという証明。
ここからまだ上がるのか！？
変動は終わり、安定していたカナンの魔力が再び不安定にブレ始めたのを確認する。
「俺は、アイツらを護るために、強くなるって、決めたんだよ……。もうアイツらを泣かせないようにもっと強くなるって決めたんだよ！　俺のバカ貫くために強くなるって、誓ったんだよ！！　その、俺が！　アイツらが頑張ってる前で根をあげちまったらもう！」
ガラスの砕けるような音と共に、影縫いの拘束力は力を無くし、カナンは自由の身となる。
上がり続ける魔力に危機を感じたヴェインは即座に槍を回収し、引き絞る。
カナンは既に大上段に剣を持ち上げている。
「男じゃねぇだろうがぁぁぁ！！！！」
「くっ！」
触れあった剣と槍、爆発するように炸裂した光。
同時、巨大な地鳴りと共に地面が二つに割れた……。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
それから数時間後、日は山に隠れ、海鳴市を鮮やかな夕焼けに染め上げる。

そんな中、鍛練は終盤を迎えていた。

「さて……」

そう一息をついてから太陽の方角を見ていた凛は振り向き、現在の状況を視野に収める。

「ヴィヴィオ……」

「限界、ですね……」

「うぅ……ま、だ……」

遠方に倒れるのは高町ヴィヴィオ。
それを心配そうに見下ろすのはフェイトとクレイだ。
激闘の名残か、汚れてはいたものの、撃墜には至っていない。
満身創痍のヴィヴィオは起き上がろうとしていたが力が入らないのか立ち上がる気配はない。
続いて凛は視線を動かし、自身から数メートルの所へ視点を合わせる。

「はっ……はっ……」

「こちらも限界ですわね」

そこには少し過呼吸気味になりつつある祐希奈が膝をついて止まっていた。
その身体を包む淡い光はバリアジャケットの残光。

「……まだいけるわ……」

凛の視線を感じてか、舌打ちをした祐希奈が弓を支えに立ち上がる。
が、歩み寄ってきていた凛は祐希奈の胸を軽くトンと押す。
「あっ……」と小さく声をあげて祐希奈はそのまま地面に倒れた。

「何、すんのよ……」

「止めておきなさい。ジャケットすら生成出来なくなっている人間が無理をして魔法を使えばリンカーコアがどうなるかは保障しかねますわ」

「チッ……」

凛のことを睨んでいた祐希奈だが、舌打ちを最後に意識を途切れさせ、ストンと眠りに落ちた。
祐希奈の身体が一瞬輝きセーラー服に戻ったのを確認し、凛は祐希奈の膝と首に手を回し、持ち上げる。

「凛」

短い声かけに反応した彼女は振り返る。
声を発したのはヴィヴィオをおぶさったフェイト。
クレイはその後について歩いてきているのを確認した。

「凛、お疲れ様」

「ええ」

声をかけたフェイトに対し凛は無表情に短く返す。

あまりに淡白な返事にフェイトとクレイは首を傾げて。
そんな二人の反応を気にも止めず一歩前へ。

「アレイザ陸曹。この子をお願いしますわ」

「え……うわっ！」

瞳を細めた凛は祐希奈をクレイに放り投げ――クレイは驚きながらもキャッチした――自身は障壁を展開。
直後、金色の砲撃が障壁に激突して光を巻き散らす！
かなりの威力ではあったが凛の障壁は揺らぎもせず防ぎきった。

「今の、カナンの……」

金色の砲撃、それはカナンの集束砲に他ならない。
つまり、今もまだカナンとヴェインは戦っていることになる。

「一段階では少し荷が重かったかもしれませんわね」

そう呟きながら、凛は砲撃によって開けた視界を真っ直ぐに見つめる。
視線の先、砲撃を放った張本人が未だ戦っている姿があった……。

あっぶな……。

先の砲撃をすんでの所で飛び上がり、回避したヴェインは冷や汗を足らす。
よもや今のカナンが集束砲まで撃てるとは思っていなかったため、反応が遅れたのだ。

そして……。

気配を巡らせてカナンの位置を探るヴェインだが、大体の予測はついていた。

カナンが現れたのは自身の頭上、抜き放った剣は大上段。

槍を掲げて流せば良い。

反応も対応も追い付く。ただし。

「オオォォ！」

「ぐっ！」

とてつもなく一撃が重い。

受け流す予定だった一撃は予想以上に槍に食いつき、流すことを許さない。

安易に流そうとすれば力を抜いた瞬間に剣は自分に叩き込まれる。

そう確信した。

戦略も何もあったものではない力押し。

ヴィヴィオとは対極に位置する戦闘方。

一見、搦め手には弱そうに見えるカナン。

「はぁぁぁッ！」

カナンが身体を右に大きく捻り、剣を身体ごと振りかぶり、叩き込む！

散った火花。

それはカナンの剣が止められたことを意味する。

事実、十字を描くようにして剣同士が合わさっている。

だが、ヴェインは槍を引き絞っていた。

受けたのはヴェインの影。

その影はヴェインの姿を隠すようにかつ守るように、二重の意味合いをこめて存在する。

「邪魔だぁぁ！　メイデン！」

『任せろ！』

が、カナンが輝いたかと思うと剣に魔力を帯びさせ、影の剣を叩き折り、そのまま横一閃。

音もなく影が霧散する。

その奥にいるのはヴェイン本人。魔力を何重にも重ね掛けをかけた槍を抱えて！

「ドライバニッシュ！」

その力を解き放たんと加速を始めた直後、その光景を目の当たりにした。

振り抜かれた剣を逆手に持ち換え、そのまま後に刺突、キン、という音が響いて剣が右腰にあるはずの鞘に納まった……。

「四式！」

カナンが大きな力を使うため場合は大抵抜刀剣術から力をのせる。

凛の場合と同じくイメージがしやすい形のためだ。

だが、振り抜いた形から剣を戻して納めるという動作はカナンの剣速を持ってしても空白の時間がある。

「抜刀剣術！」

今回のソレは全くタイムラグがない。

振り抜いた形からそのまま納刀した形なのだから当たり前だ。

カナンが考えたのは至極単純な話。
振り抜いた先に鞘を転送すればいい。
抜刀から力を乗せるイメージを変えずに、鞘の方を動かすという不器用な考え。

「金剛ォォオオ！」

だが、今までの話にあった通り、魔法というものはイメージする力がしやすければしやすいほど、力が乗る。
抜刀という形はカナンがイメージする完全な形。
カナンの全身にみなぎっている大地の力がそれを証明している。
その力は構えをとっていたヴェインに劣ることはない。
細かい理屈も、小細工も、全てを叩き斬る。
そんな想いを剣にのせて、放つは四式。純粋な剣撃ではＳランク以上の最高威力！

「閃牙ァァ！」

カナンが消失にも等しい速度でヴェインの槍へ突貫、正面から剣を叩き込む！
瞬間、空が爆ぜた。
そう思えるほどの光と音と風が炸裂したのだ。

「チィ！」

「……くっ！」

即席で放ったにも関わらず、十分に溜めたドライバニッシュと威力は互角。
それだけに終わらない。

痛みに痺れる腕を無視してカナンがヴェインの背後に突き抜けていた。
腕は動かない。ならば脚がある！
「せぇぇいアアア！」
「っ！」
強引に身体を捻ったカナンはその回転の勢いのままヴェインの後頭部に回し蹴りを見舞う。
その威力に飛行魔法を維持出来ずヴェインは地面に叩きつけられた。
止まらない！　そんな理性は捨て去った！
「くぅらぁえぇぇ！」
地面に叩きつけられたヴェインを追撃、
下方に刺突を構えてただ真っ直ぐに狙うは背中の中央！
「がっ！」
だが、逆に空に打ち返されたのはカナンだった。
地面から突如として現れた黒き槍山が突撃していたカナンを穿ったのだ。
カウンター気味に槍を受けたカナンは勢いを失い仰向けに宙を舞って……。
「勢いだけで俺は倒せない」
そんな声を霞む意識で聞き取った。

直後、空を覆い尽くす闇。
時刻は夕方、闇夜を迎えるにはまだ早い時間。
となれば答えは一つ。
ヴェインの力だ。
生まれる闇夜は地上にある影を空に伸ばして作られた物。
この空間そのものがヴェインの力の塊。

「エタニティ、ドライブ……」

呟きが響き、ヴェインの手から黒槍が消える。
ドクンと、闇夜が脈を打つ。
ゆっくりと、ヴェインが右手を空に掲げた。

「よく頑張った……」

誉め言葉ともに振り下ろされるヴェインの右手。
ギシリと歪む空。
霞む意識の中カナンの瞳はその光景を捉える。
空から槍が降ってきていた。
一本や二本ではなく、数百、否、数千もの数の黒槍が。
エタニティドライブ。
武器を媒介に発動できるヴェインの大技だ。
媒介にする武器によって能力が異なり、今回は槍のために槍の雨というわけだ。
武器によって威力は変わるが、いずれにせよ、強力な一撃であることには代わりない。

「チッ……」

己を囲う無数の槍の集団にカナンは為す術もなく飲まれ、地面へ

と叩きつけられる。
容赦なしに追い討ちがかかり、槍の雨が降り注ぎ、大地の形を変えていく。
大量の槍の葬列と、巨大なクレーターが出来上がった時、ようやく攻撃は停止した停止した……。
クレーターの中心に倒れ伏しているカナンを見下ろすヴェイン。
「なっ！？」
その表情は驚愕に変わる。
エタニティドライブをまともに受けたカナンがゆらりと立ち上がったからだ。
「勝、つ……。勝つ。勝つ！！」
ぐらついていたカナンの足取りが固定され、左腕が柄を握り、腰を落とす。
瞳は前を、ただヴェインを睨み付けて。
カナンの眼前が歪む。
それは空間突破の予兆。
一瞬反応が遅れたヴェイン。その一瞬にカナンは距離を零にし、剣の範囲内に収めている。
カナンの姿は正面。
虚を突くなどという発想は元より考えていない。
だがそれ故にヴェインの対応は追い付いてしまう。
左手を翳し、障壁を張り、カナンの一撃に備え。
「勝つ！！！！」
「……」

怒号と同時、ヴェインの左腰から右肩にかけて、閃光が突き抜ける。
“障壁に傷一つつけないままに”
痛みを感じないヴェインは一撃の威力に一歩下がる。
カナンが成した結果に少しだけ笑って。

「がっ！」

右手に生み出した剣で鳩尾に刺突を叩き込んだ。
鎧の破片を飛び散らせ、カナンが吹き飛んでいく。
が、即座に受身を取り、剣を納め、迎撃と体勢をヴェインはとって。

「そこまでですわ」

響いた凛の声に両者の動きが固まる。

「終わり……かな」

ヴェインは潔く剣を納め、やれやれと言わんばかりにため息をつく。

「ちっ、くしょ……」

呟きの直後、ドサリという音をヴェインは聞いた。
見ると、先程まで闘争心を剥き出しにしていたカナンが倒れ伏している。
無理もない話だ。
元より、カナンの身体はとっくに限界を迎えていたのだから。

「ヴェイン。あの少年を連れて、帰りますわよ」

「一段階解放でSランク相手に頑張った部下に労いの言葉も無しですか……」

あまりにあっさりとしている我らが部長に少しばかりの愚痴を漏らすヴェインだが。

「何か仰いましたか……？」

「いえ、何も……」

ナイフの如き一睨みでそんな気も消え失せる。

ヴェインからすればそんじょそこいらの犯罪者よりも凛の一睨みの方が怖いのだ。

運用部に入ったばかりなころからこればかりは変わらない。

「あー、クレイ」

「はい？」

「悪いんだけど、カナン君をおぶって送ってやってくれないか？少し用事が出来た」

「それは構いませんが……」

不思議そうにするクレイに「悪いな」と、目的も告げずにヴェインは歩いていく。

「放っておきなさい。いきますわよ」

「あ、はい！」

クレイは倒れているカナンを軽々とおぶさり、先を行く凛とフェイトに続く。

三人全員が敗北または時間切れという形で終わりを迎えた。

表面上は。

「解放してたのは一段階とはいえ……」

呟くのはヴェイン。

凛達一行から離れたには訳がある。

簡単な話、彼も男だ。

意地を張りたい時もある。

「最後に悔しそうな顔してたけどさ……」

本当に、カナンは倒れる最後の瞬間、悔しそうな表情を浮かべていた。

その表情を浮かべてヴェインは微笑み。

「君の勝ちだ……」

止めとなったのは障壁を貫通したカナンの一閃。

その時点で勝負はついたようなものであり、何とか意識を繋いでいただけで、凛が止めていなければカナンが勝っていた。

苦笑を浮かべながらヴェインは最後の力を振り絞って。

（クレイ、雑用に使うようで悪いんだけど）

（あ、はい。お手伝いですか？）

（カナン君を送ったら、戻って俺を運んでくれるか？）

（はい。わかりまし……え？）

（後でなんかおごるから、頼むよ。それじゃあ……）

（副部長？　どういう――）

クレイは明らかに混乱していたのはわかったが、全てを話さずにヴェインは念話を切った。

正確には話す余裕がなかったが正しいが。

「バーミリオン、クレイが来たら事情説明頼むよ」

『Ｓｉｒ』

「じゃあ、それまで……おやすみ……」

そう言って、ヴェインは意識を途切れさせた……。

３０分後、指示を受けたクレイが倒れているヴェインを見つけ、驚くこととなるが、彼は知るはずもなく静かに眠る。

Ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

夾「後書き、コーナー……」

くる～、きっとくる～、きっとくる～……

夾「よぉ、てめぇら、約一月ぶりだな。元気にしてたか？」

祐「まぁ、少なくとも今の夾ちゃんよりは元気じゃない？」

夾「ふふふ……」

ヴ「な、何かあったんですか？」

恐ちゃん「あぁ、あったさ……。夾の字が恐になるくらいあった……」

カ「いや、ガチでなって……」

バキャアアア！

カ「一月ぶりなのに！？」

恐ちゃん「こまけぇこたぁ、良いんだよ……」

ジ「はっはっは、人を殴り飛ばしておいて細か――」

恐ちゃん、はいぱーもーど♪

ジ「もう退場させられるとは、流石はツンな空間だね。だが案ずる――」

恐ちゃん「殺す！」

しばらくお待ち……、いやもうスルーでお願いします。

祐「まぁ、夾ちゃんが怒ってる理由はね、二月くらい前に変なアンケートとったでしょ？」

ヴ「あーそういえば……」

カ「まさかとは思うが……」

メ「集計の発表だ」

レ「ちなみにネタもありますよ♪」

　彼のはぁとを射止めるのはだぁれだ♪　ＬＶ企画、アンケート結果発表ベスト１０。

カ「そんな題名だったのかアレは……」

祐「私が今考えたわ！」

ヴ「すごいね～♪」

祐「ふふん♪」

カ「いや、明らかに嘘だろ……」

祐「アンタになんでわかるわけ？」

カ「じゃあ聞くが、本当にこんなはずい題名をお前が考えたんだな？　題名よく見たか？　ヴィヴィオで楽しむためだけによく考えもせずにいったんならもっかい見てみ？」

祐「……」

カ「感想は？」

祐「ヴィヴィオが今考えたのよ！！」

ヴ「ふぇぇぇぇぇ！？　わ、私考えてないよ！？」

祐「バカね～、夜無意識のうちに考えてたのよ。それはもう鬼気迫る迫力だったわね……」

ヴ「そ、そうなの？」

祐「私が信じられない？」

ヴ「祐希ちゃんがそういうんなら本当なんだ～……」

メ「ヴィヴィオは凄いな。私では思い付きもしない」

レ「はい～。独創的な発想が素晴らしいです♪」

ヴ「あはは♪　二人ともありがとう♪　頑張ったかいがあったよ～♪　覚えてないけど」

祐「一件落着♪」

カ「純粋さを利用する悪魔だなお前は！？」

祐「いいじゃない。本人も喜んでるんだし」

カ「ヴィヴィオじゃなきゃまず喜ばないけどな！！」

ヴ「？？？」

祐「バカナンの言うことなんて無視でいいわよ～♪」

ヴ「え、う、うん……」

カ「ツッコミに厳しすぎるだろこの環境……」

ハ「それでは発表にいきましょう♪」

一同「もってかれた！」

第十位

ジル＆グラース

コメント

ヴ「え……」

カ・祐「おぇ……」

ジ「ふ……。ここで言っておこうか。僕が男で身体を許しているのはカ――」

祐「祐希奈の名のもとにジルのコメントをカット♪」

第九位

ジル&叶トウヤ

各コメント

ト「まさかローディアス君と結ばれるとはね」

ジ「む、トウヤ君、君が相手に加わるというのなら僕は……」

ト「わ、私にはユウオという相手が……」

ジ「よいではないかよいではないか♪」

ト「あ～れ～」

祐・カ「キモいから死ね」

メ「一刀両断だな……。まぁ同感だが」

第八位

カナン&カナメ

各コメント

ヴ「従姉さんだもんね～。仲いいんだろうなぁ」

祐「まぁ、カナメならギリギリオッケーね」

カナメ「カナン君とですか～♪　ラグジュアリーショップを中心に回りましょうか♪」

カ「絶対いやだぁぁあああ！」

カ「またまた～、はずかしがらなくても良いんですよ♪　今では男の子が彼女さんと普通に入ってるくらいなんですから♪」

カ「お前とそんなとこに入るのが嫌なんだぁぁあああああ！」

第七位

夏輝＆奈津美

各コメント。

奈「夏輝さんとデートですか。随分久しぶりですね」

夏「カナンが産まれてからは減ったなぁ。久しぶりにゆっくりしようか奈津美さん」

奈「そうですね。ディナー、期待してますよ？」

夏「良いとこととるさ。好きな人との食事で奮発せずにいる男はいないって」

カ「さ、さらりと好きな人とか言ったぞあの親父……余裕だなオイ……」

ヴ・祐「カッコいい……」

カ「……」

第六位
メイデン&レナス
各コメント
メ「何故私と姉さんなんだ!?」
レ「デバイスですが、私達は一応同性という設定では!?」
祐「ん、私がレナスをお兄さんに変更したのよ♪」
レ「はい!?」
メ「ね、姉さんは実は兄さんだったのか!?」
レ「い、いえそんなはずは!?」
祐「これが蟹の力よ……」
レ「蟹が関わるのなら仕方ありません……。か～に～♪　か～に～♪」
カ「蟹が関わればなんでも良いのかお前は!?」
第五位
カナン&しーちゃん
各コメント

ヴ「お、お母さんは許しません！」

し・カ「それ以前に男だぁぁあああ！」

第四位

ヴィヴィオ&祐希奈

各コメント

ヴ「こ、これも女の子同士だね……」

祐「ヴィヴィオ、好きよ！　もちろん、愛の方ね♪」

ヴ「ふぇぇぇぇぇ！？　そ、それは私も祐希ちゃんは嫌いじゃないよ？　嫌いじゃないけどこういうのはその……」

祐「私じゃ、ダメ？　本気なのに……」

ヴ「え、えと、時間をください！」

カ「一部が喜ぶような展開すんなよーー……」

第三位

ヴィヴィオ&カナン

各コメント

ヴ「あ、私だ～♪」

祐「三位って、やっぱ凄いわねアンタ達の人気」

カ「俺というよりはヴィヴィオの人気だろ」

祐「あんだけ本編でみせつけといて何を……」

カ・ヴ「見せつけてねぇ！／見せつけてないよ！」

祐「やれやれ……」

第二位

カナン&祐希奈

各コメント

祐「二位！？　私とカナンが二位！？」

ヴ「祐希ちゃんもひとのこと言えないってことだね～」

祐「わ、私とカナンでもそれっぽく見えてるのかしら？」

メ「だからこその二位という結果ではないのか？」

祐「そ、そっか……」

カ「……」

祐「……なんで逃げてんのよ？」

カ「いや、素直に照れてるからなんか裏があるかと……」

祐「……」

ニパァ♪

カ「ひっ！？」

声にならない悲鳴。

ジ「ちなみにカナ吉が言いたいのは祐希にゃんならこれくらい当然だと言いたかっただけなのだがね！！　はっはっは、流石、地雷を踏み抜くのは達人級だね！！」

カ「うるせぇよ……」

第一位！
千春＆夾

各コメント

一同「夾ちゃんおめでと～♪／ございます」

夾「……まさかな、本編でぽっと出でしかなかった俺をここまで持ち上げるやつがいるとは予想外だったよ……」

ハ「いやぁ、まさかまさかですね～♪」

夾「余裕だなお前……」

ハ「……慣れだ……」

夾「人間変わるな……」

ハ「ああ……」

ズーン

カ「一位二人から負のオーラが……」

ヴ「せっかくのデート件なんだし、楽しもう？」

夾「野郎二人でか……？」

ジ「もう周りには夾ちゃんはピュアな乙女だということはバレバレな――」

夾「俺は男だ！　俺が女だって認めるのはハルの前だけしか認めねぇかんな！」

一同「……」

夾「あ……」

ハ「……後書きでどんだけ墓穴ほんだてめぇは……」

夾「うわぁあああああああああああ！！！！　こんな世界大嫌いだぁぁぁぁあああ！！！！」

祐「普段はしっかりものなのにねぇ……」

ヴ「頭が回りすぎて空回りしちゃってるね……」

カ「不憫だ……」

ハ「……迎えにいってきます」

一同「いってらっしゃ～い」

祐「さてと、まぁこんなとこで今日は終わりにしとくわね」

カ「色々凄い組合わせみたしな……」

ヴ「兎に角、たくさんの投票ありがとうございました♪　ポイント差がみたいという方がいればまた追記しておきます」

祐「最後に、活動報告にも書いたけど、私の絵をとある作者さんが書いてくれたわよ♪　見てない人は見てきなさい。これは命令。いいわね？」

アイ、アイ、マム！

カ「いや、お前らにいってねぇし……」

ヴ「それでは皆さん、さようなら～♪」

一同「ばいばーい♪」

完！

第五話　男じゃねぇ！！（後書き）

まさかまさかの夾ちゃんが優勝っていうね（笑）
祐希奈かヴィヴィオ辺りを予想していたのでびびりました（笑）
たくさんの投票、本当にありがとうございました！
ではまた次回にお会いしましょう。
祐希奈の絵に関してはみてみんでゆきにゃんで検索かけるとひっかかりますよ♪

第六話　暗雲　（前編）（前書き）

また一月ぶりになってしまい、もうしわけありません（汗）
次は久しぶりにＥＳに取りかかるのでまた遅れるかもしれませんが、
ご理解いただけたらなと思います（汗）
なるべく急ぎます！
では、どうぞ！

第六話　暗雲　（前編）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

黒く染まる、心。
漆黒の鎧に身を包み、立ち塞がる者は切り捨てた。
人が、倒れていく。
かつて、仲間だった人達。
道を記し、導き、優しく手を引いてくれた仲間達。
本当に、心から好きだといえた人達だ。
でも、殺した。
必死に呼び掛ける仲間を俺は事も無げに切り裂いた。
紅き飛沫を全身に浴びて、快感を得る。
仲間のモノだと思うと一際快感が大きいことがわかった。
俺を恐れ、逃げ惑い、泣き叫び、命乞いをしろ。
そんな魂を刈る瞬間、それだけが俺の存在を示す。
漆黒の鎧が赤く染まる程に殺して、殺して、殺し続けて、俺の周りには人がいなくなった。
まだ、足りない。
俺の身体は血を欲し続けている。
まるで、飢えた獣にでもなったようだ。
次の獲物を求めて進もうとした時、金髪の少女と、銀髪の少女が降り立った。
泣きそうな顔で呼び掛けようとした二人の後ろに俺はいた。
肩から腰にかけて、紅い線が引かれ液体が噴き出し、音をたてて二人が倒れ伏す。
最も大切だった、護りたかった人達を俺が殺した。
実に呆気なく二人は死んだ。
ところでお前、いつまで他人面して見てるつもりだ？

あぁ、見えるわけないのか。
鏡で見せてやるからよくみとけよ？
俺は――

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「っ！」

秋に入り、涼しくなった夜。
にも関わらず、カナンは全身汗だくで跳ね起きる。
自身の身体を触り、ジャージ姿であることを確認。
ハッとしたように右を向き、隣に眠るメイデンを見つけてようやく冷静さを取り戻す。

「うっ！」

と、同時、見ていた悪夢がフラッシュバックした。
猛烈な吐き気に襲われ、洗面所に向かうため、音も気づかわずに階段を駆け降りる。

「う〝ぇぇぇ〝……」

洗面所に駆け込むのと胃液が競り上がってくるのはほぼ同時だった。
蛇口を捻り、大量の水を使いながらカナンは吐いた。

「マスター……？　凄い音がしたがどうし――マスター！？」

階段を降りる音に驚いて起きたのか、眠そうな目を擦りながらメイデンが洗面所に顔を出した。

だが、カナンの状態を見た瞬間に驚愕の声をあげる。

「大声出すんじゃねぇよ……。俺が言えることじゃないけどな……」

「あ、あぁ、すまない……」

幾分か気分が良くなったのか、壁に寄りかかりながらカナンが振り向いた。

とは言うものの、顔色が優れないことは暗がりにも確認できた。

「マスター……」

「大丈夫だって」

心配そうにするメイデンにそう言って優しく笑いかけ、トントンと自分の肩を叩く。

それに従いメイデンがカナンの肩に乗り、再び部屋へと戻っていく。

「原因はやはり……」

「今回はちっとばかし捻った力を使ったからな。その釣りだろうさ。もう平気だよ」

「本当だな？」

「おう。頑丈なのは俺の取り柄だろ？」

ならばその足取りは何なんだ……。ふらついているではないか……。

ケロッとしているように見えるカナンだが、然り気無く手すりを使って上っている所をメイデンは見逃さない。
伊達に半年近くもカナンの無茶に付き合ってはいないということだ。

「本当に大丈夫なのか。嘘をついているなら怒るぞ？」

「疑り深い奴だなお前は。俺はお前のマスターだぜ？」

「そのマスターだから疑っているのだが？」

流石にこの言葉にはカナンも苦笑いを浮かべるしかなかった。
自分のしてきたことの結果なので自業自得だが。
ジーッと肩から来る視線から逃げるようにそっぽを向くと、飛び上がったメイデンが先回り、目と鼻の先に腕組みをしながら浮かんでいた。

「わかったわかった……」

降参とでも言うように、カナンが両手を肩まで持ち上げヒラヒラと動かす。
やっと話して貰える。
そう思ったメイデンは張り積めていた気を緩め。
瞬間、カナンがニヤリと笑った……。

「お前がめちゃくちゃ可愛いってことはそんなドアップにしなくても知ってるよ」

「な、なな、なぁ！？」

瞬間沸騰とは正に今のメイデンのようなことを言うのだろう。
みるみる内に紅くなり、カナンからもうスピードで離れた。
落ち着き払い、どんな隠し事も見抜いてしまいそうだった雰囲気もどこへやら。
恥ずかしさにあたふたするメイデンは真可愛らしい。

「い、いきなり何を言い出すんだマスターは……。そそ、そういう台詞はだな、ヴィヴィオや祐希奈に言うものであると前にも言った気がするのだが……。第一に、私はただのデバイスだと何度も言ったろう？　可愛さの欠片も――なんだ？」

モジモジとしながら言葉を並べていたメイデンだが、自身を見つめる視線、つまりはカナンの視線だが、それに気付きキョトンとする。

「はははは！！」

「な、何故笑うんだ！」

「必死に言い訳してるお前見てたらホントに可愛くて……悪い悪い」

「何だ。私が本当に可愛かったからか。ならば仕方がないな」

ニコリと笑ってうなずいているメイデンにカナンは笑いながら通りすぎる。

「ホント、お前は可愛いよ。あー腹いてぇ……」

通りすぎ様にもう一度カナンはメイデンにそう言った。

未だ勘違いの最中にあるメイデンが理解するのには時間がかかる。
カナンはその間に階段を一気に昇り、布団に潜る。

「私は！！　可愛くなどなぁぁああい！！！！」

数秒後、壮大な自爆に恥ずかしさの極地に達したメイデンが絶叫した。
布団に潜ってカナンが笑い声を押し殺していたのは言うまでもない事実である。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「す～す～……」

健やかな寝息が響くかせるのはセシリア。
さしもに昼から今まで通しで遊び続けならばそれも納得のいく話。
静かな寝息が響く中「ふぅ」とため息が寝息に重なった。
セシリアのお気に入りとなっているハルだ。
――ちなみにハルの部屋にセシリアが勝手に来襲しただけであり、ハルが意識的に連れてきたわけではない。
閑話休題。
ハルは、セシリアを起こさないよう、慎重かつ静かにベッドを抜け出し、近場においてあった椅子へとこしかけコンソールを展開。
表示された情報をみて、またため息を一つ。

「ヒットは無し……流石に名前だけでは絞込みがかけられませんね……」

瞳を細め、思考を加速させていく。
ハルとて、何もせずにいたわけではない。動き回るセシリアを相

手に少しずつではあるが情報を聞き出していたというより、もうスピードで通り過ぎるセシリアだったが……

「ちはる～？　なになに～♪」

といった様子で、ハルに対してのみ、ニコニコ顔で話を聞いていた。

が、調査は進まず、いや、進んだのかもしれない。

「ん～？　えっとね～、えっとね～、なんだっけ？」

セシリアついては何もわからないということがわかった。

「ファミリーネームは不明、住所も不明、わかっているのは名前だけ……」

たったこれだけの情報だが、それでもある程度の推測は出来る。

まだ親が捜索願いをだしておらず、探しているのか、失踪自体に気づいていないという仮定。

ただ、一日が経過して子供が見つかっていないのに出さないのかという疑問、失踪自体に気づいていないという可能性はもっと低くなる。

これが一番マシな今の現状仮定。

「残りは……」

次に捨てられた、という可能性。

できればこちらはあまり当たってほしくはない予想だ。

仮にこちらの仮定で進めるのなら、セシリアの明るさから考えて捨てられたことをセシリアが知っている可能性は低い。

何も知らされず、六課にいけといわれ、親を信じて六課を目指した、というのが妥当だろう。
大きく二つの仮定を並べてみたものの、ひっかかりがあった。
子供ということを差し引いてもファミリーネームも住所も知らないというセシリア。
単に興味がないために覚えていなかったのか、遊びに夢中で適当に答えただけだったのか、それとも――

「本当に、記憶がないのか……」

それはあまりに可哀想だと思った。
ただ一つおぼえているのは六課に向かうという記憶と名前だけ。
何があってこの小さな身体にそんな運命を背負っているというのか。
ただの仮定の話なのに、一番あたってほしくないこの予想が、もっとも答えに近い気がしてならない。　そう思うと、無意識的に右手がセシリアの額に乗せられていた。
額に乗せられた大きな手に、セシリアの瞳がうっすらと開く。

「ん～……ちはる……？」

「すみません、起こしてしまいましたね」

「ちはるならいいよ～……♪」

眠そうに目をこすりながらも、ニコリとほほえむセシリア。
それに微笑み返すハル。
さながら親子のように視線を交わして。

「ちはる、なにかあった？」

「何もありませんよ」

子供ならではの敏感さでハルの心境を感じたのか、首を傾げた少女にハルは首を振った。

子供にする話では、ましてやセシリア個人に対する問題だ。

憶測の領域で話せることではなかった。

「ほんと？　うそついてない？　うそはやだよ？」

が、尚も食い下がるセシリアに内心苦笑する。

どうしたものかと思考を重ねる。

「やれやれ、セシリアには敵いませんね。バレましたか」

「なになに～♪」

「セシリアの寝顔があまりに可愛らしいので写真でもとろうかと思いまして♪」

話してもらえると嬉々していたセシリアはその言葉に「にゃ！」っと謎の悲鳴をあげ、布団で顔の半分を覆う。

下手に嘘をつくよりは適当な話をして誤魔化した方が子供は納得することが多い。

まぁ、可愛らしかったのは本当のことですし♪

若干の真実味を帯びていればなおのことだ。

ただし――

しばらくもそもそと動いた後、セシリアは上目使いでハルを見上

げて。

「ち、ちはるなら……」

「はい？」

「ちはるなら、だいすきだから、いいよ……？」

――時と場合と人を考えて物を言わないと後々大変になることは間違いない。

これが祐希奈などある程度常識を持つ相手になら効果覿面で終わるのだがセシリア相手にはそうもいかなかった。

自業自得というものである。

「寝ましょうか。一緒に」

「うん♪」

長い沈黙の後、最終手段で強引に話をそらしてこの一件は終了した。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

そんな夜のやり取りがあってから数時間が経過。

ミッドチルダに朝日が登り、暗闇が晴れていく。

「ラスターカノン！」

朝日の他にも闇を切り裂く光があった。

クレアが駆るシルフィスが放つ光弾だ。

光弾はただの一発に止まらず、幾発も放たれ、直線に目標へと向かう。

「相棒！」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　ｂｕｄｄｙ』

「いっく、ぞぉぉ！」

視界を覆う弾幕に物怖じもせず、ハチマキとジャケットを風に靡かせてスバルが吠える。

マッハキャリバーの車輪が火花を散らして地面を削る。

左手を前に、右手のリボルバーナックルを一杯に引いて、突っ込む！

スバルが突撃した直後、光弾に圧縮されていた魔力が解放、地を揺らす。

『対象に命中』

「装填持続ですの！」

『指令了解』

が、クレアは攻撃を止めようとはしない。

仁王立ちで立つ機竜の巨大が右足を一歩引き、右の爪を大きく広げて迎え撃つ。

「リボルバァァ！」

「ラスタァァ！」

光弾の弾幕を左手に展開した障壁一枚で突貫してくるスバルを！

スバルが跳躍、最高速を維持したままの勢いで右腕に螺旋を従え機竜へと跳び上がる。

真正面からスバルを迎え、機竜の身体が大きく踏み込む。右爪の内側には膨らむ光。

「キャノン！／カノン！」

光が爆ぜた。

螺旋を光弾が消し飛ばし、光弾を螺旋が打ち砕く。

相殺という形を持って、一人と竜の身体は風に煽られ距離を取る。

「一旦退くよ！」

『Ｗｉｎｇ　Ｒｏａｄ！』

深追いはせず、冷静に、空への道を駆け上がる。

それだけに終わらず、幾本もの道を作り出し、機竜の周囲を囲っていく。

さながらそれは蒼き檻。

「出来上がる前に！」

スバルを落とす。

そう考えてシルフィスの四つの腕には光が灯る。

次の瞬間にはそれは光弾の群れと化してスバルに放たれていた。

シルフィスの射撃。

だがソレは射撃とは思えぬ威力を持って、スバルに放たれ続ける。

スバルは道を変えることで巧みに弾丸を避けている。

足場さえあれば空戦魔導師とまともにやりあえるとすら言われているスバルが、考えなしの直射に当たるはずがなかった。

が、流れ弾がウィングロードを破壊し、檻が消えていく。

スバルに当たらずとも足場となる道がこの状態では陸戦を得意とするスバルに撹乱戦法は行えない。

「いくら破壊しても、無駄だよ！　私と相棒の道は途切れないから！」

「くっ！」

しかし、スバルのウィングロードの生成の速度は尋常ではなかった。

壊れた端から新しい道が作られ、クレアの破壊の速度を上回っている。

クレアの行為は精々檻の完成を遅らせる程度であり、魔力の無駄遣い。

ならば、かかってきたスバルを迎撃すればいい。

そう考えて。

「あ、ダメだね」

「ええ。決まりますね」

遠くから二人の模擬戦の様子を観察していたなのはとハルがそう呟いた。

同時、スバルが動く！

「後ろ！」

跳び移り、進路をねじ曲げ、アブソーブグリップをフルに活用して凄まじい速度でスバルが旋回運動を行う。

遂にはシルフィスの視線を振りきり、背後に回り込んだスバル。

スバルは高速移動魔法は習得していない。

スピードで虚を突くということは難しいが、背後は認識が遅れる

ということ以前に、迎撃能力が下がる。
虚を突けずとも、接近までの時間は稼ぐことが出来る。
人間相手ならだが。
機竜には尾があり、それも立派な武装だ。
背後すら用意に迎撃が出来てしまう。
後ろからスバルが来ていることをいち早く察知したクレアは機竜の尾へと魔力を回し、尾を振り上げる。
スバルの勢いを利用してカウンターを叩き込もうとしたのだ。

「うぉおおオオ！」

機竜の背後に死角はない。
そんなことは百も承知。
“尾があるから”背後を選んだのだから。
シルフィスは大きさにして五メートル近くある。
必然その質量はスバルより多いため、まともにぶつかり合えば勝ち目はないだろう。
スバルがリボルバーナックルからカートリッジを弾き飛ばして尚、加速！
腕を引き絞り、蒼き弾丸として、駆ける！

「クラッシュテール！」

機竜の質量と魔力強化を施された尾は地面を叩き割り、亀裂を拡げるその様は、その威力を存分に示す。
カウンターが決まっていればスバルといえど倒されていただろう。

『Ｃａｌｉｂｕｒ　Ｓｈｏｔ』

現実はそうもいかない。

響く電子音、出所は。

ま、え！？

引き絞っていたリボルバーナックルは囮。
元よりスバルは尾とぶつかりあう気はない。
最高速を維持したまま前へと駆け抜けていた。
がら空きの機竜の足元へと回り込み、そして急停止。
前へと向かっていたベクトルが全てスバルへと襲いかかる。
回し蹴りを放とうとする体勢のままスバルは止まる。
いや、拮抗しているのだ。
己が生んだベクトルと。
全力で押し合い、釣り合っていた力と力。
その片方、ベクトル分をスバルが振り切った時。

「くらえぇぇ！」

その力は、常時の蹴りの威力を遥かに上回る一撃となる！
機竜の腹にマッハキャリバーが突き刺さり、破片を撒き散らせた瞬間、衝撃全てが操縦士であるクレアへと伝わる。

「きゃぁあああ！」
『衝撃甚大。保護システムを作動します』

尋常ならざる威力に機竜は巨体を地面に擦り付けながら吹き飛んでいく。
距離にして十メートル弱。
成したのはスバル以外に誰もいない。

「す、凄い……」

「でも、クレアちゃん大丈夫かな？」

スバルのパワーに驚き、凝視していたエリオだが、キャロの言葉にハッとする。

何せ、機竜を吹き飛ばすほどの一撃だ。

機竜の内部で気絶している可能性もある。

様子を見ていたハルも心配をしたのか機竜に近づいていく。

「あ、動いた」

「ホントだ。良かったぁ……」

「でも、なんか揉めてるみたいよ？」

ゆっくりとだが機竜が立ち上がったことに二人は安堵する。

が、ティアナの一言にもう一度エリオは視線を戻して。

「あ、攻撃された……」

「えぇ！？」

エリオの呟きにゴキリと音がなる程の勢いでキャロが機竜の方向を向く。

そこには確かに輝く尾を叩きつけられたハルがいた。

容易く片腕で防いだあげく、笑っていたが……。

ちなみに魔力は使っていないというのだから驚きだ。

「ハルさん、平気なのかな……」

「平気、なんだろうね……」

「「ははは……」」

ハルのデタラメさにエリオとキャロは全く感情のこもっていない笑い声をあげる。

つくづくハルが味方で良かったと心底思って。

「あ、撃たれた……」

「「えぇ！？」」

次はティアナがいった言葉にふたりしてゴキリと首を鳴らす。

――ちなみにこの後医務室で悶えることになる。余談だが。

見ると、ラスターカノンを叩き込まれるハルがいた。

これもまた、片腕で打ち砕いていた。

無論、笑顔で。

話がついたのか、ハルが退散し、スバルとクレアの第2試合が始まりを迎えた。

先刻と同じく、クレアの攻撃は雑なまま。

「なんでクレアちゃんあんなに機嫌悪いんだろう。昨日までは普通だったと思うんだけど……」

う～ん、と悩むキャロに何となくわかっているエリオとティアナは苦笑いを浮かべる。

「ティアナさん、原因って……」

「まぁ、十中八九――」

ティアナの答えに、キャロは納得し、エリオは苦笑いを二割増し浮かべた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

クレアにどやされ、すごすご、いや、ニコニコとしながら帰ってきたハルになのはも苦笑いを浮かべていた。

「一応聞くけど、平気？」

「ええ♪」

満面の笑みで答えたハルになのはは「やっぱりか」程度にしか思わない。

ハルの異常さは文字通り、身体で知っているからだ。

射撃を弾くくらいなら可愛いもので、ハルはなのはの砲撃すら片腕で消し飛ばしてしまう。

覇神の力なくともそれぐらいはいとも容易くやってのける。

クロスレンジとはいえ、なのはがリミットを外した状態で戦って七度、ハルに殺されている。

無論、仮定の話ではあるが、殺された。

そう思わせるに十分過ぎる状況だったのだ。

言い方は悪いが、クレアではハルに傷一つ与えることは出来ないであろう。

「いやぁ、どうしてお嬢様はお怒りなのでしょうね♪」

「……はぁ」

この人をからかって遊ぶ性格さえ無ければなのはも素直に認めるにたる人間なのだが。
クレアが何故怒っているのか、それを理解した上での物言いになのはは少し咎めようとして。

「あのね、ハル君――」

「ち～～～は～～～る～～～♪」

なのはの言葉を遮り、元気一杯な声が響いた。
ぴょこぴょこと青いツーテールを生き物のように跳ねさせて、隊舎の方向から子供が走ってくる。
ハルは後ろも見ないまま苦笑を浮かべた。

「え～～い♪」

一メートル程手前から勢いをそのままにジャンプ。
ハルの背中に体当たりをかますようにしておぶさった少女は、自称、迷子じゃないもんと言い張ったが確実に迷子であるニコニコ顔なセシリアだ。

「危ないと昨日も言ったはずですよ？」

「えへへ～。ちはるみたら我慢出来なかったの♪」

反省の色が見えないセシリアにやれやれと肩を竦めて、溜め息をついた。
セシリアに、ではない。
クレアに、だ。

ハルの溜め息の原因であり先のティアナの言葉、それは。

「十中八九、妬きモチ、でしょうね」

妬きモチだった。

明確な返事が貰えていないとはいえ、ハルがクレアの想い人である事実は変わらない。

その想い人がいきなり現れた子供に独占されているのだ。

自分の方がハルといる時間は長いのに。

見ていて気持ちの良いものではないのは確かだろう。

朝の戦い方に冷静さに欠き、荒れていたのもハルが妬きモチが原因だ。

初めての本気の妬きモチだ。

多少は行きすぎようと許される。

「ふふふ……。ふふふふふ……。私も我慢出来ずに砲撃の指示を出しそうですの……」

『私はマスターの指示に従いますよ?』

「クレア? おーい、クレアー? 聞いてるー? もしもーし?」

故に、少々危険な笑い声をあげていたとしても、奇抜な行動に出掛けていても、先輩であるスバルを無視したとしても許される。

そう、“多少”だから。

恋する乙女に一般常識は通じない。

ましてや初めての妬きモチだ。どんなことでも多少で済ませてしまう。

「ふふふふふ……」

「ハル君、何だか凄く寒いんだけど――」
「気のせいです♪」
「え～、あたし――」
「セシリア、朝御飯は僕が作りますね♪」
「わ～い♪　ちはるのお料理～♪」
どす黒い気を放つクレアが起こす異変を爽やかノンフライな笑みで強引に話を切り、あるいはねじ曲げてもみ消す。
早朝から問題事など、いくらハルとはいえ避けたいのだ。
大体、何をそんなに妬いてるんだか……。
そんな殺気にも等しい気を全身で受け止めているハルは本音では呆れていた。
ハルからすればセシリアはただの子供でしかない。
可愛らしいとは思いはするが、恋愛対象等とは到底思えない。
妬きモチを妬く理由がハルにはわからない。
妬くことが子供っぽいんだって、気付いてもいいと思うが……。
そう、思う。
間違っても絶対に口には出さないが。
それはクレアが自分で知るべきことだからだ。
「あの、ハル君……」

「はい？」

ハルは、無意識的に空を眺めていた。
そんなハルに声をかけづらかったのか、なのはがおずおずと話しかける。
ハルが何ともないことを知ると、ホッとした表情を浮かべ――束の間、真剣な表情に変わる。
エースオブエースが理由はわからないが本気になった。
ならば向き合わねば失礼だと正面から向かい合う。
こくりっと、なのはの喉が動き、息を飲んで。

「セシリアちゃんとハル君では流石に早すぎると思うんだ！」

必死にハルに訴えかけるようにしてなのはは叫んだ。
目を覚ましてと言わんばかりの剣幕で。

「……」

「なになに～♪　なんのおはなし～♪」

ちゅんちゅんと、雀の囀りがやたら大きく聞こえた瞬間だった。
満足に声を出せたのはセシリアのみ。
なのはの剣幕にフォワード陣もクレアも黙っていたが故に。
ある意味、素晴らしいタイミングであった。
ハルの中でなのはの情報が整理されていく。
その時間をハルが迷っている時間と勘違いしているのか必死さの表情そのままに待つなのは。
そんななのはにハルはニコリと笑い、なのはも釣られてニコリと笑い。

「……バーカ♪」

「うん♪　って、えぇぇぇ!?」

「あはははー」

「なのは～、ばいば～い♪」

罵倒され、思いっきり頷いてしまったなのはは意味を再認識して驚きの声をあげた。

「どうして!?」と聞いたなのはだが、ハルは盛大にスルーしてセシリアをおぶったまま訓練施設を後にしてしまう。

「なんで罵倒されたんだろう……」

なのはからすればハルのためを想っていった言葉。

しかし、返ってきた答えは笑顔での罵倒。

わりと本気で落ち込むなのはをフォアード陣とクレアが慰めて、朝練は終了をした。

《なのはさんだしなぁ……》

ちなみにクレアを除いたフォアード陣の面々は内心苦笑していたのはここだけの秘密。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

どこともしれぬ建物の中で、ドクンドクンと闇の中から鼓動が響く。

必要最低限の蝋燭の明かりだけが光を放ち、そこが巨大な部屋で

あることを教えてくれた。

「どうなっても、僕は責任はとれないし、とらないよ？」

部屋の壁にもたれ掛かりながら、黒いコートを纏う男、ジル・ローディアス。

すらりと長い足に、世の女性が羨むような美しい銀の長髪をし、瞳は碧眼。

その表情は珍しく苛立ちを顕にしていた。

彼の視線が向く先は部屋の中心。

描かれているのは古代ベルカの魔方陣。

ベルカの魔方陣の角には透明なクリスタルが浮かび、三角形の中心点に置かれているのは金色に輝く台座。

台座に近づいていくのは身長にして１６０センチ程の小柄な人影。

「心配するなよ。封印の上からじゃ奴とは言え、大したことは出来ねぇよ」

声からは少年だということがわかった。

少年は顔を隠すように深く被ったフードだが、端から少し覗く口はニッと笑っていた。

実に楽しそうな少年は、掌に黒いクリスタルを乗せる。

形からして、魔方陣の角にあるものと同じ物だが、透明な物とは違い、何らかの力を持っていることは明らかだ。

「そうは言うがね。ソレは人間の手には余る力だ。だが、封印は人間の手によって行ったモノ。封じられていること自体が奇跡に近いと言ってもいい。その封印ですら、一時的なモノかもしれない。止めた方が賢明だと、僕は思うよ」

「一時的なモノを永遠にするために、こうするんだろ？　何、吸われ続ければ奴の力も弱まる。弱まれば封印も破られなくなる。奴の力は俺達が利用出来る。良いことずくめじゃねぇか」

黒いクリスタルに秘められている力を危惧するジルだが、少年は話を聞かない。

確かに、少年の言っていることは正しい。

エネルギーは使えば減る。

現状でクリスタルに込められている力が最大時なら、使ってしまえばそれ以上にはなりようがない。

例え力が回復するのだとしても、最大時を上回ることはない。

“常識的に考えれば”の話だが。

黒いクリスタルに封じられている力は、明らかに常識等通じないレベルの力だ。

「これだけの力が手元にあって、利用しない方がバカだろ？」

利用出来るのなら、ね……

そう、思う。

黒いクリスタルの中に封じられているのは、たった一人で世界を覇界せしめる男。

六課と戦い、消耗した所を襲い、カウンターとなるべき人間を用意し、次元の狭間に叩き落としてようやく封印出来た。

それでも、完全封印出来たとはジルは考えていない。

未完成な封印に横から力を加えればどうなるかなど予測がつかない。

故にこそ、最悪の想定を見越し、忠告のためにここにいる。

「今一度言うよ。やめたまえ。最悪、計画に死傷を来すどころか、破滅になりかねない」

「計画って言うのはコソコソと根回ししてるてめぇの計画のことかぁ？」

「スルトか……」

スルトと呼ばれた男はガハハと豪快に笑った。

その男は巨漢の一言につきた。

１８０近い身長があるジルよりもさらに大きく、２メートルに達している。

針のように尖った髪、手入れを行っていないのがわかる無精髭、瞳は獣のごとく、ギラギラと焔がごとく燃える。

このスルト、カナンを襲撃し、ヴィヴィオと祐希奈に怪我を負わせ、カナンの暴走を引き起こさせた張本人でもある。

――スルトはどっかりと床に座り、ニヤリと笑う。

「てめぇが、何考えてんだか知らねェし、興味もねェが、折角内緒で頑張ってんだもんなァ？　ぶっ壊されちゃたまんねェんだろ？」

スルトに対し、ジルは「はっはっは」と定番の芝居がかった笑い声を上げた。

だが、その笑い声は全く楽しくなさそうで、寧ろ、冷ややかな感情が押し出されていた。

「安い挑発だ。流石は知能は猿以下のスルト君だね」

一瞬、ピクリとスルトの眉が歪んだが、理性で抑え込んだのか「まぁいい」と話を切った。

カマをかけて、逆に返されたのでは意味がない。

「まぁ、安心しろよ。ジル・ローディアス。もしてめぇが危惧するようなことがあった日にゃぁ、俺様がソイツをブッ殺してやる。そうすりゃ、てめぇも安心だろ？　俺様の優しさに感謝するんだなァ？」

唾を飛ばし、大口を開けて豪快に笑うスルト。

「フフ……」

ジルが浮かべたのは嘲笑。

スルトが言ったことが、あまりに可笑しくて。

「あん？　何笑ってやがる？」

「いや、失敬……。ははは……。君が、覇界神を殺す、か。素晴らしいジョークだ」

それが可笑しくて、可笑しくて、たまらない。

怪訝な顔をするスルト。

それがまた可笑しくて、ジルは笑う。

覇界神をスルトが殺す。

スルト“ごとき”がそれを出来ると言っているのが、あまりに不相応で、滑稽で、可笑しくて。

侮辱されていることに気づき始めたのか、スルトの頭に血が登り始める。

それでも、ジルは笑うことを隠そうとはせずに。

「君程度では、無様に殺されるだけだろう？　いや、相手にもされないか」

「先にてめぇから殺してやるよ……？」

怒りが頂点に達したのか、スルトがジルに歩み寄る。

振り放った右手に顕現するは、ロストロギア、灼熱の魔剣、レーヴァテイン。

その大きさたるや、スルトの身長と変わらない。

何よりも恐ろしいのは、レーヴァテインが発する炎の熱。

人体など触れれば剣により切断されるのではなく、炎によって溶断され、灰と化す。

その刃の標的にもっとも近いのはジルだ。

だが、その表情は涼しげで、余裕すら感じさせる。

「やめろ……」

「……チッ」

今までは成り行きを傍観していた少年と思われる人間。

たった一言、その一言でレーヴァテインから炎が消し飛ぶ。

それはスルトが意図的に行ったことではないことは彼の舌打ちが証明している。

彼は本気でジルを殺そうとしていたのだから。

「ジル・ローディアス、スルト、お前らが揉める必要はねぇだろ。全ては王の決定だ」

「やれやれ……。困った王様だ。臣下の声も聞きもしないのだからね」

王の決定。
それはここでは絶対。
逆らうことは許されない。逆らえば待つのは死、だ。

「不服か？」

正直な所は不服だ。
しかし、ジルは首を横に振った。
例えジルと言えども、王の命令には逆らわない。
逆らわない理由もある。

「僕はまだ死にたくはないからね。何故かって？　それはまだ僕の目的を達していないからさ。気になるかい？」

「いや――」

段々とジルの雲行きが怪しくなってきたため、話を切ろうとする少年。
だが、ジルは止まらない。

「そうかいそうかい！　ならば聞きたまえ！　この僕の！　壮大な野望を！　それは！」

「聞きたくねぇって……」

半ば諦めたように少年は呟いたが、やはりジルは止まることなく、拳を胸の前に握りしめて。

「余の美女に溢れんばかりの愛を贈る生活……。ハーレムを――ご

ふぅ！！」

「……すみませんでした」

最後まで言い終えることは出来ず、突如として現れた黒フードに鳩尾を殴られて幸せそうな表情のまま倒れ伏す。

ジルを昏倒させたのは、彼の監視役として選ばれた人間だった。

自身より大きなジルを軽々と肩にかつぎ、黒フードは一礼して消え去った。

「よくわからん二人だ……」

「今に始まったことじゃねぇけどな」

そんなことを言われている二人は宝石店へと帰宅していた。

鳩尾を殴られたにも関わらず、既にジルは復活し、宝石に適当な値札をつけている。

「大丈夫なのか？　あんなもん渡して」

宝石店の奥へと進みながら、黒フードはジルに尋ねる。

「ふむ」と一つ頷くとジルは微笑んで。

「大丈夫じゃないだろうね」

「まるで他人事だな……」

「自分達で火種を蒔こうと言うんだ。僕が関与すべきことじゃあない。それに、忠告はした。十分すぎると思うけどね？」

「こっちまでとばっちり来たらてめぇのせいな？　身体で張って止めろ。俺は知らねぇ」

吐き捨てるようにして黒フードは言い放つが、ジルはどこを見るでもなく虚空を見つめて。

「ツンだねぇ……」

『ツンツンですねぇ……。ですが、デレた時は……』

「『くふふ……』」

「気色わりぃんだよてめぇらは！！」

バルムンクまで加わり、手がつけられなくなった変態にもう知らんと、黒フードは宝石店の奥にあるキッチンへと進んでいく。

怒りに任せて進んだせいか、揺れに耐えられずフードが外れ、黒い長髪が背中にサラリと落ちる。

それにさらにイラついたのか雑に髪を集めてフードをかぶり直した。

「可愛いのだからフードなど取ればいいのにね？」

『ですよねぇ？』

「『か・わ・い・い・の・に』」

「……殺してやろうか？」

「『君になら！！』」

「……死ね」

カモンと言わんばかりに両腕を広げたジルに、フードの内から冷

たい視線を送り、かなり本気でそう言った。
落ち込むジル＆バルムンクを無視して、黒フードは今日の朝食を作り始めた。

後編に続く

第六話　暗雲　（前編）（後書き）

タイトルはこんなですが、ここからはわりかし明るめでいけると思います！

第六話　暗雲　（後編）（前書き）

ぎりぎり限界までいそいでこれでした・・・。
なんかひにひに書くの遅くなってるきがします。
相変わらず返信がかえせていませんが、明日は久しぶりに午前中のみのバイトなので、午後に感想を返せると思っています。
では、どうぞです♪

第六話　暗雲　（後編）

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

朝、ショートホームルームを終え、一時限目の始まるまでの間にある短い休み時間。

「ねぇねぇ、今日も中々ダイナミックな朝だったんだ～。二人とも聞いてよ～」

「ん、どうしたの？」

「構いませんけど……？」

「ありがとう。ヴィヴィオちゃーん♪」等と言いながら背中から抱きつく美鈴にも慣れたのか、実に自然に対応したヴィヴィオだが、神楽は美鈴のことを半信半疑なのか疑いの眼で見上げていた。

まぁ、いつも茶化されていれば疑いたくなるのも仕方ない。

「あのさ～、私って寝相悪くてさ。朝起きると蒲団が飛んでってた～、なんてこともあるわけね」

「女の子として失格ですね……」

「神楽ちゃん痛い！　グサッとくるよ今の一言！」

「刺さるように言ったので」

「でも、でもね……。そんなつれない神楽ちゃん、嫌いじゃないよ

……ハァハァ……」

「それで、続きはどうなんですか？」

「あ、そうそう♪」

「ふぅ……」

クルクルと変わる美鈴の表情に溜め息をつく。

美鈴のテンションに合わせることは無謀なことだということが神楽は最近になってわかってきていた。

神楽の成長はさておき、美鈴の話が続いている。

「いやね、今日の朝はね、枕が涎でべったりだったんだけど」

「美鈴ちゃん……」

「あれぇ、何だろう。神楽ちゃんの言葉よりヴィヴィオちゃんの視線の方が痛いよ？　お姉ちゃん泣きそうだよ……」

よよよ、と泣き崩れた美鈴に本気で心配になったのか、ヴィヴィオは席を立ち、近づいて。

「あ、あの、美鈴ちゃん、ごめんな――」

「隙あり♪」

「なし、ね」

「いっ！」

目を光らせて、ヴィヴィオに飛び掛かろうとした美鈴の頭をコチンと拳骨が打ち下ろす。
拳自体は動いていなかったが、美鈴はそれに自分から飛び込む形となったために自爆して痛みに踞る。

「うわぁぁん！　祐希奈がぶったぁぁぁ！」

「ゆ、祐希ちゃん、美鈴ちゃん可哀想だから謝ろう？」

オロオロとしはじめるヴィヴィオだが、祐希奈は流し目で美鈴を見て、ふん、と一言。

「どうせ嘘泣きだから無視って良いわよ」

「祐希奈酷い！」

「そうだよ。こんなに痛そうに――」

「本当だけど！」

「本当なんだ！？」

「ほらね」

「騙してごめんね♪」っとチロリと可愛らしく舌を出し、美鈴がヴィヴィオにウィンクをした。
かと思うとダンッと拳で床を叩く美鈴。
流石に気になったのかクラスメイトの視線が肩を震わせる美鈴に集中していく。

「く、ヴィヴィオちゃん泣き落として頬っぺたスリスリしたかったのに……！」

《最低だ！》

もう何が何だか、状況の把握を諦めたヴィヴィオは苦笑いを浮かべてる。

やはりいつも通りだった美鈴にクラスメイトは素早くツッコミを入れた後静けさを取り戻し――

「甘いわね。ヴィヴィオの頬っぺたは私のモノなのよ！」

「ふぇぇぇ！？」

《次はソッチ！？》

かけたのだがやっぱり戻るはずがない一年四組。

美鈴がふざけ、ヴィヴィオと驚き、神楽が溜め息、祐希奈がさらにふざけ、クラス全員をも巻き込んで賑やかに過ごす。

それがいつもの日常。

聖中では、少なくとも一年四組では、今日も平和に時間が流れていく。

一つ、気がかりなことを除いては。

「で、カナン君、ダイナミックに蒲団蹴り飛ばして涎で枕に絵を書くって私スゴいよね！！」

《まさかの無茶振り！！》

「しかもエピソード追加されてますし……」

そんな美鈴に、ツッコミが返ってくるとクラスメイト全員が思った。

カナンは自身の身も省みず、祐希奈にツッコミを入れられる男子であり、希少種なのだから、当然とすら思っていたのだ。

机に突っ伏していたカナンが少し身体を起こし、数秒。

「あー……、いいんじゃねぇか？　そんなとこあっても……。可愛いだろ……」

《なんですと!?》

まさかの素での返しにクラスメイトのほとんどが驚愕する。

当の美鈴もこれは予想外だったのか、赤面して「え、あ、ありがとう……」等と言って黙ってしまう。

「アイツ……」

「何かあったのかな……」

明らかにカナンの様子がおかしい。

カナンも自覚はしていないが、天然な所があり、素で可愛いと言う場合があるにはある。

だが、今回のカナンは適当に流しただけ、そんな感じだった。

人に対して斜めに構えるというのは、カナンにしては珍しいことで、幼馴染みの祐希奈で数える程しか見たことはない。

そもそもとして、隠し事が下手だと言える。

好きな人間にしろ、嫌いな人間にしろ、カナンは態度に出やすい。

適当に流す等、余程機嫌が悪いか、精神的に疲れているか、くら

いなものだ。
つまり、今はそのどちらかということだが、昨日までカナンは今まで通りだった。
訓練の後は気を失っていたためにわからない。
何かあったとすれば、その間。
ヴェインと何かあったとくらいしか考えられないのだが、凛からもヴェイン本人からも特に連絡らしきものはなく、問題が起こっているとも考えにくい。

「何なのよー！」

「取り合えず、そっとしておいてあげよう？」

ガー、と唸る祐希奈だが、ヴィヴィオの言葉にも一理あると思ったのか――
――そういったヴィヴィオ本人も複雑な表情ではあったが。
納得しないまでも、コクリと頷く。

「きりーっ」

クラス委員である神楽からの号令が響き、教室の雑談が消え、教員が段に上がり、一時限目の開始を告げる。
カナンに対するモヤモヤを拭い切れないまま、聖中の一日が始まった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

昼休み、普段なら適当に作った弁当を広げ、ヴィヴィオ達と一緒に食べている筈だった。
しかし、今、カナンは屋上におり、隠れた昼寝ゾーン、貯水タン

クの間に仰向けに寝そべっている。
弁当は広げるには広げているものの、手はつけられていない。
その様子が心配になったのか、メイデンがアクセサリモードを解除し、現れる。

「……マスター、弁当は、食べないのか？」

「……今はいい。先食っててていいぞ」

「い、いや、これはマスターが作ったのだし、ほら、卵焼き、美味しそうだぞ？」

元気づけようと、明るく振る舞いながらおかずを進めてきたメイデンに、カナンは少し苛立つ。

「だから、食いたいなら食えばいいだろ……」

「マスター……」

「チッ……」

やめろ。
自分にそう言い聞かせようとしたのに、口はもう言葉を紡いでいて。
メイデンを傷つけてしまったことにカナンはさらに苛立ち、舌打ちをした。
その行動ですら、メイデンを怯えさせるものだと、後から気付いたが、もう遅い。

「……悪い。でも今はほっといてくれ」

「わかった……」

せめて、これ以上八つ当たりをしないように、突き放した。

素直に従い、アクセサリモードに戻ってくれたのは、メイデンはカナンが苛立つ理由を察しているからだろう。

苛立つ理由、それは。

時間を遡り、今日の朝練の時。

途中、悪夢で跳ね起きるというアクシデントがあったものの、カナンはいつも通りの場所でいつも通りに朝練を行っていた。

オーバードライブを完全なものにするために、まずは持続させるという鍛練だ。

シン、と静まり返ったかと思うと、カナンの周囲に風が逆巻き、渦を生む。

そして、やがてそれは竜巻となり。

「っ！」

カナンが息を飲んだかと思うと、竜巻は跡形もなく霧散する。

それは、カナンが集束していた魔力も同じこと。

カナンのオーバードライブは、戦闘スタイルの変化以上に、身体能力の限界を越える、という方ものだ。

通常のカナンの全能力の底上げ。それがカナンのオーバードライブの能力。

文字通り、全てだ。

そう、殺戮衝動に至るまで、底上げしてしまう。

衝動に飲まれてしまえば暴走し、ただの怪物となる、危険な力。

だが、制御出来ていたのだ。

事実、ハルとの戦いでは完璧に制御していた。

にも関わらず、出来ない。

ハルの時は特別強い想いがあったからこそ完璧に制御出来ていた。
それはカナンもわかっている。
だからこそ、平常であろうと使えるように努力をしているのだから。
そして、完璧に、とはいかないまでも、少しは使えたのだ。
“悪夢を見るまでは”

「ビビってんじゃねぇよ……！」

「マスターは悪くはない。自分をあまり責めるな……」

俯いて歯を食い縛る。
メイデンはそうは言っているものの、これを自分を責めずして誰を責めればいいのかわからない。
オーバードライブは、メイデンやレナスの力は関係なく、カナン単独の力なのだから……。
発動の瞬間、増大した殺戮衝動が見せる悪夢。
仲間達を切り裂いた、自分。
紅く染まっていく視界、遂には衝動に呑まれそうになり、止めてしまう。
結果、失敗に終わる。朝はこの繰り返しだった。
少しとはいえ使えたものが使えなくなる。
それが、カナンの苛立ちの原因。

「カナン君、見～つけた♪」

「……へ？」

そんな陽気な声がすぐ足元から響く。
見ると、ヴィヴィオが顔をひょこりと出して笑っていた。

「えいっ」っと一声。

相変わらず身軽なことで。

一跳びでカナンの秘密基地に辿り着いたヴィヴィオにカナンは苦笑する。

――ちなみに貯水タンクがある場所は本来脚立を使って上る場所であり、高さにして一メートルと五十センチ程。普通の中学生女子が高跳びで跳べる高さではなく、下手をすれば大会記録である。

閑話休題。

ヴィヴィオは風にはためくスカートを抑え、カナンの隣で少し悩むと体育座り。

スカートから覗く瑞々しい太股がカナンの顔の横へ。

特にやましい気持ちはなくとも赤面はしてしまう。

耐えきれなくなり、身体を起こしてペチりとヴィヴィオの額を平手で軽く叩く。

「ひゃう！　な、なな、何かな？」

突然叩かれたことにビクリと身体を痙攣させて、涙目になりながらカナンを見つめる。

一々可愛いな畜生……。

などと思いながらも、表面的には呆れた表情を維持する。

苛立っていなければ出来ない芸当なため、こればかりは少し朝の自分に感謝した。

「あのな、無防備だって、何回言われればわかるんだ？　ヴィヴィオさんや……？」

「無防備って？　カナン君、いるよ？」

質問の意味を図り間違い、持ち前の天然を発動、首を傾げたヴィヴィオに、カナンはギュッと拳を握りしめる。

「ふぇぇ！？　な、何してるの！？」

「何でもねぇ……」

心の中で叫び、貯水タンクを一発殴っておく。

そうでもしないと、頬が緩んでしまいそうだったから。

驚いているヴィヴィオにカナンはあくまでも冷静に対処する。

今は、ヴィヴィオを近づけてはいけない。

「ヴィヴィオ、今日の俺には――」

「お弁当、一緒に食べよ？」

――関わらない方がいい。

そう言いたかったのに、ヴィヴィオに先手を打たれた。

ニコニコ笑っているヴィヴィオに、確信犯だなとカナンは思う。

「……イラついてるの、わかってんだろ？」

弁当を一緒にの類いは本来の目的ではないことはわかっている。

だからカナンは、探りを入れるのは止めた。

直球でした質問にヴィヴィオはコクりと頷く。

わかってるなら何で来る。当たりたくないから逃げたのに。

「ソッとして置こうって、思ったんだけどね。最初は」
「なら何で……」
「喧嘩しようかと思って」
「……はい？」

思考がヴィヴィオに追い付かない。
キョトンとしているカナンにヴィヴィオは笑う。
言っていることと、表情があまりにも違う。違いすぎる。
それがまたカナンを混乱させる。

「喧嘩しようよ。ややこしいことはなにも考えずに、不満や苛立ちに任せて、思いっきり」

あくまでも穏やかに、かつ、静かに、ヴィヴィオが語る。
ほのかに香る、柑橘系の匂いを風に乗せて、ゆっくりと立ち上がったヴィヴィオは一跳び、ストンという軽い音が着地したことをカナンに知らせる。

「フェアリー」
『起動します』
「うん、お願い」

結界を張り巡らされ、屋上の空間が世界から切り離される。
その光景を、カナンは驚愕に染まりながら見る。
次元結界。
通常、魔導師間の間で張られる場合の意味は、全力勝負。
ようやく思考が追い付いたカナンはヴィヴィオの言葉の意味を理

解する。
　カナンの見上げる青空に浮かびあがる蒼の光槍。
「アクセルランサー……」
「ヴィヴィオ、ちょっとま――！」
「ファイア！」
　空が堕ちる、そんな表現もあながち間違いとは言えず、一面を覆う蒼が加速。制止も聞かず、ヴィヴィオはカナンに向けて光槍を撃ち込んだ……。
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
　爆煙の中からカナンが飛び出し、首を振る。
　その姿は甲冑を着込み、すでに臨戦態勢、とはいうものの、戦う気は、ない。
「なんで俺とお前が喧嘩する必要がある！」
　視線の先にいるヴィヴィオへとカナンは怒鳴る。
　が、ヴィヴィオは無言を貫いた。
　ヴィヴィオの表情は穏やかで、それがまた、わからない。
「理由がないだろ！　やめろ！」
「ディバイン！」
「なっ！」

カナンの説得に、返ってきた答えは一つの言霊。
ヴィヴィオが構える杖の先端部へと、蒼の光が集束していく。
なんども見た。その技は、ヴィヴィオが主砲。
身をもって威力を知っているカナンはなりふり構わず横へ飛ぶ。

「バスター！」

その直後だった。
蒼砲は、カナンのすぐ横を通り抜け、結界内に残されていた金網をぶち抜き粒子と変える。
進路上には地割れのように出来上がった道がある。
砲撃には一切の加減が感じられない。
説得を行うカナンへと、ヴィヴィオは本気で撃ったのだ。

「ランサー……」

「チッ！」

ヴィヴィオの周囲に生まれ出る光槍をみて、カナンは舌打ちをする。
右腰に帯びた剣へと手を伸ばし。

「ファイア！」

「何なんだよ！」

計二十発にも及ぶ光の弾丸。
真っ直ぐに空を切り裂いて飛来するそれらをカナンは全て捉えきる。

カナンの左腕が霞んだかと思うと、視認することすら難しい閃光が疾り抜け、次の瞬間には光槍が砕け散る。
それを成したカナンはヴィヴィオを一睨みする。

「メイデン、お前からも何とか言ってくれ……」

もはや自分で説得するのは無理と判断したカナンは、頼みの綱、メイデンへと説得の思いを託す。

『出来ない、というよりはヴィヴィオは聞かないだろう。今ここでは、私は第三者でしかなく、口出しを出来る立場ではない』

「意味わかんねぇよ！」

思わせぶりな発言にカナンの苛立ちは募っていく。
確実に何かを知っているメイデン、となれば答えは一つ。強制的にでも聞き出す。
あまり強引な方法はカナンとしても使いたくないが、意味もわからず戦わされるよりはずっといいと割り切った。
が、それは叶わない。

「余所見してると、危ないよ？」

『Ｍｏｄｅ　２ｎｄ』

「ッ！」

そんな隙をヴィヴィオが許さなかったから。
響いた言葉に息を呑みながら抜刀、そのままの勢いで前へ振りぬく！
一瞬にして距離を詰めてきたヴィヴィオが双刃を横薙ぎに叩きつけ、火花が散った。

剣に触れた双刃が、踊る。
ブゥンと風を切り、ヴィヴィオの身体ごと双刃が回転、横薙ぎから変化した軌跡が狙うのはカナンの右肩。
反対側からの一撃をバックステップで回避、その直後にカナンは歯を食いしばることになる。
肩への一撃を外したヴィヴィオが右足を軸にまだ回る、女性特有の柔軟性を生かし、背中近くまで双刃を引いて、投げつける！
剣を縦に、飛翔してきた双刃を受け止める。
双刃はかなりの回転力を保持しており、剣に激突するも回転力を落とさない。
幾度も幾度も刃を叩きつけ、火花を散らし、カナンを押し込んでいく。

「ソニックフォーム……」

まだ、止まらない。
ドレスタイプのバリアジャケットが弾け、黒のレオタードへと変更、漆黒の軌跡を残しながら、ヴィヴィオが駆ける、その場は背後！
カナンは飛翔する双刃の防御で手が塞がり、背後はがら空き。背後にくるとわかっていても、防ぎきれるはずもない。

『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ』
「ウィンド――！」

「ちっ、くしょうが！」

もう、何度目の舌打ちとなるだろうか。
前面のフェアリーは自己の判断でカートリッジを使い、回転力と威力を保持、背後のヴィヴィオは拳に風を巻き込み、対処に追われているカナンに狙いを定め、引き絞る！

前門の虎、後門の狼とはこのことか。

「調子に……」

カナンの身体が明るく輝く。

ギシリ、そんな音を立ててフェアリーが軋んだ。

接触面から苛烈なまでに火花が飛び散り、カナンの剣が、回転に割り込む。

そこからは一瞬の出来事であった。

回転力が弱まった双刃を一気に押し切り、弾き飛ばす。

左手を剣から離し、そのままの勢いのまま反転、すでに後頭部間近まで迫っていた拳を振り向いたカナンが片手で包む、否、払う。

驚愕に表情を染めて、カナンの左をヴィヴィオが流れていく。

剣を放り投げ、右手を引き、瓦割りの要領で力を込めて。

「乗んなぁぁぁ！」

「くはっ！」

思い切り、ヴィヴィオの背中に打ち下ろす！

ヴィヴィオの顔が激痛に歪み、コンクリートの地面へと叩きつけられる。

それを見て、カナンはハッとしたように動きを止めた。

冷水を頭からかけられたように、熱が急激に冷めていく。

女の子を、しかも、全力で殴りつけてしまった。

理由も、ないのに。

「う、あ……ヴィヴィオ！　ごめん！　大丈――」

瞬間、カナンの身体が宙を舞う。

地面に倒れていたヴィヴィオがリカバリーと同時に逆立ちを行うようにしてカナンの顎に蹴りを叩き込んだのだ。
盛大に飛びはしたものの、痛みは、あまりなかった。というよりは、感じている余裕がなかったというのが正確か。
呆然とするカナンは受身をとることも忘れ、仰向けのまま止まっていた。

『Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ！』

まず、い！

だが、未だ戦闘は継続中。
蹴りの一撃からの反動で跳躍したヴィヴィオは、宙を舞うフェアリーを回収、行うのは高速移動魔法、残像とかして、ヴィヴィオが消える。
フェアリーの電子音にカナンの脳が警鐘をけたたましく打ち鳴らす！
それも、遅い。
ヴィヴィオの姿はすでにカナンに跨るようにして仁王立ち、双刃のフェアリーには十分な風の集束。
いかにカナンが速いといえど、この体勢から空間突破を発動することは不可能で。
来るべき痛みに耐えるべく、全身に力を込める。

「はい、私の勝ち」

ガンッ！　という破砕音とともに、双刃が射抜く。
カナンの頬を浅く切り、顔のすぐ数センチ横に、双刃が突き立っていた……。
近接戦闘では、非殺傷といえど、傷がついてしまう。

それは、ヴィヴィオの技術を持ってしても全てを魔力ダメージに変換することは出来ない。剣圧によって発生したソニックブームばかりはどうしようもないのだ。
無論、少しの痛みはあった。
だが、それ以上に、驚きのほうが大きかった。
ヴィヴィオの顔が、笑っていたから……。

「あはは。喧嘩でカナン君に勝っちゃった」

優しく笑って、ヴィヴィオはカナンを見据えていた。
打ち下ろされた際、切ったのか、唇の端に血が流れていた。
それでもヴィヴィオは笑っていた。
自分の怪我など、どうでもいいのだろう。
カナンが立ち直ってくれさえすれば、ヴィヴィオとしては満足なのだから。

「少しは、すっきりしたかな？」

ヴィヴィオの言葉に、カナンは霧がかかったように優れなかった気分が晴れていることを感じる。
命がけでもなく、測られるわけでもなく、苛立ちを拳一つに乗せ、ただ、全力で殴ったことが要因だった。
人間は、何かに転嫁することで、ストレスを発散することが出来る動物だ。
それが、スポーツであったり、読書であったりと、人によって様々ではあるが、何も考えずに没頭する、というのは最も効果的な方法である。
今回はそれが、喧嘩、という方法だっただけ。

「まさか……」

ここにきてようやく、カナンはヴィヴィオの目的を悟る。
自らをカナンの苛立ちの捌け口とすることで、カナンを立ち直らせようとしたのだ。
喧嘩というどうでもいい理由をつけて、わざとカナンが苛立つような行動を見せ、何も考えず、思うままに、戦わせるために。

「なんで、こんなことした……」

「カナン君が、苦しそうだったから」

カナンが怒りに震える。
自らを犠牲にしたやり方をしたヴィヴィオに。
そんなカナンを見ても、穏やかに、ヴィヴィオは話す。
また、苛立つ。
こんなことを行わせてしまった自分に、何より腹が立つ。

「こんなことしなくたって、解決しただろ……」

「したかもしれないね。ううん、したんだと思う。カナン君、強いから、一人でしちゃうんだろうね」

腕を後ろに組んで、ヴィヴィオは空を見上げながら静かに語る。
少しの苦笑を含みながら。
「でも」と、そう、ヴィヴィオが繋げて。

「私が、我慢出来なかったんだ。何かはわからないけど、カナン君が困ってて、多分それは、私達も関係してて、でも、巻き込まないように、離れてくれて。なのに、私の個人的な理由でカナン君を苛立たせて、無理やり治療する形をとった。だから、結局は私は自分

のために行動しただけ。ごめんなさい。もっと良い方法が浮かべば良かったんだけど、私、不器用だから他の方法が思いつかなくって……。本当にごめんなさい」

ペコリと頭を下げたヴィヴィオに、カナンは違うと首を振る。

自分のためにとヴィヴィオは言ったが、決して、自己満足などではないとカナンは思う。

自分は、強くなどないから。

意地を張った手前、強くは言ったが、ヴィヴィオが対応をとってくれなければ、いつまでも悩んでいたかもしれないから。

そう考えると、苛立ち嘘のように消え去り、後に残るのは罪悪感。

「謝るのは、俺だ……。ごめん、心配かけて。心配かけくて済むように鍛錬してんのに、そのことで悩んで、心配かけてちゃ本末店頭だよな。俺、やっぱバカだ」

こちらも深く頭を下げて、謝罪する。

ところが、ヴィヴィオはぶんぶんと首を振った。

「ううん！　私勝手にやったことだもん！　カナン君は悪くないよ！　全然！　だから謝らないで！」

「いやいや、どこがだよ？　明らかに俺がなよなよしてたせいだろ？」

「カナン君、なよなよなんてしてないよ？　優しいだけ」

「それはただの拡大解釈であって、実際は引きずって、八つ当たりしちまいそうだから逃げたわけで……」

「それは、逃げとは違うよ！　絶対違う！」

「いや、だからな？」

あーだこーだとどちらが悪いかという意味の無い比べあいを行う二人。

確実に自分が悪いと言い張るカナン、それを良い方向に捉え、やはり自分が悪いと譲らないヴィヴィオ。

最初は互いに苦笑を交えながら話していたはずだった。

なのに、思いのほか譲らない相手に話し合いは熱を帯び。

「カナン君は悪くないの！　私が悪いんだもん！」

「違うってつってるだろ！？　一部始終を祐希奈にでも聞かせてみろ。速攻で蹴り倒されるぞ！？　無論、俺が！！」

「蹴らないもん！　カナン君悪くないもん！」

「いーや、蹴るね！　自身がある！　アイツは問答無用で俺を蹴る！　何年祐希奈の幼馴染やってると思ってんだ！　小学三年のころからだぞ！？　手に取るようにわかるっつの！」

「私だって、期間は短いけど祐希ちゃんと半年も一緒に暮らしてる！　階段はどっちの足から降りるかとか、朝ご飯を食べる時はお味噌汁とご飯は手前でおかずは右後ろに置くとかも知ってる！　カナン君はこんなこと知らないよね！」

「し、知らねぇけど……」

「祐希ちゃんを深く理解しているこの私が断言します。祐希ちゃんは蹴りません！」

「だーもう！　蹴るっつってんだろ！？　直感でわかるんだよ俺には！」

「蹴ーりーまーせーんー！！」

白熱する討論。

議題は、祐希奈がカナンを蹴るかどうか。

幼馴染のカナン、対するは、真友とまで認められているヴィヴィオ。

両者一歩も譲らない。

祐希奈をより理解しているのは自分だと、証明するために。

「マスター、ヴィヴィオ……」

「「？」」

そんな二人の間に、やや呆れたような声で、ため息交じりにメイデンがアクセサリーモードを解除し、現れる。

第三者が現れたことでキョトンとしたカナンとヴィヴィオはメイデンの言葉を待つ。

珍しく、ジト目をしたメイデンは、二人を交互に見渡し、またため息を一つ。

「まず、議題は祐希奈が蹴るかどうか、ではなく、どちらが悪いか、だろう？　まぁ、この議題もさして意味があるとは思えないがな……」

「「あ……」」

いつのまにか議題がずれていたことを二人は知った。

議題がずれる、というのは、討論が白熱していくとままあることで、それを修正するためにその役割専門の人間がいるのだが、中学生である二人にそこまでのことを求めながら討論する、というのは難しいものがあるだろう。

取り合えずとして、メイデンはそのことを横に置くことにした。

他にもっと重要なことを二人に伝えねばならないからだ。

「二つ目に、周りを良く見ることだな」

「そうね。ちょっと注意が足りないんじゃない♪　仲良いのは結構だけど、そんな大声で話してると、内容が筒抜けよ♪」

「……」

ギギギ、そんな動きでカナンとヴィヴィオは首を捻り、出入口のほうへ視線を向ける。

そこには鬼がいた。否、そんな生易しいものでは済まされない。あれはきっと、終末を運ぶもの、そう、神にも等しい存在。

ニコリと笑う、銀髪の美少女、一之瀬祐希奈神が降臨していた。

祐希奈はヴィヴィオが出かけたきり、帰ってこないので探しに動き、今の場面に直面した、というわけだ。

二人からすれば、前置きはどうでもよかった。

今は、この場をどう乗り切ろうか、という思いが駆け抜け。

「要望にお応えしまして～♪」

「ぐっはぁ！！」

思考の時間、それすら祐希奈は許さない。
正に電光石火。
瞬きをした次の瞬間、祐希奈の跳び蹴りがカナンの脳天に炸裂し、メキリとカナンの首が軋みをあげる。
祐希奈の全身のバネが連動する。
結果、祐希奈より体格の大きいカナンの身体が浮き上がる。
重力の一切を感じさせず、カナンの身体は宙を舞った……。
まるでサッカーボールのように、転々と跳ね、ごろごろと転がって停止。しばし痙攣をしていたカナンだが、やがて、ピクリとも動かなくなった……。

「カナン君！？」

ヴィヴィオがカナンの惨状に気づいたのはその後のことだった。
まさか、話し合いの余地すらないとは思わなかったのだ。
とにもかくにも、カナンが危ないのはわかるため、治療をするために駆け出そうとして。

「ヴィヴィオー？　今日はアンタも、おしおきよ♪」

「ふ、ぇ……？」

「ほっぺたムニムニの刑ーーーーー！！！！！　大サービスでもぎ取れるまでムニムニしてあげるわ！！！！！」

「ふぇぇぇぇえええええええええええええええええーーーーー！！！！！！！！」

その後、昼休みが終了したわけなのだが、ほくほく顔で超ご機嫌

で帰ってきた祐希奈。その肩にぐったりとしたカナンが担がれ、祐希奈に怯えるようにして半泣きのヴィヴィオが随伴していたという。
ちなみに、次の授業は凛が担当し、その惨状を見るも。

「全員出席ですわね。号令をかけてくださいな」

我関せず、といった様子で授業を始めてしまう。
えー……一応、教師としてここにきてんでしょうにアンタ……
という大半のクラスメイトの思いは「何か？」の氷の一言で鎮められたという。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

時刻は夕方、フォワード陣が仕上げの訓練に明け暮れている時間帯。
六課の部隊長室では、地球にいる凛との通信が測られていた。
対応はもちろんはやてとリインフォース

「高町一等空尉は、在籍ではないのですか？」

「うん。今はフォワード陣の訓練中やからね。まだ段階的には早いし、ええやろ？」

映像に映る凛が怪訝な表情を浮かべたが、はやての説明に頷く。
凛としては、出来ればなのはにもいてほしかったのだが、六課陣営の強化も必要なことと理解しているのか、無理強いはしなかった。

「それで、どうやった？」

「今後に期待、といったところですわね」

「お、となると三人は凛ちゃんの予想以上やったわけやね」

「何故今の答えからその結論に至るのか理解できませんが……」

半眼ではやてを見る凛。

そんな凛に、はやては微笑む。

「凛ちゃんがコメント残すってことは、そういう意味やって知ってるんよ。凛ちゃんはすっぱり切り捨てるタイプやから、無理なら無理て言うはずやろ？」

「……言葉のままですわよ。あくまで、可能性がゼロではないというだけです。そちらの勝手なイメージを押し付けないでくださいな」

「そういうことにしとこか～♪」

「くっ……」

はやては、凛ちゃんのことなんかお見通しや。とでも言うように、余裕を見せ付ける。

反論してみたはいいものの、微笑みを崩さない。

悔しいと、凛は思う。

まぁ、期待以上と思っていたのは事実なので、それ以上の反論は言えないわけだが……。

「ほんなら、三人とも作戦にいれるっちゅうことで、組み立ててええんかな？」

「いえ、それはまだ二人にしておいてください」

和やかだった雰囲気が消え、冷静な凛が帰ってくる。
はやても微笑みを消し、部隊長として、凛と向き合う。
二人はすんなりと決まる。漠然とはしているが、はやての直感は間違っていなかった。
懸念される一人は――。

「……カナン、か？」

「ええ……」

――カナンだった。
魔力値が不安定で、力の上下が激しいカナンは、間近で力を見たことがあるはやてから考えても採用するかどうかは迷ってしまう。
ましてや、今回の作戦の主軸を担うことになるのだ。
急いてはものを仕損じる。という言葉があるように、結論は急いではならず、慎重に進めなければならない。

「今までの感じやと、何か護ろうとしてる時とかに力の上昇率が高いことから考えて、追い詰められんと力を発揮し切れんのかもしれへん……」

「あぁ、力の方に関しては問題ありませんわ。ある程度、自分でもわかってきているのか、データで見たものよりも制御出来るようになってはいますし、今回の作戦は戦闘が主ではありませんし、ね」

「挑発に乗り安いのは懸念材料ですが」と、凛は最後に付け足してそういった。
意外な凛の答えにはやては首を傾げる。
てっきり魔力制御のことが問題となり、懸念されていると思って

いたからだ。

「魔力運用違うんなら、他には……」

他に浮かび上がるカナンの問題点をはやては考える。

嘱託魔導師でありながら、勝手な判断で敵に突っ込んだり、大怪我をしても全く懲りていなかったり、自分が嫌なことは横槍を入れたり、精神的に未熟で頑固であったりと、それくらいなものである。

「とまぁ、軽く思いつく限りはこんなもんやね」

「……頭が痛いですわ」

つらつらとはやてから並べられいくカナンの問題点に、凛は眉間を押さえて俯く。

そのどれもが凛の初耳なのだから。

「あれ、全部はずれなんか？」

「もうこの時点で再考もしたいくらいですが……」

「あ、ちょう、今のナシ！　カナンはええ子やよ！？」

「今更遅いですわよ……」

真剣にメンバーの再考を考えようかとすら思った凛だったが、それは一先ず横に置く。

凛がカナンを使うかどうか懸念しているのは、別の理由なのだから。

「……今朝方、おかしな魔力の揺れを感じました。風間カナンのものなのだとは思うのですが、混ざっているというか……。一応、確認を。風間カナンのデバイスはロストロギア、エクスカリバーとカラドボルグ、その二つだけですわね？」

「う、うん。他に持っとるなんて話は聞いてへんし、つことるとこも知らへんよ？」

やはりと頷き、凛は視線を落とした。

普段冷静な凛が少しだけ視線を泳がせる。

それも一瞬のこと。次に視線を合わせた凛はすでにいつもの凛へと戻っていた。

「わかりました。これについては私が注意しておきます。六課の方々は私から連絡を回すまでは動かないでくださいな。あと、何かありましたらいつでも良いので連絡を」

「ん。了解や。ありがとうな？」

「お礼を言われる筋合いはありませんわよ……」

そんな言葉を残して、凛からの通信が切れる。

ふぅ、と、ため息を一つ。

はやては瞳を閉じて、先ほどの凛を思い出す。

一瞬ではあったが、凛ははやてから視線を外し、泳がせた。

これは訓練校で何度かみたことがある、凛の癖だ。

凛は、育ちが良いため、人と話しているときは正面から向き合い、視線を外す、ということはほとんどしない。

その凛が、視線を外し、泳がせるという行動をとった。

「リイン、ちょっとややこしいことになるかもしれへん。気構えとき」

「？　は、はいです！」

凛のその癖は、凛にすら、予測不可能な自体が起きているということ。

大抵、この癖がでた時はあまりいいことが起こったためしがない。

ヴィヴィオ達を鍛え、作戦に万全な状態で送り込み、協力なバックアップで相手方の出鼻をくじき、攻めに転じる。

作戦にハルとクレアが参加したことにより確実となりつつあった。

だが、順調に進んでいた計画に、暗雲が漂い始めた……。

次回へ続く

第六話　暗雲（後編）（後書き）

次回はいかに！
ってな感じですが、次回は引き金かいたあとなとなりますし、多分例の外伝になりそうです。

外伝　幻のデート1（前書き）

はい、一月ぶりとなりましたね（涙
しかも外伝という形です。本編じゃなくてごめんなさいです。
次回は現在も執筆中です。なんとか7月頭にもってこれるようにはしたいと思ってます。
では、どうぞ♪

外伝　幻のデート1

「はぁ……」

鏡の前で、盛大に溜息をつく。

別段、悪いことがあったわけではない。どちらかといえば良いことといえるのだが……。

「はぁ～～～……」

鏡の前での溜息は深くなるばかりであった。

溜息をつくその人の名前は綾瀬夾、愛称、夾ちゃん。

職業は執事、年齢は二十歳前後、朱皇千春を闇から救い、かつ、その人を好きになった初めての人間。

そんな恋する夾ちゃんの心境はというと。

「世界、滅びねぇかな……」

ごくごく自然な恋の悩みであった。

尚、これは特殊な翻訳技術がいることを追記しておこう。

とんでもないことを口走っているようだが、きちんと翻訳できればモーマンタイな言葉なのである！

何故そんな状態に陥っているのかというと……。

時は遡り早朝、とある事情により復活した夾ちゃんは、休む、などということは行わず、久しぶりにその料理の腕を振るっていた。

いや、正確には振るおうとしていた、が正確か。

「夾、夾～」

「？」

自分を呼ぶ声が厨房の外より聞こえる。

何かあったのかと、下準備だけに止め、エプロンを剥ぎ取って顔を出す。

長い廊下に視線を巡らせていくと、程なくして、次期当主、白姫クレアを発見する。同じくしてクレアも夾ちゃんを見つけたのか、ニコリと笑う。――のも束の間。

「ダメですのーーーー！！！！」

「はい？　え？　おうふ！」

いきなりの猛ダッシュから飛び掛ってきたクレアを受け止め、グラりと揺らぐが、執事として、主に怪我をさせるわけにはいかないと、踏ん張った。

４０キロ台の不意打ち突進を受けて倒れない、というのは流石ではあるが。

とりあえずクレアを降ろし、表情を伺うと、大変ご立腹な様子のクレアお嬢様。

「どうしたんですか？　危ないですよ？」

「どうしたのもうしたもないですの！　貴女はなんでここにいるのですの！？」

「は、はぁ？　朝食の支度を……あて！」

「かーーーつ！　ですの！」

俺はなんかしたんだろうか……。

１３歳とは思えない大きな胸を揺らしながら、クレアは顔を赤くしながら憤慨する。

一方、夾ちゃんは朝からクレアを怒らせるようなことには、とんと覚えが無い。

いや、よく考えてみると、あった。

「あー……申し訳ありません！」

「ようやく気づいたんですの？　なら――」

「今日は朝に手が空いていたのがハルしかいなくて、よく考えず頼んでしまいました」

謝罪する夾ちゃんに、クレアは首を傾げる。

なにやら食い違っているような気がしてならない。

「……夾？　なんのお話をしているんですの？」

「はい？　お嬢様の下着の洗濯をハルに任せたことじゃないんですか？」

「違ぁぁぁうですのーーーーー！！！　というかそれはそれで問題ですのーーーーーーーーー！！！」

「あり？　っかしいな……絶対そうだと思ったんだが……」

間違ったどころか、新たな地雷を掘り当ててしまった夾ちゃんは

クレアにタックルをくらいながらも腕組みをしながら思考を再開。
う～む、と悩む夾ちゃんだが、他にクレアが怒るようなことが思い浮かばない。
ちなみに、メイド達の手際が悪い、ということでハルはクレアの下着どころか、白姫邸全員の服の洗濯すら行ったことがあるため、今更下着程度でどうこうなるような執事ではない。
閑話休題。

「下着じゃないなら、なんだ……。下着以外になんかあっかなぁ……」

「下着の話はもういいですの！　恥ずかしくてどうにかなりそうですの！」

「御嬢様もそんな年齢にならられたんですね♪　小さい時なんてお風呂上りとかは――」

「そういうのはいいから黙るですのーーー！！！」

「了解です御嬢様♪」

夾ちゃんのペースにはめられないうちに、クレアは話をぶった切る。まぁ、羞恥の極地に至った、というだけだが。
荒い息を深呼吸で整え、キッと夾ちゃんを人睨み。とはいうものの、全く怖くないどころか、普通に可愛らしい。

「今日は特別に休暇をあげたはずですの」

「あー、そういえばそんなことも言われた気が――」

「昨日のことですの！」

「で、御嬢様的には俺のこの休暇の使い方はアウト、と？」

「寧ろ逆転満塁サヨナラ場外ホームランですの！」

「おー……また盛大に飛ばしたもんだなぁ。ＭＶＰは俺で間違いないですね♪」

「ふざけてる場合ではないですの！」

「ネタ振ったのは御嬢様ですよ？」

「例え、ですの！」

拳を握り締めながら歯を食いしばるクレアと、余裕の笑みを浮かべながら言葉を待つ夾ちゃん。

が、夾ちゃんが余裕を持っていたのもそこまでのこと。

この後にクレアから放たれた言葉にはさしもの夾ちゃんでも固まることとなる。

「とにかく！　この休暇はハルとのデートのために特別にあげたものですの！」

「……はい？」

ちなみに、１時間ほど前にハルも全く同じ反応をしたということを夾ちゃんは知らない。

「だから、仕事をするためにあげたわけではないですの！　わかっ

たら準備！　ハルはもう向かってるですの！」

「え、いや、あの、ちょっと？　御嬢様？」

「待ったなしですの！　メイドさん、執事さん！」

《はっ！》

パン、とクレアが手を鳴らすと、壁の裏から、天井から、はたまた床から、どこからともなく執事とメイドが現れクレアの前にひざまづく。

「それって使用人の種類違わね……？」

緩やかにツッコミをいれる夾ちゃんだが、クレアの瞳には最早そんなことを気にしている節はない。

ビシリと一指し指で今日を指し、胸いっぱいに空気を吸い込む。

「問答無用！　夾を自室に放り込むですの！　逃げようとしたら取り押さえ、その気になるまで監視！　では、確保ーーーー！！！」

《御意に！》

「いや、だからそれ違うって……うぉおお！？」

再びツッコミを入れた夾ちゃんだが、使用人達は雪崩がごとく夾ちゃんへと突撃を開始。

あまりの剣幕に逃走を計った夾ちゃんだが、ここ、白姫邸の使用人達はほとんどの者が訳あり、過去に凄まじい体験をしてきたもの達の寄せ集め。

いわば戦闘のプロフェッショナルばかりを集めたようなものだ。
個人の戦闘能力では夾ちゃんやハルには遠く及ばないにしても、殺し合いではないのなら、数で攻める使用人達のほうが夾ちゃんよりも遥かに有利だ。

「こうなりゃ縮地で！　ぐぉおおおああ！！！」

『きーんこーんかーんこーん♪』

それは学校のチャイムだ……。

脳に流れた激痛に倒れふしながらそんなどこぞのハルがやった全く同じツッコミを心中で放つ。
こんなボケをする人間を一人しか知らない。
天津詩織、白姫家のデバイス開発主任だろうとすぐに予測がついた。

『詩織印の脳波阻害電波ぱ～とつ～！　ですぅ。夾さんだけに発動するように改良してみたんですぅ♪　どうですかぁ？』

やはりというか、なんというか、悲しいほどに当たってしまった予想。
取りあえず、このボケた主任には言わなければならないことがある。

「死ぬぞ。普通……」

詩織さんには……やっぱ敵わねぇ……な……

薄れゆく意識の中で、思うことはただ、一つ。

開けよ口、と最後の力を振り絞る。

「晩飯は詩織さんの大嫌いなものフルコースにしてやっからな！！！」

『ひやぁぁぁ！　なんでですかぁ！　悪いことしてないですぅ！』

「してるだろ思いっきり！」

《取り押さえろぉぉぉぉ！！！》

「お前らも普通その人数でのしかかったら窒息死するっつぅこと覚えとけよ！？」

その言葉を最後に、夾ちゃんはあえなく御用となったという。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

そんなこんなで今現在に至る。

普段なら対して気にもしない髪がひどく気になる。

跳ねた所はないか、長さは均一か、どうでもいいとすら思っていたことに関心を抱く日がこようとは。

夾ちゃんの中には驚きと同時に悔しさがある。

な～んか負けてる気がすんだよなぁ……

むすぅっと、少し頬を膨らませて鏡の前でふて腐れてみる。

からかいの対象であったはずのハルと出かけにいくだけなのに自分はなぜこんなに緊張しているのか、と。

対して、ハルはどうなのかと思えば全くのいつもどおり。

深い絆があるとはいえ、夾はまだハルからすれば恋愛の対象にはなっていない、ということだ。

というよりは、そういう関係を拒んでいるような気配すらある。

ま、無理やりなっても、な……

ハルが嫌ならばそれでもいいとさえ思う。

今の関係でそれなりに満足はしているし、恋人になりたいかなりたくないかで言えばそれはもう盛大になりたい夾ちゃんではあるが、クレアのこともある手前、執事としては主を立てなくてはならない。

いやでも、執事と当主の結婚って、認められるんだろうか……執事と執事なら、アリだよなぁ。いや、もしもの話だけどさ……。

もしもの話もしもの話、と言い聞かせるように呟きながらも、いつもよりも入念に身体をチェックをしていたりする夾ちゃんはどう見ても一人の乙女であった。

などと悩むこと一時間。

「これにするか……」

悩みに悩んだ末、一着の服を選び、執事服の胸元のボタンをプチリと一つ、二つと外して。

「まだ悩んでたのか……？」

「は？」

扉の向こうから呆れたような声が夾ちゃんの耳に届く。

夾ちゃんからしてみれば聞きなれた声であり、誰なのかははっき

り断言出来る。ただ、ここまで近づかれて気づけなかった自分に驚いて、呆然とした。

警戒することを忘れていたことに。

夾ちゃんは現在お着替え中であり、女であるということを秘密にしておきたい彼女は着替えには最新の注意を払わなければならない。

今回はそのことが頭から抜け落ちていた。

彼女からすればあるまじき失態である。

ともあれ、扉の向こうにいる人物、朱皇千春に向けて、言うべきことがある。

「ハル……、お前、そんな趣味が……」

「てめぇの裸体を覗く趣味なんざねぇよボケ……」

恐らく赤くなっているであろう相手に、夾ちゃんはにやりと笑う。

本来、彼女は人を弄るのが大好きな性格。逃すはずはなかった。

「俺はまだ趣味、としか言ってないわけだが？」

「ぐっ！」

「千春君はどんな想像をしたのかなぁ？」

「てんめぇ……」

扉の向こうでは拳を握り締めているであろうハルを想像して、夾ちゃんは笑う。

年齢を重ねても、何も変わらない。ハルはやはりハルであり、夾ちゃんからすれば好きな人間であると同時にからかいの対象であるという事実もまた、変わらないのだ。

「言うな言うな。わかってる。そうか。お前もそういうことに興味が持てるようになったんだな。兄貴分としては嬉しいぜ♪」

「女男が……！」

「まだまだガキだなぁお前は♪」

「ワ――ぶべっ！　シなんぞは興味心身じゃがな！　ほれ、大人じゃからのぅ！」

和やかな空気が流れる最中、悪態をつくハルの横になにやら小柄な中年の親父が‘いた’。

‘いる’、ではない。‘いた’だ

まともな状態で喋れたのは『ワ』という言葉程度なモノ。

ハルが変態親父の存在感知した瞬間にはもうその物体はいない。

発言をしたと思われる物体は、コンマ1秒後には木片と共に鼻血を撒き散らせて宙を舞っていた。

それを成したのは夾ちゃんである。

竜蔵の呼吸音を感知した時点で彼女は反応し、分厚い扉ごとその顔面を的確に蹴り抜いたのだ。

その速度は、ハルですら避けれたかどうか、という程のものである。

蹴りを放った夾ちゃんも凄まじいが、本当に凄いのは蹴られながらも最後まで言い切った白姫竜蔵であるといっておきたい。

普通なら死んでいるほどの蹴りなのだから。

彼こそ変態の鏡であろう！

「絶覇掌……」

空間がギシリと歪む。
夾ちゃんの右腕から立ち上るのは世界を崩壊させかねないほどの過剰な力。
コツコツと、靴音を響かせながら痙攣している変態親父に止めを刺そうと歩んで、肩を強く掴まれて静止する。
振り向いた夾ちゃんはかるーく放送禁止な表情をしながら、ハルを見据えた。

「ハル、離せ。奴を抹消する……」

「気持ちはわかるが、止めとけ。奴は俺が殺る。証拠も残らないようにするから安心しろ」

「ハル……」

確かに、変態親父を滅するべきだとはハルも思うが、その程度のことのために夾の手を汚すことはないと、首を振る。
そんなハルの心遣いに感動したのか、夾ちゃんは思い直した。
仲間の行いを正す。あぁ、なんと美しいことであろうか。もしこれがドラマならば号泣ものなシーンであること間違いないであろう。

「感動する場面なんじゃろうか……」

「「黙らねぇと殺す……」」

「……」

こうして、穏便、にことを済ませた二人。
疑問を抱かれるかもわからないが、この二人を相手に五体満足でいられるのだから十分に穏便というものだ。

二人仲良く世界を崩壊させるだけの力を持っているのだから。

閑話休題

あまりの扱いに何か呪いの言葉をハルに向けて呟きながら竜蔵は背中を向けて去っていく。

夾ちゃんはそんなオヤジに向けて中指を思い切りたて、改めてハルへと向き直る。

さっきはお礼が言えなかったから。

警戒がかけていた自分の秘密を守ろうとしてくれたハルに。

「その、迷惑かけた。サンキュな」

「……何が」

「人払いしてくれてたんだろ？」

舌打ち一つを残して、ハルは「別に」と短く返す。

ハルからすればその最たる目的である変態オヤジの迎撃は失敗に終わっているので心境としては微妙なところなのだ。

ましてや、それを成したのが被害者である夾ちゃんとあれば尚更だ。

男としては少し情けなく思う。

だから、意地を張ってしまうのだろう。

まぁ、もともとのハルの性格も多分に起因しているのでだろうが。

「トロいから見に来ただけだ。んなもんしてねぇよ。だいだい――」

夾ちゃんの姿をみてハルは浅く溜息をついた。

髪はいつもどおりにポニーに縛り、青い上着を羽織って、下には白地のTシャツ、下は軽いダメージがあるジーパン。

お世辞にもおしゃれとはいえない、非常に地味ともいえる格好だ

った。
それは自覚があったのか、ハルの溜息を悪い方向に捉えてしまう。
「悪かったな……こんなでよ……」
「は？」
「だから！　色気もなんもなくて悪かったなっつってんだよ！　服なんて興味なかったし、出かける時だって大概執事服着てたからこんな服しかねぇんだよ！」
「……ったく」
いちいち言わせるなと言わんばかりに怒る夾ちゃんに、ハルはまたしても溜息をついた。
そんなことに対して、呆れたのではないから。
「服決まってんなら最初っから悩んでんじゃねぇよ。第一、お前に色気なんて求めてねぇ。ねぇもん出そうとして悩んでたんならボケたな、お前は」
流石に少しむっと来るものがあったものの、結局ハルが言いたいのは、服なんかで夾ちゃんの評価を下げるつもりはない、ということだ。
事実、ハル自身は厚めの上着とネックレスをしているぐらいで、服装的にはほぼ夾ちゃんと変わりない。オシャレなどといったことには無頓着なことがわかる。
普段の活動が執事服な上に自由時間もないに等しいので当然といえば当然ではある。

「……ほう？　つまりハルが言いたいのは俺は服なんて適当でも十分綺麗だ、と？」

意味を理解すればこれほどまでに弄るチャンスに転じれるものはない。

気を持ち直した夾ちゃんはまたハルを弄ってやろうとそう思ったのだが。

「自分でそう思うならな」

「う……」

冷静に対処したハルに逆に煮え湯を飲まされる。

夾ちゃんがハルを弄っていたときはまだ１０代半ばのハルだ。対して、現在は１９歳、執事としてつけた知識も半端ないため、対処をされることもある。

少し手ごわくなった後輩の成長に嬉しさ半分、可愛げがなくなってきたことに悲しさも感じる。

まぁ、これはこれで、アリ、か

そう思ってふっと笑う。

頼もしくなるのは悪いことではない。

寧ろ、好ましいといえる。このままハルが成長し、自分を越えていくようなことがあれば、そう考えると少し楽しみになる夾ちゃん。

「最も、俺は簡単には抜かせねぇけどな♪」

「は？」

「まだまだ負けねぇよって話だ」

「……何の話してんだか」

呆けていたハルから飛ぶようにして離れ、クルリと回ってポニーテールに纏めた髪を風になびかせながら明るく笑う夾ちゃん。

そんな夾ちゃんを見て、意味はわからなかったものの、それはとても夾ちゃんらしいと苦笑を浮かべながらハルが後を歩む。

「とりあえず、パフェ喰いにいこーぜ！　ハルの奢りでな♪」

「ったく……太っとけ」

「その分消費するからいいんだ～！」

なっ……

べーっと、いたずらっぽく赤い舌をちろりと覗かせて、先をいく夾ちゃん。

珍しく女の子っぽい動作にハルは驚き、止まる。少し、可愛いと思ったのは秘密。

それほど、夾ちゃんが可愛らしい動作をとる、ということがハルから見ても珍しい。

はっず！　これはっず！

その行動が雑誌で仕入れた知識、というのは頬を真っ赤に染めた夾ちゃんから押して知るべし、ということだ。

尚、この動作の後、二人は気恥ずかしさゆえに無言になったとい

う。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

とりあえずすくったスプーンに一口、少し目を見開き、微笑む夾ちゃん。

「おお、案外うまい♪」

「マジで頼みやがった……」

「ん？　何かいったか？」

「いや……」

自然が多い海鳴ではあるが、こうして中心街までくればそれなりに賑わっており、少し足を伸ばせば遊園地や水族館や映画館等々、デートをするには申し分ない建物がある。

そんな中、二人が選んだというよりは、夾ちゃんが選んだのはしがない喫茶店。

『熱い夏をこれで乗り切れ！　二人で食べれば心はホットだが身体はクール！　ラブパフェＤＸ！』

という看板をみた夾ちゃんの反応は。

「ははは！　なんだこりゃ！　腹いてぇ！　宣伝だせぇし、ネーミングセンスねぇし、あっはっはっは！」

「店の前で爆笑すんな……店員に睨まれてるだろうが……」

どこかツボに入ったのか人目をはばからず、涙を浮かべて大爆笑

をする夾ちゃんにハルは盛大に溜息をついた。
執事の風上にもおけないようなマナーの悪さである。
まぁ、立ち振る舞いからして今に始まったことではないので慣れてはいるが、一般人の皆様にはさぞおかしな人間と移ることだろう。
ともかく、これ以上夾ちゃんをほうっておくと、店に影響が出かねないため、引きずってでもいこうとハルが思ったとき、うんと頷いた夾ちゃんがニッと笑う。

嫌な予感しかしねぇ……

そうハルは思って。

「よし、これ食おう。おもしれぇから♪」

またしても溜息をつく。
やっぱりというか、見事なまでに嫌な予感は的中した。
流石に慣れてはいるのか、逆らうようなことはしない。
このテンションの夾ちゃんを相手に何を言ったところでただの徒労に終わるだけだということを知っているから。

「だせぇとかいっといて食うのな……知らねぇからな……」

「ほら、いくぞハル～」

といういきさつの後に現在に至る。
うまいうまいと、それなりに大きさがあるパフェを一人でがつがつと平らげていく夾ちゃんにハルは苦笑する。
自分で作ったほうが数段美味しいものが作れるくせに、そんな声は内にしまう。
ハルの視線に気づいたのか、夾ちゃんがスプーンを咥えたまま首

を傾げる。

「んあ？　どした？」

「どうもしねぇよ」

「ほほう？　用もないのにお前が俺を見るなんてことしない気がするんだが？」

「黙って太れ……」

そう毒づいて、深く椅子にもたれかかり、質問を打ち切る。

とはいうものの夾ちゃんがそれで下がるはずもない。浮かべるは、笑み。

「欲しいのか？」

「誰がんなこといった……」

「遠慮すんなよ♪　どうしてもっていうなら分けてやるぜ？」

「いらねぇっつってんだろ……」

「しょうがねぇなぁ、反抗期の青少年はこれだから困る」

ガタリと夾ちゃんが椅子から立ち上がる。

パフェのアイスの部分をスプーンにすくい、身を乗り出してハルの前でブラブラ揺らす。

それをハルは感情のこもらない瞳で見る。

「チッチッチ」

「聞きたくも無いが、あえて聞いてやる。何してやがるボケ野郎……」

「見てわからねぇのか？　お優しい夾さんがあ～んをしてやろうとだな？」

「どうみても餌付けだろうが！」

「そうともいう♪」

「そうとしか言わねぇよ！」

いたずらっぽく笑う夾ちゃんにハルは怒鳴る。

と同時に歯を食いしばった。

また乗せられた、と。

夾ちゃんという人間はどうしてこう手綱をとるのが上手いのか。

だが、ハルの脳は否定を始めていた。

そう、夾ちゃんが手綱を取るのがうまい、というのも確かにあるにはある。

だが、浮かび上がるのはそれ以前の問題。

「まさか……俺がわかりやすい、のか……！？」

「おー、なんか勝手に自爆してんなぁ青少年♪」

見事に自爆してダメージを受けたハルはテーブルに突っ伏し、動かなくなる。

その頭上に何か気配がある。

響く、音は！

「チッチッチッチ」

「……」

餌付けを続ける夾ちゃんの舌の音だった。

カシャンとハルの脳内で何かが砕けた音を聞く。

風を切る音、それはハルが右腕を放った音に他ならない。

向かう先はスプーン。ただし夾ちゃんのものではなく、新たなスプーンだ。

握られるようにして乱雑にハルの手の内に収まったスプーンは鮮やかに銀光を残して一回転、この間コンマ3秒。

まだ止まらない。

ハルの手に握られた瞬間、スプーンは消える、否、音速の速さで打ち出され。

「甘い！」

「ッ！」

夾ちゃんの右腕より払われ閃光が迎撃する！

キン、と甲高い金属音、それは一騎打ちの始まりの合図に等しい。

交わされる視線と視線、中央におかれる聖杯。

「聖杯は渡さねぇ！」

「渡してもらう必要はない……奪い取る！」

「やってみやがれ！　守りきる！」

「いくぞ……夾！」

閃光と閃光が交差する。

右側からかと思えば次は左、苛烈なまでに猛攻を加えるハル、そのフェイクは先読みし、一太刀たりとも通さない鉄壁の夾ちゃん。

幾度も幾度も幾度も、激突に激突を重ねる両者は一歩も譲らない。

聖杯を獲得するか、どちらか片方が倒れるまでこの激闘は続くのだから。

「「ヒュッ」」

全くの同時に鋭い呼吸を二人は吐き出し、袈裟に叩き付けた得物が火花を散らした。

それもそのはず、夾ちゃんもハルも同じ体術メインの戦闘方、しかも、ハルの師は短いながらも夾ちゃんが勤めていたのだ。似てくるのも当然といえる。

そして攻め時もまた、同じとなる！

「これでぇ！」

「通すかぁ！」

一瞬の空白、しかしそれは疲労から来るものではない。

互いに渾身の力を込めるための前準備のようなものだ。

ハルの右腕が唸り、全てを貫かんと銀の槍が放たれ、同じく右腕を振り下ろし、全てを断ち切らんと銀の剣が振り下ろされる！

全ては聖杯、ラブパフェＤＸを手にするがために！

「「ッ！！！」」

凄まじい激音が鳴り響き、静止する二人の身体。
それまでの激しさが嘘のような静けさ、緊張が場に走る。
勝負は、勝負はどうなったのだと、その場にいた誰もがそう思った。
が、当人達の中ではすでに決着していた。
故に、夾ちゃんは笑い、ハルは舌打ちをする。

「引き分けだな」

「得物が悪い……」

直後、カランという音を響かせて遠方五メートル程の所にスプーンの先端が落下した。
結果は単純、二人の膂力に耐え切れず、スプーンが折れたのだ。
いや、むしろよく頑張ったとほめてやりたい。

《オオオオオ！！》

「「？」」

突如としてあがった歓声に二人して首を傾げる。
かと思うと、あっというまに取り囲まれ、持ち上げられる。

「あんな良い勝負みれるたぁ、俺ぁ、俺ぁ、くぅう！」

「とっちゃん、泣かないでおくれよ！　でも、いい勝負だったよあんたたち！」

「なぁ、もっぺんやってくれよ！」

「おねが～い！」

などなど、はやし立てられ店内は最早お祭り状態。

本人達としても決着もつかないまま、というのは後味が悪い。

「やっか？」

「次は勝つ……」

《さぁ、次なる勝負の行方はどうなるのでしょうか！？　私興奮を抑え切れません！》

にやりと笑った夾ちゃんに真顔でハルが言い放つ。

再びスプーンを手にとって、店内はもう最高ボルテージ。

どこからか解説が現れ、さながらそこは闘技場と化す。

ちなみに今更かもしれないが、これはただのパフェ争奪戦であり、そういったものとは全く無関係である。

無論、この二人にそんなことは一切関係なかったりする。

《では、レディー！》

レフリーが手をあげ、二人がスプーンを構えて。

「あー、もしもし、警察ですか？」

「「待て！　出て行くからそれだけは待ってくれ！」」

店内の王、絶対なる神、店長によって勝負はお預け、となったのであった。

後に、この伝説の戦いがラブパフェＤＸの売れ行きに貢献したのは言うまでもない。

いつかやる２に続く。

▼▼▼▼▼▼▼▼

爽「さて、後書きだ……面白いかてめぇら？　残念だったなぁ！　思ってるようなあまぁいのじゃなくて！　はっはっは！　ざまぁみやがれってんだばーろーめ！」

祐「読者的にはこれでむふふってして部分があったと思うけど？」

爽「なん、だと……」

ジ「あまあまではないが、初々しい爽ちゃんをみれて僕は満足だね！」

爽「……世界滅びねぇかな……」

ハ「本編後で訳すとそれダメですよ？」

祐「爽ちゃんったらやっぱり恋する乙女なのね♪」

ヴ「可愛いよねー♪」

爽「どこをどういう解釈すればこの言葉がそんな意味につながるんだ！」

ジ「繋げればいいのだよ。主に下方面に！」

夾「んなことすんのはてめぇだけだといっといてやるよボケ！」

ジ「いやぁ♪」

夾「殺していいかコイツ……っつうか、本編中最後まで夾ちゃんでぶっ通しやがったなあの作者！」

カ「あー、そういえば……」

ヴ「わざわざ修正かけてたもんねー……」

夾「殺したい……」

祐「ま、そんなわけで外伝だったわけだけど、楽しんでもらえたかしら？　次回はいつやるかはわかんないんだけど、息抜きとかしたくなったらまた書くみたい」

カ「そうして読者をひっぱろうという作者の陰謀だな……」

ヴ「か、カナン君、いくらホントのことでも言っちゃだめだよ！」

全「ヴィヴィオもね／ヴィヴィオもな？」

ヴ「ふぇぇー、ごめんなさいぃ～」

ハ「ではまぁ、ごたごたする前にこの辺りで♪」

夾「もう外伝では合わないことを祈る……」

全「それではまた次回～♪」

完！

外伝　幻のデート1（後書き）

うーん、夾ちゃん楽しい♪
祐希奈とは違った方向に加速してくれるので、バリエーションがふえて楽しいで（笑
素のハルも久しぶりに書くとなんだか新鮮で、殺伐としてたころではないので明るめにかいてたらちょっと天然な人に（笑
では、長くなるまえに退散します。ありがとうございました♪

第七話　灯台　（前編）（前書き）

なんとかしあがりましたー（汗
とはいってもまだ話はほとんど進んでいないのですが。
次で動けるかなと思います。
では、どうぞ～♪

第七話　灯台（前編）

▼▼▼▼▼▼▼

とある一室。
優秀な査察官には個室が与えられる。
理由として、落ち着いた環境を提供することで情報整理をしやすくし、事件の早期解決までに貢献してもらうためだ。
この部屋で作業する男性もまた、査察官であった。
正確には査察官兼経理。
二つの職を同時に与えられるというのはそれだけこの男性が有能であるということを証明していた。

「もう、少しだ」

男性が呟き、コンソールの上で指が踊る。
視線は絶えず往復運動を繰り返す。
バックコーラスは単調すぎるまでのキーを叩く音。
男性にはそれで十分。このコーラスが男性の神経を研ぎ澄まし、その思考は刃物を研ぐがごとく鋭さを増していく。
浮かぶのは無数の文字の羅列、それら全てが張り巡らされたセキュリティの網。
だが、男性の前にはそんなものは児戯に等しく、ものの数秒で網羅、さらに数秒でセキュリティを掌握、逆に利用するまでに至る。

「トライ、残り時間は？」
『二分。過ぎればおじゃんどころか逆探知で――』
「わかった。終わらせる」

掌握作業を続けながら、男性は肩に乗る相棒にたずねる。
ここ一時間で初めて聞いた口であったが、会話を続けることはなく、すぐさま口を閉ざした。
コンソールを操る男性、フォルテ・アスパイアは最低限の情報を狼型デバイス、トライトンから得るとさらに集中していく。
残り時間二分。それが過ぎればフォルテの身柄はたちどころに割れ、次の日の出を迎えることはない。
それだけ危険な任務ということ。
だが、そんな状況におかれながらもフォルテは尚冷静。
二分、それだけあれば逆探知など恐れるに足らない。
故にトライトンの言葉を聞くに足らないと判断したのだから。
痕跡一つ残さず、見直しをしても時間が余る。

『普段からそれならなんも言われねぇんだろうによ』

トライトンは集中をしているマスターの肩で溜息をついた。
ほぼ同時、タン、と軽い音を響かせてキーを叩き、システムの掌握を完遂した。
極度の集中のために浅くなっていた呼吸。
完遂祝いにお待たせしました深呼吸を行い、肺に新鮮な空気を取り込んでいく。
続いて伸び、最後に相棒を軽く睨む。

「……僕のせいじゃないだろ。周りが濃すぎるんだ」
『おかえり普通のネクラ♪』
「普通のって何？　あとネクラって言うなよ」
『相変わらず面白くねぇなぁ……こう、ネタがかぶりすぎなんだよお前は』
「作業中に考えてられるか」

それまでの鋭い雰囲気が嘘のように弾けとんだフォルテ、もとい、ピアニッシモ。

そう、こちらが本来の彼の性格。

曰く、地味。曰く、根暗、曰く、ツッコミが面白くない。曰く、希薄。

名前はフォルテは音楽記号で強くの意、しかし、その上げられる特徴からついたあだ名がピアニッシモという悲しい男性であった。

先ほどのフォルテは情報戦の時のみに現れるスーパーモードといったところか。

無論のこと本人は無自覚なため、意識的にだせるようなものではない。

『で、終わったのかよ？』

「終わってなきゃ喋ったりしない。ガードは固かったけど、サポートもあったからそれなりに楽だったよ」

『ほうほう？』

作業結果をトライトンに報告すると同時に、すっかり冷めてしまったコーヒーを一口、そのまずさに眉をしかめながらもそれしかないために仕方なく啜る。

片手間でコンソールを操作し、ある人物へとつなぐ。

パシリ仲間といっても良いだろう。

「そちらはどうですか？　レイさん」

『もう少し。幻術処理が少し手間取ってる』

映像に出るのは零番運用部、副部長、レイ・リーフライン。

フォルテほどのタイピング速度ではないものの、それでも一般局員のソレと比べればかなり速い。

まぁ、そのせいでよく雑務を押し付けられているという裏事実があるのだが、今は割合しよう。

「セキュリティは掌握したので、それほど急がなくても平気ですし、なんなら手伝いましょうか？」

『いや、今、終わった』

申し出たフォルテにレイは首を振る。

フォルテと同じように、軽くキーを叩いてコンソールを閉じた。

彼も掌握を完了した、ということだ。

御疲れ様と一仕事終えたもの同士、互いを労わり、笑みを零す。

それも束の間のこと、すぐさま仕事の顔に切り替わる。

「少し、予想外でしたね」

『ああ。部長の言葉が無かったらまず調べない。灯台下暗し、とはよくいったものだ』

「ええ……」

凛に言われ、その地点を数日をかけてそのポイント洗い出した二人は今になっても信じがたい光景。

なんせ、ポイントというのは、地上本部のすぐそば、距離にして数百メートルもないであろう位置にある。

そのポイントの地点にあるものこそ、アンノウン達の隠れ家、だったのだから……。

▼▼▼▼▼▼▼

時は夕刻、地球、海鳴市の丘の上、海城凛達ら、運用部による訓練が引き続き行われていた。
組み合わせは以前と同じ。
カナン&ヴェイン、凛&祐希奈、ヴィヴィオ&フェイト&クレイ。
ヴィヴィオと祐希奈は前回と経験があるため比較的に上手くいっている。
しかし、前回が見極めであったカナンは一歩遅れてのスタート。
つまりはまっさらな状態である。
とにもかくにもやってみようということで、やることを教え、ヴェイン監督の元、訓練を始めたわけだが。

「いっけぇぇ！」

気合一閃、エクスカリバーが風を斬り、空間を歪めながら通過する。
ただし、空間を裂いたのはほんの少しだけ。あとはふつ～～の斬撃でしかない。
にもかかわらず、どうだ！　といわんばかりに振り向いたカナンにヴェインは溜息をつく。
一時間の間、全く進展がなければそうもなる。

「もう一度」

「あー……やっぱり？」

「ほら、時間がもったいないから」

「へいへい……」

恨めしそうにヴェインを横目に見ながらエクスカリバーを振るう。

その姿を見ながらヴェインは苦笑を浮かべた。
成功率としては五回に一度、しかも、発動したとしても目標とするものより遥かに劣るモノばかり。

空間切断。
それが、カナンが訓練している新しい力だ。
元々、斬撃を空間から放つ、ということはカナンは出来るが、この空間切断は名前の通り斬撃に乗せて空間を断ち切る、という技だ。
簡単にいうなれば、今までの空間攻撃は斬撃を届かせるという操作の部類。今回の種類は空間の破壊。
自由に扱えるようになれば、魔力結合の分断をも可能とする力だ。
だが、結果は思わしくない。

だー、意味わかんねぇ！

内心カナンは混乱していた。
感覚を研ぎ澄ました上で剣を振るう。
わかってはいるが、力むとどうしても力が拡散してしまう。
元々、細かな制御はカナンは得意としていないことはデータからも出ている。
カナンは凛の抜擢ではあるが、成功例が模擬戦の一回しかないとなると、この技術は向いていないのではないかと疑ってしまう。
ヴェインだけでなく、カナン自身もそう感じているようだった。
一旦切り上げようとヴェインが手を上げ――

「ちょっと良いかな？」

「テスタロッサ執務官？」

――その手をフェイトの細い指が握って止める。

フェイトはフェイトでヴィヴィオの訓練があるはずだ。
なのに何故？
そんなヴェインの視線から思考を読み取ったフェイトは剣を振るうカナンを見て薄く笑った。

「ヴィヴィオはこの間やったから基礎が出来始めてるけど、カナンは違うでしょ？　それに、ちょっと苦戦してるんじゃないかな？」

「おっしゃる通りで……」

痛いところを突かれたヴェインは視線をそらせてばつが悪そうに側頭部を掻く。
ぶっちゃけた話、教え方がわからないのだ。
内容は説明した。カナンはなんとなくはわかると言った。あとは練習で掴むしかない。だが、進歩が見られ無い。
自分の教え方が悪いのかと軽い自己嫌悪に陥るほどに、成長がない。

「すみません……。俺の――私の力不足です」

「難しく考えないでいいんだよ。カナンみたいなタイプは、ね。少しだけバトンタッチ、してもらっていいかな？」

「あ、はい。どうぞ」

頷いたヴェインに「ありがとう」ともう一度微笑んでから、フェイトはカナンの方向へと歩いていく。
訓練に意識を集中しているカナンは気づいていないようで一身に剣を振るう。
しかし、やはり上手くいかないのか、剣は小さく空間を裂くに終

わる。
結果に納得がいかず、顔をしかめ、再度振るおうと柄を握る。
その手に重なる細い指、そして背中に広がる温かみ。
明らかにヴェインではないと気づいたカナンは空間把握を取り戻し、混乱する。

「カナン、深呼吸、しようか？」

「は？　へ？　フェイトさん！？　何で！？　いや、それ以前にこの体勢何ですか！？」

焦りに焦るカナン。
それもそのはず、フェイトが背中からおぶさるようにしてカナンに体重を預けているのだから。
フェイトからすれば剣を振るわないように、と動きを押さえつけてるだけであったりするのだが、そんな意図を知らないカナンは思いっきり焦る。
傍目からみればフェイトが抱きしめているようにしか見えていないのだから、女性に免疫の少ないカナンでは冷静でいるほうが無理がある。
そんなことはお構いなしにフェイトは微笑むだけ。

「いいから、深呼吸深呼吸。ほら、吸って～吐いて～」

ぜってぇわざとやってんだろこの人ぉぉーーー！　背中になんかあたってんですけど！！　当たってんですけどぉぉぉ！？

大混乱に陥るカナンの脳。
真っ白になりながらもとりあえず離れてもらうには言われたことを実行するのが一番だと本能的に悟ったのか、ゆっくりと酸素を取

り込み、吐き出す。
そうしているうち、フェイトに他意はなく、自分に教えようとしているだけ、ということをカナンは感じ取る。

「難しいこと考えないで、余分な力を腕から抜いて、そう……。上手い上手い」

導かれるままに、力んでいた腕から力が抜けていく。
柄には掌を重ねるだけ、体勢を維持する必要最低限の力を残す。
トクトクと背中から伝わるフェイトの鼓動、規則的に伝わるソレはまるでリズムを教えるメトロノーム。

「イメージは弐式。でも、それじゃ足りない。もっと強く、もっと、もっと……」

フェイトが「もっと」を繰り返すたび、剣に魔力が乗っていく。
目指すのは空間攻撃のさらに上、先を目指して、フェイトの声以外の雑音を排除、感覚が延長され、曖昧になっていく時間。
時間が引き伸ばされていくような、そんな感覚。

「イメージが固まったら、強く想えばいい。わかりやすくいこうか」

想、う……。

カナンの頭にフェイトの言葉が反響していく。
振り放つ剣は、絶対に止まらない。止められもしない。いかなる猛者でも、いかなる名剣でも、進行を阻むことは叶わない。
無心となった心に染み入るように、フェイトの言葉が落ちていく。
自然と、口が開いた。

「「全てを、断ち切る！」」

重なる言葉。

フェイトの身体が離れると同時に柄が握り締められ、黄金の軌跡を残して剣が抜かれ、カナンの眼前を斜めに切り裂き、ありとあらゆる結合を無視して、剣が通過。

剣が過ぎ去った後には、ただ、大きく裂けた空間が広がっていた。

自身が成した結果に呆然として、カナンの思考は停止する。

「出来、た？」

「うん。よく出来ました」

「おおおおー！　出来たぁあああ！」

「今の感覚、忘れないでね？」

「はい！　ありがとうございました！」

「んー、うん」

深く礼をするカナンだが、フェイトは微妙な表情を浮かべて手を振った。

首を傾げるも、せっかく手にした感覚を忘れないうちに訓練に打ち込みたいカナンは後ろ髪が轢かれる思いでフェイトに背を向ける。

「感覚だけで魔法を組む。いるもんですね。まだ少し信じられませんけど」

「なのはとか祐希奈とかもそうだけど、珍しいよね」

背後から響く苦笑まじりのヴェインの声にフェイトも微笑みを苦笑へと移す。
百見は一聞にしかず、習うより慣れろ、そういった言葉は確かにあるが、魔導師は術式構成など、実は複雑な式の上の魔法を発動させている。
それをなのはを代表とする感覚で使う魔導師は、本当に稀なのだ。

「その例が少ない魔導師をああも簡単に扱っているフェイトさんは、流石ってとこですか？」

「もう少し早く教えてあげられれば良かったんだけど、ね……」

「ですね」

ごめん、カナン……

少しばかり時間をかけすぎた。
フェイトが内心謝っているとも知らず、カナンは二人に見守られながら剣を振るう。
掴んだ感覚を染み込ませるように、何度も、何度も。
八度目になるだろうか、剣を収めたカナンの肩が叩かれる。
カナンは振り向くことになるが、彼はそれが地獄への幕開けであることを知らない。

「あっは♪」

「……ど、どど、どうした？」

そこには凄まじく笑顔の祐希奈がいた。

普段から感情表現は豊かで、よく笑う祐希奈ではあるが、カナンの防衛本能がこの笑みはまずいと告げていた。
季節は秋にかかる、気温は暑いわけもなく、夜も近いため、肌寒くなっているくらいだが、カナンは冷や汗が止まらない。

「アンタ、訓練してたのよね？」

「お、おう……」

「そう♪」

逃げなくては。そんな思いが内にはあるが、肩を握られているために脱することが難しい。
何より、この状態の祐希奈に背を向けて逃げるということだけは危険だと、カナンの本能が冷や汗と共にひしひしと伝えてきている。
プレッシャーから逃げたい。でも逃げるほうが危険。
笑顔のまま何も言ってこない祐希奈だが、依然として肩はがっちりと掴まれたまま。
精神を削る、拷問にも等しい時間がゆっくりと流れていく。
耐え切れず、カナンは口を開く。

「お前の訓練は、どうしたんだ？」

「そりゃもうばっちりよ？　だからここにいるんじゃない♪」

「そ、そうか。流石だなぁ……」

「ありがと♪」

「「はっはっはっはっは」」

マジこぇぇえええええ！　誰か、誰かヘルプ！！

助けを求めて周囲に視線を巡らせ、見つける。

あからさまにカナンから視線を逸らし、空を見上げて話をしているフェイトとヴェインを。

訓練中に訓練生から目を離すなよ！？　っていうか空みて話する必要あんのかアンタら！？

すでに見放されていることに内心涙目になりつつも、新たなる助けを捜し求めるが、無常にも後頭部をがっちりとつかまれ、無理やり祐希奈と向かい合わされた。

表情は、相変わらず、素晴らしい笑顔である。

「で、アンタの訓練ってさ、フェイトさんにギュ～ってされるのが訓練なわけ？」

「……あの、あれはですね？　フェイトさんが俺から余計な力を抜かせるためにですね？」

「でもギュ～ってされたわよね？」

「いや、だから――」

「今なら許してあげるわよ？」

「ごめんなさいされました！！！！」

こうなってはプライドも何もあったものではない。

顔を地面にこすりつける勢いで土下座。
正義、悪、そんなものは祐希奈にはない。
自分がルール。逆らえば制裁が待つのみだ。
土下座までしたのだ。とりあえず、死の危険は去った。
優しく、祐希奈の指がカナンの額をなぞる。そして、握った。
骨が軋むほどの握力で。

「あだだだだだ！！？？　アレ！？　俺謝りましたよ！？　祐希奈さん！？」

「だから許してあげるわよ？　アイアンクローで♪」

「それ許してるって言うんですか！？　割れる！？　身体強化使ってんだろお前！？」

「モチ♪」

「笑顔で言うことじゃ……いでぇぇぇぇ！！！」

「あははは♪」

「ぎゃあああああああ！！！！」

それから十分後。

「……マジ死ぬ」

「あー、スッキリした♪」

「さいですか……」

ぐったりとカナンが地面に横たわっていた。
隣にはすっきりしたのか祐希奈が笑っている。
カナンは最早起きる気力もないらしく、動く気配が感じられない。

「だいたいね、いくら私でも殺さないわよ。弾けたらきたないし」

「そういう理由ですか！？」

「ん～、も一個あるわよ？」

祐希奈の言葉にゾワリとしたものをカナンは感じた。
あれだけのことがあって、まだあると言われれば無理もないだろう。
心臓は早鐘のごとく鼓動を刻み、祐希奈の言葉を待つ。

「カナン君……」

――必要もなくなった。
後方から響いた声にカナンが固まる。
明らかに涙声のソレに祐希奈と同じ、否、祐希奈以上の恐怖を感じる。
軋むような音をたてながらカナンの首がゆっくりと回る。
そこにいたのは、目を赤く充血させて泣きじゃくっているヴィヴィオであった。
今にも涙が零れそうであり、それはカナンにとって死刑宣告。
これが、祐希奈が指す、もう一つ。
確かに洒落にならないほど危険なことだ。
ヴィヴィオを泣かせれば、なのはやフェイトを代表とする面々が一気に敵になるのだから。

「やっぱりカナン君……フェイトママのほうが好きなんだね……」

「ストップ。待ってくれ。歳の差考えろよ？　俺みたいなガキがフェイトさんと付き合えるはずないだろ？　な？」

そう言ってはみるものの、さして効果は無かったようで、ヴィヴィオの涙が収まることはない。

寧ろ、言い訳ととられたのかキュっとヴィヴィオの拳が握りこまれた。

「でも、抱きつかれてもカナン君嫌そうじゃなかったもん……」

「待て待て。あれは訓練のためにフェイトさんが教えててくれただけってさっきも説明したぞ！？」

「私だってそう思いたかったけど、でも祐希ちゃんがあれはアイツなりに喜んでるんだって……」

カナンも薄々は分かっていた。

祐希奈がこんなに弄りやすそうなネタを自分一人だけの攻撃で終わるはずはない、と。

ハメられたと思い、振り返る。

「祐希奈ぁぁぁぁぁ！！！　お前はまたヴィヴィオの純粋さを利用して……」

が、予想していたような笑みはそこにはなくて。

寧ろ、ふてくされたように軽く頬を膨らませる祐希奈がいた。

「だって、アンタがフェイトさんにデレデレしてるから……」

「デレデレなんてしてねぇだろうが！？」

「アンタはフェイトさんぐらいが好みなんでしょ！？」

「支離滅裂すぎて何いってんのかわかんねぇよ！！」

「察しなさい！」

「また無茶いうなお前は！？」

そうして祐希奈に対応してぎゃあぎゃあ騒いでいると、次は後方に危険が迫ってきていた。

おそるおそる振り返ると、無視されたことでもう零れる寸前まで涙を溜め込んだヴィヴィオ。

自身の粛清はもう逃れられないかもしれないにしろ、後々の危険度で考えれば表面に出す祐希奈よりも抱え込むタイプのヴィヴィオの方が危険。

瞬間的にその答えをはじき出したカナンはなにやら騒ぐ祐希奈は後回しにしてヴィヴィオのケアへ。

彼女が望んでいる答えは起きたことへの言い訳ではない。

「やっぱり私のことなんてどうでもいいんだ……えぐ……」

「あー、ごめんな？　どうでもいいなんて思ってねぇって。えーっとな、フェイトさんを嫌いじゃないのは嘘じゃないし、好きだけど、それは人間としてだ。フェイトさんに対してはヴィヴィオ達が考えてるようなことは思ってないし、安心してくれていいから」

「ホント？」

「おう。だから泣き止め。ほら、笑ってるほうが可愛いぞ？」

「か、かわ……う、うん。ありが、とう……」

「どういたしまして♪」

内心叫びたいカナンだが、必死にヴィヴィオを慰めようとしていた。

その成果があったのか、ヴィヴィオの涙が引いて来ている。

未だ涙目なものの、はにかんだ笑みを見せてくれたヴィヴィオにカナンも頷いていたずらっぽい笑みを返す。

わざと言ったんだと理解し、ヴィヴィオは少し頬を膨らませる。

彼女は仕返ししてやろうと、考えて、思いつく。

褒められなれていないカナンのことだ。かっこいいと一言いってやればそれで仕返しは完了。

早速実行に移して。

「カナン君も、笑ってる時、好き……」

「い、いきなりどうした！？」

「あ、れ？　え？　え？　あれ！？　ち、違うの！　違わないけど、違うんだよ！？　違うっていうのはかっこいいっていうのが間違いで私が言おうとしたのは大好きですってことで……。あれ？　合ってる？　あれ、でもカナン君かっこいいし、じゃあ大好きが間違い？　え？　でも、私好きだし……。　あれ？　あれ？」

「わかった。わかったから落ち着け！　何を言おうとしたかはわか

る！　わかるからそれ以上自爆するな！　結構俺も限界だから！」

「ふぇ……」

口からついて出たのは心の本音。

カナンを赤面させる、といった意味ではこれは成功と言えるが、完全勝利には程遠いものだ。

混乱していたにも関わらず仕返しを考えた故にどこかでずれたのだろう。

ものの見事に自爆、二人して少し早い真っ赤な紅葉となった。

それでも、真っ赤になりながらもヴィヴィオは笑って。

「でもね、ホント、だよ？　ずっとずっと、この気持ちは変わらないから……」

「……すんません、マジで勘弁してください。俺、ホント弱いから。俺の負けでいいですから……」

『マスター必死だな。まぁ、わからなくもないが。今の言葉はデバイスの身である私から聞いてもまずいと思う』

「……だろ？」

恥ずかしがりながらも笑顔でそういうヴィヴィオは本当に可愛くて、それはメイデンも認めるほどで、もうこれは敗北を認めるしかない。

何のことかわからずキョトンとしたヴィヴィオだが、勝負に勝ったということがわかるとこれもまた反則的に可愛い笑みを浮かべて笑う。

「え、へへ。また、勝っちゃった」

「こんにゃろうめ……」

最後の最後にヴィヴィオが特大の集束砲をやってくれはしたものの取りあえず抱え込んでしまうという自体は避けることができた。が、ほっとするのも束の間、そちらにばかり気をとられていると次は前門の虎が復活する。無論のこと祐希奈である。

一度はどこかに行ったはずのふてくされた表情が戻ってきてしまっていた。

「またヴィヴィオにばっかり優しくして……」

「なんでお前がしょげてんだよ……」

「別に……」

何やら呟いたあと、ぷいっと顔を逸らしてしまう祐希奈。

それ自体はあまり聞こえなかったのだが、カナンは知っている。

「別に」というときの祐希奈は大概何かを抱えている時だ。

そして、理由はどうあれ自分に原因があるというのはわかる。

溜息をつき、悩んだあと折れる。

「……ったく、わかった。暇が出来たら一緒にどっか行こう。そん時にいくらでも愚痴聞くから。で、全部俺が奢る。だから今回は、許してくれないか？」

「……アンタ、さり気なくデート誘ってる？」

「え、あ！　いや、これは、真面目な話だぞ！？」

先のヴィヴィオの一件でまだ混乱していたのか、それとも元から

の才能か、思い切り自爆したカナンはまたも赤面して慌てた。
そんなカナンに祐希奈はたった一言。

「……バーカ」

「どうせバカだよ俺は……」

本人としては至って真面目に言ったのだが、祐希奈に一蹴され、割と本気でへこんでいるカナン。
その様子を見て、祐希奈はクスリと笑う。
なんというか、そんなカナンが少し可愛かったから。
だからかもしれない。
彼女がいつもより少しだけ勇気を出せたのは。

「――トなら、いい……」

「ん？」

聞き返したカナンに一度で聞けと祐希奈が怒る。
祐希奈からすればかなり上位に入る恥ずかしさなのだから。
もう一度だけ、少しの勇気を振り絞る。

「だから！　デー！……トして、くれるなら許してあげる……けど？」

「っ！」

『耐るんだマスター！』

なんで尻すぼみなんだろうとか、最後が疑問文なんだろうかとか、思うところはいろいろとあるものの、これはまずいと思う。

誘ったのはカナンにも関わらず、何故か不安そうな祐希奈が下から見上げるようにして見つめている。
普段ではまず見られない祐希奈にカナンの精神状態は非常に危険な状態にあった。

「予定、合ったら、誘う……」

「う、うん！　待ってる、から……」

ぎりぎりと奥歯をかみ締める。
赤面をした祐希奈の表所を出来るだけみないようにしながらカナンは強引に背中を向ける。
そうしなければ抱きしめてしまいたいほどに可愛かったから。
これがカナンの困ったところでもある。
どちらかが好き、というのが普通はわかれるのだが、カナンの場合はどちらに天秤が傾いているのか自分でもよくわからない。
ただ言えるのは二人共本当に好き、ということだけで。
だからこそ、今に至るまで悩みに悩んでいるわけだが、未だに出ていないという惨状である。
ヴィヴィオと祐希奈、カナンを迷いに迷わせている二人の攻撃を経験もなく、免疫もないカナンが受ければ仕方のないことだとも言えるかもしれない。
生い立ちから精神的に大人びているとはいえ、恋愛ばかりは別問題らしい。

こいつら、可愛すぎるだろ！！！

グッと拳を握り締めて耐え忍ぶカナンだが、それももう長くは続かないだろうし、続けてはならないとも思っていた。
もう告白からかなり時間が立っているからだ。

そろそろ、決めないと、な……。

どちらを選ぶにしろ、これ以上自分の弱さのために長引かせるのはよくないとは思っていた。

自分のためにも、二人の少女のためにも、結論を下す時は迫っている。

片方を選べば片方は傷つく。それは逃れようもない事実。

それを思うと躊躇いが生まれ、視線が自然と下を向いていく。

そんなカナンの変化を察してか、ヴィヴィオが下から覗きこむ。

「カナン君？　また難しい顔してるよ？　大丈夫？　ひょっとして……」

「ん？　あぁ。違う違う」

「そう、良かった」

ホッと息をつくヴィヴィオにカナンは心配しすぎだと苦笑する。

前回とは違い、今回はきちんと段階を踏んで行った訓練だ。

何の心得もなく使う力とは違い、意識して使うものならば問題は無い。

ただ一人、蚊帳の外である祐希奈は首を傾げて。

「何の話してんのよ？」

「えっとね、カナン君が――む～む～！？」

背後からヴィヴィオの口を抑え。妨害するのはもちろんカナン。

ヴィヴィオがもしうっかりカナンと喧嘩した、などと言ったもの

なら折角取り戻した平穏がまた猛ダッシュで飛んでいってしまう。
しかも喧嘩の理由が八つ当たりだ。
ヴィヴィオから始めたこととはいえ、ヴィヴィオの真友の祐希奈の矛先は間違いなくカナン一人に向く。
そうなるのはごめんだった。
妨害しているだけでも十分怪しいわけで、案の定、祐希奈は疑いの眼を向けた。

「何？　何か私にいえないことしたわけ……？」

「何でもない！　本当に何でもないから！」

「何でもないならヴィヴィオの口塞いでるその手を離しなさいよ？」

「拒否権を行使します！」

「アンタにそんな権利はない」

「この子には個人情報が隠されてるんです！」

「残念だったわね！　ヴィヴィオは私のものだからアンタの個人情報は私に漏れる運命にあるのよ！」

「んな横暴な！？」

「いいからさっさと……渡せぇぇぇぇ！！！」

「ぎゃあああああああああ！！！」

「……私って二人の何なんだろう」

まぁ、祐希奈に隠し事をした時点で制裁は免れられない事象だったりするのだが。

プロレス技を祐希奈にかけられているカナン、首を傾げているヴィヴィオ、情報を聞くことを忘れ、満面の笑みを浮かべている祐希奈。

その光景を見てフェイト、ヴェイン、相手がいないために合流していたクレイは苦笑い。

「アレ、ほっといていいんですか？」

「う～ん、止めないとまずいんだろうけど……」

「あれだけ楽しそうだと、気が引けますね」

三人だけの空間というか、とにかくなんとなく他人が介入しづらい空間を三人が作っていたためにフェイト達は止めるに止められず、それも災いして結局訓練そっちのけで遊び始めた三人だが、無論のこと、きっちりと凛のお説教を受けることになることとなった。

▼▼▼▼▼▼▼

その日の夕食、機動六課にて最近では定番となりつつある光景が繰り広げられていた。

つまるところ、セシリアがハルに甘える、ということだ。

家政婦の一人にシチューを持ってもらうとトテテ～と小走りにハルのところまで走り、頭上に掲げて二パッと笑う。

「ちはる～、食べさせて～♪」

邪気のない幼い笑顔は普通なら二つ返事で頷いてしまうものだが、ハルは違った。
溜息混じりにセシリアの両脇を抱えると自分の隣の席にストンと座らせる。

「ご飯は座って食べる。行儀が悪いですよ？」

「う～～！　や～～だ～～！　じゃあ食べない～～！」

「またそういう我侭を……困った子ですね……」

ちゃんと食べさせようとしたハルだが、案の定駄々をこね始めたセシリアにどうしたものかと額を抑えて。
そんなハルを見かねてか、助けようとクレアが口を挟む。

「じゃあ、セシリア、私と――」

「クレアいや～～！　ちはるがいい～～～！」

「……そう、ですの♪」
『小娘が……』

が、悩むそぶりすら見せずに案を放り投げられ苛立っているはずなのに笑顔になるクレア。
最初に会った段階でなんとなくわかってはいたことだが、この二人、どうにも相性が悪いらしいことが明らかになりつつある。
加えてシルフィスも諌めるどころか増長させるようなことまで言う始末なので手におえない。

「ほんなら、私となら、ええか？」

「う？」

弱っていた所にまさに鶴の一声、首をかしげたセシリアが振り向き、その視線の先にいたのは、はやてであった。

機動六課の中で、一緒にいる時間が長く、セシリアが最も懐いている女性といえる。

悩んでいるのか、キョロキョロとハルとはやてを見比べるセシリア。

「こっちにはザフィーラもリインもいるんよ～？」

「はやてちゃん！？／主！？」

「はやてのとこ、いく～～♪」

「ほな、おいで♪」

もう一押しとばかりに、ザフィーラとリインを餌に使い、見事にセシリアを誘き寄せたはやては、両腕を広げる。セシリアは迷い無くすっぽりと収まりニパニパと笑っている。

円満解決。――後に遊び道具となる一人と一匹を除いては。

なのだが、ハルはと言うと呆れと困惑がない交ぜになったような何ともいえない微妙な表情をはやてに向けていた。

簡単な話、全面賛成というわけではないのだ。

「あまり良い判断とは思えませんよ。子供に甘くすると、次も次もと繰り返しせがむことが多いですから」

「ご飯の時くらい甘えさせてあげてもええやん。な～？」

「ええやんな～♪」

「お、上手や」

「えへへ～♪」

「……京都の言葉遣いを教えないでいただけませんか？　親御さんに返す際に示しがつきませんので」

「これ、めっちゃかわええと思うんやけど？」

「話せたら、あたしもはやてみたいにきれ～になれる？」

「なれるなれる♪　ライバルやね～」

「はやてとらいばる～♪　らいばるってなぁに？」

「それはやな～――」

仲睦まじく談笑を始めるはやてとセシリアにハルは溜息をつくしかない。

どうやら、今日一日ではやてはセシリアの扱いをマスターしたらしく、そして、セシリアもはやてを気に入っている。

一筋縄ではいかないとわかりながらも口を出さずにはいられない。

セシリアは身元がわからないが他人の子供。せめて躾くらいはしっかりしておかなくては返す際に申し訳が立たないからだ。

そんな心情を読み取り、はやてが口を開いた。

「厳しいばっかりがしつけやないやろ？　愛情も向けたらな可哀想

や」

「そういったものは親御さんが――」

「捜索。難航してるんやろ……？　たまに能力使っても探してるみたいやし、それでも足がつかへんってことはそういうことと違うんか？」

「それは……」

思わず言葉に詰まった。

はやてに言った覚えはないが、その程度を読み取る力はあるということ。

能力も完全に無断使用。

分かった上で何も言わず、黙認してくれていたのだ。

本当の所はさらに上で探査魔法の使用許可も取っているというハルも知らない事実があり、部隊長としての対応の早さが伺える。

「親御さんが見つかるまでは、機動六課皆が親代わり。それでええな？」

疑問系ではあるものの、有無を言わせない様子のはやてにハルはやれやれと首を振る。

セシリアのことで未だ少し遠慮しているハルに、仲間なら遠慮をするなということだろう。

こうなってはハルにもう味方はいない。

多勢に無勢とはこのことかとハルは苦笑し、折れる。

「ですが、何でも与えたりはしないようにお願いします。あなた方はどうにも甘すぎる傾向がありますので」

「千春お父さんは厳しいなぁ」

「でも優しいよ～♪」

「誰がお父さんですか……」

ハルのツッコミに隊員達がドッと笑い、本来の明るさを取り戻す。

だが、フォルテ・アスパイア、レイ・リーフラインが敵の拠点を突き止めたことで、そんな平和な日々の終わりが加速度的に早まっていくことになる。

後編に続く

第七話　灯台　（後編）　（前書き）

どもです♪
ようやっと完成したものの、なんというかまぁ、進むの遅いなぁ（笑）
久しぶりにあとがきもあるのでたまには息抜きしてください♪
ではどぞ♪

第七話　灯台　（後編）

《鬼だ……あの人、鬼だ……》

うわごとのように繰り返すのは前線メンバーの四人。

待ちに待った朝食にも関わらず、疲労のためか、テーブルに突っ伏している。

というのも、朝の訓練はなのはに代わり、ハルが仕切り、個人でどこまで出来るのかを図るため、ハルと模擬戦を担当したのだが。

スバルのストライク・アーツは捌かれ、それに焦った結果、甘く入った一撃をカウンターで決められ一発ノックアウト。

ティアナの射撃は迎撃で全て破壊され、幻術も作った端から看破。決死の策略で誘い込んだと思いきや笑顔で種を暴露され詰み。

エリオの槍術は内に踏み込まれリーチを殺され、必死の高速移動で死角を突いた攻撃も悠々回避、手詰まりにされ、突貫じみた攻撃は片手で止められ最後は降参。

キャロのバインドは引きちぎられ、ブーストをかけたフリードは移動についていけずに目を回し、ろくな攻撃すら出来ず背後から肩を叩かれ降参。

散々な結果の後に言い渡されるいくつかの改善点、その後、再び模擬戦。

それでも凌ぐ時間が増えた程度で敗北には変わりなかった。

「前にやったときからわかってはいたけど、あの人は飛び抜け過ぎてるわね。前も後ろも死角無し。直射もスフィアも全部砕かれたわ。っていうか入る気しないわよ……」

「あはは。同感……。今日一発も届かなかったし、されることは同じだったから、わかってるのに、でも対応できなくて……」

「スバルさんもですか……。僕も、やることが先読みされてるみたいで、全部流されました」

「私も全然で、召還もブーストも、歯が立たなくって……」

散々な結末に一同は一斉に溜息をついた。

今日一日かかってハルに有効打を与えた人間がこの中にいないのだから無理もない。

「セシリア、右頬が汚れていますよ？」

「ん～、ちはる～、とって～♪」

「自分でとる。甘やかす気は僕は無いので」

「む～！　とってとってとってとって～！」

「……やれやれ」

食欲すらわかない四人に対し、代わる代わる何度も相手をし、休む間もなかったはずのハルは疲労を引きずるということもなく今ではすっかり日常となったセシリアに手を焼きながらも朝食を食べている。

寧ろ、セシリアのほうがハルの体力を削っている気がしないでもない。

「こっちもこっちで、大変ね」

「「あはははは……」」

ティアナの一言に苦笑いを浮かべるのはキャロとエリオ。
理由はハルが問題を起こす前より絶賛喧嘩続行中のニーナとアルティスにある。
というよりは、お互い時間を空けてしまった手前、言い出しにくいだけなのかもしれないが、何ともいえない空気に巻き込まれるメンバーはある意味被害者といえた。

「キャロちゃ～ん、おかわりいらない？　ニーナは欲しいな～♪
とってくるね～♪」

「勝手にいけってんだドチビが……」

心配をされているとは知らず相変わらず自由気ままにのほほんとした空気を放ちつつニーナが飛んで行く。
そんなニーナをエリオの髪に隠れ小声で毒づくアルティス。
ちなみに何故隠れているのかというとニーナと顔を合わせ辛いからだ。

「アルも意地っ張りだよね。エリオから聞いた話だともうすぐって話だったのにまだギクシャクしてるんだもん」

「うるっせぇな！　あたしだって頑張ろうとしたんだよ！　したんだが……」

「言い出せない、と？」

「う、ん……」

「ほうほう……」

スバルの指摘にアルティスは俯いて肯定し頷いた。
それに何を思ったのか、ジーっとスバルが視線を向ける。ティアナに。
あえてそっぽを向いて無視をしていたティアナだが、次第に肩が震え、あげくには赤く染まり、最終的にははがたがたテーブルを揺らし――。

「何よ!?　何なのよ!?　私みたいだなって言いたいわけ!?　ええそうよ!　私は私が悪くたって自分からなかなか謝れないタイプよ!!　悪い!?　だから何笑ってんのよバカスバルーー!!」

遂には爆発した。
完璧に逆切れではあるがティアナは止まらない。
切れるティアナを見てスバルはニヤニヤと笑みを浮かべて、しかし、気づいたティアナがむんずとスバルの頬を掴んで怒りのまま思い切り引っ張った。

「ふやああ!!　いふぁいいふぁいふぉふぃあ～!　ふぁふぁふぃはふぁふぁ、ふぃふぁふぁふぁふぁふぃふぃふぁ～ふぇ……」

「う～る～さ～い～～～!!」

まるで餅のように左右に引き伸ばされるスバルの頬。
恐らくこの後腫れることになるだろうが、自業自得とも言える。
これも機動六課では慣れたものとなりつつあるため、喧嘩をしている二人を見ても周囲の局員は止めようともせず、微笑みながら通り過ぎるだけだった。
ちなみに先ほどの訳は、「痛い痛いよティア～!　私はただ、ティアは可愛いなぁ～って」となる。

まぁ余談であるが。

「酷いよ～……」

「うっさいバカ」

ぶつくさ文句を言っていたスバルだがティアナは一蹴。

今はスバルの相手よりもアルティスの相談に乗るほうが優先事項と判断したからだ。

「でもアルティス。私も意地っ張りだからアンタのことは少しわかるけど、長引かせるのは良くないわよ？　キャロやエリオ達も仲立ちしてくれてるんだし、頑張ってみたら？」

「ティアだって自分のこと意地っ張りって言ってる……」

「もう一度引き伸ばしてあげましょうか？」

「ごめんなさい！」

またしても勃発しそうな痴話喧嘩にキャロとエリオの二人は苦笑を浮かべながらも、ティアナの言うことは最もだと肯定する。

喧嘩というものは時間を置けば置くほど謝罪はし辛くなっていくもの。現段階でもかなり進行してしまっているため、気まずさは増す一方だ。

アルティスもそれはわかってはいるのだが、どうにも踏み出せないでいる。

言うは安し、というやつだ。

「ほら、アル、ニーナが返ってきた」

「アルちゃん、頑張って！」

「お、おい！？」

そうこうしているうちにサラダのレタスを調達してきたのかご機嫌な表情でニーナがこちらへと飛んで来ていた。

それを見たエリオは自分の髪からアルティスを追い立て、キャロもガッツポーズを作りながら送り出す。

そうでもしない限りアルティスが動けないだろうと思ってのことだ。

「うし……」

勇気付けられたのか覚悟を決めたアルティスは翼を広げ、ニーナへと飛翔する。

アルティスの姿を見つけたニーナは彼女が近づくにつれ、ご機嫌だった表情を曇らせていく。

結局、たった数メートルの間に太陽は雲に隠れてしまっていた。

「あのよ……」

「うん……」

互いに目をそらしながら、それでもなんとか仲直りをしたいアルティスは口を開く。

が、言葉が出ない。

言い出しかけて、悔しそうに口を閉じる。

それが三度続き、四度目にさしかかろうとした時、ニーナがため息をついた。

常に能天気でハイテンションが売りなニーナが、だ。

「……また、今度でいいかな？」

「……ああ」

そう言うと視線を逸らしたまま通り過ぎるニーナ。

アルティスは小さな舌打ちを残し、力なくエリオの頭に着地、ニーナから隠れるように埋もれてしまう。

会話をするところまではいったものの、完全修復にはもう少しかかりそうだなと肩を落とすフォワードメンバー四人であった。

▼▼▼▼▼▼▼

その日の機動六課の昼。

学校にいるはずの凛からはやてに向けて連絡があった。

「な、なんやて！？」

「？　はやて～？」

「あ、あぁごめんな～？　セシリア、気にせんといて？　ザフィーラ、リイン、お願いや」

「は～い♪　ざふぃ～、りいんもあそぼ～♪」

「仕方ない、か……」

「頑張りましょう……」

思わず叫んだはやてに部屋で遊んでいたセシリアが疑問の視線を向けるがそこはまだ子供。護衛兼世話役のザフィーラとリインフォースとの遊びのほうを優先した。
セシリアの相手をする破目になったリインとザフィーラに片目を瞑って拝み、自身は改めてモニターごしの凛と向き合った。
一方凛は初めて見るセシリアに興味を持ったようだった。

『セシリア？　誰の子供ですか？』

「あー、誰の子でも無いんよ。迷子みたいなんやけど親御さんが見つからんくてな？　六課で預かってるんや」

『そういう子供は施設に任せたほうが宜しいのではなくて？　貴女方も暇な部隊ではないのですから』

「そうなんやけどね？　ハル君が物凄い勢いで調べてるからそれを無碍にするのもなぁ、と……」

『朱皇千春が？』

「うん。拾ってきたのもハル君みたいやし、セシリアもハル君にようう懐いてるんよ」

途中までは今まで通り、六課の甘さに呆れたように聞いていた凛だったが朱皇千春の名前が出た直後、凛は顎に手を当てて視線を落とす。
そんな凛を不信に思ったのかはやてが首を傾げる。

「凛ちゃん？」

『……まぁ、いいでしょう。可能性ですしね』

「何の話や？」

疑問符を浮かべるはやてだが、憶測で話をするのは好きではないと言った凛にはやては引き下がった。

こうなると凛は梃子でも動かないことは付き合い上知っている。

思わずセシリアの方向に話が逸れてしまったが、はやてが聞きたいのはそんなことではない。

「それで、本気なんか？」

『ええ。もちろんですわ』

即答で返ってきた答えにはやては焦る。

凛が言ったこと、それは、風間カナンの空間切断が完成し次第、敵陣に仕掛ける、との報告だった。

しかも、空間切断はもう少しで完全習得するだろうとのオマケつきで。

仕掛けるまでのタイムリミットは二週間。

読みの鋭いはやても、こんなにも早く打って出るというのはあまりにも予想外であった。

なのはもフェイトも報告を知らせれば驚愕することだろう。

「せやけど、いくらなんでも早すぎると思うんよ。訓練も自主練習を除いたら二回しかやってへんのやろ？　それが二週間て……」

『予想外なのはこちらも同じです。見込みはあるとは思ってはいま

したが、感覚だけで発動まで至るとは流石に予測していませんでした。高町ヴィヴィオは元より実力がありましたが、一之瀬祐希奈もほぼ完成と言っても差し支えのない領域ですし、ね』

「あの三人はまぁ、三人競い合って伸びてくタイプやしなぁ。負けず嫌いに拍車がかかったんかもしれんな。どこかの部長さんと同じやね～」

『……誰のことだかサッパリですわ』

ジト目ではやてを睨みながらとぼける、というよりは圧力をかける彼女にはやては苦笑した。

まったくと呆れながら一つ溜息を落とした凛にはやては謝罪する。

仕切りなおしとばかりに凛は表情を引き締めなおし、はやてもそれに習い姿勢を正す。

「正直なところ、私もじっくり仕上げていきたいのは山々ですが、彼らが精神的に未熟なことを考えると、長期に渡っての教導は返ってリスクが高いと判断しました」

「ブレ、か？」

「ええ。特に風間カナンは常に揺れているような状態で、今は二人のうちどちらかに支えられて平衡を保っているような危うい状態ですし……」

「成る程なぁ……」

凛の言い分にはやては視線を落として思考する。

確かに凛の言葉にも理はある。

カナンがブレることも、暴走の危険も持っていることも、はやては知っている。
少しでも安定しているうちに進めたいという凛の気持ちもわからないでもない。
だが、六課の隊員の命を預かる部隊長として、簡単には頷けないのもまた事実。
はやてが悩んでいると、凛がまた口を開いた。

「もう一つ、急いでいるには訳があります」

「……聞こか」

まともに笑うことがないことから、鉄面皮と言われる凛が、苦虫を噛み潰したかのように顔を歪ませながら。
これはただ事ではないとはやては悟る。
以前にあった、視線を逸らす、という癖ですら行うことが稀である凛が、作戦通知の段階で凛がこの表情を浮かべていることなど見たことが無かったから。

「敵方の拠点については部下と協力者が当たりをつけました。嫌な方向で予想通りでしたわよ」

「それはまた、痛いなぁ……」

「それだけならまだ良かったのですが……」

自分たちの目と鼻の先に敵がいる。
それだけでも十分に驚きの事実だが、凛の言葉は先があった。
どうやら凛の懸念材料はそこにあるようだ。

「拠点から、こちらの予測を大きく超えて膨大なエネルギーが検知されましたわ……」

「……レベルは？」

「解放されればミッドの五分の一は焼け野原でしょう。”現段階では”の話ですが……」

はやては凛から告げられたあまりの規模に愕然とした。

ミッドの五分の一、ミッドチルダはそれほど大きな星ではないが、それでも魔法技術の発展が盛んなだけはあり、人口の数は他の星からも訪れるためかなり多い。

五分の一も焼け野原になればどれだけの人間の命が犠牲になるか、わかったものではない。

その爆弾があるのはミッドの中心、本部のすぐ近くとなれば被害は悲惨なモノとなるのは間違いない。

さらに、爆弾は今だエネルギーを蓄え続けていると凛は言う。

「ミッドを吹っ飛ばすつもりなんやろうか……」

「吹っ飛ばすだけで終わりならまだ気が楽なのですが、彼らの目的はまだ先にある気がします……」

「先がまだあるとしても十中八九、メリットなんて無さそうやけど、な」

凛の予測にはやては険しい表情を浮かべながら思案顔となった。

こちらも準備が不完全だが相手が動く前に早めに動くか、準備を完全にした後、敵方がまだ動いていないことを祈るか、どちらもメリットもデメリットも同じだけある。

だが、後の危険度の度合いだけで考えるならば――。

「わかった……。動こ。なのはちゃん達には私から話しとくわ」

「わかりました。こちらもその予定で動きます。よろしくお願いしますわ」

「ん、お互いにや。ほんなら、バイバイ、凛ちゃん」

「はい。ではまた何かあれば連絡しますわ」

凛との通信が途切れるとはやては深い溜息をつく。

肩に張っていた力が抜けると同時にどっと疲れが押し寄せたのだ。

仕事バカと言われるはやてが仕事中にも関わらず、椅子に深く腰をかけていることからどれだけの心労を抱えているのかがよくわかる。

心配をしたのか、セシリアが歩み寄ってきていた。

子供にまで心配をかけてはいけないと、疲れを隠し、ニコリと笑う。

「はやて～？　だいじょうぶ？」

「ありがとう。セシリアは優しいなぁ。平気や～」

「んに～♪　きもちいい♪」

彼女が撫でると途端にニコニコし始めたセシリアにはやて自身も少し癒されながら、もう一頑張りしなくてはとも思う。

予定を早めた以上、部隊員に少しでも危険が少なくなるよう、部隊長として精一杯の仕事をすべく立ち上がらねばならない。

まず、ロングアーチの二番手、グリフィス・ロウランを呼び、今後のことを相談しなければならない。
そうと決まればと通信をグリフィスに送ろうとして。

――あ、れ……？

「はやて？　はやて！？　はやてーーー！！！」

「はやてちゃん！？」

「主！！」

突如としてグニャリと歪んだ世界。派手に転がる椅子、同時に倒れていく身体。受身を取ろうにも、身体は痺れ、感覚が曖昧になっていく。
暗闇に閉ざされていく視界の中、泣きそうになっているセシリアを、慌てて駆け寄るリインとザフィーラを見て、大丈夫と答えてやりたかった。
しかし、それは叶うことはなく、はやての意識は闇へと落ちていった……。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

探し物はどこにあるんだろう。とってもとっても大切な宝物。
何故大切なのか、そんなことはわからない。とにかく大切なものだから探すんだ。
なんとなく、この近くにいるのは知ってる。
この鼓動が教えてくれる。ここにいるよって呼んでる。
貴方は助けを求めているの？　いいよ。暗いところは嫌だもんね。
だから、もう少しだけ声を大きく響かせて。
そう、もっともっと、まだ聞こえないよ。

それじゃあ助けてあげられない。
呼んでよ。もっと強く求めて。
今ならきっと誰もわからないから、思いっきり叫んでよ。
あたし、探しもの見つけるの得意なんだ。
だから、叫んでくれればどこにいても見つけてあげる。
今までだって、そうして見つけてきた。
さぁ、あたしを信じて。

▼▼▼▼▼▼▼▼

「ん、んん？」

「「はやて！」」

「え、うわ！？」

数時間後、はやてが目を覚ましたのは医務室のベッドの中だった。
はやてが起きるやいなや胸に飛びついたのは赤髪と青髪、ヴィータとセシリアである。
何故自分がベッドの中にいるのか疑問に思って。

「はやてちゃん、過労で倒れたんですよ？　覚えてないんですか？」

「仕事が大切なのもわかりますが、休める時は休んでいただかないと……」

「シャマル、シグナムも……」

苦笑混じりに響いた二人の声にはやてはようやく現状を悟り、待っていてくれた四人にお礼を言おうとゆっくりと身体を起こす――

「ダーメ！」

「わっ！！」

「はやてちゃん、頑張りすぎだよ。確かに大変なのはわかるけど、自分一人でこなし過ぎ！」

「なのはちゃんまで……」

――ことが出来なかった。

起き上がる前にはやての額を抑えたなのはがそのまま体重をかけて押し倒したからだ。

仰向けのまま見渡すとはやての周囲には多くの人が立っていた。

もちろん、はやてが倒れたと聞いて見舞いにきたのだ。

「はやて！　はやてはやてはやて～！」

「セシリア……ごめんな？」

「うん、うん！」

自分の胸にうずくまるセシリアを見て悪いことをしたと思う。

ある程度精神が発達している人間ならともかく、幼い子供に仲の良い人間が倒れるという出来事は心をすり減らすにはあまりに十分すぎた。

泣きじゃくるセシリアを撫でながら、心配をかけてごめんと、周囲の人間に順に言い、最後にハルと目が合う。

瞬間、はやてはギクリとした。

ハルがにこやかに笑っていたから。

「人に頼れと言っておいて、自分が過労で倒れるというのはどういうことなのでしょうか？　これは貴女も六課の方達を信用していないということですか？　おかしいですね～♪　僕は自分がやっていないことを押し付けるような部隊長だとは思っていなかったのですが♪　僕の勘違いだったのでしょうか♪」

「うぅ……そ、そんなネチネチ言わんでも……」

予想通り、嫌味を言ってきたハルにはやては視線を逸らす。
自分が頼れといった手前からこんなことを起こしてしまっては立つ瀬がない。
そんな彼女にハルは細めていた目を開き、鋭い目つきを露にする。

（頑張るのは結構だが、お前が倒れたら全体に影響するってことを覚えろボケ）

「うっ！」

「はやて？　大丈夫か!?　やっぱもう少し寝てろ」

「あ、ありがとうなぁ、ヴィータ……」

グサリと突き刺さったハルの本音。
確かにそうだ。
上に立つはやてが倒れてしまえば六課全体に支障が出る。
当たり前のことを指摘され、はやては心から反省した。
とはいうものの、寝ていても仕事は増えていく一方なわけで、どうしたものかとベッドの中で悩んで。

（俺が処理出来る書類の類はやっておいた。承認が必要なものは、なのはが処理をしたし、部隊長が出るような書類はなかったから安心して寝ろ）

（え……？　ちょ、ちょう、ハル君？）

（俺は寝ろと言ってる。命令だ。従わないなら麻酔をぶち込む）

（……はい）

有無を言わせないハルにはやてはシュンとしてベッドに潜り込む。
言い方は静かなものだが、はやてを黙らせるだけの迫力がハルにはあった。
次の仕事の状況が気にはなったはやてだが、今のハルの状態からして聞けるような状況ではないことははやてもわかる。
大人しく眠りについたはやてを確認し、後のことはなのは達に任せ、ハルは深い溜息をついて一人医務室から廊下へ、そして外へ。
夜の風に当たっていると、肩に軽い感触。

「何かお前も苦労がたえねぇな？」

「まぁ、性分でしょうね」

耳元で響いた声に前を向いたまま呼びかけに答えて苦笑する。
肩に止まったのはアルティスだ。
彼女もニーナという苦労の塊を抱えているためにハルに共感した、ということだろう。

「ここの奴らさ、バカだよな」

「ええ、飛び切りバカですね」

いきなりのアルティスの言葉にハルは準備をしていたかのように迷いなく答える。

実際、次にアルティスが聞いてくることもわかっていた。

「アンタは――」

「最も、僕ももうそのバカの集団の一員らしいので、貴女が僕に頼もうとしていることも願い下げですがね」

「っ！」

故に、アルティスが言葉を紡ぐ前に、ハルは断ち切った。

読みきられていたことになのか、それとも質問の答えに対する苛立ちなのか、アルティスが奥歯を食い縛り、ハルを睨む。

それを横目で見ながら、ハルは笑った。

「パーティの時、モンディアル様に言われたのでしょう？　それでいいじゃないですか」

「てめぇは！　こっちの身を知らないから！」

怒りを発するアルティスに、ハルはあくまでも穏やかに対応する。

バカを通り越し、愚かなことをしようといている。

それがわかるからこそ、ハルは止めるのだ。

「貴女はまだ、堕ちていないでしょう？　差し伸べられた手もある。なら、手を取って一緒に探せばいい」

「でも！」

「無駄なことはするもんじゃねぇよ。繋がりは、強いからな」

反論をしようとするアルティスに口調が変わったものの、穏やかに笑ったハルは首を振る。

今のアルティスが、少し前の自分と同じに見えたからだ。

他人の視点から見ればこんなにも違うのかとも思う。

まるで前が見えていないというのがよくわかる。

最も、そうは言われるが、アルティスはやはり納得がいかないようで、俯いたまま口を閉ざしてしまう。

「嫌でもわかる。心配かける前に戻るぞ」

「……チッ」

肩で舌打ちをする彼女に苦笑を浮かべながら、ハルは六課の正面の入り口を通貨する。

夜風に辺り、同時、まとめた決意を新に胸に刻み込む。

――そうだ。繋がりは、強いんだよな。爽……。

強くと握られた拳、この拳を今度は本当に護るために使うと、そう決めた。

Ｎｅｘｔ　Ｓｔａｇｅ

▼▼▼▼▼▼▼

後書きコーナー♪

祐「さて、みんな久しぶりね。ヒロイン兼主人公の祐希奈と、もう一人のヒロインであるヴィヴィオ、アイドルのメイデン、蟹のレナス、その他仲間達でお送りする祐希奈道場の時間よ♪」

ヴ「皆さんこんにちは～♪　そしてお久しぶり、かな？」

メ「投稿自体が追いつかなくなっているからな」

レ「か～に～♪　か～に～♪」

カ「もうこれはアレなのか？　ツッコミはなしってことか？」

祐「事実だからね♪」

カ「ちっげぇよ！」

祐「脇役に降格した分際で何を……」

カ「だから！」

ヴ「でも安心してね。カナン君が脇役になっても打ち切りなんてことにはならないから！」

カ「……打ち切っちまえぇぇえええええええ！！！」

ヴ「ど、どうしたの！？」

祐「流石ねヴィヴィオ。無意識に心を抉りぬくその技術、伝授してほしいわ」

ヴ「ふぇ？」

レ「か～に～♪　か～に～♪」

カ「もういいや……で、今回の後書きはなんだ？」

祐「後書きやるのに理由なんているわけ？　読者サービスにきまってんじゃないこんなの」

カ「それぶっちゃけたらサービスにならないと思います！！」

祐「思ったことを言うのが私って設定でしょ？」

カ「裏事情まで言わないでください！　結構ダメージあるんだぞ！　お前の一言！」

祐「まぁ作者にダメージがいこうが知ったこっちゃないわ。私さえ書けば文句なんてでないんだから」

カ「確かにお前の影響力は結構リアルにえげつないけども！」

メ「いまや誰もが知るしーちゃんの生みの親は元をたどれば祐希奈だからな」

ヴ「そういえばあだ名決めてあげたのも祐希ちゃんだもんね～」

祐「つまり、しーちゃんのお母さんは私ってことよ！」

ヴ「！？　わ、私だもん！」

祐「ヴィヴィオが知らないだけよ。楽屋ではしーちゃんは私のことママ～って喜んで呼んでたのよ？」

ヴ「嘘！　嘘！　だって、だってしーちゃんは私の娘だもん！」

祐「現実は残酷ね……」

ヴ「信じない！　しーちゃんのママは祐希ちゃんには譲らない！」

レ「か～に～♪　か～に～♪」

カ「これは……どこに突っ込めばいいんだ？」

ジル「涙目ヴィヴィオ君萌え！　の部分だと僕は思うがね！」

カ「……さぁ、ゲストの登場だ～」

ジル「はっはっは！　相変わらずツンツンだねカナ吉は！　だが、案ずることはない！　僕は君のその刺々しいところもまた愛して――」

プチ♪

ジル「ぐっふぅぁ……」

カ「え～本日のゲストは～、作者がクロスしている作品、時の引き金にて俺と一緒に来てくれた～、はやコンこと東条咲夜さんと、れっふぃ～ことレフィリア、で、いまや苺パンツで一躍有名人となった――」

―撃！―

ミ「焔の執務官、ミオ・レッドフィールドよ？」

カ「中々に痛いッすよ」

レフィ「ミオの一撃を受けて平然としているだと！？」

カ「うん、いやまぁ、今まで散々鍛えられてるから並大抵の一撃じゃあんまりな」

―撃―

祐「あは♪」

カ「……こんな感じに、な…」

ミ・レ「的確に首を狩った……」

咲「ゆ、祐希奈ちゃん、今のは……」

ヴ「えと、カナン君ですから平気だとは思いますけど」

メ「ああ。問題ない」

カ「もう心配すらされないのな俺」

咲・ミ・レ「はやっ！？」

祐「まぁカナンだし。だから、ミオも加減しちゃだめよ？」

ミ「で、でもいきなりはちょっとね」

祐「大丈夫。そいつもはやコンだ――」

―撃―

カ「げふっ！？」

ミ「あ……はやコンって聞いたら思わず手が……」

祐「グッジョブ！　それよ！　それでいいのよ！」

カ「いやいやいや！　俺はやてさん好きじゃねぇよ！？」

咲「何？」

―閃！―

カ「どぅわ！」

レッ「それは主には禁句だ！」

咲「お前、あんなパーフェクトな人をどうして嫌いになれるんだ？　あの、明るくて優しい性格、それでいてわけ隔てない対応をしてくれて、魔導師としても超一流……いや、そんなことばでは表せない！　とにかくそれぐらい凄いはやてさんを好きじゃないといったか？」

カ「好きです！　もうめっちゃ好きです！　はやてさんしか考えら

れません！」

祐・ミ・咲「ああ？」

カ「どっちにしろアウトなんじゃねぇかぁぁぁぁぁ！」

咲「はやてさんは俺の恋人だぁぁあああああああ！」

祐・ミ「はやコンしねぇぇぇぇ！！！」

―滅！―

カ「完璧被害者ですよね俺！？」

レ「♪♪♪～」

レッフィ「先ほどから貴女は何を食べているんだ？　あの人は主だろう？　主よりもそちらのほうが大事なのか？」

レ「蟹さんより大事なものなんてないですよ～♪　か～に～♪」

レッフィ「何だと！？　しかし我は違うぞ主！　我は物などではなく、主が一番だ！　主を愛していると言ってもいい！」

咲夜「あ、俺はやてさんいるから」

レッフィ「主いいいいいいいい！！！」

レ「蟹、食べますか？　美味しいですよ♪」

レッフィ「はむ……。あ、美味しいな……」

レ「でしょう♪　蟹は可愛くて美味しくて最高なんですよ♪　一緒に蟹を称えましょう♪」

レ・レッフィ「か〜に〜♪　か〜に〜♪」

レッフィ「すまない主。蟹が一番になりそうだ！　これはもう蟹を愛してしまいそうだな！　主よりもな！」

咲「そうか。まぁ好きなモノできたんなら何よりだな。……はやてさんどこだろう」

レッフィ「主が妬いてくれないぃぃぃぃぃぃぃ！！！」

レ「毛蟹も美味しいですよ？」

レッフィ「自棄食いしてくれる！！」

レ「ああ！？　私の蟹！？」

ヴ「あはは……」

ミオ「なんかいろんなとこで凄いこと起きてるけど、これがここの普通なわけ？」

祐「ん〜、まぁそうね。私はずっと冷静だけど」

ミ「あ、そうなん——」

ゆきにゃんゆきにゃんゆきにゃんゆきにゃん！！

祐「にゃん♪」

わあああああああああああああ！！！！！！　ゆきにゃあああああああああああん！！

祐「ね？　冷静でしょ？」

ミ「激しく異論を唱えていいかしら！？」

ジ「ふふふ……ここではそれが普通ということさ」

ミ「わぁ！？」

ジ「しかし、案ずることはない！　僕が冷静だからね！　安心してその肢体を僕に預けたまえよ！」

ミ「変態が！　変態がでた！！　咲君！　変態が！！」

はや（ラジオ）『咲夜君、愛してるよ！』

咲「はやてさん！！　それは俺だってもちろん！　だから姿を見せてください！」

はやて『ごめんな、諸事情でそっちにいけへんのよ……だから、咲夜君の愛の言葉をここまで、届かせて欲しいな♪』

咲「はやてさぁぁぁあああああああん！！！　大好きだぁあああああああああ！！！！」

は『もっと！　もっとや！』

咲「はやてさぁあああああああああああああああああああん！！！！　宇宙一好きだあああああああああああああああ！！！！」

は『もっともっとや！』

咲「はやてさあああああああああああああああああああああああん！！　次元一好きだあああああああああああああああああああああああああ！！！！」

は『もっともっとや！』

咲「はぁぁぁあああやてさぁぁぁあああん！！！」

メ「このりぴーとボタンを押すように言われたがこれでいいのか？」

ヴ「あとは5分おきにＣＤ変えるんだよね？」

メ「ああ、そのはずだ」

ヴ「わかったよ～♪」

ジル「このように君と二人きりになる計画も抜かりないのさ♪」

ミ「ホントに使えないわねあのはやコン！！！」

ジ「さて、それではメインディッシュ……君は本当に苺パンツをはいているのか、先祖の命に従い、また先祖のために、確かめさせて

もらおう！」

―撃！―

ミ「寄るな変態……！」

ジ「これは苺パンツの歴史を語るしかないようだね……。そもそもとして苺パンツというのはだね！　紀元前１００年前後からうまれたパンツィーラ様がム・ハンドラ・ダバ！　という言葉を発したことから始まり、このム・ハンドラ・ダバというのはだね、民族の言葉で我が英知の魂ここに回帰せんという意味でだね？　この英知の魂というのが苺パンツの意味指すわけだ。そのパンツィーラ様が幼きころに愛用していた神具はオ・ボルグラドといって、これはだね、かの有名な苺パンツの原点であり、最古の苺パンツであり、たたえあがめるべき苺パンツなのだよ！　これを開発したのはこれぐらはしっているだろう？　ハルトライ・ラントヴァルだ。パンツィーラ様のム・ハンドラ・ダバという言葉に衝撃を覚え、オ・ボルグラドを開発したのさ。この人の発明は偉大なものばかりでね？　現代に至る次元航行艦の設計図を書いた人間だ。この話を原住民にすれば自分の命が危機にさらされていようと涙を流すというから驚きだ。さぁ簡単に説明しただけだがこれで君の苺パンツの凄さをわかってもらえたかい！？　とにもかくにも、僕の前に全てをさらけだせば解決というわけさ！」

ミ「きゃあああああああああ！！！　やっぱ変態ぃぃぃぃぃぃぃ！！！」

カ「さっせるかぁぁぁあああああああああ！！！！」

―轟！―

―閃閃閃閃閃閃閃！―

ジル「よ、容赦あないじゃないか、カナ吉……」

カ「てめぇ相手に加減なんかしてらんねぇんだよ……あ、そうだミオさん、大丈夫――」

ミ「あ……」

そこには空間突破で突き抜けたさいに発生した突風でスカートを巻き上げられたミオがいた。

下半身は苺パ（自主規制

―轟！―

ミ「殺す……」

カ「ああもう、なんか厄日なだぁ……いつものことだけど……」

祐「最低ねアンタ。死になさい♪」

カ「お前ぜってぇ面白いから参加するだけだろ！」

咲「はぁぁあああああああああああやぁぁあああああああてぇぇえええええええええさぁぁぁあああああああん！！！　全時空一好きだぁぁあああああああああああああああああああ！！！！」

レッフィ「主の馬鹿ぁぁぁあああああああああああああああああ！！！！」

バキ、バキ！

レ「ああ！？　甲羅ごと食いちぎるなんて可哀想です！！　ちゃんと中身を綺麗にとってあげてください！！！」

ヴ「ん～、でも蟹さんも全部食べてもらったほうが嬉しいんじゃないかなぁ？」

メ「成る程、隅々まで愛してもらってるといえるな」

レ「！！！　私は、蟹に対する愛情が足りなかったのですね……レフィリアさん！！　是非私を弟子に！！」

レッフィ「ああ！！　食べるといい！！　感情に任せて食いちぎるんだ！！！」

レ「はい！！！」

カ「あー、一応突っ込むが、タダの自棄食いだから八つ当たりみたいなもんだし、それは愛っていうよりは憎悪に近いぞ？」

祐・ミ「必殺！！！　はやコン殺しのぉぉぉぉぉぉぉ！！」

カ「ちなみにはやコンじゃないんでそこんとこご理解願います」

メ「マスターはどっちかというとマザーコンプレックスだからな」

カ「まぁ、ちっこいときな。メイデン、危ないから離れとけ」

メ「わかった。いつ戻る？」

カ「あー、一時間くらいかかるか。治療頼むな」

メ「任せてくれ」

カ「じゃあなー」

祐・ミ「炎華葬嵐ーーーー！！！！！」

―滅！！！！！―

カ「ごっは……！！！」

ヴ「あ、これ最後だ。えい！」

はやて『ボン太郎さんの作品、闇を切り裂くもの、皆も読んでや～♪　ほんなら、また次回の後編でな～♪』

全「ではでは～♪」

完！

第八話　侵食（前書き）

うーむ、ちまちま書きすぎなんでしょうか。イマイチ調子が出ません。

取り敢えず、お待たせしました。

さぁて、のほほんは終わりかなぁ（笑）

第八話　侵食

▼▼▼▼▼▼▼

夕暮れとなり、夜の闇が顔を覗かせるころ、ヴィヴィオ達三人の訓練は凛の号令により終わりを迎える。

凛は詰め込むような訓練は行わない。

疲労しきった身体に鞭打って訓練をしたところで大した効果は得られず、逆に身体を壊すだけだということを知っているからだ。

これは、過去に無茶な訓練を行ってきた彼女が導きだした結論でもある。

二の舞を踏ませたくないという凛の気遣いでもある。

無論、本人にそんなことを言えば個人的にみっちりと説教まがいなことをされるのだろうが。

閑話休題。

特に問題はない。訓練も順調であると凛が告げるとそのまま一行は解散となった。

「じゃ、また明日、学校でね！」

「カナン君、メイデン、おやすみなさい」

「お～。また明日な～」

「おやすみ、だ」

祐希奈はひらひらと手を振りながら、ヴィヴィオはペコリと頭を下げてから、訓練所となっている丘を駆け足で下っていく。

祐希奈とヴィヴィオは校長である雅樹が返ってくるまでに夕飯の

支度を終わらせねばならない。
大変だなぁと苦笑しながら手を振って、カナンは二人を見送った。

「じゃあ私達も戻るけど……」

「あ、はい。今日もありがとうございました」

師匠であるフェイトにペコリと頭を下げると、横から響くのはくすくすと女の子のように笑う声。
誰というのは見なくともわかる。クレイだ。
笑っている理由はなんのことはない。カナンの敬語が似合わないというだけの話。
そんな彼女、もとい、彼をジト目で睨みつける。
ここ数日でなんとなくクレイがどんな人物かカナンは掴み始めていた。
一見、冷静なようだが、案外表情が豊かな事。しかしその表情がたまに作られたようなモノである事。やたらと観察眼が優れている事、気配を絶っていることがある事。

――そんでもって、コイツも線引いてんだよなぁ……。

そして、少し前の自分と同じく、一定の距離から線引きをしていること。
祐希奈曰く、ベクトル違いのヘタレ。
その意味が最近になってようやくわかってきた。
クレイと話す時、精神的な距離で少し遠く感じる。
心のフィルター越しに届く言葉。大切な意味は、全てフィルターに阻まれ、彼には届いていない。カナンは、そんな気がするのだった。

「僕の顔に何かついていますか？」

「……俺が言えたことじゃねぇけど、力抜け」

「あはは。よく、わかりません」

今は何を言っても意味がない。

それがわかっているからこそかけられた言葉。

意味がわからないのか、それともはぐらかしているのか、クレイは曖昧に微笑んだだけであった。

その様子にカナンは溜息を一つ落とす。これ以上いっても無駄だろうと思ったからだ。

フェイトに一礼し、クレイにヒラヒラと手を振って丘を下っていく。

「風間カナン」

「？」

最中、凛に呼び止められ首をかしげて振り向いた。

訓練が始まってからというモノ、ヴェインやフェイトと話すことはよくあるものの未だに凛との会話はほとんどない。

故にこそ首をかしげたのだ。

「メイデンを、お借りできますか？　長くはかかりませんので」

「だってよ？」

「行ってこよう。晩御飯の手伝いが出来なくて済まないが……」

「気にすんな。飯、待っとくから一緒に食おうな」

「ああ」

求められたのはさらに珍しいメイデンというオーダー。
なにやらありそうだとは思いながらも断わるようなことでもない。
カナンが待っていてくれるという楽しみを糧にメイデンは凛の元へと飛び上がる。

「三人は先に戻っていてください」

「りょーかい」

「うん。わかった」

「では、失礼します」

三人もカナンに続いて丘を下っていく。
出来上がるのは凛とメイデンだけの、完全な一対一の空間。
二人は敵ではない。敵ではないのに、どこかピリピリとした空気がその場には流れる。

「それで？　話とはなんだ？」

「貴女は予想はついているのではなくて？」

「貴女が聞きたいのはマスターのことか……。いいだろう」

沈黙を破ったメイデンに即答で凛が返す。
対して、メイデンはやはりといった様子で溜息をついた。

彼女は、凛に呼ばれた時から、この会話になるのではないかと予想していたのだ。
頷いた凛に、諦めにも似た表情でメイデンは凛に先を促す。
何が聞きたいのか、と。
最も、メイデンは凛に教えるつもりはほとんどなかったが。
しかし、その必要もなくなった。

「とはいえ、貴女はマスターに対して不利益となるようなことを信頼の置けない人間に話すとは思いませんから、一つだけ忠告をしておきますわ」

凛は、メイデンの思考などすでに読みきっていたのだから。
正直な所、メイデンは彼女の忠告など聞きたくはなかった。
凛の性格上、個人的にカナンではなく、デバイスのメイデンを呼び出した時点で、どう考えてもカナンの利益となるような忠告ではないとわかっていたからだ。
それは本人にすら言えないようなこと。
中学生の少年に告げるにはあまりにも辛いことだから……。

「何らかの原因で風間カナンが堕ちるようなことがあれば、私はあの少年を殺さなくてはならないかもしれません」

「っ！！」

メイデンがフルサイズとなり、凛に掴みかかるまでは一瞬だった。
華奢な身体とは思えない怪力でそのまま凛の身体を持ち上げる。
しかし、凛は無抵抗。
それだけのことされても仕方がないと言っているという自覚がある。

「本気で、言っているのか……。協力を要請し、もうボロボロであるマスターの力に頼っておきながら尚、貴様はそんなことを言っているのか！！」

「頼りたくて、頼っているわけではありませんわ。頼らざるを得ない。それだけです。現状の脅威は敵の力ですが、風間カナンが暴走し、人々の脅威となるのなら局員として捕まえなければなりませんし、最悪の場合は殺害してでも止めなくてはなりません」

怒気を通り越し、殺気を放つメイデンに、凛は冷めた目つきでそう言った。

それが凛が望んでいることではないことはわかっている。人々の幸せを願うが故の行動であることも、わかっている。

暴走したカナンはほとんど見境がない。

目に付いたものを敵とみなし、破壊を撒き散らす。

端的に言って、危険分子と変わりないと言える。

「マスターに、罪はないのだぞ！　寧ろ原因は……」

「原因がどこにあれ、関係ありませんわよ」

「貴様ぁぁっ！」

あくまでも平坦な口調のまま凛が言葉を連ねる。それがメイデンの殺意を増大させるのだとしても彼女は変わらない。

優しく言うつもりなど、ない。

人間の脅威となるようなら誰であろうと取り除く。

その信念は正しくはある。しかし、その平等さは残酷だ。

一般的には正論でも、納得できないこともある。今のメイデンがそうだ。

ギリギリと服の襟を締め上げながらメイデンが凛を睨む。
例え正しかろうと、自分の主人を殺そうとするような彼女を許すことが出来ない。激情が理屈を跳ね除けていた。

「貴様は正しいのかもしれない。世界の脅威は元は仲間であろうが取り除くというその徹底した在り方は一定の境地に到達したものが出す答えなのだろう。だが、それが正しいことだとしても私が知ったことではない。どんな理由があれ、貴様がマスターを殺そうとするなら、私が貴様を殺す……」

「ええ。だから、貴女は間違っていてくださいな」

「……何？」

それでも凛の声は平静さを失わない。
咎は全て自分が背負う。
それを表すような言葉
この言葉には流石にメイデンも殺意を引っ込めた。
何故か、凛はその鉄面皮とも言われた表情を崩し、薄く笑っていた。
だが、その笑みをどこか、悲しそうだとメイデンは思う。

「その強い想いで、私のような最低な人間からあの少年を守ってあげてください。間違い続けてください。貴方方は正しく在る必要など、ないのですから」

凛の言う意味を彼女は全てはわからない。
わかることは、結局の所この海城・G・凛という人間は、優しいのだろう。
その優しさを自ら律し、局員としてあるべき行動をとっているの

だ。
上に立つべき人間あが、迷いを持っては全体の不安に繋がるとわかっているから。
しかし、ここまで来てしまうと弱い自分には戻れない。止まれない。
助けたいと思っていても、自分の一存で人を危機にさらすわけには行かないから、恨まれてでも道を進む。
そんなことをしたくないから、メイデンに願ったのだろう。
殺させないでくれ、と。
恐らく最後であろう弱さを見せた凛は、メイデンに背を向けて丘を下っていく。
先程抱いた激情の全ては拭いきれるものではない。
これから先、メイデンは凛を信頼することはない。
それでも、凛が本音を少し見せたことで、怒りは薄らいでいた。

「……覚えておこう」

故に、その悲しそうな背中に向けて静かに、しかし、任せろという意味を込めて、メイデンはそう言ったのだった。

▼▼▼▼▼▼▼

次の日、学校に登校したカナン達はまたしばらく出ることを美鈴と神楽に伝える。
そのことを聞いた二人はやっぱりといった様子で苦笑した。

「フェイトさん達が来た時点で何かあるんじゃないかとは思ってたんだけどね～」

無理もない話だ。

以前もフェイトやなのはといった人員が来ていた時、それに重なるようにして三人ともいなくなったのだから、薄々感づいていても不思議ではない。
いつもの通り、授業のノートを頼むと二人共心良く承諾。良い友達に恵まれている。

「それは全然全くいいとして～もふ～♪」

「重いっつの……」

いきなり倒れるようにして美鈴がバランスを崩す。
もちろんわざとであり、倒れた先にいるのはカナン、そのまま圧し掛かるようにしてカナンの頭に顎を置く。
下敷きとなったカナンは早朝ということもあり冷静に毒づいたが美鈴はどこ吹く風といった様子。

「私としては～、ヴィヴィオちゃんや祐希奈と遊べないことと、何よりカナン君と愛を育めないってところが一番辛いな～」

「お前と育んだつもりは一切ねぇよ……」

ご機嫌なのか左右にゆらゆら揺れながら話す美鈴。
対してカナンは呆れたように反論した。
反論した時点でもうカナンは美鈴の術中なのだが本人が知るはずもない。
そもそもとしてそんなことがわかる少年ならば今までのこともっと容量良くこなせるはずだ。
結論、カナンの運命は決まっている。
美鈴に弄られるという運命で。

「え、酷い……。私との関係はお遊びだったんだね！」

「ああ。お遊びだった。だから退け！」

だが、カナンとて伊達に弄られ慣れてはいない。
スルーしようとしたが、美鈴もさるもの。喰らいつく。
振りほどこうとするカナンと、獲物を逃すまいとする美鈴。
弱肉強食、食物連鎖のごとき戦いが今、始まる！

「でも私はいいんだ。例え遊ばれてるとわかってても、私は振り向いてくれるまで頑張るから！」

「お前が何をどう頑張ろうが振り向くなんてことはないから安心して諦めてくれ！」

「もう、カナン君はいけずなんだから～♪」

「違う！　そして言葉が古い！」

「これはね？　私がこれだけ昔からカナン君を愛してましたっていう隠喩だよ！」

「わかりずれぇし！」

「カナン君なら私の愛情表現わかってくれるよね！」

「わかる！　わかるからお前が俺を好きじゃねぇってことがありありとわかる！」

「何を言いますか！　私はカナン君が世界一好きだよ！」

「主に弄ることがだろ！」

「やっぱり愛し合ってると電信の速度が違うね♪」

「お前の俺に対しての電波は一種類しかないからな！！　解読する気なくても一発だよちくしょうが！」

「もうわかってないなぁ♪　カナン君、乙女心は複雑なんだよ？」

「それは凄くわかるがお前に関しては全くもって単純明快であると俺が言ってやるよ！」

「失敬だよ！　次はこの手で弄ろうとか、いやいや、やっぱりこっちとか、あえてこの手でとか、いろいろ考えてるんだから！」

「わかった。お前は相手にするとろくなことがないってことがよくわかった。だからさっさと退け美鈴！」

「やだにゃ～ん♪　まだまだカナン君に甘えるんだにゃ～♪」

「気持ち悪いわ！　そして重い！」

「ご主人様大好きだにゃ～♪　にゃ～と遊んで欲しいにゃ～♪」

「嫌じゃド阿呆！　さっさと退け！」

「じゃあ勝負して勝ったら退いたげる♪」

「受けて立ってやるよ！　かかって来い！」

その言葉を言うと同時、カナンは背中に怖気が走る。
カナンの心をいわゆるやらかした感が覆っていく。
そう、美鈴はまだ相手を言っていないのだ！
振り向いた視線の先、にっこりと笑う美鈴の笑顔。
ただし、瞳の奥に見える真意は、猫ではなく、獲物を見つけたライオン、または虎と言った所。
カナンの楽しむようにして、美鈴は告げる。

「祐希奈とね♪」

「え……、いや、なんで？」

「ご主人様ご主人様、ヤキモチ、ですにゃ♪」

「お前に！？」

「も～、私はこう見えて結構モテるんですよ～？」

「え～……」

えっへんと胸を張る美鈴。
祐希奈と同じく、美鈴もまた小学生からのカナンの付き合い。
幼馴染とは厄介なもので一般的には綺麗な人間なのに、関係が近すぎるせいでそうは思われてはいないことが多くある。
美鈴とカナンが正にソレである。
普段からやたらべたべた絡んでくるせいでカナンは何とも思わなかったが、美鈴も言わないだけでそれなりにモテている。ソレは祐希奈もヴィヴィオも神楽も知っている。
長々と説明したが、結論から言うと、美鈴はヤキモチを妬くに十

分な可愛さなのだ。

「時間無制限、待ったなし。決着方法は相手が動かなくなること。いいわね……？」

「いや、祐希奈さん？　それ多分死んで――」

バキバキと、後頭部よりなる恐ろしげな音。
すでに祐希奈がカナンの背後に回りこんでいた！

「死にたくないなら勝つことね？」

「え、ここ、コロシアムだっけ……？」

「ヴィヴィオ、ラウンド一、ファイって言ってくれる？」

「ふぇ？　う、うん、ラウンド一、ファイ！」

拳の調子を確かめながら淡々と説明する祐希奈にカナンはゆるゆると訂正を加えようとツッコンで、それを無視して祐希奈がヴィヴィオに提案し、ヴィヴィオも疑問を浮かべながらもそれに頷いた。
まぁ、首をかしげながらも言ってしまうあたり流石の天然と言える。
瞬間、フワリと祐希奈が浮いた。
祐希奈が跳躍したのだ。

「死ねぇぇぇぇ！！！！」

「言っちゃったぁぁぁぁ！？　ごぶぁ！！」

「ウィナー！！　祐希奈～～～！！　一之瀬～～！！」

「正義は勝つわ！」

「……カナンくぅぅぅぅぅん！？」

正に一撃必殺とはこのことであろう。

祐希奈の渾身の蹴りが顔面にめり込むと同時、カナンの身体は切り揉みをしながらぶっ飛び、教室の扉をぶち抜いて壁に激突して停止した。

そして、カナンはピクリとも動かない。

チャンピオンよろしく両手を振り上げる祐希奈と明らかに楽しんでいる美鈴、どうすればいいのかおろおろしている神楽、そして、ようやくことに気づいたヴィヴィオの絶叫と共に、一時限目のチャイムが鳴り響いた。

「風間カナン、欠席ですわね」

《ホント容赦ないですね貴女！？》

どこまでも容赦がない、凛が揃い、授業は始まりを迎える。

無論、風間カナンを放ったらかしのままに。

ちゃんと保険委員とヴィヴィオがカナンを保健室に連れて行ったのは余談である。

▼▼▼▼▼▼▼▼

所変わって白姫邸ではレナスの起動の最終チェックが済まされていた。

チェック、とはいうものの詩織の手によってメンテナンスは行き届き、形式上、というもののため、危険性はほとんどない。

”レナスのスペックならば”

『準備はいいですぅ？』

「はい……」

隔離された部屋。

ここは白姫邸で使用人達が訓練を行うために地下に作られたトレーニングルーム。

ただし、そこは異常な人間が揃う白姫邸、普通の設備で終わるはずもなく、耐衝撃、耐魔力防御、防音性、訓練に必要なものは大抵そろっている。

そう――。

「ガジェットドローン、発進ですぅ」

――ガジェットさえも。

このガジェットは訓練用に詩織が開発したモノ。性能的にはスカリエッテぃが製作したものと遜色なく、ＡＭＦも当然のように完備。召還魔法の如く魔方陣から出現した三体のガジェット？型から訓練室に張り巡らされて。

「一機……」

それと同時に風が吹き荒れた。

銀髪を靡かせて、レナスの姿はすでにガジェットらの陣中にある。

並んで現れた？型達の中心一体に突き刺さるレナスの拳。

使役した風の加速で突っ込んだレナスが速攻にて沈めていた。

自己的な判断で残った左右の二機のガジェットは迎撃のためその銃口をレナスへと向けた。

瞬間、二機から放たれた青い閃光が挟み込むようにして発射、互いに寸分の狂いもなく互いの射撃と衝突し、爆煙を上げる。

「これで、二機」

ポツリと響いた声。その声はガジェットが頭上。

風の力で飛翔し、先の一撃を回避したのだ。

フワリと浮いたレナスが風を纏い、左側にいたガジェットへと加速、ガジェットが迎撃するも即席の射撃で当たるような速度ではなく、弾の大半は外れるに終わり、偶然コースに入ったとしても舞うようにしてレナスが避ける。

瞬く間に距離を詰め?型が頭部にて身を捻る。込められしは大地の力、加速の勢いも合わせて蹴り落とす。

同時、重い音が響かせて、頭部がひしゃげた?型がボールのように跳ねてそのまま動かなくなった。

――残りは一機。

身を捻って蹴りぬいた衝撃を殺し、軽い音を立てて着地したレナスが残る一機へと視線を向ける。

瞬間に歪む空間、ガジェットの周囲だけ世界が変わったように捩れていく。

ギシギシと悲鳴を上げるガジェットの装甲、されどやはり歪みは止まらない。

レナスがゆっくりと掌を?型へと向ける。それはさながら宣告に近い。

終わりだ。と。

「砕」

たった一言を紡がれた言葉。
同時に掌が閉じられ爆破音すら捻り潰して空間が閉じた。
レナスが「ふぅ」と小さく溜息をつく。
たかだかガジェットの相手とはいえ、実機の相手だ。油断をするなと言い聞かせていたのだろう。
集中のために呼吸が浅くなっていたのだ。

『お疲れ様ですぅ。流石にレナスさんはＡＭＦ下でも問題なさそうですね～』

「私達の魔法は、少し特殊ですからね」

放送で語りかける詩織に微笑みながらレナスが返答する。
ＡＭＦそれは魔力の結合、効果発生を妨害するものである。
しかし、レナスやメイデン達が行っている力は大自然の力を利用したモノであり、発動までには一瞬の自然との意思疎通があれば十分。大量の魔力を必要とすることもない
つまり、レナス達にはＡＭＦは通用しないということだ。

『その様子だと調整の問題はなさそうだな』

「待たせてしまいましたか？」

『少しばかり寂しかったことは否定出来ないな』

詩織とは違う、しかし聞き間違いようの無い声にレナスは喜んでいた。
振り向いた視線の先に浮かぶのは最愛の妹、メイデン。
調整が終わると本人から連絡を受け、白姫邸に一人飛んで来たのだ。

主の元から離れるというのは減点ものだが、自分のために来てくれたと思うと叱るに叱れない。
そして恐らくは。

「主の差し金、ですか？」

『あ、ああ。そうだが、よくわかったな……』

やっぱりとレナスは苦笑した。
こういったことにはやたらと気を回すカナンが迎えに行けとでも言ったのだろう。
身を護る手段でもあるメイデンを別行動させるということはあとで注意しなければと思う一方で、本当に優しい人間だなとも思う。
デバイスのメンタル面にまで気を回す主は珍しいだろう。

「詩織さん、私にどこか異常はありましたか？」

『い～え～、最終チェックも問題無く終わりましたし、このまま帰ってもらっても大丈夫ですぅ』

そういって詩織が笑顔で首を振った。
その結果に二人してホッとしながら、レナスとメイデンはメンテナンスをしてくれた詩織に頭を下げた。
詩織はというと貴重な体験をありがとうと逆に礼を言っていたが。
ともあれ、二人は白姫邸を後にし。

「姉さん、話がある……」

不必要に人目につかないよう、空まで飛び上がった所でメイデンの暗い声に動きを止めた。

話題の種はわかっている。
二人からすれば、あまり話題にあげたくはない。
だから、二人はどちらもが辛そうに俯く。
しかし、避けるにももう、限界だった。

「マスターの状態があまり芳しくない。ヴィヴィオが繋ぎとめていなければどうなっていたかわからないほどだ。凛という人間にも感づかれていた」

「……今も、ですか？」

「今は落ち着いている。もしくは、”落ち着いているように見せている”だな。いつもの悪い癖だ」

姉の疑問に、メイデンは溜息と共に返答した。
レナスも仕方のない人ですねと苦笑を浮かべる。
”表面上は”
カナンの悪い癖。少し前に比べればマシになったほうだが、人のことは気にする癖に自分のこととなると無意識的に横に放り投げる癖は完全に消えてはいない。故にヴィヴィオや祐希奈に叱られたりすることもままある。
確かにこれならばまだ苦笑だけで済んだ。
しかし、レナスの思考はもう一つの仮定を掘り起こす。

――”落ち着いているように見せなければ”平静を保てないのだとすれば……。

強がることでしかいつもどおりに振舞えない。
そんな状態なのだとしたら、カナンの状態は最悪に近い。
解決策は二つ。

一つは、殺人。
一つは、破壊。
そのどちらかを行わなければ。

――主はまた、堕ちる……。

もう一度、あの深い闇の底へカナンが堕ちてしまう。
防ぎたくとも方法が残酷すぎた。

「今のマスターの状態がどうあれ、時間の問題、か」

「そう、ですね……」

悔しそうにメイデンがポツリと呟いた。
そう、レナスの思考が外れ、カナンの状態が改善していたと仮定しても、結局は時間が長いか短いかの違いだけで、いずれは限界は来る。

「何故、こんなにも辛い運命ばかりを、与えられねばならないのだろうな……」

「十分、辛すぎる運命じゃないですか……。主が、可哀想です……」

声を落として二人は瞳を閉じた。
泣き出してしまいたいほど、悲しかった。
どちらを選ぶにしても、彼は傷ついてしまうから。
殺人はどんな理由があろうとカナンが行うとは思えず、破壊に関しても絶対に否定するだろうと二人にはわかる。
破壊すべき対象は――。

「どうしてだ……。折角、会えたのに……。マスターもヴィヴィオも祐希奈も、学校の友達や、六課の皆だって、こんなに、こんなに、好きなのに！」

「会わないほうが、知らないままのほうが、良かった気さえしますね……。幾人もの人を殺めた、身から出た錆、というものなのでしょうか……」

――メイデンとレナス。

他でもない、自分達なのだから。

NEXT　STAGE

▼▼▼▼▼▼▼▼

後書きコーナー

祐「アンタ引き金のほうに気を取られすぎなのよ♪」

ごめんなさい！　僕が悪かったですだから石だけは！

祐「烈破爆砕拳♪」

もっとひどか――っどぐるしゃぁ！

ヴ「気を取り直してこんばんは～。後書きコーナーのお時間です♪」

カ「つっても気が重いけどな。最後の場面とかのせいで……」

祐「場面なんて気にしないのがこの私♪」

カ「ありがたいっちゃああありがたいが、それってさ……」

祐「どんな空気だろうと例外なくアンタをぶん殴るもしくは蹴り飛ばすのは確定よ？」

カ「やっぱりね！　そうだろうと思ってましたよ！」

ドゴォ！

カ「嘘！？　俺まだ何もしてないのに！？」

ドサ……

祐「いやまぁすることないから殴ってみただけなんだけど」

カ「八つ当たりかよ！」

ヴ「まぁまぁ……」

祐「落ち着きのないやつね……」

パンパン
テクテク

しー「アールグレイでございます……」

祐「ん。戻っていいわよ♪」

ヴ「ありがと～♪」

カ「あ、サンキュ」

しー「なんなりとお申し付けください……」

テクテク

祐・ヴ「おいし～♪」

カ「待て！？　なんかあんまりにも今サラっと出すぎててわかんなかったけどシオンっぽいのいなかったか！？　しかもしょっぱなからしーちゃん化してなかったか！？」

ジル「説明しよう！」

カ「どっからでたお前！？」

ジル「彼女、しーちゃんがこの道場にいる理由とは前回の後書き道場があまりにもカオスになってしまっていたためシオン君がその副作用として引き寄せられて現れたわけだが、引き寄せるだけに終わらなかったカオス因子は彼を瞬くまにしーちゃんへと女体化させてしまったわけだね！　それを見つけた我等が祐希にゃん総統閣下は日ごろの胸の恨み、もとい、帰ることが出来ない行くあてのないしーちゃんを引きとてあげたのだから涙ぐましいね。そのことに感動したしーちゃんは自らの願いで祐希にゃん総統閣下の執事的な役割……ん？　メイドではないのかって？　それはもちろんまよ〇きの執事君がフィーバーしたから執事でモーマンタイなのさ。ちなみに僕の好みはそのご主人様のほうが好みだがね！　Mなのか？　馬鹿かい！？　あの豊満な胸を見上げながら膝をつく僕に足を差し出して舐めなさいとでもサディスティックな目で言われた日には僕は逆

に彼女を押し倒し、襲い掛かって――。おっと、話がずれてしまったね。そういうわけで執事となったしーちゃんがここにいるというわけさ！」

祐「ご苦労♪」

ジル「祐希にゃん総統閣下のためならこのくらいなんのそのさ！」

カ「長いわぁあああああああああああああああ！！」

祐・ジ「ちなみに全部嘘よ／だよ」

カ「嘘かぁあああああああああああああい！！」

ヴ「本当はママにあいたかっただけだよね～♪」

しー「いや、本当は祐希奈にかっさらわれた――」

祐（はいって言わなきゃ殺すわよ♪）

しー「はい！　はい！！　凄く会いたかったですヴィヴィオママ！」

ヴ「しーちゃぁぁぁぁん♪」

ギュウウウウ。

しー「ヴ、ヴィヴィオ、それは流石に後でまず――」

タ「星の降るように～♪　いつからだろう～、かわからんくらいに天破紅蓮を叩き込むが構わんな？」

しー「でたぁぁぁぁあアアア！！」

タ「カカカカカカカカカ」

ヴ「た、タカトにしーちゃんは渡さない！　いくら可愛くっても、お嫁さんにはまだ早いよ！」

しー「ずれてる！　なんかずれてる！！」

遠方にて。

メ「ふむ。またごたごたしてきたな」

レ「まぁ、ここの空間なら仕方ないかと」

祐「ＬＶだからってことね♪」

メ・レ「いつのまにこっちに……」

祐「気にしない気にしない♪　私だって一応女なんだから秘密の力の１億や２億、もっててもおかしくないわよ♪」

メ「明らかにおかしいのだが、祐希奈ならばもっているといわれても納得してしまいそうな自分がいる……」

レ「ですねぇ……」

祐「ま、深く考えたほうの負けよ♪　それじゃあ、今回の後書きはここまで。息抜きくらいにはなったかしら？　またね～♪」

カ「ああ！？　俺今回ほぼしゃべってねぇ！？　っていうか空気だ！！」

祐「本編でも空気っぽいしいいんじゃない？　レギュラー降板でも」

カ「痛い！　言葉のナイフが痛い！！」

メ「取りあえず続きは後だな」

カ「え、待て、だから俺ほとんど――」

完！

第八話　侵食（後書き）

次は久しぶりに一気に書いてみますね。

休み時間にちまちまというのは僕にあってないのかもしれません。
勉強頑張って暇を作って空き時間に引き金みたいにグアーってやってみます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1264g/

魔法少女リリカルヴィヴィオ

2011年10月9日05時24分発行